

# ハーレム女王を目指す 女好きな女の話

リチプ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無人島で十数年間放置された少女の奮闘記？

女の子が好きでたまらないからハーレム作る！

ONE PIECEは知っているけど、転生前の記憶があやふやな為にほとんど知識を持たない主人公が、それでも美人を囲んで生活する夢を追い求めるストーリーです。

# 目次

東の海（イーストブルー）編

0	『女好き、名前はまだない』	
1	1 『女好き、その名もイリス』	
12	2 『女好き、正妻を見つける』	
21	3 『女好き、猛獣使いに挑む』	
32	4 『女好き、大きくなる』	
	5 『女好き、嘘つきと会う』	
6	6 『女好き、嫉妬する』	
67		
54		
45		

7	『女好き、無双する』				
8	『女好き、誘拐する』				
9	『女好き、全力で逃げる』				
10	『女好き、初の一人目』				
11	『女好き、北を目指す』				
12	『女好き、女好きに会う』				
129	13 『女好き、正妻に逃げられる』				
139	14 『女好き、決闘を見守る』				
150	15 『女好き、魚人に会う』				
	16 『女好き、正妻の過去を知る』				
157					
78					
87					
97					
111					
120					

				168
	179	17	『女好き、本気の想いを届ける』	
		18	『女好きvsアロン』	
		19	『女好きvsアロンー決着編ー』	193
		20	『女好き、正妻の家族も嫁にする』	205
		20.5	『女好き、正妻とイチヤコラシ』	220
			『ただけの夜』	235
244		21	『女好き、禁断の恋に憧れる』	
		22	『女好き、煙に巻かれる』	
		23	『女好き、クジラに飲まれる』	268
		24	『女好き、クジラの想いを知る』	280
			番外編『女好きとチョコの日』	293
		25	『女好き、眠る』	308
		26	『女好き、酒に吞まれる』	
		27	『女好き、敵すらも嫁にする』	330
		28	『女好き、酒に吞まれる』	317
			偉大なる航路(グランドライン)編	257

- 28 『女好き、アラバスタを知る』  
342
- 29 『女好き、リトルガーデンへ降り立つ』  
352
- 30 『女好き、毘を見破る』  
363
- 31 『女好き、ミキータの決意を見守る』  
377
- 32 『女好き、リトルガーデンを発つ』  
392
- 33 『女好き、正妻のピンチに動く』  
406
- 34 『女好き、山登りを決意する』  
421
- 35 『女好き、城到着』  
432
- 36 『女好き、トナカイを勧誘する』  
444
- 37 『女好き、麦わらの一味、チョツパー!』  
455
- 38 『女好き、三方六つぽよん攻撃』  
470
- 偉大なる航路(グランドライン) アラバスタ編
- 39 『女好き、オカマと遭遇する』  
481
- 40 『女好き、火拳のエース登場』  
493

4 1 『女好き、砂漠の地を踏む』

509

4 2 『女好き、決まる目的、目指すは鰐』

522

4 3 『女好き、挑むは七武海』

535

4 4 『女好き、砂の弱点を知る』

551

4 5 『女好き、作戦名《超カルガモクイ

ズ》』

565

4 6 『女好き、先を越される』

578

4 7 『女好き v s クロコダイル』

591

4 8 『女好き、怒りと涙ーぶっ飛ばせ

彗星の別れ（コメント・アヴィオ）』

607

4 9 『女好き、これはきつと、愛ある印』

626

偉大なる航路（グランドライン） ジャヤ

編

5 0 『女好き、本日の天気は晴れのち

船』

651

5 1 『女好き、ケンカ禁止令』

663

5 2 『女好き、悟る4人、逃げろペラ

ミー海賊団』

677

53 『女好き、やっぱり逃げられないベ

776

ラミー海賊団』

690

54 『女好き、モンブラン家に会う』

793

705

55 『女好き、黒光の恐怖』

717

810

56 『女好き、懸賞金額1億ベリ』

62 『女好きvs 神(ゴッド)・エネ

732

ル、慈悲なき雷の猛攻』

偉大なる航路(グランドライン) 空島編

63 『女好き、2度目の変化』

57 『女好き、in スカイピア』

846

748

58 『女好き、巨大な大地、巨大な雷』

64 『女好き&ゴム人間vs 神(ゴッ  
ド)・エネル』

764

65 『女好き、届け鐘の音、終焉の灯』

859

- 66 『女好き、空島に別れを告げる』 875
- 892 偉大なる航路（グランドライン） デー  
ビーバックファイト編
- 67 『女好き、船大工を求めろ』
- 912 68 『女好き、始まるデービーバック  
ファイト！』 929
- 946 69 『女好き、瞬殺グロッキー！』
- 960 70 『女好き、星のフォクシー』
- 71 『女好き、大将 “青キジ”』
- 976 72 『女好き、圧倒的な “差”』
- 990 偉大なる航路（グランドライン） W7  
女好き編
- 73 『女好き、不穏な決意』
- 74 『女好き、爆速海列車』
- 75 『女好き、水の都ウオーターセブ  
ン』 1031
- 1045 76 『女好き、大金持ちになる』
- 77 『女好き、突きつけられる事実』



78 『女好き、奪われる大金、涙の訴え』

1078

79 『女好き、カチコミフランキー』

1078

家

80 『女好き、変化の訪れ』

1090

81 『女好き、悲劇の決闘』

1141

82 『女好き、濡衣少女』

1129

83 『女好き、潜入海列車』

1143

84 『女好き、絶望の氷』

1157

偉大なる航路(グランドライン) エニエ

ス・ロビー 女王編

85 『女好き、追憶の過去』

1172

86 『女好き、勇気のその先は』

1189

87 『女好き、光閉ざす世界』

1203

88 『女好き、取引と別れ。決意の2』

1222

人

89 『女好き、ナミ&amp;ミキータvsカリ』

1237

フア

90 『ハーレム女王を目指す女好きな』

女の話

1252

91 『女好きvs青キジ』

1276

92 『女好き、決着、氷上の大決戦』

1291

93 『女好き、雪降る思い出、最高の海賊船』 1308

94 『女好き、曲者モンキー家族』

1326

95 『女好き、仲間の絆』

1342

95.5 『女好き、束の間の平穩』

1355

96 『女好き、高額賞金首、逃げ足の女王』

女王 “イリス”

1367

97 『女好き、新たな仲間と空飛ぶ船』

1383

偉大なる航路（グランドライン）

スリ

ラーバーク編

98 『女好き、遭遇、ゴースト船（シツプ）』 1400

99 『女好き、歓迎、「スリラーバーク」』

1411

100 『女好き、ドキッ！女だらけの』

ゴースト島（アイランド）！』

1427

101 『女好き、覗き魔の末路』

1443

102 『女好き、戦略的敗北』

1457

103 『女好き、抜けろ「不思議な庭（ワ』

ンダーガーデン）』

1471

104 『女好き、怪物再来』

1485

105 『女好き、カリスマイリスのプリ  
ンセス攻略』 1499

110 『女好き、初?の人魚と出会う』

106 『女好き、圧倒する力』

111 『女好き、鉄仮面の下』

1510

107 『女好き、もう1人の王下七武

1598

112 『女好き、シャボンディ諸島へ』

海』

108 『女好き、新たな仲間と強さの課  
題』 1523

113 『女好き、"悪い歴史"』 1618

題』

109 『女好き、夢の世界の特訓』

114 『女好き、天竜人だろうと嫁』

1551

109. 5 『第1回嫁会議』

1564

偉大なる航路(グランドライン) シャボ

ンディ諸島編  
イリー』

115 『女好き、『冥王』シルバーズ・レ  
1647

ンディ諸島編

116 『女好き、反撃NG空の旅』

1664

1679

偉大なる航路(グランドライン) 女ヶ島

編

117 『女好き、男子禁制の楽園(パラ

ダイス)』

1695

118 『女好き、嫁候補に喧嘩を売る』

1710

119 『女好き、女王と女帝』

1728

120 『女好き、目的地変更、必然の寄

り道』

1744

インペルダウン編

121 『女好き、大監獄に侵入する』

1763

122 『女好き、まだまだ序盤の大監

獄』

1779

123 『女好き、レベル3へと到達す

る』

1795

124 『女好き、大監獄の署長』

1807

125 『女好き、最後の作戦会議』

1822

126 『女好き、レベル6と七武海』

1836

127 『女好き、抜け出せインペルダウ

ン!』

1853

128 『女好き、地獄にも、咲く一輪の、

友情（とも）の花』 1867

頂上戦争編

129 『女好き、戦争参加』 1884

130 『女好き、戦争を駆ける』

1899

131 『女好き、対峙するは三大将』

1911

132 『女好き、女王（クイーン）化発

動』 1926

133 『女好き、死ぬのなら、足掻いて

無様に』 1942

134 『女好き、変える運命と誕生する

狂気』 1958

135 『女好き、戦争終結、現れる赤髪』

1980

修行編

136 『女好き、修行開始』 1991

137 『女好き、2年間の修行』

2008

新世界突入編

138 『女好き、新たな始まり』

2030

139 『女好き、相手にならない兵器

達』 2043

140 『女好き、2年越しの出航、いざ

魚人島へ！』 | 2061

141 『女好き、深海の旅』 | 2086

142 『女好き、見えた魚人島。目標は

人魚姫』 | 2099

新世界突入 魚人島編

143 『女好き、びば魚人島』

2112

144 『女好き、噴水鼻血』 | 2127

145 『女好き、知らぬ間に』 四異界

〃 | 2140

146 『女好き、出会いの人魚姫』

2156

147 『女好き、人魚姫を攫う』

2170

148 『女好き、初めての外とタイプ

じゃない男』 | 2182

149 『女好き、10年振りの再会』

2194

150 『女好き、英雄と王妃』

2207

151 『女好き、ヒーロー作戦』

2219

152 『女好き、耐えた10年、姫の強

さ』 | 2233

153 『女好き、嫁達の力』 | 2246

154 『女好き、2つの強さ』

2260

155 『女好き、最後に泣くのは』

2272

156 『女好き、ファンを嫁にする』

2286

157 『女好き、2年間での変化』

2302

158 『女好き、〃四皇〃ビッグ・ママ』

2316

158.5 『女好き、人魚姫との初夜』

2331

159 『女好き、魚人島との別れ。そして』

2344

て新世界へ！』

新世界 パンクハザード編

160 『女好き、カミカミとウイザウイ』

ザ

2354

161 『女好き、燃え盛る島』

2367

162 『女好き、捕らえたハーピー美』

女

2381

163 「女好き、入れ替わり一味」

2395

164 『女好き、大恩と裏切り』

2409

165 『女好き、子龍と遭遇する』

2430

- 166 『女好き、グリーンビットの魔  
女』 2442
- 167 『女好き、許されざるグラサン』 2462
- 168 『女好き、効果抜群の精神攻撃』 2476
- 169 『女好き、心臓保護』 2489
- 170 『女好き、密会の約束』 2500
- 171 『女好き、青キジ再び』 2515
- 新世界 ドレスローザ編
- 172 『女好き、七武海の取引』
- 173 『女好き、メイド選手登録』 2528
- 174 『女好き、早い再会』 2556
- 175 『女好き、レベッカちゃん的事  
情』 2568
- 176 『女好き、相変わらずの堪え性』 2583
- 177 『女好き、始まるDブロック』 2594
- 178 『女好き、異常事態』 2605
- 179 『女好き、託す』 2620
- 180 『女好き、2度目のゴミ箱と情報』 2620



収録』

2630

181 『女好き、街の状況を知る』

2640

番外編 『女好きとチョコの日と誕生日』

2649

182 『女好き、コロシウム決勝戦』

2666

183 『女好き、消えない過去、変えた

い己』

2677

184 『女好き、真・女王化』

2690

185 『女好き、続・天竜人だろうと嫁』

2701

186 『女好き、最悪のゲーム』

2710

187 『女好き、欲しいのは、ただそれ

だけ』

2720

188 『女好き、望まれてない救出』

2731

189 『女好き、少女、恋に落ちて』

2740

190 『女好き、意外な来訪者』

2750

191 『女好き、ルフィの新技』

2761

192 『女好き、数の暴力』

2773

193 『女好き、揃う三……四兄弟』

2784

194 『女好き、妻と娘の気持ち』

2795

195 『女好き、信頼を得るといふ贖

い』

2805

196 『女好き、傘下と酒と怪物の宴』

2816

197 『女好き、はた迷惑な怪物』

2828

新世界 ゾウ編

198 『女好き、ゴーイングルフィセン

パイ号』

2844

199 『女好き、安城 零とレイ』

2855

200 『女好き、レイの覚悟』

2868

201 『女好き、口説くか交渉か』

2878

202 『女好き、たしぎとスモーカー』

2888

203 『女好き、合同訓練キツス』

2897

204 『女好き、到着、ゾウさん』

2907

205 『女好き、《もこもどっけどむ》』

- 206 『女好き、豪快な水浴び』 2918
- 207 『女好き、久々の一味集合!……』 2928
- ならず』 2939
- 208 『女好き、禁句の言葉』 2949
- 209 『女好き、モコモ公国の公爵様』 2960
- 210 『女好き、くじらの森への道すがら』 2969
- 211 『女好き、ビッグ・ママのお茶会』 2979

- 212 『女好き、ネコマムシの旦那』 2990
- 213 『女好き、正妻の不安』 3001
- 214 『女好き、深夜の特訓、天賦の才』 3013
- 215 『女好き、正妻を好きにしたいだけの夜』 3023
- 216 『女好き、くじらの木の中へ』 3032
- 217 『女好き、情報の濁流』 3042
- 218 『女好き、100倍の先』

- 3119 2 2 4 『女好き、ポイズンキッス』
- 3098 2 2 3 『女好き、毒、食す』 — 3108
- 2 2 2 『女好き、2人同時に』
- 新世界 ホールケーキアイランド編
- 3088 2 2 1 『女好き、シラフ攻め攻め』
- 3077 2 2 0 『女好き、五手に分かれて』
- 3067 2 1 9 『女好き、鼈、双月に届かず』
- 3052

- 2 3 2 『女好き、再会のコック』 3190
- 2 3 1 『女好き、シエルとメーア』 3181
- 2 3 0 『女好き、厨房にて』 — 3171
- 2 2 9 『女好き、料理長と出会う』
- ド
- 2 2 8 『女好き、ホールケーキアイラン』 3151
- 2 2 7 『女好き、即バレ本性』 3141
- 2 2 6 『女好き、チョコの街』 3129
- 2 2 5 『女好き、絶体絶命』 —

- 2 3 9 『女好き、広い繋がり』 3264
- 2 3 8 『女好き、沙彩の能力』 3254
- 2 3 7 『女好き、ジェルマとの交渉』 3244
- ルシックス) —————
- 2 3 6 『女好きvsジェルマ66(ダブ 3232
- 2 3 5 『女好き、話し合いの結果』 3221
- 2 3 4 『女好き、痛め付ける』 3199
- 2 3 3 『女好き、爆発寸前』 — 3209
- 2 4 4 『女好き、ミロワールド』 3317
- 2 4 3 『女好き、2度目の邂逅』 3309
- 2 4 2 『女好き、牢内にて』 — 3299
- 2 4 1 『女好き、無謀な決意』 3291
- 2 4 0 『女好き、シャーロット・オーブ 3273
- ン) —————
- 3282



## 東の海（イーストブルー）編

## 0 『女好き、名前はまだない』

「んあ？」

ぱちんつ、と鼻ちようちんが裂ける音で目を覚ます。

おつといかんいかん、寝てしまったてみたいだ。

「うえ、やつぱ臭くなってる…水浴びしないと」

辺りに散らばる獣の死骸はもちろん私の仕業だ。私だつて花の19歳、返り血まみれの体は嫌なのだ。

「んーつ、はあ…、やつぱり上手く力入らないなあ」

水浴びしながら軽くぼやく。

というのも私は昔から水に入ると体の力が抜けてしまう体質だからだ。ちなみに雨程度では問題ない。

昔から水に弱い理由ももちろんちゃんどある。

まずは根本的な話からすると、ここは日本ではない。

というか、日本に居たのは前世だ、ここは二度目の人生つてやつ。

じゃないと虎とか熊とか猪とか生身一つで倒せません！

「多分あれだよ、転生つてやつ」

体についた血や他の汚れも綺麗に落として毛皮で作った服を身に纏う。

前世の記憶は臙げにしか残っていないけど、私はまだ女子高生だった。ピチピチだった！

死んだ理由はなんだっただろうか…、絶対自殺とかじゃないと思う、だって私死にたくないし。

それに、前世のことはどうでもいい、問題は这个世界に来てからだ。

3、4歳くらいの体でこの島の森の中で目を覚ました時は絶対死んだと思った。

知識というか、前世の記憶が完全に消えていた訳ではないので何とかなっただけ、結局あの実を食べてなかったら今まで生き抜くことはできていないだろう。

「ふ、ふふ、もうほんと最近独り言ばっかだよ、いや、昔から一人だから昔からか！

…はあ」

で、その実は悪魔の実と呼ばれるONE PIECEの創作果物…のはずだ。実際食べてるから創作感はない。

というか、そう！そのONE PIECEの世界に私はいる…つまり！

この世界は、美人だらけってことだよねー！ツツ！！



前世から男の子より女の子が好きだった私は、この世界に転生できたことが嬉しくて仕方がないのだ。

ONE PIECEといえば言わずと知れた超、超！名作漫画だ。前世の記憶と共に内容は大半が頭から抜けてしまったが、美人が多いというのはしっかりと覚えている。だから、私の夢はいつかこの無人島を脱出してハーレムを築き上げることだ。

ハーレム女王に私はなる!!

「……とは言っても」

先程水浴びした川に映る自分を見て、ため息を一つ。

まともな環境じゃないとはいえ、だからこそ手入れは念入りに行なっている艶やかな肩にかかるほどの黒髪や、くりつとした明るい赤目は第二の人生を迎えてすぐ無人島に放り投げられた私にとつての数少ない奇跡だ。一言で表すと可愛い。

だが、そんな可愛い顔を持っていたとしても、どうにもならない身体的特徴がひとつ。。。

「……身長……低すぎ……」

正確な身長はわからないが、一般的な感性で言わせてもらおうと小さい。

ざっと見積もって130から135だろう。私の能力を使えば補えるが、それは能力使用中のみだし戦闘中以外でそれをしてしまうのはなんだか負けた気がする。

もう19歳だと言うのにありえないほどの低身長、顔が可愛らしいのがせめてもの救いなのであった。

…んん？

「なんだろう？森の様子がおかしいな」

これでも16年間程この森で暮らしているのだ、ちよつとした変化はすぐに読み取ることが出来る。

「また突然変異の巨大熊だとか虎だとか蛇だとか出てきたんじゃないよね…」

と内心びくびくしながらも森の変化を辿って特異点に近づいていく。

いつでも戦闘に入れるように得意武器のナイフは構えておき、茂みに隠れて異変の様子を伺った。

「はー、こりや大発見ですぞお頭、こんな島は地図に乗ってねエ」

「まだ誰も見つけてない宝箱とかあるかもしれないやせん、ラッキーですね！」

三人組の……人間だ！

この世界に来てから初めて自分以外の人間を見るから興奮してしまった。

でも…なんだかあまり良い雰囲気ではなさそうだな、ガラ悪いし。

「てめエら、ここで見つけた宝はまず俺の元へ持ってこい、それから…もし人が居るようなら金目の物を奪え」

「へいッ!!」

真ん中の一際強そうなやつがそう命令する。

…あ、こいつら海賊じゃん。

そうだ、ONE PIECEとえば美人もそうだけど海賊もいたっけ、忘れてた。

海賊か……。

「あー………ッ!!」

「誰だッ!!」

あ、しまった。

「お、お頭! あっちから女の声だぜ!」

「んなもん聞けばわかる! 捕まえろ!」

海賊達が私を拘束しようとする前に茂みから飛び出して姿を見せた。

つい、海賊が来たと言うことはつまりそう言うことなんだよね? と思つて喜んだ拍子に叫んでしまった、うっかりうっかり。

「あー、あー、言葉は伝わりますか? 私は……、? あれ、そういうば私、名前なんだっけ? こつちに来てから気にしたことなかつたな……んー?」

「あア? なんだガキじゃねえか、にしてもなかなかの上玉だ、奴隷商にでも売り飛ばしやあ金になるぜ」

名前：…どうしようかな、名無しっていうのはかなり不格好だよね。

「ねエキミー？この辺りにキミの住んでる村があると思うんだけど、どこかお兄さん達に教えてくれるかなア？」

「ん？」

ニタニタと取り巻き二人が私を挟んで見下げてくる。

なんだこいつら、わざわざ近づいて見下ろして…そんなに人の身長をバカにしたいのか。

「村？そんなめんどくさいもの作ってないですよ、雨を凌ぐための簡単なのならありますけど」

「ほう、なかなか礼節ってモンを弁えてやがる、これはますます価値がつかない」

「お頭ア、こいつ売るのが勿体ねエよ、あと数年待てばめっちゃ良い女だぜ？」

「バカが、こいつを売れば女なんてどうとでもなるくらいに金が手に入る、少しは我慢しやがれ」

言葉はわかるし、通じてるっぽい。助かるね！

…それにしても、女なら金をちらつかせるだけで誰でもついていくって発想、嫌いなんだよね。

うん、やっぱりこの人達に慈悲はいらないよね、決めた。

「村がねエならそこでいいから案内しろ、命が惜しければな」

「そこまっすぐ行けばありますよ、それでは」

軽く頭を下げて海賊が来た道を歩いていく。

私がある程度歩くまで事態が飲み込めずにポカーンとしていた海賊達だが、すぐに気を取り直して銃を構えた。

「おい、あんまり俺達を怒らすんじゃないぜ？今は三人しかいねエが、海岸に止めてある船にはあと二十人仲間がいる…それに、お前を殺すくらいなら俺一人で十分だってことくらい、その歳でもわかるだろう？」

「わかんない、じゃ」

よっこらせ、と木の根を越えて進むと発砲音が聞こえて足元の草木が揺れる。

「オイオイ…正気か？てめエ…こんな島でいちやあ常識つてモンすら失っちゃうようだなア…」

足を止めて振り返った私に近づく海賊達は、全員銃や剣を抜いていつでも戦闘に入るようにしている。

「俺ア、『一丁銃のガリオン』…600万ベリーの賞金首だぜ？」

「へっ、ガリオン船長の異名、『一丁』はな、その手に持つ銃一丁で敵を全滅させる実力から来ているんだ、今更泣いても手遅れかもしれんなア！」

「ガキが調子のとって頭に楯突いてんじゃねエよ！」

…む、銃か…。

私の常識はこの世界じゃないところの常識から来てるから、銃口を向けられている今の状況はぶっちゃけ…：…新鮮。

そう、新鮮だ、恐怖はない。

何故なら、

「いいよ、じゃあその一丁で私を倒すことができなかつたら、あなたは今日から『一丁じゃ無理でした』のオニオンね」

「ガリオンだッ！てめエぶつ殺してやる!!」

パァンッ！

と発砲音が響く。

流星は一丁のガリオン、その狙いは私の眉間へと外れることはなく直撃して…：…地面に落ちた。

「ばッ…!?!」

「な、なにイッッ!?!」

何故なら私は、能力者だからだ!!

「て、てめエ…：ま、まさか、能力者か…ッ!?!あの伝説の…：…悪魔の実の！」

取り巻き二人は首を傾げている。ん？悪魔の実って希少で存在すら知らない人もいるとかだっけ？

「そうだよ、私は、私命名！バイバイの実を食べた倍加人間、自分が触れたあらゆる生き物以外の物や、自分自身のあらゆる能力を倍加することができる」

さっきの銃弾は私の固さを五倍にして防いだというわけですね。なかなか強いんですよこれ。

「最初はどんな能力かわからなくて実を食べたばかりは苦勞したけど、研究に研究を重ねてどんな能力か突き止めたんだよね」

まさかその辺に悪魔の実が生えてるとはね…。

ちなみに最大で十倍、自分以外の倍加は二倍が限界だった。

「じゃ、もういい？私はもういくからね！」

当初の敬語はどこへやら、もはや会話が適当になってきた。

「…ツ！馬鹿にしゃがってガキがア！！てめエら！殺せ！今すぐそいつを殺せエ！！」

「うおおオオぐぼらあツ…!?!」

懲りないようなのでスピードを倍加して高速で近づき腹に蹴りを入れて吹き飛ばす。

もちろん蹴りの威力も相応に倍加しているので、あの二人は当分起き上がってこれない。

「て…てめエ…！死ぬア！！」

ガリオンの蹴りを避けてお返しにと蹴りを腹に返すも、腕でガードされてしまう。

「ただのガキにしては…実の能力だけじゃねエ、身のこなしも大したモンだ…だがなア

…」

「ツ!?!」

「それでも、人を殺す覚悟が出来てねエンじゃねエのか!? 攻撃が生温いぜエ!!」

剣を抜刀して私の腹に斬りつけた。

五倍の強化では足りずに傷が横一文字で入って血が流れるが、咄嗟に後ろへ飛んだためか深くは入っていない、まだ動けそうだ。

「銃弾より剣の方が威力高いって…一丁の異名が泣くよね」

「はっ、最後に勝つてりやなんでもいいだろが…よオ!!!」

私の倍加スピードに引けを取らない速度で距離を詰めたガリオンの、私も同じく距離を詰める。

「おいおい！てめエのその倍加つてのは、さっき破つただろオがよオツ!!?」

真上から振り下ろす高速の剣に、私は拳を突き出した。

「十倍<sup>じゅうばい</sup>ー」

バキツツ、と剣が碎ける音と同時にガリオンの目を見開く。



私の拳は五倍を超えた十倍の耐久、そしてパワーを以ってしてガリオンの剣を打ち砕き、その顔を捉えた。

「灰<sup>ばい</sup>ツツ!!去<sup>さ</sup>柳<sup>やなぎ</sup>薇<sup>ゐ</sup>ツ!!!」

「ガッ…フ…ツ…!?!」

面白い程飛んでいくガリオンを見て、満足気に頷いて目的の場所に向かう。

それにしても、人を殴るのにあまり抵抗感じなかつたな、殺すのは流石に嫌だけど…。「あ、あつたあつた」

目的の物である、『船』を発見した。

二十人以上乗つてるといふこともあつてそれなりに大きな船だ、航海術は持つてないけどこれなら安心して海に出れる!!

今までは海に出るための手段がなく、それまで力をつけておこうと一人で修行とかしてた訳だけど、それも今日報われるわけだ!

私はウキウキ気分ですの（になる予定の）船に乗り込んだ。

## 1 『女好き、その名もイリス』

あの後、手っ取り早く船に乗ってた海賊達をみな外に放り投げてどんぶらこ海を漂うこと一週間。

「……遭難した」

船のデッキに大の字で寝転んで呟いた。

この一週間、船の動かし方なんてわかるはずもない私は適当にあっちこっち弄って海上を漂ってはきたが、ぶっちゃけそんな適当な知識で航海などできるはずもなかった。大丈夫だと思っただけどなあ…。

嬉しかったことといえば風呂付きだった事とか、食材がふんだんにあったことだ。その中でも特にお風呂は涙が出るほど嬉しかった。何せ石鹸などこの世界に来てからは見てなかったもので、自分の汚れを綺麗さっぱり落としてやったのだ！服もきちんとした物を身につけられたし…子供用のがあってよかった。

あと、これが重要なことなんだけど、外に出るということで自分の名前を考えてみた。名は、『イリス』

日本ぼくしよかな、とも思っただけせっかくだから洒落た名前にしたかったのだ！

せめて名前くらいはお姉さんっぽくありたい!!

「でも、ずつとこの調子じゃ流石に死んじやうよね……はあ、どうしょ……」

そういうえば、この船にはそこそこの金銀財宝も乗ってたんだけな。

元は海賊船だし、どつかから奪つたものかも知れないけど……宝はいいよね、お金があれば女の子とのデート資金に使えるし。

宝を近くでまじまじ見る機会なんてそうそう無いし、もう一回見てこようかな。

「よっ……と」

体を起こして宝物庫へと向かう。

……ああ、これは、『いる』な。

宝物庫にたどり着いて扉を開けようとした時、中に人の気配を感じた。

……誰だ? 島に置いてくるのを忘れた海賊でもまだ居たのか……?

とはいえ、待つていても始まらない。

ここは一つ、腹を括つて中に入るしか……。

なんて思つていると、ゆっくりと扉が開かれて辺りを伺うように人が現れた。

私はというと咄嗟に天井に張り付いて気付かれず済んだわけだけど、もちろん能力を使って指を天井に突き刺しているから出来る芸当だ。決してゴ○ブリみたいと思つてはいけない。

「変ねえ……人の気配を感じたんだけど……」

中から現れたのはオレンジ色の髪をしたとんでもない美人だった。

その手にはこの船の金銀財宝が袋に入れられており、まあ一目でわかる、泥棒だろう。

「バレてないうちに早く逃げなきゃ……」

「いや、バレてるよ、思いつきり」

え？と恐る恐る声が出した上を見上げる美人泥棒は、天井に張り付いてる私と目があつて数秒固まった。

「……じゃ、そういうことで」

そのまま何事もなかったかのように逃げ去ろうとする美人さんの腕を天井から素早くおろして掴む。

「ちよーっつと待った!」

「……くっ、天井に張り付いてたのはちよつと意味わかんないけど、こんな小さな子に見つかるなんて!」

振り解こうと必死にもがいているようだけど、残念だったな!倍加済みだー!

「なんて力……!? あんたは、一体……!?!」

「私はイリス、見た目はこんなだけどこれでも19歳だからね、で? あなたの名前は?」

「私は……えーつと……」

「隠すようなら、このまま犯す」

「えっ」

ほーれほーれと手をわきわき動かしてみせると美人さんは目に見えて動揺し出して抵抗をやめた。

「…私は、ナミ。海賊専門の泥棒よ、…ね？お願い、私を見逃して？」

「泥棒の件？」

「そう、それ！あなた、私に興味あるんでしょ？ちよつとくらいなら触ってもいいし、どう？」

…うーん、なんだこれ？

宝を見に来たと思ったら、まさかの美人さんにお触りチャンス到来だと？それなんてエロゲ？

「えー、ど、どうしようかな…」

「ね？悪くないでしょう？」

「迷うなあ……、って迷うかああーっ！！」

そのままナミさんをドン！と床に押し倒して馬乗りになる。そのはずみで持ってた袋は手から離れてしまい、彼女は一瞬悔しそうに顔をしたが、彼女は泥棒だ、目的は明確に宝。いくら美人だろうと鼻血くらいしかくれてやるもんはない！

「私の見た目に惑わされてるようだけど、さっきも言ったように私は19なの、それともっとあなたが抵抗する気力すら失うことを言うとするならば、悪魔の実の能力者でもある」

「悪魔の…実の…!？」

「あなたは見たところ、か弱い美人さんつてところだけど？この状況からどう逆転を狙うのかな？」

私が嫌味たらしく笑いながら言うと、ギリつと歯を噛み締めて睨んできた。美人さんは何しても美人だな、なんて呑気に思ってる私はやっぱり女が絡むとどっかネジが飛ぶのかもしれない。

「…一生、私の隣で生きていくつて誓えるなら助けてあげるけど、どうする？」

耳元でそつと囁いてみる。あ、あかん、言ってる私が興奮して倒れそう。美人さんに言いたい言われたい言葉を消化できるなんて幸せすぎる!!

「なーんちやつて!!」

散々楽しんだので彼女の上から体を退けると、突然のことに思考が追いついていないのか目をぱちくりさせるナミさん。

泥棒である彼女への罰は、今ので十分だ、何せまだ盗まれてないし、何なら元はと言えばこの船も宝も私が先に海賊から盗んだものだし！

「あんたね…その趣向というか、強さとか、まあ19歳って言うのは信じてあげるわ、でもどういうつもり？普通、海賊がこんなあつさり泥棒を見逃す？」

「見逃した訳じゃないんだけどね、ただこの船は私のじゃないし、もちろん宝もね、盗まれても困るものじゃないから」

「どういうこと？」

もう中途半端に説明するのも面倒なので、転生云々は伏せて事情を全て説明した。海賊じゃないですよ。

途中からナミさんの私を見る目が変わったんだけど、どうしたんだろ。

「つて言うわけで、今に至ると…：…つわぶつ、な、ナミさ、ん？あの、息が苦しいのですか…いやまあ、私としてはかなりのボーナスタイムと言いますか！はは…」

なんと、話が終わった瞬間に私はナミさんに抱きしめられその豊満な胸に顔を埋めているのです！

ああ…：…ここが天国か…。

「まっつったく…：…。私は、これでも忙しい身なの。将来の夢だつてあるし、その為に泥棒稼業に手を染めている。だから、もし、そんな私でもいいつて言うなら…：胸くらい、貸してあげるから」

「えっ？」

「会った時から何か変だとは思ってたのよ、そっか…あんだ、泣きたかったんだ？」  
泣きたい？私が？」

「あのね、普通、ずつつと一人で生きてきた人が、やつとの思いで一人から解放されたら…嬉しいでしょ？」

一人から…解放。

「そんなこと、考えたこともなかったな…」

前世の記憶は、臃げだ。

そんな中で二度目の人生を送った私にとって、一人というのは当たり前のことだった。

明日を生きるための術を磨く幼少期の頃なんかは、たしかに地獄だったかもしれないけど…まあ、それもいい思い出なんじゃない？

強くなってきたら一人でも問題なく命の危機に陥ることも無くなったし…私にとってはそれが当たり前だから。

「そんなことより、美人の女性に抱きしめられてるこの状況が今は至福です！それに一人なんて当たり前でしたからね、ハッチャラだから！」

ニツと笑って見せる。

あれ？おかしいな、なんかぼやけて視界が……。



「…ねえ、あんた、気付いてる?」

それでもナミさんは優しく私の頭を撫でてくれた。

「当たり前前、当たり前前って、その言葉があんたを縛ってるんだろうけど…あんた、泣いてるわよ」

「え…?」

驚いてナミさんから少し体を離すと、既にその服は私の涙やら鼻水やらでぐちゃぐちゃになっていた。

「あ、あれ…? おかしいな、一人は、当たり前なんだけど…な」

「じゃあ、これからは誰かと一緒にいるのを当たり前だと思えるようになりなさい、今度は一一人になった時、寂しくて泣けるように」

この世界に来てから、人と話したのも海賊ガリオンとその取り巻きくらいで、しかもこうも的確に私が抱いてる負の感情を優しく癒してくるとは…。うむ、やはり美人はいいな。

「つ…う」

もう、あれだよ、泣くっていったって、ほんとに十数年ぶりだし、こうやってふざけておかないとなんか恥ずかしいっていうか。

なんて思っているとナミさんの抱き締める力が強くなった。

勝手な妄想かもしれない、だけどその行為に泣くのを躊躇う必要はないと言われた気がした。

「…っ、ぐ、うう…：…うわわあー…ツツ!!」

さつき会ったばかりの泥棒なのに、その言葉は、その行為は私を油断させるために言っただけかもしれないのに…。

それでも、私の胸の、あの島で雁字搦めに縛ってきた何かを優しく解いていった。一人が当たり前の私は、どこか遠い日の思い出のように感じた。

## 2 『女好き、正妻を見つける』

「ナミさーん、これでいいですか？」

「うん、バツチリ、流石ね」

ナミさんの指示で海賊旗を取っ払う。

流石にラストまで外すわけにもいかず、そこはペンキで塗りつぶした。

今の状況を説明しよう。

さつきナミさんの前：…というか胸の中で大号泣をかましてしまった私は、見事にナミさんに惚れたのだ！

ハーレムを目指しているのはもう伝えているので、ナミさんは正妻に迎えますよ！つて言ったら流石に殴られた、痛い。

あと何で敬語かというのと、これはもう敬っているからに他ならない！ナミさんは聞いた話では18歳で年下らしいけど、知らない！見ず知らずのガキみたいな19歳相手にあんな優しい態度が取れるなんて、そんなの尊敬しちゃうでしょうが！！

で、何故一緒に行動しているかというのと、それはナミさんが航海術を持ってない私の為にナミさんの目的の島まで案内してくれることになったからだ！

「よつと…、ナミさん！肩揉みますよ！ついでに胸も！」

「はいはい、肩だけお願い」

「胸だけ？」

「あ、やっぱり両方やらなくていいわ」

「喜んで、肩揉みさせて頂きます」

ナミさんを椅子に座らせて肩を揉む。

「ごくり、これが美人の肌…ごくり。」

「ぐへへ…気持ちいい…」

「いや、なんであんたが気持ちよくなってんのよ！」

だって、私の肌とナミさんの肌が…うひっ。もう辛抱たまらん！

匂いを嗅ぐだけなら…！

「…………ごくり、…」

あともう少して髪まで…あ、ともうちよいく。

ガン！という音と共に唐突に船首あたりから海賊が三人現れた。

…なに？こいつら。

「ちよ、な、何あいつら…知り合い？」

「知ってますよねナミさん、私にナミさん以外の知り合いって言ったら今頃島で路頭に



礼しましたっ！」

案の定瞬殺だった。先程の態度はどこへやら、身体中あざだらけになって正座しながらへこへこ頭を下げている。

「よっ、と」

私は手頃な木材を船から抉り取って海に投げ捨てた。

「なにしてるの？」

「あ、ナミさん、ちよつと待っててくださいね、すぐ片付きます」

三人の襟を引つ掴んでさつき木材を捨てた所までいくと、三人は慌てて動揺し出した。

「ちよ、ちよつと待ってくれよ！流石にこんな仕打ちはねえだろ!？」

「本当に死んじまうよツ!!」

「だからそう思つて浮き輪代わりになりそうなやつ用意してあげたよね、じゃあね」

ぼい、と三人を海へ放り投げた。おー、水しぶきすごいなー。

「あんた…結構えげつないとこあんのね」

「私の至福を邪魔したのは彼らですので、当然の報いかと」

「手を下した本人が言つちやうんだ…」

呆れながら笑うナミさんも素敵だーっ！

「…あつ、見えた！ほら、見てみて」

目的の島を見つけたのか声を上げたナミさんが双眼鏡を貸してくれた。

そのまま従つて覗くと確かに島が見える。

「あんた、こうやって他の島を、しかも無人島以外を見るのなんて初めてでしょ？きつと沢山人がいるわよ」

「美人もいますか？」

「私以上はいないかも」

「それは当たり前です」

なんて他愛のない会話を繰り返しながら島へたどり着いた私達は、何とか港に船を止めることに成功する。

そのまま先に船から降りてナミさんの手を取つてエスコートした。客観的に見れば仲良し姉妹組つてところかつて喧しわい！

「じゃ、私こつちに用があるから。あんたはあつちにまつすぐ迎えば小さな村があるから、そこに行きなさい」

「え？イヤですよ、なんでナミさんと別行動しないといけないんですか？」

「それは…乙女の秘密！なーに？あんたは私が触れて欲しくないところまで勝手に触れるの〜？」

うぐ、絶対に何かあるんだろうけど……こうまで言われては……

「私はもともと泥棒、あんたにはあんたの生き方があるでしょうに……ほら、さっさと行く！」

「は、はい！」

釈然としない思いを抱きながら、ナミさんが指差す方へ走る。

去り際に「今後そちの村の人たちが言うまでこつちに來ちやダメだから」と何やらよくわからない念を押された。

……ま。

「素直に聞くわけないけど」

ある程度の距離を走った所で足を止めて百八十度方向転換する。

ナミさんは知らんな、私のナミさん依存度を。

「……流石にもういないか」

先程ナミさんと別れた道を、視力倍加で確認するも既にナミさんはいなかった。

「ふー。やれやれ、ハーレム女王の道は遠いな、正妻にすら逃げられてちや話にならないよね」

ともすれば勝手に正妻認定されているナミさんが一番の被害者かもしれないことは黙っておこう。



何はともあれこの島での目的は決まった。それはもちろん、この島で今後も暮らしていくために島の人たちへ挨拶をしていくことではない。

ナミさんと、今後も行動を共にする権利を本人から勝ち取ることだ。

そしてそのままナミさんが向かった寂れた町の方へ走る。

途中で人をくわえた鳥が空を飛んでいた気がしたけど…多分気のせいだろう。

よし、と決意を固めた所で町から爆発音が聞こえた。

「何で町の中で爆発が…、ナミさん、絶対何か知ってるよね」

もう！と来た道を逆走して音がする方へ走る。

能力を使用した爆速ダッシュである、汎用性高くて便利だろ。

爆発の震源地まではすぐたどり着くことが出来たが、そこには海賊らしき人達が数人倒れてるだけだった。

… というより、この町…ゴーストタウンなのかな？町人がいそうな気配しないんだけど…。

だから海賊が住み着いちゃって、ナミさんはこつちに来るなことを言ってたのかもしれないな。

「来ちゃったから意味なくなつたね、すみませんナミ『うおおおおおー！』  
うわあっ!?なに、なに!？」

突然の雄叫びにびくつと身を震わせる。

あの酒場からかな?…つてうわ、よく見たら凄い数の…海賊?かな、なんか居るんだけど!

…あれだけ人がいれば、ナミさんを探す手掛かりにはなるかもしれない。

私はまさに一瞬のうちに酒場にたどり着いて、屋上で騒いでいるらしい人達の様子を伺う。

「…ナミさん本人いたー!…」

宴会でもしてるのか、どんちゃん騒ぎの海賊にナミさんも混ざっている。

あ、あんな美人が混ざったらまずい!私のナミさんが海賊に取られる!それだけは許さんぞ!!

あとは、檻に麦わら帽子を被った男の人もいるようだ。

…うーん、麦わら帽子か…、なんかONE PIECEに関係あったと思うんだけど…。

関係あるどころではないというのはここだけの話。

「野郎共!!特製バギー玉準備っ!!」

「うおおおおおっ!!」

「うわ…なに?バギー玉?バギーつて、さっきの海賊の…道化つて言ってたし、もしかし

てあのピエロっぽい人がバギーなのかな？」

そういうしてる間にも準備は進んで、バギー玉という名の大砲を民家に向けた。

ちよつ、誰も居ないんだよね？ いや居たとしてもそれはやつちやダメなのは…。

なんて思つてる間にもバギー玉は発射された。

「……、な、にこれ」

言葉を失うとは、まさにこの事だろう。

隣り合わせの民家を何棟も貫通して、果てまで到達する威力…、あんなもの、私の十倍ですら受け止めきれない。

状況はその間にも変化していき、いつの間にもやら先程の大砲は檻に捕まっている麦わらの少年へと向けられていた。

点火役は…ナミさん？

『撃てっ！撃てっ！撃てっ！』

状況はよくわからないけど、あの麦わらを殺そうとしてるのは確かだ。

ナミさんは、動かない。いや、動けないのかもしれない。

次第に痺れを切らした船員の一人がマッチに火を付けて導火線に火をつけようとした時、

ガン!!!と三節棍……とでも言えばいいのか、素早く三つの棒をつなぎ合わせて一つの長い武器を作り上げたナミさんは、火をつけようとした人の後頭部を殴りつけて昏倒させた。

「……しまった、ついやつちやっただ、やばい、みたいな顔してて可愛い」

「ナミ！てめエどういうつもりだア!!せつかくこのおれが部下に迎え入れてやろうつてのに!!ああ!!」

バギーが凄く怒ってる。本物の海賊がキレた時の迫力って凄いな。

「なんだ、お前今さらおれを助けてくれたのか?」

「バカ言わないで!勢いでやつちやっただのよ!!……たとえマネ事でも、私は非道な海賊と同類にはなりたくなかったから!!……私の大切な人の命を奪った……大嫌いな海賊と同類には!!」

そっか……、だから海賊専門の泥棒なんだ。

つて、まずい!導火線に火がついちやってる!間に合ってたんだ!

ナミさんもそれに気づいたようだ、……もう!……ここは腹を括って、大砲の前にも出てみるか……。

だけど、ナミさんはやつぱりナミさんだった。

導火線についた火を、自分の両手で握って消化したのだ。

私の気分が盛り上がってきたのを感じる。だってそうだ、美人で、性格もよくて、スタイル抜群って…。

「…やっぱり、絶対、ナミさんは正妻だアあー！ー！ツツ!!」

両手が塞がって背中もガラ空きのナミさんに、報復しようとしているのか斬りかかる五人のうち二人を蹴り飛ばす。

残りの三人は、どこからともなく現れた緑髪の剣士が止めてくれたから私は二人だけで済んだのだ。

「えっ…あ、あんたは…!?!」

「お呼びじゃないって?でも助けに来ましたよ、ナミさん」

私の夢は、ハーレム女王。

こんな所で正妻にすると決めた女性を、逃がしてたまるか!!!

これが私の、生き方だから!!

### 3 『女好き、猛獣使いに挑む』

「ナミさん、文句は後で聞きます、今は下がってて」

「なんだ、ガキのくせにやるじゃねエか」

一緒にナミさんを庇った緑髪の剣士が私のことを興味深そうに見る。

「実は19歳ですー！ガキって言うな！気持ちにはわかるけどー！」

「はあ？」

何やら怪訝そうな顔だな、ちくしょう。

「ゾロオ!!」

「お前なア、何遊んでんだルフィ…！鳥に連れてかれて見つけてみりや今度は檻の中か、

アホ！」

緑髪の剣士がゾロと名乗った途端、周りがざわつき始めた。

ゾロ…ん？ルフィ…ナミ？

…あれ、もしかしてONE PIECEの初期メンバーじゃね？

ここに来て核心を見た私である。

バギーがゾロと聞いた途端、さらに強気になって喧嘩を売っている。

ゾロも売り言葉に買い言葉で二人は戦うような流れになっていた。

「ちよつと、私を忘れないで欲しいんだけどね」

「ああ？ おい、誰か軽く相手してやれ、殺しても構わねエ！」

私の周りに五人集まる。

全員剣を持つてるようだけど…多分意味ないよそれ。

ゾロとバギーの戦いが始まったと同時に、こつちの五人も攻撃を仕掛けてきた。

私が五人を迎え撃つよりも早くゾロの方は決着がついたようだ。バラバラにきつてちよつとグロい…血が出てないのが不思議だけど。

「船長倒されたけど、余裕だね」

「へへ、まあな」

「でも、私を前にしても余裕でいるのはどうかと思うよ、現にあなた以外はもうダウンしてるけど？」

「はっ？」

一番先頭にいた人が慌てて周囲を確認すると、四人が地面に伏していた。

もちろん倍加を駆使した早技だ。

「い、いつのまに…！」

「瞬く間…ってね、流石に痛いかな。でも、私はこれでも怒ってるからね、許して欲しいかな」

な」

「なんたって、こいつら一味はナミさんを殺そうとしたのだ。」

「よっ！」

最後の一人も軽く殴って昏倒させ、ゾロの方を見ると…。

「えっ！」

さつきバラバラになってた筈の腕が、まるで独立しているかのようにゾロの脇腹へナイフを突き刺していた。

周りの奴らはその光景を見て大爆笑している。

「バラバラの実…」

倒れてた筈のバギーの体が、集まるようにして復元されていく。

「それが、おれの食った悪魔の実の名だ!!おれは斬っても斬れないバラバラ人間なのさ!!」

「体がくっついた…!あの子の能力を見てもまだちよつと疑ってたけど、まさか本当に悪魔の実が実在したなんて…!!」

「急所は外れたか?でも、相当深手を負ってるのは一目瞭然だ。」

「くつ、同じ悪魔の実の能力者に…私は対抗できるか?」

「後ろから刺すなんて卑怯だぞ!!デカツ鼻ア!!」





私が思いっきり殴り飛ばし、綺麗に放物線を描いて飛んでいくバギーを見上げて頷く。うむ、これぞ人間大砲、なんちて。

「ゾロ！今のうちだ！」

「了解……！」

ルフィの掛け声でゾロは大砲の銃口をひっくり返す。

ルフィに向けられていた大砲が、丁度反対を向いたことでバギー一味を狙い撃つ形となった。

「ぎいやー……っ?!?!大砲がこっち向いたア……っ?!?!」

「ナミさん！点火を」

「え、うん……っ」

うんって、可愛いかよ。

ナミさんが点火させた導火線は今度は止める人などいない。

倍加ですぐナミさんの近くに避難して爆風からナミさんを守る位置に立った。

直後に本日二回目バギー玉が放たれる。やつぱり物凄い威力で、あたり一面が砂埃で覆われた。

「今のうちだ……！……と……ところでお前ら、誰だ」

「私……泥棒よ」

「私はイリス、ハーレム女王になる女！正妻はナミさん！」

「ちよつと話がややこしくなるから黙ってて」

大人しくしておこう、しゅん。

「そつちはウチの航海士だ、お前は誰だ？しらねエやつだ」

「バツカじゃないのまだ言ってるの!?!そんなこと言うひまあつたら自分がその檻から出る方法考えたら!?!」

「あーそりやそうだ、そうする」

確かに、普通ならこうして砂埃で相手の視界を防いだ所でルフィが檻から出ないことには逃亡すらできないのだ。

バギーと真剣勝負つてなればさっきの不意打ちのように上手くいくかわからないし。

「あと！ナミさんはあなたの航海士じゃなくて私の嫁ついたあ！」

「あんたはいい加減懲りろ！」

ナミさんの愛のゲンコツが私の脳天に注がれたようだ。いたい。

「でも、ナミさん、その点については問題ないですよ、ね？ゾロ」

「いきなり人呼び捨てかよガキ、まあ、そういうこつた」

ルフィの檻をぐつと掴んで肩に担ぐ。うぐお、十倍にしても重たい…！

「お前ちつさいのに力あるな」

「ちっさいは余計！」

そしてゾロには後ろで檻を支えてもらって、二人でルフィをとりあえず遠くまで運ぶことにした。ナミさんは別行動だ。

遠くと言ってもゾロの傷だって心配だ。ある程度の所まで歩いてきたので檻を下ろす。

「おい、俺はまだ運べるぞ」

「その腰から出てる血を見て言ってるのだとしたら、相当バカだよあなた」

「んだとこのガキヤ！」

「だから19歳だって言ってるよね!!」

ぬぐぐ…と二人で睨み合っていると、ルフィが近くの犬と遊んでいるのが見えた。

全然動かない犬に対して、死んでるのか？って目潰し食らわせて反撃くらってるって

…子供か！

終いには疲れて檻の中でひいひい寝転んでる。

「あんた達…一体こんな道端で何やってんの？バギーに見つかっちゃうわよ！」

「よオ航海士」

「誰がよ!!」

「あ、ナミさん！」

「あーよかった、こっちは普通だったわ」

あれ？さつき別れたばっかなのに再会はやいな、と思つてるとナミさんは鍵をぽいとルフィの前へ放り投げた。

「鍵！檻の鍵盗つてきてくれたのか!!」

「まあね…我ながらバカだったと思うわ、そのお陰で他に海図も宝も何一つ盗めなかったもの」

とため息つきながら言うナミさんも素敵だつ!!

「流石ナミさん！ルフィ、早く脱出してバギー殴りに行こう！やっぱりやられっぱなしはムズムズするし！」

「おー！お前女だけど度胸あるなア、よしっ、気に入った！お前、仲間になれ！」

「ナミさん航海士になるなら航海士の嫁ポジで入ってもいいよ」

「入らんでいい」

パシつとナミさんに叩かれた。

そしてルフィが檻から出るため、ナミさんが持つてきた鍵に手を伸ばした時…。

ぱく。

『……………』

さつきまでルフィと喧嘩していた犬が鍵を食べました、まる

「このいぬウ!!吐け!今飲んだのエサじゃねエぞ!!」

そこからまたルフィと犬の大喧嘩が始まってしまった訳だが…。

うーん、これ、どうしよ。

「こらっ!!小童ども!!シユシユをいじめるんじゃねエ!!」

なんかプードルのような髪をした軽い鎧を見に纏ったおじいちゃんが現れた。

この犬をいじめてるように見えたのかもしれない、実際ルフィはそれなりにマジな喧嘩をしてるし。

「シユシユ?」

「誰だおっさん」

「わしか、わしはこの町の長さながらの町長じゃ!!」

ちなみに名前はプードルというらしい、まんまじゃねえか!

自己紹介もそこそこに、敵対心はないことを伝える。

その後は一番重症のゾロに医者を進めてくれたのだが、寝たらなおるといふ頑ななゾロに自分ちの寝床をかしてくれたりもした。いい人だ。

「この犬、シユシユって言うんだ」

よーしよしとエサを食べるシユシユの頭を撫でる。

町長さんはシユシユにエサをやりに来たと言った。

「こいつ、ここで何やってんだ？」

「店番さ、見ての通りペットフード屋じやな」

「あ！本当、よく見たらここお店なんだ」

この店は町長の親友である人が主人を勤めているらしく、シユシユと一緒に10年前開いたそうさ。つまり、シユシユにとっては大事な宝物なんだね。

「この傷は、バギー一味から店を守った傷なの？」

「そうさ、勇敢だろう」

町長さんは誇らしげに頷く。

「だけど！いくら大切でも海賊相手に店番させることないじゃない、店の主人はみんなと避難してるんでしょ？」

「いや…奴はもう、病気で死んじゃったよ」

「！」

3ヶ月前に病院に行ったきりらしい。

だからずっと待っているのかと言われたら、町長さん曰くは違うと、シユシユは頭の良い犬だから主人が死んだことくらい理解している筈だという。

「きつとこの店は、シユシユにとつて宝なんじゃ、大好きだった主人の形見だから、それを守り続けとるのだとわしは思う。困ったもんよ、わしが何度避難させようとしても一

歩たりともここを動こうとせんのだ、ほっときや餓死しても居続けるつもりらしい」

その話を聞いたナミさんが何やら微笑んでいた。優しいナミさんの心には響くよね！ 私知ってた！

ルフィすらも感傷に浸ってた時だ、突然獣の雄叫びのような音が聞こえた。前までよく耳にした獣の声だ、私が狩ってたのより強そうな声だけど。

「な……何この雄叫び……!!」

「……こりやらあいつじゃ!!猛獣使いのモージじゃー!」

逃げろオー……っ!!と町長とナミさんがこの場から全速力で離れていく。

ルフィはあーあ、なんかきちまったよ、鍵返せよお前エ、とか呑気なものだ。

「お前は逃げなくていいのか?」

「じゃ、勝てなかつたら逃げるね」

ニツと笑って見せると、ルフィも口角を吊り上げて機嫌よく笑う。

次第に足音が大きくなってくると、すぐにさっきの雄叫びの主が姿を現した。

まるでライオンを巨大化させたような猛獣の上に、白い毛で覆われた着ぐるみきた男が乗っている。

「見つけたぜエまずは二人……おれはモージ」

「さっき聞いたから早くしてよ着ぐるみおじさん」



腕をくるくる回して準備運動をする。

「何っ…失敬だぞ貴様ア！これは俺の髪の毛だ!!」

とどう見ても耳にしか見えない髪の毛を指差して抗議する。

どつからどう見ても着ぐるみきてるようにしか見えない。

「じゃあなおさら変だな」

「てんめエ…その檻に入ってるからって安心してんじやねエのか、まずおれの怖さを知らんらしい…」

「べー、毛の手入れくらい真面目にやったら？」

「ぐぬぬぬ!!やれ!リッチー!!」

「ガルルル!!」

バキバキっ!!つとルフィの鉄の檻をその力で粉碎する猛獣。

「やったね、これでルフィがフリーになった!」

と思った瞬間、リッチーの前足がルフィに攻撃しようとして振りかぶられたので、咄嗟に拳をぶつけて威力を相殺する。

「なにつ?!受け止めただとオ!?!」

「ルフィ、こいつは私が、他のは任せたよ」

ばんばんと手のホコリを落とすような動作を取り、猛獣使いに向き合う。

「おう！任せたぞイリス！」

そう言って走っていくルフィを横目で確認して、私は案外余裕のある表情で相手を見据えた。

## 4 『女好き、大きくなる』

「あーはっはっ！お前のようなガキが、この俺に勝てると思ってるのか!?」

「やってみたらわかるんじゃないかな？いつでもどうぞ」

煽るようにぶらぶら片手を揺らしながら言ってみると、案の定頭に血でも登ったのか突撃してきた。

「例外はあれど、やっぱり生物の弱点として知れ渡ってるのは頭だね」

「何言ってるやがるんだア!!やれリッチー!噛み殺せエ!!」

「だから、その弱点が殴りやすい攻撃って、自殺行為だと思うよ、ほ……らッ!!」  
噛みつきょうとしてきたリッチーの鼻に十倍パンチをお見舞いする。

案の定脳震盪でも起こしたのか目を回してその場に崩れた。

「あれ、もう終わりなの?」

「…はアッ!お、おいリッチー下手な冗談はよせ!起きろリッチー!」

未だに動かないリッチーの上で焦っているモージの元へ跳躍してお出迎えしてあげることにした。

私が目の前に降りてきた時、目に見えて怯えだす。

「お、お前は一体……いい、いや！お前にな、好きなだけ宝をやろう！そ、それと手を出したことは穏便に謝ろう！ごめん!!」

ちよつと涙を流しながら後ずさるモージ。

なんか可哀想になってきたけど、ほつといたら後が面倒だ。

「ガキって言ったお詫びは？」

「そ……それも謝る！悪かった！ごめんこの通りだ！」

ついには土下座まで始めた。

「……ふう、わかったよ、顔を上げて？」

「え……？」

「と見せかけてパーンチ!!」

「ぐぼあっ……!!?」

顔を上げたところに五倍パンチをお見舞いする。

モージはそのままリッチーの上で意識を失ったので、私はリッチーから下りた。

「ちよ、ちよつと！あんた……強いとは思ってたけどそんなに強かったの!？」

脅威が去ったのを確認したのかナミさんと町長が走ってくる。

「惚れた？」

「いやびつくりしただけ」

ちくしょう。

「何はともあれ、礼を言わねばならん、もし娘がいなければペットフード屋が危なかったかもしれん」

「なら、良かった。ね、シユシユ」

「ワン！」

と、シユシユを撫でていて気が緩んでいたのか。

モージを倒した事実を、遠くからバギーの部下が望遠鏡で確認しているのを見落としていた私は、気付かなかった。

気づいたとしても防げなかったとか、そんなことはどうだっていい、ちよつとでも原作を知っている私がいながら…結局はこうなってしまった事実が許せないだけだ。

目の前を過ぎるのは恐ろしい程の爆風。

咄嗟にシユシユを抱えて後ろに飛び直撃は免れたが…目の前にずらりと並んでいた家は全てが吹き飛んでいた。

ゾロが寝ている町長の家はもちろん…ペットフード屋も例外ではない。

幸いにもゾロは瓦礫を自分で跳ね除けて出てきたが、状況を掴めていないようだった。

そりゃ、そうだろう。

まさか寝ている間に、『バギー玉』が飛んでくるとは誰も思わない。

「…シユシユ」

「ワン！ワン！」

悲しげに吠えているシユシユをぎゅつと抱きしめる。

…こんな展開、原作にあつたのだろうか。

もしあつたのだとしたら、私がいることで何も変わらなかったということなのだろうか。

力をつけてきたのは、夢であるハーレム女王になるためだ。なら、それになる為なら目の前の人たちや、その人たちの宝物は守れなくても仕方ないのか？

逆に、原作にない展開だとしたらどうだ？

ルフィがモージを倒して、あの大砲だつて何とかしていたとしたら…。

「私は…なんだつてこの世界に…」

「…あんた、大丈夫なの？」

顔を上げるとナミさんが私を見ていた。

ああ…こんな気分だと言うのに、可愛いなあ。

「はは…ごめんなさいナミさん、大丈夫です。シユシユ、瓦礫の中にまだペットフードは残つてるかもしれないから、それを一緒に探そう？」

大砲は、間違いなくバギーの仕業だ。だったら大丈夫、ルフィが何とかしてくれるはずだ。

「…ナミさん、お願いがあります」

「無理なお願いなら聞けないからね」

シユシユが一足先にペットフードを探している間に私はナミさんと作戦会議を始めた。

「私はこのままバギーのところに乗り込む、同行はゾロ、ナミさんにはその隙に海図と、あとは欲しいだけ宝を奪って欲しいんです」

「…いいけど、あんたに偉大なる航路グランドラインの海図があるって話したっけ？」

その辺は臆げな前世の記憶頼りだけど、どうやらビンゴだ。

「わしもいくぞ!!もう辛抱ならん…やつらめ、わしらの町を…宝を!」

「うーん、まあ、私が守れば大丈夫、かな？」

というわけで町長さんをはじめとしたメンバーには先に動いてもらって、私はシユシユのペットフードを探してから出発した。

結局まだ傷んでない袋は二つだけだったが、シユシユはそれでも満足そうにしてくれた。

「…ごめんね、シユシユ、そのかわりバギーは絶対ルフィがブツ飛ばす!」

「ワン！」

守るべきものが家から袋へと変化したからか、隣町に避難を始めたシュシュを見送った。

「…さて、いこうかな」

バギー達が拠点とする酒場の方からは戦闘音が聞こえて来る。

ルフィとゾロは心配ないだろうけど…ナミさんにもしものことがあったら…。

「はあ…はあ…つ、ん？あれは…！」

酒場前に到着した時、ゾロは既に敵の幹部と相打ちになって一緒のように倒れていた。

てか、脇腹の傷酷くなってるよね!?なんで!?

なんか町長さんは顔面強打して倒れてるし…え？生きてるよね!?ちよつと見ない間に何があったの!?

ば、バギーは…!いた!

「おれの財宝を放さねエかア!!」

「あーっ!!ナミさんに何してんだこの赤鼻アあーっツツ!!」

「誰が大きな赤い特徴的すぎる鼻だつてエ!?ぶべらあつ!」

発見した時、バギーはルフィとの戦闘から離脱して宝を抱えた無防備なナミさんに突



撃するところだった。

私は急いで距離を詰めてバギーの顔面に蹴りをいれる。

「うごお…て、てめエ…！覚悟は出来てんだろうな…ガキがア…!!」

「ナミさん！下がって！」

「バ～ラ～バ～ラ～…フェスティバルツ!!」

突然バギーの体が無数に分裂して襲ってきた。

あーもう！手数じゃ圧倒的に不利だ…！どうすれば…！

…もう、あの手しかない！

「…ルファイ！私、ナミさんを連れて逃げる！海図は任せた！」

「おうー！」

ナミさんの腕を取って走りだす。

「はっはっは！いくらてめエが早かろうが、お荷物抱えてちや一緒だなアオイ!!」

「うるさいな…！言つとくけど、赤鼻の相手はルファイだからね」

「てめエは人をおちよくって楽しいかッ!!? あア!!?」

…これは、かなり集中しないと出来ない上に、三分間しか発動出来ない、そもそもひとつおまけに解除後はうまく能力が使えず倍加できなくなる「メリット」があるんだけど…。

「…今から、私に追いつけると思うな！赤鼻！…すうく、『全・倍加』!!」  
オール・インクリース  
 「えっ、ちょ…」

ナミさんが私を見てぎよつとした顔をする。

それもその筈、今の私の姿はさっきの私の身長<sup>の</sup>二倍はある。

自分以外の倍加制限が二倍なので、服も二倍が限界だ、つまり真つ裸にならない為には二倍の身長までしか倍加できない。

だけど、これをする事によつて力は鍛え上げられた成人女性並みに進化する…ここから繰り出す倍加の拳は幼女の時とは比較にならない程強いのだ。

「ナミさん、失礼します」

「えっ、う、うん」

とにかく早く走るためにナミさんを横抱きしたら、妙に反応が少ないのが気になった。

いや、今はそんなことどうだっていい。

「ルファイ！プレゼントだよ！」

ガッ！つとバギーの顔を蹴り上げてルファイにパスする。サッカーしようぜ！お前ボールな！をリアルでやることになるとは。

「よっし！後は任せろ！」

「てめエいつか殺してやる!! 覚えてやがれエッッ!」  
もう気にしないでおこごう。

私は見向きもせず全速力で船まで向かったのだった。

## 5 『女好き、嘘つきと会う』

「あ!?!お前はあん時の!?!」

「今はあのクソ強えガキいねえのか!?!」

「ん?」

船に戻ると、島に着く前に海に放り投げた三人がいた。

「おい、その手に持つてる宝は置いていきな!痛い目にあいたくはねえだろ?」

「…はあ」

私は三人を通り越して、船に手を当てる。

ぼんつ、とその隣に全く同じ船が出現した。

「この船はあなた達も知つての通り、結構宝が入つてる。この船をあげるから見逃して欲しい」

「お前も悪魔の实の能力者か!?!…よし、ここは下手に逆らうより、ここで大人しく引いておくのが賢い選択つてもんだな」

「へっへっへ、じゃあな、また無くなつたら増やしてくれよ」

そのまま上機嫌で海に出て行った。

「…ちよつとあんた、そんな凄いことできるなら初めからいつてよ」

「あつはつは！ナミさんまで本気にしないで下さいよ！私の能力は確かにこうやって物を増やすことが出来ますけど…持続時間は十分が限界ですからね」

「…へえ、なるほど、それは確かにあいつらにとつては天国から地獄ね」

ナミさんもくすくす笑いだす。まったくこの人は。

「それで、どうですか？私の自慢の変身は！お姉さんっぽいですよね!!」

「えっ…そ、そうね、うん、いいんじゃない？」

さつと顔を逸らすナミさん。おっと、これは私の顔面パワーが効いたな？

普段の私は自分で言うのも何だけど、どこからどう見ても子供なのだが…、この技を使えば身長だけじゃなく、何故か外見も大人びて見えるようになるのだ。

くりつとしてた目はほんの少し切れ長のクールな印象にかわり、髪も少しだけ伸びる。自分で言うのもなんだけど綺麗なお姉さんって感じ？スーツとか似合うよね絶対。

「で？どうしてあんたは、私の言うことを無視してこっちに来たのかしら？」

「あつ、………てへ」

「てへ、じゃないでしょ!!海賊を相手にするのは本当に危険なの、たとえば今回退けられたとしても、報復を狙われたらどうするつもり？」

ナミさんは本気で私を心配してくれてるようだ。

だから私も、本気で応えたい。

ナミさんを横抱きしたまま跳躍して船に乗った私は、ゆっくり彼女を下ろして自分の考えを話した。

「私、女の人が好きなんです」

「そこがそもそもそもそも気になるんだけど、どうしてあの島ですつと居たはずなのに男女の区別や言葉が喋れるの…」

「あー……まあそれはいずれ」

その辺に関しては信じてもらええると思っちゃいけないので黙っておくことにした。

「だから、ナミさんが好きだーつてなつて、夢のハーレムの正妻に迎えたいつて本気で思ってるんです。その為なら海賊でも何でも、邪魔する奴は蹴散らす覚悟がある」

「ふーん……例えば、そいつが絶対敵わない奴だとしても?」

「私が夢を叶えるために、あなたを正妻に迎えたいつて決めたんです。その為に戦って死ぬなら、別に構いませんし」

要は魅力的な女性を、障害が大きいからと見逃したくないのだ。

自分が良いな、欲しいと思つた人を諦めるくらいならもともとハーレム女王など訳わからないものを目指したりはしない。

「死ぬつもりありませんし、ね?私こう見えて強いのですので」

「…ぷつ、あははつ、あんた、やつぱりどこかおかしいんじゃないの？…じゃ、私に男がいるって言ったら…あつ、嘘！嘘だからそんな顔しないで、ね？」

そういうのは弱いのでやめて。

「人の女性を狙う趣味は持っていないので、ナミさんのような魅力的な女性は時間との戦いなんです！」

と口にした時、3分たったのか体が元の大きさに戻ってしまった。

「…それとこの身長との戦い…！」

悲しいかな、私の最大の問題はこの子供すぎる体なのだつた、まる。

それからルフィ達がくるまでは私がナミさんにアプローチし続けて、華麗にスルーされる流れが続いた。

もはやナミさんからしてみれば手のかかる妹みたいな扱いだったのは気にしないようにしよう。

ルフィがゾロを担いで戻ってきたので、ゾロを船に担ぎ上げ、日の当たらない所に寝かして応急手当だけする。

「おほー、イリス、お前でつけエ船持ってんなア！」

「うん、島と交換に船を貰ったの」

「物は言いようよね…」

とナミさんの呆れ顔を貰った。カメラくれ。

とりあえず仮で私の船に乗ることにした。

「ルフィ、私仲間になつていいんだよね、ナミさんと一緒に入るよ」

「ちよつと、手を組むって言ってくれない？海賊の仲間なんてゴメンだわ」

「ほんとか?!いやー、これで遭難しなくて済みそうだ!ししし!」

ルフィはほんとに嬉しそうに笑う。なんかこつちまで嬉しくなってくるのが彼の凄  
い所だ。

そしてついに船を出した時、港から町長さんの声が聞こえた。

「おい待て小童共!!!」

「町長のおっさん!」

ルフィがいち早く気付く。

「すまん!!恩にきる!!!」

「…へへ」

涙を流しつつも笑顔でお礼を言ってくれた町長さんに対して、皆笑って返した。

「気にすんな!楽に行こう!!」

ルフィの返答に言葉も出ないようだ。本当に主人公の器だよね、私にはこんな返し無



理だよ。

何もしないのとはどうかと思ったので、私も一応手を振って別れを伝えたのだった。

—————

それから数日後…。

「なおったーっっ!!」

ルファイが麦わら帽子を見て喜んでいいる。どうやらバギーとの戦闘中傷付けられたらしく、相当落ち込んだのを見兼ねてナミさんが直したのだ。

「応急処置よ、穴を塞いだけ、強くつついたりしない限り大丈夫だと思うけど」

「いやーわかんねエわかんねエ、ありがとう! あんなにボロボロの帽子をここまで」

つつんと直した所をつつくルファイ。

「あ」

つつきすぎて穴を開けていた。

「人の話をちゃんと聞けエ!!」

「ぎゃああああ!!」

眉間に針を刺されて痛がるルファイだけど、仕方ないよ、それはルファイが悪い。

「ナミさん、私のナミさんに対する劣情も、どうか治療して貰えないでしょうか？」  
 「あんた…段々要求が激しくなっていない？」

気のせいじゃないですよ、これは猛アプローチです!!

「…それにしても、あんた達本当にこれで偉大なる航路を目指すつもり？ だとしたら無謀だわ」

確か、この世界には海が二種類あるとかいう話で、今私たちがいるこの海が前半の海、  
イーストブルー東の海というらしい。

そんなでもって、後半の海が偉大なる航路というとか。

「確かにな！ イリスの船にも食べ物いっぱいあつたけど、やつぱ肉がないと力が」

「食糧のこと言ってるんじゃないわよ！」

ルフィの言葉をナミさんが遮る。

んー、海とか、そういうことに関しては女子高生にはわからんですね。

「私達の向かつてる偉大なる航路は世界で最も危険な場所なのよ、その上ワンピースを  
 求める強力な海賊達がうごめいてる…当然、強力な船に乗ってね」

ふむふむ。

「船員の頭数にしてもこの船の装備のなさにしても、とても無事でいられるとは思えないわ」

「でもこの船、もとは海賊船だよ？」

「ダメね、偉大なる航路グランドラインで通用する程じゃないわ」

まあ…大砲もなければなんかしよぼいし、この船。やっぱオニオンが船長の船って感じだよな。

「で？何すんだ？」

「準備するの！先をしつかり考えてね、ここから少し南へ行けば村があるわ、ひとまずそ

こへー」

「肉を食うぞ!!」

「船を探しなさいよっ!!」

とにかく次の島は船探しってことね、よーし、ナミさんの為に天蓋付きベッドを探すぞー!!あと美人!

「おー、本当に大陸について」

「何言ってるの、当然でしょ地図の通り進んだんだから」

ナミさんの案内のもと、目的の島にたどり着いた私たち。

よっ、と船から降りてナミさんをエスコートする。

「ふーっ、久し振りに地面に下りた」

「ほんとにね、これがほんとの地に足つくってやつだよ」

ゾロがぐつと身体を伸ばしてるのに合わせて私もせつせと柔軟する。

「ところで、さつきから気になってたんだが…あいつら何だ？」

ゾロが指差すのは近くの崖から私達を監視するかのように見える四人だ。

そのうち三人はまだ子供みたいだが、あ、子供の方は見つかったのに気付いて逃げた。

残った少年と私達の目が合う。

「……………」

「おれはこの村に君臨する大海賊団を率いるウソツプ!!人々はおれを称えさらに称えわが船長、キャプテン・ウソツプと呼ぶ!!」

言ってることも大袈裟だしなんなら名前でウソだとわかる少年、ウソツプが現れた。

網目模様のバンダナを頭に巻いた、とんでもなく長い鼻が特徴的な少年だ。

「この村を攻めようと考えているならやめておけ!!このおれの八千人の部下共が黙っちゃいけないからだ!!」

「うそでしょ」

「ゲッ!ばれた!!」

「ばれたって自分で言ってるよ」

「こんな小さな子にも言われたア〜っ!!」

首から私は19歳ですって看板でもかけといてやろうかこんにやろ。

「はっはっはっはっはっは!!お前面白いな〜っ!」

「おいてめエ、おれをコケにするな!!おれは誇り高き男なんだ!!その誇りの高さゆえ、人がおれを『ホコリのウソツプ』と呼ぶ程にな!!」

それ、馬鹿にされてるよ。

「なア、美味しい飯屋知らねエか!俺もう腹へちちまつてよオ」

「飯?村に一つあるが…」

「じゃあそこに案内してくれ!」

私達四人に敵対心がないことは伝わったのか、ウソツプは軽く頷いて村のめし屋まで案内してくれた。

せつかくなので一緒にご飯を食べることになり、この島へやってきた理由もルフィが話す。

「何?!仲間を?!あとでかい船か!」

「ああそうなんだ」

はーっ、と感心したように話すウソツプ。当のルフィは肉に夢中できちんと話す気が

あるかはわかんないけど。

「まア、大帆船つてわけにやいかねエが、船があるとすりやこの村で持つてんのはあそこしかねエな」

「あそこ？」

ウソツプの言葉に首を傾げる。

「この村に場違いな大富豪の屋敷が一軒たつてる、その主だ」

ほえー。金持ちさんか、前世では関わり合いにならなかつた人種だね。

「だが主と言つてもまだいたいけな少女だがな、病弱で…寝たきりの娘さ…」

「え…どうしてそんな娘がでつかい屋敷の主なの？」

ルフィとゾロは既に酒や肉に夢中で対して聞いてないようだ。

ナミさんの呆れ顔がまた見れてしまったぜ…。

「…もう一年くらい前になるかな、かわいそうに病気で両親を失っちゃったのさ、残されたのは莫大な遺産とでかい屋敷と十数人の執事達…!!どんなに金があつて贅沢できようと、こんなに不幸な状況はねエよ」

…でも、病弱のお嬢様か…。

確かにかわいそうだけど、美人センサーがすごい…。

「……やめー」

ナミさんが軽くテーブルを叩く。

「この村で船のことは諦めましよ、また別の町か村をあたればいいわ」

「ナミさん……！流石私の嫁……！」

「え？お前らそういう関係？」

「違うから」

……でも一目みたいなの、そのお嬢様。

「……おっと、時間だ、すまんお前ら、おれはこれから重大な極秘任務に赴かなければならぬ、生きて帰れるかわからん過酷な任務だ」

なんかよくわからんけど用事があるようにウソツプが言う。

私たちが手を振ってウソツプを送り出すと、入れ違いにさつき逃げてった三人の子供が入ってきた。

「ウソツプ海賊団、参上っ!!」

「なにあれ……」

「さー……何だろうな……」

「子供の遊びだよ、可愛いね」

「お前も混ざってこいよ」

ジロ、とゾロを睨んでもどこもふく風。くー！

何やら三人でコソコソ話してると思ったら、意を決したように真っ直ぐ私たちの方へ向かってきた。

「お…おい海賊達っ!!われらが船長キャプテン・ウソツプをどこへやった!!」

「キャプテンを返せ!!」

…あー、そうきたかー。

こんな時に思うのもどうかと思うけど、一応キャプテン・ウソツプって子供には呼んで慕われてるんだね…。



## 6 『女好き、嫉妬する』

「お前らのキャプテンならな……」

「な、何だ！何をした……！！」

ちらちらルフィの食べ終わった肉の残骸を見ながらわたわたしてる子供達。そんな子供達にゾロが一言。

「喰っちゃまった」

「ぎいやあああ鬼ババア~~~~っ!!」

「なんで私を見てんのよ!!」

「ガキ共ナミさんのどこがババアなんだああん!？」

「あんたもちよつと黙ってて!」

ぶくぶく泡吹かせて気絶した子供達。

ていうか、いくらルフィでも人は食わないからね。……多分!

数分後、わりと早く起きてきた三人に本当の事を伝えると、ウソツプは病弱な子のいる屋敷に行ってるのだとか。

極秘任務ってそのことか。

「何しに行つたんだよ」

お、珍しくルフィが他人の動向に関心を持つてる。

「うそつきに」

「だめじゃねエか」

呆れてツツコむルフィに、子供達は駄目ではなく立派なんだと言う。

ウソをつきに行くのが立派って、どういうこと？

話が見えなくて顔を見合わせる私たちに、三人は説明してくれた。

「——と言うわけなんだ」

「なんだ、あいつ偉いじゃん」

「へー、じゃあお嬢様を元気づけるために、一年前からずっとウソつきに通つてるんだ」

「うそつきはうそつきでも、私はそんな嘘をつける人は尊敬しますよ、ね、ナミさん！」

三人の話によると、ウソツプは病弱でろくに外出することもままならないお嬢様のために、こうして心躍る嘘をつきに行つてゐるらしい。

「もしかして、もうお嬢様元気なのか？」

「うん、だいぶね、キャプテンのおかげで！」

誇らしげに頷いた子供を見て、ルフィはやっぱり屋敷に船をもらいに行こうと言ひ出

した。

止めても無駄そうな雰囲気バシバシ伝わってくるので、私は流れに身を任せたのだった。

### 屋敷前

「うわー！おつきな屋敷！すごい、ナミさんこれ凄い！」

「あー、はいはい、そうしてれば本当に子供みたいね……」

いや、日本人ならみなこうなるって、だって豪邸だよ？

そうこうしてらうちにもルフィが門をよじ登って敷地内に入ってしまったので、私たちも後続く。

……これ、普通に不法侵入だよね。

裏庭に続く道を歩いていくと、ウソツプが誰かと話しているのが見えた。

「おーい、キャプテン！」

「げっ！お前ら何しに来たんだ！」

ウソツプの話し相手を見る。

……うわ、やべえ、なんだこの美少女。

薄い肩にかかるほどの金髪、病弱だと一目でわかるほどの白い肌と細い体は、なんだ

か守ってあげたくなる雰囲気纏ってる。

そんな子が自室の窓を開けてウソツプと話してたのか…くそ！羨ましいな！！

だけど私は明らか人の女って感じの人には手を出さないようにしているのだ。確かにこのお嬢様はえっちないたずらして赤面させたい欲求に駆られる…けど！それでもウソツプの女…!! ああーっ！ウソツプになりたい!!

「ん？どうしたんだイリス、すげエ顔してよ」

「ん、んんっ！何でもない…よ、自分の中の獣を鎮めたの」

「あんた、どうしたの？」

「手を出したらいけない大好物が目の前に転がってるの…ここは危険だから、ちよつと向こう行ってるね…」

「ああ…大体理解したわ、心配して損した」

ナミさんの呆れ顔が刺さる。…ん？なんか今回の呆れ顔はキレがないな。

「…なんでちよつと嫌な気持ちになってるんのよ私は」

ぼそ、と呟いたナミさんの言葉は、私に届くことはなかった。

「美人で、恋人候補がいなくて、びびってくる至高の女性なんてそうそう居ないよねー

…

ナミさんなんて激レアだよ、なんで誰もゲットしてないの、バカでしょありがとう。

「それにしても、ここ結構いい眺めだね、水平線ってなんでこう落ち着くんだろ」

今私がいるのは海沿いの平地だ。

辺りはちらほら岩が転がってて、目の前の海以外の三方向は崖で囲われている密会に

便利そうな所である。

「…ん？」

何やら人の気配を感じて咄嗟に岩の影に隠れる。隠れる必要ないかもしれないけど、なんか隠れちゃった。

歩いてきたのは二人組の男だった。なに？男同士でナニするつもり!?

「それで…計画の準備はできてるんだろ？」

「ああもちろんだ、いつでもイケるぜ、『お嬢様暗殺計画』」

「!!」

びっくりして声が出るとこだった。

よりにもよって何言っちゃってるんだあの人たち…。

この村でお嬢様って言えば…もう、あの子しかいない…!!

「暗殺なんて聞こえの悪い言い方はよせジャンゴ」

「ああそうだった、事故……事故だったよな、”キャプテン・クロ”」

ほ、ほんとに密会で使われてるし。

どうする？もう少し様子を見たほうがいいよね……？

「キャプテン・クロか……三年前に捨てた名だ、その呼び方もやめろ、今はお前が船長のハズだ」

じつと息を潜めて様子を窺う。

バギーの時と違つて緊張感あるな、これ。

「しかし、あんときやびびつたぜ」

「ん？」

「あんたが急に海賊をやめると言い出した時だ、あつという間に部下を自分の身代わりに仕立て上げ、世間的にキャプテン・クロは処刑された!!そしてこの村で突然船を下りて三年後にこの村へまた静かに上陸しろときたもんだ」

な、なんだ？いくら密会だからって機密情報ペらペらしやべりすぎでは？

「まア、今まであんたの言う事を聞いて間違つたためしはねエから協力はさせて貰うが、分け前は高くつくぜ？」

「ああ、計画が成功すればちゃんとしてくれる」

……前世の臆げな記憶も合わさって、キャプテン・クロの目的はだいたい見えてきた、気

がする。

「殺しならまかせとけ！」

「だが、殺せばいいって問題じゃない、カヤお嬢様は不運な事故で命を落とすんだ、そこを間違えるな」

かっこつけてるけど、あなたの服うんこ柄だからね、ダサイよぶっちゃけ。

「どうもお前はまだこの計画をはつきり飲み込んでいないらしい」

「バカを言え、計画なら完全にのみこんでるぜ、要するにおれはあなたの合図で野郎どもと村へ攻め込み、お嬢様を仕留めりゃいいんだろ？そしてあんたがお嬢様の遺産を相続する」

「バカが…！頭の回らねエ野郎だ…！他人のおれがどうやってカヤの遺産を相続するんだ」

「がんばって相続する」

「がんばってどうにかなるか!!ここが一番大切なんだ!!」

私は聞きながらもすぐ行動に移せるようにしておく。

「殺す前に！お前の得意の催眠術でカヤに遺書を書かせるんだ！ 〃執事クラハドールに私の財産を全て譲る〃とな!!」

…なるほど、そういえばこいつはお嬢様の執事だったか。

段々思ひ出してきた、そうだ、こいつはキャプテン・クロ：何か爪みみたいな武器のやつだ。

「それでおれへの莫大な財産の相続は成立する……！ごく自然にだ、おれは三年という月日をかけて周りの人間から信頼を得て、そんな遺書が残つていてもおかしくない状況を作り上げた!!」

「……そのために三年も執事をね、おれなら一気に襲つて奪つて終わりだがな」

「それじゃ野蠻な海賊に逆戻りだ、金は手に入るが政府に追われ続ける。おれはただ政府に追われる事なく大金を手にした、つまり平和主義者なのさ」

「ハハハハ！とんだ平和主義者がいたもんだぜ、てめエの平和のために金持ちの一家が皆殺しにされるんだからな」

「おいおい、皆殺しとは何だ、カヤの両親が死んだのはありやマジだぜ、おれも計算外だった」

「まあいい……そんな事はいい……とにかくさつさと合図を出してくれ、おれ達の船が近くの沖に停泊してからもう一週間になる」

いい加減、野郎どものシビレが切れる頃だ、と締めたジャンゴ。

……ふーむ、これは、私のやることは決まったよね。

このキャプテン・クロはルフィが倒す、それは私の記憶がそう言ってる。



ただ、ジャンゴの言つてた野郎ども…キャプテン・クロの船員が沖に泊めてある船には無数の部下が息を潜めて待機してゐる筈だ。

そいつらが出ることでゾロやルフィの手が塞がって、カヤお嬢様がちよつとピンチになる。もし、原作通りに進まなくて間違つてもお嬢様が死ぬようなことがあれば……。

…今こそ、私がここに居る意味を見せる。

流れは、私を変えてやる!!

「おい、お前ら!!お嬢様を殺すな!!」

「誰だ…!?!」

「私もいるよ、計画も全部聞いてました」

ルフィも話を聞いていたのか、彼は堪らずと言つた感じで会話に入り込んできた。私もそれに合わせて乱入する。

「……やあ、これは…ウソツプ君じゃありませんか…」

ん? ウソツプまでいたのか。このひとたち話聞かれすぎでしょ。

「こんな子供まで…なにか、聞こえたかね?」

「え? わかんない、カヤお嬢様の暗殺がなんだっけ?」

「…聞かれたか」

私は倍加を使ってルフィ達の元までジャンプする。

「な……っ!？」

クロもジャンゴも驚いて声も出ないようだ。ただの子供だと思うな……いや子供じゃないから!

「ルフィ、私はこいつらの船を潰す、親玉と催眠術士は任せた」

「しし、おう!」

「お、お前、まさか一人で行かせるのか!？」

「心配すんな、イリスは強いからな」

じゃね、とひらひら手を振って別れる。

確か、あいつらの船は北にある筈……ここからだとも最速で走れば一分もかからない!

「カヤたんを殺させてたまるかあー!!」

うおおおおお!!と走り抜けると、すぐに北海岸が見えてきた。

「はあ……はあ、ん?あれ?船がない!?!な、なんで?」

北海岸で間違いない筈なんだけど、キャプテン・クロの船は見えなかった。

「……違う、まだ来てないんだ、でも一週間前からってあいつ言ってたし……沖合なら詰むけど……この島は崖が多いから、その死角で隠れてるとかなら!」

近くの木に飛び移り、更に高い木の枝に飛び移って思いつき高くジャンプする。

遙か上空とまではいかないまでも、ある程度の高さまで跳べたので周りを上から見渡

すことができた。

「…あつた！結構近い！」

思つてた通り崖で村からは見えないよう隠れて停船しており、口角が上がる。

「何人いるかは知らないけど…美少女を愛でることができないようなゴミ共は…私がこの手で殲滅してやる!!」

行くぞ！カヤお嬢様を狙えない事への、憂さ晴らしだ!!

## 7 『女好き、無双する』

「し、侵入者だアーっ!?」

「数は!?」

「一人!ガキが一人だ!」

「ならギャーギャー騒いでんじやねエ!みつともねエな、摘み出しとけ!」

「それがよオ!このガキ:!!くそ強いんだよツ!」

「てあつ!!」

突っ込んでくる海賊の顔面に回し蹴りをくらわせ、後ろから奇襲を仕掛けてきた奴もその回転のまま蹴り飛ばす。

舐めてかかってきた奴らは皆足元に転がっていて、もう無謀な突撃はしてこなくなつた。

「来ないなら、こつちから行くよ!」

私は集団に突っ込む。

数は総勢で百ちよいつてとこだったけど、今はもう百人も居ないだろう。

「くそ！おい誰かあの人達を呼んでこい!!」

「あ、ああ！そうだった、まだこの船にはあの二人が居た！」

ん？あの二人？

クロヤやジャンゴ以外に誰か居たっけ、そんな強い奴。

「へへ…ガキだからって舐めてたが、てめエもこれで終わりだ！」

「俺らクロネコ海賊団の船の番人が出るからにや、てめエ殺されるぜ！」

「誰か知らないけど、この船に乗ってる人はみんな倒すつもりだったから出てきてくれるなら丁度いいや」

喋る二人の頭を掴んでお互いの頭にぶつけ昏倒させる。鈍い音のカスタネットを叩いた感覚だ。

「んん？侵入者はガキ一人じゃないのかい」

「おだやかじゃねーな。ま行くけども」

やがて海賊達の奥から出てきたのは、二人組の猫っぽい男だった。

一人は細く、もう一人は太く…ただこれは体型の話で、どちらにも筋肉の鎧はがっちりついているようだ。

「これでてめエも終わりだな！やってくださいニヤールバン兄弟、ブラザーズ シヤムさん、ブチさん  
！」

確かに船の番人というだけあって強そうではあるが、2人組は何やら自信なさげに  
どおどしている。

「い、いや、僕達にはムリだよ！なあブチ！」

「ああ、あ、あいつ強そうだが、まじで！」

「えー……」

…ぶつちやけ言わせてもらうと、すんごく胡散臭い。

いや、だつて君たち自分の体格見てみ？どつからどう見ても弱くは見えないからね。  
しかも猫だし、猫被りとかそんなんでしょ。

「そんなの待つてあげるほど、優しくないよ」

ダツ！と床を蹴つて一気に距離を詰める。まずはシヤムからだ、おどおどしてる彼の  
顔面目掛けて蹴りを放つ。

不意打ちの攻撃なので、シヤムの顔に綺麗に入つて倒すことに成功した。

「あれ、本当に弱いのか？それとも…自分たちが不意を突かれるとは思つてなかつたつて  
事？」

ブチがいきなりの展開で固まってるうちに、倒れたシヤムの足を思いつきり踏みつけ  
て骨を折る。これは無人島に居た時に動きが速い獣対策でよく使っていた手で、とりあ  
えず足の骨を折っておけば意識が回復しようと何もできないからだ。

「そ、そんな、シヤムさんが……！」

「これで残った強敵はあなただけ？」

後ろに飛び退いてブチに言葉を投げかける。

もちろん後ろに飛び退く前に近くの下つ端を数人沈めておくのも忘れない。ただでさえ人数が居るんだから、こまめにやっておかないと終わらないのだ。

「あなた達が出てきたら私は終わりみたいに言ってたけど……、じゃあその頼みの綱が通用しないとすれば……今度こそ本当にあなた達の終わりだよね」

「ぐ……まさか猫被りの俺らにすら容赦がないとは……」

「猫を被ってるだとかなんだとか、どうだっいいいよ。どんな理由があれば、あなた達は力やお嬢様の命を狙った」

何にもしてない無害な美少女の命を狙うようなやつらなんか、例え臆病だろうが泣き虫だろうが……絶対に許すつもりはない。

「それで、もう最終兵器はないの？」

「く、……あ、あれは……！」

「ジャ、ジャンゴ船長が帰ってきたぞ……！」

ああ、あの催眠術士が帰ってきてしまったのか。

前世じゃ信用してなかった催眠術だけど、この世界じゃ出来てもおかしくないし……万





なんと、足を折ったはずのシャムまでむくりと起き上がって何事もなかったかのように歩いているのだ。

「うそ……」

…傷は完全回復し、だんだん強くなる。

こんなでたためな催眠術がアリなら、まずはジャンゴを潰さないと倒しても倒しても起き上がって、殺すしかなくなってしまう。

そうだ、傷は完全回復。痛みが無くなるんじゃない。

「…とはいえ、これはぼちぼち本気を出さないとまずいよね」

最初に闘ったガリオンやモージなどには使う必要がなく今までお披露目することのなかった私の武器、ナイフを腰から抜く。

そもそも、確かにナイフは私の得意武器ではあるのだが、人間相手に刃物なんて使ってしまうと殺してしまう確率が高くなるだけなのであまり好きではない。無人島に居た時は獣しか相手にすることがなかったから、そんなことを気にする必要も無かったが。

「…ふう、… オール・インクリース 全・倍加…!」

「んなっ!?!なんだこいつはア!?!」

ジャンゴは私の変化に驚いて声を荒げる。

この技は3分しか効果がない上に、効果終了後はろくに戦えなくなってしまう。つまり、3分以内に決着をつける必要があるわけだ。

…それにしてもこの視界の高さ…たまらん！

「はあ！十倍灰・大旋回！」  
じゅうばいばい・だいせんかい

まずは下つ端の頭を掴んで思いっきり振り回し周りを巻き込んで攻撃する。ある程度数が減つたのを確認し、私はばいと下つ端を投げてまずはシャムに突っ込んだ。

「ウオオオオ!!ネコ柳大行進!!」

「ぐっ…!!」

シャムに加勢するようにブチも加わり、爪を利用した高速の連撃を何とかナイフで捌く。

お互いがお互いの隙をカバーし合って攻撃してくるから反撃のチャンスがやってこない…なら！

「強引に、正面突破ア！十倍灰・去羅波!!」  
じゅうばいばい・さらば

「ぐはあっ!!」

ナイフを横一文字に斬りつけ、衝撃波を発生させる。

斬りつけた後のナイフの軌跡が斬撃となって飛んでいく近距離、遠距離どちらでも使える万能技だ。

近距離で使えば二連撃の技となり、今もナイフでニヤールバン兄弟ブラザーズの攻撃を止めた後、二連撃目の衝撃刃が二人を斬り裂いたのだ。

「悪いけど、時間無いから巻いてくよッ!!」

続けて二度目の去羅波さらかばを放ち、ようやくニヤールバン兄弟ブラザーズを倒した。

「おい！起きろニヤールバン兄弟ブラザーズ！明日の朝には計画を実行しなきや俺らはキャプテン・クロに殺されちまうんだぞ!」

「キャプテン・クロね…、今は目と鼻の先に、目下最大の脅威が迫ってると思うんだけど？」

「くそっ！オイお前ら！もう一度よく見ろ！お前らはだんだん強くなぐぼああーッ！」

ジャンゴの顔を殴り、吹き飛ばす。

これ以上面倒なことはされたくないし、何より術中はスキだらけだ、最後まで言わせなければ怖くない。

ジャンゴ単体の戦闘力はそう高くなく、今の拳で呆気なくダウンしてくれた。

「お、おい…まさか、嘘だろ…」

「船長やニヤールバン兄弟ブラザーズが、たった一人の女にこんな短時間でやられちゃったのか…!？」  
もはや戦意も無くなっているクロネコ海賊団の面々だが、ここで終わらせるわけもな

い。

私の役目は…此処に居る全ての海賊を倒すことだ、一人も逃しはしない。

ナイフを腰に戻し、指の骨を鳴らして下っ端に近づくと目に見えて慌て出した。

「ま、待ってくれ！強いのはよくわかった…なら、この船の宝を持っていつでも構わねエ

「いらない」ぐえっ!?!」

ガツと鳩尾に軽く拳を入れて倒す。

周りには下っ端だけとは言えあと三十人は残ってるな。

「私の能力制限はあと一分つてとこかな…、十分だよね」

もう既に怯えて縮こまっちゃってる人達を攻撃するのは流石に気が引けるけども…

仕方ないよ、カヤお嬢様を殺そうとするのが悪い。

ニヤリと笑って見せると下っ端達はビクツと肩を震わせて、何ならそれだけで何人か

失神した。

それから三十秒くらいで敵の全滅は完了し、全員をロープで縛り上げて私は船から降

りたのだった。

## 8 『女好き、誘拐する』

「あーちよつとあんた！今までどこに行つてたの!？」

村の端で固まっていたルフィ達を見つけて全滅させた報告をしようとした時、ナミさんが怒つたように私の前に立つた。

「海賊がこの村を襲うかもしれないって時に一人でうろついてんじゃないわよ！死にたいの?。」

「あ、それがですね、ナミさん」

ナミさんが言い方はアレでも私のことを心配してくれてる感動に打ちひしがれながら、船長以外は全滅させた旨を伝えようとした時、子供三人組が村の中央から歩いてくるウソツプを見つけた。

「…よオ！お前らか！…げつ！お前つ!!生きてたのか!!」

ウソツプがルフィを見て驚いてる。え？そんなピンチだったの？

「崖から落ちたんだって、頭からね」

なるほど、ルフィはゴム人間だから効かないもんね。

「そんな事よりキャプテン！話は聞きましたよ！海賊達のこと早くみんなに話さなきゃ

!!

「……………みんなに……………!!」

一瞬だけだが、酷くウソツプの顔に影が差したような気がした。

「はっはっはっはっはっはっは!!いつものウソに決まってんだろ!!あの執事の野郎ムカついたんで、海賊にしたててやろうと思ったんだ!!」

「ん?」

ルファイが怪訝そうな顔をする。そりやそうだ、したてるも何も、クラハドール…キャプテン・クロはもともと海賊。真実を村人全員に知らせるだけで良いはずだ。

「えーっ!!ウソだったんですか!?!」

「なーんだ、せっかく大事件だと思ったのに」

「……………でもおれ、ちよつとキャプテンをけいべつするよ」

「ぼくもだ!いくらあの執事がやな奴でも、キャプテンは人を傷つける様なウソ、絶対つかない男だと思つてた……!」

「帰ろうぜ、晩ご飯の時間だ!」

ウソツプの言葉を真に受けた子供達は、そのまま三人で家に帰っていった。流石に子供は純粋だね。

そして、そんな流れで海賊全滅の話は切り出せず、夜…クロがジャンゴと密会していた沖にウソツプを含めた一味全員が集まる。

「おれはウソつきだからよ、ハナっから信じてもらえるわけなかったんだ、おれが甘かった!!」

なるほど、既に村人全員、それからお嬢様に話は伝えたけど、クロは三年前からコツコツと信頼を集めていたにも関わらず、一方のウソツプはウソつきで評判だった。つまりクラハドールが海賊だといきなり言われても信じる事が出来なかったというわけだ。

「甘かったって言っても事實は事実、海賊は本当に来ちゃうんでしよう?」

「ああ、間違いなくやってくる、でもみんなはウソだと思ってる!!明日もまた…いつも通り平和な一日がくると思ってる…!!」

ここで、海賊は来ないって言うのは野暮な気がしたので、少し待つことにした。何より、ウソツプの決意をなかつたことにはしたくなかつたから。

「だからおれは、この海岸で海賊どもを迎え撃ち!!この一件をウソにする!!それがウソつきとして!!おれの通すべき筋つてもんだ!!」

その言葉にルフィ、ゾロ、ナミさんの顔が変わる。

「腕に銃弾ブチ込まれようともよ…ホウキ持つて追いかけて回されようともよ…!!ここは

おれの育った村だ！おれはこの村が大好きだ！！みんなを守りたい……！！こんな…わけもわからねエうちに…！みんなを殺されてたまるかよ……！！」

「とんだお人好しだぜ、子分までつき放して一人出陣とは…！！」

ため息をつきながらゾロはいうが、その顔は呆れてなどいない。

逆だ、ウソツプの決意を讃えるような視線は、私を含めて全員変わらない。

「よし、おれ達も加勢する」

「言つとくけど宝は全部私の物よー」

案の定、ルフィ達はウソツプに手を貸すと言った。

…よし、そろそろ言ってもよさそうだ。

「ごめん、言うの遅れたんだけどね、その攻めてくる海賊の話で…」

私はさつき海賊団を全滅させてきた事を皆に伝える。ルフィにはそう伝えてあったから全然驚いた顔をしなかったが、残りはゾロを含めたみなが目を見開いていた。

「お、お前…本当に行ってきたのか!?個人じゃねエ、丸々一つの手海賊団を相手にしたってのかよ!?!」

「まあね、すごい?」

驚くウソツプにふふん、とドヤ顔をかます。ここまでオーバーに反応してくれるとやってきた価値があったというものだ。



「すごいなんてもんじゃないわよ、よくやったわ！それで、宝はどこ?!」  
「宝? 気にしてなかったな…」

「このアホお!」

ボコ、とナミさんに脳天を殴られてしまった、痛い。

「何にせよ、イリスが全滅させたなら残る敵は総大将だけってわけか」

「じゃあ、今すぐわる執事をぶっ飛ばしに行くか!」

バシーと掌に拳をぶつけるルフィだが、それは私が止める。

「ダメだよルフィ、クラハドールは信用されてる。この段階で私たちが奇襲で倒したら…その瞬間から私たちはこの村の敵になるよ」

「それも…そうだ! じゃあどうすんだ?」

「うん、勿論考えはある」

既に海賊団を全滅させ、私達全員の手がフリーになっている今だからこそ出来ることがある筈だ。

私はそれをみんなに話した。

「まず…カヤお嬢様を拐っちゃおう」

「いやいや、そんなことしたらそれこそ村の敵じゃない!」

「敵にはならないよ、拐うのはカヤお嬢様と、あの屋敷にいる使用人全員…これでクロを

孤立させる」

「拐った後はどうするつもりだ」

ゾロの疑問は簡単だ。

「そこなんだけど、ウソツプ、ゾロ、ナミさんの三人は私が倒した海賊船を北海岸に移動させて欲しい、拐った人は皆そこに連れてって、自分の目で真実を見てもらう」

「で、でもそれだと、カヤが危険な目にあうかもしれないねエじゃねエか！」

「結局クラハドールはあの屋敷を去ることになるし、私はその理由までは思いつかなかつたから……あの屋敷に係のある人たちには、真実を隠すべきじゃないと思ったの。村人のみんなには隠してた方がいいと思うけどね」

それに拘束してある海賊の前に出るだけだ。私を含めてみんないるのだから、クロの近くでいた三年間の方がずっと危険だった筈だ。

「おい、なんでおれが船の移動担当なんだ、クロってやつと戦えねエじゃねエか」

「それは勿論ナミさんの護衛だよ！ウソツプだけじゃ心許ないし」

「オイ」

ビシ！とウソツプの突っ込みが刺さる。

何はともあれ、まずはお嬢様達の誘拐からだ。

「ルフィと私は今から屋敷に向かうから、三人も今のうちに船の移動をよろしくね、あ、

船はあっちにあるから」

「よっし、いくか!」

ゾロはまだ納得行つてなさそうだが、仕方ない、適材適所つてやつだ。

オール・インクリス  
全・倍加後の反動も既に無くなり、能力も使用できる今ならお嬢様達を拐うことなど  
わけない。

作戦会議が終わり私とルフィはすぐに屋敷へたどり着く。

最初に来た時と同じように門からよじ登り、気配を消して屋敷内に侵入した。

「なア、おれこういうコソコソすんの苦手なんだよなア、走つちや駄目なのか?」

「お嬢様を拐う前にクロに見つかつたらどうするの、カヤお嬢様達を逃し終えたら暴れ  
てもいいから」

「ストレスで死んじまうよオ〜…」

どんな身体だよ。

そう言つてる間にも、一つ一つ部屋の中を確認していく。

こつとも広い屋敷だとお嬢様の部屋がどこかわかんないし……あ、そう言えばウソツプ  
と話してたあの部屋! あそこがそうなんじゃないだろうか?

「そくだよね……よし、まずはあの部屋に……」

「おいイリス、なんかあの部屋変だぞ」

ルフィの声に一度思考を中断して指差す方を見る。

確かに、その部屋だけ扉が開けっぱなしで、何かの臭いがした。

…いや、何か、じゃない。血の臭いだ。

「ッ」

気配は消しつつも、慌ててその部屋を覗き込む。

「…!!」

「誰か倒れてるぞ…!」

部屋は所々手当たり次第に斬り刻まれたような痕があり、中央には羊のような見た目の執事が血を流して倒れていた。

私とルフィは慌てて駆け寄って意識があるか確認する。

「…ガハツ…、あ、あなた方は…?」

「よかった、まだ生きてる! 私達のこととは後で説明します、まずはここから逃げて」  
ルフィに執事さんを背負わせる。私では身長的にキツイんだよちくしょう。

「はあ…はあ…お嬢様は…?」無事ですか…?」

「まだわからないけど、絶対無傷で届けるよ、あなた以外の使用人はどこに?」

「…!!」それが、今日から私とクラハドール以外は休暇を…!」

…くそ! そんなことであるの!?! この屋敷の使用人の殆どがクロの手中に落ちて

るってことじゃないの！

「…わかった、じゃあ助けるのはお嬢様だけで良さそうだね」

「イリス、お嬢様を襲うなよ」

「襲うか！というかルフィにそれ言われるのは予想外過ぎる！」

にしし、と笑ったかと思うと窓から出て走って行った。

…はー、多分、これからミスが許されない最重要任務をしなきゃいけない私を気遣って冗談を言ってくれたのだろう。

ルフィにそんな気遣いが出来ることに驚きだよ、肉のことしか考えてないのかと思つてたのに。

ルフィに続いて私も窓から飛び出す。

目指すのはウソップが話していたあの窓だ。今日きたばかりの道だったので迷うことなく目的の場所にたどり着き、窓ガラスを割って向こう側のカやお嬢様を傷付けないように、窓を丸々取り外して侵入する。

取り外すのは十倍パワーを使えば簡単でした。

「お邪魔しまーす…」

こっそり侵入。何かいけないことをしてる気分だ。

「…………おう、可愛いなちくしょう」

月明かりに照らされながら眠るカヤお嬢様はやばかった。語彙力喪失。体が弱いということなので体を毛布で包んで横抱きしようとしたが、やはり身長の問題もあり厳しかった。

…結局使わないといけないのか、本日二度目の…。

「オール・インクリス全・倍加…と」

大きくなつてしまえばこつちのもんである。

優しく横抱きして、窓から脱出した、後はこのままみんなと合流するだけだ。

「…おつと、どこに行く気ですか？誘拐犯」

「…ッ!？」

そんな声が聞こえたのは屋敷の門を飛び越えようとした時だった。

低い殺気に満ちた声に一瞬だけ体が固まる。

「…ちよつとね、お嬢様と深夜デートと洒落込もうかと思つて」

「なるほど…ですが困りますね、カヤお嬢様は体が弱いお方だ、こんな夜更けに連れ回されてはお身体に響く」

その両手の五本指に付けられた長い爪のような刃が、夜の明かりに怪しく煌めいている。

まさしくその姿は…クロネコ海賊団船長、百計ひゃっけいのクロ本人だった…。

## 9 『女好き、全力で逃げる』

横抱きにしたカヤお嬢様を器用に背に負う。おんぶというやつだ。

もちろん、こうしなければまともに戦うことすらできないからである。

「私と戦うと?」

「できれば、戦いたくはないんだけど」

頬を冷や汗が伝う。

私は自分の事をそれなりに強いと評価しているし、目の前の執事風海賊野郎と一戦を交えようがすぐにやられるなんてことはあり得ないと断言してもいい。

が、それは私一人で挑んだことを前提とする。つまり、背に大きすぎる弱点を背負った今…まともに逃げることですらできない状況に陥っているのだ。

「なんか勝ち誇った顔してるけど、あなたの海賊団は全滅してるし、私を含めて私の仲間達はみんなあなたの計画を知っている…既に詰んでいると思うけどなあ…」

ニヤリと笑う。当然強がりだが、例え強がりだろうと強気の状態を崩すわけにはいかない。

それは私自身のプライドの問題もあるし、相手に心的有利を与えたくないからだ。

「…そうか、使えないゴミ共だ」

そんな私の心情を知ってか知らずか、クロはそれでも笑って見せた。

張り付いたような仮面の表情は消え去り、今では彼本来の“海賊”としての顔だ。

自らの武器で顔を傷付けないよう、掌で眼鏡をクイ、と直す仕草一つを取っても彼がどれだけ闘争の本能を持っているかが伺えるだろう。

「余裕の顔が消えただけでも潰した甲斐はあったかな？」

「勘違いするな、使えない奴らが使えなかつた所で問題はない、そういう時の策も当然練ってある」

「それは何とも気になる…、ね、って…あれ？」

今まで目の前で話をしてきたクロが消えた。

瞬きはしていない、急に、何の前触れもなく消えたのだ。

「これで、少なくとも俺ではなく、お前の方が詰んでいたということが理解できたか？」  
「な…あ…!？」

何の前触れもなく。ああそうだ、つい今、何の前触れもなく消えた筈のクロが、何の前触れもなく私の隣に姿を現し、首筋に爪を押し当てている。

「くっ…」

咄嗟に能力を使って脚力を十倍に強化し、クロから距離を取った。



首筋からはツ、と血が流れ、私の全身から溢れ出す冷や汗と混じり合い薄まっついてく。

「ほう…なかなか速い。だが、それではこの俺に追いつけねエ」

悔しいが、確かにその通りだった。

私の切り札である全・倍加オール・インクリスを使った上での十倍強化を持つてしても、こいつの速さについて行くことはできない。

ルフィやゾロなら持ち前の勘や、並外れた動体視力で捉えることはできるかもしれないが、私にはそのどちらもないから不可能だ。

「だが、これでわかっただろう。俺はこの場でお前を殺し、その上でカヤに…そうだな、『俺の思い通りに動かないようなら、村人全員を殺す』とでも言えばどうとでもなるだろう。本来ならこのようなりスクの高過ぎるマネはしたくなかったんだが…使えねエやつらに少しでも期待した俺もバカだった」

「…へえ、そんなこと、させるとでも？」

「何をいう、させるさせないの問題ではなく、俺がすると言ったからには当然結果はついてくる」

「なるほどなるほど…結果ついていうのは…私に、まんまと逃げられるっていう結果かなッ!!」

ガンツ!!と十倍強化で地面を踏みつけられ、大地が揺れ、地面が裂ける。と言っても勿論小規模だが、これくらいのもので足場が不安定になればそれだけでいい。

目論見通りクロはうまく体勢を整えられず自慢の速さを一時とはいえ失った。せつかくのチャンスだ、今後二度と通用するわけもない…逃げるなら今しかない!

私はまた十倍強化で地面を蹴って高く跳躍し、門を飛び越えると一直線で北の森へと走る。

一般的な道を使えばよかったのだが、わざわざ整備されている道を使って遠回りをするほどの余裕はない。

「はっ……あ、あなたは…!?!」

突然激しく動いたからか、流石に背負っているカヤお嬢様が目を覚ましてしまった。とは言え、返事を返している暇などない。

私は森へ入ると不規則に動き回りながら北へ進む。この森は広くはないかもしれないが、多少の目眩しにはなる。クロとは言え一度見逃してしまえば再度見つけるのは困難な筈だ。

「はあ…はあ…」ここまでくれば、大丈夫かな…」

くねくね不規則に走っていたせいでいまだ森から抜けることはできていないが、ひと

まずクロは追いかけてきてないようだ。

とはいえ、あまり楽観視もできない状況だからスピードは緩めるが足は止めないでおく。

私の能力制限もある、何よりカヤお嬢様がこのタイミングで目を覚ましてしまったのがまずい。

「あなたは……はあ……はあ……、私をどうするつもりですか……！ 離してください！」

「訳あって離すわけにはいきません、大人しく捕まっけて下さい」

背負われてるカヤお嬢様が必死に私から離れようともがくものの、そもそも病弱であり、力などないであろうその腕がどれほど暴れようが私を振り解けるわけがなかった。

ただ、声はまずい。あまり大声を出されてはクロに気付かれてしまう。

「何が……はあ……つ、もく、てきですか……？」

「とにかく今は、生きて私の仲間と合流することが目的ですかね」

何せバイオレンス眼鏡からの逃亡中なのだ。

「……クラハ、ドールや、メリーに手を出せば……私でも許しませんよ……」

「あなたが助かるのでしたら許されなくて構いませんが、生憎と手を出してるのはそのクラハドールですけどね」

一瞬目を見開くカヤお嬢様だが、すぐ瞳に涙を溜めて怒声を上げた。

「あなたは……あなたも……ウソップさんと同じような事を……確かに、クラハドールはウソップさんにひどい事を言ったかもしれないませんが、それにはちゃんと理由があります！それに、仕返しをするにしてもこんな……！こんな方法って……」

最後は力なく項垂れるように息切れを起こしているカヤお嬢様だが、私はどうしても言いたいことがあった。

あまりお喋りをすると、先ほども言った通りクロに発見されるリスクだけが高まる。だけど、それでも言っておきたいことがあったのだ。

「……カヤお嬢様、失礼ながら、私はそのひどい事を言ったという現場には居合わせておりません。……ですが、ですがね、例え死ねだとか、お前の父ちゃん低収入（笑）だとか散々なことを言われたからと言って……あのウソップが、人を貶めるようなやつだとは思えない」

「……!!」

「私は彼とそんなに長い付き合いじゃないどころか、今日会ったばかり……だけど、そんな私でもわかるよ。……ウソップって人間は、どこまで行ってもお人好しだと」

今回は私が海賊団を倒してしまったが、恐らく予定通り北の海岸からクロネコ海賊団が攻めてきたとあってもウソップは単独そいつらに喧嘩を売りにいっただろう。

それはカヤお嬢様を、この村全てを守るため…自分の命を投げ打つてでも彼は必ずそうした。

「確かにウソツプは嘘つきだし、わりと怖がりで鼻が長いけど…本当にカヤお嬢様か思ってるような『最低なやつ』なら…何の関わりもないあなたに、ただ元気になってほしいなんて純粋な願いだけで一年間も話し相手になると思う?」

「そ、…それは…」

「…カヤお嬢様にとつては、辛いことが待ってると思う。だけど…これが現実だよ、向き合わないといけない。…敵は、クラハドール…海賊百計ひゃっけいのクロだから」

それでもまだ信じたくないのか、私の首に回してる腕に少し力が入る。

ただ、今度はウソツプを否定するような言葉は出てこなかった。

「…ああ、しまった、喋りすぎたかな…。ま、どうしても信じられないなら…自分の目で見てみるのが一番早いんじゃないかな?」

「え……………」

私は立ち止まって後ろを振り返る。

出来れば気のせいであって欲しかったが…そんなことはなく、私が感じた気配通りにクロはそこにいた。

「…おい、海賊、カヤお嬢様をこれ以上連れ回すな、お体に関わる重要な問題だ!それと、

さつきから聞いていれば私が海賊だと？そんな野蛮なものと一緒にしないでもらおうか！」

「ふん、そこまで見え透いた滑稽な芝居が出来るなら、いつそ役者にでもなつて日銭でも稼いでたら？」

ここからは、賭けだ。

私の言葉はカヤお嬢様に届いたかどうか定かではない、もしかしたら、この場でクロを信じ通してしまいかもしれない。

だけど、私は信じたい。

ウソツプの勇敢さを？

違う

クロがボロを出すのを？

違う。

私の言葉がカヤお嬢様に通用していると？

違う。

「私は、カヤお嬢様を信じてますから」

「……！」

カヤお嬢様自身を、私は信じる!!

何故か？

私を誰だと思つてゐるのか、私は……”女好きだ”!!

「…カヤお嬢様、私があなたの執事として、屋敷に仕えてから早三年ですね。毎年のように私の就任記念日を祝つてくれたことや、この土地に不慣れな私に優しくして頂いたこと、感謝しております」

「クラハドール…」

「ご両親の代わりに、あなたを大切に見守るといふ使命が私にはあります！私は…：く、私を、信じて下さらないのですか!？」

これで本当にクロがいい奴なら、この言葉にコロツと言つてカヤお嬢様を渡しても構わないが、さつきまで散々言つてた相手だ。私にとつては白々しすぎて呆れた目しか返せない。

ただどそれはさつきまでの話を全て聞いていた私の場合だ。

何を言おうが三年。クロは三年もの月日を費やしカヤお嬢様から信頼を勝ち取つた…。ん？と言うことはこの野郎三年間もカヤお嬢様のそばにいたのか…：何だろう、ここに来て一番クロに腹立つてる気がする。

「あなたがなんと言おうとも、カヤお嬢様は私の仲間のもとへ連れて行くけどね」

「ほう、海賊のもとへですか、そんなことを私が許すとても？」

「いや？でも、私は逃げるからね、そんな危険な爪振り回して…カヤお嬢様には当たらないの？」

びく、とクロの眉が動く。

クロにとってはカヤお嬢様の体に傷が出来ようとも構わないだろうが、クラハドールはそうではない。

ここで躊躇なく振り回せば、それこそカヤお嬢様の心は私へと傾いていくというわけだ。

「…なるほど、人質とは…。野蛮な海賊らしい…姑息な手だ」

「じゃ、そういうことでー」

足元の小石をクロ目掛けて蹴飛ばす。

クロはそれを爪で軽く弾くが、私はその隙をついて駆け出していた。

見つかつてしまったのなら、真っ直ぐ一直線に走り抜けるのが最善だ。

もうすぐで森を抜けることができる、ルフイ達と合流さえ出来れば、羊顔の執事さんからカヤお嬢様へ事情を説明できる筈だ。

「仕方ない…逃げられるよりはマシだ」

「あ…ッ!!？」



あともう少し、ほんの少しのところまで追いつかれてしまった。

最悪なことに、やつは爪を振りかざしている。その軌道のまま爪を突き出せば…間違  
いなくカヤお嬢様をも貫いて私に届くだろう。

「…あなたは…よくもそんな事が出来るなッ!!」

グリーンっ!と体を急回転させ、乱暴なのは百も承知でカヤお嬢様を側に放り投げる。

「きゃっ…いつ…た…あ…!…な、にを…、え…クラ、ハドール?」

……しまった。

もう、三分経っちゃったか。

「ぐ…ふ…ッ、あー…、これはまずい…、がはっ…」

腹の底から迫り上げるものを吐き出すと、それは血の塊のようだ。

私がかヤお嬢様の盾となるため身代わりになった瞬間、オール・インクリース全・倍加の効果が切れてし

まったのだ。

結果、私の何の能力補正もかかってない腹部に爪が突き刺さってしまった。

「…ちっ、結局こうなってしまうのか、俺も少し腕が鈍ってしまったようだな」

ずぶり、と生々しい音をたてて爪を引き抜くと、腕を振るって爪から血を払い落とす。

同時に、私はふらふらと数歩よろめいた後、カヤお嬢様に背を向けて膝をついてし

まった。

「あ……ど、どうしてクラハドール……！ここまですることはないじゃない！ねえ！答えて！！クラハドールツ！！」

「はア……つ、ふ……つう……！カ、やおじよう、さま……つ、まだわからないの……？……はやく、この先の海岸、へ……！！」

「お前一人ならともかく、病弱な小娘一匹にこの俺が逃げられるような醜態を晒すわけがねエ……いい加減、諦めるんだな」

今にも泣き出しそうなカヤお嬢様だが、それでも今の発言を聞いてまでクロを信じ抜くほど盲目でもないようで、初めてクロを、執事クラハドールではなく、海賊……百計ひゃっけいのクロと認識してキツと睨む。

「……ぐ、はやく、逃げてツ！！」

何とか立ち上がってカヤお嬢様を背に庇う。

力を入れるたびに激痛が走り、何なら血がお腹から吹き出てるが……。

「……に、逃げません……！」

「な、何を……！」

私のお腹を見て！こんなんじやくロとまともに戦うなんて無理だから！

絶対これから死ぬって人間と、どうして一緒にいようとするのは！それに私がこうなったのはあなたを逃すためなんだから逃げてくれないと死んでも死に切れないよ！！

「くっはっはっは!!滑稽だなガキ、変な能力で強化されてた身体も元に戻り、反動で能力も使えねエと見える。腹に穴は空いてる、その上そうなる原因を作った本人はお前の決死の覚悟を踏みにじる!これは傑作だ!!」

「…確かに、その通り…私は、この人の覚悟を踏みにじってるのかもしれない…でも、それでも逃げられない。私を守るために…こんなになつてまで抗ってくれた…!最後まで私を信じてくれた人を見捨てて逃げるなんてできない…!」

最後の方は咳き込んでしまっていたが、それでもカヤお嬢様は私を抱きしめて叫んだ。

この決断を、人の決意を無駄にする行為だと言う人もいるだろう。

でも、カヤお嬢様の想いを聞いて…それは違う、と思った。

…だって、これってつまり死ぬなら私と一緒に死んでいい?実質プロポーズだね?やばい。抱きしめられてるし、おっぱい当たってるんだよね。

「フン、何を惚けているのか知らんが、もうお前の相手は飽きた…死ぬ」  
振り下ろされる爪に、叫ぶカヤお嬢様。

…それと、伸びてくる腕。

「っ!!」

バキ!とどこからか伸びてきた拳がクロの顔面に当たって吹き飛ばした。

その光景を見た直後：私の中の緊張の糸はぶつりと切れて再度膝をつく。私が体勢を崩したことでカヤお嬢様も同じように地面にへたり込んだ。

「イリス！お嬢様も無事か!？」

伸びた腕の張本人である我らが船長、ルフィ様が来てくれたみたいだ。

よかった：：これでクロはどうとでもなる：：。

「あ、あの！この方の傷が酷くて：：！」

「え？だ、大丈夫だよ、いやほんとは大丈夫じゃないけど大丈夫だから：：」

「イリスっ！お前腹穴空いてんじゃねエか！：：そうか、あいつにやられたんだな」

なんだかルフィの雰囲気が変わったような気がした。

：：なんだかんがたって、船員がやられたら怒るんだな、ルフィって。

ああ：：いや、なんかもう、ほんと：：安心：：し、た：：！：：！：：！

そうして、私は意識を手放した。

## 10 『女好き、初の一人目』

重い臉をゆっくり持ち上げる。

まだ頭がぼーつとするような感覚なのは、やはり寝起きだからだろう。

前世でも経験したことのないようなふかふかベッドに包まれ、あとは周りを美少女で囲めばここで一生を暮らしてもいいくらいだ。

「あ…、イリスさん！」

「え…！カヤお嬢様？」

声の方へ顔を向けると、カヤお嬢様がベッド横の椅子に腰をかけ私の手を握っていた。

え…！すべすべしてて触り心地よすぎる…ぐへへ。

「よかつた…！無事で！四日も目を覚さなかつたから、心配で…っ」

「よ、四日？そんなに？」

「はい…！でも、本当によかつた…」

涙を流しながら微笑むカヤお嬢様に思わず赤面してしまう。美しい。

「ナミさん達にも、心配かけちゃったな…」

「はい、お仲間のみなさんも凄く心配しておられた様子で…、ナミさんは凄く怒ってましたね」

「その情報は私の精神衛生的に伏せていて欲しかったかな…」

凄くつて…今から想像するだけで恐ろしい。

「そうだ、クロは？あの後どうなったの？」

「あ、そうですね…イリスさんが倒れてからすぐ、ルフィさんがやつつけてくれました、クロネコ海賊団と共に船ごと海に捨てた、とナミさんが」

ルフィはさすがだなあ。

それに、この言い方を聞くにもうクラハドルとの決別は心のふんぎりがついたってことで良いんだよね？

「カヤお嬢様に何事もなくて本当によかった」

最終的に守り通すことが出来なかったのは、私の気持ちとしてはかなりやり切れないが…。

ただカヤお嬢様はそんな私の言葉に頬を赤く染めて俯く。

ん？

「い、イリスさんが、守って下さったからこそ…です」

きゅつと手を握る力も増したように思う。

んん？まるで恋する乙女のような反応だ。いやでも、違う筈だ、変な勘違いをしてはいけない。後で泣くのは自分だぞ。

「は、はは…カヤお嬢様にそう言ってくれるなら、私も嬉しい、かな…なんて」

「…カヤ」

「え？」

「カヤお嬢様なんて、敬語を使うのはやめて下さい。カヤ…と、呼んで欲しいです」

……oh。

いや、勘違いじゃないよね？これ、完全にきた？きたよねこれ！

だって、見て!?!このカヤお嬢様…いや！カヤ…の私を見る瞳！かんっぜんに恋する乙女だよ！

「カヤ…、ちよつと照れるかも」

なんか呼び捨てって照れる。

ルフィとかゾロみたいを意識してなかったら全然気にしないんだけどなあ。

「わ…あ、ありがとうございます…！それから、もしよろしければ私を…」

私は首を傾げる。

何か言い難いことを言おうとする前みたいな雰囲気で、カヤ自身も口をばくばくさせていたからだ。

「わ、…私を！イリスさんのハーレムメンバーに入れてください!!」

「————」

ついに私の思考が停止した。

今、なんと？

「…っ…っ？」

ぎゅつと目を瞑って返事を待っていたカヤだが、一向に返事が返ってこないことで不安になったのか片目だけうつつすら開け、私を見る。

「えー…、…ええ？」

当の私はいえばようやく現実に戻ってきた所だ。

いや、ここは現実だよな？実はクロに刺されて死んでたとか、カヤに告白紛いのことをされたのも死んだ後にせめてもの夢を神が見せてくれるとかじゃない？

「私じゃ…駄目ですか？」

「えっ、いや、駄目というか…いやあ、その、ね？なんでハーレムの事知ってるのかな？つて…うん」

我ながら情けない姿である。私自身は好意を伝えるタイプの人間だと理解してはいたけれど、まさか受け手になるところも参ってしまうとは…。

「それは、イリスさんが休まれてる時にお仲間の方に伺いました。だから私は、例え都合



のいい女でも良いんです！あなたの為に尽くしたい……！」

：現実だ、これは。

一体何がカヤの琴線に触れたかは分からないけども、間違いなくカヤは私にとって夢の第一歩になるうとしてくれてるのだ。

ハーレムを作るだなんて、最低だろうか？一人の女性に狙いを決めて、その人だけに尽くすのが……美しい愛か？

答えは、それも愛だ。

一途に思い続ける。なんて健気で紳士的な愛か。

だけれど、私は最初から一人だけなんて無理だと諦めている。

前世の時からそうだったけれど、世界は美少女で溢れているんだ。誰か一人を愛する為に、その他の美少女を諦めなくちゃいけないのは私には無理なんだ。

一般論じゃないのはわかってる。……けど、私はそういう生き方を望んで、そういう夢をバカながらに目指して……そして今、その夢の一番目の理解者に会ったんだ。

「……カヤ。私でいいなら、私にとって都合のいい女になって欲しい。私にとって一番最初の女の子に」

だから、綺麗事は絶対に言わない。

何を取り繕おうと、結局は私の欲を満たす為にその他大勢の一人になってくれと言っ

ているのだから。

「…はい」

それでも、こうして笑って受け入れてくれる人に出会えたのは…、限りない幸福だと私は思った。

「あー、えつと…それじゃ、カヤも敬語やめてよ。クロにはタメだったのに、ね？」

「そ、その言い方はずるいです…、ずるいわ…」

と言いながらもきちんと言葉を正してくれるあたり流石都合のいい女志望。

「私がここまですらないと一人目すら出来なかつたんだから、二人目以降はもつと攻めなきゃ駄目ね？」

「わ、わかっているんだけど、やっぱり同意はいるっていうか…」

頬をかきながら言うと、カヤはふふ、と笑った。何かおかしなことでも言ったのだろうか？

「イリスさ…、いえ、イリスは海賊なんだから、そういうことは気にしなくていいのに…。無理やり拐うくらいが丁度いいわ、女性を囲つてる海賊なんて珍しくないのよ？」

「う…心得ておきます…」

「心なんて後からついてくればいいじゃない。まずはイリスに触れなくちゃ。あなたと

一緒にいて好きにならない女の子なんていないわ」

それは言い過ぎでしょ。言つとくけど見た目ちんちくりんのやつを好きになる人なんてほんとに物好きだからね、ロリだからね！ん？つまりカヤはロリコン…？

「さて…じゃあそろそろ行きですか」

「…もう海へ出るの？」

「うん、四日も待たせちゃったから…多分ルフイあたりの我慢も限界なんじゃないかな？」

せつかくカヤが一人目になってくれたけれど…彼女にはこの地に残ってもらおうことにした。

困って生活するのも悪くはないかもしれないけど、ふらりと訪れる地に美人な嫁がいるというのはいいものだ。現地妻というやつである。

よつ、とベッドから起き上がって立ち上がる。

ちなみに腹の傷は生きているなら完治は簡単、再生力を十倍にすれば完治などあつという間なのだ。

「じゃあ、最後にこれだけは貰っておくね」

「？……あ、…ええ、どうぞ」

同じく立ち上がったカヤが少し屈んで目を瞑る。

私はそんなカヤの”頬”にキスを落とした。いや、絵面完全に子と親とか言わない！  
「…ごめん、キスの初めては、決めてる人がいるから」

せつかくここまで言ってくれた手前言い出し難いが…、どうしても、あの人を落として…そして私の初めてを貰って欲しい。

「もう、そんな申し訳なさそうな顔しないで？…でも、ナミさんが羨ましいわ」

「えっ、ど、どうしてわかったの!？」

「どうしても何も、イリスの周りに女の人なんてナミさんしかいないじゃない」

そうでした。

「…でも、次に会うときは私にもここに、キスしてね？」

「う、…うん」

唇に指を当てて微笑むカヤはなんといか色つぼく…うーん、なんと言うか…あ、  
そうだ、表現するなら…。

…めつちやむらむらします。

この日、私たちは村を離れて海へ出た。

その際にはカヤからお礼としてメリー号という船を貰い、新たな仲間としてウソップ  
が加わった。

私にとつてもこの村で得た事は大きすぎて、何ならカヤのことは今でも夢か何かだと疑つてすらいるが…現実なんだ。

私は、私の目指す夢へと一步近付いたんだ。

ひとまずは……キスの練習でもしておこう、かな。

もちろん、すぐに落とす予定のナミさんで!!

「ふーん…それで、カヤお嬢様を一人目にできたと…」

「はー、それにしても、俺はてつきりクラハドールに惚れてるとばかり思ってたんだけどなア…」

「もちろん！ナミさんが正妻ですからね！はやく認めて下さいよ私の嫁にくるって！」

「あんたも飽きないわね…」

呆れ顔で私を見てくるナミさん。

…でも私は、その後ナミさんがポツリと呟いた言葉に気付くことはなかったー。

「…私だつて…本当は…イリスの事がー」

# 11 『女好き、北を目指す』

「できたぞ!!海賊旗!!」

海上を漂う最中、ちゃんとした海賊船 “ゴーイング・メリー号” も手に入った私たちは海賊旗を作るところから始めようと言うことになった。

オニオンの旗を塗りつぶしてた頃から考えると…何とか感慨深いものではある。ちなみに今完成したのはルフィ作の海賊旗だ。

全体的に絵がふにやふにやしており、麦わら帽子を被ってるってことだけは何とか分かる出来栄えだ…つまり絵心がない。

「よし、絵のことなら私に任せて!」

意気揚々と旗に絵を描く私。海賊旗ならこれでしょ!

「じゃん!」

出来上がったものを見せる。

ルフィは首を捻り、ウソップは呆然とし、ゾロははあくため息。

愛しのナミさんに至っては般若と化していた…何故!?

「あんた…この絵、なに?」

「なについて、ナミさんにキスする私マーク！」

「海賊旗を描くんでしようが!!その旗を船に付けてもただの飾りよ飾り！」

私は最高傑作だと思つたのに、どうやらみんなには不評のようだ。

「海賊旗は『死の象徴』のハズだろ…。…まアある意味恐怖だけだよ」

「どこが恐怖なの!私のナミさんに対する愛で詰まつてるでしょ!!」

「だからそれのどこが海賊旗なんだてめエ!!」

そのままゾロと掴み合いの取っ組み合いになりそうになつたが、本当にそうなら勝てる気がしないのでやめておこう。

「ウソツプならこういうの得意なんじゃないの?」

とりあえずウソツプに振ってみた。

結果は上々で、ウソツプは結構芸術に長けていたので海賊旗はウソツプ作のもで決定したのだった。

うん、やっぱりゴーイング・メリー号の海賊旗って言ったらこれだよ。凄くしつくりくるよ。

完成したということで、残り一つの家賊旗にも同じマークを描く。ゴーイング・メリー号のマストは2本だからね。

そして帆にも同じ絵を描けば…。

「よし！完成っ！！これで海賊船ゴーイング・メリー号の出来上がりだ！」

「おー」

船を見上げて感嘆の声を上げる。いや、普通に圧巻だよな。

「ん？」

不意にルフィを見ると、何やらせつせと大砲に砲弾を詰めていた。

おー！大砲もついているのか、なんかかっこいいね！

そして遠くに見える岩に狙いを定めて発射した。残念ながらもたらなかったが大砲を撃つ瞬間を目の当たりにする日が来ようとは…。

「うまく飛ばねエもんだな」

「よしっ、ルフィ、次は私がやる！」

袖を巻くつてふんすと大砲に弾を追加する。

「そんな体でよく砲弾を持てるよな」

「ウソツプくん、私はこう見えても19歳なのだよ、砲弾くらい持てるのは当然さ」

「いやそれは違うだろ」

ビシッと突つ込むウソツプ。

「よーし、発射！」



ドウン！と勢いよく飛んで行った砲弾は、岩のすぐ真横を通り過ぎて海に落ちた。

「あーっ！惜しい！」

「やれやれ、俺に貸してみろ」

ウソツプが得意げに長い鼻を鳴らして大砲を撃つと、見事に命中した！

す、すごい！あれ、ウソツプってONE PIECEじゃ狙撃手だったんだっけ？

「んナ!?言っただろう？俺は『狙い』に関しちやすげエのさ。恐れ入ったら俺をキャプテンと呼んでいいぜ」

お調子者ではあるかもしれないが、狙撃の腕は確かな物だった。

そうして、海賊旗や大砲の試運転などを終わらせた私達は船内で少しの間体を休めることにした。

誰も外に居ないのはまずいのでは？と思うかもしれないが、その辺が適当なのが麦わらの一味である。

「そろそろ昼だし、ご飯にする？私が作ってもいいけど…」

ちらつ、とナミさんを見ると、悪戯な笑みを浮かべて頬杖をつく。

「私？いいけど、高いわよ？」

「な、何円ですか？」

「円？」

「あ、いや何ベリーですか!!」

仕方ないよね! だって無人島生活長かったし!!? ベリーなんて言うの最近知ったし!?

「でも、本来ならコックを勤めてくれるような人がいれば一番いいのよね、せつかく立派なキッチンがあるのに」

「うんめエ肉作ってくれねエかなア…」

コックかあ…。麦わらの一味には居た気がするけど…。

うーん…、と忘れてる記憶を何とか思い出す作業に没頭していた時、外のデッキで誰かが叫んだ。

「出てこい海賊どもオーっ!! てめエら全員ブツ殺してやる!!」

「おお、海賊旗の効果かな?」

一人感心しているとウソツプとナミさんに変な目で見られた。いや、何かおかしなこと言った?

「おい、誰だお前!!」

放っておくと船の設備を壊し始めたのでルフィが怒って出て行った。

「相手何人だ」

「一人だと思っ、みんなで叩く?」

「鬼かてめエは。ルフィに任せとけ」

ゾロがそういうので私も大人しくしておくことにしよう。

「でも一人で海賊船に乗り込んでくるなんて、よっぽど自信あるんだね」

私も2回ほど似たようなことしましたね。

「でも、ルフィが優勢だぜ、相手も弱くはなさそうだが…」

そりゃあね、相手が悪すぎるよ。

数ある海賊船の中でこの船を選んでしまったのは運が悪すぎるとしか…。

「あ、ルフィが勝った」

ナミさんがほっと胸を撫で下ろす。あの胸を揉みしだきたい…じゃなかった。終わったのと同時にゾロが様子を見に外に出た。

どうやら侵入者の名はジョニーと言って、賞金稼ぎをしているらしい。

そんなジョニーは以前は賞金稼ぎだったゾロと知り合いらしく、ゾロのアニキと呼んで慕っている。

ここからが本題で、船に乗り込んできた理由が病気でほぼ寝たきりの状態になっていたヨサクという賞金稼ぎ仲間を一先ず安静にさせようと岩山で休んでいた所、私達が試運転で放った大砲に岩山を砕かれた報復だそうだ。

本当にごめんなさい。

病名は不明で、症状は突然青ざめたと思ったら気絶を繰り返し、しまいには歯も抜け

落ちて古傷が開くなど：普通にめちやくちや怖い。

実際にヨサクが船の上に寝かされている姿は、もう息をするのすら苦しそうだった。

「ヨサクとジョニー」つつつたらよ、時にはビビる海賊もいるくらいの名になったよ：何年も共に「賞金稼ぎ」やってきた大切な相棒だぜ：!!アニキ、こいつ……！死んじまうのかなア……!!」

ジョニーが泣きながら力なく項垂れるのをゾロは呆然と見ているだけだったが、その時ナミさんが怒ったように声を張り上げた。

「バツカじゃないの!!?」

「何だとナミてめエ！」

「あんた、俺の相棒の死を愚弄するとただじゃおかんぞ……！」

そんな二人にナミさんははあ、とため息をついて私達を見る。

「ルフイ、ウソツプ！あんたもほら、キッチンにライムあつたでしょ!?絞って持ってきて！」

「ラ……<sup>ラジャー</sup>了解っ！」

すぐに小樽一杯に絞って持っていくと、ナミさんがそれを飲ませてと言うので言う通りに飲ませる。

「壊血病よ、手遅れでなきやほんの数日で治るわ」

「本当ですか姐さんっ!!」

「その呼び方やめてよ」

「凄い、私なんて怖いなー、くらいしか思ってたのにな…。」

「一昔前までは航海につきものの絶望的な病気だったの、でも原因はただの植物性の栄養の欠乏。昔の船は保存のきかない新鮮な野菜や果物を載せてなかったから…。」

「お前すげーな、医者みてエだよ」

「俺はよ、お前はやる女だと思ってたよ」

「当然っ、誰の嫁だと思ってるの?」

「船旅するならこれくらい知ってる!!あんたたちほんといつか死ぬわよ!!あとあんたはいい加減にしろっ!!」

「そんなこんなでヨサクは急死に一生を得て、何とか命を繋ぎ止めることができたのであった。」

「でも、これは教訓ね」

「今回は対処が簡単だったからいいけど、本当なら医者がいてくれるのが一番だよね」

「みんなで頷く。コックもそうだけど、医者だって船旅には必須なのだ。今回はみんなで意識のすり合わせを行えたと思っておこう。」

「でも今回の件に関しては完全に栄養失調!コックがいれば起こることはない病気だ

ね」

「よし決まりだ！次はコックを仲間にしよう！なにより船で美味しいもん食えるしな！」  
ルフィがそういうと、ジヨニーが手を上げる。

海のコックを探すならうってつけの場所がある。そういうジヨニーが言った場所は  
“海上レストラン”と呼ばれる場所らしい。

ここから北に2、3日船を進めれば着くらしいが、気をつけないとそこはもう  
偉大なる航路グランドラインのそばだという。

ゾロがずっと探してたという“鷹の目の男”という存在もそこには姿を見せた事が  
あるらしく、ゾロの表情からは喜びと期待の感情を感じとる事ができた。

こうして、私たちは2、3日の間北を目指す事が決定したのである。

## 12 『女好き、女好きに会う』

2日後ー。

「着きやしたっ!!海上レストラン!!ゾロのアニキ!ルフィのアニキ!ウソツプのアニキ!ナミのアニキ!イリスの嬢ちゃん!」

「ちよつと私女なんだけど」

「私はこの中でも年は上なんだけど…」

「どーっすかみなさんっ!!」

ばんっ!と効果音でもついているかのようにジョニーとヨサクが腕を広げて海上レストランを指差す。

その姿は、一言で表すならば船を背負った魚。

まるで船らしからぬその見た目は、船体に大きく書かれた『バラティエ』という店名も合わさりレストランとしては分かりやすくていいのかもしれない。

意気揚々とバラティエに船をつけようとする私達だったが、その横に海軍の船が現れた。

「か、海軍の船?!」

「まさか…撃ち込んだじゃこねエだろうな……」

撃ち込んできたら弾き返してやる。ナミさんに何かあったら海軍の船だろうとボロボロにバラして海に捨ててやるからな。

「あ…だれか出てきた…!」

ヨサクの言葉通りに、船内からデッキに男が姿を見せる。

何か拳につけたメリケンを見せつけてくるんだけど、挑発でもしてるのだろうか？

「俺は海軍本部大尉 “鉄拳のフルボデイ”。船長はどいつだ、名乗ってみろ」

「おれはルフイ、海賊旗はおととい作つたばっかりだ!!」

「お…お…おとといきやがれっ!」

「うっはっは!それいけるぜ相棒っ!」

案外余裕だなこの二人。

「そーいやてめエら二人は見たことがある。政府の機関によく出入りしてるよな。確か…小物狙いの賞金稼ぎ、ヨサクとジヨニーつつたか…ついに海賊に捕まっちゃったのか?」

このフルボデイの挑発に二人は乗ってしまい、飛び掛かったのだがそこそこ強かった彼に一瞬でボコボコにされて戻ってきた。戻ってきたというか、吹き飛ばされてきたというか。



「んもうフルボディ、弱い物いじめはそれくらいにして早く行きましよ」

扉の向こうから女の人の腕が伸びてきてフルボディを引つ張る。

おい！フルボディでめエ許さん！いや、でも私にもカヤやナミさんがいるし！

ふん！とナミさんの腰に抱き付くと呆れた顔をされた。あ、私の身長だと丁度おっぱいに顔が…。

「ハハ」

脳天にゲンコツが飛んできました。痛い。

「運が良かったな海賊ども、おれは今日定休でね…ただ食事を楽しみに来ただけなんだ。俺の任務中には気を付けな、次に遭ったら命はないぞ」

そう言つてフルボディは奥へ引つ込んでいく。

「誰がナミさんを殺すつて!?私があなを先にブツ殺してやる!!出てこーいっ!!!」

「ちよちよっ！あんな何言つてんの！」

ナミさんに止められたので大人しくしよう…。でもあいつの顔は絶対忘れない。

「ん？」

吹き飛ばされたジョニーの懐から何やら写真付きの用紙が数枚落ちていたのを発見して、自分の足元に落ちてきたナミさんが拾う。

「……ジョニー、なにこれ？」

「ああ…：そいつあ賞金首のリストですよ、ナミの姉貴」

「…：気のせいかな？ナミさんの雰囲気が変わったような…。」

「ボロい商売でしょ？そいつらぶつ殺しやその額の金が入るんです。それがどうかしましたか？」

「ナミさー」

「おいやベエぞ!!」

ナミさんにどうしたのか尋ねようと思ったのだが、ウソツプの慌てた声で詮索は一時中断した。

あの憎きフルボデイが大砲でこちらの船を狙っているのだ。

「よしルフィ、任せた」

「おう!!」

こちとらそんな弾で沈むような柔な根性してないっつーの!

飛んできた大砲の弾の前にルフィが立つ。大きく息を吸い込んでゴムの特性を生かし、風船のように膨らんだ。

「ゴムゴムのっ…：風船っ!!」

目論見通りルフィはその大きく膨らんだ体で大砲を受け止めて、反動を利用して砲弾を返す。

「よっし！フルボデイの船を沈めてやれっ！…あつ」

「どこに返してんだバカッ!!」

ゾロの怒声が響くが、仕方なし…。

ルフィの返した砲弾は、フルボデイの船に当たる事なく全く見当違いの方向へ飛んでいき、あろうことかバラティエに直撃したのだった。

—————

「ルフィ連れてかれちゃったけど、大丈夫かな？」

「もう結構な時間経ってるな。雑用でもさせられんじゃねエか」

「バカ正直に言うからでしょ…元はと言えば海軍が悪いのに」

「見に行くか！メシくいがてら！」

ウソップの提案にみんな頷く。お腹も空いてるし…。

ちなみにヨサクとジョニーは軽く応急処置して船内で寝かせてある。

そうしてバラティエの店内へと足を運ぶと、中は結構荒れていた。ん？ここつて大砲の着弾位置とは違う場所だと思っただけだな…。

穴が空いてる天井とか、壊れてるテーブルやイス。何なら血が床についてるし…。

「な、なにが？」

「さアな、どっかの海賊が暴れたりしたんじゃねエのか」

「おつかねエ店じゃねエだろうな…」

バラティエに対して不信任感が募るが、周りの客は気にもしてないし…まあ、なんかあつたんだな。くらいに思っておこう。

適当な場所に座つて料理を注文する。その際にルフィの事を尋ねたら、どうやら一年も雑用としてタダ働きをしなくちゃならないとか…。

ちなみに出てきた料理は前世でも食べた事なくらい美味しかった。オススメで頼んだらお子様ランチが出てきたこと以外には不満はない。

「お前ら、おれを差し置いてこんなうまいモン食うとはひでエじゃねエか!!」

船長改め雑用ルフィがぶんすかと怒りながら私達の座るテーブルへとやってきた。

「ごめんねルフィ、肉頼んどくよ」

「ん？イリス気が効くなア〜」

追加で肉を注文しておこう。この前クロから助けてもらったお礼だと思つて。

丁度近づいてきたコックがいたので頼もうかと思つていると、そのコックは両手を広げてポエムを唄い始めた。

「ああ海よ、今日という日の出逢いをありがとう。ああ恋よ、この苦しみに耐えきれぬ僕

を笑うがいい」

「は？」

おっと、思わず声が…。

「僕は君となら海賊にでも悪魔にでも成り下がれる覚悟が今できた。しかしなんという悲劇か！僕らにはあまりにも大きな障害が！」

これ、口説いてるんだよね。

え、誰を？……ナミさんを!?

「障害つての俺の事だろうサンジ」

料理長みたいな調理帽子をかぶった右足が義足の長髭のおじさんが、ナミさんを口説いていた金髪のくるくる眉毛をサンジと呼ぶ。

「いい機会だ、海賊になっちまえ。お前はもうこの店にはいらねエよ」

…サンジか、そういうえば麦わらの一味のコックつてサンジだっけ？くるくる眉毛だった気がする…。

でも！今後仲間になるとしてもこれだけはハッキリしておかねばならない!!

「黙って聞いてればペらペらと人の女口説いてくれるね！障害？一番の障害はそもそもナミさんは私の嫁つてことだよ!!」

「ちよつとあんた、今はそういう雰囲気じゃないでしょ！空気読みなさいよ……！」

「離してナミさん！軽々しく人の女に手を出すことがどれほどの重罪かこのくる眉に教えてやる！表出ろ！！私が相手だアーーーーっ！！」

私は本気で怒っているつもりなのだけど、サンジは困ったように笑うだけだった。

「ああ、君のお姉さんは確かに綺麗だ…！取られたくない気持ちも、分かる！だけれディがそういう言葉遣いをするのは感心しないな」

「誰が妹だ！！くっ！離して、なんでゾロとウソツプまで私を押さえるの！離してよ！こいつは私が直々にぶん殴ってやんなきゃ気が済まないの！！」

「お、落ち着けて！どうどう！」

「てめエも似たようなモンだろ！飯が食えなくなるからじつとしてろ！」

ぐ…：似たようなモンって…。確かにその通りだから私は若干のシヨツクを受けながらもイスに座り直す。

「最後にこれだけは言わせてもらおうからね、私は19歳だし、ナミさんは本当に私の嫁！」

「…本当ですか？」

「んな訳ないでしょ、年齢の方は本当よ」

ちくしよう。

私が矛を納めたことでサンジは料理長のような人とさっきの『いらねエ』発言の撤回

を求めて喧嘩を始めた。

サンジは副料理長らしく、自分の腕には自信があるようだがそれでも料理長は頑なだった。

「てめエが俺を追い出そうとしてもな!!俺はこの店でずっとコックを続けるぞ!てめエが死ぬまでな!!」

「俺は死なん、あと1000年生きる」

それは言い過ぎとしても、サンジからは並々ならぬ決意のような物を感じた。

…これ、本当に麦わらの一味に入ってくれるの?ここからどうやって行動すればいいんだろう。

\*\*\*

「先程は失礼。お詫びにフルーツのマチエドニアを召し上がれ。食後酒にはグラン・マニエをどうぞお姫さま方」

「わあつ、ありがとう、優しいのね」

「そんな…」

「…ぐ、…ふぐウ…!」

「お、落ち着けよイリス、今のナミはただの社交辞令のような物だ！むしろイリスと喋ってる時のナミは自然体！な？どっちが近い関係かなんて言うまでもないだろ？」

ウソツプの言葉に少し冷静さを取り戻す。でもまずい、サンジは何だかんだ言ってもイケメンの部類に入るんだ…！何回もアプローチされたら流石のナミさんでも…！

「…はあ、あんたもいい加減懲りたらしいのに、言つとくけど私があんたに振り向く可能性は1%もないわよ」

「0%じゃないなら諦めません!!」

「…はあ」

ナミさんは俯いてため息を吐いた。

今の私には、このため息の理由を私がしつこいからだとしか思えなかったが…。

「…私も、そろそろまずいかもね」

赤い頬を隠すように俯いてるナミさんに、私が気付くことはなかったー。

そして、その2日後…。

事件は突然起きる。



## 13 『女好き、正妻に逃げられる』

2日後、メリー号。

「ん？ねえ…何か大きい船がこっち来てない？」

「…嘘、あれ、首領・クリークの海賊旗…！ということはこの船！」

首領・クリーク？

ナミさんが焦った顔をしていることから、そこそこ力を持った海賊なのかもしれない。…うん、だつて海賊船の規模が今まで見てきたのと訳が違うし。

「首領・クリークつて？」

「あんたは知らなくても当然かもね…。いい？首領・クリークはね、この東イーストの海の覇者とも呼ばれる海賊のこと。別名『騙し討ちのクリーク』」

「騙し討ちつて、覇者のわりには小物みたいな二つ名だけど…」

「私も詳しくは知らないけど、海軍になりすまして町に入り人を襲つたり、白旗を振つて敵船に襲い掛かったり…まあ、禄でもない方法で覇者と呼ばれるまで登り詰めたやつつてこと」

なるほど、クズか。

ただ船の外観がボロボロなのが気になる。

度重なる戦闘でそうなってしまうというよりは、つい最近そうなったような傷跡だ。

そうして、首領・クリークの巨大ガレオン船はバラティエに辿り着く。

メリー号とはバラティエを挟んで丁度反対方向に停船したので中から誰が出てきたとかはよく見えなかったが、：覇者もこのレストラン御用達なのかな？

「ちよつと様子見てくるよ」

「俺も行こう。ウソツプ、お前は どうする？」

「お、俺も行こうか。なに、俺は勇敢なる海の戦士：覇者だろうが何だろうが怖くねえ！」

「船にしがみつきなから言われても…」

何とかウソツプを船から引き剥がして連れて行く。

船内に入ると、何故かコックが何人も倒れており中央では金ピカの鎧を纏ったゴリラのような人が騒いでいた。

「俺が食料を用意しろと言ったら、黙ってその通りにすればいいんだ！誰も俺に逆らうな！！」

「はえー、ムチャクチャ言うじゃん…」

店内の騒ぎなどお構いなしに近くのテーブルに三人で腰掛ける。お、特等席。そんな金ピカゴリラ…恐らく首領・クリークの目の前に、長髯の料理長が大きな袋をどん、と置いた。

「オーナー・ゼフ！」

周りのコック達が愕然とその光景を見ている。

何のことだか、途中参加の私達にはわからないんだけど…。

「百食分はあるだろう…さっさと船へ運んでやれ…」

「ゼ……ゼフだと…!？」

ゼフ、という名前に驚愕しているのはクリークだ。

しかしそんなクリークの疑問はコック達の悲鳴で流される。

「何てことを！オーナー！一体どういうつもりですか!？」

「船にいる海賊達まで呼び起こしたらこの店は完全に乗っ取られちゃうんですよ!？」

「その戦意があればの話だ。なア」偉大なる航路<sup>グランドライン</sup>の落ち武者よ…」

その言葉にまたコック達がざわつき出す。

言葉は初めて聞いたけど、意味は大体わかった。偉大なる航路<sup>グランドライン</sup>は過酷だと聞くから、恐らくその苛烈さに耐えきれなくなり逃げ帰ってきたのだろう。

「貴様は…」<sup>あかあし</sup>赫足のゼフ!」

そんな落ち武者ゴリラが料理長を赫足あかあしのゼフと呼んだ。

クリークは語る。ゼフはコックにして船長を務めた無類の海賊で、戦闘において一切手を使わなかった蹴り技の達人だとか。

強靱な脚力は岩盤をも砕き、鋼鉄にすら足形を残すことができたという。赫足あかあしという異名は敵を蹴り倒して染まる返り血を浴びたゼフの靴のことらしい。義足の片足は海難事故で失ったとか。ほー。

「赫足あかあしのゼフ！お前はかつてあの悪魔の巣窟、偉大なる航路グランドラインに入り無傷で帰った海賊おとこ。その期間丸1年の航海を記録した「航海日誌」を俺によこせ!!」

「… 偉大なる航路グランドラインを無傷か…」

いや、これって凄いことだよ。さつきコックが騒いでた時に言ってたことが事実だとするなら…クリークは50隻の艦隊を持つたにも関わらず無様に引き返してきた。

それに引き換えゼフは無傷で偉大なる航路グランドラインを渡ったと。

このゴリラ、ちよつと身の程弁えた方がいんじゃない？

「航海日誌は渡すわけにはいかん。あれはかつて航海を共にした仲間達全員との誇り、貴様にやるには少々重すぎる！」

「ならば、奪うまでだ!!確かに俺は偉大なる航路グランドラインから落ちた!だが腐っても最強の男首領ド・クリーク…高々弱者共が恐れるだけの闇の航路など、渡る力は充分にあった!兵

力も!!野心も!!ただ一つ惜しむらくは「情報」!!そのみか俺には足りなかった!!」

「ねえ聞いたゾロ、情報だつて。知らなかったから無理だつたんだつて…あれ?負け犬の遠吠えに似てるね」

少々声が大きかったのか、クリークがこちらをギロリと睨む。

「ガキだからと許して貰えると思うなよ。ゼフの航海日誌を手にあれ、再び海賊艦隊を組み上げた時…ひとつなぎの大秘宝<sup>ピース</sup>をつかみこの大海賊時代の頂点に立つのは俺だ。その前に、貴様は殺してやろうか?」

「ちよつと待て!海賊王になるのはおれだ!!」

私とクリークで戦闘が起こるかという時、ルフィも我慢ならずに入ってきた。まあそうだよ、自分の目指す物の障害が今彼の前にはあるんだから。

「おい引つ込んでろ雑用!殺されるぞ!」

「引けないね、ここだけは!!」

「…何か言ったか小僧。聞き流してやってもいいんだが」

「ちよつと、私の時と対応が違くない?」

「イリス、ゾロにウソツプもいたのか」

ルフィが私たちを見る。

「戦闘かよルフィ、手を貸そうか」

「いいよ座ってて」

なるほど、確かにルフィの喧嘩なんだから、手を出すのはおかしいよね。

「…ハ、ハツハツハツハ…ハツハツハツハ!! そいつらはお前の仲間か! 随分細やかなメンバーだな!!」

「何言ってるんだ! あと二人いる!」

「おいお前、それ俺を入れただろ…」

サンジが呆れたように言った。あれ、もう勧誘はしてるんだ。

「ナメるなよ小僧! 情報こそなかったにせよ、兵力五千の艦隊がたった7日で壊滅に帰す魔界だぞ!!」

「高々弱者共が恐れるだけの闇の航路でしょ、あなたは弱者でも私達は違うから心配いらないよ、弱者さん」

「…フン、なかなか肝の据わったガキだ。…いいか、そのガキ含め貴様ら全員に一時の猶予をやる。俺は今からこの食料を船に運び部下共に食わせてここへ戻ってくる。死にたくねエ奴はその間に店を捨てて逃げるといい…俺の目的は航海日誌とこの船だけだ」

そう言つてクリークは出て行つた。

残つたのはクリークの手下のような男一人。

その人はギンと言うらしく、クリークをここに連れてきたことを泣いて謝罪していた。

バラティエのコック達に料理長が裏口から出ていけと促すが、コック達は逃げる気などさらさらならしく皆武器を手に応戦する気満々だ。

「そういえばギン、お前偉大なる航路のこと何もわからねエって言ってたよな、行つてきたのにか？」

ルフィの疑問は最もだ。7日もいて何もわからないというのもおかしい話である。

「わからねエのは事実さ、信じきれねエんだ……偉大なる航路グランドラインに入って7日目の、あの海での出来事が現実なのか……夢なのか。まだ頭の中で整理がつかねエでいるんだ。……突然現れた…… たつた一人の男に50隻の艦隊が壊滅させられたなんて……!!」

「え!!」

「た、たつた一人に……」

それは想像を絶するほどの戦慄だった。

私がおニオンやクロネコ海賊団を全滅させたのとは訳が違う。

クリークの海賊団は艦隊。1隻ではなく、50隻なんだから。

しかもそれをしでかした男はゾロが探しているという『鷹の目の男』に違いないと

ゼフは言う。

「…艦隊を相手にしようってくらいだ、その男お前らに深い恨みでもあったんじゃ?」

「そんな憶えはねエ!突然だったんだ!」

「昼寝の邪魔でもしたとかな…」

ゼフの物言いにギンは食いつくが、ゼフ曰く偉大なる航路とはそういう場所なのだからか。

つまり、何が起きてもおかしくない…と。

「でもこれで俺の目的は完全に偉大なる航路に絞られた。あの男はそこにいるんだ!」

「…ばかじゃねエのか、お前ら真つ先に死ぬタイプだな」

「当たってるけどな…バカは余計だ。剣士として最強を目指すと決めた時から、命なんてとうに捨ててる。この俺をバカと呼んでいいのはそれを決めた俺だけだ」

サンジの言葉にゾロは威風堂々と返す。サンジはそれを聞いてバカバカしいと言うが、その表情は本気で馬鹿にはしていなかった。

「で、これからどうするの?クリークの子供もお腹を満たしたら確実にこの店を襲ってくるんですよ?」

「…いや、外が騒がしい、もう食ったのか。どうやら連中はよっぽど腹を空かせていたらしい」

ゼフの言葉に外を見ると、海賊達がバラテイエに続々と侵入している所だった。



そしてそれは、私達がそれを見てそれぞれ戦闘態勢を取ろうとした時に起こつたのだ。

「な……!?!」

首領<sup>トシ</sup>・クリークの乗ってきた、私達の船の何倍もの大きさを誇る巨大ガレオン船が真つ二つに斬られた。船は逆ハの字に傾き、中にいた人達もあれでは無事には済むまい。

「う、そ……」

私は、まだ分かってなかったのかもしれない。

オニオンの時も、勿論クロの時だって何とかなつた。だから、まさか上が……ここまで果てしなく高い何て思つてもなかつた。

「……あーナミさん!!」

そうだ、あれ程の船を斬つたのなら、その衝撃でメリー号も危ない!

私は自身の能力をフルで使つてメリー号のあつた場所へと向かう。

「っナミさん!!」

船は……ない!!まさか、もう斬られて……!!

「イリスの嬢ぢゃ〜ん!」

海を見ると、何故かその身一つで海に浮かぶ二人がいた。その近くにナミさんの姿は

見当たらない。

「ヨサクとジヨニー！ナミさんは!!?メリー号はどこ!？」

「それが…!もうここにはいないんです!」

「何?どういうことだ?」

後から追いついてきた三人も私と同じように怪訝そうな顔をする。

「ナミの姉貴は、宝全部持つて逃げちゃいました!!」

「な…何だとオオオオ!!」

「…ほっ、つまり無事なんだね!!」

頷く二人に一先ず安心する。ナミさんが無事ならそれでいい。宝の持ち逃げも海賊専門の泥棒何だから当然といえば当然だ。

…だけど、少し気になることがある。

私の知るナミさんは、この一味のことが嫌いじゃない筈なんだ。海賊は嫌いでも、私たちの事は絶対に嫌つてなかった。

そんなナミさんが私たちを裏切るようなことをしたんだ…。何か理由があるのは間違いない。

でもこれでナミさんが生きているのは確定した訳だし、良かった。

問題は私達だ…。こんな船を斬つちやうような人相手から逃れられるのか…。

あー、こういう時に前世の知識があればなく!!  
私は真つ二つに斬られた船を見て、そう思うしかないのであった。

## 14 『女好き、決闘を見守る』

「ーってな感じで、逃げられましたー！」

ジョニーとヨサクを船に引き上げてから二人に詳しく事情を聞いた。

とは言え大まかにはさつき聞いたのと同じで、宝を持って逃げたというのが全容だろうけど。

けど、その話に出てくる賞金首のリストを眺めてたという話は気になる。昼間も同じように見ていた事があったから、無関係だと言うことはまず無いだろう。

「くそっ！あの女!!最近大人しくしてると思ったら油断もスキもねエっ！」

「この非常事態に輪をかけやがって!!」

「…待て！まだ船が見えるぞ!!」

ルファイが遠くではあるがまだメリー号が見えると言った。

「…!!」

行きたいけど…、ここを離れてもいいのか…!

「イリス、お前が行け」

「ルファイ…!!」

「ヨサク！ ジョニー！ お前らの船は!?」

「それはまだ残つてやすが……!」

「この船長は……本当に出来た人だね!!」

「みんな……ごめん！ 私は、やっぱりナミさんが好きだから。ちょっと行つてくる!」

「!……わかつたよ、つたく世話のやけるガキ女だぜ、おいウソツプ行くぞ」

「お、おう」

ゾロとウソツプもついてきてくれるなら何が起こつても安心だね。

ルフィはクリークとの決着がついていないから残るらしい。

ヨサクとジョニーは船を用意してくれているので、もういつでも出発できる。

「あいつだア!!」

「っ!?!」

だがその時、並々ならぬ雰囲気を感じてその気配の方向へ顔を向ける。

一瞬だけ目が合ったが、まるで鷹の目のような鋭く、見通してるかのような眼をした男が自らの小舟に乗つて海を漂っていた。

「まさか……あれが……鷹の目の男……!?!」

ゾロがその男をジツと見つめる。

クリークの船員が何で俺らを襲つたのかと問うた時、彼は「ヒマつぶし」と答えた。

ヒマつぶしで50隻の艦隊を潰せるほどの実力者…。これは、相当だね。

「…わりいな、イリス。ちよつとだけ待っていてくれ」

「うん、気をつけて」

そんな相手にゾロは真つ直ぐ向かっていく。

ゾロの目的は確か、世界最強の剣豪。そして目の前にいるこの鷹の目こそが今の世界最強の剣豪なんだ。

それは、引ける筈もない。

そうしてゾロは鷹の目を誘って、勝負の場を作ったのだった。

「…ゾロはいつもの三刀流…だけど鷹の目のあれは？」

「どう見てもナイフだろ…それも小型だけ」

私の疑問にウソツプが答える。

その背に背負っている十字の大剣を抜くことはなく、鷹の目は懐から取り出した小さなナイフを構えた。

そうして始まった決闘は、それはもう一方的だった。

ゾロの今までに培ってきた剣術は、鷹の目の手にある玩具のようなナイフ一本で捌かれ、反撃をもらおう。

「何を背負う、強さの果てに何を望む、弱き者よ…」

「アニキが弱エだと、このバツテン野郎オ!!」

「てめエ思ひ知らせてやる!その人は…」

「やめろ!手を出すなヨサク!!ジヨニー!!」

ヨサクをルフィが、ジヨニーを私が押さえる。

これはゾロの戦いだ。手を貸してしまつたら最後、私達はゾロの夢の邪魔をしたことになる。

それだけはきつと、ゾロが死んでもして欲しくないことの筈だ。

そして戦いは佳境へと入る。

ゾロが虎狩りの構えを取り、対する鷹の目は相変わらずそのナイフを構えたままだ。

ゾロの技が鷹の目へと襲いかかるが…、結果として左胸をナイフで貫かれていたのはゾロだった。

それでもゾロは引かない。あと少しでも前に出てしまえば心臓を貫かれる位置に居るにも関わらず。

何を喋っているのかはよく聞き取れないが、鷹の目はゾロの胸からナイフを抜いた。そして…今度は自らの背に背負つた黒刀を手にしたのだ。

これが最後の打ち合いになるだろうことは間違いない…。ゾロもそれはわかつている筈だ、だからこそ、次に自分の全てを乗せてくる。

「三刀流奥義!!三・千・世・界!!!」

「……」

その技は、間違いなくゾロの切り札だ。

三本の刀を無駄なく使う、まさに奥義。でも…その技を持ってしても届くことはなかった。

鷹の目の黒刀に両手に持っていた二本の剣を折られる。そして止めを指される寸前に、ゾロは鷹の目に体を向けた。

「背中の傷は、剣士の恥だ」

「見事」

ズバン!と世界最強の黒刀がゾロの体を肩から腰にかけて斜めに斬り裂く。

その斬り傷からは夥しい程な血が溢れ出し、力なく倒れて海へと落ちていった。

「ゾロ!!」

ジョニーとヨサクが海へと飛び込み、ルフィが鷹の目に突っ込んでいく。

鷹の目はそんなルフィにゾロはまだ生かしてあるという。その言葉通り、二人が引き上げてきたゾロにはまだ息があった。

「ゾロ!私が上げるよ!」

二人から受け取って船へと寝かす。いくら生かしてるとはいえ、この傷はまずい…。



早く処置しないと出血多量で結局死んでしまう!!

「我が名はジュラキユール・ミホーク! 貴様が死ぬにはまだ早い、己を知り、世界を知り! 強くなれ、ロロノア!!」

私はゾロの血を丁寧に拭き取って傷口に傷薬を塗っていく。

その上に薄いタオルを押し当てて、包帯で巻く。応急処置はこれくらいしか…私達の知識では無理だ。

「俺は先、幾年月でもこの最強の座にて貴様を待つ!! 猛ける己が心力挿してこの剣を越えてみよ! この俺を越えてみよ、ロロノア!!」

そんな鷹の目、ミホークの声にゾロが反応する。

彼は寝ながら、自らの剣の先を天に翳し宣言した。

「ルフィ…不安に…させたかよ…俺が…世界一の、剣豪くらいにならねエと、…お前が困るんだよな…!!」

血反吐を吐きながらも喋るゾロを、ヨサクとジョニーが止めようとするがそれでもゾロは喋るのをやめない。

「俺はもう!!二度と敗けねエから!! あいつに勝つて大剣豪になる日まで、絶対にもう…俺は敗けねエ!! 文句あるか…海賊王!!」

「しししし!! ない!!」

ゾロの宣言を聞き遂げ、ミホークは自らの小舟に戻る。

その途中クリークに絡まれていたが、軽くあしらうかのように海を斬つてその隙にこの場から離脱した。

「イリス!!行つてくれ!!」

「わかった!ナミさんは絶対嫁にするから、ルフィはサンジの勧誘成功させてね!!」

「ルフィ!6人ちゃんと揃つたら!そんときや行こうぜ、グランドライン!!」

「ああ!行こう!!」

そうして、私たちはナミさんの乗るゴイング・メリー号を追いかけた。

…ナミさんに、本気で拒絶されてるかもしれないってことを考えた事がないと言えば嘘になる。

でも、だったら何だと言うのか。私は海賊だ。奪えばいい!!

カヤの言うように、強引に行くんだ…何が起ころうとも、ナミさんの心は、身体は!私が隅々まで奪う!!!

## 15 『女好き、魚人に会う』

「追いつけそう？」

何とか見える、くらいまで離されてしまったメリー号を見据えてウソツプに尋ねる。

「追いつくのは難しいだろうな、ただこのまま追っかけていけば大体の位置は掴める筈だ」

「そっか、よかった」

「……」

「ヨサクもジョニーも、さつきからどうしたの？」

ついさつきから、明らかに口数が少なくなった二人に声を掛ける。

手配書と睨めっこをしている二人は明らかに怯えているようにも見えた。

「…もしかしたら、ナミの姉貴はとんでもない奴の所へ向かっているのかもしれない  
！」

「とんでもない奴？」

「この航路だと、間違いありません！このままだと、間違いなく“アーロンパーク”にたどり着く！」

ア—ロンパーク…。

聞いたことあるんだけど、何だっけな。

「偉大なる航路が海賊の墓場と呼ばれるのは君臨する三大勢力のせいだと思いやすが、

その内の一つの勢力が…王下“七武海”」

「しちぶかい？」

代表してヨサクが説明してくれるようだ。

「簡単に言えば世界政府公認の七人の海賊達っす」

「何で海賊が政府に認められてるの？」

海賊は海賊何だから、昼のフルボデイみたいな対応が本当は正しいのだ。

「“七武海”は未開の地や海賊を略奪のカモとし、その収穫の何割かを政府に収めることで海賊行為を許された海賊達なんでやす。他の海賊達に言わせりや“政府の狗”に他なりやせんが、奴らは強い!!何を隠そう、ゾロのアニキを討ち負かしたあの“鷹の目のミホーク”も!!王下七武海の一角を担う男なんです!!」

「…あんなのが、あと6人も…!!」

「問題はその七武海の中の一人、魚人海賊団の頭、“ジンベエ”!」

「魚人かー。イリスは興味引かれるだろ?何たって人魚だぞ人魚」

「あー…機会があれば行ってみたいな」

今は、ナミさんだ。

…でも人魚か、確かに気になるなあ…。

「ジンベエは七武海加盟と引きかえにとんでもねエ奴をこの東の海へ解き放ちまいやがった…、そいつが、アローン。かつて“七武海”の一人ジンベエと肩を並べた魚人の海賊！アローンパークとはそのアローンが支配する土地です！」

「…そっか。そう言えばナミさんが見ていた手配書…。思い返してみればアローンって書いてた気が…」

「そうなんですよ、確かに姉貴はアローンの手配書ばかりじつと見てた。そしてアローン一味が最近また暴れ出したってことをあつしらが口走った直後…ナミの姉貴は宝持って船を出したんです。これはもう偶然とは思えやせん」

ふむ…。となると、そのアローンってやつに弱みを握られている説が濃厚かな。

「あつしらの予想では、ナミの姉貴とアローンは裏で繋がってたんじゃないかと」  
「うん、私もそれは思う」

「てめエのことだから、バカみたいにナミを信じるとか言うのかと思つたぜ」

さつきまで重症で寝てたくせに普通に座ってるタフ剣士は何なの。

「信じてるよ、疑つたことなんか無い」

私は迷いなく即答した。

当たり前だ、私のナミさんだよ？

「オイ、行き先がわかったならルフィに伝えなくていいのか？」

「…なら、あつしが戻りましょう！最後まで姉貴を信じ抜くイリスの嬢ちゃん…いや、イリスの姉貴に感動しやした！任せてください！」

「ヨサク平気かよ、船もねエのに」

「この辺はパンサメの生息地だから心配いらねエ！ちよつくら行つてきやす！」

そう言つてヨサクは海に飛び込んで、宣言通りにパンダのような色合いのサメを掴んで来た海を戻つていった。

「それにしても、アーロンか…。ナミさんを下さいつて言えば大丈夫かな？」

「まず無理だろうな、どこの馬の骨とも知れねエ海賊にくれてやる馬鹿はいねエだろ」

「はは、言えてるね」

最悪は倒してでも貰うんだけど。

そして、数時間後。

私達はついにアーロンパークへたどり着くことに成功した。

まだ島についてはいいないが、外から見る感じだと昔ながらの和風なお城つて感じかな。天辺にノコギリザメの頭みたいな飾りがあるけど。

「着きましたが…問題はこれからです。まずナミの姉貴がどこに船をつけたかを…」  
「乗り込もう」

「斬り込むか」

「何でそうなるんですか?!」

「アホかためエら！まだ何の手掛かりも掴んでねえんだぞ!!」

「手掛かりならある、あそこにメリー号は止まつてるよ」

私が指を差す方向を見るが、ウソップ達は目を擦るだけだ。もちろん視力10倍チートを使ってるから出来ることなただけだ。

私が言う方向に船を進めると、ウソップ達にも見えるようになるくらいメリー号が大きくなってきた。

「お、ほんとにありやがる！」

「でも、おかしな所に停まつてるっすね、ここにあるココヤシ村から少しずれてる」

「まずはメリー号に船をつけよう。まだナミさんもいるかも知れない」

そうしてメリー号に近づいて行くと、小さな港が見えた。

本当に船を停めるためだけにあるような港だが、何とそこには魚人がいたのだ。

「私はここで降りるよ、ウソップ達はメリー号をよろしく」

「俺もここで降りる。メリー号は頼んだぞウソップ、ジョニー」

「へ、へい……」

よつ、と港におりてウソツプ達を行かせると、3人組の魚人と目があった。

「見かけねエ人間だな。この島に何の様だ？」

「あ、すみません、私イリスって言うんですけど」

「ああ、ご丁寧にどうも」

「何頭下げてんだ！」

ばしつと後の二人に頭を叩かれていた。

「人を探してまして……オレンジ色の髪で、美人で私の嫁っぽい顔してる人なんですけど」  
「こいつ頭いかれてんな、とりあえずアロンさんのところに連れていくか」

そうだな、と頷き合う3人には悪いけど内心ガツポーズ。

いかれてんなは余計だと思うけど、アロンに言えばナミさんの事は聞けるだろう。

何故かそういった確信があるのは、忘れてる前世の記憶が影響してるのかな？

私とゾロはこれ幸いと大人しく魚人達に連れていかれる。

重たそうな門を開けると、アロンパークへと到着した。城の前はまるで学校や市民プールのように長方形で水場があり、海と繋がってることから普段はここに船を停船させているのだろうか。

そして肝心のアロンは椅子に座って地べたに座らされた私達を見下ろしている。



「ここに何の用だ、人間」

「嫁を探しにきたんですけど、知りませんか？オレンジ髪的美人」

「シャーッハッハ！何？俺の耳がおかしくなったのかもしれないねエ、もう一度言ってみてくれねエか」

「だから女を一人探してるつつつてんだろ！半魚野郎!!」

なんでゾロさんはそうも攻撃的なんですかね。

「ホウ…：下等な人間が言ってくれる…：一度は許すが半魚ってのは二度と口にするな！俺達魚人は海での呼吸能力を身につけた『人間の進化系』、魚の能力分てめエらより上等な存在なのよ…：!」

確かに強そうだ。筋肉やばいし、牙も鼻のギザギザも刺さったら痛そうだ。ウソツプの鼻もあんくらいギザギザなら強そうなのね。

「天性に持つ数々の人間を越える能力がその証！『万物の霊長』は魚人だと頭に叩き込んどけ!!人間が魚人に逆らうってのは、『自然の摂理』に逆らうも同然だ!!」

「そのバカみたいな持論は聞き飽きたわ、アーロン」

「ナミさん!!」

アーロンの後ろからナミさんが現れる。よかった、やっぱりここにいたんだ!

「…：そう恐エカオすんな！お前は別さナミ！我らがアーロン一味の誇る有能な『測量士

「だ、実に正確ないい海図を作ってくれる！」

「あんた達とは脳ミソの出来が違うの、当然よ！」

「測量…!? おいナミ！何でお前がコイツらと仲良くやってんだ…！」

「何だおめエの知り合いかよ」

「バカ言わないで、ただの獲物よ。今回はこいつらからたつぷりお宝を巻き上げさせてもらったの。途中まで追ってきてたのは知ってたけど、まさかここへ辿り着けるとはね…」

近くにきてゾロの前でしやがみ込んで言うナミさん。

あれ、私とは全然目すら合わせてくれないんだけど。

「これがてめエの本性か!？」

「……そうよ、驚いた？私はアーロン一味の幹部、もともと海賊なの」

「そうだ！そして私の嫁でもある!!」

「ツ……！」

ナミさんは一瞬私を見たかと思うとすぐに視線を逸らしてしまう。

えー、何これ放置プレイか何か？

「シャハハハハ…まんまと騙されてた訳だな。こいつは金の為なら親の死さえも忘れる事の出来る冷血な魔女の様な女さ!!」

「……!!」

ナミさんの表情がほんの僅かではあるが変わった。

何かを堪える様な顔は、次の瞬間には元通りになる。

「……なるほど」

親を殺した海賊を憎く思ってるって言ってたナミさんの言葉に嘘なんかない。バギーの時、ナミさんは自分の命をかけてまで海賊のようになるのを拒んだんだ。

なら、嘘をついているのは、親の死さえも忘れる事が出来るという部分！つまり…ナミさんはアーロンに冷血で非道な人間だと思われる必要があつたわけだ。

そしてその理由は、アーロンこそが、ナミさんの思う憎き海賊だからと言うことに他ならない。

何かしらアーロンに弱みを握られてるんだらう。何をさせられてるのかまではわからないけど。

「よし、ここは一つこいつらをぶっ飛ばして…ごふっ…!」

ナミさんの武器である三節棍で顔面を強打されて地面に倒れる。

やっぱり結構力ありますね…ナミさん…。

「はあ…はあ…こいつらを縛ってブチ込んで！後で私が始末するわ」

そう言ってナミさんは後ろに下がっていった。

それと同時に魚人が外から入ってきてウソップがココヤシ村に逃げ込んだという情報が入ってくる。

アーロンもそこに用があるといつて足早に出てしまった…。

その後すぐにナミさんの指示通り縄で縛られた私とゾロは牢屋のような部屋に押し込まれた。

「…やつぱり、ナミさんには何かある」

「あのナミがお前の顔を本気で殴るくらいだからな、そりやそうだろう」

「絶対私を守ってくれたんだよね、いやー、でもアーロンに弱み握られてるのは確かだから、やつぱりアーロンを潰すのが一番早いと思うんだけ」

「バカな事言わないで」

私の言葉を遮るように部屋にナミさんが入ってくると、縄をナイフで切ってくれた。

「ほら、さっさと逃げて！アーロンが帰らないうちに」

「ナミさんは？どうするの？」

「私のことはもう名前前で呼ばないで、私もあんたの事を名前前で呼ばないから」

「ははは、何言ってるの、ナミさんが私を名前前で呼んでくれた事何か元々無いよ？」

「……………いいから早く逃げなさい」

苦虫を噛み潰したような顔でナミさんは部屋を後にした。

さて、じゃあ私も行こうかな。

「どこに行くんだ？」

「ナミさんをストーカーしようかなって、ゾロは？」

「俺はここに残る。逃げろって言われてもここ以外行くところもねえしな」  
なるほど、確かにそうだ。

「じゃあ私は行くよ、じゃ」

ゾロに手を振って外に出る。

幸い視力倍加を使えばまだ見える距離にナミさんは居たので、バレないように後をつけるのであった。

## 16 『女好き、正妻の過去を知る』

「…うわア」

ナミさんの後をつけて、ココヤシ村と呼ばれる村にきてまず目に入ったのが倒れた家だ。

比喻でも何でも無く、家が根元から持ち上げられて横たわっているのだ。

魚人のパワーってどうなってるの…。

それにしても、どう言う訳かナミさんが村に来た途端、中央で集まっていた人達がいんな家の中へ逃げるように帰っていった。

残っているのは…うお、美人のお姉さんじゃん!!

そんなお姉さんだけはナミさんと普通に接しているように見える。

この村の惨状は気にはなるが、ナミさんが少し壊れた家や荒れた村を見て悲しそうな顔をした後にすぐ歩き出すので慌てて後を追う。どうやらお姉さんもナミさんについていくようだ。

目的の場所は島の端に位置する断崖絶壁の崖だった。周りにはナシの木みたいな大きな木が生えていて、崖の側には木の棒を十字に括って地面に刺した簡易の墓がある。

崖というよりは、この墓がここにきた理由なのは間違いないだろう。

私は近くの茂みに隠れて様子を伺うことにした。こつそりはここ最近良くしてるから慣れたものよふつつふ。

ナミさんはその墓の前に座って手に持っていた花束を添えた。

「あと…3百万ベリー」

「相変わらず評判最悪だよ、あんた」

「まーね、海賊だもん。でもアーロンは話の分かる奴よ、お金で全て事が運ぶから」

お金…。あと3百万ベリーって？

「あいつとの約束までもう少し！何が何でも1億ベリー稼いで、私はこの村を買うの！」

…いかん、鼻血が。

それはもう飛びつきたくなる笑顔で言うもんだから、思わず茂みから飛び出しそうになつたけど、これは重要な情報だ。

1億ベリー…他方もない額の金だけど…今のナミさんの口振りからするともう9700万ベリーは貯まつてるってことか。私はお金あつたら使っちゃうからなア…。

ナミさんはそれだけ言うとすぐにその場を離れた。

今はアーロン一味の幹部だから、アーロンの元へ行ったのかな？じゃあアーロンパークか。

…まあ、私が今用があるのはナミさんじゃないけど。

「や、初めましてお姉さん」

「うわっ、あんた、どっから出てきてんの!？」

茂みから急に飛び出したものだから少し驚かせてしまったようだ。

「いやー、驚かせてすみません。私イリスと言います」

「え? うん…あたしはノジコ。小さいのにお行儀よくて偉いね」

「あの…こんな見た目でですけど、一応19歳です…はい」

「えっ」

案の定驚かれた。私…これでも!あと1年で大人だから!!

「それで、要件なんですけど。ナミさんとはどんな関係で?」

「え? ナミと?…ナミはあたしの妹よ」

「道理で綺麗なわけだ」

うんうんと頷く。

お姉さんは少しポカンとして、ちよつと吹き出した。

「あっはは、あんた中々面白いね、で?話はそれだけ?」

「いや?本題はここからですよ。…今、ナミさんを縛ってる物は何ですか?」

「…!!!」



変に濁さずに、直球で聞いたからかお姉さんが目を見開いて私を見る。

それでも私は言葉を続けた。

「アーロンが関係しているのは分かっています。それで、その問題はアーロンを倒せば終わる話ですか？それともそうではないのですか？」

「ちよつと待つて、あんた、どこまで知ってるの…!？」

「そんなに知らないからこうして知ってそうな人に聞きにきたんですけど」

ナミさんのお姉さんなら、何か知っていてもおかしくはない。

「…なんでそんなにナミの事が知りたいの？弱みでも握るつもり？だとしたらあたしはあんたを許さない」

「弱み？それを握ってるのはアーロンですよ、私はそれを何とかしたいだけです。理由は……、」

あれ、これって家族に嫁にしたいからです!!とか言っちゃってもいいの？いや、これまずくない？よく良く考えたらナミさんの家族と喋ってるよ私!!ど、どうしよう…ハッ、て、手土産が一つもない…!第一印象最悪だあゝっ!!

「理由は？」

「あ、い、いやゝ、その…」

ジーーーーと私を見てくるお姉さん。段々とその目に不信感を募らせつつあるのが見え

る。

「あーもうっ!!好きだからですよ!!私が!ナミさんを嫁にしたいからですよ!!そんな人にお邪魔虫が付いてる現状がゆるせないんですっ!!わかったら早く教えて下さいよっ!!この美人っ!!」

「それって罵倒のつもりなの?…まあ、その言葉が嘘じゃないって言うのは、あんたの目を見たら分かるよ。何というか真っ直ぐ過ぎるね、ナミには勿体ないくらい」

何言ってるのこの人、私にナミさんが釣り合わないんじゃないやなくてその逆でしょどう見たって。

「…それじゃ、経緯くらいは話してあげる。でも…話すだけだよ、聞くだけ聞いたら大人しくこの島を出な」

「嫌ですよ?あ、話は続けてどうぞ」

「……ふう」

お姉さんの額に青筋が浮かんだ気がした。ナミさんならゲンコツ物だったね。

「ナミの親が、アーロンに殺されたのは知ってる?」

「海賊ってことしか知らなかったけど、何となく分かってはいました」

「そう、ナミと私は、あのアーロンに親を…母親を殺された…!」

8年前、ナミさんがまだ10歳だった頃の話だ。

当時のナミさんは、今より少し悪戯っぽくて貧乏だったのもあるが時には万引き何かをしていたらしい。

その時よく盗んでいたのが、航海術を学ぶ指南書やそれに類する物。

当時からある程度の地図を描けるようになっていたナミさんは、自分の航海術で世界中の海を旅して自分の目で見た『世界地図』を作るのが夢だったそう。

その時に夢の話を実剣に聞いて、そして心の底から応援してくれていたのも母である『ベルメール』さんだった。

「でもある時、ちよつとした事であたしとナミは喧嘩しちやつてね、今思えば…本当に小さな事だった…」

「お姉さん…」

お姉さんは涙を流す。

ナミさんとお姉さんはベルメールさんに拾われた所謂拾い子だそうで、ちよつとした喧嘩が起こった際、ナミさんが言ってしまった『本当の姉妹じゃないのに』という言葉にベルメールさんが怒ってしまったのだが、ナミさんは軽く口論なつたそう。

口論だけなら良かったのだが、ナミさんは喧嘩の流れそのままに家を飛び出してしまふ。

しかし、やはりベルメールさんは良い母親だったのだろう。口論の原因としてはナミ

さんに非があるのだが、ナミさんが言った言葉が本心ではないと見抜いてたベルメールさんがお姉さんにナミさんを迎えに行つてあげてと言つたのだ。

「そしてあたしはナミを連れ戻しに出たの、場所は簡単だった、ナミが行く所なんてゲンさんの家しかないからね。：でも、：つ、そんな時にあいつらが来た：ツ!!」

ゲンさんとは、頭に風車の玩具をつけた駐在の男性らしく、昔からナミさんとお姉さんの父親代わりのような存在だったとか。

アーロンは島に来た直後にある法令を出した。法令と言つても名ばかりの恐怖で塗り固めたただの脅迫だ。

これから毎月大人一人10万ベリー、子供一人5万ベリーの金を払えと言つてきたのだ。

払えなければ死を意味するが、幸いなことにベルメールさんやナミさん達が住んでいた家は村から見えない位置にあつたため村にきた魚人達に気づかれない可能性もあったのだ。

「でも、見つかつてしまったんだ：。ベルメールさんが、ナミとの仲直りの為に作つてたご飯の煙が：家の煙突から出ててね」

そしてベルメールさんはアーロンに見つかり、戦いに発展するも相手にならなかつたそう。

元々海兵だったらしいベルメールさんでも軽くあしらう程の実力をアーロンは持っていた。

そんな彼女にアーロンは金を求める。貧乏な家だったベルメールさんは、へそくりを足しても10万ちよつと……つまり、どうやっても足りなかったのだ。

しかしそこでまたまた幸運だったのが、ナミさんとお姉さんはまだアーロン達に見つかっていないかったのだ。

このまま何食わぬ顔で一人分の10万ペリーを払えばそれで解決だった。

一つ問題があるとすれば、もうベルメールさんがナミさんとお姉さんの母親ではいられなくなるといふことだけだった。

当然だ、いずれは見つかり、結局は殺されてしまうだろう。まだ幼い二人の子供には酷かもしれないが島を出てもらうしか道はなかった。

そのままベルメールさんはアーロンに10万ペリーを渡す。

「……それしか、道はないと思つてたのに……!!」

「!!」

アーロン達が金を受け取つて帰ろうとした時、ベルメールさんは言った。

「子供二人で10万ペリー、それは私の娘達の分。私の分は足りないわー」

「ゲンさん、ごめんなさい……私……!家族がいないなんて言えないわー」

「たとえ命を落としても……口先だけでも親になりたい」

「あいつら……私の子でしょ？」

そうして、ベルメールさんはアーロンに見せしめとして命を奪われた。

命を落とす瞬間も、彼女は娘二人に愛情を向けていたのだ。

だが、悲劇はここで終わることはなかった。

ナミさんが今まで描いていた海図が見つかったのだ。アーロン一味にはまともな海図を描ける人材がいなかったのもあって、ナミさんは一度アーロンに連れて行かれたのだった。

「村にはすぐに戻ってきた……けど、その時にはもうアーロンの一味だったわ」

肩にアーロンの一味の入れ墨を入れて村に戻ってきたナミさんは、アーロンから貰ったという札束を見せつけてわざと村の人から嫌われるよう仕向けた。

自分が助けを求めれば、それだけでみんなが傷付いてしまう。ナミさんにとって、もう誰かが傷付くだけでも嫌だったからだ。

そんなナミさんはアーロンとある約束をしていた。それこそが、さっきの1億ベリーだ。

1億ベリーをアーロンに払うことで、ナミさんと、このココヤシ村は解放される。だからナミさんは、誰にも手を借りずに一人で戦うと決めたのだ。

「8年前のあの日から…あの娘は人に涙を見せることをやめ、決して人に助けを求めなくなつた…！あたし達の母親の様に、アーロンに殺される犠牲者をもう、見たくないから…！！」

「…だからお姉さんは、もうすぐ目標が達成されるナミさんの邪魔にならないように私に島を出ろつて言つたんですね」

「まア…ね。ナミの事を好きだつて本気で言つてくれるような奴は、例え女だろうとは構わない。だけどそれだけであの子の8年間を潰したくないのさ…ごめんね、最低なのはわかつてる」

そう言つて自虐気味に笑うお姉さんだったが、最低なものか。

私はそのまま目を逸らすことはなく、お姉さんに告げる。

「じゃあ、島は出る。けど近くで待つてますよ。私はもちろん…私の仲間達はナミさんが居ないと寂しくて死んじやいますし」

ニツと笑うとお姉さんは少し驚いた顔をした後、軽く微笑んだ。

「へえ、あんた、いいね。ここでアーロンを倒す！とか言い出すようなら絶対ナミをあなたに託す気はなかつたけど」

「はは…。私、これでも日本人ですから。そんなナミさんの決意を聞いて変に手なんか出せませんよ。そりゃあ、アーロンはナミさんを悲しませたんだ…ぶつ倒してあげた

「いって気持ちちはあります」

「にほんじん？よくわかんないけど、アーロンを許せないのは私も同じさ…。だから、ナミの8年間は私にとって誇らしくて、同時に凄く情けないね。自分の妹に全部押し付けてんだからさ」

「だからこそ、私はナミを見守り続けて、せめてもの心の支えになるくらいのことではしてあげたいんだと言うお姉さんは、自分で何と言おうが立派な姉だ。」

「ほら、島を出るなら早くしなよ、お仲間もいるんでしょ？」

「あれ、知ってたんですか？そんなんですよ、まず鼻の長いー」

そうやって、話に花を咲かせながら村へと足を進める。

お姉さんとの話は楽しく、ナミさんの幼い頃の思い出話などを聞いて笑う。

このたった数時間後に、自分の一番愛する人を闇の底へと突き落とす出来事が起きることも知らずに。



## 17 『女好き、本気の想いを届ける』

数時間後――。

「お姉さんに村を出るって言ったものの……みんなどこに居るんだろう……。」

ルフィ達はまだこっちに来てないのかな？ いやでもクリークって言い訳ばかりしてたイメージあるからあんまり強くなさそうなんだよなあ。

「……ん？ やば、ここどこだよ」

知らない道をぐるぐるしてたら迷子になっちゃった。てへ。

いやね、他県どころか私他世界だからね？ しかも他世界の他島な訳、わかる訳ないよね。

……私も結構言い訳ばっかだな。

「それにしても、凄いまかん畑……いい匂い……」

……ここがどこだか知らないけれど、素人目にも分かるほど美味しそうなみかんを作れる人が近くにいるのはわかった。

……よし、出て行く前にせめて一個だけでも貰って行こう。

「誰かいませんかー、と。……お、家発見っ」

「辺り一面のみかん畑を抜けると、ようやく家を発見した。

「でも、村からだいぶ離れてるね、みかん畑の為の家なのかな?とにかくお邪魔します!」

「こんこん、とノックをする。

「暫く反応はなかったが、やがてゆっくりと扉が開かれて家の住人が出てきた。

「はいはい、誰よこんな時に……。げっ」

「えっ」

「出てきたのはまさかのナミさんだった。あまりにも突然すぎてお互い顔を見合わせ  
て固まる。

「…はっ、ナミさん、その左手…」

「っ、何でもない」

「咄嗟に手を後ろに隠すナミさんだけど、間違いなく怪我をしていた。

「それも巻いた包帯の上に滲んだ血が見えるくらいの出血量だ。切り傷程度じゃない  
のは確かだった。

「…いい加減にしてよ」

「えと、でも今回は本当に知らなかったと言いますか…」

「そんなの関係ないわよ!!あんたも!!…ルフィも!何でそうも私に拘るのかわかんない

いつ!!いい加減私の前から消えてよ!この島から出てっつ!!」  
ルフィ:はもうこの島に来たのか。

この言い方は、ルフィ何かナミさんを怒らせたのか?まあルフィに島を出て行けなんて言っても聞くはずないし…。

「はい、一旦出ていきます。だからナミさん、お金が貯まって村を取り返す事が出来たら…また、メリー号に乗ってくださいよ」

「……!!あんた…なんでその事…」

「ナミさんの迷惑にならないように、今だけは出て行きますから。だからお願いです…また、私と一緒に居て下さいよ!」

「な、何で…」

ナミさんの瞳が揺れる。もうここしかない。私の気持ちを全力で伝えるんだ!冗談なんかじゃない、本気で好きだって事を!

「私はっ……!」

「!」

ふと、気配がして周りを見る。

邪魔をされた怒りが湧いてくるが、遠くから近づいてくる人影がゲンさんと海軍だと分かった瞬間に怒りは疑問へと変わった。

ゲンさんは案内役、か？海軍…？なんだ、私やルフイがばれた？それともアーロン…？

「チチチチ…私は海軍第16支部大佐ネズミだ。君かね、ナミという犯罪者は」

出会い頭にそう紹介したネズミと言うらしい奴は、名前通りネズミのような髭をして、海軍の隊服もネズミ仕様に改造している男だった。

「…犯罪者、そうね、海賊だから大犯罪者よ。ただし私はアーロン一味の幹部。大佐程ともなればよくわかると思うけど、私に手を出せばアーロンが黙っちゃいないわよ、それでも何か用？」

「チチチチ…何を言ってるのかよくわからんな…海賊？そんな情報は私の所に届いていない。君には手を出さんよ！ただ君が…『泥棒』であるという知らせを受けてね」「っ!!?」

そのネズミの言葉に、何故だか無性に違和感と…とてつもないほどの嫌な予感を感じた。

「聞く所によると君は海賊から宝を盗むらしいな。まア相手が海賊なんだ、君を強く咎めるつもりはない。……しかし、泥棒は泥棒、罪は罪だ」

心臓がうるさい。何だ、こいつは何が言いたい？私の前世の記憶は、何故こんなにも嫌な予感を発してゐるんだ…？

「わかるかね？ 罪人から盗んだ物ならば当然、その盗品は全て我々政府が預かり受ける」  
「は…あ？」

「何ですって…?!？」

「今までに貴様が盗み貯えた金を、全て我々に提出しろと言ったんだ!!」

ネズミの命令で海兵が家に押し入ろうとするのを私が押さえる。何人いるの！ 押さえるだけで手一杯だつて！

「ここ」で下手に手を出しちやえば…ナミさんのお金が更に危くなる…どうする、一か八か暴れるか…!!

「…どうして…?!?これが今海軍のするべき仕事なの!? もつとやんなきゃいけないことが他にあるんじゃないの!? アーロン一味は人を殺して町だつて潰してる!! 知ってるでしよう!!？」

ナミさんの訴えにも知らん顔だ。…腹立ってきたな。

「あいつらの支配でこの島の全員が『奴隷』にされてるのよ!? その目前の大問題を無視して『泥棒』一人から盗品を巻き上げることが政府の意向なの!!？」

「チチチ…! 罪人が偉そうな口を叩く小娘…! 構わん、搜索を続けろ!」

「島中の人達はずつとあんた達の助けを待ってるのに! よくもそんな人達を素通りして「ここ」へ来れたわね!!」

しかしそんなナミさんの言葉は聞かず、お金を探す作業に没頭している様子だった。「汚い手でベルメールさんのみかん畑に触るな!!」

みかん畑を搜索する海兵をナミさんが三節棍で殴り飛ばす。

「私のお金はお前達なんかには渡さない!!…あのお金は…!!」

「この娘の金はこのココヤシ村を救う為の金だ!!それでも貴様等に金を奪う権利があるのか、海軍!!」

ついに我慢ならずゲンさんが口を出す。

ナミさんはお姉さん以外には本心を悟られないようアーロンの一味を演じていた筈だったが、ゲンさんや他の人たちには最初から気付かれていたらしい。

ただ、それをナミさんが知ってしまったら逃げ出したいと思った時に自分達の期待が足を引張ってしまうからと知らぬフリをしていたと言った。

つまり、数時間前に見たナミさんが村に入った途端の村人達の行動も演技だったというわけだ。本心ではナミさんを労り、自分達の無力さに嘆く…お姉さんのような人達ばかりだったというわけか。

「君等は一体何の話をしてるんだ。要するに村中が泥棒だからみんな捕まえてくれと、そう言っているのかね」

「あんたら政府の人間が頼りになんないから、あたし達は一人一人が生きる為戦って

るって言ったんだよ!!」

「ノジコ……!」

お姉さんも騒ぎを聞いて急いで駆けつけてきたのか、少し息を切らしていた。

「村を救ってくれる気がないんならさつさとここから消えな!ぐずぐずしているとあんたの船もアーロンに狙われるよ!」

「………ほオ、アーロン氏に?それはどうかなア……チチチチ……」

「……え……!」

「……っ、こいつら……!」

ネズミはお姉さんの言葉に曖昧な返事を返す。

この返事は、聞きようによつては……。

「まだ見つからんのか!?米粒を探してる訳じゃねエんだぜ!?1億ベリーだ!!見つからねエ筈があるまい!」

「……なんで、あなたが額を知ってるの……?」

私は、嫌な予感が現実になる気がして、それでも信じたくなってネズミに問う。

「ん?ああ……1億、……まアそれくらいありそうな気がしたんだ。チチチチ……」

腹の底から、何か湧き出てくるような錯覚に陥る。

「まさかアーロンがあんた達を……へ!!!?」

「シアねエ…私達はただ政府の人間として、泥棒に対する当然の処置を取っているだけだ」

「……、」

私は、海兵を押さえていた力を緩めた、いや、力が抜けたんだ。

それと同時に家に海兵が雪崩れ込むが、今の私にはそれをどうこうするだけの判断が出来ない。

ただ、どうしようもない怒りだけがそこにあつた。

「出て行ってもらえ、捜索の邪魔だ」

「はっ！」

ネズミの言葉に海兵達はこちらに銃を向け、容赦なく発砲した。

私の油断で、まさか撃ちはしないだろうと、甘い考えでいたせいでその弾はお姉さんの脇腹に当たってしまった、お姉さんはその場に崩れ落ちる。

「ノジコ!!」

銃声で村の人たちが続々と集まってくる。

「…ごめんなさい…！私が、油断したせいで」

「…まだここに居たの!? あんたとは関係ないっ!! いつまでいるつもり!? さっさと島から出てっ!!」



私を突き飛ばしてナミさんは走っていく。

どこへ、なんで聞くまでもない、アーロンの所だろう。

「大佐！ありました！」

「チチチチ…よくやった。しかし、あの女もバカだね…ま、我々のパーティーに使える資金が…おっと、軍資金が増えたと思えば有り難い事だ」

「…今、なんて？」

「ん？何だこのガキは、おい、誰か摘み出せ」

私の手を掴んだ大柄な海兵が歩き出そうとしてピタツと止まる。私の力に負けてその場から動くことが出来ないでいるからだ。きつとこの海兵からすれば、岩を引っ張っているような感覚だろう。

「手を、離してくれないかな？今はとても冷静で居られる気がしないんだよね…。間違えて握り潰しちやたらどうするの？」

ゴキツ、と鈍い音が私を掴んだ海兵の手から響いた。

それと同時に私を引っ張る力は無くなったので離してやるとその場で尻餅をついて後ずさっていく。

「ナミさんをバカな女って、言ったよね？死に物狂いで集めてきた金を、遊びで溶かそうとしてるんだよね？」

足を一步ネズミに踏み出すと、地面が割れる。

もう一步、更に割れる。

そしてもう一步…。

「あ…ああ…」

「どうしたの？震えてるだけじゃ何言ってるのかわかんないよ」

足が震えて立てなくなったのか、尻餅をつくネズミ。私はそんなネズミの顔に近づく。

「私、今凄く怒ってるみたい。自分でも戸惑ってるよ。…ねエ、なんか喋ってよ」

「い…いや、こ、これはその、違うんだ…！そうだ、この1億は返そう！私も諦めて帰るとしよう…！」

「…返す？元々ナミさんでしょ？…舐めてんの？」

耳元で言うのと分かりやすく肩を跳ねさせて怯え始めた。

こいつは許せない。どれだけナミさんをバカにすれば…決意を踏みにじれば気が済むんだ…。

…それから、アローン…ツ!!

「お前の顔は見たくない、そこで大人しく寝てて」

顔を蹴り飛ばして意識を刈り取っておく。

「お、イリスこんなところにいたのか！あれ？ナミは？」

後ろからルフィの声が聞こえたので振り向くと、彼は私の顔を見てぎよつとした。

「ルフィ…やつぱり来てたんだね、クリークは倒したんだ。サンジは？」

「お、おう！ぶつ飛ばして仲間になった！」

その言い方だとクリークが仲間になったみたいじゃん…。

「私、ちよつとアーロンパークに用が出来たんだよね、ルフィもくる？」

「決まってるだろ、行く！」

バシーと掌に拳を当てるルフィ。

「じゃ、行こう。…村の人たちは、…あれ？みんなどこに？」

辺りを見渡すと、気付けばゲンさんを含めた村人全員が居なくなっていた。しまった、怒りに我を忘れるなんて漫画の世界だけかと思ってた…。

とは言え、確かに私の方も余裕はない。

すぐにアーロンパークへ向かおうと歩き出すと、すぐ向こうでナミさんが蹲っていた。

肩に入れたアーロンマークの入れ墨をナイフで何回も刺していて、何度も何度もアーロンの名前を泣きながら連呼している。

「…ナミさんっ!!」

その姿を見ていられなくて私はナミさんの腕を掴んで自傷を止めた。ナミさんは私の顔に振り向いて、また視線を前に戻し俯く。

「何で、よりもよってあんたなのよ……！」

「ナミさん……？」

「私は、村のみんなも大事だけど……、あんたにだって死んで欲しくなかった!!何で、ずっと私に付き纏って……っ、好きだなんて……!!」

ポタポタと、血と涙で地面を濡らす。

……さつき言えなかつた言葉は、今言えば良い。

「私は、ナミさんが大好きですよ。ナミさんのおかげで一人を忘れる事が出来た。甘える事の大切さと、気持ちよさを知った。……好きだから、好きって言うんです」

「……だつたら尚更、放つて置いてよ!アールンは強い!あんた達で勝てるような相手じゃないのよ!あんたが……イリスが、死んじやつたら……私は……っ!!」

「死にませんよ」

「っ!!」

ナミさんの前にしやがみ込んで、頬に手を添える。

私の手の甲を伝って涙が落ちていく。こんな時でもナミさんは泣き顔も綺麗だ。なんて思っちゃってるんだ、もう重症だね。

「もうアーロンを倒さないとナミさんが死んじやうかもしれない。…なら、私は絶対に死なずにアーロンを倒して見せる。だってナミさんは私の嫁ですからね、正妻を逃すわけ無いじゃないですか」

唾然とした顔のナミさんを放って話を進める。

『「これからは誰かと一緒にいるのを当たり前だと思えるようになりなさい、今度は一人になった時、寂しくて泣けるように」…でしたよね。私はもう…一人になった時どころか、ナミさんが居なくなるだけで死んじやうかもしれませんか?」

ナミさんのおかげで、一人に慣れていた私が誰か一人でも欠けるのを恐れるようになったんだ。

あの時の恩を…芽生えた恋心を忘れるくらいなら死を選ぶし、何より…私自身の気持ちちがナミさんを離したく無いって喧しいくらいなんだ。

「だからさ…ナミさん。…私を信じて下さい。そして…約束して下さい。私がアーロンをぶっ倒して、村を魚人から解放した時…あなたは晴れて麦わらの一味ですって…!…あ、あと嫁になって下さい」

ニツと笑うと、ナミさんは泣きながら呆れた目を私に向けた後…私を抱きしめた。

「…イリス…っ! やっぱり、私…ツ、みんなと…イリスと…っ、…助けて…!!」

「……!!」

それは、私にとって待ち望んだ言葉に他ならない。

私は今、ナミさんに信じてもらったんだ。受け入れて貰えたんだ…!死亡フラグみたいなこと言っちゃったけど、アーロンを倒したら嫁になっても良いってことだもんね!

…やっぱいい、やる気が漲ってくるし…今なら誰が相手でも勝てる気がするよ。

「当たり前ですよ…!ね、みんな!!」

「え」

ナミさんが真顔になって周りを見ると、ルフィを含めたゾロ、ウソップ、サンジがい笑い顔で頷く。

「いくぞ!!魚人共に殴り込みじゃあー…!!」

「オオ!!」

ナミさんは赤い顔をして見られたことを照れてるが、まあいいだろう。

ていうか照れ顔とかレア過ぎる…。

何はともあれ、アーロンか。

…今回ばかりは、私が大物貰っちゃうか。

何たってこれは、私の嫁奪還戦なんだから!!

## 18 『女好きVSアーン』

アーンパークの門の前に辿り着くと、村人達がナミさんの受けた仕打ちの報復を掲げて攻め込もうとする寸前だった。

幸いにもそれらの村人達はヨサクとジョニーに止められていたのでまだ誰も中には入っていないかったが。

「あ、イリスの姉貴！」

「おー、ヨサクもジョニーもお疲れ様〜」

軽く手を振って二人の後ろへ回った。

もし私達より先に村の人達が入るようなことがあれば、間違いなく殺されていただろう。

「よっ……とー！」

お行儀よく入ってやる必要なんてどこにもないから門を蹴り壊して中に入った。

アーンは最初に私とゾロが見た時と同じように、椅子に座って寛いでいるようだ。

あの椅子ってなんて言うんだっけ。ビーチチェア？

「ま、どうでもいつか。みんな、アーンには手を出さないでね。私がやる」

「お、おう！本当は俺がやりたかった所だが仕方ないっ…俺は遠くで君の勇姿を見守ろう」

「見守んな戦えてめエも！」

ウソツプのいつもの感じにゾロが突っ込む。私としてはゾロに休んで欲しいんだけど…、ミホークとの傷だつてあるんだから。

「てめエは…ナミが連れてきたガキか。ここに何の用があつて来た？」

視線だけを私に向けて姿勢を崩さないアーロンに、私は返事もなく近づいていく。

「おい…返事くらいしたらどうだ？ガキとはいえそれくらいの知恵はあるだつ…!!？」

そのまま容赦なく10倍パンチでアーロンを壁際まで殴り飛ばして、足元に転がった椅子を踏みつぶす。いつまでもふんぞり返っていられると思うな。

「どう？返事だけだ…強烈すぎたかな？」

「…シャツハハ…、虫ケラの挨拶など、蚊にでも刺されたくらいだな」

ぶつかつた衝撃でガラガラと崩れる壁を背に、アーロンはまるでダメージが入つてないかのように起き上がった。

「あつはつは！虫ケラか。で、半魚さんは何ケラですかね？」

「…その言葉は二度と口にするなど言つといた筈だぜ」

「ごめん！魚さんでしたか、海へ帰れ」



「魚人だア!!」

ぶん!と大振りに振るわれた腕を顔の横に腕を立てて受け止める。

うぐお…つ、めちやくちや重い…!!

「…つ、周りの雑魚は……任せたア!!」

腕を弾いてアーロンを飛び退かせると、間髪入れずに距離を詰める。

「十倍灰・去柳薇ツ!!」

そのまま顔面に10倍のストレートをお見舞いして、吹っ飛ぶ前に足を掴んで振り回す。

「おらアー…!大旋回!!だいせんかいかーらーのっよいしよおっ!!」

振り回す勢いを利用して地面に叩きつける。

だいせんかい大旋回の時はついでに周りの魚人達も何人か昏倒させておいた。

「あれ?結構弱いね!」

「アーロンさん!ニユ〜許さねエぞ!」

「てめエの相手は俺だ」

私を攻撃しようとしたタコの魚人をゾロが剣で制する。

「なに…!?俺の魚人空手が通用しないだと…!?」

「うん、効かねエ。ゴムだから」

なんか空手家みたいな魚人はルフィが相手をするようだ。サンジはウソツプと一緒にチユウチユウ言ってる魚人の相手だ。

…ま、この中で一番危ないのは私で間違いなさそうだね。

あれだけの攻撃を受けても大した傷もなく起き上がっているアーロンを見てため息をつく。

「なるほど…ガキにしてはやるようだが、相手が悪いんじゃないのか？」

「いや、私に言わせればこのアーロンパークなんて、あなたを含めてみんな小魚の大群くらいにしか思っでないよ」

首を鳴らして挑発する。

アーロンがいくら強かろうと関係ないのだ。今の、私にはね。

「シャハハハハ…威勢だけは良いが、てめエのカスみたいな攻撃はこの通り効いてねエ…。それは何故かわかるか？」

「ドMだから。…いや、もしかしてロリ…？」

「魚人だからだ!!」

「おわっ」

その鋭い牙で噛み付いて来た。

サメっほいし、顎の力も相応にあると見て良いだろう。当たったら10倍アーマー越

しでもシャレにならないかもしれない。

「地面でも…噛んどけ!!」

再度噛み付いて来たのを横に避けて、アーロンの頭を掴んで地面に叩きつける。

だがその顔が地面に直接ぶつかることはなく、鼻が地面とぶつかってそこから先へ沈まない。

「どれだけ硬いの…!ぐっ!」

アーロンに弾かれ、距離を取らされる。

何だかんだは言っていたけれど、確かに魚人の肉体は人間よりずっと丈夫なのは今の攻防で痛いほどわかった。

「この鼻も、牙も!生まれ持った魚人の力だ。てめエら下等な人間共とは生まれた瞬間から次元が違うんだよ!!」

「だったらそろそろ私に攻撃当ててみたら? さっきから掠りもしてないけど…」  
「バカが、始めの数発を避けたくらいで何を粋がっている?」

アーロンが口をパカッと開けたかと思うと、勢いよく歯を引き抜いた。

綺麗に入れ歯のような取れ方をした歯をカスタネットのように右手に持つ。

「サメの歯は…」

無くなった歯が直ぐさま生えてきて、同じように抜いて左手に持った。

「無くなっても直ぐに新しく生えてくる、より強靱な物となつてな…どうだ？てめエラ人間とは違つてこう言つた戦い方もできるのさ」

「はえ、確かに無理だね、一本でも抜けたら泣くかも」

トウイス  
「歯ガム!!」

両手にサメの牙を装備したアーロンが突つ込んでくる。

カスネットの様にとは正にその通りで、両手を駆使してまるで口が三つに増えたようだ。

「っ…!」

少しだけ肩に掠つてしまふが、それだけでかなりの痛さだ。10倍アーマーなどこのレベルになると大して意味がないな。

「どうした人間、手数が増えただけだが？」

「いや、手数が増えるって結構な変化だよ」

「シヤハハハハ！自分で認めるのか…！所詮はバカで愚かな人間らしい…!」

10倍ヒールで肩の傷を癒しつつ、アーロンの後ろを指さした。

「だから私も増やしてみたんだ」

「は…?…ツ!!?」

アーロンが後ろから顔に叩き込まれた蹴りで横に吹っ飛んでいく。

この時ばかりは戦闘中の仲間も、相手の魚人達も、果ては門で待機中の村人達も目を見開いた。

「て…てめエ…、そいつは…何だ!？」

受け身を取ってダメージを抑えたアロンが、口の血を拭いながら問う。

「何って…なんだと思う?」

「さあ…双子って言ったら面白そうだよね」

私の隣に、*私*が居るのだ。

どこまでも私と一緒にの*私*。思考回路も私、勿論身長も使える技も私。

何もかもが私と同じの*私*は不適に笑った。

「神背・倍加。ヒューミンクリース

最近情けない敗北をしたからね、色々自分の能力と向き合ってみたの」

「したら何か出来ちゃった、ま、制限時間付きなんだけど」

クロに敗北した後、私はずっと自分に足りない物を考えていた。

そこで考え至ったのが私の全力で戦える戦闘時間の短さを何とか出来ないかという問題だったのだから、最終的に私自身を増やすことはできないのかという馬鹿げた解決法だった訳だ。

結論から言えば今の私を見れば分かる通り、出来た。

ただこの倍加は物に使用する時と同じカウントをされるのか私の人数は2倍までが

限度でそれ以上は増えないし、10分経てば私に戻るのだけど。

それに、この技にはどうしようもない弱点が一つあるんだけど……言わなくても直ぐにわかるだろう。

「…そうか、てめエ能力者か。ガキのなりして妙にやりやがる理由も納得出来るって訳だ」

「負けた時の言い訳に使えてよかつたじゃん」

「相手は人間でも能力者だったから仕方ねエ、しやはは！」

「似てる！下等な人間共よ……しやはは」

「……殺す！」

トウイス

歯 ガムで私達を狙うが、相手の手数が増えたのと同じく、的も増えたとなつては意味がない。

結果私は右手の歯だけに集中できるし、私<sup>は</sup>は左手だけに集中出来るという訳だ。

「よっ！」

二人同時にアーロンの攻撃をしゃがんで避け、懐に潜り込んだ。

「十倍灰！ツイン去柳薇ッ！」

「かーらーのー？」

「十倍灰！ツイン去羅波！」

私が二人に増えたので単純に威力の増した去柳薇さよならにアーロンが口から血を吐きながら吹っ飛んで行った所を、ナイフを取り出しまたも二人で放つてXの形で飛んでいく衝撃の刃、去羅波さろばで斬り刻んだ。

「おい……あのアーロンが……」

「ああ、押されてる……これ、勝てるぞ……」

村人達が次第に騒ぎ出すが、私はちよつと焦っていた。

確かに、今のでダメーじ自体は与えることはできただろう。

だけど決定打になっていない。

この能力の弱点を考えると短期で終わらせたかったのだが、思ったよりアーロンがタフなのだ。

「……下等な人間なものには変わらねエが……俺の敵であると認識を改める必要があるしそ  
うだ」

今も二人の私が放った本気の攻撃を二発も受けたと言うのに、平然と立ち上がってくるアーロンに冷や汗をかく。

「本気で行こう。てめエが何人に増えようが関係ねエ……魚人の真骨頂を見せてやる」

そう言つてアーロンは私が最初プールみたいだと揶揄した海に飛び込んだ。

今の口振りだ、逃げたとは考えられない。

とすると…何かしら水中である事を利用した技が出てくるはずだ。

「…受けるしかないよね、任せていい？」

「あなたが受けるのはまずいからね…、ま、任せてよ、盾になるのも私の仕事だからね」

“私”がそう言つて前に出た。

「鮫・ON…」

アaronの声が聞こえるが、水の中にいるせいで正確な位置が特定できない。

それは“私”も同じ事だ。

「DARTS!!」

「速…っ!!」

水中から恐るべきスピードで飛び出してきたアaronが、自慢の鼻で“私”の腹を貫いた。

そのままの勢いでアaronパークの二層目に突っ込んでいく。

「どうだ？俺の自慢の鼻の味は」

ぶん！と首を振つて鼻に刺さつた“私”を下に落として笑うアaron。

落とされた私は何を言つても能力で倍にしたただけなので痛覚は存在しないのか、いや、何も見えなかった、速いね。とか言いながら歩いてくる。いや腹に穴空いてますけど？私それでクロに負けたんだけど？



「…そつちのてめエをどれ程痛めつけようが何も変化がねエのなら、本体の方はどうだ？」

「まずい、気付かれたかも。盾カモン！」

「おい、確かにそれも仕事とは言ったけどその扱いは酷いでしょ！」

「シヤク鯨・ON・DARTS!!」

「危ない！」

再度飛んできたアーロンの鼻に刺さる寸前、何とか反応が間に合った「私」が私を突き飛ばす。

「うぐ…っ！」

その際に脇腹に攻撃が掠っただけとは言え当たってしまった、がくつと膝をつく。

それと同時に神背ヒューマイニングクリス・倍加の効果も切れてしまい、私はまた一人に戻った。

「ほう…本体に少しでもダメージが入れば消えるのか」

「くう…！」

攻略されるの早い！

…でも、諦める訳にはいかない。

「だったら… オールインクリス 全・倍加！」

「てめエの体は一体どうなってやがる？」

「人体模型でも見たら大体わかるよ」

この能力を使用したからには、延長戦などありえない。  
今から三分で決着をつける…!!

## 19 『女好きVSアローンー決着編ー』

「いくよー！」

ダツ！と地面を蹴ってアローンに接近する。

アローンはさっきまでの速さとは比べ物にならない私に一瞬驚くが、すぐに対応してパンチをかわす。

「トウイス歯ガム!!」

「じゅうばいばい十倍灰・去羅波！」

お互いの攻撃で相殺し合い、アローンは碎けて使えなくなった歯を捨てた。

「てめエがいくら自分を強化しようが…反応出来なければ意味ねエ話だ。所詮水に入ることの出来ないてめエには、この技を止める手立てはねエってわけだ」

そう言つてまた水の中に消える。

確かにこの技は厄介で、いくら全オールインクリース・倍加で強化しようとも反応速度はかわらない私と

しては防ぐ手立てはない。

「でも、だったら反応できる距離まで離ればいいだけでしょ、どうだー！」

軽く跳躍を繰り返してしてアローンパークの最上階に立つ。

この位置なら、アローンが水中から飛んできてても反応出来るだろう。

「鮫シヤーク・ON・DARTSダーツ！」

「やっぱり、距離があると弱いよその技！だアーーッ！！」

飛んできたアローンの顔に踵落としを喰らわして落とす。

最上階から一気に地面に落とされたからか、流石にダメージが入ったようで血を吐いていた。

「うっし！油断なんてしないからね、ここで待つ！」

叩きつけられたアローンは、ゆらりと起き上がると目を見開く。

「下等な人間がア……！」

え……なんか目つき変わった？

「ありや海王類がブチ切れた時に見せる目と同じだ……！今の攻撃で奴の怒りが頂点に達したんだ……！」

既に戦いを終えてほぼ無傷で勝利しているサンジが説明してくれた、ありがとう。

「魚人の俺に……何をしたア!!」

アローンパークに腕を突っ込み、壁を貫く。

次に腕を引き抜いた時にはその手に大きなノコギリのような形状をした剣が握られていた。

「〃ギリバチ〃！」

ナミさんが叫ぶ。そうか、あの武器はギリバチっていうのか…。

…つてナミさん！いつから村の人達に混じってるの！

これは尚更情けない所見せられないね…！

「がア!!!」

鬼気迫る表情で私の待つ最上階まで上がってくると、手に持ったギリバチを上段から一気に振り下ろしてきた。

「くっ」

後ろに飛んでかわし、振り下ろした隙を突くつもりがアローンは振り下ろした勢いを利用してギリバチを支えに体を大きく前方に一回転させ、隙なくギリバチを振り下ろしてきた。

背後はもう壁なので、近くにあった窓に突っ込んで部屋の中に逃れる。

「当たったら終わりだね…、ここは？」

壁の向こうはアローンパーク内部だ。つまりここは最上階の部屋の中。

辺り一面に紙が散らばっていた。

「紙ばっかだねこの部屋…ん？海図？」

「その通り、これはただの紙じゃねエ」

私を追って窓からアーロンが入ってくる。

他の場所はDATA<sup>データ</sup>RTS<sup>ツ</sup>やキリバチで壊すのに、この部屋に関しては律儀に窓を通ってきた所を見るにこの紙は余程大事なんだろう。

「これは全部、8年間かけてナミが描いた海図だ。魚人<sup>おれたち</sup>にとって海のデータを取ること  
は造作もねエが、問題は測量士…世界中を探してもこれ程正確な海図を描ける奴アそう  
いるもんじゃねエ…!!あの女は天才だよ」

「ほー…」

ふと近くに落ちたペンを拾えば、そのペンには血が染み込んでいた。

「…私、これ知ってるな」

「ここで海図を描き続ける事が、ナミにとつて最高の幸せなのさ!!俺の野望の為にな!  
その海図で世界中の海を知り尽くした時!俺達魚人に敵は無くなり、世界は俺の帝国と  
なる!!その足掛かりがこの島であり東<sup>イーストブル</sup>の海という訳だ!!てめエにこれ程効率よくあの  
女を使えるか!!」

ここは、見た事がある。

勿論前世での話だ。あの時は、ルファイがアーロンの「使う」って言葉にキレたんだけ。  
け。

「ほは」

「どうした？ 気でも狂ったか？」

「ははは！ いや、でも笑うなって言う方が難しいよ！」

アーロンの「使う」発言には、ルフィじゃなくても怒りが湧いてくる…。

だけど、私はそんな言葉以上にイラつくことがあるんだ。

——知っていたくせに、今日まで忘れてナミさんと接していた自分が許せない…つ  
！

「己の無力さに気付いた人間は、怒ることも嘆く事もなく笑うと聞くが…いくらためエが自らの過ちに気付いたところで、もう手を引いてはやらねエがな」

「うん、私も引くつもりはないし、無力でもない」

近くにあった机や本棚を蹴り飛ばし、壁ごと蹴り抜いて外に落とす。

「な…!? てめエ何のつもりだア!!」

「情けないけどね、これは受け売りだよ」

次々と部屋中の海図や物を手当たり次第に外へ飛ばす。

私のすべき事は決まった…。この部屋を、アーロンパークを潰すんだ。

ナミさんに会って、好きになつて…でもそんな人の苦しみにすらずっと気付いてあげられなくて、それなのに私はそのことを実は知っていて…。

「そして最後には、こうして先人の知恵頼りだ!!」

「やめねエか!!」

「ぐ……ッ!?!」

キリバチの横薙ぎに直撃してしまい、咄嗟に左腕でガードしてたのだが、体は部屋の隅に飛ばされて辺りに埃が舞い視界が悪くなる。

いくかガードしたとはいえ、左腕には深々とキリバチの刃が突き刺さり血が溢れ出た。

「っ……がはッ……。う……。だ、けど……!それでも私は、ナミさんが好きなんだッ!!絶対に負  
けられないんだア!!!」

痛みを忘れるように決意を叫んで、埃から飛び出して拳を突き出す。

「十倍灰・去柳薇アツ!!」

「てめエ……!この部屋にある海図に、一体どれだけ価値があると思ってやがる!!」

私の拳とキリバチが衝突して衝撃波が生まれ、それらが更に海図を飛ばす。

「ぬう!?!」

「価値……っ!?!こんな物に何の価値があるんだッ!!」

去羅波を連続で放つて海図を両断する。



その最中もアローンのキリバチで身体中が裂かれるが、それでも気にせず周りの物を破壊し続けた。

「ナミさんが描きたい物にこそ価値は生まれるんだ!! ナミさん自身にこそ価値があるんだ: ツ!! お前は、ナミさんの魅力を押さえ付ける、ただの半魚野郎だろうがアーーーーーッ!!!」

ガンツ!! と迫ってくるキリバチを踏みつけると、その威力に耐えきれずついに剣は砕け散った。

「そいつを壊したからと言っていい気になるんじゃないやねエぞ、元々俺の武器はこの強靱な体に他ならねエのさ!!」

「さつきからそんなに通用してないけどね!」

「これでもそんな生意気な口が叩けるか!? 鮫シヤク・ON・歯車トウース!!」

アローンが口を大きく広げて歯を剥き出しにし、体を回転させその勢いを利用して突進してきた。それはさながら高速回転する刃。当たれば間違いなく肉は弾け飛び、当たりどころが悪ければ一撃で死ぬ。

狭い部屋の中、体の大きなアローンの全身を利用したこの攻撃を避けるのは至難の技だ。迎え撃つしかないっ!

「う、おおおおおおおッ!!! 十倍灰!! 去柳薇アーーーーーッ!!!」

私の大技とアーロンの大技がぶつかり合う。

もう既に部屋の海図は大半が外に飛ばされ、アーロンも攻撃に気を使っていないからかその威力はさつきまでのとは比べ物にならない物だった。

「シャーツハツハ!!逃げなくていいのか!?!このままじゃ腕が消し飛ぶぞ!!」

「上等…!!私の腕が無くなるうが…最後に勝つのは、私だア!!」

まるで大岩同士を高速でぶつけ合わせたかのような重低音の衝撃が響き渡り、それでも腕を引く事はない。

そして————。

「……………」

「シャハハハ…ツ、認めてやろう、まさか人間がここまで俺を追い込めるとは思ってもなかった」

立っているのは、自慢の鼻こそへし折れてはいるがアーロンだ。

私は部屋の隅で壁にもたれ掛かるように倒れ、右肩から先は今の攻撃で綺麗に消し飛んでしまった。

「…そりゃ、どうも」

「ほう…?まだ息があるとは…。てめエは今ここで、必ず殺さねエといけねエ人間だ」

アーロンが私に近づいて、碎けて戦闘では使えなくなつたとはいえ、無抵抗の私を殺すくらいなら訳ないくらい刃は残っているキリバチを手を持つ。

「そうそう…、最後に、ちよつといい？」

「いいだろう、俺をここまで怒らせ、追い込んだ褒美に何でも言うだけ言ってみるがいいさ。殺し方が変わるかもしれないねエゼ？」

そんなアーロンの言葉に私は口角を上げる。

こんな状態で笑う私を、アーロンは気でも狂つたのかと怪訝そうにするが……残念、私は気など狂つてはいない。

「私はね、アーロン…あなたにだけは絶対に負けたくない理由があるの」

一つ。

「あなたはナミさんの自由を奪つたし」

二つ。

「ナミさんを孤独にした」

三つ。

「ナミさんを泣かせたし」

四つ。

「そして何より、あなたに勝たないとナミさんが私の嫁になってくれない」

「…シャーツハツハ!!いきなり何を言い出すかと思えば、全部ナミの事じゃねエか!」  
 「そうだよ、私があなたと戦ってる理由は全部ナミさんにある。そんな私が負けちゃつたら、ナミさん、絶対に責任を感じるよね」

「つまり、てめエはこれからのナミの一生を死ぬことによつて縛るつもりか、中々考えることがエゲツねエじゃねエか、人間」

「何を馬鹿なこと言ってるの、だから半魚野郎なんだよあなたは」

ぴく、とアーロンの眉が動くが、私の態度に疑問を抱いてもいるのだろう。すぐに逆上して攻撃してくる事はなかった。

「私は、こう言いたいだけだよ。私は絶対にあなたにだけは負けない。何が起ころうと、何が来ようとして、そして、どんな手を使おうと!!」

その瞬間、今までの攻防に耐えきれなくなったのか部屋の天井が崩れてきた。

アーロンは軽く腕で跳ね除け、私は残った左腕で弾く。

「それで…今のは攻撃のつもりか?」

最後の足掻きも無意味だったとでも言いたそうなアーロンが勝ち誇ったかのように笑う。

私はそんな彼の言葉を無視して、上を指差した。

「アーロン。天井が崩れて、今は陽の光に照らされる筈の私達だけ……、なんか、暗い

ね“?”

「……?…、な…ア…!?て、てめエ…、あ、れは…いや、あの城は…：…一体何だア…ツツツ!!!」

確かに周りが薄暗いことに疑問を抱いたアロンが上を見ると、彼は顔を驚愕の色に染めた。私達の真上…、その宙に浮いている物体は、常識ではとても考えられない物だったからだ。

「見覚えはない?アロンパークだよ」

「ツ!!」

「私の能力は、倍加。流星にここまでの質量となると作るのに時間がかかったみたいだけど…」

元となる物の近くなら、どこにでも複製した物を出現させられる。

私はその特性を使って宙にアロンパークを作ったのだ。

だけど、その特性は作ってる途中の話。アロンパーク程の大きさだから作るのに時間がかかってるし、何より私の能力容量的にも限界なのだが完成すればそれはアロンパークとなって私の能力からは制御を離れて地に落ちる。

つまり、私達のいる、オリジナルアロンパークへと落下するのだ。

「…てめエ、あれが落ちりゃ…：自分もただじゃ済まねエだろう!」

「そうだね、流石に死ぬよ」

「負けねエってのは、俺を道連れにするってことか人間がア!!」

キリバチで私を抉るように斬り刻む。

「能力者の能力は、使用者が意識を失うか死ねば解除されるツ！いくらためエがあれば作ったところで、俺がためエの息の根を止める方が速エぞ!!」

首、顔、胴体、左腕、両足。どれだけ斬っても、抉っても、空の城が消える兆しは見えない。私の息の根は…止まらない。

「…く、なんだア…コイツア…ツ!!」

このままだと確実に落ちてくる。そう感じたアローンが外に逃げようとするが、私が足を掴んで離さない。

「ためエ人間がア!!どれ程斬ったと思ってる!?!何故その体で生きていられる!?!ためエは一体何なんだア!!!」

「私…?ただの、女好きだよ」

そうして城が落下を始めた。

アローンが私の手を振り解こうとするが、これが“私”の最後の仕事。

もうアローンがどうしても逃げられないくらいまで城が落ちてきた時、私の姿が消えた。

「…な……ッ!?」

アーンが驚愕で目を見開いて周りを見渡すもそこに私の姿はない。

「この勝負…!!私の勝ちだアーン………ッ!!」

「!?」

!!!

その声は、作られたアーンパークの最上階から聞こえた。

何故そんな一瞬であそこまで行ける? 何故どれ程痛めつけようが死ななかつた?

アーンはこの最後の最後で、全てを察したのだ。

戦闘中、一度だけ埃が舞って一瞬だが視界が遮られた事があった。

その時に二人目の自分を作り出す技、ヒューマン・インクリス神背・倍加を使用していたのだ。

そうしてまんまと今まで分身と戦い、本体は上でアーンパークを作り続けていた。

「この、俺が…人間のガキ何かに…っ、負けるというのかアーンッ!!」

「いつけえええー………ッ!!」

アーンの叫びをかき消す轟音と共にアーンパーク同士は衝突し、ついにその城は

崩壊した。

私は崩壊に飲み込まれないように崩れ落ちる瓦礫と瓦礫を跳躍して回避する。

「うわ……っ」

だけどやっぱりその衝撃は凄まじく、私は足を滑らせてしまい瓦礫と共に落ちていく

こととなってしまった。

「イリス………ツ!!」

ナミさんの悲痛な叫びが耳に届く。

そうして崩れ落ちた衝撃が収まった時、巻き込まれないよう距離を取った仲間や村人達がアローンパークの周りに寄ってきた。

「イリス……ツ!」

ナミさんが駆け出し、アローンパークの瓦礫を退けて私を探そうとした時、崩れ落ちた瓦礫の天辺から音がして石ころが落ちる。

「……っ!、はあ、はあ……っ!」

「イリス!」

何とか身を塞いでた瓦礫を跳ね除けた私がそこに立つ。

正直死んだと思ったけど、私が落ちたのは城の最上部からだったので瓦礫に巻き込まれるのは最小限で済んだのだ。

能力がきれて、全身は傷だらけだし、左腕からはどくどくと血が流れて止まないが…。

「ナミさ………んっ!!」

「……!!」

「もう、大丈夫だから…、だからっ!また、一緒に…、私と一緒に居てよ!!!」



「…っ…、うん…!」

「あと正妻にもなつて!!」

「…もう…っ。…こんな、私で良ければっ…いくらでもあげるわよ!!」

ナミさんが泣きながら笑顔で頷いてくれたのを見て、私も静かに涙を流す。

その瞬間に、歓声が響き渡った。

私たちを祝う声もある、アーンから解放された喜びの声もある。

何にせよ、魚人達の支配から…ナミさんもココヤシ村も解放されたのだった。

## 20 『女好き、正妻の家族も嫁にする』

「うおおおー！！アーロンパークが落ちたアーーー！！」

「俺たちは自由なんだアーーー！！」

「はは、みんな嬉しそうだね」

周りのお祭り騒ぎに、既に瓦礫の山から降りてる私も嬉しくなつて頬が緩む。

「イリス：ありがとね、あんたのお陰で村は救われたわ」

「嬉しいけど、私はナミさんが欲しかっただけだから…。それで？もう私のお嫁さんだ

よね？」

「…もう、分かったからそう何度も嫁嫁つて言わないでくれる？」

「ふい、とそっぽを向くナミさん。」

私はその言葉で、本当に好きな人を手にする事ができた喜びに胸が高鳴った。

「おーい、お前らー！」

「バカ！ルファイ今は行くなっ！」

ルファイと一緒に一味全員が同じ場所に集まってきた。

「ご、ごめんナミさん、イリスちゃん、俺からこいつには言い聞かせておくから…」

「や、大丈夫だよ、ありがとう。それより仲間になってくれたんだね、サンジ」  
「!ああ、これからよろしく、イリスちゃん」

改めてサンジとも挨拶しておく。

アーロンを倒したこともあつてか、最初に会ったときのような子供扱いは無くなっているし、ナミさんと私のことを気遣ったり、中々優しいコックが仲間になってくれたようである。

「イリス、お前あんなでつけエ城作れんのか?後でメリー号にも作ってくれよ!」

「沈むわアホ!」

びしー、とウソツプの突っ込みが刺さる。そもそもアロンパークの複製だし、10分後には無くなるけど…。

「そこまでだ貴様らア!!チツチツチツチツチ!」

「:…もうちよい強く蹴つとくべきだったか」

突然、大量の海兵を引き連れてネズミが現れた。

懲りないなア:…と思っていると、本当に懲りないことを言い出した。

「最初はどうかと思つたが、今日はツいてる!戦いの一部始終を見せて貰つたが:…チチチ、まさか貴様等の様な無名海賊に魚人どもが敗けようとはな!」

「それで？何か用なの？」

「チチチ…このアーロンパークに貯えられた金品は全て私の物となる！全員武器を捨てろ！貴様等の手柄、この海軍第16支部大佐ネズミが貰ったア!!」

「何いってんのこいつ」

冷めた目で見てやるが、ネズミはどこふく風。臆した様子は見られない。

「チチチ、貴様は確かに強いが、アーロンとの戦闘で満身創痍。他の奴らも魚人どもの戦闘後だ、まともに動けるとは思えん。さあいけお前ら！瓦礫の中をくまなく搜索しごほおオ!!」

「大佐ア!？」

ルフィの腕が伸びてネズミの顔に綺麗に入った。うわ、あれは痛い。

「とりあえず殴つといた」

「あと千発くらい行つていいよ」

パシ！と戻ってきた腕をぐるぐるするルフィ。一方の大佐は鼻を押さえて狼狽えていた。

…まあ、普通は消耗してると思うよね、でも残念な事に私以外で魚人に苦戦した人なんて居ないよ。精々ミホークから受けたダメージがハンデになってたゾロくらいじゃないかな。

「ルフィ、急に殴るな！」

「でもそいつナミさんを泣かせた関係者でもあるんだよね」

「てめエゴラア!!」

「ブヘア!!?」

サンジの蹴りで更に吹っ飛ぶネズミ。

そこから私達と海兵達との戦闘……というか一方的な蹂躪が始まってしまったのだけ  
ど、そのすぐ後には足元に海兵達とネズミが転がっていた。

……まあ、オールインクリース全・倍加の反動で私は見るだけだったんだけど。

「ナミさん」

ボールのようにネズミを蹴って、ナミさんの前に転がす。

「ええ、ありがとう」

ナミさんはしゃがんで、ネズミにぼそつと呟いた。

「ノジコを撃った分と……ベルメールさんのみかん畑をぐちゃぐちゃにしてくれた分」

そう言つて棍でネズミの顔面を強打して海へ殴り飛ばした。

何とか海から這い上がつてこようとするネズミの髭を引っ張りながらナミさんは続  
ける。

「あんた達はこれから魚人達の片付け！アーロンパークに残った金品には一切関与しな

いこと！あれは島のお金なの！それと私のお金奪ってるなら返して！」

「がえすつすがえすつす…もうどうでもいいつす…」

ナミさんはその言葉を聞いて手を離れた。

ネズミはその隙に遠くへ泳ぎ逃げていく。

「憶えてろこの腐れ海賊ども!!ガキンちよ!名前をイリスと言ったな!お前が船長なんだな!」

「船長はこつち」

「俺はルフイ」

「はア!?!…ぐ、まあいい!忘れんなてめエら!凄いことになるぞ!俺を怒らせたんだ、復讐してやる!!」

そういつて海兵達と一緒に泳いでいった。

そこ海なんだけど、どこまで泳ぐつもりなんだろうか…。まあいいか、ネズミのことなんて。

「凄い事になるつてよ」

「そりやそうでしょ、何たつて未来のハーレム女王だよ」

「いやそういう意味じゃねエよ!」

そうして、完全にこの島は、そしてナミさんは救われた。

この報せは島全体に広がり、すぐにアロンやその他の魚人達によつて潰された村の復興に取り掛かっている。

夜には島をあげた盛大な宴を開き、それは何日も続く。奪われていた自由を噛みしめるように…。

「ナミさんどこ行つたんだろ…」

一方、私は宴中ナミさんとはぐれてしまったので探していた。

「どこかな…ん？」

ベルメールさんの墓へ足を運ぶと、先客が居たようだ。

帽子に風車を付けてるこの人は、確かゲンさん…ゲンゾウさんと言つたか。

「…お前は、イリスだな」

「そ、そうですけど」

この人と話すの緊張するんだよね…、何と言つてもナミさんやお姉さんの父親代わりだから、私の立場からすればちよつと…。

「ハーレムが夢だとか言う女にナミを任せるのは、実を言うと不安もある。…だが、それがナミの幸せなら私も何も言うまい。ただ、これだけは言っておかなければいけない事

がある」

ゲンさんが私に視線を合わせるので、更に緊張してきた。

でも今の、認めて貰えたってことでいいの!?

「もし、お前がナミの笑顔を奪う様なことがあったら…私がお前を殺しに行くぞ!」

「…はい!必ず、一生幸せにしてみせます!」

左胸に掌を当てて決意表明する。

「それでですね、ついでと言っては何ですけど、お姉さん、ノジコさんも私に下さい」

「お前にはナミもノジコもやら…んツ!!」

「うわアー…ツ!!?」

鬼気迫る表情で襲いかかってくるゲンさんから逃げる。

…でも、お姉さんとも話はあるんだけどな。

数時間前—

宴の中心からは外れた所で、ナミさんと二人でご飯を食べていた。

楽しそうな声が遠巻きに聴こえてくるここは、中々いいスポットだ。

「ねえイリス、あんたハーレム女王がどうか言うわりに、あまりナンパとかしないわね、どうして?」



「え？うーん、何でだろ…カヤには私ってあまり強引に行くタイプじゃないって言われたし、それもあるかも」

首を捻って結論を出すと、ナミさんは深々とため息をつく。

「あんたねエ…ハーレム女王が聞いて呆れるわよ。私はともかく、カヤみたいな良い子なんて今後そうは現れないわよ！あんたがもつとガンガン攻めなきや、どうやってその夢は叶わないの！」

「そ、そうは言っても…」

こんな身長でガンガン言っても笑われるだけだと思っただけ…。

「…ふう、ちよつと私の言う通りに行動してみなさい。恥ずかしがらずに、自信を持ってやるのよ」

「え、何か嫌な予感が…」

そう言っただけはナミさんにある所へ連れて行かれた。

それはベルメールさんの家で、ナミさんとお姉さんの家でもある所だった。

「いい？イリス」

—————

「…本当にうまく行くんだらうか」

どうやら中にはお姉さんがいるらしく、ナミさんの言う通りに落としてこいとのことだ。

「あの一」

「んー？誰？…あんたは…えつと…イリス…だよね」

ナミさんの指示で全・倍加オールドインクリースを使用してる状態でお姉さんに会う。

「そうですよ、急に尋ねてしまつてすみません」

「いや、良いんだよ、何せあんたはこの村の英雄、何も無い所だけでも出来るだけもてなすよ」

「じゃあ、ちよつと失礼」

ぐい、とお姉さんの腰を引き寄せガツチリ抱きしめて離さない。

…本当に行けるんだらうか。

「な、何を…!？」

「お姉さん…いや、ノジコ」

「…つ」

抱き締めた体を少しだけ離して、くい、と顎を持って私と視線を合わせる。顎クイなんて初めてやったよ。何せ戦闘以外で全・倍加オールドインクリースを使うことが初めてなんだよ！

「初めて見た時から、美しいと思つていた…、私の女になつてほしい」

「え……う、ん。……って、違う！あんたにはナミが」

どん、と私を押しつけて離れる。

「ごめんなさいノジコ、諦めて♡」

「な、ナミ!?!」

その直後に私の後ろから現れたナミさんに困惑するお姉さん。

何が起きてるのか把握できないようだ。……いや当たり前だけど。

「ノジコ、今うんって言ったでしょ？うん言ったわ、これでイリスのハーレム入りね」

「え!?!こんなので!?!」

「ちよ、ちよつと待ってナミ……！何が何だか……」

流星にナミさんも突然過ぎたと思ったのか、お姉さんに全て話す事にした。私のハーレム女王の下りは呆れた目で見られたけども、ナミさんの話にはうんうんと頷く。

「そういうことなら、いいよ。私もあんなのハーレムに入れてよ」

「ええつ!?!いいのオ!?!」

「ほらね?」

びつくりして目玉飛び出るかと思った。

ちよつと話が飛び過ぎて何が何だかさっぱり分からない。

「まず、普段のあんたは確かにちんちくりんだけど今のあんたは見た目も良いし、それで

「迫られたら大半の女は落ちると思う」

「そうよね、私も初めて見た時は驚いたわ」

「で、でも三分しかこの姿では居られないんだけど…」

「小さいのもそれはそれで可愛いのも、あ、ノジコでも正妻は譲れないから」

「取る気ないから…」

「いやでも、私つてこの姿になったら本当にモテモテになれるんだなあ。」

「……元からこれくらい成長してよ!!」

「—————」

「とまあ、こんな感じであっさり夢にまた一步近づいたわけだけど。」

でも落とす為オール・インクリスに全・倍加を使わないといけないんじゃないや…結局解除した後が困るもん

ね…。

見た目だけじゃなくて、中身までしっかり愛してもらわないと脆いハーレムしか築くことは出来ない…!そこら辺をしっかりと知らないダメだぞ…私!!

ゲンさんに追いかけれながらぐつと拳を握る私。

ハーレム女王の夢はやっぱり遠いなあ。

そうして、出発の朝はやってきた。

メリー号を置いてある港には村中、いや島中から人が集まってきて私達を、それからナミさんを見送ってくれるようだ。

「じゃね、お姉さん」

「またいつでも寄ってって、次は体でもてなすよ」

そう言つて私の頬にキスを落とすお姉さんを見て、ゲンさんが血走った目で私を見てくるので視線を逸らした。怖い。

「よ、ヨサクとジヨニーはこの島でお別れなんだね、寂しくなるな」

「あつし達もつす……！またどつかで会える日を楽しみにしてるつす」

「うん、元気でね」

手を振つてメリー号に乗った。

……あれ、ナミさんが居ないな。

「何？あの一億ベリを置いてくだと!?あれはナミが命を張つて……」

「また盗むからいいつてさ……」

はあ、とため息をつきながらゲンさんとお姉さんが話してた。

「バカめ……まだ礼をし足りんのは我々の方だと言うのに……!!」

顔をしかめるゲンさん。ナミさんは本当にみんなから大切にされてるんだな。

「船を出して!!」

「ナミさん!!」

そう思った瞬間にナミさんが遠くの方から走ってくるのが見えた。

とりあえず言われた通りに船を出す準備をする。

えーと、確か帆をはって…。

「止まれナミ！礼くらいゆつくり言わせてくれ!!…あ、あいつら船を出しやがった！君らにもまだ改めて礼を…！」

そうしてる間にもナミさんは人混みを掻き分け、そして何故か真っ直ぐ走ってくる。となくくねくねと人と人の間をわざわざ入ったりして走り抜けてきた。

そうして動き出したメリー号に飛び乗り、にこやかに笑う。

「…へへ、大量だね、ナミさん」

「ふふ、でしょ?」

ナミさんは走り抜ける際に盗った財布を見せつけるように落として、笑った。

「みんな元気だね♡」

「……や」

「やりやがったあのガキヤーーーーーッ!!!」

「この泥棒ネコがアーーーー!」

「戻ってこおい!」

「財布返せエ!」

「ふふっ」

「いつでも帰ってこいコラア!」

「元気でやれよ!」

「お前から感謝してるぞオ!」

「小娘!約束を忘れるな!!!」

ナミさんやみんなへの感謝の気持ちに混じって、ゲンさんが私に対して放った言葉に親指を立ててサムズアップで返した。

当然、ハーレム女王の正妻なんだ。幸せになってもらわないと私が困るんだから!

「じゃあねみんな!!行って来る!!」

そう言ったナミさんの笑顔は、本当に心の底から笑っているのが分かるくらい綺麗な笑顔だった。

…そして、この日の夜。

私達2人にとって、決して忘れる事のない夜が始まろうとしていた――。



## 20. 5 『女好き、正妻とイチヤコラしたいだけの夜』

ナミさんをココヤシ村から連れ立った私達一行は、正式にナミさんが仲間になってからは初めての夜を迎えていた。

ここで1つ整理しておきたいのは、メリー号内の船室は当然男部屋と女部屋に分かれている。

そして、今まではナミさんが私に距離を取り同じ女部屋とは言え端から端くらいの距離で眠っていたのだが…。

「な、ななな、ナミさん？何か、色々当たってるんだけど…！」

「あら、何か問題でもあるわけ？あんたの女よ？」

「……………な、何でもありません」

まさか、今日になっていきなり同じベッドに潜り込んでくると思うまい…。

心臓が痛い…………。

「…なに？嫌なの？」

「そんな事ない！幸せ過ぎるだけ！」

考えてみてよ！今まで好き好きちゅちゅ！って攻めてた女性が、そういう関係になつたその日の夜にベッドに潜り込んできた私の気持ちを！！

そう、むらむらしてるんです！！でもいきなり手なんか出せないじゃん、我慢してるんです！！

「そう、ならいいんだけど。…そういうえばイリスって、カヤにはキスしたんだっけ」

「ほっぺね！頬！ほっぺた！」

「私は頬にもされた事ないわね〜」

んぐんぐ、露骨なアピールきた…ア！むしやぶりつけてエ…、ペろペろ、脳内だけで我慢するしかない…！

「また明日するよ！いい、今はまずいかな…はは」

そう言うのと頬を膨らませて怒つた顔を作るナミさん。これそんなに怒つてない顔じゃん…意地悪な感じの顔だよこれ…。

「今してくれないと、正妻取り消し」

「ええっ!?そ、それは嫌だよ！」

「……ぷっ、あっはは！ウソよ、ウソ。そもそも、正妻取り消し何てあんたじゃなくて私が嫌よ」

そう言うって笑うと、ナミさんは不意に私を抱きしめた。

え、だからナミさん今は不味いんだって！あなた様のおつきな双丘に顔挟まれてるんですよ！！

「…改めて言わせて、村を…私を救ってくれてありがとう。…大好き」

「つ…わ、私はその、ただナミさんを嫁にしたかっただけだと言いますか…」

「それでも。…嬉しかったのよ」

私を抱きしめる力が強くなる。その分ぽよぽよおっぱ…ごほん！二つの丸いナミさんが私を挟み込む。

「…ね、イリスは、私としたくないの？」

「……………き、キスの話？」

「そうだけど…あんたが望むならその先も」

あわわわわ。どうしようどうしよう、心臓が動きすぎて止まる…！過労死しちゃう！

「わ、私はしたいよ、すつごくくしたい、だってナミさんだし、正妻だし、大好きだし…でも、今はほら、雰囲気的に…キスだけで終わりそうにないって言うか…その、いきなり手を出すのも…それ目当てって思われたくないって言うか」

「何言ってるんの、私の体だって私でしょ、もうあんたの物何だから好きにすればいいじゃない」

な、何だ？正妻になってくれたとは言え、いきなり飛ばし過ぎでは…？

そう思ってもごもご顔を上げると、暗くても分かるくらい顔を真っ赤にしたナミさんがいた。

……なんだ、恥ずかしいのは私だけじゃ無かったのか。

「…慣れてないのよ、こう言うことは。……あんまり見ないで」

いや見るわ。可愛すぎか。

「…ナミさん、キス、しようよ」

「……さつきからそう言ってるでしょ」

胸から顔を離して、もぞもぞ体を動かしナミさんの顔の横まで私の顔を持っていく。

……ほら、何だっけ、あれ。なんかあるじゃん…据え膳？うん多分これ。今ってそういう感じでしょ？だから遠慮するのは逆に失礼なんだよナミさんに。うんそうだよん。

「い、い、くよ」

「ん」

目を瞑ったナミさんがいつも以上に色っぽく見えて、私の心臓ははち切れんばかりに高鳴る。

徐々に近づいていく私達の距離は、それこそ今までの私達を表しているのかな、なんてどうでもいい事を考えながら。

「……っ」

初めての、キスをした。

それはまるでこの世の物ではないかのように蕩けて、私の心にすっぽり落ちていく。ナミさんから漏れる吐息は想像以上に艶やかで、色っぽくて、唆られる。

…何がって、私の劣情がだよ。

それは一瞬の行為だったけれど、この先の人生で一度も忘れる事はないだろう。初めてだ。

今この時、私はナミさんから全てを委ねられて、私の全てを委ねているのだ。

……ああ、なんて幸せなんだろう。そう思うと同時に、唇が離れていく今をどうしようもなく哀しくもなつた。

「……なんて顔してんの、ほら…。何度だつてもいいから」

「っ…な、ナミさん…!」

暗い部屋に2人つきりだつて言うのも手伝つて私は自身の欲望を全て吐き出すかの様にナミさんを求める。

何度だつてキスをして、何度も何度も気持ち確かめ合う。

こんな事をずつとしていると、それは勿論、私たちもお互いを好んでいる訳ですから…そういう感じになると言いますか…。

「んっ……ふぁ」

「ちゅ……は……あ」

唇を舌で撫でて、口を開かせると一気に中へ入れる。

どうするのか頭では全く理解してない深いキスも、私の欲望はああしたいこうしたいと勝手に動き回ってナミさんを犯していく。

いつの間にやら私はナミさんの上に跨っていて、押し倒している姿勢でずっとキスを続けていたようだ。

「……ふ……う。……ナミさん、……ごめん、我慢出来そうにないよ」

「だ、から……、我慢……しなくていいんだって……。……きて？イリス……」

「ツ……、もう、知らないからね……!!」

貪るように、狂ったように互いの肌を重ね合う。

汗は1つに、体温は同じに、そして気持ちすらも深く、深く重なっていく。

それは激しい行為の中でも途絶えることのない熱を持ち、相手を想う心だけは無制限に膨らんで止まる事を知らずに高く大きくなっていく。

私達の夜は、まだまだこれから……

\*\*\*

「……ん、」

朝、ドタドタと男組…恐らくルフィあたりが騒いでる音で目を覚ます。隣を見ると私の可愛い正妻が規則正しい寝息で眠っていた。

「……昨晩は、凄かったな」

本当に好きにした、という自覚がある。

ナミさんの事を考えはしたけど、彼女自身が自分より私の事を優先しろと言ってくれたので私がやりたいように、やりたい事を好きにだけやったのだ。

…ナミさん、本当に可愛かったな。

「……好きだよ、ナミさん」

ちゅ、と眠るナミさんの頬にキスを落とすと、ナミさんはゆつくりと瞼を上げて寝ぼけ眼で私をぼーっと見つめる。

「……イリス、おはよう」

「うん、おはようナミさん」

……あれ、これ、朝チュン!!?

大好きな人とこんなシチュエーション……転生、神!!!

「イリス、昨日はその……良かった？あんな事した事なかったから……あなたが満足出来たか心配で……」

「私満足度100%かな。私の方こそ痛くなかった？」

「ふふ、あなたが自分で思ってるよりずっと優しい手つきだったわね」

そうなんだ……。

ナミさんも満更でもなさそうな表情だし、失敗してないようでよかった。

「その、ナミさん、こんな私の正妻になってくれてありがとう。これからも……よろしくね」

「急に何？でも、ま……、こちらこそよろしくね、イリス。これからは正妻としてあんたを支えていくわ」

「お、お手柔らかにお願いします……」

……思い返せば、ここまで来るのに何年掛かったんだっけ。

無人島で目を覚ました時からもう16年近くなるんだよね、それでナミさんと会って、一味と会って……。

……ここ最近だけで、かなり濃い経験を積んだなあ……。

……でも、これから先も私は濃く、花のある生活を望む。

それこそが私の夢の道であり、私とナミさんの道であるからだ。



「…ナミさん、ちゅーしたい」

「はいはい……ん」

「んっ」

だから、これから先に進むために今はナミさんを堪能しておこう。

…どうせまた、この一味は数々の苦難が待ち受けているのだろうし…いつこうしてゆつくり出来なくなるかわかったもんじゃないんだから。

そんな事を考えながら、私はナミさんの小ぶりの唇を更に小さい私の唇で堪能するのだった…。

## 21 『女好き、禁断の恋に憧れる』

「ありがと、次は新聞と一緒に美人でも運んできてよ」

チャリン、と新聞配達の鳥に金を渡す。

ナミさんが正式に仲間に加わってから…そして私達にとつて大事な初夜から数日、元々仲間みたいな感じだったから馴染むも何も最初からそこにいるのが当たり前だったかのようにナミさんは自然と一味に溶け込んだ。

「はいナミさん、新聞」

「ありがとウイリス。ていうかあんたいつまで私のことナミさんって言うのよ、する事したのでしょ」

「いやー…」

ずっと呼んでたら今更変えるのが恥ずかしいと言いますか…。

私とナミさんは晴れて夫婦、恋人より更に上のランクへとアップしたのだ。

もともと恋人では無かったとか、そんなこと言わない！

そんなナミさんが来て変化があったことといえば、やはりメリー号の一角にみかん畑が出来たことだろうか。

流石に船の上なので大量にあるわけでは無いが、それでも4本は木が生えてる。時々ルフィが手を伸ばしては警備してるサンジが止めている光景を見ることができるとぞ!

「ルフィは何だか嬉しそうだね」

「おう! あともうちよつとで偉大なる航路だからな!」

もうそんな所かー…。

「ん?」

そんな時、ナミさんが日傘の下でビーチチェアに座って読んでいた新聞からチラシが二枚落ちてきた。

なんかこんな紙どっかで見たことあるな……つて。

「あああああつ!」

ルフィと私が叫ぶ。

どっかで見たことあるとか言ってる場合じゃない…これ、手配書だ!!

「麦わら」モンキー・D・ルフィ『3000万ベリー』

「女好き」イリス『3000万ベリー』

「おおお、ルフィと一緒だ!!」

「アーロンを倒したからね、ルフィは今までの実績もあるし、そんな奴の船長だからつてとこかしら」

「それにしてもお前らなんでこんな笑ってる写真ばつかなんだ」

ウソツプが言うように、手配書の写真はルフィの場合カメラに向かって手を広げて笑ってるドアツプだ。ウソツプの後頭部が見えてるのもポイントが高い。

私の場合はナミさんに抱きついてる写真かな。笑顔は笑顔だけどなんか下心を感じる…いや実際ナミさんに抱きついてる時は下心100%であります、はい。

「はっはっはっは！ やつたないリス！」

「ね、何か有名になった！ って感じ」

「あんたら、また見事に事の深刻さがわかってないのね…。これは命を狙われるってことなのよ！ この額ならきつと“本部”も動くし、強い賞金稼ぎにも狙われるし…」

「ナミさんは何があっても私が守るよ！」

「またナミさんって…まあ、最初は敬語だったし…進歩はしてるか」

私だって色々頑張っているのです。

「おい、何か島が見えるぞ？」

「んー？」

ゾロが指差す方向を見ると、確かに島があった。

「見えたか…、あの島が見えたってことは、いよいよ “グランドドライン 偉大なる航路” に近付いて来た

のね」

「おー、ルフィ聞いた!？」

「おう!」

ナミさんの説明によると、その島には『ローグタウン』という有名な町があるらしい。別名は「始まりと終わりの町」。何故そう言うのか、それはかつての海賊王ゴールド・ロジャーが生まれ、そして処刑された町だからだ。

「海賊王が死んだ町……!」

「行く?」

ナミさんの提案に、一味は即決で賛成した。

「う、わー!ー! 凄い!」

その町はかなりの規模を誇り、入口から見る建物の並びや光景はまさにロンドンの街並みだった。

「イリス、あなたは誰か女の一人でも引つ掛けてきなさい」

「え、それを正妻が言うの……?」

「あんだ、私が誰の正妻を務めてると思うの? ハーレム女王になるって言ってる人の正妻になってるんだからそれくらい度量も覚悟もあるわ。それに、初めては貰った訳だ

しね。…ただし、変な女にだけは捕まっちゃダメよ」

「は、はい…」

最後は凄く怖い顔で頷くしかなかった。でもナミさん、流石良い女！

「はー、でも良い女か…」

ナミさん達と別れて町を歩く。

辺りを見渡せば、流石に大きな町だ。美人など幾らでもいる。

「うーん…手当たり次第に声かけてみようかな。でもどうせなら何かこう…事件でも起こってその中心に美人がいれば一番良いんだけど…」

そうすれば助けに入って、そこから始まるラブロマンスだつてあるだろうに…。

どこを見てもそんな物は見当たらないし、いや、当たり前だけどね。

精々男二人を斬り倒してるショートヘアの女の子くらいしか居ないし、自分で解決しちゃつてるから助けも何も無いよね…。

「………んん？」

いや待ておかしいぞ、なんで女の子が男二人相手に刀振り回すなんて事になるの!?

しかもその女の子、転んで眼鏡落としてるし…あ、これドジっ子属性だな。

「はい、眼鏡」

「はい…ごめんなさい。あ、ありがとうございますっ」

「お、イリスじゃねエか、こんなところで何やって……!!?」

そこにゾロが来て、女の子の顔を見るなり目を見開いた。

「何? 一目惚れ? やめてよ、私の夢知ってるでしょ、それに誰か一人は捕まえないと私がナミさんに怒られるの!」

「違エよアホかてめエは!!」

「?」

そんな私たちを、眼鏡を掛け直した女の子が不思議そうに見ていたのだった。

「それで、たしぎちゃんは何してたの?」

「えっと、それが私の刀を武器屋に預けてまして、その引き取りに……」

あの後、軽くたしぎちゃんから自己紹介を受けた私達は流れて同じ道を歩いていた。

「なに? 武器屋だと? 俺もそこに用があるんだが……案内してくれねエか」

「じゃあ私も行くよ、せつかくなら可愛い子と同行したいもんね。何ならゾロがちよつと邪魔かも……」

「俺の武器を見に行くんだろが!!」

「ふふ、はははっ」

私達のやり取りを見てたしぎちゃんが笑うので、少し気恥しくなったのかゾロは反論をやめた。

「笑った顔も可愛いね、たしぎちゃん」

「えっ、はあ、ありがとうございませす…?」

やっぱり初見で口説くなんて無理だつて…。助けてナミさん…カヤ…お姉さん…。

そうこうしてる間に武器屋に辿り着く。

うーん、武器屋に用は無いんだけど…そうだ、ナイフでも見て行こうかな。

最近ではサブウェポンに成り下がってしまった我が得意武器を思い心の中でほろりと涙を流す。無人島時代はあんなに愛用していたというのに…。

中に入ると媚びた態度の店主が出迎えてくれたが、ゾロが10万ベリーで刀を2本要求した事で顔色を変える。

「はっ、10万で2本? そんなんじやナマクラしか買えねエぞ!」

「ナイフは? お金はいくらでもあるよ!」

「子供に売る武器なんざウチにはねエよ、帰んな」

何か最近子供扱いされても許せるようになってきたよ。こうもみんなが言うてるなら、子供扱いされる事が自然なんだよね…仕方ないよね。でも涙を流すのは許して…。



「俺が代わりに買ってやろうか？金は出せよ」

「ありがとう、お金ないから出して〜！」

「今いくらでもあるつつつてたろが！」

「お、おいちよ、ちよつと…その刀見してみみ…な？」

ゾロの腰の刀を見た途端に、店主が明らかに動揺して狼狽えだす。

「あ、あー!?それ、それはもしや…!!」

たしぎちゃんも目を輝かせて店主に渡したゾロの刀を食い入るように見ている。

「これっ! “和道一文字” でしょう!」

「和道…?」

「一文字…?」

なんだそのかつこ良すぎる名前の剣は。

くうく、そういうネーミング好きなんだよね!私も今度取り入れてみようかな!?

「これは “大業物21工” の一本!名刀です!これをもし買おうとするのなら1000万ベリー以上は下らない代物です!」

「私3分の1つてところか」

「え?」

たしぎちゃんが私を見るので、とぼけて何?と返しておいた。

「てめエの価値で測られちゃこの和道一文字とやらも浮かばれねエな。まあナマクラでもいいから売ってくれ」

「その樽に入ってるのが全て5万ベリーの刀だ、何ならその刀を売ってくれるならただでこの店一番の刀をくれてやるがな」

「悪りイ、この刀だけは幾ら積まれようがやれねエんだ」

ゾロが断るので、店主もそれ以上は突っ込んでこなかった。

たしぎちゃんはメンテナンスに出していた自分の刀“時雨”を受け取る。

「時雨しぐれって言うんだ、刀ってどれもこれもかっこいい名前してるね！」

「わかります！あなたも大きくなったら剣士になるのもいいかもしれませんね！」

たしぎちゃんにも子供だと思われてたのか…泣いてないし。いや泣いてるかも。

「あなたも、刀好きなんですネ！3本揃えるなんてどつかの賞金稼ぎみたい！知ってますか？」

「賞金稼ぎ？知らないよね、ゾロ？……あつ、ゾロウ！」

「……………」

ゾロにすっごい呆れた目で見られた。誤魔化す為に話しかけて自爆するバカとは私のことであつた。

「まるでその賞金稼ぎのような名ですね。名前をロロノア・ゾロというのですが…。刀

をお金稼ぎの道具にするなんて許せません！」

確かに、たしぎちゃんは正義感強そうだもんね。海軍とかに居そうなタイプだよな。はは。

「どうしてこの時代は悪が強いんでしょうか……！名のある剣豪達はみんな海賊だったり賞金稼ぎだったり……世界中の名刀だつてほとんどそいつらの手にあるんですよ？刀が泣いてます」

「まあ、今は大海賊時代だからね、時代だと思うよ。だから海軍がいるんだしね」  
「!!」

私は話の流れでそう言っただけなのだが、たしぎちゃんは少し思ってた反応と違った。

「おれア悪党大歓迎だぜ、店が繁盛するからな。だがあの化け物がこの町を仕切る様になつてからはこの店も閑古鳥が鳴いてらア」

「スモーカーさんは化け物なんかじゃないですっ！」

「『悪魔の実』の能力者だ！充分化け物さ!!」

「へえ」

どんな実かは知らないけど、この町を仕切ってる人は何かしらの悪魔の実を食べてるのか……。

そんでたしぎちゃんはその人のこと知ってるのか…。

…：…これたしぎちゃん海軍だよ。

…：海軍…：それってつまり…。

禁断の恋ってやつだよなー…！！

海賊と海軍…：二人の間にある壁は果てしなく高く、分厚く硬い…！だけどそれ乗り越えた時…：二人は強く結ばれる…！的な！！

「たしぎちゃん…：今度二人でお茶しない？」

「え…？はい、今度休みでも取れたらどこか行きましようか、でもご両親にはしつかり挨拶させて貰いますよ」

そうじゃねえよ！！完全に保護者役務める気満々じゃん！！デートだってば！！

はあ…：まあ、引つ掛けるのは無理でもたしぎちゃんと出会えただけでも収穫だよ…。

「これ、〃三代鬼徹〃！！どうしてこんな物が5万ベリーの樽に?！」

樽を見ていたたしぎちゃんが驚いたように声を上げる。

「そんなに凄いの？」

「凄いですよっ！歴とした「業物」です、普通は100万はする品で、この前代の〃二代鬼徹〃は「大業物」で〃初代鬼徹〃は「最上大業物」に位列してます！」

確かにそれだけ聞くとすごい刀なんだろうけど、そんな物を間違えて5万の樽に入れたりほしくないだろう。

「妖刀か」

ゾロが鞘から刀身を抜いて言う。

妖刀…この世界にはそう言ったカテゴリの物もあるのか…。

「そうだ、お前の言う通り初代鬼徹を初め鬼徹一派の刀は優れてはいたが尽く妖刀だったのだ…！名だたる剣豪達が腰に差し、その度死ぬ。悪いが置いておいて何だが…それは売れねエ」

「ほう…。気に入った！これをもらおう!!」

話は聞いていた筈なのに貰うとか言い出した。

確かに、私も呪われた美女とか居たら欲しいかもしれん。あなたの呪いなんかじゃ死なないよ…とか言つて！ぐへへ…。

「バカ！売らねエぞ！それで死んだら俺が殺したみてエじゃねエか！」

「じゃあこうしよう、俺の『運』と三代鬼徹の『呪い』…どっちが強エか試してみようか…」

そう言つてゾロは刀を上回転の力を加えて放り投げた。

そして刀が落ちてくるであろう場所に腕を伸ばす。

「…凄い」

結果は、まるで刀がゾロの腕を避けるかの様な軌道を描き店の床を貫いただけに終わったのだ。

素人の私が見ても心を打たれたのだ、たしぎちゃんや店主の衝撃は物凄いようでした。ぎちゃんに至っては腰が抜けて床にへたり込んでいた。

店主の方は店で保管していたこの店最高の刀、良業物の “ゆほしり雪走” を、三代鬼徹と共に無料で譲ってくれた。

そして私とゾロは店を出る。

勿論私のナイフもちやっかり新調しました。その名も小太刀！……そうです、そのまんまです！名前なんてありませんでした！

「あの女はいいのかわ？」

「これ以上攻めても無理な気がする…また次の機会にアタックするよ」

さて、それじゃ私はナミさんを探そうかな。せっかく大きな町に来たんだから、デートしたいし！！

「じゃねゾロ！私ナミさん探してくるからー！」

「迷うなよ」

「いやあなたが言うな！！」

## 22 『女好き、煙に巻かれる』

突然ですが、ピンチです。

何がつて、ナミさんを探しに町へ繰り出し数十分、辺りの人の気配は無くなるわ豪雨は降るわで散々だった所に、顔の怖いヤンキーみたいな海軍に行く手を阻まれたからです。

「…そこ、退いて欲しいんだけどね。こんな雨だし…嫁が心配なの」

「安心しろ、すぐに一緒に牢屋にぶち込んでやる」

「あつ……そツ!!」

ダツ!と距離を詰めて飛び蹴りを放つ。このまま吹き飛んだ隙に逃げればいいと思っていた私の思惑は、その男の体を私の蹴りがすり抜けた事で無意味となったのだが。

「な……!悪魔の实の…!?まさか、あなたがスモーカーか!」

「ほう、俺を知っているなら話は早エ。大人しくしよつぴかれるんだな」

「ばーか!すり抜けちゃったから結局道は通れてるよーだつ!」

そのままスモーカーに背を向けて走り出す。

何で攻撃が通用しなかったのかまではわからないけども、面倒そうな能力者とわざわざ正面切って戦う必要もない。

「ほオ…俺から逃げられると思ってるのか？女好き…」

「はっ?!そんなのアリ!?!」

私が高速で走っている後ろを、スモーカーは下半身を煙に変えて空を飛びながら追いかけてくる。

しかも結構速い!なんだこいつ!

「くっ、新調して小太刀になった我が技をくらえっ!十倍灰じゅうばいばい・去羅波さらば!」

「フン、下らねエ」

いやあー!!やっぱり攻撃がすり抜ける!

もう戦うなんて考えるのはやめよう!ここは逃げに徹しないとまずい!

「全オールインクリス・倍加!!からの、神背ヒューマイニングクリス・倍加!!」

「なっ…!?!」

「どつちがー?」

「本物でしよー?」

“私”と目を合わせて左右に分かれて逃げる。

逃げるだけでここまで全力を使わされるなんて…。



「この町は危険だね…、早くみんなに知らせないと」

「どうやら『私』を追ってくれたらしいスモーカーに安堵しつつ、効果が切れるまで能力はそのままにしておくことにした。」

私はみんなを探すため、スモーカーに見つからないよう慎重に行動する。

そうして数分後、ようやく誰かに追われているのか猛ダツシユしてるルフィ達を見つけた。

「ルフィー！サンジー…！つて、なんで『私』まで…!?ま、まさか…」

「おーい！イリスー！」

ルフィ達の後方に目をやると、案の定スモーカーが追ってきていた。

「いやいやさつき逃げたばっかなんですけど!!?」

「あ、ごめん私！後はよろしく！」

そう言つて時間制限で消えていく分身を憎たらしく思いながらも、こうなつてしまつてはしようがないと腹を括る。

「てめエ女好き…！今度は本物か!?!」

「泣きたいけど本物だよ!!ちくしように！」

「イリスちゃん、知り合い？」

「さつきちよつとね!!」

「ただどやっぱり相手の能力は捕縛に特化しているようで、ルフィが煙に捕まってしまった。」

「うわっ、何だこれ!？」

「ルフィ!この、離せ!」

ルフィを掴んでる腕を攻撃してもやはりすり抜けて意味が無かった。

最も、神背ヒュマインクリス・倍加が切れてる事でお察しだとは思うが全オールインクリス・倍加もとつくに切れてるので殴ったところでダメージはそんなに与えられないのだが。

「お前らが3000万ベリーだと…!？」

「ぐっ…!？」

私も同じように掴まれて拘束される。

私達の攻撃は当たらないのに、相手の攻撃は当たるなんてずるい!

サンジの蹴りにもどこふく風と言うように無視している。

あのサンジの蹴りを無視できるのは、どう考えてもヤバイヤツだ…。

「うぐ…!」

そして、私とルフィはスモーカーの両腕で地面に頭を押し付けられ身動きが取れなくなってしまった。

「お前らも、悪運尽きたな」

押さえつけられてるせいで何をするつもりなのかは見えなくて分からないけど……口でもないことなのは確かだ……!

「それでもなさそうだが……?」

「!!……てめエは……!!」

な、何?!何が起こってるの!?

いきなり知らない人の声が聞こえたと思っただらスモーカーが驚愕の声を上げてる。

「……政府はてめエの首を欲しがってるぜ……!」

ちよつと、政府に追われてるって相当ヤバイ人なんじゃないの!?

「なア!!」

そして、その声の主が現れた瞬間を狙っていたかのように突風が吹き荒れる。

それはスモーカーが私とルフィから手を離してしまう程の規模で、二人揃って飛ばされてしまった。

「ルフィ走れ!島に閉じ込められるぞ!バカでけエ嵐だ!!」

「うえつ、落ち着いて観光も出来ないのこの島は!」

急いで走ってきたゾロに引つ張られるように私とルフィは走る。

サンジも近くにいるね。よし、今の突風ではぐれたとかは無さそうだ。

何とかメリー号に辿り着いた時には、既に島と船を繋ぐロープが切れかかっていた。

上にはウソツプとナミさんが待機していて私たちを急かす。

「イリス！早くしなさい！最悪他の男どもは置いてきてもいいから！」

「アホかてめエは!?!」

「んナミさんの為ならこのサンジ、何でもしますっ！」

ルフィがメリー号に手を伸ばし、私達はルフィに掴まって一緒にメリー号に戻ってきた。

「よしっ！出航!!」

ルフィの合図で船を出す。

とてつもない嵐だから波は大荒れ、船は有り得ないくらい揺れているのだが…。あんまり酔わないタイプでほんと良かった。

「あの光を見て！」

「ん？」

船を進めて少し、ナミさんが島の灯台を指差す。

「あれは…『導きの灯』って灯台。あの光の先に

『グランドドライン』の入口がある。…どうする？」

「……くうく！よつしや！行こう、ナミさん！」

「で、でもよイリス、何もこんな嵐の中を……なア！」

ウソツプが例の如く怯えているが、まあ何だかんだ言いながら腹を括る事ができる人なのは知ってるから放っておこう。

「それじゃ、偉大なる海に船を浮かべる進水式でもやろうか！」

「おー、それっぽい！よつし、じゃあ私から……！」

サンジが樽を持つてきたので、上に脚を乗せる。あ、これ高いわ。ちよ、高いわこれ。「あつはつは！イリス足震えてんじやねエか！はつはつは！」

「うっさいわルフィ！ギリギリなの！」

進水式つてよく知らないんだけど、この場合はとにかく自分の最終目的……つまり夢でも言えれば良いのだろう。良かった、メリー号にシャンパンぶつけるような事にならなくて。

「私は、ハーレム女王になる為に！」

「俺はオールブルーを見つける為に」

「おれは海賊王!!」

「俺ア大剣豪に」

「私は世界地図を描くため！」

「お、おれは…、勇敢なる海の戦士になる為だ!!」

それぞれが決意を胸に、樽に足を乗せる。

『行くぞ!!偉大なる航路!!』

6人で割った樽に決意を誓い、私達は海賊達の墓場へと船を進めるのだった。

\*\*\*

「偉大なる航路グランドラインの入口は、山よ!」

「山!?!」

船内でナミさんがテーブルに地図を置きながら言う。外は嵐なので今後の方針を中  
でゆっくり決めるのだ。

地図はみんなで囲んでいるテーブルの上なので、誰からでも見える位置にある。

「導きの灯が差してたのは間違いなくここ」

“赤い土レッドの大陸ドライン”にあるリヴァース・マウンテン

「ほへー、アトラクションみたいな名前だね」

「何呑気なこと言ってるんだ、そこ山だぞ」

「違うわよ、ここに運河があるでしょ」

運河：…？って何だっけ。人工的に作られた川とかそんな感じだったっけ。

「運河!? バカ言え! 運河があるうと船が山を登れるわきやねエだろ!」

「それはそうだけど、ナミさんが言ってるんだからそうなんだよ」

ウソツプの尤もな疑問にそう返しておく。

…この世界の海がどうなっているのかまだイマイチ分かってないんだけど…地図を見るに普通に南に渡れば偉大なる航路グランドドラインには出れそうなのに、どうしてわざわざ山であるリヴァース・マウンテンを経由するんだろう？

「イリス、顔に出てるわよ」

「えっ」

慌てて頬を抓ると、ナミさんは笑った。

「嘘。でも疑問に思うのはわかるわ。どうして海を渡って直接偉大なる航路グランドドラインに行かない

のか、それはね…」

「あれっ?! 嵐が突然止んだぞ!」

「おー、ほんとだ!」

外へ出ると、確かに嵐は収まり空は快晴の青に包まれていた。

ラッキーと思いきやナミさんを見ると、何やら焦った表情を浮かべている。

…これ、絶対何かダメなヤツだね。

「しまった…。」 嵐カームベルトの帯カームベルトに入っちゃった…」

「カームベルト？」

船が通ってきた所を見てみると、向こうはまだ嵐だった。

まるで違う世界にでも迷い込んでしまったかのような異質さを感じる…。あ、私にとっては実際違う世界だったね。

「イリス！早く帆を畳んで船を漕いで！嵐の軌道に戻すの!!」

「よしてきた！ゾロ、オールになって！」

「てめエ前から俺に恨みでもあんのか!!」

いや、きちんと突っ込んでくれるのが嬉しくて。

「ふざけてないで早く！今この船は南へ流れちゃったのよ！」

「ということとは、偉大なる航路グランドラインに…？」

私の疑問にナミさんは答える。

偉大なる航路グランドラインは、更に2本の海域にはさみ込まれて流れている。

それこそが正にこの無風の海域カームベルト 嵐の帯カームベルトなのだ。

「要するにこの海は…！」

結論を聞く前に船がまるで地震でも起きたかのように揺れる。

地震と言ってもここは海の上、そんな事はありません。



「な、なにが…?」

揺れが治ったので辺りを見渡す。

そこには、言葉で表すことすら躊躇われる程の無数の海王類達で溢れていた…。

メリー号はその中の巨大な海王類の頭に乗っているようだ。地震はそのせいか…!

「な、ナミさん…これって…」

「そう…海王類の…巢なの…大型のね」

つ、つまり、このルートで偉大なる航路グランドドラインに向かおうと思えばこの数の海王類を船で避

けていかなければ行けないのか…。

「…よし…嵐に戻るぞオー!!」

「うおおおおオオオ!!!」

この時ばかりは私もゾロもサンジも、ルフィやウソップ、それにナミさんだつて全力でオールを漕いだ。

必死に嵐の中へ戻った時には、大荒れの波に安堵するという謎の気持ちを抱いたのだつた…。

## 偉大なる航路（グランドライン）編

## 23 『女好き、クジラに飲まれる』

「ほんと死ぬかと思った…いや！ナミさんだけは死んでも守る！」

あの無風の海を何とか凌ぎ切った、というか逃げ切った私達は、あいも変わらず嵐に打たれていた。

「…わかった、やつぱり山に登るんだわ」

「リヴァース・マウンテンを？」

海の知識などが全くない私でも、やはり船で山登りは出来るイメージが湧かない。

ナミさんを信用してるけれど…どうするのかという疑問は残る。

「さつき風の帯カームベルトをこの目で見てわかったの、答えは海流よ。四つの海の大きな海流が全てリヴァース・マウンテン山に向かっているとしたら…」

四つの海とは、まずウエストブルー、東の海。そして残り三つがそれぞれ西の海、南の海、北の海ノースブルーとなつている。

名前の由来はそのまま、その方角にある海がそうなのだ。

「その四つの海流は運河を駆け登って頂上でぶつかり、偉大なる航路グランドラインへ流れ出る！もう

この船はその海流に乗っちゃってるから後は舵次第。リヴァース・マウンテンは「冬島」だからぶつかった海流は表層から深層へ潜る。運河の入口に上手く舵を合わせられなければ船は大破——海の藻屑ってわけ」

「ふーん、ルフィ、わかる？」

「要するに不思議山だろ？」

「それ」

「それ、じゃないわよ……」

それくらい認識でも問題ない筈だ。

何たって今から行くのは偉大なる航路。<sup>グランドライン</sup>常識などハナから通用しないのだから。

「不思議山が見えたぞ!!」

「で、でつか——っ!」

もうすぐ偉大なる航路<sup>グランドライン</sup>だと心の準備はしていたのだが、いざこうして赤い土の大陸<sup>レッドランド</sup>を見上げるとワクワクが込み上げてくる。

ナミさんの言ってた通り、運河の入口には海流が勢いよく流れていてあそこに上手く入ることが出来れば船だつて山を登ることができさるだろう。

途中舵が海流の力に負けて折れ、船が上手く入口に入らず岩にぶつかりそうになった

が、そこはルファイがゴムゴムの風船で船と岩の間に入って無理やり軌道を修正してくれたお陰で事なきを得、何とかリヴァース・マウンテンに入れた。

「おおっ！」

四つの海流が合流している所は噴水みたいになっていて、メリー号はそこで軽く浮いて何なく海に着地する。

と、いうことは…!!

「見えたぞ！偉大なる航路！」

ルファイが嬉しそうに笑う。何かうちの船長の笑顔ってほんと嬉しそうなんだよね。

「よーし！行けー！」

私のテンションもアゲアゲである。ナミさんの子を見つめる親のような温かい目はこの際見なかったことにしておこう。私はナミさんと夫婦の関係である筈で、まさか母娘なんかでは決していないからである。断じて。

「おい、何か聞こえたか？」

「えー？風の音でしょ、さつきから聞こえてるよ」

ゾロが変な事を言い出すので、深く考えずに軽く返しておく。確かにさつきからブオオオオオオオオみたい聞こえてはいるけど。

「ナミさん！前方に山が見えるぜ！」

「山？そんなハズないわよ！この先の『双子岬』を越えたら海だらけよ」

何か偉大なる航路グランドラインに近づくにつれて風のような音は強くなってくるし、山がどうか言ってるので流石に不思議に思ってて視力倍加を使う。

「……確かに山が見えるね……大きく口も開いてるし……」

……ん？

「いや、これ山じゃないよ、クジラだ！クジラが道塞いでる！！このままじゃメリー号とぶつかるよ！！」

「ええっ!?!」

風だと思ってたのもクジラの鳴き声だったようだ。くそ、ゾロにそれ見たことかとドヤ顔された。

「どうする!?!戦うか!」

「バカね！戦えるレベルじゃないでしょ!?!」

クジラと言えばその巨体をまず想像するだろうが、今回のクジラはそれ所ではなかった。

聞いたことないだろうか、前世の日本で噂さされていた話だと、古代にはメガ何たらという巨大鯨が居たそうな。

今回のクジラはその鯨よりも遥かに大きなサイズを誇つているのだ。近くに来てし

まったらもう壁にしか見えない。

「左に隙間がある、あそこから抜けられそうだ！舵折れてるが、何とかならねエか!？」

「よし、私も手伝うよ！まずは折れたところを二倍に伸ばして力をかけ易くしよう！」

「でかしたイリス！よし、ここまで伸びればだいぶマシだ！」

ふぐぐ!!と取り舵を回そうとするが、流石に強い流れに乗ってある事もあつてなかなか動きそうもない。

だめだ、このままじゃぶつかってー!!??

ドウンツ!!

!!??

「た、大砲!？」

ぶつかれば終わりだ、と言うところでメリー号の前方から大砲が放たれ、クジラに直撃した。

狙撃手はルフイ。彼はかなり満足といった顔を浮かべていらっしやる。

確かに大砲を撃った反動で船の勢いはかなり減速し、クジラにぶつかりはしたが大した衝撃もなくメリー号の頭が吹っ飛んだだけで済んだのは良かったかもしれない。

「クジラの反応ないよ！今のうちに逃げよう!!オール漕いで！」

「了解ッ！」

気付いていないのか、何の反応もないクジラの横を通り過ぎようとオールを全力で漕ぐ。

「あれ、ナミさんどうしたの？そんな所でへたり込んで」

「メリー号の船首像に当たりそうだったから避けただけよ、気にしないで」

「なるほどー！」

危ない危ない、メリー号の頭は結構重たいんだからそんな物がナミさんの上に落ちてきたら…。

…と言うことは結構危なかったのか…。

…

「このクジラがアー!!ナミさんに当たってたらどうするつもりだア!!」

「おれの特等席に何してくれてんだア!!」

私は跳躍して蹴りを、ルフイはゴムゴムのピストルでクジラの目を殴った。

「アホーアーっ!!」

流石にクジラも無視する訳には行かなくなったのかメリー号に視線を合わせる。

「上等だよ…!かかってこおい！」

「あんたはもう黙ってて！」

「おふ…」

ぎゅつとナミさんに抱き締められた。ナミさんや、私の扱いをよく心得ておりますな…。

「お、おい…クジラの奴、口開いたぞ…!」

ウソツプが白目向きながら泣くと言う芸当を披露している間にもクジラは次の行動に移る。

「こ、これ吸い込まれてない?」

「どう見ても吸い込まれてるだろ!!」

とてつもない程巨大なクジラが吸い込む力と言うのは凄まじく、みるみる内に船はクジラへ飲み込まれていく。

その勢いは、軽く足を滑らせたルフィが船外に放り出されるくらいの速さで飲み込まれている程だ。

「…ってルフィ!!」

「うわあああ!!?」

バツと腕を伸ばしてクジラの歯を掴んでいたから、ルフィは大丈夫だろう。

問題は私達だ。飲み込まれても直ぐに死にはしない筈だ。何が何でもナミさんは守り通してみせる。



\*\*\*

「……って思ってたんだけど……」

何だこれ……。

飲み込まれたと思ったたら、何故かそこは海の上だった。

「何これ？」

「夢だろ」

「じゃあ目の前に見えてる島と家は？」

「……。幻だろ」

「じゃあ、これは？」

「大王イカだ!!!」

ウソツプはゾロの、ナミさんは私の後ろに隠れたが、突然出てきた大王イカはロープに固定された銚<sup>3</sup>本で一突きにされて家に引きずられていく。

「人は居るみてエだな」

「ここから出る方法を知ってる人なら助かるんだけどね」

「待て、家から人が出てきた……!」

怪しすぎる家から出てきたのは、まるで花が開いたかのような髪型をした男性だっ

た。何といえぱいいのか、孔雀の広げた時の羽を横に倒して後頭部にくつつけたような感じだ。うん意味わからん髪なのはわかった。

「……………」

「……………」

……………。

「なんか言えよてめエ!!」

目は合つたのだが一向に口を開かず、ビーチチェアに座って新聞を読み出したので流石にサンジが突っ込みを入れる。

「や、やるならやるぞこの野郎!こつちには大砲があるんだ!」

ウソツプがビビりながら威嚇する。何せ相手がどんな人物なのかさっぱりわからないのだから対応の仕方がわかんないのだ。

「……………」 やめておけ…死人が出るぞ」

「……………!!…へエ、誰が死ぬって?」

「私だ」

「お前かよ!!!」

「あつはつは!!!」

芸人でしょサンジと孔雀さん!!だめ、お腹振れる…ッ!

話が出来るくらい落ち着き、この場所についての情報を教えてもらった。

まず、ここがクジラの腹の中なのは間違いないらしいのだが普通に出口はあった。ここはクジラの胃袋の筈のだけど…あんな風に扉何か作っちゃって平気なのだろうか。

そして、この男の名はクロツカス。双子岬の灯台守をやっているようだ。

「なるほど、じゃあとにかく出口に向かおう。ルフィの事も気になるし」

「ああ、そうだ…なっ…、ツなんだ!？」

急にクジラが揺れだしたのか、海と思っていた胃液が荒れ、船も同じように揺れだす。

さっきからハプニング続きで疲れてきたよ…。しかも急にくる奴ばっかり…。

「始めたか…」

「何を!？」

ていうかこれだけの揺れでよく冷静で居られるよねこのじいさん。

「このクジラが、赤い土の大陸に頭をぶつけ始めたのだ…!」

「…!」

何故そんなことをしているのかはわからないが、その説明には納得が行く。確かにこのクジラの額には物凄い数の傷があったし、空へ向かってブオオオオオと叫んでいたのはその痛み故か。

「そうか!…それが狙いかあのジジイ!体の中からこのクジラを殺す気なんだ」

「んな訳あるかい」

パシーンとウソツップを叩いてツツコミをお見舞いする。

「いてエないリス!今の何倍だ!」

「倍加してないよ。でもウソツップの説はないと思うよ。確かにこのままじゃクジラは死ぬけど、わざわざこんな回りくどい殺し方しないでしょ」

人を疑うより、信じた方が気持ちがいいって歌があつた筈だ。

いや、私はそんな人間ではないけれども、前世の記憶がそう言っているのはクロツカスがそんな事をするとは思えなかつたのだ。

「何にせよ脱出は最優先だ、とにかく今は漕げ!」

「そうだね!」

「どれだけオール使うんだよ…?と思ひながらもうんしようんしよと出口の扉まで漕いで行く。」

「…ん!?なんか扉の向こう騒がしくない?」

「気にしてる場合か!おい誰かあの扉開けてきてくれ!」

ゾロの言葉の直ぐ後でドカン!と扉が開けられる。

勿論タイムラグがなさ過ぎるのでゾロの言葉を聞いた人が開けた訳ではないし、何なら船用ではなく、その横にある人用の小さな扉が開かれたのだが。

「あああああああああ?!!」

「ルファイ!!」

どうしてクジラの内部にいるのかという疑問はこの際置いておいて、扉の向こうから物凄い勢いでルファイが飛んできた。

そして、そのルファイに押し出されるように出てきた二人組に目を向ける。

「……すごい美女いるじゃんー」

ザブーン!とルファイを含めた3人が胃液に落ちた。

何があつたんだと思う程の勢いで扉が開かれ人が吹っ飛んできたのも、やはりクジラが額を岩にぶつけていたからだろう。

「あ、ルファイを助けないと!」

「俺が行く……!」

「美女は俺が!」

そう言つてゾロとサンジも胃液に飛び込んでいった。

……こういう時、能力者つて本当に役立たずだよね…。

## 24 『女好き、クジラの想いを知る』

ゾロたちがルフィと残り二人を引き上げた時には、既にクジラは大人しくなっていた。

クジラが暴れ出したと同時に出口から外に出たクロツカスさんが何かしたのかもしれない。

「……で？あなた達は何？」

「……！」

とりあえず美女の方に顔を近づけて尋ねる。何だその顔は。子供がどうして海賊の中に？みたいな顔を止める！何でわかるかって？もう見慣れたからだよ！！

「私達と同じで飲まれたのかな？なら目的は同じ何だけど……」

「……ぐ、こうなったら仕方がない！強引に抜け出すぞ！ミス・ウエンスデー！」

「ええ！Mr. 9！」

ガチャ、と二人は持っていたバズーカを構えた。

「そういうの良いから、ふん！！」

両手でむんずとバズーカを片方ずつで掴み、お互いをぶつけて銃口を粉々に砕く。

「なにつ！その体のどこにそれだけの力が!？」

「く…我々の捕鯨も此処までか…!」

「捕鯨はここままでいいけど、私の捕美女は終わってないんだからそちの水色髪美女だけは置いてつてよね」

「は？」

Mr. 9と呼ばれた男の目が点になる。

いや、このミス・ウエンズデーとかいう水曜日美女、本当に美女なんだよね。ナミさんと同格と言っても過言ではない程の顔の良さだ。

このよく分からないくるくるした服の見た目から見えてあり得ないことだけど、実はお姫様とか言われたら絶対嫁にするよ。

目的は捕鯨だった事が分かったけれど、それから先の個人に関する情報などは何が何でも話そうとしなかったのでクロッカスさんが戻ってくるまで待つことにした。何か知ってるかもしれないからね。

\*\*\*

「……このクジラは、アイランドクジラ。西ウエストポルの海にのみ生息する世界一デカイ種のクジラだ、名前は『ラブーン』」

案外早く戻ってきたクロッカスさんに、クジラやその他諸々の情報を聞きたい私達はまず彼の胃袋内での拠点であり、一番最初に私達が確認した鉄の島にやってきていた。

何故鉄かと言えば、それは勿論胃液対策だ。つまりこのまま中でのんびりしているとメリー号がかなり危ない。

「……いつらは近くの町のゴロツキだ……。ラブーングランドライの肉を狙っている。そりゃあコイツを捕えれば町の2、3年分の食糧にはなるからな。だか、そんなことは私がさせん！こいつが赤い土レッドライの大陸にぶつかり続けるのにも、リヴァース・マウンテンに向かつて吠え続けるのにも訳がある」

「訳……」

……クロッカスさんの話によれば、昔この双子岬グランドライに気のいい海賊達がりヴァース・マウンテンを下ってきた時、その船を追う様に偉大なる航路グランドライへやってきた小さなクジラがラブーンだった。

西ウエストポルの海ではその海賊達と旅をしていたらしいが、流石に偉大なる航路グランドライともなると危険も相応に伴う。海賊達はそれを懸念してラブーンを置いてきたつもりだったのだが、ラブーンは着いてきてしまったのだ。



本来、アイランドクジラは仲間と群れを成して泳ぐ動物だが、ラブーンにとっての仲間とは、その海賊達だった。

私達はルフイの機転や、少しの運もあって船へのダメージは最小限だったがその海賊達は船が故障してしまつたらしく、その修理に数ヶ月停泊している内にクロツカスさんも彼らと仲良くなつていたので。

そして出発の日、クロツカスさんは船長にある頼み事をされたと言う。

『ラブーンをここで2、3年預かつててくれないか、必ず世界を一周しここへ戻るまでは、さ』…とな。ラブーンもそれを理解し私達は待った。この場所ですつとな」

「だから吠え続けてるの…？体をぶつけて壁の向こうに…」

ナミさんが理解はしたけれど納得は行つてないという表情を浮かべる。

それは、そうだ。その話なら、赤い土の大陸レッドライオンに頭をぶつける理由や、吠え続ける理由がない。

「そうだ…。ーもう、50年も前の話になる…。」

「!!」

……つまり、それってー。

「まだ聞きたければ話してやってもいいが、その前にまずここを出た方がいいだろう。外まで案内しよう」

「ああ、メリー号が溶けちまう！」

「……、そんな話を聞いたら、もう捕鯨何て言えないわね、Mr. 9！」

「全くだ、ミス・ウエンズデー！」

「てめえらのその呼び名……どつかで聞いたことあるんだがなア……」

ゾロが首を捻っているが、結局メリー号と共にクジラの外に出ても思い出すことはなかった。

「しっかし、50年かア……随分待たせるんだなー、その海賊達も」

双子岬の灯台下で、私達は少し遅めの昼食を取ることにした。

ルフィの呑気な声にサンジが答える。

「ルフィ、ここは偉大なる航路<sup>グランドライン</sup>。海賊達の………、……、ともかく、2、3年で戻ると言っ

たのに50年も帰ってないってことは……もう……」

私は、前世が平和な国だった事もあり死という概念に弱い。

こういう事がそこら中に散らばっているのが偉大なる航路<sup>グランドライン</sup>なのかと考えると少し気が滅入りそうだ。……ナミさんを見て落ち着こう。

「だが、事実は想像より残酷なものだ。……彼らは逃げ出したのだ、この偉大なる航路<sup>グランドライン</sup>から。確かな筋の情報で確認済みだ」

「……このクジラを置いて……!?でも逃げるには風の帯カームベルトを通らなきゃ……」

「そうとも……故に生死すら不明。だが、例えば生きていたとしても二度とここへは戻るまい。季節・天候・海流・風向き……全てがデタラメにめぐり、一切の常識が通用しないのがこの海。偉大なる航路グランドラインの恐怖はたちまち弱い心を支配する」

「……そして心の弱いせいつらは、ためエの命惜しさに落とし前もつけず、この海からとつととズラかったって訳だ」

酷い話ではあるが、それが偉大なる航路グランドラインなのだろう。好意的に取れば、それこそ一度カームベルト風の帯を生還してまたリヴァース・マウンテンから双子岬へと向かうつもりだったのかもしれない。

そして、その事をクロツカスさんはラブーンに包み隠さず伝えた。帰ってくるかどうかどうかも分からない海賊達を、ずっと待ち続けるであろうラブーンを見ていられなかったのだ。

だが、ラブーンはその話を受け入れる事が出来なかった。ラブーンがリヴァース・マウンテンに向かって吠え始めたのも、赤い土レッドランドの大陸に体をぶつけ出したのもそれからだった。

まるで今にも彼らは、あの壁の向こうから帰って来るんだと主張するかの様に……。

「待つ意味を無くすから、私の言葉を拒む。待つ意味を失う事が何より怖いのだ」

「…故郷には、もう帰れないもんね。あなた達の捕鯨は随分と残酷だね？」

「いいいいえ！滅相もない、流石にもうこのクジラを捕ろうとは思わんよ、そうだろうミス・ウエンズデー」

「え、ええ、Mr. 9…。私、自分が恥ずかしいわ…」

根っからの悪って訳ではないのか。むしろ、この話を聞いて考えを改めて、その上反省までしているのだからいい人達なのかも。綺麗だし。

「うおおおおお!!」

「あれ、ルフィ。何してるんだろ」

ちよつと目を離れた隙に、ルフィはメリー号のメインマストをへし折ってそれを持ち、ラブーンを登っていく。

凄い、ほぼ90度の壁を登ってるんだけど…。

「ゴムゴムのオオオオ!!生け花!!」

「る、ルフィーーツ!!?」

天辺まで登り切ったかと思うと、あろうことかそのメインマストをラブーンの傷口に突き刺す。いや、ちよつと…!

「何やつとんじやお前ローラーっ!!」

そこからは、ラブーンとルフィの激しい戦いが始まった。

私達ですら驚いているのだから、ルフイの突発的な行動になれていないクロツカスきんやMr. 9、美女ウエンスデーは白目を向いていても仕方のない事だろう。

ルフイが殴り、ラブーンが仕返しに頭突く。それを数回繰り返し返して……ルフイが言った。

「……引き分けだ!!」

「……?」

ラブーンは攻撃をやめ、不思議そうに顔を捻る。

「おれは強いだろーおれとお前の勝負はまだ付いてないから、おれ達はまた戦わなきゃならないんだ！お前の仲間は死んだけど、おれはお前のライバルだ！おれ達がグランドドライン偉大なる航路を一周したら、またお前に会いに来るから……そしたらまたケンカしよう!!」

「……ルフイ」

ラブーンは雄叫びを上げる。リヴァース・マウンテンに向かって吠えていたのとは明らかに違う、歓喜の雄叫びだった。

ルフイは、ラブーンに待つ意味を作ったあげたのだ。死んだ仲間達に代わって、ライバルとして。

「麦わらの人、良い人ね」

「そうやって言えるあなたもね。さ、ルフィ、最後の仕上げだよ」

私はそうやってルフィにペンキの入ったバケツを渡すと、すぐに意図を汲み取ってラブーンの額に麦わらの一味のドクロマークを描いた。

ルフィの描いたお世辞にも上手いとは言えない絵だけど、ルフィとラブーンがご満悦なのでよしとしよう。

「これがおれとお前の戦いの約束だ！また頭をぶつけてそのマークを消すんじゃないぞ！」

これで、長い間縛られていたラブーンは解放された。

もつとも、本当の意味での解放は私達が偉大なる航路グランドラインを一周してからになるだろうけど。

そうして、私達は双子岬を発った。

まさかこんなに早く出会いが訪れるとは思ってなかったけれど、悪くない出会いだったよね。

そして、もう一つ。

これはナミさんがクロッカスさんに聞いた事なのだが、偉大なる航路グランドラインは羅針盤がが使え

ない。と言うのも、偉大なる航路にある島々が鉱物を多く含んでいるせいでこの海全域に磁気異常をきたしているからだ。

更に海流や天候なども恒常性がなく、何も知らずに海へ出れば確実に死ぬらしいのだが、それを解決するのが：『記録指針』と呼ばれる磁気を記録出来る特殊な羅針盤だ。

球状のガラス細工の中に、字盤もなく針だけが付いている記録指針は、島と島とが引き合う磁気をこの記録指針に記憶させて次の島への進路とする。

またもに己の位置すら掴めないこの海では、記録指針の示す磁気の記録のみが頼りになる。

始めはリヴァース・マウンテンから出る7本の磁気から1本を選べるけれど、例えばこの磁気を選んでも最後は1本の航路に繋がり：『ラフテル』へと辿り着く。

ラフテルとは、偉大なる航路の最終地点であり歴史上にもその島を確認したのは海賊王の一団だけ、という伝説の島のことだ。

そして、その話をしたのは2日程前の事だ。今航海をしているに当たってそんな貴重な『記録指針』はどうしたのかと言うと：。

「いやー、助かるよ二人共。まさか記録指針を貸してくれるだけじゃなくて島まで連れてつてくれるなんて」

「いいの、ラブーンを殺そうとした罪を軽くすることは出来ないけど、あなた達がまたあ

そこへ帰る為の手助けなら出来るから」

「ふむふむ…嫁にくる?」

「えっ?」

とまあ、そういう訳で二人はウイスキーピークという島へ行きたいらしく、そのついでに私達もそこまで連れて行ってくれるとの事だ。

「思ってたより話が分かる子じゃない。イリス、分かってるわね」

「おーけーナミさん。ミス・ウエンズデーは私が必ず嫁にしてみせる!」

「えっ?えっ?」

はっはっは、何の話をしているのかいまいち状況が掴めていないようだね。

「所で話は変わるけど、さっきから船についてきてる鳥とラッコは知り合い?」

「え…」

二人の顔が引きつる。

直後、二人目掛けて鳥がプレゼント箱の様な物を落とすと…その箱は二人を巻き込んで爆発を起こした。

「なっ!だ、大丈夫二人共!?!」

「にやろ!ゴムゴムの銃<sup>ピストル</sup>!」

ルフィが直ぐに攻撃を仕掛けるが、流星に空を逃げ回る鳥には当たらず逃げていった



…。

爆発に直撃した二人のうち、Mr. 9が咄嗟に庇ったのかミス・ウエンズデーの方はまだ軽傷だったが意識は失っている。

「とにかく手当てしよう。あの鳥とラッコは今度見たらブツ飛ばす。美女になんて事してくれんの」

「じゃあイリス、お願いね。私はまだ中に帰れそうもないから島に着いたら呼びにいくわ」

「なんたつて双子岬を発つてから雪だとか雷だとか晴天だとか繰り返してるもんね…  
グランドライオン  
偉大なる航路恐るべし…。」

私は二人を担いで船内へ入る。

手当てをする際少しかウエンズデーのおっぱいを触るのを忘れない。うーん、これはまたいい弾力だ。ナミさんの素晴らしいおっぱいとも少し違った手触りだ。

…ゴホン。

眠っている美女を前に我慢できるかね？無理だよ。うん仕方ない。犯罪じゃないよ、合法だよ。

そうしてる間に、メリー号は偉大なる航路初となる島、ウイスキーピークに到着した。二人共まだ気絶したままだけど…大丈夫なんだろうか。この島の人なんだよね…怒

られなきやいいんだけど…。

## 番外編 『女好きとチョコの日』

「バレンタインデー？」

メリー号内のダイニングにあるテーブルに座り、私はナミさんと二人で話をしていった。

「そう！バレンタイン！それは女の子が、好きな女の子への想いをチョコに乗せてプレゼントする素敵な日なの!!」

「へえ、それで私にチョコを？」

「ふっふっふ、よくぞ聞いてくれましたっ！これはルフィ、ゾロ、サンジ、ウソップの分ですとも」

ほいほいとテーブルにチョコ入りの四角くラッピングされた箱を置いていく。

「好きな女の子にチョコをあげる日なんじゃないの？」

「チツチツチ、これは義理チョコだよ、お世話になつてる人や友達にあげるチョコ。そして……これ……れ……が……、ジャン!!」

ドン！とテーブルに一際大きなハート型の箱を置く。

「本命チョコ、ズバリ、ナミさんの為に私が愛情99%と残り1%のカカオで作った物で

御座います!!」

「そ、そう…ありがとう」

ちよつとナミさんの顔が引きつっているのが気になるけど、まあ受け取って貰えた訳だしよしとしよう!

「ルフィ達にも渡してくるね!あ、ナミさん、食べる時はちゃんと私の事を想いながら、そう…私を食べるつもりでしっかり味わって食べてね!!」

「はいはい、早く行つてきなさい」

「はーい!」

バタバタと忙しく出て行く私の後に残されたナミさん。

「はあ…」

ポケットから取り出した小包を見つめて呟いた。

「…私もバレンタインは知ってるんだけど…渡しそびれちゃったわ…。どうしよう」  
ダイニングには、一人の少女のため息だけが響くのであった…。

\*\*\*

「ルフィー!」

「お、イリスー！何だ？」

何時もの様にメリー号の頭に座っていたルフィが一番に目に入ったので手を振って駆け寄ると、ルフィは座ったまま背中を倒して仰向けの状態で私を見る。

「へへ、これ、なんだ？」

「食いもんか？」

「そうだよ、正解早すぎ！」

やっぱり匂いとかでバレるのかな？箱に入れてるんだけど…。ま、ルフィだから仕方ないか。

「はい、チョコ」

「くれるのか、ありがとなイリス！ナミには渡したのか？」

「勿論、ナミさんを置いてルフィに渡す訳ないでしょ、誕生日とかならまだしも」

「ししし！そりやそうだ」

びよーんと伸びてきた手にチョコを乗せて、今度はサンジを探しにみかん畑まで行ってみるとやっぱりサンジはそこに居た。

「やほ、サンジ。今日もみかん警備？」

「イリスちゃんか、ああ、ナミさんのみかん畑は俺が責任を持って守る！」

「頼もしいね、じゃあお礼にはい、チョコ」

「お、ありがとうイリスちゃん。ナミさんと一緒に作ってくれたのかい？」

「え？ううん、残念だけど私一人だよ。何？まだナミさんを狙ってるの？」

そう私が冗談で言うのと、サンジは慌てて首を振る。

「いやいや、そうじゃないんだ。ただ……」

「なんだここに居たのか。おいイリス、ちよつと稽古に付き合ってくれ、相手が欲しい」  
既に汗だくなゾロが私にその声を掛けてきた。

稽古に付き合えつて……もう休んだ方がいいと思うんだけど。

「サンジじゃ駄目なの？」

「そいつとじゃ実戦になるだろ」

「それに俺は今恋の警備で忙しいんだ、マリモ野郎に付き合ってるヒマはねえ」

「ンだとこのへボコック!!」

「やんのか緑マリモ!!」

バチバチと視線の間に火花が散る二人にため息をつく。

たまーにこうして喧嘩になってる二人だけけれど、本当に仲が悪いって訳じゃないから喧嘩する程仲が良いって奴だろう。

「その様子じゃ私が稽古相手になる必要もなさそうだね、はいゾロ、チョコ」

「くれんのか、甘エもんは苦手なんだが……」

あ、ゾロは甘い物が苦手だったのか…。うーん、確かにそんな感じのイメージはあるな。

「そうなの？ごめん、そういう日だから形だけでも受け取ってよ、捨ててもいいからね」  
「おいマリモ野郎、イリスちゃんからのチョコを捨てるくらいなら俺に寄越せ」

「誰も食わねエとは言つてねエだろ、それにてめエにやるくらいならルフィかナミにやるよ」

再度睨み合いを始めた二人を放つてウソツプを探しに行く。

あ、そう言えばさつきサンジが言いかけてた事聞くの忘れてた…。また今度でいいか。

「ウソツプはどこかなー、…この時間帯だから、こつちかな」

メリー号を横から見た時、前後に比べて低い位置に設計されている船の中央部、ミッドシップはメインマストがそこから伸びているとは言え船先<sup>フォア</sup>や船後<sup>アフト</sup>に比べると広々としている。

そこでウソツプはよく道具の開発を行っており、私も時々見学させて貰っているのだ。

そこへ足を運ぶと、やっぱりウソツプはそこで弾の製造を行っていた、流石狙撃手。私が近づくとウソツプは目に当てたゴーグルを外して手を上げた。

「今日も精が出るね」

「まあな、準備は念入りに行なっておかねエと、いざと言う時に逃げ……大物を狩れなくなっちゃうだろ？」

何か本音が聞こえた気がする。

「はい、これチョコ」

「お！そーういや今日はバレンタインか。いやー、まさかおれがチョコを貰える日が来るなんてなア」

「はっはっは、崇めたまえ」

ははーとノリに乗ってくれる彼はやはり良い人だと思う。

「それで、ナミからはもう貰ったのか？」

「え？そこはあげたのか、じゃないの？」

私がそういうとウソツプははあ、とため息をつく。

「イリスがナミにあげてるのか何て聞くまでもねエだろ……。で、どうなんだ？」

「貰ってないよ？だってナミさんバレンタイン知らなかったし」

「は？」

何故か疑問の表情を浮かべるウソツプ。

何だその反応は、確かに私も内心驚いてはいたけどもそこまで顔には出なかったけど



な。

「いやいや、でもよ、ナミの奴…昨日チョコ作ってたぜ？」

「は!？」

今度は私が疑問…というか驚愕の表情を浮かべた。

「どういう事? バレンタインは知らなかったけどまたまたその日チョコ作ったとか? そんな事ある?」

「サンジと一緒に寛いでたら急にダイニングから締め出されたから間違いないよ、匂いもチョコだったしな」

「そ、そうなんだ…。…何で言ってくれなかったんだろ?」

「私に言えない事だったのかな。でも、チョコを作ってた事を隠す理由って何かあるの? うーん。」

「ちよつとナミさんに聞いてくるよ、こう言うのは本人に突撃するのが一番早い!」  
「おう、頑張れよ」

手を振ってウソップと別れてダイニングに戻る。

しかし、そこにはもうナミさんの姿は見当たらなかった。

「あれ? どこ行っただらナミさん。ま、いつか、探せばすぐ見つかるよね」

お風呂かもしれないし、自室に戻ってるのかも?

そう思った私は、船中を見回ってナミさんを探す事にした。どうしてもチョコの事が気になって待てないの！

30分後――。

「…と、言う訳なんだけどナミさん知らない？」

「見てねエな」

「俺も」

結局どれだけ探しても見つからないので、これはすれ違いにすれ違ってるなと感じた私は一旦サンジとゾロに尋ねてみる事にした。

ちなみに二人はまだ喧嘩していたのだが、よくそんな派手な技繰り返して船を傷付けずに喧嘩出来るな、と感心してしまったよね。

「えー…本当に見てない？ナミさんの匂いはここからするんだけど…みかん畑のせいかな？」

「そうじゃねエか？」

「そうそう、俺は何にも知らないぜ、イリスちゃん」

なんだこいつら、怪しいな。

これはみかん畑に侵入する必要があるようだ。

「サンジ、ちよつとそこ退いてよ、私みかん畑に用があるんだよね」

「えっ!?!いや、た、例えイリスちゃんでも、ここ、このみかん畑だけは入れる訳には行かないんだ。ごめん」

絶対みかん畑に居るじゃん…。

こうなったら手段何て選んでやんないっ。

「え? 何だつてゾロ…え!!?へボコツクの作った料理が不味すぎた!?今日の昼ごはんが!?へエーそう!!」

「は? 嫌俺はんな事言つて…オイ待て!言つてねエゾアホコツク!!」

「うるせエこの緑マリモが!!誰の料理がクソ不味いつてエ!?!」

しめしめ、また喧嘩始まったね。二人には申し訳ないけど…私も急用なのだよ。

この隙にこつそりと畑には侵入させてもらいますよー。

何か凄い衝突音を奏でてゐる二人をすたこらさつきと通り過ぎてみかん畑に入る。

4本しか生えてないにも関わらず、外からは丁度死角になつてゐる位置にナミさんは体  
育座りで縮こまつていた。

「ナーミーさん!」

「っ!え、い、イリス!?!な、何で…サンジ君とゾロはどうしたのよ!」

「あつはつは、奴らは私の敵じゃないって事だね。瞬殺だったよ……」  
ある意味で。

「それで、どうしてナミさんは、二人に頼んでまで私から逃げるの？ さつきは普通に話してたのに……私何かした？」

「……してないわよ」

ぷい、とそつぽをを向くナミさんの隣に腰を下ろす。

じーつと見つめると次第に顔を赤くしていき、最終的に足に顔を埋めた。

「……耳がガラ空きですなー、あーん」

「うひゃっ!？」

ぱく、と真つ赤に染まった耳にかぶりつくと、ナミさんはバツと顔を上げて私を睨んできた。顔真つ赤だから全く怖くない所か可愛いんだけどね。

「チョコ、作ってるんだよね、私の。くれないの？」

「……分かってるんだけど……」

顔は赤いまま、バツが悪そうに言葉を濁すナミさんを見て珍しいな、と思う。

「チョコは……イリスの言う通りよ、ちゃんと用意してるの」

ポケットに手を入れて、次に取り出した時はその手にチョコが入ってるのだろう小包が握られていた。

「でも、何だか急に恥ずかしくなっただけ…。情けない理由だけど…」  
そう言つてまた俯いてしまつたナミさんを見て思う。

…これ、私と同じ状態になつた？

私も、カヤの時にこうなつちやつた事あるよね、私の場合はずつと攻めて攻めてして  
たから、急に受け入れて貰えたのが恥ずかしくなつただけど…ナミさんの場合は違  
よね、攻めてないし。

多分、私からのアタックを跳ね返してばかりだつたのに対して、アーロンパークの出  
来事を経てから晴れて私の正妻になつた訳だし…その事で慣れない心境に戸惑つて  
のかな…？あの夜もそうだったし、どつちにしろ可愛いよね。

「それじゃ、貰うね」

「あつ、ちよつと！」

ナミさんの手の中にある小包を掠め取り、頬擦りする。んー！ナミさんからのチョコ  
何て勿体無くて食べられるかどうか…！

「えへへ、油断大敵…！これはもう私の物だからね」

そそくさとポケットに入れようとすると、ナミさんが私の腕を掴んで止める。

「…い、今食べて。私もあんたから貰つたチョコ…食べるから」

「…！」

そ、そそ、そうきたかー！

私に取られた事でちよつと吹っ切れたのか、強引さが増した様な気がする…！

「じゃあ、一緒に開けよう！せーので、ね」

「ええ…、ん、良いわよ」

「よーし、それじゃ、いくよー！」

「せーの！」

ナミさんは箱の蓋を、私は小包を括る紐を外して、お互い同時に開封する。

「えっ、ナミさんもハート型だ！同じだね！」

「イリスもね。まあ、あんたに関しては箱の形で分かってたけど」

ナミさんからのチョコは、小さな一口サイズのハート型チョコが10個ほど。

私も同じ様に食べやすさ重視のハート型チョコを数十個入れていたのだ。

早速一つ口に入れてみる。…ん！これは…！

「みかんの香りがする！」

「…まあね、ほら、さっきあんたも言ってたじゃない。食べる時は私の事を考えて…とか何とか。私もそれを意識した…というか、そんな感じ…」

「!!な、ナミさん…っ、大好きだーッ！」

ぎゅつと抱きつくくと、ナミさんは少し体を捻りはしたがそれだけで抵抗は一切しな

かった。私はその事で更に気を良くして、ナミさんの持つ箱の中からチョコを取って彼女の口元まで持っていく。

「あーん！あーん！」

「ただだけあーんしたいのよ…。…。あーんっ」

ぱく、と私の指からチョコが無くなる。その際、ナミさんの唇が私の指に触れた衝撃で軽く昇天しそうになったがそれは気合で乗り切った。

「お返し、ほら」

「あーん！…。ペロペろぐへへ」

「ちよっ！チョコを食べなさい！」

ナミさんの指をペロペろしたら怒られちゃった。でも仕方ないよね、舐めたいものは舐めたいの。

「…へへへ、でも本当にナミさんとうちやうやってらぶらぶになれるなんて、…。いや思つてはいたけど、何だか夢みたいだね」

「少しの謙遜も無いところがあんたらしいわ…。でも、そうね…。私も、まさかアロンから無理やり私を奪ってくれる人が現れるなんて思つてなかった。しかもこんな小さいのに」

「小さいは余計！」

ぶんすかと怒ってみせると、ナミさんは少しだけ吹き出して隣に座る私の頭に顔を乗せてきた。

…身長差が悔しいけど…これはこれで良いポジションだよね…？

「そう…小さいは余計ね。どれだけ小さくても、私にとつては大事な人だもの」

「つ…な、ナミさん？」

なんだなんだ…？さつきまでの恥ナミさんは何処に…？

「ね、約束してよ。あんたがこの先、どれだけの女を口説こうとも…あなたの正妻は変わらず私だって」

しかし、そんな真剣なナミさんが言った内容に私は拍子抜けしてしまった。

だって、そんな事は当たり前だ。私がナミさんを正妻にするって決めた時から…私が死ぬまでずっとナミさんには正妻で居てもらおうつもりだったのだから。

「…そんなこと？約束なんてするまでも無いけど、誓うよ。何があっても」

そう言つて笑い合い、お互いの頬に軽くキスを交わした。

来年も、再来年も、この先…本命チョコを渡す人数がどれだけ増えようとも。

私の正妻はナミさんなのだと…改めて自分自身の心に深く、深く誓った。

「ずっと好きだよ、ナミさん」

「私も、好き。…大好き、イリス」



∴ナミさんにとって、大好きという言葉は重い筈なのに∴。敢えてその言い回しを選んでくれた事に感謝と、少しの誇りを感じて今度は唇にキスを落としました∴。

私も、大好きだよ、ナミさん。

## 25 『女好き、眠る』

「ナミさん、島に着いたつて？」

「ええ…何とかね」

幾度も変わる天候や、その度に荒れる不規則な海流に翻弄されながらも流石はナミさん、無事に偉大なる航路グランドライン一本目の航海を終える事が出来た。

「ごめんね、何も手伝えなくて…」

「仕方ないでしょ、二人がああの様子じゃあね」

うう…天使だ、天使がいるよう…。

「それにしてもあの島…凄くデカイサボテンが何個もあるね、あれも偉大なる航路故かな」

「さあね、何にせよ言ってみれば分かるわよ。正面に川もあるし…そこを通れば船で内陸まで行けるでしょ」

「そうだぞイリス！早く行こう！」

ルフィが急かす。わくわくを全身で現してる彼とは対照的に、ウソップは例の如く震えているのだけだ。

「バ…バケモノとかいんじやねエだろうか…!？」

「可能性はいくらでもある。ここは偉大なる航路だ」  
グランドライン

「ウソツプは心配性だなあ、その時は逃げればいいんだよ」

私が軽く答えると、ナミさんがちよつと待ったと会話を止める。

「私達にはこの島に滞在しなきゃならない時間があるって事を忘れない様に」

「へ？」

「なんかあつたつけ？と首を傾げると、ナミさんにコツン、と額を軽く小突かれた。何だ今の、熟年夫婦か!？」

「この記録指針ログポースにこの島の磁力を記録しなきゃ、次の島へ進みようがないのよ! それぞれの島で『記録』ログの溜まる早さは違うから…『数時間』でいい島もあれば、『数日』掛かる島もある」

あー、そういえばクロツカスさんがそんなこと言ってた気がする。

航海に関する事は殆どをナミさんに任せつきりなのでその辺もぶつちやけ適当にしか聞いてなかった…。

「お…おいみんな聞いてくれ…! きゅ…急に、急に持病の『島に入つてはいけない病』が」

「じゃ、入るけど、いい？」

「いや…おい、島に入つてはいけ」

「逃げ回る用意と戦う準備を忘れないで」

ウソツップの弱音はみんなで聞き流して霧でよく見えない島の川を伝い内陸へ向かう。

…何だ、凄く大勢の人の声が聞こえる。

やがて、霧の向こうへと船を進めると確かに人が大勢川沿いに集まっていた。

『ようこそ!! 歓迎の町、ウイスキーピークへ!!』

海賊だあ!

ようこそ!

偉大なる航路へようこそ!

…などなど、姿がハツキリと見える様になった瞬間にそんな声が聞こえた。

…え、歓迎の町?…いや、私達海賊ですけども。

「何だ、化け物どころか歓迎されてるぞおれ達」

「どうなってるんだ…!」

良く分からないが、凄く歓迎されている。

メリー号が島の内部へ進むのと同じように人々もついてきているようだ。

「クラツカーの音が凄いな…あ! 可愛い娘も一杯いる!」

「何?! イリスちゃんどこだ…? ま、マジじゃねエか、ここは、楽園か…?」

そうしてメリー号を丁度いい停船位置に止め、みんなで偉大なる航路初の島へ降り

立った。

ウソツプの持病は快く歓迎された事で治療されたようだ、良かったよかった。

「いらっ……ゴホン！ マー マー マー マー マー♪ いらっしやい、私の名はイガラツポイ。驚かれた事でしょうがここは酒造と音楽の盛んな町、ウイスキーピーク、もてなしは我が町の誇りなのです。自慢の酒なら海のように沢山ございます。あなた方のここまでの冒険の話を肴に、宴の席を設けさせては頂けませつ……ゴホン！ マー マー マー……頂けませんか……！」

「おお」

島へ降りた直後、町長を名乗るイガラツポイという男の方が挨拶にきた。

それにしてもこの町長、髪の毛巻きすぎである。

「喜んでく……!!」

ルフィとウソツプとサンジはそれぞれ飯、冒険譚、女に釣られて快く引き受けた。そうだ、ミス・ウエンズデーの事も言っておかねば。

「町長さん、ミス・ウエンズデーと、Mr. 9 って人知ってる？」

「……ええ、それは島の住人ですよ、どうかじつ……ゴホン！ マー♪ どうかしましたか？」  
「それが……鳥とラツコに爆弾落とされてしまつて……。いや、何言ってるのかは分からないかもしれないけど……」

「なっーびっ……コホン、ミス・ウエンズデーとMr. 9が……。では町長として、私が責任を持って傷の手当てをみましょう」

…ほっ、良かった。私達がやったのかと疑われるかと思っただけど、杞憂だったか。

すぐに二人を町長さんに引き渡すと、彼はテキパキと指示を出して二人を何処かへ連れて行かせた。対応が迅速だ！

「ねえ、所でこの島の『記録』はどれくらいで溜まるの？」

「ログ？ そんな堅苦しい話はさておき、旅の疲れを癒して下さい！」

…？ 何かその言い回しに違和感を感じるな。

ナミさんとゾロも同じような事を思ったのか、ぴくりと眉を動かした。

「さあみんな、宴の準備を！ 冒険者達にもてなしの歌を！！」

「わ」

イガラツポイがナミさんの肩を抱き寄せて町の人々にそう宣言する。

…何をして？

…ナミさんの肩を抱き寄せて…？

「てめエこの巻き髪ゴリラがアーーーッ！！」

「ぐふおっ!!？」

「ちよ、町長ーーーッ!!？」

油断も隙もあつたもんじゃないよ！

私に腹を蹴飛ばされて吹き飛んで行つた町長を見て、町の人々が目を飛び出させて驚く。

「人の女に気安く触んな！次は無いからね！」

「おいイリス！肉が食えなくなつたらどうすんだ！」

「ごめん、けど勝手に体が動いちゃつたの！」

「そつか、じゃあ仕方ねエ」

「仕方ねエの!?!」

ガビーンとオーバーにリアクションしてくれる町人達。漫才でもしてる氣になつてきた…。

「…ゴホツ、ガホツ…こ、これは、し、失礼しました…貴女の恋人でしたか…ゲホ！」

「嫁ね」

「よ、嫁で…はは」

本気では無いとはいへ、そこそこ頑丈だったイガラツポイ。

割と血塗れだけど話は分かる人っぽいから許してあげよう。

「おっさん気を付けろよ、こいつはナミの事となると抑えが効かないんだ」

「そ…そのようで、では改めて…宴を…」

そんな感じで歓迎の宴が開催された。

\*\*\*

月が出たー。

ウイスキーピークの歓迎の宴はまだ続く。

どんちゃんどんちゃんと明るい音楽が町中を包む。

私達に対する宴はまだまだ止まる事を知らなかった。

「やーん、クール、綺麗」

「身体は小柄でも、滲み出るオーラが他とは違うわ」

「ふ…：そうでしょ？」

ふあさ、と前髪をかき上げて調子に乗ってるのは何を隠そう、私だ！

周りではウソツプが冒険譚（嘘）を語ったり、ゾロやナミさんが酒の飲み比べで競ったり、ルフィが追加注文しすぎてコックが倒れたり、私と同じように女を侍らせるサングイがいた。

「ねーエ、イリスさんって19なんでしょー？お酒飲まないのー？」

なんか、そこら辺の常識は前世のままだから私がお酒を嗜むのはちよつと抵抗があつ



てまだ一度も口にしたことはない。

ルフィ達は全く気にせず飲んでるんだし……こっちの世界だと問題無いのかな？……なら、ちよつとくらい貰つても……。

「じゃあ、ちよつとだけ……」

「ちよつとは言わず、イツキに行かないの？あたし達、イリスさんのカツコいい所見た……い！」

「見た……いっつ!!」

ジョッキ一杯に入れられたビールを目の前に置かれる。

……じ、人生初酒……!い、頂いても……!!?

「……っ！行きませす……!!」

ゴク!ゴク!とイツキに呷る。お、結構いけるかも!思ってたよりは苦いし、変な味はするけど……悪くはない!

よーし、これなら、まだあと何杯でもいけるぞー!!

「ぐー……」

心とは裏腹に、私は速攻で落ちていた……。

周りではルフィを除いて全員飲み倒れ、ルフィは食い倒れて眠る……。

満足げに眠る私達を見つめて……イガラツポイは眩いた。

「良い夢を…冒険者達よ…。今宵も、月光に踊るサボテン岩が美しい…。だが、次に目を覚ました時が、お前達の最後だ」

私は、違和感を感じつつも見破る事はできなかったが…この島の住人は皆賞金稼ぎだったのだ。

…イガラツポイ…Mr. 8は、上手く事が運んだ様子に軽く口角を上げるのであった…。

そして、ここからはイリスの意識が無い状態の物語である。

## 26 『女好き、酒に呑まれる』

イリス達が酒を飲まされて眠った後、イガラツポイの元へ3人の男女が姿を見せる。

3人のうち2人はMr. 9とミス・ウエンズデー。そして残りの1人はナミと共に飲み比べをしていたシスター。正体を『ミス・マンデー』という。

中々のゴリマツチョ体格で、イリスとは何もかも正反對な女性だろう。

「ウツプ：よく飲むよく食う奴らだわ。こっちは泡立ち麦茶で競ってたつてのに：！」  
「ミス・マンデーか」

ここに集った4人が、實質この町の賞金稼ぎ達を仕切っているのだ。

しかし、その内の2人：ミス・ウエンズデーとMr. 9だけは浮かない顔をしていた。

「ねえMr. 8、考え直さない？あの人達は見逃してあげて」

「そうだ、彼らはそんな悪い奴らじゃない！」

「：仮にそうだとしても、我々の責務から逃げればどうなるか：。知らない君たちでもないだろう」

Mr. 8の言葉にうっと言葉を詰める2人。

彼らには彼らの事情があり、自分の気持ちを押し通すことに意味など無かった。

「それはそうと、Mr. 8、わざわざ“歓迎”をする必要はあったのかねエ？あんな弱そうなたった6人のガキにだよ…!」

「ふむ、まあ落ち着け。とりあえずこれを見る」

「なっ…さ、3000万ベリ…!」

そう言つてMr. 8はルフィとイリスの手配書を取り出して3人に見せると、そこに書かれた3000万の数字に3人共が驚き声を上げる。

何せ偉大なる航路グランドラインに來たばかりの弱小海賊だと思つていたのだ。まさかそんな船に2人も3000万が潜んでいるとは思うまい。

「こつちの小さい方に関しては、私もこの身で味わつた。あれが3000万かと言われれば交戦をしたわけではないからわからんが、海賊共の力量を見かけで判断しようとは、愚かだな。ミス・バン…べ…ゴホン、マ〜マ〜マ〜♪…ミス・マンデー」

「め…面目ない。…だがまア…もう片は付いている。社長ボスにもいい報告が出来そうだ」「さつそく船にある金品を全て押収、奴らを縛り上げろ！殺してしまうと3割も値が下がってしまう。政府は公開処刑をやりたがつているからな」

何やら物騒な会話が繰り広げられてるが、その言葉通り上手く事が運ぶ様な事はないだろう。

…何故なら、その“弱そうなガキ”の内の1人が、この会話を聞いていたからである。

「…なア、悪いんだが、あいつら寝かしといてやってくれるか、昼間の航海でみんな疲れ  
てんだ…」

月を背に、刀を翳して姿を見せたのはゾロだ。

そんなゾロがいつの間にか部屋を抜け出していた事によく気付いた町人…もとい、賞金稼ぎが慌ててMr. 8に報告しているがもう遅い。

「貴様…！完全に酔い潰れたハズじゃ…！」

「劍士たる者、いかなる時も酒に吞まれる様なバカはやらねエモンさ」

だが、そんなゾロにも誤算はあった。それは正に今隣に現れた幼女の事である。

「…っひく、しょうだぞ！っ、おええーっ、酒は、飲んでも吞まれるな…！…っひつく」

「おま…！イリス!?ばか、お前は寝とけ！冗談抜きで酔ってんだろオが！」

「うるしやい、酔ってませーん！べろべろ〜」

どう見ても酔っているが、本人から言わせると酔ってないらしい。

ゾロははあ、とため息をついてMr. 8に向き直る。

「…ここは賞金稼ぎの巢、意気揚々と偉大なる航路<sup>グランドライン</sup>へやってきた海賊達を出鼻から力モ

ろうつて訳だ…！」

周りから続々と賞金稼ぎが集まってくる。

それぞれ銃や剣を構え、いつでも戦闘に入れる。そんな状況だ。

「賞金稼ぎざつと100人つてどこか。相手になるぜ、バロックワークス」

「!!き…貴様、何故我が社の名を…!!?」

「んあく?バロックワークしゆう?」

「いいからためエは黙つてろ…」

中々締まらないゾロだが、バロックワークスと言われた賞金稼ぎ、それからMr. 8に続く幹部勢は驚愕の表情を隠し切れていない。

「昔俺も似たような事をやってた時にお前らの会社からスカウトされた事がある。当然ケつたけどな。…社員達は社内でも互いの素性を一切知らせず、コードネームで呼び合う。勿論社長の居場所、正体も社員にすら謎、ただ忠実に指令を遂行する犯罪集団『バロックワークス』。へへ…秘密だったか?」

「…!!こりゃ驚いた…!我々の秘密を知っているのなら消すしかあるまい…。また一つ、サボテン岩に墓標が増えるな…!」

この島に入る前にイリス達が見かけた大きなサボテンとは、ただ岩に無数の墓標が刺さっていた為にサボテンの様に見えていただけだったのだ。

「殺せつ!!」

「もう!うるさいなつ!!」

「ぐぼおつ…!!」

「んな…っ?!?いつの間に…?!?」

「俺も忘れんじゃねエぞ」

「うわあっ!!?」

「ギヤアアーツ!!?」

一瞬で100人の集まりの中に移動したゾロとイリスに、銃を撃つ隙も無く次々に倒されていく賞金稼ぎ達。

「イリス、お前動けんのか?」

「らにがっ?じえーんじえんへーきー!」

「こいつ……やベエ」

ゾロは直感で感じとる。

…こいつに酒を飲ませるのはまずい、と。

「うおー、じゆうらいらい…いやらば!」

小太刀を取り出して手当たり次第に乱舞するイリスだが、その動きは普段よりかなりのキレがあった。

イリス自身も語っていた事だが、イリスは対人戦となるとどうしても力を抑える傾向にある。しかし今、酒の力でそんな傾向など何のその。更に言うとな能力自体のパワーも上がっているのか明らかに10倍で収まる威力ではなかった。

「おいてめエ！俺にまで攻撃飛んでんじゃねエか！」

「だいじよぶ…！死なないっ」

「そういう問題じゃねエだろ！」

何とか衝撃の刃を避けつつ、ゾロも賞金稼ぎを昏倒させていく。そしてあわよくばイリスの意識も刈り取り取りたいと思っただが、ふらふらと不規則に動いているため下手に手を出せないでいるのだ。

「…うえっ、おええええっ」

「お前マジで何しに来たんだよ!!」

俊敏に動き回り敵を屠っているかと思えば、次の瞬間には蹲って吐いている。

バロックワークスの社員達も、さっきまでのイリスの強さを目の当たりにした手前、例えこれがどれ程大きな“隙”だろうと迂闊に手は出せない。

「イガラツパツ!!」

だが、Mr. 8は強力な飛び道具を持っている。

彼が普段から手に持っているサックスは、この町が音楽の町だと紹介された為違和感など無かったが…実はそのサックスこそが彼の武器であった。

それに音楽を奏でる様に吹くことよって、口からは音色ではなく銃弾が散弾銃ショットガンの様に拡散して発射されるのだ。



「…おえ…つ、何で…？何か気分が悪い…」  
「なっ…！」

だが、そんな攻撃すらも今のイリスには通用しない。というか元々銃弾の類はイリスには通用しないのだ。

それが威力の高い大砲ならまだしも、ショットガン散弾銃程度の弾なら倍加でダメージを無視する事ができる。更に今のイリスは10倍の制限がない為どれ程その体が強固になっているのかは未知数であった。

「ねーゾロー、ナミさんどこ？ナミさん」

「あ、ああ？ナミの奴ならまだ中で寝てんじやねエか」

弾丸の雨に晒された後だと言うのに、まるで気にした様子もないイリス。酒の力は偉大である。

「よーし、ナミさんのところ行ってくるね」

自由か!!と社員達の心の悲鳴が一致した瞬間だった。

「…と、ともかく、これで相手は1人に絞られたようだ…」

イリスがナミの元へ向かった事により、状況はまたゾロvsバロックワークスになる。

だが、彼らは勘違いしていた。例えイリスがこの場から居なくなつた所で…彼らに勝

機など方に一つも無いのだと、今日の前にいる剣士が自分達では到底敵わない存在だと知る事だろう。

…そして場面は、イリスへと戻る。

\*\*\*

「ナーミーさん！」

ひよこ、と宴で騒いでいた酒場に顔を出す。

しかし、そこに居たのは眠るサンジとウソップだけでルフィとナミの姿は見当たらない。

「おいおい…目覚めちまったのかい嬢ちゃん」

「これは、オシオキが必要かねエ」

中で待機していて外の様子を知らない面々がイリスを囲う。手にはそれぞれ武器を持ち、子供だからと容赦してくれるような雰囲気でもないが…、

「ねー、ナミさんは？そこで寝てたよね、天使の顔で」

イリスには関係ないようだ。

社員達はそんなイリスの様子を見て状況を理解できていない子供だと勘違いしてい

るが、そうではない。

ただ単に取るに足らない存在なだけなのだ。今のイリスからしてみれば片手を振るえば終わる程度の認識だろう。

「仲間の女なら俺達も何処に行つたかわかんねエんだよ、まあそんなことより、あつちの部屋に行こうじゃねエか、一杯おもちゃあるぞ?」

「さっきのように…私達が相手してあげるわよ?」

「ねエ、ナミさんは?」

その時—イリスから放たれる圧が変わつた。

社員達は武器を構えようとするが、上手く体が動かない。何か…得体の知れない物に心臓を握られているかの様な錯覚に陥つていた。

「だ、だから…知らねエって…」

「ねエ、ナミさんは?」

この瞬間、社員達は理解した。この子供は…おかしいのだと。

明らかにガキだ。このまま大勢で囲んで殴れば…負ける筈もない。だけど…動く事が出来ないでいる。

それはイリスから放たれる圧が原因なのだが。

「ねエ…ナミさんはどこ? さっきから聞いてるんだけど…どこにやったの?」

「ひ、…ひいつ!? な、何だよお前! 何なんだよ!」

「ほ、本当に知らないのよ…!」

「…そっかア…。何で知らないの? ここに連れてきてよ」

納得したと思えばこの理不尽だ。今のイリスに文章が成立する会話を求める事は意味がない。

すなわち、この状況で彼らが助かるには…ナミ本人をここに連れてくるか…。

「そ、外で見たぞ…! き、北の方に走ってつたのを見た!」

「お…俺も!」

「私もよ!」

「ほんとつ? ありがとう! じゃね!」

嘘をつくか。彼らは後者を選択し、まんまとイリスをこの場から離す事に成功したのだ。

…だが、それだけだ。残った彼らは、1人残らず床へ座り込み体を震えさせる。

それ程、イリスの放つ圧とはとんでもない物だったのだ…。

つまり、酒怖いって話である。

「ナミさんこつちつて言ってたなー、あれ、でもこつちつてさつき私が居たとこだよねえ

…ゾロ、嘘ついたのかな」

もはや手当たり次第である。

「もうちよつと北行ってみよ」

ゾロによって倒された社員達などに目もくれず、何なら存在自体感知してないのか踏み越えて進む。踏み心地の悪いマット感覚だ。

「ナーミさん、ナーミさん、ナーミーサーン」

ゆらゆら体を揺らしながら夜道を闊歩し、女の名前を呼び続ける幼女。こういうのを何と言うか知っているだろうか。そう、ホラーである。

途中、巨大なカルガモを2人組が追っかけてる現場に遭遇したが、前しか見てないイリスがその存在に気づく事はなかった。

「…わかったわ、おたくの王女、ひとまず助けてあげる」

「あー！ツツ！！ナーミさん！！！」

暫く歩けば、目的の人物がそこにいた。

この時、ナミは割と大事な話をしていたのだが…勿論そんなことを気にするイリスではない。

ミス・ウエンズデーが実はアラバスタ王国という所の王女だとか、イガラツポイがそ

の護衛隊長だとか、何やかんやでバロックワークスの組織に王女様が追われて今殺されそうになってるだとか…目の前の事にしか意識が向かない今のイリスには、説明しても意味など無い。

「げ…厄介なのが来やがった」

それを見て顔を引きつらせるのはゾロとMr. 8、もといアラバスタ王国王女、ネフェルタリ・ビビの護衛隊長イガラムである。ナミはそんな2人の反応に首を傾げるも、何故か見たこともない程上機嫌なイリスの方に興味を抱いて感じた疑問を抑え込んだ。

「どうしたのイリス、何かやけに上機嫌じゃない…っの？」

そんな風に軽く手を振りながらイリスに近付いたナミの足が地面から離れ倒れそうになる。それは、イリスが軽く足を払った事により起こった。

「よつと…ふ、ふふふ、やっと見つけた…ナミさん」

地面に背中から衝突する前に、イリスはしやがみながらナミを横抱きの姿勢で支えた。横抱きと言ってもイリスは全オールインワン・倍加リクスを使用していないし、しやがんだ体制である為ナミの足は地についているのだが。

「い、イリス…？どうし…んっ!!?」

「んむーっ!!ちゅーっ!!」

「んなア!」

何とイリスはその状態でナミにキスをお見舞いしたのである。

これにはナミ本人は勿論のこと、行く末を何となく見ていたゾロとイガラムもびつくりだ。

「んんん♪ちゅ、はむ」

「~~~~~ツ!!」

しかもイリスは普通のキスでは飽き足らず、その舌で強引にナミの唇を押し開けて口内へと侵入した。突然過ぎて何が起きているのかまだ状況が掴めていないナミがとっあえず離れようと顔を掴んで離そうとしたり、胸を叩いたりしても反応が無い。

「ん…う、ふぁ」

もう全てを諦めたナミは、別に嫌じゃないんだから良いじゃないという意識に切り替え、とうか切り替えるしかなくなり、腕をイリスの首に回した。

更にその事で気を良くしたイリスのキス攻撃は、この後イガラムとゾロが止めに入るまで続いたのだった…。

## 27 『女好き、敵すらも嫁にする』

「…というわけ、わかった？イリス」

「王女はー、みすえんずでー！可愛い！見つけたら好きにしていー！」

「そうよ！さあ行くのよイリス！ゾロ！」

「んで俺まで…」

とぼっちりじゃねエか…とボヤきつつも従うゾロ。下手に今のイリスを刺激する訳にもいかないからだ。

「ちよ、ちよつと待っててください、好きにするとと言っても相手は一国の王女です！先程の様な事は…」

「うん、わかつてる。さっきの様に王女様を気持ち良くすればいーんだよね！」

「えっ違」

「じゃねーー!!」

残されたイガラムは静かに涙を流し、ナミは彼の肩にそつと手を添えつつも隠れてガッツポーズをした。何を隠そうこの女、イリスのハーレム女王の夢を正妻として支えているのだ、こんなチャンスを逃す手などあるものか。



そして、その王女様の元へ追いついた頃にはMr. 5とミス・バレンタインがビビに攻撃しようとする瞬間だった。

ちなみに、Mr. 5の能力はボムボムの実の全身爆弾人間であり、能力自体はかなり強力な物である。今もビビに対する攻撃手段として選んだのは自身の鼻くそをほじつて指で飛ばすという訳の分からない攻撃なのだが…それ一つをとつても彼は爆弾へと変換させることが出来るのだ。

「死ね…！鼻空想・砲！」  
ノーズファンシー キヤノン

大層な名前だが、絵面はただの鼻くそ飛ばしである。

「そんなモン王女様に向けるな!!」

イリスは鼻空想ノーズファンシー・砲キャノンがビビに届く前に彼女の前に立ち、地面を踏んでその衝撃で大地を捲り上げる。

Mr. 5の鼻くそはせり上がった大地に阻まれ、ビビへ届く事はなかった。

「あなたは…!?あ、道が!」

しかし、爆弾鼻くそに直撃することは逃れたが地面を踏み抜いた衝撃は凄まじく、ビビの逃げる道を近くにあった岩が崩れてきて塞いでしまう。だがもちろんその様な事を考慮するイリスでもない。

「畜生っ……何てしつこいの、こんな時に！」

ただ、ビビはまさか先程まで敵だったイリスとゾロが助けしてくれたと楽観はしなかった。

第三勢力が突然現れ、自らの逃げ場も失ったと考えるビビは何とか場を凌ごうと捨て身でイリスへ突撃する。

「あ、うえんずでー……？ビビだっけ？」

「っ……何でバレて……！」

この時、ビビは間違いを犯した。

一つは、間違いなく勝てるはずも無いイリスへと突撃してしまった事。もしイリスが本当にビビを倒そうと考えていたのなら、この行動は悪手でしかない。

そして最大の間違い……それは今のイリスの状態を、普段のイリスと比べて鑑みなかった事だ。

つまり、どうなるかと言えば、こうなる。

「んちゅーっ!!!」

「!!!」

!!手順はナミの時と全く同じ。その方法でビビを抱いたイリスが今度は王女であるビビにも暴走キツスをくらわせたのである。

「んふふく、かくじろらふろひろ！おうじよさまほうろはまー！」

「んー！んー！つ、あ」

必死の抵抗虚しく、無理矢理に口を犯される様は最早犯罪行為そのもの。イリスの見た目がアレな為絵面はマシなのだが…暴走キツスをくらわされてる本人からしてみれば絵面だとか見栄えだとかはどうでもいいのだ。

「キャハハっ！中々楽しそうな事してるじゃない、私も混ぜてよっ！」

「は、あー、ふいー、いい汗かいたぜ…」

ミス・バレンタインがその隙を突いてMr. 5の爆風を使って空高く飛ぶ。イリスはその事に気付いてはいるが…大して気にした様子もない。何なら放心してるビビの顔を見て満足げにうんうんと頷いてる始末だ。

「キャハハ！覚悟なさいっ！爆風にも乗る私の今の体重はウエイト僅か1キロ！このキロキロの  
実の力…思い知らせてやるわ！」

「イリス、危ないぞー」

傍観中のゾロも子供の面倒を見る父親の様な事を言い出した。最早考える事をやめているのだ。

「聞いているのっ?!いい?!私の能力は1キロから1万キロまで体重を自在に操ることなのよ!!くらえ！1万キロプレス！」

「ん?」

何か空から声が聞こえるな、しかも女の。くらいのノリでイリスは顔を上に向けた。そこには丁度自身の体重を1万キロにまで増加させたミス・バレンタインがイリスに向かつて降下している所だった。

「え……すつごい美人だ……」

「ちよ、何で避けないの!?!1万キロよ本当に!潰れるわよつ!?!」

全く動じない所か、あ、パンツ見えた!。とか言ってる今のイリスは相当ヤバイ奴だった。

攻撃をしてる側のミス・バレンタインが動じてるくらいにはイリスが動く気配がない。

「よつ、と、ビビはこっちなね」

ひよい、とビビを隣に下ろすと、両腕を出した。それはさながら天空から落ちてきた少女を横抱きで迎えるポーズの様に、落下するミス・バレンタインを受け止めようとしているのだ。

「なっ!?!」

「バカめ……気でも狂ったか」

これにはゾロも声を出して驚き、Mr. 5は勝ち誇った笑みを浮かべる。

ミス・バレンタインも何が何だか分からないではいるけれど、向こうからやられてくれるのなら楽でいいとそのままイリスへと落下し…激突した。

凄まじい音が鳴り響く。

1万キロの重量を誇る物体が空高くから落下したのだ、その衝撃、パワーは計り知れない…普通ならば、イリスは無謀者のレットルを貼られて死亡していただろう。

「……だが、何度だって言おう。今日のイリスには、そんな事関係なかったのだ。」

「もう…：ビビもあなたも、自分から来るなんて大胆なんだからっ」

「は…？」

愕然とするミス・バレンタインを、何事も無かったかの様に受け止めているのは他の誰でもない…：イリスである。

ミス・バレンタインは自分の能力が誤作動でも起こしたのかと考えたが、そうではない。能力は滞りなく1から100まで綺麗な工程を結び終えイリスへと直撃している。その証拠にイリスの足は地面へとめり込んでいるからだ。

そう…：イリスは1万キロの人間を、まるで風船を受け止めたかの様に軽くキャッチしたのだ。

「かわいいーね、レモンのピアス似合ってるー！かわいいーし、美人！すたいるもいいね！…私の嫁になってよ」

「キヤ、キヤハハ……誰が……!!んっ!」

「んちゅーっ!!」

そうして本日3度目の強引キスが炸裂した。

ビビ同様に必死にもがくが、力でイリスに敵うはずもなく為されるがままとなつてしまふ。

その上質の悪い事に3度目ともなるとイリスのキスは上達の兆しを見せており、元からナミの思考能力を奪えるほどの上手さ、2度目はビビを放心させる程までに成長し：そしてそれは3度目となる今回も同じ事だった。

「ふあ……」

「ふう……もう一度聞くよ……、嫁になつて」

「ふ、ふあい………♡」

攻・略・完・了!

強引にキスをするだけで墮ちるとは、何てチョロインなんだろう。いやそうではない、今のイリスの力リスマは普段の時とは別次元に位置する。

酒に吞まれる事でイリスが普段抑えている欲望をこれでもかと表に出しているだけで、何のしがらみも無ければイリスという女はこれほどの煩惱を常に抱える怪物なのだ。

何せ本人が肝心な所でヘタれてしまう為に、ナミとすらも初夜以降は進展がないくらいだ。

「これで残るはてめエだけみてエだが…やるか？」

「ぐっ…オイ、ミス・バレンタイン！この事は直ぐに社長ボスの耳に入るぞ！死にたく無ければバカな事言つてねエで戻れ！」

「ボスー？だいじょーぶ！私が倒してあげる！」

「一生ついてくわ！」

「ミス・バレンタインーッ！！！」

Mr. 5の絶叫が木霊した…。

果たして誰が予想出来ただろうか。ミス・バレンタインといえばMr. 5と同じく『任務達成率100%』を誇るオフィサーエージェントの一角。

そんな女を相手にして、手を下す事なく無力化…自分の囲いに引き込むなどと。

これでMr. 5は1人残された形となった。

ゾロと1対1でも勝てない彼には、この状況を打破する方法はない。その上…更にこの場を混沌カオスへと導く人物が現れた。

「ゾロー…ッ！！！」

ルフィだ。彼は鬼気迫る表情でこの場にやってきたかと思うとゾロに対しての怒り

を爆発させる。

「おれ達を歓迎して美味しいもん一杯食わせてくれた親切な町の人みんなを……一人残らずお前は斬ったんだろ!!！」

「……はア!? そりや、斬ったがよ……」

「お前はそんな薄情な奴だったのか!! 絶対許さ……! おつ……うぐつ!」

起き抜けのルフイにはそう見えたのかも知れないが、実際は賞金稼ぎをゾロが振り返り討ちにしてただけなのだが……。

そんなやり取りはどうでもいいのだと、場の雰囲気は乱された事に腹を立てたこの場で今一番の厄介者がルフイの頭を跳躍して掴み、地面へ顔を叩きつける。

「ルフイ、うるさい! 誰を斬ったとか、そんな事今関係ある!?!」

「イリス! まさかお前まで町の人みんなを……」

「うるさい!! 折角イチャイチャしてたのに、邪魔するな!!」

ドゴツ、と地面から顔を上げたルフイの頭を踏みつけて再度埋めさせる。仲間にする事とは思えない。

「オイルフイ、そのままでもいいからよく聞け、実はな……」

「バカ共が……隙だらけだ……! 鼻空想……」

「うるせエな!!！」



哀れMr. 5。ゾロの説明を邪魔してしまったせいで片手間に斬られて倒れ伏す。イリスはその間にビビとミス・バレンタインの元へ戻った。

\*\*\*

ゾロがルフィに説明をしている間に、ナミはこの場に合流しビビは放心から意識を取り戻した。

果たしていつまで酔いが続くのか、未だにテンションのおかしいイリスにビビは頬を染めながら距離を取る。

「まさかそつちの女も墮としてるとは思わなかったわ…あんだ、名前は？」

「本名はミキータよ、『運び屋』ミキータなんて呼ばれてたわ」

「ミキータ！んく、かわいーっ！」

「キャハハっ、ありがとう、あなたの方が億倍…いや、倍だなんて表現はおこがましいわ、私とは比べ物にならない程可愛いわ！」

そんなミキータを見てナミはため息をつく。

「何をすればこんなベツタバタに好かれる訳？もうみんなにこうすればあんだの夢なんか簡単に叶うでしょ…」

「夢？」

首を傾げるミキータとビビ。ナミは2人にイリスの目指す理想郷を話した。

「ーという訳、わかった？」

「つ、つまり私は…イリスちゃんの嫁の1人に選ばれたって事…!? キヤ、ハハ…つ！最高ね！」

「お、応援だけしておくわ…はは」

両者の反応は似たような物だったが、出てくる言葉は真逆だった。

ミキータはイリスにべったりくつき、ビビは立場もあつてか自重している様な雰囲気である。

「で？あんたはその…何だっけ、バロツクワークス？を裏切つてもいいわけ？」

「率直に言えば、良くないわ。間違いなく命を狙われるでしょうね」

「返り討ちー！」

そんなイリスにため息をついて、ナミは話を変える。

「所で王女様？私、護衛隊長とあなたを救出する代わりに10億ベリーを貰うって契約を結んでるんだけど…」

「…助けてくれた事は例を言うわ、ありがとう。だけどごめんなさい…それはムリなの」  
「どうして？王女様なんでしょ？」

「それはー」

そんなナミの疑問にビビが口を開いた。

丁度誤解が解けたルフィと、疲れ切ったゾロが話に加わる。

そしてイリスはミキータの腰を撫でる。もはやセクハラジジイのような行動をし始めたイリスに対しても寛容なミキータ。彼女も相当アレな人種かもしれない…。

## 28 『女好き、アラバスタを知る』

「アラバスタという国を知ってる？」

「ううん、聞いたこともない」

ビビの言葉にナミは首を振る。

ちなみにイリスは既にミキータのそばを離れてナミに膝枕をして貰っている所だ。

自由過ぎるが大人しくはなかったので周りも良しとしている。

「偉大なる航路有数の文明大国と称される、平和な王国だった…昔はね」

「昔は？」

「ここ数年、民衆の間に『革命』の動きが現れ始めたの…。民衆は暴動を起こし、国は今乱れてる。ただどある日私の耳に飛び込んできた組織の名がー『バロックワークス』」

バロックワークス。先ほどまでイリス達がよろしくしていた相手であり、ミキータの所属していた組織の名だ。

ミキータはそこを裏切った形である為か、少し罰が悪そうに顔をしかめる。基本的に仲間思いな彼女故の表情に、横目で見たナミやビビは意外そうな顔をしたがすぐに元に

戻して話を続けた。

「どうやら、その集団の工作によって民衆が唆されている事が分かった。でも、それ以外の情報は一切が閉ざされていてその組織に手を出す事も出来ないーそこで、小さい頃から何かと私の世話を焼いてくれているイガラムに頼んだの…」

髪を巻きまくった、ルフイ曰く「ちくわのおっさん」。

今この場には居ないが、彼もビビと同じくバロックワークスへ潜入していたのだ。

「…何とかその噂のしつぽだけでも掴んでこのバロックワークスに潜入出来ないものかと…そうすればきつと、我が王国を脅かす黒幕とその目的が見えてくる筈だから」

「…私と言えば、王女様には不服かもしれないけど、例え潜入したからと言って黒幕が誰かは分からないと思うけれどね。私だって社長ボスの正体を知らないもの」

「え？そんなの？でも…私はイガラムと一緒にどちらの情報も掴んだんだけど…」

「はあ!?あなた達、どんだけ奥まで探ったのよ!!」

ミキータが驚くが、これには理由もあった。

当然、わざわざバロックワークスの社長の名を知ろうなどと思う社員達はいない。何故ならその行動だけで“死”が確実に近づくからだ。

だがビビにとって、何よりもその2つの情報は欠かせなかつた。例え自分の命を掛けてでも知る必要のある情報だったのだ。

「目的か…。でも、バロックワークスの目的なら“理想国家”を作る事なんでしょう？  
 ……あ、…まさか」

「そう、社長ボスは社員達に理想国家の建国を仄かしているけど、その実態B・Wバロックワークスの真の狙いは“アラバスタ王国の乗っ取り”!!早く国へ帰って真意を伝え：国民の暴動を抑えなきやB・Wバロックワークスの思うツボになる」

「なるほどね、そういうことか…。これでやつと話が繋がった、内乱中ならお金も無い  
 か」

「私がお金が無くてもナミさんを幸せにしてみせるっ!」

「はいはい、私もあんたとなら何処でも一緒に居られるわよ」

微妙にズレた事をいうイリスにナミが軽く返答する。

「でもよ、その黒幕って誰なんだ?」

ルフィが気軽に尋ねた質問に、ミキータとビビは慌てて止めに入る。

ミキータに関してはその恐ろしさを間近で感じていた筈だ、当然と言えば当然と言え  
 る。

「社長ボスの正体!?それは聞かない方がいいわ!聞かないで!それだけは言えないっ!!あな  
 た達も命を狙われる事になる…!」

「キャハハつ、そう、絶対に教えないわよ。まあそもそも私は知らないんだけど」

「はは…それはごめんだわ、なんとたつて一国を乗っ取ろう何て奴だもん。きつととんでもなくヤバイ奴に違いはないわ！」

「ええそうよ、いくらあなた達が強くても、王下七武海の1人：“クロコダイル”には決して敵わない!!」

……………。

……………。

「言つてんじゃねエか…」

ゾロの眩き虚しく、近くの建物を見上げればビビとMr. 9を爆撃したラッコと鳥が顔を見合わせて空へ飛んでいった…。

「ちよつと何なの!!?今の鳥とラッコ!!?あんたが私達に秘密を喋つたつて事報告に行つたんじゃないの!!?どうなの!!?」

「ごめんなさいごめんなさい!!?つい口が滑っちゃつて…」

「“っ”で済む問題か!!その一言で何で私達まで道連れにされなきゃなんないの!!?」  
がくんがくと鬼の形相をしたナミがビビの胸ぐらを掴んで揺らす。

そこせいで膝枕されているイリスもがくんがくん揺れているが。

ミキータも社長ホスの正体がまさかあの王下七武海の1人だとは知らず、驚愕の表情を浮

かべていた。

「しちぶかいかー。面白くなりそうだね！ルフィ、ゾロ！」

「ああ！」

「悪くねエな」

「あんたは黙りなさいっ！」

ぱしん、と膝の上で横になっているイリスの頭を叩く。

「とりあえず、これで俺達4人…いや、その女も含めて5人 バロックワークス B・Wの抹殺リストに追

加されちまった訳だ」

「何かぞくぞくするなー！」

「クロコダイルを倒せば美女をゲット出来るイベントとか無いかなー？」

「…こいつら、ほんとバカあ……」

がく、と項垂れた事でナミの顔が正面から見える様になったイリスが手を伸ばして顔に手を添える。

「だいじよぶ、ナミさんは私が守るよ。心配しないで」

「…あんたは私の事となると無茶するから余計心配なのよバカ」

しかし、その言葉で緊張も解れたのかふつと笑みを見せるナミ。

「イリスちゃん、私の事も守ってくれるんでしょ？」



「もちろん！ミキータの事も…王女様も絶対私が守るよっ」

それにしてもこのイリス、饒舌である。常に酒を飲んでいれば敵なしじゃないのだからか？

「皆さん、心配なさらず！」

「え、あんた何やってんの…」

と、その時今まで出てこなかったイガラムが姿を見せた。

ナミが呆然としている様に、何故かビビの服とよく似た衣装を着用して、髪の毛も同じ様に後ろで束ねてポニーテールに、顔にも化粧をふんだんに使うといふとんでもない見た目のだが…。

そして腕には5体の人形を抱えている。

因みに、ポニーテールにしたからと言って髪がストレートになっているかといえはさうでは無く、纏めた髪は何段にもカールされているのだが。

「うはーっ、おっさんウケるぞそれ、絶対！」

そんなイガラムを見て大笑いするルフィ。イリスはビビを見つめて目の保養をしていた。

「いいですか、良く聞いて下さい。バロックワークス B・W ネットワークに掛ければ今すぐにでも追手はやってきます。Mr. 5ペア没落…更にはそのパートナーの離反…将来的に謀反と

もなればそれは尚の事……！」

確かにラツコと鳥は誰かが不祥事を起こした際、必ずすぐ様姿を見せた。

B・Wの情報伝達の速さは驚異だ。

「参考までに言っておきますが、今でこそ“七武海”である彼に賞金は懸かっていませんが…… B・Wの社長、海賊クロコダイルにかつて懸けられていた賞金額は“8000万ベリー”……所で王女をアラバスタへ送り届けて頂く件は……」

「ん？何だそれ」

「こいつをウチまで送ってくれとよ」

「あ、そういう話だったのか、いいぞ」

「8000万つてアーロンの4倍じゃない!!イリス……悪い事は言わないわ、この王女様は攫つてどこか遠くで夢を叶えるのよ！」

「8000万かー！腕がなるね！」

ナミは涙を流し、イリスとゾロ、ルフィは能天気にくわくわくしている様子だ。ミキータに関してはちよつと放心してる。

だが現実問題として、懸賞金額8000万とは相当な額だ。

アーロンは東の海を拠点としていた為、実際の所はその金額で収まる器では無かったのだが……それを無視してもこの8000万とはそのアーロン以上の“格”が無ければ

懸けられる物ではない。

その上七武海ともなると目に見える脅威は尋常ではない為、ナミやミキータの反応が普通であり、残りの3人はどこかおかしいのだ。

「では王女、アラバスタへの『永久指針』を私に」

「え……？ エターナルポースって何?!」

ほんと会話に出てきた単語にナミが反応する。この辺りは流石航海士だろう、落ち込んでいようと聞き流しはしなかった。

「ん？ 存知ないか、言ってみれば『記録指針』の永久保存版、『記録指針』が常に次の島、次の島へと船を導くのに対し……一度記憶させた島の磁力を決して忘れず、例え何処へ行くこうとも永久にその島のみを指し続けるのがこの『永久指針』。そしてこれはアラ

バスタの地の磁力を記憶したものです」

へえ、とナミは納得する。航海士にとつては……ひいてはこの一味全体にとつてもかなり重要な情報だろう永久指針。

記録指針の様は何処かの島へ寄って記録させる必要が無い為、行きたい島が絞られているのならかなり便利な物となる。

「いいですかビビ王女、私はこれからあなたになりすまし、更に彼ら5人分のダミー人形を連れ一直線のアラバスタへと舵を取ります。B・Wの追手が私に気を取られている

スキに、あなたはこの方々の船に乗り通常航路でアラバスタへ！私も通った事はありませんが、確かこの島から『記録』を2・3辿れば行き着くハズです。無事に…祖国で会いましょう」

そうして、イリス達はイガラムを見送る為に彼が用意していた偽装船が用意されている海岸へとやってきた。

イリスに関してはほぼ寝かかっている、ミキータに背負われている状態だ。

何故ミキータなのかといえば、彼女は自分が触れた物の重量操作も可能としているので背負っているイリスの体重を軽くする事で他の誰よりも軽々と運べるからであった。これこそが彼女を『運び屋』と言わせた所以でもある。因みに本人は役得だと喜んでいった。

「では…皆様、王女をよろしくお願ひします」

「おっさんそれ絶対ウケるって！」

「誰にだよ」

まだ笑ってるルフィにゾロが突っ込む。

「王女、過酷な旅になるかと思いますが…道中気をつけて」

「ええ、あなたも」

「ビビ王女…！きつとあなたの手で、王国を救うのです！」

最後はビビと握手を交わして船に乗り込み、アラバスタへと出航したのだった。

「……行っちゃった、最後までおもしろいおっさんだったなー」

「あれで結構頼りになるの」

「キャハ！私が言うのも何だけど、あなた達の信頼関係は嫌いじゃないわ、恐怖やお金で繋がる我が社…いえ、B・バロックワークスWを出し抜けるのは、案外そう言った綺麗事なのかもしれないわね」

「へエ、あんたって結構ロマンチストなところあるのね」

何て、他愛もない話をしながらこの場を去ろうと背を向けた時――。

ドオオン!!

「?!?…バカな、もう追手が…?!」

後ろで大きな爆発音が響き、振り向けばそこは火の海となっていた。

――イガラムの乗る船がB・バロックワークスWの手の者によつて襲撃されたのである…。

## 29 『女好き、リトルガーデンへ降り立つ』

「――立派だった!」

「ナミ、ログは!」

「だ…大丈夫、もう溜まってる」

「そいつを連れてこい! 船を出す!!」

イガラムの乗る船がB・Wパロックワークスの襲撃に遭い、海が一面火の海に変わった事でルフィは拳を握りしめて直ぐにここを出ると言った。

イリスも流星に目が覚めたのか、ミキータの肩を叩いて地面に降りる。

「あなた! 急いで、私達が見つかったら水の泡ですよ!」

そんな中、沈む船をジツと見つめるビビにミキータが声を掛ける。

だが、ビビはイガラムの名前を叫ぶ事は無く必死に己の唇を血が出る程噛み締めて耐えていた。

「!!……ごめんなさい、あなたにとって私は憎むべき相手の一人……! 出過ぎたマネなのは分かってる、でも、だからってこのまま見捨てられないわ! あなたはちゃんとアラバスタへ送り届けてみせるから……!」

「あんた……！」

ビビをぎゅつと抱きしめて言うミキータ。そのどちらも強い意志の下で行動を起こしているのだ。

ナミはそんな2人を見て、改めて彼女達に対する認識を改めるのであった……。

\*\*\*

「行くぞ!!」

「舵を川上へ！少し上れば支流があるわ、少しでも早く航路に乗れるー！」

そして、一味を乗せた船はウイスキーピークを出た。

船に乗ったと同時に、イリスは女部屋へと籠り眠る。本人も今はとにかく酔いを覚ます事が大事だと思つたからだ。

……だが、そんな時にメリー号へ侵入者が現れる。

その者の名は『ミス・オールサンデー』。どれだけ休みたいんだと言うような名前の彼女は、先程イガラムの船を襲撃した張本人だったのだ。

その立場はB・Wバックワークスの副社長兼最高司令官である。休む気など無かつた。

彼女はMr・O、ボスクロコダイルのパートナーであり、実際にクロコダイルの正体

を知っていたのは彼女だけでビビ達は彼女を尾行する事でその正体を突き止める事ができたのだ。

だけどその尾行は彼女によってわざとさせられた物であり、ビビ達が追われる様になったのも彼女の告げ口故だ。

そんな彼女は去り際、次にこの船が行き着く島が「リトルガーデン」だと言う。そこで一味は全滅すると言つて去つていった…。

---

と言うのをさつきナミさんから聞きました。

私がぐーすかと寝ている間にだいぶ大事な話をしていたようで、しかもよりにもよつてそのオールサンデーとか言う休みみたい欲求に駆られすぎな名前の副社長の女性はかなり美しい見た目ののだとか！（サンジ談）

そして現在、そのリトルガーデンへと到着した所であります。

丸々1日がつぼり寝ていた為航海の手伝いを全く出来なかった私にはお酒禁止令が出されました。ゾロとナミさんから。

「イリスちゃん！起きたのね、調子はどう？」



「あ…うん、平気！ごめんねミキータ、何というか…」

「キヤハハ！なーに言ってるのよ、あなたが謝る事何て無いわ、私が好きにしてる事よ。…それに、何かあれば守ってくれるんじゃないかなかったのお？まさか、お酒の勢いに任せて言っただけとか？」

「そんなことない!!守るよー!」

ミキータの気遣いに涙が出そうになるよ…。いやほんと、酔ってる間の記憶とか全部残ってるんだけど、私ヤバイ奴だよね完全に。

ビビ王女にも後で一言謝っておかないと…。距離を取られたら口説けなくなるし!

「おーいイリス、守るならついでにおれの事も守ってくれよ、こんなジャングルじゃ絶対やベエの出でくるぜ」

「頑張つてねー」

ひらひらとウソツプに手を振って返す。

だけど彼の言う通りこのリトルガーデンは生い茂るジャングルのような島だった。前世で言えばアマゾンのな？

遠くには獣の鳴き声のような声が響き、地面から生えている木も天高く聳えている。何処にもリトル要素など無い。

船はウイスキーピーク同様、まずは島に入って川沿いに内陸へ進む。

「見てよ、こんな植物、私図鑑でも見たことないわ」

「リトルガーデン：聞いた事はあるけれど、実際に来たのは初めてね」

ナミさんが不安げにするのに対してミキータとビビ王女は少しワクワクしてるような感じだった。

ミキータに関しては本人の戦闘能力もあるのだろうけど、ビビ王女まで同じような反応をするのは意外だった。まあ、よくよく考えてみればB・Wパロツクワークスへ侵入するくらい大胆な王女様だからね…。

ある程度船を進めると、突然火山が噴火したかのような音が全身に響いてきた。

それと同時に船の近くの陸に虎が姿を見せるもその体は血塗れでどすと倒れた。

「普通じゃないわっ！絶対普通じゃない！何でジャングル密林の王者の虎が血塗れで倒れるの!？」

あ、こつちの世界でも虎ってそういう認識なんだ。じゃあライオンは百獣の王なのか。いやー、こつちの世界じゃライオン程度じゃ王にはなれないでしょ。だって私が見たライオンってリッチー（バギー海賊団モージの猛獣）だし、弱いし。

「でもここわくわくするなー、私が居た島も似たようなところだったけどここまでジャングルっぽく無かったし：色んな動物が居そう！」

「ちよ、ちよつと待ってよイリス、まさか行くなんて言わないでしょうね!？」

「いやー、私が言わなくても、ほら」

ルフィを指差すと、彼はうきうきといった感じでサンジに弁当を要求していた。完全に探検する気満々だ。

「ねえ、私も一緒に行つていい?」

「おう、来い来い!」

「あんたまで何言うの!?!」

ビビ王女までついていくと言い出したので、ナミさんは静かに涙を流していた。うーん、可愛い。

「キャハハ、王女様がいくなら私も行くわ。護衛くらい必要でしょ」

「ええ、心強いわ、……ありがとう」

「……!え、ええ!任せて!」

うーん、こつちも尊い……。なんていうか絵面がいい。写真撮りたい。

その後、ゾロとサンジも『肉何キ口狩れたか勝負』とか言つて島へと入つて行つてしまった。彼らは食料調達の仕事があるから無意味にはならないし、あの様子じゃお互い張り合つてとんでもない大物でも仕留めてくるでしょ。

「じゃ、私は残るか、ウソップじゃ頼りないし」

「何だとゴラ!ありがとうございます!!」

本当は私も探検したいんだけど、ナミさんを置いていく訳にもいかないし…。

ビビ王女はミキータやペット…？なのかカルーという巨大カルガモ、それにルフィまで一緒にいてるのだから心配はいらないだろう。

「ん〜、でも、リトルガーデン…。何か本で読んだ記憶があるのよね」

「リトルガーデンなんて言うくらいだから、何かちっちゃいのかな」

「でもよオ、周りのどこ見ても巨大植物しかないぜ？」

それはそうだけど。

「ちよつと調べてくる、最近読んだ気がするのよね…。…あ」

「ん？どうしたのナミさん」

隣のナミさんを見ると、顔から汗をだらだら流していた。

「ぎこちなくこつちを見たかと思うと、リトルガーデンが何なのかを思い出したという。」

「…『あの住人達にとって、まるでこの島は“小さな庭”の様だ。巨人島リトルガデー

ンナーこの土地をそう呼ぶことにしよう』…大変よ、つまりこの島には…!!」

「なるほど…その住人達って、あんな感じ？」

「イイイイアアアア!!」

私が指を差す方へウソツプが顔を向け叫んだ。

そこには、周りに聳える木々と同じくらいの高さの巨人がこの船に近付いてきていたからだ。

私は咄嗟に構えて、すぐに戦える様にする。

近づく度にその足音は大きくなり、その巨体には歩きづらいだろう。ジャングルを木などお構いなしにへし折りながらこちらへ進んでくる。

やがて目の前へとやってきた時、その巨体は口を開いた。

「俺はプロギー、酒を持っているか？」

近くで見るとその大きさがよく分かる。…いや、デカすぎるわ。

「持つてるよ、でもその体じゃ足しにはなんないだろうけどね」

「構わん、構わん。少しでもあるなら良いんだ」

ニカ、とプロギーと言う巨人族は船に顔を近づけて笑う。

「ぬあつ!!」

「ギャー……ッ!?」

目の前で当然声を上げたプロギーに2人は声を荒げて叫ぶ。

プロギーの背後を見ると、その背中をテイラノサウルス風の恐竜が噛み付いていた。

だが、プロギーはそんな恐竜の首を持つてた斧で一刀両断してしまう。とんでもないパワーだな…。

「我こそが！エルバフ最強の戦士！！プロギーだ！ガババババ！！肉も取れた！もてなすぞ！客人よ！！」

「ほんと？やったねナミさん、今回は裏も無く単純にもてなしてくれるんじゃない？」

「あ、あああんなね、この巨人を見て何とも思わないわけ!?」

「そうだぞイリス、悪いことは言わねエ死んだフリをしよう」

ナミさんは可愛いが、ウソツプは何とも情けない…。

そんな彼も、いざとなればその奥に秘められた勇気を見せるのだから本当は凄い人なんだけど。

「悪い人には見えないよ、それにナミさんは絶対守るから、ね？」

「……絶対よ」

「オイおれは？」

そうして、私達はプロギーの案内のもとに彼の家へと招待された。

家と言っても何やら巨大な岩の穴ボコの中に寝ぐらがあるだけの簡易的な物だが。

そこで先程狩った恐竜を捌き、焼き上がった肉をどすんと私達の前へ置いた。

その肉一つを取ってもサイズがバカでかい。私達3人よりでかい。

「さア焼けたぞ！食え！」

「いただきますーす」

「あんだ良く食べれるわね…」

だつて美味しそうだし…。あ、美味しい。

「プロギーさん、1つ質問してもいいですか…?」

「ん?どうした娘」

「こ、この島の記録は…どのくらいで溜まるんでしょうか…!?」

「1年だ。まあゆっくりしていけ!ガバババババ!!」

ナミさんの質問にプロギーが答える。

い…1年か。それは、何ともまあ気長な話になつてきたぞ。

「それは何とも、気長な話だけれど…そういえばこの島つてプロギーの他に人はいないの?」

「ああ、1人だけいるぞ」

こんな大きな島で2人だけつて…。まあ、この巨体からすれば私達から見ると大きな島と思う物も庭感覚で闊歩できるんだろう。だからこそ『リトルガーデン』。

「奴とはこの島で決闘をしているのだ。もうかれこれ100年はなるか!てんで決着がつかねエ!ガバババババ!!」

「ひゃ…100年も…!」

ウソツプが戦慄する。いや、私もナミさんもだ。

プロギーに言わせれば、巨人族は通常の人間の3倍は長生きするとの事だが…つまり私達で言うところの大体30年…一つの島で殺し合いをしているということだろう。

その時、ドオン！と音が聞こえた。これはさつき船でいる時も聞いた音で、あの時思った通り大きな山が噴火した様だった。

「さて…じゃあ行くか、…ん？なに、この噴火の音は決闘の合図なのだ！いつしかお決まりになっちまった」

そう言つて歩いて行つたプロギーの顔は、100年も争い続けてる相手の元へ赴く様な表情ではなかった。

まるで、これから楽しいことが起こるのだとでも言うかのように楽しそうな顔で行くので私達は言葉を失つてしまう。

…そうか、これは誇りだ。

彼らにとつて、戦う理由などいらぬのだ。

ただどちらが強いかを競い合う…その為の、お互いの誇りプライドを懸けた男達の勝負何だろう。

…それは何とも、その巨体に似合う大きな志だと思つたのだった。



## 30 『女好き、罨を見破る』

プロギーともう一人の巨人の決闘はかなり激しい物だった。

お互い少しのミスで命を落としかねない様な攻防、しかしその胸の内にあるのは憎しみでも怒りでもなくただ純粋な『こいつにだけは負けたくない』という誇りだけだ。

私と一緒に見ていたウソツプも同じ感想を抱いたらしく、すぐにこの場を離れようとするナミさんとは考え方が違った。

いや、考え方というよりは…これこそがウソツプの目指す物だからだ。

「イリス、ウソツプも今のうちに離れるわよ！ここに居て巻き込まれでもしたら…」

「おれはもう少し見てる！正にこれなんだ、おれの目指す “勇敢なる海の戦士” すべては！おれはこういう誇り高い男になりてエ!!」

「…ふーん…」

ナミさんはそんなウソツプに呆れた顔でため息を吐きつつも、その場に座った。

ウソツプの夢を仲間として汲んだナミさんは、やっぱり良い女だと思う。え？私の正妻ですが何か？

「こんな戦士達の暮らす村があるんなら、おれはいつか行ってみてエなあ…！」

エルバフだっけ。そこに行けば彼らみたいな強い戦士がわんさか居るのだろうか…。  
 …何だろう、確かにわくわくするね。

そしてついに、決闘が終わる。

その数何と7万3千466戦回目の、7万3千466引き分けだと言う。

「ガババババババ！…ドリーよ！実は酒を客人から貰った…！」

「そりゃいい！久しく飲んでねエ、わけてくれ！ゲギャギャギャ！」

2人ともどんな笑い方やねん。

「…はー、凄かったねナミさん」

「凄いののはわかるけど、誇りつてのは自分の命を賭けてまで守る物なのかは分からないわ…。私なら誇り何かより、自分の命やあんたを守りたいけどね」

「あつはつは！それは嬉しいね、嬉しすぎて抱き締めたいくらいだよ。…でも、それがナミさんにとっての“誇り”なんだよね」

「…：そうね、私にとっての譲れない物がそうであるように、彼らには彼らの譲れない物があるって訳か」

「そうだぞナミ、男つてのはそういう生き物なんだ。イリスはよくわかってる！」

私女なんだけどね。

「ガバババ！どうだお前ら、エルバフ最強の戦士の戦いぶりは！」

「迫力満点だったよ、互いの闘志がここまで伝わって来るなんて凄いね！」  
「ガババババ!! そうだろう!!」

戻ってきたブロギーがそう言う。

酒はもうドリーに渡しているようだ。

「…でも、巨人族か…」

さっきの戦いを見て思った事だけど、やっぱり体が大きいってのはそれだけでプラスになるんだな。

全・倍加オールインクリスも強いけど…他にも何か考えといっても良いかもしれないね。

「ブロギー師匠! おれもいつかあんた達みてエな勇敢なる海の戦士になるぜ!」

「巨人にか」

「そうじゃねエよ!」

ビシ、とウソツプが突っ込む。

「エルバフの戦士の様に誇り高く生きて行きてエと思ってるって事だ!」

「ガババババババ! そうか!! 俺達アよ、てめエらより寿命が長エ分余計に名誉ある死を望む。財産も人の命も…いずれは全て滅ぶもんだ。だがエルバフの戦士として、誇りを滅ぼす事無く死ぬ事が出来たら、そりゃ“名誉ある死”だ。その誇りはまたエルバフの地に受け継がれる永遠の宝なんだ」

「誇りは宝か……」

こりや、ウソツプはもうエルバフにゾツコンだね。目がキラキラしてるよ。その時、また火山が噴火した。

周期早くない？動物達もよくこんな頻繁にボンボコいつてる山の近くで生活できるな。

「ガバババ、決闘の合図か……今日は景気がいいな！」

「行くの？さつき戦ったばかりだけど……」

「なに、互いに条件は同じだ！ガバババババ！！情け容赦の無い殺し合いに言い訳などしては名が腐るわ！」

うっ、言い訳を良くする私としては耳が痛い！！

「じゃあ師匠、頑張つて!!」

「おオウソツプ！今度こそ奴をブチのめすつもりだぜ!!」

そう言つて大きな足音をたてながらプロギーは決闘へ向かった。

本場にさつきやつたばつかりなのにまたするんだね。まあ、それくらいの頻度でやらないと7万3千466戦とか無理か……

「じゃあ私達もそろそろ船へ戻りましょう。記録ログが溜まるのに1年もかかるなんてムチャクチャだわ……」

「そうだね、みんなを待って策を練らないと」

「なら、ルフイ達の所へ行かぬエか？もう1人の巨人族と一緒に居るんだろ？戻っても誰もいねエし、そっち行つた方がいいぜ絶対」

こやつ、もう1人の巨人族と話がしたいだけだな。

でも言つてゐることは間違つてないね、確かにそりやそうだ。

「じゃあ行こつか。ナミさんは私から離れないでね、恐竜とか当たり前のように出てくるんだから」

「当たり前でしょ、ちゃんと守りなさいよ」

そう言うわけで、ウソツプを先頭に真ん中をナミさん、最後尾を私が務める事になつた。

何故この順なのかと言うと単純に私が一番後ろにいた方が何かと対応できるからだ。ナミさんが中央なのは一番安全だから。

「お、おいイリス！おれの事も守ってくれるんだらうな！」

「勇敢なる海の戦士に助太刀何て恐れ多くて出来ませーん」

「い、イリス〜…」

泣いちゃつたよ海の戦士。

私は呆れた顔をしつつも、いきなり横から飛んできた恐竜を殴り飛ばして仕留める。

「恐竜ってそんな片手間で倒せるような生き物だっけ？」

「はは、こんなのルフィもゾロもサンジも出来るよ」

所詮獣だし…。カームベルト 風の帯に居たような超巨大海洋生物ともなると話は別だけどね。あれはデカすぎる。ブロギー達よりずっと大きいし。

「ん？おいイリス、ナミ、あれルフィじゃねエか？」

「ホントね。私達と同じ事をビビが考えたのかしら」

ウソツプが指差す方を見ると確かにルフィが手を上げてこちらを見ていた。

……いや不自然過ぎるわ。

「おーいル…ぐえつ、何すんだイリス！」

「まあまあ、落ち着いてよ」

ルフィの元へ駆け寄ろうとするウソツプの首根っこを掴んで止めると、ナミさんもどうしたの？と首を傾げた。うー…ん、可愛い。

「あれ、ルフィにしては静か過ぎない？」

「……!!言われてみれば、そうね」

普段のルフィなら、私達を見つければおーい！とか言って向こうから寄ってくるくらいの人柄だ。

こんなただ手を上げて、しかも不動の姿勢でジツとしていられるようなタイプではな

い。

「…確かにおかしいぜありや、ぴくりとも動きやしねエ」

「でしよ?…そこで考えたんだけど、あそこまでルフィそっくりなもの、作れるとしたら何だと思う?」

「そうねえ…まず一番に思い付くのは…何かしらの能力…あ」

「そう、能力の可能性が高い。それに…その方が辻褃が合うよね、何たって私とナミさんはB・Wの抹殺リストに名前が載ってるし…あいつらの情報網は驚異だからこの島に追手が潜り込んでいても不思議じゃないよ」

能力者のね。

…流星に何の能力かは分かんないけど…。姿形そっくりの模型を作り上げる事が出来る能力って何?例えばカキカキの実のお絵かき人間とかそんな感じの奴がいるの?

「とにかく、あのルフィは無視して先へ進もう。ビビ王女達と合流した時にルフィがいれば…私の考えはほぼ正解だよ」

「ええ、そうと決まれば早く行きましょ。ほらウソツプ早く」

「ええい急かすな!つまりこの島の何処かにお前らを殺そうとするようなやベエ奴らが居るって事だろ!?よしイリス、先頭を許す!」

「知らないよ、後ろから狙われても」

「行くぞナミィ！イリス！！男ウソツプが殿を務める…！！これこそが勇敢なる海の戦士の第一歩なのだ！」

なんて扱いやすいんだ。

足は震えてるけど前へ進むウソツプにナミさんと共についていく。

そうして森を歩き続け、ルファイ達が居るだろう所までやってきた。

「あーおいイリス！これ退けてくれ！！動けねエんだ！」

「え、どういう状況？」

そこはプロギーの家と同じような穴ボコだらけの大きな岩があり、ルファイは何故かうつ伏せの状態で下半身をその岩に潰されていた。ゴムだからあれでも平気なんだろうけど…。

「いや、でもこれで確定したねナミさん」

パロックワークス

「ええ…、3人ともよく聞いて。この島にB・Wの追手が来てるわ、それも能力者よ」

「キャハハつ、追手はともかく、どうして能力者だと？」

「それがー」

私達はさっきのルファイ模型を3人に説明する。

ルファイだから違和感に気付いたけど、ゾロが木にもたれかかって寝てるような姿だったら間違いないく騙されてた筈だ。



「…なるほど。どう思う？ミス・バレンタイン」

「キャハハ、その情報だけでもわかるわ。追手の正体は…間違はなく『Mr. 3ペア』ね」  
2人が神妙な面持ちで話す。

Mr. 3か…、しかもペアとなると、またミキータの様なパートナーがそのミスターにもいるのだろう。

「Mr. 3とやらの能力は何なの？」

「Mr. 3は、『ドルドルの実の』<sup>キャンドル</sup>ろうそく人間。体から絞り出す<sup>ろ</sup>うを自在に操る事が出来るのよ」

ミキータが顎に手を当てながら答える。

スタイルいい美人だから似合うね、そのポーズ。

「彼のペアは『ミス・ゴールデンウィーク』。見た目は…イリスさんよりは大きいけれども幼い女の子よ、だけど見た目に惑わされなくて、彼女の能力は『カラーズトラップ』」  
カラーズトラップ…いやそんな事より女の子だつて？これは一目見たい！可愛いセンサーが反応してるんだツ！！

「彼女の絵具に触れた人を暗示に掛ける事が出来る能力よ。だけど、悪魔の実じゃないの。詳細までは知らないわ」

「ビビ王女は?」

「ごめんなさい、私もそこまでは…」

うーむ、そりやそうか、社長クロコダイルに直接関係のある情報じゃないもんね。

「…あれ? そう言えばカルーは?」

「さつきから姿が見当たらなくて…。一人でこのジャングルに入っつていけるとも思えないし…」

ふと、ビビ王女のペット的な存在の超カルガモの姿が見えない事に疑問を抱き尋ねると、どうやら彼女もさつきから気になっていたようだ。

あの子結構可愛いんだよね、何事も無ければ良いんだけど…。

「…あつ、…ならドリーさんのお酒に爆薬を仕込んだのは…!?!」

「な、何の話だ…!?!」

爆薬!? ウソツプじゃないけど、私もそれは詳しく聞きたい。

「そうだ! 誰かがおっさん達の決闘を邪魔したんだ! だからイリス、この岩どけてくれ!!」

バンバン! と地面を叩いてもがくルフイだが、その岩大き過ぎない? 持てるかな…。

「じゃあ、もしかして今ドリーは…:腹ん中爆発したつてのにプロギー師匠と戦つてんのかよ?! そんなのあんまりじゃねエか! 100年も続けた決闘だぞ!」

その瞬間、決闘中のドリーの体が「不自然」に大きく傾いた。ブローギーはその機を逃す事なく、ドリーへ斧を叩きつけ：勝利する。

「…っ、酒の爆薬だけでも許せないってのに……今ドリーが体制崩したの、外の介入だよね。…よし、ルフィ、何としてでもその岩は退ける。だから邪魔者はルフィとウソツプがぶつ飛ばして」

100年も続けた彼らの「誇り」に泥を塗りやがって…！彼らにとって、その一勝がどれ程の重みなのか分かってないんだ!!

「お、おう…この勇敢なる海の戦士に任せる！」

「絶対ぶつ飛ばしてやる!!俺はもう怒った!!」

「キャハハ、ぶつ飛ばすって言っても相手はMr. 3ペアよ、大丈夫?」

「あんたは知らないでしょうけど、こいつはバカみたいに強いから心配いらぬわ」

そう言えばミキータはルフィの実力を知らないのか。Mr. 3だとかドルドルだとか知らないけど、ルフィの敵じゃないでしょ。

でもミス・ゴルドデンウィークだけは置いて下さいお願いします。

「よーっし、…でもこのままじゃ絶対持ち上がらないよね」

じゃ、お決まりの全・倍加と。  
オールインクリース

「じゃーん」

「え」

「キャハハっ、どうしたのイリスちゃん、カッコよくもなれるのね！」

ビビ王女とミキータの前では初披露だからポーズ取ってみた。ふふん、ビビ王女に至っては驚いて声も出ないか。ふっふっふ。

「じゃ、行くよー。……ふんぬッ!!」

うごお…!!お、重たあ…い…!!

「ぶぐぐぐぐぐ!!」

もう能力と力と神経とその他諸々全てを両腕に注ぎ込んで全力で持ち上げる。

すると、徐々に大岩が持ち上がりルフィは急いで下から這い出た。

「ふおー……!!」

息を吐くと同時に下ろすとズドーンッ!と音を響かせる。だって重たかったもん

!凄く!

「いやー、助かったっ!ありがとなイリス!」

「いいけど、何でこんな岩に挟まれてたの…」

腕千切れるわ。

とりあえず全・オールインクリース倍加は解除しておこう。能力のクールタイムを待った方が良さそう

だ。

「終わったか!? じゃあ早くプロギー師匠達のとこへ行くうぜ! この事を早く知らせねエと……!」

「その必要はねエ」

ジャングルの木々の間から誰かが歩いてくる声が聞こえる。

次から次へと何なの……。

そう思っても仕方ないので目を向けると、そこには全身キズだらけのカルーを掴んだ Mr. 5 が居た。

「カルー!」

「こいつにてめエらの居場所を吐いてもらおうと思つたんだが……一向に喋らねエから探すのに骨が折れた……つて何だど! 何故てめエらまでここに居る!」

ビシツと私やナミさんを指差す Mr. 5。

今だからわかる事だけど、私達が見たルフィはろう人形だった訳か。

つまり Mr. 5 の中では、私達何人かは既にあの能力に捕まつてる手筈だった訳だ。

「あんな見え透いた罠に引つかかる訳ないでしょ、で? 私達の前にこのこ姿を見せたあなたは、わざわざ倒されに来てくれたのかな?」

「……チツ、今は退いてやるか……こいつは土産だ!」

ポイ、とカルーを投げて再度ジャングルの中へと消えていったMr. 5。  
忙しい人だな。

「ルフィ、今のうちだよ！あいつを追いかけよう」

「そうね、Mr. 3のもとへ逃げた可能性が高いわ」

私の提案にビビ王女が同意してくれた。

このまま追いかけてってMr. 3共々潰してやろう！

…あ、ミス・ゴールデンウィークには手出し禁止で、よろしく。

## 31 『女好き、ミキータの決意を見守る』

「プロギー師匠！」

「巨人のおっさん!!」

私達がMr. 5を追うと、プロギーとドリーが決闘していた場所へ出た。

ドリーはプロギーの斧で斬られ横たわり、ぴくりとも動かない。そのプロギーは体も倒され地面にろうで縛り付けられていた。しかも用心深く両手両足にろうで出来た巨大な剣を突き立てられ地面に縫い付けられている。

「ろうって事は…、Mr. 3か!!」

「何だ…やかましいのがきたガネ」

「お前か!!Mr. 3ってのは！」

私の声に男が反応する。

ルフィが指を指す男を見ると、確かにそいつはMr. 3だった。

いや、だって掛けてる眼鏡も3つぼいフレームだし…髪型も頭上で3つて形作ってるし…狙ってる？

「ほう…よく私がMr. 3だと見破った…！褒めてやるガネ」

「オイルフィ、イリス、この柱壊してくれねエか？」

「え？ゾロ!？」

なんかブロギーの近くにでかい柱とその柱に1本だけろうそくが付いてるなーと思つてたら、そのろうそくはどうやらゾロだったようだ。というか柱もろうで出来た。

えー…ゾロが捕まつてんのかい。こりや、ろう人形に引つ掛かったな。

「…っ!?!まさか、あれは…!？」

「どうしたのイリスさん!!」

「あの子がミス・ゴールデンウィーク…!?!…私<sub>が</sub>相手する」

ゴキ、と首を鳴らして1歩前が出る。ミス・ゴールデンウィークは後頭部で2つに3つ編みして束ねたおさげ髪型で、小柄なりんごほっぺが可愛い女の子だった。大きめの帽子を被ってるのも似合つていいね!ちなみに小柄とはいえ私よりは大きいけどね?ちくしょうが。

「イリスさん…!気をつけて、カラーズトラップは本当に危険よ!」

「あー、大丈夫よビビ。まともに戦う気なんてないわ、全<sup>オイルインクリス</sup>・倍加の反動もまだ戻つてないだろうし…!」

バレたか。



その通り、私が嫁候補と戦える筈など無い！ちよつとお話したいだけです。

ルフィはMr. 3を。Mr. 5はどのようにでもなるだろうし…ゾロも何とか助けられるでしょ。

…まあ、人数も戦力も充分あるからなあ。

「…Mr. 5は私に任せて貰えないかしら。私がMr. 5を倒せば…気持ちにちゃんと区切りが付きそうなのよ」

「おう、好きにしろ！」

そういうミキータに、ルフィは掌を拳で殴りながら言った。

「じゃあおれらはゾロ救出だな！ナミ！ビビ！カルー！行けるか…!？」

「ええ、カルーは？傷はもう平気なの？」

「クエツ！」

「私も大丈夫。それより早くしないとまずいかも」

ナミさんがゾロを見上げると、彼の体が徐々にろうで固められて行く所だった。そしてそれはブロギーも同じだ。

「フハハハ!!今更気付いても遅いガネー！そいつはこの私の究極美術アートになるのだ！」

生身の人間が入ったろう人形とか呪われそうで怖いでしょ…！

「…ま、そっちは任せるよ」

ひらひら、と手を振ってミス・ゴールデンウィークの元へ辿り着く。

彼女はもうすぐ戦闘が始まるというのにシートを敷いてぺたんと座り煎餅を食べていた。

「美味しそうだね、私にも頂戴」

「ん。…戦わないの？」

「あんがと。あむ…んー、あなたが戦うなら戦うよ」

煎餅を受け取り、隣にどかっと座った。

「…いや、やめておくれ、勝てそうにないもの」

「ははは、見る目あるね。そうだよ、あなた達は絶対に負ける」

何度も言うけど戦力差がね…。

本来の ONE PIECE の世界でどうだったかは忘れたけど…絶対ここまで戦力揃ってなかった筈だよ。

「どうするつもり？ 私達を海軍に突き出す？」

「馬鹿言わないですよ。何で私があるを海軍に？ そうするくらいなら嫁に来て欲しいくらいだよ、可愛いし」

「…可愛いって言うってくれるのは嬉しいけど、一応敵よ、私達」

そんな事言われても。

そうやってのんびり座りながらみんなの戦いを見る。丁度ミキータとMr. 5のバトルが始まろうとしていた。

「は…、まさか、てめエが我が社を裏切るだけじゃなくこの俺に楯突くとはな…、ミス・バレンタイン」

「キャハハッ、我ながらバカだと思うわ…、けど後悔はしてない。だから、あなたを倒すのはケジメでもあるのよ」

「ケジメだと？…ハッハハハッ!!何をバカな事を言ってる!?!そもそもてめエが俺に勝てる訳ねエだろ」

「さあ?それはどうかしらね」

お互いピリピリと緊張が走ってるようだ。

…そりやそうか、パートナーだった訳だし。

「てめエの能力じゃア、俺には指一本触れる事すら出来ねエだろ!鼻空想・砲!」  
ノーズファンシー キャノン

「前から思ってたけどね、ソレ…汚いわよッ!」

Mr. 5のハナクソ爆弾をふわりと上空に飛んで避けるミキータ。

体重を1キロまで落としているからこそ、風に乗って宙に漂う事ができる彼女の特権回避法だろう。

「ハッ、それがてめエの弱点なのさ、避ける事が出来ても次へ繋がらねエ！そこから俺へどう攻撃する？無理だろう！」

そう言つて、空のミキータに向かってハナクソ爆弾を放つが、ミキータは今度は自身の体重を増やす事で地へと落下し避けた。

「無理でもやるしかないでしょ」

相変わらず、いつもの笑みは絶やさないがその頬に冷や汗を流すミキータ。

何か武器でもあれば違うんだろうが、なにせあるのは空を漂う用の傘だけだ。

「1万キロプレス！」

ふわりとMr. 5の上へ飛び上がって、1万キロの重量で落下するも難なく避けられる。

「連続1万キロプレス！」

再度浮かび上がり、落下、飛んで、落下を繰り返すも地面に穴が空いていくだけでMr. 5には擦りもしなかった。

ミキータには決定的な弱点があるのだ。…それが今正に起きている攻撃範囲の少なさである。

確かに当たればかなりのダメージとなるのだろう彼女の攻撃は、体を少し捻ってやれば躲せるくらいの範囲のものでしかない。

「何度やろうと同じ事だ！ 足爆!!」  
キツキツボム

「つ…は…つ!」

「ミキータ…!」

躲された所を上手く突かれ、蹴りと同時にM r. 5の足が爆発しミキータをジャングルまで飛ばす。

M r. 5はそれに追撃をかける為追いかけていく。

「ぐっ…い、ち万キロ、ギロチン!」

飛ばされながら、足を振り上げて迫り来るM r. 5に踵落としを放つもやはり簡単に避けられてしまった。

「何度も言わせるな! 拳爆!!」  
グーボム

「ツ!!」

爆撃を纏った拳に貫かれ、ミキータは更に吹き飛び木に激突して止まる。

その服は所々が爆発により破れており、こんな時に言うのも何だけどエロい。

「…今からでも遅くはねエ、戻れミス・バレンタイン」

「つ…ふう。…キャハハ…! どうせすぐ潰れる会社に戻るくらいなら、将来有望なかつ

こいい人についてくわ…!」

「そうか…残念だ」

よろめきなながらも立ち上がるミキータに、Mr. 5は銃を取り出す。

能力は使えなくとも盾くらいにはなるかと助けに行こうとした時、遠くのミキータにキツと目で制された。

：何があるうとも助けに来るなという事、なのかな……。じゃあ、私はミキータを信じて待つとしよう。

「この銃に見覚えはあるだろう？連射可能なりボルバーだ：俺が使えば弾要らずのな」  
「究極能力だっけ？そうね、鼻空想よりはマシなんじゃないの」

ダツと木々の間を駆け出すミキータ。  
Mr. 5やミキータの口振りからして、あの銃は彼の切り札のような物なのだろうか。

「走れば当たらねエとでも思ったか！」

ミキータに向かって銃を乱射するも、その銃口からは弾が出ていない。

「ね、ゴールデンウィーク。あれは何で空砲なの？」

「あれは、Mr. 5が言うには自身の究極能力よ。銃弾の代わりに彼の息を吹き込めば、その息さえも爆弾に変わる」

はえー、つまり、不可視の爆破弾の完成って訳だ。

だからミキータはああして咄嗟に走り回って狙わせないようにしたんだね。

「いつまで逃げられるか、見物だな」

「キヤハハハ、そのセリフは決まって敗者が使うモノよッ！」

不可視の爆破弾を銃口から逸れる事で避けているミキータ。避けた事で後ろに生えていた木の根本が爆発を起こしてグラリと倒れる。

彼女はそれを身を翻して避け、落ちた木の枝を拾った。

「ほう、枝を武器にする気か。確かにてめエの能力ならそれも可能だろう…なら」

M r. 5が懐を漁ると、先の物と全く同じのもう1丁のリボルバーが姿を見せた。

「2丁拳銃…!?あなたが持つていたのはそっちの銃だけの筈じゃ…」

「その通りだ。こいつはてめエや『女好き』を狩る為にわざわざ最速で取り寄せてもらったのさ。もはやそんな棒切れ1つをどれだけ振り回そうが…意味ねエぞ」

「くっ！」

元々連射可能だった銃が2丁に増え更に手数が増したM r. 5の猛攻。

何とか木を盾にしたり空へ逃げたりを繰り返すも、彼の弾は不可視だ。いつまでも避け続けられる訳がない。

「これで終いだ…！速射砲そよ風息爆弾!!」

ガトリングブリーズ・プレス・ボム

「このお……ッ！」

それでも避け続け、Mr. 5の弾丸の雨を掻い潜るミキータ。

そして彼の息の装填が空になるまで逃げ切る事に成功するが…。

「俺は終いだと言った筈だぜ」

「つ……!?!しまった……!」

ミキータが避け続けた事により、Mr. 5の爆破弾は全て木へと直撃したのだ。結果、彼女の周りに生えていた木はその衝撃に耐えきれず…ミキータの元へ一斉に倒れていく。唯一、正面にだけは木が倒れてきていないので避ける事は出来るが…そこにはMr. 5が銃に息を装填して待ち構えていた。

「……ッ!!」

その場から動く事の出来ないミキータの元へ、無慈悲にも木が倒れ込んだ。急いで駆け寄って助けてあげたい…、でも、それは彼女の望む事じゃない筈だ…。私が今出来ることは…信じて待つ事だけ…!だよ、ミキータ…?。

「……ほオ、能力のキャパを越えたか。この土壇場でやるじゃねエか、流石は元俺のパートナーだ」

「キャハ……この戦い、負ける訳には行かないのよ……っ!」

やはり、彼女は木に押し潰されてなどいかなかった。



自分を潰さんとする木の重量を全て1キロに変えているのだ。そしてそれはMr. 5が言うには、ミキータの能力限界量を越えているらしい。

「だが、対象に触れていないと効果を発揮しないのは変わらないのだな、その状態じゃろくに動けねえだろ」

その通り、ミキータは木に触れて重量を操作している。

例えば今なんかは手で2本の木を、肩や背中などを利用して更に多くの木を支えている。

つまり、自分に押しかかっている木のどれか1本だろうと手を離せば、それだけじゃなくとも少しでも体勢を崩せばその瞬間木は本来の質量を取り戻しミキータへと襲いかかるという訳だ。

「せめてもの情けだ、楽に殺してやる」

悠々とした足取りでミキータの前へと立ったMr. 5が、少し顔を俯かせる。ふむ、彼にもパートナーを思う心は残されていた訳だ。

残されていたというより、元々落ちるところまで落ちてなかっただけか。

「“全身起爆”…!!」

「キャハッ、それは、流石に死ぬわね！」

全身起爆。その名の通りだろう…そして彼の口振りからしてミキータが即死するだ

ろう威力なのは間違いない。

「いいのかしら、助けに行かなくて」

「いいの、今助けに行ったら嫌われちゃうじゃん」

だよ、とドンと構えてミキータを見ると、彼女は私の方を見てこくりと頷いた。

「はあッ！一萬キロウォールド！」

ミキータは抑えていた木を一本だけ両腕に抱えて前へ置く。そうなればどうなるのかはさつきも説明した通り重量が戻った周りの木がミキータへと倒れてくる訳だが…。

「…ッ！こいつ…！」

木がミキータを潰す前に、Mr. 5の全身起爆が炸裂した。

彼の周りにある木は吹き飛び、Mr. 5を中心にクレーターが出来上がる程だ。

「…キヤハハ、残念ね、私は死んでないわよ」

ミキータを潰さんとした木諸共彼は吹き飛ばしてしまった為彼女は無事だった。そしてミキータの前に防壁として置いた木で爆発を防ぎ…こうして彼女は立っている。

少しでもタイミングがズレていれば…木に潰されるかガードが間に合わず爆発にやられていたか…、どちらにせよかなりの度胸がいる行動だったのは間違いない。

流石に服はもうボロボロエッチだし、木と共にミキータ自身も爆風で飛ばされはしたのだが。

「確かに木の棒なんかじゃあなたを倒すのは無理だったわね。…じゃあ、これをプレゼントしてあげるわ、受け取ってね！」

彼女は抱える大木をポイとMr. 5へ投げた。

それは、ミキータだからこそ持つ事の許された大重量の大木。それが彼女の手を離れたという事は…。

「ま、待て…！そんな物をこつちに投げるな！」

「キヤハハハっ！もう投げたわ！攻撃範囲が狭い？結構よ！潰されなさいっ！」

「うごっ…ぐあああッ!!？」

ドゴオンツ!!と大きな衝撃が響き渡る。

辺りに舞う砂埃が晴れた時、そこには大木に下半身を敷かれたMr. 5と、その前に立つミキータがいた。

「…まさか、俺がてめエに負けるとはな…」

「キヤハハ、初めから私を殺す気何て無かったでしょ、あなた。本気の爆発より大分弱かったじゃない」

傘を肩に担いでミキータが言う。

「…は、うるせエな…。長い付き合いだろ、紙切れ1つの指令で…簡単に殺せるような間柄か？…最後に1つ…聞かせてくれ」

「なに？」

「……てめエの本心は……どっちなんだ」

「……何の事かしら？本心も何も……今私はあの子の嫁で……あなた達の敵よ」

「は……そりや、難儀なもんだ……。だったら、後悔するんじゃないやねエぞ。てめエの選んだ道は……」

「わかつてるわ。……ジエム、またみんなで……ご飯でも食べましょう」

じゃあね。とミキータが言ったと同時に、Mr. 5は軽く笑って意識を失った。

「……驚いたわ、まさかMr. 5が負けるなんて」

「何か武器を持てば、ミキータは見違えるくらい強くなるって証明だね」

信じていたとはいえ、緊張はしていたからか今どつと力が抜けたよ。

……さて、ミキータは勝利した事だし、残りの勝負はどうなってるかな、とルフィの方を見ると……。

「ゴムゴムの……バズーカッ!!」

「ぐへエ……!」

丁度終わったとこみたいだ。あ、Mr. 3が飛んでつて星になった……。

何というか、ルフィの体に傷がないし……余裕だったんだろうな。

ウソツプ達の方もろうに火薬星をぶつけて熱で溶かす事で、ゾロ救出を達成して  
いた。

…あれっ、となると残ってるの私だけじゃん!!

## 3 2 『女好き、リトルガーデンを発つ』

「…あー、終わっちゃったね、みんな」

「そうね」

ぼりぼりとマイペースに煎餅を食べてるミス・ゴールデンウィーク。

四面楚歌ってやつですけど…余裕つすね…。

「慌てたりしないの?」

「私だって感情がない訳じゃないもの、今も焦ってるけど…今更慌てたってどうにもならないわ」

なるほど。

「じゃあどうするの?私と戦ってみる?カラーストラップとやらで」

私がそういうと、ゴールデンウィークはハア、とため息をついて筆を出す。その筆には既に絵具がベツトリとついていた。

「さつきから描いてるんだけど、あなた効かないのよ…偶に居るのよね、あなたみたいに私の能力が効かない人」

ふーん…ってうわ!背中すごいぎっしり模様描かれてるんだけど!いつの間に!?

「…それで？残りは私一人って話だけど…ここまで追いつめて何もしないのかしら。それとも本当に見逃してくれるの？」

「え？見逃す？…いや、それはないかな、だって嫁候補だし…あ、それで思い出したんだけど、私の嫁になつて？」

「……………は？」

流石のゴールデンウィークと言えども、目を見開いて疑問の声を上げる。

…そりやそうなるか、突然過ぎた。

「いやー、ハーレムが夢だからさ、嫁になつてほしいんだよね」

「それであるわつて言うと思つたのかしら…あなた、思つたよりバカね」

う、うっさいわ。今までは何故か上手く行つてきたから、こう言つた正攻法の口説き方を知らないんだよ私は！

「…でも、そんなバカだからこそミス・バレンタインはあなたに付いたのかしらね。…いや、それはまだわからない…か。…嫁にはなつてもいいわ。あなたに賭けてみるのも面白いかも知れないし」

「えっ！本当!?!」

なるわつて言つてくれたじゃん！もうつ、落として上げるのが上手いんだからあつ！

「でも、条件があるわ。…必ず我が社…」

バロックワークス  
B・Wを解体して

「もともと、そうしないと私達命狙われてるからね」

「あなたは知らないだろうけれど、みんな最初はB・パロックワークス Wに夢を抱えて入社したのよ。そこで伸びてるMr. 5も、あなたに付いたミス・バレンタインも：そして私も」

新たに取り出した煎餅を齧りながら、ゴールデンウィークは目を瞑り言う。

「各々夢を叶える為に入ったつもりが、気付けばこうしてオフィサーエージェントなんて呼ばれてる。：Mr. 0を倒すことが、私達を真に解放することよ。だからあなたの手で彼を倒すことが出来たのなら：あなたの嫁にでも何でもなつてあげるわ」

「なんだ、単純でいいね」

「：…本当に分かっているのかしら。Mr. 0、社長ホスの強さは私達とは比べ物にならないわ。

あなたは死ぬかもしれない」

「でも、勝つかもわからない」

ニツと笑つてゴールデンウィークの顔を見ると、彼女は驚いたような表情を浮かべた後：…ふ、と笑つた。

「私の名前はマリアンヌ。『自由の旗手マリアンヌ』と呼ばれていた事もあつたわね。：今の言葉、忘れちゃダメよ。それからもう一つ、あなた達一味はもう：社長ホスに目を付けられてる」

そう言つて彼女はミキータにMr. 5を潰してる大木を撤去してもらい、彼を引き



摺って何処かへ去っていった。

…どこ行つたんだろ、いや、でも嫁予約はしたからいいや。

あと目を付けられてるのは知ってる。じゃなかったら追手なんて来ないでしょ。

それにしても… Mr. <sup>クロコダイル</sup>0。彼を倒すだけでビビ王女も、バロツクワークスの社員達

も解放されるって…何てお得なんだろう。

…夢、か。

「…あー…そういうえばドリリーは大丈夫なの!？」

はつとしてプロギー達の方を見れば、なんか普通にドリリーも起き上がってみんなと話していた。

…あんなに思いっきり斧を叩きつけられて生きてるって…。

いや、違うか。100年も使われてきた斧なんだ、刃こぼれがとんでもないのだろう。

だから実際には刃で斬られたのではなく、石で叩きつけられた訳だ。

「キャハ、ゴールデンウィークとは話ついたのでのかしら?」

「ばつちし、クロコダイル倒せばいい話だったよ」

「それは単純ね」

「ほんとに」

とにかく、先にミキータの元へ歩き彼女に肩を貸す。

…あ、肩を貸すって言ってもあれだから、私の肩に手を置いて支えにしている感じだから。…くそう。

「…ミス・バレンタイン。本当に裏切ってよかったの？」

いつのまにかビビ王女が近くに来ており、そう言った。

「キャハハ、いいも何も、これは私が決めた事よ。あなたが気に病む必要はないわ」

「…ごめんさい、ありがとう」

「いいわよ、お礼なんて…。私はあなたの国の騒動に一枚噛んでたんだから。恨むべきじゃない？」

そんなミキータにビビ王女はまさか、と言って私とは反対方向の肩を貸した。

「私、あなたの事を誤解していたかもしれないわ。…だから、…アラバスタまで改めてよろしくね…ミキータ」

「…ええ、ビビちゃん！」

…私が入り込んで来た事よりも、今隣で起こった事に鼻血が出そうだ。

そして場所を移し、ドリーの家で彼の怪我の治療を行い私達は目下最重要任務を話し合っていた。

…というのも、ブローギーの話ではこの島の記録ロダが溜まるのは1年と何とも気長な話

だったのでその対策についてだ。

「1年つてのは深刻だな」

「そうよ、本当に笑い事じゃないの」

ゾロの台詞にナミさんが頷く。

「何とかしてくれよおっさん達」

「バカいえ、ログばかりは我らにもどうする事もできん」

だよね…。

ドリーの言うように、いくら巨人族が強かろうとも島の磁場をどうこうする事など無理な話だ。

「…あれ、サンジじゃん」

ジャングルを抜けて走ってくるサンジを見つけたのでみんなに伝える。

ナミさーん、ビビちやーん、ミキータちやーんとか言いながら走ってくるのは何なんだ…あとどうせなら私の名前も呼ばんかい。

「無事だったんだね、よかつた〜っ♡」

「お前ほんとに男と女で態度違うよな、ある意味尊敬するぜ」

ウソップが呆れ顔で言う。まあ、サンジの場合は挨拶みたいな物だって最近気付いたよ。

「ンなんじゃこりやア!! お前がMr. 3か!!」

そう言えばサンジは見た事なかったか。巨人族を見て身構えるサンジに私は大丈夫だと手を振った。

「この人達は巨人族だよ。こつちがドリーでこつちがブロギー。…それはそうと、何でサンジがMr. 3を知ってるの?」

「おおそうだった。みんな聞いてくれー」

「ーという訳なんだ」

「…じゃあ、さつきまでMr. 0と話を…?」

何という偶然か、サンジはMr. 3が拠点としていたろうの家に侵入して『電伝虫』と呼ばれる電話カタツムリでMr. 3を装い電話していたらしい。

しかも私達を既に始末したと報告したらしく、これから追手が来る事はないそうだ。

「流石サンジ、良い仕事するね」

「キャハハ!でも、ログが溜まらない事には追手が来なくても動けないけど」

「ああ、それも心配ねエ。こういうモンを手に入れた」

そう言つてサンジが懐から取り出した物を見てみんなが口をあんどりと開ける。

それはまさしく、アラバスタへの永久指針エターナルポースだったのだ。

「アラバスタへの永久指針だア！やったーっ！！」  
エターナルポース

「出航出来るぞオ！！」

サンジ、最後の最後に持っていく男である。

でもこれは大手柄だ、1年をチャラに出来たのは凄く大きい。

「じゃあ、直ぐにでも出ようよ、早くアラバスタへ向かわないとマズいんでしょ？」

「ええ、本当にありがとうサンジさん！」

「いや〜、どういたしまし…テへ♡」

目がハートになってやがる…。

「おっさん、おれ達もう行くよ、色々ありがとな」

「ゲギャギャギャ！お礼を言わなくちゃならねエのは我らの方だ！ありがとな麦わら…

！」

\*\*\*

そして私達はメリー号へ戻り船を出した。

その際、ゾロとサンジがそれぞれ狩ってきた大きいサイと恐竜を捌いて船に載せたりしていたが。

…狩勝負ってほんとにやってたんだ。

「おい、もつと肉載せられんじやないか？」

「バカ無理だ、これ以上は保存しきれねエ」

あんな大きなの船に載せたら沈むわ。

「…お！あれおっさん達だ！」

「見送りに来てくれたんだな」

島の川から海へ出る所でドリーとプロギーはそれぞれ右、左に分かれて立っていた。

…そういうえばゴールデンウィーク…、マリアンヌは大丈夫なのだろうか、ついでにM

r. 5も。

「この島に来たチビ人間達が…」

「次の島へ辿り着けぬ理由は1年のログだけじゃねエ」

「なに？」

？

ナミさんも首を傾げてる。何を言わんとしているかが分からないからだ。

後は島から出るだけで…、この先に何かあるのだろうか？

「お前らは決死で我らの誇りを守ってくれた」

「ならば我らとて…いかなる敵があろうとも！友の海賊旗ほこりは決して折らせぬ…！」

「我らを信じて真っ直ぐ進め！例え何が起ころうとも真っ直ぐにだ!!」

なるほど、良くはわからないけどとにかく真っ直ぐ進めつてことでいいのかな。

ルフィも頷いてるし、彼が同意したのならこの先目の前にサイクロンがきても真っ直ぐ進むだろう。

「お別れだ。いつかまた会おう」

「必ずな」

「……見て！前っ!!」

ドリーとブロギーの別れの言葉を聞き終えた後、ナミさんが海面を指差す。

「なっ!?!」

そこには、カームベルト 嵐の帯で見た程の巨大な海王類がおおきな口を開けてメリー号を食わんとしている所だったのだ。

その海王類の名は「島食い」、見た目はバカでかい金魚だが、名前の由来はそのまんま島を食うかららしい。

そして島を食った時に出すフンは長く、大陸と間違えられる程だとか。

「舵きつて!!急いで!」

そして今その金魚が口を開けてこの船を食べようとしているのだ。

ナミさんは必死に舵を取ろうとするが、さっきのブロギー達の言葉もある。

「…いや、真っ直ぐ行こうよ。ね、ルフィ、ウソツプ」

「あア！」

「おう、勿論だ！」

「くくくつ!!もう！イリス、何かあったら絶対守りなさいよ!!」

「当たり前でしょ、じゃ、私から離れないでね、ほらミキータもビビ王女も!!」

「これ幸いと3人を引き寄せて抱きつく。」

「…すーはーすーはー。…はあ、たまらん。…ちよつとナミさんいつもよりあつたかい気がする…。」

「ちよつとイリス、どさくさに紛れて何やってんの」

「あら、ナミちゃんはいやなの？私はいつでも歓迎よ！」

「え、恥ずかしいのは私だけなの!？」

「三者三様の対応、ありがとうございます！」

「ミキータはレモンの香りがするのかな、と思つたらチョコの匂いの方が強かった。流

石ミス・バレンタイン。

「ビビ王女は…何だろう、単純にいい匂いだった。多分王女の香りだと思う。」

「ナミさんはみかん、知つてた。」

「そんな事してる間に食べられてるんだけど、本当に大丈夫なんでしょうね」



「大丈夫大丈夫。真っ直ぐ！」

「真っ直ぐ！真っ直ぐ！」

「おい、もう飲み込まれるぞ！」

「だ、大丈夫だ……ま、真っ直ぐ進めー！！」

サンジの声にウソップが震えながらも返事をした。

…そして、後もう少して飲み込まれるという時…。

「ー！ー！覇国っ！！」

「うわっ…！！」

2人の巨人族が放った技は海を裂き、その先の島食いの頭にすらも大穴を開けた。

その穴から脱出できた私達は、そのまま振り返らずに前へ行く。

「海を斬った…！これがエルバフの…戦士の力…！！」

ウソップが感動して泣いちゃってる。

この島はウソップにとって、色々と得たものが多かったんじゃないだろうか。

「さア、行けエ！！」

「うっはあ！すげエ…！でっけエなア…」

2人の巨人の盛大な見送りに、ルフィも目を輝かせて興奮している。

私としてもこれは助かる、マリアンヌが島を出る時にあんなのが居たら危なかった  
…。

「みんな！おれはな、いつか絶対に！エルバフへ…戦士の村へ行くぞ！」

「よしウソツプ！必ず行こう！！いつか巨人達の故郷へ！」

肩を組んで踊り出した2人を見てナミさんが呆れたようにため息をついた。

「元気ねあいつら…。何だか私さっきのでどつと疲れちゃった…。ビビ、これ…指針見  
てくれる？」

そう言つてビビ王女にエターナルポース永久指針を渡すナミさん。…私でいいよね!?

「何で私じゃないの！」

「あんたはこういう事が出来そうにないでしょ」

確かに！

「これで、やつとアラバスタへ帰れるわね」

ビビ王女へと手渡しながら笑いかけるナミさん。…ああ、愛しいぜマイルスイートハ  
ニ。

「ええ、私は…必ず生きてアラバスタへ…！」

「私がついてるから平気！ね、ナミさん」

「そうね」

……ん？気のせいかな、なんかナミさんの反応が薄い気がする。

「……ナミさん？」

「なに？……ごめん、3人とも……ちよつと私、部屋で休んで……っ」

「！ナミさん……っ！」

歩こうとしたナミさんがふらりと体勢を崩し……倒れそうになるのをすんでの所で支える事には成功した。

……だが、ナミさんに触れた時私は驚いた。

それは、ナミさんの体の柔らかさとかではない。いやそれもあるが、それ以前に……。

「ナミさん……！熱が……!!」

さつき抱きついた時よりも明らかに上がったナミさんの体温が、どう考えても普通ではない温度だったのだ。

……っつて、熱!!?い、医者！医者を呼べ……っっっっっっっっっっっっっっっっっっ!!

## 33『女好き、正妻のピンチに動く』

「ナミさん……」

あの後、すぐに部屋へと運んでベッドに寝かし、水を絞ったタオルを額に乗せるなどその他色々とやった。

…が、やはり医療関連の知識がある人がいない。少しでも齧ってるのはナミさん本人だし…。

くそ…私がもう少し早く気付いていれば…。何がちよつと体温高い気がする。だよ…！

「…おそらく、気候のせいよ。偉大なる航路グランドラインに入った船乗りが必ずぶつかるとい壁の1つが、異常気象による発病…！どんなに屈強な海賊でも、これによつて突然死亡するなんて事はザラにある話…ちよつとした症状でも油断が死を招く。この船に少しでも医学を齧っている人はいないの？」

見張り役のゾロ以外はみんなが部屋に集まっており、ビビ王女の言葉に一斉にナミさんを指差した。おいこら、人の正妻を指差すな。

「…確かに、これは笑えない状況ね、…サンジくんの作る病人食なら何とかならないの

「？」

「ミキータちゃんにそう言つて貰えるのはありがたいが…それはあくまで『看護』の領域だ、それで治るとは限らねエ。…勿論、最高の食材を使った病人食を作るつもりだけどな」

だが、とサンジは言葉を区切る。

「病人食となると種類がある。どういう症状で何が必要なのか…その診断が俺には出来ねエ」

「じゃあ全部食べばいいじゃん」

「そういう事する元気がねエのを『病人』つつーんだよルフィ」

そういえば、この世界に転生してからは病気にかかったことが一度も無かつたつけ。

長い無人島生活でその辺の免疫が鍛えられたのか、それとも耐性倍加でも知らぬうち  
に使用してるのかは分からないけど…。

ただ、前世の記憶もある私としては病気のつらさもよく分かる。

「よ…40度!?!また熱が上がった…!?!」

ビビ王女が体温計に記された数字を見て焦りの声を上げる。

40つて…、ぐんぐん熱が上がってる…、この短時間で…!!

「なアビビ、アラバスタへ行けば医者はいるんだろ?あとどれくらいかかりそうだ?」

「……わからないけど、一週間では無理……」

名家だとウソツプが告げるが、ビビ王女から帰ってきたのは非情な現実だけだった。

つまり、ナミさんの病気をきちんと見てもらおうと思えばこのまま海を彷徨って辿り着いた島に医者がいなければいけないという訳だ。

「病氣つてそんなにつらいのか？」

「つらいに決まってるじゃない……！40度の高熱なんてそうそう出るもんじゃないわ！もしかしたら命に関わる病氣かも知れない……！」

「ナミは死ぬのかア!!？」

「ば、バカ言わないで！冗談でもそんな事言わないでよ！」

ルフィがへたな事を叫ぶからつい反応してしまった。

40度だから死ぬって訳ではないのは日本人、ひいては私と同じ世界で生まれた人には分かる事だ。インフルエンザとかも40行く時はある。

……でも、死ぬケースだってあるし、死ななくても40度の熱がずっと続けば後遺症が残る場合だってある。

ルフィの発言は強ち間違ってもいないのだ。

「まずは……っ、その辺の島にでも入って医者を探さないと……!!」

「……だめよ」

「っ…な、ナミさんっ!!」

突然、ナミさんがむくりと上半身を起こした。

「だ、ダメも何も、ナミさんが危ないんだから絶対だよ！ほらみんな急いで！」

「だめなの！…私のデスクの引き出しに新聞があるでしょ？…それを見れば分かるわ」

「…っ、もうー！」

何でこう頑なの…！

仕方がないので直ぐに新聞を取つてくると、ビビ王女に渡してくれとナミさんが言うので素直に渡した。

「……!!…そんな…」

「ビビちゃん、どうかしたのかしら？」

「…そんな、バカな…!!『国王軍』の兵士30万人が『反乱軍』に寝返つた…!!元々は『国王軍』60万、『反乱軍』が40万の鎮圧戦だったのに、これじゃ一気に形勢が!!」

それって…つまり…!!

「これで、アラバスタの暴動はいよいよ本格化するわ…。3日前の新聞よそれ…。ごめんね…あんたに見せても船の速度は変わらないから不安にさせるよりと思って隠していたの…。…わかった？イリス」

「……わ、かった、けど…でも…」

「そういう事よ。分かってくれたならいい」

そう言いながら起き上がろうとするナミさんを、腕で押さえつけるも軽く微笑まれてしまう。

「イリス、心配しないで、40度なんて人の体温じゃないもん。きつと日射病か何かよ、医者になんてかかんなくても勝手に治るわ…」

「…でも」

「あんた、ここで船を止めればビビが悲しむのよ。…それで本当にいいの?」

……。頭では分かっているんだけど…。

「…ダメ、寝てて。航海なら私がする」

「私がやんなきゃ誰がこの船を進ませられるのよ、そんなに心配しないで大丈夫だから」  
トン、と私を押してナミさんは外へ出て行ってしまった…。

強情な所は魅力的だけど…こんな時くらい…。

「…このままじゃ、じきに戦争になる…!それだけは阻止しなきゃアラバスタ王国はもう終わりだ…!クロコダイルに乗っ取られちゃう…。もう、無事に帰りつくだけじゃダメなんだ…一刻も早く帰らなきゃ…。間に合わなきゃ100万人の国民が無意味な殺し合いをする事になる…!!」

「……ビビ王女」



背負ってるものが、大き過ぎる。

ナミさんはこの事を分かっているから、ああして自分は大丈夫だと気丈に振る舞っているのだ。

「おいてめエら！出てこい、仕事だ！」

「!!う、うん！」

ゾロの号令で考え込んでしまったビビ王女を残しみんなで甲板に出る。

ナミさんからの指示で南へ一杯舵を取るとのこと。

「ナミさん、本当に大丈夫？」

「平気だって言ってるでしょ」

「……本当に？」

「本当よ」

その際ナミさんに話しかけ、聞くまでもない体調の事について尋ねるとやはりこういう答えが返ってきた。

平気な人間が、ふらふらと覚束ない足取りで顔真っ赤になどするか。

「……ナミさん」

「……みんなにお願いがあるの」

「!ビビちゃん……？」

私がナミさんに追撃をかけてやろうとした時、部屋からビビ王女が出てきてミキータが首を傾げる。

さつきまでの迷いのある表情は消え、何かを決意したような顔だ。

「船に乗せて貰っておいて…こんなこと言うのも何だけど、今私の国は大変な事態に陥っていて…とにかく先を急ぎたい、一刻の猶予も許されぬ!!…だから、これからこの船を『最高速度』でアラバスタ王国へ進めてほしいの!!」

「…当然よ!約束したじゃない…!」

力無く、ナミさんは強がりだと誰が見ても分かるような返事を返す。

「ただビビ王女は、そんなナミさんに微笑み返してからまた私達を見て言った。

「…だったら、すぐに医者がいる島を探しましょう」

「!」

「一刻も早くナミさんの病気を治して、そしてアラバスタへ!!それがこの船の『最高速度』でしょう!!」

「び、ビビ王女くっ」

ギャン泣きでビビ王女の胸に飛び込んだ。この王女、器大き過ぎるよ…!!

「そうだよね…それ以上スピードは出ないよ!ね、ルフィ!!」

「そおーさつ!それ以上は出ねエ!」

そうと決まれば、ナミさんを寝かせないと…!!

「ごめんなさい気を遣わせて…! ムリしないでナミさん…!」

「…! 悪い…イリス、ビビ…やっぱわたし…ちよつとやばいみたい…」

「もう…!」

そう言つてふらつくナミさんの体を支える。

私が何度言つても聞かなかつたくせに…! 本当に自分が情けない…!!

「何だありゃーっ!!?」

「で、でっけーサイクロンだア!!」

「ちよ…ちよつと待つて、あの方角は、さつきまでこの船が向かつてた方角だ…」

「キャハハ…ナミちゃん、やっぱり凄い航海士ね」

ビビ王女の驚愕の声にミキータが同意する。

そりやそうだよ、ナミさんだからね。

「それじゃ、このまま南へ医者探しに行くぞ!!」

「うおおおおおっ!!」

ナミさんの為に、一味が一団となる。

何でもいい、医者が居てくれるならどこだろうとナミさんを連れて行つてみ

せる…!!

\*\*\*

暫く船はアラバスタを指す指針を無視して医者探しに入った。

そして、丁度一日が過ぎた頃――。

「おい、お前ら…海に、人が立てると思うか？」

天候は雪。物凄く寒いこの環境で、ゾロが海に立つ人影を発見したという。いやあ、流石にこの世界とはいえど、それは……って立つてるー！ツツ！！

なんか、ちよつと小太りのピエロが厚着しましたって感じの人が海に立っていた。

この世界、海に立てるのなんて能力者くらいのものだけ…その能力者は海水が弱点だからなあ…。

「よう、今日は冷えるな」

「そ、そうだね、雪だし…ねえルフィ、ウソツプ」

「うん…冷えるよな、今日は」

「そうか？」

「へ？」

話しかけてきたからとりあえず返事はしたけど…自分で言った事を自分で否定する

なよ……。天邪鬼な人なのかな？

「んな……っ!？」

ドゴオオオオツ!!という音がしたと思つたら、急に海中からメリー号より遥かに大きくスイカのように丸い船が姿を見せる。

さっきの厚着ピエロはその船の見張り台に乗つてただけみたいだ。

近くにいたメリー号はその船が出てくる時の荒波をモロに受けてしまったから、ナミさんが心配だ。

「ナミさん!」

「大丈夫よ、イリスちゃん。ナミちゃんは私が」

部屋まで戻ると、ミキータがベッドごとナミさんを持ち上げて揺れからの影響を無くしてくれていた。

「ありがとうミキータ……!助かったよ、……でもほんと何なんだろうあの船」

その船は、球状の天辺から蕾が花を開く時のようにパカッと割れていく。次第に中の船が姿を見せ、王冠を被ったカバの船首像やこれまた王冠を被ったドクロの海賊旗が出てきた。

「驚いたか!!この『大型潜水奇襲帆船』『プリキング号』に!!」

「くそ……何でこんな時に……!!」

ナミさんが一大事だと言うのに、何なの一体!!

「ちよつとまた出てくる、ミキータ、ビビ王女、ナミさんを宜しくね」

「キャハハ、任せて」

「イリスさんも気をつけて」

「サンジは来てよね、戦闘になったら居ないと困るんだから」

「お安い御用さ」

揺れが収まり、ナミさんの安全を確認出来た私とサンジは部屋から甲板に出た。

「…………、ふう、で？これは何事？」

「襲われてんだ、今この船」

「そうみたいだね」

部屋を出た瞬間に、船の中を無数の兵士の様な格好をした海賊が我が物顔で居座っているのを確認した後すぐ、私とサンジに銃を突きつけてくる。

その中でも一回り大柄の鉄顎太おじさんが前に出て来た。船長か？

「これで5人か、たった5人と言うことはあるめエ。…まあいい、とりあえず聞こう」

ナイフで突き刺した肉をナイフごと食らってるそいつの姿は、正直見てるだけで痛い。

「おれ達は『ドラム王国』へ行きたいのだ、『エターナルボース永久指針』もしくは『ログボース記録指針』を持って

ないか？」

「持つてないし、そつちの船に医者はいる？」

「医者か………生憎とうちにはいねエ！だがお前らの船と宝は貰うぞ」

「は？」

「だいが間が空いたのは何なの？」

「しかもこの船と宝を貰う？……こんやろ。」

「ルフィ、ちよつと黙らせようよこの人。今こんなやつに構つてる余裕ないんだからさ」

「そうだな、やるか？」

「すぐにやろう、こうしてる間にも時間を無駄にしてるんだから」

「ゴキ、と指を鳴らして小太刀を取り出す。」

「貴様！動けば撃つぞ！」

「私になら、好きだけ撃つていいよ」

「雑兵は無視して、鉄顎の元へまっすぐ向かう。」

「死ね!!」

「周りから銃弾の雨あられに晒されるが、知つての通り私に銃弾は効かないんだ。」

「何だこいつ?!…ぐあつ?!」

「女の子に対して何人がかりだ…紳士の風上にもおけねエ」

「オイコック、あいつを女と同列視するな、貧弱そうな皮を被った猛獣の間違いだろ」

「失礼な、こんなプリティフェイスに向かって何を言うの」

サンジとゾロが周りの海賊達を一掃していく。

ウソップはどこかに隠れて、ルフィは暇そうに鼻をほじってた。

「こ、こいつら強い…！ワポル様!!」

「まあ待て、ちよつと小腹が空いてどうも…」

そう言つてワポルはメリー号を食べ始めた。

何だ？能力者か!?

「こいつ…船を壊す気か!!航海出来なくなったらどうするの!」

「まっはっは!!おれ様には関係ない事だ！死ぬエイ!」

殴りかかった私に対して、ワポルは大きく口を開けた。

食う対象の大きさに応じて口を大きく出来るのか、私を食おうとしてるその口はあり得ないほど大きく開かれている。

「全・倍加!オールインクリースからのオ!!」

「んなア!?!」

「10倍灰・去羅波じゅうばいばい一文字!!」

自分の持つ小太刀の長さを倍加し、刀の様にしてから横一文字に振り抜き剣撃を飛ば



す。

その威力は普段の去羅波さらばよりも強く、尚且つワポルの開けた口目掛けて飛んだので綺麗に口を斬りさいてやったのだ。

「がばアツ?!」

口を押さえて倒れるワポルの頭を左手で掴み持ち上げる。

「口、上手く開かないでしょ? 斬ったからね。…今この船が動かなくなったら、ナミさんが死んじやうかもしれないでしょ。つまりこの船を壊そうとしてるあなたはナミさんを殺そうとしてる訳でしょ? そんなの、許せないよね」

右手をぐつと握りしめ、構えた。

「10倍灰・去柳薇!!」

「ぐぼオっ?!」

「去柳薇ツ! 去柳薇ツ! 去柳薇アツ!!」

「がべっ! グバア! …ふオ…ツ!」

やがて、びくびくと動かなくなるまで殴り倒してぽい、と海に捨てた。

これでやっと静かに航海出来る。

「わ、わわわワポル様ア!!」

「早くお助けしろ! 急げ!!」

「…あなたならも、うるさいな」

「ヒイイツ!!」

私が睨むと、海賊達は次々に海へ飛び込むか、船へ急いで戻りやがてメリー号からはいなくなった。

あのワポルって鉄顎も、流石に死ぬまで殴ってはいない。というか私に人を殺す度胸なんて無いし。

「えげつねエなオイ…」

「おれ、イリスを怒らせるのはやめとくよ」

ゾロとルフィのそんな呟きが聞こえたが、無視しておこう。私はそんな鬼女じゃないし!!

## 34 『女好き、山登りを決意する』

ワポル事件の翌日――。

「しつかし、あのワポルとかいうやつ何だったのかねエ。聞いた事もねエのにあんなすげエ船持ってたろ?」

「さあ? 余程のバカだと思うよ。流石にもう攻撃してくることはないと思うけど」

「イリスちゃんという通りだ、気にすんなウソツプ。…さ、イリスちゃん、見張りは交代するからナミさんの下へ」

「ありがとうサンジ、助かるよ」

そう言い残してナミさんの眠る部屋へと向かう。

その時、部屋の扉が開いて中からビビ王女が出てきた。

「やあビビ王女、あつたかそうだね」

「ふふ、イリスさんもね」

ここ最近ずっと寒い日が続いているので、みんな厚着グラブをしてランドいるのだ。

いきなり冬が到来したかのような気温の変化に偉大なる航路ラインの恐ろしさを再度痛感する。

「ここまで寒い日が続いてるってことは、島が近い証拠よ」

「へえ…：氣候が安定してるから？」

「そう。偉大なる航路グランドドラインは夏島、春島、秋島、冬島に分かれてて、その4つの島に挟まれてるこの海はそのせいで常に氣候が安定しない。…だけど、今安定してるって事はつまり、その4つのうちのどれかの島に近付いてるって事なの」

なる程ね、じゃあ今回は冬島に近付いてるって訳か。

…ナミさんの体調を考えると、出来れば春か秋が良かったけどそうも言つてらんないか。

「ビビ王女、改めて昨日はありがとね。ナミさんの為に決断してくれて…：本当に助かるよ」

「ううん、友達を見捨てて国民の命を救つても…：きつと私は誇れないから」

「…ぷっ…：はは！ビビ王女は、本当に素敵な女性だよね！嫁にきてよ本当に」

「…私にイリスさんを満足させられるような財力はないけど？」

「そのおっぱいがあれば充分だよ！」

途端に顔を真っ赤にして歩いてつたビビ王女を見て、流石にやり過ぎたか、と反省。

…でもビビ王女、良いよね。ハーレム女王を目指してる者としては無視できない可愛さだよ。

「ナミサーン、体調はどうですかっと…」  
扉を開けて中に入る。

中ではミキータとゾロが居たが、私が入ってきた事で気を利かせてくれたのか部屋から出て行つた。

「…イリス？」

「うん、私だよナミさん」

横の椅子に腰掛け、ナミさんの手を握つた。

…だいぶ熱いな…また熱上がったのか…？

「航海は…大丈夫…？？」

「全然へつちやらだよ、…とは、言えないかな。やつぱりナミさんが居ないと全然わかんないや。だから、早く良くなってね」

「ふふ…ええ。…やつぱり、あんたが居ると…落ち着くわ…」

「そ、そうかな、そう言ってもらえると、すつごく嬉しいね…はは」

何だこの素直な爆弾兵器は。

危ない、キュン死ぬ。殺されるウ!!

「……ん、外が騒がしいね、…あ、島を見つけたって騒いでるよナミさん。もう少しの辛抱だよ」

外からルフィの嬉しそうな声が聞こえてくる。

ナミさんも聞こえたのか、少し頬を緩ませた。…いや、その顔は自分の病気が治る事が嬉しかったんじゃないやなくていつものルフィらしさについて笑ったって顔でしょ。本当にアールンパークの時から、いや初めて会った時からそうだったけど自分の事は二の次だよね。

「イリスは、外に行つて島を見てこなくてもいいの…?」

「島もいいけど、私はナミさんが一番だよ。そういうのはキャプテンに任せよう!」

冬島が気にならない訳でもないけど、ナミさんの体調の方がずっと気にかかるよ。

「だから今は寝ててね、私がここに居るから」

「……うん」

そう言つて眠るナミさんの頭に腕を伸ばして撫でた。

うくくく、身長のせいで体を伸ばさないと届かないのがキツイ!

数分後、船が目的の島へ到着したのか揺れが止まった。

…それにしても、何か雰囲気がおかしいな…? 静かすぎる。

「……つ、銃声…!」

外から一発、弾けるような音が聞こえた。

この一味に銃をわざわざ使う人なんていないし、ワポルのようなバカが乗り込んできたのか…？

それからまた数分後、部屋にミキータが入ってきた。後ろには左腕から血を流しているビビ王女もいた。

「ビビ王女…！その傷は…？」

「何でもない、そこで転んだの。それよりイリスさん、島についたわよ」

「ナミちゃんを背負うわ、私に任せて」

それを聞いてすぐ様ナミさんを起こすと、とにかく体を冷やさないようにあつたかくさせてミキータに背負ってもらおう。

気持ちで言えば、私が背負っていききたいけれど、…くそ、身長くれよ誰か…！

「ここが、我々の村だ」

「おおう、雪国って感じだー」

国の守備隊のような人達に連れられ、私達はこの島の村まで案内された。

ゾロとカルーは船で留守番である。

「何か：前の世界でも見たことない動物が一杯いるな、なにあのカバマンモス：」  
「前の世界？」

「んん”ッ、何でもないよ、前に住んでた島のこと」

あはは、と首をかしがるビビに言葉を濁した。

「じゃあみんなご苦労さん、見張り以外は仕事に戻ってくれ」

その中のリーダー格の人が周りに指示を出す。

仕事に戻って：見張り以外はみんな民間人だったのか：。海賊がきて村総出で迎えるつてのは、そら何とも警戒心の強いことで。

「やあドルトン君、2日後の選挙は楽しみだな。みんな君に投票すると言つとるよ」  
「と：：とんでもないっ!!私などっ!私は罪深い男です：!!」

リーダー格の男の名はドルトンというらしい。かなりの大男だ。  
そんな彼に連れられ、ナミさんを連れた私達は彼の家へと案内してもらった。

「そのベッドを使ってくれ、今部屋を暖める」

「ありがとうございます：：!」

ミキータがそつとナミさんをベッドに寝かせて、布団を被した。



「申し遅れたが、私の名はドルトン、この島の護衛をしている。我々の手荒な歓迎を許してくれ」

「手荒な歓迎？」

「なな、何でもないのでイリスさん」

「そうだぞイリス、お前が知る事は何も無い、いやむしろ頼むから大人しくしてくれ」  
何故か慌ててビビ王女とウソツプが言うので、詮索しても致し方ないと結論づけて流した。

「熱はどれくらいあるんだ？」

「直近で測ったのが、42度……平熱より6度も上がってるの……」

ビビ王女の答えにドルトンは息を飲む。これ以上上がれば、本当に命に関わる問題なのだ。

「この島の医者はい？」

「……この島には、先に船で見た君達には話したが『魔女』しかない」

「その『魔女』ってのはどこにいますよ？」

サンジの質問にドルトンさんは窓の外を指さす。

「窓の外に山が見えるだろう？あの山々の名はドラムロッキー。真ん中の一番高い山の頂上に城が見えるか？今や、王のいない城だ……」

軽く視力倍加を使って見ると、確かにくつきりと筒状の山の上に城が建っているのが見えた。

「まさか、あの城に？」

「その通りだ。人々が魔女と呼ぶこの国唯一の医者、〃Dr. くれは〃があのに住んでいる…」

「よりによつて何であんな遠いところに…。じゃあすぐに呼んでくれ！急患なんだ！」

「そうしたくとも通信手段がない」

ええ…。聞いたサンジも啞然としてるよ。

「医者としての腕は確かなんだが、少々変わり者のバアさんでね…。もう140近い高齢だ」

「ひゃ…140!?そつちが大丈夫か!?!」

ギネスに載るんじゃない?この世界には無いけど!

「この国の人達は病気やケガをどうしてるの!?!」

ビビ王女の尤もな質問にドルトンは頷く。

「彼女は気まぐれに山を降りてくる、そして患者を探し処置を施しては、報酬にその家の欲しい物をありつたけ奪って帰っていく」

「話を聞くにとんでもない人みたいだけど、その人はどうやってあんなところからここに

「？」

「妙な噂なんだが…月夜の晩に彼女がそりに乗って空を駆け降りてくる所を数名が目撃したという話だ。それこそ、彼女が魔女と呼ばれる所以だ。…それに、見たこともない奇妙な生き物と一緒に居たという者もいる」

「ぐあつ！魔女と雪男だと?!いると思っただこの島を見た時からよオ!…ああどうか出くわしません様に!!」

転がるウソップを無視して話を続ける。

「大体よ、国中で医者が1人なんておかしすぎるぜ!」

「…話はわかった。だったら私が…は無理だから、私達がナミさんをあの城まで連れて行けばいいんだよね?」

「い、イリスちゃん、正気か!?そんな事すればナミさんの症状は悪化…いや、誤って登る途中落下でもしたらお終いだぜ…!?!」

「分かってる。…良く聞いて、メンバーは私とルフィとサンジとミキータ。この4人であの山を登りナミさんを城まで連れて行く。そんないつ降りてくるか定かでもないおばあちゃんを待つてらんないよ」

「…キャハハつ、私は賛成よイリスちゃん。私が背負っていけばいいんでしょう?」

「ミキータまで…!ナミさんへの負担は大きいのよ!?!」

それは、その通りだ。

…だけど、例えばここでじっとその医者を待つとして果たしてその医者はいつここに現れるの？明日にはくる？それとも1週間、果てに1ヶ月…？

…バカバカしい。

「何があるうと、ナミさんはあそこまで連れて行く。天運に任せてなんかられないよ…  
そうでしょナミさん？」

「…はあ…はあ…：イリスが決めた事なら、どんな事だろうと、ついて行くわよ…：よろしく、あなた…」

うつすらと目を開けたナミさんが手を伸ばすのでギョツとその手を握り締めた。

…あなたって…ナミさん顔赤いけどそれ熱だけじゃないよね？目も逸らしてるし恥ずかしがってるよね？…でも、燃えてきた…!!それにちよつと興奮しちゃった…。

そして、ミキータがナミさんを背負いビビ王女が更にその上から紐で括り上げて外に出る。ここまですておけば、誤って落とす様な事もないだろう。

何かあつてもこのメンバーだ、万が一にもナミさんに危険が及ぶ事はない…！

「…本気なら止めるつもりはないが、せめて反対側の山から登るといい、ここからのコースには“ラパン”がいる…！肉食の凶暴なうさぎだ…集団に出くわしたら命は無い

ぞー！」

「大丈夫、急いであるから最短コースでいく」

「うさぎ？平気だろ」

「ああ、蹴る」

頼もしいなこの2人。

「それじゃあ、行こう！先頭は2人に任せた、真ん中はミキータお願い！後ろから私がついてくよ！」

「おう（ええ）!!」

そうして、私達は走り出した。

Dr. くれは：…魔女がどうか、奇妙な生き物がなんとか：腕が確かならそんな噂はどうだつていい！一刻も早く、ナミさんを治療して貰わないと：いい加減に私が心配死するつての!!!

## 35 『女好き、城到着』

「ああーこれがラパーンか！」

私はうんうんと納得した様に頷く。

「白くてデケエから白熊だよ、間違いねエ！」

「いやラパーンだっつってんだろ、うさぎだよさつき言つてた」

サンジの突っ込みにそうだったか？と首を傾げるルフィ。やはりまともに話を聞いてなかったなこやつ。

「キャハハ…それで、どうするの？」

「うーっーん、…：…とにかく逃げながら前へ！」

「逃げながらつても…この数はどうなんだ」

サンジが軽くボヤク。それもその筈、何故なら今私達の目の前には無数の巨大兎、ラパーンがいるのだ。

雪は吹雪いてるし、足元はその雪で沈み歩きづらい。

「今は一刻も早く城へ行かなきゃ…。どうしても避けられないうさぎだけ蹴散らして前へ進もう」

「確かに、イリスちゃんの言う通りだ……行くぞルフィ、とにかく邪魔する奴だけ倒しなから進め！」

「おう！」

ダツと一斉に走り出した。

ミキータに攻撃をしかけようとした奴を最優先に撃破し、前へ前へと進む。

私にサンジ、ルフィも動けるのだから、正直巨大兎とは言っても大した脅威じゃないね。

「ゴムゴムの……！銃乱打!!」

「10倍灰・去柳薇連打ア!!」

「腹肉シュート!!」

多分このうさぎも弱くはないんだろうけど、如何せん相手が悪い。

私達を通る道を塞ぐうさぎ達は軒並み蹴散らされてミキータは快適に前へ進む。

次第に私達を狙うラパーン達は減り、姿が見えなくなった。

「よし、居なくなつた……！急ごう！」

「いや待ってイリスちゃん、上だ……！いつの間にか俺達より上にいる……!!」

「何やってんだ？あいつら」

私達が目指してる先の道なき雪道の上で、ラパーン達が揃って飛び跳ねその巨体を雪

に連続で叩きつけていた。

…い、いや、ちよつと待って、あんな数のラパーンが一斉にこんな所で飛び跳ねたら……っ!!

「う、うそでしょ……っ」

「やりやがったあのクソうさぎ共……!」

「キャハハっ……いや、笑えないわね、これは……!」

「……っ、雪崩が来るッ!!」

その言葉と同時に、ラパーンの起こした雪崩が上から一気に崩れてきた。

ちよお!? 何て規模だよ! こんなの私達だけじゃなくて下の村まで……いや、なんなら雪崩起こしたラパーンも埋もれるでしょ!

「早く逃げるぞ! どこでもいいから高いところへ急ぐんだ!」

「……いや、私に考えがある……!!」

考えというか、出来ればしたくなかったんだけど……!! 仕方ない、このままじゃナミさんを城まで連れて行くのが遅れてしまうし、何よりみんなが危ないんだ……!!

「イリス! どうしたらいい!」

迫り来る雪崩に気持ちを焦らせながらルフィが叫ぶ。

「お願いだから絶対こつちを見ないで! ナミさんとミキータは……いややっぱり見ない



で！わかった!?見ないでね!!フリじゃないからね!!」

「キャハハ、何をするかはわかんないけど、わかったわ、絶対見ない」

「ああ、勿論俺もだ」

「うん、ありがとう…!」

みんなが私に背を向けて目を瞑ってくれたので、急いで服を脱ぐ。

全裸だ、こんな雪の中、幼児体型とは言え19歳が全裸だ!!泣きたい…けどナミさんの為だ!!!いやでもごめんやっぱ涙出てきた!!

「はあ!!」

みんなを掴んで、ぐぐ、と私の体が大きくなっていく。

雪崩に耐える為に上にも横にも10倍した。巨大太っちよ全裸19歳の完成だ!お願いだから誰も見ないでほんとに!!

服を脱いだ理由は服まで10倍できないから、ほんとに肝心な時に不便だなこの能力!!

「い、イリスちゃん、今どうなってるの!?!」

「な、なんでもない!」

「おーイリス、何か声デカくねエか!?!」

「気のせい!!」

「羞恥とか尊厳とか絵面とかちよつと人として大事な物を秒単位で失つてはいるが、準備は整つた…!!」

そして、遂に雪崩が私の体に衝突する。

うぐぐ…!!私の体を10倍して体重はかなり増えているし、更に10倍で重くしてある今はちよつとやそつとでは動かないよ!その上私自身のパワーで踏ん張つてるんだから、いくら雪崩だろうとやり過ぎすのは訳ない…!!

「ふう…!!…つ、ぐ」

でもやっぱ冷たい!!やばいよ!冷たい!!ていうか痛い!!

うぐおお、と耐えに耐えて雪崩を何とかやり過ぎした。

収まつた瞬間に巨大化は解除し、ちやつちやつと服を着る。

「はあ…ふう…よし、もういいよみんな、行こう!」

「え?雪崩はどうなつたんだ…?」

「何とかなつたんだからいいじゃん!早く行こう!」

サンジの背中を叩いて先を促した。いや、もう忘れさせてよ、黒歴史だよこんなの。

そして、ついに目指していた筒状の山の下まで辿り着いた。

まるで巨大な大木みたいな山で、山登りというよりはロツククライミング的な登り方

になりそうだ。

「よし、登るか！」

「待って、ここからはミキータの事をルファイが背負った方が早いよ」

方法としては、ミキータの能力で自分自身とナミさんの体重を一キロにする。そしてルファイに捕まれば何の抵抗もなくロッククライミングができるという訳だ。

「って訳、わかった？」

「おれがミキータをおぶればいいんだろ、わかった！」

「キャハハ、お願いねキャプテン。…でもどうせならイリスちゃんにおぶって貰いたかったわ」

「低身長でごめんなさい！…サンジと私は後から行こう、無いとは思いますがもしルファイが落ちてきた時の保険としてね」

サンジが頷いたのを皮切りに、ルファイはミキータとナミさんを背負って登っていく。

ゴムの特性を充分に活かし、腕を伸ばしたり縮めたりして凄く速さで登っていった。「私達も急ごう、ていうかルファイ…その登り方はナミさんに対する負荷が重いよ！ちよつとはゆつくり登って！ゆつくり急いで！」

ルファイを追いかけるように私達も急いで登り始めた。

指の固さを10倍にして山肌に手を突き刺すだけで持ち場は完成するので、かなり楽

に登れる。

そのままひよいひよい登っていくと、わりとすぐに頂上まで辿り着いた。

「結構早く着いたね、よかった…これでやっとナミさんを診て貰える！」

みんなで走って城の門まで向かう。ドンドンと慌しくノックすると、多分この人がくれば何だろうなって感じのおばあちゃんが出てきた。

…いやでも140…?年寄りには見えるけど、そこまでか…??服装も若々しいし。

「お前達は何者だい?まさか山を登ってきたってのかい!？」

「そのまさかなんだけど、急患なの!お願いDr. くれは、報酬ならいくらでも出すからナミさんの病気を治して下さい…!!」

「!まさか、そいつを運んで来たのかい?…こりや驚いたね。…、その通りあたしやDr. くれはさ。良いだろう、小娘の病気を診てやる」

その言葉にみんなで顔を見合ってほっとひと息ついた。

…はあ、とにかく、これで一安心かなあ…。

\*\*\*

「ナミさん!起きたって!？」

「イリス！」

治療が終わり、ナミさんの意識も戻ったと聞いて私は急いで部屋に向かった。

「ガキンちよ、起きたけどまだ病人だよ、騒ぐと悪化するだろうね…ヒツヒツヒ」

「あ、ナミさんごめん…、でもガキンちよ言うな、19歳だからねこれでも！」

…でも、確かにナミさんはここ最近の中では1番穏やかな顔つきをしている。熱もかなり下がっていると見ていいよね！

「ああ良かったナミさん…！」

「ありがとねイリス、お陰で随分楽になったわ…。ビビにもお礼言わないとね」

ビビ王女の決断があったからこそ、強情なナミさんをこの島に連れてくる事が出来たからね！

「ほんとありがとございますDr. くれは！流石若々しい見た目を維持してるだけある！」

「ほう、嬉しいじゃないか。だけど診たのはあたしじゃないからお礼は返しておくよ」

え、でもこの島に医者はい人しかいないって話じゃ…？

「まあいいか。それで、原因とかわかったの？」

「ああ、それは…いつさ」

ぐい、とナミさんの服をめくり上げてお腹の肌を露出させるDr. くれは。

「ちよ、ダメだって、何か服着たままそれされちゃうとすごく厭らしい！えっちー！」

暗い部屋でなら裸すら見せ合ってるけど…こんな明るい所で、そんな…えっちじやん！雪山のアレ？なにそれ？知らない。

「こいつは何を言ってるんだい？」

「気にしないで、たまに暴走するの…それで、これは一体…？」

はしやぐ私を華麗にスルーして、お腹の何かに噛まれたか刺されたかの跡を見るナミさん。少しは反応してよ！

「こいつは『ケスチア』、高温多湿の密林に住んでる有毒のダニさ。コイツに刺されると刺し口から細菌が入っちゃまって、体の中に5日間潜伏して人を苦しめ続ける。40度以下にや下がらない高熱・重感染・心筋炎・動脈炎・脳炎！。刺し口の進行から見て今日は感染から3日目ってとこか…並の苦しみやなかった筈だが…放つといっても5日経てば楽になれた…ヒツヒツヒ…」

「？」

「放つておいたら、お前は2日後には死んでたからさ」

「はア!!？」

ガバつとナミさんに抱き付いて頬を擦り寄せる。ばかばかばか！死ぬとか言わないでよほんとに怖い!!

「『5日病』と言ってね……！ケスチアは100年も前に絶滅したと聞いてたが……一応抗生剤を持って役に立ったよ。お前達一体どこから来たんだい、太古の島でも散歩してたのかい？ヒツヒツヒ……まさかそんなことは……」

「あ」

「心当たりがあんのかい、呆れた小娘だ」

心当たりなら、私もある。

リトルガーデンだ。あそこは、この世界でも絶滅している筈の生物がそこかしこに存在していたし……その最たる例が恐竜だ。

でもそんなダニがいる島で100年も生活してたドリーとプロギーは何なの？巨人族は平気なの？

「でもまさか死にかけてたなんて……。よかった、死んじやったらせつかくあんたの正妻になれたのも無駄になるとこだったわね」

「私はナミさんが居なくなったらこの世界滅ぼすよ、とりあえず虫は皆殺しかな」  
「お前達はいちいちスケールが大きい話をするね」

そりゃ、ナミさんに関わることももん。

「どうもありがとうDr.くれは。熱さえ下がればもういいわ、後は勝手に治るんでしょっ？」

「甘いねお前は…病気をナメてる！本来なら治療を始めて完了まで10日はかかる病気だ。またあの苦しみを繰り返して死んじまいたいんなら話は別だがね、あたしの薬でも3日は大人しくしてて貰うよ！」

「3日なんてとんでもない！私達は先を急いで…！」

その瞬間、Dr. くれはは腰からナイフを取り出してナミさんに向かって突き出した。

殺意は全く感じられないから寸止めの脅しでもするんだろうけど、何であれ…。

「ちよつと、人の嫁に何するの？」

「ほう…ただのガキンチョじゃなさそうだね」

彼女の腕を掴んで止めた私は、力が抜けた事を確認して手を離す。

「ナミさんの命を救ってくれたことには感謝するけど…、どんな理由があれ、私の嫁に武器を向けるのは許さない」

「…ヒツヒツヒ…なかなか面白いガキンチョだ、良い目をしてるね。…小娘！お前の相手ならしつかり手綱を握っておくことだ」

「えっ、あ、うん」

戸惑いながらも頷くナミさんは、何だか可愛かった。

…あ、違う、いつも可愛いかったね、失敬失敬。



ドンツ!!

「ギャーーーーー!! 助けてエ!!」

「ん?」

突然勢いよく部屋の扉が開いたと思うと、外から帽子を被った鹿? かトナカイかの喋るぬいぐるみ? を追っ掛けてサンジとルフィが入ってきた。ミキータはその後ろで呆れ顔だ。

「ルフィ、サンジくん…ミキータも、…それと、何なの? あの鼻の青い…喋る鹿のぬいぐるみ」

やっぱりそう思うよね。

…何だろ、このぬいぐるみ見覚えあるな、めっちゃある。

うーん、と頭を悩ませる。何かきっかけがあれば思い出せそう何だけど…。

…しかしこのぬいぐるみ、可愛いな。

…いや女の子的なあれじゃなく、ぬいぐるみに対する可愛いね!

## 36 『女好き、トナカイを勧誘する』

「やめろオ人間!!おれはお前らなんか嫌いなんだ!!」

バタバタと暴れるぬいぐるみを押さえ込んで料理しようとするルフィとサンジをミキータが呆れた目で見ている構図なんて、この先一生お目にかかれないうなあ。

「あいつが何かかって?名前がチョップパー、ただの青つ鼻のトナカイさ」

「トナカイは喋らないわよ!」

ナミさんのツツコミが刺さる。そりやそうだ、喋る動物などこの世界でも見たことない。

「…ただし、」

そこでDr.くれはは言葉を区切る。

チョップパーは、その体格差ゆえ…というかサンジとルフィの馬鹿力が原因で抜け出すことが出来ないでいたのだが…。

「やめろこの…!!」

「え…!」

突然体を大きく変形させてまるで人のような姿になったチョップパーが、戸惑う2人の

頭を殴って床に叩きつけて逃走した。

：いやあれトナカイでもぬいぐるみでもないでしょ。

『『ヒトヒトの実』を食べて、“人の能力”を持つちまつただけさ。あいつにやあ、あたしの“医術”の全てを叩き込んであるんだよ』

へえ：じゃあ船医になれるじゃん!!勧誘するしかないでしょ!

「ちよつとさつききのトナカイ探してくるよ、みんなはナミさんをお願い」

「：ちよつと、私はあるがいればそれだけでいいんだけど」

私があう、と言葉に詰まると、ナミさんはコロツと表情を一変させてくすくす笑う。

「冗談よ、何か気になることでもあるんでしょ?早く行かないと見失うわよ」

「な、ナミさん〜!」

布団に潜り直してウインクするナミさんにほろりと涙を流してチョツパーを追いかけた。気になることっていうか：何でチョツパーの事を私が知っているかもしれないと思ったのか確かめたいだけなんだけどね。

「おーい!」

「また新しい人間か!いい加減にしろ!」

「違うって！私は別にさっきの人達みたいに取りつて食おうだなんて思っていないから！」  
「信用できるか！」

「してもらわないと話も出来ないじゃん！」

そうやって追いかけ回して数分、チョッパ―を行き止まりまで追い込んだ。壁に背をつけてこちらを警戒するチョッパ―…だから食べないってば。

最初に見た時のちっこい姿に戻ってるから、警戒はされてるけどまだ話す余地はありそう。

「私はイリス、ただの女好きだよ。食べないから話をしようよ、何で喋ることが出来るのかとかさ」

「嘘じゃないだろうな、ただの女好きとか、怪しさしかないけど」

「大丈夫大丈夫、それにその時はさつき2人にしたように殴ればいいじゃん、私一人余裕でしょ」

「人間だろうと女を殴れるか！」

結構紳士的なトナカイだね…。

「ヒトヒトの実を食べたって？だから喋れるの？」

「…ドクトリーヌから聞いたのか？」

ドクトリーヌ？Dr. くれはの事だろうか。

私はチョッパの横で壁にもたれ掛かりながら片膝を立てるように座る。

「そうだ、おれはヒトヒトの実を食べたから喋ることが出来るんだ。…でもそれだけだ、トナカイでもないし人間でもないバケモノだよ」

「自分の事をバケモノ呼ばわり？」

「事実だ」

しゅんと俯いてしまった。やっぱり…知ってるんだよね、この子。

「まあ、チョッパーがバケモノだとかはどうでもいいんだけど、チョッパーって海賊に興味ある？」

「…!!ねエよバカ!!バカ!ねエよ!」

慌てすぎでしょ。うーむ、この反応からして興味あるのは間違いないし、しかもこんな個性的なキャラだ…もしかしたら麦わらの一味かもしれないね。

「何でこの城でDr. くれはの助手みたいな真似してるの？」

「みたいじゃなくて、その通りだよ、おれはドクトリーヌの助手だ。何でって言われれば……」

そこまで言っただけでまた顔を俯かせてしまった。

…これ、聞いちゃダメな質問だったか。

「ごめん、言いづらいなら…」

「……尊敬する人が亡くなって、その人の代わりにドクトリーヌがおれの面倒を見てくれているんだ」

「……そっか」

あんまり深くは聞かない方が良さそうだね。

うーん、一味に誘ってみるか。

「私達の仲間になってよ、またいつ誰かが病に倒れるかもわかんないし……チョッパが居てくれれば心強いんだけど」

「おれがお前らの仲間に!? バカ言え、おれはトナカイだぞ、人間なんかと一緒にいられるか!」

「でも、バケモノなんですよ? 私も船長も、何なら船員みんなバケモノだよ。女の子達はバケモノ染みて可愛いし、サンジやゾロは強すぎてバケモノだし、私とルフィは悪魔の実を食べてるからチョッパと同じバケモノ!……どう? トナカイだとか人間だとかどうでもいいでしょ?」

「お前も悪魔の実を食ったのか……でも、だめだ、おれは……」

自分に自信が無いんだろうな……チョッパからはそんな感じがする。

例えばチョッパの青つ鼻が生まれた時からの話ならば、それはトナカイとして通常では無いし……ヒトヒトの実を食べてからはトナカイでも人間でもなくなってしまうて

…差別でも受けてきたんだらうか。だとしたらチョツパーのこの態度も全て納得でき  
る。

「所でさ、チョツパー…話変えて申し訳ないんだけど…さつきから何か寒くない？」

実は部屋を出てからというもの、城内にいと云うのに外とあまり変わらない気温に戸惑ってたんだよねえ。

所々雪が積もってるし…いやおかしくない？ここ外じゃないよね？

「ああ、扉に雪スノウバード鳥の巣があるんだ、雛もいるから閉めれなくて…寒かったよな、ごめん」  
なるほど、閉めちゃったら巣が落ちるからか。

「それでこんな寒いのに我慢してるんだね。…バケモノって自分では言ってるけど、そんな優しいバケモノなら是非仲間に欲しいよ、ルフイも絶対そう言うと思う」

「……………!!!この臭いは…!!」

「えっ！ちよっ!!」

考え込むように帽子をギュツと押さえ込んだかと思うと、急にチョツパーはくんくん鼻を動かして走り出した。

完全な鹿状態に変形して走っておりかなりの速さだ。10倍で追いかけてるから振り切られはしないけど…。

「大変だよドクトリーヌ！」

思ってたより早くこの部屋に戻ってきたな。…あれ、ナミさんまた起きてる、熱が悪化したらどうするの！

それに残りの3人はどこ？特にミキータは？

「ドクトリーヌ、ワポルが…帰って来た！」

「……………、そうかい」

「……………ワポル？」

Dr. くれはははチョッパの報告を聞いて目を瞑り絞り出すように言ったが、私とナミさんはその名前に少しだけ聞き覚えがあり首を捻った。

「悪いね2人共、ちよつくら用事が出来たよ。…ガキンチョ、小娘をしつかり守ってやりな」

「…お前、さつきの返事だけど…やつぱりおれはここに残るよ、…誘ってくれて嬉しかった、じゃあ」

それだけ言つてチョッパーとDr. くれははは部屋を出て行った。

残された私とナミさんは何が何だか分からないと言つた風に…いや風じゃなくて分かつてないんだけど？いきなりどしたの？

「イリス、あんたもしかしてチョッパーをあのメンバーに誘つたの？」

「ナミさんもしかしてとんでもない勘違いしてない？『海賊』の仲間には誘つたよ？う



ん」

海賊のね。決してハーレムメンバーには誘ってないよ？私は女好きだからね。

「ワポルってあれじゃない？私が寝込んでる時に追っ払ったっていう海賊」

「ああ、鉄顎かあ！」

復活早いな、結構ボコボコにしたと思っただけど…手足くらい折っておくべきだったかな？

「仲のいい旧友との再会…って訳じゃ無さそうだったわね」

「そりゃ、あんないい人達が鉄顎の友なわけないじゃん。…って事は、敵？私行った方が  
良いのかな？」

でも、ナミさんを1人にはしたくないし…。

「さみイ！上着忘れて来た!!」

「あれ、ルフィ」

ナミさんを置いて行くのもなあ、と考えるとルフィが部屋に入ってきた。この部屋はまだあつたかいから上着を脱いでたのか…そりゃその格好で外出たら寒いでしょ。

「どうしたのルフィ、散歩？」

「ケンカ。デカ口がきてよ」

「ああ、なるほど、じゃあ任せるよ…あ、ついでにミキータを呼んできてくれる？」

「おうー」

自分の上着を羽織って走って出て行くルフィに手を振りベッドに座る。

ルフィが居るなら他2人も居るだろう、チョッパーも弱くは無さそうだしワポルは弱  
いから心配はいらないね。

私の目の届かない場所にいると心配なのは嫁のミキータくらいだし、彼女はルフィに  
呼んでもらったから懸念は無し！と。

「ミキータが来たら今の内に部屋から出ましょ、ドクトリーヌに見つかつたらまたなに  
言われるかわかんないもの」

「チョッパーさえ仲間になればそれで大丈夫だけど…一歩間違えれば死ぬ程の病気を  
患ってたんだよ？ゆっくりしとかなくていいの？」

「あんた、これ以上ビビを待たせて悲しませたいの？私はもう大丈夫、先を急がなきゃ  
ね。それにそのチョッパーが仲間になればいいだけでしょ、ルフィなら上手くやるわ  
よ」

納得は出来ないけど…確かにビビ王女が懸念してるアラバスタ王国反乱まで日が残  
されていないし…それどころかもう既に紛争が起こつてもおかしくないんだよね…。

「キャハハ、何の話かしら？」

ミキータが部屋にやってきて、私達の話に首を傾げる。

「ここから逃げるわよって話。…乗る?」

「ナミちゃんはまだ少し自分の体も大事にした方がいいわよ?」

ナミさんのセリフに今きたばかりのミキータも呆れがちである。

「ん?」

爆発音が聞こえて耳を澄ませる。

大砲か何かを撃って着弾した音だよ、しかも城の上の方。

その後、更にもう一回同じ音が上から聞こえてきた。

「なに?今の」

「わかんない、城が攻撃されてるのかな…?」

だとするならば、ここでのんびりしているのも危ないのかもしれないのか。

…うーん、でも外寒いからあんまりナミさんを出したくないだよ。

「…よし、じゃあとにかく今はこの部屋から、いや城から脱出してルフィ達の様子を見に行こう、こんな所に居ていつ天井が降ってくるかもわかんないし。ただし、ナミさんは厚着をしつかりよろしくね」

「ええ、ごめんねイリス、我儘なこと言って」

「嫁の我儘なら、出来るだけ聞くと、勿論ミキータも」

「キャハハハ、なら一刻も早くトナカイちゃんを仲間にしませう。そうしないとナミちゃんをここから解放できないのよね」

その通り、ナミさんをここから連れ出すには最低限医者が必要だ。ナミさんはいなくても出発したいって言うだろうけど…：こればかりはダメだ。

「そうと決まれば早いとこ出ましょ、大丈夫よイリス、あんたがいれば万が一ワポールと遭遇しても何とかなる…：でしょ？」

「うう、そうかもしれないけど凄く心配なんだから、私から絶対離れないでね」  
「当然っ」

そうして私達は、城からの脱出を試みる第一歩としてまずは部屋を出た。

さつきも言ったけどナミさんほもこもこダウンのような厚着をしてもらってるし、マフラーも装着、手袋も当然してる完全装備だ。寒さ対策は現状で最高の仕上がりである。

「まっはっは!!」

「げっ、いきなりかい」

部屋から出た途端、ワポールに見つかってしまった。

…：ていうか普通に城の中来てるし、セキュリティガバ過ぎじゃない？

### 37 『女好き、麦わらの一味、チヨツパー!』

「お前、見たことあるなア?あの時俺の事を散々コケにしてくれたガキじゃねエか?」

「そうだね、性懲りもなくどうしたの?」

「お前のせいで俺の顔は膨れあがってしまったんだぞ!どう責任を取るつもりだ!?王の顔だぞ!!」

何か騒いでるけど、あなたの顔は元々膨れてるから気にしなくてよくない?

…っていうか、王?海賊じゃないの?

「どうでもいいか。さ、早く行こうよナミさん、ミキータ」

「待てエい!お前ら一味だけは許さん!この国の法に則り処刑してくれるわア!!」

「は……法とか、そんなもんハナっから無視してるから私達はー」

飛び掛かりながらワポルが口を開く。あれにまともに食われてしまったらどうなるのかは分からないが……まあ、良くない事は何となくわかる。

でも、そもそも当たらなければどうという事は無いはずだ。

「くらえっ!バクバク工場!」  
ファクトリー

「海賊って、呼ばれてるんでしょッ!!!  
じゅうばいばい10倍灰・去柳薇ッ!!」  
さよなら

「んぐオ!？」

飛びかかるワポルの顎を下からアッパーで殴り飛ばす。

バクバクの実の能力なのかは知らないけど、あいつの顎って鉄だから殴ったこっちのが痛いかもしれない。

「イリス!後はおれがやる!!」

「うん、よろしくー……ってルフィ、服すごいボロボロになってるけどどうしたの?」

「大砲に当たった!」

「何でピンピンしてるのかは聞かないでおくよ、ルフィだし」

上着をボロボロにしたルフィが走ってきたのでワポルは彼に任せる事にした。別に今までの敵と違って私がワポルと戦う理由ないし…。

嫁に危害を加えるようなら何が何でも抵抗するけどね、拳で。

……いや冗談ではなく私の場合はガチだからね?」

「…ん?何この鍵」

チャリンと足に当たった鍵を拾う。

ワポルを殴った時に落としたのか?だとしたら宝物庫の鍵だったりしないかな?ナミさんにプレゼントしたら喜びそう!

「なぬっ!?!それは俺の『武器庫』の鍵じゃねエか!おのれ貴様……奥の手まで奪いやがっ

て…!!もう許さんぞ!奥の手はもう一つあるのだツ!!

「逃げた!待て!!」

逃げたワポルを追いかけてルファイが走っていった。

武器庫の鍵か…、いらないなあ。

「ナミさんいる?」

「宝物庫じゃないんでしょう?…うーん、でも貰っておくわ、何かの役に立つかもしれないし」

「もう慣れてはきたけど、敵が居るのにナミちゃんもイリスちゃんもあまり気にしないのね」

「はは、気にしても一緒よ、イリスが近くに居るんだから」

ナミさん、あんまり私を攻撃しないで、死ぬ。

「サンジ達は?外?」

「そうよ、チョップパーちゃんも居るわね」

なら、その近くに行こうか。ルファイは放っておいて大丈夫だ、ONE PIECEの主人公は伊達じゃない。

私達が城の外へ出ると、そこにはサンジとチョップパーがいた。

「お前は……」

「や、チョッパ―。どう？ 私達の仲間になる決意はした？」

「……何でお前達は、おれみたいな奴を誘うんだ」

「キヤハハハ、可愛いからじゃないかしら？ どうなのイリスちゃん」

「可愛いとか言うな！」

「可愛いのに、可愛いって言われるのは嫌なんだ。やっぱり男の子だからかな？ 私はカッコいいって言われても嬉しいけどね。」

「小娘、誰の許可を貰ってここに来たんだい？」

……あ、そういえばDr. くれはも居たのか。

……上手いこと誤魔化しておこう。

「えーつと、外の空気を吸いに……？」

「ほオ、死にかけてた病人がねエ？」

うぐ……心に刺さる、今私の胸には矢印が数本刺さったよ、ほんとに！

「そ、それはそうとイリスちゃん、中はどうなってるんだ？」

サンジ……！ そういうところ本当に良いと思う！ 優しいよね！

「ああ、今ルフィがワポルを追っかけてる所だよ、もしかしたらもう追いついたかも……あ、もう終わりそう」



「あー……」

ふと上を見上げれば、城の天辺にワポルの頭が突き出ていて、ルファイがそこまで歩いて行く所だったので指を差してサンジに伝える。

「どうやったらあんな頭だけ出る何て状況になるんだろうか……ルファイの戦闘って本当に奇想天外で先が読めないよ。」

「そう言ってる間にもルファイはワポルの顔の前に辿り着き、両腕を後ろに長く伸ばす。あれ、普段よりずっと伸びてるな……ワポルが結構タフだから正真正銘の全力で叩くつもりなんだろうね。」

「ドクトリーヌ……ドラム王国が……!」

「この国は……ドクロに敗けたのさ、ヒツヒツヒ」

「何のこつちや。」

「今回の件も裏では色々事情があったのかな? ワポルが王様の身分を隠して海賊をしていたのに関係があったりするのかもしれない。」

「ドガアンツ!!」

「うっわ……」

ルフィの「バズーカ」がワポルの飛び出た顔面に炸裂してその体を果てまで飛ばした。

…何か本当に、今回は何もせずに終わったな。

「こういうのもたまにはいいかも」

「何がよ」

「戦いをサボるってこと、ナミさん達と一緒に居られる時間が増えるし?」

へへ、と笑うとナミさんは大して否定もせずそうね、と頷いた。

…ダメだ、素直ナミさんに勝てる未来が見えない、どうやっても負ける…ッ!

「おーい、みんなー!!」

「あれ? ビビ王女! どうやってこの城に?」

ビビ王女だけではなく、その後ろにゾロやウソップの姿も見える。

…ゾロ、船の見張り役は? ん?

「ロープウェイを登ってきたの! …それで、ナミさんは無事!？」

ロープウェイあるんかい!!

「無事よ、もう大分良くなつたわ」

「良かった…」

軽く手をあげてアピールするナミさんにほっと胸を撫で下ろすビビ王女。

彼女が医者を探すって決断してくれたからこそこうしてナミさんを助けることが出来たんだし……頭が上がらないよ、とにかく嫁にしよう。

「おお！お前らも登ってきたんだな」

降りてきたルフィも近づいてきて、とりあえず一味集結つてとこかな。

「お前は城の天辺で何してたんだ？」

「王様をブツ飛ばしてたんだ」

「……じゃあ、やはりさっき空の彼方へ飛んで行ったのは、ワポル……!!」

あ、ドルトンも……それに村の人達も来てたのか。……って凄い傷だけど、大丈夫なの!?

あとロープウェイに何人乗ってきたの!?

「あとの2人はどうしたんだ!？」

「トナカイがブツ飛ばした。そうだつ！おい聞いてくれよウソップ、新しい仲間を見つけたんだ！」

「何っ!？」

あとの2人つてどこの2人よ。

ダメだ……話に全くついていけない。

「ん？チョッパはどこ行ったの？」

「あの子ならあそこよ」

ナミさんの指差す方を見れば、木の後ろに隠れてるチョッパ―がいた。

「いや、隠れてるといふか、出てるけどね。尾行とかでこつそり覗く時にする体勢だと思っただよ…逆だよチョッパ―、体の方が出てるよ。」

「な、何だあの変な生き物は!?!」

「トナカイ…? 違う…!!」

「ば、バケモノ…!」

チョッパ―の見た目ってバケモノ呼ばわりよりもまず可愛いねって感想が出てくると思っただけど…。

「バケモノだー!ーっ!!!」

ウソツプお前もか。

あ、チョッパ―逃げた。

「バカ野郎! おれが見つけた仲間ってあいつなんだぞ! ショック受けて逃げちまったじゃねエか!」

「なにイ!?! あれが!?!」

「待てよバケモノオ!!」

チョッパ―を追いかけて行ったルフイ。…いやあんたもバケモノ呼ばわりするんか

い。

「あそこまでルファイが頑なになったなら、チョッパーが仲間になるのも時間の問題だね、今夜くらいかな？」

「そうね、これでようやく出発出来そ……ん？」

「ハッピーかい？小娘、外の空気は存分に吸えただろう、早く部屋に戻んな!!」

ナミさんの肩をガシツと掴むDr. くれは。

……これは、無理やり逃げられそうにもないね……。

「お前達もだよ……人残らず病室へ入んなー！」

「は……はいっ！」

そんな感じでドルトン達と一緒に病室に連れていかれた私は、再度寝かされたナミさんのベッドに座っている。

ちなみに、村人の中ではドルトンが1番重傷だったのでナミさん同様ドルトンもベッドの中だ。

そうしてドルトン達の治療が粗方済み、空に月が昇る頃、不意にDr. くれはは気になることを口にした。

「ドルトン、この城の『武器庫』の鍵つてのはどこにあるんだい、知ってるね？」

「武器庫…何故あなたがそんなものを」

Dr. くればが武器を欲しがる姿は想像できないんだけど…。

どっちかっていうと、ナイフがあれば武器は事足りるよ、とか言ってみよう。

「どうしようとおたしの勝手さね」

「…あの鍵は昔からワポルが携帯していたので、ずっとそうなら…ワポルと一緒に空へ」

「なに、本当かい？困ったね…」

「あ、でもその鍵…むぐつ」

武器庫の鍵はナミさんが持ってた筈だ、そう思ってた口にした時、上半身を起こしたナミさんに後ろから口を押さえられる。

そのままぐいと引かれてナミさんのぽよんぽよんに頭が挟まった。……こういう時はほんと、身長低くて良かったって思う、低身長バンザイ。いややっぱり高身長になりたい。

「ドクトリーヌ？私の治療代なんだけど…タダに！それと、私を今すぐ退院させてくれない？」

「ん？そりや無理な頼みだとわかって言ってみただけかい、治療代はお前達の船の積荷とあり金全部。お前はあと2日ここで安静にして貰うよ」

なんか、ナミさんが考えてることわかったよ。

こういう交渉はやはりナミさんが一味の中で頭一つ抜けてるね。

「武器庫の鍵、必要なんでしょう？」

そう言つてナミさんはキラリと輝く鍵を指に引つ掛けて見せつける。まさかナミさんが持っているとは思わなかつたのかD r. くれはだけではなくドルトンも驚いていた。そりやそうだよね。

「本物なのかい!? どういうこつた……」

「色々あつたの」

ワポル殴つたら衝撃で落ちただけなんだけど。

「……ふ、このあたしに条件を突きつけるとは良い度胸だ、ホンツトに呆れた小娘だよお前は」

「ふふ」

悪戯が成功したみたいなお笑い声してる！ あー顔が見たい！ 絶対可愛い顔して笑つてるのに!!……でも、このポジシヨンは譲れない！ ぽよんぽよんは譲れない!!

「ガキンチヨは何変な顔してんだい。……ふう、いいだろう、治療代はいらないよ！」

チャリ、と鍵を受け取つてD r. くれはは背を向け部屋を出ようとする。

「ただし、それだけさ。もう一方の条件は呑めないね、医者として」

「ちよつと待つて！ それじゃ鍵は渡せないわよ、返して！」

「いいかい小娘」

Dr. くればは振り返ってナミさんをびしつと指差す。

「あたしはこれからちよつと下に用事があつて部屋を空けるよ。奥の部屋にあたしのコートが入つてるダンスがあるし別に誰を見張りにつけてる訳でもない。…いいね、決して逃げ出すんじゃないよ!!…お前達ちよつと来な、力仕事だ」

「は…はい!」

それだけ言うと、ドルトンの見舞いに部屋へ来ていた村人達を引き連れて出て行った。

………つまり、

「…コート着て今のうちに逃げだせつて言つてるね、ナミさん」

「そうみたい。…じゃ、行きましょ」

Dr. くればは…か。

医者として、それから人としても大きな人だったな。ドリーやブロギーとはまた違った大きさがあつて素直に尊敬してしまふ人柄だよな。

「おーーい、トナカイ〜っ!!!」



「お、ルフィまだチョッパー探してるんだね」

城の外にナミさんと出ると、ルフィはすぐ近くにいた。

みんなも周りに集まっててチョッパーさえ来れば直ぐに出発出来そうだ。

「ミキータ、チョッパーは来てくれそう？」

「キャハ、それが呼んでも出てこないのよ、海賊になりたくないって事も考えられるわね」

「うーん……」

それはないと思うけどなあ。だって興味津々だったし。

「トナカイ~~~~っ!!!」

「あっ」

誰かが声を上げる。

それは、チョッパーが私達の前に姿を見せたからだ。

「チョッパー！仲間になつてくれるの？」

「……無理だよ」

私の誘いに、声を落として拒絶する。

……これは、あれだね。私は引っ込んでおこう。

だってチョッパーは、自分を押し殺してる。

バケモノだって言われ続けてきた自分に負い目を感じて、一味に入るのを躊躇ってるんだ。

本当は海賊に興味があるのは間違いないし、今でも行きたいって顔してる、それでもチョッパーはそれが理由で頷くことが出来ない。

……なら、どうする？

そんなもの簡単だ。うちの船長は、こういう事に関してはとにかく凄いのだから。

「無理じゃねエさっ！楽しいのにつー！」

「おれは……お前達に感謝してるんだ！だっておれは……トナカイだ！角だって……蹄だってあるし……青っ鼻だし………!!!」

……………。

「そりゃ……海賊にはなりたいけどさ……！おれは“人間”の仲間でもないんだぞ！バケモノだし……!!おれなんかお前らの仲間にはなれねエよ……だから……お礼を言いにきたんだ!!……誘ってくれてありがとう……。おれは、ここに残るけど……！いつかまたさ、気が向いたら……」

「うるせエ!!!」

……あ、思い出した…。

「行こーうっ!!!」

チョッパーの心の傷を、叫びを、悲しみを、全てを吹き飛ばしてルフィはうるさいと叫んだ。

そんな事はどうでもいいんだと言うように、仲間になつてくれと純粹にチョッパーを欲した船長の言葉にー。

「お”お!!!」

ーチョッパーの、歓喜の雄叫びが響く。

## 38『女好き、三方六つぽよん攻撃』

「なあ、おれ達も別れの挨拶をしに行こう、医者のはあさんとドングリのおっさんに……」  
あの後、私達の仲間になる決意をしたチョッパーはDr. くれはに旅立ちの旨を伝えるに行った。

「ばかね、チョッパー一人にしてあげなさいよ、きつと涙のお別れになるんだからさ……ドクトリーヌも表向きああだけど、本当は心の優しい人なのよ」

確かに、遠回しにナミさんを見逃してくれた訳だし優しいのは間違いないよね。

「医者がついてきてくれるのなら、ナミさんの体の事も安心だわ」

「医者?!」

ビビ王女言葉にルファイが反応する。さてはルファイ……チョッパーが医者だと知らないな?

……そう、そのチョッパーだけど、彼はONE PIECEに登場する麦わらの一味の船医だった筈だ。

さっきの強引勧誘で思い出すことができた。……何たってあの場面、好きだったし。

「おれ達は本当にこのまま行くのか?」

「もちろんよ、チョツパーが来たら山を下りてすぐアラバスタへ出航するわ！」  
「そうか、じゃあロープウェイの準備をしよう、ルフィ手伝えよ」

ウソツプの問いにナミさんが答えてすぐさまロープウェイへ向かった。

…いや、ほんとにロープウェイがあるならそつちで登れば黒歴史あんなことしなくて済んだかも  
しれないのに…。

「何だ、城の中が騒がしいぞ」

「まあまあ、ゾロのいびき程じゃないよ」

「はっ倒すぞクソガキ！」

「はあ…まったくヤボなんだから…人の別れの夜にどうして静かにしてあげられないのかしら」

「だけど、本当に騒がしいな…。まさかワポルの仲間とかが城内に残ってて騒ぎになつてるとか…そんな事になってなきや良いんだけど。」

「あ、チョツパー来たよ！」

城の入り口を見れば、何故かトナカイ形態になつてはいるけどチョツパーがこちらへ走ってきていた。

「え、でも追われてない!？」

「どういうこと!？」

誰に：：！やっぱり、ワポルの残党が!？」

「おーいお前ら、ロープウェイ出す用意が：：」

「みんなそりに乗って！山を下りるぞオ!!」

「待ちなア!!!」

な、何でー!？」

ワポルの残党とかそんなんじゃないやなかったけど、D r. くれはが包丁を無数に投げながらチョッパーを追いかけていたのだ。

丁度準備を終わらせてくれたウソツップ達も面食らった顔してるよ。

「ナミさん！ビビ王女、ミキータもー!」

ぎゅ、と3人を上手く掴んでチョッパーの引くそりに乗り込む。

そんなに広くはないそりにかなりの人数が乗り込んだから、私はナミさんの膝の上に座らせてもらった。最高。

「くう、イリスちゃん、羨ましいぜ!」

「でしょー?でもナミさんは勿論、ビビ王女もミキータもあげないからね!」

「えつと：：どうして私までイリスさんのメンバーに：：?」

何か言ってるビビ王女はスルーしよう。

キスまでした仲じゃないですか！（無理矢理）

おっぱいも揉んだし!!（意識がない時に）

……あれ、私……人間の屑???

「うおう」

一段とそりが揺れたので何事かと周りを見れば、ロープウェイが渡るロープの上を  
チョッパーが走っていた。

……わあ、今夜は満月なんだ、ここならゆっくりお月見出来そう！足場ないけど！

そのままロープを渡りきり、山を下りる。

後はこのまま船へと戻るだけ何だけど……チョッパーはいいのかな？あまりいい別れ  
だったようには……。

ドン!!

「!!」

何？砲撃音!?

城の方から聞こえてきた音にチョッパーは足を止めていつもの姿になる。

「これ、砲撃……？まさか……また城で何か……!!」

「なら、早く戻らなきゃ!」

その後も何発とその砲撃音は響いたが、チヨツパーは戻ろうとはせず……ただ何かを堪えるように城を見上げていた。

「……………あ」

「奇麗……………」

その瞬間……私は、いや……私達はその余りの光景に言葉を失った。

辺りは暗闇に包まれ、満月の光だけが夜道を照らす今……城のあつた山の天辺が淡く光り輝く。

その光は淡いピンク色に染まり……それはそれは鮮やかな……

「桜だ……………」

ドラムロツキーを木に見立てた幻想的な夜桜を見て、チヨツパーは涙を流して吠える。

彼がこの桜に一体どのような想いを秘めているのかは知らない。けれど……この光景がチヨツパーを救ったのだと言うことは何となく私にもわかったのだった……。

後に語り継がれるこの“ヒルルクの桜”は、まだ名も無きその国の自由を告げる声となつて夜を舞う。

丁度この土地でおかしな国旗を掲げる国が誕生するのは、もう少し後の話……。



\*\*\*

その後、メリー号に乗り込み新たな仲間、チョツパーを加えた私達一行は島を覆い尽くさんばかりの巨大な桜を着にチョツパー歓迎会を開いていた。

「————なるほど、そういう事情がね」

「チョツパーちゃんにそんな事が…」

ちなみに今は普通に気になってたのでワポルとドラムの関係をチョツパーに聞いていたのだ。

というのもそんな難しい話ではなく、ワポルはもともあの国の王だったのだが…国がとある海賊に襲撃されて勝てないと分かった途端に一早く村人を捨てて逃げ出したのだとか。

…それは、何ともえげつない話だ。まあ、それはどちらかと言えばドルトンの事情。

チョツパーには6年前に師匠と呼べる男がいた。

その名も“Dr・ヒルルク”。つまり、先程の桜を作った人物こそがヒルルクなのだ。

彼はチョツパーに生きる希望を与え、夢を与え、場所を与えて優しさを教えた誇るべき医者であり、チョツパーにとっても大切な人だったそうだが訳あって亡くなってしまうらしい。

流石にその辺の事情を根掘り葉掘り聞くのはヤボだと思ふから私が尋ねるのはここまですておこう。

それはチョツパーが己と向き合つて乗り越えた過去なんだから、今更後の人間がどうこう言う話でもないだろう。

「…それで、チョツパーの事情は分かつたんだけど…」

私はチラツと横を見る。そこにはぐったり倒れてビビ王女に抱きしめられてるカールの姿があつた。

「カルー、あなたどうして川で凍つてたりしたの!？」

「クエクエ…クエ、グエ…」

私達がメリー号へ戻ると、何故か川で凍つてるカルーがいたのだ。

そりや、あんな寒い島の川に入ったりしたらああなるだろう、体がびっくりして心臓が止まらなかつたのが本当に救いだ。

「足でも滑らせたんだろ? ドジな奴だな、はははっ!」

夜桜の美しさには男勢も勝てなかったのか、それを肴に酒を飲んでいるせいでテンションの高いゾロが言う。笑い事ではないと思うんだけどね…。

「ゾロって奴が川で泳いでて居なくなつたから、大変だと思つて川へ飛び込んだら凍つちやつたつて」

「あんたのせいじゃないのよ!!!」

ゴン！とナミさんの拳骨がゾロの頭に落ちた。あれ、絶対痛い。

「いやでも、チョツパーってカルーの言葉わかるの?」

「おれは元々動物だから、動物とは話せるんだ」

それって凄くない? だつてチョツパーって医術も使えて、その上そんな芸当が出来るんでしょ?」

「凄いわチョツパー、医術に加えてそんな能力ちからもあるなんて!」

「:!!ば、バカヤローそんな褒められても、嬉しくねエよ! コノヤローが!」

ナミさんの言葉に踊りながら答えるチョツパー。しかも表情もめっちゃにやけてるし、隠す気のない喜びの舞になつてる。

「…あ、しまった! おれ慌てて飛び出して来たから医療道具忘れて来たつ!」

「え? それってこれのこと?」

舞から一転して慌て出したチョツパーに、そりに乗つてたりユックを見せる。

最初から乗ってたからチョッパーが乗せてたんじゃないの？

「お、おれのリュック！何で…!？」

「何でつて…チョッパーが旅の仕度したんじゃないの？」

「キャハハ、ドクターでしょ、結局チョッパーちゃんの考えてることはお見通しだったって事ね！」

そつか…Dr. くれはが予めそりに置いておいたのか…。

チョッパーを追いかければどう出るかも完全に把握してたって事だもんね、やつぱり母の愛つて凄いなだな…、母と言うにはちよつと年を取り過ぎてるから、どつちかと言えばお婆ちゃん…？

「う、何か寒気が…っ」

「じゃ、こつち来なさい」

わ、とナミさんに引つ張られて胸の中に入る。

「最近ナミちゃんばかりでするいわ、私も混ぜて？」

「ちよ、ちよつと…!」

その上ミキータが私を挟むように抱きしめて来たせいで左右の頬にあれなぼよんが4つ…。

「ビビは来なくていいの？」

「え!? あ、いや、私は、やめておくわね…うん」

顔を赤くしてキヨドリながら答えるビビ王女にナミさんがニヤリと笑う。

「それにしても不満そうよね? 王女様?」

「なっ、そ、そんなことないわ、私にはカルーがいるもの!」

「ふーん」

今度はミキータもニヤニヤ笑い出した。いや、2人共私の身にもなつてよ!! ……すっごい幸せです!!

「でもビビ、ちよつと寒いんじゃない? 私達は暖を取ってるだけよ? 何を気にしてるの?」

「…ぐ、ぐぐ…。ま、まあ? それなら? いいかもしれないわね! ね? カルー?」

「クエ……」

呆れた声のカルーだが、ビビ王女は自分だけで頷くとそのまま私に正面から抱きついて来た。あ、あかん…どこでもぼよんや…。

「それじゃあてめエら! ちゆうもーく!」

「お!」

ウソツプが笛を吹き、皆もそこに視線を集中させる。だけどそれは視線だけで相変わらずみんなはワイワイ騒ぎながらお酒や食べ物をおぼくぼく口にしていた。

「おれさ……」

「ここで、おれ達の新たな仲間！ “船医” トニートニー・チョツパーの乗船を祝い、改めて乾盃をしたいと思います!!」

「こんなに楽しいの、初めてだ！」

「新しい仲間に!!! 乾盃だアア!!!」

『カンパーイ!!!』

涙を少しだけ見せて笑うチョツパーを祝う声を張り上げて、今宵も船は海を渡る。

メリー号は今、最高速度で——砂の王国、アラバスタを目指している。

## 偉大なる航路（グランドライン）アラバスタ編

## 39 『女好き、オカマと遭遇する』

「英雄？<sup>ヒーロー</sup>クロコダイルはアラバスタの英雄なの!？」

気持ちの良い穏やかな風が吹き、暖かな春のような日差しの中改めてクロコダイル、そしてアラバスタの状況をみんな確認していた時に言ったビビ王女の言葉にナミさんが驚きの声を上げる。

「『王下七武海』っていうのはつまり、世界政府に雇われた海賊達の事。『七武海』が財宝目当てに海賊を潰すのも、『海軍』が正義の為に海賊を潰すのも国の人達にとつてのありがたさは変わらないって訳。結局町を襲う海賊達を追い払ってくれるんだもの」  
「確かに：：だけどその英雄が、実は自分達の住んでる国を乗っ取るうとしてるなんてみんな夢にも思っていないだろうね」

例えば私も、前世で警察とかが悪事を働けばええ：：つてなるし、そういう立場の人間が何かしら悪事に手を染めるつて事は想像しないからなあ。でも、立場が違うだけで同じ人間だし：：結局は警察だろうと何だろうとヤバい人はヤバいつて事だ。

「とにかくおめエクロコダイルをよ！ブツ飛ばしたらいいんだろ!？」

「ちよつと、クロコダイル倒すのは私だからね!？」

「イリスはアーロンやったじゃねエか!」

「ルフィはアーロン以外やったじゃん!!」

むぐぐ、と睨み合う私達をナミさんが手を叩いて止める。

結局、ジャンケンした結果ルフィがクロコダイルと戦う事になった。

……解せぬ、何故そこでチヨキを出すのルフィ……ルフィと言えばグーでしょ!!

「とにかく……まずは暴動を抑えて国からB・Wバロックワークスを追い出す事が出来れば……アラバスタは救われる」

「でもよ、そのB・Wバロックワークスって会社のシステムは一体どうなつてんだ?」Mr. “だ”ミス

“だ”っていうあれは?」

「キャハハ、それは私から説明するわね」

はい、と律儀に手を上げるミキータにみんなの視線が集まる。

流石元ミスの言葉は正確だろうからね。

「システムは簡単よ、まず頂点に社長ボス……クロコダイル、Mr. “0”がいて、彼の指令を直接受ける“エージェント”が12人と1匹いるのよ」

1匹……鳥か? ラッコか?

「彼らは全員『Mr. “十ナンバー”』の名を持っていて、その力に見合った女性の“エー



「ジェント」とペアを組むの。エージェントの中でも Mr. 5 以上…つまり元々の私の立場から上の人達は「オフィサーエージェント」と呼ばれていて、私も含めて殆どが悪魔の実の能力者…違うのはゴールデンウィークくらいよ、彼女は特別」

そう、なんたつて小さくて可愛いレアな少女なのだから！

「キャハ、イリスちゃんの考えてる事が手に取るように分かってきたわ…」

「それで、そのオフィサーエージェントとやらは何をするのが仕事なの？」

ナミさんの問いは私も気になっていた、今のところ抹殺とかそんな感じの任務に来た人しか知らないんだけど。

「オフィサーエージェントは本当に重要な任務の時しか動かないわ、基本暇なの。それ以下はフロンティアエージェント、社員を率いて」グランドライン「偉大なる航路」の入り口で会社の

資金集めをするのが仕事、これが秘密犯罪会社」バロックワークス「B・W」なのよ」

ふむ…だからウイスキーピークではあれだけのミリオンズ（フロンティアエージェントの部下）が居て賞金稼ぎをしていたのか…納得した。

「…ってことは間違いなく、B・W社最後の大仕事、アラバスタ王国乗っ取りとなれば…その、「オフィサーエージェント」って奴らの残りは全員…」

「集結する…」

ナミさんの言葉を私が繋ぐ。

そっかー…クロコダイルをやらないなら、その中の誰かで我慢するしかないのかー…。

「それなら話は早エ、要はアラバスタへ行けば俺達の倒すべき敵が大集合って訳じゃねエか」

「キャハハ、そうね、でも気を付けないと…Mr. 2から上は化け物揃いよ、3と2の間ではかなりの差があるわ」

「ま、何とかなるでしょ。ていうか、何とかするよ、このメンバーなら」

私がニツと笑つていうと、ミキータもふ、と笑つてそうよね、と言った。でも何だろう…私はその笑みに、少しの違和感を覚えたのだった。

「オイルフィ、俺がアラバスタまでの食料を溜め込んでた冷蔵庫に何も入ってなかったんだが…まさか食つてねエだろうな？」

「えっ!? く、食つてねエよ…?」

そんな彼女の違和感を気のせいだろうと振り払い、目を泳がせまくるルフィを見る。いつでも猪突猛進の我らが船長はウソが苦手なのだ。

「ウソつけ! 口に食べカスついてんぞ!」

「なにイ!?!」

「やつぱてめエじゃねエか!!」

サンジの引つ掛けに容易く掛かったルフィが蹴り飛ばされた。

その後、ルフィと一緒に食料盗み食いを働いていたウソップ、チョッパー、カルの面々も合わせて4人…いや2人と2匹?や、3人と1匹…???ま、まあそのメンバーで釣りでもして食材を手に入れろとサンジからの命令が下ったので、4人は揃って釣りをしている。カールが餌にされてるけど、いいのあれ?

ちなみにサンジは少ない食材でどうやりくりするか考えてくるとだけ言い残して厨房に籠ってしまった。本当に彼が居なきや死ぬよ私達。

「…んー?ねえナミさん、船の進行方向に何か煙があるんだけど、大丈夫?」

海から煙が出てくるのか、もくもくと視界を遮る煙が海上を広く漂っていた。このままではあの煙の中へ船が突っ込むことになるんだけど…。

「あれは大丈夫よ、何も無いわ、ただの蒸気」

「え、海から?」

「うん、ホットスポットよ」

ググリたい。でもこの世界にスマホは無いし…。

ナミるしかないか…、おっけーナミさん、ホットスポットって何?

「マグマが出来る場所のこと、あの下には“海底火山”があるのよ」

「ほえー、海底なのに……」

「そうよ、火山なんてむしろ地上より海底の方に沢山あるんだから。こうやってね、何千年何万年後この場所には新しい島が生まれるの」

「さっすがナミさん、可愛いだけじゃない！」

ナミさんがこう言うなら安心だ。

メリー号はそのまま直進して煙へと突入した。

「……ちよつと硫黄臭いし、ナミさんが見えないからここはやっぱりダメダメスポットだよ」

「我慢してよ、すぐ抜けるから」

我慢!? ナミさんを拝めない状況にどうして私が我慢しなくちゃいけないの!

「ぬぐぐ……あれ、ほんとにすぐ抜けた」

時間と言えば1分も無かったと思うけど、船は煙を抜け出した。

でもあそこはダメだ、ナミさんが見えない。ていうか煙で何も見えない。

「……オカマが釣れたぞ、ゾロ」

「あん? 何言つてやがる……は?」

煙から脱出した直後に、ルファイがぼつりと眩いた。

釣りとは関連付けするのが難しい言葉が聞こえたので私達は揃ってルフィの釣竿の先を見ると……。

「シィ〜〜まったア！あちしつたら、何出会い頭のカルガモに飛びついたりしてんのかしら!!」

「お、オカマだー!!?」

餌役のカルーに飛びついてるのは、白鳥のコートを身に纏った大柄なオカマ。バレエやってそう。

「あ、落ちた」

そのまま海に沈んでいくオカマを見捨ててはおけず、ゾロが海へ飛び込んで助けに行った。

ていうかどうしてカルーに飛びつくの…?常識がやばい。絶対ヤバイ人だよ。

\*\*\*

「いやーホントに、スワンズワン。見ず知らずの海賊さんに命を助けて貰うなんて…この御恩一生忘れません!…あと、温かいスープを一杯頂けるかしら?」

「ねエよ!」

船へ引き上げた早々に厚かましい人だな…。

「それよりよ、お前泳げねエんだな」

嬉しそうにルフィが笑う。それはカナヅチ仲間を見つけて喜んでる顔ですね？

「そうよう、あちしは悪魔の実を食べたのよう」

「悪魔の実!?!これまた凄い人拾ったね」

「キャハハハ、偉大なる航路グラランドラインの海賊だとそれほど珍しくもないわ、かくいう私もそうで

しよ?。」

まあ、確かに。

「…んー??なーんかあちし、あんたを何処かで見た事ある気がするのよーう」

「キャハハ、私はないわよ?流石にあなたを一度見て忘れるなんて無いと思うから」

まあ、ミキータは手配書もあるにはあるだろうし…それでだろうね。

「それで?どんな能力なの?」

「そうねい、じゃああちしの迎えの船が来るまで慌てても何だしい、余興代わりに見せて

あげるわ」

そう言つてオカマは立ち上がり、突然にルフィを“右手”で張り手した。ゴムだから

ダメージはないだろうけど、それなりの威力はあったのか後ろへ倒れる。

「ルフィ!てめエ、何を…、な、!?!」

ゾロが慌てて応戦しようと刀を抜いた時、オカマの顔を見て固まる。

は？え？あなた、そんな顔だったっけ!?

「そんな物騒な刀ものしまつてよーう！余興だつて言つたじやなーいのよーうっ!!」

「お、おれ!？」

「ルフィの顔にそっくり!？」

何と、オカマの顔がルフィに変わっていたのだ。いや、顔だけじゃないね…声も、体格も全部ルフィだ…。

「びびった!?がーっはっはっは!!左手で触れればホラ元通り、これがあちしの食べたマネマネの実」の能力よーう!!」

「す、スゲーーッーッ!!」

ルフィがはしゃいでるが、ぶっちゃけ私はその能力に驚いた。

…だつてこれ、どう考えても隠密スパイ的な能力だよな?しかもキャラすっごい濃し、多分ONE PIECEでも登場してたんじやないだろうか。

「まあ最も、さつきみたいに殴る必要性はないんだけどねーっ!」

ゾロ、ウソップ、チョッパーと顔に触れていき、オカマがナミさんの顔にも触れようとしたのでガシ、と止める。

「要するに、その右手で顔に触ればその人の顔になれるつて事でしょ?そんな能力で

ナミさんに触れるな、私の女なんだから」

「…それは、わるかったわねーい」

そう言つて手を引くオカマだが、私の見た目にそぐわない力に驚いているようだ。そりやそうだ、見た目はこんなだけと実際の力は大男よりあるんだから。

「さて…残念だけど、あちしの能力はこれ以上見せるわけに」

「お前すげー!!」

「もつとやれー!」

「さ〜〜ら〜〜に〜〜?」

ノリノリじゃん…。

ノせられたら調子に乗つて断れないタイプのおカマなんだつて事がわかったよ。

「メモリー機能つきいっ!過去に触れた顔は決して!忘れなくい」

カシャ、カシャ、と次々この場に居ない人の顔に切り替わつていくオカマの顔。その中の1人に変身した時ビビ王女が驚きの声を上げた。

「どしたの?ビビ王女」

「……いまー」

「どーうだったあ!?!あちしのかくし芸っ!普段人には決して見せないのよう!?!」

「イカスー!?!」



「うるさいな！話ができないでしょ！」

ルフィ、ウソップ、チョッパーの3人はかなりご機嫌なようで、そのオカマと肩を組んで踊り出した。

いやその人の事気に入らすぎ！

「キャハハ、オカマさん、何か船がこつちに来てるわ、あなたの船じゃないの？」

「アラ！もうお別れの時間!?残念ねい」

オカマはそう言つて私達に背を向け船端の手すりに立つ。

さつき落ちたばっかなんだからそういう場所に立つのはやめようよ。

「エー————ツ!!」

「悲しむんじゃないわよう、旅に別れは付き物！でもこれだけは忘れないで……。友情つてヤツア……。付き合つた時間とは関係ナツスイング!!」

振り返つてグツと親指を立てたオカマは、近づいて来た船に飛び乗つた。

白鳥の船首に、帆には「おかま道」と書かれたとんでもない船だったが彼にはびつたりな船だろう。

「ギア行くのよお前達つ!!」

「ハッ!! Mr. 2・ボン・クレール様!!!」

「……………は!!!?」

「Mr. 2!!!」

まさか、今のオカマが!!!?

…まずい、ルフィを含めたゾロ、ウソツプ、チョッパーは顔を触られてる…!どこで利用されてしまうのか分かったもんじゃやない…!!

……………でも、あのオカマ、根は悪く無さそうだったよね。調子狂うなあ、もう…。

## 40 『女好き、火拳のエース登場』

「あ、あいつがMr. 2…、ボン・クレー…!?」

「ビビ！お前顔知らなかったのか!?!」

ルフィがビビ王女に問うが、ビビ王女が突き詰めたかったのは会社のトップ…クロコダイルの正体だけ。つまりその下の構成員の情報についてはその際ついでで入手できた物ではないのだろう。

「ええ…私、Mr. 2とMr. 1ペアには会ったことがなかったの…能力も知らないし…!」

「確かに、それなら仕方ねエな」

ウソツップも納得した様に頷く。

「噂には聞いてたのに…Mr. 2は…、大柄のおカマでオカマ口調、白鳥のコートを愛用してて背中には『おかま道』<sup>ウエイ</sup>と…」

「気付けよ」

あかん、私もつい突っ込んだじゃった。

…ま、この際気付かなかったのは仕方がない、…ミキータもMr. 2は見覚えがな

いってさつき言ってたしね。

「さつき、あいつが見せた過去のメモリーの中に父の顔があったわ……あいつ一体、父の顔を使って何を……!?!」

「……さつき何か言おうとしたのはそれだったんだね、でも、そうなるとマズいよ、だって王女の父って事はアラバスタの王でしょ?」

「そんな人に成り代わられるって事は……それこそ反乱中の国を揺さぶりかねない何かを……!!」

「そりゃ、厄介な奴を取り逃しちまったな」

「ウソツプ、あいつ敵だったのか……?」

「チョツパーはMr. 2と仲良くなったもんね、あんまり飲み込めないトコもあるのかも……。」

「確かに……敵に回したら厄介な相手よ……!あいつがこれから私達を敵と認識しちやったら……!さつきのメモリーでこの中の誰かに化けられたりしたら、私達、仲間を信用できなくなる」

「キャハハハ!ナミちゃん、そこまで深刻に考える必要はないわ」

「え?」

「ニヤリ、と何か思い付いたような顔をするミキータに一味全員の視線が集まる。」

「誰かのマネをするってことは、知らない事はマネ出来ないってことよ！つまり…今私達は対策が打てるって事じゃない」

「な、なるほど…！ミキータあつたまいい！それで、その対策つて？」

「そうねえ…例えば体の何処かにマークを書いておいて、怪しいと感じたらすぐ見せ合おう…とか」

「でもそれじゃあよ、そのマークをあいつが見た時一緒にマネされちまうぜ？」

「そんなもん、包帯でも巻いて隠せばいいじゃねエか」

「…そっか、そうすれば二重の確認が出来る…！」

多分あまり考えずに言ったのだろうルフィの言葉にビビ王女が納得する。

だけどルフィの方法は確実だ。包帯の中にある印が私達の本当の印だけど、それを知らない人からはみんな同じ所に付けている包帯自体がMr. 2への対策だと考えるだろう。

そんな感じで決まり、これでMr. 2への対策はバッチリになったのだった。

でも、こうして先に出会わなければ彼の能力は危険極まりない物だったろう…。

\*\*\*

あれから1日、船は変わらず最高速度でアラバスタを目指しているのだが…何せ食料が無いのだ。どれだけサンジが上手くやっても無いものは無い。いつもの飯時も通常よりかなり少なめの物しか出なかった。

とはいえそこは流石サンジ、少ないとはいえ味はすつごく美味しいし、男性陣より何故か私達女性陣の方が量多かつたけど。

「メシ〜……にくう〜…」

だらん、と脱力しているのは我らが船長、ルフィである。

完全に自業自得とはいえ、彼がここまでやられているのは初めて見たかもしれない…。

「はあ、ルフィ、しつかりしてよ、ご飯ならもうすぐお腹いっぱい食べられるわよ?」

「本当か!!?肉か!!?」

「それは知らないけど…」

「と、言うことは、アラバスタの海域にでも入ったの?」

私がナミさんに尋ねると、そうよと頷いた。

ついにアラバスタかあ…ビビ王女みたいな可愛い王女様がいる国ってだけでも期待値MAXだよね!ほんと!

「後ろに見えるあれらもアラバスタが近い証拠だろ」

「あー……一杯居ますねエ……」

振り返るとそこには10隻を越える船がメリー号と同じくアラバスタへ向かおうと  
していた。

しかも全ての帆にB・Wバロックワークスのマークが入ってるし、先の話でも出ていた通り社員達がこの地へ集まろうとしているのだろう。

「あれは恐らく『ビリオンズ』！ オフィサーエージェントの部下達よ……」

「敵は200人は堅いつて訳だ……」

「それもB・Wバロックワークス社精鋭200人。ウイスキーピークの賞金稼ぎとは訳が違う！」  
「でも、あんなのに構ってる暇はない筈だよ」

「どれだけビリオンズとか言う集団が居ようが、私達は10人しかないのだ。本来の  
標的を見失う訳にはいかない。」

「そろそろ上陸だろ、しっかり締めとけ」

ギユ、と下手に解けないよう左腕の印の上に包帯を巻く。

「港が見えたぞー！」

「西の入江に泊めましょう、船を隠さなきゃ」

「何だかんだで私達は海賊だし、船が見つかることだ。」

「よしー！」

ルフィも包帯を巻き終え、ずい、と左腕を前に突き出す。

私もルフィの隣に立って同じく左腕を出し、みんなも円になって中心に向かうよう左腕を出す。

「とにかく、これから何が起こっても…左腕のこれが『仲間の印』だ!!…じゃあ、上陸するぞ!!」

そうして、私達はついにアラバスタへと上陸を果たしたのだった。

\*\*\*

アラバスタ 港町『ナノハナ』

「にーくーー!!メシーー!!」

「ちよっ!」

上陸した途端に走り去ったルフィに声をかけるも、今の彼を止められる筈もなく手は空を切る。仕方ない、無理だよあんなつたら。

「キャハ、流石キャプテンは猪突猛進ね」



「考えてないだけよ、あいつには自分が賞金首だつて事を自覚して欲しいのよね」

はあ、とナミさんがため息をつくが、ソロはほつとけと言った。そりやそうだ、仮に海軍に見つかったとしてもあの時のスモーカーでも出てこない限りはルフィをどうこう出来る筈もない。

「…待つて、あれは…！ Mr. 3の船!?あの船は確かドルドルの実際の能力にしてる筈…来てるんだわ、この国に…」

確かにあの時ルフィは彼をぶつ飛ばしたけど…その後どうなったのかまでは見てなかったからなあ。

「とにかく今は飯と…格好をどうにかしようぜ?おれ達が海賊とバレたら…まあそれは何とかなるかもしれないエが、王女はマズイだろ?」

「そうだね…ちよつとサンジ、悪いんだけどお使い頼まれてくれる?」

「いいとも、レディの頼みなら断れん!」

本当なら自分で行きたい所だけど…私も一応賞金首だからね。

「服と、私達のご飯をよろしくね、後はこれから砂漠を越える為の物資と…まあ内容は任せるよ」

「おお!行ってくる!」

ダッ、と走り出したサンジの顔は輝いていた。どうせ何か良からぬ事を考えているに

違くない。

—————  
—————

「つて思つてたけど最高だよサンジーンツ!!!」

「そうだろ!?!いやーみんな可愛いなあ♡」

帰ってきたサンジが手にしていた服をナミさんを含めた美女3人組が着た結果、それはもうどれくらい美しかった。

ちなみに今はナノハナの外れに隠れてます。

「でもこれ、庶民と言うより踊り子の衣装よ…?」

「キャハ、私は結構好きよ?似合う?イリスちゃん」

「バツチリーン!!!」

お腹を曝け出した踊り子の衣装…いい…、えっち!!!

「でも砂漠を歩くには…」

「疲れたらイリスに抱いて貰えばいいじゃない」

「いつでももうえるかむ」

ビビ王女だけが苦笑いではあるが、ナミさんとミキータは普通にノリノリだった。

私は特にこれと言って特徴のない服だった。サンジも流石に私をそういう対象には見てないって事か…いや、流石って何？幼児体型って事でしょ!!?ねえ!!

「ゾロはなんか盗賊というか…テロでも起こしそっすよだね」

「あん？」

肉を齧りながら睨んでくるゾロだけど、いやほんとにそんな感じの格好だもん。アラブって感じ。

「……、何なんだ？さっきから鼻が曲がりそっすよ……」

「そうか、トニー君は鼻が効きすぎるのね。「ナノハナ」は香水で有名な町なのよ、中には刺激の強いものもあるから……」

「これとか？」

シュツシュツと自分の体に香水をかけるナミさん。チョッパーが止めると叫んでるが、……う、いい匂いだ…しやぶりつきたい…!

「とにかく、これでアラバスタの砂漠を越える為の物資は揃った訳だ。ビビ、これから何処へ向かうって？」

「ええ…まず何よりも先に“反乱軍”を止めたいの！またいつ暴動を起こして無駄な血が流れるか分からない。その為にリーダーのいる“反乱軍”の本拠地…『ユバ』という

オアシスを目指すわ」

「行き方とか聞きたいけど、まずは隠れて！」

ビビ王女の手を引つ張つて壁際に寄せる。

「どうしたの!？」

「海軍が居た。…どうしてこの町に？」

それもえらい騒ぎ様だ、私達とは別の海賊でも現れたのか？

「キャハ、キャプテンが追われてるわよ？」

お前かー！ー！ー！つ。

みんな一斉にずるつと転げた。一昔前のコントじゃないんだから…。

「よう!!イリス!!」

「へっ!？」

しかもあろうことか追われてる最中に私を呼んでこちらへ走ってくるルフィ。

ちよつと、せめてマいてから来てよ!!

「しかもスモーカーがいるじゃん!!」

ああああ!!これだからフラグって怖いんだよ!回収したくないのだけ優先して回収

する世の中を許さない!

ダツシユで私達へ向かうルフィを追いかけるスモーカー。あの時の様にルフィを捕

縛しよう腕を煙に変えて飛ばした。

「陽炎!!」

「えっ!?!」

ルフィを捕まえる筈だった煙は、突如として現れた炎によって阻まれる。その炎を放った何たらハットつて帽子を被つてる男の体が炎の様に揺れている所を見るに…能力者か。

「誰なの…!?!あれ…」

「エース…!?!」

「し、知ってるの? ルフィ…」

「ああ、兄ちゃんだ」

主人公のご親族の方でしたかー!!!

「変わらねエな、ルフィ。コレじゃ話もできねエ、後で追うからお前ら逃げろ。こいつらは俺が止めといてやる、行けっ!」

「行くぞっ!」

急いで水と食料を掴み抱えて走る。

それにしてもまさか、ルフィの兄に会うとは…。

「みんな、船に戻って! 船で河から内陸に入るわ! そうすればその先は砂漠よ!」

「ここへ来たのは必要物資調達の為って訳か！とにかく急ごう、海軍が来てしまう！」

「船が見えた！乗り込んでイカリを上げよう！」

「…あ、カルー待って！」

同じく船へ乗ろうとしたカルーをビビ王女が止める。

「あなたにししか頼めない重要な仕事があるわ！このまま北のアルバーナへ先行して父にこの手紙を！これにはクロコダイルとB・Wバロックワークスの陰謀、イガラムと私が調べ上げた全てが記してあるわ。そして私が今生きてこのアラバスタに…心強い仲間と共に帰って来てるって事が。…出来る？一人で砂漠を越えなきゃ」

「クエ!!」

出来る、と頷くのでビビ王女もそれ以上は何も言わずカルーの首に新しい満杯に入った水樽を掛ける。

「いい？砂漠ではお水は大切に飲むのよ。…じゃあ父に伝えて！この国は救えるんだって！」

「クエツ!!」

そう言つてカルーは船に乗らずに北へ走つて行つた。今速攻で水飲んでたけど…大丈夫かな？カルー。

「それじゃあ私達も行こう、時間もないんだし！」

「ええ！」

ビビ王女が船に乗り込んだのを確認して、すぐに船を出した。

「……………」

「あれ、どうしたのミキータ？気分でも悪い？」

「え？…キヤハ、大丈夫よ、何でもないわ」

「……………」

何でもない様には見えないんだけど…詮索するのもね…。

でも恐らく、パロックワークス B・Wのオフィサーエージェントがここに集結するから緊張してると

かだろう。

「大丈夫よミキータ、オフィサーエージェントだろうがクロコダイルだろうが、あなたに手を出す様ならイリスが黙ってる筈ないでしょ？」

「…キヤハハ！そうね！」

そう言つて笑うミキータに、私もナミさんも目を合わせて笑い合つた。

「あ、そうダルフィ、何でさつきのエースつて兄ちゃんが偉大なる航路グランドラインに居るの？」

「海賊なんだ、ひとつなぎの大秘宝ピースを狙つてる」

兄弟だけどライバルって関係か、漫画でありそう。……漫画だった。

「エースはおれより3つ上だから3年早く島を出たんだ」

「しかし兄弟揃って悪魔の実を食っちゃまってるとは…」

「うん、おれもビビった、ははは」

「ん？」

サンジの言葉にルフィが笑いながら答える。ルフィも知らないのか…。つまりその3年間の間に食ったって事だよな。

「昔は何も食ってなかったからな、それでもおれは勝負して一回も勝ったことなかった」  
「る、ルフィが一度も!?強いんだね…さっきのエースって人」

「そーさ、負け負けだったおれなんか、だっはっはっは!!でもいまやったらおれが勝つね」

「お前が」

不意に声が聞こえたと思ったら、スタンとエースが船に乗り込んできた。

「誰に勝てるって?よう、ルフィ」

「エ〜〜ス〜〜っ!!」

うわ、こう間近で見たらこう…今まで感じた事のないような強者のオーラってのを感  
じるよ…多分戦っても勝てないよね…。勿論、美女の奪い合いなら勝てるよ?余裕。



「あーこいつアどうも皆さん、ウチの弟がいつもお世話に」

「や、まったく」

ペこりと頭を下げる。あれ、ゾロも下げてるじゃん…もしかして槍でも降る？

「とにかくア会えて良かった、俺アちよつとヤボ用でこの辺の海まで来てたんでな、お前に一目会つとこうと思つてよ。…ルフィお前、ウチの“白ひげ海賊団”に来ねエか？勿論仲間も一緒に」

「いやだ」

「プハハハ、だろうな、言つてみただけだ」

その白ひげつて言葉にウソツプが愕然とする。ごめん、私その辺の知識無いからついてけない。

「オイ、話なら中でしたらどうだ？茶でも出さずぜ」

「あーいや、いいんだお氣遣いなく。おれの用事は大した事ねエから…ホラ、お前にこれを渡したかつた」

そう言つてエースはぽい、とルフィに紙を投げた。

ルフィはそれを受け取つて首を傾げる。

エースはその紙がまた自分とルフィを引き合わせると言つて笑う。

「できの悪い弟を持つと…兄貴は心配なんだ。おめエらもコイツにや手工焼くだろうが

…よろしく頼むよ」

「そう思うならウチのクルーになれば？」

「だっはっはっは!!白ひげ海賊団の船員を引き抜こうって?ルフィ、おめエ結構面白エ仲間見つけたじゃねエか!」

「そーだろ!?!イリスだけじゃねエぞ、みんな凄エんだ!」

ルフィが大きく腕を広げて言う。とエースはニツと笑ってメリー号の横に付けていた自分の小舟に飛び降りた。

「もう行くのか!?!」

「ああ、俺は今『重罪人』を追ってる…。最近『黒ひげ』と名乗ってるらしいが、元々は白ひげ海賊団の二番隊隊員、俺の部下だ。海賊船で最悪の罪…奴は仲間殺しをして船から逃げた。隊長の俺が始末を付けなきゃならねエって訳だ」

…黒ひげ、エース…か。

……何か引つかかるな…。これは、何か前世の記憶が影響してるんだろうか。

「ルフィ、次に会う時は…海賊の高みだ」

そう言い残し、エースは去っていった。

どうでもいいとは思うけど乗ってた船カッコいいな。炎を動力源にして凄いスピードで動いてたし。

## 41 『女好き、砂漠の地を踏む』

「ルフィ、兄ちゃんから何貰ったの？まさか本当にただの紙？」

「さあ、わかんねエけどエースが持つてろつて言うんだから持つてるんだ、おれは！だからしつかり縫い付けてくれよ！」

「はいはい…出来たわよ、どうぞ」

テキパキと麦わら帽子のリボンの裏に紙きれを縫い付けるナミさん。くうー、前も思ってたけどやっぱりこういうところも素敵だ！

「ルフィさん、これを着て」

「え、何でだよ、暑いじゃねエか」

ビビ王女がルフィに服を渡す。分厚くはないが、肌は目一杯覆い隠せる様になっている。

「暑いから着るの。砂漠では日中50℃を越えるんだから肌を出していると火傷しちゃうわ」

「何で、おめエら涼しそうじゃん」

「私達だつて上からちゃんと着るわよ」

「勿体ないけど、火傷なんかにさせる訳にはいかないし…仕方ないか」

3人の潤いボディに傷を付ける訳にはいかない!!

\*\*\*

「ついでぞ！ユバー…いやー、なんもねエな、ここは！」

到着して早タルファイが辺りを見渡して笑うが、うーん、何も無いと言うよりは、あつたけど砂嵐か何かの災害に見舞われて住めなくなつた…つて感じかな。砂に埋もれた家がそこら中にあるよ。

「違うのルフイさん、ここはまだユバじゃないわ。ここから半日北西に砂漠を歩かなきゃ」

「半日かあ」

そこそこの距離歩くんだね…ウソツプとか大丈夫？あ、いや大丈夫じゃないみたい、泣いてた。

「ここは『緑の町エルマル』よ」

「緑の町？緑なんかどこにもねエぞ!？」

「…ええ、今はね…!」

やっぱり、何かあったんだろうね。

この先一面砂漠だし…砂嵐が頻繁に起きるのかも。

「うおーっ、何だこりゃあ、カメか!?アザラシか!?!」

ウソップの声に振り向くと、メリー号を泊めてある河から何かよくわからないカメの甲羅を背負ったアザラシみたいな動物が出てきた。

「クンフージュゴン!だめよみんな、手を出したら…!」

「え、ごめん、何か殴りかかってきたから倒しちゃった」

倒れたクンフージュゴンとやらは、次にむくりと起き上がると私の前で押忍、と頭を下げる。空手家かよ。…クンフーだったね。

「勝負に敗けたら弟子入りするのがクンフージュゴンの掟なの!」

「ちよつと、私も狙われてるんだけど!」

「おんのれエ!ナミさんに手を出すなア!!!」

「イリスさん!!」

ナミさんに勝負を仕掛けようとしたクンフージュゴンを蹴散らし、ふん、と鼻を鳴らす。

「次ナミさん狙ったやつ…粉微塵ね」

「く…クオ…」

びくびくと頷くクンフージュゴンに満足して私もうんうんと頷いた。

「ちなみに私に弟子入りがどうか言う奴も粉微塵」

これにもこくこく頷いてくれたからよしとしよう。

…クンフージュゴンって、ほんとこの世界の動物は分からないよ。

「まさかクンフージュゴンがそんな簡単に弟子入りを諦めるなんて…」

「女関係でイリスを怒らせるとヤベエって気付いたんだろ、中々聡いじゃねエか」

「うん、『この人ヤバイ』ってみんな言ってた」

チョッパーもそう言ってる。確かに見た目は愛らしいけど、ナミさんに手を出そうとした時点で万死に値するからね、仕方ないね。

「しかしこの国のジユゴンは変わってんなアビビちゃん、河に住んでた」

「…うん、海よ」

「？」

サンジの問いにそう答えるビビ王女だが、…私達は内陸からここへ来た筈だけど…？

「太古の昔からこの国をずっと潤してきた大いなる河「サンドラ」も、近年ではかつての勢いを失って下流に海の浸食を受けているの」

「…じゃあさっきのジユゴン達のいた辺りの河は…」

「海水よ、飲み水にも畑にも使えない水」

「それで枯れたのか？この町は…」

ゾロがそう言うが、それだけで1つの町が枯れるとは思えない。

「…いいえ、稀に降る雨水を確実に貯える事で町は何とか保つていたわ。つい最近までこの辺りは緑一杯の活気ある町だった」

「ハハ」が…」

再度周りを見渡してみても、そうは見えない。

遠い昔に人が寄り付かなくなつて…時間と共に砂に吞まれて行つた、という風に見えるこの光景も、最近までは想像もつかないくらいに豊かだったのか…。

「だけど、ここ3年この国のあらゆる土地では一滴の雨さえ降らなくなつてしまつた…」  
「さっきの港町は大丈夫だったの？」

「『ナノハナ』は隣町のカトレアというオアシスから水を供給してるから無事なの…。降雨ゼロなんてアラバスタでも過去数千年あり得なかつた大事件…だけどそんな中1カ所だけいつもより多く雨の降る土地があつたの。それが首都『アルバーナ』、王の住む宮殿のある町」

「アルバーナ…」

「人々はそれを『王の奇跡』と呼んだ。——あの日事件が起きるまではね…」

ビビ王女の話では、2年前に運び屋が王の元へとある物を運び込もうと荷車を引いて

町を歩いていた時、荷物の重さにバランスを崩して転倒してしまったのだと。

しかし問題はそこではなく、その際に崩れた荷物から出てきた「ダンスパウダー」と呼ばれる緑色の粉が反乱の始まりだった。

「ダンスパウダーって？」

とりあえず横にいたナミさんに尋ねる。

「ダンスパウダー、別名は……『雨を呼ぶ粉』。昔どこかの雨が降らない国の研究者が造り出した代物でね、その粉から霧状の煙を発生させて空に立ち上がらせる事で、空にある雲の氷粒の成長を促して降水させるの。つまり、人工的に雨を降らす事ができる粉よ」

「凄いいじゃん、何でその便利粉が反乱の始まりなの？」

「便利なのは最初だけよ。『ダンスパウダー』を開発した国もその名の通り踊る様に喜んだと云うわ……だけど、それには大きな落とし穴があったの。それが——風下にある隣国の『干ばつ』、……わかる？」

なるほど、……不思議粉か。

「わかってなさそうだから言うけど、人工降雨はつまり……まだ雨を降らすまでに至らない雲を成長させ雨を落とすと言う物だから、時間が経てば隣国に自然に降る筈の雨を奪ってしまうって訳よ。それに気付いたその国は戦争を始め、沢山の命を奪う結果に



なった…。以来世界政府ではダンスパウダー製造・所持を世界的に禁止してるの」

要は、その粉を使うと自分達はハッピーだけどその周辺の国が痛い思いをするのか。

…よりもよつてその粉が運ばれた時は、王の住む町以外は全く雨が降らなかつたそうだし…民衆は王を疑うしかないと言う訳だ。

今回のクロコダイルとかいうワニ敵…頭も相当キレるのだろう。

「…今思えば、その時既にクロコダイルの壮大な作戦は始まつていたの。当然父にはさつぱり身に憶えのない事件だったけど…畳み掛ける様に知らぬ間に宮殿には大量の『ダンスパウダー』が運び込まれていた」

「じじ…」

ミキータが視線を落とす。彼女は彼女なりに思うところがあるのだろう。

「全てはクロコダイルの仕組んだ罠…！彼の迷惑通り…反乱は起きた！！町が枯れ、人が飢えて、その怒りを背負った反乱軍が無実の『国』と戦い殺し合う…！！国の平和も、王家の信頼も…雨も！町も、そして人の命までも奪つてこの国を狂わせた張本人がクロコダイルなの…！！…なぜあいつにそんなことをする権利があるの…！！？」

「……………ふんす」

ぐるぐると腕を回して近くの崩れた建物の前に立つ。

「…私は！！あの男を許さないっ！！！」

「よッ!!」

ドゴオオソツツ!!という爆音と共に、私の前の建物が更に瓦礫と化した。それは勿論、私が思い切り殴ったからだが。

隣を見ると、ルフィとウソツプ、サンジも同じように建物に当たってた。…なんだ、私だけじゃなかったのか。…この、内から湧いてくる衝動は。

「イリス…あんた一体何を…!」

「早く先へ進もう、ムカムカしてきた」

まだまだ、私が見た『アラバスタ』はほんの序の口でしかないというのに…ビビ王女はこうも心を痛めている。

…それを作ったクロコダイルを…、そしてその組織、バロツクワークス B・Wを、許せるか?

無理でしょ!!!私の嫁(になる予定)のビビ王女を、傷付けてんじやないってのオ!!!!

—————  
—————

「ア—————」

「おー…これはなかなか」

すぐにユバ目指して歩き出した私達は、上空から降り注ぐ容赦のない熱気にやられていた。

とは言つても私はそうでもないが。

「アー…焼ける…」

「あんまりアーアー言わないでよルファイ！余計ダレちゃうじゃない…」

「ナミさん…後で抱きしめていい？」

「いいけど…なんで？」

そりゃ、汗だくナミさんを堪能したいからだよ。ははは。

「ビビちゃんといリスちゃんはあんまり応えてねエみてエだな」

「…私はこの国で育ったから多少は平気なの」

「私は能力で暑さ耐性上げてるから全然平気」

「なにつ!？」

ぐいつ、とルファイの首が私に向けられる。

「ずるいぞイリス！おれにもしてくれ!!」

「残念、私にしかできませーん」

チョツパーのいた島がめつちや寒かったから生み出した倍加だけど…本当にこの能力何でも出来るな。暑さや寒さに対する耐性とかいう臚げな物すら私が認識すれば倍

になるし。

「暑いつてのもそうだが…この坂の多さは何だ、山登りでもしてるみてエだぜ」

「ここは歴史の古い砂漠だから、大きいものでは300メートルを越える砂丘もあるの」

300つて…山じゃん。

「サンジ、弁当食おう！」

「まだダメだ、ビビちゃんの許しが出るまではな」

「ビビ！弁当食おう、力が出ねエよ」

「だけどもまだ『ユバ』まで4分の1くらいしか進んでないわルフィさん」

暑さでみんな体力持ってかれてるからな…。

ルフィもよくここで弁当食べようと思ったよね、暑さを感じないとはいえ岩場も無い  
とこで食おうとは思わないよ。

「ばかだなーお前、こういうことわざがあるんだぞ？『腹が減ったら食うんだ』」

「どこがことわざだよ、ただの我慢できない人だよ」

「ふふ…わかった、じゃあ次に岩場を見つけたら休憩と言う事はどう？」

訳の分からないことわざを作り出したルフィ。相当参ってるんだろうけどビビ王女の  
言った岩場で休憩という言葉聞いて少し持ち直した様だ。

その後、みんなして暑さにやられてる中私だけ何もないのは不公平だとルフィやウ

ソップからの声があり、まあ確かに1人だけ楽し過ぎてるかな、と思つてたのでみんなの荷物を引き受ける事になった。

「お前それ何キロあると思つてんだ：軽そうに持ちやがつて」

「倍加様様だよ、ウソップも持つてみる？」

「ふざけんな殺す気か！」

そこまでなのか…。

…ん？視力倍加を使つてるから見えてるんだけど、前方に岩場もあるね。

「みんなー！もうちょっと歩けば前に岩場あるよー」

「ほんとかつ?!休憩タイムだー！ーっ!!」

「速エな！」

ドヒュン！と煙を残して走つて行つたルフィにウソップがツツコむ。

でも、やつと休憩か…。いくら能力を使つてるとはいえ、疲れるものは疲れるんだよね…。

そうしてルフィに続き岩場に辿り着いた私達は、早速弁当を食べる事にした。

「ゴア…」

「ん？」

何か周りに大怪我してる鳥がいっぱい居た。何かに襲われたのか？

「駄目よイリスさん、その鳥はワルサギ。旅人をダメにして荷物を盗む砂漠の盗賊なの」  
「へえ、危うく騙されるとこだったよ、ありがとビビ王女」

それにしてもこのワルサギ達、バレてると思つてないからかずっと演技を続けてる。

…このまま放置してたら本当に死んじやいそうだな。

「ああ!!?おれの水返せよお前エ!!」

「今の話聞いてた!?!」

その直後に荷物を取られたルフィが、逃げるワルサギを追つて走つて行つた…。根が真つ直ぐだからルフィを騙すのは簡単だけど…ルフィもルフィでもうちよつと用心しようよ…。

「うううわああ〜っ!!!」

と思つたら速攻で戻つてきたけど…、うわ、何か凄いでかいトカゲ恐竜みたいなやつに追われてる。

「サンドラ大トカゲ!」

「…隣でラクダも走つてるってのはひとまず置いとくか…」

「つたく、どういう星の下に生まれればこうトラブルを呼び込めるんだ」

「仕方ないよ、ルフィだもん」

というわけで早速この大トカゲを処理しちゃおう!

「ゴムゴムの……！」

「龍……」

「エポール肩肉……!!」

「じゅうばいばい10倍灰」

『「巻き」 ムチ」 シュート」  
 ” 去柳薇さよなら!!!』

ドオオオンツ!!と、無慈悲な攻撃がトカゲに炸裂する。

遠巻きに眺めてたナミさんやミキータ達にガッツポーズを送ると、揃って呆れ顔を返された。……何で？

## 4 2 『女好き、決まる目的、目指すは鰐』

「ローで…何なんだこのラクダは」

大トカゲを倒した後、サンジが捌いて調理した肉を頬張りながらゾロが言う。

「シア…さっきの鳥を追ってたらよ、あいつら飛んで逃げやがって。そしたら前からコイツがトカゲに追われて走ってきたんでとりあえずおれも走ったんだ」

「でもそのラクダ、ちゃんと鞍が付いてるから野生じゃないよね」

「そうね、2人は乗れそう」

「じゃ、まずおれが…」

よいしょ、とルフィがよじ登ろうとした時、ラクダはルフィの頭に噛みつき抵抗した。

チヨッパーによれば、『助けてくれてありがとう、乗つけてやってもいいが俺は男は乗せねエ派だ』と言ってるらしい。

「誰が乗る？」

「キャハ、私はまだ大丈夫よ、ナミちゃんとビビでいいんじゃない？イリスちゃんをどっちかが膝に乗せれば3人乗れるでしょ」

「ほんとにいいのね？…それで？この子、名前何て呼んだらいいの？」



「マツゲ長いからマツゲでいいでしょ、じゃ、いこ」

そんな感じで適当に決めてラクダに乗り込む。

ナミさんが手綱を握ってるから、私はビビ王女の膝の上だ。身長的に頭を預けると胸に当たって最高です。ネフェルタリ最高。

そうして私達は楽々ユバまでたどり着く事が出来たが、到着した頃には既に夜だった。

夜になると昼とは違って氷点下を下回りかなりの寒さとなっている。勿論私は寒さ耐性を倍加しているので何も問題はない。

「…町の様子がおかしい…!」

「…様子と言うか…この地響き…!砂嵐!!町が砂嵐に襲われてるよ!」

「っ!!」

更に近くまで行けば、その砂嵐の規模がどれ程の物かを実感できた。

町一つ程度なら容易く呑み込めるだろう巨大な砂嵐は、瞬く間にユバ全体を覆い尽くし…やがて、去って行った。

「そんな…」

マツゲから降りてよろよろと砂嵐が去った後のユバに足を踏み入れるビビ王女。呆

然と立ち尽くすビビ王女にかける言葉が見つからず、私はきゅ、と唇を噛み締めた。

「こりやひでエ……あのエルマルって町と大して変わんねエぞ……！」

「ここはオアシスじゃねエのかよビビちゃん……！」

「砂で地層が上がったんだ……オアシスが飲み込まれてる……！」

いくらオアシスとは言えども、あれ程の規模の砂嵐が……そう、例えばビビ王女がこの国を離れて何度も起こっていたとなれば……。

「旅の人かね……、砂漠の旅は疲れただろう。すまん……この町は少々枯れている……」

「誰……？」

不意に声がした方へ目を向ければ、そこにはスコップを手に砂を掘り起こしている爺さんの姿があった。

「何も無いが、宿だけならいくらでもある。ゆっくり休んで行くといい」

「あ、あの……この町には反乱軍が居ると聞いてきたんですが……」

「……反乱軍に何の用だね……？ 貴様等、まさか反乱軍に入りたいなんて輩じゃあるまいな……！」

「わっ……！」

ビビ王女がそう言った途端、顔色を変えて手当たり次第物を投げてきた。

「あのバカ共なら……もうこの町には居ないぞ……!!」

「な、何——っ?!? そんな……!」

誰かが叫ぶが、思いはみな同じ。反乱軍のリーダーに用があつてここまで来たと言うのに……居ないとなればユバに来た意味が無くなつてしまふ……!

「たつた今……この町に砂嵐が来たが今に始まつた事じゃない。3年前からの日照り続きで砂は乾き切つて、この町は頻繁に砂嵐に襲われる様になつた……! 少しずつ少しずつ蝕まれて……過去のオアシスも今じゃこの有様さ。物資の流通も無くなつたこの町では反乱の持久戦もままならないで反乱軍は『カトレア』に本拠地を移したんだ……」

「か、カトレア!!?」

カトレアと言えば、昼にビビ王女が言つてたナノハナの隣町にあるオアシスじゃあ……!

「どこだビビ! それ近いのか!？」

「……! ナノハナの隣町にあるオアシスよ」

「ナノハナ!?! おいそれじゃあ何のためにここまで」

「ビビ……!?! 今ビビと……!?!」

あ、そうだ、ビビ王女はアラバスタの王女なんだから……迂闊に名前を出せば……!!

「あ、あの……私はその」

「生きてたのか……! よかつた……!! 私だよ! わからないか!?!……無理もないな、少し痩せた

から……」

「……！！トトおじさん……！！？」

トトおじさん？

それにビビ王女と顔見知りだったのかこの爺さん。もしかしてお偉いさんか？

トトおじさんはビビ王女の肩をガシツと掴む。その目からは涙を流し、まるで気持ち  
を訴えてるかのようだった。

「私はねビビちゃん……！国王様を信じてるよ……！！あの人は決して国を裏切る様な人じゃ  
ない……！そうだろう！！？反乱なんてバカげてる……！あの反乱軍を……頼む！！止めてくれ！！  
もう君しか居ないんだ！！」

「おじさん……！」

「高々3年雨が降らないから何だ……！私は国王様を信じてる……！まだまだ国民の大半は  
そうさ……！何度も何度も止めたんだ！だが、何を言っても反乱は止まらない……反乱軍の  
体力ももう限界だよ……。次の攻撃で決着をつけるハラさ、もう追い詰められてるんだ……  
！死ぬ気なんだ！！頼むビビちゃん……あのバカ共を止めてくれ！！」

……。

ビビ王女は、きつとこう言うだろう。

「トトおじさん、心配しないで」

ほら。

「反乱はきつと止めるから!!」

「ああ、ありがとう……!!」

そう言つて笑うのだろう。彼女はそういう人間だ。

トトという人に心配をかけないように、1番不安に思つてるビビ王女が気持ちを押し殺して何もかもを背負おうとしてる。

…そしてその事は私だけじゃない…ルファイも気付いてる。

「ルファイ…気付いてる?」

「……ああ」

小声でルファイに尋ねると、彼は小声でコクリと頷いた。

その日は、そうした思いを抱えながらユバの宿で夜を過ごした。

何もかもを背負おうとしてるビビ王女を…どうすれば救えるのかを考えながら。

\*\*\*

「……………ん、……………あれ、ここは…？」

……………？確か私は、宿のベッドで寝ていた筈なんだけど……………どこ……………ここ……………真つ暗だ…。  
いきなりの事で処理が追いつかないが、目を覚ますと辺りが暗闇に包まれた空間に私  
は居た。

「夢、かな？」

『そう、夢』

「うわっ！」

いきなり耳元で囁かれてビクツと震える。

あのね、私は幽霊とかの類に耐性はあるけど、それは流石にびっくりするから!!

「誰っ!？」

『それは、あなたが一番よく知っている』

何…？

『気持ちを押し殺す。…あなたも同じ』

「何訳の分からない事言ってるの？それより、ここつて本当に夢？妙に意識がハッキリ  
してるというか…」

『……………、夢だけど、夢じゃない。ここは……………』

「え……………」

大事な所が聞こえる前に、私の意識は途絶えた。

\*\*\*

「昨日はすまんねびじちゃん、とんだ醜態を見せた…」

次の日の朝、私達はトトに見送られながら来た道を戻りカトレアへ向かおうとしていた。何だろ…変な夢見た気がするんだけど…、まあ、いいか。

「ううん、そんな事…。それじゃ、私達は行くわ…」

「ああ…。ルフィ君、これを持って行きなさい…」

「ん？うわつ、水じゃん！出たのか!？」

「昨夜君が眠った直後にね。湿った地層までたどり着いたんだ。何とかそいつを蒸留して絞り出した」

「おおーっ!!なんか難しいけどありがとう、大切に飲むよ！」

ルフィはワルサギに荷物取られてるから、自分の水が無いんだよね…。

じゃ、と手を振ってユバを出す。

そのまま少し歩くと、ルフィは急にどか、と座って難しい顔をした。

「…ルフィ?」

「やめた」

『は!!?』

一味の声が重なった。

…ルフィ、何か思い付いたのかな? ビビ王女を助ける方法を。

「ッやめたッ つて…!!? ルフィさん、どういうこと!?!」

「おいルフィ、こんなところでお前の気まぐれに付き合ってるヒマはねエんだぞ! さア立て!」

「戻るんだろ」

「そうだよ、昨日来た道に戻ってカトレアって町で反乱軍を止めなきゃお前、この国の100万の人間が激突してえれエ事態になっちまうんだぞ! ビビちゃんの為だ! さア行くぞ!」

「つまんねエ」

「何を!?! コラア!!」

ルフィの態度にナミさんやミキータは首を傾げる。サンジは案の定騒いでるが…ルフィは人の気持ちも考えないような奴じゃない。大丈夫だ。



「ビビ…おれ達はクロコダイルをぶっ飛ばしてエンだよ！」

「!!」

今おれ達つて言った？あれ絶対私の事入れたよね。ほんとそういうとこ船長流石尊敬します。

「反乱してる奴らを止めたらよ…クロコダイルは止まるのか？その町へ着いてもおれ達は何もすることはねエ、海賊だからな、いねエ方がいくらいだ」

「……………」

ナミさんが「え…こいつルフィよね…？」みたいな顔で見てる。ミキータもびつくりしてるけど、そうだよルフィはたまに核心つく人だよ。

だからみんな着いてくるんでしょ？

「それは…」

「お前はこの戦いで、誰も死ななきやいって思ってるんだ！国の奴らも、おれ達もみんな！」

「…………!!」

「『七武海』の海賊が相手で、もう100万人も暴れ出してる戦いなのに…みんな無事なら良いと思ってるんだ。…甘いんじゃないか」

「何がいけないの!?人が死ななきやいと思ってる何が悪いの!?」

「人は死ぬぞ」

その言葉にビビ王女は我慢出来ずルフィを殴り飛ばす。

「やめてよ！そんな言い方するの！！今度言ったら許さないわ！今それを止めようとしてるんじゃない！！反乱軍も！国王軍も！！この国の人達は誰も悪くないのに！！何故誰かが死ななきゃならないの！？悪いのは全部クロコダイルなのに！！」

「じゃあ何でお前は命賭けてんだ！！」

バキ、とルフィがビビ王女を殴り返す。

「…………ツ」

握り締めた拳から、噛み締めた唇から血が流れる。

私は、私が許さないと思っていた事を黙認しているのだ。…こうするしかビビ王女を救えない自分の不甲斐なさ…結局ルフィに頼ってる弱さを情けなく思うから…。

「…………大丈夫よ」

「……」

そんな私をナミさんが後ろから抱きしめてくれた。

……正妻とかそんなの関係なしに…ナミさんって何か包容力あるよね……濁ってた心が浄化されそう。

「この国を見りゃ、一番にやんなきゃいけねエ事くらいおれにだって分かるぞ！！」

「何よ!!」

ビビ王女はすぐに起き上がってルフィに馬乗りになり顔を何度も何度も叩く。

「お前何かの命一個で賭け足りるもんか!!」

「じゃあ一体何を賭けたらいいのよ!!!他に賭けられる物なんて私、何も!!!」

「おれ達の命くらい一緒に賭けてみる!!仲間だろうが!!!」

「!!!?」

そんなルフィの言葉に…態度に、ビビ王女は涙を流す。

「何だ、出るんじゃねエか…涙。本当はお前が一番悔しくてあいつをぶっ飛ばしてエんだ…!!…!!…!!教えるよ、クロコダイルの居場所!!」

「…っ、うん…!!」

「ちよつと待つて、流星に口を挟ませて貰うけど、ルフィそれはダメ、カツコいいからダメ。ビビ王女がもし、もー…し惚れちゃったらどうするの???私が泣くよ今度は、泣くよほんとに!!!」

うがー!!とビビ王女とルフィの間に入り込む私!

これ以上は続けさせてやらん!話は纏まったと見た!いいね!

「イ、イリスさん、そんな心配しなくても…私はそもそもイリスさんが…、はっ!?な、何でもないわ…!!」

「キャハハ！なに？ビビ…何て言おうとしたのか聞かせてくれない？」

「も、もう、やめてよミキータ！」

なんて言おうとしたのかは気になるところだけど、ビビ王女が元気になったならそれが1番いい事だ。

そんじゃ、次の目的地は決まったね!!王下七武海?クロコダイル?懸賞金8000万越え?知るかそんなもん。

私の嫁を泣かせる奴は…どこの誰だろうと殴って空の彼方へ飛ばしてやる!!

## 43 『女好き、挑むは七武海』

「もし私がクロコダイル倒したらさき、ビビ王女、どうする?」

「え?」

ユバから北へまっすぐの所にある『レインベース』というオアシスにクロコダイルが居るとの事で、一味は現在そこへ向かってまたも広大な砂漠をひたすらに歩いてきた。

そんな中、私が不意にした質問にきよんとするビビ王女。

「だから、私がクロコダイルを倒したらどうするの?感謝の嫁になつたりしない?」

「あんたバカねえイリス、クロコダイルを倒せばそれなりの礼つてもんが貰える筈でしょ。一国を救うのよ?そりやもう王女様を貰うなんて安い物よ、ねえビビ」

「ど、どうかしら…はは」

「オイイリス!クロコダイルをぶっ飛ばすのはおれだぞ!!」

くうう!じゃんけんさえ勝っていれば…っ!!

そんなこんなで一行は、丸一日掛けてレインベースへと到着した。

遠目で見てもわかる…今までのエルマルやユバとは明らかに違った活気というもの

がここからでも認識出来る程だ。

「…そうだ、ウソツプ、頼んどいたアレ…出来てる?」

「アレ?」

「オオ…アレか。出来てるぜスゲエのが」

そういうとウソツプはガサゴソ鞆から棒を取り出した。それはナミさんが使ってたような3節棍で、私は首を傾げる。

「見ろ…これがお前の新しい武器! クリマ・タクト 天候棒だつ!!」

「クリマ・タクト?」

ナミさんもその3つに分かれた棒を受け取り、空洞になつてる中を覗きながら首を傾げている。

「そう、一見前と変わらねエただの棒だが全然違う! 3つの棒の組み方でなんと攻撃が変わるんだ」

「凄いやんウソツプ! 私にも何か作つてよ!!」

「お前は武器いらねエだろ!!」

ゴツン、とウソツプの拳が私の頭に落ちた。でも殴ったウソツプの方が痛がつてるのは、勿論私が体の硬さを倍加したからですなえ。

「でもナミさん、武器を新調してどうしたの? 珍しいね」

「あら、イリスは私が戦闘では何の役にも立たない雑魚小娘だって言いたい訳？」

「そ、そそそんな事言つてないし!!!」

「フフ、でも間違つてないでしょ？だからよ、私がウソツプにクリマ・タクトを頼んだのは」

…そつか、ナミさんも今回の一件は自分自身でも動きたいんだね。

そうだよ、だってナミさんだもん、ビビ王女の気持ちを知つてて…自分だけ何もしていないなんて許せる性格じゃないか。

「所でよ、パロックワークスB・Wは俺達がこの国にいる事に気付いてんのか？」

「間違いなく気付いてるよ。今までMr. 3や2にも会つたし…Mr. 2の能力で顔だつて間違いなくバレてる…、慎重に行動しないとね」

「そうだな」

みんなで頷き合つてレインベースへと入った。

ルフィとウソツプは水が飲みたいというので近くの食堂に足を運ぶそう。

「ウソツプ、ルフィの事よろしくね」

「任せろ、しつかり手綱引いといてやる!」

そう言つて2人は人混みへと消えていった。

残された私達は隅の方で腰を下ろし、砂漠で歩き疲れた体を癒す。

「おれ、トイレ行ってくる」

「んー」

…あれ、チョップパーが言った事に気軽に返したけど…彼つてトイレどこでするんだろ…まあいいか。

\*\*\*

ナミさんやビビ王女、ミキータと楽しくお喋りしていると、突然町が騒がしくなってきた。

何かデジャブのようなものを感じるよね、つい最近も同じ事なかった？『ナノハナ』とかで…。

「…ゲツ」

「だと思っただよ…」

はあ、とため息をつきながら私が見る方向には、ルフィとウソップが海軍から逃げている姿があった。

やっぱりルフィの手綱を引くのはウソップでも無理なのかな。



「ウソでしょ…？何でこっちに来るのよ！」

「ナノハナでもそうだったんだから諦めよ、ナミさん。…所でチョツパーがまだ来てないけど…」

「放つとけ、てめエで何とかするさ！」

ゾロの言葉にそれもそうだね、と頷く。チョツパーもああ見えてちゃんと強いし…問題ないでしょ。

「オイみんな！海軍が来たぞオ!!」

「お前らが連れて来てんだよっ!!!」

「しかもまたスモーカーがいるじゃん…!!」

こんな所で座ってたら速攻捕まるので、急いで立ち上がって走る。もう全力で走る。

その際に辺りをチラリと見れば、

バロックワークス  
B・Wの社員と思われる奴らが人混みに紛れて私

達の顔と手に持つ紙を見比べていた。

…あちゃ、もうバレたか。

「まずいよ、バロックワークス B・Wにも見つかった!こうなったら早くクロコダイルのとこへ行こう

!」

「…うん!あそ…!」

ビビ王女が指差す建物を見る。それはこの町のどの建物よりも高く、ピラミッドのよ

うに三角錐になっていた。

「ワニの屋根の建物が見えるでしょ!?あれがクロコダイルの経営するカジノ、  
“レイン  
ディナーズ”!」

「了解…っ!みんな、とにかく今は散ろう!」

何たってこの数の海軍だ。固まって行動するのは得策じゃないだろう。

「よしっ!じゃあ後で“ワニの家”で会おうっ!!」

そう言つて3手に分かれる。

私はナミさんとウソツプ、サンジ達と一緒に方向だ。

「海軍はまだ来てる!?!」

「あの煙野郎はいねエが、海軍はワラワラだぜイリスちゃん…!よし、ここは俺が一旦引き受ける!ウソツプ!ナミさんとイリスちゃんを頼むぞ!!」

「ごめんサンジ!また後でね!」

スモーカーが居ないのなら、どれだけ海兵を掻き集めようとサンジに敵うはずもないので素直に場を託す。

私が最優先すべきはこの場だとナミさんだし、何が何でも守り通すんだ!

「居たぞ!あいつらで間違いないエ、さっさと殺せ!!」

「うるさい!」

「ぐへっ!!」

道中、道を塞ぐB・Wバロックワークスを数人蹴散らし、何とか目的のレインディナーズへと辿り着いた。

「とにかく中へ急ごう、またいつ海軍やB・Wバロックワークスに見つかるか分からないし」

「そうだな。…ん？オイゾロも来たぞ！」

「あれ！ゾロ、ビビ王女とミキータは!？」

「まだ着てねエのか!?!先に行かせたんだが…もう中に入ったのかもしれないねエ！」

なら尚更急がないと…！

「おおおおおおお!!!!みんな行くぞ！中に走れ！走れ！」

「うおわ!?!ルファイ!!！」

今度はスモーカーに追われてるルファイもやってきた。

私達はレインディナーズの中へ走り込み、とにかく奥へ奥へと走る。

「…つふう！…ここまで来れば、スモーカーも撒けたんじゃない？」

「はあ…はあ…、そうね、この人の数だもの。それで？どれがクロコダイルなの？」

レインディナーズ内は、見たままにカジノだった。

かなり繁盛しているように中は人でごった返しており、ここに紛れ込んだ私達を見つけてるのはスモーカーでもなかなか難しいだろう。



「ご丁寧に看板まで設置してあり、矢印が左に向いてる方はVIP、右は海賊と書かれています。」

「おれ達は海賊だから、右だろ！」

「ああ！」

「ちよつと待つてー！」

多分何も考えてないルフィとウソップ、ゾロの3人が右へと向かう。

ちよ、絶対そつちじゃないよ！間違いないく毘だつて！！

「待て麦わらア！！」

「ええっ!？」

スモーカーも一旦私達を無視してルフィ達を追う。いやあなたも大概考えなしというか…狙つてる物があつたら周り見えなくなるタイプだね!？」

「おわあっ!？」

案の定右に行つたメンバーは床が抜けて下に落ちていった…。そりゃ、そうなるよ…。

「…どうする？左に行つてみようか？」

「どつちに進んでも毘つて可能性は？」

ナミさんの言うことも一理あるよね…。そもそもここは敵の本拠地になる訳だし…  
罨が無い方が不自然だよ。

「…じゃあ、こうしよう」

ドゴツ！と壁をぶち抜けば、その奥の部屋が姿を見せる。

「これで罨かどうか確認しながら先へ進もう。ルフイ達は下に落ちたから…地下に繋が  
る道が何処かにある筈だよね」

「かなり強引ね…。でも、流石イリス！それなら安全に進めるわ、どうせ敵の店よ、何な  
ら金目の物を奪って行きましょ！」

強かなナミさんはやっぱり素敵だー!!

…つてこれ、よくよく考えればナミさんと2人きりだし…!?デートじゃんデート!!  
「よっ……ていつー!」

バコオン！ボコオン！と響く音と共に私達は先へと進んでいく。

部屋が壁越しに繋がってるような構造で良かったよ、ほんと。

そうやって進んでいけば、やがて少し広い空間に出た。

中央に階段が設けられており、下へと降りることが出来る様になっている。

しかもこの空間、私がぶち抜いた穴以外どこにも扉らしい物が見当たらない。つまり  
…隠し部屋って事だ。

「お、正解ルートきたかな、どう思うナミさん？」

「こればかりは行ってみないと分からないわね…。何かあっても守ってくれるんでしょ？」

「勿論。…さ、行く」

ナミさんの手を取って階段に足を踏み入れる。

かなり長い階段なのか、それとも下が暗いだけなのか先が見えない。

「絶対に手を離さないでね、こんな暗いとはぐれちゃったら危ないから」

「離すわけないでしょ」

ぎゅ、と握り返してくるナミさんの手の平の感触がやばい、こんな時に言うのも何だけれど…むらむらしてきた。だって暗いし。ナミさんいい匂いだし。…でも何だろうか、ここ…ナミさんの素晴らしい匂いの他にも別の匂いがあるんだよね。…何だろ…チヨコとか？そんな感じの甘い匂いがある。

「…灯りとかは無いのかな？ スイッチとかない？」

「こども暗いとね…。…あ、イリス、あんた…視力倍加とか出来るなら暗順応とか、そういう倍加はできないの？」

「暗順応…？ 何それ、暗闇適応！ みたいな？」

「そんな感じの認識で大丈夫だけど…どう？」

「なるほど…確かに言われてみれば何で思い付かなかったんだろ、出来るよ、多分！」  
暗順応…とにかくこの暗闇に対応する視覚機能を倍加しよう。

……あ。

「見えてきた！」

「あなたの能力ってほんと幅広いわね…そんな何となくで出来るような物なの？」

「はは、悪魔の実際の能力なんて大体何となくだよ。ルフィだって何となく使ってるじゃん」

倍加出来そうだな、と思えば大体出来ちゃうから…便利と言えば便利だね。

「んー、一本道だね、それも人一人通れる程度の狭いところがずっと奥まで続いている」

「緊急の脱出口かもね…」

結構長かった階段を下りれば、そこから先は一本道だった。

ナミさんと縦になって先へ進めば、突き当たりを上へ登る梯子が姿を現す。

「さつき下りたのにすぐ登るの？設計した人バカでしょ。あ、ナミさん先に上がってね」  
もし落ちたら危ないからとナミさんを先に行かせる。

…ぐへへ、本当の目的はナミさんの可愛らしいお尻を間近で眺める為だけだね…！

「…ちよつと、どこに顔近づけてるのよ、そんなにしたくないなら一緒に寝てるのにならして夜手を出してこない訳？」



「そ、そこはほら、ミキータとかビビ王女も居たし?」

「ふうん……?」

そうしてナミさんのお尻を堪能しつつ梯子を登れば、遂に一番上まで辿り着いた。遂にと言つてもそんなに長くはなかつたけど。

「開けるわよ」

「そつとね、クロコダイルが居るかもしれないんだから」

ナミさんはコクリと頷き、ゆつくりと塞がれている天井を少しだけ上へ上げて中を覗いた。

「……居るわ、間違いない……クロコダイルよ。あとあのバカ達も居るわね、捕まって檻の中みたい。ビビも居るけど……捕まってはないみたい」

「案の定だね。ビビ王女はどうやってそこまで行つたの? 私達はこんな遠回りしたのに」

中に聞こえないよう、ナミさんと息を潜めながら会話する。

どうやら中ではルフィ達が纏めて檻に捕まっているようで、クロコダイルと何やら話をしているのか声が聞こえて来た。

「お前さえこの国に来なければ、アラバスタはずっと平和でいられたのよ!!」

「待てビビ！ここを開けろ!!おれ達を出せ!!」

見えないから状況が分からないんだよね。

「ナミさん、上はどうなってるの?」

「…かなりまずい状況ね。まず、ビビが今クロコダイルに捕まったわ」

「なにつ!!」

「ちよ、静かに…!大丈夫よ、捕まったと言っても何もされてないわ。相手にもされてないみたい」

「どうする?突撃する?」

「…ビビが無事ならあまり無理はしない方がいいかもしれないわね。クロコダイルの能力…相当厄介よ、攻撃が効いてないみたいなの…」

それはあれか?まさかスモーカーみたいな能力って事なのかな?

「7時を回った。丁度頃合い…。パーティの始まる時間だ」

「パーティ!!ふざけないで…!今度は何を企んでいるの!?!」

「クハハ、何、少しこの国の王から国民へのメッセージが届けられるだけさ。そうなれば……俺の作戦は最終段階に入る」

この国の王って言ったって、どうせ化けたMr. 2でしょ？

…つまり、国王の顔で国民に…不信感を爆発させる何かを言わせる、もしくは何か行動を起こすとみて間違いない。しかもその作戦はもう始まっているんだ。

「どうだ、気に入ったかねミス・ウエンズデー。君も中程に参加していた作戦が今花開いた…耳を澄ませばアラバスタの唸り声が聞こえて来そうだ!!…そして心にみんなこう思っているのさ、「俺達がアラバスタを守るんだ!」…クツハツハツハ!!」

「やめて!なんて非道い事を…!!」

「ハハハハ…!!泣かせるじゃねエか…!国を想う気持ち<sup>が</sup>国を滅ぼすんだ…!」

野郎…!!

国王軍と反乱軍…どっちもこのアラバスタを大切に想ってるのに…その心につけ込んで…こいつは!!!

「ナミさん…ごめん、きちんと隠れてて!」

「あつ、ちよつとイリス!」

天井口を開け、勢いよく部屋に飛び出る。

…この鰐野郎…！一発殴ってやらないと気が済まないよ…！！

## 44 『女好き、砂の弱点を知る』

「クロコダイルーーツ!!!」

「イリスくくッ!!!」

飛び出し、床に着地する。

……お!もしやあれがミス・オールサンデー!?う、美しい……というか、何か見た事あるような……?

でも、今はそれよりも……!!

「うおおおっ!!!10倍じゆうばいばい灰・去柳薇さよならアツ!!!」

クロコダイルの元へ一直線に駆け出して拳を繰り出す。

しかし、クロコダイルはそれを薄ら笑いを浮かべながら見ているだけだった。

「っ……!!」

「クツハハ……ハーツハツハツハ!!!てめエが『女好き』か?話には聞いてるぜ!」

そんなクロコダイルの態度を裏付けるかの様に私の拳は奴の体をすり抜け、右手で首を掴まれて持ち上げられた。

くそ、やつぱりスモーカーみたいな能力か……!!スモーカーが煙なのに対して、こいつ

は砂っぼいな…!!

それに妙な事も言ったよね、話には聞いてるとか何とか……。

「いけない！イリスさん、クロコダイルの右手は…!!」

「な…ア…!?」

みるみる内に身体中の水分が吸い取られていく…!!

ひ、干からびてたまるかア…!!

「…なんだと？てめエ…何故干からびねエ…？」

「ばーか…！そのまま容量キャパオーバーしちゃえ」

吸い取られる度に体内の水を倍加して補填していく。確かにこいつの能力は厄介だけど…私なら対策できる！

とはいえ、まだこれじゃ何も意味がない。私からの攻撃手段が無いのに変わりはないんだ…!

「放せこのツ!!」

足裏でスタンプするようにクロコダイルの体目掛けて連打するも、やはりすり抜けてしまつて意味がない。

…スモーカーもそうだったけど、まるで無敵だ。けど…抜け道は必ず何処かにある…! だって本当に無敵なら「七武海」所かそれこそ敵無しだもん!

「クハハ……こうなつちまえば『麦わら』も『女好き』も終わりだろう。東イーストフルの海で多少名を挙げた所で料がる様な小物は……この海には幾らでもいるんだぜ？」

「やつてる事は……あなたの方が小物でしょ……!?……うぐ、!?」

クロコダイルの私を掴む力が強くなる。ぐ、ぐ……!首が締まる……つ。

「ぶふッ……」

「ッ……!!?」

あ、やばい、水倍加の調節ミスって吐いちゃった。

その水はクロコダイルの顔に直撃して顔をびちゃびちゃに濡らす。

「こほつ、けほつ……はーつ、ぐ、ぐるしい……!気管に水入った!」

「何やつてんだお前エ!」

檻の中のウソツプやゾロが口を広げて叫んでいる。

いや、ふざけてる訳じゃないんですよ、確かに絵面はふざけてるみたいになつたけど

!

「いい加減……はな、せ!!」

「ぐつ……!」

「あれ……つ」

だん!と再度蹴りを顔に放つた時、それはクロコダイルに直撃して吹き飛ばした。

腕から解放された私はふらつきながらも何とか立つ。いやね、首締められてた訳なん  
で、酸欠みたいなあれだったんですよ。私自身の肺気量倍加してなかったら死んでたよ  
絶対。ちなみに肺気量を倍加してるからと言って肺まで倍の大きさになった訳ではな  
い。そんなことになったら身体がヤバイ。

…ともあれ、私は今クロコダイルに攻撃出来たんだよね…？

「クロコダイルを、吹き飛ばした…!？」

声を発したビビ女王も…更にはミス・オールサンデーも驚愕の表情を浮かべている。

私が攻撃出来た後と前で、奴の身体に起こった決定的な違い…それは間違いなく水だ  
…!

奴の能力はもう見たまんまに砂で間違いない、だからサラサラの砂に対して拳や蹴り  
と言った攻撃は効果がないんだ。

だけど、*“水で濡れた砂”*は固形になる…!泥団子が良い例だ。

「…俺を蹴るとは、なかなかやる。だが」

クロコダイルは受け身を取って体勢を崩さずに着地し、右手に小さな砂嵐を発生させ  
た。

「あれは…っ!まさか、ユバを襲う砂嵐ってのは…!」

「ほオ…察しが良いじゃねエか小僧」



ウソツプの言う言葉にハツとする。そうか、こいつは…あの町すらも…!!

「この通り、俺はてめエがどれ程自分を強化しようとも関係ねエ規模で攻撃ができる。少しばかり攻撃が届くようになったからと勝てる気で居たのか?…だが、俺はこの国の王に用があつて少し忙しいんだ、てめエ一人に構つてやつてる場合じゃないのさ」

「逃げるの!?!」

くる、と後ろを振り向いてオールサンデーと共に部屋を出て行こうとするクロコダイルに再び飛びかかり蹴りを放つが、床から突然生えてきた腕に足を掴まれてそのまま下に叩きつけられる。

「邪魔をしないで、そこで大人しくしてれば…  
あなたは助かるわ」

「私は…?それってどういう…」

ガコ、と大きく隅の床が開いて勢いよく水が溢れ出てきた。

え、何でこんな大量の水が出てくるの…?あれ、よく見たらここ水族館みたいに周り全部ガラス張りで水に囲われているじゃん!頭にバナナくつつけた巨大ワニとかも泳いでるし!…!ということは、私とナミさんはこの部屋を支える柱の中に作られた道を通ってきたのか…。

「この部屋はこれから1時間かけて自動的に消滅する。そこから溢れる水でな…。つまりてめエがそこのお仲間を見捨てれば、てめエとミス・ウエンズデーは助かるって事だ」

「…ふん、そういう事？分かりやすくいいね、中々気が効くじゃん」

「クツハツハ!!精々足掻くんだな…最も、てめエに残された選択肢は1つだけだが。それに、奴らの殺し合いが始まるまであと8時間…時間も残されちゃいねエみたいだぜ…？」

それだけ言うとかクロコダイルはオールサンデーを連れて部屋を出て行った。

…その扉どこに繋がってんの？やっぱVIPルームに入れば良かったのかな？

「…さつきクロコダイルは、父に用があるって言った…！これ以上何をするつもりなのかは分からないけど…禄でも無い事なのは確かだわ！」

「しかも、そのお父様に化けたMr. 2が何かしでかしてるとみただし…8時間とか言ってたし、本格的に急がないとまずいよね…、ナミさん、もう大丈夫だよ！」

私がそう声を掛けると、よっ、とナミさんが上へあがってきた。

「ナミ…ナミも一緒だったのか！」

「当然よ、こんな訳の分からない店の中でイリスが私を離す訳ないでしょ。…それよりビビ、さつきのクロコダイルの話聞いたけど…現実問題として反乱は止められるの？」

「…まだ、何とか間に合うわ！ここから東へまっすぐ『アルバーナ』へ向かえば反乱軍より早く到着出来るかもしれない！そうすれば私から反乱軍のリーダーに話をつけられる！」

「だったら、早いとここの檻を何とかしよう。中から破壊出来ないの？」

「ダメだ、海楼石つて海と同じエネルギーを発してる石でこの檻は作られてる！しかもゾロですら斬れねえんだ！」

ルフィやスモーカーは無理、ゾロでも斬れない程の強度を持つ檻つて事か…。

となると私でも無理だ。能力を封じられちゃうとただの役立たず19歳に成り下がってしまう私にとって、天敵の檻なんだから。

だからクロコダイルは私に選択肢は1つしかないと言ったんだ、この檻を開ける事など出来ないと思ってるから。

「扉はあるね、鍵はないの？」

「多分クロコダイルが持つてると思うけど…」

「追ってる時間もないもんね…困ったな…」

どうしたものか、と頭を悩ませていると、今度は水が溢れている床とは別の床が開きそこからワニが這い上がってきた。

…くそ、鍵もないとなれば完全に手詰まりじゃん…！

「グオオツ!!」

「あーもううるさい!!」

噛み付いてきたワニの顎目掛けてバキヤツ、とアツパーを当てる。そのままワニは目

を回して倒れた。何だこいつ。

「う、うそ…バナナワニを一撃で…?」

「バナナワニって言うんだ。まだ続々きてるっぽいけど?」

続々とそのバナナワニとやらが開かれた床から姿を現す。

こんな訳の分からない動物に時間をかけてる場合じゃないってのに…!!

こいつら全員を相手取ろうと思えば…一体どれ程の時間を無駄にするのか…!!くそ、クロコダイルめ、これも仕組んでたのか!

「てい…おりゃ!…こつちまで…オーイッ!!」

軽くバナナワニを殴っていき、自分に意識を向かせてルファイ達がいる檻の向こう側へ走る。

時間がない今、何一つとして無駄に出来ない。このワニも檻破壊に協力してもらおう  
!!

「グゴオオ!!」

狙い通り、数体のバナナワニが檻に噛みつく。

中でウソツプが騒いでるけど助かるなら安いもんでしょ!

「ガカカ…」

「うそん…」

だけどその目論見は嘯み付いた全てのワニの牙が欠け落ちた事で失敗に終わった。

おかしいでしょ…何て檻だよ！

鍵はない、檻は壊せない、なら…水を止めるか!? 床をまた閉めればとりあえず水の侵入は防げる筈だし…だけどそれじゃ結局檻からみんなを出せない、時間が無いのに…!

「〃食事中は極力音を立てません様に〃」

「つ…あー!」

「<sup>アンチマナー</sup>反行儀キツクコース!!!」

ドゴォ!と音を立ててバナナワニの腹を蹴り飛ばし一撃で沈めたのは、ここまでどうやって辿り着いたのか聞きたいサンジであった。チョツパーとミキータの姿は見当たらないが…。

「サンジ!!」

「つたく、海軍片付けて来てみりや…何野郎共が纏めて捕まってるんだ。レディにばかり負担を掛けてんじゃねえよ」

「サンジはどうやってここに?」

「ん? ああ、VIPルームから来たのさ、海賊って書いてた看板もあったが…ありや何だ? バカにし過ぎだと思わないか? イリスちゃん」

「ほーんとにそう思うよ、全くその通り」

じと、と檻の中の面子を見るとウツ、と視線を逸らした。

「まだまだワニは沢山いるけど……、ナミさん、ビビ王女も私とサンジから離れないでね！」

「ええー！」

「分かつてるー！」

さて……サンジが来てくれたのは嬉しいけど、状況は対して変わってないよね……。せつかく戦力が増えた訳だし、バナナワニでも全滅させておこうかな。

「サンジ、ワニが邪魔で祿に考えも纏まんないよ、倒すの手伝ってもらって良い？」

「勿論、レディの頼みは断れねエ」

そう言つてサンジは次々にワニを昏倒させていく。私は嫁2人から離れる訳に行かないので、近づいて来た奴を倒していく。

「お……何か出てきたぞ、イリスちゃん、これ何か分かるか？」

「ん？……ん?!」

サンジが倒したバナナワニの1匹が、倒れ様に白く大きな球体を吐き出した。

……うーん、こんな感じに白い何かを、つい最近見た様な気が……。

「“ドルドルボール”……解除……お、オオ……水！水だガネー！奇跡だガネー！」

「お? Mr. 3!」

その球から Mr. 3 が出てきて、周りの水がぶがぶ飲んでいた。

干からびてたし、ありや完全に任務失敗の罰か何かでクロコダイルにやられたな。

「ぶはーっ! 死ぬと思ったガネ! フッフ…クロコダイルめ、私を仕留めた気で居るだろうが甘いガネ! 私はコイツに食われる瞬間、最後の力を振り絞ってこの “ドルドルボール” を造り出し…その中に身を隠す事で何とこの身を守っていたのだガネ」

「何急に説明始めてんの、興味ないから。…それより」

「は?」

ナミさんとビビ王女には檻の陰にでも隠れてもらって、私は Mr. 3 に近付きその足を掴む。

「その能力…利用させて貰うよ」

「は、何をバカな事…オオオオオオオオツ!!??」

掴んだ足を持ち上げて、高速で “大旋回” をする。

最初は5倍、そこから段々とスピードを上げていく。

「ほらほら! 言う事聞かないとこのまま開いた床にでも投げ飛ばして水に浸けるよ! いいの? 能力者なんですよ!」

「あばばばばばっ!!? わ、わかったガネ! 言う通りにするガネ! だからやめろ!」

よし、と頷いて回すのを止めると、そのまま檻の前まで引きずっていく。

「イリスちゃん、何を？」

「サンジは話にしかな聞いてないと思うけど…こいつの能力はろうを自在に生み出す事が出来るの。つまり…」

「そうか！この檻の鍵を作る事が出来るって事か！」

「そゆこと。ほら、話は聞いたでしょ、早く作って」

「ま、全く…人使いの荒いガキだが…ぐへ！」

「19歳だつての!!見て分かんない!!」

「いや、それは仕方ねエ」

サンジとスモーカー以外の全員からツツコミが入る。何だところ、喧嘩売ってるね??  
とまあ、私の見た目の話はこの際置いておこう。いや本当は置いておきたくないんだけど、私も自重しなければ本当に時間がない。

ガチャリ

「お、開いた!?!」

「やるな、ロウソク人間」



やはりと言うべきか、Mr. 3が作った鍵で檻を抜け出す事には成功した。

サンジはそんなMr. 3を蹴り飛ばして意識を奪う。そりや、一応敵だからね、利用するだけして後は眠つててもらいますよ勿論。

「みんな早く出て！急がないと時間がない！」

「…でも、あの通路にはまだ沢山バナナワニが…！」

「大丈夫、もうルフィとゾロが倒してるよ！」

ビビ王女の心配をよそに、ルフィ達は既にワニを全滅させていた。

そりや2人に掛かれればこの程度のワニ敵じゃないでしょ。

「うわあっ!?壁が壊れたア!!」

「ええっ!?ルフィ何してんの!?やり過ぎだよ！」

「通路まで壊れた!!」

「ちよつと！私達能力者だよ!?!…こうなったら湖から脱出するしかない！ワニは全滅してるから大丈夫、このまま外に出れば脱出できる筈!…という訳でナミさん、ビビ王女も私をよろしく！」

「全く潔いわね、でも任せて、こういう時くらいはあんたを私達が守ってみせるから。ね?..?..?」

「ええ！安心してね、イリスさん」

そうしてナミさんとビビ王女の胸に飛び込んで目を強く閉じる。

その直後に壊れた壁や通路から水が雪崩れ込み、私は倦怠感に襲われながらも弱々しく2人の服を掴んだのだった。

## 45 『女好き、作戦名《超カルガモクイズ》』

「ガハツ、ゴホツ！」

「イリス、大丈夫…!？」

何とかあの地下から湖を泳いで脱出した私達だが、意外と苦しかった。ほんとに体が何一つ言うことを聞かないのだから参ったよ。

「だ、だいじよぶ…じゃない。ナミさんの…く、おっぱいさえあれば…!」

「大丈夫みたいね、よかったわ」

ホツと胸を撫で下ろすナミさん。あれ、スルー??

「うおっ!?!スモーカー!?!おいおいゾロ、何敵連れて来てんだよ!」

「うるせエ不本意だ」

「ゲホ、う…、まあ、今はそんな事より先を急ごう!」

「ああ、だいぶロスしちまったな、ビビちゃん、間に合うか?」

「わからない…」

どちらにしても、行ってみない事には何も始まらないんだ。

まずはチョッパーやミキータと合流しないと!

「ナミさん、『ナノハナ』で買った香水持ってるか？」

「ええ…何で？」

「体に付けるんだ、チョップパーはそれで俺達の場所がわかる」

なるほど、流石サンジだ、頭がいい。

シユツと香水をつけるナミさん。あー、普段とは違った匂いで…新鮮で素敵だー!!

「ロロノア!!」

ギイン!!とスモーカーが十手でゾロに攻撃したのを、彼は刀の腹で受け止めた。

「何故俺を助けた…!？」

「『船長命令』を聞いたただけだ、別に感謝もしなくていいと思うぜ? コイツの気まぐれ

さ、気にすんな」

「……………。じゃあ、俺がここで職務を全うしようと…文句はねエ訳だな?」

「見ろ…!言わんこつちやねエ!」

…でも、これスモーカーやる気ないよ。なんて言うんだろ…私達を捕まえるっていう

意思を感じない。

「クロコダイルは何処だー!ーっ!!」

あ、ルフィも目を覚ましたか。

「うおっ!けむりっ!やんのかお前っ!」

スモーカーを見た途端すぐに構えるルフィ。そういうとこの判断力というか、戦闘に入るスイツチの切り替えは流石だよね。

「……………、行け」

「ん？」

「ーだが、今回だけだぜ、俺がためエらを見逃すのはな…」

「やっぱりね…でもほんとに助かった。こんな所でスモーカーと戦闘なんてしたら絶対にアルバーナへ間に合うなんてムリだった。」

「…次に会ったら命はないと思え…、麦わらのルフィ…」

「お、私は忘れてくれてるみたい！ラッキー！」

「勿論ためエもだ、『女好きイリス』」

全然忘れてなかった。

「あそこだ!!麦わらの一味だア!!」

「っ、じゃね、スモーカー！助かったよ！」

別の海軍に見つかったか…！スモーカー程話が分かるとも思えないし…えっと、東へ真っ直ぐだったよね！

そうして私達は東へ真っ直ぐ走る。

だけどここのまま走ってるだけじゃ間に合わないんじゃないか…！それに、ミキータは!?

「サンジ、ミキータを知らない!？」

「ああ、それがミキータちゃん、オフィサーエージェントに見つかったとかで丁度『アルバーナ』に逃げるって言ってたから大丈夫だ!心配すんな、彼女も強い!」

「…そっか!」

普通に心配だけどね? オフィサーエージェントって…強さで言えばミキータ以上の  
人達ばつかなんでしょ?

…でも、あのMr. 5だって単独撃破出来たんだし…こんな状況なんだ、信じるしかない!

「おい!もしかしてこのまま走ってアルバーナへ行くなんて事ねエよな!」

「そうだマツゲ! マツゲは何処に行ったの!？」

「ご安心あれ…前を見な!」

丁度レインベースを出た時、サンジの言う通りに前を見ればそこには巨大すぎる蟹と、その背中に乗ったマツゲとチョッパの姿があった。

「これは…!」ヒツコシクラブ!!」

そのまんまじゃんか!!

「おーいみんなー!ー!!早く乗ってくれよ!」

「乗れるのかア!?!うほーっ!!」

「ああ、マツゲの友達なんだ！マツゲはこの町の生まれでこの辺には友達が一杯いるんだ！」

そうか、チョッパーは動物とも会話出来るから…!!

みんなでカニに乗り、チョッパーが手綱を引く。

カニに手綱つて…もう意味わかんないよね。

「よーし行くぞー！出発!!」

「!!? ビビ王女!!」

カニが走り出した直後に、ビビ王女の体が宙を浮く。

その体にはフックが引っかかっている、その先をずっと砂が伸びていた。間違いない

…クロコダイルだ！

「イリス！おれが行く!!」

ルフィはすぐ様ビビ王女をフックから剥がして私達の方へ放り投げ、代わりに自分がフックに掴まって引き寄せられていく。でもマズイ…! あそこは砂漠だ、クロコダイルのホームの様な場所で戦闘なんていくらルフィでも…!!

「……、違う、そうじゃない！」

ブンブンと頭を振って余計な考えを払う。じゃんけんで勝ったのはルフィ、あいつと戦うのはルフィの役目だ。だったら私は彼が勝利するのを信じていればいいだけだ！

「ルフィー！私達は先に行く！絶対に後から追いかけて来て！！それから、クロコダイルの弱点は水だよ！！水さえかければ攻撃は当たる！」

「おう！！」

ルフィーはニカツと笑ってクロコダイルに引き寄せられて行った。

私達はそのまま速度を落とす事なく『アルバーナ』を目指す。

「ルフィーさんっ！」

「大丈夫だよビビ王女！ルフィーは本当に強いから！」

実際は、あのミホークと同じ七武海のクロコダイルに勝てる保証など何処にもありはしない。だけれどさつきも思った通り…私達は彼を…私達の船長キャプテンを信じて待てばいいのだ。

「いいかビビ、クロコダイルはあいつが抑える。『反乱軍』が走り始めた瞬間にこの国の制限時間リミットは決まったんだ。『国王軍』と『反乱軍』がぶつかればこの国は消える！それを止められる唯一の希望がお前なら…何が何でも生き延びろ…！！この先ここにいる俺達の中の…誰がどうなってもだ…！！」

「…そんな」

ゾロの言葉にビビ王女が狼狽るが、その通りだ。ビビ王女にはルフィーのあの言葉を本当の意味で理解してもらわないと行けない時が来たんだ。



《おれ達の命くらい一緒に賭けてみる！仲間だろうが!!》

「…ビビちゃん、コイツは君が仕掛けた戦いだぞ。数年前にこの国を飛び出して、正体も知れねエこの組織に君が戦いを挑んだんだ。……ただし、もう1人で戦ってるなんて思  
うな」

「!」

「び、ビビビビ!!心配すん…パイスン…スンばいなよ!おれガツ…ガツツいて…」  
「いやガツツくな」

「…ルフィさん!!」「アルバーナ」で!!待ってるから!!」

覚悟を決めたビビの声に、ルフィも大きく雄叫びを上げるかのように返事を返した。

戦いを嘆く者——

戦う者——

戦いを煽る者達——

その真実を知り阻止する者——

それぞれの想いは行き違い、首都「アルバーナ」で衝突する。

\*\*\*

「え！このカニ、河は渡らないの!？」

「ヒツコシクラブは砂漠の生き物だから…！水は苦手なのよ！」

レインベースとアルバーナを直線で結べば、その中央にはサンドラ河が横断して  
必ず河を越えなければならぬ。

だというのにこのカニ、河を渡らないって!？」

「河を越えてもまた何10kmも砂漠があるんだぞ！このカニが向こう岸へ行かなきゃ  
その先走るのか!？間に合うわけねエだろ！」

「やべエっ！そう言ってる間に…サンドラ河が見えてきた!!」

どうするの!？」

「そうだ！ハサミ」は踊り娘が大好きだ!!」

ちなみにハサミとはこのカニの名前である。

ハサミだなんて、ナミさんの命名は可愛いなあ！好き!!

「私がローブを抜けばいいの?」

「は? いやいや、人の嫁を見せ物にしないでもらえますかね? ん? 今すぐてめエのミソ

ほじくつてもいいんだよ？あん？」

コンコンとハサミの頭をノックすると、それはもう面白い程スピードが上がった。その顔は恐怖に包まれてたけど。

「おいおい、すげエぞこのカニ、奇跡だ！水上を走ってる!?……いや気のせいだ!!」

最初だけなら勢いで水上を走ったハサミだったが、人間が水の上を走らないのと同じでハサミも無理だったようだ、ぶくぶくと沈んでいく。

流石に不憫なのでサンジとゾロでハサミは陸に戻したが、こうなると泳ぎで向こう岸まで渡らなければならぬ……!!くそ、私はこうなるとただの足手まといだったの!!  
「ぎゃあああつ?!?今度は何だア!?!」

水中から巨大なナマズのような魚が出てきた。なんでこの地には何かと巨大なやつしかいないの!!

「サンドラマレナマズ!!出現がごくマレなの!!」

「んな説明いらねエよ!」

ナマズが口を開けて襲いかかってきた。え、ナマズの癖に人間食べるの!?

「あと人間が大好物!!」

「そつちを先に言えエ!!」

ウソツプが悲鳴を上げ、みんなして泳ぎ逃げ出すが如何せん私が邪魔をしてしまう。

そのままナマズの大口に吸われそうになるが…ナマズは突如として現れた無数のクンフージュゴンによって倒された。

「クンフージュゴン！」

「ナイスだ！助かったぜ！」

倒れたナマズの上に乗る、クンフージュゴン達が向こう岸まで運んでくれた為かなりペースを縮めることが出来た。

チョツパー曰く「師匠のピンチを見過ごせねエツす」とのこと。

ハサミの移動で本来なら半日かかるのを3時間で、そしてクンフージュゴン達のおかげで1時間で河を渡れた…！レインベースでのロスが大体30分だとすれば…クロコダイルの言っていた8時間まで大体あと3時間!!

「順調に来てるぞ、間に合いそうか!？」

「難しいわ、マツゲ君に乗ってもまだ間に合うかどうか…!？」

ゾロの問いにビビ王女が答える。てかマツゲ君って…呼び方がもう可愛い。

「しかもそれじゃ乗れて2人だぞ!」パロックワークス B・Wが仕掛けて来るとすりやここから先だ!何とか全員で行動する方法はねエのか…!？」

「…！待ってみんな、向こうから何か来る!？」

「何だ!?!敵か…!?!」

「違うっ！あれは…っ！」

砂漠から集団で走って来る何かを見つけ指させば、ビビ王女の顔が綻ぶ。

「カルーっ！！それに「超カルガモ部隊」！！迎えに来てくれたのね?！」

カルーは勿論知ってるけど、超カルガモ部隊って何よ！

…いや、それはもういい！とにかく…えーつと、いち、に、…7頭いるのか！1人1頭は無理でも全員乗るくらい訳ないね！

「よし、これならアルバーナへ文字通り最速で行ける!!…ただし、その前に1つ…作戦会議をしない?！」

—————

—————

「あー、幸せ、幸せだよこれ、役得役得！」

「ちよつとあんた、敵が見えたわよ、静かにして」

今私は、7頭いるうちの1頭のカルガモにナミさんと乗って砂漠を走っていて、既に眼前には首都アルバーナが見えている。

1人で乗ってるように見せかける為、体の小さい私はナミさんに凭れ掛かるように、

そしてナミさんは私を覆い隠すようにマントを羽織っていた。

「ちなみにマントは他全員着用している。何故なら相手の狙いはビビ王女…どれがビビ王女か分からなくするのがこちらの作戦という訳だ。」

「ま、今この場にいるカルガモは6頭だけだけど！」

「……！」

「あれは、雰囲気からしてオフィサーエージェント…！Mr. 2もいるし、数も合う！間違いはない…!!」

「…だけど、ミキータはいないか、ちゃんと逃げ切れたなら良いんだけど…!!」

「私達はどこから登るんだっけ？」

「西門からよ、行くわよ！」

「ダダ、と物凄い速さで走るカルガモがオフィサーエージェントの攻撃を掻い潜りながら抜けていく、」

「アルバーナへ西から入ろうと思えば、5つある内の3つの門…西門、南西門、南門から入れる。作戦通り、西門からは私とナミさん、そしてゾロ。南西門からはウソップとマツゲ。南東門はサンジ、チョップと三手に分かれての行動となる。」

「みんな散れたね、オフィサーエージェントも追ってる！」

「ふふ、流石ねイリス、良い作戦だわ」

「それ程でも〜」

でへでへとやってれば、それなりに奥まで走ってこれたようだ。

私達は大柄な坊主の男と、大人の女性感醸し出す美人を引きつける事に成功した。

この距離まで走れば…もう今更戻った所で手遅れだ!!

「あなた達勘がいいわ、そう! 私こそがビビ王女♡」

「何言つてやが…言ってるの? 私が真のビビだわよ!」

「ぷっ」

あ、だめ、声出ちゃった…!! だってゾロが…あのゾロが…!! はっつはは!!!

「今正体を見せてあげるわ!」

バツ! とマントを脱ぎ捨てる。

というか、そもそもどこの門に入ったカルガモを追った所で…。

「残念、ハズレ」

「なっ…!」

ビビ王女には会えないけどね! だってそもそもビビ王女は最初から別行動だし!!!  
もう今頃追手やら何やらを気にする必要もなく反乱軍に会えてるだろうね!!

バーーーーーーッッッッッ  
!!!!!!

## 46 『女好き、先を越される』

「あーっはっはっは!! 私の嫁を殺そうなんておこがましいわ!!! ていうか、普通に許さないしー!」

「オオ、やる気じゃねエかイリス」

「……………、参ったぜ」

やれやれ、と首を振る坊主。

てか、こいつ Mr. 1 でしょ、胸に大きく壺って書いてますけど。

「…イリス、あんたは下がってて」

「ナミさん?」

ぐい、とナミさんに肩を引かれて後ろに下げさせられる。

え、私の出番ってこういう時くらいしか無くない!? どうしたのナミさん!?

「ゾロ、あんたはそつちのデカブツをお願い! 私はそつちの女をやるわ」

「別に構わねエが…: どういう風の吹き回しだ?」

「ふ…、あんたね、私が誰の妻を務めてると思う? こんな所で…: 止まってられないでしようが!」



「っ!？」

そう言うとなミさんは足元の石ころを美人なお姉さんに投げつけて入り組んだ道へ走って行った。

「ハッ、成る程…良い度胸じゃねエか！オイイリス！ここは俺達が引き受けた、てめエは先にビビの元へ向かえ!!」

「…!!で、でも…」

「てめエの女が腹括ってんだ!!てめエ自身がくよくよしてんじゃねエよ!」

ダッ!と坊主頭に距離を詰めて刀を振り下ろす。

お姉さんの方も狙い通りにナミさんを追いかけて行った。

「ッ……あー……もうっ!!ゾロ!!ナミさんに何かあつたら絶対許さないからね!!」

「安心しろ、あの女は殺した所で死にやしねエ」

私はそれだけ聞くと、勢いよくビビ王女が居るだろう王の宮殿に向かい走り出した。

遠くから野太い声が聞こえる…!多分、入り口で反乱軍を止めるのは失敗したんだ!!

「はっ……はっ……じゃあ、どうして失敗した…?」

…あのタイミングなら、間違はなく反乱軍より先にビビ王女の方が到着出来た。向こうのリーダーが聞く耳を持たなかった…?それも有り得るけど何か違う気がする…!!

…もしかして…国王軍、もしくは反乱軍…最悪その両方にB・バロツクワークスWが潜入してる…!?

だとすれば、どれだけビビ王女が声を届けようと邪魔など幾らでもしようがある…!!

「出た…! 宮殿前!」

走る事数分で喧騒の聞こえる広場へと出た。道中はかなり登りの階段が多く、王の宮殿はそれなりに高い所に作られているようだ。

王国軍の兵士でこった返して…私はこんな見た目だからスルーされてるのかな? きつと普通の一般市民が来たら追い払われるくらい嚴重に警備されてるんだろうね。

「ビビ王女はどこ?!? こっちはかな?」

どこ…ビビ王女…!! それにここにいるのならミキータも!! ミキータはちゃんとアルバーナへ辿り着けたの!? まさか、オフィサーエージェントにやられてるなんてないよね…? もしそうなら、絶対許さないよミキータ…! 勝手にピンチになんてならないでよ!! 「こうなったら、もう宮殿に乗り込むか…! 門も空いてるし…!」

今は緊急事態なんだし、王様も多少の不法侵入は許してくれるでしょ?

そんな私ルールを発動し、宮殿の大門前階段まで行けばそこも既に大量の兵士で溢れていた。

ビビ様が危ないとか言ってるし…もしかしてこの中にいるんじゃない?!

「ちよつとごめんね!!」

「ふべつ!」「あで!」「ちよ、あばつ!」

ぴよんぴよんと人の頭を踏み越えて最前列に進む。この階段長いしかなり角度あるなあもう！

「…何これ…！」

そこには国王軍の精鋭みたいな人達が複数人倒れていて、しかもビビ王女がクロコダイルに首を掴まれ持ち上げられていた。

しかもビビ王女の足元に場はなく、その手を放せば何百mと下に落下するだろう位置だ。

…あの下は、広場か…！そこから争いの声や音が聞こえて来る…！

「全てを救おうなんて甘っちょろいお前の考えが、結局お前の大好きな国民共を皆殺しにする結果を招いた。最初から最後までどいつもこいつも笑わせてくれたぜこの国の人間は!!」

何の話をしてるんだ…？ていうか、ルフィは!?!まさか、ルフィが負けたの…!?

「2年間、我が社へのスパイ活動御苦労だったな…。結局お前達には何も止められなかった…反乱を止めるだの王国を救うだの、お前の下らねエ理想に付き合わされて無駄な犠牲者が増えただけだ…！教えてやろうか…！お前に国は救えない」

その言葉を最後にクロコダイルはビビ王女を掴んでいた右手を砂に変え、下へ落とした。

下では既に反乱軍と王国軍が衝突しているし、何よりここから広場まではかなり高低差がある。さっきも言った事だけど…何百mあるかわからない。間違いなく落ちれば命を落とすだろう。

……………。

流れなんて何にもわからない。

この国がどうか、国民がどうか…正直私にとってそれらはあまり関係のない事なんだ。

ビビ王女が国を救えないだとか、国民がバカばかりだとか、そんな事はもう…この際どうだつていい…!!ただ…今、ビビ王女泣いてたよね…?

泣かせたな?クロコダイル…!!!!

「う、おおおおおおお!!!」

落下するビビ王女に向かって走る。

勿論足場など無い、壁を足場に走ってるんだ!気合で!!!

「届けエえええええええ!!」

が！つと落下するビビ王女を抱きとめる。流石にその衝撃で壁走りは出来なくなつたけど……もうビビ王女は掴んだ！落下の衝撃くらい気合いで和らげてみせる!!

「イリスさん!!」

「ビビ王女……泣いてる場合じゃないでしょ!!あのワニ野郎に何言われようと……あなたは立派だよ!こんな所で死ねない、必ず生きて争いを止めなきゃならないの!!」

「!!……ええ!ごめんなさい……私……!」

「クロコダイル~~~~!!!!」

「つるファイ!」

落下に備えようと色々倍加していた時、ルファイが大きな鳥に乗って空からやつてきた。その鳥は物凄い速度で私達の元に飛来し、乗ってたルファイが落ちる私達を受け止める。

「ふうっ!間に合った!!」

「ルファイ!無事だったんだね、助かったよ!流石に落ちたら痛かったかも」

「ししし、おう!」

ビビ王女への衝撃もゼロには出来なかっただろうし……何なら私は死んでたかも……

う、想像したら怖くなってきた。

「イリスさん…ルフィさん、ペル…！広場の爆破まで時間がないの！もうみんな…やられちゃったし…！私の“声”はもう…誰にも届かない！このままじゃ国が……んっ！」

「聞こえてるよ、私に…仲間みんなに！」

ビビ王女の唇を人差し指で押さえ付けて言葉を紡ぐ。

その言葉に静かに涙を流して私を抱き締めるビビ王女の背中をそつと撫でた。

…あれ、結構いい雰囲気。

「ちよつとルフィと鳥さん邪魔じゃない？今なら口説けそうなんだよね」

「お前助けてやったのにそれはねエだろ!？」

「ビビ様を口説く!?!何を考えているのだ!!」

そんな事を言いながら、下まで降りた私達は鳥さんの背中から降りて辺りを見渡す。

…争いもかなり激しくなってる、さつき私が見たときよりも更に…そしてこれからもつとだ。

「ルフィ…上に行くの?」

「ああ、ワニをぶっ飛ばしてくる!」

「ルフィ、負けたの?」

「あ、ああ、一回負けたんだ、わりイ。…でも次は」

「なら次は私の番だよね?!?!?!」

「何イ!?!」

がびーんと目を飛び出させて驚くルフィ。だって負けたら順番としては次私じゃない・私だつてあいつを許さないんだから、ルフィばかりずるい!

「あああゝゝつ!!ルフィが生きてるぞゝゝ!!」

「トニー君!」

「何イイ!?ルフィ!?ビビもイリスも居るじゃねエか!な!!な!!だから言っただろ!おれにはわがつてだ!!」

「分かつてたつて奴のツラかよ…」

チヨッパーにウソツプにサンジ!!…つてウソツプ全身包帯だらけだけど!?大丈夫!!?

「ウソツプゝゝつ!!」

「ホゲエ!」

そこにウソツプの後頭部を殴りながらナミさんも現れた。ゾロも一緒か…!ゾロは相変わらず傷だらけだね!

「つてナミさんんんん!!?傷だらけじゃん!!うわあああ!!足が!足から血が…誰か、医者、チヨッパー 医者を呼んで!!」

「おれが医者だ!!」

「こちらー!」

ガツン、とナミさんの鉄拳を貰いました。痛い。

「こんな物傷のうちに入らないわ。そんな事より、私もオフィサーエージェントの一角を倒したって事実を褒めてくれてもいいんじゃないの?」

「……そ、うだよね!流石ナミさん!傷付いた姿も凛々しくて素敵だー!!」

ぎゅ、と抱き締めるとそれでいいのよ、と頭を撫でられた。うー…でも心配だったから…本当に良かった…。

「じゃあなー!」

「あつ!!ルファイ!!待てー!ツツ!!」

その隙をついてルファイが上へと「ロケット」で飛んで行った。

私もそれを追いかけて壁を全力で駆け上がる。さつき出来たんだから今回も出来て当然でしょ!!おのれルファイ…!次は私だつてのに…!!

上へ辿り着くのにそう時間は掛からず、到着してすぐルファイを探せば彼は既にクロコダイルと戦闘していた。

もう!先を越されちゃうと手出し出来ないじゃん…!!



「ゴムゴムの銃<sup>リストル</sup>!!」

「濡れていようがいまいが…俺の掌はあらゆる水分を吸収できる…!」

「しまった!その能力があつた!!」

私のアドバイス通りに手を水で濡らして攻撃するルフィだが、伸びた腕を掴まれて水分を取られていた。

その後も攻防は続き、ルフィの攻撃がクロココダイルに直撃した隙について彼は背負つた水樽を直接クロココダイルにかけようとクロココダイル目掛けて放り投げる。

「水浸しになれっ!!」

「そりゃ、当然の狙いだろう。<sup>サーブルス</sup>砂嵐」

だけどクロココダイルは、ルフィが投げた水樽に右手から発生させた小さな砂嵐をぶつけて跳ね返した。

ルフィは慌てて水樽を掴む。あのワニ野郎を相手取ろうと思えば水が無ければどうしようも無いから…あの水樽が手元に無ければルフィは戦えない。

「その樽がなきやあ結局何も出来ねエって訳だ…、これじゃ初戦と何も変わらねエじゃねエか!!クハハハ!!」

「……、お前の言う通りだ…!!なら、これならどうだ!!」

「は…っ?」

「……正気か、てめエ……」

端から見てるだけの私も、正面切つて戦つてるクロコダイルさえも素つ頓狂な声をあげる。

だつてさ、まさか…水樽に入つてる水を全部飲み干すとは思わないじゃん？お腹凄く膨れてるけど…戦えるの？

「水ルファイ…ゲツプ」

「アハハ！」

オールサンデーは笑つてるし…。笑つてる顔可愛いな。嫁に来ないかな。

「フザケてんじゃねエぞ小僧オ!!」

「！」

そんなルファイに対し、クロコダイルが青筋を浮かべながら突撃する。

ルファイの俊敏さは完全に無くなってしまっているからこのままだと奴の攻撃に直撃してしまうのだが、ルファイは腹からポンプの様に喉まで水を持ち上げて目の前まで迫っていたクロコダイルに水玉を喰らわせた。

「誰がフザけてるんだ!!おれはいつでもまじめだぞ!!ゴムゴムの…バズーカ!!」

「ぐっ!!!」

水に濡れたクロコダイルの腹に必殺技を決めて、後方へ吹き飛ばす。

「信じられん……!」

何かよくわかんないおじさんが驚いた様にその光景を見ていた。まあクロコダイルを相手に普通に戦つてるもんねルフィ。七武海だよ相手は。

「感心してる場合じゃないでしょ、Mr. コブラ。あなたは私を案内しなさい、歴史の本文の記される場所へ!」

おじさんとオールサンデーが何か話してるけど……ぼーねぐりふって何??

「ふふ、あなた達の命運も……ここまでかしらね、もう時間がないわ」

「さっさと行け、ニコ・ロビン。ためエも干上がりたくなけりやあな……俺アもう……相当キてるぜ……!」

「ええ……従います」

ニコ・ロビン? オールサンデーの本名か?

ルフィに吹き飛ばされて相当怒ってるクロコダイルに言われ、ロビンと呼ばれた美人はおじさんを連れてこの場を去った。ぼーねぐりふつてとこに行つたんだっけ、追つた方がいい……よね?

「ルフィ! 私はあの嫁を追う! だからクロコダイルは任せるよ、次負けたら今度こそ私が貰うからね!」

「おう! もう負けねエ!」

その言葉を聞いて、私も駆け出した。早くしないと見失っちゃうよ、どこにその何  
ちやらぐりふがあるのかなんて知らないんだから！

## 47 『女好きVSクロコダイル』

「はあっ…はあっ。——————迷った!!」

私がロビンたそを追いかけた時には、既におじさんを連れて何処かに消えていた。

それから数10分探し回ってる訳だけど、こんな広い都の何処に居るのかなんてわからないし!! あ———どこ———!!

「こつちか——!! 違うか! じゃあこつちは!? ちが——う!!」

行き止まり! 行き止まり!! 行き止まり!!

もう勘弁してよこの首都さんやい! 別に方向音痴じゃないけど、全く知らない土地だから何処行けばいいのかわかんないよ!

「こつちはどうだあ——!!」

「っ…あ、女好き…!?!」

「お…!?! まさか、たしぎちゃん!? ってどうしたのその怪我、血が…! 足の骨も…」

広い道に出た! と思ったたら、大勢の海軍とたしぎちゃんが道のど真ん中で倒れていた。しかも身体中かなり酷い怪我をしている様だ…、誰が私の嫁(予定)にこんな事を…!!

「女好き、あなたも…クロコダイルを追っているのですか…」

「え？いや、私はおじさんとロビンたそを。…もしかしてクロコダイルもここ通ったの！？」

となるとルフィとの戦いはどうなったの…!？」

「麦わらがクロコダイルを追って…葬祭殿の方へ…！あなたもそこへ向かって下さい…、私達では、奴を止められない…っ!!」

ガン！と地面を強く殴るたしぎちゃん。その表情や言葉からは強い悔しさや無念の気持ち痛み程に伝わってくる。

海軍である彼女が、海賊の私にこんな事を頼むのは……とんでもない程の覚悟の上での事だろう。

それに彼女は初めて会った時かなり正義感を持っていた。私に海賊を止めてくれと言うのは…屈辱の筈だ。

「…たしぎちゃん、あなたは早くその海兵を起こして…『広場』へ！暴動が激化してるの！たしぎちゃん達が行かないと犠牲者が増え続けるよ!!」

「…っ！分かっていきます！だったら女好き、あなたも、急いで葬祭殿へ！」

「それこそ分かってるよ！あと…私の名前はイリスだから！そう呼んでね!!そんでこの前したお茶の約束も忘れないでね!!ね!!」

は…、?と目を丸くするたしぎちゃんに有無を言わず走り去った。

目指すはたしぎちゃんの指さしてた方向にある「葬祭殿」とか言うよくわからんと  
し!

「…ん!?!」

葬祭殿まで急いで走ってる途中、今度は海軍ではなく海賊…それも我らが船長ルフィが道に倒れているのを見つけた。

急いで駆け寄って状態を確認すると、クロコダイルとの度重なる戦闘で出来た傷などが身体のあちこちにあり…本人も気絶していた。

「生きてるなら、ルフィだし何とかなるか…よし、起こそう」

ニヤリ、と笑ってルフィの頬を連続でビンタする。ゴム人間だから痛くないでしょ!ほらほらア!!

「ぶへっ!な、なんだ!?!おれ顔腫れてねエか!?!…お、イリス!!」

「あ、起きた?」

ニコ、といい笑顔でルフィを見ると、彼は分かりやすく顔を引きつらせた。

「ルフィ、負けた?」

「うぐっ…」

「負けた???」

「ま、…けた…!!でもイリス、次は必ずかー」

「うるさーい!!私もマリアンヌとか、ロビンたそとかビビ王女の恨みを晴らしたりとか、色々とおんの!これで私が負けたらルフィがやってよ!ね!!?」

ルフィが理解出来ない程の早口で勢いよく会話を終わらせる。

次こそは私の番、クロコダイルは私がぶっ飛ばす!!

「ルフィは広場に戻って!ビビ王女やナミさん達の手伝い!ほら行って!」

「く、くそ〜っ!!じゃあ絶対に負けんじゃねエぞ!」

「ルフィじゃあるまいし、負けないよ!!」

ニツ、と嫌味も入れて笑うと、彼も同じく笑って私に背を向けて走っていった。

さて…私も急ぐか!

「つて…絶対ここじゃん!」

ルフィと別れた後に少し走れば、道の外れに不自然な下り階段を発見した。

明らかに隠し階段なんだけど、それをついさつき開けたって雰囲気がある。

…この下に、クロコダイルが居るのか…!!

「待つてろ…!クロコダイル!!」

…ああ!クロコダイルと戦う事想定してないから、水持っていない!!?

…取りに帰ってる暇なんてないし、このまま行くしかない…!まあいいか…こうなっ



たらアレで……!

急いで階段を駆け下りれば、だだっ広い地下空間に出た。

あーもう! また広い空間!?! ここからクロコダイルを探すのも骨があるなあ!

「真っ直ぐ行ってみよう……とにかく今はそれしか……」

ただひたすらに真っ直ぐ走る。

多分、そんなに入り組んでもないでしょ、この空間!!

「……っ! あれは……!!」

ビンゴだ。真っ直ぐ走れば、その先にクロコダイルの姿が見えた。

その足元にはロビンが倒れていて、胸から血を流しているのが確認出来る。

「クロコダイル……ツッ!!!」

「……てめエか、女好き。クツハハ、てめエらのバカな船長なら……さつき殺したぜ?」

「バカはそつちだよバーカ! ルフィなら上で元気にしてるよ! きちんと始末したのを確

認しないのはあなたの悪い癖なんじゃない?」

クロコダイルの前へ立ち、ロビンを庇う様に構える。

近くにはあのおじさんもいて、何かしようとしていたのか柱に手を置いていたのを私

が来たことでゆっくり離れた。

「威勢が良いのは悪い事じゃあねエ。だが……水も無しにどう俺と戦う気だ? さつきの様

に吐き出してみるか?」

「それもありませんね!」

駆け出して拳を振りかぶる。クロコダイルはそんな私を心底つまらなさそうに見て、  
……私の拳に殴り飛ばされた。

「がはア……っ!?な、何だと……!」

「汗、倍加!!手汗べっちょべちよモード!」

にひひ、と拳を握ったり開いたりして挑発する。

何も水だけじゃないもんね、砂が固まるのは!!なんなら靴も脱いでるから蹴り技も問題ないよッ!

「はあ!!」

再度距離を詰めて殴りかかる。クロコダイルは私の拳を左腕で弾いて右手に砂嵐を発生させると、それを私にぶつけて吹き飛ばした。

「うわっ!?ぐ、……!」

地面に背中から叩きつけられて息が一瞬出来なくなった。あの砂嵐、厄介だな……!!

「女好き、例えてめエがどれほど出来ようが……俺の弱点を知っているようが、俺には勝てねエゼ」

「はん!言うだけならタダだしね、好きなだけ言ってなよ! ヒューマイニングクリス神背・倍加!!」

2人に分裂した私と「私」が、互いの位置を連続で入れ替えながらクロコダイルに走る。シャツフル！本物がわかるかな？

「神背・倍加…分身にいくらダメージを与えても意味はなく、本体に少しでも攻撃する事で解除可能。…だったか？」

「な…っ!？」

「言っただろう、てめエが俺の弱点の1つや2つを知った所で…戦局が変わる事は万に一つもあり得ねエのさ。砂嵐」

クロコダイルは的確に私を狙って砂嵐を当ててきた。倍加時点で既に分身を見ておらず、本体の私だけを狙っていたからシャツフルなんてした所で意味はなかったのか…。

いや…!そんな事よりも、何で奴が私の技を…!?

「だったら…!!」

攻撃をされた事で効果が切れた神背・倍加だが、私は再び距離を取って小太刀を構え、その刀身に汗水を垂らした。やばい、戦闘終わったら風呂入らないとまずいよこれ、嫁の前に出れないわ。

「10倍灰!!去羅…」

「飛ぶ斬撃、知ってれば対処のしようなど幾らでもある。砂漠の宝刀!」

「っぐ!!」

咄嗟に横へ飛んで避ければ、クロコダイルの放った砂の斬撃は地をも綺麗にパツクリと斬り裂いていた。

「な、何で…!」

「生憎と、ためエの情報なら幾らでもあるぜ?そろそろやらねエとまずいんじやねエのか?全・倍加オールインクリースとやらもな」

「…ッ」

何でここまで私の情報がこいつに漏れてるの…!?する事為すこと全て手の内がバレてる!

「クハハハハ…!何も分からねエって顔だが…女好き、本当に何も分からねエか?」

?

何を言ってるの…?そりや何も分からないでしょ、自分の事を全て把握してるとか…。

「まさか、ストーカー?」

「冗談はためエの容姿を見てから言うんだな、ガキ。…  
大地グラウンドの…」

「っ!?!」

クロコダイルが地面に右手を置くと、周りが一瞬にして砂に変わっていく。

あの右手…、相当厄介だね…！

「宝刀!!」

「がっ…?!」

周りの砂の中から突如として砂の刃が私を襲う。1つだけならまだしも、前後左右からの計4つもの刃だ。

見えていた前左右を避ける為に後ろへ飛び退いた時、私の背中を斬り裂いたのだ。

「ぐ……、手の内がバレてるのなら…!!オールインクリース全・倍加!からの… 10倍灰…銃!!」

「ツ……ち、そいつア…!!」

「どう?今考えたんだから、知らないでしょ!」

ルフィと同じように…とは行かなくとも、倍加で腕を伸ばしてクロコダイルを殴る。

そして、ルフィとは違って私の腕はゴムのように戻ってくる事はない…伸びたら伸

びっぱなしだ!!

「10倍灰…!鞭イ!!」

腕を大きく上に持ち上げて下に振り下ろす。

倍加で長く、固くもしてある私の両腕がクロコダイルに直撃して地面へ叩きつけた。

「砂嵐…!」

「っ!」

その言葉に慌てて腕を元に戻し距離を取ると、クロコダイルは砂嵐を引っ込めて自身を砂に変え肉薄してきた。くそ、その砂嵐はフェイントか!!

「さっさと死ね、女好き!」

「死ねるか…!あなたを倒すまでは!!」

そのまま振り下ろすフックに突き刺さらない様に、私はフックの中に腕を通して受け止めた。

フックに腕を引っ掛けたまま、クロコダイルの顔面目掛けて拳を振るうがそれは砂の身体を上手く駆使して躲される。

「全・倍加は…3分間で効果が切れる。そうだろう?なら俺はわざわざめエと戦ってやる必要もねエ訳だ」

「は…!?逃げるの!」

「クハハハハ!!俺がためエの土台で戦ってやる必要が何処にある?楽に勝てるならその方法を選ぶのは誰だってそうだろう」

それは…:…そうだけ…!!

「三日月形砂丘!!」

クロコダイルが振るった右腕が三日月の形をした砂を描き私の体を包む。

それだけで触れた部分の水分が吸い取られ干上がりそうになつたので慌てて水分を

倍加させるが、クロコダイルはその隙について私から距離を取った。

「砂嵐……」サーブルス 「重……」ペサード

「うっぐ……！」

右手から発生させた砂嵐が私に襲いかかる。その威力は今までの砂嵐とは桁が違い大規模な物だった。

……きつと、ユバを襲った砂嵐つてのはこれの事だろう。

何とか踏ん張って吹き飛ばされないようにするが、ロビンはそはおじさんの近くに飛ばされてしまった。

……あの辺なら、逆に巻き込まれなくて済みそうだ。

「どうした女好き、このまま砂嵐に吞まれて3分待つか？」

「は、はは……！……ふざけないで……!!」

畜生……！私の最大倍率じゃ、この砂嵐を乗り越えられない……！このままじゃ本当にあいつの言う通り、時間切れまで粘られる……!!

「ツ……あ」

そんなギリギリの状態でも耐えられる筈もなく、私は遂に巨大な砂嵐に吞まれて遥か高く吹き飛ばされた。

天辺の岩盤に激突して止まり、下へと落ちていく。

「終わりだ…。砂漠の宝刀！」  
デザート・スパーダ

「が…っ、ああああッ!!!?」

落下中の私に向かって飛来した圧縮された砂の刃は、10倍の防壁壁など容易く斬り裂いて私の肩から腰まで一文字に傷跡を刻んだ。

空中で後方に飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がって壁にぶつかり止まる。最大倍加で自然治癒を促すも、そもそも痛みが尋常じゃなくて能力が上手く使えない。

「っ…は、ふう…」

「クッハッハッハ!!虫の息じゃねエか女好き…、麦わらが生きていたのなら、まだ素直に任せていた方が良かったんじゃないやねエのか?奴より弱いてめエが俺に勝てる訳がねエだろう」

「…っ」

…確かに、ルフィなら…。

でも、私だって…こいつには負けたくない…!!

「俺は今までにてめエの様な奴を幾らでも見てきたぜ。身の程を弁えず…誰かの“為”だと言いつい聞かせ無謀にも格上に挑む馬鹿をな。そんな奴はこの海には幾らでもいる、その他大勢の雑魚としてな」

「う、るさい!!!」



コツコツと私の前まで歩いてきたクロコダイルの不意を突く様にバツと立ち上がり、アッパーを狙う。

だがクロコダイルはその拳に見向きもせずニヤリと口角を上げた。

「あ……」

「気付いたか？……てめエの負けだけ、女好き……」

拳はクロコダイルの顎を捉える事なく、すり抜けた訳でもなく……ただ届かなかった。

それは無慈悲な身長差。そして、身長に差が出来てしまった最大の理由が……。

「全・倍加が……切れ、た……」

体の硬さ、力、五感、汗……何をやってもうんともすんとも言わない……倍加しない……!!

「……、だったら、この身一つで!!」

「俺ア、身の程を弁えろと言った筈だけ」

「ツぐ、ごっつあ……」

振りあげた拳がクロコダイルに届く前に、奴の蹴りが私の腹に刺さりすぐ後ろの壁にまたも激突した。

ずるずると壁を背に崩れ落ち、乱れる息を何とか整えようと呼吸を荒く繰り返す。

「能力ありきのためエの戦法がこの俺には通用しなかった。能力もねエただのガキに成

り下がったためエに何が出来る？」

「まだ…！負けてない!!」

「クハハハ…！気概だけは認めてやろう、だがためエもわかった筈だぜ、気持ちだけではどうにもならねエ」  
 “壁” って奴をよ」

「…つるさい、ぐ、…私は、…私を信じてくれたルフィの為にも…私を待つ嫁の為にも…!!  
 !!負ける訳には…!!」

「ク…、ハツハツハ…！クツハツハツハ！ハーツハツハツハツハ!!!」

突然に笑い出したクロコダイルをキツと睨めば、奴は右手で顔を覆って尚もくつくつと笑いを堪えきれていない様だった。

「何が、おかしいの…！」

「丁度いい…『来たようだ』。教えてやろう、何故俺がためエの能力を全て把握していたのか…その全てをな。全てを知った時…ためエは何もかもがバカバカしくなるだろうさ」

「…！どういう…」

「本当は気が付いてる筈だぜ、女好き。ためエの様な名も知れねエ海賊団の一団員でしかねエ奴の能力を、七武海であるこの俺が普通なら把握している筈がねエだろう。…  
 てめエらの海賊船に、情報提供者でも乗ってねエ限り…な」

「ふ……っ、ぎけるなっ……!! 私達の船に……、麦わらの一味にそんな人お……!!」  
いるわけがない……! そんなの……、だつて……!!

「おかしいとは思わなかつたか? そいつが船に乗り込んだ途端、我が社の追手がためエらを見つける速度が上がった事に」

……!!

…違う……! コイツはただ適当言ってるだけの筈なんだ! 気にするな……気にするな!!

「そもそも、ためエらの船に乗り込んだ理由が……普通ならあり得ね工程強引だった事に。一味に誘われてねエのに、船に乗った奴が居ただろう」

「……っ! もう、やめてよ!! 私には信じない!! 私達の仲間にはスパイなんて………あ」

頭の中が、目の前が真っ白になったような錯覚に陥る。

いつの間にかクロコダイルの横に立ち、いつもの様に薄ら笑いを浮かべながら私を見下ろす彼女がそこに居たからだ。

ああ……今思えば、レインデイナーズの地下通路で……甘いチョコの様な匂いがしたのは、きっと彼女の……。

「—————キャハッ」

48 『女好き、怒りと涙——ぶっ飛ばせ彗星の別れ（コ  
メット・アヴィオ）』

「み、きー……た」

「キヤハハつ、何かしら？女好き」

「……つ」

《あなた達一味はもう……社長に目を付けられてる》

あの時のマリアンヌの言葉が浮かんでくる。

……彼女は、暗にこの事を伝えていたのか……

「クハハハハ!!これはいい、傑作だぜ……!てめエの信じた嫁とやらは、実はこの俺が仕向けたスパイだったのさ!脆い愛もあつたもんだ……!!」

「社長、上は滞りなく作戦完了です。爆発もこのまま行けば予定通り進むかと」

「御苦労だったな、ミス・バレンタイン。丁度いい……最後に1つ仕事をくれてやる」

クロコダイルは跪くミキータにくい、と顎を動かして私を指した。

「こいつを殺せ。今の奴ならお前でも問題なく殺せる」

「はい」

ミキータは短くそう返事をする、私の頭に右手を置いた。

…クロコダイルの言う通り、今の私なら…この右手の重さが1万キロ…いやもつと軽くても体ごと潰れて死ぬだろう。

「ミキータ…どうして…!?私の嫁になってくれたんじや」

「オイオイ…俺の指令があつたからミス・バレンタインにはてめエの訳の分からねエメ  
ンバーとやらに入つて貰つたに過ぎねエ。むしろ…コイツはてめエに対する恨みで一杯だろうよ。何せ好きでもない奴の嫁にされ、自分はまるで相手を好いてるかの様な態度を取らなきやならねエ…屈辱だつたらう!!コイツは今、てめエを殺したくてうずうずしてるのさ!!さあ殺れミス・バレンタイン!!積もつた恨みを晴らせ!!クツハツハ!!」

「っ…」

ぐつ、と頭にかかる負荷が大きくなった。…それは、ミキータが能力を使用したの  
意味する。

「…、はあ!!1万キロ…プレス!!」

「がっ…!」

重さに耐え切れない頭が下に落ち、顔面から地面に沈んだ。

……ぐ、……、……あ、れ？

「……完了しました。死体は後で私が」

「クハハ！よくやった…!!念の為に頭を潰しておけ、その方が踏ん切りがつくってモンだぜ」

「……、社長<sup>ホス</sup>」

何やら雰囲気が変わったミキータにクロコダイルは訝しげに眉を寄せ、彼女の声に何だ、と答える。

「頭を潰す、それだけでは色々手間です。この場にはミス・オールサンデー。そしてコブラも居ますので……この祭殿自体を潰してしましましょう」

「……ほう、俺に逆らうのか？」

「その方が効率が良いかと。どの道3人共逃げられる身体ではありません」

「……」

そんなミキータの言葉に、クロコダイルは一呼吸置いた後振り向いて歩き出した。

「なら、さつさとするんだな。てめエの能力なら柱の1本や2本、直ぐにへし折れるだろう」

「ありがとうございます。……とところで、社長<sup>ホス</sup>」

「……いい加減にしろ、俺を怒らせてエか……ッ!!?」

ミキータの、1万キロプレス…私にしたのは、1万キロどころか100キロもありはしなかった…!!

私を、殺さなかった…じゃあ、ミキータの狙いは、まさか…!!

ぐ、と顔を上げれば、私の視界には小樽を薙ぐ様に振るつたミキータと、その樽から出てきた水に濡れたクロコダイルが映る。

「いいえ、怒らせたいではなく…倒そうと思っただけよ!!こんなにもこの人を、あの子を傷つけた…あなたを!!」

「……………てめエ」

「キャハ…キャハハハ!!どうかしら!?まさか、誰一人信用してないあなたでも…私の裏切りは予想外だったかしら!!」

水樽をぼい、と放り捨て笑う彼女を、水で濡れたクロコダイルがギロリと睨んだ。

「てめエ…一体自分が何をしてるのか、分かっているのか…う」

「ええ、百も承知よ。私は私の大好きな人を傷つけた野郎をぶっ飛ばしてやろうと思ってるだけ」

「う、…ミキータ…?」

彼女は軽く目だけで私を見て笑う。…でも、ダメだ!!ミキータと、奴を戦わせる訳には…!!



「水で濡れたあなたには、攻撃が良く通るでしょ！一万キロ！プレ…」

「……バカが」

「…っ」

ミキータが空中へ飛び上がろうとした時、クロコダイルの左腕が砂となり伸びてフックでミキータのお腹を貫く。

…しかも、何このフック…、中に毒針が仕込んであったのか、それで貫いているのだ。

「ミキータ…っ!!?!」

「ど、うじて…!?!濡れた、咎じや…」

「俺の右手は…渴きを与える。濡れた箇所に触れるだけで水分を吸い取るのは容易なのだ。さ…。ミス・バレンタイン…、お前はよく働いてくれた。なのに最後の最後で失望させてくれる…!」

ぶん！と左腕を振ってミキータを私の近くに振り下ろしたクロコダイルが、コキ、と首を鳴らす。

ミキータはと言うと、倒れたまま自身のお腹に手を添えて全身を痙攣させるかの様に震えていた。

「み、ミキータ…！何で…っ」

痛む体を引き摺りながらミキータの隣に行き、何とか座って彼女の上半身を抱けばそ

の体はかなりの熱を持っていた。

「クハハハ……この毒針にはな、巨大なゾウだろうと掠っただけで命を落とす猛毒を塗ってあるのさ。そいつはそれに貫かれたって訳だ。この意味はわかるだろう?」

「ツ……ミキータ!嘘でしょ……こんな、こんな事で……」

「……い、り……すちゃん……」

「っ」

弱々しく私の頬を撫でてきた手を握り締める。

「きゃ、はは……。やっぱり、ダメだったわ……ま、上手くいく訳ないって……分かってたけど、ね」

「だったら、どうして!!」

「……これ、は、……罰だから。……私の、あなた達を騙した……罰」

ごほつ、と咳き込めば、その口から夥しい量の血が出てきて彼女の胸を真っ赤に染め上げる。

「……私は、最初……あの島で……っ、ああなたの想いを利用して……一味に入った……。ハーレムメンバーに……入るつもりも、無かったわ……寧ろ、バカバカしいって……思ってた……っ」

私の頬に当てている手の力が強くなる。ミキータの今の心境を……いや、今までの葛藤を表すかの様に。

「ビビ……だって、いつか寝首を掻いてやろうって……。そう、ね……ナミちゃんを殺せば……。あなたの戦意を削ぐくらい出来るかもなんて……。考えた事も、したわ……」

そこまで言えば、ミキータはその瞳から大粒の涙を流し始めた。

彼女の想いが、懺悔が、涙となって形を変えて出ているのだ。

「でも……。っ、ダメだった……。一緒に冒険する内に……。あなたと、長く時を過ごす度に……。私は、本当の意味で……。あなたの嫁に……。っ、この一味の、本当の仲間になりたいって……。ごほっ、げほっ……。Mr. 5……。彼と戦った時はもう、薄らとそんな気持ちだが、芽生えてたわ……。がふっ……」

「うん……。うん……。もう分かっていたから……。だから喋らないでミキータ！ 本当に死んじゃうよ！ 嫌だよ私は……。ミキータ！」

「この地に来てからは……。きや、はは……。もう、1分1秒が過ぎる度……。私は、自分の犯した罪に……。潰されてた……。私は、仲間になりたいって……。そう思ってたあの子の国を……。潰す手伝いをしてたのよっ……。そんなの……。今更、どの面下げて……。……。だからきちんと……。最後まで、私の出来る事をしたかった……」

私は何を言っても、ミキータが喋るのをやめる事は無かった。

私はきゅつと唇を噛み締めて、ミキータを強く抱きしめる。

「怪しまれないように……。クロコダイルに……。みんなの情報を……。流したわ……。最初と違って

「…どうでもいいような物だけど…。でも、それだつて裏切り…。だから、みんなと顔を、合わせづらくなつて……」

「それで私達から離れて、クロコダイルを殺せる機会を伺つたんだ…っ」

「…ん。…ま、そこまでしても…結果は、見ての通りよ…。きや、はは、ほんと…情けない、わね…みんなを裏切つて…好きな人を、裏切つて…結局…何も為せない……っう…っわだ、し…!!私…!うう…っ!ごめん、なさい…!みんな…ごめ、んな…さい…ツ」

私は更に強くミキータを抱き締める。何で…何で彼女が私達にここまで謝る必要があるんだ…!!

「いいよミキータ…!また一緒に麦わらの一味になろうよ!私の嫁だつて…やめてないよ、一度なつたら逃さないから…だから、だからさ…!死なないで…っ!!」

「…ごめ、んなさい…いり、すちゃん…。あり、がとう…だ、いす…、……」  
「ミキータ…?ミキータ!!」

私の頬を撫でる彼女の力が不意に抜け、叫ぶように彼女の名を呼ぶ。

信じてもない神に全霊を込めてお願いをし、オールインクリース全・倍加の反動で使えない…!そもそも自分以外の人には効果が無いと分かっているながらも治癒の倍加をかけたり、出来る事を全てやる。

それでも、ミキータが目を覚ます事はない。…鼓動が、段々、段々弱くなつて……。

「クツハツハツハ……! 死んだか……ミス・バレンタイン……! 下らねエ情になど絆されるからそういう結果を招く……。『愛』だの『仲間』だのほごく奴ほど先に死ぬように出来るのさ、この海は」

「……………ミキータ」

「女好き、てめエも同じだ。そのバカな女同様、下らねエ理想掲げて勝ち目のない相手に勝負を挑んだ時点で終わっているのさ」

びくり、と私の眉が動いた。

ミキータをそつと地面に寝かせて、立ち上がってクロコダイルに向き直る。

「じきに上の広場も爆発が起こり……民衆は残らず消し飛ぶだろう! 勿論、そこに居るだろうてめエのお仲間も含……………ツ!!?」

クロコダイルが振り向いた私の顔を見て飛び退く。

その目は驚愕で見開かれており、額からは夥しい程の汗が流れていた。

「(何だ……? 今……俺はまさか……怯えたのか……? この俺が……こんなガキに……!?)」

「……………バカな女?」

「……な……、」

クロコダイルは、今度こそ本当の意味で驚愕に顔を染める事となる。

目の前で起きている事態に処理が追いつかないからだ。

「バカは私だよ。…私がバカで、弱いから…だから、ミキータは苦しんだんだ。…何も為せない?…違う…!私、繋ぐ…!!ミキータの思いは、私が…!!!」

私の体を中心に、オーラを可視化したかの様な衝撃波が吹き荒れる。

私の怒りが現れ出たのか、そのオーラは酷く乱暴で荒れ狂っていた。

「私は、最低だ…。少しでも彼女を疑って、裏切ったなんて思ってた…。今回ばかりは自分に呆れたよ。…許せない、そうでしょう?」

頭に透明なティアラが顕現する。

幼い見た目は、能力が使えない筈なのに全・倍加オールインクリースを使った時の様に成長し、黒い艶やかな髪も灰色へと変化した。

「…ク、ハハ…ツ…何だその髪は…!頭のそいつは!!てめエはさっきの反動で能力が使えねエ筈だろう?!まさか…!」

クロコダイルが倒れたミキータに視線を向けるが、それは勘違いだ。

ミキータが奴に虚偽の報告をしたのではなく、全・倍加オールインクリースの反動が戻った訳でもない

…これは、私にも分からないんだから。

ただ…。

「だからまずは、あなたをぶっ飛ばす…。ビビ王女だけじゃなくて、ミキータにまで酷い事をしたあなたも…私は許さない」

「…ハ、ハハハ!!クハハハハッ!!死にかけのガキが…ちよつと粋がつた程度で何が変わる!!<sup>サーブルス</sup>砂嵐ツ!!<sup>ベサード</sup>「重」!!」

私とミキータを襲う巨大な砂嵐が目前まで迫り来る。さつきはこいつに為す術も無かった。

…だけど。

「……………<sup>さんじゆう</sup>30<sup>ばいばい</sup>倍灰」

「何だと…ツ!?!」

「去柳薇<sup>さよなら</sup>」

ゴオオウ!!!

と吹き荒れ、今にもこの祭殿ごと飲み込みかねない程の巨大な砂嵐に対し、私は拳一つを突き出した。

10倍の時とは比べ物にならない程の威力をもって拳は砂嵐と衝突し、遂には拳一つで砂嵐を打ち消してしまった。

「……、そ、んなバカな…」

「だから言ってるでしょ、私はバカだって」

手をぐつと握りしめる。…わかる、私の限界は…まだまだこんな物じゃない。

「……!砂嵐……!」

「何度も何度も…もう効かないよ」

いつかの海賊、クロよりもずっと速いスピードで奴に接近して砂嵐を起こす前に顎を蹴り上げる。

そして足を掴み、浮き上がった体を地面に叩きつけた。

「がっ…はっ…！動きが、見えねえ…だと…?!」

さんじゆうばいばい  
レインファスト  
「30倍灰… 拳 雨」

「ぐっ、調子に乗ってんじゃねえ…！」

右腕を振りかぶると、私の肩から腕が29本生えて計30本になり拳が雨の様に降り注ぐ。

クロコダイルは体を砂に変えてそれを避け、離れて地面に右手を置いた。

グラウンド・セツコ  
「千 割!!」

「!」

奴の触れた地面から始まり、徐々に地面が砂へとなっていく。

そうなれば自然と足場は無くなっていき、地面は不自然に迫り上がったたりひび割れたりして体のバランスを崩れさせた。まるで、大きな地震の震源地に立っている錯覚に陥ってしまいそうだ。

横たわったミキータの服も砂に変わりそうになり、それを見て私はミキータを優しく



抱き上げた。

「グラウンド・デス侵食輪廻…!!」

完全に足場が砂へと変わってしまった。

まるでこの場に砂漠を召喚したかの様な足場になってしまい、もしあのままミキータを寝かせたままだったら…彼女ごと干からびていた筈だ。

「…まだ、生きてる」

ミキータは弱々しくも、それでも鼓動は不安定ながらリズムを刻んでいる。

生きているのなら…まだ、助かる…!

ミキータに衝撃が行かないよう丁寧に、だけれど一瞬のうちにおじさんやロビンの近くに移動して、ゆっくりとミキータを寝かせた。

「…君は、一体…」

「…。さあ、少なくとも、今はただのバカだよ」

その際に話しかけてきたおじさんに軽く答えて、再度砂の地へ戻った。

「終わりだぜ…女好き。この地は俺の戦場だ、ここでの俺は無敵なのさ!!」

「口じゃなくて、行動で示してよ」

腰を落として構える。

…ミキータは勿論…ロビンだって怪我してる…戦闘を長引かせる訳には行かない。

……次の攻防で終わりにしてやる。

「終わりだア!!!」

「……?」

体を砂に変えて正面から突撃してきたクロコダイルに、そのまま拳をお見舞いしてやろうと腕を引いた所を足元の砂から出てきた砂鎖に全身を縛られる。

「てめエもあの女諸共……死ぬがいい!!」

「……私も、この国も……ビビ王女も……ミキータもオ!!!」

「がっ……?」

ブチツッ!と砂の鎖を引きちぎり、拘束しているからと油断して無防備だった奴の腹に蹴りを入れて遙か上空へと飛ばした。

「……ぐ、……!」

「あなたなんか……殺されてたまるかア!!!<sup>ごじゆうばいばい</sup>50倍灰!!!」

「ツ!!畜生が……!砂漠<sup>デザート</sup>の……!」

足に最大の倍加を付与する。

クロコダイルは右手を大きく後ろへ振り被り、高密度に圧縮された砂をその手に集めていた。

「<sup>ラスバード</sup>金剛宝刀!!!」



上へと吹き飛ばした。

「はア…はア…いやっ…た…!!」

遙か遠くへと飛んでいくクロコダイルを見ながら、私の体は重力に従い落ちて行く。

…だけど、奴を倒すのは通過点…まだ私にはやるべき事が残っている筈だ。

「ーっ」とー!

かなり高くまで跳んでいた為、落下のダメージを想定していたのだが全く身体に痛みはなくゆるりと着地を決める。

落下のダメージは確かに全くないけど…それ以外のダメージが多すぎるよ、それに私のこの変化……一体何なんだろう…。

「いや、今はそんな事より…」

急いでミキータ達の元へ駆け寄り様子を見れば、ロビンが起き上がりおじさんに何やら薬の様な物を渡していた。

「早くそれを飲ませてあげなさい。クロコダイルから受けた毒を中和できる」

「そ、それほんと?!」

自分もお腹を貫かれてるのに…!結構良い人だね、ロビン!

私がミキータに薬を飲ませてる間、おじさんとロビンは私に理解できない話をしていてた。

兵器がどうか、真リオ・ポージェリフの歴史の本文がどうか。

「っ!？」

「なんだ!？」

突然聖殿が揺れ出し、天盤やら柱やらがそこかしこから崩れ落ちてきた。…流石に戦鬪の規模が大きすぎたか…!この聖殿が耐えられなかつたんだ!

「…ここが最後の希望だった。そして…ハズレ…。…ここでそのまま死ぬのなら丁度いい。この道で生きて行く事に私は疲れた…。…ただ歴史を知りたいだけなのに」

崩れ行く聖殿の中、ぺたりと壁にもたれ掛かりながら座るロビン。

「私の夢には…敵が多すぎる」

「ッ…泣くほど悔しいならさ…!!」

ヒューマ・インクリス  
神背・倍加で私を2人増やして1人はおじさん、1人はロビンを抱き抱えさせる。

「簡単に諦めないですよ…夢なら!!あなたの夢はちよつと私には難しい話だけどさ…諦めるのは死ぬ時でいいでしょ!!それが夢ってもんだよ!!」

「っ…」

本体の私はミキータを抱えて、急いで聖殿から脱出して地上に出た。

…あ、雨降ってる…。この国は救われたんだ…。

「叶わない夢だつてあるわ!あなたに何が…」

「…もう!!うるさいな…!ぶっちやけあなたの夢なんてどうでもいいよ、私の夢の為にあなたには死んで欲しくない!!わかる!!」

「なんて無茶苦茶な…」

おじさんは苦笑いで、ロビンは絶句していた。いやでも、ロビンがここで死ぬなんて勿体無いよ。死ぬくらいなら嫁になってよね。

…まあ今はそれよりも、ミキータを何とか治療して貰わないと…!誰でもいいから…出来ればチョッパーに…!!

「あ、れ…っ」

ぐら、と視界が揺れる。

だめ…今はまだ、倒れる訳には…。

「……………つ、み、きーた……………!!」

ミキータを、治療してくれる医者を見つけるまでは…倒れる事なんて…!!

「…っ」

言葉とは裏腹に、私の身体は相当限界が来ていた様だ…。ゆっくりと身体を傾かせ…。

「よ。…ったく…2人揃って何死にかけてんのよバカっ…!あんたに至っては何よその

髪と飾りは……。ほらみんな、運ぶの手伝って！」

「おう！」

「あ……。な、みさん……」

掠れ行く意識の中で、最後に見たのは私を支える最愛の人と……大好きな仲間達。

ああ……。良かった……。ミキータは、もう大丈夫だ……。ね……。

……。そして、私は完全に意識を絶ったのだった。

## 49 『女好き、これはきつと、愛ある印』

「…っ」

暗闇から瞼を持ち上げる事で抜け出した私は、まず目だけを動かして状況を確認する。

ベッドの上…か、ふかふかだ…カヤの時もこんな事あったっけ。

という事はナミさん達がここまで運んでくれたんだろうな、広い部屋だし…もしかしたらビビ王女が宮殿の一室を貸してくれたりしたのかな？

「…あつ…ミキータは…っ?!」

ガバ!と綺麗に被せてくれたいた布団を取っ払って上半身を起こす。

あがが…!な、何…?身体がめっちゃ痛い…凄く痛い…!

「…っから、急に体動かしちゃダメよ」

「ツー」

私の横に設置されてあるベッドから聞こえる声にぐるっと首を向ける。

そこには、いつもの丈の短いワンピースとは違い病人服を身に纏ったミキータが私と同じく上半身を起こして笑っていた。



「ミキータ…！お、お腹の傷は…毒は!?何ともない!」

「キャハツ、何ともはあるわね、なんとって2日程心臓が止まってたみたいなのよ、私」  
「ええっ!!!ミキータ、死んじゃったのお!!」

「ちよつとイリスちゃんは落ち着いた方が良いと思うわ」

とまあ、峠を乗り越えミキータはチョッパー達の尽力により急死に一生を得たという訳だ。本当に…良かった…!

普通なら2日も心肺停止して死んでるよ…奇跡…!!チョッパーありがとう!!

「………ん?2日?」

「ええ、今日である日から3日目ね」

「………なぬ!」

どう考えてもミキータの方が重傷だったのに、私の方がぐっすり寝ていたって事!!?

「イリスちゃんは軽く考えてそうだけど…イリスちゃんの身体も相当危険な状態だったそうよ」

「…そっか」

…私でも何が起きたのか分からなかったけど…間違はなくあの時、私は自分の限界を越えた。神背<sup>ヒュム</sup>だつて2人増やせたし。

どうすればああなるのかは全く分かんないけど…とにかくあの時の私は尋常じゃな

い力を得てた筈だ。その反動が一気に来たって事かもしれない。今じゃ背丈も髪も元に戻ってるし…ティアアラも無いし。

「でも、本当に良かったよ…ミキータが無事で」

私が笑顔でそう言えば、ミキータは少し表情に影を落とす。

「…イリスちゃん、本当に私を許してくれるの？」

「ああ、そういうの良いよミキータ。つまんない」

「え？」

よつこらせ、と年寄りの様にベッドから抜けて彼女のベッドに座る。そのままミキータの胸にぱふ、と顔を落とした。

「許すとか、許さないとか…いやね、怒ってないから。だってミキータは私の嫁でしょ？…それにさ、それを言うならミキータが私を許せるの？私はミキータを最後まで信じ切れなかったんだよ？最低だとは思わないの？」

「…：…キヤハハ、本当ね…つまんないわ。…私も怒ってないもの、イリスちゃん」

「ふふ…でしよ？」

私の頭をぎゅつと抱きしめその胸に押しつけてくるミキータ。

…あ、何も考えずにやったけどこれあかん、むらむらする。

「改めて…誓わせて。私はあなたの嫁になりたい、みんなの仲間になりたい…大好き…

イリスちゃん」

「うん……つ、とつくに嫁だよ……！仲間だよ！」

ミキータの左腕に巻かれた包帯を掴んで引き寄せ、キスをした。初めて強引にした時よりも深く……ミキータを強く求めるように。

……だつてむらむらしてますから、仕方ないね。

「……あらお2人共、随分お盛んの様ね」

「「ぶはっ?!」」

急に背後から聞こえたナミさんの声に私達は慌てて顔を離す。

「な、ななナミさん！あれ、ビビ王女も！お、おはよう！」

「ええおはよう。所で続きはしないのかしら？私の事は気にしなくていいわよ？」

「ええ?!私は気にするわよ、ちよつとミキータ、じゃあいつかみたいに続けようとしなくて！」

ビビ王女が私を抱き上げてミキータから離した。ミキータは少し不満げな顔をしたが直ぐにニヤリと笑つて言う。

「だつたらビビもすればいいじゃない、キ・ス♪」

「んな……！」

「なんだつてアラバスタを救つた英雄よ？王女から何の謝礼も出ないつて事はないで

「しよ?。」

そこにナミさんの追撃も決まり、ビビ王女は顔を真つ赤に染め上げた。

「う、ううう! だったら! イリスさん、ビビ王女って呼ぶのやめて! あなたの嫁になるなら…立場は関係ないでしょ!？」

「思い切ったじゃないビビ」

うんうんと満足げに頷くナミさんだが、何だコレ? 美女3人に囲まれて…しかもみんな私の嫁? 私は死ぬの? 前世でどんな徳を積んだんだ? いやただの女子高生でしたが?

「あー…び、ビビ。…その、キス…」

「ああもう! こんな我慢ならぬわ!!」

「えっ!? ちよお…んっ?!」

まさかのビビ王女…ビビからの強引なキスに目を見開く。あるえ? 何で私されてる側なの?？」

しかも深い方だし! ビビノリノリだし、ちよ、さつきむらむらしたばつか…まずい、これは非常にまずいーっ!!

「…そういえば、あの日から碌に夜の相手してくれないじゃない。せつかくだから今してくれる? 1人も3人も変わらないわよ」

「ぷは……つ、な、ナミさんちよつと待つて……今はまだ夜じやないし……！それに幾らハーレム女王目指してるからつてこんな同時に相手なんて……ちよ、ミキータまで何でそんなキラキラしてるの……ちよつと……だめ……あつ、アツ……！！！！」

……私は、ハーレム女王を目指している筈でしたが、結果として私は3人の獣に弄ばれる子羊になってしまったようです。

あれ……どうしてこうなった。

それにミキータ……傷は大丈夫なの……??

\*\*\*

カポーン

「あー、気持ちいい……」

「ほんとねえ……」

「キャハ、いいわねエ…私も全身浸かってみたいわ」

現在、私とナミさん達は揃って王の宮殿の大浴場にやってきていた。ミキータは足だけしか浸けてないけど。

やっぱり私達が寝てた所は宮殿の一室だった様で、王様の命令でこっそり海賊である私達を匿ってくれていたのだ。

王様って誰だろう、私見たことないんだよね…。ビビのお父様になる訳だから…やっぱり挨拶とか？いるよね?？」

「…そういえば、ロビンはどうなったの?」

「ロビン?…もしかして、増えたあんたが抱いてた女?それならあんたが気を失った後何も言わずに何処か行つたわ。なんか思い詰めた顔だったけど…」

そっか…まあ、無事ならいいや。

ちなみに現在、私達には知る由もない事だが男湯の方では女湯を覗くか覗かないかで揉めていた。

王様やサンジは覗きたがったが、他のみんなが全力で止めたそうさ。理由としては「イリスに殺されちまうぞ、まじで」

「…私達、今夜にでもここ出ようかと思うの」

「え、そなの?」

「あんたもミキータも起きたからね、ここに居る理由がないじゃない。港には多分海軍も構えてる、船もそろそろ危ないわ」

「…そうよね。みんな海賊だもん、この国にいつまでも留まってなんておけないわよね」  
「ま…そういう事。…ビビは、これからどうするの?」

ナミさんの問いに、ビビは直ぐに答えを出すことが出来なかった。

…私としては、そりや勿論一緒に行きたいんだけど…。

「かなり悩んでるよね、アラバスタの姫様」

「そりやね…なんとたつて今後の人生が……つてえええええ!!? マリアンヌ!!」

「へっ?ミス・ゴールデンウィーク!」

いつの間にか私の隣で湯船に浸かってたマリアンヌに皆が目を飛び出させて驚く。いやだつて彼女と別れたのリトルガーデンだからね!? ここアラバスタだけど!!!

「些細な事はどうでもいいじゃない。…あなた、本当に社長<sup>ボス</sup>…いや、クロコダイルを倒したみたいね」

「些細かな? ここ宮殿内の筈だけどなあ?…ま、いつか…。うん、倒したけど…」

「なら私は約束通りあなたの嫁よ、よろしくね」

「あつ…確かに約束したよね!まさか本当に来てくれるなんて…感激だよ!!」

やったー!!マリアンヌも嫁になってくれた!!やった!

「だけど一緒に行く事は出来ないわ。私には夢がある…そのレモンと違って私は自分の夢を放棄してまであなたについて行く程惚れ込んでないもの」

「キャハハ、レモンって私の事かしら?」

「…それを言いに来ただけ。ただ、今後私の所へ寄る事があつたのなら…こんな体で面白味はないかもしれないけれど好きにさせてあげるわ」

つまり、する事してもいいってこと?

「じゃあ、それだけ。またね、イリス」

「あ、名前を…。ってマリアンヌ、もう行くの!?!」

「ええ、私は嫁の中でも比較的立場が弱いから…その3人に囲まれると生きた心地がしないのよ」

え、そんなヒエラルキーあるの?

と思つてナミさん達を見るとないない、と首を振っていた。

もう一度マリアンヌの方へ顔を向ければ、既にその姿は無かつた…。

\*\*\*



「いっは？」

「寝室、私のね」

…そ、そうですか。

というわけでなんと今、まさかのビビの寝室へと通されてる訳であります。

昼にあんな事をしておいて今更寝室に招かれるくらいって思うかもしれないけど…それとこれとは違うから！

「どうしたの？あ、もしかして…決まった？」

「…ううん、それは、まだ」

私達についてきてくれるのか、どうか…。

ビビは確かにまだ迷っているような表情を浮かべている。

「ただ、改めてお礼を言わなくちゃと思って。この国の真の英雄ですもの、ね？」

「…いやー、そうかしこまって言われると…照れるよ」

英雄なんてガラじゃないし…私は女王を目指してるんだから！ヒーローよりクインが良し！

「本当に、ありがとう…！これは凄い事よ、本来なら私の体一つなんかじゃ足りないくらいの大恩なんだから！」

そんな恩があつてたまるか！ビビの体はそんな安くない！！

「そりゃ…ビビは恩を感じるかもしれないけど、私はただ許さない奴をぶっ飛ばしただけだし…下心もあつたからね。そんな大それたものなんかじゃないよ、はは」  
「そう？前々から思つてたけど…イリスさんはもう少し積極的になつてもいいと思うけど…」

そんな事を言うビビを見て、軽く吹き出してしまった。

途端に頬を赤く染めてぶんぶん手の平を振るビビだが、笑つたのは別にビビの言つてることが間違つてるからじゃない。カヤと同じ事を言っているのが面白かつただけだ。

「私は、自分では十分に積極的だつて思つてるんだけど…。なんで？」

「…だつて、我慢している時があるじゃない。今だつて…折角2人きりなのに何もしないの？」

「何もしないのつて…さつき存分に…」

「あれはまた違うわ。そうでしょ？」

「…ビビは核心を突いていると思つているのかもしれないけれど…私は本当に心当たりがない。」

我慢をしているつもりはなく、ただヘタレしているだけの筈だ。

……そうだ、それ以外であつちやいけない。

『…また、逃げるの?』

「……ええ」

不意に聞こえた声に振り向いても、そこには無地の真っ白な壁が一面に広がっているだけだった。

…あの声…そうだ、ユバで聞いた、あの…。

「イリスさん?」

「……え? あ、ああ…ごめん、何でもないよ!」

軽く笑って誤魔化すが、ビビは更に怪訝そうに眉を潜めた。

「…あー! イリスさん、目にゴミが…! 早く閉じて!」

「えっ!? な、なにになに!? こう…!? ……ッ!」

「っ…」

大声に反射的に目を閉じれば、直後に唇へと恐ろしく柔らかいながか当たる感触があった。

鼻腔をくすぐる良い香りが目の前に広がり、思わず閉じた目を開ける。

「……っ、ん」

…分かつてはいたけど、それはやはりビビが私にキスをしてきた感触だった。

見た目の割にはかなり大胆な性格で、それでいて誰よりも他者を気にかける…それは私とはまた違った「王」としての器だ。

そんな彼女の唇が、私を強く求めて吸い付いてくる。…私は、手を出すべきだ。今ビビはそれを望んでいる。驕りじやなくそうだと確信出来る状況じやないか。

「ん……、イリスさん。……私は、貴方なら……」

「ビビ…」

ナミさんと初めてそういう行為をした時も、何故か内心で怯えている私があったのを覚えていてる。

そしてそれは今も……。

「ビビ……」

だけど…!!でも…ビビの気持ちを受け止めてあげなくちゃいけない…!!ここまでさせておいて、出来ませんだなんて…そんなの、言っちゃいけない…!!

私は、怯えるへタレな自分を奮い立たせて…彼女の服に手を掛けたのだった……。

\*\*\*

夜——、行為を終えて、再度ビビとお風呂に入ったりしていたらこんな時間になった。

今は客室にビビを含めた一味全員が揃っている。……くう、あんな事をしたばかりだからちよつと恥ずかしい。

「電伝虫？誰から？」

宮殿の係の人が、「ボンちゃん」って人から電話だと部屋へ電伝虫を持ってきた。

「ボンちゃん？誰？」

「ワナかも知んねエぞ、やめとけ」

「まあでも、ただの電話だしね、出るだけ出たらいんじゃない」

ゾロは止めたが、私も言ったようにただの電話だし…問題ないだろう。

『モシモシイ!!?モツシイ!?!がつーはっはっはっは!!あアちしよオくう!!あ!ち!シく!!!』

ガチャン。

「ナイスサンジ、今の電話は聞かなかつた事にしよう」

「ああそれがいいぜ」

ジリリリリリリリリ!!

「何だよ!!」

「おうオカマか?!おれ達になんか用か?」

切つてもかけ直して来たので、船長であるルフィに任せた。

Mr. 2:…こんな時に一体なに?

『アンタ達の船…あちしが貰ったから!』

「あアん!?!」

『その声は女好きねーい!アンタ強いじゃなくい!あちしびつくらコイたわ!でも違うのよ!…あちし達、友達ジャーナイ?』

何だこいつ…:…と思いつつながらも話を聞いていけば、どうやらメリー号の停泊場所が海軍から見つかりそうだったから船をサンドラ河の上流へ移したという連絡だった。

つまり、そこまで来れば船を渡せるから逃げという電話だったのだ。

「…信用出来るか?」

「いや、行くしかないよ、船を取られてるんだから」

「だな。そうと決まりやさつさと仕度だ」

みんなして急いで準備をする。

今の話が本当なら、この島はかなりの数の海軍に囲まれてるんじゃない?

「ねえ、みんな…私、どうしたらいい…?」

「…ビビ」

そんな時、ビビが不安そうに言った言葉にナミさんが反応する。

「よく聞いてビビ、「12時間」猶予をあげる。私達はサンドラ河で船を取り戻したら、明日の昼12時丁度!「東の港」に一度だけ船を寄せる!恐らく停泊は出来ないわ…。あんたがもし、私達と旅を続けたいのなら、その一瞬だけが船に乗るチャンス!その時は歓迎するわ!海賊だけどね…!!」

「…ビビ、さっきはありがと。……………それじゃ、先行くね…っ!」

「あ、イリスちゃん、私も行くわ!…ビビ、これはあなたの人生よ。…ゆっくり考えなさい」

サンジが開けた窓から脱出する。ミキータも私に続いて窓から飛び降りた。

本当は、私はビビと共にこれからも旅をしたい。色んな冒険、色んな出来事…全て共に経験して、その…さっきみたいな事だつて。

だけど、やっぱり最後に決めるのはビビだから。私が今本気で一緒に来てつて言っちゃったら…ビビ本人の考えとは関係なしについて来てくれるかもしれない。

だから私は、一刻も早くここを離れたかった。

「あ、君たちは…!」

こっさり窓から脱出して宮殿を後にすると、そこには6頭の超カルガモ部隊が待つてくれていた。

…そっか、今夜には出るって言ったからビビが用意してくれてたのか。  
すぐに後ろからルフイ達も出てきて、みんなでカルガモに乗って船へ駆ける。

流石はカルガモ部隊。かなりの速さで砂漠を駆け抜け、アルバーナからサンドラ河まで3時間で到着した。

「ん待つつつつつてたわよアンタ達っ!!おシサシブリねいっ!!」

「うん久し振り、それでどうしてこの船に?」

カルガモ達にお礼を言っつて、船に乗り込みながら待つていたらしいMr. 2に話しかける。

「アンタ達、今この島がドウーいう状態にあるか知ってる?海軍船による完全フリーサよ、封鎖っ!スワン1羽と逃げられない」

「…じゃあ、お前…海軍からゴーイングメリー号を守ってくれたのか…?」

「何故だ!!」

「何で!?!」

「友達…だからよう」



キラーンと涙を光らせて親指を立てるMr. 2ことボンちゃん。いや、それってつまりあなたもこの島から出られないだけじゃん…。

後ろを見ればボンちゃんの船もメリー号についてるし…まあ本当にそんな封鎖をされてるなら、戦力が少しでも増えるのはありがたいけどね。

「なら早く行こう、ゆっくりしてたら向こうの守りがより強固になるよ」

「そうだな！よし、野郎共！船を出せ！東の港に行くぞオ！」

「オオ!!」

ここから下流まではそこそこ距離がある…それまでに海軍船との戦闘準備でも整えておこう。

「…キャハハ、みんな、私が裏切り者だったって知った筈なのにどうして今まで通りで居られるのかしら…つままないから？」

「そりやそうだよ、つままないでしょ？だってミキータはもう…いや、最初から私達の仲間なんだから」

「…キャハハ。そうね…！」

裏切り者って言っても、完全に裏切った訳でもないし、私からすればそんなことはどうでもいいしね。

ナミさんがそんな私達を見て微笑んでいたが、とにかく可愛いつて事だけは分かっ

た。

そんなこんなで、私達を乗せた船はサンドラ河を抜け出した。

その頃にはもう陽も上がって、時刻は午前11時半と言った所か。

「やっぱ、海軍だらけだね」

「何がなんでも東の港には辿り着くぞ！野郎共気合いを入れるよ！」

完全封鎖というだけあって、どこから抜け出そうとしても必ず海軍船が存在してつてくらしいには全方位に海軍船があつた。

「ちよつとアンタ達！鉄の槍が飛んできてるわよう!!」

「何イ!？」

いきなりメリー号目掛けて黒い鉄の槍が何本も飛んできた。

いきなりの事で反応しきれず、その巨大な槍は何本もメリー号の船底を貫く。

「くつそ〜！砲弾で来い！跳ね返してやるのに!!」

「こんな攻撃…いつまでも耐えられないよね…！メリー号…これで少しはマシになつた？」

メリー号に触れてその強度を倍加させる。

とは言えメリー号は当然木製だし…飛んできてるのは鉄の槍だ。私の強化じゃ結局

時間の問題だ……!

「ボン・クレール様大変です!! “黒檻”です!」

「黒檻?」

「ウゲツ! “黒檻のヒナ”! この海域をナワバリとする本部大佐よう! 厄介な奴が出てきたわ! さつさとトンズラぶつコクわよう!」

「ハツ! Mr. 2・ボン・クレール様!!」

「ほらアンタ達も逃げるのよ! このまま進めば必ずやられるわよう!」

「行きたいなら行ってよ。でも、私達はまだ行けない……あと、ヒナつて女?」

「そんな事今関係ないでしょう! 捕まるわよアンタ達!!」

ボンちゃんの言う事は最もだけど……私達にも譲れない物はある。

「仲間を迎えに行くんだ!」

「!!!」

そんなルフィの言葉にボンちゃんは雷にでも打たれたような表情を浮かべた。

彼は逃げようとしていた動きをぴたりと止め、私達に向き直る。

「……ここで逃げるは、オカマに非ず!! 命を賭けて友達<sup>ダチ</sup>を迎えに行く友達<sup>ダチ</sup>を……見捨てておめエら、明日食うメシが美味エかよ!!……いいか野郎共及び麦ちゃんチーム……あちしの言う事、よおく聞きねい!」

覚悟を決めたかのような顔をしたボンちゃんが言ったのは、この場を切り抜けて私たちが東の港へ辿り着ける作戦だった。

…確かに、その方法なら確実に港まで迎えて…尚且つそこからこの包囲網を抜け出すことすら出来る…だけど、それはボンちゃん達を犠牲にして初めて成り立つ作戦だ。

「…行くわよう、アンタ達!!ここで咲かなきゃ、オカマが廢るわア!!!」

「ボンちゃん!!」

彼はスワン号に乗り込み、自身の顔をルフィに変えて南側へと突っ込んだ。

これで海軍はメリー号を囷だと勘違いして、ルフィボンちゃんが乗るスワン号を追う筈だ。その隙に私達は東へ逸れる。

「…ありがとう、ボンちゃん…!!」

彼の勇姿をゆっくり見ている暇もない…私達はせつかく作ってくれたこの絶好の機会を無駄にしない為にも急いで東の港へと向かう。

「すぐにあつちが囷だつてバレる!ちよつと私刺さつた槍抜いてくるから、みんな中から補修お願い!」

「待てイリスちゃん、1人じゃ大変だ、俺も行く」

助かるよ、とお礼を言つて船に刺さつた鉄の槍を抜いていく。

全てを抜き終わり、中の補修も済んだ時…アラバスタから拡声器を使った声が流れ

てきた。

『……少しだけ、冒険をしました。それは暗い海を渡る“絶望”を探す旅でした。国を離れて見る海はとても大きく……そこにあるのは信じ難く力強い島々、見た事も無い生物……夢と違わぬ風景、波の奏でる音楽は……時に静かに小さな悩みを包み込む様に優しく流れ……時に激しく弱い気持ちを引き裂く様に笑います』

「ビビの、声……」

拡声器……スピーチ……今……!?

『……暗い暗い嵐の中で、一隻の小さな船に会いました。船は私の背中を押してこう言います。「お前にはあの光が見えないのか?」……闇にあつて決して進路を失わないその不思議な船は、踊る様に大きな波を越えて行きます。海に逆らわず、しかし船首は真つ直ぐに……例え逆風だろうとも……そして指を差します。「見ろ、光があった」……歴史はやがてこれを幻と呼ぶけれど、私にはそれだけが真実。そして……」

その後も、ビビ王女のスピーチは続く。

「聞こえたら、今のスピーチ。間違いなくビビの声だ」

「アルバーナの式典の放送だぞ、もう来ねエと決めたのさ……」

言ってるゾロとサンジも、やはり表情は暗い。

「…行こう、12時を回った」

「おいまずい！海軍がまた迫ってきた!!」

「一体何隻居るんだよ…!」

「…、ビビ…っ」

ぐ、と拳を握りしめて噛み締める。

ミキータとナミさんが私の肩に手を乗せ、優しく背中を撫でてくれたその時—。

「みんなア!!」

「ビビ!!カルーも!!」

港に、間違いないビビとカルーの姿が見えた。

どうしてだとか、そんな事を考えてる暇はない、早く船を戻さないと…!!

「…お別れを!!言いに来たの!!」

「…え、今、なんて…!？」

『私…一緒には行けません!!今まで本当にありがとう!!』

……聞き間違えじゃない。

1回目は、よく聞こえなかったけど…2回目は拡声器を使ってさっきのスピーチと同じくらいの音量で私達に声が届く。

『…本当は、ずっと隣に居たかったけど…!!私はやっぱこの国を愛してるから!!…それから、私は戦力にもならないし、航海の術も知らない…!!あなたの隣に立つには、色々足りないから!!だから、行けません!!』

「…そんな、隣に立つことに…力も、知識も…いらナイよ…っ」

『…だから!!私がつつともつと立派に国を背負って立てる程成長したら…また、会いに来てっ!!!好きだつて…何度でも言います!!!その時は、あなたのそばでずっと居ます!!みんなも!!私は、みんなにも相応しい人になります!!だから私は、私は!!今はここに残るけど…!!!いつかまた会えたら!!もう一度仲間と呼んでくれますか!!?』

「…!」

…最後の方は、嗚咽できちんと喋れてなかったけど…伝わったよビビ。

そりや、無理だよね、優しいあなたが弱り切った国を放つて私達についてくるなんてさ…だから、アラバスタがもつと大きくなって自分が必要なくなった時に迎えに来てくれつて事でしょ…?

「いつまでもナつぱ!」

「アホかルフイ、返事をするな!海軍が今の話を聞いている…返事をすればビビちゃんは“罪人”だ…このまま、黙つて別れるぞ」

そう言つて私達は、左腕の包帯を取つて上に掲げた。ビビとカルーに見えるように：海軍にバレず：私達は仲間だと態度で叫んだのだ。

：いつか、また彼女と会つた時に：胸を張れる私で居たい。涙を流して左腕を高くあげるビビを横目で見てそう思ったのだった。

：それにこの印は：私達にとつてただの仲間つて証明じゃないもんね。

そうだなあ：名前を付けるなら——

愛ある印、かな。



## 偉大なる航路（グランドライン） ジャヤ編

## 50 『女好き、本日の天気は晴れのち船』

「おー、もう追って来ないね海軍も」

「んー…」

「突き放したって感じかな？」

「んー…」

「…ねえゾロ、ルフィ達どうしたの？」

「知らねエよほっとけ」

「さみしーんだよー…」

シクシクと涙を流すルフィ、ウソップ、チョップ、サンジ。

結構一緒に旅したビビやカルーが居なくなるのは確かに寂しいけど…。

「イリスは寂しくねーのかよオ…」

「そりゃ寂しいよ、けど私がいつまでもメソメソしちや…残るって決断したビビに申し訳ないもん。お姫様に相応しい女でありたいの」

「おめエ…そのナリじゃどうやっても相応しくはがべっ!？」

ナミさんの鉄拳制裁を受けたウソツップが白目を剥いて沈んだ。

「いいのよイリスはこれでも！ね、ミキータ」

「キャハハ、むしろ抱きしめる時は丁度いいわ。抱き枕としても優秀よね」

「あら、なら今度私にも抱き枕さんを抱き締めさせてもらってもいいかしら？」

「ええ勿……ええ!!」

その場にいるみんなで一齐に声を上げる。

突然美人の声が聞こえたと思つたらそこにはロビンが居たからだ。

「おおおおおおお!!!!ロビン!!何で知らないけど美人が船に!」

「…色々問題はある女だけど、あんた好きそうよねこういうの。ちゃんと管理できるな

らメンバーに入れてもいいんじゃない？」

「お、おいおい待って待って、何呑気に言つてんだ。相手はパロツクワークスB・Wでクロコダイルのパート

ナーだぞ!!いつの間にか船に乗つてたんだぞ!!」

そんなウソツップの肩にナミさんがぼん、と手を置いた。

「諦めてウソツップ、イリスの夢がまた一步近付くのよ!」

「おめエもイリスが絡むと大概アホだな!!」

「…。イリス、ね。あなた…私に何をしたか忘れてはいないわよね?」

へ?まだ手は出してないけど?

「イリス、もうやることやったの？いつよ、そんな暇あった？」  
「やってないよ、まだ」

「もうおれこいつらに着いてけねエ…」

がく…と項垂れるウソツプはとぼとぼと後ろに下がっていった。

そりやそうだよ、ウソツプには別の夢があるんだから私に着いて来れる訳ないじゃん！夢の道は1つだけ！なんちて。

「いいえ、耐え難い仕打ちを受けました。責任…とつてね」

「いえす!!!まずは嫁に来たらどう??そうだね!私も最近ちよつとは慣れてきたから今夜にでも責任取るよ!ばっちこー!ー!ー!ー!ー!い!!!」

流石に話が進まないからとミキータに止められました、いやだつて責任つて…責任つて言つたじゃん…!!

よくよくロビンの話を聞けば、私のメンバー入りは置いといて一味の仲間に入れてくれという事だった。

なんだ、そういう事なら私じゃなくて普通ルフィでしょ。

ちなみにロビンの一味入りは私が熱烈に歓迎してルフィは割と考えずにいいぞ、と返事した。私が気に入った女性だから悪い奴じゃねエだろつて。

「い、一応このおれが取り調べをする！ルフィが良いつつつてもこの女は元敵だ！畏つて事も考えられるだろ」

「そりやそうだ。オイイリス、お前もそれくらいなら文句ねエだろ？」

「まーね、ついでに好みのタイプとか聞いといて」

軽く手を上げて了承した。将来的には私の嫁なんだからあんまりいじめないでよね。

そんな感じで各々普段通りの船生活に戻った。

サンジは私達のおやつを作り、ルフィとチョッパーはロビンが船に生やした腕で遊んでる。

悪魔の実なのは間違いないけど…何の実??ニヨキニヨキ??

※ハナハナ

「118歳で「考古学者」そして「賞金首」に」

「考古学者?」

「そういう家系なの。その後20年ずつと政府から姿を隠して生きてきた。子供が1人で海に出て生きて行ける訳も無く…色んな「悪党」に付き従う事で身を守ったわ。お陰で裏で動くのは得意よ?お役に立てる筈」

「ほほう、自信満々だな…何が得意だ?」

「暗殺」

「ルファイ！取り調べの結果危険すぎる女だと判明!!」

ロビンは悪戯っぽく笑う顔も美しいなあ…。

今まで会ってきた女性とはまた違った雰囲気的美女というか…ああ、神よありがとう。もし調査する事が可能ならば全力で祈りを注がせて貰います！

「よっし！じゃあ危険かどうか私が確かめてくる!!ロビン、ちよつと寝室に行こう、手取り胸取りちよめちよめ取り調べてくる!!」

「やめとけバカ、大体本当にそうなたら狼狽るのが目に見えてるぜ」

「う、うっさいわ三刀流！」

「それ悪口なのか…?」

私を含めた女性陣や、ルファイチョップパーウソップの3ば…ごほん、賑やかな男性陣にいつも通りのサンジは既にロビンを迎えてるがゾロはまだ警戒しているようだ。

私が言うのも何だけでも、1人くらいはああいうポジションについてくれた方が一味としても…そして多分ロビンとしても安心だろうね。怪しいのはロビンだつて分かっている筈だろうし、いきなり全幅の信頼を置かれても困るよね。

「ん?やば、雨降ってきた?」

コツ、と上から何かが降ってきて船に当たる。いやでも雨にしては音が硬いな。あら

れか？ここは偉大なる航路だし…いきなり雪とかあられが降り始めてもおかしくないか！

「ね、ねえイリスちゃん…これ、雨でもあられでもないみたいよ…」

上を見て目を見開くミキータに釣られて私も上を向くと…。

ああ、確かに雨じゃないし、あられでもないね!!いやー、でもこれなら槍が降る方が現実的だよ、まさかね、いやまさか…。

「船が降ってくる何てねー」

「言ってる場合かア!!」

ドオン!!

と空から降ってきた一隻の大きなガレオン船が海面に直撃する。

よ、良かった…船の真上なら危なかった…。

「ナミさん、ミキータ！ロビン！」

神背で「私」を増やして女性陣はガツチリホールドする。

ガレオン船が落ちた衝撃で荒れ狂う波や、まだまだ降ってくる船の残骸からとにかく3人を守り通した。

「はあ…何だったの…今の…。空から船が…」

「空にや何もねエぞ…」

「偉大なる航路って凄いなー、船も降ってくるんだもんなー」

もう半分現実逃避だけだね…あんなの誰だって訳わからんわ。

「あ…!! どうしよう…つ、記録指針が壊れちゃった! 上を向いて動かない…!」

「…違うわ、より強い磁力を持つ島によって新しい記録に書き換えられたのよ…! 指針が上を向いているなら『空島』に記録を奪われたと言う事…!!」

空島あ???

…いやでも聞いたことあるな? と言うことは本当にあるのかな??

まあここ漫画だしね…空に島が浮かんでもおかしくはないか、何たって人が伸びる世界観だし…。

って事はさっきのガレオン船…そこから落ちてきたって事になるのかな?

「じゃあ空島行く?」

「え? あんた空島とか言う訳わかんないモノ信じるの? そりや…あんたが信じるならついてくけどね…」

ナミさんは少し半信半疑の様だけど、絶対あるよ空島は、だってONE PIECEだし。

「正直、私も空島については見た事もないし知ってる訳でもない…」

「記録指針が壊れたって事は?」

「いいえ、赤目さん、今考えなきゃいけない事は記録指針ログポースの故障箇所ではなく、空へ行く方法よ」

赤目さんって私??みんなの事は狙撃手さんとか、航海士さんとか呼んでるのに???確かに私何の役職もないけど???赤目さん?????

：うう：オチビさんって言われるよりはマシだけどさあ：!!

ルフィとウソツプは落ちたガレオン船に探検だとか言って乗り込んで言った。：それ一応残骸が浮いてるだけだからいつ崩れるかわかんないんだけど：ルフィ大丈夫?

「この船が例えどんな怪奇な事態に飲み込まれようとも：例えどんなパニックに陥ろうとも：記録指針ログポースだけは疑ってはいけない、これは鉄則よ。この海では疑うべき物は寧ろ頭の中にある『常識』。その指針の先には：必ず島がある」

「そう言う物なんだ：」

ええ、と言ってロビンは落ちてきた物の一つ：棺桶を開けた。

「きゃつ!ちよ、ちよつとロビン!それ：骸骨入ってるじゃない!」

「私もそう言うのは苦手かも：。ミキータは平気なの?」

「あー……、その、あまりイリスちゃんには、言いたくないんだけど……。死体は見慣れるのよ……」

あ、そりやそうか、元オフィサーエージェントだもんね。



「あはは、そんなの気にしなくていいよ、ミキータはミキータなんだから」  
 「……、ふう！……さて、今日の夜が楽しみな」

あかん……押しちやいけないスイッチ押しちやった…。

「そ、それで？ロビンは何やってるの？」

「フフ…それは見てのお楽しみよ」

ガチャガチャ骸骨を弄って、砕けてる部位をつなぎ合わせて頭蓋骨を完璧に復元してみせたロビン。

生粋の日本人にその生骸骨はキツイよ…。日本人ならみんな分かってくれるよね！

「ここに空いてる穴は人為的なもの」

「ははーん、そこを突かれて殺されたって訳かコイツは」

頭蓋骨の上に穴が数箇所空いてるのを見て言うロビンにサンジが答えるが、どうやらこの穴は殺人目的ではなく真逆の医療目的だったようだ。

チョップパー曰く、昔は脳腫瘍を抑える時に頭蓋骨に穴を開けていたそうだけど…でもそれはずっと昔の医療らしい。

「そうね、彼が死んでから既に200年は経過してるわ。歳は30代前半…航海中病に倒れ死亡、他の骨に比べて歯がしつかり残っているのはタールが塗り込んであるせい。この風習は “南の海”<sup>サウスール</sup>の一部の地域特有のものだから、歴史的な流れから考えてあの

船は過去の探検隊の船。……あつた、南の海サウスフルの王国ブリスの船「セントブリス号」……208年前に出航してる」

ペラペラと何かしらの資料を捲りながら言ってるロビンだが、何故こんな頭蓋骨一つでそこまでの情報を得られるのか……凄すぎ。

「おいみんな！ やつたぞ、すげエもん見つけた!!」

丁度探検から戻ってきたルフイが見ろ！ と地図を広げて見せてくる。

ああ、船が沈んだから帰ってきたのね。

「つてこの地図……空島の！」

「スカイピア」……本当に空に島が!?!」

やはりあの船は一度空島に行つてたのか……それで理由は分かんないけど落ちてきたと！

「やったぞウソツプ、チョツパー!! 空島はあるんだくく!! 夢の島だ! 夢の島へ行けるぞオ!!」

「何だか私もテンション上がってきちゃった……つ、楽しみだね、空島！」

「上がるのはいいけど、そこまではどうやって行くのよ。空よ？」

うーん……確かにそうだよね……

情報も何も無いから、そこへ行くにしたって行き方も何も分かんないし。

「じゃあさ、ルフィとゾロとサンジがさつき沈んだ船に行つて手掛かり探せばいいじゃん」

「おれ泳げねエぞ」

「そこはウソツプに潜水服でも作つてもらおうよ」

「つてオイ、いくらおれでもんなモン作れる訳」

\*\*\*

「作れたぜ！」

「言つてみただけなんだけど…ウソツプって本当に手先器用だよ」

まさか本当に作るなんて思わないじゃん？

樽を上手く繋ぎ合わせて立派…とまでは行かなくてもきちんとしてるし。

これならルフィだつて水に触れなくて済むから安心でしょ。

「てめエは来ねエのか」

「バカね、海中なんて危険な所にイリスを行かせる訳ないじゃないの。ほら行つた行つた」

「鬼かてめエら…」

そう言いながらも3人は海へ潜って行った。

…正直行ってみたかったけど…海の探検。

ルフィ達と船を繋ぐロープは私を持っている。この役目があるから何だかんだ言いながらゾロも大人しかったんだろな。

「こちらイリス、みんなそっちはどう？」

『こちらルフィ、怪物が一杯居ますどうぞ』

『ここは巨大ヘビの巣か!?!』

『こちらサンジ…うわ、こっち見た!!』

「OK」

「OKか!?!」

コクンと頷くナミさんに突っ込むウソップ。ヘビの怪物がうじゃうじゃ居ても心配ないでしょあの3人なら。

と、その時前方から謎の音楽に合わせた歌と共に一隻の船が現れた。

…何? 猿?!

## 51 『女好き、ケンカ禁止令』

サ~~~~ルベ〜ジ〜サルベ〜ジ〜♪

シャンシャンシャンピーピーピー

「何だありや…」

「しゃんしゃんしゃん♪さーるベービー♪」

「こらいリス、真似するのはやめなさい、可愛くて襲っちゃいそうになるでしょ」  
「え」

良くわかんない船から流れてきた歌を口ずさんだらそう言われました。

私がナミさんでむらむらする様にナミさんも私で…!? あ、何か今まで感じた事ない様な嬉しさが…。

「全体〜…止まれっ!!」

号令と共に音楽が止んだ。

サルベ〜ジとか言ってるからどんな奴が出てくるのかと思えば、顔を見せたのはまんま猿みたいな顔してる人だった。

…ウツキーとか言ってるし。

「おいお前ら！そこで何してる、ここはこの俺のナワバリだ」

「船が沈んだから探検ー」

「ほうなるほど探検……はっ!?まさかてめえら……船に手エ出したって事か?」

「当たり前じゃん、自分の物だつて名前でも書いてんの?」

「た……確かに……!!」

分かった、この猿バカだ。

「ねえナミさん、あの人が船を引き上げてくれるならルフィ達回収していい?空島の手掛かりならその時猿にでもお願いして探させて貰おうよ」

「まあ……相手がそれを許してくれるならいいけど……」

大丈夫大丈夫、そんなに何も考えて無さそうだもんこの猿。

そんな感じで3人を引き上げて猿の人に合図を出せば、彼は船員にテキパキと指示を出し海底に沈んだ船を引き上げた。

引き上げたと言つてもその方法はかなり独特で、まず「ゆりかご」と呼ばれる良くわからん巨大フックの様な物を沈んだ船に引っ掛けて、息を吹き込む事で浮力を生み出し持ち上げるといった物だ。

風船じゃあるまいし……どんな肺活量??

「よーしお前ら空気送るの忘れんな!引き上げるオ!!」

「アイアイサー!!」

空島の手掛かりの為とはいえ…何を見せられてるんだろう、私…。

ルフィやウソップチョッパー…まあいつもの3人はこの光景に目を光らせてるけど、正直私はどうでもいいや、船さえ引き上げれるなら。

「…あ」

と思っていた所を、海中に現れた巨大な亀がガレオン船をぱくりと丸呑みしてしまつた。

「ああ〜っつ?!?! 船がー…ーッ?!?!」

「手掛かりが…!?! あのカメラ…甲羅ごと砕いてやる!!!」

海上に姿を現した亀を見て腕を回して準備運動する。

サルベージ云々はどうでもいいけれど、その船はどうでもいい事ないから吐き出せ!!!

「え…何? 急に夜になつた?」

ナミさんが言うように突然、辺りが夜の闇に包まれる。

さつきまで真昼間だつた訳だから、考えられるとしたら陽の光を何かが塞いでるとし

か…。

「ボ!!ボ… 園長! あ…あれは…!!」

「何だ?」

船の進行方向を指差しながら猿の部下達が何やら震えている。

良く見れば、巨大亀も同じように前を見てガチガチと震えていた。

「……キヤハ、イリスちゃん……アレ、何かしら？」

「え？」

不意にミキータが私に抱き付いてきて、前を指差す。

アレって……あー、アレ……あー……。

「きよ、巨人かなあ……ドリーとプロギーの何10倍も大きいやつ」

「そんな呑気な事言ってる場合かア!!みんな舵を切って!このまま正面に進んだら間違  
いなく死ぬわ!」

「急げお前ら!オールを漕げ!!」

もう急いで舵を切り、みんなでオールを全力で漕ぐ。

槍の様な武器を持った翼の生えた真つ黒大巨人から全力で逃げ出し……気付いた頃には夜は晴れて昼間の日差しが帰って来ていた。

後方を見ても巨人の姿は何処にもない……ふー、流石にあんな巨体……勝てないよ。生物  
じゃないって。

「ハア……ハア……あり得ねエ……」

「ああ……あのデカさはあり得ねエ……」



「…今日は厄日だね…ロビンが一味に来てくれた事で幸運使い果たしたかな？」

ガレオン船は降ってくるわ指針は空に奪われるわ…猿は出るし巨大亀出るし夜は来るしバカデカイ巨人の大怪物は出るし!!

「ナミさんミキータ、ロビン…私を癒して…」

「はい」

ミキータがひよい、と私を抱き上げてほふ、と胸に顔を埋めさせた。

うーん…癒しとは何か、よく分かってらっしやる…。

「ミキータ、後で私に代わってよね。…それで？船で何か見つける事はできた？」

「流石に探索時間が短すぎだ。手に入れたモンもこれくらいしか無かったが…」

「何これ？ガラクタばつかじやない！」

ルフィ達が集めてきた戦利品をガラガラと袋から取り出せば、そこには錆びた剣や食器に生タコが入っていた。

…お、生タコは嬉しいね。タコ美味しいもんね。

「何も無かったんだナミさん。あの船は明らかに既に何者かが荒らした後だった。でなけりゃ何かしらの理由で内乱が起き殺し合ったかだ」

「探す時間も短かったし、こればかりは仕方ないよナミさん。あとサンジ、タコの刺身食べたい」

「お安い御用で」

ミキータからナミさんへと抱かれるのが代わって胸を枕代わりに寛ぐ。

「…そうは言うけどイリス、私達に今必要なのは日誌とか海図よ、情報が無かったら空なんて行き様が無いわ」

「なら、これが役に立ちそうね」

「え？」

ロビンがナミさんに渡したのは、まさかのエタナールボース永久指針だった。

「こ、これ何処から？」

「さっきのおサルさん達の船から盗つといたの、一応ね」

「す、凄い！あんな短時間で！」

あの短い間にその一応を判断して行動に移せるのは凄い事だよ！

「行き先は？」

「…『ジャヤ』。きつとあの猿達の本拠地ね」

「お、そこに行くのか!? オー—シ、ジャヤ舵いっば—い!!」

ルフィが雄叫びを上げ、みんなもそれに合わせて舵を切る。

丁度サンジが持つてきてくれたタコの刺身をうまうまと食べていると、そこそこ重要な事実が付いた。

「あれ、でもジャヤに行くって事は空島の記録ロクが書き換えられるって事だよな？」  
「まあ…そこは運も必要ね。島についてすぐ記録ロクが溜まる訳でも無いから時間との勝負になるわ」

なるほど、確かに現状はそれしか方法ないもんね。

そういう訳で、私達は一先ずジャヤを目指す事となった。

でも空島の情報か…果たしてその島で手に入るのかどうか…。ま、行ってみないと分からない、か…。

\*\*\*

「ジャヤ着いたー!!」

「ちよつとりゾートっぽくねエか!? 港に並んでる船が全部海賊船っぽく見えるのは置いといて」

あの後、そう時間を掛けることなくジャヤへ辿り着いた。あの猿達がさっきの場所をナワバリとか言ってた位だからそこまで遠くはないだろうと踏んではいたけど。

「殺しだア!!!」

「何なんだようこの町はア〜っ…」

突然町の中から聞こえてきた声にウソツプとチョツパーがしくしく涙を流す。さつきりゾートつぽいとか言ってたけど…もしかしたら真逆かもしれないね、ここ。

「とにかく情報収集に行かないとね、危なそうだけど…ナミさんやミキータは来る?」

「キャハハ、残る方が危ないんじゃないかしら、1番安全なのはあなたの隣だもの。ねえナミちゃん」

「そうよね、ロビンはどうする?」

「私は平気よ、こういう事は1人の方が得意なの」

ロビンは裏の仕事が得意って言ってたし、こういう情報収集なんかは十八番なのかな?  
?

「じゃあ降りるメンバーは私とナミさんとミキータ、ロビンにルフィ、ゾロでいい?」

「本当は俺も行ってエ所だが…」

「バカ野郎サンジ! お前まで行っちゃったらこの船がもし襲われた時誰が守るんだ!!」

「わ、分かった分かった、離せて…」

船番はサンジとウソップ、チョップパーか。サンジがいる時点でメリー号は安心だね。「じゃ、行こう！」

そして私達情報収集組は町へ繰り出した。

それにしても、見れば見るほど無法地帯って感じだね。さつきも殺しがどうか言っていたし…本気で気を張って置かないといつナミさん達に危害が加わるか…。

「ねえあんた達、この町でケンカするのだけはやめてね」

「何でだよ」

ルフィが唇を尖らせてナミさんに問う。

「騒動を起こすとこの町に居られなくなるかもしれないでしょ？そしたらもう空になんて行けないんだからね」

「キャハ、ごもつともね」

私はその点心配ないけど…ルフィやゾロはちよつと煽られたらすぐ喧嘩しそう。

…ん？何かナミさんもミキータも私の方を見て言ってる気がする…気のせいだろうかア…。

「一番危ないのはあんたよイリス。私達に何かあつたらすぐ騒ぎ起こしそうだもん」

「ハハっ、言ってるな。誓いの言葉でも立てたらどうだ？」

「うっさいわゾロ！私が喧嘩なんてする筈ないよ、ね？ナミさんの言う事なら何でも聞

くし」

「二応、誓って貰うわ、今から私が言う言葉を復唱してね」

えー…私信用ないなあ。

そう思いながらも「ワタクシはこの町では決してケンカしないと誓います」と復唱した。

ルフィとゾロにも言わせてるけど、やっぱり私をジッと見てるよね？絶対私よりルフィやゾロの方が喧嘩っ早いからね？ね??

道中、落馬して吐血してる人が居ただけと見るからに怪しいしおっさんだったからスルーした。

私の関わってはいけないセンサーが発動したから信じてよし、きっと前世の知識が私を止めたに違いない。

他にもチャンピオンがどうか騒いでる人も居るし…この町何かおかしいよね、うん。

「お、ここなんか情報収集するのに向いてそう、静かだし」

「ここは素敵ね、ガラの悪い町だけど…こんな所もあるのね」

外れへ歩いていたら私達は、海上リゾート的な場所へ辿り着いた。

さつきまでの喧騒とは無縁の静かな場所で、落ち着くには丁度いい感じだ。あ、ホテ

ルもあるじゃん！

「お、お…お客様っ！お客様困ります！勝手に入って頂いては…」

「ん？」

情報収集の為にホテルの前まで移動すれば、何やらそのホテルの従業員だろう人が私達を止めてきた。

え、何この人…ずっと体揺らしてるんだけど…ボクシングのフェイントを大袈裟にしているみたいなきだ。

「と、当「トロピカルホテル」は只今ベラミー御一行様の貸し切りとなっておりますので！べ…ベラミー様に見つかっては大変な事になりますのでどうかすぐにお引き取りを」  
「何だよ、いいじゃねエか入るくらい」

ルフィがそう返すが、貸し切りなら仕方ないだろう。こんな良さげなホテルを貸し切りにしてるんだし…それなりにお金も払ってるんじゃない？

「オイどうした」

「ヒエ~~~~~!!!」

急に背後から聞こえる声に従業員が分かりやすく震え上がる。

声が出た方を見ればそこにはロン毛のイキッてそうな長身男が隣に美女を侍らせて歩いてきた。

…はん！私の方にはナミさんとミキータがいるもんね！羨ましくなんか羨ましい！！

「どこの馬の骨だその小汚ねエ奴らは…」

「さ…サーキース様、お帰りなさいませ、いえ、これはその…」

「言い訳はいいから早く追いついて！いくら払ってココ貸し切りにしたと思ってんの！？」

「その通りだ…。オラ、帰れよクソガキ共…、あ？良い女も連れてるじゃねエか」

サーキースと呼ばれた男がミキータを見て舌舐めずりする。

おーうおうおう、誰の女狙ってんだこのクソロン毛ださコートがよオ…！

「キヤハハ、イリスちゃん抑えないと！どうどう！」

「はっ…、ごほん、ほら、手出さなかつたでしょ？」

「いや…今のはミキータが止めたからだろ…」

「オイ、こいつぶつ飛ばしていいか？」

「あんた達ねえ…!!」

う…ナミさんを怒らせるのだけは嫌だし、ここは大人しくしよう…。ミキータだって直接手出しされた訳じゃないし…。

「フン…ハハ！面白エ奴らだ、この俺をブツ飛ばす…?!…それにしても貧相なナリだな、ホラ、これで好きな服でも買うといい」



そう言つてサーキースは私達の前に紙幣や小銭をばら撒く。

…何だコイツ、腹立つな。

「サーキース勿体ないわよ、コイツらなんかに」

「ハハ…ケツでも拭いた方が有効だったかな」

「行くわよ！不愉快っ！」

「うわっ」

ナミさんに引き摺られてホテルの敷地内を出る。

ケンカが止められてなかつたらあの男…ルフィ辺りにボコられてそう。

「何なのアイツら！人の事をバカにして!!」

「隣の美女が気になるよね、サーキースの女じゃなければなあ…」

基本的な人の女には手を出さない様にしてるのだ。略奪愛は好きじゃない。

「それで、これからどうすんだ。アテはあるのか」

「それなんだけどさ…こういう情報収集の基本に立ち直つてみない？」

「基本？」

ミキータが首を傾げる。おっと、可愛い死するところだったぜ。

「うん、やっぱりまず…酒場でしょ！」

「結構良い案ね、じゃあこの町の酒場を探しましょう」

という訳で、私達は酒場へ向かう事になった。  
よーし、酒場探すぞー!!あと美女も居れば完璧だー!隣に2人居るけど!!

## 52 『女好き、悟る4人、逃げろベラミー海賊団』

## 酒場

「……この「モックタウン」は…海賊達が落としてく金で成り立つ町だ。海賊達は稼いだ金を湯水の様に使ってつてくれるからな、ケンカや殺しは“日常”だが無法者達も町の人間には滅多に手を出さねエ、金があろうと接待する者がいなきや楽しめねエだろう？」

私達は酒場を見つけ出す事に成功して、そのカウンターで店主のおじさんに話を聞いていた。

「だけど、ほんとやな感じよこの町」

「ワハハツ…そう思うのがまともだろうな、だが生憎まともな奴の方がこの町では珍しい、4日もありや記録<sup>ロク</sup>は貯まるからゴタゴタに巻き込まれねエウチにここを出るんだな」

「4日か…じゃ、2日も居られないわね…。ねえおじさん」

「オオイ！おっさんっ！」

「オイオヤジィ〜っ!!」

ルフィとその隣に座る男が同時に店主を呼ぶ。

「このチェリーパイは死ぬほどマズいな!!」

「このチェリーパイは死ぬほどウメエな!!」

「ん?」

「ん?」

え〜…ルフィと隣の汚いおっさん真逆のこと言ってるんだけど…。

「ぶはーっ!このドリリンクは格別にうめえな!!」

「ウエエツ!このドリリンクは格別にマズいな!!」

「…お前頭オカシインじゃねエのか」

「てめエ…舌オカシインじゃねエか」

次第にバチバチと火花散らす睨み合いが始まった。ルフィを除く私達は呆れ顔だ、何でそこまで意見が食い違うのか…。

遂にはお土産勝負も始めてるし。おれは肉50個!とか俺はチェリーパイ51個!とか…ならおれは肉60個!俺はチェリーパイ80個!

…何だコレ。

「何だお前やんのかア!!?」

「ルフィ!約束したでしょ!?!ケンカはダメよ!」

「ほら！私よりルフィの方がケンカっ早いでしょ!!ね!?ね!?

「あんたは黙ってて!」

はい…。

「おめエ…海賊か…!?!」

「ああ、そうだ!!」

「懸賞金は」

「30000万!」

私も30000万です。私の首一つで豪遊出来るじゃん！これが新手の生命保険つて奴？私が死んでもナミさん達はお金に困らない…！なんて言ったら本気で怒られそう。

「30000万!?お前が…?!?そんなワケあるかア!ウソつけエ!!」

「ウソなんかつくかア!本当だ!!」

これから本気でケンカが始まりそうだった時に、店主がチェリーパイ50個を袋に包んでケンカ相手の大男に渡した。おおファインプレー!

「ホラホラ、店の中で乱闘はゴメンだぜ、てめエはこれ持ってさっさと帰んな!」

男は意外にも大人しくチェリーパイを受け取り、金を払って去っていった。

だが、その男とすれ違いにまた一波乱が起きそうな男が入店してくる。

「『麦わら』を被った男と女の『ガキ』の海賊がここに居るか?」

「ベ……ベラミーだア!!」

ベラミーつて奴、どう見てもルフィと私を御所望のようだね。…顔見ても誰だかわからないや、何処かで会ったっけ? ていうかベラミーつてあのホテル貸し切ってる奴でしょ? もしかして勝手に入ったから怒っちゃった感じ?

「ヘエ……お前らが……? 3000万の首か……『麦わらのルフィ』、『女好きのイリス』」  
 おう……そうやって呼ばれると気恥ずかしいな……。

それから一言だけ言わせて欲しい……あなた、物凄い小物臭溢れてるね。オーラまで小物臭あるよ、うん。

「何? あんたに用なの?」

「キヤハハ、有名人は困るわね、イリスちゃん」

ベラミーはカツカツと歩いてきて、さつきまで大男が座ってた席に座る。ていうかこいつも大概デカイわ、何だこの世界。

「俺が一番高エ酒だ、それとこのチビ共にも好きなモンを」

「……ああ」

ルフィは適当に飲み物を、私は何だかこのベラミーとかいう奴が第一印象で気に食わなかったから遠慮しておいた。

「見て、あいつらさっきの…」  
「ん？」

ナミさんが目線だけで知らせてくるので私も見てみると、サーキースを筆頭にぞろぞろと店に海賊が入ってきた。

しかも満席だと分かれば先に座つてた客を大きなナイフで斬り倒して席を確保している。…何だこいつ、順番待ちすら碌に出来ないクズじゃん。

てことは、その親玉らしいベラミーも当然アレな人物なんだろうなあ。

「ホラ、お待ちどう」

コト、とルフィとベラミーの前に酒を出してきた。

「まあ飲め」

「おお、ありがとう。なんだ、良い奴だな」

んな訳あるかい。

腹に入る物くれたら良い奴認定するのいい加減やめた方がいいと思う！

「え!？」

「ルフィ!!」

やはりと言うべきか、ルフィが酒を一杯飲んでる最中にベラミーは彼の後頭部を掴んでカウンターテーブルにルフィの顔面を押し碎いた。

おー、そんなことしたら店主怒るよ、あとルフィも。ついでにゾロも。私？そんなもんナミさんが抑えろって言ったんだら抑えるに決まってるじゃん！

「何のマネだ…!? 下っ端」

「その質問にやあ…お前が答えろよ」

すぐ様ベラミーに刀を向けて臨戦態勢を取るゾロ。

てかゾロに下っ端って言うてるのが笑える。どう頑張ってもこの男じゃゾロに勝てるとは思えないんだけど…。

「ぞ、ゾロちよつと待ってよ！まだこの町で何も聞き出してないのよ!?!」

「うるせエ!! 売られたケンカをかうだけだ!!」

「ね? ミキータ私の方がずつと我慢出来るでしょ?」

「キヤハハつ、流石イリスちゃんね、偉いわ」

ドヤ顔でゾロを見ると彼は青筋をたてて目元をぴくぴくさせていた。気持ちいい、これが…『勝利』か…。

ルフィもすぐに立ち上がって顔の切り傷を拭う。

「よオし…覚悟出来てんだな、お前」

「オオ!! あいつらベラミー相手にやる気だぞ! わつはつはつは! やれやれ!!」

周りの客やベラミーの手下共もケンカを煽ってる。あーあ、こうなったら止まらない



よね…。

「ハハツハハハ!!こいつはケンカじゃなくてテストきー来い、力を見てやる…」

「っ……………」

だ、ダメだってそんなの。まるで格上かの様に話してるけど…どう見てもルフィの方が強いよ!雰囲気っていうか…まあ一目で分かるくらいに力量差あると思うんだけど…!危うく吹き出す所だった…!

ナミさんもこれは抑えられないと思ったのか、ここだけでも情報を集めようと声を張り上げる。

「ルフィ!!待って!!ねえおじさん、私達 “空島” へ行きたいの!何か知ってる事ない!!」  
「!?!?」

ナミさんの言葉に、何故か酒場全体が静まり返る。…ん?何かおかしな事言った?

「ウソでしょ……………」

「何言った今…あの女」

「?…だから、“空島” へ行く方法を…」

「……………」



そう言つて私を後ろから抱き締めるミキータ。

最近ナミさんもミキータもこうして私の心を落ち着かせようとよくするんだけど……！つ言わせて貰うね、ソレ、効果バツグン。

…それでも爆発寸前だけどね、これ以上刺激しないでよほんとギリギリだからさ。

「ハハツハハハツハハハ…!!オイオイ…参つたぜ。お前らどこのイモ野郎だよ…、そんな大昔の伝説を信じてるのか?空に島があるつて?ハハハ…! 一体いつの時代の人間だよ…」

ベラミーが喋り出す。まあそんな陳腐な煽りじゃびくともしないけど。何たつて私  
の後頭部にはフカフカぼよんがあるからね!!

「偉大なる航路グランドラインの変わった海流は今次々と解明されてる。ノックアップストリーム突き上げる海流”もその1

つだ。そういう海流がある事も知らねえんだろうな…その海流の犠牲になつた船は空高く突き上げられそのまま海へ叩きつけられる。何も知らねえ昔の航海者は船が降る奇怪な光景を見て「空島」を思い描いた。「きつと空にはもう1つの世界があるんだ」…!ハツ!バカな現象には全て理由があるもんだ」

凄いコンプレックス抱いてるのかつてくらい喋るなコイツ。

「“夢”の理由なんざ今に全て解明される!!呆れたぜ…お前らをテストして “新時代”

への船員クルーに加えてやろうと思つたのに……とんだ妄想野郎だ……!! いいか……海賊が夢を見る時代はもう終わつたんだ! 黄金郷!? エメラルドの都!? 大秘宝「ワンピース」!! 夢の宝に目が眩んだアホ共は足元の利益に気付かねエ……この海の時代に誰よりも海を渡る野郎共がありもしねエ幻想に振り回されて死んでいく!! 死んだバカはこう言われるのさ、「あいつは夢に生きて幸せだった」!! ハハハ……!! 負け犬の戯言だ!! そういう夢追いのバカを見てると俺ア、ムシズが走るんだ!!」

長くベラベラ名前に負けず喋つたと思つたら、最後急にルフィを持つてた酒瓶で殴つた。……? でも今のタイミング、ルフィなら躲して一発パンチ返すくらい出来たと思うけどな。

そのままルフィは殴り倒されて床に仰向けになつた。

「てめエみてエな軟弱なヤロー共が海賊でいるから、同じ海賊を名乗る俺達の質まで落ちちまう!!」

周りの奴らも倒れたルフィに向かってグラスを投げつけたりしていた。

「ハッへへへ……出て行きなウジ虫共、酒がマズくならア!」

「その通りだぜ! ヒヤヒヤヒヤ!」

「出てけ出てけ! この町から消え失せろ!!」

そう言つて私達にも酒瓶を投げってくる客共。小物臭ばない。

「ハツハツハツハツハツ…おいベラミー! 店中が「シヨ」を希望してる様だぜ?」  
「ハハツ…そりやお安い御用だ…! ハハツハハア!!」

「ルファイ! ゾロ! イリスも! 約束はもういいから早くあいっつらブツ飛ばして!!」

お、ナミさんからOK出た!

よーし、とミキータから離れて腕をぐるぐる回すと、ルファイから私とゾロに声がかか  
る。

「イリス、ゾロ。…このケンカは、絶対買うな」

「え?...がっ...!?!」

「イリス!!」

ルファイの言葉がいまいちよく分からず硬直すると、横からベラミーではない別の誰か  
に蹴り飛ばされた。

くそー、あれか!?! こんな海賊って呼ぶ事すら勿体ないような奴らのケンカを買うって  
ことは、自分達も同じレベルに成り下がるって事だから買わないってこと!?!...高みを目  
指すルファイからすれば、こんな奴らのケンカを買ったなんて汚名にしかならないって事  
か...!

「つもう...わかったよルファイ、ただし後で美女探し手伝ってよね」

「おう、わりイ...ツ!?!」

ルフィも正面のベラミーに蹴り飛ばされて壁まで吹っ飛ぶ。ゾロも近くの奴に頭を掴まれて床に叩きつけられた。

それからもリンチは続く。女性陣には攻撃が届いてないから良かった…。ああ…。痛い…。けどなんだろう、思ってた程ダメージ無いというか…。もしかして、倍加の限界上がつてる？というか私も女性なんだけど???

「あぐっ……！」

どつちにしろ反撃できないリンチに変わりはないんですけど!!

「イリス!!……ちよつとあんた達ねえ！」

「ナミさん！私は大丈夫だから……っ、下がってて！」

「ハハハ、そうだけお嬢ちゃん、利口だぜコイツら。敵わねエ敵と悟ったのさ……強エ者に立ち向かわねエ……みつともねエ決断だがな……！」

「そうだけ、サーキースの言う通りだ！せつかくのショーなんだッ！引っ込んでな！」

その時、1人のベラミー海賊団が酒瓶を投げた。

そいつに当てる意思があつたのかは知らないけど、それは真っ直ぐに……真っ直ぐにナミさんの頭へと吸い込まれる様に飛んでいき……。

ガシャンッ!!

「いっつ……、あ」

「あ」

「あ」

「あ」

ルフィが、ゾロが、ミキータが、そして酒瓶を当てられたナミさんまでもが思わず声を漏らしていた。

ルフィは顔から汗を大量に流して、ゾロは視線を落ち着かなく彷徨わせ、ミキータはナミさんを後ろに下げて血の出てる頭の止血を始めてる。

ただ、私以外の一味はみんな思う事は1つだった…。

『あ、あいつら死んだ』

## 53 『女好き、やっぱり逃げられないベラミー海賊団』

「……………」

「ね、ねえイリス！私は大丈夫よ、ほら！ピンピンしてるじゃない！」

「そ、そうだぞイリス！ナミは元気じゃねエか！な!?」

「その血は何？」

「こてん、と首を傾けてルフィを見れば、彼は分かりやすく目を泳がせて最終的にミキータに助けを求めた。

「きや、キャハ…ハ。無茶振りにも程があるわ…。あ、あんまり暴れたら、店の迷惑に…」

「私は海賊だよ、そんな事関係ない。…それにミキータ、その右腕…どしたの？」

「えっ」

「ミキータがバツと自らの右腕を見れば、先ほど酒瓶を投げていた時の破片でも飛んできたのか少しだけ切り傷があつた。

「彼女も目を瞑って数秒思考し…やがてゾロに丸投げした。

「オイ！俺にどうしろってんだ…あー、イリス、このケンカは買うなって船長命令——」



「私が売られたケンカは、また別のモノだよ」

「……おう」

「おう、じゃないわよ！一瞬で言い負かされてくるな!!」

バシン！とナミさんがゾロの頭を叩く。

「ハハハ……どうしたんだ仲間内で言い争って……気でも狂ったか？」

私の目の前まで歩いてきたサーキースが、ナイフを指で回しながら舌舐めずりする。

顔はナミさん達の方に向けたまま視線だけでサーキースを見れば、奴は分かりやすくでかい態度を取って私を見下していた。

そんな奴の顔に向かって手を伸ばすと、勿論届く筈もなく店中が爆笑に包まれる。

まあいいよ。

……笑える内に存分に笑え。

「ぎゃーっはっはっはっは!!届いてねエぜお嬢ちゃん!!」

「ここはガキの来るトコじゃねエよ!!」

「ハハ！そうだけ……！悪い事は言わねエ！どうやって3000万の懸賞首になったのかは知らねエが……俺に勝てる訳がね……ツぐお……!!」

ペラペラと喧しいサーキースの顔を掴む。

届かない？そんなもの腕を長くすれば良いだけだ。顔を掴めるだけ手が大きくない

? それも手を大きくすれば良いだけだ。

「うぐ…っ、こい、つー能力者か…?!?」

そのままミシミシとアイアンクローを決め続け、腕を徐々に上へ伸ばしていく。

サーキースが地に足を付けられなくなつてじたばた暴れるので、店の天井に到達した辺りで思い切り床に叩きつけてやった。

その際の衝撃でサーキースだけじゃなく、周りの雑魚達も数人巻き添えにした。

「ぐふおっ…?!?」

「ぎゃあッ!?俺達まで巻き込まないでくれエ!!」

「酒瓶投げといてよく言うよ…逃す訳ないでしょ」

神背ヒューマで私を増やして店の出入り口から逃げようとする奴を1人1人潰していく。

誰がナミさんやミキータを傷付けたのか分かんないから…ここにいる奴全員潰せばその中にいるでしょ。疑わしきは罰するから。

「さ、サーキースを一撃…だと…?!?」

ベラミーが私を見て目を見開いている。何を言ってるのか、あの程度ならルフィでもゾロでも一撃だよ。

…それにしても、間違いなく倍加の上限上がってるね。流石にあの時の50倍までは行かないけど…20倍までなら今のままでも扱えるようになってる。

「…ハハツ…ハハハ!! 不意打ちでサーキースを倒した程度で…粋がるなよガキがア!! スプリング狙撃!!」

こいつも能力者だったのか。

足をバネに変えてバネの力を利用して突撃してくるベラミー。なるほど、結構速いね、あの速度で殴られたら…今の私だったらそうだな… ちよつと痛いかも。

「20倍灰」

「ッ!!?」

ベラミーの拳を体を少しずらす事で避けて、右手を握りしめる。

「去柳薇」

「ブツ…ゴ…っ…!!?」

自分のバネで付けた勢いと、私の20倍の拳の勢いに挟まれて物凄い衝撃がベラミーの顔面に突き刺さる。

最終的にバネの勢いを私の拳が上回り、バキバキと嫌な音を立てながらベラミーの体は後方へ吹き飛ばす……なんかで終わらせる筈がないでしょ。

「何だ、やっぱり口だけじゃん。…まだダメだよ、もつと体に叩き込んでやる」

吹き飛ばす前にベラミーの足を掴んで床に叩きつけ、近くの雑魚に叩きつけ、倒れたサーキースに追加で叩きつけ……次第に顔の原型が無くなってきた所で店の端に放り

投げた。

「私からも一つ言わせてもらおうよ。粹がるな雑魚が！」

「いや、もう聞こえてねエだろ……」

ゾロの突っ込みが聞こえるけど、だって仕方ないじゃん。ナミさんとミキータを傷付けたんだからこれくらいはね。

「さて……まだ沢山残ってるね？」

「え……!? お、おれは何もして無い！ただ瓶を投げただけじゃねエか！しかもその女に当てたのはおれじゃねエ！」

「お、おれでもない！」

「おれも違うぞ!!」

「そうなんだ、じゃ、さよなら」

「がぺっ!?!」

私の肩から生える腕を20本に増やして一気に殴り飛ばす。

…お、これで立ってる奴ら居なくなつたね！勿論、美女達や関係の無い店主には何もしてないけどね。

「ひ、ヒイ……!」

「ん？ああ……あなたは確かサーキースの隣に居た……名前は？」

「あ、あ……り、リリー、リリー……！お、お願い見逃して……！！」

尻餅をついて震えるリリーの前にしやがむ。

ふうん……リリーか。

「ちよつとサンングラス取つてよ」

「……え、は、はい……っ」

びくびくとサンングラスを取るリリー。……ふむ、可愛い、案外いけるね。

「そつちの君は？名前なんて言うの？」

「み、ミュレよ……」

ミュレねえ……リリーは可愛くて、ミュレは綺麗だね。ベラミー海賊団も良い女居るじゃん！

「君達の可愛い見た目に免じて、この海賊団を修復不可能つてレベルまで潰すのはやめとくよ。ナミさんとミキータに傷をつけた事は……周りの人達の惨状で勘弁してあげる。だからそいつらが目を覚ましたなら言つてやつてよ。……私達は“空”へ行く、いつまでも下から上見上げてへこへこしてやがれつてね」

それだけ言つて立ち上がり、私達は店を後にした。ごめんね店主さん、許して！

「やっぱおれ、イリスを怒らせるのはやめよう」

「倍返しなんてもんじゃねエぞ…死んでねエだろうなアレ…」

「キヤハハ！私達の為に怒ってくれるイリスちゃんも素敵よ！」

「ミキータ…あんたはちよつとイリスに甘すぎるわ！」

「いやー、ごめん!!でも仕方ないよね？」

「私が悪びれもなくそう言えば、ナミさんは般若の顔で私の頭をぐりぐりしてきた。痛い痛い！それ痛い!!」

「あ…ん…た…ねエ…!あんたがやられてた時の私やミキータも同じ気持ちだったって事に気付きなさいよ!本当なら私がいっくらポコポコにしてやりたいのよ!!」

「大丈夫よナミちゃん、私店出る時に1万キロで踏んできたわっ!」

そっちの方が重傷になりそうなんですが…?それ、死んだんじゃない??

「空島はあるぜ…ゼハハハハ、嬢ちゃん思ってたよりやるじゃねエか、3000万とは思えねエな」

「ん?あー、あなたはさっきの」

店を出て少し歩けば、さっきの大男が道の真ん中で座ってチエリーパイを食べていた。いやどこで食ってんの。もうちよい端寄るとかさ。

「アイツらの言う新時代つてのはクソだ。海賊が夢を見る時代が終わるって…!!?えエ!!?オイ!!?ゼハハハハハハ!!?…人の夢は、終わらねエ!!!」

「!!」

…何か凄い聞いたことあるセリフだなあ…。前世では有名なのかな？てかこの大男誰？

「人を凌ぐつてのも楽じゃねエ！海賊の宝を狙うなら双方命を賭けるべきだ!!一方は宝を傷付けた！一方はそれに対し裁きを与えた!!迎え撃てなかつた方が弱く、悪いのさ!!海賊つてのアそういうモンだろ!!えエ!!」

「……行こっか、よく分かんないし」

「ええ…」

そうして何か言ってる大男から背を向けて船に戻った。

それから1つ言わせて貰いたい。あの大男を見ながら不安げな顔してるナミさん、ちよーooooooooー可愛いつ!!!

\*\*\*

「る、ル、ルファイ！ゾロ！イリス!!お前ら何だそのケガ！何があつたんだ!!」  
 「何!?イリスちゃんが傷だらけだと!!?ナミさんやミキータちゃんは無事か!」

「私達は平気だけど、ナミさんとミキータが重傷だよ、チョッパ―真つ先に2人を見てあげて」

「いやいやいや」

船に戻ればウソツップが心配して声をかけてくれた。それに釣られてサンジとチョッパ―もやってくる。

「ルフィもゾロも、ここはレディファーストでしょ!」

「どう見ても俺らの方が重傷だろうが!それにてめエも一応は女だろ!」

「何言ってるの!ナミさんは頭を打ったんだよ!ああ、私がついていながら情けない!」

どつちにしろ私はナミさんとミキータが治療終わるまでは待つ!!

…あ、あれ、なんか怖い笑顔の嫁2人が近付いてくるんだけど…。

「はいはい、あんたが1番先よ」

「キヤハハ、私の傷なんて絆創膏貼れば治るわ」

「い、嫌だ!ナミさんとミキータが先に治療して貰わないと安心できない」

「それは私達も一緒!!」

ずるずるとチョッパ―の前に引き摺られてしまった…。くそう、そう言われたら返す言葉もないよ…。



「随分傷付いて…何かあったの？」

「あ、ロビン！」

ロビンも帰ってきた様だ。何処に行つてたのかと聞けば服の調達と空島への情報を入力してきたと言う。流石有能だった。

「これよ」

「お！宝の地図だっ！」

「ただの地図だろ、どこだコリヤ？」

「この島よ」

すつとルフィに地図を渡した。この島の地図か…何か手掛かりでもあったのかな？

「左にある町の絵が現在地「モックタウン」…そして対岸…東にバツ印があるでしょう？そこにジャヤのはみ出し者が住んでるらしいわ、名前は「モンブラン・クリケット」…夢を語りこの町を追われた男、話が合うんじゃない？」

「流石ロビン！収穫あったね。…じゃとにかく行つてみよう！これが現状唯一の手掛かりなんだし」

「ええ、そうね。ルフィどうする？」

「おう！行こう!!」

そして船は対岸のモンブラン・クリケットが住む所へと向かう事になった。

島の対岸に進むだけだから対して時間はかからないだろう。

\*\*\*

「…で、これは何？」

「さア…」

船を進めてほんの数10分で、船と遭遇した。

昼間のサルベージサルベージ言ってた猿船と似たような形で、船首にはゴリラが付いている。

「そういえばさつき、猿の船がこの島に入るのを見たぜ」

「あ、じゃあ見た目も似てるし関係者かもね。とにかく邪魔だから退いて貰おうよ」

船の進行方向に相手の船が居るから進めないんだよね。

「オウオウ!! ニーチャンネーチャン!! そっちでゴチャゴチャ言ってるじゃねーぞオ!! ウォーホーホー!!」

ハイテンションゴリラだった…。見た目もゴリラだった…。

「思い切った顔してんなー、何類だ？」

「人類だバカヤロー」

ルフィの問いに漫才みたいな返しをするゴリラ。いやルフィの問いも漫才みたいだったけど。

「おれ達行きてエ場所があんだよ、どいてくれ！」

「あほたれエ！ここの海はこの俺のナワバリだ！！通りたけりや通行料を置いてゆけ！！」

「何だナワバリって、マシラみてエな事言つてやがる」

「マシラって誰？」

「昼間の猿だよ」

何でウソツプ名前知つてんの？自己紹介してた？私が聞いてなかったただけかな。

「何イ!?マシラア!?マシラがどうした!？」

「昼間に会つたんだ、おれ達」

「何！そうか…と言うことはマシラの知り合いってことか！つたく、ハラハラさせやがる…」

今の会話のどこにハラハラしたのか教えてよ…。

「マシラの知り合いなら俺の知り合いでもある!!どこに行きたい!!」

「モンブラン・クリケットって人んち」

「な、なぬ!? おやつさんとも知り合いなのか…!!? よし、じゃあ通っていいぞ。ハラハラするぜ…」

何にハラハラしているのかは置いて、通ってもいいらしい。

別にクリケットって人とは知り合いでも何でもないけど、勘違いしてくれてるならそれでいいや、楽だし。

多少の運もありながら、ゴリラと遭遇しても何のトラブルを起こす事も無く私達はジャヤの東海岸に到着した。

「着いたわ、地図の場所。ここに例の…誰だっけ?」

「モンブラン・クリケット」

「…その夢を語る男が住んでるのね?」

「お、おお!!」

東海岸へ辿り着くと、そこには海岸沿いに豪邸が建っていた。

何で海側に玄関があるかは置いて。

「ん…? いやこれハリボテじゃん!」

海側から正面で見れば立派な豪邸だが、島に降りて後ろから見た姿は寂しいものだっ

た。

何故か半分縦にすっぱり無くなってる家の断面に、豪邸に見せかける為の大きな板はつてるだけだ。実際の家の大きさはくっ付けてある板の半分もない。

「こ、これは中々斬新なデザインだね」

「一体どんな夢を追って町を追われたの？」

ナミさんがロビンに尋ねる。あの町なら夢を掲げるだけでバカにされて追い出されそうでもんね。

「詳しくは分からないけど……このジャヤという島には莫大な黄金が眠っているとわれているらしいわ」

「黄金かー」

「あなたは海賊なのに黄金とか興味なさそうよね」

「いや、興味はあるよ！だって黄金があればナミさんが喜ぶからね！」

「結局そこじゃないの……」

呆れた顔をしつつもふふ、と笑うナミさん。

一応前世は日本人な訳ですから黄金と聞けば気持ちは昂りますけど……やっぱり一番は女の子だよ！

「とにかく家に入ってみようよ、ハリボテの入り口は海側だけどちゃんとした玄関は陸

側にあるみたいだし」

「おうー！」

そう言つてルフィが「お邪魔しまーす」と入つて行つた。

ちよつとルフィにはお邪魔しますと言えば勝手に入つてもいいつて思つてる考えを直して貰わないといけないねこれは。

…あ、いや海賊だからそもそもそんな事気にする方がおかしいのか。

## 54 『女好き、モンブラン家に会う』

「ルフィー、家の中なんかあったー?」

「なんもねエなー、留守みてエだ」

本来は勝手に侵入なんてダメだけどね、海賊だからね。

「!絵本:随分年季の入った本ね、「うそつきノーランド」だって、あはは」

「ほー、イカスタイトルだな、題材がいいぜ」

ナミさんが切り株の上に置かれていた本を手にする。うそつきノーランドかあ…またまた聞いたことあるなあ…。最近こういう事多い気がする。

「うそつきノーランド」?へー懐かしいな、ガキの頃よく読んだよ」

「知ってるの?サンジ君。でもこれ北の海の発行って書いてあるわよ」

「ああ、俺生まれは北の海だからな、みんなにや言った事無かったか?」

「生まれは北で育ちは東?どうして東の海に?」

「まあ俺の話はどうでもいいさ、こいつは北では有名な話なんだ。童話とは言ってもこのノーランドって奴は昔実在したって話を聞いた事がある」

何か今露骨に話を逸らされた気がする。

…気のせい、かな??

「へえ…」

ナミさんはそう言って本を開ける。私も読んでみたいと言ったらナミさんはしゃがんでくれた。あれ、親子かな??

ーむかしむかしの物語。

それは今から400年も昔のお話ーー北の海のある国に、モンブラン・ノーランドという男が居ました。

探検家のノーランドの話はいつもウソの様な大冒険の話。だけど村の人達にはそれがホントかウソかも分かりませんでした。

あるときノーランドは旅から帰って王様に報告をしました

『私は偉大なる海のある島で山の様な黄金を見ました』

勇氣ある王様はそれを確かめる為2000人の兵士を連れて偉大なる海へと船を出しました。大きな嵐や怪獣達との戦いを乗り越えてその島にやっと辿り着いたのは王様とノーランド、そしてたった100人の兵士達。

しかしそこで王様達が見たものは何も無いジャングル。

ノーランドはうそつきの罪でついに死刑になりました。ノーランドの最後の言葉は



こうです。

『そうだ！山の様な黄金は海に沈んだんだ！』

王様達は呆れてしまいました。

もう誰もノーランドを信じたりはしません。ノーランドは死ぬ時までウソをつくことをやめなかつたのです。

「…哀れ、ウソつきは死んでしまいました…『勇敢なる海の戦士』に…なれも…せずに…」

「おれを見んなア!!切ない文章勝手に足すなア!!」

ナミさんが最後ウソツプでオチ付けたが、…これは妙に引つかかる話だ。

ただの作り話なら、こうはならない様に嘘つかない子になるのよー、みたいな感じで子供を教育する本としては童話の役目をきちんと果たしている。

…だけど、サンジの言つてた『実話』というのが本当なら…。

「…?どうしたの、イリスちゃん」

「ああ…ちよつと気になる事が」

「ぎゃあああゝゝゝつ!!」

「へっ?」

ヤバイ……! 童話に夢中になつてゐる間にルフィが海に落ちた!

……いやなんで!?

「てめエら誰だ!? 人の家で勝手にお寛ぎとはいい度胸、ここらの海は俺のナワバリだ」

落ちたルフィの代わりに頭に栗を乗つけた様な飾りをしてる男が海から出てきた。状況的に見てあの男に引き摺り込まれたんだろう。

「ウソツプ、ルフィを宜しく」

「お、おう!」

「狙いは『金』だな、死ぬがいい」

「うわっ」

言うや否や蹴りを問答無用で打ち込んできた。

「ち、違うよ! 私達は空島に行く方法が知りたいだけで……!」

「!!……何? 空島……:ぐ、:は、ハア……ツ……ツ!!」

「お、おじさん!」

私の言葉にピタ、と攻撃を止めたと思つたら急に苦しみ出して地面に倒れた。い、医者!! チョップパー!!!

「ど、どうして急に……いや、とにかく早く家へ運ぼう! チョップパー、頼める?」

「う、うん、おれの役目だ、診てみるよ!」

サンジにおじさんを担いで貰って、急いで家の中へ運び込む。

そのまま中にあるベッドに寝かせ、そこからはチョツパーの指示を聞く事となった。

「タオルをもつと冷やしてきて、窓は全開に！」

「わかった。タオルの冷たさ2倍！」

「凍ってるよッ！そこまでしなくてもいいぞ!！」

「あわわ…」

あたふたしながらも何とかチョツパーの指示に応える。

ナミさんの時はビビが居たからなあ……。あ、なんかビビ思い出したら会いたくなってきた。別れた当初は大丈夫だったんだけどなあ。いや大丈夫では無かったけど。

「それで、このおっさんの病気は何なんだチョツパー」

「多分潜水病だ」

サンジの問いにチョツパーが答える。潜水病？知らないな、潜ってたらなるのかな？

「ダイバーがたまに罹る病気さ、本当は持病になったりする様な物じゃないんだけど。海底から海上へ上がる時、減圧が原因で体の中にある元素が溶解状態を保てずにその場で気泡になるんだ、気泡は血管や血管外で膨張するから、血流や筋肉・関節に障害を与

える…」

「……あア怪奇現象ってわけか」

「それ」

全くわからんからルフィといつかのやり取りを繰り返す。

「この人はきつとその気泡が体から消える間もないくらい、毎日毎日無茶な潜り方を続けてきたんだ」

「一体何の為に…」

「わからないけど……危険だよ。場合によっては“潜水病”は死に至る病気だ」

結構危ない奴だった！

…まあ！そんな感じでヤバイ病気だつて事が分かった訳だ。

私達は意識を切り替えてチョツパーの指示に従う。とにかくタオルを冷たくして、冷たく…冷たく…。

「っ、凍ってるぞー！」

「ふあ！！ご、ごめん！！」

倍加しか出来ないから微調整出来ないんです…!!こんな所で欠点出ちゃった…。

そうして数10分付きっきりの看病を一味で続けている時、家にマシラとゴリラが姿を現した。お、やっぱり繋がりがりあったのかこの人達。

2人（2匹？）にはおじさんの状態と看病していた事を説明して、とにかく家にいた事は納得してもらった。

今は看病もある程度目処が立ち、チョッパーが1人で状態を確認しているので私達は外に出てマシラ達と話している所だった。

話してると言ってもルファイが打ち解けてるだけなんだけど。相変わらずコミユ力やばい。

「お前らもここに住んでんのか？」

「まあこのおやつさんの家が「猿山連合軍」の本拠地ではあるんだが、大概はてめえらの船で寝泊まりだ」

「俺達にこの家は小さすぎるからな、ウオツホツホツホ!!」

笑い方完全にゴリラじゃん…。何類だ？

「お前らがデカすぎるんだよ、まー巨人のおつさん達から見たら耳くそみたいなものだけどな」

あの2人が大きすぎるだけなんだけどね。規格外だよあれは。

「ルファイ！気がついたぞ！」

お、早かったね、流石チョッパー。

という事なので再度家の中へと戻った私達は、当初の目的である空島について聞くことにした。

「ひし形のおつさん！聞きてエ事があんだよ」

…モンブラン・クリケット。間違いなくモンブラン・ノーランドに関係ある筈だ。

そして、私の違和感が正しければ…。

「迷惑かけたな、おめエらをいつもの金塊狙いのアホ共だと思った。…で、俺に聞きてエ事つてのは何だ？さっきの嬢ちゃんが言つてた様に空島の事か？」

「そうだ！おれ達空島に行きてエんだ!!」

「…そうだな、あると言つていた奴を一人知つてるが…そいつは世間じゃ伝説的な大嘘つき。その一族は永遠の笑い者だ。…うそつきノーランド」…そういう昔話がある、ある程度察する事は出来るだろうが俺はそいつの子孫なのさ」

まあ名前的にも、見た目的にもね。

「モンブラン家は当時国を追われ…肩身狭く暮らすも人の罵倒は今もなお続く…。だが一族の誰一人奴を憎む事はない」

「…なぜ？」

「ノーランドが類稀なる正直者だったからだ」

「……」

これは私の違和感が正しいのかもしれない。

…いや、私が違和感を持てたのはそもそも前世の知識があつたからかもしれないけど。

「絵本にあるノーランドの最期の言い訳はこうだ。「そうだ！山のような黄金は海に沈んだんだ！」：アホ面そえて描いてあるが、実際は大粒の涙を流した無念の死だったという。到着した島は間違いなく自分が黄金都市の残骸を見つけたジャヤ。それが幻だったとは到底思えない：ノーランドは地殻変動による遺跡の海底沈没を主張したが、誰が聞いてももはや苦し紛れの負け惜しみ：見物人が大笑いする中ノーランドは殺された」  
「じゃあ！だからおっさんはそのモンブラン家の汚名返上の為に海底の黄金都市を探してるのか!!」

「バカ言うんじゃねエ!!」

ドウン！と撃たれた銃弾がウソツプの頭上を通過する。あ、危ない事するなこの人。  
「大昔の先祖がどんな正直者だろうが、どんな偉大な探検家だろうが、俺に関係あるか!!  
そんなバカ野郎の血を引いてるってだけで見ず知らずの他人から罵声を浴びる子供の気持ちがお前らに分かるか!!俺はそうやって育って来たんだ!!」

「だけど、この人以外のモンブラン家の人はそう言った名誉を取り戻す為に海へ出た者も多いらしい。：帰って来た者も居なかったそうだが。」

だからこの人はそんな一族を恥じて、自らは海賊になった。

「別に海賊になりたかつた訳じゃねエ、ノーランドの呪縛から逃げ出したかつたんだ。  
：しかし10年前……冒険の末俺の船は何とこの島に行き着いちゃった。奇しくもモ

ンブラン家を、ノーランドを最も嫌い続けたこの俺だけが行き着いた。絵本の通り黄金郷など欠片も見当たたらねエ……この島の岬に立つと、これも運命さだめと考えちまう……もう逃げ場はねエ……」

だからこそクリケットは、この地に残って黄金郷を探し続けた。

あるのならそれもよし、無いのならそれもよし。別に黄金を見つけてノーランドの無実を証明したい訳じゃない、と。

「俺の人生を狂わせた男との、これは決闘なのさ。俺がくたばる前に……白黒はつきりさせてエんだ……!!」

「じゃあ、あいつらは？さる達は何でここにいるんだ？」

「あいつらは絵本のファンだ」

えー、めっちゃ簡単な繋がりじゃん……。

「空島にはどうやっていくんだ？」

「だから話してやったろ、『空島』の証言者はその「うそつきノーランド」……こいつに関わりやおめエらも俺と同じ笑い者だ」

そう言つてクリケットは柵から日誌を取り出した。……お？航海日誌？

「え!?そいつ空島にも行った事あんのか!?!」

「残念ながら行ったとは書いてねエが……」



「航海日誌…まさか、ノーランド本人の!？」

ナミさんの驚いた声に、クリケットはページを開けた状態でナミさんに日誌を渡す。

「その辺…読んでみる」

「凄い…400年前の日誌なんて…海円暦1120年、6月21日快晴、陽気な町ヴィラを出航…記録指針ログポイントに従い港より真つ直ぐ東北東へ進行中の筈である。日中出会った物売り船から珍しい品を手に入れた。「ウェイバー」というスキーの様な1人乗りの船である…。無風の日でも自ら風を生み走る不思議な船だ。コツが要るらしく私には乗りこなせなかった。目下船員達クルーの格好の遊び物になっている…ウソっ!何これ欲しいく!!」

「いいから先読めよ!!」

「バカ野郎!!ナミさんが欲しいって言うてる物を調達するのが先でしょ!!待っててナミさん!私が今から探しに…!」

「お前は落ち着けエ!!」

それにしてもこいつら何にも分かってないな、ナミさんが音読してくれてるんだよ? ああ、録音したい…耳が幸せ…。

「この動力は『空島』に限る産物らしく、空にはそんな特有の品が多く存在すると聞く。『空島』と言えば探検家仲間から生きた「空魚」を見せて貰った事がある。奇妙な魚だ

と驚いた物だ。我らの船にとっては未だ知らぬ領域だが…船乗りとしてはいつか『空の海』へも行ってみたいものだ」

「空の海…ロビンが言ってた通りだ！」

「それにこの時代じゃ空島があつて当たり前前のように書いてあるぞ!!」

「やっぱりあるんだ!!」

「やった〜!!!」

いつものトリオがはしやぐ。

でも空島つてなつたら騒ぐよね普通、だつて普通じゃないもんね。

という訳で、クリケツトが空島について知っている知識を教えてください。

もう動いて大丈夫なのか…頑丈だなこの人。それかチョッパが凄いのか、どっちもか…。

みんなで外に出て切り株周辺に集まる。

ナミさんミキータが隣同士に座つて、私はその上だ！これぞハーレムの特権なんだ!!

うはーっ!!

…あ、ここちよつと居心地良すぎるかも。話、まともに聞けるかな…??

## 55 『女好き、黒光の恐怖』

クリケットから聞いた話を纏めるところだ。

ここらの海では時として真昼だつてのに突然「夜」が襲う奇妙な現象が起きる。その時に現れる巨人の事はクリケットも詳細は分からないそうだが：夜の正体は極度に積み上げられた雲の影。

その雲の正体は「積帝雲」。空高く積み上げるも中には気流を生まず雨に変わる事もない：それが上空に現れた時、日の光さえも遮断されて地上の「昼」は「夜」にも変わる。

何千年何万年も変わる事無く浮遊し続けているという説もある事から雲の化石とも呼ばれてるらしいが：もし空島が存在するとすればそこにしか可能性はないのだと。

そして本題の行き方だが：これが厄介だ。

ノックアップストリーム  
突き上げる海流、この海流に乗れば空へ行けるらしい。

だけどタイミングが大事で、一歩間違えれば船は大破。海の藻屑という訳だ…。

分かりやすく言えば海底ですんごい規模の爆発が起こって海を吹き飛ばし、1分間程空へ続く海流が出来るからそれに乗れという話だ。

積帝雲に空島があるかどうかも定かではないし、飛んだところで何も無く落ちて藻屑エンドを迎える可能性もある。

「ただ、あるかもしれない。」

それにクリケツトの話によれば今までの経験上次の積帝雲、突ノックアップき上げる海流ストリームの発生位置も大体わかっているらしい。おまけにその丁度良いタイミングの日が明日の昼って話だ。

私達にとつては最高に美味しい話だ、クリケツトがこの辺の海に詳しくて助かったよ！

2人の太もも膝の上が心地良すぎて逆に話がすつと入ってきたのも助かった…。

そして今は夜も更けてクリケツトの家で宴会中である。この家にマシラもシヨウジヨウ（ゴリラの名前）も入っているからかなり狭く感じるよ。

「いや今日はなんて酒のうめエ日だ!!」

「キア食え食え、まだまだ続くぞサンマのフルコースは!!」

「ぶっ…!か、からあく…!!い、いひやい…!!」

「うお!?!何でイリスにおれの必殺「タバスコボンバー」が…!?!きちんとルフィの皿に…!」

「…ウソツプ…?」

「キャハ…覚悟は出来てるのかしら?」

「ギヤアアアアアアアアアア!!!」

ウソツプが処刑されてる!!あ、ミキータがウソツプの上に座った…うわ、徐々に重さ増やしてる…あれキツイだろうな…。

「うゝ…ヒリヒリする…、あれ、ロビン?どしたのこんな端っこで」

「ノーランドの航海日誌を見てるの、なかなか興味深いわ」

すとん、とロビンの隣に座ると彼女は私の方を見て微笑んだ。おう…美しい…。

「…赤目さんは、どうして今の夢を追いかけようと思ったの?」

「え?…どうして、か…。可愛い女の子が好きだからかな…。うーん…わかんない。そういう物だからかな」

私が困った顔でそう返せば、ロビンはふふ、と笑ってそういうものよね、と返してきた。何だ、可愛くもあり綺麗でもある…強い。

「私も狙っているんでしょう?」

「まあねー…何なら今誓わせてあげようか?」

「フフ…じゃあ今夜、ベッドの上でお願いしようかしら」

「うえっ!?あ、い、いやそれは…そのお…!」

「航海士さんが言ってたように、こう言えば躊躇うのね」

し、心臓に悪いわ!

「……」

ぺら、とページを捲るロビンの手が止まったので不思議に思っただけで見てみるとそこから先は白紙だった。

「髑髏の右目に黄金を見た」

「!」

急に目の前に現れたクリケットにビクツと驚くロビン。ギャップ萌えすらも完備しております、隙がありません。

「涙で滲んだその文がノーランドが書いた最期の文章……その日ノーランドは処刑された。このジャヤヤに来てもその言葉の意味は全く分からねエ、髑髏の右目だア!? コイツが示すのはかつてあった都市の名か、それとも己の死への暗示か……後に続く空白のページは何も語らねエ。だから俺達ア潜るのさ!! 夢を見るのさ海底に!!」

クリケット……どう見ても酔ってるね、これ。

そうしてクリケットはまたどんちゃん騒ぎの中へ戻っていった。

ナミさんとミキータは未だウソップをシメている。あれは昼間のベラミー海賊団の時の鬱憤もウソップで晴らしてるな……。

「……私ね、ロビン。黄金郷は存在すると思うんだ」

「へえ……それはどうして？」

うそつきノーランドの話を聞いた時から違和感はあるけど、  
突き上げる海流……この情報が決定的だった。

「まず、ノーランドが嘘をつく意味がないもん。偉大なる航路と言え言わずと知れた海賊の墓場。そんな海に乗り込んで帰って来れるような人物が……わざわざ嘘をついてまでもう一度偉大なる航路に乗り込むとは思えなかつたんだ」

「でも……実際ジャヤには何も無かつた。……地殻変動？」

「似た様な物だけど……違う。黄金郷は地殻変動によつて海に沈んだんじゃない……」  
ノックアップストリーム  
突き上げる海流”で島ごと空へ飛んだんだよ」

「……それは、興味深いわね」

外れてたら恥ずかしいけど、合つてる気がする。そもそも突き上げる海流がそこまで強いのかどうかはわからないけど、変に確信している私が居るのだ。何でなのかはわからないけど。

「……赤目さん。……あなたの説、もしかしたら本当に正しいかもしれない」  
「え？」

ロビンが取り出した地図2枚を重ねてさういう。

持つてるのはジャヤと昼間ルフィが見つけてきたスカイピアの地図。

「照らし合わせれば……ほら、髑髏。……さっきの話聞く限りでは髑髏の右目に黄金を見た……だから、ここに黄金郷がある可能性があるわ」

「え……本当に合ってた？」

ロビンが興奮気味に話しながら繋げて髑髏の形になった地図の右目部分を指差す。

「それに、この家の真つ二つに裂かれた様な外見もそれを裏付ける証拠になっている。……赤目さん、あなたは今……とんでもない発見をしたかもしれないわ」

「そ、そんなに？あはは、嬉しいなあ……」

前世のもつさりした記憶すごーい……。

「でも、まだ確定じゃないから黙つとこうよ、せつかく空島に行くんだから私達で確かめて……それでクリケットには報告しよう。ぬか喜びになったら流星に申し訳なさ過ぎるもんね」

「ええ、そうね。……フフ、良かったわね赤目さん。私……あなたに更に興味が湧いたわ」  
「ほ、ホント？それが一番嬉しい情報だよ！」

えへへ、えへ、でへえ……と鼻の下を伸ばしてるとつん、と鼻を突かれた。突いたロビンも口元を隠して笑い、私達のやり取りは部屋の喧騒やウソツプの悲鳴でかき消されていく。

クリケットの話す昔ジャヤにあつたとされる黄金の鐘の話をしたり、海に潜つた時に



手に入れた小さな黄金を見せたり盛り上がって……そのまま眠くなるまで騒ぐ……と  
思ってたんだけど。

「しまったア!!こりやまずい!おいお前ら森へ行け!!南の森へ!!」

「びつくりしたあ……どうしたの急に」

「サウスバードという鳥を捕まえて来い!この鳥だ!」

そう言つてクリケットは取り出した黄金を見せる。

変な鳥だなあ。

「いいか、よく聞け……お前らが明日向かう突ノックアップ上げる海流、この岬から真つ直ぐ南に位  
置している……そこへどうやって行く!」

「船で真つ直ぐ進めばいいだろ」

「ここは偉大なる航路グランドラインだぞ!!一度外海へ出ちまえば方角なんて分かりやしねエ!!」

「そうか……目指す対象が島じゃなくて海だから頼る指針がないんだわ……!じゃどうす  
れば真つ直ぐ南へ進めるの!」

ナミさんがそう言うが、足元に転がつてる鼻の長いナニカには触れない方がいいの?  
「その為ために鳥の習性を利用する!!サウスバードはどんな広大な土地や海に放り出されよ  
うとも、その体に正確な方角を示し続ける。とにかく!この鳥がいなきや何も始まら  
ねエ!空島どころかそこへ行くチャンスに立ち会う事も出来んぞ!!いいな、夜明けまで

にサウスバードを1羽…必ず捕まえて来い！」

かなり急な話だけど、それがなきや何も出来ないのなら仕方がない。

ウソツプも何とか起こしてみんなで森に入る事になり、虫網などを持って森へ向かった。

\*\*\*

「わー…真っ暗だね、ナミさん」

「は、早く捕まえて戻りましょう…」

びくびく震えて私に縋り付くナミさん。

…夜の森探検ハマリそう。

「サウスバードって言うその鳥の手掛かり…本当に変な泣き声ってだけで分かるのかしら？」

「さアな…だが姿は分かってたんだ、森に入りや分かるって言ってたオツサンの言葉も気になる…」

「ジヨ〜」

「うわつ、変な鳴き声」

「これだ…」

どこからか聞こえてきた特徴的過ぎる声にみんなで反応する。

とにかく！鳴き声と姿がわかってれば後は捕まえるだけなので、網が3つあると言うことで3手に別れて探す事になった。

班分けとしては、まずルフィ、ウソップ、サンジ。

チヨッパー、ゾロ、ミキータ。

私、ナミさん、ロビンだ。

くじで決めた訳だが、班が決まった瞬間のミキータの顔が忘れられない。絶望に染まっていたもん…またフォローしておこう。

「鳥つてくらいだからやっぱり高い所にいるよねー、ちよつと木に登ってきてもいい？」  
「はは、冗談でしょイリス、離れたら死ぬわよ私」

「大袈裟ね、航海士さん」

「あ、あんたはこの場所何とも思わないの!? 怖いでしょ…」

縋り付くナミさんがレアだったので、ぶっちゃけサウスバードより今の状態の方が私にとつては重要かもしれない。

「…あら航海士さん、いつの間にそのコ捕まえたの?」

「え?」

ナミさんが恐る恐るロビンの指差す自身の腰を見れば、そこにはタランチュラのような大きなクモがくっ付いてわさわさ動いていた。

「キヤアアアアアアツ!! イリス! イリス取つてえ!!」

「わ、わかったからちよつと離れて、何も見えない! 何も! おっぱいしか見えない! 息も出来ない! あれ、結構幸せかも、このまま死ぬのなら、本望…!!」

ナミさんのばい窒息死とか、私がもし死ぬとしたら死因はそれがいい。

…まあその話は置いて、ナミさんが本気で怖がつてるから動けない私の代わりに神背ヒューマを出してクモを取ってもらった。

私も虫は普通に苦手なだけで…ナミさんとロビンの前で格好悪いとこ見せらんないし…。

「ん? 赤目さんと航海士さん、足元で何か動いてるわ」

「うぎやあああああつ?!?!」、ゴキ…!!ゴ…ゴゴゴ!!」

ナミさんの背中に手足を回し、完全にぶら下がる形になった。

格好悪い?うるさいな!相手はあの黒き彗星だよ!私はこいつだけはどーーし  
ても無理なの!!!

「だ、大丈夫よイリス!ロビンが何とかしてくれるわ!」

「イヤよ、私もそれは触りたくないもの」

「も、もうやだあ…この森い…!」

ぎゅ、とナミさんの服を握り締める。

「ゴキ…いや、Gだけは本当に無理なんです…見たくもないし、触るなんて絶対無理…」

!多分前世の前世はGに殺されたんだ!!

「イリス…!そ、そうよ、こんな時くらいは私があんたを助けてあげなくちゃ!ロビン、  
走るわよ!」

「ええ、鳴き声は西の方角から聞こえてくるわ、そっちに行きましょう」

ナミさんだつてGは苦手な筈なのに、齒を噛み締めて私を抱いたまま西へ走り出  
た。

うう…格好悪い所というか、嫁に見られたら幻滅されてもおかしくないよ…  
…なのになミさんはこんなにも私の事想つて…!好き過ぎる…!!

「今度はブタ!？」

「こつちからはてんとう虫ね。ちよつと大きいけど」

ロビンは呑気に言ってるけどちよつとどころじやない大きさはよそのてんとう虫、自動車タイヤくらい大きいよ。

「ナミさん、もう大丈夫だよ、ありがとう」

「はいはい…よつ…と。それにしてもあんた…そんなにアレが苦手によく無人島生活なんて出来たわね」

「当てもサイアクだったよ…」

「やっぱりGはどこにでもいるんだよ…チヨツパーの居たところかなら居ないのかなあ…。」

「ジヨ〜」

「…もー!声は聞こえるのに!」

「こうも暗いとね…一旦みんなと合流する?」

「そうね」

私達はコクリと頷き合つて、別れた地点まで戻つた。

そこには既にみんなが居て、やはり私達同様捕まえる事が出来なかつたようだ。この

森がおかしいんだよ…規格外にでかい虫とか当たり前のように大群でいるGとかさあ…。

「おれ達は姿は見たんだけどよ、虫だらけで鳥どころじゃねえんだよ」

「だよね…。間に合うかな…」

「なんだよイリス随分弱気じゃねえか、さては虫が苦手なんだな？」

「んー、ちよつと一部無理な奴がいてね…情けないところ見せちやつて傷心中…」

「キャハハ！そんなイリスちゃんも可愛いわ！」

なでなでとイリスちゃん補充とか言いながら撫でてくるミキータ。うう…私の嫁は良い人しか居ない…！

「ジヨくジヨジヨくジヨツ！」

「あ!!あの鳥！」

びし!とルフィが指差す方には例のサウスバードが木の枝に乗ってそこに居た。

何やら笑っているようだけど…。

「『お前らなんか捕まるかバーク』って」

「なにイ!?!わざわざそれを言いに出てきやがったのか!!?撃ち落としてやる!!」

ウソツプがキレルのもよく分かるよ。私も今から一発殴ってやろうと思った時、サウスバードの翼から腕が生えてきて拘束し、木の枝から落ちてきた。

「おおー、流石ロビン、鮮やか！」

「姿さえ見えれば……」

「お手柄だよ！早く森から出よう！」

ゾロがサウスバードの脚を掴んで持ち上げた。よし、後はクリケットの所へ戻るだけか。

「イリス、足元で黒い何かが動いてるぞ！」

「あぎやあああああつ!!!み、ミキータ!!」

1番近くに居たミキータに飛びつき逃れる事に成功した。……早く出よう、ほんとに。Gの疲労よりも情けないとこ見せてる疲労の方が大きいよ……

「ムシムシの実モデルゴキブリとかあったらピンチね」

「ろ、ロビン……？さうと恐ろしい事言わないでくれるかな……?？」

な、ないでしょ流石にそんなのは……ないよね？

色々と不安を抱えながらも、何とか森を抜けた私達はクリケットに報告して少し休む事にした。

ナミさんとミキータの間に挟まれて外で家の壁にもたれながら寝る事にしよう。本当はロビンも居たら良いんだけど……何だかロビンって壁があるからな……いつかその



壁を壊す事が出来たらいいな……。今日はなかなかいい感じだったし……。それにしても疲れた……。ちよつと、寝よ……。

## 56 『女好き、懸賞金額1億ベリー』

翌日の朝。

「おー!!なんか起きたらメリー号が凄い事にー!」

「飛べそ〜〜!!」

「だろぅ!!?おれも手伝ったんだぜ!」

ナミさんのぼよんを枕に、ミキータのぼよんを握り締めながら寝てた私が起きた時メリー号の外観が色々変わっていた。

まず大きな変化として翼がある。あとメリーに鶏のトサカみたいなのが付いてる。…え、鶏? 飛ぶ、んだよね…?

ゴーイングメリー号フライイングモデルと言うらしいが、ナミさんやミキータはこれを見て不安にしかならないと言っていた。

言いたいことは凄く分かるけど、翼がある事で海流に突き上げられた時の機動制御がしやすくなったりするのかな?

「マシラやシヨウジヨウ達にも手伝って貰ったんだ、中々イケてるだろ!」

「翼にジェットは付けないの?」

「付けたかったんだが…材料も技術もねエ…！そこだけが惜しいんだ!!」

「はいはい分かったから早く行きましよ、そんなに時間も無いんでしょ？」

「俺達が先導してやるよ！」

マシラとシヨウジヨウの船が連れてつてくれるのか。

後はサウスバードで方角さえしつかりすれば完璧だね。

「ありがとうひし形のおっさん！じゃ行つてくる！」

「ああ、俺アここでお別れだ！だがな小僧…！つだけ間違いなエ事を教えてやる！〃黄金郷〃も〃空島〃も、過去誰一人〃無い〃と証明出来た奴アいなエ!!バカげた理屈だとは笑うだろうが、結構じゃねエか!!それでこそ！〃ロマン〃だ!!」

そして私達は全員船に乗り込みマシラ達の後に続いて海へ…  
突ノックアップき上げる海流を目

指して出航したのだった。

…空島に黄金郷が〃ある〃かもしれないという証明なら…昨日したけどね。

\*\*\*

3時間後、私達は目的の海上へと到着した。

本来なら後1時間ここで待機しておかなくてはならない筈だったが、積帝雲が

やってくるのが予想よりも早く予定を繰り上げたのだ。

「ウータンダイバース！すぐに海へ入れ！！海流を探る！」

「ウォー—ホ—ホ—！！」

「あれが積帝雲かあ…こうして見ると本当に夜がやってきてるって感じだね」

「確かにあの雲の中なら、島の1つや2つくらいは隠れてもおかしくないわね」

「そういえば、あの積帝雲が現れた時に巨人は現れたんだよね…。実は空島の住人がみんなあんな巨体とか言わない…でしょ？もしそうだったらケンカなんてしたらとんでもない事になるよね。」

「反射音確認！12時の方角大型の海流を発見！！」

「9時の方角巨大生物を探知！海王類と思われれます！！」

「10時の方角に海流に逆らう波を確認！！巨大な渦潮ではないかと！！」

「それだ！！船を10時の方角に向ける！爆発の兆候だ！！渦潮を捉えろ、退くなよ！！」

その言葉と同時に急に波が高くなり船がとつともない規模で揺れる。

爆発の前震らしく、それだけでもかなりのものだ。

「航海士さんっ！記録指針はどっ？」

「……!! ずっとあの雲を指してる!! 風の向きもバッチリ! 積帝雲は渦潮の中心に向かっているわ!!」

「う、渦潮なんてどこにあるの…!?!」

ナミさんはまだ発生してない渦潮の事すらわかるようだ。可愛いだけじゃなくて航海士としてのレベルも高いナミさん…素敵だ!

「どうやら今回当たりの様だぞ兄弟!!」

「ああ、爆発の規模も申し分なさそうだ!!」

マシラとシヨウジヨウの2人が言うなら間違いないだろう。

2人は更に私達を渦の軌道に連れて行くと行って、自らの船とメリー号をロープで繋いだ。

「流れに乗れ! 逆らわずに中心まで行きやなる様になる!!」

「おお!?!」

海を見ればいつの間にもやたら巨大な大渦の上に居たようだ。

ええ!?! これってこのまま行けば渦に飲み込まれるんじゃないの!?!

ある程度船が渦潮に乗れば、マシラ達はロープを回収して渦から外れた。

「じゃあおめエら! 後は自力で何とか頑張れよオ!!」

「ああ! 送ってくれてありがとうなく!!」

「い、イリス…これ、本当に大丈夫よね？」

「はは、わかんない！もし渦に巻き込まれたら助けてねナミさん」

「この規模はどう考えても即死よ！」

そう言ってる間にも積帝雲の生み出す夜に飲み込まれ、船は大渦の中心へと放り出された。

「ぎゃあああああ!!落ちる~~~~っ!!!? ……んあ?」

ウソップが叫んでいる様に、そのまま下へ落ちて船は渦に巻き込まれて大破…とはならず、何故か急に大渦が消えて波も元通りになった。

積帝雲は変わらず上にあるが…どうなってるの？

「…渦が消えた…?」

「…違う!もう始まつてるのよ…!!渦は海底からかき消されただけ…!!」

あの規模の渦を消せる程の……大爆発!!つまり…この船の下にはもう…!

「待アてエ~~~~!!」

「ん?」

突然聞こえた大声に目を向けると、昼に会ったチエリーパイの大男がイカダみたいな独特の船に数人の仲間と乗ってこっちに向かってきていた。

でも…今は来ない方がいいと思うよ。

「ゼハハハハ!! 追いついたぞ麦わらのルフィ! 女好きのイリス! てめエらの1億の首を貰いにきた!! 観念しろやア!!」

「え? 1億つて?」

「やはり知らねエのか、…ん? 何でこの辺暗いんだ?」

大男は一瞬首を傾げるも直ぐに切り替えて3枚の手配書を見せてきた。

「てめエらの首にや1億ベリーの賞金が懸かってんだよ! そして『海賊狩りのゾロ』! てめエにや6000万ベリーだ!!」

「またルフィと一緒にすること? へへ、この一味も女好きの一味に改名かな!」

「船長はおれだぞ!!」

改名はいいんだ…。いやしないけどね?

「そうか…アラバスタの件で額がハネ上がったんだわ…! 1億だなんて…」

クロコダイル倒したからかなあ? ルフィはこの一味の顔みたいなものだし、ゾロはよく分からないけど…強い人でも倒したのかもしれないね。

「つ…?」

とその時、海が持ち上がる。

ゴゴゴ…と海なのに地響きが聞こえて視界が段々と高くなってきた。

「全員船体にしがみつつか船室へ!!振り落とされるぞオ!!」

「おお…!?!」

直後、メリー号の真下から海が吹き飛んだ。

それは一直線のビームの様に太く長い水柱の海流で、こいつこそが突ノックき上アップげる海流ストリームつてことだろう。

メリー号はその海流に文字通り突き上げられて空へと上がって行く。

近くにいた大男の船が大破して吹っ飛んで行ったけど…命狙ってきた訳だしまあいっか。

「うわあああああああゝゝ!!!」

「水柱の上を船が垂直に走ってるぞ!」

「うほゝゝ!!面白エゝゝ!!どういう原理だア!?でもこれで空まで行けるぞゝゝつ!!行けエ!!メリー!!」

「ちよつと待った…!そうウマイ話でも無さそうだぞ、船体が浮き始めてる…!このまじゃハジキ飛ばされるのがオチだぞ!!」

「オイオイ!そんな事言つてもよ!こんなもん爆発の勢いで昇つちまってるんだから、今更自力じゃア…」

「ああおれ達お終いだ…このまま落ちて全員海に叩きつけられて死ぬんだよ!!」



「……ちよつとみんな騒ぎすぎじゃない？」

「え？」

私はニツと笑つて親指で自分を指す。

「私の正妻を忘れてない？」

「帆を張つて！今すぐ!!」

私の言葉のすぐ後にナミさんが声を張り上げる。

どれだけ船が浮き上がつていようが、上から突ノックアップき上げる海流で突ストリームき上げられた残骸が降つてこようが……関係ない筈だ、この船は！

「これは海よ……ただの水柱なんかじゃない、立ち昇る『海流』なの!!そして下から吹く風は地熱と蒸気の爆発によつて生まれた『上昇気流』!!相手が風と海なら航海してみせる!!この船の『航海士』は誰!!」

「!!」

こんな海流ですら航海してみせると断言したナミさんは可愛いだけじゃなくて格好いいも備えてるよね！

「オオ野郎共!!すぐにナミさんの言う通りに!!」

「オオ!!」

「右舷から風を受けて舵はとり舵、船体を海流に合わせてっ!!」

「イエッサー！と全員で指示を聞いて取り掛かる。

指示は完璧なんだ、私達が言う通りにこなせば…間違いなくこの船は空島まで到達する!!

「わあっ！ヤバイぞ！水から船が離れそうだ！」

「落ちるー！っ！落ちるぞナミ何とかしろオ!!」

「ううん、いける!!」

チョッパーが言つてた様に、船は水柱から離れてしまった。

だが、船がそのまま急降下する事はなかった。

何故ならメリー号は、水柱を離れても上へ昇る勢いを緩めなかったからだ。つまり…

空を飛んだのだ。

「すげエ！船が空を飛んだ!!」

「この風と海流さえ掴めば、どこまででも昇っていけるわ!!」

「キャハっ！ナミちゃん流石ね!!空島は積帝雲の向こうでしょ?」

「ええ、あるとしたらね！」

みんなで頷き合つて、ルフィが両腕を上げて叫んだ。

「積帝雲に突っ込むぞっ!!」

そうしてメリー号は突ノックアウトき上げる海流ストリームをナミさんのお陰で攻略し、積帝雲の中へと辿り

着く事に成功したのだった。

\*\*\*

「つぷはあ……つーはあ……はあ……」

積帝雲に突っ込んだ直後、息は出来ないわ何も見えないわでかなり苦しい思いをさせられたが何とか雲を突き抜けて目的の場所へと到着する事が出来た。

雲の上だと言うのに船はまるで海にでもいるかのように静かに漂う。

辺り一面真っ白で……まるで雪景色。凄く綺麗だった。

辿り着くまでの衝撃で翼は折れ、帆もボロボロだがメリー号も何とか耐えてくれてありがとう。何はともあれ私達は……空の海 “空島” に来れたんだ……!

「雲……!? 何で船は乗ってるの!?!」

「そりゃ乗るだろ、雲だもんよ」

「イヤイヤ」

能天気な事を言うルフィにサンジ達が突っ込む。

まあなんでもいいよね、こうして私達は誰一人欠けず空島に来れたってだけでも上々だよ。

「大変だ、ウソツプの息がねエ！」

「よし、人工呼吸だ!!」

「…はっ！よーし…じゃあ私もナミさん達に人工呼吸しちやおつかなー!!」

おっと、久しぶりにナミさんの呆れた視線を頂きました、たまらん。

「どうぞで」

ミキータには当たり前の様に目を瞑って待機されました。これもこれでたまらん。

「ともかく、ここが空の海って訳ね。でも見て、記録指針ロクッポースはまだこの上を指してる！」

「どうやらここは積帝雲の中層みたいね」

「まだ上へ行くのか…？どうやってだ…？」

「それは分からないけど…」

そもそも積帝雲の中に来たのはいいけど、ここからどうすればいいのかなんてわからないからなあ。

今はあっちこちに行ってみるしか無いのかも。

「第1のコース！キャプテン・ウソツプ泳ぎまーす!!」

「おう！やれやれ!!」

ウソツプがこの海を泳ごうとしてる。

ルフィがそれを煽るのは分かるけど…ウソツプはよくここ泳ごうと思えたよね、絶対

普通の海じゃ無いのに。

「やめといた方がいいよ、まだどんな海なのかも分かってないのに」

「海は海さー！」

そう言つて雲の海に飛び込んで行つてしまった。

…普段からそれくらい積極的なら良いんだけどなあ。

「ウソツプー！中はどうなつてるのー!!」

……………。

「…あれ、上がつてこないね、結構深くまで潜つたのかな」

「思うんだけど…ここには、『海底』なんてあるのかしら…」

「あ」

ロビンの発言に一味全員が冷や汗を流す。

空の海つて言つたつて雲は雲なんだし…底を抜けたら地上に真つ逆さまじゃん!!

「あの野郎雲から落ちたのか?!」

「ウソツプー……!!!」

ルフィが雲の中に全力で腕を突つ込む。

「出来るだけ腕を遠くに伸ばして!」

「でも下は見えねエから勘だ…!」

「大丈夫、任せて。目オッホスフルール抜咲き！」

目を瞑ったロビンが何かしているようで、彼女の額には汗が滲んでいた。もうウソツプの命はロビンに託されたと言っても過言じゃ無いよこれ……

「……いた!! やつぱり落ちてるわ……六輪セイスフルール咲き!! OK、引き上げて！」  
「うぐっ! うおっ!! つ!! ふんぎぎぎぎ!!」

彼女の合図で引き上げ作業に入るルフィだが随分重たそうだ。ウソツプ1人分の重量くらいルフィならわけないのにどうしたんだろう?

「だア!!」

「やった! 上がってきた!!」

やがてウソツプはルフィの腕から生えた無数の腕に捕まって引き上げられた。ロビンの能力って結構使い勝手良さそうだね。

「何かついてきたぞ!!」

ウソツプのついでに巨大なタコや魚みたいなやつも来てしまったが、これはゾロが難なく斬り倒す。ルフィでも重たかったのはこいつらが原因か。

だけど斬り倒した時、タコの方はまるで風船の様にパン! と破裂音を鳴らして張り裂けた。…図体だけで美味しくなさそう。

「雲の中に生物がいるなんて……」

「船が乗れてるくらいだから、やっぱり雲というよりは海なのかもね」

「ギヤアアアアアアアアア!!!」

「うるっせエな今度は何だウソツプ!!」

「ず、ズボンの中に……! なんかいだ……」

ガクン、と力尽きるウソツプに変わってロビンがなんかいだと言う魚を手を持つ。平べったいなー、ヒラメか?

「これが空魚じゃないかしら。ノーランドの日記にあつた『奇妙な魚』。ーおそらく、海底のないこの『空の海』に対して生き残る為に色んな形で進化を遂げたんだと思うわ」

「それで風船になったり平たくなったり?」

「キヤハハ! 流石ロビンはすぐ的を得るわね」

「ふふ、ありがとう」

より軽くなる為につてことか……。

地上の海より浮力が弱いのだろうね……。鱗も羽毛みたいだし、まるで肉食生物のよう  
なギザギザの口も変だ。

「おー船……」

「んー? 船があつたの? どこ?」

空島を探してくれていたチョツパーが双眼鏡で見る方角を私も見る。

視力を倍加する限界も上がったし…これ結構便利だね。

「おーいみんな！船…と、…人？」

双眼鏡を覗き込みながらチョツパーが皆を呼ぶ。だが、次の瞬間私達が見ていた船は攻撃を受けたのか爆発を起し真つ二つに割れて、何やら牛みたいな角を生やした仮面を付けてる人が雲の上を滑るように近付いてきていた。

「うわあっ!!」

一緒に見ていたチョツパーは双眼鏡を落としてあたふたと慌て出す。

あれって何で雲の上をあんなにスイスイ移動できてるんだろ？

「どうかしたのかイリスちゃん」

「うん、何かどう見ても友好的じゃなさそうな人が雲の上滑ってこっちきてる。手にはバズーカと盾ってところかな」

「あんたよくそれで落ち着いてられるわね…」

ナミさんがため息を吐きながらも私の後ろに隠れる。嬉しいんだけどナミさん、私の後ろって結構ガラ空きだからね、主に身長差分…ってやかましいわ！

その人間はすぐにナミさん達でも視認出来るくらい近づいてきた。

「マジじゃねエか、雲の上走ってやがる」



「いやーどう見ても滑ってるよあれは」

「んなこたアどうでもいいだろ、奴さんはやる気らしいぜ」

「何だ何だ？」

「麦わらの一味戦闘要員4人で出迎えてやるとしよう。可哀想に空の人……いつちよ軽く捻ってやりますか。」

## 偉大なる航路（グランドライン） 空島編

## 57 『女好き、in スカイピア』

「よっー！」

飛びかかってくる男の蹴りを腕を立てて受け止め、弾き返す。

ちなみにルフィとゾロとサンジは初っ端の攻撃でやられて船に転がっていた。

あの3人がやられる理由なんて1つしかない、この空気の薄さが原因だろう。

私はほら、倍加すればいいだけだから問題ないのです。

男は私に弾き返されても空中でバランスを整えてバズーカを構える。

「バズーカ撃つ気…？させないよー！」

小太刀を取り出して長さを倍加する。ここからならワポルに喰らわしてやった

去羅波さらばいもんじ一文字が届く筈だ。

「そこまでだア!!」

「ん?」

だが男がバズーカで船に狙いを定めている時、急に横から鎧の老人が現れて仮面の男を槍で突き刺した。

男は持っていた槍で防いだが流石に飛べる訳ではないのかそのまま雲の海に落ちていった。…そのまま落下して死んだりしないよね？

「誰？」

「我輩、〃空の騎士〃！」

「ピエー」

空の騎士だけじゃなくて彼をここまで乗せてきた鳥も鳴いて返事をしているけど、いやピエーじゃわかんないよ、チョツパーを呼んで！

「…去ったか」

去ったっていか雲海に落ちたよね。

「あんた達3人どうしたのよ、イリスがいなきや今頃どうなってたか…！」

「はは、ナミさん、私を持ち上げてくれるのは嬉しいけど…ルフィ達は何も悪くないよ。なんだってここは地上から遠く離れた積帝雲！空気だつて相応に薄くなってるからね」

「いや、でもまったく不甲斐ねエ。レディに全て押し付けるようになって…」

「大丈夫、私は能力で取り込んだ酸素を倍にすればいいだけだから気にしないで」

逆に能力が無かつたらどうなった事か…。

私から悪魔の実取つたら低身長しか残らないからダメじゃん!!せつかくの全・倍加

ポーナスタイム

も使えなくなつて大人っぽくなる事すら不可能になる訳でしょ!? あーだめだめ、この考えはやめよう。

「おぬしら青海人か？」

「正解？ 外れの人がいるの？」

「キャハ、絶対そういう意味じゃないと思うわ」

それより、あなたは誰？ とナミさんが鎧老人に尋ねる。

髭が凄い、サンタクローズみたいだなこの人。

「我輩 “空の騎士” である。青海人とは雲下に住む者の総称だ。…つまり青い海から登つてきたのか」

「うん、そうだ」

「ならば仕方あるまい…先もその幼子が言っていたように」

オイ、幼子って私の事???

「ここは青海より7000m上空の白海、更にこの上層の “白々海” に至つては1万mに及んでいる…通常の青海人では体が持つまい…」

でもルフィもゾロもサンジも

「段々慣れてきた」

とか言ってますけど…。そうだよ、彼らを通常の括りに入れるのは間違つてるよね

!

「それよりさっきの奴海の上を走ってたのは何でなんだ？」

「まあまあ待って待って…質問は山程あるだろうが、——まずビジネスの話をしようじゃないか」

チヨツパーの質問には一旦答えず、何やら交渉でも始める気なのかよつこらせ、と手すりに座った。

「我輩フリーの傭兵である。ここは危険の多い海だ、空の戦いを知らぬ者ならさっきの様なゲリラに狙われ、空魚のエサになるのがオチだ。ワンホイツスル500万エクストルで助けてやろう」

「……………」

「……………何言ってるんだおっさん」

「ぬ!!」

みんなして首を傾げる。なんだエクストルって。

「バカな…格安であろうが！これ以上はーエクストルもまからんぞ！我輩とて生活があるのだから!!」

「何そのエクストルとかホイツスルとか」

「こちとらただでさえベリーにも慣れてないってのに。」

…いやベリーは大体1円11ベリーって感じだから分かりやすかったんだけど！

「……!!おぬしら…ハイウエストの頂からここへ来たんじゃないのか?ならば島を1つ2つ通つたろう」

「ハイウエスト?!いや、私達は普通に突ノックアップ上げる海流ストリームに乗つてここまで来たんだけど」

「…何と!あのバケモノ海流に乗つてここへ!!?…まだそんな度胸の持主がおつたか…」

あれ、普通じゃなかったのかな?

そのハイウエストとかいうところから来るのが主流だったのかもしれないけど、結局あの時点ではあれしか方法無かつた訳だし…ま、結果オーライ!

「ワンホイッスルとは1度この笛を吹き鳴らす事」

空の騎士が笛を投げてきたので受け取る。

おー、この形の笛なんだか懐かしい!小学生の時とか進行で先生が使つてた様な気がするよ、ピッピッ!ぜんたい止まれ!

「その笛を吹けば我輩、天よりお主らを助けに参上する!本来はそれで空の通貨500万エクストル頂戴するが…あの海流を渡つてきた勇氣あるお主らにはワンホイッスルプレゼントしよう!その笛でいつでも我輩を呼ぶがよい」

空の騎士はそれだけ言うとかバサツとマントを翻して背を向けた。

「待つて!名前もまだ…」

「我が名は空の騎士、ガン・フォール!!そして相棒ピエール!!」  
「ピエール!!」

「言い忘れてたが我が相棒ピエール、鳥にしてウマウマの実の能力者!!」

あ、凄いい、鳥が翼を生やしたまま四足歩行になつてる……え、つまりペガサス!?

「翼を持った馬になる!!即ち……」

「嘘……!素敵、ペガサス!」

「そう、ペガサス!!」

ばあん!と背景に効果音でも付いてそんな気合の入り様だが、その見た目はペガサスと呼ぶにはあまりにも……いや、やめておこう、例えば身体中の斑点模様で色々台無しにしてるとか、そもそもペガサスにしては顔がちよつとあれだとかは放っておこう。あれはペガサスだった!!

「勇者達に幸運あれ!!」

バツバツと羽ばたくピエールに乗ってガン・フォールは去っていった。

……結局何も教えて貰ってないよね……。

「……フリ出しに戻った訳だけど……どうしよつか」

「とにかく船を進めよう、じつとしても何も変わらねエ」

ゾロの言葉にそうだね、と頷くと改めて辺りを確認していたチョツパーから声がかかった。

どうやら滝みたいに見える雲があるらしく、辺り一面代わり映えのない景色の中では唯一の違いだと言うことからそこに行くことに決まった。

滝へ行くまでも道中、他の雲とは性質の違う雲を発見した。

それは島のようにいくつも雲海に浮かんでおり、乗り込んだルファイ達曰く綿のようにかふかして気持ちいいとか。：ぐ、ちぎって持って帰りたい…。

その際ルファイ達に乗れる雲の上から滝の雲を確認してもらった所、その滝の下には大きな門があるらしい。

「…よし、抜けたみたい」

道を塞ぐいくつもの「乗れる雲」を避けて何とか門の前へと辿り着いた私達は、その門を見て声を上げる。

「おお…確かに門あるね」

「キャハ、天国の門だってイリスちゃん」

確かに門にはそう書いてるけど…。それに、見えてた滝はやっぱり雲の滝だったようだね。さっきの乗れる雲の上を雲海が流れてるみたいだ。

「見ろよあそこ、誰か出てきたぞ!」



門の隅にある扉が開かれて、中から背中に翼を生やした老婆が出てきた。あれって本当に翼……なのかな？飾りじゃなく？

「観光かい？それとも戦争かい？」

凄い物騒な事吹きながら写真撮ってきた。

……あえ?!写真?!やつぱりあるんじゃないこの世界!!そりやあるよね、妙に文明進んだりする世界だもんね!!よし!カメラ手に入れるぞー!!!!そして色んな嫁達の姿を写真に収めるぞー!!

「どつちでも構わない、上層に行くんなら入国料1人10億エクストル置いて行きなさい、それが「法律」

「10億……!!?……って高いの?エクストルの相場がわかんない」

「さあ……あの、お金もし……もし無かったら……」

「通つていいよ」

「いいのかよっ!!」

ウソツプの突っ込みが刺さる。いやホントだよ、いいんかい!

……でも法律がどうこう言つたのは気になる所だけど……門番みたいなのが良いつて言つてるんだから良いんだよね!

「……それに、通らなくてもいいよ」

「え？」

「あたしは門番でもなければ衛兵でもない。お前達の意味を聞いただけ」

「え??」

門番じゃ…ないの??

………え、これ、大丈夫??門番は?だつてこれ不法入国みたいにならない?

「……ま、いつか」

考えるのめんどい…。

最悪どうにでもなるでしよつて結論付けてこの門を通る事にした。

老婆が呼んだのか、船の下に巨大なエビが現れて船を持ち上げ門をくぐつてその先へ連れて行く。

そこにある滝を登り、登り切った先にまだまだ螺旋状に上へ続く道がありそれも登る。しかも結構速い!

「どうなつてんだこりゃ…!雲が帯状になつてまるで川みてエだ…!」

「自然に出来たものとは思えないわ」

「何か書いてあるぞ!出口だ!!」

上を見れば確かに光が見えていた。

辺り一面雲のトンネルで囲われた場所の中に出来た道を通つてからあれを出口だ

と思つてしまふが、これからの事を考えればあれば入口だろうね。

「神の国、スカイピア!？」

「行けエ!!」

そしてメリー号は長い縦のトンネルをエビに送つて貫つて登り切り、ついにもう一つ上の層…おそらく、白々海へと出た。

「島だ…!!空島だ…!!」

どういう原理かはさっぱり分かんないけど、雲の上に木が生えてるし!何だあれ!?!  
とにもかくにも、私達は空島に到着したのであつた。

「ここ海底はないんだよね? 錨はどうする?」

「一応出すしかねエだろ、まさかこのまま船を置いとく訳にもいかねエ、どうにか固定しよう」

私とゾロが四苦八苦してる間にもルフィとウソップ、チョッパーは既に上陸してワイワイ騒いでいた。

いやー、でも雲の上にある島…いや、雲でできた島…か?これはロマンだよ!!

「よし、何とか固定出来た!私もふかふか遊ぶぞー!!」

ここにはあの乗れる雲が海底にあつたようなのでそれに刺しておいた。その雲がこ

の島の基盤になつてゐるんだね。

「ジヨ〜ジヨジヨ〜!!!」

「痛い痛いっ、ごめんごめんっ!」

「…あ?」

何やらナミさんが痛がつてる声が聞こえると、思つて振り返ると、サウスバードが逃げたナミさんの頭を叩きまくつていた。

ああ、置いてくるの忘れたのか、一緒に連れてきちゃったんだね、はは、それは申し訳ない事をした。

「とか言うと思つたかクソ鳥イー!!!」

「ジヨオオオツー!?!?!」

サウスバードに蹴りをかましてメリー号の船体にめり込ませた。あ、ごめんメリー…でもあの鳥が悪いんだよ。

「つてナミさん、何その格好! えっち!」

「えっちつて…、水着よ、上だけね」

「ミキータは水着着ないの!?!」

「キャハハ、私はこれでいいわ」

いつものワンピースか。確かにミキータが脱いではしゃいでる所つてあんまり想像

出来ないけど…どうせなら脱いでよ！ミキータも!!あとロビンも!!

「ねえ、ここ、ここ、スカイピア」って…」

「ええ、ルフィの見つけた地図にあった名前よ！空から降ってきたあのガレオン船は200年も前に本当にここに来てたのね」

ロビンがナミさんとこの場所の事について話している。

スカイピアが実在したとなると、髑髏の右目は現実味を帯びてきたな—！

「ナミさん、ミキータ、ロビンも！早く行こう！」

「あ、待ってイリス！」

「キャハハ！そうやってはしゃいでると見た目相応ねイリスちゃん、可愛いわ！」

「何を〜!？」

わいわい言いながら船から飛び降りれば、雲海はやはり普通の海とは入った感じが違った。

海自体も抵抗少ないし、足がつくとこはフカフカだし…何だか気持ちいい。

「う〜…ん、ここなら海軍も追ってこないし羽を伸ばせる！」

ビーチまで歩いて体を伸ばしながら言うナミさん。でも今まで海軍に追われた事つてアラバスタでしかないよね。

「ナミさんの魅惑の腰つき…ぐへへえ…っ」

「こちら、涎がつくじやないの。もう」

がし!と腰に抱きついた私の頭を撫でる姿はまるで天使のようだ…。

仕方ないわね…ふふ、みたいな感じ!ペロペロしちゃう!

「うお、このイス雲で出来てるのか…!でもフカフカ雲とは別だな、まふつとしてるぞ」  
チヨツパーの体にはサイズが合っていないけどねそのイス。

それにしてもあのイスといいここまで上がってきた雲の道といい…空にはやはり雲を造形する技術があるんだろうね。

「おい、あそこに誰がいるぞ!」

「ゲリラか…!?!」

サンジとゾロが発見した人を見れば、遠くでハープを弾いている様だった。

耳を澄ませれば心地よい音色が耳にすつと入ってくる…それにあの人…視力倍加で見てみたんだけど可愛いよめっちゃ。羽生えてるし多分天使だと思う。

「お、何だコリヤきつねか?」

「やだ、可愛いじゃない!」

ビーチを歩いて近づいて来た真っ白い小狐のような見た目をした動物をナミさんが撫でる。

可愛い動物と可愛いナミさん…これは奇跡のコラボレーションだ…。早く写真が

欲しい。

ハープを弾いていた天使も私達に気付き近づいて来た。

「へそー！」

「…？」

ん？と自分のお腹を見る。：んー？私、そういうへそ出しの服はあんまり着ないんだけど…、もしかしてこの天使、へそフェチ!?

「青海からいらしたんですか？スー、こつちへおいで」

あれ、なんか普通になった。

白狐がスー！と鳴きながら天使の元へ戻る。へそつてあれかな、タイミング的にあいさつみたいなものかもしれないね。

「下から飛んできたんだ、あなたはここの住人なの？」

「はい、住人です。ここはスカイピアのエンジェルビーチ。：あ、すみません紹介が遅れました、私はコニスと言います」

「コニスちゃん！」

なんかその、触角みたいな髪の毛…？はかなり奇抜だけどこの空島では流行りのファッションなのかな？素材が良いから何でも良いんだけど、

「はい、コニスです。何かお困りでしたら力にならせて下さい」

見ず知らずの他人なのに：空島つてとこが良い人だらけなのかコニスちゃんが特別聖人なのか：どっちでもいいか、可愛いし。

「分からない事が一杯で困ってるんだよね、今だつたらそう：コニスちゃん、君の好みのタイプとかね：」

「はいはい、その子は後で口説いておきなさい。今は空島の情報でしょ」

「待てお前ら！海から何か来るぞ！」

今度こそゲリラか？

来たら来たで返り討ちだけどね、こつちには空島に慣れたルフイ達もいる事だし。

「あ、父です」

「なぬ!?お父様!!?!」

返り討ちなんてとんでもない!!お父様ならむしろ低姿勢にいかねば…!

遠目で見てもコニスちゃんと同じ触角髪型なのが分かる。

海の上を水上バイクの様な乗り物に乗ってやってくるお父様。私がよく知ってるよ  
うな水上バイクに比べるとまだ小舟っぽさはあるけど、ハンドルがあったり、船を動か  
す謎の機関っぽいのがあったり：まあ空島版水上バイクみたいなものだろう。

「あれ何に乗ってるんだろう」

「“ウェイバー”の事ですか？」



ウエイバーって言うのか。…ウエイバー？もしかして、ノーランドの日記にあったやつかな？

「はいすいません、止まりますよ」

お父様が陸に上がり、私達に声を掛けるので道を空ける。

だけど操作を誤ったのか転んで大ダメージを受けていた…、血が出てますけど…。

そんな感じで私達はコニスちゃんとそのお父様…パガヤに出会った。

みんながウエイバーに興味津々なので乗り方を教えてくれるそうだ。

…ふ、これは前世に似た乗り物があった私が有利過ぎる…、乗りこなしてナミさん達を後ろに乗せて華麗にドライブと行こうかな…。

## 58 『女好き、巨大な大地、巨大な雷』

「これがアクセルで、そんでこつちがブレーキって訳だね」

コニスちゃんにウェイバーの仕組み…と言っても物凄く簡単に説明を受けた私達は、それじゃあ早速乗ってみようという事になった。

じゃんけんで勝利した私が一番手だ。

アクセルが右足側でブレーキが左足側、立って運転…よし。

動力は『ダイアル』と呼ばれる空島特有の具がどうこう…まあそれは後で詳しく教えてくれるらしい。

「いぎ、発進!!…!!…!!おお!!」

ブオオ!とエンジン音を鳴らして走るウェイバー。

ちなみに前世では女子高生だから車はもちろん、原付すら免許持ってなかったと思います、多分…あんまり覚えてないけど。

だけど前世でアクセルやブレーキ、おまけにこういった乗り物に関しての知識だけは一般常識として得てる訳だし、この世界の人達よりもこのウェイバーに関してはアドバンテージがある筈だ!!

「うおおおおおおお!!!」

「…声だけは立派だな」

「ウェイバーつてのどつか飛んでったぞ」

「ちよーイリス!!」

ゾロの言う通り、とにかく声を上げた私を待っていたのは物凄く揺れるウェイバーだった。アクセルを踏んだ直後は勢いで前に進んだのだが…そこからが無理だったよ……。

振り落とされたし…雲の海も泳げない事が分かったし…。

「ほら！掴んで！」

「つげほっ、ごほっ！む、難しいよこれ…！」

助けに来てくれたナミさんの腕を掴んで雲上に顔を出す。まさか雲に溺れるとは…。「ウェイバーの船体は動力を十分に活かす為とても軽く作られているのです。小さな波にさえ舵を取られてしまうので波を予測できるくらい海を知っていなければならなくていいません！」

浜まで運んでくれた時、お父様がそんな事を言っていた。

何だそりゃ…日本にそんな安全機能の一切を取り外してスピード特化にしましたみ

たいな車なんてないよ！スポーツカーだって何かしらあるよ！！

「ナミさんは乗れるんじゃない？」

「私？」

波を予測とか、ピツタリだと思うけど。

「…じゃあ、あんたが後ろに来るって条件付きなら乗るわ」

うーん…ちよつと見てた未来とは違うけど、それはそれでアリかな！！

「1人乗りつぽいけど乗れるのか？」

「子供1人だけなら問題なくてすいません！」

「誰が子供だって？」

頬を引きつらせながらナミさんの乗るウェイバーの後ろに乗り、ナミさんの腰にギユツと抱きつくとうエイバーが走りだす。

勢いよく走り出したウェイバーは、まるで整備された道を走る車のように揺れなく進む。ちなみにさつきはこの時点で落ちてました。

「キャハハ！凄いいじゃないナミちゃん！」

「何と…！私達でも乗るのには数年から数10年の訓練が必要だと言うのに…信じられませんか！」

「確かにコツが要るわね、デリケートでイリスには無理かも」

「わ、私もコツ掴んだら大丈夫かもしれないじゃん！」

数10年くらい訓練すれば何とかなるよ!!

「ナミー!おれ達おっさん家に行くから早く戻ってこーい!!」

「先行つててルファイ!おじさん、もう少し遊んでいい?」

「ええどうぞ、気をつけて下さい!」

「ハツ:あれつてよく考えればイリスちゃんと密着して2人乗り:!?羨ましいわナミちゃん…」

わくわくと言った感じでコニスちゃんの家に向かうルファイ達とは裏腹にしよんぼりと歩くミキータ。

アラバスタの1件以来かなり変わったよね彼女。具体的にはより一層好意を曝け出してくる様になったというか:、ほんとに可愛い。

「ねえイリス、このウェイバーつて乗り物ルファイ達が深海から引き上げたガラクタの中になかった?」

「生タコしか記憶にないかなあ:、あつたつけ」

「あつた筈よ、:もし直せるなら直して、地上に持って帰りたい所ね」

それこそ本当に水上バイクみたいな使い方が出来るよね…。

私なら自分の能力を使って速さ倍とか色々出来そう、運転できないんだけど！

「こうしてあんたと2人でゆつくりするのも、なんだか久しぶりな気がするわ」

「あー…実際そうかも、一味も段々増えて賑やかになったもんね」

少し前にはビビが居て、今ではロビンやミキータが居る。

男性陣も最初はルフイとゾロだけだったのに今ではサンジ、ウソップ、チョッパーと

3人も増えたし…それに何よりみんな良い人ばかりだ。

「だけど、やっぱりこうして2人で居るのもいいね」

「ふふ、私は立場上あんまりあんたと2人きりって言うのは良くないんだけど…、たまに

は、いいわよね？あんたをさ…独り占めしたって」

立場上…か。

ナミさんは私の正妻だからか、私の夢を誰よりも応援してくれている。

それが時にはナミさんの思いを縛り付けている事もあったのかもしれないと思えば

胸が締め付けられる様な気持ちになった。

「…ナミさんはさ、もつと我儘になってもいいんだよ」

「え？」

「私の目指す夢を知ってるナミさんだからこそ、正妻って立場は軽くないと思う。…そ

れでも私はナミさんにその重荷を背負って欲しい、それは変わらないよ。…だけど、そのせいでナミさんが私に我慢するのはやだ」

聞けば聞くほど自分勝手な言い分だ。

大変な立場になって欲しい、だけど楽にして。という事なんだからナミさんからすれば訳が分からないかもしれない。私だって私が何を言いたいのかわかってないのだから。

「2人きりになりたい時があるなら、言ってよ。もつと私に不満があるなら、それも抱え込まないで教えてよ。…私は、ナミさんの頼みなら何だって叶えてあげるから」

ナミさんを抱き締める力を強くした。ウエイバーは静かに雲を走る。

「……、それは、今日の夜私とエッチしてって言うても？」

「えっ……、…えつと……」

「……………」

「あ、あの……」

「…ぶつ、あつはは！何不安げな声出してんのよ！…それに何？あんたに不満？そんなのあつたら正妻にはなつてないわ、あるとしたら夜のヘタレ具合くらいかしらね？」

うぐつ、何か刺さった、胸に刺さった！

「我慢は…ちよつとだけしてる。でもねイリス、私は…あんたの幸せそうな顔を見るの

が幸せなのよ。例えば私とミキータに挟まれてる時のあんた、可愛い女の子を見つけた時のあんた、ロビンと何かは分かんないけど話してる時のあんた。全部：好き。我慢するのは好きでしてる事だから気にしないのよ、だから：たまにこうして2人きりになれたその時だけでも独り占め出来たら：それだけで良いの」

「…ナミさん」

顔は見えないけど、本当に本心からの言葉だつて事はナミさんの声で分かった。

私には勿体ない程の良い女性だ、そんな彼女を正妻にする事が出来ている幸せを再確認出来ただけでもこの雲デートはして良かったと思えるよ。

「……んっ？」

「ナミさんどしたの…つて、これは…」

話に夢中になり過ぎて周り見て無かったよ。

気が付いたら目の前に雲に浮かぶ島があった。それも空島じゃない、何故なら地面が…大地がその島にはあるからだ。

「……まさか」

ロビンと話した「もしかして」を思い出す。

ジャヤの一部が突き上げる海流ノックアップストリームで空に飛んだつていう夢の様な話ではあったが今日の前にある光景は夢ではない。



ただ、ジャヤだと言うのならちよつと色々大きすぎるけどね。リトルガーデンのジャングルに生えていた木よりも更に巨大な……まるでピルの様な大きさの木が当たり前にそこかしこに生えている。根は複雑に隣接した木同士で絡まり合つて道を険しくし、耳を澄まさなくとも奥から獣の唸り声が聞こえる。

「でつつ……かい……、何コレ、この木の大きさ……樹齡何年の木なの？これ全部天辺見えないわ」

「……獣の声に紛れて別の……何だろう、戦闘……かな、何か聞こえるよ。入る？」

「入るわけないでしょ、離れましょ」

戻つてルフィ達に言つたら絶対来たがると思うけど……。

それに私は結局黄金郷を探しに入ろうと思うけどね、ナミさんが嫌なら今はやめとこうかな。

「……」

何やら気配を感じて振り向くと、島や私達から少し離れた所にさつきの仮面の男がバズーカを構えてこちらを見ていた。

……いや、私達じゃないな……島の方？

「い、イリス……あれ……」

ナミさんが指差すのは島の中、ジャングルの奥だ。

目を凝らせば4人の人達が争いながら1人の男を追い掛けて見えた。

私とその光景を視認した瞬間、仮面の男がバズーカを島の4人に向けて放つ。思ったより火力が高く、巻き添えくらった逃げてる1人が崖際まで吹き飛ばされてきた。

「!!…オイ、助けてくれ…! 乗せてくれ…!…ハア…、船に…乗り遅れたんだ…! 頼む! 礼ならいくらでも…」

息も絶え絶えで今にも意識を失いそうな男がそう言う。崖下から見ただけの私達には何が何だか全く分からないが…。

「だったら早くそこから飛び降りて…よく分かんないけど狙われてるんでしょ!」

「あ、ああ…!…うわ!!ゲリラ…!」

「ツ!!?!危ないツ!!!」

崖下に飛び降りようとした男は、私達の後ろにいるゲリラに驚いて一瞬固まった。

その時だった…まるでその男を狙ったかのような大きな雷が男に落ちたのだ。それは男だけじゃなく島もめぐり取り、余波だけで私とナミさんは吹き飛ばされそうになった。ていうか男を助ける為に島へと近付いていたから私がナミさんを咄嗟に庇ってなかったら飛ばされてたかも…。

「くそ…! エネルか!! よくも “ヴァース” を!!…くっ!」

雷は今度は仮面の男を襲うが、男は予測していたのか打たれる前に身を翻して避け何

処かへ去っていった。

あの雷……やっぱり意思がある……？ いや、それよりは何かの能力……仮面の言葉を信用するなら『エネルギー』って奴の仕業だろうけど……。

「……くそ、あの人……死んじやったよね……!!」

「そうね……残念だけど、これを見て助かってるって思える人は居ないわ……」

私達の眼前にあるのは、天辺が見えない程の巨大な大木をあつさりと言つ二つにして男がいた地点の島の一部を跡形もなく消し去っている光景だ。

「……あの人を追ってた4人が居る……隠れよう……!」

4人の死角になる所へと行き身を潜めた。

私1人ならともかく、今はナミさんも居るから下手に出られない……まずは様子見だ。

「……今の男、誰かと話していた様だが……?」

「ゲリラだ、今逃げた」

こつそりと顔だけ覗かせると、4人だけじゃない……大きな鳥や犬もいる様だ、ペットか?

4人の特徴としてはとりあえずみんな翼がある。つまりさつききの男と違って空島の民って事だろう……仮面の男もコニスちゃんもお父様も生えてるから間違いない。

1人は玉のように丸い体型の男。

2 人目は鳥を連れたパイロットみたいな格好の男。

3 人目は訳わかんないイソギンチャクみたいな髪型の男。

4 人目は犬を連れた坊主サングラスのマツチヨな男。

……何だこいつら、個性的過ぎる…。

「しかしエネルギー様もどういうおつもりだ、自分でカタをつけるとは…我々は何の為に…」  
「時間切れという事だろうよ、次の『不法入国者』が既にこの国に侵入している。青海  
人9人を乗せた船だとアマゾンのばあさんから連絡があった」

「!!……」

隣のナミさんと目を合わせる。青海人9人…びつたし私達と同じ人数だ。それにあの時の老婆の言葉…色々裏がありそうだとは思ったけど…まさか本当にそんな事になってるなんて…。

「たった9人とは手応えがない」

「首9つか、割り切れんな」4“では」

…どう聞いても友好的な話じゃないね。

それにあの雷も気になる…あんなの、規模が大きすぎて流石にどうしようもないよ。

「……戻ろう、ナミさん」

ボソツとナミさんの耳元で呟く。

ナミさんは少し顔を赤く染めてコクリと頷いた。

…いや、そういう反応はむらむらするからやめて、確かに私も急に耳元で囁かれたら  
そうなるけど…！

## 59 『女好き、天の裁きを受ける』

「あつ、戻ってきた？」

「ええ……けど……もう既になんか居る……！」

あの後すぐに私達は島を離れて来た道を真っ直ぐ帰った。

結構急いで戻ったと思っただけ……ルフィの前に結構な数の人が集まってるね。

他のみんなはメリー号の上か……

「状況がわかんないね、あれってやっぱり空島の軍人みたいなの？」

「わからないけど……下手に手を出すのはマズいって事は確かだね。……ルフィ!!その人達に

逆らっちゃうダメよ!!」

「ああつ!!ナミさん、イリスちゃん!無事だったんだね♡」

ちよつと遠出しすぎて心配でもさせちゃったのだろうか。サンジはいつも通りだけどミキータも何やらホツとしてるし。

「逆らうなって……オイナミ!じゃあ700万ベリーの不法入国量払えるのか!？」

「……良かった、まだ罰金で済むのね、700万ベリーって」

「っうわ」

ウソツプが言った金額を聞いてナミさんは少し顔を俯かせる。：何か今ウェイバー揺れたんだけど、速さも上がってる気がするんだけど…。

「高過ぎるわよ!!」

「ぶべエ!？」

ウェイバーに乗ったまま海から浜へ飛び上がり、ルフィと話してた軍人の隊長だと思われる男の顔をウェイバーで轢いてはね飛ばす。

「隊長〜〜!!」

部下達が慌てて男に駆け寄るが、かなり血だらけだよその人、大丈夫？

ナミさんはどうやら理不尽な多額請求について体が動いてしまったようだ。ならしうがない。

「コニスちゃん! さっきぶりだね」

「え? あ、はい…、いえ! そうではなく…、あなた方大変な事に…!」

「ああ… 大変はいつもの事だよ、気にしないで!」

1歩間違えれば死ぬって状況に今まで何度も陥ってきたし… 大変なんていつもの事だよね!

「それよりルフィ、さっきヤバいの見てきたよ、流石に大変って言葉じゃ済みそうになかった」

「そうよ、まずはここを離れて話を……!」

「待てーい!!」

ルフィに声をかけて私達も船に乗り込もうとした時、轢かれた隊長が起き上がった。き

「我々に対する数々の暴言、それに……今のは完全な公務執行妨害、第5級犯罪に値している……!」<sup>ゴッド</sup>神エネルの御名においてお前達を「雲流し」に処す!!」

「雲流し……!?そ、そんな!!」

「コニスちゃんがあんまりだとも言うように声を荒らげた。雲流し?島流しみたいなな?」

「何だそれ、雲流しって気持ち良さそうだな」

「良くありません!逃げ場のない大きさの島雲に船ごと乗せられて骨になるまで空を彷徨い続ける刑です、死刑ですよ!!」

ルフィの脳天気な声にコニスちゃんがそう返す。

なるほど……つまり例のガレオン船はこの刑を受けて空から降ってきたのか。

「引っ捕えろ!!」

「ハッ!!」

部下達全員が弓を構える。



何だ、やる気なの？手っ取り早くて良いね。

「逃げて下さい！敵かないません!!」

「よしなさいお嬢さん、それは犯罪者を庇う言動に聞こえますよ」

声を荒らげるコニスちゃんに隊長がそう忠告した。

犯罪者ねえ…。

「下でも犯罪者、ここでも犯罪者…どうするルフイ？私達どこに行ってもお尋ね者らしいよ」

「何言ってるんだイリス、海賊なんだから当たり前だろ」

そりやそうだ。

「撃て！雲ミルキアアローの矢!!」

「ん?」

部下達が撃った矢は雲を生み出しながら駆け抜け、細い雲道をいくつも空中に作り出した。

彼らはその雲に乗って仮面の男がつけていたようなウェイバーの靴版で雲上を滑ってくる。

「ナミさん船に行つてて、すぐ終わるよ」

「ええ」

走って船に乗り込んだナミさんを確認して、雲を滑る男に視線を戻す。

敵さんはそれなりの人数なんだし：：そうだ、せつかくだからあの技。パクっちゃうか！

「10倍灰… 銃乱打去柳薇!!」

「なっ!!」

腕を10本に増やして長さも伸ばし、まるでルフイの技みたいに拳を繰り出す。

ルフイのと違って本当に10本あるからガトリングかと言われたらそうではないけど：：。ていうか名前変えてるだけでやってることはクロコダイル戦の拳レインラァスト雨と一緒にただけど!

「イリスお前！それおれの技だぞ！ゴムゴムのく：：！銃乱打!!!」

「うごおっ!!」

「ぐふあっ!!」

「ま、まさか、悪魔の実の：：!!?ごはっ：：あ!!」

私達の攻撃に大半が倒れて、倒し損ねた敵もゾロとサンジがやってくれた。

まだロビンもミキータもチョッパーも戦力は残ってるし、別にウソツプやナミさんが戦えない訳じゃない。

麦わらの一味ってそう考えたら凄い戦力じゃない?

「とろろでナミ」

敵を全滅させてからゾロが口を開く。

「ウチの船の経済状況は？」

「残金5万ベリ」

「5万!?!…そんなにねエのか？」

もつて後1日2日じゃん。

消費の原因の大半がルフイの食費らしいけどね、良く食べるからなあ。

「ハ…ハハハ、バカ者共め……」

「まだ意識があるの？タフだね」

流石は隊長、倒れ伏す部下とは格が違うって訳だ。

「我々の言う事を大人しく聞いていれば良かったものを…我々ホワイトベレー部隊はこの神の国の最も優しい法の番人だ。彼らはこう甘くはないぞ…!これでもはや第2級犯罪者、泣こうが喚こうが…ハハハハ…」  
「<sup>アップバーヤード</sup>神の島」の神官達によつてお前達は裁かれるのだ!!へそ!!!」

え、へそつて挨拶とかじゃないの!?!神官がどうかよりそつちの方が気になるけど!?!あ、さよならとかそんな感じだった？

\*\*\*

「で、危なそうだから帰って来たんだけど…どうする？ハメられてこの島でも無事犯罪者になったし、やっぱりあの巨大島行く？」

「イリス…あんたもあの雷見たでしょ？今回は本当に危ないわ、やめといた方がいいわよ」

「うーん…確かにあの雷からナミさんを守り切れる保証はないけど…」

ホワイトベレーとかいう部隊が居なくなつた事でみんな船から降りてきて、浜辺でさつき見てきた巨大島や雷の出来事を話した。

「キャハハつ、じゃあこうしたらどう？私とナミちゃん、ロビンとイリスちゃんでここに残れば良いんじゃないかしら？」

「ダメよミキータ、コニス達に迷惑がかかるわ。私達はこの島でも犯罪者、お尋ね者なんだから。…そうね、どうせもう犯罪者なんだしコニスの1人や2人くらいは拐つてもいいかもしれないけど」

「え」

コニスちゃんドン引きしてるし、それはどうかと思う！

「とにかくここを離れましよ、居場所がバレてるもの。…コニス、おじさん、色々ありがとね」

「はい…」

何かコニスちゃんの元気が無いけど…流石に常識ある人から見たら今の私達は怖いのかな、なんとたつて誘拐発言出たからね。

色々やり残した事はあるけど、まずここを離れるというナミさんの判断に反論する人は誰も居なかった。唯一ルフィは不満げだったけど…。

そんなルフィは今、サンジと一緒に一度コニスちゃんの家へと私達が島に行つてた時に作ってもらつたという料理を弁当箱に詰めに行った。

ウソップもお父様にウエイバーを修理する為の材料を貰うために付いて行つた。やはりルフィ達が深海から引き揚げたガラクタの中にウエイバーが紛れ込んでいたらしい。

ミキータは何やらウソップに頼み事をしていたらしく、確認の為に3人について行つた。内容は確か新しい装備がどうか…まあ詳しくは教えてくれなかったかな、秘密だとかで。

ちなみに残りのメンバーは私を含めてみんな船の上だ、ナミさんもTシャツ着ちやつ

たし。

「これからどうするんだ？」

「そうね…本当なら地上に降りたいんだけど…」

聞いたチヨツパー本人がナミさんの返答にがつくしと項垂れる。

「私はまだ用事あるんだよね、あの島に」

「あんたまだ言ってるの？危ないわよあそこは、本当に死ぬわ」

「でもルフィ弁当頼んでたし…絶対探検する気だと思っけど」

「うぐ…、こうなったら2人で、いやロビンもミキータも含めて4人でルフィを倒すのよ

！大丈夫、イリスが居るから何とかなるわ！」

ルフィと戦闘とか絶対イヤだけど…。

何してくるか分かんないし。

「っわ!!」

ナミさん達と今後の話をしていた時だった。急に船体が激しく揺れて前に居たナミ

さんの胸にダイブする。

…何が起きたの？目の前が真っ暗で大きなぼよんに顔を挟まれてるのだけは分か

るんだけど…。

「ふかふかー」

「言つてる場合か!!何なのこれ!」

私は今ここから離れたくないから状況がよく分からないのだけど……どうやら船がエビに持ち上げられて運ばれてるようだ。

エビつてここに連れてきてくれたやつとは別なのかな?

「俺達をどこかへ連れてく気だ!!おい!全員船から飛び下りろ、まだ間に合う!」

「ふがふが、ふが!」

「ふふ、赤目さんの言う通りそんな事は出来ないみたいよ、見て」

「絶対ソイツは何も有益な事を言つてないだろ……。……だが確かに、こりやア……」

「ええ……大型の空魚達が口を開けて追つてきてるわ、飛び込んでも勝ち目は無さそう」

あれかな?さつきホワイトベレーが言つてた裁きつてのは、もう始まつてるつて事?

だとすれば船を運ぶこのエビも、それを大きく口開けて追う空魚も全て仕組まれてい  
るのか……。

「「天の裁き」か……追手を出すんじゃないやなく俺達を呼び寄せようつて訳だな、横着なヤロー  
だ」

「じゃあまたあの島へ!」

「ふが……」

「あんたはいつまでそうしてんのよ!」

とか言いつつも引き離さないあたりナミさんが私に激甘なのを知っているのだ。だつてここ落ち着くもん…ナミさんの匂いと温もりと柔らかさどエロスに包まれて最高だもん…。

エビが私達を運び終えるのにそれ程時間はかからなかった。このエビ凄く速いし、何よりあの島はエンジェルビーチからそう遠くない。

そして私達は島の内部へ行き、雲の湖のような場所まで運び込まれた。その湖の中心部には小さな祭壇があり、船ごとそこに揚げられたのだ。

「…ふがふが、…ふう、堪能したー」

「し過ぎだよ」

いい加減にしておこうと思つて顔を離す。

今は湖から岸に渡れるか調査する為にゾロが飛び込んで空サメと格闘している所だった。

ゾロを襲う空サメ以外にもまだサメはうようよいるな…。

「あアウザつてエ!!」

ボコオ、とサメを殴つて倒したゾロが祭壇へと戻つてきた。剣を使わなくても腕力が凄まじいから素手格闘で充分強いんだね。



「参つたな…これじゃ岸へも渡れねエ…一体どこなんだここは…」

「アップバーヤード神の島つてとこの内陸の湖なのは間違いないよね」

「まるでここは生け贄の祭壇ね…」

生け贄の祭壇か…確かにそれっぽいな。

「えらいトコに連れて来てくれたもんだ、あのエビ…」

「ここで飢えさせる事が天の裁きかしら」

地味な裁きもあつたもんだよ。どうせなら隊長が言つてたような『神官』がお命頂戴！  
 ！みたいに襲い掛かつて来てくれる方がやりやすいんだけど…。

船底もエビに運ばれてる時の衝撃でボロボロだし…こんな状態で湖に降ろしたらとんでもない事になりそう。

「どうする？」

「とにかく船を直さねエ事にはこの島から出られねエ…チヨツパー直しとけ」

「おれ!?!わかつた」

「直しとけつて…あんた何かする気？」

「どうにかして森へ入る、とりあえずここは拠点にしといた方がいいと思うんだ。きつとルフィ達が俺達を探しにここへ向かつてる」

ゾロの言う事は正しいね、私達もここでじつとしてるのは得策じゃなさそうだし、

かと言って全員で動いちゃ万が一ルフィ達がここへ来ても誰もいないって事になるし。  
「この島には神がいるんだろ、ちよつと会ってくる」

「神かあ…私もこの島で気になる事があるんだよね…、ね、ロビン」

「そうね、なら私が剣士さんについていくわ。赤目さんは残った方がいいでしょう？」

ナミさんを残していくのが心配だって思ってるのを察してくれたのか、ロビンがそう提案してくれた。

私はそれを了承して、探索組はロビン、ゾロ。居残り組は私、ナミさん、チョッパーとなった。

「あのつるが使えそうだな」

「あ、ホントね、いい考え」

丁度船の近くに長いつるがぶら下がっており、それを掴んで跳べば前世で世界一有名だった架空の野生兎みたく岸まで辿り着ける筈だ。

「ウン！ア…ウウン!!…アーアーアー…」

そんな感じでゾロがお決まりの掛け声と共に岸まで揺られていった。

こつちの世界でもそれって浸透してるんだ…。

ロビンは普通に掴まって無言だったから、やっぱりゾロのテンションがアレだっただけなのかもしれない…。

「じゃあ船番頼むぞ!!」

「よろしくね!」

「おう! 2人とも気をつけて行けよ! 無事に帰って来いよ!」

チョツパーが見送りの声をあげ、2人はそれを見て大きな森に入ってしまった。

「じゃあ私達は船の修理でもしちゃおうか」

「そうね、チョツパー1人だけだと大変でしょ」

「いいの!? 助かるよ」

「あ、そうだ、念の為此はチョツパーが持つてたら?」

そう言つて私は船のメインマストにかけてあつたホイッスルをチョツパーに渡す。

これはガン・フォールから貰つた例の笛で、誰が持つておくかという話になつた時に「平等にメインマストにでもかけておこう、困つた人が吹いてね」と決まつて置いてあつたものだ。

今はいつどこから神官とやらが現れてもおおかしくない。ナミさんは何があつても守るから笛はチョツパーに持つて貰おう。

「あ、ありがとう! これでイリスだけじゃなく、空の騎士にも助けて貰えるぞ……!」  
何だかんだ言つても今の状況はかなり危険だからねえ……。

ロビンもチョッパーを置いていけないと思ったから私を残したって理由もあるのか  
もしれない。

「じゃあ私とナミさんは船底でも直してこようかな、チョッパーは突ノックアップ上げる海流ストリームで壊れたマストとかお願いできる？」

「おう、任せてくれ！」

ウソツプの手伝いをしたりして船の修理経験はこの一味だとチョッパーが2番目に多いから頼りになるよ。

私に関してはセンスなさ過ぎてウソツプから木材を運ぶ係しか任命された事ないんだけど…今回は上手くいくかな?!

「うわ…間近で見ると凄く壊されてるね…」

「そうね…これはカヤが見たら怒るわよ」

「う……………」

せつかくカヤに貰った船だと言うのに…。

………会いたくなってきたなあ。

『ピイイイイイ~~~~~!!!』

「……え、笛の音!」

「いくらなんでも早過ぎじゃない!」

まだ何も修理に取り掛かってないけど、チョッパーが笛を吹いたって事はそれなりの事態なんだろう。

私とナミさんは急いでチョッパーのいるデッキに乗り込んだ。

「何だ、殺していい生け贄は弱そうなお前から3人だけか?」

「い、イリス〜!」

慌てたチョッパーがとてと私の背後に隠れる。

船の近くには大きな鳥に乗った槍を武器に持つ『神官』らしき奴がいた。

こいつはあの時島で見た4人のうちの1人…パイロットみたいな男だね。パイロットゴーグルのせいで余計にそう見えるよ。

「チョッパー、ナミさん…出来るだけ遠くへ。…こいつは引き受けた」

「ハハッ! 何だ1番乗りはてめエか、ガキ。度胸だけは認めてやらんでもないがな…それは無謀ってモンだろう、実に腹立たしい」

「奇遇だね、私もキレてるよ。…ナミさんの…嫁の命を狙う輩は、誰であろうと潰してやる」

ゴキ、と指を鳴らしてパイロット野郎に向き直る。

…相手の力量は分かんないけど…ここは何としても食い止めないとナミさんと  
チヨツパーが危険だからね、絶対に負けられない！

## 60 『女好き、容易い紐の試練』

絶対に負けられない！

……とか思ってたんだけど…。

「ぐほオツ!？」

「もういつちよオ!!」

「がは…ア…っ…!!」

…うん、弱い!!

どう見ても相手の要である鳥を1発目に去羅波さらばで落として、そこから空を食べなくなった神官『シユラ』をポッコポッコにするだけの作業だった。

槍から火が出る？ 当たらないから意味ないよね。大して身体能力が高くないんだよこの人…多分今までも鳥に乗って戦うスタイルしか使ってたんだらうね…。

「ハア…ハア…！…何だ貴様…！…見た目のわりにそのパワーは…!!」

「あなたこそ、私が何の攻撃をしてくるか分かってるような動きは何なの？」

避けるのは間に合っていないみたいだけど。

「ぐっ!? 右足の蹴り……ごはっ……!」

「うーん……なんで分かるんだろう」

今も私が攻撃する前に右足で蹴ろうとした事がバレたんだよね……避ける事は出来なかったみたいだけど。

「あなた、神官ってやつ?」

「……つ、そうだ、さつきも言っただろうが!俺は神官の1人、紐の試練……スカイライダーのシユラだ!!」

「何がスカイライダーだよ、今何に乗ってるっていうの?」

「……く、クソが……っ!」

まだ神背・倍加ヒューマインクリースも全・倍加オールインクリースも使っていない。こんなのが神官だっていうのなら神つてのも大した事無さそうだね。

「少々待たせた!敵はどいつだ!」

「あいつ」

チョップパーの笛で呼んだガン・フォールが到着する。

ナミさんがシユラを指差せばガン・フォールは目を見開いて私を見た。

「なんと……あの神官を1人で相手取って押しているのか……!」



「押しているというか…一方的よ、アレ」

「イリスまだ攻撃受けてないぞ」

改めて言わせて貰うけど、ここまで楽勝なのは奴の鳥がないのが大きいからね。あとは20倍が便利、今まで10倍だったからかなりパワーアップしたのが実感出来るよ。

「…ん？何？」

「……!!!」

突然身動きが取れなくなった私を見てニヤリとシユラは笑う。

…紐の試練。見えない糸か何かでいつの間にか縛られたのかな？

「バカめ!!これで貴様もお終いだぜエ!!」

「いかん!!」

流石にそれだけの隙を見逃す程シユラもバカじゃない。槍を構えて私に向かって突っ込んできた。

ガン・フォールが飛び出そうとしたが、ナミさんがマントを掴んで止める。

「何故止める!」

「必要ないからよ、ま、見てれば分かるわ」

「……だ、大丈夫なのか？」

ナミさんは普通だけどチョツパーは少し心配してくれてるようだ。

「ただど大丈夫、心配なのは奴が槍を振り回したせいで余計に傷付いたメリー号の方だよ。」

「死ねエ!!」

「やだ」

「がっ…!?」

槍が私に届く寸前で、シユラは突如として自分の真下に現れた。『私』に顎をアツパーされて舌も噛みながら目を回して倒れた。

…  
ヒュウマ 神背は使わされたな。

「…バカな…信じられん…」

まだ神官を倒した事に驚いているのかガン・フオールがそう言っていた。

私は神背ヒュウマを解除してナミさん達の元へシユラを引きずって戻る。

「いい、イリスかっこいいぞ!」

「戦う前はどうかなる事かと思っただけど…そんなでもなかったわね」

「ていうか弱かったよね、この人」

俺の槍は燃える!とか言いながら空振り連発は笑っちゃったよ。燃えるだけならただの曲芸だもんね。

「…我輩、来た意味無さそうだな」

「ピエー…」

「いや、そうでもないよ？」

「この情報がさっぱりないから、それを聞くだけでも有益だよ。

残り3人の神官やそれこそ神についての知識はあつた方が良さそうだし…。

「まず、ここは何？ やっぱり生け贄の祭壇なの？」

「…ふむ、その通り、ここはそう呼ばれておる」

「やっぱり私達は生け贄扱いか…。となるとさっきの戦闘でシユラを倒したから生け贄拒否した事になるのか。」

「神官ってこいつの他に誰がいるの？」

「我輩も詳しくは知らぬが…神官はお主らも知つての通り4人居るのだ、まずはそこでノびておるシユラ、そしてサトリ、オーム、ゲダツで成る組織」

「…じゃあ、神つてのは…」

「<sup>ゴッド</sup>神エネルギー…この空の神の名だ…今のな」

「今…？」

「詳しくは後で話そう、せつかくのワンホイッスル…何もせず帰るのは忍びないのでな」  
みんなも居る時について事か。

… 神ゴッド エネル…大層な名前だ。

「ならガン・フオールとピエールにも働いて貰おうかな、私達船を壊されちゃって…修理したいんだけど」

「うむ、そのような話ならば力になろう」

「じゃあチョッパの手伝いでよろしくね、私はさっきの続きでナミさんと船底行つてくるから」

「おれ分かつたぞ、イリスナミと2人になりたいだけなんだな」

チョッパーが何か言ってるけど、そりや当然だよ、隣に嫁がいれば気合も入るつてもんでしょ？

\*\*\*

「ふうっ！こんなモンかな！」

「え、ええ………ごめんカヤ」

最後何やらナミさんが呟いたが、上手く聞き取れなかった。

私とナミさんのチームだが、夕暮れ時に何とか船底の修理を終えた。木を取り付ければいいんだよね？カヤに嫌われない為にも真剣にやったよ私は、うん。

「おーいイリス、ナミ！ちよつと来てくれ！」

「なにー？」

丁度チョッパーが私達を呼ぶ声が聞こえたので船に乗れば、船の真上を大きな鳥が数羽飛んでいた。

しかもその鳥は間違いなくサウスバードで：つまり、私とロビンで立てた説を裏付ける証明になる！

「やっぱり…ここはジャヤだったんだ…！」

「え？どういう事よ？イリス」

「それもまた、ガン・フォールの話の時にでも話すよ、きつとロビンの方も有益な情報を持って帰ってきてくれる筈だから」

ジョー、ジョーと騒がしく鳴くサウスバード。：図体が大きいから喧しいな。

それにしても地上のサウスバードより遥かに大きいのはどうして？木も魚もそうだけど…空島って巨大化する成分でも含まれてるのかな？

「あつ、ゾロ達が帰ってきたぞ！向こうからはルフィ達もだ！」

「おーいお前らー！！このキャプテン・ウソップが来たからにはもう安心だ！！」

「イリスちゃーん!!大丈夫ー!!?」

チヨッパーが船から身を乗り出してみんなに手を振る。

岸からはゾロとロビン、そして湖の隅にある雲の道からはミキータ達ミルキートが来て、鳥だという事はうつすらとわかる船首を取り付けた小舟に乗ってやってきた。

ミキータに大きく手を振って無事だと伝えるが、いやそんな事よりミキータの方がポロポロだけ?!ルフィ達も結構傷付いてるじゃん!何があつたの:!?

気にはなるけど、とにかくまたみんな集まれて良かった良かった。

ルフィ達の乗る小舟にゾロとロビンも乗り込んで祭壇までやってくる。

「……どオわつ!?!お……オイナミ、船底の修理は誰がやつた?」

「……………、私」

「と私!!」

「やっぱりな!だと思つたよちくしょう!!」

ウソツプが船を見上げて叫んだと思つたら何か泣き出した。はは、感極まつてるよ。

「イリスちゃん、この人は?」

「え?ああ……」

ミキータが指差す所にはシユラが倒れていて、そういえば居たな……と思ひ出す。

「空のナントカも居るじゃねエか、やっぱ何かあつたのか?」

「色々ね、ゾロとロピンは何か見つけられた？」

「ええ、やっぱり…赤目さんの考えは正しかったわ。…クリケツトの家の片割れを見つけたの」

「…へへ、確定したね」

「これだけでもクリケツトに教えてあげられたら、もう潜水病に罹ることもないだろう。」

「色々と話し合いたいことはあるが…とりあえず森へ下りて湖畔にキャンプを張ろう。もしもの時はここよりいくらか戦い易いだろう、日も落ちてきてるし船もこの状態…エンジェル島へ帰るのは明日になりそうだな」

確かに船底はともかく他の部位も損傷激しいもんね！

私達は小舟に乗って何回かに分けて岸へ移動した。

そこにテントを数組張ってサンジが晩ご飯を作る。

「…まず、私達が見たものから話しをするわ。これは地上で赤目さんが話してた事だけど、この島は『ジャヤ』…つまり地上のジャヤの片割れよ」

「…!!そうか、突き上げる海流…!!それで、どうしてこの島がジャヤだと?」

「クリケツトの家は不自然だったでしょ? 2階はあるのにそれに続く階段はない、そし

て何よりも不自然に分断されたような家の形…その片割れがこの島の海岸にあったわ  
「!!」

「と、いう事はこの島に黄金が眠ってるってのか!？」

「黄金かア!こんな冒険を待ってたんだ!!」

ウソツプは驚いているが、ルフィはうずうずと言った感じだ。

「よ〜〜し!やるか、黄金探し!!」

「そこなくっちゃ!」

ナミさんにプレゼントする為に沢山集めないとね!

そもそも私達海賊だし、お宝目前の状況で黙っておく訳には行かないよ!残金も5万  
ベリーだし…。

「…ん?ナミさんその髪型はどしたの?」

「気分ってだけよ?…もしかして、似合っていない…?」

「そんなことない!すっこぐ似合ってたから気になっただけ!!」

後頭部の下の方で2つ結びにしてるナミさん…可愛いよ!

「…ふうっぐぐ」

「あなたはやめておいた方がいいと思うけど…」

ミキータも髪の毛をナミさんのように束ねようとしているけどロビンに宥められて



いた。ああやって私に気に入って貰おうとしてるのってなんて言うか、ハハ、可愛すぎて襲いたい。

「おれ達は神官のサトリって奴を倒したんだ、決め手はやはりこのおれ！キャプテーンウソツプの」

「それで？どうだったのミキータ」

「キャハハ、神官を倒したのは本当よ、マントラって言って私達の攻撃を読んでくるのが厄介だったわ」

「…なんと、同じ日に神官が2人も…」

ガン・フオールは驚いてるけど、そりゃルファイ達に遭遇して勝てる訳ないよ。私一人にすら勝てないんだから。

「私の方はシユラっていう神官を倒したよ。今船で縛ってるあいつの事ね」

「という事は神官も残り2人ってことか？何だ案外楽に脱出出来そうだな」

「バカね、あんた達は神の力を見てないからそんな事が言えるのよ、実際あれを目の当たりにしたら考えが変わるわ」

ナミさんの言う通り、確かにあの雷は凄まじかった。だけどそこまで気にし過ぎるのも逆に気疲れしちゃうよ。

「なら明日どう行動するか作戦会議でもする？」

「そうね…行き当たりばったりよりかは良いと思うわ」

そんな感じで明日の行動を決める事にした。

丁度サンジが晩ご飯を作り終えたらしく、大きな木の根を机にシチューを頼張る。…美味すぎ。

「さっきの話だが…ここがジャヤだったのは本当なのか？明らかに大きさが違うぞ」「それは…きつと海雲や島雲を作る成分のせいね、この空島を包む環境は動植物を異常な速度で育む力があるみたい」

ゾロの質問にロビンが返す。彼女がそう言うならそうなんだろう。

「じゃあここで取っておきの情報を一つ！ここにスカイピアの地図とジャヤの地図があります、その2つをこう…海岸の家同士くっつけると…！」

じゃーんとみんなにも見えるように大きさを2倍にして見せた。

あの時ロビンと一緒に立てた説が本当に正解だったなんて…めっちゃ嬉しい。

「スゲエ…！ドクロに見える！」

「つてことは、ノーランドの日記に書いてた「髑髏の右目に黄金を見た」つてのは…!!」「そう、この場所だよ!!」

トン、とドクロの右目を指差す。

ナミさんは目がベリーになってるし、他のみんなもワクワクが止まらないって感じ

だ。

「…となると、明日は真っ直ぐにそのポイントを目指せばいいのね、その間船も放つておけないから2班に分かれて動きましよう！」

そうして明日の行動が決まった。

班はまだ決めてないけど…それは明日でもいいだろう。

海賊達の夜は長く、明日の黄金を夢見てキャンプファイアーを始めだす。

火は島の動物を呼び寄せ、ルフイ達の楽しげな雰囲気にもまれて同じように踊り出した。

「そういえばおっさん、コニスちゃん達はどうした!? 無事か!」

「うむ、親子共我輩の家におる、安心せよ」

「…コニスちゃんがどうかしたの?」

サンジとガン・フォールの会話が気になって割り込むと、サンジが応えてくれた。

「ああ、それが……」

サンジの言う話はこうだ。

スカイピアの住人はある掟によって縛られている。

それは犯罪者を確認した場合、裁きの地へ誘導しなければならぬと言ふものだ。それに逆らうと逆らった本人が殺されてしまう…そしてコニスちゃんはそれに逆らった。

私達が第2級の犯罪者になっちゃったから誘導しなきゃいけないかなかったのを拒否して神に命を狙われたらしいのだが、間一髪の所でガン・フオールに助けってもらったそうだ。「…そんなことが…よかった、コニスちゃんが無事で…」

ホツ…と胸を撫で下ろす。全くこの島の神とやらはとんでもないクズだね。コニスちゃんのような美少女を殺そうとするなんて…あのレベルの美少女はどんな宝よりも価値があるってどうして分からないのか!!いや寧ろ天秤にかけるな!!

「イリスちゃん達も踊らないか?」

「いいね、後で行くよ」

「イリス…早く来いよー!」

遠くで叫ぶルフィに手を振って応える。サンジもキャンプファイアの輪の中に戻っていった。

「…さっきのお主らの話だが…この島の元の名をジャヤというそうだが、何故今…ここが『聖域』と呼ばれるか…分かるか?」

「?」

そもそも聖域って呼ばれてるの?」

「お主らにとつて、ここにある地面は当然のものなのだろうな…」  
「…ん？そりやそうだろ…」

土を手で集めながらガン・フォールが言う。ゾロもそう返したように、私達からすればそれは当たり前前の事だ。

「だが、空には…これは元々存在し得ぬものだ、島雲は植物を育てるが生む事はない、緑も土も本来空にはないのだよ」

エンジェルビーチで見た木も、全ては地上のものだったのか…。

「…我々はこれを大地と、<sup>ヴァース</sup>そう呼ぶ。空に生きる者達にとつて永遠の憧れそのものだ」  
「へえ…」

私達から見た空島が憧れでありロマンであつたように、空の人達から見た地上もそんなのか。

「でも聖域にするなんて勿体ないよね、神つてやつは案外ケチなんだ」  
「ケチつてあんた…神に向かつて何言つてるの？」

「だつてそうじゃん、もし私が神様だったなら、聖域なんてものにせず…憧れだけじゃなくともっと身近なものにしてあげたいよ。地上から見た空島と違って…こんなにも近くにあるんだからさ」

「…フフ、そうね」

ロビンも笑って頷いてくれた。

「じゃ、私は踊りに混ざってこようかな、みんなも行こうよ」

「キャハ、私は遠慮しておくわ」

「私も」

「え」

なんでかわかんないけどナミさんとミキータに拒否された!?!

わ、私…何かした!?!

「となるとロビンしか残ってないわね、ほら、行った行った」

「あら」

ぐいぐいとナミさんに押されて私の横までくるロビン。

…あ、そう言うことか、2人共気を利かせてくれたんだ…。

「ロビン、そう言う訳だから…よろしく」

「強引ね、赤目さんも航海士さん達も。…フフ…よろしくね」

「…!」

その時、ロビンが小さく微笑んだその姿に…私は何よりも代え難い価値を感じた。

…だってロビンって笑うには笑うけどこうやって楽しそうに笑うことは少ないし…、

なんか嬉しいな。

私達の夜はまだまだ長い。

…1つだけ悲しい事があるとするとするならば、ロビンと踊ろうとしても身長が足りない事だろうか…まさか踊るために全オールド・インクルーシブ・倍加をする事になろうとは…。本気で泣きたい…。

## 61『女好き、謎の影の願い』

キャンプファイアーの宴も終わり、皆が寝静まった夜…男性陣は外で寝て私達女性陣はテントで寝ているのだが…。

「……………」

ねっつっれない!!

なにこのテント、狭いわ!!普通メリー号だとそれなりのスペースにどんどん!!とベッドを並べて悠々自適に個人個人で寝れるの!そりゃあ時々ナミさんやミキータが潜り込んで来てたけど…言ってしまえばそれだけで済んだ!!

「…、く…っ」

だけど今はどうだ!?右にロビン、左にミキータ、そして上はナミさんの完璧な布陣を敷かれてる…!

4人で寝るために1列で並んでは無理だからとナミさんだけ私達とは体の向きを90度変えて貰ってるんだけど…、どうしてそんなに私に顔を近付けてるんですかね!?そしてミキータもなんで私の腕を抱き抱えて谷間に挟んでるんですかね!?普通なのはロビンだけだよ!…いやでもロビンももう少し向こうにスペースあるのに何でこっちに





「ちよつと行つてみるか」

少し怖いけど、そんなに悪い感じしないし…大丈夫でしょ！

ルフィ達の乗ってきた小舟を動かして船のある祭壇まで移動し、音のする方へ近づいていく。

「……………」

こんなにも近付いているというのに、音を出していた正体は目の前にいると言うのに…何故かモヤがかかっているかのように上手く姿を捉える事ができない。

どれだけ視力を倍加しようが何をしようがそれが変わることはなく…それは存在していた。

今、目の前にいる謎の存在は…これまた謎に船を直してくれていたのだ。コーンコーンという音はハンマーで釘を叩いていた音だった。

「……………誰？」

モヤはかかっているけど、辛うじて人型なのはわかる。

何かの能力か？ 認識をあやふやにする…みたいなの。

『…イリス？』

「……………どうして私の名前を…？ あなたは、一体…」

その声は何とも不思議で…初めて聞いた筈なのに何故だか心にすつと響いてくると

「うか…安心感があるというか…初めて、会ったんだよね…？」

『ごめんね…こんな事しか出来なくて…。実は、もうみんなと航海出来る時間もそんなに残されてないんだ…』

「こんな事…つて、…それに、みんなとつて…あなたは…、っ!?待つて!あなたは、まさか…!!?」

『もし、今後…僕がこれ以上保たない様だったら…気にしないで置いていつて欲しい。無理をしてこの先の海を乗り越えられないのは…凄くイヤなんだ。みんなには…もつとずつと先の海へ行ってもらいたいから』

「待つてよ!私の質問に答えて!あなたは本当に…」

コーン…と音を響かせたかと思うと、あれだけ濃かった霧は晴れて船は修復されていた。

…船底も何故か修理し直されてる…何故??

それにさっきの影…消えちゃった…。でも、間違いない…今のは…。

私は急いで船首まで行って、メリーの頭に飛び乗りコンコンと叩いた。

「ねえ!あんな一方的に何なの!?!時間が残されてないとか何とか…!これからもずつと航海出来るんですよ!?!ねえ!」

そんな私の叫びは、夜の闇に溶けて消える。

メリー号の船首像は、いつもの様に変わらず前を見据えるだけだった…。

\*\*\*

「見ろ！言つた通りだろ、ここに誰かいたんだ！見たんだおれは、やつぱりあれは夢じゃなかつた!!」

「…！ゴーイングメリー号が…修繕されてる…！」

朝、メリー号まで戻れば昨夜と同じくメリー号が直つていた。

私が予想外だったのはウソップもあれを見ていた事だ。…でも近くまでは来てないみたいだね、…どうしよう、時間も残されてないとか意味深な事言つてたから言い出し難いな…。

「良い奴がいるもんだ」

「おれアてつきりオバケかと…」

「…しかしこんな辺境で誰が船を直してくれるつてんだよ、アップルバーヤード神の島は俺達以外敵しかい

ねエ筈だぞ…」

ゾロは怪訝そうに眉を潜めるが、ウソツプはメリー号がフライングモデルじゃなくなってる事に気が付いたようだ。

…ていうか、たしかにフライングモデルじゃなくなってるね、あの姿は気に入らなかつたのかな？

「直つたんだからいいじゃない、それより昨日のおさらいよ、この地図を見て！」

ナミさんが地図を広げてみんなに見せる。

「探索組のルートはこうね、南へ真っ直ぐドクロの右目に向かって！この右目に何らかの遺跡がある筈だから…まあ敵もろもろに気をつけて黄金持つてきて！」

「簡単に言いやがって…」

「何だお前、オーゴンオーゴン言ってる癖に来ねエのか？」

「そうよ、だってコワイじゃない、それにイリスが脱出組なんだからそつちに行く訳ないでしょ」

「まあ…そりやそうだ」

ルフィですら納得する程の説得力だったのか…？

「その間私達はメリー号でこの島を抜けるわ、なるべく早く遺跡付近の海岸へ行くからそこで落ち合いますよ！そしてそのまま空島脱出、これで私達は「大金持ち海賊団」よ

！好きな物買い放題♡」

「いいね、頼んだよルフィ」

「おう!!そんなじゃ行くかア!!」

ちなみに脱出組は私、ナミさん、サンジ、ウソツプの4人とガン・フォール&ピエール。

探索組はルフィ、ゾロ、チョッパー、ロビン、ミキータの5人だ。

またロビンとミキータと離れてしまったけど、それぞれの能力を考えるとこの配分がいいという事に決まったのだ。

未だ気絶したままのシユラに関しては脱出組で見張る事になった。もし野放しにして行動されれば探索組の邪魔になる可能性がある為で、この島を脱出する際に何処かに捨てる手筈となっている。

みんなでメリー号を祭壇から下ろし、それぞれのチームに分かれて行動を開始した。

雲ミルキロードの川は起伏が激しいからルフィ達が乗ってきた小舟の動力に頼らざるを得ず、その小舟にメリー号が押される形でゆっくりと前へ進む。

この動力は1度コニスちゃんと言ったようにダイアルを使ってるらしい。便利だなーダイアルって。

船を動かすだけの私達はそれだけでも危険だとはいえ探索組に比べると安全だ。

つまりする事が無くなるのでその辺に座ってサンジの入れてくれたジュースを飲みながら外の景色を見る。

「……この国の歴史を少し…話そうか」

「…？」

突然ガン・フォールがそんな事を言い出した。

…確かに気にはなるけども。

「我輩…6年前まで『神』であつた…」

「頭打ったかおっさん」

そんなウソツプをピエールが馬になって頭に噛みつくが、いきなり神だったとか言われたらそれらそうなるって…。

「…この神の島がスカイピアに姿を見せたのは…お主らの知る通り400年も昔の話だと聞く。それまでのスカイピアはごく平和な空島だったそうだが、たまに突き上げる海流に乗ってやってくる青海のわずかな物資は、空の者にとつてはとても珍しく重宝される」

空島の物資だつて地上じや価値あるもんね。

「空島にある大地は全てそうやって偶然空にやってきたものだ。だが神の島ほど大きな大地が空にやって来る事はまずあり得ぬ……、奇跡なのだ」

「奇跡……」

「うむ、空の者は当然それを天の与えた『聖地』だと崇め、喜んだ。……しかし大地には先住民もいて……大地を巡る戦いは始まった。その者達こそが『シャンディア』」

「ゲリラ達のこと？」

聞いた事あるなあ……前世の記憶だろうけど、シャンドラ……?とかなんとか言ってたよ  
うな。

「うむ」

「じゃああいつら元々地上のジャヤに住んでた奴らなのか!？」

「そうだ、きつと不本意に島ごと空へ飛ばされたのだ」

「なのに島を追い出しちゃったって事!？」

「そうだ、空の者が私欲の為に彼らの故郷を奪い取った……以来400年、シャンディアと空の者との戦いは未だ止まぬ。シャンディアはただ故郷を取り戻そうとしているだけだ」

「じゃおめエらが悪インじゃねエかよ!」

そんな2人にピエールが嘯みつく。

……それ、ちよつと切ないね。

「……そうだな、お主らの……言う通りだ……」



その言葉には、ガン・フォールの計り知れない気持ちが入り込められている様だった。

「エネルは？何なの？神ゴッドエネル」

「我輩が神であった時…どこぞの空島から突如兵を率いて現れ、我輩の率いた「神隊」と「シャンディア」に大打撃を与え神アッパルの島に君臨した…6年前の事だ。神隊は今その殆どがエネルによって何やら労働を強いられている、詳しくは分からん。…だがシャンディアにとつては…神が誰であれ状況は何ら変わらぬ、ただ故郷を奪還するのみ」

「その「故郷を奪還するのみ」のシャンディアが何で俺達を狙ってきたんだ、空へ来た途端に」

「今労働を強いられていると言った神隊、時に船を手に入れ逃げ出す事があるのだ。シャンディアにとつては当然敵である、逃さず排除しようとする…！それと間違えられたのだろう！」

間違いで命を狙われたのか…。

あ、間違えて殺しちゃったーめんど、とか冗談にもならないよ…。

「我輩「空の騎士」となったのも、そんな脱走者を他の空島へ無事逃してやる為でもあるのだ、犯罪者ゆえもはやエネルの目の届くこの国にはおれんな」

「聞いてりゃ神ゴッドエネルつてのはまるで恐怖の大王だな」

「恐怖か…いや、それより性質タチが悪い。エネルはお前達の様に国外からやって来る者達

を犯罪者に仕立て上げ、裁きに至るまでをスカイピアの住人達の手によって導かせる。これによって生まれるのは国民達の「罪の意識」。己の行動に罪を感じた時…人は最も弱くなる、エネルギーはそれを知っているのだ…迷える子羊を自ら生み支配する、正に「神」の真似事という訳だ……食べぬ男よ……」

「…エンジェルビーチへ着いた時はここは楽園にさえ思えたのに、とんでもない…かつての黄金郷もえらいトコへ飛んで来ちゃったものね…」

「おおそうだお主ら、その…昨夜から騒いでるオーゴンとは一体…何なのだ？」

…え???

ボケが進んじやつたのかな？

ピエールにギロリと睨まれたんだけど…なんで？心が読めたりするんですかね??

よくよく話を聞いてみれば、空島の住民にとって黄金とは価値のある物ではないらしい。

それよりも地上の大地…つまり砂や土の方が重宝されるのだ。クロコダイルをここに連れてきたら本当の意味で英雄になれそうだな。

「おおそうだおっさん、神官の一人が使ってた衝撃インパクトつてのァ…ありやなんだ？まるで体の内側から攻撃されてる様な感覚だったぜ」

「…ふむ、ならばその事についても説明しよう」  
インパクト？なんだそりゃ。

「お主らに初めて会った時我輩が傭兵をかって出たのも、青海人では『空の戦い』についてゆけぬからだ」

「空の戦い？」

私がそう首を傾げると、ガン・フォールは懐から平べったい巻貝を取り出して渡してきた。

なんだこれ、ダイアルってやつ？

「空樽はあるか？」

「あるにはあるが…」

「持つてくるよ、確か食糧庫にあったよね？」

「あア」

サンジに了承を得て持つてくる。

船の船首側のデッキ…フォアの真ん中に空樽をどん、と置きガン・フォールの指示で樽の上に巻貝を乗せた。

更に私の身長分くらいはありそうなハンマーも用意して準備万端だ。

「これは何の為に用意したの？」

「やればわかる、その貝を思い切り砕いてみよ」

「よーし」

「イリス、そーつとだぞ！甲板に穴空いちまうからな！」

「思いつきりやればよい」

「てめー他人の船だと思つてテキトーな事言うなア!!」

ウソツプがキレてるけど、何もそこまで鬼じゃないでしょ。

思い切りやれつていうなら思い切りやるよ。

「…ふう、… 20倍灰…」

にじちゅうはいばい

「よせー!!!穴が空く所か船が割れちまうぞ!!」

「思い切りハンマー!!!」

「技名適当かつ!!イヤそうじゃねエ、船がアーー!!……あ?」

「あれ?」

「?」

私も、そしてウソツプも見ていたサンジとナミさんも首を傾げる。

船を叩き割るくらいのが持ちちで振り下ろしたハンマーの衝撃は、貝の下の空樽すらも割れなかったのだ。勿論、その貝も。

「…何だろう、貝に衝撃を吸い込まれたみたい…」

思い切り叩いたのに結果が伴わないから不完全燃焼だな…。

「では貝の穴を空樽に向け裏の殻頂を押ししてみよ」

「?…?…?」

ポチツとな。

「ツツ!!?!ちよおつ?!」

「イリスツ!!」

ポオンツ!!ととつもない衝撃が巻貝から発生して空樽を粉々に破壊する。

その衝撃は殻頂を押しただけの私にまで伝わり、完全に油断してて倍加無しの素の状態でだった私を吹き飛ばす。

「イリスちゃん!危ねエ!」

「つと…あ、ありがとうサンジ…!」

そのまま船外まで飛ばされそうになったのをサンジが体を掴んで止めてくれたから何とかなっただけ…。

「…すまぬ、まさかそれ程までの衝撃を貯えさせておるとは…」

「おっさん、見た目に騙されるなって。神官とこいつの戦い見たんだろ?」

「ほんと…イリスに何かあったらわかってるんでしょね?ん?」

「す、すまなかつた」

私からは見えないけどナミさんの顔を見てガン・フォールとついでにピエールが顔面蒼白になって頷いた。

「ご、ごほん、ともかく…それが インパクトダイヤル 衝撃貝、与えた衝撃を吸収し自在に放出する。本来手の平に手袋やバンテージで固定して使用するのだ、正確にヒットすれば並の人間を死に至らせる力を持つ」

へえ…戦闘には便利そう。

「……………、こゝは…？」

その時、丁度シユラが目を覚ましたので私はもう一度思い切り インパクトダイヤル 衝撃貝をハンマーで叩いた。

こいつは並じゃないし、試すには丁度いいや。

「てめエは…！く、この縄さえ解ければ…！」

「どれどれ…？」

インパクトダイヤル 衝撃貝をぽん、と暴れるシユラの胸に当てた。

そこでこの殻頂だったよね。

「…何？ インパクトダイヤル 衝撃貝…？そんなものでこの俺を…」

インパクト 衝撃ッ!!」

「…………ツ?!」

面白い程吹き飛んで行ったシユラが雲の川を走るメリー号を越えて周りの森の中へと突っ込んで行った。

飛ぶ直前に白目向いてたからまた気絶したね、あれは。

「なるほど、確かに強烈だな」

「う、うむ……」

ほオ……と感心した様に見えるサンジと、ドン引きのガン・フォール。

「おっさん……あいつの嫁にだけは危害を加えるな、あと危害を加えるような発言もするな、ああなるぜ」

「気を付けよう……」

でもやっぱりこの貝便利だね、ルフィでも誰でもいいからこの貝を1発殴っておけば、ナミさんやウソップのいざという時の自衛アイテムになるじゃん。

「……貝<sup>ダイアル</sup>ってもっと日常的なもののかと思ってた」

「そうだと、だが人が便利だと思ふ物には必ずそれに反する悪用方法があるものだ、使う人間次第だな」

深いね。確かに……前世でもそうだったかも。

「貝<sup>ダイアル</sup>は極めて便利であるが……それゆえ戦闘に用いればそれだけの力を生んでしまうの

だ。例えば料理を温める熱ヒートダイアル 貝でさえ槍に仕込めば自在に高熱を発する熱ヒートジャベリンの槍と化す」

「シユラが使つてたね」

「空の戦士達はそれらを鍛錬により使いこなす。知らぬ者では手に負えまい…だからこそお主らが神官を2人落としたのはこの空島にとつて異例の事なのだ」

ルフィ達が倒した神官はわかんないけど、シユラに関しては何だの鍛錬不足だと思  
う。

「じゃあよ…あの俺達の動きを先読みするマントラつてのにも何か理由が？」

「心綱マントラか…あれは我輩も使えるわけではないのでな、上手く説明は出来んのだが…

心綱マントラとは聞く力だと言われている…何やら人間は生きていだけで体から声を発しているらしいのだ」

声？

「それを聞く事で相手の次の動きも分かるという、更に鍛えるとより広域まで声を聞ける様になる…、神官共は神アップルヤードの島全域…エネルはこの国全域までその力が及ぶ。あの力ばかりは得体が知れぬ…」

…という事はその神ゴッドエネルは私達が空島に來た時既にこちらの存在を認知していたって訳か…。



そして今も……、……は、プライバシーもクソもあつたもんじやない。

シユラが私の攻撃を読んでいたのもそれが原因だったんだ、厄介な力だね…。  
その時、ビリ、と視界の端で電気が走ったのがちらりと見えた。

…?なんだ…?

「ヤツハハハ！お初にお目にかかるな、青海人諸君」

「……はっ!？」

「貴様は…!!」

一体いつ現れたのか、メリーの頭に男が座っていた。

……全く気付かなかつた…何だ、コイツ…!!?!!?

## 62 『女好きvs 神（ゴッド）・エネルギー、慈悲なき雷の猛攻』

「てめエ…何者だ？」

「我は神なり」

「なんだと？」

突然現れた男が自分は神だと言った。…つまりこいつがエネルギーか。

「変な太鼓背負ってるね、雷神の太鼓ってやつ？」

「ん？何だ知っているのか、博識じゃないか」

「まあね」

前世だと一般常識だったよ。

「それで？その神サマが何しにここへ？」

ナミさんを背で庇う様にして話を続ける。

…あちやー、シユラを倒した時は呑気なこと考えてたもんだよ…こうして対峙してみると分かる…こいつは、強い…！

「用があるのはその老人だけだ、お前達は黙ってじっとしていればいい」

「んだとてめエ…！勝手に人様の船に乗り込んで何言つてやが…っ！！が…、！」

「ギャー！！サンジ…！！？」

「サンジ君！！」

「今…何を…！！？」

エネルに詰め寄ったサンジに奴が触れたかと思うと、一瞬にしてサンジは黒く焦げて倒れ伏した。

…サンジが一撃で…!？」

「オイ！心臓の音が聞こえねエぞ！」

「うそ…」

「ヤハハハ…バカな男だな、別に私はお前達に危害を加えに来た訳では無いというのに…」

「ならば何をしに来た!!」

「ヤハハ、冷たい言い種じゃあないか…実に6年ぶりだぞ…！先代<sup>ゴッド</sup>神ガン・フオール」

危害を加えに来た訳じゃないって…でもこいつはサンジを…!!

「ちきしょう！こいつ…サンジを…!!殺しやがったア…!!!心臓がピクリとも動かねエ…！おいサンジ…!!」

「…ん？待ってウソツプ、そっち右胸！」

「え？……ゲッ！心臓が動いてる！良かったなア生き返って……」

だが次の瞬間、ウソップも一瞬で目の前に移動してきたエネルギーに額を指で小突かれて黒コゲになりサンジの上に倒れた。

「貴様……」

「黙っていれば……何もしない……いいいな？」

「……いいな？じゃないよ。仲間が2人も理不尽にやられて……黙ってられるかつての」「ならばどうする？まさか戦う気ではあるまい」

「その、まさかだよ!!」

常人の目に負えないスピードでエネルギーの背後を取り拳を振りかぶる。

「20倍灰・去柳薇!!」  
にじゅうばいばい さよなら

「……」

軽く振り向いたエネルギーの頬を思いつき殴ってやる気持ちで振り抜いた拳は、奴の顔をすり抜けて終わった。

それどころか奴に触れているだけで電撃が身体中に流れてくる……！耐性を倍加しないと意識が保たない……！

「……あなたも、攻撃が当たらないパターンの能力者か……!!」

「そうだ、ゴロゴロの実を食べた私に……つまり雷に、たかたが人程度が勝てる訳ないだろ

う」

「あなたも、人でしょ……!」

一度後ろへ跳び退き距離を取る。クロコダイルにだって弱点はあった……こいつにも絶対何かある……!!雷、雷の弱点……!!

……わからん!!絶縁体とか!?ゴムとかさ!よし、ルファイ呼んでこーい!!

「100万V……」

「っ!?!」

後ろへ跳んで距離を稼いだ筈の私の背後から声が聞こえた。

前を見ればさつきまでそこにいた筈の奴の姿は見えず……ぼん、と軽く頭の上に手の平を置かれた。

「放電」  
ツァーリー

「ぐっ……!?!」

耐える耐える……!!まだ倒れる程じゃない……!!

「ほう……これを耐えるか、なら……1000万V 放電!」  
ツァーリー

「き……っ、き、効かない、ね!!」

振り向き様に裏拳をお見舞いする。勿論奴の顔を横一文字にすり抜けるだけで終わったが……。

「はア…っ、はア…！げふ」

口から煙を吐き出す。

10000万Vって…、何処まで電圧高める事が出来るの…!?

「…ふむ？なかなかタフだな、青海人の娘」

「どうも…！だあ!!」

どん!!と甲板を踏みつける。

そこにあつた<sup>インパクト</sup>衝撃員を拾ってエネルギーの胸辺りに持ち上げて殻頂を押す。

「衝撃ッ!!」

「まだやるのか？…無駄だという事がわからんか」

<sup>インパクト</sup>衝撃が当たった位置だけエネルギーの体が影のように揺らぐが…それはスモーカーにもク

ロコダイルにもあつた現象だ、つまり効いていない証拠…!」

「仕方がない、あまり時間もかけられないのでな」

「…くそ…！ヤバイ…、ナミさん、ガン・フォール！2人を抱えて下へ逃げて!!」

「う、うん！」

私の声に慌ててガン・フォールはウソップとサンジを抱えてメリー号の中央へ飛び降りる。

ナミさんもすぐに降りていったが、私の方をチラリと見て心配そうにしていた。

…だけど、今回ばかりは本気でマズイかも…。

「…1億V 放電」  
ブアーリ

「ツ!!!」

船が揺れ、目の前が真っ白に染まった。

い、ち億とか…やり、過ぎだつて…ば…。

そうして、あっさり私の意識は刈り取られた。

…情けなくも、手も足も出ずに敗北してしまったのだ…。

\*\*\*

「…ん、う…つ、」

体中におかしな痺れを感じながらも目を覚ます。

…エネルギーにやられたのか…！くそ…情けない、あの場にはナミさんも居たのに…私は

…っ!!

「つて、ナミさんは?!? たあ…つ!!」

「つつ…! あ、目を覚まされましたか…? 体の調子は…」

「何だ生きてたのか青海人め!」

…何だこの状況。

急いで起き上がるうとしたら私を覗き込んでたのかコニスちゃんの額に頭突きをくらわしてしまった。

とうかそもそも何でコニスちゃんがここに? あと誰この幼女、私よりちっちゃい?。 ……フツ。

「コニスちゃん…? どうしてここに…? とも聞きたいけど、まずナミさんは…?」

「はい、ナミさんなら今は外でウェイバーの試運転をしています。イリスさん達が地上から持ってきたウェイバーですよ」

…良かった、無事だったんだ…。

「サンジとウソップは?」

「彼らなら外で治療中です、まだ起きてはいませんが…」

無事ってことか…ふう…心配事が無くなったよ。

「コニスちゃん、私の怪我見てくれたんでしょ…? ありがとうね」

「いえ…私など…。 そもそもあなた方をこの島へと誘導させるよう仕向けたのは…」



「関係ないよ、ありがとう」

そう言つてニツと笑うと、コニスちゃんは胸に手を当てて微笑んだ。

「…それで？そつちの子供は誰？」

「誰が子供だ！青海人に名乗る名なんてない!!」

「彼女はアイサさん、シャンディアの子供です」

「真正正銘の子供か…。子供詐欺も居る世界だから見た目は信用ならないんだよね！」

…流石に子供相手にどうこうしたりはしませんよ？コニスちゃんのぽよんからは目が離せませんけども。

「…さて、本当はコニスちゃんを口説きたい所だけ…」

「何言つてんだこの変態は」

「変態じゃないよアイサちゃん、これは私にとって挨拶みたいなものなの、ちなみにあなたにはしないよ…まだ早いからね、フツ…」

「何か腹立つ」

ピキ、と額に青筋を立てたアイサちゃんをスルーして起き上がる。その際止めようとしてきたコニスちゃんの腕はそつと掴んで退けた。

「大丈夫、これくらいは傷何ともないよ、意識さえ戻ればすぐ治るから」

20倍で治します。私の自然治癒速度はこの能力のお陰でとんでもないからね。流

石に戦闘中とかにそこまで気は回らないけど…。

「ダメですよ！ナミさんから聞きましたけど1億Vの雷撃を受けたって…!!」

「でも見て、1億Vをくらった人間とは思えない程元気でしょ？」

飛び跳ねて元気をアピールする。シャドーボクシングも入れるか、しゅっしゅ！

「つとと…」

「イリスさん！」

しまった、やり過ぎた…。心配かけたく無かったけど…ダメージはかなり残ってるね…。

そのまま私の体はコニスちゃんの方へ倒れていき、ぱふつ、と胸の間に顔を挟んだ。

「……………」

「……………す??」

「……………す、うううううう!!」

「へ、変態だ……………!!」

これ幸いと息を吸いまくればアイサちゃんがそう叫ぶ。失敬な、美少女の胸に顔が挟まったんだから深呼吸するでしょ!!

「…さ、流石に恥ずかしいですね、嫁入り前ですし…あまりいい事でも…」

「はああ…すうう、はああ…。…ん?何を言ってるのコニスちゃん、嫁入り前って…そも

そも私の嫁にくるんだからそんな事気にする必要ないんだよ！」

「え？そんなんですか？」

「まじまじ」

コクコクと頷けば、コニスちゃんはそうだったんですか…と驚愕の表情を浮かべた。アイサちゃんはそんなコニスちゃんを信じられない奴を見る目で見た。

「ともかく、すーはー、私は見ての通り大丈夫だから、すうう、はー、甲板に戻るよ、すーはあ…」

「いい加減にしろオ!!」

バシッ!とアイサちゃんに頭を叩かれたので泣く泣く中断して外に出た。

「イリス…!!あんた無事…よね?何あんな奴に負けてんのよ!!…心配したでしょ…」

部屋を出て階段を登りフォアに上がれば、私を見たナミさんが一目散に駆け寄りぎゅつと私を抱き締めてそう言った。

…本当だよね、情けない…。

「ごめん…、はは、思ったよりやるね、神とやらは」

「ばか…!」

ナミさんを心配させてしまった事に罪悪感を感じつつも、私はエネルギーの能力について考える。

…奴の能力は自分自身でも言っていたように雷。つまり災害級の悪魔の実だ。

またこの船に現れることだつてあるかもしれない…次は負けない…!!

「あれ、ガン・フォールは？」

「ん…この国の危機とか言つてエネルを追つてどこかに行つたわ」

「この国の危機…、そりゃあんなのが神ならこの国はずつと危機に陥つてるよ。

「ダメですよアイサちゃん！」

「うるさい！離せ!!」

「？」

なんか騒がしいな、とコニスちゃん達の方を見ればアイサちゃんが彼女の制止を振り

切つて雲の川ミルキークロードに飛び込んでいた。

「アイサちゃん！」

「あんたは泳げないんだからじつとしてなさいつてば、私が行くから」

ポフツと雲に飛び込んだナミさんがアイサちゃんを捕まえる。

「何だよ離せ！あんたには関係ないだろっ！」

「関係あるわよ、あんたも女なんだから将来的には家族でしょ？」

「何言つてんだ!?!こいつらやつぱおかしい!!」

ぐいぐいと暴れるアイサちゃんを引っ張つて一旦ウェイバーに乗り込んだナミさん。

お、私達が修理してもらったウエイバーってちよつと大きめなんだね、2人乗りくらいなら出来そう？

「…ん??」

ふとナミさん達の近くの森を見た。

別に何か意味がある訳じゃないんだけど…ただ違和感を感じたから…。

「……ゲプ」

「……ウワバミだ」

「ええ!？」

雲水をごくごく飲んでいた巨大過ぎるへびに遭遇した。

…いや、でかいって。どんくらいでかいかと言うとカームベルト風の帯に居た海王類くらいでかい。

森から顔を出して水を飲んでるようだけど…何やら気が立ってそうな雰囲気だ。

「ジュララララララ!!」

「きやああ~~~~!!何なのこのデカさ!!」

「ウゲ…ジュララララア~~~~!!」

「いやああああ!!」

「ちよ~~~~ツ!？」

いきなり暴れ出した巨大へびから逃げるようにナミさんが乗ってたウェイバーを動かす。

でもそつち森なんだって！

「くっ…！引き戻すのが無理なら…！行け、20倍！」

ぐーん！と腕を伸ばしてナミさんとアイサちゃんが乗るウェイバーに掴まった。

仕方ない…！このまま森に行くしか…！

「ああっ！ナミさんそつちは森の中!!」

「ごめんコニスちゃん！サンジとウソップ任せたよ！お父様もよろしく！」

「お父様…？」

首を傾げるコニスちゃんのお父様、そこは気にしなくていい。

「よっ…と」

そのまま腕の長さを戻して私の体はウェイバーへと引き寄せられるかのように距離を縮め、ナミさんの後ろへと乗った。

「ぎゃあああ!?腕が伸びたー!?」

「私より伸びる人居るから驚くのはまだ早いよ？」

「呑気な事言ってる場合か!!…でもごめん！つい体が動いちゃったのよお…！」

「仕方ないよ、あのサイズが暴れちゃったらね…」

後ろを見れば、ヘビは私達を追いかけてきていた。

それにしても苦しそうだね…。

「森の中入っちゃった…どうしよう…」

「どうにかなるよ、最悪あのウワバミは私が…つてあり？」

あのヘビどこ行つた？

森自体が広すぎてあのサイズでも見失うよ。

「メ〜!!! 見つけたぞシャンディア! メ〜!!!」

「神兵だ!! 走ってナミ!!」

「え? え? 何?」

いきなり出てきたヤギみたいな人にアイサちゃんが悲鳴に似た声を上げる。ナミさんも反射的にウエイバーを走らせた。

「何なの!? メ〜つて!」

「神兵だよ! 捕まったら殺される!!」

「待つてよ! だつて、でもどこへ向かつてんの私達〜!」

「ナミさん! ちよつといい!!」

「どうしたのイリス!」

緊迫した声のナミさんが視線だけを私に向けた。

「さっきのメрутつてもつかい言つて!!」

「あんたはいつも通りで安心したわ!!!」

「ほんとこいつらバカ!!!」

「待てー!! 神の社へ行かせるなー!!」

ウエイバーはかなりのスピードで森を走り、巨大な蔓まで辿り着いた。

ウエイバーはその蔓をも勢いを落とす事なく真上に登っていく。何たらと豆の木みたいなの蔓だね、最上部には大男でもいるのかな？

「上の雲抜けたらどうなるの!?!」

「大丈夫! 突つ切つて!!」

アイサちゃんが言うのでナミさんは速度を緩める事なく蔓を登りながら雲に突入した。

積帝雲に突つ込んだ時のように長い時間息ができないなんて事もなく、比較的早く雲を抜け出すことができた。…このジャックと何たら…まだ天辺が雲に覆われて見えな  
い…、一体どれ程高くまで伸びているのだろうか。

「!? お前ら…!?!」

「アイサ!」

「娘つ!!」



「え？ゾロ……！ミキータ！あとついでにガン・フォール！」

この階にはゾロ達が居た。

ゾロとミキータだけ……？残りの3人は!?ロビンとかロビンとか!!

「仕留めろ〜！メ〜!!」

「さつきからうるさいなっ!!」

飛びかかってくる神兵とやら3人の顔面を腕を増やしてそれぞれ殴る。何だこいつら！

ナミさんは追ってきたヤギがダウンしたのとゾロ達が居た事で一旦ウェイバーを止めた。

「イリスちゃん！」

「ミキータ、無事!？」

「ええ、平気よ！」

良かった……見た感じ一悶着あつたつて雰囲気だもんね。

「アイサ！ここで何してる!!」

「てめエらもだイリス！ナミ！船はどうした!？」

「いや、それがー」

「何を企んでやがる青海人！アイサ！そいつから離れる！」

なるほどゆっくり話も出来ない!! せっかちかこのモヒカン!!

それにモヒカンの持つバズーカ、なぐんか見覚えあるんだよねえ…あれか、初めて見たゲリラ!

「うわっ!？」

離れる! とか言いながらバズーカから熱線みたいなのを放ってきた。ちよ…それ当たったらアイサちゃんも死ぬよ!?

「ピエー!!」

「お主ら何故こんな場所へ来た!!？」

「あ、ありがとうガン・フォール…!」

仲間もいるのに撃ってきて反応に遅れちゃった…ガン・フォールがピエールに乗って助けてくれたから良かったけど!

「鬼ー!ーっ!! ワイパーの鬼〜!!」

あいつワイパーって言うのか…。そりゃ鬼だよあんなの。

「何故って…だつてすつごい大きな…!」

「…!!! あ」

ヘビが…とナミさんが口にした瞬間、その「大きなヘビ」が大きく口を開けて真横に現れ、ピエールごとパクリと食べられてしまった。

ど、  
どうしよう……!!

## 63 『女好き、2度目の変化』

「おわあああああああ!!」

「へぶっ!」

「うーん…いたた…!」

巨大へびに飲まれて随分と長い胃袋の中に来てしまった…。

ナミさんとアイサちゃんへの衝撃は勿論最小限に留めたけどね、そりやもう全力で。

「大丈夫?2人共」

「平気よ、ありがとう」

「あたしも」

良かった…。

ガン・フオールもピエールも何ともなさそうだね。

「…お主ら、なぜ船におらぬのだ…。いや、それよりその子はシャンディアでは…」

「げげっ!神っ!!は…排除してやるっ!!」

「やめなさいったら」

シャンディアからすれば元神のガン・フオールも敵なのか…。

アップバーヤード  
神の島を管理しているのがガン・フォールかエネルかってだけでシャンディア達には何の変化もないから仕方ないといえば仕方ない…よね。

「おお〜〜〜っ!!? イリス、ナミ〜〜〜!!! 変なおっさん!! 何やってんだお前らこんな不思議洞窟で〜〜〜!!」

「ルファイ!!…なにしてんの?」

どうしてかは分からないけど、へビの胃袋でルファイと出会った。服も少し溶かされてるし…半泣きだし、だいぶ長い事ここに居たんだろうな…。

「キャプテン…何してるのここで」

「聞いてくれよ! 急に足場が崩れたと思ったたらこの洞窟にいてよ!! 動いたり海雲が流れ込んできたりするんだよこの不思議洞窟!」

「まあ…そりやね。私達も今へビに食われたトコなんだけど…」

「へビに…!? そうか、そりや大変だったな…! お前らへビに食われたのか…!!」

「だからあんたもそうなのよ!! ここがへビのお腹の中なの!!」

ぐいぐいとルファイの鼻を引っ張りながら言うナミさん。

そこまで言ってやっつとルファイは現状を理解してくれたのか驚愕の表情を浮かべた。

「よし、じゃあこいつの尻の穴を探そう」

「どこから出る気だ!」

ボコン！と私とナミさんの拳が脳天に炸裂する。大丈夫大丈夫、ゴムだから打撃は効かないからね！

「…とにかく、この蛇今虫の居所が悪いみたいで私達食べられたのよ、また暴れ出さない内に早くここから……ん？」

「ん？」

ナミさんはそこまで言うてからルフィを見て、まさか…という顔をした。

ナミさんだけじゃなく、この場にいるルフィ以外の全員が何となく察してしまったのだ。

「あんた……まさかずっとここで暴れてたんじゃ…」

「ああ、ブツ壊して外出ようと思つてよ、あはは、あー腹減った、なんか食いもん持つてねエか？」

「……………」

「……どうした？」

「この……どバカ……!!!」

「ギャー……!!!?」

ナミさんの拳骨がまたもやルフィに落ちた。

ルフィが中から攻撃を繰り返してたからヘビの機嫌が悪かったのか……まあ……食べら

れた事に気付かなかつたらここがヘビの胃袋だとは気付かないよね、なんとつて広すぎるし、長いし。

「とりあえず…口っぽい方に歩いてみる？」

「どつちよソレは」

「口っぽい方だろ？あつちだな、口っぽい」

「あたい分かった、この人バカだ」

バカかもしれないけれどルフィは凄いいんだよ!!いやホントに!!

それにバカつてより素直なだけだから！物事を考えられない訳じゃないし！

「外はどうなってるんだろう…ミキータ達大丈夫かな…」

歩きながらそう呟く。一緒にワイパーっていうモヒカンも居たし…なんならこのへじも居るもんね…、どうせならみんな丸呑みされた方が安心できる状況かも、なんて。

「ゾロも居たし大丈夫でしょ、それより心配なのはチョッパーとロビンよ、2人はどこに行つたの？」

「とにかく外に出ないことには始まらないのである。仲間が心配なのなら進むしかある

まい」

「だよね…」

「このままじゃ状況が一切分からないから不安が募る一方だ。

私達は何とか胃液を避けながら長い長い胃袋を歩き続ける。

…どれだけ歩いてても先が見えないなあ…。

「っ！これは…！」

「ピエー…！」

へびがまた体勢を変えたのか、足場が無くなり下へ落ちていく。

横長の洞窟がいきなり縦長になるとか、殺す気満々か！

「我輩は飛んでゆく！」

「ええ、もう切りがない！ウェイバーに掴まって！一気にエンジンかけるから！」

「!!ナミさん！下に出口発見！へびが口開いてる！」

「一気に行くわよ!!あの口が閉じる前に!!」

落下しながらも器用にウェイバーに乗ったナミさんが言って、ルファイが腕を伸ばしてウェイバーと私を掴む。私も近くにいたアイサちゃんを引き寄せた。よし、これでみんな脱出でき…、…、…ん？ルファイ…それ掴んでるトコ…それ…!

「行つつくわよ!!」

「は〜〜!やつと出られる!!」

「待ってルファイ!それ掴まってるトコ噴射口…あぶっ!?!」

「ぶほア！」



ナミさんとガン・フオール、ピエールが凄いスピードでヘビの口へ飛んでいく。

その際にウエイバーから大量に噴射された白煙に押し出されてルフィがウエイバーから手を離してしまった…:ということはつまり私とアイサちゃんも同じという訳で…:

「うわああああ!!?あ、アイサちゃん!」

アイサちゃんはがしつと掴んでおく。このままヘビが口を開き続けてくれてたなら良かったけどそう上手く行くはずもなく…:ナミさんとガン・フオールが外に出た瞬間に閉じてしまった。

「ぐへっ!」

「ふげっ!!」

「いったあ…、あ…:また逆戻りかあ…:

ヘビの体勢が同じならずと下に落下して口から出れたのに、もう元に戻ったのかमतもや口がどっちか分からなくなってしまうた。

「えれエ暴れやがったな…!」

「ピエ〜!」

「あ、ピエール!残ってくれたんだ!」

それは助かる。もうピエールに乗って口に向かおうよ。

「アホ!!何で噴射口なんて掴むんだよ!!」

「悪い悪い！まあ無事だったんだから細かい事は気にすんな！」

「もうやだこいつ……！」

「ルフイ、アイサちゃん、とりあえず早くここから脱出しよう、ナミさんが外に出ちゃった」

アイサちゃんを持ち上げてピエールに乗りながら私は話す。

「ゾロも居るんだろ？」

「居るけど心配は心配なの！ナミさんだけじゃない……ミキータも、ロビンだって心配なの……！」

「イリスは心配性だなア」

「ルフイが呑気なだけでしょ……」

と言いながらもルフイもピエールに乗った。

お、3人も乗ってるのに飛べるんだ、結構力あるねピエール。……2人子供カウントだから実質2人しか乗ってないとか言わないで。

\*\*\*

「あ！あれ口だよね？」

「！閉じてるけどそうだよ！はあーやつと出られる…けどワイパーに怒られるよ…」

ようやく出口に辿り着いた私達は、ヘビの口をこじ開けて外に出た。色々ハプニングはあったけど結構早めに出られてよかった…。

「あれ？石の地面…？」

「ホントだ、土でもないし…どこ此処？」

「うおおー！！出ったア！！出られたア〜っ！！」

ルフィが高い建物に登って叫んでる。私もルフィの隣まで行って景色を見渡してみた。

「…凄い、なんて広大な…遺跡、だよね？」

「ここにあんのか…!?でっけエ、黄金の鐘!!」

黄金の鐘か…そう言えばそんな事もクリケット言ってたっけ。

それにしても見渡す限り一面遺跡だらけだ。

さつきゾロ達がいたとこの遺跡とは比べ物にならない規模だし…。

「もしかして…ここ、あたいた達の故郷…？」

「…黄金都市、シャンドラ。…黄金が見当たらないけど………ん？」

「あ、ちよつとどこ行くんだよ!？」

遺跡を飛び降りて今日に入つた光景を確認する為走る。

…でつかい穴が地面にぽっかり空いてる所の近くに…見えた。

「……つ、な、ナミさん…? ミキータ…ロビンも……」

それにゾロも、チョッパーまで…!! どうして…倒れてるの…?

「おいイリス! 急に走つてどうした…!! …!! …お前ら…!! おい、オイゾロ!! 何があつたんだよ!! お前が居ながらどうして…!」

ルフィがゾロを抱き上げて揺するが反応がない。…全員黒く何かで焼かれたようになっていて…ガン・フォールにワイパーまで…!

「ワイパー!! うわ〜ん!!」

「…あのバズーカの奴だ…! あんなに強エのに…みんな誰にやられたんだ…!」

「エネルだよ!! …こんな事できるのあいつしかいない…!」

「エネル…つて、カ神か!？」

…エネル…!!!

「蛇の中にいる間マントラずつと心綱が効かなかつたからここで何が起きたかは分かんないけど

…!」

「……うウ」

「!ロビン!!」

かすかに意識が残っていたのか、ロビンが呻き声を上げたので急いで駆け寄って抱き上げる。

「…ごめんなさい、みんなエネルギーにやられてしまったわ…」

「何を謝る必要があるの!?それで、ソイツは何処!？」

「…わからない…ハア…よく、聞いて…」

朦朧とした意識の中で、ロビンは何かを伝えようと必死に口を動かす。

「このままだと…この国は、スカイピアは消滅してしまう…」

「空島が!？」

「…あ…あたい達の村も!？」

「『全て』よ…!!空にいる全ての人々を地上へ還すと…言っていたわ…」

「…奴のどこに、そんな事をする資格があるんだ…!!」

それに…みんなをここまで…、私の大事な人達を…!!

「…航海士さんは、立派だったわ。エネルギーについていけば…少なくとも危害を加えられる事は無かった…けど、赤目さん以外の人に歩いて行くくらいなら…つて…勿論、ミス・バレンタインも…」

「…!!…バカ…バカだよみんな…、そんな…やられちゃったら意味ないじゃん!!」

地に倒れ伏すナミさんとミキータを見て、視線を落とす。

「…赤目さん、彼女達は別に、意味もなくやられた訳じゃないと思うわ」

「え？」

「必ず…あなたがどうにかしてくるだろうって、信賴している…ただそれだけなんじゃないかしら…」

……信賴、私が、奴を倒すことが出来ると…？

奴の力は雷そのもの、果たして勝てるかどうか…。

「……ルフィ」

「どうした」

「一発私を殴ってよ」

「え!? あ、あんた何言ってるんだよ!」

「おう」

「あんたも何領いてんだ!!」

ロビンを地に寝かせて目を瞑ると、直後に顔面へ強烈な打撃が飛んできた。

私はその勢いで後方へと飛ばされ、背後にあつた石の壁にめり込んで止まる。

「赤目さん……? 何を…」

「……ふん!」

バキ！と石から体を出して立ち上がり、首を回す。

「……はく効いた効いた、バカな考えが吹っ飛ぶくらい効いたよ」

私はさつき、奴を倒せるのかと思った。：いや、思ってしまったというべきか。

ここまでナミさん達が私を信頼してくれて、私が居るからと体を張ってまで勝てないとわかつているエネルギーに戦いを挑んだ彼女達の気持ちを：蔑ろにする所だったんだ。

勝てるかどうか？ 下らないね。

「ブツ飛ばそう、神を名乗るペテン師を：私の女に手を出した外道を!!」

バシツと手の平に拳をぶつけて宣言する。ルフィも強く頷き、ロビンはそんな私を見てため息をつきながら笑った。

「……!」

体から力が溢れ出てくる感覚がする：この感じ：クロコダイルの時と同じ：!

「えっ!? あ、あんたいきなりどうしたのその髪の色：! それにその、頭の飾りみたいな：!」

「あー……やっぱりそうなってる?」

でも前みたいに体は大きくなってないし、衝撃波も出てないみたい……。出そうと思ったら出せるのかな? 分かんないや：そもそもこの状態が何なのか分かってないし。

「……航海士さん達は私が避難させておくわ：だから何も気にしないで」

「うん、ありがとうロビン、けど無理しないでね」

「それから…黄金郷の、ノーランドの日誌にあった『黄金の鐘』…あれは恐らく空にある。…あの蔓の天辺…エネルギーはきつとそこを目指してるわ」

…!!流石ロビン…場所の特定は済んでたのか!

「でもよ、今エネルギーの奴がどこに行ったのかわかんねえんだろ?」

「…うん、あたいわかる!!この島で『声』が1つ動いてる…すぐちかく!きつとエネルギーだ!!」

「よっし…じゃあそこまで案内してくれる?」

アイサちゃんは迷わず頷いた。

急がないと…このまま奴の好きにはさせられない…この島を、みんなを守る!!



## 64 『女好き&amp;ゴム人間VS 神（ゴツド）・エネルギー』

「ルフィ、イリス！あそこ！」

「了解!!」

「間違いねエな!!」

「うん！あの穴だよ！」

アイサちゃんのいう洞窟に入る。

私とルフィは地面を走り、アイサちゃんは馬になったピエールに乗ってついてきていた。

「……あれは……」

洞窟に入って少し奥へ進めば、かなり広い空間に出た。

自然に出来た穴と言うより……これを作るために掘って広げたって感じか……。

「……でっけエ船だな」

「そうだね……プロペラとかついてるし、飛行船じゃない？」

神って大きく書かれてるし、船の中央には大きな金ピカ地蔵の顔の意匠を凝らしている。

「…そんで、さつきぶりだね、自称神さま。このダツサイ船はなに？」

船端に立つて私達を見下ろすエネルを見据えて不適に笑う。

奴は不機嫌さを隠す事なく言った。

「…実に不愉快、私の“予言”は外れだったと言うわけか…」

「いい歳して予言だの神だの恥ずかしくないの??…アイサちゃん、ピエール……下がってて」

「う、うん」

「ピエ」

1人と1羽が岩陰に隠れたのを確認してエネルをキツと睨む。

「お前か、エネルって奴は。…お前何やってんだ、おれの仲間によ」

「?どのゴミの事かな…口を慎めよ、私は神だ!」

「お前のどこが神なんだ!」

「ルフィ、先行くよ…早くこのゴミを掃除しなきゃいけないんだから」

フツ…と私の姿が消える。

ルフィはギョ、と目を見開きエネルも軽く眉を潜めた。

「(青海の娘…何やらさつきと風貌が違うようだが…どこに消えた…?)」

「下だよ」

「…っ!!」

「50倍灰・去柳薇!!」

ゴオオ!!と目にも留まらぬ拳がエネルギーの腹を貫く。

…文字通り貫いてる訳だが、奴に攻撃ができたわけではない。ただその拳の衝撃波だけで後方の岩壁にクレーターが出来上がった。

「…なるほど、貴様もただの人間ではないらしい。その見た目の変化が鍵か…?だが、所詮超人系…話にならん…!」

びた、とエネルギーの手の平が私の頭に当たる。

「貴様は電撃の耐性も多少はあったな。なら…1億V… 放電!!」

「イリス!!」

ルフィが腕を伸ばして船を登ってきた。

私はエネルギーの電撃に打たれながらそれを涼しい顔で見る。

「…なに?…出力を間違えたか…!ならば…<sup>エ</sup>神の裁き<sup>ル</sup>!!」

これは、一番最初にナミさんと神の島で見た光線のような技だっけ…。

それが私を呑み込み、そして私の後ろから向かってきていたルフィをも巻き込んで壁に激突して大穴を開けた。

「眩しいなあ…そうだ、眩しさに対する耐性でも上げておこう」  
「？」

壁が破壊される程の密度を誇る雷光線の中だけど、私とルフィは普段通りに存在していた。

私はちよつとピリつとする感じだが、ルフィに関してはノーダメージかも。何やつてんだこいつ、みたいに首傾げてるし。

「……、上手く避けた様だな……！」

「え？」

いや私はあなたの目の前にいるから避けようが無かつたんですが…。

完全に現実から目を背けているエネルが持つてる黄金の棍棒をくるくる回して背中の太鼓を2個ドドンと叩く。

「6000万V… ジャムアップル 雷龍！」

龍を模した雷が私とルフィを襲う。ていうかいい加減…、

「バリバリうるさい！」

「!!」

エネルの腹に足裏でスタンプする。またも後ろの壁に穴が空いたが…そのくらいの破壊はシャンディアも許してくれるよね！

「……………」

バツとエネルギーが私から距離を取る。そのタイミングでルフィも私の隣へとやってきた。

「何やってんだあいつ、ゴロゴロゴロゴロ…腹でも減つてんのか？」

「あつはつは！言えてるね…：それで？次はどんな雷で来るの？」

エネルギーを見れば物凄い驚愕の表情を浮かべていた。何だあれ、目玉飛び出て口開いて…顔全体で感情表しすぎでしょ。

…とにかく、ここからどうするかだね。

あ、ルフィが突っ込んでった。

「うおアア!!」

「ツ!!」

ルフィの蹴りは、幾度となく私の攻撃を無効化してきたエネルギーの腹に直撃し、すり抜ける事なく確実に捉えた。

その証拠にエネルギーは口から血を吐き出してよろよろと覚束ない足取りだ。

やっぱりルフィは「ゴム」だから「雷」のエネルギーに対しては絶対的なアドバンテージを持つてるんだ…！

……、あれ、という事は…。

「ルフィ、ちょっと失礼」

「え、何すんだイリス、おオ!？」

ルフィの両足を手の大きさを倍加して片手で鷲掴みにする。

「何だと言うのだ…貴様ら…!!」

「うちの船長はゴム人間でね、あなたには良く効くでしょ…行くよ」

「ゴム…?」

棍棒の様にルフィを肩に担いで構える。

これで完成…変幻自在の、予測不能なゴム棍棒の出来上がりだ。ふざけた見た目だけで奴に対しては効果抜群だろう。

これで奴を殴ってもルフィはゴムだから彼自身にダメージが入る事はない。

「50倍灰!」  
(ごじゅうばいばい)

「っ!」

一瞬で奴の目の前に移動してルフィを振りかぶる。

「心綱マントラ—」

「遅い!!伝説の英雄棍棒!!」  
(レジェンドルフィ)

「ぐほオ!?!」

とてつもない勢いで叩きつけられたルフィの顔がエネルにぶち当たり、この洞窟端の

壁にめり込ませて人型の穴を作り上げた。

「イリス…痛くはねエけどよ、なんかコレおかしくねエか」

「ううん、かつこいいよルフイ、変幻自在の武器なんてロマンでしょ?」

「変幻自在?!?何だそれよくわかんねエけどいいな!」

チヨロイ。

「…MAX2億V、<sup>ヴァーリー</sup>放電!!」

「ん?」

いつの間にか船に戻ってきていたエネルギーが、中央に設置され、船と繋がっている2つの黄金の玉に両手を置き電撃を流す。

流石雷の速度…結構速いね。

「…ヤハハ、見ろ、浮くぞ…私を<sup>フェアリーヴァース</sup>限りない大地へ導く方舟…『マクシム』!!」

「へえ…やっぱりこれって飛行船だったんだ」

「なんだ!?!船が飛ぶのか!?!」

最初に見た時も言ったけど、プロペラ付いてるし飛びそうな雰囲気だったから…飛行船だって言われても驚かないよね。

「ヤハハハハ!!…この方舟の究極の機能への回路が既に開き作動している。名を『デアスピア』…『絶望』という名のこの世の救済者だ!!」

…、船上に取り付けられてる煙突みたいなものから煙が上がってる…いや、煙じゃないな…。

「雷雲…?」

「ヤツハハ…! そうさ、雷雲だ。私のエネルギーによって『デスピア』は極めて激しい気流を含む『雷雲』を排出する! やがて雲はエネルギーを増幅させながらスカイピア全土を闇と共に包み込む…:それらは私の合図で何10本もの雷となり、この国の全てを破壊する!! 例えは…」

バリツとエネルの体から電撃が走り、空の雷雲へと向かっていく。

その電撃が雲へ到達した時、エンジェルビーチのある方角から大きな落雷の音が鳴り響いた。

…こいつ、エンジェル島を攻撃したの…!?

「ヤハハハ…なに、天使達を少しからかってやったのだ」

「神なら何でも奪っていいのか!？」

「そうだ。『命』も『大地』もな」

ルフィの怒声に涼しげな顔で答えるエネル。

…この雷雲が広がれば広がるほど、こいつの射程圏内も増える…。つまり、あの雷をどこにでも落とせるようになるって訳だ。



「貴様はなかなかやるみたいだが…所詮青海人…所詮人間！神に敵う道理などな……つ  
いふー！」

ルフィを振り回してエネルにぶち当てる。

「ごちゃごちゃとうるさいな…神？人間？天使？…何だつていいよ、神に敵う道理も、この『空』を守る理由も…私にとつては同じものなんだから」

「…つ、ぐウ…！なんの、これしき…！」

コツコツとエネルの前に歩いていく。

蹲って息を荒らげてる奴の頭にルフィを振り下ろして船に顔を沈めさせた。

「お前がいると嫁達が危ない…だから私はお前に勝てるんだよ」

「…くつー！」

ボコツと顔を抜いて雷の速度で距離を取るエネル。その顔には焦りがわかりやすく表れていた。

「貴様のその力は…、いや、所詮私へ攻撃が出来るのもあの青海人のゴムとやらで…」  
エネルの持つ棒がバチバチと光り、その棒がまるで三叉の槍のように精錬されていく。

「形ある雷だと思え！」

「…！くそ、刃物の類か…！ルフィ、一旦武器モードは解除しよう！」

「おうーおーし、やっと動けるぞー……つとー！」

エネルが突き出してきた槍を足で払い除けるルフィだが、その槍に触れた瞬間ジュツと焼ける音がした。

「んあぢい!？」

「ヤハハハハ！高電熱スパアだ！」

ルフィ：…ゴムに対して熱や斬撃が有効だと気付いたエネルが標的をルフィに定めて攻撃を繰り返す。

「あちちー！」

「おつとー！」

そのままルフィを貫こうとした槍を片手で鷲掴みにして押さえる。

高電熱がなんだ、今の私には効かない。

「何…!？」

「ゴムゴムのバズーカ!!!」

「……グフツ!!」

その一瞬の隙を突かれて、エネルはルフィの攻撃で後方へ転がっていく。

「ゴムゴムの…、回転弾!」

腕を捻って捻ってして伸ばし、その回転の勢いも合わさった強烈な拳が起き上がる前

のエネルギーに刺さって更に奥へと飛ばした。

「…ゴハツ…、ハア…ハア…、バカめ…、これ、…これしき、…ゲホ！ハア…ハア…！貴様らさえいなくなれば…私の天下なのだ。再び…誰もが私に怯え…崇め！奉る…！！貴様らなどが、私に敵うものか！！不可能などありはしない、我は全能なる神である！！」

「何が全能…全能なら、もつとこの国の人を笑わせてみせろ！」

「…ヤハハハ、所詮そのゴム人間がいなければ手も足も出ない小娘が言うじゃあないか…！見てろ…墜つ島の絶望…もう誰にも止められん……つ！！」

「やめろ！！」

ルフィがエネルギーに腕を伸ばして殴りかかる。

エネルギーは後ろにある金の壁に触れ、熱でドロ…と溶かしたものをルフィの腕に巻きつけた。

グローム・パドリング  
「雷 冶金！！」

「…！！あ、あぢい…つ！！」

巻きついた金は丸く巨大な塊となり、ルフィの右腕にはかなり大きく重い物体がついてしまった。

「青海のゴム人間…貴様さえ封じてしまえば…小娘のパワーやスピードなどは何の意味もない…！！」

「ルフィー！」

金塊を船外まで蹴られたルフィがその重さに引つ張られて落ちそうになる。く…困ったな、ルフィがいないと攻撃の手段が…！

「このオ…！外れる！外せこの！」

「く、…！」

私の力なら、金塊ルフィでも問題なく振り回せる…だけど無闇矢鱈に振り回しても電熱や斬撃で逆にルフィが傷付く可能性が出てきたから…くそ、エネル…神だと自分でいだけの厄介さはある…！

「だけどルフィが居なくなればどうしようもない…！何とか引き上げないと…。」

「っ…！」

「それを私が見ているとも思ったか？」

ルフィを引き上げようとした時、エネルが私をルフィごと船外に蹴り飛ばした。空を飛ぶ船から落とされるって事は…戻るのが難しくなるじゃん…！

「伸びろ…！」

腕を伸ばして船にしがみつく。

後はこのまま元の長さまで戻せばいいだけだが、それは大きな隙があったらの話だ。当然のようにエネルに手を蹴られて、私とルフィはそのまま下へと落ちていく。

「ルフィー！イリス！」

「アイサちゃん！」

ピエールに乗ってアイサちゃんが近づいてきた。

そうか…船が地から離れる衝撃で地面が崩れたからピエールと避難してたのか…！

「イリス！雷が来るぞ!!」

「追い討ちか！抜かりないね…！」

あれは、神エルトルの裁きってやつか…、なら！

「50倍…！」

手の平を高く上に翳して、大きさを50倍にする。

これでアイサちゃん達もルフィーも守れる筈だ。

直後に降ってきた雷が私の巨大な手の平の上に落ちて、そこから全身に駆け巡る。

とはいえ奴の攻撃は私には効かないから耐えるのは容易く、神エルトルの裁きが収まつてもダ

メージは無かった。

「よっー！」

「ぶへー！」

すた、と着地する。あの高さから落ちてきてもダメージないって…やつぱりこの状態はかなり強化されてるのか…。

ルフィは顔から地面に刺さってブリッジしてるみたいになってたので引っ張って救出した。

「アイサちゃん、ピエールも怪我ない？」

「大丈夫！」

「ピエー！」

「よし、それなら…とにかくナミさん達がいた所へ戻ろう！あそこにあつた巨大蔓を登って船に行く！それでいい？」

「おう、こんな金玉がついたところで…おれを止められると思うなよ！」

金玉言うな。

そうして私達はさっきの遺跡へと戻つたのだが、ルフィが重そうにしていた金塊をひよい、と持ち上げて走る私を見てちよつと複雑そうな顔をしていた。…珍しい顔だね。

「…あれ、ナミさん達は!?!」

遺跡へと辿り着けば、そこにナミさん達の姿はなかった。

「多分もう上に登つたんだよ！」

「そうか、ロビンか。よし行こう」

巨大蔓を利用して上の階へ運んでくれたんだね…頼りになるなあロビンは！

…あの船…ぐんぐん上へ飛んでつてるからね…急がないと！

「…イリス、ルファイ…！」

「アイサちゃん？………！」

走り出そうとした私達を呼び止めて、アイサちゃんが俯かせてた顔を上げる。

その顔は涙に塗れ、悲しげに瞳を揺らしていた。

「空島…失くなるの…!？」

アイサちゃん…いや、今この空に住むシャンディアの民…空島の住民の居場所がここ

「空島」の筈だ。

失くなるなんて考えたくない筈だし、アイサちゃんはまだ子供なんだ…シャンディアと空の民のいざこざなんかより、もっと大事な事を本能で分かっている。

「…、空島が失くなる？…あり得ないよ。だってアイサちゃん…私が、ルファイが居るんだよ」

「！」

アイサちゃんの涙に、「空」の想いにルファイの顔つきが変わってるんだ。

「…絶対に救うよ、何もかも。未来の私の嫁がき…悲しそうに泣いちゃダメだよ」

ね、と頭を撫でながら言えば、アイサちゃんはほんのりと頬を染めて頷いた。

「……って誰が嫁だ!!」

そんな叫びはスルーしてルフィと蔓まで走る。

アイサちゃんにはピエールがいるから問題ないだろう。

「……終わりにするよ、ルフィ!!」

「当たり前だ!!」

蔓を煙だてて登りながらルフィと領き合った。

…もう、落とされない、次は奴を確実に倒す!!!



## 65 『女好き、届け鐘の音、終焉の灯』

「お、みんな居た！」

ズボツと雲を走り抜ければ、上の階層にはロビンが居てみんなはその近くに運ばれていた。

「赤目さん！」

「ロビン！みんなを運んでくれてありがとう！」

「ええ、…？その腕の黄金はなあに？」

「ロビン！この蔓の天辺に黄金の鐘があるんだな！」

彼女の質問に今はそれどころじゃないと言っても言うかのようにルファイが問う。

「それは…鐘楼があるとすれば…そこしかないわ、だけでもう…」

「よしー！」

それだけ聞いて頷くと、上の船を睨んで蔓を走って登り出した。

…なら私も、そろそろ出し惜しみなんてしてらんないよね！

「待ってろエネル…！」

ルファイの後を追うように蔓を登る。ここからは本当の本当に本気だ!!オールインクリース全・倍加!!

「おっー！」

いつものように体を大きくした瞬間にあの時のような衝撃波を放つオーラが体から溢れ出す。

荒れ狂うそいつは一旦体に纏わせて、一緒に戦うだろうルフィの邪魔にならないようにした。

彗星の別れでもそうだったけど、このオーラを纏えば更に身体能力が向上するんだよね

…絶対何かあるよこの変化。

「あの船…昇るの速いな…でも…!!」

私の方が速い!!50倍なめるなっ!!

走って登るのも億劫だから、ぴよんぴよん跳んで上を目指そうかな!

「イリスー！」

「私に掴まって!あの船に戻るよ！」

途中でルフィを見つけて、伸ばしてきた腕を掴みまた登る。

「…!マズい…!始まつちやつたよ、空島全体の落雷…!!」

「なんだこれ…!」

四方八方から雷が落ちる音が聞こえてくる。空を見れば、ここは雲の上だと言うのに雷雲が空を覆い尽くしてそこから次々に雷を発生させていた。

「なにが『デスピア』……！そんなモンで人を救済する神なんてこつちから願ひ下げだよ！」

「あア！」

気を引き締めて蔓を登るスピードを上げた。

船はまだまだ上にあるが、この調子なら間に合う……いや、間に合わせてみせる!!

「ルフィ……わかつてるよね！奴に空島は墮とさせない……」

「わかつてる!!黄金の鐘もやらねエ……！あれはなんの覚悟もねエ奴が奪つていいモンじゃねエんだ!!」

ルフィはきつと、クリケット……そしてモンブラン家の人達の為に、ノーランドの為に鐘の音を響かせようとしてる筈だ。

だから黄金だけでその鐘の価値を決め付けるエネルギーを許さないんだ。

「だあ!!」

思い切り跳んで雲を突き抜ければ、ようやく巨大蔓の天辺が見えた。

くそ、船はもう天辺越えてるのか！

「何だ……は……」

「わかんない……」

周りを見れば、社が全壊して辺りに残骸が散らばっていた。

焼け跡から見てつい最近こうなったのだろうし、状況を鑑みればエネルの作業なのは間違いない。

それより…。

「エネル!!」

キツと船を見上げて上から私達を見下ろすエネルを見る。

ルフィも同じように空を見上げて蔓の天辺を目指して登り出した。

「!・ルフィ!」

「!・うわっ…」

ルフィが登り出した瞬間に、蔓の天辺に雷が落ちる。

その衝撃で巨大蔓の先端が折れ、登るための足場も船に辿り着くまでの道も無くなつてしまい、蔓の先端と共にルフィが下まで落ちそうになった。

「伸びて!」

ぐーっと腕を伸ばしてルフィを掴み、長さを戻して回収する。

あの右腕の黄金さえなければルフィはもっと身軽に動けるのに…!

「わ、悪いイリス…:…:にやる!!」

ここからでもエネルが高笑いしているのがわかる。

蔓はエネルに先端を折られたせいで余計船まで距離が出来てしまったし…:まだ翔べ

ば届くか？

「ん!？」

突然にエネルギーが雷となり船から消えたかと思うと、エンジェル島の真上から光が挿した。…雷雲が無くなった…？違う…雷雲が形を変えているんだ…!

雷雲は徐々に形を変え、次第に球状となる。丸い雷雲など流石にこの世界でも見た事がないが…。

「……ッ!」

その雷雲がエンジェル島へと落ちる。今まで見たエネルギーの繰り出す雷とは次元の違う規模のそいつは、とてつもない落雷音を響かせ大気を震わし、電撃が一面に迸る程の威力を持って海雲ごとエンジェル島を消し去ってしまった。

「…エンジェル島が…」

「ヤハハハ!! どうだ? 空から消える間抜けな島を見たか?」

船からエネルギーかニヤリと笑いながら挑発してきた。

エンジェル島…住人は大丈夫なんだろうか。

「…間抜け…? 勝ち誇った顔した間抜けならそこにいるよ」

「…フン、相変わらず口の減らない小娘だ。だが、私はもうその様な挑発に乗ってやる程貴様等を甘くは見えていない。私が欲する物さえ手に入れたら…あの「雷迎」により今度

はこのスカイピアを丸ごと消してやる、お前達の真下に佇むいくつかの“声”も然り  
…」

…声？ということはみんな起きたのか？

「この空に不相応な“人の国”を消し去り、全てをあるべき姿に還すのだ!!それが神である私の務め!!ヤハハハ…さらば娘、ゴムの男…もう二度と会うことも無い!そこで指をくわえて死期を待て、もはや誰も私を止められん!!」

「お前の思い通りにさせるかア!!」

「くどい!」

ルファイが登ろうとした蔓に雷を落としてルファイの行く手を阻む。

その間にも船は上へと昇っていき、またかなり高い所まで行ってしまった。

「畜生…おれは、おっさん達に教えてやるんだ!!おれは!!鐘をならすんだア…!!」  
遠ざかる船に雄叫びを上げるルファイだが、その顔は打つ手の無い悔しきで溢れていた。

「…ヒューマ・インクリース  
神背・倍加」

私は自身の分身とも言える2体を出して互いに領き合う。分身と言っても私は私…  
思考回路も私だ、今考えてることも既に伝わってる筈!

「…船の上昇が止まった、きつとあそこに黄金の鐘がある!」

「思いつきり鳴らしてやろうよルフィ！」

『私』達が連れて行くから！」

「え！どれがイリスだ!?!」

「『私が』」

…3人増えたら分かりにくいなあ。

「じゃああなたイリであなタリスね、*私*はイリスで…」

「ちよつと待つて、なんでちやつかり私の立場奪おうとしてるの？ドツペルゲンガー的なホラーなの？」

「あつはつは！『私』達はもともとイリスなんだから、分かりにくいのは仕方ないよ…それより、次のが来るみたいだよ」

みんなで空を見上げれば、そこにはさっきの数倍は大きな雷迎がスカイピアを覆っていた。

…確かに、あれはマズいね…当たったら痛そうだ。

「どうするんだ、イリス」

「跳んで連れてく…どう?」

「…しし、いいな！」

ルフィが頷いたのを見て、私達3人は全力で上に跳ぶ。

『私』が両足を私と『私』の足裏に当て、両腕はルフィに向かって伸ばした。

「じゃ、私は上に行くよ」

「踏み台ご苦労」

「オイ今踏み台って言ったのどの『私』だ！」

文句を言いつつも私達が跳ぶ勢いに合わせて強く蹴り上げた『私』は、今度は両腕でルフィの腕を掴み思い切り空に放り投げ私達にパスした。

「ルフィ！行って！！後は任せたよ『私』達！！」

「任された！！」

『私』がさつきと同じように私を上へと蹴り上げ、飛んできたルフィを上投げた。

「よし……後は黄金の鐘……」

「イリス！あのゴロゴロにおれを投げろ！！」

「！……いいけど、死なないで、ね！！！！」

ゴウ！とルフィを雷迎の中へと放り投げる。

その際エネルギーに向かって舌を出してやるとあからさまに顔を歪めた。

「どうしたの？挑発に乗ってそんな顔してるけど？」

「……ヤハハハ！貴様は何を考えている？いかにゴムの男だろうと……この雷迎は中で激しい気流と幕放電が蠢いているのだ、無事で済む道理などない！！」



「道理？そんなのがルフィに通用するわけないじゃん」

「……なに?」

中の幕放電が異常にバリバリと発生する。

よくわかんないけど、ルフィの右手に黄金があつたから雷がそれを伝つて放電しているのかな？中で出し切つてくれたら……この雷迎も消せるかもしれない!!

「行けエ！ルフィ!!」

「いや、サボらずにあんたも行け」

「へ?……おおおおおつ!?!ちよ、私はゴム人間じゃないからあああああ」

下から腕が伸びてきて、グン、と“私”が私を雷迎の中に投げ入れる。

鬼！私の鬼!!

「晴れろくくくく!!!!うおおおおお!!!!」

その時、丁度雷迎が勢いよく弾け飛ぶ。ルフィが間に合つたんだ……よ、良かった……私があの中に居ても意味ないもんね……多分、“私”が私を投げた理由は……ここからにあるんだ。

「……!おのれ……雷迎を……!!青海のサルが……!不屈き者めがアー!!」

「!」

エネルギーは怒声と共に体を激しい雷で覆う。

その次の瞬間には、巨大な雷の巨人となってそこに存在していた。

「2億V… // 雷神<sup>アマル</sup>!!」

「…なんじゃありや…!?!」

雷迎を破壊したルフィがエネルギーの姿を見てギョツとする。

…だけど、それより大事なものは…。

「ルフィ、見えるよね…エネルギーの…船の後ろ!」

「あア! // 黄金の鐘<sup>カネ</sup>だ!!」

雷迎も壊して島を守った、なら…後は黄金の鐘を鳴らすだけだ!!

「手を!」

ルフィに左手を出してもらって、それを両腕で掴む。

「行くよ…! 50倍<sup>ごじゅうばい</sup>灰!! ゴムゴムのオ!!!」

「おおおおッ!!!」

グルグルと空中でルフィを回す。ルフィは自分でも勢いをつけて更に回転の速度が上がっていき、黄金のついた腕も伸びて行く。

次第に黄金ではなく、金色の何かを中心に星の環のようになるほどの高速回転となった。

「串刺しにしてくれる!!」

2本の巨大な槍を構えるエネルギー。

…私の嫁や、島や、空や、黄金や、誇りや…何もかもを嘲笑ったこいつに…くれてやる!!!!!!

「う、おおおおおおお!!!!!!  
黄金の星環<sup>アウルステラ</sup>、アアアアアア!!!!!!」

「!!速い…!ゴツ…ハ!」

回転の勢いを全て乗せてエネルギーに叩きつける。

後ろの鐘まで勢いよく振り切り、エネルギーごと鐘に勢いよく輝く金塊をぶつけ奴の意識を刈り取った。

「届け~~~~~!!!!!!」

「……綺麗……!」

ゴーン…ゴーン…と大きな音色が鳴り響く。

ルフィの右腕について離れなかった黄金が砕け散るほどの勢いで鳴らされたその鐘は…まるで今この瞬間をずっと待っていたかのように綺麗で…。

「聞こえてるか!?!ひし形のおっさん!サル達イ!!  
黄金郷<sup>黄金郷</sup>はあつたぞ~~~~~!!!!!!」  
「届いてるよ…!だってこんなにも大きくて綺麗なんだから!!」

ニツとルフィに笑いかけ、ルフィもにしし、と笑った。

「…ん!？」

突然私の体の変化が解け、体も通常に戻った。

…しまった、ここ結構高いのに…能力使えない!

「イリス!」

「わっ…ありがとう…!死ぬかと思った…」

ルフィに掴まれて近くの小さな島雲に降りる。

…能力が使えないどころか、体もろくに動きません!前と違って倒れる事はないけど

…反動はあるんだ…。

「あ…エネルの船が…」

飛行船…マクシムだっけ、そいつがエネルの制御から外れた事によって重力に従い落ちてゆく。

幸い下は海雲なので落ちた所で問題はない。

なんならエネルも船と一緒に落ちているが…まあいいか。

「…黄金の鐘も、落ちちゃったけどいいの?」

「いいさ、鐘は鳴らせたんだ」

なら、早いところ下に降りるかな。

……動けないんだけどね。

「ナミさん達が心配だよ、下に降りよう…ていうか降ろして、運んで！」  
「仕方ねエなア、しつかり掴まってるよ！」

「だから掴めないんだってば！指先1つ足りとも動かないの！」

反動が凄まじいんだよ！

…それにしても、この雲巨大蔓と距離あるな…どうやって下に降りるんだろ。

「ルフィ、ここからあの蔓まで届く……の？」

「ん？」

私達がいた雲から巨大蔓に飛び移るのかと思ったら、ルフィは私を背負ったまま下に飛び降りやがった。

これ、死んだわ…。

「ちよおおおとおおおつ!!!わたし、わた、わたし能力使えないからね!!!いま!!使えないからね!!!死ぬ!死ぬから!!」

「なんだよ、降りようって言ったのイリスだろ」

「そうだよ!降りようって言ったの!!決して“落ちよう”なんて言っていないから!!!」

そりゃルフィはゴム人間だから!?平気かもしんないけど!?

「ゴムゴムの…風船!!」

「わぷっー！」

地面に激突する瞬間にルフィの体が膨らんで衝撃を和らげた。

反動でぼーんと上に飛び、何回かバウンドしてようやく地面に立つことが出来たが…。

「…はあ…はあ、寿命縮んだ、絶対縮んだ」

「何言ってるんだよ、大袈裟だなア」

「大袈裟なわけあるかい!!…ん？メリー号じゃん！」

雲から飛び降りて地面に着くまでに風にも煽られたか、島の端まで来ていたみたいでメリー号を発見した。

ということとは…。

「あ…イリスさん！ルフィさんも！」

「コニスちゃん!!」

やつぱり居た！コニスちゃん！

「…って、どうしたのその頭の怪我!…ん？サンジとウソップは？」

「サンジさんもウソップさんも何処に行かれたのか…。怪我は何でもありません、転びました」

明らかにウソでしょ…その怪我は攻撃の痕だよ。

…まあ、コニスちゃんが隠すなら深くは聞かないけどさ。

「お父様はどこに？」

「！……父は…、それが、私を庇って…エネルギーに…！」

「……、そつか…」

「コニス…」

「コニスさん…」

視線を逸らして俯くコニスちゃんに、私は何も言えなかつた。

ルフィも険しい顔付きになり、お父様も顔に影を落とす。

「……ってあなたの話だよっ!!!」

「生きててすいません!!」

コニスさん…じゃないよ!!コニスちゃんも目が点になってるじゃん!!

「父上く!!」

「おっと…」

感極まって抱きつくコニスちゃんを受け止めるお父様。人騒がせ過ぎるでしょ…。

「…父上…！どうやって…！」

「ええ、すいません。気が付いたら下層に叩き落とされていまして…」

どうやらお父様は、エネルギーの雷に打たれそうになった所を雲の下に落ちた事で逃れる

ことが出来ていたようだ。

「…まあ、なにはともあれ良かったよ」

「ええ…本当にスカイピアを救って頂いて…、ありがとうございます！これでこの国は本当の自由を取り戻せたんです…！」

「気にすんな、おれもアイツはブツ飛ばしたかったんだ」

「私も」

「…何かお礼をしたいのですが、生憎私は何も渡せるものが…」

びく、と耳が跳ねた。ほうほう、お礼とな??ふむ、どんな事でも??

ルフィがまたやつてるよみたいな顔で見てきたが無視しよう。

「なら、私の嫁になって！コニスちゃんは私の嫁！」

「え?お、お嫁ですか…?そうですね、そんな事でよろしいのでしたら…不束者ですが」

「よろしいのです!! やったー！ エネル倒した甲斐あるよ！ うん！」

「元氣じゃん、歩けねエのか?」

「それは無理、動かないもん」

元氣なのは声だけだよ！ 体は今もぐでーんとしてるからね！

でも、やったね。お父様もぽけーつとしてるし。…いきなり娘が口説かれて安心してただけなのかもしれない…。



…まあ、よし！後はナミさん達と合流するだけか！

「じゃ、遺跡まで行こう！コニスちゃんも来るよね？」

「あ、はい！」

もう場所は大体分かってるし、ルファイさえ見張つてれば迷わず着く筈。そんな感じで私達はみんなと合流する為に神の島アップバヤードの森へ入った。

…つてルファイ！そっちじゃないよ!!

## 66 『女好き、空島に別れを告げる』

「あ、ナミさーん！」

「…!!イリス!!」

シャンドラの遺跡へと戻れば、みんながそこに集まっていた。アイサちゃんも居るね。

「お前らそれ食糧か?どうしたんだ」

ゾロの問いには、遺跡へと来る途中の森で神官達の食糧庫を見つけたルフィが袋いっぱい詰めたのできたのだと答える。いくら何でも詰め込みすぎだけどね、ルフィの10倍は大きいよこの袋。

「お前らよくあの高度から…」

「ゴムゴムの風船だ!」

「死ぬかと思った」

「キャハ、何にせよ無事で良かったわ…」

ルフィの背中から私を受け取って横抱きするミキータ。

ナミさんも近くに寄ってきてつんつんと私の頬を突つく。

「全くあんたは毎度毎度無茶ばっかり…ちよつとは私達の身にもなってみなさいよ」  
「ごめんなさい」

「何よその棒読み」

ぐい、と頬を引っ張られる。痛い痛い、倍加出来ないから痛い！

「サンジ！飯！」

「任しとけ、空島の食材をふんだんに取り入れたフルコースを食らわせてやる。…レ  
ディのみんなには特別メニューだよ〜!!」

「いえー！」

「ブーブー！」

はっはっは！男衆のブーイングなど効かぬわ!!

…つて言うほど鬼でもないから、こつそりあげちやおう。特にルフィには今回も世話  
になったし、彼が居なきや情けない話エネルギーを倒す事なんて出来なかった…。いや、む  
しろー！

「イリス、ルフィ、…ありがとう」

「アイサちゃん？どしたの」

「空島だよ！救ってくれて、感謝してるんだ！」

ぶんぶん腕を振り回して感情を表すアイサちゃん。

「はは、失くすには勿体ないでしょ？この空は」

「…う、うん」

ふい、と顔を逸らして頬を赤らめるアイサちゃんを見てフツ…とドヤる。

つついっい幼気な少女すらも墮としてしまったか…空島は墮ちずともあなたの心は私に墮ちた…なんてね、はっはっは!!!

「赤目さん、凄い顔になってるわ」

「こら、調子に乗らないの」

「ふあい」

また頬を引っ張られてびよーんと伸びる。でも調子には乗るよ！うん！

そして夜になり、サンジが料理を運んできた。

匂いにつられてシャンディアの民も、そしてエンジェル島を避難していた空の民もこの遺跡へと集う。

長年いがみ合っていた彼らは、取り戻した自由を謳歌するように手を取り合い…ルフィの掛け声で宴が催された。

「イリス…これ食べる？」

「うん、でも食べさせてね、手が動かないから」

「あ、あーん」

ぱく、とアイサちゃんの差し出したよく分らない肉をひと口食べる。

…食材は分かんないけど、美味しい！流石サンジだ。

「うん、凄く美味しい！」

「ほ、ほんと！」

「ほんとだよ」

うーん、子供に好かれるっていいなあ。なんか癒されるといふか…。

「ジユラア！」

「お、主もご機嫌だね」

あの時追っかけ回されたウワバミも宴会に混ざっている。チョッパ曰く、このへビは幼い頃からずつとこの地に住んでいて…鐘の音をもう一度聞ける日を待ち望んでいたのだとか。

「アイサ、その青海人の子がお気に入りなの？」

「ラキ！そ、そんなんじゃないけど…」

「どうだか」

美人なお姉さんがアイサちゃんに話しかけながら近づいて来た。シャンディアの女

性か…むむ、美人だなあこの人も。

「あんたがエネルを倒してくれた青海人？ありがとね…お陰で私達は…」

「ああ、いいよそれはもう…お礼ならさつきアイサちゃんとコニスちゃん…あー、エンジェル島の女の子に貰ったからさ」

嫁になるっていうね。

「へエ…幼いのにやるじゃない、アイサより少し小さい？」

「同じくらいだと思うけど!?それから私は19歳だからね、勘違い禁止!」

「えっ…」

アイサちゃんも目を点にしてた…。だって仕方ないじゃん…伸びないんだもん!!

「そんな事より!!ね、宴を楽しもうよ、ほらあなたもこっちこっちー!」

「いいのかい?じゃ、お言葉に甘えて」

ラクと呼ばれてた女性は、私の隣に座るアイサちゃんの隣に腰を下ろした。うむ…美人だ。

「イリスちゃん、デザート持ってきたわよ、レディ限定らしいけど」

ミキータがお盆を手に持ち歩いてきて、隣に腰を下ろす。お、これは…。

「ありがとミキータ」

「アイサちゃんもラクも、はい」

「何コレ？」

「見た事ないね、青海の食べ物？」

「見た感じパフエっぽいけど…空島にはないの？」

「まあでも、確かに食の文化も全然違うし知らなくても変じやないか。」

「食べてみたら分かるよ、サンジがレディ限定って言ってる料理は…というかサンジの料理にハズレはないからね」

「そう言つてミキータと一緒についでたスプーンでクリームを掬つて食べさせてもらう。………う、うまあい!!」

「あらミキータ、私の分は？」

「キャハ！勿論あるわよ、はい」

「ナミさんもこつちに集まつてミキータからパフエを受け取る。」

「ロビンも強引にここへ連れてこられ、これまた強引にパフエを押し付けられていた。…ミキータ、なかなかやりおる。」

「赤目さん、前から気にはなつてただけど…あの変化はなあに？あなたの能力とは関係が無さそうなの…」

「ふとロビンがそんな事を聞いてきた。…うーん、なんだろう。」

「私にもわかんないんだよね、何だろう？」

「何を倍加したらああなるのよ……」

「さあ……溢れ出るナミさん達への想いかな……」

「キャハハ！なら私も出来るわね、イリスちゃんへの想いで強くなるわ！」

ふんす、と鼻を鳴らして胸を張るミキータ。なんだこの女はア……襲ってやろうかア……！

「案外人じゃ無かつたりして」

「ブツ……ロビン？私は見ての通り人間ですが？」

「フフ……そうね」

全くもう……こうやって冗談を言ってくれるようになったのは嬉しいけど……なんていうか心臓に悪いよ。

ぱくぱくとミキータやナミさんにパフエを食べさせて貰い、容器が空になった所で私はアイサちゃんを見る。

……うーん、名残惜しいなあ。

「……じゃ、お別れの挨拶でもしようか」

「えー！」

バツ、と私達の方を向くアイサちゃん。その時余程驚いたのか手に持っていたパフエの容器を落としてしまった。でも中身はもう空か……じゃ、良かった良かった。



「どうして!? もつとゆつくりしていつてよ!! 青海人にとつてここは珍しいんじゃないの!?」

「ふふん、そりや珍しいよ、雲の上の島なんて…滅多に来れるトコじゃない」

「アイサじゃないけど、私からもお願いするよ、島を…空を救つてくれた恩人なんだからもつとお礼をさせてくれなきゃ…」

「だつたらあなたも私の嫁つて事で、はい決定」

お礼がつて言つた女性は軒並み嫁ね、決定—。

「よ、嫁…?」

「うん嫁。…で、私達はこれでも海賊だからさ、用事が済んでるのにいつまでも同じトコにはいられないよ、…特にうちの船長がね」

「…でも、あたいたい…もつとイリスと…」

涙ぐむアイサちゃんに優しく微笑みかける。…本当は頭撫でたり、抱きしめたりしたいけど体がなあ…動かなくてなあ…!

「だつたら、また会いに来るよ。…だからそれまで、私が手を出せるくらいにいい女になつてね」

「騙されちゃダメよアイサ、コイツは私達にもろくに手を出さないから」

「ちよつと! 騙してないから!! アイサちゃんもそんな顔しないで!」

はあ、はあ…：せっかくいい感じに締めようと思ったのに…！

「…ううん…。あたい、平気だ!!あたいはまだまだ子供だから…一緒にいけないけど、だ  
けどもう一度イリスが来てくれるなら待つ!!」

「アイサちゃん…」

凄いな…：確かまだ9歳なんですよ？私が9歳の頃はどんなだったかなあ、思い出せな  
いや。

「オイお前ら！ちよつとこい！」

「ん？」

ルフィが私達を呼んでいる。宴会疲れなのか大口開けて寝ているヘビの口元で手を  
振っていた。

「ナミさんーつれてってー」

「はいはい…つよ」

おう…：お姫様抱っこですか…、やだ、イケメン…！

「イリス、もう行くの？」

「ううん、出発は多分明日の朝だと思うよ」

「…明日の朝」

そうやって考え込んだアイサちゃんをラキに預けてルフィの元へ行く。

…コニスちゃんにも挨拶したいなあ。

「どしたのルフィ」

「ししし、…黄金を奪って逃げるぞ」

「黄金？」

小声で言うルフィに小声で返すナミさん。でも黄金郷はないし、鐘は海に沈んだ筈でしよ？

「どうした、もう帰るのか？」

「なんだなんだ、予定より半日早くねエか？」

他のみんなも集まってきて、ルフィはそれを見てへビの口内を指さした。

「こん中に黄金が大量にあったんだ、ソレを貰ってく」

「いいね、海賊っぽくて」

私は賛成、お礼お礼言われるのも何だし…女性陣のお礼は嫁入りとして、男性陣が困るから黄金を奪ってチャラにしよう！

「おれはこの島の貝がダイアル気になるなア…黄金は任せていいか？」

「そうね、それぞれしたいこともあるだろうから…黄金探索組とそれ以外で別れましょう」

「了解！」

そうして私達は数手に分かれて行動する事になった。ちなみに私は黄金探索組……  
 なんだけどもまずはアイサちゃんの所に戻る。

「イリス！ルフィはなんて？」

「予定変更なしで明日ここを出るってさ。…それでなんだけど、私達が島を出るのはみんなには内緒ね」

「どうしてだい、私達から言わせればあんた達にはとれだけ感謝を述べても足りないくらいなのに」

「簡単だよ、海賊に湿っぽい別れは似合わないじゃん」

そう言えば2人とも納得してくれた。

…本当は黄金を奪って逃げてるのがバレたくないからです。

逃げるようにヘビの口内へ向かう。

それにしてもナミさん、細いのに柔らかい触り心地…特にぽよんとか。

「…あ、体動く」

「本当？」

能力も使える…ていうか反動長いな！全・倍加と比べ物にならないくらいあるじゃん！

ん！

「えー、次イリスちゃんを抱っこするのは私の予定だったのよ!!」

な、に……？勿体ない事した……。

とはいえ動けるんだから仕方ない。私が動ける事で持てる黄金の数も増えるでしょ。ナミさんに下ろしてもらって自分で歩く。ルフイを先頭にして長いこと歩けば、辺り一面黄金に染まった場所に出た。

「へー！このへび何食べてるんだろ……」

「な!?あつたる黄金!」

「ああ、こりや凄エな」

ちなみに黄金探索組は私、ナミさん、ミキータ、チョツパー、サンジだ。後は船長ルフイ。

「凄い、見てナミさん、王冠!」

「素敵!あ、これはサウスバードの……!」

各々で持つてる袋にばいばい黄金を詰めて行く。こんなに黄金があつたら何持つて行こうか迷うなー、この量は絶対全部は持つていけないもん。

そんな感じで探索は続き、気付けばかなり時間が経っていたのか背中にかけてある袋一杯に黄金が詰まっていた。おー、ガシャガシャいつてる……黄金がガシャガシャしてるんだよ、日本人なら憧れるよね!

「キャハハハ!これをお金でイリスちゃんの黄金像を作るわ!等身大がいいわね

…」

「それはやめて頂きたいのですが…」

ミキータならしかねない…！でもそんな所も可愛いよ！！

ヘビから出れば、既に空からは陽の光が差していた。もう朝だったのか、ヘビの中で  
 どんだけいたんだ。

「へびしかいねエじゃねエか、昨日のゲリラとか天使ちゃん達はどこ行ったんだ？」

「わかんないけど、いないなら都合がいいよね、バレたら事だよ！」

「そりやそうだ、何せこんな黄金奪って逃げようってんだ！」

ジャラジャラと袋を揺らして遊ぶ。もう残りのみんなは船に行ったのかな？

「お前ら！黄金探索は終わったのか！」

「ウソツプ、ゾロ！凄かったよ、こんなにあつた！」

どん！と袋を見せれば2人もおー、と声を上げる。

ゾロとウソツプが担ぐ分の袋にも黄金を詰めてたから、それを2人に渡しておいた。

「あとはロビンだけか」

「あ、じゃあ私船に戻って出航の準備してくるわ」

「ああ、コニスも準備してくれてるぞ」

コニスちゃんはメリー号にいるのか。…よし、彼女にも挨拶する機会はありそうだ

ね。

「それにしても、この空島ともお別れか。いぎ地上に戻るとなると名残惜しいもんだ」

「ああ、おれはもつと貝ダイアルを探したかったなア」

「キャハハ、それはそうとウソツプくん、例のアレは出来てるの？」

「お、アレか…、材料なら揃ってるぜ、船に戻ればすぐにでも取り掛かれそうだ」

む、ミキータの新しい武器つてやつか…？ どんなのだろ。

「ダイアル貝を使う事でおれの武器も、ナミのタクトも強化できる！ ついでにゾロの剣もフレイバーダイアル貝

で強化してやろうか？」

「やめろ」

どんな強化を施すつもりだったんだ…？ どっちにしろここの貝はかなり便利なものだって事はわかる。ミキータの武器にもソレを使ってるんだよね？

\*\*\*

それから待つ事数10分、ロビンの姿が遠くに見えた。

…ロビンの後ろにシャンディアも空の民も全員居るんだけど…。

「ちよつとマズイよね、今私達宝持ち逃げするトコなんだけど…」

「ちよつと所じゃねエぞ、まさか俺達がしている事がバレたのか!？」

「おーいロビ〜ン!! 逃げ逃げ! 逃げるぞ、黄金奪ってきた!!」

「アホ、言うな!!」

サンジがバシつとルフイの頭を叩く。ロビンも状況を掴めたのか軽く頷いて走ってきた。

「よーし、逃げろ〜!!」

「逃げろ逃げろ〜!!」

逃げ足にも自信がある麦わらの一味、かなりの速さで島の人達を振り切つて船へ帰る頃には後ろに人影など一つも見えなかった。…ん? いや一人居るな…:あれは。

「オイ早くしろ! 誰か追い付いてきたぞ! 誰だ!？」

「誰でもいいだろ!! 船を出せ!!」

「ー待って!!」

その一人は大きな声を上げて私達を止める。

私はその声の主を船の上から真つ直ぐ見つめた。

「ハア…ハア…!! つ…、イリスー…!!」



「聞こえてるよ、アイサちゃん！」

その一人はアイサちゃんだった。まさか私達に追いつけるなんて…でもがむしやりに走つたのだろう、その足には数多の傷跡が見える。

「あたい…あたいね!!待ってるから!!イリスに相応しい…女王の嫁に相応しい女になって、待ってる!!!だからまた、絶対来てエーーーーー!!!」

「…やるじゃない、アイサ」

「キヤハハ、私達もうかうかしてらんないわね」

「フフ」

…まだ子供だつていうのに、こうして想つてくれたんだ。前世なら私は逮捕物、今世でもこれは逮捕物かもしれないけど…9歳の嫁つても悪くない。そもそも元から賞金首だからね、どんとこい。

「うん!!ぜつつたい、ぜつつつつたいに来るから!!その時はまたよろしくねー!!!色々トーーーー!!」

「アイサー!その時は私が嫁の全てを叩き込んであげるわ!!」

「キヤハハ!私ともイリスちゃん談義でもしましょう!!」

「うん!!またね!!!」

ぶんぶんと手を振るアイサちゃんの姿が段々と遠くなっていく。

…またここへ来た時にあんた誰？とか言われたら泣くけど…。

「それで、コニス、私達は何処からこの島を出るんだっけ？」

「あ、はい、空島から青海へ帰るには雲の果てに行かなくちゃいけないので、まずは下に降りない」と

ああ、ここが白々海だからその下の白海についてことね。

という事はまだちよつとかかりそうだね、数10分くらいか。

「では私が案内させて貰って下さいません」

お父様がメリー号の前につけてある小型の船から声を上げる。案内役を買って出てくれたのはかなり助かるよ。

「コニスちゃんともお別れかあ…いや、また会えるんだけどね？」

「ふふ、そうですね、いつでもいらして下さい。イリスさん達でしたらどんな時も歓迎しますー！」

「次はベッドの上で歓迎してもらおうかな」

「は、はい…」

顔を赤くして俯くコニスちゃんから視線を逸らす。こ、肯定しちやつたよ…ど、どうしよ。

「あんたまた自分から言つといてカウンター喰らつてるじゃない。別に今からでもいい

「のよ、この船にもベッドはあるんだから」

「ちよ、ちよつと待つて！ほら、もうすぐ雲の果てだからね、やっぱり次の機会に……」

「キヤハハ……そんなこと言つても良いのかしら？」

「ひゃ……つ」

ミキータがコニスちゃんの胸を下からぽよん、と持ち上げる。な、なんだあれは……  
神秘、か……!?

「もう次にここへ来るのは一体何年後かしらねえ……で、本当に良いの？イリス」

「……ぐ、ぐぐぐ……!!い、良い……の!!!本当に良いのお……!!!」

うわーん!!と叫びながら部屋へ駆け込んだ私を見てみんなはため息をついた。

……私は、ヘタレだなあ……。

\*\*\*

「……あ、あの、やっぱり私って魅力ないんでしょうか……」

「はあ……そんな事ないわよ、あいつの嫁に相応しいくらい美人でスタイルも良いわ、自信

を持ちなさい」

「でもイリスちゃんも頑なね、無理矢理じゃないと出来ないっていうのもイヤじゃない？」

「うーん……ロビンはどう思う？あんた達も」

イリスの頑なな態度に悩む女性陣。いきなり話を振られた男性陣の中の1人であるウソツプが腕を振って答える。

「おれらにやわかんねエよ、普通好きいな女が居たら色々したいモンじゃねエのか？おれは恋とかあんまわかんねエけど」

「おれも」

「おれもだ」

「あんた達に期待した私がバカだったわ」

ウソツプ、ルフィ、チョップからは予想通りと言って良い返事が帰ってきた。

元々そういうのが分かりそうな奴らでもないし、とナミは軽く首を振って気持ちを切り替える。

「でも、赤目さんってそういうコトに興味が無いわけじゃなさそうよ」

「それなのよねえ……」

うーん、と悩んだ所で答えが出る筈もなく、ナミはイリスの不思議な行動に頭を抱え

るばかりだ。

「前にどうしてしてくれないのよって聞いたらはぐらかされたし…」

「キャハ、ただどスキンシップは激しいわね、もつとして欲しいくらいよ」

「赤目さんにも、何か私達に言えない秘密があるんじゃないかしら」

「……そう、ね」

秘密だけで済めば良いけれど…、とナミはこれ以上考えないようにした。

…この先の、そう遠くない未来で————

————イリスの“秘密”を切っ掛けとした大事件が起こる事になるとは、まだこの時の誰も想像すらしていなかった。

偉大なる航路（グランドライン） デービーバックファイ

ト編

## 67 『女好き、船大工を求める』

「みなさん、前方をご覧ください！見えました、雲クラウド・エンドの果てです！」

「おー！あのトンネルみたいな門を潜れば青海かあ」

コニスちゃんの指差す前方にある門を見て言う。

…あーあ、空島…というかコニスちゃんともお別れか。

「あの門抜けたら雲ミルキエロードの川で一路、青海つて具合か」

「うー、コニスちゃん、またね」

「はい、待ってますから！」

そう言つてコニスちゃんは船を飛び降り、門から伸びる雲道に着地した。

「…名残惜しいですが、皆さんお元気で！」

「ええ、送つてくれてありがとう！」

「何から何までありがとう！」

みんなでそう言って大きく手を振る。また来なくちや……ここには心残りが一杯あるからね。主に嫁関係で。

「ではすぐに帆を畳んで船体にしがみ付いていて下さい!」

「おい!おっさんの言う通りに!だいぶ高速で行くみてエだ!」

「そりや7000mの坂道だもんな!急げ!!」

「黄金も部屋に運ぶぞ!!」

一氣に忙しくなったなあ!

せつかくなつてくれた嫁との別れは寂しいけど……次の冒険の事を考えるとまたワクワクしてくるよ。

「ジヨ~~~~ツ!!ジヨ~~~~!」

「あ、一緒に来ちやつたサウスバード!」

忘れるな、とでも言うかのように船へ入ってきた鳥が怒りを顕にするが、適当に凄んだら大人しくなった。やつぱり一回はつ倒したからかな?

「次の島への記録もバツチリ!」

「んん、そうだ!……ここ降りたらまた新しい冒険が始まるんだ!!野郎共、そんじやあ……!!  
青海へ帰るぞオ!!」

「おお!!!」

みんなで腕を上げて雄叫びを上げた。

くく、次はどんな美女に会えるんだろう！

「じゃあねコニスちゃん!!また絶対くるからねー!!」

「はい!!…また、必ず!!ではみなさん、落下中お気をつけて!!」

よし、船にしがみ付いたね、万が一がない様にナミさんとミキータとロビンは私が掴んでおこう。何たって落下するんだから振り落とされたりするかもしれないもんね！  
落下なんだから……。

………ん？落下中??

スポーン、と船が門を乗り越えれば、その先に道などなく…つまり、それが意味する事って…。

………え、もしかして………このまま7000m落下!!?

「へそ!!」

「へ、へそじやなあああああああああああい!!」

もしかして空島の人は青海人が空を飛べると思っちゃってる感じ!?

死んじやうよこれは!!ああ何としてでも嫁だけは助けなければ…!!

ボフツ

「…!!」



「た、タコ!」

重力に従って落下する船を雲から飛び出してきたタコが掴む。そのまま頭が風船のように膨らんで、気球のように船は落下速度を減速させた。

「た、助かったの…?」

「キヤ、ハハハ…はは、流星に、死んだかと思つたわ…」

「うわ〜面白エ〜! バルーンだ!」

まだ心臓バクバク言つてるよ…コニスちゃんもこう言う事なら初めから言つといてくれても良かったのに…。

「……! ねえ、聞こえる?」

「ああ、バツチリな!」

カラアーン、カラアーン…と心地よい音色が空から流れる。この音は…間違いない、黄金の鐘だ!

見送りに鳴らしてくれたんだろう。きちんと回収出来たみたいで良かった…。

「うっはっはっは! いいなコレ…」

「ああ、い〜い気持ちだ〜…」

「んー、…風もいい感じだし…何だか寝ちやいそう」

ふわあ〜、とあくびすればナミさんが座つて膝を叩いてくれたので喜んで飛び付く。

うーんすりすり…なんて素晴らしい手触り…！ズボン越しだけど！

そんな感じで本当に数分間寝てた私は、気付けばもうかなり下まで降りてきていた。言うだけで寝るつもりは無かったのに…鐘の音とナミさんの太ももコンボはとんでもない威力だったよ…。

ごろん、と上を見ればナミさんのナイスな形をした2つのぽよんが見える。その向こうには段々小さくなっていくタコの頭。

うむ…絶景かな絶景かな。

「起きたの？早かったわね」

「うん、夢見心地だったよ」

…あれ、なんかさつきおかしな光景を見たような…。

「んー？」

じー、とナミさんの胸を見る。…いや、全くおかしくない…いつも通りのナイスバディだ。

何だろ、萎んでるタコの頭が関係してるのかなあ…。うん、タコの頭がねえ…萎んで行つてねえ…。

「つて萎んで!？」

「わっ！ちよつとイリス！急に起き上がらないでよ！」

「どうしたんだよイリス」

「バツ！と飛び上がった私にルフィが首を傾げるので、上を指差してみんなに伝えた。

「タコが縮んでるよ！まだここ空でしょ!?このままじゃ落ちるから衝撃に備えて!!」

「何だとオ!!?」

みんなして上を見上げてだらだら汗を流す。そして次の瞬間、一気にタコは空気が抜けたかのように縮んで浮力が無くなり…つまりメリー号がタコの手を離れて落ちていく事になった。

「うおお!!」

腕を増やして伸ばしてなみさんとミキータとロビンを掴み、私も強く船体にしがみついた。

「ああああああ!!何とか耐えて!!メリー号!!!船の耐久倍加…!木材の柔軟性を…

!

「おおおおおおお!!?」

「ドッパアーン!!と凄まじい水しぶきを上げながらメリー号は海へ着水した。海水が大量に入ってきて冷たい…、みんなは大丈夫なの!？」

「ナミさん、ミキータちゃん、ロビンちゃん、イリスちゃんも大丈夫か!？」

「何とか……みんなは!?」

「死ぬかと思つた……」

「おれも……」

思つただけなら大丈夫だね!

「……でも、何とか無事に戻つてこれたね、一安心かな」

「……しかし、すげーとこに行つてたんだな」

サンジがタバコをふかしながら空を仰ぐ。落ちてみれば……また遠い場所だよね……。

……よし、また行くぞ空島! みんなに会いに!

「野郎共……! 帆をはれ……!! 行くぞ次の島!!」

「おいちよつと待てよルフィ、少しは休ませろ!」

「甘い甘いつ……そんな事言つてられる海なら誰も苦労しないでしょ!? 波が少し変なの、

さあみんな動いて、とり舵!」

とり舵いっば……い……! ……おおつ、凄い大波だ!

「何だあの波! 中に何かいるぞ!」

「シーモンキーだ!」

波の中から猿の顔が出てる。シーモンキーって言うらしいけど……何で波の中に?

「まあいいか、急げ急げ!」

あんな波に飲み込まれちゃお仕舞いだからね、とにかく急がないと!

もう慣れた作業をテキパキとこなして波から逸れる。ナミさんの指示に従っておけばこの船は空だつて飛べるからね、波を躲すくらい訳ないんだよ!

そうこうしている内に、波もだいぶ落ち着いてきた。油断は出来ないけど……気を張り詰める必要も無いだろう。

「キャハ、ナミちゃん、持ってきたウェイバーは海でも使えるのかしら?」

「ああ、そういうえば気になるわね……試してみる! イリス、手伝つてくれる?」

「もちろん」

奥からガタガタとウェイバーを取り出して海へ浮かべ、すぐにナミさんが乗り込んで走り出した。

「……良かった、この海でも使える!」

「最悪の場合嫁だけに乗せてウェイバーで逃げ出すとか出来そうだね」

「その時に航海士さんが真っ先に連れていくのは赤目さんな気がするわ」

そうなつたら私よりロビンやミキータを優先して貰いたい……。

使用できる事を確認出来たナミさんはすぐに船へ上がつてきたので腕を伸ばしてウェイバーを回収しておいた。

「見ろ、これが苦勞して何とか手に入れた憤風貝だ!」

「おおー！」

「えっ、凄いやないウソツプ！それって空島でも珍しいやつでしょ!?このウェイバーにも搭載されてるっていう…」

「まあな！けどこれはミキータ用だけ？それに加えてプレスタイアル風貝ジェットタイアル3つで完成だ！本当は全てプレスタイアル風貝にしたかったんだが…」

それでも凄いやー…けど、どう使うの？

「ダイアルもいいけど……」

くい、とナミさんが部屋を指差すのでみんなぞろぞろと中は入る。

中の机の上には大きな袋が所狭しに並べられていて、私達はそれらを見て目を輝かせた。

「今はコレの山分けよ！まず私とイリスに8割」

「いやちよつと……」

ジャラ…と山盛りになった黄金を横に避けようとしたナミさんをみんなで止める。私にとって何？そんなにあつてもどうせナミさん達に飛んでくよ！

「ちよつと待つて、山分けもいいけど…私達にはそれよりもっと大事な事があるよね？」

ウソツプに話を振ると彼は首を傾げていた。そう考えなくてもすぐに答えは出すけ

どね。

「船の修繕だよ、カヤから貰ったメリー号も…気付けば色んな所に傷が出来てるからね」  
「ああ、そりやいいな！大賛成だ！」

「言われてみれば、そうよね。なら宝の山分けは一旦保留って事でいい？メリー号を修繕してもらって残ったお金を分けましょ」

みんなで領き合う。東の海のあの村から…こんな所まで私達を運んでくれた船だ、たまにはしつかり労ってあげないとバチが当たるよ。

……それに、空島でのあの出来事も気になるし。

「だったらよ、『船大工』を仲間に入れよう！旅はまだまだ続くんだ、どうせ必要な能力だし…メリーはおれ達の家で、命だぞ！この船を守ってくれる船大工を探そう！」

「……コイツはまた……」

「ホント、稀に核心をつくよな……」

本当にやらなきやいけない事を本能で分かるから、ルフィは凄いだよ。後ろを歩いて行く私達船員が不安に感じることも無いからね。

「そりやそれが一番だ、そうしよう！」

「よーし、じゃあ次の島からは船大工探して事で！」

「「おおー！！！」」

こうして私達は船大工を探す事になった。船大工って言うとは海パンにアロハなイメージがあるなあ……何でだろ??

\*\*\*

「うわあああッ!! シーモンキーだ!!」

「ついてきやがったのか!? まずい、風がねエ！」

「漕ぐんだ、漕げ〜〜っ!!」

現在メリー号はまたもや大波に襲われていた。波の中にはシーモンキーの顔もあるし、この大波はシーモンキーが引き起こしてるの？

「緊急報告! 緊急報告!! 12時の方角に船発見！」

「何だ敵か!!」

見張り台に立っていたウソツプからそんな声が上がった。

「こんな時に何だよ！」

「いや、それが…旗もねえ帆もねエ! 何の船だか…」



「何だそりや、何も掲げてねえ!? 何の為に海にいるんだ!?」

ルフィにとつては海に出る＝海賊か海軍つて認識なのかもしれない…。

「わからねエ…それより乗つてる船員クルが異様に少ねエし…それにすげエ勢いでイジけるぞー! まるで生気を感じねエつー!」

「よいしょ、よいしょ! それよりその船さ、この大波に気付いてるの!? その方角にいるのなら…このまま波の餌食だよ!!」

「ちよつと行つてくる!!」

「えっ、ルフィが行くの!?!」

オール漕ぐつてのに何でルフィが居なくなるの! う…負担が…! あ、かわりにウソツプが降りてきてくれた…見張りはロビンか。

「おー…いいお前らー!! 大波と猿が来てるぞー!! 舵きれくく!!」

「……おい、船だ、海賊船だ!」

「野郎共! 立ち直れ、敵船だぜ! 宝を奪うぞ!!」

何だコイツら、やっぱ敵か!

「待て波だ! 大波が来てる! 避けるのが先だ!」

「あの船に逃げられちまうぞ!」

「大砲を用意しろ！」

「オイ誰に命令してんだ!!」

「てめエがやれ!!」

「舵！舵舵!!」

「うわあ…まとまりないなあ…」

ゾロとサンジを混ぜ込んだらあなるのかな？

「誰か号令を！航海士〜！」

「いねエよ!!」

「船長〜!!」

「いねエよ!!!」

「ダメだ飲まれる〜〜〜ツ!!!」

「波1つ切り抜けられねエのかア!!」

航海士はまだしも、船長もいないのかい。船出すな。

波から逃げるメリー号に追い抜かれてもなお、後ろでもたもたしてるその船は案の定

簡単に波に飲み込まれていった…。

…知らない人達だけど、死んでなきやいいね。

「もつと遠くへ行くこう！漕いで漕いで！」

みんなで必死に漕ぎ、何とか普通の海に辿り着けた。

気候も波も穏やかだから…島が近くにあるのかも。

「ふー、おさまったか…」

「というより、あの大波はシーモンキーのいたずらよ。湿度も気温も随分安定してるか

らもう次の島の気候海域に入ったんじゃないかしら」

「ロビン、なんか見える？」

下から見上げながら問う。…ああ、あのぼよん、いい下ぼよんだ…。

「島がずつと見えてるわ」

「「言えよそういう事は!!」」

ビシー！とルフィとウソップが突っ込む。2人からしたら次の島は冒険の合図だか

らね、待ち切れないのかな。

「わりと霧が深いわ」

「霧か…危ないわね。イリス、前方確認お願い」

「はい」

視力倍加で見ようかな。流石に霧の向こうは何を倍加しても見えないけど。

「所で……さっきの船気にならねエか？船長がいねエとか航海士がいねエとか……旗はねエわ帆はねエわ、やる気もねエわまとまりねエわで……海賊の一団として成り立ってねエんだ！」

ウソツプが身振り手振りでそう言う。あの時はオールを必死に漕いでたからよく船を見てないんだけど……。

「海戦でもやって負けたんだろ、で、船長が死んで……色んなモン奪われて……」

「死んだなんて可哀想だね……」

「それが、この海だろ」

くうくゾロのくせに！このマリモ!!

……ジロつと睨まれたんだけど、心とか読めたりする？

「いやいやそれがよ……よく船も見たんだ、そしたら戦闘の形跡もねエんだよ！なのに海賊として『命』とも言えるようなもんがああ船には何もなかった!!」

「じゃ海賊じゃねエんだろ、気にすんな」

「……んー、どうみても海賊だと思っただがな、あいつら」

確かに、普通の船ではなかったよね。宝を奪おうとする一般船があつてたまるかつての。

「海岸が見えたよー！ミキータ、イカリよろしく」

「任せて頂戴！」

深い霧を抜けて、ついに島が姿を現した。

……うおー、見事になんつつつにもないな。所々に細長い木がぽつぽつあるくらいで、見渡す限りの草原って感じだ。

「うおー！！大草原だー！！」

すぐに我慢できなくなつたルフィとウソップとチョッパーが島に飛び降りる。それに対してナミさんが咎めたが、まあ大丈夫だろう、何せこれだけ見え透いてるんだから何かあつても対処できそうさ。

「コラー！遠くに行くなー！！」

「まあまあ、ルフィもいるんだし大丈夫だよ」

「キャハ、でもいいわよねここ、ゆっくりイリスちゃんとお散歩したいわ」

「あら、いい考えね！ロビンもどう？」

「ご一緒しようかしら」

え、気付いたら最高のシチュエーションに発展してた!?

「オイ、何だこの船は」

「ん？」

ゾロの言葉に海側を見れば、大きなガレオン船が島と挟むようにメリー号の前まで接近していた。

うわ…霧で気付かなかったのかな？

その海賊船の前方左右から先端に手の形状が取り付けられた鎖が勢いよく飛び出し、その手が島をガツチリ掴んだ事で鎖と島と船に囲まれてメリー号が動かせなくなってしまう。

……何だ？やろうつての？

「いきなり何するの！このデカ船!!」

「船の行く手を封鎖された!!」

ゾロも刀を抜きかけ、危うく戦闘になりかけたその時…ガレオン船から聞こえてきた声に首を傾げる。

「我々は『フォクシー海賊団』。早まるな、我らの望みは……『決闘だ!!』」

……………、決闘???

## 68 『女好き、始まるデービーバックファイト!』

「…『デービーバックファイト』?」

決闘がどうか言ってきたseitらの船は、キツネの船首に不細工なドクロを描いた旗で成っている。

…ふ、海賊船としての格はうちの勝利だ…! 大きさだけが全てじゃないし!!

「そうだ、その戦いの火蓋は互いの船の船長同士の合意によって切つて落とされる。今おれ達の船長がお前達の船長、『モンキー・D・ルフィ』に戦いを申し入れている頃…!」  
「どうでもいいけど、じゃあ今その船潰したらその何たらファイトやんなくていいってハナッ?」

「何言つてんだお前、バカだな」

なんだとこの変テコマスク共!!!

「イリスちゃん、知らないのか? 『デービーバックファイト』は海賊のゲームなんだ」

「ゲーム?」

「…そうよ、海のどこかにあるという海賊達の楽園―『海賊島』でその昔生まれたというゲーム…より優れた船乗りを手に入れる為、海賊が海賊を奪い合ったというわ」

流石ロビンは物知りだなあ。

…それにしてもなんて物騒なゲームなんだ、私はポチポチ出来るゲームさえあればそれでいいのに!

「そんな事も知らねエでよく海賊をやつて来れたな、「デービーバックファイト」つてのは“人取り合戦”の事さ!俺達が挑むのは3コインゲーム!3本勝負だ!!」

「あ、そ。勝手にやつてればいいじゃん、私達は受けないよ」

「はあ…これだからガキの女は…」

「よし、この船ぶつ潰してやる」

ガタ、と乗り出した私を血相変えてサンジが止めてきたから仕方なく大人しくする。

…ゲームだか何だか知らないけど、煽ってくる方が悪くない!?

「1勝負いちゲームごとに勝者は相手の船から好きな船員クルーを貰い受ける事ができる!貰われた船員クルーは速やかに敵の船長の忠実な部下となる!深海の海賊“デービー・ジョーンズ”に誓つてな!!」

「何それ、私達受けるメリット無いじゃん」

「勝てば俺達の誰かはそつちの仲間になるんだぜ?」

「いらない」

バツサリ斬り捨てて言つてやった。だつていらないもん、可愛い子は居なさそうだ



し。

…いやそりや、表に出てないだけかもしんないけど。

「まあそういうな、欲しい船員がいなかった場合は船の命、海賊旗の印シンボルを剥奪する事も出来るんだぞ」

「それもいらぬ、ダサイ」

「!!」

それも絶妙にダサイ。ルファイ考案の印シンボルはいい出来だよほんと。

ガーン…と効果音が背景に見えるくらい落ち込んでるけど、いい加減に諦めてくれな  
いかな…。

「…もしかして海であったあの纏りのない妙な船…帆も無くて船長もいなかったのは…」

ナミさんの疑問にガレオン船から声上がる。うるせーナミさんに返事するな。もうそれすらなんか嫌だ!

「もしやキバガエル海賊団の船にでも会ったか?あの船ならさつきゲームの餌食になったのさ!見ろ!こいつが俺達の新しい仲間!!」

「ウオーー!!フオクシー海賊団万歳く!!!」

…喜んで見える元キバガエル海賊団の面子も、内心ではどう思ってるか分からない

て事か。ゲームのルールとして、選ばれた船員クルーは船長に絶対服従らしいからね。

「バカバカしい! 私達はそんなゲームの申し入れ、絶対に受けないわ!!」

「バカめ!! それは……ぐへエ!!」

ナミさんをバカ呼ばわりした奴に去羅波さらばを1発放った。

「いい加減にして。ゲームだかなんだか知らないけど……そのデービーバックファイトとやらがもし始まるとしても、それまで私達は休戦してる訳でもなければ仲良しでもない……敵同士、そうでしょ? ならこうして向かい合ってる今……どうして私が大人しくしなきゃいけないの?」

「キャハ! その通りね」

「それは1船員クルーが決めていい事ではない! このゲームは互いの船の船長の合意によってのみ開戦する!」

だから開戦までは何してもいいって事じゃないの?

「泣けど喚けどお前達の船長、モンキー・D・ルフィが首を縦に振ればお前達も全員ゲームの参加者となるのだ!!」

「……確かに、そうだったら従うよ、でもそれまでは何してもいいんでしょって事を聞きたいんだけど」

「ああ、構わない。……だが、ゲームが幕を上げるのも時間の問題! 船長同士が同時に撃つ

2発の銃声が開戦の合図だ!!」

「じゃ、開戦まで敵戦力潰しておくか、行——」

ドン!!ドオン!

……えく……。開戦しちゃったよ……。敵船の中がはしやぎにはしやいでるのが分かって少し腹立つが、こうなったからには手を出せない。

「……ちえ、ゾロもサンジも楽しそうだね」

「面白そうじゃねエか」

「ちよつと興味があるんだ、奴さんの食糧の指定がありなら真っ先に欲しいと思ってる」  
なるほど、ゾロはバカっぽい理由だけどサンジはよく考えてるね。

「声に出てるぞガキ」

「あ、ごめん」

「謝れば良いってモンじゃねエだろコラ!!!俺が何歳でめエより歳上だと思ってやがる!!!」

「タメだよ!!ブツ飛ばすぞ!!!」

ゾロに飛びかかろうとした所を私の胸から生えてきた腕2本に抑えられる。……く、口ピンまで楽しそうな表情浮かべてるじゃん……!

いやね、ゲームだからって負ける気はさらさら無いけど……負ける可能性が0じゃない

なら受けたくないよ!だってナミさんもミキータもロビンも可愛いじゃん!絶対取るよあいつら!!私なら取る!3勝してナミさんミキータロビンと取る!!!

…とまあ、少し熱くなってしまったけど…始まったものは仕方がない。  
私にはあ…とため息をついて色々と諦めたのであった…。

\*\*\*

『開会式を始めます!皆さん静粛に!!』

「さーさーフランクフルトはいかがが!？」

「うるせー!てめエ黙れ!!」

「早く始めろ!!」

静粛について言われてるのにうるさいなこの人達…。

開戦の合図のすぐ後、船からフォクシー海賊団の連中がぞろぞろと降りて屋台やら何やらセットしていたのをぼーっと眺める事数10分、ようやく準備が終わったのか開会

式が始まった。

ていうか開会式って……。ただのゲームで大袈裟だよな。

「さーて野郎共っ！騒いじやいやん！」

「ポルチエちゃん♡」

おっ、何やらカワイイ娘ちゃんもいるじゃん!!

デービーバックファイトと書かれた看板が掲げられたステージの上に立つのは、ポルチエと呼ばれた青髪のスタイル抜群美女だ。その隣には変な髪と鼻の中年男とルフィが座っている。

「敗戦における3ヶ条<sup>ガ</sup>を今から宣誓するわよー！1つ！「デービーバックファイトによつて奪われた仲間・印<sup>シンボル</sup>全てのもはデービーバックファイトによる奪回の他認められない」：2つ！「勝者を選ばれ引き渡された者は速やかに敵船の船長に忠誠を誓う物ものとする」：3つ！「奪われた印<sup>シンボル</sup>は2度と掲げる事を許されない」!!以上、これを守れなかった者を海賊の恥とし、デービー・ジョーンズのロツカーに捧げる!!守ると誓いますか!?!」

「誓う」

「誓う!!」

即答で双方の船長が受諾した事で、周りから大きな歓声が上がった。

ルフィはともかく…なんで隣のヘンテコ男まで自信満々なんだろ…ゲームってそんなに難しいやつなのかな。

「キア、このコインを見ろ！」

奴らの船長、『フォクシー』がコイン3枚を海に投げ入れた。

それによってオーソドックスルールによる3コインゲームがデービー・ジョーンズに報告され、開戦の幕が上がったらしい。

「さっきも言ってたけどデービー・ジョーンズってなに」

ロビンに聞いてみる。彼女は流石に物知りで直ぐに返事が返ってきた。

「悪魔に呪われて深い海底に今も生きているという昔の海賊よ」

「オールサンデー…ああもう面倒くさいからロビンでいいわよね！そのデービー・ジョーンズってのは伝説上のやつなんでしょ」

「ええ、ミス・バレンタイン」

ミキータがぶすつとした顔になる。あれは完全に私も名前前で呼べよ、みたいな感じの顔だよ、可愛い。

「海底に沈んだ船や財宝は全て、甲板長だった彼のロッカーにしまわれるの。沈んで来るものを何でも自分の物にしてしまうデービーの名前から、敵から欲しい物を奪う事を海賊達は『デービーバック』と呼ぶのよ」

「なるほど、だからそれをモチーフにしたゲームの名前にも使われてるって事か」

デービー・ジョーンズの事は何となく分かったけど、結局デービーバックファイトの細かいルールとかは知らないままだなあ。

「おい！オーソドックスルールはわかるなおめエら！出場者は3ゲームで7人以下！1人につき出場は1回まで、1度決めた出場者に変更は無しだ！」

「わかってる、あっち行ってる！」

サンジがそう言って向こうの船員を追い返すが、私としては助かったよ、今の情報だけでも知らない事だらけだったから…。

「3ゲームって、種目は何？」

「レース・球技・戦闘って渡された紙には書いてあるな。戦闘は俺が行くぞ」

ゾロが出場選手記入の紙を見ながら言う。戦闘に関してはうちの戦闘員みんな強いから誰が出てても大丈夫だろうけどね。

「なにー!?待てよおれがやりてエ！」

「俺に任せとけ、足がウズウズしてんだ！」

ルフィとサンジも立候補するので、じゃんけんで決めた結果第3回戦の「コンバット」というのはルフィが出場する事になった。

残りのレース、球技はそれぞれミキータ、ナミさん、ロビンがレース。

私、ゾロ、サンジが球技だ。補欠員はチョッパーとウソップ。

1回戦目のレース…いいな、美女3人が固まっているのは目の保養にもなるし!

紙に決まったメンバーを記入して提出すれば、あちらは既に決めていたのか時間を置かず1回戦を始めようとしていた。3人は急いで準備された樽の前へ進む。…なんだあの樽。あの前に来るよう指示があったから行つてるけどレースにどう使うの?

『ギアギアまずは海岸づたいの島1周妨害ボートレース「ドーナツレース」!手作りボートの木材はオール2本、空ダル3個!!それ以外の部品を使っちゃその場で失格!船大工の腕の見せ所だ!なお司会は私フオクシー海賊団宴会隊長イトミミズ。南サウスブルーの海の珍鳥“超スズメ”のチュチューンに乗って空から状況をお伝えするよ!!』

え…船から自分で作るの…?新しいな…ていうか船作れるのかなあの3人。ナミさんもミキータも汗凄い流してるけど大丈夫かな、ロビンも心なしがちよつと困り顔だよね。

「…ごめん!私、船を動かす事は出来ても作るのは…」

「キャハ!私は動かすのも作るのもムリね」

「知識だけなら…少しは」



ロビンが3人の中では唯一の希望のようだ。  
…ウソツプでも居ればまだマシな物が作れたかもしれないけど。

\*\*\*

そうして出来上がった船は……、……うん、見事な、そう……いかだだった。  
空樽を3個合わせてロープで括っただけの簡易すぎる物だ。

「アレ大丈夫か？今にも沈みそうなんだが……」  
「仕方ないよ……下手に触るよりそのままの樽を使ったほうが良いって判断したんじやないかな、きつと」

遠目で見ればナミさんもほろりと涙を流してるし、苦肉の策なのは間違いないね……。  
『まずは麦わらチーム！航海士ナミ！運び屋ミキータ！考古学者ロビン!! 乗り込むボートは「タルタル号！」』

「ウオオ〜!!あのオレンジの女イカすぜ!!」  
「おれア黒髪の姉さんが仲間欲しいぞ！」

「バカめ!金髪のナイスバディがいるだろう!!」

「お、抑えろイリスちゃん、バカが騒いでるだけだつて…!」

「抑えてるよ、ちよつとボコしてくるだけ」

あいつら人の嫁を何だと思つてるんだ!!ブツ飛ばしてやる!!絶対にな!!!

『さアそしてフォクシーチーム代表は我らのアイドル、ポルチェちゃん!率いるはカジキの魚人カポティ!!ホシザメのモンダ!!乗るボートは「キューティワゴン号」くく!!!』  
「ちよつと、サメつて…魚じゃない!」

「いやん!魚がダメだというルールは無いわ!」

めちやくちやだ…。ボクシングにゴリラ連れてくるやつなんて居ないでしょ、常識つてもんをさあ…。

…いや、待てよ?という事は…私達もルールにない事なら何してもいいつて事…?

『さア両組、スタートラインへ!!』

ナミさん達や敵チームは言われた通りボートでスタート地点まで漕いでいく。もうそれだけでかなり困つてるっばいけど…大丈夫かなあのボート…。

『さアさアお待ちかね、勝てば宴会敗ければ深海!!情け無用のデービーバック!!ここで1発ルくる説明!!この海に浮かぶロングリングランドを…1周せよ!!以上つ!!なお、銃・大砲・爆薬・カトラス、凶器は何でもOKだア!!卑怯だ何だと抜かした

奴ア一海賊の恥と知れ!!』

「レースになるのか?」

「違うよ、このルールは今ボートに乗ってる人に向けて言ってるんじゃない。私達にだよ」

「……そうか、妨害が認められてるって事か!!」

しかも、奴らはその事をそれとなくしか伝えていない。

……つまり、私達の不意を突いてナミさん達に外野から攻撃しようとしているに違いない。見れば明らかに大砲などの準備をしているし。

『さあ、受け取れ! 迷子防止の永久指針<sup>エターナルポース</sup>! 精々島から離れすぎないようにお気をつけて、幸運を祈るよ!! 位置について!! レディくくくイ……』

ダツ! と大砲を構えるフォクシー海賊団に向かって走る。

『ドーーーナツ!!!』

「おらア!!! 誰に向かって武器構えてるの!!! 半月去羅波!!!」

半月状に飛ぶ斬撃がフォクシー海賊団を襲った。

狙いは大砲とか、まあ武器関係だけど……奴らに当たってもまあいいよね!

『両組<sup>りょうちゅうぐみ</sup>一斉にスタート!! と同時にお邪魔攻撃を始めようとしていたフォクシー海賊団に巨大な斬撃が襲い掛かるー! ツ!! これは一億の賞金首、『大好きのイリス』

だーっ!!!!』

「ギヤアアアア!!!」

「ナミさん達に何しとんじやコラア!!」

私の襲撃より少し遅れてサンジもバズーカを構えていた数名の船員を蹴り飛ばす。

まだまだ…お邪魔は止まらないよ!!

にじゅうばいばい  
「20倍灰…!去羅波一文字!!」

「いやん!?!」

「ウオオ!?!」

縦長の斬撃をキューティなたら号に放ち、その船体を真つ二つに斬り分ける。

はーっはっはっは!!!それでボートを漕げる物なら漕いでみろオ!!

『鬼かこの女はーっ!!?!あの『女好き』ともあろう者が女の乗るボートを斬り倒したーっ!!!!』

「ブーブー!!つまんねエ真似すんなよ!」

「レースになんねエだろ!!」

「バーーーーーカ!!!ルール違反じゃありませんかーん!!」

ベーツと舌を出してフオクシー海賊団を煽る。

それに私は女に攻撃出来ない訳じゃない…今はナミさん達を援護しなきゃならない

んだから、優先順位つてもものがあるでしょうが!! そりやポルチエちゃんには斬撃当たらないようにしたけど!!

しかし敵のチームもなかなかタフで、何せメンバーにサメと魚人が居るのだ。ボートが割れてもポルチエちゃんが片割れに乗り込み、それをサメと魚人で引いて泳ぎ出す。

「…流石サメと魚人だね、速い!」

「オイ待て! あいつら…何してんだ?」

ウソップが首を傾げるので私も見てみるが、確かに何してるのか分からない。

2本あるオールはどちらもロビンに任せて、能力で生えた腕で操っている。ミキータはその間何もせずボートに手を添えており、ナミさんはボートの尾から海面に手を突っ込んでいた。

……うん、わかんない!

「お!」

「飛んだア!」

『な、なんと!! タルタル号、空を飛んだア!! そのまま次の障害である、ロングサンゴ礁“・ロング渦・ロング岬と飛び越えたー!!” タルタル号、序盤で一気に大幅リーード!!』

「何だありや…ロビンちゃん達は船にどんな改造を…」

「すげエー!ナミ達すげエぞー!」

「うおー行けー!!ナミー!!ミキータ!!ロビンー!!」

…あの3人で、あそこまでの瞬発力が出せる方法なんてあるのかな?

ロビンの能力に何か秘密が?

「……あれ、ねエー!」

「どしたのウソツプ」

「おれのバックにしまつてた衝撃 貝が……つて、まさか!!?」

「……まさかというか、それしか無さそうだね」

ナミさん、レース前にウソツプから盗つたね……。わざわざ盗つたのは私に気付かれな  
い為かな。知つてたらあんな暴力貝をナミさん達には使わせなかつたと思う。

空を飛んだのはミキータの能力だね。船とみんなの重さを纏めて1キ口に変えたん  
だろう。メリー号は大きすぎるから出来ないけれど……あれだけ小さいボートなら可能  
だったという訳だ。

流石にそこまで差が出来てしまえばどうしようも追いつく事は出来ないだろうけど  
…不安要素は早めに片付けておこう。

「ちよつとゴール地点まで行つてくる」

「オイイリス、貝は後でちゃんと返して貰つてくれ!頼む!」

「うん、分かった！」

さつきチラツとゴール地点に向かう奴らの船長の姿が見えたんだよね…。なんだっけ、コロツケだかハンバーグだかそんな感じの名前の大男に乗ってた。

「…とにかく、ナミさん達への邪魔を私が居る所で出来ると思うな！」

何がなんでも、嫁達には安全にゴールしてもらおうからね!!!

## 69 『女好き、瞬殺グロッキー!』

「追いついた……!」

全力で追いかけていたからか、この島が平坦過ぎるからか、フォクシーの姿を確認するのになんか時間は掛からなかった。

その頃にはナミさん達もゴールの手前で、このまま行けば間違いなく勝てる。

…でも、わざわざナミさん達の乗るボートと並走して陸を走るフォクシーと大男が気になる…。何か仕掛けてくるのは間違いない。なら…。

「おい! てめエら! よくもここまで手こずらせてくれたな!! ノロノロビ」

「させるかア!! 去柳薇!!!」

「なぬツ!!? ぐへエツ!!!」

ナミさん達を見ていたフォクシーの後ろから拳をお見舞いする。卑怯だなんだと言われようが…こいつよりはマシだと思う、うん。

『ゴーーーーーッツル!!! なんとデービーバックファイター回戦、「ドーナツレース」を制したのは!!! まさかまさかの継ぎ接ぎイカダ、タルタル号くくく!!!』

「てめエ女好き! 卑怯だぞー!!!」



「オヤビンの邪魔をするんじゃないやねエ!!」

「はーっはっは!!負け犬が何か吠えてるなあ……!んく?」

私の素敵な嫁達に危害を加えようとした時点であなた達の敗けは決まってたから!!

ざーんねーん!!

「ぐふウ……て、ためエ女好き……よくもやってくれたな……!」

「はん、ナミさん達に何しようとしたのかは知らないけど、どうせ下らない事だったんでしょ」

「下らないとはなんだ!おれのノロノロビームは当たれば最強なんだぜ!」

「はいはい、当たればね」

クロコダイルやエネルギーみたいな、そもそも避けようがないって攻撃じゃない時点でいくらでも対策は打てるっての。

……でもこの人も能力者なんだ、なんか意外だ……。

「イリス、何話してるの?」

「あ、ナミさん!ミキータ、ロビンも!お疲れ様ー!」

「キャハハ!余裕だったわ!ねえロビン?」

「ええ、ミス・バレンタイン」

「……………」

勝ったけど別の理由でがくりと項垂れるミキータ。そんな彼女を見てクスクス笑っているロビンを見る限りでは…ミキータの反応を面白がっているようにも見える。

「丁度いい…！てめエらもよーく見とけ！ノロノロビームの恐ろしさ…!!聞くよりも見るこの威力!!ハンバーグ!」

「へエー!」

奴が隣に佇む大男に声をかければ、その男はフォクシーから少しだけ離れ、何の躊躇いもなくフォクシーにバズーカを撃った。

「ノロノロビ〜〜ム!!!」

「おお!」

フォクシーの指先から放たれた円錐の様に広がるその光線に、ハンバーグの放った砲弾が当たる。

するとその光を浴びた砲弾が言葉通りノロノロした動きになり、宙でゆっくりと動いていた。

「フェツフェツ…見たか!光を浴びた全てのものが減速する。この原因はノロマ光子…この世に存在するまだまだ未知の粒子だ!この光を受けたものは生物でも液体でも気体でも…!他の全てのエネルギーを残したまま物理的に一定の“速度”を失う!おれはノロノロの実を食ってそいつを体から発せられるノロマ人間になったのだ!!フェツ

フエツ……ぐふエ!!?」

「オヤビーーン!!!」

ノ口くなっている筈の砲弾の速度が元に戻ったのか、かなりの勢いでフォクシーに直撃した。すつごい音したけど……大丈夫?……って、心配するのはおかしいか。

「……、ごのどおり……、約30秒経てばその後速度を取り戻す……フエツフエツ……」

「でも負けたじゃん」

「……そうだけど……」

ガクン、と膝を突いて落ち込むフォクシー。

まあどうでもいいけど、勝ったんだから何かしら指名しなきゃいけないんだよね……。

『第1回戦決着〜!持ってけドロボー!!誰を指名するんだー!?私か!?!』

いらん。

という事なので、ルフイ達の元へ戻ってどうするか話し合う。

ぶつちやけ、向こうの船員で欲しい人なんていないもんね。ポルチエちゃんくらいか……でも指名して来てもらうのはなんか違うよね。ギスギスしそうだし。

「人は要らないからお金が欲しいね、食糧とか」

「それが一番良いけど……ルールのにはどうなの?」

『ダメだよ〜!デービーバックファイトはあくまでも人取り合戦っ!!物取りじゃないか』

らね〜!!』

ナミさんの質問に実況のなんたらって人が答える。物で唯一取れるのは旗ってことか…。

「ルフィは？誰かビビつとくる船員いる？」

「いや、いねエ」

ビビつととか言ったらビビに会いたくなってきた。震える。

キャプテンであるルフィが要らないと言っちゃったので、私達は指名無しにした。つまり何も要らないということである。…ルフィ、こういう時の嗅覚は流石だね…。

\*\*\*

「…さて、2回戦は私達だね。…ゾロとサンジか、寝てても大丈夫そう」

「アホかてめエは」

「あまりレディに負担はかけさせねエ、俺に任しとけ」

準備に時間はそう掛からないとの事で、その通り待つ事数分…私達は海岸近くの草原

に集められていた。

天然の芝生のように平坦で広いそこに、サッカーのようなフィールドが白線で描かれている。

互いのフィールドの端には大きな浮き輪がぽつんと置かれており、中央は自陣敵陣を分ける為の白線が引かれて、各陣地の中央にも白線で円形が引かれていた。

『準備が完了した所で、「グロッキーリング」のルール説明をするよっ！フィールドがあつてゴールが2つ〜!!球をリングにブチ込めば勝ち!!』

ゴール…あの浮き輪のことだね。

『ただし！「球」はボールじゃないよ！人間!!両チームまずは球になる人間を決めてくれっ!!』

ああ、そういうルールか！前世ではそんな怪我人続出しそんなルールのスポーツはなかったけど、この世界ならなかなか楽しめそうなスポーツだね！

「球は私で良いよ、この中だと一番身軽だからね」

「いや、イリスちゃんにそんな役を押し付けるくらいなら俺が」

「大丈夫、そんな簡単に運ばれたりなんかしないよ！」

そう言いながら3人でコートに入れば、向こうの船員が私の頭に毬のような球を乗せた帽子を被せた。

なるほど…これで球役を一目で判断させる訳だ。

「みんなー！似合うー?!」

「キャハハ！キュートよイリスちゃん！」

「あんたはイリスの事となるとほんとイエスマンよね…」

「赤目さんだから、まだ見た目は悪くないわ」

「ロビンまで…。私がおかしいの？」

ぶつちやけナミさんが正しいと思うよ。もし球役がサンジかゾロならちよつと絵面の違和感があってもないことになってそう。

ゴンダバダバ♪ゴンダバダバ♪

『おっと聞こえてきた、奴らの入場テーマ曲!!「グロッキーリング」無敗の精鋭!!そうだ、こいつらに敗北などあり得ない!その名も「グロッキーモンスタース」!!今フィールドに…登場くくくオ!!』

「でっか…」

訳のわかんない陽気な音楽が流れ出し、奴らの船から相手の3人が姿を現しこの場に降りてくる。

1人はさつきフオクシーと一緒にいた大男で…その後ろにそれより大きな大大男、そ

してその後ろにはもつと大きな…というか巨人族程の大きさはある大大大男だ。

『先頭には四足ダツシユの奇人ハンバーク!! 続いて人呼んで「タツクルマシーン」ピクルス!! そして再後方には巨人と魚人のハーフ!」  
 “魚<sup>ウオータン</sup>巨人”のビツクパン!! まさにモンスター共の行進!! さアさアさア! 1回戦の雪辱を晴らしてくれ!! 第2回戦「グロツキーリング」…始まるよ〜!!』

ハンバークでも作るの?!

『我らの誇るグロツキーリング最強軍団に対するは、1回戦でお邪魔軍団を蹴散らした  
 “暴力コック” サンジ!! そしてその上オヤビンまでぶつ飛ばしやがった “女好きのイリス”!! 60000万の賞金首、 “海賊狩り” ロロノア・ゾロ!!』

前に並べば更にその大きさが分かる。しかも1番大きなハーフの巨人が球役だった。

「凄いね、相手」

「そう言うのはちったア焦った表情を浮かべてから言え」

「えへへ…バレちゃったか」

大きいだけの相手なんてどうとでもなる。逆を言えば相手の球役は巨大だからこそ私達がゴールに入れやすいって事でもあるのだ。

そうして審判が駆け寄ってきて、コイントスをする。

ハンバークがコインの向きを当てた事でフィールド or ボールの選択権は相手とな

り、ハンバーグはそれでボールを選んだ。

『ボールを取ったのは我らがグロッキーモンスターズ!! 麦わらチーム“ボールマン”は敵陣のミッドサークルへ! 試合中球印を頭につけたボールマンは2人! 敵のボールマンを敵陣リングに叩き込めれば勝ちだよ!!』

ミッドサークルって、あの丸い枠線か。

よし、ボールマンイリス、行きます!!

ふんす、と鼻から息を吐き出して敵陣のミッドサークルに入る。

「おいお前ら、武器は反則だぞ、刀を外せ!」

「え、そうなんだ」

『そう!これは球技!武器を持つちゃゲームにならないよ!!』

腰に下げている小太刀を外してナミさんに渡す。ゾロも同じように外してウソツプに預けていた。

まさか遠距離技をこんな所で封じられるなんて思ってたけど…ルールなら仕方ないよね。

『さアさアまったなし!! 麦わらチーム“ボールマン”イリスが敵陣サークルについたよ!』

「ビックパン、速攻でぶっ潰して行くぞ!!」



「……………。は〜」

「ぷーっ!!…ぷぷぷぷぷぷ、聞こえてねエ！」

「いや…イヒヒヒヒ、いや…お前、イヒヒ…聞けよっ！イヒヒヒ!!」

「ぷしし!!…ぷししししし!!あア…え？」

「ぷー!!…ぷぷぷぷぷぷ!!」

なんだこいつら、楽しそうだなあ。

『いつも勝手に楽しそうだ、グロッキーモンスターズ!!さアこの楽しい勢いで〜!!時

間は無制限…1点勝負!!』

要するに敵のビックパンとかいう魚巨人を敵陣のリングにブチ込んだら勝ちって事

でしょ。

『まさかの1回戦、何も指名しなかった麦わらチームがもう1度勝つか!はたまたやり

返して船員クルーを奪えるかフオクシーチーム!!激突寸前!「グロッキー〜リング」!!今ホイッスル笛

が鳴るよ!!』

ピ〜〜〜〜〜ッ!!!

『試合開始〜〜〜っ!!!』

その合図と同時に大いに観客が盛り上がる。

じゃ、始めますかっ!!

「やるどー!!!」

「おっと!」

開始直後に肩をぶつけるようにタツクルしてきたタツクルマシンことピクルスの肩を、衝突する前に片足を上げて足裏で受け止める。

『1億の首は伊達じゃ無い!!女好きイリス、ピクルスのタツクルを難なく受け止めたー!!!』

「20倍灰・去鷹媚!!」

「ふべっ!」

肩を弾き返して、体勢が崩れた所を狙って顔面に強烈な一筋の軌跡を残す蹴りを放った。それは狙った箇所が違うことなく直撃し、ピクルスを1発で昏倒させる事に成功した。

『なぬー!!!?なんとピクルス、女好きの1撃で軽くKO〜!!!』

「サンジ!ゾロ!上がって!!一気に攻めよう!」

「任せろ!首肉コリエシュート!!」

「ふぼオっ!」

行く手を邪魔するハンバーグも軽く蹴散らし、早くも残るはビックパンだけとなった。

…いやあ、こうなっちゃえば負ける気しないね。

「無刀流…！龍卷たつまき！！」

「うお…！！」

荒れ狂う暴風をその身一つで発生させたゾロが、それをビックパンにぶつけて体をグ  
ラつかせる。

刀無しでなんでそういう事が出来るのかなあ、本当に人間？

「サンジ！ゾロ！私をお願い！！」

「指示が適当なんだよてめエは！」

「ごちゃごちゃぬかすなマリモヘッド！ここはイリスちゃんに従っておけ！」

サンジの足とゾロの腕に乗る。ビックパンは大きいからね、勢いで倒さないと！！

「後は頼んだぜイリスちゃん！空アルメ・ド・レール軍パワーシュート！！」

「下手こくんじゃねエぞ！龍卷たつまき！！」

「了解！！」

『女好きイリス、飛んだー！！！！コックのサンジ！海賊狩りのゾロ！2人の合わせ技が  
奴をビックパンのもとへ誘うぞー！！』

「ぶし！そう簡単に…！！」

「いや、簡単に終わらせて貰うよ！！20にじゅうはいはい倍灰！！」

大きく手の平を広げてビックパンの顔に手を置く。見るがいい!華麗な私のダंकを!!

「巨<sup>グランド</sup>大な・右<sup>ハンド</sup>手!!!」

置いた手の平がビックパンの顔を驚掴みできる程大きくなり、アイアンクローを決めて押し倒して行く。

倒れる位置にはリングがあり、思いつきその中へビックパンの頭を叩き込んだ。

「よし、勝ちっ!」

強く打ちすぎたせいか気絶して起き上がってこないビックパンを放って、ばんばんと手を払いゾロとサンジの元へ戻る。

『……………、はっ!!?まてまさか、まさかまさかまさか!!?グロッキーモンスターズ…何も出来ずに2回戦敗北くくッッ!!そして麦わらチームの勝利だくく!!?なんだこの速さは!!無敵のグロッキーモンスターズを瞬殺したアくくッッ!!』

無敵とか言うほど強く無かつたけどね。ハンバーガー要素は名前だけなの?

「審判、笛は?」

「は?え?」

「私達勝ったから。笛」

親指で倒れ込むビックパンを指して言うと、審判は分かりやすく顔を青くさせて高ら

かに笛を吹いてくれた。

これで正式に私達の勝利が決まった訳だね！

『デービーバックファイト2回戦！無敵のグロッキーモンスターズを無傷で下し！！ゲムを制したのはこいつら!!!麦わらちくくム!!大勝利くくっ!!!』

圧倒的勝利に対する大歓声を浴びながら、私達はナミさん達の元へと戻ったのだった。

次でラストか…ま、ルフィだし何とかしてくれるよね。

## 70『女好き、星のフォクシー』

2回戦で勝ち取った奪う権利もパスした私達は、ついに最終戦に移ろうとしていた。とはいえ3回戦目は「コンバット」という戦闘が主体となるものだ。それならルフィが負けるとは思えない。

「ルフィ、後は任せたよー！」

「おう！任せとけ！」

『波乱のデービーバックファイト、最後のこの1戦が運命の鍵を握るく!!種目はそうみんなもお待ちかね!ゲームの花形、「コンバット」オくくくッ!!』

「待ってたぜー!!」

「早くやれくくッ!!」

やっぱり戦闘ってだけあって人気なのかな。ルフィの懸賞金が1億って事を知っておきながら逃げない事を見るに、敵も何かしら勝算があるんだろうけど…。

『さア〜ア!フィールドメイクを始めるよくくッ!!』

「フィールドメイク?」

『用意されているのは大砲、そして中には1発の鉄球!出場選手が2人同時にこの大砲

を回す!!」

ルフィが呼ばれてその大砲に近づいていく。

要するに2人で大砲を回して止まった位置で撃ち、砲弾が当たった所が戦いの舞台つて訳か。

「…いやいや、その大砲を用意したのはそっちじゃん。いくらでも不正できるよね?」

『不正なんてしてないよ〜! なんなら確認しても大丈夫!! ただし、元に戻せるならね〜!』

「…なるほど」

大砲をバラして確認するのは勝手だけど戻せなかったら分かってんだろ? なア? つて脅しか。

「イリス、どうするの?」

「大丈夫、任せて」

ひらひらと手を振ってその大砲の前まで歩き、それに手を当てる。

するとその大砲の隣に全く同じのものが複製され、よっこらせと持ち上げてウソツプの元へ向かい彼に渡した。

こういう事に関しては一昧の中でウソツプがダントツだからね。

「……………」

フォクシー海賊団の皆さんが額から流す汗の量が尋常じゃないんですが…それだけで答え合わせ出来るんだけど。

「私がこういうのも倍に出来るって失念してた？はい残念でした。で、どんな感じ？ウソップ」

「おオ…ちよつと待ってくれ」

ガチャガチャ工具を漁って分解していくウソップ。なんだありや、全く分かんないや。

「…おい…、これ、回しても最後は同じ向きに大砲が止まるように細工されてるぞ！」  
「って事らしいけど？」

ニヤリと笑ってフォクシーを見れば、分かりやすくぐぬぬと顔を歪めて悔しがる。誰がそんな怪しき満点大砲を回すか！

最終的に別の大砲を使う事で話は終わった。ちなみにその大砲も同じ手順でウソップに確認してもらったので問題ない。

『お邪魔は入ってしまったが、気を取り直して〜！回るよ大砲！』

誰がお邪魔だ！

ルフィとフォクシーが回す大砲は自然に止まって草原の方を向いた。



直後に撃った砲弾も勿論草原に着弾し、フィールドはお互いハンデのない平らな草原に決まったのだった。

「……フェ、フェツフェツフェ：け、けちよんけちよんにしてやるぜ…」

「どうせ自分の船を戦場にしようとしてたんでしょ」

「そ、そんな訳、そんな訳あるかおめエバカ、バカが!!」

焦りすぎだけ…。

自分の船なら最初っから細工など好きなかだけ出来るし、奴の能力を有利に働かせるギミックなんかも一杯搭載されていた筈だ。

いやー、いい仕事した!!

『ル〜ル説明するよ〜つ!!バトルフィールドは今鉄球が落ちた場所から半径50m以内!つまり、直径100mの“円”の中全てが戦場!武器・兵器、円内の全ての物は利用可能。円内には決闘者の2人以外は立入禁止!敵を円から出せば勝ちっ!〜以上!!なお、空中・海中では出た事にならないよ!!』

あかん、草原フィールドだからルファイが圧倒的有利すぎる…。

草原に都合よく武器が転がってる筈もなく、生身の殴り合いだどう考えてもルファイが勝てるし、仮にルファイを円内まで飛ばしたとしても周りが海って訳でもないから、地に足着く前に腕を伸ばしてロケットで帰ってこれる。

『フィールドが平坦な草原だから観客席は必要ないね！早速出場選手の2人には準備をして貰うよー!!』

「選手はこつちに来てくれ。セコンドは誰だ？」

「ああ、それなら俺が」

セコンドつてあれかな、ボクシングなんかでリングの外でやいやい言ってる人？

適当言ってる様に聞こえるかもしれないけどそれくらいしか知識ないなあ…。マネージャーみたいな物つて考えてたらいいのかな？

まあ、そのセコンドにはウソツプが付いてくれるそうだ。良いコンビだから安心して任せられるね。

「最初はどうかとことかと思っただけど…案外楽に勝てそうで良かったね！」

「キャハハッ、そうね、やっぱり2回戦でイリスちゃんが大活躍したからじゃないかしら」

「それを言うならミキータ達だって1回戦目圧勝したじゃん」

「それも赤目さんが向こうの船長を抑えてくれたからよ。そうでしょう？」

おう…そう素直に褒められると照れる…。

目を合わせると気恥ずかしいのでフィールドとなる草原の方へ目を向けると、直径100mのラインや選手が入場する道などを作っている最中だった。

…あの道、いるの？

「ルフィが勝つまで暇だなあ…ポルチエちゃんでも口説いてこようかな」

「ルフィが勝った時の指名で選ばばいいじゃない」

うーん…そういうので得た美女ってなんか…こう、違うというか…！

「…ふふ、冗談よ。あんたにはあんたのやり方つてのがあるんでしょ。もう知ってるわ

よ」

「ナミさん…！」

私の正妻は相変わらず察しが良すぎて素敵！

『ライン設置完了！お待たせ致しましたア！！本日のメ〜〜インイベントツ！！「コンバット」！！ま〜もなくゴングだよ〜〜っ！！』

「お、始まるみたい！」

暇つぶしに観戦するかあ。

丁度良いからルフィの戦いをじっくり観察してまた技盗んでやろう…ふっふっふ！！

『さ〜と、今回の対戦はこの2人！計らずも船長対決〜〜！！まずは来る者拒まず！！

「コンバット」無敗伝説920勝！！全ての勝負に勝つ男！！レフト側から入場…：：：我がが

オヤビン！！「銀ギツネのフォクシー」！！！！』

「フェツフェツフェ!!!」

「オヤビーーーン!!」

「瞬殺で頼むぜー!!!」

ボクシング系統のスポーツで用いられるグローブを着用してるし、服装もそれっぽく仕上げてきたフォクシーが左右から吹き出る煙に包まれて登場する。ほんとにボクシングっぽい演出だな…。

『さアそして対するは、東の海出身!!<sup>イストラール</sup>少数派海賊団のリーダーで懸賞金1億ベリーの男!!  
!!ライトコーナーより入場!!通称 “麦わら”!!』

「おめーも頑張れー!!」

普通にルフィ応援してる人居るし。このフォクシー海賊団ってなんていうか…根っからの悪というか、根っからの海賊だよね。

『モンキー・D・ルフィ!!!』

「うがーっ!!!」

登場したルフィは、フォクシー同様グローブを拳に装着して…何故かアフロを被っていた。

「うわ…凄いい!私も付けてみたい!」

「やめなさい」

ペし、とナミさんに叩かれる。だってあれ付いたらパンチ力上がりそうじゃん！通常の状態です00倍出せるかもしれないじゃん！！

『デービーバックファイト運命の第3回戦、「コンバット」始まるよ〜〜！！』

ルフィとフォクシーがバトルフィールドへと入りシャドーボクシングなどを始める。ルフィ完全に成り切ってるなあ…ウソツプもその後ろでノリノリの声援を送っているし。

『さ〜〜！待ちに待ったメインイベント！！両選手がバトルフィールドに足を踏み入れたよ！！それではセコンドは邪魔なので引っ込んでてくれ！！』

「早エな！もう終わりかセコンドの役目は！！」

ウソツプが叫び、その後しぶしぶと後ろに下がっていった。

意味あったのかな…セコンド…。

『さて今回の舞台は、まさかまさかの大ハプニング！真つ平らな草原地帯！！それもこれも全て奴のせいだ！！』

「ブ〜〜！！」

「空気読めガキ〜〜っ！！」

「キャハハ！………一万キロ」

「待ちなさい、あんなのただの煽りよ。気にしちゃ負け…分かった？」

「う……ええ、ごめんなさい」

しゅんとなつて走り出そうとした体を引っ込めるミキータ。可愛い。

「オイ、何言つても仕返してこねエぞ」

「今のうちに先の2戦の鬱憤を晴らすか！やーいチービー！」

「バーカ！」

「女好きー!!」

最後のは悪口でも何でもないんだけど…。

「……ふう。ちよつと行つてくるわ」

「ま、待つてナミちゃん！抑えて！あんなのただの煽りでしょ？ね？ナミちゃんなら抑

えられるわ！」

「そ、そうね。悪かったわミキータ…」

「アハハ」

そんな2人を見て笑うロビン。

…うーん、これは何とも良い光景ですね。いいぞもつと煽れ！

『直径100mの円から放り出されるのは一体どっちだ!?時間は無制限!!広い決闘場に残されたのはたった2人の海賊!!さアさア草原を熱気が包み込むよ！仲間を奪るか奪られるか!!もう後が無いっ!!デービーバックファイト最終戦!!銀ギツネのフォク

シーvs麦わらのルフィ！両海賊団主力対決にその全ての命運がかかるっ！！』

そして、カアーン！と高らかにゴングが鳴った。

ルフィ：構え方もボクシングっぽくなってるし。

「ゴムゴムのオ！」

「ノロノロ！」

「うわっ、あぶねエ！」

真正面から突っ込むルフィに向かって右手を突き出すフオクシー。

ルフィはそれを見て咄嗟に右へ跳ぶ。

「バカめ！！ノロノロビーム！！」

「しまっ……た……ま……ま……ず……ず……い……い……！！」

最初の右手はフェイクだ。跳んだルフィに向かって左手からビームを放ち、跳んでい  
る為直ぐには動けないルフィはそのビームに直撃し、空中で動きがノロノロになってし  
まった。

…あれ、当たったら本当に厄介な能力だったんだね…正直舐めてたかも…。

「フェツフェツ！このまま場外まで飛ばしてやる！」

「や……め……ろ……ろ……ッ！……の……！！」

「ホイ」

とん、と宙に浮くルフィの体に飛び乗ったフォクシーが拳を構えた。

「九尾ラツシュ!!!」

「……!!!」

まるでルフィのガトリングの様な拳の雨がルフィ自身に襲いかかる。

それはルフィに全発直撃しているが、まるでビクともしていない。

…というより、反応がノロくなっているだけだ。と言うことは…。

「フェー…ツフェツフェツ!!! 挨拶がわりだ! どうせパンチそのものはさして効いてねエ。それくらい分かっているぜゴム人間!!!…3、2、1…!!! 30秒だ!」

「うげばへどかぶ!!!?」

フォクシーの能力が効力を失った今、ルフィにそれまでノロくされていたパンチの「衝撃」が一気に押し寄せる。

「だけどフォクシーも自分で言っていたようにルフィはゴム人間だ。打撃は効かない!…:…それに、そもそも…:。」

「はア…:はア…:、くそーっ! 思った以上に厄介だな、ノロノロビーム!…:ビームっていないな」

「まだまだ行くぞ! ノロノロビーム!」

「食らうか!」



「なに?!

今度はジャンプではなく、地に足付けて高速でフォクシーの背後に回り込んだルフィが拳を構える。

こんな感じで、そもそも個人の力量差が大きいからね…卑怯な手を使える舞台ならともかくこんな平坦フィールドでルフィに勝てる訳がないよ。

「お返しだ!! ゴムゴムのオオ!! 銃乱打!!!」  
ガトリング

「うぼぼへっ?!」

無数の拳に吹き飛ばされたフォクシーに向かって飛び付き、足を掴んでぐるぐる回す。あ、これ終わったわ…。

「ゴムゴムのオー! 星ア!!」  
ステラ

「ごうん! と物凄い勢いでフォクシーを投げ飛ばしたルフィが、うおー! と雄叫びを上げていた。

挨拶がわりのパンチなんてしている余裕なかったと思うんだけどね、うん…。あれかな、1億の賞金首と戦ったことなかったとか?

…それよりルフィの決め技、空島での合体技のやつだね。あの時は自分が星になるって意味だったけど…この技は投げた相手がって意味かな。ルフィが私の考えた技を自分用に組み替えて使ってくれるって、何か嬉しい。

そして、私の読み通りフォクシーはそのまま場外の海に落ちて敗北となった。

あつけないなあデービーバックファイト…、苦戦したゲームあつたつけ？

『ら、落下地点、フィールドの外オ！デービーバックファイト3回戦！チームの運命を背負った船長同士の「コンバット」！オヤビン920戦無敗の伝説はここに敗れ、ゲームを呆気なく、呆気なく！制したのはなんと…!!麦わらの、ルフィくくく!!!』

「まあでも、何もなくて良かったね」

「本当にね…でもま、あんたが居てくれるなら私達に何があつても安心よね」

「そ、そうでしょ。何があつても守るよ！」

いきなり私を持ち上げるのはやめてもらっていいですか！心臓が！

\*\*\*

海に落ちたフォクシーを救出するまで待っていた私達は、ついに勝利者として最後の指名権を渡された。

最後までパスっていうのも締まらないし…うーん…。

「さア早エトコ選べ！誰が欲しいんだ！」

救出されて治療を受けたフオクシーが言ってくる。

『指名権は勝利チーム、船長麦わら！彼ら一味はどうやら船大工を御所望の様子だよ！そうなる和本命は50人の船大工のボス、ソニエか!?本能の赴くままお色気船大工ジーナ姉さんか!!?』

「ジーナ姉さんにしよう」

「やっぱりそうだよなイリスちゃん！」

サンジと固く握手を交わす。

あの中ならジーナ姉さんでしょ!!…ハツ…でもポルチエちゃんも…!!!  
…ま、ルフィは多分人は取らないと思うけど。

「海賊旗をくれ！」

「何——っ!!」

「そんなバカな！迷わずおれ達の誇りを奪おうというのか!!」

あ、そっか、そういうえばそれも奪えたんだっけ。

「いいよ帆は。それがねエとお前ら航海出来ねエだろ」

「えエ!?なんて慈悲深い…!!」

「——だが、帆にも印シンボルが入ってるんだ！もうあれを掲げる訳には…!!」

「情けは無用だ！奪うもんは奪ってもらおうぞ！！」

「……わかった。じゃあマークだけ貰えばいいんだから、おれが上から新しいマークに描きかえてやるよ。そしたら帆まで取らなくてもいいだろ」

そんなルフイの言葉に感動するフォクシー達だったが、ぶつちやけ私達一味の面々はフォクシー海賊団の今後を思うと涙が出てきそうだった…。

だつて…だつて…！！ルフイデザインつて…！！

「描くぞー！」

すらすらと迷うことなく筆を走らせるルフイを見て、私はあーあ、と顔を押しえた。

ミキータやロピンは笑ってるし、ナミさんはため息を付いている。

「これでよしー！」

満足げに描き終えたルフイ作のジョリーロジャーは、びつくりするくらいセンスの無い物だった。これはこれでいつも通りだから安心するよ…。

きつね、と書かれた下に最早何なのか訳がわからない…まあ少なくともキツネには見えない動物の顔が描かれていて、その背にはアンバランスな骨がバツ印を描いていた。もしかするとこれはこれで芸術なのかもしれない。

案の定フォクシー海賊団の面々はがっくしと地に手の平付けて落ち込んでいる。…ま、一番穏便な最後だったかもね。

『…ま、まあとにかく、勝者！麦わらの一味！！デービーバックファイト、これにて閉会く  
くくく!!!』

見た目はアレだけど、じつと見ていれば可愛く見えない事もない……様な旗を掲げて、フォクシー海賊団は海へと繰り出して行った。

…さて、私達はこれからどうしようかな。

## 71 『女好き、大将 “青キジ”』

あの後ルフィとウソップ、それからチョッパーに連れられて島の中へと歩いて行つた私達は、そこにぽつんと建っているドーム状の家を見つけた。

その近くには綺麗な毛並みの大きな馬と小さな馬とおじさんが生茂る草の上に座つて楽しみに話していて、ルフィ達を見つけるなり手を振つて出迎えてくれた。

「ブツ飛ばしてきたー！」

ルフィが奪つたフォクシーの旗をおじさんに見せて、ニツと笑う。

何かあつたのかな？

「……、随分ケガしてる」

「こんなのいつもだ」

そう言つてまた笑うルフィに、おじさんも笑顔でお礼を言い馬も嬉しそうに鳴いたのだつた……。

「……その綺麗な馬、ケガしてるっぽいけど……まさか」

「ああ、それが——」

ウソツプによれば、フオクシーが馬：シエリーを撃った事に怒ったルフィが決闘を受けたのだと言う。

そもそもそんな事になった理由として、このトンジツトと言うおじさんの身の上話を聞かされたのだが：それが何とも壮絶な話だったのだ。

トンジツトは竹馬が好きで、生き物も植物も何もかも長いこの島の竹を使って世界一長い竹馬に挑戦したところ、登ったはいいが恐くて降りられなくなってしまったという。

なんとしかもその期間10年……凄いが遠くなる話だ。

まあ、それだけならただの超人話なのだが：彼にとつて問題なのはそこではなく、その10年の間に自分の村が移動していた事が問題だった。

と言うのも彼等は遊牧民である為に移住を繰り返しているのだ。この島は長いリング状の島だが、普段は海によって10の島に区切られている。凹凸があり凸部分が島となるって訳だ。

年に1度だけ大きく潮が引く日があり、彼等はそこを狙って3年に1度島から島へと移住する。

つまり：1つの島に3年ならここへ帰ってくるのは大体30年後。トンジツトが竹馬に乗っていた年月を引いても後20年は仲間に会えないのだ

「成程ね、それで決闘を受けたの」

ウソツプの言葉に納得して頷くナミさん。

でもあれだよ、ルフィならこの馬が撃たれてなくても決闘受けてそう。

「キャハ、その移動したつていう村へ私達が連れて行ってあげられないのかしら？」

「それがよ、10の島はそもそも繋がった1つの島だから記録ロクがとれねえんだと」

「いいんだ、そこまでやって貰う事はねえ。俺達は気が長エから大丈夫だ。それより：そうか、これがお前らの仲間か。せっかく来たんだ。ウチへ入れ、もてなそう」

そう言つて玄関まで歩いて行くトンジツトだったが、扉の前で何かにぶつかつて止まる。

何だ：？え、人じゃん……でか……

「ぐー……」

「え、寝てるの……？」

「寝てるわね……」

立ちながら寝るつて器用だな……。ていうかこれ人だったのか、全く動かないから大きいし木だと思つてた……

「…、んん!!?何だお前ら」



「おめエが何だ!!」

その男は騒がしさからか目を覚まし、付けていたアイマスクを外す。  
……すつつごく見た事ある。前世かな？

「…え」

「つーロビン!?!」

男の顔を見た途端、急にロビンの顔色が悪くなつて尻餅をついた。

顔色どうこう以前に…震えてる…? この男に怯えてるの…?

「ハア…ハア…え!?!」

「どうしたのロビン! こいつと知り合い!?!」

「……あららら、コリヤ、いい女になつたな……ニコ・ロビン」

「…私の、嫁ですけど?」

すつとロビンの前に立ち構える。

ルフィもすぐ動ける様にし、サンジは腰を落とし、ゾロは刀に手を掛け、ウソツプはパチンコを構えた。

「……あららら、まーまーそう殺気立つなよ嬢ちゃんと兄ちゃん達…。別に指令を受けて来たんじゃないんだ。天気がいいんでちよつと散歩がてら…」

「指令だど!!? 何の組織だ!!」

ゾロも額から汗を流しながら問う。

「ただその問いには男ではなく、ロビンがぼつりと答えた。

「…海兵よ。海軍本部 “大将” 青キジ」

「大将!!」

う、嘘でしょ!!? 大将って言ったら…えーつと、んーつと…、ま、まあすつごく偉いじゃん!! もしかしてこの人の顔見たことあるって前世じゃなくて新聞とか何か!!?

「た、大将っておめエ…ど…ど…ど…ただ偉い奴だよ」

「海軍の中でも、“大将”の肩書きを持つ将校はわずか3人…!! “赤犬”・“青雉”・“黄猿”…!! その上には海軍トップ…センゴク元帥が君臨するだけ…。世界政府の

最高戦力”と呼ばれる3人の内の1人が…その男よ…!!」

「な、何でそんなお偉いさんがこんな所に…!!?」

「あららら、こつちにも悩殺ねーちゃん、スーパーボイン! 今夜ヒマ?」

「ちよつと待てコラ。お偉いさんだか何だか知らないけど私の女口説くとはいい度胸してるね!!」

ナミさんとミキータに声をかける青キジとやらの詰め寄る。

大将だからなんだ!! 私嫁はやらん!!

「ちよつと待ちなさいお前ら。全く…そつちこそ話を聞いてたのか? 俺ア散歩に来ただ

けだつつってんじやないの、カッカするな。だいたいお前らアレだよ、ホラ………忘れた、もういいや」

「話の内容グダグダかお前っ!!」

「それに私がカッカしてるのはあなたが散歩に来たことと関係ないから!!」

まあ？ ナミさんは美人だから？ そりゃ口説きたくなる気持ちは分かるけど?!

「何なんだコイツ……おいロビン！ 人違いじゃねエのか!! こんな奴が海軍の“大将”な訳がねエ!!」

「オイオイ、そうやって人を見かけで判断するな」

ウソツプの言葉に青キジは不服そうに返す。

何？ 言動はこんなだけど正義感は強いってやつ？

「俺の海兵としてのモットーは『ダラけきった正義』だ」

「見かけ通りだよ!!!」

本当に何なんだこの人……

「……とにかくまあ……。……あアちよつと失礼、立ってんの疲れた……」

よつこらしよ、とその場で抱えていた軍服を枕に横になる青キジ。

……海賊を前にしてここまで無防備になるなんて……こりゃ、本当に大将かも……

「そんでまあ、早エ話お前らをとつ捕まえる気はねエから安心しろ。アラバスタ事後消

えたニコ・ロビンの消息を確認しに來ただけだ。予想通りお前達と一緒にいた」  
 「私の嫁となつてね！」

ロビンはまだ嫁じゃないけどね…。くそ！どうしてなつてくれないのか！！

「本部に報告くらいはしようと思う。賞金首が1人加わつたら総合賞金額トータルバウンティが変わつてくるもんな。1億が2人と…6000万と…えー、そっちの姉ちゃんアキが750万だけか…、それに7900万を足して…：…わからねエが、ま、かなりの額だ」

「しろよ計算」

「ゴムゴムのオオ！！」

何でルフィはいきなり青キジに殴りかかつてるの!?

いきなり過ぎて驚いたけど、何とかウソツプとサンジが奇行を止めた。

「離せ！何だよお前ら!!ロビンが連れてかれるんだぞ!!」

「いやだから、何もしねエって言ってるじゃねエか…」

「ていうかちよつと落ち着いて！」

尚も暴れ続けるルフィの腹にとりあえず右ストレート！

ぶへつ、と声を上げたルフィが何すんだ、と不満げに見下ろしてくる。

「だから、この人はただの散歩でここに來ただけだつてば。私達にどうこうする気がないのならこつちから喧嘩をフツかける必要ないでしょ？」

「なんだ、散歩か！じゃあこんなところ通るなお前！あっちいけ!!」  
「めちやくちやじやないっすか……」

青キジも軽く引いてるし……ルフィは走り出したら止まらないからなあ。

「……じゃあ、わかった……。帰るがその前に……さつき寝ながら聞いてたんだ。……あんた」  
「ん？」

トンジツトを指差す青キジ。さつききつて、仲間とはぐれたって話だよな？

「俺は睡眠が浅くてね、話は大方頭に入ってる。すぐに移住の準備をしなさい」

「おいおっさん！こんな奴の言う事聞く事ねエぞ!!こいつは海兵なんだ!!!」

「……………」

「……………」

数秒間見つめ合うルフィとトンジツト。

トンジツトは訳が分からないって顔をしていて、ルフィも何か自分がおかしな事を言っただ自覚はあるようだ。

「いーんじゃねエのか？」

「いーんだそうだよ、いーんだ。普通海兵が味方でおれ達の方が悪者だよ、あつはっは!!」

普通はそうだよな。

ルフィって本家イメージ通りの海賊って感じじゃないから、海賊Ⅱ悪って認識が薄れちやうよ。こんな事ルフィに言ったら機嫌悪くなりそうだから言わないけど。

「要するに…留守中に移住しちまった村を追いかけて3つ先の島へ行きたい。引き潮を待ち馬で移動したいが、その馬が足にケガを負っちゃったってんだろ、違うか？」

「そ、それがわかってんなら今は移住なんてできねエのわかるだろ」

「大丈夫だ」

ウソツプに返事する青キジの言葉は強気だけど、如何せん態度がダラけ過ぎてて説得力がない…。

「本当に大丈夫なの？」

「……確かに、その男なら…それが出来るわ」

「？」

未だに尻餅について動く事の出来ないロビンが、震えながらもそう言葉を繋ぐ。

…この男、態度は軽いけど…ロビンの状態を見る限りだと相当ヤバい奴なんだろうね。

「…よし、わかったよ。じゃあトンジット、荷物用意してね」

「あア」

「それが終われば海岸に行く。年に1度引き潮で道が出来るって言ってたろ。そこだ」

青キジもよつこらせ、と起き上がり私達と共にトンジツトの荷造りを手伝い出した。ちやんと働けるんだ……ぶつちやけまだちよつと疑つてるよ…。

\*\*\*

「よし、海岸に着いた。たまには労働もいいもんだ」

「ほんとだ、いい気持ちだ！お前なかなか話せるなー!!」

「やめときなよルフィ、一応敵の四天王みたいな奴だよその男は」

トンジツトとシエリーの荷造りを終えた私達は、それを例の海岸まで持つてきていた。ちなみにここまで運ぶのは我が嫁、運び屋ミキータの能力のお陰でかなり楽出来たんだけど。

何故か打ち解けているルフィと青キジはもう知らない。コミュカ高すぎてついてけないよ…。

「で？どうすんだ？このままおめエが馬も荷も引つ張つて泳ぐのか？」

「んなわけあるか…。少し、離れてろ」

言われるがまま距離を取る私達を背に、青キジは海面近くまで歩いて行つて右手の先を海に浸けた。

だがその瞬間、海に大きな影が映つたと思つたと同時に海中から巨大な海王類が現れる。そいつは腹でも空かせているのか一直線に青キジを狙つて食いつきに迫つた。

「!!あれは…!!?」

「いかんつ!!この辺りの海の主だ!!」

「危ねエぞ!!!」

青キジが何をしようとしているかは知らないけど、このままじゃぱくりと丸呑みコー

スじゃん!!

「まずい…!!にじゅうばいばい20倍灰…!!」

「—————」  
アイス・エイジ  
 「氷河時代」

私が腕を伸ばして海王類を殴り飛ばそうとした時、それは起きた。

青キジの放つた技は迫り来る海王類だろうと関係なく、辺り一面、見渡す限りの大海原を一瞬にして凍結させる。

その規模は計り知れず、急に寒冷地帯に放り込まれたかのような錯覚に陥ってしまう



程であり、私はそのあまりの規模、威力に我が目を疑った。

「あ、悪魔の実……！」

「海が、凍った……!!」

「……自然系、<sup>ロギア</sup>「ヒエヒエの実」の氷結人間……！これが海軍本部「大将」の能力よ……!!」

こ、それは……とんでもない……ね。

……ロギアってあれでしょ、スモーカーとかクロコダイルとかエネルとか……実体の無い面倒なやつ。

しかもその能力で大将って……まあ、この海を見ればその実力の程は大体分かるよ。底は、見えないけど……。

「1週間は保つたら……のんびり歩いて、村に合流するといい……少々冷えるんで……あつたかくして行きなさいや……」

「……夢か、これは……。海が、氷の大地になった……！なアシエリー、海を渡れる、みんなに会えるぞ!!」

トンジツトは嬉しさと興奮のあまり飛び跳ねて喜んでいる。

そのままのテンションで青キジとルフィ達にお礼を言うと、氷の大地に降りて次の島まで歩いて行った……。

「……まあ、これで一件落着か。これからどうする？」

「そりやおめエ、次の島に行つて船大工探しだ！凄エもも見れたし、ここに来て良かったな！」

「確かに凄かつたけど……あれつてつまり……ん？」

私はそうでもないが、海が完全に凍つてしまった為そこから出る冷気で寒いのだろう。みんなして海から離れていけばそこに青キジが胡座をかいて座つていた。

何か考え込むように頭をポリポリ掻いているのが気になる……というか……悪い予感しかない。

「何というか……じいさんそつくりだな、モンキー・D・ルフィ……奔放というか……掴み所がねエというか……!!」

「……!!……じいちゃん……!!」

「じいさん？」

主人公のおじいちゃん……？しかもルフィそつくりか……ルフィのこの反応を見るに、出来ればお会いしたくない所ではあるが……。

「お前のじいさんにやあ……俺も昔世話になつてね。俺がここへ来たのは……ニコ・ロビンと……お前を一目見る為だ。……まア、本当はあと一個理由はあるんだが……」

チラリと私を見る青キジから視線を逸らす。

……何で私を見たの？別に私、大将に目をつけられる事なんてやった覚えありません

ど。

「……やっぱお前ら……今死んどくか」

「……はっ!?!」

お前らって……それは勿論、私の嫁も含めてだよね!!?

……大将だか何だか知らないけど……私の嫁を殺そうとするなら……絶対許さない!!

## 72『女好き、圧倒的な“差”』

「…誰を、殺すつて？」

「……………、ふウ」

意味はないと分かっているながらも、牽制の意味を込めて殺気を放つてみる。

…だけどやっぱり効果なし——どこるかやれやれ、と首を振られる始末だ。

「政府はまだまだお前達を軽視しているが…細かく素性を辿れば骨のある一味だ。少数とはいえ、これだけ曲者が顔を揃えてくると後々面倒な事になるだろう。初頭の手配に至る経緯、これまでにお前達のやってきた所業の数々、その成長の速度…長く無法者共を相手にしてきたが…末恐ろしく思う…!!」

「…へえ、そこまで調べてるなら知ってるんじゃない？さつきあなたは、私にとって許されない発言をしたつて事にさ」

「まア…そうだ、お前の言う通り…政府はお前達についてある程度の情報を掴んでいる。特に危険視される原因の1つは…お前だよ、ニコ・ロビン」

ロビンが危険視の原因…？

だったら何だ、私にはそんな事関係ない！

「懸賞金の額は何もそいつの強さだけを表す物じゃない…政府に及ぼす『危険度』を示す数値でもある。だからこそ、お前は8歳という幼さで賞金首になった」

淡々と語る青キジに今にも飛びかかってしまいそうだが…仮に戦闘になってしまつたら間違ひなく周りを巻き込む…。この男の能力はそれ程までに強大だ…!

「子供ながらに上手く生きてきたもんだ、裏切つては逃げ延びて…取り入つては利用して…、そのシリの軽さで裏社会を生き延びてきたお前が、次に選んだ隠れ家がこの一味というわけか」

「っ…んだとこのネボスケが!!!ロビンに何の恨みがあるつていうの!?!」

「ちよ、ちよつと抑えてイリス!あんたにしてはよく保つたわ!どうどう!」

…危ない…ナミさんが居なきや、さつき思つたばかりの戦闘になつてしまふ所だつた…。

すぐ感情的になるのは悪い癖だとは分かつてるんだけど…。

「別に恨みはねエよ…因縁があるとすりやあ、1度取り逃しちまつた事くらいか…、昔の話だ。お前達にもその内分かる…厄介な女を抱え込んだと後悔する日もそう遠くはねエさ。それが証拠に…今日までニコ・ロビンの関わつた組織は…。…全て、壊滅している。その女1人を除いて、だ…何故かねえ、ニコ・ロビン」

「簡単な事ほざくな!あんたら海軍がロビンを追うもんだから、逃げるのが得意なロビ

ンだけ海軍から逃げ切れた。ただそれだけの話でしょ！要は立ち回るのが上手いってだけなのによくそこまでロビンが疫病神みたいに言えたね!!!」

「…成る程、上手く一味に馴染んでるな」

ぐ…なんだ、コイツ…!!

「何が言いたいの!?私を捕まえたのならそうすればいい!!トレンタフルール三十輪咲き!!」

ロビンが怒り、能力を発動させる。

青キジの体や地面から生えた何本もの腕が奴の体に巻きついていき、身動きを封じた。

…自然系ロギアって言っても、触れないってパターンじゃないのかな…?

「あららら…少し喋りが過ぎたかな。残念、もう少し利口な女だと買い被ってた…」

「クラツチ!!!」

ボキッ!と青キジの背骨を折るくらいの勢いで、並の相手なら一撃必殺になる攻撃を喰らわせて奴をコナゴナにした。

…そう、コナゴナにだ。

今度は、こういう系か…!!

「んあア…酷い事するじゃないの…」

「ギャー!!!」

コナゴナになった“氷”は、徐々に人の形へと変わっていき青キジは無傷でそこに立った。

ウソツプじゃないけど…私も叫びたいよ、こんなもの。

そして青キジは足元の草を手の平で掴んで引きちぎり、宙へ放り投げてその草に息を吹きかけた。

息すらも冷たいのか、吹きかけられた草は瞬時に氷漬けになり1つの武器と化す。バラバラに散る草を無理矢理氷で繋げているだけの歪な剣ではあるが…舐めてはかかれ  
ない。

「アイスサーベル。…命取る気は無かったが…」

「ロビン!!」

「待て、俺が行く!」

そのままロビンに向かって氷の剣を振り下ろそうとした青キジの攻撃はゾロが刀で  
応戦して止めてくれた。

「切肉シュート!!」  
スライス

その隙にサンジが青キジの持つサーベルを蹴り飛ばす。

これで奴は無防備だ!油断は出来ないけど…コナゴナになるんだ、全くダメージを受  
けない訳でもないのかもしれない!!!

「20倍灰！」  
にじゅうばいばい

「ゴムゴムのオ……!!」

「去柳薇ツ!!!」  
さよなら

「銃弾オ!!!」  
ブレット

私とルフィの拳が、もろに青キジの腹へと刺さる。

手応えある……! 青キジにはやっぱり実体が……!!

「ぐあア!!」

「おああつ!!」

「っ……え!?!」

青キジにガシ、と掴まれたゾロの腕とサンジの足、それから奴を殴って体に触れている私とルフィの拳から急激に冷気が襲う。

それは瞬く間に広がり、各々触れられた部位が一瞬にして氷漬けになった。

「ツ……く、そ!!」

実体があつてもダメーヅは入っていないじゃんか……!!

単純にタフなのか……それともそういう自然系ロギアなのか……!!

「た……大変だ! すぐ手当てしないと、凍傷になったら手足が腐っちゃうぞ!!」

チョッパーが言うなら間違いないだろうけど……こんな一瞬で凍らせる事が出来る



なんて……。そりゃ、あれだけの規模で海を凍らせた時点で既に分かっていた事だけ……！

……ぐ、っ……！冷たいを通り越してすっごく痛い……！引き裂かれるような痛みだ……っ！

「いい仲間に出会ったな……。しかし、お前は……お前だ、ニコ・ロビン」

「違う……私はもう……!!」

狼狽えるロビンの隙を突いて、青キジが正面からロビンを抱きしめる。

こいつがただの男なら、ロビンを抱き締めた行為についてはただの変態野郎で説明がつく。……ただこいつはそうじゃない。

抱きしめたとって事は、青キジの体がロビンの体に密着してるって事に他ならない……!!

マズい……ッ!!!

「ロビンっ!!!」

「私は……っ!!!」

急いで青キジに突撃しようにも、腕が凍っていて上手く動かせない……!!でも、そんな事言ってる場合じゃ……!!!

「……!!あ……ロビン……ッ!!!」

ロビンの体全体を徐々に氷が覆っていく。

こんな奴に……ロビンを殺させてたまるか……ア!!!

「う、おおおおおッ!!!」

「……ん?」

右手の痛みなど忘れ、青キジへ突撃して蹴り飛ばす。

ダメージなんて無いだろうけどね!

「ロビン……っ……あ……」

「ロビン……ッ!!!」

だけど、時既に遅く……、ロビンの体は氷で覆い尽くされていた。

嘘……でしょ……? こんな……人間を、氷像みたいに……!

「青キジッ!!!」

「喚くな……ちゃんと解凍すりやまだ生きてる。ただし……体は割れ易くなってるんで気を付けろ、割れりゃ死ぬ。例えばこういう風に砕いちまうと……」

「……っ速……っ!!……ッふざ、けるなア!!!」

凍って固まったロビンに対して、青キジは一瞬で私の前まで移動して非情にも拳を振り上げた。

大将がなんだ……! 自然系ロキアがなんだ……!!! ロビンを、失いたくないッ!!!

「はあああああッ!!!」

「おっと……! オイオイ……お前さん、それは……」

「イリス！」

凍ったロビンを抱えて青キジの攻撃を避けた時、私の体にまたあの時の変化が発生しているのに気が付いた。

髪の変色、謎の透明なティアアラ…。

だけど、好都合だ…！これならまだ、戦える…!!

私は全・倍オーレンクリース加を使用する。そうすれば衝撃波のようなオーラも同じように顕れた。

「みんな!!ロビンを連れて船へ逃げて!!後から追うよ！」

「バカ言わないでイリスちゃん!!だったらみんなで逃げましょう!!」

「…ルフィ!!お願い…!!…一生のお願いだよ」

「……!!」

小さく笑ってルフィを見れば、彼は唇を噛み締めて目を見開いた。

…私だつて分かつてるんだ。これが…危険な賭けだつて事くらい。

だけど、この状態に私がつてしまったんだから…私がやらないとダメだ…！それに、ロビンの借りも返してやりたい…！

「みんなも、ナミさんも、ミキータもお願ひ!!一騎討ちでやりたいの！」

「…っ、ばか…バカイリス…！こっちの気も知らないでツ!!」

ナミさんの悲痛な叫びを背中で受け止める。

「だけど、やっぱりナミさんはナミさんだ。私の思いをきちんと受け止めて…船へ逃げてくれた。」

ルフィ達も同じく、ナミさんの後を追って船へと帰っていく。

「…ま、そう言う事なんで…、タイマンでよろしく」

「…構わねエが、連行する船がねエんで…殺して行くぞ?」

「やれる物なら…やってみなよ!!」

「ダツ!と一気に距離を詰めて青キジの顔を殴り飛ばす。」

「…くそ、頭が砕けただけか…!どうせすぐ元通りなんでしょ…!」

「確かに…パワー、スピード共にかんりの物だ。その上気付いているのかは分からねエ

が、はおうしよく「霸王色」を身に纏っている」

「何を訳の分からない事を…っ!!」

「お前の体から出てるソイツの事だ、知らず知らずの内にそこまで制御してるなら大したもんだが…どんな力が面白いとかか?」

「うるさい!!」

「今度は腹を蹴り後方に飛ばす。」

「アイツは、私のオーラについて何か知っているのかもしれないけど…私は奴と話す事なんて何も無い…ッ!!」

「まあ聞け。お前の『覇氣』はこの際置いておくとしてもだ…麦わらの一味で政府が目を付けていたのは何もニコ・ロビンだけじゃあない、お前もだ、女好きのイリス」

「はあ？」

さつきから攻撃しているというのにまるで効いていない青キジが、緊張感もなく私にそう言った。

「政府はニコ・ロビンに関係したお前達…麦わらの一味の素性を調べ上げた。その中には調べ切れない者も居たようだが…女好き、お前はそうじゃない。全く情報が無エときた」

「そりゃね、無人島にずっと居たんだから当然でしょ」

「なら、何故お前には知恵がある？言葉を話せる？政府は不思議に思っているって事だ。…お前に両親が居て、知恵も語学も親に教えて貰ったのだとしたら…その親の情報すら手に入らないってのは不自然だと。正直な所…俺にとってはいつでもいいんだが…上はどうも気にかかるらしい」

…正解は、この世界の人間じゃ無いからです。つてとこなんだけど…。

この世界に両親は居ないし、知恵は生まれた時からあったから…。

「世界政府の情報網がスカスカって事が言いたいのか？それこそ私にとってはいつでもいい事だけど…ね!!」

「おっと…、危ねエな」

「ッ…！」

一気に距離を詰めて殴りかかるが、青キジはそこに拳が来るのが分かっていた様に手の平で受け止める。

しまった…！ 掴まれたら…！！

「このオ!!」

使える足で蹴りを放つが、当たった所が碎けるだけで直ぐに再生した。…さつきは蹴り飛ばしたり出来たのに…こいつ、遊んでたの…!!?

「1つ、俺から忠告しておこう。…大将としてじゃなく俺個人としてだ、そう警戒すんな。まず…敵う筈のない敵に挑むのは時に勇気と呼ばれる物だが、今回の場合はただ無謀なだけだ。お前の女が言つてた様に共に逃げるべきだったろう」

「それで、逃げ切れるならそうするよ!!」

「ここでお前を殺し、その上で追いかけたとして直ぐに捕捉出来る。それは最初に見せた俺の能力を見たお前なら…分かるだろ？ お前は心の何処かで思っていた筈だ…」

俺に勝てる」

「だつたら何!?!勝つよ…！あなたはロビンを殺そうとした…!!」

腰から小太刀を抜き、私の拳を掴む青キジの腕を斬る。

すぐに再生するだろうが、それでも少し隙が生まれ、その間に青キジの体を空高く蹴り上げた。

私はこの時気付くべきだった。

蹴り上げる事が出来た事実…。相手が私の攻撃を誘っているという事に。

「…強く考えれば、勝てると思っっているのが間違っているんだがなア…世の中にはどうやっても勝てねエ存在つてのが居るもんだ」

「ツ…!! 黙れ!! 50倍灰…ツ!! 彗星の… 別れオオオオオオ!!!」

「人の話はちゃんと聞きなさいよ、今からでも逃げれば…仲間を悲しませずに済んだだろうに」

「な……ツ」

クロコダイルを1発で沈めた私の技は…、エネルギーに反応する隙も与えなかった私のスピードは…、少しでも首を傾げる事で躲された。

気付いた時にはもう遅い…、ロビンと同じように、青キジは私を抱き締める。

「アイス…タイム!」

「………わた、しは………!! 負け……」

ない……。

大層な口を開くまでもなく、私は奴の技で氷漬けにされた…。

体だけじゃなく、心までも凍っていくような錯覚に陥る。勝てると思っていた……この力なら……私は……！

……。

……ああ、……私は、ロビンの為に……みんなの為に……あんな奴に、負けたく……無かった、の……。

……かつこ悪い、なあ……。

……ごめん、みんな……ナミ、さ……。



## 偉大なる航路（グランドライン） W7 女好き編

## 73 『女好き、不穏な決意』

……。

……。

あ、れ？ここは……？

「真っ暗……」

目を覚ませば、真っ暗な闇の中に1人…私は立っていた。

この感覚は前に1度味わった事がある。ユバで見た夢の時だ。

「……ことは、あの声も……」

それに、私がここに居るって事は私はまだ死んではいない…のか？それとも死んだからここに……？

「ツ、い……つ、な、何……ツ？」

あ、たまが…、割れそうな程、痛い…！

ここは、夢なんじゃないの…？いや、そう言えば…夢だけど夢じゃないみたいなさ…

言ってたっけ……っ。

『頭が、痛いんでしょ』

「……あなたは……」

やっぱり居た……謎の声……！

でも今回はあの時と違って……声が何処から発せられてるか分かる。光の球からだ。

……うーん、何と言えば良いのか、私の前にふわふわと浮かぶ光の球から声が出ているのだ。ホタルの光みたいなの……とでも言えば良いだろうか？淡く儂い……そんな光だった。

『痛むのは、あなたが目を逸らしているから』

「……前もそうだったけど、何言ってるのか分からないよ」

『分からないことが、既に逃げている証拠。 “知らない” 筈がない』

そんな事、言われても……。

「う……、あぐ……ッ」

痛い……！頭も……心臓も……!!なんで、これは、何なの……！

ぎゅつと目を瞑って痛みに耐え続ける。

今まで感じた事のない様な……心の底を握り潰されているような痛みだ……。心の底について言ってもよく分からないけど……本当にそこが痛いのだ。

「……え」

ふと痛みが消えて、ぱつと前を見る。

……な、んで……？……ここ……まさか、学校……、……教室……だよ……3年、B組？

「うわ……っ」

いきなり謎の学校の教室に来たと思えば、次の瞬間にはこれまた良く分からない家の中に場所が変わった。

……まるで瞬間移動でもしたみたいだ……それに、この部屋………なんだか見覚えがある。

『……………』

「……？」

ただの光の球だから、実際の所は何とも言えないけれど……何故だか私はこの球がどこか泣いているように見えた……。

この部屋が、原因なの……？それとも別の……。

《……………つ、う》

「……？」

いつの間にか、その部屋の勉強机に突っ伏して涙を流している少女がいた。

……長い、見惚れる程綺麗な純白の髪。顔は見えないけど、女の子だよ……？身長高い

な……。170……いや、もつとあるかな……？

《…っ…私、は…》

「どうしたの…っって」

肩に手を乗せようとしても、まるで実体が無いかのようにすり抜ける。

…そりやそうか、夢だもんね。

「…ねえ、これは、何なの？」

泣き続ける少女から何故か目が離せず、何か知ってそうな光の球に尋ねる。

『これは……、記憶。必死に忘れようとして…でも忘れられなかった…真実』

「…ふうん」

何で私はそれを見せられてるんだ…。

…あ、本棚にONE PIECEがズラーつと並んでる…この子もONE PIECE

E好きだったんだ。

「何で泣いてるんだろう……、…え……ッ？」

その時、私の視界に一冊のノートが映った。

それは泣きじやくる少女の頭の横に置かれており、タイトルは「数学」と書かれている。

…いや、問題はそこではない。

……この女の子の正体…まさか…。

「…3年…B組…名前…、————」

—————  
入州<sup>いりす</sup>」

\*\*\*

「ツ!!!?」

ゴンツ!!

「あ痛っ…!」

「あ…え、…な、ナミさん…う…あ、ご、ごめん！そんなつもりじゃ…」

…あのノートに書かれていた名前、それを目にした瞬間私は体の底から湧き上がってくる負の感情に蝕まされそうになった。

理由は分からないし、何より…私と関係していると決まったわけでもないのに。

「だけど間一髪という所で夢から覚める事が出来た…のだが、勢いよく起き上がった。まった為に私の顔を覗き込んでいたナミさんに頭突きをかましてしまったのだ。」

「いいのよ、そんなの…。あんたがこうして目を覚ましてくれたなら」

「ナミさん…」

私が当ててしまった額の痛みには気も向けず、ナミさんは少し震える手で私の手を握る。

「氷漬けになったあんたを見た時は、…死んじゃうんじゃないかって、思ったんだから…！だから、本当に無事で良かった…！」

「…ナミさん…。ごめんね…。心配かけちゃって」

目を赤く腫らしている彼女の顔を見て申し訳なく思う。それと同時に、情けなくも…。

氷漬けになっても助かってるって事は、多分、チョッパが尽力してくれたんだろうね。

「心配どころじゃないわよ…。氷が溶けてからだだつてずつと斃され続けるし、一体何が…」

バン！とナミさんの言葉を遮るように寝室の扉が開かれる。

開け放ったのはミキータで、その額には尋常ではない量の汗を流していた。

「ナミちゃん！新しいおしぼり持ってきたわ……って、い、イリスちゃん……!!目が覚めたのね!」

「うん、ミキータもごめんね……」

「キャハハ！何を謝ってるの？生きていてくれただけで満足よっ！ね、ナミちゃん！」

「そうね。それにイリスにも朗報よ？ロビンも無事だからね」

はあく、良かった……ロビンも無事か……。

ナミさんやミキータもそうだけど、私とロビンを治療してくれたチョッパにもきちんとお礼言っておかないと……。

……それにしても、変だ。

どうして私は青キジに殺されていないんだろう？そりや、生きてるのは良いことだけ……あの状況で奴が私を見逃す理由が見当たらないんだけど……。

「ロビンは……」

寝室のどこ見渡してもいないし……私と同じ時期に大怪我する人ってみんな私より先に回復するよね……。

「ロビンなら外で読書よ。あんたがやられてから3日経ってるんだから」

「3日……」

道理で体の節々が痛いと思つたよ。

…ちよつと外歩いてこようかな。

「ごめん、外で体動かしてくるね。出航はいつになるの？」

「イリスに任せるわ。療養も兼ねて長い間停泊してもいいのよ」

そう言ってくれるのはかなり嬉しいけど…体が怠いだけでそれ以外に不調が見られないからなあ。

…唯一違和感があるとすれば、未だに引つかかる夢の話くらいか…。

「大丈夫だよ、明日にでも出そう」

「本当に大丈夫？イリスちゃん」

「平気平気。じゃあ行ってくるね」

「あ、待って、私も行くわ」

「キャハッ、勿論私もね」

2人が来るのか。

…あの良く分からない夢のせいで乱れてる心を、是非とも癒して頂こうかな。

そうと決まれば直ぐに出発しよう。

ベットから抜け出すだけでそれなりに力を要するのには驚いたけど…これはアラバスタでもそうだったし、何とかなるよね。

そのまま甲板へ出ると、ルフィ達が周りに集まってきた。その中にはロビンの顔も見



える。

「イリス！もう大丈夫なのか!？」

「うん、完全回復!…とまでは行かないから、ちよつとりハビリがてらその辺歩いてくるね。あ、チョップパー、助けてくれてありがとう。歩いてきてもいい?」

「ああ!無事で良かった!!でもあんまり無理すんなよ、病み上がりなんだぞ!!」

「イリスちゃん、帰ってきたら特製ジュースをご馳走しようか」

「ほんと?ありがとう!」

「リハビリって言うなら俺と一本打ち合わせねエか?」

「お前はイリスを殺す気か!!」

「はは、一味総出で出迎えか…。何だか嬉しいな、こういうのって…。」

「…赤目さん、ありがとう。私も散歩一緒にいいかしら?」

「なんでお礼?…でも、うん、嬉しいよ!一緒にっこう!」

じゃあまた後で、と手を振って4人で船を降りる。

この島をゆつくり1周してたら日が暮れちやいそうだし、ある程度歩いて引き返しちゃうか。

「改めて考えたら、こうやってみんなとデートするの初めてだね」

「そもそも、1つ言わせて貰うけどあんたはあまり私達とデートしてくれないじゃない」  
 「う…それは、そうです…ごめんなさい…」

だつてえ…時間も無かつたじゃん…。

「キャハ、でもロビンも一緒について言うのは嬉しいわ。ようやくイリスちゃんの嫁に来る決心がついたのかしら？」

「フフ、さて、どうかしら」

「何々？ロビン、随分曖昧に濁すじゃない」

このままロビンも嫁になってくれたら幸せだよね。

…でも、過去に色々と問題を抱えてそうだから、ロビンが躊躇しているとすれば理由はそこかな。

別に私はロビンがどこの誰だろうと気にしないのに。

「……………」

過去、か…。

どうしても、さつき見た夢の光景が頭から離れない。

あれは、私？それも前世の…。だとしたら、何で泣いてたんだろうか。というか、あれが私だとはい底思えない。

同じなのは名前だけだし、その名前も私は今世、自分で命名したのだから。

「イリス?」

…あの光の球も分からない。夢に関係あるのは間違いののに…私の事も何か知ってそうだったよね。

あー!何か考えてたらムカムカしてきた、あの球…毎度毎度一方的に情報与えてきてさ!何で私がいんにも悩まなくちやいけないの!

「イリスってば!!」

「わっ!…え、ご、ごめん、どうしたのナミさん」

「どうしたのじゃないわよ、あんたがどうしたのよ、やっぱりまだ寝てた方が良いんじゃない?」

ナミさん達の心配そうな顔が視界に映る。

だけど、体調的にはこれと言って問題ないからナミさんには大丈夫だと返事をした。

「…だけど」

「航海士さんの言う通りよ、休んでた方がいわ」

「ロビンまで…どうしたの?…って、あれ?」

不意に、頬を何かが伝う感覚がしたので触れてみる。

……、涙…?…どうして…?私、何で泣いてるの…?…?

「……………」

「イリスちゃん、何か、あった…?」

「え…? いや、これと言つて何も…」

泣いてる事に関しては本当に心当たりがない。自分のことなのに分からないって…  
自分でも意味わかんないよ。

「イリス」

「ん?…つて、え?! ちょ…!」

突然ナミさんに体を押されて、ロビンの胸に顔から飛び込む形になった。

ま、待つて! ちよつと待つて! いきなりどうしたの!? 今度こそ本当にどうしたの!?

「あら…中々抱き心地いいわね」

「当たり前じゃない、だつてイリスちゃんだもの。次は私よ!」

「わぶ」

すぐにミキータが変わつて、また胸に顔を埋められる。

…という事は、最後は…。

「はい、私の番」

ぎゅ…と優しく私を抱き締めるナミさん。

さつきから困惑するばかりで、意図が掴めないんだけど…。

「あんたの嫁だつてのに…私はあんたの悩み一つ察してあげられない。どうして泣いて

いるのかも、苦しんでいるのかも…」

「それは、違って…！私でも分からないから…！」

「良いから。…だからせめて、これくらいさせてよ。…だめ？」

……………もう、ずるい。

…これでダメなんて言えるわけがないよ…。

「イリスが困ってるなら、私達は何時でも力になるから」

「キャハ、勿論、私は何だってするわ！」

「私も、微力ながら」

……………みんな。

…ただ、本当に分からないんだけど…。

……………でも、落ち着く……………。

「ごめんね…情けなくて」

「情けなくないわよ、仮にそうだとしても、あんたはあんたよ。情けないのだからってイリスなんだから」

「もうっ、それって別に褒めてないよね？」

あはは、と4人で笑いあえば、何時の間にか流れる涙は止まっていた。

ロビンも、少しずつ私達に気を許してくれているのだろうな、そんな気がする。

私の、大切な人達。

またあの青キジの様に手も足も出ない敵が現れたら…私はどうするんだろう。

…いや、そんな事に答えを見出しても意味ないよね。何故なら、何が何でも仲間と嫁を守る！それが私の役目であり、使命とも言える事なんだから。

…だから心配しないで、ナミさん、ミキータ、ロビン。

何があっても、

何が起きても、

例え、どれ程の敵が道を塞ごうとも、

全ての障害は私が、どんな手を使ってでも、

…みんな、私が守るよ。

## 74 『女好き、爆速海列車』

後日、私達は予定通りロングリングロング島を通航した。

その後3日間は特に何もなく、最早恒例となつた偉大なる航路グランドラインの天候変化にもだいぶ慣れてきたナミさんの指示もあつて現在に至る。

「んんん！いい天気だね」

空は快晴、天候は春。時々夏になるのは夏島が近くにあるからだろうか、過ぎこしやす  
い季節だ。

「又ワくくミシアくくん♡ンミイくキイたちやくくん♡」

「?」

「じゃがいものパイユ、作つてみたのですマドモアゼル。よろしければ」

サンジが何時ものテンションで料理を持つてきた。

パイユ?何じゃそりゃ。麦わら帽子みたいな見た目の料理だね、おつまみ系?

「私も食べていい?」

「勿論、好きなら食べてくれ」

「やった、いただきます」

パリ、とこんがり揚がったパイユとやらを割って口に放り込む。

…あ、美味しい…。味付けは塩胡椒だけなのかな、シンプルながらじゃがいもの美味しい所をぎゅつと凝縮云々…。

とにかく美味しい。

「これ、美味しいね！」

「ほんと、美味しいわ」

「うおー!!!幸せー!!!」

海に向かって叫ぶサンジ。隣で寝てたゾロが寝れねエだろ!と言っていていつもの口喧嘩が始まっていた。あの2人は本当に仲が良いね。

「私も頂いていいかしら?」

「ロビン!はいっ」

いつの間に隣へやってきていたのか、ロビンが私の肩に手を乗せてそう言うので、あーん、と一口サイズにちぎったパイユをロビンの口元まで持つていく。…く、身長がね、足りなくてね!!

「フフ…ありがとう」

しゃがんで私の指に摘まれているパイユをぱくりと食べる。

お、おお…:良い!!ロビンとこうやってそれっぽい事やってるの嬉しい!



「あら……これ、美味しい」

「だよね？」

流石サンジ、誰が食べても絶賛だ。

「ロビン、イリス、気分はどうだ？ 寒気はあるか？」

「大丈夫だよチョッパー、ありがとね、チョッパーが居なかつたら危なかつたよ」

「そんな……嬉しくねーぞコノヤロがつ」

ニッコニコで踊りながら言われても説得力ないよ。

でも、本当にチョッパーが居ないと死んでいたかもしれないから……彼には感謝しかない。

「……ん？ 何だありや……」

「？」

何を見つけたのか、サンジと言い争っていたゾロがふと海を見つめて呟いた。

その言葉に真っ先に飛び付いたのは好奇心旺盛な船長、ルフィだ。

「カエルだ！ 巨大ガエルがクロールで海を渡ってるぞ!!」

「はあ？ 巨大ガエルはまだしも、クロールなんてするわけ無いじゃん。そんなカエル見た事無い……ってしてるー!!」

「追うぞ野郎共！ オール出せ！ 漕ぐぞ!!」

まさかの海をクロールで泳ぐカエルの登場により、ルフィの目がキラリと輝く。

「船体2時の方角へ！」

「こら！あんた達何勝手に進路変えてんのよ!!」

「キャハ、大丈夫よナミちゃん。ここ最近気候も安定しているでしょ？少しくらい逸れたって平気じゃないかしら」

安定しているのは島が近くにある証拠だもんね。

それに仮に進路から大幅にズレてしまったとしても、ナミさんなら後でどうとでも出来そうだ。

「それによナミ、そのカエルは体中怪我してたんだ。おれ達は是非それを丸焼きで食いてエんだよ！」

「食うのかよっ!!」

追うならともかく、食べるのはちよつと…。

カエル食べるのは抵抗があるかな…鶏肉みたいだとは聞くけど…。

「ん？あれは…：灯台…!?!どうしてあんなところに灯台なんて…誰かいるのかしら…：」  
「どうした、島が見えたのか!?!」

「ううん、灯台があるの！別に記録指針ログポースが指す場所じゃないわ」

あんな海のと真ん中に灯台って…何か意味あるの？例えばここが偉大なる航路グランドウェイの丁

度中間ですよーみたいな。

「カエルも灯台を目指してるわよ」

「カエルはまず白ワインでぬめりを消し、小麦粉をまぶしてカラッとフリート」

ロビンの言葉に続いてサンジがカエル料理を語る。…うーん、やっぱりカエルは…なんか抵抗ある。

食べるっていう習慣が無いからだろうけど…なんかね？

「よっしゃー！カエルに全速前進くっつ！！」

「おーっ！！」

何でカエルにここまで熱くなってるのかは知らないけれど、ルフィとウソップは大いに盛り上がってるようだ。

でも食べるのはやめて頂きたい。

カンカンカン…

カンカンカン…

「あれ、この音…」

何だか、聞き覚えのある音に首を傾げる。

多分この世界じゃない…前世の事だと思っただけ…何の音だっけ。

「待って、みんなストンプ！変な音がする！」

私と同じように気付いたナミさんがそう言うが、ルフィは止まらない。

カエルは泳ぐのをやめて海の上に立つ。実際は海の上ではなく、恐らく下に岩か何かの足場でもあるのだろうけど。

「うわ！何かに乗り上げた！」

カエルの乗ってる足場はそれ程広いのか、近くを通るメリー号も何かに乗り上げてしまった。

…？いやでも、岩なんて見当たらないんだけどなあ…。

カンカンカン…

それにしてもこの音何だろう…音も大きくなってる気がするし…。

「…………え」

しかしその時、私は見てしまった。

そして同時に気付いてしまった…、メリー号が乗り上げている物の正体に。

私の視界にはこちらへ一直線に向かってくる“列車”が映っているのだ。

まさかこの世界にあるとは知らなかったけれど…なんて、今はどうでもいいか。

つまり、私達が乗り上げたこいつは…線路。急がないとどうなるのかなんて考えるま

でもない!

「バックバック!! 180度旋回して!!」

「え?」

「急いでつ!!!」

「この世界にも列車ってあったの!? 聞いた事無かったんだけど…!」

早くしないと私達全滅だよ! オールオール!!

「うおわあ!!!?」

「な………!!!?」

何とか、本当に何とかギリギリで旋回が間に合い線路から脱出した私達の目の前を列車は勢いよく通り過ぎる。

蒸気機関車…あんなのに激突してたらひとつたまりも無いや。それに車体の先端尖ってるし、殺傷能力高いつて。

「何だコリヤ!!!?」

「ちよっ…、カエルが危ない!!」

「おいカエル逃げろ!! 何してんだ!!」

線路の上に立って、列車を止めようとしてるの…!? 無理だよそんなの、止まるわけがない!!

「何なんだこの鉄の怪物はア！」

「船?!!」

「違う……!こんな形で海を走れる訳がない!!」

流石ナミさんはこれが船ではないと直ぐに気が付いたようだ。

そうだよ、これは船と違ってとんでもない速度で“陸”を走る乗り物だよ、決して海の上を走るものじゃないと思うし、間違っても正面から止めるなんてやつちゃいけない!!

「……!!」

ガン!!と列車とカエルが激突し……当たり前だが、少しの抵抗もなくカエルは吹き飛び海中に叩きつけられた。

……見たところ、死んじやいないか……頑丈なカエルだなあ。

「……船が、けむり吐いてたぞ」

「あれは船じゃない、列車だよ」

「列車?」

チヨツパーが首を傾げる。

私も首を傾げたいよ。海上を走る事が出来る列車って何なの。前世にも、珍しくはあったけどそういう列車はあったと思う……多分。だけどそのどれもが海面から線路が

飛び出して、今過ぎ去った列車のように海中にある線路を利用するなんて聞いた事も見た事もない。

「あ!!」

「ん?」

灯台の足場付近に建てられた建物から、幼い女の子が出てきて船の旗を見て声を出す。

「大変だばーちゃん!海賊だよ!!」

「何!?本当かチムニー!よーひ、ちよつと待つてりや」

「面倒だな、建物から誰か出てきた:!!応援呼ぶ気だぞ:」

チムニーと呼ばれた少女が呼んできたのは、酒瓶片手に真っ赤な顔した年配の女性だった。

その女性は持つてた電伝虫を地面に置いて受話器を取る。

「あー……もひもひ!?え〜と!!……、……何らっけ?忘れまひた!ウイ〜ツ!!」

「酔っぱらいかよっ!!」

ゾロとウソツプが突っ込む。酔っぱらいだし、あの様子だとかなり出来上がってるでしよ…。

真昼間からどうしてそこまで飲んでしまうのか…私なんて一口飲んだだけでアレな事になるから禁止令が出たというのに。

そのまま通り過ぎるにしてもさっきの列車といい謎が残るので、一度この灯台に船を止める事にした私たちは、早速錨を下ろして小さな人工灯台島に降りた。

チムニーと呼ばれた少女の他に、ペットのゴンベ、チムニーのばあちゃんである先程の酔っぱらい…ココロと軽く挨拶を交わす。

「おめエら、列車強盗じゃねくだろうな、んがががー！」

「おれはルフィ、海賊王になる男だ!!」

「私はハーレム女王!!」

「はいはい、あんた達今は大人しくしててね。で、チムニー、あれは蒸気船でしょ？でもあんな形じゃ普通航海なんて…」

ナミさんの疑問にチムニーがひひつと笑って答える。

私もそれが気になっていたので。というか海の中に線路入れてたらさっきみたいに乗り上げ事故とかありそうな物だけど…その辺は大丈夫なの？



「見た事無いでしょあんなの、世界中探してもここにしかないよ！あれは『海列車』  
「パツフィング・トム」って言うの」

「煙吹きトム？」

「うん。蒸気機関で外車パドルを回して海の線路を進むの！」

そのまま、前世の列車っぽいね。

走る所が海か陸かの違いでしかない。：海を走れる時点で利便性は

「列車は毎日同じ所をぐるぐる走って島から島へお客を運ぶの。それより！『仕切り』  
もあるのに船で入っちゃ危ないじゃないあなた達！」

「んー？」

確かによく見てみれば、海中に敷かれている線路よりも少し外側にプールのレーン仕  
切りのような物がずっと並行して続いている。

カエルに目がいつて気付かなかった：これは完全に私達が悪いね…。

「危ねエつつつてもよ、カエルはそれわかんねエだろ、吹き飛ばすのは酷いぞお前。おれ  
達の獲物なのに」

「ああ…あいつは『ヨコヅナ』、このシフトステーションの悩みの種なのよ。力比べが  
大好きでいつも海列車に勝とうとすんの。あれくらいじゃ死なないしまた現れるわよ  
！」

「それに、列車は急には止まれないからね。前に出る方が悪いんだよ」

ルフィはそういうもんなのか…と納得した様子。何やら頑張り屋は食わないとか言ってるし、列車相手に力比べしてる所を気に入ったのかな？

「そんで？おめエら一体何処へ行きてエんだい。ここから海列車で行くとすりやあ…」

「ああ、違うよココロさん。私達は列車に乗りに来た訳じゃないから… 記録ロクに従わないと」

「へー、どこ指してるの？」

チムニーが聞いてくるのでナミさんに目を向けると、ここから北の方だと言う。

「そうか、そりやおめエ「ウォーターセブン」だね。さっきの海列車はその島のブルーステーションから来たんらよ。「水の都」つつーくらいで、いい場所だわ。何よりアンタ、造船業でのし上がった都市だからね、その技術は世界一らー！」

酔いが回ってるせいで舌足らずだが、ココロさんが言うには次の島…ウォーターセブンは私達が求めている島その物かもしれないね！

「ルフィ、どうする？どうやら次の島にはすごい腕の船大工がわんさかいるらしいよ」  
「なら、そこにしよう！そこ行って必ず「船大工」を仲間にするぞ!!」

船長が決定したから、行き先はウォーターセブンで間違いないね。

私達はすぐに船へ乗り込もうとしたが、ココロさんがちよつと待ちな、と待ったをか

けてきた。

「便利なモンがあんら」

「？」

そう言つてココロさんは建物に入り、何やらガサゴソやつて直ぐに外に出てきた。

その手には紙が2枚掴まれており、便利なモンとはそれで間違いないだろう。

「ほいじゃあコレな！簡単な島の地図と“紹介状”、しつかり船を直して貰いな。ウォーターセブンは広いからね、迷わねエこつた」

「地図！確かに便利……助かるよ」

「あたし達も近いうちウォーターセブンへ帰るのよ」

「へえー、2人はウォーターセブンに住んでるの？」

聞けば、普段はウォーターセブンで常住しているのだがたまにこうやつて灯台に出張しているのだとか。

仕事つて大変だねえ。……よくよく考えたら、私の夢つてニートみたいな物なんじゃ……いや、これ以上は考えないでおこう。

「また向こうで会つたら行きつけの店で一杯奢るさ、んががが」

「そうか、んじゃまた会えるといいな！」

「ウォーターセブンでの記録は1週間<sup>ログ</sup>らよ、ゆっくりしていきな！」

色々教えて貰って、その上地図と紹介状まで渡してくれたココロさんとチムニー、あとゴンベに手を振って船に乗り込む。

紹介状：アイスバーグ？船大工かな？

「気をつけてね！」

「政府の人間に注意すんらぞ!!」

一般人なのに海賊に対してそんな送り出して大丈夫なのかと心配になる。

でも、まあいつか、別に私達が嫌な思いしてる訳じゃないし、寧ろこうやって言ってくれるのは嬉しいもんね。

よし、目指せウォーターセブン！

## 75 『女好き、水の都ウォーターセブン』

「それで、ウォーターセブンまでの地図ってどんなの？」

「ああ、そうね、確認しなきゃ」

地図を受け取ったのは勿論航海士のナミさんだ。

可愛いナミさんはペラ、とココロさんから貰った地図を広げた。

「…成程」

「キヤハハ！ 凄いわ、地図というよりお絵かきね！」

ミキータの言う通り、地図つぼくはないそれを見て私達は苦笑いを浮かべる。

まあ…線路沿いに進んでいけばウォーターセブンに辿り着くんだった事ばかりはわかるから…まあいつか。

「…でも、ようやくメリー号もきちんと直してあげられるね」

「ああ、この継ぎ接ぎも戦いと冒険の思い出だからな、おれア感慨深くもあるわけだ…」  
すりすりとメインマストにしがみついて話すウソップの顔は本当に感慨深そうだった。

何だかんだ言ってもこの船を一番修理してきたのはウソップだもんね、私じゃ上手く

出来ないし。

「…ん？おい、アレじゃねエのか」

「アレって？」

「てめエ分かってて言ってるんだろ、島が見えたんだ。見てみる」

双眼鏡を片手にゾロが首をくい、と動かして前を指す。

どれどれ……、おお、……おお！凄い……まさに水の都！って感じ！

「イリス、見えんのか!？」

「ふふん、いつもの視力倍加です！」

「ズリイぞーよし、みんな漕げ！オール！」

冒険を至上の悦びとしているルフィにドヤ顔で言えば、分かりやすく悔しそうな顔を  
して地団駄を踏んだ。

だけどそれも一瞬で、直ぐに切り替えて島へいち早く辿り着くことを優先するのは何  
ともルフィらしい。

そんなルフィの頑張りもあつてか、島には思ってたより早く近づく事が出来た。

私は早くから視認出来ていたが、近くに来た事でよりくつきりとその全貌が明らかに  
なる。

「すごい……」

「素敵ね」

水の都、ウォーターセブンは、まさにそう呼ばれるに相応しい：圧巻の一言に尽きるものだった。

島の中央部に聳えるタワーの様に高い噴水から湧き出る水が、島全域に行き渡っているのにも見える。そう見えるのは、この島の形自体が中央から外周に向かつて低くなっているからだろう。

「でつつけ〜噴水だ!!」

「うは〜こりやすげー！まさに産業都市!!」

「海列車も走る訳だ」

ジャヤはなんちゃってリゾートだったけど、ここならゆつくり羽が伸ばせそうだね！

水の都デート…いい!!

「正面にあるのが駅ね、ブルーステーションって書いてある」

「港はどこだよ」

「キャハ、多分街の方じゃないかしら？」

確かに、そりゃそうか。

じゃあこのまま港まで向かえば…、

「おーい！君達!!」

「ん？」

近くで小舟に乗って釣りをしているおじさんに声をかけられる。

何だ？海賊に気安く声かけられるって凄いな、一般の方じゃないの？あ、分かった、海賊って気付いてないんだね。

「海賊が堂々と正面にいちやマズいぞ、向こうの裏町へ回りなさい!!」

気付いてますやん…。

「…はい、ありがとう！」

ナミさんも同じ疑問を抱いたのか、少し考えてからおじさんに返事をした。

とはいえ、おじさんの言っている事は正しいから私達は素直に裏へと回る。

確かに…段々と人気がひとけ無くなってきたね。ここら辺なら船を着けても良さそう。

「裏へ来ても凄いわね、水上都市！」

「町が水浸し！家が海に沈んでるぞ！」

「違うわ、元々沈んだ地盤に造られた町なのよ。家の下の礎を見て」

成程…つまりこの島は人工島なのか。

あの柱を全部破壊したらウォーターセブンは沈む訳だ…。ヤバイ海賊の気まぐれでやられなかったらいいけど。

「よし、じゃあ早く船着けるぞ！」



「コラコラおめエら！ここはダメだ海賊船は。何しにきた？略奪か？」  
「えー…」

今度はまた違うおじさんに呼び止められる。

海賊に略奪かつて聞く？フツ…。

「違うわ、船を修理したいのよ！」

「それならこの先に岬がある、とりあえずそこに停めるといい！」

「…うん、ありがと!!」

言われるがままにその先の岬へと船を進め、ようやく岩場付近で錨を降ろせる事になった。

じゃ、帆を畳んで早速行っちゃいますか、水の都！

「うおっ!？」

「わー！何やってんだゾロくっ!？」

「違…！俺はただロープを引いただけで」

ぐいつ、と帆を畳むためのロープを引つ張った瞬間、その力にすら耐えきれずメインマストが嫌な音をたてて折れ曲がった。

幸い完全に折れてはいないけど…まさかここまでガタが来てるなんて…。

ウソツプにびしびし叩かれながらパワーでメインマストを元に戻すゾロを尻目に、ナ

ミさんは腕を組みながら疑問を口にした。

「ところで、島の人達何で海賊を恐れないの？」

「海賊だって『客』だからって事かしら？」

「海賊に暴れられても構わないくらい強い用心棒がいるとか…」

「いるだろうな、これだけの都市だ」

でも問題ないけど、私達は客な訳だし。

まあ…普通なら海賊船なんて直さなと思うけど、産業都市つてくらいだから客は選ばないよね。…ね？

「なら、みんなこれ受け取って！滞在1週間分のお小遣いよ」

「おおーっ！肉!!」

「食材!」

「刀!」

刀は買えないでしょ!

イツポンマツみたいに気前が良い店主なんてそうそういないからね。

「じゃあ、どうする? 私はナミさんと一緒に行くけど」

「私も」

「そうね、じゃあ船長のルフイト、あとウソップ、イリス、ミキータと私でアイスバーグ

という人を探すって事でどう？ サンジ君達は自由行動で大丈夫よ、ただし、夜は船に帰ってくる事！ ついでに言うならロビンも私達と一緒にどう？」

「私は…、…悪いけど、遠慮しておくわ」

少しだけ考え、軽く笑って断るロビン。

単純に行きたい所でもあるのかな？ そもそもここに来るのはロビンも初めてだろうから、考古学者の血が騒いだりとか。

「そっか…残念。でも一週間もあるんだからまたどこかでデートしようね！」

「フフ、ええ」

そうして、私達アイスバーグ探し隊は“水の都”ウオーターセブンへと入るべく船を降り、ロビンに大きく手を振って歩を進める。

ルフィの引く台車には空島で手に入れた黄金がぎつしりと袋に詰めて乗せてあり、まずは換金所を目指す事となった。

理由としては、やっぱり黄金のままだと持ち運びが不便で仕方がないから。私とルフィしか持てない重さなのはちよつとね。ミキータに全部任せる訳にもいかないし。

「あつたあつた、ここから入れそうだよ」

「ここだけ？」

町と岩場岬を繋ぐのは、たった一本の石橋だけだった。

あるだけ助かるからいいけど、何かあつてこの橋壊れたらまた作り直さなくちゃいけないんだからもう一本くらい作つてたら良いのに。

しかもその橋を越えた先の門の上には、何やら謎の看板が貼り付けられていた。

「レンタルブル、ブル、シヨップ？ブルって何だろ」

「知らねエ…ブルドッグか？いや、なわけねエよな」

「入つてみるしか無さそうね、行くわよ」

ナミさんの言葉にみんな頷いて、ルフィを先頭に門を開いて中に入っていく。

いや、建物の中に入ると言うよりは、ここがウォーターセブンの入り口か。

「すいませーん！誰か居ますかー？」

「…ん？ああ、はいはい、ブルだね、何人だい？」

「5人です」

カウンターを挟んで受付のおじさんが新聞を読んでいて、私達が来たと分かれば前まで歩いてくる。

「おお」

思わず声が漏れてしまった。

ここからでも町の様子は見えるのだが、まさに水の都だ。歩道より水路の方が多からか住人達はみな見た事もない動物に乗って移動している。

…そうか、ブルってあの動物の事か。

「何ブルにしようか。ランクはヤガラ、ラブカ、キング。まア5人ならヤガラ3匹つてとこでいいね」

「ブルってあの動物だよね？」

「ああ、知らないのかい？」

「初めて来たからね、海列車じゃなくて記録ロクを辿って来たんだ」

やっぱり馬みたいな顔してる動物がブルなのか。

確かにああやって移動しないとこの町では生きていけなさそう。

「ほオ、記録ロクを辿って船で？大したもんだよおめーら。じゃあ「ブル」なんて全然知らねエだろ。嬢ちゃんの言う通りあれがブルだ、ヤガラブル。住人にとつちや見ての通り欠かせねー乗り物さ。この島を観光するにも同じだよ」

「あの魚が船を引いてるの？」

「引くつーより乗せてんだ、背中に。まー、陸でいう乗馬のような、馬車のような…」  
なるほど、小さな首長竜みたいな体型をしているのか。

水上に出ている首は体の一部で、水中には人が座るボートを乗せられるだけの体が隠れているって訳だね。

「そこに生簀があるだろ、まー乗ってみな、快適だ。二人乗りのヤガラブル3匹で300

0ベリーだ」

しかもお手頃価格だね。

という訳で早速ヤガラブルに乗り込む。

私はナミさん、ミキータと同じブルに。ウソツプは1人、ルフィは黄金と一緒にだ。

「そんな大量の黄金のせても大丈夫なの？」

「黄金？ わはは！ 面白いな、何にせよ大丈夫だよ、ブルの力は凄いらな」

そう言うおじさんにルフィは袋を開けて中の黄金を見せる。

「うおー！！くれ！！」

「やるかつ！」

「キャハ！ 正直な人ね」

でもこの人の反応が正しいよ…私達もこれだけの黄金を見つけた時はテンション上がったからね。

「いや…驚いたよ。さて、ヤガラブル3匹で150万ベリーだよ」

「値段上がったぞおっさん！！」

ウソツプのツツコミが刺さる。

本気で言ってる訳じゃないのはニュアンスで分かるから、このおじさんが良い人なのは今回の事で良くわかったよ。

ただこんな人ばつかな訳ないから、あまり人に見せるのは良くないけど…。

「ねえ、この辺に換金所はある？」

「んー…あるにはあるが、そんな量の黄金だと店に金が無いだろう。造船島の中心街へ行った方がいい」

「じゃ、そこ行こっか！しゅっぱーっ！」

「ああ待て待て！ついでだ、この街の地図をあげるよ」

さつすが、良い人は気前も良いね！

ナミさんがおじさんから地図を受け取り、お金を払ってついにウォーターセブンへと繰り出した。

ちなみに私のポジションは勿論ミキータの膝の上ですね。元々ヤガラブルは2人乗りだから、こうするしかなかったの…！ウソツプは1人で乗っていると、そんな事は今はどうでもいいの！

「ありがとうおじさん！」

「ああ！まいどあり、気をつけてなア！」

そのままスーッとブルは抵抗もなく進む。

私達へ揺れは伝わってこないし、速度も遅くなく、そして速すぎないから快適！

「まずは商店街を目指しましょう」

「よーし！行けヤガラ！」

「ニーーっ！」

それから、ものの数分後に商店街へと到着した私達はまたもやその光景に圧倒されていた。

さつきまで通っていたのは住宅街っぽかったから、やっぱり商店街は人の数からして違うや。

ブルもかなり大きめのサイズも居る。あれがキンググ：だよな？

「ねえイリスちゃん、何だか仮面付けてる人多くないかしら」

「ああ…確かに。パーティーでもあるのかな？」

この街特有の物かもしれないけど、全員が付けてる訳じゃないからなあ。仮装の様なものなのかもしれないね。

「ニ〜!!」

「わっ！おい、どこ行くんだ！」

「おいルフィ、どうした！」

突然、ルフィの乗るブルが進路を変えて“水水肉”とやらを専門に売っている店の前から離れなくなった。



肉とあつちやルファイも黙ってはいられないので、彼らしく豪快に10個程買って戻ってくる。

「ねールファイ、私にも1つ頂戴」

「やだよ、買ってくればいいじゃねエか！」

ぐぐ…肉の事となるとやっぱダメか…。

仕方なしにナミさんをお願いして店の前まで移動してもらった。

ルファイ程ではないが、ブル用に2個余分に購入して合計3個となる。ナミさんとミキータは要らないらしい。…でも美味しそうじゃん、この肉。

「はいブル。乗せてくれてるお礼」

「ニくくっ!!」

倍加で腕を伸ばしてブルの口元まで持つていくと、2個丸々口の中に放り込んでむしゃむしゃ食べ出した。さっきのブルもそうだったけど、どうやらこの種族は水水肉が好物らしいね。

「どれどれ…あーん」

ぱくり、とまづは一口。

水の滴るその肉は、何がどうなっているのかかなりの柔らかさで…口の中に肉の旨味と水が同時に広がる感じだ。

お、美味しい…！すっごく美味しい…！サンジに調理して貰えばとんでもない絶品メニユーになるよこれは！！

「美味しい？イリス」

「すっごく美味しい！病みつきになりそう！」

「そう、良かったわね。でもこぼしちやダメよ、汚れ落ちないんだから」

ナミさん…それじゃお母さんみたいだよ。

ほら！通りすがりの女の人も微笑ましい物を見るような目で見てくるもん！違うから！この美少女は正妻だから！！お母さんじゃなーーーーい！！

## 76 『女好き、大金持ちになる』

「さて、いよいよ造船島へ入るわよ、水門エレベーターで」

「水門エレベーター？」

商店街の奥へ奥へと進んでいけば、やがて大きな塔の下へと辿り着いた。

ナミさん曰く、この塔のような物がその「水門エレベーター」らしい。

『お入り下さい、エレベーターは造船島、造船工場及びウォーターセブン中心街へ参ります。門の中へお急ぎ下さい、閉門1分前です』

係の人が私達にそう告げるので言われるがままに急いで塔へと入る。

どこからか水を流しているのか、塔の内部には滝の様に水が流れ落ちてきている穴があり、恐らくこの門を閉める事で水位が上がってエレベーターの役割を果たすのだろう。

「おー、門が閉まった」

「上がってくぞー！面白エな〜ウォーターセブン！」

「水で何でもやっちゃうのね！」

ぐんぐんバケツに水を入れるように水位は上昇していき、ついに上へと到着して門が

開く。

その先に広がるのはさつきまでよりもずっと大きく見える中心の噴水と、その下に  
ある沢山の家々。

住宅街より少し下の層では大きな造船所が何箇所も存在し、まさに世界一の造船所と  
呼ぶに相応しい街だった。

「ここは流石に陸の方が多いな」

「巨大だなー色々〜!」

かなりの大都市に興奮してキョロキョロと忙しく首を動かしていると、何やらーと  
書かれている大きな門の前に人だかりが出来ているのを発見した。

造船所でも見ているのか、とにかく行ってみよう。

「ルフィー!あの人だかりまで行こう!」

「おう!行けヤガラ!」

「ニー!!」

早速歩道へ降りてブルに別れを告げる。いやー、ほんと助かったよ。この子達が居な  
いとこの街じゃやってけないね。

「ホラ見てあそこ!ルッチさんだわ、素敵!!」

ざわざわと人だかりから聞こえる声に耳を傾ける。

大体は船大工達を誉め倒している内容っぽいな。

「パウリーはいないのか？」

「ルルが居るぞ！シブイなア、男の中の男だぜ、奴は！」

「男つちやあタイルストーンだぜエ！」

まるで芸能人みたいな騒がれようだなあ。

丁度近くを通る通行人が居て、ルフィがこの人だけについて軽く尋ねた。

「なアおっさん、何かあつたのか？」

「ん？ああ、この一番ドックでまた海賊達が暴れたらしくてな。…まア結果は当然職人達にノされて終わりよ。バカな輩が後を絶たない」

「船大工が海賊を？」

「あア…君達は航海者か。あの人だけかりは、まあつまりヤジウマだな。「ガレーラカンパニー」の船大工達は住人みんなの憧れの的さ。強くて腕があつて…彼らは「ウォーターセブン」の誇りなんだ」

なるほど…それは楽しみだね。腕のいい人に直して貰えるならメリー号も嬉しいでしよー。

「私達、ここに換金所があるって聞いたんだけど知らない？」

「換金所？ブルがあるならその水路を渡ってー」

街の人が親切に教えてくれたので、早速ブルに乗り込んで言われた道を進めば確かに換金所がそこにはあった。

よし、行くぞー！多分これだけの黄金があれば……、ちよつとどれくらいのお金になるかは分かんないけど、きつと大金持ちだよね！

ガツシャガツシャと黄金の詰まった袋を揺らしながら換金所に入る。持つてるのがミキータだからか、音だけが大きくて重いものを持つているようには見えない。そりやそうか、実際軽いはずだもんね。

流石中心街と言われるだけあって、ここの換金所はかなり大きい銀行の様な内装だった。

中ではせつせと忙しく働く人達や、お金を受け取ってる人達など……私達は後者だね。

すぐに受付に向かい、周りの人達に見られない様に袋を開けてこつそりと係の人に見せればその人は目ん玉を飛び出させてパチパチ瞬きをする。

「よ、ようこそお越し下さいました。こ、こちらは？」

「見ての通り、黄金よ？換金して欲しいの」

「で、ではこちらへ！」

そう言われて案内されたのは、「VIP」と書かれた部屋の中だった。

VIPルームかあ…レインデイナーズのせいでいい印象ないんだよね。

それもこれも全部クロコダイルが悪い！今度会ったら水水肉で顔面ぶつ叩いてやる！！

とりあえず長机を挟んだ両側の椅子の片方に座り、隣にナミさんとミキータが座る。残った両端にルフィ、ウソップがそれぞれ座った。

「これだけの黄金だからな…5000万は下らねエか？」

「いやあ、保存状態が素人でも分かるくらい良いから、もしかすると1億とか行くかも？」

「1億って肉何個買えるんだ!？」

相変わらずルフィの頭の中は肉しか無いようだけど、もし1億換金出来たとしても全て肉には使えないからね…?？」

「ふふ」

そんな私を見て微笑ましいものを見るように笑うナミさん。ちくしよう、何で笑われたのか分からないけど可愛いなちくしよう。

うおお…！とナミさんの可愛さに悶絶していると、扉がガチャ、と開いて鑑定士が入ってくる。

おお…あの鑑定士がしてそうな眼鏡に、鑑定士が生やしてそうな髭！ザ・鑑定士!!

「お待たせして申し訳ありません。物はどちらで？」

「これよ」

ミキータが机に袋を乗せて、ナミさんが紐を解いた。

「おお…、素晴らしい。では早速…」

「わくわく」

「わくわく」

ウキウキ気分で向かいに座った鑑定士の黄金を確認する姿を見る。

今度空島に行く時は空島住人全員に何かプレゼントでも持つて行ってあげようそうしよう。

「う、ううむ…ざつと見た限りでも…」

「見た限りでも!？」

「……1億相当の価値があると思われれます」

!!!!

いち!おく!!

日本円にして、1億円!!!? 1ペリーー1円だからね!!

生涯賃金の半分じゃないですか!! やたー!!! ぶっちゃけこの世界でお金ってそんなに興味ないけど、それだけ手に入るっていうのは素直に嬉しいよね!!



「そんなにくれるのかア!!?」

「歴史的にも純度も…素晴らしい黄金です…!」

「そんだけありやあ充分メリー号を直せるな!!残りの金で肉買ってよオ」

「ご納得頂けましたら、早速換金の用意を…」

「やったね!ナミさん、ミキータ…:…つひえつ」

笑顔でナミさんとミキータを交互に見ると、…お、おう…何か2人とも恐ろしい笑顔を浮かべておられました。

ナミさんなんかニツコリ笑ってるけど青筋が隠し切れてないよ!ミキータも背中から殺気漏れてるよ!

ドスン!!

「ひ!!」

突然、テーブルの上にかかと落としを喰らわせたナミさんに驚いて鑑定士が小さく悲鳴を上げる。

「な、なな、ナミさん…:ど、どうした、の?」

「…私の言いたい事は3つよ…:鑑定士さん」

ギロリ、と鑑定士を睨み付けるナミさんの迫力は、推定懸賞金額1億は下らないと思つた。怖い。でも可愛い。

「1つ…言い忘れてたけど、こつちの2人はそれぞれ1億の賞金首。2人合わせてじゃないわ、1人で1億よ。…2つ、今の鑑定に私は納得しない。3つ、もう1度ウソをいったら…あなたの首を貰う！以上」

「キャハ！私からも言わせて貰うけど、無邪気なイリスちゃんを騙さないでくれるかしら？信じちゃうじゃない。あ、でもそんなトコも可愛いわ！好きよ！」

私も好き!!

…じゃなくて！…いや、じゃない事はないけど、今は置いといて!!

1億ってウソなの!?しかもナミさん達の言い方…1億でも安いって事!?

「あ…そ、それは…、そ、その…、…ま、誠に申し訳ございませんでしたあーっ!!」

びゅーっ!と風の様去っていった鑑定士。

と思っただらものの数分でアタツシユケースを4つ抱えて持ってきた。取引とかに使われてそうなやつ!

「こ、こちらが紙幣になります!えー、かなり古くに発見が確認されていて、現在だと数個しか存在しないと思われていた、まさに幻の黄金の数々…それを1度にこれ程までとなると…はい、合計で4億ベリーになります…!」

「よっ…!!?」

「4億ウ!!?」

ルフィ、ウソツプと一緒に大口開けて驚き、急いでケースを受け取って開ける。す、凄い……！4つ全てにぎつしり埋まった紙幣……ここ現実だよな？

「な、ななな、ナミさん、ミキータ……これは……？」

「これはも何も、お金よ。元々それくらい価値はあると踏んでたの」

「私もナミちゃん程じゃ無いけど、経験上そういう事は少し詳しくてね、まさかこれだけの黄金で1億だなんて……言ってくれるわ」

ミキータがちら、と鑑定士を見るとその額からドバドバと汗を流していた。

なんだ、私達を下に見て騙したのか。……3億も騙せると思ってたの？バカだよねこの人。

……2人が居なきや間違いなく騙されてたけども!!

そんなこんなで、まさかの大金4億を手に入れた私達はホクホクと暖まった懐を噛み締めるように換金所を後にした。

鑑定士の心は私たちに比例して極寒の地になってそうだけど。

「よ、4億になっちまった……こ、こえエよおれ、1億も持つのかよ」

「ミキータ1人にこんな重圧任せるなんて酷な事出来ないよ、私達全員でこの子達を泥棒から守りきらなくちゃ！」

「あんたは何に怯えてるのよ…あんた相手から盗める盗人がいるなら見てみたいわ」  
ルフィ以外の4人で1個ずつアタツシユケースを抱える私達は、先に船大工に会う事  
にしてさっきの1番ドックまで戻った。

何故ルフィに持たせてないのかなんて、言う必要もあるまい…。

「造船所の入り口まで戻ってきたぞ」

「さっきの人だかりはもう無くなってるわ。じゃあアイスバーグって人を探す?」

「そうねえ…」

誰に声を掛ければ良いのやら、呼び出しベルでもその辺に置いてくれば便利だと  
言うのに。

「おじやましますー!」

「うわ…強引だ…」

柵を乗り越えて中に入ろうとするルフィを見てため息をつく。

これから船を直してもらおうってのに不法侵入しちやったらマズいんじゃないの?

「おっと待つんじゃない、他所よそも者じゃな?」

「ん?」

自覚のない不法侵入を試みたルフィが柵を乗り越える前に、突然物凄いスピードで現  
れた男に顔を押しさえられて動きを止める。

…何、この人…、全く動きが見えなかった…!

「とりあえず外で話そう。工場内は関係者以外立入禁止じゃぞ、このドックに用か?」

どっこいしょ、と柵を乗り越えてこちらにやってきた男がそう話す。

は、鼻が…:長い!!四角い!

「ウソツプ…?」

「オイ、おれはここに居るだろ!」

ビシ、と例の突っ込みを披露するウソツプを置いて、ナミさんが男に紹介状を渡しながら本題を尋ねてくれた。

「あの、アイスバーグさんに会わせて欲しいの」

「ほう、ソフトステーションのココロばーさんの紹介状じゃな」

「え?お前おっさんか?」

「ワシヤ23じゃ」

「23じゃ」で、じいさんみてエな話し方だぞ

「ワハハハ、よう言われるわい」

キャラ作り…ではないか。特殊な環境で育ってきたんだらうなあ、周りが老人ばっかだったとか。

「知ってるの?アイスバーグって人」

「ん？知つとるも何も、アイスバーグさんはこのウォーターセブンの“市長”じゃ  
え、わりと大物に紹介状書いてくれたんだね…。」

ていうか、そんな人に紹介状を書けるって…ココロさんは一体何者なの？

「へえ、お偉いさんなのね」

「更にワシらガレラカンパニーの社長でもあり、海列車の管理もしておる」

「いやそれはやりすぎ！」

市長で社長で管理者つて事でしょ？めっちゃくちや有能じゃん！

…ちよつとあの、年収とか聞いても良いだろうか。単純に気になるよ。

「じゃが…あの人も忙しい身じゃしろう。お前達の話は要するに船の修理じゃろう？船を止めた場所は？」

「え？岩場の岬だよ。裏の方」

「よし、じゃあワシがひとつ走り船の具合を見てこよう。その方がアイスバーグさんに会った時話が早いし、金額の話も出来るじゃろ」

ひとつ走り？

「ブルでつてこと？」

「ワハハハ、そんな事しとつたらお前達も待ちくたびれてしまうじゃろう。まあ10分待つとれ」

「10分…?」

「10分」

男はそう言い残すと、まるで風のように速くこの場から走り去って行った。

しかも私達が登ってきた水上エレベーターの上からジャンプして下に落ちて行ったし…本当に信用して大丈夫なのだろうか。単なるダイナミックな自殺って訳では無いだろうけども。

「死んでないよね?」

「キャハハ…分からないわ…」

「ンマー…!心配するな、奴は街を自由に走る」

突然の事で驚き、少しの間男が落ちて行った所を見ていた私達の後ろから声がかかる。

…誰だこのおっさん。隣に立ってる美女を下さい!!

「人は、奴を“山風”と呼ぶ。ガレーラカンパニー番ドック、大工職職長…カク」

「凄い職長も居たもんだよ。安全第一じゃないの?」

「それを言われると痛いな。次からは速度制限の装置でも持たせておこう」

「アイスバーグさん、そんな装置はありませんし、彼女が言っているのはそういう問題で

はないかと」

アイスバーグ！この人がそうなんだ。おっさんとか言っでごめんなさい。

……もう一度言うけど隣の秘書の様な美女下さい！……ボンキュツボン……ああ、良い！！



## 77 『女好き、突きつけられる事実』

「いや、でも驚いた。飛ぶんだもん、あそこから」

「ンマー！ウチの職人達をナメて貰っちゃ困る。より速くより頑丈な船を迅速に造り上げる為には…並の身体能力では間に合わねエ…とこでカリファ」

「ええ、調査済みです」

カリファ！良い名前だ…よし決めた、嫁にしようこの人。秘書だからアイスバーグの女じゃないでしょ？

というか、調査済みって何が？

「〃麦わらのルフィ〃、〃女好きのイリス〃、〃海賊狩りのゾロ〃、〃運び屋ミキータ〃、  
 〃ニコ・ロビン〃。5人の賞金首を有し、トータルバウンティ総合賞金額3億4千650万ベリー。結成は  
イーストブルー東の海。現在9人組の『麦わらの一味』です」

物凄いバレてら。

スマホの様に簡単に先生を使えないこの世界で、ここまで速く私達の情報を探し出せるなんて…世界一の造船技術怖い。情報網もバロックワークスより敷かれてそうだなー！

「そうか、よく来た。俺はこの都市のボス、アイスバーグ」

「普通に対応出来るなんて凄いね。目の前に居るのがその1億だよ?」

「客は客だ」

成程…流石大都市のボス。

私が前世で例えば働いていたとして

『いらつしやいませー』

『おう姉ちゃん。俺1億の指名手配犯、でも客やからな』

『客は客です!!』

…うーん、絶対言えないね。震えるよ色々。

そんな凄腕市長のアイスバーグがさつきから胸ポケットに入れて可愛がつてるネズミも気になるんだけど…ペット?

「このネズミが気になるか? さつき拾ったんだ。名前は…そうだな…、ティラノサウルス。エサとカゴを用意せねば」

「手配済みです、アイスバーグさん!」

「ンマー! 流石だなカリファ」

「恐れ入ります」

胸ポケットに入っちゃうような可愛らしいネズミに対して、その名前はちよつと重たいんじゃないかな…。

「それより、10分後にチザのホテルでグラス工場の幹部と会食。その後リグリア広場での講演会。終わりましたら美食の町ブッチの市長：ビミネ氏と会談。その場で新聞社の取材を受けて頂き、本社へ戻り書類に少々お目通しをお願い致します」

「いやだ!!」

「では全てキャンセルします」

「市長ってそんなでいいの!!?」

「キャハ…私の元上司も、ここまで適当じゃなかったわ」

元上司ってクロコダイル? そりゃあの男はかなり用心深いというか…適当にする訳には行かない立場だったからね。

それにしてもアラバスタ乗っ取りとか良く考えたもんだけど、ビビを泣かしたんだから失敗するのは当然だよな。

「こんな事が出来る程の権力者だ、俺は」

「市長失格じゃねエか完全に」

「わがままな奴だなー。でもコレ、あのバーさんの言つてたアレじゃねエか?」

「ええ、そうみたい。そのアレよ」

ルフィの言葉にナミさんが頷く。

あんまりアレコレ言ってたら流石のアイスバーグと言えども怒るんじゃないよ。

「無礼者っ!!」

「うわっ!」

アイスバーグ本人では無かったが、流石に言い過ぎたかカリファが連続で蹴りを放ってきた。

しかも、結構キレがあるな!まるで戦こっちいが本職の様だ…。でも!

「おっと、ナミさんとミキータにまで当てられちゃ困るよ」

「っ!」

ガシ、とナミさんの顔前まで迫ってきた右足首を軽く跳躍して掴んで止める。

いくら美人秘書だろうと、私の嫁には手出しさせないよ、

「…うわ、パンツ丸見え」

「え?!は、離しなさい!この無礼者!!」

「どーしよっかなー???私、海賊だからなア?」

実際はこの角度だと太ももが遮ってスカートの中身は見えないんだけどね。

でも、太ももも悪くない…!

とはいえ、本当に無礼をし過ぎると船を直してもらえないかもしれないから冗談だよ、と手を離れた。

「…さ、流石は1億の首…私の蹴りを受け止めるとは中々です。ですが！世界屈指の造船技術者に向かつてアレだのコレだのは何ですか！」

「うん…それは、ごめんなさい」

「……。失礼、つい取り乱してしまいました。ですがアイスバーグさんは市民の憧れ、あまり無礼のない様に」

素直に謝れば、意外そうに目を丸めた後またアイスバーグの後ろへと戻って行った。

でもカリファアって怒ると見境無くなるんだね…気付いてないだろうけどそのアイスバーグの顔にも蹴り入ってるよ…。

「とにかく、あなたがアイスバーグだね？」

「そうだ。船の修理だったな？」

「ええ、紹介状もあるわ」

カクに見せた時と同様に、ナミさんはアイスバーグに紹介状を渡して見せる。

何て書いてあるのかは知らないんだけどね。アイスバーグって人に渡してくれとしか言われてないし。

「ココロバーさんか、なにに…『ふねみてやんなよ』」

「……え、それだけ？」

「……ふう」

アイスバーグはそれを見て軽くため息をつく、あろうことか紹介状を破り捨てた。

その顔はかなりの不快感で一杯だ。まさか、船を見て貰う事は…。

「ねえ、お願い、船直して！お金なら払えるのよ!!」

「私からもお願い！航海でメリー号はボロボロなの！」

「いいよ」

「それに、あの船は私達の思い出が……っていいんかい！なんで破いたの！」

すつごく軽く承諾して貰ったんだけど！心臓に悪い！

「最後のキスマークが不快だった。ココロバーさんとは昔からの飲み仲間だよ……」

「……、まあ、見てくれるなら良いけど」

昔からの「飲み仲間」と言うには、呼び方に親しみを感じるのは気のせいだろうか。

まあ…船を見てくれると言うのなら、その辺の事情に無闇に踏み込んでいく必要は無いから詮索しないでおこうかな。

「ンマー！とはいえ、既にカクが船を査定に行ってたんだ、話は進んでる。それにどうせ今

日は退屈な日だ。工場を案内しようか」

退屈にしたのはあなたの一言でだけどね…。

…良く捉えれば、自分で言うのも何だけど私達って高額な賞金首だし、目を離せないとか…?」

「あれ、ウソツプ、お金は?」

「ああ、ずっと持つてるのも重たいからな、ナミのも預かってここに…:…つて」

「…あ、バレたぞ、逃げ!!」

ウソツプが自分の足元を見るがそこにアタツシユケースは無く、急いで周りを見渡せば背後でこそそこそ隠れてケースの中を覗いている連中と目が合った。

何だこいつら!どنگりみたいな格好しやがってー!!!

「フランキー家!」

アイスバーグにフランキー家と呼ばれたそいつらは、用意していたヤガラブルに乗って逃走しようとする。

悪いけど…あげないよ!!それは大切なお金なんだ!!

「ん!?!」

フランキー家の乗るヤガラが橋の下へ差し掛かった瞬間、橋から誰かが飛び降りてきてフランキー家をロープで弾き飛ばし、代わりにその人がヤガラに乗る。

ロープで縛るんじゃないかと、ムチみたいな攻撃の仕方する人初めて見たなあ。

…いやいや、今はそんな事よりも、誰だか知らないけど助かったよ。後もうちよつとで必要以上に彼らの体が傷付くトコだった。

「パウリー！」

「パウリー？もしかしてあの人アイスバーグとこの船大工？」

「そうだ」

なんだ、じゃあ丁度良かった！

「おーい！ありがとう、その金おれ達のだ！」

ウソツプが大きな声でパウリーを呼べば、彼は自分の足元に転がつてるアタツシユケースを開けて瞳をキラリと輝かせ、そのまま手を上げて遠ざかっていく。

「いやオイ！戻れっつ！！」

「もういいよウソツプ、私が行く」

どこに泥棒が潜んでるのか分かったもんじやない。あの人も大金だと知るやそのま  
ま持つて帰ろうとするし…常識を疑うよ！普通1億だろうと人の金は取らないでしよ  
!!

『いや、俺が行こう』

「え？」

何処からか声が聞こえたと思った次の瞬間、船の上からパウリーの痛がる声が聞こえ



てきた。

声だけじゃない。いつのまにかヤガラの上に…：そうだ、あの時人だかりの中の誰かにルツチと呼ばれてた人がパウリーの耳を抓つて立っている。

…え、さつきその辺で声聞こえたのに、もうあそこまで!?

ルツチはパウリーを引つ張つたままヤガラを動かしてこちらに戻ってくる。

「ありがとう。本当は私が取り返そうと思つたんだけど…」

ルツチからアタツシケースを受け取りながらお礼を言う。

その時に感じたんだけど、ルツチつて絶対強いよね。何て言つたらいいか…：底知れぬパワーを感じるというか。

「ンマー！悪かった、身内のバカは身内でカタをつけさせてくれ。おめエらにとつ捕まりやカドが立つからな」

「フランキー一家に盗られなくて良かったと思つてここは1つ…」

「カリファが言うなら許すよ〜！」

「そ、そうですか」

くねくね踊りながら言えば、少し引き気味で後ずさるカリファ。

今に見てろ、その顔を真つ赤に染めてやる！

「…でも、何者なの？さつきの変なカツコした奴ら」

「泥棒でしょ。どっからどう見ても」

「泥棒と言つても、あなた方は海賊ですので法には触れませんよ。フランキー家は船の解体屋であり、賞金稼ぎでもあるのです。この都市に出入りする海賊達を見つけては諍いを起こす迷惑な人達です」

あ：確かにそうか。私達海賊なんだから、盗られる方が悪いのか…。

あの黄金だつて空島から盗つてきた奴だし、奪われたくなきや守り通すべきだよ。この街に来た海賊共を潰せばせいづらの乗つてきた船も手に入るだろ？それを解体して使える木材は売り捌く。これがフランキー家の商売だ」

「キャハ！おつかないわね。でもあれくらいの人達が集まつてるだけなら、盗られても盗り返すのは容易ね」

「あれは手下共だ。だが、裏に控える一家の頭…「フランキー」は甘くみるな」

フランキー…？

何処かで聞いたことあるなあ…。この感覚も久し振りだよ…なんか前世の記憶が疼いてるって感じの…。

『……うん、今度こそ本当に決めた。私は…ハーレムを築き上げてみせる！』

『ハーレムつてだけじゃ、なんか味気ないからハーレム女王なんてどう？』

『いいね、海賊王みたいで!』

「————ツツ?!?!?」

「イリスっ?!?!」

「イリスちゃん!!!」

…!?え、…あ、頭が…痛い…っ!!

今、頭の中で、ちらりと映像が映ったのは…何…!?何か、話してた、様な…!!

「はア…っ、は、あ……。…。」

「どうしたイリス! アイツにやられたのがまだ直ってねエのか? 休むか?」

「…、いや、ごめん。もう治ったみたい…。何だろうね、別に体調は悪くないから気にし

ないで!」

ルフィまで心配してくるので、大丈夫だと手を振る。

本当にもう頭に痛みはなく、あの一瞬だけの話だったようだ。

「イリスちゃん…:本当に大丈夫?」

「うん、平気平気! さ、アイスバーグ、工場見学させてくれるんでしょ?」

「そうだが、倒れられちゃ困るぞ」

倒れたりほしえないと思ってるけど…でも実際の所本当に何なのだろうか…? 多分、と

いか絶対脳裏に映ったアレは関係あると思うんだけど…。

「……」

う、ナミさんからのジト目が刺さる…。

こんな状況で言うのも何だけど、そんな表情も可愛いね!!

「ンマー…とにかく、職人の腕一本の世界に案内しよう。金はもう手離すなよ、中に盗人はいねエ筈だが」

「さつきはおれが悪かった。その辺に置くなんて普通ダメだよな。オイルフィ、しつかりおれをガードしろよ!」

自分が悪いと反省しつつも人任せのスタンスを変えない辺り素晴らしいと思うよウソップ。ブレない。

「お」

ギギ、と前にある大きな門が開いていく。

1と書かれた文字が縦に割れる様に開かれていき、次第に中の様子も目に見えてきた。

大まかには外からでも確認出来ただけだね。だって門が大きい割には柵が低すぎるし…。

「この1番ドックには、「ガレーラカンパニー」の主力が集まり最も難しい依頼を引き受

ける」

「へえ……うわ……凄い！」

門が開ききつて中へと入れば、そこは正しく職人達の世界。

どんな巨大な船だろうと造れると言わんばかりの設備に、熱気ある船大工達の作業音……。私にはよくわかんないけど、あのクレーンもめっちゃ大きいよね。

「でっけ〜んだなア！造船所つーのは近くで見るとまた！」

「巨大ガレオン造ってんぞ！誰のデアア!？」

こういう光景が好きそうなルフィとウソップがわいわい言つて騒ぎ出す。でも仕方ないよね、これだけの規模なら誰だつて盛り上がるつてモンだよ。

「おお！アイスバーグさんだ！」

「おい、社長がおいでになつたぞ!!」

「本当か！アイスバーグさんおはようございます!!」

「おはようございます!!」

やっぱりアイスバーグつて凄い人なんだなあ。上に立つ人つて言うのは、勿論例外もあるけど嫌われる傾向にあるのに……凄く慕われてる様に見える。

「アイスのおっさん随分人気あるぞ」

「勿論！この都市では『腕』が全て。その昔この島では、元々造船業が発達していて7

つの造船会社が競い合っていた時、天才的な造船技術で職人達を魅了し…7つの造船会社を1つに束ねたのがアイズバーグさんなのです。そして集結した会社こそが、ガラレーラカンパニー。彼の造船に対する熱意と腕はずっと変わらず、職人達は彼への尊敬を忘れない」

実作業している訳じゃないのに腕って落ちないもんなんだ。

普通しなくなったら忘れて出来なくなるのよね。そうならないって事は、それだけ熱心に毎日造船の事を考えてる証拠でもある訳だ。

「職人達はその腕に誇りがあるから、海賊にも権力にも屈しない…ここはそういう場所です」

「そっかあ…。じゃあカリファ、私の嫁になつてよ」

「脈絡!!」

がびーん、と分かりやすく驚くカリファ。

いやあ、じゃあ船大工じゃないカリファは私に屈してくれるって事じゃないの？

「違うぞイリス！おれ達は船大工が欲しいんだ！オイおっさん、すぐエ船大工なんだつてな！おれと一緒に海賊やらねエか!？」

「ンマー！お前らの船には大工の1人も居ねエのか!」

ウソツプ先生なら居るんだけど、流石のウソツプも本職じゃないからね。

あの継ぎ接ぎには彼なりの愛情も感じるけども。

「船大工はごまんと居るが、海賊船に乗りてエって奴アいるかな。希望して行き  
てエって奴がいりやあ引き抜いて構わねエぞ」

「ホントかー!? やー話が分かるなー!! おっさんはダメなのか」

「ンマー! 俺はダメだろ、市長だぞ。ーとーとこで、お前の船には「ニコ・ロビン」と  
いう女が?」

「いるぞ! 頭いいんだこいつがまた」

そして私の嫁だ!!

まだだけど……、もうすぐ落としてみせる…!!

「カクが帰ってくるまで、好きに工場を見て回るといい。ただし、あまり船大工には近付  
くなよ」

「おう!」

「!あれ、デミ・カルヴァリン砲か!?! おお〜!!」

アイスバーグの許可が下りたので、ルフィもウソップも喜んで各々見たい物の下へ向  
かって行った。

私は……いいかな。ここでナミさん、ミキータ、カリファと一緒にイチャイチャして  
る方が有意義だし。

\*\*\*

と言つても、造船所内で心トキメクイチャイチャストリーが繰り返られる訳もなく…カリファに至つてはアイスバーグの横で忙しなく働いてるし…。

そんな感じで5分くらいが経過した時だった。

「あ、カク」

「キャハ！査定は終わったのかしら！」

ついに船を見に行つてくれていたカクが帰つてきて、ナミさんの号令でアイスバーグの所に固まる私達。

ん？

「ルフィは来たけど…ウソツプは？ルフィ知らない？」

「ウソツプ？いねエのか？」

「きつと遠くまで見に行つてるのね。だからかケースはここに置いてるわ」

確かにナミさんの足元にはウソツプが持っていたアタツシユケース2個が置いてあ



る。

「……でも、ウソツプはついさつきケースから目を離して盗まれそうになったのを反省していた筈だ。何か、引つかかる…。」

「それで、いくらかかりそうなの？」

「いくらでも出せるぞ！金なら持つてんだ！出来ればよ、もつと頑丈で大砲も増やして、スピードも速くして！」

「後素敵な装飾なんて外板につけたり出来る？部屋の中也改装出来るの？」

「私は大きなベッドが欲しいわ！イリスちゃんと熱い夜を過ごすのよ!!」

ルフィもナミさんもミキータも少し興奮している様だ。

ちよつと待つてミキータ、それ作っちゃったら私毎日寝不足になるから!!

「まあ待て、手つ取り早く言うと…お前達の船は戦いのキズが深すぎる。随分豪快な旅をして来たんじゃない？」

「そりやもー、山登つたり空飛んだり串刺しになつたり、色々あつたからなー。ちゃんと、直してやりてエんだ!!」

「もしかして、だいぶ時間かかるの？」

首を傾げてカクに問えば、彼は被っている帽子のツバを持って軽く整えた。まるで、何か言いにくい事がある様な…何か、何か嫌な予感が、私の胸の奥底から湧いて来てい

るのだ。

前世の記憶なのか、ただの第六感なのかは分からないけれど…頼から流れ落ちる汗が、私が知らず知らずのうちに緊張しているのだという事実を突きつけてくる。

「…いや、はつきり言うが、お前達の船は…、わしらの腕でももう直せん…!!」

「!」

「え…」

……ええ?

「……例えば、無理に修理したとして、次の島まで持つ確率は… // 0」

「じゃ」

「…そ、そんな!!だって、だって今日まで普通に航海して来たんだよ!!?」

「…竜骨でもやられてたか」

「ああ、酷く損傷しておる」

パウリーが竜骨がどうか言ったのに対して、カクは否定せずに軽く頷いた。

「……メリー…!!」

脳裏に浮かんでくるのは、空島で見たあの影の事。

…もつと船を大切にしていれば良かった。もつと修理に気を遣ってあげれば良かった。もつと安全なルートを選んであげれば良かった。

ーーもう走れないなんて…そんなの…ウソでしょ？

## 78 『女好き、奪われる大金、涙の訴え』

「メリー号が直せねエって!?何でだ!!おめエらすげエ船大工なんじゃねエのかよ!!」

「……………」

「金ならいくらでもあるのに!!」

「金は……」

ばんばん、とケースを叩くルフィにカクが口を差す。

私とルフィだけじゃない。ナミさんもミキータも……言葉が出ない程信じられない事実だった。

「関係ないわい。いくら出そうともうあの船は元には戻らんのだ。よくもまあ……あの状態でここへ辿り着けたもんじゃと、むしろ感心する程のもんでな」

「……どういう事!?!メリー号に何が起こってるの!?!」

「お前ら、竜骨って分かるか?」

同じく近くで座っているパウリーが、タバコの煙をふかしながら何やら聞き慣れない言葉を口にした。

「……船底にある……」

ナミさんは知っていたのか、時間を置かずなどの部位なのか当てる。

「そう、船首から船尾までを貫き支える、船において最も重要な木材だ。船造りはまず……  
そいつを据える事から始まり、船首材、船尾材、肋根材、肋骨、肘材、甲板梁……全ての  
木材をその「竜骨」を中心に緻密に組み上げていく。それが「船」だ」

「……まさか」

「ほう、ガキのくせに察しが良いじゃねエか。そのまさかだ。船の全骨格の土台、〃竜骨  
〃は「船の命」……そいつが酷く損傷したからといって挿げ替えるなんて事ア出来ねエつ  
てわけさ。それじゃあ船を1から造るのと同じ事だからな。1……だから、もう誰にも  
直せねエ。お前らの船はもう、死を待つだけのただの組み木だ」

……!!

トゲのある言い方に、私の中で沸沸と怒りが込み上げてくる。

……だけど、それが爆発する事はない。何故なら……メリー号の状態は、一流の職人にこ  
うまで言わせるほどだ……って事なんだから……。

「……じゃあ……だ……つたらよ……もう1回、1から船を造ってくれよ……!!  
ゴ……イン……グ……メ……リー……号  
を造ってくれ!!」

『それも無理だ、クルツポー』

「何で!!」

ルフィの言葉に即返答したのは今度はルッチだった。

でもルフィは手を広げてどうしてだと声を張り上げる。

『似た船なら造ってやれるが、厳密に言つて同じ船はもう誰にも造れねエ。この世に全く同じ船は2つと存在し得ねエのさ』

『どういふ事!?!』

『世界中に全く同じ成長をする“木”があるか? 帆船はほぼ木材で出来ているから、船の大きさも曲線も全て木の形に左右される。同じ設計図を使つても全く同じ船は2度と造れねエのさ。例えばそんな船を造つたとして…それが全く別の船であると最も感じてしまうのは、きつとお前達自身だ。クルツポー』

腹話術だか何だか知らないけど、こんな状況でクルツポークルツポー言われると腹が立つな…。

私も、相当気が立っているんだろうか…普段なら、そんな事気にしないのに。

「…そんな、じゃあ本当にもうゴイングメリー号では2度と航海出来ないの!?!」

「そうなるのう。このまま沈むのを待つか…さつさと解体してしまうかじや。言つちやなんじやが、船はキャラベルじやろう。そもそもそんな古い型の船じやあ、この先の航海も厳しかろう」

ちらりとルフィを見れば、彼は視線を固定させたまま何か考え事をしている様だつ

た。

…ウソツプがこの場に居なかったのは、良かったのか、悪かったのか…。でもどの道言わなきゃならない事だし…。

「……いいや、乗り換える気はねエ!!おれ達の船はゴーイングメリー号だ!!まだまだ修理すれば絶対走れる!大丈夫だ!!今日だつて快適に走つてたんだ!なのに急にもう航海できねエなんて信じられるか!!お前ら、あの船がどんだけ頑丈か知らねエからそう言うんだ!!!」

「……沈むまで乗りやあ満足か。呆れたもんだ…てめエ、それでもー船の船長か」

「……!!」

あくまでもメリー号が良いと叫ぶルフィに向かって、アイスバーグが冷たく、それでも悟す様にそう口にした。

「話は一旦終わりだな。よく考えて…船を買う気になったらまた来い、世話してやる。有り金4億出せば最新の船でも何でも造つてやれる。カリファ」

「はい。…どうぞご検討を、新型から中古までのカタログです。値段の参考に…」

カリファの差し出すカタログはミキータが受け取り、それを伏し目がちにぺらぺらと捲つていくがすぐに溜息をつきながらばたんと音を立てて閉じた。

…まずは、ウソツプを見つけて話をしないと…。





「オイ！お前ら何騒いでんだ!!」

「パウリー…取った!？」

「取るか!!いや、欲しかったけどよ!!」

叫ぶ私達の元へ寄ってきたパウリーに聞くが、そりやそうだ。パウリーはずっと私達の視界に居たんだからあり得ない。

「騒がしいな。どうかしたのか」

そこへ、また新しい船大工がやってくる。アイスバーグやカクがルルと呼んでいるから名前はルルで間違いなさそうだけど…寝癖とんでもないな。

「いや、今はそれより…カクお前、さつきフランキー家と一緒に居なかつたか?」

「ん?何言うとる、ワシア今日はフランキー家など見かけてもおらんぞ」

「?おかしいな…確かにおめエの長エ鼻を確認したんだが」

…!!

「ちよつと待って!それつてもしかして…!」

「ウソツプだつ!!」

「フランキー家と一緒にいたの!？」

カク程の長い鼻なんて早々居るもんじやないよ!居たとしてもウソツプくらいで

しよ!!

「一緒に居たと言うか、抱えられて連れてかれてたというか」

「誘拐じゃないっ!!」

しまった…! あいつら、工場内にまで入ってきてウソツプごとケースを盗んだのか!!

「ルフィ、イリス、ミキータ! 急いで探すのよ!!」

「おう!」

「つてちよつと待つてルフィ! どこ探す気よ! ルフィ〜!!」

話を最後まで聞く事なく、何処かへ走り去っていくルフィを呼び止める事に失敗するナミさん。

でも大丈夫、犯人は分かっているんだ…! フランキー一家の家が分かればそれでいい!

「フランキー一家ってアジトはどこ!?」

「アジトというか…解体の作業場はお前らが船を停めてるっていう岩場の岬から、ずつと北東へ行った海岸にある『フランキーハウス』だ」

パウリーの言葉が本当なら、まずはヤガラに乗ってブル屋まで戻るのが良いのか! ついでにゾロ達も呼んでこよう…! あのフランキー家どもめ…誰から金を盗んだのか  
思い知らせてやる!!

そうと決まれば早速行動開始だ。ルフィは放っておいても何とかなるタイプだから探すのは諦めるとして、とりあえず私達の持つてる2億だけでも安全にメリー号へ送り

届けるという事になり、3人でヤガラに乗り込む。

「行こう！ブル、悪いけどめっちゃ急いで！」

「ニーツー！」

私の言葉に不満なく頷いたブルが、来た時よりもずっと速いスピードで下町へと下つていく。

途中の水門エレベーターではどうしても往生しなければいけなかったが、それを越えてしまえば後は時間との勝負だ。

あの2億は、使われる訳には行かない……。メリー号を乗り換えるにしても、メリー号を修理するにしても、結局必要な金なんだ!!

「……ちよつと待つてイリスちゃん！あそこに人だかりが!!」

「でもミキータ！今はそんな事……！」

「……!!ダメ、イリス止まって!!」

何やら2人の焦った声に急いでブルを停止させ、人だかりに目を向ける。

水路の方が多いうォーターセブンの数少ない陸地で人だかりが出来てるなんて、一体

何が……。

「……!!!」

人だかりは、〃何か〃を中心に来ていた。

1番ドックで見た様な黄色い声が飛び交う物とは程遠く、ざわざわと不穏な空気を放つその周辺の真ん中で倒れていたのは…、

「ウソツプ!!!」

「ツ!!」

慌ててヤガラから飛び降り、人だかりを押しつけてウソツプの下まで駆け寄って上半身を抱き上げる。

酷い…全身傷だらけじゃんか…っ!

「ウソツプ!しつかりして!ちよつと…!大丈夫!?ねえっ!!」

「な、なアおい、君達もしや海賊か…?」

「うん、騒がせてごめん。でも見せ物じゃないから…何処か行つてくれる?」

ギロリと睨めば周りの人達はびくりと肩を跳ねさせて散り散りに去って行った。

別に彼らが悪い訳では無いけど…いつまでもウソツプのこんな姿をジロジロ見せる訳にも行かない。それはあまりにも彼が不憫だろう。

「ウソツプ!やったのはフランキー家なの!?あいつら!」

ナミさんが呼び掛ければ、弱々しく咳き込みながらもまだ意識がある様だった。

「そうだ…。おれが弱エもんで…大金…全部奪られた…!!…ナミ、イリス、ミキータ…おれ、みんなに、会わせる顔がねエよ!やつとメリーを…!直してやれるハズだったのに

……、つ、みんなに、会わせるガオがねエよ!!!…うヴ!! 面目ねエ…チギシヨオ……!!」

…くそ!!くそ!!何が、何が弱いもんで、だよ!!

弱い人が、こんなに傷つくか!!本当に弱いっていうのは、動かなきゃ行けない時に動けない人の事を言うんだ…!必死に取り返そうと足掻いて、やられて、それで傷付いたウソツプが…弱い…!?

「…平気だよ、ウソツプ…!お金なら必ず取り返す!!」

「イリス…!そうよ、ウソツプ!イリスもみんなも居るんだから何も心配はいらないわ!私達は今から急いでチョツパーを呼んでくるから、ここでじつとしててね!」

ゆっくりとウソツプを移動させて、近くの壁にもたれ掛ける。

そしてすぐに戻る、とウソツプに言葉を残して私達は再度ブルへと乗り込んだ。

「…まさか、あのバカそうな集団がここまで非道なんてね。…初めて見た時に手足の骨でもへし折っておくべきだったかも」

「イリス、遠慮はいらないわ。…好きにやっちゃって!」

真剣な顔のナミさんに、私もふざける事なく頷いただけで返した。

そこからメリー号へ戻るまでは早かった。ブルに頼んで速度を最高まで上げてもらい、ほとんど暴走と言っても過言では無い速さで水路を渡ってブル屋まで辿り着き、

ダツシユで岩場を駆ける。

そうして船まで帰ってきた私達は、早速船にいたゾロ、サンジ、チョツパーに事情を説明する事にした。

…あれ、ロビンは……？……まあ、彼女の事だ。何処かで情報でも集めてまたふらつと帰ってくるに違いない。

\*\*\*

「ウソツプが!？」

「……あいつらか」

事の顛末を3人に説明すれば、案の定3人とも表情に怒りを浮かべていた。

チョツパーからは焦りも見取れる。やはり医者だけあつて容態が気になるんだらう。

「ウソツプの居る場所は私が知ってるから、まずは私と一緒に街まで来て欲しいの! ミキータとナミさんは船に残つて2億の管理。…大丈夫?」

「平気よイリスちゃん、任せて」

「絶対あいつらぶつ飛ばしてきなさいよ、イリス!」

事が事なのでゆっくりしている暇もない。

私はゾロ、サンジ、チョッパーを連れてさつき通ってきた道を急いで戻って行くのだった。

## 79 『女好き、カチコミフランキー1家』

急ぎウオーターセブンへと入ってきつきウソツプが倒れていた場所までブルを飛ばした私達だが、そこに辿り着いた時、ウソツプの姿はどこにも無かった。

あんな傷で何処に……!

「イリスちゃん、ウソツプが居たのはここで間違いねエのか?」

「そのハズ……あ、これ……」

地面を見ると、血がとある方向へぼつぼつと落ちているのを発見した。

バカ……勝手に動いちやダメじゃん……!

「……って、まさか……」

「……可能性はあるな」

「なんだ?! 何があるんだ?!」

私の呟きにサンジが顎を触って肯定する。チョッパーは気付いていない様だけど……ウソツプはきつと、責任を感じて一人でフランキーハウスまで行ったに違いない。

「あああああああああ!!!」



「…ん?」

上空からの聞き慣れた声に顔を上げれば、何故かルファイが空から飛んで来ていた。

あれ絶対ルファイの事だからカクのマネでもして、そんなでもって失敗して落ちたつてとこだらうね。

「ぶべっ!!」

「ルファイ!」

やっぱり地面に激突して「やー、難しいなーこれ」とか呑気に言ってるのはルファイだった。

一歩間違えれば水路に落ちるつてのに…。まあでも、上手く行けばその方法が一番早いのは確かだけどね。

「イリスか!ウソツプは!」

「フランキー一家にやられてたよ…!それでチョッパーに診て貰おうと思つたら居なくなつてたの!多分…敵のアジトにケンカ売りに行つたんだ!」

「え!?!」

ルファイとチョッパーが驚愕に目を見開く。特にルファイはウソツプがやられたつて事すら知らなかつた訳だから…その顔に焦りが出てしまうのは仕方ない事だろう。

「イリスの言うように、そういう事だルファイ。俺達は今からそのアジトへ向かおうと

思ってる」

「だったら急ごう……！ウソツプが危ねエ!!」

もはや金の事など忘れてそうなるルフィに、彼らしいなど少し口角を上げる。

行ったり来たりで大変だけど……とにかく岩場の岬からずっと北東へ行けばフランキーハウスがあるんだよね！

「ごめんねブル、もう一走りよろしく!!」

「ニーツ!!」

陽気に笑うブルの背に乗り、私達はまたまた来た道を全速力で引き返したのだった。ウソツプ……、何も無ければ良いんだけど……！

\*\*\*

岩場の岬

「フランキーハウス」前

「……どうも、認識が甘かったみたい。チョツパー、息はあるよね？」

「ああ、大丈夫、助けられるよ！完全に気を失ってるけど……！」

私達の足元にボロボロになって伏しているのは、さつき見た時よりも更に傷が酷く  
なつたウソツプだった。

…ウソツプにとつては、どうしても無くってはならないお金だった。それはメリー号を  
直すお金だと彼は思っているからだ。

だから…責任を感じたんだね、ウソツプ…!!

「…ちよつと待つてろよ、ウソツプ」

ルフィが指を鳴らし、サンジがタバコに火をつけ、ゾロがバンダナを被り、チョツパー  
が人型へと変化する。

…私も、全・倍オールインクリース加でカチコンでやる…!!

「あのフザけた家…吹き飛ばして来るからよ……！」

三日目を屋根に突き刺した様な見た目の家からは、大金が手に入ったからなのか喧し  
い声がここまで聞こえてきている程だ。

「……オールインクリース全・倍加」

もう、容赦はしないからね…!!フランキー一家!!

「…？イリスちゃん、それは新しい技か？」

「ん？」

不意にサンジから声が掛かり、何のことか分からずに首を傾げて彼を見上げる。

見上げる…？

「え…あれ…!? 全オールインクリース倍加出来てない…!? お、おかしいな…！」

あ、あれ…？何回やっても出来ない…何で!?

他の倍加は…：うん、大丈夫。何でそんな限定的な…。

「新技じゃなくて、ただ出来てないだけみたい…。ま、あいつらにカチコミするくらいなら訳ないよ。待たせてごめん、行こう！」

今までこんな事は1度も無かったのに…。

違和感を感じるけれど、今はそれどころでもない筈だ。

気になる気持ちは奥にでもしまっておいて…まずはあいつら、やってしまおう。

フランキーハウスの前まで行き、大きな扉を蹴破ろうと足を振り上げる。

丁度その時、中から買い物にでも行くのか札束を握りしめて外に出てきた大男と目が合った。

「ん？何だおまつぶいッ…!？」

もともと蹴破ろうとした扉の前に潰してやろうと思つていた奴らの一人が出てきただけだし、構わずそいつごと蹴り抜いて入り口を大きく破壊しながら中を見渡した。

…人数だけは一丁前に居るけど…所詮烏合の衆。

「ぶわ!!な、何だー!!どうした!!」

「誰だア!てめエらは〜!!」

「いや待て!あれは…麦わらの一味!!」

料理の良い匂いが、今は腹が立つ原因の1つにしかならない。

これは一体何の金で買ったんだ…誰から奪った金で…楽しんでるんだ!!

「ゴハハハ!!金を取り返しに来やがったな!!バカめ、この人数を見ろ!たった5人でおめエら何しようってんだア!!ゴハハハ!だがまア…来たからにやあ賞金の懸かったその首、置いていつて貰うぞオ!!」

どすん、と入り口で吹き飛ばした奴より大きな男が一步前に出てくる。

全身纏う鋼鉄のアーマーに、体に合う巨大斧が危険そうな奴だ。

…まあ、ルフィには関係ないか。

「あの貧弱長つ鼻野郎のいる一味の船長だ…!てめエの実力の程も知れるつてモンだア!!来てみる、チビ!!」

…そんな、私でも言えないよそんな事。

ほら、ルファイ…すつごく怒ってるっぽいけど。

「ゴムゴムの…!」

一見銃乱打の様に見えるが、敵に当てていない無数の拳を放つルファイ。

あれは…勢いを付けてるのか!最終的に繰り出される技の威力は計り知れないだらうね。

「ん?何やつとるんだ!パンチか!?戦艦の砲撃も通じねエこの巨大鋼鉄アーマーに!?ゴハハハ!笑わせるぜ!!遊んどるならこつちから叩き潰すぞオ!!」

「攻城砲!!!」

「ゴツ…ガフツ?!」

案の定、全ての勢いを乗せたルファイの両腕がアーマーなど容易く貫き男を吹き飛ばした。

うちの船長を甘く見るなんてね、手配書は嘘付かないよ。

「きよ、巨大アーマーを貫いたア!」

「ええエく!?!ちよ、ちよつと待てお前ら!まず話を…!」

「はなし…ハナ、ハナ…!」

「放て砲弾!!」

ドン!ドン!と10は余裕で越える数の大砲を撃ち込んできた。

不意打ちのつもりだろうけど…所詮それならまたまた意味なんて無い。

「三刀流…！鴉魔…！狩り!!」  
からすま

ゾロの3本の刀が飛来する何10個もの砲弾を容易く真つ二つに斬り捨てる。

鉄だろうがなんだろろうが、うちの剣士は最強を目指してんだから斬れない訳がない!

「20倍灰… 去鷹媚!!」  
さようなら

瞬時に移動してバキツ!と大砲の口を蹴り壊し、そのまま大砲から足を離さず敵が集まっている所へ蹴り上げた。

「ギヤーツ!!?大砲が降ってくるぞ!!やべエ!ちよつとコイツらまじでやべエぞ!!」

「裏口から逃げるんだ!!急げ!!」

「…人にケンカ売つといて、締まらねエマネすんじゃねエよ…!!」

「ギヤー!!?」

裏口へと走り出したフランキー家の内、1人の顔を驚掴みにしたサンジがその手を軸にカポエイラのような動きで周りの奴らに蹴りを喰らわせる。

前世じゃあ、元々のカポエイラよりもあの某国民的ゲームでその武術をモチーフにして作られたあのキャラの方が知られてたけどね。

「う、裏口はダメだ!窓から!!」

「『ランブル』！角強化！」  
ホーンポイント

獣型へ変形したチョツパーの角が、みるみる立派に成長していく。

戦闘要員としての影はそれ程濃くはないチョツパーだけど、こうしてみると彼も十二分に強い！

「桜並木!!」  
ロゼオコネド

「ホゲータツ!!」

窓から逃げようと躍起になって走る奴らの真ん中へと突っ込んで、その立派な角を振り回し蹴散らすチョツパー。

裏口も無理、窓も無理、じゃあ正面なんでもつと無理。

この場にいるまだ倒れていない残りのフランキー1家も、ようやく立場を理解したのか顔から汗をたらたらと垂らしているが…お前達がした事は、頭を下げてどうにかなる問題じゃない。

「ちよちよ…つちよつと待ておめエら!!金だろ!?えエ!?返して欲しいのは!あのヘナチヨコが持ってた…2億ベリーだろ!?残念な事にここにはもうその金はねエんだぜ!一家の頭、フランキーのアニキがああ金持って買物に出ちまったんだ!今頃はもう海列車のなばべっ!!」

「あ、しまった。大事な事言ってたのかな、うるさくて殴っちゃった」



「構わねエよイリスちゃん。金だとか何だとか…… とうとうこつちやねんだよ……」  
「そうだな……もう、手遅れだ」

ゾロの言う通り、もう手遅れなんだ。

最悪、私やゾロ、サンジ、チョッパはどうか口で丸め込めたとしても……ルフィはダメだ。

友達を傷付けられたんだから、嫁を傷付けられた私と同じく……止まる筈がない。

「……お前ら骨も、残らねエと思え」

そうして、私達の蹂躪は開始された。

もう奴らに私達がただの5人組だという認識などなく、例えるならば獲物と狩人。どこへ逃げようと、どう反撃しようとも……勝てる筈のない力の差の前には無力だつて事を悟った。

散々ボコボコにして、家まで粉々に解体してやって……そこでようやく私達は手を止めたのだつた。

既に立っているフランキー家の面子は1人として居らず、ボロボロになった家の残骸に埋もれたり、近くで倒れ伏したりしている。

終わった後、チョッパは直ぐにウソップの元へ駆け付けて応急手当を始めていた。

「追うか？フランキー」

ふと、新しいタバコに火をつけたサンジが瓦礫に座りながらそう口にした。

「…どこへだよ」

「…そりや、そうだ。…ふう、参ったな。金の行方は本当にわからねエ様だ…そのフランキーって奴を締め上げても…買い物された後じゃあな…」

「…うーん…」

「ここでずっと待つてるにしてもナミさんやミキータも心配だし…ロビンも帰ってきているかもしれない。それに、そもそもメリー号自体の問題も解決してないからなあ。」

「おーい!! 応急処置終わったぞ!! タンカで運ぶから手伝ってくれよ!!」

「今行くー!!」

手を振ってチョッパーに知らせ、よっこらせ、と立ち上がった時…何やらずっと海を見て考え事をしていたルフィが口を開けた。

「船よオ…」

「ん?」

「決めたよ…」

それは、何か決意の籠もった声だった。

普段は感情の起伏が激しいルフィの珍しく平坦な声色に、周りの音が無くなった様な錯覚に陥る。

「ゴーイング・メリー号とは……ここで別れよう」

「！」

「イリスやウソップには、悪イとは思ってる」

そう言つて帽子を深く被り直すルフィを見て、私は胸が締め付けられるような気持ちになった。

…メリー号は、カヤからの贈り物だ。そしてウソップはメリー号の修理を主に担当していたのもあつて愛着も一味の中では飛び抜けてある。

そんな私達には言いにくい事を、ルフィは船長として…決断したんだ。

「…悪いことなんて、ないよ。ルフィはルフィの決断に胸を張って！私については、  
船長キャプテン！」

「…イリス…」

私を見るルフィにニツと笑つて応えた。ゾロもサンジも少し口角を上げてルフィの決断に異論はないと態度で示す。

私だけじゃない…いや、私達なんかより、ルフィはもつとずっと辛い筈だ。

…だから私が、精一杯考えて答えを出したルフィにどうこう言う事なんて何も無い。  
でも…、ウソツプは、何て言うかな…。

…胸がざわつく、時折感じる嫌な予感。

この世界に来て、ルフィやみんなに会ってからはよく感じる様になったこの感覚は…  
そう言えば外れた事が無かったな、なんて…私は後になって思い返すのだった。

## 80 『女好き、変化の訪れ』

メリー号へとウソツプを運び終えてから、時間は既に1時間程経過しているというのにロビンは帰って来なかった。

本格的にロビンを探しに行った方がいいかもしれない…聞いた話によると、サンジがロビンを1度見かけていると言うのだ。それも見た事のない仮面をつけた大男と一緒にいた所を。

「みんな！ウソツプが目を覚ましたぞ！」

「本当！」

色々と思考を張り巡らせている頭を1度ストップさせて、みんなでウソツプを飯で寝かせていたキッチンへと向かった。

部屋へ入った直後、ウソツプはゾロの足に泣きながら飛び付き何度も謝ってくる。

とにかく奪われた2億の行き先などをウソツプに話して、取り返すのは難しそうだと言った。

「…そうか、やっぱり金は戻らねエのか…。すまねエ…！みんな…！…でもよ、じゃあ船は…メリー号は残りの2億ありや何とか直せるのか!?せっかくこんな一流の造船所で

修理出来るんだ、この先の海でも渡っていける様に今まで以上に強い船に……！」

「いや、それがウソツプ、船はよ！乗り換える事にしたんだ。ゴーイング・メリー号には世話になったけど、この船での航海はここまでだ」

明らかに……明らかに無理しているという事が分かるルフイの言葉に、ウソツプは何を言われたのか分からないとでも言うような顔をして固まる。

「ほんでな、新しく買える船を調べてただけど、カタログ見てたらまあ一億あれば中古でも今よりデカイ船が……」

「待てよ待てよ……！そんなお前、冗談キツイぞバカバカしい……何だやっぱり、修理代……足りなくなつたつて事か!?おれがあのだ2億奪られちまったから……金が足りなくなつたんだろ……！」

「違うよ、そうじゃねえ……！」

「じゃあ何だよ、はつきり言え!!おれに氣イ使つてんのか!!」

段々とヒートアップしてきた2人にゾロやチョツパーが落ち着くと声を掛けるが止まらない。

「落ち着いてられるか!バカな事言い出しやがって!!」

「ちゃんとおれだつて悩んで決めたんだ!!」

「ちよつと2人共、そんなに熱くなつたら話し合いなんで……！」

止めに入ろうとしても手で押し退けられてしまう。

ダメだ……このままじゃ、何かダメなんだ……!

「メリー号はもう、直せねえんだよ!!!」

「……………!!!?」

「……どうしても、直らねえんだ。じゃなきゃこんな話しねえ!」

呆然としたウソツプの顔が、徐々に怒りへと染まって行く。

なおも止めようとした私は後ろからミキータに引つ張られて彼女の胸の中へと収められた。

「……もうこれは、2人の問題よイリスちゃん。止めたって止まらないわ」

「……………、うん……」

ミキータの目は、悲しみに揺れていた。

きっと彼女は……今までもっと酷い状況を目にしてきたのだろう。

海賊時代も、バロックワークスでも……。だからミキータは無理に止めようとはせず、当人達に任せようとしているのかもしれない。下手に止めに入るといのは、昂った人達からすれば逆効果だからだ。

「何言ってるんだお前……ルフィ」

「本当なんだ、そう言われたんだ!造船所で、もう、次の島にも行き着けねえって!!」

「ハア…：そうかい、行き着けねエって…：今日会ったばかりの他人に説得されて帰って来たのか」

「何だと!？」

今度はルフィの表情にまで怒りが滲む。

私を抱きしめる腕の力が少しだけ強くなり、ミキータだけじゃない、一味全体に緊張が走った。

「一流と言われる船大工達がもうダメだと言っただけで！今までずっと一緒に海を旅して来た、どんな波も！戦いも!!一緒に切り抜けて来た大事な仲間を…：お前はこんな所で…：見殺しにする気かア!!!…：!!この船はお前にとつちやそれくらいのもんなのかよ!!ルフィ!!…：ゲフツ…：…！」

「ウソツプ、だめだ！そんなに叫んじゃ！」

元々傷だらけの体で無理して叫んでいるんだ。体はろくに言う事を聞かない筈で、案の定血反吐を吐く。

それでも、ウソツプの瞳から怒りが無くなることはなかった。

「…：じゃあ、お前に判断できんのかよ！この船には船大工がいねエから！だからあいつらに見て貰ったんじゃねエか!!」

「だったらいいよ！もうそんな奴らに頼まなきやいい！今まで通りおれが修理してやる



よ！元々そうやって旅を続けて来たもんな！

「おい待てウソツプ！」

傷付いた体を引きずりながら外へ向かおうとするウソツプをサンジが呼び止める。

そんな言葉など聞こえないとでも言うようにウソツプは口を止めない。

「よし、早速始めよう！おいお前から手伝えよつ！そうだ、木材が足りねエな、造船所で買つて来よう！さア忙しくなつてきたつ！！」

「……お前は船大工じゃねエだろ！ウソツプ!!!」

「おうそうだ、それがどうしたルファイ！だがな、職人の立場を良い事に、所詮は他人の船だとあつさり見限るような無責任な船大工なんかおれは信じねエ、自分達の船は自分達で守れつて教訓だな、コリヤ!!」

「……」

「絶対におれは見捨てねエぞこの船を!!バカかお前ら！大方船大工達の尤もらしい正論に担がれてきたんだろ！おれの知つてるお前なら、そんな奴らの商売口上よりこのゴ－イング・メリー号の強さをまず信じたハズだ!!そんな歯切れのいい年寄りじみた答えで……船長風吹かせて何が「決断」だ!!!見損なつたぞルファイ!!!」

ガシ！とルファイの胸ぐらを掴んで言い寄るウソツプに対し、ルファイはあくまでも意見は変えないと叫ぶ。

船は乗り換える、メリー号とはここでお別れなんだと…、まるで自分にも言い聞かせているみたいに。

「いいかルフィ、誰でもおめエみたいに前ばっかり向いて生きて行けるわけじゃねエ!! おれは傷付いた仲間を置き去りにこの先の海へなんて進めねエ!!…それにイリス、おめエは良いのかよ?! カヤから貰ったモンだぞこの船は!! おめエの嫁の、贈り物だぞ!!」

「…そうだね。だからこそ、メリー号とはここでお別れなんだ」

「ツ!!? 何なんだおめエら! どうしちまったんだよ! メリーは仲間じゃねエのか?! 大事じゃねエのか!! 大方もう次の船に気持ち移してわくわくしてんじゃねエのかよ!! 上っ面だけメリーを想ったフリしてよオ!!」

「!! いい加減にしろお前エ!! お前だけが辛いなんて思うなよ!! 全員気持ちは同じなんだ!!!」

勢いよくウソツップを床に叩きつけ押し倒し、ルフィが感情を露わにする。

私だって今のはちよつとキタけど…ミキータに言われた事もあるし、必要以上に突っ込むのはやめておこう。

「だったら乗り換えるなんて答えが出るハズがねエ!!」

「…じゃあいいさ! そんなにおれのやり方が気に入らねエんなら、今すぐこの船から…」

「バカ野郎がア!!!」

ルフィが最後まで言葉を紡ぐ前に、サンジがルフィの顔を蹴って吹き飛ばす。

…ああ。

嫌な予感つていうのは…何でこうも、当たるんだろう。

お願いだから、これ以上引き戻れない所までは行かないで欲しい…!

「ルフィてめエ、今何言おうとしたんだ!! 頭冷やせ! 滅多は事口にするもんじゃねエぞ!!」

「…あ、ああ…! 悪かった、今のはつい…」

「いや、いいんだルフィ…それがお前の本心だろ」

「何だと…!」

流石に言い過ぎたと思ったのか素直に謝るルフィだが、ウソツプの熱が冷めることはない。

原作でも、こんな事あったのだろうか…ウソツプは、どうなるの…?

「使えねエ仲間…次々に切り捨てて進めばいい…! この船に見切りをつけるんなら、おれにもそうしろよ!」

「おいウソツプ、下らねエ事言つてんじゃねエぞ!!」

「いや本気だ、前々から考えてた…正直、おれはもうお前らの化け物じみた強さにはつい

て行けねエと思つてた!!今日みてエにただの金の番すらろくに出来ねエ。この先もまたおめエらに迷惑かけるだけだおれは…!弱エ仲間はいらねエんだろ!!ルフィ、お前は海賊王になる男だもんな、おれは何もそこまで高みへ行かなくていい…!思えばおれが海へ出ようとした時に…お前らが船に誘つてくれた、それだけの縁だ…!!意見がくい違つてまで一緒に旅をする事ねエよ!!」

そう言つてウソツプはバン!と扉を勢いよく開けて外へ飛び出し、船から降りる。

私達も全員ウソツプを追つて部屋の外へと出た。

「ウソツプ!どこ行くんだ!!」

「どこ行こうとおれの勝手だ。おれは、この一味をやめる」

……!!!!うそ…でしよ。

「お前とはもう…やつていけねエ、最後まで迷惑かけたな。…だから俺なりに、筋つてモンを通させて貰う!!イリス、この船はカヤから貰つたお前のモンだ!!お前がこの船を捨てるつて言うなら、おれと戦え!!おれが勝つたらメリー号は貰つて行く!!」

「え…」

完全に油断していた方向から攻撃が飛んできて固まる私をキツ、と下から見上げるように睨むウソツプ。

ルフィは静かに私を見てきて、ナミさんやミキータは不安げに、チョツパーは泣きそ

うに…いや、泣いてる。

「イリス…！おれと決闘しろオ!!!」

「……ウソツプ」

きゅつと唇を結んでウソツプを見下ろす私は、一体どんな顔をしているんだろうか。

「今夜10時!!またおれはここへ戻つて来る。そしたらメリー号をかけて、決闘だ!!おれとお前達との縁も…それで終わりだ!」

それだけ言うと、ウソツプは振り返つて街の方へと歩いていった。

…こんな事、思いつきで言うような人じゃない…。ウソツプは、本気なんだ…。

「イリス…！あんた、大丈夫…!」

「……………、ナミさん、今は何時?」

「ちよつとイリス!聞いてよ!どうしてあんた達が戦わなきゃならないの!?!ねえつてば!」

私の肩を掴んで揺らすナミさんの顔をまともに見ることが出来ない。

…私だつて分かんないよ…どうして、こうなったんだろう…。

「ちよつと部屋に戻るね。…じゃ」

ナミさんの腕をそつと退けて、そのまま早足で寢室へと戻つた私はすぐにベッドへと倒れ込んだ。

…原作には、有り得ない事が今起きたんだ。

もし、もしこんな事がONE PIECEにもあったのだとすれば、それはルフィとウソツプの決闘だった筈だ。

だけど、私がカヤからメリー号を貰ったって前提があったから…ルフィの代わりに私が選ばれた。

「……怖い」

この後、なんだかんだでウソツプが戻ってきてくれるなら良い。

…だけど、決闘を私がする事によって、今回みたいに内容が変わればどうなる？

今まではルフィが戦うハズだった「敵」を私が貰っていたけれど…「敵」じゃないウソツプとこんな大事な場面で戦うなんて。

しかも私の意思が介入していない状態での変化だなんて…初めてで…。

…ウソツプが、一生一味に戻ってこなかったら？

例えば、10時からの決闘で私が判断を誤り、正しい選択をしていれば戻ってきたウソツプが戻ってこないとなったら？

「……ダメ、これ以上は、深く考えちゃ…」

考えれば考える程ネガティブになっていく思考を打ち切り、私は1度睡眠を取ることにした。

……寝れるかどうかは、  
ともかくとしてだけど。

## 81 『女好き、悲劇の決闘』

「……………」

ザ、と船から降りて岩場に立つ。

時刻は既に10時が来ようとしていて、結局私は一睡も出来ず今に至る。

「イリス…」

「イリスちゃん…」

ナミさんとミキータの声が聞こえる。

正直、本当に私が戦つてもいいのかというのは今も思っているのだ。今からでも無理言つてルフィに代わつてもらえないものかと…どうにかして私が戦わなくてもいい方向に話を持っていきかけたが、それは決闘を申し込んできたウソップにも失礼だ。

「……………」

もう10時なのか、ウソップが姿を見せた。

チョップパーに手当てしてもらつた時のままの包帯姿で、それでも手には武器であるパチンコが握られている。

「…ウソップ、本当にやるの？」



「当たり前だ、殺す気で来いよ、返り討ちにしてやる！もうお前を倒す算段はつけてきた！！手の内を知らねエ今までの敵と一緒にするなよイリス。おれとお前は長エ付き合いだ。お前の能力はよく知ってる」

…正直、私の能力は完全なる身体強化だ。対策を立てることなど出来るとは思えないけど…油断も出来ない。

「聞いて驚くなよイリス。おれには…8千人の部下がいる！！命が惜しけりや今すぐ降参しろオ！！」

「行くよ…！！」

戯言は聞き流して、早々に決着を付けるべくウソツプへと駆け出す。

「ウソくッツプ呪文！！」スベル「全ての歯の間にカミソリが挟まった」！！」

「20倍灰…！！」にじゅうばいばい

「ウ…ゲホー！」

「…！！」

構わず殴り飛ばそうとした私の前で蹲って咳き込むウソツプ。

その口元は赤く染まり、抑えた手の平にまで付着しているが…。

「嗅覚倍加…、ウソツプ、そんなハツタリは私には通用しないって知ってる筈だよ」

「知ってらア…！くらえ必殺！『卵星』！『星』！！」

「ツ!？」

一瞬でも躊躇った私のわずかな隙を突いて取り出した卵を数個当ててきた。

気にするな…：所詮は卵…!!………、っ…!!?っ!!?

「うっ…、く、くっさアア!!!腐ってるの!？」

「腐ってるのは当然!その上お前は今“嗅覚倍加” だろ!？」

しまった…!：能力を、利用されたのか!!

慌てて嗅覚の倍加を止めて、今度は臭いに対する“耐性”を倍加する。これで臭いの

は気にならない!

「まだだ!：必殺“タバスコ星”!!」

「わ。ぷ。ー!」

鼻で息をしないように口呼吸に変えた瞬間をウソツプに狙われ、今度は口の中にジャヤで1度味わった技を喰らわされる。

「か、辛アア…っ!!!」

「イリス!お前は確かに強エよ…：だが対策が全く出来ない訳じゃない!これが俺の戦闘だ!!」

「っ…!!」

辛さに対する耐性を…：倍加。

…厄介だ、いくら後から倍加したところでさつき臭いも、辛さも消える訳じゃない。あくまで倍加後の耐性が増えただけなんだ。

だから私にはまだ卵の臭さは鮮明に鼻に残ってるし、辛さもそのままだ。

「はア…はア…。…でも、それだけ？ウソツプ…私にはルフィみたいに斬撃が有効な訳じゃない。かと言って打撃が効く訳でもない…銃が効かない私に対してこれ以上の有効打があるとは思えないんだけど…？」

「そうだな…ダメージを与えるには、その倍加の壁を突破出来る程の威力が必要だ」  
やけに落ち着いているウソツプに違和感を覚える。

この状況で、他に何が…。

「…煙？」

周りを見ればいつの間にか煙に囲まれていた。

プレスダイアル

風 貝から風を出し、それでひっそりと煙を広げていたというわけか…。

「煙が、どうしたの？」

「やっぱり臭いに対する耐性でも倍加してきたな…！そのせいで気付かなかつたら、そこにガスが充満してるなんて」

「!!」

「悪いな！くらえ!!必殺『火炎星』!!!」

それをウソツプが放った直後、物凄い規模の爆発が私を襲う。

まるでボロ雑巾の様に吹き飛ばす私の体は、空高く舞い地面へと落下した。

「……ゲホッ……」

20倍のアーマーを越える事の出来る攻撃……それをウソツプは見事に当ててみせた。

当てるまでのコンボも彼なりに考えた結果だろう。私の嗅覚を機能させなくする発想は流石としか言いようがない。

「……でもっ」

「!!」

ゆっくりと立ち上がり、煙の中からゆらゆらとウソツプに向かって歩いて行く。

爆発の衝撃で尻餅をついていたウソツプは慌てて起き上がりパチンコを構えた。

「20倍灰……去柳薇ツ!!」  
にじゅうばいばい さよなら

最高速度でウソツプの前へと移動し、拳を放つ。

でも彼はそんな事など読んでいたとでもいうかのように私の拳を受け止める。その手

には……  
インパクトダイアル  
衝撃 貝が握られていた。

「貰ったぞ……お前の 衝撃」  
インパクトダイアル

スッ……と私の顔に衝撃 貝を当て、ウソツプは力の限り叫んだ。

「インパクト衝撃!!!」

「………知ってるよ」

「…え」

私に向かつて放たれた衝撃は、まるで意味のなさない微弱なものだった。

それもその筈で…ウソツプが私の手の内を知っている様に、私だつてウソツプの手の内を知っているんだ。インパクトダリアル衝撃員が主力になる事くらい…最初から分かっていた。

だからさつきも20倍でなんて攻撃していない。素のパンチだつたつてだけだ。

「今度こそ、20倍だよ」

「ツ……!」

「20倍灰…!!」  
にじゅうばいばい

今度こそ本当に打つ手無しのウソツプが、悔しげに私を睨んでくる。

…本当に、これで……良かったんだろうか。…わからない、わからない…けど。

本気でやらないのは、絶対に違うつて分かるから…だから私は、本気で勝ちに行つたんだ!!

「去柳…!!…ツ!!…うあああッ!!!」

ズドン!!とウソツプの腹へと拳を叩き込み、一撃で地に沈めた…。

…結局私は、決めの技に別れの言葉を使えなかった。それだけは…イヤだつたから。

倒れ込んだウソツップに背を向けて、私は少し俯きながら話しかける。

「…メリー号は、ウソツップの好きにしなよ。ただ……メリーに、仲間を殺させないでね」

「!!!」

痛みで体は動かせないだろうが、ピク、と身体が跳ねた気がした。

…こんなの、私の役目じゃないよ。船長のルフィがやってくれないと…。

「…っ」

頬を涙が音もなく伝う。

ルフィが、やってくれないと……私には、重すぎる…!!

「…あの時、空島で私達が見た影は……こう言っていたよ。『船が保たないなら、気にせず置いて行って欲しい。次の海を乗り越えられないのは凄くイヤだ』ってね……。私は、その意思を尊重したい。メリーに私達を殺させない為にも……ここで船を乗り換えて、私達は先の海へ進む」

それだけ言って、私はみんなの元へと戻って行った。

ウソツップを殴った右手がズキズキと痛む。右手だけじゃない……心だつて…。

「…イリス……っ」

船の前まで辿り着けば、ナミさんとミキータが急いで降りてきて私を抱きしめた。

2人だけじゃなく、他のみんなも続々とメリー号から降りてくる。

「…悪い、イリス…」

「ううん…ルフィが謝る事じゃないでしょ」

「…どの道、メリー号ではもう居られねエな。どうする？」

「なら、中で適当なホテルでも探しましょう。それっぽい所ならいくつかあったわ」

ミキータが覚えていてくれた事もあり、私達はすぐに街へと入ってホテルを借りた。

男女別の2部屋しか借りなかったから果たして私が寝ることが出来るのかどうかは

謎だ…。

ちなみにロビンが帰ってきた時の為にメリー号に書置だけは残してきた。それを見て明日の朝にでも合流出来たら良いんだけど…。

そして今、問題の部屋で私はお風呂に入っていた。

私の1番風呂を強く勧める2人に押され、結局根負けして最初に入ったのだけ…2人とも何であんなに強引だったのだろうか？

ガチャ…

「え」

「入るわよイリス」

「キヤハ！来ちやつた♡」

え。

入るわよって…あの、どうして2人は服をお脱ぎになられているのでしょうか？というよりここってホテルだから、お風呂と言ってもお手洗いとかと共用の3点ユニットバスというやつなんですが…そもそも、鍵してなかったっけ!!?

「ああ、鍵？イリス忘れてそうだから言うけど…私泥棒よ？」

ナミさんの前では鍵を閉めた所で無意味って事ですかそうですか。

「イリスちゃんもつと詰めて！ほら、私の上に座って？」

「ちよ、ミキータ…湯も張ってないのに座ったって意味ないー」

「あらイリス、まさか今から何をするか、分からないあんたでも無いでしょ？湯船なんて邪魔なだけよ、少し狭いくらいが丁度いいわ」

少して何だっけ!?!そりやナミさんもミキータも細いけども、強調してるそのぼよんがかなり幅取ってるから!!

ミキータの膝の上に座らされて、ミキータと私がナミさんと向かい合う様な形になった。

何だコレ…2人とも、今日はやけに無理矢理というか…強引というか…!



「んっ……！」

ナミさんの唇が私の唇を塞ぎ、いきなり舌を入れてくる。

「っふ……ひゃ」

しかも後ろのミキータも私の首筋に舌を這わしてきて、ついさつきまで普通に髪の毛を洗っていたとは思えない状況になってしまった。

待っ……ちよ、ホントに待って……いあ、そこは……まだ洗ってないから！洗ってないから……！！！！

\*\*\*

「……がくり」

ぼふ、とベッドに倒れ込み、びくびくと体を痙攣させる。

散々弄ばれて……好き勝手されました……はい……。いや、そりや悪い気はしないよ？だって嫁だし、何なら凄く良かったよ、うん。

でもなんか違うよね？無理矢理は違うよね？前から後ろからもね……まあアラバスタでは2方向どころか3方向からわちやわちやされたけども！

「どう？イリス、…少しは気分晴れた？」

「…うん、おかげさまで」

予想はしていたけど、やっぱりナミさん達の狙いはそこだったようだ。

私がウソップと決闘した事を辛く受け止めているのは、態度からしてバレバレだったのは知っているけどまさかこういった方法で気分転換させてくれるとは思ってなかったかな…。

「ごめんねナミさん、ミキータ…心配かけて。慰めてくれて嬉しいよ。だけでももう少しソフトに…」

「ダメよ、私はシたいもの」

「キャハ、同じく」

心配の裏に下心も混ざってたか…。

まあ、そんな2人なりの照れ隠しなんて分かり切っているけども。…やっぱり私の嫁は良い女だと思う。

痺撃から立ち直り何とか座ると、ミキータが用意してくれていたお茶を渡してくれたので一気に飲み干した。いやあ、風呂場で運動は汗の量がね…。

「実際の問題として…ウソップはどうなるんだろう」

「…こればかりは、成り行きに任せるしか無いと思うわ。今からウソップを説得しに

行つたつて彼が惨めになるだけ…。イリスちゃんは、あの場でベストを尽くしたと思  
う」

「うん…ありがと。ところで明日の予定は？」

「もう1回アイスバーグさんに会つて船の話をしてみようと思つてるけど、あの人も忙  
しい身だからどうなるかは分かんないわね」

ああ…確かに乗り換えるとなれば、もう1度相談に行くのが素人の私達からすれば  
手っ取り早いのか。

「ふわあ…ん…」

「イリスちゃん、おねむ？」

「確かに眠たいけどねミキータ、その言い方はちよつと引つかかるかなあつて」

ぶつぶつ文句を呟きながら横になり布団を被る。

…今日は色々あつたし、最後に2人に激しくされちゃったせいですつごく眠たい…す  
ぐにでも夢の世界へ旅立てそうだ…。

パチ、と電気も消され、各々用意されているベッドに潜り込む…なんて思つてた私  
がバカでした。

「…あの、ナミさん？ミキータ？ここ私のベッドだけど…」

「何か問題が？」

「ないけど…」

ナミさんが前から、ミキータが後ろから私のベッドへと入ってくる。

問題はないけど、あるんだよねえ。特に私のむらむら度とかさア…。

「私、今日はどうしてもイリスと一緒に寝たいの」

「私もよ、どーどーしても」

「2人共…」

私が抱く劣情などなんのその、ナミさんとミキータはただ私の事を思ってくれている上での行動だった。

当然だ、2人が私の事を1番に考えてくれているなんて事は…私が1番知っているんだから。

「ありがとう…」

さつきから2人には慰められてばかりだ。

ロビンの事や、勿論ウソツプの事で悩む私に無理をさせまいと出来る手段で息抜きをさせてくれている。

「…おやすみ」

「ん、おやすみ」

「おやすみなさい、イリスちゃん、ナミちゃん」

大好きな2人に包まれて、疲れ切った私の体は夜に墮ちていく。

ああ…私…：…幸せだなあ。

—————

静寂に包まれる夜に、安らかで幸せな3人の寝顔。

次の日も、また次の日も、彼女達は幸せに日々を過ごすようにと強く願う。

だからこそ、何としてでも乗り越えなければならない。

だからこそ、何としてでも乗り越えて貰わなければならない。

近いうちに訪れる“絶望”を。

絶望から生まれる“恐怖”を。

恐怖から始まる“過ち”を。

イリス…あなたはきつと、本当の意味で—————

———  
———  
———  
———  
———  
幸せになつてね。

## 82 『女好き、濡衣少女』

翌朝

私は起きてすぐにこの宿の屋上へと向かった。

理由としては隣にナミさんもミキータも居なかったからだ。要は慌てて探してる所である。だつて起きて居ないつてちよつと不安になるじゃん。

どうして屋上なのかと言うと、聴覚倍加を使用した時に屋上から声が聞こえたからだ。残念ながらナミさんやミキータの声では無かったけれどチョツパーの声は間違いないでなく聞こえた。

「ナミさん、ミキータ」

ガチャ、と屋上の扉を開けて外に出れば、空からさんさんと輝く太陽さんが寝起きの瞳をこれでもかと刺激してくるので手で覆い隠す。

眩しさに対する耐性でも倍加すれば良かったか…いやでも、何でもかんでも倍加してたらその内貧弱になりそうだよね…。

「あ、チョツパー、サンジもゾロも、ルフィも居るじゃん、みんなどうしたの?」

男性陣揃い踏みじゃん。

…ウソツプは、まあ、居ないけど…。

「せつかく宿とったつてのに、みんな揃って眠れてねエんだ」

「そつか…私達だけ寝ちやつて、何だか悪い気が…」

「イリスちゃんも休むべきだった。ナミさんやミキータちゃんのお陰でだいぶ顔色良くなってるな」

ぺたぺたと頬を触ってみる。そうなのだろうか、確かに気持ちの整理はついたけどね。

「俺は夜中中岩場の岬を見張ってたんだが、ロビンちゃんは結局帰って来なかったよ。…どこ行ったんだろうな…、何も言わずに…」

ロビン…変なことに巻き込まれたりしてなければ良いけれど…でも、全く連絡が無いつていうのもおかしい話だし…。

「俺は今日は町中を探してみようと思う。もし何かあってもこの宿を落ち合い場所にしとこう」

「お…おれも行くぞ！探しに！」

「私も行こうかな、ロビン捜索」

サンジの意見に私とチョップパーが乗った。ウソツプだけでも相当マズいのに、その上ロビンにまで居なくなられたら何だか一味がバラバラになっていくようで良い気がし



ない…というか、イヤだ。

「ルフィはどうする？」

「そうだな、だつたらおれも…」

「イリス！あとルフィも!!」

突然私の後ろにある扉がバン！と勢いよく開かれた。

向こうから息を切らして現れたのはナミさんとミキータだ。2人は何やら焦っているのか表情が険しく見える。そんな表情も可愛いなあ。

「どうしたの2人共、何かあった？」

「ええ、それも大変な事がね」

それを聞いて、冗談言ってる場合では無さそうだと気を引き締める。

「実は……」

\*\*\*

「え…!?アイスバーグが、撃たれた!?」

「アイスのおっさんが…!？」

「ええ、今は意識不明だつて…!！」

ナミさんの口から出てきた事件とも呼べる内容に私とルフィは目を見開いて驚く。

だ、だつてアイスバーグつて凄く尊敬されてるとか、そういう人じゃなかったの!？」

「誰だいそりや、ナミさん」

「昨日造船所で私達がお世話になつた人よ。造船会社の社長で、ウォーターセブンの市長」

「そりやまた随分と大物が…」

ナミさんが言うには町中この話で持ちきりらしいが、それはそうだろう。

さつきも思ったけどアイスバーグはこの街のトップで、それでいて嫌味もなく、上に立つ人物としては…いや、かなり適当な所もあつたけれどそれも含めて支持されていた筈なのだ。

ウォーターセブンに住む人達からしてみればこの上ない大事件だろう。

「ちよつと行つてみる」

「待つてルフィ、私も行くから!ミキータもね」

「キャハ、どうして私も?」

「それは勿論、私の護衛よ」

私がロビンを探すって言ったから私を連れていくのは気が引けたのか、代わりにミキータを指名するナミさん。

でもその判断は凄く助かる……私もアイスバーグは気になるけど、やっぱり今一番気になるのはロビンの居場所だし。

「じゃあ俺達はロビンちゃんを探しに行くぞ。お前は どうする？」

「……いや、俺はもう少し……成り行きを見てる」

「何かあの人カツコつけてる、ぶぶ」

「よし、イリスそこに座れ、叩つ斬ってやる」

こめかみをびくびくと痙攣させてるゾロとは目を合わさない様にして、私達はそれぞれの目的の為に行動を開始した。

それにしてもゾロとのこんな会話も久しぶりな気がするなあ……心なしかゾロもノリノリだったし、私が思ってるより楽しんでいるのかな？

みんなと別れて街中をサンジとチョッパーと共に搜索していると、時間が経つにつれて段々と風が強くなってきた。

あれだけ輝いていた太陽は時折雲に潜み、その雲の流れるスピードも普段よりずっと速い。

「何だろ、嵐かな？」

「ナミさんがいればな……」

きつとこの気象の理由なんてすぐ当ててくれるだろうにね。

『ーお知らせ致します』

「ん？」

突然、町内アナウンスでサイレンが鳴り響いた。何？警報？

『こちらはウオーターセブン気象予報局。只今、島全域に“アクア・ラグナ”警報が発令されました。繰り返します、只今ーーー』

「……アクア・ラグナ？何それ」

「セア……」

警報が発令とか言ってるくらいだから、何かしら災害なんだろうけど……。そのアナウンスが流れてからと言うもの住人達も血相変えて慌て出したし、そんなにヤバい災害なのかな。

このまま考えてても知識が無いんだから時間を浪費するだけだと思った私達は、とりあえず近くを通る住人に話を聞いてみた。

その人も例外なく忙しそうにしているからわざわざ捕まえるのは気が引けるんだけど……。

「ああ、そうか君達……旅の者か。いや、運の悪い時にここへ来たなあ、アクア・ラグナ“ っつてのは「高潮」さ」

「高潮?」

「ああそうだ。ちゃんと高い場所へ避難しとかねエとこの町は海に浸かつちまうぞ。まあ別に今すぐって訳じゃねエから大丈夫だ、予報じゃ今夜半すぎと言ってる。毎年の事だ、気いつけなよ!」

わはは!と笑い手を振って去っていく住人に手を振り返して別れた。

高潮か……いや、それにしてもこの町全域が浸かるって相当な規模の波が来るんだろうな。

「なら早いところピンを見つけないとね。チョッパー、ニオイとか辿れそう?」

「ごめん、さつきから潮のニオイが強くて良く分からないんだ」

確かにチョッパーの言う通り、嗅覚を倍加しても潮のニオイが濃くなるだけだった。

アイスバーグの事も気掛かりだし、アクア・ラグナつてのが来るならウソップも危険だ……!

「そうか、ウソップが危ないんだ……ウソップはアクア・ラグナを知らないから……!」

「!!なら早エとこ知らせないとやベエ、もう今夜にはその、アクア・ラグナつてのは来るんだろ!」

「知らせるつて言つても、ウソツプはおれ達の話を聞いてくれるのか!」

…今の状態だと、言つても突き返されるのがオチだ…!なら…!

「…すつごく簡単な事だけど、私に作戦がある。聞く?」

そういう私に、2人は迷わずコクリと頷いた。

例えあんな別れ方をしたからと言つて、ウソツプを見捨てられる訳がないもんね…何としてでもこの事は伝えなきゃ!!

\*\*\*

「えー…ツツ?!?!? アクア・ラグナつていう “高潮” がここへ近づいてきてるの?!?!?!」

「そうそう!!!今日の夜中にはこの町は海に浸かっちゃうんだぞ!!!この海岸だつてどつぷりさ!!!」

「そりゃ大変だ!!!じつとしてちゃダメだな!!!早く高エ場所へ避難しねエと!!!」

「避難しないとね!!! 避難!!! ひ・な・ん!!!」

叫んだ後、ハア、ハア、と肩で息をする私達3人。

何をしているのかと言えば、勿論私の考えた「ウソツプに何とか伝えよう大作戦」を  
決行しているのだ。

岩場の岬にあるメリー号の近くまで行き、そこでとにかく必要な情報を叫ぶ。

後は中から声に気がついたウソツプが出て来たら全力で逃げる。これだけの超簡単  
ミッションだ。

「お」

「逃げるぞ……っ!」

ガチャ、と叫んだすぐ後に船内から扉を開けてウソツプが出て来たので、見つかる前  
に全力で逃げた。

きちんと聞こえてたら良いんだけど…!!

何とか見つからずに町へと戻ることができ、無事ミッションコンプリート!

さてと…なんだかんだ言っただけで結構時間かかったし、ロビンを探さないと  
…。

「あ、ちよつとそこの人!何か落としたよ」

「え？あ、ああ……親切にどうも……」

ぴら、と号外と大きく書かれた新聞を拾う。

？何だか慌てている様な雰囲気だけど、どうかしたのかな。いや、よく見ればこの人だけじゃない、町にいる人全員が同じように慌しく何かを探しているみたいだ。

アクア・ラグナがどうこう言ってたのに、また違う話題で持ちきりになってるのだろうか。まさかアイスバーグを襲った犯人が見つかったとか。

「はい。どうかしたの？」

「あ、ありがとう！……それが、昨夜アイスバーグさんを襲った犯人の正体が判明したんだ！あんたも見るか………つて、……ん？」

え、なに？何か新聞と私の顔を見比べてうんうん唸ってるんだけどこの人…。

まさか、とは思うけど……いやいや、まさかそんな……いやまさかあ。

「……いい、いた………ツ！！麦わらの一味だ！！女好きのイリスが居たぞ！！ひっ捕らえろ！！！！」

「ええツ！！」

ぎよ!?!と目を飛び出させて驚く私とサンジとチョッパー。

いやだつて、ちよつと町を離れた間に身に覚えのない罪を被せられてるんだよ!?!確かに私は海賊だけれど、悪事の全てを引き受けてる訳じゃないからね!!!



「本当だ、間違いない！麦わらの仲間だ!!」

「逃すな!!捕まえろ!!」

「うわああああっ?!?!?」

物凄く恨みの籠った表情で追いかけてくる住人達に手を出す訳にもいかず、とにかく逃げる私。

…あれ、サンジとチョッパーは追われてない?…あ、そうか、手配書が無いからか!!もーっ!!私はロビンを探したいのに!!

「居たぞ！女好きだ!!」

「そっちに行つたぞ、回り込め!!」

「子供は全員家に入れろ!!残つた外に出てるやつが女好きだ!!」

どこまで本気なの!!?本当に身に覚えがないつてのに…この感じだと言っても信じてくれなさそうだよね…!

だとしたら、真犯人は誰…?わざわざこうして私達に罪をなすりつけて、何が目的なの?

「こんな時に全・倍加オールインクリースが使えたら…!」

言つても仕方がないけど、そう思つてしまう。

手配書には素の私しか写つてないから、結局全・倍加オールインクリースを使用すれば短時間だけバ

レなくて済むんだよね……!

「……っ、しまった……!」

道が分からないからとにかく目に入った所へ進んでいたのだが、ある曲がり角を右へ曲がればその先に道は無く、右は民家、左は水路となっていた。

「もう逃げ場はないぞ! 観念しろ!!」

「他の仲間の居場所も吐いてもらうからな!!」

……くそ、こうなったら……あの手しかない……!!

「ねえ! さつきから私、全く身に覚えが無いんだけど!」

「とぼける気かア!! アイスマーグさんが証言しているんだぞ!!」

証言って何の証言だよ! 寝ぼけ過ぎだつて!!

「あくまでも私の話を聞かないって言うなら……あなた達の家の屋根がどうなっても知らないからね!! 私は加減を知らないよっ!!」

じりじりとにかく寄り寄ってくる住人達にそう宣言して、私は右側にある民家の屋根に飛び乗った。

さて……ここに居てもすぐ登ってくるだろうから、やってやりますか!! 山風式移動術を!!

「屋根に……!?!」

「くそ！みんな、何としても見失うな！！絶対に奴らを許すなア！！」

ひい、全く身に覚えの無い事でもんでもない程の恨みを買っちゃってるよ！

だけど、私もこんな意味の分からない事で時間を潰してる暇はないから、全力で逃げさせて貰うよ！！

「ほっ！！」

ダン！と大きな音を立てて走り出す。

ウオーターセブンの家は造りからして屋根が平らなのが多いから走りやすい！

完全にカクのマネが出来てるかは知らないけど、屋根から屋根へびよんびよん移動してるだけでも住人達を撒くのは十分可能だろう。

現にもう私を追いかけている人達の姿は見えず、ものの数秒で逃げ切る事に成功したようだ。

「上手くいつて良かった……！それにしても、一体何で私達が犯人扱いされなくちゃ……っあー！」

ちよつと調子に乗り過ぎたか、屋根の端に足を滑らせて真つ逆さまに下へと落ちる。

ぐへー！と地面に直撃して痛む頭を撫で、どこに落ちたか確認する為に前を見れば……。

「あっ……ロビン!!」

「……赤目さん」

何と！落ちた所にはロビンが居ました!!

凄い、運命かな!?!ただ見た感じここって路地裏的な、ひとけ人気の少ない所っぽいけど……何でロビンはこんな所に居たんだろう?

……ま、いつか！別に細かい事は。見つかったんだから気にしないでおこう！

## 83 『女好き、潜入海列車』

「ロビン！探したよー！」

「……………」

私がいきなり現れた事で驚いているのか、どうもロビンの反応が鈍い。

でも表情は驚愕というより…そう、焦りだ、焦りが見て取れる。

「ロビン、どうしたの？そんな胸元開けてたら興奮しちゃうよー！」

「赤目さん」

まるで私の言葉など聞いていないかの様に口を開くロビンに、また私は疑問を抱く。

確かに彼女は探究心が強く、特に遺跡の様な「歴史」が絡む事象については自分を強く出していたイメージがある。だけど、私の話を無視するなんて事は…今まで1度たりとも無かった筈だ。

「さっきそこでコックさんと船医さんにも会ったわ。そしてあなたにも、同じ事を言わせてもらう。…あなたとは…ここで、この町でお別れよ」

「……………は、い？ごめん、良く聞こえなかった。もう1回お願い」

「お別れよ、赤目さん」

…何、コレ。

聞き間違いだと思わせてくれない程にハッキリと、2度もそう告げるロビンに私は未だ自分の耳を疑う。

「お、お別れ…？えつと…その、なんで？」

「あなたも耳にしている筈よ、昨夜の市長発砲の件」

「あ、ああ…あれね、いや、私も大変だったよ！何だか知らないけど麦わらの一味が犯人って事になってさ！私まで追われちゃって…はは。あ、もしかしてそれでお別れって言ってる？大丈夫だよ！これはただ濡れ衣着せられただけで、きちんと話せばアイスバーグも分かってくれる筈だから！私達の仲間になんかのする人居ないでしょ？」

「…そうね、確かにあなた達の中でそんな事をする人はいない。謂れない罪を被せて悪かったわ」

…ええ？

「だけど、私にとつては偽りのない記事よ。昨夜市長の屋敷に侵入したのは私」

「…？何、言ってるの？」

「私には、あなたの知らない『闇』がある。『闇』はいつかあなたも、そして大事なお嫁さん達も滅ぼすわ。現に…私はこの事件の罪をあなた達に被せて逃げるつもりでいる…、事態はもつと悪化するわ。そして何故そうするのかも…あなたが知る必要のない事

よ

…闇がどうか…何なんだ一体…!

そういうえば、青キジもロビンの闇がどうか言うてたっけな…。

ロビンと関われば身を滅ぼす。不幸になる。後は何だっけな、関わった組織は壊滅とか? そんな感じだっけ。

…うーん、じゃあ私からも一つ言わせてもらおうか。

「で?」

「っ……………」

はて、ととぼける様に首を傾げる私を見てロビンの表情が怒りに染まる。

「なるほどなるほど、アイスバグを撃つたのはロビンで、私達に罪をなすりつけようとしてるのもロビン。はー、ほー…………誰に脅されてるの?」

「え…」

「だから、ロビンにそんな事させてるクソ野郎は誰って聞いているの」

ずい、と距離を詰めれば彼女は同じだけ足を引いて逃げる。

さっきの怒りの表情はどこへやら、今は只々目を見開いて言葉を失っているみたい

だ。

…私はもう、*「信じない」* 事はしたくないんだ。

「言わないなら別にいい、気絶させてでも連れて帰るから」

「…私は、私の意思でそうしてる。誰に指図されている訳でもないわ」

「ふーん…じゃあさ、ロビンがアイスバーグを襲った訳は？それを答えてくれるなら信じてもいいよ」

「っ…私の、夢の為よ」

…っはー。

やれやれ…と首を振る。

ロビンの夢は何たらグリフの解読でしょ、アイスバーグ関係ないじゃん。

もうこれ、ロビンがアイスバーグ襲撃の犯人なのは本当だとしても、裏で誰かが手を引いているのも事実なのは確定したよね。

何故ならロビンがアイスバーグを殺そうとする理由がない…だから理由はロビンではなく、彼女に指示する誰かクソ野郎の方にあるという訳だ。

「アイスバーグとロビンの夢は何の関係があるの？」

「それは…」



ロビンもそこまで迫られるとは思ってなかったのか歯切れが悪かった。大体、ロビンは私達を何だと思っているのか。

短い付き合いとはいえ、ロビンがどんな人かなんて知ってるし、信用もしてる。

私に至っては嫁にするの確定してくらい好きなんだから離す訳がないじゃん。

「言えないのなら、諦めてね。私はロビンの事諦めないけど…ねっ!!」

「ッ!?!」

最後の言葉と同時に、地面を踏み込みロビンへと一直線に走る。

押し倒して身動き取れなくしてしまえば後はこつちのもんだ!ぐへへ、観念しろオ!

「くっ…:私、捕まる訳には行かないのよッ!!オートチャール八輪咲き!!」

「それは、私には通用しないよ!」

私の体から生えてきた8本の腕を、同じく私の肩から、だけど今度は私が生やした8

本の腕が掴む。

力で私が負ける筈もなく、押さえ込んだままロビンへどんどん近づいて行けば能力で

勝負するのは不利だと悟ったのか背を向けて逃げ出した。

「速さも、私の方が上だよ!!」

ロビンが能力を解除した事で余計な気を使うものも無くなり、ただ追う事だけに集中しているからかその距離はみるみる内に近づいていった。

む、曲がり角を曲がったか。

「絶対に逃がさない!!…つて、あれ?」

ロビンが曲がったすぐ後にその曲がり角を曲がれば、そこにロビンの姿は無かった。

…しかもこの先…行き止まりだ。普通に考えれば逃げられる訳がない…が、さっきの説が本当に本当ならロビンに指示してる奴が逃走の手引きをしたとしか考えられない。

…くそ! 邪魔ばっかしてくれるじゃん…!

彼女を良いように扱って…下らない陰謀に巻き込みやがつて…!!

…でも実際問題、これからどうするのが正解なんだろう。

私としてはこんな事態になってるんだからナミさんやミキータが心配だけど、動きやすくなる為にはサンジ達と合流するのが今は一番なのかな?

だったら…、

「よっー」

タン、と再度屋根に飛び乗り辺りを見渡す。

視力倍加も使用して人一人見落とさない様にしなければ…:とはいえここは下町。アクア・ラグナの影響で人通りもさつきよりはまばらだからまだ見つけやすいだろう。

時間をかけすぎて私が潮に吞まれるのはバカらしいし、早めに見つけたいね。

\*\*\*

と思つてただけどお…。

「誰も居ない…うそん…」

サンジどころかチョツパーも居ないし、ルフィもゾロも、ナミさんもミキータも居ない!! なんならウソツプもメリー号も居ない!! アクア・ラグナのせいで人も居ない!! なんのここ、私しか居ないの!?

「もう夜だよ…アクア・ラグナ来るのが何時だっけ」

確か今夜半過ぎとか言つてたし、もうそろそろだよね…時間分かんないから勘だけど。

「…あと探してないトコといえば…」

アイスバードの屋敷にはきつとルフィ達が居るはず…、なら、サンジとチョツパーは残ったあそこしかない!

「ブルーステーションか、確か島の正規入口にあつたっけな。ということはあるか」

…あ、そっか、よくよく考えればロビンが島を出るなら海列車を通らなければ無理な

訳だし、そこで張つてればいつかはロビンを見つける事が出来るじゃん！

サンジは頭が良いから、私が思いつくずつと前に閃いて駅にスタンバイしてるかも。かなり慣れてきた山風式移動法ですいすい屋根を飛び越え移動し、目的のブルーステーションに結構早く到着した私は適当な所で屋根から飛び降り周囲の様子を伺う。

「……う？あれは、世界政府の役人……？確かあんな感じの服着てたっけな。それに海兵も……、……………!!?ロビン……！」

え、まさかロビンを一番最初に見つける事が出来るとは思ってなかった……!

つてまずいまずい、適当な柱の影にでも身を隠さないと見つかったら面倒だ。

「ビングゴだね、やっぱりロビンは海列車で移動しようとしてる……さて、後は……」

嗅覚倍加……タバコの臭いを探そうか。

サンジの事だ、タバコは吸ってるだろうし、だとすればこの方法で見つからない訳がない。

「……くんくん、……………いた……！」

銘柄までは分かんないけど、いつもサンジが吸ってるタバコの臭いだ!

受動喫煙？その辺の耐性を倍加云々……。

臭いがするのは私から少し離れた柱の影からだ。恐らくサンジも私と同じように様子を伺っているに違いない。

居ると分かれればそれでいい、チョッパーも近くに居るだろうし…後の問題はロビンだけか。

「放せチクシヨ―！放せー!!」

「?」

後から現場に到着したのか、4人組の男女が町方面から駅に向かって歩いてくる。

その内の1人の両肩には人が2人担がれており、叫び声は担がれている人物の1人が発しているものだった。

「…ウソツプ…!!」

しかもウソツプだし…！何であんなぐるぐる巻きにされて…まるで連行されてるよ  
うな…！

…ていうか、連行してる4人組の内3人は知った顔なんだけど。

担いでる大男は知らないけど、女はアイスバーグの秘書のカリファだし、残り2人は船大工のルッチとカクだ。ルッチはともかくカクの鼻を見間違えるなどあり得ないから間違いないだろう。

「CP9だ…！」

「スゲー…なんて迫力だ…」

聴覚倍加を使って海兵達の囁き声に耳を傾けるとそんな声が聞こえてきた。CP9

? カツプリングならイリス×ナミとか、イリス×ミキータとかイリス×ロビンとか一杯あるよね!!

…いや、違うのは分かるよ流石に。冗談だよ。

「全員気を引き締めろ、列車に乗れ！」

「はっ！」

ルツチの一言で役人や海兵はぞろぞろと駅へと入っていく。

なに? ルツチってあんなに権力ありそうな奴だったわけ? この島の船大工ってそんなに偉いの…?

…何にせよ、この列車にロビンが乗るってんなら私も乗り込むしかない。

けど、ナミさん達を置いていくのもね…。

『「ウォーターセブン」ブルーステーシオン発、エニエス・ロビー行き。アクア・ラグナ接近中につき、予定を繰り上げまもなく出航致します』

「え、もう!？」

さつき入ったばっかじゃん!

…くそ、なら今いる私とサンジ、チョッパーだけでも列車に乗り込まないとロビンを追う手がかりすら…!

「サンジ！」

「イリスちゃん!？」

もう駅前には誰も居ないし、隠れる必要も無くなった私はサンジの元へ移動する。

「あれ、チョツパーは?」

「別行動中だ。それよりイリスちゃんが無事で良かった」

「うん、ありがとう。…それで、サンジはロビンに会ったんだよね?」

「ということはイリスちゃんもかい。…どう見る? 今回の件」

「どう…とは、ロビンの真意だろうか。」

「どうもこうもないよ、ロビンの本心が聞けてない以上は何も分かんない。…だからサンジ、悪いけど一緒に来てくんない?」

「ニヤリ、と笑ってサンジを見れば彼も同じく笑って頷いた。

「ちよつと無茶するけど…必要な無茶ならナミさんも許してくれる筈!…きつと!!」

「乗り込む前に書き置きを残しておこうよ、電伝虫がいれば完璧だけど…」

「小電伝虫なら持つてるぜ」

「さつすがサンジ、痒いところに手が届く。」

そんな訳で私は紙にロビンの行き先と、私とサンジもロビンを追って海列車に乗り込む事と、一緒に置いておく小電伝虫に何とか列車の中から連絡する旨を書いて柱の下に置き、その上に小電伝虫を乗せる。

うーん、これだけじゃ分かりにくいよね…。

「イリスちゃん」

「ん？…お！」

サンジが小さく私を呼ぶので振り返れば、彼の手にはペンが握られていた。用意周到にも程があるよ、え、何？もしかしてこうなる事が分かったの？

…ま、まあ何にせよあるのは助かったよ。

柱の壁に「ナミさんへ」と大きく書いてメモを置いてある場所に矢印を引つ張っておく。

間違いないこの場所には来るだろうし、その時にでも発見してくれたらそれでいいや。

エニエス・ロビーがどこかは分かんないけど、ルフィ達なら何とかして後を追ってくるでしょ。

「よし、準備完了！…じゃ、行きますか」

「ああ」

出発する前に乗らないとね。

…流石に遅れるのは洒落にならない。



出発する直前の海列車まで2人で走り、動き出した列車の最後尾の外の…何て言えばいいのか、バルコニーみたいな所へ乗り込むことに成功した。家じゃなくて列車だけだ。

でも…一段落ついたかな。

「しかしここはめっちゃくちや濡れるな…一服もできやしねエ…!」

「アクア・ラグナのせいで波が荒れてるもんね。水飛沫が…雨も降ってるし」

2人揃って水に濡れてビチョビチョですよ。寒い!

「とにかくどうにかして列車内に潜入しよう。ここに居てもすぐにバレ…」

ガチャ

「いやア、外は凄い嵐…:…ん?」

「… 首肉コリエシユートオ!!」

「ブはア!!」

タイミング悪く中から出てきた役人の下っ端を、つい反射的に列車内へ蹴り飛ばしたサンジがしまった、と青ざめる。

「…くそ、こうなりや仕方ねエ! オイてめエら、俺一人の潜入を許してマヌケだな!」

「…!!」

そう言ってサンジは私に振り返る事なく、中に入って扉を閉めたのだった。

…そっか、私は丁度扉の裏に居たからバレてないのか。体が小さいのがここにきて役に立つとは…。

「…さて」

せつかくサンジが機転を利かせてくれたんだ。この好機は上手く使いたい。

…上に登るしかないか。ロビンがどの車両にいるか分かんないけど…それは上手く能力を使つて確認して探そう！

…それにしても寒いな…濡れすぎたかな？

## 84 『女好き、絶望の氷』

「よつと」

ひよい、と列車屋根に上り視力倍加と聴覚倍加を併用する。

今の私は全・倍加オールインクリースが使えないから、強敵との戦闘を避けつつロビンを救出しなければならぬからね。小手先の技でとにかくこつそり動かないとマズい。

うーん、見たところ全部で7車両か。

最後尾の車両は敵しか居ないっぽかったし、探すのはその前からいいだろう。

走る足音を消したりとかは出来ない訳だし、ゆつくりと歩いて第6車両へと行き屋根端にしゃがみ込んだ。

「窓があつて助かったよ、中確認し放題じゃん」

びよーん、と首の長さを倍加してろくろ首の様な見た目になった私は、そのままホラー映画よろしくひつそりこつそり中を覗く。

「…ロビンは……」

居ないか。 …ん??…あれは…ウソツプ!

良かった…扱われ方は雑だけどちゃんと無事だ!隣にいるリーゼントのチンピラは

見ない顔だけど、ウソツプと一緒に捕まってるなんて何やらかしたんだろう。

そうだよ、ウソツプもなんで捕まってるの？まさか役人の前で自分は海賊だとか言ったの？…まあ、その辺の「嘘」を付けるような男じゃなかったね。

ま、ウソツプの心配はいらないか、後ろからサンジも来てるし…私は次の車両を確認してこよう。

そんな感じで5、4、3、2両と順に覗いていき、残すは先頭車両だけとなった。

前へ進むたびに寒くなっていく…かなり嵐に熱を吸われてるみたいだ。

…というか、5から3両目まではいいよ、サンジ達でも勝てそうな奴らしか居なかったし。

ただ…2両目の奴はヤバイ。船大工してる時には感じなかった「圧」を…黒服着たルッチ達からびしびし感じたもん。

1人1人倒せるならサンジも対抗出来そうだけど、一斉に襲い掛かられたらまず勝てない。そう思わせられる程の実力が伝わってきた。

「あれで2両目って…先頭には誰が配置されているのやら」

出来るだけ戦闘は避けたいというのに…。

おっかなびつくりといった感じで慎重に、ゆーつくりと窓を覗く。

「……………!!!ロビン…!!!」

私がいる方とは反対側の窓際の席で、ぽつりと座って外を眺めているロビンを見つけた。

…誰も傍に居ないの？何でかは知らないけど、ラッキーだ。

「こつそり…こつそり…」

首と同じく腕も伸ばして鍵近くの窓を割る。

「!!」

バツとこちらを見たロビンと目が合ったが、私は気にせず鍵を開けて窓から入った。

…中也寒い！暖房付けといてよね!!

「赤目…さん…!!?どうしてここへ…!?!」

「どうしてって…勿論、ロビンを連れ戻しに」

どうしてロビンがわざわざ私達から遠ざかろうとしているかは分からない。ロビンの後ろに誰かが居ると言うのも結局は推測でしかない訳だし。

だけど…私達はそんな勝手な離脱に納得してやれる程広い心は持ってないんだ。

「うちは厄介だよね、来る者拒まず、去る者は追うってね」

ウソツプだつて、あんな経緯じゃなければ離脱なんてイヤだった。今もまだ、私はあの時の決闘を鮮明に思い出せるのだから。

「…私は、あなた達にはつきりとお別れを言った筈よ!!私は今もう二度と一味には戻らない!!赤目さん…お願いだから今すぐここから出て行って!!」

「そうは言うけど、海列車から飛び降りたら死んじやうよ。あとここに居るのは私だけじゃない、サンジにウソツプも居るからね」

「そんな…!私は助けて欲しいなんて欠片も思っていない!勝手なマネしないで!!」  
…偉く強情だね。

世界政府から20年も逃げ続けてきて、何故今になってこうもあつさりと連行されるのか。

そして何故、頑なに私達を遠ざけようとしているのか。

うーん…ロビンの裏で動いていた「クソ野郎」は、CP9…ルッチ達で恐らく間違いないだろう。

それを踏まえて考えれば、ロビンはルッチ達に脅迫、或いは取引をしている関係なのかもしれない、とも考える事が出来る。

内容は…ロビンが捕まる代わりに私達は見逃す、といった所が濃厚だろうか。だからロビンは私達に別れを告げ、自分だけ捕まった。

…うん、なんだかスツと胸に入ってきた。多分この考えは正解だね、違和感がないから前世の臆げな知識と相違がないって事の証明にもなる。

「勝手なマネで結構。ロビンの意思なんて関係ないよ、私はロビンを見捨てられない」

「…っ、赤目さん！本当に、早く出て行って!!お願い…っ!!」

「…ロビン?」

…なんだ?今私は、強烈に違和感を感じている。

私の推理もどきは正解しているという自信がある。つまり何とかロビンを拐って、ルッチ達との車両を切り離せば逃げる事は可能だ。

…でも今、ロビンは…私の中に眠る知識とは別の「ナニカ」を恐れているような…そんな違和感だ。

「早く!!!」

「わっ…ちよつと、ロビン落ち着いて…!」

グイッとロビンに窓近くまで引っ張られる。そのまま私を列車外へ押し出そうと必死だが、力で私に勝てる訳もなく彼女の顔は焦りで包まれていた。

「ま、待ってロビン!落ちたら本当に死ぬよ私!」

「…この列車に乗っているよりかは生き延びる可能性が高いわ…!例えあなたが、能力者でも!!」

「それって…どういう…!」

今ので、ロビンが私達を生かそうとしてくれてるのはハッキリした。

だけど、ロビンはONE PIECEでもここまでの手段に出たのか…？いや、違う…そんな事はしてない筈だ。分からないけど…。

普段冷静なロビンがここまで焦りを隠すこともなく、海へ能力者の私を突き落としたりの方が生存率が高くなるというほどの…十二力。

「…ロビン！」

「きや…っ！」

何とか彼女の拘束から抜け出し、ドン！と床に押し倒して逆にその身を押しさえ込む。

「この列車に何があるって…!?何が来たって、私はあなたを守ってみせる!!信じてよ!全部話して!!」

「話した所でどうなる事でもないのよ!言っているでしょう…!私はもうあなた達の一味じゃないの…関係ないのよ!!」

「バカ!!そんな理由で納得できる訳ないじゃん!!私達を信じてはくれないの…!?!」

「…私は…」

キツ…と私を強く睨んだロビンの瞳が微かに潤む。

小刻みに震える肩はまるで何かに怯えているような…。

「私は、あなたを信じたいわ!!だけど、その気持ちに許されない時もある!!それが今なの…!赤目さんや他のみんなが強いのは知ってる…!あなた達なら恐らくは、



バスターコールからすらも逃げ出せるかもしれない!!」

「…ツ！」

バスターコール…それを乗り越えられるかもしれないとロビンが言った事に、何故か私の心臓はドキリと跳ねた。

「だけど…っ、あの人は…!!」

「あの人…？それって、誰の…、…え」

その時、ふと床に視線を落とした私はそこで起きている現象から目を固定させ、動かせなくなった。

それはきつと、私の脳が強烈に感じる違和感、情報…それらを整理するのに時間がかかっているからだ。

「なんで…床が、凍ってるの…？」

「…ツ赤目さん！早く!!」

何とか顔を動かして周りを見れば、床だけじゃない…壁も、窓も、天井も、椅子も、机も…何もかもが所々凍っていた。

「…まさ、か」

「……………あららら」

「ツーーーーー!!?」

ソイツの声を聞いた瞬間、私は反射的にロビンの腰を抱えて車両前方へ跳んだ。

バギンツ!!

跳んだ瞬間、私達がさつきまでいた所に岩のように巨大な氷の塊が出現する。

…おかしい、あり得ない、居る筈がない…!!ここには、居ない筈だ!!

喧しく吠える私の記憶と、奴の強さを知る今の私の記憶…そのどちらもが警笛を鳴らす。

抱えられたロビンは私の腕の中で目を瞑って歯を食いしばり、氷を生み出した本人は第2車両へ続くドアからゆっくりと、この第1車両に足を踏み入れた。

…確認した時は、居なかったのに…!!どうして…!?

そいつの名は…その、怪物の異名は…!!

「青、キジ…!!?」

「1週間ぶりくらいか? やっぱりこの列車に乗ってきたな、女好き」

青キジが、そこに居た。

「……どう、して?」

ギユツとロピンを抱きしめ、青キジから目を離す事なく問う。

大将つてこんなホイホイ出歩くもんなの?」

「あ……まあ、話せば長くなるんだが、なんだ……1度本部に帰つて報告したはいいが、やはり女好き、お前を見過ぐすのは無理との事だ」

「長くなつてないけど……? いや、それより、私程度で大将さんが出向くなんて、海軍つて相当暇なんだね? それに、さつき確認した時はあなたの姿は無かつたんだけど」

額から流れる汗、酷く波打つ鼓動を誤魔化すように小さく口角を上げる。

「さつきまで腹が痛くてな。トイレだ、ありや参つた」

なんつータイミングだよ……。強敵とは戦いたくないつて言つた側から最高難易度の強敵と遭遇する事になるなんて……。ね。

「私より危険な存在なんて山程居るでしょ……。その人達から捕まえたらどう?」

「お前はまだ自分の異常さに気付いてねエようだが……そもそも『霸王色の覇氣』つてのがどんなのかは知つてるか?」

「さあ、前に言つてた事しか知らないけど」

「『覇氣』には3つの種類が存在する。1つは『武装色』、そして『見聞色』。これら2つは並外れた鍛錬を積む事で、一般人ですら習得可能な技だ」

武装だとか見聞だとか、何言ってるの…？そんなの、この世界に来てから聞いたことも見たことも…。

「武装色は実体を捉える力、見聞色は声を聞く力…見たことねエか？」

「…さあ」

…見聞色…つてのがどうなのかはまだ分かんないけど…空島で心綱マントラつて力があつたな…それはもしかして見聞色の覇氣つてやつなの？

いや、そんな事はどうでもいいか…！ロビンがどうして頑なに私達を遠ざけようとしていたのがようやく分かったんだ…!!

CP9だけじゃない、その裏に青キジまで居るつてなれば、ロビンの今までの行動にも合点が行く。

…だったら私は、何としてでもこの状況からロビンを連れ出して青キジから逃げる事を考えるべきだ！

「だが、〃霸王色の覇氣〃はその2つとはまるで違った性質を持つ。鍛錬で成長を積める2つの覇氣と違い…霸王色は己の心が成長しなければ成長しないモンだ…：…そして霸王色とは、即ち〃王の資質〃」

「だから？」

「霸王色つてのは、数100万人に1人しか素質がねエと言われている。とりわけお前

<sup>覇王色</sup>  
 のソレは…威圧だけで髪色が変化したり、頭に王冠を乗せている様な幻を見せる事が出来る程のレベル…潜在能力だけで見りや、四皇並だ」

ピク、と腕の中のロビンが跳ねた。

四皇…？聞いた事はあるけど…何だっけか。

「實際あの島でお前と戦った時、俺は恐ろしいとさえ思った…！今はまだ赤子の様に自らの力の有用性を理解していなくとも、これから先…成長していく上で武装色、見聞色共に覚えてしまえば…世界の脅威となるだろう…そう、上は判断した訳だ」

「ああそう…じゃあさ…」

青キジの後ろで影が動く。

それは私が発動した神背ヒューマで生まれた「私」だった。

「私」は列車内の椅子を持ち上げ、青キジに振り下ろす！

「勝手に怖がっててね!!私は世界の脅威とやらになるつもりは毛頭ない!!」

「私」が青キジの体を粉碎させ、私はその隙にロビンを持ち上げて窓を指す。そこから列車屋根に登ればまだ逃げ切れる可能性がある！

パキン…！

「…っ窓が…!」

脱出する直前に、車両の窓が全て凍らされた。

それらを叩き割ろうと20倍の力で攻撃してもビクともしなかった：どんな氷だよ

！

「…赤目さん：今からでも遅くは無いわ：私を置いて逃げて：！」

「いいや、ニコ・ロビン：それは違う。前回と違って俺は今“任務”でここに居るって事を忘れて貰っちゃ困るんだが：」

「だけど、私一人を捕まえる代わりに一味の安全は保証してもらった筈よ!!」

「それは世界政府との取引じゃねエの？俺は関係ねエだろ、違うか？」

「…ッ」

もはや氷で囲われていると言ってもおかしくはないくらい氷漬けになった列車内で、青キジだけがいつも通りのダラケ顔を浮かべている。

“私”は氷漬けにされて足元に転がっていた。：  
ヒューマ神背で増やした分身とはいえ：強さは私と同等なのに：…！

「この先のエニエス・ロビーで、女好き、お前には色々と聞きたい事が山程ある。：…まあ、俺を介した上のモンの質問だが：。その後はニコ・ロビン同様正義の門を抜けて、まずはインペルダウンだ」

インペルダウンってのが何なのかは分かんないけど、ロクでも無い所なのは確かだろうね。

「もう、私達を捕まえた気での？ 私はまだ捕まってるないけ…ど!!」  
ダツと青キジに距離を詰め、飛び上がって顔に蹴りを放つ。

青キジはそんな私の足を片手で受け止めて床に叩きつけてきた。…くそ、やつぱり動きが読まれてる…! これが見聞色ってやつなの…!?

ロビンを逃そうにも窓は塞がってるし、第2車両と繋がる道は青キジを越えないと辿りつかない。

…何とかして、青キジを怯ませる必要があるんだけどどうすれば…!

「これなら、どうだ!!」

すぐに起き上がって腹に拳を見舞う。しかも拳の熱を20倍上げてやってるんだ、氷には効くでしょ!!

「ツぐ」

しかし、殴っても青キジの体にダメージが入る事はなく逆に私の腕が凍っていく。

…この、氷って…普通の氷とは全然違う…融点が高過ぎるし何より硬い…!!

「オイオイ、俺はこれでも大将をやってるのよ、挑んじやいけない敵の見極めをつけろって前言っただろうに」

「うる、さい!!」

腕を増やして殴る、殴る、殴る。

だけど、どれだけ回数を重ねた所で結果が変わる事は無く…ただそこに青キジという怪物が立っているだけで私はなす術もなかった。

私程度が生み出す熱ではビクともせず、私程度の力では青キジがちよつと強く作り出した氷を砕く事も出来ない。

ちくしょう…！私は、ロビンを助けられないといけないのに…！！どうすればこいつに、青キジ相手に少しだけでも隙を作る事が出来るの…！？

「何度やつても結果は同じだが…ま、そろそろ良いだろう」

「っ…あ」

青キジに首を掴まれ、ピキ…と凍って行く。

「霸王色を使えてない今のお前が俺に敵うハズはないんじゃないやねエのか？もはや自殺行為と思うが…」

「赤目さん!!」

「ろ、ビン…!!」

ロビンが私に駆け寄ろうとするが、青キジはそれを目で制した。

「落ち着け、別に今すぐ殺そうって訳じゃない。さっきも言ったら、俺は…海軍はこの女に用がある」

「だったら私が捕まる代わりに、彼女は離して!!政府との取引よ、あなたも無関係じゃな



いでしよう!？」

「関係あるか? そもそも…海賊と政府が取引をするのがおかしいだろ」

…つく…!

ま、ずい…この列車にはまだサンジも、ウソップも居るのに…!!

「が…く、嫌だ…ロ、ピンを連れて行くな…!!」

「ん? まだ喋れるのか、だがあまり暴れるな、殺さない様に凍らせるのは簡単じゃねエんだ」

「うるさい…ロビン!! お願い…死のうとしないで…! 私は、誰も失いたくない!! 今の内、何とか逃げ…!」

うあ…! ま、ずい…氷が広がって…!

「う…」

やがて、私の体は完全に氷に包まれた…。

…情けない…。ロビンを助けるって乗り込んだのにこのザマか…、こんなの、誰に笑われたって何も言えないじゃん…。

助ける筈だったロビンを助ける事も出来ず、私が失敗した事で一味にも迷惑をかけて…う、もう誰も、失いたくないのに…! 私は、私は…!!!

偉大なる航路（グランドライン） エニエス・ロビー 女

王編

## 85 『女好き、追憶の過去』

「……ん、っ……、？」

びちゃびちゃと、体に水をかけられている様な不快感に目を覚ます。

覚醒し切っていない頭で辺りを見渡せば、どうやらここは檻の中らしく、用心深く手錠もかけられている。

その檻の天井に直径15センチ程度の小さな穴が空いており、そこから出ている水に打たれていた様だ。本当に水をかけられてたのか…。

出た水は檻の両端にある網状の排水溝へと流れ落ちていた。

…ああそうか、凍った私を溶かす為の…。

…いやそれより、ここはどこなの…？ロビンは、みんなは？

「目が覚めたか、思ったより早かったな」

「……青キジ」

散々な目に合わせてくれた奴の声に、怠い体を起こして檻の外を見ればそこには案の定青キジが立っていた。

力が上手く入らない……この手錠、海楼石か。

「ロビンはどい？」

「起きて1番に言うことがソレか。ま、いいや……ニコ・ロビンなら今はCP9の下で拘束されている。ついでに言えば、今麦わらのルフィ……そして恐らくその一味全員がここに向かっている事だろう」

……一味全員が……って事は、サンジとウソップは上手く逃げ切れたんだね、良かった……。

「……は？」

「言っても分かんねエだろうが、ここは司法の塔……その中の牢屋だ」

「……司法の塔」

「まア、そんな事はどうだつていいじゃないの、俺も一応仕事でここに居るんだ……手短に済ませたい」

そう言ううと青キジは檻ごしに私の前まできて横になった。

……くそ、余裕ぶりやがって。

「まず1つ、お前の親の名は？」

「知らない」

「……即答じゃねエか、本当にか？」

「本当だよ……それより、質問に答えていけばどうなるの？解放してくれるの？」

「んな訳ねエだろ」

はあく、と怠そうにため息をつく青キジ。

……本当にどうしよう。このままだとナミさん達と会う事なく連行されちゃうじゃん。それにロビンを何としてでも助けないと……！

「……お前さん、もしかしてまだニコ・ロビンや自分がどうすればここから抜け出せるか考えてるか？」

「……」

「オイオイ……マジか。ハッキリ言わせてもらおうが、お前さんの思考はどうも平和が過ぎるんじゃないのか。それともその思考回路自体がお前の生まれに関係しているのか……」

平和が過ぎる、か……確かに、それはそうかもしれないけど……、私はただ、最後まで諦めたくないだけだ……！

「これだけは言っておくが、真面目に答えねエとお前の一味は殺していくぞ」

「……は、じゃあそれは、私が真面目に答えたなら仲間は見逃してくれるってこと？」  
「考えてもいいってだけだ」

…私の失態で捕まってるんだ。最悪、私一人の犠牲は仕方がない…。

だけど出来ればそれは避けたい。捕まったらハーレム女王なんて絶対なれない…！

…いや、もう捕まってるんだけど。

「それで、お前の親の名は？」

「それはさつき答えたでしょ、知らないって」

「…、なら育ての親は？お前が一人でそうやって生きていける様になるまでは誰に面倒を見て貰った？」

「そんなの居ない。私は生まれた時から一人だったし」

ピク、と青キジの眉が動いた。

奴はゆっくりと座り肘を足に立てて顎を触る。

「…悪魔の実はどこで食った？」

「生まれた島で。なんかあったから食べた」

「なら、本当に自分一人で生きてきたってのか、言葉はどこで覚えた」

…仲間の命がかかっている…ここは、もう正直に話した方が良いのかな…？

…だけど、何故か抵抗がある。…なんて、言ってる場合じゃ無いか。

「……この世界」に生まれる前の世界で」

今度こそ、青キジの顔が怪訝そうに歪む。

まるで私を狂人を見るかのように見てくるけれど、私は何も間違った事は言っていない。

「…囚人は次第に精神が壊れ出す者も少なくない。だがお前がそうなるのは些か早過ぎるんじゃない？」

「勝手に人を精神異常者みたいに言うのやめてくれない？嘘なんてついてないんだけど」

「だが、信じるに値する情報じゃねエ」

そんな事言われても…。

「親も前の世界には居たよ、こっちに來るときに記憶は大半が無くなったけど」

「…一応、詳細を聞いておこうか。何かしらのショックで生まれた時の記憶を失っている可能性もある」

バカにしてるなこいつ。

そもそもこの世界に転生してきました、とか言っても誰も信じないと思ったから私は今まで誰にも言わなかったのに。

「詳細って言われても…：…そうだね、前の世界で住んだ国の名は日本。そこで女子高生してました。覚えてないけどなんか死んで、この世界の無人島に転生してました。だからある程度の知恵はあるけどこの世界の一般常識には疎いです。以上」

「医者を呼ぶか」

「自分から聞いておいて酷くない!?…いつ…いつ…」

…っ、何か頭がズキつとしたけど…何だろう。

ウォーターセブンでもあつたっけ…あの時と違って変な声は聞こえないけどさ…。

「っ…いつ…。…言つとくけど、嘘じゃないからね、私は異世界の人間なの」

「医者を…」

「もういいってそれ!」

頭をがしがし掻く青キジにはあ…とため息をつく私。

そりや意味は分かんないだろうけど、真実なんだから仕方ないじゃん。

「捕まったすぐだ、檻の中で混乱してる可能性もある。少し頭を落ち着かせてからにするか」

「落ち着いてるんだけど」

「気持ちは焦ってるけどさ…。」

青キジはよっこらせ、と立ち上がって近くの椅子に座りアイマスクをして寝始めた。

…何とかしてこの海楼石の錠を外せたら今が好機なんだけど、能力者にとって海楼石は本当に毒だから…。…毒では無いか?体に悪くはないし…。

「…ふう」

とにかく、今は頭も心も落ち着かせよう。

いざって時に冷静に動かなきゃ話にならない。

…それにしても、前世かあ。

記憶があんまり無いからそんな意識した事なかったけど…よくよく考えれば私って  
ONE PIECEを知ってるんだよね。

じゃあ…何とか前世の記憶を掘り起こせば…ここを脱出する手がかりとか、青キジの  
弱点とか見つかるかも…。

私のはつきり覚えてる事と言えば、高校生だったって事と、ONE PIECEを見  
てたって事。

…あと、多分苗字が入洲。

「……うーん……」

思い出そうとしても記憶にモヤがかかっているみたいに思い出せない。

でも何とか、何とか思い出さないと…。

「……っ!!?い……っ!」

突然、私の頭を割れる様な痛みが襲う。

ウォーターセブンで起きたものや、さっきのとは訳が違う程強烈な痛みに座る事すら  
出来ずその場に倒れ込んだ。



「…んあー…？なんだ？どうした」

青キジがアイマスクを外して声をかけてくるがそれに返すだけの余裕がない。

痛い、痛い！なに…これ、何これ…!!痛いし、怖い…怖い…!!

「はア…はア…つ、う…つ…、あ」

そして、そのまま私は意識を手放した。

…水に濡れた床は、気付かず流した私の涙と混ざり溝へと流れていった――

\*\*\*

「…：…：…どういふ事だコリヤ」

頭をボリボリ掻きながら青キジが倒れたイリスを見て眩く。

その顔は恐怖で染まり、流した涙や鼻水で汚れ、さつきまで普通に会話していたとはとても思えなかつた。

「マジで医者を呼んだ方がいいか？」

ほつりと眩いた所で返ってくる返事がある訳もなく、海賊とはいえ気絶した女をいつまでも放置しておくのも、それは正義ではないだろう。

「…はア」

ため息を吐きつつも檻を開け、イリスを出して適当に顔を拭き、その辺の床に寝かせ  
る。

檻の中は水浸しだった訳だから、その辺の床でもまだマシだろうという判断だ。

「こいつア…本気で謎だな」

イリスを見ながらまたため息を吐く青キジは、結局自分は異世界人だと訳の分  
からない事しか言われなかった事に気付きつつも頭を搔き、イリスが目を覚ますまで寝る事  
にした。

「次起きたらもう正義の門通っちゃまうか」

正義の門とは、エニエスロビーにある巨大過ぎる門の事だ。

そもそもエニエスロビーという島自体が犯罪者を連行する為の司法の島であり、司法  
の島とは名ばかりで、本来ここに連れて来られた犯罪者はこの司法の塔を素通りして正  
義の門を通り『インペルダウン』という監獄に行くか『海軍本部』に行くしかないのだ。  
…つまり、正義の門を潜ってしまえば…その時がイリス、そしてロビンの最後である。

\*\*\*

「……ん」

ぱち、と私は目を覚ます。

…真つ暗…という事は…。

『…自分からここに来るなんて、珍しい』

やっぱり…。

前に見た光の球が、私の目の前でふわふわと浮かんでいる。

暗闇で光を見てるのに眩しいと感じないのは何故だろう。

「自分から来た覚えは無いんだけど…」

『あなたは、過去を望んだでしょ』

「過去を？」

…確かに、今までよりずっと知識を欲したけど…。

『過去は、誰にでもある事。だけどあなたはそれを拒否した』

ピカッと一瞬強く球が眩く光り、流石に眩しくなって目を瞑る。そして次に目を開けた時、そこには暗闇とは似ても似つかない…学校の教室に私は居た。

「……ええ？」

『これは、あなたが忘れた過去。ここは、あなたの記憶の世界』

「記憶……」

いたって平凡な教室には、休み時間なのか1つの机に固まって話をしたり、1人で読書をしたり、黒板に絵を描いて遊んだり……それぞれが思い思いの行動でその時間を充実したものと変えていた。

私や光の球を見えてる人は、記憶の世界とやらだから誰もない様だ。

「あ」

そしてその中の1人に、純白に輝く綺麗な長髪、まるで日本人とは思えない青色の瞳、モデルのような高身長……あの時見た入州いりすがそこに居たのだった……。

—————

「相変わらず王華の髪と目って綺麗だよね」

「ほんと、同じ女として羨ましいわ」

「いやー、そんなに褒められても何も出ないよ?」

私、入州いりす 王華おうか』は、友達の美咲みさき、叶かなえ、沙彩さあやと共に休み時間を使っていつもの様に私の席に集まり話に花を咲かせていた。

私にとってはみんな以上に幸福なこの時間に、いつもの事なのに胸が弾む。

「ねえ王華ー、次の小テストがマジでヤバいから勉強教えてよー」

私達の中でも小柄な、だけど胸は一番大きく、短めのポニーテールがびよこびよこ可愛い美咲がそう言った。

「はっはっは、それを私に尋ねるとは、さては全問不正解がお望みなかな？」

「しまった、見た目のわりにバカだったのを忘れてた」

「ひ、酷いよ美咲ー！」

ぼこぼこ美咲を殴った私は、ある程度のとこで満足して拳を引っ込めた。

勿論相手にダメージが響くようにはしていないから、ほんのじゃれあいみたいなものだ。…私にとってはただのじゃれあいとは意味合いが違ってくるけど。

「それに美咲、私達もう受験生ですよ？入州はともかく、あなたは勉強をすればそこそこのトコを受験出来ますからK大にしたのでは無かったですか？」

「ちよつと待って、今もしかして私バカにされた？私も一応K大なんだけど!？」

私と同じ様に長い髪を、ツインで三つ編みおさげにしている叶が美咲を咎める。

平均的な150センチ台だけど、真面目な委員長オーラが眩しい美少女だ。胸は高い。…何で叶私を睨むの？心読めるの!？」

「いやー、でも王華もそろそろ本腰入れて頑張らないとまずいんじゃない？みんなでK

大に行くって決めたんだから、あんただけ落ちちやったら困るわ。勉強、教えてあげよっか？」

「うう…：お願ひします師匠…：」

私達の中でも1番の姉御肌な沙彩が私のほつぺたを突つく。

美咲程では無いにしろ大きな胸…：というか全体的にスタイルが良く、たまに寝癖か何かでぴよこ、と跳ねているミディアムヘアがギャップで可愛いのだ。

成績も私達の中では叶に次いで2番目に良い。

みんなとは1年の時に仲良くなつて、それから今まで特に衝突も無くやってきていた。

…：問題があるのは、私だけだったのだ。

「ごめん、ちよつとお花抜いてくる」

「せめて摘むって言つて」

「いでら」

ひらひら、と軽く手を振つて私は教室から出てトイレに向かう。

トイレに入った私は、個室に入る事なく洗面台の前に立つてはあ、とため息を吐いた。少しだけ火照る頬を手の平で撫で、少しだけ早まる鼓動を意識するかのように目を閉

じる。

「…はあ、みんな可愛すぎる…」

ぼつり、と呟いた言葉に自然と熱が籠る。

…私は、みんなとは感性が違う。みんながじゃれあうように抱きつき合うのも、時折見せる無防備な姿も…私にとっては毒なんだ。

だって私は、女の子が好きだから。

「私にもう少し勇気があれば…」

俯きがちに前髪を弄り、2回目のため息を吐く。

私は自分の気持ちを隠して生きてきた。

そういう人達にも寛容的になりつつある世の中とはいえ、自分がそうだとと言える人間が果たして何人居るのだろうか。

…だから私は誰にも、親にすら言つてなかった。いや、言えなかったという方が正しいか。

要は度胸が無いだけなんだけど…。

「受験も近付いてるんだし、あんまり考え込まない様にしないと…！」

なんて思った所で、これは私が物心ついた時からの課題なのだ。逆に考えないようにしようと思った方が考えてしまう…というよくある話だった。

私はもう一段と気合を入れ直して、教室へと戻ったのだった。

——それから2ヶ月後。

本格的に受験勉強で忙しくなり始め、みんなより劣っている私はそれはもう全力で過去問と睨めっこをしていた。

こうして忙しくなる前は、思い作りとして休日にみんなと遊んだり、家に泊まり合ったり、軽くプチ旅行をしたり：恐らく、今後生きていく上で忘れる事は無いって程には幸福な時間を過ごしていた自信がある。

“本当の私”を隠すのには骨が折れたけれど、楽しかったのは事実だから良しとしよう。

「…ん？」

ベッドに置いてあったスマホが軽く振動して通知を知らせる。

なんだろ：勉強してるかの監視LINE：!?!?…な訳ないか。ない、よね？

寝転がって見てみれば、画面には「次の休日は息抜きも兼ねて今話題の恋愛映画をみんなで観に行こう」という内容のLINEが映っており、それを見た私の鼓動がドキ、と



跳ねる。

それもその筈で、実はこの恋愛映画：女性同士の儂くも美しい恋愛を描いた、とかそんなキヤッチコピーにしている作品であり：つまるところ百合だったのだ。

あまり大衆受けするジャンルではないのだが、この作品は登場人物の心理描写を見事に表しており、何よりラストが泣けるとの事で有名になった。

「……みんなは、こーういの……平気なのかな」

ぼふ、と枕に顔を埋めながら呟く。

不安と期待がごちゃ混ぜになった声は今にも消え入りそうで、脳内でぐるぐるぐるぐる……思考が行ったり来たりを繰り返した。ぶっちゃけた話勉強よりも頭が回転してる気がする。

「……、よしー！」

勢いよくベッドの上で立ち上がって、ぐっと両手に握り拳を作って意気込む。

「映画観たら、みんなに私の事を打ち明けよう……！」

何のきっかけも無かった今までとは違うんだと言い聞かせるように、私の瞳に決意が宿る。

きつとこの映画を機に、“本当の私”だって受け入れてくれる筈だ。

ああでも、みんなに映画の内容が不評だったら言うのはやめようかな。それで打ち明

けてもただの自殺行為だよね。

ほら、よく言うやつ…関係が終わってしまいうくらいならこのままで良い、みたいな。  
…なんて、弱気すぎるかな？

だけど…もともと度胸がない私からすれば、それくらいの意気込みが丁度いいよね！  
前進はしてる…よ？きつと、多分！

## 86 『女好き、勇氣のその先は』

「は、早く来すぎちゃったかな」

いつも待ち合わせに使っている交差点近くに2時間も前からそわそわそわと落ち着かなく待っているのを、道行く人が物珍しげに見ては去っていく。

みんなを待っている私の顔はどこからどう見ても恋する乙女で、まるでデートの待ち合わせみたいだ。私にとってはそれくらいの意気込み……いやそれ以上の覚悟をして来ているんだけど。

服装もかなり気合を入れてきた。

いつもは面倒くさいから適当に済ましてるんだけど、今日の為に新調した程なのだ！綺麗だと自負している白髪に合うよう、白を基調としたニットにブラウンのロングスカーツで清楚感をバッチリ醸し出してきた。麦わら帽子があれば完璧だけど……この風景には合わないから断念……。

「王華……」

「あ……」

ペア、と顔を輝かせる。

おお、みんな可愛い!!良かったーオシャレしてきてて…浮くところだった。

「王華くるの早すぎだよー、まだ約束の15分前じゃん」

「とか言つて、あなたも先程そこで会ったんですし、同じくらい早いじゃないですか」

「それよりあんた達見なよ王華の服! 珍しくお洒落してるわ! 可愛いー!」

美咲、叶、沙彩の順に話す。

みんな楽しみにしてたんだ! …沙彩にはまた今度何か奢ろう。

という訳で全員集まったのですぐ映画館に向かった。と言つても場所はすぐそこだったから、楽しくお喋りしてたら直ぐに着いたけど。

「どうする? 上映時間まであと30分くらいあるけど」

「じゃ、私ポップコーン買ってくる」

「美咲、私はMでお願いね」

「私はSでお願いします。ドリンクは適当に」

「へーい」

美咲がポップコーンとドリンクを買ってくれている間に、残った私達は4人分の席を予約する。

あ、良かったー、丁度4人分真ん中の席が空いてるね。

そして私達は、美咲が帰ってくるまで適当な雑談で時間を潰した。

昔からそうだったんだけど、私にとってはこの雑談1つ気が抜けない。何気ない一言でポロリと漏らしてはいけない本音を漏らしそうになるからだ。それに今は例の映画前……こんなタイミングで自滅する訳にはいかないから、普段より一層気を張っておかねば！

そんな感じで張り詰めた（私だけ）会話もそこそこに、美咲が手にカゴを持って戻ってきたので、入場可能時刻になっている中へみんな揃って入り、指定した席へと座った。

「楽しみだね、映画」

「そうだねー。あんまり見ないジャンルだからちよつと新鮮かも」

「……そ、そうだね」

ちよつとそれには共感できそうに無いけど、楽しみなのは一緒だしいいか！

それにこの映画、普通に楽しみだ……！

……あ、照明が落ちて暗くなってきた。

「……………」

公開されてそれなりに日は経ってるのに、周りの席はまだ沢山埋まっている。私達4人の会話もぴたりと止み、お決まりの泥棒さんの映像が流れ終わって本編が始まった。

\*\*\*

「“おんこい”、すっごく良かったね!!」

「それ」

「感動しました」

映画を観終わり、近くの喫茶店でランチタイムを取っている時に美咲がそう言った。2人も叶の言葉に間髪入れず返している。

“おんこい”とは、今回みた映画：『女達の恋』の略称だ。

「楓…：私はきつと、生まれ変わってもあなたを愛すよ」

「きゃー！愛して！私を愛して！」

「それ、終盤の主人公のセリフですよね」

キャツキヤと盛り上がる3人に、否が応にも期待が高まる。

まさかここまで上手く行くとは…、恐るべし流行映画。

「王華は面白かった？」

「え？うん、予想よりずっと面白かったよ！」

「そうよねー…私、同性愛に対してだいぶ理解高まった気がする」

あははと軽く笑って、緊張で味が良く分からないサラダを口に運んでいく。

…これなら、みんなに打ち明けられそうだ。

でも、やっぱり1日置いた方がいいかな、いやいや、そんな事してたらまたいつもの隠す日々に戻るだけだし…。

…：…：そうだ、気合入れろ、私！だってこんなチャンスもう2度とないかもしれないんだから…！

映画ブーストで私の弱い心を奮い立たせるんだ。勇気を出せ！

「あ、あのー…」

「でも、私達の中の誰かが、私達の誰かを好きになつてるかもしれない…って考えたらちよつと困るよね」

「!!」

言葉は：：出なかった。

その言葉の意味を瞬時に理解することが：：幸いにも出来たからだ。

「反応に困りますね、身近にそういう人が居るって思った事もありませんし」

「でも私、男を好きになつた事ないけどね」

「あなたはそもそも好きな人出来たことある？聞いたことないんだけど」

確かに、と笑つて美咲に返す沙彩。

：：しまった、みんなの前で私を隠し続けた弊害が出ちゃつた：：。

みんなにとって私は、恋愛にはまだ興味が無い、という設定なのだ。実際は興味ありまくりだし、女の子が好き過ぎるんだけど：：今の流れでそれを打ち明けられる程私の心臓は頑丈にコーティングされてはいない。

「や、やつぱり、普通の恋愛が一番だよね！流行映画とは言つてもさ、その：：：、：：：」  
 ……結局、こうして私は逃げるんだ。理解ができない「普通」を着飾つて、自分を隠す為に仮面を被る：：。

「私さ：：」



「……そんなの、もう、イヤだ……！」

「ん？」

「どしたの王華？」

いつまでも隠し続けて、思ってもない恋愛観を知った風に口にして、笑った顔の仮面を張り付けて、心でずっと泣く日々は……もう……！！

「さっきの映画さ、なんていうか、女の子が女の子を好き、とか、そんな感じだったと思うんだけど……！」

「そんな感じというか、まんまそうだけど……どうかした？ 歯切れ悪いじゃない」

「わ、私もさ……そうなんだよ、ね」

「……い、言った……。」

「言ってやった……！！」

「ずっと隠してたけど……今、私は3人にだけ……言えたんだ……！！」

「そうって、何が？」

「え？まさか王華って……その」

「っ……うん……！」

ぎゅっと目を瞑ってみんなの答えを待つ。

これ以上、私から言葉をつげる程の勇氣は出ない。…私が打ち明けた事で、困らせるかもしれない。それはさつき叶も言っていた事なんだから。

「……私……」

「……まあでも、王華は王華でしょ？」

「え？」

ゆつくりと顔を上げると、困ったように眉を下げながらも、だけど笑って私を見る人が居た。

「反応にはやはり困りましたけどね。とりあえず今度からは王華の前で着替えるのだけはやめようと思いました」

「はは、もともと叶は胸無いんだから、見られて減る物なんていたいいたいつ！ごめん叶！私が悪かったからっ！」

「……みんな」

ぼろり、と涙が一筋流れる。それを皮切りに、まるでダムが決壊したかの如くポロポロと溢れ出て止まない。

「ちよ、王華……：……そうね、辛かったんだね」

「あのー、とりあえず外出ない？流石に周りの目が痛いというか……」

「……っ、うん、みんな、ありがとう……っ」

そうして、私達は会計を済まして店の外へ出た。

お金を払う時も終始泣きっぱなしだった私を見てみんなは呆れてるし、店員はドン引きしてるし……だけど私は、それ以上に幸せな気持ちで包まれていたんだ。

…私が出した勇氣は、確実に実ったよ……!

「じゃ、今日とはどことんまで遊ばない? 王華の告白記念に!」

外に出てすぐ、美咲が私の腕を取ってそう笑った。2人も間髪入れずに承諾の返事をし、私には聞かずそのまま引つ張られる。

「わ、ちよつと、美咲……!」

「何? 今まで親友にそんな大事なコト隠してたんだから、少しは付き合ってくれんでしょ?」

「つ……うん……! 夜のホテルまで付き合うよ!」

「付き合い過ぎです!……でも良かった、王華……今までで見た中で一番楽しそうな笑顔ですよ」

そ、そうかな……でも、それはみんなのお陰だよ……! 受け入れて欲しいとは思っていたけど、まさかここまでですんなりと全てを肯定して貰えるなんて思ってたから……笑顔が止まらないの!

「じゃあ行くかうか、ラブホ」

「沙彩も何を言ってるんですか!？」

「あはは!もう、みんなにそこまで頼んだりしないよ!…まだ」

「まだ!？」

…こんな冗談を言える様になるなんて、本当に今日は勇気を出して良かった。また出てきた涙をみんなに気付かれない様にそっと拭い、私達は今日を楽しく過ごす為に歩みを進めた。

その後、適当にシヨツピングを楽しんだり、カラオケに行ったり…している事はいつもと変わらないのに、私は堪らなく楽しくて仕方が無かった。

その日はみんなと別れるのすら惜しくて、また少し涙が出ちゃった程だ。泣いてばかりで情けないけど…

\*\*\*

王華と別れた後の3人は、普段よりも晴れやかな気持ちで帰路についていた。

勿論今はイリスの記憶外の出来事だ。これは入州<sup>イリス</sup>が知らない…確認のしようのない過去<sup>過去</sup>だった。

「それにしても驚いたわ、あの王華がねー」

「あれ程完璧に整った顔立ち……そもそも全体的に綺麗な容姿なのに恋人が出来ないのはおかしいと思っていましたか……」

「もしかして、私達の誰かを狙っていたりして?」

「王華なら良いかなってくらい可愛いけどねあのコ。流石に本当にそうなら少し考えはするけど……」

こうして3人で帰るのはいつもの事だ。別に王華を除け者にしてる訳ではなく、王華は徒歩なのに対して3人は電車を利用しているから同じになるのである。

ただ今回いつもと違うのは、その話題が王華の話だけだという事だろう。

「……………」

「どうしたの、美咲」

「いや……なんか、見られてる気がする」

視線を感じた美咲が振り返っても、そこは今まで歩いてきた道が続いているだけだった。

そこまで複雑な道でもないし、誰かが隠れる場所なんてあの電柱くらいなものだ。

まさかそんな所に隠れる人が居るわけないか、と美咲は気のせいだったみたい、と言ってまた歩き出した。

「…驚いた、まさか、入州さんがねえ…」

まさか、の電柱に隠れていた王華達の同級生の1人がニヤリ、と下衆な笑みを浮かべる。

さっきの会話は本当にたまたま聞こえただけだったのだが…幸運だった。まさかこんな場所であの女の弱みを…人に知られたくはないだろう情報を盗み聞けるなんて思つても無かつたからだ。

「前からウザい女だと思つてたし…」

間違いなく、今まで見てきた女の中で1番綺麗な顔立ちをしているという事実も苛つく要素ではあつたが、自分が好意を抱いた男があの子に惚れていたのが何より許せない。

要するに、ただの嫉妬と逆恨み。彼女は其中で少し…狂つていた。

「そうだ…良い事思いついちゃつた…♪」

狂気の笑みを張り付けて、女は鼻歌混じりで軽やかに歩く。

自分が行う事で何がどうなるのかなど女の頭には無い。ただ欲しているのは、憎い恋敵への復讐…と呼ぶのも憚られる、ただの八つ当たり。

歪んだ恋に狂つた女の歌は、王華への憎悪で旋律を彩らせて、不気味に…だけど妖艶

に音を響かせていた。

\*\*\*

今日は朝から機嫌が良かった。何故なら、昨日私は3人に秘密を打ち明けて…そして受け入れて貰ったからだ。

「ふん、ふん♪」

学校へと到着し、3年B組の教室へと辿り着いた私はウキウキ気分でガラ、と扉を開けた。

なんにも隠す必要が無くなって…今日から今までよりずっと楽しい毎日が送れる…その事実だけでどうしても頬が緩んでしまう。

「……？」

そう思っていたのだけど、私が扉を開けた瞬間、教室に居た同級生のみんなが私を見てきた。

…何？私遅れた？…いや、まだ来てない人もちらほら居るよね、美咲達もまだっぽいし。

「…お、おはよう」

…返事がない。何だろう…凄く、イヤな予感が…。

私を見てクスクスと笑って近くの友達とコソコソ話してる人達も居れば、私と目が合うなり慌てて逸らしたり、あからさまに嫌悪感丸出しで見てる人達も居る。全員が全員そうではないが…。

「なんなの……。……え」

かなり不快な気持ちになりながらも、自分の席へと歩いて鞆を机に置こうとした時…私を目を疑った。

ありふれた、陳腐な行為の“ソレ”を見て…私の体の至る所から嫌な汗がじんわりと出てくる。

机の上には、それはもう無数に私が同性愛者だと言う事に対する悪口で埋め尽くされていたのだ。



## 87 『女好き、光閉ざす世界』

「は……」

何、この内容…「キモい」「死ぬ」「男女」「調子乗んな」……。

似たような罵倒がぐちゃぐちゃに敷き詰められていて、鼓動が否応にも速くなる。

…何で、私がそうだって…。知ってるのはだって、3人だけで…じゃあ、美咲達がいかに…?

…あり得ない。絶対…みんなはこう言う事をしない。だけど筆跡はぐちゃぐちゃだ、1人だけの仕事とも思えない…。

「おはー」

「…?何か、妙に静かですね」

静寂を壊すように、教室に美咲達3人が入ってきた。

3人は中の雰囲気にも首を傾げて、1人突っ立っている私の元へ歩いてくる。

「どうしたのですか?そんな所で立ったまま………!?!?!」

「これ、は…!?!」

「王華…!ちよつと、これ書いたの誰?!?!」

私の机を見て3人は目を見開き、バン！と机を手のひらで叩いた沙彩が叫ぶ。

当然、その問いに答える人など誰も居なかった。

「王華、大丈夫だから。こんなの気にしないで！」

「ね、ねえ…それに書いてる事って、その、本当なの？」

「そんな事、今どうだっていいじゃない!!誰か見てないの!?!これを書いた人！」

「し、知らない…」

周りに聞いた美咲が、答えに舌打ちしてハンカチを取り出して机を強く擦る。ただ、水性じゃないその字が消える事はない。

美咲は諦めずに消しゴムと油性ペンを取り出して、文字の上を油性で塗り潰してから消しゴムで擦る。

確かに文字は消えていくけど、それでみんなの顔が晴れる事はなかった。

「…そんな必死になって消して…事実を認めてるようなモノじゃない。…そっか、だからあなた、着替えの時更衣室で妙に周りを見ていたのね…!?!…キモ…!」

「…!そんな事してない!私は、出来るだけ見ないように…」

「どうして出来るだけ見ないようにする必要があるの?自分で認めてるじゃない!今まで本性を隠して、私達の体を立場を利用して見ていたんでしょ!?!そんなの、覗きと変わらないわ!」

「…!!」

この人は…確か、安城あんじょうさんだったか。

私を指差して大声で怒鳴る姿は、心無しか周りに同意を求めているように見えた。

「安城さん、黙って聞いていれば好き放題言ってくれますね。そうやって1人を糾弾するような言い方は——」

「あ、あなた達も入州さんと同じってだけなんじゃないの!?! 体を盗み見られた人の気持ちにもなってくれない!?!」

「そうよー男に見られるのと何も変わらないんじゃないの!?!」

安城さんに続いて他の人も同意するかのようには非難が飛ぶ。

そうなってしまうては、もう…手遅れだった。協調とは怖いモノで、人数が多い方が正しくなるのだ。

中には戸惑っている人も居るけど、大半の同級生が私達に対して様々な声で非難する様を見て口を出さずに縮こまるだけ。そして、その場ではそれが正しい在り方なんだ。

「何なのコイツら…今まで3年も同じクラスで学んできた事が恥ずかしいわ…!! 王華、行こー!」

私達4人は教室を飛び出して、走って学校から出る。

職員室に駆け込むのは、みんなが気遣ってやめてくれた。先生へ説明するには、どう

しても私の事情を話さなければならなかったからだ。

「はあ……はあ……！」

「逃げて、来ちゃったけど……はあ……つ、明日から、どうする……？」

「……明日には、落ち着いていると思いたいですね。……あ、大丈夫ですよ、仮に周りは何て思っても……私達は王華の味方ですから」

「そうよ……つ、私達はあんたが、優しく可愛いつて事くらい知ってるからね」

「うん……ごめんね、私、アレを見た時最初みんなを疑っちゃって……」

私の言葉に3人は首を振って微笑んでくれた。だけど3人には気になる事が1つ……自分達は誰かに口を滑らせてなど居ないとハズなのだ。そもそも昨日の今日だ、何かがおかしい……と。

「私達が1番疑わしいのに、信じてくれてありがとう……！」

「……今日は昨日の続きよ……こうなったらヤケね、遊び尽くしてやりましょ!!そしたら気も紛れるでしょ?」

「みんな……うん、私の方こそ、本当にありがとう……!!」

みんなが私を見て微笑んでくれるのを見て、私も笑って返した。

例え全校生徒に嫌われても……3人が味方なら乗り越えられる。そう、思った。

その日以降は表立って私達を糾弾する事は無くなっただけど、私の話はもう学校全体に広がっていた。

そしてそれでもずっと私の傍にいる3人も同類という扱いを受け、こつそりと陰湿なイジメを受ける毎日が続いていた。

ある日はトイレから帰ってきた美咲がびしょ濡れになっていたり、ある日は叶のノートが破り裂かれていたり、またある日は沙彩の机に花瓶が置かれていたり…そして私も、同じような事をされ続ける毎日だった。

ただ、そんなイジメがあろうともみんなが居るから私達は耐える事が出来ていた。特に沙彩なんか、持ち前の姉御気質で常に私達を励まし続けてくれていたんだ。

—————そんな沙彩が死んだと聞かされたのは、あの日から1ヶ月経った頃だった。

死因は、転落死。自殺でも事故でもない、間違いなく…行き過ぎたイジメによる立派な他殺だった。

学校の階段から突き落とされた沙彩は、当たりどころが悪く…そのまま息を引き取っ

てしまった。目撃者が居ないから推測でしかないけれど、今までの状況からして他殺に  
違いないのに…。

足を滑らせたただけだと言い張る学校側には、当然3人で抗議を重ねた。だけど幾ら  
言ったところで聞く耳は持つてくれなかった。沙彩の死より、自分達の保身に精一杯な  
んだ…。

…その日から安城さんの様子が明らかにおかしいけれど、今はそんな事に構ってい  
れる精神的余裕はない。

…それから、更に1ヶ月後——今度は叶が死んだ。原因は…：自殺だった。学校の  
3階から飛び降りて…そのまま…。

その日は休日で、何故叶がそこに居たのかも分からないけれど…。  
沙彩が居なくなつて、私達も精神的ショックから徐々に一緒に居る事が少なくなつて  
きていた。それでもイジメは今も続いていて、叶は様々な方面から来る悪意とストレス  
に耐えられなかつたんだと思う。

叶が死んでしまった日の前日に、何やら安城さんと話していたという目撃証言があつ  
たそうだけど…それも今となつてはどうでもいい話。

この事を聞いた時、私も美咲も泣き崩れてしまった…。当然だ、私達が、私がつと

叶の心を理解してあげられていたなら…こんな事にはなっていない筈だったのだ。

いや、そもそも…私が、3人に…打ち明けなければ…。

「……………」

自室の勉強机で、数学のノートを出して問題と向かい合う。

……私は、何？自分の為にみんなに「本当の私」を打ち明けて…そして2人…親友を殺した私は、一体何で…将来を見据えた勉強なんてしてるの？

「……………」

ポロ…と涙が零れる。

前は、こうして勉強机の上にスマホを置いていれば沢山の通知が届いていたのに…今は、ゼロ。

そして、ゼロにしたのは…私。

勉強なんてとてもする気は起きなかった。パターン、とノートを閉じて机に突っ伏す。

「……………」

次々に溢れ出てくる涙は、あの日、みんなに打ち明けてしまった事に対する後悔で

濁っていた。

一体私は何なんだろう。沙彩は何で死んだ？イジメ…？違う、私が殺した。

叶は何で死んだ？ストレス…？違う…！私が殺した…！！

「…っ…私は…！」

勇気なんかじゃ、なかった…。あの日、私がみんなに話した行為は…無謀だったんだ。その先を何も考えていなかった。ただ、みんなに知って欲しい…そんな事しか、考えていなかったんだ…！！

「…ちよつと、外歩いてこようかな」

思考がどんどん危ない方向へと進んでいくので、1度風にでも当たろうと外に出る。

もう夜も遅いのにと親には心配されたが、そんなに遠くには行かないと言って出てきた。

「…あ」

「あ」

玄関から出たすぐの所に美咲が立っていた。どうやら私の家のインターフォンをpushそうかどうか迷っていたみたいだ。

「…一緒に歩く？ちよつと…頭冷やしたくて」

「うん…私も、王華と話がしたくてね」



そう言つて傍げに笑う美咲を見て、私はこの娘の可愛い本当の笑顔まで奪つたのか：と瞳を伏せた後勢いよく首を振つて無理やり思考を切り替えた。

せつかく頭を冷やしに外に出たんだ。変な考えは捨てなければ：死んでしまった沙彩や叶に怒られてしまう。：2人は私が死ぬ事なんて望んでいないって断言できる。私が今すべきなのは：そう、美咲を1人にしない事だ。

そのまま2人で目的地なども決めず歩き出し、長い間の静寂の後：美咲が口を開いた。

「王華…その、あんまり氣負わないでね。…きつと王華の事だから、私のせいだ、とか思つてるかもしれないけど」

「…凄い、正解だよ。…だけどそれに関しては譲る氣はないよ、私が何も行動を起こさなければ、2人が死ぬ事は無かつた」

「……王華」

軽く俯いた美咲が、ぎゅつと私の手を握る。

「…王華まで死んじやつたら…私…っ」

「…、…私は、死なないよ。…死ねない…美咲を1人にしたら、それこそ2人に殺されるよ」

軽く美咲に微笑むと、彼女は小さく嗚咽を漏らし出した。…かなり、参つてたんだろ

うな。当然だ…この短い間に2人も親友が亡くなったんだから。

私だけが辛い訳じゃ無いと再確認して、一層美咲を1人には出来ないと思った。

そのまま、話せなかった期間を埋めるかの様に様々な話題を投げ合い、受け止めていく間に交差点近くへとやってきていた様だ。

ここはよく待ち合わせに使っているあの場所で、美咲もそれに気付いたのか、私達が集まっていた場所を目を細めて懐かしむ様に見ていた。

「そんなに前じゃないのに、何だかみんなまで遊んでたのも懐かしいね」

「そうだね…。今度は、2人で遊びにこよっか」

私の誘いには答えず、美咲はそこから目を離して私を見る。

「…王華、私、良いこと思いついた」

「ん？」

「沙彩と叶の復讐」

私の目を見て、真剣な顔でそういう美咲から目が離せなかった。

復讐…って、それって…どういう…。

「王華は女の子が好きで、それを受け入れられない人達が沙彩と叶を殺した。…だったら、そんな人達すらも纏めて王華の女にしてしまえばいいんだよ」

「え？」

「ううん、それだけじゃない…世界中の可愛い、あなた好みの女の子全員をお嫁さんにする事が出来たなら…王華をバカにする人も居なくなつて、王華が正しいって事になる。そうなれば、沙彩と叶の敵討ちにもなる」

「……………」。

言葉が、出なかった。

同性愛の壁は高いのに、その言い方だとまるでハーレムを作れと言つてゐるみたい…というかまんまそうだったからだ。

「……………」は、はは、無理だよ…だつて私が「そう」だったから、沙彩も叶も……つ、死んじやつたのに…！」

「…そんな事、言わないであげて」

斜め下に視線を逃す私の頬に手を添えて、美咲は何かを決意したかの様に揺らぎのない瞳で私を見据えた。私は、その瞳を見る事が出来ない。…新しい希望が、私には怖くて…！」

「逃げないであげて、王華。叶も沙彩も、王華から“本当の王華”を奪いたかつたんじゃない…好きな物に正直になつて!!何にも遠慮する事なんか無いでしょ!だつて王華は王華…ただ女の子が好きだけじゃないの!!」

「っ……でも、私……もう怖いよ……私の気持ちがいみんなを巻き込んで……そして殺しちゃうのなら……私は自分を、隠していき……っん!!」

……あ、え、……?今、何が起きてるの……?

私の唇に、何が当たって……え、美咲の顔、どうしてこんなに近く……。

「は……、……だったら、あなたの嫁第1号に私になるわよ……!!そんなに苦しいのなら、私があなたの隣に居てあげる!!こんな風に、き、キスだって、その先も!幾らでもさせてあげる!!」

顔を赤く染めた美咲がそう言った事で、私はようやく何が起きたのかを理解した。今のは……美咲の……!

「だから……あなたはあなたらしく、堂々と生きてよ!!私は死なない……あなたも死なせない!王華の可愛い所を知ったら、みんなもあなたを放っておかない!!」

「み、さき……」

「それでもまだ分からないなら、この場でおっ始めてやる!服脱げえ!!」

「ちよ、ちよつと待つ……!み、美咲!本当にちよつと……!!」

冗談ではなく、本当に脱がせようとしている美咲に焦る私は、何とかその手を止めながら美咲の言葉を頭に浮かべる。

……それは、どう考えても現実的じゃないどころか不可能に近い考え……。希望も何も

無い、ただ真つ暗なだけの未来に灯された一筋の光ってだけ……  
だけど、

それでも、私の口角は上がっていた。

「……そうだよ、私はただ、女の子が好きなだけ」

「……うん」

ハツとして私の服にかけた手を止める美咲に……もう大丈夫だよとでも言うかのように笑いかけた。

……これがただの希望で終わっても良い。それが……美咲と生きていく理由になるのだから。

「みんな墮として……嫁にすれば、私達をバカに出来る人も居なくなる……！」

「うん……っ！」

そしてそれが、2人の敵討ちにもなるのなら……！私は、ハーレムを目指したい……！いや、目指す!!

……勿論、今の私は正常な思考回路などしていない。新しい目標が出来たという事実に逃げただけなのかもしれない。……それでも、そんな逃げ道が後ろではなく前へと進んでいるのなら、私は美咲と一緒に歩いていけるだろう。

「ありがとう美咲、私……頑張るから」

ん、と微笑んで美咲は私に体を預けて来た。

…心臓の音、聞こえちゃうかな。まあ…いつか。それにしても美咲が私の嫁になりた  
いって…言っちゃ何だけど予想外だね。

「……だけどその、嫁って……実際どうすればいいの？日本って認められてたっけ？それ  
に美咲って……同性愛に関心あった？」

「そんなの、正式な書類なんて必要ないでしょ。ただお互いに好き合ってて、ハーレムを  
目指す王華が嫁だと認めたら嫁！これでいいと思うけど。2つ目の質問には、王華だか  
ら関心がある、かな」

そんな簡単で良いのかな…。

「それにさつきは目指すって言っちゃった……というか、勿論今も目指す気では居るんだ  
けどね、ハーレムって酷くない？だって私は美咲に、その他大勢の1人になってって言  
うって事じゃ…」

「じゃあ、1人を愛し続ける事だけが愛なの？」

「それは…」

「確かにそれも愛だけど、沢山の人の気持ちに纏めて受け止めて、その上で気持ちを返す  
事が出来るなら……それだって愛だと思わない？あ、勿論、浮気みたいな後ろめたいのは  
また別の意味だからね」

「……愛」

……そんな事、考えた事も無かったな。

美咲の言う事はハードルが高く、下手をしなくても雲を掴む様な話だ。だけど……。

「……うん、今度こそ本当に決めた。私は……ハーレムを築き上げてみせる！」

「ハーレムってだけじゃ、なんか味気ないからハーレム女王なんてどう？」

「いいね、海賊王みたいで！」

そう言つて2人で笑い合つて、先が見えなかつた真つ暗な未来に光を見つけた。

私達が見つけた光は細く、並大抵の努力で掴めるような未来じゃないけれど……必ずやり遂げてみせる。

そして……私達をバカにした人達を全員見返してやれば……それが沙彩と叶の敵討ちに……。

プーーツ!!!

「……………」

耳をつん裂くような、けたたましいクラクションの音が脳を揺さぶる。

反射的にバツと音のする方を見て：私の顔は真っ青に染まった。

私の眼前一面に広がるトラックの前面が、ゆっくりとスローモーションで近付いてきているのだ。

それは運転ミスなのかは分からないけれど：とにかく歩道に乗り上げて私達に迫っているのは間違い無いし、このままでは当たってしまう！美咲を助けー、

ドンツ!!!

「っ……あ」

…人間ってこんなに吹っ飛ぶのか、なんて呑気な事を考えながら宙を舞う。

…ああ、落ちたら死ぬな、これは死ぬ。

同じように飛ばされた美咲を見れば、その顔は見えなかったけれど涙が舞っているのが分かった。

……死ぬ？

……、死ぬ？

………ふぎ、けんな。

ふぎけんな!! さっき決意したばっかじゃんか！ やってやるぞって、見返してやるって



…!!

こんなの、まるで運命みたいな…私は幸せになっちゃいけないっていうの…?! こんなのって無いよ…!!

「……………?」

聞きたくもない、不快な音を立てて私達は地面に叩きつけられた。

美咲は……………は、はは……………美咲、人ってそんな首曲がないよ……………! 手品じゃあるまいし

…!

「……………は、……………あ……………つ、ぐ……………そ……………!!」

震える手で、最後の気力を振り絞って美咲の手の上に自分の手を重ねる。

…結局、あなたの決意に応えてあげられ無かった。見せてくれた希望は、呆気なく散った。

私が、全てを打ち明けた事で……………みんな、死んじやった。みんな、殺しちやった……………

!

「……………つ」

涙が止まらない……………無力な自分に。理不尽な仕打ちに。死んだ親友達に。どうしようもなく私を嫌いなんだろう……………この世界に。

……………どうして私は、私なんだろう。もつと普通に生まれたかった。もつと普通に恋愛し

たかった。だってそうすれば…もつと、もつともつと、美咲達と一緒に居られた筈なんだ。

…私が誰かを好きになる事で、その人を殺してしまうのなら…私はもう、誰も愛さない。愛したく、ない。

…もし、生まれ変わるとするならば、私が世界に気付かれない様に姿形を別人にしてほしいな。…あ、だけど私なんかより美咲と、叶と、沙彩を優先して欲しい…。

…でも、今のまま生まれ変わっても死にたくなるだけか。…記憶を失えば、大丈夫かもしれないね…。フフ、そうなったら別人と変わりないか…。そうなれば、夢は次の私に託すとしようかな…。なんて。だって私は、もう誰かを愛するのが怖いから…。

ずっと私の味方であり続けてくれた3人に、私はついぞ、何も返してあげられなかった。生まれ変わるなんて信じちゃいない…。だけど、願わずにはいられない…！

無謀な私には…過ぎた…望みかも知れないけど…。

——ああ……意識が…遠く……。

「……い、め……、————」

人生の終わりは、呆気なく訪れた。

親友を死に追いやった私が死ぬのは当然……だけどそれに美咲も巻き込んで……。彼女が見せてくれた“希望”が眩しい……。手を伸ばしたって、もう届かない……。

『入州<sup>わ</sup> 王華<sup>た</sup>』の人生は、そこで終わったのだった。

## 88 『女好き、取引と別れ。決意の2人』

「……ッ!!!?」

ガバツと勢いよく上半身を起こして、胃の底から湧き出る衝動を抑える為に口を塞ぐも意味はなく、結局床にびちゃびちゃと夥しい程の量を嘔吐する。

「はあ……はあ……っ……あ、あああああ!!!」

床に額を何度もぶつけて、痛み<sup>!</sup>に逃げる事で狂いそうになる心を何とか持ち堪えた。

視界が歪み、心が悲鳴をあげる……。あり得ない程の心拍数に、全身から吹き出る嫌な汗。

みんな……みんな……! ああ……私、忘れてたんだ……みんなを、私の、責任を……!!  
「かな、え……さあや……み、さき……!!ぐ……ううう!!」

私は、みんなを忘れて自分だけ幸せになつてたんだ!!! 自分の世界から逃げて、こんな所にまでやってきて、美咲との約束を良い様に捉えて自分だけのうのと!!

だと言うのに結局、今度はナミさん達をも危険に巻き込んで……! 世界は、私を見逃してくれてないなかつたんだ……っ。姿形を別人に変えようとも、住む世界が変わろうとも……私を見つけて、どこまででも執拗に絶望を与えてくる……!!

今回の青キジの件が全てを物語っている…！

原作ならここまで絡んでこない青キジが、「私」という異物が混入した事で表立って動き始めた。

…今のみんなに、青キジを倒せるだけの力なんてない…！また、私は…大切な人の命を…！！

今までだってそうだ。アーンだって、クロコダイルだってエネルギーだって…今回のルツチだって…私なんて必要なかった。

ただ、それを私が利用して、恩を押しつけて…。麦わらの一味だけで十分な戦いを私が横から掻っ攫って！！

結局私は、前世でもこっちでも、イレギュラー異常者なんだ…。

…私が、みんなを危険に晒したんだ…！！

「急に起きたと思えば、一体どうした？床が汚れちゃったじゃねエか」

「青キジ…」

…はは、そりゃ、この人に敵うわけないよ。

記憶を取り戻した今となっては、青キジから逃げ出すっていうのがどれ程困難か…よく分かる。

“大将”という肩書きの大きさ、それから実際のこの人の強さも…私は全てを思い出

したのでから。

私が無謀だったって事も分かった。そしてこれから先の「死」も…逃れる気は無い。全てを思い出して、美咲達を思い出して…私はそれでも大丈夫だと言える程前向きな人間ではない。

……………だけど、

「…青キジ」

「なんだ」

だからと言って…!!

「…青キジ、私と…取引をしよう」

「あん？起きて早々何言ってるの、そりや無理だ」

私が…ここで引く訳には行かない…!!

…誓ったでしょ、私。

…どんな手を使っても、みんなは私が守ると。

もう…私の身勝手に巻き込まれて、そして死んでいく大切な人を見るのは…嫌だから。

「無理じゃない。私から出す条件は…私以外の一味に手を出さない事」

「…はア、俺がそれを飲むメリツトがあるなら話は別だが、お前にそれ程のモンが提示出来るとは…」

「いや、今の私には…これとない取引材料がある。」

口元を拭つて、真つ直ぐに青キジを見据えた。

私の瞳から何かを感じ取ったか、はたまたただの気まぐれか…青キジは口を噤んで私の言葉を待つ。

「私は、この世界の未来が分かる」

「…ああ、もういいや、話すだけ無駄……」

「例えば、青キジ、あなたが海軍に対して…いや、大将『赤犬』…サカズキに不信感を抱いている事も知ってる。今は分からないかも知れないけど、それが原因でこの先…大きな事件が起こるよ」

「……!!」

私の世界で描写された事しか分からないとは言え、逆をいえば描写されている情報は鮮明に分かる。

青キジは目を見開いて私をジツと見つめ、数秒間お互い視線を逸らさずに睨み合っていた。

「……なるほど、そりゃ、戯言だと一蹴するには早計か。俺は確かに…現海軍の在り方、

それから同じ立場のあのバカに良いイメージは抱いちやいない。それにこの事を誰かに話した覚えもねエ……」

やがて、ため息をついて場の雰囲気のリセットした青キジが降参だとも言うように手を上げて首を振った。

「まだだ、もう一つ……青キジを信用させる情報を出して……完璧に信じさせてやる。」

取引の土台に立つ為には、まず信用させなければ話にならないんだから。

「未来だけじゃないよ、過去だつて分かる。……そうだね……オハラ……ロビンの故郷がバスターコールで地図から消える時……あなたはそこに居たね」

「……ニコ・ロビンから聞いたか？」

「まさか、列車で私とロビンのやり取りを聞かなかつたの？ そんな事話してるように見えた？」

更に付け加えるように、私は続け様に情報を投げ続ける。

「何がなんでもこっちの要求は飲んでもらう。」

私は、確かにこの世界の異物かもしれない。

本来麦わらの一味に存在し得ない……いや、この世界にすら存在し得ない存在で……その上、こうして世界の迫る道そのものを変えた。

それは勿論、私が居る事で起きた。本来なら有り得ない。青キジとの邂逅。



…私のせいでこいつを呼んでしまったのだとしたら、私は…私を犠牲にしてもみんなを助ける…!!

「ハグワール・D・サウロ。彼の事もほんの少しなら知っているよ。自分を犠牲にしてロビンを助けた…あなたの親友」

「!!…よく知ってんじゃないの…ほんじゃあついでに未来の事も喋つとくか?」

「バカ言わないで、ここから取引だよ。…私を連行して、檻の中で拷問した果てに未来の情報を吐かせて…そして殺したつて構わないから、だからみんなには手を出さないで」

今ならまだ間に合うんだ…!もう、前世のような…私の無謀な行動一つでみんなを危険に巻き込みたくない…、死なせたたくない…!!

みんなの夢を…これから迎える未来を潰すのは、もう…沢山だ!

「なかなか良い条件だ。だが、未来が見えるというなら何故お前は俺に捕まってる?海列車にニコ・ロビンが乗せられる前に…いや、政府がニコ・ロビンに接触する事すら防げた筈じゃねエのか」

…やっぱり、そこを突いてくるか。ここは適当にそれっぽいウソでもついておこう。

「見える未来は断片的にだけ。今回の件は見えなかったの…さつき倒れたでしょ?あれが未来予知の前兆ってとこ」

「…まあ、それでもその能力は破格だろう。見聞色を極めれば未来が見えるとは言うが…どうやらそういった類でも無さそうだしな。…そう言えば魚人島で似たような未来予知をする人魚が居ると聞いた事がある、それと同じ類か？」

シャーリーでしょ。違うよ、私は占いじゃないし。

でも何とか、青キジを信用させる事が出来た。知る筈のない青キジの不信感とサウロの話が決定打になったのだろう。

「手を出さないのは青キジだけで良いよ。CP9には好きにさせといて」

「…つーことは、麦わら達はニコ・ロビンを奪還できると？」

「そうだね、じゃあもーっ信用してもらおう為に言っておけば…ここに居るCP9は全員麦わらの一味によって倒される。ロブ・ルッチも例外じゃない…間違はなくルフィが倒すよ」

「…ほオ…確かにそりゃ、想像も出来ねエ与太話だと思える…。良いだろう、その話に乗ってやるよ。…仲間の為に命を張るつてのア…嫌いじゃねエんだ」

…海軍大将のくせに、一海賊の気持ちを汲むつていいのか。

やっぱり青キジはよく分かんない…結局ONE PIECEが完結する前に死んだし…青キジが敵なのか味方なのかも良く分からないんだよね。

「異世界から来たつて言うのは信じてくれた？」

「それを信じる奴つてのはよつぼどのバカか、そういう神に仕える敬虔な信徒か……もしくは……、ま、いいや」

つまり信じてないって事だね、もう別に良いけど…。

「ここにいつまでも居られねエだろ、早エとこ正義の門通つて本部に帰るか」

「インペルダウンじゃないんだ？」

「そこに入れるかどうかを決めに行くつてこつた。サカズキあたりはお前の予言を聞くのは猛反対するだろうが……ま、結局そこら辺を決めるのはセンゴクさんさ」

「ふうん」

自分から聞いておいて、大して興味も無さそうに立ち上がつて先を歩く私を呆れ顔で見る青キジ。

……ナミさんとミキータ、ロビンは大丈夫だろうか……。原作通り事が進んでくれるならミキータも入った事で楽になる筈だけど……。

「……」

今更心配しても仕方ない……私はもう、直接彼女達を助けることなど出来ないのだから。

……そつか、そう考えたら、私はハーレム女王になれないって事か……。

……美咲との約束は、今世でも破つちやうね。……でも、みんなの命と比べられる筈も

無い。

私1人の命、夢…それらを諦めるだけでみんなが助かるのなら…。

「安いもんだよ」

…じゃあね、ナミさん、…みんな。

\*\*\*

エニエス・ロビー 司法の塔内部。

現在、ここにはCP9、ニコ・ロビン、フランキー、青キジ、イリス……そして、麦わらの一味が揃っていた。

ニコ・ロビンはCP9の長官「スパンダム」に連行され、イリスは青キジにロビンと同じ正義の門へと連行されている。最もイリスの場合は連行と言うより「同行」の方が正しいのかもしれないが。

CP9…ルッチ達は侵入者である麦わらの一味の迎撃を任せられ、各々配置場所で待

機していた。

そして、麦わらの一味…その中でもナミとミキータは——。

「あんのおバカ!!どこに居るのよ!!!」

「イリスちゃん…どこに…!!!」

手当たり次第に内部の部屋を開け、青キジに連れ去られたイリスを探す2人。

つつきりロビンと一緒に居るのかと思えば、なんとイリスは青キジと2人きりだと言  
う。

イリスの書き置きを見て、後から「ロケットマン」という名の暴走海列車に乗ってこ  
の地にやってきたナミ達は、数々の障害を乗り越えてようやく司法の塔へとたどり着く  
ことに成功していたのだ。

ロビンの本当の意味も確認済みで、後は2人を救出するだけなのだが…肝心の2人  
が、特にイリスの姿がどこにも見当たらない。

「イリスちゃんの匂いもしないし…!」

「それで分かるあんたはおかしいわ。…まさか、もう正義の門に…!」

もしそうだとしたら、ナミ達ではどうする事も出来なくなってしまう。

そしてそれは即ち…2度とイリスと会えなくなるのと同義だ。

それだけは…何としても阻止しなければならぬ。

「…!!ナミちゃん、今、急にイリスちゃんの匂いが…」

「だからミキータ、あんたそれで分かるのはどうかして…って、何ですって!?!何処から!!?」

「このまま真っ直ぐよ!!」

ミキータの言葉通りに真っ直ぐ走る。

…ただ、イリスが居るといふことは青キジも一緒の筈なのだ。連れ戻すのは容易では無いだろう。

「…イリス!!!」

やがて大きな空間に出た。何の為にここだけ広くしているのかは定かでは無いが、その空間の端にある下り階段からイリスが歩いてきているのを見つけた。

下の階にいたからミキータの謎能力が効果を発揮しなかったのだろう。

やはりイリスの隣には青キジが居て、ナミ達を見つめるなりひゅー、と口笛を吹いてきた。

「こんな所まで来てたのか。あんたら、思ったよりやるじゃないの」

「あんたなんか寝められたって嬉しくないわよ…イリスを離してくれる?」

「イリスちゃん!それ、海棲石の手錠?待って、錠を探してくるわ!それとも青キジが

持つてるの!?!なら今すぐ奪ってみせるわね!

ナミが改良を加えた完成版パフエクトクリマ・タクト天候棒を構え、ミキータがぎゅ、とオープンフィンガークローブ…指が露出している薄い黒のグローブを引つ張りにぎにぎと拳を開け閉めする。

「青キジ、行こう」

「あらら…挨拶くらいしねエのか」

「……………」

「ちよ、イリス…!?!」

ナミ達に視線すら向けず、イリスは何事も無かったかのように歩いていく。

ナミもミキータも、イリスが青キジとしている取引など勿論知らない。だから2人にとってこのイリスの行動は訳が分からなかった。

「待つてよ! あんたどうしたの!?! ああ、ロビンの事? ロビンなら大丈夫よ、生きたいって言つてたの! だから助けてあげなくちゃ!! したらロビンを嫁に出来るわ!」

「……………嫁は、もういいよ。悪いけど…ナミさんとミキータも私との関係は解消して、私の事は忘れて生きて」

「……………はっ。」

何を言つてるんだこいつは…とでも言うかのように固まる2人に、イリスは更に言葉を繋ぐ。

「もうみんなと会うこともないかな。一味も抜けるよ」

「きや、ハ…？イリスちゃん…？悪い冗談はやめなさい。流石に私も怒るわよ」

「冗談でこんなこと言うわけないでしょ？」

「…じゃあ、なんであんたはちよつと前のロビンみたいな事言ってるの!? ウソツプとロビンの次はなんであんたがそんな事言うのよ!! ねえ、やめてよイリス!!」

ダツとイリスに向かって駆け出すナミとミキータに、イリスは最後まで目を合わせずに扉の前へと歩いて行き、ガチャ、と開けた。

その先は階段を降りて真つ直ぐに一本道となっており、ナミとミキータは知る由もないが、正義の門手前…ためらいの橋へ行くための近道だった。

「青キジ」

「つたく、人使いが荒いんじゃないの？俺はこれでも大将なんだが…」

アイス・エイジ  
「氷河時代」

「きや…つ!!」

イリスと青キジ、そしてナミとミキータの間に部屋を2等分するかのようには氷が割って入った。

分厚い氷の壁に阻まれて向こうの様子すら見えず、音も聞こえず…ナミとミキータはただ唇を強く噛んで今起こった訳の分からない事態に頭を悩ませる。

「……………つ」



がく、と膝をついて氷の壁を見つめるナミの瞳には、疑問と、悲しみと、…そして、怒りが浮かび上がった。

「……ミキータ」

「なに、ナミちゃん」

「…どう思う？」

顔だけをミキータに向け、瞳の中に熱を宿したままナミは問いかける。

ミキータはナミの言葉に軽く口角を上げ、右足を振り上げて…。

「ふざけないで、かしら…ね!!!」

ガンツ!!!

ミキータが思い切り踏んだ地面は、彼女の能力で大きくクレーターが出来上がった。

ナミもそれを聞くと不適に笑って立ち上がり、ミキータの隣に並ぶ。

「…あのバカの手錠、2番って書いてたわ。つまり私達は2番の鍵を手に入ればいいってことよ」

「イリスちゃんは自分の事忘れてって言うてるけど、どうするのかしら」

「あなた、分かかって言ってるでしょ。……あんな、初めてあいつに会った時みたいに泣きそうな顔されて…何が忘れて、よ。大方私達を守る為に自分を売ったんでしょ、ロビンと何も変わらないじゃない！」

相手が青キジ？関係ない。

世界政府？関係ない！

「あいつが自分を蔑ろにするってんなら、私達であいつの価値を教えてあげるわ！その為にも……」

「ええ、2番の鍵ね。……急ぎましょう、正義の門を通られたらおしまいよ」

2人は走り出す。イリスの目を覚まさせる為に。

泣きそうなあの人を、再び抱きしめて泣いてもいいよと言ってあげる為に。

何度でも好きだと言ってあげる為に。

……もう2度と、嫁じゃないなどと今にも消え入りそうな声で言わせない為に……

## 89 『女好き、ナミ&amp;ミキータvsカリファ』

神経を研ぎ澄まし、少しの変化も見落とさない覚悟で塔の内部を走る事数分、ミキータが1つの扉の前で足を止めた。

「ナミちゃん、この部屋の中から音がするわ」

「音?」

「何かしら…シャワー…?」

明らかに怪しい部屋の前で話し合う2人だが、考えていてもイリスが離れていくだけだ。

コクリと頷きあつて勢いよく扉を開ける。

「…ビュッ。居たわ…CP9よ」

薄いカーテンの向こうで女体のシルエットがシャワーを浴びているのが分かる。

こんな塔に居る女など…CP9の紅一点、カリファしか考えられない。

「…あら? 案外来るの早かったじゃない。少し待ってもらえるかしら、今裸なの」

「キャハッ! 嫌、よ!!」

ふわっと飛び上がってカーテンを飛び越えたミキータが1万キロに体重を変化させ

て勢いよく落下した。

やはりカリテンの向こう側に居たのはカリファで、彼女はミキータの攻撃を難なく避けて手早く着替える。

「もう…ゆつくり着替えさせてもくれないのかしら？」

「悪いけど、ゆつくりしてる暇はないの。あんたの持つてる鍵…何がなんでも貰うわよ」  
完成版の天候棒クリマ・スタブを構えてカリファと向き合うナミが、ミキータに視線で合図を送る。

それを見たミキータが宙へ飛び上がり、また一気にカリファへと落下した。

「またそれかしら、そんな単調な攻撃に…」

「キャハッ！ だったら、避けてみなさい!!」

ボツ、とミキータのブーツから風が吹き出し、一直線にカリファへと落下していた軌道を大きく変化させて背後からカリファに蹴りを放つ。

予想外の挙動に一瞬反応が遅れたカリファは慌てて構えを取った。

「…!! 鉄塊!!」  
テツカイ

ガン!!!

「ぐ…っ」

「あら、当たったわ。フラついてるけど…単調が何だっけ？ キャハ！」

「そ、の靴は…!」

くるりと回転してゆるやかに着地を決めたミキータが、ブーツをトントンと鳴らしてナミの隣に並ぶ。

「噴射靴ジェットブーツ。私の新しい力よ」

噴射靴。空島でミキータがウソップに頼んでおいた彼女専用の装備の事だ。

ナミの完成版天候棒バリエクトクリマ・タクトと同時期に作られ、その性能は単純かつ強力だ。

空島のシャンディア達や神兵を見本にミキータの両靴フレスタイアルに風 貝を仕込んだだけだが、彼女の能力はそれを強力な移動手段に変える事ができる。

要は、使いこなせば空を自在に、それこそ蝶の様に舞い蜂の様に刺すを体現出来るという訳だ。

「データには無かった力の様ね……！ だけど、もう油断しないわ」

「どうかしらねッ!!」

激しく風を纏ってミキータが飛び出し蹴りを横薙ぎに放つ。

カリファはそれを屈んで躲し人差し指を立てた。

「しなる指銃シガン…… 鞭ウィップ！」

「キャハ！ 私の攻撃に『間』は無いわよ！」

カリファが屈んだ事で空振りに終わったミキータの右足から風が勢いよく噴出する。

そうしてもう一度くるっと回転してカリファの指銃シガンとぶつかり合った。

「!! 厄介ね……!」

「厄介なのは私だけじゃないわ!」

ミキータの背後からナミが飛び出し、カリファにクリマ・タクト天候棒の先端を向ける。

そこからバチツと電撃が発生した。

「サンダーボルト・テンポ!」

「くっ…… 剃<sup>ソル</sup>!!」

一瞬にして2人から距離を取ったカリファが、自らの行動を責めるように唇を噛んだ。

この2人……舐めてかかつてはいけない。

新しく手に入れた「悪魔の実」……その力を試す暇など与えてくれそうにもなかったからだ。

「やっぱ……簡単には当たらないわね」

「キヤハツ、私も隠し球見せちゃったし、気を引き締めないといけないわ」

「フフ……! どれだけ気を張った所で、元々の身体能力が向上する訳でもないでしょう!

ソル 剃<sup>ランキヤク</sup>! 嵐脚・鞭<sup>ウイップ</sup>!」

2人が視認できない速度で頭上に移動したカリファが、まるで鞭のようにしなる衝斬撃を飛ばすが、ミキータがナミを抱えて横に飛び上がり回避した。

「身体能力なら、この靴で上がってるわ！」

「なら……！」

再度剃<sup>ソル</sup>でミキータの背後を取り、2人の体を手の平を這わせるように触る。

その直後、ナミはミキータに掴まっていらなくなり手を離し地面に落ちてしまった。

「ナミちゃん！……これは……！」

「フフ、驚いた？」

ミキータは自分の体を見て驚く。いや、自分だけじゃない……ナミも同じだ。

自慢のボディラインは平坦なのっぺりに変化し、あり得ないほど肌がすべすべに変化していたのだ。しかも上手く力が入らないときた……これは……！

「くっ……悪魔の実……！」

ブーツの風を使って移動するミキータにはあまり効果がないかもしれないが、それが出来ないナミには痛手だった。

すべすべ過ぎる体のせいでミキータがナミを抱える事も、逆にナミがミキータに掴まる事も出来そうにない。

「一体なんの……！」

「それを見極めながら戦うのも、対能力者の醍醐味なんじゃないかしら」

試す暇は無くとも、既に独自で試し終わった技を使用する事は出来る。

カリファは自分が優位に立った確信を抱いて妖しく笑った。

「つ…なんかあんたの腕に泡が付いてるし、〃アワアワの実〃の全身泡人間ってトコかしら？いや、そこまで単純じゃないか…！」

「た、例え能力が分かったとしても、あなた達に勝機がある訳では無いわ！無礼者っ!!無礼者っ!!」

どうやらナミの適当な推理は正解だったようで、見るからに取り乱しているカリファにしらーつと冷めた目を送るミキータ。ついさつきまでの余裕の表情は何処へやらである。

「泡なら…」

ミキータがナミに近づいて左手を翳し、そこから風を発生させる。

「…！どうやら、その風が出る変な機能は靴だけじゃないみたいね？」

「キャハ！バレちゃったわ…！だけど、あなたの能力はこれで完封したって事でしょう？」

ナミの体についていた泡が全て剥がれ落ち、体も元通りになる。

ミキータ自身の体も風を当てて元に戻した。

ちなみに、手に付けてあるのは噴射ジェットグローブ。これもブーツと同じ様なものであり、



空中制御の補助みたいな役割と…右手に仕込まれた“切り札”を最大限活かす為の装備だ。

「泡なんだから風で吹けば飛ぶ…！何なら水があれば1番ね」

カリファアの頬に一筋の汗が流れる。

「どうも相性は最悪みたいだ。これならいつそ能力を使用しない方が勝ち目はあるかもしれない。」

「ところであなた…手錠の鍵は何番かしら？2番だったら嬉しいのだけれど」

「…良かったわね、私の鍵は…2番よ!!」

言葉尻に勢いをつけて、またも剃<sup>ソル</sup>で姿を消したカリファアを探す2人だが、動体視力が上がっている訳では無いのでなかなか見つからない。

「2番…！だったらこの戦い…私達は絶対に負ける訳には…」

「いいえ、この私に勝つなど有り得ない…！指銃<sup>シガン</sup>！」

ドス、とナミの肩に背後からカリファアの指が突き刺さる。

鋭い痛みで顔を蹙めて肩を押さえ、後ろに向かつて天候棒<sup>クリマ・タクト</sup>を払うもそこには既にカリ

ファアの姿はなかった。

「厄介なのは、その靴とグローブ…そしてあなたの持つ棒…だけど私の姿が見えなくちゃ意味は無いですよ?」

「っ!？」

「ミキータっ!…っ、きやつ…!」

今度はミキータの目の前に姿を現したカリファがミキータの顔を平手突きして吹き飛ばし、それに気を取られたナミの隙をついてミキータの隣へと蹴り飛ばした。

「能力が封じられようとも関係ない。私には“六式”があるの…あまりCP9を舐めないことね、お嬢さん達」

「ごほっ…く…く…! 蜃気楼・テンポ!」

「…! 姿が…!」

クリマ・タクト  
天候棒の先端から冷気を出し、生み出した蜃気楼でナミとミキータの姿を隠す。

その場においても見つかるだけなので音を立てず少し横に移動して立ち上がった。

「…ミキータ、あいつの防御を貫ける攻撃…:ある?」

カリファに悟られない様小声で、しかしその瞳には既に勝利のビジョンを浮かべてナミはそう言う。

「ええ…あるわ。私にすら制御不能な”とっておき”よ。…何か手があるのね?」

「ええ…!よく聞いて…!まず…!」

「どこに消えたのかしら……？……見えないのなら、無理矢理にでも出てきて貰うわ！嵐脚ランキヤク！」

ゴオツ！と何度も放たれる刃が部屋中を所構わず斬りつける。この中のどれか一つでも敵に当たれば、その時の血飛沫で居場所は割れて勝ち揺るがない物となるのだ。

だが、そんなカリファの行動を読んでいたかのように背後から声がかかった。

「……予報するわ。あなたは……雷に体を撃たれた後、激しい嵐に吹き飛ばされ……倒れるでしょう！」

「……隠れんぼは終わりかしら？」

ナミの声がした背後に振り向けば、そこにミキータが居た。彼女はニヤリと強気に笑ってブーツをトントンと鳴らす。

「キャハ！このまま隠れてても見つかるのは時間の問題だもの、そうでしょ？」

「それにしてももう一人が居ないようね、声だけかしら？」

「私一人で充分ってコトよ」

「言ってくれるわね、ならあなたを始末した後にもゆつくり探させて貰うわね？」

「どうぞ、お好きなように」

ぶわ…と宙に浮かび上がり姿勢を低くするミキータに、カリファも月歩ゲッポウで宙を蹴り同じ目線になった。

「何も空を飛べるのはあなたの専売特許じゃないのよ」

「キャハツ、元々そんな事思っていないわ…」 風ブレス！

ジグザグに移動しながらカリファへと迫るミキータに、彼女も同じような挙動で月歩ゲッポウを駆使して立ち向かってくる。

「喰らいなさい！一万キロ風ブレスプレス!!」

「指銃・鞭!!」

ぶつかる瞬間に一万キロの重さに変わったミキータの脚と、弾丸すらも上回る威力を誇るカリファの指がぶつかり合った。

力は能力分も合わさって完全に五角。ここからは…経験が物を言う。

「間マは無くとも、隙マはあるよね！」

「っ！」

ミキータの足を掴んで地面へと急降下し、勢いよく床に叩きつけ、更に壁際まで蹴り飛ばして嵐脚ランキヤクを何発も打ち込んだ。

激しい衝撃にミキータが突っ込んだ壁周辺に埃が舞い散り、彼女がどうなっているの

かは確認出来ない。

「念の為、心臓を貫いておきましょうか……、っ…、これは、なんのつもりかしら」

「…すぐに、分かるわ…!!」

ミキータを吹き飛ばし、少しの隙が出来たカリファを今まで隠れていたナミが羽交い締めにする。

だがカリファは焦ることはない。それは勿論、その程度の拘束などそれ程意味はないと思っているからだ。自分は超人…対して相手は奇抜な武器が無ければただのか弱い女の子。すぐにでも振り解けば…。

「随分余裕だけど…お生憎様、航海士の天気予報は聞いておくべきだったわね!」

「…!!まさか…!!」

「天候は、雷!」

バツとカリファが上を見上げれば、そこには大きな雷雲が今にも落雷しそうな程帯電しながら漂っていた。

ナミとて黙って大人しく隠れていた訳じゃない…じつとこの機を伺っていたのだ。

「安定した気圧配置の中…、所による雷雲により発生した雷が、あなたを撃ち抜くでしょう…っ!」

「何を…!そんな事すればあなたも」

今すぐナミを振り解いたとしても、ナミごと<sup>ソル</sup>剃で移動したとしても…落雷より早く動くことなどカリファには出来ない。

つまり、この攻撃は避けようがないのだ。

「…私の体なんて、どうだっていいわ…っ!!貫うわよ、あんたの鍵…!!サンダーボルト・テンポ!!!…ーっああ!!」

バリバリッ!!と雷が2人に落ちる。

部屋全体に余波である電撃の火花が飛び散り、想像以上の激痛がナミに襲いかかった。

「ぐっ…!!」

ぐらりと揺れる視界を、持ち前の超人的忍耐力で何とか堪えたカリファが前に2歩程ふらつく。

それでカリファが離れた事によって、ナミは地面に前向きに倒れた。

「はア…はア…!あ、危なかったわね、もう少してー」

「ー…天候は、嵐」

「ッ!!?」

いつの間にか、カリファから少し離れた前方にミキータが立っていた。

彼女は体の至る所から滲み出る血を構う事すらせず右手を背後に突き出し、構えを取っている。

カリファは本能で感じ取っていた。

それは、闘いの中で生きてきた『戦闘本能』であり、人間として当然に備わっている『危険本能』。

その2つが全力で警笛を鳴らしている… アレは、マズイと…!

「吹き荒れる暴風の様な乙女心により、お邪魔なお馬さんは吹き飛ばされて意識を失うでしょう」

「ゴォ!と右手から風が吹き出す音が聞こえて、慌てて剃ソルを使用して避けようとしたカリファが何かに引っかかった様に動けなくなつた。

足を見れば、カリファの片足をナミが両手で必死に掴んで押さえていた。あれ程の規模の落雷…カリファですらギリギリ耐えられた威力のものをナミが耐え…かつ、その腫はメラメラと燃える炎を途切れさせない。

それは正しく…正妻の意地。

「嫁。パワーにご注意下さい…!!一万キロ…!!」

「まっ…!!」

「噴射プレス!!!」

爆音と共に飛び出した制御不能の嵐は、右足を突き出した蹴りの構えのままカリファへと突っ込んだ。

当たる直前に咄嗟に「鉄塊」<sup>テツカイ</sup>を使用したカリファだが、そんな体技など意味はないとでもいうかの様に彼女の体をくの字に曲げて壁へと激突し、更にその向こうの壁へ、更にその向こうへと続いていき…合計で4部屋分壁に穴を空けてようやく嵐は鎮まった。空いた穴からはガラガラと音を立てながら瓦礫が崩れ落ち、その攻撃の威力を分かりやすく物語っている。

「はア…ふう…：悪いわね、お腹蹴っちゃって。だけど…私達も止まらないのよ。でもあなた美人だから、イリスちゃんの嫁候補には考えておいてあげるわ…って、聞こえてないわよね」

ミキータの右手グローブに仕込まれた切り札…それは「<sup>ジェットダイアル</sup>噴射貝」だった。

通常の移動では使わない、完全な超攻撃特化用装備…その貝から発生するとてもない規模の爆風は、<sup>プレスタイアル</sup>貝で得た推進力と比較にならない程のパワーとなる。

既に意識のないカリファの腹から足を退けて、急いで鍵を探す。

何とか胸の谷間に隠してあった鍵を見つけて、ミキータは元の部屋に駆け足で戻り倒れているナミに肩を貸した。

「ミ、キータ…、あいつは…」



「倒したわ！ナミちゃんの落雷のお陰よ……！鍵もほら」

「……よし、ちゃんと、2番ね……！」

頷き合つて、ナミは大丈夫、と1人で立つ。その体は既に満身創痕だが……止まらない、止まれる筈がない。

……絶対に失くしたくない人を、取り戻すまでは。

2人は急いで部屋の外へ飛び出して走る。噴射ブーツジェットとグローブの風残量も心許ないが、攻撃力は十分だ。これなら、青キジに拒まれたあの空間の氷壁に穴を開ける事だつて出来るはず……！

あんな、訳の分からない別れなどごめんだと、2人は再び心に炎を灯して最愛の人を追いかけるのであつた。

……  
愛する人を失いたくない嫁の想いと、愛する人を守りたいイリスの想いが交差する時

……後の歴史に名を刻む闘いが、始まる。

## 90 『ハーレム女王を目指す女好きな女の話』

1歩前に進む度に…私はこの世界に来てからの…いや、それは違うか…。

…みんなに出会ってからの思い出が、記憶から溢れて止まらない。

「……、」

見上げると、そこには果てしなく巨大な扉が雄大に存在していて…これが開くなんて想像が出来なかった。

だけど、開くんだけ…私はそれを知っているから分かる。

「赤目さん…あなた…！」

「…ん？ロビンもここに居たんだ、ああ、そういえばもうそんな時間になるんだね」

彼女も私と同じようにこの『ための橋』まで連れてこられた様だけ…ロビンは大丈夫。なんて言ったってみんなが居るから。

今頃みんなはそれぞれCP9を撃破して…ルフィとルッチが戦ってるトコかな？

…あ、正義の門が開き出した。向こうに海軍の船も沢山見えるけど…。

ああ、確かスパンダムが通話電伝虫と間違えてバスターコール用のワールド電伝虫を押し込んだっけな。そういえばさつきバスターコールがどうとかって、スパンダムと口

ビンの声がスピーカーから聞こえてたね。

「随分余裕じゃないの、アレだけの軍艦を見て…まだ麦わら達の勝利を信じてんのか」

「まあね、信じてるって言われれば…それはちよつと違うかもしれないけど」

「そういや、そうだったか。知ってるんだったな」

「だけど、信じてるよ」

完璧に記憶を取り戻した今となつては、何だか全能感がある。隣にいる奴にはどうやつても敵わないからそれも台無しだけど。

これから起こる出来事を全て知っているっていうのも、何だか優越感があるね。

…それにしてもスパンダムめ、原作通り散々ロビンを痛めつけてくれた様で…!

体もそうだけど、顔にも沢山血が付いてる……。もう、私がどうこう言える立場ではないけれど…。

青キジは私を連れたまま橋から海へ飛び降り、足が海水に触れた瞬間そこだけパキ…と凍つた。

「赤目さん!!」

「俺ア先に行つてる。あんたらはこの氷を渡つてくるな、手助けをしないつてのが取引内容に含まれているからな」

「なんだと…!? 大将とは言え所詮政府の犬が、この俺様に楯突こうつてののか!」

「…アンちゃん、そう誰でもかかれでもに嘯みつくもんじゃねエよ、中には権力なんざ関係ねエって輩も居るんだ」

私を横目で見ながらそんな事を言う青キジをギロリと睨む。

無駄な時間を使わないでほしい。そんなのと会話してる暇などないのだから。

「赤目さん！何をしているの!?その男に何をされたの!？」

「ロビンこそ、私の言葉には耳を貸さなかつたのにみんなに言われたらそうやって心を入れ替えるんだね？」

「っ…違うわ！これは…赤目さんが列車で私を、最後まで助けようとしてくれたから…！」

「…もう私は、ロビンを助ける気は無い。じゃあね」

嫌われる様に、わざと嫌味を言った。最低な発言だ、だからこそ…私がみんなと心の距離を離すには丁度いい。

このまま私を追ってこられても困る、せつかくした青キジとの取引が無駄になる上に更にみんなを危険に晒してしまう。

ロビンの言葉にそう返して青キジについて行く。そうして辿り着いた一番大きな海軍船に乗り込み、甲板で膝を尽かされて両側から剣を首筋に添えられた。

能力が使えないとここまで簡単に刃物が通るんだ…刃を置かれただけで血が出てる

よ…。

「能力の使えないただの子供に随分嚴重な警備じゃない？」

「海樓石でもお前さんの未来と過去を見通す力は抑え込めない様だからな。まー保険だ保険、気にすんな。…つかガキなのは見た目だけじゃなかったのか」

見通すつていうか、實際記憶を見るだけなんだけども。

…というか私の実年齢知ってるんだ。

「お疲れ様です大將殿、どうぞこちらへ」

「いや、俺はまだ外でコイツを見張っておく。この状態で隊を全滅させられては敵わねエだろ」

「いや、無理だから」

…直にこの船は旋回し、あの門を直ぐにでも通過するだろう。

そうなれば…これで、本当の本当にお別れだよ。

心残り？…あるよ、沢山ある。だけど…私には夢なんかより大事な人達が居る…！  
どう見たつて怪しい私を信頼して、正妻にまでなってくれたナミさん。

いつでも私の隣で笑つて、どんな時でも私を第1に考えてくれたミキータ。

出会ったのは最近でも、私達の為に自分の命を賭けてくれたロビン。

…勿論、他のみんなだつて…私は、守りたいんだ！例えそれで、私が死ぬことになる

うとも…!!

…美咲達には、あの世で怒られるだろうけどね。

ついに船はゆつくりと正義の門の方へ旋回していく。私にはそれがやけにゆつくりに見えて……………。

「イリス……………ツ……………!!!」

「……………ツ……………」

「イリスちや……………んツ……………!!!」

ヒュ、と隣で青キジが口笛を吹いた。

ためらいの橋から私を呼ぶのは…やっぱり、ナミさんとミキータだ。

その近くには2人にやられたのかスパンダムが転がっており、ロビンも解放されていた。

「な……………」

なんで、2人がここに…!…だって、ここに来る為にはルツチを越えるか、青キジの氷

を破壊するしか道は無いのに……っ。

……いや、そんな事より……。

「イリス!!! あんたそんなトコで何してんのよ!!! 早くこっち来なさい!!!」

「……っ、なんで……」

「そんな奴けちよんけちよんに倒して!!! イリスちゃんなら余裕よっ!!!」

「どうして……っ!!!」

ギリ、と歯を食いしばる。

私は……確かに別れを言った筈なのに……。今になって私達を拒絶したロビンの気持ち  
が分かった……。

ロビンは私と違って助かるけど……それは当たり前だ。

私は異物で、ロビンは元々この世界の住人。万が一の話、ロビンを犠牲にして私が助  
かるなど……あつてはならない事だ。

「どうして、ここまで来たの!!! 早く帰ってッ!!!」

「イヤよ!!! 帰るもんですか!!! あんたが帰ってきなさいよ!!!」

「っ……私は、そこに居ちゃいけないから!!! 帰らないッ!!!」

腹の底から、力の限り叫ぶ。

首に当たる刃が食い込む事すら気にも留めずに。

「何を……」

「みんな知らないでしょ！私の近くにいた大事な人は、みんな死ぬ！前回もそう、そして今回だってそうなる所だった!!私みたいな、この世界に生まれ変わった異物は消えるべきなんだ!!」

「!!」

「この世界の事は良く知ってたよ!だって前世の有名な読み物だったからね!そしてナミさん達は登場人物として出てて、様々な苦難を乗り越えていた!私が居なくても!!」  
ついに言ってやった。…別に、この事を今まで隠していたつもりは無かった。

ただ…何故か心のどこかで打ち明けるのを躊躇っていたのは事実。…それこそ、前世の「無謀」だった自分を無意識ながらに意識していたからだろう。…矛盾してはいるけどね。

「だから私はこの世界で、その知識を利用して立ち回った!クロも、アロンも、クロコダイルも、エネルも、…今回の事も!!そして未来も、全部知ってる!!!だから私は上手いこと手柄を横取りして、みんなに恩を売ったに過ぎない!!!」

ナミさん達は私の叫びに戸惑っているのか、私を呼ぶ声は聞こえなくなった。

…はは、そもそも、いきなり言われてこんな話信じるわけないか。…ま、いいや、頭がおかしい人だと思われたって今は何も不都合はない。



…ただ、胸が抉られる様に痛いだけのことだ。

「…だから、…ナミさん、ミキータ…ロビン！もうそろそろ夢から覚めてよ!!私を好きになつてくれたみんなの気持ちは…私が作り出した幻に過ぎないんだよ!!都合の良い女として利用された事に気付いてよ!!ほんとちよろかつたね!少し優しくしたら勝手に惚れてさ!!もう、飽きたんだ!!!…飽きたんだよ……!」

最後は俯いて、ギリ…と歯を噛み締めた。

飽きた…か。はは…流石に言葉に重みが無かつたかもね。だけど、みんなは戸惑つてその足を止めてくれているかな?だつたら私の思惑は上手くいったつて事だね。…さて、一体みんな…どんな顔して……。

「……え」

俯いた状態から再び前を見れば、ミキータがナミさんとロビンを抱えてこの船へと飛んできていた。その顔は陰になっていてよく見えず、視力倍加も使えない今となつては諦める他ない。

そもそもどうやって飛んで…いや、違う…!何でこつちに來てるの!?

かなりの速さで飛んできていたから、3人は時間をかけることなくこの船の甲板に降り立った。

当然、海兵達は銃を構えるが青キジがそれを手で制す。

「青キジ……これは違うよ、状況が……早くみんなを船から追い出して……」  
「追い出すのは、別れの挨拶がきつちり済んでからでも遅くはないだろう。会うのはこれで最後になるんだ、互いの想いを伝え合うなり無事を祈るなり、好きな事をすればいい」

ポリポリと頭を搔きながら青キジがそう言うのと、海兵が私の首筋に当てていた剣を外し、私はよろよろと3人の元へ近付いて行く。

「みんな……なんで、どうして!!!」

「どうしてって、勿論、赤目さんを連れ戻しに」

……!!それは、海列車で私がロビンに言った……、

「みんな、話聞いてた!?私……知ってたんだよ!ナミさんの過去も、ロビンの過去も、ミキータの夢も全てさ!!」

これがどういう意味だが、みんな分からない訳じゃないでしょ……!!

「本来ならアーロンを倒すのはルフイだった!クロコマイルもそう!私の世界の話ではそんなのツ!!!私、それを横から掠め取って英雄面してただけ……!!」

それをダシにナミさんを正妻にしたり、ミキータやビビを嫁にしたり……他にも沢山の嫁を、私は手柄を横取りする事で得てきた……!

美咲達の事も忘れ、自分の欲を満たす為に……好き放題してただけだ!

「だけど、その話には…今青キジが出てくる事は無かった…!!何で分かる…？私が居ないからだよ!!私がいなどと関わりなければ、ここで青キジが出て来る事は無かった…!!この世界にとつて異質な私が、出しゃばるべきじゃなかった…!!ウソツプの事だつてそう、あの決闘は本来…私がすべき事じゃ無かった!!」

「……そう」

私がいなどと一線越えるのを躊躇っていたのだつて、今考えれば心のどこかに負い目があったからだろう。

微かに残っていた記憶の残滓が、自分を異端者だと戒めて…。

美咲達を殺した私の望みを、私自身が遠ざけていたんだ。

「分かったら、もう帰つて。…みんなの顔はもう、見たくもない。…正直、助けに来たつもりなんだろうけど迷惑だから」

…流石に、バレバレの嘘だろうけど。

それでも、こんなこと言われて嫌悪感を感じない人は居ない。そこから私に対する不信感、悪感情が増幅してくれば…私なんかを助けようと思わなければ…全て丸く収まるんだ。

麦わらの一味はこれまで通り航海を続けて、苦難を糧に成長し、数多の島を駆けて、どんな強敵だろうと乗り越えていける立派な海賊団になるんだから。

「だからさ、みんな…もう、私の事は……」

パァン……ツッ!!

「ツッ……!!……え、あ……え、み、ミキータ……?」

「イリスちゃん……私の目を見て」

私の言葉を遮る様に、加減など全くしていない全力の平手打ちがミキータの右手から私の頬に飛んできた。

痛みを堪える暇もなく、ミキータはガシ、と私の顔を両頬から包み込む様に掴んで強引に視線を合わせる。

「……イリスちゃんの言う、別の世界の麦わらの一味に……果たして私は居たのかしら?」

「それは……」

「居ないでしょう、当然よ。だってイリスちゃんが居ないと私が入る意味なんてなかった。今でこそみんな仲間で、みんな大事だけれど……私が加入した理由の全てはあなただもの。……ねえイリスちゃん、あなたの言う異端者<sup>イレギュラー</sup>っていうのには、私も含まれてるんですよ?」

「……違う、確かにミキータは麦わらの一味には居なかったけど……それでも、ONE PI

ECEには…物語には登場してた立派な登場人物で…っいつ…!!」

ミキータが手を離れた瞬間に、今度は逆の頬にロビンからの平手打ちが飛んできた。

既に彼女の海楼石の錠は解かれているけど、能力は使わず力だけで思い切り振り抜いたのだ。

「赤目さ…いや、イリス」

「!!」

「あなたは私に言ったわ、『夢なら簡単に諦めるな。もし諦めるとするならば、それは死ぬ時だ』と。…イリス、今回のは果たして…死ぬ時かしらね?」

静かに、だけれど確かに怒気を含んだ声色でロビンはただ私に問いかけて来る。

「…青キジに目をつけられた時点で死ぬ時だよ。世の中、どう足掻いたって勝てない存在は居るって…私は知ったん…っだっぼ!」

最後まで何も何言ったのか分からなかったけれど…そうなった原因がナミさんの顔面右ストレートだった。

能力も使えない私とその衝撃に耐え切れる筈もなく、ただ後ろにばたりと倒れると、ナミさんは間髪入れずに私に馬乗りになって胸倉を掴み上げた。

「あんた…本気で言ってるの…?」

「本気だよ、私はこの世界の住人じゃないし、つまり麦わらの一味じゃ…」

「そんな事どうでも、いいわっ!!」

ガツン!とナミさんに強烈な頭突きを入れられて視界がチカチカと点滅する。

ど、うでもって…!!

「あんたの世界だとか、この世界だとか…ハッキリ言つて全然何言つてるのか分かんないけど…!!ただ、これだけはハッキリしてる…!!…私達の世界には、あんたが居なきや始まらないでしょうが!!」

「……え」

「アーロンとクロコダイルを倒したのはルフィ?本来ならミキータは一味じゃなくて、そもそもあんたが居ない?一緒に居たら死ぬ?…あのね、正直に言わせてもらうけど…あんたにとってこの世界がどう見えてるのかは知らない…!だけど、私にとって、私達にとつてこの世界は、あんたも居るのが当然なのよ!!」

「っ…!!」

「あんたがアーロンとクロコダイルを倒したのがこの世界でしょ!!」

あんたが私を好きになって、私があんたを好きになつたのがこの世界でしょ!!そんなどこの誰とも知らない…あんたを知らない“私”のいる世界なんてどうでもいいの!!!死ぬだとかもそう…!あんたが居れば死ぬ?ふざけないで!あんたが居なくなつたら死んでやるわ!!!」

ガン！と胸倉を掴んだまま甲板に私を押し付けてナミさんは尚も言葉を止めない。

その瞳からはボロボロと大粒の涙を流して、怒っている様な、だけれど縋るような…そんな感じだ…。

「異端者だとか、青キジだとか、横取りだとかね…：どうだっていいから、あんたは私達の傍に居なさいよ!!!今まであんたを信じて嫁になつてくれた“みんな”に顔向けできないようなマネするんじゃないわよ!!」

「っ…何も知らないクセに、何でそこまで私を想えるの!!言っておくけど、前世の私の近くにいた大切な人はみんな死んだよ!!今回だつて考えなくても分かる事じゃん!!バスターコールだけじゃない…！青キジまでここに来てる…っ！普通にやって勝ち目がある!?死ぬよ！私達全員…!!ここで!!!」

こんな、希望も何もない状況で…：どうして私なんかを信用出来るの!!

いきなりとは言ってもあり得ないほど最低な罵倒を浴びせられて、それでもまだ私を助け出そうとしてる意味は…：理由は…：っ!!!

「前世のあんただか何だか知らないけど…：じゃああんたは誰なのよ…！」

「…!!」

「ちよつとヘタレで、喧嘩早くて、ゾロを小馬鹿にするのが好きで、少しおバカで…：、だけど仲間を大切にしてくれて、笑顔が可愛くて、年齢を間違えられて不貞腐れた顔も

愛おしくて、泣きそうな顔していると抱き締めてあげたくなくなっちゃって、そして…誰よりも私達を愛してくれる。…私は…確かにあんたの前世は知らない。だけど…「イリスの事は誰よりも知ってるわ…！」

「……………」

ポロ…とナミさんが涙を零す。その瞳には私だけが映っていて…私だけを、見ているんだ。

「こんな、海軍に囲まれた今でさえ…私の事だけを…！」

「辛いなら、頼ってよ…！悲しいなら縋ってよ!!今更私達に何の重みも無い冷たい言葉を数だけ並べたって届かないわよ!!ねえ…お願い…っ！私から…っ、…うう…、あんなを…愛する人を…奪わないで…っ」

「……………私、は」

「イリスちゃんツ!!」

「オイイリス！聞こえてつか!!」

「おれも居るぞー!!!あ、違う今はそげキング！狙撃くの島で〜」

「み、んな…」



ためらいの橋は、バスターコールの影響で沢山の海軍に囲まれてるといふのに……サンジも、ゾロも、ウソップも……そして大声を出せない程の深手を負ったチョッパードさえも手を振って、私を見ていた。

「オオオオオオオオオ!!!<sup>ギガント・ピストル</sup>巨人の銃!!!」

ボオン!!と司法の塔から巨大な腕が現れた。

その拳の先にはルッチが居て、腕は当然……ルフィのものだった。

「イリズ……ツ……ツ!!!おれはこんな奴に負けねエ!!!だからお前も、そんなトコで諦めんな……ツ……ツ!!!うおおつ、ち、ちっさくなるく……つ!!!」

「……なんで」

ルフィなんて、私の事情を全く知らないくせにそんな事言って……。

……いや、違う。彼はいつもそうだった。どんな時でも誰かを助けて、人の心の一番大事な所に火をつけるのが上手な人だった。

事情とか、そんなの……ルフィにとってはどうだっていいんだ。

「……ね、イリス。あんた……これ見てもまだ自分を異端者だなんて言える訳?」

「…だ、って…っ」

「みんなあんたを思っつて、みんなあんたを失いたくなくて…それで命張っちゃつてるじゃない。私もそうよ？もしあんたが青キジについて行くって言うなら、私も行くわ」「キャハ、ナミちゃんだけ抜け駆けなんてずるいわ！私も！それからイリスちゃん、ウソツプはイリスちゃんに決闘を申し込んだのよ？寧ろイリスちゃん以外は受けるべきじゃないと思うわ」

「フフ…私は元々助けてもらった命、あなたの隣で死ねるなら本望ね」

っ……だつて、だつて…！私は…っ、私は…最低な人間なのに…！

自分の事を最優先に考えて、起こす行動が勇気か無謀かの違いすら分からない！そのせいで殺したんだ！叶も、沙彩も、美咲も!!!

無謀な私がいけなさを危険に晒して、そして死に近付かせた…！そうだ、私は本当にこの世界に居てはいけないんだ…！私は、この世界の住人じゃないんだ…！

だから本当は、みんなと一緒にいちゃいけないのに……!!!

また、みんなを危険に巻き込んで、美咲達のように殺してしまうかもしれないのに…

!!

「……………どうして、涙が止まらない…!!」

「初めてあんたと会った時も、あんたはそうやって私の胸の中で泣いたわね。…何でもかんでも背負わないで…もうちよつと、私達を信用しなさいよ…バカ」

ナミさんが私の手錠に何かを差し込む。…まさか…、

「…私は、私達はあんたを信じてる。だからイリス…あんたも私達を信じて。何があつたつてあんたを一人にはさせない、異端だなんて2度と言わせない…!…どんな苦難だつて、あんたとなら何だつて乗り越えられる!!今回もそう…ちよつと大将が居るだけ!ちよつと海軍に囲まれてるだけ…!だから、まずは無事に帰る為に…この状況を何とかしなさい!!」

「…は、はは…無茶言うよ」

ガチャリ、と私の手錠が完全に外れた。

それを見て流石に海兵達も黙っていられなくなつたか再び武器をこちらに構えてくる。

「……………本当、無茶、言うよ…つ」

「無茶を言ったのはあんたが先よ。…あんたが選んだ嫁達は…正妻は、ここであんたを…イリスを放つて逃げる事が出来る女なワケ?出来るわけ無いでしょ…!私達は、私は

…イリスが何者だろうとなんだろうと、心の底から…愛してるわ」

そう言つてナミさんは私にキスを落とした。…はは、こんな時でも羨ましそうにしてるミキータや、優しげに微笑んでるロビンが…本当にいつも通りで…。

ちよつと落ち着いてると思つてたのに、また溢れ出す涙に目を瞑る。唇に伝わる感触がより強く伝わつて…たつたこれだけの行為で黒く濁つた私の心は優しくナミさんの心へと溶けていく。

——そして次に目を開けた時、そこは前世の私の自室だった。

\*\*\*

いきなりこんな場所に來た事に対する驚きなんてない。何故なら、私からここに來たからだ。

「……全く、私は泣き虫だね」

流れる涙を拭いながら、机の前の椅子の上に浮かび上がる光の球に手を伸ばす。

『ひつ…ぐ、う…、う！』

「もう…、…逃げてたのも、忘れる様にしたのも全部あなたなのに、今まで散々言つてくれちゃつてさ」

逃げて、逃げて、逃げて、逃げて。

恐怖から逃げて、絶望から逃げて、過ちから逃げて、そして、世界からも逃げた。

そして、出会つたんだよ。私は——「私達」は、何よりも代え難い宝物に。

「…もう、大丈夫だよ。どうやら私は…みんな宝物が離してくれないくらい人気者だったみたい。…だからさ、いつまでも記憶そんなトクに籠つてないで…ほら」

光の球が、次第に人の形へと変形していく。

そうして光が完全に晴れた時…そこには王華が居た。

「…王華として過ごした18年。そしてイリスとして過ごした約16年…私達は同じ存在でも、別々の記憶を持つて育つた」

『う…、つ、う、ん…。だから…前世の死んだ私は、もう消えるよ…、私の心残りは…、つ…もう無いから…私の記憶を、今みたいに全てイリス私に託して——』

「私さ、思うんだ」

王華の言葉を遮つて、私は強引に話をしていく。

当の王華は目をぱちくりとさせて私の言葉を待った。

「私は16年間、入州 王華としての記憶がほとんど無く育つて来た。あつたのは知識

と、朧げな、本当に朧げな記憶。…ね、そんな状態の私達つてさ、本当に「同じ人」？」  
 『え？』

「私は違うと思うんだ。私とあなたは確かに入州<sup>イリス</sup>だけど、私はあなたじゃないし、あなたは私じゃない。…つまり何が言いたいか、わかる？」

王華は、分からないとでも言うように首を振って続きを促した。

ほらね…分かってない時点で、私達はやっぱり同じじゃないんだ。

「同じじゃないって事は、あなたは私とは違う女の子」

『!!…まさか…』

「そう…！…だつたらさ、私の前から消えるなんて…許す訳ない!!」

ガシ！と王華の手を掴んで引き寄せる。彼女の大きな体が私に引つ張られた為、体勢を崩して膝をつき、私と同じ目線となった。

「あなたは消えない…！私と今度こそ一つになって…私の中で生き続けて貰うからね！」

『…でも、そんな事したら、私を消さなかったら、またあなたに宿った記憶は私に戻ってくるよ!! そうなったらこの世界の未来も分からない！それに私は、もう、耐えられないよ…つ、美咲達を殺した私が、まだ幸せになりたいだなんて…つ!!』

王華の悲痛な感情が私に刺さる。

…私は、美咲達に対して物語の登場人物くらいの認識しかない。…それは、実際に彼女達と仲が良かったのが王華だから。

「…ねえ王華、王華は死ぬ前に、何を願ったの?」

『え…?』

「覚えてない?…自分が生まれ変わるよりも、優先して欲しい3人が居るって…強く願ってたでしょ」

王華は目を見開く。私の言わんとしている事に気が付いたからか…その瞳には、さっきまで一切感じられなかった「希望」が見えた。

「私があなたの人生を継いでいるのに、この世界に美咲達が転生してない筈がない。優先されてる筈の3人が居ない訳がない。…だというのに、死ねないでしょ」

だから…!!

「…記憶が無くなるのは、良いんだよ。私は予言者でもなければ女子高生でもないんだから。…絶対に、美咲達も見つけられる!何年後かは分からない…もしかしたらお互いお婆ちゃんになってるかもしれない…!だけど約束する。…絶対に探し出してみせるって!」

『…っ…私、期待しても、いいのかな…!』

胸の前で片手を握り、その瞳はまだ戸惑いで揺れながらも入州が力強く私に問いかけ

る。

「あなたが今世を託した『イリス』<sup>イリス</sup>は、やると言ったらやる女だって知らないの？ 私は負けないよ…世界にだって」

『つ…、…ふ、…はは、諦めかけてたのに良く言うよ』

「なぬー？そもそも私がああなったのもあなたの負の感情が大きすぎたのが悪…：つと」

涙で塗れた顔を拭くこともせず、王華はその端正な顔立ちをぐちゃぐちゃに歪めて私に飛びついた。

…きつと王華は死ぬほど辛かった筈だ。

転生しても意識は私にあつたから、彼女は記憶と共に私の中に封印されて…そこで光の球として過ごして来た。

だけれど…私が忘れていた彼女は、結局いつも大事な所では力を貸してくれたよね。例えば私の髪の色が変化するあの変化だって…あれは王華の白髪が原因に違いないし、霸王色はもともと彼女の素質だ。

「今度はもう、絶対に忘れたりなんかしない」



王華と私の体が薄くなり、重なり合う。

それを境にして、前世を形作っていたこの空間にガラスが割れた様な亀裂が入った。

「3人の事も、絶対に見つけ出してみせる」

2人のイリスが混ざり合い、そして…私の中にあつた記憶が段々と抜け落ちていく。

この世界での思い出はそのままに、前世の記憶がすつぽりと…だけれど “王華” や “約束” の事は何一つ忘れずに…。

「だからさ、特等席で見えていてよ。この先の未来と…希望に満ち溢れた世界を。そしてこれから始まる、新たな私の…私達の物語を—————」

————『ハーレム女王を目指す女好きな女の話』を!!!」

## 9 1 『女好き v s 青キジ』

私が再度目を開ければ、意識の底に潜る前の状況へと帰ってきていた。

私の手錠を外して強く抱き締めキスをするナミさんも、それを見守るミキータとロビ  
ンも…そして、武器を構える海兵達も。

…ただ、一つ、決定的に違うのは…。

「……………ツツ?!?! そりゃ、マズいぞ!! アイスBAL<sup>ボー</sup>L<sup>ル</sup>!!」

「っ! イリス…!!」

「イリスちゃん!」

青キジの顔が焦燥感に染まり、2も3も無く攻撃を放ってきた。

その腕から放たれる霧状の冷気が、私や私を庇おうとしてくれた3人までをも一瞬の  
内に凍らせる。

「た、大将殿…? 殺してはいけなかったのでは…」

「…キミ、今すぐバスターコールの標的を『エニエス・ロビー』ではなく、『この船』に

「変えるよう伝えなさいよ」

「な……!? そ、そんな事をすれば我々が……!」

パキ、と氷にヒビが入る。

それを中心に空気が渦巻き、波は大荒れ…海が振動を始めた。

「参った、今回ばかりは判断をミスつちまつたと認めざるを得ねエか。…情けを掛けたばかりにとんでもねエ怪物が生まれやがった」

「……そういう事ですか……!」

青キジの言葉の意味をいち早く理解した准将が小電伝虫を使ってバスターコール出動中の中将へと連絡を入れる。

報せを受けた中将モモンガは怪訝そうに眉を潜めるが、大将の指示だ、従う他ない。

「乗り込め!! 船を落とすぞ!!」

「出来るだけ味方には攻撃するな! だが、最優先である海賊、女好きのイリスを消すのに邪魔だと判断した場合、は斬り捨てても構わん!!」

「クザン大将の氷で固まつてる今がチャンスだ!! 一気に討ち取……!!」?

先陣を切つて船へと突撃した海兵の1人が…その場で倒れた。

突然の事態に周りは混乱し、青キジはハア…とため息をついて頭をポリポリと搔く。

「…遅かったか。…来るぞ」

鋭い眼光で青キジが氷の塊を睨んだ瞬間…氷に亀裂が広がり、やがてそれは粉々に砕け散った。

中から現れた私を見て海兵達は、青キジは…ナミさん達ですら目を見開く。

「…あ、んた…イリス…よね…?」

頭の上に燦爛と輝く黄金のティアアラ。中央には真紅に染まった宝石が当て嵌められており、今までのような透明ではなかった。

髪はいつもと同じ黒だが、漆黒に煌く美しい、まるで絹の様な長い黒髪を靡かせ…同じく変わらない赤の瞳を開く。

肩から足元まで届く程の薄く優雅なマントは、私の存在を更に雄大に見せ…何より、私の背丈も170センチ台に伸びていた。

「…あ」

「う…」

「なに…が…っ」

バタバタと周りの海兵が倒れていく。

記憶を全て渡したから良くわかんないけど…これは覇王色はおうしよく…だよ。

「…どうやら、私は凄く強くなったみたい」

オールインクリス  
全・倍加ではあり得ない背丈に、体から湧き出る今までにない力の波動。

過去を王華と乗り越えた事で…本当に大事な事と別れなかった事で…私の能力が強  
化されたとでもいうのか。

「どつちでもいいか…！」

ちよつと凄めば、私の霸王色は更に規模を拡大させてバスターコールで駆けつけてい  
た海兵達をも昏倒させていく。

私から湧き出る白い霸王色のオーラが天へと昇り、その堂々たる立ち姿はまさし  
く――、

「女王……!!」

青キジがボソリと呟いて構えを取った。

奴に…構えを取らせたんだ。

「こりや…報告したら怒られるな。殺しておくべきだった…どうしたもんか」  
「そうかもね。恩に着るよ…私達に時間をくれて」

右腕をジツと見つめてそこに「攻撃をする」という意志を強く込めれば、私の腕は  
真つ黒に染まった。

…出来ると確信して試してはみたけど、何だろコレ。

「まあ、いいか。…あ、そうそう、さっきの取引なんだけどさ」

フツ…と私の姿が消え去り、次の瞬間には青キジの横腹に黒色の蹴りがめり込んでいた。

「あれ、無かったことにしといて…ねッ!!」

「つぐお!!? 武装色か…っ!」

そのまま派手に横へぶつ飛び、勢いよく海に落ちて大きく飛沫を上げる。

「え…勝ったの…?」

「そうだと嬉しいけど…奴はそんなに甘くないよ」

船の端にある手すりに掴まり海をジツと見つめる。奴が海中に落ちる瞬間に能力を発動していたのが「視えた」。何でだろ…? これも出来ると思ったたら出来たんだよね、王華の知識が私を後押ししてくれてるのかな?

…ほら来た、能力者なんだから海に落ちたら終わりにしとけばいいのにさ。

「よっ」

柵を飛び越える様に自然に、私は手すりを飛び越えて海面へと飛び降りた。

ギョ…つとナミさん達が驚愕の顔を浮かべるが、…大丈夫、心配ないよ。

パキインーローツ。

「これは……！」

辺り一面、まるで氷河時代でも来てしまったのかと言うほどの光景にロビンが声を漏らす。

私は無事氷の地面となった場所に着地して、迷わず一直線に歩いて行く。

私に向かっている場所の地面が、ボコ！と下から蹴り飛ばされそこから青キジが姿を現した。

大したダメージはやっぱり入ってないか……タフつてもあるんだなあ。

「あららら……とんでもなくパワーアップしてくれてんじゃないの」

「でしょ？ 私もびっくりしてるんだから」

「……覇王色、武装色と来たら……見聞色が使えねエ事はねエよな……」

覇気ね……。どうして私ができるのかは分からないけど、使えるものは何でも使ってる！

奴に攻撃が当たる……！これだけで、今までより大きく進歩しているんだ！

この勝負……必ず勝って、みんなで帰るよ!!!

「行くよ……！50倍灰！女王の慈悲なき拳ッ!!!」

「氷塊・熊!!」

アイスフロック

ウルス

武装色だか何だかは知らないけど、奴を殴ると強く意識すれば真つ黒に染まる右腕を武器に奴へと距離を詰め、一切の躊躇いなく拳を振るう。

青キジも対抗して巨大な熊型の氷を出してくるが、そんなモノは私の攻撃の前では豆腐の様に脆く崩れ去り、拳は黒く煌く軌跡を描いてその向こうの青キジの顔面へと突き刺さり後方へ吹き飛ばした。

「手を緩める気はないよ……（いじょうばいばい）50倍灰！」

吹っ飛ぶ青キジに走って追いつき、その頭を両足で挟み込む。

「女王の御御足!!」

挟み込んだ頭を、体を捻る事で氷の地面へと首をへし折るつもりで叩きつけた。

……これで倒れてくれるなら楽だけど……絶対そんな事は無いだろうな。

「んア~~~~く~~~~つ、いつ振りだこんな痛みは……」

ガラ……と氷の瓦礫を押し除けて青キジが立ち上がる。

……? 叩きつけた時のダメージは入ってない……のかな? ダメージが全く入ってないって訳でも無さそうだけど。

どちらにせよ、ようやくこれで私も戦いの土台に立てたって事か。全く……面倒だなあ  
自然系ロキアってのは。

「にしても……あんどき見たお前の覇王色より規模が大きくなってねエか?……言つとく



が、今のお前の霸王色は規模だけで言えばあの「赤髪」や「冥王」と同等…いや、それ以上だ。どの覇氣も使い方をマスターしてないのが救いではあるが…」

「…私も意識してる訳じゃないけど、覇氣だつて私から発せられるモノでしょ？ だって恐らく…私の能力で倍加してるんだらうね」

「…つーこたア、ざつと50倍…」

「いや…」

深く腰を下げ、右手の大きさを軽く倍加する。

王華と1つになった事で…私は能力が強化された。

…つまり、上限は50よりも更に増えているのだ。

「ひやくばいばい100倍灰…!!」

「ツ！そりや、手強いなツ！」

「逃がすかツ!!捕まえた!!」

移動するだけで私を通つた所の氷は抉り取られ、風が吹き荒れた。

倍加していた右手で青キジの頭を鷲掴みにして勢いよく空へ飛び、そこから縦にぐるぐると回転を始める。

「うおおおおおッ!!!アイス・ステラ氷の星輪ア!!!」

そのままの勢いで地面へと回転しながら落下し、その遠心力を利用して青キジの頭を

氷に叩きつけた。

氷の大地は大きくクレーターができたが、それでも下から海水が飛び出さない所を見るに相当下の方まで海を凍らせているんだらう。

「…ふうー！」

とんでもないな、100倍って！

クレバスのような物をさっきの衝撃でそこかしこに生み出してしまふ程の威力だ。…まあ、という事はつまりそれだけ青キジは海を深く、そして広く凍らせてるって事なんだけど…。

「やれやれ…マジでやらねエと殺されちまうな」

「…私としては、さっきのであんまダメージ無さそうにピンピンしてるあなたにちよつとシヨックを受けてるトコなんだけど？」

「『覇氣』を纏った体で攻撃しないと意味がないって事かな…。地面に叩きつけたって、地面に覇氣が通ってるわけでもないし。」

「だがこのままじゃ俺ア負けるだらう。…はあく、まさかコレを使わされるとは思っても無かった、女王イリス」

女王イリスって…。…出来ればその前にハーレムって付けていただければ泣いて喜びますけど。

「コレ？」

「見てりや分かる」

青キジの周囲をとてつもない程の冷気が迸る。それは次第に氷の礫となり、辺りに激しく降り注ぐ。

正に吹雪の様な光景だが、これを一人で起こしてるんだからやっぱり青キジは強いし……油断ならない……！

寒いのは耐性倍加で防いで、私は猛烈な吹雪のせいで見えなくなった青キジの気配を探る。

……居た。けど、さっきの位置から移動はしてないみたい。気配を探るって、普通にやってるけどこれが見聞色かな。さっき青キジの能力を「視た」時も同じ感覚だったし。

「っ……」

一際激しく吹雪が吹き荒れ、青キジが居る場所を中心としてまるで竜巻のような猛吹雪が発生した。

その竜巻は激しく轟音を奏でた後、まるで役目を終えたかのように呆気なく四散し……

「……」  
『アイス・バツキン  
氷の宝鎧』

…あれは、氷、か？

青キジの体を、鎧の様にイカつい氷が包み込んでいる。

肘辺りからブレードの様なモノが生えているし、顔だけを出した氷の西洋風兜には鬼の様に角も2本存在していた。

全体的にゴツゴツし、強そうな見た目になったが…それは見た目だけじゃなさそう  
だ。

「…凄い覇気…」

私はあの子のお陰で100倍もの倍加が可能となったのに…奴の気迫に押されてしま  
う。

やっぱり…一筋縄じゃ行かないか…！

「この状態は長くは続かねェんで、速攻でケリ…付けさせてもらおうぞ」

「へえ…そんなこと言って、実は私にケリ付けられるんでしょ？」

「そうなつちや、流石に面目丸潰れだ。大事にしたい面目なんざねエが」

コキ、と奴が首を鳴らす。その動作をするだけでも身につけている氷がガチャガチャ  
と音を立て、まるで本物の鎧を着ているかのような金属音に冷や汗を流した。

…恐らく、あの氷鎧にはこれでもかかってくらい青キジの「覇気」が詰め込まれている  
筈だ。通常の氷と同じだとは…思わない方が良さだろうね。

「おわっ!？」

一瞬で私の目の前に移動してきた青キジが、そのゴツくなつた右腕を振りかぶつてパンチを放つ。

「そんな重量級の見た目して速いとか反則でしょ!」

ブリッジをする様に逆手で地面に手をつけて避け、ガラ空きの腹を蹴り上げた。

…う、うそん…氷に傷1つつかないんだけど…。

「うわ…！足が…っ」

蹴り上げた足が、触れた箇所を皮切りにパキパキと凍結していく。

即座に足の熱を100倍にさせて氷を瞬く間に蒸発させた。

「悪いが、この鎧は触れた物を何であろうと凍らせる。少しでも解凍が遅れたら…ま、言わなくても分かるだろ」

「ご丁寧にも!!」

ブリッジの体勢をした状態から後ろに跳んで仕切り直しにしようとした時、私の体を分厚い氷が輪っかを通すように拘束してきた。

どつからでも出てくるなあこの氷ほんと…!

「さつきから攻撃されてばっかだから、そろそろ俺の攻撃でも喰らつとくか!!!」

「お構いな…ぐっ…が…っ!？」

両手の指を祈るように絡ませた青キジがそれを私の顔面へと思い切り振り下ろしてきて氷へ叩きつける。

い………ったい!! 100倍アーマーだよこっちは! 5倍で充分だったオニオンに謝れ!!

「この! 女の子の顔を躊躇なく殴るなんて海軍のすること!?! てあ!!」

拘束している氷を溶かし、思いつきり青キジの顔面を殴って無理矢理距離を取らせた。

「躊躇なんてしてたら、こっちが殺されるでしょーが」

何やら考え込むように殴られた頬を触りながら言った。失敬な、私は殺人なんてしたくないっての!!

(…まさか、この状態の俺を殴り飛ばせるとは…、早いとこ決着をつけねえと面倒になる…)

「考え事するなんて、余裕だね!! 100倍灰… 去羅波ツ!!」

小太刀を抜き、全力で奴へと振り抜いた。

す、すごっつ、いつもの去羅波とは比べ物にならない大きさとエネルギー…!

想像を遥かに超える飛ぶ斬撃が、氷の地を斬り裂きながら青キジへと飛来する。

「アイス・ランス」  
「氷 槍!」

巨大な刃を迎え撃つは、青キジの腕から生み出された同じく巨大な氷の槍。まるでドリルの様に回転しながら私の技と衝突し、相殺した。

「あー…これでもダメかあ」

「そう簡単に突破されちゃ、この技も報われねエだろ」

さつきから、間違いなくMAXの100倍で攻撃してるんだけどな。

だけど、向こうも私の攻撃をきちんと警戒してるって事はそれだけ相手と私に力の差が無いってことを意味してる訳だ。

…なら、そろそろやっちゃいますか。

「手伝ってもらおうかな、そこで見てるだけじゃ退屈でしょ?」

「…なんだ、まだ何かあんのか?そろそろ打ち切りにしとけ、面倒だろ」

「残念だけど、もつと面倒になるよ。……女王・倍加」  
クイーン・インクリース

目を瞑り、私は技を発動させた。

見聞色があるとはいえ、同じ位の實力の者同士が対峙していて視覚を断つのは悪手過ぎるだろう。

普通ならば、この隙について青キジは私に攻撃を仕掛け、勝つことだって出来たと思う。

……私の隣に、青色の瞳をした、綺麗な純白の髪が特徴の“彼女”が立っていない

ければ。



## 92 『女好き、決着、氷上の大決戦』

「……誰だ、そいつア」

目を見開いて驚く青キジに、私はニヤリと得意げに笑って隣の人物を横目で見る。

今の私より高めの180くらいあるだろう身長に、白の髪と美しくマツチしている淡い青の瞳。

…そう、王華だった。

「ねえ、イリス、そりやあ私…あなたには感謝してるよ？普通ならこの世から消えてバイバイするところだったのを助けて貰ったし、美咲達の事も尊重してくれて、こうしてこの世界に顕現させて貰ってさ…だけどね？見て目の前」

スツ、と王華が青キジを指差す。

「初戦が青キジって何??幾らなんでもおかしくない??」

「そんな事言われても、私1人じゃ無理そうだったから」

「私が増えても足手まといになるだけでしょ！戦い方とか分かんないからね!?!そりや今までずっと観ては来たけど！あくまでも観てただけだし!」

「大丈夫だよ、王華なら」

ぐつ、と親指を立ててウインクすれば、王華は露骨に嫌そうな顔をした。

だけでももう出しちゃった以上は引つ込めるまで頑張ってもらわないと私も困る。だって1人じゃ勝つ為の布石すら打てそうにないし。

「…だって私、青キジのあんな姿知らないんだけど。そもそもONE PIECEに青キジの戦闘シーンなんて数える程しかないからね?？」

「だったら初見で攻略しちゃおっか」

「…くつ、ここでも既に考え方に差があ…!!」

そんな事を言いながらも、腹を括ったかのように構え直す王華を見て頷く。

大丈夫…私の中でずつと居たのなら、多分体が嫌と言うほど覚えてるよ。

「そんな訳で、女王・倍加です。クイーンインクリース神背と違って私じゃないから、私を攻撃したって解除出来ないし…何より普通に手強いよ?」

「そんなんアリか…っ!」

2人同時に青キジの視界から消え、まずは私から仕掛けた。

奴の真上に姿を現して思い切り踵落としを放つ。

「ぐ…っ」

「そら、背中がガラ空きだよ!!王華!!」

「もうどうにでもなれ…!!100倍ひやくばいばい灰!破ハロウ瓏!!」

私の去柳薇と同じように、右手に最大倍加を付与して背中を殴打された青キジが顔を顰める。技名もオリジナルでノリノリじゃん。

ついでに神背で更に追い詰めてやろうとしたが、流石に王華顕現中は出せないのかうんともすんとも言わなかった。くそう…この辺は要特訓かあ…！

「わあ、出来たっ！」

「流石王華、このまま押し切るよ！」

青キジに踵落としして居る状態から足に力を入れて飛び上がり、霸王色を纏う。

王華も後ろに距離を取って私と同じように霸王色を纏わせた。

氷の大地、こいつがかなり下まで凍ってくれてるって分かった今なら、別にこの技を使っても壊れないでしょ！

「100倍灰!!」  
ひやくばいばい

宙を蹴って一気に青キジへと落ちていく。王華も地を蹴って突撃していた。

「流星の別れ!!」  
メテオ・アツイオ

「彗星の別れ!!」  
コメット・アツイオ

「夜でもねエのに、星を降らすんじゃねエよ…！」

直後、物凄い爆撃音が木霊する。

青キジは私の拳を頭の上に左腕を添えて防ぎ、王華の拳は右手の平で受け止めてい

た。

くそー、攻撃したらそれだけで凍るの面倒だなあ、解凍に手間かかるし！

「だっ!!」

「おっと…危ねエな」

王華の放つ渾身の蹴りを後ろに飛んで回避する青キジ。

ぶっちゃけこの技、私の中に王華が居る私にしか出来ないから反則みたいなところあるのに…なんでこいつは普通に対応してくるんだ…!

神背ヒューマとの違いは、私を増やしている訳ではなくただ王華を外に出しただけの為王華自身もダメージを負うという事。

そして私とは違った考えを持っているという事だ。

「段々慣れてきた…これなら…!!」

「よし、じゃあ王華、私に合わせて!!」

休む暇なく攻撃ラッシュしてやろうと構えた時、王華が私の肩を掴んで止めてきた。

「ダメ、闇雲に突っ込んででもまた躲されちゃう」

「2人で畳み掛ければ大丈夫だよ!」

私はそう言うが、王華は困った様に笑って首を振る。

「イリスはまだ気付いてないかもしれないけど、この力はかなり負担が大きいんだよ。

今まで使えなかった力をいきなり大量に使ってるし、それになにより私をこうして出してるのが余計体力持っていかれてるのかも」

…確かに、言われてみれば既に体のあちこちが痛いような気がしなくもない。

…けど、そんな甘い事言って青キジに勝てるとは思えないんだけど…。

「…私が次の一撃で、必ず青キジにダメージを与えてあげる。その後は任せるよ」

「王華…、大丈夫なの？」

「そんな甘い事言って、青キジに勝てるの？」

「！」

私が今思った事を、全く違う意図で返されて目を見開くと王華はふふ、と笑った。

…全く、私の癖に、いい女だよあなたは…！

「分かった、信じる…！」

力強く頷いて王華の背中をぼん、と叩けば、彼女は軽くウインクして青キジへと駆けた。

初戦で青キジがどうか言ってた彼女はすっかり居ないみたいだね。…その辺の立ち直りの早さは私にはないよ。

「おおおおおっ!!!」

「バカ正直に突っ込んでくるだけじゃ、俺に攻撃は当たらず、ぐ、何…!？」

突然の背中への衝撃にぐらりと体勢を崩す青キジは、背後の足元に空いてある小さな穴を見て目眩を起こしそうになっていた。

「オイオイ……ありやどう見ても武装色の覇気を飛ばした穴……!! 奴は覇気の扱いはまだまだ素人レベルだった筈じゃねエのか! 目の前のコイツは……一体……っ!!」

「覇気なんてね! 漫画で腐るほど使い方学んでるんだから!!……喰らえ、これが私の……全力だ!!! 100倍ひやくばいばい桜華……おうか絢爛けんらんツ!!!」

黒ではなく、真つ白に染まった拳がふらつく青キジの顔面を捉えて上空へと殴り飛ばした。

その際に辺りへ飛び散った覇気の残滓が、まるで桜の花びらの様にヒラヒラと空を漂う。

間違いなくモロに入った……! 鎧の無い顔を狙って、100倍の、しかも火力の高い技を倒す気で放った王華の一撃はここから見ているだけでもかなりダメージが入ったのが分かるほどだ。

「後は任せたよ……イリス!!!」

「うん、ありがとう王華……! 今度はもつと長く出してあげてから!!」

王華が私に戻ったのを確認して、青キジを追って跳躍し、腹に両手を絡め合わせたハンマーの一撃を与えて体をくの字に曲げさせて地面へと落とす。

落ちた青キジはその瞬間に受け身を取って起き上がり、追撃した私とぶつかり合った。

「さっきの奴ア、ありやなんだ」

「私の相方だよ、色んな意味でね!!」

私が右手で殴れば青キジは左手で受け止め、逆に青キジが右手で殴ってくるのを左手で受け止める。

まるで押し合いみたいたいになって、その時の余波だけで大地が震え上がっていた。

同じタイミングで手を離して後ろに飛び、お互いに姿を消したと錯覚させる程の速さでぶつかり合う。

そこかしこで私達がぶつかった音の衝突音が響き渡り、その場所には氷のクレーターが出来上がっていく。

王華のおかげで青キジの動きが鈍ってるから、さっきより私の攻撃も奴に通ってるって分かる…!!

「どうしたの？随分軽い拳だね!!」

「あー、小娘にはこんくらいで丁度いいだろ!」

口ではそう言っているが、青キジにかなりのダメージが入っているのは明らかだ。攻撃の威力があらさまに落ちてるからね。

今のままじゃ、例えば私が100の倍加を使えようが覇気を使えようが…青キジには勝てなかった。だから王華の作ってくれたこのチャンス、絶対に無駄にはしない！

「…とはいえ、このままじゃジリ貧か」

互いが互いに決定打を与えられないこの状況では、王華に1発貫つた青キジの様にその「1発」が命取りになる。

だから私は奴に攻撃を貰うわけには行かないし、だけど私の攻撃は当てなくちゃいけないって訳だ。

アイス・ボックス  
「氷箱」

「ツー」

私の周りの大地が急に変形して私を閉じ込めてきた。

そんな遠隔操作みたいなの出来るの!? だってこの氷つて青キジが直接生み出したわけじゃないのに…いや、そんな先入観のせいで今捕まってるんだから、まずは追撃を貰わない様に一刻も早くここから脱出しないと！

「こんな箱、すぐに壊してやる!」  
ひやくばいばい  
「100倍灰——」

「——アイス・ランス  
氷 槍 ツ!!!」

「がッ……、ツえ!!?」

暗くてよく見えないから、アラバスタで1度使用した暗闇耐性を倍加。確か暗順応が



どうか…今はどうでもいいか…っ！

そんな事より、どうして青キジが箱の中に…!?

「いっ…っう…ッ」

青キジの突き出した1本の氷槍が、私の左脇腹を抉り取る様に貫通している。ヤバイ…血が尋常じゃない程出てる…!

奴から攻撃を受けられないって言った側からノックアウトレベルのダメージを貰ってしまった…ッ。

「俺は氷が繋がっていれば…何処だろうと一瞬間の間に移動できる」

「ぐっ…!」

青キジに蹴り飛ばされ、氷の箱をぶち抜いて外に転がった。

青キジの生み出す氷は、覇気で強化されているのもあるだろうけど…私のアーマーを軽々と突破してダメージを与えてくる…。

治癒能力を倍加したいけど、そんな隙を与えてくれる程奴は優しくない筈だ。

…くそ、どうすれば…っ！

「…っ」

ちらりとナミさん達の方を見た。見た理由は、激しさ極まる痛みを少しでもみんなの可愛さで和らげる為だったけど…みんなは私をじっと見ていた。

ロピンはいつものように、否、いつもより真剣な表情で。

ミキータは瞳に涙を蓄えながらも、決して私の元に来たりはせずに。

ナミさんは歯を食いしばって、血が出る程に拳を握りしめて。

「……ただ、私が勝利する事だけを信じている。」

「……そうだったね」

みんなだけじゃない：王華が繋いでくれたこの戦いで、高々槍で小突かれた程度で地を這つてる様じゃ：私は、情けなくてみんなに顔向け出来ない：!!!

倒れる私にまたも氷を伝い一瞬で移動してきた青キジが、その腕を槍に変えて振り下ろした。

当たれば死ぬしかない、今度は脇腹に穴が空くだけじゃ済まないのくらい見れば分かる。

「……だけど、私は今その攻撃を待ってたんだよ!!」

「う、おおおおおッ!!!」

「何……っ!?!」

ガシ!と右手で私の眼前まで迫っていた槍を掴んだ。力んだ為に更に血が吹き出してきたが、構わず無理矢理に掴んだ槍を動かして私の脇腹に当てる。

「うっ……く、……!」

形容し難い痛みが私を襲って、たまらず顔を顰めた。

槍が触れた箇所は徐々に氷で覆われていき、抉り取られていた肉を補填するかのよう  
に氷がそこに詰め込まれる。

…あー、痛い、すんごく痛いね。

だけど、

「私は、負けないよ…ッ!!止血協力ありがとねッ!!」

思い切り青キジを蹴って飛ばした。

この程度の擦り傷で、私は負ける訳には行かない…!

私が負ける時は…夢を諦める時は!

「死ぬ時でいい!!はあああッ!!」

「化け物が…!」

再びぶつかり合って、何個目か分からないクレーターを地に空けた。

私と青キジはお互い直ぐに距離を取って構える。

「…ハア…ハア…つ、…ごめん、そろそろ終わりにするよ」

「そうか…、…フウ…俺も、そろそろだ」

この戦いの中で、私はナミさん達への感謝と同時に青キジにも感謝を抱いていた。

きつと他の大将ならこうは行かなかった。私の前に現れたのが彼だったから…私は

今ここに立っているんだと思う。

問答無用で私を消そうとする訳でもなく、むしろ海賊である私の願いを聞き入れてナミさん達を見逃そうとしてくれた。そんな青キジとの戦いは…正直、ちよつと楽しかったんだ。

こんな状況なのに何を思っているのか自分でも理解が出来ないけど…私は、目の前で対峙しているのが青キジで良かったって心から思ってる。

だから、少し…名残惜しいけど、

「……ひやくばいばい  
100倍灰」

「アイスランス デュオ  
氷 槍・二重奏」

私の今出せる、最強の技で決める…!!

奴も終わらせる気満々のようで、1つで、しかも掠っただけであの威力の技を両手で発動…だけならまだしも、去羅波を相殺した時みたいに高速で回転していた。

「…ふっ!!」

だけど、そんなので臆してられない!!

自身の体に霸王色を纏わせて、四肢を武装色で覆って黒に変色させた。王華がやってみせた白色の武装色は私にはまだ無理だから…これが今の全力だ。

私も青キジも、まるで打ち合わせでもしたかのように完璧に同じタイミングで走り出

した。

自身の最強の技をもって、目の前の好敵手を打ち倒す為に。

「氷廻獄!!!」  
コキユートス

「女王の……っ!!瞬焉たる別れええええ!!!」  
クワイン エンデイスタンテ

今までとは比べ物にならない爆発音を響かせて私と青キジはぶつかった。

霸王色で倒れていない海軍の実力者達も、そしてナミさん達も、攻撃の余波だけで吹き飛ばされそうになる体を必死に何かを掴んで堪える。

ここに居る全員は理解していた。

この戦いは…これで終わるのだと。

「……はあ、はあ……っ」

青キジと全力の攻撃をぶつけ合い、今は背中を向け合うように立っている。

私の両腕と両足は、見事なまでに氷で包まれおり、かつ体が限界を迎えたのだろう…変化も元に戻り私の見た目は元の幼児体型になっていた。

つまりそれは、能力が使用できなくなったのを意味する

「…見事だな、イリス。俺ア…ここまで追い詰められたのは久し振りだ。最後の俺の攻撃も、お前は全力をもつてして弾き返した」

「……」

くると青キジに向き直って、崩れるように尻餅をつく。

奴はそんな私の近くにゆっくりと、悠然とした態度で歩いてきた。

「今の能力が切れたお前なら、簡単に連行出来るだろう。もう一度海楼石の手錠を掛け直し…今度こそ確実に本部へ連れて行く。それが俺の出来る唯一の手向だ。…最後まで手を抜かないっていうな」

私は、そんな青キジの言葉を聞いて「……………」

「……………」『笑った』

「ふふ…はは、もう笑う元気も残ってないっていうのに、笑わせてくれるね。青キジ」

「…何を笑っている」

「何を？…ふふ、だつてさ…最後まで手を抜かないのが私への手向なら…  
う勝った気であるの？」

「!!……………ぐ…っは…ッ」

私の言葉に青キジが目を見開いた瞬間だった、それが起きたのは。

なんでも

突然、青キジの腹部の鎧にとつてもない衝撃が走ったと思えば、そこが拳型に凹んでいたのだ。

「…な、に!?!」

口から出る血を拭う為に腕を上げれば、今度はその腕が弾かれる。その腕には、まるで蹴られたかのような形で痕がついていた。

「これ、は……ッ!?!がっ!?!…な、つぐつ!?!…ふっ!!」

続いて足、背中、頭、腰…奴の体には次々と衝撃が襲いかかり、その全てに拳や蹴りの痕がついている。

「…私は、まだまだみんなと一緒に航海するよ、青キジ。例えば私が異質イレギュラーだとしても…みんなの中で私が必要な存在なのなら、私はこの世界で生きてもいいって言ってくれるのなら…どんなに大きな障害だろうと乗り越えてみせる」

次第に青キジを襲う衝撃は速度も威力も増して行く。

一撃一撃も決して軽くはなく、青キジの顔に焦りが現れた。…だけど、もう遅い。

「その拳は、脚は、私から貴方への最高の贈り物だよ。ただし、返品は受け付けられないからね」

「がふっ…はア!!い、イリス…ぐっア!お、お前は…ッが…どこまで…ぐふ…ッ!」

ドドドドツ!!と攻撃の雨は降り注ぎ、最後に1発、最も強烈なのが奴の顔面に炸裂し

て……そして……青キジは倒れた。

「……最後の最後で情けを掛けたのが、あなたの敗因だね。だけど……ありがとう、私はあなたを尊敬するよ」

「……気付いてたか。……、正義なんてのは、立場によつて形を変える。俺ア海軍大将だが……お前の正義に魅せられちまった……出来ればまた、会いてエ……もんだ……。……」

「……ふふ、私はもうお腹いっぱいかな、大将なんて」

瞬<sup>エンデイスタンデ</sup>焉たる別れの正体は、恐ろしい程までの高速連撃。

受けた敵は攻撃を受けた事にすら気付かず、そして気付いた頃にはもう遅い。

だけどその攻撃を青キジに当てる事が出来たのは、最後の最後で奴が私への攻撃の手を緩めたからだ。そうじゃなきゃ奴の攻撃の方が先に私に当たつてたと思う。

……癪だけど、私は今回……全力を出しても青キジには勝てなかった。能力だけが一丁前に強くなって、私自身の強さが全然足りていないんだ。

私のもつと……もつと……！強くならなくちゃいけない！嫁を守る為に……誰よりも強く！

「……あー！」

青キジの意識が無くなったからか、奴が生み出した氷は全て溶けた。無理矢理止血し



ていた脇腹からは血が吹き出るし…そして何より…。

「しまった…海に落ちる…！」

氷の大地だつて水になつたのだ。ただでさえ能力の使えない今…大ピンチだつた。

…ああ、でも…大丈夫か。

ポ…つと、海の底へ沈みながら思う。

…絶対、ナミさん達が助けてくれるから。

だから私は…大丈夫。

## 93 『女好き、雪降る思い出、最高の海賊船』

「……ん、んん……っ」

「あ」

「……な、みさん……？ミキータ、ロビン……みんなも……」

「こ、こは……？船の、上……？」

目を覚ますと、覚悟はしていたけれど全く動かない体、そして頭の下にある幸せな感触に目をぼちくりとさせる。

……ていうか、この船……分からない筈がない、もしかしなくてもメリー号だよね……？

「……メリー……？どうして……」

「あんたが良く分かんない力で海兵達を眠らせてくれたから、後は脱出する方法だけって所でメリーが来てくれたのよ。船内のどこを探しても誰もいないのに……。……それよりあんた、体大丈夫？チョコッパーが出来る限りの治療をしてくれたけど……相当酷い状態よ」

「あー……確かに脇腹がすんごく痛いですが、でも大丈夫だよ、能力が使えるようになったらすぐ回復するから」

…メリーが来てくれた、か…。

私の頭の中に、空島で見た影が浮かんでくる。

…そつか。やつぱり…あれはメリーだったんだね。

「ウソツプも、戻ってきてくれる気になったの？」

「う、ウソツプ？ 私はウソツプでは無くそげキング…安心したまえ、彼ならさつき小舟で先に帰ったとも」

「ふーん…」

そんな意地張らなくてもいいじゃん…ロビンを助けるのに一役買ってくれたんでしょ？ 私だつてあの時ウソツプに声かけて貰つて嬉しかつたのにな。

「…それにしても赤…いえ、イリス、まさか青キジを倒しちゃうなんて、驚いたわ、とても」

「あア、そりや俺もだイリスちゃん。なんだいあの変化は」

「それに、この世界の住人じゃない、だったか。言いたかねエなら別に構わねエが、流石に俺も気になる」

「あはは…うん、もうみんなには隠すのやめるよ。全部話すから」

前世の記憶は王華関係以外全て忘れて元に戻つちやつたから、未来が分かるようになってないんだけど。

それでももう、みんなに私の生まれを伏せておくのも…何より私が嫌だった。

「実は……」

「ん？前から船が来るぞ！」

「ちよつとルフィ、今からイリスの話の聞くんだからそんな事はどうでも……って、あれは、ガレーラカンパニーの船？」

ふぐぐ…と全力で首を動かして前を見れば、確かに帆に「ガレーラカンパニー」と書いてある船が近付いてきていた。

「うおー！麦わら達だ!!」

「生きてるぞ〜〜!!」

「アイスのおっさん!!」

アイスバーグも居るのか。

…ああダメだ、アイスって聞いたらもう青キジしか頭に浮かんでこない…。

確かにあの戦いは楽しかったけど、同時に今までで一番命懸けだったから…何というかトラウマ物だよ。出来れば青キジの顔は一生見たくないです。フラグじゃないから！

「うわ…!」

「メリー!?!」

その時、突然メリー号が：嫌な音を立てて前後で割れ、前方に傾いた。

傾いてしまったメリー号の甲板上にいた私が滑り落ちないように、ナミさんは慌てて私を抱き抱える。

「おい、何だ！どうしたんだ急に!!」

「急にも何も……これが当然なんじゃねエのか！メリーはもう2度と走れねエと断定されてた船だ、忘れた訳じゃねエだろ」

サンジの言葉にルフィはたじろぐ。

走れないと言われても、この船は……メリーは、私達を助ける為にエニエス・ロビーまで来てくれた。

そんなメリーを前にしてルフィが落ち着いていられる訳もない。

「おっさん！やべエ！メリーがやべエよ!!何とかしてくれ!!お前ら……丁度良かった、みんな船大工だろ！頼むから何とかしてくれよ！ずっと一緒に旅してきた仲間なんだよ！さつきもこいつに救われたばかりだ!!」

だけど……アイスバーグは首を振る。

それは彼が船大工だから、その船はもう走れないから直せない、と言っているのではなかった。

「だったらもう、眠らせてやれ……既にやれるだけの手は尽くした……。俺は今……奇跡を

見てる。もう、限界なんかとうに越えてる船の奇跡を」

「……………!!」

「……………長年船大工をやってるが…俺はこんなに凄い海賊船を見た事がない。見事な生き様だった」

「……………イリス」

ルフィが横目で私に確認を取ってくる。

もう…分かってるよ、そんな目で見なくたって…ルフィが、人だろうと船だろうと、その心を踏みじめる様な人じゃないって事は…ここに居る全員が知ってる。

…だから、

「…お願いね、ルフィ」

軽く頷いて返事をした。

ごめんね…ルフィ。1番辛い役を押し付けちゃって…。

私達はメリーを降りて、小舟に集まった。

いつものメンバーの中に、何故かココロさんとチムニー、それからゴンベも居る。勿論、フランキーも。

「じゃ、いいか?みんな」

木の棒に火を付けたルフィが、覚悟の籠もった声で聞いてくるのを全員で頷いた。

「…メリー、海底は暗くて、淋しいからな。おれ達が見届ける」

ルフィはそう言つてメリーに火を付けた。

パチ…パチ…と音を鳴らして、火の手は一気にメリーを包み込む。

「ウソツプは…いなくて良かったかもな…。あいつがこんなの、耐えられる訳がねエ…」

「…だつてさ、そげキング…どうなの？」

「そんな事、ないさ…。決別の時は来る、男の別れだ。涙の1つもあつてはいけない…彼にも覚悟は出来てる」

…そつか。

なら、メリー号も心残りなく眠れるね…。

「長い間…おれ達を乗せてくれてありがとう、メリー号」

ぼつ、と私の頬に何かが落ちる感触がした。

視線を上に向ければ、雪が降ってきたようだ。

「……メリー」

『よし！完成つ!!これで海賊船ゴーイング・メリー号の出来上がりだ!』

『おー』

「……」  
『お、オイ待てイリス、これお前が修理したのか……?』

『うん! メリー号には未長く、私達を連れて行つて貰いたいからっ!』

『うぐ…そんな目をされると言うに言えねエ…』

「……」

『すげエ、船が空を飛んだ!!』

『行けーっ!! メリ〜っ!!』

「……」

『今日は良い天気だね〜。寝ちやいそう…時間が来たら起こしてね、メリー』

『いや起こせるか!』

「……っ」

ポロ…と涙が溢れる。

今まで苦楽を共にしてきたメリーとの思い出が、航海の日々が…降る雪の様に止む事なく頭の中で巡って…。

(…ごめんね)

「…え」



（「……もつとみんなを遠くまで、運んであげたかった……。……ごめんね、ずっと一緒に、冒険したかった）」

あの時の……声だ。

空島で出会った、影の声。……メリーの、声。

私だけじゃない、みんなにも……ガレーラカンパニーの人にも、この場にいる全員にその声は届く。

（だけど、ぼくは）

「ごめんっつーなら!!おれ達の方だぞメリー!!おれ、舵へただからよー!!お前を氷山にぶつげだりよー!帆も破った事あるしよー!!ゾロもサンジもアホだがら色んなモン壊すしよ!!そのたんびウソツプが直すんだけど、へたくソでよオ!!イリスさんが……つ、おれよりへたなクセに直したがるしよオ!!ごめんっつーなら……」

（だけどぼくは、幸せだった）

「……っ」

私を抱くナミさんの涙が、ポロポロと私の頬に落ちて私の涙と混ざり伝う。

ルフィの言葉を遮って、メリーは自分の想いを伝えてきたんだ。

……自分は一方的に謝っておいて、私達には謝罪すらさせてくれないなんて……この船は、本当に……なんて、なんて気高い……っ。

(今まで大切にしてくれて、どうもありがとう。ぼくは、本当に………幸せだった)

「……っ……メリ………!!!」

ルフィの叫びが海に轟く。私達の気持ちも、感謝も、全てをその声に乗せて………メリーへと届けた。

あなたは立派な海賊船………未来の海賊王が、女王が乗った………初めての海賊船なんだ!

………今まで、ありがとう。次に会う時はきつと………沢山の武勇伝を携えて行くから。だから今だけは………おやすみ。ありがとう………メリー。

\*\*\*

「………ん」

メリー号の最期を見届けた私は、その瞬間にぷつりと糸が切れた様に眠った。

………んだけど、何故か今真つ暗闇の空間に居る。

………ここは、アレだね。王華部屋だよ。

「お疲れ様、イリス。………メリー号と………別れたんだね」

「…王華。 ……うん」

ぱつと目の前に現れたのは、やっぱり王華だった。

彼女も残念そうに顔を陰らせて、でも直ぐに表情を切り替えて私を見据えた。

「私はね、イリス。これから起こる大体の出来事を知ってる。…例えば、メリー号の事だつて最初からあなたに伝えておけばこんな結末にはならなかつたつて言えるよ」

「…ふふ、気を使ってくれてありがとう。だけど…いいよ、未来を教えなくても」

「！」

王華は驚いた様子をみ開かせた。分かるよ、あなたの言いたい事くらい。それに…私は絶対にそれを聞いた方が良いと思う。

…だけど、それじゃあダメなんだ。

「私はこの世界の人だからね。その知識を得ちやつたら…なんていうか、ズルじゃん。今でも大概ズルしてるのにさ、2度目の人生なんて」

「…はは、まあ、そういうかな、とは思っていたけど…でもやっぱり面と向かって言われるとビックリするよ。私なら絶対に根掘り葉掘り聞くのに」

「だけど…私が聞いたら教えてね？そのくらいのはズルは許してくれるでしょ、私は女王になるんだから…世界も、私の都合の良い様に動いて貰わなくちゃ」

「うわあ、ナミさん達に言つてやる」

「やめて下さいお願いします私が悪かったですごめんなさい!!!」

ズザー!と土下座をすれば王華は腹を抱えて笑った。

く、くそう…怖い事を言ってくれる…!

「…でも、今私をわざわざ呼び出したって事は…この先、未来で何か起きるって事だよね? それこそ私に教えたい程の何かが」

「実は…そうなの。…聞く?」

「言つたでしよ、私が聞いたなら教えてねって」

私は少し冗談っぽく口にしたが、王華は逆に表情を硬くした。

…それ程の何かが、あるっていうのか。

「……まだ少し時期は先だけど、エースが死ぬ」

「……え?」

エース…って…ちよつと待つてよ、それつてまさか…ルフィの兄の名じゃ…!!

「死因は別に病気でも何でもない…戦争で命を落とすの。事情さえ知つてれば助けられる!」

「…なるほど、そういう事ね」

それなら、私がこの世界に来た時に授かった王華ポーナスを遠慮なく使わせて貰うでしょう。

：ONE PIECEでエースは死ぬ。ということはそれはつまり、身も蓋もない言  
い方をすれば恐らく：『ルフィの成長イベント』だ。

兄の死を乗り越え、肉体だけじゃなく心も成長する。ああ、成る程、確かにONE  
PIECE、何て良く出来た『世界』だろうか。

でも、敢えて言わせて貰おう。

ここは、『私の世界』だ。

「ONE PIECEならこうなったとか、くだらないよね、王華」

「はは、確かにそうだね！ここはもう私の知ってる世界じゃないんだもんね！」

ルフィは、恩人だ。当時はナミさん以上に素性の分からない私を一味に迎えてくれた  
し、さっきの事もあつた。

…助けてあげたい。

「じゃあどうする？どうやって助けたらいいの？」

「うーん…そこなんだけど、エースが死ぬ事でルフィは確かに精神的にもかなり成長す  
るんだよね。…うん、あの戦争にはあの人も居た筈…上手く利用しようかな」

うわあ…悪い顔してるなあ…。

「作戦は思い付いたよ。とりあえずイリスはこのままみんなと冒険してて。ああ、それ  
からくまに頼んでルフィと一緒に女ヶ島に飛ばしてもらってね」

「はい？クマ？女ヶ島??作戦って??？」

「作戦は戦争が始まる直前くらいに教えるよ。今教えても早すぎるからね」

「いやあの、クマってのと女ヶ島は…」

「それは一味と冒険してれば分かるよ。…あ、それとくまに頼むのはスリラーパークじゃなくてシャボンディだからね！間違っちゃダメだよ」

何なのこの人！そんな専門用語並べられても分かりません!!このオタクめ!!  
と…そこで私の意識は途切れた。

無理矢理追い出したなあ…王華めく…!

…せっかくなんだから、もつとゆっくり話ししたっていいじゃん…もう。

\*\*\*

海軍本部

「………は？今、なんと言った…?」

「は、ハッ！え、エニエス・ロビーにて罪人、『ニコ・ロビン』と『女好きのイリス』を

連行中、我々の拘束から抜け出した女好きを大将青キジが捕らえようとして……失敗！敗北致しました!!」

「……何だと」

海軍本部の上層、その中に位置する執務室で『センゴク』は我が耳を疑う報告を受けた。

「クザン」……海賊や世間一般からは三大将の1人……青キジの異名で呼ばれている男の名だ。

元帥という立場のセンゴクではあるが、もし自分が立場を退くような事があれば、その後継には彼を推薦しようとの心の内で密かに思っている程にはクザンを一目置いていない。

(……しかも相手は『女好きのイリス』などというではないか……！)

その名はセンゴクも耳にしている。近頃、よく世間を騒がせている麦わらの一味の1人だった筈だ。

懸賞金までは把握していないが、クザンがやられる様な脅威ではなかった筈であり、そもそも彼がやられると言うことはその『女好き』が王下七武海……最悪の場合は四皇クラスの实力者であるかもしれないという事だ。

ただでさえ苦勞の絶えない元帥という立場で、どうしてこんな訳の分からない報告を

受けなければならぬのか、と現実逃避しかけた脳内をリセットしてセンゴクは机を挟んで対面する伝令役を見据えた。

「青キジはどうしている?」

「大将殿は現在、医務室にて療養中です。先程目を覚まされまして事情を聞き、伝令を承った次第です」

「…なるほど、つまりその程度の事しか伝令に伝えなかつたという事は、私に医務室まで来てくれ、という事か。全く…仮にも元帥を顎で使う様なマネをするとは…」

そう口にはしながらも、大して嫌そうには見えないセンゴクはゆるりと立ち上がり、伝令役の肩を「ご苦労だったな」と叩いて部屋を出た。

そして医務室へと辿り着いたセンゴクは、今度は自分の目を疑う事になる。

確かに報告ではクザンが敗れたと聞いてはいたが…心のどこかではクザンが手を抜いたか、またはいつもの気紛れで彼から戦闘放棄をしたかだと思っていたからだ。

…だと言うのに、目の前のクザンの容態はどうだ?

全身を包帯でぐるぐる巻きにされ、もはや傷が無いところを探す方が困難な程のこれ  
は…。

「ああ、センゴクさん。すみませんね、しくじりまして」



「…お前程の奴が、〃しくじる〃とはな。…して、相手は本当にあの『女好き』なのか…?」  
「間違い無く、本人。この目で確かに見てきましたよ、奴の底知れない器を」

クザンの言葉や実際の容態から、冗談ではない事はすぐに分かった。

本当にあの『女好き』が、海軍大将の一人であるクザンを倒したのだ。

センゴクはその事実を認識した途端、ヒユ…と息が詰まりそうになった。

「俺が見てきた女好きを話しましょうか。…長くなりますが」

「…勿論、それは聞こう。だがクザン…これだけは教えろ。お前は本当に全力でやったのか?」

「………ええ、勿論です」

センゴクは、キリキリと痛む胃を堪えて心の中で頭を抱える。

クザンの反応からして全力を出したというのは嘘だ。…だが、やられたのは事実。そもそも、クザンは多方向から物事を見れる男だ。今回の件でニコ・ロビンを見逃す事はあつても…ただの海賊に情けをかけて見逃すとは思えなかった。

だけど現実として目の前には傷だらけの部下がベッドで横たわっている。この矛盾はなんだ…『女好きのイリス』は、なんなんだ…?

そしてそう思うセンゴクの疑問の中で1つ誤りがある。

クザンは確かに最後の最後に情けをかけた。自身の攻撃を当てず、わざとイリスの攻

撃をその身に受けた。

だが誤算だったのはここからだ。攻撃を受ける所まではいい。だが…その攻撃で意識を失うとは思ってもみなかったのだ。

本気ではなかったが、手を抜いたつもりなど無いのだ。矛盾しているが確かにクザンはイリスを捕まえる気で居た。…ただ、殺す手に躊躇いが生まれただけの事。

そんな躊躇いを逃さずにイリスがクザンを下した…と、言葉に表せばこういう事ではあるが、実はあの時もう一つの誤算があった。

あの瞬間…本人も周りに居た誰一人としても気付いてはいなかった事。否、気付く筈がなかった。

「……バイバイの実」の真の能力が、薄らと顔を出していたという事実。

時代は常に移ろい流れ行く。人の興味も、流行も、…そして、恐れられる人物も。

センゴクは長年の経験から直感で感じ取っていた。

…『女好きのイリス』…コイツは…この世界をひっくり返す事が出来るだけの器足りうる存在となる。

…だが、その事実をそのまま世間に知らせる訳にも行かない。

クザンが敗北したなどと世間に知れ渡れば、それこそ海軍本部の信頼、果ては市民の不安に繋がるからだ。

さて、どうしたものか…。とセンゴクは心の中で泣いた。

元帥の未来は暗い。もういつそ誰かに押し付けて隠居したい…。

はあ、とため息一つ吐いて、クザンの言葉に耳を傾けたのだった。

## 94 『女好き、曲者モンキー家族』

「あー…体が痛いよー…」

「当たり前でしょ、外傷はあんたの能力で消えてるけど、どう考えたってあの戦いの疲れが1日2日で取れる訳ないじゃない！」

「うあー…」

青キジを下し…そして、メリーの最期を見届けた日から2日が経過していた。

ついさつき目を覚ました私は、能力が使えるのを確認してすぐに体の治療を行いほと一息ついた所にナミさんとミキータ、そしてロビンが部屋へ飛び込んできた訳だ。

ちなみにここはガレーラカンパニーの仮設本社、特別海賊ハウスとかいうちっちゃな小屋のような家である。

「キャハ！イリスちゃん、お疲れの様なら私のおっぱいでも揉んで落ち着く？」

「あはは、もうミキータったら、あんまりイリスをからかっちゃダメじゃ…」

「そうだよ、まったく…自分で言うのもなんだけど私ってヘタレなんだから！」

ぼよん。

「……へあ？」

「…ん?」

ミキータの口から聞いたことのない様な声が漏れて、ふと彼女の顔を見れば物凄く真っ赤に染まっていた。

え? え? 何その反応…新鮮なんだけど。

……………ていうか私、何してるの!!?

「い、いいいいイリス!? あ、ああんたまだ寝ぼけてるんでしょ! ええそうよ、そうに違いないわ…じゃないとあんたからそんな大胆な事出来るはずがない!! あんた、イリスじゃないわね!!」

「ええ!? イリスだよ! でもなんで!? わ、私の手が勝手に…!!」

…つて、勝手にな訳あるかー!

私は今…触りたいとは思ったけど理性が止めたんだよね、ヘタレだから! …ヘタレだから!!!

だけど…うん、よくよく考えれば今まで私のこういう本能をすんでの所で止めていたのは私の罪悪感だったから…。

「さてはあんた…頭がおかしくなっちゃったんじゃ…!! そうだ、ちよつと私のも触ってみなさい!」

「お、落ち着いてナミさん。これには事情が…」

「戻りましたよナミすわあん達!! イリスちゃんの具合はどう……つてもう目を覚ましてるのか、良かった」

「良かったじゃないわよサンジ君! 見てこのイリスの手、ミキータの胸を自分から揉んでるの」

「……くウ、羨ましいぜイリスちゃん!」

おつと、ナミさんの額に青筋が浮かびましたね。だけど本当にこれには事情があるから……。

「も、もともとみんなにそういう目的で触れなかったのは、その……多分、無意識に私はこの世界の異物だから……って思ってたからだ……はい、思います……」

「異物?……イリスがあの時言っていた話ね、興味深いわ。考古学者としてじゃなくて、一人の女としてね。……私のはどう?」

「ロビン……! そ、それは置いといて、まあ、その辺の話はみんなが集まってからでどうかな。凄く非現実的な内容にはなるけど……」

「きや……ハハッ! イリスちゃんの話は、何であれ私の現実よ! 気にしないで!」  
復活したと同時にズイ、と身を寄せてくるミキータ。

何だか開き直ってるのか、近寄ってきた事で挿んでいる胸に更に手が沈んで幸せです。はい。

：いやでも、私の心の中にあつた無意識のストッパーが無くなつたからかそういう欲求がとんでもない。

特に今はすんごい密着してるミキータ：色んなところが当たつてヤバい。何がヤバいつてもう全部ヤバい。

こ、堪える私〜！というか今まで私は良くこんな誘惑に自分から拒否する事が出来たなく！！：いやよくよく考えたら出来てなかつた時もあつたなく！！

でも今は場所も場所だし：何とか堪えて、私達はみんなの帰りを待った。ルフィは何故かテーブル席に座りながら寝てるけど。

\*\*\*

ルフィが座りながら寝てた理由はすぐに分かつた。

サンジが料理をテーブルに並べた瞬間にバクバクと食べ始めたからだ。

寝ながら食うつて：凄すぎ！

私達もサンジからパスタが乗つた皿を受け取り、ぱくりと一口。：う、うまあい！

サンジの得意分野である魚介類を使ったパスタ…美味くない訳がない!

「ふふ、でも本当に良かったわ、イリスが連れてかれなくて」

「もぐもぐ…、私もそうだけど、ロビンも良かった。…それにミキータ…あの空飛んでたの何?」

「ああ…あれはウソップが作ってくれた私の新装備ね。空島でも言ってたでしょう?」  
あ、あれか。

「私の能力を使って、<sup>ダイアル</sup>貝で空を飛ぶのよ」

「へえ、カッコいいし、綺麗だね! 蝶みたい!」

「…うっ、ナミちゃん…ロビン…後は任せたわ…私はここまでみたい…」

「何を任せるのよ…」

ナミさんが呆れ顔を浮かべたその時、部屋にココロさんとチムニー、ゴンベが入ってきた。

寝ながら食べてるルフィに驚いてる。誰でもそういう反応になるよねやっぱり。

「何はともあれ、元気になったようで何よりら! ログポースの記録はあと2、3日で貯まるらろ! これからどうすんらい」

「…あ、そういうえばナミさん、奪われてない残りの2億ベリーは…」

そういうとナミさんはハツとしたような顔を浮かべた。



「しまった…：そうよ、2億ベリー…：服も家具も、ベルメールさんのみかんの木もみんなア  
クア・ラグナに持ってかれちやっただわ…：どうしよう…：」

ああ…：そつか…。ベルメールさんの木も…。

あの木はナミさんが毎日大切に手入れして、恋の警備がどうかうとか言つてたサンジ  
に守らせてたくらいには大事な『思い出』なのに…。

裏町の宿に全部預けてたから、波に飲み込まれてるのは確かか…。私も良くナミさん  
と一緒に手入れしてたから何だか悲しいな…：ナミさんはもつと悲しいだろうし…。

「じゃあ、表の客はそれかねエ」

「客？」

サンジが首を傾げてドアを開けると、そこにはなんと、みかんの木や私達のお金を入  
れていたアタツシケース、その他諸々の荷物を持つて街の人達が来ていたのだ。

「え、うそ！みかんの木!!？」

「ナミさん！やっただね!!」

いえーい！とナミさんとハイタッチ。

なんたつてあの木はお金で買えないから、何より大事な物だよね！

「でもどうして？確かに宿に置いてきたわよ」

ミキータが顎に手を添えると、街の人が説明してくれた。

「どうやら、私達の事をアイスバーグ襲撃の犯人だと思つて追いかけて回してた時に宿屋の方にも来てたらしい。」

「で、海賊の持ち物だつて事で全部没収してたとか。」

「賞金首が数人いる海賊団の荷物を没収つて…別に何もしいけど肝座つてるなあ。今回はそれに助けられたんだけど。」

「そうこうしている内にチョッパーが帰つてきた。ケガしてたフランキー一家を診てきたらしい。」

「…みんなに聞きたかつたんだけど、何でフランキー一家と仲良くなつてるの?」

「ああ…それはもう色々あつたのよ、彼らにも彼らなりの信念があつたつていうか…」

「信念か…。その信念があれば、あの時のようにウソップを貶し、嗤い、辱めるのも仕方がないのか?」

「…うーん…色々と釈然としないけど、まあ良いだろう。そげキングがフランキーと特に何もなくて一緒に行動してたくらいだから…私では計り知れない友情を築く何かがあつたのだと思つておこう。」

「アウツ! スーパーか!?! おめエら!…全員…は揃つてねエか! まあいい!」

「そんな話をしてるとフランキーがやってきた。噂をすれば何とやら…だね。」

「どつたの？」

「おめエらに話がある！聞けっ!!」

どすん、とフランキーは入ってきて早々地べたに座り込んで話し出す。

うーん……よく見れば変な見た目だ。腕もめっちゃ太いし、本当に人間？

「……ある戦争を繰り返す島に……例え島に住む人間が砲弾の降り注ぐ戦争を始めようが、島中の人間が死に、街が死に、廃墟と化そうが……ものともせず立ち続ける巨大な樹がある」

「?なに、つまらない話なら……」

「うるせー黙って聞け!……何が起きても倒れねエ。人はまたその樹に寄り添い街を……国を作る。世界にたった数本……その最強の樹の名は……宝樹 “アダム”」

アダム? そりやまた大層な名前の木もあるもんだよ。そのアダムって名前の由来が、私の想像する全人類の父と同じかどうかはさておき。

「その樹の一部が、極稀に裏のルートで売りに出される事がある。俺アそいつが欲しいんだが、2億近くもするって代物で手が出さずにいた。ーと、そこへ現れたのが大金抱えた海賊達……お前らだ」

「てんめエ!!俺達のお金でそんなもん買いやがったんじゃねエだろうな!!」

「まだ聞け!話を!!……俺は昔、もう2度と船は造らねエと決めた事がある。だが、やはり

目標とする人に追いつきたくて、気が付きや船の図面を引いてた……」

……宝樹アダムに、フランキー……。

……もしかしてフランキーって、麦わらの一味の船大工なんじゃ……!!

何か正解って胸の奥が確信してるし、確信してるって事は王華が否定してないって事……だよな。

まじか……フランキーだったのかあ。

「俺の夢は……その「宝樹」でもう一度だけ、どんな海でも乗り越えて行く「夢の船」を造り上げる事なんだ!! 「宝樹」は手に入れた! 図面ももうある、これからその船を造る!! だから、完成したらお前ら……俺の造ったその船に乗ってつてくれねエか!!?」

「え、いいの? 確かに宝樹アダム代はうち持ちだけど、造船にあたっての人件費は一切出さないよ」

「構わねエ! 俺の気に入った奴らに乗って貰えるんなら、こんなに幸せな事はねエ……元金はそこの怪物級に強エ嬢ちゃんの言う通りおめエらから貰った様なもんだしな。……この海で、唯一世界一周を果たしたゴールド・ロジャーの「オーロ・ジャクソン号」もその樹を使って造られた。すげエ船にしてみせる」

おお……! ちよつと嫌味半分で言ったのに、何の躊躇いもなく承諾しちゃったよ!

確かに……みんなが仲良くなるのも分かるかも……フランキーって、熱い男だね。

「良かったね、みんな！荷物は全部帰ってきたし、船も手に入る！いやー、フランキーのお陰だよー。ごめんね、意地の悪い事言っちゃって」

「気にすんな、俺がお前らの仲間に手を出したのも事実：そう簡単に割り切れるとは思っちゃいねエ」

さつきも思ってたけど、そげキング：もといウソツプが彼と行動を共にしてたんだからもう私が気にする必要もないよね。私自身も彼の人となりを見てみんなが気に入った理由も分かったし。

「…ま、この話はもうお互い水に流そうよー」ちそうさま、サンジ」

空になった皿をサンジに渡して、じゃあゾロが来るまで適当に今後の話でもしようかという流れになった時、いきなり家の壁が外側から何らかの衝撃で破壊された。

ガラガラと音を立てて壁が崩れ落ち、それを起こした張本人が崩れた瓦礫に足を置いてこつちを見据える。

「お前らか：『麦わらの一味』とは」

名前は分からないが、その犬の被り物を被った男は私を見て興味深そうに笑った。な、なにに、怖いんですけど！

「私に用？」

「ほう：お前がイリスか。：ううむ、力を隠しておるのか、そこまで凄いやつには見えんが

…まあいい。今はモンキー・D・ルフィに用事があるんじゃないか？」

「ルフィに？それは…」

「起きんかア〜!!!」

「えっ!!?」

ドカアン!といつの間にかルフィの前まで移動した男が拳をルフィの額に叩きつけた。

速い…！見えなかった…。しかもルフィはその拳を痛いと言って目を覚ますし…打撃を痛がるって事は…覇気!?

「愛ある拳は、防ぐ術なし…随分暴れとる様じゃのう、ルフィ!」

そう言つて男が犬の被り物を脱ぐ。

「げエ!!じ…じいちゃん!!」

……………。

「「えエ?!?!じいちゃん?!?!」」

「待つて…この人、もしかしてあのガープ…!?!」

「ろ、ロビン、知ってるの?」

都合よく思い出してくれる私の記憶も、どうやらガープの記憶まではホイホイ引き出してくれないようだ。

ロビンが知っている様なので尋ねてみれば、彼は海軍の英雄として知られた大物らしい。

流石ルフィ、血縁者も相当凄い人じゃん、

「ルフィお前…：わしに謝らにやならん事があるんじゃないか!?」

「ルフィ、本当にお前のじいちゃんか!?」

「そうだ！絶対に手エ出すなよ！殺されるぞ…！おれは昔じいちゃんに…：何度も殺されたんだ」

「おいおい、人聞きの悪い事を言うな。わしがお前を千尋の谷へ突き落としたのも、夜のジャングルへ放り込んだのも、風船にくくりつけて何処かの空へ飛ばしたのも…！全ては貴様を強い男にする為じゃ!!」

いや死ぬわ。ライオンより鬼だなこのじいちゃん。

なんか2人で言い合い始めたし…：赤髪がどうか、強い海兵にする為に鍛えたのにどうとか。

…いや、うん、まあ確かにまさか孫が海賊になるなんて思わないよね。そこはちよつと同情するよ。でもルフィだから仕方ないって諦めも大事だと思う。

「そもそも『赤髪』って男がどれ程の海賊なのか解つとるのかお前は!!」

「シャンクス!? シャンクス達は元気なのか! どこに居るんだ!?!」

「元氣も何も…！今や星の数程おる海賊達の中で…かの『白ヒゲ』に並ぶ4人の大海賊の内の1人じゃ。偉大なる航路グランドラインの後半の海に、まるで『皇帝』の様に君臨するそやつらを世に「四皇」と呼ぶ!!」

四皇…！青キジがちらつと言つてた奴か。

「この4人を食い止める力として「海軍本部」…そして「王下七武海」が並ぶ！この『三大勢力』がバランスを失うと、世界の平穩は崩れるという程の巨大な力…という訳じゃ、女好きのイリス」

何で急に話を振るの!?

確かにそのバランスを崩しそうな事ならつい最近やつたけど！

「…あの赤髪と繋がりが…!」

「ルフィの麦わら帽子、その人から預かってるんだって。そんなにスゴイ人だとは知らなかったけど…」

ロビンの疑問にナミさんが答える。

ロビンがこんな驚いた顔するくらいには凄いだ、四皇って…。

「…ん？何事じゃい！」

ガープがぶち空けた壁穴の外で、海兵達の戦鬨音が聞こえる。

ああ…このすんごい刀捌きの音…ゾロだね。



そして案の定それはゾロだった様で、海兵の1人がそう報告に現れるとガープはニツと笑って待機させていた部下2人に止めてみる、と指示を出す。

しかも何故かその内の1人はゾロではなくルフィを狙い…当然2人を狙った海兵はものの数秒で地に倒れてたけど。

ついでに言えばその海兵2人は何やらルフィとゾロ共通の知り合いだったらしく、今ではすっかり思い出話に花を咲かせていた。

ちなみにガープやその他海兵大勢は壊した壁の修理に取り掛かっていた。直すなら壊すな。

「そういえばルフィお前、親父に会ったそうじゃな」

「え？父ちゃん？父ちゃんて何だよ、おれに父ちゃんなんか居るのか？」

「何じやい、名乗り出やせんかったのか…。ローグタウンで見送ったと言うとつたぞ！」

…ローグタウンって…あの、始まりと終わりの町ってとこ、だよな。

確か偉大なる航路グランドライン入る前に寄ってって、最終的にスモーカーに追われながら出航したトコだったような…。

「お前の父の名は、「モンキー・D・ドラゴン」…革命家じゃ」

「え!？」

「え…」

「「えエくくくくくッ!!!」」

え？ナミさん達どころか海兵達も驚きで飛び上がってるんだけど…そんなに凄いの？その人…。確かに名前は強そうだけど。

「おい、みんな一体何をそんなに」

「バカ!!お前ドラゴンの名前を知らねエのか!？」

「あなたのお父さん!とんつつでもない男よ!!？」

「??」

ルフィと私は揃って首を傾げる。

知らないのが私とルフィだけってことは、本当に一般常識レベルの人物って事か…！  
ルフィの家系ってほんとどうなってるの??

「ねえロビン、何なの、そのドラゴンって」

「何て説明すればいいかしら…。海賊は自分から政府や海軍を襲う事は無いけど、今「世界政府」を直接倒そうとしている力があるの。それが「革命軍」…その頂点に立つ男がドラゴンよ。今世界中の色んな国々でその思想が広がって、王国に反乱を招きいくつも  
の国が倒れてる。政府は当然怒り…その黒幕ドラゴンを「世界最悪の犯罪者」として  
ずっと探し回っているんだけど…彼は素性の片鱗すら全く掴めない「謎の男」だった

…のに」

今こうして、かなり大きな手掛かりが現れた…と言うことか。

「あつ！コレやつぱ言つちやマズかつたかのう！ぶわつはつはつはつ、じゃ、今のナシ」

「「ええエエ~~~~~つ!!?!」」

今頃ドラゴン泣いてそう!

それにしてもガーブか…、ルフイのおじいちゃんだけあつて、何と言うか自由奔放っぷりが彼そつくりだ。いや、ルフイが彼に似たのか。

…はあ、いつ私の前世とか、その他諸々の事情を話せる時が来るんだろう…。

エースの事とかも話しとかないとマズいかな…。いや、これはまだいいか、言う時期が早すぎても不安を煽るだけだね。色々と分かってきたらその時に教えてみんなにも手を貸して貰うとしようかな。

## 9 5 『女好き、仲間の絆』

「お前はわしの孫なので！この島で捕らえるのはやめた！！——と、軍には上手く言い訳しておくので安心して滞在しろ」

「言い訳になってないので「逃げられた」って事にしましょう」

壁の修理も終わったと言う事で、ガープやその他大勢の海兵達は島から去る事となった。

理由は何であれ、見逃してくれるなら有り難い。…ま、あの時の…そうだね、『女王化』クイーンでも呼ぼうかな。それをすれば対抗できる自信はあるけど。

どうやってあの状態になるかっていうのも感覚で理解してる。…例に漏れず使用後は動けなくなったり能力が使えなくなるのが難点だけど…。

「結局、本当にルフィの様子を見に來ただけなんだね…」

「嵐の様な人ね、血の繋がりを感ずるわ」

ガープが去った後、隣にいたナミさんとガープをそう評した。

あれ、あの2人…えっと、なんて言っただけな…確か…：コビーとヘルメツポ！2人

は帰らないのかな？残ってるけど…。

久々の再会らしいし、ガーブが気を利かせて話す時間を設けてくれたのかも。

「…海軍の話か、ちよつと気になるわね」

「ん？」

そういうとナミさんは電伝虫をルフィとコビーの近くに持っていき、2人には見えな  
い場所にそつと置いて戻ってきた。

「おう…盗聴ね」

「そ♡私達は裏のプールでのんびりしてましょ」

「え、ここつて裏にプールあるの？」

ていうか、ナミさんの水着姿が見れるの??

空島の時は下は普通のズボン履いてたからなあ！これは楽しみだなあ!!

「ミキータとロビンもプール行こう！」

「キャハッ！いいわね！イリスちゃんの水着姿…キャハハハハ!!!キャハハつ!!ごほつ、げ

ほっー！

「私は後で行くわ。このコーヒーを飲み終えてから」

「分かった、それじゃ後でね！」

手を振って2人と裏のプールへ行つた。

！  
勿論水着も忘れず持つてね。みんなに合いそうな色をチョイスしてやりましたとも

「あれ、ココロさんにチムニー、ゴンベも」

着替えてプールへと到着すれば、そこには既に2人と1匹が中で泳いでいた。

よし、私はとにかく浮き輪を膨らます事から始めないと！私とミキータとロビンの3人分だよね。

「海賊のねーちゃんも泳ぐの？」

「ふーっ！ふーっ！…え？いやあ、私は泳ぐというより…浮く？まあそんな感じ。ていうか今私の事ねーちゃんって言った？いくら欲しい？1億ペリーで足りるかな？」

「えっ」

1個完成。

それにしても、ナミさんとミキータ…美しい…！

ナミさんには白と黒の水玉模様を。ミキータには白を。そしてまだ来てないけどロビンに黒を渡せば完璧だよね！！うはー！！あ、2個目も3個目も出来た。

「ナミさんはまだ来れない？」

「ええ、でもすぐに行くー！」

「よし！じゃあミキータ、2人で向こう岸まで競争だよ！」

「キヤハ！負けないわよ！」

ちやぷんと浮き輪を浮かべてその上に座りプールに入れば、物凄い脱力感が私とミキータを襲った。

おう…浮き輪…私の命は預けた…！

「んががが！それじゃ競争も何もないれ！」

「ふふ…波に揺られて…先に向こう岸までついた方の勝ち…だよ」

「随分と気が遠くなる話らね…」

あー…でも水の中気持ちいいなあ…。疲れた体に染み渡るといふか何といふか…。

「…むむ」

丁度能力が使えない今なら絶好の実験チャンスだと思い、「覇気」を使うイメージを思い浮かべてみる。

…ダメだ、やっぱりうんともすんとも…。能力で私の中に眠るそいつらを倍加してあげないと使えないって事かあ…。

いつか能力なしでも使える様になれば、絶対便利な力になるのに…。

というか、この先の海を攻略しようと思えば覇気の習得は必須なのでは？と考える。

例えば悪魔の実で1番厄介な種類といえ、やはり自然系ロギアだと思う。クロコダイルや

エネルギーの様に…分かりやすい弱点が存在しない実だつてあるだろう。何たつて青キジがそうだったし。

結局青キジと対抗する為に使用した力は「覇氣」な訳だし…この先の海ではみんな、当たり前のように「覇氣」を使ってくるかもしれないよね。

…そんな時にいちいち女王化クイーンなんてしてたら体がいくつあつても足りない、か…  
「せめて…後2年くらい…修行が出来たらなあ」

「だつたらその修行には勿論、私達もついて行くわよ」

「あれ…ナミさん…もういいの？」

ナミさんがミキータの浮き輪を引っ張つて近づいて来た。

ナミさんは首を縦に振つて、「聞きたい事は聞けたし、これ以上は野暮かな」と微笑む。天使だった。

「…イリス」

「え？」

「…ん」

「…な、ナミ…ちゃん。な、何を…ぐ、ぬぬ…！」

ちゅ、と触れるだけのキスをかましてきたナミさんは、悪戯が成功した子供の様に無邪気な顔で舌を出した。



「くう…ずるいわナミちゃん…私も…私もする…!」

ミキータが必死に顔を動かしているが、能力者ゆえの制限で体が動かない為ヤキモキしていた。

ナミさん…いきなりどうしたんだろう。

「ナミさん…どうしたの…?」

「何だか今、無性にあんたが近くに在る事の喜びを感じたのよ。…本当に怖かったんだから」

浮き輪の上に仰向けで寝る様に浮かぶ私の顔を、ナミさんが頭元から包み込むように手で挟んで額と額をくつつけた。

…う、何この状況…ムラムラしてきた。

「ふぎぎ…!ナミちゃん…!私もお…!!」

「あんた…あんまり無理していると落ちるわよ? 勿論後でミキータの時間も作ってあげるから」

「あら、なら私は?」

「ロビン!」

コーヒーは飲み終えたのか、流れるように会話に入ってきたロビンが同じように浮き輪を浮かべ、穴の中にお尻を入れる形で座った。

そして、3人の嫁に囲まれる私……ううん、素晴らしい！

「お姉ちゃん達……絶対私達の事忘れてるよね」

「ニヤァ……」

……わ、忘れてませんとも。

\*\*\*

結局、あれからサンジが私達に料理を持ってきてくれて、それに釣られたルフィやチヨツパー。そして賑やかになる事で更にはガレーラカンパニーの船大工達やフランキー一家まで集まってきた、かなり大きな宴となりみんなではしゃぐ。

コビーとヘルメツポは流石に帰っていたが。

水水肉のバーベキュー……うまあい！サンジが手を加えてるからかなりのものとなってるし！でもさつきパススタ食べたばかりだから、お腹はあんまり空いてないな……。

「……じゃ今が丁度いいかな、そげキングもいるし」  
「？」

私の隣にいたミキータが首を傾げる。

水から出てからというもの、ミキータの熱烈キッスをこれでもかと喰らわされたから

何だか恥ずかしい…。

「みんな呼んでくるね。…私の事、話したいから」

「…分かったわ」

ミキータに微笑みかけて、私は宴の雰囲気壊さない為にも隅の方にみんなを集めた。

ルフィとチョッパーはどうしてそげキングがいるのか疑問に思っていたが、そこは何とか誤魔化した。別に彼がウソツプだよと言っても良かったけど…。

あ、後フランキーも呼んでいる。だって麦わらの一味になるんだし、今話すか後で話すかの違いしかないもんね。

「おーし、いいぞイリス…どんと話してみろ！」

「はは、頼もしいねルフィ。…何から話せば良いのか分かんないけど…そうだね、じゃあまずは私の…『王華』の過去から…」

ぽつり、ぽつりと私は自分の全てをゆっくりとみんなに話して行く。

前世で起こった事や、今世で前世の記憶が無かった理由。そして私の女王化クイーンや…まだ私の中に王華が文字通り生き続けている事など。

全てを話し終えた時、何だか私は胸のつつかえが取れたような…長年溜まりに溜まっ

たしこりが無くなったような、そんな気分になった。

私の話の口を挟む事なく、ただ黙って聞いてくれたみんなには感謝しかない。

「……と、いう訳です」

「……なるほど」

まず真つ先に頷いたのはルフィだった。意外すぎる。

「不思議体験つてことか」

「アホか！ そんな一言で終わるような内容じゃねエだろ!!」

バシーン！ とそげツプに頭を叩かれたルフィ。

だけどその顔は何とも不思議そうに眉を顰めていた。

「だってよ、それ以外に何かあんのか？ イリスはおれ達の仲間じゃねエか！ 生まれた世界が違ふとか、そんな事はおれはどうだっていい！」

「ルフィ……」

「ああ、俺もルフィと同意見だぜイリスちゃん。その別の世界つてのは気になるが……行くこうと思つて行けるもんでもねエだろ」

「それより俺はお前が生前んな事で悩んでたのに驚いたぜ。女が好きとか、それを気にする時期がてめエにもあつたのか」

ルフィもサンジも、そしてゾロも、私の目を真つ直ぐに見つめながら言うその言葉は、

私にとって涙の引き金みたいなものだった。

流石に堪えきれなくなつて頬から涙が伝う。

「おれはどんなイリスでも好きだぞ！な、そげキング！」

「おお！そうだと！例え生まれが次元レベルで違うとしても、君は一味の仲間だ！」

「うおおおおん！おめエ…！おめエ…苦勞してんだなア…!!」

…こんな、訳わかんない話を信じてき。…はは、みんな、バカだよね。

…バカ過ぎて…大好きだよ…!!

「勿論、私もみんなと意見は変わらないわ。イリス…あなたの知る私がどうであれ、私が知る私は今、あなたの横にいる私…。それだけよ」

「キャハハッ！ロビンの言う通りよ？私は仮にイリスちゃんが世界を滅ぼそうとしてもついて行くわ！もうイリスちゃんラブよ！」

「…だつて。イリス、良かったわね」

ふふ、と笑つてナミさんが私の頬を撫でる。

ナミさんは…？と尋ねれば、彼女は分かつてるクセに、と微笑んで…。

「愛してるわ、あんたがどこの誰だろうと、私はあんたを愛してる。何があつたとしても私達だけは、いつまでもあんたの…イリスの味方だし、嫁よ」

「っ…もう、もっと、もっと好きになつちゃうよ…！」

「ふふ…それは良かったわ」

そして私は、ナミさんの胸に飛びついて泣いた。

初めてナミさんと会った時のように…エニエス・ロビーで連行されかけた船の上のときのように…。

私が初めてナミさんと出会った時に、ただ『忘れた』だけの孤独は…今、私の中から完全に消えてなくなったのだった。

「でもよ、じゃあそのイリスじゃないイリスってのはなんなんだ？」

一頻り泣いた後、ルフィが首を傾げながら聞いてくる。そうだよ、そこは多分ルフィじゃなくても難しい所だと思う。

「えつと…この世界に来てからの私は前世の記憶が無い状態で過ごしてて、私の心の奥深くにずっと仕舞い込んで、表に出ることがなかった記憶こそが入州…名前は、王華”って言うの”

「なるほどね…。記憶が無い状態で過ごしたって事は、その間の10数年間で似たように違うイリスとしての人格が生まれたって訳でしょ」

「そう、それが私ね」

それでもつてそのイリスと王華が混ざりかけてたのが、エニエス・ロビーでちよつと不安定だった時の私。

「女王・倍加を使えば王華を呼べるけど、それを使うにはまず女王化クイーンしなきゃいけないし、顕現させるために消費する覇気も凄い量だから…」

出来るだけこの世界を生で味わわせてあげたいんだけどね…。

「その覇気つてのも何なのかわかんねエ」

「覇気はもともとの世界にある力だよ。私もちやんと理解してないから説明出来ないや…」  
「めん」

王華が居れば少しはマシな説明が出来るかも知れないんだけどね。

「それよりルフイ、新しい船はフランキーが造つてくれるんだつて」

「え!?ほんとかフランキー!!お前やつぱりいい奴じゃねエか!」

「俺の夢の為だ、感謝される様な事じゃねエ」

「でも私達は感謝するからね!よーし、じゃあ宴再開だよ!行こう、みんな!!」

過去の話は終わったんだ。

『本当の私』は…凄くあつさりを受け入れられ、みんなの心の広さにはそれこそ感謝しかない。

…だから、これから先の“未来”…まず1番の脅威はエースの死。

…それをルフィへの恩返しのため、何がなんでも運命という名のちやぶ台をひっくり返してやろうと、私は強く決意したのだった。



## 95. 5 『女好き、束の間の平穩』

宴の翌日、仮設本社内にて私達は机の上に新聞紙を広げてワイワイと眺めていた。

「おお？ フランキー一家の事が全く載ってねエじやねえか、あれだけ暴れたつてのに……」  
「ああ、多分青キジだろうね。フランキーを助けに来ただけの人達に罪を被せるのは忍びなかったとか」

「そんな事考える人かしら……」

私の眩きにロビンが反応するが、この流れだと青キジしかそんな情報操作をする人は居ないし……理由は迷宮入りだねこれは。

「何にしても良かった、俺達アともかく……あいつらこの先、逃亡人生じゃ可哀想だもん  
な」

「その代わり俺達の事は酷エ書かれ様だ……」

私達とは違って、近くの柱に背中を預けて座っているゾロが言うので見てみれば、確かに散々な書かれ様だった。

……？

「あれ、青キジと私が戦ったつていうのは載ってるけど、勝敗までは書いてないね。それ

どころか…」

「麦わらの一味、大将の力になす術も無く撤退…って何コレ!？」

ナミさんがバン!と机を叩いた。

「…きつと、大将が敗れたなんて大々的に報道出来ないからよ。それこそギリギリ保たれている均衡が崩れかねない…海軍はそう判断したんじゃないかしら」

「キャハ、ま、ロビンの言う通りでしょうね。まさか向こうも大将がやられて帰ってくるなんて思っても無かったでしょうし」

「イリスちゃん存在自体に大した危険が無いと判断したって証拠でもあるんじゃないやねエか?青キジ自身で対面した相手だ、イリスちゃんの嫁さんに手を出しさえしなければ、ただの可愛い女の子だからな」

「えへへ、そうでしょ?」

サンジには冗談っぽく返したけど…青キジには一応私が別世界から来たって言うのは話してるんだよね。

異世界から来たことは信じては貰えなかったけど、私には過去や未来が分かる能力があるって思ってる訳だし…危険がないと考えるのはおかしいと思うけど…。

ま、いつか。なる様になるでしょ。

「だけど撤退とはいえ、エニエス・ロビーの、しかも『バスターコール』からの撤退よ。

もしかなくても…」

「ああ、こりやまた懸賞金が上がりそうだな」

「お！おれも賞金首になれるかな！」

「まア可能性は無くもねエが、大変なのは俺だよ…『巨星現る』だ！」

「何で喜んでんの!? あんた達バカか!!」

そんなナミさんの肩にぽん、と手を置いて親指を立てた。ナミさんだつて賞金首になる可能性高いよ!!

「あんたねエ…知らないでしょ? 私達、政府の旗撃ち抜いたからね。あれはまあロビンの為だからその事は良いんだけど、政府に喧嘩売つたつてことはあの場にいた全員に懸賞金が懸かるつて事なのよ!」

「はは、海賊王になろうとしてる男の船員クルーだよ? むしろ高みを狙つて行かなきゃ!」

「くくつ!! もう! じゃあもし私が賞金首になったら、あんたちゃんと守りなさいよ!」

「え? 賞金首にならなくても全力で守るけど」

こてん、と首を傾げるとナミさんはそうだったわね…とため息を吐いて目の前のお菓子菓子を口に放り込んだ。

「船完成まで5日かかるつて話だっけ?」

「そうらしいな。船つて5日で造れるようなモンなのか…職人つてのアわかんねエもん

だ」

そしてそんなプロが仲間になってくれると言うわけか。

頼もしいなあ…フランキーって見た感じ戦闘も出来そうだし、単純に戦力増強じゃん。

「じゃ、その間ゆっくりお買い物でもする？4人でデートしましょ…って、あれ？ここにあった2億ベリィは？1億しか無いじゃない！もう1つのケースはどこに!？」

「ああ、宴の時によ、肉やら酒やら買うのにやった!」

「やった？私達のお金よ!」

「おれ達の宴会だったじゃねエか」

「な、ナミさん落ち着いて!ほら、後1億は残ってる訳だし!デートしよ!ね!」

ピキ…と青筋を浮かばせるナミさんの腕を抱き締めるように引っ張って抑える。

その瞬間、ナミさんはピタリと動きを止めて、私の胸辺りを凝視してきた。

…な、何でしょうか…、腕を抱きしめてるのに胸の感触が無いって言いたいんでしようか!

「…あんた、…ああ」

最後にぽつりと、「これはミキータが喜ぶわね…」と言っていたのは気になるけど、まあそこまで重要な事でもないだろう。

と言うことで、私達は早速それぞれお小遣いを受け取ってウォーターセブンの街へ繰り出した。勿論私はナミさん、ミキータ、ロビンと一緒にね。

\*\*\*

「イリス、あんたはまずこっちよ」

「えっ」

ちよつと小腹が空いたから水水肉を食べに行きたかったんだけど、何故か私はナミさんに引き摺られてウォーターセブンの一角にある、所謂下着専門店へと放り込まれた。

「え、え?」

「あらナミちゃん、もしかしてイリスちゃんに私達の下着を選ばせてあげるの? 良い考えね!!」

「フフ…お願いね、イリス」

ええー!?ちよちよまままま!!!確かに、私はそういう事を躊躇う必要はもう無くなったよ!だ、だけどなんて言うか…ヘタレはヘタレだし!!恥ずかしいじゃん!!

「そうね、それも楽しそうだから後で選ばせるとして…今回の本命はこっちよ!」

ムニユ。

「……ん？」

ムニユ？

…え、あれ？今ナミさん…私の胸触ってない??

いやそれはまあいいんだけど…ムニユ？ムニユってなに？そんな膨らみがあるみた  
いな…はは、あり得ないあり得ない。何たつてこの世界に来てからの10数年、私の胸  
が膨らみを感じる事など一片足りとも無かつたんだから！

「んっ…、ナミさん、あんまりその、えっちな触り方は…」

「…イリスちゃん、確認の為よ。こっちに來なさい」

ぐい、とミキータに手を引つ張られて試着室に放り込まれた。

後からぞろぞろと2人が入ってきて、一般的な試着室と比べたら少し広めの室内とは  
いえ、流石に4人も一緒に入ったら狭いなあ、ははは。……み、ミキータさん…？目が  
血走ってません？ロビンさんもなんか、妖しい笑みですね!?ナミさんも何そのにつこり  
笑顔、逆に怖い!!

「ちよ、ちよと待って、まさかとは思うけどこの無理矢理な流れ、まさかとは思うけど  
…!!」

「キャハつ、ま・さ・か・よ♡」

「ひあ…っ」

ぺろ、と首筋を舐められて飛び上がりそうになる。  
もお……！胸関係無いじゃん……！

\*\*\*

「……ふー、スッキリしたわ。でも確かにナミちゃんの言う通り……」

「ええ、イリスの胸が成長してるのよ」

「私は今回が初めてだったから、成長は分からなかったわ」

ビク、ビク、と壁に凭れ掛かりながら息を切らす私の前で、何事も無かったかのように話が再開された。

ミキータに至ってはまだ私をチラ見してはニヤ、と目を赤く光らせている。

うう……過去を受け入れてもみんなにしてやられるのは変わらないのね……ぐすん。

「せ、成長って言っても、ほんのちよつとでしょ？まっ平からちよつと膨らんだかな、くらい」

「そうね、だけど成長は成長よ」

そもそも成長したのが謎なんだけど……。考えられるとしたら、女王化クイーンの影響……？王華を受け入れたから、体が前世に近付いてるとか。

そもそも私の体がちっちゃ過ぎる幼児体型な理由も、恐らく死ぬ間際の願いが原因だろうし。

…あ、そっか、それで気付いたけど、全・倍加オールインクリースが使えなくなつたのは王華に見た目が近付いてしまうからか。無意識に王華を拒否していた私にとつては、使用できなくなるのは当たり前か。

あれ、と言う事はもう全・倍加オールインクリースを使えるのかな？…まあ今はいいか、また今度調べてみよう。

「と言うわけで、今回はイリスの下着を買いに来たつてわけ」

「それを言う為に私を犯す必要はあつたんですか！」

「勿論よ、あんたの胸が大きくなつたとか、そんなの我慢できる訳ないじゃない」

あれ、質問の答えになつてないような!!

崩れた服を整えて、揃つて試着室から出れば店員に怪訝な顔をされたのでとりあえず笑つておいた。何も無かつたですよ。本当はばりばりアレな事してましたけど!

「下着かあ…。何でもいいけどね、こんななんとかで」

適当に取つたスポーツ用のやつをみんなに見せると、揃つて眉間にシワを寄せた。

「確かに今のサイズや、それからイリスの普段の行動からスポーツブラにするのは正解よ。でも…何でもいい訳ないわ!私は脱がした時に視覚的興奮を得たいの!!」



「ナミさん!? 大声で何を言ってるの!!?」

「私はこれが良いと思うわ! イリスちゃんが持ってきた奴の黄色版よ! 私の髪とお揃いね!」

「私は彼女にはコレが似合うと思うわ」

ミキータはともかく、ロビンそれ布どこにあるの?? そんな紐みたいなのでどこを隠すの? ナミさん待って真剣な顔して頷くのやめて。

「…あ、ねえ、これなんかどう?」

「え?…わあ、可愛いねコレ!」

ナミさんが手に取ったのは、水玉模様の淡い水色をしたものだった。

どうやら上下セットの物らしく、なんて言うかさつきまでの流れでまさかここまでまともな…というか私の好みドストライクを当ててこられるとは思わなかったからびつくりした。

「私、これにするね!」

「ええ、絶対似合うわ!」

早速受付へ持って行って購入。その後試着室で素早く着替える。

うん、やっぱりこの色は私に似合うなあ…。背後から感じる3つの視線はこの際気にしないでおこう。

「お待たせー。んー、慣れないから気持ち悪い…」

「すぐに慣れるわよ、じゃあ次は私達の選んでくれる?」

「勿論!とびきり可愛いの選んであげるよ」

ナミさんはやっぱり水玉が似合うよね。ミキータは赤の煌びやかな装飾がついてるのとか似合うと思う。それでロビンは大人な感じで黒!ギャップを狙って白でも良いなあ…。

ナミさん達の気持ちも分かったかも…、確かに下着選びつて楽しいんだね。

脱がせた時の視覚的興奮…か。自分が選んだ奴を身に付けてくれてるだけでも嬉しいや。

そんな感じで、私達のデートの時間は過ぎていった。

4人でこう、平和に買い物をしてれば前世の友人達を思い出す。あの人達は私の友人ではなく王華の友人だけど…それに、今私の目の前に居るのは友人じゃなくて嫁なんだけど、ね。

一時はどうなる事かと思ったけれど、かなり楽しい時間だった。

みんな水水肉を食べた時も、適当に街中をぶらぶら歩いたり、ブルを借りて優雅に水上デートと洒落込んだり。

…ああ、本当に…こんな幸せな時間を当たり前のように過ごせるのも、みんなのお陰だなあ。

あの時、全てを諦めていた私の事を…みんなが諦めなかったから今がある…なんて、いつまで考えてもしょうがないか。

「…ふー」

楽しかった時間は過ぎて、今はもうみんなも寝静まった夜だ。

そんな中、私は1人仮説本社を抜け出して夜風に当たっている。遠くから聞こえる釘を打つ音で、こんな時間になってもまだ作業を続けてくれてるんだな、と嬉しく思った。でも暗いから怪我だけはしないようにして貰わないと…。

「イリス」

「…ん、ロビン?どうしたの?」

私と同じく風にも当たりに来たのか、ロビンも中から出てきて私の隣に立つ。

「あなたが出て行くのが見えたから来たの。…イリス、改めてお礼を言わせて…ありがとう」

「へ?まさか、エニエス・ロビーの事?でもそれは私も助けられたし…」

「それもあるけど、アラバスタで私を助けてくれた事も…私に、あなたの嫁という幸せを与えてくれた事も含めてのお礼よ」

どれもこれも私が好きでした事だから…お礼って言われてもイマイチピンと来ないんだけどね。

…でも、感謝の言葉を伝えたくなるって気持ちには、私もよく分かるから。

「じゃあ、これからも末永くよろしくね？一味の仲間としても…私の嫁としても」

「フフ…ええ、こちらこそ」

くい、とロビンの腕を引っ張れば、彼女は私の意図を察してしゃがんでくれた。

私はそんなロビンの頬に片手を添えて、ゆっくりと顔を近づけて…キスをする。

「ん…」

深くはせず、だけど触れるだけの軽い物でもないソレを2人で何度も、何度も繰り返して夜は更けていく。

…最終的に段々寒くなってきて、キス中に身震いした私を氣遣ったロビンが、微笑みながら中に入ることを提案してくれたから戻って寝たけど…最後まで締まらないなあ、もう。

## 96 『女好き、高額賞金首、逃げ足の女王』 イリス

新しい船の完成を待ち、早くも3日が過ぎた。

現在私達は仮設本社内にてそれぞれ思い思いに過ごしている。

私と言うと、部屋のすみっこでイメージトレーニングだ。勿論、覇気の。

あ、あとこの3日間で私の能力がまた成長していた事が判明した。女王化クイーンしていない素の状態でも、30倍まで倍加が可能になっていたのだ。相変わらず自分以外の物や、神背ヒューマで増やせるのは2倍が限度だったけど。

「記録が貯まった！記録指針ログポースが次の島を指してる！」

「じゃあ後は船だけだね」

「そうね、完成までは見に来るなって言われてるし……」

それにしても次の島かあ。もう結構な冒険をしてきたつもりだけど、今度はどんな所に行けるんだろう。

ちよつとワクワクしていたら、椅子に座ってゴクゴク酒を呷っていたココロさんが「その記録ログの先にある島を知っているか」と聞いてきた。

勿論知らないけど……ナミさんが言うには針は何だか少し下を向いてるらしい。

「んががが…そりやそうら。次の島は海底の楽園、“魚人島”らよ!!」  
 「魚人島かあ」

なんか複雑だなあ。ナミさんの村の事もあるし…あんまり魚人に対していいイメージが…。

「イリスちゃん、アーロンは海賊だ…!だが魚人島にいる “人魚”達は違う…!!」

「え、人魚…?」

「そうさ!魚人島は偉大なる航路の名スポット!!世にも美しい人魚達マーメイドが海上に弧を描き、魚達と共に戯れる夢の王国!!」

な、なな…何ですと!!?

魚人ってあの、アーロンとか、なんかタコみたいなのとかばつかじやないの!?

「フフ、嬉しそうね、イリス」

「人魚って言われると、日本人としてはワクワクが止まらないんだよ!あー、ナミさんごめんさい…私、魚人島に行きたい!!」

「行きたいというか、行くしか無いわよ。それにあんたが行きたいんなら私が断る訳ないでしょ」

マーメイド!マーメイド!とサンジと盛り上がる。

誰か1人くらい嫁にしたいなあ。マーメイドプリンセスとか居たら絶対嫁にする!

「……ただし、『楽園』には簡単に辿り着けるもんじやらいよ」

「海底ってというのが気になるけど……」

「そこはまー、行ってみりやわかるよ。問題はそこじやらいね。：一面を見な、最近の新聞ら」

ほん、とココロさんが新聞を机に放り投げたのをナミさんが広げ、読み上げる。

「何コレ：「今月もまた14隻：船が消えた」……う？ どういう事？」

「『フロリアン・トライアングル魔の三角地帯』。楽園へ到達する為に、必ず通る事になる海域ら。その海では毎年100隻以上の船が消息不明になるんら：そして後々、船から船員だけが消えちまつた船が見つかったり：死者を乗せて海をさ迷う『ゴースト船<sup>シッブ</sup>』の目撃情報が後を立たない」

バミューダ的なアレね。

前世では色々な憶測が飛び交っていたけど：こつちでも似たような話みたいだね。

尤も、前世と違つて科学で証明できない部分もあるんだらうけど。

「やだ……絶対遭いたくない！ 見たくもないっ！ そんな気味悪い船っ!! その海何が起きるの!？」

「ナミさん大丈夫だよ、何か出てきても私が殴つて倒してあげるから！」

「殴れたらいいわね」

ロビンさん、あなた時々怖い事言いますよね。

「んががが…まあ、その身に何かが起きた奴らはその海から出て来ねえんらから…何が起きるかは分からねえ。霧の深い海ら…気をつけな。とにかく遭難の多い危険な海ら。出航前にしつかり準備しておく事ら」

「…ん？でもさ、海賊船とかのゴースト船って事は、宝とか結構積んでるんじゃない？」  
「そうね、〴〵そういう船には宝船の伝説が付き物よ」

「!!…ゴースト船を探すのよつ!!」

うおー！と盛り上がるルフィとナミさん。

さつきまで怖がつてたナミさんだが、宝という言葉に反応して盛り上がっていた。

「ミキータはそういうの平気なの？ガイコツは大丈夫かもしないけど、ホラーとか」  
「キャハ、信じてはいないけど…得意って訳でもないわね」

私と同じくらいの感覚かぁ。

多分大体の人間がそんな感じの認識だね。信じてないけど怖い、みたいな。

「海賊にーちゃん達〜!!」

「麦わら〜つ!!」

「ん？」

バン！と外から扉が開かれる。



チムニーと、何か凄い髪型した2人組の女の人が居た。強風が吹いたら前に進めなくなりそうなくらいのつぺりした髪型だなあ…一瞬自分の目を疑ったよ。でも凄い美形だった。

「何か用か？」

「フランキーのアニキが…！みんなを呼んで来いって…!!」

「『夢の船』が完成したんだわいな!!」

「すつごいの出来てるよーっ!!」

「え、随分早いね！」

「まだ3日目だよ？流石フランキー…一流だね！」

「超一流の船大工5人で夜通し造ってたんだわいな!!」

「5人？…それにしても3日は早いけどね！」

「さて、だったら早速船のあるところまで…！」

「麦くくくわらくくくさくくくん!!」

「ん？…フランキー家じゃん。どつたの？」

「あんた達、どうしたんだわいな？息切らして…！」

「かなり慌ててきたのか、彼らは全員息を切らして地面に膝をついた。

紙を複数枚持つてるけど…それと何か関係あるのかな。」

「ハア…ハア…実は、無理聞いて貰おうと…。…手配書…！見ましたか?!」  
「手配書?」

「あんた…！とんでもねエ額ついてるぜ麦わらさん。あ、あんたに至ってはもうとんでもねエなんて言葉じゃ済まされねエよ、イリスさん…！それに、他のみんなも追加手配されちまつてる!!話すより…見てくれ!!」

あ、額が更新されたんだね！

フランキー一家の1人…確かザンバイだったかな。彼が地面にばら撒いた手配書をみんなで食い入るように見つめた。

『麦わらのルフィ』懸賞金3億ベリ。

『海賊狩りのゾロ』懸賞金1億2000万ベリ。

『悪魔の子』ニコ・ロビン』懸賞金1億1000万ベリ。

『狙撃の王様』そげキング』懸賞金3000万ベリ。

『わたあめ大好きチョッパー』50ベリ。

『黒足のサンジ』懸賞金7700万ベリ。

『正妻』ナミ』懸賞金1億ベリ。

『嵐の運び屋ミキータ』懸賞金4000万ベリ。

『逃げ足の女王』イリス 懸賞金…6億ベリ。

「……………は？」

「うほーっ!!イリスすげエーっ!!」

「ちよちよちよ、待ってよコレ!おかしくない!!?何で私が1億なのよ!!」

「…でも、イリスの6億はまだ少ない方じゃないかしら。きつと政府も、本来つける額にするべきかどうか悩んだのね」

何故か50ベリーのチョッパーとか、写真じゃなくて特徴は捉えてるけど似てない似顔絵のサンジとか、色々可哀想なトコもあるけど…。

「逃げ足って何!?!ちよつと、私が誰から逃げたって!?!うう…:こんな手配書じゃ、世間一般の女の子が見たら誤解されちゃう…!」

「安心してイリス、そもそも世間一般の人達は海賊の手配書を見ても恐怖しか感じないわ」

確かにそうだけどその事実は聞きたくなつた!!

「ん?イリスちゃんの手配書だけ別紙が付いてるわね、2枚セット?」

「なににな…」

「へら、と受け取ってナミさんが読み始めた。これ以上何があるのでしょうか…。」

「えー…『逃げ足の女王は、大将や多くの軍艦から逃走する事が可能な為、発見しても決して捕獲、戦闘はせず海軍に連絡を入れる事。その際、万が一にも近くに居る『女性』に手を出す事を禁ずる』だって」

「なるほど、それでイリスの懸賞金が高い理由を納得させて、後は実際の実力がこの懸賞金以上だから戦うなど遠回しに言っているのね」

「どっちにしろ不名誉なのに変わりはないんだけど！乗り込んでやろうか海軍本部へ！！」

「…ま、まア心中お察しするというか…色々と言ってエ事はあるだろうが、その…待ってくれ！俺達の頼みつてのはこっちなんだ、コレ見てくれ！！」

「そう言つてザンバイは懐に入れてあつたもう一枚の手配書を出した。」

『<sup>サイボーグ</sup>鉄人フランキー』懸賞金4400万ベリ。

「フランキー！！」

「あ、フランキーってサイボーグだったんだ」

「成程、何か色々と納得したよ。」

「…そして、フランキー家の頼み事つてのもね。」

私が思っていた通り、ザンバイは私達にフランキーを頼むと言ってきた。

このウォーターセブンについては、また捕まっても自分達じゃ助け出せないから、無理矢理でもいいから海へ連れ出してくれ、と。

勿論それに二つ返事でルファイがOKを出し、今は仮設本社に戻って荷物を纏めている所だ。

「にしてもイリスちゃん凄エな、船長越えの賞金首なんて聞いた事ねエぞ」

「あはは…青キジブーストだよ。それに逃げ足なんだよ私は…はは、はは…」

「そのブーストをかけられる実力って事だろ。…いつのまにか差が開いちまった」

気分を上げる為にちよつと凹んでるゾロの近くに行つてドヤ顔をかますと拳が飛んできた。あ、危ない…！

「それにそげツプもついに賞金首かー。知ってるのかな？」

「あいつの事だからそういう情報を得るのは早エだろうな。…ああそーいや、この前ウソツプを海岸で見たな。うちに戻ってくる時の予行演習をしたよ」

そうなのか!!とルファイが反応して、今すぐ迎えに行こう!という流れになった。

そっか、これでやつと一味全員が揃うね!

「…待て、お前ら!!」

「?」

ゾロの制止に、迎えに行こうとしたルフィ、チョッパーが足を止めて振り返る。

「誰一人、こつちから迎えに行く事は俺が許さん。間違つてもお前が下手に出るんじゃねエ、ルフィ。俺アあいつから頭下げて来るまで認めねエぞ!!」

「ゾロ?」

「ルフィとウソップの初めの口論にどんな想いがあるうが、どつちが正しかろうが……!相手にイリスを指定して決闘を決意した以上、その勝敗は戦いに委ねられた。そしてあいつは敗けて……!勝手に出てつたんだ。いいかお前ら、こんなバカでも肩書きは“船長”だ。いざつて時にコイツを立てられねエ様な奴は、一味にやいねエ方がいい……!船長が“威厳”を失つた一味は必ず崩壊する!!」

……。確かに、それはゾロの言う通りだ。

だから私は、懸賞金は越えたかもしれないけど、ルフィへと尊敬の念を忘れた事は一度だつて無い。

でもそれはウソップだつて同じ筈だ。……そして、ゾロはその事もきちんと分かっているのだろう。

「あのアホが帰つて来る気になつてんのは結構な事じゃねエか。……だが、今回の一件に何のケジメも付けず、有耶無耶にしようつてんならそれは俺が絶対に許さん!!その時は、ウソップはこの島に置いていく!」

「…待ってよゾロ、確かにあいつも悪いところあったけど…!」

「ナミさん。…今回は、ゾロが正しいよ!」

一味を抜けるっていうのは、そんな簡単な事じゃない。

仮にも海賊王になろうって男の船に乗ってるんだから、それなりの「覚悟」を持っていなければいけないんだ。

「簡単な話だ…ウソツプの第一声が深い謝罪であればよし…それ以外ならもう奴に帰る場所はない。…俺達がやってんのはガキの海賊ごっこじゃねえんだぞ!!」

「……。…そうだな、1度は完全に別れたんだ。…まだ出航まで2日ある…黙ってあいつを待とう!」

そして荷物を纏め終えた私達は仮設本社を出て、フランキー1家の案内で船がある海岸沿いの廃船置き場へと向かった。

…ウソツプも船が造られてるのは知ってる筈だし、ここに私達が居なかつたらそつちに来るでしょ。

「その話は、まあ納得したわ。だけどみんな、これ見てよ!」  
びら、とナミさんが自分の手配書を見せる。

うん、私の隣に立って微笑んでる時のナミさんだね。確かにこの表情には正妻感出て

る！海軍もいい仕事するなあ。

「何か変か？」

「最初から1億とか凄エな」

「ちつがーう!!何で1億もあるのかって事よ!!」

「そりや、イリスの正妻だからだろ」

ゾロがそういうと、ナミさんはハツ…として考え込みため息をついた。

「そういう事なら、仕方ないか…。別の考え方をすれば世間にイリスの正妻だって認知された訳だし…」

「そうよナミちゃん！私は羨ましいわ!!私の手配書もイリスちゃんの嫁ミキータ!!って書いててくれれば…!!くう…!!」

「相変わらずあんたはイリスの事となると暴走気味よね…」

「バロツクワークス時代のミキータを知る人が見れば、まず間違いなく別人を疑うレベルね」

ナミさんとロビンが面白おかしく言って、ミキータは別人じゃないわよ！とロビンに飛びついていた。

何かミキータとロビンの絡みって感慨深いなあ。いつのまにか名前前で呼んでるし。

「あ、あれかな！なんかおっきいのあるよ！」



廃船置き場へと辿り着いた私達の目に飛び込んできたのは、大きな布で隠されている船だった。

その周りでは徹夜疲れからか、地べたに寝転がって眠るガレーラカンパニーの人達の姿が見える。

「おーい!!来たぞフランキー!!船くれーっ!!」

「…ん、…ンマー…来たか」

アイスバーグも手伝ってくれていたのか、かなりお疲れみたいで眠っていたけど私達が来た事で目を覚ます。

あれ、でも肝心のフランキーが居ない様だけど。

「あいにくフランキーは外しててな。だが船は出来てる、俺が代わりに見せよう。この船は凄いで、凶面を見た時目を丸くした。あらゆる海を越えて行ける…この船なら世界の果ても夢じゃねエ。フランキーからお前への伝言はこうだ、麦わら」

「早く見せてくれーっ!!」

「『お前はいつか“海賊王”になるんなら!この百獣の王の船に乗れ!』」

ばさっ!と大きな布を大胆に脱がし、ついにその船の全貌が明らかになる。

うわあ、でっかい…!!

「うおーっ!!色々飛び出しそ〜っ!!」

「へえ…メリーの2倍はあるな！」

「おっきな縦帆！ “スループ”!？」

百獣の王と言うだけあって、船首にはライオンの頭が立派な鬘込みで付いていた。

メリー号の様に可愛くデフォルメされた顔だけど、私達の船の船首像はこれがいいんだよね！フランキー流石、分かってる!!

「中見に行こう!!」

「寝室見に行きたいなあ！行こうナミさん、ミキータ、ロビン!!」

みんなでその船に乗り込み、色々と好きな所を見て回る。

おおおー！何このおっきなベッド…！みんなで寝れるくらいおっきい!!!

…ん？と言うことはもしかして、私寝かせてくれない日が増えるのでは…？

……か、考えないでおこう！何はともあれすつごくいい船なんだし!!

「外は芝生の甲板かあ！」

「ガーデニングも出来そうね」

いつの間にかナミさんのみかんの木も設置されてあるし、気遣いも完璧！

「なアアイスのおっさん、フランキーどこだ？！礼も言いてエのにつ!!」

「ーもうお前らに会う気はねエらしい。麦わら、あいつを船大工として誘う気なのか？」

「うん、よく分かったな！おれ、あいつに決めたんだ！」

「それを察した様だ」

「？」

「どうやら、フランキーは面と向かつて誘われたら断る自信が無いから身を隠したらしい。」

「ただ、本心は私達と海へ出たいと思っている、今まで大切に暖めてきたこの『夢の船』を託す事で充分それは分かるだろう、と言う。」

「フランキーは私達の事を心底気に入ってしまったけれど、フランキー自身がこの島にいけないといけないという義務を自分に課してるから、一緒に行くと自分から言い出す事はないらしい。」

「その辺の事情は王華なら分かるんだろうけど、私はさっぱりだ。…それに、ザンバイも言つてたけれど来ないなら無理矢理誘えば良い。ルフィという男はそういう人だ。」

「行きたいけど無理です、なんて言葉が通用する人じゃない事くらい、フランキーも実は分かっているんじゃないかな。」

「…おれ、ちよつと行つてくる！」

「ルフィ、おれも行く!!」

ルフィとチョッパーが船から飛び降りて走り出す。続いてゾロ、サンジも後を追つて

行った。

「私も行った方がいいのかな？」

「あんたまで行ったって過剰なだけよ。あのバカなら、絶対にフランキーをここに連れてくるわ」

確かにそうだね、と頷き、私はみんなを待つ事にしたのだった。

でもみんな、どうやって連れてくる気なんだろうか…。

## 97 『女好き、新たな仲間と空飛ぶ船』

待つ事数分。ルファイがチョップパーを連れてゴムゴムのロケットで飛んできた。

随分早かったし、ダイナミックな乗船だね…だなんて思っていると街の方から今度はフランキーが飛んできた。…しかもパンツも履かずに。

「はっ!? な、ナミさん、ミキータ、ロビン! 船内へ避難、変態だよ! ちよつと退治してくる!!」

「ま、待てよイリス!」

ガシ、とルファイに肩を掴まれて動きを止める。

はっ…: そうだった、フランキーは仲間になるんだ…退治しちゃダメじゃん! ていうか今は近付きたくない!

「フランキー!! 船、ありがとう!! 最高の船だ、大切にする!!」

…ルファイ、それ空高く掲げてるそれってもしかして、フランキーのパンツ?

「このパンツ! 返して欲しけりや、おれ達の仲間になれ!!」

やっぱりパンツか!! どうやって盗んだの!?

「パンツを返せ、麦わら」

「じゃ、仲間になれ！」

「バカ言え…パンツ取ったくらいで！俺を仲間に出来ると思うなよ!!」

しかも下半身丸出しでポーズ決めてるし…。

はあ、遠くて見えないとはいえ、あれを出しっぱなしにされるのは普通にイヤだし…手伝ってもらおうか。

「じゃ、後はよろしくね“私”」

「いやふざけんな!!あなたが嫌なら“私”も嫌なんだけど!!」

神背で“私”を出して頭を下げる。だってイヤだもーん！私年頃の乙女だからアレは無理なの！

「お願いします!!」

「……覚えてろく!!」

神背ヒューマで増やした“私”にお願いして、何とか行つて貰える事になった。

まさか彼女もこんな形での身代わりになるとは思いもしなかっただろう。その顔には不満がたつぷりと見えたけど…うん、ごめん。

…そこからは、何とか悲慘だった。

私の無茶振りをくらったお怒りの“私” 渾身の金的蹴りをモロに喰らったフランキーが、言葉も出ずに蹲った時はどうしようかと思つた…。

何か言いたげに口をパクパクさせているけど、それが言葉になる事はなく、何ならフランキーの顔も青ざめてたし。

そんなフランキーにアイスバーグが近付いて、「コイツはまだ、お前の言う『夢の船』には成つてねエハズだ」つてカツコいい事言つた時も、助けを求める様にアイスバーグを見ているフランキーを見て流石に申し訳なく思った。

その後もザンバイが遠くからフランキーの旅の荷物を放り投げたり、フランキー一家がフランキーの幸せを願う言葉を大声で叫んだりして、ようやく彼の心は開く。

瞳からは大粒の涙を溢して…だけどその涙を、金的の痛みのせいにして…。いや、本当にそれが理由つてもあるかもしれないけど…。

「てめエら、俺が居なくて…生きていけないのかよ…!!」

「…!!ウオーターセブンの裏の顔…!俺達力合わせて立派に受け継いでみせますとも!!  
例えアニキがどんなに遠くへ行こうとも!俺達ア一生、あんたの子分ですからね!!」

「ウツ…イデデデ!涙が出る…!!…いや本当にいてエよ…!!」

最後の言葉は本心な気がする…。私はキレてもあそこまで蹴り上げないんだけど…  
「私」つて人格芽生えます?

「ルフィー…!!」

「あ、ゾロ、サンジ」

2人も戻ってきた!

後はゆっくりウソツプを待てば…。

「大変なコトになつて来たぞ、ルフィ!!」

「え?」

何やら慌てている様子の2人に、私はルフィと顔を見合わせた。

「お前のじいさんが戻つて来たぞルフィ!!向こうの海岸で、攻撃態勢で俺達を探してる!!」

「えエ!!?何で!!?」

確か、孫だから捕まえないとか言つてなかつたつけ!?

「俺達を知るかよ、とにかく出航準備急げ!!」

…つ、くそ、ウソツプをギリギリまで待つのは厳しいのかな…!!

「あ、パンツ返す」

ぼい、とルフィが船の下にいるフランキーにパンツを投げ渡した。

まだ痛がつてるんだけど…ほんとにごめん。神背ヒュイマは解除しておこう。

「さア乗れよフランキー!おれの船に!!」

「…へへ、生意気言うんじゃねエよ!ハリボテ修理しか出来ねエド素人共め。これだけ立派な船に大工の1人もいねエとは、船が不憫だ。仕方ねエ!世話してやるよ!おめエ



らの船の「船大工」…このフランキーが請け負った!!」  
「…ん〜いやったア〜!!新しい仲間だ〜!!」

そうして、フランキーは私達の仲間になった。

船大工としてはこれ以上ない人選…!何よりONE PIECEでもフランキーは仲間だったって事もあつて無条件に信用出来る!

「出航ー!!」

「アニキー!お達者でー!!」

「フランキー!家は不滅ですぜー!!」

見送りの声に軽く手を上げたフランキーが、ルフィを見て問う。

「本当に良いのか麦わら、もう1人待たなくて」

「…待ちてエけど、じいちゃんが来てる。捕まる訳には行かぬエからな。それに、3日は待つてたんだ、でも来なかつた!これが答えだ!あいつだつてよ、楽しくやると思うよ!海賊はやめぬエだろうから、その内海で会えるといいなー!」

「…ルフィ」

どう見たつて空元気じゃん…。もう、ウソツプ…何やつてるの!?早く来てよ…!!

「うわア!!」

「何? 大砲!？」

急に大砲が海に落ちたような音がして辺りを見ると、遠くに軍艦が一隻、こつちに向かつて真つ直ぐ進んできていた。

あれがガープの軍艦か……! 船首が犬だから分かりやすいね。

『おいルフィ……、聞こえとるかー!! こちらじいちゃん、こちらじいちゃん!』

拡声器が何かで話しかけてくるけども、ついさつき奇襲に近い形で大砲を撃たれたばかりだ。きつと話し合うつもりで話しかけている訳じゃ無いんだろうね。

「おいじいちゃん! 何だよ、おれ達の事ここでは捕まえねエつつたじやねエか!!」

『いやあ、しかしまあ色々あつてな、すまんがやつぱり海のモクズとなれ!!』

「え……つ!!?」

『お詫びと言つちやあ何じゃが、わし一人でお前らの相手をしよう!』

視力倍加で見れば、ガープは砲弾を下つ端の海兵から受け取っていた。何をす

気なの……?

「拳・骨…… 隕石!!」<sup>メテオ</sup>

「はっ?」

「うおオっ!!」

ガープは何と、素手で砲弾を投げつけてきたのだ。しかも何が厄介かって、あのじい

さんどんな腕力してるのかは知らないけど普通に大砲で撃つよりずっと速く、威力の高い物が飛んできたのだから驚きだ。

「…仕方ないっ！とにかく逃げるわよ!?新しい船が粉々にされちゃうわ!」

「おい見ろ!ヤベエな、今のが大量に飛んで来るぞ!!」

ガープの元に次々と砲弾が運ばれていた。例えばあんなのを、まるで石ころを投げるような感覚でホイホイ投げてこられたら…!!

「こうなったら…!!…これを切り抜けたら、後はお願いね、みんな!!」

「イリス!?何を…」

——深く、深く意識を沈ませる。

そこにある私の全てを拾い上げるように、私を全て受け入れる様な感覚で……!!

「……来た!!」

ふわ、と一気に髪が伸びて、綺麗な漆黒が煌びやかに風に揺れる。

中央に赤い宝石を嵌め込んだティアラに、薄く、それでも威厳を示すマント…。

「女王化…出来たあ、良かった!」

「おおうっ!変身したア!」

「あ、そっか、ルフィは見てなかったんだっけ!」

うん……この状態になれば霸氣が使える……まるで第3の目が増えたように視野が広がったよ。

「おお……つ、近くで見たらこりや確かに、本当の女王様みてエだな、イリスちゃん」

「私のイメージした姿……らしいからね。何だか脳内覗かれてる様で恥ずかしいけど……」

早速飛んできた砲弾を上手く衝撃を殺してキャッチして、飛んできた2発目の砲弾にぶつけて相殺する。

「とにかく、砲弾は私が見るよ。船は全速前進でお願い！女王化クイーンもいつまで保つか分からないし……！

「大砲相手ならおれにも任せろ！」

「レディに任せてばっかじゃ、紳士が廃るぜ。俺にもやらせてくれ」

「仕方ねエ、数が数だ。撃ち漏らした奴は俺が斬つてやる」

頼もしいね！

……ていうか、私達4人揃ったら懸賞金10億越えるのかあ……地味に凄い。

「……来た！来たぞウソツプが!!」

「本当!?!」

……!!良かった……じゃあ後は、ウソツプの謝罪を待つだけか！

「100倍ひやくばい倍ばい灰…… 去羅波さろば一文字いちもんじ!!」

ゴオオ!!と横薙ぎに飛んでいく特大の斬撃が、ガープの投げた砲弾を全て打ち消し、更に向こうの軍艦をも襲う。

ただど流石はルフィのじいちゃんだ、軍艦に斬撃が当たる前に去羅波を殴って消滅させていた。

斬撃を殴るってどんな腕してるの…。

「おーい!!喜べ!!おれだぞーい!!!!」

「!!」

「そういえば朗報があるぜ!!なんとおれが帰った暁には、副船長になってやってるぞ!!どうだ!おーい!!おーい!!ルフィ!みんな!!分かってるぞ!嬉しくて泣いてんだろ!そっちだよ!!」

ウソツプ…!!

…ううん、私は、砲弾を退けるのに集中してるから何も聞こえない!!  
「はあああつ!!お返しだ!!」

飛んできた砲弾を受け止めて、ガープの様に投げ返してやる。

うわ、明後日の方に飛んで行っちゃった。コントロールも居るのかあ!

「お前ら!まさかあの時のあのジョーク信じてねエよな!?長エ付き合いだもんな!!あん

な事本気で言うわけねエよおれが!!色々言い合ったけどよ!仲間だ!!多少の事は水に流してやるよ!なアおい、何とか言えよ!!いい加減にしるお前ら!!」

「イリス!ウソツプが呼んでるよ!」

「聞こえない!」

「ルファイ!」

「聞こえねエ」

「チョッパ…:気持ちは分かるけど、それは返事出来ないんだよ…!」

「…だって分かってるからさ、みんな…:チョッパ…:だってそうでしょ?」

「ウソツプは、何だかんだ言っても最後にはやる男だつて。」

「(づ)め —————ん!!!」

「……………!!!」

「意地はつてごべ————ん!!!おれが悪かったア————今更みつともねエんだけど

も、おれ、一味をやめるって言ったけど!!アレ……取り消す訳にはいかねエがなアー!!  
 ダメがな……頼むからよ、お前らと一緒にいさせてくれエ!!もう1度……!!おれを仲間に入れてくれエ!!!」

涙と鼻水で濡れたウソツプの顔に、激しい後悔の色が見えた。

……バカだね、最初からそうやって言っておけば……もう、心配かけさせないでよ……!!

「バガ野郎……!!早く、早く掴ばれ……!!」

ルフィの腕が、ウソツプの居る海岸へと伸ばされる。

ウソツプはその手を掴み、船へと戻ってきた……!!

「やつと……全員揃った!!さっさとこんな砲撃抜けて、冒険に行くぞ!野郎共……!!」

「お……!!」

「じゃあウソツプも帰ってきた事だし、いっちょ新技でも見せてあげるよ!」

「なに……!!それはカツコイイ奴か!」

「カツコいい!!」

小太刀を持って精神を研ぎ澄ます。

……覇気を、刀に流し込むイメージ……!!

「うお、刀身が真っ黒に……!!」

「オイイリス、それどうやってんだ、聞かせろ!!」

「やっぱり一番食いつきがいいのはゾロか。」

「どうやってるのは教えられないけどね、感覚だから!」

「私の武装色を…小太刀に集中させた大技だよ!!沈め海軍…!黒刀…!去羅波!!」

「私が振るった小太刀から、真つ黒に染まった斬撃が猛スピードで軍艦に迫っていく。」

「それを見たグループは流石に表情に焦りを浮かばせて、自身の両腕を真つ黒に染めて私の斬撃に立ち向かった。」

「今だよ!今なら砲弾も飛んでこない、逃げよう!!」

「真つ黒の斬撃カツケエー!イカすーっ!!」

「よし、ならこの船のスーパー!な機能を見せてやる…!てめエら、急いで帆をたため!!」

「え、帆を!」

「船なのに!?風を受けれなくなつて進めなくなるんじや…!」

「バカ野郎!この船を信じろ!」

「そうだ!信じろバカヤロー!!」

「コノヤローバカヤロー!!」

「コンニヤローめー!!」



「手伝えお前ら!!」

「ウソツプ…あんたほんの数秒前まで…、…まあいいけど」

うんうん、やっぱりいつもの3バカがはしゃいでる光景つて、何というか逆に落ち着くよね。これが日常なんだなあつて感じで。

「てめエら、この船の名前なんだが…」

「名前!?こんな時に!?!」

「そうさ、名もねエ船じゃ出航に勢いがつかねエだろ」

「そうだ、女王イリスと嫁のハーレム船つてのはどう!?!」

「キャハ!最高ね!」

「どこがだ!?!」

ビシ、とウソツプからツツコミを受ける。

うんうん、ツツコミも健在か。

「船の名前、俺からも候補があるぜ」

船を造った張本人であるフランキーが考えた名前かあ。ルファイが考えるよりはいいかも。

でもやっぱり第一候補は私のじよ

「サウザンドサニー号!?!」

「……!!!」

…サウザンド、サニー号……!!

何だかスツと心が受け入れたよ……きつと、それがこの船の名前なんだ!

「よし、じゃあそれにしよう、気に入った!!」

「サウザンドサニーか、いい名前だ!」

「千の海を越える船つて…素敵ね、太陽も」

「名前が決まると出航の気が引き締まるもんだな!」

…あ、ルフィのじいちゃん、私の斬撃相殺した!また砲弾の雨が降るのか……!こうなったらもう一回去羅波で……!

「てめエら!今の内にこの美しい“水の都”を見納めとけ!あつという間に島の影も見えなくなるぞ!!」

「そうか……じゃ……、じいちゃん……ん!!!それから……!コビーと……、久しぶりに会えて良かった!!」

「呼べよ俺の名を!!」

ヘルメツポつて何だか不憫な人っぽい雰囲気がある…。

「何じやイルフィ!まだ弾は残つとるぞ!!」

再度投げてきた砲弾は、今度はルフィが拳で弾き返し空中で爆発した。

…よし、帆はたたみ終わったね!!

「こつからおれ達、本気で逃げるからな!!またどつかで会おう!!それから、アイスのおっさーん!!みんなも色々ありがとうー!!おれ達行くからよー!!っ!!」

「フランキー!準備オツケーだよ!!」

「オウよ!任せろ!!」

よし、じゃあそっちはフランキーに任せるとして…!

「わしをナメとつたら…ケガするぞー!!」

「!!船より大きな鉄球って何!?…流石に、あれを弾き返そうと思ったら船へのダメージも…!!」

そりゃ、跳ね返す事は出来るけどさ…!!

「風来…バースト!!!」

「ッ、おつと…ええ!」

多少の船へのダメージは覚悟するしかないか…!と構えた瞬間、船の尾から高出力のエネルギーが放たれ…船が、空を飛んだ。

「お、おお!!」

「コーラ樽3つも消費しちゃうが、1km飛べる!!お前らの乗ってきたゴーイング・メ

リー号に出来てこの船に出来ねエ事は何一つ無い!! 全てにおいて上回る! だが、あの船の勇敢な魂はこのサウザンドサニー号が継いでいく!! 破損したら、俺が完璧に直してやる!! 船や兵器の事は、何でも俺を頼れ! 今日からコイツがお前らの船だ!!」

「おおお!!」

コーラ樽なんかで空を飛べるのが凄いいよ!! この世界のコーラって何なの!?! 私の知ってるアレじゃないの!?

そして、もうウォーターセブンの影も見えなくなつてようやく船は着水した。

本当に高性能な船だ……! じゃ、私もそろそろ女王<sup>クイーン</sup>化解いても大丈夫そうだね!

「あ……う、そ、うだつ……た……」

解いたら動けないんだつた……。忘れてた……!

「よっ……と。もう、倒れるなら私に一言かけなさいよ、バカイリス」

「ナミさん……ありがとう」

私に向かって微笑むナミさんに、私も笑い返す。

……はあ……改めて思えば、今回は本当に色々あったなあ。

ロビンと私、それからウソップが一味を抜けかけて、でも帰ってくる事が出来て。メリーは残念だったけど……それでもその意思を継いだサニー号と凄腕大工のフランキーが新しく仲間に加わって。

早速ルフィがサンジに言つて酒と肴の準備を頼んでる。きつと歓迎会を開くんだろう。

そしてこの一味は、これからもつと沢山の修羅場を切り抜け、成長していく筈だ。

……戦争、エースの死。……はあ、色々とは先は思いやられるけど…。

そつと私を寝かせて、その場で膝枕をしてくれたナミさんをちらりと見る。

すぐに心配して駆け寄ってくれたロビンとミキータとも目を合わせて、私は思うのだった。

……彼女達が居れば、どんな困難も乗り越えられるつて、確信してるから。

だからドンと来い……！私は何だろうともう臆さないよ……困難さん！！

偉大なる航路（グランドライン） スリラーバーク編

98 『女好き、遭遇、ゴースト船（シップ）』

ウオーターセブンを出航してから数日、私達は各々で新しい仲間でもあり、家でもあ  
るサニー号を満喫していた。

「おおお!! ルフィ、サメだよサメ!!」

「カッチョイイー!! ウソツプ、生簀開ける!」

「おう!!」

私はというと、ルフィとウソツプと共に釣りを楽しんでる所だ。

これが終わったらナミさんと一緒に大浴場と洒落込む予定である。フランキー…も  
そうだけど、ガレーラカンパニーの一流船大工の腕には驚かされてばかりだ。

「サメ入ったぞ!」

「よし! 見に行こう!」

今生簀に突っ込んだサメも、船内からはまるで水族館のように見る事が出来るのだ。  
生簀を兼鑑賞用にするっていう発想が凄い。

あ、ちなみに現在はサメ以外の魚は入っていない。理由は勿論、今日のサメ釣りの為に昨日サンジが魚料理を振る舞ってくれたからだ。だってサメと普通の魚を同じ水槽には入れられないし。

「サメどんな感じー!?!」

「うほーっ! すっげー!!」

生簀の中で暴れ回る、何かツノの生えたサメを見て興奮する私とルフィとウソップ。

いやー、普段はここまで興奮しないんだけど、こう：新機能みたいなのに興奮しちゃって…。日本人の性っていうか…!

丁度その部屋にいたフランキーがドヤ顔で足を組んでいたので、親指を立てて笑って見せた。これはドヤ顔しても許される!

この部屋も鑑賞用生簀だけが見所ではなく、普通にくつろぎスペースとしても充分な程機能が充実している。名前はアクアリウムバーというらしい。

例えば今ロビンが座っている丸テーブルなんかもそうだ。丸テーブル：と言っても良いのかはちよつと良くわかんないけど、真ん中に円柱が立って、その周りを囲って机にしているアレ。ドーナツの穴に棒を刺してるイメージ。うん。

他にも今フランキーが座ってる、一体それ何人座れるんだよってくらい長い長いソファもそうだ。

しかもここはただのお寛ぎスペース：キッチンも寝室も別にまだあるし：改めてすつごい船貰ったなあ。2億じゃ安いくらいだよ！

「ねーサンジ、ミキータとナミさん知らない？」

「ん？多分測量室じゃねエか？今日は見てねエな：美女に料理を振る舞いたくて仕方ねエつてのに」

「ああ、そつか。ありがとねサンジ！」

釣りも充分楽しんだ！そろそろお風呂に誘いに行こう。

『おい！海に何か浮いてるぞ』

「ん？」

展望台：…というかもうほぼゾロのトレーニングルームになってるメインマストの上部に取り付けられた部屋から、ゾロが何やら発見したようでスピーカーを使って報告してきた。

何か変に近代的なの何なんだろうこの世界…。物によっては当たり前のように前世の技術越えてるし。便利だから良いけど。

「なんだなんだ、…タルか？お？見ろ！「宝」って書いてあるぞ！もしかして：「宝船」の落とし物じゃねエか!？」

「お宝!？」



ゾロの報告で甲板に集まってきたルフィが、海に浮かぶ樽に腕を伸ばして引き揚げた。

なにになに…『海神御宝前』？

「残念、それはお酒と保存食よ」

ルフィ達と同じく、後からみんなも集まってきてナミさんが樽を見てそう言った。

「何で分かるの？」

「ふふ、「海神御宝前」って書いてあるでしょ、それは「流し樽」と言って誰かが航海の無事を祈って、海の守護神にお供え物をしたって事なの。「宝前」は「神様へ」って意味よ。イリスの居た世界の雰囲気聞いた限りじゃ、あんまり馴染みはないかもね」

にこ、と私に笑いかけながらそう口にするナミさんを思わず押し倒しそうになった。

何だこの正妻は…天使？天使なんだね？そうか、天使かあ（確信）

「酒だろ、飲もうぜ」

「バカ！お前バチが当たるぞ!!」

「お祈りすれば飲んでもいいのよ？」

はあ、なるほど…ナミさんが天使って事はよく分かったけど、要するにこの樽は誰かがお祈りした物って事だ。

ロビンの補足によれば、飲んだ後の空樽にまた新しいお供えを入れて流すのが習わし

だとか。

「ついでに言えば、波に揉まれたお酒は格別に美味しいそうよ」

「そりや味わうべきだ、よし、乾杯するぞ！アウ！イリス、そういやおめエとは飲んだこと無かつたな！」

「キャハっ！ダメよフランキー、イリスちゃんは格別お酒に弱いんだから」

「んなもん、倍加とやらでアルコール耐性でも増やせばいいんじゃないのか？」

「ハッ……確かに！」

「そうだよ、そうすれば私もみんなと混ざってお酒が飲めるって訳だ！」

…それにあの時私が暴走したのだから、今にして思えば王華を忘れてた反動に過ぎない気がするし……だからあの時だけ倍加の限界を超えて、何なら霸王色っぽいのも使ってたんだろ？

つまり今お酒を飲んでもあそこまで酷くならない可能性がある…!!

「でも今のイリスが暴走しちゃったら、本当に手が付けられないわね」

「おお、そんなときや、ナミとミキータ、ロビンには犠牲になつて貰うぜ。寝室に一晩閉じ込めときや何とかなるだろ」

「ウソツプ、あんたね……。ま、いいけど」

いいんかい。

「神様ー、おやつ貰うぞー!…よし、開けるぞー!」

ルフィ式お祈りを済ませて、蓋を閉めているロープを解いていく。

みんなお酒の気分みたいだけど、保存食しか入ってなかったらちよつと、いやかなり白けそうなー!ー!ー。

「わっ!!」

「!!何?」

何か飛んだ!?

ルフィが蓋を外した瞬間に、樽の中から勢いよく何か上空へ飛び出して、激しく発光して消えた。

な、なにになに…? イタズラだったって事?

「酒が飛んで、光って消えた!」

「… // 発光弾 // よ」

「はっはっは、海の神の呪いじゃねエのか?」

そんな地味すぎる呪いがあつてたまるか。

…でも気になるなあ。光も何故か赤かつたし…、光の色が赤とか青とかになつてるのを見たら、救難信号とかその辺のを思い出すよ。

「ただのイタズラならいいけど…もしかしたらこの船は、これから誰かに狙われるかも

「知らない」

「まさか…そういう罠なのか!?樽を開けた事で、おれ達がここに居ると誰かに知らせちゃったのか!!」

ロビンが言うくらいだから、そういう可能性も充分考えられるだろう。

罠だとしたら良く考えてるなあ。海神御宝前って書いてたら、さつきナミさんやロビンが言ってた様に普通開けちゃうもんね。

「周りに船とか無いぞ!」

「…確かに誰も居ないし…見えもしないけど…」

ナミさんはそう言って風を感じる様に目を閉じる。

「…みんな、持ち場に!南南東へ逃げるわよ!!大嵐おおしけが来る!!」

「了解っ!」

雨どころか雲すら見えないけど、ナミさんが言うんだから絶対来るんだろうね。

とりあえず一旦さつきの発光弾の事は忘れよう!

ナミさんの指示で即刻南南東へ舵を切れば、数分後にはやはり嵐が荒れ狂っていた。

とはいっても流石はサニー号、「ソルジャードックスシステム」なるものが搭載されており、そのチャンネル0という機能を使う事でサニー号の船横から車輪を出し自力で海

を渡ることが出来るのだ。

前世ではエンジンなど当たり前だったが、この世界での船というのは一般的に風の力が無ければ船は前へ進まない。

だから嵐が来ようとも、完全に向い風だろうとも構わず突き進む事のできる「外輪船」バドルシップ サニー号で軽々と嵐を突破できたのだった。

でも勿論ナミさんの指示が無ければ嵐から抜け出す方向とか分からなかった訳だから、ナミさんが居たから嵐を抜けたって事を忘れてはいけない！

…で、嵐を乗り越えたのはいいんだけど。

「何この海…なんか暗くない？」

「そうだな…まだ夜でもねエだろうに…。霧が深すぎて不気味な程暗いな」

「キャハッ、例の海域に踏み込んだんじゃないかしら？ 確か…フロリアントライアングル 魔の三角地帯」

あー…確かにそれっぽい雰囲気だね。あれ、でもウソップが不安がってない…珍し過ぎる。

「ウソップ、精神的にもかなり成長したね！ここが怖くないんだ？」

「怖い？次は魚人島だろ、そのフロリアンなんたらーってのは知らねエが…」

……あつ、そうか…そう言えばココロさんから話を聞いた時は、まだウソップは居な

かったんだ。

「オバケが出る海だ！楽しみだなア…しっしし!!」

「え」

ルフィの言葉に、さつきまでとは一転して顔を真っ青にさせたウソップ。成長……、うん、してるよウソップも…うん。

「ココロばーさんが教えてくれたんだ。生きたガイコツが居るんだぞ」

「そりやお前のイメージだろ、ムダにビビらせてやるなよ。…いいかうソップ、この海では毎年100隻以上の船が謎の消失を遂げる…。更に死者を乗せたゴースト船シップが彷徨ってるってだけの話だ」

「ギヤアアアアア!!て、てめエが1番ビビらせてきてんじゃねエか!!顔の下にマツチの明かり当てんのやめろ怖エから!!」

…してないかもしれない。

————ヨホホホく————

「………ん?」

———ヨホホホ———♪—————

「何？この音楽…後ろから………つうわ…」

ヒュ、と自分の息を吸い込む音が聞こえた。

誰かの歌が聞こえるなあ…と呑気に振り向くと、そこにはかなり大きなゴースト船<sup>シッ</sup>が…。

「で、出たア~~~~!!」

「ゴースト船<sup>シッ</sup>!!!」

ど、どう見ても、幽霊船だよ…ね？帆や、そもそも船体は所々が朽ち、素人目から見てもかなりボロボロに見えるし…それに何より未だに聞こえてくるこの歌声…。

「あ、悪霊の鼻唄だ！聞くな！耳を塞げ、呪われるぞ!!」

…よ、よくわかんないけど、呪い耐性倍加しとこ。いや呪い耐性ってなんだ、でもとりあえずやっておこう。出来てなかったとしてもとりあえずやったって事実で精神の安定を図ろう…！

「…この船に、誰が乗ってるっていうの…？」

「フン、敵なら斬るまでだ」

「………いるぞ、なにか」

ゆつくりとサニー号を通り過ぎようとする船を見て、ゴクリ、と喉を鳴らす。  
…確かにサンジの言う通り、何か…居る。

「……ビンクスの酒を……♪」

…居た。

船の端に肘を掛けて、ティーカップ片手に私達を見つめる……、

「届けに……ゆくよ……♪」

……骸骨。

……アフロの。



## 99 『女好き、歓迎、「スリラーバーク」』

「はあ……くじ運良いのか悪いのか……」

「良いわけないでしょ……今の状況分かってるの？」

「えー」

はい、現在私とナミさん、それからルフィとサンジの4人でくじによる対等な抽選方法の下、ゴースト船シッブに乗り込むメンバーが選出され、ロープを伝って甲板へ登ろうとしている所で御座います。

げんなりとした顔で言ってきた私の下にいるナミさんと顔を合わせる。

「いやだつて、ナミさんとお化け屋敷デートだよ?」

「あんたにはルフィとサンジくんが見えてないのね? そうなのね?」

ええい、他の人が2人や3人居ようがデートなの!! スリル満点! 吊り橋効果期待!

「!」

「キャアアアア!!!」

「おっと」

ロープの到達点から例のアフロガイコツが私達を見下ろしていたのに驚いたナミさ

んが反射的に手を離れた。

すぐさま腕の長さを倍加させて落ちる前に手を掴み、そのまま私の所まで持ち上げる。そんなスリルはいらない！

「もう！絶対にナミさんを落とさせやしないけど、心臓に悪いから今度からは私の背中に掴まってて！」

「い、イリス…だ、だつて…」

幽霊の類がよつぽど怖いのか、涙目のナミさんが私にしがみついて震えてる姿は…ナミさんには申し訳ないけど可愛過ぎる。あのガイコツ、ナイス。

私達を見るだけで、特に何をしてくる訳でも無いガイコツに首を傾げながらも私達はゴースト船シッパに乗り込んだ。

「ごきげんよう！ヨホホホ!!先程はどうも失礼！目が合ったのに挨拶も出来なくて！」

「え、うん」

え？フレンドリー過ぎない？

上がつてきて早々にかなりのハイテンションで挨拶をされて何事かと目をパチクリと瞬かせる。

ガイコツのくせに…紳士？いやいや、そもそもこの世界の元はONE PIECE…

常識に囚われてはいけない筈。

「ビツクリしました！何10年振りでしょうか、人とまともにお会いするのは！ここらじゃ会う船会う船ゴースト船<sup>シッブ</sup>で、もう怖くて！」

「見ろ！喋ってる！ガイコツがアフロで喋ってる！」

「しかも言ってる事結構まともじゃない？多分仮装とか、そんな感じだよきつと」

「オヤオヤ！そちら実に麗しきお嬢さん、んビューティフォー！あなたもきつと、お嬢さんの様に魅力的な女性になりますよ」

「こらガイコツ、私を見て和やかな雰囲気を出すな。ナミさんより年上だからね！胸もちよつと成長したからね!!」

「私、こう見えて美人に目が無いんです。ガイコツだから目は無いんですけども！ヨホホホ!!…あ、パンツ見せて貰ってもよ」

「おおおおいバカガイコツ！今すぐその口閉じろ！」

サンジがかなり焦った表情でガイコツに飛び付きその口を塞いだ。もうなり振り構ってられない！みたいな感じだったけど、大丈夫だよサンジ…バツチシ聞こえてるか  
ら！

…ま、ただのジョークにそこまで怒ったりはしないよ。ナミさんの下着が見たいなんて、そんなの全人類…いや全ての生き物が平等に本能として刻まれてる物だし。4大欲

求って知らない？

「…よ、良かった…聞こえてなかったか…」

「どうかされたんですか？」

「バカ野郎てめエ！イリスちゃんの前でナミさん達に一線を超える様な事を言うな…！俺でもその辺りは気を付けて居るんだ…！」

ルフィに至っては汗だらだら流してサンジに任せてるし、私つてそこまで嫁関係にうるさい人に見えてる？

…思い当たる節があり過ぎるのは、まあそうなんだけど。

話が拗れてもアレだから、聞こえなかったつて事にしておこう。

私がスルーしていれば、ルフィとサンジはようやくホツと胸を撫で下ろした。

「いやー、それにしても動くガイコツつて、お前面白いやつだなア。うんこ出るのか？」

「それ以前の疑問が山程あんだろ！」

「あ、うんこは出ますよ」

「答えんなどうでもいいわ!!」

私も似たような事気になってたとは言えない雰囲気。

私は下の話じゃなくて、今もガイコツが飲んでる紅茶は本当に飲めてるのか、とか。口には放り込むけど、胃が無いから骨の隙間からジャバジャバ漏れてるのかなあ、とか

気になつてる。仮装でしたつて言つてくれたら全て解決するんだけど。

「まず、お前は骨だけなのに何故生きてて喋れるのか、お前は一体何者なのか、何故ここに居るのか、この船で何があつたのか、この海ではどんな事が起きるのか、全部答えろ!!」

「そんな事よりお前、おれの仲間になれ!!」

「ええ、いいですよ」

「うおおおおいっ!!」

流石にビックリしたわ! 本当にうちの船長と来たらする事が突拍子も無くて心臓止まっちゃうよ!!

「…ま、まあでも船長が決めたなら仕方ないよね! えーつと、あなた名前は?」

「これはすみません、申し遅れました! 私、死んで骨だけブルックです! どうぞよろしく!」

「ちよ、ちよちよつとイリス! あんた何言つて…!」

仕方ないよナミさん…こういうルフィの暴走を止められる人なんて居ないから…。

「ブルックね。私はイリス、この天使は私の嫁…正妻のナミさん。こつちがコックのサングジで、あなたを誘つたのがうちの船長、ルフィ」

「ああなるほど、お二人はそういうご関係でしたか!」

「ちなみに船には後2人嫁が居るから、変な事しないでね」

「ヨホホホホ！小さいのになかなかのプレイガール！師匠…と呼ばせて貰ってもよろしいですか？」

「あんたら何で打ち解けてんのよ…」

「いやー、なかなか話せるよ、ブルツク！」

\*\*\*

「ヨホホホホ！ハイどうも皆さん、ごきげんよう！！私、この度この船でご厄介になる事になりました、〃死んで骨だけ〃ブルツクです！どうぞよろしく！！」

「ふざけんな！！何だコイツは！！」

ブルツクを見たウソツプ、ゾロ、フランキーは同じ反応をする。

ミキータとロビンも流石に目を見開いて驚いてるし、チョツパーに至っては白目向いてた。

「おいルファイー！こいつ何だ！！」

「面白エだろ、仲間にした！」

「したじゃねエよ認めるか！おめエらは一体何の為についてったんだ!? こういうルフィの暴走を止める為だろうが!!」

「えーつと……いい、いざという時に船長を立てられないようじゃ、船にはいられないかと思つて」

「コレがいざという時か!!?後てめエバカにしてんだろオイ!!」

ちえ、流石に騙されてくれないか……!

…でもブルツクつて、多分ONE PIECE世界でもかなり珍しいんだろね。みんなここまで取り乱すくらいだから、『骨族』みたいな種がいる訳でもない、と。

王華に聞けば分かるかもしれないけど、何でもかんでも聞いてたらつまらないしなあ。私の世界だし、先は見えないほうが面白い。

「ヨホホホ!まあそう熱くならずには、どうぞ船内へ!夕食に<sup>ディナー</sup>しましょう!」

「てめエが決めんな!!」

怒るゾロを何とか宥めて、みんなでダイニングへと向かった。

でも私は正直な話ブルツクから嫌な感じしないし、仲間に入れてもいいんじゃないかなと思つてる。

さつきも、ナミさんと私の関係を知つてからはナミさん…それにミキータやロビンに

も最初みたいなジョークは言わなくなつたし。

「いやいや、何と素敵なダイニング！そしてキッチン！これは素晴らしい船ですね、ヨホホホ！」

「そうさ、スーパーな俺が造つた船だ！おめエなかなか見る目あるじゃねエか！」

私の正面を座るブルックが身振り手振りで船を誉めていく。フランキーはそれに大層ご満悦な表情を浮かべ、サンジにあまり馴れ合うなど注意されていた。

「しかしお料理の方楽しみですね、私ここ何10年もろくな物食してないので…もうお腹の皮と背中の中の皮がくつつく様な苦しみに耐えながら毎日生きてきたのです。お腹の皮も背中の中の皮もガイコツだから無いんですけども！ヨホホホ!!スカルジョーク!!」

「あつはつはつは!!」

ルフィと私以外はやはりまだブルックを警戒しているようだ。その証拠に、彼の骨ジョークに反応したのはルフィだけで、他のみんなはじつとブルックを見つめ…いや、観察?をしている。

「ガイコツを追い出すのは後回しだ。ひとまず食え」

「おお、今日のも美味しそう！」

コト、とサンジがテーブルに皿を置いていく。

毎回思うけど、コックにサンジを当てる事が出来たのは幸運だよねえ。盛付けは勿論



のこと、味もとんでもなく美味しいし、しかもそれが魚介類を使った物となれば絶品を通り越してなんかもう凄い事になる。

「私、何だかお腹より胸が一杯で……！お嬢さんのお肉、少し大きいですね。替えて貰ってもよろしいですか？」

「おかわりあるから自分の食べえ!!」

しかし何ともまあ、個性的なガイコツさんだ。

サンジの絶品晩ご飯を食べながら、まずはブルツクの事についての疑問をみんなが尋ねていく。

1番最初に出た疑問は勿論、彼の風貌についてだった。

「実は私、生前にヨミヨミの実というものを食べてまして」

「〃ヨミヨミの実〃……？悪魔の実かあ」

「そうなのです！私、実は数10年前に1度死んだのです！ヨミヨミの実とは……ヨミヨミがえる”。つまり「復活人間」というわけで2度の人生を約束される何とも不思議な能力でしてね。その昔海賊だったのですが、私の乗っていたさっきの船で仲間達と共にこの〃魔の海〃へ乗り込んで来たのですが、運悪く恐ろしく強い同業者に出くわし戦闘で一味は全滅、当然私もその時死んでしまったのです！」

自分が死んだ事を明るく語る人初めて見た。いやそもそも1回死んだ人を初めて見

たよ。…ん？みんな何で私を見るの？

「生きてる間はただカナヅチになるだけの能力でしたが、ついにその日実の能力が発動しました。私の「魂」は「黄泉の国」より現世に舞い戻ったのです！すぐに自分の死体に入れば蘇れる筈が、私の死んだこの海はご覧の様に霧が深く迷ってしまい…霧の中、魂の姿で彷徨い続けること1年！自分の体を発見した時には何と既に「白骨化」していたのです！びっくりして目が点になりましたよ、目玉無いんですけども！ヨホホホ！！」

「お前イリスみてエな奴だなー」

2 度目の人生くらいしか共通点無いよね？え？充分？あ、はい。

「しかし、白骨死体に普通、毛は残らねエよな。ガイコツがアフロって…」  
「毛根強かったんです」

流石にその返しには吹き出してしまった。

毛根強いガイコツつてのがちよつと、ツボというか…ふふ。

「じゃ、お前オバケじゃねエんだな!？」

「ええ、私もオバケ大嫌いですから！そんな者の姿見たら泣き叫びますよ私！」

「キャハつ、あなた、鏡見た事あるかしら？」

ミキータが取り出した手鏡をブルックに見せる。するとブルックは何故か恐れてい

るかのように鏡はやめてください、と叫んだ。

「え!? おいちよつと待て! お前何で鏡に映らねえんだ!? …い!? よく見りやお前“影”もねエじゃねエか!」

「え、凄い。吸血鬼!」

「なんであんたはちよつとテンション上がってるの!」

鏡に映らなくて、影もない。あとガイコツでアフロ。

…キャラ濃すぎではないだろうか。

ロビンは落ち着いてるけど、ミキータはちよつと顔が強張って、ナミさんに至っては私にしがみついて離れない。ナイスブルック。私はあなたの味方だよ!

「でも私、ブルックが悪い人にはどうしても見えないんだよね。ごめん、根拠は無いんだけど」

「ああ、ありがとうお嬢さん。…全てを一気に語るには、私がこの海で漂った時間はあまりに長い年月。私ガイコツである事と、影がない事とは全く別のお話なのです」

………。

「続く」

「話せ!!今っ!!」

…悪い人では…ないだろうけど…うん。

「『影』は数年前、ある男に奪われました」

「…奪われた？」

「影を…？」

お、ここに来てロビンが初めて反応した。『影を奪う』なんて事をしでかす人に心当たりがあるのかな？

「お前が動いて喋ってる以上、今更何言おうと驚かねエが…そんな事があんのか？」

「あります。『影』を奪われるという事は、光ある世界で存在出来なくなるといふ事で、直射日光を浴びると私の体は消滅してしまうのです！同じ目に遭った誰かが、太陽の下消えていく所を目の当たりにしました…！『光』で地面に映るハズの『影』が無い様に、鏡や写真などに私の姿が写る事ありません！つまり私は光に拒まれる存在で！仲間全滅。『死んで骨だけ』ブルックです、どうぞよろしく!!」

「何で明るいんだよ！散々だな、お前の人生」

呆れながら言うサンジの言葉にも、ブルックは更にジョークで返答する。そして更に、高らかと踊り出しそうになる程のテンションで笑い出した。

「ヨホホホホ、ヨホホホホ!!今日は、今日はなんて素敵なお日でしょう！人に逢えた!!」

「!」

「今日か明日か、日の変わり目も分からないこの霧の深く暗い海でたった一人、舵のきか

ない大きな船にただ揺られて彷徨うこと数10年！私、本つつ当に淋しかったんですよ！淋しくて、怖くて……！死にたかった！！」

…そっか、数10年…ずつと1人…。それはきつと、信じられない程辛く、苦しい日々だっただろう。

私も無人島では1人だったけれど、あの島では私は自由だった。対してブルックは舵すらきかない船の中、刺激のある生活をしていた訳でも無く……か。

「長生きはするものですね。人は『喜び』！私にとつてあなた達は『喜び』です！ヨホホホ！！涙さえ涸れていなければ泣いて喜びたい所」

ブルックはルフィを見る。瞳などどこにも見えはしないが、私にはその眼窩に果てしない感謝の色が見えた気がした。

「あなたが私を仲間に誘ってくれましたね。本当に嬉しかったです、どうもありがとうございます。…だけど、本当は断らなければ！」

「おい！何でだよ！！」

「先程も話した様に、私は影を奪われ太陽の下では生きていけない体！今はこの魔の海の霧に守られているのです。あなた方と一緒にこの海を出ても、私の体が消滅するのも時間の問題。私はここに残って、影を取り返せる奇跡の日を待つ事にします！ヨホホホ！！」

「何言ってるんだよ水くせエー! だつたらおれが取り返してやるよ! そういや誰かに取られ  
たつったな、誰だ!? どこにいるんだ!」

「そうそう、あなたが女の子ならもつとやる気出るけど、ルフィが目をつけた人の為なら  
頑張るよ?」

それでもブルックは強情で、何が何でも私達に“敵”の名を教えるはくれない。

「あなた方は本当にいい人ですね。…しかし! それは言えません。さつき会つたばかり  
のあなた達に、“私の為に死んでくれ”なんて言えるハズもない。それより、歌を歌い  
ましょう! 今日のおよき出逢いの為に。私は楽器が自慢なのです! 海賊船では“音楽家  
”をやっています!」

「えー! っ!? 本当かア!? 頼むから仲間に入れよバカヤロー!!」

「ヨホホ! では楽しい舟唄を1曲、行きましょうか! ……!!? ぎ、ギヤアアアア!!」  
「へっ? ど、どうしたの!?!」

急に腰を抜かし、尻餅をついたブルックへと駆け寄つてその体を支える。…うわ、  
軽っ!! 骨だけとはいえ軽すぎじゃない!?

「ご…ゴースト…!!」

「え…? ……!!」

ブルックが指差す部屋の壁を見ると、そこからてるてる坊主のようなゴーストが壁か

ら体を貫通させて私達を見ていた。

「!?わ、なに!?」

しかも今度は船がズズン!と何かに揺られる。

近くで何かが動いて、それによって波が揺れたつてというのが1番考えられる事だけど  
…一先ず外に行つてみないと!

みんなで慌てて船外に飛び出ると、前方に口のような門が見えた。

「あれは何!?まさか、今の振動つてこの門が閉まった音!?」

「…その通りです。これは門の裏側…という事は…船の後方を見て下さい!!」  
「後ろ?」

門の裏側つて事は…ここはもう、何かの中つて事か。

…なら、後ろにあるのは必然的に…門の中の何か。

「……これは」

「…もしやあなた方、「流し樽」を海で拾つたなんて事は?」

「…!拾つたぞ!」

「それが罠なのです。この船はその時からずっと狙われていたのです!」

今、私達の前に広がるのは…島だった。

おどろおどろしい雰囲気、物凄く大きい鎖が天高く伸びたり、遠くには大きな城の

ような建物が見えたりする不思議な島だ。

「でも、船はずっと停めてたはずなのに…何で島がここに？」

「これは、海を彷徨う アイランド ゴースト 島 “ …！ 「スリラーパーク」 !!」

「…ゴ、ゴースト…」

私の肩に手を添えて震えているナミさんの手に、私の手の平を重ねる。

…でも、ナミさんが何も言わなかったって事は記録指針ログポにも反応が無かったって事だ

よね…？

…うーん、本当に偉大なる航路グランドライってというのは…退屈させてくれないね…！



100『女好き、ドキッ！女だらけのゴースト島（アイランド）！』

「彷徨う島……でも、記録指針ロジポースは何も反応してないわ……」

「そうでしょう。この島は遠い西の海ウエストブルーからやって来たのですから……しかし、今日は何という幸運の日！人に会えただけでなく、私の念願まで叶うとは!!ヨホホホ!!」

笑いながら、ブルックはダイニングを出たすぐの場所から船首まで跳躍した。

「うお、何て身の軽さ……!」

「ヨホホホ!そう!『死んで骨だけ』、軽いのです!あなた方は今すぐ後ろに聳える門を何とか突き破り脱出して下さい!絶対に海岸で錨など下ろしてはいけません!私は今日、あなた達に出逢えてとても嬉しかった、美味しい食事……一生忘れません!!ではまたご縁があればどこかの海で!」

「ちよ、あなた能力者でしょ!?!海に飛び込んだら……!」

そのままびよん、と海へ飛び込んだブルックを見に行けば、まさかの海の上を走っている姿が見えた。

身が軽いからああいう事も出来るって事か……青キジとはまた違った海の対策だね。

「…と、とにかくルファイ!あいつの言う通りにしましょう!何が起きてるのか分からないけど、完全にヤバイわ、この島っ!」

「…んん?なんか言ったか?にしししっ!」

「だって、ナミさん。行く気満々だよ」

「分かった事だけどね…!」

いやー、実は私も気になってるんだけどね。

こんないかにもーって感じの雰囲気なら、ナミさんはきつと怖がつて…そしていつもとは違った雰囲気私に抱き付いてくる筈…!ふへへ…おっとヨダレが。

「なアなア!さっきのゴーストどこ行った!?!まだ船に居るのか!?!」

「いや、島の方へ飛んでった。あの島の住民なんだろう」

ゴーストか。…私の見立てでは、あれは誰かの“能力”だと思ってるんだけどな。

ブルツクの件でも分かった事だけど、この世界で起こる摩訶不思議な現象には、大抵悪魔の実が絡んでるもんだし。

そしてブルツクのあの反応…きつとこの島に彼が言っていた“影”を奪う人が居るんだ。

「さっき起きた大きな震動だけど…あの口みたいな門が閉じた音だとしたら、私達はあの“口”に食べられた形になったんだと思うわ」

「食われた？」

「キャハ、ロビンの言う通り：霧で分かりづらけれど、門の延長に延びる壁が島を取り囲んでる様に見えるでしょう？」

「そう。ーつまり、この船は今、島を取り囲む壁の内側に閉じ込められたという事」

例えばこの島を真上から見た時に、ゴースト島：アイランド「スリラーパーク」とやらが中心となつて、その周りを円状に壁で囲つていてるという事か。

「じゃあこの島は人工的に海を彷徨つてゐるって事!?何の為に…」

「それは分からないけど、島が動いてるとなると錨は下ろせないね」

「おいおい！何停める気でないだよ、脱出するんだ！今すぐに脱出だ、呪われるぞ！」

そんなウソツプの言葉も虚しく、ルフィは既に冒険準備万端だ。何を捕まえる気なのかは知らないけれど、虫網に虫かごまで装備している。

「ルフィ、よく見ろあの不吉な建物！本物の「オバケ屋敷」だ！」

「よし、ルフィ船を止めよう。目指すは「オバケ屋敷」!!」

「てめエまで何言つてんだ!?!お前らは悪霊つてもんをナメてるぞ！」

「何言つてんだ、おれはちゃんと細心の注意を払いながら…さっきのゴーストを捕まえて飼うんだ」

「ナメ過ぎだつ!!」

「ただどウソップも伊達にルフィと長い付き合いな訳じゃない。何言っても止まらな  
 い事は分かっているんだろう、それ以上は何も言わなかった。というか、弁当まで用意  
 してきたルフィを見て諦めてた。とはいえ、島には絶対に降りたくないらしく船番を強  
 く希望していたが…。」

「という流れもあつて、居残り組と探検組で分かれる事になった。」

「居残り組は、ウソップ、チョッパー、ナミさん、ロビン、ミキータ、私。そして探検  
 組は残りのメンバーだ。」

「ミキータはともかく、どちらかと言えば探検好きなロビンが残るなんて珍しいな、と  
 思つて理由を聞けば「イリスが居る方を選んだの」と言われて思わぬ攻撃をダイレクト  
 に浴びてしまったぜ…。」

「私は探検…というかオバケ屋敷に行きたかつたんだけど、ナミさんが無理だつて言う  
 から…。涙目のナミさんに勝てる私がどこに居るのか。」

「さて、お前ら、これより小舟を使つて島へ上陸するわけだが、おめエらにまだ見せて  
 ねエとつておきのものがあるんだ」

「とつておき…」

「ああ。「ソルジャードックシステム」<sup>ウシ</sup>「チャンネル2」<sup>スリー</sup>だ!このシステムのチャンネル  
 は5つある。0が2つに、1、2、3、4。各ドックより各種機能が発動するわけだ!」

えーつと、0が外輪バドルで…1も3ももう見せては貰ったつけ。あれ、でも…。

「たしか2と4はまだ空だつて言つてなかつた？」

「うははは、とつておきなんでそう言つた。上陸する気のねエ奴らは試し乗りしてみろ！」

「何人くらいなら乗れるの？」

「最大4人つてトコだ」

「だったらナミさん、ミキータ、ロビンと一緒に乗りたいな。海上デートを楽しんでくる!!」

3人の手を引つ張つて2番ドックへ向かえば、そこには私達がよく見知つた“あの船”の小舟版があつた。

見間違える筈もない、デフォルメされた羊の船首像は…。

「すごい…メリー? いや、メリーの子供的な立場か…メリーJr.? ミニメリー?」

「ミニメリーの方が可愛いからミニメリーで行きましょう! それにしても、フランキーも粹な事してくれるわね!」

メリーが帰つてくる事はないけども、サニーと同じでこのミニメリーもメリー号の意思を受け継いでいるんだろう。

私達は早速ミニメリーに乗り込んで、海へと飛び出した。

\*\*\*

「…それで、どうしてこうなったんだっけ」

「う……ごめんなさい…」

現在の状況?ええ、ここはもうスリラーパークの中ですね。

で、どうしてこうなったかと言うと、ナミさんがミニメリー号に浮かれ過ぎて岸に乗り上げてしまった拍子に、私達はその勢いで島の中に放り出された、という訳です。

しかも運悪く落ちた所が堀の底という事もあり、登ろうと思えば6・7メートルもある壁を登らないと行けない。

あ、勿論私やミキータなら簡単に船に戻れるけど、せっかくなんでこのままデートをしようと思います。ぐへへ…幸いな事に今ナミさんは自分のミスでこうなった事に対して責任を感じてるから、そこまで頭は回っていないだろう。

酷い?私はそれでもみんなとデートしたいの!!

「でも、島に入つてすぐこんな深い堀があるっておかしいよね」

「ええ、竹ヤリが敷き詰めてなかったただけ幸運だったかもしれないわ。…でも、何があってもイリスが守ってくれるんでしよう？」

「勿論つ。あ、ナミさん、足場はガイコツで一杯だから歩くときは気を付けてね」

「ヒイイイ!!」

おふ…抱き付かれるのを狙って言った事だけど、真正面からはちよつと息が…! 幸せ窒息死しそう…!!

「とにかく、ここは海面の下だから早く移動しようよ。流石にここが海水で浸かっちゃったらどうする事も出来ないし」

「そ、そうね…でも、どっちへ行けば……」

その時、パキ…と何かを踏み潰す音が聞こえた。何かつて、ガイコツしか無いんだけど…。

その音がする方へ視線を向けた私達は、驚きに目を見開く。

1つの体に3つの頭部…それって、どこからどう見ても…。

「け、ケルベロスッ!!」

ナミさんはそう叫んで私の後ろに隠れた。

ケルベロスって言ったたら、確か地獄の番犬だった様な…。

「ワン!」

「ワワン!!」

「コーン!」

コーンて…1匹キツネ混じってない?

「どう思う?ロビン」

「そうね…少なくとも私の知る“ケルベロス”は、3つの頭部全て犬のものだ」

「キャハッ、じゃあ、アレは?」

すつとケルベロスを指差すミキータ。ケルベロスはそんなミキータに狙いを定めたのか、一直線に彼女へ向かって駆け出した。

そして、3つの口を大きく開いて…。

「私の嫁に手を出そうとしてるくらいだから…能無しノバカ犬でしょッ!!!」

「「ギャッ!」」

1番左の頭を右に向かって殴りつける事で全ての頭を連鎖的に攻撃し、ワンパンしてやった。

20倍に抑えてやったんだから感謝しろ!!

30倍はあのクロコダイルの砂嵐サブラスすら殴って消せる威力だからなあ。下手に使った

ら殺してしまいかねない。今は幼児体型だから完全にあの時の威力は30倍にしても出せないけど。



「?このケルベロス…何というか縫った痕が多いね」

「縫い目だけじゃないわ。ほら、ココ…数字が書いてある」

…82?何か意味のある番号なのだろうか。

「わ、ワン…」

「コーン…」

「え、結構タフだね。一応意識は奪ったつもりだったんだけど」

もう立ち向かってくる気はない様だけど…体も大きいし、相手のタフさを見誤ったかな?  
な?

とりあえず私達はこの一本道の堀を道沿いに歩いてみることにした。じつとしていられないっていうのはさっきも話したことだったからね。

「いやー、やっとデートっぽくなってきたね!」

「どこがよ!ケルベロスを倒すデートなんて聞いたことないわ!」

「キャハっ!私はそうでもないわよナミちゃん。ケルベロスに襲われそうになった私を助けるイリスちゃん…最高のシチュエーションだったわ!!」

「あんたはそういう奴よね…」

がく、と項垂れるナミさんを慰めながら、私達は何とか地上へ出られる階段まで辿り着き、上がっていく。

階段を上ってる最中から感じてた事だけど…堀の底を長く歩いてる間にどうやら森の中まで入り込んでしまったみたいで、上がりきった先は目を凝らせば周りが見えない事もないって程の仄暗い森の中だった。

震えてるナミさんが可愛い。可愛い…けど、流石にここまで怯えさせちゃったとなると罪悪感が…。

「私は能力があるから大丈夫だけど…みんなは周り見づらいよね、絶対に私から離れないでね」

「は、離れる訳ないでしょ…」

「でも、実際これからどうする?来た道戻ろつか?」

「けど、さっきのケルベロスみたいな生物がアレだけでも限らない。ルフイ達も後から来る筈…どうにかして落ち着ける場所を探すのが無難じゃないかしら」

成程ね…流石はロビン。ちょっと顔にこの島が気になるからまだ居たいって書いてあるのは気になるけど!

「だったら、お屋敷に案内してあげまし」

「…ん?」

後ろから声が掛かって振り向けば、そこには木の枝にぶら下がって私達を見ているコウモリ…のような何かが居た。

ロビンがしゃがんで、私の耳元で「あのコウモリも額に数字があるわ」と囁いてくる。…なるほど、ケルベロスだけじゃない…と。番号は21か。

しかも縫い目まできちんとある。ケルベロスと無関係って事は無いだろう。

「屋敷？そもそもあなた誰？」

「私はヒルドンと申しまし…。どうやらこの森に迷い込んでしまったご様子でしたので、お困りなのではと背後から忍び寄りました…。ここらの森はこれから夜が深けて参りましと、この世のものとは思えぬ程に危険な森へと変化致しまし…。もしよろしければ、私の馬車でお屋敷へいらっしやいまし…。ドクトル・ホグバック様のお屋敷へ…」

「いやだ」

「そうでしか、ではこちらの馬車へ…え？嫌？」

当たり前じゃん。いきなり現れてペラペラ喋り出す善人人面コウモリがどこにいるの。こういうのは大体敵だと相場が決まってるの！

「で、ですが、話を聞かせて貰った所、お仲間を待つのなら屋敷が1番安全だし、目立ちましし、安全でし！」

「その聞き取りづらい話し方やめてくれる？馬鹿にしてんの？」

「オエ…の、能力者でしか…！」

腕を伸ばしてコウモリの首を掴み、無理矢理引き寄せる。

「イリス、もし、もしよ?万が一、ううん、億が一コイツの言ってる事に悪意が無かったら…」

「…そうだね、確かに、手を出すのは早すぎたかも…。ごめんね、こっちは嫁を連れてるからあなたみたいな怪しき満点野郎は警戒しないといけないの」

「い、いえ…。だ、大丈夫だし…。そ、それよりどうでし?屋敷へ案内…」

「どうする?とみんなに顔を向けられ、みんな私の判断に任せると言った。

うーん…そうだなあ。

「じゃ、お願いしようかな。もし何かあっても蹴散らせばいいか」

「キヤハハっ!イリスちゃん、私も強くなったのよ?」

ふんす、と鼻を鳴らしてドヤ顔するミキータが可愛いですはい。

そんな感じで私達はヒルドンの馬車へと案内されて中に入った。

馬車内は4人乗りみたいで、私はナミさんの膝の上に座る。

「どうぞワインでも」

「誰が得体の知れない生物から渡された物を嫁に飲ませるか。いらない」

「そ、そうでしか」

…逆に怪しすぎて何も無いとか、ある?ただの善人でした、みたいな…。

……いやないか、流石に無いよね。

「所で、そのドクトルなんたらつてのは人間なの？」

「はいでし」

「Dr.・ドクトルホグバック、天才外科医よ。地位も名誉も、医者として得られる全てを手に入れた男と聞くわ」

「ふーん……なんでその天才がこんな『オバケ島』に住んでるんだろ」

ねー、とナミさんを見上げれば、ナミさんは窓のカーテンを少し開けて外を見ていた。

「……ウソ、この森……ライオンまで」

「ライオン？」

私もナミさんと同じく窓から外を見れば、そのライオンが私達の方を見てにやりと笑った。……人の顔で。

「……ねえイリス、この島絶対おかしいわ」

「グランドライオン偉大なる航路だから……つて言うのは考えづらいよね。確かここつて西の海ウエストフルーから来てる筈だから、島の環境自体は普通のハズだし」

となると……今のところ一番怪しいのはそのホグバックとやらか。

ロビンもそう思っているのか、何やら難しい顔をしていた。

「ライオンの他にも何か居るのかな」

再度カーテンを開けて外を確認する。

………。なんか大量に居るんだけど。しかも踊ってるんだけど。エモノがどうとか言ってるんだけど。木とか猫とか馬とか。

「ねえヒルドン、これは何?」

「……えーつとでし……まず、このカーテンを閉めるでし」

「ふんふん」

「そして再び開けましと……なんと、何も居ないでし!」

「おー!!……で? 遺言はそれだけ?」

「ヒイイイ!ま、待って下さいでし!せ、説明するでし!!」

ヒルドンの首を掴んで力を入れていくと、彼は慌てて弁解し出した。

「こ、この森は少し変わっています……そして、この深い霧と恐怖心から幻覚を見してしまう方もちらほら……!」

「幻覚……?……分かった、じゃあこの際“そう言う事”にしてあげるから、とにかく海岸まで送ってくれない?」

絶対幻覚なんかじゃないし、私の中ではこのヒルドンとかいう奴も何かしら隠してそうだと思うけど……。

「……わかりましたでし。……では、使用人にその旨伝えましたので、お待ち下さい」  
ヒルドンは馬車を止めるように指示を出し、外に出て行った。

「…で、みんなはどう思う？ 私はこの島絶対何かあると思う」

「イリスちゃんの見解に賛成よ。さっきの木や馬も、ロビンが言っていたように体に番号が振られていたわ」

「縫い目も同じようにね」

「……もしかして、そのホグバックって奴が何か…？」

ナミさんが言った事にロビンが頷いて肯定する。やっぱりロビンもそう考えてたか…。

ん？となると、ホグバックがブルツクの『影』を奪ったってやつ…？

「ま、それは行ってみればわかるか」

「イリス？それってどういう…」

ガン！と扉を蹴破って外に出る。

前を見ると、やっぱりヒルドンも馬も消えていた。

「ちよつと隙を与えたらこれだよ。…ナミさん、手を」

「ど、どうなってるのよ…？」

ナミさんは私の手を掴んで馬車から降り、ミキータとロビンも続いて降りる。

「見ての通り、馬車だけ置き去りにしていったみたいだね…墓地に」

「ぼ、墓地…」

今日何度目か分からない、頭に当たるナミさんのぽよんの感触に頬が緩む。  
わざわざ奴はここに私達を置いていったんだ。…何かあるんだろうね。とにかく…  
油断だけは絶対にしないでおこう。



## 101 『女好き、覗き魔の末路』

「おらー！こんにやろー！ふん！！」

「ぶへエ!?も、もうやめてくれエ！お、おれ達が悪か…ぼはアツ!?」

「あ、悪魔かア…こいつア腐れやベエ!!げふウ!?」

「お、おれ達、まだ何もして…こはア！」

「……なんていうか、ここまで来たら怖くなくなってきたわね」

現在、私の足元には何10体ものゾンビが倒れ伏している。

…どうしてこうなったかと言うと、ヒルドンに馬車ごと置き去りにされたこの墓地の墓から、こいつら「ゾンビ」がお約束通り土を破って出てきたのだ。

それだけならまだいいんだけど、こいつらはあるう事かナミさんやミキータ、ロビンまで狙った。攻撃しようとしたんだ。…そんなの、許せないよね？

「あなた達は、頭が取れても生きてる…というか動けるんだからちよつとやそつとじゃ大丈夫だよね？」

「え!?いや…そういう訳では…」

「や、やめてくれ！わ、悪かった！もう何もしねエ！」

「30倍灰・巨大な手」  
さんじゅうばいばい グランデ・ハンド

両手の大きさを倍加し、奴らの真上へと跳んだ。ここからなら…ゾンビー匹逃さずに済むからね!!

「去柳薇・銃乱打!!」  
さよなら ガトリング

「ギャエエエエエエエ!!」

「に、逃げ場が…アぐヘエ!」

ドドドドツ!!

ゾンビどころか墓すらも巻き込み、それはもうかなり罰当たりな行為をしでかしたけれど奴らを全滅させる事には成功した。

…どうせこのままほつといても復活するだろうけど、ま、いつか。どうせ後からファイ達も来るだろうし同じようにやられたらいいよ。

「お待たせー、待った?」

「待ち合わせじゃないんだから…」

かなり恐怖心も薄れてきているのか、ナミさんの顔はこの島に入った当初に比べると明るかった。良かった良かった、怖がるナミさんを見たいって気持ちもあるけど、行き過ぎると罪悪感が…。

「ありがとうイリスちゃん!でも次は私の分も残しておいてくれるかしら?私の成長を

イリスちゃんに見て欲しいのよ！」

「はは、ごめんねミキータ、次はちよつと残しておくよ」

「それで、これからどうするのかしら？ 屋敷はもう目の前よ」

ロビンの言葉にナミさんが頷く。

「ここまで来たんだから、もう屋敷に行くわよ。あのヒルドンって奴が言つてたようにルファイ達と合流するならそこが一番早いわ」

「そうだね。2人もそれでいい？」

ミキータとロビンが私の言葉に頷いたのを確認して、私達は墓地を抜け屋敷を目指した。

墓地を抜けてすぐの並木道を真っ直ぐ歩き、屋敷の門前へと到着する。

「近くで見ると、また格段と大きく見えるね」

「ええ……。 Hogバツクって奴が居たら、どうする？」

「とにかく様子を見よう。あのゾンビや、キツネケルベロス、人面ライオンとかの生態を研究してらっただけかもしれないし」

良いように考えたらの話だけだね。十中八九、Hogバツクは黒だろうけども。

「すいませーん！ ドクトル・Hogバツク氏の屋敷はここでしょうかー!? 開けて下さーい！ 旅の…… 船乗り」ですけど!!」

……。

「留守かな？…ん？門は開いてる…」

「キャハ、こんな森で鍵もしてないなんて、怪しいわ」

「中へ入れば、それも分かるわね」

とりあえず勝手に門は開けさせて貰うとして、私達は中へと入った。まあ、ここは外門だからまだ屋敷の中に入れた訳じゃないんだけど。

屋敷の真ん中にトンネルがあつて、その向こうに中庭が見える。トンネルの中間地点に井戸のような物を見つけたその時、その近くに設置されていたスポットライトが井戸を照らした。

「いらっしやい」

「んひやいっ！」

び、ビックリしたー！井戸に近付いたら中から女の人が出てくるんだもん！…結構美人だねこの人。

「んひやいっ！だつて、ふふ、可愛いじゃないイリス」

「フフ…大丈夫よ、怖くないわ」

「もく、そういうナミさんだつてビックリしてたじゃん！」

…井戸から出てきたのはビックリしたけど、この人も身体中に縫い目がある…。それ

になんていうか、暗くてよくわかんないけど……顔色に生気を感じない。丁度10枚お皿を持つてるのも気になるし。

「さあ、入って」

「え、いいの？なんか随分あっさりだね……」

美人さんが井戸の隣にある扉を開け、私達は警戒しながらも中へと入った。

中は……結構広いね。壁に沢山飾ってある絵画や、熊？かなんかの剥製絨毯、そしてその部屋の中央にある長テーブルとそこに座るいかにもな悪役面……と。

「フォスフォスフォス！よく来たな我が屋敷へ!!」

「あなたがホグバツク？」

「そうだ。そしてその女は昔婚約していた大富豪の主人の愛を試す為に、主人の宝物の10枚の皿を全て叩き割った所婚約破棄され、顔にハナクソをつけられて追い出されたという不幸な過去を持つ皿嫌いの使用人、シンドリーちゃんだ」

シンドリーちゃん……それはあなたが悪いような気が……。

婚約破棄されたなら私が貰ってあげてもいいんだけどね??

「座ってもいい」

「え？あ、うん、ありがとう」

シンドリーちゃんが椅子を引いてくれたのでそこに座る。みんなも同じように座り、

上座に触るホグバツクへと意識を向けた。

「それで、色々聞きたいことあるんだけど聞いてもいいかな？」

「なんだ、分かる事なら答えよう！」

「この島は一体何？ゾンビとか、訳わかんない生物は？あなたは何でここに居るの？」

どうせ適当に建前を返されるだろうけど、一応聞いておこう。

万が一、まだこいつが白である可能性も……ないか。

「まあ待て、その質問には全て同じ理由で返答出来る！答えはこうだ、

俺はあれらが何か分からねエからここに住んでる……！」

研究してるとして事？と聞くと彼はいかにも！と興奮気味に立ち上がった。

「確かにゾンビと聞けば人は恐怖する。しかし『死者の蘇生』と言い換えるならば!!そりゃあ全人類にとつての永遠の『夢』じゃねエか！誰しも身近に生き返ってほしい人間の1人や2人いる筈だ……！……！しかし、人の生死を操ろうなど神をも恐れぬ邪道の医学……！だから俺はこっそりと世間から姿を消し、この不思議な島で研究を続けている」

成程……それが建前だとしても、まあ理由にはなってる訳だ。

「プリンをどうぞで」

「え？お、お皿……」

「世界から皿なんて無くなればいい」

「こ、こういう時の為にテーブルクロスは死ぬ程洗ってあるから安心しろ！」

そういう問題じゃないよ！

プリンを鷲掴みにして置くのはまだいいよ美人だから！でもそのままテーブルの上にべちやつて置かれたプリンを誰が食べるの!?! いやホグバックは食べてるけどさ！

「お風呂の準備もしたわよ、あんた達、森の中歩いてきたのなら入れればいい」

「ありがとうシンドリーちゃん。いやー、ゾンビに触ってるからお風呂入りたかったんだよね」

流石に手を付けられないプリンはそのままに、私達はホグバックに一声かけて風呂場へ向かった。

…なんかみんなで一緒に入る事になったけど。…ま、いつか、その方が安全だよな。

\*\*\*

「ふんふん♪ふんふん♪」

「痒いところないかしら?」

「だいじよぶー」

4人であれば狭くなるんじゃないかと懸念していたけど、なかなか広い浴室で助かった。ちなみに4人共同体にはタオルを巻いている。今はむらむらしてる場合でもないの  
で、それ対策だ。

そして今はロビンに髪の毛を洗ってもらってる所である。幸せすぎます…。

「はあく…私がじゃんけんで負けなければ…!」

ミキータが浴槽の縁に両腕を置いて枕のようにしてもたれかかっている。さつき私の髪を洗うのは誰か、みたいな感じでじゃんけんしていたのだ。私としては誰が来ても  
幸せになる得しかない勝負でありがとうございます。

「…みんな、屋敷の中見渡した? 気付いてる?」

「ええ」

「ん?」

ミキータと同じく湯船に浸かっているナミさんがぼつりと呟いた言葉にロビンが頷  
く。

気付いたって、何のこと?

「壁に飾ってある絵画や骨董品、気付かれないように観察してたけど…そのほとんどが



ゾンビよ」

「えっ」

そ、そうなんだ…全く気付かなかった。

ていうかこの感じ、気付かなかったの私だけ!?なんか情けない…。

「それも、ここに来るまでの廊下にあったのも含めて、ね。そうなると一番怪しいのはやっぱりホグバツク…!彼はウソを付いてる。あの男とゾンビ達に繋がりが無かったら、この屋敷や島で暮らしていける訳がない!…どうする?」

「…そうだね、じゃあ—」

「—グルルル…なかなか、賢い女だ…」

「……………、なに?」

突然、この浴室内から声が聞こえた。

…獣の唸り声…?人間の声もした…同じ奴か?

「ガルルル…ガキに用は無い」

「は?…ツ!」

“何か”に腕を掴まれて浴室の端まで投げ飛ばされる。何…?姿が見えない…!

「イリスー……つ、な、何……!?手が……」

ナミさんの両腕が掴まれ、〃何か〃に引つ張られていた。間違いなく居る筈の〃敵〃の姿が見えない……!

そのままナミさんは壁に押し付けられる。

「ナミちゃん……」

ミキータはナミさんを助けようとして、だけど躊躇うかのように体を止める。それはそうだろう、敵の姿が見えなければ、迂闊に手を出して逆にナミさんを傷付けてしまうかもしれないからだ。

そしてそれはロビンも同じで、彼女の場合はそもそも相手が見えなければ上手く能力を使用出来ないから難しいだろう。

「ほう……この中では、貴様が一番好みだ……。貴様、おいらの花嫁になれ……」

「イリつ……う!?!」

「……な、」

ナミさんの口が、塞がれた。

相手は透明人間だ。塞いだそれが手なのか、腕なのか……唇なのか、私には分からない。い。

だけどき、一緒のお風呂に入っていて、声からして男だろう奴にどういふ訳か侵入を許

して、タオル巻いてるとはいえ裸を見られて、そしてあまつさえ…唇を奪われてるかも  
しれない…？

…ムカつく。ムカつく。人の女に…ナミさんに触りやがって…。どこのどいつだか  
知らないけど…覚悟は出来てるんだらうね…。

「イリスちゃ…、…、…ロビン、とりあえず避難しましょう」

「そうね…ここは危険だわ」

「なんだ？逃げるのか？丁度良い、邪魔者は殆ど居なくなった…！オイ貴様、こつちに  
来」

ゴキイツ!!

「い…？…が、ああアアア!!おいらの、おいらの腕がア!!」

「…何だ、腕か。良かった」

ナミさんの口を塞いでいた見えない“何か”を両腕で掴んでへし折る。

そうなれば勿論、ナミさんを拘束する余裕など無くなって“何か”が痛みに震えなが  
ら後ろへ数歩下がった音がした。

「とりあえず聞かせてよ、あなたは何の訳にナミさんに求婚したの？」

「…っ、ちっ、おいらの腕を折るとは…流石は腐つても6億…ここは撤退…！」

「私はお前に、質問してるでしょ!!!」

「ゴッ…!?!」

浴室の窓へと走る音が聞こえ、私は大体の場所を予測して蹴りを放つとドンピシャで直撃して壁に人型の窪みを作った。

「私の懸賞金の話はしてないの。私は今あなたに、質問してるでしょ?」

ほら!と窪みを見てお腹の位置を1発殴ると、乾いた呻き声が浴室に響いた。

…まだ透明解除されないか。

「はア…はア…!か、可憐な女性に、ひ、一目惚れして…」

「私のナミさんに、一目惚れすんな!!!」

「り、理不尽…がはっ!?!」

足裏でお腹を蹴り、更に壁へめり込ませる。壁の周りにヒビが広がっていくけど…まあいいか、ホグバツクの屋敷だし。

「ぐ…お、おいらを舐めんじゃ…ねエ!ガルルル!!」

「っ…」

ドオン!といきなり私の顔面に何かの攻撃が直撃した。火薬臭い煙が私の顔を隠し、続け様に何発も同じ攻撃が顔に降り注ぐ。

「ど、どうだ……！こんな至近距離から何発もおいらの『死者の手』を喰らえば……！」

「ああもう鬱陶しい!!！」

「ゴヘア!？」

何発撃とうが一緒だ、と返答する代わりにもう1発奴の腹を殴る。

……ああ、もういいや、この屋敷の事とか、ゾンビとか、色々こいつに聞けるかもしれないとは思ったけど……。

「声を聞くだけで腹が立つ。雑魚が調子に乗って私の女を狙うとどうなるかってのを、教えてあげるよ。…… 30倍灰<sup>さんじゅうばいばい</sup>」

「が、ルル……！こんな筈はない……！奴の懸賞金は、飾りじゃなかったのか……!?これが、『青キジ』から必死に逃げ出してきたあの『逃げ足の女王』な訳……！」

「そんなもん、自分の目で確かめなよ。もっとも、確かめてる余裕は無いだろうから直接教えてあげるね……去柳薇<sup>さよなら</sup>ツ!!！」

奴の腹に直撃したかなりの威力を誇る私の拳は、容易く浴室の壁を貫通して奴を吹き飛ばす。

どこかに行かれるのも鬱陶しいので腕を伸ばして回収し、流石に今の衝撃に耐えられなかったのか崩れそうになる浴室からナミさんを抱えて脱出した。

……それにしても、『逃げ足の女王』か。やつぱあんな遠回しの警告じゃバカには通用

しないじゃん。

というか、いくら青キジが敗けたって事実を世間に知られる訳にはいかないとはいえ、やっぱり逃げ足は流石に酷くない？

もう会いたくないけど、もし今度青キジに会うことがあれば直談判してやる！侮辱罪で訴えてやる!!

## 102 『女好き、戦略的敗北』

あの後、崩壊した浴室にてへべろしながら着替えを終えた私達は、気絶した事で透明が解除された男を引き摺って元の部屋に戻る為廊下を歩いていた。

この男も色々混ぜられているらしく、人間がベースなのは分かるんだけど、体や顔の部分部分に獣の部位が移植されているような感じだった。

となると、ゾンビやケルベロス：それからシンドリーちゃんにあつた縫いキズも同じ考えで間違いないだろう。

そしてそれを行なったのは、間違いなく天才外科医の Hogback 。

「この絵画もゾンビなんだっけ？」

「まあ…勘でしかないんだけど…」

「よっー！」

「ぐへっ!？」

おお、本当にゾンビだ。殴ったら呻き声あげたし間違いない!

呆れ顔のナミさんは見なかった事にして、私は次々と目についた絵画や置物を攻撃して行く。

中には本当にただの絵画とかもあつたけど……紛らわしいのが悪い！弁償なんてするか、こちとら海賊だつての。

そんな感じで最初ホグバックと話していた部屋へと戻ってきたんだけど、何故かその部屋は真つ暗で、灯りを消されていた。

「……キヤハ……これはもう、確定ね」

「ええ、ホグバックこそが、ゾンビ達を生み出してる張本人……！どうして私達を屋敷に招き入れたのかは知らないけど……」

「私達をゾンビに変えようとしているのかも」

「こ、怖い事言わないでよロビン……そんな事したら、今度こそ本当に死人が出かねないんだから」

何故か私と私の腕に引き摺られてる男を交互に見ながら言うナミさんにピースを返せば、彼女は分かりやすくてため息をついた。え、何？

「ホグバックはどこに行つたんだろう……」

「お2人はもう、お休みになられましたでし……！」

「ん？」

その声に合わせてパツ、と灯りがつき、ヒルドンが姿を現す。

奴はシャンデリアにぶら下がり私達を見下ろしていた。……よくもまあ、この状況で私



達の前に姿を見せれたもんだよ。

「伸びろ」

最初にヒルドンに会った時の様に腕を伸ばして掴み、引き寄せる。ただ1回目と違うのは……もうお前を庇う人なんて1人も居ないって事だけだね！

「な、何をするでし……！」

「ホグバックの所へ案内して欲しいんだけど」

「そ、それは出来ないでし……！お2人ともお疲れでし……休ませてあげたいでし……！」

「白々しいなこのコウモリもどき。ねえ、この男はあんた達の仲間？」

透明獣野郎の頭を掴んでヒルドンに見せると、奴は目を見開いて私とその男を交互に見る。……OK、その反応だけで充分。

「痛いのがイヤなら、早いうちに決断してね。……そーら!!」

ヒルドンを顔面から床に叩きつける。それはもう床に穴が空くほどのパワーで。

「ホグバックはどこ？」

「……………！」

「もう」

しようがないなあ、みたいな雰囲気を出しながらもう1度床に叩きつけた。ついでにもう1回、更にもう1回！

「どい？」

「い、言いました…言いました！お2人はこの屋敷の2階の…」

「嘘をつくな」

もう1回床に叩きつけて、今度は腹に小太刀を突き立てて床に張り付けにした。  
流石ゾンビ、血の一滴も出ないんだね。そもそも痛覚とかあるのかな？

「言え」

「…そ、その、暖炉の中でし。か、隠し通路がありました…その先の…」

「そ、ありがとね」

ズボ、と小太刀を抜いてヒルドンを部屋の間まで蹴り飛ばした。

扱いが酷い？こいつらにはこれくらいで充分でしょ。

「行こっか、暖炉の先だって」

「キャハッ、凄いわ！でも、最初のが嘘って何で分かったのかしら？」

「あー、1回目には本当の事喋ると思っただけだから、カマかけただけだよ」

「流石ね」

にひひ、とピースしてロビンに返した。

暖炉まで歩いていく途中で絵画からゾンビが襲ってくるかと思っただけ、奴らは汗をだらだら流して私と目を合わせようとしない。

…ああ、もしかしてこの透明男が原因なのかな？ゾンビとはまた違った感じだし…血も出てたから、こいつらの中でも偉い方だったのかも。

「あ、これね。…確かに隠し扉があるわ」

ナミさんが暖炉に入ってペタペタと調べ、石煉瓦にカモフラージュさせていた奥へと続く回転扉を見つけてそこを通っていく。流星は泥棒、そういうのを見つけるのはお手の物だね！

私の心も会って早々に奪ったからなあ…ナミさん、恐ろしい娘…!!  
さてと、左は行き止まりだから、右に進めば良いんだよね。

流星に行き止まりの壁にまた何か仕掛けがあるとかは…ないよね？

「この廊下もゾンビで一杯ね」

「よし、じゃあさつきと同じく殴りながら進んじやおう！」

びく、と絵画の中のゾンビが震えたけど、お構いなしに殴って先へ進んでいく。ナミさん達に危害を加えるかもしれない存在は予め潰しておかないと！

「ふんふん♪えいつ」

ドオン!!

「ふんふん♪ふん♪ていつ」

バコオン!!

「声の重みと屋敷の被害が釣り合っていないわよ…」

「ここより先のゾンビ達からすれば、まるで死へのカウントダウンね」

ゾンビだから死なないんだけどね。

だけどそれが今の私にとってはかなり嬉しい事で、何故かというところ30倍の火力を相手の命を気にする事なく実験出来るからである。

そりやもう楽しすぎて鼻唄も知らず知らずのうちに歌つちやいますよ！

「お、扉発見」

もはや屋敷のダメージなど全く気にする必要がなくなつた私は、その扉を蹴破つて中に入った。

「…つて、何この部屋」

「また絵?…いや、写真ね」

その部屋は、所狭しと美人な女性の写真を飾っていた。

…というか、この写真の人…もしかしてシンドリーちゃん?

「シンドリーちゃんの部屋…なわけ無いか」

「ええ…それより見て、この写真には顔にも体にも、どこにも縫いキズが無い。やつぱり、シンドリーちゃんも…」

ゾンビって訳ね…。

「ビクトリア・シンドリー…随分有名な舞台女優だったみたいよ」

ミキータが部屋を漁って、見つけた記事を読んでいく。

「…舞台女優？以前どこかで使用人してたとか…ああ、もしかしてそれも嘘だったのかな」

「これを見る分には、そんな経歴考えられないわ。元々貴族の生まれで、子供の頃から人気者……。…やっぱりね、みんな、ここ見て」

ミキータが私達に見えるように記事を開けて、とある一文を指差す。

…えーつと、なになに…ビクトリア・シンドリー、大舞台での悲劇…舞台から転落…。

「…死亡…!!」

「ということは、やっぱり彼女は、ゾンビなの!？」

そうとしか考えられない…!だって、この記事は10年前のものだから少なくとも10年前にはシンドリーちゃんは亡くなっているんだ。

だというのにこの写真と、私達が見たシンドリーちゃんは縫いキズ以外は瓜二つ…いくら何でも、歳を重ねてそんなに変化がないなんてあり得ない。

…いや私の例もあるけど!

「死者蘇生…まともな方法だと思っ？」

「まともなら、今頃世間に公表して大金持ちよ」

「だよね」

これは尚更ホグバックを問い詰めた方が良い。奴自身の戦闘力は分かんないけど、私の目を信じるならばあいつはそんなに強くない。

「ま、ルファイ達が来るまでの暇潰しにはなるんじゃない？」

「フフ、頼もしいわね」

「暇潰しって、そんな軽い話じゃ無い様な気もするけど……」

そう言っただけで私達はその部屋を後にし、更に奥へと進んで行く。

あー、でもシンドリリーちゃんがゾンビなのは勿体ないなあ……流星に死者を嫁にするのは……いやいや、でも可愛いしなあ。く……！

\*\*\*

「フオ……スフオスフオスフオス!! フオ……スフオスフオスフオ……ウ……ンン!! フオ……スフオス!!」

「……ホグバックだ」

「……は……研究所かしら」

廊下をずっと歩いていけば、1度聞けば耳に残る、あの甲高い笑い声が部屋から聞こえてきて扉を少し開けて中を覗く。

やはりそこにはホグバックが居て、隣にはシンドリーちゃんも控えていた。

「フオ〜スフオスフオスフオスフオース!!もうすぐ完成だ!この見事な没人形<sup>マリオ</sup>!!  
見ろよシンドリーちゃん!まさに芸術<sup>アート</sup>!天才の所業!!」

「もう一息の所で失敗すればいい!」

「何言ってるの!?!シンドリーちゃん!!まったくおめエの暴言には毎度生き肝を抜かれるぜ!!」

「こちら、夜食のスープスパゲティです」

「みるみるスープが無くなるぜ!?!シンドリーちゃん!!何故そう果敢なメニューを選ぶんだ!?!」

…ちっ、イチヤイチヤしやがって…今すぐこの屋敷全壊させてやろうかな。

「…あの台の上を見て」

「…人? いや…死体ね」

ロビンが呟いた言葉にミキータが反応する。

以前にミキータは「そういうの」は見慣れてるって言ってたから、彼女が言うならあれは死体で間違いないだろう。

「しかも今まで見てきたゾンビと同じで、番号が付いているね」

「それをもうすぐ完成だと言ってた。…これで決定的ね、アレこそ今まさに生み出されようとしているゾンビ…この島にいるゾンビ達はやっぱりホグバックが蘇らせたんだわ…」

「…それで、あなたもゾンビ?」

くる、と振り返っていつのまにか私達の後ろにいた「ソイツ」と顔を合わせる。

ナミさん達も私の言葉で気付いたのか、勢いよく振り返った。

「ヨホホホホ!」ご機嫌よう!よく私の接近に気が付きましたね」

「ヨホ…?ブルツク…?」

いやでも、ブルツクにしては肉も皮もついてるし…!

「ハア!」

「ちよ、いきなり…!」

刀で斬りかかってきたその男の攻撃を、みんなを巻き込まないように小太刀で受ける。

…!なに、この刀…!小太刀が折られそう…!強度2倍にしてるってのに!

「うわっ!」

「きやつ!」



そのまま、奴の力に押し切られて Hog Back の研究所内へと飛ばされた。

しまった…見つかった…！くそ、小太刀じゃなくて素手で受ければ良かった！

「ぬう!! 貴様ら、何故ここへ…!!? ……まアよかろう、今更何の秘密を知ろうとも…もう手遅れ。あと数分で『夜討ち』が始まる…！油断させ、島に迷い込んだ客人達を一気に狩り込む『夜討ち』が…!! ……て、えエ!! き、貴様…その手に持つてる男は…まさか…!!」

「え? ああ…知り合い? あげる」

「ほい、と死体を置いてある台に勢いよく投げつけて、『あと少しの所で失敗』させてやった。

透明獣野郎の体は妙に頑丈だったから、あの死体の方が潰れるか折れるかしてる事だろう。

「き、貴様…！まさかアブサロムを…!! シンドリーちゃん！サムライ・リニューマ！今すぐコイツらを影の世界へ叩き落としてやれ!! もう2度と光の差さない影の世界へ!!」

カチャ、とお皿を重ねたシンドリーちゃんが前から、まるでブルツクのような笑い方をする『サムライ』が後ろから。

…どうしようかな、多分、纏めて相手しても勝てると思う。だけど何の手掛かりも無くなるってのは…。

せつかくゾンビの手掛かりも掴めそうだし…『影』の世界って言ってたからブルツ

クの「影」を奪った人も分かるかも知れないし。ホグバツクではないと思うけど…。

「おやおや、よく見ればそちらのお嬢様方、んびューーティフォーー!! パンツ、見せて貰ってもよろしいですか?」

「残念だけど、パンツどころか体の隅々まで私のだから…あなたに見せられるものなんて何もないよ」

ちら、とナミさん達にアイコンタクトを送る。伝わるかは分かんないけど、ここは愛に託すしかない!

内容は、「わざと負けて私達をどうするか見よう!」つてもものだけ…果たして伝わるか…。

「フォスフォス…お前達がこれまでに見たゾンビ共とは「格」が違うぞ、そいつは特別な肉体を持つ將軍ジェネラルゾンビ! 「新世界」「ワノ国」から来た男!! アブサロムをも凌ぐ実力を持つ、伝説の侍だ!!」

「……さて」

リユーマとやらが剣を抜く。なんだあの剣カッコいいな。いや違うそうじゃない!

…どう攻撃してくる…? 奴に気付かれないよう、攻撃を完璧に受け流して敗けた「フリ」をしなければ…。

「ッ!!?」

次の瞬間、恐ろしく速い剣撃が私達を襲い、リユーマは何事も無かったかのように横を通り過ぎて行つた。

……………だけど…ふう、間に合つた。

「な、何？斬られるかと思つた…」

「…いや、さつき、攻撃されたよ」

「え？」

恐らく、私が青キジを倒した瞬<sup>エンデイスタンテ</sup>焉たる別れ、あれと同じ事が起こつたんだろう。

斬られた事すら気付かない、みたいな。

「まあでも…私は見えたからみんなの攻撃を上手いこと流しといたよ…。後は倒れるフリするだ…け…ッ！」

——囁く様にみんなに指示を出した直後、私のお腹に凄まじい衝撃が襲いかかる。

だつて、そうじゃん。いくら私でも…気付かれない様に自分とみんなを守るなんて無理だから…だから、自分くらいは犠牲にしないと…。

「イ…ッ！」

思わず叫びそうになるナミさんを、倒れながら目だけで訴えて止める。

…私の事は良いから、倒れて…!!

「ッ…！」

3人とも、唇を結んで私を睨みながら私と同じように地面へと倒れた。

……あー、次目を覚ましたら、怒られるんだろうなあ。

だって思ったより威力あったもんあの剣撃……というか私だけ妙に威力高かったもん

……!

……そんな事を考えながら、私の意識は薄れていく。

意識を失う前、最後に聞こえたのは……リユーマとかいうサムライが辺りに響かせる様に刀を鞘に納める音だった。

「鼻唄三丁……矢筈斬り!!!」

# 103 『女好き、抜ける 不思議な庭（ワンダーガーデン）』

——…す…！——

——…りす、——

「イリスツ!!!」

「っはうわ!!」

……あ…え、な、ナミさん…。耳元で叫ぶなんて、普段はしない起こし方ですね！あはは、額に青筋が見えるのは気のせいですか？

「あ・ん・た・ね〜!!! 私達を庇って攻撃貰うくらいなら、普通に戦って倒しなさいよ!!」  
「だ、だって、影の手掛かりが…!」

「私はそれよりあなたの体の方が大事なのよ！次無茶したら殴るわよ!!」

「ご、ごめんなさいっ!!み、ミキータもロビンも、ごめんっ!」

「…ふう、イリスちゃんは強いから無茶しちゃうんでしようけど、私達も心配するのよ

？」

うう…ミキータに怒られると心が痛い…、普段怒られ慣れてないからかなあ。

「も、もうし…、…ないから！そ、それでここは？外みたいだけど」

「露骨に話題を逸らしたわ」

「しないって言うのにも間があつたわね」

「やつぱり一発殴って…」

ひい！ごめんさい！ごめんさい！もうしません！！…多分、きつと。

「…はあ。…ここは恐らく、屋敷の裏手ね」

「裏…？…うわ、反対側にでっかい建物もある…！」

「そう、ここはあの屋敷と建物を繋ぐ大きな渡り廊下よ。森みたいに見えるけどね」

まあ、森にしては木とかに飾り付けられてあるものがファンシーだなあとは思ってたけど…。

私が気を失ってから、倒れたフリをしたナミさん達と一緒に棺桶に閉じ込められてここまで運ばれてきたそうさ。

途中で運んでいたリスゾンビ2体が棺桶を落とした際、ナミさん達が気を失ってない事がバレたらしい。

…確かに私が寝てたの棺桶の中だ。…え、じゃあみんなでこの狭い棺桶に詰められて

たつてこと!?うわあ…意識が無かったの本当に勿体ない!!!

「サムライリニューマ…峰打ちだったのかな、斬られた痕がない」

「殺す気は無かったんでしようね。きっと私達をゾンビにしたかったんでしようけど、殺せばゾンビにできないとか」

うーん…でもホグバックがせっせと完成させてたのは死体だったから…よくわかんないなあ。

「そのリスゾンビは?」

「仲間を呼ぶって言って逃げてたわ。だからあんたを急いで起こしたんじゃない。本当ならもつとゆつくり寝顔を堪…もとい、疲れを取らせてあげたかったのに」

「正直な話、ナミちゃんも私の事言えないわ…」

なんだかんだ言ってナミさんは私に甘いから…。

「…ん?」

ペツタン♪ペツタン♪

なんか、ペンギンが3匹後ろ向いて踊りながら出てきた。

ナミさんが何この愛らしい森の動物達…と喜んでるけど、気付いてナミさん!それ絶対ゾンビ!

「番号〜!〜!」

「2!」

「…あ、3…」

それぞれ順番に私達に振り向いたペンギンもどきはやはりゾンビで、1番はまだしも、2番は人面、3番はブルドック面…いやあ…うーん…キモ可愛いって、呼べるのか…な??

「コンニチワ! 僕ら」

「ペンギンゾンビコンビ! あ! 間違えた」

「トリオ! トリオだ。おれ新入り」

「どうでもいい…」。

「そして君達の後ろにいるのが仲間の動物ワイルドゾンビ達!!」

「へ?」

『ようこそ!! ペローナ様の ワンダーガーデン “不思議の庭” へ!!』

「……す、凄いヘンなのがイヤっていう程いるー!!」

ナミさんの言う通り、もう記述出来ない程いるんだけど。

ゴリラウサギや、人カバ、カンガルーシマウマ、牛犬、パンダゴリラ、羊猿、蛇鳥e



t c …。

「ただど私は、そいつらの見た目なんかよりもよっぽど衝撃を受けた言葉がある。」

「…何でだか分からない。ただ、私の心を揺さぶったのは、『ペローナ』という人名。私の前世の記憶かな？ Hey 王華、ペローナって誰？」

「なんて聞いて、ほいほい出てはこないんだけどね」

「それ、ケチョンケチョンにして絞り上げろ！」

ドドドド！と大勢のキメラゾンビ達私達に向かつて走ってきた。

…仕方がない、ここは神背ヒューマを使って…。

「やめろ!!!」

「!!?」

その時、私に攻撃しようとした人カバを…ペンギン3号が蹴り倒した。

な、なに…? どうしてこんなタイミングで仲間割れなんて…。

「おい新入り！仲間は何してやがる!! 敵はその女共だ、そつちをブツ飛ばせ!!」

「…このレディ達がどこの誰かは知らねエが…例えばご主人様の命令に背いても…俺は死んでも！女は蹴らん!! 文句があるなら、かかってこい… クソゾンビ共!!」

……!!

このペンギン…なんでこんな、サンジみたいな事…!! ま、さか…サンジ、ゾンビにさ

れたの!? 肉体とか改造されちゃったの!?

「さ、サンジ……?」

「ああ? 誰だそいつは。それより早く逃げろお嬢さん達……ここは俺が引き受ける」

…サンジじゃない? …いや、それにしても言葉の節々に面影がありすぎる…!

仮に肉体を改造するとしても、サンジの体は強靱だ。手駒にするのにこんな弱そうなボディにする意味がない。

…ということは、意識だけを飛ばしてる? 例えばその意識…仮に魂として、魂をホグバックが作っていた死体に入れれば動き出す…とか。

…え、私天才じゃない? 絶対これだよ、これしかない!

「…だとしても、とりあえずこの場を乗り切らないとね。手を貸すよペンギンくん」

「キャハ! ついに私の成長のお披露目ね!」

「私の手も必要かしら?」

「つたく…あんたらと一緒だと心強すぎて怯えるだけ時間の無駄よ」

4人で戦闘態勢を取り、ペンギンくんの横に並んだ。

おうおう、気を付けなよキメラゾンビ共。ここに居るのはただ可愛くて美しいだけの嫁じゃあない。

…私の嫁なんだから！

「<sup>フレズ</sup>風！」

「おお、ミキータ飛んでる!!」

あれはエニエス・ロビーでも見たけど何だろ?…あ、そういえばウソツプがミキータの為に風<sup>フレズ</sup>貝を手に入れたとか言ってたから、それをブーツに仕込んでるのか!

「はああー!一万キロジエスト!!」

「おおおお!?なんだこいつア!」

「み、見た目のわりに一撃が重いぞ!」

体の大きなパンダゴリラに蹴りを当てて、そのままグローブからも発生する風の力で押し込み、パンダゴリラの後方にいる奴をその巨体を利用して潰していく。

なるほど、確かにあの装備は自身の重さを自由自在に調節できるミキータにはピッタリだね!何よりカッコイイ、映える!

どう!?みたいな顔で振り向いてきたミキータに親指を立てて返した。いやー、これはウソツプもいい仕事してるね!

「<sup>ドス・マノ</sup>二本樹…クラッチ!」

「ふへー!」

ロビンもゾンビの肩から腕を生やして首をへし折っていた。流石にゾンビとはいえ

あそこまでされれば……まあ動けるには動けるだろうけど機動力は無くなるだろう。

「私も忘れないでよね……！上空の雷雲にご注意下さい……！サンダーボルト・テンポ!!」

「あばばばばばー!!?」

「な、なんだこいつら?!強すぎるぞ!!」

「ど、どうする……? 将軍級がいねエと無理だ!!」

「ついでにいえば、その将軍が居た所で勝てないよ……あなた達なら、30倍を使えそうだね……!」

脚と腕に最大倍加を付与して構えを取る。

……イメージは、青キジ戦。それからさつきのリューマだ。

「30倍灰…… 違期道!!」

「……は?ど、どこに行つた!」

「後ろだ!このガキ……いつの間に……!」

「速いだけ取り柄だつてんなら、すぐにとつ捕まえて半殺したバガツ……!」

「ゴフォ……!!」

……ふいー、上手くいった。

青キジみたいな化物級に強い奴には、覇気ももりもりに盛つて、100倍で全力を賭さないで成功しないけどこいつら程度なら30倍で充分みたいだね。

狙い通り殴られた事すら気付いてなかった奴らが次々に倒れていく。…なんか暗殺とかに使えそうな技術だね。そんな機会ないけど。

「…イリス、今度は別方向から何か来てるわ!」

「ええ…今度は何…?」

「…みイイツウウけエエたアアアア!!アブ様の仇イイイイイ!!」

ええええツ!!?な、何アレ!?か、カバ!?いや、サイ!?それかブタ!?…いやイノシシだ!!  
「死ねエ!!!」

「このレディに手を出すな!!」

私に向かって振り下ろしたきた巨大な斧を、犬ペンギンが蹴り飛ばす。

「邪魔すんじゃないわよオ!!」

「犬ペン!!」

武器を取った所で、犬ペンとイノシシでは体格に差がありすぎるせいか簡単に投げ飛ばされてしまった。

ていうかアブ様の仇ってなんだ…誰だそれ…。

………あ!もしかしてアブサロム…!?

「ナミさんに求婚してたアイツか…!」

「何ですってエ!?ナミって誰かしら!」

「私だけど…ってきやあつ！あ、危なつ！」

「この泥棒猫ー！！！！」

何だこのイノシシほんとに！急にナミさんに殴りかかったんだけど！！

くそ…確かに私は女だろうと嫁に危害を加えるのなら攻撃できるタイプ…！だけどこのイノシシが変に純粹っぽいから攻撃しづらい！

「と、とにかく逃げよう、倒すのは気が引けるよ」

「キャハつ、そうね、純真で可愛いコじゃない」

「倒しちゃつたら心が痛いわ」

最悪はそりや、倒す事になるのかもしれないけどさ…！

「目指すはあのでっかい建物！走って！」

「ええー！」

ダダッ！とみんなで森を走り抜けていく。

本気で走れば撒くのは簡単だけど、それだとみんなを置いてっちゃうから…！

「…っ、イリス、先に行つて！！」

「！…ダメ、みんなを放つていけない！」

「あのイノシシなら大丈夫…！私に考えがあるの！」

そうは言つても…！結局倒すつて事？それなら私も居た方が…！

「倒しはしないわ、ちょっと話をするだけよ！……だからお願い、足手まといはイヤなの、私は、私達はあんたの嫁でしょ!？」

「足手まといって……。……。本気？」

「冗談でこんな事言うわけないでしょ……！」

……これ以上は……ナミさんの決意を無駄にしちゃうか……！

それにミキータもロビンも残ってくれるのなら安全だよね……！

「……みんな、無茶しないでね！」

「あんたが言うな！」

あ、はい、すみませんでした。

\*\*\*

ウエディングイノシシから逃げて、森みたいな渡り廊下から続く上り階段を駆け上がって建物に飛び込んだ。

……ナミさん達大丈夫かな。

「…いや、心配は不要な筈…みんな強いんだから、何とかなるよね…! あんまり過保護過ぎてても将来的に鬱陶しく思われるかもしれないし?」

とにかく私は、この建物で「ペローナ」って人を探さなければいけない。

私の心がその名前に反応しているってのもあるけど、そもそも今の所「影」の手掛かりはその「ペローナ」だけなんだから。

「あ…し、侵入者…:ペ、ペローナ様…!」

「ん?…くま…のぬいぐるみゾンビ??」

…まあ、このくまには何の恨みもないけど…ちよつと眠ってて貰おうかな!!

「ごめんね!…去柳薇ツ!!」

「ブオ…!!?」

ぬいぐるみの腹部に拳を叩き込み、遙か後方へと吹き飛ばした。

…ぬいぐるみのくせに、なかなか重かったなあ。中に何が詰まってるんだか。

「…さつきあのくま、ペローナ様って言ったよね。…ということはこのペローナが管轄のエリアって訳だ」

可愛い名前だなあ。

…いや待て私、今まで会ってきたこの島の人間…人間?を思い返すんだ。まずはホグバック、そしてアブなんとか。…:ペローナも人間じゃない可能性が高い…!



「期待はしないでおこう…」

それにしてもこの建物、中も広いなあ。見渡す限り石造りで、至る所に階段があつて扉もそこかしこにある。考えなしに動いても迷子になるだけか…。

「どうしようかな… 神背ヒュウマで増やして手当たり次第が1番良いのかな…？」

「オイ」

「それかこの建物自体を壊しながら進むとか？ そうしたら流石に誰か飛び出してくるでしょ」

「オイ!!」

「…ん？」

私が登ってきた階段から、私を苛立たしげに呼ぶ声が聞こえて振り向く。全く、次は何？これが女の子の声じゃなかったら姿を見るまでもなく殴り飛ばしてる所だよほんと！

「何かよ……………う……………」

「……………？何だお前、人の顔見て固まりやがって。…それよりお前、〃逃げ足の女王〃か？いや、見間違える筈もねエな…。いいかよく聞け、お前が幾ら6億の首だろうと、この私の能力の前では」

「……………うううう、かか、かかかか…!!」



## 104 『女好き、怪物再来』

タツタツタツ！

「ギャー………ツ!!! ネガティブ・ホロウ！ネガティブ・ホロウ!! ホロウ！ホロウ……ツ!!!」

「ぐっへへへエ！当たらないよペローナちゃん!!」

「クマシ……!! 助けて……!!」

「げっへへへ！逃げる姿もサイコーにキューティクル!!」

あー楽しい！これってあれでしょ!? 「捕まえてごらんさーい」「おい待ってー」「キヤツキヤツ」的なアレでしょ!? ペローナちゃんも私とイチャイチャしたいならこんな回りくどいことしなくてもいいのに……!

「い、いい加減にしろオ!! 特ホロ!!」

「……大きなゴースト……!」

「ハア……ハア……そうだ! いくらお前が頑丈だろうと、この技の破壊力に耐えられる訳が

ねエ！<sup>かみかぜ</sup>神風ラップ！」

巨大なゴーストが、私の体を包み込んで大爆発を起こした。

当然近くにいたペローナちゃんも爆風に巻き込まれて床を転がっていく。

「ペローナちゃん！大丈夫…？」

「いやなんでお前ピンピンしてんだよ！！直撃しただろうが！！」

「？」

「何言ってるのこイツ、みたいに首傾げてんじゃねエぞ！！頭イカれてんのか！！」

まあ…ダメージはあったけどそんなに効かなかったかな。それにしてもペローナちゃんの反応って、この世界でも新鮮でなんだか興奮してきた。

（や、やばい…こいつはとにかくヤバイ…！…どうにかして逃げねエと、マジで犯される…！！）

「ま、待て！ほ、宝物庫の宝をやる！だから見逃してくれ！！」

「え？別に宝はいらないかな。私はペローナちゃんが欲しい」

（お前海賊じゃねエのかよ…！！でもそんなストレートに言われたらちよつとトキめいちゃまったじゃねエか…ガキみたいななりしてる癖に…畜生！！）

ガシ、とペローナちゃんの両腕の掴んで床に押し倒す。

ふふふ…：口調からして、ちよつと男勝りなのかな？だけど格好とか、趣味は女の子ら

しい…可愛すぎ？そう、キューティクオー。

「や、やめろ…！ネガティブ・ホロウ！」

「あ」

し、しまった…何の技か分からないから避けてたのに当たってしまった…ダメだ…警戒してたのに当たるなんて…私、本当に人間のクズ…。

「死のう…生まれ変わったらカタツムリになりたい…」

「い、今のうちだ！どけ！」

そのまま強引に退けられてペローナちゃんはどこかへ走り去ってしまった。

そうだね…私なんかじゃ、ペローナちゃんには釣り合わないよね…はあ…。

「…はっ！私は何を…」

ブンブン、と頭を振って深呼吸する。

…ネガティブ・ホロウだっけ。技名からして、まあそういう効果なんだろう。実際喰らったわけだし…。

「…でもまさかペローナちゃんがあそこまでかわいいこちゃんだとは…！もう嫁にするしかない…！」

問題は、ペローナちゃんをどうやって嫁にするかなんだよねえ…。とにかくアタック

しまくって、チャンスを待つしか無さそうだけど。

「おーい！イリスー!!」

「あ！ナミさん、ミキータ、ロビンも！」

3人が私を通ってきた道を同じく走ってくる。所々にある爆発の跡にギョツとしているが、私自身がピンピンしているので気にするのはやめたようだ。

「大丈夫だった？イノシシは？」

「何かわかんないけど、あの子…ローラって言うんだけどね、ローラの恋を応援したら友達になったわ」

うん、わかんない。

「キャハハ！ナミちゃん、イリスちゃんが困惑してるじゃない」

「でもそれ以上に説明する事なんてないわよ…、それで？あんたの方はどうだったの？」

「あ、うん、めつちや可愛い女の子見つけた！嫁にする！」

ぐつ、と握り拳を作ると、その女の子は？と聞かれたので逃げられたよ、と答える。

ただ能力はとんでもなく厄介だから、それについてはキチンと説明しておこう。

\*\*\*

「…なるほどね、ネガティブ…」

「うん、なんか精神侵されるって感じで…」

「それで、イリスはそのコを探すのかしら？」

ロビンの言葉に迷わず頷く。

ブルツクの影の件も大事だけど…ペローナちゃん、あの娘を逃すなんて考えられない。  
い。

あんなに可愛い女の子を嫁にしなかったら、私はハーレム女王なんて一生名乗れないよ！

「でも、だとしたら手強いわよ。今まで嫁にしてきた人達と違って、そのコは何にも困ってない。寧ろ本当に私達の敵なんですよ？」

「うん。…だから、真正面から口説き落とそうかなって思ってる」

「それしかないでしょうね」

「キャハ、イリスちゃんに口説かれて落ちない人なんて居るのかしら？」

「……そうね、イリスが『本気』を出せば恐らくは…」

本気？ 私は常に全力だよ！

ナミさんの言葉にミキータも頷いている。分かってないの私とロビンだけなの？

「イリス、私達もあなたの嫁勧誘を手伝うわ。でも、その為にはまず二手に分かれる必要がある」

「…何か作戦があるんだね？」

「ええ。それも…とっておきのね」

作戦の大まかな流れはこうだ。まず、私とミキータが空からペローナちゃんを探す。

そしてナミさんとロビンが “あるもの” を探し出す事が出来れば、後はそれを使うだけでペローナちゃんは確実に私の下へ自分から来たがるというのだ。

…ナミさんの言うことだからとりあえず信じるけど、本当にそんな美味しい話があるの？

「それで何だけど、イリス、ちょっと神背<sup>ヒューマ</sup>出してくれる？ 護衛があつた方が探し物はしやすいの」

「ああ、そうだね。だけど知つての通り神背<sup>ヒューマ</sup>の制限時間は10分だから、気をつけて」「分かつてる、必ず見つけてくるわ」

そもそもその “あるもの” が何なのか分かってないんだけど…。



「ま、いつか。ミキータ、よろしく！」

「ええ！任せてちょうだい！」

神背ヒューマで「私」を出して、私はミキータに掴まって空へと舞い上がっていく。

「見つけたら分かるように合図送るわー!!」

「うん!!じゃあまた後でー!!」

「ちゃんとペローナちゃん見つけてよ、私!!」

「そっちも、ちゃんと2人を守ってよ！「私」!!」

そうしてナミさんとロビンと分かれて、段々と高度を上げていく。やがてこの島全体を見渡せるようになった時…私とミキータは思わず目を見開いた。

「…これは…!」

「そう言うことだったのね…」

今、私達の目の前に見えるのは…地上に居た時には霧で見えなかった巨大な「帆」だ。

帆はペローナちゃんを追いかけ回していた建物の上であり、メインマストだろうと推測出来る。

…つまり、この島は島自体が動いているんじゃない。この島自体が丸ごと“船”だったんだ!

「ほへー…：ジョリー・ロジャーも描いてるから、海賊船かあ…。ん?という事はホグバツクもアブなんたらも、ペローナちゃんも海賊なんだね」

「ええ…：それに、ここまで規模の大きな『船』の船長となると…：間違いなく名の知れた大物だわ。あ、勿論イリスちゃんの方が強いのは当たり前よ!名の知れた大物なんか敵じゃないわ!」

ミキータの中の私ってどうなってるんだろう。無敵生物なのか…? :

とはいえ、この島が船だから何だという話だ。私達の第1優先目標はペローナちゃん  
の勧誘であり、そこに船だとか島だとかの些細な違いはどうだつていいのだ。

てな訳で、ミキータと一緒に空から搜索を続ける。

ぶつちやけ屋敷とか、最初にペローナちゃんが居た塔みたいな建物の内部に居たら見  
つからないけど…。

「…：ん?何かあの建物揺れてない?」

「え?…：本当ね、私達が飛んでるから分からないだけで地震が起きてるのかしら?」

「島とはいえ、一応船だからね。地震が起きるような事は無いと思うけど…：下から  
ノックアップストリーム  
突き上げる海流でも来てない限り」

もし本当にそうだとしたら洒落にならない。流石に全滅しちゃうよ…。  
しかし、その考えは杞憂だったと次の瞬間に思った。…いや、これはこれで厄介だけ  
ど…。

「肉ーーーーーッ!!!ハ~~~~ラ~~~~ア~~~~つたア~~~~!!!」

「…!!!」

「な、何かしら?」

ビリビリ!と空気が震える程の大声があつた。建物の内部から轟く。

一瞬ルフィかと思つたけど、有り得ないと首を振つた。幾らなんでも爆音過ぎるだらう。ルフィにあそこまでの音量は無いはずだ。……多分。

「…なんか、あの建物内からすごい気配を感じるんだけど」

「キャハハ…私もよ。……行つてみる?」

確かに、今のところペローナちゃんの姿も手掛かりも何も無し。

唯一起きた変化がさっきの声だから行つてみるのはアリだけど…。

さて…どうしようか。

「ゴムゴムの〜!銃!!」

ピストル

次の動きを考えている間に、さっきの声の主が建物を内側から破壊して外へ出てきた。

…何だあれ…巨人族、か？

でも技名… ゴムゴムって言ってたっけ。…もー…情報量多すぎて私の頭じゃ処理が追いつかないよ!!

「…いや待って!! ミキータ、ちょっとあの建物に近付いて!!」

「え!! でも危険よ? 得体の知れない怪物が近くに…」

「平気!」

私がそういえばミキータも特に反論はせずに少しづつ建物へと近付いていく。

崩れた箇所から内部が見えるようになっており、そこにいる人物をじっくりと視力倍加を使って見ていく。

「…やっぱり、居た…!!」

ペローナちゃん!!

ホグバツクと、あとなんか大きなナスみたいな大男。ついでに腕に包帯を巻いてフラフラと足取りの覚束ないアブサロム。まあそいつらはどうでもいいや。ペローナちゃんが居たんだし!! やほーい!!

あ、丁度ホグバツクの屋敷の方でナミさん達が目的の“何か”を見つけたみたい。合

図であるロビンの腕が、屋敷の一点から天高く連結して睨いていた。

「先にナミさんとこ行こっか。ペローナちゃんはここにいるって分かったし」

「そうね、あの鬼みたいな巨人族に暴れられたら面倒なものね」

確かにそうだ。建物の壁を内側から広範囲に粉碎する腕力と巨体…敵じゃない事を祈りたいけど、風貌はどつからどう見ても敵だ。

ホグバツクが居る所から出てきたにも関わらず、奴に攻撃を仕掛けたような跡がない事からも私達の味方ではないと判断がつく。少なくともルフイではない…筈。

そして私達は急いでナミさん達の元へと向かい、到着して神背ヒューマを解除した。

「見つかったの?」

「ええ、バツチリよ。やっぱりキッチンにあったわ」

キッチン? 一体何を探しに行ったの…。

「準備も出来てるわ。とにかくこれを飲んで」

「これ? ……まあ、飲むけどさ、何か意味あるの?」

「それが無いと始まらないわ。一気に飲みなさいよ」

ナミさんから何か飲み物の入ったコップを受け取り、コクリと頷いて中身を一気に呷った。

………つ!!!こ、これは………!!!

\*\*\*

「…ナミ、これを飲ませるだけで、本当に大丈夫なの?」

「ああ…そういういえばロビンは知らないのね。なんて言ったら良いのか…体験したら分かると思うわよ?」

「体験?」

ナミの言葉に、ロビンは意図を把握しきれず眉を寄せる。一体それをコップ一杯分飲ませたからといって何になるというのか。

ナミが今も片手に持っている…酒なんかが。

ナミは知っていた。アルコールを少しでも摂取したイリスのある意味での恐ろしさを。

…だが、1つだけナミは見落としている事があった。

ウイスキーピークでの1件では、まだイリスは自分を乗り越えていない状態であり…

つまり不完全で殻に閉じ籠もっている状態だった。

しかし今はどうだ。エニエス・ロビーで自分という存在を根から天辺までを余す事なく認められて、愛されて…籠もっていた殻なんかはとうに破り捨て、ゴミ箱に捨てて収集車がすり潰している今は…果たして、どうなるのか。

逆に抑えている物が無くなったから、アルコールを摂ったくらいでは人格は変わらな  
い？

…そんな事がある筈がない。イリスという存在は、殻を破ってもヘタレる時はヘタレる奴だ。

つまり、今のイリスがアルコールを摂取するとどうなるか…答えは……。

「……………ヒック、…はア…気持ちよかったあ…」

イリスの足元には、乱れた服を整える余裕すら無くなって3人の姿。

それでもイリスの瞳から欲の光が絶える事はなく、未だにギラギラと妖しく眩く。

「……そう、答えは……」全てのタガが外れた、怪物が誕生する」だ。

「そうだ…ペローナちゃん…い…ふ、ふふふふ、ハハハ…ハツハハハハ!!ハア…ハツハツハツハツハツ!!!…待っててね…今行くよお」

一筋の閃光が、空気を蹴って空を駆ける。

その目に映るはピンク髪のごスロリっ娘と、さつき頂いてきた嫁達だけであり…邪魔する存在は全て敵だと認識している怪物が、スリラーパークに放たれたのだった。



## 105 『女好き、カリスマイリスのプリンセス攻略』

「…なんで、ペローナちゃん居ないの?」

暴走したイリスが真つ先に向かったのは、さっきの超大型ゾンビーー『オーズ』が出てきた場所だった。

「居るのはナスだけか…ねえでかナス、ペローナちゃん知らない?」

「…お前は『逃げ足』か。俺を相手に傲慢な態度な奴だな」

「??ペローナちゃんは?」

「キシキシ!!知らねエよ、何で俺がお前の質問に答えてやらなきやいけねエ?その辺探しや見つかるんじやねエか?…ふあゝ…」

「ペローナちゃんは?」

オーズの死体を保管していた、超特大冷凍保存庫。

それを上から見下ろせる位置の足場で、壁にもたれかかりながらイリスの問いを適当に往なしていた『王下七武海』『ゲッコウ・モリア』は、まるでロボットの様に同じ質問を繰り返してばかりのイリスに眉を寄せる。

「…まさか、隠したの?」

「はア？」

「私からペローナちゃんを、奪って、隠して!!!自分の物にしようとしているの!!!?」

「何を言ってるやがる、元々あいつは俺の配下……ツぐオツ?」

イリスの蹴りがモリアの腹に突き刺さる。

そのままバランスボールの様に何度もバウンドを繰り返して吹っ飛んだモリアは、途中で体勢を立て直してギロリとイリスを睨んだ。

（このガキ……なんて速さだ! “影” が間に合わねエとか、そんなバカな事があるか!）

「どこ!!!ペローナちゃん!!!」

「ツ!」

次の瞬間には背後に現れたイリスに、後ろから横顔に薙ぐような蹴りが襲う。

そしてそれを避けることも、“影”と交代することも出来ないまま壁に頭からめり込んだ。

「ねえ、私さつきから質問してるでしょ?早く答えてよ!」

「ぐ……!」

ドゴン!頭を更に押し付けられてモリアは更に壁へとめり込む。

モリアは信じられなかった。昔、とある海賊に敗北してから自分より上が居ると言うこと自体は知っていた。

だが、こんな小娘に手も足も出ない程：自分は弱かったのか？それとも、長く「影」とゾンビに任せてきたのもあつて体が鈍っているのか？

：正解は、そのどちらでも無いとモリアは思う。

青キジから逃げた？バカを言え、そんなタマじやないだろう。：コイツが強過ぎるんだ、と。

「ハア…ハア…！ペ、ペローナなら、不思議な庭だ。ワンダーガーデン分かるか？屋敷とここを繋ぐ渡り橋だ…っ」

「なんだ、そこに居るなら居るって言つてよ」

モリアとて心ない男ではない。この怪物がペローナを殺しに行くような奴なら多少の抵抗はしただろうが、どうもそんな感じではなかった。

むしろ、居場所を教えなければいつか自分が殺されてしまうと直感で感じ取つただ。

思惑通りイリスはそれを聞いてからモリアに対して一切の興味を示さず、来た時と同様に宙を蹴つて目的の場所へと向かつて行つた。

そのすぐ後、息を切らした麦わら帽子の少年がこの場に現れ、モリアは対応の面倒臭さのために息を吐いたのだった。

一方、ルフィを除く一味はそれぞれ自身が倒すべき敵と対峙していた。ゾロはブルックの“影”が入った剣豪リユーマ。

今までのゾンビも同じで、ホグバックが作った死体に、モリアが人から奪った“影”を入れる事で絶対服従のゾンビを生み出す事が出来る。

肉体より“影”の人格に影響される為、リユーマはブルックのような、オーズはルフィのような、そしてシンドリーも皿嫌いの女性のような立ち振る舞いをするという仕組みだ。

フランキーはブルックと共にゾロ vs リユーマの戦いを近くで見ている。

サンジはイリスを含めたナミ、ミキータ、ロビンの搜索。

当初はアブサロムを引き受ける予定ではあったのだが、ウソツプが何気なく放った“火薬星”で呆気なくダウン。原因は空を駆ける怪物にあるのだが…。

そしてウソツプがペローナを引き受けていた。

ネガティブ・ホロウが唯一効かないウソツプは、彼女にとって天敵であり、逆にウソツプ以外に引き受けられる人が居なかったというのもある。

ナミ、ミキータ、ロビンは何とかあの状態から復活し、仲間と合流する為に動き出していた。

上階で激しい音が聞こえているのは、ゾロとリユーマの戦闘音だ。とりあえず3人は音が聞こえるそこを目指して行動を開始した。

\*\*\*

「ハア…ハア…くそ、冗談じゃねエぞあのネガッ鼻！ただでさえ恐ろしいのがもう一人居るつてのに…！」

現在、ペローナはとにかくウソップから距離を取る事を優先していた。というのも、彼女はホロホロの実の能力者であり、ネガティブ・ホロウの様な精神攻撃や特ホロなどの爆破攻撃以外にも『幽体離脱』が可能なのだ。

幽体離脱を使用したペローナは、ゴースト故に敵の攻撃は一切通らず…逆に自身の攻撃を一方的に敵へぶつける事が可能となる。

ただしこの技にも弱点はあって、幽体離脱した後の本体がどうしても無防備になってしまうのだ。

つまりペローナが狙っているのは、距離を稼いでどこかに隠れ、幽体離脱を行なって

ウソツプを一方的に倒す事だった。

後ろから追いかけてくるウソツプの後ろを、更にクマシーが追いかけてくれているおかげでウソツプの注意は自分から逸れている。この様子なら逃げ切る事も、隠れて能力を発動させる事も容易————。

ドオオオオオツツ!!!

「——ツ!!!な、何だ?!!」

突然目の前の天井が崩れ落ちる光景に目を開けてたじろぐペローナは、一瞬オーズがやったのか?と疑うもその思考をすぐに放棄する。

何故なら、空から降ってきたそいつは、天井が崩れ落ちた衝撃で立ち籠める煙越しでも分かる程には小さなシルエットだったからだ。

「お、おい…嘘だろお前…」

この島で、そんなダイナミック入場が出来る小さいシルエットの人物など…ゾンビを含めようが1人しか存在しない。

そしてやはりというべきか、煙の中から気持ちが悪い程の満面の笑みで現れたのは…イリスだった。

「見イっけた！ペローナちゃん！」

咄嗟に叫びそうになるのをぐっと堪え、まずは冷静になる様努めるペローナはちらりと背後を見る。

…大丈夫、まだネガツ鼻はクマシーと遊んでいる。なら自分は…何とかしてこの化け物から逃げなければいけない。

幸い、攻略法は知っているのだ。捕まった瞬間にネガティブ・ホロウをぶち込んでやればよい。

「……………!?!」

だが、ペローナはとんだ思い違いをしていたと気付かされる事になってしまった。

一瞬の内に、自分でも全くと云つていいほど気付かない程の速さで押し倒されてキスされているのだ。

「ふあ…んっ…あ」

しかもディーブなアレである。その上この化け物…キスが滅法上手かった。

何か技を出そうにもボーっとして上手く頭が働かない。

突き飛ばそうにも、そもそも力ではひっくり返つても生まれ変わつても勝てやしない。

滴る水滴の音は、果たして自分の口から出るモノか、相手のモノか。

やがて唇が離された時、ペローナは小さく物足りなさそうな声を出してしまい、慌てて口を結ぶ。

しかし残念な事に、今のイリスはそういう些細な仕草だったり声だったりを見逃しはしない。ソレを聞いた瞬間にニヤリと妖しく笑ったイリスの顔を、ペローナは当分忘れられないだろう…。

そして、ペローナはイリスにひよい、と横抱きされてこの階にある自分の部屋へと連れて行かれた。

元々この部屋はウソツプを撒いた後、自身の体を隠すのに使おうと思っていたものであり、決して如何わしい事をする為に隠れたかった訳では無いのだけど。

「ペローナちゃん…可愛い」

「…っ、はっ！流されてこの部屋まで連れてきちゃった…！おい！や、やめろ服を脱がすな…!!」

「なんで？私は今、ペローナちゃんが欲しいんだよ」

「私はイヤだっつってんだろ！女好きの女王が、女の嫌がる事していいのか!？」

「何言ってるの？さつきちゆうして悦んでたじゃん」

「ギャー！やめて！忘れさせてー!!」



バタバタと暴れるも一向に拘束が弱まる気配が無い。自身のお腹に指を這わせるイリスを睨んだ所でソレは同じ事だ。

このままでは本当にまずい、とペローナの心の警笛が喧しく響く。イリスに大事な貞操を奪われる事への警笛か?…否。

…心が奴に傾きかけている事に対するものだ。

「幸せにするよ、だからペローナちゃんも楽にしてて」

「で、出来るか…！私はモリア様の配下！『ゴーストプリンセス』ペローナ様…んんっ！」

普段ならともかく、現状のイリスに何を言おうとも意味はない。

残念な事にそれを気付きつつあるペローナは、今も唐突にされたキスに対して反抗心を感じてはいなかった。

それに、元来のペローナの性格からしてイリスに心が傾かない筈もなかった。

可愛いモノには目が無い彼女は、言動はともかく容姿だけを見れば小動物のような愛らしさを誇るイリスがタイプではあったからだ。最も、恋人にしたいという意味ではなく、愛でる…つまりぬいぐるみなどに対する感情に限定される訳だが。

しかし、そんな好み真ん中ドストライクのぬいぐるみ自分が自分を全力で口説きに来ていた状況をペローナはそんなに悪い事だと思えなくなってきたのだ。

それこそが、ペローナの心に響く警笛の正体であり…恐らくもう逃げられないだろう事への証明でもあった。

口付けは徐々に激しくなり、抵抗するのをやめたペローナの服をずらすと慣れた手つきで脱がすイリス。

未だに逃げるべきだと囁くほんの少しの抵抗心は、この先へと進みたい特大の好奇心に押し潰されて呆気なく散り…その瞬間、イリスの容姿が一変する。

さつきまでの愛らしい面影を残しつつも、その髪は艶やかな漆黒の長髪へ、背丈は子供から大人へ、顔付きは可愛さを残しつつ綺麗に…本当に同一人物なのかと見紛う程だ。

戦闘用の変化では無いためか、霸王色を使用していないのでティアラやマントは無<sup>クイーン</sup>い。だけどこれはイリスが逃げ足の女王と呼ばれる様になってしまった所以の女王化である事に違いはない。

「…ペローナちゃん。好きだよ」

「~~~~ツ!!」

急激な変化に脳内の処理が追いつかず、ペローナの頭が混乱を極めている時にぽつり、と耳元で囁かれた言葉に顔を真っ赤に染めさせる。

正常な判断が出来ない…いや、イリスに出来ないようにされたペローナは…ついには

んの少しの抵抗心も無くなった。

…つまりーーー怪物のお楽しみタイムが、始まったのだった。

## 106 『女好き、圧倒する力』

「うおおああああああ!!! 忘れろ忘れろ忘れろオオオオオオオオ!!!」

「何やってるのペローナちゃん」

ガンガンガン!!と石柱に頭をぶつけるペローナを不思議そうに見るイリス。

“お楽しみタイム”が終わって部屋から出てみればすぐにこうなったのだ。理由は  
お察し。

「て、てめエが、その…ベッドの上で散々…!」

「ああ、可愛い声で鳴いてたよ!私の嫁に相応しいって改めて感じたね!」

「うるせエこの変態が!!!ネガティブ・ホロウ!」

「もう、女の子がそんな言葉遣い…ん?でも可愛いからいいのかな?うん、いつか!」

飛んできたゴーストを笑いながら見もせず手に弾き消滅させる様を、ペローナは泣きながら見ていたのであった。

「ペローナちゃんって、海賊?」

「…はア?お前知らねエのか、私達の船長はあの王下七武海、ゲッコウモリア様だ」

「モリアって、もしかしてあのでかナス?」

「でっ…モリア様になんて事言うんだてめエ！あの人は私の親みたいな人で、本来ならてめエみたいな奴相手にもならねエからな!!」

親みたいなの、というワードしか聞いていないイリスの脳内では既に、娘さんを私に下さいイベントをどの様にして行うか会議が行われていた。

「ペローナちゃんさ、私の嫁になつたんだからお義父さんに挨拶しにいこつか。みんなにも紹介したいし…麦わらの一味の仲間が増えたつて」

「お前らの船に乗るとか聞いてね…いい、いや、何でもねエ。ほ、ホロホロ…」

もはや何言つても意味ない事などさつきのお楽しみ以下略で充分に理解したし、何なら相手にならないとは言つたけれど、イリスがモリアに負ける未来も想像出来なかつた。それ程までに目の前の怪物から放たれている「オーラ」が強大だったのだ。

不服だけど、こいつらの船に乗るしかないと腹を括る。

…それに、個人的に愛されるのも悪くないと感じた……感じてしまったんだし、もう少しその心地よさを味わっても良いだろう。

何なら自分には不意をつくだけで一味を全滅させられる能力があるのだ。飽きたら捨てればいい。

そんな日が来る事はこの先一生来ないとは、この時のペローナに知る由もない事だが。

「……なんだ？」

建物全体が揺れている様な感覚と、いきなり物凄い音を立てて傾きだした建物にペローナが眉をひそめる。

既にあちこちで崩れている天井が恐怖を刈り立たせるが、心配する事無かれ、近くにいるのは絶対安全の怪物だ。

「なんか、でっかい気配が暴れてるね。その近くに……、…みんなも居るっぽい」

丁度ペローナの頭上に降ってきた瓦礫を気合……という名の霸王色のオーラで粉々に吹き飛ばし、彼女を横抱きして建物の外へ飛び出した。

「お、お前、空も飛べるのか……!？」

「全力で空気を蹴るイメージだよ、やってみる？」

「殺す気か!!」

イリスにとっては軽い事でも、ペローナからすればあまり遊べるような状況ではない。

外へ飛び出さず一番最初に目に飛び込んできたのが、例の超特大ゾンビ、オーズだった。

あんなのが暴れ回れば、スリラーパークごと海に沈んでしまう可能性もある。今は何

とか麦わらの一味が抑えているが、それもいつまで保つか分からない状況だ。

「ナミさん達は…あのデカブツのどこか」

「お、オイ、まさかお前…あつちに行く気じゃねエだろうな…!?冗談じゃねエ!死にたいのか!?何とかお仲間<sup>に</sup>合図を送ってあいつから離れるように言え!!…つて聞いてんのかあああああ…」

ペローナを抱えたまま少し離れた場所にいるオーズの元へと瞬時に移動する。

速すぎて放心しかけてるペローナは、何とか落ちないようにイリスの首に腕を回して耐えていた。

「ナミさーん!ミキーター!ロビンー!見て見て〜ペローナちゃんゲットだぜー!!」

「おおおおお前バカやめろ掲げるなア!落ちたらどうすんだ!死ぬぞ私は!!」

「イリス!その様子を見る限りだと、作戦は成功したみたいね。…何で 女王化<sup>クイーン</sup>してるのかは分からないけど」

イリスに文句は言うも、抱かれている事に嫌な顔してない所かしつかりと首に腕を回しているペローナを見て頷くナミ。

それに、女王化<sup>クイーン</sup>している事も今は都合が良い。さつきから自分達はこのデカブツ…ルフィの影入りゾンビ、オーズに苦戦を強いられていたのだから。

…正確には、オーズの腹の中に入ったモリアに、だが。

「あの方は誰なのですか？」

「ああ、お前は見たことねエのか。あれはイリスちゃんだ」

「イリスって…あの時の子供では!？」

「身長に触れるなよ、死にたくなけりやな」

イリスの変化を初めて目にするブルックがサンジに尋ねているのを、オーズの中のモリアも聞き耳を立てる。

あの小娘の腕に抱えられているのは自分の配下だ。やはり無事ではあるようだが、何やら様子がおかしい。

「…あれ、デカブツの中にモリアいるじゃん。丁度良かったー!」

そのまま宙を蹴りながらオーズの腹の前まで移動したイリスが、モリアと視線を合わせて一礼する。

「お義父様、挨拶に参りました、イリスです。単刀直入に申し上げます…娘さんは貰ったア!!」

「挨拶じゃねエ!!!」

ウソツプの突っ込みも何のその、イリスは言葉が続ける。

「ペローナちゃんは可愛すぎる罪で私の嫁に終身刑なんで、そっちの戦力的には痛手だろうけど許してね。ダメだって言うなら力尽くで奪っていくけど」



「キーツシツシツシ！相変わらず上からな女だなテメーは！この巨体が見えねエのか？オーズは生半可な攻撃じゃビクともしねエ、殴り飛ばせオーズ！」

「はい、モリア様」

その巨体に見合わぬ速度でイリスから距離を取ったオーズが殴る構えを取る。モリアがああやって司令塔になる前は、ルフィの影とはいえ体が伸びる事は無かったが、ここにモリアのカゲカゲの実の能力が加わる事で腕や脚が伸びる様になり、本当にルフィの様な戦闘スタイルの巨人が生まれてしまったのだ。

「ゴムゴムの〜!!銃<sup>ピストル</sup>!!」

巨大な拳は、通常ルフィの巨人の銃並<sup>ギガント・ピストル</sup>の火力を誇る。実際の威力で言えばギア3の方が強いが、そのレベルの攻撃なのは変わらない。

だが、

「危ないな、ペローナちゃんも居るんだよ」

「は？」

イリスへと直撃する筈だった拳は、彼女が下から振り上げた蹴りによつて簡単に逸らされて不発に終わった。

イリスはそのままオーズの顔前まで瞬間移動でもしたのかと見紛う程の速度で移動し、顎を蹴り上げる。

「ぐえエ!!」

「なに?! オーズの体を浮かせただど!! オイオーズ怯むな! 痛いのは気のせいだ、お前はゾンビだろ!!」

「ペローナちゃんを抱く私を攻撃したって事は、つまりあなた達はペローナちゃんを攻撃したって事になるよね」

もう一発顎を蹴り上げ、更に宙へ浮かせる。そして更にもう一発、もう一発…。

気付けばオーズは、顎を蹴り上げられてスリラーパークのメインマストが目の前に見える程の高さまでやってきていた。

「ペローナちゃんが居てあまり派手には動けないから、このくらいで終わらせてあげよ」

「ま、待て逃げ足! ペローナならくれてやる、大事な配下だ、無下に使わねえと約束しろ!!」

「も、モリア様…!!」

顎を蹴るのをやめて、宙に浮くオーズの頭上まで飛ぶ。

モリアは、冷酷の様でいて元々仲間思いの側面もあった。ペローナごとイリスをオーズに殴らせたのも、イリスならペローナを盾にする様な真似は絶対にしないと変な所で確信があったからに過ぎない。

「許可が無くても貰って行くけど、もしかして、だからオーズに攻撃するのはやめてとか言うつもりだった？1度でも私の嫁を狙った相手に：慈悲はないから。：女王クイーンの」  
イリスの右足が真っ黒に染まる。それは、高密度の武装色を纏わせている証明だった。

「フアストリテ慈悲なき別れ」

ドゴオオン!!!

オーズの頭頂部へと、バカげた火力の蹴りが振り下ろされた。

その衝撃はスリラーパーク全域に広がり、喰らったオーズは物凄い速度で落下して地面に巨大なクレーターが出来上がる。

ナミ達はギリギリ余波が及ばない位置に居て、オーズが落ちた際の揺れと突風だけで済んだ。あと少しでもズレていたら巻き込まれて大怪我は免れ無かつただろう。

「よっ」

「も、モリア様……オイてめエ……モリア様は無事なんだろうな!」

すた、と軽やかに着地したイリスの胸ぐらを掴んで揺らすペローナ。イリスはそんな彼女の頬に手を添えてキスを落とす。

「い、いきなりはやめろ!」

「だって可愛いから。それにそう簡単にでかナスは死なないよ。オーズは使い物になら

ないだろうけど」

今の攻撃で間違いなく頭蓋骨は粉碎、地面へ落ちた衝撃で全身の骨も粉々だろう。

青キジとは違い、オーズには覇気で守るといふ手段がない。よつて覇気による攻撃を生身で受ける訳だから、それはもうかなりの威力になる。

「……かア!!…居た…ん? モリアはどこだ?」

「あ、ルフィ」

「麦わら…!」

森の方からルフィが走ってきた。身体中に擦り傷があり、息も切らしている。理由は、彼は彼でモリアを追っていたのだが途中でモリアの影…  
影法師をドッベルマンに使われて今

まで森の中を探し回っていたのだ。

「あ、お前、お化けの女!! さっきは良くも…」

「何、私の嫁だけど」

「何でもねエ、何でも」

イリスの地雷を絶対に踏みたくないルフィは目を逸らして汗を流す。船長の威厳も、アルコールの入ったイリスには関係のない事なのだ。仕方ないね。

「勝ったわー!! やってくれたわ!」

「ありがとうお前から最高だア!!」

「あんた、強エな!!まさかあの巨体を蹴り上げたア……」

続々と一味の周りに人が集まりだす。イリスはそれを見て首を傾げるが、それ程興味も無いのかナミ達の近くに歩いて行く。

因みに彼らはモリアによって影を奪われていた人達であり、影を取り返せる可能性があつた麦わらの一味を影ながら応援していた人達だつた。

本当はルフィに『影』を与えてパワーアップさせようとしていたのだが、空高く蹴り上げられていくオーズを見てとにかく現場に向かおうと言う話になり今ここに居ると言う訳だ。

「おいルフィ!イリス!どっちでもいいから早く影を取り戻せ!朝日だ、夜が明けるぞ!!」

「知らないよ、私はみんなとイチャイチャするのに忙しいから勝手にやってて」  
「誰だイリスに酒飲ませた奴は!!」

地団駄を踏んで文句を言うウソップ。

現時点ではルフィ、サンジ、ゾロの影が奪われており、奪い返さなくては陽に当たつた瞬間灰となり消えるのだが……嫁しか脳のない今のイリスはその言葉が頭に入っていない。

「ナミさん見てよペローナちゃん、可愛いでしょ？」

「はいはい、可愛いから影取り返してあげなさい。流石にルファイ達が消えたら酔いが覚めた時あんた絶対後悔するわよ」

「ぶー、ナミさんが言うならそうするけど…」

「…お前らの主人は頭イカれてんのか？」

「今日からあなたの主人でもあるわよ？それに、お酒が入ってない時はもう少しまともなの。知ってて飲ませたのは私だから、責任は私にあるけど」

ペローナを降ろして、ぶつぶつと唇を尖らせながらオーズの落ちた場所へと歩いて行くイリス。

その周りを影を奪われた人達もついて歩いてきていた。その中の一人、ローラが大きく声を上げる。

「さア、モリアを叩き起こして影を返して貰うのよ！朝日はもうそこまで来てる！」

「…起こすにや及ばねエ…!!」

オーズの腹の中からモリアが息を切らしながら出て来た。

やはり地へ落ちた時の衝撃は凄まじかったのか、その体には傷が至る所に出来ていた。

「…逃げ足の女王」イリス…てめエは確かに強エ…だが、このまま航海を続けても死

ぬだけだ……。『新世界』には遠く及ばねエ……！てめエには大切にしている女や仲間もそこそこいる様だが、全て失う！何故だか分かるか？！」

「どうでもいいから影返して」

「俺は体験から答えを出した。大きく名を馳せた有能な部下達を、何故俺は失ったのか……！仲間なんざ、生きているから失うんだ！全員が初めから死んでいるゾンビならば、何も失う物はねエ!!ゾンビなら不死身で！浄化しても代えのきく無限の兵士!!俺はこの死者の軍団で再び海賊王の座を狙う!!てめエらは影で俺の部下になる事を幸せに思え!!」

モリアはそう言つて自身の影から無数の影系を地に走らせた。

それは森中の……スリラーバーク中の全ての影を集める為の供給線で、集まった影が続々とモリアの体内へと注入されていく。

「……、下らない。死体を嫁にする趣味はないよ。シンドリーちゃんも可愛かったけど……生きていないと、温もりが無い」

「温もり!?下らねエのはそつちの方だ！これから先の海に……情などとは必要ねエ!!」

「その情から逃げたのがあなた。情けない自分から目を逸らして、過去に怯えて縮こまる。……ちよつと前の誰かさんを見ているみたいで、酔いも覚めてきたよ」

ついに、1000体目の影を体内に取り込んだモリアが高らかに声を上げた。

影を取り込むだけで自身も強化されると言うことをイリスは知らない。…だけど、モリアに負ける気はしなかった。

モリアが今後、過去を乗り越えて自分の前に立ちはだかればどうなるかは分からないが…今の怯えてるだけの奴に負けるほど、女王は甘く無い。

酔いのおかげかいつもより長く保っている女王クイーン化も、酔いが覚めてきた事でそろそろ解除される頃合いだろうし、朝日の問題もある。

ここからは、時間との戦いだ。



## 107 『女好き、もう1人の王下七武海』

「オオオオオオ!!!」

「ふん!!」

モリアの拳と私の蹴りがぶつかり合う。

1000体の影を取り込んだ奴の攻撃は、文字通り一撃で島を割った程だ。だけど、私のパワーだつて負けちゃいない。

「ギア…『2』!」

「え…ルフィなにそれ、カッコいい」

ルフィが膝に手をつけて、血液の流れる速度を速めた…のかな? ゴムだから血管をポンプのように使えるって事なのかも…それにしたつてカッコいい。

「こつなつたらおれは強エぞ」

「頼もしいね」

酔ってる時の記憶は前と同じで残っている。その時に得た知識から考えれば、モリアが今回の黒幕なのは疑いようが無い。ていうか今起きてる事を見れば誰でも分かる。

今みたいに影を自分自身に取り込む力なんてのは知らなかったけど…モリアも詰め

込みすぎたようだね。影の量に耐えきれず暴走気味だ。

「ゴムゴムのJET銃!!」  
ジェットピストル

「オツ…!?!」

ヒュ、と消えたルファイがモリアの腹前まで移動して拳を放った。技までカッコいい。速さだけじゃなくて威力も上がっているようで、モリアは腹を押さえて呻き声を上げた。

「じゃ、次は私で…」  
ひやくばいばい  
「100倍灰」

ルファイと同じく腹近くに移動して、拳を振りかぶった。

「女王の慈悲なき拳!!!」  
クイーンフアストリテ

「オゴアツ…!?!」

屋敷へと突撃しながら吹っ飛び、奴の口から大量の影が解放されていく。モリアは必死にそれらを手で押さえ込み、私達をギロリと睨んだ。

「お、オイ…お前!!モリア様になって事を…」

「殺しはしないから、安心してよ。あとお前じゃなくてイリスって呼んで!」

「イリス!先行くぞ!!」

ペローナちゃんに返事している間にルファイがモリアへと突っ込み攻撃をぶち込んでいく。モリアも反撃はしているが、ゴム人間であるルファイに対しての有効打がない様

だ。

…クロコダイヤルとかもそうだけど、全盛期は覇気を使えたんだろうね。前線を退いて鈍っちゃった。パターンか。

「じゃあそろそろ、みんなの影を返して貰おうかな…！ルフィ、離れて!!」

「おう!!」

空高く舞い、口を塞いで影の放出を防ぐモリアの上に位置取った。

「100倍灰!」  
ひやくばいばい

覇気を纏わせ、頭上にティアラ、肩にマントが出現して両腕を黒く染める。そして、真下に居るモリアに向けて拳を放った。

「女王の戯れ!!」  
クイーン・アデイオ

「ツ!?!」

私の両腕から放たれる無数の拳が、モリアの巨体を蜂の巣にしていく。

貫通はしていないが、1発1発深くモリアの体に直撃し、その体に数え切らない程の拳の痕を付けていた。

見た目だけで言えば銃乱打ガトリンクのようだが、威力は段違いだ。その拳から放たれるパンチ1発が、普段の去柳薇さよならとは比べ物にならない火力だからだ。

「オオ…ツ、グホ…！…にげ、あし…、麦わらア!!てめエら…ハア、ハア…行つてみるが

いい…！本物の「悪夢」は、「新世界」にある…!!…く、あああああ!!!」

それだけ言い残して、モリアは最後に自分の体の中に詰め込んだ影を一気に吐き出し意識を失った。

…何が悪夢だ、一人で抱えるから苦しいんでしようが…!

「…本物の悪夢？それは「過去」にあつたし…私は、私達はもう乗り越えてる。宣言通りペローナちゃんは貰ってくね、お義父さん」

倒れたモリアの体に手を添えて言い、私はみんなの元へ戻っていった。

…と同時に変化が解けてペローナちゃんの胸にダイブしちゃった…さつきも堪能したけど、なんて素晴らしいぼよん…。

「…モリア様の許可もちやつかり貰いやがって…ちゃんと責任取れよお前」

「はは…当然」

今回は意識を失うまでは行かなくて済みそうだね。今までは体へのダメージも半端なかったから倒れてただけか。確かにガープの時も変化が解けたからって気絶はしなかったつけ。

…体は全く動かせないけど。

「…朝日だ」

「影があるぞ…!!」

「…何かよく分かんないけど、嬉しそうだね」

モリアを倒したのは、ブルツクの影を取り返すっていう当初の目的とは随分変わってペローナちゃんを連れて行く挨拶ついで、って感じだったから、何だか申し訳ない。

「頭は痛くない？イリス」

「うん、平気」

「キャハ！どうする？今日はペロちゃんに背負って貰う？」

「ペロちゃん言うな」

「そうだねー、せっかくだからペロちゃんに背負っててもらおうかな」

「落とすぞ」

そんな事言いながらもすっかり背負ってくれるペローナちゃんの優しさと可愛さは異常。

「…でも、今回は意図してなかった女王化クイーンとはいえ、この先強敵が現れば毎回イリスは無茶をするんでしようね…。代償も軽くないし…体に掛かっている負担ってバカに出来ないでしょ…？心配だわ…」

「…私達にもつと力があれば…。現状はイリスとの力量差が激しすぎて、戦いも足手纏いになりかねない」

「そんな事、気にしなくていいんだけど」

私の眩きにナミさんはため息を吐いて私の額を小突いた。痛い。

「私達は気にするのよ、ね、ペロちゃん」

「ぶっ飛ばすぞ女」

「言つとくけどペロちゃん、ナミちゃんの懸賞金は1億よ」

「すみませんでした!…ぐ、全然そんな風には見えねエツてのに!…」

ナミさんの懸賞金額の設定は何というか…特例みたいな感じだからね。ナミさん本人の危険度で言えば3000万も無いんじゃないかな、可愛いし。いや待てよ?可愛さを懸賞金額に加えるとしたらナミさんどころか私の嫁は全員100億くらいいくのは…?というかそもそも額が決まるのか!?

「もしー!」

「?」

「うおーゾンビ!!…ん?なんだ、墓場で会ったじいさんか」

突然声をかけられて顔を向ければ、そこには身体中を包帯や縫いキズが見られるゾンビ…のような老人が居た。ウソップが反射的にパチンコを向けて、見覚えのある顔に武器を下ろす。…あれ、ウソップのパチンコも新しくなってるね、何か大きい。

「信じられん…太陽の下をまたこうして歩ける日が来るとは…。ありがとう、どうお礼をすればよいか…!」

「スポイルじいさん！」

「被害者の会名誉会長!!」

…本当に話についていけないよ。今回に関しては、私はただペローナちゃんを嫁にしたかっただけだし…。あ、ペローナちゃんの髪の毛良い匂い。

「嗅ぐんじゃねエよキモい」

「だってこの体勢だとペローナちゃんのようなじが目の前にあるんだもん、嗅ぐでしょ」  
「本気で落とすぞ…」

でも嗅ぐのはやめな—い！ナミさん達もそうだけど、美少女の匂いは落ち着くというか、精神安定剤だよね。

「あんた達…：礼が遅れたわね！…ありがとう!!スリラーパーク被害者の会一同、この恩は決して忘れないわ!!」

「ありがとうございます!!」

「だってさ、ルフィ」

「しし！気にすんな、ついでだからな」

被害者の会か。…本当についでだったとはいえ、助ける事が出来たのは良かった。ずっと影無しで太陽に怯えるなんてあんまりだもんね。

「…あ、そういえば…」

「どうしたの?」

ぼつりと呟いた私の言葉にナミさんが反応する。

…私が酔って女王化を發動した時、同時にみんなを探る為に見聞色も使った。その時に感じた、オーズでもモリアでも、そしてみんなの中の誰でもない気配…。私自身の覇気の練度が低過ぎるし、気のせいって可能性もあるけど…。

「もしかしたら、この島にはまだ何か……」

『成程な』

「っー」

突然、近くの崩れた建物から声が聞こえて見上げれば、そこにはモリアにも劣らない程の巨体をした男が瓦礫に座って電伝虫に話しかけていた。

頭に熊耳帽子を被ってる黒目のないその男を、私は何処かで見た事がある気がする。  
…前世かな。

『……悪い予感の中したというわけか』

「…そのように」

『やつとクロコダイルの後任が決まった所だというのに、また一つ “七武海” に穴を空けるのはマズい』



…ん？ペローナちゃんがあいつを見て固まってる…、ロビンも目を見開いてるし、何か凄い奴なの…？

「誰だありやあ!!」

「…誰つてお前、ネガつ鼻…知らねエのか？」

「知ってるの？ペローナちゃん」

「逆に何で知らねエんだ！あいつは…王下七武海、*「暴君」*、*「バースロミュー・くまだ!!」*

「七武海!!」

それは…マズい…本当にマズい…！私は反動で動けないし、みんなだつて疲れは残ってる…万全じゃないのに!!

くまつて奴が私達に敵対しなければ、それが一番いい流れだけど…！。

『まだ微かにでも息はあるのか？』

「ギア…」

『生きてさえいれば、回復を待ち一先ず七武海の続投を願いたい所。措置についてはその後だ。——そう次々落ちて貫つては七武海の名が威厳を失う…この情報は世間に流すべきではない、全く困った奴らだ。……私の言っている意味はわかるな？モリアの敗北に目撃者がいてはならない』

…は、はは。

クソ……これは、見逃してくれそうな雰囲気じゃ無くなってきたね…。

『世界政府より特命を下す……！麦わらの一味を含むその島に残る者達全員を、抹殺せよ』

「……容易い」

「……くそー！」

ペローナちゃんの私を背負う腕に力が入る。まだ動けるゾロやルフイ、サンジが前に出て戦力外の私を庇うように構えを取った。

「イリスちゃん、〃反動〃が無くなるのはいつだ？」

「…正確には分かんないけど、大体半日から1日くらい」

「おっし…お前から気合入れろよ、1日耐えれば勝ちだ！」

「うるせエアホコック、イリスを待たずとも俺が斬り捨ててやる」

「おれがブツ飛ばす!!」

だが、次の瞬間くまは被害者の会が集まる目の前まで瞬間移動した。

その速すぎる移動に誰もが目を見開き、逃げる事が叶わないと知つてくまに斬りかかる。

「こんな所で死んでたまるかア！やっちゃまえ!!」

「うおお!!」

数人でくまに立ち向かう被害者の会だが、くまが先頭の1人の腹に手の平を当てるだ

けで吹き飛ばされた。しかも何故かその人の後ろに居た人達まで同じ様に飛ばされていく。

…それ程強く衝撃を与えたとは思えない…！どう見ても、ぽん、と触れただけにしか見えなかったのに！まるで衝撃が、貫通弾のように貫通したとしか考えられない…！

「逃げ足の女王」イリス、お前が戦闘不能なのは幸運だった。俺では勝てまい」

「は…私の周りに居る人達には勝てるって？バカにしないでよ、麦わらの一味は私のワ  
ンマンチームじゃないっての!!」

「…的を得ている。だが、それでも俺には届かん」

「ゴムゴムのオオ!!」

ドルン…！とギア2を発動したルフィがくまの顔横に現れた。

「JET銃!!!」  
ジェットトビストル

そのまま渾身の一撃を顔面目掛けて放つも、くま本人は多少フラついただけであまり効いていない様だった。

…ルフィのあの攻撃を喰らってもダメージ無いって…顔面にパンチ貰ったんだよ？  
人体の急所に攻撃受けてんの……本当に人間!?

「二刀流…居合！羅生門!!」

「消えた…!」

ゾロの高速の剣技すらも見極めて躲し、羅生門を放ち終わった後のゾロの前に現れ突っ張りで攻撃する。

ゾロはそれを跳んで後ろに躲し、ルフィとサンジの隣に並んだ。

「…何だありや」

「変なマークが地面に残ってるぞ…」

ゾロが避けた事によりくまの平手は地面に直撃した。

まるで肉球の様な形で地面に跡をつけており、ふざけたマークではあるけれどその威力の高さが窺える。

「うオオ!!粗碎!!」  
コンカッセ

「麦わらのルフィ、海賊狩りのゾロ、…手配書とは少し違うが、黒足のサンジ。…やめておけ、俺には勝てない」

サンジの回転して勢いをつけた踵落としてすらも涼しい顔をして、逆に攻撃をしたサンジの方が足を押さえて痛がっている。

「ハア…ハア…くそ、強エなコイツ…!」

「三十六…ボンドほう 煩惱鳳!!」

ゾロの螺旋状に飛ぶ斬撃は、手の平を当てる事で軌道を逸らす。

あの手の平…肉球があった…!ゾロの攻撃で生まれた衝撃を弾いた感じだ。恐らく、

何らかの能力者……!

「それがてめエの能力か……!」

「あらゆるものを弾き飛ばす能力……!俺はニキュニキュの實の肉球人間……」

「肉球人間……」

弱そうな名前のわりに、あらゆるものを弾き飛ばすとかとんでもない能力だ……肉球関係ない!

さつき見せたゾロの斬撃を弾いたのも、被害者の会を吹き飛ばしたのも全部悪魔の實か……。サンジの蹴りやルフィの拳に対して平気な顔してるのも能力なのか……?何か違う気がする……。

戦闘は、その後も一方的に続いた。

オーズもモリアも結局決めを私が取っちゃった事で、3人の蓄積ダメージはそれ程多くはない状態での連戦だった……にも関わらず、ここまで一方的にやられているのはくまの強さ故だろう。

「……やはり、万全ではないお前達を消した所で何の面白みもない……。政府の特命はお前達の完全抹殺だが……」

「……あれは……」

くまが自分の真上にある巨大な何かを抱えるポーズを取った次の瞬間、そこに肉球型

の大気の層が発生した。

それはボツ、ボツ、とくまが開いた両腕を閉じていくにつれてどんどん小さくなっていく。

「肉球で弾いて…大きな大気の塊に圧力をかけてるのね…あんなに小さく圧縮されてく…！」

「ち、小さくなったらどうなるんだ」

「あれ程の大気が元に戻ろうとする力は…例えば物凄い衝撃波を生む爆弾になる…!!」

ナミさんの言葉に疑問を口にしたペローナが、ロビンの答えに顔を真っ青に染めていく。

良く分かんないけど、とにかく爆弾なんだね…！

「よしペローナちゃん、いざとなったら私を盾に」

「何当たり前の事言ってるんだ！あんなのまともに受けたら死んじゃうだろ!!」

ペローナちゃんが死ぬくらいなら喜んで肉壁になります!!

「お前達の命は、助けてやろう」

ぎゅ、と手の平に納まる大きさまで圧を閉じ込めたくまが静かに呟く。

「そのかわり、麦わらのルフィ、もしくは逃げ足の女王イリスの首…どちらか1つを俺に差し出せ。無論、両者2つの首があれば尚良いが…その首さえあれば政府も文句は言う

「まい」

「…仲間を、売れつてのか」

「さア、麦わらか逃げ足をこつちへ」

ちら、とナミさんを見ると丁度彼女も私を見ていたようで目があった。

その顔は…あー、怒ってますね、凄く。私の首を差し出すとか死んでも言わないって無言の圧を感じる…。青キジと戦う前のナミさんにも似た凄みがヒシヒシと私の体に…

「「断る!!!」」

「…残念だ」

ルフィの首も、私の首もやらないというみんなの決意がその場に轟いた。

ペローナちゃんは何も言わずにただ黙っているだけだ。背負われている私には表情が見えないから、何でペローナちゃんが今すぐ私を捨てて逃げないのかが分からない。

「チクシヨウ…っ！…お前を盾にすれば、少なくともダメージを軽減は出来るつてのに

…」

ウルススシヨック

「熊の衝撃」

「…どうしてもお前に傷付いて欲しくないって私が、うるせエんだ。お前ほんとのほん

とに責任取れよ、人の為に傷付きたいだなんて思ったの初めてだからな」

「……!!ペローナちゃん……」

私を押し倒して、覆う様に上に被さる彼女と目が合った。

…涙を浮かべて、死の恐怖を押し殺している目と。

本当は物凄く怖い筈なのに、本当は今すぐにも逃げ出したい筈なのに…唇を噛み締めてそこから動かないペローナちゃんを見て、申し訳ないけど私は心の底から歓喜に打ち震えた。

だってそうだ。私がペローナちゃんを嫁にしたのは完全に容姿一択、性格なんて二の次だったというのに…:…なんて、なんて優しい…!!

くまの放り投げた小さな肉球型の“爆弾”が地面に触れた瞬間、その大気の層が爆発的に広がり、範囲の中の存在全てに破壊的な衝撃を与える。

当然範囲内に居るみんなはそれぞれ衝撃に吹き飛ばされ、それはペローナちゃんに守られている私も同じ事だった。

…ただ、吹き飛ばされてもペローナちゃんは私を離さなかった。必ず私の体を晒さず、自分の体を盾にして。

…能力の使えない、肉体的にも子供レベルしかない私が…守られているとはいえ気を失うのにそれ程時間は掛からなかった。



ただ、これだけは言える。私がこれ程の衝撃の中……能力が使えないにも関わらず絶命していかないのは……間違いなく、間違いなく……ペローナちゃんのおかげだったのだ。

## 108 『女好き、新たな仲間と強さの課題』

私が目を覚ました時、王下七武海、暴君バーソロミュー・くまは既に島を去っていた。何故だか嘘の様に体が軽いらしいルフィとは反対に、どういうわけか身体中傷だらけのゾロ。

ゾロに事情を聞いても話してはくれないし、というか起きてて大丈夫なのかと聞きたいくらい。

ペローナちゃんかというと、私を守って出来た傷をチョッパ―に治療して貰ってからというものナミさん達にもみくちやにされてるらしい。

本人はうぜエとか言ってたけど、表情は案外満更でも無かったような？

そんなペローナちゃんの提案で、このスリラーバークにある食糧、そしてお宝を頂いていく事にした。

財宝置き場はペローナちゃんが詳しいから、目をベリーに変えたナミさんとウキウキで取りに行った。食材の方はサンジが取りに行き、サニー号にあつたのと合わせて宴会の料理に使うとの事。

あ、あと、私が気を失っている間に王華が話しかけてきた。なんか今日の夜に話があ

るらしくて、夢の中で会おうね、とか何とか。あなたは私の恋人か。

「…はー…、何か知らないうちに事が動いて知らないうちに事が終わったって感じだよ…」

「ししし、イリスは何も知らねえんだよな、ブルツクの事とかよ！聞いたらお前ビックリするぞ〜！」

崩れた屋敷の中でも、まだ無事だった広い部屋の中に被害者の会も含めたみんなが集まっていた。

丁度体も動くようになった私は、ルフィと一緒に部屋端っこの方で座ってサンジの料理を今か今かと待っているみんなの姿をぼーっと見る。

「…私、強くなつたって驕りがあつたのかもしれない」

「ん？」

「青キジを倒して、ガープにだつて引けを取らないって。…でも私がそれだけの力を使えるのは、限られた時間でしかない」

これから先の海は、女王化クイーンした私よりずっと強い敵が現れるかもしれない。…今回のように、最後はただの足手まといで終わる事だつてあるかもしれない。

「…私は、強くなりたい」

「…にしし、おれもだ」

軽くルフィと笑い合つて、船に財宝を積み込み終わつたのか、被害者の会と共に帰つてきたナミさんやペローナちゃん達の所に行つた。

「ペローナちゃん、体は大丈夫？」

「大丈夫な訳ねエだろ、見ろこの包帯、私の肌が傷付いちまつたじゃねエか」

「え、それは大変…！舐めてあげるね！」

「ふざけんなキモいんだよ…！ギャー！近づくなア！」

そうは言つても可愛いんだから仕方ないよね！

スリラーパークはペローナちゃんが居ただけでも来た甲斐あつたつてもんだよ。モリアやくまとかオマケだよ、死にかけてたけど。

「おら野郎共、飯出来たぞ!!運ぶの手伝え!!」

「待つてましたー!!!」

「運べ運べ！久しぶりの美味しい飯だぞ!!」

「うはー！良い匂い!!」

サンジの料理も出来上がったようだ。相変わらず食欲をそそる良い匂いに自然と口角が上がる。ペローナちゃんもその匂いで小さくお腹を鳴らし、恥ずかしそうにお腹を押さえて目を逸らしていた。よし、犯す。

…あ、そうだ、せっかくだからブルックに軽く挨拶しとこう。みんなはこの戦いの中でブルックとそれなりに話をしたみたいだけど、私は全くしてないし…ついでにペローナちゃんも連れてくか。

「やーブルック、無事で何より」

「イリスさん…！どうもありがとうございます、お陰でまた、こんなにも美味しい料理を頂くことが出来て…！」

「料理に関してはサンジの腕だよ」

「…お前、剣侠『鼻唄』か？聞いてた特徴に合う」

鼻唄？なんじゃそりや。ブルックも首を傾げてて、どうやら身に覚えはないようだ。

「数年前、うちで暴れてゾンビ兵を浄化しまくってくれた骸骨だ。ホロホロ、あの時のホグバツクの焦り様は面白かったな」

「ああ、それは確かに私です。剣侠ですか…。あの、1つお願いがあるんですけど良いですか？」

なんだ、と興味無さげにペローナちゃんが返事をする。

「パンツ、見せて貰ってもよろしいっでっ！」

「おおお!!?!どうしたブルック!?!敵襲か!!?!…なんだイリスか」

おっと、勢い余ってウソツプ達が騒いでるトコまで殴り飛ばしてしまつたみたい。め

んごめんご。ナミさんの時は見逃してあげたんだから、学習して貰わないと！

「お前…あの程度でキレてどうすんだ。一々相手してたら保たねエぞ」

「私の嫁は私の嫁。冗談だろうと許せない事はある。…それに、もしブルックが私達の仲間になるのならそこんことをよーく教育しとかないとね」

「独占欲の塊かよ、お前と同じタイプの女を嫁にしたら私達殺されそうだな」

「失敬な、私だつてきちんと人を見て誘つてるよ！」

「私を可愛いからつてだけで嫁にするの決めてただろ、説得力ねエんだよバーカ」

ペローナちゃんは何というか、絶対に嫁にしなきゃいけないっていう使命感が宿ったというかね。うん。

間違つてなかつたんだから良いじゃん！あ、この肉美味しそう。

「あむ…。んく♪美味しいな、良い腕じゃねエかあのコック」

「そうでしょう、プリンセス。私の名前はサンジ…これから同じ船で暮らす者同士、よろしく願います」

「なんだてめエどつから現れた!?…つてこれには何も言わねエのか女王！」

女王つて、何か距離感じるな。

それにサンジは特別だよ、彼は紳士だからね。ブルックももう少し人となり知れたら多少の冗談くらいは許してあげるけど。

「ん……？音楽？」

……あ、ブルツクか。へえ、この部屋ってピアノあつたんだね。

聞き覚えのある歌……ピンクスの酒？今世では知らないな。

もう少し近くで聴きたいな、と思いピアノの近くで料理を乗せた皿を持って座る。

近くにナミさん含めた嫁がみんな集まってきたきそ園みたいになっちゃった。

「ピンクスの酒……何処かで聴いたと思つたら懐かしい歌……」

「ロビン、知ってるの？」

「昔の海賊はみんなコレを謳つてたわ」

凄いな有名な歌って事は分かった。

それにリズムが覚えやすいというか、口ずさみやすい良い歌だ。

「く♪」

「サルベージの時といい、あんた、割と歌上手いわよね」

「え、そう？歌唱力倍加してみようかな。出来ないけど……」

「キャハ、私がファン1号になるわ！勿論、おひねりには期待してて!!」

ミキータの場合おひねりどころか全財産渡してきそうだから怖い。

「お前さ、おれの仲間になるんだろ？な！影帰ってきたもんな、日が当たつても航海出来るだろ」

いつのまにかルフィがピアノの屋根に乗ってブルックに話しかけていた。彼はルフィの話を聞きながらもピアノの手を止めず、そのまま言葉を返す。

「…それなんです、私1つ、言っただけな事だ…」

「何だ」

「仲間」との…約束があるんです。それをまず果たさなければ私…男が立ちません…!!」

それを聞いたルフィが、ラブーンの話だろ？知ってるよ、と言った。…え、ラブーン？その名前、確か双子岬の…。

「え…ああ、そうなんです。ラブーン…そういう名前のクジラなんですけど、ある岬に…」

「だからよブルック、おれ達双子岬でラブーンに会ってんだ！あそこで50年ラブーンが仲間の帰りをずっと待ってるのは知ってた。だから驚いたよ！あいつの待ち続けている海賊達の生き残りがお前だつて分かった時は…！そしてお前はちゃんとまだ約束を覚えてる。これ知ったら、ラブーン喜ぶだろうな…！ししし!!」

うそん…ナミさんも口をぽかんと開けてるし、何でルフィがその辺の事情を知ってるのかは分かんないけど…それが本当なら凄い事だよ…！そんなの、絶対ブルックを仲間にしなないと！



「…ちよ、ちよつと待つて下さいよ！ヨホホ…！びつくりした…唐突で…！あなた達が本当に、ラブーンに会ったって!？」

「うん」

「50年も経つてるのに…!?今もまだ…あの岬で待つていてくれるんですか!?ラブーンは…!？」

「居たよ、おつきくて、仲間に出いたくて無茶してた優しいクジラでしょ」

ブルックと別れた時はまだ小舟程の大きさだったらしい。…うーん、考えられない。今となつては腹の中に家があるくらいの大きさだもんね。

「…元氣、でしたか…!？」

「ルフィと派手にじゃれ合うくらいには元氣だった」

「…:…:そ、うですか…!?!ちよつと聞き分け悪かつたけど、音楽好きで良い子でねエ…:今でも瞼を閉じるとその姿が…:あ、私瞼無かつた。…:頭にね、浮かぶんです」

ポタポタ…とブルックは自分で無いと言つていた目から涙を零れ落とす。それは初めて会つた時、彼が言つていた「枯れた涙」とは別の…:嬉しさから出る物なのだろう。

「そうですか…!?!彼は、元氣ですか…:…!?!ウオオ…!?!こんなに嬉しい日は無い…!?!」

そう言つてブルックは、頭をパカツと開いて頭蓋骨から何かを取り出した。…いや待つて!どんな収納庫だよ!!

「…ん？ 音 貝じやん。ブルックも空島行ったことあるの？」

「ご存知でしたか。いえ、私は行った事はなく、これはとある商人から買ったものです」

「なんだ空島って」

「また今度連れて行ってあげるよ！良いトコだよ、雲がふかふかで気持ちいいし！嫁もいるしー」

「お前らどんな冒険してきたんだよ…」

そりやもう凄く濃い冒険を。

…濃すぎて、今考えれば良く生きてるなあつて感慨深くなるよ。

「何か録音してあるのか？」

「唄」です。死んだ仲間達の生前の唄声…！我々は「明るく楽しく旅を終えた」という…ラブーンへのメッセージ。…今かけても構いませんか？」

「おー、聴きてエー！そりやラブーン喜ぶだろうな」

それを聞いて、ブルックは音楽を流し始めた。陽気な前奏から始まるその唄を、私はやはり覚えている。…いや、これを覚えているのは入州あなかな？

「〜♪ピンクス〜の酒を、届け〜にゆくよ♪」

「海風気〜まかつせ♪波まつかせ〜♪」

ふふふーん♪ふふふーん♪ふふふーん♪

やがてそれは、この場に居る全員での大合唱となった。

そのダイアルの向こう側では、きっとブルツクの仲間が命を賭して音楽を奏でているんだ。

だけど、それを一切感じさせない陽気なテンション。楽しそうな唄声。…ラブーンのことをどれだけ大事に思っていたかが分かる様だ。

そして、再生は終わった。

かつての仲間達と共に命いっばいに唄ったこの唄を、きっとブルツクは海を彷徨っていた間何度も聴いていたんだろうな。

ラブーンだけじゃなくて、ブルツクの心の支えにもなっていたんだ。きっとその仲間も喜んでくれるだろうね。

「1人ぼつちの大きな船で、この唄は唯一私以外の『命』を感じさせてくれたのです。……しかし、今日限り私は新たな決意を胸に、この音トーン 貝ダイアルを封印します。封印！！」

カパッと頭蓋骨を開けて貝を放り込むブルツク。絶対おかしい…どうなってるんだあの頭。

「ラブーンが元気で待っていてくれてると分かった…影も戻った、魔の海域も抜けた…！この貝ダイアルに蓄えたみんなの唄声は…もう私が1人昔を懐かしむ為の唄じゃない！これは、ラブーンに届ける為の唄!! 辛い日など無かった…希望なんか正直見えもしなかった。でもねルフィさん…私！生きてて良かったア!! 本当に生きてて良かった!! 今日という日がやって来たから!!!…!!…!!…!! あ、私、仲間になつていいですか?」

「おう、いいぞ!」

「さらつと! 入ったア〜!!!」

「でも歓迎〜っ! 音楽家♪」

また一段と賑やかになりそうな予感!

このスリラーバークで得たものは、本当に多い。

私の能力…それについての今後の課題と、ブルック、そしてペローナちゃんの一味加入。ペローナちゃんは私の嫁にも。

特に私は…この先の事を考えてもつともつと強くならなくちゃいけない。背負ってる命は重くて、そして多い。その中のどれか1つ足りとも失いたくないし、大切な人達なんだ。

王華との“約束”もある。…はあ…覇気を自在に扱えるようになれば、格段とレベルアップするのは間違いないんだけどなあ…。

## 109 『女好き、夢の世界の特訓』

「改めまして！」

バン、とブルックが手配者を床に置きながらルフィの前で跪く。お、賞金首だったんだ。

「申し遅れました……私、死んで骨だけ、名をブルックと申します！フダツキでございませす！通称『鼻唄』のブルック！懸賞金3300万ベリー！昔、とある王国の護衛戦団の団長を務め、その後ランバー海賊団船長代理『音楽家兼剣士』。今日より麦わらのルフィ船長にこの命！お預かり頂きます！皆さんのお荷物にならぬ様に、骨身を惜しまず頑張りますっ！！ヨホホホ！！」

「私もついでに挨拶しとくか。『ゴーストプリンセス』ペローナだ。そっちのお前達は私の怖さをよく知ってるな？ホロホロホロ……覚えておけ、私はいつでもお前達を裏切る事が」

「イリス庇って包帯だらけの奴が何言ってるんだよ」

「うっせエネガッ鼻!!これは、その……イメージアップだ！」

命懸けのイメージアップだねー。顔真っ赤にしていることか、もう言葉に出来ないく

らい可愛い。

「鼻唄、お前からすれば私と同じ船に乗るのは嫌か？」

「美しいお嬢さんと同じ船に乗れて、嫌な気持ちになる男がこの世界に居ますか？」

女の私でも嫌な気持ちになんてならないっての！私は例外かもしれないけど。

…とまあ、こんな感じで平和に挨拶は済み、宴はまだ続いた。

それが終わってからサニー号に積み込んだ財宝をナミさんが仕分けしたり、ブルツクの船で大切に保管されていたルンバー海賊団の遺骨を運び出して土に埋め墓を造ったり、それなりに忙しい日々を送り、早2日が過ぎた。

そして今、遂に次なる島：魚人島を目指すべく、被害者の会と共にサニー号の前に集まっていた。

「……はあ」

「イリス、どうしたのよため息なんか吐いて。昨日の朝からちよつと様子が変よ？」

「ああ…宴初日の日にね、王華が私に用事があるっていうから夢の中で会ったんだけど……」

\*\*\*

「……ん」

『あ、来た来た』

「……なにこれ」

宴ではしゃいで疲れていた私は、ペローナちゃんの胸に飛び込んで即睡魔に堕ちた。そして呼ばれた通り、今この夢の世界に来た訳ですが…なんか、以前の様な暗闇じゃない。完全にどこかの部屋の中だった、それもかなり快適な感じの。

「何この80Vはあろうかと思われるデカ液晶テレビ!!壁一面に並べられてる本棚!!ソファアール!テーブル!その上の高級そうなお菓子!!なにこれ!」

『エアコンもあるよ、つける?』

「この空間で暑いとか寒いとかの概念無いでしょ…。ていうか本当に何これ」

いつのまに私の夢世界は金持ちになったんだろうか…。私の懸賞金に比例して記憶内装が豪華になっていくシステムでも働いてるんですかね?

『タネ明かしをすると面白味も何も無いんだけど、記憶の世界だから私の記憶にある物は何でも取り寄せられるんだよね。ついでに言うところも自由自在』

「わっ……!」

パチン、と王華が指を鳴らせば、見渡す限り真っ白の果ての見えない空間へやってきた。

せ、精神と時……いや、何でもない。

『今日からはここで、私と特訓しよう!』

「……へ?」

『寝ながら特訓出来るなんてお得だよ。この方法を見つけた私を褒めて欲しい!』

「ま、待つて待つて!特訓?王華も言うように私今寝てるんだけど……夢の中で特訓して何になるの?」

私がそういうと、ハア〜と肩を竦めながらため息を吐かれた。何この気付かない私が悪いみたいな雰囲気。

『肉体の強化も良いけど、ここでするのは主に“覇気”と“ペイント”の特訓だよ』

「覇気……:……ペイント?」

『そう、ペイント』

何でペイント?私の将来の夢はハーレム女王であって画家では無いんだけど……。

『この先、どーしても必要になってくる能力だから死ぬ気で覚えて。今のペイント力が仮に1だとしても、期限までに50までは上げてもらわないとダメだから』



ポイント力って何…。

だけど王華の顔は真剣だ。これで冗談でした、とは言わないだろう。……多分。それに1番最初に言った「覇気」の特訓。確かにそれを行うならこの空間はうってつけだね。

あの技術は肉体を鍛えるというよりも、主にイメージが重要だつていうのは薄らと理解していた。ならば別に起きている時でなくとも特訓自体は問題なく出来るだろう。

「…分かったけど、それで、私は何すればいいの?」

『ほい』

またも王華がパチンと指を鳴らせば、私の目の前にナミさんのめっちゃめっちゃリアルな等身大フィギュアが色を塗られていない状態で現れた。

…ぼよんがえつちだ。

『イリスもこの夢の世界なら、私と同じようにイメージで物を創造出来るよ。まずはパレットと絵の具、筆を取り出して』

「うん。…むむむ……。あ、出た」

『じゃあ、早速塗ってみようよ。今のレベルを知りたいし』

「…ナミさんでしょ? いつも見てるのに出来ない訳ないじゃん。もつと難しいお題じゃないと成長なんてしないと思うけど……」

『…うーん、…見事、としか言いようがないかな。あれ程美しいナミさんをここまでヤバい見た目に出来る才能に震えるよ』

「な、ナミさん…!!そ、そんな…私、ナミさんに何て酷いことを…!!」

『海賊旗にナミさんとキスする自分のマークを描いたり、画力自体は悪くないんだろうけど…塗りのセンスが壊滅的だったね』

「ぐ…倍加すれば何とか…!!」

『技術力を倍加は出来ないでしょ…』

ち、ちくしょー…!!ナミさんを汚してるみたいで、興奮…は今回のケースではしないかな…普通に申し訳なくて心が痛い!

『さ、じゃんじゃん行くよ。ナミさんに申し訳ないって思うのなら一刻も早く上達してね』

「お、鬼!!悪魔!!せめて違う人にしてよ!!」

『はいミキータ』

「ちがー！ー！う！！！！」

…とまあ、こんな感じで特訓は続いた。

ある程度塗りが終われば、次は覇気の修行に入る。修行と言っても素人2人しか居ないから、目隠しをして王華の攻撃を避ける、という分かりやすい見聞色の修行方法だけだ。

ちなみに夢の世界なのに何故か痛い。変にリアルな仕様ありません。

\*\*\*

「ー！ー！という訳で、肉体的にも精神的にもボロボロです…」

「へえ…私も行ってみたいわね、その夢の世界とやらに」

「だめだめ、あんなナミさん見せられない…！…う、思い出ただけで頭痛が…！申し訳なさから来る目眩がア…！」

がく、と項垂れてナミさんの胸に飛び込む。今癒されておかないと、夜が地獄なんだから!! 本当に申し訳ないんだよ! 大好きなナミさんをあんな…あんな風にしてしまう自分が情けない…! くー!!

「別れ難いなアお前ら、もう2、3日宴やつてこうぜ!」

「だめだ! 次魚人島なんだ! おれ楽しみなんだ! 面白エ奴いるんだろうなくく!!」  
被害者の会の1人の誘いはルフィが断った。

魚人島か…。…人魚…!!

「ナミさんのマーメイド姿が見たいなー」

「キャハ! 私ならいつでもなつてあげるわ! 今すぐ海に飛び込めばいいかしら!?」  
「死ぬわよ、あなた」

そのままミキータを離さないでねロビン。彼女なら本当にやりかねない。

「人魚さんのパンツ、見せて頂いてもよろしいんでしょうか…」

「オイオイバカな事言うんじゃないやねエ!! 人魚は…パンツなんかはかねエよ…」

…ぶつ。

「ん? 何だか生暖かい…:…えつ、イリス? あんた何よその鼻血! まさかさっきの想像して…つて、今までそれ以上の事しておいて今更鼻血つてどうなつてんのよあんなの脳は

「！」

「いや…あの、想像したら何だか…えっちで」

普通に考えれば下半身魚だから履いてないのが当然なんだろうけど…!

ナミさんで想像したのがまずかったか…いやでもナミさんのマーメイド…す、素晴らし…!!

「何でお前ら詳しいんだ？」

「ああ、3年前ここへ来んのに通ってきたからな！サイコーだぜ魚人島！」

「ローラ、あんた達『新世界』へ行ってたの？」

ローラ曰く、どうやら新世界に行っていたのではなく、新世界から『来た』らしい。

彼女の母も海賊をやつて、しかも凄い海賊なんだとか。

「あ、そうだわ。コレあげる」

「紙？」

ローラがナミさんに懐から取り出した紙を破いて渡した。

「ママのビブルカード、特別よ？ナミゾウと私は姉妹分だからね」

「…？ビブルカードって？」

「え？知らないの？」

「ローラ船長、ビブルカードは新世界にしかねえんすよ」

新世界にしかない紙？ 凄い効果ありそう。

月にある石と一緒に、新世界の紙イーストブルって東の海とかで売ったらとんでもない値が付くん  
じゃないかな…。

「これはただの紙じゃないのよ、濡らしても燃やしても平気なの！ 自分の爪の切れ端を  
お店に持ってくと、それを混ぜて特殊な一枚の紙を作ってくれるわけ。それが別名、「命  
の紙」ビブルカード」

「へえ、命の紙…」

「それを離れていく友人や家族に破って渡しておくの。見てて、これは私のママから  
貰ったビブルカードね」

ローラがビブルカードを手の平に乗せると、風も吹いていないのにずりずりと動き出  
した。

…ホラーで使えそう。

「離れたカード同士は世界中のどこにいても引き合うから、私はいつでもママのいる方  
角が分かるって訳よ！ 距離までは掴めないけどね。便利でしょ、ママのビブルカードに  
私がサインしとくから、いつか何かに困ったらこれを辿ってママに会うといいわ。その  
時は私も元気にやってたって伝えてね」

「…そういえば今思い出したんだけど、その紙、ルフィ…」

「ああ、おれ、それ一枚持つてるかもな」

アラバスタでビビ：じやない。エースに貰ったビビ。：じやない。ビビがビビ。

：アラバスタを思い浮かべたらビビに会いたくなってきた：。

ごほん。

アラバスタでエースに貰った紙きれがそうなんじやないかな。それが俺とお前を引き合わせる、とかなんとか言つてたよね。

「そういう意味だったのか、コレ。：あり？ちよつとコゲて小さくなつてる」

「ちよつとアンター！それ見せて!!」

ルフィが取り出したビブルカードを見てローラが血相を変える。

：私は王華からの情報もあるから、大体予想はつく。「命の紙」なんて別名が付くほどの紙がコゲて小さくなつて事：つまり。

「：気の毒だけど、この人の命：もう、消えかけてるわよ!!」

「え、えエ!!」

：さて、ここからどうなるのか。

王華が何も言わなかつたって事は、まだ猶予はあるんだろう。：もしくは、既に未来が変わつてて時期が早まつたか。

いや、それは無いか。もしそうなら今頃心の底で喧しくらいに声が響いてる筈だ。

それが無いって事は、ここまでは王華の想定通り。

「ルフィ…助けに行く?」

「……いや、いい」

あれ、珍しい。こつからエースの元に向かうのかと思っただけだ。

「私は寄り道したつていいよ?みんなも同じだよ、ルフィの為なら命張るつて」

「私は嫌だからな。…オイ、聞いてんのか?オイ」

「…ししし!いいんだ、気にすんな。万が一本当にピンチでも一々おれに心配されたくねエだろうし、エースは弱エとこ見せんの大っ嫌いだしな。行つたつておれがどやされるだけさ。おれ達は出会えば敵の海賊、エースにはエースの冒険があるんだ」

……流石兄弟、良く知ってるね。

…エースには、一層死んで欲しく無くなったよ。

「でも、本人が弱ると縮むだけなのよ。また元気になれば元通りになるわ」

「そっか。なら、会うのはそんな時だ!その為にエースはこの紙をおれにくれたんだ!」

「…ま、ルフィが良いなら良いけど、助けに行くつて決めたら教えてよね、手伝うし」

私がそういうと、ルフィは笑って頷いた。

…助けに行くタイミングは、絶対に来る。だから私もそれまで準備しておかないと…

!……ペイントとか。



そして、私達はローラを筆頭にした被害者の会のみんなに見送られながらスリラーバークを後にした。

因みに被害者の会にはブルツクの乗っていた船をフランキーが修理してプレゼントしたらしい。勿論、ブルツクの許可は取っている。

…次は魚人島かあ。人魚楽しみだなあ…、人魚姫ってやっぱり居るのかな？居るなら当然嫁にするんだけど…！

人魚姫を嫁にすればハーレム女王にまた一歩近付きそうな気がする…！！

## 109. 5『第1回嫁会議』

夜——。

仲間達が皆寝静まった頃、サニー号の測量室兼図書館に集まる4人の女の影があった。

己が生涯を捧げると誓った主人、イリスにも黙ってこの場にやってきたのは…。

「…さ、始めるわよみんな」

1人は、『正妻』ナミ。

その懸賞金額はなんと1億にもなり、政府からの危険度はかなりお高い美女である。

そんな彼女は、測量室の中央に置いてある測量机を一旦隅に追いやり、代わりにホワイトボードを置いた。

「キャハ、何だかわくわくするわ!」

2人目、『嵐の運び屋』ミキータ。

言わずと知れたイリスバカであり、イリスが白だといえは真つ黒も白になるヤバい女が彼女である。

戦闘面でもかなりの強さを誇り、弱点だった機動力の無さを克服してからは強さに一

段と磨きが掛かっているみたいだ。

「フフ、楽しそうねミキータ」

3人目、『悪魔の子』ニコ・ロビン。

イリスの嫁の中では珍しい完全なお姉さんキャラであり、例え相手がイリスだろうとも間違っている事は正すことが出来る。ミキータは見習え。

「オハラ」の生き残りで、幼い頃から散々政府に追いかけて回された壮絶な過去を持っているが、麦わらの一味の覚悟とイリスが青キジを降した事で無事に仲間&嫁入りを果たした。

「私は眠いんだぞ…何時だと思ってるんだてめえら…肌が悪いだろ…」

4人目、『ゴーストプリンセス』ペローナ。

最近…というか3日前の時点でイリスの「メンバー」に加わったゴスロリ風美少女である。

その能力はかなり優秀ではあるが、覇気使いにはそれ程効果が無いようだ。それでも不意をつけば問題なく戦意喪失させられるのだが。

彼女は前の3人に比べれば、そこまでイリスに惚れ込んでいる訳では無い…と思わせ割と夢中になりつつあるのだが、それを自分から言う事は無いツンデレ（笑）であった。

「イリスの『メンバー』もかなり増えてきたわ。特にロビンやペローナは全然把握してないでしょ」

「ええ、そうね」

「知る必要ねエよ……ふわあ……」

「甘い甘い！私達は未来のハーレム女王……つまり女を統べる王様の嫁なのよ！それくらいは把握しておくべきじゃない？」

キュッキュ、とホワイトボードの上の方に『第1回嫁会議』と書いて、その左下に『カヤ』と書く。

ナミはボードの横に立ち、他の3人は講義を受けるかのように椅子に座っていた。

「私達にとって、まず重要な嫁はこの人よ。イリスのハーレムに初めて加入した……初めて夢の後押しをした人物ね」

「はア？正妻のお前が1番手じゃねエのか」

「会ったのは私が最初だけど……その時は色々あってね、私から拒否してたのよ」

これにはミキータも驚いた。ナミがイリスの正妻を拒否する姿など想像も出来ない。

「東の海にあるシロップ村ってトコのお嬢様で、そこでも色々事件が起きてね。そのお嬢様を命懸けで守ったのがイリスって訳」

「お嬢様か、少し親近感が湧くな、ホロホロ」

「あんたのなんちゃってプリンセスと違って本物だけどね」  
「ブツ飛ばすぞ」

なんだかんだ言いつつも話を聞くペローナに、軽口を叩いて距離を詰めるナミ。会って間もないが、イリスの嫁とは仲良くしたいナミなりの行動なのだ。

「病弱で、色白で、髪は薄い金髪の長髪……これだけのお嬢様特徴を揃えててイリスが気にならない訳がないでしょ？」

うんうん、とみんなは頷いた。特にペローナは物凄い勢いだ。自分もビジュアルで見初められた嫁であるから、更に親近感が芽生えたのかもしれない。

「で、カヤの次は……順番で行けばノジコね。私の姉よ」

「え、ナミちゃんってお姉さん居たの？」

「ええ、とつても頼りになる、優しい人なの。私を正妻にした後の初めての嫁だったわね」

ほえー、と口を開けて感心するミキータ。

彼女も偉大なる航路グランドラインから嫁に加入した事もあって、それ以前は知らないのだ。

「でも、ノジコについてはそれ程触れる事もないか。みんなには紹介したいけどね」

そう言つてナミは『ノジコ』の下に『マリアンヌ』と書く。

その名前に「あ」と反応したのはミキータだった。

「ここからは偉大なる航路になるわ」

「ここからはってお前……東の海で3人しかメンバーに入れてないのか？それでよくハーレム女王とか言えたな」

「確かに、積極的に誘ったりはしなかったのよね。強引に嫁にしたのは、多分私を除けばペローナが初めてじゃない？」

ペローナ以前で嫁となった者は全員、自分から加入を申し出るか、何らかのお礼って形しか無かった筈だ。

ここへ来て強引にペローナを引き入れたのは、間違いなくイリスが過去を乗り越えた事による心境の変化だろうとナミは思った。そしてそれは正解であり、イリスがこの世界に対しての遠慮が無くなった証明でもある。

「…ま、それは置いておいて、マリアンヌよ。彼女はミキータやロビンと同じく元パロックワークス

B・Wのオフィサーエージェントの1人だった。なんやかんやで嫁になったけど、嫁の中だと2番目に小さい子よ」

「1番はアイサちゃん？」

「そうよ。まあ…正確にはあの子はまだ嫁じゃないけど、将来はかなり美人になってると思うわ」

さつきから話についていけなくて、ペローナの頬が不満げに膨れていく。元々眠たい

所を引きずつて来られたのだから当然とは言えば当然だが。

「マリアンヌだかアイサだか知らねエが、ソレを私を知る必要があるのか？」

「イリスの嫁なんだから、私達からすれば家族でしょうが。家族を知らないなんておかしいでしょ？」

「お前らやつぱりどつかブツ飛んでんな…」

ため息を吐きつつも、理解はしたのか頬杖をついて話を聞く姿勢に戻ったペローナを見て満足げに頷くナミ。

「…で、イリスの嫁の中でも、多分特にイリスの心に強く残ってる嫁がこのコね」

「…『ビビ』？どつかで聞いた事はあるんだが…」

「あのコには悪いことしたわ、次会ったらきちんと謝りたいものね」

「私も…」

首を傾げて唸り出すペローナとは別に、どよんと暗いオーラが漂い始めたミキータ。実際の所、バロックワーズB・W時代の過ちに関してビビに許しを貰っている2人ではあるのだが、だから全く気にしないという訳でもない。というか、許せるビビの器量がおかしいだけである。

「…オイ、ビビつてもしかして、アラバスタの…ネフェルタリの…」

「知ってるの？アラバスタの王女様よ」

「知ってるも何も、最近王政に関わり出した超重要人物じゃねエか！次の世界会議レヴェリにも出てくるって話が上がってるくらい…」

「え、ビビもうそんなに活躍してるの！ふふ、これはイリスに教えてあげないと。きつと凄く喜ぶわ」

まさか自分でも知っているレベルの政治的重要人物の名が出てくるとは思わなかったペローナがわなわなと頭を抱えた。

彼女がビビを知っているのは、最近の新聞をちらりと見た時にたまたま載っていたからではあるのだが、その時の記事がえらくビビの活躍と今後に対する期待で溢れていたのを覚えている。

「私達もまた会いたいわね、彼女に」

「そのアラバスタの姫君に嫁げば、結果的には女王だろ」

「ただのね。それじゃあいつは納得しない…恐らく、最終的にはビビをアラバスタから引き抜くんじゃないかしら」

「国を一つ潰す気かよ…」

まあ、そんな事にはならないようにビビ自身が「自分が居なくても国が続いていける様になるまで待っていて」と言っていたから問題はないのだが。

「空島にはさつき言ったアイサに、コニス、ラキと3人も居るわね」



「キャハ、なんだかんだ、私はラキって人とあんまり話してないのよね、きちんとお話ししてみたいわ」

「そうね、彼女は空島を出る直前に誘ったから、ラキ自身もイリスの嫁っていう感覚は薄いかも…。こればかりはまた空島に行った時に何とかして貰いましょう」

空島に行くのは楽ではないが、行こうと思えば今のイリスなら行けない事もないだろう。空を飛んで行けば直ぐに辿り着くからだ。勿論、辿り着いてから半日はベッドで安静にしなければ行けなくなるのは必至だが。

「…とまあ、ここまで軽く名前だけ、現状のイリスの嫁を紹介した訳だけど」

バン！とホワイトボードを裏返して、ナミはそこに大きく『嫁を増やす為には』と書いた。

「私達はイリスの嫁、それも一番近くで居る…いわば責任のある立場よ。私はイリスの夢の手伝いをして、あの子をもっと幸せにしてあげたい」

ナミの言葉に間髪入れずにミキータとロビンの2人は頷いた。ペローナも態度で示さなかつただけで、無言は肯定である。

「ペローナの件で良く分かった、あの子はエニエス・ロビーでの件以来、間違いなく私達に対して…違うわね、この世界に、遠慮が無くなったわ」

「司法の塔か。お前らがとんでもねえ工事やらかしたアレだろ、何かあったのか」

「その辺は…悪いけどイリス本人に聞いてくれる？ちよつと私が勝手に話してもいい内容とは思えないの」

それは勿論、イリスの過去の事だ。…否、王華の。

「それでナミ、何か作戦があるのかしら」

「作戦っていう程大層なモンじゃないわよ。あの子自身が変わりつつあるのなら、私達はその後押しをする。…つまり」

「…キャハ、成る程ね」

楽しそうに笑いながら立ち上がるミキータと、それに続くロビン。

全く話が分かっていないペローナは首を傾げるが、流れには従っておこうと立ち上がった。

「じゃあ、行くわよ。…夜這いに!!」

「「ええ!!」」

「……は?!?」

\*\*\*

「お前ら…なんだかんだ理由つけてあいつの寝込み襲いたかっただけだろ…」

「何言ってるの、そんなんじゃないわよ。きちんとイリスには“女”を知ってもらわなくちゃ」

「犯された私から言わせて貰うと、アレは充分に知ってる手つきだったから安心しろ」

今4人の前には、巨大なベッドの真ん中でちよこんという表現がびったりないイリスがすやすやと寝息を立てていた。

4人ともそこから抜け出してきたのもあって、温もりを探すかのように腕を伸ばしている姿は見た目だけではなく、本当の子供のようだ。

「しかし…仮にも6億の首が何て無防備な寝顔だ…。……………なんだお前、気持ち悪い顔で笑ってんじゃねエよ」

「別に何も？ただ、イリスを見る顔が随分と優しくなったから気になっただけよ、ごめんなさいね」

「ばっ…な、何言ってるんでめエ！そんな訳ねエ、私はいつかお前ら全員を裏切つて…えええええ…!!」

大声を出したからだろうか、上半身だけ勢いよく起こしたイリスが、寝ぼけ眼のまま

ペローナの腕を引っ張って体の位置を入れ替えて押し倒した。

「……んー、パレット…絵の具」

「は!? てめエ寝ぼけてるじゃねエか! どんな夢見てんだ! オイお前ら、コレ何とかしろ!」

「よつと。…さ、私達も混ぜて貰うわよ!」

「服脱いでんじゃねエぞ変態共!! 意識ないのにやったって意味ねエだろ!」

「キャハ…、私はそれでも、やりたいのよ!」

この時、ペローナは思った。

主人が主人なら、嫁も嫁だと。…そして、自分もいつかはああなってしまうのかと。

(嫁会議っていうか…ただの夜這い口実会じゃねエか…)

これじゃハーレム女王になる前にえっち女王になってしまふんじゃないか、と訳の分からない事を考え出した時点でペローナもかなり雰囲気飲まれてる事が分かる。

数日前もスリラーバークの自分の部屋だった所で襲われたばかりの彼女にとってはそういう思考になるのも致し方ない所もあるが。

「……う」

「?」

そしてこのままイリスを美味しく頂く、というのがいつもの黄金パターンだった。…

のだが、何やらイリスの様子がおかしい。

顔を歪めてナミの名前を連呼しているのだ。その額には尋常じゃない程の汗が滲んでいる。

「…っ、な、みさん……ああ…絵の具……」

「あ」

自分の名前と、絵の具というキーワードに思い当たる節があったナミが声をあげた。

昨日も言っていた、夢の中での特訓…、間違いなくそれが原因で今は魘されているだろう。

「…イリスちゃん、どうしたのかしら」

「あー…多分…」

ナミは軽くみんなに説明する。

因みに、これから夜這いしちやおう！という雰囲気でも無くなってしまった為服は着た。

「もう一人のイリスちゃんにスパルタされるイリスちゃん…夢の中に入って見たいわ！！」

「…だけど、そうなると当分夜に『そういうコト』は出来ないわ。ナミ…これは早急に策

を練らないと」

「そうね、夜以外は基本航海で忙しいし…夜だって天候によつてはゆっくりも出来ないつてのに…」

うーん…と唸る3人に呆れ顔を贈ったペローナは、確かにこれだと調子が狂うな、と眉を寄せた。

今だってペローナを押し倒してはいるが、そこから微動だにしない。恐らくそのまま寝ているのだろうが、押し倒しといて何もしいって言うのもどうなのかと不満が募る。

「…ま、いいか」

イリスの背中に手を回して、その小さな体を自分の横に寝かせる。

「お前らも今日はもういいだろ、寝るぞ」

「…そうね。でもペローナが居てくれて良かったわ、そういう判断は私達つて中々出来ないから」

「ただだけやりてエんだよ…」

「でもちやつかり自分の隣にイリスちゃんを寝かせる辺り、ペロちゃんも流石ね！」

「うるせエぞ…つてペロちゃん言うなー！…でも案外可愛いな、アリか？」

\*\*\*

男も女も、皆寝静まり：サニー号を静寂が包む。

その中で一人、横にはなっているがまだ夢の世界へ旅立っていない女が居た。

「……イリス」

正妻、ナミ。

ペローナとは反対側のイリスの隣で、彼女はその小さな頬を優しく撫でた。

「とうとう起きてる時だけじゃなくて、寝てる時も無茶する様になったのね……。全く、心配ばかりかけて……これじゃ息抜きもさせてあげられないじゃない」

そう言つて軽くキスを落とし、……いや軽くなかつた。寝る前のモヤモヤを吹き飛ばすかの如く深いキスだった。正妻の執念とは怖いものである。

寝ている為されるがままのイリスの口から垂れた唾液すらも綺麗に舐め取り、ナミは妖艶に笑う。

確かにイリスは夢の中でも無茶をし、息を抜く間もないかもしれない。……だが、それとナミの中にある欲とはあまり関係の無いものだった。

最近はイリスと2人でそういう事をするなんて機会は随分減ってしまい、その事に関しては仕方ないと思つている…が、やはり独り占めしたい時だつてある。

そして今は、ペローナのお陰で奇跡的に独り占めが出来る状況にある。

2人きりではない為、こつそりと、イリスにすら気付かれずにする必要があるが…ナミはそれでも構わなかった。

「……ん」

「……」

その時、不意にイリスの目が開かれた。ペローナを押し倒した時のようなものではない…確実に『起きた』様子で。

「…ナミ、さん？…あれ、なんでわたし、前はだけてるの？」

「ごめんイリス、声…出さないでね」

「え？ちよ…お、王華め…珍しく休憩くれたと思つたらそういう訳か…」

しかしもう、ナミは止まらない。

イリスの小振りな胸に手の平を添えて、舌舐めずりをし、目はギラギラと欲に満ちていた。

久し振りに2人でする、という事にナミは興奮しているのだが、その事に気付かないイリスは普段と違う彼女の様子に困惑しつつも、その腕に体を委ねるのだっ



たー。たー。

因みに次の日、珍しくイリスに説教されていたナミを不審に思つた3人がナミに問い詰め、夜中に楽しくイチャコラしてましたと白状するや否や朝っぱらからイリスを押し倒してやり始めたのは、もはや語るまでもないだろう…。

偉大なる航路（グランドライン） シャボンデイ諸島編

110 『女好き、初?の人魚と出会う』

「…来た」

「くうく…感慨深いね、ナミさん！」

「ええ…何だか懐かしくも思えるわ」

「どうとう来たんだ、ここまで!!」

スリラーバークを発つてから数日後、私達の目の前には巨大な見渡す限りの絶壁、『赤い土の大<sup>レッド</sup>陸<sup>ドライン</sup>』が雄大に聳えていた。

これで偉大なる航路は半周…！ラブーンに会った双子岬は海の反対で、この壁と繋がっている。とにかく、ここまで誰一人欠けず…！それどころか仲間を増やしつつ到達出来たんだ！

「私は西<sup>ウエスト</sup>の海<sup>ブルー</sup>から5年前にこの海に入ったのよ」

「…へへ、でもその時と違って、今は私達の仲間だもんね！」

ロビンにひひ、と笑いかければ彼女も珍しく満面の笑みで応えてくれた。美しい可愛さ…！二刀流…!!

「キャハ、私も西ウエストブルの海の生まれよ」

「なんだお前もか？私も生まれは西ウエストブルの海だ。小さい頃にモリア様に拾われたから、育ち  
はこつちだけどな」

「西ウエストブルの海って美女の海か何か?？」

それにしても、やっぱりペローナちゃんにとつてモリアは親みたいなものなのか。きちんと挨拶出来て良かった良かった。

「世界をもう半周した場所でこの壁はもう一度見る事になる。…その時は、おれは海賊王だ!!ししししー!」

「じゃ、私はその夢の道を補佐しながらハーレム女王になるよー!」

「補佐つつーかお前、気が変わって海賊王になりたいとか言い出せば誰も止められねエだろ」

「何を言つとるかねウソツプ君。私にそんな気は無いし…仮にその気持ち芽生えたとしても、海賊王になる為の道でルフィと戦つたつて私は勝てないよ」

逆にルフィがハーレム王になるとか言い出しても、私は絶対負けない。

本気で目指してる夢がある人は強いからね。

「それで、こつからどうすんだ、魚人島は海底にあるんだろ?」

「ええ…ロツ指針は間違いないこの真下を指してる」

「それなら、良いのがあるじゃねエか」

フランキーの言葉に、私は首を傾げた。

—————

「そういえばあつたね、これ」

海中に沈んでいく『シャークサブマージ3号』を見ながら私は呟く。

確かサニー号初日にフランキーがソルジャードックシステムの説明をしてくれて、その時に見た『潜水艦』だ。

これで海底を探索して魚人島への入口を見つけようって腹である。

潜水艦に乗っているのはルフィ、ロビン、ブルック。

くじで決めた事とはいえ、潜水艦に能力者が3人も乗るといふヤバイ事態になってしまった。せめてロビンだけでも私と代わってもらおうと思っただけ、ロビンにやんわりと断られてしまったのだ。無念…。

「あー、心配だなあロビン…」

「そんなに心配なら私が海に落としてやろうか? ホロホロホロ…」

「キャハ、始まったわ、ペロちゃんのお口だけ威嚇」

「いい加減、お前にも私の恐ろしさを味合わせてやらないとな!! ネガティブ…」  
ぺしん、とナミさんがペローナの頭を軽く叩いて中断させる。

「て、てめエ! 誰の頭を…ひー!」

「ペローナ、ここはもう「海軍本部」と世界政府の聖地、〃マリージョア〃のすぐそばよ。  
…騒いじやダメじゃない」

言葉は柔らかいけど顔が怖いよナミさん!

ペローナも速攻で「ごめんなさい!」と謝り、胸を押さえて深呼吸していた。うーん、  
だけど嫁達の絡みは何を見ても癒されるなあ…眼福眼福。

「そっちはどお? ロビン」

『ダメね…真っ暗で』

『真っ暗だー! うひゃー! おいおいアレ今なんか光ったぞ!』

『うわーっ! 怪物の目玉では!?! 死ぬーっ!! って、私もう死んでました! ヨホホホ!!』

ナミさんの持つ電伝虫から騒がしい声が聞こえて、ナミさんの額にびしつと青筋が浮かび上がった。

「まあまあナミさん、ロビンが居るから大丈夫だよ」

「そうよね…、良かったロビンが居てくれて。魚人島への手がかりを探しに出た筈がとんだ深海冒険になる所だったわ…」

「愛しのプリンセス方々♡スリラーパークに生つてたホラー梨のタルトが美味しく出来たよ♡」

お、サンジのおやつか。

スリラーパーク産つていうのが怖いけど、サンジが調理したなら心配要らないよね。普通に美味しそう。

「けど、困つたね。…あむ、美味しいー!」

サンジつて何でも作れちゃうよねえ…。私的にはこの前食べたパイユ、あれをもう一回食べたいなーつて思ったりしちゃつたり。

「また空島の時の行き詰まり再来だな」

「そうね…進むべき方向はわかつてても到達の手段が分からない。どうやって行くの?」  
魚人島<sup>〃</sup>」

確かにナミさんの記録<sup>ログボース</sup>指針は今も真下を指し続けているし、海底にあるつていうのはココロさんの情報だけじゃなく、確かな事実らしい。

「ペローナは知ってるんじゃない?モリアつて新世界に行ったことあるんでしょ?」

「私がモリア様に拾われたのは西<sup>ウエストブルー</sup>の海だ。それ以降はさつきも言ったがずっとスリラーパークで暮らしていたんだ、魚人島への行き方なんか知らねえよ」

まあ、そうだよな。モリアに話を聞いてるなんて事も無さそうだし、こりゃほんと

参ったな…タルト美味しい。

「出たぞ〜!! あー面白かったー!!」

「あ、おかえりー、どうだった?」

海面からサブマージ3号が浮上して、上部のハッチが開いて3人が出てきた。

「ダメだ、全然海の底も見えねエや。本当にあんのか? 魚人島!」

「空島があつたんだから絶対あるよ。ルフィが疑つちやダメでしょ」

「そりやそうだ、悪イ」

…とはいっても、手がかりがこれで潰えた事は確かだよな。

どうするか…この際赤い土の大<sup>レッド</sup>陸<sup>ランド</sup>を掘ってコツコツ移動してみるとか?…無いか。

「あれ、ルフィ…その付けてるバンドどうしたの? お洒落? 珍しいね」

「これか? これはスリラーバークの財宝だ、ナミが良いって言うから貰ったんだ」

ナミさんが? あ、それ宝石じゃないからかな。

その時、水中からぶくぶくと泡が出ている事に気付いたルフィが「ん?」とそこを見る。直後、その真下からウサギのようなワニのような大きな生物が飛び出してきた。

「うおー!? ついてきてたのか!」

「海兔?!」

でも、ちよつと前にオーズを見たからか、そんなに大きいって思わないな。常識的に考えればこの兎は規格外の大ききなんだろうけど。

ナミさん達に危害を加えられたらたまつたもんじやない、早々にご退場願おう。

「30倍灰、去柳薇!」  
さんじゅうばいばい、さよなら

「ゴムゴムの、回<sup>ラ</sup>転<sup>イ</sup>弾<sup>フル</sup>!!」

大きな口を開けて私達を食べようとした海兔の腹を2人で殴って吹き飛ばした。

その際口から空へ何かを吐き出した様だけど…なんだ?降ってくる…。

「…ちよ、ちよつと待つて…!あのシルエット、まさか…!!」

「ま、まさか…!!」

「おつと…!!」

丁度私の真上に落ちてきた“何者か”をキャッチして受け止める。

ま、間違いない…!上半身は人で、下半身は魚の尾ビレ…!!なんかヒトデも居るけど

今は放置で。

「あの、あなたつてもしかして…」

「ごめんなさい!受け止めて貰っちゃつて…!大丈夫!」

「うん、全然平気。で、あなたつて」



「わー!!びつくりした、いっぱい人間の人の!!」

な、何というか、そそっかしいな、この人魚ちゃん。

…そう、間違いない。この子は人魚だった。

受け止めた時に鱗を触ったけど、あれは本物だね、うん。

「…人魚よね」

「ま、マーメイド…!?美しい…俺ア初めて見るマーメイドの煌めきに心が燃え尽きてしまふそうだ…」

「何言ってるんだ、ウォーターセブンで…」

「それ以上言うな」

サンジが暗い顔で地面に手をつく。あー…ココロさんって、そう言えば人魚だった。

「消化されそうな所を助けてくれてどうもありがとう!私、海獣に食べられやすくて

!かれこれももう20回目くらい」

もうちよつと周り警戒しようよ。

「何かお礼をしなくっちゃー…そうだ、タコ焼き食べる!」

「私達もあなたを助けられたのはたまたまだし、それくらいの方が良いね。あなた、名前は何?」

「ケイミーだよ!タコ焼きはお1人500ベリーになります!」

え、お金取っちゃうの?と苦笑いした時、さつき無視しちゃったヒトデがケイミーちゃんに「商売かい!」と突っ込んだ。

「間違えちゃった!!」

成程天然系ね。コニスちゃんとはまた違った天然のタイプだし、可愛いから嫁になつてもらおう。そうしよう。

「ケイミーちゃんを嫁に貰うのは確定としても、そのヒトデは何?喋るなんて珍しいね」  
「ペットの『パツパグ』!私の師匠なの」

「へえ…師匠でペットってなんか面白い関係だね」

上なのか下なのか…。いやーでもケイミーちゃんの上にヒトデが立つなんて無理でしょ、まず可愛さのオーラだけでケイミーちゃんが圧勝してるし。

「飼われてやってんのよ、訳あってな…ケイミーは、いつもハマグリをくれる」  
餌だね。

その流れで何か歌い出したパツパグをスルーしてケイミーちゃんと話す。

今ケイミーちゃんが着てる服は『クリミナル』っていうブランドで、魚人島でも流行っているらしい。しかもそのデザイナーナーがパツパグで、彼女もいつかデザイナーナーになりたくてパツパグの弟子になったとか。

いーなーパツパグ、ケイミーちゃんみたいな可愛い弟子が出来て羨ましいなー!!

「…あ、でもこれって凄くラッキーじゃない？行き詰まっていた進路を聞くのに最適な人材が…」

「おいイリス、タコ焼きが先だぞ！」

「麦わら…お前そんなんで良く船長務まってるな」

「キャハ、私達の船長はキャプテンこうじゃなくつちや調子狂うわ」

確かに。

目の前に食べ物があるのに我慢出来る人じゃないか。それでこそルフイって感じだよね。

「そうだね、ちゃんとお礼のタコ焼きを食べてもらいたいから！じゃあ、はっちんとどこかで待ち合わせしなきゃ」

はっちん？

ケイミーちゃんは背負ってるリュックから電伝虫を取り出して呼び出しをかけた。

「もしもしはっちん？こちらケイミーだよ、逸れてごめんね、今どこに居るのー？」

『……………』  
…？反応がない、どうかしたのだろうか。

ケイミーちゃんも首を傾げて「はっちん」の名前を数回呼ぶ。ケイミーちゃんに何回も名前呼ばれるとか普通に羨ましい。

『おー…その声ケイミーか。モハハハ…わいが誰か分かるかい？ハチじゃないぜエ〜!!』

「えー!?はっちゃんじゃないの〜?!」

『マクロだよオ〜! 毎度お馴染みズツコケ一味だよオ〜!』

何かトラブルみたいね、と軽く呟いたロビンに軽く頷き、みんなで静かにその電伝虫に耳を傾けた。

「むっ! どうしてあんたがはっちゃんの電伝虫もってんの!？」

『ハチの野郎をやっつけちゃったからに決まってるだろ、モハハハ!!』

「うそよ! はっちゃんがお前達なんかにやられる訳ない!」

『まあ、そうだな。いつもならわいらハチには敵わねエが、今回はなんとあの「トビウオライダーズ」と手を組んでいてねエー! モハモハハ!!』

『ニユ〜…ケイミー、無事だったか…良かった』

電伝虫の向こうで人が代わったのか、別の男の声が聞こえてきた。ケイミーちゃんがその声を聞いて「はっちゃん」と呼んでいるから、トラブルが起きているのは確定したようだ。

『ちよつと油断したんだ…おめーはここに来ちゃダメだぞ! ニユ…おれは一暴れしてすぐに帰るから大丈夫だ』

『モハハハハー!! おいケイミー、コイツこのまま売り飛ばしちまうぜ! タコの魚人は珍しいから高く売れる! 助けに来たきや来るがいい。ここはシャボンディ諸島44番<sup>グループ</sup>GRから東に5kmの海…人攫い組、「トビウオライダーズ」のアジトだ!!』

『ニユ〜! ダメだケイミー、来るんじゃねエぞー!!』

『黙れコノタコ助!!』

受話器から人を殴る音が聞こえ、そして通信は途絶えた。

…タコの魚人で、はつちん。…聞いたことあるし、何なら1人頭に浮かんでる人物が居るんだけど…。

ナミさんも頬に手の平を添えて考え事をしている様だ。

「…ごめん、ルフィちゃん、お礼のタコ焼きまた今度でいい!? 私すぐに友達を助けに行かないきゃ!!」

「ケイミーちゃんと、そこで忘れられて泣いてるパツパグだけで助けられるの?」

「それは…:…だけど、行かなくちゃ!!」

“はつちん”が私の思い浮かべるあいつ<sup>…</sup>だったとしても、ケイミーちゃんをみすみす危険に晒す訳にはいかない。

それに、ケイミーちゃんみたいな良い子が無謀だと分かっているても助けに行こうとしている人だ。…案外私の思い違いかもしれない。それに…私は“無謀”な人は好きだ

し。

「そのはっちゃん、助け出すのは私達に任せて貰えるかな?」

「え!?!いい、いいの:?!」

「勿論。:あ、自己紹介が遅れたね、私はイリス:ケイミーちゃんを嫁に貰う者の名だよ」

「え?お嫁さん?またまた、私、人魚だよ?」

人魚だから何だと言うのか。種族の壁?へーきへーき、この世界には巨人族とかも居るし、人魚と巨人のハーフだって居るくらいだから人間と人魚でも問題ないでしょ!

「ルフィ達も良いでしょ?私の未来の嫁が困ってるんだよね」

「おう、嫁なら仕方ねエ」

うんうん、とルフィに続いて男組が全員息ピッタリで頷いた。何か反応が引つかかるけど:まあいいか。

「それでケイミー、場所はわかるの?」

「えーと:」

「44番GRは諸島の最も東に位置する島だからよ、丁度ここからシャボンディ諸島へ行くライン上にあるな。諸島に着く5Km手前だ、まず西へ進もう。後は魚達に聞きやあ分かるだろ」

「パツパグ：ただの空気ヒトデじゃなかったんだね。ぶっちゃけ人気ブランドのデザイナ―とか今でも疑ってるけど、認識を改めないといけないかも。」

「うん、急いで行こー！」

そう言つてケイミーちゃんが立つたまま船端まで尾ビレを使つてぴよこぴよこ移動する。癒し。

「おい、と海に向かつて彼女が呼びかけると、大量の魚がそこに顔を出した。」

「すげー……」

「魚と話せるなんて、人魚つてそんな事も出来るのね」

海王類とも話せるのかな？ だったら風カームベルトの帯も簡単に渡れるよね。：無理か、全ての魚

類と話せるなら食べられたりしないし：いやでも海獣だから魚じゃないのかな？

「ふんふん……トビウオ達が恐いから近くまでなら先導してあげてもいいってー！」

「よし来た、任せてー！」

腕捲りをして力こぶを作る仕草をし、ケイミーちゃんに笑いかけた。

魚達の先導で船を走らせ、丁度いいタイミングでゾロもトレーニングルームから降りてくる。

「もう船出すんだな、魚人島へ行けそうなのか？」

「それよかコイツ見ろ、人魚のケイミー！ 本物だぞ、スゲーんだ！ あ、でもイリスの嫁だ

…気を付けろー！」

私の嫁つて言葉に敏感になり過ぎでは!?あと、ケイミーちゃんはまだ嫁じゃないから!

「へエ、人魚か。……………、……………初めて見た」

「消した!今記憶を消した!!」

ゾロでもこうなるくらい破壊力のあるマーメイドココロさん。…待てよ?ココロさんは確かに凄いい見た目…げふん。まあ、ちよつと個性的な外見をしておられるけど、チムニーは可愛いよね?嫁約束するべきだったのでは!?というか、チムニーこそ魚人と人間のハーフなんじゃないの?確かあの子つて尾ビレ無かったよね?ぐあー!どつちにしろ勿体ない事したー!!

「…はっちゃんの声、随分弱つてた。きつと酷いことされたんだ…」

「まー、あいつも相当頑丈だから大丈夫だ。それよりおめエら、軽く引き受けてくれたが腕つぶしに自信あんのか?」

「うん、強エぞ」

私も腕には自信あるね。持久力ないけど。

「先に言つとくが、この辺りにや〃人攫い〃つて裏稼業の集団が何10チームも存在する!「シャボンディ諸島」という場所で、人間の売買が盛んに行われてるからだ」



「…奴隷ってやつ？」

「まア、そうだ。中でも人魚はいくい値で取引されるから“マクロ一味”って魚人の3人組はしつこくケイミーを狙って来る。タコ焼き屋のハチは多分…今回おれ達が海獣に食われて帰って来ねエのをマクロ一味に攫われたと勘違いして乗り込んでつたんだと思う」

「そいつら下手すりゃ死ぬぞ」

私をチラチラ見ながらウソツプが口にした言葉にパツパグが首を傾げた。首つていうかなんていうか…体？ヒトデだからその辺は曖昧なんだよね…。

「うん…多分そう…はっちゃん優しくして真っ直ぐな人だから…、私のせいだ」

「何言ってるの、こうしてマグロだのトビウオだのを壊滅させられる戦力を連れてきたんだから、むしろお手柄じゃないかな」

「イリスちゃん…」

後ろからナミさん達の熱い応援が聞こえてくる。「今よ、キス！」とか「押し倒すのよイリスちゃん！」とか…。そんながつついてるのは酒が入った時くらいだからね？

「…タコだのハチだのと聞くと、俺はあのアホな魚人の顔が浮かぶ…」

「もし本人なら助けやしねエ…まア、そんな訳ねエが…」

ゾロとサンジが話している事は、私とナミさんもさつき思った事だ。

サンジはそんな訳ないって言ってるけど、恐らくはっちゃんはアイツで間違いないだろう。

あの時私はナミさんを救い出す事で頭が一杯だったからきちんと周りを見ていた訳ではないけど、あそこまで特徴的なやつを忘れてはいない。

「それで、トビウオライダーズって何なんだ」

「ペロちん、それは」

「お前から私の名前をペロで区切るのいい加減にやめろ」

と、言いつつも既に諦め気味なのか、語調はそれ程強くなかった。

「最近、急にここらの海でハバキかせ始めた人攫い集団の1つだ。狙われたら最後って評判さ…。ボスは「デユバル」って名の『鉄仮面』の男…。その素顔は誰も知らねエ、何でも人を探してるらしくてな、ここらを通る船全てをチェックしてるって話を聞いた」

「ふーん…。でも心配いらないよケイミーちゃん！私に狙われた敵だって、最後はみんなやっつけて来たから！」

「うん…。ありがとう」

少し視線を斜め下に逸らしながらほんのりと頬を染めるケイミーちゃん。およよ、これはもしかして…?!

「ケイミー、こんな子供の言葉を真に受けるのか？ただのおままごとき、気にする必要

は」

ガシ、とパツパグの体を手を倍加させて驚掴みにした。

最近では手配書のお陰もあつてか、あんまり子供扱いされなくなつて来てるのにこのヒトデめ……!

「パツパグ、私はこれでも19歳。おーけー?」

「お、おーけー……!よ、よく見りやなんて美しいお姉さん……!」

「行き過ぎたお世辞も腹立つ」

「すみませんでした!!!」

全く……人を見た目で判断しないで欲しいね。

……仕方ないとは思うけどさ、それとこれとは別だから!

# 111 『女好き、鉄仮面の下』

数分後。

「え？」

「？ケイミーちゃん、どうかした？」

「魚達が…「悪いけどここまで」だって…」

…という事は。

「うわ来た！」「トビウオライダーズ」!!」

パツパグが叫び、私達は急いで船首側に走って海を見た。

…けど、何も居ないよ？

「違うよイリスちゃん！海じゃなくて、空！」

「え、空!?!」

トビウオって魚じゃないの…？と思いながら空を見上げれば、そこには大きなトビウオと、それに乗って操縦しているライダー達が居た。

ただ奴らは私達の船に必要以上には近付かず、そのまま西へと去っていった。…トビウオって言うてもウオなんだからお空ビュンビュン飛ぶのはやめて欲しいよ。

しかもケイミーちゃん曰く、あのトビウオは水中から出て5分は飛行出来るらしい。魚名乗るのやめろ。

「まさか空から来るなんてね…、大砲とか準備してたらどうかかな？」

「おお、それいいな！撃ち落としてやるぜ！」

ウソツプなら余裕だろう。あのトビウオ大きかったから、的が大きい分狙いやすいだろうし。というか小さくても彼なら当てるけど。

「海上の戦闘になるなら、私も試したい技があるんだよねえ」

上手いかなかったら普通に海に落ちるけど、まあみんなも居るから大丈夫でしょ。

\*\*\*

「着いたぞ！アレだな！」

「あれがライダーズのアジトか…」

見た感じ、トビウオライダーズのアジトは海に無理矢理建てた居住区って感じだ。上空から見れば三日月の形をしているのだろうその島もどきの、囲いが無い場所から船を

進ませる。

その三日月の真ん中には、海底に刺した鳥居型の木の棒に檻がぶら下げられており、その中に誰か居るみたいだった。

「気を付けてねみんな…マクロ一味だけでも私が30回は捕まった程の敵…」

「捕まりすぎだろお前っ!!食われ過ぎだし!」

「とうか、妙に静かじゃない?待ち伏せされてるね」

「え、みんなおやつの間で家の中に隠れてるんじゃないの!?!」

ケイミーちゃん、これだけは言わせて欲しい。だから捕まるんじゃないのかな…。

でもそういう純粋なトコも可愛いんだけどね。

「ニユツ!おれはここだケイミー!無事だから心配するな!」

檻の中から声がして目を向ければ、そこには全身真っ黒の見覚えがあるシルエツト。

…うーん、やっぱりもう確定じゃないかな、何で真っ黒かは知らないけど。

「ナミさん、どう?」

「うーん…怪しい…っていうかほぼ…」

ナミさんが目を凝らしてじーっと真っ黒シルエツトを見て言い、サンジが「聞いてみ

よう」と船首側に歩いて檻に近付く。

「おい!アーロンは元気がア!?!」

「ニユ〜!? あア! アーロンさん!? あの人もチュウもクロオビも、みんな海軍に捕まったままよ! おれ一人で脱獄してきて今、昔からの夢だったタコ焼き屋やってただけ!」

「おめエかやつぱり〜っ!!!」

「しまった〜!!!」

バカ過ぎる…。疑う事を知らないのか…私達にバレたく無かったんだろうけども。

さて…どうしようかな。

「オイ正妻、お前あの黒タコと知り合いか?」

「知り合いつていうか…まあ知った顔ではあるんだけど」

「ナミの故郷は昔『アーロン一味』つていう魚人海賊団に支配されてて、あのタコはその一味の幹部だったんだ。まあ当然おれ様がルフイ達を引き連れて殴り込みをかけ…」

「キャハ、大体分かったわ、イリスちゃんにキレたのね」

ウソツプはそんな事一言も言っていないと思うんだけどなあ? 間違つてはいないんだけど、それだけの情報で正解に辿り着くつてミキータどんだけなの…、私分かりやすいだけとか、そんな事は言わない。

「何だお前だったのか! 『はっちゃん』ていうタコ焼き屋は!! アーロンとこのタコツパチ〜!! そうとわかりやおれ達はお前なんか助けねエぞ!!…でも…でもお前のタコ焼き…! そんなにうめエのか!」

「揺れんな、食欲と理性の狭間で…」

「もしかして、みんなはつちんとお友達だったの!？」

「友達じゃねエよ!!」

私達のやり取りを見てそう聞いてきたケイミーちゃんにゾロが凄い形相で怒り気味に返す。

…うーん…困ったなあ。

「ナミちんっ!」

「…うーん、まさかケイミー、あんたの友達があいつだとは思わなかったから…悪いけど…」

「そんな…じゃあ救出は、手伝って貰えないのね…!…はつちん…!」

「ニユク!!ケイミー、それでいいんだ!そのまま帰れ!!これは罠だぞ!」

ああ、ダメだ…本当に困った。

「イヤだよ!だってはつちんはいつも私達を助けてくれたじゃない!!」

「ニユク!我儘を言うな!本当に危険なんだぞ!!」

こんな考えは…本当に困った…。

…ナミさんの顔が、怖くて見れない。

「……………ナミさん」



ぼつりと呟くと、ナミさんは「ん？」と私を見た。

あー…言いづらい。言いづらいけど…！

「……助けてもいい？」

「え、いいわよ」

「そうだよね…ごめん…って、いいの!？」

私、悩んだんだけどなあ？

ナミさんの未来を奪った魚人海賊団の幹部を助けるなんて、普通に考えればイカれた事を言っていると自分でも思うし。…だけど、そんな奴でも居なくなればケイミーちゃん  
が悲しむのなら…私は、助けたいって、思っちゃったんだ。

ナミさんはきつと、私のそんな気持ちまで全部見透かして……。やつぱり、ナミさん  
は正妻だよ。

「はっちゃん、今助けるよ！…ごめんね、イリスちゃん」

「けっ！コイツらこんな薄情な奴らだとは思わなかったぜ！バクカおめエら!!」

「あ、ちよつと…！」

私とナミさんの会話を聞いていなかったのか、ケイミーちゃんとパツパグは制止も聞  
かずに海へ飛び込んでしまった。

しかもすぐに3人組の魚人に捕まっていた。アレがマクロ一味か？

「捕まえたぞケイミ〜！」

「きゃー〜！」

「口程にもねエとはおめエらの事だア!!」

ウソツプの突っ込みが刺さり、私は船端の手すりに足を掛ける。

…あいつらがマクロかどうかはこの際どうでもいいや。今私のするべき事が決まったからね。

「よっ」

「えっ、い、イリス！そこ海よ!?何で飛び降りて…!!」

「イリスちゃん!!」

私の足が海面に触れる。その瞬間、パキ…と何かが割れるような音がした。

そしてそのまま、私は海面を歩いて3人組の近くまで向かう。

…いや、正確には海面ではない。私の足に触れて凍った海の上を…だ。

「ど、どうなってるんだ…イリスの周りだけ海が凍ってるぞ…」

「…成程、イリスの能力は倍加、一度空島でもおしぼりを凍らせた事があつた筈…恐らくそれと同じ事を海で実行しただけね」

流石の観察力だね、ロビン。

ただ1つ違うのは、おしぼりの時はおしぼりの冷たさを2倍にしたのであって、今回

は私の冷たさを倍加したってトコかな。

つまり、マイナス方向の倍加。体の大きさとかをマイナス方向には出来なかつたけれど、おしぼりや体温に関しては問題なく実行できた。

つまり今の私は足先の体温がマイナス30倍…絶対零度とは何だったのか、深く考えるのはやめよう。

「お、おおい、何だ、どうなってるんだ!?!海が凍ってるぞ!」

「いい加減、その手を離して」

「えっ…ブフツ!?!」

一瞬で後ろに移動した私に気付かない魚人の顔面を蹴り飛ばし、その手に捕まえられていたケイミーちゃんを氷の上に降ろす。ついでにパツパグも助けておいた。

私が動いた場所の周りだけ海が凍って何だか面白い。

「い、イリスちゃん…!」

「ケイミーちゃん、タコは必ず助ける…だから安心してよ。あと、あんまり動かないでね、危ないから」

「う、うん!」

氷の上に座っているケイミーちゃんと目線を合わせるようにしやがんで頭を撫でながら言うと、彼女は頬を染めながら嬉しそうに頷いた。

本当に何が惜しいかって？私の身長だよ！絵面が！！

「イリス！あんま凍らすな！！サニーがそっち行けなくなるだろー！」

「心配しないでルファイ！青キジと違ってただの氷だよ、船で砕きながら進めるハズ」

私の言葉通り、サニー号は私が凍らせた海を砕きながら前へ進む。

青キジの氷はね、氷の見た目をした何か別の物だよ、うん、固すぎ。

「よーし！ゾロ、タコツパチの檻とロープを斬れ！イリスに全部奪われるぞー！」

「おうー！」

「野郎共！戦闘だア〜〜！！」

うおおおお！！とみんなが雄叫びをあげて戦闘態勢を取った。そうだ、久し振りに

全・倍加オールインクリースを使おう。女王化クイーンと違って反動は重くないし。

…いや能力使えなくなるから重いのか！ちよつと感覚が麻痺してるみたい。

「ま、いいや。全・倍加オールインクリースと」

おー、これこれ、この目線の高さだよ。生前の王華は世界から逃げたくて私みたい

なちつちやな体を望んだみただけど、私はやっぱり大きい方が良い。

「え!?お前おつきくなれるのか!？」

「まあね。可愛いとカッコイイ、そして美しいを兼ね備えてるのが私」

「その通りだから何も言えねエ…。よし、離れるぞケイミー！ここはこいつらに任せよ

う!!」

「女好き! 気を付けろよ!! もうお前ら罠の中だ! “トビウオライダーズ” が海中から囲ってるぞ!!」

そのライダーズさんが何人居ようと私達に勝てるわけないじゃん。

さて…能力的に、3分でケリ付けてやる!

「海中に居るんでしょ? だったら邪魔するのも簡単だね!! 30倍灰! 氷板!!」

さんじゅうぼいばい アイス・アツセ

ガガガガガガ!! と私が全力で海を広範囲に走ることで、青キジの氷河時代…の超縮

小版が出来上がった。

氷の層は薄いし、1週間も保つなんて事はまずあり得ないけどトビウオライダーズが海上に出るまでの視界を遮る事はできたはずだ。

あ、サニー号の周りまで凍って進めなくなっちゃったみたい。流石にここまで凍らせちやうと砕きながら前進はキツかったか…まあでも、ここまで広範囲に氷を張ったんだから足場を作ったって事で許して下さい。

「来るよ!!」

私の合図にルフィやゾロ、ブルックが船から飛び出し、氷の地に降り立った。他のみんなはサニーの上で迎え撃つ様だ。ミキータは空に行くのかな? あ、ペローナちゃんも降りてきてるね。

その直後、氷を突き破りながら何体ものトビウオが飛び出してきた。…が、やはり氷のせいで海中でつけた勢いがかかなり落ちたのか飛ぶスピードも最初見た時よりずっと遅い。

「ホロホロホロ…初陣だな。ほら、よく狙って私に攻撃を当ててみる」

「なんだとこの女!!おらア!!」

ライダーの1人が持つてる棍棒をペローナちゃんに叩きつけるが、棍棒は彼女をすり抜けて氷を砕いただけに終わった。しかも、砕かれて足場が無くなっているというのに海には落ちず、ペローナちゃんはその場で浮いている。本体はサニーの中かな。

「お前らじゃ相手にもならねエな。ネガティブ・ホロウズー」

『ホロホロホロ』

彼女の生み出した何体ものゴーストが空を飛ぶトビウオ、そしてライダー達をすり抜けて墜としていく。んー！優秀だなあペローナちゃん。

「キヤハハ！私も負けないわよ！風！<sup>ブレス</sup>」

対抗してミキータもふわりと浮かび上がり、ペローナちゃんのゴーストから逃れたライダーズを持ち前の機動力の高さで追い詰めて狩っていく。

ミキータの能力であそこまでビュンビュン縦横無尽に動き回られたら対応するの大変だろうなあ。なんたつて高速移動する1万キロの物体つて訳だし…うん、やばい。

「おほー！最高!!」

ルフィはトビウオライダーズのトビウオを1匹奪って代わりに乗り、空の移動を楽しんでいるようだ。じゃあ私はトビウオが出てきた穴でも塞いでおこう。

「おらガキイ！てめエを倒せばこの氷も無くなるんじゃねエのかア!!」

お、ライダーズの1人が空から私に突っ込んできたか。真上から垂直に落ちてきているから、自爆覚悟の特攻かな。

「確かに倒せば消えるんだけどね。…倒せれば、ね。消えない傷が残っても恨まないですよ、ケイミーちゃんを狙ったあなた達が悪いんだから」

小太刀を抜いて、体温をマイナスにした指で刀身をなぞれば、白い冷気が煙のように刀身から浮かび上がった。

「10倍灰、去羅波・氷一文字!!」

飛ぶ斬撃が冷気を纏って真上に走っていく。それは私目掛けて急降下していたライダーをトビウオごと斬り、いとも容易くKOする事に成功して落ちてきたライダーをキヤッチしその辺に放り投げる。流石にあの高さから落下したら死ぬし。

斬つた箇所は氷の膜で覆われており、倍加も10倍で済ませてあげたから死んではないだろう。トビウオは知らない。

他の面々もそれぞれライダーズを撃破していて、次第に奴らの数は減っていった。

私も何だか蠅叩きしてる気分になってきた…。というか残り時間があと1分くらいだと思っただけど、ほんとに私の能力って持続力が無さすぎる…。！何とかしないといけないっていうのは分かるんだけどね？

「ん？」

ふと空を見上げると、トビウオに乗ってたルフィが敵のアジトに突っ込んで行ったのが見えた。

あちゃ…ブルックも初陣で張り切って敵を眠らせてるから、それでルフィの乗ってたトビウオも寝ちゃって制御が出来なくなつたのか。

「うわ！あの野郎、ヘッドの部屋に!!」

ライダーズの1人がそう叫ぶ。ヘッドって事は、こいつらのボスか。

なら丁度いいや、ルフィに任せてたらそのヘッドとやらをぶっ飛ばして来てくれるでしょ。それでこの戦いは私達の勝ちって事で。

「うーん、結構減らしたと思うんだけど、まだ居るね」

「お前のソレもそろそろ切れる頃合いじゃねエか？」

「あ、ゾロ。ん…：そうなんだよね…：もういつそ女王化してこの島もどきを塵クイーンに変えた方が早いかな？」

「ニユ〜！油断して、ロロノアめ!!」



ついさつきゾロに救出されていたはっちゃん：ハチが、その6本の腕に剣を構えて突っ込んでくる。

：ああ、ハチから殺気を全く感じないと思ったら、ゾロ目掛けて突撃していたライダーが居たのか。ハチはそいつを斬り倒し得意気に腕を振ってみせた。

「そういうあなたもね」

「ニユ!？」

斬った後無防備になったハチに攻撃しようとしたライダーをゾロが斬って撃墜する。

「お前はツメが甘えんだよ」

「し、死ぬかと思った…：ありがとうな」

「ん、あれルフィじゃない？」

アジトの方からダッシュで走ってきたのはルフィだった。何で逃げてるんですかね、絶対ヘッドつての倒せるでしょ！

「何してるのルフィ！」

「仮面のやつと牛が来ててよ!!逃げろ!でっけエぞ!」

「でっけー?」

確かにさつきから低い牛の様な声が響いてるけど、これがそのでっけーやつやつの正体だろうか。ルフィも牛って言ってたし合ってるよね？

「モ、モトバロの声だ…!!」

ライダーズの1人がそう呟いたのが聞こえる。モトバロ…牛の名前か。「何か出てきたぞ!」

ウソツプがアジトを指させば、ルファイが逃げてきた所から巨大な牛と、それに乗った男が現れた。

自分らのアジトすらも踏み潰して出てきており、何とか背水の陣の様な意気込みすら感じる。

「バタバタと叩き落とされやがって!!蚊やハエじゃねえんだぞ!もうこのアジトはいらねえんだ、麦わらの一味さえ殺せりやあな!!どけ!!魚人や人魚に用はねえんだ、逃げたきやどこへでも行きやがれエ!!!」

そう言つて進路上にいたハチを押し除けて男は私達の前に現れた。

ライダーズからヘッドと呼ばれているから、こいつがボスなのだろう。

「俺は好きでこんな人攫い稼業やってんじゃねえんだよ!!よく分かつてるよなア、おめエら…!」

「も、勿論です、ヘッド!」

「めでてエ日だ今日は…!殺したくて殺したくて夢にまで見たその男が…!!今俺の目の前に居る!!ありがてエ…神様つてのア居るんだなア…!!ある日突然、俺を地獄のドン底

へと突き落としやがったその男……俺は今日ここで、例え刺し違え様とも必ずお前を殺す!!」

なんかあいつ、サンジの方見て言っていない？

「海賊、〃黒足のサンジ〃!!……会いたがったぬらべっちゃ……」

やっぱり標的はサンジだったみたいだ。それにしても怒りで凄い訛ってる……意味は分かる訛り方だから助かるけど。

私は軽く跳躍してサニーに乗り込みサンジの隣に行く。

「サンジ何かしたんじゃないの？ほら、バラティエの時とかさ。あ、あれは？何だっけ……私最初しか居なかったからあんまり記憶に無いんだけど……クリーク？だっけ、そいつとか」

「いや……奴が恨むなら俺じゃなくてルフイだ。……それにあの時代は人に恨みを買う事ばっかやってたから」

「すつとボケてんじやねエ黒足イ!!……最近の話だ!!」

「危ねエ伏せろ!!……銛だ!!」

そう言つて、手に持つ小型のガトリングから銛を連射してきた。ウソツプの声でいち早く死角に逃れて、同じようにサニーの上でライダーズを相手にしていたナミさんとロビンを守るように私の体で隠す。

ペローナちゃんは船の中だし、ミキータは空だから今は心配要らないだろう。

「最近だ?!?ますます分からねエ」

「…待て!この銚、何か変だぞ!!」

サニーの甲板に刺さった銚から、何かが溶ける様な音が聞こえてウソツプが汗を垂らした。

…毒だ。クロコダイルが使ったのと効果が似てるからまず間違いない。

「コイツはサソリの毒の銚!刺されば3分であの世へ行ける!!俺の怒りの程を知れエ!!  
ためエも一味も皆殺しだア!!」

更に追加で何本もの銚を飛ばして来て、私はそれを掴んで捨てたり、弾いたりして対処する。

毒?耐性倍加で平気です。

…ただ、

「皆殺しって言葉は聞き流してあげられないね…。私の嫁を、殺させる訳には行かないし」

「だったら手伝ってやる。あの銚が何かの間違いで、本体に当たれば面倒だ」

ペローナちゃんに頷き返して、サニー号を飛び降り男の元へと真正面から走る。

ペローナちゃんが私より早く行動を開始して奴に近付き、奴は墜とそうと毒の銚を放

つも当然それは体をすり抜けて抜けて意味がない。そして、彼女の幽体が男の体をすり抜けた。

「……おら、もし生まれ変わるなべら、ミジンコになりてエぬら…」

「相変わらずその能力、凄い効果だ…ね!!」

「ツ!!」

牛の顔を踏んで足場にし、落ち込んで項垂れていた奴の仮面だけを蹴り飛ばした。

こいつを無力化する前に、まずは正体を知っておかないと…こいつの恨みが万が一、億が一正当性のある物なら知っておかないと可哀想だろう。それと私の嫁を殺す発言した事とは別の問題だけだ。

………つて…!!

「う、うそ…!」

「オイ…こりやお前…」

スタン、と牛から降りて着地した私の隣に浮かぶペローナちゃんすらも目を見開いて驚いていた。

きつと他のみんなも…特にサンジの衝撃は計り知れないだろう…。

「…!!なんだ、今の…まるでこの世の全てに絶望した様な気持ちは…!!…まあ、いいさ。絶望ならとうにした…!!よく見ろ…!!この俺の傷付いた顔をよく見ろよ…!!」

私ですら見た事のあるその「顔」は、サンジが忌み嫌っていたアレに他ならなかった。

…まさか、まさか本当に…実在していたなんて。

「今日という日を待ってたんだらべっちや…貴様をブチ殺すと心に決めてオラは海さ出た…！だどもおめエを探すのは大変だったべっちや…！手配書と本人の顔が違ーがらなア…！海軍や賞金稼ぎはもすかすて、本人を見がけても素通りがもすれねエぬらなア…！！」

周りのトビウオライダーズも涙を流してその話を聞いている。

そんな中、サンジはサニー号から飛び降りてこっちに走ってきていた。

「…いや、そんだら事はねエ、奴らはお前を見づける！見づけで、せいづらこう言うぬら…。「見づげだどー！黒足のサンジ!!」ーーーとしてオラは言う。ーーーオラ違うよオ!!オラそんな奴知らねエよー!!海賊ですらねエぬらべっちや!!」

奴がその顔から涙を流して叫んだ。

…手配書のサンジそっくりな、特徴は捉えてるけど全然別人のあの顔がそこにはあったのだ。

「分がるか!?ある日突然命を狙われたオラの恐怖!!…なしてオラが…海軍本部に追われなくつちやならねんだ!!名のある賞金稼ぎに殺されがげにやならねエぬら!オラが一

体何をすた!?オラの人生を返せエ〜!!!」

「知るかア〜〜〜!!!」

「ゴベ〜〜!!!」

走つてきていたサンジに顔面を蹴り飛ばされて牛から落ちる男。

いやあ、世界つて広いね!

ていうか、その顔で海軍本部に狙われるのなら…まずは髪とか髭とかをどうにかすれば良かったんじゃないかなって思うんだけど…言っちゃダメなんだろうか。

## 1 1 2 『女好き、シャボンディ諸島へ』

サンジがヘッドローデュバルを蹴り飛ばしてからも、私達が優勢だつていう流れは変わらなかった。

1度サンジが不意を突かれてトビウオライダーズに海に引きずり込まれ、あわや溺死してしまう所だったのを、海中での速度がトツプクラスだという人魚…そう、ケイミーちゃん！彼女がサンジを助けてくれたのだ。

いやー、流石ケイミーちゃん！ただそんなに速いなら海獣に捕まるのももうやめて欲しいんだけどね！

それからサニー号の上に巨大な錨をトビウオ何匹もの力を使って運ばれて落とされそうになったのは、私が適当に落ちてきた錨を蹴り飛ばして事なきを得ていた。

その後も、フランキー曰くサニー号の秘密兵器…『ガオン砲』を敵のアジト目掛けてぶつ放して、その余波でトビウオライダーズの殆どを撃ち落としたり…まあ、正直に言えば相手にならなかった。

最終的にデュバル自身がモトバロに乗って突撃を掛けてきたのもルフィが止めて、しかもその際ルフィの気迫に圧されてモトバロが泡を吹いて倒れるという事態も起こっ



た。

私達はそれを見た事がある：私の「霸王色の覇気」と同じ現象だったからだ。

でも普通に考えたらルフィが霸王色を扱えるのは当然か、だって海賊王になる男なんだし、王の資質くらいはあつて当然だよ。ルフィ自身は霸王色を使つたつて自覚が無かつたから、また発動しようにもうんともすんとも言わないみたいだけど。これは通常状態の私と同じだね。

そして肝心のデユバルは、サンジが顔を顔の造形が変わるほどボコボコに蹴り倒して気絶させた。

凄く痛そうだけど、整形が出来る蹴りつて何：凄すぎる。

「お、美味しい：。悔しいけど、美味しい：!!」

そんなこんなで今は、気絶したデユバルとトビウオライダーズを放置してシャボンディ諸島へ向かつていた。

サニー号の横を屋台船が並行して進んでおり、その中で私達はハチの作ったタコ焼きを食べているのである。

ナミさんを酷い目に合わせた奴の一味のクセに…美味いんだよねこのタコ焼き!!

「…確かに美味しい。オイ黒足、お前コレの作り方学んでおけ」

「ペローナちゃんの為なら喜んでく!!」

「うくん!美味しいわ、今まで食べたタコ焼きの中で一番よ。タコちゃん流石ね」

「ニユ〜!そうか?ありがとな!…そ、それで、どうだ?ナミ…その、味は…」

こ、ここでナミさんに聞きに行くんだ…。割と勇気あるなあハチ。

「…これで何かが許されるって訳じゃないわよねエ…」

「い、いやっ! 勿論そんな、そういう意味で言ったんじゃないやねエよ!? 味はどんなかなーって

…ホントに!」

あたふたと6本腕を忙しなく動かしナミさんの返事を待つハチ。

ナミさんはそんな彼をじっと見ながら、タコ焼きを楊枝で刺してその可愛いお口に放

り込んだ。

「…:…すつごく美味しい!」

「!」

「ニユ〜!そうか?そうか?」

笑顔でハチにそう返すナミさんを見て、私はナミさんの器の大きさに目を見開く。

そりゃ、彼女が最高に良い女だって事は私が一番良く知っている事だけど、まさか

アーロン一味の幹部にまでそんな器の大きさを發揮できるとは流石に思っていないかった。

許した訳じゃ無いだろうし、この先一生許すこともないだろうけど…多分、ハチつて奴の人柄を少しは見直した結果なんだと思う。どっちにしてもナミさんは最高だ！

「ふう、ふう…。イリスちゃん！これチーズタコ焼き！あーん！」

「え、いいの？ありがとう！あーん」

私の隣に座るケイミーちゃんがタコ焼きを私の口元に持つてきたので、パクリと一口で頂く。うーむ…ケイミーちゃんのふーふーと合わさって最強のタコ焼きが生まれてしまった様だ…！

「ひひへおほオイヒフ」

「ルフイ、飲み込んでくれないと何言ってるのか分かんないよ…」

「にしてもよオイリス、だって」

何でウソツプは解読できてるんですかね？

「ん、ぷはあ！にしてもよ、お前今回長くねエか？」

「ああ…これね」

これ、とは今の私の状態を差している。起きている事態に関しては別に慌てる様な事では無い……というか逆に嬉しい誤算なんだけど…。

「分かんない。でも普通ならとつくに切れてるはずなんだよね……」  
オールインクリース  
 そう、何故かまだ全・倍加オールインクリースが解除されていなかったのだ。この技の制限時間は3分であり、今は使用してから1時間は経っている。

考えられる原因としては、そもそも制限時間が3分ということ事態に何かしらの要因があったという事。そしてその「要因」も王華関係だと思えば納得が行くし。

一時全・倍加オールインクリースが使用できなかった時の理由が、王華の見た目に近付くからだった筈だ。ならこの技の制限時間が3分だったのも心が無意識のうちに王華へと近付くのを拒否していたのかもしれない。だから色々と乗り越えた今となっては制限を設ける必要が無いって事かな。

「あ」

とかなんとか考えてたら元に戻ってしまった……。制限時間はきちんともあるのね……。1時間って所かあ……。これじゃあまだ普段から使用しておく訳にも行かないか。

「よくわかんねエけど、また強くなつたんだなイリス！ よーし、おれも負けねエ！ うおおお!!」

バクバクと物凄い速さでタコ焼きを消費していくルフィだが、それと強さに果たして関係があるのかは謎である。

「オーイー!! おめエらア~~~~!! 若旦那~~~~!!」

「ん?」

後方から凄いい水飛沫の音と聞き覚えのある声に首を傾げる。

あの声：デュバルとトビウオライダーズ?でも確かサンジがボコボコにして顔を変えた筈だし、もう私達に用があるとは思えないんだけど。

「待て待て〜っ!!挨拶ナシつてそりゃないぜー!!ハンサム…あつ、間違えた!!デュバルだぜーっ!!」

「うわ、想像してたよりだいぶ顔変わってるじゃん」

ちら、と船から顔を出して後ろを見るとやはりデュバル達がモトバロヤトビウオに乗って追いかけてきていた。

敵意は全く感じられない所か、逆に感謝されそうな程の雰囲気纏っているし…いやそれにしてもアレほんとに同一人物か?

「いや〜!黒足の若旦那!!ボッコボコに顔面蹴られたあの後、意識を取り戻して俺達もくびつくり!」

なんか船の横に停めて話し始めたんだけど…。内面的な意味でもさっきの奴と同じとは思えない…。

「こんなハンサムにして貰っちゃまって!もう自分でウツトリ♡コレ女子が放つとかねエベよ。人生バラ色ぬらっ!みたいな!アハハハ!すぐにでもまたのんびり田舎

に帰ってエとこなんだが、恩人達に恩も返さず帰った日にやあ寝覚めが悪イってんでね！この海域は初めてだろ!?何か俺らでお役に立つ事があれば、何なりと申し付けて欲しいん…だ！」

「慣れてねエならウインクすんなよ…」

顔を面白い程歪ませてウインクするデュバルにサンジが呆れ顔で呟いた。片目開いてないし、白目だし…。

ナミさんとかはめっちゃ上手いよねウインク。というか一味の女性陣はみんな上手い。私も出来るし。

「不満がねエンならそれで結構。頼みがあるとすりや、もう二度と俺達の前に現れるなって……聞いてんのかよ!!」

「いつそ白馬に乗りたい…」

サンジの話の途中で手鏡を取り出してうっとりと自分の顔を眺めるデュバルに部下達が慌てて話を聞く様に促す。ダメだこのヘッド。

「そうかそうか…え？ハンサム？」

「言つてねエだろそんな事一言も!!」

「頭おかしいんじゃないか、1発ゴースト撃った方が良くもな」

「でもそれは可哀想じゃない?どんな理由があればあの顔がコンプレックスだったのな

ら、それが無くなればテンション上がるものだよ。私だつて身長伸びたら泣いて喜ぶかも」

確かにちよつとヤバイ人になつちやつたけど、少しくらいは大目に見てあげよう。

「あ…」

「ん?」

デュバルとタコ焼きのタレをハンカチで拭つていたナミさんの目が合う。

「照れ臭いが受け取つたぜ…お前の投げKISS<sup>キッス</sup>」

「ひゅーひゅー!」

「してない!!タコ焼きのたれ拭いてただけよ!どんな前向きな幻覚見てんのあんた!!…よ、良かったわ、イリスが能力使えない状態で。ほんとに」

「はは、ナミさんも大袈裟だなあ。別にあの程度じゃ私は海に沈めてやろうとは思わないよ。」

「え?どんな理由があれ、私の正妻にそういう話を持ち掛けた時点で罪だよ?」

「お前ら、嬉しいのは分かつたからナミ達に変な事すんな。冗談通じねエんだからよ!」

「え?ハンサム?」

「ペローナ、ミキータ、悪いけどその人気絶させて海に捨ててきて貰つていい?」

「キャハハ、お安い御用よ!だけどその前に、ケイミーちゃんが待つてるわよ、イリス

ちゃん」

隣を見ればケイミーちゃんがタコ焼きを刺して待つていた。そうだ、今はケイミーちゃんに食べさせて貰つてたトコだった、あいつらに構つてる余裕は無かつたね。

「……ふ、危ねエ、ナイスミキータ」

「イリスちゃんの能力が使えない状態だからこそよ、あの人は運が良いわ。さて、じゃあ海に沈めて来ようかしら」

「待て待て待て!!お前今イリスの奇行を止めたんじゃねエのかよ!…そうだった、お前はイリスの言う事が全てだったな!!」

「ニユ…女好きの恐ろしさは初めて会つた時によく知つてるからなア、おれも怒らせたくねエな」

もう…そもそも私が怒るつて、大体身長か嫁関係だからね?特にナミさんが私の嫁つて事は世間的にも知れ渡つてるんだから、ちよつかい掛ける方が悪いんだよ!

デュバルも雰囲気で色々察したのか、電伝虫の番号をサンジに渡して『人生バラ色ライダーズ』がどうか言いながら去つていった。

私達もお腹いっぱいタコ焼きを平らげ、サンジのお茶で一休みがてらケイミーちゃん達も含めてサニー号の甲板に集まる。

「そういえば、シャボンディ諸島に行く進路は合つてる?<sup>ロブボース</sup>記録指針が無いからちよつと



不安で……」

「大丈夫、合ってるよ」

「そこに行かないきや魚人島へは行けねエのか?」

「おれ達魚人や人魚なら潜つてすぐに行けるけどな、おめエらは人間だからそのまま潜ると水圧で死んじまう」

確かに、潜水艇でもダメだったもんね。と言う事はシャボンディ諸島へ行けば魚人島へ繋がる道があるって事かな?

「よーし注目! おめエら何も知らねエみてエだから、この辺の海の事一通り教えといてやろう。誰がだつて? おれだよー!」

「誰だっけ」

「パツパグだよ!! 喋るヒトデだぞおれは! 忘れようも無いだろ!!」

自分で言っちゃってるけど……まあ確かに忘れようもない。冗談だよ。

それに海の情報は助かるね。私達何にも知らないから。

「まず、〃新世界〃へ抜けるルートは実は2本ある! ーだがお前らみてエな無法者にとつては1本に限られる!」

「何で?」

「何故ならば、1本は世界政府にお願いの上、赤い土の大陸の頂にある町……聖地マリー

「ジョア」を横切るといふ手段だからだ。海賊に通行の許可なんか出るわきゃねエー！」

「あー、なるほど…。」

それに陸地を歩いて渡るとなれば、自然とサニーを置いて行かなくてはならない。この船なしで新世界を渡る勇氣は無いかな…。何だかんだ言つてフランキーがロマンを詰め込んだこの夢の船はみんな氣に入つてるし。

「だからお前らの使う航路は、『魚人島』経由の「海底ルート」!!」

「でも、海底ルートは危険も多いよ!」

「あれ? ケイミー、ケイミー? バトンタッチしてないぞ」

「海獣や海王類に船ごと食べられちゃう人達も沢山居るから」

「パツパグがシヨックを受けているけど、私からしたらケイミーちゃんに説明して貰つた方が幸せだからドンマイ! とだけ心の中で思つておくよ! バトンタッチありがとう!」

「あれ、でもケイミーちゃん、今船ごとつて言つた? どんな船を使つて海底に行くの?」

「この船だよ?」

「この船…? サニーに潜水機能を取り付けられる職人がシャボンディに居るつて事だろうか。」

「それでね、世界を1周してるあの大きな壁、赤い土の大陸には唯一小さな穴が空いてる

場所があつて……あ、でも私達から見ればおつつきな穴だよ！魚人島はそこにあるの！」  
補足でハチが言うには、魚人島は丁度聖地マリージョアの真下あたりにあるそうだ。  
潜つて1万mの海底にあるそうで、確か空島が上空1万mだったからその深海版つて  
ところだろう。

「海底へこの船で行くつてどういう事だ？」

「これから行く島で船をコーティングするんだよ！」

「コーティング？」

当然フランキーは誰よりも気になって質問していたが、コーティングという答えに更に疑問が深まったようだ。

「ホラ前を見ろ、着いたぞ！」

パップバグが船の正面を指差し、私達はそれを追つて前を見る。

……!!わ…凄く綺麗で、幻想的……!

泡、だよね。シャボンディ諸島つて言うくらいだから泡要素があるんだろうくらいにしか思つてなかつたんだけど、実際に目にすれば島中を見渡す限りにシャボンがふわふわと空へ舞つていた。

天高く聳える数多くの木は何故か白黒の縦縞模様で、その全てに番号が書かれている。中には観覧車のようなシルエットも見えるし、アミューズメント施設なんかも充実

しているのかも？

…よし、デートするしかない！ペローナちゃんとケイミーちゃんも居るんだし、このデートでケイミーちゃんは完全に嫁にするぞー！！

# 113 『女好き、悪い歴史』

そんなこんなで私達は船を停め、シャボンデイ諸島へと降り立った。

ここは島というより「樹」の集まりだから、記録指針ログポースが磁場で更新される事もないそうだ。

その樹というのが「ヤルキマン・マングローブ」とかいうやる気に満ち溢れた名前前で、根っこが常に海上に出ているからそこを陸地しているのだとか。

「わ、地面から泡が生まれた」

「乗れたぞ！」

ぼよん、と根っこの地面から生まれた大きな泡にルフィが乗る。

…ふ、ぼよん力なら圧倒的に私の嫁が勝利…！勝った…！！

「こいつが何考えてるか分かるようになってきた…クソ」

「フフ、あなたもそろそろ「こちら側」かしら？」

「意味深な言い方やめろ!!こっちもあっちもねエだろ！胸ガン見されたら誰でも分かるだろうが！」

それにしてもこれ、どういう仕組みなんだろ？何かそういう泡を生み出す機械でも

作ったのかな。

「このヤルキマン・マングローブの根っこからは特殊な天然樹脂が分泌されてるんだ。樹の根っこが呼吸する時に、その樹脂が空気で膨らんで空へ飛んでいく」

「へえ…パツパグ、意外と物知りだね。自然に生まれてるのかあ」

「もしかして今、存外にバカにされたんじゃないか？おれ…これでも一流デザイナー…」  
 そういえばそんな事言ってたっけ、ケイミーちゃんが可愛すぎて忘れてた。ごめん。

「おい！遊園地が見えるぞ！観覧車乗ろう！」

「遊園地〜!？」

ルフィが乗った泡はかなり高い所まで上がっており、高所から遊園地が見えたのかそう叫ぶ。チョップパーはかなり興味津々のようだ。

「いいなあ観覧車…私、あれに乗るのが夢なんだ」

「バカ言え！ダメだぞケイミー！」

「うん…わかってるよお…」

「…？どうして？」

私が首を傾げれば、ケイミーちゃんは困った様に笑いながら頬を掻いて誤魔化した。  
 ……言いくらいなら触れないけど…。

「ハチ、この島での目的は何？さつき船のコーティングがどうか…」

もう普通にハチに話しかけてるナミさん。天使：天使か？天使だ…。

「ニユ〜…！コーティング職人に会いに行つて、おめエらの船を樹脂で包んで貰う。簡単に言うのとそれで船は海中を航海出来る様になる」

「空を航海出来たんだから、海中を航海するくらいナミちゃんなら朝飯前ね！」

「そう自信満々に言われてもね…。そりゃ、もしホントに海中を航海するとなつたら必ず次の島まで行つてみせるわ。イリスが乗ってるんだから下手な真似出来ないもの」

まあ確かに、突ノックアップストリームき上げる海流を航海出来たんだからナミさんが辿り着けない島なんて無いよね。

「空を航海つて…お前ら何モンだ」

「麦わらの一味だよ？ペローナちゃんも、その『何モン』になつたんだから他人事みたいに言うのはやめようね！」

私達が型破りなのは今に始まつた事じゃないし、ペローナちゃんもこの先の航海で慣れていくだろうけど。あ、ルフィが落ちてきた。

「だが、腕のねエ職人に当たつちまうと船も人間も大破してお仕舞いになる。おれが一人だけ信頼出来る職人を知ってるからそこへ連れてく」

「何から何まで悪いね、ハチ」

「ニユ〜！これくらいはさせてくれ！…だけどその代わり、1つだけ約束を守つて欲し

いんだ」

「おう、何だ？」

空から落ちてきたルフィが息を切らしながら聞き返す。

「町に入ると「世界貴族」が歩いてる事がある」

「何だっけ」

「聖地マリージョアの住人達よ」

ふーん。そのマリージョアの住人とやらについて、何かしらルールでもあるのかな？でも貴族とはいえ、私達は海賊だからルールを守る必要は無いんじゃないの？

「例え町でどんな事が起きようとも、世界貴族にや楯突かねエと約束しろ！例え目の前で人が殺されたとしても…見て見ぬフリをするんだ!!」

「え？やだ」

「ニユ〜!!」

即答した私にブンブンと腕を振って抗議するハチ。だけど、それだけは領けないね。

「例え相手が貴族様だろうと、私の嫁に手を出したらブツ飛ばす」

「ダメだ！そんな事したら「大将」が軍を率いてやって来る！」

「…えっ、大将って…海軍の!?!」

何ソレ…バスターコールよりタチ悪い…。



青キジに勝つたとはいえ、アレは相手の油断とか、色々な要素がプラスされた結果の勝利に過ぎない。次奴と戦えと言われて、絶対に勝つとは言い切れないだろう。…ただ、嫁に手を出すようなら何が何でも倒すけど。

うーん、でも、大将か…。出来るだけ呼ばない方がいいよね。

「とうか、大将を呼べるってそれいづらどんだけ偉いの」

「偉いなんてモノじゃない！世界貴族…『天竜人』はおれ達と住む世界が文字通り違うんだ！絶対に危害を加えちゃならねエぞ！」

「……。分かった。ただし、私の嫁に危害を加えようとするならその約束は守れない。大将だろうと相手にしてやる」

「ニユ〜…まア…関わらなければ良いだけだ。良いか、お前達は絶対に手を出すなよ！」  
私を説得するのは無理だと踏んだのか、ルフイ達に強く念を押すハチだが…多分私と同じくらい我慢出来なさそうな男がそこに居ますよ。麦わら帽子被ってる人とか、剣3本腰に下げてる人とか！

\*\*\*

ハチの案内でコーティング職人とやらに会うため私達はシャボンディ諸島の内部へと足を踏み入れた。

ルフィ、私、ナミさん、ミキータ、ロビン、ブルック、チョップパーとケイミーちゃん、パツパグ、ハチのメンバーだ。フランキーとウソップはライダーズとの戦いで多少なりとも傷付いた船の修繕。サンジは船番。ゾロは分かんないし…ペローナちゃんは歩き回るのは疲れるから嫌との事。幽体離脱には行動範囲に制限があるらしいから無理って言われた…背負っていくのに！デートしたかったのに！！

「天竜人は偉そうで一般人と同じ空気を吸わねエ様にマスクしてる。そいつらに決して衝突かない事が一つ、これは絶対の約束だぞ！」

「絶対は無理だつて」

未だに念を押して来るハチに手を振って返す。そりやあ大将が来るなんてみんなにも迷惑かけるだろうけど…譲れない事もあるから仕方ない。

「そんで注意点もいくつかある。この島は『新世界』を目指す者達が集う島だ。おめエらと同じ名の通った「海賊」達も居るし…それを狙う「海軍」「賞金稼ぎ」…それに「人攫い」。海賊は人身売買されても一切法に守られねエ、目立つマネするとお前らなんて一気に目を付けられるからな、充分に注意して行動しろ」

それは分かったけど、ハチが6本ある内の4本の腕を服の中に隠したりケイミーちゃんは綺麗な尾バレを服で隠して、自分では歩かない様にハチに背負って貰ってるのは何でなんだろう。人魚ってバレるとその美しきで人に囲まれるとか？

「お前、それいつの間にケガしたんだ？」

「あ、コレは気にするな」

ルフィがハチの額に貼られた大きな絆創膏を見て尋ねると、彼はそう言っただけで誤魔化した。

…ケイミーちゃんが観覧車に乗れないって事と聞いて、何かありそうだね、ここ…。確かハチの額には何かのマークの焼印があった筈だ。それを隠しているとしたか思えないし、つまりそれを隠す理由がこの島にはあるって事なんじゃないの？

「それともう一つ、おれとケイミーは魚人でも人魚でもねえ、この島では“人間”として対応してくれ」

「…ん、分かった」

…何か、分かった気がする。

前世の知識は消えてないから、私には当然前世の記憶は無くとも常識はある。

前世でも未だに根深い問題を抱えていた事…それは『人種差別』だ。肌の色だったり、産まれた土地だったりで差別を繰り返して来たのが人間という種族…。という事は、こ

こシャボンディでは魚人が差別の対象になっていられるのかもしれない。

……この世界は割と寛容だけれど、前世では同性愛も差別の対象だったし。その人の人となりなんて話してみなきや分からないというのに……。

「このまま歩いていくのは大変だからな、『ボンチャリ』を借りよう」

「ボンチャリ？」

「ニユ、そうだ。着いたぞ」

ハチに連れられてやってきた店の看板には『ボンチャリ』と書いてあった。自転車みたいなのが店頭に並べられているが、本家自転車とは全く構造が異なっている。そもそもタイヤが無いし……本当に自転車なのか不安になってきた。

ハチが店主と話をし、そこかしこに浮いているシャボンと同じ物をルフィに渡す。でもあのシャボン、店内から持ってきたよね？一応人工的に作る事は可能なんだ。……いやまあ、シャボンだから当然か。

「それをゆつくり体に押し付けてみな」

店主に言われてルフィがシャボンを顔に押し付けると、スポン！とシャボンの中に頭が入った。そこからはするすると体も入って、しかも体が全て入った事でシャボン自体の大きさも変わっている。

中に入れる物の大きさによってシャボンの大きさも変わって来るのか、不思議泡って

ことだね！

で、シャボンに全身が入った所に店主が自転車の様な何かをルフィの入ったシャボンに取り付けた。

…ああ、なるほど、それでタイヤが要らないのか。よく見れば後方にはスクリユーが付いているから、ペダルを漕げばそのスクリユーが回転して前へ進むって事だね。浮力はシャボンでって訳だ。

「ボンチャリー台レンタルなら一日500ベリー、買取なら1万ベリーだよ、安いだろ？」

「欲しい！おれ、小遣いでコレ買うぞ！」

既にボンチャリーの虜になっているルフィがペダルを漕ぎながら言うが、ハチは買う意味がないからレンタルにするとの事。

買う意味が無いって何だろう。便利そうなのにな。

私達の分のボンチャリーも借りて、いざコーティング職人の元へ向かう。

ハチは大きめの複数人乗せられるボンチャリーで、自分がシャボンに入るタイプではなくシャボンの上にボンチャリーを取り付けてそこに乗るタイプを借りていた。ケイミーちゃん、パツパグ、ブルック、チョッパはハチが運転するそれに乗っている。

ナミさんも同じような物を借り、私とミキータとロピンはそれに乗っていた。

「おれ、ボンチャリやつば買おう！」

「麦わら、おめー最初によ、シャボン玉に乗って空へ登ってったろ。何で落ちてきた？」

「あー！それがよ、木のとっぺん越えてもつと上まで行けんのかと思つたらな、周りのシャボン玉みんな消えちまって、おれの乗ってたのも急に割れちまってそれで落つこちた」

「それはシャボンディ諸島の気候空域を抜けたからだ。ヤルキマン・マングローブの生息に適した気候がここにはあって、その範囲を抜けるとシャボン玉の樹脂成分が充分に力を発揮出来なくなるんだ」

はあ…つまりシャボンディ諸島以外では使えないんだ。そりや要らないね。

「ふく…ん…でも、説得力ねエし…：1台…だけ、買おつかな…」

「あんた意味分かって無いんでしょ！要するにこの島出たら割れちやうの、不思議な事にね！」

「何だど?!不思議と割れる!?!そんなワケがあつたのか!」

大丈夫かなうちの船長。キャプテン

「あ、でもルフィちゃん、魚人島では使えるよ！海底にもシャボン玉文化はあるの」

「“人魚姫”に会うといいぜ、それはもう美女！ヒトデのおれが言うんだ、間違いねエ！

おれアマブだから会わせてやろうか」

「人魚姫!!! け、結構です!!! 人魚姫には自分から会いに行つて、そんで嫁にする!!!」

ケイミーちゃんでもかなりの美女だというのに、パツパグにこうまで言わせるつて事は人魚姫も相当な物何だろう…!

ああ… 実在するんだ人魚姫! 待つててねまだ見ぬ嫁! すぐに迎えにいくよ!! うひよひよ!

「あ、あれもしかしてシヨツピング・モール?」

「おー、結構大きいね、行く?」

ナミさんが遠くに見えるそれなりに大きな建物を見つけて、そこに行くかと尋ねる。返事はすぐに頷きで返つてきて、ミキータとロビンも行くとの事。

「ケイミーちゃんも行くようよ!」

「私は… やめておくれ、ごめんさい!」

「…むう…、分かった。でもまた絶対デートしようね!」

は… ケイミーちゃんとも買い物したかったなあ…。

でも、もしさつき想像した私の考えが当たつていたのだとすれば… 今無理矢理ケイミーちゃんを連れ回すのは申し訳ないし…。 はあ… ケイミーちゃんとデート…。

そんな感じで、ケイミーちゃんが居ないのだけを心残りに私達はコーティングの件をルフィ達に任せて面白い物に向かった。

私は別にそんな服とかも興味ないんだけど、ナミさん達があれやこれやと試着しているのを見るのは大好きなのだ。可愛いし。

…まあ、気が付けば私が着せ替え人形にさせられてるのが常なんだけど！

\*\*\*

「いやー、結構服とか買ったけど持ち運び楽だね、これ」

案の定着せ替え人形にさせられて、しかもメイド服とか白黒のゴスロリ系の服とかを無理矢理購入させられたという事は一旦忘却の彼方に流しておいて、私はナミさんが漕ぐボンチャリのシャボンの中に入れて運んでいる購入品を見て言う。

「私は複雑…：役割を奪われた気分よ。運ぶのは私の専売特許でしょ！むきー！」

「もつと大きな物を購入した時なんかは凄く助かってるわよ。今回はミキータだけに運んでもらうとしても物が小さいでしょ？」



「それはそうかもしれないけど、気分の問題よ！役に立ちたいのよ〜！」

役に立ちたいってミキータが言っちゃうのか。役に立つ所か、もう一味には欠かせない程の役割をこなして貰ってるんだけどな…。重量物の持ち運びは基本、トレーニングとか言つてゾロが運ぶか、ミキータが軽々運ぶかのどっちかだから。

でもそんなに気にするなら…。

「よつ…と」

「わ、イリスちゃん？」

「手持ち無沙汰なら、私の事よろしく」

シャボンの上は広いから別々に座っていたけど、私は体を動かしてミキータの膝の上に乗った。

ん〜…ぼよん枕サイコー！

「イリスちゃん…!!はー…好き！」

むぎゆ、と抱き締めて息を荒くし始める。ちよつと待つてミキータ、流石にマズイよ！…ここ外だから!!

「そ、それより、ケイミーちゃん来れなかったのほんと残念だね！はは…ね！ロビン！」  
慌てて雰囲気流す為にロビンに話題を振れば、彼女は頬に手を添えて何やら考える素振りをする。

「…もしかしてこの島には、『悪い歴史』が残っているのかも…」

「悪い歴史?」

私では無く、運転中のナミさんが視線を前に向けたまま聞き返した。

…これは本当に、私がこの島に来て考えていた事が正しかったのかもしれない。

「たった200年前まで…実際にあった悪い歴史。魚人族と人魚族は『魚類』と分類されて世界中の人間達から迫害を受けていたの。皆が彼らを蔑んでいた…」

「!!差別…」

まさか本当に当たってたなんて…!

次にケイミーちゃんに会ったら抱き締めて愛の言葉でも囁き倒してやらないと気が済まない。そんなもって今度こそ一緒にデートする…!

「そしてそれは、200年前「世界政府」が魚人島への交友を発表するまでずっとだったわ。…もう1つの人間の悪い歴史、「人買い」や「奴隷」の文化、それがこの諸島ではまだ黙認されている」

奴隷…!?!…確かに、良く周りを見渡せば首輪を付けている「人間」がちらほら見える。ナミさん達しか見てなかったから気付かなかったけど、この島、結構ヤバいんじゃないの…?」

「だから、もしかして魚人や人魚に対する差別も残っているのではと思ったの。…ただ

の思い過ごしだといいいけどね」

「…でも、もし仮にこの島がそういう場所で…万が一にもケイミーちゃんが攫われようものなら大変が起きるわね」

「大変で済めば良いんだけど…まあでも、気にしすぎよみんな。もしここにロビンの言う歴史が残っていたとしても、そんなピンポイントにケイミーが攫われるなんて事には早々……」

「オイおめエら!! 大変だ!!!」

いきなり上からフランキーの声が聞こえて、え?と空を見上げるとそこには何故かいるトビウオライダーズとそれに乗ったフランキー、ペローナちゃんが居た。

…このタイミングで、連絡先を貰ってるサンジがトビウオライダーズを呼ぶ程の事態…。嫌な予感しかしない。

「トビウオに乗れ!! 人魚の奴が攫われた!!!」

「……!!!」

その言葉を聞いて、頭で考えるよりも先に体が動き一匹のトビウオに飛び乗る。相変わらず、嫌な予感は外れないみたいだね…!

「場所は何?」

「分からぬエーが、とにかく攫われた！これだけは確かだ!!」

「なら手当たり次第に探そう！じっとして居る時間が勿体無い!!ほら、速く!」

私の乗るトビウオのライダーを急かして、みんなより早くスタートを切った。

私が嫁にするって決めた女に手を出しやがったクソ野郎は絶対にぶっ潰す…けど、その前にケイミーちゃんだ!攫われたって事は…この島は確か人身売買の歴史が残ってるって話だったハズ…!どこかの奴隷商人にでも売られる可能性が充分に考えられる…!

私は頭に血が昇るのを感じながらギリツと奥歯を噛み締めた。もつとちやんとケイミーちゃんを見ておくべきだった。私の責任もある…私が守らなきやいけなかった。

「……よし!!」

パシツ!と両頬を叩く。反省は終わりだ、後悔も今は忘れる!とにかく今私が考える事…それはケイミーちゃんを見つける事だ!

待つててねケイミーちゃん…!必ず助け出してあげるから!!

## 114 『女好き、天竜人だろうと嫁』

「じよ、嬢ちゃん！しっかりしろって！」

「うえ…っ、ゴホッ、ゲホッ！み、水に潜るならそう言つてよ…！死ぬ…！」

みんなより先にスタートを切ったのは良いけど、トビウオが助走をつける為に水中に潜り…まあお察しの状況になった。

ライダーが助けてくれなかったら死んでた…水怖い。

「嬢ちゃんが咽せてる間に人魚の居場所が分かったぜ！体はもう大丈夫か？」

「大丈夫かって言われたら寒いし力出ないし最悪だけど、大丈夫」

「悪かったって!!」

今は助走をつけて空中に飛び出したトビウオに飛び乗る事で同乗が叶い、ケイミーちゃんが居るといふ一番GRのオークションハウスへと向かっていた。

「くー！みんなもう着いてるんではよ!?出遅れたー!!真っ先に出たのに！」

「だが嬢ちゃん、下を見てみな！」

「下?！」

ちらりと下を見ればそこには大きな建物があった。看板には『HUMAN』と書いて

あり、間違いない。ここがオークションハウスだろう。

「え、早いね！」

「まあざつとこんなもんよ！どうする、下がろうか？」

「いや、いい！ありがとう！」

バツと飛び降りて屋根に着地する為防御力を倍加させる。結構高さあるからきちんと耐久値上げとかなないと落下死しちゃ…、

「う…!?へっ!?」

屋根、脆ッ!!

着地した瞬間にズボツ、と屋根が衝撃に耐えきれず私を中に落とす。ちよ…潜入しようと思ってたのに…!!

あ!!ケイミーちゃん居た！でも「商品」としてっぽいね…ステージ上で水槽に入れられてる。

ナミさん達も来てたのか！観客席で…あ、そっか、競り勝って正攻法で助けるつもりなんだ！

「でもごめん…このままじゃ私目立つちゃうよ…！」

会場内が騒がしいのもあって、私が屋根を突き破って落ちている事に気付いてる人は1人も居ない。

あー…落下地点に誰も居なきや良いけど…。

「5億で買ええ〜!!5億ベリイ〜!!」

「…あ?」

丁度私の落下地点でそんな声があった。シャボンの様な透明マスクを頭全体に覆った奇抜ファツションの小太り男が…ケイミーちゃんを5億で買おうと言ったのか?

「誰だか知らないけど…!!!」

ケイミーちゃんは私の嫁（予定）だ!!!金で買える様な存在じゃないっての!!

それに5億なんて高すぎて正攻法じゃ敵わない、ここはもう無理矢理にでも正面突破で行こう!サンジ…:技借りるよ…:えー、一般人だから…、

「5倍灰…!」

落下しながら体を縦に回転させて勢いをつける。う…:結構目回る…。けど…!

「粗碎!!!」  
コンカッセ

「ブフウツ?!」

加減はしたけど、かなりの勢いをもつて放たれた踵落としが奇抜ファツションの脳天に落ち、彼は目玉を飛び出させた後に気を失った。

めんごめんご、まあ…:ケイミーちゃんを買おうとした罰ってことでどうかーっ。

「い、イリス…!」

「ナミさん！やー、ごめん！ケイミーちゃん助け出すのはやつぱり正攻法じゃ難しそうだから攻撃しちゃった！」

「それはいいけど、あんたが今気絶させた男は天竜人よ！」

……………

ぐるりと周りを見る。あー…皆さん私の事をヤバい人を見る目で見てますね。

……………やつちやつた!!

いや、でもやつぱり天竜人とはいえケイミーちゃんを買おうとしたんだから脳天踵落としくらいは当然じゃない？ね？

「うわア!!？」

今度は会場の入口から何かが突っ込んできて、砂埃の中から騒がしい話し声が聞こえてきた。

…ルフィとゾロ！それにしてもタイミング良いね。…あ、空からロビン、ウソップ、ブルックも来た。全員集合したみたい。

「ルフィー！私、天竜人蹴っちゃった！大将来るってー！」

「え!!何があつたんだよ!!」

「ケイミーちゃんを買うつて言うから!!」

「なら仕方ねエ!!」



だよね、仕方ないよね。うん。だからペローナちゃん、そんな泣きそうな顔しないで下さいお願いします。

「じゃ、やる事は決まってるわね？まずはケイミーを助けるわよ！」

「舞台裏のどつかにあると思うわ、ケイミーちゃんの首輪の鍵！」

首輪ア!?!: ホントじゃん！ケイミーちゃん首輪付けられてるじゃん！

: ムカつくなあ、あの首輪。

「待ってイリス、あの首輪は無理に外そうとすれば爆発する仕掛けよ。下手に触らない方がいいわ」

「: : : ふふ、心配しないでロビン、鍵なんか要らない: : : ちよつと助けてくるよ」

タツと階段状になってる観客席から跳び、ステージにあるケイミーちゃんが入った水槽前に着地する。

ふむ: : 水槽は頑丈にフタされてるし、フタにケイミーちゃんの首輪の鎖が繋がれてるから無理に開けると彼女の首を閉めかねないな。ホント性格の悪い設計で腹が立つ。

なら: : :

ケイミーちゃんにちよつと離れてて、とジェスチャーを送ると伝わったのか出来るだけ端の方に寄ってくれたので思い切り切り水槽を割った。

水に衝撃が吸われて破片がケイミーちゃんに飛ぶなんて事も無いし、無事に彼女もそ

ここから脱出させられた。後は首輪だけ…。

「爆発は、『無理に』外そうとするから起こるんでしょ？なら、首輪は外さずに外すね」  
「え？」

心配しないで、とケイミーちゃんに微笑んで首輪に手を添えた。

…首輪の機能はそのままに、そして首輪を外す事もしない。私にはそれが出来る…：そうでしょ…!!

「倍加…！」

ぐぐ、と首輪の大きさが倍になり、小さなケイミーちゃんの頭からスポンと抜き取った。

外さずに取る…：大きさを換えられる私には造作もない事だよ。ドヤ。

「ケイミ〜！ニユ〜、ありがとなア女好きイ!!」

「何言ってるんだか、別にあなたの為に助けた訳じゃないっての」

私の女を私が助けるのは当たり前じゃん！

「…ツ!!おのれ、下々の身分で息子に手をかけただけじゃ飽き足らず、購入する予定の人魚まで解放したな!!首輪も外すとは何を考えているんだえ！この世界の創造主の末裔である我々に手を出せばどうなるか…!!」

踵落として沈んだ男と同じ服装の天竜人が、私とケイミーちゃんに向かって銃を乱射

してきた。

ただどそれはサンジが間に入って相手が手に持つ銃を蹴り上げた事で治まった。

「生憎、うちの女王様に世界のアレコレは通用しねえんで」

「貴様……ロズワード聖に!!」

天竜人の護衛も続々と出てきたが、ただの分厚い鎧を纏った雑魚だ。サンジだけじゃなく他の面々も動き出した今となつては相手にもならない。

「じゃ、あげるよ、大切な首輪なら自分で付けてたらいんじゃない」

輪投げの様に首輪を投げ、綺麗にその天竜人の首に通して倍加を解除する。

「き、貴様……!!な、な……何を……ッ!?この私に……奴隷の首輪など……オ!!」

「嬉しすぎて感無量って感じ?うんうん、似合ってるよ」

「はは、態度は相変わらず大きいけど暴れなくなつたね。あんまり動いたら爆発する仕掛けなのかな?自分で取ろうとしちゃダメとか?」

「ぐ……こ、この……下等な豚が……!!何をやってる!!早く捕まえろ!!こやつら女は剥製にして、男はエサ抜きガリガリ奴隷の刑にしてやるえ!!……そして私は、そんな奴隷達に踏まれて人生を過ごしていきたい……」

「ネガティブ・ホロウ……クソ……こうなりやヤケだ!やつばお前らと居るとロクな事にならねエじゃねエか!」

「風！<sup>プレス</sup>キヤハハツ！剥製ね…イリスちゃん以外の誰かにジロジロ見られるなんてごめん  
だわ！！<sup>プレス</sup>一万キロ風プレス！！」

「ぎゃあああ！！」

ロズワード聖と呼ばれていた男もペローナとミキータの技で沈み、それを見ていた女の天竜人が「お父上様ーっ!？」と叫ぶ。くそ、天竜人のクセに可愛いな。

「ろ…ロズワード聖まで…!」

「また罪を重ねたな海賊！イカレてるぞコイツら!!」

「しかもあいつ、ロズワード聖に首輪を付けたぞ!?!どこまでイカレてやがんだ!!」

イカレてるのはどっちだ、このクズ共が。人を商品にするっていう考えが気に食わないんだよ。

「このシャボンみたいなマスク外しなよ、せつかくの美人がくつきり見えないじゃん。後フェイスベールも」

ケイミーちゃんをハチに預けて女の天竜人の前まで移動し、シャボンマスクを割ってニタリと笑う。

彼女はガタガタと私を見て震え、それでも偉そうな瞳の色が消える事は無い。それが天竜人のプライドであり、あるべき姿とでもいうのか…どうでもいいけど。

「名前、なんていうの?」

「つ…誰が、…下等な者に高貴な私の名前を…!」

「おのれ海賊め! シヤルリア宮にまで手を掛ける気かア!!」

後ろから私に殴りかかって来た鎧の腹に振り向く事なく後ろ蹴りを放ち吹き飛ばす。

「へえ…シヤルリアかア…」

「ぐつ…使えない奴らアマス…!」

将来的には私ってハーレム女王な訳だし、天竜人の1人や2人嫁にしておいても問題ないよね? それにそもそも可愛いんだよこのコ。ちよつと性格に難ありだけど。

「周りの護衛達は私や仲間に手も足も出ず、あなたの家族やあなた自身も私に敵わない…どうしよーかなー? ここであなたを殺しても、別に私は困らないし?むしろ奴隷達からはヒーローみたいに扱われるかもね!」

「…何故、私を亡き者にして奴隷達が下々の民を崇めるのかえ。理解が出来ないアマス」

「そりや、奴隷にされて、しかもその言動…かなり酷い事をしてきたんじゃないの?」

「酷い…? 下々が私達、高貴なる神の一族の言いなりになるのは当然アマス。そこに悪感情が芽生える方が考え難いと言うもの…」

なんか凄い事言い出した。

そもそも、私達との価値観が違う…? 例えば、産まれた時からずつと自分は高貴なる存在で、それ以外は家畜以下だと教えられて来たらどうなるのだろうか…。自我が成り

立っていない段階から既にこんな事を当たり前の様に教えられ、刷り込まれ…洗脳じみた事をされた子供は…きつと目の前の女性みたいになつてしまふんじゃないのか？

「…1つ私から言える事は…あなたは神の一族でも何でもないって事だよ」

「何を…!!ブツ!!」

シャルリアの顔を私の蹴りが刺さり、後方へ吹き飛ばした。それを見て1番驚いていたのは彼女の護衛ではなくナミさん達だ。

コツコツと1歩ずつゆっくりとシャルリアに進む。彼女の様な貧弱な体でも意識がギリギリ飛ばない様に加減したからまだ気絶はしていない筈だ。

「どう?痛いんじゃない?…そう、蹴られたら痛い。殴られても痛い。銃なんかで撃たれればもつと痛い」

「ゲホツ…つ、…ひイ…!」

「私達はこうして言葉も交わせる。多少の上下関係はあつても、明確な種族としての差なんて無い…じゃなきゃ、”神”が私の足元で転がってるなんてあり得ないよね?」

シャルリアのすぐ近くまで歩いて、倒れる彼女に近づく様にしゃがんだ。

「人を殺そうとするのなら、自分が殺される覚悟もするべきだよ。ほら、何泣いてるの?あなたが今までに直接的、もしくは間接的に殺してきた人達だつてあなたと同じ様に怖かつた筈だし、痛かつた筈だし、無念だつた筈だよね?」

「わ、私は…ツ、神の、末裔…!!わた、くしは…間違つてなど…!」

「間違っているか間違っていないかを考え出した時点で、とつくにあなたの中では迷いが生まれてるんじゃない?自分を恐れない、自分を殺せる相手が目の前に現れた事で視野が広がったんだね。…ただ安心して、私はあなたを殺さない」

震えるシャルリアの頬に手を当て、指をツ―、と顎に向かつて這わせていく。うん、流石に手入れの行き届いた、綺麗な肌だ。

「や、やはり、あなたも私に恐れて…」

「シャルリア、私の嫁にならない?」

「え?」

周りに居る客や、護衛兵と戦うみんなもギョツと私を見てきた。ナミさん達嫁一同は呆れた顔で笑っているけども。

「私の夢はハーレム女王。沢山の嫁を娶つて、やがて世界一幸せな女になる。…その時は、私はあなたにも傍に居て欲しいな。そんな環境で育っておきながら…私の言葉で考えが揺らぐ様な柔く、優しいあなたに」

「……世迷言、を…。……そち、名は…?」

「これはこれはシャルリア様、私の様な下等な生き物の名を知りたいと?」

「う、うるさいアマス!私をこの様な目に合わせた者の名くらい、知っておきたいのは当

然アマス!!」

焦ってるなあ。なんか可愛くない?この人。鼻血垂らしてるし…、それは私のせいだけだ。

「私はイリス。次に会う時はあなたを嫁に貰いに来るから…その時まで更に更に女を磨いておいてね。後…人としても」

ひらひら、と手を振って私を複雑そうに見るシャルリアから離れ、ナミさん達の元へ行く。まさか天竜人に嫁予約が出来るなんて思ってたな、ラッキー。

「お前ほんとに見境いねエな、相手は天竜人だぞ…つて言っても意味ねエのは分かかってらア!それよりイリス、早く逃げるぞ!海軍がこの会場を取り囲んでるそうだ!」

「ウソツプ、何言ってるの?いくら海軍でもさっきの今で到着出来る訳…」

「それがイリスちゃん、どうやらオークションが始まる前から周辺で待機していたみたいだ。誰を捕まえたかったのかは分からねエが…、とあの野郎が」

クイ、とサンジが親指を差す方向には、足を組み、アザラシの様な柄のニット帽を被った男が大きな態度で座っていた。…う、凄く見たことある。王華が私の中で騒いでる気がした。

「ホラ見ろ巨人君、会場はえらい騒ぎだ」



「ooooooooooッ!!!」

「い、イリス? どうしたの?」

舞台裏の幕を破って、そこから巨人族の男と…白髪の老人が現れた。

私は反射的にナミさん達の前に立ち、咄嗟に女王化クイーンを使いそうになったのを堪える。

「……あのお爺さん…一体……!」

あの人が現れて、一瞬物凄い気迫を感じた。それはもう…青キジと相対している時と同じくらい…とてつもない「強者」の圧。

「ありや商品じゃないか! どうやって檻から抜けて…!」

商品!? あんなオーラ放つ強者が!?

…あり得ない。普通に考えて、あの人を捕まえようと思つたらバスターコールでも足りないレベルだよ。

「れ、レイリー!?!」

「おお、ハチじゃないか! 久し振りだ! 何しとるこんな所で、あれ程この島では出歩くなと言つたらうに!」

「ニユ…でもよ、麦わら達に恩を返してエと…!」

しかもハチと知り合ってきたか。…ということは敵じゃない…のか? それなら良い

んだけど。

「ふむ…少々騒がしさが過ぎるな。…さて」

「う…!？」

「あ…ツ!？」

「…これは…っ」

白髪のお爺さんから「霸王色の覇氣」が放たれた。それは会場に居る護衛兵達を皆昏倒させ、私達はそれに目を見開く。

…って、シャルリアまで泡吹いて倒れてんじゃん！あの爺…！私の嫁（予定）を…!!  
 と言つても…手は出さないけど。今あの人とドンパチ起こせば間違いなく大将戦まで体が保たない。霸王色を使用したことで疑念は確信に変わったんだし。

「その麦わら帽子は…精悍な男によく似合う…!!会いたかつたぞ、モンキー・D・ルフィ」  
 「ルフィ…知り合い？」

「知らねエ…！誰だこの爺さん…!」

まあ…知らない相手に一方的に知られるっていうのは私達にとって珍しい事じゃないし…。

「悪かつたなキミら、見物の海賊だったか…。今のを難なく持ち堪えるとは半端者では無さそうだな」

お爺さんが感心した顔でさっきのニット帽と、後ろの方で立つてる逆立った赤髪の男を見て言う。

「ローまさかこんな大物にここで出会うとは…」

「…冥王」シルバース・レイリー…!!間違いねエ、何故こんな所に伝説の男が…」

冥王?…なんか青キジの口からそんな名前を聞いたことがあるような無いような

…。つて、あの話の流れだとやっぱりのレイリーつて爺さんヤバい人だよ!!

「んでおっさん、おれに会いたかつたつて何だ?」

「ん…話は後にしよう!まずはここを抜けねばな…」

「…あれ、ペローナちゃん、大丈夫?」

ペローナちゃんがしくしく泣いてたから聞いてみれば、レイリーの名に驚いて涙が出てしまったとか。可愛い。

「笑い事じゃねエぞ…分かってんのかためエ…冥王レイリーつて言えば…」

「キャハツ、その話は冥王も言つてた通り後にしましょう」

コクリとミキータに頷くと、外から拡声器で海軍の声が聞こえてきた。

『犯人は速やかにロズワード一家を解放しなさい!直「大将」が到着する。早々に降伏する事を勧める!!どうなつても知らんぞ!!ルーキー共!!』

「あらら、私がやらかしたのに、ルーキー共」だつて。ルーキーつて私とルフィでしょ

「?もしかしてあなた達も?」

「フン、俺達を知らねエのか?情報は力だぜ、"逃げ足の女王"さんよ。噂に聞く麦わらのルフィのイカレ具合は見れなかったが、代わりに女王は見れた。文句はねエが:今大将とぶつかるのはゴメンだ」

「逆立ってる赤髪の男がそういう。この人も:隣の覆面からも強いオーラを感じるんだよね。」

「あー、私はさっきの様な力はもう使わないのでキミら頼むぞ。海軍に正体がバレては住みづらい」

「さっきの様な力って:霸王色の覇気でしょ?あれか、私達が覇気を知らないと思ってるな?そりゃあ私が居なきや知る由も無いけどね?どや?」

「長引くだけ兵が増える、先に行かせてもらうぞ。モノのついでだ、お前ら助けてやるよ!表の掃除はしといてやるから安心しな」

「ぬ」

「...ふん」

「逆赤髪の男がそんな事を言いながら外に出ていくので、挑発に乗りやすいルフィと、同じく乗ったニット帽が逆赤髪を追って外に出て行った。」

「:大将の居ない海兵程度ルフィ1人でも充分だと思っけど:私も出るか、多少手こ

ずつてナミさん達に危害が及んだら面倒だし。

## 115 『女好き、『冥王』シルバース・レイリー』

「おー」

赤逆髪…キッドだっけ、強いなあ。ニットのローも変な能力使って海軍をボコボコにしているし、とんでもない強さだ。私も負けてらんない！

「30倍灰・終衝徨！」  
さんじゅうばいばい しゅうしょうさま

「うおッ…!？」

思い切り地面を殴って地震が起きた様な揺れを起こす。衝撃で地にはヒビが入り立っているのもやつとの海兵の姿も見れる。…よし、夢の中で適当に開発した技だけど成功して良かった。

「『女王屋』！俺達の足場まで奪う気か！」

「あ、ごめん。…あと何その呼び方！許してあげるから手前にハーレムって付けてー！」

揺れる大地の上では味方の邪魔もしてしまうのは確かに盲点だった…。それでもただ地震が起きただけで止まる様な連中では無いようで、動きが鈍った海兵を次々に倒していく。

やがて私達を囲っていた向こうの陣形は大きく崩れ、逃げる隙が出来てきた。

「麦わらの一味を逃すな！あいつらが主犯だ!!」

「悪いけど、そう簡単に私達の主は渡せないわね。サンダーボルト・テンポ!!」

「ウギヤアアアア!!」

「ネガティブホロウズ!!離れてろお前ら!!特ホロウズ!!」

「グギヤアアアア!!」

え、えぐい範囲爆発攻撃だね：クレーターが凄いいことになってるし。

「見ろルファイ！トビウオライダーズだ！」

「ん？あつ、トビウオ！」

サンジが指差す方向には、離れた位置から私達に手を振っているデュバルの姿があった。案外頼りになるね、トビウオライダーズ。

ここに居る海軍を全滅させる事は容易だけどそんな事で手間取っていたら後が大変だ。大将が来るまでの時間稼ぎをされちゃ敵わない。

「みんな！包囲は崩れてる、急いでトビウオに乗って!!もう一発さつきの“地震”行くよ!!」

「おう！急げお前らー!!」

「私も連れて行ってもらおう。何やら私に用があるようなのでな」

用：？？冥王とか呼ばれる程のお爺さんに用がある人なんてこの一味には誰も居ない

と思うんだけど。…今はいいか！

「30倍灰!! 終衝徨!!」  
さんじゅうばいばい しゅうしょうさま

さつきと同じように地面を殴って揺れを起こし、その間に私を含めた一味全員とケイミーちゃん一行+冥王がそれぞれトビウオに乗って急いでその場を離れたのだった。

…こんな状況でコーティングなんてやって貰えるのかなって不安になってきたよ…  
 コーティング師すら見つけてないし…。

\*\*\*

「じゃあまた！ホント気軽に呼んでくれよ!! 若旦那達が無事魚人島へ出航出来る時までおれ達が手足となるからよ!!」

「おう！ありがとなお前ら！」

トビウオライダーズに送ってもらって『シャッキー、SぼったくりBAR』という店の前に到着した私達は、レイリーに促されて中へと入った。

どうやら最初ショッピングモールに行く為に別れた時にルフィ達はここへ来ていた



らしく、中にいたシャクヤクという店主とは顔見知りみたいだ。

「…で、その冥王さんが私達…ルフィに用があるって?」

一旦店を閉めてくれたシャクヤク…もといシャッキリさんに軽く頭を下げて、私達はソファアールやカウンターに座り込む。

「ニュー女好き、違エぞ、レイリーがおれ達の探していたコーティング職人だ」

「えっ、こんな強い人がコーティング職人!」

私は驚いて声を上げる。

戦闘は確かにしていないけど、霸王色の覇気の規模…それからオーラがどこからどう見ても強者のソレだった。最近は良く強敵と相見えるからそういうのが分かるようになってきたよ。

「フフ、イリス、彼は『冥王』シルバーズ・レイリー。海賊王の右腕とまで呼ばれていた男よ」

「へえ、凄い人なんだね。……………え?」

「え~~~~~~~~ツ!!!」

「か、かか海賊王の船にイ〜!?」

ポロリと何を言い出すかと思えばとんでもない情報を口にしたロビンにみんなが口を開けて驚く。そ、そりや強い筈だよ…納得は出来たけど…どうして海賊王の右腕が

コーティング職人なんかやってるのが疑問なだけだ！

「ああ、副船長をやっていた、シルバース・レイリーだ。よろしくな」

「副船長?!」

右腕って言われてるならそうなんじゃないかとは思ったけど、実際にそうだと言われ  
たら衝撃が凄い……!

えー!なんか超有名な人に会ったみたいでテンション上がる!

「何でそんな大物とタコが知り合いなんだ」

「ハチはな…20年以上前に私が海で遭難した所を助けてくれた」

「この人の命の恩人なのよ、まだ子供だったけどね」

どこで誰が誰と繋がってるか分からないもんだね…。まさか私達が海賊王の乗っ  
てた船の副船長と知り合うとも思ってたし。

「しかしよ、ゴールド・ロジャーは22年前に処刑されたのに副船長のアムスは討ち首に  
ならなかったのか?一味は海軍に捕まったんだろ?」

サンジの問いにレイリーは意味ありげに笑みを浮かべて、持っていたグラスをカラ  
ン、と鳴らした。

「捕まったのではない…ロジャーは自首したのだ。政府としては力の誇示の為…あいつ  
を捕らえたかの様に公表したかもしれないがな」

「自首…!?なんで!」

「我々の旅に限界が見えたからだ…。あの公開処刑の日から4年程前か…ロジャーは…不治の病に罹った。誰も治せない、手の打ち様のない病に流石のロジャーも苦しんだが、当時海で1番評判の高かった灯台守でもある医師…双子岬のクロツカスという男だけがその苦しみを和らげる腕を持っていた。我々は彼に頼み込み、最後の航海”に船医として付き添って貰い、ついにその3年後ロジャーの命を取り止めつつ、不可能と言われた偉大なる航路制覇を成し遂げたのだ」

く、クロツカスって…双子岬の花頭の…ブルツクの子孫とも縁のあるあの人だよね?!どうなってるのこの世界…割と狭い?」

「と言うことはあのおっさん海賊王の船員クルーだったのか!!」

「そういえば数年船医をやったって言ってた。その3年間海賊をやってたのね!」

「キミらが会ったという事は…まだ元気でやつとるか!クジラを可愛がっていてね。クロツカスは何やら探したい海賊団が居ると乗船を承諾してくれたのだが」

それブルツクの事じゃん!本人も気付いたのか涙を流して感謝しているし…。

は…と体を寝かしてミキータの膝に顔を埋める。情報量が半端ないっす…くんかくんか、素晴らしいニオイ。

「で、海を制覇した後は?」

「そこからだ、ロジャーは世間から『海賊王』と呼ばれる様になった。何もずっと海賊王だった訳じゃない…死にゆく男に称号など何の意味も無い、だがロジャーは喜んでいな。何事もハデにやらかす事が大好きな男でね…宴もそう、戦いもそう…己の先の無い未来にも一計を案じ楽しんでる様に見える」

ルフィに似てるな…。彼もどこかそんな節がある。別に死に急いでいる訳ではないけれど、死を恐れず…逆に苦難を楽しんでいるかのような。

「やがて『船長命令』によりロジャー海賊団は人知れず解散し…全員バラバラに、一人…また一人姿を消した。共に命を懸けた仲間達は今やどこで何をしているか殆ど分からない。…そして解散から一年が過ぎた頃…ロジャーは自首し、逮捕され…あいつの生まれた町、<sup>イーストブル</sup>東の海」のローグタウンで公開処刑が発表された。あの日の広場には…今海で名を挙げている海賊達の若き日のそうそうたる顔ぶれが並んでいたと聞く…。海賊王の処刑に世界が注目していた、…私は行かなかつたよ。あいつの言つた最後の言葉はこうだ…」

「おれは死なねエゼ…？ 相棒…」

死なない…。そうか、海賊王が最期に放つた、たった一言…確か…。

「おれの財宝か？欲しけりやくれてやるぜ：探してみろ、この世の全てをそこに置いてきた」：世界政府も海軍も驚いたろう。他の海賊達への見せしめの為行つた公開処刑：残り数秒、僅かに灯つた「命の灯」を奴は世界に燃え広がる「業火」に変えた。あの日ほど笑つた夜は無い：！あの日ほど泣いた夜も：酒を飲んだ夜も無い：！我が船長ながら：！見事な人生だつた：！！」

「…なんか凄い話聞いちゃつたみたい。：ちよつとイリス、そろそろこつちに来なさい」  
「どうぞ、ナミちゃん」

ぐい、と引つ張られてミキータの膝枕から反対側のナミさんの膝枕へと切り替わる。  
くんかくんか…。

「まるでこの海賊時代は、意図してロジャーが作つたみてエだな：」

「そこはまだ、答えかねる：ロジャーは死んだのだ。今の時代を作れるのは、今を生きてる人間だけだよ：！あの日、広場でロジャーから何かを受け取つた者達が確かに居ると思ふがね：キミのよく知るシャンクスもその一人だろう」

「え？おつさんシャンクス知つてんのか！？」

ルフィらしいけど、海賊王の右腕におつさんつて凄いな。

それはそうとナミさんの匂いが素晴らし過ぎて話があんまり入つてこないんだけど。後で王華に改めて確認しよう。

「東の海ならバギーという海賊も知らんか？」  
イーストブルー

「バギー……」

嫌そうな顔でその名を言うナミさんとゾロ。そりや……あのイカレ赤っ鼻にはそれなりの事されたからなあ。

「アレは2人共ウチの船で見習いをやっていた」

「えー……っ!! シャンクスは海賊王の船に居たのか!？」

シャンクス……つてのはともかく、バギーが!? 小物臭半端なかつただけ……海賊王のクルーでも見習いならあんな感じなのか……な？

「10年程前か……この島でばったりとあいつに会ってな。トレードマークの麦わら帽子と左腕が失くなってた。ワケを聞くと嬉しそうにキミの事を話すんだ」

ルフィと知り合い……しかも話の流れる的にルフィに麦わら帽子を託したのはそのシャンクスって人か。……こりや間違はなくONE PIECEのキーパーソン……下手に関わってルフィ達の冒険をぐちゃぐちゃにしない為にも、私はそのシャンクスって人には近寄らないでおこう。

……というフラグじみた願望は当然後々回収されるのだが今は別の話。

「シャンクスが君に話してない事まで私がべらべらと喋る訳にはいかんのでな……とに

かくここまで良く辿り着いた……! “新世界” であいつはキミを待ち侘びているだろう」  
 「……そうか! そうかな! おれも会いてエなア……!!」

「……さて、状況も状況、船のコーティングの依頼だったな。私も今の本職を果たすでしょう」

それについてハチがコーティングは高エぞと言うと、レイリーはハチの友達からは金  
 は取らないと言ってタダにしてくれた。流石海賊王の右腕、太っ腹過ぎる。

「レイリーさん、質問が……!」

少し難しい顔をしたロビンがレイリーに問いかける。

「“Dの意志” って……一体何……? 空島で見た歴史の本文ポネグリップに古代文字を使ってロジャーの  
 名が刻まれていた。彼は何故あの文字を操れたの……!? あなた達は900年前に始まる

“空白の100年” に世界に何が起きたのかを知ってるの!?”

「……ああ、知っている。我々は……歴史の全てを知った。……だがお嬢さん、慌てて  
 はいけない……キミ達の船で1歩ずつ進みなさい。我々もまた……“オハラ” もまた……  
 少々急ぎ過ぎたのかも知れん。キミ達に今ここで歴史の全てを私が話しても、今のキミ  
 らには何もできやしない……! ゆっくりと世界を見渡して、その後に導き出す答えが我々  
 と同じとも限らない……! ……それでも聞きたいと言うならば、この世界の全てを今、話そ  
 う」

ロビンはそれを聞いて、少し笑って目を閉じ首を横に振った。私もナミさんの膝枕から離れてロビンの隣に行き、腕を引つ張ってソファーに座らせその上に自分も座る。

ロビンにとっては夢の全てが目の前にあるといつても過言では無い。今の決断は：彼女なりに考え抜いた結果だったのだろう。心労も計り知れない。

「いずれ全てが見えて来る…キミの故郷、オハラ的事は気の毒だったな…だがロジャーはあの文字を解読出来たわけじゃない。我々は海賊。天才クローバーやオハラの学者の頭脳に敵うハズが無い…。あいつはな…『万物』の声を聞いた…それだけの事」

万物の…？なんか凄い事言ってるのだけは分かるけど、スケールが大き過ぎて理解が追いつかない。

…私も何かを倍加したら動物の声を聞けたりしないかなー。そんな機能が元より存在しないから何を倍加しても無理なんだけど!!

その後はウソツプがレイリーにひとつなぎの大秘宝、ワンピースが本当に最後の島にあつたのか、と言うのを聞こうとして凄く怒ったルフィに止められていた。

そりやそうだよ、それこそがルフィの夢…さっきのロビンと一緒に誰かに教えて貰うようなモンじゃない。それが本当に存在するのか、本当に最後の島にあるのかなんて事は…行けば分かるのだから。その為の冒険だ。



「…で、どうしようか。レイリーがコーディング作業してくれるなら…私達も追われてる身、いつまでもここに居ちや迷惑だよな」

「キャハ！イリスちゃん、デートしましょ！またショッピングモールに…」

「身を隠すんだよアホかてめエ！頭ん中どうなってるんだこのハッピーが！」

ペローナちゃんがミキータの胸ぐらを掴んでぐらぐら揺らして怒ってるけど、元々の腕力がそんなに無いからかミキータも苦笑いだ。

「じゃあ俺達ア適当にバラけて仕上がりの時間にそこへ集合でいいだろ」

「チョッパー、ゾロに薬を！集合とか言い始めた！ゾロが絶対迷わずに集合地点に辿り着ける強力な薬をお願い!!」

「くっ……無エ…!!」

「よし、斬る」

やば、ほんとに刀に手を掛けた！最近のゾロの剣は30倍でも防げるかどうか分からない程澄まされてるからここいらでやめておこう。

「シャッキー、あれがあつたら」

「ええ、1枚あるわよ」

あれ？

レイリーの言葉でシャッキーが奥へと引っ込み、何やらガサゴソと何かを引っ張り出

してきてレイリーに渡した。

「私もフダツキの身なのでな、41番GRグロウプからどこかへ移動して作業すると思う」

「あ、それってビブルカード？」

「ほう、知っているなら話は早い。コーティング作業には3日貰おう、命を預かる作業なのでそれが最速なんだ。そうだな…3日後の夕刻と決めようか、私はその時何番GRグロウプに居るか分からんが、ビブルカードの導く先でコーティングを済ませ君達を待っている。魚人島への海中航海に備え必要な物を買っておくといいだろう」

「ああ、ありがとなおっさん！」

…と言う事は、ケイミーちゃんともちよつとの間お別れか。

「ケイミーちゃん、また3日後ね。…それと、今度こそ私の嫁になってー」

「…えへへ、うん、もうはぐらかさない…。イリスちゃん…私、イリスちゃんのお嫁さんになりたいー！」

…!!

ビックリした…ぶつちやけまだ返事は貰えない物だとばかり思ってたから…。

「んー！やったあ！すつごく嬉しい！ケイミーちゃん、これからはお嫁さんとしてよろしくね！」

「…うん…！ほんとにありがとね、イリスちゃん！私、イリスちゃんのお嫁さんに相応しくな

れる様に頑張る！3日後も魚人島に案内するね！」

「はは、相応しいかどうかで言えば充分過ぎるんだけど…うん、もつと磨いてくれるなら願ったり叶ったりだよ。3日後よろしくね！」

「じゃあなー!!」

そう言つて私達はぼつたくりBARを後にした。シャッキーさんも3日後に見送りに来てくれるそうだから、それなりに騒がしい船出になりそうだ。どうせトビウオも来るだろうし…。

「じゃ、散らばる？私としてはナミさん達と一緒に居て守つてあげたいんだけど…」

「おめエらが固まりや目立つだろうよ。特にイリス、おめエは女王の異名で6億の賞金首…大将も狙うならまずはその首だ。守りてエなら離れる方がいいかもな」

「うーん、確かにフランキーの言う事も一理あるよね…」

今は町から離れた道を皆で歩いている所だが、いつまでもこうしていれば見つかつてしまつたろう。

かと言つて適当に班分けも出来ない。1人1人で散らばるのも良くない…もし見つかった時の事を考えれば、1人だと絶望的だ。

「だったら私、ルフィ、ゾロ、サンジは分かれるべきだよ。戦力を固めるのは良くない。

4班で動こう」

「だな。この中だとヘボコックが1番戦力的には低い。フランキーとロビンはそこに入れるか」

「マリモより俺が弱いだど!?ロビンちゆわんはともかく、フランキーはてめエにやるよ!俺はペローナちゃんとなみさんとミキータちゃんが良い!!」

欲望にまみれてるじゃんか…。私以外全員美女が集まっちゃうし、却下で。

「…ん?誰か居……………。って……………え?」

私達の通る道を塞ぐ様に、見知った顔の大男がそこに立っていた。

まるでクマかと思紛う程の巨体と、クマ耳帽子…そして機械的な感情の見えない瞳。

無表情の顔……………間違いない、こいつは…!!

「どうして、ここに…!!バーソロミュー…くま!!」

王下七武海、暴君バーソロミュー・くまがそこに居たのだ。

…でも今は前と違って万全だ!来るなら来い…邪魔をするならぶっ潰してやる!!!

## 116 『女好き、反撃NG空の旅』

「…手袋取った…来るよみんな、衝撃波!!」

「おうー」

女王化はまだ早いから、オールインクリース全・倍加を使用する。

七武海を舐めている訳じゃないけど、もし仮に大将と遭遇した時私が使い物にならないきやマズいという判断をしたのだ。

「ツ…は?」

くまの手の平から高速の閃光…ビームが放たれる。おかしいでしょ…!?あいつの手の平は肉球だったハズ…そんな事が出来る能力だとはとても…!!

「あんどきやよくもやってくれたな!!風来砲!!」

ドウンツ!!とフランキーの手から放たれた特大の風の砲弾がくまを吹き飛ばし木に激突させた。

その際にルファイがギア2を発動し、一気に距離を詰める。よし、私も…!

「ゴムゴムのー!」

「30倍灰…!」

「三刀流…」

「悪魔風」  
ディアブル

「羊肉J E T 去柳薇煩惱攻城砲!!!」  
ムートンジエツトさよならボンドキャノン!!!

私達の攻撃に押され、木を貫き更に遠くまで飛んでいくくま。…だけど、おかしい。攻撃が簡単に当たりすぎている。

「…なんか、弱くない?」

「ああ…! 本当にあの時のあいつなら、もつと瞬間移動で攻撃を避ける筈…」

「双子なんじゃねエか!」

「それも考えられる…! 何より衝撃も飛ばさねエし肉球もねエ…!!」

…弱いとは言ったけど、それはあのくまに比べればという話だ。

…ほら見ろ、私達の攻撃を受けてもまだ立ち上がってきた。厄介なのに変わりはない

…!

「ペローナちゃん! ネガティブホロウは…」

「さつきー発撃つたが効かねエんだ! あいつ本当に心あんのか!!? それともあいつもネガティブと同じ理屈か!」

ウソツプは確か元からネガティブだから効かなかったとかそんなんだっけ? でも残念ながら、奴がネガティブだとは思えない…。

「こくいてい刻蹄・桜吹雪!!!」

「!!」

歩いてここまで戻ってきた奴に向かってチョッパが大技を放つも、奴をふらつかせる事は出来たがそれだけで終わり、逆に体を掴まれてビームを撃たれそうになる。

「チョッパーちゃん!! 1万キロ風嵐蹴!!!」

ゴウツ!とミキータが空を駆け、光を溜める奴の右腕を蹴り上げて光線を空に飛ばさせた。

その隙を突いてブルツクが持ち前の身軽さを利用して空高く跳躍し、落下の速度を利用して突き技を放つも鋼鉄の様な硬さの体を貫けず宙で静止してしまう。

「マズい…隙が大きすぎる!ウソツプ!」

「分かってらア!必殺、アトラス彗星!!」

ウソツプが放った4つの弾はそれぞれが小爆発を起こし、1つが奴の口内で爆発した為跪いて動きが鈍くなった。

流星の怪物と言えど、体内まで鍛え上げては無いようだね…!

「体内が弱いと分かれればこっちのモンよ!ペローナ、ロビン!」

「ええ」

「あんまり無茶すんじゃねエぞ正妻…女王!私を守れ!」

「了解、姫様！」

ナミさんが何処かへ走って行くのを見届けて私がペローナちゃんを抱えた直後、彼女の体から彼女自身の幽体がスルリと出てくまもどきの近くをふわふわと漂い始めた。私に本体の護衛を任せるなんて…信頼されて嬉しい！

「ホロホロホロ…！当てるみるノツポ！」

「……！」

手の平から放つビームは幽体の彼女に当たる筈も無く貫通し、ならばと口をかば、と開いてビームを溜めるもその肩からよきによきつと腕が生えてきていた。

「八十輪咲き・四本樹!!シヨック!!」

ロビンが奴の肩から生やした4本の腕でハンマーの様に頭を叩き、放とうとしていたビームは口の中で暴発する。

そんなくまもどきの前に準備を終えたナミさんが姿を現した。

「行くわよ！サンダーランス電光槍…！」

バチバチとくまもどきの背後で小さな黒雲がふわふわと浮かび上がっており、そこからナミさんの天候棒へと一筋の雷が走った。

「テンポ!!」

「……!!!」



黒雲と天候棒クリマ・タクトの間に居たくまは当然その雷の槍に貫かれ、口から煙を吐く。

間違いない効いてる……！流石みんな！

「おわア！あんにやろ、暴走し始めた！」

流石に堪えたのか、見境無く辺りに光線を放ち出したくまもどきにウソップが叫ぶが、これは好機だ！ヤケになった相手程簡単に潰せる相手は居ない！

「こつちへ飛ばせコツク！」

「命令すんな！悪魔風脚……ディアブルジャンプ 画竜点睛シヨット!!」

サンジの燃える脚がくまもどきの腹に刺さり、ゾロへと蹴り飛ばした。

「鬼気九刀流、阿修羅あしゆら・魔九閃まきゆうせん!!」

私の女王化は霸王色の圧で王冠やマントを見せているのに対して、ゾロは気迫だけでアシユラの様に頭が3つ……そして腕が9本になりくまもどきを斬り裂いた。

見た事ない技だけど、相当威力のある一撃だった！あと1発……頼んだよ、ルフィ！

「ギア、3！ゴムゴムのオ……!!」

上空で腕を巨大化させたルフィが、右腕を後ろへ伸ばして捻っていく。

「潰したれルフィ……!!」

「オオオオオ!!!ギガントライフル 巨人の回転弾!!!」

ルフィの放った特大の拳が奴に直撃して地面に大きなクレーターを作った。そのク

レーターの中心で、くまもどきはピクリとも動かずに停止した。

「…よっしや!!流石に倒したでしょ!」

なんか私殆ど何もしてないけど、とにかく倒した!!動かないし…まだ動き出しそうで不気味ではあるけど。

でも私とペローナちゃんはまだ万全と言っても過言ではない。こんな強敵を相手にこの成果はラッキーだ。

「とにかく早いとこ別れて隠れよう。今の戦闘で場所を気付かれたかもしれない!」

「ハア…ハア…!ちよつと、ほんのちよつと待ってくれ。まさかいきなり、こんな全力の戦闘になるとは思ってたなかつた…!」

ルフィは流石にギア2と3の疲れが大きい。体に負担があるって言うってたもんね…。

「じゃあ少しだけ休憩しよっか。その間に班分けでも…」

「全くてめエらやってくれるぜ!!」

「…誰!」

「ほいさア!!」

聞き覚えの無い声が唐突に聞こえ、辺りをキョロキョロ見渡していると私達の目の前

に人が落ちてきた。

砂埃で良く見えないが、2人の影が見える。…誰だ？

「オイオイ…何て無様な姿だ「PX-4」…!!てめエら「パシフィスタ」を1人造る為に軍艦1隻分の費用を投入してんだぜ!!まったく、あのパンク野郎に何て報告すりゃいいんだよ…!!」

「……!!また…!!」

煙の中から現れたのは、まさかり 鉞 担いだ金太郎みたいな男と…くまだった。

…くそ、今度は本物か？偽物か!?!…そういえば本物は本を持っていた筈…あれが気紛れで持っていただけなら分からないけれど、何となくそれで判別できそうな気がした。ということはいつは本物じゃない、また偽のくまもどきだ。

PX-4というのも気になる…。PXはさつき奴が自分で言っていたパシフィスタの略だろうね。

「てめエ何者だ鉞イ!!」

「…人を武器の名で呼びやがって、わいに質問しても無駄だ、お前達に教える事は何もねエよ!わいは世界一ガードの固い男…!したがって口も固いんだ」

フランキーの問いにそう返すガードの固い男。

別に男のガードが固かろうが緩かろうがどうでも良いっての。

「…名前くらい名乗ったらどうだ」

「何も答える筋合いはねエな…言った筈だ、わいは世界一口の固い男、戦桃丸だ」

「せんと丸だね…」

「…あ、今のはわいが自発的に教えたんだぜ。てめエの質問には答えねエ。始めるぞP  
X—」

さて…このままじゃ間違いなく重傷者が出る。

どうする…？まだ大将と遭遇する可能性もあるつてのに女王化クイーンを使うのも…！

「…言ってられる状況じゃ無いか…！」

すう…と息を吸い込んで集中する。次の瞬間、私はいつもの女王化状態クイーンへと変化して  
いた。

「みんな!!とにかく分かれて逃げて!!ここは私が引き受ける!!」

「イリス!!でもお前それ、時間が…!!」

「こんな奴らに時間なんて必要ないよ!すぐ追いつく、行っ…、…この、気配は…?」

近くまで…来ている…!誰だ、この気配…強い!!!

「早く行って!ヤバイのが近くに居る!!」

「ヤバイって、今のあんたがそう言うって事はその気配ってまさか…!」

「ナミさん!余計な事は考えなくて良いから早く行って!!出来るだけ遠くに…早く!!!」

PX-1と呼ばれた奴から放たれたビームを腕で弾いて空に飛ばし、地を蹴って奴の眼前に近付き腹を蹴り上げた。

PX-1はそのまま遙か上空まで飛んでいき、落ちた頃には立ち上がれないだろう。…こいつら絶対人間じゃないし、遠慮はいらない…ハズ。

「…っ、来た…!!」

驚く戦桃丸は無視して、私はこの場に突如として現れた超要注意人物に向かって駆け出し蹴りを放つ。『そいつ』は今の私の蹴りを同じく蹴りで打ち返して威力を相殺した。

「…ったく、遅エんだよ！やつと来たか黄猿のオジキ…」

「黄猿…!?!」

戦桃丸の言葉にロビンが目を見開いて私の蹴りを受け止めた奴を見た。…そうか、こいつがこの前ロビンが言っていた大将の1人…黄猿か！

「おおうやるねエ…わっしに攻撃を当てられるって事は、覇気使いだねエ。戦桃丸君、彼女は何者だい？」

「懸賞金6億ベリ、逃げ足の女王」イリスだ。PX-1もすぐダメにされちゃった。逃げ足の噂と強さが釣り合わねエ…心配は要らねエだろうがおじきも気を付けな！」

「気を付けた所でどうにかなるかな？こっちは時間制限付きで余裕が無いんだ…ハナッ

から飛ばして行くよ!! 100倍灰・女王の慈悲なき拳!!!

黒に染まった拳を迷いなく黄猿の顔面へと放つ。

…だが、既に私の目の前から奴は消えていた。

「っ…な、…」

「……………遅いねエ」

「ぐっ!」

背後から声が聞こえ、見聞色を使つてギリギリ横顔狙つて放たれた蹴りを受け止めるが、止めた腕が痛みに悲鳴を上げた。…何て威力だ…! 私の100倍アーマーが意味ないって…大将はこれだから…!

「本当に申し訳無いんだけど、私一人じゃ勝てそうにないからよろしく…! 女王・倍加!」

「ん…?」

「おじき!上だ!!」

黄猿が上を見上げるとそこには王華が腕を振りかぶっている所だった。つまり、今更気付いてももう遅い!あなたがどれだけ速くても、反応速度には限界があるでしょ、

おっさんめ!

「100倍灰… 桜花!打刻!」

「ッ……！」

持ち前の霸王色で辺りに桜の花びらを散らし、その拳は黄猿の顔面へと突き刺さり地面へ激突させて王華が私の隣に立つ。

「ちよつとイリス、私が出る時決まって大将戦なのやめて欲しいんだけど！」

「仕方ないじゃん。この状態で勝てないのなんてそのクラスの化け物くらいなんだし！」

王華の一撃をモロに喰らつてるといふのに起き上がってくる黄猿を見て冷や汗を流す。

「……そもそもこいつ、能力者か？」

「黄猿はピカピカの実の光人間……名前は弱そうだけど、光の速さで動いたりレーザーを出したり、かなり強力な能力だから気を付けて」

そりや厄介なんてもんじゃないね……。常に見聞色は発動しておかなければ、目で追える速度じゃ無さそうだ。

「……よし、ナミさん達も逃げてくれたか。いつの間にか戦桃丸も居なくなっただけど……流石に黄猿相手に他の奴にまで気を回せられない。」

「……流石に、認めるしかないよねエ。あんた、クザンから逃げたなんて嘘じゃないのか」

「嘘？私は元からそんな情報流してないっての。そっちが情報操作した癖に私のせいにしてないで欲しいね」

「ん〜…けど妙だねエ。クザンがやられる様な強さとは思えない…覇気も雑。力、速さもまだまだ荒い…。手を抜いたねエ、これは」

「ぐぬ…！」

確かに、そうだ。青キジとの戦いの最後…あいつは私に当てられる筈だった攻撃をわざと外して、私の技をモロに全て受けた。

…見逃されたとも言える結果だけど、一応私があの人から掴み取った勝利なのは変わらない。まさかあよつと戦っただけでそこまで見破られるとは思ってなかったけど。

「ゾロooooooooooツ!!!」

「ツ!!?!」

!!!

バツと声のする方へ顔を向け、視力倍加で遠く離れた状況を確認する。

…あれは、パシフィスタ…？違う…本物だ…！バーソロミュー・くま!!

「何で…いや、それよりゾロがどうし…ツが…!?!」

「わっしを前によそ見してたら、あんた死ぬよオ」

私の腹にめり込んだ奴の脚が私を後方へ飛ばすが、王華が後ろに回って受け止めてくれた。



「ゲホ…ッ！ごめん…！」

「ううん、大丈夫。…来たねくま…！」

…？王華はくまの登場を知っていた…？と言う事は、原作でもこの状況はあつたつて事だ。

そして彼女から焦りを感じ取れないから大丈夫…だろう。

いや、待てよ…？ちよつと前にそういえば、くまにお願いして女ヶ島がどうか…。

「イリス！もうすぐレイリーが来る！見聞色でも分かるでしょ？だから黄猿はレイリーに任せて、私達はみんなの元へ急ごう！」

「…確かに、この気配はレイリー…！任せて大丈夫!？」

「冥王舐めちゃダメだよ！それにこのまま私達が黄猿と戦っても…勝てない。分かるでしょ?」

……うー！認めたくないけど、確かにその通りだ。

青キジが情に熱い男だったから、私はあの戦いに勝利したんだ。次やれば負ける…そしてそれは今回の対黄猿でも同じ事。

「それから、くまの攻撃は避けないで、受け止めて！」

「…王華が言うなら信じるけど…それで何か変わるの!？」

「勿論…ただ、当分嫁とは会えないからそれは覚悟しててね」

「え!？」

どういう事!?この先の展開が全く想像出来ないんだけど!!

…でも、今は従うしか…!私では目の前の相手に勝てないんだから…!

「後は任せたよ…!レイリー!!」

「ほう…私の接近に気が付くとは…中々強い気配を感じると思えばキミか。その変化…色々と気にはなるが…ここは任された。行きなさい」

この状態の私を見て一目で誰だか分かるって、その時点で見聞色を極めてるのが分かる…やっぱりこの人、凄く強いんだ…!

「!!…冥王レイリー…!あんたの出る幕かい」

ぎ、と私達と黄猿の間に割って入る様に剣を構えるレイリーを見て背を向けみんなの元へ駆け出す。

…!え…何これ、みんな、何処に行ったの…?

「ウウ…!!何だおれは…!!…仲間1人も…救えないっ…!!」

「…これ、は…」

ルフィの元へ辿り着けば、そこに居たのは地面に蹲るルフィとその前に立つ戦桃丸、そしてくまだけだった。私の見聞色に誰の気配も引つかからない…なんで…。

「イリス…!悪イ…!おれ…!!何も…っ!!」

「っ…王華！反撃しちやダメなの!!？」

「ダメ。…ルフィには悪いけど、このまま奴の攻撃に当たって。その前に…」

ダツと王華がくまへと駆け出して拳を打つ。だけどそれはくまが見切れる様わざと遅く放っており、簡単に躲かれていた。

そうして軽く打ち合い、その間に何やら話している様だった。…何だ？話についていけない…。

「イリス！私を戻して!!」

「…よく分かんないけど…本当にそれで上手く行くんだね!!!」

「うん…!」

王華が頷いたのを見て私も頷き、女王・倍加クイーンインクリースを解除した。

「…『逃げ足』のイリスだな。話は聞かせてもらった…それが望みなら答えよう」

「オイ…イリス!!逃げろ!!それかぶつ飛ばせ!!!」

「…それがどうも、反撃しちやダメみたい」

くまの手の平が私へ近付いてくる。

私はこんな状況だというのにその手の肉球を見て触り心地良さそうだな…とかどうでもいい事を考えた。状況が訳わからなさ過ぎて一種の現実逃避とも取れるだろうか。

「……………!!!」

ポン。

「な……」

おわわ!!何コレ:!?私、飛んでる!?!空飛んでる!!?

何か一瞬のうちに上空へ飛ばされて何処かに飛んで行ってるみたい。:抜け出す事は出来るけど:無理にする必要は無いだろう。王華がこれで良いと言ったんだから、私はそれを信じるしかないんだ。

:という事は何処に行ったか分からないみんなもこうして空の旅かな。当分会えな  
いって:まさかみんな別々の場所に飛んでるのかも:。

「……ふう」

空をそれなりの速度で飛んでるというのに衝撃が私に伝わってこない:結構快適だ。  
女王化も解除しておこう。まさかいきなり海に落とされたりはしないだろう:…:…と思  
いたい。

能力を解除して目を瞑る。とにかく急展開に急展開が重なって訳が分からない、ここ  
は一旦寝て王華を問い詰める所から始めるとしますか。

## 偉大なる航路（グランドライン） 女ヶ島編

## 117 『女好き、男子禁制の楽園（パラダイス）』

「……て事は、この先のエース救出の為に私は何処かへ飛ばされてると」  
「そゆこと」

夢の中でナミさん模型にペイントを重ねながら王華の話を聞いていた。

話の内容は勿論、私の体が空を飛ばされている理由についてだ。

「ルフィと同じ所に飛ばして貰ったから最高の島だよほんとに。そこでその島からエースを救出に行くって流れね。…だから早くこのペイント、もっとスキルアップしないとダメだよ！」

「へーい……因みにこのペイント、もしその “作戦” とやらで上手く出来なかつたら……」  
「そうだねー……エースの救出自体はこのペイントが無くても大丈夫だけど、その後を考えた時にこの方法で助けた方が良くんだよ。ルフィには申し訳ない事をするんだけどね」

「気になる……。教えてくれても良いと思うけど、王華が作戦内容よりもまずは実行できる腕を上げてから、と言うのでこうして頑張っているのだ。」

「でも最初に比べればかなりマシにはなってるんじゃない？伊達に夜中中ずっと無残な塗られ方をしたナミさんを見て泣いてた訳じゃないね」

「もう、確かにその通りだけど！…あつ、手が滑つ…、あー!!ごめんなさいナミさん…ツ!!」

む、難しい…！ごめんねナミさん…。

「それで、ナミさん達は無事なんだよね？」

「うん。あんまり詳しく教えちゃうと私達の流儀に反するから言えないけど、無事だよ」  
 流儀…ただ未来を知りたくないってだけなんだけどもね。知った上での冒険や夢なんてつまらないし、私は暗闇を手探りで進んでいく方が好きだ。どうしても光が必要になれば自分で照らしてみせる。

緊急時は別です。

「…よし」

ナミさん達が無事だと分かればやる気も出てくるってものだ。私は瞳に炎を宿して、目の前に現れたもう一人のナミさん模型に色を付けていくのであった。…あッ…手が滑つ。

\*\*\*

くまに飛ばされてから2日後——。

「——ぐえ！」

ベコン！と地面に叩きつけられた衝撃で目を覚ます。叩きつけられたと言ってもあんまり痛くはないし…私が落ちた跡が肉球型だからくまの能力で衝撃を軽減したんだろう。便利な能力だな…。

「ふげっ！」

私に続いてルフィも空から降ってきた。ルフィも私と同じで寝てたっぽいね。顔が寝起きだから分かる。

「…生きてた。どこだここ…」

「私も居るよ、ルフィ」

「えーイリス〜ツ!!良かった、じゃあみんなここに飛ばされたのか!?!」

「あー…それはどうも、違うみたい…」

変に希望を与えてしまって申し訳ないけど、とにかくみんなは別々の方向へ飛んで

いったとルフィには伝えた。

つまり、この島には居ないという事だ。王華からの受け売りだけだね。

「それに…見てこれ」

ガサゴソとポケットの中を漁つてある物を取り出しルフィに見せる。

「あ…：そうだ、ビブルカード!!それがあればまたみんなと会えるな!!」

バーで別れる時にレイリーに貰ったビブルカード…これがあればまた集まる事は出来る。あの時はレイリーを見つける為に貰った物だけ…状況が状況だからあの時以上には有り難みのある紙になつたね。

「うん。…ただ、ここがどこなのかさっぱり分かんないんだよね…：ジャングルっぽいけど…」

あと、くまの事とか…。

王華がくまと話して、わざわざ願いを聞き入れてルフィと同じこの場所に飛ばしてくれたって事は…：くまは味方なの、かな？

黄猿から仲間を全員逃してくれたって事だし…：次会ったら一つくらいは感謝の言葉でも送りつけてあげるとしよう。

「とにかく歩いてみる？いつかは海岸とかに出ると思うし」

「それしかねエな。それにしても腹減った…」



「…あ、これワライダケじゃない？」

懐かしいなあ、と地面からワライダケを引っこ抜いて傘の表面を眺める。私の住んだ無人島にもあつたキノコだけど、名前は後からサンジの持つてる食材図鑑を見て知つたんだよね。

「確か、こうして…」

かつては石を研いだり木の枝を尖らせたりしていたけれど、今では小太刀がある！  
じゃーん！

その小太刀で傘の表面だけを薄く切り取り、ルフィにはい、と渡した。

「ワライダケは傘の表面に微量の毒があつて、それが笑いを引き起こす原因だからね。こうすればただの美味しいキノコだよ」

「ホントか!? いやー、イリス結構頼りになるなー! もぐ…」

「ふっふっふ…無人島生活16年を舐めて貰っちゃ困るぞお兄さん」

仕留めた獣の血抜きなんかもそれなりに上手い自信がある。サンジ? あれはもう別格ね。上手過ぎて比べるのが恥ずかしいレベルだから。多分私の料理の腕を100倍に上げててもサンジには敵わないだろうなあ。そういう倍加は出来ないけども。

という訳で歩きながら食糧調達の時間だ。ルフィは採って直ぐ食べようとすから「それだけはやめて」と必死に止めながら進む。見た事無いキノコだって沢山あるんだ

から、あんまり何でもかんでも食べられちゃうと後の処理に困る。仮にアミウダケを食べられたらお仕舞いだ…。

「あ、崖だ」

「登る？迂回する？それとも、ここで一旦休憩しちゃう？」

巨大化させた手の平に一杯詰まったワライダケをルフィに見せながら言うと、彼は腹の虫を鳴らせて頷いた。さっきから腹減ったって言ってたもんね。それにこの崖かなり高いし、登ろうと思ったたら体力使うよ。

「フゴ…！」

「ん？」

背後から聞こえた鼻を鳴らす様な声に振り向けば、そこには巨大な猪が居た。

…おー、ラツキー。本日のメインドイツシユがあちらから来てくれるなんて！

「ゴムゴムのオオ！ギガントビストル巨人の銃！！」

「はやっ！」

私が動くよりも先にルフィが猪へ攻撃を仕掛け、一撃で沈めていた。何ならオーバーキルと言っても良い。猪潰れて無いだろうね…。

幸いにも猪の原型を残しつつ仕留めてくれたので、私自慢の血抜きを行った後に調理を開始した。

…と言っても水も何も無いジャングルの中…適当に火を起こして丸焼きにしただけ  
なんだけど。キノコも毒の処理を行なって同じように焼いて食べた。サンジの料理が  
恋しい…。

「で、崖だけどこれどうする？」

「登れば良いんじゃないか？確かに結構高エけどよ」

食べ終わつた後、私達はまた崖を見上げながら話す。

ルフィの言う通り、登るのが一番速いかな。それに高い所へ上がれば今よりずっと場  
所の把握がしやすくなるのは間違い無いし。

「じゃあ登るつてコトで、先に行つー」

「何者だ!!」

「え？」

「ん？」

登ろうと崖を掴んだ瞬間、ジャングルの中から声が響いた。声は1人…だけど足音は  
3人かな。

草木を掻き分けて現れた3人組の女の子達が、私とルフィを警戒して弓矢を向けてい  
る。…中央の金髪ちゃん好みだな。可愛い。それに人が居るつて事は一応ここは無入

島ではないと証明されたね。まさか私達と同じでただの遭難者って事は無いだろうし。

「島では見ない顔だ、侵入者か!？」

「うーん、でもこの島に侵入出来るとは思えないわ」

「私もそう思うの巻」ね」

…それにしても、なんて個性的なんだ。

中央の金髪ちゃん、の巻、とか変な喋り方をしてるゴツイ体格の人は体にヘビを巻いてるし、最後の1人は巨人族とまでは行かなくても大きい体格の持ち主だ。

「何だお前ら! ここが何処か知ってるのか? 教えてくれ!」

「惚けるな! ここが何処か分からずに来る人間が居るか!!」

「本当に分からないんだよ、私達もさつき飛ばされてきたばかりで…」

「飛ばされる? それは相当な腕力の人なのね」

天然かこの大きい女性は! …いやそりやそうか、私の説明が足りなかった。

「飛ばされるっていうのは、悪魔の実の能力でって事で…」

「悪魔の実? 何だそれは」

おー…う。そう来たか…。

確か悪魔の実って貴重で、存在自体を知らない人も居るんだったよね…、最近はその人居なかったからすっかり忘れてた。

「ここは風の帯カームベルトに囲まれた女ケ島だ……！何か目的があつて侵入したに違いない！」  
 「とは言つてもね……知らないトコだし」

女ケ島つて名前しか知らないから、どんな島かつてのも分らないんだよね。その辺は王華にも聞いてないし。

「男子禁制の島、女ケ島だ！聞いた事はあるだろう」

「え」

「によ……女ケ島つて……え、もしかして、女の島つて書くの……？……く、くうう……！！」

「あのさ……」

……き、

「……因みに、村とか、ある？」

「〃国があるの巻〃ね」

「女の子、だけ？」

「そうよ」

き、来た………！！！！楽園じゃん！！え、私女だから入国していいかな！！いいよね

！！うひょー！！！！王華が言つてた最高の島つてこういう意味だったのか！！

「私、女！入国、望む！！」

「どうしてそんなに変な喋り方なんだ……」

だって女の子だけの国って…！うひよひよ！！

…それに、確かに欲望もあるけれど、もしかしたらこの島に美咲達が転生している可能性だってある訳だ。女だけなら確率も高い…と思ってる。

「でもマーガレット、入国自体は別に良いんじゃない？そもそもこの島には男は入って来られないし…」

「…そもそも男を見た事が無いの巻」ね

「え？お前ら男見た事ねエのか？」

ルフィの言葉に3人は頷いた。…男子禁制って、禁制の度合いが私が想像してたより遥かに高いのかもしれない。

これはルフィにこっそりと自分が男だって言わないように言つとかないと…。

「じゃあおれで初めてだな！男を見んのはよ！！」

「え…」

「あ」

早ー早ー早ー早ー！！！！フラグ建てたのは私かも知れないけど…でも、でも早いよ！！ビーチフラッグしなくていいから！！

「今…何と？」

「い、いとこ！従兄弟を見るのは初めてだねって事！ルフィちゃんにはさっきの男がい

とくに聞こえたんだよね!!ほら、ルフィちゃんと私って実はいとこだから:!!」

「何言つてんだ、ルフィちゃんって気持ち悪い:おれは男だぞ!!」

!!!

バツ!と3人はバラけて周りに飛び散り、ギリギリと弦を引いた。

:ルフィ:流れて察して欲しかった:でもそれをルフィに求めるのも確かに酷だった:!!私が悪いか:いやそれも腑に落ちないけど!?

弓矢の先端は私にも向いており、ルフィのせいで私まで男疑惑が掛けられているみた  
いだった。どう見たって女でしょ!見てよこのプリティフェイス!!

「男だと:!?何故男がこの島に居るのだ!!」

「だからさつきから言つてんだろ、おれ達は空を飛んで:」

「真面目に答えろ!!」

「わっ!」

放たれた矢を体を逸らして躲し、躲したルフィはその矢が砕いた岩を見てギョツとする。

:あの矢、覇気を纏っていたね。この人達:まさか覇気使い:!?

「ま、待つて!本当なんだつて!!本当に何にも知らないの私達!この島が男子禁制つて  
事も知らなかったし、カイムベルト 風の帯に囲まれてるつて事も知らなかった!もし出て行けつてい

うのなら大人しく出て行くから攻撃するのはやめて欲しい……！私もルフィもあなた達を傷付ける気はないから……！あ、でも船を1隻貰えると凄く助かるかな。あと、私は女だから!!」

「……もしその言葉に偽りが無かったとしても、私からどうぞと船を与える事は出来ない」「良いじゃねエか船くらい。ちっさいんで良いからよ、出来れば航海士も」

「〃注文が増えてくの巻〃ね……」

そりゃー私達が船に乗り込んで出発した所で漂流するのがオチだからね。特に私達はナミさんのお陰で難易度ヌルヌル航海をしてきたから……今更そんな知識皆無で海へは出られないというか……。

「私達の国、アマゾン・リリーにある船は〃遊蛇ユダ〃という獰猛な毒海へびが引く1隻しか無いのだ。それは海王類すらも近寄るのを恐れるから、海へ出る時も遊蛇ユダならば快適に出航出来るだろうが……」

「じゃあ、申し訳ないんだけどその遊蛇ユダの船に乗せてよ。また出て行く時についてで良いからさ」

私の言葉にも3人は難しい表情を変えず、ただ首を振るのみ。

「その船の出航を管理しておられるのが、我が国の皇帝なのだ」

……おう……なるほど。つまり……男子禁制のルールを自ら引張ってる人が唯一の船を



管理しているから、ルフィの存在を教えるしか方法が無いというわけか。そしてそんな人がルフィを船に乗せるわけがない…と。

ルフィは女です！って言っても肝心のルフィが口を滑らせそうだし。

「何とかその、皇帝の人に口添えして貰うことって出来ない？ 私達本当に危害を与えるつもりはないから…。ほら、小太刀も外すよ」

腰に付けてある小太刀を外し足元に置く。

万が一皇帝の機嫌を損ねてこの楽園と敵対する事になっちゃったら泣くよ私は。どうせなら円満に円滑にうひよひよパラダイスをしたいもん!!

「嘘を言ってる様には見えないの巻」よ」

「マーガレット、何とか蛇姫様を説得出来ないの〜?」

「ううん…」

下心満載の交渉だけど、少しずつ信用してもらえる様になってきたかな…。

「蛇姫様って?」

「ああ、この国の皇帝だ。またの名を海賊 “女帝”<sup>じよてい</sup> ボア・ハンコック。この国は彼女と

2人の妹君によって固く守られている」

「そのハンモックって奴も海賊なのか!」

「ハンコックね。お世話になるんだから無礼はダメだよ」

…いやでも、もし可愛かったら…うん、嫁にするしかない。女帝？知りませんエ…  
既に一国の姫君を嫁にしてるんだから今更なんだよねエ…。

でも今は何も知らない女帝より、目の前のマーガレットって呼ばれてる女の子だよ。  
嫁にしたい…いや、する。

「で、さっきのマーガレットの反応を見るに…蛇姫様への説得は厳しいの？」

「…蛇姫様は国中の誰もが憧れる女性。強くて気高く、世界一美しい。…だが、掟に関して最も厳しいのも蛇姫様だ。男の入国を許して貰えるとは…すまないが…」

ふうむ…マーガレットが蛇姫様なら話は早そうなのに…。

この際海を凍らせて歩いて進もうかな、でも**カインベルト**の海王類に囲まれて勝てると思えないんだよね…。女王化クイーンをするにしても時間制限があるんだし。

「…私達も、お前達が悪い者では無いという事は分かった。…出来る事ならば蛇姫様へ願いを届け、叶えてあげたいと思う。だが…掟を破れば罰を受けるのは私達なんだ。…これ以上は情が移る…！」

そう言つて手に持つ矢を再び私達に向けてきた3人を前に、私とルフィは一瞬目をパチクリさせた後、視線を交わしてニヤリと不適に笑った。

「ごめんねマーガレット、仲良く手を取り合う事が難しいのなら…この国は私が貰う事にしたから」

「は!？」

「な、何なの!？」

「と…」とんでもない事を言い出したの巻”ね…!」

お互い海賊で、意見が噛み合わないならやる事は一つだ。前世ならば刑務所行きの狂気の沙汰も、今世の海賊イリスには関係の無い話…思い通りに事が進まないなら無理矢理言う事聞かす他無いじゃんね!

「これでマーガレット達の罰にはならないでしょ? 私達が勝手にこの国制圧するから、捕まえたのなら適当に追いかけてきてよ。じゃあね!」

軽く手を振ってさつき行き止まった崖をジャンプして登り始めた。かなり高いから一度の跳躍では上まで登りきれないし、指を崖にめり込ませながら上がるしかない。…おわつ、下から矢が飛んできた!

制圧と言っても、勿論その女帝と話してからだ。もしその人が話の分かる人なら良し…ルフィを見て問答無用で攻撃を仕掛けてくる様なら…その時は一暴れさせて貰うよ!

# 118 『女好き、嫁候補に喧嘩を売る』

「よつとー！」

「ほっ」

マーガレット達の弓を避けながら、私とルフィは崖を登り切ってその先の景色を見る。

…というかマーガレット達、弓矢当てる気あつたのかな？わざと外してた様に思えたけど…。やっぱり優しいと思う。

「なかなか壮観だね、これがマーガレットの言つてた国？」

私達が登ってきた崖にぐるりと囲まれた大きな穴の中にあるその国は、さながら要塞の様だ。視力倍加で下にある町並みを確認してみれば…うん、やっぱり女の子しか居ない。飛び込みたい。

「偉いやつってどこに居んだ？…お、あそこ偉そうだな」

「偉そうって何…ってホントに偉そうだった！」

ドン、と一際大きく、他の建物とは違い城の様な外観をした高い建物を指差すルフィに同意する。

この国は皇帝が治めてるらしいから、きっとあの建物に女帝ボア・ハンコックとやらが居るのだろう。

「…どうする？出来れば穩便に話をつけたいんだけど」

「行ってみりゃ分かるんじゃないか？」

「だよね…行くしかないもんね」

正面から行くにしても潜入するにしても、あの城に入るのは至難の技だ。そりゃ強引に行けばやり様は幾らでもあるけど。

崖にくっついて建ってるからあの城の真上から飛び降りれば潜入自体は出来そうだけど、どうしたものか…。

「じゃ、行ってくる」

「ちよ…ルフィ！」

きちんと話し合う事も無く城の上に位置する崖まで走るルフィを追って私も走った。

そりゃ分かつてはいたけどね？ルフィが話し合った上での作戦をきちんとこなさない事なんてずっと前から分かつてたけど…!!

「よっ」

「もう…！」

そして更に崖から城へと飛び降りたので、もうどうにでもなれと飛び降りた。潜入

ルートは確定か……ここから正面切つて堂々と入場出来る様になる未来が想像つかない……なんてかなりの距離を落ちながら私は思う。

「つと……うわ!」

「どわー! 脆かった!」

華麗に天守閣の屋根へ着地を決めたと思えば、思つてたよりも脆くて私とルフィは中へと落ちてしまった。シャボンディでも似たような事があつたばかりだと言うのにまたコレか! 潜入つて言つた側から厄介事を引き起こしそうな事しちやつたし……頼む……! 落ちた先の部屋に誰も居ないで下さい!! 逃げる時間を下さい!!

「ぶっ……水……!? 違う、お湯か……っ」

バシャン! と落ちた先はお湯の中で……足は付くから風呂場だと分かる。

湯気がそこら中に立ち込めていて……んんんん!!?! どえらい美人が居るんだけどオ!!?

「あわわわ……る、ルフィ……う、美しすぎる女性がそこに……!!」

「嫁にすりやいいいやねエか。……ん? おめーその背中……おれどつかで……」

背中? ……ああ、振り向いた顔にしか目が行つて無かつた。確かに背中に何かマークがあるね。オシヤレ?

「見たな……!!」

怒気を多分に含んだ声で、その美女は背中を隠す様にしやがみ込んだ。

「あ、ご、ごめん！裸を見ちゃった事は謝る…けど、湯気でよく見えないしセーフって事で！あとその背中タトウも、意味は分かんないけどオシヤレで良いんじゃないかな！うん！」

「……ッ!!」

私の言葉に目をひん剥かせた彼女から凄まじい殺気が放たれた。やつぱり裸を見られて凄く怒ってるみたいだ、ここは誠心誠意土下座で許してもらおうとしよう。ナミさんに見られたら私が下手に出るなって怒られそうだけど。

「姉様!!」

「姉様!!」  
「姉様!!」

浴室の扉を蹴破る勢いで入ってきたのは、また新たな女性2人だった。あねさま?どちらにしても、この人達は目の前のどえらい美人の妹って事かな?体大きいね。

「誰だ!?!子供と……男!?!」

「何故男がこの国に!?!姉様、ローブを……一体何が起きたの!?!」

「……背中を……見られた……!!」

……背中?あのタトウーか……?

……もしかして、私は言っではいけない何かを言ってしまったんじゃないだろうか。だとしたら冗談ではなく、きちんと謝らなければ……!

美人さんの言葉を聞いた2人は目を見開いて青ざめた顔をし、私とルフィを見下ろす。

「……では、死んで貰う他ないわね」

「え!? 何でだよ、背中を見たくらいで……! でも何だかな、どつかで見た事ある様な」

「……そなたらが見た背中のは、わらわ達が例え死んでも見られたくないものじゃ……!!」

コレ? どうしてマークだとか、タトウーだとかで表現しないんだろう。

……いや、今はどうでもいいか。とにかく私は死んでも見られたくないものをオシヤレだなんだと侮辱したって事だ。

「……ごめんなさい! 私……そういうものだとは知らずに失礼な事……!!」

「……よい、見たもの全て墓場へ持ってゆけば水に流してやろう! メロメロ甘風<sup>メロウ</sup>!」

「……っ!」

は、ハート型の光線!? あぶな……咄嗟に真横へ飛んで無かったら当たってた……! 当たったらどうなるのか知らないけど、墓まで持って行けと言うセリフからとんでもない効果を発揮するのは間違いないだろうし……!

「ふん……避けるでない、小娘」

……私は今、30倍の速度で光線を避けた。だと言うのに目の前の美女は私の動きを目



で追っていた。

「どうやら、ただの美女じゃ無さそうだね。」

「とにかく逃げるぞイリス！戦う理由がねエ！」

「逃げるのには賛成だけどね、そもそもここに来るハメになったのは誰のせいなのか今一度自分の胸に手を当てて考えてくれる!!」

「逃がさぬ!!」

「そうは言われても逃げさせて貰いますよつと！出でよ分身！」

「ビュマインクリース  
神背・倍加！突撃——」

「こんな雑な囷ある!?!」

「私」を呼び出して美女に突撃する指示を出し、窓から飛び降りた。…つてうわ、私」が速攻でさつききの光線で石にされてる…?!あの能力はまずい、当たれば1発で拘束されてしまう…!!

「逃がさぬと言ったであろう！銃ピストルキス!!」

「ツぐ…!?!」

くそー！「私」は私の分身だから美女相手だと囷にもならないって事か!!

彼女が出した2発のハート型銃弾に射抜かれた私とルフィは、空中であった為に避ける事も叶わず直撃し地面へと落ちた。私のアーマーを貫通して、ルフィにダメージを負

わせている所を見るにどうやら覇気を纏った攻撃であるのは間違いなさそうだ。

「侵入者じゃ!! その小娘と男を取り抑えよ、九蛇海賊団!!」

「は、はい!…男? 何故男が!…」

直ぐに落ちた私達の元へ人が集まってくる。しかも数が尋常じゃない、あの美人の命令でここまでの人を動かせるって事は…彼女が“蛇姫”…皇帝の可能性が高い、というかそうなんだろう。そうか…蛇姫で石…モチーフはメドューサだなコレ…!

「くそ、全員女か!…やりづれエなア」

「ん? 珍しいね、ルファイがそんな事言うなんて」

「イリスが居なきや何も気にしねエよ」

オイ。

でもまあ、どうするか…!

私は別に女だろうと男だろうと関係ないけど、ここで抵抗して騒ぎを起こせば船を借りる道は完全に途絶えるだろうし…。

なら…ここは敢えて捕まるのもアリじゃないかな?

「ルファイ、ここは大人しく捕まろう。それでこつちの言い分を聞いてくれるならよし、聞く耳持たないなら暴れる。それでいいでしょ」

「任せる!」

「じゃ、そういう事だから手は出さないでね」

こういう事になると本当に流れに身を任せるよねうちの船長は。後先考えないとい  
うか…、まあ、真つ直ぐやるべき事へ突き進むっていう長所で全てを帳消しにしてるか  
ら良いけどさ！

\*\*\*

そんな感じで大人しく九蛇海賊団とやらに身柄を拘束された私とルフィは、周りをぐ  
るりと観客席に囲まれたスタジアムへと連れてこられていた。

体に巻き付いてる蛇は中々頑丈で取れそうにない…ロープじゃあるまいし何この強  
度。

この闘技台と観客席の間には溝があり、その中はここからじゃ良く見えなかった。

「見てルフィ！客席も女の人で一杯…ここは楽園だよ!!」

「分かったから落ち着けよ…」

さっきから私はこんなテンションである為、ルフィもやや呆れ気味にそう言った。ル

「フィには分からないかなー！ここがいかにも素晴らしい空間かって事が！」

「いい？ルフィにも分かりやすく例えるなら、周りにとーっつても美味しそうな肉が沢山あるって状況なの、今の私は！」

「何言つてんだ、あいつらは肉じゃなくて女だろ。流星に人間は食わねエよ」

例えつて言ったでしょー!?

「ーっでは聞くが小娘、そして男よ、そなたら何の目的でどうやってこの島へ入った！」

闘技台の周りには観客席があるが、それらとは違い闘技台から伸びる階段を登った先にもまるでVIP席の様な豪華な観戦席があった。

その舞台の椅子に、足を組んで座っているメロメロの美人がそう問いかけて来た。名前何だっけか…確かマーガレットが1回だけ言つてたよね。蛇姫様で…えーっと、ハンコック？

「目的なんて無いんだけど…。あ、強いて言うならここに居る女性みんな私の嫁にしてもいいかな？」

「貴様！姉様の前で何たる態度!!」

「何なら周りの女の人みんな嫁に来る？というかきてー!」

ピキ、と蛇姫様の額に青筋が浮かび上がる。なるほど、怒った顔まで美しいと。

「…そのような態度で誤魔化されはせぬ、何が狙いじゃ」

「だから嫁——」

「狙いつつ——なら船をくれ！」

あ、そういうえば船の交渉をしなければいけないんだった。まさかルフィに気付かされるとは…楽園に浮かれ過ぎてるのかもしれない。

「とにかくおれ達は早くここを出て行きてエ場所があんだよ！お前が一番偉いんなら頼むよ！海へ出たいんだ！」

ルフィの言葉遣いに観客が騒がしくなった。

女の私が働いた無礼ではそんなに騒がなかった所を見るに、やっぱり男に対する当たりが強いみたいだね。

…まあ、今までずっと男子禁制だった…というか今もそうなんだから当たり前なのかもしれないけど。

「生きてここを出られると思うな、*“死”*は免れられぬ…!!」

「だつてさ、無理そうだよルフィ、とりあえずマーガレットだけでも攫つて船奪つて海出る。」

「バカだなアイリス、おれ達航海術持つてねエじゃねエか」

もうマーガレットを攫うとか言つてるのに関しては完全スルーを決め込んだルフィ

がそう返した。

だけど相手が本気で私達の話聞く耳を持たないと分かった以上は無理矢理にでも海へ出ないことには始まらないと思うんだけどね。王華のいうエース奪還がどのタイミングで始まるのかも分かんないし。

「お待ち下さい！蛇姫様!!」

「あ」

ばつ、と客席から闘技台に飛び降りて来たのは、噂をすれば何とやら…まさかのマーガレットだった。

彼女の額には汗が見え、よっぽど緊張しているのが一目で分かる。

マーガレットが居た場所を見ればさつきマーガレットと一緒にいた2人が慌ててマーガレットに戻って来るよう叫んでいた。

「…っ、こ、この者達は恐らく、ウソを言える様な人物ではありません！言っている事は全て本心…！この国に害を為す様な者とはとても思えません!!…あ、いえ、若干1名微妙な所ではありますが…」

「ん？」

私？害なんて及ぼさないよ！全員私の嫁になって貰うだけだし。

…っていうか、庇って貰って凄く嬉しいんだけどマーガレットは大丈夫なのかな…、こ

の国の最高権力者に意見出来るだけの立場なら大丈夫かもしれないけど。

「護国の戦士か」

「マーガレットと言います」

「ちよ……」

初対面レベルじゃん……！何でそんな、見ず知らずの私達の為にここまで……。やっぱり嫁にしよう、マーガレットは内面も凄く美しい様だし。

「男子禁制のこの国に侵入した時点で男の『死罪』は確定、小娘もその仲間ならば同罪じゃ……何故庇う？」

「……負い目を感じています……！その2人に情けをかけ、この国の情報を与えたのは……私です」

「!!……確かにそうかもしれないけど、その言い方は自分の非しか伝わらない……！どこまで正直者なの……マーガレット……！」

「へ、蛇姫様！ちよ……『ちよつと待つて下さいの巻』!!」

「そ、そうです！それならば同じく行動を共にしていた私達にも責任があります！」

「スイトピー……！アフエランドラ!!」

あの時の2人もマーガレットに続いて闘技台まで来てそう言った。

そんな3人の謝罪の声に、遂に蛇姫様はゆっくりとした足取りで闘技台まで階段を降

りて歩いてくる。

「待って下さい、蛇姫様！男の入国を阻止できなかった罪は私1人で!!」

マーガレットはそれでも2人を庇う様に前に出て頭を下げ続けた。あくまでも責任は自分1人で負うつもりなんだろう。

「もうよい……面を上げよ、正直なマーガレット……」

「……」

蛇姫様は頭を下げるマーガレットの顎を人差し指でクイツと持ち上げ……

「メロメロ……甘風!!」

「ッ……!!」

マーガレットは……そしてスイトピー、アフエランドラも石となってしまった。

これは……ヒュウマ神背を行動不能にしてた技だ……。

「……、これは、何の罰?」

「それはそなたらが1番良く知っている事じゃ……この国への侵入を許したのも罪、そしてそうなる過程も罪なのじゃ。……バキュラを闘技台へ!!」

「……そっか、男子禁制、それがこの国の鉄の掟だっけ。じゃあ仕方がないね」

本場に仕方がない。あー、仕方がないねこれは。

「そしてそなたらも同じく罪人……ここは戦士の国アマゾン・リリー、強い者こそ美しい



∴。精一杯戦つて散るがよい、わらわ達が見届けてやる」

そう言つて蛇姫様は元いた場所まで戻り、その後闘技台の足場の一部が開いて中から檻が姿を見せる。その檻の中からは巨大な黒豹が出てきて私達を見て涎を垂らし舌舐めずりをしていた。

「その黒豹の名はバキュラ。この国の皇帝に代々処刑人として仕える肉食獣∴処刑後は人の骨一本も残らぬ」

「処刑人ね∴」

シウル∴と私とルフィを縛っていたヘビ達もバキュラを見て一目散に逃げていった。別に抜け出そうと思えばいつでも出来たけど、これであるヘビ達を傷付けずに済んだつて訳だ。

「なアオイ!こいつらどうなるんだよ!元に戻るのか!」

「蛇姫様に口答えるんじゃないわよ!!」

「やつちやえバキュラ!!」

「弱いクセに生意気な男!!」

「バキュラ!!」

「∴∴∴!!」

わーきゃーと騒ぐ人達を見てルフィの顔に少し怒りの色が浮かび上がる。

…ごめんね蛇姫様、あなたは確かに美人で…嫁にしたいとは思ってる。

だけど…マーガレットも私の嫁にすると決めたんだ。それなのに手を出したって事は…分かってるんだらうね。

「ガルルルルアア!!!」

「30倍灰……、ん」

飛び掛かって来たバキュラを蹴り飛ばしてやろうとした時、ルファイが私を腕で制した。

…ああ、そうだね、怒ってるのは私だけじゃ無いんだった。

ルファイはコキ、と首を回して右腕を引き…、

「ギャブツ!!!」

「……!!!」

「ゴムゴムの銃<sup>ピストル</sup>でバキュラの顔面を殴り飛ばし、遠くの客席まで派手にぶつ飛ばした。どう見たって1発KOだ、起き上がってはこれまい。

「…どうかしてるぞお前ら…! あんな女に、仲間が石に変えられてんに…!! 何でお前らへらへら笑ってんだよ!!」

「!? 野蛮人が私達に怒鳴ってる!!」

「信じられない、凶暴な生き物!!」

「3人は可哀想だけど、蛇姫様のやる事に間違いは無いのよ!! 国の規律を破ったそのコ達が悪いのよ!!」

なるほど、これは筋金入りだ。

余程この蛇姫様は信頼されていると見えるね。

「わらわは…何をしようと許される…! 何故なら、そうよわらわが…美しいから!」

「キャ〜〜♡ 蛇姫様あ〜♡」

「ふふ…そなたらもそうであらう…?」

私とルフィを見て妖艶な笑みを浮かべる蛇姫様は、確かに言うだけの美しさを備えているのは間違いない。

絶世の美女と言っても良いだろう、かなり完成された容姿…体格、地位、富、名声…本当に全てが揃っているんじゃないだろうか。

ただどね、蛇姫様…あなたは1つ…大きな誤解をしているよ。

「あなたは美しいし、完成されてるよ。…だけど、それだけだよね」

「何…?」

「私はハーレム女王を本気で目指してるの。…たかが美しいからってだけで、私の嫁候補を石に変えてくれたのが許される筈もない…。ここは闘技台でしょ? だったら私の前まで降りて来てよ…拳で語って、あなたを嫁にしてからマーガレット達を助けてみせ

る。「仕方ない」よね。嫁に危害を加えられたんだから暴れたってさ」

ぱし、と手の平を拳で殴って挑発した。

…戦闘になって彼女に攻撃出来るかと問われれば、余裕で出来る。嫁を助ける為なら私は何だつてするからね。そりゃあ傷は残らない様にしますけど！

「ツ……ここまで侮辱されたのは久しぶりじゃ……ツ！マリーゴールド、サンダーソニア！そなたらは男をやれ、仮にもバキユラを一撃で仕留める男じゃ、油断するでない。娘の相手はわらわがする」

「姉様が直々に!？」

タン、と軽快に跳んで私の前に降り立った蛇姫が乱れた髪を後ろへ流す。…う、バカ！私さつき啖呵切ったばかりなんだから見惚れるな！

…いやでも美人だもん！美しいもん!!

マリーゴールドとサンダーソニアと呼ばれた2人はルフイの前へと立つ。

「蛇姫様を侮辱した女と男に極刑を!!」

「死刑!!」

「死刑!!」

「「死刑!死刑!!」」

「…あらら、これは凄い大歓声」

私とルフィへ向けられた数え切れない程の悪意を、私はそれでも笑って流してやった。

ちよつと当初と予定は狂っちゃったけど…仕方ないよね。嫁の為なら…予定変更くらい幾らでもしてあげるよ!!

## 119 『女好き、女王と女帝』

石化してしまったマーガレット達を闘技台の外へと避難させ、私は蛇姫…女帝と向き合う。

ルフィの方は……、うわ、ルフィの相手も2人とも能力者なんだ……！へびに変化しているから、へびへびの実つて所だろうか。

「言っておくが、わらわは童だとして手は抜かぬぞ」

「大丈夫、ここに子供なんて居ないから」

女帝の椅子となっていた大蛇はその女帝をいつでも援護できる様に周りを這っていた。

……うーむ、最初はルフィの方と違って1対1だからまだマシかと思つてたけど、この人…対峙したら分かる、物凄く強い人だ。

「30倍じゃ厳しいかな」

「何をぶつぶつと…、わらわ直々に処刑するなど初めての事、光栄に思うが良い」  
「そうだね、あなたみたいな綺麗な人を嫁に出来て光栄だよ。どうもありがとう」

「……、その戯言を受ける気など毛頭無いが、わらわは元より誰のモノになる気もないッ

!!

っ…と！ビックリした…急に蹴りが飛んできた…!!

何とかそれは避けたが、その時私の背後にあったバキキュラの檻が蹴りの犠牲となる。

「…えっ」

蹴りが当たった檻が石化してる…!?石になるのはあのメロメロなんたらだけじゃないんだ…!

石化は何の耐性を倍加したって意味ないよね…、石化耐性なんてそもそもないし!

「ほっ…」

後ろへと跳んで距離を取り、床を踏みつけて瓦礫を生み出す。接近戦は危険過ぎる…遠距離のメロメロなんたらは気を付けてれば当たらない程のスピードだから問題ない、あの脚技が厄介なんだ。

「それそれっ!」

瓦礫を連続で蹴り飛ばして女帝を狙う。どこへ避けても当たるように頭上、左右にも飛ばしてある、避けようはない!

「何じゃコレは、子供の…っこ遊びに付き合っているヒマなど無い。虜スレイヴァーの矢!」

「何ソレ!」

私が蹴り飛ばした瓦礫は彼女が生み出した幾本ものハートの矢に射抜かれて砕け散

る。

瓦礫の総数よりもハートの矢が多かった為、余り球は全て私へと跳んできたが横へ跳んで何とか躲した。

小太刀は使えないな、流石に刀傷を残すのは可哀想だし。

どうにかして直接ぶん殴るか：拘束するしか無さそうだね。

「仕方ない…行け！」

「なんか“私”、ずつとこんな使われ方してる気がするんだけど！」

神背ヒュイマで“私”を生み出して女帝へ特攻させる。私もその後ろについて走り、これで彼女がビームを放とうが矢を放とうが私本人が石になる事は無いって寸法だ。

「厄介な能力じゃ…！サロメ！」

「蛇相手に遠慮なんかするか！30倍灰さんじゅうばいばい」

去羅波さらば いちもんじ・一文字!!」

後ろから飛びついて来た蛇に斬撃を喰らわせて動きを止める。だけどこの蛇、私の攻撃を喰らってもそんなにダメージを負ってない様に見えるね…。ペットでこの強さってどうなってるの？

パフォーム・フェムル  
「芳香脚！」

「うぐ…！速…っ!？」



…！しまった…！ “私” が石に…！

と言う事は…！私本人が特攻しても同じ未来を辿るだけか…。

「うわアああ!!？」

「ルファイ！」

2人の相手をしていたルファイが私の近くへと吹き飛ばされてきた。

横目で戦闘を見てはいたけど、あのへびに変身した2人もマーガレット達と同じで覇気を使えるようだ。そして恐らく…目の前のこの人も。

「フ…口程にも無いとはこの事じゃ、わらわが出るまでも無かったやも知れぬ。ソニア、マリー…これ以上は時間の無駄じゃ、一刻も早く終わらせよ」

「じゃあ、遊びはこの辺にして…」

「……!!」

「受刑者達に “絶望” と “死” を与えましょ…」

巨大な大蛇の体に変身しているサンダーソニアが、その長太い尾で石になったマーガレットを巻き持ち上げた。

「私とルファイの処刑じゃ無かったの？マーガレットは関係無いじゃん！」

「このコには悪いけど、それがあなた達にとつての罰になるから」

くそ…これは力を出し惜しみしてる場合じゃ無い…！後先考えるよりまずはマーガ

レットを助けないと！

「ふざけんな！おれ達とお前らとの決闘だろ!!」

「決闘だと思ってるのはあなただけ。そっちのお嬢ちゃんですらこれが公開処刑だと理解しているというのに……。大人しく見てらっしゃい」

「オイ！やめろ!!あ、バカ……。そいつをもっと大事に扱えよ!!どうなっても知らねエぞ!!」

私はサロメに、ルフィはマリーゴールドに巻きつかれて身動きが取れなくなった。

次第にルフィの顔には焦りが生まれる。：私をチラチラと見てくるのは何なの？

「どうなると言うのかしら？そこで大人しく見てらっしゃい……。姉様の受けた心のキズはこんな物ではないわ!!」

「バカかお前！やめろよ！冗談でもそんな事すんな!!」

「いやね、下品な言葉……。行くわよ、……。3……。2……。1!!」

カウントダウンが始まり、サンダーソニアがマーガレットを地面へ叩き付けようと尾を勢いよく落とし……、

「やめろつつつてんだろアア!!!」

「……あ」

「私が女王<sup>クイーン</sup>化を発動したと同時に、ルフィの内で眠る『霸王色の覇氣』が爆発した。その気迫に押されてサンダーソニアもマリーゴールドも、そして女帝さえも目を見開かせる。」

観客席に居た人達の中でも何人か倒れる者が現れ、それを起こした張本人のルフィは、サンダーソニアの力が抜けてそつと地面に置かれたマーガレットを見て安心した様にため息をついた。

「何だ、言う事聞いてくれたのか、物分かりいいなアお前ら！そりやそうだ、そんな事したらイリスがキレ……げエ!?変身してんじやねエか!!」

「当たり前でしょ、ルフィが代わりに助けてくれたから良かったものの、そうじゃなければ私がサロメを引き千切つても助けてたよ」

「……し、シヤ……」

私に巻き付いていたサロメは、私の風貌の変化……そしてその内から発せられるオーラがさつきままでとはレベルの違う物となっている事に気付いて逃げるように女帝の後ろへと移動する。

「……わらわと同じ霸王色……!?ただの小僧ではないのか……あやつ……!!」

「同じ?あなたも霸王色使えるんだ」

「……そなたもまた随分風貌が変わった様じゃな。……ッ!?」

ほんの少し霸王色を外へ放出してやれば、女帝は私を信じられないものを見る様な目で見てきた。

「まさか…そなたもか…!？」

「霸王色が使えるだけで何をそこまで驚いてるの？驚くのは…ここからだよ！ルフィー！そつちも早いこと終わらせて！私は長期戦無理だから合わせてね！」

「くっそ〜！お前らがもつと早くにおれの言う事聞かねエからだぞ！いいかお前ら、良く覚えとけよ…イリスを怒らせんな！」

何で私限定？

…前から思ってたけど、ルフィーって私の怒りに敏感じゃない？そこだけなんでそんなに気にしてるんだろ、ルフィーらしくないんだよね。

「言っておくけど、私は強いよ」

「何を言う、この不届きも…ツ…いぐ、!？」

女帝が目で追えない速度で背後へ回り込み、首筋を掴んで地面に叩きつける。よし、捕獲つと。完全に不意打ちみたいなものだったから良かったけど…正面切って戦ってたらこの状態でも面倒な相手だったに違いない。

「え…蛇姫様…?」

「き、きつと敵を油断させる為の演技よ！」

「そうね！確かにあの体勢なら、いつでも『ゴルゴンの目』を解放出来るわ！」

ゴルゴンの目？…そりゃこの人の技は石化系だけど、それとゴルゴンに何か関係があるの？…まさか、背中のあのマークが何かしら切り札の様な物の発動媒体…!?なら、背中の服を破ってサンダーソニアとマリーゴールドに見せれば…！

『そなたらが見た背中のは、わらわ達が例え… 死んでも見られたくないものじゃ…』

「……、」

……死んでも、か。

ふう…、駄目だね、私ともあろう者が…1度ならず2度までも美女の心に傷を残す所だった。

ただでさえオシヤレだなんだと言ってしまったんだから、これ以上傷付ければ私はハーレム女王になんかなれやしない。

「…やめ、私の勝ちね。船もいらなから1日だけこの国に滞在させてよ」

「…ツ、何故、トドメを刺さぬ…！この様な屈辱…わらわは受けとらない…!!」

「そうは言っても、見てよあれ」

くい、と顎でルフィ達を指せば、もう決着はついていた。

何故か服が燃えているサンダーソニアが、うつ伏せの状態で闘技台から観客席までの橋となっていたのだ。

観客席を掴む腕を離せばその下は剣の山、離すことなど出来る筈もなく…そんなサンダーソニアの背中にルフィが飛び付いていたのだ。

マリーゴールドはルフィを剥がす事が出来ない。ただ見ているだけだ。それもその筈…背中に張り付いたルフィの体が…彼女の背中にあるマークを隠しているのだから。

「私もルフィも、あなた達を殺したくない。あなた達が私達を殺したくてもね。で、どうする？まだやるの？」

「……………つ、何故、そなたらがわらわ達を守ろうとするのじゃ…！」

「殺したくないからだって言ってるじゃん。美人は世界の宝だよ、何よりも大事にすべきだと思っ！」

私の言葉には納得していないようだったが、女帝はすぐに体から力を抜いた。

「じゃ、反撃してよ」

「…わらわの…：…ぐ、…負け、じゃ、そなたもさつきそう言ったであろう…！」

「そうだよ、あなたの負けだよ。でもそれを国民に伝えたらまずくない？演技で私が負けておくから、私を倒して国民をここから遠ざけた方がサンダーソニアも助けやすいん

じゃない？」

「…ぐ、屈辱じゃ…！覚えておれ…!!」

私も女帝を掴んでいた腕の力を緩め、その直後に私の拘束から抜け出した女帝の蹴りで闘技台の端まで蹴り飛ばされた。なんだかんだ溝にある剣の山に落とさない辺り良い性格してそう。落ちてもこの状態だからノーダメだけど。

「武々」は終わりじゃ！ゴルゴンの目が晒される前に、みな会場を出よ!!」

「!!」

「大変…！」

「闘技場の外へ！石化してしまうわ！」

「ゴルゴンの呪いよー!!」

おー、流石は女帝、蛇姫様の一声。あんなに集まっていた人達が蟻の様に外へ出て行ってる。

…どうしよ、まだ効果時間あるけど女王クイーン化解こうかな、いやでも動けなくなるからなあ…。どっちみち動けなくなるからこの国の1日滞在をお願いしたんだけどね？

\*\*\*

「こめんなさい姉様！」

「敗けた上に敵に救われるなんて!!」

「…よい、わらわも同じ事じゃ」

女帝の発言に2人は目を見開いて私を見た。ふふーん、やるでしよ私!

「じゃあ3人の石化を解いてよ、何も悪い事してないんだからさ」

「そうだ!おれ達を庇ってくれただけだ!お前なら何とか出来るだろ!」

女帝は何か思い詰めた様な表情で目を瞑った。

…な、なに?まさか解除出来ないとか…。

「確かに、その石化はわらわなら自在に解ける」

出来るんかい!何をそんな難しい顔する必要があつたんですかね?

「しかし、そなたら…船で行きたい場所があると言つておつたな。小娘、そなたに關してはこの国で1日滞在したいとも。…聞ける望みは1つじゃ、その者達の石化を解くか…」

「ホント?ありがとう!じゃあ石化を解いて!やったねルフィ!」

「ああ、良かった!ありがとう、こいつら助けてくれるんだな!どうもありがとう!」



「……!!」

ルフィと同時に頭を下げたマーガレット達を女帝の前まで運んだ。

難しい顔してたのは私達を試そうとしたからかな？でも残念、それじゃ2択にはならないんだよね。私が嫁候補を見捨てる訳無いじゃん。

「ふー！じゃあ私能力解くから、ルフィよろしくー」

「え？ああ、分かった」

「……ふにゅ〜」

ポス、とルフィの腕の中へ倒れ込んで全体重を預ける。ナミさん達が見たらめっちゃ怒りそう。

女帝達もそんな私を見て驚いていたが…仕方ないじゃん、動けないもんは動けないの！

その後すぐ女帝は3人を元に戻してくれた。3人共石化される前後の記憶が無いみたいだ。まあいいや…無事で良かった。

で、今はルフィと一緒に「九蛇城」という城の『皇帝の広間』に案内されていた。何やら私達に用があるらしい。

ていうかここ、私達が浴室に落ちた城だね。

「何だ？用って。あ、戦いの後のお食事というわけですかねえ、なア！そういうわけならおれは喜んで…」

「そんな訳無いじゃん、こんな意味深にカーテンで区切られたベッドの前に座らされてるのにさ」

そしてその向こうからは服を脱いでいる衣擦れの音が聞こえている。この場に居るのは私とルフィを除けばサンダーソニアとマリーゴールドだけで、つまりカーテンの向こうに居るのは女帝…。服を脱いでいるのか、着替えているのか…どちらにせよ大変耳によろしい。

「あなた達にはお礼を言わなきゃね…ありがとう」

「お礼？国の規則を破って侵入したわけだし、許してくれた事に私の方からお礼言いたいくらいだけど」

「そうは言うけど、背中の中のものを見られたら私達はもうこの国には居られなかった…」  
そんなに…？あのマーク、私が思ってるよりずっとんでもない物なのかな…。

「入ってよいぞ」

「ん？…え、いいの？」

「中へ入れ、小娘。男もじゃ」

よく分かんないけど、ルフィによろしく頼んで背負って貰いカーテンの奥へと入る。

ルフィは飯かな、と涎を垂らしていたがカーテンを捲った途端勢いよく顔を逸らして私をカーテンの中へ放り投げた。

「お前……裸になつてゐるならそう言えよ！おれを殺す気か！」

「？何を言つておるのじゃ、そういうのを気にする様な男にも見えぬが……まあ、よい」

女帝はそう言つてベッドの上に座つたままくりと背中を向け、右手で長い黒髪を避けて『見られたくない』マークを見せて来た。

私は反射的に視線を逸らしたが、女帝は震えながらも言葉を続ける。

「……このマークを、そなたら、どこかで見たと言つたな……今一度よく改めよ。どこで見た……この印の意味が分かるか……？」

「……見ていいの……？」

「構わぬ……さつさと答えよ、あまり見せたい物ではない……!!」

「……ルフィ、背中しか見えないから、一緒に確認して」

私の言葉にルフィも中へと入つてきて、私と一緒にじつとそのマークを凝視する。体動かせないからよく見えないんだけど……私はやっぱり見覚えはないかな……。

「……私は、見た事ないかな、ルフィは？何処かで見た事あるんでしょ？」

「……、うくん……、やっぱり、おれが知つてんのは少し違ふみてエだ。ハチのおでこにあつたマークかと思つたんだけど違ふだろ？おれの勘違いだな、そのマークは知らねエ

「や」

ああ、確かに似てるかも。女帝の背中にあるのは何かの蹄のようなマークだけど、ハチの額にあったのは太陽のマークだもんね。マークの中心が大きな円なのはどっちも同じかな。

「にしても魚人の中でも珍しいらしいタコハチと、こんな美女が付けてるマークを見間違える？普通」

「マークは魚人でもハチでもねえんだから仕方ねえじゃねえか」

まあそうだけど。

「知らニユのなら、話してやるがよい！」

「ニヨン婆……！」

一体いつ、どこからこの部屋に入ってきたのか、1人の年老いた女性が蛇の杖を突いて歩いてきた。

蛇の杖って言っても本当に蛇の杖だからね？蛇型とかじゃなくてそのまんま蛇が杖になつてるからね？

「!!またどこから……！」

勢いよくカーテンを開けた女帝がニヨン婆と呼ばれた人物に問い詰めるが、当の本人

はそれを流して言葉が続ける。

私はそれよりも早く女帝に上着を着てほしい。

「その者達の懐の深さ……しかとその目で見たハズじゃ……！安心して全てを吐き出せ……！おぬし！海賊モンキー・D・ルフィと逃げ足の女王、イリスで間違いニヤイな!?」

「え？お婆ちゃん、私達の事知ってるの?」

「これだけ世間を騒がせておいてノンキなニヨじゃ。見よこニヨ新聞、こニヨ娘……つい先日『中枢』のすぐ側にあるシヤボンデイ諸島にて、『天竜人』を蹴り飛ばすという……！神をも恐れぬ大事件を引き起こした張本人じゃ!!」

正確には蹴り飛ばすというか踵落としだけだね。

……ん?ていうかももう新聞の記事になってるの?だったら名前も逃げ足から改名してくれないかな!神をも恐れぬって言うなら逃げ足って異名はおかしいんじゃないかな!!

## 120 『女好き、目的地変更、必然の寄り道』

私が天竜人を蹴つたと聞いた途端、明らかに動揺している3人に首を傾げる。そんなの気にする人だっけ、特に女帝さん。

「そんなニヤ事をしでかして中枢の『最高戦力』から逃げ切れている奇跡……！事件の日からたった2日でこんな遠い土地へ到達している事実、色々と理解し兼ねるがな……。小娘の方の異名は『逃げ足の女王』……流石の逃げ足と言った所じゃな」

「ちよつと待つてよ、私、その名にはほんと異議申し立てるからね！それに天竜人の事もさ、あのヒト私の嫁を買おうとしたんだよ、そりや許せる訳ないじゃん！」  
ほら、ルフィだってうんうんと頷いてるし。

あの時はケイミーちゃんを助けなきやって必死だったし！！

「……では、天竜人に手をあげたのは事実か」

「足ね、踵落とし」

「……まだそんな、大バカ者が……この世界におったのか……！命を顧みず、『天』に挑んだ彼の様な者が……！」

私が女帝にそう言えば、彼女は手の平でその小さな顔を覆い隠して涙を流した。

…何か、相当なワケありっぽいな。

「この世界が私を拾っただけだよ。それに…彼つて…？ああ、勿論言いづらいなら言わなくてもいいからね」

「いや…そなたらには、全て話す。そなたの魚人の友が額に刻むシンボルの意味も…！」  
意味…海賊団のマークつっただけかと思つてただけど、もつと深い意味が隠されてい  
るつて事…？

疑問に感じて眉を寄せれば、女帝は再び背中を向けて髪を避けた。背中を中心に焼き  
付けられた蹄の様なマークがしっかりと見える。

「これは…『天駆ける竜の蹄』…『天竜人』の紋章じゃ」

「!!」

「『世界貴族』に飼われた者に焼き付けられる…一生消える事のない『人間以下』の証明  
…!!」

は……、と口から声が漏れた。女帝はすぐに上着を羽織り、私の目を見る。  
「わらわ達三姉妹は…その昔……、…世界貴族の奴隷だった…!!」

そこからは、それはもう酷い話だった。

女帝…「ボア・ハンコック」が12の頃に3人とも人攫いの手に掛かり売り飛ばされ、

その先で天竜人に買われ、奴隸として天竜人の物となった。

記憶は始終蘇るらしく、当時はその環境から何の希望も見出せずに死ぬ事ばかりを考えていたと…。

話の途中でサンダーソニアが頭を抱えて奇声を上げたのを見て、私はその時彼女達が負わされた屈辱や絶望が計り知れない物だと察する。そして…それを「オシャレ」だと抜かしたどこぞのバカに対する怒りも…。

「ーだが、4年経ったある日の夜、世界政府が青ざめる様な事件が起きた。天竜人には誰も逆らわない、それが鉄則の世界…あの赤い土の大陸を素手でよじ登り天竜人の住む聖地マリージョアへ1人乗り込んだ男が居たのじゃ。彼こそが…後に魚人海賊団を率いる冒険家…「フィツシャー・タイガー」。魚人達を多く虐げるその町の「奴隸解放」の為…彼は力の限り暴れ回った…。種族として人間を嫌ってはいても奴隸達に區別せず何千人ものあらゆる種族を解放してくれたのじゃ。わらわ達も決死の思いで逃げた…！彼には計り知れない恩がある…！！」

それは…まるで英雄みたい…いや、英雄だ。

そこで捕まっていた女帝…ハンコック達の様な立場の者からすれば、それは暗闇に灯った一筋の光。必死にそれを見失わない様に逃げてきたんだらう。

そしてその光を生み出したのが…フィツシャー・タイガー。



「タイガーは多くの魚人達を海へ解放したが、奴隷だった者達の烙印が消える事はない  
 ……世界政府を敵に回したタイガーはその者達と『タイヨウの海賊団』を結成し外海へ  
 飛び出したのじゃ…！まるで呪いをかき消す様に……皆の体に刻まれた天竜人の紋章を  
 太陽のシンボルに変えて！」

「…」

そっか……蹄の紋章の上から太陽の紋章を新たに刻んだんだ……そうすれば奴隷だつた過去は周りからは分からないし、奴隷以外の人達にも同じ紋章を刻めばもう特定など出来る筈もない。

だからハチの額にそのマークがあるからと言って、ハチが奴隷だったとも言いきれな  
 いうて事だろう。

「ちニヨみにフィッシャー・タイガーはもう死んで、魚人海賊団は……いくつかの一味に分  
 裂したようじゃがな…」

という、アローンとかもその系統だったって事か。

「くしくもわらわ達は奴隷であった時……余興で口にさせられた『メロメロの実』と『ヘ  
 ビヘビの実』の能力のお陰で国をダメし……秘密を守る事が出来ている。もしあの時そ  
 なたがソニアの背中を庇ってくれなければ、そなたがわらわの身を自由にしてくれなけ  
 れば……わらわ達はもうこの島にはおれぬ所であった……誰にも過去を知られとうない

…!!例え国中を欺こうとも…わらわ達は一切のスキも見せぬ!!もう誰からも支配され  
とうないっ…!!誰かに気を許す事が恐ろしい…!!…恐ろしうて…かなわぬのじゃ  
……、っ……!!」

「…ルフィ、ちよつと私の体持ち上げて」

「おう」

ハンコックが涙ながらに語った過去と背中の中のマークの全て…それらを聞き終わった  
私はルフィに頼んで体を動かして貰う。

ベッドを降りて、床に膝をついて額も床に擦り付ける様に置いてもらった。所謂…土  
下座だ。

「…そなた、何を…」

「私が最初、あなたの背中を見て言った事が…どれ程クズな行為だったのか分かった…。  
こんな謝罪で許される様なものじゃないと思う、本来はあなたに、そしてその妹達に殺  
されたって文句は言えない…!…!…!ただ…!…!私は今死ぬわけにはいかないから…だから、私  
からこんな事言うのはお門違いだって分かってはいるけど、許して欲しい…!!ごめんな  
さい…!!」

知らなかった、で済まされる内容では無い。彼女達の心の傷を…私はあの時抉ってし  
まったのだろう。

自分から傷つけておいて許して欲しいだなんて……いくら何でも最低だと思う。  
だというのに……

「もう、よい……。何も知らない者が見ればこれはただの焼印じゃ……。だが、これだけは聞かせてくれぬか？」

「こんな、あつさりと……私を許してしまうの？」

「……それはまずい。」

「……私特有の発作が……！」

「そなたは……、奴隷であつたわらわを……蔑むか？」

「絶対に、蔑んだりしないし、もし今後そんな輩が現れば私が許さない……!!だから……私の嫁になつて!!」

「えっ」

ニヨン婆の口から間拔けな声が漏れる。

「だつて……だつてさ！私、彼女達に何したと思う!? 本当に許されざる事をしたからね！  
だと言ふのに簡単に許してさ、しかも話を聞く限りでは闘技台で背中を隠したルフィと  
手伝つた私に感謝までして……!? そんなのさ、ああそうだよ、そんなの……私が嫁に  
するのを我慢出来る訳ないじゃん!! そりゃー私は彼女達に酷いことしたよ? だけど嫁  
にするのは我慢出来ない！」

「…ふふ、そなたを気に入ったぞ。わらわの話聞いて…まだその様な冗談で場を和ませるとは…。目的地を言え、船を貸そう」

「えっ」

今度は私の口から間抜けな声が漏れる。

涙を拭いながらそう言ったハンコックへ訂正の言葉を並べたいけど、何かそういう流れでも無くなってきた。せめて体を動かす事が出来れば…！体をオク…!!

「本当か!?おれ達シャボンディ諸島に行きてエんだ!」

「ちよ、ちよつとルフィ…！まずは冗談と思ってる事について訂正を…!」

「それは後でもいいじゃねエか、イリスならいつでも出来るだろ?」

何その信頼は〜！仕方ないね！ルフィがそう言うなら仕方ない…誰か今チヨロ  
いつて言った?

「ルフィ…そしてイリスと言ったな、出航は明朝、九蛇の海賊団にシャボンディ諸島まで送らせる。今夜は航海に向けて骨を休めておけ」

…1番最初に会った時には想像も出来ないくらい優しい声だ。やっぱり私は…この人を嫁にしたい…!

でも明日の明朝出発で、ハンコックも一緒に来る様な言い方じゃなかったからなく！  
今から明日の朝までのどこかで口説いておかないと…あとマーガレットも。

「あ…忘れてた。あのさ、重ね重ね申し訳ないんだけど…パレットと絵の具無い?」  
「?町にはあると思うけど…案外素敵な趣味を持つてるのね」

「はは…まあね。あるなら良かった、また買って来る」

それが無かつたら始まらないからね…。いつもは夢の世界で練習してるから、念じればパツと手に持つ事が出来るけど現実ではそういう訳にもいかないし。

「よい、それも明日までにわらわの方で用意しておこう。今すぐ必要ならすぐにでも持つて来させるが…」

「え、いいの…?遠慮しないよ?くれるっていうなら貰うからね!でも今すぐは大丈夫かな、明日でお願いします」

「聞いたな、ソニア、マリー。明朝までに用意を済ませておく様に伝えておけ」  
はい、と返事をして部屋を出て行く2人。

本当に何から何までありがたいなんてモンじゃないよね。

いつエースを助けに行くのか分かんないからパレットの用意は早めにしておかないといけないし。

\*\*\*

「うめエ！イリス、これうめエぞ！」

「ふふふ…料理なんかで喜ぶとはまだまだ…もぐ、美味しい…けど！見て周りを！女の子だらけのこの空間を!!」

現在私とルフィは、九蛇城の大食堂でこの国の民や戦士達と宴を開き盛り上がっていた。

ルフィは当然料理をばくばくと食べ、私は素晴らしきこの空間にほろりと涙を流す。

「わーホントに伸びた！」

「はい、もう終わりよ」

「えくもう一回！」

「じゃあ次私！」

「その次私！」

「食いづれエな！なんだ人の体ついたり伸ばしたり!!おれを触るくらいならイリス触れよ!!」

「記念に男を触りたいってコ達が多いのよ、ほら」

綺麗なお姉さんがルフィの横に並んだ物凄い長蛇の列を見せてきた。その手には1タッチ20ゴルと書かれている看板が…。商売魂逞しいな…。

「いいなあ…私もチャホヤされたい…！私、実は男なのー！！」

「それは無い」

そ、そんな…！ルフィだけそんなの…ずるい…！！

「触らせて〜！」

「つつかせて〜！」

「やめろおめえら！メシ食べねエ…おい！……こうなつたら…！」

バツと腕を伸ばしてこの場にある一番大きな肉を掴んでルフィは逃げた。そしてそれを追いかける女の子達…。

……ただけ人気あるの、さつきまで沢山人居たのに、今じゃ殆ど人が居ない…ぐすん、私の人気の無さに涙が出てくる…。

「寂しそうね」

「！…あ、マーガレット！！」

動けないのでくでーんと机に上半身を預けていると、隣にマーガレットが座ってきた。良かった、私にはまだ彼女という光が残ってたんだ！うう…状況も相まって天使に見える…。

「寂しいなんてもんじゃないよ…だけでももう平気！マーガレットが来てくれたから」

「そう、良かった」

そうやって柔らかく微笑むマーガレットに少し赤面してしまう。あれ：マーガレットってこんな感じだっけ。もつとこう、男勝りな喋り方をしていた記憶があるんだけど。

「マーガレット、なんか喋り方とか：雰囲気柔らかくなった？」

「?…ああ、最初会った時の話ね。そりやあ侵入者には言葉遣いも荒くなるわよ。…だけど、もうあなた：イリスは侵入者じゃなくて蛇姫様の客人、そして私達の命の恩人だもの、いつまでもあんな態度は取れないでしょ？助けてくれてどうもありがとう、イリス」

「いいよ、命の恩人だとか気にする事無いのに。それなら、お礼として私の嫁は来てくれたりしない？」

「最初も言ってたわね、私なんかで良いの？」

おおっと、ダメ元で誘ってみたら案外いい感じの返事きた！もう黄猿顔負けの光の速さで頷いておこう！

あと、私がハーレム女王を目指している事も言っておかないと…。

「ハーレム女王…：なかなか気が遠くなる話ね。だけど…私をその一人に加えてくれ



るって事でしょ？それなら断る理由が無いわ。元よりあなたが居なければ無くなってた人生だし…捧げるならやつぱりあなたに捧げたい」

「ほ、ホント!?やった、ありがとうマーガレット!」

私の嫁になってくれる人達ってどうしてこうも聖人が多いのか…!ふっふっふ…やはり私の見る目が素晴らしいという事なのでは…!?

「うわああああ!!おめエらしつこいな!メシ食わせろ!」

「待って〜!」

「触らせて〜!!」

1周して来たのか、外から騒がしい声が聞こえてきた。

はあ…ここから良い雰囲気を持って行ってキスの1つや2つしようと思ったのに、これじゃ出来ないじゃん!

「マーガレット、ルファイが静かにご飯食べられる場所ない?」

「うーん…あ、あそこなら…」

ここは一旦周りを静かにする事から始めようと思った私は、マーガレットに頼んで場

所を変えてもらう事にした。

静かな場所に心当たりがあるマーガレットの案内で、まずはルフィを捕まえて女の子達を振り切りその場所を目指す。因みに私はマーガレットに横抱きされてる状態だ、最高！

「よつと、…あれ、お前らなんか距離近くねエか？」

「珍しく鋭いねルフィ。そりや当然、マーガレットはもう私の嫁だし！」

「なんだ、じゃあ後はあいつだけか」

そう、最終的にはもつとこの島で嫁にしたいコ達は沢山いるけど、とにかく今狙っているのはハンコックだ。

彼女自身が皇帝という立場だから会えるかどうかも怪しいよねえ…どうしても会うのが無理そうなら無理矢理にでも会いに行くけど。

そんな感じでそれなりの距離を走り、この国の一番片隅にある家へとやってきた。屋根伝いに走ってきたのでバルコニーに飛び乗って周りを見ればニヨン婆が椅子に座って新聞を読んでいる所だった。ここはニヨン婆の家なのかな。

「どうしたニヨじや、マーガレット」

「ルフィが村の女のコ達に大人気になっちゃって…」

「おー！豆バーさん！」

「まー男ニヤど珍しいからニョー……ここは村の片隅、ゆつくりして……おぬし！豆て!!」  
ちつちやいから豆ばーさん？失礼すぎて安心する、ルフィらしい。

…そんな事を考える時点で私も充分失礼か。知らない間に随分考え方が海賊寄りになつてゐるのかな。

「ここならゆつくり出来るね、マーガレット」

「そうね、じゃあ私はちよつとお茶を淹れてくるわ。良いですか？ニヨン婆様」

「うむ」

ここには結構来るのか、迷いなくマーガレットは家の中へと入つてお茶を淹れ始めた。

でも確かにこの雰囲気は良いね…、静かで、風も気持ちいいし。

「バーサン新聞好きなんだなー」

「風の帯にはニユース・クーが来んニヨでな…：なかなか手に入らニユが…：我が国の皇帝カムセルトが『七武海』である以上この世の情勢くらい知つておかねばまずかろう」

ブツ、と何も口に入れていないのに吹き出しそうになった。え、え!?!ハンコックつて  
そうなの!?!そりゃ強い訳だ…。

「ハンコックつて七武海だったんだ…」

「蛇姫がこの国の皇帝、並びに「九蛇海賊団」の船長となったのは11年前。あの頃はただ若かったが、たった1度の遠征でその首に8000万の懸賞金を懸けられた。元々轟いておった九蛇の悪名と相まって、中枢の者達は即座に蛇姫を警戒し七武海への加盟を勧めてきたニヨじや…。じゃからおぬしが蛇姫に勝った時は驚いたもニヨよ」

あれ、気付いてたんだ。と言うことはニヨン婆もかなりの実力者だね。

「…だが、今やその称号も剥奪の危機」

「え？」

「海軍本部からの強制招集に応じる気が蛇姫に無いニヨじや。「七武海」と「海軍本部」が…「白ひげ海賊団」と戦争する為の強制招集じや、断れば剥奪は免れニユな」

「え!?何だそれ、どうなるんだよっ!!」

流石のルフイでも驚いたのか声を荒げた。

そのタイミングでマーガレットがお茶を持ってきてくれたのでお礼を言い受け取ってひと口…あ、美味しい。

「呆れたもニヨじや…無知にも程がある!—ただ、その話はいくまで予測じや。しかし十中八九戦いは起こる!」

「どうして?」

「世界政府は打って出たのじや…「白ひげ」は仲間の死を決して許さぬ男、それを知つ

てなお……「白ひげ」の優秀な部下、ポルトガス・D・エースの「公開処刑」を発表した……」

……!!!

「え……誰だつて？」

「エース、〃火拳のエース〃じゃ」

「エースが……処刑……!？」

……間違い、ない……!!ここだ、このタイミングだ……!!

今夜は王華と色々話し合わないと……これからの作戦とか、私がどう動けばいいかとか  
!

……だから今はとりあえず……!

「ルフィ、次の目的地……変更で決まりじゃない？」

「……わりのい。……バーサン、エースはおれの兄ちゃんなんだ!!公開処刑つてどこでやるんだ!？」

「何と……!?!……海軍本部を有する町、マリンフォードの広場……1週間後とあるニヨで今から実質〃6日後〃か……!」

ふーむ……となるとやっぱ1度シャボンディに戻ってるような時間は無さそうだ。そのままマリンフォードへ向かうしかないだろう。

「マリolfォードまではどうやって行くの？」

「いや、今はまだインペルダウンに幽閉中じゃ、マリolfォードに行つた所でエースはおらニユぞ。インペルダウンまでなら海賊船で1週間：海軍船なら4日という所じゃ」

何で海軍船はそんなに速いのかと尋ねた所、どうやら世界政府専用の海流があるらしい。

エニエス・ロビー、インペルダウン、海軍本部、変形した巨大な渦潮がこの3つの機関を繋いでいるそうで、それぞれの持つ正義の門を開閉する事で海流を流し込み3つの機関へ到達出来るって仕組みだそうだ。つまりその海流に乗れた所で、門が開かなければただ渦に乗り続けてぐるぐるするだけ… 外輪船バトルシップさえあれば話は変わってくるんだろうけど。

「……!!」

ルフィが麦わら帽子からエースのピブルカードを取り出せば、それはかなり焦げて小さくなっていた。つまり…エースがかなり弱っている事を意味する。間違ひなくスリラーバークで見た時より小さくなってる、急がないと手遅れになるんじゃない！

「おれ、エースを助けに行きてエ!!」

「…それがどれ程無謀な事か…この戦争がいかなる規模のものか、分かつて言うのじゃな？」

「関係ないよニヨン婆、家族が危険なら助けに行くでしょ？」

「……………、あい分かった。今世界一重要な囚人を助けるか…。そのチャンスが万に一つもあるとすれば今幽閉されておる大監獄に行くべきじゃな…マリソフオードの処刑場に連行されれば「海軍大将」と「七武海」がそのガードを固めてしまう」

…うげ、という事は最悪青キジとまた会うのかあ…。絶対絡んでくるじゃん…嫌すぎる…！

「とはいえ、おぬしの兄が現在最重要囚人である以上、監獄の警備網も確かな戦力が傾けられておって当然、中に侵入するなどまず不可能」

「その辺の海軍船奪えば良くない？海軍本部が近いなら結構居そうなものだけど」

「待て待て、そんな力技を使う必要などない。これもまた可能性は薄いが…今日まで頑なに断り続けておる『七武海』の「強制招集」…蛇姫がもしこれに応じてくれれば…」

「なるほど…それに乗じてルフィと私を軍艦に乗せられる…！」

そうと決まれば早速ハンコックに頼みに行かないと！会える口実も作れたしラツキー！

…いやでもちよつと待つて、ハンコックが強制招集に応じないのつて世界政府からの招集だからかな…、だとしたら頼むのも申し訳ない…けど、頼むしかないんだよね。

どうしてもハンコックが嫌だと言ったその時にはその辺の軍艦でも奪ってインペル

ダウンへ向かおう。無理させたくないし。



## インペルダウン編

## 121 『女好き、大監獄に侵入する』

## 『九蛇城』

「ハンコック、承諾してくれるかな」

「可能性は低い。…じやが、あの子もおぬしらには恩を感じておる、もしかするかもしれない  
ニユな」

最悪軍艦奪うから負い目は感じなくていいけどね。そもそも無理言ってるのは私達  
なわけだし。

「ニヨン婆様!!」

「どうしたエニシダ、慌てて…」

後は門を開けて中に入り、あの皇帝の広間に行くだけ…だったのだが、私達が門を開ける前にエニシダと呼ばれたスタイル抜群お姉さんが息を切らして慌てて外へ飛び出してきた。

ニヨン婆を今から呼びに行くつもりだったらしく、だったら丁度いいねとルフィと領

き合おう。

「何があつたのじゃ」

「それが……！ 蛇姫様が原因不明の病で倒れてしまわれて……！！」

……え。

「や、病……つて……ハンコックが!? そ、そんなに重い……!? よ、容態は……」

「落ち着け。……わしに心当たりが……無い事も無いが……まさかな。一応見に行こう」

そんなの、ハンコックにお願ひしてる場合じゃない……！ 原因不明だなんて……まずは彼女の体を考えてもらわないと……！

そうして、相変わらざるフイに背負われたまま皇帝の広間へと辿り着いた私は、ニヨン婆に少し外に出てくれと頼まれて部屋のパランダの様な場所に出る。

外から窓越しに見ただけでも分かる……苦しそうで、本当に今にも死んでしまふ様な……！ だ、だめだめ、こんな考えは……。でも心臓の辺りを押さえているんだよね……嫌な想像ばかりが膨らむというか……。

「大丈夫なのか、蛇女」

「大丈夫そうには……。……え、立った!? ……しかもこつち来る!?」

ニヨン婆と少し言葉を交わした後、足取りは重そうで、体をふらつかせてはいるが間

違いなく私達の居るベランダに向けて歩いて来ていた。

そして遂に扉を開けて外へ出て来る。

「何か用か……？イリス」

「え、あ、うん……頼みがあるんだけど……大丈夫なの？体……」

「わらわは病になど支配されぬ……！申してみよ」

本当に大丈夫なのだろうか……。支配されるのは嫌だと言っていたし、ただ無理しているだけなんじゃ……。

「今度処刑される白ひげんとこのエースっていう海賊はおれの兄ちゃんなんだ！エースを助きたい……でも海賊船じゃ間に合わねえんだって」

「……めん、体が大変な時にこんな事、本当は言いたくないんだけど……。強制招集の船に乗って私達をエースのいる「監獄」まで送ってもらおう事って……出来る？」

私がそう言うと、部屋の中から窓が開いてそこからソニアとマリーが顔を勢いよく顔を覗かせた。

「何を身勝手な事を!!そなたら、姉様の心のキズを知ってなおあの忌まわしき土地へ行くと言うの!?!」

「ごめん……本当に酷い事を言ってるとは思……う……だけど……!」

「……『七武海』の招集に………応じろと言うのね……」

私が最後まで言葉を紡ぐ前に、ハンコックは私の目を真っ直ぐに見つめ、更にその頬を上気させて言った。

…え、何ですかその顔は…あ、あれ、私、別に鈍くないから分かるけど…その表情まさか…！

「そなたがそれを望むなら…わらわは、何処へでもゆきます…」

「あつ…、うん…あ、ありがとう…、まじか」

まじでか…！

窓の向こうでニヨン婆と姉妹2人が騒いでいる。ハンコックの病は「恋煩い」だとか…。

…どうやって墮とそうかと考えてた人が、なんか勝手に墮ちてた件について。

ま、まあ…いつか！これでハンコックを嫁にも出来るし、体も何ともなかった訳だし、エース救出にも乗り出せるし。

ただ何というか…あつさりし過ぎててドツキリを疑うレベルだよ。ハンコックのキャラでドツキリなんてしなさそうだから疑う余地ないけど。

\*\*\*

目的地が急ぎのインペルダウンへと変更になった事もあって、船を明朝ではなく今すぐ出してくれる事になったので船の前でハンコックを待ち待機している。

まだ体が動かないんだけど…クールタイムやっぱ長いなあ…!

「引き続きよろしくルフィ〜」

「いいけどよ…イリス背負ってたら蛇女が羨ましそうに見てくるんだよ。お前いつの間に口説いたんだ?」

「いや…それが私にもさっぱり…」

口説きに行った覚えは無いんだよね、ほんとに。

「イリス、またね」

「ん」

見送りに来てくれていた人達の中からマーガレットが出てきて私の頬にキスを落とす。それだけで頬を赤く染めていたから慣れてないんだろな、と予想。

なんかそういう反応は新鮮で可愛い。

「…あ、ハンコック」

「じゃあ、私はこれで。…蛇姫様とも仲良くね!」

「うん、またね！」

動けないので手は振れないけど、心の中で思い切り振っておいたから伝わってる…と  
思いたい。

それにしてもハンコックが登場しただけで周りが凄い騒がしくなったね、どんだけ人  
気あるの。

あ、かなり大きめのコートを着てるから、あの中に隠れろって事かな。…ぐ、うう…  
！だとしたら、ルフィこの野郎ハンコックに抱きつくって事じゃん…！ルフィじゃなけ  
れば即刻この場でポッコポコにしちゃう所だよ…。

「出航じゃ、用意を」

「はい！」

近くの者にそう言って船に乗り込むハンコックの後をルフィがついて行く。そして  
みんなに見送られながら私とルフィは女ヶ島を後にした。…最後の最後まで女ヶ島で  
はルフィの方が人気あったのが悔しい！そりゃマーガレットっていう素敵な女性を嫁  
にできて、なんか分かんないけどハンコックも嫁に出来そうなのは嬉しいけどさ！

あと、パレットと絵の具もすっかり受け取った。これが無いとダメみたいだからね…  
何でか分かんないけど。

\*\*\*

「上手いこと行つて良かった、ありがとうハンコック」

「そなたの為ならば、わらわは例えこの世の地獄にだろうと飛び込んでみせます…♡」  
ちよつとお礼を言つただけなのに何だコレ。

今、私達は何とかハンコックのコートに隠れて軍艦に乗り込む事が出来ていた。結局体は動かせないままだったから、その点でもルフイに世話かけちゃったけど。

ハンコックにと用意された部屋でようやく体を外に出し、備え付けられていたベッドで横になっている。

「なー、監獄まで何日かかるんだ？」

「ここからなら4日と言つた所じゃ。風向きによつて半日程度の誤差はあるのは覚悟しておけ」

「4日か…」

と言うことは、私が王華と練習できるペイントも後4日が限度か。

“作戦”に關してもそれまでに詰めておかないといけないし…今は寝た方が良さそ

うだ。

「ごめん、ちよつと寝るね。騒いじゃダメだよルフィ」

「おお」

本当に分かつてるのかな。ご飯食べたら、「ぶへー食った食った！」とか大声で言うんじゃないの??

…まあ、いつか。気にしてたら寝れないし。

「そなたの安眠はわらわが保証する。ど、どうせなら子守唄を歌つても…よいぞ?」

「……………」

「……………もう少しゆっくり眠れ、バカ者…でも、そんな所も素敵じゃ…♡」

『王華部屋』

「てな訳で、後4日だけど…そろそろ作戦を教えてくださいてもいんじゃないの?」

「んー…」

ゴロゴロと寝転がって漫画を読みながらお菓子をボリボリ食べてる王華にため息を



吐きながら問う。そりやこの空間では体に悪影響はないかもしれないけど、なんていうか人としてどうかと思う。

「そうだね…じゃ、話そつか。うーん…何から話したものか…」

「普通にペイントの練習してる理由から教えてよ」

「あー、それはね、エースの死体を塗る為だよ」

……はい!?

「ちよ…死んじやダメじゃん!」

「あはは、正確にはエースの死体風蟬人形ね。あの戦争にはイリスがインペルダウンでやらかささない限りMr. 3も参戦するの」

Mr. 3…バロックワークスのあいつか! その言い方だと上手いこと事を運ばないと無理って事なんだよね。それこそ原作通りか、もしくはそれ以外の方法でMr. 3を戦争に参加させないと…。

「政府からすればエースは何がなんでも殺したい存在。だったらお望み通り形だけでも殺させてあげようよ。そしたらみんなエースが死んだと思ひ込むし」

死を偽装するって事かあ。何がなんでも殺したい存在ってのが気になるけど…王華が何も言わないって事はそんなに重要な情報ではないのか、もしくは話の流れで分かることなんだろう。

「でも、それってその場に居る全員を騙すんでしょ？私…ルフィを騙したくない」

「堪えて。じゃないと本当の意味で助けるなんて無理だよ、死を偽装しないと海軍は…この世界はいつまでもエースを追い続ける。最終的にバレるのは仕方ないとしても、その頃にエースがもつと強くなっていれば今回の様に捕まるなんて事もそうそう無いだろうし」

「釈然としないけど…納得するしかないのだろうか。」

「だけどき、その蠟人形と本物のエースを入れ替えるなんて出来るの？」

「出来そうなタイミングは1度だけ…ある。…私がある時その場に出ていれば分かるんだけど…こればかりは賭けだね。とにかく私を出すのは、というか女王<sup>クイーン</sup>化するのにはエースを解放するまで待つて」

「死ねってか」

「そうするしかないの！」

「え…海軍の最高戦力が揃ってるんだよ…？…王華がそういうならそうするしかないんだろうけどき。」

「…で、エースを助けた後にも大仕事が残ってるからね」

「まだ何かあるの？」

「私がそう聞けば、王華は顎に指を添えて唸り出した。」

「…んー…、これは、その時のイリスの判断に任せるよ。多分OKしてくれると思うけど」

「出た…またお預け？」

「ごめんごめん。だってこの世界の今後を変える程の事だから…。あ、それはエース救出も同じ事か」

この戦争だけでどれだけ動くんですか運命さん…。

「エース救出に関しては大体分かったよ、とにかくエースの身柄を解放してから王華を呼んで、その時Mr. 3が近くに居ればいいんだね？」

「そ。そこからのタイミングは私が指示を出すから安心してね。…じゃ、作戦も分かった所で…」

「はいはい…始めますか、ペイント練習」

後4日…時間も無い。

誰にも見られない様にペイントするには、例えば地面を殴って砂埃が舞ってる時に速さを100倍すれば大丈夫だろうけどクオリティは必要だ。

…死体をじっくり見られればバレるけど…その辺は大丈夫なんだろうか。まあ…色々考えている事を信じよう。

Mr. 3の確保方法とかもしつかり聞いておかないとダメだし、これから忙しくなる

ね……!

\*\*\*

「……ん」

パチ、と目を開けてもぞもぞと体を動かす。…よし、動くね、体。

…なんか隣にハンコックが寝てるのが気になるけど…いや寝てないなこれ、ガン見されてるなあ!

「…お、おはよう」

「……おはようございます……♡」

始めの態度からは考えられない赤面顔にグツと来る。可愛い顔も出来るのかこの人……無敵か……!

何とか堪えて上半身を起こし、床で寝ているルフイに掛け布団を放り投げた。何も無いのは流石にどうかと思うし…。

「…あのさ、ハンコックって私の事好きなの?」

「愛しています…♡」

おお…。め、珍しい…。私からのアプローチが殆ど無く、逆に向こうからグイグイ来るなんて初めてじゃない？嫁になってからならミキータもこんな感じ…。いやもつと激しいか、ミキータは。

「だったら私の嫁にならない？ハーレム女王を目指してて…ハンコックが入ってくれたら嬉しいなあ」

「わ、わらわでいいのか…：…こ、これは、まさか…結婚!?!…これから宜しくお願いします…あなた♡」

チヨロ過ぎる…!!!初めの威厳は何処に行ったんだろう…誰だこの人!!  
「はは…よろしくね?」

本当に嫁になったのか不安になるくらいあっさり入ったなあ…。

ま、チヨロくてもなんでもいつか、ハンコックみたいな美人が嫁になってくれたんだから。

…ルフィを邪魔者扱いしたい訳じゃないけど、こうなつちやうとイチヤイチャしづらいね。大事な作戦が控えてるし、変に気持ちを浮つかせない意味ではこの場にルフィがいてくれて助かったかも…?

そして、出発してから4日が過ぎ……ついに私達はインペルダウンへと到着した。来た時と同じ様にハンコックのコートの中に隠れてこっそりと侵入する。

それにしてもここ、バスターコールより軍艦の数が多い……流石は大監獄だ。

ハンコックとサロメ、そして案内する中将モモンガがインペルダウンの門を潜り、ハンコックがボデイチエックを受ける事になった。

更にこれより奥へ向かう際には海楼石の錠をつけるらしく、当たり前ではあるが嚴重な警備だと思ふ。

そんなことより私達にボデイチエックが入る事をこっそり知らせてくれたハンコックが、あせあせつ、みたいな擬音が飛んでそうな感じだったのが可愛かった。

「ようこそ、我がインペルダウンへ……ああ間違えました、我が……」ってちよつと野心出ちやつた。私はまだ副署長のハンニヤバルです！よろしくお願いスマッシュ」

「モモンガだ」

ここからだと言だけしか聞こえないけど、また何ともキャラの濃い人が現れたね。

「署長のヤロ……署長のマゼランはLEVELE4の署長室におりマッシュなのでお立ち寄り頂きマッシュ！案内はこちらの副看守長ドミノと私で……」

「時間がない様ですのでさっそくこちらへ！中将殿はあちらで、失礼ですがボデイ

チエツクを」

お、美人な雰囲気をする声だ。気になる……けど今出る訳には行かない。我慢だ……我慢……

「客人は個室でのチエツクです、ご安心を。それからそのマントは外して頂きます。1番物を隠し易いアイテムですので、ここでお預かり致します。疑う訳ではありませんが不審な行動をとられませぬ様に……インペルダウンの内部には至る所に『監視電伝虫』が這い回り監視モニターに映像を送り続けています」

個室に入ったのか……それは運が良い！

ハンコツクも今が好機と見たか早速ドミノと周りの電伝虫を石にして私達をコートから出した。石にされる前後の記憶が飛ぶらしいから私達がバレル事はないだろうし……その能力ほんといいね。

「イリス、ルフィ、どうやらわらわが送つてやれるのはここまでの様じゃ。この先は能力も使えず……マントも取られては隠しきれぬ。……もつとそなたの力になりたいが……」

「充分助かつてるよ、私とルフィだけじゃ暴れでもしないとここまで来るのは不可能だったと思う」

「そ、そうか……♡……コホン、ここは人を逃さぬ為の要塞じゃ、絶対に騒ぎだけは起こしてはならぬぞ！捕まれば2度と外へ出られなくなる……！そなた達は強いが……暴れない！

そう約束して欲しい……！」

「…分かった、本当にありがとうハンコック！いつか絶対この恩は返すよ……じゃ、行つてくる」

ガシつとハンコックの手を握ってお礼を言い、ルフィと一緒に部屋の天井にぶら下がった。

なんか固まっていたハンコックも復活し、電伝虫とドミノの石化を解除する。…ドミノ可愛いな、サングラス取ってくれ〜！

…さて、ここからはしっかり気を張っておかないとね。見つかったらアウトらしいし、私も女王化クイーンを今使う訳には行かないから…。

「…行きますか」

「おう」

エース救出作戦…開始だ。まずはMr. 3を探さないとね。



## 122 『女好き、まだまだ序盤の大監獄』

ハンコックのお陰でなんとか大監獄に侵入した私とルフィは、エースが投獄されているという地下を目指していた。

これは王華から事前に聞いていた事だけどうやらインペルダウンは海の中に建っているそうで、下の階に行けば行くほどレベルとやらが上がって監獄されている囚人達の凶悪さも上がっていくそう。

で、通常はレベル1から5までしか無いらしいんだけど、実はその先にレベル6と呼ばれる表沙汰になる事はない階層があるみたい。

エースはそのレベル6に居るらしいから、地下6階かな？今が地下1階だからまだまだ道のりは長そう。

「それにしても広いね、この監獄」

「地下ってどう行くんだ？」

まだレベル1だと言うのにこの広さ。迷路みたいに道が複雑に分かれており、壁にはずらりと檻が並べられていた。

王華も下へ降りる道筋までは覚えていないらしい。そりやそうか、そこまで詳しくかつ

たらそりや好きを通り越してソムリエだよ。

でも何か穴を飛び降りるとか何とか言ってたから、その穴を探さないといけない。

「ちよつとちよつと、お前達なんで外に出てるんだ？」

「ん？」

その穴を探す為に走り回っていた私とルフィを見て檻の中の囚人が声をかけてきた。

「何でつて…そもそも外から来たし」

「バカ言え、侵入なんざ出来るワケねエだろ。脱獄中か？お前みたいな嬢ちゃんがイン

ペルダウンに…何したんだ」

「何もしてな…いい事はないけど、だから外から来たんだつて」

まあ信じなくても良いけど。

見ず知らずの囚人とお喋りしてる暇もないし、多分そこから出して欲しいんだろうけ

ど…残念だったね、今は忙しいから。

……あああ……！

「…？」

…なにか聞こえない…？

「あああああ……!!」

「…誰かの悲鳴だ…こつちに来る!」

声が届いてくる方の道をルフィと見れば、その先からゴリラの様な何かの集団に追われている人を見つけた。しかもその人囚人服着てるし、脱獄囚かな。

「ブルゴリだ!逃げろ殺されるぞ!」

「どうも、心配してくれてありがとう。よしルフィ逃げるよ、戦ったら騒ぎになっちゃう」

「ああ。けどよ、これももう騒ぎになってねエか?」

「……騒ぎの中心が私達じゃないから大丈夫でしょ、早く離れよう!」

もうブルゴリとやらもそこまで来てるし…うわ、脱獄囚真つ二つに斬られた!

「斬られたア!走りづらっ!」

「…つて、なんだバギーか」

「あ!?!誰が素敵な赤っ鼻だつて!!…て、てめエは…!」

とにかく逃げよう、このままじゃハンコックとの約束が守れなくなっちゃう。

ルフィと一緒に走り出せば、その後ろをバギーもついてきた。ちよ、せめて後ろのゴ

リラ達なんとかしてから来てくれない!?

「ちよつと！前から来てるんだけど！」

「オイバギー！何でここにいんだよ！騒ぎ起こさねエって約束したのに巻き込みやがって！」

「麦わらとガキ…！おれだって好きで騒いでんじゃねエ！たつた今「バギーのこつそり脱獄大作戦」が台無しになったトコなんだ!!」

「こつちが知るかそんな事…：もう…：前と後ろで完全に挟まれちゃったじゃん!!」

「…ハンコックとの約束を台無しにしゃがってこの野郎…！ルフィ、仕方ないから倒すよこいつらー！」

「ああ、騒ぎはもう起きちまつてるしな！」

「このスットンキョー共め…：ああアわかった、やったらア…：やりやいいんだろ？ド派手大作戦に変更じゃア〜!!」

「のつた！」

「そもそも騒ぎ起こしたのあなただから、ちゃんと反省してよ、ね!!」

私に飛びかかってきたブルゴリの顎をアッパーで殴り飛ばし意識を飛ばす。数はまだ多いけどルフィも居るし…：バギーは戦力になるか知らない。

「ゴムゴムの銃乱打！」



「だあれが赤っ鼻じゃい!!ま、待て麦わら!そ、その腕輪素敵だな!くれよ!」  
「何だいきなり!」

バギーは走りながらルフィの腕輪をまじまじと見ている。それがどうかしたの?確かスリラーバークの宝物庫に眠ってた宝の1つじゃなかったっけ、ナミさんが宝じゃないからあげるみたいいな事ルフィに言ってたってやつ。

「それくれたらエースの所への行き方を教えてやるよ!」

「いいのか!?じゃあやるよ!」

信用していいのかわからないけど……ここは乗るしかない。どうせ闇雲に走り回っても分からないんだから。

「よっしゃ!じゃあまず敵を振り切る、おれの足を持って!」

「これか!」

バギーの足首とその上の体が分かれて、足首の方をルフィが持ち上げた。するとバギーの体は宙へ浮かび、私達の前を飛んで移動する。

「全速力で走れ!レベル2入口へ案内する!」

「レベル2!?!違うよ、おれが行きてエのはレベル5!」

「違うよルフィ、レベル5に行く為にはレベル2から順番に下へ降りないといけないの!」  
エレベーターとかあったら便利なんだけどね。いや、もしかしたらあるにはあるのか

も…ただ看守達職員しか使えないってだけで。

「そうだ！そしておれはレベル4までしか降りてねエからそれ以下のフロアは分からねエ…案内できるのはレベル4までだ！」

「いや、それで充分！何も分らないよりずっと早いでしょ…！」

…と言う事はバギーは弱いからこのフロアに居るのか、なんか可哀想。

私が捕まったとしたらどこに行くのかな、やっぱりレベル5？それとも6？ふふん。

「なんかお前急に親切になつたな」

「ぎやははは！そりやおめエ、キャプテン・ジョンの財宝のありかを示すトレジャーマップをくれるってんだか…：はっ!!」

慌てて口を押さえるバギーだけど、聞こえてるよ。というか別にそれが財宝のありかとか別に私とルフィはどうでもいいし。

「そうかく、この腕輪宝の地図みてエなもんだつたのか、じゃ、これ先にやつとくよ」「え？」

私達の方へ振り返って間の抜けた声をあげる。その状態でも前に進めるんだ…、その先壁があるんだけど気付いてるのかな？

「おめエ…今くれたらおれアこのままトンズラこくかも知れねエぞ?!」

「そうか！でもお前案内してくれるって言ったじゃねエか！」

「それに私達から逃げられる訳ないでしょ」

さっきのブルゴリ戦を見る限りだと、私やルフィがバギーに遅れを取るなんて事は無さそうだし。

バギーは一人百面相を浮かべて、恐る恐るルフィから腕輪を受け取り――、

「ボケバブオウ!!!」

「ん!?その壁破ると近道か!?よし、任せろ!!!」

「違ギャアアア!」

案の定後ろ向きに飛んでいたバギーは先の壁に気付いておらずそのまま背中から直撃した。

更にそこヘルフィの勘違いが発動し、バギーの体を押し壁を突き破る。

「……まず……」

ドン！と床を思い切り殴って辺りに砂埃を散らせた。

突き破った先のこの部屋、看守室なのか看守が何人も居てビックリした……！ルフィが壁を壊した時の埃でもある程度の視界は潰せただろうけど、やっぱりやるなら徹底的にやっておかないとバレたら面倒だし。

「止まれ麦バガアアアアア!!」



「うおおおお!!」

こらバカ! 声出したら…!!

「誰だ!? 2人居るぞ!」

バレたじゃん!…こりや私もすぐに気付かれるね、仕方ない。

更にこの部屋の壁も突き破つて、私達はその向こうへと飛び出した。

うわ…つ森…?ていうか床無いし…!落ちる—!

「何だこゝ…!監獄の中に…森!」

真つ赤な森が眼下に広がる。私達はそこへ落ちながら森を見渡していく。

「下にいったばい人も居るぞ…!」

「囚人達だ、ここはただの森じゃねエ!樹の葉っぱは刃物の様に切れる『劍樹』、下に敷き詰められた草は針の様に体に刺さる『針々草』!足元に放たれた毒グモや獄卒達に追われ森を駆け回る囚人達は葉に切られ、草に切られ、血に染まり切り裂かれる痛みに苦しむ…!総じてレベル1紅蓮地獄!!これがインペルダウンだ!!」

真下の囚人達から助けてくれ、痛い、苦しいと声が聞こえる。まさに地獄だ…これでレベル1…!

さっきの迷路みたいな道にあつたのはただの牢獄で、真のインペルダウンじゃ無かつたって事だ。

「このままじゃ下に落ちるけど……!」

「そうだ、いいんだ!このまま落ちるぞ!」

「何で!切れるじゃねエか!」

「おれなら切れねエ!黙って掴まってろい!おれの足を下に投げろ!」

バギーの指示でルフイが足を放り投げる。それは地に生える針々草に切られながらも全くの抵抗無しに歩き出した。

こういう時はバラバラの実って便利だね。私ならそのまま落ちててもダメージ無かつたと思うけど……もしアーマー貫通されたら痛いじゃ済まないだろうし大人しくバギーに掴まっておきます。

「ぎやははは!足さえつきやこつちのモンだ!」

「うわっ」

そこから中に針の木が生えてるからバギーの背中の上で避けなきゃいけないのがね、速いから良いけど。

「このフロアから下へ降りるのに階段はいらねエ、階段への扉を開けるカギもいらねエ!紅蓮地獄にや苦しみから逃れる為の“逃げ道”が用意されてんのを思い出した!」

「逃げ道?地獄なのにな?」

「見ろ、ここだ!誰もここからは逃げようとはしねエがな」

空を飛んでいたバギーの体が止まった。前方には下へと続く大きな穴がぼっかり空いており、底が見えない程深く、そして暗かった。

「…成程、レベル2への抜け道か」

それは確かに誰もここから逃げようとはしないだろう。地獄から逃れる為に大地獄へ行くバカなど何処にも居ない。

「視力倍加に、暗闇耐性倍加と……。んー、至って普通の床が見えるね。さっきの迷路道と似たような石畳の床だよ」

「そうか、よし、行こう！」

びよん、とバギーの背中から穴ヘルファイが飛び降り、私もバギーを掴んでそれに続いた。

1人で残ってトンスラこく予定だったのか私の胸倉を掴んで怒ってるけど…宝の地図分の働きはしてもらわないとこっちだって困るんだよ。

「ゴムゴムの…風船!!」

肉眼でも下の階の明かりが見える様になって、ルファイが風船を使用して落下の衝撃を殺してくれた。

…ここがレベル2…、最初の迷路と何が違うんだろ。

…だけど、この階には用がある。

王華の話では、どうやらこのフロアにMr. 3がいるそうだ。私は何としても彼を見つけて出さないといけないんだけど……その辺の牢屋を片っ端から見えていつてたんじや日が暮れちゃうよね。

「や、やベエ……このレベル2はな、魔界の猛獣フロアつつつとんでもねエ怪物達が解き放たれてんだよ！」

「ふーん……例えばあんな感じ？」

私が指を差す方には、ヘビの頭をした巨大なニワトリが姿を見せていた。バギーが言うにはこいつはバシリスクというらしい。

「とにかく逃げよう！下の階へ続く道さえ分かればあんな奴の相手をする必要ないし！」

あとMr. 3と！

「バギー、レベル3へはどうやって行けばいいの!？」

「あ!?!知らねエよんなモン!この腕輪さえ手に入りゃ後はトンズラこくつもりだったんだ!嘘に決まってるんだろガキ！」

「はあ!?!性根腐ってんじゃないの!この赤っ鼻でデカっ鼻!!」

やいのやいのと言いつ争いながら逃げてたら、遂には行き止まりまで追い込まれてしまった。

くそ……せめて周りの牢屋のどこにMr. 3が居るのが分かれば……!

「逃げられないのなら、やるしかないか!」

「よおし、来てみる鳥!」

Mr. 3はいいつを倒してから、後でゆつくり探すとしよう。

ルフィが腕を巨大化させたのを見て私も巨大な拳を発動する。  
グランデ・ハンド

……うーん、手だけつてのがなんかなあ……ルフィみたいに腕から巨大化させようかな。  
だったら技名は巨大な腕にしよう。  
グランデ・アルム

「ゴムゴムの〜!!」

さんじゅうばいばい  
「30倍灰!」

ギカンデ・ピストル  
『大巨人の双銃!!』

私とルフィの巨大な拳はバシリスクに直撃し、その巨体を勢いよく吹き飛ばした。

飛ばした先にある部屋へとぶち当たり壁ごと粉碎してバシリスクは倒れる。……ん?  
この部屋も看守室か? 看守が今の衝撃で全員倒れてるね。なんかごめん。

「てめえら2人揃って化け物か!」

「ギア3だ……! ハア……! おれはちっちゃくなってるのにイリスはすげエな……お、戻った」

「その分威力はルフィの方があつし、腕の大きさもルフィの方が上でしょ?」

まだまだ30倍ではルフィのギア3を越すだけの火力を出せないからな。

…いつかは、誰よりも強くなってみんなを…嫁を守るようにならなくちゃ。

「地獄に…救いの神が降りたぞ」

「…あの怪物を倒した…」

何やら周りがざわめきだした。…そうか、看守室を潰したから鍵がフリーになつてるのか。

バギーはそれを見て一早く行動に移し、看守室の近くに転がっていた鍵の束を拾い上げて檻の中に放り投げていく。

「ぎやははは!!感謝しろバカヤロー共!!」

「うおー!自由だア!!」

「最高だぜあんた!!」

…待てよ?これ、結構好機じゃない?このまま囚人達が暴れてくれれば、そこそ騒ぎに紛れて看守の目に私とルフィが映りにくくなるし。

ここに囚人だけでもぎつと50〜100人規模…なかなかの数だよな。

「で、レベル3に行く為の階段とか穴はどこ?」

「ああ?知らねエよレベル3への道なんて!こんな迷路みたいな監獄の中全フロア覚えてるわけねブオア!」

「確かにそうだよね…じゃあここからは適当に探すしかないのかあ…」

「殴つてから納得してんじやねエよガキヤア!!」

「オイお前! レベル4まで案内してくるつて言つたじやねエかよ!!」

バギーの言うことを信じた私も悪かつたよ…。流石に王華との作戦会議でここまでのは話はしなかつたし…話し合ひは大体マリンフォードを中心にしたからね。

ルフィとバギーが言い合ひを始め、更にそこに囚人達の喧騒も加わるかと思つたけど何故だか囚人達は元いた檻の中へ戻つていく。

その様子にバギーが慌てた様子で囚人達に問い詰めた。

「お、オイオイ! どうしたんだてめエら!」

「降つて湧いたチャンスに浮かれちまつてた…こんなのチャンスでもねエよ! このフロアのボスが… アイツが居る限り…」

「まだ檻の中の方が安全だ…!」

「アイツ…? まあいいや、外に出ないならそれはそれでいいから誰かこのフロアを抜ける道知らない?」

「このフロアに居るなら知ってるんじゃないの? バギーもここに来るまでの方は知つてたし。」

「このフロアで何か困つてゐるなら力を貸そうカネ?」

「……お!!?」

「ん? 何だそのオーバーなりアクションは。フハハハ…久しぶりだガネ! 麦わら、女好き! くしくも貴様等のお陰で自由の身になれた…私は恩を返す男なのだガネ」

「誰だ?」

何か知らんけど Mr. 3 居たー!! 力を貸すとか言ってるし、この人には存分に働いて貰おう!

よし、後はエースの所へ進むことだけを考えればいいんだよね! そしてあわよくばこのインペルダウンで助けよう。王華はマリンフォードで助けるのが今後の為にはなるって言うたけど…助けられるのに手を伸ばさないなんて事はしたくない…!



## 1 2 3 『女好き、レベル3へと到達する』

「30倍灰……去羅波・礫太刀！」  
さんじゅうばいばい  
さらはば  
つぶてたち

「ガルウ!？」

「ステーキ!？」

「カンシュ!？」

30倍の速度を利用して放った礫の様な斬撃が、私達を追う人面ライオンを切り刻む。

なんかさつきからこのライオンに追われてるんだよね…、Mr. 3が言うにはこいつらは「マンティコラ」という名前らしいけど、なまじ顔が人なだけあってインコのように人の言葉を喋れるそうさ。

それを囚人達が面白がって色々言葉を覚えさせているらしい。

人面ライオンといえはスリラーパークでも一度見たけど、あれはホグバックが造ったゾンビだし…まさか本物が居るとは思わなかったよ。

「もう……1頭1頭は大した事ないけど…数が多し！ルフィ、早く次の階に行く道見つけないと……！」

「おう！なアお前、力を貸してくれるって言ったよな」

「勿論だガネ、ここは1つ力を合わせて脱獄しようじゃないカネ！」

「脱獄？そんな事よりレベル3への道はどこ？」

私の言葉に驚いて一瞬間まるMr. 3。今立ち止まれるなんて凄いなあ、あの数の人面ライオンに追いつかれればどうなるか分かんないってのに。

「脱獄じゃないのカネ〜!!? レベル1へ登るのでは!!」

「まあ最終的にね！だけど今はもつと下の階…エースを助ける為にそこを目指してるの  
！」

「火拳のエースを救出〜?!イカレてるガネ！逃げるガネ!!…グエツ」

そう言って別の道へ逃げ出そうとしたMr. 3の首根っこを掴んで走る。だめだめ、あなただけは逃してあげない。

「どうせエースを助ければまた地上に向かうんだし、今行くか後で行くかの違いじゃない！私達と別行動取った方が危ないんじゃない？」

「……（そうだガネ…！レベル1からレベル3までの階段は続いている！その階段を守る怪物の囿にこいつらを使えばいいだけだガネ！私はそこでおさらばだ！）よし麦わら、女好き！共に行こう!!ついて来……ぶっ!!」

私の腕を振り払って前も見ずに先頭を走るMr. 3が、目の前の巨大な何かにぶつ

かった。

：巨大な何かって言うか：私達を追ってくるマンティコラの親玉みたいな奴だ。 図  
体はマンティコラの何10倍とありそうだけど。

「階段の守り主、スフィンクスだガネー……ッ!!」

「階段の……!?!」

と言うことは、こいつを倒せば道は開ける!!……んだけど、私はその隙を突いてM r.  
3に逃げ出されないようにする必要もあるから……。

「神背・倍加」  
ヒューマインクリース

とりあえず “私” を出してM r. 3につけておこう。これで心置きなくスフィンクスとやらだけを見れるね。

「ヴォルルル……ソーメン……」

「ソーメン?」

「ラーメン……!!」

「やば……!」

ゆつくりとこちらに振り返ったスフィンクスが、その巨大な腕を振りかぶって私達へと振り下ろしてきた。咄嗟に後ろへ飛んで避ければ、躲したというのにその腕の風圧だけで体が吹き飛ばされてしまう。

床への衝撃も物凄い…なんて力だよこのでかライオン…!

「おっと、どこに行くのかな?あなたは逃さないよMr. 3」

ナイス「私」。やっぱり神背使<sup>ヒューマ</sup>つてて良かった、速攻で逃げようとしてるじゃん。

「どうして女好きが2人になっているのだガネ!?というより何で私にそこまで固執する!?」

そりやあなたが居ないと作戦が始まらないからだよ。つと…!

「ヴオルルルルツ!!!ジャージャーメン!!」

「まだ全・倍加<sup>オールインクリス</sup>を使う訳にも…はー、面倒だね! 30倍灰<sup>さんじゅうはいばい</sup>・巨大な腕<sup>グランテアルム</sup>!」

両腕を倍加させて飛び上がり、スフィンクスの顔前で構えを取った。見れば見るほど人間みたいな顔してる…: 麺類<sup>ガトリング</sup>を中心に覚えさせられてるのも何だか面白い。

「行くよ…!去柳薇<sup>さよなら</sup>… 銃乱打!!」

「ヴオバブツ!!」

「おれも行くぞ〜ツ!!ゴムゴムのオ!バズーカ!!」

「ヴオルルウ!!」

私の今出せる一番火力の高い技とルファイのバズーカを受けても大したダメージになつてないっほいな…: 流石インペルダウン、レベル2の番人程度で既に私が全・倍加<sup>オールインクリス</sup>を使わなきゃ余裕で勝てない敵だなんて…。しかも今はその全・倍加<sup>オールインクリス</sup>を使えない状況だ

し。

「まずい…っ、へぶー！」

空中に浮いて避けようの無い私にスフィックスのネコパンチが炸裂し、吹き飛ばされて壁にめり込んだ。

「いったあ…！」

「こ、こつちにも来るガネ〜!?あ、2人して卑怯だガネ!そんな高い場所へ逃げて!」

ぬぐぐ…バギーは飛んで逃げてるのか…!ルフィは何かスフィックスの頭に乗ってるし…あー痛い…30倍を使ってもこの体じゃあこんな物か…情けないな。

「ヴォルルル!!」

「ぎゃああああ!!」

スフィックスの右腕を振りかぶった一撃がMr. 3に直撃する。いや、正確にはMr. 3じゃなく…。

「フハハハ!!引つ掛かったな単純動物め!それは私のドルドルの能力で作り出した蠟人形!ミス・ゴールデンウィークの着色無しでは物足りないが動物の目をダメすのには充分だガネ!!」

色こそはついていないものの、何10体ものMr. 3人形をその場に作り出してスフィックスを翻弄する。

今そこに蠟人形があるのなら実践練習が出来そうだけど…スフィックスがモグラ叩きみたいのに叩いて叩いてしてやるから塗ってる暇は無さそうだ。

…だからこそ、練習には都合が良い。

さんじゆうばいばい  
「30倍灰、ペイント！」

壁から抜け出し、腰に下げてあるバックからパレットと筆を素早く取り出してスフィックスの真下にあるMr. 3の蠟人形へと着色を開始する。

本番も塗ってる暇なんてない…一瞬の出来事なんだ！これくらい緊張感のある方が良いつてもんだよ！

「なっ…私の蠟人形に着色を…!？」

「こんな時に何やってんだアイツ、頭イカレてんのか!？」

確かにこんな状況で颯爽と道具取り出して塗り始めるって頭おかしい人みたいだよな。でも仕方ないじゃん！こんな形で練習出来るなんて思っても無かったんだから！

「…ほべっ!？」

「イリスく!?!そんなトコに居たら危ねエだろ!!」

あ…あともう少しで塗り終わるといふ所でスフィックスに潰されてしまった。

だけど今の30倍…しかも全オールインクリス・倍加を使つてない状態であそこまで塗れたのなら本番でもきつと通用する筈だ…いや、成功させてみせる！

「危ない！」

再度スフィックスに潰されそうになった所を「私」が腕を伸ばして助けてくれた。

「ごめん、ありがとう」

「仕方ないよ、ペイント上手くいきそうだね！」

「うん……！後はこのでかライオンをどうにかして下に行かない……と?!」

ボゴオン!!と足場が崩れたと思ったら、崩れたどころか床が抜けていて体が浮遊感に包まれる。

モグラ叩きだけでこんな分厚い床をブチ抜くってどんな力してるの!ていうかこんな怪物置くならもつと床を強固に……:……いやでも待てよ?これって下に落ちてる訳だから、まさかこの先は……!

「ぎゃあああああ!!このバカ怪物め!フロアの床をブチ抜きやがったア……!!!」

「まずいガネ……!!」

「オイオイ!この下レベル3だぞオ!!?」

お、やつぱりね。

て言っても私も危ないなコレ。下に何かクッションがあれば別だけど、流石にこの高さから落ちてその下に針山が待っていた時には痛い所じや済まないだろう。その時は全・倍加もしくは女王化クイーンを使うしか……!

「うわあああ!!」

「何か暑い……!耐性倍加つと……」

下が見えてきた……!……なんだアレ……砂?!砂漠?!何にせよ着地点が砂ならそうそうダメージも負わないだろうからスフィックスにでも捕まっておこう。

ドオン……!!

そうして私達はレベル3の砂漠みたいなトコまで落ちてきた。天井も高いし、さつきまでのフロアに比べるとかなり広々としている。落下の衝撃は目論み通りスフィックスが大半を背負ってくれたようで、ついでにそのスフィックスもノビてるから都合がよい。

「あつっ!床が熱い!!」

暑さ耐性は倍加したけど熱さはしてないよ!まあいいや、じゃあそつちも倍加で。

「……暑いな……イリスは倍加だろ?おれにもくれよ」

「これが無かつたら私はただのか弱い女の子だから無理でーす」

神背<sup>ヒューマ</sup>も解除しておこう。ん?やけにMr. 3弱ってるね。



「ろうそくの能力を持つ私には……ここはキツ過ぎるガネ〜……」

なるほど……全身ろうそく人間だもんね。じゃあさつきとこのフロアを超えないと……。

「うわっ！焼き鳥が降ってきた!!」

「上の階のハチ鳥が迷い込んで上空で焼けたのだ……」

暑すぎでしょ!!ぜ、絶対能力は解除しないでおう。

「ここはレベル3……飢餓地獄!ぐずぐずしてたら我々もあつという間に干からびてしま  
うガネ……まだ暑くて汗が出る内にここを抜けなくては……!」

「じゃ、急いでレベル4に行こう!」

「行くか!!」

私は大丈夫だとしても、ルフィやMr. 3の体力まで奪われるのは問題だ。バギーは  
どうでもいいけど。

……それより、この階は何かがおかしい。今までの階と違って静か過ぎる気がする……こ  
の砂漠のような所を徘徊できる獣や看守が居ないだけかもしれないけど。

……ていうか、砂が敷き詰められてるのは私達が居る一帯だけ?それ以外は普通の床  
だね……。怪し過ぎる。

「Mr. 3、この床怪しくない?」

「何?……ふむ、確かに……これは罫である可能性が高いガネ。私ならこの下には海楼石の

網を張って…今みたいに標的がその上に立つたら網を引き上げて一網打尽にするだろう」

「なんだなんだ？まずいのか？」

「いや、もう解決したよ。捕まってるね！」

ルフィ、Mr. 3、バギーの体を腕を増やして大きさも倍加させて掴み普通の床まで一気に跳ぶ。その直後さつきまで私達が居た床から網が出てきてスフィックスを中に入れて宙へとぶら下げた。天井から網を引き上げる為のワイヤーみたいなのも網に付いていたのか、細すぎてそれは見えなかった。

これは罠でよく見るよね、天井から網ごとぶら下げられる手法。とにかく気付けて良かった良かった。

「お〜！すげえイリス！」

「ふふ〜ん」

ドヤ。こんな所でバッドエンドなんて勘弁して欲しいし。

「くっ…！まさか一人も網に掛からないとは…良く気付いたな…！」

大量のブルゴリを引き連れて小さな男が現れた。

ツノの生えた帽子を被って銚を持っている…弱そうな見た目だけど、インペルダウンに居るのだから油断はしないでおう。

「じゃあ悪いけど私達は行かせて貰う……ってアレ!? Mr. 3は!? ついでにバギー!!」  
 周りを見渡しても……居ない! 視力倍加!……居ない!! どうして……一体どこに!?

まずい……彼が居ないと作戦が……!!

「捉えろ!」

「邪魔!!」

小さい男の指示で飛びかかってきたブルゴリを殴り飛ばす。

邪魔なんだよ! 今私は焦ってるんだから!

「ギャくくッハッハッハ! 麦わらア! 女好き! エースに会ったらよろしくな! 命あったらまた飲もうぜってよ!!」

「フハハハ! 精々イイ囀になってくれたまえ! バくくカ!!」

「!!」

上か!! 網よじ登って上の柱まで登ったんだらうけど……!

「見つけたんだから、絶対逃がさない!! ルフィ、ちよつと別行動でよろしく!」

「え? 別にいいじゃねエかあいつらが居なくても……」

「良くない!! じゃ、そういうコトで!!」

また飛びかかってきたブルゴリの頭を踏んで思い切りジャンプし、Mr. 3達の居る柱を腕の長さを倍加させて掴む。それを見た彼らは慌てて逃げ出した。

「逃すか！待て〜ツ!!」

何があつたつてMr. 3だけは手放す訳にはいかない…!こんなところで躓く訳には  
…いかないんだ!!

## 124 『女好き、大監獄の署長』

「くっそ〜!!どこ行つたの!!」

結局逃げ足が速い2人には逃げられ、その辺を探し回る事数10分…あちこちから戦鬨音はするけど、多分これはルフィだろうし。

「もう1回高いトコから見てみようかな」

さっきの柱ほどは高くなくても、例えばあそこの分厚い壁の上なんかは結構高いよね。

「よつと…、ん?…あれ、もしかして…」

壁を登り切つてその真下を見れば、そこには下からモクモクと浮かび上がる煙と耐性を倍加させていても暑く感じる程の熱風が吹き出ている大きな穴があった。

私が登り切つたこの足場は、その大きな丸い穴の縁だ。

煙はかなり下から出てるようだから…もしかしたらここを降りればそこがレベル4なのかもしれない。

「……………何?…」

近くですんごい爆発音が聞こえた。

私の居る場所とは丁度反対方向からかな、…とりあえず行ってみよう。そうした方がいい気がする。

急いで反対側の縁までぐるりと回って走れば、そこにはルフィとMr. 3、バギー、そしてまさかのボンちゃんが居た。…え!? ボンちゃん…!? 良かった、生きてたんだ!

「あ、イリス!!」

「Mr. 3も居るじゃん! 最初からルフィと行動すれば良かった…! ていうかそれよりボンちゃん無事だったの!」

「んがっはっはっは!! ジョーダンじゃなーいわよう! オカマは死なないのよ〜う!! 久し振りねイ、女好き!」

オカマ不死身説!?

近くで倒れてる牛みたいなのも気にはなるけど、とにかくMr. 3も居るようだし良かった!

「それよりこの天井どんどん高くなってるけど、エレベーターか何か?」

「おーホントだガネ、ガラガラと音もするしどういうトリックを使っているのかと思えば…」

「いやこれ私達が…!」

「落ちてるくっツ!!?」

足場が崩れて下に落ちてるだけじゃん!! さっきの爆発音が何なのかは分かんないけど、絶対それが原因でしょ!

まずい…今の私でも暑さを感じる程の熱風…この下にはもしかすると床が無いなんて事も考えられる…! マグマみたいなものに入っちゃったらそれこそ終わりだよ!!

「く…!」

やっぱり落下地点に床はないみたいだね…! ポコポコと沸騰した湯みたいな…まさにマグマのようなものがそこにはある。だけど近くに床もあるみたい。跳べば何とか届きそうだな。

「ふん…!」

ボンちゃんルフィはほつといても何とかなるとして、Mr. 3とバギーはダメそうだから抱えて床のある場所まで落ちる前に跳んだ。

よし…なんとかレベル4にも到達出来た!…ここつてほんとにレベル4だよな?

「ここがレベル4?」

「そう、ここはレベル4…「焦熱地獄」! 間違つても下に落ちちゃダメ! 本当に死ぬわつ!」

確かに…さっきも見たけど落ちれば痛いでは済まなそうだな。

「あつツ！ここの床さっきのフロアの床より熱イじゃねエか！オイ女好き、てめエおれの足持て！」

「わかった、この下捨てればいいの？」

「うオーーい殺す気か!!」

「んゝがっはっはっは！だーらしいわねーい！心頭滅却すれば火もまたオカマ！まあでも気持ち解るわ……ここは上の階より少々暑いもんねい。……ん？ああ……少し暑いわ、うん、ちよつと焼ける感じするかも……熱つつうウウウアア!!!」

「「おめエがー番暑苦しいよ!!」」

ボンちゃんのカヤラは初めて会った時と変わらないなあ。何だか懐かしくなってきた。

「ん？」

「どうしたのルフィ？」

「んゝまそーな匂いがした様な気が……あつちだ！」

「ちよ……！」

そのまま走り去って行ったルフィを止める事も出来ずに、仕方が無いからMr. 3を引つ張ってついていく事にした。

Mr. 2が言うにはその先には調理場があるらしく、バギーもお腹が空いている様で



そこに行くのは珍しく肯定的だ。

「見つけたぞ！ 麦わらと逃げ足だ！ 他にも何名かいる！ 捕まえる！！」

「おっと……！」

このフロアでも追いかけるのか……！ 全く面倒だよね！

数もかなり居るようだ、パツと見ただけでも100人は居るかな？

「でも……固まって向かってくるのは悪手だと思うよ？ ルフィ、しやがんで！！さんじゅうぼいぼい30倍灰・去羅波一文字！！」

前方から大量に押し寄せてくる人の波を、私の放った横薙ぎの斬撃が払っていく。

今ので半数は削ったかな？

「ゴムゴムのオ！ 花火！！」

「うわああああ！！！！」

お、初めて見る！

まるで打ち上げ花火のような見た目の技だ。跳躍したルフィを中心に四方八方からパンチや蹴りが入り乱れていて、広範囲の敵を倒すのには有効そう。

「あー腹減った。今ので終わりか？」

「ほい。……何かさつきからやけに軽いけど……Mr. 3どうし……た！！」

私が掴んでいたMr. 3を見れば、そこに居たのはもう殆どが熱で溶けたMr. 3の

蠟人形だった。

しまった…！良く見ればバギーも居ない…逃げられた…！

「ごめんルファイ！私ちよつとMr. 3を探しに…」

「待って女好き！上!!!」

「ッ…!?!」

ボンちゃんの声に咄嗟に反応してルファイを掴んで後ろへ跳べば、さつきまで私達が居た所にゼリーのような形状をした紫色の何かが落ちてきた。

それは床に触れるとジュワー…と溶け出して…いや、違う…床がソレに触れて溶けてるんだ…！

「ネズミ共ッ!!」

「今度は何!?!」

ゼリーの様な何かが落ちてきた場所へ、今度はかなり大きな体の男が落ちてきた。真つ黒な制服に身を包み…何やらお偉いさんのような帽子を被ってツノが生えてるその男は…、

「ま、マゼラン…!!?!」

そうボンちゃんが叫んだ。マゼラン…?誰だろう。

だけど分かるよ…この人は強い…！オーラがさつきまで会ってきた奴らとは違う…

強者のオーラがする……!

「熱いなア……焦熱フロアは……」

ポタ、とその男が流した汗の一滴が床に落ちただけで、汗が触れた床は黒く溶けていく。

「ふ、2人共戦つちやダメよう!! せいっはインペルダウンの監獄署長マゼラン!! 〃ドクドクの実〃の能力者なのよう!!」

「ドクドク……!? 毒か……! 厄介な……」

「いかにも、そうだ。……この歴史ある鉄壁の大監獄に侵入するとは……署長である俺の顔にドクを塗ってくれた訳だ……。目的は分かっている……! ポートガス・D・エースの元へは行かせやしない」

……な、何で私達の目的が……!? ルフィとエースが兄弟だつて事がバレたの……!? バレるとすればどこから……ガープか?

「ここへ一体、いつの間にもどの様にして侵入したのか、後でじっくり話して貰おうか……!」

……ハンコックの事まではバレていない様だ。一先ずそれは良かった。

「残念だけど、それだけは何が起きても言わないよ! 後、あなた毒だつて? 残念だけどそれが私に効くのかな!! 全・倍加!」  
オールインクリース

署長が出てきたとなればこいつさえ倒してしまえばインペルダウンも楽勝だ。

一定時間能力が使えないのは痛手だけど、時間的にマリンフォードまでは全然余裕で使用可能になるだろう。だから今は：

「はあああ!!<sup>さんじゅうばいばい</sup>30倍灰：<sup>さよなら</sup>去柳薇!!」

「ぬ!？」

まさか真正面から殴りかかってくるとは思わなかったのか、マゼランの無防備な顔面に私の拳が突き刺さった。

「…ぐ…ウー！」

コレ普通に毒効くね!!というよりこの毒がおかしいのか：私の30倍毒耐性を貫いてくるなんて…!!

「ホラ見なさい!急いでこつちへ!体中が毒で触れもしない男にアンタ勝ち目ある!?! さっきの場所まで戻って右折よう麦ちゃん!女好き!食糧は諦めてレベル5へ逃げ込むのよう!!」

「…ムダだ」

ペツと私に殴られて口内が切れたのか血を吐き出したマゼランが威圧しながらそう言葉を放つ。

耐久もすっかりあるようだ、今の攻撃では大したダメージにならないらしい。

「レベル5への階段前には獄卒長と3人の獄卒獣が構えている。このフロアからの脱出口は全て押さえてあるのだ！貴様等の逃げ場など既に無い!!毒竜<sup>ヒドラ</sup>……!」

ゴポゴポとマゼランの背中から竜の形をした毒の塊が現れ、私達へと放たれた。

私は咄嗟に体を捻って避け、ルフィもボンちゃんも走って避けている。

当たればお仕舞いつて訳か……。私もさっきの激痛が全身に降りかかるとなるとまず

いかも……!

「毒ガス弾<sup>クロロボール</sup>」

まるでガムのように噛みながら己の口の中で毒を生み出し、ぷくつと風船ガムみたいに膨らましてそれを燃え滾る火の海の中へ吐き捨てた。

私達を直接狙わなかったのは勿論、その技が熱で引火し……

ポォー……!!

「く……!」

こんな感じで大爆発を起こすからだろうけど……!この煙……これも当然毒だよね……!

「ヘックシユン!!ブエッキシ!!」

「ルフィ……!」

あれ、ボンちゃんは……?まあ今はいいや、離れてくれてる方が良い。

それよりこの煙はくしゃみが出る毒か……これは私の倍加した耐性が防いでくれては

いるけれど、何でもアリかっての！

だけど…奴は毒！さっきの私の攻撃が通った所を見ても自然系ロギアじゃないのは間違いない！

攻撃が当たるのなら…無理にでも押し通る！！

30倍灰！巨大な腕！！  
さんじゅうばいばい グランデ・アルム

「ヘツキシ！！…ギア…エツキシ…2！！」

「去柳薇ア！！」  
さよなら

「JETバズーカ！！」

ああああもう痛い！！！だけど私よりルフィの方が痛い！！我慢だ…！！

マゼランも流石に今のは効いたのか膝をつく。ルフィの腕もマゼランを触った事で肉が溶ける様な嫌な音が聞こえるけど、立ち向かう闘志が消える事は無かった。

「手を休める気は無いよ…！30倍灰！拳雨！！」  
さんじゅうばいばい レインファスト

「毒竜！！」  
ヒドラ

「っ?！」

マゼランを殴る筈だった私の何10本もの腕は全て奴の生み出した毒の竜に衝撃を吸われてしまい、その上殴った時の毒飛沫が私に返ってきて体にかかる。痛い…焼ける様だ…！

「イリス…！ゴムゴムの…！ツインJET 銃!!」  
ビストル

「毒フグ！」

空気を大きく吸い込んだマゼランは、それを全て毒玉に変換させてルファイへと吐き出した。

ルファイはそれを避けるが、避けた先に毒竜ヒドラが待ち構えていてルファイの脇腹を掠つていく。

ルファイの攻撃も私の攻撃も威力が足りない…！どうすれば…もうここで女王化クイーン使えないの…!?

「まだやるのか…流石に貴様にはなかなか俺の毒が効かないようだ。6億は伊達じゃないという事か。…だがやはり逃げ足の女王、戦闘能力は6億にとっても及ばん」

「あつそ…！ルファイ、私も居るんだからあんまり無理しないで！」

「あア…悪イ…！」

…女王化クイーンはまだ待って、攻め方を変えてみようかな。

パキ…と私の足下が凍っていく。床自体が暑いせいで凍っては溶け、凍っては溶けてを繰り返して蒸気が辺りを満たし始めた。

さんじゅうばいばい  
「30倍灰…！」

「上か！」

煙で見えなかった筈なのに見つけるの速いなあもう……見聞色か！だけど、とりあえず！発！！

「氷脚……！去鷹嫺！！」  
ジャリド さようなら

「ぐう?!」

マゼランの脳天をかち割る勢いで振り下ろした氷の脚が奴に再び膝をつかせる。

やはりここが元々暑過ぎるからか凍つてもすぐに溶けているけど、この脚に触れればそれだけで激痛でしょ。

「……なるほど、確かに厄介だ。聞いていた通り悪魔の実の中でも遥かに幅の広い力……。俺の能力も直接毒竜ヒドドラに飲み込ませるしか効果は無いのだろう……ならば」

「……う……!!!まさか……っ」

バツとルフィへ振り向くと、ルフィの背後から毒竜ヒドドラが今にも覆い被さろうとしていた。ダメだ、間に合わない……女王化を……!!

「隙だらけだ!」

「しまっ……!!う……」

ルフィに気を取られて一瞬マゼランから目を逸らしてしまった隙を突かれ、私は毒竜ヒドドラに飲み込まれた。

ま……ずい……ルフィも私と同じ様に全身に浴びて倒れている……。痛い……苦しい……!ダ



メだ…こんな所で、こんな所で負ける訳には…!!

…かなり、早いけど…!

「…間に合って…!!来て…!!王華!!」

「…はいいよっ!!お待たせ!!」

「何だと…!?!」

私の姿形がガラリと一変する。それと同時に王華も現れた。…間に合った…  
女王<sup>クイーン</sup>化!

「マゼランか…今のうちに体の毒飛ばしといた方が良いよ、ルフィじゃあるまいし女王<sup>クイーン</sup>化切れたら死んじやう」

「了解。…体中痛いんだけどこれ治る?」

「治癒力100倍でしょ、人間の底力を信じよう!」

女王<sup>クイーン</sup>化を使った事で今マゼランに負ける事は無くなったと思う…だけど、これはまずい、エースを助ける為に使わなきゃいけない分を今使ってしまったんだ…!

「政府…いや、海軍め…情報を隠していたのか…!」

「まーね。…イリス、ルフィがマゼランにやられてるなら女王<sup>クイーン</sup>化を使うチャンスはまだ残ってる。だからまずはマゼランを倒そう」

「俺を倒す気で居るのか…! 図に乗り過ぎだ!」

毒竜ヒドラがその何個もある頭を伸ばして私と王華へ迫り来る。

使うチャンスがあるって何で…？まあいいや、後で教えてくれるのなら…！

「ひやくばいばい グランデ・ハンド  
100倍灰！巨大な手！！」

ある程度動けるようになった私が手を巨大化させ、毒竜ヒドラを手の平で押さえて受け止め、その隙に王華がマゼランへ距離を詰める。

その腕は真つ白に染まっており、決着は早々に着ける気で居るようだ。

「ひやくばいばい おうか  
100倍灰！桜花…」

「接近戦が出来ないと思っているのか…！俺はこの大監獄の署長…貴様等の様な多少名の知れたルーキーに敗れる程甘くはないぞ！！毒へび！！」

近づく王華へと、腕を蛇の様に變化させて不規則に突きを繰り出した。だけど王華はその技を避ける事はせず、ただ真つ直ぐにそこへ拳を伸ばす。

「絢爛けんらんツ！！」

「ツゴツハア…！！？  
！！！！」

毒へびの突き技を貫いて、桜舞う拳は美しくマゼランの腹に直撃してフロアの彼方へと吹き飛ばし…そして、遠くで奴が壁に激しくぶつかる音が響いて、ようやく辺りは静かになった。

「倒したの？」

「いや、かなりダメージは入れたけどまだ気を失う所までは行っていないと思う。自分でも言つてたけどマゼランはそんな甘い男じゃないし……何よりまだ本気も見せてない。不意を突けて良かった……今のうちにルフィを運ぼう！」

「運ぶつたつてどこに……！」

「レベル5にルフィを治せる人が居るから！そこまで行けば何とかなるし、もしさつきまでMr. 3とバギー、それからボンちゃんも居たなら完璧！」

「じゃあ完璧だよ！早く向かおう！」

何か分かんないけど完璧らしい。……レベル5か、確か道は……最初の場所に戻って右折だっけ。

毒も大方引いてきた、早くしないと……今倒れる訳には行かない……！

## 125 『女好き、最後の作戦会議』

というわけで、最初落ちた道に戻って右へ曲がった先の道に進んだんだけど、そこには何と鞭を持った目隠れえろえろボディお姉さんが居ましたとき。やほーい！

「イリス、本当に申し訳ないんだけど今は…」

「う…分かってるよ？分かってるんだけどお…！」

私の腕の中には今にも死んでしまいうような程衰弱しているルフィが居るんだ、今はハーレムの事は一旦忘れなければ…！

「いやん♡署長は何をしているのかしら？取り逃してるじゃないの〜！」

「ちよつと！次会った時には嫁にするからね！私のこの顔!! 忘れないでよね!! じゃ!!」

「は…?…ん〜♡意味は分からないけど、この扉は通せないわっ！行きなさいカワイ子ちゃん達!!」

ドSっぽいお姉さんの周りにいる動物…巨大な人型のシマウマやコアラが私と王華に向かつて走ってくる。あーもう、動物に用は無いんだよ！来るならお姉さんが来てよね!!

「邪魔!!」

ボゴツ！と一番速かったシマウマを蹴り飛ばして後に続く動物達へぶち当たった。

流石に一撃でやられるとは思ってもいかなかったのか、お姉さんの額から汗が流れる。

「じゃあねー！」

もつとゆつくり話したいけど今はそうも行かない。彼女が私を認識出来ない速度で後ろへと回り込み、その分厚い扉を蹴破つてその先の階段を下へと降りていく。

後ろから慌てて追いかけて来ている様だけど、私達に追い付けるとは思えない。

「…で、今のうちに聞いておくけど女王化クイーンがもう一度使えるってどういう…？」

「今から向かうレベル5には…ていうか、5・5だったかな？とにかくそこにね、フルネームは覚えてないけどイワンコフっていうインパクト抜群のおと…いや女？まあ性別を乗り越えた奇跡の人が居るの。その人がルフィを治療できるただ1人の存在なんだけど…治療にはほぼ1日かかるから…」

「なるほど、その間に使用可能になるって訳ね」

それなら良かった…作戦を台無しにしたと思つてたから気分も落ち着いて来たし。

…お、階段が見えて来た。じゃあこの先がレベル5か。

「いめんねっと」

扉を守る看守達を軽く攻撃して気絶させ、扉を蹴破つて先に進む。

さーてと、次はどんなフロアかな…って……、

「さつつむ!!!倍加倍加!」

え、寒い!!ちよつと待って…私後もうちよつとで能力切れるけど!?!死ぬけど??!

何ここ…吹雪いてるけど、ほんとに屋内!?!さっきのフロアと真逆すぎて体が混乱してるよ!レベル3みたいにかなり広い空間だし…まるで外みたいだ。

「後からボンちゃんが助けに来てくれる筈だから見つけやすい所で倒れてた方がよいよ、囚人の檻の傍とか」

「イワンコフって人の所へは行かないの?」

「場所が分かんないんだよね、そこは原作通りに行つた方が無難だと思う」

そうするのにボンちゃんが必要って訳だ。王華も出してから結構時間経つてるから疲れて来たし、それを伝えて中に戻ってもらうことにした。

次に来てもらう時はエースを救出したすぐだつて、タイミングが大事らしいから気は抜けない…!

「…ん?お…?誰だ姉ちゃん、新しい看守か?」

「こりや良い女じゃねエか…ま、どうでもいいがな、どうせ死ぬんだ」

王華を戻して歩く事少し、ようやく檻を発見したのでその前にルフィを置いて座り込んだ。

…ボンちゃん…お願い、早く来て…!ルフィが死んじゃう…!

「あ……」

丁度私の能力も解け、力を入れられなくなりボテつと雪の中に倒れ込む。

……さむい……こんなの……幼児体型には厳し過ぎるよ……つて誰が幼児体型だ！

「う……？ゲホ……ツ……なんだ、ここ……寒イ……」

「ルファイ……？良かった、意識が……！」

「イリスか……？悪イ……よく目が見えねエんだ……」

マゼランの毒か……！くそ……私には他人を倍加させる術が無いからルファイを直接助け  
てはあげられないんだ……私が油断しなければ……もつと早く女王化クイーンを使っていれば……！

「体が痛エ……でも、エースを助けねエと……！」

「動かない方がよいよ……！マゼランの毒まみれなんだから」

「けどよ、イリス……ツ、早く行かねエとエースが……！」

そうだよね……私は王華に聞いたから知ってるけどルファイは不安だよね……。少しくら  
いの情報なら教えても大丈夫かな。

「さつき女王化クイーンして……何とかマゼランは切り抜けたんだけど、その時に王華がエースは  
まだ大丈夫って言ってたよ……。だからルファイも、少し落ち着こ……？快調じゃなきやまた  
マゼランが現れた時に勝てないよ」

雪に埋れながらこんな事言ってもダサいだけなんだけど、ルファイは私の事が見えてな

い様なので大丈夫大丈夫。

ルフィも私の言葉には納得してくれたのか、動き出そうとする体は止まっていた。：  
ボンちゃん、いつくるのかなあ。

それから数分後の事だった。誰かに化けていたのか囚人服ではない格好に身を包んだボンちゃんが私達の前に現れたのだ。

まさか私達が檻の外に居るとは思ってたのだから檻の鍵を持って一瞬固まっていたけど、すぐに切り替えてその鍵は囚人達に放り投げる。どうするかは決断は彼らに投げた訳だ。

「ボンちゃん…ありがとう」

「何言ってるのよ、当然じゃなくい？あちし達… 友達ダチじゃないのよう…！麦ちゃんももうちょっとだけ堪えるのよ！絶対に助けてあげるからねい…！」

友達の為とは言ってもここまで出来る人などそうは居ない。だからルフィはこの人の事を気に入っているんだろう。

ボンちゃん自身もこのフロアの寒さで体を震わせているのに、私とルフィをソリに乗せて引つ張って周る。

このフロアに居る囚人達に聞いて周る情報はどうやらエンポリオ・イワンコフという



人の場所らしい。…なるほど、王華がボンちゃんが居ればイワンコフは何とかなるって  
言っていたのはそういう事か。

「…ダメね、みんなイワさんの事は知らないみたいだわ…！だけど諦めたりしない…ま  
だ聞いてない人は居るわ…っ!!…ねエあなた達！イワさんって人を捜してるのよう！  
知らないかしら!？」

「イワさん…？…あア…それは分からねエが、あつちの林に今使われてねエ看守室があ  
んだ…あの辺から妙な男が出てくるのを見たぜ…」

「ホント…!？」

ようやくくまともな証言か…。少々異臭いけど行ってみる他無いだろう。

ボンちゃんは私達のソリを必死に引つ張っていく。やがて話に出た林へと辿り着く  
と、周りからぞろぞろと狼が姿を見せた。

…やっぱり、あの証言は嘘か。

…ああ、私の体は貧弱過ぎるね…ボンちゃんがこんな必死に、ルフィだつてマゼラン  
の毒と格闘していると言うのに…私はただこの寒さだけで体が限界を迎えてるみたい。  
まだ体は震えてるかな…？それすらも分からないや…確か震えが止まったらマズい  
んだっけ…、…痛っ…狼に噛まれたのかな…動けないんだから襲うのはやめてよね…。

…あ、痛みが消えた。…でも噛まれてる感覚はする。…コレ、まづいヤツじゃ…。

だ…め…！意識が…保てなく…なって…、…あ…：…気を失う訳には…：…う…：…。  
寒さと痛みに体が限界を迎えたのか、私の意識は途絶えてしまった。

1番ダメージが少ない私が1番最初にダウンするとは…情けないな…私。

\*\*\*

### 王華部屋

「あれ、イリスどしたの？」

「寒過ぎて気絶した」

「ああ…まあその体じゃ仕方ないよ、小学生には酷過ぎる環境だよね…」

張つ倒すぞこの…：…この…！！

「とりあえずボンちゃんや私達を見つけてくれてイワンコフ探してるんだけど、どこに居るのか分からないんだよね」

「私も覚えてないけど…イワンコフが居るフロアはレベル5、5だよ」

さつきも思ったけど、5・5って何…。

どうしてレベル5だけそんなのがあるんだろう。

「その状況で気絶したなら、多分起きた時にはもうイワンコフのトコだと思うよ」

「…なら良いんだけど…」

「どしたの？女王化<sup>クイーン</sup>が切れた後の役立たずさで無力感に苛まれてるとか？」

その通りだけどさあ…と言うと王華は冗談だよ、と軽く笑う。

「マゼラン倒したのも王華だし…」

「でも私を呼べるのはイリスだけだよ？私はイリスの技みたいなどこあるじゃん」

「何言ってるの、王華は王華でしょ」

ただ私の中に居るっただけで生きてる人間なのに技扱いは出来ないよ。

王華を呼ぶのは女王<sup>クイーン</sup>・インクリス<sup>インクリス</sup>・倍加を使うけど。

「…：そりゃハーレム築けるよ。元が私とは思えない…」

「？」

何をボソボソ言っているのやら。

王華ははあ、とため息をついた後、パチンと指を鳴らして私の後ろにソファアールを出す。

ほんと便利だねこの空間。

「せっかくだからもうちょっとこの先の話詰めようか、例えばインペルダウンからの脱

出法とか、マリンプォードのエースを救った後の話とか」

「…救った後か」

本来は助からない人を助けるんだから、後々の事を考えるのは私の仕事って事かな？  
そう思つて王華に尋ねればそれは違つたと首を振る。

そもそもエースは簡単に捕まるような人じゃないそうで、今回捕まつてしまったのは  
とある海賊が原因だとか。

そういうえば、インベルダウンに来る前の話し合いでエースを救つた後にも大仕事がど  
うとか言つてたつけな…。

「ここから先の話は作戦に関係無かつたから最初は話さなかつたけど…今は時間がある  
から話しておくよ。インベルダウンも後は流れに従うだけで脱出出来るだろうし、作戦  
の詰め込み過ぎで理解できなくなるなんて事も無いから」

「ん、それで？」

「…さつき話した、エースが捕まる最大の要因を作つた”とある海賊”。名前は…マー  
シャル・D・ティーチだったかな、黒ひげって呼ばれてるよ。多分ジャヤで1回会つて  
ると思う、パイがどうか、人の夢は終わらねえ！…とか言つてる大男居なかつた？」

……あー…え、あの人が黒ひげ？

…そうか、だからルフィと好みが正反対だったのか。主人公であるルフィとは真逆だ

と言う事を分かりやすく表現したかったんだね。まあそれはONE PIECEの話  
だけだ。

「その黒ひげも今回の戦争に姿を現すの。ていうか、何ならイリスはこの大監獄で会う  
と思う」

「そうなの？」

「だからその時は黒ひげと戦わないでね」

「分かった。…ん？その時は？」

私が首を傾げると、王華は真剣な顔で私の目をじつと見る。

「マリルフォードで、私は黒ひげを倒そうと思ってる」

「……!!」

黒ひげを…？

倒す事に関しては何にこれと言って意見はないけど…そもそも倒せるのだろうか。

「マリルフォードには白ひげが居るし、海軍も集結してる。黒ひげもまだ成長段階だし  
私達でも充分倒せる…とは言えないけど、手を貸してくれそうな人なら居る！…と思  
う。…だから私はそこで、黒ひげを倒したいの」

王華がどうしてこうまで黒ひげに拘るのかは分からないけど、倒したいのなら倒そ  
う。

どの道稜な海賊じゃない事は確かなんだし…倒しておいて損はないと思う。

「うん、いんじゃない？倒せるんでしょ？」

「だけど…黒ひげはONE PIECEの中でもかなり重要なキャラクターだよ。マリ  
ンフォードで倒して…例えば海軍に身柄を拘束させるとすれば、この先どんな展開にな  
るかは私でも…」

「でも、倒したいんでしょ？」

倒した方が良い敵を倒せるチャンスなら、それをみすみす逃す必要なんてない。

未来が変わるだとかは変わってから考えよう。この先私達の進む道が原作からどれ  
だけ逸れようが…最終地点は私のハーレム女王だ。

ルフイだつて何が起ころうと最後は必ず海賊王になつてる筈だ、だつたらマリ  
ンフォードで黒ひげを倒しても問題はない！

「黒ひげを倒した方が良い理由は聞かないよ、この先関わらない人の情報を聞いたつて  
意味ないし」

「…ふつ、あはは！後先考えないのは本当にイリスの怖い所だよね！」

「言つとくけど、その後先考えてない行動を提案したのは王華だからね？」

「だけど黒ひげを倒す方法だけは聞いておこう。何だかんだ言つても奴はエースを捕  
まえた張本人らしいし…弱いなんて事は絶対あり得ない筈だ。」

その時には王華も居るだろうし今聞く必要も無いだろうけど、せつかく時間もあるんだし、とそこまで考えて王華に尋ねた。

「方法？…んー、黒ひげは『ヤミヤミの実』の闇人間で、能力者に触れるとその人は黒ひげに触られてる間能力が使えなくなるの。あとこれはまだ原作でも判明してない事なんだけど、黒ひげはどういう訳か能力者の能力を奪う事が出来るの、原作ではそれで白ひげの能力を奪って2つの悪魔の実の力を手にしてた…かな」

ふーむ…本来なら悪魔の実の能力は1人1つが限度…その限界を突破出来るだけでも異質さが伺えるね。

「だけど黒ひげには弱点があつてね、闇だから何でも吸引するけど、それは相手の攻撃も一緒に…例えばパンチを撃つとする」

王華がシユツ、と前に拳を突き出す動作をする。

「この時に発生する衝撃は壁に当てても今みたいに空を切つても、全てを対象にぶつける事は出来ないよね？多少の衝撃は逃げるし、私達もミスをする。だけど黒ひげに限ってはそうじゃない…何故ならその逃げる衝撃すらも奴の闇の体は吸引してしまうから。だから普通の人よりもずっと攻撃が良く通るって訳」

更に、と王華は拳を元に戻し人差し指をピン、と立てた。

「黒ひげは敵の攻撃を必ず1発目は無防備に貰う。それは油断だったり慢心だったり…

まあ奴の性格上の弱点かな。だからイリス…私達はその1発で勝負を付ける必要があるの。もしくはその1発を起点にする」

「…だね」

黒ひげの能力…その話を聞く限りだと私は奴に捕まったら終わりだ。能力が使えなくなる？ 死刑宣告じゃん。

「1番良い流れは、白ひげ、私達、海軍大将、エース、ルフィvs黒ひげかな。でもそんなのまず不可能だからとりあえず海軍は青キジだけでも説得出来ない？」

「無理でしょ」

高望みし過ぎでは？

…あんまり青キジとは顔を合わせたくないけど、文句も言いたいし！ 勿論逃げ足関連の！ だから丁度良いっちゃいいのかも。

「とりあえず整理するよ？ 私はこちらからインペルダウンを脱出してマリルフォードへ向かう。そこでエースを最初聞いた作戦で助けて、その後今話した黒ひげ討伐作戦を実行する。青キジを仲間につけたら尚よし…でいいんだよね？」

「うん。…ふふ、本当に原作とは全然違う所を目指そうとしてるね」

「そりやそうだよ、わざわざ敵を逃す必要なんてないでしょ」

じゃあ作戦は詰められたって事で、余った時間はペイント練習でもしてようかな！



出来る様になつたとは言つてもまだまだ甘い実力な訳だし、せつかく時間があるんだから出来るよとこまでやる！

早速立ち上がつて目の前にナミさん人形を生み出し、地獄のペイント特訓へと自ら身を投げるのであつた。

…は…人形見たらほんとに思うけど…ナミさんに会いたい。みんなに会いたい  
…！

## 1 2 6 『女好き、レベル6と七武海』

「……んん〜……はあー……、よく寝た。……いや、塗ったの間違ひかな」

むくり、と上半身を起こして周りをぐるりと見渡す。王華の言つてた通り何とか助かったみたいで、今はどこかの部屋のベッドに寝かされていた様だった。ここがレベル5。5？

それに動けるって事は能力も女王化クイーンも使用可能になつてゐるって事だし、かなりの時間寝ていたらしい。

「……エース助ける、黒ひげブツ飛ばす……！作戦も覚えてる！よし……行くか!!」

両頬を手の平で叩いて一気に起き上がり、この部屋にある唯一の扉を開けた。

……なにこのひつつろい空間……大きな洞穴みたいなの……。

ていうかそれよりも気になるのがあの大扉だよ、何あれ、網タイツ履いた男の人や女の人が一心不乱に食糧をあつた扉の近くに集めてるし、集めたそばから扉の向こうから手が伸びて吸い込まれていくし。あ、伸びるって事はルフィか！良かった、無事だったんだね！

「女好き……あなたも無事だったのねい！」

「ボンちゃん！」

その扉の近くまで歩いていけば、ボンちゃんがやばい見た目の人の隣から声をかけてきた。

「本当にありがとう……！ボンちゃんが居ないと私達死んでたよ！絶対いつかこの恩は返すから……とところで、そっちのインパクトしかない見た目の人は？」

ゴツイ体をしているのに、オカマなんだろうなつて事が一目で分かるのは凄いな……。

「ヴァタシはエンポリオ・イワンコフ。ヴァナタ……一体何者？電伝虫で見てたわよ、マゼランを倒す所をね」

ああ、この人がイワンコフ！

オカマなんだろうなつていうのは見れば分かるけど、ボンちゃん以上に忘れられそうにない見た目だ。マスカラがとんでもない。

「マゼランは不意を突いただけだよ、それよりルフィの事ありがとう！うちの船長だから助けて貰って本当に感謝してる……！」

「ん……フフフフ！礼には及ばないナブル、ヴァタシはただ麦わらボーイの免疫力を過剰に底上げしただけ」

「免疫力を？凄いな、能力者？」

「そうよ」

聞けば、どうやらイワンコフは“ホルホルの実”という実の能力者らしく、ホルモンを自在に操れるのだとか。

これを上手く使えばいとも容易く性転換が可能になるらしい。全人類女の子にしてくれー。

「ン治ったア~~~~!!」

「お」

大扉の向こうからルファイも姿を見せた。治療つてどれだけ激しかったんだろう、マゼランから受けた傷よりも遥かに傷が増えてるし体中血が付いてるじゃん。

「…ヴァナ〜タも相当規格外の間人ねエ、麦わらボーイ。たったの20時間でマゼランの猛毒を打ち勝ってしまっなんて…奇跡の度を超えてるわ」

「はア〜食った食った!…あ、イリス、ボンちゃん無事だったか!!」

「バカね〜いい!! ジョーダンじゃないわよ〜う!! それはコツチのセリ…」

「ボンちゃん! おい…!」

バタン、と何の受け身も取らずにその場に倒れるボンちゃんを見て私とルファイは急いで駆け寄る。

「だけどイワンコフが言うには、これは怪我のせいではなく過度な疲労によるものだと  
言う。」

「イワちゃん！生きられた…！おれ達の事助けてくれてありがとう！」

「礼を言うなら、そのMr. 2 ボンボーイに言うんだね…！ヴァターシは能力を使つて少々力を貸したに過ぎナブル。…だがそいつはね、何時間も何時間も…何時間も、ノドが裂けて血が噴いても、ずっとここで苦しむヴァナタと共に苦しみ…頑張れと、生きろと叫び続けてた…！！ヴァナタが命を取り止めた事に何の影響も無かつたとは思えない！！」

私がぐーすか寝てる間にボンちゃんはそこまでの事をしてくれたのか…。わ、私だつて油断してルフィを毒まみれにしたり、瀕死のルフィを極寒のレベル5に連れてきたりしたし！！

…あれ、私カス野郎じゃん。野郎じゃないけど…！！

「ボンちゃんありがとう！恩にきる！！…それにイリスも、ありがとう！！」

「うう…私何にもしてないよ…」

「マゼランを追い払つただけでもやり過ぎな程よ！ヴァナタが破つたのはこの監獄の頭…本来なら触れもしない相手ナブル！」

「追つ払つたのも王華だし」

別にいいもんね！マリンフォードで活躍しまくつてやるから！

「回復して早々悪いけど、早速行こうか、エースのそこ！」

「ああ、勿論だ！悪イけどお前らボンちゃん頼めるか!?後で迎えに来るから…：わっ」  
 「つと…：やつぱりフラフラだね、ルフィ」

オカマ軍団にボンちゃんを頼みながら歩こうとしたルフィがフラついて倒れそうになつたのを支える。

当然だけどね…：さつきイワンコフが言つてた20時間…：この20時間ずっと毒と戦つていたのだとすればその疲労は相当な物の筈だ。

「大丈夫だ、まだ動ける…！紙は…：まだ下向いてる！エースは下に…：ん？そういえばこゝどこだ？」

「ヴァナタそれ、ビブルカードじゃない…：こつちこつちや珍しい物を持っているわね。  
 …：今復活したからには何が何でも兄の救出に行くんだらうね、まアヴァナタの命…：勝手にすればいいけど」

「イワちゃんは脱獄すんのか？ボンちゃんはおめエを助けたくてフロアを降りて来たんだもんね！逃げ出すついでにエースの場所教えてくんねエか？」

ルフィがイワンコフにそう言うも、イワンコフはその気持ちだけ受け取っておくと脱獄を断つた。

まだ脱獄する時ではないとかなんとか。

「世の中の情勢は把握してる…：「海軍」と「白ひげ海賊団」を中心に大きく世界は動こう

としているわね。…でもあの男はまだ動かない。世界中の革命家達の『黒幕』…ヴァターシの同胞…革命家ドラゴン!!」

ルファイのお父さんか。

「ああ、おれの父ちゃんか」

「そう、ヴァナタの父ちゃん。彼が軍を率いて動き出す時…ヴァターシは再びシャバへ

飛び出し…?!…父ちゃん?!?!」

「父ちゃん!!!」

なんかこんな感じの流れウォーターセブンでもあったなあ…。

そこまでドラゴンに息子が居る事実が驚愕なのか、イワンコフを含めたオカマ軍団全員がどよめいていた。

「あ、コレ言っちゃいけないエんだっけな、まあいいや、じいちゃん言ってたし。でもおれ、顔も見た事ねエけどな」

「…ヴァ、ヴァナタ…出身はどこ…?!」

イーストフル  
「東の海だ」

「!!…やっぱり…?!」

イワンコフだけはルファイの事に心当たりがある様だった。そのドラゴンって人から何かしら情報を貰ってたのかな…?

どちらにせよ、それを聞いたイワンコフの瞳に炎が宿る。すぐに近くに居る、ワインを片手に持ち右半分が白で左半分がオレンジ色の髪をし、服も髪と同じ色の物を着た男に指示を出した。

「イナズマ！エースボーイの出航時刻をお調べ！」

「ええ、直ぐに」

「ギリギリよね……ビブルカードが下を向いてるから連れ出されちゃいない！ヴァターシはこれから麦わらボーイとレベル6へ向かうわよ!!」

レベル6……今度はどんな地獄が待っているのやら。

私の耐性でも防げないレベルの暑さだとか寒さは遠慮願いますねー。

でも何だかんだでイワンコフが力を貸してくれる様な流れになってきているのは幸運だった。この人からも強いオーラを感じるから、共に行動出来るのならするに越した事はない。

「麦わらボーイ！ヴァナタ今の軽々しく口にするんじゃないわよ！」

「ああ……やっぱそうなのか」

「ヴァターシはヴァナタの父親の仲間！「革命軍」の幹部よ！だからここに捕まってた。勝手ながらヴァナタをサポートする義理がある……同胞の息子を目の前で死なせるわけにはいかないわ！」



革命軍か。王華は詳しそうだけど私には何が何やらさっぱりだ。

革命軍の人達も世界政府ももう少し歩み寄ればいいのに……。話し合いが出来ないレベルまで来てしまってるんだらうけど。

「案内してくれるのか!? ありがとう!! よーし待ってるよエース、今行くぞオオオ!!! オオ〜……」

「辛そうだね……背負って行くこうか?」

「ぐぎぎ……へ、平気だ、これくらい……」

再度ルフィを支えるも、流星にこの調子じゃ助けるも何も、動く事すらままならないんじゃない。

平気だつて言うけど、どこからどう見ても平気そうには見えないし。

「エンポリオ・テンションホルモン!!」

「ぶい!!」

「え!!」

いきなりイワンコフがルフィの脇腹に親指以外の4本の指を突き刺した。：テンションホルモン……?

「アドレナリンつてヤツよ……! 今日1日その疲労を忘れられる。その代わり後日来る壮絶な後遺症なんてヴァナタ今更気にしないでしよう?」

それもホルホルの實の力か…相当便利な能力だ…!

ルフィもまるで疲れを感じなくなった所かハイテンションだし…確かにアドレナリンが切れたら糸が切れたように動けなくなりそう。

まあいいや、動けるのなら…!今はとにかく、エース救出!打倒黒ひげだ!!

\*\*\*

「さつきはよくもやってくれたねえこの犬っころ!!!おらア!!」

「ギョブ!!」

「どけエ!!邪魔すんなア!!!」

「ボギヤウ!!」

はーっはっは!!能力が戻った今ならこんな寒さへでもないよ!

狼が何匹掛かってこようが同じ事!動物愛護団体なんてこの世界には居ないんだよ

!!…多分!

今、私達はイワンコフ達の居た秘密のフロア…レベル5. 5を抜け出してレベル5へ

と戻つて来ていた。

レベル6へ行くための扉はイワンコフ達がつ持っている鍵で開けられるらしい。囚人とは思えない手持ちの良さだね…。

「見えた！あの扉だよね！」

「ええ！イナズマ、カギを！」

「ハイ」

ガチャ、と鍵を差し込んで開ける。当然下り階段か、この先がレベル6…！

「この先監視アリです。罠も複数あるかと」

「関係ねエ！おとおおお!!!エースくく!!!どこだアくく!!!」

「罠なんて発動しても私が壊してあげるよ！海楼石は死んじやうかも！」

ルフィに続いて螺旋状の階段をグルグル走つて下りていく。向かつてくる看守や飛んでくる罠を跳ね除けて、遂に私達はレベル6へと足を踏み入れた。

「…！何このフロア…強者のオーラがそこかしこからプンプンする…!!」

「ここはレベル6…政府が表沙汰にする事すら憚る程の凶悪事件を起こした輩が主に連れてこられる場所ナブル…！この囚人は基本終身刑か死刑待ち…その名も「無限地獄」!!」

無限地獄…、放り込まれた囚人からすればたまつたもんじやないかもしれないけど、

別に関係ない私に言わせれば暑くもなく寒くもないここは都合が良いよ。

「エースボーイはこっちよー!」

「おおお!!待ってるエー…ぐエえ!」

「イワンコフがこっちって言ってるでしょ!」

全く見当違いの方へ走ろうとしたルフィの首根っこを掴んで走り出す。どうしてイワンコフは場所が分かるのかと思えば、その手にはさつき倒した看守の1人が掴まれていた。

「…、この檻…です…」

…王華が言うにはイワンコフの所へ行つた時点でインペルダウンでのエース救出は間に合わないとの事だけど、果たしてどうなるか…。

「…居ない…」

「い、イリス、苦しいって…!」

「あ、ごめん」

ルフィの首根っこ掴んでたの忘れてた。

それにしても、やっぱりエースは居ない様だ。この檻に居るのは傷だらけの大きな体格をした魚人くらいか。

イワンコフが脅した看守にこの檻で間違いないのかと再度問い質しても答えは変わ

らなかつた。

となると……やはり既にマリソフオードへと向かつたんだね……!

「お前さん、〃麦わらのルフィ〃だな!?”

「……ああ」

檻の中に居た魚人が大声で話しかけてくる。レベル6に居るような囚人がどうしてルフィの事を……、あ、いやそりやそうか、ここにはエースが居たんだからルフィの話も聞いたのかも……。

……と言うことはこの魚人は味方かもしれない。エースがルフィの事を喋るんだから少なくとも敵ではないのだろうし。

「今しがただ、すぐ追え!! エースさんはリフトで連行された!! 急げばまだ間に合う!!!」

「……そうか! ありがとう!……誰だか知んねエけど……!!」

軽くその魚人に手を挙げて礼を言い、私達はまたフロアを駆け出した。

と言つてもリフトはすぐそこにあるんだけどね。鉄柵も開いたままだし、流石に私達がかここに居るのは気付かれてるからこのリフトを動かすのは無理だろう。エレベーターみたいな構造だからこのチェーンを上に乗っていけば登れるんじゃないの? と思つた直後に上からバカでかいハリセンボンみたいな鉄球が落ちて来て上へ伝う道を閉ざしてしまった。

「素直に元きた道を戻ろうか！」

「おう！」

「…つていつの間にか塞がれてるじゃん!!」

階段は鉄格子に阻まれてしまった…しかも見事にこれ海楼石だ…どうする事も出来まい。

「つ…これは…ガス!?!」

その上階段の上から白い煙が迫って来た。

このフロアからの出口はこの階段とリフトだけ…なのにその両方が使えない…と。

「ガスだろうが何だろうが知るか!!うおおくくく!!…ぐー…」

「睡眠ガスみたいだね」

「無謀にも程があるよ麦わらボーイ!!」

まあ多分私にこのガスは効かないだろうけど、私一人が掛からなかった所で状況が変わる事はないだろう。

せめて女王化クイーンが使えるればこんな天井ぶち壊して上に進めるのに…!

「この睡眠ガスは私にお任せを」

「どうするの?」

「見ていれば分かる」

イナズマはそう言つて両手を巨大なハサミに変形させて地面をチヨキチヨキと切つていく。布じやあるまいしどんな切れ味だよ。ていうかあなたも能力者だったんだね。

「イナズマはチヨキチヨキの実際の「ハサミ人間」……切り出した物を紙の様に扱える……」  
やがてイナズマが切り出した地面は階段とこのフロアを隔てる鉄格子の上に貼り付けられ、階段からやつてくるガスを塞ぎ止める事に成功した。

「全滅をしなかつた事だけが救いだね。ルフィ、起きた？」

「ああ、悪い、もう大丈夫だ！」

「せめてもの対抗はコレ……！敵の情報を奪う事……！」

イワンコフが手に持っているのは……このフロアの電伝虫か、確かにその機能さえ停止させれば向こうの動きも鈍るだろう。

「……だけど常識で考えてもう間に合わナブルよ、エースボーイがリフトでスムーズに海上へ連行されるのに対し、こちらには立ちはだかる敵がいる！軍の護送は迅速……ビブルカードをごらん、真上は差してないんじゃない？」

ルフィが手の平にビブルカードを取り出せば、それは真上ではなく斜め上を差していた。

……つまり、エースらもうリフトを登り切つて連行されている最中と見て間違いない。

「気持ちを切り替えて。ヴァターシはこの大監獄からヴァナタを無事脱獄させる事に全

力を尽くす。エースボーイの身柄はもう「海軍本部」へ渡ってしまおう。諦めるんだね……、いえ、後は白ひげに賭けるしか……」

「……だったら、おれ行くよ！海軍本部!!」

「!!ヴァカおつしやい!!この世界の頂点の戦キャブルよ!!白ひげの実力知ってるの!!?迎え撃つ海軍の大将・中將・七武海の実力知ってるの!!?ヴァナタ命幾つ持ってるの!!?」

「……もし諦めたら、悔いが残る!!おれは行く!!」

ルフィなら絶対そう思うと思うていたけど……実際問題このフロアをどう乗り越えるか……。

……ん?何か知った顔が近くの檻の中から私をめっちゃ見てくるんだけど。出来れば見たくない顔なんだけど!

「……ここを抜けたきゃ、俺を解放しろ……!俺ならこの天井に穴を開けられる!どうだ女好き……クハハハ」

やっぱりお前かクロコダイル!!まさかこんな所で再び顔を合わせる事になるとは思ってもなかったよ!

「ふざけんな!お前はビビの国をメチャクチャにした奴だ!!」

「待ってよルフィ、私は別に良いと思うけど……それにコイツ程度ならいつでも倒せるよ、大丈夫大丈夫」



実際はいつでもは言い過ぎだけど、私こいつ嫌いだから煽っておこう。べー。

それに、今はクロコダイルの能力があれば助かるのも事実だし…。う、クロコダイルの脱獄の協力したなんて、死んでもビビには言えない…。

「後生の頼みだ!!」

「?」

クロコダイルに向かって舌を出して煽ってたら、エースの居た檻の中から魚人がそう叫んだ。

「わしも連れて行ってくれ!必ず役に立つ!!」

…この人が誰かは全く知らないけど…多分ルフィも私と同じ答えの筈だ。

「良いよね?ルフィ」

「ああ、いいぞ」

「かたじけない…!!」

リアルかたじけない初めて聞いたかも。武士みたいな人だ、ますます裏のない良い人感が強くなったよ。

そもそも人を見る目が良いルフィが良いって言ってるんだからダメな筈がないんだよなあ。

そういう訳で、私達はイナズマの持っている鍵を使って魚人とクロコダイルを解放し

た。

それにしてもクロコダイル…あなた囚人服似合わないなあ…バギーはあんなに着こなしてたのに…。

## 127 『女好き、抜け出せインペルダウン！』

クロコダイルと魚人：ジンベエを解放して天井に穴を空けた後、イナズマの能力でレベル5へと続く螺旋階段を作りそれを登り切った私達は、早速次のレベル4へ続く階段を登っていた。

イワンコフとイナズマはレベル5、5に戻ってオカマ軍団とボンちゃんを連れてくる為一旦別行動だ。ていうかクロコダイルはいつ着替えたの？どこにあったのそのいつもの服。

「今が朝10時前、処刑は午後3時！その時刻には必ず処刑は実行される！白ひげのオヤジさんが来るとすれば、その何時間も前に仕掛けるハズ!!エースさんはもう海の上、戦いはいつ始まってもおかしくない!!」

「白ひげがいつ仕掛けるとかは問題じゃないよ、その情報で大事なのはまだエースは殺されないって事でしょ！」

海軍本部もバカだよね、どうして白ひげと全面戦争になるって分かっているがらわざわざ時刻を指定して処刑しようとしているのか。

自分達の都合のいい時間に行ってしまうば戦争になる前に事を済ませられるという

のに…まあ、今回はそのお陰で助かってるんだけど。

「フン、扉なんざ無意味」

階段を登り切った目の前には大きな扉があり、クロコダイルがそれに右手を添える。

「俺の右手は乾きを与える」

そのまま扉とそれに連なる岩の壁諸共砂に変えて向こうのレベル4へと足を踏み入れれば、その先には沢山の看守が銃を構えて待つていた。

銃なんか効く人この場にいないでしょ。

「こちらレベル4、レベル6より逃れた囚人、七武海ジンベエ！侵入者モンキー・D・ルフィと『逃げ足』イリス！元七武海クロコダイル!!現れました、応戦します!!」

「撃て!!」

「効くか！くらえ… 30倍灰！拳雨・長!!」

銃を無視して、腕の数を30本に増やし長さも伸ばして前方に居る看守達を一気に殴り飛ばす。

ルフィ達もそれぞれ看守を大勢撃破していた。ジンベエも強いな…そりやそうか、看守の話ではこの人七武海らしいし。

その上後ろからイワンコフ達も追い付いて来て、テンションホルモンを打って貰ったのかボンちゃんもかなり元気になっていた。

「レベル5の囚人も出来るだけ解放してきたわ！このフロアでも手当たり次第の囚人を解放して行きなブル！」

ぶつちやけ悪人を解放するのはかなり気が進まないけど、こうなってしまうては仕方ない……！とりあえず先に看守室に向かい、目につく檻の中に鍵を放り投げていく。

「んげ！何でアンタいんのよう！Mr. 1!!」

「Mr. 1? ああ、ゾロに負けた人ね」

誰かが解放したのか、レベル3へと走る集団にMr. 1も合流していた。

ゾロに負けたとはいえ戦力としては十分だ、雑魚じゃないんだから役には立つだろう。

「よーし……行くぞ！海軍本部ー!!!」

このフロアを越えれば後3フロア……！レベル2は大した猛獣も残ってないだろうから抜けやすそうだし、思ったより早くインペルダウンを抜け出せるかもね！

「カニちゃん！レベル3へ行く階段どっちだ!？」

「左へ！」

カニちゃんて。確かに手がハサミになつてゐる時はカニっぽいけど！

「ブルゴリが来たぞ!!」

「サルデスも一緒だ!!」

前からブルゴリの大群：数だけじゃ足止めにはかならないと思うけど、その足止めでマゼランが到着すれば確かに厄介だ。

「暴れるブルゴリ！」

「ン〜フフ!!道を開けナツシブル!!〃顔面成長ホルモン〃！」

顔面がめつちや巨大化したイワンコフが目を見開く。

インパクトしかない見た目のイワンコフが、更にインパクトのあるサイズになってしまいうもメチャクチャだ…。

「地獄の！<sup>へい</sup>WINNK!!」

「うお…っ」

う、ウインク：??ブルゴリが纏めて吹っ飛んで行っただけど？バツチグウオオン!!  
みたいなおつもい音響いたんだけど??

ま、まあいいか、今のでブルゴリ軍団全滅したっばいし!

「ヒーハー!麦わらボーイ!ヴァナタ立ち止まっちゃダメよっ!後ろの事はヴァターシ達に任せて、どんどん前へ!どんどん上へ進みなさい!お行き!!」

「わかった、ありがとう!」

味方が強すぎて勝ちのルートに入っちゃってるなあコレ!…ん?

「ぎゃあああ〜!!獄卒獣だア〜!!」

「3人も居るぞ!!」

あ、あれは：マゼランぶっ飛ばした後に見た目隠れ美女!!嫁にしたいけど：私の立場じゃ絶対無理だよねコンチクショウ!!いや、諦めるな：チャンスは掴むもの：！結局今は無理なんだけど！

その時に見たでかコアラやシマウマも居るようだ。コアラ達はそこそこ強いのか脱獄囚やオカマ軍団を容易く蹴散らしていく。

仕方ないか：こっちの頭数を減らされる訳には行かない：！ちよつくら眠って貰おう!!

「30倍さんじゅうばいばい灰：つて、：私要らないじゃん」

グランデ・アルム

巨大な腕を発動しようとした直後、ルフィとジンベエ、そしてクロコダイルがそれぞれ3人の獄卒獣を持ち技でブツ飛ばした。

「：よし！じゃあ残った目隠れ美女は私が相手を」

「ンダメよクレイジーガール!!ヴァナータ達は先へ進めと言ったブルわよね!!?ヒーハー!!」

「多分あの女と話したいだけだろ」

「は、はあ？私が？こんな状況で？自分の欲を優先してるとでも??は、はは！ルフィはそれでも私の乗る船の船長??全く、も、もう少し仲間を信用しても：」

「こういう奴なんだ、面白エし強エぞ。嫁が絡むと怖エけどよ」

ジンベエも苦笑いを浮かべた。クロコダイルは興味無さげに鼻を鳴らすだけだ。言つとくけどあなたもその嫁関連で私に負けたんだからね!あの時ミキータに攻撃しなきや私はあのまま負けてたというのに…。

「目隠れ美女はイワンコフが対応してくれてるし、レベル3へ続く階段は目の前のアレでしょ?」

「そうだ、だがまだ副署長のハンニヤバルを見ていないのが気になるな」

イナズマがそう言葉にした直後、階段へ続く扉の前に誰かが立った。

誰だ?般若みたいな顔して…って、ハンニヤバルか。なんて分かりやすい名前と顔なんだ…!

「ここが地獄の大砦!何人たりとも通さんぞ!!見よ、レベル3へ登る階段には1000人の監獄弾バズーカ部隊を配置している!貴様らに出口など無い!」

武器は薙刀か…そのなんたらバズーカつてのが何なのかはさっぱり分かんないけど、ただのバズーカなら何千人居ようと同じ事だ!

「か弱い庶民の明るい未来を守る為!前代未聞の海賊、麦わら、逃げ足!署長に代わって極刑を言い渡す!かのバスターコールから逃げようとも、海軍大将から逃げようとも、この大監獄から逃げる事など不可能だとその身に味合わせてやる!!」



「…悪いけど、それでも私達は逃げるよ」

「逃げられるものならな！般若！」

「！」

何：!?周りの看守達が太鼓やマラカスを取り出してリズムを取り始めた：状況が一切掴めないんだけど…！

「般若！デ・リズム♪般若！デ・ニヤバル♪ご存知ハンニヤカーニバル！ // 焦熱地獄車 //  
！」

ぐるぐると薙刀を高速で縦に回し、このフロアの熱を利用して薙刀の刃に火をつけたハンニヤバルがその回転を維持したまま突っ込んできた。

「その程度の火じゃ、残念だけど私には通らないよ!!<sup>さんじゅうばいばい</sup>30倍灰、去柳薇!!<sup>さよなら</sup>」

「グハ…ッ！」

薙刀での攻撃を無視してハンニヤバルの顔面に拳を叩き込んだ。気持ち良い程綺麗に入った…！今のはノックアウトレベルの…！

「…つき、効かん!!」

「うわっ…！」

その隙に横を通り過ぎようとした私とルフィに未だ熱く燃える薙刀が鋭く振るわれ、後ろへ跳んで避けた。

「どけー!」

「やだねー!!」

「ゴムゴムのオ〜!! J E T 銃乱打!!」  
ジエットガトリング

ルフィの数多の拳が今度こそハンニヤバルを捉えて膝をつかせる。

アレは私でも喰らえば痛いでは済まなそうだ。

「…ま、だ、まだア〜〜!!」

「どんだけタフなの…:…じゃあ悪いけど、加減はしないからね! 巨大な腕。」  
グランデ・アーム

30倍さんじゅうばいばい灰、去柳薇! さよなら

「ツツ!!!?」

ドゴオン…!と地面にめり込ませる様に殴った、今の私が出せる最高火力だ…! 幾らタフだろうと…!

「ゴフ…! 待て…!!」

「…この…!」

何て奴だ…:タフにも程がある…! まさか私が思ってる以上に強いのかな…!?

私とルフィだけではなく、Mr. 1やボンちゃんにイナズマと、次々にハンニヤバルを攻撃するも彼は倒れなかった。

その体は血で黒く染まり、最早薙刀を杖代わりにしなければ立てない状態になろうと

も倒れない。

「は、ハンニヤバル副署長！」

「もう立たないで……！死んでしまいます!!」

「何を……！貴様らシヤバで悪名揚げただけの“海賊”に“謀反人”……！何が兄貴を助けるだ！社会のゴミが綺麗事ぬかすな!! 貴様らが海へ出て存在するだけで、庶民は愛する者を失う恐怖で夜も眠れない！か弱き人々にご安心頂く為に凶悪な犯罪者達を閉じ込めておく、ここは地獄の大砦!!それが破れちやこの世は恐怖のドン底じゃろうがイ!! 出さんと言ったら一歩も出さん!!」

「……なるほど、確かにその通りだね。世間から見た私達は悪……そして政府は正義……！だけど、私達にも私達の正義がある！お互いの正義をぶつけて……最後に立ってた方が勝ちなんだよ、この世界は!!」

「……なら、私が負ける事は無い……！」

自分の正義を疑わないハンニヤバルの返答に口角が上がった。私はこの人、どうしても嫌いにはなれないな……こんな人が居るのならインペルダウンも安泰でしょ、いや、これから抜け出そうとしてる私が言っても説得力ないけど。

「ふ……副署ちよ……！」

「な……、おい、どうしたお前ら！バズーカ部隊！何が起きてる!?!」

「……これは……」

バズーカ部隊が地面から生まれる「闇」に呑みこまれていた。闇……とくれば間違いない、奴だ……!

「やめときな、正義だ悪だと口にするのは……この世の何処を探しても……答えはねエだろ、くだらねエ!!」

いつの間にやら現れたソイツは、ハンニヤバルの顔面を思い切り蹴って踏み倒した。

やつぱり……ジャヤヤで会った大男……コイツが黒ひげ……!!後ろに居るのは仲間か……? 全員強者のオーラ放ってる……!

「ほうほう、コリヤすげエ面子が揃ってやがる。何か取り込み中だった様だな……ゼハハハ」

「ティーチー! 貴様が何故ここに居るんじや!! いや、今は黒ひげと言うべきか……!」

「ジンベエ……ハハ、オイオイ物騒だな、その拳は引っ込めて貰おうか。そういやおめエはエースと仲が良かったな……だがおれを恨むのはお門違いだ」

ルフィが黒ひげという名前に反応する。まあ当然だろう、エースを捕まえたのはこの男なのだから。

「お前が黒ひげ!!?」

「んん? そういや名乗った事は無かったな。ゼハハハ……! 久しぶりだな麦わらア! おれ

も驚いたぜエ、お前が我が隊長……エースの弟だったとはな。フフ……ここに居ていいのか？もうすぐ始まるぞ、お前の兄貴の「公開処刑」がよ……ぜハハハ!!」

「心配……無<sup>ク</sup>用、ゴムだから……なんちて。さ、早く行こうルフィ、今はコイツらに構つて暇ないでしょ」

「まあ待てよ、少し話そうじゃねエか。後から話を聞いてみりゃあ、その元七武海クロコダイルを討ち取ったのはおめエだつてんじゃねエか、女好きの……いや、逃げ足の女王イリス……あの時七武海の後釜を狙つてたおれとしちゃ、おめエかその船の船長の麦わらの首を取つて政府に実力を示すのが最も有効な手段だった」

だから何だと言うんだ。本当にただ喋りたいだけなの？

「だが運命はお前らを守つた……白ひげの船で大罪を犯したおれをずっと追いかけていたエースは奇しくも麦わら、お前の兄だった!弟とその仲間を殺しに行くというおれ達を目の前にして……あいつの退路は断られた!分かるか?おれ達を逃がせば……白ひげの名を汚すだけでなく弟が殺されちまうからだ!」

「運命に偶然など無いのである」

「ウィーハッハ!!立派に戦つてたぜエ、おめエの兄貴はよ!!」

「……………」

ルフィがプツツンしそうな事をペラペラ喋るのはやめて頂きたいんだけど……それよ

り私は黒ひげの後ろに居る“女”が気になった。

おかしいな…王華の話じゃ、現時点で黒ひげ海賊団に女海賊は居ない筈じゃ…？確かこのインペルダウンでカタ…カタリーナ？だか何だかを仲間にするって話じゃ無かつたっけ。

しかもその女の人、何故か私をジツと見ている…何なの…怖いんだけど。

生気のない瞳に、紫のストレートロングヘア、そして大きいぽよん。

「エースの墓前ではよくよく礼を言うんだな…！あいつが現れなかつたら、本来死んだのはお前らだ」

「だったら今…やってみろよ!!」

困惑する私を置いて、ルフィと黒ひげが戦闘を始めた。

…あ、確かにルフィの初撃をモロに喰らってるね。慢心と油断てのは本当みたい。

「……………、入州」

「ん?」

何…?今名前呼ばれたの?あの女の人に…?

それにしては発音に違和感があったと言うか…まるで私の名前を呼ばれた気がしなかつただけだ。

私がその人から目を離さないで居る間もルフィと黒ひげの戦闘は続いており、早い段階でジンベエがルフィを止めた。

今は黒ひげと戦っている場合では無いとルフィを諭し、双方睨み合っている。

そうだ、私も今はこの女の人に気を取られている場合ではない！

「マゼランが来たぞオーー!!」

「…それはマズいね…!ルフィ!行くよ!」

女の人は気になるけど、とにかく今はエース優先だ。こんな時にマゼランなんかとガチバトルしてる余裕は無い。

後方から聞こえた報せのすぐ後、同じく後方から爆発音が響いてくる。既に攻撃されてるんだね…最後尾からじわじわと数を減らされているのだろう。

「獄卒獣がまた出たぞ〜!!」

「今度はミノタウロスだア〜〜!!」

アレは…ルフィ達が倒してた牛!復活してるじゃん…!

「え〜!?アレはあちし達がやつつけた奴じゃないのよーう!!」

「復活は当然、あいつらは『覚醒』した動物系ゾオンの能力者だ。異常なタフさと回復力がウリなのさ!」

あのコアラとかシマウマとかも悪魔の実だったんだ。私が言うのも何だけど何でも

ありだね、悪魔の実。

「楽しみにしてろよおめエら!」

「ん?」

「わずか数時間後、おれ達が!!世界を震撼させる最高のショーを見せてやる!!ゼハハハハハ!!!」

ジンベエはそれに構うなど言って走り出した。

私達もそれに続くが：最高のショーか：多分それこそが王華の言ってたマリルフォードでの出来事だろう。

黒ひげが世界を震撼させる前に、逆に私がこの世界を震撼させてやる：！辿るべきだった運命は変えてやる：死ななくてもいい人が死なない未来へ：！

楽しみにしてなよ黒ひげ：！そのショーとやらが始まる前に、私が必ずお前達の企みを無に帰してやる!!



## 128 『女好き、地獄にも、咲く一輪の、友情（とも）の花』

あの後、黒ひげ達を無視してレベル3へとやってきた私達は、追ってくるマゼランから全力で逃げる様にレベル2へと登る道を辿っていた。

「クレイジーガール！ヴァナタまたあの変身でマゼランを倒す事は出来なっシブルなの！？」

「アレ使っちゃうとほぼ1日身動き取れないし能力も使えなくなるの！海軍本部に行くのならこんな所でそんな大技使えないでしょ？」

「ぬウ……ままならないわね！」

「だけど直ぐ後ろにはもうマゼランも毒竜ヒドラも居て、味方にした囚人達がどんどんやられていく。マゼランの毒だ……助かる見込みは無いだろう。」

「私をもつと強ければ、女王化クイーンをもつと自在に扱えていれば犠牲者はかなり減らせていた筈だ……。」

「だけど、ごめん……今はあなた達を追悼してる余裕が無い……！助かる様にと奇跡を願う事しか私には出来ないんだ。」

「軍艦と監獄船は監獄を囲む様に配置されておる、どれか一隻奪い取れば、処刑までにマリンフォードへ着ける!!」

「なるほどね……! 船の制圧か!」

それなら私ができるかな、私なら単純に神背ヒューマで人数を増やせるし、船を奪う時間を短縮出来るだろう。

レベル2へと続く階段を勢い良く駆け上がっていく。

マゼランは後ろ、副署長は倒れた、獄卒獣も後ろ、ならこれから先はもつとスムーズに進めるハズ!

階段を登り切れれば、案の定レベル2は手薄も手薄、それどころか囚人達が1人も居なかった。

「檻が全部解放されてる……! あれ、マゼランが居ない!」

「さつきイワさんとイナズマが下のフロアで立ち止まってたわ……!」

「……そつか……!」

ボンちゃんの言葉に歯を食いしばってただ走る。

マゼランを相手に時間を稼いでくれてるんだ……! イワンコフ……あなたが奇跡の人だって言われてるのなら、こんな所で死んじやダメだよ……!

レベル2の猛獣など足止めにもならない。イワンコフがマゼランを止めてくれてい

る今がチャンスだとばかりに私達は大した時間をかける事なくレベル1まで戻ってきた。

階段を登って来たから針地獄は通っていないけどね、今は1番最初にバギーと会った迷路みたいな場所だ。

「あともう少し……あ、あれは!!」

Mr. 3! ガネ! ついでに隣に居るハデッ鼻!

王華が完璧って言ってたのは、ここで再会出来るって知ってたからか!

あとなんか知らないけど獄卒獣も居るけど、なんで? 先回り出来る道があるって事かな、まあいいや。

「どけ〜ッ!! 30倍灰・巨大な腕!! 去柳薇… 銃乱打!!」

さんじゅうばいばい

グランデ・アルム

さよなら

ガトリング

両腕を巨大化させて4人の獄卒獣をブツ飛ばした。手応えアリ! 暫く寝てろ!

「お、女好き〜ッ!!? 麦わらも……! ってんぼ、ぼぼボス〜ッ!!?」

「あ、あれは七武海のジンベエ!」

「Mr. 3…お前か、使えねエカスがここで何してる…」

今回ばかりはMr. 3が鍵だから使えないなんて事は無いんだけどね!

「きゃ、キャプテン・バギー! レベル2から次々に囚人達と変態達が登ってきます!」

「変態まで〜!!?」

ああ、そうか、バギーが混乱に乗じて脱出する為に囚人を解放してたのか……！レベル4まで降りてたのにここまで登ってこれるなんてやるじゃん！それにそのお陰でMr. 3と合流出来たし、助かったよ！

「毒竜!!」  
ヒドラ

「…!?!」

「来たア！マゼランだア〜!!」

マゼラン!?じゃあイワンコフとイナズマは…!!

いや、まだ死んだと決まった訳じゃ無い……！イワンコフもイナズマも結構強かった、そう簡単には……!

「ルフイ君！上のフロア正面入口へ急ぐぞ!!まずい事になった、マゼランにばかり気を取られていた…!!」

「どうかしたの……って……！しまっ……!」

いつの間にか毒竜ヒドラがそこまで……！このままじゃ直撃してしまう……クソ、女王化クイーンを使うしか無いの……!?!

「キャンドル壁ウォール ツ!!」

「……Mr. 3!!」

今にも私達を呑み込もうと迫ってきた毒の竜は、Mr. 3の生み出した巨大な蠟の壁

によつて遮られた。そんな事も出来るんだ……!

「今の内に行け! 私の諦めは早いぞ! 借りの作りっぱなしはゴメンだガネ!!」

「だいじょーぶ! 借りなら後で沢山返して貰うから! それはそうとありがとね!」

「それはどういう……いやそんな事より早く先へ進め!! 私も早く逃げたいんだガネ!!」

能力の相性つてのは分からねエもんだな、とクロコダイヤルが薄く笑う。クロコダイヤル

ルつて Mr. 3 を過小評価し過ぎだと思っただけだなあ。

「おめエ、さつき軍艦奪うつて言つてたよな」

「そうじゃ、急がにゃあ……」

「じゃあ、イリス! みんなと先行つて軍艦奪つといってくれ! それまでおれ、ドクの奴止めてみる! ちょっと考えがあるんだ、どうせあいつに追われながら軍艦奪うの大変だぞ!」

「……ルファイが言うなら行くけど……もうあの毒に触れちゃダメだからね、ただでさえテンションホルモンとかいうドーピングして一時的に動ける様になつてただけなんだから、次は幾らルファイでも……」

「大丈夫だ、おれを信じろ!」

……はあ、信じてるよ、ずっと前からね! でも心配はするでしょ誰だつて!

これだからうちの船長はさ! 真つ直ぐで自分の身も顧みないトコあるからさ!

「…じゃ、早くしてねー！」

「おうー！」

だからこそ、私だつて船長の期待に応えたくなるんだけど！

ルフィに手を振つて正面入口へと駆ける。

あの場に残つたのはルフィとMr. 3、そして少しの囚人とオカマ達。本当は私も残りたかつたけど、軍艦を奪うのも大事だからね。ルフィに任された船の事もあるし！

「正面入口…着いた！もうちよつと…！」

「だが問題はまだある。外には軍艦が10隻はいるだろう…1隻につき海兵は800人、どういう風に待ち構えてるか分からねエが、軍艦を1隻奪うつて事は10隻いる軍艦全部を敵に回すという事になる」

「うん…！」

Mr. 1の言葉に頷く。いくらこのメンバーでも簡単な戦いにはならないだろう。なんせ8000人の海兵達を相手にするんだから。

そして、遂に正面入口の大きく重い扉が開かれていく。…んー…眩し…くはないね、霧が濃くて…、

……つて…。

「あ、あれ？」

「え、ええ!!軍艦が、ねエぞ!!」

扉を開けたら即砲弾やら何やらが雨あられの様に飛んでくるのかと想定していたのだけど、そこには…港には、何も無かった。

…そうか、そういう事か…!!

「成程、敵も思う程バカじゃなかった様だな…海底には大型の海王類達、確かにこのカームベルトの帯こそがインペルダウン最大の防壁だ」

ジンベエがさつき言っていた、マゼランにばかり気を取られていたってのはそういう事だった訳だ。

つまり、この大監獄を囲っていた軍艦は港を離れてどこか沖で待機しているという事だろう。

クロコダイルの言うように、普通なら船の無い私達にはこのカームベルトの帯を突破する事は不可能だし。

「じゃが、よく見ろ、霧の奥にまだうつすらと帆影が見える」

ジンベエが水平線を指差す。港を離れたのはそう前では無いって事か、確かにそこには船の影が見えていた。

「安心せい、わしがおる!…ここは任せて貰おう…!」

「そっか、ジンベエは魚人だもんね。なら…よっ！」

正面入口の大きな扉を片側だけ強引に外し、ジンベエに渡す。…お、重い。

「これに乗って軍艦まで行こうか、私は1人で大丈夫だからジンベエはその扉にクロコ  
 ダイルとか強いのを乗せて来て！」

「1人では言うが…お前さんも能力者じゃろう」

「そうだよ？まあいいから！じゃあ私が襲ってる軍艦まで、船を奪い取るメンバーが決  
 まったら来てねー！」

よっ、と海へ飛び出し触れた水面を凍らせて走る。

軍艦は…1番近いもので良いよね、うわっ、大砲撃ってきた！

「船は壊さない様にしないとぉ…ほっ！」

走ってる私に大砲など当たる筈もなく、ヒョイヒョイと避けて1隻の軍艦まで近付い  
 て飛び乗った。

おー驚いた顔してるね、そりゃ能力者が海上走ってきたらこんな顔にもなるか。

さーて…6億。パワー…は無理だから、女好きパワーでも見せてあげますか！

「船を奪いに来たんだ！絶対に逃すな！」

「能力者だろう！海へ落とせば勝ちだ！」

「逃げ足だぞ！恐れるな！」



「だからさあ…私の事を逃げ足逃げ足言うのは…やめてくれないかな!!」

突っ込んできた海兵の一人をアッパーでかち上げ、襟を掴んで集団に投げ入れる。

…ん?なんだあの水柱。ああ、クロコダイル達か。

「クロコダイルも来たぞオ!!」

「撃ち落とせ!!早くしろオ!!」

ジンベエがやったのか、海面から伸びる水柱が足場である扉を突き上げて私の襲う船へと乗り上げた。えーつと、クロコダイル、Mr. 1、…なんだバギーか。ボンちゃん  
が居ないのは予想外だ、残る様な人には見えないんだけど。

「水を凍らせるのは何の能力だ…? いやいよてめエの能力は訳が分からねエな」

「まああなたは砂だもんね、砂。ぶつ、弱そう! あ、実際水に弱いんだっけ?? ぶー!」

「あ、煽ってんじやねエよ女好きゴラア! 早く周りの奴ら片付けちまえ!」

来たんならあなたも少しは手伝ってよ…。

それに私のクロコダイルに対する接し方はこんなもんで上等だつてーの!

「ひ、怯むな! 放り出せ!」

「出せるものならやってみたら? ヒュルマインクリース神背・倍加!!」

「オイオイ、こんな集団戦でそれを使って意味あるのか」

「いーいっだ! あなたの能力こそ私達を巻き込まないでね!」

とはいえクロコダイルの言った通り、神背ヒューマを出したからには私がダメージを受ける訳には行かない。ま…この程度の敵なら問題ないけど。

「氷腕ジャリガ！ 30倍灰さんじゅうばいばい…！大旋回だいせんかい!!」

腕を伸ばして高速で回転するだけのお手軽技だ。

周りに味方が居たら使いづらいけど、まあクロコダイルとかならないでしょ！

「ぐふオ…！つ、つめてエ…！」

「う、撃て！全弾逃げ足に集中させろオ！」

「この船に乗ってるのはそのガキだけか…？俺を誰だと思っていやがる。砂嵐サイフルス」

クロコダイルの起こした砂嵐で沢山の海兵が空へ舞う。

「魚人空手…！槍波！」

海中からはジンベエが水を槍の様に飛ばして攻撃していた。Mr. 1もスパスパの能力を使ってみるみる内に数を減らしていく。バギーはその辺で倒れてた。

流石に軍艦といえど、私達を止められる程の人は皆海軍本部へ呼ばれているのかこの船を制圧するのにそう時間はかからなかった。

周りの軍艦から砲弾が飛んでくるかと思っただけ、それはジンベエが火薬類を濡らして未然に防いでくれている様だ、バギーも少しはなんかやったの？ん??

まあでも、なんだかんだ全員倒したし、後はルフィ達を待つだけ…！

「！来た……！」

視力倍加を使つて正面入口を見ると、マゼランに追われてはいるもののルフィ達が走つてくるのが見えた。

「……だ、だ、だ、この船をそつちに寄せている暇なんて今はない……！どうしたものか……！」

「大丈夫じゃ、安心せい！わしが既に手を打つておる！」

「ジンベエ……！」

船を奪つた事で海中から乗り込んできたジンベエが小電伝虫を取り出す。その先の相手は勿論ルフィだった。

「ルフィ君、来たか！」

『来た！まだアイツに追われてんだ！もうすぐ出口で行き止まっちゃうよ！』

「すまん！船は既に1隻奪つたが、すぐにそつちに行くには距離がある！！……だが止まるな！そのまま海へ飛び出せ！全員を海へ突き落として構わん……！その後の事はわしに任せろ！！」

『……わかつた！頼む！！』

そう言つてルフィは電伝虫を切つた。

ルフィらしい決断だ、普通は風カイハクの帯ベルトへ飛び込めなど言われて、はい分かりましたなんて言えないよ。

「それで、実際どうするの?」

「まア見ておれ」

インペルダウンの港では、既にイワンコフの地獄のWINKの反動でルフィ達が海に飛び込んで居る所だった。

「…あれは…!」

だけど、ルフィ達が海へ沈む一步手前という所で海から飛び出してきた無数のジンベエザメがルフィ達を受け止めてこつちまで運んでくる。

ジンベエが呼んだのか…! そういえばケイミーちゃんも似たような事してたっけ。あれ、でもそれって人魚の特徴だった様な…。

「やったア〜!! 軍艦に辿り着いたぞ〜!!」

まあいいや、ルフィ達が無事に船まで辿り着けたんだから!

ちゃんとMr. 3も居る…! 大丈夫、作戦は崩れてなんかない!

「喜ぶのはまだ先じや、相手も火薬を入れ替えてきておる、急いで船を出さぞ!!」

「そうだね…! 全員砲弾を迎え撃つ準備! まだ周りには何隻も軍艦が居る事を忘れないで!!」

「おう!!」

その直後、沢山の砲弾が後ろから勢いよく飛来してきた。もう一度ジンベエが相手の

火薬類を台無しにしてくれれば楽だけど同じ手は2度も通じないだろうし、彼が操舵に回った以上は私達でどうにかする他ない!

「…そういうえば、正義の門はどう抜けるの?」

飛んでくる砲弾を蹴り飛ばしながらジンベエに問う。忘れてたけど、こいつが開かなければどうする事も出来ない…!

「突っ切る」

「無理に決まってるだろハデバカかてめエ!事態は最悪だ、てめエ何でそんなに落ち着いてんだよ!」

とはいえ、ここまで一緒に戦ってきた感じからすればジンベエは馬鹿じゃない。何か考えがあつてこう言っているのだろう。

なら私達はとにかく船を守る事に集中するべきだ…!この船を沈められれば勝ち目などゼロに等しい!

「よし…じゃあこれで時間を稼ごう!」

軍艦に手を置き、少しの間集中する。

…ん…久し振りだなあこんな大物を増やすのは!

「…船、倍加!ついでに大きさも…倍加!」

「どえエえ!?!なんだなんだ!?!後ろにバカでかい船が現れたぞオ!?!」

この船の数と大きさを2倍にして後方に出しただけの単純な話だけど、それだけで軍艦からの砲弾を大半防ぐ事が出来る!

「オイ前も見てみる!正義の門が…開いていく!!」

「ど、どういう事カネ…!?畏か!?」

「畏でも何でもいいでしょ、向こうに行けるのなら!」

何故だか分からないけど、ジンベエはこうなる事を初めから分かっていた様だった。

「…お前さんの仲間のお陰じゃ。1人残って正義の門を開けると言っておった」

「…仲間…?…あれ…!?そういえばボンちゃんは!?」

「ホントだ…!ボンちゃんがいねエぞ…!?」

…まさか、ボンちゃん…!

だって、そんなの…!私達またあなたに…!!

「ボンちゃん1人残ったのか!?おれ達このまま進むのか!?」

「時間が無い」

「あいつ置き去りにすんのかよ!!」

「他にも…!途中倒れた同志達を何100人と置き去りにしてきた!!また戻ってマゼランと戦う気か!?更に犠牲者は増える!時間も失う!!誰かが残らねばこの門は開けられんかったんじゃ!!」

……。くそ、確かにその通りだ……！私は今の今までこの正義の門を忘れていた……その責任を、ボンちゃんが引き受けてくれたんだ……！

「……、まだ、繋がつとる……!!」

「!!」

ジンベエが差し出す小電伝虫を見て、ルフイは震える手で受け取った。

小電伝虫の電波は短く、この門が閉じれば通信も切れるとジンベエは言う。

「……つ、ボンちゃん!!おい！聞こえてんのか!?ボンちゃん!!お前また何でこんな事すんだよ！あん時みたいによオ！」

アラバスタでもそうだった。彼はその時も身を挺して私達を救ってくれている。

そして、今回も……！

「一緒に脱獄するんじゃないやなかったのかよオ!!おれ……！助けて貰つてばつかじやねエかつ!!そこに居るんなら、返事しろよボンちゃん!!」

周りの脱獄囚やオカマ達も、そうだったのか……と小電伝虫に集まってボンちゃんの名を呼ぶ。

私だつて叫んだ、せめて感謝の言葉くらいは……言わせて欲しいから！

「ボンちゃん……！門が閉まる……おれ達……行くよ!!……ありがとう!!」

「私からも……ありがとう!!」

「ボン兄イ！ありがとよー!!」

「ありがとーっ!!」

『……麦ちゃん!』

!!ボンちゃん……!

ルフィの持つ小電伝虫が、涙を流しながらもニカツと笑顔を見せた。そんな状況で、私達を救って……ありがとなんて言葉で大泣きして……!

『必ずアニキ……救って来いやア……!!! アンタなら……! アンタ達なら……!……き……!……!……!』

門が閉まる、最後の最後まで……ボンちゃんは私達へ言葉を紡いだ。

私達は、こうしてインペルダウンを抜け出した。ボンちゃんがいなければ絶対不可能だっただろう……。

「……絶対、エースは救ってみせる」

強く拳を握りしめて言葉を出す。

失った人は多い……だからこそ下を向いてる暇なんてない……!

ここに来るまで犠牲となってくれた人達の為にも……私はこの戦争……何が何でも自分の思い描く最高のシナリオで……!!



「ハッピーエンドで…終わらせる！」

## 頂上戦争編

## 1 2 9 『女好き、戦争参加』

「さっきの正義の門はボンちゃんが開けてくれたけどさ」

「ボンちゃん…」

操舵手のジンベエの近くで、ルフィ、クロコダイル達が集まっているのを確認して話を切り出した。ルフィはまだ落ち込んでるみたいだ。仕方ない事だから今はまだ存分に落ち込ませてあげよう。

「今いる海流が世界政府専用の航路…『タライ海流』なら、海軍本部に行く為の正義の門はどうやって開けるの?」

「…ぬウ…それは、とにかく行ってみない事には…」

今回はボンちゃんも居ない、海軍本部に味方も居ない…最悪は扉を回り込むしか無いけど、そんな時間ないよね。

「そんな事より女好き…お前の目指すあのカスみてエな夢は前進してるのか?」

「ん?あなたが私の夢に興味を示すなんて珍しいね、クロコダイル」

「興味じゃねエ、確認だ。俺はお前を甘く見て、そしてお前の女に手を出して負けた…そ

れは事実だろう。いつまでも弱者だと思つちやいねエ…面倒だが、お前の女に手を出さねエ様にする必要がある。…今はな」

「ほう…この男にそこまで言わせるとは…イリス君はそれ程までに強いのか?」

なんでクロコダイルまで私が嫁閔連となると暴走する人みたいな認識してるの? そういえば手配書の別紙もそんな感じで記載されてたつけ…。間違つてはないけど。

「イリスは強エぞ! 青キジを倒したからな! しっしし! おれも早く強くなんねエとなア」

「なんと…そこまでの強者には見えんが…」

「まだ『冠』が出てねエ…本気じゃねエんだろう」

そういえばクロコダイルは私の半女王クイーン化までは見てるんだっけな。

「ジンベエも強いじゃん。七武海なんですよ?」

「えくくくつ!?! お前七武海なのかア!!?」

「看守達が散々そう言つてたじゃん…」

流石ルフィ、その辺の話は聞いてなかつたと見える。

「わしの事はジンベエと呼んでくれ、それに七武海はもう称号剥奪は確実じゃ、思う存分「海軍本部」で暴れてやろう! オカマ君の想いにも応え…必ずやエースさんを救出するんじゃ!!」

「え〜〜つ!?」

今度はバギーが叫ぶ。次から次へと何? ルフィは良いけどあなた達の話に耳を傾けても時間を無駄にしそうだから嫌なだけだな。

「おい! 海軍本部って何だ!? まさかこの船海軍本部へ向かってんじやねエだろうな!? 「白ひげ」と「海軍」の戦争の事知らねエ訳じやあるめエお前ら!!」

バギーの声に周りの脱獄囚達もざわめきだす。

ていうか、そもそもタライ海流に乗ってる時点で海軍本部に行くのは当たり前じゃん。正義の門を閉める事で波の向きを一定にさせて、エニエス・ロビーからインペルダウン、インペルダウンから海軍本部ってな感じでぐるぐる回ってる海流が今私達を通ってるタライ海流なんだから。

そんな感じの事をクロコダイルも呆れた様に口に出せば、バギーやMr. 3達は聞いてないぞと騒ぎ出した。

「全く…: だったら今すぐ船から降りれば? あ、Mr. 3はダメだからね」

「どうしてだガネ!?!」

「ていうか降りるか! 折り紙つきでハデ死ぬわ!!」

「だったら諦めて海軍本部に行くしかないよね! はいこの話終わり! …と、なんか電話かかってきてるよ!」

軍艦に設置されてる電伝虫がプルプルと電波の受信を告げている。

この軍艦専用の奴なら：相手は間違いなく海軍だろうね。あ、ルフィが出た。

「もしもし」

『こちら海軍本部』

「あ、おれルフィ」

「名乗るな海賊が!!」

この船が奪われた事なんてもうとつくに知られているだろうし、わざわざ電話をかけてきたんだから何か用でもあるのだろうか？

『この船が脱獄囚共に乗っ取られた事は、インペルダウン護衛艦隊より報告を受けている。通信が途絶える前の獄内からの情報で割り出された今回の大脱獄事件の「主犯」は3名!』

「3人?」

『海賊“麦わらのルフィ”。同じく麦わらの一味でもある“逃げ足の女王イリス”。——そして、同じく海賊“道化のバギー”!!』

「え〜っ!?マジか! キャプテン・バギーが七武海を抑えての「主犯」!?!」

「あんだ一体何者なんだ!!」

主犯格に選ばれる様な事したっけ…? あ、囚人解放かな? でもそれはイワンコフ達も

同じ事だし…。

『名もない一海賊と我々は甘く見ていたが、〃道化のバギー〃、貴様が海賊王ゴールド・ロジャーの船の元クルーである事が分かった!』

「え、ええええええ!!!!?」

『更には「四皇」赤髪のシャンクスの兄弟分である事も調べはついている!!』

「「ん何だつて~~~~!!!!?」」

えええ!!?それには私もビックリなんだけど…!海賊王のクルーで四皇の兄弟分つて……、いや、そもそもその情報が間違つてるんじゃないの?

「…なぜバレた…!」

でも当の本人はマズい事になった…という顔をしている。彼の性格なら、もしそれが誤った情報なら飛び跳ねて喜んでゐる筈だ。ぎやははは!おれ様は海賊王の元クルーで、四皇の兄弟分だぜエ!?!…みたいな。うん。

『それ程の男がよくも今まで際立つた事件も起こさず水面下に潜んでいたものだ。…ここへ来て頭角を現したか…火拳のエースとの繋がりは見えて来なかつたが、目的は当然〃麦わらのルフィ〃らと同じくエース救出であろう』

本人はこの海流を抜け出したくて仕方ないみたいですけどね。

『その船にはジンベエ、クロコダイル、イワンコフを始め曲者200人以上の脱獄囚が乗

船している事も確認済み……！忠告しておくが、こちらが「正義の門」を開かない限り「マリンフォード」到達はおろか、そのタライ海流から抜け出す事すら出来ない！お前達全員には逃げる海も……生きる道も無い……！以上だ」

「……おい!!待て海軍!!エースは必ず助け出す!!お前ら芋洗つて待つてろ!!」  
「首だよルファイ……つてもう切っちゃつたか」

私がさっきの電話の相手なら受話器の向こうで腹抱えて笑つてる所だよ。

でもルファイらしくていいね、私の士気をあげるのにはそういうので充分……！

「キャプテン・バギー！アンタ海賊王のクルーだったのかっ!!」

「それにあの赤髪の兄弟分!？」

「おれ達の救世主はやっぱ物凄エ海賊だったんだ!!」

「マズい……！コレがバレると今後政府に目エつけられちまうのに……！」

ボソツと呟くバギーの言葉を聴覚倍加で聞き取った。という事は本当なんだね……経歴だけは凄いいんだ。

「ていうか、そういうえばレイリーも言つてたつけ」

「副船長……!?てめエらレイリーさんに会つたのか!?元気にしてたか!?懐かしいぜエ……」

!!副船長、一体どこで……」

「『冥王』レイリーの名が出たア……!!すげエ会話だ!!」

「キャプテン・バギー！ やっぱアンタ恐るべき人物だったんだな！」

「すげえぜ！ あの伝説の海賊団の一員だなんて!!」

そのまま「バギー！ バギー！」と謎の声援を送られるバギーが、何やらぶつぶつと眩き始めた。倍加で聞き取つても言葉になつてないから何言つてるのかさっぱり分からない。

「キャプテン・バギー！ おれ達アあんたに付いてくからよ!!」

「指示をくれ！」「海軍本部」へ行こうなんて奴らからこの船を奪おう!!」

「そして自由の身になるんだ!!」

なんだこの流れ。…困つたなあ…なんだかんだ言つてもこいつらそこそこの懸賞金かかつてるし、中にはレベル4や5の囚人も居るから面倒だよね…。

「シア麦わらア!! この船を空け渡して貰おうか!!」

「せっかく脱獄したつてのに海軍本部へなんて行かれてたまるか!!」

「こつちにやキャプテン・バギーが居るんだぜ!!」

「困つたのう」

「殺せばいいんだ、全員」

未だやまないバギーコール。ほら、正念場だよキャプテン・バギー。あなたが次に発



する一言でクロコダイルの行動が決定するんだからさ。…私は皆殺しなんてしないからね!?

「……鎮まれい!ハデバカ野郎共オ!!」

にやり、と何やら思い付いたのかバギーが口角を上げて叫ぶ。その声に脱獄囚達はピタリと動きを止めた。

「全くとんだ酔狂メンだお前ら!!この船はもう止まらねエんだ、戦争のど真ん中へ向かってる!!「乗り掛かった船」って事もあらアな…ハラア括つてよく考えろ、手を伸ばせば届く距離に世界の「頂点」が首を磨いて現れる…!!もう生涯…こんな「チャンス」はねエだろうな」

「…!!」

「男なら…おれと一緒に夢を見ねエか…?!おれは今日、白ひげの首を…即ち「世界」を取る!!!」

バギーがまたとんでもない事言ってるよ…と思いつながら見てたら、脱獄囚達の心にはガツツリ刺さった様で彼らは涙を流してバギーを称えていた。

「うう…!キャプテン・バギー…!おれ達…地獄の闇に打ちのめされて…いつの間にか大切なモン失っちゃまってたみてエだ…!」

「あア…!あの頃持ってた夢という名の「心の宝石」をよオ!!」

「おれアアンタについてくぜ!! 平穩な暮らしなんかいらねエ!!」

「そうとも! 行くぞ野郎共だ!! いぎ「海軍本部」へくく!!」

『ウオオオオオオオオオオオ!!』

!!!

「…なんか纏まつてるね」

「こういう才能はある様じやのう…」

前世に生まれてればその才能はフルに生かしてたというのにね。社長向きの才能とか強そうだし。

…ん? ジンベエの胸元に着物に隠れながらもチラリと見えてるアレって…タイヨウのシンボル?

ジンベエもタイヨウの海賊団なんだ…アーロンの事とか知ってるのかな…?…かなーり前に…ヨサクかジョニーがジンベエの事について何か言ってた様な気がするんだけど…流石に覚えてないや。

…ま、その事は凄く気になるけど…!

「見えたね、正義の門」

「もうか? 早エなく!!」

「遅いくらいじゃ…風が手伝えばもつと早く着いたはず…さて、あの門をどう越える

かのう」

ほんとにね…どうしよっかなあ…。

押したら開かないの？ていうかクロコダイルが触れば良いんじゃない？一部砂に変えてそこ渡ればいいじゃん。

「…つて、あれ？」

「開いた！」

「どういうこつちやい…」

正義の門が開いてくけど…!?開けないんじゃないやなかったつけ…！動力源はマリルフォードの筈だし、何でこのタイミングで…。そりや私達は助かるけど。

「なんかよく分かんねエけど、通つていいなら通るぞ!!待つてるエースくく!!!」

「何言つてるの、通つちやダメでも押し通る!!でしょ？」

「ぎやははは!!ついに近付いてきたぜ…！え？何が!?そりやおめエら、このおれ様が天下を取る時がだア!!」

「いよっ！キャプテン・バギー!!!」

ぎやーっはっはっは!!と高笑いするバギーを称える信者達。いい加減うるさくなってきたけど、嬉しそうだから放つておいてあげよう。

と、そこハイワンコフが近付いてきた。イナズマがマゼランの毒を浴びていたから治



んんん?! いやまたまた待つて、なんか船浮いてない!?! ていうかコレ浮いてるんじやなくて…!!

「すんげエ大波だア!! 船に掴まれエ!!」

「じ、ジンベエ舵! 舵!!」

「む、無茶を言う…! こうなれば舵など効かんわい…!」

「どんだけ高いんだこの波…! どこまででも上がっていくんだけど!」

波に乗って遙か上空までやってきた私達は、突然の異常事態に混乱してしまいそうになる。

しかもこの大波だけでは終わらなかつた。

「今度は波が凍ったぞオ!」

「船底も波と共に凍っちゃつテブルわね…! 一体何が…」

「…考えたくないけど…」

かなり上空まで波と共に持ち上げられた私達は、船底が凍らされた事で身動きが取れなくなつていた。何か強い衝撃を加えれば船と氷を離せそうだけど…。大波はともかく、こんな大規模な災害を一瞬で凍らせる事が出来る奴なんて私は一人しか知らない。

「下を見てみる、答えが分かる」

クロコダイルの言葉を聞いてちらつと船から下を覗けば、そこにはマリンプォードの

街並みと…広場で起こっている大人数の衝突が見えた。

視力倍加…と。…エースは…居るね、処刑台の上か。そんなもってクジラみたいな船に乗ってるあの人が「白ひげ」…？確かに凄いオーラだ…四皇ってやっぱり伊達じゃないんだね。

あと、やっぱり海軍側には青キジが居るなあ…!!嫌だあ…!

「もう戦争は始まつチャブルのね!!」

「…よし！お前から聞け！おれのアイデアでこれを通り切る!!ここまで来たのに急がねえと…エースの処刑までもう3時間もねえんだ!!」

「ルフィの案か、珍しいね」

時間が無いのは確かなのでみんなでそのアイデアを聞く事にした。

ルフィの考えはこうだ。この波は凍らされると言っても波は波、斜面が必ず存在している。

まずはこの船を氷から外してその斜面を滑り落ちて脱出しよう、という訳だ。

「…バカカネ!?軍艦だぞ!どうやって氷から分離させる気だ!!」

「この氷は間違いない青キジがやったものだから簡単には壊れてくれない…けど、力を合わせれば大丈夫!思い切り船の下の氷を攻撃したら削れるんじゃない?」

「当然だ!!出来ねえ訳ねえ!おれ達にはキャプテン・バギーがついてるんだぞ!!」

「バギー！バギー！！」

とまあこんな風に人数もそれなりに居るし。

じゃあ、そうと決まれば早速…、

プルプルプル…ガチャ

「？電伝虫？勝手に出たけど…」

「連絡用じゃろう、一方通行でこちらの声は向こうに届かん」

へえ…電伝虫にも色んな種類があるんだね…。

『全艦、全兵に連絡！目標はTOTYZ、陣形を変え通常作戦3番へ移行、準備をぬかりなく進めよ。整い次第予定を早めエースの処刑を執行する』

「え」

……………い、

「「急ぐぞオ!!!」」

そして私達は即氷へと降りて船について離れない氷を攻撃した。私は去柳薇さよなら、ルフィはゴムゴムの斧へ、クロコダイルは砂漠デザートの宝刀スパルダ、ジンベエは五千枚瓦正拳、そして最後のイワンコフが地獄ヘルのWINKウインクをぶちかました時…まさかの足元の氷にヒビが入った。

「や、やり過ぎた〜!!?」

「あああ!! 落下するぞオ!!」

やがて氷の波は攻撃に耐え切れずに崩れ落ち、その上の私達も下に落ちる事となる。

こ、こんな高さから落下したら流石に死ぬよ!? みる、ルフィにしがみついておこう!!  
だつてさつき下見たとき一面氷だつたし!? 間違ひなく叩きつけられて死ぬ!!

「うわあああああ!!? や、やつぱりルフィの斧が強すぎたんじゃないの!? そりや斧つて下に衝撃加わるじゃん!」

「イリスも下らへん殴つてたじゃねエか! …あ、でもいいやおれゴムだから」

こんな作戦も何も無い戦争への参加の仕方なんてあるの!? 下の海軍や海賊達も驚愕の目で私達見てるじゃん! そりやそうだよ! まさか空から軍艦と人間とオカマが降ってくるなんて誰も思わないよね!!

と、にかく! …まずは今を生き残らないと! …頼んだよルフィ! 空島の時もすんごい高いところから飛び降りて風船で助かったんだから今回もそんな感じで頼んだよ!!

「…つて下海じゃーん!!」

なんで私達が落ちるとこだけ凍つてないの!? そんな事つてある!? 海水は海水で死ぬー!! そ、そうだ! …海面に触れる瞬間に凍らせて! …つて無理だよね普通に考えて!!

…:…よし、後はジンベエに任せた!! 溺れた私達を助けてね!!



## 130 『女好き、戦争を駆ける』

「ぶはア!! あ、ありがとうジンベエ! 死ぬかと思った…!」

「全く、能力者つちゆうモンは厄介じゃのう…!」

結局海へ落ちた私達であったが、能力者は全員ジンベエの迅速な対応によつて、海に浮く私達が乗つてきた船の残骸へと乗せてもらった。

「ルファイ!!!」

「!!…エ~~~~ス~~~~ス~~~~ス~~~~!! やつと会えたア!!! 助けにきたぞオ~~~~!!!」

遠くから自分の名を叫ぶ兄の声にルファイが反応する。

なんだかんだと色々あつたけど、ようやくここまで来れた…! さあ、正念場だよ私…

!!! 絶対にエースを助けるんだ!!!

「あ、アレは『逃げ足の女王』…!? クロコダイルも居るぞ!!!」

「革命軍のイワンコフまで!」

「ふむふむ…」

視力倍加を使つてざつと辺りを見渡す。

…たしぎちゃん、見た事ないけどピンクの美しいお姉さん。その他にも沢山の美女…戦争つて地獄かと思つてたけど、案外それでも無さそう！

…で、王華が言つてた黒ひげが潜んでる場所つてのはどこだろう。まだこの辺りじゃないね。

「あ、ワニのヤツ…!!」

「ん？」

ルファイが慌てて白ひげの船へと走つていった。

ああ、クロコダイルが白ひげの首狙つたからそれを止めに行つたんだね。とりあえずルファイはルファイで放つておいても何とかなるでしょ、私は私の為すべき事をやらなくちゃ。

えーつと、王華が言うには青キジや他の人を説得して黒ひげを倒す協力をして貰うんだつて。…今は海兵がうじやうじや居て厳しいから…。

「まずは数を減らそうか！30倍さんじゅうばい灰！去羅波さらば・一文字いちもんじ!!」

「させないよオ」

「げ…っ」

き、黄猿!! あんな遠いところから攻撃するなんて卑怯でしょ！

私の斬撃が黄猿の脚から放たれる光線に掻き消されて消滅し、更に突き抜けてこつち

まで光線が迫ってくる。

「ぜ、全員全力で横に跳んで!!!」

大声で指示を出して真横に跳び、何とか黄猿の光線を避ける事が出来た。

あんの猿野郎く……!今みたいな攻撃を絶え間なくぽんぽこ撃てるってどうなってるの……!

私達は何とかそれを避け切る事が出来たけど、光線が直撃した所の氷の地面や近くにあった私達が乗ってきた船の残骸なんかはその攻撃だけで跡形も無くなっていた。

……やっぱり、女王化も無しにやり合っているいい訳ないよね。

でもこれだけの大混戦、こんな時こそ私の身長を上手く利用して人に隠れながら安全に進軍出来る筈だ。

「よし、進もう!」

エースの居る処刑台まではまだまだ距離があるけど……助け出すまで女王化<sup>クイーン</sup>を使えない今は急ぐしかない!

「どけエ!!」

「DEATH<sup>デ</sup>WINK<sup>ウインク</sup>!!」

みんなも暴れてるし、流石の黄猿もここまでの面子を纏めて消し去るなんて無理だろうからね。

青キジは……、うげえ……めっちゃ私の事見てるんだけどお……！大将だから後ろの方で構えてはいるけど、視線は私から外さないんだけど！！怖い！！

「行かせない！！」

「あ、ピンクのお姉さん！！」

綺麗な人だなあホント。こんな状況でも無ければ今すぐ求婚したい所だったのに……

！インペルダウンの目隠れ美女もそうだったけど、本当に勿体ない……！

あわせほおり  
「拾羽檻！！」

「何これ……！」

お姉さんの両手から出る柵の様なもの、まるで檻の様に私の周りを囲む。かなり広

範囲に囲ってるから私だけじゃなくて海兵達も入ってるけど……。

わたくし  
「私の体を通り過ぎる全ての物は…… 禁縛ロックされる！！」

……なるほど、それでこの檻を閉じれば私を拘束出来るって訳だ。

でもそれじゃあ……！

「こんな風に、私の動きが見えなきや意味ないよね？」

「ツ……！速い……！ヒナ不覚……！」

速さを30倍にしてお姉さんを通り抜ける。

ヒナっていうの？悪いねヒナお姉さん、相手してあげたいけどそんな時間もないし……

!

…ん？ていうかその名前、どこかで聞いた様な……あ！アラバスタの時の人！

あの時は名前だけしか聞いてなかったからすっかり忘れてたよ、まさかこんな美女だったとは！……くー！求婚したい！

「またね！」

ここであのお姉さんをスルー出来たのは大きい……！ボンちゃんを簡単に捕まえられる様な相手って訳だし、戦闘してたら時間かかっちゃう。

ルフィはどこに……あ、居た。暴れてるなあ……こんな乱戦でもどこに居るのか分かるなんて凄いと思う。

「ルフィ!!来るなア!!!」

エースはそんなルフィを見て処刑台から叫ぶ。エニエス・ロビーでの私もあんな感じだったのかな……。

つてうわ、危なっ！ちよつとよ見してただけなのに剣が背後まで迫ってた……！そうだよね……ここは戦場……！それもかなり大規模でレベルの高いモノなんだから油断はして良い筈無かった……！

「分かつてるハズだぞ!!俺もお前も海賊なんだ、思うままの海へ進んだハズだ!!俺には俺の冒険がある！俺には俺の仲間が居る!!お前に立ち入られる筋合いはねエ!!」

近づいてきた海兵数人を巨大な腕で叩き潰して走る。

「お前みてエな弱虫が俺を助けに来るなんて、それを俺が許すとも思ってたのか!? こんな屈辱はねエ!! 帰れよルフィ!!! 何故来たんだ!!!」

…そうは言うけど、エースも分かっている筈だよ。

例えそんな、思ってもない様な言葉を連ねて遠ざけようとしたって…それが通用する様な人なんかじゃないって事くらいね。

「おれは…弟だ!!! 海賊のルールなんておれは知らねエ!!!」

その言葉にエースは齒を食いしぱり、周りの海兵達はどよめく。

ルフィが弟と言ったから、じゃあるフィの父親もロジャーなのか? という疑問が大半だったけど…。

「親がどうこうとか下らない事言ってるから、目の前の私を見落とすんだよ! 30倍灰

! 去羅波・一文字!!!」

「ぐウ!?!」

「がはっ…!!」

よし、今回は阻止されなかった! 結構な数ダウンさせたんじゃないかな。それでも全  
体で見れば微々たる人数だけど。

「ゴムゴムのオ! 銃乱打!!!」

…まだまだ序盤だつてのに疲れるなあ…！ただの雑魚兵と戦うならいいけど、ここにいるのはその辺のモブ海兵ですら油断できないから…！

『何をしてる、たかだかルーキー2人に戦況を左右されるな！』

処刑台の上から司令塔の様な男の声が拡声器越しに聞こえた。その男は私をチラリと見た後視線を戻して話を続ける。

『麦わらの男もまた未来の「有害因子」！幼い頃エースと共に育った義兄弟であり、その血筋は…「革命家」ドラゴンの実の息子だ!!!』

その言葉にまたも周りがざわざわと騒つく。革命家ドラゴンっていう名はそれだけ世界に浸透しているんだね、戦争の真つ只中でも驚きで動きが止まったり鈍ったりして人が沢山出てきてるくらい。

「ゴムゴムのオ〜〜!!<sup>ギカント</sup>巨人の・回<sup>ライフル</sup>転弾!!!」

そんな騒めきをかき消すかの様に吠えるルフィが、対峙する巨人族の海兵をその巨大な拳で吹き飛ばす。

「エース〜〜!!!好きだけ何とでも言えエ!!!おれは死んでも助けるぞオオ!!!」

親がどうか、自分の問題がどうかはどうかだっついていいんだ。

ただ、死んで欲しくない。その一心でルフィは戦場を駆けている。

他のみんなが今のルフィの言葉を聞いてどう思ったのかは知らない。

…ただ私は、かなりやる気が出たよ。

こんなに頑張っているのに…こんなに傷付いているのに…！なのに最後は助けられないなんて許せる訳がない！！

「女好き！」

「…あ、たしぎちゃん…！」

くつそ…！本当に状況が勿体ない…！

まあ普通に考えれば海賊の私が海兵を嫁にするなんて無謀もいいとこだけ…！でも絶対いつかは嫁にするから覚悟してよね！！

「ていうか、たしぎちゃんが居るって事は…」

「どけたしぎ！ホワイトランチャー！！」

「やっぱり近くに居るよね！スモーカー！！」

煙となつて突進してきたスモーカーが繰り出す十手の振りを、かがむ事で避けて後ろへ跳び退く。困つたな…自然系ロギアか。

「ルフィはあつちだけど？私よりルフィの方が仲良かったじゃん！」

「てめえらと仲良くした覚えはねエがな。少し確かめに来た…『逃げ足』とやらをな」

む…私の不名誉すぎる異名関連か。それは今もあそこで私を見てる怖い人に聞いた方が分かるんじゃないかな！



「残念だけど…今はまだ本気出せないからまた後でね！」

「ハッ！なら尚更逃す事は出来ねエだろう！ホワイトブロー！」

「うぐっ!!」

ヒナお姉さんの要領で横を通り過ぎれば、後ろからスモーカーの腕が煙となり迫ってきて十手で私の頭を地面に叩き付けた。

う、ぐうおオ…!!い…痛過ぎる…!!意識が飛ぶかと思った…!そういえばアレ海楼石入りだっけえ…!!

「はあ…はあ…か、海楼石は私には禁止だよほんと…」

「その様だな」

頭から血をドクドク流す私を見てスモーカーがそう呟く。くそ…十手で押さえつけられてるから身動きすら取れない…!

「おのれ！離れぬか!!」

「!?ぐ…!?」

な…何…!?誰かがスモーカーをぶっ飛ばしたの…!?頭押さえつけられてたから見えないんだよね…!

「…!ハンコック！てめエも七武海をやめる気か!？」

「黙れ!!怒りゆえ何も耳に入らぬ!!そなたよくもわらわの愛しき人を殴り飛ばし押さえ

込んだな!! 生かしてはおかぬ…こんなに怒りを覚えた事はない!! そなたを切りキザンで獣のエサにしてやる…!!」

「は、ハンコック…!!」

「はい♡」

そつか、もともと私がこの戦争の招集に応じる様頼んだからこの場に居て当然だよね…!!

でも助かった…今は覇気が使えないからスモーカーに手も足も出ないのは事実だし…。

ハンコックはそんな私に近寄ってしゃがみ、胸の谷間からごそごそと何かを取り出す。

どこに保管してあるねーん…むらつとするからやめて欲しい…。

「そなたらは必ず生きてここへ来ると信じておった。…これを…! ルフィの兄の手錠のカギじゃ…!!」

「え…! ありがとう…!! 本当にあなたには助けられてばかりで…!」

カギを受け取り、そのままハンコックの手をギュッと握る。

本当に女ヶ島からこのマリルフォードまで…彼女が居なきや何も出来なかつただろう。…ダメだ、気持ちが昂つてきた。

「よ、よいのじゃ、気にせず先を…先を急ぐのじゃイリ…っ」

私に手を握られただけでアタフタしてるハンコックをぐいっと引つ張り、そのまま強引に口付けを交わす。

…ゆつくり堪能してる暇も無い…！舌を絡める余裕すらない…！だけど今は…これだけでもしたかった。

「…じゃ、ありがとう！また後でね！」

「……………はあん…♡」

「か、海賊女帝に無理矢理口付けした!？」

「せ、精神攻撃だ…！シヨックで崩れ落ちてるぞ!!」

好き放題言ってくれるね?! いいもーん! ハンコックは幸せそうな顔してくれてたも  
ん!!

…とにかく、面倒な人をまた一人突破出来た…！しかもエースのカギまで手に入ったし、ルフィに伝えたい所だけど…！

「ルフィは……っ痛てっ！もう！邪魔しないで！30倍さんじゆうばいは……い!!!」

ドン、と何かにぶつかって後ろへよろめき、そいつをぶっ飛ばしてやろうと視線を前に戻して口をあんぐりと開ける。

ど、どどどどうしよう…!!?まさかこんな早い段階で絡んでくるなんて思ってた  
というか…いやホントになんてこんな前線に居るの!?さっきまで後ろに居たじゃん!

「青キジ…!!」

「よっ、久しぶりだな、イリス」

指を2本立てて「よっ!」とポーズを取る青キジに思わず頬が引き攣った。普通に名  
前と呼んできたし…友達か!!

ああああ…!!本当にどうしよ…!30倍で勝てる様な相手じゃないってのに…!

…よし…、逃げよう!!!

## 131 『女好き、対峙するは三大将』

「…あの、すいません、私が悪かったんで…」

「まア落ち着け…別に取って食ったりしねエよ。捕まえはするが」

「既に捕まつてる様なものなんですけど!？」

はい、という訳で実際に逃げ出してみた所、あつという間に周りを氷の壁に囲まれて閉じ込められたという状況ですね!

そんなに広くないし、見たところ直径5メートルつてとこかな!ハハ!!ガツテム!!!  
そんな狭い空間に青キジと2人?死んだんじやないかな…私…。

ていうか何でこの中明るいの…氷で外の光塞いでる筈じゃん…え?光を通す?氷ですもんね、そうですね…!じゃあ何でエニエス・ロビーで同じ様に閉じ込められた時は真つ暗だったんだよオ…!!

「…えーつと、とにかく話を聞いてくれない?私、どうしてもしなくちゃならない事があつて…」

「『火拳』が死ぬ未来でも見たか?」

…まあ青キジならそう言ってくるよね…。ここはどう返せば…黒ひげの事を話しておこうか…?

「エースは関係ないよ、それはルフィが何とかする」

とりあえずエースの事は誤魔化しておこう。バレたら都合の悪い情報だけを隠して…後はさもこつちを本命かのように話せばいい。嘘も混ぜながら話してみよう。

「この戦争に…黒ひげが来てるの」

「…黒ひげ?」

「そ。インペルダウンにも来てたし…レベル6の囚人を何人が引き抜いて、自分の仲間に加えて何処かに潜んでるの」

今はまだ居ないだろうけど…戦争の終盤には必ず現れる。それは王華が言っていた事だから間違いない事だ。

「そいつらの奇襲で多くの命が無くなる。…それは、あなた達海軍も同じこと」

「ま…なんだ、その話は分かった」

お、なかなか幸先良い! エニエス・ロビーで青キジにある程度私の事教えておいて正解だったなあ…後はこのまま畳み掛けて黒ひげを倒す手伝いをして貰えるよう話を持っていくて…。

「だが、それとお前さんを捕まえるのは別の話だ。居ると分かった以上はこつちで対応

出来るだろう」

「へ？」

「俺からしてみれば、お前を野放しにしておく方がよっぽど危険に思える。黒ひげは後で対処するでしょう」

ええええええ……この人私の事買い被りすぎなんじゃない!? 一回あなたに勝つただけじゃん……! しかも情けで!

「ちよ、ちよつと待つて本当に! あなたは黒ひげを甘く見てる様だけど、下手打ってやられてるのがあなた達の未来だからね!」

そんな未来無いけど!!

でももつとずーつと先の未来は知らないよ? 海軍どころかこの世界そのものを脅かす存在になるかもね!

「悪いが、俺は別に黒ひげを甘くみちやいねエよ。元より奴からは得体の知れねエ臭いが漂っていたんだ……警戒はしていた。だが……俺は奴よりもお前を危険視していると言うだけの話だな」

「なんでそんなに私を買ってくれてるのはかは知らないけど、お願いだから見逃して……なんて言っても仕方ないのは分かっているんだけど!」

逃げ場は無いし、戦うしかないか……?

この戦争に参加するって決めた時から覚悟はしていたけど、まさかこんなに早く青キジと戦う事になるとは思ってもみなかったな……ていうか戦いたくない。

「悪いけど……女王化は使えないからこのまま相手させてもらうね」

「姿は“それ”で構わねエのか？」

「構うよ、出来れば本気を出したいけど……それは後にとっておかないと本当に困る」

「俺を相手にして先の事を考えてんのか、やっぱりお前は面白エ奴だな、イリス」

……さて、どうしたもんかな。話し合いは失敗に終わったし、かと言って本当に青キジと戦うって訳にもいかない。だって死ぬし。

よし、シミュレートしよう。

まず1、体温の熱を倍加させて氷の壁を溶かして逃げる。

……一番無難かな、でも溶かすまでにちよつとは時間かかるし、その間青キジが黙って見ているとも思えない。とにかく候補の1つってだけだね。

2つ、体温の熱をマイナスに倍加させて青キジの能力に対抗する。

絶対零度レベルまで体温を落とす事で青キジに凍らされる事が無くなるかもしれないという希望的推測の案。

前世ならともかく、今世ではそんな法則ぶち抜いて凍らされそう……ていうか絶対零度とかこの世界存在するの？光の速さで動いてる人が居る世界だからこの案はあんまり



当てには出来ないね…。

3つ、時間を稼ぐ。

これはもう話をしまくつて時間を稼ぐうつつ案だけど、青キジが興味を唆られる様な内容じゃないと意味が無い。

黒ひげの情報すら私より優先度低かったんだから…もう何話してもダメな気がする…3も無理そうだね…。

「じゃあここは無難に…!!」

「まーた捨て身役かあー!」

神背<sup>ヒューマ</sup>を発動して青キジへ突撃させた。ほんとごめん!

その隙について手の平の大きさと同体温に今出来る最大の倍加を付与し壁を溶かす。

あーもう!何この氷!一般的な人間の体温って36度とかでしょ!?!その30倍だよ!900だよ!!何で溶けるのこんなに遅いのか教えてくれないかな!?

「アイスタイム」

いやー!!「私」が一瞬で凍らされちゃったけどお!!?

まあ…だよね!勝てる訳ないよね、ごめんねほんとに!

<sup>アイス・ボックス</sup>  
「氷箱」

「ちよ…」

せつかく解凍していた氷の壁の上に新しく壁が1枚追加された。血も涙もないとは  
こいつの事だよほんと……!

「本気を出すつもりは本当にねエのか?このままだと間違いなく死ぬぞ」

「そうは言ってもね……!こつちにも事情つてモンがあるの……!!私だつて死にたくはないよ……!」

もう……こればかりは仕方が無い……!この戦争がいつ終わるかは分かんないけど……!

「全・倍加!30倍灰!!」  
オールインクリース さんじゅうはいはい

「……あの時の変化とはまた違うようだな……身体を大きくして素の力を上げたか」

私のタイムリミットは、後1時間……!こんな所で捕まつてる場合じゃない……!!

「巨大な腕!!去柳薇ア!!」  
グランデ・アルム さよなら

この狭い空間で、思い切り巨大な腕を振り回して氷の壁にぶち当てる。

よし……なんとか壁を壊せた……!青キジがエニエス・ロビーで見せた鎧を纏う前に離れないと……!!

「た、大将青キジに捕まったハズの逃げ足が出てきたぞ……!」

「いや、あれは逃げ足か!?姿が全然違う……!!」

まだ捕まっていっての！

せつかく不意を突いて脱出が叶ったんだ…このチャンスは無駄にしない！

「あららら…もうかなり作戦進んでる様子じゃないの」

「…!!パシフィスタが…こんな…!!」

ずらりと並ぶ何10体ものパシフィスタを見て目を見開いた。その先頭には戦桃丸が立って指示を出している。

ルフィ達が苦勞してやっと1体倒せるレベルなんだから、そんなじゃそこの海賊じゃ太刀打ち出来ないだろうな…!!

くそ、改めてこの戦争の規模がどれ程のものかを見せつけられた気分だ。

例えば私が女王化クイーンを使ったとしても…タイミングを測らなければ戦況は左右されないだろう。

「……？」

それに…何だ…？さつきまでとは回りの雰囲気全然違う……。

「オヤツसान!!? 本当かよオ…!!」

「おれ達を売ったのかア…!!」

「何の話…?!…!!…白ひげ…腹が…!!」

何がどうなってるの…!?

ちよつと氷の壁に阻まれてる間に事が起きたのか、白ひげの腹から血が溢れ出て  
し……！周りの海賊達からは白ひげに対する悲痛な声が響いてるし……！！

「青キジイ……！！」

今度は海軍側から青キジを呼ぶ声が響いてきた。

「おつと……センゴクさんに呼ばれたようだ……仕方ねエか、一旦場は預けておこう」  
「そんな場は封印しても良いからね！」

海軍側にもトラブルがあつたのか、あんなにも急いで青キジを呼び戻すなんてね。私  
はラツキーだけだ。

この戦争もかなり混戦を極めてきてるみたいだ……何故か白ひげに不信感を抱いてる  
人達が気になるけど……。

「うわ……！！」

急に地面が揺れ、倒れないようにバランスを取りながら周りを見れば、この島を取り  
囲んでいた波の水が白ひげの能力によって粉々に粉碎されていた。

一体何の能力だろう……いくら何でも破壊力が尋常じゃない気がするんだけど。

「海賊なら……！！信じるものをはてめエで決めろオ……！！」

「退路が……！！」

「あの軍艦を使えば、おれ達逃げられるぞ……！！」

「じゃあやつぱり、オヤツさんはおれ達を裏切つてなんかいなかったんだ……!!」  
 「すまねエ……オヤツさん……!!」

白ひげの大声で我に返つたのか、不信任を抱いていた海賊達が白ひげに許しを乞うように謝り出した。

良く分かんないけど、つまり白ひげの信用を損ねるような何かを海軍側が起こして、それを上手く白ひげが捌いたつて所かな。

捌いたと言つてもその代償は大きいけどね……白ひげの腹に穴が空いたのは痛手なんてモノじゃないハズ。

「俺と共に来る者は、命を捨ててついて来い!!!」

「「ウオオオオオオオオ!!!」」

「行くぞオ!!!」

そう言つて白ひげは船から氷の地へ飛び降りた。ついに動くのか……四皇が!

「構えろオ!! 暴れ出すぞ!! 世界最強の男がア!!!」

海軍の司令塔の男がそう叫ぶ。

私も青キジが面倒だとか言つてる場合じゃないね……!

「後々、ある意味で世界最強になる女もここに居るつてのを忘れないでよね……!

30倍灰……!! つ……うえ?!」

じ、地面が傾いて…！じ、地震！？いや…これはそんな生半可なモノじゃない…！島ごと海も傾いてるんだ！

当然こんなバカげた事をしでかしたのは白ひげだよね…世界最強は伊達じゃないか。

氷の大地も所々が割れ、下手をすれば下の海に落ちかねない。彼の船員達クルーは早々に避難していた様だ。教えてよ…。

「何だ…！？壁!?!」

「今度は何だ!!」

私達を囲む様に大きく、そして分厚い壁が地面から生えてくる。四方八方を壁に囲われたみたい…、これじゃ処刑台すら見えやしない…！

…ん？一箇所だけ壁が上がってない所があるね…！そこに巨人族が倒れているから、あの人がストツパーとなつて壁の上昇を止めているのか。

「よく見れば海兵も後ろに下がってるっばいし」

だからセンゴクさんじゅうばいばいつて人は青キジを呼んだのか…納得はしたけど、困ったね…。

「30倍灰、去柳薇!!」

ドゴオン!!!

…ダメだ、この壁、30倍でもビクともしない。かといってあの一箇所だけ壁が上がってない所から進軍したつて、待ち構えられて袋叩きにされるのは目に見えてるし…

!

「打撃がダメなら斬撃はどうだ……！ぶつ壊れる!! 30倍灰さんじゅうばいばい！去羅さら……ば!!」

あつぶない!!

なんか熱を感じて上を見れば、巨大な拳型のマグマが隕石の様に無数に降ってきていた。

去羅波さらばを使う直前だったから、狙いを壁からそのマグマに切り替えて何とか起動を逸らすことに成功した、……けど、逸らしたただけだ、相殺とまではいかなかった。

これほど大量に落ちてきている拳マグマの内、たった1つ……それすら逸らすのがやつとなんて地獄かここは!

「足場が……!」

そうか……狙いは私達の足場か!

元々私達が居るのは海を凍らせた氷の上。エースの居る処刑台の広場に行く為の道を壁で塞いで、退路にすらも壁を張って逃げ道を塞ぎ、氷が溶けた海に落とすつもりなんだ……!

「ま、私には効かないけど」

無くなった足場を瞬時に凍らせてまた作る。

溶けた所で私の足の温度をマイナスにしていれば問題ない。溶けては凍り、溶けては

凍りの繰り返しってだけの話だ。

だけどうしたのか…、今も白ひげがその強大な能力で大気にヒビを入れ、かなりの衝撃を壁にぶち当てても砕く事は叶わなかった。となると私が女王化<sup>クイーン</sup>してもこの壁は壊せないって事だ。

『作戦はほぼ順調、これより速やかにポートガス・D・エースの処刑を執行する!!』

「聞いたか今の!! あんな見えもしねエ場所、仲間をあつさり殺されてたまるか!!」

「オーズの道しかねエ! 気をつけろ、敵は必ず構えてるぞ!!」

オーズ…? もしかして壁の上昇を止めてるあの巨人族の事…!?

…いや、あの巨人族は血を流してるし、私の知るオーズでは無いんだらうけど。

「と言つてもあの道しかないなら仕方ない! 私もあそこから…!」

「イリス!!」

「わ…!」

オーズが開けてある道から突撃しようと走り出した直後、遠くにいるルファイが腕を伸ばして私の腕を掴み引き寄せた。

む、イワンコフもジンベエも居るね。



「どうしたのルフィ、何か作戦でも思いついた？」

「ああ、頼む、一緒に来てくれ！」

「分かった。どこへ？」

「作戦の内容は聞かんのか」

ルフィの言葉に即領いた私にジンベエが言うが、内容なんて今はどうでもいい。ルフィがするって思つた事を全力で援護するのが仕事だ。

「あれは……！オーズが立つダブル……！あの傷でまだ立ち上がるなんて、無茶をするわ！」  
「だったら丁度いい！やってくれジンベエ！」

「全く……！お前さんも充分無茶じゃ……！」

そう言つてジンベエは足場が崩れて海になつてゐる場所へ飛び込んだ。ルフィも海の上に丸太の様な船のマストを浮かべ飛び乗り、私もその上に立つ。

「うわ……!!」

直後、真下の海面がうねる様に盛り上がつて一本の海流となり、私達をマストごと天高く持ち上げた。

この技インペルダウンの軍艦を奪う時にも一度見たつけ……！あの時はクロコダイル達の乗る扉を船に押し上げたんだよね。

「……!!」

そして今回は…!!

「よつとー!」

天高く上がった海流が地面へ落ち、私とルフィも上手く着地を決める。

その海流は私達の行く手を拒んでいた壁すらも越え…即ち、私達が立つこの場所は…。

「処刑台の広場…!」

多くの人が起き上がったオーズへ意識を向けているから出来た事だ。

今はこつち側に味方は1人も居ない…だからこそ私達がここで暴れに暴れて後続が続きやすい環境を作っておかないと…!!

「あららら、またすぐ会えたな、イリス」

「堂々としちよるのう…ドラゴンの息子オ…」

「恐いね…この若さ…」

「…!!!」

つていきなり青キジと黄猿!?!え、という事は真ん中にいるこのおじさんは赤犬!?!三大将揃ってるじゃん…!!

「行くぞ、イリス!!」

「…了解…キャプテン 船長!」

大將がなんだ……！もう止まれやしない！

エースはそこに居る……だいぶ近付けたんだ……！……つて、あ、M r. 3忘れてた!?

# 132 『女好き、女王（クイーン）化発動』

「エースは返して貰うぞっ!!」

「倍加!」

ルフィが手に持つマストを三大将に放り投げた。その際にマストに触れ、大きさを倍加させる。

「用があるのはイリスなんだが…」

ルフィが放り投げたマストは青キジが一瞬で凍らせた…が、ルフィはそれを読んで、凍ったマストに「スタンプ乱打<sup>ガトリンク</sup>」をぶち込んだ。

それによってマストは砕け散り、青キジ達へと残骸が降り注ぐ。

「ギア…2!!」

「ちよ、速っ…!」

その隙にルフィが3人の横を通り過ぎ、私も最大まで速さを倍加させてルフィに続く。と言っても30倍じゃルフィのギア2には追いつけないんだけど。

「んん、遅いねエ…」

「!!」

文字通り、光の速さで私達の前に移動してきた黄猿の蹴りをモロに受け、私の目の前をルフィが吹っ飛んでいく。

見聞色が使えなきや本当に何も見えないし、気付いたら移動してて怖いよこのおじさん!!

「お前の相手は俺だ、まーゆっくりしていけ」

私の前には青キジが立ち塞がった。

今、私達の足場は氷じゃやない。だから奴の機動力はそこまで高くはない筈だが…それでも今の私より遅いなんて事は無いだろう。

「いい加減にしてくれないかな…！人一人処刑するだけでこんな戦争になるんなら、処刑なんてやめたらいいじゃん！」

「お前達が海賊である以上は仕方がねエ事だ。例えお前が市民を襲つて無かつたとしても、海賊というレッテルだけで恐れられているだろう。それだけでも罪は罪…その上火拳は海賊王の息子、海軍としても見逃す訳にはいかねエのさ。…まー、俺は別にどつちでもいいんだが」

ぐぬぬ…！何も言い返せない…！

私は海賊…前世でいう犯罪者だ。青キジの言っている事は正しいし、私のしている事は間違っているんだろうね。

だけど……!

「私の正義は、今はエースを助けろって言ってる。黒ひげを止めろって言ってる! 犯罪者上等……! 罪なんていくらでも重ねて来た!! 邪魔を……するな!!」

青キジに突撃して拳を振るう。それは簡単に受け止められ、私の腕はその瞬間にパキパキと凍っていくが、そんなの何の問題も無い!

「そんな使い捨てに気を配っていいの? ちよつと視野狭いんじゃないかな! 30倍灰!」  
さんじゅうはいばい

青キジに掴まれていた私の腕がフツと消えた。当然だ、何故ならソレは私が能力で増やした腕……本物じゃない。

「ヒート熱腕!! 去柳薇ア!!!」  
さよなら

熱を倍加させた私の拳が青キジの顔面へと突き刺さる。もつとも、奴にダメージなんて入ってないだろうけどね……!

「だけど一旦頭は砕けてる! 今がチャンスだ……!」  
 「あなたの相手なんてしてられるか!」

そのまま青キジを通り過ぎて処刑台を見れば、今にもエースの首に刀が落とされようとしている瞬間だった。

まずい……時間を取られ過ぎた……! 女王クイーン化も去羅波さらばも間に合わない……っ!!

「あつ……！」

刀が振り下ろされる直前に、執行人2人へと砂の斬撃が襲い掛かる。

いつの間にかこつち側に来ていたんだ……！そうか、奴は飛べるから……！

「貴様……白ひげに旧怨があるお前は我らに都合よしと思つていたが!!……ククロコダイル!!」

「あんな瀕死のジジイ、後で消すさ……その前にお前らの喜ぶ顔が見たくねえんだよ!!」

こいつがビビ達にした事は許してやらないけど、今回ばかりは本気で助かった……！あんな一瞬じゃ私の女王化クイーンも間に合わないし……！

「青キジは……！」

ちらりと後ろを見れば、奴は私を気にしながらも青白い炎を纏う男と戦い始めた。

誰か分かんないけど青キジを止められるって凄いね！パイナップルみたいな髪型はかなり斬新だけど！

「逃げ足！もう逃げられんぞ!!」

「逃げる気なんて無いっての!!どいて！」

前に立ち塞がった海兵を蹴り飛ばして先へ進む。

ただどすぐにまた海兵が現れ、殴つては現れを繰り返す。くそ……流石にキリが無い……

！

「ウオオオオオオオオ〜!!!」

「!? な、なに…!?」

1つだけ壁が上がっていないなかった場所から、鯨をモデルにした船が突っ込んできた。オーズが引き上げたんだ…! 船には白ひげを始めとしたさつきまで壁の中に居た人達がみんな乗っているとみていいだろうね。

「広場に入ったぞオ〜!!!」

「エースを救え〜!!! 海軍本部を攻め落とせエ〜!!!」

そして白ひげが船から広場へ飛び降り、手に持つ薙刀を振るえばそれだけで何10人も海兵が塵の様に飛んでいく。いくらなんでもバカ火力過ぎでしょ…!

「野郎共オ!! エースを救い出し!! 海軍を滅ぼせエエエ!!!」

「ウオオオオオオオオオオオ!!!」

ビリビリとその雄叫びだけで空気が震えているかの様に肌を感じ取った。

滅ぼすまで行かれたら困るんだけどね…嫁にしたい人だつて居るんだから。

「女王…! ここは通さん!!」

「!!…うぐ…つ!」

走る私の目の前に現れた海兵の蹴りを腕でガードするも、その威力はかなりのもので



受け止めた筈の腕が震える。

私を「女王」呼びなんて珍しい人も居るんだね…しかも強いし…!

「いったいなあ…! 女の子に蹴りかかるって、それでも海兵なの!」

「貴様をただの女とは思っていない。まだ本気を出していないと見える今の内に討ち取らせて貰うぞ…!」

「…っ、私の女王化を知ってるの…!」

刀で斬りかかってきた海兵の攻撃をすんで避け蹴りを放つも剃ソルで躲されて逆に蹴り飛ばされる。

この人、本当に強い…! ただの海兵じゃないな…!

「げほっ…! …ぐ、あなた、誰…っ?」

「私は海軍本部中将、モモンガ。エニエス・ロビーのバスターコールにも参加していた…  
といえれば分かるか?」

「…なるほどね」

あの場に居たから私の事を知ってるのか…、それに中将って…大将の1つ下だよな?  
そりゃ強い筈だよ。

「ふう…、全く、この戦争は本当に面倒だよね…! 私のやるべき事は多いし、何より役割  
が重要過ぎる! それに成功したって嫁が増える訳でもないし、メリット少くない? 私

だって死にたくはないっての!」

「なら、何故この場に居る! 本当の力を出すこともなく、ただ無様に逃げ回るだけ! この戦争の規模に怖気付いたのなら、今この場で私が討ち取ろう!!」

「…何故この場に居るのかって?」

再度斬りかかってきたモモンガの刀を小太刀で受け止め、腹に足裏で蹴りを放つて無理矢理距離を取らせた。

つまらない事聞くじゃん、そんなの決まってる!

「<sup>キャプテン</sup>船長の為だよ…! 数少ないメリットにルフィの為だつて理由が含まれてるのなら、私はそれを全力で頑張りたいてって思えるんだ!!」

更に後ろへ跳んでモモンガとの距離を伸ばす。これだけあれば充分な筈だ、私<sup>クイーン</sup>が…女王化を使用する為の隙を埋める距離は。

王華…ごめん! さつき思い付いた考えがあるから、今使わせてね…!

いつまでもこんな所でモタモタしてらんないの…! Mr. 3 だつて探さなくちゃならないし、何より負けつばなしは性に合わないから!!

「…ふう…集中…!」

「ツ!! 逃げ足の女王」を狙え!! 変化を防ぐんだ!!」

「もう…」

髪は伸びて、全・倍加時オールインクリースより身長は下がり、頭にティアラ、背にマントが出現する。

モモンガはそれを見て舌打ちをし、深く息を吸い込んで刀を構え直した。

「遅い……100倍ひやくばいばい灰こくとう!!黒刀……去羅波さらば!!!」

横薙ぎに振るった巨大で真つ黒な斬撃がモモンガに迫る。

背後は沢山の海兵、避けられる筈もなく彼はそれを刀で受け止めるが、完全に威力を殺し切れずに弾き飛ばされ後ろにいた海兵を何10人も巻き込んだ。

「エースは返して貰うよ!」

「オオ……逃げ足の女王」

「まった厄介なのが来たね!!ふん!」

走り出した私の横顔を蹴り飛ばそうとした黄猿の攻撃を避け、逆にその顔面に蹴りをぶち込んだ。

光の速さがなんだ!自分が速いだけで、動体視力まで上がってる訳じゃないんでしょ

!

「女王・倍加!」  
クイーンインクリース

「……つと。あれ、もう女王化使ってるの!?!」  
クイーン

「まあね!考えはあるから許して……エースを救うよ、カギはここにある!」

王華を呼んで、ポケットに入れていたカギを見せた。

今の私なら処刑台まで行くのはそう難しい話じゃない筈だ……!

「……いや、処刑台前にはガープが居る! ただの老兵じゃないよ……あの人は本当に強い! それにそのカギはそれ程重要でもないの!」

「どうして?」

カギが無くちや結局エースを解放するなんて無理だと思うけど……!

「視力を倍加させて処刑台を見てみて。執行人2人のうちの1人……見覚えあるでしょ?」

「?……あ、……Mr. 3!」

さつきクロコダイルが執行人2人を倒した時に入れ替わったんだ……! そうか、あそこ  
にMr. 3がいるのならカギなんてどうとでもなるのか……!

じゃあこのカギは私が貰ってもいいかな? ハンコックからのプレゼントだし。

「……それに、多分もう黒ひげ達は来てる。だけど私達が奴らに奇襲するタイミングは  
エースを確実に救い出してから。……今使ってる女王化は……多分その時まで保たないよ!」  
「大丈夫、さつき考えがあるって言ったでしょ!」

「考え? どうせ無茶な事ですよ」

「……なんか王華、私の考え透かしてない? 伊達にずっと見てくれてた訳じゃないんだ  
ね。」

「まあ…：そうでもないかも？イワンコフに頼もうと思つてさ」

「…はあ、やつぱり無茶するんじゃない。ナミさんに怒られても知らないよ」

大丈夫大丈夫、バレなきや問題ない！

「アイス塊フロック、両棘矛バルチザン！」

「おつと…！」

背後から飛んできた複数のナイフの様な氷を最小限の動きで避け、それを行った人物…：青キジに視線を向ける。

「やつとその姿になつたか」

「何であなたつてそんなに私を気にしてるの？この場には私より強い人だつて居るでしょ」

流石にゴロゴロは居ないだろうけど。三大将で白ひげを見るのが一番良いんじゃないのかと思うんだけどね。

「ノ、馬鹿言つちやいけねえよ、将来的に一番厄介なのは…：間違いなくお前だろ」

「…なるほど、それは言えてるね」

「それに、俺としてはお前の事を気に入ってる。この間のリベンジも兼ねてつて所だ」

「あなたからそんな言葉が出てても違和感しか感じないけど？」

リベンジとか…：絶対そんな事考えてないでしょ。

青キジは私の言葉に小さく笑って、自身を中心に竜巻の様な吹雪を発生させた。…そりや使うよね、私と戦う気ならさ。

「… 氷の宝鎧」  
アイス・バッキン

「今回は情けも何も無さそうだね…！」

吹雪が晴れたそこには、やはりあの時の様な氷の鎧に包まれた青キジの姿があった。

あの時よりもずっと強大なオーラで、一切の手加減が無い事が見て取れる。

「イリス、先行つて。青キジは私が引き受けるよ」

「…了解、死なないでね。あなたは神背ヒューマじやないんだから死んだら死ぬんだよ」

「そう簡単に死ぬ訳ないでしょ？ 継り付いてでも…私は生に足掻くからさ」

そう言つて青キジに向き直つた王華に一言お礼を言い、また処刑台まで走り出す。

ふと処刑台を見ると、また処刑が行われようとしている場面だった。白ひげは体へのダメージや、そもその歳のせいもあつてか咳き込んで膝をついている。他の面子もすぐ動けそうな人は居ないか… 執行人の Mr. 3 もエースを助けるとしてあそこに居るのも限らない。

なら私が何とかするしかない…！ まだ制御もろくに出来ない霸王色… 周りを巻き込まない様にと思つて使わないでいたけど…！！

「やめろオ~~~~!!!!」

「……!!」

私が霸王色を発動させようとした時、ルファイが「霸王色の覇氣」を発動させ空気を震撼させた。

敵味方問わない無差別の威圧は、執行人の2人をも気絶させる。

ルファイ……ある程度目覚めているのは知ってたけど、こんな所で発動するなんて……やっぱり持つてるね!

それにMr. 3……彼もエースへ振り下ろそうとしていた刀の軌道を直前で変えて、もう1人の執行人の刀を弾き飛ばそうとしていたのはちゃんと見えたよ……! 何だかんだ言ってもエースを救うつもりなのは分かった、これなら私達の作戦にも協力的になっ  
てくれる!!

「おい! しっかりしろ!」

「危ねエ、意識が飛びかけた!」

「気の弱い者は下がれ! ただのルーキーだと思うな!! 革命家ドラゴンの息子だ、当然と言えば当然の資質……! 奴をこの戦いから逃がすなよ!! 逃がせばいずれ必ず強大な敵となる!! そして、敵にはもう1人その資質を持ったルーキーが居るのを忘れるな!!」

「私の事かな？あなた中將でしょ、なかなか強そうなオーラだもんね」

「ぬ?!?」

その男の頭上から話しかけ、ぐつと拳を構える。面倒な人は速いうちに処理しておいて損は無い筈……!

「100倍ひやくばいばい灰……! 隕石メテオ・アウエイオの別れ!!」

ダン!と宙を蹴り真つ逆さまに下降してその男の顔面に拳を叩き込んだ。それだけで勢いは止まる筈もなく、地面へと叩きつけて大きなクレーターを生み出す。

「ま、こんなものかな」

とりあえず倒す事は出来たけど、攻撃が当たる直前、咄嗟に顔を引いて威力を消してたからすぐに目を覚まして起き上がってくる筈だ。

それでもつて次は同じ倒し方なんて出来ないだろうし……急がないと。

「ど、ドーベルマン中將を一撃……!?!」

「誰だこの女……! コイツが中將の言ったルーキー……!?!」

「ルーキーの女って言えば、大食らいと逃げ足だけだぞ! じゃあコイツは逃げ足なのか?!?」

「で、でも逃げ足の賞金額は6億だろ! 中將がこんなあつさり負けるとは……!?!」  
「ざわざわうるさい! 自分の目で確かめてみたら!!」



去羅波を連続して放ち、騒つく海兵達を蹴散らした。

逃げ足逃げ足と本当にうるさい人達だな…いい加減うんざりだったの!!

「野郎共オ〜!!!麦わらのルフィを、全力で援護しろオ!!!」

…!白ひげ…!彼も気付いたか、ルフィの力に…!

戦闘能力じゃない、近くに居るものを自然と味方につける…この世界において最も驚異的な力…。私だってルフィの人柄に惹かれて今もここに居るんだ。

「若エの!お前は暴れるだけ暴れてみる!!!」

「!!…言われなくても!!!」

白ひげは私にまで声を掛けてきた。暴れてみる、か…、なら、今私がする事は決まっ

てる!

「100倍灰!女王の戯れ!!!」  
ひやくばいばい クイーンアデイオ

腕の数を限界まで増やし、銃乱打みたいに真つ黒に染まった無数の拳を放つ。  
ガトリング

それは白ひげを狙っていた海兵達を纏めて吹き飛ばし、私は白ひげの隣に並んだ。

「何のマネだ…俺ア暴れると言った筈だぜ…」

「暴れるよ、あなたの隣でね。私があなたを援護して敵を引き付ける事がルフィを処刑台に到達させる一番良い方法だと思つたの」

「…グラララ…!!俺ア白ひげだ…援護なんざいらねエよ…!!グフ…!」

「寄る年波は越えられんか、白ひげエ!!」

白ひげが咳き込んで俯いた瞬間を狙って、対峙していた赤犬が拳をマグマに変える。

私が隣に居るつてのに、そう簡単に白ひげを狙える訳ないでしょ!!

「100倍灰!熱腕!女王の慈悲なき拳!!」

「…! 逃げ足の女王」 …! 貴様も必ず消きにやアならんのオ…!!」

ドオンツ!!!

赤犬の拳と私の拳がぶつかり合った。うお…! 熱を100倍上げてるのに熱い…! 何の能力だ…? マグマっぽいけど、マグマって絶対3000度もないでしょ…! 青キジもそうだけどコイツらの体どうなってるの!!

「ぐぬぬ…!! あなた達は言うよね、白ひげだとか、ゴールド・ロジャーの息子だとか、ドラゴンの息子だとか何だとか… 下らない事をさ!!!」

全力で赤犬の拳を押し除け、後方へと無理矢理下からせる。…右腕は1本焼けたか。そりやそうだ…まだ私じゃ大将には敵わない。だけどこれだけは言わせてもらおう…!

「私から言わせて貰えば、白ひげもエースも、あなたもそこら辺の海兵だつて何も変わりゃしない!!」

「…ほオ、面白い事を言うのオ…逃げ足イ…! わしとそこの役も無い兵士が一緒じゃと…?」

「そうだよ？ 当たり前じゃん。——男——なんだから！」

ニヤリ、と意地悪く笑えば赤犬は不機嫌そうに顔を歪め、白ひげは小さく口角を上げた。

人に優劣をつけようが、その命の価値に差なんてない。……とは言わない。……だけ……少なくとも私にとってエースやルフィの出生はどうでもいい話だ。

「ああ、勿論あなたが女なら答えは変わってるけどね？」

「グラララ……！ 変わった小娘だなアオイ、そういうタイプは初めて見たぜ……」

「当然でしょ、私はこの世界に一人だけなんだか……ら!!」

左手で小太刀を振るって去羅波を繰り出し、辺りの海兵を一掃する。

でも流星は海軍の本戦力……この戦争に参加してからかなり倒してきたつもりだけど、まだまだ人数に衰えが見えない。

「……ぐ……!」

頭がふらつく……！ 王華を呼んでるから余計に覇気が持つてかれてるんだよね……！

だけど、まだ……！ まだやれる!!

処刑台を見れば、私達が敵を引き付けて手薄になっていた隙を突き、イナズマが地面を切つて処刑台へと続く坂道を作り出した所だった。

よし……道は出来た……！ 後もう少しだ!!

# 133 『女好き、死ぬのなら、足掻いて無様に』

「来たぞ〜〜〜!!! エース〜〜〜〜〜!!!」

ルフィが全力でイナズマの作った道を駆け上がっていく。

それを邪魔する海兵達の攻撃も、周りの海賊達が全力で阻止していた。

「行かせないよオ」

「あなたをね! はいパス!」

「おつとオ〜!」

ルフィの元へ向かおうとした黄猿を掴み、白ひげの方へ放り投げる。

白ひげはそのまま黄猿の顔面を殴り、能力で生み出した衝撃で吹き飛ばした。

「ルフィ〜〜ツ!!! 行けエ!!! う…っ」

視界がふらつく…っ、女王化の制限時間が思ったより短い…!

「ウオオ!!!」

足取りが覚束ない私を狙った赤犬の攻撃を、白ひげが薙刀で弾いて止めてくれた。

援護に回ってる筈が逆に助けられちゃった…!

「あ、ありがとう…!」

「それ程の覇気を常に全開に出してりや息切れもする…むしろ良く保っている方だ」  
…やっぱり、覇気の扱い方が良くないんだ…。

夢の中で練習していてもまだいまいち良く分らない覇気だけど…いつかはマスタ―しなくちやいけないんだよね…！

「ハア…ハア…!!イリス…ちよ、ちよつと…、もう無理、限界！」

少し離れた場所で戦っていた王華が私の隣に立った。その体は所々が凍っており、傷も目立つ。

向こうに居る青キジは…うん、彼もダメージは負ってるみたいだ。流石に王華を相手に無傷で勝つのは無理みたいだね。

「英雄ガープだ!!」

「麦わらア!何とかしろオ！」

「!…遂にここまで来たんだね…!イリス!何としてもエース救出までは耐えて!イワンコフにテンションして貰うのはその後でいいから！」

「うん…!」

足が震える…目が霞む…!だけど、まだ倒れるには早いみたいだからね…!

ルフィの前に立ち塞がるは伝説の海兵ガープ…ルフィのおじいちゃんだ。あの人もきつと、今心の中では複雑な気持ちさが絡み合ってるに違いない。

「オオ〜…もうフラフラだねエ逃げ足の女王オ〜」

「はあ…はあ…、ふう…！…そうだね、疲れたよ…！」

「所詮は一時のパワーアップ…それでわっし達を相手取ろうとしたのが間違いだよねエ…無謀なだけじゃ救いたいものも救えないよオ〜」

…フフ、私より人生経験豊富なおっさんが…こんな事言っちゃってるよ。 “無謀”…？何が悪いの…！ “無謀”になる事が出来ない奴が、未来を変えるなんて出来るか！

「言つとくけど…私の無謀さは折り紙付きだよ…！何たつて生まれ変わる前から無謀な夢を抱くくらいだからね…！！…ハア…王華、ごめん、一旦戻つて…！」

「…うん、分かった…！無理はしないで…なんて言つてもするだろうから、とにかく死なないように…！」

「了解…！」

王華を私の中に戻して、グツと集中する。

夢の中で試した…今までルフィにだけ許されてきた荒技を披露してやる…！

「後、もう少しだけ…！私の体…保つて…！！…ハア…ツ…ハア…！」

血管の強度、柔軟性、弾力、血液の速度、皮膚の強度、その他心臓等を諸々…色々倍加…！！…そして体に覇気を纏わせて更に肉体の強化を図つて…！！

私はゴム人間じゃないから…能力で無理矢理するしかない…！！…1歩間違えれば即体

が弾け飛んであの世行きだ……！でも、成功すれば私の技は……全部1段階進化する！！

「……………『ギア』」

う……ぐ……つ。血管の中を、物凄い速さで血液が巡っていく……！心臓の操作をミスつたら1発でアウトだなあ、コレ……。

『セカンド』  
『2』！！」

ポンプ式じゃないから、ルフィの様にドルルンと音が鳴る事は無いが、肌は赤みを増し、煙が体から湧き上がってくる。……よし、成功した……！だいぶ体への負担が凄いいけど……まあ今はいいや、体なんて！

「100倍灰……つ、……ひやくばいばい J E T……！」  
ジエツト

「ツ！！」

黄猿の前まで一瞬で移動して、真っ黒に染まった右腕を振り上げた。

「クイーンファストリテ  
「女王の慈悲なき拳ツ！！」

「つ………?!」

黄猿は防御が間に合わず、そのまま私がアッパーで出した拳に顔面を貫かれて空へ舞う。ざまあみろピカピカじいさんめ！

速さも、威力も今までの100倍より上がってる……！ただ、やっぱり負担が物凄い……

！寿命縮めてるでしょコレ、絶対……！

「…ハア…ハア…つー…ひやくばい100倍…ばい灰…！…ジェットJ E T…、…ガフ…！」

口から夥しい量の血を吐き出してしまったけど…まだ、まだ戦える…！血を吐いた程度で倒れてたまるか…！

「彗星の…！別れ!!」コメント

空を舞う黄猿へと彗星の軌道を描きながら突撃して拳を腹にぶち込んだ。

体をくの字に曲げて更に上へと飛んでいく黄猿に、小太刀を構える。

「ひやくばい100倍灰…ジェット…！J E T…！」

「アイスランス氷 槍!!」

「つが…ツ!!?」

青キジが地上から飛ばした氷の槍は、私の背中を貫き胸まで貫通した。

ま、ずい…意識が…！

「今のは効いたよオ…やつぱり今殺すべきだよねエ…逃げ足の女王オ…!!」

「ぐウ…!?!」

今度は上空から黄猿のレーザーが私の左肩を抉った。

流石に耐えきれず、私は力なく地上へと真つ逆さまに落ちていく。

「…ーる、ふいは…！」



…あ、良かった…！処刑台に辿り着いてる…！

あそこにはMr. 3がいるから、エースの解放は成功したも同然だよね…！

「ハア……う……くうう!!う、おおお!!!」

地面に激突する前、最後の力を振り絞って全力で宙を蹴り後方に飛んだ。あのまま落ちてたら大将のおやつだし、何としてでも場を離脱する必要があったから…！

でもこれ、着地の事全く考えてなかったんだよね…流星に痛いかな……？

「イリス!!」

「ん……？」

そのまま地面に直撃する筈だった私を、誰かが衝撃を殺して受け止めてくれた。ああでもこの頭に感じる優しいぼよんの感触…これだけで誰か分かるよ。

「全く……そなたはどこまで無茶をする気なのじゃ！身体中傷だらけで……つ、許せぬ

……！わらわの大事な人をこの様な目に……!!!」

「は、んこつく……！ありがと……助かったよ……。ハア……、お願いがあるんだけどね……この氷、抜いてくれるかな……」

「そ、そんな事をすれば血が……！」

「それは、すぐ治せるから……平気。思いつきりお願いね」

私がそう言うとハンコックは少し躊躇った顔をしたけど、覚悟を決めた様に私を地面

に寝かせて氷に手を添えた。

大将達は…大丈夫だ、さっきの蹴りでかなり後ろに下がれたっばい…。

「…抜くぞ…！」

「ん…！」

そして一気に槍を引き抜いた。…ぐぬウ…！い、たいなんてもんじゃ…ない!!…でも、返しの無い槍で助かった…！それでも意識が飛びそうだけ…！

「ハア…ハア…、後は、100倍の治療で…勝手に治るでしょ…」

ほら、今にも傷が塞がって行ってるし。

戦闘中じゃなければ治療に専念出来るから、ハンコックが私を受け止めてくれて本当に良かった…。

「あと、頼みがあるんだけど…」

「何じゃ！何でも言ってくれて構わぬ…そなたの力になりたいのじゃ！」

「力ならずつとなつてくれてるけど…。私、今から動けなくなるからさ、イワンコフのとこまで、連れてって…！」

…よし、火傷が激しすぎて使い物にならなくなった右腕も、青キジに貫かれた腹も、黄猿に挟られた左肩も治ってきた…！

…大将から致命傷貰いすぎでしょ私…。

「…あ、イワンコフってのは、あそこのアフロオカマね…、ウインクの人…」

「…分かった。じゃが…また無茶をしに行くのではないか？」

「させてよ、無茶くらい。…私が無茶をするだけで、悲しい未来を変えられるのなら…する価値はあるでしょ…？」

処刑台の方は、もうエースを解放出来たみたいだね…、火柱の中からルフィとエースが出てきたし…その火柱を生み出したのはエースだろう。

と言うことは、海楼石の錠は外れたって事だ…。

「…お願い…!!」

「……、この戦争が終わったら、たっぷり休むと約束してくれるのなら…！」

「約束する…!!」

ガシ、とハンコックの手の掴んで「お願い！」と願った。

ハンコックはそんな私の瞳をジッと見て、やがてため息を一つつく。

「…わらわの負けじゃ…。そなたの願いに、瞳に…わらわは逆らえぬ…」

そう言つてハンコックは再び私を抱き上げてイワンコフの元へと走り出した。

本当に彼女には助けられてばかりだ…どこかで借りを返さないとバチが当たる。

「ん…」

女王化も切れた…あ、なんか一気に脱力感が…!

「だけど寝ちゃダメだ…私にはまだやらなきやいけない事があるんだから…！」

「そなた！名はイワンコフで間違いないな?」

「いかにも、ヴァターシはニューカマーの女王、イワンコフ…つて、か、海賊女帝?!? ヴァターシに何の用つキヤブル!？」

「用があるのはわらわではない、主人の方じゃ!」

「…ありがとう…ハンコック。もう、大丈夫だよ…! あんまり私と一緒に居ると、七武海の称号剥奪されちゃうよね…」

「良い、良いのじゃイリス…! 七武海の称号などそなたに比べれば小さき事…!」

小さくはないと思うけど…。

「ただこんな美人にここまで言ってもらえるなんて、嬉しいなあ…。」

でも流石に七武海剥奪まで迷惑は掛けらんないから、ハンコックに何とか無理言つてイワンコフへ引き渡して貰えれた。

その際ハンコックとイワンコフには軽く演技で打ち合つて貰い、あくまでも敵同士でイワンコフがハンコックから私を奪い返したと周りに認識してもらう様にもした。

…いや、流石に七武海の称号剥奪は申し訳なさ過ぎるよ。ここまでしてもらつてそれは、恩を仇で返すなんてもんじゃないでしょ。

「イワンコフ…私にもテンションホルモンお願い…!」

「…けどねクレイジーガール、アレは、後日体に物凄い反動が…」

「後の事はどうだつていい…！私は今後悔したくないの！」

私の言葉にイワンコフは目を見開いて、ヴァナータも麦わらボーイと同じ様な事を言うのね、と諦めた様にため息をつく。

「…ヴァナータはまだ1回目だから、麦わらボーイよりは反動もマシな筈よ…でも、後日1日は動けない事を覚悟しておきナツシブルね!! テンションホルモン!!」

「うぐっ…！」

イワンコフの指から生えた針が私の脇腹を刺し、そこから謎の液体が注がれるのを感じた。

麻酔とかないから痛いのは痛いんだね…！でもこの痛みを消す為に治癒倍加は使えない…！ テンションホルモンすらも無くなってしまう可能性があるからだ。

「う、おおおおお!!!!」

力が漲る…！能力は…！使える!!

エースは解放出来るんだ！だつたら早速…！集中!!

「……………ふう……………女王化！」

私の体に本日2度目の変化が訪れた。

ただでさえ使用後に反動が有る女王化2回に、テンションホルモン…ちよつとマズい

かな??ま、いつか。

「そんでもって女王・倍加!」  
クイーンインクリース

「よつと…、どうやら、上手くいったみたいだね」

王華も青キジから受けた傷は治つてる様だった。

私は王華と頷きあつて別々に行動を開始する。

「じゃあ、作戦通りに!!」

「分かつた!」

頷いて処刑台の下まで行き、倒れているMr. 3の首根つこを掴んで走り出す。エースが赤犬の攻撃を受けて殺されるのはその後の事じゃないって王華は言っていた…急がないと!

「な、何カネ!?ちよ…いたツ!引き摺るのはやめて貰えないか!」

「ああ、ごめん」

ぐいっと引つ張つて肩に担ぎ直し走る。

ルフィとエースは…居た!海兵達を息の合つた連携でバツサバツサと倒してるし、2人の顔もなんだか楽しそう!…これは、絶対にエースを助けないと!!

…ん?白ひげ達に乗ってきた船が陸を走ってる!?

「あれ外輪船バドルンツフだったんだ…!でも誰が乗ってるんだろ?」

「……あれは、乗ってるのはスクアードだガネ！大渦蜘蛛海賊団……白ひげを刺した白ひげ海賊団の傘下の男だ！」

刺した……？ああ、最初に白ひげの腹に穴が空いたアレね。……なるほど、それで罪を償おうと海兵が固まつてる場所に突貫してる訳だ。

そこには大将だっている……その程度の捨身じゃ大した時間稼ぎにもなりはしない！無謀だ！！

……だからこそ、あの人は死なせない！！それが出来る人っていうのは、好きだから。

「ひやくばいばい100倍灰…… グランデ・アルム巨大な腕！！う、オオオオオオ！！！」

船の正面に回って、どん！！と船を止める。

流星は船……なかなか重い……！！けど、止まった！！

「あ、あんたは……！！」

「捨身の突貫……やってしまった事への償い……！どれもこれも生半可な覚悟じゃないね。あなたを見殺しには出来ない……！……だから、白ひげ！！あなたもさつきと退却準備しろ！！戦場で死ぬのが本望なの！？違う……最期くらい、家族の隣で息を引き取ってみろ！！」

さつきから見れば、白ひげ……この戦争を死に場所を選んでるでしょ……！くっつだらない、寿命以外で死なせてやるか！

「……言ってくれるじゃねエか……！さつきまで死にかけてた小娘が……！！」

「今にも死にそうなあなたに言われたくはないね！」

まあ…何言つても聞き入れてはくれないだろうから、とりあえず白ひげを守らせて貰おう。

今救つたつてこの傷だ、直ぐに命の火が燃え尽きてしまう事は容易く想像出来る。：  
 だけど、死ぬのが今か、白ひげのいう息子達の側か…その違いは大きい筈だ…!!

「俺ア時代の残党だ…！新時代に俺の乗り込む船はねエ…！」

「なーにが時代の残党だよ！私なんか転生者だつての!!時代なんて無理矢理怒鳴り込んで行くぐらいが丁度良いよ!!かつこよく命を散らす暇があるなら、無様に足掻いて家族の隣で死ぬ!!」

「……!!……!!……!!言いやがる……！」

…多分、原作よりダメメジは少ない筈だ。赤犬や黄猿が白ひげに致命傷を与えそうになつたのを全部塞いだし、受けているのは海兵達の攻撃やスクアードが貫いた胸のキズくらい。

名医が見ればある程度の延命は可能かもね。

「それに、あなたが死ぬ気で戦つたつてエースは救えないよ。あなたが生きて、そして私に協力してくれないと！」

「…何？」



原作ではエースも、そして白ひげも死ぬらしいし…!

「話は後ですから、だからもつと生きる事に積極的になって！海賊だってんなら、自分の幸せだって考えて!!」

「俺は白ひげだ…いつだつててめエのやりたい様にやってきた。今もそれは変わって」

「うるさーい!!!」

ボゴオン!!

「ツグっ…!」

白ひげの頭を殴り飛ばし、体をふらつかせた。

ブツ飛ばすつもりで全力で殴ったのに、やっぱおかしいよこの爺さんは。

周りから白ひげを心配する声や、私への非難が聞こえてくるけど…それは無視だ! 気にしてられるかっての!

「それ見たことか! 私の攻撃を避ける事も出来ないくらい弱ってるじじいが、死ぬ気でこの場に残ったって何も出来ないでしょ! どうなのさ!! 捨てる必要の無い命を捨てるな!! 私が居るんだから、あなたがそこまでする必要なんて無い!!!」

「…小娘…!!」

ギロリと私を睨む白ひげに臆す事なく、私は更に1歩距離を縮めた。

「私が必ずエースを救ってみせる。この場に居る別の脅威も払ってみせる…だから、



「グラララ……お前に賭けてみたくなった……！ エースや麦わらの小僧……お前の様な〃時代を作る〃者が……この先どう世界を動かしていくのか……見てみようじゃねエか……！ この俺に逃げの選択を選ばせたのは……お前が初めてだぜ……小娘……！ それに、気になる事も出来た……」

「……うん……っ！ 理由は何だつて良いよ……！ こんな所で死なないつて約束してくれるのならね！」

良かった……こんな所で白ひげに死なれちゃ、周りの海賊達やエースも悲しむだろうから……！

特にエースは、自分を助けに来たせいで、と考える可能性だつてあるし……私ならそう思う。

だけど、結果としてはよし……！ これで後はエースの死を偽装して黒ひげを倒すだけだ……！ 逃げながら白ひげにも説明しておこう……！ この人は頭も回るし、言つておいて損はないでしょ……！ つか手伝つてほしいし……！

## 134 『女好き、変える運命と誕生する狂気』

「…何て突拍子のねエ話だ、俺ア長く生きたつもりだったが、お前みたいな事を言う奴は初めて見たぜ…。エース救出は失敗する？ ティーチがこの場に居る？ 未来が分かる？ グラララ…!!…状況は分かった。だがどうする？」

「突拍子が無いとか言いながら簡単に信じるね、私が言うのも何だけどそう簡単に頷ける内容だった？」

「俺は自分の目を信じてるだけだ。お前がそういう下らねエ嘘をつく様な人間には思えねエ…なら、答えは1つだろう」

「なんだこの包容力の塊は。これであの実力？ そりや四皇にもなりますわ。」

「エースは…一旦死を偽装する。エースという存在は死んだんだと世界を騙す」

「…そうか。…確かに今のエースを救った所でウチは疲弊している…もう1度攻めて来られりやア…危ねエな…」

「で、死を偽装する方法は私の持つこのパレットセットと、この人」

「ヒイヒイ！ 揺らすな女好き！ 白ひげの近くに居るだけでも寿命が縮む思いなんだガネ!!」

「この人の能力を利用して貰う。まあ……見ててよ。で、黒ひげの方は……とにかく不意をついて倒す」

奴が初撃を慢心してモロに喰らうのはルファイ戦でも感じた事だ。

私の全力を叩き込めば倒す事は出来る筈……！

「！見て……王華の言う通り、エースが赤犬と向き合ってる！」

「バカ息子が……！俺が逃げさせられているのに何を突っ立ってやがる……！」

「あーもうごめんて！逃げないのが誇りだったんでしょ！聞いたよさつきー！」

王華もそんなエースを見て私に視線で合図を送り、私の隣に居る白ひげを見て吹き出し、すっごい驚愕の顔を浮かべて一直線にこっちへ走ってきた。

「ちよ、ちよちよちよ……！！イリス!!白ひげなんでここに居るの!?!」

「何でって……殿務めそうだったからやめさせて連れてきた」

「やめさせた!?!白ひげを!?!え、逃げ傷ついちゃうかもただけど良いの!?!」

「良くねエな……人の誇りより命を大事にしやがれと喧しい小娘に引つ張ってこられただけだ……」

いや、だってそうじゃん……どんなカッコいい死に様より、やっぱり生き抜く事が大事だよ。悲しんでくれる『家族』が居るのなら特に。

「……まあ……いいけどさ。でも白ひげ、もし傷治ったらその羽織ってるマント抜いで「逃げ

「傷一つ無し！」って言ってるね」

「いや、王華も何言ってるの？それより、急ごう！そろそろエースと赤犬がぶつかりそうだよ！」

…っていうか、ぶつかった…！でもやっぱりダメだ、エースの今の力じゃ赤犬に対抗は出来ない！能力の相性も良くないんだ…勝てそうにもない…！

「じゃあ白ひげ、後は任せて！あなたは家族とその辺の軍艦でも奪って避難して！！適当にマリルフォード壊しながら進めば完璧！」

「グララララ…！指示を出されたのなんざ何10年振りだア…？つくづく面白エ小娘だ…死ぬんじゃねエぞ」

死んでたまるか！どうせ死ぬならナミさんの胸に埋もれて死にたい！！

「Mr. 3、さっきの話聞いてたよね！エースの蠟人形よろしく！！」

「本当に上手く行くのカネ！！」

「うるさいな、失敗した時の事なんて考えても始まんないよ！やってから考えればいいでしょ！」

「や、やっぱりイカれてるガネ…！」

そうは言いつつも蠟人形を作り始めたMr. 3を担いでエースと赤犬の元へ走る。

…！アレは…赤犬が標的をエースからルフィに変えた…！？そうか…それでエースが

ルフィを庇って…!!

「そんな事、させ…るかアあああああ!!!だあああああッ!!!」

ドオン!!と地面を抉る様に踏みつけ、辺りに砂埃を蔓延させる。

「まだまだ…倍加!!」

発生させた砂埃の規模を倍加させ、かなり広範囲で視界を遮った。

Mr. 3の蠟人形も出来上がっている…!もう時間がない…!頭部だけキチンと塗って…体は適当だ!!

「~~~~っ!!よし!王華!!」

「受け取ったよ!!」

完成した蠟人形を王華に託して、私はMr. 3を連れてこの場を離れる。

…どうなったのかは、この砂埃が晴れない事には私にも分からない。

………。

やがて、砂埃が晴れ始めた。

私達を追っていた海軍も、逃げていた海賊達も…どの様な結末を迎えたのかと固唾を飲んで見守っている。

「……エー……ス……？」

尻餅をついているルフィの前に転がるのは……エースの首。

首から下は赤犬のマグマとは思えない程の高温な熱拳で溶け落ち、その辺り一帯は血が夥しい程飛び散っていた。

「……嘘だろ……エース……！」

「フン……次は貴様の番じゃ……!!」

赤犬はそんなルフィの前に立ち、残った一つの首も煮え滾る脚で踏み潰して跡形もなく溶かしてしまった。

「……………」

……!!くうう……!

よおおおし……!!……成功だ!!!

あの首は私が塗った物で間違いないし、血は赤色の絵具を倍化したもの……!!  
という事は、つまり……エースを救えたんだ……!!  
!!!

……だけど喜ぶのは後だ。



今私だけが喜んじや不自然過ぎる。自然に…自然に徹しなきゃいけない。

「エース…！赤犬…！貴様ア!!!」

「想像よりもモロかったのオ…！貴様も逃がさん！逃げ足イ!!!」

そりや、蠟ですからね。貴様ア！なんて言ったことないんだけど違和感無かったかな？

ルフィは自分の目の前に落ちてるビブルカードが燃え尽きていない事実と、目の前で実際起きた事実混乱している様だ。とにかく動けない事に変わりはないだろう。

けど、近くにはジンベエも居るし今は放っておこう。私には私の成すべき事がある。

「Mr. 3…ありがとう。あなたは…そうだね、あそこに居る人の海楼石の錠でも外してきて」

Mr. 3には最初青キジを止めてくれた青白い炎の能力者を解放するよう頼んだ。いつの間に手錠を付けられていたのか、あんな強い人が満足に動けないなんて勿体ないにも程がある。

「…さて、黒ひげはどこだろうね」

海賊達のエースの名を呼ぶ声がいくつも響き渡る。

騙して申し訳ないって罪悪感に押し潰されそうだ…！でも、必要な事だから許して欲

しい…！

作戦を伝えていた白ひげにだけ視線で合図を送り、軽く頷く。本当は手伝って貰いたいけど……無理もして欲しくない。

「王華はどこに行つたのかな……まあ、いいか……黒ひげは……!!」

「ティーチはどこに居る？」

「ああ、それが分かんなくて……つてええ!!?なんで戻ってきたの白ひげ!」

なんかいつの間にか背後に居て怖い!!

「なんだ、ようやく黒ひげとやり合うのか？」

「青キジ!?ちよ、ちよつと待つてよ!今あなたと戦つてる暇なんて本当に無いんだからね!!」

どーなってるの私の周りは!

逃げてくれない白ひげに謎にフレンドリーな青キジ!特に青キジ!平然と隣に立つな!あなた大将だからね!一応!!そりゃ2人とも、黒ひげ討伐に協力してくれるなら喜んで受け入れるけどさ!

「時にイリス、火拳は本当に死んだのか？」

「え?……くつ……!救いたかつた……!」

「やっぱり生きてんのか……」

「は!?!何でそうなるの!?!」

「分かり易すぎだアホンダラ…」

ぐぬぬ…！それがバレちゃ意味ないじゃん!!作戦が…！

「心配すんな、誰にも言やしねエよ。俺が今ここに居んのもお前に手を貸す為だ。どうだ？戦力が増えて良いだろ」

「不安しかないわ！罠か?!いきなり何で?!」

「いきなり何も…もし本当にお前達がここまでやる様なら、黒ひげ討伐にも手を貸そうと思っただけの話だ。お前が倒した方が良いと言うのなら、そうなんだろう」

「変に小娘の肩を持つじゃねエか、小僧」

「あー…あんたも魅せられたクチでしょうに。その女は麦わらのルフィと同じで…周りに居る人間を惹きつける才能がある」

なんか良く分かんないけど、とにかく青キジは信用して良いって事!?

…てことは、黒ひげ海賊団相手に私と白ひげ、青キジで対抗出来る訳か…！

…流石にオーバークルかな。

「小娘、ティーチが現れるのは処刑台側か、海側かどっちだ」

「うーん…王華もあんまり覚えてはないみたいだったけど、処刑台側だったと思う」

「そうか…なら、ちよつと離れてな」

何をする気かは分かんないけど、私と青キジは白ひげの言葉通り少しでも距離を取

る。

…ていうか青キジ、あなた私達と行動してて立場とか大丈夫なの？

「ぬうん!!!」

「へあ!？」

ちよおおお!!白ひげさん!?!何地面叩き割ってんの!?

ああああ…!広場が真つ二つに割れてみんな海側の向こう岸に行っちゃったよ…

!私達海軍側に取り残されたけど!?

「息子達を逃がす為には必要な事だ…俺達は後で帰ればいいだろう」

「こんな海兵だらけの中どう帰れと?…まあいいや、その時考えようか」

とにかく今は黒ひげだ。…どこに…、

「え、おい、何だありやア!本部要塞の影に何か居るぞオ!!!」

「あ、見つかった」

「は…?」

本部要塞の影って…その本部要塞がどれだけ大きいと思ってるの!?!それと同サイズの間が影から顔を覗かせてるんだけど!

「それだけじゃない…!処刑台の上に居るのは誰だ…!?!」

「…!!!」

バツと処刑台に顔を向ける。

…居た…！良かった…処刑台側で間違いなかったみたい。

「おお…やつと気付きやがった」

「…てめエ…」

隣に居る白ひげから低いドスの効いた声が漏れ出る。

…確か、あいつは白ひげ海賊団で仲間殺しをして逃げたんだっけ。それは…白ひげが許す訳ないか。

「黒ひげ海賊団!!!」

海兵の誰かがそう叫んだ。遂に最後のミッションターゲットも出てきた事だし…全力で片付けて私達の世界を平穏な物にしてやろうか!!

「ゼハハハハハハ!!久しいな!!死に目に会えそうで良かったぜオヤジ!!!」

「ティーチ…!!」

「…ありやア間違はなくレベル6の死刑囚共じゃねエか、1人1人がとんでもねエ悪事を働いて、その存在自体を抹消された世界最悪の犯罪者…ん？あの女は知らねエが…」

あの女…？どっちだ？

…多分、髪が紫の方だ。もう1人は確かカタリーナ・デボンとかいう名前だった筈。

「……………」

その女はインペルダウンの時と変わらさずぼーっと私を見つめていて、その漆黒の瞳は何もかもを吸い込んでしまいそうな程美しく…不気味だった。

長い紫の髪を無造作な垂らし、ストレートヘアーと言うよりはただ手入れをしていないだけの様にも見える。

そしてその真つ白な肌はもはや病的だ。痩せ細ってはいるが、どう見ても健康には見えない。胸はある。胸はある!!…やっぱりインペルダウンで見た時と同じ人で間違いない。

「ティーチィ〜!!」

「…」

白ひげが腕を振り、いつもの構えを取ったのを見て走り出した。

勿論技に巻き込まれないように少し横に逸れて走っている。青キジも私とは逆側から攻めていた。

ドオン!!!

「おっと…余波だけでも凄いな…」

白ひげが黒ひげ海賊団へと放った一撃は処刑台を崩ごと崩し、黒ひげ達を広場へ落とす。

相変わらずブツ飛んだ火力…頼もしい爺さんも居たもんだ!

「……容赦ねエな……ある訳ねエか!!」

思い切り空へ飛ぶ。今の私を見る事が出来るのは、それこそあのバカでかい人間からいものだろう。

みんな白ひげに集中しているだろうし、私もその間、空で集中させて貰う……!

下では白ひげと黒ひげが戦闘を始めている所だった。……黒ひげは確か能力者の能力を無効に出来るんだっけ。確かに、白ひげの地震を起こす能力は黒ひげの手から生み出された闇の渦に飲み込まれて不発に終わっていた。

「ゼハハハハハ!!!!どうだ!もう地震は起こせねエ……、つ、オ!!……ゴワアアア!!」

能力が使えないと分かった途端、手に持つ薙刀で直接肩を斬り付けていた。確かに軽率、過信が弱点なのは間違いない。

……じゃあそろそろ私も行くよ!!

「……もう1度だけ、無茶するからね、私の体……ふう……ツ…………ギア………2!!!!ひやくばいばい100倍灰

!!……特大の行くよ……!!グランデ・アルム巨大な腕!!!」

終わらせてあげるよ……何もかも!!これから先あなたが起こす事件も!!ONE PI  
ECEが辿る筈だった未来も!!……全て、ここで変えていく!!!

「う、オオオオオオオオオオ!!!」

そのまま真つ逆さまの体制で宙を蹴り、隕石の様なスピードで落ちる私にようやく黒

ひげも気付いた。だけど今更気付いたつてもう遅い…! 決着は早々に着ける予定だった…頼んだよ白ひげ!

私の攻撃を避けようと動き出した黒ひげの顔を掴み、白ひげは思い切り地面へと潰す様に容赦なく押し付ける。更にそのまま能力を使って頭を後頭部から地面にめり込ませていた。

…なるほど、あの闇に触れなきや能力は解除されないんだね。…だったらこの技も…当たるよね!!

「危ねエ船長!!お前ら、あの女を止めるぞ!!」

「させる訳ねエだろ。氷河時代」  
アイスエイジ

「なア…!?あ、おキジ…!!」

黒ひげの仲間は青キジが止めてくれた。だったら後は…船長だけだ!

「JET!!! 流星の…:っ! 別れオオオオオオオオッ!!!」  
ジェット メテオン アウェイオ

「……………ツ!!!」

直前に白ひげは後方へ跳び退避し、遙か上空から勢いを付けて高速で落下した私の巨大な拳は、それはもう綺麗に動けない黒ひげへと落ちてこのマリンフード全体を揺らす。

黒ひげの体からはバキバキと嫌な音が響き、中身が飛び出ていないか心配になる程



だ。

その地に大きくクレーターを作り上げ、私は近くで何が起きているのか理解していな  
さそうな海兵を指差した。

「ハア……ふう……その海兵！ さつさと海楼石の錠!!! まだ起き上がってくる可能性は  
あるよ!!」

「……え？ は、はい!!」

何で敬語？

……随分呆気ないな。まあ原作より白ひげのダメージが少なく、青キジも参戦して、私  
も居るんだからこんなものなのかな？

黒ひげには念のため白ひげがもう1発能力で振動をぶち込み、青キジが氷アイスランス槍を腹に  
突き刺し、私ももう1発顔面殴つといたから起き上がってはこないだろう。

何ならあの後すぐ持ってきた海楼石の錠もつけたわけだし。

「……黒ひげ海賊団はこれで全員お縄か。サンファン・ウルフには逃げられたが……ま、すぐ  
見つかるだろう」

「黒ひげ以外の奴らはどうするの?」

全員今は氷漬けにされてるけど、中にはすぐ割って出てこれる奴もいるんでしょ？

「誰が能力者かも把握出来てねエ、とりあえず全員に海楼石の錠をつけるべきだ」

「じゃあ、急がないとね」

青キジがより強固な氷を張り直して、片手だけを溶かし海兵に指示を出して錠を付けていく。

中には能力者ではない奴もいるだろうから、早いとこインペルダウンにブチ込みたいと青キジは言った。

「輸送には戦力を固めておいた方が良くもね、青キジだけでインペルダウンに連行して、万が一があつてもアレだし」

「なんだ、心配してんのか？」

「…まあ…一応…今回は助かった訳だからさ」

黒ひげを倒せたのも、白ひげ、青キジ、この2人の協力があつたからこそだ。今の私じゃ1対1で黒ひげには勝てないし、周りのクルーを全員相手取るのも無理だった。

「じゃ、逃げるか！」

「なんだ、もう行くのか」

「ここ、私からしたら敵地だからね？」

海楼石の錠を付けるのも、残すはあの女の人だけっぽいし。

とりあえず最後まで確認しては行こうかな。…あの人、氷漬けにされてるのにずっと私の事見てるの怖いんだけど。

そうして、最後の一人：紫髪の女の片手の氷を溶かして海兵が手錠を入れようとした時——

その海兵が、泡を拭いて倒れた。

「!!……バカな……!」

「ツ……これ、は……霸王色……!?!」

女の氷はピキピキと割れ目を増やしていく。

何だこの人……!?! 原作に存在しない上に、霸王色まで……!!? あ、それは私もそうなんだけど!!

「イリス……こっちは何とかなったよ……って……これは……!」

王華もこちら側の岸まで飛んできて、今日の前で起きている事に目を見開いている。

やがてその氷は粉々に砕け散り、女はまたぼーっと私を見て……そして、王華を見た。

「—————あ」

女の口が小さく動く。

眼孔が開かれていく。

口角が吊り上がっていく。

王華を見た瞬間…その女は…まさに“狂気”と呼ぶに相応しい表情で笑い出した。

「フフフ…」

「く…！捕らえろ！所詮女一人だ!!」

「ばっ…！」

その女を捕らえようと動いた海兵数10人を呼び止めるも既に遅く、彼らも同じ様に霸王色で倒れていく。

ずっと私を見ていた女は、王華が現れた事によつて私への興味の一切を無くし…ただ狂気に満ちたその瞳で王華を鋭く射抜いていた。

「…フフ、ハハハ…つ、アハハ!!ヒツヒツ!!ハーツハハハハハハ!!!フー、フー…!!ハー…

!!!…“上等”…!!」

「…!!」

霸王色の覇気を撒き散らしながら笑うその女は、まるで隙だらけだ。いつでも攻撃して下さいと言わんばかりに隙しか存在していない。…だからこそ、ある程度実力を持つた者は皆、逆に仕掛ける事が出来なかつた。

隙だらけ故の隙の無さ…加えて奴から湧き出るあのドス黒いオーラ…、様子を見ない

事には動く事すら出来ない。

「『上作』……『上智』……『上昇』!!……アハ……♪『上・々』!!」

「う……ッ……!?!」

な、んだ……!?!目眩が……っ、これ、霸王色……か……!?!

青キジは、私の覇気をなんて言った……? 四皇よりも規模は上?……じゃあ…… 目の前

のコイツは!?!

私の覇気なんか、比喩物にならない規模じゃん……っ!!

「見つけた……♪やーっぱりこの世界に居たのね……入州さん」

「……何で、私の苗字を……」

その言葉には王華だけじゃなく、私も目を見開く。

この世界に来て初めての……私以外の転生者……!?!それも、同じ世界から……!

「私、本っ当くに探したのよ? イリスって名前のコなら居たけど、その子はま……ったく

く入州さんとは似ても似つかない容姿だったから……でも、良かった……ちゃんと見つかつ

て♪」

「あ、あなたは……?」

王華が震える声で質問する。

相手がフレンドリーに接してくるからこそ、そこに恐怖を感じるのだ。何故なら私も

王華も目の前の人物を知らない。…なのに、まるで離れていた友人と再会したかの様な…。

「私の事、忘れちゃったの…?…私、あなたの事を忘れた日なんか無かったのに…? あなたは、私を忘れていたの…? ああ、アア…ダメ、だめよ入州さん…今更自己紹介なんて…そんなの、まるで初対面じゃない…。私達はもつと深く、ふかーく繋がってる…  
そうでしょ?…ね?」

…何が、とは言えない。だけどハッキリと言える事が一つだけある。

——コイツは、ヤバい奴だ。

「私は覚えてるわ…♪あなたのご友人すらも…沙彩さん、叶さん、美咲さん。…フフ、美咲さんも早く見つけてあげないと…沙彩さんと叶さんは前の世界で済ませているんだし…」

「……私の、同級生?」

「フフ、フフフ…ヒヒヒヒヒ…!!ハハッ…ハ…本当に忘れてるの?」

……誰だ…、誰だ…!?王華の親友の誰でもないのなら、後は…!!

「……………あ」

……居る。1人だけ。

「ただど…どうして彼女が…？いや、違うかも知れない…だって彼女がこの世界に居る理由が…！ただど、彼女以外考えられない…！」

「……安、城……」

「……………」

「ほつり、と私が呟いた言葉に女は首だけを動かして私を見据える。

その目には先程まで王華に向けて喋っていた様な感情などまるで無く…ただひたすらなままでの闇。

「……………どうして入州さんが忘れてて、あなたなんか私の名前を…？…フフ、ヒヒ…つ、でも、いいわ…！今日は気分が良いもの…。許してあげる。…入州さん…私の事…覚えてるでしょう？」

「安城……さん」

それは…王華の過去に出てきた登場人物の1人だ。

彼女のいじめが発端で、王華達4人は命を落とす。…ただど、何でこの人までこつちの世界に…？それに、前世よりもずっと狂気に満ちた性格で…。

「ヒヒ…！安心して？まだあなたを殺さない。あなたはちゃーんと、美咲さん達の前で殺すわ♪」

「ツ……安、城さん……あなたは、何でこの世界に……!! どうしてそこまで執拗に私達を恨んで……!!」

「……つまらない質問はやめてくれる? 入州さん……ヒヒ、ハハ……!! 理由なんて、私から説明するだけじゃつまらないわ。……次に会う時は……しっかりと叶さん達も見つけておいてね?」

「…………ハツ……!! に、逃すな!! 捕えろ!!」

海兵の1人がその緊張から抜け出し、周りに指示を出す。

その声でみんなも動き出し、安城さんに向かってバズーカや銃を撃ち込んでいく。

「……ン……やっぱり今日の私……気分……上々♪ 上等で、上品!……だから、今の私にそんな物騒なの似合わない。これは返すわ♪」

「は……?」

安城さんへと撃たれた砲弾や銃弾が、何故か彼女の体の周りに出来た黒い空間へと吸い込まれていき……直後、そこから勢いよく先程放った筈の砲弾等が海兵達に跳ね返ってきた。

「能力者……!!」

「気を付けろ! 敵は今見た通り、攻撃を跳ね返す能力者だ!」

「……ヒヒ……つ、今日は気分がいいから、向かってこないなら私も手は出さないのに!」



「…なら、1つだけ聞かせて」

接近戦ならどうだとばかりに突撃しようとした海兵を殴り飛ばして、私は安城さんに声を掛ける。下手に手を出せば死ぬって分かんないかな、今のあなた達じゃ勝負の土台にすら立つちゃ居ないんだからジツとしてて。

それに…やっぱり私の言葉には王華と違って感情のない瞳で返してくるんだよね…  
一体何なの…。

「あなたは本当に、安城さん？それとも……」

「……私は、安城あんじょう零れい。それ以外に何かあるって言うの？」

「…そっか」

「…じゃあね、入州さん」

それだけ言うと、安城さんはフツと姿を消した。

…消したというより、超高速移動だ。ただ攻撃を跳ね返すっただけじゃないとは思ってたけど…一体何の能力だろう。

……あ、私達も逃げないとまずい!!ここ海軍側のだ真ん中じゃん!!!

それに色々起こり過ぎて頭痛いよ!!

# 135 『女好き、戦争終結、現れる赤髪』

「…ありやなんだ、お前の知り合いか？イリス」

「…んー…私っていうか、王華の」

「…というか今回女王化結構続いてるね。テンションホルモンの効果かな？体への負担を忘れるんだっけ？…：…：反動やばそく…：…でも…!!」

「…エースは助けた、黒ひげは倒した…！何なら白ひげだって死なずに済んだ！…今回も私の勝ちでいいかな？青キジ」

「…あー…まア…癪だがそうなるな。その上最後にとんでもない敵を残していくとは…」

「ちよつと、安城さんに関しては私別に悪くないじゃん！」

「イリス、安城さんの事は後で考えよう…！今はこの場から逃げる事が先決だよ！」

王華に肩を叩かれてハツとする。また忘れるところだった…ここ敵地の真ん中だ！

「エースはある海賊の船に預けてきたから。それと、イリスの今後もその海賊に託してきた」

「ええ!?急展開だね…：じゃ、そゆことなんでまたね青キジ！」

「俺も疲れた…帰って寝たいんだが、立場上はお前達を見逃せねえんだ」  
「今更!?!」

共闘までしといて何言ってるのこのノツポめ!

「グララララ…!!なら最後に置き土産だ、海軍本部!!…ぬウン!!」

ガン!!と大気を殴り、ヒビを入れて衝撃波を発生させてマリンフォードの街並みをぶち壊す。デンジヤラス過ぎでしょ…。

「じゃね!私と戦う気が無いならまた会ってもいいよ!」

「そうか、なら海軍やめるか?」

「冗談でしょ!?!」

転生してハーレム作ってたら海軍大将のお気になつてた件。

…訳わかんねえ…なんだこれ。

…黒ひげ捕獲を手伝ったからか、周りの海兵も逃げる私達を捕まえようかどうしようか迷っているようだ。

王華もこの世界から黒ひげという脅威が無くなった時、どういう風に運命が転ぶかは分からないって言ってたつけ。

「ほら、掴まっててね白ひげ」

「こんな白ひげ見たくなかった…」

白ひげが能力で広場を真つ二つに割ったせいで、私達は飛んで向こう岸まで渡らな  
きやいけなくなつたから飛べない白ひげを抱えて飛ぶ。

王華が何か言ってるけど……白ひげだつて伝説だとか四皇だとかの前に1人の爺ちゃ  
んだからね。幾らデンジャラスでバカ火力でも労らないとバチが当たるよ。

「こつち側はまだ戦つてるのか……向こうでは黒ひげとか安城さんとか色々あつたのに  
……」

スタン、とこつち側の広場に降り立つて辺りを見れば、そこではまだ戦争が繰り広げ  
られていた。

逃げ回る海賊を追い回す海兵……海兵達を率いているのは赤犬か……彼からは海賊に対  
する並々ならぬ思いを感じるんだよね……。ああいう真つ直ぐな人つてのは強いんだよ。  
私達からすれば厄介この上ないんだけど。

「行くよ王華……海軍を止めよう!」

「……いや、私達の役目はもう終わったよ。……ほら」

未だに争いは止まる事を知らず、戦争が収束する目処も付いていないにも関わらず王  
華は大丈夫だと言つた。

そんな彼女が指を差す先には……赤犬の前へと滑り込んだ1人の海兵の姿があつた。

私はその男を知っている。1度だけ……ウォーターセブンで見た海兵だ。確か、名前は

……  
 「そこまでだアア~~~~!!!!」

「……コビー……!!」

「そうだ、あの時の若い海兵……」

そんな彼が、赤犬の前に立つて両手を広げる。まるで後ろの海賊達を守るかの様に。  
 「もうやめましょうよ!!もうこれ以上戦うの、やめましょうよ!!……命が、もつたいだいつ!!目的はもう果たしてるのに……戦意のない海賊を追いかけ、止められる戦いに欲をかいて……今、手当てすれば助かる兵士を見捨てて……その上にまた犠牲者を増やすなんて、今から倒れていく兵士達は……まるでバカじゃないですか!!!」

「……!!……す……!!」

「そうか……ルフィが気にいる筈だ……自分のずっと上の立場の人間に、殺される覚悟であんな台詞を吐ける人なんだ……!!コビー……。ちゃんと覚えておかないと、いずれ絶対、私達の前に立ちはだかる強い海兵となるだろうね……!」

「王華、私、コビー助けてくる……!」

「あ、ま、待つて……大丈夫だから……ほら、見聞色で探したら……」

「……?」

王華に言われて見聞色を使えば、強大な気配を持った何かがコビーの元へと凄い速さで向かってきているのを感じた。

白ひげは目を薄めてその者が来る方向をじっと見ている。

赤犬がコビーへと拳を振り上げ、本気で殺そうとマグマとなった腕を振り下ろす

…だが、その拳はコビーへ届く事は無く…私達を感じた強大な気配の持ち主が剣で受け止めていた。

「…あの人は？」

「四皇… “赤髪のシャンクス” 。ルフィに麦わら帽子を預けた人で…ついでに言えばエースとイリスの今後を頼んだのもあの人」

「ぶっ…！…ええ、ええ!？」

今後を頼んだって…四皇じゃん!!

しかもルフィに麦わら帽子を…!?絶対何かあるでしょその人!!

「…これ以上を欲しても、両軍被害は無益に拡大する一方だ…!まだ暴れ足りねエ奴がいるのなら来い…!!俺達が相手をしてやる!!全員…この場は俺の顔を立てて貰おう」

シャンクスはそう言って足元に落ちていたあつたルフィの麦わら帽子を拾い、それを懐かしそうに見た後バギーへ放り投げた。ルフィへ届けてくれとでも頼んだのだろうか

か、あのバギーが素直に言うことを聞いてる姿はなかなか新鮮だ。

…もしかしたら宝で釣ったのかもしれないけど。

「エースの弔いは俺達に任せて貰う。戦いの映像は世に発信されていたんだ…！これ以上、そいつの死を晒す様なマネはさせない！！」

「奴の死体は既に無い！！仮に残っていたとしても、こいつの首を晒してこそ海軍の勝鬨は上がるの…」

「構わん！！」

シャンクスの言葉に突っ掛かった中将の言葉を、元帥…指揮官であったセンゴクが言葉を受けて止める。

「お前なら…いい。赤髪…責任は私が取る」

「すまん」

「…負傷者は手当てを急げ…！！戦争は…！！終わりだア！！」

…戦争が…！！

「……はあ……！！…終わっ…たア…！！」

その瞬間、私の隣に居た王華は消え、私の身長は元に戻って崩れ落ちた。緊張の糸が

切れた瞬間これか……！でも、本当に……本当に何もかも上手く行って……良かった……！！  
…何もかも、では無いかもしれないけど。

「……ぐ……っ……う」

おおおおおオ……ん……！は、反動が……や……やばい……！身体中が痛いなんてもんじやない  
…苦しい……！あがが……。

「……この戦争の1番の立役者は、間違いなくお前だろう……。戦いは海軍の意に反して世  
界に発信されている、もう政府がお前を“逃げ足”などと称する事も出来ねエな。グラ  
ララ……！」

「ほ、んと……？それ、めっちゃ嬉しいかも」

…あ、やば……意識が……。

まあ……いいや、…今は意識が飛んでくれた方が……楽でいい……。

…このまま死なないよね??ね??

\*\*\*



## 王華部屋。

「…ここに来たって事は…死んではないか、よかつたく…」

「心底安心してるね、死にかけてはいるんだけど」

「死んでないからおっけーおっけー」

どか、っとソファアアを出現させてそこに座る。

はー…何か色々やり遂げたから夢の中だつてのにどつと疲れが…。

「…そいえば、ルファイって大丈夫なの？エースの事とか…」

「…うーん、とりあえずハンコックにはルファイに付き添ってあげてって言ってるから療養場所とかについては問題ないと思うよ。それにエースの事は乗り越えるから大丈夫

…ルファイだよ？」

「…実は死んでません、助けてましたって言ったら、1発くらい殴られるの覚悟しとこ…」

流石のルファイでも怒りそうだよね…。はあ…。

「シャンクスは2年間、どういう修行つけてくると思う？」

「2年？…ああ、そう言えば2年間修行期間に入るんだっけ。…2年…、2年…も、会

えないのかア……ナミさん達に……!!ウウ……死ぬウ……!!」

「あれ、質問の答えが返ってこないな……」

これから2年もナミさん達に会えないなんて……悲しいなんてモンじゃないよ……!!

お楽しみポヨンが……寝る時周りから漂ってくる良い香りがア……!!

「……はあ……、え……? シャンクスの修行? さあ……実戦かなあ」

「うーん……私が頼んだ時、修行するならうつつのアイテムを持っているとか何とか言ってたんだよね……それが気になって……」

アイテムか……。飲んだだけで力倍増! とか?

「ていうか、それより安城さんだよ。あの人絶対おかしいよね」

「……まあ、そうだね」

この場合でのおかしいは、前世との差異だ。

前世の安城さんは確かにヒステリックな人だったけど、あそこまで狂気に満ちてはいなかった……と思ってる。

「これは私達だから分かることだけど……もしかして……」

「うん。……あの安城さんは、こつちの世界で生まれた人格なんだ。私の知るクラスメイ卜の安城 零は多分、私と同じ様に心に閉じ籠ってるんじゃないかな」

私は王華の影響を受けてハーレム女王を目指す様になった。

目指す夢はポジティブなもので、私の人格自体は至って普通の女の子として育った。…なに王華、何か言いたい事あるの？お？

ゴホン…だけど、安城さんは？例えば夢が王華を殺す事で…その思いを引き継いで人格が形成されてしまったとしたら…あんな風になるのも、分からなくもない、か…。「安城さんと…、レイとでも呼ぼうか、この世界で生まれた人格の彼女がどういう関係かは大体推測出来たね。…合ってるかは知らないけど…」

「ま、問題は人格云々より能力だよ。私はあの時女王化クイーンを使っていたけど…レイの動きを目で追えなかった。つまり…私よりも…下手をすれば黄猿よりも速い」  
黄猿より速いとか、ぶっちゃけ想像したくない。

例えばスピスピの実際の速さ人間!!…的な能力なら速さに特化してるんだなあで納得出来なくもないけど…それなら銃弾を跳ね返したあの技が納得行かない。

「何かを弾く能力とかは？」

「くま…。…あ、でもあり得るかも…！くまだって瞬間移動してるし！」

「一応候補の1つね。…後は…例えば取り込んだ物の力を使えるとか」

「ああ…銃弾を取り込んだから銃弾を返せし、移動も銃弾の速度で移動できるって事？でもそれじゃ私達が目で追えない理由にならないよね…」

そうなんだよね…銃弾は目で追えるし。

なんか当たり前のように言ってるけど、銃弾を目で追えるって凄いな私。

「これ以上は考えてもしょうがないか、あれだけの情報じゃ何とも言えないし」

「まあね。…イリスはゆっくり休みなよ、せっかく戦争も終わったんだから」

「ん」

確かに、身も心も神経擦り減らしてボロボロだよ…。得た成果はかなりのモノだけ  
ど。

だけど王華もこう言ってるんだし、ゆっくり寝かせて貰うとしよう。

今日は本当に疲れたな…よくよく考えなくてもインペルダウンから戦争まで動きつ  
ぱなしてヤバイよ。バテない方がどうかしてるっての。

…シャンクスの修行か…。…レイがめっちゃくちゃ強いかもしれない。しかも命を  
狙ってくる可能性が以上は私はもつともつと強くなるかもしれない。

…四皇だろうと、海軍大将だろうと軽々倒せる女になって…また2年後、ナミさん達  
と航海するんだ。

だから…私はどんな修行でも乗り越えてみせる…！来るなら来い…！スパルタなん  
かに負ける私じゃない…！！

待ってる2年後ぼよん！！2年後ブライズ！！！！

## 修行編

## 136 『女好き、修行開始』

「はあ…っ、はあ…！」

「…今、私なにしているとと思う？」

「し、死ぬ…！冗談抜きで…!!」

「ここ、無人島なんだよね。どうもカームルト風ルトの帯の中にあるヤバいところしくて、弱い猛獣からやべえのまでわんさか居る島なんだけど…。」

「ち、力も出ないし…！」

「そこで私…サバイバルしてます。」

「…海楼石入りの腕輪つけて。」

\*\*\*

時は戻り、1日前。

「……ん」

むくり、と体を起こして辺りを確認する。…どこだろここ…船の中、かな。

外が騒がしい…でも嫌な騒ぎじゃないね、どんちゃん騒ぎって感じ。

怠い体を起こして部屋を出れば、時間的には夜なのか月明かりが私を照らす。

心地よい風が頬を撫でて、新鮮な自然の空気を肺一杯に取り込んだ。

どうやらここは…どこかの島の様だ。沖に船を止めて浜辺でキャンプファイヤーで

も焚きながら宴をしているのだろう。

「ふわあ〜…」

寝起きの覚束ない足取りで船を降り、ガヤガヤと騒がしい場所へ向かえば1人の男が大きく手を上げて私を出迎えた。

「お！主役がようやくお目覚めだよい!!ありがとう!逃げ…いや、イリス!聞いたよい!お前がエースを助けてくれたってな!!あっはっは!!」

「え?う、うん…あはは…」

酒臭い…!かなり酔ってるみたいだけど、この人、確かあの青白い炎の能力者の…

!

「がーっはっはっは!!めでてエ!オイ!座れよ女王!!」

「え?いや…」

他にも錚々たる顔ぶれだ…白ひげの隊長達だっけ…。白ひげ本人も居るし、エースもその中には居た。

それだけじゃない、あの戦争には居なかつた面々も居る。…その中にはシャンクスの姿も。

多分見た事ない人達は赤髪海賊団かな。

で、ここに居る人達全員に言える事だけ…全員が酔つてた。

「嬢ちゃん!別嬪なのに強いなあ!酒注いでくれ!」

「えー……」

酔っぱらい過ぎでしょこの人達。強いなあ、酒注げ!ってどういう脈絡だよ。注いだけど!

「ありがとよ嬢ちゃん!エースもオヤジも無事だったのはお前のお陰だ!!」

何かむず痒い…さつきから感謝の言葉を周りからポンポン言われて恥ずかしくなってきた…。

「グララララ…!お前も飲め、イリス!」

「あ、私お酒はダメだから」

「オヤジの酒断んなよ〜!」

この楽しい雰囲気をぶち壊してもいいなら飲むけど! 私だって気を使って言ったんだからね!

「…はあ。…あの」

「ん?」

まだ比較的酔ってなさそうな人に近付いて話かける。

ちよつと現状が理解できない為に把握したいからだ。酔っぱらい共は当てになりそうもない。

「状況が知りたくて…、今って何日で、これはどういう流れで宴になったの?」

「ああ…。今はあの戦争から丁度5日目の夜…この宴は見ての通り、お前が成し遂げた

「火拳」奪還を祝う宴だ」

「…私は最後に後押ししただけで、それまではルフィが頑張ったんだから私ばかり持ち上げるのはやめて欲しいんだけどなあ。…ていうか5日? 寝たなあ…私」

道理で体が怠い訳だ。

反動どうこうでめっちゃ痛かった体は治ってるからいいけど…。

「俺達も驚いたぜ…マリンフォードに向かつてる最中、目的の島から人が飛んできた時



はよ。なア、ルウ」

「オウカだろ！エース抱えて飛んできたんだよなア。そういやオウカは？」

「あ、王華を知ってるって事は赤髪海賊団の人達？彼女なら“ここ”に居るよ」

とんとん、と私の胸を叩けば、ルウと呼ばれた人は申し訳なさそうに顔を曇らせた。

「悪い事を聞いちまったか…」

「何か勘違いしてる様だけど、死んでないからね？…ん？死んでるのか？ややこしいな

王華」

「？」

私の説明の仕方が悪かったのもあるし、2人にはキチンと説明しておいた。

まあ、キチンと言っても、私の中にもう1人別の人格が居て、私の能力で外に出せるってくらいの簡易的な内容だが。

「王華が話してくれてると思うけど、この度は厄介になります」

「それは気にするな、うちの船長が決めた事だ。それに俺達としても…あの戦争を白ひげの勝利へ導いたお前の手腕は気に入っている」

だからそれは私だけの功績ではないんだと…。もう言い返すのはやめとこう…。

「改めて自己紹介といこう。俺の名はベン・ベックマン」

「おれはラツキー・ルウ」

「私はイリス。夢はハーレム女王!」

ベックマンにルウか…。気軽に接してくれてるけど、この人達からは凄い強者のオーラがぶんすこする。

ていうかここに居る人全員からするけどね…シャンクスとかヤバい。白ひげと変わらない威圧感だよ…酔ってるクセに。

「海賊なのに海賊王を夢見ねエたア勿体ねエな!イリス!」

「あなたは?」

「俺か?俺はヤソップ…狙撃手だ!」

ヤソップ…。…いやいや、まさかそんな…、顔似てるけど、まさか…ハハハ。

「所でウソップって知ってる?」

「お、そりゃ俺の息子の名前だな」

うそーん…。

ウソップあなた…お父さん四皇のクルーじゃん…。しかもポジション幹部クラスじゃん!

「…ふふ、越えるべき壁は高そうだね、ウソップ」

「あん?何か言ったか?」

「ううん、あなたがウチの狙撃手に抜かれる日が楽しみだなんて」

何だソリヤ、とまたクビクビ酒を呷り出したヤソップは宴の輪の中へ戻っていった。あれ、父親なのにウソソップが私達の一味に居るのは知らないの？…つて、そういうえばウソソップの顔が写つてる手配書ないもんね。

…ていうか、さつきから思ってたけど白ひげ…あなた何で酒飲んでるの？

「オヤジが元気なのが気になるか？」

「…誰だっけ」

「ビスタだ。花剣のビスタで世界には通ってる」

むう…この人からも強者のオーラが…。

さつきからヤバい人とはばかり絡んで流石の私も緊張してきた…。

「白ひげだけじゃねエ、お前のボロボロだった体もある海賊に診てもらったんだ」

「とある海賊？」

ベックマンの言葉に首を傾げる。あの状態の白ひげをここまで回復させるんだから、そりや相当な腕なんだろうけど…物好きな人も居るんだね…誰だろ？

「ソイツの名は…トラファルガー・ロー。お前と同じルーキーだ」

「ロー？…あー…そういえばそんな人居たっけなあ」

シャボンディ諸島で会った覚えがある。ニット帽の男が確かそんな名前だった筈だ。

「俺達はオヤジが治療を受けるとは思わなかったが、あっさりとオヤジは奴に体を診て

貰うのを承諾した。以前は治療器具を体に付けているだけで鬱陶しがって外していたというのに…一体どんな心境の変化なのか…」

「…ま、まあそれは良いじゃん、助かったんだからさ。で、そのローは？」

「奴は麦わらのルフィの治療も行っていたからな。オヤジとお前の体を診てすぐ、また何処かへ向かったようだ。話によれば女ヶ島がどうか…」

ルフィを匿う為にハンコックが一肌脱いでくれたんだね。確かにエースと一緒にルフィも今は見つかったっちゃマズいし…女ヶ島なら政府の目も届かないだろう。

それにしてもローはなんで私や白ひげ、それにルフィの治療をしてくれたんだろう…彼に何のメリットが…？ただの良い人なのかな、そんな感じには見えなかったけど…人は見かけによらないってやつ？

「ああ、そうだ。これを見てもらおうと思っていたのを忘れていた」

「？…新聞？」

ビスタが差し出す新聞を手を取って開ける。

…おうおう、頂上戦争の事が色々書かれてるね。…うん、ちゃんとエースも死んだ事になってるっぽい。

「良かった…作戦が上手く行ったようだ」

「そうだが…見て欲しいのはそのではない」

ビスタに促されて新聞を捲る。次のページもまだ頂上戦争の話か…ハハ、見開きでルファイが写ってやんの。

「……つてルファイ!?何で!?!」

な、何してるのルファイ…これ頂上戦争の写真じゃないよね!?!隣に居るのは…ジンベエとレイリー!!またマリンフォード行ったのか…無茶し過ぎだよほんと…!

なにになに…!

『麦わらのルファイ、海軍本部で亡き兄を追悼か!!?』

…何だコレ。

…オックス・ベルを「16点鐘」…?広場に残る戦争の傷痕に花束を投げ込み堂々たる「黙祷」?

……ビックリするくらいルファイらしくない。…なんかあるなコレ。

「……んー……あ、これか」

写真に写るルファイは静かに黙祷をしており、麦わら帽子を右手で胸に当てている。

見るべきはその右の二の腕…身体中包帯を巻いているのにも関わらず、そこだけは包帯を外して“3D2Y”と文字を書いてあり、ご丁寧にも『3D』の文字の上にはバツ印があつた。

王華から聞いていたけど…こんな形でみんなに報せたんだ、ルファイ…考えたね。…い

や、考えたのはジンベエかレイリーかな？

つまり…3日後じゃなくて2年後…！

「2年後に、シャボンディ諸島で…！」

ぐしゃ、と新聞を持つ手に力が入る。

2年間修行をするって分かってはいた事だけど…実際にルフィからこうして “指示” を貰ったらやる気が湧いてくるというか……なんか、燃えてきた。

「イリスは意味分かるのか？」

「まあね、…仲間に向けたメッセージだよ。鐘を鳴らしたのとか黙祷は全部ミスリードだね」

ルウにそう返し、私はシャンクスの元へ歩いていく。

…この新聞は、1日前のもの。だったら…私以外の仲間達は…もうどこかで修行を積んでいる筈だ…！！

私だけがモタモタしてられるか…！頂上戦争で何度も力が足りない思いは味わった。レイつていう厄介な敵も増えた…！だから私は…強くならなくちゃいけない。

仲間を…大事な嫁を…守り通す為に…！！手の届かない範囲つてのを、無くす為に！！

「シャンクス…!!」

「お、イリスか!」

…この人も酒くさっ!

楽しそうな雰囲気の中邪魔するのは申し訳ないけど…私だってもう時間を無駄に使えないから…。

「王華から聞いてるかな、修行の話」

「ああ、勿論聞いている」

シャンクスはそういうとポケットをガサゴソ漁って私に取り出した物を投げた。

おっとっと…!何…?…う…!力が…。

「そいつア海楼石の手錠の鎖を取って腕輪にした代物でな、*“新世界”*ワノ国で使われている少し効果が薄い海楼石の錠なんだ」

…だからこれに触っても力は抜けるけど体を動かせるのか。

能力はやっぱり全然使えないけど。

「コレをお前とエースにやろう。これから俺が良いと言うまではその腕輪を必ず付けておけ」

「…そういう系かあ。…ていうかどこでこんなモノ手に入れたの…」

まあ四皇だし…入手するルートはそこそこありそうだけど。ていうかワノ国にも

行ったことありそうだし。

「その腕輪を付けたまま後ろのジャングルに入り、こことは真逆の浜へ辿り着いた後、折り返して帰ってくるまでがまず1番初めの修行だ」

「…因みに、この森…獣とか…」

「さつき見てきたが、うじやうじや居るよい」

うじやうじやって…。

まあ…付けるし、行くけどさ…。

「ちよつと待ってくれ。悪イ、今いいか？」

「え？うん…いいけど」

急にエースが話しかけてきて、親指でクイツと岩の陰を差した。2人で話したいって事かな。

特に断る理由もないので頷いてその場まで歩いていく。ちよつとお酒の匂いはするけど…エースはそんなに飲んでないみたいだった。

「…まず、これだけは言わせてくれ。…今回の戦争、色々迷惑をかけた…！俺が不甲斐ねエからルフィも危険に晒して…オヤジもみんなも死ぬかもしれないなかったのに…。少なくとも俺はお前が居なきや死んでいた、その事でお礼を言いたかった」

結構真剣な目で見つめてくるから一体何事かと思えばそんな事か。



「ありがとう、助かった」

「…つて言う割には、なんか納得行つてなさそうな顔だけど？」

「い、いや…何でもねエ、気にすんな」

これはあれだね、赤犬に殺されかけて、その上ルフィの仲間である私に助けられたつてのがちよつと情けないって思つてる顔だ。私も良く情けないなつて思うから分かる。

「大丈夫だよ」

「…？」

「次、勝てばいい」

真つ直ぐにエースの瞳を見つめ返し、拳を前に突き出した。

弱い自分と無理矢理向き合わされて辛くても、情けなくて潰れそうでも…次があると  
思えばそれだけで頑張れるから。

「エースは死んでないし、まだまだ強くなれる。だから…これから先もつともつと強くなつてき、次会つたときにぶつ飛ばせば良いよ。だから、えつと…そう！今回の戦略的撤退！勝つ為の逃げ！…で、どうかな…？」

「…勝つ為に、逃げるか。…ハハ、そんな事、考えた事も無かつた…俺はアイツのアニキで、オヤジの船の2番隊長だつて誇りもあつたからかもしれねエが…」

逃げる事は負けに繋がる事もあるけど、勝ちに繋げる為の逃げだつてある筈だ。伊達

に逃げ足なんて言われてないもんね！

ちよつと自信無かつたけど、エースも納得してくれた、かな？

「…俺はまだまだ強くなれる。弟に助けられてる様じゃ兄貴としての立場がねエ…！そうだろ？イリス」

こつ、と私の突き出す拳にエースの大きな拳が当てられた。

「…うん…：…ていうか、私の名前覚えてたんだ」

「弟の仲間を忘れるかよ、それにお前は戦争でもかなり暴れてたじゃねエか」

あ…：エースから見ても目立ってたか。これは逃げ足って異名が無くなるのは確定だねえ、ふふふ…！！

「じゃあ、戻ろつか、修行開始だよ」

「丁度いい酔い覚ましにはなるか？」

「海楼石付けてるのに強気だね…」

グルングルン腕を回すエースに若干引く。思考回路はやっぱルフィの兄ちゃんだった、酔い覚ましのスケールがでか過ぎる。

私達はシャンクス達の元へ戻り、詳しい説明を受ける。と言つてもそう多くはなかったが。

「制限時間は特にない。後は…：そうだな、この程度で死ぬようなら自分はその程度だつ

て諦めるんだな。俺達は誰もお前らを助けにはいかない。…さア、行け！もう修行は始まってしまっている！」

「じゃあ俺は先に行くぜ、イリス」

「…これ死んだかも」

…こうして、地獄のスパルタ修行が始まったのである。

能力の使えない子供みたいな私を夜のジャングルに放り出す四皇…：鬼が可愛く見えてくるよ…。

で、入った瞬間に狼の様な獣に追われて冒頭に至る訳だね。…はあ…：助けて…：ナミサー…。

\*\*\*

「グララララ…！！なかなか名演技じゃねエか…！頼んだぜ、ピスタ」

「ああ、分かったぜオヤジ、イリスの護衛は任せてくれ」

「じゃあ俺はエースにつくか」

エースとイリスがジャングルに入っただけ、ビスタとヤソップも草木が生い茂るそこへと飛び込んでいった。

シヤンクスは死ねばその程度とは言ったが、本気でそう思っている訳じゃない。むしろ：エースはともかくとしてイリスが往復してここまで帰ってこれるとはとてもではないが思っていないのだ。

ただでさえあの子供のような体に、普段から能力に頼り切った生活（王華談）、その上に海楼石まで身に付けているのだ。まず不可能だろう。

今回の修行での狙いは、素の能力向上、ただそれだけである。

海楼石を身に付ける事で身動きも制限され、能力者には厳し過ぎる環境へと身を投じさせる：だからこそ乗り越えた時に得られる対価は大きい。

とはいえ失敗するのを分かっている1人ジャングルに放り込む訳にも行かなかったので、ああして護衛をこっそり付けたという訳だ。

「俺達は宴の続きと行くか！」

「さてはお頭、宴したいから面倒みなくて良いこの修行方法取ったな！」

「イリスがいつ音を上げるか賭けるか！」

「最初だからな、1時間保てば良い方じゃねエか？」

やいのやいのと楽しい雰囲気は続く。

この宴自体、森に入ったイリスが焚かれている火などでこの居場所を見失わない様にと行っているものではあるが：そこまでシャンクスが考えているという事は、獣から逃げ回るイリスが知る由もない事であった…。

## 137 『女好き、2年間の修行』

「く、くそ……どこだこー！」

狼っぽいのが逃げたら迷った…！

その狼も私が撒いたというよりは突然現れたバカでかいゾウにびびってどっか行っただけだし、そのゾウは私に興味を示していなかっただけだ。

開始早々運で乗り越えてるようじゃ…この修行を終わらせるなんて無理な話…！

…それに、分かってはいた事だけど自分がいかに能力に頼り切った生活をしてきたのかが分かった。

例えば今、私は夜のジャングルの中で迷うっていう1歩間違えれば即死の状況に陥ってる訳だけど、いつもなら身体能力を倍加して木に登れば高い所から現在の場所を把握する事くらいは出来た。

だけど素の私は本当に小学校低学年並みの力しかないし…暗闇でこんな大木よじ登れる訳もない。

運良く登っても降りられないのが目に見える。

「そうなんだよね…暗いんだよねえ…」







アマダケって言うのは、その名の通り甘いキノコだ。ワライダケと違って表皮を剥かなくても水で洗えばすぐに食べられる素晴らしいキノコである。ただし水で洗う工程は必須で、アマダケの表面に付いている胞子成分を取り除かない事には食べた物ではないのだ。水で洗う前のアマダケが美味しいと言う人も居るらしいが…これはサンジに聞いた事だけだ。

ミズダケは水分をめっちゃ吸収するキノコで、無人島では水の保管に使っていた。水を吸う事でかなり大きくなるんだよね…キノコの傘に乗って小型のボート代わりになるくらい。雨の日なんかは見つけやすいキノコだった。

「川とか、どこかにあればなあ…」

無人島に居た頃は、聴覚倍加を使って微かな水のせせらぎを拾い、川や滝などを探したモノだ。

…今は滝があっても絶対近づかないけどね。滝壺で死ぬ。

「ガルルル…」

「あー、お腹すいてそうな声。私もペコペコなんだよね…」

「ギャオツ！」

「お、また違う声！さては獣の群れだなあ？………退散っ！」

急いで立ち上がって振り返る事もなく走り出す。勿論アマダケとミズダケは握りし

めて！これが生命線だもん！！

やっぱりGから逃げる時に大声出したのがダメだったか…！獣を呼び寄せちゃったみたい…！

突然後ろから涎が落ちる音と唸り声が聞こえた時は心臓が飛び上がったよ…今もバクバクだけど！

「はあ…はあ…っ！」

逃げてばっかだな…私…。やっぱり…能力が無きやただの雑魚じゃん…。

いつもなら拳一つあれば充分な場面も、今の私にとっては命をかけた逃走劇になる。…こんなんじや、いつまで経っても変わらない。

「だけど…！」

そうは言ってもどうする事も出来ない…！気持ちだけで後ろの獣達をどうにか出来るなら今すぐ振り返って戦ってみせるけど、そんな事をすれば二度と朝日は拝めまい。

情けなくても、弱くても…まずは逃げ切る事を考えないと…！ただでさえこの腕輪で動きも制限されてるんだ、頭も使わないとただ死ぬだけだ！

「どうする…どうする…！…ッがあっ！」

くくくッ！！！！せ、背中引つ搔かれた…！爪…!?なんだ…また狼とか、虎とかそんな系統の獣なの？

「……ツ……つう……！」

傷はそんなに深くは無いハズ……！だというのにズキズキと焼ける様に痛い！貧弱過ぎる体を恨むよ……！

「……あ……！！この、音……！！」

これは、水が高所から落ちる音！つまり……滝だ！

近くにある……そこまで行ければ、まだ逃げ切るチャンスは残されてる！滝は怖いけど……どうせこのままだとやられちゃうんだから！

「ツうぐー！」

ドンツ！と背中から突撃されて前に倒れた。コイツ……！しっかり背中を踏んで起き上がれない様にしてやがる……！

……やっぱり予想通り虎みたいな獣だ……！それが群れを為して私を追ってたんだ！私を押さえ込んでるコイツはボスか……！コイツの前には誰も出ようとはしない……付け入る隙はそこにある……！

「おつもい……な……！これでも、食ってる……！！」

持つてるアマダケを虎の口に放り投げる。虎はそれをムシャムシャと咀嚼し、直後に口から火を吹いた。

「ハア……！バーカ！アマダケの胞子は真逆の激辛成分たっぷりだって……！！」

その辛さで怯んで拘束が緩くなった隙を付いて走り出す。滝…滝…!!  
「だあー!もう復活したの!」

私を追う足音がまた聞こえ出した。しかもさつきより力強い…!怒ってらっしやる

!

「間に合って…!頑張って私の貧弱体…ッ!!」

見えた!滝…!!

上流から流れて来た水が滝となつて下流に流れてるんだ…!それなりに勢い強いね…。

「…飛び込んだら死にそう。…でも飛び込まないと結局死ぬんだ…!頼むよミズダケ  
!!」

大きく息を吸い込み、ミズダケを握りしめて川に飛び込んだ。

着いてこれるモノなら来てみる!私だつて入りたくないよこんな勢いの強い川!!

「…ああ…」

海楼石の腕輪なんか比じゃない程の脱力感が私を襲う。

だけどここのミズダケだけは離せない…いや、離すな…!死んでも!!

水位もそれなりに高いのか、足は付かない。

そのせいか水に流されるスピードも洒落にならない…既にかなりの大きさとなつて

いるミズダケを離れた瞬間にこの荒波に揉まれて水死体となる事は火を見るより明らかだった。

「っ……う、そでしよ……！」

今でもギリギリだったのに、この先また滝あるじゃん……！

あれに落ちれば、死ぬ……！それまでに何とか……何とか……出来るわけないじゃん力も出ないのに！

「あ……ッ」

案の定、抜け出す事叶わず……私はそのまま滝に飲み込まれて行った。

ぐ……！こんな、所で……！！こんな所で、死んでたまるか！！私……イリスだ！！未来のハーレム女王で、誰よりも強くなって、何が起きても嫁を守り抜く……！

だったら滝の1つや2つ……絶対に乗り越えてやる……！！

\*\*\*

「……ハア……ハア……！！……生きてる……！」

滝の高さがそんなに無かったから、落下の衝撃も最小限だったのもあるだろうけど……よく無事だったな、私……。

そりや乗り越えてやるとは思ったけど、気持ちだけは負けないようにしようと思っただけでぶつちやけ死んだと感じてたのに……。

しかもたまたまミズダケが岸近くの木の根に引っかかってくれたのもあって、今こうして地に足ついているのだ。

「……食糧はないけど」

アマダケも使ったしね……。はあ……目的地が本気で分からなくなっちゃった……。

「とにかく服を乾かせ……寒い」

どうせ誰も居ないんだ、裸になろうと問題ないでしょ。

こんな森の中で裸になるのはちよつと不安だけど……仕方ないよね。

「暗いけど、その辺の葉で服作っちゃおうか」

ちやつちやと服を脱いで近くの木の枝に干し、手頃な葉っぱを見つけてさくつと服を作る。

うん……ちゃんと着れる、腕は衰えてなさそう。

……ふう。とりあえずここで休憩させて貰おうかな。ここなら獣に襲われても川に飛び込めば助かるし……その後は保証できないけど。

「……ナミさん達、どうしてるかな」

ゆつくり落ち着けば浮かんでくる当然の心配に心が騒つく。

それぞれ修行出来る環境に送られたって話だけど…私みたいに超スパルタを受けてるんじゃないよね…。

…何であれ、みんなは2年後…シャボンディ諸島に心も体もずっと強くなってやってくるんだ。スパルタだなんだと根をあげてる場合じゃない…か。

「こういう時はテンション上げるためにナミさん達のぼよんを思い出そう…！あのぼよんは素晴らしおっぱい…！ぼよんぼよん…ぼよんぼよん」

…何だか余計会いたくなって会えない事実にはテンション下がったよ。

「……」そして、スパルタ修行が始まって早3日が過ぎた。

私は未だに森の中を彷徨い続け、その辺に生えてるキノコとか食べられる草で空腹を凌いでいる日々が続いていた。

初日以降は獣に追われる事もなく、安全に歩を進めてはいるがこつちで本当に合っているのかは分からない。勘だ。

「…うん、こんなものかな」

ぎゅ！と木の枝と石を頑丈な草で結んで簡易的な槍を作る。

石はちまちま研いできたからそれなりに尖ってるよ！これでやつと肉が食える…かもしれない！

弓も作りたいけど弦となるものがないから今は諦めてる。槍さえあれば弱い獣はこれで狩れるのだ。

とはいえ自分からわざわざ探しに行く必要もない。あちらさんからこんにちはした場合に限ってこの槍は活用しよう。

「お？とか何とか言ったら兎っぽいの発見！」

しかも一匹！群れからはぐれたのかな？…じゃあ悪いけど、私のお昼ご飯になって貰うよ！

「慎重に…」

こつそりと、音を立てずに兎へと距離を縮めていく。

走って距離を詰めれば逃げられて終わりだから、これくらい慎重な方が狩りは成功するのだ！

ーーーーここだ!!!

槍が届く距離まで近付き、思い切り突き出す。

完璧だ…！まだ気付いてない…兎肉は貰っ……………！



「グオ……!？」

「た……!？」

笑えるほど最悪なタイミングで、横から虎型の獣が兎を丸呑みにしやがった。

私の槍は兎ではなくその虎の頬に刺さり、虎は槍が刺さったまま私をギロリと睨む。

…!! 槍……! これがあればまだ……! 早く抜かないと……つ。

「うぐ……!!」

力が無さすぎて中々抜けない……!

終いには刺さった槍を抜くために力一杯頭を振り始めやがった……! 当然槍を掴んでる私も振り回される。

「うわ……!」

ズボ、と槍が抜け、その時の勢いで投げ飛ばされて木に激突した。

つつ……! これだけで意識が飛びそうになる程痛いつてのに……!!

「ガルルルア!!」

「ふんぬ……!」

刺された怒りで私に飛びかかってきた虎ののしかかりを槍の柄で防ぐも、虎の重さを支え切れる筈も無く、それはすぐに私の体へとのかかった。

ぐ……う……! 骨が……軋む……! 折れる……! 肋骨イかれるつて……!!

抜け出せない……キノコなんて持ってない！槍は押さえつけられてるし、私だって身動き取れない……っ！

「ガッ……あああああああ……!!?!」

押さえ付けられたまま肩に噛み付かれ、その鋭い牙が深く刺さり、強靱な顎で抉っていく。

……く、そ……!

槍から手を離して虎の頭を私に押し付ける。今一番怖いのは……引き千切られる事だ……このまま噛み付いてくれる方がマシなんだ……!

「はア……っ、ハア……っ……、この、獣風情が……ッ」

私を誰だと思ってるの……未来の……ハーレム女王だよ……!!

……!!  
だというのに、何……その目は……!!私を餌としか思っていないみたい……舐めきった目は……!!

「こんな、所で……っ!!!!こんな雑魚に殺されて、たまるか……!!夢がある……大事な人が居る……!!帰りたい場所だ……!!見つけた人も居る……!!お前なんか……私の、未来を……!!」

……オ!!」

「グオ……!!?」

「邪魔、するなア……!!!!!!!!」

「オ……………」

…何だ…？今、空気が震えた様な…。

…ん!?重い…!この虎…全体重かけてきやがったな…!!

「て…気絶してる…?」

ちらりと虎の顔を見れば、白目を剥いて力なく項垂れていた。

体重をかけたというより、力が抜けたのか…。

「うぐウ…いつ…!?ああもう!!」

何とか虎を退けて、刺さった牙を抜いた。

…流石に血がヤバイ、止血しないと…!

ダラダラ流れる血を止める為に、葉や蔦などを使って止血していく。

とはいっても医療機器があるわけもなし、出来ることは最低限に留まってしまおうけど。

「…これで、よし…!」

包帯とか欲しいけど…無いものは無い。今あるもので最高の手順を踏めば良い。

…でも血は止まらないなあ。マシにはなったけど…。

「今の、冷静に考えたら霸王色…だよな」

この腕輪してるし、何より女王化クイーンもしてないのに覇氣を使えた…？

…命の危機で私の才能が目覚めたなあコレは！ふふん、どや。

霸王色の覇氣っていうのは、発動した時オーラが見えるものだ。それを飛ばせば小さな岩くらいなら砕く事も出来るし、周りの生物の意識を奪うことだって可能。

…今の感覚、まだ忘れちゃいない。忘れない内に…！

体の奥底から、自分の存在を、圧を、力を沸き立たせる様なイメージ。

誰かが言っていたけど…覇氣とは意思の力…私の心が成長した時、それは更に強くなる。

「……………ふん!!!」

全力で霸王色の覇氣を発動させてみた。

…オーラは見えないけど…目の前の木は少し抉れた。つまり成功したんだ…!!…でもこれって本当に霸王色…?…なんか違うような…ま、いつか。

これの扱いがもつと上手くなれば、他者を傷付けずにただ圧だけを発したり、私が良く使う様な体に纏って身体能力を強化したり、今みたいに物を破壊したりと使い勝手も良くなる…!!

オーラが見えないのは単純に私の覇氣が弱々しいからだろう。私の能力で1000倍まで倍加していたからあれ程の規模の覇氣を扱えていただけで、素の状態ならこの程度

…。つまり、この素の状態でもともと覇気が使える様になったその時…!!

「……私は、格段にパワーアップする!!」

…くうく!! シャンクスめ、これを狙ってたんだね!? 流石四皇…私の覇気を目覚めさせてくれるなんて…!

そうと分かれれば、後は武装色と見聞色だ! 待つてろ2年後…!! 待つててナミさん達…

!!

私はもっともっと強くなって…ハーレム女王に相応しい女になって帰るから!!!

\*\*\*

「…あれからもう2ヶ月か」

「まだ帰ってこねエな、イリスとビスタ」

森の中を見て言うシャンクスの呟きに、後ろで昼食の肉を齧っていたマルコが反応す

る。

イリスとエースが森に入ったあの日から早くも2ヶ月が経過しており、1ヶ月前にはエースが往復を終えて帰ってきていた。

やはり素の力だけでもエースはそれなりに戦えて、その辺の木の棒で獣を狩っては腹の足しにしつつサバイバルを終えたという流れだ。

「グラララ…なかなか骨があるじゃねエか…！一体どうやって生き抜いてやがるのか…心配か？エース」

「気にはなるが、心配はしてねエよ、オヤジ。アイツは強い」

エースの顔には言葉通り心配の色は見えなかった。ただこの2ヶ月…どうやって生き延びているのか、それだけが気になっているのだ。

白ひげもイリスに言っておきたい事があり、他の面子は全員イリスの身を案じながら帰りを待っていた。

「…、この気配は…！」

ぴく、とまず最初にシャンクスが反応する。その次に白ひげが深い森の奥を見据えてニヤリと口角を上げた。

「こりや…予想外じゃねエか、赤髪の小僧…！」

「…参ったな…、修行のステップを何段も飛ばす必要がありそうだ」

パキ…と木の枝を踏む音が、草木の生い茂る影の向こうから聞こえる。

その足音は徐々に大きさを増していき、やがて足音の主が影から出て、陽の光に当たって眩しそうに瞳を細めた。

「…やった。往復出来た」

その少女は、森へ入った頃とは打って変わって疲れ切った表情を浮かべていた。

薄汚れ、よれよれになった衣服を見に纏い、背中には葉っぱや蔦で作ったのかカゴを背負い、手には獣の牙を刃にした槍を持っている。

ただ、その眼の奥だけに：ギラギラと燃え尽きない炎を宿して。

「…うううう…!!やったー…!!…うにゅ」

両手を上げて叫んだと思えば、よろよろと倒れそうになる少女を後ろから現れたピスタが支えた。

「グラララ…やるじゃねエカイリス…！オイ、誰か手当てしてやれ」

白ひげの為に集めた精鋭の医者達が、ピスタに凭れ掛かりながら気を失っているイリスを船の中の医療室へと運んでいく。

シャンクスはそれを目で追いながらピスタに「様子はどうだった」と聞いた。

「恐らく赤髪も、オヤジも驚くだろうが…森に入って3日程で武装色が扱える様になるまで成長した」

「な…!?!」

驚愕で目を見開いたのはエースだった。

確かに自分はイリスより1ヶ月も早く往復を終わらせたが…覇気が使えた試しは無かった。

つまり、海楼石の腕輪をつけながら覇気を発動させるという能力者にとってはほぼ不可能に近い芸当を…彼女はたったの3日でやってみせたのだ。しかも彼女が行ったのは武装色を「飛ばす」という高等技術であり、これはそう誰にでも扱える様なレベルのモノでは無いというのにも関わらず。

「見聞色はその2週間後…霸王色はつい1週間程前だった。確かに運が味方をした時は何回もあった…だが俺にはそれすらもこの世界の意思の様な気がしてならない。何度も助けに入ろうとしたが…その度に自分で苦難を乗り越えていた…アレは、間違いなくこの世界を動かす程の存在となる」

イリスの運が良いのではなく、世界がイリスを死なせない。ビスタはこの2ヶ月間でそんな感想を抱いていた。

「運も力、アイツがそれだけの器を持っているだけの話だろう。これからどうすんだ、赤髪の小僧」

「本当はもう少し後にしようと思っていたが…近くにまた1つ島がある。そこはこここの



動物達とは比べ物にならない強さを持った「独自の進化」を遂げた動物達の島だ。そこで1年間鍛えようか」

想定よりも数ヶ月早く島を移る事となり、イリスが眠っている間にと急いで海を渡る。

確かにイリスの成長速度は早い。2ヶ月足らずで海楼石の腕輪をつけながら覇気を使えるようになり、それなりの大きさの島を往復してみせた。

だがシャンクス達は知らなかった。∴イリスは眠っている間も修行を欠かしてなど居なかったのだ。

睡眠時には常に王華部屋で覇気や技の開発、その他諸々の強くなるトレーニングは欠かさず行い、意識の中では海楼石で縛られていようが関係なく使える能力を使って、自分の能力で出来るだろう事を片っ端から試し、糧にした。

結果としてイリスは起きている間に覇気と肉体の修行を。寝ている間は覇気と能力の修行をこの2ヶ月ずっと行い続けていたのだった。

王華ですらドン引きしていた程の過密スケジュールである。覇気がある程度自由に使える様になったら休むよ、と言って早2ヶ月なのだから誰でも引く。

そして、島を移動してすぐにイリスは目を覚ました。当然眠っている間は覇氣と能力の修行を欠かしてはいない。

その島では、まず白ひげ海賊団の隊長達と組み手をしたり、シャンクスに覇氣の詳しい説明を受けた後すぐに島へと放り込まれた。

エースは今の状態でも覇氣が使える様になる為にと意気込み、イリスは更なる力を手に入れようと気合を入れる。

その際に…イリスは白ひげから重大な報告を受けた。別にイリスに関わりのある事ではないが…どうやら白ひげは海賊を引退するらしい。

驚いたイリスが訳を聞けば、「海賊としての俺は、あの日背を向けて逃げた時に死んでらア」との事。

誇りつてのは厄介なもので、どうもそれを割り切つて海賊に戻るのは難しい様だった。

エースも同じく逃げたくない戦いから逃げはしたが、アレはイリスが助けていなければ既に死んでいる場面だったからエース自身も気持ちも新たに前へ向けたという訳だ。

そうして、1ヶ月…5ヶ月…1年が過ぎ、また1ヶ月…5ヶ月…と過ぎて行つた。

最初の1年と2ヶ月で1個目の海楼石の腕輪は外れ、効力の弱めていない海楼石の腕輪を新たに付け直して5ヶ月：その後残りの5ヶ月を海楼石無しで過ごし、日々エースやシャンクスと拳を交える日々が続いて――――

そしてついに、約束の刻が訪れた。

## 新世界突入編

### 138 『女好き、新たな始まり』

「もう2年か……」

草木が生い茂る森の中で、1人の少女が静かに佇んでいる。

周りには、何頭もの猛獣達が普段の猛猛しさなど微塵も感じられない程に大人しく座り、その少女に対して頭を垂れている様だ。

ここに来た当初は、この猛獣達に追いかけて回される日々だったな、と少女は薄く笑う。

「おーい！早く来いってオヤジが呼んでるから急げよー！」

「うん、今行く！あ、みんな、じゃあね！」

猛獣達に軽く挨拶をし、手を振る男に小走りで近づく少女が隣に並んで歩き出す。

男は眠そうにあくびを噛みしめ、少女はそんな男の脇腹をつついて遊ぶ。

ただのジャレ合いだが、一方の男は自然系ロキアの能力者である事からこの少女がただの可愛い女の子ではないという事は一目で分かる事だった。

150あるかないかの身長で、小ぶりではあるが確かにそこに存在する胸。肩まで伸びる髪は入念に手入れが施され、綺麗な赤の瞳が良く映えている。

髪を留めている訳ではないオレンジ色をした飾りだけのヘアピンを前髪につけて、その容姿は幼さが残ってはいるものの美しきすら垣間見えた。

少女の名は、イリス。

2年前に世界の辿る筈だった道を大きく変えた張本人で、隣を歩く男：エースの命を救った者でもある。

この2年でエースとは兄妹の様に仲良くなり、妹が居なかったエースはイリスに甘かった…というのはまた別の話になるが。

「お待ちせー！」

「おー、全く待ったよい！」

「早く乗れよエース！イリス！出航するぞ！」

船は騒ぎを起こさない様に新調したモノに乗っているのだが、乗ってる人物は見つかれば騒ぎ所では済まない。

海賊をやめた白ひげや、その元船員：家族達。そして赤髪海賊団一同が同じ船に介しているのだから政府が見れば泡を吹いて倒れてもおかしくはないだろう。

そんな大物達が集まる船だろうとも、イリスは臆することなく乗り込んで四皇の一人：シャンクスの隣に立った。

「シャンクス…改めてありがとう。私、こんなに身長伸びて幸せだよ」

「背が伸びたのは俺のお陰じゃないだろう。真剣な顔して何を言うかと思えば…」

「イリスには一大事だろ。なアイリス」

「そうだよ?…それにしても楽しみだなあ…ナミさん達」

目を瞑って自らの嫁がどの様に変化しているのかを予想で思い浮かべていく。

修行中、シャンクス達はあまり島に近付いたりはしなかった。元々四皇というのもあり、ずっと船を島につけてれば怪しまれるというのもあつての事だ。

代わりに船の無かった白ひげ海賊団はずっと島に居て、イリス達と共に鍛え直している人も居た。それは白ひげが船から居なくなるからという意味も少なからずは込められていただろう。

「エースは白ひげ海賊団…もとい不死鳥の海賊団に残るんだっけ」

「ああ、やっぱり俺の居場所はここなんだ。でもルフィには会っておきてエナ」

イリスとしてもそうしてくれると助かる話だった為、とりあえずエースにはローブを被せて一緒にシャボンディを降りる事になった。

イリスもとりあえず同じ様に被って顔バレ防止とする。本人はエースを隠す理由は分かるけど自分は別に隠さなくてもいいじゃん、と言っていたが。

実際身長も伸びているからすぐにイリスだと気付かれる事も無いかもしれないが、も

し正体に気付かれれば騒ぎが起き、出航に手間取るかもしれないというシャンクス達の配慮だ。

かなり朝早くに出発したというのもあり、シャボンディへ辿り着いた時もまだ昼前だった。

イリスは船を降りる前、1人1人に挨拶に回る。この2年間：お世話にならなかった人物など居ない。全員に何かしら助けてもらっている、何も言わずに去るなどあり得ない。

今の自分があるのは、間違いなくこの人達のお陰なのだから。

挨拶を終え、白ひげに「医療機器は無理矢理外すな！」と念を押してシャボンディ諸島へ降り立った。

見送りは要らない：それをした瞬間にここら一帯は大パニックになるだろう。

…だが、降り立ったのだ。

2年前：みんなと別れたこの地に：また。

「…みんな、この2年間、ほんつつとうにありがとう!!!絶対!!ハーレム女王に、私はなる

!!!  
」

船に大きく手を振ってそう宣言し、エースと共に歩き出す。

バレる訳にはいかないので全員船から手を振るだけだったが、イリスはそれだけで充分やる気が漲ってきていた。

「…よっし…！行くか！」

\*\*\*

「……き、つつたー！！！！やつと着いたわ！シャボンディ！！諸島！！キャハっ！キャハハ！！イリスちゃん！イリスちゃんどこー！！」

肩まで伸びた淡い金髪を黒のリボンで後頭部の下に1束で纏めてローポニーテールにし、帽子は被らず、黄色のシャツに白のジーンズを履いている美女…ミキータが顔をだらしなく緩めて走り回る。

「私は待った…！2年間も！！禁断症状なら飽きるほど出たわ…！私は生と死を彷徨い続けたのよ！！ダイブしたいわ！あのおっぱいに！！おしりに！！ああ、イリスちゃん…！私は



「ここにゐるわ!!」

ヤバイ女が走り回るその姿に、道行く常識を持つ人は避けて通る。しかし心配しなくても彼女が探しているのはイリスだけ……それ以外の人に危害を加える気など無い。

その事を知らない人から見ればただの変質者だが。

「ちよつとアナタ、さつきからイリスイリスとウチの主人に何か用オ?」

「え? イリスちゃんを知ってるの!」

キキ! とブレーキをかけ、ミキータはその女にあなたは? と尋ねた。

女は黄色のベレー帽のような物を被り、小太りで、着ている黄色のワンピースも張り裂けそうなインパクトのある見た目の人だ。

「私を知らないなんて遅れてるわねエ。私は『嵐の運び屋』ミキータ。懸賞金は4000万よオ? ギヤハッ!」

「?……ああ……そういう……ふうん。で、その主人は?」

目の前の「偽」ミキータがそう自己紹介した瞬間に、この女の言う主人とやらもイリスではない可能性がだいぶ高くなつた事でテンションが落ちるも一応聞いてみる。

そもそもイリスは面食いな所がある。この女を嫁にすると少々考えづらい。自分を偽るくらいだから中身も良くないんだろう、とミキータは急激に冷えた頭でそう分析した。

「向こうの酒場よオ？あなたも来るウ？」

「キャハ…そうね…行くわ」

イリスに会う前に、大好きな人を偽る胸糞悪い連中をぶっ潰してから行こうと決めてミキータは自分の偽物の後について行った。

―酒場―

「( )よオ」

「ふーん…」

やはり、ざつと中を見渡してもイリスなど居やしない。

長いオレンジ髪の女性や、ピンクのお姫様みたいな女性、黒のストレートロングの女性なら居るのだが…。

「…つて…ナミちゃん!?ペロちゃん、ロビンも!!」

「えー!ミキータ!?うわー、久しぶり!雰囲気違うわねー!」

偽物に用事が出来た、と言ってカウンターで固まって座っていた3人に近付き、ミキータも近くに座る。

「雰囲気ならナミちゃんも…ていうかペロちゃんががらりと変わったわね!綺麗で、イリスちゃんが見たら絶対惚れ直すわ」

「うっせーな…別にアイツの為にやってるんじゃないやねエよ…」

ぬいぐるみを抱きしめて、ぷい、と頬を染めそっぽを向くペローナを見る限りではイリスの為でしかない様に見えるが。

「でもゾロを放つてここまで来たんでしよう？イリスが居るって噂になつてるこの酒場に」

「た、たまたま入ったんだよ！酒が飲みたかったんだ!!」

「飲んでない様に見えるけれど」

「ぐぬぬ…!!」

ロビンに弄ばれてるペローナを見て、ミキータとナミは軽く笑い合う。こんな光景も2年ぶりで、つい笑いが溢れ出てしまったのだから仕方がない。

後はイリスが来れば、とりあえず女組は全員揃うのだが…。

「…で、ここに居るイリスちゃんっていうのは？」

「ああ、あそこよ。いつ消し炭にしようか相談していたの」

ミキータはナミが親指でクイ、と指差す方を視線だけで盗み見る。

そこに居たのは…麦わら帽子を被った丸々した体型の男と、その隣で偉そうに踏ん返り返っているお世辞にも可愛いとは言えない背の低い女。髪もボサボサで、瞳に閃いては赤ではなく黒。

女は近くの男を呼び付けてはあれやこれやと命令をしていた。呼ばれた男はその女とは全くの無関係だったにも関わらず慌てた様に命令に従っている様だ。

「ちよつと、アタシが誰だか分かってんでしょオね!? 女王」イリスよ!! 懸賞金10億の!! 殺されたくないきやさつさと金と男持つてこい!!」

「あ、あんた女好きで有名なはずじゃ…ぎやあ?」

パン!と偽イリスが放ったピストルが男の足を貫く。

「女好きイ? んな訳ないでしょ!?! 美人連れてた方がイイ男が寄ってくるからそう名乗ってるだけだつつの! 女が女を好きに!?! キモいわ!!」

「……………殺す」

「ペロちゃん落ち着いて、ここは一旦冷静になるのよ。殺すならまずは指を切断して、耳を引きちぎり、鼻を抉って四肢をトばしてから!!」

「あんたが落ち着きなさいよ、そんな事しなくても雷落とせば楽に殺せるわ」

「フフ、首を180度回す方が速いんじゃないかしら」

デンジヤラス☆ブライド達が殺気を隠そうともせず、そう口にするが、殺気を感じ取る実力すら無い偽物達は気にした様子も無く、逆に美人が集うこの場所へと大声で話しかけてきた。

「その女共オ!!仲良く固まってねエでこっちへ来い!」

「死ね」

「お、オイオイ……!アンタなんて事言うんだ!あの男は“麦わらのルフィ”だぞ……!2年前の頂上戦争に突っ込んでったイカレた海賊だ!知ってんだろ!?隣に居るのは更によベエ、あのイリスだ……!海軍大将とも渡り合えるって噂なんだぞ……!怒らせないでくれ!店が危ねエよ!」

小声で怯えながら言う酒屋のマスターに、ペローナは尚も不機嫌そうな顔を隠そうともせず更に舌打ちをかました。

「……チツ、私に死ねって言われたら逆に喜んでんのがあのアホだろうが。どこに目ついてんだカス共」

「あ?何だって……?お前……アタシが女王だから手は出されないとでも思ってるんじゃないやないでしょオね?女だろうが何だろうが関係ないわ……!アタシよりカワイイ顔してるお前らは皆殺しだ!!」

「だったら世界中の女を殺さなきゃいけないわね、頑張つて」

「コノ……ツ!!舐めんじゃねエよオ!!」

煽るロビンにガチャ、と銃口を向けた偽イリスにため息をついて、4人はナミ達が飲んでいた飲み物の代金をカウンターに置いて歩き出す。

「ゴーストラップ」

「がア…!？」

ペローナが指を鳴らした直後、突然偽イリスの持つ銃が爆発を起こして痛みで蹲った。

爆発の前兆など何も無かったのに…と偽イリスは歯を食いしばる。本当にいきなり爆発したのだ。指を鳴らしただけで…銃が弾け飛ぶレベルで。

「ホロホロホロ、そこで一生蹲ってる、バアカ」

「こ……んの…オ!!」

「キャハ、危ないわね」

「んなア…!？」

銃が壊れたならと隠し持ったナイフを取り出した瞬間、突風と共に目の前に現れたミキータの蹴りでナイフを弾かれて落とす。

その事で更に頭に血が昇った偽イリスは、後先考える事無く攻撃を仕掛けた。

「右腕のパンチ、そして左足の蹴りかしら、単調ね」

「え…!？」

自分の攻撃を分かっているかの様に避けてみせたミキータに偽イリスは目を見開く。

そんな彼女の反応を見て満足した様に笑い、ミキータは踵から突風を巻き起こして蹴

りを放ち、偽イリスを店の壁まで吹き飛ばした。

「私達を相手にしたいのなら、せめて軍艦でも引つ張つてきなさい。じゃ」

最後にそうナミが短く締め、4人は店を出る。

ナミ達が去った店内は最悪の雰囲気となり、偽イリスや偽ルフィの機嫌が悪くなつていくが…それに比例して自分達の身に危険が迫っている事など、彼らが知る由もない事だった。

「ペロちゃん、あの技は？」

店を出てとりあえず目指すはシャツキーのカフェ。その道中にミキータは、さつきペローナがやった技を尋ねた。

「ゴーストラップだ、2年前も使つてただろ。ただ私だつて2年間肌のお手入れにばかり気を使つてた訳じゃねえ…ゴーストの姿を消す事が出来る様になつたんだ」

「つまり、本物の幽霊みたいなの…！凄いわね、ペロちゃん！」

「ネガティブゴーストや特ホロは姿を消すつてのはまだ無理だけだな。いずれそれもモノにしてやる。…お前だつて成長してんじゃねえか、あれは「覇気」だろ」

「アレは私も驚いたわ、私も習得しようと思つたけどそもそもどうすれば良いのか分からなくて諦めたもの」

ナミが苦笑いして頬をかいた。

そうは言うが、彼女もこの2年間必死に修行を重ね、航海士としての知識を増やす行為にも一切の妥協をしなかった。

数ある空島の1つに飛ばされたナミは、そこで天候の科学を詰め込んできたのだ。

そして、空島に飛ばされたのはナミだけでは無かった。

「私は2年間空島に居たの。名をアーツ、空の武を極めようとする人達が沢山住んでる所よ。そこで私は心綱<sup>マントラ</sup>…見聞色の覇気と、貝<sup>ダイヤル</sup>で空を駆ける戦闘の極意を叩き込まれてきたわ」

「だから2年前と違って動きやすそうな服なのね」

「お気に入りのワンピースだったのに、修行1日目で破れちゃったのよお…!…でもまだ持つてるわ、あの服を着てイリスちゃんのベッドに入れば襲ってもらえる筈なのよ!!」

「変わらないあんたに安心したわ」

その後、ナミ、ロビン、ペローナも自分達がどこで力を付けていたのかを伝え合い、会えなかった2年を埋めるかの様に話に花を咲かせたのだった。



## 139 『女好き、相手にならない兵器達』

「シャツキーのバーってどこだっけ…」

「オイオイ、俺は知らねエぞ」

シャボンディ諸島に降りて、結局場所が分からずその辺を歩き回る私とエースだったが、一向に目的の店は見えてこなかった。

そもそも何番グローブだっけ？ それすら覚えてないのに探すなんてやっぱ無謀だったかなあ。

いやでも無謀は好きだし！（適当）

「その辺で暴れて海兵呼んで貰って、バーの場所教えて貰う？」

「騒ぎは起こさねエンじゃなかったか？ それは最終手段に置いておけばいい。それよりイリス、腹減ってねエか？ いつもならもう食ってる時間だろ」

「あー…確かに。でも私お金持つてない」

「金なら俺が持つてる。奢ってやるよ飯くらい」

それならどこか適当な店にでも入って奢ってもらおうかな！

せっかくシャボンディに来たんだからサンジのご飯が食べたいけど…このままだと



「流石兄貴、ルフィの事良く分かってるね」

「まあな。あいつの事なら大体何でも知ってる」

そういうエースの自信を裏付ける様に、騒ぎに近付けば近づく程人も増え、皆口々に麦わらのルフィがどうだの一騎当千の女王がどうだの話していた。

…いつきとうせんのじょうおう？

「ガハツハハ!!こりやめでてエ!まさかあの麦わらの一味の傘下に入れるなんてよ!!」

「船長はあの麦わらのルフィだぜ!!イカレた男だが、海賊王候補の一人に必ずなる男だ、勝ち馬に乗るたアこの事だ!」

「一騎当千の女王も忘れるな!アイツが居れば大将すら怖くねエ!!!」

「…ナニコレ」

広場みたいな所に出たと思ったら、そこにはかなりの数の海賊達が興奮し切った状態で集まっていた。

数で言えば…2000人は下らないか。

「オウおめエら!おめエらも麦わらの傘下に入ったのか?」

「あー……えーつと……まあそんなとこ。これ、麦わらのルフィが仲間を集めてるんだっけ?」

「つたりめエだろ!このチラシを見ろ!」

近寄ってきた海賊に適当に話を合わせて、渡されたピラを見る。

麦わらの一味、仲間募集……。加入条件は懸賞金7000万以上……etcつと。

「ヘエ、ルフィもやるなア、偽物が現れる様になったか」

「あん？何言ってるんだあんちゃん、近くに偽物が居るつてのるかア？」

あなた達を集めてる人の事だよ、とは言わないでおいた。その方が楽しそうだし。

「エー……んー……、お兄ちゃんの偽物とか居ないの？」

「ブツ……お、おま……、あーいや、そ、そうだなア……見た事ねエな……ハハ」

テンパリ過ぎでしょこの兄貴。『エース』なんて目の前に人がいる状況では言えないつての。

2年の期間の中で、エースが義兄妹の盃を交わそうという提案を持ちかけてきた時はあった。それ以前からも私に甘すぎるといふか、シスコン気味だったし……その盃は断らせて頂いたけどね、酒だから。

ルフィに対しても凄く優しい兄ちゃんみたいだから、女の私となると接し方がよく分からないのかな？そういえば一度エースの親の話を一緒にしたんだっけ……その時からなんだよね、私に甘くなったの。

「ゴールド・ロジャーがお父さん？聞いたよ、海賊王が父親なんて凄いいよね。それがどうしたの？」つて言ったら笑い出して……あの時のエースは今考えてもよく分からない。

「お！おめエら見ろ！！船長のお出ましだ！！」

「どれどれ」

ルフィの偽物つてくらいだし、そりやもうとんでもなく強いオーラを放つてる男で…。

「待たせたなア！！野郎共！！そして周りを見てみる！！知らねエ顔ばかりだろうが、おめエらは全員この先俺の子分！！」  
「麦わらの一味」の船員だア！！」

………はア？

「やべエ…本物の麦わらのルフィだ…！」

「俺達ア本当にあの伝説の男の船に乗れるんだ！！」

はあん???

あ、あの…あの男が!?

今も広場に海賊達を集めて、高台の上からイキってるだけの小太りなあ男が!?!?

「麦わら帽子被ってるってだけじゃん…手配書と違い過ぎる事に違和感とかないの?」

「何言ってるんだ、麦わらの一味が消息を絶つてから2年だぞ！見た目くらい変わらアない。」

見た目っていうか色々変わってるんだけど??そもそもオーラが違うよね？

「今おめエらをここに集めたのは外ほかでもねエ!! そのおめエらにとって大切な“大頭”のこの俺を、どこぞの馬の骨が侮辱した!! 犯人達はこの諸島のどこかにいる!! そいつらを見つけて出し、この俺の目の前に引き摺ってこい!!」

はあ…バカバカしい、ルフィの偽物を名乗りたならせめて仲間を“子分”とか言っちゃダメだよ。仲間内で上下関係作るの嫌いだからさ。

…ありや、ここに大勢の気配が押し寄せてる気配がする。あそこに倒れてる海兵が仲間を呼んだのかな、血を流して倒れてる所を見るに…近くで血のついた剣を握っている舌が長い男がやっただに違いない。

助けなくてもこの数がやってくるなら問題ないでしょ、何人か強い気配もするし。

「……ん!?!」

「お」

今、懐かしい気配も感じた…! エースも同じタイミングで感じ取った事から…ルフィで間違いない!

偽麦わらの一味の船員と行動を共にしている様で懐かしいその気配は偽ルフィの元へと近付いていた。

「あつちか。行こう、エース」

「もう呼ばねエのか…」

小声でエースに話しかければそんな反応が返ってきた。ガチで落ち込んでる…いや、私も今更お兄ちゃんとか恥ずかしいんだからね！

「船長！あの本物のペットは見つからなかったんですが…アンタの探してた男はコイツでは!？」

!!!

船長が探してるとかはどうでもいいけど、私が探してたのはその男だよ!!

宴会用の付け髭とローブで一応変装はしてるっぽい…ハンコックが面倒見てくれたんだね。ハンコック達は私達の島にも何回かやってきていたから、ルフィの事はその時頼んでおいたのだ。白ひげ海賊団も赤髪海賊団も女の子が居ないから、九蛇の人達が来てくれる日は至福の時だったなあ。

「ルフィ!!」

「あん?」

「いや、あなたじゃなくて」

大声を上げてルフィに近づけば、高台に居る偽物が私に顔を向けてきた。いやほんと誰だこいつ。手配書に寄せる気が無さすぎる。

「?誰だお前、おれになんか用か?」

「誰だって…酷いなあ、私の顔忘れたの?」

そういつて顔を隠していたローブだけ取って、ルフィに笑いかけた。

「……??誰だ?」

「なぬ!」

…あ、ああ…まあね、身長も伸びてるし?150センチとなると2年前にやってたオールインクリース クワイーン全・倍加とか女王化じゃあり得ない身長だし?ルフィが私を忘れてる訳じゃないもんね!ね!!?

「お前らはこいつ知ってるのか?」

そう言つて隣に立つ偽物共に話しかけるルフィに内心大きいため息をつくと同時に、心の底からフツフツとツツコミたくなる衝動が湧き上がってきた。

「いや、そいつらがゾロとサンジに見えるなら私だつて分かるでしょ!ねえ!」

この場にルフィを連れてきた2人の事をゾロ、サンジと認識しているルフィに目眩がしてきた。何をどう見てもこの2人がゾロとサンジになるっていうの!!いや、まあそれはルフィだから良いとしても私は本物なんだけど!?

「イリスに似てつけど、胸あるもんな、小せエけど」

「ンでつしよー!フン!この膨らみ…私の宝物!」

ルフィですら私の成長を認識してくれてるなんて…!ありがとう私のおっぱい!ありがとうぼよんの神様!!



「お前なかなか良い女だな。数年後が楽しみだ…俺の船に乗れ!!悪い様にはしねエ」

「遠慮しとく、あなた臭いし」

「あ…!!?」

話しかけてきた偽ルフィに、鼻を摘んでシツシツとジエスチャーを送った。別に臭いは感じないけど、この男はどれだけ馬鹿にしても良い気がしたし…。

「…OK、良いだろう。…おめエら!!よく見とけ!!今から俺がこのクソ女とヒゲの男にする仕打ちは…この俺に逆らうとこうなるというお前達子分への警告でもある!!イリス、てめエは女をやれ!!」

「えエ!!」

……ハア、やっぱり私の偽物も居るのか。

手を怪我してるっぽいけどどうかしたのかな?別にいつか、嫁にしたいとも思わない。外見も好みではないけれど、そもそも彼女から良い女の気配を微塵も感じないもん。

「そこまでだア!!海賊共!!」

「あ」

さっきの海兵達の気配がもう到着したのか、思ったより早かったな…。

こうなったらエースとルフィがゆっくり話してるヒマも無さそうだ。

「〃麦わらのルフィ〃、〃一騎当千の女王イリス〃及びその子分共!! 大人しく降伏しろオ!! この46番GRの出入口は全て封鎖した!! 貴様等にはもう、逃げ場はない!!!」

「え、何で海軍におれの事バレてんだ?」

「ルフィがっていうか、あそこの偽ルフィを捕まえに来たんじやない?」  
「え」

偽ルフィを指差せば、近くにいた偽ゾロと偽サンジがびく、と肩を震わせて私から視線を勢いよく逸らした。別に何もしないよ…海軍は知らないけど。

「おれの偽物? え、あれおれの偽物だったのか?」

「そうだよ、ここに居るのはみんな偽物のルフィに騙されて集められたバカ達だからね」  
「覇気で眠らせて海賊捕獲の手助けをしてあげてもいいけど…この数が隠れ蓑になりそうだから要らぬことはしないでおう。」

「おい! カリブー!! コリブー!! さっきの海兵を盾に出口をこじ開ける!!」

「大頭ア、そりやちよつと出来ちやわねエ相談だ。コノガキヤアよう、「軍隊は呼んでねエ」とウソついたんだよオ。なアオイ」

カリブーだかコリブーだかどっちかは知らないけど、返事した方の奴が倒れて動けない海兵に銃を向けた。

海兵はまだ辛うじて意識あるっぽいけど……銃なんて撃たれちゃ死んじゃうか。

「人殺しを躊躇しないクソは、海軍にしよつ引かれてインペルダウンにでも放り込まれとけ」

私の人差し指が薄らと光る。ルフィはそれを見て目を見開き、私の顔をジツと見てきた。

「別に義理はないけど……救える命は救っておくよ」

中指から小指までを閉じて、親指と人差し指を立て手を銃の形にし、海兵を撃とうとする奴に標準を合わせる。

体に纏わせた『武装色の覇氣』を、伸ばした人差し指の先端に集中させてつと……。

「—————覇銃<sup>ハガン</sup>」

直後、私の指先から放たれる弾丸の様な覇氣が、正しく弾丸の様な速さで飛んでいき男が持っている銃を弾き飛ばした。

「……え、ど、どうした？」

「今何が起こった？銃が……勝手に飛んだ？」

「弾かれたのか!?!……でも銃声なんて聞こえなかったぞ!」

「ま、こんなモノかな」

「なアお前!今の覇氣だろ!どうやって飛ばしたんだ、教えてくれ!」

「知りませーん！私の事忘れたルフィに教える事なんて何にもありません!!」

全力で思い出そうとしてるけど…そんな思い出さないと分かんない!? 私達の間に絆は無かったのー!?

そうこうしてる内に海兵達と集まった海賊とで戦いが始まった。

こつちには麦わらのルフィがついてるんだぞ!とか言ってる海賊達には合掌しとこ  
う、全員お縄だよ君達。

「ギャー!!パシフィスタも居るぞ!!」

「頂上戦争に投入された海軍の人間兵器が何故ここに!?!」

パシフィスタ? ああ、強い気配はあいつらか。5体は居るっぽい。…あ、戦桃丸も居るー! ひっさしぶりだなあ。

「無理だ、大頭ア! 何とかしてくれエ!! 俺達あの人間兵器に全滅させられちゃう!!」

「あれ!?! ルフィの大頭は!?! 女王もいねエぞ!!」

その「ルフィの大頭」は絶賛しっぱ巻いて逃げてる最中だけどね。

あ、戦桃丸が偽ルフィ達の退路に先回りした。

「うおお!! 麦わらの大頭が戦ってくれるぞオ!!」

「やっちまえエ!! 4億の力を見せてくれエ!!」

「一騎当千の女王も居るのに負けるわきやねエ!! 10億だぞ10億!!」

「……? 何でおめーらが『麦わら』だの『女王』だのと呼ばれてんだ!」

「お、オイてめエ!! 俺が誰だか分かってるよな!?! ぶつ殺されて…腹わた引き摺り出されたくないやあ道を空ける!! 俺はドラゴンの息子で! ガープの孫で!! あの一騎当千の女王を従える懸賞金4億の男!!」

お、先回りされて逃げ道を塞がれたからやけくそで叫びだしてる。

「あたしは女王よ!!? 大将すら相手に出来る戦闘力! 従える強力な女達!! 10億の懸賞金はダテじゃないってその体に直接教えられたくなければ…」

「『あいつら』はおめエらみてエなカスじゃねエよ!!!」

ドオン!! と、偽ルフィと私の偽物の頭をまさかり鉞の面部分でブツ潰しながら戦闘丸が吠えた。

ほんと、ここに集まったバカ達にも言ってやってよ。

偽ルフィ達が一撃でやられた事で海賊達は目を飛び出させて驚き、ルフィや私の名を叫んだ。

戦闘丸もそれでようやく現状を把握したらしく、パシフィスタに今ブツ叩いた奴が誰だと聞き、ピピピ、と機械音が辺りに響く。

『懸賞金2600万ベリー…海賊『三枚舌のデマロ・ブラック』。600万ベリー…』  
化狸チャメロ』



付けヒゲの外れたルフィを見て、手配書と同じ顔だとか何とかでまた辺りが騒めきだした。

私とエースはルフィの隣に立ち、エースはルフィにだけ見える様に軽くフードを捲つて「よう」と声を出す。

「え……………」

「話は後だ、とにかくここを抜けるぞ、ルフィ」

「あ……………え？」

流石のルフィも理解が追いついていない様だけど…せっかくの腕試し、本調子で行つてもらわないと。

「もう…騒ぎを起こせば出航し辛いとかなんとか言つてたけど、やつぱり私達には騒がしいのがお似合いなのかな」

「…お前は…、まさか…!!やはり居るのは麦わらだけじゃ無かつた様だな!安心しろ!出航する必要はねえ。2年前と違ってわいは正式に海兵になったんだ、お前達をここで捕える!!やれ、パシフィスタ!!」

「やるなら反撃するけど…加減は下手くそだよ。そいつらの修理費は出さないからね!」

私を狙つて3体のパシフィスタの口からビームが放たれたが、それを避ける事もせず

に腕を前に出した。

「//倍//」

ズオオ…と私の前に現れた空間に3本のビームが吸い込まれていく。

「//返し//」

「なにっ!?!」

直後、その空間から威力が2倍になったビームがパシフィスタの方へと一直線に飛び、直撃して大爆発を起こした。3体のパシフィスタは当然壊れて地に倒れ伏し、バチバチと小さく放電して動かなくなった。

これは2年前、頂上戦争でレイが使っていた反撃の技と同じ物だ。

私にも使えたのだから…レイも私と似たような能力なのだろう。そしてこの2年の間で彼女の能力についても見当がついている。

因みに今の反撃技『倍返し』だけど、当然弱点がある。

まず第一に私が相手の技を完全に見切らないと成功しない。エース相手だと成功率は低かった。

後、バカ火力は空間に吸い込めない。白ひげの攻撃返せたらかつこいいなーと思って試した瞬間に身体がフツ飛んだ修行中の私…。

例の如く生き物の類は吸い込めないから遠距離攻撃しか反撃出来ないというのもあ



る。それでも便利な技なんだけどね。

「ゴムゴムの…… J E T 銃!!」  
ジェットビートル

放心から帰ってきたルファイがPX-5を覇気を纏った一撃で粉碎し、私とエースの隣に再び立った。

「じゃ、まずは船まで行こうか、ルファイ。エースの事は走りながら説明する!」

「っ……ああ、頼む!」

そうしてルファイ達と広場から離れるように走り出せば、前方から本物のゾロとサンジが走ってくるのが見えた。

「オイ! ルファイ!!」

「やっぱりこの騒ぎはお前か! 何でてめエは常にトラブルの渦中に居るんだよ!」

うわ〜! ゾロとサンジもだいたい腕上げたなあ! 気配で大体分かるのが見聞色の良いところだよな!

「ん?」

「!」

そんな2人の前に、残ったもう一体のパシフィスタが現れて手の平からビームを放とうと2人に向けるが……

「どけエ!!!」

2人にそれぞれ致命傷レベルのダメージを負わされ、オーバーキルで爆発した。瞬殺  
じゃん…やっぱみんな強くなってる！

ナミさん達はもう船なのかな!? んゝ!! 楽しみ!!

## 140 『女好き、2年越しの出航、いざ魚人島へ!』

「ローローという訳で、エースはこの2年間死んだって事にして私と一緒に修行してたってコト」

簡単にだけど、あの戦争で起こった事とこの2年間をルフィに説明する。1発殴られるのは覚悟してたんだけど…ルフィは私を責めたりはしなかった。流石、器の大きさは計り知れない船長だ。

「エース…ッ！おれ、死んだと思って…！」

走りながら顔を涙と鼻水でぐちゃぐちゃにするルフィにハンカチを渡す。せつかくみんなと2年ぶりに再会するのに泣き顔なんて勿体ないもんね。あんまり拭いてくれなかつたけど!!

「でもねえ…あのまま本当に死んでたらルフィの前で赤犬に殺されてたって訳だし…あの時は赤犬の挑発に乗ったエースが悪いよね？」

「そ、その話はもう良いだろ、悪かったって」

「逃げる時は逃げなきゃダメだよ」

「……………」

黙るな!

全くもう…修行中もエースの『逃げない』って思想は良く垣間見えていた。

どう考えても当時の私達では勝てない様な巨大な恐竜と遭遇した時も、海楼石の腕輪付けてるのに突っ込んで行ったり…死にたいのかー!? って叫んだのを覚えてる。

「ルフイの兄貴が生きていたってのは本当に良かった、世間でも“火拳”は死んだ事になっっているからその思惑は成功してる。…それよりも俺が気になってんのは…君はまさかイリスちゃんか?」

「当たり前でしょ…さつきから誰だと思っただ話してたの?」

「何イ!!」

ルフイとゾロがグイン!と首を向けて驚愕を顔全体で現す。コイツら…! ちょっと背が伸びただけでなんて反応をオ…!! そりゃ私だっただ自分の成長は喜びましたけども!!

「ふうんだ、別にいいもんね、私はナミさん達によしよしして慰めて貰うし!」

「あ、じゃあさつき覇気を飛ばしてたのはイリスか!? あれどうやんだ、教えてくれ!」

「謝ったら教えてあげるけど…どうしよっかな」

「悪イ!」

「誠意が足りないなあ?」

「ごめんなさい!!」

「走りながらじゃなあ〜??」

ゾロがぼそつと…「この腹が立つ感じはイリスで間違いないエ…」とか言った。聴覚倍加で聞こえてますけど?!

「じゃあ俺はここまでだ」

「え、もう?」

ぎ、とエースが足を止め、フードを取った。

「フード…取ってもいいの?」

「へへ、何のために修行したんだよ。…もう捕まったりしねエ。それに…もし捕まったりしてもイリスが助けてくれんなら死なねエよ」

「…フフ、ハハハ!!弱いとこ見せるの嫌いなクセに…助けてなんて言わないでしょあなたは!」

ちら、とルフィ達を見ればあつちはあつちで見送りにきたレイリーに挨拶している様だった。

ああ、ルフィってレイリーに修行つけてもらったんだっけ。

「じゃ、またね…エース。悪いけど海賊王はルフィになって貰うから」

「オヤジが引退した今、海賊王になるのは俺だ。ルフィにもそう言っといてくれ」

「ばーか。私が付いてる以上、ルファイが海賊王、私がハーレム女王になるのは決まってるから」

エースはそんな私の言葉にニツと少年の様な笑顔を浮かべ、レイリーに挨拶を終えたルファイへ手を振った。

「じゃあな、ルファイ!次に会う時は…今度こそ海賊の高みだ!」

「エース…:ああ、〃そこ〃でおれがエースを待つ!!」

「…へへ、言うようになったな、ルファイ!…イリスもまたな、ルファイの事よろしく頼むよ。それにお前も無茶するなよ、お前が怪我するだけでマルコが騒ぐのは知ってるだろ?」

あなたもね。

「絶対…ハーレム女王になってやる!…よーし…!!行くよ、みんな!!」

「!!おお!!」

じゃあねー!!と大きく手を振りながら走っていく。

その直後、後ろから凄まじい熱気を感じた。エースとレイリーが追いかけてくる海兵の足止めをしてくれてるんだ。

これでエースの生存が海兵にバレたのは確実…だから、あなたも頑張つてね、エース…!!2年間ありがとう!!

でもやっぱり2年間も一緒に居た人達と別れるのって寂しいなあ…なんだか胸に

ぼっかり穴が空いた様な…。

「やべエ、回り込まれたぞ!!」

「ん!?!」

あちや、ちよつと挨拶に時間をかけ過ぎちやつたか…私達の前にはかなりの数の海兵が銃を構えて待ち伏せていたみたいで、あんまり大きく騒ぎを起こしたくはない私としては困った展開なんだけど…!

「ネガティブ・ホロウ!!」

「ツンン!!!?」

上空から飛んできたゴースト達が、海兵のスキを付いて体をすり抜け一網打尽にしていく。

ここ、この技は…さっきの声は…!!

ああ、ぼっかり空いた穴が即満たされていく!!うっ…感動で涙が…!!

「ペローナちやーん!!!」

「お前ら何ぐずぐずしてんだ!早く来い!!」

「今行くー♡えへ、へへ♡」

巨大な鳥に乗って空から奇襲を仕掛けてくれた様だ。私はルフィ達を掴んで一気にそこまで飛び乗った。ああ…夢にまで見た…ていうか実際王華部屋で等身大人形を出

して寂しさを紛らわせていたみんなが…今日の前に…!!

「ロビン!! ミキータ…!! ナミさんもお…!! んん…!! 久しぶり…!!」

「きや…! え、あなた…イリス!? 綺麗になったじゃない…!」

ガバツとナミさんの胸に飛び込んでその豊満なぽよんに顔を埋めた。ふーっ! ふうっ!! この、この匂い…!! たまらぬ…!! それにみんな髪型とか変わってる…! ぽよんもすこーしだけ大きくなった…!? 2年の月日って凄い!

「ブツ…!」

「へ?」

ブツハアアアアア!!!

さ、さささサンジ…!! 物凄い鼻血吐き出してるけどお!? どこまで飛んでくの!?

「危ねエ!」

咄嗟にルフィが手を伸ばしてサンジを掴み引き寄せる。

確かにナミさんの格好はかなり際どいけど…でもサンジがそこまでの反応を見せるのかと言われると違和感があるというか…。

「さ、サンジ! 大丈夫か!? 後で診てやるからな!」

あ、チョッパーも居たんだ! 流石の可愛い生物チョッパーも、4人の美女を前にすればその存在感も薄れてしまう…!



サンジはどくどくと血を流しながらも辛うじて生きている様だ…危ない…。

「い、イリスちゃんのこと…！おっぱいが…ちゃんとあるわ…!!」

「ホロホロホロ、詰めてんじやねエのか？」

「もー、じゃあいっぱい触って確かめて？みんなになら幾らでも触らせてあげる！」

「それは夜が楽しみね」

やばい…ナミさんのぽよんから顔を離せない……すー…、はー…。

深呼吸をしないと…でも深呼吸する時にナミさんの素晴らしい匂いが鼻腔を刺激してとんでもない程の劣情を生み出してしまふ…！ああ…！ナミさん…好き!!

「あ、サニー号が見えてきたぞ！」

「おお！おーい!!みんなくくく!!!!

ルフィが大声で手を振っている。

ナミさんの胸に顔を埋めてても周りの状況分かるんだから見聞色って便利だよね！  
もうずつとこのまま生活しようかな、ペロペロ。

「男上げてんなアお前ら!!女性陣もスーパー綺麗になつてんじやねエか!!」

「ルフィさん!!お会いしたかった!!」

「へへっ…またみんな揃った!!」

サニー号からフランキー、ブルック、ウソップが声を上げ、私達は鳥から飛び降りて

サニー号に着地した。

おおっ、なんだこれ、甲板がぶにぶにしている!!…あ、これがコーティングって奴か! 「うおおお!!フ…フ…!!フランキーお前エ〜!!」

ルフィがフランキーを見て目を輝かせている。なんか全体的にゴツくなつたというか、ロボっぽさが増したなあ。

「イリスさんもお綺麗になられて…!あともう少し成長すれば、パンツ、見せて貰つてもよろしいでつづぐハア!!」

「ブルック…張つ倒すわよ」

「張つ倒してから言うなよナミ…。そ、それよりルフィ!軍艦がすぐそこまで来てるらしいぜ!急がねエとマズい事に…つてうおっ!砲弾飛んできた!?!しまった…もう撃ち込める距離に!!」

ウソツプが言うように、もうそこまで軍艦がやって来ていた。…でも一隻か、丁度いい…新世界に行く前の肩慣らしでもしとこうかな。…ん?

「スレイプアロー 虜の矢!!」

「あ!」

軍艦から更に撃ち込まれた砲弾をハートの矢が射抜き、石にして海へと落とした。

あの技は…!!

「あれは、九蛇のマーク…」

「くじや?」

「七武海」 「海賊女帝」の統べる屈強な女人海賊団よ」

「七武海!?何じやあの絶世の美女は!!」

ロビンの説明にウソツプとブルックが望遠鏡で船を見てあんぐりと口を開ける。サ  
ンジは…ありや、固まっちゃった。

くうく!!海軍にハンコック達と私の間に関係があるってバレちゃ迷惑かけるし…!  
手を振るだけにしよう…!!ありがとうハンコック!!また会おうね!!

マーガレットちゃんもまたねー!!

軍艦からは見えない様にぶんぶんと手を振ってハンコック達に全身全霊のお礼を体  
で現せば、ハンコックからウインクで返事が返ってきた。

くうそお…!ハンコックも連れて行きたかったなあ…!!

「お前まさかあの女帝も嫁に!?!」

「うん、可愛いよ、ハンコック」

「七武海だぞ?!」

そんな事言われても。

「よし、じゃあ今のうちに出航だ!フランキー!」

「オウ・バルブ開くぞ! 船底のエアバッグから空気を入れる!」

「おお」

仕組みはわかんないけど、ぷにっとした感触のコーティングが膨らみ始めた。

それは最終的にサニー後を包み込み、大きなシャボン玉の屋根を作る。

「みんないい? コーティング船は色々な圧力を軽減する力を持つているの! つまりコーティングした船は浮力が足らなくなり、今船底を支えている「浮き袋」を外すと船は海底へ沈んでく。そういう仕組み」

「分かんないけど分かった!」

「まあ…そうね、とにかく沈むの。今フランキーが浮き袋外してるから、みんなすぐに帆を張って!」

帆を? と首を傾げれば、ロビンがコーティング船は海流を風の様に受けて動かすと教えてくれた。

なるほど、沈むだけじゃないんだ。

「ほんじゃ野郎共!! ずっと話しかかった事が山程あるんだけど、とにかくだ!! 2年間もおれのおれのままに付き合ってくれてありがとう!!」

「今に始まった我儘かよ」

「全くだ! お前はずっとそうなんだよ!」

ルフィはサンジとウソップの返事に満足気に頷いて、2年間越しのこの言葉を、全力で息を吸い込んで叫んだ。

「出航だア~~~~~!!!」

『オオオオオオ~~~~~!!!』

「行くぞオ！魚人島オ!!」

んんん!! 昂ってきた!! よし! ロビンの胸に飛び込もう!!

「ロビンのぼよん、失礼します」

「どうぞ」

ああああ!! 良い!! このハリ! 弾力!! そしてナミさんとはまた別の良い匂い…!

「オイ…あれ私にも順番回ってくるんじゃないやねエだろうな」

「キャハ、嫌なら寝室に戻れば大丈夫だと思うわよ?」

「は、はア? せっかくこの綺麗な海の中を見るって時にんなトコで籠つてられるか!」

むふふ…心配しないでペローナちゃん! 後でがつつり堪能してあげるよ!! 寝室に行つたって追いかけるよ!

「でも確かに絶景だ! 潜水艇でもこんなワイドな窓は付けられねエもんなア!」

「フランキーなら造れそうだけど」

「嬉しいコト言ってくれるじやアないの! 創作欲が沸いてくるってモンだ!」

「ヨホホ〜! ちよつと横見て下さいよろ!!」

横?…: おお、凄いいつきい…: 樹かな? いや、根つこか! それが何本も海底まで続いている姿は圧巻の一言に尽きる!

「シャボンディ諸島は大きなマングローブで構成されているというのは知識としてはあ  
るけれど…: 実際にこの根が海底まで続くなんて、大きすぎて言葉にならない…:」

「ふふ、ロピンは本で読むより自分で見る方が好きだもんね!」

「ええ…: やつぱりこの目で見ないと、それはただの “知識” でしかないもの」

深いなあ。こつという時にロピンは考古学者なんだよなあつて再認識させられるよ。

「おつ、魚! 掴めそうだぞ! このつ!」

「こつちにもウマそうな魚がいるな」

ガバツとシャボンに飛びつくルフィと刀を抜刀するゾロをすかさずウソツプと  
チヨツパーが殴って止めていた。割れたらシャレにならないし…: 流石の私もそればか  
りはどうしようも無い。

「ナミさん、こいつらがバカやらねエ内にコーティング船の注意事項なんかを」

「そうね、サンジ君! レイリーさんにメモ貰ってるから、じゃあみんな! 説明を…:」

「ブハツ……！生身の美女オ……♡」

「ええええ!!？」

またしても鼻血を吹き出させて飛んでいくサンジが、シャボンに突っ込んでぐんぐん伸ばしていく。鼻血でどんだけ飛ぶの！

「やべエ！サンジが海に飛び出た!!帰って来オ……い!!」

最終的にポン！とシャボンから海へ飛び出したサンジを、ルフィが腕を伸ばして引つ張ってくる。海の中だと流石に力が出ない様だ、エースも結局最後まで海楼石には慣れてなかったつけ。

「本当にどうしたんだろ……サンジ、こんなに女に弱くなるなんて……」

「キャハ、この調子じゃ人魚に会うなんて無理そうね……。当面目隠しとか？」

「根本的な解決になってねエから……。魚人島で献血を募らなきや……」

あまりにも予想外のトラブルにチョッパーも困り果ててるみたいだ。そもそも人間と血液が同じなのかが分からないし。

「つまり、今のようにはシャボンディ諸島のシャボン玉と特性は変わらないのね？」

「そう！基本的には同じよ、ある程度まで伸びて……それ以上は突き抜ける！極端な話、船に襲い掛かる海獣に向けて銃や大砲を撃ち込んでもシャボンは割れないんだって！」

サンジがダラダラと血を流しているけれど冷静に分析を続ける私達。

ナミさんによれば、1度に多数の穴が空いたりするのは流石にダメらしい。

つまり海獣や海王類の牙で噛まれたらアウト、岩や海溝にぶつかったりして中の船そのものが壊れても、マストや船体の割れ口でシャボンが割れててそれもアウト。という感じだ。

「気をつけるのは海の生物達と障害物ね、中からは余計な事しなきゃ大丈夫みたい」

「そうか、意外と強エんだなア!」

「でも、「魚人島を目指す船は到達前に7割沈没するので注意」だって」

「何が起きるんだよオ!!」

何が起きたって私が何とかするよ。こんな序盤で全滅してたまるか!

「ナミ、船はもう少し安定してんのか?」

「うん、今はまだ大きな海流に乗ってるだけだから」

「なら、まだ時間はあるな。全員に俺から話しておかなきゃならぬエ事がある」

何か大事な話でもあるのか、フランキーが改まって私達を近くに集めた。

なんだなんだ? 遂にフランキー人間をやめちゃったのかな? 完全体ロボになっちゃったのかな!?

「本当は海底への案内を買って出てくれてたハチだが…あいつはシャボンディで大怪我を負い「魚人島」で療養中って話だ…!理由はデユバルと全く同じ…島に残されたサ



二一号を守る為の負傷だ」

ロボの話では無かったようだが：デユバルか、あの人律儀にサニ一号守ってくれてたんだね。意外と義理難い人だな…。

「1年程前、サニ一号の存在は海軍にバレて激しい戦いになり、2人はそこでリタイアした。なのに今日まで船が無事だったのは：戦士がもう1人居たからだ…。2年前俺達を散り散りにすつ飛ばした張本人、”王下七武海”の大男：バーソロミュー・くまだ！」  
：うん、まあくまの話については王華にこの2年で聞いたことがあった。

王華も詳しくは分からないからきちんとは言えないって言ってたけど、頂上戦争のくまは既に自分の意識はなく、D.P. ベガパンクと何らかの取引をしてサニ一号を守り抜く様プログラムが設定されていたそうだし、

王華はルフィの父親がドラゴンだから、革命軍の幹部であるくまが力を貸してくれたのかもしいないって言っていたけど…：いつか、くまの真意が分かれば良いね。

「実際俺達はあの時のくまの行動に命を救われた…。この2年間を生み出してくれたのはあの男だって事は間違いないねエ…！今となつちや本人にその胸の内を尋ねる事も出来ねエが、心に留めとけ…：この一味にとつてバーソロミュー・くまは結果的に、”大恩人”だつて事をな…：そしてまたいつか出逢う日が来ても、くまはもう心無き人間兵器だ…！！」

心すらも政府の実験に売り渡して私達を助けたって事は…ルフィの生存に大きな意味があったのかもしれないけど…まあ、この先私達がどう進むかも分からないだし。

人間兵器となつたくまを殺す…そんな苦渋の決断をルフィがしなくちやいけない未来が来る日もあるかもしれない。

だけでもしかしたら、そんなくまをどうにか上手い方法で助けてあげられるのかもしれない。

とにかく、今の私達がどれだけ考えた所で答えが出るはずもない話…この事は一旦頭の片隅にでも置いて、今は今の冒険を全力で楽しもう…!!

じゃないと、それこそせつかく助けてくれたくまに悪いもんね!

—————

| ???  
| 裏路地 |

「…ア…食いモン…水でも良い…分けてくれエ…!」

「何日も食つてねエ…!水が、飯が…金が欲しいイ…!!」

ここは、新世界のとある国。そして…その闇である。

“天竜人”へ納める『天上金』の高さ故、住む家すら無くしてしまった人達が集うこの路地に、1人の女が姿を見せた。

その者も周りの一文無しと同じく薄汚れた衣服を身に纏い、それでもクリーム色の綺麗な長髪の手入れだけは欠かしていないのか、まるで絹のように風に靡いている。

「これを」

女は懐から小包を取り出し、地面にそっと置いた。

その時に響いた金属の擦れるような音に、周りの飢えた人間達が群がり始めたのを見て女はその場を離れていく。

こんな事をしたって意味が無いのは分かっている。自分だってその日を暮らすのが精一杯で、ご飯もまともに食べれていないし、衣服だって綺麗に洗濯すら出来ない。

ただこの髪は、この肌は…傷付ける訳にはいかない。“あの人”の為に…自分を磨いておきたいから。

故郷を飛び出して、色んな土地を巡って来た。

どこに行っても自分は虐げられ、ゴミの様に…いや、それ以下の扱いを受け…殺されかける事も少なくは無かった。

だけど、…いや、だからこそ…確信を持ったんだ。

あそこを出てきて、良かったと。

自分を見つめ直す良いきっかけになったと、今ではそう思っている。

…さて、次はどこを目指すでしょう。

そうだ、そういえば昨日働かせて貰った商船…次はあの地に行くと言っていた様な

…。なら、せっかくだ、一緒に連れて行って貰えないか頼み込んでみよう。

…フフ、頼み込む…か。

…、…、”人間”、どう変わるか分かりませんね、本当に。

次の目的地は…情熱の国…『ドレスローザ』にしましょう。

—————

|  
???  
|

「もしもし、私です」

『はい、たしぎです。…どうかしましたか？こんな時間に連絡なんて珍しいですね』  
「いえ、ただもう一度念を押しておこうかと思ひまして」

月夜が妖しく輝く彼の地、ジャングルの木々に覆われた場所で、まるで魔法使いの様な大きなトンガリ帽子にブカブカのマントを羽織った女が小岩に腰掛けて電伝虫に話しかけていた。

「『女王』がこっちに来て…もしたしぎが彼女を見つけた場合…すぐ私に連絡して下さいね、お願いですよ」

『はあ…分かりました…、スモーカーさんにもそう伝えておきます。そうだ、ヴェルゴ中將にも…』

「スモーカーさんにだけで良いですよ、ヴェルゴには言わなくて良いです」

『…？そうですか…もしかして、ヴェルゴ中將の事苦手なんですか？』

マントの女は足下に転がっていた小石を蹴り飛ばし、人差し指をクイ、と動かしてその小石を宙に浮かせた。

そのまま目の前まで飛ばして来て、ヒュンヒュンと動かして遊ぶ。

「苦手なんじゃない、嫌いなんです。それより本当にお願ひしますよ、大事な事なんですから」

『分かりました。…ヴェルゴ中将を嫌うなんて、やっぱりあなたはどこか変わっていませんね』

女は電話越しの海兵に悟られない様、小さく笑って「じゃあ、頼みましたよ」と通話を切った。

「たしぎも可哀想に、そんなにヴェルゴの事を信頼してて裏切られるなんて…あんまりです。…あの戦争から丁度2年…、そろそろこつちに来る頃ですね。さて、確かめさせて貰いますよ。あなたは…『王華』なのか、どうか…。女王…イリス」

ぐつ、と拳を握れば、宙に浮いていた小石が粉々に砕け散った。

帽子からチラリと覗く青色の髪。そして同じく青の瞳には、一体何が映っているのだろうか。

—————

—  
???  
—

「姉さん、またサボリ?」

「ここは、とある国のとある城…その天辺に配置された執務室。そこには今、2人の女

が居た。

1人は煌びやかなドレスを身に纏った三つ目の美女。そしてもう1人は…緑色の髪をした、寝癖がぴよこつと跳ねてアホ毛の様になっている美女だった。

「サボりなんて人間きの悪い、きちんとこうして事務仕事を終わらせているじゃない」

「今、ママを怒らせた国と戦争中よ？ どうして姉さんがこんな所に居るのよ」

「私が行かなくなつて結果は変わらないわよ、それに私はそういう理由で戦いたくないもの、下らない」

「ママのする事に臆する事無くそう言えるのは、ウチじゃ姉さんくらいね…」

戦争の理由としてはいたつて単純、ただ我が国と定めていた協定、これが破られたからである。

しかしながら寝癖の女性はこの事実のため息を吐いた。

「その国を滅ぼしただけで、一体ウチにどれだけ損害が出ると思う？ 労働者も減れば、それこそお菓子だけじゃない…色んな貿易が止まるわ。あの国は鉱石なんかも豊富に取れていたし、その加工の技術だつてウチでは真似出来ないモノだったというのに…：ハア、お菓子を納めるのが少し遅れたからなんだつていうの…」

「仕方ないでしょ、それがママなんだから。文句があるなら姉さんが止めてくればいいじゃない」

「イヤよ、ママを止めるのは大変なもの、今私は大怪我を負う訳にもいかないから」  
 「出来ないって言わない辺りが流石ね」

戦う事は好きではない、寧ろ嫌いな方だと彼女は自分を分析している。仕方がない時だけ戦って、それで問題なく生きていけるならそれが良い。むしろ戦いが起きない世の中にならなうとさえ思っている。

争いさえ無くなってしまえば… “あの時” の様な事にもならなかつた筈だから。

「……王華」

自分のせいで、きつと悲しい想いをさせてしまった人の名前を呟いた彼女の瞳は、どこまでも深い慈愛の色が見て取れた。

「…女王、イリス……ね」

ピラ、と手元にある新聞を広げてまじまじとその一面を飾っている女の顔をジツと見つめる。

これは2年前から毎日している事だ。あの戦争が起きてから…この女の知名度が一気に全世界へ轟き、自分の耳にも入ってきたその日から、ずっと。

『一騎当千の実力、海軍大将とも渡り合う海賊の誕生か!』と大きく書かれており、逃げ足というデタラメな呼び名を変更する旨や、懸賞金額の修正を余儀無くされている事などの詳細な理由について長々と記載されていた。



「姉さん、毎日そのコの記事見てるけど…好きなの？」

「…ええ、この子と良く似てる子がね、好きなのよ」

果たしてその「好き」はどういう意味でなのか…までは自分でもまだ分かってはいない。

だけど、会えばきつと、自分の気持ちが変わる筈だから。

「…はあ、まだ来ないのかしら…王華」

ポツリと呟かれた言葉は、宙に溶けて消えて行った。

—————

—とある島…その街中にて—

「フフ…そろそろね…。ええ、気分上々よ、ええ、ええ…フフフ…。感じるわ、入州さん、あなたの気配…!!」

「……………」

漆黒の瞳を輝かせ、黒に溶ける紫の髪を靡かせながら彼女は踊る。

それはもう、新しいオモチャを与えられた無垢な子供の様に。

「ね、アナタも感じるでしょう? フッフ…ああ、そうね、喋れないわね…、フッフ…つ、アツハハハハ! まだよ、まだ待つわ…! あなた達が揃うまで…! しっかり待ってあげろ。フッフフ…あア…楽しみね…、入州さん、あなたの絶望に染まった綺麗な顔…: フッフ…! 早く見てみたい…」

「…う…: か…:」

「うん?…: あら、やるじゃない、言葉を発するなんて…: 並大抵の精神力じゃ無理よ?…: つて、意識は無いわよねエ…: フフ、本能だけで求めちゃってるのね、入州さんを。フッフ…: 良い、良いわ…: ! フッフフ、アハハ!…: 私好みの上等な展開へ、上質な絶望を…: ! …: アハハア…: ! フッフッフ!!…: 気分、上…: ヌ…: ♪」

近くで蹲り血に濡れたローブを羽織った赤髪の女が、涙を流しながら虚な瞳で声を出したのを見て、狂気に吞まれた女は楽しそうに笑い出す。

彼女もまた、全身を血でドス黒く染めているというのに…: その表情には悲壮感のかけラも感じ取る事は出来ない。

女が踊るたび、チャプチャプと水たまりを踏んでいる様な音がする。だがこれは断じて水などでは無い。何故なら2人の周りには沢山の人が倒れており…: 夥しい量の血が流れ出しているからだ。

先程から聞こえる水音は…: 死体から流れ落ちる血の音だったのだ。

これ程の大量殺戮を行ったのは、勿論この場にいる2人だが：殺した動機などありはしない。

たまたまこの島に降りて、ただこの街にたまたま足を踏み入れて、その時にたまたま：殺したくなった。

「フフフフフ…!!!次は何処に行こうかしら…!!ハハ…!!上々気分になれるトコロなら、どこでもいいけれど！」

黒ひげという悪意を失ったこの世界は、また新たに狂気を生み出した。

まるで減った分の悪を補填するかの如く…。

気分1つで世界を破壊してしまう事の出来る程の力を持った怪物は、今もこの世界で狂った笑みを浮かべていた――。

## 141 『女好き、深海の旅』

「結構沈んだねー」

「光も届かなくなってきたわ。「受光層」を抜けて「薄明層」も終わりって所ね。1000mは越えた筈よ」

1000mかあ…：体出したら水圧で潰れちゃうのってどんくらいだろ？

「6時の方角なんかいるぞ！海獣…？いや、船だ！こっちへ突っ込んでくる！」  
「ん？」

見聞色で見れば、確かに後ろからそれなりのスピードで突っ込んできていた。これ、船を何かが引いているから速いのか。

「うわ…！」

「海賊船だ！」

どん！と報告の直後に船に衝撃が走ってバランスを崩す。

ぶつかってきやがったなこんにやろ…！シャボンが割れたらどうしてくれるの！

「船を押し付けてくる!!まさか、シャボン越しに乗り込んでくる気じゃ…！」

「逆に乗りに込んで全滅させて来てもいいよ。行こうか？」

「まあ、あんたならそれでもいいけど…、いや、ちよつと待つて…アレ、モーム？」  
モーム？だれ？

「あんた、アールン一味のモームでしょ?！」

ナミさんにモームと呼ばれた船を引く牛っぽい海獣は、ナミさんと、それからルフィとサンジを見て何故だが震え上がった。

「野郎共オ、俺に続けちゃえ〜!!」

「わー!!誰か船に入ってきたア〜!!」

「ケヒヒヒヒ!!こいつらが呆気に取りられてる内にイ〜船内皆殺しにしちやいや〜がれエ〜!!ケヘヘヘ!」

あ、こいつカリブーじゃん。さつき広場に居た奴。

俺に続け、的な事言ってるけど、あなたがこつちに入った瞬間にモームが逃げつたから船は離れてあなた以外誰も来てないけどね。

「さア挨拶代わりにイ〜!!ガトリング銃ガンをぶつ放せエ〜!!麦わらの一味を全員ブウチ殺して……………、……………なにイ!!?」

やつと気付いたのか、後ろを見て目ん玉飛び出させて驚いていた。

うーん、別に危険性がないならこのままにしておいてあげてもいいけど、こいつ海兵を簡単に殺そうとしたり、今も皆殺しとか言ってたからなあ…、万が一ナミさん達に危

害を及ぼされたらたまったモノじゃないし……とりあえずシメとくか。

「ねえ、ちよつと！さつき船を引いてた海牛どうしたの？」

「おつとオ……こりやあ……んくカくワイ子さんく、アンタア……『正妻』だなあ？……うごツツ……!？」

「……人の女を見て舌舐めずりしないでくれる？ねえ」

ガシ、とカリブーの首を掴んで甲板に押し付ける。メキ……と奴の首が軋み、ゴフ、と血を吐いた。

「あ、あ……いや、ち、違うんだ……！お、俺はただ、その女がえらく別嬪さんだなアつて思つちやつただけなのよオ……ヒ……ヒ……ツ」

少し首の拘束を緩くしてやればペラペラとしようもない言い訳を始めた。私が臆病で良かったね、首をへし折られずに済んで。

（い、一騎当千の女王……！俺は何を血迷っていたんだよ……！こ、こんな怪物に、か……敵う筈がなエよオ……！）

「殺しはしない。寝ててよ」

「や、やめ……！ウギャツ!？」

バキイッ！と顔面にたつぷり加減した拳を叩き込み、とりあえず気絶させた。私が誰だか分かつてナミさんにそういう態度取つたのだとしたら逆に凄いや、別に強い訳でも

無かつたし。

「ちよつとイリス、氣絶させたらモームの事何も聞けないじゃない!」

「ふーんだ、そんな事よりみんなの安全だし」

「いや今のはいつもの短気だろ」

短気つて言うけどねゾロ! ナミさん達に少しでも危害を加えそうな奴がそこに居たら倒すでしょ! 今回は雑魚だから助かつたけどさ!

「海獣どつかに居ねエかな」

「さっきの船みたいに引かせるの?」

「おう! いろいろ考えだろ!」

確かに手懐ける事が出来たら今より早く魚人島に着きそうだ。

いい感じの海獣見つけたらカリブー叩き起こして方法聞こ。

「おいナミ! 記録指針ログポースと少し違う方向へ進んでねエか?」

「なーに言ってるのウソツプ、違う方向へ進んでるって事はそうする必要があるって事だよ」

「その通りよ、多分イリスは私を信じてるだけで分かつては無さそうだから一応説明するけど、この指針より少し南西へ進むのが正しい航路なの。まっすぐ進んでも海流に攫われて下降しきる前に海山や海底火山に突き当たっておしまいだって」

へえ……つまり不思議海流って事だね！

ルフィとふむふむ、と知ったげに頷いておいた。昔からそういう頭使う事は苦手なんです、私。

間違いないく前世の王華のせいだわー、私が頭悪いのも王華が悪いわー。

「でも偉大なる航路グランドラインの海流なんて元々データラメだろ？間違いのねエ流れなんてのがあるのか？」

「1つだけある……みんなコートでも羽織った方がいいわよ、ここから先寒くなるから」「寒い？」

「これから行くのは深海でしょ？お風呂の湯は上が熱くて下が冷たいから、海でも同じ事が言えるのよ、イリスちゃん」

ふーん……確かに混ぜないと上だけが熱くて下の方が冷たいよね、お風呂って。

「ただ温度差があるだけではありませんよ？海の下層部は「深層海流」と呼ばれる私達は普段目に出来ない巨大な海の流れがあるのです！それは今ここにある「表層海流」とは全く別の動きをする海流です」

うーん……ま、そういう航海術はプロに任せて、私はその愛しい愛しいプロの邪魔になる怪物や障害物をブツ飛ばす係に全力を出しますかね。

とにかく深海は冷たい。更にもっと冷たいトコは海流が下に向かうから、下を目指す



ためには冷たい場所に行くしかないってコトだね。うん、やっぱり不思議海流だ！分かるん！

「オイナミ、そう言ってる内に見えてきたぞ」

「ホント!?!」

「そんな事よりいつの間にペローナちゃん、ナミさんの事名前まで？私の事もイリスって呼んでよ！」

「イ・ヤ・だ！」

ぐ…なんて強情な…！

…おお、これが下に流れる海流か…！

確かに寒くなってきたな、私は寒さ耐性倍加で大丈夫だけど、みんなはいそいそとコートを着始めた。ルフィとゾロ、フランキーは私と違って倍加出来ない筈なんだけどもなんで何も羽織らないの…。

「あれが下降流のブルーム…！」

「これじゃまるで海中の…巨大な滝だ!!」

「ず…と下まで海が落ちてく!!ものスゲースピードだぞ！」

下が見えないなあ…、ん？なんかでかいタコが居る。

「ぐ…ウ…！お、い…！麦わらの一味…！直ぐに引き返せ、やべエぞ…!!」

「あ?…思ったよりタフだね、もう起きてきたんだ」

カリブーの奴がフラフラと覚束ない足取りで歩いてきたと思っただけでよかった。なーにが引き返せだ、お前を餌にあのタコ釣るぞおらあ。

「下をよく見ろ、怪物が居る!…アレがここに住み着いてるなんて聞いた事がねエ! …「殺戮に飽きる事を知らず…船を狙って大海原を駆け巡る悪魔」!!人間の敵…!!」

「あれは…!!」

「うわあア!!クラークンだア…!!」

クラークンかあ。何隻も船を握り潰してるっぽい。ここ数日でここまで降りてきた船を潰してたのか。

…怪物ねえ。

「引き返す必要がある?」

「女王オ…!お前さんそれはヤベエよオ…!いくらお前さんが強いと言っても、奴には敵わねエ…!よく聞いていやがれ…!奴の残した数多くの伝説の1つに…」

「うるさいなあ…ちよつと黙ってて。私が居る以上、この船は絶対安全だよ」

コキ、首を鳴らしてついでにカリブーの顔を蹴り飛ばす。いきなり蹴り飛ばされたカリブーはへブツ!?!と声を上げて壁に激突した。

「さて…今日はタコパだね」

「待て、イリス!!」

小太刀を抜いた時、ルファイから声がかかった。

「どうやらあのタコに船を引かせたらしい。…ふーむなるほど…確かに良い考えかも!」

と、その後方からモームがまた船を引つ張つて突つ込んで来た。

カリブーはそれを見てコリブー! 助けに来てくれちゃったのかア〜とか喜んでたけど、その船は一瞬でクラークンに握り潰されていた。

乗ってたコリブー含む船員達はみんなクラゲの様にぶかぶか海上へと上がっていく。…この深さだし、海上までは結構距離あるからなあ。助けてあげたいけどあれは無理かな…ごめんね、助かる事を祈っておくよ。

「こつちにも攻撃来たぞオ!!」

「ギア…3!」

「やめろおめエら! だけエ攻撃はシャボンが割れる!!」  
「だったら私に任せて」

ス、と迫りくるタコ足に銃の形をした指を向けた。

あのサイズなら、これくらいかな。

「<sup>ハガン</sup>覇銃」

ドオン!!と飛んで行った漆黒の弾丸が、シャボンを突き抜けてクラークの足に直撃して弾き飛ばした。

うし、足は健在だね。運んでもらうのに消し飛ばす訳にはいかないし…加減しないと。

「あ!忘れてた!!イリス、それ教えてくれ!」

「覇気を飛ばす」

「おオし!」

今の説明で満足してる辺りがルフィらしい。実践しようとする私のマネして指を銃の形にしているけど、中々難しいようだ。そりやあ私も頑張ったからね…エースの火銃ヒガンがカッコ良かったから何とかして真似できないかと努力を重ねた結果だし。

「お前はどこまで化け物染みた力を身につけりや気が済むんだ…オイロボ、クー・ドなんやらで逃げる事は出来ねエのか?」

「そりや一つ問題がある。クー・ド・バーストやガオン砲は大量の空気を発射する兵器だ。ここは海中、空気量は限られてる!空気を飛ばせばこの船のシャボンが萎んじまう!」

「逃げなくていいじゃん。戦おうよ」

別にここからでもさつきみたいになまちなまやれば勝てるし。そりや、外に出る方法が

あるなら一番いいけど。

「つ……く、仕方ねエ……そんなに戦いてエんなら策を授けちゃうぜ！一騎当千の女王！」  
「ん？」

そういうとカリブーは船のシャボンを少し千切って人が入れる程度の大きさのシャボン玉にした。

それを4個作り、それぞれ私やルフィに渡してくる。

「その中に入っちゃえば、この船のコーティングと同じ効果を受けられるのよオ……これが即席、バタ足コーティング!!」

「へえ、クソ野郎だと思ってたけど役に立ったね。でもそういう事ならやつぱり私はいらない。ルフィとゾロとサンジで行ってくれない？」

「なんでだ？イリスも居た方が楽だろ」

私が自分の分のシャボン玉を再度船のシャボンにくっつけて元に戻しながら言えばルフィがシャボン玉に入りながらそう言う。

「いや、このカリブーとかいう奴残してはいけなかなって思ってたさ、別にあのタコくらいなら私要らないでしょ？」

「イリスちゃんが居てくれた方が楽だが、それも一理あるな。じゃあイリスちゃん、ナミさん達を頼んだぜ」

「ん」

そう言って3人はシャボンを纏って海へ飛び出して行った。ナミさんが命綱は付けなさいよ!と怒ってる。そんな顔もすんごい可愛い。

\*\*\*

結果として、クラーケンはルフィの象エレファント・ガン銃でワンパンする事が出来た。

…んだけど、その後運悪く近くの滝みたいな下降流に飲まれてしまい、私達もそれを追って下降流に飛び込んだのだ。

かなりのスピードで落ちてしまった船だけど、ナミさんの的確な指示もあって何とか無事に下まで辿り着く事が出来た。

フランキーによるとここは深海7000m程だろうとの事。

そして1番厄介なのが…落ちた3人が未だに見つからないという事だ。

「流石深海だねえ、見たこともない魚でいっぱいだよ。ほら、このクラゲとか綺麗な手し

てるし、毒持ってそう！」

ハハ、と笑いながら船に入れてきたクラゲの触手を掴む。お、ピリツとする！私がピリツとするって事は…常人なら一発で即死するレベルの毒持ちだね！

「と、友達になりてエのかな？おれも握手してみようかな…」

「はは、触った瞬間に死ぬだろうから絶対に触らないでね」

「なananでイリスは触れてんだよ!!あぶねエ、触るトコだった！」

毒耐性倍加ですネ。

それに修行中に毒持ち生物にもすっごい襲われてたし、その時何回か死にかけたからなあ、普通に毒耐性付いてるのかも。マゼランの毒を一回喰らってるのも大きいね。

「…ん？そういえばカリブーは？」

「あー、そういや居たな！すっかり忘れてた」

「別に良いだろあのキモいのは、ほっとけ」

「下降流の時に落とされたんじゃないかしら」

じゃあその時落ちたか…もしくは…隠れてるか。

ハア…もし後者だとしたら面倒だ、今度こそポッコボコにして息の根止まる寸前まで行かないと。どれどれ、見聞色に反応は…、

とか言ったらフランキーが樽の中に隠れていたそいつを見つけて逆に樽の中に閉

じ込めた。

抜け出せる場所が無いくらい嚴重に隙間を埋められ、樽がじたばたと暴れる。

「俺に見つけられて良かったなアお前、イリスなら今頃四肢のどれかは失ってるだろうよ」

「私を何だと思ってるの？そりゃ半殺しの予定ではあつたけどさ」

樽の中からヒイツと声が聞こえた。

それよりコイツ自然系ロキデなんだね、雑魚だとばかり思ってたけど…2年前ならコイツ一人に全滅させられてた可能性もあるのか。2年間様々だ。

…さて、バカの拘束も済んだところで…本格的にルフイ達を探すのでしょうか。



## 142 『女好き、見えた魚人島。目標は人魚姫』

「暑い…おれ、暑いのだメなんだ…」

「チヨツパーちゃん程じゃないけど、確かに暑いわね…どうしたのかしら？」

さつきまで寒かったくらいなのに、何だかいきなり暑くなってきた。今度は暑さ耐性を倍加に切り替える。

「前方、視界を奪われた…！暑いっ！何だこれ…煙か!？」

「海底から煙い？…あ、もしかして…言ってた海底火山？」

私が呟けば、ナミさんは頷いて慌てた様に船から下を覗く。

「熱水鉱床…！ここは海底の火山地帯よ！活動の跡がある…!!」

「うわ、噴火したら痛そうだね」

「痛いでは済みませんよイリスさん。あ、今のは痛いと言体にかけて…」

「んな事言ってる場合か!!早くここから離れるぞ!!」

フランキーが慌てて舵を取り、私はいつ噴火しても良い様に火山の噴火口を見ている。

最悪、腕を伸ばして手の大きさを倍加すれば吹き出る火山から船を守る事は出来る。

代償に腕は爛れるだろうけど、これも私なら治るし問題はない。

とまあ、こんな感じで警戒していた訳だけど、幸い噴火する様な事態には至らなかつた。

別の問題として深海海獣がひっきりなしに襲ってきたけど、このレベルの獣なら片手間の覇銃ハガンとペローナちゃんのネガティブ・ホロウだけで対処は簡単に出来た。クー・ド・バーストを使うまでもないね。

「だいぶ深海も進んだけど…まだルフィ達見つからないね」

「死んでんだろ、こんなトコにただのシャボンで取り残されて生きてられるか」

ペローナちゃんの言う事も尤もだけど…それは常識の話だからなあ。ルフィに常識は通用しないし。

「あれ何だ？ものすげエ光ってるけど！魚人島かな!？」

チョップパーが船の前方に現れた強い光を指差す。

うっ…：こつとも真つ暗な所にあんな光を持ってこられると、私の暗闇耐性倍加も意味なくなつちやう…！

「何か見えるか？」

「まだ眩しすぎて何も…もつと近付けば分かるかも…」

近付けば近付く程眩しくなる一方だ……。本当に何だこの光……!

「あ」

「しまった!!」

その光の丁度目の前にやってきた時、私達はその光が何なのかを理解した。

私達の真下……。そこで口を大きく開けて、巨大なアンコウが今か今かと待ち構えていたからだ。

「アンコウだっ! ダマされたっ!!」

「深海のハンターに釣られましたね! マズイ!!」

チョウチンアンコウ! 知識にあるものより遥かにでかいけど、この世界だとあれくらいサイズ普通か!

「まあ、問題ないんだけどね。覇銃<sup>ハガン</sup>!」

覇気の弾はアンコウの体を貫き、船を食べようとしたアンコウは痛みに悶えた。ついでにペローナちゃんもネガティブ・ホロウズで戦意喪失もさせる。

ネガティブ・ホロウは図体が大きい相手には通用しづらいらしい。何回も当てないとネガティブになつてくれないのだとか。確かにそんな感じではあるね。

「アンコロオ……!!」

「次は何?」

巨大な岩の陰から声がして、その声の主がアンコウの光に照らされた。

「…でつかい人。こんな奴マリソフオードに居たなあ…逃げたけど。」

まああいつとは違うだろう、オーラがそこまで凶悪じゃない。

「おいおい…人の姿をした海の怪物といやあ…海坊主かア!!?」

海坊主が腕を振り上げて攻撃態勢をとる。

「ギャー!船をひっくり返されるぞ!!」

「心配要らないわ、ウソツプ君。海坊主の狙いは私達じゃないみたいよ」

「な、何で分かるんだよオ!」

ミキータの宣言通り、海坊主はこの船ではなくアンコウをガンツと殴って躡けていた。船は食うな、キャプテンバンラーれっケン様に怒られる、と。

ら、とかれ、とか言ってるのは単に口調の問題か。…それよりミキータ、それが分かるって事は見聞色の覇気を使えるんだ…!

『死人に口なし、欲もなし…♪鳥も飛べねえ黒国じゃあ〜』

「……………」

次から次へと色んなことが起こるものだよね。

この「唄」はどこから聞こえてきてるんだ…?

『死人の指に宝石やいらぬ、闇じゃ無念も見えやせぬ…♪』

「うわ……！ゴースト船だ……！」

「お……良い雰囲気シッパの船じゃねエか、アレに乗ってる奴は分かってるな」

「お、お前本気で言ってるのか!?あの船だぞ!どこからどう見たってゴースト船シッパだろ!!」  
「だから良いんだろ、何言ってるんだネガツ鼻」

本気で何言ってるの?みたいに首を傾げてるペローナちゃんに私達は苦笑いを溢す。そういえば彼女の趣味趣向はこういう系だった。

『探せ、探せ、沈んだ宝はおれのものオ……おれは世つ界一の大く金く持……♪キャブテン、バンダー・デッケンだア……!!』

『『ウオオオオオ……!!』』

深海でゴースト船シッパか。どうしようかな……とりあえず破壊する?

「脆ハガそうな船だし、覇銃ハガン何発か打ち込めば壊せそうだね」

「や、やめとけイリス、呪われるぞ……!!」

「そうですよ!アレは本物です、あの帆を見て下さい!有名な船……『フライングダッチマン号』!」

フライングダッチマン号?

続くブルックの説明によれば、その船はこの世にあつてはならない船らしい。

ある大嵐の日、突然錯乱した海賊船船長が部下を次々に嵐の海へ投げ込み皆殺しにし

…神にさえツバを吐いた。その船長の名は「バンダー・デッケン」…船の名は「フライング・ダッチマン」。

彼は神の怒りを買ひ、永遠の拷問を受けながら海を彷徨い続ける事を運命づけられた。との事。

そして今日の前にある船こそが、そのバンダー・デッケンの船だという。

「なるほど…分かった！とりあえず沈めてみよう！」

「話聞いてたのかオイっ！」

ビシッ、とウソツプの突っ込みが刺さった。聞いてたけど…別に私が攻撃を遠慮しなくちやならない理由じゃなかったし。

そもそもあんな怪しい船、とりあえず落としとけば何とかなるんだよ。

「ワダツミ…アンコロ…船は食っちゃ宝が取れねエ…叩き落とせ！」

「わかったら!!」

拡声器でも使ってるのか、妙に響く声が耳に届いた。

その言葉でワダツミと呼ばれた海坊主は標的を私達に定める。

「フランキー！クロー・ド・バーストを…！」

「いや、必要ないよ」

ワダツミの拳をハガン覇銃で弾いて、ジッと目を合わせた。

私の体から溢れ出る霸王色の圧がワダツミにも見えているのか、奴は体を震わせて戦意を喪失させたようだ。：そりやそうだ、いくらワダツミがバカっぽく見えても戦つてはいけない相手くらいは見分けつくだろう。それに霸王色で分かりやすくしてあげたんだから尚更だ。

「おおーい!!お前ら〜!!」

「あ、ルファイ!サンジ!ゾロ!無事だったんだ!」

「さつきすんげエ覇気感じたぞ!イリスか!」

流石ルファイ、ばれてる。

それよりルファイ達を運んでるクラークンが気になる所だ：ちゃんと手懐けたみたい。  
い。

「コラー!何をしているワダツミ、怯えてないでやり返せ!!」

「酷な事を：怯える事が出来るのだから立派な防衛だと思っただけだな」

やり返したって手も足も出ない事を理解したからワダツミは何もしてこないんだって事をあの船に乗ってる奴は分かってないんだよね、多分戦闘とかした事ない人なんだろうな：バンダー・デッケン。

「それより3人共どうしたの?1つのシャボンに入つて」

「おれとサンジのシャボン割れちまってよ、ゾロんち逃げ込んでたんだ、あはは、死ぬと

「こだった！」

割とシヤレになつてないく…。

とにかく急いで3人を船に入れて、今にも割れそうなシヤボン玉から解放してあげた。

ルフィが船に戻った事で、クラークンが自分の頭の上にサニー号を乗せる。成程、モームと違つてタコならこうした方が船を引きやすいのか。

…もう引くつて言い方はおかしい気もするけど。

「呆れた…本当に手懐けちゃったわけ？あの怪物タコ…」

「おう！上級者の航海をするんだおれは！な！スルメ！」

「それイカじゃん！」

どうしてルフィって技のネーミングセンスはピカイチなのにこういうのとなると何か別の方向へと行つちやうんだらう。

ネーミングセンスで言えばナミさんもアレだけど、ナミさんは可愛いから全て許される。私が許しちやう♡

「船長キャプテンが無事なのは良かったけど、何か揺れてないかしら？地震？」

ナミさんがハツとしてさつき通つてきた火山地帯を見た。

…あ、これやばいやつ。



「…まずいわ…、海底火山が…噴火する！」

「火山かあ、ここなら特等席で見れるね」

「んな呑気な事言ってる場合か!!逃げるぞ早く!」

「まあまあ、そんな焦らなくても大丈夫だよ、ほら」

船の下を指差してウソツプに見せる。そこには必死の形相でサニー号を持って全力ダッシュしてるクラークンの姿があつた。

揺れを最小限に抑えてるあたり出来るスルメだ。

直後、ドオオオン!!と物凄い音がして火山が噴火した。

私は手を海に出し、巨大化させて爆風を軽減させる。

「イリス…あなた腕を出しても大丈夫なの!?!ここは深海よ!水圧で潰されてもおかしくないのに…!」

「ありがとうロビン、でも平気!」

本当は骨がミシミシ言ってるけど、これは黙っておこう。

うーん…この状態ではこれくらいの強度が限界なのか、まあ2年前だと間違いなくこの手はペシちゃんこだったろうね。

「水温差で海流が渦巻き始めた!」

「ナミさん、魚人島はどっちだ…ブツ…、こ、こんな時までやましい気持ちちが…!?!」

サンジ、本当にどうしたんだろう。これは相当重症だよ。

「まだ真っ直ぐ！もう少し……あの海溝へ!!」

「おわああ!!断崖絶壁じゃねエか!ここ飛び降りるのか!？」

「そう!!」

目と鼻の先にある海溝は、もはや下が全く見えなかった。

暗闇耐性を倍加した所で暗闇の先にあるのは暗闇なのだから何も見えないのは当然なだけだ。

「飛び込め!スルメ〜!!」

ルフィの指示で海溝へ飛び込んだスルメだが、今度は海溝が崩れて上から土石流が降ってきた。

まるで海の土砂崩れだ、巻き込まれたらただでは済まない。

「そう何度もイリスに見せ場を取られる訳にはいかねエな!必殺緑星!「サルガッソ」!!」

ウソツプの放った弾から巨大な海藻が生え、土石流を一瞬ではあるが足止めした。

その隙にスルメは土石流の範囲から逃れ、私達はほっと一息つく。

「やるじゃんウソツプ!」

「ネガッ鼻お前!やる時はやるじゃねエか!」

ドヤ顔してるウソツプだけど、今回はそのドヤも正しい。もしかしたら私じゃあの土石流は止められなかった可能性だってあるし、ああやって確実にしてくれたのは助かったよ。

「わ……」

確かに土石流は止められたけど、上からもう1個だけ落ちてきた岩石がスルメの頭に直撃した。スルメはそれで気を失ってしまい、私達はスルメと共に海溝を真つ逆さに落ちていったのだった。

\*\*\*

「うにゅー！」

とりあえず落下の衝撃でなんかがあっては事だから、嫁達を私の近くに呼んで1人1人の腕を掴んでいたがその心配は杞憂に終わった。

というのも、スルメの身体がクツシヨンとなつてそれ程衝撃が伝わってこなかったのだ。

「だいぶ下まで落ちたつぼいけど…」

「う…眩しい…っ！女王、私の前に来い、陰になれ」

「はーい♡」

「…光？なぜこんな深海に…」

「おおく！！おいお前から来てみる！上見ろよ上く！！ナミ、アレか？！」

ルフィが上の方を指差して、ナミさんが記録指針ログポースで確認している。

視線を上に向けたその眩しい光の先にあるのは…大きなシャボンに囲まれている島だった。

「間違いないわ！指針はあの島を指してる…あれが魚人島よ！」

「んんん！来たー！！魚人島！！」

「人魚達の舞い踊る島！美しい人魚姫！！遂に辿り着いたんだ、ガキの頃から憧れた夢の楽園！！…ブツ！」

さ、サンジー！！！！

遂には妄想だけで吹き出す様になっちゃった…こんなんじや人魚に会うなんて…！！

「まずは入口を探さないとね。正面に見える口がそうだと思うけど…」

ナミさんの言葉に頷く。サンジには悪いけど、私はこの魚人島で目一杯良い思いさせて貰うんだ！！

人魚だけじゃない…そのお姫様がもし本当に居るって言うのなら…!!んくくくつ  
ぜつつたい嫁にする!!昂つてきたあ!!  
!!!

## 新世界突入 魚人島編

### 143 『女好き、びば魚人島』

「魚人島の料理には何の肉が入ってんのかなー…」

「魚とかは食べてなさそうだね。…ん？」

私達が魚人島への入口を探している時、近くに巨大な気配を何個か感じ取った。巨大な気配って言っても強さじゃない、大きさの問題だ。

「何を人間なんぞに従わされてんだ、クラーケン!!」

「わああああ!!何すんだスルメ!もう一息運んでくれよ!!」

私の感じ取った巨大な気配の主、それに乗っている魚人がスルメを一喝すれば、スルメはサニー号をポイッと捨てた。

恐怖で縛られているのか…可哀想に、それじゃ奴隷と何も変わらない。

「誰だコイツら…!」

「わああああ!!海獣の群れだア〜ッ!!」

チョップパーがサニー号の前に集まる巨大な気配…海獣達を見て叫んだ。

キリンとかサイとかゴリラとかが海に適応しましたって見た目してる。こいつら

みたいな見た目の海獣は修行中に何頭か見たっけな。

「カツコいいなく海獣！誰か乗ってるぞ！」

「魚人だね、3人くらい居るよ。とりあえず倒そうか？」

「どうしてあんたはそう直ぐに手を出そうとするの…」

簡単な話、見聞色で相手の色が見えるだけの事だよ。コイツらからはあんまり好きな色が見えなかったから倒そうかなって。

まあでもナミさんが言うなら私は従うけどね、だってナミさんの言う事だし、私からすれば神の啓示かなって。

とか考えてたら海獣に乗る魚人の1人が口を開いた。

「お前達…『麦わらの一味』だなア…よく知ってるとも…かつて『アーロン一味』の野望を打ち砕いた海賊達。……それで済めば答えは簡単だったが…！よりによって2年前、あの憎き『天竜人』をぶちのめしたとも聞いている…！まるで我々の敬愛する『魚人島の英雄』フィッシュヤ・タイガーの様に…。ハモハモハモ！まったく、扱いに困る」

ハモの魚人かな。それっぽいよね、ハモハモ言ってるし。

「なア、教えてくれ…！お前達は敵なのか、味方なのか。我々『新魚人海賊団』の『傘下…に下る』か!!『拒否する』か!!拒めばここで沈んで貰う!!」

「それより、私も教えて欲しい事があるんだけど」

私の体から覇気が溢れてるのを見たミキータがナミさんに伝えると、ナミさんは慌ててフランキーと何やら話していた。

…ここは深海1万m：そりや、私だって本調子で戦える訳じゃない。だからここからの離脱を提案しているのだろう。

私が今から取る行動を早く理解したからこそナミさんはそれだけ早く行動出来たのだ。あのハモの魚人の肩に入れられた：アーロンと同じ刺繍。それを見て一瞬だけど怯えた目をしたんだ。…ナミさんが。

それを見たんだ：もう私に神の啓示も何も通じる事は無いと思っ正しい。

「あなた達とアーロンって…関係者？」

「関係者だとオ？そんな簡単に言うな…：あの方は我々新魚人海賊団の先駆者だ!!イリスとやらがあの方の野望を壊してなけりや、今俺達は“上”で人間共を淘汰してやつた所だ!!」

「そつか。じゃあ…堕ち…つ、ろ!!?」

「な…!!?うつ…!!」

「おわっ!!?」

い、いきなりクー・ド・バーストく!!腹貫いてやろうと思つた覇銃ハガンが掠つただけで終



わったじゃん！おとおお……！しゃ、シャボンコーティングの空気が無くなるう……！！

「ちよつと……！私今からあいつらボッコボコにする所だったのに！ナミさん……！」

「怒ると周りが見えなくなる所も好きだけど、こんな深海であんな海獣に四方八方から襲われちゃ対処出来ないでしょ！ケンカなら魚人島で幾らでもやつちやつていいから……！」

むう……！別に負けはしないけど……方が一は確かにあるかもしれない……。

へんだ、今度あいつら見かけたらボッコボコにしてやる。なーにが新魚人海賊団だ！せめてアーロンの思想を切り替えてまともに海賊やってれば仲良く出来たのに……！まともな海賊ってなんだ？

「んっ……！」

そのまま魚人島を囲う巨大シャボンにサニー号が突っ込んだ。

そのシャボンを突き抜けた時、サニー号を覆うシャボンは巨大シャボンに持つていかれてコーティングが剥がれてしまう。

「コーティング無くなったけど大丈夫なの!？」

「しかもシャボンは二重構造！普通の船ならこの空気層で落下する……!!」

巨大シャボンの中にもう一つ巨大なシャボンか……！

「もう一発激突するぞ！しがみつけエ！」

「よし！来い！……っ、ゴボツ……!？」

「うわああ!?ゴホボボバボ?!？」

う、海!?シャボン突き抜けたら海って…それは流石に対処しきれない…!

「ガバボ……!」

くそ、能力者は私を含めて7人も居るっのに…!

しかも潮の流れ早いし…!せめて嫁達だけでもこの手にイ…!!ふんぎぎ…!!くそ！能力が使えないから…!!

「ゴブボア!!」

な、ナミさん達が離れて…っ!うぐ…!くそ!!伸びてよ私の腕…!……ぐ…っ。

ナミさん達に追いつこうと必死に泳ぐも、流れが速すぎて私にはどうする事も出来なかつた。

流石に動きすぎたか…酸欠で意識が朦朧としてくる…。

ナミさん…ミキータ…ロビン…ペローナちゃん…、必ず迎えに行く。…だから、ちよつとだけ…待ってて…!……!……!……!

\*\*\*

「ツナミさん!!! ツていつつア!!?」

「ふぐ……い、っ……!?!」

オオオオオ……飛び起きて早々ガチンコするのは久々の感覚……だ、誰……?

「ご、ごめん……! 思いつきり頭突きしちゃって……!」

「う、ううん……平気だよ……!」

……うん? 聞いたことある声……というか、すっごく癒されるこのカワボは……!

「ケイミーちゃん!!?」

「そうだよ! 久し振り、イリスちゃん!」

う……うわー! また一段と可愛さにも美しさにも磨きが掛かっちゃってるう!

「ごめんね……イリスちゃんの寝顔があまりにも綺麗だったから、もつと近くでみようと思

って……」

「今から寝ます」

「ちよつと待てい!」

ガシ、とウソツプに止められた。なんだ居たの。

サンジもチョップパーも居るね、あとまだ気を失ってるけどルフィも。

「可愛いね」

「可愛い！」

「可愛くない！」

「可愛いんじゃない？」

「可愛いから何!?!」

「…えっと、ありがとう…?この子達は？」

なんか私の前をシャボン?の浮き輪か何かに乗ってふわふわ浮かんでる小さな人魚達が私の顔を見てそう言ってるので一応お礼を言っておいた。五つ子…だよ、5人もそっくりだし。

「私のお友達!メダカの人魚の五つ子ちゃんだよ」

「イチカです」

「ニカです」

「サンカです」

「ヨンカです」

「ヨンカツーです」

「ゴカで良いだろそこは!!」

ウソツプの突っ込みが刺さる。でもこの子達可愛いね、小動物みたいで。

そんな事を言ってる間にルフィも起きて、五つ子達が乾かしてくれた私達の服を持ってきた。

…流石にここでは着替えにくい。

「イリスちゃんはあっちねー」

「あ、うん」

ケイミーちゃんに引つ張られて奥の部屋へと向かう。男連中と一緒に着替えるのは流石に無理だと思つてたのを察してくれたのかな…ありがたい。私だって乙女だからね。

「はい、この部屋なら脱ぎやすいでしょ?」

「気を利かせてくれてありがとう、助かったよ」

うんしょ、と服を脱いでケイミーちゃんに渡す。なんか夫婦みたい、ふへへ。

「それにしてもびつくりしたよ、まさかこんないきなりケイミーちゃんに会えるなんて。

私達を助けてくれたんでしょ?」

「お友達と一緒にね。それに、今回は私が悪くて…! 迎えに行くつて思つてたのに時期を1ヶ月間違えちゃつてたの…!」

「ううん、大丈夫だよ、こうしてちゃんと辿り着いたし。ナミさん達は？」

「サンジちゃんは、とりあえず海底まで流されたのは自分達だけだからナミちゃん達は無事だつて言つてたよ」

それなら良かった。ゾロもフランキーも居るし、あつちも大丈夫そうだね。

「……」

服を着た所で、私が抜いだ服を持つて待つていたケイミーちゃんと目が合う。彼女はどうかした？とでも言うかのかの様に軽く表情を和らげて首を傾げた。

「……ちよつとごめんね」

「わ……っ……ん……っう」

ぐいつ、と腕を引っ張りそのまま強引にキスをして、ケイミーちゃんの鱗をするつと撫でる。

なんか、仕事帰りに脱いだスーツを受け取った妻、みたいな感じのケイミーちゃんに興奮しちゃった。

「ん……」

舌でケイミーちゃんの口をこじ開け、隠れていた彼女の舌を絡めとつて口内を犯していく。やばい……スイッチ入りそう。だつてケイミーちゃんとかういうことするの初めてだし……。

彼女の唇はぷるんと柔らかくて気持ちが良いし、舌はしつとりと湿っていて吸い取りたくなる。

…本当は続きをしたいけど…。

「ぷは…、ん、ぐちそうさま」

「あ、えと…あはは、なんか、照れるね。あ、暑いねえここ…！」

パタパタと真つ赤になった顔に手団扇を煽る彼女に笑いかける。見るからに慣れてなさそうなケイミーちゃんに無理矢理するのはなんか言い表せない気持ちよさを感じた…あのまま最後までしたかったけど…今はナミさん達との合流だって急がなくていい状況だ。

「急にごめんね？でも次する時はもつと先までやるから」

「…うん…！よ、よろしくお願いします」

ぐ、と握り拳を作つて頑張るジェスチャーを取るケイミーちゃん。いちいち可愛い。もしかして今すぐ襲われたいのかな？ん〜??

…我慢するけどさ…。

………気合で…!!!

「お待たせー」

「お、やっと着替えたか、遅いぞイリスー！」

「男共と違つて女には女の着替へつてのがあるの」

ぶちゆこらかましてただけですけど。

「ケイミーちゃん、ここはどこなんだ？」

「ここは『人魚の入り江』の海底！町の『人魚カフェ』<sup>マーメイド</sup>の女子寮だからお友達がいつぱいいるの」

「女子寮？…マーメイドカフェって？」

「私が今ウエイトレスしてるお店だよ、美人な人魚がいつぱい居るよ！」

あ、やばい、サンジが震えだした。…お…自力で押さえたつぱい。

魚人島では鼻血を噴いて倒れたりしたくないとの事。そりやそうだ。

「上に行つてみよーよ！お友達紹介するね」

ケイミーちゃんのお友達かあ、それはそれは美人揃いなんだろうなあ！ぐへへ…楽しみ過ぎる…！

ケイミーちゃんに連れられて私達は簡易シャボンに入り外に出る。おお、すつご…海の中だ。

玄関の前には、背に人が腰掛けられそうな台が付いてるカメがいて、その台も大きく



シャボンで覆われている。

「カメちゃん、上までよろしくね」

「ウミガメエレベーターかあ」

シャボンに書いてある文字を読み上げ、私達はそのシャボンに入って柔らかいクツシヨンが敷かれた台に座る。

見渡す限り海だし、その中に幾つも明かりのついた部屋が見えて、ここは魚人島なんだな……と実感した。

「ここは海中のサンゴマンシヨンね。私の寮は家賃も安いから最下層、光の入る最上階は1番値段が高いの」

「へえ……」

これが人間ならば、間違いなく最下層の光が届かない場所が1番高いんだろう。

じゃあどうしてここでは最上階が1番高いのかって言われたら分かんないけど、光が届く、届かないが理由なのかも。

「そっぴやハチとパツパグは？」

「はっちゃんは1年程前に大ケガしちやつて！もうほとんど良いって聞いているけど、はっちゃんは元々「魚人街」の出身だからそこで養生を」

「魚人街？」

ハチの大ケガはサニー号を守ってくれた時のものだから、またお礼を言いにかなくちや。

「うくん：少し恐い所でね、イリスちゃんが一緒なら案内してもいいよ」

「スラム街みたいな感じかな？分かった、ケイミーちゃんの護衛は任せて！」

こつちにはルフィもサンジも居るんだぞ〜！

それに行くならみんなと合流してからになるし、ケイミーちゃんの安全は守られたも同然だね！

「パツパグはね、あの人は超有名デザイナーだから魚人島の一等地、「ギョバリーヒルズ」におつきな屋敷を持つてるの。今日もハマグリ届けに行くから一緒に行こつ！」

「お前飼い主だろ、一緒に住まねエのか？」

「えへへ、私にはあの町は身分違いで：ハマグリもこの辺のが美味しいし！」

身分違い〜??

：よし、いつか無人島を開拓して私の国を創ってやる。ここでは身分も何も無い！私の嫁は私の嫁！素晴らしきハーレム女王国を築き上げて、ケイミーちゃんも超一等地に住んでもらったりなんかして!!：殆ど私の願望だけど！

「なア、あのストローみてエなの何だ？」

あともう少しで海上につくとこの所で、ウソツプが海中から海上へ伸びるストローの

様なモノを指差してケイミーちゃんに尋ねた。

「島のシャボン職人が加工したウォーターロード。魚達も私達もあれに乗って…、ちよつと見てて！」

そう言つてケイミーちゃんはそのストローに入つて海上へ昇つた。丁度私達の乗るカメエレベーターも海上につき、近くの足場でカメから降りる。

ウソツプの言つていたストロー…ウォーターロードはその名の通り水の道というのに相應しい形だった。

海中から伸びる水の道が空中で孤を描き、そしてまた海中に向かつて下りていく。まるで水の虹みたいだ。七色じゃないけど！

「あれ、何で深海に空と雲があるんだろ」

水の道から手を振るケイミーちゃんに手を振り返した時、その向こうに空が見えて首を傾げる。

そもそも光がある理由もよく分かんないよね…。

「おーいケイミー!!」

「あーみんな!!」

女の子の声!!

サンジと一緒に声が聞こえた背後にバツ！と振り向けば…、そこにあつたのは、正

しく……楽園……っ!!

「お友達、もう平気なの？ 溺れてた海賊さん達」

「こんにちは！ あんまり恐そうじゃないのね」

「不法入国？ ワイルド！ 海賊って好きよ、私」

「…びば魚人島……っ!! ひゃっほーい!!」

感動して号泣してるサンジを放って、私は人魚ちゃんが沢山いるその場所…「人魚の入り江」に飛び込んだのだった。

みんな美人だあー!! うひゃー!! 美女祭りじゃーい!!

## 144 『女好き、噴水鼻血』

「うへへ…お肌すべすべだねえ、鱗も肌触りさいこーだねえ」

「うふふ、そうでしょう？お手入れ頑張ってるの」

「私の髪は？」

「私の尾はー？」

うひょひょー！みんな、頭の天辺から尾びれの先までさいこーです！！ふんす！！

「私イリスー！みんな可愛いから私の嫁に来ないー!?」

「お嫁さんは遠慮しまーす！私はルリス、名前似てるね！」

遠慮された…。い、いいもん！後で墮とすし！

「イリスとルリス…ほんとだ！これっでもう運命じゃ!?」

「遠慮しまーす！」

「くそう!!」

このシユノーケル美女め！覚えてろお…この島を出る頃にはメロメロにしてやるからなあー！

「私はメロよ、人間なのに私達を嫁にしたいなんて変わってるのね」

青いロングストレートの髪に花飾りをつけた美女がそう話しかけてくれた。はあ、それってあれでしょ？ シャボンディ諸島であった人間だとか魚人だとかの差別的な話でしょ？

「下らないよね。種族が違うから差別なんてさ…だつたら私は生まれた世界が違いますけど?? ねえ王華。」

「ま、私がそう思ったところで魚人島の考えは分からないし、あんまりこの話には触れないでおこう。」

「おれ、ここに住む〜!!」

鼻を膨らまし、目をハートにしたサンジが人魚達とはしゃいでるのを横目で見る。あの調子を見る限りだと鼻血はもう大丈夫なのかな? だつたら良かった、せっかく夢の場所に来たつてに鼻血噴いてお休みくじや報われないよね。

「そういやなんでイリス泳げてんだ? そこ水の中じゃねエのか?」

「色々あって水は克服したの。能力は使えないけど…」

「え?! 克服出来んのか!?! よし、じゃあ俺も飛び込んで…」

「やめとけルフィ! イリスがおかしいだけだ!」

おいコラウソップ。

誰だつてあんなバカみたいな修行すれば克服出来るよ…、でもエースは結局多少マシ

にはなつたけど私みたいに体を動かしたりは出来ないままだったつけ。

何でなんだろう…私が食べたのって悪魔の実じゃないのかな？なんてね。

ルフィは不満そうにしながらも飛び込むのはやめ、水の中に足をつけてバシャバシャと動かす。

「なーケイミー、おれこの魚人島で必ず会いてエ奴がいるんだ！」

「ふーん、誰？人魚姫？」

「いや…ジンベエだ！」

ジンベエかあ！あの人には2年前色々世話になったなあ。インペルダウンでもマリントフォードでも、あの人が居なくちゃ色々危なかったし。

「おいルフィ、「ジンベエ」ってまさかおめー、七武海の!？」

「頂上戦争で一緒に戦ったんだよね、強かったよ」

「お前ら七武海何人と知り合いなんだよ!!もうそこまで行くと恐エよ！」

何人として…顔を見たってだけなら全員知つてるとしか。…あ、でももしかた七武海の入替えが起きているのなら分からない人も居るかもね。

「ジンベエはどこに居るの？」

「えーと…ジンベエ親分は今この島には居ないの」

その言葉にルフィがええ！と声を上げた。どうやら2年後に魚人島で待っていると

話をしていた様だ。

「戦争の時七武海をやめたでしょ？だから「魚人海賊団」だった人達はこの島に居られなくなつて…ジンベエ親分と一緒に魚人島を出て行つてしまったの」

「え〜〜っ!!じゃあジンベエには会えねエのか〜!?」

「詳しく話せば長くなるけど、戦争の後この島にも色んな影響がでて…」

と、その時、慌てたようにメダカの五つ子達が宙を泳いで私達のそばに寄つてきた。

王国の船がくる…とかなんとか。

「誰が乗つてるの!?メダカちゃん達っ!」

ケイミーちゃんがちゃん付けなんて珍しい…それほど焦つてるのかな?

「まだわからない!」

「珍しい王国の船っ!」

「ここには滅多に來ない船」

「…もしかして、『不法入国』のイリスちん達を捕えに來たのかも!」

…あ、あ…:そうか、私達つて入口から入らなかつたから…。

まあ、でも海賊だし…:その辺は別にいつか。

ケイミーちゃんに隠れるように促された私達は、それぞれ岩の影に隠れる。…あ、サ  
ンジが可愛い人魚さんに抱かれて隠れてる!!ぐぐぐ…私もそうすれば良かった!!



「あれ、王族のゴンドラ！」

「でもまさか王族の誰かという事はないでしょ、こんな島の隅っこへ竜宮城からわざわざやって来ないわよ……」

あれがこの国の王族の船か。

…船が空を飛んでる…飛行船かな。でもエネルギーのバカ野郎が作ってたマクシム？とは構造が全く違うね、浮力はシャボンだし、移動は船を引く巨大なリュウグウノツカイに任せてるみたいだから。

その船が入り江の近くまでやってきた時、船の上から陽気なラツパの音が鳴り響いた。

「ネプチューン三兄弟様のオ、御成ア~~~~り~~~~!!!」

「三兄弟……?」

ボソツと呟いて陰から顔を覗かせれば、その王子達とやらが姿を現した。

真ん中に居るのは、銚子を持ったいかにも戦士つて感じの男。その左には何か歌ってる男、そして右には口を開けて陽気に踊っている男。

そしてその全員に共通しているのが、とにかく体が大きいという事だった。

「やあ入り江の娘達……1つ尋ねたい事があるのだ」

真ん中の戦士然とした男が口を開く。…この世界でよくある様な裏では圧政を敷い

てますよ、みたいな雰囲気……というかオーラは無さそうだ。普通に良い人なんだろう。だけど人魚達にキヤーキヤー黄色い声を上げられてるのは許せん……!!なーにが王子だ! 私は女王だつての!!

「不法入国者の報告を受けているのですが、ここへ来てはいませんか?」

「来てたら言ってくれミファソラシド……♪来てなかつたら仕方なミレド……♪」

「歌うまい……、訳分からんタイミングで歌い出したのにも関わらず耳が安らぐというか……プロですかね?」

「い……いいえ! ここへは誰も来ていませんが……そんなにも重要な人物なのでしようか!?!」

「王子達がわざわざ降りて来られる程の!?!」

「ウム……まあ……まだ私の思う者達と確定ではないのですが……。ふむ、そうか……どうもありがとう、他を当たってみよう。国境警備隊の見間違いか……。遊戯中、邪魔をしましたかね……」

「いえ、そんな事!」

王子達のキヤラは気になる所だけど、私達を探していたのは間違いなかつたみたい。隠れててよかつた……。

後はこのまま……彼らが何処かに去ってくれるのを待てば……

ブツハア~~~~ツ!!!

「あ……っ」

「サンジ……!!?」

し、しまった……!!美女の胸に挟まれて、押し殺してた興奮が爆発したか……!!?

天高く噴き出した噴水の様な鼻血は、人魚の形を作ってそれはもうアートの様な……つて言ってる場合じゃないんだけど!!

「今の血の量やベエぞサンジ!!」

「ほんとにもう……!何やってるのサンジ!!」

今ので王子達にも見つかったし……どうする……!?!いやでも、まずはサンジをどうにかして貰わなくちゃ……!

アンモナイトと呼ばれた兵隊達が私達の下まで歩いてくる。……ここで交戦するのは簡単だけど……それをしちゃうとサンジを助けてくれなくなるかもしれない……!交渉は医者チョッパーに任せよう。

「ちよつと待ってくれ!不法入国は悪かったよ、でも捕まえるのは後にしてくれ!誰か、献血してくれねエか!?このままにしてたらもう数10分で仲間が死んじゃうよ……!!血

液は「S型RH-」、ちよつと珍しいけどこの中に誰か居ないか!?それとも魚人や人魚は流れる血が違うのか!?

「おい!頼むよ誰か、お願いします!サンジに血イヤつてくれエ!!」

「……ルフィが敬語使うなんてめっちゃ珍しい……」

でもそれだけ緊急事態なんだよね……!

「私からもお願いします……!!誰かいませんか!?

「……チョップパーちゃん……!人魚も魚人も人間と同じ血液だよ!輸血も出来る……!だけど……!」

……なんだろう、ケイミーちゃんにしては歯切れが悪いというか……。

……いや、待てよ……?普通に考えればそれって無理なんじゃないの……?

アンモナイツの兵隊達も、そして入り江の人魚達も誰も言い出さないのは何故なのか。単にその血液型じゃないから?ならなんでみんな言葉を失ってるのか……口を開こうとした人が慌てて閉じたのは何故なのか……それは……きつと……!

「ハモハモハモオ!!!」

「あ……?」

「人間共がア〜!!バカ言つてやがるぜエ!クソみてエな “下等種族” のためエら人間に血をくれてやろうなんて物好きはこの魚人島にやあ居ねエよオ!!そんなものを差し出

せば人間を嫌う者達から「闇夜の裁き」を受ける!!」

こいつ…海獣連れてたやつか。隣にいる2人の魚人もあの時居た奴だね…なんだ？わざわぎ殴られに来てくれたの？

「…イリスちん、ちよつと待ってて!」

「え?」

急に現れた魚人3人をぶつ飛ばしてやろうと拳を構えた時、ケイミーちゃんが私にそう耳打ちして海に飛び込んだ。

待ってて…何をやる気なんだろう。

「ダラダラと大量に血を流し、何も出来ずに死に絶えればいい…!この国には古くからの法律があるのさ!!」「人間に血液を分かť事を禁ず」!!」

「…は、それは何とも下らないね」

「下らないだと…?これはいわばお前ら人間が決めたルールだ!!長い歴史において我らの存在を化け物と恐れ…!血の混同をお前達が拒んだ!!魚人島の英雄「フィツシャー・タイガー」の死も然り!種族構わず奴隷解放に命を張つた男が…後の流血戦の末、血液さえあれば確実に生きられた命をいとも簡単に落としたり!心なき人間達に供血を拒まれ…死んだ!!」

知らないよ…、魚人にもバカがいる様に人間にだってバカは居るんだから、そんな一

部のバカの話だけで人間を知った気になられても困る。

…とはいえ、人間ってのは自分達と違う物は徹底的に差別してきた生き物だ。前世でも白だとか黄だとか黒とかで散々言い合ってる問題がある。あれだって私に言わせれば下らない問答だよ、色とか関係なく、そこに居るのは一個人の人間だつてのにさ。

「そんな部下一匹の命なんか諦めて、お前ら俺達と『魚人街』へ来い!!」「新魚人海賊団」船長「ホーデイ・ジョーンズ様」がお前らをお呼びだア!!」

「そのなんちゃらに伝えとけ、『お前が来い』つてね」

その男に指を向ければ、奴は分かりやすく慌ててバズーカを構えた。さつき覇銃ハガンは見られてるからなあ…警戒されてるみたいだ。警戒した所であなた程度が防げるものじゃないけどさ。

「力づくで連れてくぞオ!! 打瀬網!!」うたせあみ

パアン! と撃たれたバズーカの中から飛び出して来たのは私達を纏めて覆える程の網で、斬り刻んでやろうと小太刀に手をかけたのをルフィに視線で止められた。

「JET 銃!!」ジェットピストル

「おー、流石」

飛びかかってきた網ごと後ろの魚人3人を殴り飛ばし、その直後に襲ってきた奴らの仲間の海獣も視線を合わせただけで怯えさせ動きを止める。霸王色か…ルフィもかな

り洗練されてるみたいだ。

：にしてもあの右端のタコ魚人：いや人魚か？あいつだけルフィのパンチ見切つて受け止めてたし、その上：、：ありや只者じゃないね。私やルフィから見れば石ころみたいな感じだけど。

「イリスちゃん達くくくっ!!」

「ケイミーちゃん!!」

何で上から声が？：：つてケイミーちゃん!?それ乗ってるの王族のゴンドラって言うてたやつじゃない!?

「サンジちゃんを乗せて町へ行こう!町の港には人間の人達がいっぱい居る!急いで!!」

「待ちたまえ君っ!リュウグウ号は王子達の：」

「ごめんなさい!サンジちゃんを助けたら必ず返しますっ!!」

そんな事して平気なのかは分からないけど、まあいい：!平気じゃなかったら私が守れば良いだけの話だ。それにあの王子達はこれしきの事じゃ何も怒ったりはしない気がするし。

私達はサンジを抱えてリュウグウ号とやらに飛び乗る。船内に入るのは申し訳ないので、私達はリュウグウノツカイの頭にサンジを寝かせて座り込んだ。

「お願いリュウグウちゃん!町まで!」

「モスー！」

泣き声可愛い。

「……ごめんね、私が同じ血液型なら拒否なんて絶対しないのに……」

「お前が謝る事じゃねエだろ！元々はコイツのやましい気持ちから始まってんだ、見ろよこの顔、少しニヤけてやがる！」

「サンジー！良い加減にしろよー！何も考えるな！本当に一刻を争う状態なんだぞ！」

一刻を争う状態になる経緯が残念すぎる……。とにかく、このまま町に出て人間を探さなくちゃいけないって事だね……！

「しかし、シャボンディで2年前にお前が受けた『差別』といい根っこは深そうだな……」

！下心の鼻血が笑えねエ大ごとになるなんて……」

「うん……。話は別なんだけど、町に着いても少し心配なの、献血者がすぐ見つかるかどうか……ここ1ヶ月人間の人間の人達が全然この島にやって来なくなつて……ルフィちゃん達は久しぶりのお客さんなんだよ」

私は何で？と尋ねるとケイミーちゃんは分からないと首を振った。

……いや、何で、じゃないか……どう考えてもあのクラークン、スルメが原因だろう。

そしてそのスルメを無理矢理働かせてるのが新魚人海賊団とやらで……うわ、犯人分かっちゃうた。



「私達がここに来る道中でクラークンを見たよ、新魚人海賊団にコキ使われてるっぽい」  
「じゃあまさか…その人達がここに来る筈だった人間の邪魔を…？」

「可能性の話だけだね」

ほぼ確定だけど。

まあ、それ自体は私にとって…引いては麦わらの一味にとつてはどうでも良い事だ。ただど新魚人海賊団はこの手で捻り潰してやるから…結果としてここに辿り着く人間は以前と同じ数に戻るよね。ホーデイ・ジョーンズか…アーロンよりは強そうな名前してるし、退屈な戦いにならない事を期待しておこう。

# 145 『女好き、知らぬ間に『四異界』』

「……は……どこだ……」

「サンジ！気が付いた!?!」

ベッドの上で意識を取り戻したサンジが、力無い声で呟く。  
良かった……目を覚ましたみたい。

ここはリユグウ王国の港町、サンゴが丘という場所だ。サンジに血液を提供してくれる人間を探して走り回ってる時、酒場に居たオカマな双子の海賊が快く話を引き受けしてくれたという訳だ。

「全く……人間と魚人の過去のイザコザで大変な目にあつたよ。あ、サンジ、彼らが血の提供者だよ」

「イヤん、ばかん♡」

「もつとあげるわ、バカン♡」

「ああああああ!!?!」

オカマ達を見て絶叫するサンジ。その顔から恐怖が溢れ出してるんだけど……どうし

た??

「それよりルフィ、さつきタコに刺されてた針は平気なの？」

「針？」

「え、ルフィ！ちよつとその右腕見せてくれ！」

ルフィの腕を伸ばしてチョツパーが軽く血を採る。どうやらそれは猛毒だったらしいが、ルフィの体には抗体があるからはね返してるんだとか。だと思つて今まで何も言わなかったんだけどね、私もマゼランの毒を治してからと言うもの毒系はあんまり効かないし。

ルフィの体に何の不調も問題も無いことが分かった私達は、とりあえずサンジにはまだゆつくりして貰う事にして、チョツパーが面倒を見てくれるそうなので私達だけでその部屋を後にする。

扉一枚隔てたその向こう側に居るのは、さつきも見たけどすつごく美しいお姉さん：

！その名もシャーリーがいるのだ！うつくしー！

「どーもシャーリー！お陰で無事に助かったよ！」

「そうかい、それは良かったよ」

“マダム・シャーリー”が妖艶に微笑む。ケイミーちゃんの働くマーメイドカフェの店長らしく、ここはそのカフェの裏口なのだ。

つまりサンジを連れ出せばまたとんでもない事になりかねないという…。

「おーいでか人魚！これ何だ？」

「マダム・シャーリーよ、ルフィちゃん」

ルフィとウソツプが部屋の隅に置かれていた大きな水晶玉を指差している。開けた貝殻の中に置かれてあり、まるで占いで使う水晶の様だった。

「それにはお触れでないよ、麦わらボーヤ達」

「それは占いに使う水晶玉だよ、マダムの未来予知はこのサンゴが丘じゃ有名なんだよ  
〜!!」

「もうやめたのよ、占いは。未来なんて知らない方がいい」

「はは、大丈夫だよ、嫌な未来は私を変えてあげるから」

私がそういうとシャーリーはじつと私を見つめてきた。な、なんでしょうか…美人に凝視されると落ち着かないんですが…!!

「…フ、貴女が言うと言得力が違うわね。『希望の星』」

「？」

希望の星…？ナニソレ、私の事？?

「ケイミー、あんた今日はお店休んでいいよ…お友達を島案内でもしておあげ」

「え？いいの!？」

「いいも悪いも…近頃は人間の海賊の客足がパツパツで商売上がったりじゃないか、入り江の娘らもじき来るし人手は充分だよ…」

「ヒトデは充分…あ！いけない！早くパツパグにハマグリを届けなきゃ！」

「そういうばそんな用事もあつたね。パツパグめ…よく考えたらケイミーちゃんを使わせてご飯持つてきて貰つてゐるって偉そうじゃない？私だつてケイミーちゃんにご飯持つてきてもらつて、あーんとかして欲しいし!!」

「何だい、ムツシユ・パツパグなら懐かしい友達に会つたつてウチの店で騒いでるよ？」

「え？」

「そうなんだ、じゃあシャーリーも行こうよ」

「…いいや、私は遠慮しておくよ。これ以上貴女と一緒に居るのは心臓に悪いし…」

「?!」

「良く分かんないけど、嫌われてるって意味じゃないんだよね？いい意味？だとしたら全く身に覚えがないんだけど…どこかでフラグ建てたつけなあ…」

「私達はケイミーちゃんに連れられて裏口から出て、サンゴが丘の表通りに向かう。ここからくるつと周るだけで表にあるマーメイドカフェに着くらしい。」

「向かっている最中、不意にケイミーちゃんが口を開いた。」

「さつきは言えなかつたけどね、マダムはまだ小さかつた頃…「島に海賊がいつぱい来

る」って言うって…そしたら翌年“大航海時代”が始まったんだって」

「え!?!」

「話せばキリがないけど、最近ではマリンフォードの戦争も、…その、ルフィちゃんのお兄さんの死も…言い当てるの。不吉な事が当たるから自分でもイヤみたい…」

なるほどね。…ふふ、だったら喜ばせてあげられる情報が1つあるねえ?

私はルフィと目を合わせて頷き合った。

とん、とケイミーちゃんの肩に手の平を乗せて笑いかける。

「あのねケイミーちゃん、確かに世間的には“火拳のエース”は死んだけど…実際は生きてるんだよね」

「…え!?!」

「ほんとだぞ、おれもシャボンディで会ったんだ」

「えーっ!?!」

これにはウソツプも驚いていた。そういえばルフィとゾロ、サンジにしか言うてなかったつけ。

「…それは、まだマダムには言わない方がいいかも」

「なんで? だって不吉な占いが外れたんだよ?」

「…うーん…これもまた言うてなかった事だけどね、実はマダム…白ひげ船長の死も予

言してたの」

白ひげの？と言う事はそれも外れた事になるじゃん……ん……？でもそれって、私が居なきや全て当たってた占いじゃ……。

「だけど実際はイリスちんの活躍で白ひげ船長の命は守られた……。自分の不吉な占いが初めて外れた時のマダムは今まで見た事なくらい泣いて喜んでたの。……それからというもの、白ひげ船長を救ったイリスちんを崇拜し始めて……」

「ん??」

なんか話が変な方向に行っていない!?

「さつきは隠してたけど、イリスちんの抱き枕、イリスちんのタペストリー……他にもいっぱいイリスちんグッズが山程あの部屋にはあるくらい、マダムはイリスちんのファンなの。だからその話をマダムに話しちゃったら……次は嬉しすぎて倒れちゃうかも……」

ええ……シャーリーみたいになめちゃんこ美女さんとフラグが建つたのは素直に喜ぶべき点だと思うけど……そっち方向にフラグ建つたのかあ……。崇拜じゃなくて恋心を抱いて欲しいんだけどなあ。ま、墮とすけど。

「あ、ついたよ……ここがマーメイドカフェの入口!」

今すぐシャーリーに会いたいとこだけ……今は我慢しよう。パツパグの言う懐かしい友達が一味の誰かかもしれないんだし。

「食べ物もあるよ！ケーキや海のフルーツが」

「肉は？」

「人魚は肉もお魚も食べないからメニューはワカメブリュレ、モズクタルト、コンブスフレ…あ、貝のお肉はあるよ！ホタテサンドとか」

「貝は肉じゃねエ！肉をナメんな！！」

…む、そういうえば私もお腹すいたかも。

結局シャボンディでエースが奢ってくれるって言うってたのもナシになったし、サニーに乗ってからは色んな事が連続して起こったからご飯を食べてる余裕も無かったし…。う、考えれば考える程お腹が…。

その時、唐突にカフェの入口が開いて中からブルックとパツパグが出てきた。懐かしい友達はブルックの事だったかあ…ナミさん達との再会はまだかな…。

「ムギ〜！！ハナ〜！！嬢ちゃんも！！会いたかったぞおめエら〜！！来てたんだな〜！！」

「ん、久しぶり、パツパグ」

やっぱり私って分かるじゃん…。みんなは一緒に居たのが長かったから余計私の成長に驚いてただけなのかな？

「ヨホホホ！！もー最高でしたよ、マーメイドカフェ！誰もかれもお綺麗な人魚さんばつ



かりで！もー骨抜き！…私、骨抜いたら失くなっちゃいますけどー!!ヨホホホホ!!」  
「ブルックも無事で良かったぜ、あの波でブルックが無事だったならロビンとミキータとペローナも無事だな」

「一番心配なのは能力者だからね。ナミさんは何だかんだで泳ぎは得意だから勢いが弱まった瞬間に抜け出してそうだし。」

「お前から今日帰るわけじゃあるめー、マーメイドカフェには全員後で行きやあい！今から『骨』を我が屋敷に招待するところなのさ。おめーらもついて来い、海獣の肉は好きか!？」

「肉があるのか?!!？」

「ワイルドなおれがワカメなんぞ食つとれるか!!おれの主食はより凶暴な海獣共の肉だ!!」

「あつ、パツパグ、これ今日のハマグリ!」

「わーいケイミーの美味しいハマグリ♡」

「主食貝じゃねエか!!とウソツップに突つ込まれてた。私もいつかケイミーちゃんの美味しいハマグリ（意味深）を食べたい。」

「人魚はダメだが、魚人達は肉も魚も食らう!この島に素材がねエわけじゃねエのさ。ヘイタクシー!」

パツパグがハマグリを食べながらタクシーを呼び止める。

勿論、私達の知るようなタクシーではなく宙を泳ぐ魚のタクシーだ。背中にシャボンがついており、その中に入ってリラックス出来る仕組みになっている様だ。

「わー！バンダー・デッケン!?なぜオバケが指名手配に〜!?」

「バンダー・デッケン?ゴーストシップの?」

ブルツクが無い目を見開かせて近くに貼られた紙を見ていたので声をかける。確かにその紙はバンダー・デッケンの手配書だ…。

「遭ったのかお前ら!そいつア今国を挙げて何年も捜してる海底の盗賊みてエな海賊だ。まアとにかく乗れ!話は上でするぞ!」

そう言うので、私はケイミーちゃんを横抱きして魚にトン、と飛び乗った。こういう所でも伸びた身長が役に立つ…!2年前ならお姫様抱っこなんて絶対出来なかった訳だし…!

「あいつは週に1度はこのリュウグウ王国にラブレターを送ってきやがって、やがてそれらは手紙から小包へ、そして脅迫の求婚状へと変わっていった…!人魚姫は脅え無視できない事態になって…」

「人魚姫に?」

「そう!お姫様のお父さん、ネプチューン王が怒って、さつき会った3人の王子が軍隊を

引き連れて探し回ってるんだけど見つからないの！」

私の腕の中でケイミーちゃんやんがパツパグから話を継いで説明する。パツパグは継ぐつもりは無かったのか力なくケイミーちゃんの名前を呼んでるけど……どんまい！私はケイミーちゃんから聞いた方が幸せだから助け舟は出ささないでおくね！

「あ……つまり、この国を治めてる『海神』ネプチューン王には4人の子供が居てね、1番下が人魚姫様、そのお兄さん達がさっきの3人の王子様達なんだよ」

「やーでも、私が聞きたいのはバンダー・デッケンという人は何100年も前の呪われた海賊では!?という事です！」

ブルツクの問いに調子を取り戻したパツパグが答える。

「まー……伝説なんてモノには尾ヒレハヒレ付くもんでよ、実在はした様だが実際そのイカれた船長……バンダー・デッケンはこの魚人島へ行き着きこの国で生き絶えたと聞いている。現におめエらの遭った船は正に伝説通りのフライングダッチマンだったろうが、乗ってるのはその子孫……」

「『バンダー・デッケン九世』よ!!」

「ケイミー?ケイミー??決めを取らないでケイミー……」

子孫つてコトか……なかなか厄介そうなヤツではありそうだし、メタな話をすると物語に関わってこないハズもない……か。

別に私の嫁に手を出さないのならその九世とやらがどんな悪党だろうとどうでもいいけどね。脅迫の求婚状って時点でかなりグレーな所だけど…まあまだ人魚姫は嫁になってないし、会ってもないから私がソレに対して怒るのはお門違いだろう。

「お、また居たぞ！オバハン人魚！」

バンダー・デツケン関連の話を全く聞いていなかったルフィとウソツプが下を指差しながらいう。

…あり？あの人魚は尾ヒレが二股なんだね、普通に歩ける…。

「ココロバーサンみてエに二股のヒレだな、ケイミーも30越えたらあの足になるんだろ？」

「そうだよ、よく知ってるねー」

30歳のケイミーちゃんとか絶対大人の魅力ましましてくっそ美人になってる事間違いないじゃん…ていうかルフィ詳しいね、私がない所でそういう話にでもなったのかな？

「あっち見ろ！赤ん坊だ。魚人が父親、その子供が人魚と魚人！面白エなく！色も大きさも色んな奴が居て楽しいな〜」

「人魚と魚人が結婚した場合、子供は人魚か魚人で男か女。つまり4パターンのお楽しみだ」

つまりケイミーちゃんや入り江の美女達、そしてシャーリーが人魚の女に生まれてくれたのは奇跡なのか…!! ありがとう神!! ありがとう!!!

「ここから高速に乗ろう」

タクシーが最初ケイミーちゃんが見せてくれたウォーターロードに乗る。あの時のドーナツ型とは違ってこれはきちんと道になっているようだ。

「ん? アレはなに?」

その時、沢山の煙突から煙がもくもく昇っていく工場のような建物が目に入って尋ねた。気になったのは建物というよりかはその壁に大きく取り付けられた海賊旗だけだ。

「あー…あれは「おかし工場」」

「海賊旗の方は?」

ドクロに厚い唇を描き、海賊ハットを被った海賊旗…女海賊が船長なのかな?

「…あれと同じモノが島の入口にも港にもある。この島は今あの海賊旗に守られてんのさ! マークの持ち主は「新世界」のシャーロット・リンリンという海賊! 通称「ビッグ・ママ」…「四皇」の1人だ」

あー…四皇…。そういえば白ひげがそんな感じの海賊の話をしていた様なしななかつた様な…。うーん、覚えてない。

「戦争の前は「白ひげ」の名でこの島は海賊達の手から守られてたんだが…今はビツ

グ・ママがそうだ。その代わり毎月大量の“甘いお菓子”を要求してくる、さっきの工場はその為のものだ。そうやって巨大なモノに守って貰わなきゃ国が成り立たねえ工程、ここは海賊達の往来の激しい危険な場所なんだ」

そりや、そうか…。海賊が新世界に行ったり、逆にこっちへ戻ってくる為には魚人島を通らないと無理って話だもんね。

でもその話で1つ気がかりなのは…。

「白ひげの名じゃあダメなの？」

「確かに“白ひげ”は戦争で死ななかつた、だが同時にその海賊人生から引退したのも事実。世間に轟いていた四皇の白ひげは死んだも同然よ…：そうなたらこの国のバツクに白ひげが居るって事実は大した抑止力にはならねエって事さ。事実あの年は例年より暴れ回る海賊達が急増したから、この国の王様は“ビッグ・ママ”に名を借りたんだ」

…あー、白ひげもそんな事言ってたなあ。ナワバリの奴らにや悪い事をした…：とか何とか。

そうか…：ふーむ…：こつちの問題も中々に根深そうだ。

「ビッグ・ママ海賊団には『四異界』も居るからな」

「??:よんいかい??:」

なにその四皇みたいなの。

「なんでおめーが知らないのかは分からないんだが…2年前から突如として姿を現し、この世界を荒らし始めた大海賊…『狂神レイ』。奴の登場で政府は確信したのさ…。……この世界に、今まででは考えられないくらいに強力な悪魔の実際の能力者が現れ始めてる事に。そいつらの事をまるでこの世界の人間じゃない、とでも言うように現した呼び名が『四異界』だ」

「レイ…」

間違いない安城 零の事だろう。パツパグはレイがまず1人目、と言った。

「奴の能力は未だに政府も解明出来てないんだ、だが1年前…大将『黄猿』が奴と遭遇して敗走した事実がある」

「はあ!?!」

「黄猿ってあの黄猿だろ!?!」

零…レイ。やっぱりかなり強い…!黄猿が逃げ帰ってる姿なんて想像も出来ないってのに…。

「ただの負けじゃねエ…大敗北だ!その2人の戦闘が終わった後も狂神は変わらず姿を現し、黄猿は一時期姿を見せなかった。…海軍は青キジとお前の『氷上決戦』の時と同様に黄猿の敗北は隠したかったみたいだが…状況から見て結果は誰の目からも明らか

だったのさ。…ま、四異界の中でもコイツは桁違いだからな。ちなみに」

「イリスちゃんも四異界の一人だよ！」

「ケイミー？ケイミー…」

「他には、『グリーンビットの魔女』と、ビッグ・ママ海賊団の『超彩ちようさいのサアヤ』がいて…」

「ッ…!!?、ケイミーちゃん！今なんて!?!」

ガバツと血相変えて飛びついた私にケイミーちゃんはビクツと体を跳ねさせた。ああ、驚かせてほんとにごめん、でもどうしても聞き逃せない言葉が…いや、名前が聞こえて…！

「ビッグ・ママの四異界って…」

「ちよ、超彩のサアヤ…だよ？ “カミカミの実” の能力者で、将星を束ねる立場の…」

カミカミだか将星だかは分かんないけど…その名前は私が…いや、“彼女” が探し求めていた人だ…!!

「沙彩…!!」

ルフィ達もその名前を聞いて私の顔を見つめてくる。2年前、ブルックやペローナちゃんにも私の事情は話してあったから沙彩の事は知っているのだ。

「ち、因みにグリーンなんちゃらの魔女は…」



「魔女さんの方は名前が知られてなくて…。ただ、『ウィザウィザの実』の能力者で、とんでもなく強いって噂なの。あんまり人前に姿を現さないから、1年前まではその存在すら誰も知らなかったんだよ」

…その魔女とやらも、もしかしたら王華の過去に関係がある人かもしれない。

ここに来てようやく手掛かりが見つかった…！名前が同じだけの原作に存在するキャラクターじゃない事を祈るしかない…!!

## 146 『女好き、出会いの人魚姫』

「さア着いたぞ、ここがおれんちだ!!」

「おお!おつきい!」

四異界や沙彩の話もほどほどに、私達はパツパグの家へと辿り着いていた。あんまり長く沙彩の事を話した所で今はどうしようもない事だ。ビッグ・ママに会いに行く理由が出来たってくらいかな。

パツパグの家はなかなか独創的なデザインだけど、その大きさはかなりのものだ。まるで貝のタワーとでも称せばいいだろうか。

「お帰りなさいませ、ご主人様」とか言われてるし…あの人は男だけど、私もあんな感じのメイドが欲しいと思いました、まる。

「アレは何だ!?!」

「1階は「クリミナル」のお店なの!誰か騒いでるね!」

確かに店内からは騒がしい声が聞こえてくる。…だけど私の耳がその声を間違える訳もなし!私はダツシユで扉の前に向かって入口の扉を勢いよく開けた。

「ナミさー!ん!!無事で良かったあ!」

「あ、イリス!!」

そのままナミさんの胸にダイブする。ンフフ：極楽ぽよん!

「キャハっ! イリスちゃんも無事で良かったわ」

「ミキータもね! ロビンとペローナちゃんは：居ないか」

「ここに居るのはナミさんとミキータだけっぽいけど、2人が無事だと分かったのは良かった! ロビンとペローナちゃんはどこに居るんだろうか。」

「何してたの?」

「ああ、それが：あ、ルフイ：：あゝゝ!! ケイミーじゃない! 久し振りね!」

みんなも店の中に入ってきて、ナミさんとミキータはケイミーちゃんとの再会を喜び合っていた。

「む、ムツシユパツパグ! いい所に：：! 少々困ったお客様が：」

「ちよつと、ここあんたのお店なんだって? 何よこの値段、ボツたくり!? まけてよ!」

ギューつとパツパグの頬をつねりながら言うナミさんに店員の魚人が狼狽えていた。いや：：うちの正妻お金にはちよつと：。

「水くせえ事言うな! おめエらには2年前の大功がある。何でもタダだ、好きなだけ持ってけ!」

「え? ホント!?!」

好きただけって言うならほんとに好きただけ持つていくけどね!

あ、あれ可愛い!これも可愛い!これも可愛い!これ、あれも…。

「ムツシユ、お店空っぽです!」

「手加減ナシだな!!」

ふっふっふ…あのねえパツパグ、日本にはこんな諺があるんだよ。…口は災いの元ってねエ!ハツハツハ!!

私だけじゃなくて、他のみんなもタダと聞いて袋一杯に服を詰め込んだからなあ。海賊にそんな事言うのが悪い!

「アレ?何でしょう、店の外が騒がしいですね」

ブルツクが素晴らしい、みんな外に目を向ける。外は沢山の人が忙しく走り回っており、「あの方がー!」とか「あの方よー!」とかよく分からない事を言っていた。とにかく緊急事態って事かな。

「ムツシユくく!!大変です!!」

慌てて店の関係者が外からパツパグを呼びつけ、外に連れ出して空を指さした。私達もパツパグに続き上空を見上げる。

…くじら?上に誰か乗ってるっぽいけど…。

「りゆ、竜宮城からあの方が…!!」

「あ、あア〜っ!? あ、あの方は…!!?」

パツパグも口を開けて驚き、ケイミーちゃんも何であの方がここに!? と動揺している様子だ。

町の人達も全員動揺しており、国の一大事なのかと疑われ始めている。そんなによばい人なの? あのひげもじや。

やがてひげもじやは私達の近くまで降りて来て、一緒に来ていたサメに話しかける。

「おいメガロ、この者で間違いないんじやもんな?」

「あれ? あのサメ…海中で見たわよね…」

えーつと…あんなサメ居た? 全く覚えてないんだけど…。

「おい! 『麦わら』の人間達っ! お主らを竜宮城へ招待するんじやもん!!」

「え、竜宮城!?!」

えー!? じやあそこには人魚姫がおりますよねえ!? 行く行くー! もうめつちや行ききたい!! 今すぐ行くこう早く行くこう!!

「い、イリスちゃん、このお方はこの国の王…ネプチューン王様だよ。私でも生で見たのは初めてで…」

「そっか、じゃあいい機会だから一緒に行くこう!」

ケイミーちゃんを横抱きしてびよん、とメガロと呼ばれたサメに飛び乗った。

ネプチューンは自分用のくじらに乗ってるから私はこっちのサメでいいや。みんなもメガロに乗り込み、そして空へと泳いでいく。竜宮城は空にあるのか、なかなかロマンがあるね。

「ほっほっほ、そのサメ…メガロは娘が大層可愛がっておるペットじゃもん！あの時はメガロが帰って来んと泣いて手に負えなんだ…！クラークに襲われとつたとは危ない所よう助けてくれたもんじゃもん！」

「良かったねメガロ。所でお父さん、娘さん下さい」

「やらぬわ!!お父さんと呼ぶでない!!」

へーん、別にいいもんね、ダメなら奪うまでだし！

「い、良いのかな、私まで招待されちゃって…！」

「友人も構わんじやもん。娘のペットを救ってくれたお礼に宴を開こうかと思つとるし、そうなると人数は多い方が楽しいじゃもん」

「それにケイミーちゃんを突き返す様だったら私がこのおっさんブツ飛ばしておくよ！」

「バババババカおめー！ネプチューン様だ！」

海賊に様も何もあるかっての。王様がなに？未来のお父さんでしょ。家族に物怖じしてられるか！

そう考えたら私の家族つて多いな…モリアが父親に居る時点で相当やばい家族構成になりそうだ。

「ああ、言い忘れていたがお前達の仲間を既に1人招いておる。そやつが今さつさと酒盛りを始めてしまつとる。宴はみんなでやる方が楽しいと言うのに…身勝手な男よ!」

「ゾロかー」

「ゾロね」

酒と身勝手と男で特定余裕だよ…。

あ、竜宮城見えてきた。あのシヤボン玉に包まれてるのがそうだよね。

「他の仲間達も直に兵達が捜し出して城へ招くので安心するんじゃないよもん!」

「私達みたいに逃げ出しちゃったら捕まえるの困難な人達ばかりだけど大丈夫かな…」

今の私達の状況から考えれば、普通兵士達が近寄つて来るのは捕まえに来たんだつて思うよね…。ペローナちゃんは変な所でおつちよこちよいだけど、ロビンは絶対捕まらないと思う。

「ねー、ところでおじいちゃん」

「海神ネプチューン様だからア!」

「そうだよナミさん、おじいちゃんじゃなくてお父さんだよ」

「あ、そうね」

「お前らマジで何なんだよ！もう恐エよ!!」

騒がしいヒトデだなあ。人魚姫を嫁にするんだから海神だろうがネプチューンだろうがお父さんでしように。

「何じゃもん。あとお父さんではない!」

「ここは深海1万mなのに、この魚人島のある場所だけどうして明るいの?」

確かにそれは私も気になってた事だ。最後土石流から逃れる為に海溝に飛び込む前は確かに真つ暗だった筈なのに…。その更に下へと潜った途端明るくなつたんだからもう意味が分からない。

「ほつほつほつ、魚人島のある場所が明るいのではない…世界で唯一光の差すこの海底に…遠い昔魚人達が住み始めた。それが魚人島!ここには地上の光をそのまま海底に伝える『陽樹イブ』という巨大な樹の根が届いておる…!」

「光を…!?つまり、1万mを超える光る根っこを持つ樹があるって事…?」

「そうとも、学者達は何かと理屈つけておるが、地上で受けた光をその根に灯す神秘の樹じゃもん。その樹の根の呼吸は更に空気をも海底へと供給する…!」

へえ…サニーに使われてるっていう宝樹アダムと何か関係ありそうだね。

「地上に陽が差せば海底も明るく、地上の夜には光を失う。何の慈愛か…我々もまた、当然という顔をして太陽の恵みに生かされておるんじゃもん!」



「ふーん…おっさん、ハラへった」

「ほっほっほ…もう着いたぞ、これが入口じゃもん」

案の定ルフィはあんまり興味無さそうだ。正に花より団子だなあうちの船長は。

それにしてもこれか竜宮城の入口か…。竜宮城自体が魚人島と同じくシャボンで覆われているから、魚人島が体、竜宮城が頭の雪だるまみたいだ。

魚人島を覆うシャボンから竜宮城を覆うシャボンへ移動する為の入口が今頭上にある輪つかだろう。この中に入って上に行くという訳だね。

ネプチューンがその輪つかの近くにあるインターフォンをピンポーンと鳴らせば、音声機から『はい』と声が聞こえた。

「わしじゃもん」

『…国王様っ！只今通路を降ろします！』

降ろす？…うわ、すご…輪つかの所まで水が流れて来たんだけど。

そうか、魚人や人魚はこれさえあれば上に行けるのか…便利だね。

「シャボンをしっかり張るんじゃもん」

「はい」

私達がメガロの体に浮き輪の様に巻かれているシャボンの中に入れば、ネプチューンとメガロはその輪つかに入り上へと泳ぐ。

「凄いね、ウォーターセブンで見た水のエレベーターみたい」

「あれと違って上へは自力で登ってるんだけどね」

「流石魚人って感じだな」

そして、さほど時間をかける事なく登り切った私達は目の前に大きく聳えるその城を見てまた感嘆のため息をついた。

パツパグの屋敷がノミの様だ：詳しくは分かんないけど、細部の意匠一つ一つが拘り抜かれているっていうのは素人目でも分かった。

「王が戻られたぞ、門を開けよ！」

「ネプチューン王がお戻りに〜!!」

「どこへ行かれたのかと：!!」

ネプチューンが到着した事で城正面入口のおつきな門が開かれていく。：：おお、中も凄い豪華だ！兵士の数もとんでもないし：まさに王の城って感じ！

「我が城じゃもん！ゆるりとしてゆけ！」

「何がゆるりとしてゆけですか！まったくあなたと言う人は!!ご自分の立場を弁えもせずまた勝手に城外へ!!護衛兵も引き連れず下界へ降りるなど言語道断!!何か起きてからでは遅いのです、今この国がどういいう情勢にあるのかあなたは——」

我が城でめっちゃ家臣に怒られてますけど。

…ん？ルフィ、どこ行くんだろう。

「…私も行こ」

あの説教長くなりそうだし、それより私は人魚姫を探さないといけないからね！  
軽くナミさんの肩を叩いて、ちよつと散歩してくる、と言いつて残してルフィを追った。

\*\*\*

「ルフィーー！」

「お、イリス！イリスもんまそうな匂い辿って来たのか？」

「え？いやそんな事は無いけど」

飯の匂いがしたからふらつとどこかに歩き出したのか…。ん？なら何でこんな所で立ってるの？

「この扉が閉まったら匂いが消えたんだよ、多分この部屋が宴会の会場なんじゃねエか？ゾロも先に来てるんだろ」

「ああ…なるほど。そうなると人魚姫もここに居るのかな」

宴会つてくらいだから参加してる可能性も充分あるだろう。それにしてもこの扉……  
 とんでもなく分厚い。その周りの壁も相当頑丈そうで、宴会の会場だとすればちよつと  
 オーバースペックなんじゃないかとは思う。

「それに……」

扉や壁に無数に突き刺さる武器の数……剣や斧、槍に鉞まさかり、鉄球など種類も豊富にある。  
 なかなか斬新なおシャレ……という訳でも無いとは思うけど……。

まあ、いいや、とにかく入ってみよう。

「おじゃまー」

ギイイつと扉を開き、ルフイと一緒に中に入る。うわ……真つ暗……宴会場じゃないみた  
 い。

仕方がない、ここは暗闇耐性を倍加して……。……ん!!?

「お、い……い匂いの食い物があるぞー!じゃここ食糧庫かな?まあいいや、少し貰おう  
 !」

「待って」

「ぐエっ……!?!」

少しだけ開けた扉から差す光で見えた皿に乗った食べ物へとルフイが走り出そうと  
 するのを、首根つこを掴んで阻止した。

だつてそうだろう、そのまま真つ直ぐ走つていけば……この人を踏みつけてしまふ。  
「何すんだイリス！」

「ちよつと、あんまり大きな声出すの起きちやうじゃん！せつかく可愛い顔して寝てる  
天使がここに居るつていうのに……」

「……う、う……ん……だ、誰か……いらつしやるんですか……？」

「あ」

ルフィと私の声でその人は目を覚まし、部屋の灯りを点けた。……おお、明るい所で見るとこれはまた……なんて美少女!!体は私の何10倍も大きいけど!!

淡いピンクの絹の様な長髪や、透き通る様な海の青の瞳……まっちがいない……こんな美少女、人魚姫しかあり得ないでしょ!!

「あ、え……お、お父様でもお兄様でもない……!?ど、どちら様でいらつしやるんですか!?あなただ方は……!!」

「見て、ルフィ、私の嫁」

「ああ……うん、まー言うとは思つてた、おれ」

「こんな可愛いんだからそりやあ嫁にするでしょ!あのおっぱいに顔を埋めたい!!いや……体を埋めたい!!」

「あなた方もわたくしの命を取りに来たのですね!!ですけど恐くなんかありませんよつ

！わたくしはネプチューンの娘なんですからねっ！恐くなんか……!!…う、うえくくくん!!誰かくくくっ！お父様あ！お兄様あくく!!」

泣いてる顔もなんて可愛いんだ…とか言ってる場合じゃないか。…ん？今あなた方もって言った…？

……誰かこの子の命を狙ってるっての…？

「うわああああん!!お父様あ！フカボシお兄様あくく!!」

「おいおいっ！おれは何もしねエよ！何かするのはイリスだから泣くなよ！」

「ちよ、今それは私のイメージダウンに繋がるんだけど!!」

「リュウボシお兄様あくく!!マンボシお兄様あくく!!人間のお方がわたくしの命を取りにお部屋の中にいらっしやっておられますくく!!」

…うーん、参ったね…。体格に見合ったかなりの声量だし、ここに兵達が雪崩れ込んでくるのは時間の問題か…そうなると姫様の証言で私達は一躍人魚姫暗殺の犯人だ。

それに、この子からすればそりや怖いだろう。寝てる間に部屋に知らない人間が2人も居たんだし、それに元々誰かに命を狙われている様な発言もしてた。…私達をそいつの仲間だと思うのも仕方ないか。

「っ…!？」

「え…!？」

その時、私達が開けていた扉の隙間から…斧が飛んできた。かなりの勢いで…誰に？私？ルフィ？…違う…!!これこそがこの子の…人魚姫の命を狙ってるものの正体…!!

「こな…クソがああああ!!!」

人魚姫の胸へと吸い込まれる様に飛来する斧の腹を蹴り飛ばし、壁に激突させた。私からすれば威力の無い低級な攻撃だけど…あんなの戦闘経験すら無さそうなこの子の胸に刺さったら…っ!!

「…怪我は無い？」

「…え、あ……」

急な事で驚いているのか、私の顔と壁に刺さった斧を何度も交互に見る姫様。…何しても可愛いなこの子…、そんな子を…どここの馬の骨とも知らないクソ野郎が、殺そうとしたんだよね…？

扉を開けていた私も悪い…怖がらせて本当に申し訳ないとは思う…!だけど、この斧を投げた奴はぜつつたいに許さない…!!投げた事にどんな事情があろうとも、必ず地の果てまでも追いかけて回して…ポッコポッコにブツ潰してやる。

## 147 『女好き、人魚姫を攫う』

「しらほし姫様〜!!今参ります!!」

「見ろ、扉が開いてるぞ、何事だア!!」

「兵士達が来たみたい…!でも、私ちよつと斧投げた奴探してくる!」

「あ…お待ち下さい…!」

この際兵士に見つかっても構わないという勢いで部屋を出ようとした私と隣にいたルフィを、その大きな手のひらで掴んで背中に隠した。

直後、部屋に息を切らした大勢の兵達が入ってくる。

「しらほし姫!…無事でありますかア!!尋常ならぬ姫様の泣き声、心配しましたぞ、この扉一体誰が!?!侵入者でありますか!?!」

…この男、竜宮城入った時にネプチューンを怒ってた人だ。多分大臣クラスの偉い人。

それにしても…しらほしちゃんか。私とルフィを庇ってくれてるんだよね…?

「…ご、ご心配をお掛けしました…!何でも御座いませぬ、何か、悪い夢を見てしまった様で…!」



「…はア…夢…。左様ですか…何事もなければ、まアよいのですが。…ああそうだ、少しお耳に入れておかねばならない事が…。例の…メガ口を助けたという海賊“麦わらのルフィ”の件ですが、どうにも厄介な事に…!!」

厄介…？

私が首を傾げてる間にも、その人は話を続けた。どうやら入り江の人魚達が数名攫われたとか、シャーリーの占いでルフィと私が魚人島を滅ぼすという未来が出たとか…ちなみにシャーリーはその未来を見てかなり取り乱し、今は寝込んでいるらしい。

そして何故か入り江の人魚達を攫った疑いが私達麦わらの一味にかけられているそうなのだ。私が人魚を攫う？まああり得なくはないけどね。

「…という訳で、行方知れずの人魚の娘達を“攫った疑い”、そして未来の“不確定危険人物”として『麦わらの一味』を全員城の牢獄へ幽閉する事が決定いたしました。先に竜宮城へ来ていた剣士は既に身柄を確保、先程到着した4人の仲間も恐らくもう拘束完了の頃…!」

ナミさん達か…拘束とかはこの人達では無理だろう。特にゾロの身柄を確保したつていうのが信じられない。あの脳筋がはいはい言つて捕まってる姿を想像する方が難しいというものだ。

「しかし一緒に城内へ入った筈の船長“麦わら”や“女王”が勘付いたのかまさかの失

踪……城の何処かに潜んでいると思われまますので充分ご注意を。魚人島内に居る他の仲間達も順次捕え国の安全は必ずやお守りします！せつかくのメガ口の命の恩人達に宴どころかお縄を差し上げる事になろうとは残念至極……ああ、もう5分を過ぎました。我々はこれにて！」

そう言つてその男は兵士をぞろぞろと引き連れて部屋を後にした。：5分？姫だから面会時間が決まつてるのかな？

「……もう、大丈夫でしょうか。あの、本当にありがとうございました、先程は大変な非礼を……どうかお許し下さい。メガ口の命の恩人があなた様方でいらつしやつたとは……！」

「わっ……、ううん、気にしないで」

背中隠していた手を顔の前まで持つてきて開き、私とルフィはその上に座る。うわ……間近で見てもなんて美しいお顔……ていうか私しらほしちゃんの手の平に座っちゃつてる！舐めていいかな？

あれ、それにこの部屋メガ口も居たのか、気付かなかつた……。

「お名前は……ルフィ様と……」

「イリスだよ、嫁にならない？」

「イリス様……。お、お嫁さん、というのはその……ふ、夫婦になりませんか、という事で御

座いますか？ですがわたくし…あなた様の事は今知ったばかりで…」

「そんな事気にしてるの？お互いのコトなんてこれから知ってけば良いんだよ。少なくとも私は、さっきの人に私達は危険だって言われているのにも関わらず私達を助けてくれたあなたの優しさを知ったよ？」

純粹とも言えるけどね。私達が本当にしらほしちゃんを狙った海賊なら彼女の判断は間違っていたと言える。

「で、でもイリス様は海賊でいらつしやるので…悪いお方なのは…？」

「そうだねえ…、私もルフイも海賊だから世間一般から見れば悪者だよ。それは間違いないけど、けどしらほしちゃんにとつても私達が悪者かどうかは、それはしらほしちゃんが見て決めてね」

ああもう、本当に可愛いなあこのコ。こんなおつきな体してるのにまったく威圧感がないどころか癒されるよ…。雰囲気がほわほわしてるというか。

「お仲間の方々はウチの兵士達に捕まってしまったと…」

「ああ…大丈夫大丈夫、お前らじゃあいつらを本当に捕まえるのはムリだ！まー、そんな事いいよ、さっきのオノ何なんだ？イリスかおれが居なきやお前死んでたぞ」

「そもそも私達が扉を開けなきやあのオノは飛んでこなかったけどね」

「しらほしちゃんに会えたから扉を開けたのは正解だったけど。それにその犯人もすぐ見つけ出してブツ潰すし、早期発見出来たと思っておこう。」

「犯人は…分かっていきます。バンダー・デッケンというお方で…結婚をお断りしたわたくしを恨んでおいでなのです…。その殿方は「マトマト」という悪魔の呪いを受けておられ…いつ、どんな場所からでも、”的”と定めたわたくしの命を狙う事がお出来になるらしく……ですから外は危なくて、わたくしはこの「硬殻塔」こうかくとうから一步も外へ出られないのです」

硬殻塔…そうか、だからこの部屋の扉も壁も分厚く頑丈なんだ。

「一步も出られないってどんくらいなの？流石に護衛付きで散歩くらいは行ったことあるんでしょ？」

「いえ…ここに來てからもう10年になります」

「は？10年??」

「その上兵士の方達がここにいられるお時間は5分とお父様が決めてしまわれて…。ですからわたくしのお話し相手はメガロだけ…大切なお友達なのです」

それでメガロを助けただけで宴までやってくれるって言ったのか。

…バンダー・デッケンね…

「お、おいイリス…覇氣漏れてるぞ」

「…あ、ごめん」

おっと、危ない危ない…。覇気はどうしても相手を威圧しちゃうからしらほしちゃんを怖がらせるとこだった。

「まー…ならよ、お前もうこんな所で閉じ籠ってなくても大丈夫だろ」

最初に見た食べ物盛り付けられてある皿が置かれてる机の上に、よつ、と飛び降りたルフィがそう言い、しらほしちゃんが不思議そうに首を傾げた。

「イリスを怒らせて無事だったヤツなんて今まで見た事ねエ、だからそのワンダー・ゼツケンもイリスがブツ飛ばすだろ」

「バンダー・デツケンね。名前以外は何も間違った事言っていないけど」

バクバクと料理を食べ始めたルフィには背を向け、またしらほしちゃんに向き合う。

「しらほしちゃんってさ、人魚姫なんだよね？」

「はい、国王ネプチューンの娘です。しらほしと申します」

「ん。…バンダー・デツケンがしらほしちゃんに求婚する気持ちは良く分かるよ。だって可愛いし、穏やかで、埋めたいくらいのおっぱい。だけど手段がクソ野郎だね、嫁にするって決めたのなら殺すんじゃないかって死ぬ気で守るぞってくらいの気概を見せない」と

ヤンデレってヤツ？束縛が強いまでなら私もそうだから分かるけど、好きだから傷付

けるってのはさっぱり理解できない。私とは正反対の考えだよ。

「やっぱり、わたくしにはあなた様方が悪いお方には見えません。『海賊』でしたら冒険というものをなさるのですか？ 『太陽』をご覧になった事がありますか？ それに……色々な種類の『お花』やお体が毛だらけの『お動物』、『お森』という緑色の場所へはいらっしゃった事がありますか？」

「ふふ、質問攻めだね。うん、ココには陽樹イブの光しかないけど、地上には当たり前の様に太陽があつて、月があつて、他にも沢山の星が夜空に煌めいてる。花の種類なんて数え切れないほど一杯あるし、動物だつてそれは同じ事だよ。森だつて色々な森があるし……なんなら空に島もあるよ？」

「まあ……それは……とつても素敵なお話ですね……！ イリス様はお空のお島に行かれた事が……？」

「おー、目が輝いてらっしゃる……。メガロしか話し相手が居ないっていうなら、こんな話を誰かからしてもらおう事なんて無かつたんだろうな……。」

「空島って言うんだけどね、雲の上に島があるの、凄いでしょ？ 可愛い女の子も一杯居るし……まあ、ちよつと空気は薄いけどね。あ、でも空島にはとつても大きな森があるよ？ 動物だつて沢山いるし」

「……わたくしも、許されるのならばいつか行つてみたいです……！」

「連れてってあげるよ？今すぐは無理だけど…私の夢が叶った後とかなら何度だって、どこへだって連れて行ってあげる」

「イリス様の夢とは、どんな物なのかお聞きしても宜しいですか？」

勿論、と頷いて私の夢の話をする。私の言葉一つ一つに聞き入る様に相槌を打つしらはしちゃんとの話は、私の夢の話が終わった後も続いた。

聞き上手過ぎる…話しててこんな気持ちのいい気分になったのは初めてだよ、私の中ののしらはしちゃんの株がぐんぐん上がってく…。

\*\*\*

「じゃ、行こっか」

「もう、行ってしまわれるのですか？」

一通り私達が歩んできた冒険や出来事を話してる内にしらはしちゃんとはそれなりに仲良くなれた…と思ってる。しらはしちゃんが何話しても楽しそうに聞いてくれるモンだからつい話し込んでしまった…。

「しらほしちゃんも行くんだよ。したいんでしょ？冒険。良いよねルフィ」

丁度しらほしちゃん用に作られていたご飯を平らげたルフィにそう確認を取れば、彼は迷わず頷いてくれた。ルフィが断る訳ないけどね。

「い…いけません…！その様な事…」

「ごめんね、しらほしちゃん。私達海賊だからさ…いけない事をするのは慣れっこだよ、さっきの話でも私達がした悪事は一杯あったでしょ？それにまた何か飛んできて私や、その上ルフィも居るんだから大丈夫！絶対に守ってあげるから！」

「で、ですけど…！」

ん…まあ10年もここに閉じ籠ってたら出て行くのにも勇氣がいるか。幼い頃からずっとここを出てはいけないと言いつ聞かされてるだろうし。

「しらほしちゃん自分勝手な事したら城のみんなの迷惑になるって思ってるんだよね？うんうん、分かったよ。…じゃ、私が攫ってく」

「え？」

「メガロ、あなた大きいんだからしらほしちゃんを口の中に隠せない？いや、隠して。そんでここ出よう」

「シャ!!？」

無茶言ってるのは分かるけどお願い！隠して出て行った方がスムーズに事が運ぶし、



城内で戦闘にならなくて済むから！

「で？ 私に攫われる可哀想なお姫様は、一体どこに行きたいのかな？」

「わ、わたくしは……、い、いけません……その様な事……」

「いけない？ はは、しらほしちゃんは今から私に攫われるんだよ？ わるーい海賊に攫われて、その先がたまたましらほしちゃんの行きたかった場所かもしれない。……ただ自分の行きたい場所を言うだけだよ」

「……………、……………」

私の言葉の後暫く間を置いて、覚悟を決めた瞳に涙を溜め、しらほしちゃんはゆっくりと口を開く。

「……『海の森』……」

「あー、今急に海の森にしらほしちゃん攫いたくなつた。海賊だから人攫いもお手の物だよ。ねーメガロ」

「シャ……」

お、諦めてくれたかね。じゃあ早速……。

ドドオン!!

ズドオン!!

ドン！ドオン!!



んに微笑みかける。

嬉しいんだよね、外に出られるのが、行きたい所へ行けるのが。

私だつて境遇は違うけれど、ナミさんと初めて会った時は情けなくも大泣きしちゃったっけなあ。

「…ん、音止んだね。じゃあ行くつかメガロ、悪いけど誘拐の共犯者になつて貰うよ」

「シャー…」

そんな感じでしらほしちゃんをメガロの口の中に隠し、私達も簡易シヤボンを身に纏つて重い扉を開き外へ飛び出した。

…やつぱり沢山の間人…海賊達がいるね。あれ、ブルックも居る。それに縛られてブルックに担がれてるけど、さつきしらほしちゃんの部屋に駆けつけて来た大臣的なタツノオトシゴつばい人も。

「ま、今はいいや。お願いねメガロ…!」

「お、オプ…!」

…や、ほんとごめん。もうちよつと余裕あるかと思つてただけど…、はは。

## 148 『女好き、初めての外とタイプじゃない男』

竜宮城から出て魚人島のシャボンへと入った私達は、しらほしちゃんの案内で「海の森」とやらに向かっていた。

案内されたら誘拐じゃないような気もするけど…細かいことはこの際置いておこう。とにかくこれは誘拐なんです。

「もう竜宮城は抜けたからメガロから出てもいんじゃない?」

「い…いえ、わたくしまだこの中の方が…」

「そっか」

メガロ…苦しそうだけどもう少し頑張つて!しらほしちゃんの為だから!

「どうだ?10年振りの外!」

「ドキドキします…わたくし、とても悪い事を…」

「悪いわけねえだろ、外出るだけでよー」

「それにしらほしちゃんには私に攫われてるんだから仕方ないよね」

はあ…とはいえ座る場所ミスったかも。しらほしちゃんはメガロの口の中だし、私はメガロの頭上に座ってるからこれじゃ可愛い顔が見えない…。

「この様な事を…冒険というのでしょうか？」

「そうだね、ドキドキするのならそれは冒険だよ。…それで、海の森って何なの？」

「お墓です。建つてからまだ1度も訪れていないお墓があるのです…！10年間ずっと…1番行きかけた場所です」

お墓か…じゃああんまり触れない方が良さそうだね。10年つてのがしらはしちやんが硬殻塔に軟禁されだしたのと同じ時期になるから…何かしら関係があるのかもしれないし。

不用意に突いて傷付ける様なマネだけはしたくない。

「…？なんか飛んでるなあ、遠くて良く見えねエけど…イリス見えるか？」

「んー？」

ルフィが指差す方向を視力倍加して確認すれば、かなり遠くにシャボンをつけた海獣が数体空を飛んでいた。

背には沢山の魚人が乗っており、何かお祭りでもあるのかと納得して視線を外す。

「魚人達だね、なんか一杯いた」

「ふーん」

自分で聞いててなにその返事は！興味ないなら聞くなー！

「はー。…あ、そうだ」

よつ、とメガ口の頭から飛び降りて、腕を伸ばしメガ口の歯を掴んで口の中に降りた。よしよし、これでしらしちゃん顔と顔を合わせながらお話しが出来るね。

「しらしちゃん髪ってほんとに綺麗だよね。どんな手入れしてるの?」

「小さい頃からのお気に入りのおブラシがありまして、髪を梳くのはずっとそれでやってるんです。それ以外には特に気にかけている事はありませんが…私はイリス様のお髪の方が好きですよ」

「えへへ、ありがと、髪の手入れには気を使ってるんだー。私って結構体動かす方だからせめてお手入れくらいはキチンとしてあげないとね」

髪の話で言えば王華も凄いいけどね。あの純白の髪はなかなかだと思う。

「そういうええも何も飛んでこないけど…武器が飛んでくる頻度ってどれくらいだったの?」

「えつと…数時間に1度の時もあれば数分おきに何回も来られたり…決まってるはいません」

「気分って事か。…ますます腹立ってきた、美少女の命は世界より重いってのに」

そんなにしらしちゃんが好きなら正々堂々とアピールしたらいいのに。

さくらを使ってしらしちゃんを襲わせて、間一髪の所で助けるとかでもいいじゃん、それだって作戦なんだしさ。いやそれも腹は立つけど…ただ思考放棄して殺そうっ

てなってるのだけはほんとにムカつく。

「私ならしらほしちゃんを泣かせたりしないよ? どうか、私の嫁になるつてのは」

「ふふ、イリス様にそう言つて頂くのは不思議と悪い気がしきね。励まして下さりありがとうございます」

「本気なんだけど…」

私の夢の話もしたんだから、ただの励ましじゃない事くらい分かりそうな物だけど：やっぱりかなり純粹な子なんだね。

例えるなら真つ白なハンカチつてとこかな。よし、魚人島を出る頃にはそのハンカチに大きく黒ペンキで『イリス』つて書く事にしよう。そうしよう。

そんな感じで楽しく話しながら海の森を目指すこと数分、マーメイドカフェの上も通り過ぎて、今はサンゴが丘の海岸付近上空までやってきていた。

でもなんか下が騒がしい…どうしたんだろ?…あ!

「おーい!! サンジ! チョップ! パ〜!! 鼻血はもう大丈夫なの?!!」

「あ、イリス! ルフィ!!」

喧騒の中心に居るのはサンジとチョッパーだった。近くに身体中包帯だらけで倒れてるハチも居るし、魚人達に囲まれてるけど。

囲まれてるのはアレだね、私達が人魚を攫つた犯人にされてるからだよね。でもごめ

ん、私今人魚姫攫ってるからその疑いは真実になっちゃったんだよねえ。

「お友達ですか？イリス様」

「海賊の仲間！黒いのがサンジで、角生えてるちっこいトナカイがチョッパー」

「トナカイ…？」

「ああ…えーつと、しらほしちゃんの言ってた体中が毛で一杯の動物だよ。でもチョッパーは凄いいから言葉を話せるの」

ヒトヒトの実とかの説明はややこしいから省いておいた。チョッパーが凄いのは変わらないし、まあこの説明でいいでしょ。

「見ろ！こいつらの船長が来たぞ!!」

「人魚誘拐グループのボスだ!!」

人魚誘拐の主犯は私だけどね。

「ちよつと降りるね、ハチが気になる」

「は、はい…お早くお戻りになられて下さい…イリス様がおそばに居られないと、ふ、不安で…」

「…え、誘ってるの？純粋なのは良いけど可愛すぎるのも罪だよね」

え？と目を点にするしらほしちゃんに手を振って、一旦地上に飛び降りた。ルフィもハチに気付いていたのか私と同じタイミングで飛び降りて来る。



「ハチー！やっぱりお前か！どうしたんだそのケガ、誰にやられた!？」

「それが教えてくれねエんだよ！おれ達に島を出るの一点張りで…」

「教えてくれない？…何でだろ、何か深い事情でもあるのだろうか。」

傷に関してはチョッパーが見てくれているから心配いらないうけど…さて、この周りの魚人達はどうしたものかな。私達に向けて来る敵意が尋常じゃないし…。

「や、やっぱり間違いなエ、船長の麦わらと…女王だ…!」

「女王って言うとおのママム・シャリーのお気に入りだろ!？」

「だが女好きだとも言われてる…！人魚を誘拐する動機は充分あるだろ!？最終的にはしらほし姫を誘拐する気なんじゃ…!」

「そんなバカな…！それは不可能というもの！姫はビッグキスの人魚、更に海神ネプチューンの愛娘、そんな事夢に描いても誰が実行するってんだ!」

「あつはつはつは!!だつてよイリス!」

「何がおかしいのさ、ルフィ…!」

「私が言わなきやルフィだつて絶対同じ提案してたクセに…！…あ、やば、メガロの限界が近そう…。」

「ウ…ウプ…！オ、オエエ…!」

「ぎゃ」

「あ」

「「え」」

…あーあ、メガロ、しらほしちゃん吐いちやったから見つかったじゃん。

いやー、それにしてもなんて可愛いんだろうしらほしちゃん。民に見つかったちやつて困った顔してるのがなんともまあ可愛い。好き。

「「し、しらほし姫様ア〜〜?!?!」」

サンジが振り返って石化してる…。ハンコックを見た時と同じ反応だね…。という事はハンコックとしらほしちゃんって系統は違うけど美しさは同等って事か、サンジレーダー分かりやすくもいいね。

「人魚姫誘拐事件だア〜!!!」

「今正に誘拐されている〜!!!」

「あ……、う、うえくん……すみませんイリス様あ……見つかってしまいましたあ……!」  
「へーきへーき。見つかったモンは仕方ないじゃん、切り替えてこ。だから泣き止んで、ね?」

しらほしちゃんを見上げて身振り手振りで何とか泣き止んで貰おうと言葉を紡ぐ。泣き顔も可愛いけど……やっぱり泣いて欲しくは無いから。

「つ……うえ!」

「よし……！捕えたぞ！！女王！！」

い、いきなりロープで縛られたんだけど!?しらはしちゃんに集中してたから周りなんも警戒してなかった……こんなロープいつでも千切れるけど、どうしようかな……。

「ぶへっ。ちよつと……あんまり手荒に扱わないでよ、私はか弱い女の子なんだよ?」

いつの間にかルファイ達も縛られており、私達を一ヶ所に固める様に押し飛ばされた。とはいえ……別にこの人達に恨みなんてないし、反撃はしなくていいだろう。しらはしちゃんを思つての行動なんだから私としては良くやったと褒めてあげたいくらいだ。

「あ……イリス様っ!あ、あの、違うのです、皆様……！イリス様とルファイ様はわたくしを……」  
「もう大丈夫ですよ姫様!こいつら全員打ち首に……」

「……ん?おい、お前ら!何か飛んでくるぞ!」

ルファイが上空の一点を見つめてそう言う。何だろう……ん……?でつかいサンゴに……誰か乗つてる……?

あれ、あいつさつきここに来る途中で見た、海獣に乗つてた魚人の1人だね……足が4本ある……何の魚人だろ?

「オイ、本当に何か飛んできてるぞ!しかもアレ……!!」

「まさか……!?バンダー・デッケン!!?」

「……あ……?」

バンダー…：テツケン？あいつがそうなの…？

手配書はあったけど、良く顔が見えない手配書だったから気付かなかった…。

…よし、ブツ飛ばそう。

「見イつけたぞオ!!のハズだ!!バホホホ!!しらほしィ〜!!」

「ずっと姿を暗ましてたあいつがとうとう島に現れた〜!!」

「姫様逃げて下さい!ここは俺達が!」

ブチ、と縄を引き千切る。あー…縄を無駄にしない為にも大きさを倍加すれば良かったかな。ま、いいか、私海賊だから弁償する必要ないもんねー!

「答えろしらほし!YESならば“死”を免れられる!!バホホホ!このおれとオ〜!!  
結・婚しろオ〜〜!しらほしィ〜!!」

しらほしちゃんはこちらりと私を見て、胸元で握り拳を作って言った。

「…タイプじゃないんですっ…!!!」

すっごいストレートな断り方だ。…でも当然でしょ、10年も命を狙われてどう好きになれっただ。

それよりもう私も我慢の限界だからさ…拳が疼いて仕方ないんだよね!

「貴様ア…おれの10年の想いを踏みにじり、誰と結ばれる気だア!!!」

「私以外に、誰が居るんだ!!」

「何イ!!?」

「歯ア食いしばってね…折れない様にさあ!!」

一瞬で目の前に現れた私に目を見開いたデツケンをブン殴る為、まずは奴の乗ってるでかサンゴを蹴り飛ばして粉々にする。

マトマトとやらでしらほしちゃんを狙ってるのだとすればそのサンゴだって危ない武器だ、壊しておかないと万が一が怖いからね。

さて…。

「ま、待て…：拳を下ろせ!」

足場を奪われて宙に取り残されたデツケンの前で大きく腕を振りかぶる。殺さない程度に加減して…。

「この馬の骨がア!!!」

「ブフゴオ…!!?」

私の放った一撃は、デツケンの顔を抉って地面へと勢いよく叩きつけた。地面には大きくクレーターが出来ており、もう当分立ち上がってはこれまい。

「うーん…全然全力出せないから気持ちよくない…思い切り殴ってやりたい相手なのになあ」

強くなったのはいいけどこれがあるからね…フラストレーションが中々解放され

ないもん…。

どん！と下に叩き落としたデッケンの上に着地を決めて更に地面へめり込ませた。コイツもバカじゃなけりやもうしらほしちゃんを狙う事はないでしょ、仮にもう1度狙って来る事があるのなら、その時はもう容赦しない。

「メガロ、しつかり！ほら、みんなも急いで！」

小太刀でみんなのロープを斬り、未だに苦しそうにしているメガロを叩いて上に飛び乗った。

「しらほしちゃんも早く、まだここは海の森じゃないでしょ？大丈夫、冒険にトラブルは付き物だから」

しらほしちゃんの指を掴んで引つ張り、メガロに抱きつかせた。ルフイ達も同じく上へ乗り、再び空へ舞い上がる。

「姫様！何故そいつの腕を取るのですか！」

「ごめんなさい皆様…っ！お夕食までには戻りますからっ！」

「じゃーねー！しらほしちゃんはまたまた私が貰ってくよー！それとよく覚えといて！しらほしちゃんを嫁に貰うのはそこで伸びてるデッケンでも、まだ見ぬ未来のお婿さんでもなく…私だ!!はっはっは!!」

「やっぱりあいつ危険だア!?!」

「危険んくく??私のそばが1番安全だっつーの!つまり私の嫁イコール超安心超安全!やっぱり嫁になつた方がいいよしらほしちゃん。ふへへ。」

## 149 『女好き、10年振りの再会』

「わー…綺麗な場所だね…」

あれから数10分、私達は「海の森」へとやってきていた。

海の森というだけあって海の中に存在しているから、私達はメガロが浮き輪みたいにつけているシャボンの中へ移動している。

鮮やかなピンク色のサンゴや、海底から生える木…色んな種類の魚など、まるで御伽噺の世界みたいだ。

沈没船もそこかしこに転がっているけれど、その船が魚達の住処になつていたり、この場所の幻想的な風景を更に深い物としている。…うーん…いい場所だ。

「え〜くん…！ありがとうございますイリス様…ルフィ様…、わたくし…ずっとここに来たかったのです〜…」

「うん、すぐにいつでも来れる様にしてあげるからね」

ここへ来る途中にブツ飛ばしたバンダー・デッケン…あいつ、私が思ってたよりタフだったみたいであの後何回も斧や剣を飛ばして来たのだ。

当分起き上がれないと思ってたんだけど…流星に舐めすぎだったかもしれない。



「あーサニー号！」

ルフィが木が生い茂っている場所の手前に置かれたサニー号を見て指差した。よく見ればサニー号がある場所は巨大なドーム状のシャボンの端の方で、あそこら辺一帯は空気がありそうな感じだ。

「むむ!!おーい!ペローナちゃん!!ついでにフランキー」

「アウ!相変わらず嫁以外には適当だなおめー!」

「私にも適当でいいんだけどな」

はは、何言ってますやら、ペローナちゃん相手に適当な言葉など使えないって!

ドーム状のシャボンの中に入り、メガロから飛び降りてペローナちゃんに飛びつく。

「きゃっ……!おま……いきなり飛び付いて来るな、危ないだろー!」

「きゃ、だつて……!可愛い……!」

「よーし殺す、今回こそは本当に殺してやる!」

といつつもペローナちゃんの胸にすりすりしてる私の頭をペしん、と叩くだけの優しい「殺す」だったけどね。その攻撃で死ぬ生物ってそんなないと思う。

「みんなに紹介するよ、こちらしらほしちゃん、私の嫁」

「あ……しらほしと申します、お嫁にはまだ貰われていませんが……」

「聞いた?」まだ「ね、ま・だ」

「それはまあいいが、ロビンの奴もここに來てるぞ。あのだけエサンゴの森に入ってた」

ああ、あの森ってサンゴなんだ。バカでかいサンゴ礁なのかな?…ってロビンが?何で待つててくれないの〜!!

「おー、ルフイ君、イリス君!見違えたぞ、懐かしいな!」

「あれ?ジンベエ?」

なんかフランキーと一緒にジンベエも居た。でも確か七武海をやめたからここには居られなくなって…とかなんとかケイミーちゃん言つてなかったっけ?

「ジンベエ!お前はいねエって聞いたから会えねエと思つてた!!」

「何じゃ、伝言を聞いてここへ來たんじゃないのか」

伝言…?全く聞いてなかったけど。

あれ、そうなるとやっぱりしらほしちゃんって素晴らしいよね?自分が行きたかった場所が私達にも意味がある場所だったなんて…!

「ジンベエ親分様!」

「やあー、しらほし姫もご一緒とは…ご無沙汰しており…、しらほし姫エ〜つぜん!!!?」

「ふふん、攫つてきた!」

「何しとるんじゃ!! そんな事をすればこの魚人島全てを敵に回す事になりかねんぞ!!」  
「だからなにさ、私は私のやりたい様にやる。だから嫁のやりたい事をやった、それだけだよ。敵になるってんなら相手してやる! 10年も閉じ込められて、行きたい場所にも行けないなんて放っておけるわけないでしょ!!」

ふんすかと怒りながら言えばジンベエはうぐ…とたじろいだ。彼だつてしらはしちゃんの境遇に何も思つてない訳じゃない筈だ。閉じ込めておくのは簡単だけど…それでしらはしちゃんの自由が無くなるのは私は我慢ならなんだ!

「…噂通り、女が絡むと途端に引かなくなるんじゃな、イリス君」

「違う、嫁の間違いだよ。それに心配しないで、デッケンの攻撃なんて…ん? 来たね」

遠くから斧が飛んできているのが見え、しらはしちゃんの前まで跳んで反射空間を生み出す。

「何回来ても同じだ! 〃倍返し〃!」

空間に吸い込まれた斧が、威力を2倍に増加させて空間から飛び出しどこかへ飛んで行った。

…ま、どこかへじゃなくてその攻撃をした人に、だからデッケンの所へ飛んで行ったんだけどね。マトマトの実の効果も跳ね返したからあの斧はデッケンの元までまっすぐ飛んで行った筈だ。

さつきから同じ手順で跳ね返してただけど攻撃の手は緩まないから…多分返した斧に斧をぶつけて相殺してるんだろう。あ…でも私が返した斧の方が威力高いから相殺は無理か、何とか頑張ってるんだらうな…と予想。

「てな訳で、姫様の安全は私が必ず守り通すから心配しないで大丈夫！」

「…ふーむ…納得しかねるが…一先ずは承知しよう。しかしイリス君、今のカウニングター技は「狂神」の使う技と似ておるようじゃが…」

「うん、だけどごめん、私もよく分かってないの、上手く説明は出来ないや」

本当は予想出来るけど…下手に確実性の無い情報を与える必要もないでしょ。ここは誤魔化しておこう。

「ああ、マーメイドプリンセス…あなたの前ではまるで僕は無能なる画家…！僕の絵の具ではあなたの輝きを描けない♡ああ僕のキャンパスにあなたの美は収まらない♡」

「あ、戻った」

いつものサンジだ…良かった、これで鼻血を吹き出す事もないか…。

その時、サニー号から1人の人魚が姿を現す。とはいえ男だから騒ぐ様な事でもないけれど。

「誰？」と知ってそうなフランキーに尋ねれば、どうやら彼はフランキーの師匠、トムさんって人の弟らしい。名をデンといい、破れた船のコーティングをしてくれているんだ

とか。それは本当に助かるね。

「あの、イリス様…、わたくし、少しあちらに行つて参ります。…えつと…その、もし宜しければ、ご一緒に貰えませんか？」

「?・うん」

しらほしちゃんが見る方はシャボンの外側…そこに小さな建物があつた。シャボンから出るのなら、とジンベエが渡してくれた小さなサンゴのカケラを首を傾げて見つめる。

「何これ？」

「それはシャボンを生み出すサンゴ…バブリーサンゴじゃ、外に出るのなら持つていけ」「へー、そんな便利な物があるんだね、ありがとう」

シャボンを千切るだけじゃないんだ、簡易シャボンつて。

早速使い方を教えてもらい、筒状になつてるサンゴをキュツと軽く握れば穴からシャボンが出てきたのでそれに入る。おー、すごい。

そのまましらほしちゃんに連れられて小さな建造物の前までやつてきた。…ああ、そつか…ここお墓か。

そういえばしらほしちゃんも海の森はお墓だつて言つてたよね。

「…ごめん、言いたくないなら言わなくて良いんだけど…ここのお墓つて…」

「…はい、わたくしのお母様…オトヒメお母様が眠っているお墓です。10年前…お母様が亡くなったあの日から…わたくしはあの方に命を狙われ始めました。それもあってお母様の葬儀も出られず…先程の部屋で、イリス様が私を攫って下さったあの瞬間まで…わたくしは、ずっとここに来たいと願っていました」

ですから、としらほしちゃんは頬に涙を流し、それでも微笑みながら私の体を手の平で掬って持ち上げた。

「…本当に、ありがとうございます…：わたくし、ずっと…ずっとここに来たくて…：つ、う、うえ〜ん…！」

「…だったら、今は私にお礼なんて言ってる場合じゃないでしょ」

耐え切れずに表情を崩して泣き出したしらほしちゃんの肩に跳び乗り、その豊満なぽよんを支える水着の様な服の肩紐を掴んで座った。

「10年間…溜めに溜めたしらほしちゃんの想い…全部ここでお母さんに伝えてあげな  
きや」

「……はい…っ！」

そして、今度は穏やかな表情で指を組み、祈る様なポーズで静かにお母さんのお墓と向き合うしらほしちゃんを見て、私は強く自分の心に誓う。

10年間…言葉で表すのは簡単だ。だけど実際その年月の間、ずっと…ずっと我慢し

てきた女の子がここに居る。

母と死に別れ、葬儀も出られず……伝えたかった言葉一つ……何も話せないもどかしい日々を送つて来た子が、ここに居る。

……だから私は、デッケンを死んでも許さない。

私が何の為に2年間修行を重ねたと思つて居るんだ、私が私であるためだ。

じゃあ、私が私であるとはなんだ。……そんなの決まつてる……嫁を、幸せにしてこそその私だ！だから私は何が何でもしらほしちゃんを救つてみせるし、しらほしちゃんが願うなら根深い差別の問題だつて解消してみせる！……どんな敵も、障害も乗り越える為の2年だつたんだ、何だつてやつてみせる……！

……それにしても祈るしらほしちゃんの横顔、可愛いな。

\*\*\*

「あれ?! ナミさん! ミキータ! それにケイミーちゃんも!」

しらほしちゃんの肩の上で私も祈りを捧げて、みんなの元に帰つてきた時、そこには

ナミさん達も居た。竜宮城で拘束どうこうはやっぱ無理だったみたいだね、そりやそうか、ナミさん達を捕まえるのはそう簡単な話じゃないし。

「ゾロとかは？」

「あー…それがー…」

詳しい話を聞くと、どうやら今竜宮城はかなり危ない状況らしく、新魚人海賊団の船長を名乗るホーデイという男を筆頭に次々と魚人達が押し寄せて来たという。あのネプチューン王も捕らえられてしまったらしく、ゾロ達の安否は分からないとの事。とにかく今の状況を私達に伝える為にここまでやってきたそうだ。

「入れ違いにとんでもない事態が起きてるね…あの時飛んできていた人間は魚人島へ侵入する為の駒だったんだ…」

「お父様が捕まったなんて、そんな事信じられません…!」

う…また泣いちゃった…。泣き顔も可愛いけど泣かせたくないんだよねえ私は…。

「…すまん…!早くもお前さん達を巻き込んでしまったか…!」

「…ん?何の事?」

何でジンベエが私達に謝ってるの?イマイチ流れが分かんないんだけど。

「事を急ぐが、2年前…ルフィ君とイリス君の2人に出会った時は今以上にこの話が出



来る状況ではなかった。東の海イーストブルーにてアーロン一味の暴走を食い止めてくれた者達に対して…わしは深く感謝しておった…！お前さんらなんじやる？…ありがとう…！！」

「ねえ、さつきから何言ってるのか良く分かんないっていうか…」

「同時に謝罪もさせて欲しい…！1年前…アーロンの奴を東の海イーストブルーへ解き放った張本人は…わしなんじゃ！！」

「…！」

私達は目を見開いた。いきなりの衝撃的過ぎる展開に…私の脳が情報を処理できていない。

ジンベエが…アーロンを解き放つ…？でも私から言わせて貰えば、ジンベエとアーロンは考え方からして違う。…仮にジンベエの告白が真実だとしても、何か事情があったとしか考えられない。

まあ、本人に直接聞くのが早いか。

「どういう事？詳しく話してくれるんだよね。ちなみに、私はあなたの人柄を信じてはいるけれど言葉は選んで話した方がいいよ。ここに居る私の正妻…ナミさんの故郷こそ、そのアーロンに支配された島。ナミさん自身耐え難い苦汁を嘗めてきた1人なの」

「！！」

「…ニユ…ホントだ、ジンベエさん。おれ達はその娘こに謝っても許されね工程の傷を与

「えてる…」

「…随分ヒドい目にあわされた様じゃな」

サンジが何を人ごとの様に！とジンベエに突つかかる。ヒドい目で済む内容ではないけれど…今は聞き流してあげよう。大事なのはその先の話なんだから。

「ええ、何があっても今更アーロンを不憫だなんて思うつもりはない。…だけど私は2年前シャボンディ諸島に着くまで、あんなに強い魚人達が人間から迫害を受けてたなんて知らなかった。ケイミーが人攫いに捕まって…それを追ってた時…私を疑った。目の前に広がる「シャボンディパーク」が…アーロンの建てた「アーロンパーク」にそっくりだったから…!!」

シャボンディパーク…？そんなのあったっけ。あの時は必死で周りなんて見てなかったから…。

「…ニユ…：…憧れてたんだ…。許して欲しくて言うんじゃねエぞ…ナミ…！アーロンさんは人間が大嫌いで、人間を恨みおれ達はやり過ぎた…でも、ガキの頃から人間達の住む世界に憧れを持ったのは事実だ。200年前まで魚人と人魚は“魚類”に分類されてたそう…：200年前にリュウグウ王国は世界政府の加盟国となり、人間達との友好を結んで…王は世界会議への参加も許された」

レヴェリーって何…。G20とかそんな感じのアレ？

「でも、人間達は魚人族を嫌い続けた。おれの生きてる中で一番酷かった時代は大海賊時代の始まり……人間の海賊達がこの島で暴れ回る恐怖は今でもはつきり覚えてる……!!」

「そこを救ってくれたのが……今は引退されておるが、白ひげのオヤジさんじゃ……! オヤジさんが魚人島をナワバリだと言った一言で島に平和が戻った。……しかし、人間達の魚人嫌いが止むわけじゃない……! お前さんらもシャボンディ諸島で見たハズじゃ……現実をな」

「……うん」

私達が見たのは魚人も人間も関係ないオークションだったけど、ハチやケイミーちゃん人間を装つてた事で大体想像はつく。

「おかしな話……一度権力を手に入れた者程変化を恐れるもの。魚人と人間の交友を決めた政府の中枢に近づく程に、差別体質は深く根付いて変わる事はなかった……! そんな折、魚人島ではこの腐った歴史を変えようと2人の人物が立ち上がったんじゃ……。1人は「オトヒメ王妃」……人間と“共に暮らす”事を島民達に説き続けたしらほし姫の母上じゃ。そしてもう1人は奴隷解放の英雄「フィツシャー・タイガー」。人間との決別を叫び……世界の禁止事項を犯し、たった1人で聖地マリージョアを襲撃……! 奴隷達を救つた」

フィッツシャー・タイガー……！確か、ハンコック達三姉妹を助けたっていう人だったよ  
うな……。

素手で赤い土の大陸をよじ登ったっていう凄人でしょ。

「その後、元奴隷の魚人達を連れ、「タイヨウの海賊団」を結成する男じゃ……！わしも  
アローンも……当然ハチも……その「タイヨウの海賊団」に所属する事になる……！しかし、政  
府に激しく衝突した「魚人海賊団」が海に居る事は……同時に人間との友好を実現しよ  
うとするオトヒメ王妃の首を締める結果となった……。今を耐え忍び未来を変えようとす  
るオトヒメ王妃に対し……未来を捨てて今苦しむ同族の奴隷達を救い出したフィツ  
シャー・タイガー……どちらが正しいかなどとても決められん……じゃが、わしは……」

ぼつり、ぼつりとジンベエが当時の事を話し始めた。

フィッツシャー・タイガーの事を……そして、……しらほしちゃんのお母さんの事を。

## 150 『女好き、英雄と王妃』

オトヒメ王妃は、「愛の人」と称される程心の優しい人だったそうだ。

強盗犯を自ら捕らえ、殴打し、されどその強盗犯の全てを否定する事なく物を盗むしなくなつた民の事情に涙する。そして、その事に気付いてあげられなかつた自分を責める程の器量があつた。

そんな彼女が国民に掲げる理想こそが、『人間との共存』。国民一人一人に意思を説いて回り署名を集めていたのだという。

そしてもう一人：英雄フィツシャー・タイガー。彼は冒険家として国を飛び出し、やがて「聖地マリージョア襲撃事件」を起こし：ハンコック達など沢山の奴隷達を解放した英雄と呼ばれ、同時に大犯罪者ともなつた。

これを受けて世界政府と対峙したタイガーを見殺しにはしないと彼を慕う「魚人街」の曲者達が集結し、タイガーの連れ出した元奴隷達とそうでない者達を識別されぬ様奴隷の烙印を覆い隠す「タイヨウの刻印」を全員が体に刻み込み「タイヨウの海賊団」は結成された：と。

「そこまでは分かつただけだし、魚人街の人達がタイガーを慕つてゐる理由ってなんな

の？」

「元々フィッシュヤー・タイガーは魚人街出身なんじゃ。わしも、そしてアーロンもな」

魚人街の事の始まりは、孤児達を預かる巨大な保護施設であった。しかし程なく施設は荒れ始め：管理者達の手へ負えずそこは魚人島のみ出し者達の集まる無法地帯となった。：だからケイミーちゃんは魚人街が怖いって言ったのか。

でも、そうやってタイヨウの海賊団が地上で暴れ回れば暴れる程オトヒメ王妃の理想からは遠ざかっていった。

そしてここから更にオトヒメ王妃を絶望の淵に叩き落とす事件が起きる。それこそ正しく「英雄フィッシュヤー・タイガー」の死。そしてその死因だった。

タイガーの死より少し時は遡るが、彼らは航海中、とある島で「コアラ」という人間の女の子を拾ったそうだ。拾ったというか、その島の住人に預けられたと言った方が正しいか。彼女はその当時でいうと3年前のタイガーが起こした奴隷解放の折にマリージョアから逃げ出していた元奴隷で、遠い故郷の島に居る親に会う為に船に乗せて欲しいと頼み込んできた。

始終ニコニコ笑って、人間故に魚人達から大量に浴びせられる罵倒にわずか1歳でありながら涙も流さず、働き続ける。それも全て奴隷時代に染み付いてしまった奴隷の生き方が原因だったのだ。

泣いただけで、少し休んだだけで殺される奴隷達を見てきたから少女もそうするしか無かったのだ。

そんな少女を見兼ねたタイガーは、少女を部屋に連れ込み奴隷の烙印の上からタイヨウの烙印を焼き付け：自分達は天竜人じゃないと目の前で武器を海に投げ捨てた。誰も殺さない、お前を必ず故郷へ送り届けると。

それでその子は泣き崩れたそうだけど：あの、ごめん、この雰囲気崩すのはどうかなって思うから口には出さないんだけどね：？

：それってフラグじゃん：!!しかも恋愛！

いいなあ!!私も、その子にフラグ建てたい!!コアラちゃんって可愛いのかな?会ってみたいんだけど：：！

「そ、それで?その女の子とタイガーの死に何の関係があるの?」

「コアラ自身は知らなかったじやろうが：最初にコアラを預けてきた島の者達が海軍に通報しておつたんじゃない。お頭はコアラを無事故郷へ送り届けた後、その島で待ち伏せしておつた海軍に襲撃された」

：そういうコトか。

更にはコアラの村の人達もタイガーを捕らえるのに反対する者は居なかったそうで、自分達も海軍に狙われて襲撃に気付いたジンベエ達がタイガーの援護に入って、何とか

海軍の軍艦を奪い沖へ逃げ出した時には：すでにタイガーは瀕死の状態だった。

血を流し過ぎていた為輸血をすれば生き長らえる事は出来たのだが：タイガーはその血で生き長らえたくはないと叫んだ。

汚らわしい血だ、そんな血に恩など受けない、情けなど受けない。：人間に、屈しない。

実は、フィツシャー・タイガーは一人赤い土の大陸を登り聖地マリージョアを襲撃したのではなく：冒険家としての最後の旅でマリージョアに捕まり数年：天竜人の奴隷だったのだ。

その時に生まれた心の中の鬼が人間の血を拒絶する。

ただ、オトヒメ王妃の願いが正しいのは頭では理解しているのだと。だけでももう自分人間を愛せない。本当に魚人島を変えられるのはゴアラの様な何も知らない世代だと：だからジンベエ達に頼んだのだ、魚人島には何も伝えるなど、人間達への怒りを伝えるなど。この世には心の優しい人間も沢山居る：だから頼む、とジンベエ達に伝えたい。イガーは息を引き取った。

「後に世間に知れ渡るフィツシャー・タイガーの死因は、人間に献血を拒まれ死亡となる。これはアーロンが報復でゴアラの島に襲撃し、その時の中将に捕まった際に話した嘘の供述じゃ：が、奴も真実など口には出来なかったんじやろう：それを言えばお頭の



名誉も傷付く」

「アーロンが襲撃？コアラは無事なの？」

「村へ辿り着く前に捕まったんじや。当時は中將であつた…大将黄猿にな。当然アーロンが敵う相手ではないわい」

ああ…。

という事は黄猿つて当時から特攻役みたいな感じだつたんだ。その時の話でもそうだし、シャボンディでもそう。そしてレイの事でも。

そりやあんなのが先発で出てきたら絶望するわ。

ちなみに、ネプチューンとオトヒメ王妃だけには真実を伝えていたらしい。

それでもオトヒメ王妃は負けなかつた。先にある次の世代の未来の為、必死にくる日もくる日も駆け回り、署名活動、街頭演説、果ては難破船の人命救助までとにかく幅広く活動した。

しかしタイガーの死は魚人島の人達の胸に深く傷を残し…人間との溝は更に深まるばかりだつた。

集まつた署名はみるみるうちに数を減らし…やがて署名箱の中は空となるも…オトヒメ王妃は諦めなかつた。

そんなある日の事、地上で海賊を続けていたジンベエの元に政府から一通の手紙が届

く。それこそ正に「七武海」への勧誘の書類であり：ジンベエは魚人島の為：オトヒメ王妃の邪魔をしてしまった罪滅ぼしの為にとその話に乗って王下七武海：「海峡のジンベエ」となったのだ。

ジンベエが七武海となった事で、丁度釈放されたアロンと一悶着あったらしい。

タイガーの言葉を理解し、誰も死なせないと誓ったのがジンベエ。対して人間への恨みが募る一方のアロンとタイヨウの海賊団にも2つの派閥ができ：アロンを慕う者が彼について行つたのだ。

その際にアロンはジンベエに対して「俺を止めたければ殺せ」と言つたそうだが：殺す事は出来なかつた。あんな奴でもジンベエにとつては弟分：手にかかる事は出来なかつたのだろう。

：ん？解放したつてもしかしてその事？だとしたらちよつとしようもないというか、ジンベエなんも悪くなくて笑うけど。

：で、話はもう少し続き、ある日魚人島に一隻の巨大難破船が流れ着く。その難破船にはなんと「天竜人」が乗っており、それ以外の護衛は海底生物に襲われ死んでしまつていた。つまりその天竜人1人だけが運良く魚人島へと辿り着いた訳だが：当然天竜人はその場で銃を取り出して魚人達に銃口を向け脅す。

しかしそこは既に大将が駆けつけてくれる場所とは遠く離れた深海の魚人島：天竜

人を恐れ、屈服する人は1人も居なかった。逆にその天竜人に向けて銃を向け、あまつさえ発砲してしまったのだが：そんな天竜人を銃弾からオトヒメ王妃が庇ったのだ。

子供達が見ているから、銃を捨てて下さいと。だけどそうやって庇ってくれたオトヒメ王妃すらも天竜人は殺そうと銃を向け、その場に居たジンベエも一瞬反応に遅れてしまったのだが…。

「その時、しらほし姫の『力』が覚醒し、その場に巨大な海王類が何頭も姿を見せおつたのじゃ。その天竜人も、そしてわしらもあまりの出来事に声を発する事すら忘れてしまった」

「巨大ってどれくらい？ていうか覚醒って？」

「お前さんらの船の3倍は大きい天竜人が乗る船：その100倍は大きい海王類が何頭も：じゃ」

スケールが想像以上過ぎて逆に想像出来ないんだけど。それってつまり魚人島を潰せる程大きいって事じゃん…。

「しらほし姫には海王類と話せる力をその身に宿しておる。暴走すれば世界を壊しかねん代物じゃ…」

「凄いなしらほしちゃん！自在に話せるの？」

「い、いえ…！わたくしも当時の事は良く覚えていなくて…」

ああ、無意識の内につてやつかあ。それにしても海王類に対して使役に近い事が出来るって相当だけだね。

…で、その海王類達のお陰で難を逃れ…そして数週間後、治療を終えた天竜人を地上へ送り届ける際にオトヒメ王妃はその船への同行を願った。

オトヒメ王妃からすれば降って湧いたチャンス…世界貴族と直接話が出来るいい機会だったからだ。だけど当然ネプチューン王は強く反対し、ならば自分が行こうと言ったのだがオトヒメ王妃は強いあなただでは意味がない、と言つてその申し出を拒んだ。

私が行つて帰つてこれる世界でなければ、地上の安全を証明出来ない、と。

そうしてオトヒメ王妃は天竜人と共に船へと乗り込み…島民達やネプチューン、しらほしちゃん達にとつては100日にも感じる1週間が経つた頃…オトヒメ王妃が魚人島へ帰つたきたのだ。

その手に…1枚の紙を大切に抱えて。

すぐにオトヒメ王妃は「ギョンコルド広場」という場所に島民達を集め、その紙を掲げて見せた。

それはオトヒメ王妃が救つた天竜人の一筆…「魚人族と人間との交友の為、提出された署名の意見に私も賛同する」と書かれた物だったのだ。

つまり後必要なのはより多くの署名…オトヒメ王妃は地上への移住は夢なんかでは

なく、もうあと一步の所まで来ていると説得した。

深海でも生活出来る自分達が、何故この光が届き、空気が存在する場所を選んで生活しているのか。何故子供達は地上の施設を危険を犯してまで見に行くのか：それは一重に、地上を夢見ているからではないですか、と。

だけどそんなオトヒメ王妃の説得に意味など無かった。何故なら：島民達は皆、オトヒメ王妃が無事に魚人島へ帰ってきてくれたならば署名など幾らでも出すと決意していたからだった。

つまりオーオトヒメ王妃の努力は、駆け回った苦労の日々は：この日、報われたのだ。

実に7年にも渡る苦労は実を結ぶ。何より国民達は：オトヒメという人物が好きなのだ。その日から広場は連日国中から署名をした人々が集まった。

「：じゃが、：：：現実には、時に非情じゃった。：いや、残酷過ぎた：！：」  
顔を伏せるジンベエに、涙を流すしらほしちゃん。

当時々々に署名が集まっていたある日の事：なんの前触れもなくギョコンコルド広場で集めていた署名が署名箱ごと燃やされたのだ。

当然兵士達やジンベエはその火を消そうと必死に動き：そして、それは起きた。

喧騒の中に紛れる様に響いた銃声。そして、その場に崩れ落ちたオトヒメ王

妃——。

更に最悪なのは……その場に王子達やしらほしちゃんも居た事だった。

フカボシ王子は当然激昂し、すぐにでも犯人に報復する勢いだったがそれを瀕死のオトヒメ王妃が止める。自分が死ぬのは避けられないから、せめて最後までいいは傍に居てくれ、と。

犯人がどこの誰であれ、私の為に怒らないで。私の為に怒りや憎しみに取り込まれないでと言ったのだ。

母親が死んでしまうという事実が付いた幼いしらほしちゃんが大声で泣き叫び、力が暴走してしまう寸前だったのを、マンボシ王子とリュウボシ王子が泣きながら笑い、歌い、踊りあやして……こうやって妹を守っていくから大丈夫だと……フカボシ王子も燃えた署名はまた集め……しらほしちゃんを命懸けで守るから、だからどうかご安心を、と泣き笑いでオトヒメ王妃に伝え……それを聞いたオトヒメ王妃は静かに……そして安らかに……息を引き取った——。

「……。これだけでも、わしら……いや、姫や王子達……ネプチューン王にとっては大きすぎる絶望だった筈じやろうが……悪い事は重なる物で……」

オトヒメ王妃を撃った犯人はすぐに見つかつたそうだが……そいつを捕えた時、ジンベエはその者を隠せと命令した。

何故ならその犯人は……人間、だったからだ…。

しかし、その時その場に居た兵士時代のホーデイ・ジョーンズが広場を見渡せる位置で高々と捕えた人間を掲げ、人間が我が国の王妃を殺した、と叫んだ。

あまりにも残酷なその話に：国民達全員が怒りに震えたという。

ネプチューン王も自ら硬殻塔に閉じこもり殺意を押さえ、そしてその日からしらしちゃんには例のラブレターが届く様になる。

オトヒメ王妃の葬儀は海の森で開かれ：殆ど全てと言っても過言ではない数の国民達が参加した。

狙撃手がまだ潜んでいる可能性もあるからと王子達やしらしちゃんは参加出来なかった様だが：モニター越しでフカボシ王子が母の意思を継ぎ、また一緒にタイヨウの夢を見ましよう、と国民全員に言葉を投げかけ……そしてその意思は今も、国民達の心に残っている。

だからこの国の人達は私達に友好的で、だけどその一方で輸血など血を分け与えるなどの行為を禁ずる様な法律が出来ているんだ。

…そつ、か……、それは、確かに……あまりにも、非情だ…。

簡単にしらしちゃんを嫁にするなんて言つて、しらしちゃんは私を恨んでないだろうか：私だって人間なんだから、しらしちゃんが私を恨む理由は幾らでもある。あ

の可愛い笑顔や泣き顔の裏に…人間への憎しみの気持ちが一……、

「……あるわけないでしょ……！」

そうだ…そんな出来事があったにも関わらずしらほしちゃんは私に普通に接してくれた。

今も私やルフイを信じて、デッケンのアホの脅威から必ず守ってくれと疑っていない。…だったら私も疑ってられないよね…！しらほしちゃんの優しさと、純粋で綺麗な心を。

気合入れろ、イリス。

…ハーレム女王になる為に、何が何でもこの島を縛る差別の呪いと…お別れするよ！



## 151 『女好き、ヒーロー作戦』

「その後10年…『フカボシ』、『リュウボシ』、『マンボシ』……3人の王子を筆頭に、王や姫もモニターで呼びかけ…その努力で再び国民の署名は大きく集まっておる…！これがここ16年程のこの島の差別との戦い……そして、魚人海賊団の成り立ちじゃ…。お前さんの故郷を苦しめたというアロンは、つまりわしの弟分なんじゃ…！責任を感じとる…！何かあればどこにでもわしらが飛んで行くつもりじゃったが、アロンは近くの海軍を買収し「海軍本部」に情報が届かん様に手を回しておった…」

「そっか…」

そういえば…アロンと手を組んでた海兵もいたっけ。ネズミ？みたいなやつ。

「何なりと処分は受ける覚悟じゃ…！わしは殺されても文句は言えん…!!じゃが、もう少しだけ待って貰いたい、今は国がこの様な状況で…」

「何か勘違いしてない？ジンベエさん。私は確かにアロンを許す事はこの先一生…何が起ころうともあり得ないわ。…だけど、そんな酷い渦の中……私は一生分の幸せを手に入れる事が出来たの」

「……」

「あんたは別に黒幕でもないし、何よりルフイの友達なんでしょ？結果としては私とイリスを会わせてくれた大恩人とも言えるし…魚人だからって恨みはしないわ。だから、私の人生に勝手に謝らないで！私は今…最高に幸せよ、誰よりもね」

心からそう思っているのだろう、今のナミさんの幸せな笑顔を見て…ジンベエは顔を伏せて体を震わせた。

やっぱりナミさんって最高なんだなあ…海峡なんて異名はやめて恋のキューピットジンベエにしない？だめ?!

「…何ちゆう…勿体ない言葉…!!かたじけない…!!」

涙を流してそういうジンベエにこれ以上何か言う人など誰もいなかった。それ程までに追い詰められていたのだろう。…自分の選択で、誰かが不幸になった事実には。

だからその件でのジンベエが抱えていた心のモヤを今ナミさんが払ったんだ。どこからどう見てもパーフェクトなナミさんがね！

「あんたしらほしって言うの？正に絶世の美女ね、勿論イリスの嫁に来るんでしょ?」

「あ、あの…それはまだ…その…!」

「何が何でも嫁にするよ、私は人間でしらはしちゃんには姫だから、私の嫁になれば差別も減るでしょ」

「てめエそんな事考えてねエだろ」

うぐ…そうだけどね？普通に可愛いから嫁にしたいだけなんだけど、建前っているじゃん？ね？

「ローでは、すまん…時間を取った。竜宮城におる者を確認するが…ホーデイとその一味が攻めてきて、国王と兵士が捕らわれ、お前さんらの仲間達が4人動向不明。今ある情報ではここまで…」

4人…ゾロとウソップ、ブルックに…あ、パツパグか。

「ニユ…ジンベエさん、ホーデイの計画通りなら今頃国中もつと酷い事になってるハズだぞ…」

「そうか、ハチー！お前魚人街におったのならホーデイの計画を知つとるのか…!?あの男…軍を出した後魚人街で何か企んでおるとはふんどつたが、わしの前では決して尻尾を出さなんだ」

ホーデイの計画か…。…私がブツ飛ばせばホーデイ自体を潰すのは簡単だけど…それだと魚人に手を上げる人間の構図になっちゃうよね…オトヒメ王妃の思いを無駄にはしたくないな。人妻じゃなけりや過去に戻つて嫁にしたい所だよほんと。あ、娘さんは貰いますね。

「…ホーデイはアーロンさんを超える程の“人間嫌い”、魚人族の恨みと怒りだけを食つて育つた様な男なんだ…。だけどあいつには明らかにアーロンさんと違う所があ

る……！アーンさんは人間を蔑むけど、同族の魚人には手を上げない『種族主義者』。でもホーデイは人間と仲良くしようとする魚人にまでも容赦なく手をかける……！！」

……確かにアーンは仲間内でわいわいしてる雰囲気だったな。その辺は割り切ってたって考えたらあいつは大人だったって訳だ。

「今年は4年に一度の「世界会議」<sup>レヴェリ</sup>が開かれる年だろ……署名も沢山集まって……！今回いよいよネプチューン王が世界に対して「魚人島移住」の意思を伝えに行く予定だ……」

「まさか……それを阻止するのが狙いか……！」

「ニユ……いや……阻止だけじゃ終わらねエ……」

「うわ！森からでっけー電伝虫……！」

チョップパーが言うように、森から大型の映像電伝虫が姿を現した。

モニターが作動して、パツと空中に映像が浮かび上がる。

「あ、あいつだわ」

「ホーデイ？」

「キャハ、そうよ」

ふーん……対してオーラ感じないし、ぶつちやけ弱そうだ。

態度だけは一丁前の雑魚……は言い過ぎか。

『あく……全魚人島民、聞こえるか？俺は……魚人街の「新魚人海賊団」船長……ホーデイ……』

ジョーンズだ。魚人島リユウグウ王国国民に伝えたい事がある。——この国は一度…崩壊する！そして生まれ変わる…！新しい王は俺だ！』

乗っ取りかあ…。国を乗っとるって問題に立ち合い過ぎなんじゃない？私達って。

アロンは国じゃなくて島だったけど似たようなものだし、クロも乗っ取って遺産を奪おうとしてたんだっけ。ワポルもそうだし、クロコダイルは見るからに乗っ取ろうとしてたし、エネルは乗っ取った後だった。悪人ってとりあえず何かに成り代わるのが好きなんだなあ。しかも大体が不当な方法だし…せめて正攻法で王になればいい物を…。

『人間との“友好”を望む者はこの国から消えろ！——直に「魚人街」から新しい住民達がここへ移住して来る…！共に人間達を嫌い…共にこの島の変改を望んでいる。お前達は見たハズだ、大好きなオトヒメ王妃の“死”を!!人間を信じ、笑顔で歩み寄っても人間はまたお前達を裏切るだろう！何故それが分からねエ!!お前達はネプチューン一族に唆され、死へ続く道を歩かされてるだけだ！目を覚ませ!!…これを見る…!』

アップで映っていたホーデイからカメラを引き、その後ろで縛られていた人物の姿が露わになる。

そこにはネプチューン王と兵士達が鎖で縛られて動けなくなっていた。

「お父様…!!」

『かつての“大騎士”ネプチューンも歳を取った…!』

「…あの王様が捕まってる原因は私達にあるっていうか…ソロにあるっていうか…」  
 「何をして来たんじゃないやお前達っ!!」

えーっ!?!とジンベエが驚きに身を任せて突っ込んでいるが、恐らくナミさん達を捕らえようとして反撃されたんだらう。そこに都合悪くホーデイ達が攻めてきて、まあ漁夫の利を取られたって訳だ。多分。

『旧リュウグウ王国との決別の時だ。3時間後ギョコンコルド広場にて、この無能な王の首を切り落とす!!』

「!!」

口元を手の平で覆い隠したしらほしちゃんの肩に飛び乗って、ぽんぽんと肩を叩いた。

大丈夫だと言いつける様に…とりあえず安心してもらおうと咄嗟にした事だけど思いの外効果はあったのか、しらほしちゃんには私の顔を見て涙を引っ込める。

『ここは竜宮城…いいものが見つかった。10年前…オトヒメ王妃が命懸けで手に入れた“天竜人の書状”！破棄すればもう2度と手に入る事はないー、そしてこのだけエ箱にはこの国の過半数を超える署名…!!ジャハハハ、こんなにも人間達と手を取り合おうってバカが居るとは。ここに名を書いた者達は俺の新しい王国に反発する者達……つまりこれは、“裏切り者”のリストだ!!1人1人…処分していくとしよう』

本気で頭イカレてるんじゃないだろうか。裏切り者って…誰もあなたの味方なんて最初からしてないでしょ。

出たよコレ、思春期特有の俺は特別だぜーって奴でしょ。その気持ちは私もまあ分かるけど、せめて20までに卒業しようよ。

…あ、私21だった。

『そして最後に、海賊“麦わらの一味”!!これを見ろ!』

「へっ?」

ゾロ、ウソツブ、ブルック…!?なんか体縛られて小さな檻の中入れられてるんだけど!

檻は天井から吊るされてるし…なんか下から水迫ってきてない!?てか捕まつてるじゃん!

『この島のどこかでモニターを見てるだろう…!魚人族の“怒り”、アーロン一味の野望を砕いた人間達よオ!!この部屋も国王の処刑が終わる頃には水で一杯になる…下等な生物“人間”はこれだけで死ぬんだよなア…!!』

でも確かに…アレだいが危ない状況だね。ゾロの腰に刀も見えないし、がつしり鎖で縛られてるから解けないだろう。いや、ゾロなら筋肉で壊せそうだけどね?ふん!みたいな感じで。少なくとも私は出来る、筋肉では無理。

『懸賞金4億ベリー』『麦わらのルフィ』！懸賞金10億ベリー』『一騎当千の女王イリス』  
 “!!お前達の首は地上の人間達への見せしめに丁度良い!!”——さア!旧リユウグウ  
 王国の大掃除を始めるぞ!!3時間後、この国はプライドある魚人島に生まれ変わる!!』  
 それだけ言つてモニターは切られた。:ああ、シャボンディ諸島で言つてた10億つ  
 てやつぱり聞き間違えじゃなかったんだ。

「おれもイリスもいつ懸賞金上がったんだ?それに10億つて何したんだよイリス!」  
 「ええ…特には何も…」

「上がったのはお前らだけじゃねエぞ、モリア様の下からお前らの船に居場所が変わつ  
 たせいで私まで賞金首だ」

「私とミキータ、ロビンも上がってるわ」

私の懸賞金が上がったからナミさん達も上げられたんだね…。

ちなみにペローナちゃんは2000万、ミキータは1億、ロビンは2億、そしてナミ  
 さんは3億5000万らしい。やばい。

ペローナちゃんが他の嫁達に比べて低めの額なのは私の嫁だと認識されてないから  
 か。あとは彼女の強さを政府が理解してないってのもあるだろう。ホロホロの実も相  
 当怖い能力だからね…。

「それより、お義父さんが危ない…!助けに行かないと…」



「お前父ちゃん多いなア」

嫁の数だけいるからね、そりやね？

「まア、売られたケンカは買うぞ！」

「私も。…だけど、そう簡単な話じゃない…だよ、ジンベエ、ハチ」

しらはしちゃんの肩から飛び降り、今すぐホーデイの下へ向かおうとしたルフィの肩を掴んで止める。

「ニユ…そうだ。ホーデイが今のリュウグウ王国で最も恐れてるのはしらはし姫の『才能』だ。この先あいつがどれだけ理想的な魚人島を作っても「海王類」を操り攻めてこられたらひとたまりもねエ…！国王はその攻撃の盾にする為の人質だ…！ニユ…！ホーデイは姫自身を捕まえその力を利用してしようとは思ってねエ、その力の存在自体を恐れてるからだ。だから姫の命を狙えるデッケンと手を組んだ…！厄介なものは全部消すのがホーデイだ…！」

「…けれど、わたくし…『力』の話は聞いていますが、まだ海王類様とお話させて頂いた事はございません…！！本当にその様な力があるのかどうかも、まだ…！！」

「そうか、ではその話はホーデイに伝わらん様にせねば…、恐れて貰うのは結構な事じゃ」

それにホーデイが一番恐れるべきなのは…こんな可愛いコ有能力なんかじゃなく

て…私だよ。

自分で言うのもなんだけど、私ってすつごく強くなってるからね。

「それに私達がホーデイ達と戦っちゃうとまた魚人の残党が “人間” を恨むと思うし…」

「じゃあどうすんだよ、ゾロ達も危ねエんだぞ！」

「ん…どうする？ いつそ私が誰にも視認出来ないスピードでホーデイゴコしてこようか？ 出来るよ？」

「…いや、わしは今回の件…逆に考えればチャンスじゃと思つとる」

チャンス？

「ルフィ君、わしとお前の関係は何じゃ？」

「友達!!」

「そうとも、この造作もない関係を築けず、魚人族と人間は長年往生しとる！ 闇雲に戦ってはならん。やるのならホーデイをブチのめす凶暴な人間にならず…この島のヒーローになってくれ!!」

ジンベエはそう言うが、ルフィは嫌だ！ と即答した。え…私はヒーローになって人魚達に感謝されてお礼のうはうはタイムしたいんだけど…。

「おれ達は海賊だぞ、ヒーローは大好きだけどなるのはイヤだ！ お前ヒーローって何だ

か分かってんのか!？」

ジンベエは首を傾げる。なんかルフィが熱弁してる…しかもヒーローについて。

「例えば肉があるだろ!海賊は肉で宴をやるけど、ヒーローは肉を人に分け与える奴の事だ!おれは肉を食いてエ!」

「何よその基準…」

呆れ顔のナミさんも素敵だ…でもルフィが言ってることも理解は出来るなあ。

「じゃあ肉は食わせてやるから言う通りにせい!」

「分かった!」

「解決!」

ルフィっぱいけど何とも雑な解決…。まあとにかく理解はした。私達がヒーローとなりホーディを倒せば、人間への認識も変わって寄り添いやすくなるとかそんな感じだしよ。

「簡潔に言えば…わしがお前さんに助けを求める。それを助けてくれたらええ。まずわしとメガロはあいつらにわざと捕まり広場へ侵入する!その間メガロの腹の中からこっそり抜け出し、敵の持つ「天竜人の書状」と「国王の錠の鍵」を盗み出すんじや。出るものはおるか?」

「盗みならナミさんがサイコーだよ。私の心も一瞬で盗んだからね。あとはロビンかな

…適任だと思う」

それにしてもメガロの腹に潜むのは決定なんだ。当のメガロは勘弁してくれ、みたいな顔してるけど。

「そうね、私とロビンに任せて」

「…で、ロビンはどこ？ 私まだ姿見てないから早くロビンのぽよんに飛び込みたいんだけど…」

とか言つてたら、噂のロビンが森の中から歩いてきた。おー！ロビン！！

「遅れてごめんなさい。話は聞いていたわ…その役目は任せて」

「ロビンー！」

ぽよん、とロビンの胸に飛び込む。あーふかふか！ふかふかだよこのおっぱい！

聞いていたってアレかな、耳をどこかに生やして聞いたのかな。

「…よし、王を解放出来たらわしがルフイ君に助けを乞う。メガロの腹の中からルフイ君が堂々と現れればわしら全員共謀者である事が皆に分かる。姫様は広場の外、八方安全な場所に待機しており、「書状」を受け取り解放した王達と共に逃げてくれ。一方それ以外の者達は今すぐ竜宮城へ急ぎ仲間救出、全員揃ったら広場へ急行してくれ。竜宮城の仲間救出の方法についてじゃが…何とかしてくれ」

「雑か…！うちの作戦!!」

「あーそれとジンベエ、私も広場に行つていい？メガロの腹に隠れてさ」

「そうじゃな…お前さんが居てくれたら心強い。ルフイ君だけでも問題はないじやろが、万が一があつてはならん作戦じゃからのう」

その場にホーデイもデッケンも居るのなら私がそこに行かない理由が無い。ゾロ達を救出するのにそう何人も要らないだろうし…何よりもデッケン達をブツ飛ばしたいんだ。

「して、この作戦の様な事が起きれば、国民はギャラリーどう思う、お前達」

「ニユ、ジンベエさんは「魚人島民」も「魚人街」の連中も皆一目置く存在」

「うん、親分が国王様を助ける為にイリスちん達に命を預けたと分かったらみんなイリスちん達の事応援するよ！」

ジンベエつてやつぱりすごい人なんだね。ルフイはやつぱりヒーローとして持ち上げられるのにはイヤそうな顔しているけど…最終的にはジンベエの頼みだからと納得してくれた。

「なら、早速行こう」

「俺達はどう竜宮城まで行けばいい？」

「その事なら任せてくれ。これでもシャボンの扱いは慣れている」

サンジの質問にはデンが名乗りを上げてくれた。この島で宙を泳ぐ魚達みたいに

シャボンの浮き輪でも作ってくれるんだらうか。

…まあ、そつちは任せたよ。サンジ達…！

「…じゃあ、頼んだよメガロ」

「シャー…」

仕方ないなあ、みたいな感じで開けたメガロの口の中にナミさん達と一緒に入った。  
うひよひよ、最高！

えー…ホーデイがネプチューンを殺すのがギョコンコルド広場だから…ここからだ  
と1時間くらいか。間に合うとは思うけど…急いでね、メガロ…！

## 152 『女好き、耐えた10年、姫の強さ』

「このままメガロが間違えて私達呑み込んだらどうなるんだろ、あはは」

「空島でよ、ノラつてヘビ居ただろ！あん時みたいになるんじゃないか？やー…いつかもつかい行きてエな、空島！」

「そうだねー…もう2年も経ったんだし、アイサちゃんの成長も気になるといふか。」

「ー」と、いう訳で只今絶賛メガロの口の中で待機中でありませぬ。

今は広場に向かっている最中で、もう1時間くらい経ったんじゃないかな。ルフィと話してたら時間経つの早いんだよねえ、コミユカオバケだし。それにナミさんもロビンも居るのだ、私にとっては楽園だよ！

「ヒーローかあ…ルフィはイヤつて言うけど、やつぱりヒーローつてカツコよくない？ていうか、ぶつちやけ私達つて行く先々で誰かのヒーローになつてる訳じゃない？」

「カツコいいけどよ、ヒーローになるのは違エだろ。なんか調子狂うんだよ」

「確かに国民に応援されながら戦うのは私達らしくないかもね。お礼言われる為に助ける訳じゃないんだから」

「そうだろ？とルフィは同意を求めてくるので領いておいたけど、お礼を求めずにただ

困ってる人を助けるって…それこそヒーローだと思っただけだな。

私は困ってる女の子しか助けたくないから、その点で言うとはヒーローとは無縁だね。

「私にとつてはイリスはヒーローみたいなものよ、私達はヒロインでしょ？」

「ナミさん達の前なら私はいつでもヒーローだし、可愛くてカッコいい主人であり続けるからね！うへへ！」

うへへとか言ってる時点でカッコいいからは遠のいているとか、そんな事は気にしない、気にしない…ついたら気にしない。

「あ、あれはお父様…!」

「いやー…あれはどう見ても……そ、そうじゃな、あれはネプチューン王…!」

「ん？」

外で何か進展があったのかな？と思つてメガ口の口の中からこつそり覗けば、前方にネプチューンの形をしたバルーンが浮いて「わしじゃもん」って音声が流れていた。

ああ、どつからどう見てもしらほしちゃんを捕まえる罠…まさか本当にこんな罠を仕掛けてるなんて…。

しらほしちゃんとは迫真の演技でそのバルーンへと近づいて行く。本当にネプチューンだと思つているのなら純粹過ぎて可愛いと思います。

…よし、そろそろ覗くのはやめよう。万が一にもバレちゃ話にならない。



「つと……！」

「おお？」

メガロの体が揺れているのか、中に居る私達にもその揺れが伝わってきた。ジャラジャラと鎖の音が聞こえるから……不意を突かれて鎖で巻かれてるって所が。不意って言ってもわざとだから不意も何もないけど……。

って、しらはしちゃんも素晴らしい柔肌にクソみたいな鎖巻きつけてるんじゃないの!?ぐぐぐ……!!お、落ちて着け私い……さ、作戦でしよ……!!作戦……作戦……!!

「イリス、おめエほんと堪え性ねエな！なはは」

「私が悪いんじゃないよ、私をイライラさせるのが悪いんだよ」

いやほんとに。だって私は嫁関連じゃないとそんなに怒ったりしないし。身長？ふん、今や150にもなった（146だから四捨五入）私がただか身長をいじられた程度で怒るわけじゃないじゃん。

「つ……な、なに……!?!」

今度は強い衝撃が私達を襲う。まるでメガロが地面にでも落ちたかの様な……。って、そうか、縛られたからそのままどこかに連れてこられたのか！

……うん、周りに物凄い人の数の気配を感じる。と言うことは、ここが広場だろう。

「ホーデイ船長！しらはし姫とジンベエが畏にかかりました!!」

「お父様……お兄様達……!!」

…見聞色はこういう時便利だ。周りの状況がよく分かる。

ここがギョンドンコルド広場なのは間違いない。これだけ広い空間：周りはサンゴの壁に囲まれてる場所で、その壁の上には沢山の人が集まっているのも分かった。恐らく国民達だろう、広場に続く道が封鎖されて直接入れなかったから上から見に来たんだ。

で、しらほしちゃんやジンベエの正面…つまりは広場の中心で王座の様な物に座っている小物オーラが…恐らくホーデイ。その周りにポツポツと敵意を持った気配も感じるから…これが新魚人海賊団の幹部達だろう。

そしてホーデイの後ろには縛られて磔にされてるネプチューン王や王子達の気配も感じる。…明らかに弱っている…しらほしちゃんが取り乱すのも無理はない。

「これは幸運だ！ジャハハハ!!危惧していた2人が一気に捕まるとは！こんなムシのいい話があつていいのか!?!ジャハハハ！」

「何じやいホーデイ…！さつきとまるで様子が違うな…!!」

見聞色じゃ顔までは分かんないから様子って言われても分かんないな。気配は…確かに強くなつてるけど。

「ジャハハハ…！さアこれで必要な顔は出揃った！思ったよりた易い作業だったな…！後はどう動くのか分からねエのが、麦わらの一味」。今頃竜宮城の入り口でも探して

途方に暮れてる頃だろう……仲間の「死」に怒り、ここへ現れても迎撃の準備は万端だ」  
 ……、この中に居ても聞こえる、足音。

それだけの数の人達が今この広場に入ってきてきた。さつきから見聞色で分かつてはいたけど……どうやって集めたんだ……こんな数。

「武器を使える魚人族、7万人！ここ1ヶ月で海中で捕らえた人間の奴隷、3万人！！閉ざされた「魚人街」から移住してきた、締めて10万人の無法者共だ!!!」

『ウオオオオオオオオ!!!』

空気が震えてる……この外に今、10万人の戦力が居るって事か。

「更に、地上の「協力者」から新たに得た人間の奴隷、10万人!!合わせて20万人の戦力だ!!いつも人間……いつかは殺すが、今はありがたくこの駒を頂いておくとしよう」

20万で……広場埋め尽くしてるんじゃないの？

地上の協力者つてのが気になるけど……!

「公共の広場でバカ騒ぎして……品のないコ達ね！お調子にお乗りでないよ、ホーデイ・ジョーンズ!!」

国民達の中から1人、その人は一歩前に出てホーデイに対して声を上げた。

……この気配、シャァーリー……！良かった、起き上がれるくらいには体調良くなったんだ。

「懐かしい顔だ…。てめエ何の用だ、マダム・シャーリー！」

「粹がつてるお前に一言云わせて貰いたくつてねえ、…「ある人達が…魚人島を滅ぼす」と出たんだよ、私の占いでね」

「実質、滅ぼす事になるかもな。そこに俺が映つてたのか」

「いいえ。…この島を滅ぼすと出たのは…「麦わらのルフィ」と「尊い…」じゃなく、…「一騎当千の女王イリス」だよ…！」

「なんか今ちらつと心の声出なかつた？ 明確に私のファン名乗ってくれてるのシャーリーが初めてな気がする。」

「…何が言いてエんだ！」

「分かる事はこれだけ。あんだ達じやあなかつた…!!」

「そ…そうか！ マダムの占いは外れない、あの話は裏返せば…最終的にホーデイがこの島に君臨する未来はないつて事だ!!」

「誰かがそう言った瞬間、ホーデイはシャーリーに向かって何かを飛ばし…それがシャーリーの胸を貫いた。」

「…シャーリー…!! 気配はそんなに弱まってない…大丈夫だとは思…けど、まさかそんな簡単に手を出してくるなんて…!! ホーデイ…ツツ!!!」

「ふ…フウ…！」

落ち着け…落ち着け…！怒るな怒るな怒るな！今出て行ったら作戦台無しだ…！

「イリス」

「…」

ぎゅ、とナミさんとロビンが私を抱きしめてくれた。明らかに様子がおかしくなった私を見てそうしてくれたんだ…。ルフィは分かんないけど、ナミさんとロビンは外の状況を知らずにはない…。私を取り乱せば取り乱す程不安を誘うだけ…！

だけどナミさんもロビンも、自分の不安などお構いなしに私を落ち着かせようと行動に出てくれた。…いや、そもそも不安など感じていないのかもしれない。だって…抱き締められた事で感じる2人の鼓動は、いつもと何も変わらないから。

…バカでも分かるよ。私が居るから、2人は緊張も不安もないんだって。だから私が取り乱すのは…2人に失礼だ。信じられてる、だということにこんな情けない姿は見せられない！シャーリーだって深手を負った訳じゃない…今はとにかく落ち着け…！

「バカバカしい…！何への当てつけだシャーリー！腹いせか!?俺はお前の兄とは違う！そりゃあガキの頃は… お前の兄アローンは「魚人街」中の憧れだった!!だが俺達は「力」を手に入れ、実際今じゃ「アローン一味」の名は結束の為の空っぽのシンボルしかねエんだよ!!見ろ、この規模を！見てろこの実力を!!俺の作戦は10年前から既に始動している…。それにお前の占いは2年前に1度外れている筈だ…！丁度いい…教え

てやろうか：!!このリュウグウ王国の：お前らが愛して止まねエ王妃!!オトヒメを殺したの、俺だ!!」

……。

「……はア？」

「よわむしの母ちゃん：!?!あいつが殺したのか：!」

よわむしって何ダルフィコラ。

：それより、何だその事実：。オトヒメ王妃を殺したのは人間何じゃ：!

：いや、人間が殺したと言ったのは、確かホーデイ：!!こいつだ：!!

国民達もここに来て知る驚愕の事実にとよめきが広がる。混乱が起きればマズい：

まだ出ちやダメなの：!?!早く呼んでよ、ジンベエ!

そりや落ち着くとは言っただけど、私にだって限界はあるからね!ていうか嫁関連なん

だからかなり沸点低い自信ありますけど!!!

「イリス、私達はもう行くわ」

「あ、うん：：2人とも、お願いね」

ナミさんとロビンの仕事は天竜人の署名の奪還とネプチューンやフカボシ達の救出解放。かなり大事な役回りだけど、2人なら必ず成功させるだろう。

ナミさんは自分とロビンに蜃気楼をかけ、メガロの口から誰にも気付かれずに出て

行つた。全く心配するなというのは無理だけど、不安はないかな。…抱き締められてた事で感じてたばよんの感触が無くなったのはかなり悲しいけど…!

「あの日…人間の海賊に金を渡して狙撃で『署名箱』に火を付けさせた。…そのスキに俺がオトヒメを狙い撃ち、そして雇つた人間を撃ち殺し!!犯人に仕立て上げた!!」  
「おのれ…ホー・デイ・貴様ア!!ウツ…!」

磔にされたまま暴れるネプチューン王の体に、シャーリーを貫いたのと同じ技を放つ。

「邪魔だつたんだよ!!なアしらほし!人間への復讐を『悪』とし…人間と仲良くしよう  
と島中に触れ回り!それを実現しかけたあの女が目障りだつた!!お前の母親は死んで  
当然の女だつた!!だから殺したのさ、犯人は俺なんだよ!!!」

こんの…クソ野郎が…!!

ジンベエ…早くしてよ!こんなの、しらほしちゃんが耐えられる訳が…!!

「…、知って、ました…」

…え。

「何じゃと!!?」

「しらほし…!?」

知って、た?それってどういう…。

「……俺がお前の母を殺したと……知ってたとはどういう訳だしらほしィ……」

「……事件から数年後……メガロがこつそり教えてくれました……このコは元々ネプチューン軍のペット。あの日、全てを見ていたのです……!!」

だ、だったらなんで、そのことをもつと早くみんなに……、……みんなに、言え  
ば……どうなる？ 待つて……まさかしらほしちゃん……まさか……！

「しらほし姫……ではなぜそれをわしらに言わなんだ!!」

「言え……!! 誰かがホーディ様をお恨みになると思いましたので……!! それではお母様が悲しまれます……！ お母様と交わした、最新のお約束なのです……、犯人様がどちらのどなたでも、決して憎んではいけないと……!!」

「……しらほし……お前……それで10年前の母上の言いつけを守つて……！ この事実を、硬殻塔で1人……ずっと抱え込んでいたのか……!!」

親を殺したものを憎まない……そんな事、出来る人が居るの……!?! 死にゆく母の願いだとしても、母の為に……必死に1人抱え込んでいたつて……!!

そして私はさつき、そんなしらほしちゃんを見下して……!! // 耐えられる訳が無い”だなんて決めつけて……!! この子が必死に耐えてきた10年を……バカにしたの……!!?!

……バカは私じゃん……！ 大馬鹿だ、いつペン死ね!!

しらほしちゃんは……この島に居る誰よりも強い!! 私より、ずっと強いよ!



「ジャハハハ!!!」

「笑うな貴様ア!!」

「メガロオ……! お前よくこのマヌケ女を選んで話をしてくれた!! 他の誰かなら俺達の計画は潰れてた。ジャハハハハハハ!! いいかしらほし! この世じゃそれを“マヌケ”と呼ぶんだ! お前が俺を憎まなかつた事で、これからこの王国は滅びる! お前のせいで父も兄も! お前も国民も、全員が死ぬんだよしらほし!!」

「……………っ」

隣でルフィがあたふたし始めた。一体何でかな……? ……なんてね、分かっているよ……。私は今……理性がフツ飛びそうなんだから。

「違う……! 耳を貸すな姫様! あんたのやった事は間違いないじゃない!!」

「ジャハハハ!! 間違い以外の何だ!!? 矢武やぶさめ鯨!!」

シヨットガンの様に飛んでいく何かが、王や王子達の体を激しく貫く。

国民の悲鳴が聞こえる、しらほしちゃんが泣いてる音が……涙が落ちる音が聞こえる。

「お父様あ! お兄様あ……!!」

しらほしちゃん……。

ごめんねジンベエ、タイミングで言うはまだ早いんだろうけど……私、どうも堪え性が無いから……、ん?

「おい、海賊麦わらのルフィ！一騎当千の女王イリス!!いつかこの島を滅ぼす気なら今来い!!」

「今すぐここで暴れるオ〜!!」

「島のどこかにいるんならすぐにここへ来オ〜い!!」

「麦わらア!!」

「女王オ!!!」

「これは…：国民達の声…！」

悲痛な叫びだ…：ワラにも縋るような、そんな声。

希望なんてもんじゃないと思う、だって私達は海賊…：国民からすればホーデイ達と何も変わらない。

「ただ願うしかない…：現状を変えてくれるイレギュラーを。」

「呆れたぜ…：ワラにも縋るとは正にこの事…：第一シャーリーの占いは今回も外れだ…：血迷ったバカ共を現実に戻してやろう!!よく見ておけ、先代国王ネプチューンの頭が飛び散る様をオ!!」

「ウワア〜〜!!!国王様ア!!」

「父上エ!!!」

ホーデイが腕を振り上げている。あの何か貫く技を頭に打ち込みようとしているに違

いない。

…ああ、それとこの島の国民達。あなた達がワラにも縋る思いで願ったイレギュラー…それは何ともまあ運の良い事に…、

「イリス様あ!!お父様をお守り下さい〜!!」

「恥知らずのリユウグウ王国は…!!終わりだア!!死ねエ!国王〜〜オゴアツ!!」

「大当たりだよ。イレギュラーなら、私の右に出るものは居ないし」

しらほしちゃんの声で外に飛び出し、ホーデイの顔面を蹴り飛ばして壁までフツ飛ばした。

…なんだ、デッケンは居ないのか。

「「え、ええええ〜!!」?」

「あ、あれは…!!」

「「一騎当千の女王、イリスだア〜!!」本当に現れたア!!!」

さて……ナミさん達は…もう来てるね。じゃあいつちよ暴れるか…いい加減、我慢の限界だから。

## 153 『女好き、嫁達の力』

「イリス様…っ！」

「イリス君…！もう出てしまってたかー！じゃが、今のは致し方なし！急げお前達！」  
「ムツヒ！何だ…誰に話しかけてるっヒ!!？」

ジンベエがその場でそう声を張り上げれば、イカの魚人が周りを見渡してそう言った。

「大丈夫よ、始めから急いでた！」

「ムツヒ!!」

私の隣から、スーっと天使が現れる。ナミさん…！流石、速い！

「イリスが泣いてる女の子を前にしてジツとしてられる訳ないもの。蜃気楼解除！」  
ミラーージュ

「うわっ！女が急に出てきたっヒ!!」

「これでいい？ジンベエちゃん。「天竜人の書状」！あと、錠の鍵はロビンに」

「上出来じゃ、ようやくた！」

ナミさんがピラ、と紙を見せて王や王子達の鎖を繋いでいた錠もロビンが外す。

「うおー!!出れたア!!!」

「「麦わらのルフィも居た〜!!」」

よっこらせ、とメガロの口から出てきたルフィを見て国民達が騒めく。

更に上空には、デンによつて取り付けられたシャボンで空中航海してきたサニーと、その隣に王が乗っていたクジラが泳いでいた。救出組も間に合ったみたいで良かった。良かった。

「行くぞおめエら!!ガオン砲…発射ア!!」

「ぎゃあああ!!海賊船だア〜!!?」

ガオン砲を壁にぶち当て、その周りに居たホーデイの部下を吹き飛ばす。その隙にクジラが王と王子を背負つてその場から逃げ出した。しらほしちゃんも連れてけよー! …あ、そうか、私の近くが一番安全つて事だね? うんうん、それは確かにその通り。

「よつと」

空から落ちてきたサニー号を片手で受け止めて、そつと地面に下ろす。みんなも船から続々と降りてきた。

船の下は竜骨がどうこうで傷めちやマズいんだよね。アダムつて木なら大丈夫だろうけど、念のためね。

「い、イリス…? さらつとやってるけど、それ一応船よ?」

「ふふん、凄いでしょ?」

ドヤ、とナミさんにいいところ見せれたから満足！若干引いてる？あはは、まさかそんな、はは。

「麦わらの一味…全員来た!!」

「おい!!麦わらのルフイク!!お前らは本当にこの島を滅ぼすのか!!?」

「なぜ竜宮城を占拠した!!?」

「人魚達を誘拐したのはお前達なのか!?!」

「答えてくれ!!お前達は魚人島の敵なのか!?!味方なのか!?!」

「敵か、味方か?そんな事、お前らが勝手に決めるオ!!」

「私は味方だよ!しらはしちゃんを助けてって言ったんだから、死んでも守るよ!!」

国民達に大きく手を振る。特に美女に!あ、あの子も可愛い!

「女王!!だつたら頼むぞ!!」

「麦わらア!魚人島を守ってくれ!!」

「でも最優先は女の子だからね!!男共は引つ込んでろ!!」

「何を!?!そんなこと言うなら何があつても姫様をお守りしろや女王!!」

「俺の嫁も頼む!」

「俺の娘も!!」

「なんか変に打ち解けてねエか、あいつ」

「2年前からあった『自信』が更に強くなつたんだろ。どれだけ強くなつてんのか興味あるな」

ウソツプとゾロがそんな事を言っているが、私は2年前から変わらず守りたいものを守るだけだ。守れる幅を、掴める手の平を大きくする為に2年間必死に修行した。それは私だけじゃない…みんなでもでしょ？

「はいコレ書状」

「ありがとうございます皆様…！これはお母様が残して下さつた魚人島の希望…！」

「はは…、違うよ。あなたのお母さんが残したのはそんな紙1枚なんかじゃない」

「え？」

パチクリと瞬きするしらほしちゃんに笑いかけた後、また振り返つて20万人の軍勢と向き合つた。

「本当にオトヒメ王妃が残したかったのは…しらほしちゃんのような優しい子だよ」

「…ですが、わたくしが勝手に真実を胸の内に隠していたばかりに…」

「いいんだよ、しらほしちゃんはそのままで。憎しみの連鎖を断ち切るにはあなたの様な心の優しい子が居ないとぜつったいに無理だからね。だから…後は私達に任せて。しらほしちゃんが守り抜いてきたこの大きな優しさを…耐え忍んだ年月を、今度は私が

守り抜くからさ」

「……っ、はい！……ありがとうございます……っ、えくくくん!!」

何があるうと、しらほしちゃんの10年を無駄にはしない。

私を誰だと思っているんだ……この誰が付けてくれたのかは知らないけど、一騎当千の女王”だよ？……私の嫁の努力を無駄にしようとする様な輩は、この名において苦しみを与えてくれるっての！

「“よわほし”、思ったほど弱く無かつたけど泣き虫だなー」

「あんなトコで10年間も命を狙われてたら誰だつて泣きたくなるっての。……ん？あいつも結構タフだなー……仕留めたつもりだったんだけど」

ボゴオン！とホーデイを埋めた筈の壁から音がし、煙の中からホーデイが現れた。ボリボリと葉みたいなの食ってるし、強化薬かなにか？

「ハア……ハア……ツ！ジンベエ……！まんまと引つかかった様だ……あんたが大人しく捕まってる時点で気付くべきだった……！グハ……っ、ぐ……」

でも相当ダメージはあるみたいだ。足取りは覚束ず、既に肩で息をしている。

「ハア……ツ、ハア……！……人間達と、仲がいいんだなア……！お前みてエな奴が俺は一番嫌いなんだよ！共に魚人街で育ったハズのフィツシャー・タイガーも……弟分アロンも”人間”にやられちまったってのに、その仇を討つ所か張本人と肩を組むとは……ツ、……ネ



プチューンにも劣らねエ、とんだフヌケ野郎だ：!!俺がこの島の王になれば全てを変えてやる!今年開かれる世界会議<sup>レヴェリ</sup>は絶好のチャンスだ!!世界中の人間の王達をマリージョアで血祭りに上げ、恐怖の「海底帝国」の伝説は幕を開ける!」

こいつ今ビビにも手を出しますよって宣言したんだよね?バカでしょ、何でそんなに死に急ぐの?そんなに私にポコされたいの?Mなの?

「世界中の人間共を海底に引きずり下ろし奴隷にしてやる!やがて魚人族に逆らう者は居なくなる、海賊の世界も同じだ!!見ろ、この腕に覚えのある海賊達の姿!!これがお前達の未来だ、麦わら!!女王!!俺こそが真の海賊王に相応しい!!」

海底で捕まえたという3万人の奴隷を差して言うホーデイ。：あちや、海賊王がどうか言い始めちゃった。

お陰で私がお前をブツ飛ばすのはお門違いになっちゃったじゃん：いらん事言ってるんじゃないっての。

「ジャハハハハ!!吹けば飛ぶ様なたつた10とちよつとの海賊に何が出来る!こつちは20万人だぞ!!やっちゃまえ!」新魚人海賊団!!」

「「ウオオオオオオオオオオオ!!!」」

「……『海賊王』?」

ルフィが四方八方から向かってくる海賊達に向かつてゆっくりと歩を進め…カツ、と目を見開いた。

ルフィを中心に衝撃波の様なオーラが全方位に広がり、バタバタと私達に向かつていた海賊達が意識を落としていく。

「な、何だコリヤ〜!!?」

「何もしてねエのにどえらい数やられたぞ!!」

「よ、4分の1はやられたか…!?5万人!!?」

「おー、やるね、ルフィ」

「覇王色の覇気…!使いこなせてんじゃねエか」

「たった2年でここまで…!!」

残り15万人か。私も減らしてあげよう。

「ホーディつつつたな、お前はおれがブツ飛ばさなきやなア。お前がどんなところでどういう『王』になろうと勝手だけどな……『海賊』の王者は、1人で充分だ!!…悪イイリス、あいつ貰うぞ」

「いいよ、仕方ないし。…じゃあー残りも寝てろ」

今度は私を中心に放たれる覇王色の覇気が、とてつもない程の広範囲に広がって更に

バタバタと奴らを気絶させた。

「な、なんだ?!今度は半分以上倒れたぞ?!?」

「10万人は倒れたか?!?残ってるの5万人?!?」

「一瞬で15万人やられたのか?!?何したんだあいつら!!」

「やば、減らしすぎたかな。せつかくみんなの成長を見れるいい機会だと思ったから加減したのに…」

「これで手加減してんのかよお前…もうおれはお前が怖エよ」

失礼な、味方なんだから頼もしいでしょ?

「キヤハ、確かに減らしすぎよイリスちゃん。せつかくイリスちゃんに私の成長を見てもらおうと思ってたのに」

「ごめんごめん、残り5万で許して…っていうか、こいつら船長含めて大した事ないから成長は分かんないかもね」

「私は手加減しなくていいから残り5万もさつさと倒して欲しいって思うんだが…見せ場なんていらねエだろ」

「まあまあ、そう言わないの、本当はペローナだって闘いたくてうずうずしてたんじゃないの?みんなそうよ、どこまで強くなったのか…実戦練習には丁度良いわ」

ナミさんがクリマタクトを構えながら言った。クリマタクトって言っても、私が最後

に見た形状とはまた違ってるけどね。

「こんな広場の真ん中で…でかい弱点を守りながら戦えるならやってみるオ!!撃水!!」うちみず

ホーデイがしらほしちゃんに向かって水滴を弾丸の様に飛ばした。

ああ…アレか、シャーリーやネプチューンを攻撃してた技の正体は。

だけど私が出すまでもなく、ジンベエが同じ撃水うちみずをホーデイの飛ばしたソレにぶつけて相殺させる。

「フン…何をして力を得たのかは知らんが、ヒヨツ子の「魚人空手」じゃ」

「やるね、ジンベエ」

「お前さん程じゃないわい」

そりやどうも。

「ヒヨツ子かどうか…もう一度良く見てみる!!撃水!!」うちみず

「お」

もう一度良く見てみる、とか言いながら私を狙うんかい。不意打ちって言うんだよそれ。

ホーデイの放った撃水は私の顔面に直撃し、べちやつと水鉄砲が当たったかのような音を立てて終わった。

濡れた髪の毛からポタポタと水滴が滴り落ち、肩から水が服にまで入ってきて気持ち

悪い。

「もー…しらほしちゃんがいるからカツコつけようと思つてわざと食らつてあげたのにさ、こんな濡れるなんて思わないじゃん！弁償してよ！この服シャンクスが買ってきてくれたやつなんだからさ！」

「…な…ツ」

直撃したのにピンピンしてる私がそんなにおかしいのか目を見開くホーデイだが、何を不思議に思う事があるのだろうか、単純に火力不足なんだよ、分かりやすいじゃん。

「え、シャンクス？」

くる、とルフィが私に振り返ったが、その視線は一旦無視した。

そりゃルフィが気になるのは当然、シャンクスもルフィの事を凄く気にしていたし…。だけど今はホーデイに集中して貰わないとね、あとたった5万人だし、ちやつちやとボコして終わろう。

「さあて、始めるよ!!」

小太刀を出して長さを倍加させる。

「イリス、それもしかして妖刀か？」

「流石ゾロ、分かる?…分かるか、この見た目じゃ」

私が抜いた小太刀は、刀身がドス黒く真っ赤に染まった危険な見た目のモノだった。

ベックマンにやるよ、みたいな軽いノリで貰った奴だけど、最初は一振りするのすら苦勞したよ、逆に私が操られそうになっちゃって！

今となっちゃ私の意思に素直に従ってくれるけどね、私を所有者と認めてくれた証拠だろうし。

「世界に1つだけの小太刀の妖刀…その切れ味は鉄をも豆腐の様に斬り裂く…とかなんとか。じゃあ、行くよ！」

私が抜いた小太刀に尻込みしてその場に留まってる奴らの中に、フツと消えたかのように一瞬で移動して刀を構える。

「一閃!!」

「グハ…ツ!?!」

「い、いつの間に…ツ…」

横振りの剣撃を一閃…それで20人くらいはダウンさせたかな。

うんうん、なかなか悪くなかったね、剣の腕はゴミみたいな私だったけど、シャンクスに色々教えて貰えて良かったよ。

ルフィ達もそれぞれ海賊達の軍団に突っ込んでいた。やっぱりみんなめっちゃ強くなってるね。

「な、何だこの女…！攻撃が当たらねエ!!」

「遠隔操作形か!? 近くに操縦者が居るかもしれないねエ!! 探せ!!」

「ホロホロホロ…私が本体だ、覇気使い以外が私に勝てる訳ねエだろ! ネガティブ・ホロウ!」

えつ、ペローナちゃんって本体を幽体化させる事が出来る様になったの? それ強すぎじゃない…:ん? なんかペローナちゃんこつち来てるけど。

「ちよつと私を守れ。幽体化出来るのは1分が限度だ、次に使うのに10分くらい時間がある」

「え、それ序盤で使つてよかつたの? でも凄いな、1分も無敵なんて強すぎだよ!」

「そ、そうだろ、ホロホロホロ! ……:褒めてくれた!」

ペローナちゃん? 私倍加で耳良いからボソつと言つたそれ聞こえてますよ? 可愛すぎじゃない? ねえちよつと神様可愛すぎじゃないこの女の子ねえ。

私に褒めてもらいたくて序盤から新技披露つて何ですか? 誘つてる? 誘つてるよねもう。

「色んな意味でやるわね、ペローナ! 私も負けてられない。…私だって、2年間必死に努力してきたの…!」

相手が振り回す剣をステップで華麗に避けたナミさんが、クリマタクトを3分割してその内の1本を持ち、棒先を相手に向けた。

「ウエザリアの天候の科学…ナメないで！突風<sup>ガスト</sup>ソード!!」

「ブホオ!!?」

おお！棒からまるでレイピアの突き技の様に放たれた、回転する高速の突風がナミさんを斬りかかった奴だけではなくその後ろにいた連中までも巻き込んで吹き飛ばした。

かっこいい!

「千紫万紅、ミルフルール ヒガンテスコ・マ巨大樹」

「おいおい、何だアレ!?!」

「脚!!?」

うわ…なんだあの綺麗なおっきい脚は!!…ロビン!?

「ストンプ!!!」

ロビンが生み出した巨大な脚になす術なく踏み潰されていく海賊達。破壊力えげつない…あとえつち…。

「キャハ…!みんな強くなってる…私も2年間の成果…見せなきゃいけないわね!」

「くそ!こいつさつきからひらひら避けやがって…!」

「おれ達が攻撃する場所が分かかってるみてエだ…!」

「キャハ!正解よ!見せてあげるわ…私の本気!10万キロ!」

10万!?!え、10万キロってなんトン!?!100トン!?!



「<sup>インパクト</sup>衝撃・プレス!!!」

空高く飛び上がったミキータの踵から、とんでもない威力のブーストがかかってまるでミサイルの様に地面に直撃した。

地面はメキメキと割れ、かなりの規模のクレーターが出来上がり周りには100を軽く超える数の海賊達が転がっている。

「…いたた、これ使うと足が痛くなるのが難点ね…。まだまだ修行が足りないわ」

クレーターの中心からふわりと浮かび上がったミキータが私に大きく手を振ってきたので振り返しておく。

みんな、2年前とは比べ物にならない強さだね…!…ぶっちゃけコレ私いらないな!?

## 154 『女好き、2つの強さ』

「調子に乗りやがって…!!クラークケン! 広場へ出る!!」

「クラークケン?」

…わ、やっぱりあの時のスルメか。

でもいいのかな? そいつルフィの友達だけど。

「たった13人だクラークケン! 踏み潰して来いっ! それで終わりだ!!」

「ギャハハハハ!! 海底生物の恐ろしさを知るがいい!!」

「おお! バカのクラークケンだ!」

「あいつはデタラメに強エぞ!!」

新魚人海賊団の面々はクラークケンの登場に大はしやぎだ。

海中ですらルフィに負けているのに、地に足ついてる今どうやって私達がスルメに負けるのさ。

「まだ分かんないの? デタラメに強いってのは、こういう事を言うんだよ」

指を銃の形で構えて、海賊が密集してる場所に指先を向ける。

「30倍さんじゅうばいばい灰」

私を中心にオーラが渦巻き、服や髪がパタパタと忙しくなく風に揺れ…体中を巡る覇気を指先に集中させ…、

「覇銃<sup>ハガン</sup>」

バゴオオン…ッ!!とまるで爆発でも起きたのかと錯覚してしまう程の火力を誇る覇気の塊は、まるで大岩程の大きさを誇って私の指先から放たれた。

当然、こんなのを奴らに直撃させたら私はその瞬間から大量殺人鬼に早変わりなので、奴らの丁度頭上を狙い、物凄い勢いのエネルギー弾が通り過ぎていった余波だけでその場にいた海賊達を吹き飛ばしていく。

広場を囲う壁を貫き、どこまでも遠くへ飛んでいくその巨大な弾丸は威力を衰える事なく、魚人島のシャボンすら飛び越えて遙か彼方に消えていった。

「……な、なんだこいつ…!は、外してくれて助かった…!あ、あんなの当たったら…死んで…!」

「分かった? デタラメってのはこういう事を言うんだよ、ちなみに全然本気じゃないけど、もう一発撃とうか?」

「ヒイイ!も、もうやめてくれエ!!」

周りを見るとみんなも私の方を見て口をぽかんと開けて見ていた。良いね、その反応、なんか気分が良い。

「30倍って…あれで!」

「んー?信じられないなら50倍で撃とうか?チョッパー」

「いや!良い!!おれ達まで余波にやられちまうよ!」

「でも、イリスちゃんがそれくらい強くなるのはある意味当然ね。バイバイの実っていうのはそれ程強力な能力だから…」

そうなんだよね。四異界とやらに選ばれるのも納得だよ。2年前は素の私が雑魚だったから倍加してもあんな感じだったけど、海楼石を付けた修行で私は素の状態でもそれなりに戦える様になったからね。

肉体的に成長したのも大きいと思う。

スルメも今の私の攻撃を見たのと、ルフイが「友達だろ、また乗せてくれよ!」と彼特有の純粹過ぎる呼びかけをした事によってホーディを裏切り、私達の味方となった。雑魚相手ならスルメでも充分無双出来るから、単純にこっちの戦力が余計増えただけとなる。

「いいかスルメ、お前はここでイリスと一緒によわほしを守るんだ!」

「私もあっちこっち動くから、ペローナちゃんの事もお願いね」

「は?いや、私はお前に…、あ、な、何でもない、忘れる!」

「分かっているって、後で襲ってほしいんでしょ?」

「んなわけねエだろ!!」

えー…そんな事言つといてお預けするの? でも今のは襲われても文句言えないでしょ? 誘い受けかな?

コクン、と頷いてしらほしちゃんとペローナちゃんの後ろに周り守る態勢を取るスルメを見て、ルフィはよし、と笑いかけてホーデイの所へ再度駆けていった。

「…クラーケン!! よくぞしらほしを捕まえた!! そのまま握りつぶせ!!」

「!!」

「北極で平和に暮らすお前の兄弟…その居場所は分かつてる。俺達ならいつでも容易く殺しに行けるんだぜ、なにせ伝説の種だ、死体でも高く売れるだろうな!!…それが望みならこのまま俺を裏切るがいい!!」

「とか何とかあのアホーデイは言ってるけど、分かつてるよねスルメ」

よつ、としらほしちゃんの肩に飛び乗って、スルメと顔を合わせる。

「私達があいつらに負けるとでも?…大丈夫、あなたの兄弟も、誰一人殺させやしない。何よりそんな事ルフィが許さない、だから大丈夫…私達にもあなたの家族、守らせてよ。それにしらほしちゃんを握り潰そうなんて考えたらブチのめすよこのタコ!」

ええ…みたい顔した後、スルメは覚悟を決めたかの様にキツとホーデイを睨んだ。

そりやそうだよ、この広場の状況を見て、一体誰がホーデイに軍配が上がるなんて思

うの？奴らにベットするアホがいるなら連れて来い！ボコって現実見せてあげるよ。

「おーおー…ルフィもホーディボコってるなあ」

「ルフィ様…お強いのですね…！」

見ててホーディが可哀想になってきた。する攻撃は全て避けられるか防がれるかで全く効いていないし、逆にルフィの攻撃には吸い込まれる様に全て直撃している。

あ、また壁に吹っ飛んでった。これで何回目だ？…タフさは本当に一丁前だよね。

「…ん？なんか急に暗く……げ!？」

「あ、あれは…！」

しらほしちゃんが空を見て目を見開いた。流石に私もビックリした…というか、普通驚くよ…だってこんな…バツカでかい船が空を覆ってたらさ！

「魚人島の半分はあるんじゃないの…？この船…！」

「の、ノアです…！魚人街にあった筈なのに何故、こんな大きなものが……っ」

明らかにこの広場へ一直線に向かってきてる…。島のシャボン突き破ろうとしているのが一番危ない…！流石にここでシャボンが割れば私も死ぬだろうし…壊しているのかな、アレ。

「ノア…!?あんなのが落ちてきたら居住区はひとたまりもないぞ！」

「避難しろ！避難!!」

「お、おい、なんか落ちてきたぞ!!」

国民達の中の誰かがそう叫んで上を指差せば、確かにノアから大きな何かが落ちてきていた。

「ホゲーーーっ!!!?」

その大きな人の形をした生物は、私達の目の前に頭から落ちてきて痛みにも声を張り上げる。

あんなところから落ちてきてタンコブで済むのはなかなか頑丈な証拠だけど…同時にあの船には誰かがまだ乗ってるって証拠にもなった。

確かこいつは…海で1度会った…名前は……えーつと…覚えてないけどーデツケン  
の部下だったハズ…。

「いったア〜!!足滑つたら〜!!バンらーれっケン船長〜!!おれが落っこちまつたらー!!舟を止めてくれ〜!!おれ死にたくないろオ〜!!」

「やっぱあいつか」

という事は、わざわざ私にボコられに来てくれたって訳?丁度いいや、雑魚ばつかで飽き飽きしてたトコだし…能力者ならまだマシでしょ。

「ちよつと行ってくる。スルメ、しらほしちゃんを頼…ふぎゅー!」

「お、お待ち下さい…イリス様!」

むぎゆ、としらほしちゃんの両手で体を握られて動きを止める。

すべすべの手で包まれてすつごく居心地は良いけど、今はマズイかな…早くしないと来ちゃうよあの船。

「どうかした？」

「つ…ノアは、わたくしを狙っています…！デッケン様の“マト”はわたくしですから…！」

「……ちよ、まさか…!!」

しらほしちゃん…今とんでもなく危険な事考えてない…!?

『バホホホ！バホホホホホ!!ワダツミイ、お前を助ける事はもう不ギヤ能!!この能力で飛ばしたものは何かに激突するか標的を仕留めるまで止まらねエ!!この魚人島と共に、しらほしの死に供えられる生贄となれエ!!』

「そんな…!!?」

あ…ワダツミカ。…いや、どうでもいいやそいつの名前は…!それよりしらほしちゃんだよ、なにその決意した瞳は…!

「…わたくしなら、あの舟の軌道を逸らす事が可能です…!ノアは来たるべき時まで動かしても、壊してもいけないとお父様が仰られていたのを覚えております…つ、ですから、わたくしにお任せ下さい！」



しらほしちゃんが自前のサンゴを握ってシャボンを出し、浮き輪の様に装着して空へ浮かび上がった。

…全く、どうして私が嫁にしようって決めた女の子は揃いも揃ってみんな天使なんだろう！私の人を見る目って実は凄いいんじゃないかな！でもしらほしちゃんはまだまだ甘いね、もし仮に今のしらほしちゃんの立場にナミさんになったのだとしたら、間違いなく1人で囷になろうなんてしなかった。

「よっ…とー！」

「っ…イリス様!？」

軽く跳躍してしらほしちゃんの肩に掴まる私を見て、その大きく綺麗な淡い青の瞳を見開かせて驚く私の人魚姫。私の。

まだまだしらほしちゃんは甘い。…この私が、そんな危険な事を嫁1人に任せる訳がないじゃん。

「しらほしちゃんが誰にも負けないくらい強いなら任せただけ…力はそんなに強くないでしょっ！」

「そ、それは…そうですけど…！」

「その代わり、あなたには人の為に、国民の為に命を懸ける勇気と心の強さがある」

「…!!」

その強さを持つ人を私はもう一人知っている。彼女…ビビも、国の為…自らの命すら投げうって数々の苦難を乗り越えていた。そしてその強さは誰にでもある訳じゃない…私に力が無ければしらはしちゃんや彼女の様な決断を下せたか分からないし…いや、多分出来なかつただろう。

「あなたが勇気を出して得たその答え…私にも手伝わせてよ。私には腕っ節の強さがある。でも喧嘩の強さだけじゃどうにもならない事もあるから…残りはしらはしちゃんが補って！しらはしちゃんに無い部分を私が補うから！」

「っ……はい…!!」

何も気休めでそう言ってる訳じゃない。本当に今はしらはしちゃんの勇気が無くちや島を救えないんだ。

今ノアはシャボンを突き破ろうとシャボンの形が大きく凹むくらいに接近しているから、この状態でノアを壊そうものなら攻撃の衝撃や破壊した破片でシャボンが割れかねない。だから一度しらはしちゃんにはノアを魚人島から引き離して貰う必要がある！

魚人島のシャボンさえ気にする事が無くなれば…後は私のターンだ！勇気のしらはしちゃんに変わって、腕っ節の私がノアをどうにかしてあげる！

「じゃあ、行くうか！」

上を見て、迫りくるノアへ近付いていく。下から突然居なくなったしらはしちゃんを心配する声が聞こえてきて、そういえば誰にも行つてくるつて言わなかったつけ、とちよつと反省。ナミさん達にいらぬ心配かけたかも。

「わたくしなら、こちらです!!」

「おオオ!!俺の愛した女ア!!」

ノアからデッケンの甲高い声が聞こえてきた。愛するな、私の嫁を。

「あなた様の『マト』はわたくしの命ではございませんか!!わたくし一人の命を奪う為だけに、リュウグウ王国の皆様まで巻き添えになさるのはおやめ下さいませ!!わたくしならこちらに!!」

「おオ:何と美しいんだしらはし!心までも!!その身一つにこの災害を引き受けて国を守ろうというのかしらはし!!その美しきままに死に、我が胸に永遠に生きるがいい、しらはし!!」

「一人じゃないよ」

言葉尻に投げつけてきたナイフを人差し指と中指で挟む様に掴んで止め、投げ返してノアに突き刺す。ちよつとくらいなら壊れてもいいでしょ?アレもダメかな?!

「あとしらはししらはし呼ぶなつつの。お前がその名を口にするのは私が許さない」

「バホホホ!!許さないからなんだ!?このノアが見えないのか!?能力者の俺ですら止める

事が出来ないこの舟を貴様が止める事など不ギヤ能!! いらほしと共に死にたいのなら死ねイ!!」

何言つてもダメだな、コイツは。

そういう奴は一旦ボコボコにするのが良い解決法なんだけど、今ボコつてノアが落ちたら終わりだ。

ボツコボコにしたい衝動を抑え、とにかく今はノアから離れる為に私達は急いで竜宮城の入り口へと向かった。理由は島から海へ出る為の道が竜宮城しか無いからだ。

正面入口もあるけど、今は遠すぎて選択肢に入らない。その点竜宮城の入口はつきつきゾロ達が使った筈だから、まだ竜宮城への水道は繋がっている筈だ。まさか出る時に律儀に閉めたりなどしてないだろうし。

「…っ、良かった、やっぱり道は繋がったままだね!」

「はい……!」

竜宮城から伸びた水の道は、予想通りまだこの魚人島のシャボンと繋がったままだった。

いらほしちゃんはその「連絡網」と呼ばれる水道に飛び込み、その道を経由して海へ飛び出した。私もサングを握ってシャボンを出し中に入る。

後はこのノアを下に何も無い場所へ移動させてデッキをボコすだけか…! 任せて

…喧嘩ならもう、誰にも負けないから!!

## 155 『女好き、最後に泣くのは』

「しらほしちゃん、とにかく上に行こう！シャボンから離せば後は私が何とかする！」  
「はい！」

魚人島から離れる様に上へ上へと泳ぐ。流石泳ぐスピードNo. 1の人魚、速いね。  
ここまでくればしらほしちゃんにノアが当たったとしても痛くはないだろう。巨体に押されるだけで潰される心配はない。

「バホホホ!!どこまで逃げる気だア!どこに行こうとノアはお前を追っていくぞしらほし!!俺の愛も!ノアと共にお前をどこまでも追いかけてようツ!!バホホホホ!!!」

「ほんつとに私をイラつかせるのが得意な奴だなあ…」

…ん? ホーデイとルフィも海中に来てるのか。流石に海中戦となるとルフィも苦勞しそうだ。

「しらほし!!自由はどうだ?!10年間お前を守り続けた硬殻塔の壁はもう無いぞ!俺のナイフに当たって死ぬのが先かア!この巨船に押し潰されて死ぬのが先かア!!バホホ!!最後にもう1度だけチャンスをやろうかしらほし、イエスならば今からでも命を助けよう!!俺と結婚しろオッ!!」

結婚しろとか言いながら何本もナイフ投げてくる奴が居るか！

くそ…反撃出来ないのがストレスだ！とにかくナイフは弾き落として…！

「させるか!!」

「!」

突然私達とノアの間にも2つの影が割り込み、迫り来るナイフを剣で弾き落とした。

…あ、あなた達は…！

「マンボシお兄様！リュウボシお兄様！」

フカボシ以外の王子達！フカボシは…お、ルフィの方に行ってくれたか、それは助か

る…！

「お前との結婚なんかおいら達が認めるか！」

「我らのたった1人の妹！指一本触れさせんぞデッケン!!」

「そうだそうだ！しらほしちゃんは私の嫁だよ!!」

「お前もか!!」

流石王子、息ぴったりだね。

「あいつに取られるくらいなら私が貰った方がいいでしょ？どう？この魚人島を救う代わりにはらほしちゃんを嫁に貰うってのは」

「こっちも相当厄介ラシド…」

「あ、あの、マンボシお兄様、リュウボシお兄様、私は——」

「バホ——!!お兄様達イ!!今正にしらほしが俺との結婚を決めかけていたのに!!」

あーもう!あいつほんとうるさいな!

大体私の嫌いなタイプなんだよデッケンは!身分の差だとか、高嶺の花だとかはどうだつていい、そんな無謀な恋は嫌いじゃないけどね——!好きだつて言うのなら、せめて相手を幸せにしてみせるつて気概を見せてよ——!ただ不幸にして、自分の物にする為に相手を傷付けて——!そんなの、愛でもなんでもない!自分の欲を満たしてるだけじゃん!!

「しらほしちゃん!ノア、だいぶ魚人島から離れたよ!そろそろ横に逸れよう!」

「それはダメだ!周りは海山が多い——どこかにぶつける事なく海底へ戻さねばならない!ノアは傷付ける事も許されぬ舟ラシド!」

「うっさい!このまま真上に上がつて、仮にデッケンが能力を解除したらどうなる!?!例えば奴が何らかの要因で気絶したら!?!その瞬間にマトマトの効果は切れるよ、したらノアは真つ逆さまに魚人島に落ちる!!——そうなつてもノアを殴り飛ばす事は出来るけど、その衝撃でかなり損傷するのは間違いない!確実にノアと魚人島の両方を守りたいなら、海山でも何でも気にせずぶち当たりながら横に逸れるべきでしょ!!」

う——と言葉に詰まるリュウボシの肩にぽん、と手を添えて「ごめん」と一言謝る。

「あなた達からすればあの舟はとても大事な物かもしれない、何も知らない私がこんな



事言うのは間違つてるのかもしれない。…だけど、私はあんな舟なんかより魚人島のみんなの方が大事だから。…それはあなた達も同じでしょ？」

「…そう、だな。…言い伝えに拘り過ぎるのは良くない…我々は過去を乗り越えなければいけないのだから」

「それにあんなばかでかい舟、ちよつとその辺の岩にぶつかった程度じゃびくともしないよ。…と言う訳だから、よろしく、しらほしちゃん！」

「は、はい…！お兄様、申し訳ありません…！」

…ん?!いや、ちよつと待つて…！ノアにホーデイが入り込んでない…!?

まずい…ホーデイがここまで来たのはソレが狙いか…！そりやそうだよね、自分もろともノアで潰そうとしたデッケンをあんな短気バカが許すとは思えない…っ！

あのままじゃデッケンがホーデイに殺される！

「しらほしちゃん！全速力でノアに突っ込んで！」

「え!?で、ですが私がノアに近づけば…！」

「大丈夫、しらほしちゃんがノアより上にいる限り、どこまでも上へ上昇し続けるハズ！」

まずはホーデイをデッケンから遠ざけないと…！デッケンが殺されちゃ面倒だ！

「リュウボシ達も来て！しらほしちゃんの護衛！」

「当たり前ラシド！任せてくれ！」

しらほしちゃんはそのままノアへ急降下し、シャボンの中へ飛び込んだ。デッケンが能力者だからノア全体をシャボンで覆って空気を得ているんだ。こんなでかいシャボン良く用意出来たな。

「おおく！しらほしィ！お前から俺の下へ来てくれるとは!!やはり俺とけっこ」

「覇<sup>ハガ</sup>銃!!」

「バホオ!?!」

弾丸がデッケンの頬を掠めて飛んでいき、デッケンのすぐ後ろまで迫っていたホーディの肩を貫いた。

「ぐウお!!?き、貴様…ア！」

「お前の相手はルファイでしょ！出てけ雑魚鮫！」

「ガツ…ハア!?!」

腕を伸ばして腹を殴り飛ばし、シャボンの外まで退場願った。

ダメージ入れ過ぎたかな？あんまり私がダメージ与えちゃうとルファイとの勝負の邪魔になるからね。

「バホホホ!!危ねエな、お前がホーディ・ジョーンズを止めなければ、今頃俺は奴に刺さっていた！バホホホ!!だから止めたのだろう！俺が死ねば！このノアは魚人島へ落ち

るもんなアしらほしィ〜!!やはりノアはお前をどこまでも追っていく!どこまでも  
だア!!…だが!俺はこう見えても紳士…!お前が俺と結婚すると言うのなら…」

「まだ言うか!妹はお前なんか…」

「…デツケン様!!」

ガシ、とマンボシの体を掴んで言葉を遮ったしらほしちゃんが、珍しく力強い瞳で  
デツケンを見据えた。

王子達もいつもの様子とは違うしらほしちゃんに戸惑っているようだ。

「おオ…俺の嫁になる決意を固めたか!!バホホホホ!!」

「わたくしは、あなた様のお嫁にはなりません…!!」

「バホ!」

ほら見る、いい加減しらほしちゃんも我慢の限界だったんでしょ。タイプじゃないっ  
て言われているのにいつまでも自分を変えようともせずアタックするからだよ。

私はここを出る頃にはしらほしちゃんを嫁にしてウハウハする予定だけど!

「…わたくしは…っ、もう、イリス様のお嫁です!!!」

「……へ?」



の世界線の私を覗いても断つてないと思う、断言する。

「…勿論、当然…大歓迎だよ!!ね、お兄様!」

「うぐぐ…しらほしから告白するのは予想外ラシド…!」

「い、妹の幸せを願うのが兄としての務め…!だけど本当にこれで良いのか…?!いきなり過ぎて状況が…!」

うん、それはほんとにそうなんだけど…まあいいじゃん、しらほしちゃん嬉しそうだし。

「…ば…ばっギャヤロー!俺の前でイチャついてんじやねエぞ、しらほしィ!!お前は俺の物だろオ!」

「はあ…何年想い続けてたんだっけ、10年?はは、残念…寝取っちゃったねエ」

「き、貴様ア!!…もう、いい…っ!!しらほし!!俺の物にならないお前など俺は耐えられねエ!!つまり死ぬ!!死んで俺の物になれエ!!しらほしィ!!」

勢いよく投げてくる斧を蹴り飛ばし、しらほしちゃん達にノアのシャボンを出て横に逸れる様指示を出す。

護衛はリュウボシとマンボシに任せるよ…デッケンを私が見ていれば、残る驚異はホーデイだけだし。なんならそのホーデイもルフィが絶賛ボコリ中だ。

「どいへ行くしらほし!!」

「おっと…お前の相手は私だよ」

再度投げつけた斧に覇銃を当てて弾き、デッケンとノアの上で向き合った。

「貴様…！貴様さえいなけりや、しらほしはこの俺の物になっポファ!!」

デッケンを蹴り飛ばしてノアの甲板へと飛ばし、私もそこに立った。

おっとと…しらほしちゃんを追ってノアが軌道を変えたからか、足場がぐらついてバランス取りづらいな…。

「そうやってさ、女のケツばつか追っかけ回してるから、あなたはいつまで経ってもしらほしちゃんに見向きもされない魅力皆無の人なんでしょ。…愛がどうか、好きがどうかか熱い言葉を語るくらいなら…好きな女の幸せを願って、腕引いて前を歩くなりすれば良かったんじゃないの?」

しらほしちゃんやリユウボシ達のお陰で、ノアはゆっくりと進路を横に逸れて行く。

「…愛…!? そうだ、俺はあいつを愛していた! そりゃア初めはしらほしの中に眠る。力“や竜宮城の金銀財宝が目当てだった”が…10年の月日を得て! 俺はしらほしに恋をしてきたと気付かされた!! 分かるか!? 恋に気付いたと同時に失恋した俺の気持ち!! そうなりやもうしらほしには死んでもらう他ねエだろ!? 何もおかしな事は言ってねエ!!」

「…じゃあ、お前には分かるのか」

私に蹴り飛ばされた事で尻餅を付いているデッケンの下へ、ゆつくりと歩みを進めて行く。

必死に溢れ出そうになる霸王色を押さえ、それでも溢れて私の周りの空間がねじ曲げて揺らしながらも、1歩ずつ。

「10年も命の危険に怯えて」

「ツ…や、止める…！ま、待て！いくらノアが横に逸れたと言つても、こんなバカでかい船が下に落ちれば衝撃は魚人島まで届く！お前らが守ろうとしている物を結局壊すハメに…」

「大好きな母の、お墓参りにすら行けず」

ドン！と言葉を遮る様に強く足を前に出せば、ノアの甲板に私の足跡がつき、

「こ、壊れてるぞ！オイ！お前ら、その船守りたかつたんじゃ…！」

「年頃なのに、行きたい場所にすら行けない…！！」

「ヒイ…！！」

やがてデッケンの前に来た時、ノアは完全に魚人島の真上から逸れ、最早こいつに遠慮してやる必要など無くなった。

陽樹イブの光もノアの巨大な体躯が遮蔽物となり、暗闇が支配するその世界に、私の赤の瞳だけが鋭くデッケンを射抜いて離さない。

「私は分からない……しらほしちゃんの苦しみも……そんな不幸を、あんな純粋な子に背負わせたお前の身勝手さも!!」

押さえ込んでいた霸王色が爆発したかの様にあたりに衝撃が吹き荒れる。ノアを包むシャボンがその衝撃で震え、辺りに小さな海流が幾つも出現してすぐに消えた。

「しらほしちゃんは私が幸せにする。お前はもう、二度としらほしちゃんと関わるな。いや……私が、関わらせない……!! 良く覚えとけネコ面、結局最後に泣くのは……私の嫁に、手を出した奴だつて事を……!! 10倍灰!!」

腕を後ろに振りかぶり、言い慣れたフレーズを口にした。デッケンは私の霸王色の圧で身動きが取れず、ただ体を震わせて私の瞳を見つめるだけだ。

これで終わりだ……しらほしちゃんの耐えた10年間も、こんな、クソ野郎も……私が、終わらせてやる!!

「もう二度と、そのツラ見せるな……去柳薇ア!!」

「ツブボオ!!!」

2年前とは比べ物にならない威力で、10倍の別れを告げる拳がデッケンの顔面へと吸い込まれる様に刺さった。

まるで重さなど感じさせないスピードで吹き飛ばされたデッケンは、そのままの勢いでノアの船内へと通じる扉に激突し、それでも勢いが弱まる事はなく壁をぶち抜いて奥



へと飛んでいく。

何枚も壁を破る音が聞こえ…やがて音が聞こえなくなった時、同時にしらほしちゃんを追っていたノアが落下を始めた。

「……だー!! スッキリしたー!!」

ブン殴つてやったわ! みたかこのネコ面4本足野郎が!! バァーカ!!! やつとブツ飛ばす事が出来たあ! ふー!! きもちー!!

「イリス様!! ノアが……」

「…あ、うん! 後は私に任せて! お疲れ様、しらほしちゃん」

ノアのシャボンに入ってきたしらほしちゃんが私を手の平に乗せる。

このまま下に落ちれば…私達が最初に流れ着いた海底に落ちるね、落ちた衝撃で魚人島のシャボンは結局割れそうだ。

「任せてとは言ったけど…」

しらほしちゃんの肩に掴まり、サンゴからシャボンを生み出して中に入りノアを覆うシャボンから出る。

「情けない事に私じゃ落下するノアに追いつけそうにないや、しらほしちゃん、全速力でノアの落下地点の海底までお願い!」

「は、は、は…」

流石、速いね。ノアをすぐに追い抜き、魚人島も通り過ぎて私としらほしちゃんは海底に立った。

真上を見ればなかなか壮観、超巨舟が真っ直ぐ急降下してくるんだから笑いが出てきた。しらほしちゃんは涙目だけ。

「今のままじゃ流石にキツイな…。じゃ…。女王化、と」

「わあ…」

ぶわっ、と私の姿が一変した事にしらほしちゃんが声を上げた。驚きもあるけど、なんだか瞳が輝いてる様に見える。

私もこの変化は久しぶりだ。頭のティアラも、マントも、体格の変化も2年前と変わらない。

ただ…その内から出ているオーラは2年前と比べ物にならないけど。

「100倍で行こうか」

私の両方の手の平が巨大化し、真っ黒に染まった。

ノアはもう目と鼻の先…行くよ!!!

「よいしょオオ!!!」

グーン！と腕を伸ばして落ちてくるノアを受け止めた。おお…！結構…重い…！！でも…！！

「ふぐぐ……！止ま、れエ!!」

ノアの落下が遅くなる。よし…、けどまだまだ!!

「おりゃああああ!!」

うおおおおいしょオオ!!と全力で掛け声を上げ…そして、ついにノアは私の腕に支えられて落下を止めた。

「…さて、ここをどこに下ろしたのか……つて、あれ?」

あれ?何で?私が押さえた筈のノアが、今度は逆に上へ上がってる。

もう一回落ちてくる感じ?……いや、違う…!

「おおお……海王類……!!」

ノアの船底から出る鎖をくわえて3頭の海王類がノアを持ち上げていた。これは…しらほしちやんの力……?ここに来て覚醒したんだ……!しらほしちやんの凄い力が!!

確かにこう見ると圧巻……いや……想像より大きかった……大丈夫だよねノア、丸呑みされないよね???

## 156 『女好き、ファンを嫁にする』

海王類がノアをどこかへ運んで行く前、何やらしらほしちゃんと話していた様だけども…ほんとに海王類と話せるんだ…。

しらほしちゃんを航海に連れて行ったら風カーメルトの帯も簡単に渡れそうだね。

海王類が去った後、私はまたしらほしちゃんの肩に乗って小さくあくびを出す。色々あつて疲れたんだよね…。

「何話してたの？」

「どうして海王類様が来てくれたのか…それを聞いていたのです。わたくしが…イリス様のお力になりたいと強く願い、それに導かれたと…あの方達は仰っていました」

「へえ、そこまでやってまだ私の力になりたいって願ってくれたの？流石に頑張り過ぎだよ、姫って普通みんなの後ろに守られてる立場でしょ」

「わ、わたくしは、イリス様のお力になりたいのです！」  
可愛い。

…あ、そうだ、ルフィは…。

「女王！」

「あ、フカボシ…だよな。どうも、新しく妹となったイリスと申しますが」

「何を言っている？それより麦わらが…！」

フカボシが背負っている人物2人のうち1人を私に預けてきた。つてルフィじゃん……どうしたのその血……！

「何やら一瞬、舟で凄いハキを感じたとかで隙を見せてしまい……ホーデイに噛まれ深傷を……」

「何してんの?!」

自業自得じゃん！戦闘中に気にする事じゃないけど……まあ、ホーデイ弱いし、ちよつと気を抜いちちゃったのかもしいけど……海中だからねえ。

「それで気を失ってるの？ホーデイはその背中の？」

「そうだ。…君達には本当に返しきれない恩が出来てしまった様だ。ノアも最小限の損傷で済み、国が長く追っていたバンダー・デッケンまで捕らえてくれるとは…!!」

「いいよ、私はしらほしちゃんを嫁に貰えただけで満足だから」

「そうか……ならよかつ……ん？今なんと……」

ああ、これ面倒な流れだ。全くシスコンはこれだから。

適当に話は切り上げて、ルフィをチョッパーに診てもらおう為に海へ出たルートとは逆の手順で魚人島のシャボン内へ戻った。

確かにルフィ、血やばいな…流し過ぎだ。変なところで覇気解放しなきゃ良かった…  
デッケンをビビらずつもりがまさかルフィを釣っちゃうとは思っても無かったから…。

「おーい！ チョッパく〜!!!」

「お、帰ってきたぞ！」

みんなが居た広場の中心に急いで泳いでくれたしらほしちゃんにお礼を言つて、ルフィを抱えてチョッパーに見せる。一瞬ギョツとしたが、すぐに気を取り直して私に「バックの中にある止血剤を取ってくれ！」と慌てた声で言った。

「どうしたの？ 体動かせないっほいけど」

「ああ…今イリスが使つてる女王化と一緒だよ、ランブルボールで意識を失わずに怪物になれる様になつたんだけど、効果が切れると動けなくなるんだ」

なるほど。

それにしてもチョッパーが自分から怪物になろうとしてるなんて、なんというか心の成長を感じる。初めて会つた時はあんなに私達を警戒してたのになあ。

「血は止まるけど流血の量がちよつと多いな…ルフィなら肉でも食べさせれば治りそうだけど、医者としては輸血してやりてエ…！ 一体どうしたんだよルフィ…！」

「あ、なんか私の覇気に気を取られたみたい」

「本当に何してんだ!!!」

ウソツプの突っ込みにうんうんと私も頷いた。強くなったから、油断するのも分かるけどね。

「誰か血液型F型いねエか!？」

「でもウチにはルフィ以外Fは居ないんじゃないか? 私はXFだし!？」

今ふと気になったんだけど、この世界で王華が輸血が必要な程大怪我するとすれば、血液型って大丈夫なんだろうか。確か王華はAB型だけど…XFとABは同じって考えでも大丈夫なのかな? わからん。

「広場には誰かいるんじゃない?」

「そうか…! 誰か…!! 血液型Fいねエか!!？」

…と言っても、確か法律で決められてるんだよね、人間に血を分けちゃ駄目だって。

「あ、あの、わたくし血液型違いますけど赤いです! ダメですか?」

「うん、よし! 気持ちだけありがとな!」

可愛すぎないかこの姫様ア…! 押し倒したいく!! 身長差的に押し倒しても絵面がアレだけど!

「わしの血を使え! Fじゃ、いくらでもやるわい!」

「あ」

ジンベエ! でも、いいのかな、ジンベエだって魚人だから法律があるんじゃないか…。

「わしは海賊じゃ、何に縛られる必要がある？」

「…いいね、そういう考え好き」

口角を上げて、もう大丈夫だと言うチョツパーを下ろしてしらしちゃんの肩に飛び乗った。

うん…ここ、やつぱり居心地が良い。1番が良いのはぼよんの谷間だろうけど…。

チョツパーがジンベエから血を採り、輸血パックに移してルフィへと血をゆつくり注いで行く。

…あんまり深く考えて無かったけど…これって魚人と人間の隔たりを無くす大きな1歩となりそうだね。ルフィの腕へと伝う1本の管が…何よりも分かりやすい印だろう。

それに私だってしらしちゃんを嫁に貰ったから、その点で言っても人間と魚人の距離は縮まった…というか縮まらざるを得ないし。

「ジンベエ…」

あ、ルフィ…目を覚ましたんだね。それか意識はあったとか？喋る元気が無かっただけみたいだな。

「何じやい、意識あつたか…」

「なア、ジンベエ」



ルフィのジンベエを呼ぶ声が強くなる。

その瞬間に、私達一味のみんなは察したのだ。…この弾む様な声、期待に溢れる声、何よりも嬉しそうで…ルフィがいつも生き生きしながら言う言葉を…ジンベエにも言うおうとしてるんだと。

そしてその事に気付いてもみんな笑っている。だってそうだ…今からルフィが言う言葉に、誰一人異論を唱える人は居ないから！

「おれの仲間になれよ!!」

「…」

ジンベエだけが驚いた様子を睨み開いて、私達はだよ、と頷き合うだけ。だって分かっていたしこの流れ。ついでに言えばちよつと期待してた。ナイスルフィ。

\*\*\*

そんなこんなでルフィにジンベエの血を輸血するのを終えた私達は、そそくさと逃げる様に広場を後にしていた。

サニー号にシャボンを取り付けて空を飛び、ネプチューン王がホーデイ達の拘束が完了した事や、新魚人海賊団の残党のこれからを説明している隙を狙って逃げた為殆ど誰にも見られていない。しらほしちゃんにはバレたけど。ていうか私が呼んだ。

「皆様、何故逃げる様に広場をお出になられたのですか？」

「バカ言ってるじゃねエよ、あんな見世物みてエな場所で戦わされて…あのまま広場にいたらヒーローにでも担ぎ上げられちまう」

「誰がバカだつて？」

「だー！面倒くせエんだよてめエは!!」

ゾロがしらほしちゃんをバカつて言うのが悪いんじゃないし！バカじゃないし！可愛いし！

「それよりイリス、あんな女王クイーン化解除したのに動けるのね」

「まーね。因みに制限時間は1時間で、次使える様になるのは半日後つてトコだよ。能力は解除した後も普通に使えます」

肩からもう1本の腕を生やしてみせた。2年前だと女王クイーン化が解除されたら身動き1つ取れなかつたし、能力だつてうんともすんとも言わなくなつてたからね。しかも半日から1日ずつと。

「何で断るんだよオ！ジンベエくっ!!一緒に冒険しよう!!」

「そうだ！仲間になれ親分！」

「元七武海が居たら心強エ〜!!あとルフィ絶対安静な」

…で、さつきからジンベエに掴みかかったりしてるルフィと、それを困った様に往なしているジンベエだが…実はルフィの勧誘をジンベエが断つたからああなっているのだ。

断つたって言っても、今は無理、みたいな感じだったけど。

「じゃから今はムリだと言うだけじゃ！誘ってくれた事は本当に嬉しく思う、お前さんらと海に行くのはさぞ楽しかろう…しかし、わしにはまだやらにやあならん事がある！現在の立場というものがあるんじや…今はそこを離れて来ただけ。人の道に仁義を通し、スツキリと身軽になった時…今一度わしはお前さんらに会いに来ると約束しよう。その時にまだ今の気持ちのままでおってくれたなら、もう一度誘ってくれんか…  
“麦わらの一味”に!!」

「…絶対だぞ！ジンベエ!!」

随分気に入られた様だね、ジンベエ。

まー私とルフィからすれば2年前の事もあるし…彼が信頼出来る人物である事は充分承知しているからね。

「じゃあどうする、このまま“新世界”か？」

ゾロの言葉にしらほしちゃんが目に見えて動揺していた。なーに言ってますやら、まだ居るよ！

「私はまだ残りたいかな、しらほしちゃんといチャイチャしなくちゃいけないから」

「お前はほつといても自力で新世界来れそうだな」

ウソツプは私を何だと思ってるんだろう、流星に無理だからね？ ナミさんの航海術も無しに海に出たくないからね私は。

「ここって元々海賊達の休憩場みたいなのとこなんでしょ？ せつかくホーデイとかブツ飛ばして平和になったんだからもう少し居てもいいでしょ」

「だけど俺達はこの島じゃ “人魚誘拐” の犯人だ。早いトコ出た方がいいんじゃないか？」

「お前はアホか黒足、私達は偶然とは言えこの国の危機を救ってんだぞ、そんな奴らを捕まえたりすると思うか？」

「ペローナちゃんの前じゃ、俺なんてアホ以下のノミみたいなものだよろこ♡」

ネガティブ・ホロウを喰らってないのにネガティブ発言してる…にも関わらず表情は幸せそうだ。

「ーお待ちを!! 麦わらの一味の方々!!」

「ん?」

サニー号の後ろを結構な速さで追いかけてきているのは、大きな魚に乗ったこの国の兵士だった。手には電伝虫を持っており、見た感じ通話中っぽい。

『ルファイ君!! 宴の仕切り直しをしようじゃもん!!』

「宴々!!? 宴だつてよお前ら! やっぱりまだ魚人島に残るぞ!!」

「オイオイ、ほんとに大丈夫なのか? 罨とかじゃねエだろうな……!」

ウソツプは心配し過ぎだと思ふけど……宴か。普通に魚人島を救った私達へのお礼つてトコかな、フカボシも私達に感謝してたし。

「あ、じゃあケイミーちゃんも呼びに行こうよ。あとハチ」

「そうだな……よし! お前ら急げ!! 宴だア!!!」

おお!! とみんなで盛り上がって、ホツと一息つくしらはしちゃんにウインクした。まだ一緒に居られそうだね!

― 竜宮城 ―

ケイミーちゃんとハチを迎えに行った後、竜宮城へと案内された私達は「宴会の間」と

いう場所に案内された。

その部屋は完全に水に浸かっており真っ暗で、私達は「長ヒラメ」と呼ばれる巨大ながーいヒラメの上にシャボン張ってその中で待機している。

「おお…なんだここ、今からアトラクションでも始まるの？」

「ふふ、イリス様、正面がステージですよ」

ステージ？

長ヒラメの横を泳ぐしらはしちゃんがそう言うので前を見れば、パツとそこだけ明かりが点いて貝殻のステージが現れた。

その上には一人の人魚が居て、私達を歓迎するかの様に歌い出し、それを皮切りにドラム、マーメイドカフエダンサーズなど沢山の魚人、人魚達が芸を披露し始めた。

暗い水の中に、所々ぼつぼつ光る灯りのお陰で暗闇耐性倍加を使わなくてもはつきりとそれらは見えるが…さながら夜空の中心にでも来た様な気分だった。これはいい宴の予感！

良く見れば下には兵士達が沢山居て、皆私達に歓声を上げて手を振っていた。

「食事を運べ〜!!」

「食え歌え! 飲め踊れ〜!!」

「お前らの為の宴会だ!! 酒は浴びるほど飲んでくれ! 飯はたらふく食ってくれ!!」

「よーし!!野郎共オ!!宴だア!!!」

「やつほーう!!食べるぞー!あと可愛い人魚達と遊ぶー!」

私は念の為お酒を飲むのはやめておこう。もし…もしアルコール耐性の倍加が出来なかつたら……この場がとんでもない事になって、今度こそ魚人島出禁になっちゃうかもしれない…!!お茶飲みます!

「女王様、私も嫁にして♡」

「抱いて♡」

「冗談とかじゃなく本気で嫁になってー!!…あ!ルリスちゃん!」

「どーも!ありがとうイリスちゃん、お陰でまだマーメイドカフェで働けそうだよ」

人魚の入り江で知り合ったシュノーケル美少女がシャボンを超えて私の隣に座った。

「それは良かった。所で考えは変わった?私の嫁に来てよ」

「今イリスちゃんに求められて断る女の子は、多分魚人島には居ないと思う。勿論、私も

もう遠慮しないからね?」

「あー!ルリスだけズルイわ!私の事も覚えてますか?メロです…!」

「忘れる訳ないじゃん!可愛い女の子は一目見ただけで完全記憶余裕だよ!」

青髪で花飾り付けてる美人さんがメロだ。ルリスちゃんとは反対側の私の隣に座って腕に胸を押し付けてくる。

「私の事は知ってる？ヒラメラよ、入り江では自己紹介してなかったわよね」

「私はセイラ、やつぱりあなたってワイルドね、素敵」

「ヒラメラにセイラね。もう知ってるよ？お姉さんっぽさがダントツのちよー美人の二人を忘れようが無いって」

ふんわりピンクツインテールのヒラメラと、同じくふんわりとした黒髪をポニーテールにしているセイラが後ろから腕を首に回して抱き締めてくる。ツインテールなのになんでこんな大人っぽいんだ…ふんわりしてあんまりツインテールっぽく無いからかな…ローツインテールでもないのに本当にお姉さんっぽい。

セイラに関してもお姉さんぽさでは同じ事が言える。そういえば初めて会った時に、ワイルドな人が好きって言ってた様な…？ていうか何この状況、えっち。

「じゃあ、私はここね」

「あ、イシリー…！」

サンジを噴水鼻血させた張本人の、黒髪でそばかすのある美女が正面から私に背を預ける様に凭れかかって来た。

「イシリー、大丈夫？誘拐されたって聞いたけど…」

「ええ…ちよつと海賊に捕まって、自分でも何が起きたのかハッキリ覚えてないのよ」  
「海賊…？…もしかして、カリブーかな？そういえばサニー号にあいつの樽なかった



様な……」

「あ、そう！樽を開けたら中から人が出てきて……」

「やっぱりアイツか……。後で探しに行こう、それでブツ飛ばす。」

「随分モテてるみたいだね、女王様」

「え？あ、シャーリー！」

今度はシャーリーが片手に盃を持ってやってきて、メロの隣にゆつくりと腰を下ろした。

「ホーデイにやられた傷は平気？」

「あんなの擦り傷だよ、あなたがこの島を滅ぼすなんて……そんなバカげた占いをしてしまった事を謝りに来ただけだから気にしないでおくれ」

「気にするよ、シャーリーみたいな美女の体に傷が残ったらどうするの？」

全く……そこんともう少しでもいいから自覚して欲しいよね。

私の言葉に頬を染め、そっぽを向いて照れ隠しに酒を口に含んでいた。アールン……本当に兄妹なの？全く面影ないけど。

「シャーリーもさ、良かったら私の嫁になってよ」

「嫁……。でも、私はあなたの正妻を傷付けたアールンの妹だよ、そんな資格がない事くらいは分かってる」

「うん、だから妹でしょ？ 兄ちゃんが誰だとかどうでもいいから私の嫁になってよ」

血縁者が誰だからくとかで美女を見逃すのはバカだからね。それがナミさんをあんな目に遭わせたアーロンの妹だろうと同じ事…。アーロンの罪はアーロンの罪、シャーリー関係ないし。

「贅沢言うならルリスもメロも、ヒラメラもイシリーも嫁になつてね。知つてるでしょ？ 私が一騎当千の女王以外に何て呼ばれてるのか」

「…勿論、あなたの事は調べ尽くしているからね。女好き…世界中の可愛い女性を嫁にしたいんだろう？」

「そう…夢だからね…文字通り、生まれる前からの」

シャーリーは少しだけ顔を伏せた後、ゆっくりと顔を上げて私と視線を交わす。

「正直に言うかね、私はあなたの事が大好きなのさ。あなたが白ひげの船長を救ったあの戦争の記事を見た時…私は初めて外れた占いに歓喜の余り泣き崩れて、それを引き起こした張本人に興味が湧いた。それからずっとあなたのファンなのさ…、でももし、ファンという枠から外れ、あなたの嫁になつてもいいと言うのなら…」

「うん」

「……よ、嫁に…貰つて…下さい」

最後の方は私の目から視線を外し、斜め下を見て頬を染めていた。

ぎや、ギャツプ萌えつてこういう事を言うのかな……今凄く心に来た……!!

「マダムだけズルイわ! 私も良いでしょ?」

「私も良いですよね?」

「女は強い存在に惹かれるのよ……私も嫁にしてくれるんでしょ?」

「ふふ、モテモテね。勿論、私もお願いね?」

「私の事も忘れないで欲しいわね」

「もっちりろん! なんか順当に行きすぎてて怖いけど、大歓迎だよ!」

上からルリスちゃん、メロ、セイラ、ヒラメラ、イシリーがそう言ったので当然受け入れた。魚人島だけで8人も嫁が居るって凄い! しかもみんな可愛いし……美人だし!

この宴の場を設けてくれたネプチューンには感謝だなあ、後でお礼言つとこ!

## 157 『女好き、2年間での変化』

「いやー、魚人島、ほんとに来て良かったー!」

「そう言って頂けて嬉しいです。えへへ」

ルリスちゃん達やシャーリーと散々イチャイチャした後、興奮した頭を覚ます為脇へ引つ込んでゆつくりお菓子を食べていたらしらほしちゃんがひよこつと顔を覗かせた。

少し表情も柔らかいし、頬も火照ってるから酔ってるのかな。

「しらほしちゃんは酔い覚ましてここに?」

「はい、飲み慣れないお酒で少しくらくらするので、お部屋に戻ろうかと思ったのですが、扉近くにイリス様が居たので…」

「ここだと宴の喧騒はあんまり聞こえてこないから、頭を冷やすには丁度良いと思うよ。あー、でも硬殻塔の方が静かだね」

それにしらほしちゃんも落ち着くならあの部屋にいた方が良さそうだ。何だかんだ言っても幼い頃からずっと過ごしてきた部屋な訳だし、居心地は良い筈だろう。

「…で、どう? 本当の自由を手に入れた気分は。デツケンのボケは今頃ホーデイと一緒に

に檻の中、命の危険も無くなった訳だけど」

「そうですね……んー……イリス様のお近くだと余り違いが分かりません……」

「えー……なんで？」

自分の命を脅かす存在から解放されてるのに違いが分からないって、鈍感なんてもんじゃないと思うんだけど。

「……それは、イリス様のお近くなら……例え誰に命を狙われていても心から安心出来るからです。ですから、分かりません」

「……ふーん、つまりデツケンやホーデイじゃなく、私に襲って欲しいって言ってるんだね？」

「えっ?」

そんな私を喜ばせる様なコト言ってきた。例えばここが硬殻塔の中で、しかも2人つきりつて状況だったら間違いなく襲ってたね、うん。

「せつかく興奮を冷ます為にここに来たのに、しらほしちゃんが可愛いからまた火照ってきたやつた」

「も、申し訳ございません……あ、あの、すぐにお部屋に戻りますから……」

そんな本気で言った訳じゃないのに！涙溜めないで！ごめんなさい！

「……あ、イリス様、最後にーっだけ……」

「？」

「……ん。…、で、では私はこれで…！ま、また後で顔を見せます！！」

しらほしちゃんが私に顔を寄せ、頬に軽くキスを落とす。そして逃げる様に硬殻塔へ泳いで行った。

サイズ差のせいで唇を諦めたから頬にしたのか？その辺は良くわかんないけど…。

「あつぷな…」

頬を撫でながら一人呟く。

…体を倍加させて押し倒し、そこからしらほしちゃんの体を隅々まで犯し尽くしたい衝動に駆られたのを抑える事が出来てほんと良かったあ…こんな場所で盛ってたら、仮にネプチューンにでも見つかったらヤバイ。娘さんを下さい所の騒ぎじゃなくなるよ…。

でも今のはしらほしちゃんも悪いよね、可愛すぎるのも罪だと思っただよ、私は。

「あら、イリスも休憩？」

「ナミさん！うん、興奮冷ましにちよつとね。まあ…冷ます所か余計火照っちゃったけど」

少しばかり頬が上気しているナミさんが、ふう、と息を吐いて隣に座る。

「？まあいいわ。私は酔い冷ましで来たの、ちよつと膝借りるわね」

そのままごろん、と私の膝を枕にして寝転がったナミさんが、上を向いて手を伸ばし私の頬をぷにぷに触り始めた。

「どうしたの？何だかいつもより甘えんぼさんだね」

「だって…人魚達を嫁にする邪魔をしたく無くてあんたから離れてたから…今くらいは引っ付いていたいじゃない」

「いつでも引っ付いていいよ？ナミさんなら」

頭を撫でると、ゆっくりと気持ちよさそうに目を閉じるナミさんを見て口元が緩む。こんな甘えてくれるナミさんは珍しすぎるから今は存分に甘えて貰おう。

今日は魚人島に着くまでの航海の疲労も溜まってたんだろうし、なんならここで一眠りして貰っても構わない所存です。

「イリスちゃんのを匂いを辿って来てみれば…これはかなり珍しい状況ね。ナミちゃんは寝てるのかしら？」

「あ…慣れねエモノを飲むんじゃ無かった。頭が痛い…」

ミキータとペローナもここへやって来た。2人とも酔い冷ましかな？

「まだ寝てないわよ、寝そうだけど」

「寝てもいいのに…」

「今寝ちゃったら夜に寝れなくなっちゃうから我慢するわ」

そんなあ…私の膝で眠るナミさんの頬をつついたり、こっそりキスしたりするドキドキ感を味わいたかったのに！

「うっぷ…もう入らねエ…」

お腹を膨れ上がらせたウソツプがふらふらと歩いて来て大の字で寝転ぶ。やっぱりみんな休憩するならここに来るんだね。

「はア〜…♡」

今度はチョツパーがサンジを連れてやって来ていた。これは何冷ました？私と同じかな。

「ここは楽園だ…オールブルーだ…」

「それでいいのかサンジ!？」

突っ込みつつも寝かせたサンジを団扇で扇ぐチョツパーを横目で見ながら、ナミさんの髪に指を絡ませたりして感触を楽しむ。

みんなも普段私を愛でる時こんな感じなのかな…そりやあハマるよね、なんだか尽くしてるーって感じで心が満たされるというか。

「はー…飲んだ飲んだ。…あん？なんだ、お前らもここに居たのかよ」

次はゾロか…じゃあ今度はルフィかな、とか思っていると本当に来た。何やら大量のお菓子を抱えてジンベエと共にやって来たが、休みに来たって感じじゃなさそうだ。



「ここってほんとに人を集めるオーラでも出てるのかな」

「それってイリスちゃんみたいね。ペロちゃんもそう思うでしょ?」

「お前はいつまで私の事をペロちゃんって呼ぶんだ」

まあ、ペロちゃんが似合う可愛いペローナちゃんの話は今置いておいて、どうやらルフィとジンベエは、ジンベエがルフィの情報力に不安を抱いたから今現在の世界のアレコレを話そうとここまでやってきたみたいだ。

ゾロは寝ちやつたけど、サンジはトリップから帰ってきてるからみんなで話を聞きましょう。ロビンはネプチューンに話があるからとこの場には居ない…というのはミキータに聞いた話だ。ブルックは多分まだ宴。

「何から話せば良いか…、ルフィ、お前さん…赤犬と青キジの『大決闘』は知つとるのか?」

「え、赤犬と青キジの大ゲンカ!!」

「何ソレ、私も知らない!」

赤犬と青キジが決闘オ?どうして同じ海軍に所属する…しかも三大将の2人が決闘なんて…。

そりゃあ青キジって大将としては…というか海軍全体で見てもおかしな奴だったけど。

「どうしてイリス君も知らないんじゃない、一体どこで修行を積んでおった」

「私はシャンクスんとこ」

「そうか、四皇の……ん？」

私の言葉にジンベエは一瞬固まり、ナミさんやミキータ達もギョツと目を見開く。

因みにナミさんはそれでも私の膝から移動はしなかった。これ、2年間会えなかった分も含めてくつついてるんだって今気付いたよ。

「なるほど……あの時、シャンクスがくれた服がくって言つてた理由が分かったわ」

「因みに白ひげも居たね」

「親父さんもか……。お前さんの為に四皇が2人も時間を取ったのか……世界政府がこの事実を知れば卒倒しそうじゃのう……」

ルフィとサンジ、ゾロにはエースを助けてるって話をした時に白ひげの話はついでに言っていたが、シャンクスの話はしてなかったからルフィは珍しく話をきちんと聞いている。

……あ、そうだ、ジンベエにはエースの事も伝えておかなきゃ。

「あと、エースも助けてるから生きてるよ。伝えるの遅くなつてごめんね」

「何じゃとオ!!？」

「うわっ!」

グワツと身を乗り出してきたジンベエに驚いて跳ねそうになる体を何とか堪えた。ナミさんの頭が私の膝に乗ってるんだから下手に動けないし。

「本当か!？」

「こんな嘘付くわけないじゃん。多分そろそろ記事にもなると思うよ、シャボンディで暴れてたから」

「しかし、一体あの時どうやって…それにエースさんは確かにわしらの目の前で…」

Mr. 3の作った蠟人形なんだけどね、アレ。

説明すると長くなるから、とにかく生きてるとだけ伝えておく。ルフィとサンジもそれについては本当だとジンベエに言ってくれたので、割とすんなり受け入れて貰えた様だ。

「…お前さんは、何というかとんでもない奴じゃのう…。あれ程の戦争の中、エースさんと親父さん2人を命の危機から救っておるとは…」

「いいよ、そういう評価はさ。エースはルフィの家族だし、白ひげは死ねば悲しむ人が沢山居たから助けた、それだけなんだから。それよりさっきの話に戻ろうよ」

「わしとしてはそう簡単に切り替えられる話でも無いんじゃが…」

そうは言われても切り替えて貰わなきゃ…青キジと赤犬の決闘の話は気になるし。

「…とにかく、エースさんは生きておるんじゃないか?…」

「うん。ピンピンしてるし、めっちゃ強くなってるからもう捕まらないよ」

「…そうか」

堪え切れなかったか、出てきた涙を指で拭ってジンベエは私に頭を下げた。

「魚人島の件だけではなく、エースさんの事までイリス君には返し切れぬ恩が出来てしまった…!! 本当ありがとうございます…!!」

「もう…良いってば」

困った様に笑えば、ジンベエはそんな私を見て涙を流しながら軽く声を出して笑った。

「恩を着せない立ち振る舞いは、ルフィにも似とるな」

「ジンベエが男だから何も要求しないだけだよ。美女だったら嫁になって貰ってるトコロ」

美女だったらね？ 実際は筋肉凄い男性だから興味ないけど。

「シャンクスは元氣だったか？」

「そりやあもう。宴会ばかりしてたんじゃないかな。あ、でもやっぱり強かったね、飲んだくれってだけじゃない」

「そっか、なら、もういいや。後はいつか会った時に、この麦わら帽子を返す時にでも聞くよ」

ルフィらしい返答に、私もみんなも軽く笑った。

普通はここで根掘り葉掘り聞く所だっというのに、私達のキャプテンはやっぱり大物だよな。

「大分逸れた話を長引かせてしまつて申し訳ない、そろそろ話を戻そうか」

お、やつとか。

私が気になる所といえは…やつぱり決闘の理由よりは勝者が気になる。

青キジと赤犬だったら能力的にやつぱり青キジか不利なのかな？

「赤犬と青キジの決闘じゃが…事の始まりは2年前のあの戦争の直後、センゴク元帥が職を下りてから起こつた」

センゴク…戦争で海軍の指揮をとつてた人だ。大仏にもなつてた気がするから能力者…のハズ。

「センゴクは次期元帥の座には部下からの信頼も厚い青キジを推したが…政府上層部には赤犬を推す者が多く有力になつた。普段は特にやる気など見せん青キジじゃが、赤犬が元帥になる事は強く反発した…」

私と戦う時ノリノリだったけどねえあのヤロ！

「2人は対立し、前代未聞、大将同士の抗争はついにある島での『決闘』にまで発展した。死人に口なし、敗者には一切の口出しは出来ぬ…海軍の指揮は勝者の手に委ねられ

る」

「……………」

「10日にも及ぶ死闘はもはや世界の語り種、実力はほぼ拮抗したが、決着は…ついた。勝者は「赤犬」!!海軍の“新元帥”はサカズキじゃ…!!」

ルフィが胸の傷を押さえて顔を顰めている。あのバツ傷赤犬にやられたのか…。

「それで、青キジはどうなったの?」

「両者壮絶な深手を負い、目の前で立ち上がらぬかつての同志に流石の赤犬も情けをかけた…。——赤犬の下になど就けぬ青キジは…海軍を出たわい」

げ…てことは青キジってもう海兵じゃないのか…!

うわぁ…青キジを縛る物が何もないとか恐怖でしかないんだけど…!…まあ、生きてるなら良かったけどさ。

「政府にしてもでかい戦力を失ったといえる。…じゃが、その穴を埋める為に政府の取った“策”は「海軍」に思わぬ力を与えた…!!ええかお前達…この2年の“新世界”で最もデカイ変化を2つ覚えておけ。1つはサカズキ元帥率いる「海軍本部」はより強力な正義の軍隊になっておるといふ事。——もう1つは、“狂神海賊団”の進撃じゃ」

「狂神……。レイ…!」

「奴は大將『黄猿』をも凌駕する強さを持ち、気分で1つの島を滅ぼした事もある…まさに狂人。奴の仲間も全員が全員厄介な力を持つておる…奴に狙われれば終わる、そう噂が広まり…やがては『狂神』と呼ばれるまでに至った」

安城さんめ…せつかく黒ひげを倒したつてのに、何でそんな世界を引つ掻き回す様な事をするの…！

「狂神の起こした事件は謎が多く、政府も狂神の能力を特定出来ておらん。1度…この事件も気分分で国を潰そうと考えた狂神からその国を救おうと海軍が派遣されてな…黄猿もこの時任務に居たんじゃ」

「じゃあ、黄猿はその時に…？」

「ああ。海軍が国へ突入した時…何故か国民達は全員武器を持つていたらしい」

「レイ達に…自分達だけで突撃しようとしたの？」

命知らずにも程がある、と思つて口にした言葉は、ジンベエが軽く首を振つた事で否定された。

「国民達は…武器を持つてこう叫んだんじゃ。——『出て行け海軍！』」

「はあ？」

これには私だけじゃない、他のみんなも驚いて目を見開いていた。

だつてそうだ…訳が分からない。助けにきた海軍を追つ払うメリットがあるのか？

しかも国を壊されそうになつてゐる国民達が。

「脅されている訳でもなく、国民達は進んで海兵達へと突撃し、武器を振るつた。ただの国民が暴れ出した所で海軍の兵士は脆くは無い、普通ならば拘束するのは容易いだろうが：奴らは強かつた。女子から老人まで、皆達人の様に強く：一人、また一人と倒れていく兵士達。やがて狂神がその場に現れた時には国民達からの熱い歓声を浴びていたという」

つまり：何故か国民全員がレイの味方をしていて、しかも一人一人がめっちゃ強く：更にはレイまで登場したから黄猿も負けたくて事か。

：荒唐無稽な話でいまいち良く分かんないんだけど：つまりレイにはその短期間で国民全員を味方に付けるカリスマ性：もしくは、そうさせた「何か」があるという訳だ。

「今ではその危険性の高さもあり、『四異界』：そして『四皇』の一人でもある」

四皇：：シヤンクスや白ひげと同じ：！

「四皇という立場にはおるが、実力は未知数：。お前さんらも新世界に行くのなら、この狂神には気を付ける事じゃ」

：でも、そいつは前世から来てしまった私の：王華の知り合いだ。

奴がこの世界を狂わせているのなら：いずれは相見える事もあるだろう。その時は



……倒さないと。

「……………ん？」

不意に、しらほしちゃんの居る硬殻塔から何かの気配を感じた。

…嫌な感じ、ちよつと様子を見てこようかな。

「ごめんナミさん、ちよつと用事できた」

「…まだここに居ちやダメなの？」

「う…そ、そんな目で見るのは…ズルイ…」

ナミさんの普段はお目にかかれぬ上目遣いは私に刺さるからあ！

「なんてね、冗談よ。はい」

「もう…ありがとう」

ナミさんの頭が私の膝から離れるのはかなり勿体なさを感じるけど…見聞色に引つ掛かったこの気配が気になるんだよね…。

ルフイとサンジも気付いたらしく、ゾロを引つ叩いて起こし一緒に硬殻塔へと向かう。

…何事も無ければ良いんだけど。

## 158 『女好き、四皇』 ビッグ・ママ』

とにかく急いで硬殻塔へ向かった私達は、バン！と勢いよく分厚い扉を開いて中を見る。

その瞬間にルファイ達は顔面を蒼白にし、ふいっと目を逸らした。……私から。

「んんんっ!!」

「ケヒヒヒヒヒイっ!!そーんなに恨めしい顔しちやあやだよオ、お姫さっくん!なに、痛くしねエし苦しくもねエ:財宝頂いて、人魚売るのも面倒になったがお前は特別だよオっオ。ちっよっつと気絶してて貰うだアけよっう!島の港に弟達が着いたと連絡があつたア!一緒に行こうぜ、新世界!!」

カリブーが、その姿を泥に変えてしらほしちやんの口を塞ぎ、自分の体へと取り込もうとしていたのだ。

……てことは、入り江の人魚を誘拐しようとしたのもやっぱりコイツか…、はあ。

「オイ」

「あア〜ん??…げっエツ!!じよ、女王オムグツ!!」

手の平を倍加させてカリブーな顔面を鷲掴みにし、ズルズルと引っ張ってしらほし

ちゃんから離す。

そのまま硬殻塔を出て腕を振りかぶった。

「どっか行けこのクソ野郎オーオー!!!」

「ああああああああ!!!」

ブン!!と高速で投げ飛ばされたカリブーが、竜宮城のシヤボン突き破って魚人島に落ちてった。

やば、つい投げ飛ばしちゃったけど拘束した方が良かったよね…。

「しらほしちゃん、ごめん…気付くの遅れて」

「うう、イリス様あ…えくく…ん! 恐ろしゆうございましたあくく!!」

しらほしちゃんの所へ戻れば、大きな手の平でぎゅつと私の体を握って顔を擦り寄せて来た。

泣かせちゃってごめんね、ほんとに…。

「姫く! 何かあったのですか?!」

「あ、右大臣」

タツノオトシゴの人魚の右大臣がいつもの様に慌てて駆けつけて来て、私に縋り付くしらほしちゃんを見るなり事情を尋ねてきたので軽く答える。

まー私もよく分かんないから、カリブーっていう泥の海賊がしらほしちゃん襲ってた

からブツ飛ばした、とだけ。

「泥の……危なかつた、重ね重ね礼を言う!!財宝泥棒め、まだ城内におつたとは……!!普段はメダカー匹侵入不可能の城だが、戦いの最中門は開いたままで……!!」

「ふーん……、ん?財宝泥棒?」

「ああ……泥に変化する不思議な男が人魚誘拐の犯人だと見つかった人魚達から聞いていたのだ。ソイツは城の財宝を全部盗み、人魚達を開放したと……」

「じゃあ、あいつの体の中にはまだお宝が一杯あるわけか……。せつかくだし、ナミさんへのお土産にその宝も取り返しちやおうか。」

「私ちよつと魚人島に降りてくる」

「イリス様……何処かへ行かれるのですか……?」

「うん、お宝獲りに。ねえ右大臣、カリブーから財宝取り返したら貰っていい?」

「ふむ、国を救ってくれた恩人だ、いいとは思うが……一応国王様に確認しておこう。私からもお願いしておく」

それは助かる、有能な大臣でネプチューンも鼻が高いね。

「しらほしちゃん頬にちよつと行ってくるね、とキスをしてメガ口を連れ竜宮城から飛び出した。」

ちなみにルフィ、ゾロ、サンジも同行してくれている。あのまま残つても私一人に行

かせたのかとナミさん達に怒られるだろうから、という理由らしい。

\*\*\*

「あ、いたいた」

「おー！すげーなアイリスの見聞色！」

あの後、魚人島に降りてからすぐに全力の見聞色を使ってサーチをかけ、難なくカリブーを発見する事が出来た私達は、投げ飛ばされて気を失っているカリブーの周りに散らばる財宝を袋に詰めていた。

「こりやあスゲエ量散らばってんぞ!?!本当に全部俺達にくれるのか!?!」

「すげー！肉いっぱい買えるな!」

「あの沼みてエな体にコレ全部入れてたのかコイツ!」

空島の時に持ち帰った宝より多いし、素人目で見ても分かるくらい価値が高そうなモノばっかりだ、これはナミさんも喜んでくれるハズ!

「本当にこれで最後なのかな?まだ出てくるんじゃない?おら!」

ボコ！と奴の顔面を殴ると腹からポロン、と金のネックレスが飛び出してきた。ほら  
く！まだあるってコレ！

「すごい！殴る度にお宝が出てくる！」

「鬼かお前……」

ボコボコと殴る度にポロポロ落ちる宝石。

……あ、出なくなった。

「よし！これで本当に最後っぽい！竜宮城に戻ろっか」

ずっしりとした重さの袋を背負って、私達はメガロに乗った。おー、メガロも重そう  
だね。

「私達もさ、2年振りの再結集を祝して何か宴やらない？新世界行つてからー」

「それいいな、イリスちゃん。金ならここにたんまりとある、良い食材で絶品の料理を御  
馳走するよ」

「酒も忘れんなよ」

「肉く!!!」

よし、決まり！新世界に行く前に魚人島で色々食材買つて行こうか！

「……ん？なんか人だかりが出来てる……」

「んん？」

メガロの体から身を乗り出して下を見れば、左大臣と…ライオン？が何やらお菓子工場の前で話し合いをしているようで、その様子を見て国民達が集まって来ている様だつた。

それにどうもあれは話し合いと言うよりは…脅迫っぽい。左大臣がずっと下手に出てる所から、相手の方が立場が上だと分かるし。

「メガロ、降りて」

「シヤ」

ぼんぼん、と頭を叩いてメガロを促し、人が集まるその場所に降りて左大臣に近づいて行く。

この島で知り合った人が困ってるなら、何か力になれない物かと来たんだけど…。

「おお！麦わらのルフィ！女王イリス!!」

「イリスさーん！宴は終わったの〜？」

「終わった…のかな？キミ可愛いね！どう？嫁に来ない？」

キヤ、嫁に誘われちゃったー！と頬に手の平を添えて人混みに紛れていく人魚の子。ちょ…違う違うー！ファンサじゃない!!ガチ!!

「ルフィ君達…何故ここに？」

二足歩行のライオンと話していた左大臣も私達へと視線を移して尋ねてきたので、財

宝泥棒の奪ったお宝を奪い返しにきた、と伝える。勿論、このお宝を貰うってこともついでにね。

「それにしても魚人島のお菓子最高だったぞ〜！もうねエのか？」

（あ、む、麦わらさん…っ）

（それは言わないでくれ〜っ）

すっごい小声で国民達がしーつとポーズを取りながら言ってくる。どうしたんだらう？

「オイ小僧！お菓子ってのは何の話だ!!」

「誰だお前、魚人じゃねエな！お菓子買いに来たのか？おれもたった今腹一杯食って来ちゃったよ!!」

「何?!?! どういう事だ！お菓子を食ったと言ってるぞ!!」

ガオー！と左大臣を問い詰めるライオンがサングラスを外してスゴんだ。でもサングラスの下はなかなかつづらな瞳…ナミさんが好きそうな可愛さだ。

「どういうこと？お菓子が欲しいなら貰えばいいじゃん。丁度ここお菓子工場の前なんだし」

「それが無いから困っているのだボン」

近くで話し合いを見守っていたライオンの仲間が話に割って入ってきた。なんだこ



の人の体：タマゴのカラに下半身突っ込んだみたいな…。

「失礼、自己紹介が遅れたでジュール。手前、タマゴ男爵と申しまソワール！」

「タマゴ男爵ねえ」

帽子を被っているのかと思いきや、頭の上に皿を置いて、その皿に飲み物が入ったマグカップを置いていただけだった。

飲む時だけ頭の上からマグカップを取って飲んでる。…いつつこんな感じのかな、この人。雨の日とか大変そうだけど。

「で？お菓子が無いと何が困るの？よそで買ったらいじゃん」

「そもいかないのでジュール、工場にある大きなマークは我らがボス、大海賊シャロット・リンリンの海賊旗なのでソワール。その工場で作られるお菓子を毎月10トン我々に渡す事で、この島が「四皇」『ビッグ・ママ』のナワバリである事を示している。つまり、魚人島は今ビッグ・ママの名で守られているのだボン」

なるほど：用心棒みたいなものか。10トンってどれだけ作らせる気だよ…、

それに、ビッグ・ママ…、私が今一番用のある四皇じゃん。

「だったら良い考えがあるよ。次のお菓子が出来上がるまでは私がこの島を守るから、それまではビッグ・ママもこの地を守らなくて良い。それでどうかな」

「ダメだ！ガオ！今この時もこの国は、島は！ママの名前で生かされている！白ひげの

名が意味を持たなくなつた年……この島の治安が悪くなつたのは島に住む国民達が良く知つてる筈だ」

「むう……とりあえずさ、あなた達んトコのサアヤつて人に会わせてくれない？」

店長呼べよ！みたいなノリで言つただけど、タマゴ男爵は頭の上にカツプを乗せてため息を吐いた。

「多少姿形は変われども、その内に眠る強さまでは変わらないのであるブプレ。黄身が『四異界』の一人……一騎当千の女王”である事は一目で分かつたソワール。しかし、だからと言つておいそれとサアヤ様は表に出る事は無い。ママと同格の強さを持ちながら……欲が無いのか、それともソレ自体が欲なのか人に尽くすのが大好きな彼女は、基本裏で手前達を取り纏めているだけだボン」

「どーでもいいよそんな事情は。何ならビッグ・ママんところ行つて暴れたつて良いんだよ？ 負ける氣しないし」

「慢心し過ぎるのは半熟者の証だボン……ママは黄身に負ける様な女性ではないでジュール」

面倒だなあこいつ!!

「みんなも何とか言つてやつてよ！」

「困みにだがタマゴ野郎、その菓子もビッグ・ママの下へ届けられないとなると、一体ど

うなるんだ」

そりやービッグ・マムの後ろ盾が無くなって、魚人島がやばいんでしょ？でもそれは私が守るってさつきから…。

「魚人島と結ぶ協定の決裂、そして後日…ビッグ・マム海賊団の猛者共がこの「魚人島」を滅ぼす事になるブプレ！」

「はあ？」

何ソレ…！そんな事になったら、どうやったって罪もない国民達を巻き込んだんじゃうじゃん…！

お菓子のためだけにどこまで自分勝手なの…ビッグ・マムは絶対嫁になんかしないって決めたし！！

「魚人島を滅ぼすく！?!バカかお前ら！お菓子で国が滅んでたまるか!!この島は今助かったばっかだぞ!!」

ルフィが怒りを露わにして2人に詰め寄ろうとした時、タマゴ男爵が持っていた電伝虫が『プルプルプル…』と音を出した。

「…きつとママだ、ガオ。さつき状況を知らせといた」

「……おい、ペコムズ」

「アンタ出るよ！俺怒られんのやだ」

ライオンの名前はペコムズか…。いや、それよりあの電話の向こうに居るのがビッグ・ママという事が重要だよね…。

「ルフィ」

「ああ」

私が何を言うまでもなく、ルフィはスタスタと電伝虫を前にあたふたしている2人に近付き、そして受話器を取った。

「もしもし！お前、ビッグ・ママか!？」

「オイオイオイオイ!!」

「はい邪魔しないでねー」

そのまま通話を続けようとするルフィを止めにかかった2人の体を掴んで、ずるずるとルフィから離れた。私も後で代わって貰わないといけないんだから…邪魔されたら困るんだよ。

「ぐう…！俺達2人をこうも容易く…!」

「これだから『四異界』は厄介なのでソワール…!」

はいはい、四異界でも何でも良いから大人しくしててよね。

『…誰だい？タマゴでもペコムズでもないね…』

「おれはモンキー・D・ルフィ!!海賊王になる男だ!!」

『モンキー・D……？ああ……ガープの孫かい、思い出した……。2年前戦争を引つ掻き回した小僧だねエ……』

あの戦争は私も色々やってやったって自覚あるからね。結末まで変えたんだから相応な事してると思う。……自分で言うのもアレだけどさ。

「お菓子はねエぞ!!!おれが全部食った!!!」

「……やっぱり本当に無いのかい……!?10トンあったはずだが!?」

「10トン全部食った!!!」

魚人島を庇ってるのか、ルフィらしい返答の仕方だ。なんだかルフィなら10トンくらい食べれるんじゃない?と思わせるのは普段の食べっぷりのせいだろう。

『バカだね、ウソつくんじゃないよ……魚人共を庇ってるねエ、お前』

「でも食ったのは本当だ!そんな約束のお菓子だったって知らなかったんだ!あ、おれ達今いっぱい財宝持つてるからよ、これ全部やるよ!お菓子の弁償する」

「ええ!?」

それは私が困るんだけど!それナミさんへのプレゼントだから!

『財宝なんざ食えるか!オレは甘いお菓子を食べたいんだよ!!』

よしよし、このままの流れなら財宝は渡さなくて済みそうだね!

……なーんて思ってたなら、私に拘束されてるタマゴ男爵が声を張り上げてビッグ・マ

ムに話しかけた。

内容は：どうやら現在、ビッグ・ママ海賊団はお金に困っていたらしい。キッドに海賊船を2隻沈められたとかなんとかで。それはまあ何とも都合の良い事だけ：タマゴ男爵はそのお金と引き換えにお菓子はあと2週間くらい待ってはどうか、と提案した。

『フザけんじゃねエよタマゴ!!みつともない発言をよくも!!欲しい物を妥協する海賊がどこにいる!?!』

「す、すみまソワール!!」

『ローーとはいえ、ハハハ…このオレに盾つくそのガキに興味が湧いた。望み通り今回の件…標的を魚人島からお前達に替えてやる!!…来な、"新世界"へ!』

このままでと財宝全部持つてかれそうだ…ナミさんには申し訳ないけど、それで魚人島が狙われないのなら…まあ、良いか。じゃあそろそろ…、

「ルフィ、私も」

ルフィが持つ受話器を受け取って、徐に口を開いた。

「もしもし、私イリス、知ってる?」

『ローー今度はお前かい、女王。ああ…良く知っている、オレの他にも"女王"と呼ばれる女の事だからね』

それは光栄だ。

…ん？てことは私の存在って四皇全員に認知されてるんじゃない？割と凄い事になってる…。

「言いたい事と、伝えて欲しい事が1つずつあるから、まずは言いたい事を言うよ。…魚人島はあなたのナワバリらしいけど…そんなお菓子1つで私の嫁がいる島を滅ぼされちゃ堪ったモンじゃないからさ。『そっち』に行ったら…あなたをブツ飛ばして、魚人島は私のナワバリにする」

『…マ〜ハハ…!!…やってみろよ…!』

その言葉には、少なからず緊張が含まれている様な気がする。

私と同じ『四異界』のサアヤが自分と同じ実力だから…私も警戒するのは当然だろうけど。

「伝えて欲しい事は…あなたのトコに居るサアヤって人に向けてなんだけど」

『同じ『四異界』と呼ばれる存在が気になるって事かい、だが娘がその話を聞くかどうかは分からねエ…マ〜ママ…!何せウチの武、知の両翼を担う女、戯言なんざ無視されて終わりだ』

「はは、そうだね。無視されるかも分からないから気軽に伝えておいてよ。内容は…『イリスが王華を連れていく』…でいいかな」

ビッグ・ママは『オウカ…?』と疑問符を浮かべていたが、こんな訳が分からない伝言なら、逆にきちんと伝えてくれるだろう。

この言葉を伝える事によつて、私に何か利益がもたらされるつてのがバレバレの内容になつちや伝えてくれないだろうし、これで良いハズ。

「じゃあ、お願いね」

そのままブツ、と受話器を置いて、私達は背負っていたお宝を詰め込んでいる袋をタマゴ男爵とペコムズの前に置き、左大臣と国民達に軽く手を振つてまた竜宮城へと戻つていったのだつた。

…サアヤ…やつと掴んだ初めての手掛かり…！お願いだから本人であつて下さい！

!!



## 158. 5 『女好き、人魚姫との初夜』

「……という訳で、財宝は全部あげちゃったしビッグ・ママにもケンカ売ったしで、もー本当に色々あったけど、探してた人の手掛かりは見つかったから良しと言う事でー！」

「財宝全部あげた!？」

「四皇にケンカ売ったア!？」

ん？

ウソツプとチョツパーがビッグ・ママに喧嘩を売った事実を嘆くのは予想してたけど、財宝を全部あげた事に関してナミさん以上に声を張り上げて驚いてるネプチューンと右大臣に私は首を傾げる。

「ハア……まああんたがやった事なら仕方ないかもしれないけど、何で全部あげたのよ」

「あげるって言っちゃった手前、やっぱりちよつと欲しいです……とは言い出しづらくて……めん」

軽く頭を下げると、ミキータが私を庇う様にナミさんとの間に入ってきた。

「ナミちゃん、そう言う事なら仕方ないわ、イリスちゃんだって悪気があった訳じゃない

もの」

「ミキータ……！」

うんうん、その通りだよ、私だって本当は財宝全部ナミさんにあげようと思って……！  
「だから財宝を売ったお金で買おうとした、今のイリスちゃんに合うサイズの露出度  
が高い服とか華の国の服とかは諦めて……今夜は大人しく裸で遊びましょ？」

「ん？」

「フフ、久しぶりね、イリスと『アソブ』のも」

「んんん??？」

「ミキータもロビンもやる気ね。はあ……本当はイリスにアレコレ着せて楽しみたかった  
んだけど……ま、メイド服は手に入ってるからいっか」

んんんん??？何かヤバめの空気だぞく？メイド服？んん??

「ホロホロ……逃げられそうもねエな、女王」

「ペ、ペローナちゃん、助けてくれるの……？」

「……いや、私はいつらに誘われてるから……」

つまりナミさん達と一緒に私をアレコレするって訳ですかね!!

はは……ハ……分かった……コレ逃げらんないやつだ……。

いや、そりゃあ私だって嬉しいよ？みんなと一緒にそういうコトするのは久しぶりだ

し。だけど限度つてモノがあるじゃん？私の体は1つだしさあ、*「私」*を出して相手して貰うのもイヤなんだよね…自分の分身にすら嫉妬するからね私は！

「…あ、でも今夜はダメかも。私達は明日の夜まで我慢するわ」

「えっ、そう言われるとそれはそれで寂しいんだけど」

「私達がイヤつてワケじゃないのよ、ホラ、後ろ」

後ろ？……あ、しらほしちゃん。相変わらずなんて可愛さ……！

「出航は明日の朝、つまり今夜はまだここに居るから…出航までしらほしの傍に居てあげなさい」

「…そういう事なら、喜んで」

もうそろそろ地上も夜になろうとしているのか、陽樹イブが取り込む光も薄くなり始めていた頃だ。つまり、魚人島に夜が訪れようとしていた。

ご飯に関してはさっきの宴で充分食べたし…。

「じゃあ早速しらほしちゃんとイチャつきに行こうかな、いこ、しらほしちゃん」

「あ、はい……！」

目指すは硬殻塔、ここなら今夜、2人だけでゆっくり過ごせるはずだ。

2人きりになるのなら…やってみたい事もあるし。

\*\*\*

「イリス様…、あの…どうしてお洋服をお脱ぎになられているのですか…？」  
「破れない為かな」

硬殻塔に入った途端、脱ぎ脱ぎと服を脱いでいく。

端から見ればマジモンの変質者だけど、端から見るのはしらほしちゃんしか居ないから気にする事も無い。

「倍加」

ぐぐ…つ、と私の体が大きくなっていく。普段は服を破りたくないからやらない巨大化だ。

1度だけドラムでやった事はあるけど…あれは黒歴史みたいなモノだから無かった事にしといて下さい…。

「じゃーん！どう？しらほしちゃんと同じ大ききさだよ」

「わあ…凄いです…！人間様のお体はこんな風になつて居るのですね…」

「ちよ…あんまりソコは見ないで欲しいかなーって…どうせ後でやるんだろうけど」

どこをガン見されてたかは恥ずかしいからあんまり考えない様にしよう。

ずっと裸なのもどうなのかと、しらほしちゃんが自分の上着としらほしちゃん用の大きなタオルを貸してくれたので服を着て腰に巻いておく。

「…イリス様、改めまして、本当にありがとうございます！皆様の命を救って頂いただけではなく、ノアも無事で…」

「ノアが無事なのはしらほしちゃんが海王類を呼んだからって理由もあるけどね。それにお礼ばつかつまんないよ、明日には発つちやうんだからもつとしらほしちゃんのコト教えて欲しいな」

「わたくしの……」

例えば好きな食べ物とか、キユンとするシチュエーションとか！

私は後者が知りたいかな…切実に！

「ほら、しらほしちゃんって頭に鯛焼きの飾り付けてるじゃん。しらほしちゃんの大きさに合うサイズのものって事は作って貰ったんじゃないの？」

「あ、はい…これは小さい頃にお母様が、わたくしのお誕生日に贈って下さったものです」

「そっか、じゃあ宝物だね。…ちよつと見せてもらっても良い？」

「少々お待ちを……、…どうぞ」

パチン、と飾りを外せば、結んであったしらほしちゃんの綺麗で長いピンクの髪がふわりと下に落ちた。

髪を下ろすとまた：一気に王女っぽくなるのはビビと一緒にだね。と髪飾りを受け取りながら考える。

「うん、使い込んでるのは分かるけど、同時にすごく手入れも入念にされてる、とても綺麗で想いの詰まった髪飾りだね。それに流石オトヒメ王妃、しらほしちゃんに良く似合うモノを用意できるなんて凄いよ」

普通鯛焼きの髪飾りが似合うなんて思わないでしょ。だというのにオトヒメ王妃はそれを作った：と。母の愛は凄い。

「ありがとうございます、きつとお母様もお喜びになられている筈です」

しらほしちゃんに髪飾りを返せば、それを再度付ける事は無くベッドの枕元の脇に置いた。

「イリス様の、そのオレンジ色の髪飾りは誰かから貰ったのでございますか？」

「コレ？これは私の黒髪に良く映えるだろうって言って、1年くらい前にベックマンって人がくれたの。しらほしちゃんのと違って良い話は何も無いけど：ただ何となく気に入っちゃってずっと付けてるって感じ」

巨大化した事で外したヘアピンを手の平で転がしながら言う。

王華は知らないけど、私はこういうのに興味なかったからなあ、まさか自分がここま  
で愛用する装飾品が出来るなんて思ってもなかった。ていうか、多分オレンジ色だから  
ずっと付けてるんだろうな。ベックマンもそれで「よく映える」って言ったに違いない。  
「イリス様がずっと付けてる髪飾り…それはお宝ですね」

「私から言わせて貰えばしらほしちゃんの鯛焼きちゃんの方がずっと尊くて価値のある  
物だと思うけど」

しらほしちゃんが普段髪を留めている頭部を撫でる。そのまま体を寄せ、背中に腕を  
回して抱き締めた。

…ふっふっふ…普段はナミさん達に色々されちゃってる私だけ…しらほしちゃん  
はどう見たって完全に受け！私から攻める事が出来るというもの…。

しらほしちゃんはそのような事への耐性は無さそうだから、今日はキスだけにしておく  
けどね。でもリードは私がするよ？

「あ、あの…！ナミ様が仰ってました…イリス様は、こうされるとお喜びになられると…  
！」

「んっ」

とん、と体を押されてしらほしちゃんに押し倒される。

……あるえ？何で私下なの？何でしらほしちゃんを見上げてるの??

「ちよ、ちよつと待って！私は別に…」

「…っ…やつぱり、わたくしではご満足頂けないのでしょうか…う…う…っ」

「あー！すっごい嬉しい！私今からしらほしちゃんに何されちゃうんだろー！楽しみー！！」

くそつたれ!!!

ナミさんもナミさんだよ、一体いつしらほしちゃんにこんな事吹き込んだの！…私がカリブーから財宝を取り返しに行った時かあ…!!

「…で、では…いい、…行きます…っ！」

「…うん」

目を瞑って、りんごの様に顔を真っ赤に染めたしらほしちゃんの震える唇が近付いてくる。

…可愛いな…こんな感じなら、私が下でも別にいつか…。

ふっくらとしたとても心地の良い感触が、ゆっくりと私の唇に吸い込まれる様に近づき…そして一つになった。

しらほしちゃんは両腕で私の両腕を掴みベッドに押し付けている。これは何というか、必死さの表れだ。ナミさん達のように今から襲ってやるぜえ…みたいな拘束ではない。そこがまた何とも…しらほしちゃんの純粋さが見て取れて無性に愛おしく感じた。



「…んっ…、…ここ、ここからどうすれば…っ」

「…良いよ、しらほしちゃんの良い様にして。私の事、好きだっと思ってくれるのなら…本能でこうしたいっていうのがあるでしょ」

「…で、ですけど…」

よーし、もう一押しだね。ちよつと煽つて、優しく教えながらしらほしちゃんとの初夜を始めるとしようかな。

「ほら…例えば…」

ツー…と私の太ももから胸までゆっくり指を這わし、小さな膨らみに手の平に包み込む。

「…こことか…触ってみたいって思わない？」

「…わ、わたくしは…、っ…はあ…」

瞳の奥に熱が宿り、興奮の為か息遣いが荒くなったしらほしちゃんが私の着ている服に手をかけた。

まだ震えるその手に私の手の平を重ね、大丈夫だから、と撫でてあげる。分かるよ、初めては緊張するよね…怖いよね。

だから私も、あの時のナミさんの様に…しらほしちゃんにはうんと優しくしてあげるんだ。

「……っ……イリス様……！」

「わ……。ん、いいよ……きて」

しらほしちゃんの手が、普段では考えられないくらい強引で力任せに動き、私の着ている服を上にも捲り上げた。

……なんだか思ったよりしらほしちゃんに火が付いてるというか……私大丈夫かな、コレ……。

\*\*\*

「……ぐすん」

「すー……すー……」

恨めしい程可愛い顔をして眠るしらほしちゃんの隣でこっそりと涙を流す。

無事にしらほしちゃんとの初ちよめちよめは終わったけど……1つ言わせて欲しい

……上手すぎだよ、しらほしちゃん……!

そりやあしらほしちゃんの興奮を煽ったのは私だよ?まさかあそこまでの面に効くとは思っても無かつたけどさ!

結局何度も鳴かされたよ私は!ナミさん達としてる時との違いと言ったら、しらほしちゃんが私にあれやこれやしてる最中も上手くできてるか不安そうに見つめてくるって事くらいだよ!!可愛かつたけど!!

「結局私はやられちゃうんだね……はあ」

お酒が入れば私だつてえ……!!くうう……!!

「……なんていうか私、やられちゃう事に慣れ過ぎてない……?」

もう完全に受ける事に特化し過ぎたのかな……だとしたらナミさん達が悪いよね!これはもう物申すしか……!!……いやー……やっぱりやめておこう、オチが見えた。

『大変だね、イリスも』

「ちよつと、さっきの見てないよね?」

『当たり前じゃん、その辺は弁えてるよ。しらほしちゃんの部屋に入ったあたりから繋がり切ったし』

突然話しかけてきた「王華」に適当に言葉を投げ返す。

彼女は、私の前世の人格だ。2年前は私が寝るか女王化<sup>クイーン</sup>するしか話す方法は無かったが、今はこうして王華から話しかける事が出来る。

私の方からも強く王華を呼ぶみたいになんか念じれば向こうには伝わるらしく、修行中とかで私が1人の時はこうして話す事も少くは無かった。

尤も、こうして2人きりにならないと自重しているのか話しかけてくる事は無い。

「…じゃあ、沙彩の事は？」

『…うん、それは聞いた。間違いないよ…それは絶対に沙彩』

ここまで断言してるって事は、原作にサアヤってキャラクターは居なかったんだろ  
う。

『グリーンビッドの魔女っていうのもONE PIECEには居なかった。あんまり期待し過ぎるのも良くはないと思うけど…』

「いや、期待していこう。変に意識しない様に考えたって…大切な人達との再会なんだから、どうしたって意識しちゃうだろうし。それなら思いっきり期待した方が得でしょ」

『イリスって本当に変なところでポジティブだね…でも、ありがと』

王華達の過去を知ってるんだからそう思うのは当然だし、幸せになつて欲しいとも思

うでしょ普通。

生まれ変わった私だけが楽しむなんて、それは王華にも美咲達にも悪い。

「じゃあ、そろそろ寝るよ。すぐそっち行つて修行する」

『これ以上強くなつてどうするの…』

呆れ声の王華をスルーして、私は目を瞑つた。

…王華はそういうけど、私はまだまだ強くならなくちやいけない。

嫁を全員守る為には、私はこの星の端から端までを守る力が居るんだから。

レイの事もあるし…気は抜けないよ。私がどれだけ強くなつていたとしても…ね。

## 159 『女好き、魚人島との別れ。そして新世界へ!』

「え〜くん! イリス様達、本当にもう行ってしまわれるのですか!?! うう…せめて後1日…いえ、1週間…いいえ1年だけ…! イリス様は一生…!」

「一応海賊だから、一生は無理かな…!」

イチャイチャしまくった夜が明けて、現在は魚人島正門に続く港にサニーを浮かべてみんなで集まっていた。

ネプチューンや王子達、兵士や魚人島の国民達…そしてしらほしちゃん。他にもシャリーやケイミーちゃん、ルリスちゃん達など沢山の人が見送りに来てくれる。

「イリス! また来ておくれよ!」

「イリスちゃん! 今度来た時はマーメイドカフェ一同、イリスちゃん専用でフル対応するね!」

「私達も忘れないでよ!!」

「うん!!」

ぶんぶんと手を振って見送りに来てくれた事への感謝を表した。こんなんじや足り

ないけど、あげられる物もないし…。

「イリスちゃんの良いなあ、俺も俺一人の為だけに麗しのマーメイド達が相手してくれたら…！」

「サンジはもつと落ち着けば普通に女の子にモテると思うよ、今でも充分カッコいいんだからさ。…ま、私の近くにいるうちはモテようがないけど」

「キャハッ、みんなイリスちゃんの事を好きになつてしまっから当然ね！」

私があタックしまくるからつて意味だけどね。ミキータが私を過剰に持ち上げるのは2年前と変わんないし、それが何とも落ち着く自分が居るのが不思議だ。

「ナミ殿、これを持っていけ」

「え？」

左大臣がナミさんに渡したのは、今までには見た事が無い形の記録指針<sup>ログポース</sup>だった。というのも、今までの記録指針は指針が1つだったのに対して今渡されたやつは3つの指針があるのだ。

…ていうかナミさん髪型ローツインテールじゃん！空島の時も思ってたけど似合い過ぎじゃない??

「何これ？」

「新世界で使う記録指針<sup>ログポース</sup>だ。たった1本の指針で航海しようとは、かなわんわ…。

グランドライン  
偉大なる航路前半の海で使つて来た記録指針を覗いてみよ……」

私達も気になつて一緒に覗き込めば、ナミさんの腕に付けている指針が不規則に揺れ動いていた。

「あれ、まだ記録貯まつてないんだ」

「貯まつているとも、ここからの記録は半日で貯まる。偉大なる航路は次の島から出る

「磁気」を記録指針に記憶させ、それを頼りに航海をしてきたハズ……。しかしこの先、後半の海には「海流」「気候」に加え今まで唯一信頼出来た「磁気」までもが変動する島がある。航海中に完全に磁気を失う島さえあるのだ」

「ナミさんならそれでも次の島に辿り着くし」

「無茶言わないでよ、流石に無理だからね」

本当かなあ。ナミさんつて本当に凄しいし、何とかなりそうつて思つちやうよね。

「しかし、1本だけならそれで遭難する航海も、3本あれば変わってくる」

「!本当……1本はこっちの記録指針と同じ様にブレてるけど、他の2本は安定してるみたい……!」

「3本の指針はそれぞれ別々の島の磁気を記憶する。つまり進路は3本の航路の中から己の「勘」で選び、進む事が出来るのだ。選び方が命の分かれ目とも言える!優れた航海士はその僅かな針の動きでより安全な航路をかぎ分ける……単純に分かる事は、針の動



きが異常な程辿り着く島の危険度は高い……！磁場を動かす程の“異常”が島で起きているという事だ……！」

あ……そういうやつですか。だったらソレ……真逆の使われ方されそうだね。

「どれどれ？……その真ん中のすげー針が揺れてる島、面白そうだなア……！！しししし！！」  
知ってた。

まあでも……私も面白い島の方が良いかなあ。いや……ナミさん達の事を考えれば安全な方が……いやでも……！」

「ちよつとルフィ……あんた黙ってなさいよ！！これからは私が進路を決めて行く！イリスの安全が第一なのよ！！」

「バカ言え！おれが船長だぞ！！それにイリスはどこ行っても何とかなるだろう！！」

女の子が1人も居ないトコに行ったら死ぬよ、私は。

例えば男しか居ない国に行ったら終わるだろうね。女ヶ島に落ちたのは本当に救いだよ……あの時はナイス、王華、くま！

「よしお前ら！出航準備整ったぞ、浮上操作も習ったア！行くか？！」

「行こう……！！！」

なんだかんだ言っても、みんな最後はルフィの決定に従うんだけどね。

勘って言ったたら、それはもうルフィが一番良い。嗅覚が鋭いというか……とにかく彼が

決めた事は結果的に良い方向に動くからだ。

みんなでサニーに乗り込んで、魚人島 みんなに手を振った。またね愛しきブライド達…余裕が出来たらまた会いに行くから!

「よし、帆を張れエ〜!! 出航するぞオ!!」

「オオオオオ!!」

「またね〜!!」

そう言つて、遂に船は動き出し港を離れて行く。私達を見送ってくれている人達が段々と小さくなっていくけど、それでもまだまだ大きく手を振っているのは分かった。

「また来いよ〜!!」

「お菓子と肉を食いに来〜い!!」

「人間好きになつたぞ〜!!」

「イリスさ〜ん!! お嫁にして下さ〜い!!」

「わたしも〜!!」

おそ〜い!! 船を出してから言わないでよ!! もっと早く言ってくれば間に合つて

たのに！

…あれ、ケイミーちゃん達は見えるけど、しらほしちゃんはどこに…。

「イリス様!!」

「おわっ!」

ザバー!と海の中からしらほしちゃんが飛び出してサニー号を横から掴んだ。す、凄いダイナミックな登場だね…!

「イリス様…!また、またお会い出来ましたなら…その時は、もっとイリス様のお嫁様に相応しい女になっておきますから…!泣き虫も卒業して…誰にお見せしても恥じない女に…!…ですからまた…私を『誘拐』して下さいませ…!」

「誘拐?また海の森に行きたいの?いいよ、連れて行ってあげ…」

「いえ…!今度はもつと遠くへ…海の上の、本物の「森」という場所へ!そこで…おデート…!しましよ…!」

目頭に涙を溜めながら言うしらほしちゃん言葉に少しだけ目を見開き、すぐ微笑んで頷いた。

…これだけじゃなんか軽いな…、よし。

「『約束』しようよ、しらほしちゃん」

すつと小指をしらほしちゃんに向けて出す。口約束だけじゃ…なんかパツとしない

し、これだけでもしておけばなんか約束！って感じがするもんね。

「はい…お約束です…!」

「イリス、それ一緒に航海してる私達にも責任ない?」

「キャハ!イリスちゃんの責任なら借金でも何でも背負ってあげるわ!」

借金なんて作るつもりは無いけど、仮にそうなってもミキータにだけは頼らないでお願い。全財産渡してきそうだし…。

「なら、みんなで約束しましょう」

「まったく…仕方ねエ姫様だな。今度会った時はプリンセスの極意でも教えてやる」

私の小指に触れるしらほしちゃんの大きな小指にロビンとペローナちゃんの小指も追加され…ナミさん、ミキータ…それからルフイ達と言う風に約束の輪は繋がっていった。

「フランキーは手が大きすぎるから来ないのは分かるとしても…ゾロは何で約束しないの?」

「柄じゃねエ、それにそんだけやって今更一人増えても変わんねエだろ」

「ああ、まあたカツコつけてるんだね、納得」

「叩つ斬るぞてめエ…」

でも間違つてないじゃん…まあ、確かにこれだけ約束してるんだからゾロがしてな

くても変わらないか。

「では……また……！」

「うん、しらほしちゃんも元気でね！ネプチューンとお兄様方にもよろしく伝えといて。

……それじゃ、今度こそ……またね」

「っ……」

最後に小指をぎゅつと握り締め、ひらひらと手を振って数歩後ろに下がった。

しらほしちゃんはサニーから手を離し、出てくる涙を隠す様にバシヤツと海水で顔を洗ってるけど……別にこの別れは泣いたっていいんだよ。永遠の別れじゃあるまいし……次会う時に笑顔なら、別れの時くらいはね。

サニーは段々正門へ近づいて行くけれど、それでもずっと手を振っているしらほしちゃんに私達も手を振って応えた。

また絶対、しらほしちゃん達には会いに来よう。約束もしたし……何より私がまた会いたいと思ってるから。

……それを言っちゃったらカヤもビビも、他にもたくさん会いたい人は居るんだけどね。

そして遂に、私達は魚人島を出た。

フランキーが言っていた浮上操作つてのは、今もサニーに括り付けられて上に浮き上がろうとしているこの四角い木片の事かな。

「…さ、みんな、気持ち切り替えるわよ、海に出たら安全な場所なんてないし、またあの暗黒の海を通るんだから!」

「ああ…ここ上つたら、シャンクスのいる海だ!」

シャンクスか…もう新世界に行つてのだろうか?でも新世界へ行こうとすればマリジョアか魚人島を通るしかないと思うんだけど…やっぱりまだ前半の海に居ると思う…でも無粋だからこれは黙つとこ。

ん…でも、新世界か…!新しい美女達に会える予感…!

ハーレム女王の夢も、何となくじゃない…!しっかりと着実に近付いて来ている!

それに王華との「約束」だつて果たさなくちゃいけないんだ…私は、必ず美咲達を見つけてみせる!

「この海底を抜けたら、世界最強の海だ…!」

「やつとだな…全部斬つてやる」

「待つてて下さい、ラブーン…あと半周!」

「いいわよ、どこへでも連れてつたげる!」

「そうさ、サニー号なら行ける!船の整備は任せろ!!」

みんなも気持ちが悪くっている様だ。当然だよね……私だって、ワクワクが止まらないんだから！

「重たい荷物を運ぶのは私に任せて！」

「好きなだけケガしろみんな!!」

「食うことには俺が困らせねエ！」

「海の戦士も乗ってるしなア!!」

ペローナちゃんはフン、と鼻で笑うだけだが、その瞳は上を見据えている。ロビンもそんなペローナちゃんを見て笑い：私達の昂った気持ちは今、正に1つになった。

「待ってる美女達……片っ端から私の嫁にしてやる!!!」

「行くぞ野郎共オ……!!!」「新世界」へ……!!!」

ウオオオオオオ!!とみんなで雄叫びを上げた。

珍しくペローナちゃんも腕を上げ、サニー号からもやる気が伝わる。

よーし……行くぞお……!!最強の海!!

## 新世界 パンクハザード編

## 160 『女好き、カミカミとウイザウイザ』

魚人島を出た船は、いよいよ偉大なる航路後半の海、「新世界」に向けて上昇を続けていた。

そんな中…私は目の前で揺れ動く幾つものぽよんに圧倒されている。

「な、なんかみんな…全体的にぽよん様成長してない…?」

「胸が?それを言うならイリスの胸の方が成長激しいじゃない」

「キャハ…気になるなら触ってもいいわよ? 勿論私は気になるから後でイリスちゃんのおっぱい揉ませてもらうけどね!! キャハハ!!」

ミキータが笑いながら私の胸をガン見していて流石に苦笑いが零れた。

…で、今どんな状況かと言うと…女性陣みんなでお風呂に入ってるという訳ですね、はい。

久し振りにサニー号のお風呂を堪能したいというナミさんの言葉に賛同したら、即座に目を光らせたミキータが私の肩に手を置いて意味深なサムズアップ…。

そこからはロビンもペローナも来て、まあ…こうしてみんなで入る事になったのだ。



「イリス、私はどう…？まだ綺麗かしら」

「何を気にしてるのかわからないけど、ロビンは幾つになっても綺麗だよ」

「そういえばロビンはもう30歳だもんね、私も21歳だし、いつのまにか大人になっ  
たって感じ。」

王華と足せば私は39歳？おふ…あと1年で40歳…。

「女王、私の背中洗え」

「ああ、うん。よいしょ…」

「そこ前じゃねエか!!背中って言っただろ私は！」

いや…背中向けてるけど、前に無防備なぼよんがあると思つたら我慢出来なくて。

「まあまあ、いいじゃないペロちゃん。イリスちゃんが揉んでくれるなら喜んで差し出  
しておくべきよー！」

「私はお前みたいにそいつの事ばっか考えてる訳じゃねエんだ！」

「そういえば、魚人島で最初散り散りになった時にイリスが居なくて慌てふためいてい  
た人が居たような気がするわね」

「うるせエ！喋んなロビン!!」

可愛いなあペローナちゃん。ていうか嫁みんな！絡んでるトコ見るのも最高！

「…それで、真面目な話をするけど…イリスの探してた人って言うのが四異界のサア

ヤって事？」

ああ、そうだった。私がお風呂で襲われない様にこの話を持ち掛けたんだった。ペローナちゃんのぼよんの魔力に思考が奪われてたよ。

「そうみたい、王華もそうだって言ってるし…、みんなは知ってるの？」

「むしろ何で知らねえんだ、『超彩のサアヤ』って言えば四皇ビッグ・マムの右腕だぞ」「カミカミの実だっけ？神様？」

ビッグ・マムの右腕と言っても、タマゴ男爵は確かサアヤとビッグ・マムは同等の強さって言ってたよね。

ただ表立って行動しないから海の皇帝に名を連ねる事は無いそうだけど。

「神様じゃないわ。カミカミって言うのはつまり…ワポルって覚えてる？あいつの上位互換みたいなものよ」

ワポル…覚えてはいるけど能力ってなんだっけ、バクバク？

食べた物を自分の力にするとか…だった筈…。最終的に倒したのはルフィだし、私はあの戦闘に参加しなかったから印象が薄いんだよね。

「カミカミの実…対象となる物の一部を囓む事で、対象の特徴を自分の物にする。例えば超彩がイリスの髪の毛を一本でも囓めば…その時点でバイバイの実の力を得る事が出来るのよ」

ロビンの説明に心の中でため息をついた。そりゃ…確かにとんでもない能力だ。相手の能力までコピーしてしまうなんて…そんなのカミカミというよりコピーコピじやないの??

「その能力で複数の能力をコピー出来る事から、彼女は『超彩』と呼ばれる様になったわ」「だけど『超彩』は滅多に表へは出てこねエ。奴の懸賞金額が12億止まりなのはそれが理由だ。もし本気で暴れ出せば…それこそ第5の海の皇帝が誕生するだろうな」

四異界ヤバイのしか居くない??私も相当ヤバイって自覚してるし、レイは普通にヤバイし。ヤバイしか言っていないけど!

「…まあ、だからサアヤとは会わなくちゃいけないから、ビッグ・マムのトコには絶対行くんだけど…王華は『グリーンビットの魔女』も気になってるみたい」

「また四異界…、もしかして四異界って全員イリスと関わりあるとか言わないでしょうね」

「残念だけど、その可能性は高いよ」

そもそも『四異界』なんてものがONE PIECEには無かったそうだからね。

でももし四異界が全員私と王華が探してる人達だったとしても、レイは安城さんで確定してるから…1人は私だし、『超彩』は沙彩だし…魔女が美咲か叶だったとしても後1人の手掛かりだけが無いんだよね…。

『グリーンビットの魔女』：彼女もあまり人前には姿を見せないそうね、まるで超彩も彼女も…誰かを待っているみたいに」

そうだとしたら、間違いなく待人は王華だろうけどね。

「魔女の能力は『ウイザウイザ』だっけ」

「そう…彼女の能力は正直…私としては羨ましくもあるのよね…」

「ナミさんが？」

…ウイザウイザだから…、あ、ウイザードって事か！

私の顔を見て気が付いた事を察したロビンが、カミカミの時と同じ様に解説してくれる。

「火・水・風・雷・土・光・闇…これら全ての自然の力を、まるで魔法の様に自在に生み出し、操る事が出来る能力よ」

「メラメラとゴロゴロとピカピカとヤミヤミを混ぜてるって事お!？」

「それに水、風、土を追加しているのが魔女の能力よ。因みに水の力で氷を生み出したりも出来るそうだから、ヒエヒエも兼ねてると言えるわね」

強すぎでしょ…超彩より超彩してるけど。

「だけど自然系ロギアじゃないから攻撃は当たるのよ、当然イリスちゃんの方が強いわ!!」

私の方が強い情報は果たしているのだろうか…！戦ってもないし分かんないけどね

…負けないけど!

「魔女の情報だけ多いのは、彼女は超彩や狂人とは違って海賊では無いから、普通に海軍と連絡を取り合っているからよ。海軍に誘われたりもしたそうだけど、自分はここを離れられないからと断ったみたい」

なるほど…四異界って別に海賊につけられる異名じゃないもんね。なんかヤバそうな能力だなあ…って思われた人につけられるんでしょ。

サアヤと違って自分の手の内を隠す必要もない訳だから、どこかで能力の詳細が知れ渡ったんだろうね。

「とにかく、用があるのは魔女と超彩って訳ね!なら当然私達も探すのは手伝うわ…!…だから今はゆるゆるくり体を休めないよ」

とかなんとか言いながら私の体に手を這わせてきたミキータ。ちよつとお?体を休めるって言ってたのは何だったのお?

「っ…キヤ!」

「わっ…!」

な、何?!急に船体がかなり揺れたんだけど!?

「みんな大丈夫?!」

「ええ…、つたく、上昇気流に乗るまでは穏やかな海流の筈なのに何をやってんだか…

！」

「やっぱりあいつらだけ甲板に残したのは間違いだろ、早く戻るぞ！」

「ま、待つてみんな！まだイリスちゃんを堪能してないわ!!」

「はいはい、後でね！」

後でつて、それ言うとしても私のセリフだよね!?

そりゃあいいけどさ！

これは本格的に夜寝かせてくれなさそうだなあ…と遠い目をしながら急いで体についた水分を拭き取り、服を着て甲板に出る。

…つてこの服メイド服じゃなか!!誰だこれ用意したの!!!ご丁寧に動きやすいミニスカだし!カチューシャもちゃんとあるし!!!魚人島で言つてたのはコレの事ですな!!

…着たけどさ!!!可愛いから!!!

「フフ、食べちゃいたいわね」

「キャハ!流石イリスちゃん…似合うと思つていたわ!本当は丈の長いスカートの方が好みなんだけど…」

私としては、スカートは動きづらいから普段着にはしたくないんだけど…。

つて、メイド服は絶対普段着にはしないけどね!スカートが嫌つて訳じゃないから、普通の!そう、ふつ…!のスカートとかワンピースならパジャマに使つたり、後はナ

ミさん達とお出かけする時に着たりもしたいけど！

「め、メイド服はあと！今はさっきの揺れの原因を…つてええ!?なんか居る!」

船から縄が伸び、その先をバカデカイ魚が食らい付いていた。既に狩った後みたいだけど…こんなでつかいの引つ張つててサニーは上昇出来るのかな?心なしか沈んでいつてるような…。

それに目の前に見えてるこのでつかいへびみたいなのは何…?白いし…ウネつてるからやつぱりへびかな?どこまで続いているのか端が見えない大きさのへびなんて流石新世界の海だ。

「…!大変、あれは白ホワイト・ストローム?い 竜!!」

「ほわ…?」

あのへびのコトかな。

「まるで生きた竜の様に突然海底に現れるという巨大な白い渦巻よ、この渦に捕まった船は後日…信じられない程遠い海で船だけ発見されるそう。つまり、あれに捕まれば私達は全員死んでしまうわね」

「え!?それってマズいじゃん!」

全然へびじゃ無かった…あの渦を消せばいいのかな!?いやでも、そんな威力の技を放つたら間違いないくシャボン割れるし…!

「みんな!! 急いであの渦から離れるのよ!! 早くあの魚切り離して!!」

「「え〜〜!!」?」

「魚と命どっちが大事なのよ!! あんなの引つ張ってたら身動き出来ないでしょうが!!」

「ただあの魚、サンジが調理してくれたら美味しいんだろなあ。」

「マジでやベエぞ…! オイロボ! クー・ド・バースト使え!!」

「いや、スーパース手遅れだ!!」

「船体にしがみつけ〜!!」

ズボ、と渦に魚が引き摺り込まれ、サニー号もその後直ぐに渦の中へ吸い込まれる様に入ってしまった。

「これはまずい…! 確かにとんでもない渦巻だ!!」

「み、みんな…! 捕まって!!」

左手でメインマストを掴み、右手は倍加で4本に増やしてナミさん達の手を握り締めた。

サニーのマストならそう簡単に折れないだろうから、私がこの手を離さない限りはナミさん達の安全は確保されてるね…よし。

「それにしても…」

なんて渦巻だよ…激し過ぎてどこまでもグルグルと回されていくんだけど…。



しかも結構速いし……どこまで連れていかれるんだっての。

ドン!!

「つと……な、何!? 止まった……? 何かにぶつかったの?」

「え!?!」

奇跡的にサニー号は渦を遮る何かにぶつかって渦外に放り出された。

……で、何にぶつかったのかと思って船の前を見ると……。

「ら、ラブーン……!?!」

ルフィがそう叫んで、目の前を優雅に泳いでいる何頭ものクジラの群れを見上げた。

……ラブーンでは無いだろうけど、同じ種だよね。みんなラブーンと同じように額に傷があるのは何でだろう……?

「でも、助かったね。クジラ達が居てくれたから渦から抜け出せたし」

「そうね……アイランドクジラの群れに出会うなんて……!」

「ピンクス〜の酒を〜、届け〜にゆつくよ〜♪ラブーン!! 止まって聴いて下さい! プ  
ルックです!!」

「落ち着け! クジラ違いだ!」

ウソツプが混乱するブルックを何とか落ち着かせようとするけど、彼がああなるのも仕方ないよ……ラブーンに会うのが目的なんだし。

ラブーンは前半の海にいるワケだから、どうやったってこつちには来れない筈だ。私達が魚人島へ来るために飛び込んだ海溝の穴だつてラブーンでは通れないだろうし。

「うおつ……！改めて見てみりや、イリスちゃんメイド姿か……！良く似合ってる」

「えへへ、ありがとう」

「服なんて何着ても変わらねエよ、な、イリス！」

「ルフイつてもしかして私が女だつて忘れてるんじゃないの??」

メイド服まで行つちやうと確かにアレだけど、それでも可愛い服とか好きなんだよ私

……。凄く興味があるつて訳では無いけどさ……。

やっぱリサンジは女心良く分かつてるなあ……！

「それで、ナミさん達は無事だけど他のみんなは大丈夫？さっきの渦で飛ばされた人とかいない？」

「ああ」

うん、全員居るみたいだね、良かった良かった。

「じゃあ、どうする？早いとこクジラから離れる？」

「ううん、このままでいいわ。これだけ大きなクジラの群れは既に“海流”を生んでる、

流れに逆らつては危険が増すだけなの。今はしつかり帆を張つて船体をクジラ達と同じ方向に向けるのが一番良い！」

「よし、任せて！」

帆を動かし、海流を受けて船体をクジラと同じ方向に向けた。

やつぱりナミさんは凄いなあ……私なんて戦闘しか出来ないのに。

「そうだ……ここはラブーンのご郷……ご親族の方居られますか……!？」

あつ……群れから逸れたのがラブーンだから、この群れが故郷なのか……!

それに一早く気が付いたブルックが、船から身を乗り出してクジラ達に語りかける。

「50年前……群れから逸れた小クジラをお探しの方……!ご安心下さいね!彼は反対側の海で……元気です!今や大きく育っているそうです、どうかご安心下さい!!」

そう言つて、バイオリンを取り出し『ピンクスの酒』を歌い始めた。ブルックだからこそ出来る、クジラ達と心を通わせる方法だ。

アイランドクジラはラブーンもそうだったけどかなりの知能を持っている。それこそ人の言葉を理解しているくらいだ、ラブーンがそうだった。つまり……このクジラ達にもその言葉が届いたという事だろう、1頭のクジラがサニー号の真下について、頭の上に船を乗せたのだ。

「お、乗せてくれんのか?」

「ブオオオ……！」

「このまま連れてつて貰いましょう！みんな上昇海流に乗るみたい」

ホワイト・ストローム

白い竜とかあったけど、何とか無事に新世界へ辿り着けそうで良かった！ブルックがクジラ達と打ち解けてくれたおかげだよ。

そのまま真上に昇っていき、すぐに海面が見えてきた。

この先が……新世界だ！

「海上に出るぞ!!」

ワクワクと言った感じのルフィがそう口にし、いつもの様にサニーの船首像へと座る。

来たよ……「新世界」！

船はみるみる内に海面に近づき、私達の胸の昂りもそれに比例して高まっていく。

そうして、遂に私達は新世界へと飛び出した。

「出たア……!!ウオオオ!!新世界……!!」

うつわ……さつすが新世界！空は雷雨、風は強風！海は大荒れ逆巻く火の海……てかほんとに燃えてるけど!!

「まるで地獄だね！望む所だよ……地獄の可愛い女の子達も嫁にしてやる!!」  
とにかく行くよー！美女の居る島あ!!!

## 161 『女好き、燃え盛る島』

アイランドクジラ達とも別れ、私達は大荒れの海を突き進んでいた。

とんでもない悪天候だ：前世の船なら大破転覆死亡セットで確定だねこりゃ。

「見ろ！あの島で火山が噴火した！」

「ちよつとルフィ！まさか行こうつて言うんじゃないでしょうね：!?あの島は3本ある指針がどれも指してないの！異常な「新世界」においても異常よ!!」

「何でもいから上陸するぞ！だつて見えてんだぞ!?もう指針なんかどうでもいい！」

「あ、じゃあ私あの島行つてこようか？私なら海が荒れてるとか関係ないし。凍らせるし、何なら飛べるし」

手を上げて、どうかな？と提案したらナミさんにギロリと睨まれたので大人しく引き下がつておく事にしよう…。危ない事はするなバカ野郎つて事ですぬ…。

「あの島の周りは火の海よ？意味が分からない！あんたが海面を凍らせてもすぐ溶けるわよ！飛んだつて安全かは分からないじゃない！」

「うーん…まああそこには美女はいなさそうだね…」

ルフィには悪いけど、ナミさんが言うならあんまり強く出れないのが私だから…。尻

に敷かれてる? そういうんじゃないから。…え、ないよね?

「おいルフィ、残念な知らせがある。せつかく釣つて来た深海魚…切り出した分を除いて海で全部丸コゲに」

「えエ〜ッ!!」

「海で丸コゲつて凄いな、サニー号は平気なの?」

「サニーはスーパ―負けねエ、大丈夫だ!」

…でもこれ、ルフィはあの島が気になつてるワケだし…何がなんでも上陸しそうだけどね。結局ナミさんも船の進路についてはルフィの決定に従うんだし。

『プオツホーホホホー!! プオツホー!!』

「うえ!? な、なに!?!」

いきなりダイニングキッチンの方から声が聞こえて来た。何…? この聞いたことのない声…。

一体何なのかと船内に向かうと、部屋の隅にある机の上で電伝虫が泣き喚いていた。

あれ、電伝虫なんて私達持ってたっけ。

「あると便利かと思つて、子電伝虫と一緒に何個か持ってきたのよ、寝室にも置いてある

わ」

「へえ…流石ロビン、用意周到だね」

「そして、今のソレは「緊急信号」…だけど「緊急信号」の信憑性は50%以下よ。海軍がよく使う「罨」の可能性が高い。出て盗聴されれば、圏内に私達が居るとバレるわ」  
 そんな風に補足してくれたロビンだけど、ルフィはビッグ・マムの時の様にずかずかと電伝虫に近付いて受話器を取った。

「もしもし、おれはルフィ！海賊王になる男だ!!」

「早いし喋りすぎだア!!」

アホ!!とウソツプの突っ込みが入るけど、別に今更海軍が来たって怖くないんだけどね。なんなら新世界初の戦闘って事でウオーミングアップにもなるかも。あ、それは魚人島で済まして来てるか。いやでも…ウオーミングアップになったっけ？デッケン。

『助けてくれエ!!…ああ…寒い…！ボスですか…?!』

「いや、ボスじゃねエぞ、そこ寒いのか?!」

『仲間達が…次々に斬られてく…!!サムライに殺される…!!』

サムライ…？侍だよな？あれかな、スリラーバークで見たなんたらってゾンビ剣士の故郷が侍の国だとか何とか…ホグ…なんだっけ、ホグなんたらが言ってた気がする。

「おい…お前名前は?!そこどこだ!!?」

『誰でも良いから助けて……ここは……「パンクハザード」!!!……ギャアアアアア!!!』

最後に電話の向こうでズバツ!と斬られる音がして……電伝虫の通話は途切れた。

パンクハザード……それってもしかして、あの燃える島の事かな。

「相手が小電伝虫なら、電波が届くのは精々あの燃える島との距離ね……」

「あんな環境でも人が居る事に驚きだよ。あれ?という事は美女が居る可能性もあるよね?! よーし、行こう!」

「おう!今の奴助けに行くぞ!!」

いや、さっきの声は男だったからそれはいいかな……美女を探すついでに助けるのは賛成だけど。

とはいえ、こうなってしまうえばルフイは考えを曲げないだろう。サンジもそう思ったのか、早々に弁当を作り始めた。

「……はあ、分かったわよ……たく人話を聞かないんだから!でも、ルフイとイリスだけには行かせらんないわ、誰かあと3人、ついていく人をクジで決めましょう」

ここで別に2人でも大丈夫だよ、なんて言っちゃった日には怒髪天喰らうのは目に見えているから黙っておこう。うん。

そんな感じでクジを引き、私達と同行する事になったのはロビン、ゾロ、ウソップの3人だった。案の定ミキータが凄く悔しがって彼女らし過ぎて笑っちゃったけど。



\*\*\*

「ミルキーロード！」

「おお!!」

「凄い！ナミさんがタクトから出した雲が道になった！それ空島のやつでしょ！

それが火の海の上を滑らかな曲線を描いて通り、島へと続いていく。」

「空島でしかムリみたいな話だったのに…凄いねナミさん！」

「えへへ、雲だから安定してる内に早く通って！」

「…えへへって何えへへって。私が言う分には普通だけどナミさんが言ったら破壊力ヤバイからね普通に。死人出るよ、私とか。」

「ホラ、深海魚弁当だ」

「うほ〜！楽しみ〜!!」

「サンジからも弁当を受け取って、私達はフランキーが出してくれたミニメリー号に乗り込み雲の道を進んでいく。」

「じゃあ、ちよつと行つてくる!!」

「気を付けなさいよ！あんたらもイリスとロビンをしっかりと守るのよ！」

「守る必要あんのかよ…特にイリス」

「ちよつとゾロ、私もか弱い女の子なだけで？」

ゾロが何言ってるんだこいつ…みたいに見てきた。私も一応女なんですけど？見た目だつてか弱そうじゃん!!…か弱 “そう” って自分で言っちゃった時点でアレかな…ぐすん。

「火の海越えられるぞ！」

「お、それになんか門もあるよ！あそこから島の中に入れてそう！」

「で、でもよ！やつぱりこんな所に住めるわけねエ！さっきの電伝虫もどつか遠い島から受信しちまったんだ！」

「残念ウソツプ、門に『パンクハザード』って書いてる」

ニヤリと笑って言った私の言葉にウソツプはムンク顔をし、ルフィとゾロは意気込む様に小さく笑う。

さて、ミニメリーが雲の道を進んで島に辿り着くまでまだもうちよつと余裕あるから今の内に弁当食べちゃおうか。燃え盛る炎を見ながら食べるのもまた乙つてモンだね。

「なんでお前弁当食ってるんだよ！」

「ウソツプは食べないの？」

「今ノド通らねエよ!!」

私は耐性倍加で熱さも暑さも感じないから、食欲は普通にあるんだよね。でもルフィもゾロも、ロビンですら食べてるけど。

「ああ…2年前の持病がまさかの再発だ…おいお前達、実はおれは「島に入ってはいけない病」なんだ…!!」

「知ってるよ」

「知ってるなら引き返してくれッ!!」

それは無理かな…美女が居るかもしれないのに引けない!!

\*\*\*

そして、私達を乗せたミニメリー号は島へと辿り着いた。

雲は不安定って言ってたから、ミニメリーはきちんと島にあげておこう、燃えちやつたら大変だ。

「おお…なんか科学って感じの門だね」

パンクハザードと書かれた門は鉄網で覆われ、その周りには何を流しているのかパイプ管が沢山あった。

「この島立入禁止だぞ！コレ見ろ：ほら！」「世界政府」と「海軍」のマークだ！」

門の中央に大きくその2つのマークがあり、その下にKEEP OUTと書かれていた。世界政府ねえ…：だったら尚更この門ぶち破って侵入してやりたくなるよ。

「それにこの門硬く閉ざされてんぞ！他に入れそうな入口はねえし…！」

「斬りゃあ良い」

ゾロが刀を抜き、上段から一気に振り下ろして門を真つ二つに叩つ斬った。

おお…：良い剣筋。私もシャンクスに色々教えてもらったけど…：流石に剣術でゾロには勝てそうにもないなあ。

「たまたま門空いてるみたいだから入っちゃおうか！」

「たまたまつーか斬ったろ今！犯罪だぞコレ！あ、海賊も犯罪者か…！」

中に入れば外より更に暑くなったのか、ルフィもゾロもウソツプ上着を脱いで上半身裸になり、ロビンも薄着になっていた。

私はこのままメイド服で行こーっと。炎をバックに佇むメイドつてカッコいいよね、どう？…：身長は、まあ…：見逃して下さい…：。

「尽く燃えてんな…！」

「元々が燃える島という訳じゃなさそう…災害？事故…？」

しばらく前へ進めば、溶けて原型を保っていない建物が沢山並ぶ場所へ出てきた。流石にあの建物に人は住んでないよね…。

「恐らくこれは民家じゃない…ここには以前、政府の施設があつた様ね…。この島を記録指針ログポースが示さないというのも引つかかるわ」

「おーい！さっきの奴いねエか〜！！助けに来たぞ〜！！！！」

…うーん…。

「ねえ、さっきの電伝虫さ…「寒い」って言ってなかった？」

「ああ…おれもそれが気になってたんだ」

パンクハザードなのは間違いないとしても…寒いってどういう事？だってこの島そこら中が燃えてるんだよ？天邪鬼的な人だったって事かな。

「グルルル…！！」

「あれ、ゾロ、いつの間にそんな唸り声出す様になったの？」

「あん？俺じゃねエぞ、ルフィだろ」

「え？今のロビンの腹の音じゃねエのか？」

「ブツ飛ばすぞルフィコラ」

……いやいや、という事はなんなの？こんな灼熱の地に耐える「何か」が…今私達の後ろにいるって事!?

面倒だなあ…と思いつつ振り向いた時、最初そこには足しか無かった。というのも、体が大きすぎて足しか見えなかっただけなので視線を上に向ける。

…ふーむ、鋭い牙、堅そうな鱗、そしてその巨体に見合う程の巨大な翼、そして2本のツノ……わあお。

「これ、この世界には存在するの？」

「いや…空想上の生物だ！存在する訳ねエ…！」

「だけどこの姿…そうとしか思えない…!! 竜…!!」  
ドラゴン

ドラゴン…：こうやって実際に動いているのを見るとテンション上がるなあやっぱり！空島で見たペガサスが…まあ…あんなだったから、今回はキチンとドラゴンでバツリ！

「何奴だ……」

「えっ」

しゃ…しゃしゃ…喋ったあ!?!いやでも、前世の創作でも喋ってるドラゴンって結構多かったし？一番有名な創作ドラゴンだって願ひ叶えてやるよっつって喋ってるし？

「どう見ても空想上に伝わる姿そのもの……!」

「新世界って凄いな!」

「って言うてる場合か!!」

しかもこのドラゴン、かなりヨダレ垂らしてるし……私達をエサとしか見てないな?

コンニャロ……つまりロピンを殺す気で居るんでしょ? だったら私の敵だよな。

「グロロロ……」

ボボ……つとドラゴンの口内から炎が漏れ出た。

ルファイ達はそれを見て火を吹いてくると読んで横に回避する。

「イリス! 危ねエぞ!」

「私は平気。知ってるでしょ?」

そして、ドラゴンは口を開いて炎のブレスを勢いよく吹いてきた。

なかなかの威力……でも残念、私には届かない!

「倍……」

右の手の平を前に出し、生み出した空間にブレスが吸い込まれていく。

焼け焦げろデカ竜!

「返……!」

ゴオオ!! っと威力が倍になってブレスはドラゴンを飲み込んだ。

…あー、でも効いてないっぼいね、流石に自分のプレスでは倒れてくれないか。  
「仕方ない、ここは私が直接…」

「待てイリス！おれもやる！ゴムゴムのオ…」

ルフィが腕を後ろに伸ばしながらドラゴンに向かって走り、顔の横に跳躍した。

「JET銃弾!!」

腕を戻す時の力を利用してドラゴンを殴る…が、ルフィが思ってたより硬かったのかダメージは通っているものの致命傷にはなっていないかった。

「あ…つくないブ…！涼しいブ！」

「また喋ったぞ!!」

なんかやせ我慢してるし！

…うわ、飛んだ！やっぱり空も飛べるんだ！

「ブ！お前達も『七武海』の仲間か!？」

「七武海…!？」

また火吹いてきたし…学習してよね！

迫りくる炎はさつきと同じ様に倍返しで跳ね返し、小太刀に手をかけた。

「待てイリス、コイツは俺にやらせろ！ブツた斬る！」

「そう？じゃあ任せるね」



「ほんじゃ、おれが叩き落として来る!!」

ロケットでドラゴンまで飛んだルフィが、落とそうと噛み付いてくるドラゴンに自分の翼を噛ませて逆に落とす事に成功する。

落ちて来るドラゴンに向かって、ウソップが生み出した「トランポリア」というまんまトランポリンみたいな植物を踏んで跳躍したゾロが刀でドラゴンの首を一刀両断し…あつさりどドラゴン退治は終了したのであった。空想上の生物弱くない？

「…涼しい…炎が涼しいブー」

「え？」

落ちてきたドラゴンがまだ喋ってる…首斬られたよね??

まさかまたゾンビみたいなそんな感じ…?

「…いや、違うか。なんか刺さってる」

「人…?じゃあ、喋っていたのは…」

まだ生きているのかと思って落ちてきたドラゴンの頭部に近づけば、下半身しか見えない何者かが頭からドラゴンに突き刺さっていた。

ブって言う特徴的な喋り方も一致するし…間違い無い、さつきからしてた声と同一人物だろうね。

「抜くぞー!」

流石にそのままにしておくのは可哀想過ぎるし、ルフィの提案に私達は全員頷いた。でも感じから女の子じゃないし…テンションは上がらないかなあ。

「おい！何奴だ、手を放せブ!!」

「抜いてやるんだ、じつとしてろ！せくくのっ!!」

そして、スポ、と何者かの体をドラゴンから抜く事に成功した。

……下半身だけ。

「ぎやあゝゝ!!ちぎれた!ごめゝゝん!!」

「バカ!ゴメンで済むか!殺しちまったアゝ!!」

「…いやでも待って、ドラゴンの方には体が千切れた後なんてないよ?」

「どういう事だろう…やつぱり喋っていたのはこの人じゃ無かったのか…。下半身だけで喋れるわけないし…。」

「おお!離れられたでござブ!」

「喋ったア!?ゾンビか!?!」

ドラゴンに動く下半身、そこら中が燃えている環境といい…どうなってるんだこの島!まず普通じゃない…燃えてる時点でそれはそうなんだけど!!

## 162 『女好き、捕らえたハーピー美女』

あの後、下半身は何故か暴れ出して逃げ出し、それを追ったルフィに結局捕まっていた。

しかもドラゴンの時みたいにルフィの背中にくつつけられてケンタウロスくって遊ばれてる始末。

「七武海がどうこうって言うてたし…やっぱり下半身だけなのにも理由があるんじゃないの?」

「お前は夢のない奴だな!こいつはこういう奴なんだ、なア、お前名前は…ブヘア!!」  
おう…綺麗なバックドロップ。そりゃ素直に従う筈もないか。

「そもそも私達の声は聞こえてるのかな」

「いてて…でも喋ってんじゃねエか」

「うーん…それはそうだけど…」

もう意味分かんないんだよねこの島。私みたいな転生者もいるわけだし、どっか別の島から召喚された魔物説とかある?

「おいお前ら…こっち来てみる!」

ゾロが階段を登った先の溶けた建物の上から手を上げている。

侍か助けを求めてた人でも見つかつたのかとゾロの居る場所まで歩いて行き、私達はその先の光景を見て目を見開いた。

「何だコレ……！」

私達の周りは今も燃え盛る炎や活火山がある……が、ここから見える大きな湖を挟んだ島の反対、そこにはなんと氷の山があつた。

「1つの島でここまで真逆の環境を作れるなんて……しかも隣り合わせに」

「1つ謎が解けたわね」

あつ……「寒い」つて言つてたあの声か。

つまり……侍と犠牲者はあつち側に居る訳だね。

「世界政府の所有地、環境が二極化している島……、もしかして……」

魚人島でジンベエが言つていた……「決闘」の話。確か島の天候を変える程の争いとかなんとか言つてなかつたつ。赤犬と青キジのやつ。

「面白エ島だなく……！雪降つてるよなあ山！今暑いしかき氷食いてエー！」

「向こう言つたら寒いだろ!!それに遠過ぎる、一旦船に戻ろう!!」

「私も戻るの賛成かな、このままだとロビンの体に悪いよ」

暑いところからいきなり寒い所に行くのは心臓にもよろしくないと思うし。

「とりあえずナミさん達に連絡しようよ、今から戻るって」

「そうだな、ナミから小電伝虫預かってて良かったぜ。……ん？」

鞆の中を探っていたウソツプが、不意に一定の方向を見つめて固まった。どうかしたのかな、とウソツプの見つめる方向に視線を向け……。……おっと、これはこれは……。おやおやあ……？

「美女じゃん……！」

少し離れた所にある溶けた建物の上……そこになんとなーんと言ふことでしょう！これまた新世界級のとんでもない美女がいるではありませんか!!こつちを見て妖しく微笑んでるのは偵察のつもりかな？

腕はなく、代わりに翼が生えていて足首から下も鳥の様なツメの足だけ……胸は大きいし!薄い薄緑の髪は顔突っ込んで嗅ぎたいし!何より美しいく!!!

「ちよつとナミさん達に電話しててね!私用事できた!」

「え?どこ行くんだよイリス!」

「美女のとき!」

燃え盛る炎の向こう側で建物に掴まってこちらを窺っていた美女は、突然私が飛んで近づいて来た事に目を見開き、翼を広げて逃走を図る。

あーだめだめ!逃がさないよ!

「はい、捕まえたー！」

「っ…!? 速い…!!」

ガシ、と翼を掴んで飛ぶのを阻止する。近くで見たらこれまたなんとも…とんでもない美女だなあ。

「私達を観察してどうかした？ ちなみに私はあなたの美貌に打ち抜かれてどうかしたけど？」

「……、」

あ、この人褒め言葉に弱いぞ？ 簡単に赤面見せてくれたんだけど。

「…あなたは何者…？ 私を掴めるって事は覇気使いね…。あの人達は麦わらの一味…2年もの間姿を消し…再び姿を見せる前に使用人を雇ったって事かしら…」

「使用人？」

…そういえば、今メイド服着てたっけ。私も身長伸びてるし、2年前の手配書じゃ分かんないか。

「どつちかと言うと主人なんだけどね。…で？ 私の最初の質問は答えてくれないの？」

「…ふふふ、それは言えないわ、お嬢ちゃん」

「そ。別に良いけど…私達この島から緊急信号拾って来たんだけどさ、ドラゴンが出るわ下半年人間は出るわでもう散々…あ、なんなら今ルフィがケンタウロスと楽しそうに

話してるしさ」

ちよつと離れてる間にルフィがケンタウロスと和気藹々と言った風に話していた。ケンタウロス…ホントに居たんだ、この島。

ルフィを同種と勘違いしたのかな、背中に下半身付けてるから。

「そうでしょう、かくいう私もハーピーなの、見れば分かるでしょうけど」

「鳥のなんかだっけ？鳥にしては美し過ぎると思うんだけど」

「ふふ…きちんとお世辞が言えて偉いわね」

そう言つて、ハーピーの美女はふわりとその柔らかな翼で私を抱き締めた。えっ…と？これはどういう状況？

「…ああ、なるほど」

この人に抱き締められたら何だか眠くなってきた。体が冷たくて体力が奪われるからかな、倍加つと。

という事はこの人…私を眠らせて行動不能にする理由があるって事か、眠つてはあげないけど。

「ふふ…どうかしら？あなたの戦闘能力は分からないけど、私に抱き付かれて離れられる人は居ないのよ？この冷たい体で、みるみる内に体力が無くなっていくのが分かるでしょう？」

「あー、凄い眠たい！これは寝る前に抱き締めておかないと勿体ないなあ！ついでもスモしちやうかあ！おっぱいも揉んじやお！」

「やせ我慢がいつまで保つかしら…？」

うひょー！ぼよんに顔埋めちやうつ！

ンフフフ…くんかくんか、もみもみ。

「……な、なかなか堪える様だけど、無理しない方がいいわ…楽に逝きなさい」

「え？うん」

絶対に倒せると思って抱き締めたのに、まさかその間胸を揉まれ続けるとは思ってもいなかったのか顔に焦りが見えるハーピー美女。

だつて耐性倍加して冷たさ感じないし…その時点で眠くなる訳がないんだよね。

「…そろそろ眠ったらどうかしら…！」

「うーん…」

まだぼよんを揉み続けていたい…。あともうちよつとだけね！

どうして私が眠らないのか、その事に対する焦りで彼女の額に薄らと汗が滲む。

そろそろ私が何かの能力者だと勘付かれてるだろうから…ちよつと遊んじやお。

「…うつ、なんか眠く…」

「!!」



「パア、と擬音が見えるくらい表情が明るくなったハーピー美女。不安を必死に隠そうとしてずつとうすら笑いを浮かべてたもんね！」

「これであなたもおしまいね…？能力者の研究はマスターにとつても利益があるでしょうし、このまま連れて行きましょう」

「く…こんな所で負けるなんて…マスター…一体、誰の事…!？」

「それはあなたが知る必要の無いコトよ、さあ…お眠り」

…む、教えてくれそうにはないか。その辺の情報管理は徹底してるのかな？外部に漏らしてはいけないナニカがあると見た。

「はあ…くっ…ぺろぺろ。寝ちゃダメだ…！ぺろぺろ」

力無くぐつたりとしているのを演じ、どさくさに紛れて谷間に舌を這わしていく。…はい、自重します。

「…じゃ！とにかくそのマスターって人のトコ行かないとね。流石に無断で貰って行くのはどうかと思うし」

「え…」

眠くなつたフリを止めれば、露骨に落胆した表情を見せるハーピー美女が可愛い。すぐに顔を引き締めていたけど、私からすればあなたの威厳なんてとつくに無いからね。谷間ぺろぺろしたからね！

「あつちの寒い方にいるんでしょ？あなたはさつきそこに逃げようとしてたもんね。あと、残念だけど私はあなたに抱き締められても眠くはならないよ、えっちな気分にはなるけど…」

この人はそこまで強くなさそうだし…これ程密着していれば攻撃することなく無力化出来そうだ。

「という訳なんで、申し訳ないんだけどちよつと寝ててね」

「何を…っ！うっ…！……！……！」

ズオ！と霸王色の覇気をハーピー美女だけに向けて放ち気絶させた。私を抱き締める力がフツと抜け、そのまま崩れ落ちそうになるのを支える。

「見れば見るほど整った顔立ちだなあ…」

横抱きして、顔だけではなく全身をくまなく観察する。やっぱりハーピーというだけあって鳥の特徴をばっちり捉えている。ふわふわの羽毛に包まれた翼…ベッド代わりにしたい…！

「イリス！ちよつと来てくれー!!」

「あ、うん！」

ウソップに呼ばれて元の場所へと飛んで戻った。どうかしたのかな…さつきまで仲良くしてたケンタウロスがノビてるけど。

「どうしたの？」

「ああ、それが……ってお前もどうしたんだよ！誰だその鳥女!!ちよつと目を離せばすぐ女引っかけてんな！」

「ふふ、嫁には出来たのかしら？」

「あー、それはまだ」

とりあえず敵意しか感じられなかったから気絶してもらったんだし…嫁がどうこうって話は出来てないんだよねえ。

「それで？」

「ああ…実は、さつきサニー号に連絡したんだけどよ…どうやらブルック以外全員何者かに攫われて行方不明なんだ！ナミ達もだ！」

「え…」

……攫われた…？

何で…え、ナミさん達が？

「ブルックは死体と思われてたのか無事で、船の積荷を運び出そうとしていたガスマスクを付けてる奴らは全員倒したから居場所も聞き出せねえ」

「サンジやフランキーも居て簡単に攫われるとは考えにくいわ、恐らく意識を失う様な…睡眠ガスでも船に投げられた可能性が高い。眠らされている間に船も島の反対側へ

移動させられているそうよ」

という事は…今も目の前に見えているあの氷山の向こう側か。

睡眠ガスで眠ったブルツクを死体と勘違いしてくれたのは助かった。お陰で状況が分かったんだし。

「近くにだけエ建物もあるって話だ！きつとそこに運び込まれてるに違いねエ！さっきのケンタウロスもそいつらの仲間かも知れねエ、持ってた子電伝虫に“CC”ってマークがある」

「…ん、分かった。じゃあ早く行こう、どのみち引き返してもサニー号は無いのなら…氷の土地へ行かなくちゃならないって事でしょ」

「かき氷も食えるな！」

CC…何かの組織の名かな…。

ま、何だつて良いよ、ナミさん達に手を出したって事は…つまり私に何をされても良いつていうコトでしょ。

…潰してやる、クソ組織が。

「だが、向こうへどうやって行く？俺とウソップはともかくお前らは泳げねエだろ」

「ん…飛んで運ぶって言いたい所だけど、向こう岸吹雪いてるからなあ…」

「そうね、島の中でこれだけ極端な温度差があれば風は吹き荒れる」

ナミさんがサイクロン・テンポを使う時もそういうのを利用してののかなあ。

「そもそもこの湖、一部燃えてるし氷は浮いてるし泳いでなんか渡れるワケねエだろ！向こう岸へ渡ればいいんだろ？ちよつと離れてる。∴必殺緑星！」「ボーティーバナナ」

「団扇草」！」

「お」

ウソツプが放った種が湖に着水し、バナナ型の大きなボートになった。

近くに咲かせた団扇草という持ち手の長い団扇の様な草をオールにするんだね。

「色んな種持つてるんだね、なんだっけ、おっぱい列島？」

「煩惱しかねエのかお前の脳内は！ボーイン列島だ！あそこは変な植物の宝庫だったかな、危険な森の奥<sup>エリヤ</sup>へ行く程、便利な植物を手に入れられた」

ボーインもおっぱいもあんな変わらないと思うんだけど∴。それは言い過ぎかな。

「よーし！出航だーっ！」

みんなでバナナに乗り込みオールを漕いで行く。私は乗ってるだけだけどね、だって両手塞がってるし、神背<sup>ヒュマ</sup>を出す場所も無いし。

「待てエ！コノヤロオ〜!!」

「！」

私達がさつきまで居た場所から誰かが岩を投げてきた。岩自体は覇銃で砕いてやつ

たけど、投げたの誰だ…？ああ、ルフィにやられたケンタウロスか。

「おーい！やっぱりおれの仲間になりたくなつたのか？！」

「勧誘したんかい！」

勧誘するなら私の腕の中に居る美女からしてよ！あーほんと可愛い…私が犯罪者ならこのまま犯しちやつてる所だよ…あ、犯罪者か。

「ボス…!!侵入者がそっちへ!!始末して下さい…!!」

「ボス…!!」

角笛を鳴らしてからそういうケンタウロスの言葉にウソップが反応する。

ボスカ…私達が緊急信号で聞いたボスと同一人物なのだろうか？

「何か現れたわよ、向こう岸に…」

「…あれがボスかな？」

吹雪のせいでシルエットしか見えないけど、かなりの数のケンタウロスと、一際大きな体格のケンタウロスが姿を現した。でかいのがボスって考えるのが自然だね。

「面白エ奴らだなア！おーい、おれの仲間になれ！」

「誘つてる場合かア?!あいつらバズーカこっちに向けてるぞ！ボスってあいつの事じゃねエのか?!だつたらおれ達を攻撃するのは筋違いだ！」

「とはいえ狙われてるのも事実、遠くから撃たれてボートが転覆したとなつちや面倒だ

し…仕方ないなあ」

能力でボートを倍加させ、広くなったスペースに神背ヒューマを使い、私を出してハーピー美女を預ける。

ウソップが最初からそうしとけよ！つてツツコミ入れてくるけど…広くなったらハーピー美女を寝かせるスペースも出来るわけだし、私が抱っこしておく理由が無くなるじゃん！！

「撃ってきたぞ！船を転覆させる気だ！」

「大丈夫。… 覇銃ハガン」

飛んできた5発の砲弾を、右手の指5本から出した覇銃ハガンで破壊する。

攻撃の意思があるのなら…とりあえず倒してからあちらさんの話を聞くとしようか。

「10倍灰じゆうばいばい」

ボートの先頭に立ち、小太刀に手をかける。

「黒刀 去羅波さろば・炎えん文字いちもんじ!!」

居合で熱さを最大まで倍加させた小太刀を横に振り切り、熱を纏った巨大な黒い斬撃がその岸にいた全ての敵を焼き斬りダウンさせた。それはボスとして例外ではなく、見聞色で確認しても全員倒れているのが分かる。

なんならちよつとやり過ぎたかな、ボス以外のケンタウロス達もまさかそんな脆いと

は思ってたから…。

ま、いつか。私達を狙うって事はロビンを狙ってるのも同じだし、それは許される行為じゃないし！



## 163 「女好き、入れ替わり一味」

「見て見て！このケンタウロス達、あつたかそうな服！」

「おおお……助かるぜー！」

流石にこいつらも寒いのか、みんなコートを羽織っていた。こんなのが着ていたのをロビンに着せるのは普通にイヤだけど……仕方ないか……凍傷とかになるよりずっとマシだ。

ハーピー美女はこの地に来てても全く体に変化が無い。例えば身の震えだとか、肌が赤く火照るとか……寒さに強すぎでは？一応コートは着せたけど。

「あ、おい、ブルックが来たぞ！おい！ブルックく〜!!」

丁度みんなが奪ったコートを着た時、ルフィが遠くから走ってくるブルックを見つけ、手を振る。

ブルックも誰かから奪ったのか、あつたかそうなコートを身に纏っていた。まあ……ブルックは骨に直だからね……あれ？じゃあ逆に寒く無いのでは??

「皆さん……無事で何よりです……ヨホホホ！」

「ブルックもね。……ただ、ナミさん達が行方不明なんですよ……こら、起きろ！」

ドカッ！と倒れている茶色いヒゲの下半身が巨大ワニになつて男の腹を蹴り上げれば、呻き声を上げて咳き込んだ。

「私の嫁が攫われたらしいんだけど、どこに攫われたか知ってるんじゃないの？」

「ハア…ハア…、ぐ…黙れ、俺は何も口は割らん…！」

「…口を割らない？なんで？誰かに指示されてるから？それともあなたも『CC』つて組織の一員で、ナミさん達を攫った奴の部下だから？仲間は売れないから？忠義があるから？…：…：…：そういうのはどうでもいいからさあ、早く教えてよ！」

更に強く蹴りつけ、雪の積もる地面をその巨体が転がつていく。

吐くまで続けるからね…誰を攫ったのか…：…：…：そうする事で何が起きるのか…：その身をもつて特と味わえクソ野郎が…！

「ま、待てよイリス！何も今そいつから全てを聞く必要なんてねエだろ！ブルツクの見たっていう建物に案内だけしてもらおう！」

「…：…：それもそうだね。いまいち納得は出来ないけど…：…：…：つて事だけど、それくらいはしてくれるんだよね？」

顔の横に刀身の長さを倍加させた小太刀を突き刺す。ワニタウロスは真横で光る赤い刃を見てびくつと体を震わせ、額から大量の汗を流した。

「私達を…お前らのアジトまで運んで。嫌だつて言うのならここでお前らを皆殺しにし

て探す事にするよ。ついでにそこにいる奴らも全員殺す」

「…ウオツホツホ…！俺達はともかく…『あのお方』を殺せる訳がない…！」

「殺せる訳が無いのなら、連れて行ってもいいでしょ？」

まあ実際殺せないんだけど。私殺人とか無理だし。

「…分かった…連れて行く…！だから部下に手を出すのは止めてくれ…！」

「へえ…部下思いだね、そういうのを本心で言える人は嫌いじゃないよ。ほら、立って腕を掴んで無理矢理立たせ、みんなでワニの尻尾付近に座る。ルフィだけそいつの肩に乗ったけど。」

「なはは、イリスは怒ると容赦ねエからなア」みたいなコソコソ話が聞こえてきた。前から言ってるけど、私の嫁に手を出さなきや別に怒ったりしないっていうのに…。

「ほら、早く走って」

「ぐ…屈辱だ…！こんなワケの分からない格好をした小娘に…っ」

「誰が小娘だこのワニが…！」

「だーっ！お前らしい加減にしろよ！おっさん、良いから早く行った方が身の為だぞ！」  
「わざと道を間違えようとすれば私が許しませんよ、一応ここまで走ってきましたから、道は覚えていきます！」

逃げ道を次々に塞がれ、ワニはようやくやく走り出した。

ナミさん達…無事なら良いけど…!

\*\*\*

ブルツクの言っていた大きな建物、その近くから激しい戦闘音が聞こえてきたのでまずはそこへ向かえば、何故か陸地でひっくり返って真っ二つに斬られている海軍の軍艦と、その近くに立つ男…えーつと、あ、私やルフィ達の手当てをしてくれただ人じゃん! 「あれ?! お前は…っ!! おーい、お前じゃんかー! おれだよおれ…! あん時やありがとなー!!」

「名前なんだっけ…ロー?」

「ええ、トラファルガー・ローよ」

「そうそう、そんな感じの名前。」

「ローがそこに立っていた。」

「あいつよー、2年前の戦争からおれを逃がして、傷も治してくれたんだ!」

「傷を…!」

ロビンが驚いた様に声を上げる。まあ…ぶっちゃけシャボンデイで会っただけの人の為に、命を懸けて救い出しただけじゃなく傷の手当てまでしてくれたりっただから驚くよね。

「ジンベエと同じ様にあいつも命の恩人なんだ！」

白ひげや私の事も見てくれたし、目的は分かんないけどね。ただ優しいっただけなら話は簡単なんだけど。

「こんなトコで会えるとは思わなかった！あん時や本当にありがとう！…あれ？喋るくまは？」

ワニ男から飛び降りてローの所へ駆けていくルフィに私もハッピー美女をロビンに預けてからついていく。

それにしてもこの人、ちよつと雰囲気変わった？大人っぽくなったような気がする。

「…よく生きてたもんだな、麦わら屋。だがあの時の事を恩に感じる必要はねエ、あれは俺の気まぐれだ」

「気まぐれでも助けてくれたじゃん、ありがとね、白ひげのコトもさ」

「…？お前らの船に使用人は居なかつたと記憶しているが…俺の記憶違いか…？」

ハッピー美女もローも、この服を着てると私を一味に雇われたメイドだと勘違いするんだよね…。

でもこの黒髪と赤目っていう特徴的な見た目で判断して欲しいなあ！

「イリスだよ、私の傷も治してくれたじゃん！」

「…!?…お前が女王屋…!?…その見た目じゃ、手配書は役に立たねエ…考えたな」

「そんなつもりは無かったんだけど…」

そんなつもりも無くメイド服を着るのもおかしいとは思うけどさ…流れで…つい…!!

それにみんなも喜んでくれたし…。

「それより、この軍艦は何？海軍居るの？」

「……………」

私の問いに言葉で答える事はなく、視線だけを動かすローと同じ方向に顔を向ける。

…誰か倒れてる?…見た事あるような…でもうつ伏せで倒れてるから顔が見えなくて誰だか判断が付かない。

「スモーカーさん!!!」

「スモーカーさん!!!」

「あつー！」

遠くから海兵達が雪埃を上げながら走ってきた。しかも先頭にはたしぎちゃんがいる……という事は、倒れてるのはスモーカーか、また面倒くさそうなのが居るもんだ。

でもたしぎちゃんが居るからおっけーです!!

「おい! マズいぞルフィ、イリス、海軍だ!」

「待って! でもたしぎちゃんが居る! お近づきのチャンス!!」

「お前はこんな時まで何言ってるんだ!」

こんな時? 美女が近くに居る時だからこそこう言ってるんでしょ!

それにしてもたしぎちゃんも雰囲気変わったなあ、髪伸ばしてるし、ハーフアップも可愛いね。

「スモーカーさん…っ!」

たしぎちゃんは倒れるスモーカーに駆け寄り、状態を確認してからローを鋭く睨んだ。

「よくも…!!」

刀を抜き、たしぎちゃんは勢いよくローへと突進する。ローもそれに対応しようと刀を構えた。

「おいおい、よせ…そういうドロ臭エのは…嫌いなんだ」

ガキインツ!

「な……っ」

「……何故止める、女王屋」

そのままたしぎちゃんへ突き技を繰り出そうとしたローの攻撃を、腰から抜いた小太刀で受け止める。

…何故止める？ 私に聞くのか、それを。

「たしぎちゃんは私の嫁になる人、手出しはさせない」

「…嫁…？…まさかあなたは女好き…!？」

「そうだよ、あと前からずーっと言ってるんだけど私はイリスね？ イリスって名前前で呼んでよ」

ペローナちゃんだつて未だに女王呼びだもんなあ…はあ…ペローナちゃんに名前前で呼ばれたい…おいイリス、私の胸を揉め、って言われたい…。

「…ま、そういう事だから、彼女に手を出せば私が許さな…つてうわっ！」

後ろからいきなり横薙ぎに振られた刀をしゃがんで躲し、軽く跳んでルフィの隣に並ぶ。

「女好き…いえ、女王…！あなたは今や10億の賞金首…私など今みたいに不意を突こうと勝てる相手ではない事くらい分かってます…！ですが、だからと言って海賊の伴侶に成り下がるつもりは毛頭ありませんっ！守られるなど以ての外…！屈辱です…っ!!」



「何く!? へーんだ! 今は別にそう言つても良いけどさ、絶対いつか嫁にするからね! あなたみたいな美人を逃したくないし!」

海軍と海賊の間にある溝は面倒だなあもう! たしぎちゃん自身が正義感の強い優しい子だから特に堕とすのが難しいというか…。

「お前ら急げ! ここを離れるぞ!」

「…むう、分かった」

下手にここにいるスモーカーとたしぎちゃん以外の海兵を全滅させちゃつたらそれこそ敵対しちやいそうだし、わざわざ倒す必要も無いし…言う通りにしよう。

「そうだ、おいトラ男! ちよつと聞きてエんだけど!」

「研究所の裏へ回れ、お前らの探し物ならそこにある、また後で会うだろう。互いに取り返すべきものがある」

ルフィがナミさん達について確認しようとするればそう返ってきた。理解が速いのは助かるけど、知ってるって事はお前も関係者かこら。理解が速いのは

「言つとくけどね、ロー。たしぎちゃんに手を出したら、幾ら恩人と言つても許さないから」

「……はア、今はお前を敵に回したくはねエ…。傷一つ付けない、命も取らない。…これでいいな? 分かつたらさつさで行け」

「…約束だからね？ちゃんを守つてよ？」

…まあ、今はナミさん達が最優先…か。たしぎちゃんは心配だけど、この様子だと酷い目に遭うことも無いだろう。ていうかそもそも、ローつてそんな無意味に誰かを傷付ける様な奴には見えない…:…と思う。勘！

ワニ男に飛び乗つてハーピー美女を抱き、たしぎちゃんに大きく手を振りながらその場を離れていく。

その際、私の腕に抱かれているハーピー美女を見てローが目を見開かせていたけど…それも今は気にしないでおこう。

ローに言われた通り研究所の裏までやってきた私達は、何故か大勢の子供達を引き連れていたナミさん達の姿を見つけた。

しかもその子供達、大きさはそれぞれだけどもみんな体格が大きい。中には巨人族の子供かと疑つてしまいそうな程巨大な子も居た。

そんな状況に違和感を感じるけど、何はともあれナミさん達が無事で良かった！

「おーい！みんなー！」

「…:…!!」

「…あ…みんな…」

…???

あれ、無事に会えたというのに何だろうその反応は。

ナミさんが困った様に笑っているけど、何かあったのかな。

「と、とにかく吹雪をしのげる場所まで移動しよう！な！この子供達や…えーっと、他の事は後で説明するから！」

「フランキー…？どうしたの、なんか喋り方変じゃない？」

「そ、その事について後で大事な話がある。だけどまずは移動しよう、子供達にこの吹雪は酷だよ」

なんかチョッパーみたいなフランキーだなあ。…いやいや、まさかね。

私は頭の中に湧いた考えを即座に否定し、フランキーの言う通り移動を開始した。

少し歩いて、崩壊した建物の一部が突き出て屋根の様になっている所の下に辿り着いたんだけど…ここに来るまでナミさん達はずっと無言で、私だけではなくルフィ達も首を傾げていた。

因みにルフィが背中にくっつけていた下半身、その持ち主である頭部はナミさん達と行動を共にしていたらしく、今では下半身の上に首をくっつけたよく分かんない生物に

なっていた。本人は下半身が戻ったと泣いて喜んでいた。あと、どっからどう見ても侍！

「で…大事な話って？」

「イリスちゃん、落ち着いて聞いて」

「…うん。…えっ」

一瞬ミキータに言われたと思って頷いたけど、どう見ても喋ったのペローナちゃんだよね!!え、今私の名前読んだ?しかもちゃん付けで!!

「み、ミキータ、ペローナちゃんに私の事をそう呼ぶようになってお願いしてくれたの?」「バカじゃねエのか、お願いされたって呼ばねエよ!」

ひえ…今度はミキータに罵倒されたんだけど…!ど、どうなってるの…?…ええ…まさか本当に、本当にさっきの仮説が当たってるのかそんな事…。

「私がミキータよ」

「私はペローナだ」

「うそん…」

「ええっ!?!」

う。ミキータが自分の事をペローナと言ひ、ペローナちゃんが自分の事をミキータだと言

そんな…何でそんな事に…？私だけじゃない、その事実にはルフイ達も全員驚いていた。

「おれはフランキーじゃなくてチョッパード」

「俺はフランキーだ、がつはつは！無事で何よりだぜおめエら！」

フランキー姿のチョッパードに、チョッパード姿のフランキー…。

「な、ナミさんは？」

「私は平気。あとサンジ君もね」

…??どうしてナミさんとサンジだけ無事なんだろう。いや、でもこれ…何かしらの能力が原因…だよな？人の精神を入れ替えるって…なんじゃそりや。

「流石に能力者の仕業でしょ？犯人は？」

「えつと…覚えてる？シヤボンディで会った海賊…」

「『死の外科医』、トラファルガー・ローだ。…自分の体じゃねエのは落ち着かねエな」

「ミキータなペローナちゃんもペローナちゃんなミキータも新鮮でいいね…けど、ローか」

よりにもよって…恩人じゃん。

…元に戻すとすればとりあえず…ん…もう一度ローに会ってみるしかない…かな。

「でも不思議だね、どうしてナミさんとサンジの2人だけ、能力にかけられなかったの？」

能力のキャパオーバー？」

「それはねエ……と俺は思ってる。想像しか出来ねエが、ナミさんはイリスちゃんの正妻として有名だ。下手に刺激したくなかったんじゃねエか？」

「そうね、私もそう思う。あんた、もし私がサンジ君と入れ替わってたら……それはもう荒れてたでしょ？」

「まあ……正直」

ミキータとペローナちゃんは2人とも嫁だからまだ良いけど、サンジとナミさんが入れ替わってたら……か。まあ……サンジだからまだ……いや、でもなあ、ちよつとムカムカするとうか。

……すみません嘘です。すつごい暴れます。この島無くなります。

あつ、それに確かさつき……ローもあんまり私を敵に回したく無いとかなんとか言ってたっけ？

「トラファルガーの奴もその辺は理解していたって所だ。俺達としてもイリスちゃんが我を忘れて暴れる事は望んじやいねエ」

「我を忘れて暴れるとか無いから!!……多分!!」

……た、多分!!!

## 164 『女好き、大恩と裏切り』

「じゃあ、ちよつとローに会つてくるよ」

「早くしろ、この体は落ち着かねエ」

ミキータ…じゃなかった、ペローナちゃんが表情を歪めてそう言う。

その顔がなんだか新鮮で、私はついつい軽く吹き出した。

「そのままなのは絶対に良く無いけど、なんだか面白いね」

「他人事だと思つててめエ…!」

「イリスく、あ・い・し・て・る♪」

「おおおおおまおまえ!!!何してんだ!?!私の体でそんな事言つてんじゃ…!!」

「ぐふ…ペローナちゃんに甘えられるのはダメージが大きい…!」

「落ち着け女王!そいつは私じゃねエ!!」

思わず口元を覆えば、ペローナちゃんが私の肩を掴んでガクガクと揺さぶる。

ロー…あなた、結構良い仕事してるよ…!!グツジョブ…!!

「ぐ…!覚えてろ…お前ら…!!」

「あ、勿論、私は普段のペローナちゃんの方が好きだよ?当然、ミキータもね」

「……………、だ、だから何だ、下らねエ事言つてないでさっさと行け」

「キャハ、ペロちゃんが照れてるわ」

「お前は!!いちいち!!うるせエんだよ!!」

ギヤーギヤーと照れ隠しに騒ぎ出したペローナちゃんに苦笑して、私は軽く手を振つて一旦皆の下から離れた。

ハーピー美女はロビンに預け、ローを探す為に来た道に戻る。

…被害にあつたペローナちゃんとミキータには悪いけど、ぶつちやけ私としてはちよつと楽しかつた。…ハツ…その能力で私とナミさんを入れ替えて貰えれば…普段とは違つた楽しみ方が出来るのでは…!!?

「お」

「あー」

そんな邪な事を考えながら、さつき逃げてきた研究所の入り口前までやってきた私は、そこで案の定たしぎちゃん達とばつちり遭遇する。

「女王…!何故ここに…!」

「あー、ちよつと用事が。ロー知らない?」

「ロー?海賊のてめエが奴に用があるつて事ア…何か企んでやがるんじゃねエだろうな



「？」

たしぎちゃんが凄いいかつい顔して私を睨み付けてきた。…あれ、これ…2人も入れ替えられてない？

「私がちよつと目を離した隙に……はあ、頼む事が増えちゃったね」

確かに…体を入れ替えただけなら「傷も付けてない」し「命も奪ってない」。してやられた…。

「何を……」

「私の嫁がたしぎちゃんと同じような被害に遭ってね、それで用事があるの。…所でスモーカー、あなたたしぎちゃんの体でなんて格好してるの？ シャツのボタン止めて、下着もつけて！」

たしぎちゃんの体だと言うのにタバコは吸ってるし、何故かシャツのボタン解放して下着も取ってるから胸チラツと見えてるし。

「あ…うんなもん引きちぎった」

「はあ!?!引きちぎった!?!女の子の体を何だと思ってるの…!?!それにその体は将来的に私のもものなるんだから、変な事されちゃ困るんだけど!!?!!ていうか、それセクハラだからね!?!セクハラ!!?!!やーい変態オヤジ!!?!!タバコまで吸って部下の体調を気遣う事すら出来ない半人前!!?!!」

「……………チツ」

前半はともかくとして、後半は何も間違った事は言っていない。

いや、おかしくない？自分の性別が女になっただけならまだしも、たしぎちゃんを体を一時的に借りてただけだつて自覚が無いんじゃないの？女の人の下着を引きちぎつて、その上シャツのボタンを閉めずに開けてるって、前世ならセクハラで自殺されても仕方ない所業だよホント。

…とまあ、私の言葉に思う事はあつたのか、スモーカーはタバコを放り投げてボタンを閉め始めた。

「……………今回の件に関してだけは、助かりましたとだけ言っておきます。ですが、あなたの嫁になる気はありません…！」

「強情だね、たしぎちゃん。でも墮とすからね…！あ、それでローの事だけど、どっちに行つたかとかさ、知らないかな？」

何でローが私達の戦力を削ぐ様な真似をしたのかは分からないけど、たしぎちゃん達の状態を見るに、私との約束は守るみたいだし…ローにはローなりの事情があるって事なんだろう。

「…はア…、たしぎ」

「…はい。…トラファルガー・ローは恐らくこの建物の中に居るか…私もついさつき

まで気を失っていたので、正確な情報ではありませんが」

建物：「研究所のコトかな。」

「じゃあ行ってくる」

「ハ：俺から言わせりや、てめエも捕獲対象だ。：ノコノコと現れた獲物をみすみす逃す訳ねエだろ！」

「ふーん」

言葉尻に私へと突かれた十手の先を首を傾げて避け、十手を蹴り飛ばす。

「私を捕まえたいのなら、エサはたしぎちゃんにするのが一番効果的だよ。例えばたしぎちゃんを嫁にする代わりに捕まってくれて言うなら大人しく捕まるよ？その後は晴れて嫁となったたしぎちゃんを連れて逃走劇を繰り広げるけど」

「スモーカーさん：っ！」

「止めろたしぎ！：今のは俺のミスだ、こいつにその気があつたのなら：俺は今、死んでいた」

死んでいた：：じゃないって！殺さないから!!無理だから!!

ていうかスモーカー：：自分の体じゃないからか動きが何ともぎこちないし：：ぶつちやけ弱い。その上頼みの海楼石入り十手が無くなってお手上げってところかな。

「じゃあ私今度こそ行くから、邪魔しないでよ？」

「…クソ…こんなふざけた格好の奴に…っ、情けねエ…勝手にしろ…!」

スモーカー1人だけならまだ私に挑んできたかもしれないけど、部下も居るから抑えてるんだね。

さーて、やっと中入れるね、入り口分かんないから壊して行こつと。

「さんじゆうばいばい  
30倍灰」

研究所の壁の前に立ち、腰を落として小太刀の柄に手を添える。

「せいっ」

スパン、という小さな音と、刀を振り抜いた風切り音が響く。

その直後、目の前の壁に数え切れない程の斬り目が網目状につき…ガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

「ふー、開いた開いた!」

「…!…そんな…全く見えなかった…」

「じゃ、またねー!」

手を振って研究所内に侵入する。

…なんだこの広い空間は、上には渡り廊下がいっぱいあつて普通に迷いそうなんだけど。

壁には沢山の電気配線が這っており、ちよつと衝撃を与えればすぐにショートしそう

だ。

…私が斬った場所もコードが通ってたから、多分何かしらの電源供給は断っちゃったろうね…う、うん、気付かなかった事にしよう。

「見聞色の覇気つと…」

見聞色を発動させて施設内を歩いていく。広いし、しらみ潰しに探すのは骨が折れるからなあ。

……うーむ…強い気配強い気配…、ん？そこそこの気配が1人…だけど、ローじゃないなあ。なんか小物っぽい気配だから。

「侵入者が居たぞ！殺せ!!」

マスター  
「Mの指示だ！生きて返すなア!!」

「ん?」

なんかラッキー、沢山人が来た。人というかケンタウロスとか…他にも体の一部が動物の人とか。

今は体の特徴なんてどうでもいいんだけどね、人が来てくれたつてのが大事なんだし。

「俺を知ってるか!?懸賞金1億の風斬のジェット!人の足は無くしたが、代わりに得たこの虎の脚はお前をどこまでも追い続けブホア!」

「はいはい、すごいすごい」

とりあえず先陣きつて突っ込んできた虎足の男を殴り飛ばし、手首をぶらぶらさせながら言う。

いきなり攻撃をしてきたって事は、少し落ち着いて貰わないと話も出来なさそうだね。

それにそもそもなんだか対応が早い気がする。私はついさつき壁を壊して中に入っただばかりだというのに既にこうしてケンタウロス達が私を殺そうと動いてるし。

マスター  
M: ま、普通に考えればコイツが何か後ろめたい事でもしてるんでしょ、ローとの関係性は知らないけど。

ついでに言えばハーピー美女もそのMマスター寄りの陣営に居るって事だよな。

ハガン  
「覇銃! 去羅波! 去柳薇あ!」

「グハ…ツア!?!」

「だ、ダメだ…!俺達じゃ勝てねエ…!」

「銃が効かねエよ!何モンだコイツ!!」

「銃だけじゃねエ!見ろおれの剣!斬りつけたら折れやがった!!」

銃はともかく、剣に関しては腕が無さすぎる。そんなへ口へ口の太刀筋じゃあ傷は付かないよ。

「おら獣ども、ローはどこに居るの?」

「と、トラファルガーの事か?!?し、知らない!」

「本当に…?ここに突っ込んで聞いたけど」

「俺達も奴と親しい訳じゃねえんだ!どこに居るのかまで把握してねえよ!」

…ん…この場でのローの立ち位置が良く分かんないな。

ぶつちやけ、まだ敵なのか味方なのかも分かってないし…。今までの行動から考えれば、ローは私達と敵対したい訳じゃなさそうだけど。

「ま、その辺は本人に聞けばいいか。覇銃<sup>ハガン</sup>」

「や、やめ…ツ…うぐ!?!」

武器を弾く様に攻撃を飛ばす。無駄に傷を負わす必要も無いだろうからね。

「あなた達が知らないのなら、この研究所内に居るM<sup>マスター</sup>って奴のトコまで連れてって。そいつなら知ってるでしょ」

「ふざけるな!お前みたいな奴に誰がM<sup>マスター</sup>の居場所を教えるか!!」

「うん、ありがと。つまりこの研究所内には居るって事だよ。という事は…さつき感じた小物っぽい気配がそうかな?」

ニヤリ、と笑いながら言うと、そのケンタウロスはしまったとでも言うかのように顔を蒼白に染めた。

マスター

M っつてもかなり慕われてるんだね、悪い人じゃないのかな…?…でも私を殺せって指示出したんでしょ?…あー、私って海賊だし、賞金首だから殺せって指示は間違いではない…かな?

…あ、いや、待てよ?よくよく思い返してみれば、こいつらの口振りって私が一騎当千の女王だって気付いてない?なのに研究所内に入っただけで殺そうとしたって事は、私が一般人だろうがなんだろうが関係なく口を封じようとしている訳で…。

…うむむ…ナミさんでもロビンでも近くにいればなあ。私の頭じゃイマイチ良く分かんない。

「安心してよ、あなた達は私に向かってきたから攻撃したけど、Mとは話し合いに行くだけなんだから」

「侵入者の言うことなど信用出来るか!!」

ごもつともですね。私でもそう言うよ。

だけど本当の事だし…信じて貰わなくても会いには行くけど。

「くそ…表の海軍共にも戦力を割かなきゃいけねエってのに…!」  
「ん?」

むむ…ああ、確かにさつき私を通ってきた所に沢山の気配がある。戦闘してるっぽい雰囲気も感じられるし…なるほど、私が開けた穴から入ってこようとしたけど、私みた



いに邪魔されてるってトコか。

「だったら表に全戦力を集めた方が良いんじゃない？少なくとも私はあなた達に危害を加えるつもりは無いし。…今は」

「最後の一言が怖エよ!!」

「メイドのクセになんなんだてめエ!!」

「メイドメイドって…つまりコスプレ感は無いつて事かな？似合ってるの?」

んふふ…ミニスカメイドなんてカフエかコスプレ以外何処に居るんだよって突っ込みたいけど、私はメイドにしか見えないらしい!つまり似合ってる!…喜んでいいのかどうかは分かんないけど。

「だれどごめんね、私はメイドじゃなくて…どうやら世間では、“一騎当千の女王”って呼ばれてるみたい」

「な……」

「い、一騎当千の…!!?」

私とその異名を名乗れば、半獣達は目に見えて狼狽え始めた。

さつきまで私に向けていた敵意は今見る影もなく、ただ私を前にして膝を震わせるか、その場に崩れ落ちるか、そのどちらかの反応を見せる。

…女王の異名つつよ…私本人より強いんだけど。

「懸賞金10億だろ…俺達で勝てる訳がねエ…」

「いや…こんな奴に目をつけられた時点で、マスターMも……」

「だから何もする気ないっての！私はただローの居場所を知りたいだけだと言って  
じゃん！」

一騎当千の女王って異名のせいで噂が一人歩きしてるんじゃないのこれ！目に入っ  
たモノ全て倒すみたいなの？するか！

私が許せないのは嫁達に危害を加えられる事だけだし！身長？伸びたもん！

「じゃあ、通るね」

「…いや………！それでも、マスターMの元には行かせない！」

「ああ……あの人は命の恩人なんだ……！恩を仇で返せるか!!」

「殺すなら殺せ！肉壁となつてでも止めてやる!!」

震える足腰にムチを打ち、恐怖で支配されそうになる心に打ち勝って、彼等は再度私  
の前に立ち塞がった。

うーん……困ったな…。

何がって……だつて私、こういう恩人だからって命を張れる人大好きなんだよね。こ  
うまでされてさ、「だから何？どいて」とか言えないというか…。

「一騎当千がなんだ！」

「おい！誰かMにお逃げ下さいと伝えて来い！」

「電伝虫で俺が伝える！少しでもこの場の戦力を増やせ!!」

彼らが私相手に時間を稼いでいる間に増援が間に合ったのか、周りから続々と新たな半獣達が集まってきた。

私が倒した筈の人まで気合で起き上がってきたり…、って、これじゃ本当に私が悪者みたいじゃん！

「だから、Mに危害を加えるつもりは無いんだって！私が知りたいのはローの居場所！」

「お前がMの場所まで案内しろって言ったんだろ！」

「あなたがローの居場所を知らないから、Mに聞くしかないでしょ!?!あ、だったらその電伝虫で聞いてよ、それで場所が分かるならわざわざMに会う必要は無いし」

「…そうか！確かにそれなら…」

私の提案に納得してくれたようなので、彼等に敵意はないと分かりやすく伝える為その場に腰を下ろした。

もう…一騎当千って異名も面倒だね…逃げ足よりは良いけどさ。その辺スモーカーと掛け合ったら変えてくれないのかな？彼の発言力がどれほどの物か知らないけど。

「こちらジェット部隊。M、<sup>マスター</sup>応答願います」

『おく、俺の可愛い部下達…どうした、侵入者を始末出来たか?』

「それが…侵入者はあの“一騎当千の女王”だということが判明しまして…」

『何だとオ!!?』

おーおー…破壊力抜群だね。なんか自分がここまで影響力強いの実感したらちよつと気分が昂ってきたよ。

「女王の要求は一つ、トラファルガーの居場所との事です…ご存知ありませんか?」

『そ、そこに居るのか?あの女王が!?!…ぐぬ…ついさつきローとは顔を合わせたか、何処に行つたのかまでは知らねエよ!この事が奴に知ればどうなる?研究所が吹き飛ばすぞ!!』

「しかし、我々に危害を加える気は無いと…」

『口では何とでも言えるだろうがカス共!!いいか、俺がここを離れる間に、貴様等使えぬエカス共はどんな手を使ってでもソイツを足止めするんだ!』

…なんだ?なんか雰囲気がおかしい。どこからどう聞いてもただの暴言だ、こんな奴が慕われてるの?

いや…言われた部下達は全員固まっている。今言われた言葉の意味を…理解出来て

いないのだ。

『てめエら<sup>モルモット</sup>実験体の代わりなんざ幾らでも居る!!そこで何人死のうが構わねエから俺を守れ!!良いな!!?死んでもそこを通すんじやねエ!!』

「ま、<sup>マスター</sup>M…?」

理解するのを拒んでいる様にも見えた。

溢れそうになる涙を無理矢理作った笑顔で堪えている。

「ば、バカ!お前ら何戸惑ってんだよ!そんなの<sup>マスター</sup>Mの嘘に決まってるだろ、女王の不意を突くためにわざとそう仰られたんだ!疑っちや優しい<sup>マスター</sup>Mが傷付く!!」

「そ、そうだよな!はは、その通りだ!俺達の役目は、逃げると見せかけた<sup>マスター</sup>Mが不意を突いて女王を倒す隙を作ることだ!」

「ああ!やってやろうぜ!元よりトラファルガーの位置は分からねんだ!」

「……、」

「悪いが、そういう事だ!トラファルガーはここにや居ねエよ!!!おらア!!!」

無言で立ち上がる私に突進してきたケンタウロスが、ガン!と私の頭を棍棒で思い切り殴り付ける。

「Mを疑うなんて、俺はなんてカス野郎なんだ！くらえ女王オ!!!」  
マスター

頭部が羊つばい人が、私のこめかみに銃口を押し付けて発砲する。

「俺達のMマスターが来るまでの時間稼ぎと隙作りだア！何なら俺達の手で殺してしまえエ!!」

下半身がクモの男が、刀の切っ先を私のお腹に突き立てる。

だけど、棍棒は砕け散り、銃弾はこめかみを貫けず暴発し、刀は少しも私の肌に傷付ける事なくパキン、と折れた。

「Mマスターを信じてる。Mマスターが大事だ。Mマスターがあんな事を言うわけがない。自分達の聞き間違いだ。……って?」

「……!!」

私の正面で刀を折られたクモ男が目を見開き、折れた刀から視線を私の瞳に移した。

果たしてそこに映っているのはなんなのか……私の綺麗すぎる赤の瞳かな?……いいや、違うね。

「どれだけ自分に言い聞かせようが、どれだけ強がりでも心を無理矢理補強しようが……本当は分かっているんですよ、裏切られたってさ。その証拠に今、あなたの見る私の瞳には……涙と鼻水で顔を汚す自分の顔がハッキリと見えてる筈だよ」

この人達の事情なんて私は全く知らない。だけどこの人達はMマスターを心の底から信頼し、

そして全てを捧げてきたというのはさつきまでのやり取りで充分分かった。

…そして、そのMとやらがゴミ屑以下のノミ野郎だつて事も。

私の言葉を否定したくても、一度そうだと現実を突きつけられ、どう足掻こうとも敵わないと理解してしまつた彼らには現実と向き合う時間が否応にも与えられた。

いつまで経つても現れないMと、さつきの電伝虫の内容…それだけで彼らが戦意を失うのは充分だつた。

そもそも、本気でMを信じているというのなら、私にまで聞こえる程の大声で作戦内容を叫ぶ必要はない。あれは彼らが彼ら自身を守る為の雄叫びなんだから。

涙を流し、鼻水を垂らし、武器を落とし、そしてその場に崩れ落ちる。やがてこの広い空間で立っているのは私だけとなり…彼らの嗚咽だけが悲しく溶けていく。

「全く、見る目無いね、あなた達は」

「…っ…！」

「恩人だかなんだか知らないけど、結局良い様に使われてるだけじゃん。そのクセあなた達全員男とか、もー勘弁してよ」

信じていた恩人に呆気なく裏切られて、その命すらも駒として使われた彼らの悲しみ、絶望は計り知れない。

全員の瞳から光は消え、今にもそこら中に落ちている武器で自決を図りそうな雰囲気

も出ている程である。

「…もういつそ、殺してくれよ」

「え？やだ」

「…なら、自分で…!!」

「それもダメ。覇銃」

拾おうとしていた銃に覇銃ハガンをぶつけ、粉々に砕く。

男は私の顔を意味が分からないと言った風に見つめてきた。

「あのさあ、あなた達が悲しいのは分かるよ？絶望するよね、信じてた人にあんな事言われてさ。私が人殺しに躊躇しないやべー人ならあなた達は本当に死んでたし。…だけど、私はそうじゃない」

「……何が言いたい……ここから乗り越えろって言うのか！俺が！俺達が！一体あの人の事をどれ程慕ってきたのか知って」

「知らないし、興味も無い。…あなた達は今殺されたんだよ、そのMマスターって奴にさ。慕ってたのはなんで？命を救ってくれたから？他にも何かあるのかな？…でもさ、どれ程大恩があろうとも、殺されたって事実には勝てくない？あなた達は今殺された事で…それいつから貰った恩を返したんだよ」

恩を返した。…つまりどういう事なのか、分からない程盲信的だつて訳じゃあるま



い。仮にそうなら私はもう知らない、男だし、これだけ言って自決するなら勝手にしてろって感じ。

「もし、まだあなた達に自らの意思があるのなら……そんな下らない意味の涙は流さないで。そうすれば……そのM<sup>マスター</sup>って奴の面をぶん殴るのに協力するから」

「……どうして、見ず知らずの俺達にそこまで……。お前は一騎当千の女王だろ……！ 四異界だろ！！最悪の世代だろ！！俺達の命なんてその辺の石ころみてエなもんだろ！！」

「……石ころ？ 人間の命の価値に……差なんて、あるか！！」  
ガン！と地面を踏みつけた。

人の命に、価値なんて付けられる訳がない！！誰だってみんなそこに生きているんだ！  
どんな悪人だって、生まれてからずっと、自分だけの人生を歩んでいる。そこには自分だけの物語があつて、感情があつて、出会いがある。

……そう考えられる様になったのも、エニス・ロビーでみんなが私を受け入れてくれたからだけだ。

勿論、死んで償うべき罪人というのも居るだろう。だけどその人だって、別に命の価値が無くなったから死ぬんじゃない。むしろ、死んで償えるって事はその命に価値があるという事だ。

……ちよつと脱線したかな。

「私も、あなたもーそしてMもーみんな同じ1つの命でしょーその辺の石ころ？ーいや、例えるなら夜空に輝く幾億もの星々だね！ー1つ1つが違う輝きで、大きさも形もみなそれぞれー！失って代わりがあつてたまるか!!」

どんなに絶望しようとも、生きることだけは諦めちゃダメだ。

…私はその事を、ナミさん達に教えて貰ったからーだから、この人達を見捨てる事がどうしても出来ないからー!

「だから……、いや、私が言うのはここまでにするよ。後の決断はあなた達に委ねる。…じゃあ私はもう行くね、ローを探してる最中だし、Mにもきちんと用ができたから」

ひらりと振り返って私は歩き出した。…さて、ローを探しに来ただけのつもりがまさかここまで不愉快な気持ちにさせてくれるなんて…流石新世界だ。

…ナミさんの胸に飛び込んで癒されたい。

「……、ま、……待ってくれ……!!」

「んっ?」

よろよろ、と1人の虎タウロスが立ち上がった。…あいつは確か、ジェットだっけ。

「…俺達は、本当にあの人を慕っていたんだー!だから、きちんとこの目で、耳で、直接確かめたいー!1度Mと会って話をするー!それでもあの方が俺達を…実験動物と言うのなら…その時はお前の…いや、あなたの言う事を聞くー!…頼む…俺達に…確かめる

時間をくれ…!!」

「……、強いね、あなた。良いよ、気に入ったし…電伝虫ちようだい。…ほら早く」

「え、あ、はい」

近くで座っていた男をつついて催促し、一匹の電伝虫を受け取った。

「あなたがMを見つけたら、もしくは私がMを見つけたら、必ずこの電伝虫に連絡を入れるコト。それと分かっているととは思うけど、この事は事情を知らないあなた達の仲間は伝えない方が良いからね、無駄に混乱を招くよ」

「ああ。…さつきは襲って悪かった」

「気にしないで、石ころに襲われたって何とも思わないから」

「「石ころ言ってんじゃねエか!!!」」

はは、と小さく笑って手を振り、今度こそ私はこの場を後にした。

最後は何とも息の合ったツツコミで安心したよ、あの調子じや自殺は無さそうだ。

…さーて、仕事が増えちゃったね。

ローにM…優先は…ジェット達の気持ちを鑑みれば、ローかな。…はあ、何処に居るのやら。

## 165 『女好き、子龍と遭遇する』

「…なんもないなあ」

ポリポリと頭を搔きながら研究所内を歩く。

私はそれなりに精度の高い見聞色を使えるけど、範囲はそうでも無いからなあ。Mマスター  
の反応も消えたし…ローは相変わらずどこに居るのか分かんないし。

かと言って入口に戻ってもスモーカーやジェット部隊とは別の半獣達と鉢合わせるだけ…という訳で、今は研究所を調べてローの居場所の手掛かりを探している所だった。

ちよいと強い反応もするけど…ローじゃないね。……んん？そいつはローじゃないけど、その近くから感じるこの反応…まさかローじゃないの!?

「いや、でも研究所内には居ないみたいな事をMマスターが…」

…や、居ないというか知らないだったつけ。でもさつきまでは全く気配を感じられなかったから、今ここに入ってきたってコトかな。

「ん…同じ研究所内でもかなり遠いトコに居るっぽい…。迷路みたいだから迷うんだよ(ハハ)…」

いつその事壊してやろうかこの研究所……でもジェット部隊の住処？でもある訳だし……私的にはあの人達を気に入ってる訳だから？ちよーつとの破壊衝動くらいは我慢してあげるけど？

「……ん？」

結局何も考えずに先へ先へと進み、目についた部屋に入れば、見聞色に新たな気配が引つ掛かった。

だけどおかしい……気配はずつとずつと下……まるで地下でもあるかの様だけど、その気配自体かなり弱ってるっぽいし。

そもそもこの部屋は何？色んな化学薬品が置かれてるし……私じゃ一生理解出来そうもない書類や実験道具がわんさかあるんだけど。

『ここはシ……あ、いや、<sup>マスター</sup>Mの研究室だよ。漫画で見た』

「ONE PIECEね……それより急に声出さないでよ、びっくりするじゃん」

『はは……ごめんね』

そんな素直に謝られたら弱いんだけどさ……。

「なら、さつきまでここにM<sup>マスター</sup>が居た可能性が高いつて事だね」

『そうだね、さつきローとあの人の気配を感じたから……多分チョッパーもこの研究所内に居るんじゃないかな、因みにこの床壊せばダクトを通ってゴミ箱に繋がるよ』

あの人…はどうでもいいとして、チョツパーも来てるんだ。確かフランキーの姿だったよね…にしてもチョツパーが何の用だろ？

「ゴミ箱？」

『そ、かなーり広くて深いゴミ捨て場。あのハーピーをイリスが捕らえちゃったから、この下を感じる弱ってる気配の主はイリスが助けに行かないとマズいかも』

「ハーピー美女を…何でそうなるのかは分かんないけど、私が助けた方がよいなら助けるよ、気配を感じた時点で下には行こうと思ってたけどさ」

それに、助けた方がよいって事は物語に深く関わる人物って事だよな。それか美女…？そ、それなら今すぐ行かなくては…!!

その場に膝をついてしやがみ込み、手のひらを床に押し当ててる。

殴ってブチ抜くのも良いけど…今はこういう気分だから、

「ふん!!」

ズオオ!と私の体を纏う武装色を手のひらに集中させ、そのまま床に流し込んで粉々に破壊した。

うわ、力加減ミスって私の足場まで壊しちゃった…!つとと!宙を蹴って空を飛べるようになって良かった…何だっけ、サンジは確か空中歩行スカイウォークって言ってたっけな。ルッチ達は月歩ゲッポウだっけ?ルッチで思い出したけど、カリファ今どうしてるんだろ…まだCP

9に所属してるのかな。

「ここに飛び込めば良いって事？」

『うん、汚いけど』

宙を飛ぶ私の真下には、直径で2mくらいはありそうな程の大きな穴があった。これがゴミ捨て場に通じるダクトだろうし…その先に弱ってる美女が居るなら行くよ！

「ほっ」

そのまま穴の中に飛び込み、長い滑り台を滑り降りる様に下へと降っていく。

ゴミが穴の中で詰まっているなんてアクシデントも無く、ダクトを抜けた私は王華の言う通り広い空間へと飛び出た。

宙を蹴って飛ぶ事もなく、重力に従って下まで落ち、鉄屑の瓦礫の上へ派手な音を立てて着地を決めて辺りを見渡す。

『じゃあ、私はこの辺で』

「どうせ私にしか聞こえないんだから気にしないで良いのに」

『いやー、ちよつと眠たくてさ。昼間はイリスの邪魔しない様に寝てる事が多いじゃん、私』

「…前から思ってたけど、なんで王華って眠たくなるの？睡眠欲あるの？」

『うーん…寝なくても大丈夫なだけだね…なんというか、眠たくはなるんだよね。多

分前世の癖かなあ。お腹も減るし、えつちな事も考えるよ？最近では美咲とのあれやこれ…」

「ああはいはいおやすみ」

王華部屋は相変わらずダラける事に特化した仕様になってるとはいえ、最近の王華は特にリラックスしている。

それが悪い事だとは言わない。むしろ気が休まるなら良いんじゃないだろうか。でも自分の下事情は心の内に秘めておいて欲しかった。

「で…結局さっきの気配の主はどこだーつと…」

とは言っても場所はもう分かっているんだけどね。

端の方で縮こまつてるみたい。…というか、今日に入ったんだけど…、

「また龍じゃん」

「ま、またとは何でござるか…!?おぬしは何者か…!?」

龍だし、喋ってるし…。

ルフィ達と一緒に見たのは西洋風だったから、龍じゃなくて竜って感じだったけど、今日の前に居るのは生前、某国民的漫画だった作品の願いを叶えてくれる龍のミニサイズみたいな風貌をしている。下半身が引っ付く様な大きさでも無さそうだし…見た感じ今回は本当にこの龍が喋ってるっぽい。



「私は海賊で、ハーレム女王を目指してる者だよ！ぶっちゃけ美女が弱つてると思っ  
助けにきたから、あなたみたいな龍だと分かって落ち込んでるトコ！」

「そんな情報知らぬわ……ハア……ハア……それに、おぬしがかいぞくな訳無い。かいぞくな  
るは目方百貫もある大男にて……もつと、狂暴で強そうな者にござる。おぬしの様なひら  
ひらした装いをしている者の筈がなかるう！」

「メイド服のコト？この服の名前知らないなんて世間知らずにも程があるよ、その喋り  
方からしてワノ国関係者かな？」

「ハア……そうでござる……！せつしやモモの助と申す……ハア……！」

モモの助……なるほど、今まで出会った人達とは名前の感じからして違うね。

そういえばイゾウもワノ国出身なんだっけ、あんまりそういう話しなかったのは、今  
思えば勿体ない気もするなあ。

面倒見も良かったし、私もあの人は結構好きだった。ワノ国に対して比較的良好いイ  
メージを持っているのはイゾウのお陰だ。

なんて1人浸っていると、突然モモの助の腹が盛大に空腹を訴え鳴り響いた。

「相当お腹空いてるんだね、お昼抜いた？」

「ばかを申せ……ハア……10日ばかりの断食で、武士がハラなど……空こうものか……ハア……」

「え、10日!?!」

お昼抜いたとかのレベルじゃなかった…、そりゃ気配も弱る筈だよ、餓死してもおかしくない。

「モモの助はいつからここに居るの？」

「ここには…この施設の事か？それも10日前からでござる」

「ふーん…ならこの施設と関わりは無いんだね、だったら助けてあげるよ」

ジェット部隊とはああ約束したけど、私はぶつちやけM<sup>マスタ</sup>の事を信用してはいない。ていうか、あの流れでどう奴を信用出来るの？無理だよムリムリ。

「助けなど必要ない！誰がおぬしの様なおなごに…！」

「そういうの良いから。上に行ったらまずはサンジと合流しよっか、10日断食した後  
にサンジのご飯食べたなら美味しすぎて死んじゃうかもよ？」

「…おぬしもよそ者か？」

断固として施しを受ける気は無いとでも言うのか、無理矢理話を逸らしてきた。

なんだこの龍…訳ありっばいけど。

「よそ者だよ、この施設がどんなモノなのかすら知らない」

「…せっしやも、ここが病気の童がおる施設としか知らぬ。ここがどの様な島で、自分が起きたのかも知らぬ…事の成り行きでとある船に「密航」した事が始まり…」

で、その船に乗ったら、そこには沢山の子供達が居たという事らしい。

どうやらみんな重い病氣らしく、親にも挨拶出来ないまま船でこのパンクハザードまで連れて来られているのだからか。

ジェット部隊には悪いけど、私はこれでMがクロだと確信したけどね。

親に何も告げず連れてこられるなんて事があつてたまるか、どう考えても誘拐で、そのMとやらが何かを企んでいるに違いない。

部下の命が無くなる事に何ら抵抗が無い奴が企む事だ、どうせ碌な事では無いのだろう。

「あまり関わろうとしなかったせつしやにも童達は親切にしてくれたが…気が立っておつたゆえ…」

優しく話しかけてくれたりしたのに、全て冷たい言葉で突き返したと…。

その時に渡される食事すら一口も食べていなかったらしく、ふらふらと研究所を彷徨つてとある部屋に入り込めば、その部屋の中央に何やら見た事もない不思議な模様の果物が置いてあつたそうだ。

モモの助は空腹に耐えかね、結局その実を口にしてしまったそうなのだが…。

「…それって、絶対悪魔の実じゃん」

「悪魔の実？」

「あなた、元は人間だったんでしょ？その実を食べてその姿になったのならそれは悪魔

の実だよ。その見た目からしてヘビヘビって事は無いだろうから……リユウリユウかな？  
かっこいいじゃん」

動物系だから人間にも戻れるだろうし。戻らないのは、多分まだ力の使い方が分からないから戻り方も分からないってところかな。

「……さつきはああ言ってもうたが、せつしやはこの穴から出たい……そして、童達に伝えたい！聞いてしまったのだ……あのシーザーという者の話……！」

「シーザー？」

「ここに来て新キャラか……しかも強そうな名前だし。」

「あの男は当初、せつしやや他の童達を優しく施設に迎え入れてくれた。医者かと思っていれば……実は童達を死なせる気でおる悪い男だったのでござる」

「ふーん……どうしてそう思ったの？」

「この姿になったせつしやは、情けなくも少々混乱してしまい施設内を駆け回っておったのだが……その時に通ったある部屋の前で聞いてしまったのだ。あの男の真意……！非道な胸の内を……！知らせようという行き道で、屑入れに隠れるつもりがここへ……」

モモの助の話によれば、シーザーは子供達を使い人体の巨大化実験を行なっていたそう。しかしその実験は薬物投与の限界を知る実験……5年後には全員この世には居ないと断言していたと言う。

実験には失敗が付き物だと笑いながら、次を貰わねばとも口にして。

「…なるほど、それは確かに……どうしようもないクスだね」

私も巨大化した子供達は一度この目で見ている。あの子達は全員……その実験の被験者だったのか。被験者って言っても本人達は何も知らされてない訳だから被害者って言い方が正しいんだけど。

「そのシーザーってのは何者なの？」

「せっしやも良く知らぬが……<sup>マスター</sup>Mとも呼ばれておった。童達からの人気もあつたが……まさかあの様な男だとは……!!」

「……へえ、<sup>マスター</sup>Mね……」

はいクロ確定、と。そんな事をする奴が、あの場面でジェット部隊を助けに来ようとする筈がない。アレは間違いなく見捨てたと見て良いね。

……うーん、だけどこの事を私から彼らに伝えるのはなんか違う気がする、彼らは彼らで自分の目で確かめようとしてるし……やっぱり電伝虫を使うのは<sup>マスター</sup>M……いや、シーザーを見つけてからで良いだろう。

「しかし生憎とこの出口は高く……壁に手や足を引つ掛ける出つ張りも無くよじ登る事も出来ぬ……何故か力も出ない事も相まって行き詰まつておったのでござる……」

「何故かって空腹でしょうが、いい加減認めたらどうなの？……ま、いいや、すぐここ登る

よ

モモの助の首を引つ掴んで持ち上げ、私の体に巻き付かせる。それくらいの力は残つてるでしょ。

「子供達の事なら心配しないで、私の仲間も嫁もついてるし…それにルフィがシーザーのやつてる事を知つたのだとしたら、シーザーも終わりだね、何せ奴はルフィの一番嫌いなタイプだし」

「ルフィ…？仲間、嫁…？おぬしはおなごであるのに、嫁がおるのか？」

「そうだよ、私は女好きだし」

「…そうか、…それは普通の事では無いと言うのに、その堂々とした物言い…童達を氣遣つてくれる心…見ろ、やはりおぬし、かいぞくなどでは無い…」

何が普通かなんてどうだって良いっての。

…モモの助はその辺分かつてくれてそうだけど。

「じゃ、上に行こうか。でもごめんね、先にローを探さないと…シーザーはまた後で」

「上に？何を言つておる…上を見ても先の見えぬ暗闇、出口がいかに高い所にあるのか察しが付くでござらう」

「もう、ここを出たいのなら黙つて私に掴まつてて」

そう言つて、私は宙を蹴つて飛び上がった。その事にモモの助が驚いた様な表情を浮

かべるが、これくらい出来ないところから脱出しようなんて言わないよ。

「おぬし、まさかくノ一でござったのか!？」

「海賊だつて言つてるでしようが!ほら、ダクト入るからじつとしてて」

一番上までやつてくれば、そこには多くの穴が空いていた。多分それぞれが別々の場所のゴミ箱に繋がつてゐるんだらうけど、どれが良いかなんて分かんないし……とりあえず適当に目についた穴へと入つて上つていく。

ローの気配は……感じるけど、なんか他にも沢山感じる……。ルフィやスモーカーも一緒に居るのかな……? たしぎちゃんやフランキー……ロビンも……?

私の見聞色が間違つてないのなら、これだけのメンツが何故か同じ場所に固まつてゐるっぽい……何で??……とりあえず行つてみようかな。

## 166 『女好き、グリーンビットの魔女』

ゴミ箱の口まで何とか這い上がってきた私とモモの助は、出口を探す為に研究所内を歩き回っていた。

といつても、モモの助は私が背負ってる為歩いているのは私だけではあるけど。

「それにしても…私が下に落ちてる間に何かあったのかな？外が騒がしいんだけど」

「そうか？せつしやには何も聞こえぬでござるが…」

「私はあなたの30倍は耳良いから」

何か起きているのなら早くみんなと合流したいのに…まるで迷路だよここ。

ルフィ達の気配がする所まで壁ぶち抜きながら行ってもいいかなあ、流石にまずいかな？

プルプルプル…プルプルプル…

「あ、ジェット部隊からだ」

「誰でござるか？」



「この施設の兵士達」

モモの助の質問に軽く答えて、ガチャ、と電話に出た。

見つけたのかな？でもシーザーの近くにジェット部隊の気配は感じられなかったんだけどな。

「どしたの？」

『ハア……ハア……クソ、やっぱりあんたの言う通りだったよ！俺達が間違ってた！信じる人を誤った!!』

「……ちよつと、本当にどうしたの？今どこ？」

出るやいなや、かなり焦った様子の子の電伝虫が大きな声を上げた。

向こう側で沢山の走ってる足音が聞こえる。研究所内にはなんの気配も感じないから外のどこかだろうけど。

『外だ……湖の近く……俺達はM……マスターシーザーを見つけたんだ……!』

「だったらどうしてその時に電伝虫で連絡して来なかったの？もうシーザーは研究所にいますよ。」

『……俺達が見つけると同時に、向こうも俺達を捉えた。……そこからは思い出したくもねエ……逃げ出す暇も無い程の一方的な攻撃……!命乞いをする仲間は殆どがやられちゃった!』

…自分の本性を知って報復に来たと勘違いしたのか？どっちにしても問答無用に攻撃されたって事でしょ…奴の本性をジェット達が理解出来たのは良いと思うけど…。

「…誰も死んで無いよね？」

『……………、それが…』

どうやら、殆どがシーザーに無力化される中、数人だけは何もされずに放置されていた様で…シーザーは去り際にジェットにこう言っただけらしい。

—お前達が死にかけて4年前の兵器暴発事故…あれは俺の仕業だ。シユロロロロ…！そして今からその時の兵器をより強力にした奴を放つ…！お前らゴミクズ共は、精々俺の兵器実験体として死んでゆけ！！—

「兵器暴発事故…」

『ああ…！そのせいで島中に沢山毒ガスが蔓延したんだ…！奴はその事をずっとベガパンクの仕業だと言っていた…！けど実際は奴の仕業だったんだ！！俺達は奴の手のひらで、良い様に踊らされていただけだ…！！』

とんでもないクズだな…最悪のマツチポンプもあつたものだ…！

『それで、俺達はその“より強力な兵器”に迫られてる！！毒ガスだ…この島中を覆える

程のな!! 奴はガスだから効かねエが、奴以外はみんな死ぬ!! 俺達が間違っていたのは分かった、だから頼む!! お前だけでもこの島からさっさと脱出しろ!!!」

そのガスに仲間が何人か既に飲み込まれているらしい。

ガスに触れただけで体が動かなくなり、最後には石みたいに固まってしまおうという。

ジェットは自分達も時間の問題だと言つて私に逃げろ、と声を張り上げて叫んだ。

「…逃げろ? 誰に言つてるの、逃げ足の異名はとつくに捨ててるから。…待つてて、すぐ行く」

『おい…っー』

有無を言わずに通話を切り、私は電伝虫の電子機器を握り潰して破壊した。

湖の近く…となるとあつちか。この建物を最終的な避難場所にするなら、穴を空けるのは得策じゃない。

「仕方ないね」

ふう、とため息をついて自らの力を解放する。即ち、女王化だ。

これでより広く、そして正確に辺りの状況が分かるようになった。

「お、おぬし…その見た目は…!? やはり忍者の…」

「変化の術つて? 似たようなものだけど違うからね」

ふんふん…お、湖近くで確かに沢山の人が走つてゐるね。島全体を覆う様にガスが広

がっているし…ナミさん達は二手…いや、三手に分かれてるのかな？チョッパーも別行動って言うてたから四手になるのか。

「えつと…ナミさん達は…あ、もう研究所の近くまで来てるね。みんな間に合いそうだし…ジエツト部隊助けに行っちゃうか。出口は…こっちだね」

「分かるのでござるか…!？」

「うん、見える様になつたつて言つた方が良いかな？真上から地図を見てる様なイメージで…その地図上で人の位置も確認出来る、みたいなの？」

見聞色の覇気…なーんかまだ上の段階行けそうなんだけど、私には才能が無いのかイマイチ開花しないんだよね…。武装色と霸王色は自慢したいくらい才能で溢れてたケド。

「急ぐからしつかり掴まっててね」

「う、うむ…つウおわア!？」

ゴウ!!と強烈な突風を巻き起こしながら研究所内を移動していく。

そうなれば出口に辿り着くのはあつという間で、私達の目の前には既に私が侵入する時に斬り刻んだ壁の前に立っていた。

「な、何が起きたのだ…」

「急がないとマズいね、毒ガスそこまで来てる。…行くよ」

「またもさつきと同じ速度で移動し、湖の方へ駆けていく。」

「あ、いたいた。…残ってるのは10人くらいか、と言う事は…他のみんなは全員あの毒ガスの……。」

「……ッ!!お前は……!!」

「あなた、ジェットだよな?残ってるのはあなた達だけ!?急いで!ガスは私が止めておくから!あ、ついでにこの子もお願い!」

「おわあ!な、投げるでない!」

「やっぱり女王か……!止めるなんて出来る訳ねエだろ!何でここに来た!!つてうお、なんだこの龍!」

「ぼい、とモモの助を投げ渡して手を振った。誰もいない所に放置するのは気が引けたから連れてきたけど、誰かに預かって貰えるならそれが1番良い。」

「ひやくばいばい100倍灰… グランデ・ハンド巨大な拳!」

「はい完成、両手に特大手団扇!」

「ほら!早くして!!」

「…っ、くそ、何なんだよ俺達は!!助けて貰ってばっかじゃねエか!!」

「まだ少し躊躇いはあるみたいだけど、逃げてくれたようで何より。」

ほおら！吹き飛べ毒ガス！！

「せい！！」

ブオン！！と大きく手の平を振るって暴風を発生させる。なかなかの規模だ、竜巻出来そう。

私の生み出した風は毒ガスを上空へ飛ばし、迫りくる時間を大幅に延長させる事に成功した。よしよし、今の内に私も戻っちゃおうか！

「—————『ストーム』」

「っ…!?!」

それは、突然の出来事だった。

まさに暴風…まるで、いきなり災害がこの地を襲ったのかと言わんばかりの風が吹き荒れて、辺り一帯の毒ガスを天高く舞いあげていく。

『フリーズ』

しかもそれだけでは終わらず、天高く巻き上げられた毒ガスの端から端まで…全てが余さずに凍って行く。

やがて全てが凍りついたガスは宙で爆散し、あられになって地面へと降り注いだ。  
た。

「……、やっと、あなたとお話が出来そうですね、一騎当千の女王、イリス。……メイド服……？あれ……？女王……ではない？」

空からふわりと青髪の美女が降りてきた。魔法使いみたいなローブとトンガリ帽子……風貌は正に魔女って感じだ。

さっきの暴風と凍結はこの人が……？ていうか、私に用があるの？

「いや、私が一騎当千の女王とやらで間違いないよ。……でも、悪いけど……私はあなたを知らないよ。あと服に関しては気にしなくても大丈夫」

「……………、…そ、う……ですか。……では、これだけは聞かせて下さい。あなたは何故麦わらの一味に……？ああ、警戒しないで下さい、私も転生者なんです。だからあなたが転生者、そうでなくともこの世界出身じゃない事は分かっています」

「!!……………それって……」

私や零以外の転生者……！というかこの魔女って感じの風貌、絶対グリーンビットの魔女でしょ！

「……私も、まずはあなたの名前を教えて貰いたいんだけど。ほら、私だけ一方的に知られてるなんておかしいでしょ？」

「それはまだ言えません。あなたが何故麦わらの一味に居るのか、その目的を聞くまでは信用が出来ない」

「…少しくらい信用してくれないと、私としても警戒を緩める事は出来ないんだけど？それに、あなたの目的って王華の事でしょ？…叶」

「…!!!」

私の言葉に叶が目を見開かせる。彼女が本当に叶なのだと思えば…ぶつちやけこれ以上警戒を強めても意味が無い。とつとと王華を呼んで、感動の再会をさせてあげないといけないんだから。

「…あなたには色々知られているみたいですね。そうです、私の名前は叶…この世界ではグリーンビットの魔女、だなんて呼ばれたりもしています」

その目にまだ警戒の色を宿した叶が、無駄のない動作で華麗に一礼をした。長いツバの帽子を脱いでしまえば、魔女というよりはどこかのお姫様みたいにも見えるかもしれない。

「信用…とあなたは言いますが、正直な所を言わせて貰えば、それは難しいと言わざるを得ないでしょう」

「それは、私の正体や目的が分からないからだよね？あなたが叶だって事は間違いなさそうだから、私知ってる事は余さず話すよ」



「…嘘をついたら」

「もー！そんな事言ったら私何も言えないじゃん！」

私が叶を警戒する理由が無くなっても、叶が私を警戒する理由は充分にある。王華と叶では転生時の流れが違うからだ。王華は転生後、まずは自身の記憶を閉じ込めた。そこから生まれたのが私という人格…なんだけど、叶にはそういった経緯は無かった筈だ。

つまり、ONE PIECEに登場していないキャラでもあり、かつ王華と同じ名前  
の私に対しては警戒しない方がおかしいのだ。

「まずは…そうだね、自己紹介から行こうかな。知っているとと思うけど、私の名前はイリス。王華とは別人だよ…って言うのもおかしいかもしれないけど」

「…？」

「あー…じゃあまずは王華を呼ぶよ」

「呼ぶ…、王華は今、どこに？」

「今は私の中に居るよ」

びく、と叶の眉が跳ねた。…よく考えたら、私の中に居るとか訳の分からない事と言ったのはマズかったかな…。事情を知らない人が聞けば余計に警戒心を強めそうな事を言っちゃった気が…。

「あ、えっと、今のはちよつと言い方が悪かったというか…よ、呼ぶから！今すぐ！王華ー！王華ー！！」

「……………」

い、痛い！叶の疑いの目が痛い！！

元々委員長長気質のある叶のジト目はちよつと興奮…もとい気分が高まるけど、今はダメだからね！

……………」

「あれ？王華？王華ー！！」

え、なんで…いつもなら…、……………あつ。

「…どうしたんですか？中に居るだのと言ってから彼女の名前を口にするだけ…もしかして私、バカにされてます？」

「ち、違うから！ホントなんだってー！こつちにもハプニングがあつたの！ホントだから！信じてよお！！」

ハプニングだよ…忘れてたけど、王華…今寝てるじゃん…っ！！

しかも運の悪い事に本日はかなーり熟睡している様子…ま、マズい…！！

「…はあ。本当にそちらに何かしらのハプニングがあつたとして、現状ではそれを私が信用出来ないというのは…あなたも分かりますよね？」

「う……い、今までの事とか全部話すからさ！」

「そこに嘘偽りが無いという証明は出来ますか？王華を一目見せてくれれば……それだけで済む話。それが出来ないと言われれば、信用出来ないのも当然の事では？」

そうですね！もー！なんで今来ちゃうの叶！夜に来てくれたらいいじゃん！

「……この世界で私は、ある程度海軍と縁があります。今から私はあなたを捕らえますが、海軍に突き出したりはしません。私はあなたから、真実を聞きたいだけですから。……信じて、とは言いませんが」

「と、捕らえる？ちよつと待つてよ！あなたの事は信じるから、今ここで全部話すから！」

「どうして慌てているのですか？王華も見せられない、信じていると言いながら私に着いて来るのは拒否をする。……あなた、私の警戒を解く気は本当にあるんですか？……はあ、本当に、調子狂います……ね！」

ビュン！

「うわっ!!？」

高速で飛んできた火球を首を捻って避ける。ほ、本当にマズい流れになつてきた……！  
だって、今私は叶に捕まる訳にはいかないから……！シーザーも居る、ハーピー美女も居る、たしぎちゃんも居る、そしてローにみんなの精神の入れ替えを戻して貰わなくちゃ

いけない！…！する事が沢山あるんだ、だから捕まる訳にはいかないんだけど…！

「あなたにどの様な事情があれ、私にも心の余裕が無くなるだけの理由があります。…正直、あなたの言動は何もかも怪しい。だというのに…、はあく…！」

額に手を当てて困った様に首を振る叶に首を傾げる。イマイチ叶の言っている事の意味が分からない。叶が私を捕らえようとしている事も、その意味も理解したけど、どうして困っているのかは全く見当も付かなかった。

「…そういう仕事もそうですが、あなたからは敵意が一切感じられない。その上、撒き散らす雰囲気は柔らかく…端的に言えば、善人としか感じられません」

ですから、と叶は言葉を紡いで手の平を前に突き出した。

「…その疑惑を確かめる為にも、まずはあなたを拘束します。ああ、話を拷問等で伺うつもりはないので安心して下さい。抵抗のない相手には軽い催眠をかける事も可能です。なので、あなたが何一つとして後ろめたい事もなく、かつ王華にとって害のない相手だと分かれば、傷一つつける事なく解放する事を約束します」

「…えーつと、たしぎちゃん達を嫁にしたいから、今はちよつと待つてほしいというか…！」

「その辺の事情も拘束後に伺います!!」

「ちよつ、と！待つて!!」

身体強化でも使ったのか、地面に足跡が強く残る程の勢いで接近してきた叶の拳を手の平で受け止める。

魔女とか言われてるのに肉弾戦も出来るんですかそうですか！

叶は勢いよく手を振り払って払う様に蹴りを放ち、私はそれを跳んで躲す。跳んだ後の硬直を狙われたくないから、宙を蹴って距離を取った。

「叶にとつて私が無視できない存在なのは分かってる！だけど、私にだって今ここを離れたくない理由があるの!!」

「パンクハザードの件なら、あなたが居なくとも麦わらの一味だけで解決が可能です！その上この世界だとペローナやミス・バレンタインまで一味入りを果たしているんじゃないですか！何を心配する事があるんですか!」

パキパキ…と周囲の空気が凍っていくつももの尖った氷の礫が私を囲む様に現れる。

「私だって麦わらの一味だよ！仲間の心配をして何が悪いの!!それに、あそこには嫁になつて欲しい人が居るから!!」

「…嫁…イリスという名前をし、女好きで有名なあなたを私は王華本人だと確信していたのですけどね。…お互い譲れないなら、押し通るのみです!!」

「もー…じゃあ私が勝つたら、きちんと話を聞いてね!!」

武装色の覇気を放出させ、衝撃で氷の礫を消し飛ばして接近する。私の速度に軽く目

を丸くさせる叶を視界に捉え、小太刀の鞘を取り出して叶の横腹を殴り飛ばした。

あまり傷をつけたくは無いし、勝負も一瞬で終わらせたい。…一番良いのは、彼女に霸王色をぶつけて昏倒させる事。でも恐らくそれは無理だろう。叶も相当な実力者だろうから、まず覇気で倒すなんて事は無理な筈だ。

『セイクリッド・ファイア』ツ!!』

「あぶなっ!!」

いきなり地面から噴き出てきた巨大な炎柱を後ろに飛んで回避する。服が焼けちゃうじゃん!

…くっそ…さっきの攻撃は防がれたのかな、全くダメージ入ってないっぽいけど!

『セイクリッド・スピア』!!』

「わっ!?!」

青キジが繰り出す氷槍の光版みたいなのが高速で飛来してきたのを避け、再び後ろへ飛び退いて距離を稼ぐ。

周りに漂っていた毒ガスは彼女の力で殆ど消えてるし、動く事に関しては何も不都合は無い。

私が早く勝負をつけたい様に、あちらも同じ考えの筈だ。だからさっきから大技っぽいのが連続で放たれているんだろう。

「この……ちよこまかと！『ヴァント』！」  
「っ……おつと……！」

ボコ、と私の足場が盛り上がり、そのままぐんぐん上昇していく。

とりあえず飛び降りようとすれば、まるで土の塔みたいに聳え上がった足場からツルの様な草が生えてきて私の体を拘束した。

「その蔓は簡単には千切れませんよ、逃げられたくはないので。このまま催眠をかけた  
いとこですが……やはりあなたも相当な実力者の様です。このままかけても効き目は  
悪いでしょう。……ですの、『シャドウ・ミラージュ』」

私と同じ目線になるまで宙を浮かび上がって来た彼女がそう唱えれば、私を中心にし  
て、ぐるりと辺りを包囲する様に叶の分身が現れた。数は……ぱつと見100人くらいか  
な？

「本体は私1人ですが、全員が質量を持った必殺の一撃を放てます……！私の最大にして  
最高の技です。あなたの得意とする倍加も、この技の前では無力!!……降参するなら、こ  
れが最後ですよ？流石にあなたが強いと言えども、この技を耐えられるとはとても思え  
ない」

「……なるほど」

勝ちを確信している叶に向かって、私は臆する事なくニヤリと笑みを浮かべて口を開

く。

「あなたの『最高』の技とやらで、もし私が倒れなければ……ここは一旦引くか、大人しく私の話を聞いて。どう？ ああ、大丈夫大丈夫、絶対死なないから」

「……言っておきますけど、私は当然あなたの能力を知っています。最大が100倍だという事も、海軍大将の技をそれでも防げないという事も。……2年の年月で、あなたがどれ程の成長を遂げたのかは未知数ではありませんが。それでもまだ、降参をするつもりは……」

「大丈夫、全力で来ていいよ」

変わらない私の瞳の色に、叶が少し唇を噛んで手の平を前に翳した。それは周りの影達も同じで、手の平を中心に直径2m程はある1枚の魔法陣が展開される。まさかこの世界にきてこんなもの見るなんて思っても無かったなあ。

『エレメント……』

更にその魔法陣の前に同じ様な少し小さい陣が展開され、それを何回か繰り返して合計で5枚の魔法陣がタワーケーキみたいに重なっていた。

1番手前の魔法陣に光が宿り、収束して2枚目の燃える様な魔法陣へと移る。その光は2枚目の魔法陣を包み込み、光り輝く炎の様になる。3枚目の魔法陣では水の力を取り込み、徐々に属性を増しながら力を溜めていく。5枚目まで辿り着いた時、そこから



必殺技つてのが放たれるんだろうね。

4枚目では電気：かな、なんかバチバチしてるし、5枚目は：闇？なんかもやつとした霧みたいなのが魔法陣を覆っている。

「いきます…!! 『バースト』!!」

「――!!」

最終的に、炎、水、雷、光、闇の属性を一点に凝縮させた様な光が出来上がり、一斉に放たれる5属性の光線おおよそ100本が、一切の手加減なく一直線に私の元へ降り注いできた。

その衝撃は計り知れず、一点にエネルギーが集中した為か直後に大爆発を起こし、ソニックブームが発生する。上空の雲は掻き消され、遠くに見えていた毒ガスも遥か上空へと舞い上がって消えた。

空気も震え、地面に幾つか亀裂が走っている箇所がある。積もっていた雪なども吹き飛び、茶色い土が見えていた。

「…はあ……はあ………っ！大丈夫、です、よね…！あれだけの覇気を…ふう…持っているのですから…気絶程度で済んでくれれば…」

「いやー、凄かったね」

「……は？」

「どーも」

ぼん、と息切れしている叶の背後から肩に手を置き、ニツと笑って見せた。

「な、なんで……」

「確かに、アレは当たってればそれなりにダメージ受けてたろうね。…でも私、受けるなんて一言も言っていないよ？」

その技を撃つても死なないよ、避けるから…という意味ね、さっきのは。

「さ、私は死んでないし、気絶してもないよ。さっきの話覚えてるよね？」

「……あなたがそう言うのなら、私だって、あなたの提案を受け入れたとは一言も言っていないよ」

「あ、確かに……」

「でも……、あなたからはやはり少し、王華に似た何かを感じます。…今回は、私も冷静ではありませんでした。結論を急ぎ過ぎた、という事でしょう。…ですが、今回の件を謝罪する程、私はあなたを信用出来ない」

叶はそういうと、私の手を振り払って距離を取った。

「あなたが次に向かうのは、間違いないく、ドレスローザ」という国です。そこで開かれる武の大会に出場して下さい、私も出ます。……決着はそこで着けましょう」

「優勝商品が美女なら出てもいいけど」

「……あなたは、本当に女性が好きなんですね」

叶が確認する様に静かに尋ねてくるのを、間をおかずに頷いておく。それが私であり、王華との共通点だ。

「……、ではまた、ドレスローザでお会いしましょう。大会の件、よろしくお願いします」

トンガリ帽子を深く被り直し、叶はフラフラと飛んで行った。まだ必殺技の反動が取れ切って無いんだね。

…大会か……新たな美女との出会いもあるかなあ。それに叶もそこで私の事を見極めてくれるみたいだし……うん、出よう。

さて……じゃあ私は一旦研究所内に戻るとしますか。

## 167 『女好き、許されざるグラサン』

「ほい」

ズガン!!と研究所の壁を蹴破って中に侵入する。毒ガスは叶の…えつと…エレ：えー…まあそんな感じの技で大半は吹き飛んだし、別に穴を開けたって問題ないだろう。ジェット部隊もシーザーの本性をバッチリ理解出来たみたいだから、いつまでもここに居座るなんて事は無いだろうし。

軽く見聞色で様子を探ってみれば、中々に面倒な事になっているっぽかった。お、ハーピー美女も起きてるね。気配だけじゃイマイチ良く分かんないけど、大人しくしているみたいだ。ゾロの近くに居るから下手に動けないってとこかな。

「研究所内に毒ガスは入ってるのかな」

外のガスが無くなったとしても、既に屋内に侵入しているガスに影響はない筈だ。変わらず猛威を奮っている事だろう。

とりあえずナミさん達と合流しよう。

「こっちだね」

もうお構いなしに壁をぶち抜いて先へと進んでいく。一直線に進んでいるから、みんな

なを見つけるのもあつという間だった。

「いたいた、おーい！みんなー!!」

「イリス!!」

「イリスちゃん!!」

ガバツと私の方に勢いよく振り向いた嫁達が私に大きく手を振る。走ってるワニタウロスの上に座っているみたいだ。ナミさん、ミキータ、ペローナちゃん、ロビンに、サンジとウソツプが居るっぽい。ちゃんとハーピー美女も近くに座らされている。

ゾロとブルック、そしていつの間にか身体が元に戻ってる侍：錦えもんはその前を全力で走っていた。

というかミキータ達、体元に戻ってるじゃん！いつの間にい！

「女王!!」

「あ、あなた達も無事で何より！」

「それはこつちのセリフだ！」

その後ろからジェット部隊が追いかけてきて、モモの助はジェットが担いでいるようだけど、だいぶ体調が悪いのかぐったりとしていた。そりゃ断食10日もすればそんなるよ…。

とりあえずワニタウロスの隣について走り、みんなに今の状況を確認した。ちなみ

に、たしぎちゃんもスモーカーの入れ替わりも元に戻っているとの事。

「あんたと分かれてから色々あってね。毒ガスだとかシーザーだとか…」

「あと女王、その女は自然系ロキアだったぞ。私達の攻撃は当たらなかった」

「え!? そうなんだ…ごめん! そうだと知らずに預けちゃって…、怪我とかない!」

「ええ、それは大丈夫よ」

自然系ロキア…気付かなかった…私の甘えでみんなを危険に晒してたんだ…。

そうだ、彼女は体が冷たかった、あれは能力の影響だったんじゃないのかな…だとしたら私はバカ過ぎる、自分から嫁を危険に巻き込んだんじゃないかっての。

「…何変な顔してんだ、対処はロロノアがした。お前を責めたくて言ったんじゃない」

「ペローナちゃん…えへへ、ありがとう」

珍しく慰めてくれたペローナちゃんにお礼を言うと、白い肌を分かりやすく赤に染めてそっぽを向いた。

言ったら絶対否定するだろうけど、ペローナちゃんも私の事、好きでいてくれてるんだなあと思って思った。嫁になってくれた経緯が経緯だけに、ペローナちゃんがそういう気持ちを抱いてくれているのは素直に嬉しい。

「そうだ、毒ガスなんだけど、もう研究所内に入ってくる事は無いと思う。さつき外で色々あったから」

「色々……？さつき物凄い爆発音と揺れがあったけど、もしかしてあんたの仕業なの？」

「私じゃないけど……それも後で話すよ、大事な事だから。で、その爆発で外の毒ガスの殆どが吹き飛んで無くなったから大丈夫だよって事」

物凄い威力だったし、最初に毒ガスを凍らせたりもしていたからね。

仮にまだあの毒ガスが残っていたとしても少量だろうから、毒ガスと敵に挟まれるなんて事もないだろう。

「今俺達は、そのガスから逃げる為に走ってたんだが……この棟に1つしかない扉が閉まりにかけてるんだ！それも大丈夫なんだな？」

ウソツプが念を押して確認してくるのを領いて返した。平気も平気、ガスが無ければ閉じ込められたって壁を壊せば先には進める。

ガスがあるから壁を壊して先に進むって選択肢が取れなかったんだろうけど、もう気にすることもない。

「じゃあ斬るぞ、この扉」

チャキ、と刀を構えたゾロが瞬時に一閃を放った。それだけで閉じかけていた巨大な扉を盛大に叩つ斬り、先の道が開く。

「ちよつと剣術かじったから分かるんだけど、ゾロって剣の使い方上手いよね」

「その言い方だと今までは思ってたのだからかため」

「脳筋ゴリ押しマリモだとばかり」

「他の誰を差し置いてもてめエにだけは言われたくねエな、そのセリフ……」

冗談だけど。2年前から思ってはいたけど、自分も剣術を勉強してからより強く実感出来る様になったというかね？うん。

「そういえばイリスにはまだ言ってなかったわよね、実は……」

「ちよつと待て！天井に何か居るぞ！」

「何だ!?あの生物は……!!」

周りのガラの悪い海兵達がそう言うので天井を見れば、確かにそこには小型の竜が飛んでいた。モモの助とはまた随分違った見た目だし、あれら明らかに能力者ってより始めの方に見た竜と同じく、ただの野生の竜だろうね。

……いや、野生で竜がいる時点で相当おかしいんだけどね？

「ギヤアアア!!」

「火イ吐いて来たぞオ!!」

「あ、あのトカゲさん、私達と一緒にガスから逃げて来た子ですよ」

「仲良いの？」

「いや」



サンジに聞いてみれば、ガスから逃げる際、走るよりもあの竜に掴まってた方が速かったから掴まって逃げて来ただけみたい。

と言う事は…危ないし別に倒しても良いって事だよな。

「待たれよ！ 竜ドラゴンなら拙者が！」

「え？」

あ、もう覇銃ハガン撃って倒しちゃったけど…。

「ごめん、何か因縁アリだった？」

「…いや、その竜ドラゴンとは何もござらん…！既に倒しているのならそれが良いでござる」

…「その」、ね。

間違いなくモモの助の関係者だろうし、何か竜に因縁でもあるのかな？

「それで、ナミさんはさっき何を言いかけたの？」

「あつ、そうそう、それがね…」

簡単にナミさんから説明を受けた内容は、主に「同盟」についてだった。

どうやらローの『ハートの海賊団』と私達で同盟を結んだらしく、その目的が「四皇カイドウ」の首だとか。

で、カイドウを倒す為の第1歩として…なんとシーザーを誘拐しなくちゃいけないみたいなのだ。

「私、あいつ嫌いなんだけど。誘拐じゃなくてさ、ボコツて海軍に突き出すのじゃダメなの??カイドウを倒す為の第1歩?そんな面倒な事しなくても……あー……」

いや……これに私が首を突っ込み過ぎるのもおかしな話か……。ルフィの夢に関わる問題だし……。

自分の強さを過信している訳ではなく、冷静に考えても私がカイドウに負ける事は無いと思う。ONE PIECEのパワーバランスくらいもう分かっているんだ、多少苦戦はするかもしれないけど、負ける気はない。

だからと言って……私がカイドウをブツ飛ばすのは違うかな……って話だ。そりや……カイドウが私の嫁に何かしたのなら問答無用でブツ飛ばすけど。

「たしぎちゃん達とはだいぶ距離離れてるんだね」

「そりやおれ達は茶ひげに乗ってっからな」

「たしぎちゃんだけでも乗せてあげたら良かったのに……。ていうかあなた茶ひげっていうの?なにになににひげって異名の割には弱くない?ぶつちやけ名前負けしてるよ」

「うるせエな!!」

それにどうしてこの人、文句は言いつつもみんなを乗せてるの?明らかにシーザーへの逆行行為だけ……。ジェット部隊みたいにシーザーの本性を知ったのかな。

「……………これは……!」

「!!お前ら、俺はちよつと離れる!!」

「えっ?!ちよ…イリス!!サンジくん!!」

キキーツ!と急ブレーキをかけて反対方向へと走り出した私に、サンジも同じく血相を変えてついてきた。

「ごめん!用事出来た!すぐ戻るから先行つててー!あ、ちなみにその先でチョッパーが暴れてる子供達止めてるからねー!」

「えっ?!そういうのはもつと早く言いなさいよ!!」

それだけ言ってみんなと分かれ、来た道を逆走して走る。この感じ…サンジも聞こえなかったぽいね?流石紳士!

「誰だあ!!私の嫁を…泣かせたカスはーツ!!」

見えたぞコンニャロオ…!サンジ…悪いけど私だけで充分みたい!!

「ツ…!?誰だ…!!」

「このグラサンボウズがア!!」

「グツ…ボア…ツ!?!」

たしぎちゃん達が遅れてる理由は何も歩きだからって理由だけじゃ無かった…!何かよくわかんない奴に足止めくらってたんだけだ!

周りには血を流し倒れている沢山の海兵と、同じように倒れている…たしぎちゃん。

そして…その近くに立っていた、今私が蹴り飛ばしたグラサンボウズ。

「つふう…！やっぱ速エなア、イリスちゃんは」

「まあね」

「…む、麦わらの一味…！なぜ海賊が…！」

海賊？立場とか気にしてないんだよね、私って。

「女の…涙の落ちる音がした」

「私はたしぎちゃんの嗚咽が聞こえて」

倒れるたしぎちゃんに近寄り、しゃがんで状態を確認する。

「…ぐ……女王…！」

「……、頬に、殴られた痕があるけど…」

「何？そりゃ許せねエな…レディに手エ出しゃがったのか今の野郎は」

しかも腫れてるから、結構強く殴ったんだろうな。…一体どういう思考回路してたら、たしぎちゃんみたいな美人を殴る事が出来るんだろう。

……理解が出来ないし、する予定も無い。

ただ…沸沸と心の底から怒りが湧き上がって来る。当然だ、一体この男は誰に手を出したと思ってるんだろう。無事で済むと思っちゃってる訳じゃないよね？

「…ガフ…ツ…！一騎当千の、女王か…、噂に違わぬ強さだ…」

蹴り飛ばしたグラサンボウズが、フラフラとした足取りでここまで戻ってきた。

「…へえ、一応意識は刈り取ったつもりだったんだけど、やるねえ」

「…見ての通り、私は少々頑丈でね…」

「はあ？ いやいや、違うよ、あなたが頑丈とかどうでも良いから。私が言いたいのはさ」  
フ、と姿を消し、次の瞬間には奴の目の前に現れて拳を振りかぶる。

「わざわざもう1度ブツ飛ばされに来るなんてねって意味だ、よ!!」

「ッ!!?」

私の拳は奴の腹に刺さり、体をくの字に曲げながら壁まで飛んでいく。殴られる直前に武装色でガードしてたみたいだけど…あの程度の覇気の鎧で女王化クイーンしてる私の攻撃を防げる訳ないじゃん。

…そうなんだよ、女王化クイーンしてるから加減が難しいんだよね。解除しよっかな。

「ゲフっ…：…参ったな…まさかこれ程とは…」

「私も驚いたよ、まさか私の嫁に手を出しておきながらそんなに弱いとは思っても無かった」

「…あの、さつきから気になってたんですけど、私はあなたの嫁ではありませんが」  
まだ嫁じゃなくなつていつか嫁にするんだから一緒じゃん！

「…これが何だか分かるか？」

「……？」

グラサンはもう息も絶え絶えって感じで、フラフラしながら懐からある物を取り出した。

「…え、心臓？何アレ、キューブ状のボックスに心臓が入れられてるんだけど…ちよつとグロいんですけど…。」

「それは…まさか、スモーカーさんの…!!」

「いや、これはローの心臓だ」

ローの心臓だ…じゃないわ!!なんで心臓が出てきてそんな平然としてるの？あれ、私が遅れてる!?情報弱者!?

だって心臓だよ？しかもローのって言ってるし…ローは死んだの…!?

「一騎当千の女王、取引といこう。…俺はどう足掻こうがお前には勝てない。だが、これ以上攻撃の意思を見せる様ならばこの心臓を握り潰す」

「え、あれって本当にローの心臓なの？」

「…恐らく、トラファルガーと何らかの取引をしていたのでしよう。トラファルガーの能力を使えば、人体に傷一つ与える事なく心臓を取り出す事も可能です。…スモーカーさんの心臓も…っ!」

ああ、能力ね。という事はアレは一応ローの心臓なんだ。

「で？私の事をローの心臓なんかで止められると思ってるの？」

「悪いが、もう調べは付いている。麦わらの一味とハートの海賊団の同盟…つまり、ローが死ぬ事はお前達にとって不都合でしか無い筈だ」

「へえ、耳が早いね」

「いかにお前が強くても、この心臓が俺の手の中にある内は何も出来まい。だが俺がお前に勝てる様になった訳でも無い。そこで取引だ…この心臓をローに返す代わりに…この場は引いてもらおう」

ふんふん…なるほど、そうすればローは助かる、私もたしぎちゃん達を連れてこの場を離れる事が出来る。そんなもってコイツは自分の身の安全が保証される…という訳だ。

「確かに心臓潰されてローが死んじやつたら困るんだよねえ…恩人だし、ナミさん達と入れ替わりプレイする為に必須だし」

入れ替わり…？と首を少しだけ傾げるグラサンボウズだが、私の言葉に否定的な文が入っていないからか小さく息を吐いた。

「ならば——」

「だけど、その取引は却下ね。私の嫁を泣かせておいて…なんで取引に応じると思っちゃってる訳？」

「は……………」

「ハハ」

隣で軽くサンジが笑った。いやいやいや、当たり前じゃん、自分がした罪の重さを理解できてないでしょ？

「…………ならば、取引は不成立という事で良いんだな…!?元よりローは消すつもりでいた…今殺すか、後で殺すかの違いでしか……、…な…っ…!!?」

「あつれ〜?どうしたのかな?右手を熱心に見つめちやつてさあ」

グラサン越しでも分かる程、瞳を目一杯開かせて「空の右手」を凝視するグラサンボウズに、ニタア…と意地悪く笑いかけた。

「お探しの物はもしかしてこれかなあ?あまりにも隙だらけだったから、どうぞ受け取って下さいって渡されてるのかと思つて取っちゃったんだけどね。…ん?取引?え?あなた材料あるの?え?ぷぷ!!え!?ないの!?えー!?取引材料無いのにドヤ顔で私に話を持ちかけて来たの?ねえ今どんな気持ち?ねえねえ!あーっはっはっは!! …おらア!!」

散々コケにして笑い、最後に顔面をつま先で突き刺す様に蹴り飛ばして意識を刈り取った。

取引したいのなら、その心臓を私に見せるべきでは無かったね。実力に差があり過ぎ



る相手との取引は、いかに相手にメリットがあるかというのを示さなければ話にならない。これは私と青キジの取引がよい例だ。

だというのにこのバカ坊主は切り札足りうる心臓をわざわざ私に見せつけた。そりやある場所が分かれば奪えば良いのだから、取引なんぞに応じる必要はないのだ。

まあ、まだ私の実力を甘く見ていたのだろうけど。

## 168 『女好き、効果抜群の精神攻撃』

「…そういう訳で、彼は私達の直属の上司にあたるヴェルゴ中将なんです…。…私はいつも、誰かに助けられてばかりで…!!今回も、部下に手をかけるヴェルゴを止める事が出来ずに、その上海賊であるあなたに助けて貰って…!!」

「ああ…そういうのやめにしない?たしぎちゃんだつて充分に私が到着するまで時間稼ぎしたじゃん。勝てないのは仕方ないよ、それが今のあなたの強さなんだから」

せっかく自分達の危機を乗り越えたんだからもっと喜んで欲しいんだけど。周りのチンピラ崩れの海兵達は全員喜んでるよ?

「オイオイてめエ!なんだその言い方はア!!」

「大佐ちゃんが弱いみたいなの言い方じゃねエか!!」

「いや、そういうつもりじゃなくて…」

まだまだ強くなれるから気にしないで〜みたいな感じだつたんだけど…。

「それにさ、別に良いじゃん、助けられたつて。私が助けたくて助けたんだしさあ…」

「…あなたは、どういうつもりなんですか…?女が好きと言いながら、1番女性を口説くのに適さない『海賊』になり、今では一騎当千とまで呼ばれて恐れられている…!!あな

たは確かに強い…ですが…その強さは本当は、何の為の強さなのか?!」

…え、何この流れ。どうして海賊に…? そりゃ、当時の私に言わせればONE P I E C Eの世界に来て海賊にならない方がどうかしてるってもんだよ。…って説明するのは簡単だけど、多分その話を信じてもらえる様な仲にもまだなつてないだろうなあ。

「…海賊になったのは、ナミさんが居たからかな。まー流れだよ流れ。今ではその流れに乗って正解だったと胸を張って言える。強さを求めたのは嫁を守る為かな、何かを守る為に強くなりたい…それは誰だつて同じでしょ?」

誰かを守る為だつたり、例えば自分を守る為だつたり…強くなる理由っていうのは大体何かを守る為だから。

私はそれが嫁だつたつてだけで、強さは後から付いてきた結果に過ぎない。

「私の異名で沢山の人を怯えさせてるのは、それは本当に申し訳なく思うけど…私も譲れないモノはある。あなたにだつてある様にね。それから今度私とお茶してよ? 約束は守ってもらわないと困るんだからね」

「お茶…?…あ、初めて会つた時の…」

たしぎちゃんは思い出した様に声を上げ、まじまじと私の目を睨み付けてきた。睨み付けると言つても悪い意味ではなく、私の言葉の意図を確認しようとしている様な感じ

だけど。

「海賊と海軍だし、そりや当然たしぎちゃん私が私に対してアレコレ言いたい気持ちも分かる。だけど私は初めて会ったあの時から…あなたを嫁にしたいって気持ちは何一つ変わつちやいないよ。絶対に惚れさせてみせる」

今は無理でも未来で必ず！

…さて、私はそろそろ先に進もうかな。

「…なんだか、上手く言えないんですけど、私の尊敬する方に似てる気がします。…です  
が勘違いはしないで下さい、あなたは海賊…！その様な言葉に私は惑わされません…  
！」

…尊敬？スモーカー…では無さそう。スモーカーなら名前を出してるだろうし…。

「惑わすつてか、直球で口説いてるんだけど？あと、この先のシーザーは私達が捕らえる  
からたしぎちゃん達は船に戻つてて良いよ」

「シーザー・クラウンを捕らえるのは海軍の役目です！あなた達、動けますか？」

「ああ、へでもねエゼ！」

「たしぎちゃんに手を出したらブツ飛ばすぞ女王！」

「ざんねーん手は別の意味で出しませーす！」

…と、話はここら辺で終わつておこ。急がないと、私はハーピー美女も捕らえな

きやいけない訳だし。

「ついてくるなら止めないけど…よつと」

「きや…いな、何を…!」

たしぎちゃんを軽く横抱きする。ヴェルゴって奴にやられた傷はまだ痛んでるだろうから走らせる訳にはいかないし。かと言ってチンピラ共に任せたくない、私の嫁だからね!!

「よし、行くう!」

「お、下ろして下さい…ツ!」

抵抗されない様にそれなりの速さで走り出した。先を走るみんなにもこれならすぐに追いつける!

私とたしぎちゃんの会話に入らずに見守ってくれていたサンジまで置いてきちゃったのは申し訳ないけど、海兵達の護衛として近くに居てくれれば不足の事態にも対処できるだろう。

それより頼みの毒ガスが無くなったシーザーがどう動いてくるのか検討もつかないって事だけがちよつと不安だけど、奴がどう動いても心配はいらないか。

「見えた!みんな…あれ、全員は居ない…?」

子供達とナミさん、ミキータ、ロビン、そしてゾロとチョッパーはいるけど、ペロー

ナちゃん達が居ない…ジエツト部隊も…もう…この島みんなと一緒に居られないから早く出たいんだけど!!

「…っ…女王……ツ!?!」

「イリス! いい所に!!」

ハーピー美女の能力でかは分からないけれど、吹雪が吹き荒れて一面真っ白に染まった大きな部屋に入る。ナミさん達も無事そうだなにより!

「ゾロ、ナミさん達を連れて先に行つて。よろしく…と、その前に状況説明お願い」  
「別に構わねエが…あの女にお前は勝てるのか? 刺し違えても良いって覚悟が見える」  
「大丈夫だつて、逆に何を心配してるの?」

「そりやそうだな。状況は見ての通りだ、あの女が暴れ出したからお前を待っていた」  
なるほど…もうこんな風に強硬手段に出るしか道が無くなった訳だ。

ハーピー美女からしてみれば、毒ガスも無くなって、自分も捕まり、そしてジエツト部隊を含む殆どの人が反乱を起こしている現状は最悪と言ってもいいだろうし。

「…それより、コイツが何でお前に抱かれてんだ?」

ああ、たしぎちゃんの事か。

…コレ、反抗出来ない様に走ってきた際の風で髪の毛が乱れ、服もちよつとはだけかけてるから私何がアレな事しかしたみたいないな絵面になってない? これ。

「色々あつてね。ね、たしぎちゃん」

「…っ、は、早く下ろして下さい…!」

「えー」

「キャハ！イリスちゃん、気をつけてね？」

「あんまりやりすぎちゃダメよー？」

「はーい」

2人は私じゃなくてハーピー美女の心配をしているみたい。最悪怪我はさせちゃうかもしれないけど、出来るだけそうはならない様に頑張る！

…完全に敵に回ってる時点で厳しいかもしれないけどね？

「平気なら俺はもう行く」

そう言つてゾロは先に続く出口へと走り出した。ちよつと、ちゃんとナミさん達を護衛してよね！

「おーい！大丈夫かイリスちゃん！」

「サンジ！うん、平気ー！ここは私が引き受けたから先行つてて！」

「大佐ちゃんはこつちに渡せ女王！」

「そうだそうだ!!」

「やだ」

「ふい、とそっぽを向いて断固拒否の姿勢を取る。たしぎちゃんだってもう諦めてるもんね!というか降りようと頑張ってたけど無駄だと気付いて諦めたって感じ!」

「わ、私の事は心配要りません、構わず前へ…!シーザーの身柄の確保を優先して下さい!」

「…オイ!頼むぞ女王!」

「女好きってんなら大佐ちゃんを傷付けんじゃねエぞ!」

「当然!」

少し後ろ髪を引かれながらも先へ行ったチンピラ海兵達を視線で追って、部屋を出たのを確認してからハーピー美女に向き直る。

「お待たせ、大人しく待っていてくれてありがとうね」

「…あなたの前では下手に動けない。…まさか、そんなバカげた格好をしている女がある女王とはね…」

「可愛いでしょ?それより、どうするの?まさか戦う気?」

戦ったって方に一つの勝ち目すら無い事は彼女も分かっている筈だ。女王化クイーンを使わなくとも覇気だけで勝ててしまうのに、彼女がどうやって私を倒す…もしくは足止めする気でのだろうか。

例えば今ここで、私が彼女に覇気を一点にぶつけてやればそれだけでカタが付く…要



はそれくらい実力に差があるのだから。

「いいえ、戦いはしない。正直……どうやったってあなたには勝てる気がしないもの。だけど、戦いだけが全てじゃないわ……！私は私の役目を果たす！カマクラ十草紙<sup>じゅっそうし</sup>！」

「お」

「ゴオオ……！と私の周りの雪が盛り上がり、私を囲う様にカマクラが出来上がった。なるほど、とりあえず全力で足止めするって事か。

「たしぎちゃん、ちよつと下がってて」

「いえ、私も一緒に……」

「いいから」

刀を抜こうとするたしぎちゃんを無理矢理その場に座らせ、私は小太刀を腰から引き抜いた。

このカマクラの強度は知らないけど、私の攻撃に耐えられるとは思わないし、軽く斬り刻んで足止めする気すら起こさないであげよう。

「……あなたに……、いい事を教えてあげる」

「ん？」

クルクルと小太刀を回してれば、カマクラの内側にハーピー美女の上半身がスポ、と生えてきた。なんか可愛い……。

「私は自然系<sup>ロキア</sup>じゃないわ。そして今、私はこのカマクラと同一化している…この意味、分かるかしら」

「……そう来たか」

私が彼女の能力を自然系<sup>ロキア</sup>だと思っているのはロビンからの情報があったから。つまり…実際この目で確かめた訳じゃない。ロビン達から逃げ切る為に、その時はわざと自然系<sup>ロキア</sup>だと思わせただけかもしれないって事か…。

「あなたはもう、このカマクラを攻撃出来ない。私が女である以上…そこから逃げる事など」

「よっ」

「……えっ？」

ボコッ！とカマクラを蹴破って普通に脱出した私に、ハーピー美女もたしぎちゃんも目を見開いた。

なーんか勘違いされがちなんだけど…私って別に女の人に手が出せない訳じゃないっていつも言ってるよね。攻撃しなきゃダメな場面は躊躇しないよ、私は。

「私を閉じ込めるには…ちよつと愛が足りないね。あなたが裸になって突撃してきた方がまだ足止めになると思うけど」

「…ふ、ふふ…、その手に持った刀でカマクラを破壊しなかったのは何故…？傷は付けた

くないって事でしよう?」

「まー…その通りだけどき」

斬り傷を付けちゃうのは流石に抵抗あるかな…殴ったりするのも出来ればしたくないけど、仕方ない場面っていうのはあるし。

「だけどお陰で私もあなたが自然系ロギアだつて事が分かったよ、これで覇気を使った攻撃をしない限りはあなたを傷付ける事も無いって訳だよね。後は初めて会った時みたいに…威圧だけで充分倒せる」

せつかく抜いたのに出番の無くなった小太刀を戻し、体から強大な霸王色のオーラを噴出させる。

最初と違って今は女王クイーン化してるし、霸王色の規模はあの時の比じゃ無いよ?

「…っ…まさか、2年でこれ程まで…!!」

「じゃ、おやすみ」

暴れる覇気を纏めてハーピー美女へと放出した。このオーラに吞まればまた気絶するだろうから、たしぎちゃんを横抱きで彼女は背負うとしよう。

「フフ…確かに私はあなたには敵わない」

「……………ツ…!!」

霸王色の覇気がハーピー美女へと届く直前、彼女は武器である巨大なピックの様な物

を構えてそう言つて、私は驚愕に目を見開いた。

構えた…と言つても、私に向けてじやない。羽根で掴んで、自身の喉元に向けているのだ。そんな事をすれば、覇気に当たつて昏倒する衝撃で突き刺さるのは目に見えてい

る。  
なぜ？何の為に？決まつてる…私に対して絶大の効果がある…捨身の精神攻撃だからだ…！私との戦闘中に自殺なんてすれば、私はその事で気に病んで戦力がダウンすると思つたから彼女は行動に移しているんだ…！！

…舐めてんじやないつての…！！私の目の前で、そう簡単に死ぬると思うな…！！

「っ…え…!？」

私は放つた覇気を即座に取り消し、かつ彼女がそれを認識して自分の力で喉に突き刺すよりも早く、私は彼女が持つピックを蹴り飛ばして覇銃で粉々に粉碎した。

あまりにも一瞬の出来事に驚愕の表情を浮かべるハーピー美女に、私は憤りを隠す事なく詰め寄つて霸王色の覇気をぶつけ昏倒させる。

あのままなら、今度は自分で舌を噛んで死のうとするかもしれないからね。ハーピー美女には申し訳ないけど、自殺出来ない様にタオルを噛ませるくらいの処置はしないとマズイかもしれない。

「…自分の死で私を弱らせる理由が、この人にはあつた…？」

残っているのはシーザーだけ……つまり、私を再起不能にしようが勝ち目などある訳がない。だどいうのに命を投げてまで行動に出た理由は……つまり、まだバツクに何か居るって事だ。

そいつと万全の私をぶつけない為に彼女は命を捨てようとした……、……まだ、分かんないけど。

「倒した……んですか？」

「うん、何とかね……」

……でももし、本当にそうなのだとしたら……、……めちやくちや腹が立つ……!!

こんな簡単に命を捨てさせる様な奴って事でしょ……? そんなの、許されていい筈がない……!!

「命を粗末に扱うのは許せない……たしぎちゃんもそう思うでしょ?」

「え?………はい」

海賊の私に言われたからか反応が少し遅れたけど、たしぎちゃんも返事は力強かった。やっぱり正義感が強いだけあって、今起こった出来事を見て何か思う所もあつたんだらう。

バツクに何かが居るかもしれないという事に気付けただけでもまあよしとしよう。彼女を嫁にするのは今はまだ厳しいかもしれないけど……すぐその腐れ切った価値観を

正して、私に惚れさせてやる…!!

## 169 『女好き、心臓保護』

「…え、シーザーの後ろ盾についてるのって七武海なの？」

「はい、王下七武海の中でも特に異質な海賊…名を『ドンキホーテ・ドフラミンゴ』…！  
闇の世界のブローカーとも呼ばれ、裏取引ではジョーカーという名を使って戦争などを  
助長している厄介な存在です」

「ハッピー美女を横抱きしながらみんなの元へと走る。たしぎちゃんには自分で走れ  
ますと断られた…悲しい。」

「それにしても、そのジョーカーとやらがシーザーのバックに居るって事は…つまり、  
ハッピー美女のバックも奴だという訳だよな。」

「それにしてもたしぎちゃん、結構情報持つてる！何か普通に話してくれたけど、少し  
は信用されたって事で良いのかな？」

「ドフラミンゴか…戦争にも居た様な気がする」

「あの時は何かと必死だったから…居た、かな？…くらいの記憶しか残っていない。」

「見かけたら殴っておけば良いって事だよな、能力者だったような気がするけど、きち  
んと見てないからあんまり覚えてない。」

「これってさ、もう私達の後ろには誰も居ないんだよね？」

「ええ…居たとしてもヴェルゴくらいだと」

「じゃ、ここから後ろ吹っ飛ばしとくね、脱出しやすくなるし、シーザーの研究所も壊せて一石二鳥だから。あ、ちよつとお願いね」

「え？」

ハーピー美女を少しだけたしぎちゃんに預けてつと…。

久し振りにド派手に行こう！ヴェルゴは結構タフだから、多分死にはしないでしょ、多分…。

「50倍灰」  
ごじゅうばいばい

立ち止まって、来た道を振り返り指先を向けた。増幅していく私の覇気が、莫大なエネルギーとなつて指先へと収束していく。そのエネルギーは光となつて可視化され、徐々に大きく膨らみ…。

「覇銃!!」  
ハガン

凄まじい爆発音と共に私の指先から特大の弾丸が放たれた。その大きさは比喻抜きで直径5mはあり、辺りに衝撃波を撒き散らしながら前へと飛んでいく。当然その間も覇銃の余波に当たつた壁や天井などが無残にも吹き飛び、技を放つた私や近くに居るたしぎちゃんとハーピー美女にまでも瓦礫などが飛んできた。当然そんなものを直撃さ



せる私ではないので、覇気を放って壊しておく。

最終的には私達の居る場所から前だけを残して、研究所を内部から木っ端微塵に吹き飛ばしたのだった。

「……うそ……」

「気分爽快！大掃除した後みたいで気持ちいいね」

覇銃が通った地面は半円型に抉られ、未だに勢いを衰えさせずに空へと飛んでいくエネルギーの塊を見てうんうんと頷く。たしぎちゃんが開いた口が塞がらないという感じだけど……ふ、どう？惚れても良いんだよ？……勿論冗談だからね？建物ぶっ飛ばして惚れられるとは流石に思っていないからね？！

「え……!?こ、これは……!?さっきの技で全て吹き飛ばされたのですか……!?」

「え？」

何の事？と思い見通しの良くなった周りを見渡せば、吹雪で積もっていた雪などは消えて下の地面が見え、所々にあつた岩や廃屋なども全て消えて辺り一面更地になつていた。あー……これは私じゃなくて……。

「叶が必殺技みたいなの放つてこうなつたというか……私は何もしてないからね？」

「……連絡してからかなり時間も経っているのにカナエさんが来ないのはおかしいと思つていきましたが……まさか、さつき起きた大きな爆発は……」

「うん、叶の技。それで毒ガスが無くなって……って、え？たしぎちゃん、叶を知ってるの!？」

なんか普通に話通じてビックリ…叶って私の思い浮かべてる叶だよな？

「私が尊敬している方です。…それにしても、これだけの技を何故カナエさんが…」  
「……」

それについては色々理由があるんだけど、話すことややこしいから黙っておこうかな。

たしぎちゃんに預けていたハーピー美女を再度私の腕の中に迎え入れ、現状を探る為に見聞色で周囲の確認をする。…みんなこの先の広い空間に集まっているみたい。シーザーは……あれ、シーザーのやつかなり離れた所に居るね、研究所から出てる……？意識は無さそう……かな。ルフィがブツ飛ばしたのかもしれないね。

「急がないともう終わってるっぼいよ、私達待ちかも」

「シーザーの捕獲は完了したという事ですか？」

「捕獲というか、倒したというか」

そういう流れかは分かんないけど、とにかく終わってるという事は分かる。合流するのにそんな時間はかからないだろうし毒ガスに追われてる訳でも無いから慌てずに行こう。ハーピー美女の美しい顔でも見ながらね!!

\*\*\*

私の見立て通りみんなと合流するのはすぐだった。居ないのはフランキーくらいだけ、フランキーはサニー号を移動させる為に外に居るらしい。叶の技に巻き込まれてなければ良いんだけど…。

で、今私達はなんかSAD? っていうものを運び出す為のトロッコに乗って研究所から脱出中である。なんかよく分かんない薬品らしいけど…そういう難しそうな事は苦手なんだよね。ちなみにヴェルゴから奪い取った心臓は既にローに渡してある。

「女王屋、本当に外に毒ガスはねえんだな?」

「ないない、なんなら色々無いよ」

「それより女好き、てめエヴェルゴとやり合ったらしいじゃねエか、奴は何処にいる?」  
「質問ばつかだね…: グラサンならかなり後ろの方に居ると思うよ、私が研究所を破壊するのに使った技に巻き込まれてる可能性もあるからもつと遠くまで飛んじやつたかも」  
「可能性というか確実に巻き込んだじゃったけど…。」

それから、このハーピー美女の名前はモネと言うらしい。ペロペロしたい程美しいお顔だ…ペロペロ。ついでにペローナちゃんもペロペロ。

「うぜエ…」

「ガチトーンは泣くよペローナちゃん、私、泣くよ」

「……し、知らねエよ」

冗談なのにちよつと罰が悪そうに視線を逸らすペローナちゃんほんと可愛い。可愛さの暴力、私への特攻ダメージ…あ、私に対して強烈な攻撃を放てるのは嫁達全員に共通してるけどね？

「…まさかとは思うが女王屋…モネをお前の部下にするつもりか？」

「部下じゃなくて嫁ね、よ・め！」

「……はア」

ふふん、と宣言すれば、ローは軽いため息をついてとんでもない事を言いやがった。

内容は…モネの心臓の在り処。どうやらローはこの研究施設を破壊する為、シーザーに協力するという建前で潜入したらしいのだが、その時この研究所を自由に出入りする条件として自分の心臓をシーザーに、そしてシーザーは信用の証としてモネの心臓をローに渡したらしい。

で、私達がこの島にやってきて、スモーカーの心臓を奪い取ったローはその事をシー

ザーに話して…モネの心臓を返した。

当然スモーカーの心臓を取った、という話をした後には渡されたのだからそれはスモーカーの心臓だと勘違いするだろう。ローは一言も誰の心臓だとは言っていないが…つまり、勝手に勘違いしているシーザーがどう動くか分からないという事だ。

最後にスモーカーを道連れにしようとして持っている心臓を潰せば…モネは死ぬ。

「ちよつと…！一大事じゃん！ブツ飛ばすよホントに！」

「仕方ねエだろ…保険だ。それに幸いまだモネはくたばつちやいねエ、急げば間に合う可能性はある」

「急ぐに決まってる！」

トロツコが走るこの先の道にシーザーが居るのなら、ちよつと先に行つてくる！！

もし意識の戻つたシーザーがその心臓をどうにかしてしまつたら終わりだ、全く…！  
とんでもない事してくれちやつて！！

「ちよつと先行くね！」

「ええ、私達もすぐに追いつくわ」

ナミさんの返事にこくりと頷き、トロツコから飛び降りて走り出した。

全速力で走つちやつたら衝撃で道を崩しちやうかもしれないし、かと言つて急がないとモネが危ない…くそ、どうしても焦つちやう！

「出た！シーザーは…!？」

とりあえず研究所の出口からは出たし、毒ガスも思ってた通り無いけど…シーザーどこまで飛んだの!!

「こつちか…!？」

見聞色で探ってシーザーが倒れている場所まで急ぐ。

やがて奴の姿を捉えれば、丁度ローの能力で取り出されたモネの心臓にナイフを突き刺そうとしている場面だった。

「こんの…ボケがア!!」

「ボゲヘエ!!？」

一瞬でシーザーの所まで移動し、ナイフを蹴り飛ばして顔面をブン殴った。

あつつぶない…!後少し遅れてたらと思うとゾツとするよ…心臓は私が預かっておこう。

「アウ！やつと来たか、シーザーの捕獲は終わったのか？」

あ、フランキー。

魚人島で見せた合体ロボに乗ってるのか。毒ガスがあつたからかな？

「このとーりね。それより…その美女は誰!？」

ボロボロだけどすごい美女が合体ロボフランキーと対峙してる！あと、隣におまけ

のプロペラ男。

その美女はなんか今の私の様な格好……つまりメイド服を着ていて、頭にはカチューシャも付けている。私が着ているソレよりかは動きやすそうだけど。あと、目元だけを覆う仮面もつけていた。とにかく綺麗な人だという事だけは伝えたい。美しい!!

「そこのお嬢さん、私の嫁になつて!」

「えっ……!私、必要とされてる……?」

「今ソレはやめろベビー5!とにかくシーザーを回収するのが最優先だ!」

先制で軽く口説いとこ、と思つて口にした言葉に思つたより食いついてくれた……。頼まれたら断れないのかな……。いや、流石の私もそんな軽いノリでOKされたら驚きを通り越して心配するよ?」

「どこのメイドだか知らないが、その男を渡せば命だけは見逃してやる!」

「あなたも、どこのプロペラだか知らないけどその美女を差し出せば見逃してあげるけど?」

でもこの2人、雑魚ではなさそうだ。負けるなんて事はありえないだろうけど……。どうしてシーザーを回収しようとしているのかは気になる所だね。

「出エたア……!!」

「おお！あれ見ろ！」

「うおおく!!ショーグンだア!!」

「ロ・ボ・ダーーーっ!!!」

「お」

みんなも到着したみたい。ルフイ達や海兵、子供の男連中は殆ど合体ロボに目を光らせている。反対に女性陣は子供も含めて全く興味なさそう…私は少し興味あるんだけど…私がおかしいの？

「イリス、どうだった？」

「危なかったけどこの通り！」

ナミさんの質問に、じゃーん！と倒れ伏すシーザー、そして奪い取ったモネの心臓を見せた。心臓は間違つて傷付けないよう慎重にモネの胸元へと戻しておく。ついでにぼよんを一揉みしておいた。やわらかかった。

「イリス…!?まさかこのメイドが女王…!!?」

「流石にコレは分が悪いだすやん…!く…:ロー、この裏切り者がア!ジョーカーはお前の為にまだハートの席を…」

「ハートの席?この人達仲間なの?」

「いや…敵だ」



私の言葉に即答し、ローは2人を見据えた。

仲間：というにはローと2人の空気感は自然過ぎる。まるで小さい頃からの知り合いだけど、仲は良くない：：みたいな感じ。わかんないけどね？

「敵だつてさ。じゃあ悪いけど：：」

「ツ!!?」

フツ：とプロペラ男の前まで移動し、顎を上空に蹴り上げた。この程度の敵なら一撃でKOするのは訳ない話だよ、それにフランキーが弱らせてくれたから余計にね。

「あなたは：：こうだつ!!」

「う……」

さくさく過ぎて笑っちゃいそうだけど、ベビー5の方はモネの時の様に霸王色をぶち当てて意識を飛ばしておいた。いやー、みんなと離れ離れになるから早く出たいとは思ったけど、モネにベビー5といい：：この島に来てほんと良かった！叶にも会えたし：：たしぎちゃんとも話せたし。

いい加減たしぎちゃんのガードも緩くなってくれても良いのになあ。嫁にしたいかどうかには海軍とか海賊とか関係ないじゃん！

## 170 『女好き、密会の約束』

「いいか海賊共っ！タンカーはお前ら海賊チームのもの！これは“正義”と“悪”の境界線、この線からこつちへ入って来るな！分かったか麦わらの一味！」

長い線を地面に引いて境界線とやらを作ったチンピラ海兵達が大きな声でそう宣言してきた。

タンカーって……これか。流石に液体を輸送する為の船だけあって大きいね、サニー号の何倍もあるよ。

「それよりたしぎちゃん、今回の私の活躍どうだった？惚れた？」

「コラコラ女王ー！今入るなど言っただけだろ！」

「はあ？私と嫁との間に境界線なんて必要無いから。海軍とか海賊とか悪とか正義とかどうでもいいから！」

それにルフィも普通に越えてきてるし。

どうやら自ら進んで海軍に捕まる事を申し出た茶ひげと話をしているみたいだった。そういえばジェット部隊も茶ひげと同じ様に軍に捕まるらしいけど、どこだろ、挨拶くらいしておこうかな。

「女王……いや、イリスさん」

「あ、ジェット」

そう考えてたら向こうから話しかけてきてくれた。何人かはガスに飲まれちゃったみたいだけど……ジェットの後ろにはまだまだ沢山の仲間達が残っていた。

「いいの？せつかく自由が手に入りそうなのに軍に捕まるなんて」

「ああ……その方が俺達にとつても都合が良いんだ。どうやら俺達も微量の毒薬実験をされてんだと……。軍に捕まりや治療して貰えるってんだから、みんな喜んで捕まるさ。それに……奴に好き放題されるより真つ当だろ？」

「ふふ、そうだね」

シーザー、ベビー5、そしてバッファローと言う名のプロペラ男は縛つて岩にもたれ掛けてある。ベビー5だけは解放して欲しかったけど特別扱いは流石に無理だと言われたんだよね……じゃあ隙を見て攫つちやお。

「イリスさんには俺も含めて部隊のみんなは全員感謝してる。罪を償つて……出てきたらさ、俺達絶対あんたに何か恩返しするよ、いや、させてくれ」

「俺からも頼みます！」

「何でも申し付けて下さい！」

「恩返ししても……私は別に何もしてなくない？シーザー倒したのはルフイだよ？」

私がシーザーにした事なんて、最後顔面殴ったくらいじゃない？それもルフィが倒してたやつにトドメ刺しただけって感じだし。

「俺達は全員、あんたのお陰で大事な物を再確認出来たんだ。立ち向かう勇氣や、命の大切さを改めて教えて貰った気がした。…シーザーみたいな紛い物じゃねエ…あんたから受けた恩は、返したいと思えるモノだからさ」

「……そ、か。なんかそう真正面から言われると照れるね、はは…」

いつつも恩を返したいなら嫁になつて〜とか言ってるから、こうやって茶化す事が出来ない場面は気恥ずかしくなってくるね…。

でもまあ、返してくれるっていうのなら氣長に待つていようかな。

「そういうえば、預けてた龍は？」

「ああ、その龍ならそこに……、ん？おかしいな…子供しかいねエ…」

子供？…あ！

「も……モモの助?!」

その子供を見て、錦えもんが名を口にした。モモの助はあの子龍の名前だから…人間に戻れたんだね！良かった良かった。

「父上エ!!」

「モモの助エ！無事でござったか!!ぬ？おぬし、裸ではござらんか！ドロン！」

「お」

ぼん！と服を着てなかったモモの助が一瞬のうちに侍の様な着物に包まれた。錦えもんも能力者なのかな？

ていうか親子だったんだ……この2人。なーんかそんな感じはしないんだけどな……。

「うむ、流石ワノ国の男児、着物が似おうてござる！」

「しかし父上……よくここがわかっ……う」

「ほら見た事か、やっぱりフラフラじゃん。子供が変に意地張って断食するからそうなるんだよ」

倒れそうになったモモの助を支えて錦えもんに預けた。ご飯の段取りは今サンジがしてくれているから、その空腹は最高の形で満たされるでしょ。だってサンジのご飯だよ？断食後にそれは美味し過ぎて死ぬかもしれないよ？

「あれ、ナミさんは？たしぎちゃんも居ない……さっきまで居たよね？」

良く見ればローもチョツパーも子供達も色々居ない！……と思っただけど、ローとチョツパーは子供達の治療か。聞いた話じゃ……覚醒剤入りの飴を毎日食べさせられてたんだっただね、その上巨人化の実験……子供によくそんな事が出来るな……。

「ナミちゃんなら子供達をあの海兵ちゃんに預けに行っただわ。最初に子供達を救ったのがナミちゃんだから、みんなナミちゃんに懐いてるのよ」

海賊だから、後の事はたしぎちゃんに任せる為に引き継ぎみたいな事をしに行つたつて訳だね。それにしても流石ナミさん！最高に素敵だー!!

「お前は今回何してたんだ、あつちこつち動き回りやがって…ジツとしてらんねエのか？」

「心配だからずつと私の隣に居てって言ってるわ」

「い、い、言つてねエだろんな事!!一言も!!」

でも顔真つ赤だよペローナちゃん。はー可愛い、可愛さの塊。ペローナちゃんのお愛さが留まる事を知らない…!!

「私は…今回なんか動き回つてただけって感じかなあ。でもそのお陰で叶とも会えたよ！」

「…カナエ…？イリス、その名前は確か…」

考えるように顎に指を添えるロビンに頷いた。みんなには話してある過去の事…叶を見つけたのも話しておこうと思つてた事だし、とりあえず今ここにいるメンバーにだけでも先に話しておこう。

「なんの話？」

「あら、タイミング良いわね、ナミ」

ナミさんも話は終わったのか私達の所に戻ってきてくれたので、嫁達はみんな集まっ

たね。

「みんなが研究所に居る時、外ですつごい爆発音が聞こえなかった？」

「聞こえたけど……イリスがやったんでしょ？」

「ううん、その音は葉の技だよ。この世界にいつやってきたのかは分かんないけど……  
こでの叶は私と同じ『四異界』の1人……グリーンピットの魔女！」

「!!」

もうここまで分かったら確定的だ……四異界は全員が転生者、それも私と同じ世界から  
!

魔女は叶で、超彩は沙彩、そして狂神は零で……女王が私。

「……なるほど、あんたの……王華の知り合いは全員こつちに来てるのね。良いニュース  
だけど……あれ、でも待って……？ 確か後もう1人……」

「ミサキが居ないわ」

「そうなの……私達が四異界として纏められたのは偶然じゃ無い……と思う。けど、だった  
ら美咲だけ居ないのは不自然だと思うし」

ナミさんの言葉にミキータが続けて私の不安を言い当てた。

……でも、絶対この世界には来てる筈だ。1人だけ来ていないとは考えづらい。

「そのカナエは？ 会ったのなら話せたんでしょ？」

「あー…色々あつて戦闘になっちゃって…」

「はア？」

う、ペローナちゃんのジト目が刺さる…！でもそんな顔も可愛いから幸せになっちゃう…！！

「そ、そんな訳で…どうやら叶はドレスローザつてトコで私と改めて話がしたいみたいなんだけど…」

「ドレスローザ…新世界では有名な観光スポットね。情熱の国と呼ばれ、過去は平和の象徴ともされていたと聞いた事があるわ」

過去は、か…また波乱が起きそうな国だ。

叶はドレスローザのコロシアム？だかなんだかに出場してつて言つてたし、流れに逆らわなければドレスローザにも辿り着くつて言つてたから…原作では次に目指すのがドレスローザになるんだろう。

「奇遇だな、次の目的地はドレスローザだ」

タンカーからローが飛び降りて来てそう言う。やっぱりそうなんだ、つまりこれで叶がある程度ONE PIECEの知識があるつて証明にもなったね。

「そういえばローさ、私達と同盟組んだんだけ？今度嫁達に手を出したら、いくら恩人と言えども許さないからね」



「分かっている、わざわざ厄介な敵を増やすつもりはない」

それなら良いんだけどさ。どうせなら私とナミさんを交換してくれないかな？ そうなったら速攻で寝室戻って一人で楽しむというのに！

…ん、凄いいい匂いが漂って来た…！ご飯の用意が済んだのかな？

「サンジー！今日のご飯は何ー？」

「俺が修行中に学んだレシピの1つ、冷え切って疲れた体に復活系、海ぶた肉入りホルモンスープだ。沢山作ったから腹一杯食べてくれ…と、まずはお前らだ断食親子。何日も食ってねえんなら…まずはスープからゆっくり腹に入れろ」

モモの助と錦えものの前にテーブルを出して、その上にスープとそれ以外にも肉中心の料理が並べられていく。

お、美味しそう…！スープが特に美味しそうだけど、普通に焼いた海ブタのお肉も良いい匂い…！

匂いに釣られてルフィ達もやって来て、もはや境界線など意味ないくらいに海兵と海賊が入れ混じっていた。

「お前腹減ってんだろ？サンジのメシは最高だぞ!!」

「…い…！要らぬ…!!せっしや腹など空いておらぬ!!こんなも…!」

「ストップストップ、それはサンジが怒るよ?」

スーパの入った容器を持ち上げて地面に叩きつけようとしたモモの助の腕を掴み、そつとテーブルに戻させた。

サンジは料理を残すのも好きじゃないけど、一番怒るのは食べ物を粗末に扱った時だからね、今の行為はモモの助の為にもさせるべきじゃない。

「いたadaki候っ!!」

「!」

ぱくつ、と先に料理を口に入れた錦えもんが次々に手を伸ばして皿の中のモノを減らしていく。

「うまい…!!何だ!?力が漲る!モモの助…大丈夫…!大丈夫でござる!これも…これも!何というウマキメシでござろう、一飯の恩に預かろうぞ!実は拙者もこの度命を救われた…この者達は信用しても良いのだ…。おぬし、今日まで何も食わなんだか、よう耐えた!辛かったろう…!…もう、大丈夫でござる。奴らもきつと無事と信じよう!さア…生きようぞ、モモの助!!」

そう言つて涙を流す錦えもんを見て、モモの助もついに限界が訪れたのか小さく何度も頷き…スーパをゆっくりと口に含んだ。

間違いなく何か相当な訳アリだよね…空腹が限界を迎えてたつていうのもあるだろうけど、そこまで号泣しながらご飯を食べるなんて余程の事だ。ワノ国…そこで何かあ

るのだろうか？身も蓋もない言い方をすれば、ルフィがワノ国の住民である錦えもん達と出会った時点で何かはあるんだらうけど。

気付けば海兵海賊関係なしの宴が始まり、タンカーに積まれていた酒やジュースなども持ち出してかなりの騒ぎとなっていた。私は2杯目のスープに口つけている。美味しい。

ナミさんの周りに沢山子供達が集まっちゃったせいで近付けなくなっちゃった…押し除けて通る程鬼でも無いから、この機会にたしぎちゃんとお話してこよ！えーつと、たしぎちゃんはつと…。

「居たー！たしぎちゃんー！」

「あ……女王……！」

全体を見渡せる隅の方で、1人静かにスープを飲んでいたたしぎちゃんに近づいて行く。

こんな時にも警戒を怠ってないのは流石たしぎちゃんって感じ！

「もつと宴の中心に行かないの？子供達も居るのに！」

「…いえ、あの子達が懐いているのは私ではなくあの人ですから。この宴が終われば別れは避けられません、今だけは…楽しい思い出を作ってもらいたいです」

「…そっか、優しいね」

ナミさんも子供達を預けるのがたしぎちゃんで良かったって思ってるに違いない。こんなにも市民の事を考えてあげられる海兵なんてそうは居ない……のに、何故か私の言葉に顔を俯かせて肩を震わせ始めた。

「……優しい、ですか。…私は海兵です、市民の事を第一に考えるのは当然だと、そう思います。…だけど私は、想うだけで力が足りない……！守りたいと正義感を強く抱いていても、実力が伴っていないんです……！！今回の件でも、その事を強く実感しましたから……」

「……でも私は、たしぎちゃんの様な人が好きだけどね」

「それは、弱い人がって事ですか」

「弱くても自分を曲げない人」

私の言葉に、たしぎちゃんが小さく息を吸い込んだ。  
ぶっちゃけ、たしぎちゃんはちよつと自己評価が低すぎると思う。こんなに可愛くて、こんなに優しいのに。

「どうやっても勝てない相手と分かっているけど、後ろに居る誰かを守る為に無謀にも立ち向かう。その為の力を得る為に、努力を重ねている。そして……たしぎちゃんが自分でも言つてた様に、他人を第一に思いやる心。…簡単に出来ることじゃないよ、誰もが出来る事じゃない……違う？」

「……それでも」

「それでも強くなりたいたいのなら……私が教えてあげる」

「え……」

海賊が海兵を？……だから何だと言うのか。たしぎちゃんはこの申し出、絶対受けるよ。彼女は沢山の命を守る為なら、例え海賊と共闘したって構わないと思っっている筈だ。

誰かを犠牲にするのは許さなくても、悪と正義の価値観に囚われたりはしない。そういう所も素敵だと思っただけ……多分自分では気付いてないんだろうな。

「……………海兵である私が……あなたに教えを乞うなど……、耐え難い、屈辱です……っ！」  
「うん」

「……けど……っ……弱くて、誰も守れなくて……何も出来ず、ただ後ろで強い人の背中を見続けるだけの私を見るのは……!!もつと……耐え難い……!!私は、強くなりだい……っ!!」

この2年……いや、それ以前からたしぎちゃんにはこういう気持ちがあつたのかもしれない。  
ない。

スモーカーの後ろで、何も出来ない自分。クロコダイルの時も……確か最後は私に託してくれた。そんな事が続いて今回もヴェルゴだったりモネだったり、結局倒したのは私だった。

「はい、これ」

「…っ…っ…これ、は…？」

「電伝虫、私と連絡する用ね」

たしぎちゃんから私に向かつて「強くなりたいです、教えて下さい」なんて、それはどれだけ思っているも立場上言えるわけが無い。だからここは私が助け舟を出してあげないとね。

「これに電話してくれたら、暇な時はいつでも行くよ。出来れば夜が良いかな。あんまり遠すぎると行けないかもだけど、呼んでくれたらすぐ駆け付ける」

「…海賊のあなたがそんな事をして、一体何のメリットがあるのですか…？私に、何をしろと…？海軍の情報を横流しにしろとでも？」

「…いいよ、そんなの。呼んでくれたらたしぎちゃんに会えるじゃん、充分過ぎるメリットだと思っけど…」

たしぎちゃんはまだ理解してないみたい。私が私である最大の要因…私の強さの源を。

海軍の情報なんて、要るとしてもこれから新たに入隊するかもしれない美女とか、今だとヒナの事とか、それくらいだ。

「私はハーレム女王になる女だよ？美女と夜な夜な会えるのなら…それこそが最高の報酬だよ。…だから気にしないで、いつでも呼んで？」

「……まだ、信用は出来ませんが…、いえ、簡単に信じる訳にはいきませんが…これは、一応頂いておきます」

お、受け取つてくれた！やつたー！たしぎちゃんを墮とすチャンスはまだあるつて事だよね！よしよし…こんな素敵な人を逃すなんて出来ないし、これはラッキーだ！

も、勿論修行はきちんとするよ？浮かれて本来の目的を果たせないなんてたしぎちゃんに申し訳ないし？うん。

でも会うとしたら密会つて事になる訳だから…ああ、たしぎちゃんと密会…！この響きだけで既にメリツト得てる！最高です！！

「えへへ、すつごく嬉しい！私からも連絡していい？」

「そ、それは困りますが…必要だと思えば構いません。…それと、お茶をするという約束はこれで果たせた事になりますか？」

「え？…えー!?お茶つて…これスープだけ!?デートの事言つたんだよ私は！」  
「…ふふ、そういう事なら、その約束はこの先果たされそうにないですね？」

少し意地悪そうに微笑んだたしぎちゃんを見て目を見開かせる。

なんていうか、会話の距離が近くなつた…かな？それつてつまり少しは心を許してくれた的な…、う、嬉し過ぎる…!!

これから先、この電伝虫が鳴くのを楽しみにする日が続きそうで、私は胸の中が暖か

なくなった勢いでスープを飲み干すのだった。



## 171 『女好き、青キジ再び』

「スモヤン中将！俺達もう一度島内へ行ってくる！」

「どうした…？」

宴中に突然どうしたのか、チンピラ海兵達が集まってスモーカーにそう話をしていった。そこにはジェット達の姿も見えて、何故か嬉しそうに顔を綻ばせている。

「毒ガスの弱点をシーザーに吐かせた！こいつらの仲間はまだ助けられる！」

「手伝って貰ってすまねエ…恩に着るぜ海兵さんよ！」

弱点があるんだ、でもそれは本当に良い情報だね！

死んだと思つてた仲間達をまだ助けられるって分かったからジェット達も明るい表情だったのかあ。

「私も手伝おうか？」

「イリスさん…！何から何まですまねエ…！頼む！」

「いーよ、また今度美女でも紹介してくれたらチャラにしてあげる」

「キャハ！最低でも私くらいの子じゃないとダメよ！」

「条件厳し過ぎるだろ!!」

ミキータはスタイル抜群の超絶美女だから…なかなか居ないと思う。…いやでも、私の嫁になってくれた天使達ってみんなめちやくちや可愛かったな…。

「じゃあ、その間に俺達はタンカーの用意だ。ガキ共を送り出す準備をしねエと」

「タンカーはお前らが使うんじゃないのか？」

サンジの言葉にスモーカーがそう疑問を投げかけた。

ルフィ曰く、子供らの出航を確認しないとウチも絶対船を出さないってナミさんとチョッパーが言っているらしい。スモーカー達以外の海軍を待つのも時間がかかるから、タンカーを利用してくれとの事だった。

「宴もそろそろお開きでしょ？ 私はジェット達の応援に回るから、子供達の事はよろしくね！…あ！そのタンカーってもしかしてたしぎちゃんも乗っていくの!? もっとお話ししたかったけど…!! うう…またね…!」

「……ええ、＼また＼」

「…?」

ふっふっふ…首を捻ってますねえスモーカーくん。これは私とたしぎちゃんだけの秘密…あなたになんて言わないやい!!

「ルフィ！ 先に出航してていいよ！ 私は後で追い付けるからー!」

「ああ！ 早く来い!」

大きく手を振ってみなと一旦別れ、島の中へと戻っていく。

聞けば、毒ガスに包まれた人達は、体を包んでいる毒ガスの塊を砕いてやれば割れて動けるようになるのだとか。

包まれた状態で半日以上放置すれば死ぬらしいが、それまではさつき言った手順で助けられるらしい。叶の技の余波で割れてないのが不思議だ…。

「茶ひげの仲間もガスに吞まれてたの?」

「ああ…もう少し早くシーザーの本性に気が付いていれば…! だから一刻も早く助けてやらねエと!」

半日なら時間はまだ余裕があるくらいだけど、それはあくまでも平均的な数値だろう。個人の体力差とか、その時の健康状態にも左右されるだろうから茶ひげのいう通り早いうちに助けた方が絶対に良い。

「だったら…、あ、起きてやがるな…このネボスケめ…!」

「出てきて、王華」

「はいはい、ちよつと寝起きであんまり話聞いてなかったけど、事情は分かってるよ、研究所内と外の仲間を助け出す、でOK?」

「いや、外だけだよ、中には毒ガス入ってないし、研究所はぶつ飛ばしたし」

寝てたから分らないんだよね！いやーでもね、寝過ぎだと思ふよ私は！すつつごく大事な所で起きてくれなかったんだからね、もう！

「ぶつ飛ばしたって……うわ、ホントだ…何コレ、隕石でも落ちたの？」

「いや、その跡は葉の仕業」

「え!? 叶と会ったの!?!」

ええもうホントばつちり会いましたとも！ややこしい事になったけどね！

…というのをさらつと王華に説明しておいた。本気で申し訳なきそうにしてたから、なんだか逆にちくちく言っちゃった私が悪いのではと思ふようになってきた…いや、よく考えたらどつちも悪くないよ、うん！

で、何とか茶ひげやジェット達の仲間も全員見つけ出す事に成功して、固まったガスを叩き割って茶ひげに積み上げていく。便利だなーワニタウロス。

「さ、流石に重い…!」

「ミキータにも残って貰ったら良かったかな、失敗した…。あ、王華もありがと、そろそろ必要無いだろうから女王化クイーンも解くね」

「はーい」

女王化も解除し、だくだくに汗を流す茶ひげにみんなでエールを送りながら元の宴をしていた場所まで戻ってきた。時間で言うと大体1時間は経過したかな…? 仮死状態の

人は見聞色で気配を探れないから探すのに苦労した…私や叶の技の余波で固まった所とは違う場所まで飛ばされてたりもしたから余計に大変だったかも。

……ん……？

「……、茶ひげ、ジェット部隊、ストップ」

…さつきまでは居なかった、デカイ気配の持ち主が近くに居る。

それに、スモーカーの気配が小さくなってる…？まづい、何か起きたんだ!!ナミさん達は…良かった、とりあえず一旦出航してくれたみたい…!

「どうかしたのか？イリスさん」

「…それを確かめてくるから、絶対にここから動かないで」

それだけ言い残して走り出した。スモーカーを死なせる訳にはいかない…!たしぎちゃんが悲しんでしまう…つ!

……んあ!?

「や、やばい…!!」

スモーカーともう1人の新たな別の気配の近くまでやってきた私は、スモーカーを助ける事なく近くの岩場の影に滑り込んだ。

スモーカーを見捨てた訳じゃない。私が助けなくとも…“あいつ”が先に助けたから身を隠す事を優先したのだ。

…スモーカーを殺そうとしていたのは…間違いない、どこからどう見てもドフラミンゴだ。ドフラミンゴはスモーカーにトドメを刺そうと右腕を振り上げて……その状態で固まっていた。何でって…氷だよ……こんな事出来るの、あいつしか…っ！

「あらら…あの女探して来てみりゃ…兄ちゃん、随分面白そうなおトトしてんじやないの」  
「……！」

…あ、青キジ…!!で、出たあ…やばいの出たあ…いや、落ち着け私…これはただのトラウマ…!今の私なら何も恐れる事はない、そう、深呼吸しよう。クールになろう。

何とか心の平穏を保ちつつ状況を観察していれば、凍らされた筈のドフラミンゴは簡単に氷を破って出てきた。

近くにスモーカーも居るから本気で凍らせる事が出来なかつたんだろうけど、ああもあつさり突破するんだからドフラミンゴも相当強いんだろうね。

「…フツフツ…お前と戦う気はない…しかしその男の口を塞げねえんなら、俺も取るべき行動を変えよう！」

「…やめとけ、お前じゃアイツに勝てねえよ」

「癪だが…その通りだ。あんな怪物、2年の月日が経った今となつちや相手したくはねえ…が、俺もバカじゃねえ、対応策は練つてある」

…もしかしてアレ、私の話? いやいや…それは流石に考えすぎかな、自意識過剰って

言われちゃうかも。

「生半可な対策は意味ねエが…ま、精々頑張んなさいよ」

「生半可?…フツフツフ…!! 例えば俺のバックに居るのは…四皇の1人、カイドウ」

「裏の情報を得てる者なら常識じゃねエか」

「そしてもう1人が…」

もう1人…?と青キジが眉を潜める。裏の情報とやらは知らないけど…バックに四皇が居るって凄いな…。

…私も居るようなものか、2人ほど…。いやでも、その内の1人は元四皇だから! 引退してるから!!

「狂神…:…レイだと言ったら…:…どうだ?」

「ツ…!!?」

「!!」

れ、レイ…!?!まさか、ドフラミンゴと組んでるの…!?

何に驚いたかって、誰かと徒党を組む様なタイプだとは思ってなかったから余計に驚いた。あのぶつ飛んだ考えの人でも誰かを利用しようと考えたりするんだ…。ああ、そういえば1番最初に出会った時も黒ひげ海賊団を利用してたんだっけ。

「…:…コリヤ、確かに驚いた。そいつア誰かの面倒を見るようなタマか?」

「いいや、奴は本物の怪物だ、俺では手に負えねエ。だが…厄介な“女王”を潰す駒としてならその効果を存分に發揮してくれる。…フツフツ…そこで隠れているつもり女王にでも伝えておけ」

「うえ…っ?」

バレてた!!? 流星に気配は消し切れなかったか…!

青キジも普通に気が付いていたのか、これっぽっちも驚く事なく静かにドフラミンゴを見ていた。

やがてドフラミンゴは、連れていたバッファローと共にどこかへ飛んで行った…けど、ベビー5とモネはどこだろ、一緒にサニー号へ乗せてくれるのかな? だったら良いんだけど。

「…じゃ、私もそろそろ…」

「あららら、ツレないじゃないの、せっかく2年ぶりに再会したつてのに挨拶も無しか?」

「いやー…結構です…なんて、…はは」

逃げようとした私の前まで歩いてきた青キジに逃げ道を塞がれてしまった。それにしては、軍服着てない青キジってなんか新鮮だなあ。

スモーカーや周りに倒れている海兵達の手当てを優先したら? と言って一旦誤魔化



しておく。

よし…青キジが医療班を呼んでる間に私は逃げるとしますか…。

「それなら俺達が医療班を呼んでくるぜ、あの青キジと知り合いなんて流石イリスさん…！ ゆっくり話をしていてくれ！」

「えっ」

「お、良いのか、そんじゃア頼むわ」

えっ。

何やら勘違いしてるジエツトの言葉に変な声が出ちゃった…。

彼らも良かれと思って言ってくれた事だからなんだか反論もしづらい…。

…ん？

「青キジ…なんか、その足おかしくない？もしかして…」

「ああ…コレか。ちよつと色々あってな、流石にお前にはバレちゃうか」

「まあ…明らかにその気配に違和感があるからね」

青キジの左足…間違いない、義足だ。

しつかりと確認した訳じゃないけど2年前はちゃんと両足あった筈だ。という事はつまり…失ったのは赤犬戦だろうね。

「で、片足失っちゃった青キジさんが私に何の用？」

「大した事じゃねえんだが…… “狂神” の事について確認しておきたいのと、後はただお前と話すのが目的だ」

「ふうん……？」

話すのが目的か……私との会話の中でレイの事や、その他に探りたい何かがあるのかな？ 青キジにしては周りくどいと思うけど。

「狂神レイ……奴は、お前の知り合いだったな？」

「私じゃなくて王華ね、戦争にも居たでしょ？ 白髪の可愛いコ。王華とレイは同郷なの」  
「……オウカつてのは、お前の能力で生み出すもう一人のお前……じゃねエのか？」

あ……この事を詳しく話そうと思ったら長いし、誰にでも言いたい内容でも無いからなあ……。

なんか青キジとは妙に縁があるし、言っても良さそうな気もするけど……。

「まあ、その辺は色々あってね。……で？ レイがどうしたの？」

「俺は奴と接触を試み、一度だけだが話をする機会を得た」

「ふうん………、えっ!? 話!？」

レイと……!? 黄猿をフルボッコにしたって聞いたけど……良く無事だったね青キジ……。もしかしてその足つて赤犬じゃなくてレイから？」

「どんな奴か興味があつたんでな、話をしたにはしたんだが……ありや、まともな思考じゃ

なかった。イリスさんイリスさんとお前の話ばかりでこっちの質問には何も答えねえ  
：向き合つて話をしている筈なのに、俺は奴と会話している気はしなかった」

「因みに、その入州さんつて言うのが王華の事だよ。彼女は私の事も眼中に無いみたい  
だった。…で？逃げ帰つてきたつてわけ？」

「ま…そんなトコだ。知り合いなら代わりに奴について知つている事を聞いておこうか  
と思つてな」

「私もそんなに詳しくは知らないよ、ただ王華の同郷で、何かがおかしいつて事しか」

そもそも私の知る安城 零はあんなに狂気に満ちてはいなかった。彼女がこっちの  
世界に来る意味も分かんないし、あそこまで王華達を殺す事に拘る理由も動機もさつぱ  
りだ。

「奴は…狂神は、間違いなくそう遠くない未来で暴れ出す。奴は一方的に話を進めなが  
らこう言つた…『そろそろだ』と」

…そろそろ。

いろんな意味で捉える事が出来る言葉ではあるが…この言葉を発したのがレイつて  
だけで危険な意図があると瞬時に理解してしまう。

そろそろ暴れるのか？そろそろ王華達を殺しに出るのか？…今はまだ、何も分からな  
いままなんだけど。

「気を付けておく事に越した事はねエだろ？ いずれデツケエ山が来るってのが分かっただけでも “上々” だ」

「レイの事だけに？」

「ん？……、アー……んなつもりは無かったんだが……思ったよりギャグのセンスはねエんだな、イリス」

「うっさいわボケ！」

確かにそうかもしれないけど、そんな事は心の中だけで留めておいて欲しかったかな！！形だけでも笑ってほしいな！！

「なんだ、話に付き合わせて悪かったな、俺の用はこれで終わりだ」

「もう？」

「話したかっただけだと言ったじゃねエか」

「あれホントだったの!？」

本当に私と話すのが目的だったのかこのオッサン……2年前から思ってたけど、この人何でこんなに私を買ってくれてるのか不思議でしようがないよ。

「……じゃあ私行くから、ジェット達やスモーカーにもよろしく言っといて」

「ああ。次会った時は一戦どうだ？」

「結構です!!!」

間違いなく今は私の方が強いだろうに：何かコイツには苦手意識があるせいで戦いたくない。

ていうか私と話したくてパンクハザードまで来るってなんなの？もうストーカーでしょこの人！

：は、早くみんなを追いかけないと！

## 新世界 ドレスローザ編

## 172 『女好き、七武海の取引』

あの後すぐにサニー号へと追い付き、飛び付いてきたミキータに頭を撫でられながらナミさん達にジェットや茶ひげの仲間を助ける事が出来た事を報告した。

船には私達一味の他にも錦えもん、モモの助、ロー、シーザー、そしてモネとベビー5が乗っている。

どうやら私がパンクハザードで青キジとお喋りしている間にこっちでも色々あったらしく、作戦の一環としてローがドフラミンゴに王下七武海の脱退を求めると交渉をしたらしい。シーザーを引き渡す代わりに脱退しろ、との事だ。

普通に考えればシーザーを見限って無視すれば良い話だと思いが、このシーザーが請け負っていた“SAD”という人造悪魔の実を造り出す薬品…これのメインの取引相手が“四皇カイドウ”だとか。要はお得意様って訳だ。

ドフラミンゴとしてもカイドウに余計な刺激を与えて怒らせる訳にも行かないという事らしいが…バックにはまだレイもついてるって言うていたからそれが不安要素ではある。

で、シーザーを引き渡す場所はドレスローザらしいのだが、何とも都合の良い事に錦えもん達もドレスローザに用があるのだとか。話を聞けば、錦えもん達の仲間の1人がドレスローザで捕まっているらしいのだ。

「私達はローザがドフラミンゴを引き付けてる間に「SMILE工場」を壊したら良いんだね？」

「ああ」

SMILE工場とは、その人造悪魔の実を製造している工場の事だ。SMILEって名はそのまま人造悪魔の実の名前だとか。

「シーザーを引き渡す場所はグリーンビット、普段はあの地にそう易々と踏み込む事は出来ねエが…今は厄介な「魔女」は居ない。奴はドレスローザで開催されるコロシウムに出場するからだ」

「あ、それも出たいんだけどいい？」

「…四異界が揃うのは出来れば避けてエんだが…」

「じゃあ、こう言ったらどう？私がそのコロシウムに参加する事で、その厄介な「魔女」さんが味方になるかもしれない」

ほんの一瞬首を傾げるローザだが、私は嘘は付いてない。

王華を寝かせない様にして叶の前で王華を召喚するだけで彼女はコロツとこちら側

に墮ちる筈だ。四異界だなんだと呼ばれたって仲良くしちゃいけないなんて決まりはないでしょ？

「根拠はあるのか？ デリケートな作戦だ、お前の行動一つで俺達のやっている事全てが無駄になる可能性もある」

「根拠は…：やっぱり愛かな、それしかない」

「諦めるトラファルガー、それにコイツの言ってる事は嘘じゃねエ」

うそ…：ペローナちゃんが助け舟を…！？ 嬉しい…！ 涙が出ちゃう！

「魔女は女だろ、ならコイツをぶつければ勝手に墮ちて返ってくる」

「え、いや、私は別に叶は」

ギロ、と鋭くペローナちゃんに睨まれた。黙ってるって事ですぬはい。

ん？ 待てよ…？ 女に私を当てがわせたなら勝手に墮ちる…？ つまりペローナちゃんは自分が墮ちてる事を自分で認めてくれた！？ 初めてかも！！

「…そ、そういう訳だ、コイツに任せてみるのもアリだろ」

自分が何を言ったのかを理解したのか、頬を赤く染めながら早口で会話を終わらせる可愛いペローナちゃんはあはあぺろぺろ。

ローもペローナちゃんの申し出に不満が無かったのか、そこからは特に何も言わなかった。



「そろそろ日も沈むね、私ちよつとお風呂入つてくるよ。…そうだ、モモの助も一緒にどうう？」

「え」

「何日もお風呂入つてないんじゃないの？まだ子供だし、付き添つてあげるけど」

「…いい、イリスちゃん、ダメよ！いくら子供だろうともイリスちゃんの玉のように綺麗な裸は私達だけのモノ！」

思つたよりミキータが猛反対してきた。なんなら泣きそうだし…嫁に泣かれるのはキツイ。

「そうだぞイリスちゃん、男つてのはガキの頃から毎日女性の裸を想像する様な奴しかいねエ」

流石にそれは嘘…でしょ？え、嘘だよ？サンジが特別なんじゃないの…？

「それにイリスはここにいる女の中でも一番モモの助と近い外見してるんだから、刺激だつてその分強い筈よ、代わりに私が一緒に…」

「だ、ダメ!!ナミさんの体を見ていいのは私だけだもん!!」

「ほら、あんたはそういうでしょ？私達だつて同じ事よ。仮にモモの助がまだ4、5歳ならともかく。あんたは自分の事に無頓着過ぎるわ、自分が可愛いってこと忘れてるでしょ」

「忘れてないよ、私は可愛いー！」

この顔は自慢だからね、初めて見た時は神に感謝したくらい。あ、勿論ナミさんと比べたらかなーリランク下がるけどね。そりや当然ですよ。

「どうせあなたの事だから私と比べると自分なんてって思ってるかもしれないけど、あなたの顔の良さは本当に人形…いや、天使を疑う程なのよ？私も可愛いけど、私からすればイリスの方がずっと可愛いわよ、本当に理解してるの…？」

はは、何を馬鹿な事を言ってるのナミさん、私よりナミさんの方がずっと可愛いってば。

……って言いたい所だけど、間違いなく平行線だろうからグツと堪えた。

「ごめんねモモの助、ダメだった」

「かまわぬ、せつしやは1人でも平気ゆえ」

そう言ってくれて助かる……んだけど、何故か錦えもんやサンジ、ブルックがガッツポーズをかましていた。なんで？

そうして夜は更けてゆき…朝が訪れた。

ふわあ…とあくびを溢しながら上半身を起こす。なんかミキータが私の胸を鷲掴

みにして離さないけど、これで寝ているのだから彼女は本当にブレないなあ、と苦笑い。彼女と反対側の右側には…今日はロビンが居た。いつも早起きのロビンだけど、私の隣で寝る時は決まって起きるのが遅い。理由は…自分で言うのもなんだけど、きつと私とギリギリまで一緒に寝たいから…だといいな。

ちなみに、普段起きる順番はロビン↓ナミさん↓私↓ミキータ↓ペローナちゃんの順だ。ペローナちゃんは時に昼まで寝てる事もあった程で、かなーり朝に弱い。

そう言う訳なので今ナミさんはこの場に居ないのだけど…多分測量室だろう。ナミさんの夢を完成させる為にあそこで良く籠もっているのだ。

私起きている時なんかは、呼ばれて楽しくお喋りしながら描いたりする。そんな話しながら出来るような作業じゃないと思うんだけど…やっぱりそこんこの技術は航海士として抜きん出てると思う。

「ア〜〜サ〜〜でーすヨホホホホホ!!アイエ〜〜♪しーんぶんが〜!来てますよ〜  
〜♪ハイツカマン!」

「…ん」

ブルツク?こんな早くに目覚ましなんて珍しいね。

ロビンとミキータもその音で軽くあくびをしながら目を覚ます。ペローナちゃんは

変わらず寝ているけど、とりあえず起こそう。

…あ、そっか。ドフラミンゴが七武海を脱退したのかどうかの記事が載ってるか確認しなくちゃいけないのか。

それもあつてか、軽く揺すっただけでペローナちゃんももぞと起き上がる。みんな顔を洗って着替え、芝生のデッキに集まった。

…あ、ちなみに、私はもうメイド服じゃなくて普段着です。

「ナミさん、おはよ」

「おはようイリス、みんなも」

「そっちの2人もおはよ」

流石にもう目は覚めていたのか、海楼石で縛られた挙げ句ロープでぐるぐる巻きにされていたモネとベビー5もこの場に居た。

ほんとはこんな扱いしたくなくて全力で抗議したけど、ローに懇々と正論で言い負かされて今に至る。

具体的には、「敵意のある人間を拘束も碌にせず同じ船に乗せるって事は、お前の嫁を常に危険に晒すって事になるが、いいか？」と言われました、その通りです…。

「…お、おはよー」

「……」

「……」

もー！2人揃って無視ですかそうですね！でももう少しお話しして欲しいな！仲良くなりたいたいだよ私！

「ふわあく…、ドフラミンゴの野郎はどうなってるんだ？」

ローが広げる新聞をペローナちゃんが幽体離脱して上から覗き込み、私達も新聞を囲って覗き込んだ。

その新聞の見開きにはこう書いてある。

『ドンキホーテ・ドフラミンゴ「七武海脱退」、ドレスローザの王位を放棄か!？」』

「…ほ、本当に辞めやがった…!!」

「王位って…ドフラミンゴって王様だったんだ」

「鳥の国か？」

ドフラミンゴだから鳥の国って考える辺りがルフィらしいけど、まあそんな事はまずないだろう。

それよりも私は…少しこの記事に違和感を覚えていた。いや違和感と言うより、アツサリとコトが進み過ぎてる事に対する不気味さかな。

レイが関わってる事とは関係なく、ドフラミンゴはそんなあつさり色々手放す様な性

格じゃない気がする、多分。

例えそうしなければカイドウの恨みを買うかもしれない、という状況だとしても…何かしらの行動には出てくるだろう。

(つて思ってるんだけど、どう?)

『やるね、その通り…ドフラミンゴはそう簡単に言う事を聞く様な相手じゃないよ。まずその脱退したつていう記事、それは誤報だったつて速報が直ぐに飛ぶ。だけどその頃には既にローはグリーンビットに居るから…まあ、つまるところ騙されてるつて事だね』

ああ…そういう事か。

『その上グリーンビットには大将も出向いてくるし、ローも苦戦を強いられる』

(え、それつて大丈夫なの?)

『大丈夫かと言われれば…どうだったかな、死ぬ事は無いのは絶対だよ、命は絶対大丈夫』

(なら、この交渉が決裂する事実だけでも伝えておこうか。グリーンビットに行かないつて選択肢は無いだろうし)

シーザーの誘拐も果たし、一応形だけでもドフラミンゴの七武海脱退は為された。

行かなければ状況は動かないのだから、ローとしても行くしかない筈。

「どうしたの？イリス」

「ん、なんでもないよ、ちよつと王華と相談をね。どうやらこの七武海脱退の情報はウソらしいから」

「…何？」

私の言葉にローが怪訝な顔をした。まあ…その反応は正しいよね。普通いきなりこんなこと言われても信じられないと思う。

「グリーンビットにローが到着する頃には、そこに大将も居るんだって。誰かまでは聞いてないけど…ま、良くない流れなのは確かだよ」

「…ていうかあんだ、王華と話せるのは夢の中だけとか言つてなかった？」

「2年前まではそうだったけど…なんか最近は普通に話せるの。何でかは分かんないんだけどね」

「…それより、どういう事だ女王屋、何故そう言い切れる？」

「王華が言ってるから、としか言えないかな。詳しくは話せないけど…私はちよつと先の未来が分かるの」

これは最初キジに説明したウソだけど、強ち間違っているという訳でもない。勿論正解でもないけど。

ローは考えるように眉を寄せるが、その顔には疑いの色が濃く出ていた。

「信用出来ないならそれでもいいけどね、王華が言うには別に死なないみたいだし、それに今更行かないって事はないでしょ？」

「……ああ、俺がそこで時間を稼ぐ事で工場の破壊に時間を使える。仮にその話が本当だったとしても、俺はグリーンビットまで行くしかねエ……。根拠が無い話を信じたくはねエが、そういう事もあるかもしれねエ、とは思っておく」

「うん、気を付けて」

……ていうか、私がグリーンビットに乗り込んでドフラミンゴをぶつ飛ばしてきても良いんだけど、叶の件もあるしなあ。ここは素直にローに押し付けておくとしよう。

「おーコイツらも同盟組んだんだってよー」

「ん？」

キッド、アプー、ホーキンスの海賊同盟？……てか、私達とローの同盟も記事になってるけど!?……ってそりやそうか、普通にスモーカー達の前で話してたっけ……。

「キッドは知ってるけど他の2人は知らないね」

「その2人も最悪の世代と呼ばれる人達よ。イリスやルフィ達と同じ様にね」

へえ……ロビンが教えてくれないとずっと知らないままだった気がする。自分で言っちゃお仕舞いだけど、そういう情報に疎いからなあ……。私の頭の中は基本嫁達の事で埋め尽くされてるし。



「他所は他所だ、ドフラミンゴに集中しろ…。奴が七武海の称号を放棄していない可能性があらうとも、作戦は予定通り進めるしかねエ。まずは奴と連絡を取る」

「や、奴ってドフラミンゴか!？」

「当たり前だ」

相変わらず腰が引けてるウソツプに構う事なく、ローは電伝虫を用意してドフラミンゴへとかけた。

仮にも王…こんな朝早くにいきなり電話をかけた所で繋がるとは思わなかったんだけど、予想に反して何コールも待つことなく奴は電話に出た。こうなる事が分かっててスタンバイしていたのだとすればかなり面白い絵面だと思う。

『俺だ、七武海をやめたぞ』

「…そうか。…約束通りシーザーは引き渡す」

『そりゃあその方が身の為だ。ここへ来てトンスラでもすりゃあ…どういふ目に遭うかお前は良く分かってる』

ローの事を知った風な口きいてるけど、何かしらの繋がりでもあったのかな？

それよりドフラミンゴの声を聞いて心底安心した顔をしているモネにムツとしてしまふ。そんな忠誠心今すぐ捨てて私の嫁になつてよお！

…とまあ少し話は逸れたけど、話の内容はこうだ。まずはシーザーの声をドフラミン

ゴに聞かせて、交渉の材料は生きている事を伝える。

そして、今から8時間後、ドレスローザの北の孤島にある「グリーンビット」、その南東のビーチにて、午後3時にシーザーを投げ出すと一方的に伝えて電伝虫を切った。

ちなみに、普段ならグリーンビットを取引場に選ぶ事は有り得ないそう。それは前も聞いた通り叶が居るからで、彼女は私が思っているよりもこの世界では大きな存在らしい。

「作戦の内容は大体理解したけど、目的の工場はどこにあるのか知ってるの？」

「悪いが、そこだけどうしても情報を得られなかった。作戦を執行するには不透明なままだが…こればかりは任せるしかねえ」

「キャハ、敵の大切な工場なら、何か秘密があるんじゃないかしら？普通は工場が分からないなんておかしいもの」

それはそうだ。例えば誰かの能力で隠しているとか、それこそ空を飛んできるとか地下にあるとか。色々考えられるけど…ま、行ってみれば分かるか。

「ロー殿、グリーンビットと申しておったが…」

「ドレスローザに船はつける、安心しろ」

ああ、錦えもん達は仲間を助けなきゃいけないんだよね。それも出来れば手伝ってあげたいけど…私は私で忙しくなりそうだからなあ…。

「ローはドレスローザに行ったことあるの?」

「…ない、奴の治める王国だぞ」

「そっか、じゃああんまり細かい作戦も立てられないって事だね」

「だが、何の計画も立てずに乗り込める程甘くはねエ筈だ。工場を搜索するにしても固まって動けばそれだけ怪しまれる可能性は高くなる…。行動する班を分けた方が良い」なるほど、確かにその通りかも。

…ドフラミンゴやその部下に負けるつもりはないけど、心配なのはレイだ。奴がどう今回の件に絡んでくるのか…。

「飯出来たぞー、考えるのは良いが、まずは腹ごしらえからだ、野郎共」

「うほー! ハラへった! 朝メシなんだ!」

「サンドイツチだ」

「あ、私はフルーツサンドがいいなー、みかんいっぱい」

「俺はパンは嫌いだ。…:はっ:!!」

完全に私達のノリに染まってきてるローににまにまと笑いかけながら、私はモネとベビー5の体を抱き上げて一緒にダイニングへと向かった。

体縛ってるから、あーんって出来るよね! ここで親密度を高めようと思うのです! 体縛ってるけど!!

# 173 『女好き、メイド選手登録』

「……………ぐすつ…」

「…オイ、こいつどうした？」

「ああ…捕らえた人達に話しかけても無視されるって言って、さっきからずっとあんな調子なのよ」

「アホか…」

うう…誰がアホじゃい…。ゾロの癖に生意気言うな…なんて言う気力も無いけど…。

『今日も可愛いね、2人共☆』

『……………』

『私はあなた達を絶対に幸せにしてあげるよ！』

『……………』

『え、えーつと…………ふ、布団が、ふつとんだ！…………あはは』

『……………』

『うわーん!!』

：「みたいな感じで、あなたと話す事なんてありません、て言うような顔で私が話しかけても目を瞑って無視するんだもん！どうしたらいいのー!!もう昼時だつていうのに仲良くなるどころかお話しすら出来てないし！」

あ、そういうえば、朝ご飯を食べている時に錦えもん達の目的も聞いたんだつた。

どうやら錦えもん達は「ゾウ」と呼ばれる場所を目指して海へ出たらしく、しかも、その場所はシーザーを引き渡して工場を壊した私達の次の目的地だったのだ。

そこにローの仲間が居るらしく、何から何まで奇遇だけんどそこまで錦えもん達も同行する事になった。ていうかルフイ曰くワノ国まで行くとかどうとか。

ドレスローザに用がある理由としては、そこで仲間の1人が捕まっているから。

ゾウに向かったのは良いけどあえなく遭難した錦えもん達は、残る1人を除いて全員がドレスローザに漂着した。そこで運悪くドフラミンゴ達に追い回され、モモの助が慌てて乗り込んだ船がシーザーの人体実験に利用される予定の子供達が乗る船だった：という顛末だ。

錦えもんも残り1人の同心、「カン十郎」により何とか海へ逃げ、パンクハザードに行き着いた：という訳である。つまり錦えもん達がドレスローザに向かう理由はそのカン十郎を助ける為だった。

「はあ…それはまあ良いけど、モネもベビー5も私と少し話してはくれないのかなあ…  
ね、お願い〜」

「!!…わ、私が必要なら…」

「…ベビー5…!!」

私の言葉に口を開こうとしたベビー5にモネが目を見開いて名前を呼んだ。呼ばれた彼女はビク、と体を震わせて顔を俯かせる、パワーバランスはモネの方が上らしい。

「お!!お前からア〜! 島が見えたぞオ!!」

「もうそんな時間なんだ」

「おオ!?なんだこのでつけエ島は!!」

どうやらドレスローザに着いた様だ。見た感じは大陸で、ここからではドレスローザの街並みはさっぱり見えない。

どこまでも断崖絶壁の崖だけど、船を停める様な場所はあるのかな?

「あ、あつちに船を停められそうか海岸があるわ」

良かった、普通にあつたみたい。

私達はそこに船を止め、錨を下ろしてドレスローザの地へ足をつけた。

左右は岩壁で、後ろは私達を通ってきた海だから前に進むしかなさそうだね。

「所でさ、ドレスローザって王様が居るくらいだから結構大きな国なんですよ? 私達つ

て変装しなくて大丈夫かな？」

「勿論必要だ、今朝の新聞で大きく報じられたからな…対策もナシに街を歩けば直ぐに捕まる」

「変装ならば拙者に任せて貰おう…ドレスローザは皆、この様な衣装にござる故、街に溶け込める様お主らを変身させてしんぜる！」

そう言つて錦えもんが取り出した紙には、男は襟シャツ、女はすっぱだかと書かれ、ご丁寧にもその通りの見本絵まで描いてあつた。

「へえ…つまりあなたはウソをついてナミさん達をこの場で裸にしたいつて言つてるといふ事でもいいの？」

「やめとけ錦えもん、イリスちゃんも普段はただの可愛い女の子だが、突つ込んだじゃいけねエラインつてのがあるんだ」

「…ぬ、当然、冗談にござるが…」

「そういう冗談は通じねエぞ、怒るとおつかねエからあんまり怒らせるなよ」

ルフィにすらこう言われるつて、私…もしかして普段の行動を見直した方が良いのだろうか。

いやでも、許せない事は許せないし。

「おい、お前にこいつを渡しておく」

「?ビブルカード…?」

ローがビブルカードを取り出して少し千切り、紙片をナミさんに渡した。

そのビブルカードの先にはさつき話した『ゾウ』があるらしく、俺達に何かあればここへ行け、との事だった。

何故ナミさんに託したのかと言うと、それは今回の班決めが理由になっている。

シーザー引き渡しチームがウソップ、ロビン、そしてローとシーザー。

サニー号の安全確保チームがチョッパー、ブルック、モモの助、サンジ、ペローナちゃん、ナミさんだ。モネとベビー5の2人も船に残ってもらう事になっている。

そして残りのメンバーが工場破壊チームだ。攻撃力に特化したメンツが選ばれたと言う訳だね。

「…あれ、ルフィ達は?」

「え、サンジもいねエ!おい!おれ達は誰が守ってくれるんだ?!」

船番チームはサンジが居なくても戦力に問題は無いだろうけど、居てくれた方が私も安心なんだけどな、ナミさんも居るし。

「麦わら屋達はどうした…!あいつら作戦のメインだぞ…!!」

「キャハ!船長キャプテンはいつもこんな感じよ。じゃあ私達も着替えて行っていくわね」

着替えとは、さつき言ってた変装の事だ。当初は錦えもんの能力に任せる予定だった



けど居なくなつたので持ち前の服でどうにかするしか無くなつたという訳である。あいつらほんと……!

結局私はパンクハザードの時と同様のメイド服に宴会用の陽気なデザインの仮面を付けて顔を隠し、ミキータは普段着ない様なヒラヒラのドレスを身に纏つてメイドとご主人様を装う事にした。

いざという時にすぐ戦闘出来るよう、ドレスの下は動きやすいいつもの服装だ。

「みんな頑張つてね！ナミさんもペローナちゃんもロビンも気を付けてー!!」

「あんたもね。あと、女の1人や2人は引つ掛けてきなさい!」

「はーい!」

そうだ……ドレスローザは大国!沢山の美女と出会える筈!!待つてろまだ見ぬ未来のお嫁さん達……!!!

\*\*\*

「ここがドレスローザ……！」

おお……人でいっぱいだ！

……なんか人じゃ無さそうなのも歩き回ってるし、なんなら喋つてもいるけど……あれはなんだろう。

「オモチャ……？かな。まあいいや、それよりいい匂いがあつちからもこつちからも漂ってくるんだけど」

花の香りだったり、料理の匂いであつたり……後は、女性の素晴らしい匂いとか!!

見渡せば、結構至る所で踊り娘達が踊っているのが見える。この国の文化なのだろうか、みんな素人目で見ても洗練された綺麗な踊りだった。

「……？」

その踊り娘達の中で1人だけ、何故か目に付く人がいてじつくりと観察する。周りの踊り娘達と比べても頭一つ抜けて上手い踊りをしているから……という訳ではなく、どこかで見た事ある様な気がしてならないのだ。

……ちよつとだけならバレないでしょ。

さつと仮面を外してじーつと見つめる。あの栗色の髪……それに、あの顔立ち……私は

どこかで、彼女の事をー。ー。

「…!!」

「あ、まずいまずい…!」

不意にその女性と目があつてしまい、私は慌てて仮面を被り直した。ば、バレてないよね…?

目が合った瞬間に目を見開いていたからバレたのかと思つたけど、踊りは続けてるから…私の気のせいだったのかもしれない。

「先に(づ)飯食べる?」

「あ…イリスちゃんとデートするなら、お弁当を作ってくるべきだったわ…!!く…失敗した…!!」

「デザートとしてミキータを頂けば大丈夫じゃない?」

「!!…イリスちゃん、それだわ!!」

あの、当然キス止まりですよ?おーい、分かつてますかミキータさん。

分かつてなさそうなミキータと一緒に、私達は近くの飯屋へと入った。

今更だけど私達つて主人とメイドに見えてるのかな?仮面つけた怪し過ぎるメイド…ミキータは綺麗だから本当のお嬢様みたいだけど。

「パスタの気分なんだけど、魚介類のやつあるかな…つて、えええ…う…なにこれ…」

店内に入った瞬間に目に飛び込んで来たのは、まるで地震でも起きたのかと勘違いしてしまう程の荒れもようだった。客は騒めきだち、テーブルやイスなどはその辺に転がっている始末。

その上、何やら隅の方の床に巨大な穴がぽっかりと空いていた。すつごい重たい物で床を押し潰した…みたいな感じで、とてもではないがご飯を頼めそうな雰囲気ではない。

「…ゴホン。…申し訳ありません、ここで何かあったのですか？」

「あ、ああ…実は……」

とりあえず近くに居る女性に話を聞いてみる事にしたけど…良かった、キャラ作りの為に敬語を使ってみたけどバレてないみたい。

肝心の内容はこうだった。さっきまで店内では『ドンキホーテファミリー』の下っ端達によって賭けルーレットが行われていたらしい。

それもただの賭け事ではなく、盲目のじいさんを騙して、目が見えないのをいい事に分達の都合の良いよう事を進めていたのだとか。つまりじいさんが絶対に勝てない様仕向けていたという訳ののだが…そこに現れた一人の男が不正を告発し、騙されていた事に気付いた盲目のじいさんによって下っ端達はあの穴の底まで押し潰された…とのことだった。

「…面倒な事をしてくれましたね、私達は昼食を摂りに来ましたのに」

「ここら辺で飯屋となると、コロシウムの方へ歩けばもう一軒あるわ。ここより値は張るけれど、あなた達なら多少高く付いても問題なさそうだし」

「本当ですか？それは大変貴重な情報、どうもありがとう御座いました。それでは私達はこれで失礼します」

怪しまれる前にそそくさと会話を終わらせて店を出る。コロシウムの方…か、そつちに用もあるから丁度いいや。

教えて貰った通りに、私達はコロシウムの方へ進んで昼食を済ます。いつコロシウムが始まるかも分からないので急いで食べたけど、確かにちよつと高かった。魚介パスタが3000ベリー…単品だったハズなんだけどなあ。ナミさんに言ったら勿体ないって怒られちゃうかな。

なんてね、私が食べたんだったらナミさんは「美味しかった？」って天使の微笑みで聞いてくる事は簡単に予想出来る。だって私の正妻だし、可愛いし天使だし良い女だもん。

そして、遂にコロシウムへと辿り着いた時には既に受付が終了しようとしていた。受付は綺麗なお姉さんだ、俄然やる気が出てくるといふもの!!

「一般からの受付、他には誰か居ませんかー!」

「はい、私が」

軽く手をあげて受付カウンターみたいな場所へ歩いていく。周りに集まっているのはまだ会場に入っていない観客達だろうか、私を見る目はなんとも居心地が悪い。

「オイオイ…大丈夫かあんな小娘が」

「今日の大会の出場者知ってるのかよ」

「それより隣の女ア、ありやア上玉だぜ」

「……、」

「はいストップ。ダメよイリ…、ゴホン。…えーと、とにかくダメよ、こんな所で騒ぎは起こせないわ、私の事は大丈夫だから」

「むー…」

ミキータに止められてしまった…、私のミキータを見て舌舐めずりした奴をぶっ飛ばそうと思ったただけなのに！

「お名前は？」

「えつと…」

しまった…受付だから名前は当然聞かれるか…。前世と違って身分証は要らないだろうから適当に言っておけば良いんだろうけど…どうしようかな。

「あ、アイリスです、アイリス」

「アイリスさんですね、かしこまりました。少々お待ち下さい」  
そう言って受付の女性は奥へと引っ込んでいった。

私の名前にアを付けたただけだけど、だいぶ名前の印象変わるしメイド服だからバレやしないだろう。

私も本名に近い方が呼ばれた時反応しやすいし。

「お待たせしました、こちらがアイリス様の選手番号になります。参加ブロックはDブロックです、お忘れなき様」

渡されたのは『IRIS』と書かれた大きな背番号札だった。名前の少し上に私の番号が書いてある。えっと…0557番らしい。

誰にでも見える所に付けてとの事なのでミキータにお願いして背中につけてもらい、受付の人の案内で選手の控え室へと向かった。

ちなみにだが、ミキータとはここで一旦別行動を取る事になっている。コロシウムに用があるのは私だけだし、その間に彼女は工場の場所を探るらしい。あんまり一人で行動して欲しくはないけれど、どうやら猛者揃いらしいこのコロシウムに参加させるよりは安全かもしれない。

「こちらが選手の控え室です、出番までご自由に」

…ふう、ここからは敬語を使う必要も無さそうだから助かるよ。

それにしても凄い熱気だ：強いオーラもそこら中から感じるし、あとちよつとむさ苦しい。男女比が偏り過ぎてる気がする！

視界に映るのはほぼ全員男で、広いとはいえこの控え室に500人は下らないだけの人数が詰め込まれているのではないだろうか。しかもみんながみんな試合前のウォーミングアップをしているせいで余計暑苦しく感じる。

「…まさかこれ程まで熱気のある大会だったとは知りませんでした：場所をここに指定したのは間違いだったかもしれません」

「あ、叶」

「……数日ぶりですね。それより：ちゃんと来てくれた様で何よりです」

げんなりと言った様子の叶がハンカチで汗を拭いながら近づいて来た。その顔にはまだ敵意が若干含まれているけど、今は王華も起きてる。：周りの人達に正体を気付かされたくないからここでは出せないけど。：まあ、このコロシアム中の何処かでは私の正体を晒す必要は出てくるだろうけどね。

「私はDブロックですが、あなたは？」

「私もDだよ」

「…そうですか、それは良かったです。あなたがまだ私に何か伝えたい事があるとしても…後はリングの上で語りましょう。私もそこで…全霊を込めて応えます」



「へえ、パンクハザードでは私に傷一つ付けられてなかった様な気もするけどなあ？」

ニヤニヤと意地悪く言う彼女がムツとしてそっぽを向いた。

「前回とは違います！」

そんな叶の反応に頭の中の王華が騒がしくなった。具体的には…可愛い！とか、早く話したい！とか…気持ちには分かるけど、流石に煩いかな!?

「それでは、私はコレで。…それと、改めて…パンクハザードではみつともない姿を見せてしまい申し訳ありませんでした」

「はは、うん、気にしないで。じゃあまたリングで」

ヒラヒラ、と手を振って叶と一旦別れる。やっぱり叶は真面目な性格なんだなあ…。それに全然気付いてなかったけど、叶と話してただけで周りから注目を浴びていたらしい。私に刺さる好奇の視線の数々…：うう、居心地が悪い…。

## 174 『女好き、早い再会』

「へへへ……こじや女は珍しいからな、魔女サマも心配で声をかけたって訳だ」

「今までも『無敗の女』くれエしか居なかつたからなア」

へえ……無敗の女か。私を遠巻きに観察しながら零した言葉だろうと、私にかかれば一語一句聞き逃す事なく耳に入れる事ができる。

正直、これだけ甘く見られているのに誰も私に絡んで来ないのは予想外だった。こういう場だから、私みたいな女は試合前から狙われるモノだとばかり……。

確か試合はAブロックから順に行われるらしいから……うわ、じゃあ私最後じゃん。暇だ……。

まあ、Aブロックの試合は既に始まつてるんだけど。

強者が集まつてると言つても、ぶつちやけた話叶以外は大きく脅威でもないだろうから叶を説得した後には適当に優勝して賞金頂いておこう。ナミさんにプレゼントすれば喜んでくれる事間違いないし！

「……ん？アレは……」

する事もないのでその辺を歩いていけば、戦闘準備室と書かれた部屋の中にルフィが

居た。背中にはルーシーと書かれた布を貼りつけてあるから、偽名出場らしい。

「やつほー、ルーシー」

「……………、あ、おれの事か！あーイリ……………むぐ！」

「ちよつ……………あのねえ、私はここではアイリスって名前だから…」

ルフィにひつそりと耳打ちして、視線だけで辺りを見渡す。…よかつた、怪しまれてなさそう。

ルフィもそうだけど、私も今や悪い意味で有名人だ、名前だけで正体を勘づかれたつておかしくない。…そう考えたらルフィって、今仮面つけてるのに良く私って分かつたよね。シャボンディでは全然気付いてくれなかったのに……………！メイド服のおかげかなあ。

「わ、悪い……………」

「……………それで、ルーシーがどうしてここに？」

「ミンゴの偉い部下がここに居るって聞いてよ、工場を場所を教えてもらう為に参加してろってフランキーが」

「潜入って事だね、なら尚更正体を気付かれる訳にはいかないじゃん」

偉い部下下つていうのは、幹部連中だろうか。幹部達に聞けば工場を場所を教えてもらえるとは思えないけど……………モネ達と違つて無理矢理聞き出せるし、まだ可能性はあるかな。問題はその幹部がどこに居るのか、という事だけ……………このコロシアムの運営側なの

か、それとも出場者なのか、はたまたそのどっちもなのか。

うーん…分かんない！考えるのやーめた、適当に勝ち上がったたり、それこそ優勝すれば自ずと会えるよね。

「それよりイ…アイリス！は景品何か知ってんのか？」

「優勝の？賞金じゃないんだ、全然知らないよ？」

「それがよ、司会のおっさんがさっき言ってたんだ、優勝すれば…」

「……異界の悪魔の実が手に入る、とね」

なんか凄い顔の整った人がいきなり話しかけて来た。周りがウオーミングアップをしている中、彼は気負わず薔薇を啜えている程だ。ていうか薔薇を啜えるっていつの時代の人だよ。

「異界の悪魔の実？」

「言葉の通り、かの四異界レベルの悪魔の実という事さ」

は…つまり、今までの常識ではありえない程に強力な効力を得る事が出来る実って事だね。

「あなたは？私はアイリス、こっちはルーシー」

「俺はルフィ、海賊王になるおとつ…ごぶツ!?…る、ルーシーだった…たはは」

「…フフ、本当にキミが麦わらのルフィだったら…今ここで殺していたよ」

殺す?…顔に似合わず物騒な人だなあ。咄嗟にルフィの後頭部を叩いて止めて良かったかも。声からして男の人だろうけど…女装されたら性別分かんなくなりそうだ。「僕が新世界に入ったのは3年前…2億を超える美しきルーキーの登場に世界がざわめいていた。新聞にも連日登場…手配書という名のブロマイドは全て女性達に盗まれる始末…」

「なぬ!?それはダメだよ!私が墮としたいのに!」

「うん?どういう事だ?…いや、それより…当時の僕は輝いていた。何人の女性に求婚されたか分からない!…それがどうだ1年後!!全てを掻き消す「頂上戦争」…!湧き出て来る後輩のルーキー達は最悪の世代ともて囃され獅子奮迅の大立回り!!更にそこへ現れた「四異界」!!記者達はもう僕に見向きもしない!!だから殺すんだ…目障りな後輩達を全員つ!!」

逆恨みじゃん…。あのルフィですら、それは逆恨みって言うんだぞ…と呆れていた。

それにしても私達の1つ先輩かあ…なんだかんだ言っても新世界を3年生き延びてるって事でしょ?実力は確かなんだろうけど…殺されてやる訳にはいかない。

「…ふー、じゃあ、僕は少し風に当たって来るよ。そよぐ風に揺れる僕の髪は、それだけでどんな名画をも超える美となる。困った事に、今は見せる女性達もリングに釘付けだね」

なんかまたズレた事を言いながら去っていった。

強さもそうだけど、個性的な人も多いよねこの大会…。

…それに気になるのは賞品の悪魔の実…。私達の食べた悪魔の実と同じく、従来では有り得ないというのなら…その実は今までに発見された事のない新種のハズ。それだけで異界の悪魔の実と断定出来るって事は…もしかしたらその実の提供者はレイかもしれない。

ドフラミンゴのバックには彼女も居るんだから、その可能性も充分考えられるだろうし。

「このおっさんの像カッコイイなア」

「ん？」

一人あれこれと考えていれば、ルフィがこの部屋に飾られてある銅像を見てそう呟いた。

えーっと…名前は、キュロス？コリーダコロシアムの歴史上最強の剣闘士で、3000戦全勝、無敗の男。その内敵の攻撃を受けたのはたったの一太刀だけ…か。いや、化け物かな？

「その人に興味ある？」

「え？」

「誰だ？」

銅像を見上げる私とルフィに近寄って来たのは、可愛いお声の美女：だと思ふ。顔の大半を隠して黄金の兜のせい、口元と、後はうっすら目元しか見えない。そこだけ見るとかなりの美人だけど：問題はその装いだ。ピキニですか？と突っ込みたくなるくらい肌を曝け出して、ぶっちゃん目やり場に困る。端的に言えばピキニアマー。

彼女は銅像に書かれている私を読んだ内容を読み上げ、だけどこの国中の誰も、彼の事を知らないと言った。

「知らない：？あ、あと嫁になつて」

「へ？あ、えつと：私はレベツカ、剣闘士よ。この国のお年寄りも剣闘士達も、誰一人彼に会つた事がないの」

レベツカちゃんかあ、聞き間違いだと思ふ事にしたのかな。ふつつつ、聞き間違ひじゃないよ可愛こちゃん！

：く、自重しなければいけないと言ふのに自分を抑える事が出来ない：!!

「ドレスローザで最も不思議な銅像よ。「剣闘士キュロス」は実在したのか、誰かの空想なのか：いつから、なぜここに銅像があるのか。私達の知つている情報はこのプレートに刻んである事のみ、誰も知らない人だけ：誰もこれを撤去しようとはしない。：そ

れも不思議」

「撤去しないのは、この銅像に魅力があるからじゃない？ 私も不思議とこの像は気に入っちゃうな」

「おれも好きだぞ、男らしくて！」

「…私も好き」

「やっぱり嫌いだよこの銅像、レベツカちゃんに好きって言われてるし！ 私が好きって言つて欲しいのにー!!」

「よオ！大戦士レベツカちゃん！」

「無敗の女！今日も期待してるぜ！」

「さつきはスツとしたろく！長年のイジメっ子スパルタンが無様にやられて！」

「バカ、やめてやれよオ、ギヤハハ！」

「ギヤハハハ！そうじゃねエかよ!!」

「ま、違エねエがな!!ギヤハハハ!!」

「そう言つて去つていく2人を見て、私はすつと目を細める。」

「…なんだ、この2人組。いきなり現れてレベツカちゃんをバカにしてるみたいだけど

…私、キライなんだよね、そういう弄り方。」

「なに？あいつら」



「気にしないで…。私…今日で最後にするんだ…！異界の実際の能力を手に入れて、討つんだ…！ドフラミンゴを…!!」

「ドフラミンゴを…。うあ、あとさ、これだけは言っておくよ」

ぐ、と拳に力を入れる。レベッカちゃんは初対面だからまだまだ私の事を分かってないみたいだ、ルフィは今から私がしようとしている事に気付いてるみたいだけど、それを止めようとはしなかった。

何故なら、もう止まらないのを分かっているから。

「私はね」

「…。？」

ポツリと呟いた私の事を、レベッカちゃんが首を傾げて見てきたのでさっきの2人組を指さした。

「自分が嫁にすると決めた相手が侮辱されるのだけは、どうしても我慢出来ないタチなの。気にしないで？ごめん、ムリ」

「ぐオはア…!？」

「ギャブツ!!」

「…え？」

次の瞬間、突然さっきの2人組が吹き飛んで壁にめり込んだ。その顔には強く殴られた痕がある…というか、勿論やったのは私なだけけど。

違期道いとまごいという、スリラーパークで1度使った技を奴らにお見舞いしてやったのだ。まあ…当たり前だけどあの時より技の精度は上達しているから、私が攻撃したなんて誰も気付かないだろうけど。

「そんな訳で、私がやったって事は黙って貰えると助かるよ」

「…今のは、あなたが？」

レベッカちゃんの問いに小さく頷く。試合中じゃないのに攻撃するのは絶対反則行為だろうけど、どんな反則もバレなきゃ大丈夫!!

突然大の男2人が吹き飛んだ事に周りは騒めき、係の人がすっ飛んで来て調査を開始していた。距離も離れてるし、バレる事はまず無さそうだ。

「アイリスはブロックどこなんだ？」

「私はDだよ」

「!!…私もD」

うわ、レベッカちゃんと被ってる…。そのブロックには叶も居るつてのにい…。

レベッカちゃんも無敗の女って言われてるんだからそこそこ戦えるんだろうけど、流石に私達の戦闘について来れるとは思わない方が良さだろう。巻き込まない様に…守

りながら戦おうかな。

「…お互い、悔いの残らない戦いにしよう」

「うん、よろしく」

「……じゃあ、これで」

そう言つてレベツカちゃんは手を振り去つていった。少し表情が暗く見えたのは…私と同ブロックと知つたから、だと思つて間違いなさそうだ。

彼女にも色々事情がありそうだけど、それはこの大会が終わつてから聞くとしよう。何か大変な事に巻き込まれていたとしても必ず私が助けてあげるから。

「勝負がついたぞオー!!」

「え!? もう!?」

「誰だアレ! 化け物みてエに強かつた…!!」

お、Aブロックの勝者が決まつたらしい。

誰だろう……つて、あれえ? なんかすつごく感じた覚えのありすぎる気配が…:ていうか少し前まで常に一緒に居た気配がするんだけど?!

『Aブロックの勝者は「仮面の男」!! ットップ!!』

「嘘でしょ…!! いつの間に追い抜かれたのお!」

「お、おいイリ…じゃなかった、アイリスどうしたんだよー」

急いでリングを見下ろせる場所まで走って行き、仮面の男とやらをこの目で確認した事で疑問は確信に変わった。

私が彼の気配を感じ間違えるなんてあり得ないけど…いくらなんでも早すぎるんだよ!!

『おっとーその男が今仮面を取ったア!!』

してやったり、と言った風に口角を上げて、彼は外した仮面を右手から発生させた。炎で炭にしてみせた。これにはルフィも驚き、あぐり口を大きく開かせている。

いや、ルフィだけではない。大会の司会役や観客達、そして私と同じように勝者を見に来た待機中の選手達も皆…驚愕に目を見開いていた。

『な…何ーッ?! 何故ヤツがここに居る?! 2年前、世界を震撼させたこの男を、我々は良く知っている!! そしてこの異常な強さにも納得せざるを得ないくっ!! ていうか、本当に生きていたのかア…?!』

ざわつく観客達に、わりとノリノリな司会者。そんな中で男は私とルフィを見つけて手を振ってきた。

…こっちは変装してるってのにバレバレか。ていうかこっちに向かってアピールされたら繋がりを疑われて正体気付かれやすくなるからやめてよ!

『波乱の幕開け！意外な出場者!! Aブロック「バトルロイヤル」勝者は…あの全世界を騒がせた「戦争」の中心人物！海賊王ゴールド・ロジャーの実子にして、元白ひげ海賊団2番隊長!! 火拳のエースだア~~~~!!』

いやほんと、なんでココに居るの？早くない？あと、次に会う時は海賊の高みとか言ってたじゃん！Aブロックの高みだけど!?

## 175 『女好き、レベッカちゃんの事情』

エースの生存は既にシャボンディで気付かれていた事だからか必要以上に騒がしくなる事は無かったけど、それでもやつぱりエースが正体を現す前と後では周りの熱気が違う。

海賊王の息子…というのは置いといても、エースは強いし…そんな彼を倒して名声を手に入れたという輩が沢山居るって所だろうか。

民間人は知らないけど、このコロシムに参加している人でエースの父親がどうこうってのを気にしてる人はあんまり居ないみたいだ。まあ…良くも悪くも世間のみ出し者が集まってる訳だからそりゃそうだよね。

「…で、なんで居るのさ」  
「ん？」

現在はBブロック開始までの待機時間中であり、Aブロックの勝者であるエースはこの選手控え室に戻ってきていた。

対面して話す訳にも行かないので、エースが腰掛ける樽の近くにある柱に凭れ掛かり、隣にルフィを添えて自然に話しかける。

「次に会う時は海賊の高みなんじゃなかったの？」

「俺もそのつもりだったが……仕方ねエだろ？追いついちゃまったもんは。たまたま選んだ航路も同じだったってだけで、また会えたんだ、良いじゃねエか」

「……大会に出た理由は？」

「優勝賞品が妹分の食った悪魔の実と似たようなモンって聞いたんだ。そりゃ兄貴としては気になるだろう？」

それだけで大会に出たのお……？ノリが軽すぎる……。

私だってエースと再会出来たのは嬉しいけど、まさかこんなに早く会うなんて思ってもなかったから少し混乱してるんだよね……。

「他のみんなは？」

「この島に来たのは俺だけだ、ルーシーの船が見えたんで小舟で……つと、今のは聞かなかった事にしてくれ」

「数秒前の自分のセリフを聞かせてあげたいよ、ホントに」

なーにがたまたまだよ、会う気満々じゃん！うきうきでボート走らせてこの島降りたんじゃない！

そこでこの大会の優勝賞品を聞いて参加したって所かな。他のみんなはもう先に進んで……と。まあエースならあのエース専用炎エンジンボートですぐに追いつけるん

だろうけどさ。

「ルーシーとアイリスは何ブロックなんだ？」

「おれはC！」

「私はD」

「お、なら決勝は一緒に戦えそうだな」

私とルフィが勝ち上がってくる事に微塵も疑いが無いらしい。…そりゃ負けはしないけどね。

はあーあ、Dブロックまでは待つのがちよつとだるいね。エースとはそんなに長く喋っていられないし。

いくら誤魔化しながら自然に話しかけるとはいえ、いずれはエースと繋がりがあある事に誰かは気付いてしまうだろう。こんなタイミグじゃなければ身バレなんて気にしないけど、今は叶の事もある、勘付かれる訳にはいかない。

「おい、俺の目は節穴じゃねエぞ」

「え？」

…だ、だれ？今私達に話しかけてきたの？この人…。

うーん…どこかで見た事ある…誰だっけなあ…。

「いくら変装しようと、俺の経歴に傷をつけた奴の顔は忘れねエ…!!」



「……あ!!」

こいつ……ジャヤのあいつじゃん!! 確か名前は…、

「えつと……ベロ……」

「ベラミーだ」

「そう! ベラミー……つて、ベラミー? なんであなたがここに……あ、いやいや、私はあなたなんて知りませんけど? 初対面ですけど?」

「惚けても無駄だ、女王。それに、俺がどこに居ようが勝手だろ」

メイド服に仮面して、しかも当時とは身長も違うのに即バレするつてこの人なんなの? またぶつ飛ばされたいの?

……でもなんだろ、ベラミーからそれほど邪なオーラを感じない。

「ドフラミンゴはガキの頃から俺の憧れの海賊だった、*“異界の実”*に興味はねエが……俺にも優勝しなきゃならねエ理由がある……!」

「私が居るのに?」

「ハツハハ……! デケエ口叩きやがる……俺は昔とは違う。女王、麦わら……俺は「空島」へ行ったんだ」

!……空島……。

何か心境の変化でもあったのかな……ジャヤで会ったベラミーなら、空島に行こうなん

て思う筈ないし。

「一応聞くけどさ、当然私の嫁には手を出してないだろうね？」

「…さあな。ーとまあ俺はもうお前を恨んじやいない。やがて来るデカイ波を越える為に、俺はドフラミンゴの船に乗る！…もうお前らを笑わない」

「…そっか」

ベラミーはBブロックなのか、それだけ言つて私達に背を向けリングに出る通路へと歩いていく。

「待つてよ、アイサちゃん達には手を出してないんだよね？さあな、なんて言葉じゃ納得しないから」

「…ハア、そいつが誰だか知らねエが、俺は空で騒ぎを起こしてねエんだ。何もしてねエよ」

「最初からそう言つてくれればいいのに。あ、もしかしてベラミー、かつこつけちゃった？」

「言つてろ」

む…ゾロと違つて反応がつまんない。

それにしてもベラミー…本当に変わったみたいだ、夢を見る事を覚えたからだろうか…覚悟を背中から感じる。

彼はそのままリングへと出て、観客席から大きく声援を受けていた。

『おーっ！と！Bブロック開始直前、遂にこの男が姿を見せたア!!今大会においてその男が優勝した折には、彼の執念は実を結び、晴れてドンキホーテファミリー幹部へと昇格する事が決定している!!大会優勝候補その1人…海賊〃ハイエナのベラミ〜〜』

「へえ…人気もあるみたい。ちよつと見て行こうかな」

「なら俺はその辺を歩いてくる」

エースは散歩か。

それにしても、やっぱりDブロックまでは長そうだ。ルフィはCなんだよね、いいなあ…もうすぐじゃん。

そんな感じでBブロックの試合が始まった。エースは言葉通りその辺を散歩しに行ったし、ここは選手用の観客席だから私はここでゆっくりさせてもらおう。

「あのベラミーという男…えらく人気じゃないか」

「だねえ」

私とルフィの間に入ってリングを見たキャベンディッシュがそう呟いたので私も適当に相槌を打つておく。ベラミーに人気があるのは事実だし。

「おー…これってバトルロイヤルじゃ無かったっけ」

リング上では、王様みたいな人を守るように沢山の人が囲いを作って戦っていた。徒党を組んじやってるけど、アレもアリなんだ…。

「フム…あれは厄介だ。君達は知っているかい？プロデンス王国の王、「エリザベロー一世」が起こした事件」

「事件？さあ…知らない」

「そういう情報には疎いからなあ私…。知らなさ過ぎる自覚はあるけど、ロビンが居るからわざわざ私が詳しくなる必要もないかなーって。

「彼の王は、その拳から繰り出されるパンチで敵国の要塞に風穴を開けたんだ。それでついた異名が“戦う王”…つまりあの陣形はその拳で確実に勝利を得る為の物だって事さ」

「へえ…すぐに撃たないって事は何かしらの制限があるって事かな」

「それは僕には分からないが…恐らくあの陣形を作り出したプロデンス王国の軍師ダガマは既に結末を見据えているだろう。仮にこのままパンチを撃たせてしまえば…エリザベローの勝ちは確定的だ」

中央に居る王様はさつきからシャドーボクシングをして集中力を高めているつばいから、ああいうルーティーンを踏まないと要塞をぶち壊す程の威力を出せるパンチは放てない…と予想出来る。

「君達ならこの試合、どう攻略する？」

「あのおっさんぶつ飛ばせばいいんだろ？」

「そう簡単にはいかない、エリザベローを囲んでいる者達は皆曲者揃いだ。僕ならまず、軍師ダガマを倒すさ」

うーん…見た感じはそのダガマって奴が指示を出してるし、そいつをやつてしまえば統率は乱れて王の守りも薄くなりそうではあるけど…そもそもそのダガマも簡単に倒せるとは思えないんだよね。

軍師ってくらいだから自分が攻撃されない手の1つや2つ用意してるんじゃないの？

「もう面倒くさいし、私なら纏めて全員倒すかなあ」

「フ…君のような華奢な体のレディは特に、この大会においては頭を使わなければ勝てないとだけ言っておこう。纏めて倒せるのは雑魚だけ…つまりそれより上の選手には通用しない話だろう」

「そうかな？私はあるの陣形、範囲攻撃に弱そうに見えるけどね」

軍師ダガマって奴は指揮官としてかなりの腕を持ってそうだけど、それでも部隊を完全に操れている訳では無さそうなのだ。恐らく…この国に来てからお金か何かで買い取っただけの関係…連携が上手く取れていない。

個々の実力がどれほどのモノだろうが、一斉に叩けばいずれ穴は空く。要はそこを突けば良いんだ。

「……つて事だけど」

「…なるほど…。今の言葉は訂正する、その戦い方も間違つてはいない…。いや、範囲攻撃の手段があるのなら正解の1つだと思う。それなりに戦い慣れてる様だね」

「あ、あー……まあね」

これ以上余計な事を口に出すのはやめておこう。流石にバレないとは思うけど…万が一という事もある。

「あいつなんだ？寝てるぞ！」

「彼を知らないのかい？人を食った行動ばかり取るから…「人食いのバルトロメオ」と呼ばれている男さ。彼も生意気な後輩の1人…」

リング上で横になれるくらいだから、その実力も相当なモノなんだろう。そんなにもちやくちや強いつて気配は感じないから…能力が特殊なのかな？

「ひやはや…ここが観覧席ですか…。試合がよく見える」

「…？」

なかなか、強そうな気配の爺さんだ。いきなり隣に立つてきたんだけど何の用だろうか。

「ひやや……ところでガープさんは元気かな……？」麦わらのルフィ「君」

「え？おっさん爺ちゃんと同じ合いなのか？……あ!!」

「え!!」

「……あちゃ」

まずい……まさかそんな自然に話しかけてくるとは思ってたから、今のは私も油断してた……！確かキャベンディッシュは最悪の世代に対して並々ならぬ逆恨みを抱いてたし、ここで戦闘が起きる可能性がある……！

……よし、逃げよう。だって私はまだバレてないもん！

「え、えー！あなたがあの!!びつくりーきゃー！」

適当な事言つてその場をそそくさと離れ出した私に、助けてくれ、と視線を送ってくるルフィだがスルーする。

悪いねルフィ、今は逃げるのが一番なんだよ！

うわ、後ろから戦闘音が聞こえ出した……本当に暴れちゃってるよあの人達！

「災難だったなア嬢ちゃん！にしてもさつき麦わらって聞こえなかったか？」

「麦わら!!奴もこの大会に出場してんのか!!」

「き、聴き間違えじゃないかな、はは」

とりあえず誤魔化してはみるけど、あまり効果は無いだろうなあ……。

…とまあ、ルファイ達が試合前に戦鬪を繰り広げてる中、Bブロックの試合が終了した。司会の声を聞くに、勝者はさつき聞いた「バルトロメオ」という男らしい。どんな能力か見たかったんだけどなあ。

…というかベラミー負けちゃったのか、大丈夫かな…。なんて、私が心配する事じゃないよね、ベラミーも望んで無いだろうし。

それよりもCブロックかあ…いいなあルファイ、私Aブロックが良かった。そしたらエースとも戦えたし、出番も早かっただろうから。

「あ、アイリス！ やつと見つけた…！」

「レベッカちゃん？ どうしたの？」

なんだか私に用があるらしいレベッカちゃん。可愛い女の子に誘われちゃったら何処にでもついて行くよー！

ルファイの活躍とか見てあげたいけど、物事には優先順位つてのがあるからね！ 悪いねルファイ！

「ちよつと…あなたと2人でゆつくり話がしたくて」

「え！ ホント!? 私も…！」

「こつちよ、ついて来て」

おお、なんかラッキー！ 一体なんの用なのかは知らないけど、2人きりで話せるな



ら何だっていいや!

そんな感じで、ついでに軽く軽食を購入しつつレベッカちゃんに連れられて来たのは、レベッカちゃん達コロシアムの剣闘士の宿舎……だそうだ。獄舎って呼ぶ人も居るらしいが、その前にある通路に来ていた。ゲスト選手はここに来ることは無いから出番までゆっくり話そうとの事。

とうかここ、宿舎にしては檻に近い見た目をしてるよね。ぶっちゃけ牢屋にも見える。

近くのベンチに腰をかけ、まるで檻みたいな宿舎を背もたれにここへ来る途中購入したみかんを剥いて口に放り込んだ。うむ……ナミさんのみかんのが美味しい。

……というか、2人きりって聞いてたのにこの檻……じゃなかった、宿舎の中に人の気配がかなりするんだけど!

カブトを脱いだレベッカちゃんが想像を遥かに超えて可愛かったからもう何でもいけどね? うん。

「レベッカちゃんは何も食べ物買わなくて良かったの? 何も食べずに力なんて出なくな  
い?」

「私は……お腹空かないから平気」

「もう、そんな事言わないでさー。なんなら私が何か買ってあげるから一緒に食べ

……、つと

背後の檻から出てきた何人もの腕が、後ろから私を掴まえて拘束した。

いきなり、という言葉を使わなかったのは気付いていたからで、気付いていたのに何も行動に起こさなかった理由はとても簡単な事だ。

「オラア！捕らえた！」

「レベッカ！やるならやれ！」

「その気で連れて来たんだろ!!？」

「……っ！」

ゴク、と唾を飲み込んだレベッカちゃんが剣を持ち、霞の構えをとった。その手は震え、額から流れる汗の量も尋常ではない。

対して私は、ただジッと彼女の目を見つめるだけだ。これといって暴れる事もなく、何なら普段と変わらないくらいには落ち着いている。

「手が震えてるよレベッカちゃん、しっかり狙わないと、一撃で殺せないかも」

「……!!やあ!!」

剣の腕はなかなかのモノで、高速の突き技が私の眉間へと一直線に迫って来た。けど私はピクリとも動かない。剣先すらにも目を向けず……ただ変わらず彼女の綺麗な目を見つめるだけだ。

私の眉間を貫く瞬間：ピタ、とレベツカちゃんの動きが止まった。目と鼻の先にはレベツカちゃんの構える剣先が突き付けられており、よく見なくても震えているのが分かる。

当然仮面には剣先が突き刺さったので多少欠けているけれど、欠けただけで壊れてはいないし、額だから顔を隠す役目はまだ果たせそうだ。

「どう、して……っ…、私は今、あなたを殺そうとしているのに：!!動かなければ、あなたは死んでいた!!避けられる筈でしょ、あなたの腕なら!!」

「だけど私は動いてないのに死んでない」

「それは私が……っ!」

「そうだね、私を殺さないでいてくれた。私はそれを信じてたから動かなかった。理由はそんなトコだよ」

ほらね、私が動かない理由は簡単な話だ。レベツカちゃんが人を殺す様な人ではないと信じていたから、避ける必要が無かった。

会って間もない彼女だけど：私は彼女を嫁にすると決めた。私は例えどんな理由があるうとも：嫁にすると決めた人の事はなにがなんでも信じると決めているんだ。

「…ハア、そんな余裕で相手されちゃア、どうも出来ねエな」

「1人でもここで実力者を消しておけりゃ：少しくらい希望も持てるってのに」

檻の中から声が聞こえ、私を拘束していた腕が離れていく。

私を亡き者にするのは諦めたのか、レベツカちゃんも剣を床に落としてその場に力無く座り込んだ。

…絶対何か事情があるよね…、あとレベツカちゃん、動くたびに揺れるその豊満なぽよんはかなーり危ないから今着てるビキニアーマーは止めてくれないかな!!

## 176 『女好き、相変わらずの堪え性』

「俺達は…囚人剣闘士」

「え？囚人？」

檻っぽい部屋だと思ってたら本物の檻だった…。

それよりこの檻に入っている人達…ただの1人の例外もなく全員が包帯で全身をぐるぐる巻きにされていた。

しかも片腕や片足を失くしている者、耳が片方ない者、目が潰れている者など、とにかく欠損が目立つ。

「レベツカもそうさ…戦い続け、いつかリングの上で見世物として殺される…！ドフラミンゴファミリーに少し逆らったからだ」

「100勝できりゃあ自由の身になれると国王は言うんだが…どんな腕自慢でも100回も殺し合いをすりゃ死ぬ。ここから脱走を謀った奴らは皆射殺された。俺達に逃げ場は無い」

「10年前…ドフラミンゴが王になるまでは「剣闘」は殺し合いじゃ無かったんだが…奴の治めるこの国には極端な光と影がある」

…この人達はみんなレベツカちゃんの仲間って訳か、それにしてもやつぱり色々やつてるっぽいねドフラミンゴは。この世界の王様は裏で色々悪事を働かないとダメな法則でもあるの？

「私は今日の大会…どんな手を使つても優勝して異界の実の力でドフラミンゴを討つんだ！今日…」兵隊さん「の率いる軍隊が私達を解放する為にドフラミンゴに決戦を挑むって…！」

「…うん」

兵隊さんという人が誰かは知らない、だけどレベツカちゃんからは強い決意を感じた。同時に、戦う事を嫌がっている雰囲気もある。

レベツカちゃんの事だ、戦うのが怖いから嫌なんじゃなくて、相手を傷付けるのが性に合わないとかそんな感じの天使な理由だろう。

「彼は命と引き換えに…この国を滅ぼす気なの！彼より先に、私がやるんだ…!!もう守られるだけじゃイヤなんだ！今度は私が…兵隊さんを守りたい!!」

「兵隊さんって…？」

「片足の…オモチャの兵隊さん…」

オモチャ？…ああ、そういえばこの国って、なんかオモチャが平然とその辺歩いてたりするもんね。

…え、あれって高度な技術で完璧なAIを作り上げたとかそんな感じでもなく、普通に生きてるんだ。

「私は、たった一人の家族だった母親を失ったその日から兵隊さんに育てて貰った…。私にとつて彼は、親も同然の人…。」

「だから、今日の大会に優勝して…悪魔の実を食べてドフラミンゴを倒すって決めたんだね。やっぱり天使だね、レベッカちゃんは」

「え？てん…？」

「だけど」

…はつきりは言えない。レベッカちゃんでは、例え悪魔の実を食べた所でドフラミンゴを倒すなんて絶対無理だ。

それは実力の差を考えて、という理由もあるけど、やっぱり一番の理由は彼女の優しさにある。戦いに不向き過ぎる性格…他者を傷付けるのを嫌がる、とても優しい彼女だからこそ…ドフラミンゴを討つのは不可能だ。

…とはいえ、それを彼女に伝える気はない。

「優勝を譲る気はないよ。優勝は私が頂いてくから、リングの上では正々堂々と戦おう」だから私は、レベッカちゃんから戦う為の剣を奪う事にした。

Dブロックで私が勝てば、レベッカちゃんの思惑は全て無に帰すだろうし…諦めもつ

きやすい。

あ、でもだからといってそのまま見捨てるなんて絶対しないよ。彼女が戦いに不向きだろうと、親同然の兵隊さんというオモチャを助けたといって気持ちは本物なんだから、私が嫁にすると決めたレベツカちゃんの親は私が代わりに助けてあげる。

要は、ドフラミンゴを私達が倒せば良い。裏で誰が何をしようとも関係ない、ぶっ飛ばせば終わりだし。

レベツカちゃんは私の言葉に頷いてくれた。

いやー…でもあれだね、叶の件もあるし、レベツカちゃんの事もあるし…ドレスローザも中々忙しくなりそうだ。

その上裏ではレイやカイドウが動いているって話だし、裏で動き過ぎだよって突っ込んでやりたい。隠れ蓑になる筈の表舞台より裏の方が大きくなっちゃって隠れ切れないんだよマヌケ共め！

\*\*\*



Cブロックの試合は、何とかルフィの勝利で幕を下ろした。

最後にルフィとタイマンしてたチンジャオってじいさんも結構強かったけど、やつぱりルフィは流石だね。しかもまだ全力じゃなさそうだし…。

という事は遂にDブロックか？と思ったけど、その2人の戦いでリングが壊れた為現在のはリング交換中である。

私は既にレベツカちゃんとは離れ、戦闘準備室で剣を選んでいた。

というのも、私の持っている小太刀は知つての通り妖刀であり、手加減をしてもそれなりの威力を誇ってしまう。

その点この部屋に置かれている剣は、パツと見る限りでは業物レベルすら無いようなので手加減にはもってこいだ。手加減するのは相手に申し訳ないと思う心が無い訳でもないけど、自分の実力を過小評価するつもりもない。私は間違いなくこの大会においてはぶつちぎりで強い筈だし、レベツカちゃんも居るんだから誤って傷付けちゃった日には自殺モノだ。

「これでいっか」

適当に選んで腰にブラ下げた。ちなみに刀身は一番短い物を選んでる。理由はそうでもないし身長をのせいで剣先が地面に当たるから……、いや、悔しくないよ？ナミさん達ならかつこよく剣を腰に下げてそらもうめっちゃ似合うんだろあつて思う

だけで悔しくないからね？だって私はもう身長150はあるわけだし？問題はここに  
ある剣がほぼ高身長のために造られてある事でしょ？いや悔しくないし、私はもう幼女  
じゃないもん!!

『お待たせ致しました、リング交換完了です!!Dブロック出場者はリングへお集まり下  
さい!!』

「お」

やつとかあ、遂に叶の誤解も解けるって考えたらワクワクしてきた。

それに私は叶をこちら側に引き込むのも仕事だし、それが達成出来ればドフラミンゴ  
を討つのももつと楽になるだろう。

「あ、レベツカちゃん」

リングへと向かう途中にレベツカちゃんと会った。やつぱり思い詰めた顔をしてる  
けど…決意もしてる。

手加減はするけど、舐めてかかるのは違うよね。油断はしないでおう。

「アイリス…約束通り、正々堂々やろうね」

「うん。あ、そんでさ、会った時も言ったけど嫁になってくれる？この国が解放されたら  
さ」

「フフ、またそれ？」

…冗談つて思われたかな？まあいつか、よく思われる事だし、最後には必ず墮としてみせるから。

「おーいアイリス！負けんじゃねエぞー！」

「麦わら！待て！逃げるなア!!…ん？麦わらと親しい女性で、アイリス…？アイリス…アイリス…ハッ!!」

うわ…なんか知らないけどルフィを追っかけてたキャベンデッシュに物凄い形相で睨まれたんだけど！

ていうかルフィ、もう完全に正体バレてるよねえ…南無。

アイリスは流石に安直過ぎたかもしれない…と思いつながらリングまで歩く。ちよつと気分が高揚してきた…！ほら、リング上で無双すれば観客席に居るかもしれない美女達は私に釘付けになる訳でしょ？ウヒョヒョ！今から先の事が楽しみだね！

『さア来るぞ！準備はいいか!?皆の衆!!』

うおおおおお！

と司会の掛け声に観客達が大声で応えた。ん？なんだなんだ？何が来るの？

『当コロシアムきつての美少女剣闘士！“幻の王女”!!こんなにも会場を熱く沸かせる選手がどこに居る!?!』

美少女剣闘士…ああ、レベツカちゃんの事か。そりやレベツカちゃんは可愛いからね



「くたばれー!!」

「リク王の一族ー!!」

「人でなしの一族ー!!!」

「…気にしないで、アイリス。いつもの事だから」

「いつも…?」

いつも、これなの？

止まない罵声に、突き刺さる膨大な数の敵意の視線。

こんなものを一人で背負って戦ってきたなんて…しかもその理由が自分以外の誰かの為だなんて、そんなのさあ…!!

ああ、きた、きたきた…!この感じ…すつつごく良いって人を見つけると私はいつも胸が高鳴る!…つまり、何が言いたいか分かるよね？

「絶対、レベツカちゃんは私が嫁にもらう。…そんな人にいつまでもブーブーうるさいんだよ、ちよつと静かに…して!」

ぐつ、と気配を周りに撒き散らす様に力を入れた。要は霸王色の覇気を観客席に向かつてぶつけたただけだね。勿論、気絶させる程強くはしていない。精精目眩がする程度だろう。

「…い、今のは…?」

「あのメイドか…!?!」

「観客席に手を出したのか!何を考えてんだ!!」

「危ねエだろ!!」

「すううう………う・る・さああああああい!!!」

ドン!とリングを踏み潰して足跡をつける。何が危ないだつて…?ちよつと目眩がしただけで喧しいんだよ!

「今!!レベツカちゃんのを貶した奴!!全員…全員顔覚えたからね!!!客席が安全だと思うな、私がいる限り…嫁への侮辱は死んでも許さないから!!!」

シン…と静まり返る客席に、尚も言葉を投げかけていく。

「粹がるくらいなら降りて戦え!私が相手してあげるよ!!それが怖いなら黙って見てて!!!」

「……う、……うるせエ!てめエだつて仮面つけて素顔を隠してるからつて言いたい放題じゃねエか!!何様のつもりだ!!」

「そいつを庇うつて事がこの国でどういう意味になるか分かつてんのか!!」

「仮面取つて言つてみる!!お前こそ顔覚えて殺し屋を派遣してやる!!!」

…ちよつと予定とは違うけど、まあいいや。この仮面は…今外す。

仮面を片手で掴み、無理矢理紐を引きちぎる様にして取りその辺に投げ捨てた。

素顔を見たからと言って、私の正体に気付くのはごく小数だろう。それに観客席からここまでは距離もある、私は問題なく1人1人の顔をじっくりと観察出来るけど、普通はこの距離で顔を詳しく見るなんてそれこそ相当な視力がないと無理だ。

だけど、その中でも私の顔を見て…それでいてその正体に気付く者達も居た。本当にごく小数ではあつたけど、数の程度は問題ではない、1人でも私の正体に気付いたのならばそこからあつという間に情報は広がる。

次第ににざわざわと観客席は騒がしくなっていく、リング上では私を見て顔色を蒼白にする者まで現れた。

…思ったより強い私の名前、10億の賞金首は飾りじゃなかったみたい。

さて、これでようやくレベツカちゃんに対する喧しい声も無くなった事だし…後は選手が全員揃うのをゆっくり待つとしますか！

# 177 『女好き、始まるDブロック』

「い…一騎当千の女王…!!?」

「嘘だろ…なんでそんな奴がここにいるんだよ!!」

私の正体に気付いただけで、さっきまで強気だった観客達は皆ざわざわと慌てふためいていた。

騒動の原因…って訳でもないけど、当のレベッカちゃんも私を見て目を見開いている。

「…そうか、お前は一騎当千のイリスだったんだな!」

「うわ!」

まだ試合は始まっていないにも関わらず、誰かが急に後ろから斬りかかってきた。殺気がただ漏れだったから避けるのは簡単だったけど…。

「つて、キャベンディッシュか」

「そうだ、僕だ!お前はまたしても僕の人気を奪った…!やはり、殺すしかない!!」

「ええ…奪ってないけど…」

「いいや、お前は僕が華麗に登場する直前、自らの正体を晒し、会場全体の視線を一気に



攫って行った!! 誰よりも美しく、そして華麗に登場した僕には誰も見向きもしない!! 正に2年前: お前達最悪の世代が僕から人気を奪った時と同じ様に!!」

すっごい逆恨みだけど!?

ここまで吹っ切ってる人はあんまり嫌な気にもならないし、逆に応援したくもなる。だけど殺されるのは嫌だからなあ。

そんな感じで絶賛大荒れ中のキャベンディッシュに絡まれていると、ひしめき合う選手達の中から葉が姿を見せた。

葉が通る道を開ける為に、屈強な戦士達が横へズレていくのはなんだか異様な光景だ。それだけ葉の: 四異界の肩書きは大きいのかな。

「:遠慮はしません。この勝負で、私なりにあなた的事を見極めます」

「手加減するなって言ったのは叶じゃなかったっけ?: 私だって、この状態では”手加減しないから”」

少し含みのある言い方に、葉が目元をぴくりと動かして追求しようとしたその時、ゴオオナー: : : !と開戦のゴングが鳴った。

知らないうちに開始時刻になっていた様だ、周りに集まっていた選手達も皆散り散りになり、誰を狙うか見極めていた。

「女王オ! その首、この僕が貰い受ける!!」

「悪いけど、それは嫌かな」

シイツ…と鋭く抜かれた首を狙う剣撃をしゃがんで躲し、ガラ空きの足元を掬うように蹴り払う。

当然両足を地面から離されたキャベンディッシュは空を飛べる訳でもないのですが、まだまだと体勢を崩し倒れてしまうが、そこは流石と言うべきか、剣を地面に突き立ててくるりと周り、後方へ飛び退いて体勢を立て直す。

「でも、私の前でそれは致命的なスキだよ！」

「ツク!!」

「後方へ飛び退く」だけの時間があれば、私が相手との距離を詰めるには充分過ぎる程の隙が生まれる。キャベンディッシュが顔を上げた時には、既に私の拳が目の前まで迫ってきていた。

「まだまだア！」

咄嗟に上半身を後ろに倒したキャベンディッシュが、その勢いのまま宙返りをする様に蹴りを放つて来た。それも悪手だけどね！

「はい、捕まえた！」

「な…!?く、離せ！デュランダル!!」

「おっと！」

蹴りを片手で掴み動きを封じ、剣の突きは首を傾けて最小限の動きで躲す。私個人としては、彼がそう悪い人だと思つちやいなから嫌いではないんだけど……流石に命を狙われてるんだから、それなりの反撃はしないとね！

「その顔が自慢なら、キチンとガードした方が良いよ!!」じゅうばいばい「10倍灰!」だいせんかい「大旋回!!」

キャベンディッシュの足首を掴んだままぐるぐる周り、軽く竜巻を起こした。そんなに強くない人達はこの竜巻に巻き込まれて場外になつてゆき、当のキャベンディッシュ本人も苦しそうに顔を歪めていた。

「この……僕を武器の様に扱うな!!」

「分かった、ほい」

「あ、おい、今手を離れたら……!!」

パツ、といきなり手を離れた事で、キャベンディッシュはかなりの勢いで場外まで吹っ飛び、壁にめり込んで動きを止めた。なんなら気絶もしてるみたいだし、もう動けまい。

……いや。

「10倍灰、ハガン覇銃!」

更に壁へめり込んだキャベンディッシュへと追撃をかけ、動き出す前にもう1度意識を刈り取った。

…なんか今、気絶した筈のキャベンディッシュからとてつもない圧を感じた。壁に埋まっていたお陰ですぐに行動出来なかったみたいだけど、覇銃を撃つのが少しでも遅れていたら復活していただろう。

別にそれでも負ける気はしなくても、面倒になるのは間違いないし、結果としては気付けて良かった良かった！

…端から見たら倒した相手に死体蹴りしたみたいになつてるかもしれないけど、仕方ないじゃん！だつてなんか圧を感じたし！！

『…つ、強すぎる!!一騎当千の女王!!!正に怪物、開始早々怒涛の展開だア!!!』  
「…この場に居るのは、イリスだけじゃないですよ。『アクアトルネード』」

「な、なんだ!？」

「いきなり水の渦が出て来たア!？」

「い、勢いが…!!ぬ、抜け出せぬ…うわア!!」

『そしてこつちでは『魔女』がその存在を示しているーツ!!まさか同ブロックに四異界が2人も揃うとは、一体誰が予想出来た!!?私も興奮してるー!!!荒れ狂う水の竜巻が、屈強な戦士達を巻き込んで場外へ吹き飛ばして行くぞオ!!』

私に対抗してか、叶も竜巻を起こして人を減らして行く。レベツカちゃんは上手いこと竜巻の影響を受けない位置まで移動しているみたいで、近くに居る人達の攻撃を避け

ながら戦っていた。

…というかレベルツカちゃん、攻撃してなくない？敵の攻撃を避けて場外の水に突き落とす…くらいしかしてないような…。

まあ、いつか。それなら巻き込む事も無さそうだし。

「叶と1対1で話し合う為にも、まずは人を減らさないとね。30倍で行こうかな」

ぐぐ、と私の右腕が30倍巨大化し、リングを見下ろせる位置まで跳躍する。このまま攻撃まで30倍にしちやったら余波で観客席も吹っ飛んじやうだろうから…。

「10倍灰！去柳薇！！」  
じゅうはいばい さよなら

そのまま落下し、勢い任せにリングへと拳を叩き込めば、その衝撃でリング上の戦士達の大半が吹き飛ばされて場外となる。

リング自体も大きなヒビ割れが全方位に広がりに今にも崩れそうだけど、何とか堪えてくれたみたいだ。残った戦士も、レベルツカちゃん、叶、その他数人って所だ。

「…っ、なんて、力…！」

リングの隅で戦っていたからか、私の攻撃に巻き込まれなかったレベルツカちゃんがそう呟いた。まあ、その位置にレベルツカちゃんがいる事を確認して私も行動したんだだけね。

叶の事は全く気にしなかったけど、それはどうでもいいからって訳じゃ無くて、彼女

ならどうにでもなるだろうと思ったからだ。事実、叶は私の攻撃で発生した衝撃をリングから生み出した土の壁で防いでいる。ちなみに、叶とレベツカちゃん以外で残った数人というのはその壁の後ろにたまたま運良く居た人達の事だ。

『開始から数分経たず、リング上は壊滅状態だアあ!!これが四異界!!オオロンブスや首はねスレイマン、他にも名だたる各国の戦士達、悪名轟く海賊達を相手に息一つ荒げていないくっ!!』

「そんな言う程でも無かったけどね、強いて言うならキャベンディッシュから一瞬感じた圧が…って、今はいつか、そんな事」

目の前には叶が居る。私も、そして叶も、大事なのはここからだ。

「少し待って下さい、残りも片付けます。……『バインド』そして…『ハイト・ミール』」

聞き慣れない言葉に首を傾げると、レベツカちゃんを含めた残った人達の体を光の輪っかが縛る様に拘束する。

直後に、もやもやとした紫色の雲の様なモノが拘束されている人達の顔に纏わりつき……全員その場に倒れ込んだ。

倒れた瞬間に能力を解除したのか、雲の様な何かは溶けるように消えてなくなり、倒れた人達は皆眠りに落ちていた。…よく分かんないけど、眠らせる力だったって事?何

その、本当に魔法みたいなの。何でも出来るって…いくら何でも出来過ぎじゃない？  
「これで、1対1です」

「どうも。レベツカちゃんを眠らせてくれたのは助かるよ、どうやって気絶させようか迷ってたから」

「…私もあの子に攻撃するのは気が引けます。色々と事情を知ってる身としては、手荒な真似はしたくありませんから」

「そっか、じゃあ私とも平和的に解決しない？例えば…ほら、会話とかさ。他にも…」

周りに私の正体を晒した現状だと、会話すら必要ないくらいに簡単な解決方法はある。

その方法は勿論、女王化<sup>クイーン</sup>して王華を呼ぶ事だ。流石にそうなれば叶も信用するだろう。

「女王化<sup>クイーン</sup>と…王華、来て！」

流石に今回は寝てないでしょ…とドキドキしながら王華を呼べば、私の不安を払拭するかの様に勢いよく王華が私の隣に現れた。

「っ!?!…あ…あ、お、王華…?」

「叶…だよね?ちよつとイメチェンした?」

王華が叶を見てそう言うが、確かに転生前とは幾らか姿形に差異がある。

まず前世の叶は髪も目も日本人らしく黒だ。王華が特例というだけで、叶だけではなく沙彩も美咲も黒髪黒目だった。

だけどこの世界の叶は青髪青目だ。可愛らしい顔立ちは前世と瓜二つな所を見るに、変わったのは髪と目の色だけだろう。

「どうかな？これで私の話を信じてくれる気にはなった？」

「……、そ、うですね。今すぐにも、彼女を連れて色々と話したい事が山程あります。……だけど、そこにいる彼女が幻じやない証拠がありません」

「ええ……私、流星にそんな事は出来ないよ？」

「……分かっています。今目の前に居るのが、王華本人だと言うことも……。けど、私はこの世界に来て、ずっとあなたを待ち続けていました。……つまり、今見えている王華の姿は、私が都合よく作り出した幻想である可能性もゼロではないという事です！」

「いや、ゼロだけど!？」

さては、いきなり王華を目の前に出されて混乱してるな？訳の分からない事を言っちゃってるよ叶さん!!

「王華……！私がこの人を倒して、あなたを解放します!!」

「おかしくない!?!話の！脈略!!!王華も何とか言ってる!!」

「助けて叶!!」



「ちよつとお!!?」

王華も叶と会えてテンション上がってるなコレ! なかなか攻めてる冗談だよ! 問題はそのジョークをジョークと捉える事が出来なさそうな人に言っちゃった事なんだけどね!!

「…前回は、あなたが本当に私の敵になるのか分からなくて本気は出せませんでしたけど…」

「え? でも確か、私の最高の技です、とかなんとか言ってた様な…」

「……本気は出せませんでした」

なるほど、突っ込んだんじゃダメって事だね。もう私突っ込まない、ちよつとこの2人のテンションについていけない。

「今回は…初めから全力を出します」

叶はそう言うのと、手の平を広げて目の前に突き出す。

そこに光の球が生まれ、徐々に棒状に大きくなっていく。

やがて光は形を整えて、葉が棒状となった光を掴む事で光は弾ける様に消え去った。代わりに葉の手に握られているのは……杖だ。

先端はまるで花が開いた様な形状をしており、中央には青色の宝石が浮かんでいる。

「前回出した最高の技は、あの状態での私の最高の技という意味です。今の私は、甘くあ

りませんよ」

「…なるほど」

…確かに、身に纏う覇気がさつきままでとは比べ物にならない。私の女王化の様に、叶にも強化形態があつたという訳だ。

「プロテクション」

軽く杖を振れば、私達を中心にドーム状の膜がリングステージに広がっていく。私と叶、王華以外の選手達はその膜以外にも小さな膜で覆われて、風か何かでリング端に運ばれていた。便利だね…。

「レベツカちゃんの仕事はもつと丁重に扱って欲しいんだけど」

「出来る限り端の方が安全です。リング外に落とさないだけマシでしょう。王華はどうしますか?」

「私も隅の方で見てるね、気が散るでしょ? 頑張つて!」

頑張つて、じゃないから! ほら見て! 叶がふんすつてやる気出してるから!

私が睨んでも全く効いていない様で、それでも悪いとは思っているのか口パクでごめんね、と言つてきた。

…何か考えがあるつて事? いや、無いんだろなあ…はあ、もう良いよ、乗つてあげろ! でも、あなたの友達に攻撃したからつて後で怒つても知らないからね!!

## 178 『女好き、異常事態』

「『ファイア』!!」

「<sup>ハガン</sup>覇銃!!」

ドオン!!

私と叶の技がぶつかり合う。さつきからずっとこうして遠距離攻撃のぶつけ合いが続いていた。

叶の技は、宣言通り以前とは比べ物にならない威力、速度で私へと迫ってくる。私も相応に倍加しないと相殺出来ない程だった。

観客席への被害は叶の張ったプロテクションという技で押さえているみたいだ。と言つても流れ弾や余波を防ぐ程度のものでらうね。

「ロングレンジじゃ勝負はつきそうにないね? 叶」

「近付きさえすれば勝てる? ……まあ、悔しい事に強ち間違いでもありませんが、そう簡単に近づけさせはしませんよ! 『プロテクション』!」

「!」

突然、私の体を包む様に小さなドームが出現する。こんな風に規模を縮小したりも出

来るんだ……!

『スチームファイア』!!」

ボツ……!

「うわっち!!」

あ、足元に炎が出てきた!?!しかも段々強く……大きくなって……!!

「あっつ!!」

熱さ耐性……倍加!これでもう熱くない!……熱くはない、けど……これはなかなかエグイ技だと思った。

今、私の視界は一面炎で包まれている。もつと分かりやすく言えば、私を包むドームの中全体を炎が荒れ狂っているのだ。多分外からは私の姿は見えない筈……燃え盛る炎が詰まった透明の卵みたいな見た目になっている事だろう。

「ふん……」

腰に挿していた剣を振り、ドームを縦に斬り裂いて叶へと前進する。炎に包まれても尚無傷な私に対して叶は驚く事も無く冷静に杖を振るった。

『プロテクション』!!」

「また……!?!」

再度私を包み込む様にドームが形成された。時間稼ぎか?稼がせてあげないよーだ

!!

強く拳を握り締めて、私を閉じ込めるドームに向かって拳を振りかぶる。

『ウオーター』!!』

「ツ…えっ…!」

う、そお?!一瞬でドーム内が水で満たされた!?

これは…かなりマズい…!いくら水を克服したからと言って、能力が使えなくなる事に変わりはない!

これによって私の女王化も強制解除させられ、王華も私の中へと意識が戻ってきた。

『これ、能力者殺しだね』

(ホントにね…!)

倍加出来ない私の肺活量なんてたかが知れてる。勿論、2年前に比べれば私の身体能力は劇的に成長しているけど、息はもって後1分が限度だ。じっくり思考出来るだけの余裕がある時間となると更に短く…30秒って所か。

確かに凄いや叶。これ…絶対勝てないじゃん。

(2年前の私なら、ね!!)

しゃがみ込み、地面に手の平を添える。

じっくりと探る様に…焦らず、慎重に。

「……!!」

見つけた…!!

「っ…やらせません」

叶が私の狙いを察知し、させまいと杖を振る。けど残念…!もうやった後だから!私の手の平から、今の私が出せる最大の武装色を放出した。

今している事は、パンクハザードで研究所の床を壊した時と同じ事だった。覇気を地に流し込み、エネルギーを暴れさせて足場を崩す!

…なんて言っても今の武装色なんていつもに比べて大した事は無い。だけど、2年間あの人達に鍛えられた私の覇気は…倍加しなくてもこれくらい出来るんだからね!!

バギイツ!!

「ふはー」

読み通り、破壊した足場へと水が勢いよく落ちてゆき、ドーム内に溜まっていた水は空になった。

同時に私の能力制限も無くなり、プロテクションを殴り壊して脱出した。

「ふう…危なかったよ」

「…まさかとは思いましたが、水中で覇気を使用するとは…あなたは本当に能力者ですか?」

「私みたいな非能力者なんて居ないと思う」

まあ、脱出したって言っても女王化は解除されちゃった訳だけど。

初見殺しの様な技とはいえ、女王化が使えなくなつたのはかなりの痛手だつた。もうさっきのコンボを喰らうつもりは無いけど、他にも同じ様な初見殺しがあればマズいかもしれない。

…流石に叶相手に…アレは使えないからなあ…。というか、使用する機会も無さそうだし。

何とかこの状態で倒すしか無さそうだ。

「王華はどこへ？」

「王華を召喚させるのには覇気が大量に居るからね、さっきの状態じゃないと呼ぶのは厳しいよ、今はもう私の中に意識だけがあるって所」

「……あなたの、中」

杖を構えたまま、何かを考え込む様に叶が眉を寄せた。

…初邂逅の時と違って、今は王華の姿も見せている。だから叶の思考の幅も広がっているんだろうけど、だからこそ状況が把握しづらいのかも。

「私は……うーん……率直に言えば、王華が殻に閉じこもつた事で生まれた人格なんだ」

「……？」

ますます分からない、という様に眉を顰める叶に、私は頬を軽く掻いて思考を巡らせていく。

今、私も叶も攻撃の手は止まっている。きちんと話し合うなら今がチャンスだ：頑張れ私…！

「王華って前世で色々あったでしょ？希望を砕かれる様な最期も迎えちゃって…：それで心を閉ざしたままこの世界に転生したの。で、その時に生まれたのが私の人格って訳。2年前に色々あって、私も王華もみんなに…仲間達に、そして嫁達に救ってもらってからは王華もさつきみたいに出てくれる様になったんだ。まあ、時間制限はあるけど」

「…元々はその体は、転生した王華のものだった…？」

「そうみたいだね、今では私に馴染んじゃってるから、王華が表に出てくるにはさつきみたいな手順が必要なんだけど」

多分、王華がやろうと思えばこの体に乗っ取って、私という人格を心の底に封じ込める事も可能だと思う。何でそんな事が分かるのかといえば、それは私も同じ事が出来るからだ。

つまり、私も王華の人格を封じ込める事は出来る。当然そんな事はしないけどね。そもそも私の考えでは王華と私は別人なんだから、ずっと外に出ている問題ない様な方法があるのなら喜んで使うよ。



その後私と王華のあれこれを少し話せば、叶は軽いため息をついて持っていた杖を構え直した。ありや、何か話の内容に違和感でもあったかな？

なんて不安に思ったのも束の間、叶の浮かべる表情はどこか安心した様だった。私を見る目も今までより遙かに柔らかいモノになっている。

「実を言うのですね、王華を呼び、彼女と直に話をした時点であなたの事は信用していません。…そして今、更にその信用は間違っていないかつたと確信を持っています。…はあ、これじゃあパンクハザードの私はとんだ勘違い魔女だったって事になりますね」  
「あはは…あの時は私の受け答えも悪かったというか…だって私、叶から見れば怪しき満点だったでしょ？」

「ふふ、そう言つて貰えると助かります。…では、続きを」

「続きつて…もう戦う必要ないじゃん」

完全に和解…というか、お互いの事を分かり合つた今なら、別に戦う必要なんて無いような気もするけど。

「一応今はコロシウム中ですから。この場に居る以上は全力で。…どうですか？」

「…なるほど、それはそうだ」

なら私も、もう遠慮は要らないね！

叶と分かり合えたのはとても嬉しい。それはただ私が嬉しいから、というだけではな

く、単純に戦力強化になるからだ。

この先：間違いなくレイと戦う事になるだろうから、その時に叶の様な実力者が居てくれると助かるからね。

さて、じゃあその実力者である叶の力を、今ここで存分に見せてもらおうかな！

\*\*\*

「ふう……」

古ぼけた、安っぽい宿の一室。

そこで「彼女」は少し汗を吸った踊り子の衣装を脱ぎ、丁寧に畳んでからカゴの中に置く。

この2年、彼女は沢山の地を渡り歩き、行く先々で誰かを助け、自らを研鑽させてきた。現地で日銭を稼がなければ生きていけない程、困っている人が居ればついお金を差し出してしまふ。

何でもかんでも手助けをすればいいというものではないという事は分かっている。

自分のやっている行為は所詮、自己満足の延長に過ぎない事だという事も。

「…イリス、様」

だけど、やめられない。やめられる訳が無い。

自分だって救いようの無かった人間の一人…いや、人間と呼ぶ事すら烏滸がましいかもしれない。それ程地に堕ちていた存在だったのだ。

それでも、こんな自分でも彼女は手を差し伸べてくれた、道を示してくれた。だから、彼女に応えなくてはならない。自分は…心だけでも美しく、そして強くならなければならぬ。

そんな思いからこの日まで駆け抜けて来た。救える人は目に入る限りで救い、数多の地を巡ってそこに生きる人を見る。

そして今回はドレスローザ…あのドフラミンゴが治める国という事で不安はあったが、いざ入国してみればなかなか良い国だと思った。…というのは表面上の国を見ての意見であり、豊かな国の裏では一体どの様な事をしているかまでは分かったものではないのだけど。

入国して1ヶ月、そろそろ次の地に向かおうかと思つた矢先の出来事だった。

…：…見てしまった。あの人の顔を。

この国に来ているのだ。恐らく、あの時共にいた仲間達も一緒に。

会いたい、会って感謝を伝えたい、自分を人に近づけてくれた貴女に、生き方を示してくれた貴女に、…優しいと、そう言ってくれた貴女に。

だけど、まだ早いんだ。自分はまだあの人と会うには汚れ過ぎている。もっと、もっと罪を償わなくてはいけない。

「…はあ、そう心では分かっているけど、この地に居るのなら…せめてもう一度お顔だけでも…。だ、ダメです、ダメですわ…心を強く持ちなさい…!」

ふるふると首を振って、欲望に忠実な本来の自分が顔を覗くのを無理やり押し込める。

あの頃とは外見も違えば口調も違う。口調はありきたりなものに変え、髪も下ろした事により腰近くまで届いている。それは過去の自分との決別を決意しての事だったけど、そんな事をしたからと言って全てが許される訳ではない。まだまだ先は長いと気を引き締め直した。

「…それにしても、何だか外が騒がしいですわね」

宿に戻る前はいつもと変わらない雰囲気だったというのに、今は何やら騒がしく感じてる。

今日は特に記念日という訳でも無かった筈だ。大きな祭が開催されるといっているのは聞いていない。精々「魔女」が参戦する事が確定しているコロシウムが賑わっている

らいだった。

それに良く耳を澄ませば、騒がしいのは外だけではなく、この宿の中も同じ様に誰かの大声や他にも何かがぶつかる音などが響いていた。

いくらなんでもそこまで来れば異常だと判断せざるを得なく、急いで動きやすいよれた衣服に着替えを終えて部屋を出る。

まず目に映ったのは……床に倒れ伏した人の姿。そしてその上に跨り、無表情で顔を殴り続けている男。

「……な……」

予想だにしない光景に一瞬呆けている間に、馬乗りになっている男が視線を自分に向けて。その瞳に光は無く、明らかに普通じゃない。

男は殴っている手を止め、ゆるりと立ち上がるとゆっくりとした速度でこちらに歩を進めて来た。……その間に距離はそれほど無く、すぐに近づかれるだろう。

「っ……!!」

何故こちらに向かって来ているのかなんて分かる訳がない。だけど、倒れている男の人を見れば大体何をされるのかは分かる。

彼女の身体能力は別に低くはないが、あそこまで殴られ続けられればまず死ぬのは間違いない。……だが、それでも彼女は背を向けなかった。

視線の先には倒れ伏す男の人。…そう、この後に及んで彼女はまだ、彼を見捨てる事が出来ないでいた。

状況を考えるなら見捨てるべきだと心が叫んでも、恐ろしいのだと頭が警笛を鳴らしても、それでも彼女は“前”へ駆け出す。

何故ならば、ここで“誰か”を見捨てる様な真似をすれば…それは自分の2年間を否定する事になるから。すなわち、自らが認められたいと思っっているイリスから遠ざかるからだ。

それは何よりも、今の自分から言わせてみれば死ぬよりも怖い事。

「あああああ!!!」

恐怖を掻き消す様に叫んで歩いてくる男へとタツクルをし、思っていたよりも抵抗なく後ろへ倒れる男から視線を逸らして倒れていた人の方へ向いた。

しかしその瞬間、彼女は振り返って脇目も振らずに走り出した。階段を降りて、入り口の扉を強引に開けて外へと飛び出す。つまり、一瞬前の思考とは真逆の“逃走”を選択した。

そしてその理由は…倒れていた男が起き上がっていたからである。ただ起き上がった訳ではない。その瞳は馬乗りの男と同じく光が無く、自分へとゆっくり歩を進めるその姿も瓜二つ。

…つまり、助けようとした男もまた、何か可笑しかった。

「き、急に何が起こつて…!!これは、一体…」

外に出れば安心などという筈もなく、喧騒は外からも聞こえていたのだから当然ではあるが、宿を飛び出した先の光景も異常なものだった。

逃げ惑う人々に、それをゆつくりと追いかける人々。

追いかける側は先程の男達同様に瞳に光が無く、その足取りも緩やかだった。もはやアレが人なのかどうかすらも怪しい所だ。精巧な人形だと言われた方が納得出来るくらいには表情に揺らぎが無いのだから。

「…しかし、このままではこの国の人々が…!!」

見れば、瞳に光が無い人々もこの国の住民だった。見覚えのある顔の人も居る、世話になつた人も居る。

…やはりこれは、『悪魔の実』が絡んでいるに違いないと結論づけるしか無かった。それもかなり大規模に効果範囲を広げられる厄介な能力者…これはもう、自らの手に余るのは間違いない。

「…っ」

だが何度でも言おう、彼女はそんな理由で退く事を良しとしないし、出来ない。

まだ彼らに心が残っているかどうかは知らないが…もし少しでも心が残っているの

なら、この場に居る操られているだろう人々の意識を自分一人に集中させる事は出来る。その為の手段がある。

「すうう……、……あなた達!!!止まりなさい!!!」

道を駆け抜けながら叫び、注目を集めていく。操り人形と化した人達が、それでもまだ多少なりとも自我があるのなら少しくらいは気にしてくれるだろう。

結果は願い通りで、彼らは視線だけを彼女に向けた。だがその足は止まらない。 فقط関係なかった。意識を逸らすことは出来る……なら、必ず彼らは自分だけを狙うようになってくれるに違いない、と。

この世界に住む人々の心の中には、絶対と言つてもいい程の存在が君臨している。彼らが欲しいと言えば伴侶だろうと差し出さねばならないし、死ぬと言われれば死ぬしかない。故に、必ず逆らつてはいけない存在が。

(……ふ、本当に、とんでもない程腐った外道ですわ……)

自虐する様な笑みを浮かべて、すぐに顔を引き締め直す。

この存在には確かに逆らつてはいけない。だから何をされても彼らは従うしかない。

だが、従うのはあくまでも表面上だけだ。その心の中まで従わせる事など出来る筈もない。

……そう、今の彼らに理性なんてものは存在しない。



つまり…憎い存在には、タガが外れるだろう、…と彼女は考えた。

「私が誰だか分かりますか？知っている方は？見た事がある方は？名前を聞いた事がある方は？もしある、というのなら、今ここに私は存在していますわ！憎き絶対主に鉄槌を下せる絶好のチャンスですわよ!!——私の名は、ロズワード・シャルリア!!!さあ、民達よ！護衛を一人も連れていない天竜人です!!殺したって誰も気づきませんわよ!!!」

それだけ言つて、彼女は…いや、『ロズワード・シャルリア』。一般的には「シャルリア宮」と呼ばれていた女は人の居ない方向へと走り出したのだつた。

## 179 『女好き、託す』

ロズワード・シャルリア。

その名はこの世界において、ある意味で影響力の強い名前である。

彼女が人前に姿を現す時は、大抵が自分の欲を満たす何かしらの行為をする為であり、例えば気になった人を奴隷にしにきた。逆にあいつは気に入らないから殺しにきた。

この様に、人々は口が裂けても言えないが、彼女も天竜人としての枠を出ない人柄であつた。

幼い頃からの教育で自己に対する特別視が止まることを知らず、下々の民に対しては人間だと思わない扱いをし、同じ空気を吸う事すら嫌がつて常にシャボンマスクを頭に覆う。

そんな憎き天竜人の一人：そいつに今、民達は溜まつた恨みをぶつける事が出来る機会がやってきた。その上今の彼らには理性など殆ど残つちやいない。つまるところ、彼らがシャルリアを追う様に歩き出すのは必然だつたのだ。

「……」

そして今、シャルリアの後ろにはまるで数えるのもバカらしくなる程の人々が押し寄せていた。

この国の民達に危害を加えさせたく無いというシャルリアの思惑は成功したが、民達を狙う筈だった無数の人影は現在シャルリア一人に狙いを定めている。

幸いにもその足取りは変わらず悠然としていて追い付かれる心配は無さそうだが、それでもこの数に追われるというのはなかなか精神的に来るモノがある。

自分を狙わせる以上、彼らの視界に映らなくなる程遠くに逃げる事は出来ない。つかず離れず、この絶妙な距離を保ち続ける必要もあった。

(目に映った者を無差別に攻撃する様に操られている…？操られている者同士では争いは起きない。だけどそうなると、最初に見た2人が気になりますわね)

生死を賭けた闘作戦を実行中にもシャルリアは現状把握に努める。

今自身を追っている者達は、視界に入る限りでは誰一人として同士討ちをしていない。だけど宿で見た2人は違った。

ここまで情報を整理して、シャルリアの中で3つの可能性が生まれる。まず1つ目は…操られている者に攻撃されれば、その効果がゾンビの様に感染する。

そして2つ目は、殴られている時に丁度操られたか。

2つ目に関しては無い…と思いたい。何故ならそれは、遠隔操作でいつでもどこでも

操り人形を増やせるという証明にしかないからだ。

今この瞬間にも自分が操られる側に回るかもしれないという可能性は、出来れば考えたくなかった。

3つ目は…同士討ちをしている余裕が無いほど、天竜人である自分を殺したいと思っているから…か。

再三言うが、この世界の人間はほぼ例外なく天竜人に対して何かしらの悪感情を抱いている。当然だ、彼らの横暴が過ぎる行為はマリージョア以外に住む人にとって災厄以外の何でも無い。

「あら…あらあらあ…？」

「ツ…!？」

突然、真横に人が現れた。本当にいきなり…まるで瞬間移動でもしたかの様に自然と…その女はそこに居た。

狂った笑みを浮かべ、碌に手入れもしてなさそうな紫の長髪を靡かせて隣を走る彼女をシャルリアは知識として知っている。

「あなたは…狂神…!!？」

「凄いわね！上々よお？こーんなに沢山の人数達からヘイトを集めるなんて…どんな方法を使ったのかしら？ふふふ」

話を聞く気は無いようだが、口にした内容はシャルリアを驚かせるのに十分な内容であつた。何故ならその口振りは、この異常事態に関わっている事を暗に示していたからだ。

…この国に、狂神が牙を剥いている。

「…この方達を操っているのは貴女ですか？」

「うふふ、ふふ！これなら、もーっと移動速度を上げてても平気じゃ無いかしら！それから…ええ、ええ！そうしましょう、その方が楽しそうよ！最上に楽しく！上々気分！！」

話は通用しないらしい。楽しそうに話しているが、こちらの質問には何の反応も示さない。無視しているというより、元からシャルリアの言葉など聞く気もない…という事か。

「じゃあね、私はもうこの島を出なくちゃいけないけれど…あなたが最後まで頑張つて逃げて、その果てに絶望に吞まれて、そして死ぬ。そんな上々な展開を期待しているわ」

「…!!」

そう言った瞬間、また彼女の姿が掻き消えた。何をしにわざわざ姿を見せたのか…狂った人間の考える事など分かる筈もないが、無視出来ない内容をあの狂気は口にした。

“移動速度を上げる”。

それはまさか…とシャルリアは軽く後ろを振り返って目を見開いた。

先程までは、通常の歩行速度よりゆっくりと歩いてきた筈の者達が…段々と、段々と歩く速度を上げていく。

いや、これはもはや歩いてない、走っている！シャルリアはそう認識した途端に駆け出した。

彼らが歩いているからこそあつた余裕も、今や見る影も無し。全力で走つてようやく同程度の速度で…無数の人影がシャルリアに襲い掛かろうとしていた。

\*\*\*

プルプルプル…プルプルプル…

「こんのお！何そのデタラメな光線はあ!!……ん？」

叶の放つバカげた威力のレーザービーム、合わせて10本もの数を誇るそれらを必死に避けた丁度その時だった。特に持ち込みが禁止されなかつた電伝虫が懐から鳴き響

いたのである。

「…待った方がいいですか？」

「あー…ごめん、ちよつと出るね」

誰からかかつてきたのかは分からないけど、私にかけてくるって事は急ぎの用事である可能性が高い。既に叶との和解を済ませてある今となつては大会よりもこちらを優先すべきだろうと判断した。

「もしもし、誰？」

『イリスちゃん、俺だ、サンジだ』

「サンジ？どうしたの？」

あれ…電伝虫の向こうで何か起きているのかな、大砲の音が聞こえる。

『詳細は省いて、とりあえず現状を簡潔に言わせて貰うが…まず俺達は今、ビッグマムの船に狙われている！それから、ドフラミンゴの野郎にモネさんが攫われた！』

「え!？」

『ちよつと前にドフラミンゴから襲撃を受けてな、何とか撃退は出来たんだが…!』

…いや、ドフラミンゴに突然襲撃されてそれだけで済んだのは素直に凄い。私がその場に居なかつたのが悔やまれるけど過ぎた事を考えても仕方がない事だ。

モネに関しては後で取り返せば良い、大丈夫、まさか殺されたりはしない筈だ。

『こつちの件はルフィに先に連絡した。船に反撃する許可も貰った。『ゾウ』って所に先行する事にもなった。…つまり後はイリスちゃんに頼み込むだけなんだ』

「…なるほど」

サンジは紳士的な人だ。大体何を考えているのかも分かったし、私もそれを拒む事は無い。

『今、サニー号にはナミさんとペローナちゃんも乗ってる。2人の命…今だけは俺に預けさせてくれねエか?』

「了解。頼んだよ、サンジ」

『やけにあつさりだな…本当に良いのかい、イリスちゃん。俺は一度モネさんの護衛を失敗してるってのに…』

「サンジだから良いよ。私はあなたの誠実さを信用してる。私が合流するまで、2人の事お願いね…信じてるから!」

あのサンジがナミさん達が船に居るにも関わらず反撃するって結論を下したんだから、状況はよつぽど切羽詰まってるんだろう。どの道私は今すぐそこに駆けつけてはあげられないし、サンジの事を信じるといふ言葉にも嘘はない。

私が嫁を預けるって言う事がどれだけ大きな事なのか…サンジにはそれが伝わったのか向こうで唾を飲み込む音が聞こえた。



「それに安心して？もしみんな捕まっちゃっても私が絶対助けに行くから！ビッグママなんてボゴボコにしてあげるよ！」

『…ははっ、ウチの女王様は頼もしいな。こりやア男としてカツコ悪いところは見せられなくなつちまつたじゃねエか』

「そんな事気にしなくても、ウチの男性陣はみんなカツコいいよ。…それじゃあ、よろしく」

『ああ、任せてくれ。…それから最後に一つ…俺達が船を出す前の事なんだが、何やら街の様子が変だった』

…変？私がおここに来るまでに見た街はオモチャが生きていたくらいでそこまでおかしくはなかった。

とはいえ、サンジがこうやってわざわざ伝えるくらいだ。用心はしておくべきだろう。

「分かった、気をつけるよ。サンジも気をつけて」

そして電伝虫を切り、再度叶と向き直った。

さて…サンジは街の様子が変だというのが分かっただけで、何がどう変なのかまでは分からない様だったし…みんなが心配だから早いとこ様子を見に行きたい。

それにモネの奪還も急がないと、自分の死すら躊躇させない様な価値観を植え付けた

のであろうドフラミンゴとこれ以上共に居させたくはない。モネには自分の価値をもっと深く知ってもらわないといけないんだから。

「ごめん、ちよつと急用が出来ちゃった」

「聞こえていましたよ、そういう事なら急いだ方が良いでしょう。そうですね…何とか私に負けるフリをして貰えれば…」

「分かった、どうせ八百長に気付ける程の達人なんてそうそう居ないだろうから、それっぽく行かせて貰う、ね!!」

今更観客に気を遣っても遅い気もするけど、私は無防備に、一直線に叶へと突撃して拳を振り上げた。

試合中に電伝虫を取り出したくらいだ、叶の作り出したドーム状のプロテクションで何も聞こえないが、外では下手したらそれなりのブーイングが流れたりしていたのかもしれない。

「10倍灰!去柳薇ア!!」  
じゅうばいばい さよなら

「つ…!ちよ…当たつたらどうするんですか!」

間一髪で私の拳を避けた叶が慌てた様に杖を振るい、私の周囲にいくつもの炎弾を発生させた。

私は無理に殴りに行ったせいで体勢が元に戻らない…事もないが、ここは敢えて歯を

食いしばって耐える事を選択した。私の考えは当然、これにわざと直撃して倒れる…という流れである。

『ファイアバレット』!!』

「うぐっ!?!」

ふ、普通に痛い!! 20倍の防御力なんだけど！ 覇気も纏ってるんだけど!!

…とまあ、予想以上に火力のある炎弾を無防備に喰らい、私はそのまま力無く倒れる様に崩れ落ちた。

あまりにも呆気ない最後に見えるかもしれないが、強者同士のバトルとは得てしてこうなるものだ。…いやまあ、八百長だけどさ。

ま、あのまま試合を続けても結果は変わらなかつただろう。女王化の使えない私が杖持ちの叶に勝つのは正直言って厳しいし、よしんば試合の流れが上手く行ったとしてもそもそも30倍では叶のプロテクション一つ突破するだけで精一杯だ。

…さて、後はこのまま担架で運んでくれたら、そこから出口を探して何とかしますか。

## 180 『女好き、2度目のゴミ箱と情報収集』

「どうしてこうなった」

えーつと、まずは状況を整理しよう。

確か私はついさつき、叶との八百長バトルで敗者となり担架で医務室に運ばれていた筈だ。なのに医務室のベッドに寝かされた途端、その下の床が開いて地下のゴミ箱施設へと真つ逆さま！わーい！まるでパンクハザードの巨大なゴミ箱みたーい！！

「つて、言ってる場合じゃない！」

「何言ってるんだア？お前」

頭をガシガシと搔いた私に近くに居た男がそう話しかけてきた。

この通り、何故かは知らないけど私以外にも沢山の人達がここに運び込まれている。彼ら1人1人に話を聞いて行つた訳ではないけど、確認を取つた人は全員がこの大会の敗者だった。

負け組の控え室はゴミ箱がお似合いって事？いや…それはいくらなんでも可笑しいよね？

…ん？もしここに敗者が集められているのだとしたら、もしかして…。

ふと気になった事があり上を見上げてみた。すると今まさに懸念していた事が起きていた様で、鮮やかなピンク色の髪をした美少女が空から降ってきていたのだ。勿論他にもキャベンデッシュやら何やら沢山降って来ていたが、一番大事なのは当然レベッカちゃんである。

「レベッカちゃん!!!」

危うくゴミ溜めに叩きつけられそうになったのをすんでの所で優しく衝撃を殺す様に受け止めた。

あつぶな……! 気付くの遅れてたらと思うとゾツとする……!

「ん……、あ………ん、こは………?」

丁度目を覚ましたのか、私の腕の中で頭を押さえて辺りを見渡すレベッカちゃんに簡単に状況説明をした。といっても私も良く分かってないんだけどね……そりやあ出ようと思えば今すぐにでも出られるけど、私1人だけ出て行くのも何だか申し訳ない気がするし。

「……私、負けたんだ……」

悔しそうに……いや、悲しそうに呟くレベッカちゃんには申し訳ないけど、私としてはレベッカちゃんには絶対勝たせたくないから結果としては悪くなかった。だって賞品の悪魔の実を口にしたら最後、ドフラミンゴに突撃するんでしょ? 流星に使い慣れ

ない実の能力で勝てる程あの男が甘いとは思わない。レベツカちゃんには無駄に命を散らして欲しくないんだ。

「レベツカちゃん」

「え?……え!?わ、私、いつからアイリスさんに抱っこされてるの!」

「あ、それは最初から」

いや確かにお姫様抱っこをする事で触れる太ももだとか腕とかは最高だけど、私が名前を呼んだのはその話をする為じゃない。

「レベツカちゃんさ、ドフラミンゴを討ちたいんだよね?」

「は!!?」

「何言ってるんだお前?!」

「頭をイカれてんのか!」

「あ、アイリス!あまりそう言うことは……!」

あまりにも無遠慮な私の質問に周りの人達が反応し、レベツカちゃんも困った様に私の顔を見上げてくる。けどもう今更だ、どうせドフラミンゴは今までの流れから考えて働いて来た悪事がバレるんだろう。そしてルフィにぶつ飛ばされるまでがテンプレ。…つまり、今更レベツカちゃんの反逆心を隠す必要などない。もしも何かあれば私が守ればいだけだし。

「それってさ、絶対にレベツカちゃんが手ずからやらなくちゃいけない事？」  
「え？」

私の言葉の意図が分からないと言った風に目を点にするレベツカちゃんに私は優しく微笑みかけた。

さっきの試合でも思つた事だけど、ぶつちやけレベツカちゃんに剣は似合わない。何なら彼女自身からも戦いに対しては消極的な想いがその戦闘スタイルから滲み出ているのだ。

「レベツカちゃんがどうしても自分の手でドフラミンゴをぶつ倒したいのなら、私が手伝つてあげる。だけどそうじゃないのなら…私達に全部任せてみない？」

「え、でも…な、何でアイリスがドフラミンゴを…！」

「私にもあいつをぶつ飛ばしたい理由はあるからね。それにレベツカちゃんにだって何か事情があるんでしょう？ だったら任せてよ、こう見えても私、強いよ？」

「それは、知ってるけど…」

うーん…やっぱりいきなり言つても困らせるだけだったかな。けどこのままレベツカちゃんが落ち込んでいるのを見てるのはなあ…。

「…ん？」

どうしようかと唸つていれば、何かが上から降つてくる気配がした。気配だけじゃイ

マイチ良く分からなくて上を見れば、見るからにベトベトしてそうな粘液が私とレベツカちゃんの真上に落ちてくる所だった。

ぶつちやけ意味が分からないが、あの粘液で私達を引き上げる気なのは間違いない。それがこの状況を仕組んだ者の仕業か、それとも私達の現状に気付いた者が助ける為に打ってくれた手なのかまでは判断出来ないけど……どちらにせよ、私はこれをチャンスと見てわざと粘液に気付かないフリをし直撃した。

その際に周りを見れば、私達以外にも沢山この粘液に捕まっついていて、続々と上に引つ張り上げられている様だ。あ、キャベンディッシュもいった。

「うえ」

「あ、アイリス!？」

「わっ!」

思ったよりベトベトで気持ち悪いけど、これなら自分1人で抜け出した様には見えな  
いし、何よりこの先に元凶が居るのならそいつを叩けば良い。

目論見通り粘液は周りに続いて私を上へと引つ張り上げ始め、天井に空いてある無数の穴の1つへと吸い込まれる様に入って行く。腕の中のレベツカちゃんを落とさない様に少し力を込めて、この先何が起きても良い様に身構えた。

それなりに長い穴の道、頭上から光が射して出口が近い事を悟り、粘液を無理矢理引



き剥がしてから宙を蹴って外へ飛び出した。

そこは何というか：かなり豪華な部屋だった。豪華、とは少し違うかもしれないが、子供部屋を煌びやかにした様な感じ：と言えば良いだろうか。プリン型の椅子に、何故か部屋の中にあるメリーゴーランド。そしてどこかへ歩いて行くオモチャ。うん、訳がわからん。

それよりも私が驚いているのはそんな部屋の内装などではなく、この部屋に居る一人の女の子の事だ。エメラルドグリーンとでも言えはいいのか、それに近い髪色のちっちゃな幼女がブドウ：かな？それを口に放り込みながら出口から飛び出した私を見つめている。

近くには粘液を出したのであろうなかなか汚らしい外見の男も居たが、こっちはどうでもいいのだ。

「君、可愛いね！名前は何？」

「……」

「ブツヘツヘ〜！何か面白いヤツが釣れたんね！」

いくらなんでもその子くらいの歳の子をどうこうしようとは思わないけど、アイサの様に将来の約束は出来る訳ですよ……ま、流石に冗談だけだね。

可愛い女の子を見たら反射的に言っちゃうだけで、誰でも良いって訳じゃない。特に

今の状況なら特に。

「んん〜!?まさかその女は、レベツカか〜!?」

「え…?」

「ん?」

あれ?なんかこのおっさんはレベツカちゃんの事を知ってるっぽい?

「べへへ…これはいいドファイへの手土産になりそうだ!!シユガー、オモチャにするのはそつちのメイドだけにするぞ!」

「別にいいけど」

なるほど、彼女はシユガーって言うのかあ…:…じゃなくて!今結構重要な事言っただけ!?オモチャにするとか何とか…。

もしかしてだけど、私が外で見てきたオモチャ達って元は人間だったって事!?じゃあ、さつき歩いて行ったオモチャ達って下で引き上げられたキャベンディツシユ達か…:…!

「…レベツカちゃん、ちよつと下がってて」

だとしたら、やっぱりこの人らは敵の可能性が高い。だってオモチャにさせるのは確定くみたいな話になってるし、普通に考えてオモチャになりたい人間なんてそうそう居る訳がない。

…だけど私が彼らを敵だと断定出来ないのは、そのオモチャ達がそれなりに人と馴染んでいたからだ。普通無理矢理オモチャにされたら反抗しない？それもあれだけのオモチャ達がいれば反乱くらいは起こせそうな物だ。

それすらも未然に防ぐだけのカリスマがドフラミンゴにあるのなら話は別だが、そもそもそんなカリスマがあるやつは人をオモチャにはしない。

という訳で床に降り立った後、私はレベツカちゃんを自分の背中に隠した。…隠れ切れてないのは仕方ないでしょ！ね!!

「えーつと、色々聞きたい事はあるんだけどさ、まず…ここはどこ？」

「べへへ、ここは「幹部塔」！だがくく!!何故かオモチャが次々と生まれてくるこの工場のような部屋には「幹部塔」とは別の呼び名がある…！シユガー、またの名をオ？」

「幹部塔」

「ちギヤくくく!!べつつへへ!!」

…とりあえず確定なのは、この人達が私達を助ける為にここまで引き上げた訳じゃないという事。何というか…話の内容から考えてそれはあり得なさそうだ。

敵だと断定する情報は無いとしても、ぶつちやけほぼ敵で間違いないだろう。

「まあ、親切にどうも。じゃあついでにさ、そのオモチャについても教えてくれない？」  
「どうせオモチャになれば何も出来ねエし、それくらいは構わねエ！べへへ…！お前も

見ただろう、この国のオモチャ達を！」

鼻水男の言葉に軽く頷いておく。ここでこいつらを倒すのは簡単だが、情報は少しでもあつた方が助かるのも事実だ。

早くみんなと合流したいという気持ちもあるけど、少し耐えて話を聞き出してみよう。

「あれらは皆、ここにいるシユガーの能力でオモチャにした元人間だ〜！オモチャになつた者は人々の記憶から消える！シユガーとの契約で幾らでもコキ使える手駒にもなる！んね〜！便利なんだなアこれが！」

「…なるほど」

その鼻水の言葉に、後ろのレベッカちゃんの肩が跳ねた気がした。何だろう…何か気になる事でもあつたのかな？

「それに、レベッカ！母親も居ねエのに良く今まで生きてこられたな〜！んつべへ！あの日ディアマンテがお前の母を殺して以降、どうにか食い繋いで来たつてかア〜？」

「…え」

「……あ？」

レベッカちゃんの、母親…？え、それに…殺した…？

「父親はオモチャになつたからなア〜！もう記憶にも居ないだろうにねエ！哀れな人生

だとダイヤモンドも笑って……ぐべエ!?」  
「と、トレーボル…!?!」

シュガーがさつきまでの無表情とは違い、少し驚いた様に吹っ飛んでいったトレーボ  
ルを見て声を張り上げた。

事情は良く分かんないし、こいつらが結局何なのかもハッキリ分かってないけど…。  
「私の嫁の敵だって事はハッキリした。…もう許さないから」

そのダイヤモンドって奴もすぐにぶっ飛ばしてやる…! シュガーは…霸王色で眠ら  
そう。

30倍しか倍に出来ないのは痛いけど、多分シュガーならそれで昏倒させるには十分  
だろうし。

## 181 『女好き、街の状況を知る』

「ぬウ……シユガー！早くそいつに触るんだ!!」

「やってる……けど……!」

トレーボルの焦る様な声とシユガーの必死な声が部屋に響く。

流石に1発では沈んでくれなかったトレーボルと戦闘になり、そこにシユガーも乱入して2対1の状況になっている訳である。

「アイリス！私も……!」

「大丈夫、そこに居て」

慌てるレベツカちゃんを視線だけで制し、腰の小太刀を引き抜いた。トレーボルは自分の体をベトベトだかネバネバだかの能力で大きく見せており、要はハリボテになっている様なのだ。見聞色で探れば細っこい貧相な本体を正確に殴ったり蹴ったりは出来るけど、正直に言うのと触れるのすら躊躇うほどに汚いから小太刀に任せるとする。

それからレベツカちゃんを戦わせる気はない。ここで応援なんか頼めば彼女に言った「任せて」の言葉が嘘になってしまう。別にこの2人程度なら何も問題は無いし……。

「えい……!」

「よつと」

無防備にも腕を突き出して体に触れようとするシュガーの手をすりと避け、小太刀を喉元に突き付けた。

「トレーボル、動けばこの子を殺すよ」

「シュガー!!…く…人質のつもりか貴様ア!!」

「さつきまでの気持ち悪い喋り方はどうしたの? んねーんねーとかべへへとか、もしかしてキャラ作り?」

ニヤリと笑って挑発すれば、奴は分かりやすく額に青筋を浮かべはしたがそれ以上動きはしなかった。仲間を大切に思っているのか、シュガーの能力が大切なのか…。一つだけ確かなのは、思ってたより慎重だということだ。

命を私に握られている形になってしまったシュガーは、私の握る赤黒い小太刀の刀身を見て固まっていた。妖刀と言う事までは理解できなくとも、この刀が普通では無い事を何となく察したのかもしれない。まあ…当然殺したりはしないけど。

「1つだけ、どうしても確認しないといけない事があるんだけどさ…あなた達ってドフラミンゴの仲間?」

「…せ、正確には、ファミリーの幹部…よ」

「おい、シュガー!」

「なるほど、繋がりはこちらとある訳だ」

その言葉を聞いて満足し、シユガーの喉元から小太刀を離す。

その瞬間、私が油断したと見たのか、それとも、もう今しかチャンスが無いと思つたのかシユガーの腕が動いて私の手に近づいてくる。

「甘いよ、おやすみ」

シユガーの手が私へと届く寸前、30倍の霸王色の覇気をぶつけて昏倒させた。妙に手で触る事に拘っていたから彼女の能力は『自分の手で相手の体に触れる』が発動条件なんだろう。それだけで相手を意のままに操れるんだから中々に強力だが、当の能力者本人がそんなに強くないのなら対処は簡単だ。

「シユガーが…!? マズい…!! 貴様、良くもやってくれたな!!」

その顔を怒りに染めて、トレーボルは持っていた杖の先端から炎を生み出した。ライターみたいになつてたのかな？

『イリス、あれマズい、爆発するから早く倒さないとレベツカちゃんを巻き込むよ』

「……………オツケー、じゃあ手短に済ませようか! 20倍灰!」  
(にじゅうばいばい)

「……………な、その、技は……………!」

王華の助言に軽く頷き、小太刀の長さを2倍にして居合の構えを取る。

あんまりやり過ぎて真つ二つにする訳にもいかないし…加減が大事だよね。死なな





を探さないかね」

「うん……」

…奴らのした事は許せないけど、とにかく今はレベツカちゃんにお父さんだけでも取り返してあげられて良かったと思う。

涙を止めどなく溢れさせるレベツカちゃんを見て、私は早くお父さんに会わせてあげようと決意した。

「……」

トレーボルは別に良いとしても、シュガーを放置していくのは少し気が引けるといえるか…。

まあ、仕方がない、今は他に優先すべき事柄が多すぎるし私もたまには自重しよう。

「…あ、そうだ」

地下の人達を何とかここまで連れてこないと！あそこにはオモチャも沢山転がってたり、仮にあれらもシュガーの能力でオモチャにされてた人なら今頃地下は混乱を極めているかも。

うーん、でもなあ…私の能力じゃあ一度に運べる人数が限られてくるんだよね…。急ぎで行動したい今、正直そんな事をしている時間なんてない。

「…よし、(ト)は素直に助けを呼ぼう」

現在地が分からないけど、彼女ならなんだかんだで来てくれそうな気がして電伝虫を取り出した。

\*\*\*

「ハハハハ!!」

数分後、バン!と扉を強く開ける音と共にミキータが入ってきた。

私が応援を呼んだのは見ての通りミキータだ。少し息切れしているが、この短い間で私を探す為に走り回ってくれたのだろう。

「流石ミキータ、良く分かったね!」

「キャハ!当然よ、イリスちゃんの天にも昇る程心地良い匂いを私が突き止められない筈が無いワツ!!」

「そ、そっか」

ぐわっ!と目を見開かせるミキータに軽く苦笑して、私はここに呼んだ要件を手短かに伝える。

ミキータの能力なら彼らを運ぶのも楽だろう。空も飛べるから、地下からここまでの往復についても問題ない。

「あ、それから……ここに来るまでの間、何か街で変わった事は起きてなかった？あ、オモチャが人にな変わった事以外で！」

「あ、そう！その事でイリスちゃんに伝えなくちゃいけない事があるのよ」  
「伝えたい事？」

「やっぱりサンジが言ってた様に何か街で異変でも起きているのかな……。ミキータは大丈夫として、後は姿を見れていないロビンが心配だ……」

「オモチャが人にな変わっていくのも驚いたけど……今街ではそれ以上の異常事態が起きているわ。……私も目を疑ったけど、何故か人が人を襲っているのよ」

「え？」

「海賊とか、強盗とかじゃなくて、普通に道を歩いていたこの街の住人がいきなり同じ住人を襲い出したのよ。隣同士で仲睦まじく歩いていた恋人達もいきなり争い始めたわ」  
「……え？どういう事？それは、確かに異常事態だ。ハッキリ言って状況が掴めないというか、どうしてそんな事になっているのかがサッパリ分からない。」

サンジは勘が良いから、きつと詳しくは分からなくともこういう事態が起こる雰囲気を感じ取ったんだろう。悪寒がするとか、そんな感じで。

「…王華、分かる？」

『……ドフラミンゴ、かな？でも、それだと早すぎる……、ごめん、記憶に無いね。つまり……』

「……レイ、か」

『狂神』レイ。原作に無いデタラメな異常事態がこの国で起きたのなら、ドフラミンゴのバックに居るといふレイが今回の件に囁んでいるのは間違いない。

……ただ、この事態をレイが引き起こしたのだとするならば、奴の悪魔の実の能力がよく分からない事になってしまう。

私と王華の読みでは、「良くも悪くも身体強化系」だと思っていた。だということにここに来てこの様な事態を起こせる能力である可能性も出てきたと……。

……はあ、もう何が何だか……。

「イリスちゃん、私がイリスちゃんに伝えたいのはそこじゃないわ」

「え、そうなの？」

こんな異常事態が起きてるのに、それ以上に大事な事があるって相当だよね……。ミキータの表情も何だか本当にそれを口にしようかしまいか迷っているかの様で、その情報に対して何か思う所があるかの様だった。

「……、それが、その暴動を起こしている人達はある一人の人間を追っているらしいの

「よ」

「へえ……？　じゃあ国民を操っている人の狙いはその人なんだ？」

「それが……その人が自分を狙う様に引き付けているらしいんだけど……」

「だとすると、他の人に危害が加えられない様に囚になつて事……!?　そんな事が出来るってことは、その人は相当の手練れか、もしくは……心の優しい人か。」

「その人は自分の名前を叫びながら走っているらしくて、その名を聞いた暴徒達はみんな彼女を追っていくわ。私も名前を聞いた時は驚いた。多分、イリスちゃんも凄くビツクリするとは思うけど……」

「あのミキータがここまで言葉を濁しているんだから、相当驚く人物なのだろう。」

「ミキータと私の共通の知り合い、もしくは知ってる人……うーん……候補が多すぎて分からない！」

「誰？」

「……ロズワード・シャルリアよ」

「…………はえ？」

「驚きすぎて思考が停止した瞬間だった。」

## 番外編 『女好きとチヨコの日と誕生日』

「「「あ」」」

サニー号のキッチンにて。普段はこの船専属の凄腕コック専用室となっているこの部屋で、今日、四人の女性が鉢合わせた。

一人目はナミ。

二人目はミキータ。

三人目はロビン。

四人目はペローナ。

要するに、主であるイリスを外した嫁ズ四人組であった。

「あんた達も?」

「そういうナミちゃんも?」

「フフ、みんな考える事は同じようね」

「なんでお前らも居るんだ……クソ」

現在の時刻は昼の3時。新世界の予測出来ない波を幾度となく乗り越え、ようやく食糧調達のための無人島へと辿り着き、島に降り立つて各々の仕事を開始したのだ。とはい

え、食糧調達に一味全員で取り組む必要はなく、そうして彼女達がやって来たのがこのダイニングキッチンであり、同じ事を考えていたのが4人居ただけのこと。

ちなみにイリスはゾロと外で修行だ。イリス自身もゾロをいじるのは2年前から嬉々としてしているし、ゾロとしても強くなったイリスと手合わせ出来る事は自分にとってプラスに繋がると考えている様で、ここ最近は良く二人で打ち合っていた。それ以外の面子は無人島に乗り込んでいる。特にルフィなどは大いにはしゃいでいる様子だった。

「幸いキッチンが広いし、みんなそれぞれ干渉しないで作りましょ？」

「当たり前だろ、誰が好き好んでお前らと仲良くオリヨリなんてしたがるんだ」

満更でも無さそうだが、口ではそう言ってしまうのがペローナという女の子だった。イリスを前にすると更に攻撃的になって、そして更にデレデレになる特徴があるが。

「キャハ、待っててイリスちゃん！最っ高に美味しい「チョコ」を作るわ!!」

チョコ。

勿論、小鳥が歩く擬音ではなく、チョコレートの事だ。

というのも、明日は世間一般ではバレンタインデーなのである。海賊である彼女達に世間一般のアレコレはあんまり関係のないものだが、ことバレンタインに関してはそうもいかない。



何故ならその日は、女の子が好きな女の子にチョコを渡す日だからだ。と彼女達は認識している。やはり世間一般とは色々かけ離れた思考回路をしていた。

「ミキータのチョココレートか、それなら多めに作って私にもくれ」

「あなたがそういう事を言うなんて珍しいわね、ペローナ」

「深い意味はねエぞ。単にこいつの作るチョコが美味いってだけだ」

ロビンの疑問にペローナがそう答える。

確かにその通りで、この中で……どころか、あのサンジと比較してさえも、こと「チョコ作り」に関してはミキータに軍配が上がるのだ。

イリスもミキータの作るチョココレートはお気に入りである。

「イリスちゃんチョコを作った後でもし余るなら、みんなにも作ってあげるわ」

「お前……そんなに材料用意して余らないなんて事あるのか？ どんだけ作る気だ」

「私からイリスちゃんへの愛を送るには普通のじゃ足りないのよ！ だから作るわ、等身大イリスちゃんチョコを!!」

「頭おかしいだろ……お前……」

ペローナから言わせればあり得ない事も、当のミキータはどこ吹く風、既に自分の世界だった。

そんな彼女を呆れた様に見えるペローナだったが、不意にナミとロビン2人に視線を配

らせて軽く頷く。

ペローナとのアイコンタクトを終えたナミが、こほん、と軽く咳払いを一つ。そしてミキータに何の気なしに風で話しかけた。

「ミキータ、それならちよつとお願いがあるんだけど、聞いてくれる？」

「キャハつ、イリスちゃんへチョコ……!!……あ、ナミちゃん？何かしら？」

「ミキータが作るチョコってかなり大きいんでしょ？だつたらイリスが私達のチョコを受け取りやすい様に最後に渡して欲しいんだけど、良い？」

「？イリスちゃんはそんな事気にしない——」

「ミキータ、お願いね？」

「ええ……？」

ナミかららしくない提案をされたと思えば、今度はロビンも念を押す様に同意を求めてくる事実にミキータは今度こそ首を傾げた。

「……はア、お前のチョコは味もそうだが、形も大事なんじゃないか？私達より先に渡してしまえば、それこそアイツが私達のチョコを受け取ってる間に溶けるぞ」

「む、それは、そうね……」

「それにここは夏島だ。余計に溶けやすいだろうな。私はそれでも構わねエが……ホロホロ」

「た、確かに……っ!!」

ごくり、とミキータは唾を飲み込んだ。その事実気付かず真つ先にチョコを渡していたら、イリスがそのチョコを食べる頃には最愛の人の顔がドロドロになってしまったホラー感満載のゲテモノになっていただろう。

その光景を想像してぶる、と身を震わせた。

「きゃ、キャハ……！ありがとう、みんな。渡すのは最後にしておくわ！」

風情は無いが、このキツチンで渡すのが良いだろう。ここなら冷蔵庫から出して最速でイリスに渡す事が出来る。とミキータは考えた。

本日の夕飯と明日の朝食は無人島で得た食材を使う筈なので、明日の昼までは冷蔵庫の中をサンジなどが見る事もない。

そんな風に納得するミキータを見て、3人は満足気に頷くのだった。

そして、後日。

\*\*\*

「ん……っ」

丸い小窓から、夏島特有のカンカンと照りつける朝日に顔を襲われて目を覚ます。

昨日はあの筋肉剣士に1日中修行に付き合わされたせいかな、少し体が重い。私が20倍縛りしているのに気付いてからのゾロの剣幕はとんでもなかったから、二度と奴には手を抜かないと誓った。

「……………あれ？」

いつもなら感じる温もりが無く周りを見れば、そこには誰も居なかった。あのペローナちゃんでもさえも、だ。

「ああ、そういう」

とはいえ、疑問はすぐに解ける。私は鈍感系じゃないから、今日がバレンタインデーだということにはすぐ気が付いた。ていうか、バレンタインなのは知ってたけど。

2年前のバレンタインはナミさんとチョコを送り合ったんだよねえ。みかんの木に身を隠して、いちやいちや……………ぐふふ。

……………ま、今回のバレンタインはもうどう過ごすのか決めてるんだけど。

今日は大事な日だから、いつまでも布団ではいられない。のそりと体を起こし、まずは顔を洗いに向かった。

「あれ、ペローナちゃん？」

「ふわ……………あ、……………女王か」

そこで、明らかに寝起きですって感じのペローナちゃんを見つける。

朝起きて、洗面所の前で歯磨きしているペローナちゃんか……レアだね。

「……ん」

「ん？」

目を合わせる事なく、歯磨きの途中でペローナちゃんから綺麗にラッピングされた四角い箱を手渡された。

ちよつと突然過ぎて驚いちゃったけど、これはまあアレだろう。

「ありがとう、すつごく嬉しい！」

「いちいち大袈裟なんだよ、お前は」

「そんな事ないよ、私の為にペローナちゃんが作ってくれたチョコだから嬉しいんだよ」

「……うるせエんだよ、バカ……」

もはや見慣れつつある赤面ペローナちゃんだけど、やはりいつ見ても可愛いなあとはっこりする。

早々に顔を洗い終えてその場を後にするペローナちゃんを見送って、私も口の中を洗い流した。

私もみんなに渡すチョコ取りに行こうつと。

2日前に作り終えて冷蔵庫に入れてるから、とりあえずキッチンに向かえばいいかな。

冷水を両手に含んで顔にかけ、少し残った眠気を完全に飛ばして目的地へと向かう。道中で、壁にもたれかかる様にして本を読んでいたロビンと目が合った。

「あら、おはようイリス、やっぱり起きてたのね」

「おはよう、ロビン。やっぱりりって？」

「さつきペローナがいつもの顔で歩いていたら。またイリスにやられたのだと思っていたわね」

「はは……言い方を変えて欲しいなあ、なんて」

別に私はペローナちゃんをやったつもりはない。ペローナちゃんが打たれ弱いだけだと思う。まあ、そんな所も含めてちょー可愛いんだけどね？

なんて思っていると、ロビンもペローナちゃん同様にチョコが入っているのだろう箱を取り出して私に差し出した。

「ありがとう。でもごめん、私のまだ冷蔵庫なんだよね」

受け取りながらそう言えば、「分かっているわ」と頷いてからある方向を指差した。

「ナミならそっちよ。みかんの木で待っているらしいわ」

「あ、そうなんだ。じゃあ先にナミさんに会いに行こうかな」

それにしても、わざわざキッチンへ行く為の道中をロビンが張っていたり、ナミさんの所へ誘導したり、まるで私をキッチンまで行かせたくないみたいだ。

……というか、そうなんだろう。理由も分かりきっているし。

キッチンへ向かおうとしていた足を返し、みかんの木を植えてある場所へと移動した。

前はメリーだったけど、今回はサニーのみかんの木だ。色んな場所でいちやいちや出て来ている事実にはらしくなく頬が緩む。

そうして見つけたナミさんは、あの時同様にみかんの木にもたれて座り、まるで身を隠す様にしていた。

メリー号と違ってサニー号のみかんの木は船尾近くの一段上がった屋根の上に植えられているから、別に隠れなくとも誰も見ないとは思うけど、きつとナミさんは前回と同じ形で待っていたかったんだろな、と思った。そういえば前はみんなから隠れるというか、私から隠れてたんだっけ。恥ずかしいとかで。

……恥ずかしいがってるナミさん、イイね。

「おまたせ、ナミさん」

色々と雑念を振り払って、私もナミさんみたいに座って木にもたれ掛かる。

「おはよう、イリス。ゆっくり眠れた？」

「うん、昨日はみんな早く寝たし、もうぐっすり」

「そう、それは良かった」

いつもよりも簡素な挨拶。気のせいじゃなく、ナミさんは何かを堪えている様だった。

「はい、コレ。チョコレート」

「ありがとう！」

これで私の手には3つのチョコが収まる事となった。

ナミさん曰く、今年のチョコもみかんの風味を感じられるモノにしてあるらしい。

あれはナミさんの匂いに包まれて、なんだかナミさん味って気がしてかなり好きなんだよね。

「……さーこれで私の用事は終わりよ。こんな場所まで来させておいてごめん、イリス」  
「謝らなくてもいいよ。今日はみんなそうなんだ、気を使ってか、あんまり私と話してくれないし」

「そうね、今日くらいは私達も自重しないと、でしょ?」

そうやって笑うナミさんに、私も感謝を込めて笑い返した。

私の夢はハーレム女王。そういう事もあって、嫁達がギスギスする事もあるかもしれない……なんて、実は最初の頃思ってたりもした。

だって、ハーレム女王っていうのは言い換えれば女を囲うという事だ。私は出来るだ



け彼女達の機嫌を取りつつ、嫁間の仲が冷えない様に奔走する毎日……だつてあつたかもしれない。

だけど実際はどうだ、みんな、私は何をするまでもなく仲良くしてくれている。こうして自分を抑えてでも、自分じゃない嫁の幸せを願う事が出来る。

それつて、かなり素敵で、そして、とても凄い事だ。

「じゃ、行つてきなさい！その代わり、明日は目一杯相手してもらおうから！」

「うん、ナミさん、ありがとう！」

「あ、そうだ。私達今日、全員この島を『冒険』するから！多分、日が変わらないと帰つて来ないと思うわ！」

「あ、りよ、了解っ！」

あはは……まさかそこまで気を回してくれるとは。

……これは、夜に暴走しそうだなあ……すつごく。

\*\*\*

「お待た……せえ!？」

「キャハ！ようこそイリスちゃん……と言っても、キッチンだけだね」

扉を開けた瞬間に、ミキータが私に飛びついて来たから慌てて受け止めた。ぽよん！と大きな双丘が鼻頭にぶつかり、私の鼻の形に沿ってそれは形を変える。

……って、下着付けてなくない!? ミキータさん!!?

「も(も)も(も)……っ、ぷはっ! ね、熱烈な歓迎だね、ミキータ」

キツチンと言っても、サニー号のキツチンはダイニングキツチンだ。それなりに広いし、いつも食事を取っているテーブルの前には既にミキータが作ったのであろう私の等身大チョコが置かれていた。

って、ちよつと待てい! なんかある! 前世の一昔前の定番バレンタインネタみたいなチョコがある!!

「な、なにこれ、私?」

「そうよ! イリスちゃんに渡すなら、やっぱりこれしかないと思って!!」

「そ、そうなんだ。ふつう、こういう時って私じゃなくてミキータの等身大チョコなんじゃない? 私が食べるんだし……」

「……………、はっ!!?!!」

ピシヤア! とミキータの背後に雷が落ちた気がした直後、わなわたと震えて冷蔵庫を虚な目で見つめ出した。

「い、今から作り直す……? いえ、流石に時間も材料も……っ! でも、材料ならイリス

ちやんチョコを溶かせば……っ！……で、出来るワケがないでしょう！？私が作ったとはいえ、イリスちゃんの姿を模したモノを、崩すだなんて！！そんなの、神が許してもこのミキータが許さないわっ！！どど、どうすればあ……！！」

「はは、大袈裟だよねえ、ミキータは。食べるならどうせ崩れるって」

ほんぽん、とミキータの背中を叩いて、ゆっくりと体を離す。

ちよつとまつて。と冷蔵庫まで歩いて、中に保存しておいたハート型の箱を取り出して戻り、ミキータに手渡した。

「ハッピーバレンタイン、ミキータ。それと……」

くいつ、とミキータの腕を引いて膝を折らせ、無防備な唇に私の唇を押し当てた。

……んー、美味しいね。流石ミキータ。ほんのりレモンとチョコの香り！

「っはあ……！ごめんね、最近街とかに寄ってないから、何も用意できなくて……ミキータ、お誕生日、おめでとう」

「……あつー」

あつ、て。

これ、私にチョコを用意するのに夢中で自分の誕生日忘れてたなあ？そんな所もミキータらしいけど。何よりも私を優先してくれる所って言ったらいいのかな。

「い、イリスちゃん……っ！あり、ありがとう……！すっごく、すっごく嬉しいわ……！！

キヤハハツ…!!」

少し涙ぐみながら、ミキータにしては珍しく吃りつつも確かにそう言葉を伝えてくれる。

「私だって、ミキータのその真つ直ぐな好意にいつも幸せを感じてるから。今日の私はミキータ専用ですつ、いつものお返しに、今日とはびきりミキータを満足させてあげる」  
ぎゅ、と強く抱き付けば、ミキータも私を抱き締め返す。いつそ痛いくらいに強く抱き締められ、だけど不満は漏らさずに受け入れた。

うん、今日はミキータが何をしようとも全て受け入れる。そういう日にしよう。それが誕生日プレゼント。つまりプレゼントはわ・た・し♡

……ちよつと痛いかな。

「あつ、だけど溶ける前にチョコ食べないとー」

「そう、ね……」

まるでお預けをくらったみたいにしゅんとなるミキータに苦笑しながら、私は等身大私チョコの人差し指を引っこ抜いた。

流石に内部までは再現されていなかった様で、断面は普通にチョコで安心したと言っておく。

ちなみに、ミキータは引っこ抜かれたチョコ私の指を見て顔を青くしていた。絶対

チョコイス間違えてる。

「あむ。もぐ……、んっ、美味しい！やっぱりミキータの作るチョコは絶品だね！」

「きや、キャハっ！ありがとう！嬉しいわ！」

人の指を食べてる絵面は置いておいて、味は本当に美味しい。

ぱくぱくと食べ進めていく内に、気付けばチョコ私の右腕は無くなっていた。

む、無惨な姿になってしまったけど、仕方ないだろう、うん。それにどうせ最後は頭の先まで私の胃袋に消えるのだ。慈悲はない！

……とはいえ、流石にこの量を今日一日で食べるのは難しいから、残りは冷蔵庫に入れるけども。

「い、イリスちゃんチョコ、食べていいかしら」

「勿論いいよ。どうぞ」

ハートの包みを開けて、その下に隠れていた同じくハート型のチョコを見てミキータは目を輝かせた。

一口サイズにしようか迷ったけど、結局大きさは私の顔くらいにした。大きい方がハートの印象が強くなるかなと思っただけですけどね！

「い、いただきますっ！」

ぱく、とチョコを口に含んで数回咀嚼。その後、なんかいきなり涙を流し始めた。

うん……私もミキータの事はそれなりに知ってるから、なんで泣いてるのかは敢えて聞かないでおう。

「喜んでももらえてる様でなにより。じゃあ、食べ終わってからでいいから、2人でなんかしようよ。ミキータがしたい事なら何でもするよ？何たって今日の私はミキータ専よ……んっむ!!」

最後まで言葉を発する前に、ミキータのキスで塞がれた。

その上、口の中にチョコが流し込まれる。舌で歯茎や舌、歯にチョコを塗る様な動きで、キスというよりは塗装だなあ、とかぼんやりと思う。

「ぶはっ、キャハハ……っ！キャハハ！なら！早くベッドに行くわよイリスちゃん！せっかくイリスちゃんからチョコを貰ったのだから、最高のチョコと最高のイリスちゃん、同時に味あわなきや損よ!!」

「ど、どういう理屈で……ひやつ」

そつと胸に手を添えられて変な声が出た。ベッドに行くのでは!?

ブラをつけていなかった事を考えるに、元々するつもりではあったんだらうけど!

「この可愛い胸にチョコを塗って、下の方にもいっぱい塗って、塗って。そしたらそのチョコごと、美味しく頂くわ!!」

ギリギリと灼ける様な視線を送ってくるミキータに、私は大人しく体を委ねる事で全

面的に受け入れる旨を示した。

彼女は会った時からずっと変わらない。とても真つ直ぐな人。

そんな所が周りを笑顔にするし、勿論、私も幸せにしてくれる。

それに対する感謝の気持ちをつた一日で全部返せる訳が無いけど、せめて今日だけは、ミキータの欲望の全てを受け入れてあげようと、そう思った。

そうしてベッドに連れて行かれた私は、この日、寝室の扉を開く事はついで無かった。  
……ミキータ、普段でも結構抑えてるんだなあ、と思いました、まる

## 182 『女好き、コロシウム決勝戦』

イリスがミキータと合流する少し前の事、コロシウムでは今まさに決勝戦が行われていた。

叶は自分と同じリングに立つ4人を見て苦笑いを浮かべる。コロシアムの決勝戦へとコマを進めた覇者は以下の5名だ。

『グリーンビットの魔女』叶。

『コリーダコロシアムの英雄』ダイヤモンド。

『謎の強戦士』ルーシー。

『人食い』バルトロメオ。

『火拳』エース。

(…原作ではあなたの能力を奪い合っていたというのに…ふふ、奇妙な巡り合わせですね、これもあの娘が起こした奇跡なんでしょうか…)

この場の景色を、まるで尊い物を見るように目を細める叶に躊躇なく攻撃を仕掛けたのはダイヤモンドだ。

本来であれば彼はこの決勝戦でレベツカと戦い、そこで過去の真相を語る。だがその



役目はトレーボルに取られており、今の役目は「『異界の実』を誰にも渡さない」というシンブルなモノのみである。

つまり自分が優勝する事が彼に与えられた使命だが：だからこそディアマンテは焦っていた。

直前で決まったグリーンピットの魔女の参戦も彼を狼狽えさせるには十分な出来事であったが、そこにまさかの『女王』『火拳』『麦わら』も加わったのだ。最早彼の手に負えるレベルではなく、何とか魔女と女王を同じブロックに入れて潰し合わせる策だけは功を奏してくれた。

とはいえ、女王が居なくなれば楽になるかといえどそんな訳がない。そもそも今の今までドフラミンゴがこの国に対し直接的な危害を及ぼせなかったのは魔女の存在があったからだ。その為に水面下で慎重に事を進める必要を迫られる程には『魔女』の力は絶大だった。

既に異界の実を喰らっている身でありながら何故まだ求めるのか、ディアマンテは状況の理不尽さに胃を痛めながらもこの場に姿を現し、勝ち目などないと分かっているながらも主の命に応えるべく、こうして不意を突いて魔女に攻撃を仕掛けたのだ。

『プロテクション』

「ぐっ…!?!」

だけど、哀しいかな、気合いで縮まる実力差ではない。

叶が軽く振るった杖は、ダイヤモンドを囲うように膜を生み出し、『ウォーター』で膜内を満たした。

イリスですらも危うくやられかけた対能力者への特攻を持つ初見殺し技にまんまと引つかかったダイヤモンドは、そのまま息をするかのように軽くノックアウトされたのだった。

「…創作であるONE PIECEならまだしも、現実であるここであなたの行いを許す訳には行きません。少し眠っていて下さい。『ファイア』」

プロテクションを解き、水に吞まれて危うく死にかけてダイヤモンドが息も絶え絶えと言った風に膝を突く。

ただ数秒水に浸けただけと言えばそうであるが、能力者にとつてはそれだけで体の自由が効かなくなるのが普通だ。おかしいのはあのメイド女王なのだ。

そんなダイヤモンドに炎弾を追撃で喰らわし、意識も刈り取っておく。戦意が喪失していようと容赦は無かった。

「…ああ、そうですね、『ウインド』」

それから思い出した様にダイヤモンドの体に風を纏わせ、そのまま空に放つてどこか遠くへ飛ばした。

狙ったのは『ひまわり畑』、叶は別に原作であるONE PIECEとこの世界をシンクロさせようなどとは思っていないが：レベツカの為、そしてキュロスの為にもあの男はひまわり畑で待機しておくべきだと判断した。

もし、仮にこのまま原作通りに進むのだとすれば、レベツカにもロビンにも傷をつける事になってしまう。

そうなればイリスに怒られるのだろうか、と考えて軽く笑った。

「さあ、次は誰ですか？」

「…へへ、つたく、化け物しか居ねエのか四異界つてのは」

「それより俺はイリスをお前に紹介したかったんだが：どこ行つたんだアイツ：」

ルーシーとエースが軽口を叩きながらも構えを取る。バルトロメオはルフィの兄であるエースと対面した事で涙を流していた。

「イリスは何やら急用が出来たみたいですよ。：ああ、あなたの正体は私に隠す必要はないですよ、知っていますので」

「……俺のことか？何で知ってるんだ、つてのは突つ込まない方が良いのか？」

「深く聞かれたとしても、知っているから、としか言えませんが」

当初はルフィがルーシーとしてこの大会に潜り込んでいたが、今は兜の中の人は交代している。

詳細は省くが、死んだと思われていた、エースとは別のルフィの兄…サボがルーシーとしてここに居るのだ。

色々あつて革命軍に所属し、その組織のNo.2として力を振るっている。そして叶がその事情を知っているのは当然原作知識から来るものだ。

「では、行きます」

コツン、と杖で床を叩いて音を響かせる。更にもう2回、連続で床を叩いて何やらブツブツと唱え出した。

明らかに長い溜めに、サボとエースは深く考えず叶へと突っ込んでいく。バルトロメオは叶の行動を警戒してバリアを張ったが、2人にはその様な防御手段がない。つまりは何か行動を起こされる前に仕留めるしか無い。

「竜の鉤爪!!」

「火拳!!」

「つ…!」

実力者2人の技を『プロテクション』で防ぐも、真正面から受けたそれらの威力を完全に防ぎ切れる筈もなく叶は後方へ弾き飛ばされた。

しかし、そこでも叶は詠唱を止めない。更に床を杖で叩き、パキ…とリングに亀裂が走った。

『『コールドムーン』!!!』

そして、遂に技が発動された。リングに注意を向けていた3人は、突如として頭上から降ってくる巨大な氷月ひょうげつを発見する。

リングを杖で小突いたり、軽く亀裂を入れたのは上へ注意を向けさせない為のブラフだったのだ。

やられた、と、引つかかってしまった事に苦笑を浮かべるサボだが、だからと言って負けてやるつもりもない。

元は別の要件で訪れたこの国で、2年前からずっと行方を絡ましていた兄弟達とようやく再会できたサボの心は晴れやかだった。その上今、未っ子は居ないまでもエースとはこうして会えなかった分の語らいを拳でする時間すらも得た。まだまだ終わらせるには早すぎる、と自分を鼓舞する。

頭を悩ませているのはバルトロメオも同じだった。

頭上から迫る氷月に当たれば、まず間違ひなく負ける。自分は良いとしても、何としてもルフイの兄である2人を負けさせる訳にはいかなかった。

といつてもバルトロメオのバリアとしてそこまで万能ではない。自分を捨ててサボとエースだけにバリアを張ったとして、氷月アイスが降ればリングは崩れ落ちるだろう。そうなれば飛行能力のある叶の勝ちが確定してしまう。

…ならば、リング全域にバリアを張るしかない。と決意を固めた。

再三言うが、バルトロメオのバリアは万能ではない。ただの武装色程度であれば、仮に大陸を叩き割る様な一撃だったとしても彼のバリアなら耐えてみせるだろう。だが、*“内側”*に衝撃を伝える武装色などは防ぎ切れないだとか、精神干渉系は守れないだとか、一度に出すバリアの面積には限度があったりだとか、抜け道はあるのだ。

今回はその面積が問題であり、この巨大なリングを全て囲う程のバリアとなるとその大きさはかなりのモノになる。

それで何が起きるかといえば、氷月からリングを守り切れる代わりに自分が無防備になる、という事だ。そうなればバルトロメオに叶の攻撃を防ぐ手段はない。

だけど彼はバリアを展開した。自分の勝利よりもルフィの関係者を守り通そうとする意思は何よりも彼らしい。

「これ、バトルロワイヤルじゃないんですか？ なんだか、私が悪の親玉みたいになってるじゃないですか」

「そのデータラメな強さだけで言やア十分親玉だろ」

「褒め言葉として受け取っておきます。『サンダー』」

「あばばばばば!!?」

叶はエースの言葉に軽く返答する。

バルトロメオの捨て身の守りに敬意は表すが、勝負は勝負だ。チャンスは逃すまいと無防備なバルトロメオを一撃の元に沈めた。

落ちる氷月はバルトロメオが意識を失う直前にバリアへと直撃し、大轟音と大量の霰を辺りに撒き散らして終わる。観客席は阿鼻叫喚という感じだったが、コロシアムの観客席が危険なのは彼らも百も承知だろう。

同時にバルトロメオも気絶した事でリングを覆う巨大なバリアも消失した。

「火銃!!」  
ヒガン

「『プロテクション』」

息をつく暇も与えないという様なエースの猛攻を、正面に膜一枚張って防ぎ真横へ跳ぶ。叶の使用する『プロテクション』は、発動は即座に行えるものの耐久性は心許なく、現に今もエースの火銃を一瞬食い止めただけに止まりすぐ破壊された。

それを読んで真横に逃げた叶だが、そこには既にサボが腕を構えて待ち構えていた。

「竜爪拳!」  
リゆうせうけん

「っー!」

「竜の鉤爪!!」

他の四異界はともかくとして、叶は見た目通りに打たれ弱い。攻撃力には自信があるが、打たれ弱さに関してだけ言えばこの一発を貰うだけでかなりの大ダメージになって

しまうくらいだろう。

(プロテクションでも間に合わない…!流石のコンビネーションですな…つ)

今から出来る事といえば、咄嗟に眼前へ杖を持つてくるくらいしか無かった。

ドオオツツ!!と、この世界にやってきてから今まで感じた事のない程の衝撃と痛みが杖を介して叶に伝わる。咄嗟に杖でガードしていなければ死んでいたのではないかと思う程の威力に、持つていた杖も弾き飛ばされて叶本人も呆気なくリングを転がって行く。

「いった…あ…!!」

前世の死因は落下死、当然、痛みを感じる暇もなく死んだ彼女は、この時初めてキャパシティをオーバーする痛みを感じていた。

舐めてかかっていった訳ではないが、自身の能力を過信していた所もあったのだろうと即座に反省して弾かれた杖を『ウインド』で手元に戻す。

とはいえ、さっきの衝撃で両腕とも骨が粉々に砕かれている。なんなら叶よりも技を放った本人の方が慌てている始末だ。恐らく『四異界』と呼ばれている程の実力者がこれ程打たれ弱いとは思ってもいなかったのだろう。

そういった事情もあり、手元に杖が戻った所で握る事は出来そうもなかった。風の魔法は継続させて体の横に杖を浮かべておく。



「……ふー……つ、ふー………『ヒール』」

光を纏った治療魔法が叶の腕を包む。骨が砕けようが、四肢が千切れようが意識さえあれば元には戻せるのだ。当然時間はかかるし、治療中も痛みは消えないが。

「サボ！ しっかりしろ！ 相手は『魔女』だ！」

「つあ、あア、悪い！」

驚きはしたが、確かに対峙しているのは『四異界』の一人：『グリーンビットの魔女』。舐めてかかっているいい相手な筈がない。と気を引き締め直して再び叶を見据えたサボは、エースと頷き合って再び駆け出した。

次は意識を奪う一撃で、回避出来ない技で。それだけに意識を集中させたサボの腕をエースが生み出した炎が包み込んだ。

かなり熱いが、やろうとしている事を理解してその焼ける様な痛みを我慢する。

「うオオおおおお!!! 『火炎』！ // 竜王 オオ!!!」

「おオオおおおお!!! 大炎戒!! 竜炎帝!!!」

それは、メラメラの実とサボの技である竜の鉤爪の合わせ技と、エースがサボの技を吸収して得た新技。

サボの方は竜の鉤爪に灼熱の炎を纏わせ、エースの方は遥かに巨大で強大な炎の竜を生み出して放つ。それはさながら、一頭の炎竜がその牙で、爪で叶を打倒せんと迫り来

る様だった。

「…ふふ、これは、良いモノを見せて頂きました」

その様子を見ても、叶はまだ笑みを深める。

メラメラの実を食さなくとも、彼はその技を使用してしまうのか、と呆れているのか。それともこの状況で臨機応変にも新技を生み出した彼を称賛しているのか。

「…『リベラシオン』！」

まさかまさか、と叶は再び口端を持ち上げる。まさか同じ四異界じゃない人達に、このステージまで解放させられるとは思ってもいかなかったからだ。

リベラシオン…解放を意味するその言葉を叶が口にした数分後。

リング上に立っていたのは、叶だけだった。

## 183 『女好き、消えない過去、変えたい己』

「…シャルリア、つて…まさか…!」

驚愕で目を見開かせる私に、ミキータはそのまさかよ、と頷いた。

「シャルリア…?」

「…天竜人だよ、それも私が思ってた以上にお人好しの」

「え…!?!」

レベツカちゃんも天竜人は知っていたみたいだ。だからこそここまで驚いているんだらうけどね。

私だつて驚いてるよ、そりや、シャルリアは心の優しい人だと思つてはいたよ? けどまさかここまでだとは…私、ちよつとシャルリアの事過小評価し過ぎてたのかも。

「つて、だつたらゆつくりしてる場合じゃない!」

シャルリアが無数の暴徒に追われてるつて事でしょ!? モネの事も大事だけど、今は命に危険が迫つてるシャルリアを優先すべきだ。

「レベツカちゃんは、せつかくだからお父さんと会つて来たらどうかな? 護衛はミキータ、お願いできる?」

「キャハ、任せて頂戴！イリスちゃんの頼みならなんだって、幾らだって聞くわ！」

「はは…無理だけはしないでね？」

ミキータらしいけど、私の為なら本当に何だっけしそうでから心配だ。私にとつては嫁を失う事が一番悲しい事だから、その辺は見極めて行動してくれると思っではいるけどね。

「…本当に、良いの？そこまでしてもらっても、私にはその恩を返せるだけの物がないわっ！」

「良いって、嫁になってくれればそれで」

「嫁…ふふ、アイリスっていつもそうやって茶化するのね」

「む…茶化してないけど」

そこだけは勘違いしないで欲しいけど、私はいっただって本気だ。

「あと、私の名前はイリス、ハーレム女王になる女だよ!!」

「……？」

れ、レベツカちゃんが純粹過ぎて心が痛い。

ハーレム女王って言葉の意味が分かって無さそうで辛い…。

「と、とにかく、私は今からシャルリアを探しに行くから、ミキータ、レベツカちゃんを宜しくね！」

「ええ、イリスちゃんも気をつけて」

…状況とか全然違うけど、なんだか仕事に行く夫を見送る妻みたいな流れだよな。

……ええい！

「ミキータ、ちよつと」

「?..どうし…つ」

クイ、と腕を引つ張つてミキータの腰を曲げさせる。そして、それで下がつて来たミキータの唇目掛けて私の唇を押し当てた。

時間もないから、本当に軽く触れるだけのソレを交わし、私はいきなりキスをした羞恥心から逃げる様に外へ飛び出すのだった。今更羞恥心を感じるなんておかしいかな。

因みに中には顔を真っ赤に染めたレベツカちゃんと、いきなり過ぎて放心し、既に本日夜の運動についての事を考えているミキータが残されたのだった。

\*\*\*

「はあ…はあ…つ!!」

今やドレスローザの街並みは普段の様子からは考えられない程の異質に包まれていた。

逃げる女を追いかけるのは、パツと見ても1000人は下らない人並み。その全員が瞳の色を無くし、ただ女を追いかけるだけの機械の様に走る。

「…この、ままでは…!!」

やはり操られているからか、走っているとは言ってもその速度はそう速くはない。女——シャルリアが全力で走れば逃げ切れる速度ではあるが、全力で走ってしまえば体力は簡単に底を尽く。それに全力で走っていない今も既に疲れは出ているのだ。

シャルリアも、2年前の怠惰な生活をしていた頃に比べれば遥かに体力はついただろう。しかし、今みたいに1・2時間走り通しというのは経験した事もなく、常に全力に近い速度で走らなければいけなくて、少しでも転べば追いつかれるという極度の緊張もあり、今のままではいずれ追いつかれるだろう事は目に見えていた。

…それと、もう一点。

ただでさえ暴徒達だけで手一杯だというのに、つい数分前、1人の援軍が暴徒側に加わった。

光の無い瞳の暴徒達とは違い、あくまでも自分の意思でシャルリアを追っているそれは、他の暴徒達よりも遥かに強大な敵だと認識せざるを得ない。

何が面白いのか常に口角を吊り上げているそれは、まるでいつでも殺せるとでもいうかの様にシャルリアの背後2mの距離を付かず離れずで追いかけてきているのだ。

「キヤー！いつまで逃げ続けるつもり？そろそろ諦めろよ！天竜人！」

「諦める……？私は、何があっても彼らの命を諦めはしません……！」

援軍の正体はドンキホーテ海賊団、ディアマンテ軍幹部『デリンジャー』。

彼の当初の任務はベラミーの暗殺から始まり、ルフィ達……つまりドフラミンゴにとつて邪魔になる存在を殺すように指示されていた。

ベラミーの暗殺はバルトロメオの妨害により失敗に終わってしまったが、その後は予定通り他の幹部達と共にルフィらを消せば任務は完了……となる筈だった。

しかし、デリンジャーだけには別の任務が言い渡される事になる。それこそが現在街で起きている暴徒達の統括。指揮権の付与だ。

そういう事情もあって、デリンジャーは暴徒達と共にシャルリアを追っているのだが、現在デリンジャーはかなり気分が高揚している状態であり、本来ならばすぐにでも殺せるシャルリアをわざとじわじわ追い詰める様に、楽しむ様に行動していた。

「ねエ、どうして天竜人がこんなトコで、そんな格好で居るのか教えてよ！それを教えてくれたら、一思いに一撃で殺してあげるわ！」

「なら、まだ言えませんか……はあ……く……！」

シャルリアは逃げるしか出来ないが、この暴徒達を助ける為の希望が全くない訳では無い。

彼女の脳裏に浮かぶのは、朝に見た黒髪で赤い瞳をしたメイド服の少女。どうしてメイド服を着ているのかは分からなかったが、あの少女が誰なのか…それが分からない彼女ではない。

そう、この国には今彼女が居る。ならば信じればいい、彼女を。自分が憧れて、焦がれたあの子を。こんな状況を作り出した元凶を叩いてくれれば、暴徒達は間違いなく解放されるのだから。だから自分はそれまで逃げ続ければ良い。

「…そう、ならもういいわ、いい加減飽きて来た所だし」

「ツ……！」

「鬼ごっこは楽しいけど、こころも一方的だとねエー！」

「うぐ…!?!」

ハイヒールの靴底で背中を蹴り込まれ、尖ったソレが突き刺さる様な痛み顔に顔を顰めて地面を転がる。

かなりの威力で放たれた蹴りで強制的に吐かされた空気を取り戻す様に慌てて肺に取り込み、急いで立ちあがろうとした瞬間に頬を蹴り飛ばされて近くの壁に激突する。

早く起き上がって逃げなければいけない。自分が死ねば、暴徒達は目的を失ってまた罪なき民を襲い始めるか、自分達で潰し合いを始めてしまう。それだけは阻止しなければと、シャルリアは心に炎を灯すが…。



「…っ、あ、れ…っ」

がくがくと膝が笑って立ち上がる事が出来ない。先程の衝撃で目が回り、視界もぐにやぐにやだ。

…それもその筈、彼女は戦闘員ではないのだ。実力者であるデリンジャーの蹴りをまともに2発受けてこうして意識を保っているだけでも上等であり、普通ならば既に気絶していてもおかしくは無い。

「キヤー！頑張るのね！だけど無駄な努力、もう殺すから!!」

「…っは…あ…う…」

暴徒達もシャルリアに追いつき、デリンジャーの後ろで待機している。彼が命令を下せば…すぐにでもシャルリアの儂い命は終わりを迎える事だろう。仮にそうしなくとも、デリンジャーが後一撃加えれば呆気なく死ぬ。

それが分かっているからこそ、シャルリアは現状を打破する一手を考え続ける。そんな奇跡みたいない一手など存在しないと分かっている、あの人に恥じる自分では居たくないから。

「…あア、分かった！アレね、あなた…誰かが駆けつけてくれるだとか、自分が引き付けられその間に…とか思ってるのね！キヤー！無駄な努力！ゴミの考えそうな事!!」

「っ…」

自分が考えていた事を当てられ、シャルリアはピク、と肩を震わせた。

それを見たデリンジャーの顔が更に愉快的な表情へと染まっていく。

「ぷ……く……キャハハハ!! バカじゃないの? あなた、自分が何なのかまるで分かってないわね! あたし達はあの方に忠誠を誓ってはいるけれど、普通の人が天竜人の為に何かすると思う!!」

「…私の為ではありませんわ、今もそうして苦しんでいる、あなたの後ろの民の為。私の命に価値など無い事は承知しています。私は…この国の民達を救う為に此処にいるだけです」

「キヤーーハハツ!! それよオ! 救うって、そんな事するわけないじゃない! せつかくの天竜人を殺せるチャンスよオ!!」

「そんな事の為に、民達の手を汚させる人など居ません!!」

あまりにも民達を下に見た発言にシャルリアは声を荒らげた。…もしくは、彼の言葉に同意してしまいそうになった自分自身を鼓舞する為か。

シャルリア自身も分かっている事だ。この2年間、色んな土地を旅して生きて…自分が天竜人だと明かした事は何度かある。

誰にでも教えていた訳では無い。2年間の旅の中で、お世話になった人に少し話すくらいだった。結果は…言わなければ良かったと後悔するばかりではあったが。

もう天竜人ではないと幾ら伝えようとも効果はなく、ただ天竜人であったという事実がシャルリアに重くのしかかる。事実天竜人であった頃は彼女も残虐の限りを尽くしていた。その罪を少しでも贖えればと…そう願って生きてきた。

「善行を幾ら積んだって、過去の自分が消えるわけじゃないってのに！あ、もしかして…この国に来てる女王達に期待してる!? キャー！ だったら残念…！ 今頃彼女はシユガーの能力でオモチャになってる筈よ！」

先程も言ったが、今、デリンジャーはかなり気分が高揚している。だから自分の発言の矛盾に気付かなかった。

そしてシユガーの能力を知らないシャルリアは最悪の未来を想像してしまう。オモチャになった…つまり、この国に存在していた生きるオモチャ達は皆…人間が姿を変えただけの存在だったのだ。

つまり…イリスもそうなのという事は…。

「……………」

シャルリアの希望が、無くなったという事に他ならない。

否、ただその情報を聞いただけならば、彼女は見てもない情報など信じられないとイリスの事を信じ続けていただろう。

だが…、

（善行を幾ら積んでも、過去の自分は残る…）

そんな事、言われなくとも分かっている。とシャルリアは唇を噛む。

分かっていたんだ、そんな事は。それでも、そうするしかシャルリアには道が無かった。

イリスに会いたい、もう一度会って、話が出来るくらいに誇れる自分になりたいと思つた。だからこの2年…必死に努力を積み重ねて来たんだ。

変わりたかつた。優しくなりたかつた。人を傷つけたくなかつた。誰かを救いたかつた。…それでも、“シャルリア宮”はいつまでも“シャルリア”を離してはくれない。

その事実から目を逸らして、染み付いて落ちやしない汚れを善行という水で洗い流した気になっていただけだ。

汚れた身は、心は…流した水すらも黒く濁らせて溶けてゆく。

「…う…く」

結局、自分の事しか考えていなかったと自覚して、結局、あの頃の自分と何一つ変わっていないと認識して…そのあまりにもどうしようもない事実には涙が溢れ落ちた。

間違っていたんだ、最初から。

イリスに胸を張って会える様な、誇らしい人間になりたいだなんて…そう思う事自体

が間違いで。

天竜人として生まれ、自らの欲を満たす為に民達を奴隷の様に扱った17年間が…消える筈もない。

(なのに、私は…懲りずに、まだ…！)

自分がいかに救いようの無い人物なのかを再度自覚しようとも、それでも、目の前の民達を見捨てる気にはなれなかった。

こんな自分が誰かを救うなど烏滸がましいかもしれない。どれだけ誰かを救ったつて、あの人の隣に立てる訳がない。

「あ、ああああ!!」

これはもう意地だった。自分勝手でも良い、傲慢でも良い。最低な存在でも良い、生きる価値なんて無くて良い。

だけど、やっぱり苦しんでいる人を見捨てたくない。だからシャルリアは気合いだけで立ち上がった。

壁に背を預けながらも、何とかその足で立ち、涙に塗れながらもその瞳には決意が宿る。

「キヤー！じゃあそろそろ、くたばりなさいよ!!」

被っていた帽子を破り捨て、デリンジャーはその角を前に突き出して突進する。

シャルリアにはそれを避ける手立てはない。もう、死からは逃れられない。

だけどその瞳はなおも気高く、迫る死に恐怖を感じつつも、自分の気持ちに正直に微笑んだ。今の自分に来れる最大限の時間稼ぎを成した。だからどうか、民達を救ってほしいと思いを胸に。

(ああ…だけど、こんな…“人”にも成れなかった愚か者だけ…、もし、もし…許されるのならば)

瞳を閉じる。脳裏に浮かぶのは、あの黒髪の少女で。

(もう一度だけで良いから…貴女様と、言葉を交わしたかった)

ドオオオオンツ  
!!!!

そして、衝突する。

まるでその場に隕石でも降ってきたかのような衝撃音が辺りに響き渡った。

吹き荒れる風が、その激しさを物語っているみたいだ。なんて、ぼんやりとシャルリアは思考する。

……。

……………。

(…………?)

何だ、とシャルリアは眉を寄せた。自分はこの角に貫かれたのだろうか。だけどそれにしては痛みを感じない。それに何やら、酷く安心する匂いが鼻腔を擦るのだ。

「…………?!?!」

いつまでも届かない衝撃の代わりに、目の前からデリンジャーの驚愕した声が聞こえ、シャルリアは何かあったのかと目を開き——、

「…………え?」

思わず、声を漏らした。

何故ならそこに居たのは、自分が求め続けていた人物で。

何よりも焦がれた英雄で。

自分が人でも神でもないと気付かせてくれた恩人で。

「…あつぶな…、大丈夫? 怪我はない? シャルリア」

シャルリアが憧れて、想い続けた少女——イリスが、デリンジャーの角を受け止めてそこに立っていた。

## 184 『女好き、真・女王化』

「なんで、お前がここに…!!それにどうしてオモチャになつてないの!?コロシウムで敗北したつてディアマンテ様は言っていたのに!!」

「負けたけど、だから何?ディアマンテはまだやってないけど、トレールボルとシユガーならさつき倒してきたよ。それにさ、あなたが私の事を覚えてる時点で…当然オモチャになつてる筈ないじゃん」

角を受け止めながら話し、チラリとその後ろに控えている無数の暴徒達に目を向ける。

…これ程の数の人間にずっと追われていたのか…しかもそれを自分から誘導して、あともう少して死ぬ所まで来てしまつていた…と。

「まずはあれだね、邪魔だから寝てて貰おうかな」

何人居るかは分からないけど、一般人相手なら女王化が使えなくても関係無い。という訳で放つた霸王色の覇気は短パン角と暴徒を洩れなく巻き込んでバタバタと昏倒させていく。

当然シャルリアには向かわない様に調整済みだ。というか今気絶してもらつては困



る、言いたい事だつてあるんだし。

「ぐ……離しなさいよ!!」

「おわっ」

グイ、と思つていたよりも遥かに強い力で掴んでいた手を跳ね除けられ、その隙に短パン角は後方へ飛び退いて距離を取った。

「流石に今ので倒れてはくれないか」

「…余裕つて顔だけど、そう思つていられるのも今の内だけよ!!」

ドンーと地面を踏み込んで突撃してくる短パンに思い切り蹴りを入れて遠くに飛ばす。

…何だろう、今の攻撃、何か違和感があつた。

何といえはいいのだろうか、あまりにも直線的過ぎた…? いや、こいつがそんなに強くないといえは話は終わるんだけど、何だかそうじゃない気がする。

そう、例えるなら…：自身のスピードに反応出来なかつた、みたいなの。

強化系の能力者…?だとすると、自分で強化した身体能力についていけないのはおかしい。実を食べたばかりで能力の性能に振り回されている、と考えるのが自然かな。あの角と、背中に見える背ビレは能力の副産物?それともそういう種族なのか。

「シャルリア、動ける?」

「え……あ、その……」

「後で話があるから、ちょっと離れてて欲しいな。ほら、ここ危ないし」

再度突っ込んできた短パンの顔面に、今度は思い切り拳を打ち込んで地面へのめり込ませた。

…おかしい、さつきよりも固い…？人体を殴った感触がしないんだけど…。

「っ…どうして、私を助けに…っ」

「何でそんな事聞くの？せつかく困になつてくれた優しい人を見捨てる訳ないじゃん。分かつたら早く下がって、ね？動けないなら運ぶけど」

「だ、大丈夫ですわ…っ！ひ、一人で歩けます…！」

「？見た目もかなり変わってるけど、口調も違うね、可愛い！」

「くっっ！」

耳まで顔を赤くして、よろよろと覚束ない足取りで下がっていくシャルリアの姿を目で追っている、不意に足元から強烈な殺気を感じて顔を腕で覆う。直後、腕に感じるとても無い衝撃に骨も肉も悲鳴を上げた。

短パンのハイヒールキックが炸裂しただけだが、その威力は想像よりも遥かに強かった。さつきよりも明らかに能力が上がってきている…やっぱりそういう系の能力者なんだろうか。

「キヤー!!段々慣れてきたみたい!これは確かに恐ろしい力ねエ!!」

フツ、と目の前から敵の姿が消える。え、と思うよりも早く、私の顔面に蹴りが突き刺さっていた。

「ピストルハイヒール!!」

「がっ……ふ?!」

そのまますぐ後ろにあつた壁に頭から埋もれた。久し振りの強烈な痛みに意識が飛びそうになるけど、必死にそれらを繋ぎ止めて壁から顔を出す。

見聞色で奴が追撃を仕掛けてくる事を察知していたので、脱出した瞬間に横に飛べば、私がさつきまで埋まっていた壁に蹴りが刺さつてその建物はあまりの衝撃に崩れ落ちる。

『イリス、こいつ……確か名前はデリンジャーって奴だよ。たしか闘魚の血筋がどうこうとか言つてて……だけど悪魔の实の能力者じゃなかった筈……それにこんなに強くも無かった!』

「へえ……という事は、もしかしなくてもレイ絡みか」

「へエ、良く分かったわね。そう……この力は『狂神』の力!彼女の力を分けて貰つたのよ!」

……力を分ける。冗談だと思いたいけど、どうやらマジらしいね。

例えば私は、自分以外の人相手に能力は干渉させられない。だけどレイにはそれが出来てしまう。…という事なんだろうけど、それってつまり、どんな人だろうが超一流の戦士並みに強化出来てしまうという事に他ならないんじゃないだろうか。

効果範囲や、強化可能な人数制限なんかも気になる所だけど、それを今この短パン：デリンジャーに聞いても教えてはくれない…というか知らないだろうし。

「本当にあの『女王』ですら取るに足らないなんてねエ!!」

「く…っ!」

顔の横から薙ぐように放たれた蹴りを腕を立ててガードするも、やはりかなりの威力があるのかその衝撃はビリビリと全身に伝わってくる。

レイの能力について、また一つ情報が手に入ったのは大きい。正直、これだけの戦士を量産出来まつか言われたらたまったモノではないが。

…いや、待てよ…? 確か魚人島でジンベエからレイの話聞いた時、今の状況と似たような話を聞いた様な…。

「…!!」

そうだ! 確かジンベエはこう言っていた、国民の女子も老人もみんな達人の様に強くなって、鍛え抜かれた海兵達を国から追い出した!

それが今デリンジャーにかかっている物と同じだとするなら…強化可能な人数はそ

れはもう莫大な数になるんじゃないよ…。

「考え事をしている余裕なんてないわよオ!!」

「ぐふ…ツ!!」

あーもう! 見えない! っていうか女の子のお腹を蹴るってどうなの!? 大事なトコなんだけど!!

「困ったなあ…!!」

せめて女王化が使えたら、なんて考えても使えない物は使えないんだけどね!

「キヤーハハハ!! この力ならあたしは若さまより強いわ!! きつと沢山褒美を与えてくれる筈…!! 何せ厄介な女王を潰したんだから!!」

言いながら、ぐぐ、と頭部の角が大きくなっていく。そんな事も出来るの…:と想っていると、今度は歯がボロボロと抜け落ちてそこからサメの様な歯が生え変わってきた。まるでアールロンみたいだ。魚人ってみんなこんな事出来るのかな?

「ビツクホーン! 弾丸スピア!!」

「——ツ!!」

ズン! と腹部に焼ける様な痛みが走る。

それは、奴の巨大な角で一突きされた物だと気付くのにそう時間はかからず、それに伴って発生する突撃の威力も相まって私は遙か遠くに吹き飛ばされてしまった。

「…げほっ」

あー…これは、マズい。

血を流し過ぎてているし、このままじゃ死ぬだろうな。

しかも結構飛ばされた筈なのにもう追いついてきたのか、倒れる私を覗き込んでへらへらと笑っているデリンジャーの顔が見える。

「キヤー！ 瀕死って感じ？ 痛そうね！」

「そう、だね…結構痛いかも…」

びく、とデリンジャーの頬が引き攣った。直後に私を頭のおかしい奴を見る様な目で見てくる。

どう見たって死ぬ寸前って感じなのに、話のノリが軽いから違和感を感じているんだろうか。

「…本当に、困ったなあ」

どう見たって死ぬ寸前で、未だにどくどくと止まらない血。

多分ナミさんがこの場に居たら、顔色を真っ青に変えて怒った様な表情で泣きながら手とか握ってくれるんだらうなあ、なんて。

…いや、死なないけどね。

「ねえ、あなたさ……私と本気で戦った？」

「……どういう意味？正直に答えるなら、本気じゃないわ、まだあたしは力を出せる！つまりあなたは本気でも無いあたしに——」

「そっか、なら良かった。『その程度』ならうつかり殺してしまうかもしれないからさ。……精々、堪えてね？」

あまりにも状況に合わない言葉に、デリンジャーは逆に言葉を失った。

だけど、彼もなんだかんだ言って歴戦の戦闘員という事だろうか、私の言葉に悪寒でも感じたのか、慌てて足を振り上げて私の顔面を踏み潰そうとし——直後、デリンジャーは宙を舞った。

それは、私が奴の顎目掛けて放った蹴りが原因で。

当の私は、まるで何事も無かったかの様に起き上がっていた。

シエルタ  
クインエクステイア  
「真・女王化」

少し赤みのかかった黒髪に、女王化と変わらない背丈に装飾品。

唯一違うといえ、その装飾品の色合いだ。頭部に飾るティアラはティアラだというのに紅蓮に染まり、肩から靡くマントもまたより一層赤みを増していた。

全体的に赤みを増した私の装いは、少し攻撃的に見えなくも無い。そしてそれは何も

間違っではないのだ。

真、と大層な名前がついたこの形態は、正しく女王化の強化形態。そのあまりに凶悪な性能は、シヤンクスをもつてしても「使い時を考えろ」と言わしめる程である。

肝心の効果は、私の倍加上限の解放。そして：100倍以下が使えなくなる。

：というわけで、下手な相手に使用すれば加減が全く出来なくなるのだ。因みに真・女王化は女王化使用後のクールタイムを無視して使用する事が出来る。

：代わりに使用後1日は能力に制限がかかるんだけどね。簡単に言うると倍加の最大値が10倍になってしまうというもの。

100倍を超える治癒速度で先程喰らった傷は既に癒えつつあるし、恐らく顎を蹴り飛ばされたデリンジャーはそれだけでかなりのダメージを負った事だろう。

「ぐ……う……!!何よ、その力ア……!!」

何とか体勢を立て直して地面に降り立つデリンジャーを見て眉を顰める。今のも当然100倍の蹴りだ。それも2年間修行をした私の。

それを喰らって：平気とは言わないまでもまだ戦闘を続行出来るだけの余力がある。：と。つまりレイの施した強化はそれだけのモノだという事の証明になる。：そりゃあ黄猿も逃げ出すよね。

「本気よ……本気の力で殺してあげるッ!!」



直後、またデリンジャーの姿が目の前から消えた。

さつきと違うのは、見失っていないという事。

「あのさ、わざわざ言う必要もないかなって思ってたんだけど、どうやら分かって無さそうだから言うね」

「断頭!!ハイヒールウウ!!!」

ボゴオン!!と私の首目掛けて振られた脚が見事直撃した。直撃した事にニヤリと口元を歪めたデリンジャーだが、その場からびくりとも動かない私を見てその表情を驚愕に…そして恐怖に染めていく。

「…私の嫁を殺そうとしておいて、無事で済むと思ってるの?言っとくけどさ…私今、ブチ切れてるからね?」

ガシ、とその足首を掴んでそのまま地面に叩きつける。ごふっ、と血を吐き出した奴の体の上に跨って腕を振り上げた。

「目を覚ましたらドフラミンゴにより〜く伝えといてよ、私の嫁に手を出すなら、例えあなたでも、その後ろにいるカイドウでも、狂神だろうとぶっ飛ばす、ってね。…じゃあ、よろしく。ひやくばいばい 100倍灰」

「…!!!」

「女王の慈悲なき拳!!」

振り下ろした拳はデリンジャーの顔面に突き刺さり、バキバキと嫌な音を立てながら辺りに衝撃波を撒き散らす。

地面には巨大なクレーターが作られ、軽く地震すらも起きた事で周りの建物が幾つか崩れ落ち、それを見て慌ててシャルリアの気配を探った。

幸い、崩れ落ちる建物の近くにシャルリアは居なかつたようで、きちんと安全な所に避難してくれていた様だった。

…2年前と違つてあんまり100倍使わないから、規模が把握出来ないんだよね。これで全力とか出しちゃつたらどうなるんだろ…、つ、使い時、本当にちゃんと考えて使おう…。

## 185 『女好き、続・天竜人だろうと嫁』

「ひ、ひえ……わ、わた、わたくしの事は、お氣になさらず……っ！」

「デリンジャーを叩き潰して、これでシャルリアの事は守れた!!……ってな訳で、避難してくれていたシャルリアを迎えに行った私を待っていたのは、こんな感じの台詞を吐きながら何故か顔を真っ赤にして狼狽える彼女の姿だった。

「どうしたの?……それより、2年前よりも随分雰囲気柔らかくなったね、以前よりもシャルリアの優しさを感じやすくなってるよ!」

「っ……そんな事は……あ、いえ、きよ、恐縮です……」

……何この、恐れ多いみたいな態度は。

「一体この2年でシャルリアに何が?なんだかこれ、私と会話するのを躊躇ってない?……もしかして。」

「それよりさ、覚えてる?次にシャルリアと会った時は……私の嫁に貰うって話」  
「っ……」

「私のその言葉に罰が悪そうに視線を逸らすシャルリアだけど、面倒な流れには持っていかないぞ〜!こちとらあなたを嫁にするのは確定事項なんだからね!」

「…私、は…その、貴女様の御許に置かれて良い存在では…」

「シャルリア」

出来る限り彼女へ距離を詰め、2年前に比べると少し傷んでいるその頬を両手で包み込む。その際にビク、と震えるのが何とも可愛らしく、本当に彼女は自分を変えようとしていたんだな、と愛おしくなった。

「シャルリアがどう思っているかとか、そんな事は関係無いからね」

「え？」

「私は、あなたを嫁にする。そこにあなたの意思は無いの、分かった？あなたがどれだけ嫌がろうと、どれだけ私の事が嫌いだろうと…今からあなたは、私のモノだから」

「………そ、れは………あのっ………っんむ…!？」

まだ何か言おうとしていた彼女の唇を、強引に私の唇で塞ぎ込んだ。私は鈍い女じゃない。どうしてシャルリアが私の隣に立つ事を否定するのかなんて分かりきっている。大方、天竜人だった私がああなたの隣に立つ事は許されませんかとかそんな感じだろう。

…私にとって、そんな事はどうでもいい。シャルリアが元々どんな人間だったのか、なんて事より、今が大事なんだ。

だけど、シャルリアはそう言っても納得しないだろう。そんな強い意思が見えたから……だから私はそれ以上に強い意思でねじ伏せたんだ。

『何が何でも、あなたの事を貰う』ってね。

「ふ……あ……ん」

右手だけを頬から離し、私から離れようとする彼女の後頭部を押さえ込んで逃げ道を塞ぐ。その隙に強引に舌をねじ込んで、口内で逃げ回る舌を無理矢理絡め取ってやった。

普段はナミさん達の下で散々喘がされてる私ではあるけれど、そのお陰でそっち方面のテクはかなりのモノである。シャルリアも時折びく、びく、と体を震わせ、悶える様に振る姿は……その、凄く唆られる。

そうやってシャルリアの口内を蹂躪し続けてどれくらいの時間が経っただろうか、お互いの口端からは拭う余裕も無かった唾液が伝い、当のシャルリアの瞳も熱っぽい色を持つていた。

……当然、こんな場所で最後まで致すつもりは無いけど……シャルリア、可愛過ぎない……くう……時間さえあればなあ……！今すぐ宿取って色々したかったなあ……！！

「ん……」

最後に軽く唇に吸い付いてから離れた。

シャルリアの赤く染まった顔が可愛らしい。顔立ちは綺麗が勝っているというのに……ふふ、ほんと……2年前から随分成長したね、シャルリア。

「…ね？これだけ私に求められてるんだから、応えない方がどうかしてるでしょ？」

「…あ、貴女様は、本当に分かかっていらつしやるのですか？私は天竜人でしたのよ？過去に行つてきた、非人道的な、悪意のある…極悪非道で横行闊歩な所業の数々を知れば、普通は…誰だろとうと…」

「最低な自分を自覚して、今日までずっと苦しんできたんでしょ？ううん、それだけじゃないよね？きつとシャルリアの事だから、何とか自分の罪を償おうと苦しんでいる人達を自らの身すら顧みずに救い続けて来たんじゃないかな。…それこそ、今日みたいだね」

天竜人つて人達が、どれだけ屑の集まりなのかは知ってる。シャボンディで実際に見てるし、ジンベエから聞いた魚人島の話にも出てきた。それに、ハンコック達にトラウマを与えたのも天竜人だ。

…だけど彼らは、生まれた時からそうする事が当たり前だと育てられてきた。そうする事が当たり前の環境で生まれて、そうする事が当たり前の環境で育つて。

ある意味、可哀想な人達だと思う。本来なら無限にある可能性も、自分の中で作られる価値観も、全て生まれた時に決められてしまうんだから。

だからこそ、シャルリアちゃんは凄いな。そんな環境で育ちながら…ちよつとしたきつかけで自らの過ちに気付く事が出来た。

それでいて、何とかして罪を償おうと足掻く事が出来ている。

絶望して蹲るだけじゃない。きちんと前を向いて、誇れる自分であろうとし続けている！

「だから、改めて言わせて。…シャルリア、あなたに、私の嫁として隣を歩んで欲しい！あなたの在り方を見て、私は確信した！あなたが私の嫁になつてくれなきゃ、私のハーレム女王になるっていう夢は一生叶わない！あなたが居ないとハーレム女王なんて言えない！！あなたが、シャルリアが欲しい！！」

シャルリアの両手を私の両手で優しく包み込んで、力強くそう宣言した。

天竜人を嫁にすれば、多分また波乱というか色々起きてしまうのかもしれない。けどそんなモンは知った事か、待ち受ける困難なんて全て蹴散らしてみせる。私が目指すのはハーレム女王！困難上等なんだから！

「…ふ、ふふっ…：…やっぱり貴女様は、2年前から変わらせずに無茶苦茶な方です」  
「そ、そうかな？」

「はい、初対面の女の顔を蹴り飛ばすくらいですから」

「うえ!?ちよ、それはごめんなさい!!私が悪かったから許してえ!!」

「ふふ、冗談ですわ。…私は、貴女様には本当に感謝しているのです。当時のどうしようもない存在であつた私を、強引でも闇から引つ張り上げてくれた…。そんな貴女様の事

を、私は心からお慕いしております」

「……………」

そう言つて目尻に涙を溜めながら、儂くも、だけど美しいその微笑みを浮かべたシャルリアに……私はつい息を呑んだ。

「これからも私は、貴女様にご迷惑を掛ける事になるでしょう。シャルリア宮の名は、最早私の生涯を賭けた善行などで洗い落とされる様な汚れでは御座いませぬ。……それでも、私はこれから先の人生をこの世界で暮らす人々の為に使いたい。……許されるのなら、貴女様のお側で」

「つ……という事は……？」

「はい。この様な、本来であれば救われていい存在ではない私ですが……」

「んもう……それはシャルリアが何とかする事ですよ！私の隣に立つのにそんな事情は関係無いから!!」

遂に我慢が出来なくなつて、ギユ、とシャルリアの体を抱き締めた。細かいけど出るとこは出てる素晴らしい体……さわさわさわさわ。

「んっ……、そ、その様な行為は、未経験ですので、その……ご期待には添えられないと思います……が……」

「えへへ、最初はそんな事言つてる嫁も居たけど、今じゃ私を押し倒して好き勝手してる



くらいだからシャルリアも気にしないで？むしろ不慣れなのも可愛いよ」

……つと、ちよつと……いやかなりテンション上がったかも。まだまだこの国での用事は終わってないだし、急がないと！

「……あー、その、さつきあんな事言っておいて幻滅されちゃうかもしれないんだけどね、この国にはまだ嫁になって欲しい人が何人か居て、まだ振り向いて貰えて無いから……」

さつきの今でじゃあ他の人口説いてくる！とか流石にアレだよね……でも状況があ……  
!!

ハーレム女王を目指す身としては、仕方がないと割り切るべき所なんだろうけどやっぱり気にしちゃうのが本音だ。

「何を仰っているのですか、王とは様々な事情に備え、多くの側妻を持つべきです。失礼ながら、イリス様は現在何名程の側妻をお持ちで？」

「ええ!?!い、いきなりだね……えつと……22人かな」

「……え？それだけですか？」

「あ、それだけなんだ……」

確かに私としては美女はどれ程居てくれても構いやしないどころか大歓迎だけど、端からこの人数を聞いてそれだけって言えるのは凄い……。

「ええ、勿論ですわ。何故なら貴女様はハーレム女王……つまり、この世の女の頂点に立つ

お方であらせられます。全世界の女の数は正確には把握しておりませんが、それはもうかなりの人数となるでしょう。その頂点に立つお方の側妻が22人となると、些か威厳にも欠けるかと思われれます。……はっ……いい、いえ、やはりそれは、貴女様の様にカリスマ性溢れたお方には、あまり関係の無い内容ではあつたかもしれませぬ……」

「……いや、その通りかもね、シャルリアの言う事も最もだよ。それに、そこまで私の夢の事を考えてくれて嬉しいし！ありがとう！」

「う……あ……み、身に余る程の光栄……き、恐縮の極みでございます……わ……」

はは……私の夢に肯定的なのはありがたいけど、変に謙られるのも困つたものだね……ま、この辺はまた追々考えちやおう。せつかくシャルリアがこう言ってくれてるんだし、まずはモネの件をどうにかしないと！

「それじゃ、失礼して」

「きやつ」

んぐ……ちよつとお姫様だっこしただけでなにその可愛らしい声は！だから！ここ外だから！私も自重しなきゃいけないからさ！！

「当分起きないとは思うけど、もし暴徒達やデリンジャーが起きたら危ないし……一緒に連れてくけど、良いよね？」

「……はい、元より私は貴女様のお側にこうして居られるだけで幸せで御座います。どこ

へなりともお連れして下さいませ、どこへなりともお供致しますので」

…な、なんだか2年見ない間に私の臣下みたいな事言い出しちやった…。

ほんと、2年前とのギャップが強すぎる人No. 1かも…。ま、可愛いからいつかあ。

## 186 『女好き、最悪のゲーム』

一応何が起こるか分かったモンじゃないから、女王化は解除せずにそのまま空を駆ける。

当然100倍以下は使えないという事もあつてただ空を駆けるだけでもかなりのスピードだ。

すーすーつごく加減した力に100倍を付与しているからまだマシだけど、全く遠慮が無くなつたら風圧でシャルリアを苦しめかねない。

そんなシャルリアは現在、体験した事のない空の散歩を少し怯えながらも楽しんでい  
る様に見えた。

「…良かった、暴徒にされたこの国の民達は、あそこに居た者達だけだった様ですわね」  
「そうだね、それもこれもシャルリアが囮になつてくれたからだよ」

「……うう」

自らの善行を褒められ慣れてないせいか、私の言葉に頬を赤くして呻く。…うーん、  
可愛い。ドレスローザに来てほんと良かったです。

でも、冗談じゃなくて本当に良かった。空から見たドレスローザの街中では、オモ

チャから戻った人達がそれぞれの大事な人達と抱き締め合ったり、幸せそうに言葉を交わし合ったりしている。

：オモチャになった人達って、普通に自我あったのかな？だとしたら、シユガーの能力はかなり恐ろしいモノだと思う。効果時間とかは分かんないけど、もしシユガーが倒れるまで永続的に続くのだとしたら……。こ、怖っ！

「それにしても、さっきから気にはなっていたけど、アレ、なんだろうね？」  
「…私も、気になっておりました」

アレ、というのは、このドレスローザを丸ごと覆う様に囲っている白い鳥籠の事だ。

縦格子の1本1本がかなり狭い間隔でまさしく檻の様になっており、子供1人、ねずみ1匹も通り抜けられないだろう。

まあ…状況を見るに閉じ込められてるって事なんだろうけどね。誰がやったのかは知らないけど、これだけ大規模な能力の行使だ、かなりの実力者なのは簡単に想像出来る。

私が「地上」に出た時には無かったから、デリンジャーとの戦闘中に発生した物だろう。

いや、私も幹部塔を飛び出した時はほんとビックリしたよ。何せそこは日の光が届かない地下だったし、貿易港つぼくも見えたからだ。

どうせ碌な貿易はしてないんだろうけど、急いでいた私は即地下の天井を殴って蹴って覇銃を撃って撃って、そうして地上への直通ルートを作り上げたのだ。

…いや、ホントミキータなんで私の居る場所分かったの？発信機みたいな取り付けられたりしてる？

「……っ!?ちよつと…なんか、また街の様子が可笑しくなつてない!」

「…!!」

様子が可笑しい、みたいな可愛い表現をしていいのかすら分からないが、私の視界に映っている光景は悲惨なモノだった。

街に居る海兵が民家に銃を放ち、先程まで仲睦まじく話をしていた人達が殴り合い、海賊達は腰に提げている各々の武器を掲げて人々を襲い始めている。

暴徒と化していた者達とは違い、今回、暴れ出した彼らは泣き叫んでいるみたいだった。体が勝手に動いていると、誰か止めてくれと必死に訴えている。

「…っ、酷い…!!」

唇を噛んで、思わずと言った感じで声を漏らしたシャルリアに頷く。せつかく彼女が守った光景を、こんな最悪な形で蘇らせるなんて…惨いにも程がある…!!

しかも、私が地下でチラッと見た工場のような大きな建物が地下を突き破って地上に出てきたり、王宮のような壮観な建物が石の土台ごと独りでどこかへ移動し始めた。まる

で石が生きているみたいだけど、訳が分からないからそつちは考えないでおこう。まずは暴れてる人達をどう鎮めるか…!!

『ドレスローザの国民達…及び、客人達』

「ん!？」

何? 街中のスピーカーからドフラミンゴの声がするんだけど…!

その上、至る所に設置された映像電伝虫が映像を映し出し、その画面にはドフラミンゴの顔が映っていた。

…このタイミングでのコレか…となると、今街で起こってる出来事や『鳥籠』関連は奴の仕業か…?

『別に初めからお前らを、恐怖で支配しても良かったんだ…』

「…ドンキホーテの…」

腕の中のシャルリアがそう呟く。

やっぱり彼女でも七武海であるドフラミンゴの事は知ってるんだ。いや、彼女の場合は2年間旅を続けたからかな?

『真実を知り、俺を殺してエと思う奴もさぞ多からう! だからゲームを用意した。』

『この俺を…殺すゲームだ』

………?

『俺は王宮に居る。今しがた、俺のファミリィが動かしたどでかい宮殿にだ。当然だが、逃げも隠れもしない！この命を取れば当然そこでゲームセットだ!!…だが、もう一つだけゲームを終わらせる方法がある…！今から俺が名前を挙げる奴ら、全員の首を君らが取った場合だ。その上1人1人に賞金も付いている！』

うーわ…流れ読めたよコレ。あれでしょ、それでルフィとか私とかの名前を挙げる気でしょ。

でもそんなのこの国の人達が成し遂げられる訳が無いから、結局はドフラミンゴを討つしかないし、そこでドフラミンゴを討つのも国民達には無理な話。結局、いずれはドフラミンゴの手によって…最悪は皆殺し、良くて国民全員が奴隷…だろう。

そしてその過程で間違いなく大勢の人が死ぬ。…ほんと、どれだけ性根が腐ってればこんな方法を取れるの…!!

『誰も助けには来ない、この「鳥カゴ」からは誰も逃げられない。外への通信も不可能。暴れ出した隣人達は無作為に人を傷付け続けるだろう、それが家族であれ、親友であれ、守るべき市民であれ…！逃げてでも隠れてもこの「カゴ」の中に安全な場所など無い！「鳥カゴ」の恐怖は幾日でも続く！全員が死に絶えるが早いか!!お前らが「ゲーム」を終わらせるのが早いか!!…ああ、そしてもう一つ、この俺の親愛なる家族の1人であるモネだが、彼女の周りにも小型の「鳥カゴ」を設置してある。今これから！王宮に侵入すれ



ばこの鳥カゴは徐々に縮小し、触れるだけで鉄をも斬り裂く刃となつて中の者の命は途絶える!!…どうするべきかは、お前が決めろ』

「……!!」

ちよつと…コレ、完全に私の動きを封じに来てる…いや、それだけじゃない、王宮に入れぼつて事は、誰が王宮に入つても発動するつて事だ。つまり…モネの命を守る為には王宮に入られたらマズいんだ…でもドフラミンゴは討たないといけないし…だけど奴は王宮から動かない…!

…その鳥カゴの縮小時間はどれくらいだ!?私が急げば間に合うのか!?それとも、王宮に入った時点で既に手遅れなくらいの速度なのか!?…だー!!!畜生ッ!!!面倒な事してくれるね!!

『考えろ…俺の首を取りに来るか、我々ドンキホーテファミリーと共に、俺に盾突く15名の愚か者達に裁きを与えるか。選択を間違えればゲームは終わらねエ。…星1つにつき1億ベリ―!こいつらこそが、ドレスローザの「受刑者」達だ!!』

そして画面に映し出された画像は、やはりというべきか私の想像に近い面子だった。知らない人も居るけど…ん?んんん!!誰だこの黒髪美女は!美しい!!ヴィオラ…? おお…名前まで綺麗だ…!

……さて、と、星の数とかきちんと見ておこうかな。

どれどれ……。

レベツカ☆

錦えもん☆

ヴィオラ☆

フランキー☆

ミキータ☆

キュロス☆☆

ゾロ☆☆

サボ☆☆☆

エース☆☆☆

ロー☆☆☆

リク・ドルド3世☆☆☆

カナエ☆☆☆

ルフィ☆☆☆

イリス☆☆☆☆

……ぶつ、いやいや、え？

『フッフッフッフッフ!!各組織の主犯格は、もれなく三ツ星!!!更に、今日俺を最も怒らせた

女……！お前らをこんな残酷なゲームに追い込んだ全ての元凶！！この五ツ星の首を取った奴には、当然5億ベリ―だ！！その分難易度は高いがな……フツフツフツ！迷ってる時間は無いぞ、各一刻と人間は倒れ、街は燃えていく！！』

そう言うのと、映し出されていた映像は消えてドフラミンゴの声も聞こえなくなった。

…私、5億ベリ―かあ。…あれ？でも良く良く考えたら普段より安いんじゃない？私って10億（ドヤ）だし？

「……いやいや、そんな事より……」

モネの事だよね……、悪知恵働かせやがってフラミンゴ野郎……！どうやって奴をぶっ飛ばしつつ、モネを救出するかが最優先だ。

きっとモネは今自分が受けている待遇に疑問を抱いてない所か、使命だとすら思っている可能性が高い……！もしかしたら自分から提案したのかもしれないし……！……！……！そんなの、許せない！命をなんだと思ってるんだ……！！絶対に死なせないから覚悟しろ！！

「私にも、何か出来る事は御座いますか？」

「ある。私の腕の中で、首に腕でも回して抱き締めて、時折首筋にキスでも落として欲しい……！！」

「あ、あれ、可笑しいですわね……緊迫した状況の筈では……」

そう言いつつも私の言葉に従ってくれるシャルリア。首筋にキスは自重しているの

か、大人しく頭を私の体に預けてくれているだけだが、その行為でも十分に元氣出るからよし!!

…本当はシャルリアには安全な所に避難しておいて欲しいって言うのが本音だ。だけれど今のドレスローザには安全な場所自体無いような気がするから、それなら私の腕の中が実質一番安全なのでは? と思いつただけである。

さて…モネをどうするか、だね…。まず、王宮に入ったら鳥カゴが縮小するシステムが謎だよ。誰かがそこに近付いた、というのが分かる何かがあるに違いない。

…なんてね。ここに来て私はドフラミンゴの能力について大体の見当がついていた。まず、パンクハザードで見たスモーカー達につけられた切り傷。そしてこの鳥カゴに、操られている国民達。で、王宮に入った事を勘付ける何か。

…うん、糸でしょ? コレ。

糸っていうには余りにも強度が可笑しいけど、そんなモノは覇気でどうとでもなる。決定的なのは操られている人達だ。見聞色で操られている人達をじっくり観察してみれば、体内で糸の様な物に操られているのが分かる。これは今の私の状態だから分かる事で、普通はこんなの分かりっこないだろう。

そして、王宮感知システム。これは単純に周りに目に見えない細い糸を張り巡らせているんじゃないかな。この方法なら糸に気付かれて斬られようとも、王宮に接近された

事実は伝わる。

…まずは王宮に近付いてみるしかない、か。うっかり糸に触れない様に、どこまで近づいて大丈夫なのかを見極めないと！

## 187 『女好き、欲しいのは、ただそれだけ』

一先ず王宮に向かうと決めた私は、シャルリアを大事に抱きながらその場所を目指していた。

移動した王宮今は鳥カゴ内の中心に位置し、何層にも連なる大地の最上段にある。

普通はあの王宮まで辿り着こうと思えば、一段目、二段目と順番に上がっていかない  
とダメなんだろうけど、生憎私は空を飛べるから関係ない。

…とはいえ、ルフィ達はドラミングを目指すだろうし、王宮に辿り着くのもそう先  
の話でも無いだろう。さっきの話を聞いたのなら、ルフィも王宮に入るのを躊躇うだろ  
うから私が早く到着しないと！

それにしても、既に乱戦は始まつてるっばいね。コロシウムで一緒に戦った人を味方  
につける事が出来たのか、戦力的にも頼りになる人達がかなりの数こちら側についてく  
れてるみたいだ。

ドンキホーテファミリーの下っ端くらいなら簡単に蹴散らしてくれてるし。

お、この気配はキャベンディッシュだね。それにレベツカちゃんも居るし…あれ、叶  
も居るじゃん！戦力過多〜！

…ん？ちよつと離れてるけど、そこにエースの気配もする…！誰かと共闘してる…のかな？相手、それこそ海軍大将並に強そうだけど…。

いや、なんか分かんないけどすつごく息のあつた連携してるし、大丈夫かな！それにお相手も本気で戦ってる訳じゃなさそうだ。エース達と戦う事でわざと足止めを演じている…様な印象を受ける。いや、正確には分かんないけどさ。

「1段目はルフイ達で、2段目は…とつと、この気配はベビー5！」

ベビー5だけじゃなくて他にも強そうな気配沢山…てことは、向こうの幹部達か！

でも良かった、ベビー5は今すぐに身に危険が迫るって事も無さそう！さつさと無力化して嫁に迎えなければ！

っていうか、もう近くまで来てるんだけどね！シャルリアを抱いてるから抑え目とはいえ、それなりの速さで移動してるし…私は誰にも邪魔をされずに空を走ってる訳だから地上のみんなと違ってスムーズにここまで来れたという訳だ。

「よつとー」

衝撃がシャルリアに届かない様に緩やかに着地し、辺りを見渡す。んー、まだ誰も来てないか。

という事は2段目の大地に居るのは私とシャルリア、それから…さつきからずつと警戒しながらも殺気を飛ばしてくる、そつちの4人だけって事かな？

「ベビー5く!!さっきぶり!!」

「…女王、また容姿が変わってるわ…!」

「気を付けろ、ベビー5、奴を止めるにはお前が必要不可欠だ」

「えっ…私が、必要…!?ま、任せて!」

相変わらず、誰にでも何にでも必要とされれば嬉しそうに笑うなあ。なんだかその表情に…ほんの少しの悲しみさえ見えなきや、ただただ可愛いねで終わってるってのに。

「女王!お前の目的は分かっている、ここに居るベビー5と、若のお側で待機しているモネだろう!!」

ツツツ頭の、特徴的なメガネ…サングラス?ゴーグル?をつけた男が話しかけてくる。他にはよぼよぼの爺さんと、脂肪が詰まりすぎている巨大男。…本来ならここにデリンジャーが居たのかな?今じゃ顔を地面に埋めて夢見てる所だけだね。

「待機?…鳥カゴとやらに閉じ込められているのを待機っていうのなら、そんなんじゃない?」

「つ…お前が今ここで手を引くのなら、ベビー5もモネもお前にくれてやると若は言っている!お前も知っているだろう!?モネも優秀な女だが、この女は何と言っても便利差が違う!お前が頼めば何でもしてくれるだろう!戦場の切込隊長から夜の慰物まで、それこそ何でもだ!!」



びく、とベビー5の体が跳ねた気がした。

…うーん、さてはこのツンツン頭、交渉下手だな？闇の世界とやらで生きてきたからか、クズ相手には十分効果を発揮しそうなセールスではある。

だけど…ぶつちやけ私相手にそれって、逆効果だと言いたいようがないよね？

「便利…？」

「そうだ！お前には成し遂げるべき夢があるんだろう!?ならばこの女を使うと良い！これは手となり足となりお前お前の為に動いてくれる!!」

「ふうん…そつかあ」

「どうだ!?お前にとつて、悪い条件では…つ…つがア…!!」

メリ…、と私の足がツンツン頭の腹にめり込み、その後凄まじい勢いで彼方へと飛んでいった。

他の3人も何が起きたのか分かってなさそうだけど、簡単な話、私の足の長さを倍加させた『100倍灰・ゴムゴムのスタンプ』である。

当然、加減の出来ないその攻撃を喰らったんだから間違いなく一撃KOだろう。死んでない事を祈るしかない。

因みにわざわざこの手を選んだ理由としては、私自身が高速で動いちゃうとシャルリアに負担が掛かるからだ。それは避けないとね。

「…一撃で…!」

「あのさあ」

「!!」

ドン!と地面を踏み付ける。それだけの動きでも100倍は発動し、グラグラと大地に揺れが発生した。

それにしても、レベツカちゃんといい、シャルリアといい、モネといい、ベビー5といいさあ…どうしてこうも、私をイラつかせる状況に身を置くのかなあ? 狙ってる? 狙ってるよねこれはもう。

「私の夢は…:ハーレム女王になるっていう夢はさ、当然…:私一人で成し遂げられる物じゃないよ」

「けど、と言葉を繋いで、ついでに爺さんも蹴り飛ばしておいた。

「私は、嫁を“使って”ハーレム女王になるんじゃない」

「今度は大男を蹴り飛ばし、邪魔者も居なくなつたという事でベビー5へと歩いていく。」

「…嫁と“一緒に”、ハーレム女王になるの。…ベビー5、確かに私はあなたが必要だよ、だけど…:絶対にあなたをモノ扱いなんてしない」

「…!!」

「私はあなたを幸せにしてみせるし、私はあなたを人として尊重する。勿論、助けて欲しい時は助けてあげるし、逆に私が困った時は力を借りる。これから先の人生で、あなたを便利な女だなんて呼ばせやしない！よく聞いてよベビー5……！私は、あなたのその能力よりも、あなたが闇の世界で培ってきた数多の技術よりも、私は……！！あなたっていう存在が、欲しい！！」

「……あ」

怒りに身を任せて、ド直球で、もうかなりのストレート球で口説いてみた。

だって腹立つじゃん！便利とか！使うとかさ！私はそんな事を言わせる為に嫁にするんじゃない！！

「……ふふ、やはり貴女様は、素晴らしいお方ですわ」

「え？」

腕の中のシャルリアがもそもそと動いて何かを呟いた。何かをつて……聞こえたけどさ、バツチリ。ちよつと降ろして欲しいと視線で告げられ、一旦澁々と降ろせば私の一歩後ろへと移動し控える様な形になった。

「……わ、たし……必要？私が、必要？」

「……うん、何が何でも、ね。だから自分を粗末に扱って欲しくない。あなたにはこれからもずっと健やかに生きて貰わないといけないんだからさ」

ベビー5の前へと辿り着けば、彼女は嬉しさの中に困惑を滲ませた表情を浮かべていた。

…正直な所、いきなりど直球のプロポーズをかまして成功するだなんて思ってもなかった。多分、ベビー5にも色々事情があつて、私の言葉はたまたま彼女の琴線に触れたのだろう。

それは良いけど、困惑の感情は…あれかな、それこそいきなりだから、とか、まだ残つてるドフラミンゴへの忠誠心…とか?そもそも彼女がモネと同じ様な忠誠心を持つているかどうかは知らないけどね。

「ベビー5、私の嫁になつてよ!」

有無を言わせない為に、背中に腕を回して抱き締めた。あ、勿論抱き締めたつて言つても力を入れてないからね!?潰しちゃう!

「…はい、あなたが、私を必要としてくれるなら!」

「うん、これからよろしくね!」

必要とされれば命すらも差し出しちやいそな彼女だけど、それも今後直していけばいい。もうそうやって自分を追い詰める必要はないんだから。

「…それで、嫁になつて貰つてすぐで本当に申し訳ないんだけどさ、王宮の状況つて正確に分かる?えーつと、モネを囲つてる鳥カゴとか」

ほんとに急で申し訳ないけど、モネの事も急がなきゃいけない。

ベビー5もそれは理解してくれている様で、変に疑問を抱く事なく答えてくれた。

「それなら、分かるわ。若は王宮の周りを囲う様に細い糸を張り巡らせてあるのよ、それに少しでも触れたら、鳥カゴは縮んでいく」

「んー…じゃあ、縮む速度とかは？」

「今までも拷問に使ってたりしてたけど…あの大きさだとモネの体を斬り刻むまで、縮小が始まって2分。若が調整を入れてるなら私にも分からぬ」

…だよ、んー…困ったなあ、結局そうなる…か。

もし本当に2分もかかるのなら、王宮に侵入してモネを助け出すのは簡単だ。10秒でも助けられる自信がある。…けど、私が糸に触れた瞬間にモネが死んでしまうくらいまで縮小されたら厳しい。

そんなもって性格の悪いドフラミンゴの事だ、それくらいは準備してそうだと思っておいた方が良さだろうね。

どうしようかなあ…と悩んでいると、おずおずとシャルリアが遠慮がちに腕を上げた。別に気にする必要は無いのだけど、私の思考を邪魔している、とか考えているのかもしれない。

「シャルリア？」

「申し訳御座いません、僭越ながら私、1つだけ糸に引っかからない方法を閃きました」  
「どんな!？」

それを聞いた瞬間に間髪入れずにシャルリアへと詰め寄る。当のシャルリアはいきなり目と鼻の先まで迫った私の顔を瞳をぱちくりとさせ、頬を染めながら目を瞑る。

「…あれ? どうして目を瞑ったの?」

「…この距離までお近付きになられたのですから、キスでもどうかと思ひまして」

「ははは、私、そこまでがつついてない…:…けどする!!」

流石シャルリア…:近付くのならキスくらいしていけ、と言う訳だね…:…いやまあ本人は多分、自分を慰物に使え、くらの気持ちで言っただろうけどさ。…:あんまり自分をそういう風に扱って欲しくないけど…:…なんか、なんかえらい。

そんな感じで軽くキスを交わして本題に入った。

「それで、方法って?」

「はい、それはベビー5様、あなたですわ」

「え? 私?」

「こてん、とベビー5が首を傾げ、シャルリアは頷いて肯定を示した。

ベビー5が…:…なんだろう?

「ここでの出来事を逐一監視するだけの余裕がドンキホーテの者にあるとは思えませ

ん。つまり、まだベビー5様がイリス様の手に堕ちた事は気付いていない筈ですわ。なら、仲間であるベビー5様は王宮へと入れるのではないでしょうか」

「！そっか、じゃあ私はベビー5と一緒に入れればいいんだ！」

「確かに私には王宮の罨は作動しないわ！」

ベビー5もこう言っているので、シャルリアの案で行く事にしよう。

私が王宮の周りがダメなら地中から無理矢理突入してやろうかな、とか考えている内にこんな実用的な案を思い付くとは、流石シャルリアだ。……私の考えが脳筋なのは昔からだから！

「凄いよシャルリア！あともうちよつとで穴掘りしないといけなくなる所だった！」

「え？……？ここ、光栄ですわ」

私の言ってる意味が分からなくて困惑しながらも取り敢えず言葉を返すシャルリアも可愛い。

「ベビー5もよろしくね！」

「ええ、任せて」

……これ、ベビー5を便利扱いしている事になるのかなあ。うーん、彼女の場合は色々複雑で、お願い事をするだけでもちよつと深く考えてしまうね。

……ううん、やつぱり違う！“使う”と“頼る”じゃ全く違うもんね！うん、気にす

るのやめた！

よーし！頼りにしてるよ、  
ベビー5！



## 188 『女好き、望まれてない救出』

「…案外あっさり入り込めたね」

ベビー5の案内で王宮に潜り込んだ私は、その辺の物陰に隠れながら軽く息を吐いた。

何があつたのかは知らないけど、王宮内は割とボロボロだった。壁がぶつ壊れて日の光が差している所なんていたる所にある。ていうか、そもそも壁が無くなつてる廊下とかあるくらいだ。

お陰で崩れた瓦礫などが物陰になっているのだけど。

それからシャルリアは今も私の側に居る。外に置いてはこれないと判断したからだった。

「大変なのはこれからよ、何せあなたのその『圧』を隠しながら若に近づかなきゃならないんだから」

…まあ、そうだよね。女王化並みの持続時間はないが、真・女王化の状態も1時間くらはいは保てる。それを解いちゃったら10倍までしか使えなくなるから、モネを助けるのには心許ない…という訳で、この状態のままモネの所まで辿り着く必要があつた。そ

れも、ドフラミンゴに気取られぬ様に。

「正直、いつ気付かれてもおかしくないわ、あなたのその覇気…若に近付けば近付く程に気付かれるリスクが増してると思った方が良い。…そういう所も、遅しくて素敵だとは思うけど」

ぼ、と頬を染めながら言うベビー5に苦笑を浮かべる。なんとというか、良い感じに切り替えが早くて心が落ち着くというか…。

で、肝心のドフラミンゴとモネはというと、見聞色で探ってみた所この王宮の最上階に居るようだった。…あと、これはベラミー…か？かなり弱ってるみたいだけど、どうしたんだろう？大会のダメージがそんなに大きかったのかな？

「…場所は分かったけど、まだちよつと遠いね」

「近付いてみるしかないでしょう。…不躰ながら意見させて貰いますと、イリス様の使われているそのハキとやらは、効果を切らない方がよろしいかと。万が一気取られた場合、相手方の動きが分からないのでは…」

「それもそうだね、分かった」

シャルリアの言葉に素直に頷いておく。最悪、無理矢理にでも突っ切る必要性が出てくるかもしれないって事だ。

ぶつちやけた話をすれば、今の私ならここから最上階まで、文字通り一瞬で移動でき

る。当然屋根などぶち抜きながら進む事になってシャルリアやベビー5に危害が及ぶ可能性があるから、それはあくまでも気付かれた際の…要は最終手段。もしこの手を使う事になったとしても、シャルリアとベビー5には傷一つ付ける気はないけどね。やっぱり念には念を、だ。

「……んー」

でも慎重に行きすぎるのもねえ…。多分、真・女王化の効果時間がそろそろ切れる頃だろう。詳しくは、後10分くらい。

……あ、そうだ。

「王華呼べばいいじゃん…」

真・女王化でも王華を呼ぶ事は出来る。まあ、王華が顕現してる時はその分覇気の消費量も多いのは2年前から変わらないから、後10分って思っていた効果時間もがくつと落ちて5分くらいになってしまっただろうけど。

それでも彼女が出てきてくれたら周りを気にする必要が無くなる。つまり、私が暴れてもシャルリアとベビー5に危害が及ぶ事は無くなる！

「という訳で、王華、来て」

「はいはいっつ」

びよん、と王華が宙から現れて地に足を付ける。突然現れた彼女に2人は目を見開か

せるが、驚いて声をあげるのはなんとか堪えた様だ。

「イリス様、彼女は……？」

「王華って言って、私の……、……友達？」

「いやいや、もう大親友ってレベルじゃない？心が通じ合ってるレベルで」

待って？確かに心は通じ合ってるけど、それって大親友だから繋がってる訳じゃ無いからね?!

「いきなり現れた様に見えたわ……」

「まあまあ、王華はそういうものだから気にしないで？」

「そういう解釈のされ方はちょっと釈然としないんだけどなあ！」

怒ってないけど怒った様に見せる王華をスルーして、私はシャルリアとベビー5を守ってもらう様にお願ひした。

まあ、私の考えを実際に心の中で聞いていた王華だから、私が何を言うでもなく2人の側に控えてくれてたけどね。

「じゃあ、ちよつと行ってくるね。……信用はしてるけど、絶対に2人に傷を付けないでね？」

「はいはい、分かってるって」

軽く返事をする王華だが、私はその言葉を聞いて頷いた。

王華の能力は私とリンクしている。正確には違うとかなんとか王華は言っていたけど、まあ大体同じだ。

例えば私が女王化を使ってる時は王華の上限も100倍だし、真・女王化を使えば100倍を越えて更に先のステージに立てる。

つまり今の王華も私と同じ倍率を使用可能という訳だ。護衛としてはこれ以上ないくらいに頼もしい存在だろう。

ふう、と一息を吐いて集中する。

今から行おうとしてる事は単純だけど、だからこそ確実だ。

さつきも少し考えた、屋根をぶち抜いてドフラミンゴの居る王宮の最上階へと向かうという方法。これなら辿り着くのは一瞬で済むし、跳躍1つで事足りるから私も楽だった。

「はっ！」

ドツ、パァン!!!

瞬間、私が居た所に巨大なクレーターが出来上がった。近くに居たシャルリアとベビー5は王華によって安全圏まで運ばれ、私はというともう目的地に辿り着いている。

あまりにも突然の訪問にドフラミンゴも、そしてモネも驚愕で固まっていた。

「…お前、どうやってこの王宮に入った？」

流石に胆力が違うのか、モネより早く思考を取り戻したドフラミンゴが疑問を口にす。その疑問には軽い笑みで返し、まず手始めにモネを囲っていた鳥カゴをこじ開けた。

「…っ!? な…! 若様の鳥カゴを…!?!」

「何? これ、そんなに凄いの?」

そうして中からモネを引っ張り出して、腰を抱いて隣に立たせる。

最初はただただ驚愕していたモネだったが、次第に私への敵意と殺意を瞳に宿していく。

「ドフラミンゴ、モネは貰って。それと、あなたもぶっ飛ばしていく。…それは私がするか分かんないけど」

「そんな事、させる筈ないでしょう!?! 見てなさい…あなたが私をあそこから出したせいで、私は…!!…ぐう!?!」

私は、死ぬ事になる。

どうせそんな事でも言おうとしたんだろうモネが、分かりやすく自分の舌を噛み切ろうとしたから、メイド服のスカートを少し破って丸めてモネの口に詰め込んでおく。

「私こそ、そんな事させる訳ないでしょ? ……あ」

丁度真・女王化の効果も切れたのか、シウルシウルと体が縮んで元の姿へと戻った。

あー…流石に10倍でドフラミンゴの相手をするのはキツイかもしれないね。みんなに任せるか、ここで足止めだけでもしておくか…。

ドンツ!!!

「…ん?」

そんな事を考えていると、突然空から何かが私とドフラミンゴの間、その丁度真ん中に降ってきた。

かなりの勢いで落ちてきた何かは、ドフラミンゴを庇う様に私を睨みつける。

「…やつとその変化を解いたわね、女王オ!!」

「…っ…うわ…もう復活したの!」

デリンジャー。

ぶっ倒した筈の男が今、怒りの表情を少しも隠す事なくそこに立っていた。

「デリンジャー…そいつの処理、お前なら出来るだろう?」

「今の奴なら、すぐにでも」

「…!」

ドフラミンゴの言葉で戦闘態勢を取ったデリンジャーを見て、私は即モネを抱えて近くの穴へと飛び込んだ。それは私が最上階へと昇る為に開けた穴であり、当然その下に

はシャルリアとベビー5が居る。女王化が切れた今王華にも頼れない。なんとか乗り切るしかない！

…とりあえず今は、この方法に賭ける!!

「後は、任せた!!!」

\*\*\*

下に降りた後、モネを任せて、彼女達が見つからない様にデリンジャーを引きつけ王宮を飛び出した。

思惑通り自分を追って来てくれた事に内心で安堵し、何処へ行こうかと思考を巡らせる。

どうせすぐに追いつかれるだろうけど、どこを目指すのかは大事だ。例えば王宮の外のみまわり畑は、多分王宮を指すみんなと鉢合わせるだろうから長居は出来ない。

なら街へ戻るのはいかがかと言えば、それはそれで民を巻き込む恐れがある。最初にデリンジャーと交戦した時と違って、今は奴を完封出来る術を持っていないのだから特



に。

「…なら、仕方ない！」

花畑や王宮のある4段目よりも2つ下の2段目の台地！そこならあまり人も居ないだろうし、何より広さがある。多少暴れられても被害は最小限で済むだろう。

そんな望みを抱いて全力で坂道…というか最早崖となるそこを駆け下り、なんとか2段目の地へと辿り着く事が出来た。

ここもドフラミンゴの手下達と戦ってくれてる人達は居るが、大半は3段目へ辿り着いているのか比較的人数は少なめだ。

「キヤー!!」

「ツぐ!?!」

状況を確認し終わった直後に背後から頭を蹴り飛ばされて綺麗に吹っ飛んだ。流石に追いつかれるよね…!

「…全く、一体どれだけ強化されてるのやら」

まるで何事も無かったかの様に立ち上がり、作戦が上手く行っている事実に「私」はニヤリと不敵に笑ったのだった。

## 189 『女好き、少女、恋に落ちて』

「よしよし、どうやらあつちは上手くいっただみたいだね」

「……」

うんうんと満足気に頷く私をモネが鋭い眼光で睨んだ。美女に睨まれても興奮するだけで怖くないよね？

あの後シャルリア達と合流してすぐ、私は割と久し振りの神背・倍加ヒューマイニングクリースを使つて「私」に囮になつて貰つた。

デリンジャーは青キジやハンコックと違つて相手を固めて行動不能！とかは出来ないだろうから、今頃何度攻撃しても平気そうにしてる「私」に困惑してる頃かもね。

「じゃ、外してあげるね」

「つ……」

モネの口からスカートだった布を抜き取り、ハンカチを取り出して口の周りを拭いてあげる。…流石にもう自殺をしようとは思わないよね？多分、目論んだ所で意味はない事は彼女自身が1番理解してると思う。なんだつて自殺を阻止されたのはこれで2回目な訳だし。3度目の正直？言つとくけど次したら、犯すから。

……つてモネに言ったら、なんか身を震わせていた。心無しか私を見る目に怯えの感情が入ってる様な……いや、自殺なんてしようとしなければ何もしないから!!……あ、何もしないは嘘だけど!

「……ベビー5、あなた……若様に必要とされていながら裏切ったのかしら……?」

「残念だけど、ドフラミンゴの言う『必要』と私がベビー5に対して思ってる『必要』とじゃあ本気度も意味合いも違うからね!裏切るっていうか、そもそも裏切られる様な扱いをするのが悪いんじゃないの?」

「……誰もあなたに話しかけていないのだけど?」

「あ、因みにモネも必要だよ?」

「……………」

うーん、手強い。シャルリアも顎に手を当てて何やら考える様にモネを見つめていた。

その視線に気付いたのか、モネもシャルリアと視線を合わせて怪訝そうに眉を寄せ

る。

「……何かしら」

「いえ……、ただ……何故そこまでドンキホーテの者に忠誠を誓っているのかと疑問に思っただけですわ」

「どういう意味？」

「そのままの意味です。あなたは一体、彼の何処に惹かれてそこまでの忠誠を？傲慢な態度に？圧倒的な強さに？誇るべき知性に？…いえ、違いますね、あなたからは…依存の気配がします」

「…!!」

シャルリアの言葉にモネは大きく目を見開いた。…けど、依存？どう言う事？

「依存そのものを否定は致しません、今の私も似たようなモノ…既に私の身は、心は…この御方を無くしては生きていけない様に成っています。しかしあなたの依存はそうではない、彼の為に自身を使い潰す事に喜びを感じているのでは？」

「ふふ、何を言うかと思えばそんな事？別に否定する必要も無い事よ」

「ええ、だからあなたは揺れているのでしょうか」

その言葉にまたモネは軽く目を見開し、息を呑んで次の言葉を待つ。

…シャルリア、何でそんな事分かるの？私、全く分かんないけど。

「ドンキホーテの者に対する依存心は、きつとあなたの心の中でとても大きなモノとなつている筈ですわ。だけど、そんな中で…イリス様が現れた。あなたの当たり前を、それこそ当たり前の様に否定し、そしてあなたはその事に対して不快に思わなかった。…いえ、むしろ心地よかつたのでは？」

「な…!?!」

「だから、あなたは自分自身の中で揺れている、いえ、混乱しているのでしょうか。とても良く分かります…私も、2年前はそうでしたから。当たり前だと思っていた事を当たり前前に壊して下さった…私の英雄様に、当時はとても激しく心を揺さぶられた物です。今となつては、何が起ころうとも揺らぎはしませんが」

……あ、あれ?ちよつと待つて。なんかその言い方だと…今まで全く効いてないと思つていたモネへの言葉が、私が思つている以上に効果あつたつて事じゃ…?

「断言致します、同じ依存でも、彼よりイリス様へと向けた方が幸せになれますわ」

「…っ!あなたが私の何を知つていると言うのかしら!?!若と共に、あるいは若の為に!私は若の目的の為ならば、この命を捨てる事だつて惜しくはない!!」

「そうですか、私は例えイリス様の為とはいえ自らの命を投げ打つのは惜しいですね。何故ならば、そうなつてしまえば…私は2度とイリス様とお会い出来なくなりませぬ。それに何より…イリス様を悲しませてしまいますので」

「そんな事、私にはどうでもいい事でしょう!?!」

さつきから、シャルリアは淡々と言葉を並べて行つてゐる。だというのにモネは段々と言葉が荒くなつて来ていた。…余裕が無い証拠だ。なんていうか…シャルリア、凄

「ええ、あなたの死など、『ドフラミンゴ』にとつてはどうでもいいでしょう。良くて目的達成の為の布石程度。…ですが、イリス様は違います。あなたの命を尊重してくれま  
す、大事にしてください、何があつても守り抜いてくれます、そして…本当のあなたを、  
見てくれますよ？」

「っ…」

「モネ、本当よ。私もこの命、若さまの為に使い潰すしかないのかと思つていた。…便利  
な女として、自分を残す事もなくこの世を去るのかと。でも、彼女はそんな私を許して  
くれなかつたわ、私に残つた選択肢は、彼女の隣を歩む事だけだつた。…だけど、そこ  
では私自身を見てくれる。私自身を必要としてくれる。…私にとつて、それは何よりも  
幸せな事だつたのよ」

「ベビー5…」

「モネ」

がし、と戸惑うモネの両手を私の両手で包み込んだ。私よりも大きなその手は包み込  
むには足らなかつたけど…でもその分、彼女の心だけは大きく包んであげたい。

じつと見つめれば、まだ揺れる瞳が私を捉える。今こそ長年彼女の心の中で成長して  
きたドフラミンゴへの忠誠心と、私の本気の心がぶつかる時だ。この揺れる瞳、私の方  
に傾倒させてやる…!!

「好き」

「っ…!?!」

ぐい、と手を引つ張つてその身を引き寄せて耳元で囁く。

何をしているのかつて?…愛を囁いてるんだよ!!もうこれしか方法無いよ!全力で、私  
が思つてる事を貫く!!貫き通す!!!モネが何も考えられなくなるまで、私はモネへの想い  
を全て吐き出す!!

「好き、好き、好き。愛してる、可愛いし、とつても綺麗…。その雪の様にしつとりと白  
い肌も、艶のある淡い緑の髪も、そして、恩義を忘れない尊い心も、何もかも美しいよ。  
だから私の嫁になって、私の女になって。あなたの身も心も全て、私に頂戴!」

「な、にを…:…っ、んむっ!?!」

元よりモネは褒められるのに慣れていない。それは初めて会ったあの時に気付いた  
事だ。

そこに私の欲もぶち撒け、足を引つ掛けて床に押し倒し、奪う様に豪快なキスをかま  
した。

「ん〜♪」

「ちゅ…んう、ふあ…:…っ」

楽し気に、愉し気に、私は息つく間も無く舌をモネの口内に侵入させた。強引にこじ

開け、逃げ回る舌を絡め取って私のものと一体化させる様に舐めとっていく。時折唇に吸い付き、だけど口の中では変わらず動き回る舌。

私が入を位置取っているからか、私の舌から滴る唾液は全てモネの舌を伝ってその口内を濡らしていく。こく、とモネの喉が鳴る度に私の中でとんでもない興奮の波が押し寄せた。

…一体私がどれだけキスの嵐に晒されながら今日まで生きてきたと思っているのか！どうだモネ！私が（半ば無理矢理）培った技術は！！

私と“そういうコト”をして来た嫁達は、例外なくテクニシャンである。夜な夜な求められては応じ、押し倒されては体を預ける日々…！再会してからはそれ程していないが、2年前はもうすんごいくらいしていたものである。もうね、凄かった。そりやあ私だつて嫌じゃなかったよ？というか、嬉しいし？だつて嫁から求められてる訳だからね？でも…何事にも限度があると言いますか…。

で、みんなからの攻めを一身で受けるという事は、言うなれば私は一番“そういうコト”に対しての経験値が多い。普段は基本的に押し倒されている私ではあるけれど、みんなからあれやこれやをされ続けてきた私は…凄腕のテクニシャンになっていたのだ

!!

「んっ…ちゅ…はあん…っん！」



ほーら！ほーら見てこれ！モネの『とろん…』って感じの瞳!!しかもこの短時間でキスへの抵抗無くなってるからね!!…いやまあ、抵抗しても無駄って思われただけかもしれないけどさ!!

「はあ…っ、…とりあえず、これで唇は貰ったよ?こんな所じやなんだけど、次はその体をまるごと頂くから。…そして、心もね」

耳元でボソツと呟けば、途端に顔を真っ赤に染めて私を睨むモネ。勿論威圧感ゼロである。だってリンゴだし。

「私の気持ちを全部、今すぐ伝えるっていうのは無理かもしれない。でも、さっきのキスで少しは伝わってくれたよね?」

「あ、あなたが…っ、欲に塗れた、女なら誰でも良いっていう人って事は、良く分かったわ…!」

「もー、そんな事言つてー、顔に書いてあるよ?『もっとしてえ…』って」  
「ツ…」

…うん、効果は抜群、心も傾き始めた。

少し強引だし、なんならちよつとずるいかもしれないけど、卑怯だなんだは言つてられない。

きつとモネは愛情に飢えていた、それこそ…ドフラミンゴに依存し、自らの命を簡単

に捧げてしまう程。だから私はそこを突いてやったのだ。モネの許容量を遥かに超える愛情を、誰が見ても分かるように、ドストレートに態度でも言葉でも示した。

「…わた、しなんか…」

「モネは可愛い」

「う…、私は、あなたなんか…っ」

「私はモネが好き、大好き愛してる」

「あ……だ、だけど、若が…」

「その若サマより、私で染めてあげるよ、モネ。…そろそろ、自分を大切にしようよ」

最早モネの心は没落寸前だった。誰が見ても分かる程に、彼女の瞳は熱く私を射抜いている。ただその態度が、口から出てくる言葉が…自分自身の思いを否定している。だったら後は彼女自身に認めてさせてあげればいい。長い年月をかけて固まっていたその価値観を、1発で破壊してあげるんだ。自分の心に、揺れる必要も感じられなくなるくらいの一発を！

「モネ。私の事…好きになって下さい！」

「…っ…」

モネの瞳から、水滴がぽつりと零れて床へと伝う。大人びた彼女の顔立ちだけれど、その表情はまるで幼い少女の様だった。そう…例えるならばそれは…

――初めて恋をした様な、そんな、甘酸っぱいものだった。

# 190 『女好き、意外な来訪者』

「……………あのー」

「……………」

「えーつと……………」

「……………」

……………どうしよう、モネが本気で怒ってる。話しかけても答えてくれないし、目も合わせしてくれない。私からそそくさと離れたかと思えばこんな状態になってしまったんだけど、ほんとにどうしよう…。

「大丈夫、照れてるだけよ」

「ベビー5……………ツ!!」

ギロ、とモネがベビー5を物凄い形相で睨んだ。なお、顔は真っ赤である。

「恐らく、自分の心と向き合い、初めての恋心という物を自覚して羞恥心が抑えられないといった所でしょうか」

「なるほど」

「なるほど、じゃないわ…!!」

モネみたいな大人なお姉さんって人でもそういう事になるんだね。可愛いから別いいけど。

「じゃあ改めまして、モネ…私の嫁になってくれる?」

「この流れで?なる訳が…」

「あ、じゃあいいや」

「へあ?」

予想外過ぎたのか、モネから出たとは思えない声その口から発せられる。直後に不安気に揺れる瞳が何とも愛らしい。

それだけで彼女の本心を察するには余りあるけれど、どうやらモネ自身はそれを口にはしない様だった。…やっぱりなんだかんだ言っても、長年仕えてきたドフラミンゴをあっさり裏切るのには難しいか。ベビー5は…:…まあ、ちよつと特殊だよね。

「なつてくれる?…なんて、そんなの受け身だよね?うんうん…やっぱりこの場合は…」  
少し離れてるモネへの歩み寄って、腕を取る。

「今から私の嫁としてよろしくね、モネ。勿論、拒否権は無いから」

「…なら、仕方ない、わね」

まだ少し複雑そうな顔だけど、しつかりと嬉しさも滲んでいるから今はこれで良いだろう。これから素直になればいいし、これからもつとつと私の事を好きになって貰え

ればいい。

……とにかくこれでパンクハザードから狙っていたモネを嫁にする事が出来た訳で、私のテンションもモリモリ上がっております。

「あれ、イリスー！お前いつここに来たんだ？」

「女王屋……ベビー5、モネも一緒か。そっちの女は……」

お、ルフィとローも王宮に到着したみたいだ。やっぱり私を除いた一番乗りはルフィ達だよ、叶が居ないのは意外だったけど。

「モネはこの通り助け出したから、もう鳥カゴの事は気にしなくて大丈夫だよ。そんなもってこの人はシャルリア、事情は後で説明するけど、彼女も私の嫁だから」

「シャルリア……名前だけで言やア……、いや、こんな所に居る訳がねエ……」

「初めまして、ロズワード・シャルリアと申しますわ。……いえ、2年前のオークション会で会ってはいますので、お久しぶりです、が正しいのでしょうか？」

「……………は??」

ローが説明を求める様に私の方をガン見してくる……いやローだけじゃなかった、モネもベビー5もだった!!唯一ルフィだけが首を捻って、「誰だこいつ？」と空気に合わない事を言っているけど。

「事情は後で話すから！今はドフラミンゴでしょ?」

「…分かつているのか？その女を抱えるって事ア…この世界の闇を」

「そんなもん、全部薙ぎ払って先に進むよ。良いから早く上に行つたほうがいいんじゃない？」

天竜人だろうがなんだろうが、彼女は私の嫁なんだ。文句があるならその全てを振じ伏せてやる！そうしたらいざれ文句も出なくなるから問題無い！

…ナミさんに言つたら呆れられそうだけど。

「…麦わら屋、お前は…とんでもねエ爆弾を抱えている事に気づいているのか？」  
「バクダン？何言つてんだ？」

「…いや、もっいいい」

目を瞑り眉間に皺を寄せながら、目元を片手で覆つて大きいため息をつくロー。色々考えるのはやめた様で、視線をドフラミンゴの待つ最上階へと向けた。

「俺達はこのままドフラミンゴの下へ向かうが…お前達は どうする？」

「私はいいや、戦えないシャルリアを危ないところには連れて行きたく無いし、このまま王宮から離れるよ」

そう言えばローは納得した様に頷き、ルフィと共に上の階へと登つて行つた。登るつて言つてもローの能力で瞬間移動したんだけどね。るーむ？とかなんとか言つてたけど一体どんな能力なのやら。

2人を見送った後、私達も王宮を出て花畑の方へやってきた。この4段目の台地はひまわり畑の中に王宮が建っているの、王宮から出れば一面ひまわりで埋め尽くされていてなかなか壮観：なのだが、今は色々と台無しである。

というのも、その花畑の中心で片足の男ともう1人の男が死闘を繰り広げているのだ。剣と剣がぶつかり合い火花を散らすその光景は、ひまわり畑とは少々不釣り合いに見える。

「…お」

片足の男の背後に視線を向ければ、そこにはレベッカちゃんとロビン、それから葉が決闘を大人しく見守っていた。

ロビンと叶はレベッカちゃんを守る様に前に出ており、恐らく戦闘の余波などがレベッカちゃんに届かない様にしてくれているのだろう。

…なんだか真剣そうだし、事情を知らない私が能天気「やーやー」って話しかけるのは違う気がしてその場からそっと距離を取った。

…それにしても、あの片足の人、どこかで見た事ある気が…する様な？

にしてもあれだよ、工場破壊する為にドレスローザに乗り込んだ筈が、巡り巡って…だかどうかは分かんないけどドフラミンゴそのものを叩く事になってるとは。

殆どコロシアムに居たし、あそこから出てからも目の前のするべき事をして来たって



ただだから、なんというかイマイチしつかりと状況が分かってないんだよね…。

まあ、状況なんて分かんなくてもいつか、なんとたつてこの地で私は4人も嫁を見つけただんだ！しかも叶とも和解出来たし、エースにも会えた。控えめに言つても素晴らしいと思う。

「あ、いたいた！こんな所に居たんだ、探したよ私」

その時、後ろから「私」が声をかけて来た。…つて、あれ？デリンジャーは??

「…うわ、かなり痛めつけられてるね…」

「痛みは感じないけどね」

「私」はなんて事ない顔をしているが、そのボロボロの体を見てモネですら顔を顰めている。

…まあ、右腕が肩から千切れ飛んで、左脚も太腿から下は骨が見えるくらい挟られており、その顔に至つては左上の頭部が吹き飛んでいるのだ、誰でもビックリするだろう。「ご、ごめん、流石に適当に囮役押し付け過ぎたかも…」

「何言つてるの？元々「私」はこういう役割の筈でしょ、寧ろしつかり仕事を果たしたんだから褒めてくれてもいいじゃん！私はナミさんを守った後に「守らせてごめん」て言われたいの？」

「申し訳ありませんでした、囮役ありがとうございます！…ん？仕事を果たしたつて…

デリンジャーはどうなったの？」

「ああ…その事について今から説明しようと思うんだけど」

「私」はどう言ったら良いのか考える様に残っている右頬を掻く。

2年前と違って「神背<sup>ヒュウマ</sup>」の効果時間もキチンと伸びている。10分という短い時間に縛られる事は無くなったが、相変わらず私が攻撃を受けると消えてしまうのは変わっていない。

ただ今、私に危害を加えそうな人は居ないから急いで「私」から事情を聞き出す必要は無く、黙って次の言葉を待っていたんだけど…。

「デリンジャーなら私が倒しておいたわよ？全く…原作だとハクバにやられてたのに凄く強化されてて焦ったわ」

「…え？」

唐突にその女の人は姿を現した。今の私では視認出来ない程の速度で…つまり、10倍の私よりずっと強い誰か。

緑色の長髪は何にも縛られずに彼女の腰近くを揺れ動き、同色の瞳は軽口を叩きながらも鋭く私を射抜く。

その身に纏う翠のドレスは、ドレスなんだけど戦闘服にも見える。基本的にはAライ

ンに見えるけど、その材質はドレスと言うには硬そうだし、何よりスカートは動きやすい様になのか知らないけど、太腿から下の部位が全周ぐるつと縦に何本も切られていた。水に浮かしたらタコの足みたいになりそうだ。：いや、タコに喩えるのは流石に申し訳ないかもしれないけど。

とうか！この人今原作って言ったよね!?

「えつと…あなたは？」

「あら、分らない？」

悪戯っぽく笑う女の人の言葉を、顎に親指と人差し指を挟んで思案する。原作って言葉から、目の前のこの人が前世の記憶持ち…つまり王華関連なのは間違いない。

王華の友達である3人の内の1人である叶とは既に知り合っているし、レイな訳が無い所を見るに、美咲か沙彩のどちらか…だよね。

「うーん…」

『い、イリス！髪の色も目の色も違うけど、この人沙彩だよ!!顔立ちは全く変わってないでしょ!』

「あ、沙彩なんだ」

流石は王華。正直、あんまり関わりが無い人が目と髪の色を変えたら誰か分からないと言いますか…。

……つて、沙彩!?

「へえ、ちよつと意地悪してみたけれど、良くわかったわね、王華?」

『分からない訳ないよ!!』

「分からない訳ないよ、だつてさ」

王華の言葉をそのまま伝えてあげれば、彼女はピクリと眉を動かした後、目を細めてジツと私を観察して来た。えつと…美人に見つめられるのは嬉しいんだけど、何でしようかね…?

「…あなた、王華じゃないの?」

「あー…えーつと…」

チラツと横目でモネ達を見る。

まあ…嫁になって貰った訳だし、彼女達に私の事を隠しておく必要も無い…よね。というか、モネとベビー5は沙彩の顔を見て固まつてるし。シャルリアは相変わらず私の近くで大人しくメイドみたいに佇んでる訳だけど。今メイド服着てるのは私だけけどね??

そんな訳で、叶の時の失敗も踏まえてじっくり慎重に私と王華のこれまでの事を話した。

私が話す度に「うんうん」とか「ほー」とか「そんな事が…」つて相槌を打ってくれ

ていたので、全く信じていない訳じゃ無きそうさ。良かった…。

「……という感じで、今に至るんだけど……えっと、信じてくれるかな？」

「うーん…信じる信じないで言えば、その話で出てきた叶と同じく王華を一目見ない事には何とも言えないわね」

「ですよー…」

彼女達にとつて大事なものは王華の存在だ。私の中でどれだけ王華が叫び散らかそうとも目の前の沙彩に届く事は無い。

…でも困ったなあ、今日は女王化も真・女王化も使っちゃったから王華を呼び出せないんだけど…。

「…女王、どうしてあなたが、『超彩』と仲良くお喋りしているのかしら。いえ、それよりさつきから話に出て来る前世というのは…」

「ああ、私には前世の記憶があつてね、沙彩もそうなの。で、前世で私達はこことは違う世界に住んでたから…まあ何というか、旧知の仲なんだよね」

「+6」

何言つてんだこいつ、みたいな目で私を見てきたモネだったが、やがて考えるのが面倒になったのか頭を振つてため息を吐いた。

ベビー5はあんまり話の内容を理解していない様だったし、シャルリアは変わらず、

眉一つ動かしていない。

「イリス様が何者であれ、イリス様はイリス様です。モネ様、その事実は決して揺らぎは致しませんわ」

「ええ、それは分かっているわ。情報を処理し切れないだけよ」

「どんな事情があれ、私を必要としてくれた人なのに代わりはない。そうでしょ？」

「あはは、うん、ありがと、3人共」

エニエス・ロビーの時の私に聞かせたら号泣しそうだ。

まあ…あの時はあの時で鮮烈だったというか、今でも大切な思い出として胸の中でずっと鮮やかに残っているけれど。

## 191 『女好き、ルフィの新技』

「それで？沙彩はどうしてここに居るの？」

3人からの言葉にほっこりする事少し、そういえばビッグマムの右腕とかなんとか言われていた彼女が何故この場に居るのか気になって尋ねてみた。

「叶から王華の手掛かりと接触したって聞いてね、ドレスローザに来れば会えるかもって言われたものだから来ちゃったわ」

「…良く分からないけど、表に出たくなって裏で紙と睨めっこしていると噂の『超彩』が、今になってわざわざ自ら出向くなんてどういった心境の変化かしら？」

「私としても貴女が死んでいないのはどういう事かと聞きたいんだけど…、あ、違うのよ？喧嘩を売ってる訳じゃないから」

…ふむ、原作ではモネは死んでいる、という事か。

それもそっか、何たってあの時、私が居なきや多分シーザーはモネの心臓をナイフで刺していた。そりゃあ事情を知らない沙彩にとっては驚愕に値する事実なんだろうけど。

「モネは私の嫁だよ、誰にも殺させやしないし、今後死なせる予定もない」

「うん、それがいいわ」

あれ、予想よりもあつさりど領くんだね…。まあ王華の友人だし、人の良さは疑うまでもないか。

「ベビー5も王華…じゃなかった、イリスに捕まったのね」

「捕まったなんて人聞きの悪い。そりゃあ結構強引だったかもしれないけど！」

「…となると、八宝水軍はどうなるのかしら…後ウホリシアとか…サイの未来も変わってるわよね…」

「どうかした？」

「…ううん、何でもないわ。原作がどうであれ、この世界の人が選んだ未来が正しいのだから」

あ…あれかな、何かまた色々原作との差異を生んじやったのかな。

でもそれは仕方ないよね？ベビー5が可愛いのが悪いんだと思います！ていうかミキータとかペローナちゃんや私達の一味に居る時点でそんな事気にしてられっかー！

「話は逸れたけど、私が出向いた理由だったわね、それは当然王華に会うためよ。というより表に出なかつた理由の大半は王華に会う為だから」

「え、そうなの？」

「ええ、なんだってビッグマムの娘に転生したのよ？戦場に出る回数が多くなる程死の



危険性も高まる訳だし、裏方に引っ込んで安全にその時を待つのが最善だと思つたのよ。…結局、いつの間にやら『超彩』だとか右腕だとか言われる様になつただけれど」

…ふむ？そつか、そう考えると沙彩のケースは結構レアだ。私と叶にはこの世界での親と言うべき存在は居ない。男女の交配で産まれた存在ではなく、この世界にポン、と産み落とされた形だから…言うなれば世界そのものが親なのだ。

だけど沙彩にはビッグママという明確な親が居る。つまり転生する手段は一つだけじゃないという事だ。

となるとまだ居場所も分かっていない美咲やレイの転生手段も気になる所だけども、今はいいや。

「…でもごめんね？今日はもう王華に会わせてあげられなくてさ…明日まで待つてくれるなら何とかなるんだけど」

「ああ、大丈夫よ、今日はあなたに会えただけでも十分。それに私も国を抜け出してここに居る訳だから早く戻つてあげないとね」

「良いの…？1日待てば会えるんだよ？」

「大丈夫大丈夫、どうせすぐ会えるから」

うん？どういう事？

あれかな、そう遠くない未来で私達はビッグママに会いに行つたりするのかも。

…うん、だったら良いな。ついでにビッグマムをぶん殴って魚人島の縄張りも私に譲渡させられるし！

「だから私はこの辺で帰るわね。…あ、そうそう、デリンジャーだけど、海楼石の手錠を付けてやったからあの強化状態？みたいなのが解けたわよ。そこから一方的にポッコポコにしてやったから当分は起き上がって来れないと思う」

「あ、うん、ありがとう」

ポッコポコで…。うーん、あの状態のデリンジャーを相手に海楼石の手錠を付ける事が出来るんだから、やっぱり沙彩って強いんだなあ。

「私が戦う前からダメージを負ってたみたいだけど…何かあったのかしら？」

「あー…」

やっぱり結構効いてはいたんだね、100倍パンチ。

…でも、いくら海楼石で効果は切れると言ったって、あの強化は厄介だ。

デリンジャーの元の実力を知らないから何とも言えないけど、七武海であるドフラミンゴとは圧倒的な実力差がある筈。なのに私が100倍を解放せざるを得ない程の力を奴は得ていた…。

あんなのを四皇クラスに使われたら、それこそんでもない化け物が生まれてしまうだろう。…流石にそうなっちゃったら、私が全力を出しても勝てるか怪しい所だね。

まあ、仮にそれで嫁に危険が迫る様なら何が何でもぶっ潰すけどさ。

「それじゃあ、またね」

そう言つて沙彩は目の前から姿を消した。やっぱり見えない…速すぎて。

「えーつと…」

色々とあつたけどデリンジャーの脅威が去つたのは僥倖だった。となると次に私がすべき事はなんだろう？ドフラミンゴはルフィとローだけで十分だし、花畑の決闘も同じ事。

これより下の台地に関しても、2段目の台地に居た幹部連中をベビー5以外全員私がぶっ飛ばしたからか戦局は安定してこちらが有利だし、遠くの方で見えるエース達の戦いも今の所手助けは必要無さそうだ。というか、戦闘してる相手から本気でエース達を叩き潰そうとする意思が感じられないっていうか…。

…あれ、これ、もしかしなくても私暇なのは??

\*\*\*

「——ギア、  
4、フォース弾む男！」

ゴイン！

ゴイン！

武装色とゴムの性質によって張り膨らんだ筋肉で、碌に地面に立つ事すら出来なくなつたルフィが目の前のドフラミンゴを見据える。

多少図体が大きくなつたからなんだ、その体ではもうこの戦闘のスピードについてこれまい。と高を括つていたドフラミンゴは、次の瞬間目の前に現れた拳によって空高く打ち上げられていた。

(速い…ツ!?)

「ゴムゴムのオオ!!」

ギリギリ…と丸太の様に太く強靱になつたルフィの黒腕が、まるでバネの様に圧縮されていく。

ゴムと覇気力で再現されたスプリング構造の腕は、一体何トンの力で押し潰されていくのかという程までに圧縮され続け、やがてその黒腕にズボツと埋まつた。

つまり、それ程までに圧縮された力が解き放たれるということは…、

「コンダガン猿王銃!!!」

「——ツ!!!?!!」

腕に埋まる程まで圧縮されたルフィの拳がドフラミンゴを捉えた。

ドフラミンゴとて弱くはない。そう何度もモロに喰らってはやらないと腕でガードをするも、そんな防御に意味などないとばかりにぶち抜かれてドレスローザの街まで吹き飛ばされる事になった。

1対1ならば自分が敗北する様な事は無いと確信していたのに、今の一撃だけでその確信に疑問が生じてしまう。

それだけの強化、威力、脅威。

ドフラミンゴの頬に冷や汗が伝った。それは今もまた、*「ゴムの弾力で空を飛ぶ」*などというふざけた芸当を見せる麦わらの小僧を見てしまったのもあるが、それだけが理由ではない。

モンキー・D・ルフィを相手にするのなら、自分にはまだ*「悪魔の實の覚醒」*という切り札で対抗出来る。

だが問題は、敵がルフィだけではない事だった。

(面倒な事になった……！*「デリンジャーは負けたのか……!」*)

視界の端に映るのは、王の台地で何やら話をしている女達。その内の1人は知らない顔だが、残りの4人は嫌でも知っている。

モネ、ベビー5、女王、そして……『超彩』。

「デリンジャーが追っていた筈の女王は今も五体満足で生きており、訳が分からない事にあの超彩までこの地に居る。

拘束もされていなのに付き添っているモノとベビー5を見るに、ドフラミンゴにとつて良い事は起きていないのは明白だった。

「何がどうなつてやがる…!!」

狂神は言っていた。

「デリンジャーを強化すれば、まず麦わらの一味に負ける事は無い」と。

「今回はお試し期間で、力を強化してやるのはデリンジャー1人。そして、おまけで国民を暴徒化してやる」とも。

だが実際はどうだ？ 負ける事は無いどころか一味の1人も撃破出来ていない。それに暴徒共はどこぞの「物好き」によって束ねられ、そこを突かれ鎮められてしまった。

狂神の後ろ盾さえ得ればどうにでもなる、と甘い考えを抱いていた訳では無い。ただ、いくら何でもこの現状はどうかしている！ とドフラミンゴは頭を抱えて大声で叫び出しそうになる。

あの女王を抱えた麦わらの一味。

グリーンビットの魔女。

先程存在を確認した革命軍のNo. 2。

何故か居る // 火拳 //。

裏切った幹部連中。

そして… 『超彩』。

(…バカげてやがる)

自分の手に負えるレベルはとづくに越えていた。ここで麦わらを倒そうとも、背後にはそれ以上の戦力が控えている。

『超彩』の立ち位置は分からないが、今も女王と無防備に話をしているのだから敵対しているのではないのだろう。つまり、居ても事態は好転しない。むしろ女王と手を組んでいるのだとすれば最悪だ。

「ゴムゴムのオオオオ!!!」

そもそも、目の前の敵を倒せるかどうかも分かつちや居ないのだが。

遠くで拳を構えるルフイを見て、ドフラミンゴは油断なく構えを取った。相手はゴム人間、離れていようとも攻撃手段は幾らでもある。

(だが、それは遠すぎる…まだその力を使いこなせていねエのか)

その距離ならば、幾ら速かろうとも拳は避けられる。見てからでも余裕だ。

そう思うが、当然隙など見せはしない。じつくりと相手の動きを見定め、最小限の動きで、確実に躲して――、

「オーバード・コングガン覇猿王銃!!!」

「グウツ?!」

ドオンツ!!!

ドフラミンゴの体が再び宙を舞う。鮮血が飛び散り、視界がチカチカと明滅する。何が起きたのか理解が出来ない。拳を圧縮し、ゴムの弾力を利用する構えまでは先程と同じ。だからドフラミンゴはそこから腕が伸びてくる物だとばかり思っていた。

だが、実際に飛んできたのは拳でも脚でも無い。

——覇気だった。

実際に拳で殴るよりも遥かに速度が出ている弾丸が、ルフィのパンチ分の威力を上乗せする形で顔面に直撃したのだ。

ドフラミンゴは知るよしもない事だが、原作のルフィにこの様な技は無い。いや、仮に似た様な技を使うとしてもまだ先であるし、この様な威力も無い。

…そう、この技はイリスの受け売りであった。

少し時間が空いていた時、ルフィは軽くイリスに「ハガン覇銃」をレクチャーして貰った。

素のイリスを大きく上回る程に馬鹿げた覇気量を持つルフィの覇銃はそれなりの威力ではあったが、実戦で投入するには心許ない、ハッキリ言って直接殴ればいいじゃんレベルだった。だが、それを持ち前の閃きでさっきの技に昇華させたのだ。



要はイリスみたいに撃つのではなく、  
 “殴り飛ばす” 感覚。これがルフィの戦闘スタ  
 イルにピッタリとハマったのだ。

ドフラミンゴはまだ覚醒を残していると考えているが、正直に言えばそれは甘い考え  
 というもの。

“オーバーロード 覇” を会得していないルフィにすら負けるのに、今回勝てる道理などどこに  
 も無いのだ。

だが、それは結果的な話。

ドフラミンゴとて、そんじよそこらの新世界レベルの海賊ではない。その実力は七武  
 海の中でも上位に入り、持ち前のカリスマでこの地位を獲得している。

戦いは、必然的に長引こうとしていた。

\*\*\*

「…ん？」

ルフィとドフラミンゴが戦い始めて数分、遠目で眺めていてもルフィが優勢だったの  
 だが、いきなり状況が反転した。

ルフィの使用していた新しい強化形態、その効果が切れたのだ。

…私と違って持ち前の等倍覇気しか使えないのに、どうしてあそこまで濃密な覇気を身に纏えるのか不思議でしょうがない。2年間ルフィが積んだ努力が目に見える様だけど、今はそうも言つてられないみたいだ。

「ごめん！モネ、ベビー5、シャルリアを頼んだ！私は向こうの応援に行かなきゃ！」  
 「…ええ、…女王…いえ、イリス、もし若様と話をする事があるならば、こう伝えておいてくれないかしら」

走り出そうとした時、モネからそう声がかかつて慌てて振り向いた。

その表情には決意が表れていて、これを無下にするのは誰であろうと出来ないと思う。

「…ん、ばつちこい」

「ありがとう…。……『嫁ぎ先が決まったのでファミリーを抜けます。今までお世話になりました』と」

「…ふ、ふふ、随分ハッキリ言っちゃうんだね、ドフラミンゴもビックリするかもよ？」  
 「ふふ、若様がなんて言っていたかくらいは後で教えなさい」

任せて、と親指を立てて、軽く手を振ってから今度こそ走り出した。

…さーて、10倍縛りのフラミンゴ討伐、いっちゃやっていくよ!!

## 192 『女好き、数の暴力』

「さよなら  
去柳薇ア!!!」

「ツ!?!」

なんか知らんけど、私が来たたら黒髪の美女にこいつ攻撃してやがった!!おのれドフラ  
ミンゴ!美女は世界の財産なんだけど!!!?!

ルフイとの戦闘で既に満身創痍なドフラミンゴではあるが、それでも今の私の不意打ちを躲すのは訳ないのか簡単に躲されてしまう。

ま、この人を守れたから良しとしよう。

「あ、アイリス…!?!」

「あれ、レベツカちゃん?」

少し離れた所にはレベツカちゃんも居る様だ。さつきはひまわり畑に居たのに、いつの間にこんな所まで来ていたのだろうか。

ロビンと叶、それに片足の人は大丈夫なのかな…?

「…ん、なんだ、イリスも来たんですか」

「あ、叶」

そこに叶まで合流してきて、ここからでもドフラミンゴの顔が顰められたのが見えた。ここからでもって言うか、私の視力ならそりゃあ見えるんだけどさ。

「お？なんだ結構先客が居るじゃねエか」

「俺らが出る幕も無さそうだな、エース」

…えつと、誰だろ？さつきエースと共闘していた人と、そのエース本人までも現れた。

エースと普通に肩並べて戦えてたくらいだから相当強いんだろう。

…というか、コレ、ドフラミンゴ詰んだよね？

「…うじゃうじゃと、何処までも目障りな連中だ…！」

「あ、そうそう、『嫁ぎ先が決まったのでファミリーを抜けます、今までお世話になりました』ってモネから伝言預かってるんだけど」

「は？ちよつと待って下さい、モネってあのモネですか…？ドフラミンゴファミリーの

!?!あの忠誠心の塊の!!?!」

私の言葉にドフラミンゴは固まり、叶まで騒がしくなった。

そうだよ？と普通に返せば叶から呆れる様な目が……って、嫁を増やしただけなんだけど…。…いやこの発言は割と屑っぽいね…。

「…そうか」

叶に反して、ドフラミンゴの反応はそれだけだった。

何も感情が動いていない訳ではなく、怒りだとか失望とかを押し殺した結果の反応。少なくとも私にはそう見えた。

「で？ドフラミンゴ、あなたはこの状況でもまだ戦う気？」

「…この状況でも？フッフッフ…女王、お前は1つ勘違いをしていないか？」

クイ、とドフラミンゴが指を動かす。それだけで鳥カゴの縮小が目に見えて早くなつた。

…この速度じゃ、5分保ちそうにないね。早くしないと被害が拡大するし、何より嫁が危ない!!

「後5分だ、俺はその時間…お前達に倒されなければいい」

「とかなんとか言つて、口元引き攣つてるよ？分かってるんでしょ、そんなの無理だつて」

私がドフラミンゴの立場でも厳しいって。

エースだけなら何とかかなりそうだけど。

「アイリス…!」

「レベツカちゃんはそつちの黒髪お姉さんと下がつててね」

かと言つて、あんまり離れ過ぎるとそれはそれで困るんだけど。

ドフラミンゴの能力…もうここまで来れば糸が関係している事は理解出来た。しか

も自分だけじゃない、周囲にまで影響を及ぼすレベルだ。

これは能力の覚醒ってやつで、2年間の修行でエースが会得したものだ。

因みに白ひげがドンドコ地震起こしてるのも、アレは覚醒しているからである。

「…まあ、関係ないか」

ドフラミンゴが生み出した糸は、その次の瞬間には炎に包まれて焼き切れていた。

糸なんだから、そりゃあエースの炎とは相性最悪だろう。焚き火の中に放り込んだ糸織物がどうなるのかなんて誰にでも分かる事だ。

「叶、あのぶろてくしよんってやつでチャチャつと終わらせられない?」

「ごめんなさい、それは出来ません、あまり強力な魔法は今では使えなくて…」

なるほど、私の真・女王化の様な能力制限にでもかかっているのかな?

じゃあ仕方ない、ここはもう単純に…!!

「物理で!ゴリ押す!!10倍灰!!」  
じゅうばいばい

ドン!と地面を踏み込んで、ドフラミンゴとの距離を一気に詰める。

このまま真正面から殴ってしまえば、後に続ける人が居なくなるから…!!

「ほいつ!」

「!!」

奴の目の前まで到達した瞬間に、サッカー選手のドリブルみたいにクルツと体を回転

させながらドフラミンゴの横を通り過ぎ、その勢いのまま脚を振り上げた。

「去鷹嫺!!」

「ぐ…ツ、ゴフ…!」

フェイントを交えた背後からの一撃がドフラミンゴを襲う。流石に今の私の攻撃程度なら見切れている様で、腕でガードはされたものの血を吐き出していた。

私の攻撃でそうなった訳では無さそうだから、ルフィとの戦闘で予想以上のダメージを負っているみたい。

こりや…ルフィが復活する前にドフラミンゴを倒しちゃうと後で機嫌が悪くなるかもしれないね。

「竜爪拳! 魔爪の竜辻!!」

「盾白糸!」

地面が糸に変化して、覚醒したドフラミンゴの能力によって巨大な盾が作られた。

「ただど残念! それは盾にはならないんだよね!

「火拳!!」

「『ファイア』!」

「ツ…! がフ…!」

エースの火拳と叶の魔法によって盾は呆気なく燃え散り、防げる筈だった金髪の人

攻撃をモロに受けてドフラミンゴはその場に膝をついた。

金髪の人の攻撃は2本の指を立てて、それを武装色でガツガチに強化し、切り裂くというモノだから威力も半端ではない。

「これで、終わらせる!!」

ドフラミンゴはかつなりタフな野郎だ。それは今の奴を見れば誰もが分かる事。……普通、あんなポロポロで意識なんて保てないからね？

だからこそ、終わらせる為に私は飛んだ。ドフラミンゴの真上へ、両の腕を10倍大きくして。

「トドメを掠め取るみたいで気は乗らないけど……!!じゅうばいばい10倍灰っ!!」

「つく!!」

「『アイス』」

指から糸を出そうとしたドフラミンゴの手が氷に包まれる。

氷を出したり炎を出したり、汎用性の鬼みみたいな能力だよね、ホント!

「……」

「……」

「去柳さよならああ!!銃乱打ガトリンク!!!」

「ツ!!?」



ドゴオン！ドゴオン！！

「防御も出来ないドフラミンゴへと、拳の雨が降り注いだ。

声を上げ、全力で乱打を続ける。

「はあああああつ！！」

いかにドフラミンゴがタフだろうとも、流星にもう限界だったのだろう。時間にしてたったの5秒程度。落ちた拳は30発程度。

遂に、鳥カゴは消え去ったのだった。

「よっし！！一丁上がりー」

腕をぐるんと回して満足気に頷く。少し離れた場所にいたレベツカちゃんへと視線を向ければ、ドフラミンゴを討った事実に関極まってか涙を流していた。

レベツカちゃんはドフラミンゴに対して恨みとかもあつただろうし、私も手助けが出来て良かった。

それに、レベツカちゃんだけじゃない。国中から歓声が湧き上がっている。

ここに居る私達を讃える声も多いが、一番はやっぱルフィに対してだ。あそこまでドフラミンゴを追い詰めたのはルフィだから当然っちゃ当然だけど。

「みんなもありがとう！多分、私一人じゃ厳しかったかも」

「いえ、被害を最小限に抑える事が出来たんです。加勢した甲斐がありました」

「エースと、そっちの人もありがとね」

そっちの人、と言うと、エースから説明が入った。

どうやら彼はルフィのもう1人の兄貴分らしい。昔に死んだと思っていたらしいのだが、革命軍に拾われて、現在ではその革命家トップでありルフィの父でもある「モンキー・D・ドラゴン」に次ぐ、革命軍のNo. 2なんだとか。普通に凄い。

「あの『四異界』の1人がエースの妹分か。だったら俺の妹でもある訳だ」

「じゃじゃ馬だが、可愛いトコもあるんだ、これが」

「誰がじゃじゃ馬だつてえ? ……おっと、海軍が近づいて来たみたい。そろそろ離れるよ」

これは冗談抜きでルフィも含めた4人兄弟という事になってしまわないだろうか。 ……嫌って訳じゃ無いんだけど、そこつて私が入り込める隙間あるの? 無さそうに思えるんだけどな。

それに私はどうせ入り込むなら美女の谷間が良い。うん、そっちの方が私らしいし。

今すぐこの場を離れる前に、まずはレベツカちゃんの近くに寄った。隣に居るナイスバディ黒髪美女さんも気になるけど、私はレベツカちゃんに言わなきゃならない事があるのだ。

「レベツカちゃん、大会中にも何度か言ったけど ……私の嫁になってくれない?」

「え?」

「……女王イリス。悪いけど、レベツカはこの国の王女。確かに、国を救ってくれたあなたならその「報酬」も悪くはないと思うわ。だけど、この国は度重なる障害で疲弊している。王女を差し出す事は出来ないのよ」

レベツカちゃんに代わって隣の美女がそう返してきた。レベツカちゃんが小声で「ヴィオラさん」と眩く。

「あなた、ヴィオラって言うの?」

「ええ。……それで、分かってくれたかしら? それ以外なら、あなたが望む事は何でも叶えるわ。国を救ってくれた英雄に対して申し訳ないとは思うけど……」

「うーん……じゃあ、あなたも一緒に嫁になつてよ」

「ちゃんと話聞いていたのかしら!」

レベツカちゃんの肩を抱く様にして、ヴィオラは私から一歩後ずさった。ふっふっふ……疲弊しきつた国だろうとなんだろうと関係ないね! 私はレベツカちゃんが欲しいんだ! それに、私だつてこの国を潰そうとは思っちゃいない。

「レベツカちゃんとあなたを嫁に貰ったとして、別に今すぐ私と行動を共にしてもらいたい訳じゃない。落ち着くまではこの国で復興に力を注いでもらいたいし、それが終わってもこの国で居たいならそうしてもらっても構わない。会いたい時には私から会

いにくるし、ね?」

「アイリス……。だけど私、まだそういう事、考えた事もなくって……」

「うん、答えだつてそんなに急いで出さなくても良い。そうだね……。この国を出る前にもう一度だけ会いにくるよ。その時にまた、返事を聞かせてくれない?」

まあ、その時は全力で口説き落とさせて頂きますけど??

そりゃあ私だつて、今この状況で強引に口説くのはちよつと空氣的にどうかと思つてるよ? だからこれくらいで一旦引くんだけどさ! 一旦ね! ここ大事!

「……うん、分かった」

真剣に頷くレベツカちゃんを見て、私も頷いて返した。

いきなりこんな事聞いて、それを真剣に考えてくれるっていうんだから彼女はやっぱり良い人だ。

「……なんですか、今の強引な求愛は」

「私は悪くないよ? レベツカちゃんが可愛いのが悪い。世の女性達が魅力的なのが悪い」

「何言ってるんですか……」

「あ、王華が『叶も魅力的な女性だよ』だつて」

「んなつ……!」

お、顔を真っ赤にさせて口をパクパクさせてる叶のレアな表情ゲットだぜ。なんちやつて。

王華が自由の身になれば、叶や沙彩、それに今はどこに居るのか分からない美咲も含めて嫁にしてそうだよ。むしろ彼女達の幸せの為にそうなって欲しいと思う。

ちよつとゆつくりし過ぎたかも。そろそろ移動しないと、ドフラミンゴを捕らえに来たのだろう海軍と鉢合わせちやうと面倒な事になるだろうし。

## 193 『女好き、揃う三……四兄弟』

ドレスローザ、東の町『カルタの丘』。

そんな丘の、見渡す限りの美しい花々に囲まれた家の中に私達は居た。

ちなみに、ここはキュロスの家らしい。

ああ、キュロスはレベツカちゃんのお父様だ。また私にお父様が増えるね！

現在は夜も更け、海軍の目から逃れる為にここに集まって疲れを取っている。

私達一味以外にも、この家の主であるキュロスは勿論、ローにベラミー、シャルリア、モネ、ベビー5、そしてサボ、エースまで居た。流星に狭く感じる。

サボとエースが居るからか、ルフイは疲れを堪えて寝ずに耐えていた。といつても、何度か船を漕いでいる為起きていられるのも時間の問題だろうけど。ローとベラミー、キュロスとウソツプは既に寝ている。

「サボが生きていた理由は分かったし、素直に嬉しい。これでまた兄弟3人……いや、今は4人だな。集まれるって訳だ」

「エースさあ、その4人目つてももしかしなくても私だよな？ 私の事は気にしなくていいから、せっかくの再会なんだし3人で仲良くしてよ」

「女王……いや、イリス、そうはいかねエ。俺はお前に感謝したいんだ。エースが今生きてここに居るのは、間違いなくイリスのお陰だからな」

そんな感じの好意を向けられるのは、なんか照れる。

エースを助けたのは、単に私が死なせたくなかつたからってだけだし、そもそも、私一人の力でどうにかなつた訳でも無い。

「ルフィに3人目の兄弟がいたのにも驚いたが……俺としてはそつちの女も気になる」

「ああ、シャルリアね。もう私の嫁だから、天竜人だからって攻撃するならブツ飛ばすよ？」

「そもそも『天竜人だから攻撃する』って発想に常人は辿り着かねエよ」

サボの呆れた様な、だけど私に希望を見る様な、うーん、なんとも言えない視線がむず痒い。

そういえば彼は革命軍のN.O. 2であるらしいから、天竜人をモノともしない私の存在って結構大きいのかもね。

「改めまして、今は、ただのシャルリアです。家名は捨て、2年間各地を転々としておりました」

「花嫁修行みたいなものだよね？」

「……そう、なります、ね。結果的には、ですが」

少し頬を染めるシャルリアを見て微笑む。なんとも幸せそうな顔だ。私の嫁になれたのがそんなにも嬉しいという事なのか。……可愛いなあシャルリア!

「キャハ、なら、これからよろしくねシャルリア。船には乗るのかしら?それと、そつちのお二人も」

「あー……シャルリアが着いてきていいのかどうかはルフィに聞くよ。船長はルフィなんだし、私の独断では決められないから」

「いいぞ」

「いいつてさ」

「軽いな……」

ルフィのいつも通りの軽さにサボが苦笑いを溢した。

「でも、モネとベビー5には残ってもらおうよ」

「あら、そうなの?」

2人も連れて行くかと思っていたのか、ロビンが意外そうな声を出した。

まあ、私としてはこの地に残る理由がないのなら一緒に来てもらった方が嬉しいんだけど……。

「2人には、この国の王直属近衛兵になって貰うつもり」

「おいおい、大丈夫なのかよ。一応そいつらもドフラミンゴの手下だったんじゃないエの



か？間違いなく反感を買うと思うが……」

「それに、普通なら敵だったそいつらをこの国の王が迎えるとは思えぬエ」

「フランキーもゾロも分かってないね、むしろ、だから近衛兵なんだよ」

この国の王を説得出来るのかは、確かにまだ分かんない。だけどモネとベビー5が己の中の罪と向き合うにはその立場が1番都合が良いんだ。

きつと最初は周りの人達に冷たくされるだろう。絶対に歓迎されない。危険もあると思う。

でも、それは彼女達が乗り越えるべき壁だ。きつとこのまま私が連れて行ってしまえば、2人はずっと罪悪感に苛まれるだろうからね。私も心を鬼にする必要があるという訳だ。……うん、鬼になれ私！迷ってるけど、鬼になれー！

だけど、結局シユガーを捕まえられなかったのは残念だった。時間も無かったし、きつと今頃他の幹部達やドフラミンゴと同じく海兵に捕まってるんじゃないだろうか。

……む、そう考えたら、今後2人に近衛兵になってもらうとしても、海兵に見つかったら結局監獄送りなのでは？

でもあれか、手配書は出来てない筈だから大丈夫なのかな？

「そつちの事情は分かった。それで、そいつが同じ船に乗るっていうのなら、何が出来るのかくらいは知っておきてエな」

「その……申し訳ありませんが、私は戦闘能力はほぼありませんわ。出来る事といえば、一通りの家事や、釣り、簡単な狩りなど。あとは……記憶力には自信があります」

「天竜人が釣りに狩りつて、本当なのか?」

フランキーの疑問にシャルリアは軽く頭を下げて答える。

「この2年間、金銭が心許ない中で生きていく為に必要な事でしたので」

「へえ、経験のない事を、誰の手も借りずにこなすのは簡単な事じゃないわ。要領が良いのね」

「それに、戦闘能力がないのなら培えば良いんだよ!大丈夫大丈夫、優しく教えるからねっ、ゾロ」

「はア……別に構わねエが、訓練中に傷をつけても怒るんじゃねエぞ」

「え?それは無理でしょ」

「ふざけんてめエ!どうやって鍛えるつもりだ!!」

「優しく!!楽しく!!安全に!!」

「鍛える気あるのか!!」

……と、言うのはまあ冗談で、多少怪我をするくらいは仕方がないだろう。私達の一味に加入してもらう以上は、当然危険が伴う。

私が守れば良いのだけど、やっぱり自衛能力があるのとないのでは全然違うし。

私達って、料理人とか船医とか航海士とか船大工とか、更に音楽家に運び屋、果ては考古学者までそつなく戦闘をこなしてしまおうトンデモ海賊団だ。うん、これは間違いない必要だね、戦闘能力。

「それで、サボとエースはどうするの？私達と一緒に行動するとか？」

「ハハッ、それも悪くねエかもな。だが受け取るのは気持ちだけだ。俺には俺の冒険があるもんで」

「俺もそろそろ帰ろうと思ってる。「CPO」がここへ引き返して来てるからな。狙いは間違いなく俺達革命軍だろう。お前達も可能な限り早く出航しろ」

「しーびーぜろ……政府の組織か。良かったら私がブツ潰そうか？」

「それが冗談じゃねエってのは段々分かって来たな。でも止めておいた方がいい。奴らを潰しても意味はねエ、むしろ、余計に刺激を与えかねエからな」

ふーん、と適当に言葉を流す。その奴らってのが、サボ達革命軍が潰したいものなんだろう。

ま、手を貸すのは助けを求められてからでいいか。考えなしに出しやばつても得は無いしね。美女が居るなら行くけども。

「じゃ、帰る。これ一応ルフィの「ビブルカード」。作つといた」

「おお、ビブルカードってそんな簡単に作れるもんなんだ」

渡された紙を受け取れば、サボは端の方を破つて懐に仕舞った。欠片は貰うつて事だね。

ビブルカードつて何を素材にするんだっけ？爪とかだったっけな。

「ちなみに、イリスのも作つてる」

「ええ？どうやって……」

「材料は修行中にとつといた」

何やってんのこの人。まあ、貰うけどさ、一応。

私とルフィのビブルカードの欠片をエースとサボは受け取り、モネとベビー5は私のだけを破っていく。

お、そうか。ビブルカードがあつたらとりあえず嫁に渡しておけばいいんだ。一緒にいるナミさん達はいいとして、今度会つたらたしぎちゃんにも渡したいな。

それに、今まで嫁になつてくれた人達に渡したい。ていうか、ワンピース見つけたらどこかの無人島開拓してみんなで住んじやうか。うん、それがいいね。1人で勝手に決めて、みんなの承諾を得ないのもなかなか乙だよ!!……うん、ハーレム女王とは傍若無人の意もあるから仕方ない、という事にしよう。

「ほんじゃ、またな。ルフィにや手焼くだろうが、よろしく頼むよ」

「ルフィ、イリス、困つたらいつでも呼べよ」

「そつちこそ」

「本当に困った時はお互い様だ！海賊は自由だからな！しししっ！」

自由だから、別の海賊団だろうと助けたいと思つたら助ける。ルフィが目指す海賊王とは、この海で一番自由な海賊だからね。やりたい事をやりたい放題するって意味では、ルフィはもう海賊王かもしれないけど。

そうして、エースとサボは家を出て行つた。まだまだルフィと積もる話とかあるだろうに、立場とは面倒なものだ。

そういえばエース、今回は次に会う時はくつて言わなかつたよね。はは……変なところで学んでるみたい。

\*\*\*

翌日、私は朝早くから外に出て来ていた。

海軍に見つかりと面倒だから、こつそりと目的地を目指す。

「目的地は大体どこからでも見えるんだけど……さて、どうやって侵入したものか」

目的地とは、ずばりこの国の王宮だ。理由は、レベツカちゃんの嫁の件とか、モネヤベビー5の件。つまり王様に用があつた。

この国の英雄的立場にいる私達だけど、立場は海賊。堂々と正面から入場出来る訳がないからどうにかして侵入するしかないのだ。

といつても、ドフラミンゴのせいで見張りの兵士達の数はかなり少ない。なんとかタイミングさえ見極めれば侵入自体は出来そうだ。

「こつそりこつそりと……」

「何をしているのかしら、女王さま?」

「うひい!」

突然真横から声をかけられて飛び跳ねてしまった。ま、まだ侵入してないけど!まだ何もしてないけど!?

「つて、あなたはヴィオラ!」

「おはようございます。王宮に用事でも?」

「あ、あはは……ちよつとね、ちよつと」

「……はあ。いいわ、案内しましょう。今更海賊だからとあなたを拒んだりほしくないわよ」

「!あ、ありがとう!」

ヴィオラはそう言つてこつそり裏から私を王宮内に招いてくれた。懸念していた侵入が予期せぬ形で成功してぐつと拳を握る。

あとは王様に会うだけだね。

「それにしてもヴィオラ、良く私を見つけられたね、気配は消してただけだなあ」

「私も能力者なのよ。例えあなたであろうとこの“目”からは逃げられないわよ？それで、要件は？」

「ああ、王様に会わせてもらおうかと」

「へえ、どうして？」

「ここで雇ってもらいたい2人の話と、レベツカちゃんを嫁にもらう事についてちよつと、ね」

「……雇う？」

今更レベツカちゃんの件については突っ込んでこなかったけど、ヴィオラにとっては初耳の言葉に首を傾げていた。

「あれ、アイリス？」

「お！レベツカちゃん！」

と、そこに丁度レベツカちゃんが姿を見せた。

うわ、ドレス着たレベツカちゃん可愛い。いや、ビキニアーマーも可愛かったけどそうじゃなく。うん、可愛い。

「レベツカちゃんも来たし、ちよつくら王様のところまで案内してよ」

「そうは言っても、恩人とはいえ易々と会わせていい方でも」

「アイリス、おじ……リク王様に会いたいの？良かったら案内するわ」

「良いの!?!ありがとうレベツカちゃん！」

レベツカちゃんに遠慮なく飛び付いて、その綺麗なドレスに皺を作ってやった。

ヴィオラは額に手を当ててため息を吐いている。常識人ボジは大変だよね……私は振り回す方だから、とりあえず心の中でごめんなさいと謝っておく事にしよう。



## 194 『女好き、妻と娘の気持ち』

その後のリク王との交渉は、特筆する事も無い程にはスムーズに流れて行った。というか、交渉にもならなかったというか。

リク王様的には、モネやベビー5を迎え入れるのはどこか思う所があるという。当然だ、むしろ何も思わないのなら王様失格だろう。

だけど、彼女達は私の嫁でもある。この疲弊し切った国で、更に一騎当千の女王である私の怒りを買う訳にはいかず、この提案は飲むしかないのだとか。

これじゃあ脅迫だよねえとは思うけど、上手いこと話が進んだからヨシとしよう。

そんなこんなで数日が経ち、ルフイ達の傷も癒えたという事で私達はそろそろ“ゾウ”を目指そうという事になった。

余談だけど、既にシャルリア強化特訓はスタートしている。現在は基礎の体力作り、私やミキータとの追いかっこだ。

2年間各地を渡り歩いて来ただけあって、シャルリアはそれなりに体力がある。それでもまだまだ足りないからこうして特訓してるんだけど。

その他にも、どうやら剣術の才があるとかでゾロから色々と学んでいるようだ。ゾロも人に教えた事は無かつたらしく、これはこれで良い修行だとか言っていた。

あと気になるのは街の噂話だ。レベッカちゃんのお父親はここに居るキュロスの筈なのに、巷では隣国の王子がレベッカちゃんのお母様と駆け落ちしたとか何とも言えない噂が流れていた。

レベッカちゃんのお母様、スカレットは、あの時のトレーボルの言葉を信じるなら既に亡くなっている。だから、この噂がどうして広まったのかは謎だった。だって、火のない所に煙は立たないのだから。

「その噂は私が流したんだ……」

「え?」

なんか変だよ、とミキータ達と話してれば、唐突にキュロスがそんな事を言い出した。

「私がレベッカの父親だと知る者は限られている。ごく一部の王族と、ドンキホーテファミリー。そして君達だ。だから知れ渡る前に噂を流した」

「なんで?」

食い気味に質問をする。レベッカちゃんの事情はある程度知っていても、キュロスの事情までは知らないんだ、私は。

その辺はミキータの方が詳しそうだ。

「私には『前科』がある……育ちも劣悪だ。本来、王族と結ばれていい身分では無かつたのつだぶア!？」

「オイリス! 手を出すのが早エって!!」

「離してウソツプ、離さなくても止めないけど」

「押さえられてんだから止めろよ!？」

思わずキュロスを殴った私の肩をウソツプが掴む。

ここは変わらぬキュロスの家で、ベラミーやローも既に目を覚ましている。エース達に代わって現在は錦えもんと、助け出した侍であるカン十郎もここに居た。

「その事、レベツカは知ってるの?」

「ぐ……、手紙が、渡っている筈だ。私の人生の全てを正直に綴った。彼女には軽蔑されるかも知れないが……レベツカはまだ子供だ。一時の激情で将来の幸せを逃して欲しくないがア!？」

「いでででででッ!! 無理矢理殴るなお前エ!!」

ウソツプに掴まれていようが関係なく殴り飛ばした。殴らないといけないと思つた。この人には、自分が何を口走つたのかを理解してもらわないといけない。

「それって、つまりバカにしてるって事?」

「……そうではない。ただ、私のそばにいても幸せにはなれないと……」

ああ、ダメだ。なんか無性に腹が立つ。この人は何にも分かってない!!先を見据えすぎてるし、結局は独りよがりの自己満足だ!!

「レベツカちゃんもそうだけど、あなたの嫁さんをよくもそこまでコケに出来るね」

「……何?」

「隣国の王子と、駆け落ち?ふざけてるの?レベツカちゃんのお母様が愛したのはあなただつてのに、そのあなたがっ!どこの馬の骨とも知らない奴と!!あいつは遠くの地へランデブーしましたつて!!あなたはそんな噂を流したのかっ!!」

「っ……」

キュロスが目を見開いて私を見据える。みんなも空気を読んでか、ウソツプさえも静かになった。

「自分の嫁でしょ!!そんな人との娘でしょ!!あなただけは逃げちゃダメって思わないの!?!天国でスカーレットさんも泣いてるだろうね!!なんたつて自分の夫に架空の男をあてがわれてるんだからさ!!」

「っ私は!そんなつもりでは……!」

「……そんなつもりがなくなつたつて、あなたがしたのはそういう事だよ。娘の為じゃない、娘と向き合えない自分自身の為、あなたはスカーレットさんの想いを踏み躪つた。」

……レベツカちゃん、あなたの事を思い出した時、泣いてたよ。私達がお父さんに会う為の手伝いをするのを恩だと言って、その恩を返せるモノがないって嬉しそうにさ」

「!!……っ」

グ、とキユロスは拳を握り締める。

弱って弱って、自分がどうしようもなく情けなくて、愛する人からも逃げてしまう。

その気持ちは、正直覚えがあった。だからこそ見逃せない。お節介でもなんでもいい。殴ってでも考えを改めさせてやるのだ。

「罪を犯そうが、育ちが悪かろうが、あなたはスカーレットさんが愛した人で、レベツカちゃんが尊敬する父だよ」

「……父、か。こんな私でも、あの子の親を名乗れるのか……う」

「名乗る必要なんてないよ、レベツカちゃんがあなたを父親だと認めているんだから、あなたはレベツカちゃんの親なんだ。親子関係ってさ、誰かに認められて成り立つものじゃないでしょ？」

「そう、か。いや……そうだな、その通りだ。私は逃げていただけかも知れない……。過去と向き合えず、妻にも顔向け出来ない事をしてしまった」

ネガティブな発言だけど、表情はどこか吹っ切れたみたいに穏やかだった。これならもう大丈夫だろう。

言いたい事を言つてスツキリしたので、晴れやかな気持ちでソファに腰掛ける。やっぱり自分を抑えるなんて私には出来ないって事だね、自重？何それ？

と、そこへ呆れ顔の叶が姿を見せた。

「話があつて来てみれば、どうして原作を知らない筈のあなたがキュロスを立ち直らせているのですか。本当に、生粋の人たらしですね、あなたは」

「どゆこと？原作知つてるとか関係くない？」

「ぐおおお!!!む、麦わらの一味が7人も居られるだべ〜ツ!!」

叶のよく分かんない発言に戸惑つてると、その後ろからバルトロメオが出てきて顔を腕で覆つた。何してんの。

「もしいづか麦わらの一味オールスターズに逢つちまつた日にや、オレア失明しちまうベコレ〜ツ!!」

「お、おう……バルトロメオ、だよね？なんか濃くない？あなた」

「キヤハツ、イリスちゃんの濃すぎる可愛さには負けてるわっ!」

「どうしてそこで張り合つちやつたの!？」

むぎゆ、と後ろから私を抱きしめてミキータがそう言った。椅子に座ってるから、立ってるミキータに抱き締められたらぽよんが丁度頭に当たって大変素晴らしいですはい。

「い、イリス先輩が、オレの名前を……っ！その上奥様であるミキータ先輩との甘い会話をこの目で見られる日が来るなんて……!!」

「さっさと要件言えよ!!」

いい加減我慢出来なくなつたゾロが、一人涙を流すバルトロメオにそう突っ込んだ。

コロシウムでは大胆不敵ってイメージだったんだけど、既にそんな印象は忘却の彼方である。

「ハッ、そうだべ！海軍のテントに動きが!!ボチボチこも危ねエベ!!大参謀おつる中将と、前元帥センゴクが到着した!!」

「おつる?センゴク?」

誰だっけ。

えーっと、おつるって人は分かんないけど、センゴクはそういえば2年前の戦争で見た気がする。

前元帥……ああ、あれだ、青キジが従つてた人だ。

だとすればかなりの大物がこの地にやって来たという事だね。

「だったら、その2人は私が相手しようか?」

「お前が行くなら俺も行く。獲物の独り占めはさせねエよ」

「お?大丈夫なの?私について来れるかな?」

「てめエ本当に叩つ斬るぞ」

なんてゾロと遊んでると、キユロスの電伝虫に連絡が入った。相手はレオという小人族らしい。

どうやら、私の知らない所でみんな小人族との交流を育んでいたようだ。ちなみに叶は結構前から知り合いだったみたいだけど……何故？

それで要件だけど、この地に留まっていた海軍が動き出したとの事。目的は間違いない。私達海賊の捕縛だろうけど、何で今更なんだろ？捕まえるなら一番消耗の激しかった。決着当日の夜がベストだっただろうに。

それはともかく、さてどうするか。別に私が全員相手してもいいけど、そこまで大規模ともなると国に損害を与え過ぎてしまうかもしれない。ただでさえ今回の騒動でボロボロになっているというのに、更に私が暴れたとなると踏んだり蹴ったり所ではないだろう。

「この島を出るなら、船はどうする？先にナミさん達を行かせてるよね？」

「ギャー！そうだったア！船どうすんだよオ〜〜っ!」

サニー号は先行してゾウを目標している筈。最悪の場合……本当に海軍とどんぱちやり合う必要もあるのか……!

それに、まだモネとベビー5を王宮まで送り届けられてない。こうなってしまうては



しようがないかもしれないけど、なんだかんだで強行突破になりそうな予感がした。

「船ならあるべ！真つ直ぐ東の港に走つてけろ!!あんたたづがいづでもこの国から脱出出来る様に、既に同志たづがずっと要所に待機してんだべ！」

「へえ！やるじゃんバルトロメオ！」

「そ、そんな、恐れ多いべ〜っ!!」

うんうん、やっぱり敬われるのは悪くない。少し偉そうになつてしまひそうだ。

だから、そんな彼には申し訳ないんだけど……。

「ごめん、私ちよつと別行動！すぐに追いつくから先行つてて！」

「えエ!!?」

「何を言つている、そんな時間など……」

「ええ、気を付けて、イリス」

驚くバルトロメオとキュロスを通してロビンがそう言つてくれた。

理解ある嫁でホント助かるよ。

けど、急がなきゃいけないのは事実なので、まずは女王化を使用した。2年前だところんなに簡単に使えはしなかつた。でもまだ奥の手が残されてる現在なら、こういった安易な使用も悪くない。

「行くよ、掴まって2人とも！」

「っ、え、ええー！」

「きゃっ」

両脇にモネとベビー5を抱えて家を飛び出す。2人を送り届けなくちゃ、私はこの地を出発出来ないし、しない。だからこれは最優先事項なのだ。

それにレベッカちゃんもこの家まで連れてきたいから、往復する必要があるそうだ。

「舌を噛まない様にしっかりと口閉じてねー！100倍で行くよおー！」

速さだけね!!

よし、このまま目指せ王宮、攫えレベッカちゃん！つてね。

## 195 『女好き、信頼を得るといふ贖い』

「待ってください」

「はえ？」

王宮へ向かおうとした私を叶が呼び止める。今はかなり急いでいるから、叶もそれなりの理由があつて呼び止めたのだろうけど、なんだろう。

「王宮へ向かうのならば、私が案内します。こちらへ」

叶の手に杖が生み出され、それでカツンと地面を叩けば、叶の周りの地面に直径2メートル程度の魔法陣が浮かび上がる。

……なんか読めた気がするけど、まさかそんな事まで出来るわけないよねー、と思いつながらも叶に促されるままモネとベビー5を連れて魔法陣に入った。

「行きますよ」

「う」

シユンツ。

「ん。……うわあ、予想はしてたけど、マジですか……」

「え？え……？」

今、私達の目の前にはレベツカが居た。というか、私達がここまで『転移』して来たのだ。

魔女……魔女かあ、いやあ、定番とはいえテレポートの的なアレまで出来ちゃうんですか、しかも人を連れて。

「これ使えばルフィ達ももうちよつと安全に東の港まで行けたんじゃない？」

『テレポート』は同時転移人数が4名までなんです。あの人数を纏めて運ぶ事は出来ません。それに、回数制限もありますので」

なるほど、色々と縛られてるって訳だ。

……それにしたってとんでもない性能の技、いや、魔法だけだね。

「あ、アイリス？え、今どうやって……」

「あはは、人間やめてる知り合いがちよちよいつてね」

「あのですね、その言葉はあなたにだけは言われたくないのですが」

叶に続いてモネとベビー5もうんうんと頷く。自覚はあるから変に反論しないでおう……。

「お父さんから手紙はもらった？」

「!……うん。……お父さん、もう私と暮らしたくないのかな……」

「大丈夫、その事なら話つけて来たよ。後はレベツカちゃんが本心を伝えるだけで良い。だからまずは会おう、会って話をしよう!あと嫁になって!!」

ぐいっとレベツカちゃんの腕を引つ張る私に、周りに数10人と控える侍女達があたふたし始めた。

今や(といつか前からなんだっけ?)レベツカちゃんはこの国の王女だ。気軽にこういう事をするのは良くないのかもしれないけど、嫁になるんだから別にいいよね。

「レベツカ!何かあったの!?!……って、あなたは女王!?!」

とそこに、勢いよく扉を開けてヴィオラが登場した。うーん、やっぱり彼女も美しい。「ちよつとレベツカちゃん貰ってくね。あと、こつちの2人を今日からよろしくお願ひします」

「こつちの2人……?……ツ、あなた……モネ……ツ!!」

「……久し振りですね、ヴィオラおう……ヴィオラ様」

私の手で2人を示せば、知り合いだったのかヴィオラは分かりやすく表情を怒りで染めて、モネは気まずそうに視線を逸らした。

うん、こういう事もあるだろうね。だからこそ乗り越えてもらわないといけない。これこそが、彼女達に与えられる罰であり試練なのだから。

「この2人が今日からここでお世話になるのはヴィオラも知ってたよね。改めてよろしくお願いします」

「……それは、聞いていたけど、まさかモネが居るなんて」

「事情も知らない私が勝手に話を進めちゃって申し訳ないとは思ってる。でも、受け入れてほしい」

「わ、私からもお願いします、ヴィオラさん！」

お、まさかのレベッカちゃんからの援護射撃だ。

それでもヴィオラは眉を寄せたままだったが、すぐに考えは纏まったのかモネをジッと見据えた。

「この国を救ってくれた恩人の頼みだもの、無下には出来ないわ。けど、条件は付けさせてくれないかしら？」

「ありがとう！それで、条件って？」

「まず1つ目だけど、モネには海楼石の手錠を付けてもらおうわ。そちらの女性も能力者なのなら同様にね」

ふむふむ、それはまあ、当然の処置だよな。信用できない自然系ロキアの人間を雇うのは無理だつて事だ。そんなの誰でもどこでも同じである。

「そして2つ目は……、もし、少しでも彼女達に怪しい動きが見られた場合は……死んで

もらう」

「うん、分かった。じゃあそれでよろしく!」

「……えっ、い、いいの? そんなに軽くて大丈夫かしら!」

正直、やった事だけ見ればモネもベビー5も即インペルダウン行き確定だ。条件付きとはいえ受け入れてくれるだけでも、ドレスローザの王族は心優しい。

それにこの条件は2人には枷とならないだろう。既にこの国に害を及ぼそうとはしていないし、ドフラミンゴの洗脳じみた支配からは抜け出している。

七武海であるドフラミンゴ軍の幹部だったモネとベビー5には手配書が無いから、海軍側にも顔は割れてない筈だ。

「モネ、ベビー5、頑張つてね」

「ええ、……ヴィオラ様、もうあなた様方には嘘を付かないと誓います」

「……はあ。まずはその言葉が信用するに値するという事を行動で示して貰うわ。昔程甘くはないわよ、びしばし働いて貰うから」

ヴィオラや王からの信頼を得るのは彼女達の途方もない努力が必要になるだろうけど、こうして受け入れてくれたんだから、それも時間の問題だと思う。

さて、私はレベツカちゃんを頂いていきますか。

「という訳で、後はよろしく! またね、モネ、ベビー5、あとヴィオラも! ……叶、お願い

！」

「行きます。『テレポート』」

そして私は慌てるヴィオラに手を振って再びキュロスの家前まで転移してきた。

うん、2回目だけど改めて思う。叶の能力便利過ぎない？

「さ、レベツカちゃん、中でお父さんが待つてるよ」

「う、うん！」

軽く背中を叩いて送り出す。レベツカちゃんの表情からは、少しの緊張と多くの期待がバツチリ見て取れた。

「あ、アイリスっ！私、本当にあなたに感謝してるのっ！約束通りドフラミンゴを倒してくれて……それに、こうしてお父さんとも……っ！」

「私だけの力じゃないけどね。でも、ありがとう、レベツカちゃん」

「ううん、ありがとうは私の方……だから、その……！」

「ん？」

「私、なるわ！アイリスのお嫁さんに！ううん、なりたいのっ……ダメ、かな？」

そう言つて、恥ずかしそうに俯くレベツカちゃん。申し訳ないけど、俯いたつて身長のせいで赤くなつてる顔は隠せていない。

うん……なんていうか、正直今回はもう厳しいかなつて思つてたんだよね。また今度



この国に来た時に全力で求めてやるーとかなんとか考えていたっていうか……つまり何が言いたいかと言うとですね、

「レベツカちゃん、ちよつと」

「えっ?……んっ!」

腕を引つ張つて強引に唇を奪つた。背伸びしたつて届かない私のいつものパターンだ。

キス自体は短く終わり、最後に軽く唇を舐めて腕を離す。

「私から嫁になって欲しいって言っておいて、ダメなんて言う訳ないでしょ? ありがとう、レベツカちゃん!」

「アイリス……!」

「……………私も居るんですけど」

「え? 知ってるよ?」

「知ってるのに目の前で見せつけられたんですか!? 私は!!」

叶には申し訳ないけど、レベツカちゃんが嫁になつてくれたのが嬉しかったんだから仕方ないよね!

名残惜しいけど、あんまりキュロスを待たせるのも悪いし、手を振つてレベツカちゃんを見送る。

私もついていって娘さんを下さいな挨拶をしたい所だけど、流石にそれくらい空気が読めますとも。

「それじゃあ叶、みんなと合流しよう！テレポートよろしく！」

「1日にテレポートを使用出来る回数は2回までです。大抵は行き帰りで終わりますよ」

「あ、はい」

回数の制限って、そんなに厳しいんだね……。

\*\*\*

結局、全力で走ってみんなに追いつく事を提案してそれに落ち着いた。

叶は私の様な速度は出ないとの事で、せっかくだからと王華を呼んで彼女に叶を任せる事にした。

王華も叶も幸せそうだから、私のした事は間違っつてなさそうだ。

「つて、うお！なんか凄い事になってない!？」

「これは……！海軍の大将、藤虎の能力です！ズシズシの実の重力人間で、隕石を降らせる事も可能です……あ、隕石なら私も降らせる事は可能ですが」

「どうなってるのウイザウイザ……!」

まあ、異界の実が頭おかしい性能なのは今に始まった事じゃない。深く考えないでこう。それより今はこの「空」が問題だ。

ドンキホーテファミリーとの戦闘の跡に残された沢山の瓦礫、それらが全て上空へと舞い上がり、青空を覆い尽くしている。天候は瓦礫つて所かな。

その藤虎つて海軍大將がこれを引き起こしているのなら、ただの瓦礫撤去つて訳でもないだろう。確実に私達を狙つた攻撃だ。こんなもん落とされちや面倒過ぎるから、どうにかしたいんだけど……。

「真・女王化を使えば瓦礫を吹き飛ばす事は出来るけど、それだけの威力を放つとなると余波がとんでもない事になる。なんとか周りへの被害を最小限に抑えられないものかな?」

「アレはスルーで良いです、気にしても無駄でしょう、どうせ落ちてきません」

「えっ、あれが!?!」

「理由なら後で分かりますから、まずは合流を急ぎましょう!」

んん? 良く分かんないけど、落ちてこないならいつか! 叶は原作知識がある訳だし、信用しても大丈夫だろう。

「行くよ!」

「うん！叶、しつかり掴まってるね！」

「は、はい！」

私達は全力で東の港へ走り出し、空の瓦礫は意識の外に追いやった。

目的地へ近づけば近づく程海兵も増えていく。一々攻撃してはキリかないので避けて通っているが、こうも数が多いとそれはそれで面倒だった。

「ちよつと眠つてて貰おうかな！フツ！」

周囲へ向けて霸王色の覇気を放ち、海兵達を昏倒させていく。少し手荒だけどそこは大目に見て欲しい。怪我させてないだけマシだ。

「見えた！東の港!!……けど、あれなんだろう？」

てつきりそこに停めてある船に乗り込むのかと思っていたけど、どうやらそうではないらしい。

見た所、沢山の船が霧で見えないくらい遠い沖の方まで連なっていて、その横に橋が浮かべられている様だった。あの橋で海の上を移動しろって事だね！そりや確かに、こんな港に出港用の船なんか置いとけないか、いつ沈められるか分かつたもんじやないもんね。

「ルファイ達はもう向こうまで行ったのかな！」

「うん、藤虎がそこに居て、民達がこっちに走ってきてるからね！それより叶、あなたも

一緒に連れて行って大丈夫なの？」

「大丈夫です。王華に会えたのなら、私がこの地に残る理由はありません。小人族との別れも済ませてあります」

そっか、と王華が言うと同時に、私達は宙を蹴って海の上を駆ける。用意されていた橋は今の私達を通つたら衝撃で壊してしまふかもしれないから、という判断だ。

ちらりと『藤虎』と呼ばれた大将を横目で見る。……盲目か、あれでよく海軍大将まで登り詰めたもんだよ。

そうして少し宙を駆ければ、視界の先に大きな海賊船が見えてきた。これだけ離れても依然として空には瓦礫が舞っているが、確かに叶の言う通り落ちてくる気配は無く、藤虎の気配を探ればその近くに沢山の民の気配もした。

なるほど、港にドレスローザの民が集まるから瓦礫を降らせないのか。

「イリスちゃん！こっちよー！」

舷から軽く身を乗り出して手を振るミキータに大きく振り返し、私達はその巨大船に乗り込んだ。おお、なんか分かんないけど沢山乗ってるね。コロシアムで見た顔が多い、かな？

しかも、なんか変な空気だった。なんか参加がどうか言つて……え、参加じゃなくて傘下の方なのこれ??え?傘下??

# 196 『女好き、傘下と酒と怪物の宴』

状況を整理しよう。

どうやら私達の一味の傘下を希望している集団が沢山居るらしい。終わり。

「……どゆこと？」

「分かんねエ。なんかコイツらが急に言い出してよ〜」

凄いいヤそうな顔をしたルフィが私の隣に立った。お陰で傘下志望の人達の視線が私に集まってくる。

「ルフィはイヤなの？」

「イヤってより、窮屈！おれは海賊王になりてエんだ、偉くなりてエ訳じゃねエ！」

「そつか。じゃああなた達も諦めなよ、船長がイヤって言ってるんだから私達はそれに従うからね？」

「えエ!?!」

そうは言ったけど……代表として前に出てきている人達はみんな強そうなオーラ放ってるんだよね。

傘下っていうのが無理でも、どうにかして繋がりを持つておきたい。今んとこ男しか

見えないけど、知り合いが多くなれば美女との出会いも必然的に多くなる筈！  
で、肝心の志望者達の詳細を聞いてみた。

まず、「美しき海賊団」75名。代表は船長のハクバのキャベンディッシュ。

次に「バルトクラブ」56名。船長は人食いのバルトロメオ。

「八宝水軍」約1000名。13代目棟梁、首領ドンサイ。

「X X X 格闘連合」4名。代表、破壊砲イデオ。

「トンタッタ族トンタ兵団」200名。兵長、戦士レオ。

「巨兵海賊団」5名。船長ハイルディン。

「ヨンタマリア大船団」4千300名。提督、開拓冒険家オオロンブス。

しめて5千600人……かぁ。

今乗っている海賊船もオオロンブスのとこの「ヨンタマリア号」らしい。

「戦力として考えるなら凄いやね」

「なら、そこに私も含めて頂いても構いませんよ」

「「はア!!」」

いきなり叶が発した爆弾発言に殆どの人間が思わずと言った感じに声を上げた。私も、それに玉華もだ。

「名目は、最近名を上げてきている麦わら海賊団に諜報員として潜入。でどうでしょう

か」

「いやいや、いいの？そんな私達の味方ですーって発言して。一応叶って海軍側と繋がりあったよね？」

「だからこその名目、建前ですよ。私にとつて最優先すべきなのは王華達です。こうして王華と再会出来た今、海軍側とのパイプはそれほど重要じゃないですから。この建前が疑われないのならラッキーってくらいに思っておきますよ」

だからつて傘下に入ろうとする？普通。叶は叶で行動力あるよね……。

まあ、そもそもルフィが傘下つてのを否定しているから叶がそこに入る事もなさそうだけど。

「っ、<sup>ハガン</sup>覇銃ー」

いきなり飛んできた砲弾に覇銃を当てて消し飛ばした。

なんだ？海軍の軍艦か？

見れば、少し離れた所にいる船から飛んできている様だ。しかも海軍じゃないし……海賊つて訳でも無さそうだけど、どこの勢力だろう。

「コロンブスに指揮を執らせろ、我々はまだ取り込み中である。誰であれ薙ぎ払え！」

「はー」

オオロンブスが仲間にもう指示を出した。ちゃんとコロンブスも居るんだ……子供



かなあ。

だけどそのコロンプスが何をやるまでも無く、砲弾を撃ってきた奴らの船は空から降ってきた瓦礫によって潰される事となった。

私達の船は避けている……と言う事は、藤虎つて大将は何故か私達の味方をしているという事になる。確かに叶の言う通り私達に落ちては来なかつたけど、ほんと、青キジといいあその大将は良くわからない人が多いね。

「傘下だか何だか知らねエけど、そんなモンにならなくたつて良いじゃねエか。困った時はまた呼べ！いつでも行くから！おれ達が危ねエと思つたら、その時は大声でお前らを呼ぶからよ！」

「そうですか、なら良いです」

そう言つて叶は王華から盃を受け取り、その中に酒を注いだ。バルトロメオやオオロンプス達など、各団体の代表格も盃を手に持っている。

「バルトロメオ、口上をお願いします」

「んだべ。……ルファイ先輩！誠に勝手ながら口上を述べさせて頂くべ!!」

「ん？」

みんなして盃を持ちちゃつて、今にも飲むぞーつて姿勢になつてる。

いやでも待つてよ、それつて飲んだら傘下がどうこうつて話になるんじゃないの？

え、王華もちよつと笑つてるし、こんな強引な流れつて原作にもあつたつて事!?

「ではルフィ先輩!ここに我ら子分となり、いついかなるときも、親分、麦わらのルフィ先輩の盾となり、また矛となる!此度のご恩に報い、我ら7人、命全霊をかけてこの「子分盃」!勝手に頂戴致しますだべ!!」

少し早口でバルトロメオはそう捲し立て、ルフィが止めるよりも早く全員が盃内の酒を飲み干してしまった。

叶は王華を見ながら飲んでいるから、あの子が誓うのは王華について事なんだろう。

「あー!!お前ら、何してんだ!!」

「——つふウ!良いじゃねエか!俺達は勝手にお前さんの子分になったんだ。勝手に危機に駆けつける奴らが居たって損はねエだろう?」

この人は誰だっけ、確か……サイ、だったかな。

なんだか叶と王華が彼を見る目が優しいんだよね……合掌したりしてるし、何かあるの、かな?死んだりする様な事では無いのだろうけどね、もしそうならあの2人が止めようとするだろうし。

そんな感じで、なんだかんだで麦わら海賊団には占めて6千万人を軽く越える程の傘下がついた。

オオロンブスの船はこのままドレスローザを離れ、バルトロメオ達の船を待機させて

ある所まで運んでくれるそうさ。それまでの道のりは宴を行うらしい。

「宴なら私は愛しの嫁達と一緒に楽しんじゃおっかな」

「おう女王！お前も一杯どうだ？」

サイが巨大な盃にお酒を注ぎながら誘ってくる。その瞬間、ルフィとウソツプの顔の色が一気に青白くなって慌てて私達の間に入ってきた。

「い、イリスは飲まねエだろ?」

「おいお前！イリスは酒に弱いから絶対に飲ませるんじやねエぞー!」

大慌てな2人だけど、そういえばエースやシャンクス達も私にお酒を飲ませようとはしなかったっけ。私自身、耐性を倍加してもどうにもならないお酒は避けてるし。

「安心しろイ！これア酒じやねエ、ちんちくりんに酒はまだ早エだろ?」

「これでも21歳なんだけど」

ムカつとしながらも、酒じやないならいつか、と盃を受け取った。宴の雰囲気にはこの容器が合うし。

甲板上に沢山設置されている椅子の中でも、私は隅の席を選んで腰掛けた。両隣にはミキータとロビンがやってきて、正面にシャルリアが座る。

うんうん、ここなら気になるのは宴の喧騒くらいでゆつくりと嫁との時間を楽しむ事が出来そうさ。

「今回の宴はドフラミンゴに勝利したから開かれたものだけだし、私達は別の事を祝して乾杯しようよ」

「別?……キャハ!そういうコトね、勿論、イリスちゃんの願いを私が断る訳ないでしょ!」

「フフ、そうね。音頭はイリスがとつてくれるのかしら?」

「え、つと、皆様、私は今一つ理解が……」

シャルリアはどうやら分かっていないみたいだったけど、私は一旦その言葉にウインクだけ返して盃を眼前に掲げる。

「えー、今回の騒動では色々な事がありました!レイの手がかりとか、コロシウムでのあれこれとか、ドフラミンゴの暗躍とか、叶の事とか、本当に沢山!でも、それはまあ置いて、やっぱり一番喜ばしい事は……色んな人が嫁になつてくれた事!レベツカちゃんにモネ、ベビー5に、シャルリア!特にシャルリアは私達の一味入りという事なので、それを記念して乾杯とさせて頂こうかと思えます!」

シャルリアはまさか自分の為の乾杯だとは思つてなかつたみたいで目を丸くしていた。その辺はまだ私の嫁という自覚が足りてない証拠だね、うん。

「海賊になるんだから、この先色んな苦難が待ち受けてると思う。だけど私の嫁なんだからそんなモンは私が跳ね除けてあげる!嫁に危機が迫つたなら何が何でもすぐに駆

けつける！だからシャルリアも私を、私達を心から信頼してね。……うん、こんな所かな、じゃあ……乾杯！」

『乾杯!!』

拙い音頭も終わり、同じタイミングで盃内のものを呷った。

その、直後。

ピリつと喉に刺激が走って、後味はなかなか苦い。独特の香りがツーンと鼻を通り抜けて、脳が激しく警報を鳴らしている気がした。

この感じ……マズいかも。え、だってこれ……え？

「これ、お酒……じゃん……」

手から盃が溢れ落ちて甲板に飲み物——お酒を撒き散らした。ミキータ達の焦った表情が、揺れる視界に微かに映る。

とりあえずもう手遅れだから、声は出なかつたけど口の動きだけで「ごめんなさい」とだけ伝えておいた。特にシャルリア、本当にごめん。

\*\*\*

「イリスちゃんっ!!」

「イリス様!?! どうされたのですか!?! ま……さか……毒盛り!?!」

「天竜人さん……いえ、シャルリア、これは毒じゃないわ。命にも別条は無い」

「どうしてその様な事が分かるのですか!?! 現にこうしてイリス様は苦しそうに……んう!?!」

揺れるイリスの体、今にも倒れそうなその人を支える為に一歩近付いたシャルリアは、勢いよく後頭部を引き寄せられて唇を塞がれた。勿論、イリスの唇でだ。

その瞳は元から赤いにも関わらず、今では熱つぼさも感じる程に爛々と煌めいて見える。

理性などつくづくに無かった。今のイリスは……正しく己のやりたい事だけをやる怪物だ。それを邪魔するものは誰であろうとブツ飛ばす、傍迷惑な嫁狂である。

突然キスをかまされまシャルリアはというと、最初こそ驚いたもののすぐに身を委ねる方向にシフトチェンジした様だ。

そもそもシャルリアはイリス信者な所がある。イリスが求めるなら何だつて差し出してしまいかもしれない。

「ロビン、このままイリスちゃんをどこか落ち着ける所まで移動させましょう。流石に

この場で「そういうコト」は出来ないわ」

「ええ、分かったわ」

ミキータとロビンは軽く頷きあつて、まずは近くににいる人達に離れる様指示を出した。

その際に異変に気付いたサイが声をかける。

「どうした、何があつた？」

「イリスちゃんのお盃にお酒が入っていたのよ」

「何だと？俺は確かにここに置いてあつた普通の……」

「その樽なら酒入りのと入れ替えておいたぞ。宴な席でお子様ジュースなんざ飲んでられつかてんだ！げはは！」

と、かなり酔っている下つ端海賊が陽気にその様な事を口にした。ミキータとロビンは軽いため息をついて、サイは怪訝そうに眉を寄せる。

「すまねエ、酒を飲ませちまつた事は謝る。だがそこまで深刻になる事か？」

「……そうね、見た方が早いわ。あなた、ちよつと良いかしら」

「ああ〜ん？」

樽を入れ替えた下つ端海賊を呼んだロビンは、彼にイリスの所まで行くように指示を出した。サイに現状を伝えるのと同時に、勝手な事をした彼に罰を与えるという意味も

あつての事である。

フラフラと千鳥足でキス中のイリスに近付く下っ端海賊。やがてその距離が1メートルを切った時、彼は空を飛んだのだった。

「は？」

最初に素つ頓狂な声をあげたのはサイだった。イリスへと近付いた男が、気が付けば宙を舞っている。

血飛沫が上がっている所を見るに、恐らく何者かから攻撃を受けたのだろう事は間違いない。そして、それがイリスだということも薄々気付いてはいた。

サイとて強者だ、己の腕にはそれなりに自信があつた……というのにも関わらず、その攻撃動作が全く見えなかつた。

「オイ、何が……、は？あいつ酒飲んでねエか!？」

「何イ!? おいルフイ、ヤベエ事になつた!」

「げエ!? イリスに酒飲ませたやつ誰だ!」

「キャハ、今空を飛んでる人よ」

ゾロ、ウソツプ、ルフイの順で顔を青に染める。この3人はイリスに酒を飲ましてはいけない事をよく理解していた。特にルフイとゾロはウイスキーピークでの出来事もあつてそれだけは絶対にやってはいけないと心に刻まれていたのだからその心境も



推し量れるというものだ。

かくして今、嫁以外の人物に対しては容赦の無い怪物をどうにか抑えるべく、ここに『何とかしてイリスを嫁と一緒に寝室へ放り込もう』作戦が決行されたのだった。

## 197 『女好き、はた迷惑な怪物』

「いつ、イリス様、急にどうされたのですか？」

「急に？ううん、私はシャルリアを見た時からずっと、ずーっとこうしたかった。……だけれど、ちよつと周りが騒がしいと思わない？」

「ええ？」

イリスの瞳がギラリと光る。それを見たミキータはルフィ達に目配せをし、作戦を実行するべく動き出した。

まず、戦力として心許ない人達は先に大量の小舟で避難させた。そうしないと遠慮の無い言い方をしてしまえば邪魔になると判断したからだ。そこにはローやベラミーなどの実力者も護衛を兼ねて同行させていた。

残ったのはそれぞれの代表格。幸い、この場には王華も叶も居るのだ、敵との戦力差はそう無い。

とは言っても、小舟の数にも限界はある。全員が避難できた訳ではないのだ。

「まずはプランAから！ロビン、頼んだわよ！」

「ええー！——イリス、楽しそうね？」

「ロビン！うん、でも、ちよつと騒がしいというか、どうして私達以外の人も居るのかなあつて思つて」

ロビンはその言葉にニヤリと笑みを浮かべ、するりとイリスの腕に自らの腕を絡ませた。その際、きちんと胸は押し当てている。

「私もミキータも、勿論シャルリアも……みんなイリスとベッドでアソビたいと思つているわ。だから……寝室まで行きましょう？優しい人が用意してくれているわよ」

「え？なんで行くの？ここじゃダメ……かな？私、今すぐが良い！」

「……、それは……」

下手に返答は出来ない、とロビンは思考を張り巡らせる。自分がこの役割を与えられたのは、こういつた事態でも臨機応変に対応出来る様にする為なのだ、と鼓舞する。

そう、臨機応変に行かなくてはならない。例えばここで「他の人には見られたくない」だなんて言つてしまえばどうなるか？恐らく今のイリスは「じゃあ寝室に行こう」とはならない。きつとこういうだろう——「じゃあ他の人は邪魔だから、みんな海に捨てちやおう」。そうなつてしまえば大乱戦が始まつてしまうので、なんとか避けて通るべく必死に最適な言葉を探して……。

「私、今日はイリスに押し倒して欲しい気分なのよ。柔らかいベッドの上で……どうかしら？」

「そうなんだ！じゃあ、はい！」

「え？」

イリスがしゃがんで甲板に触れると、足場がふかふかのベッドの様に柔らかくなつた。

これで良いでしょ？とばかりにニッコリと笑みを浮かべるイリスに、ロビンは冷ややかな汗が背中を伝うのを感じた。

「ベッドまで移動するなんて面倒だよ、今ここで、みんなでしょ？……ね、ルフィやゾロ達もそこに居るんでしょ？私の嫁以外、ちよつとの間だけ海に飛び込んでくれない？」

「鬼かてめエは!!」

「おに？違うよ、女王だって！ねー、王華もなんとか言つてやつてよ！」

「う、うーん……」

木材の柔軟性や弾力等を倍加してまで今すぐの行為にこだわりの見えるイリスに王華は声を唸らせる。

プランAは失敗だろう。だが、言葉だけで寢室に連れ込むのは今のイリスを相手には厳し過ぎるという事は判明したのだ。何も得なかつたという訳でもない。

「……うん、よし、実力行使で行こう」

「やっぱりこうなるんですか……」

プランAとは言ったが、そう何通りも作戦を立てている訳ではない。時間も限られていたのだから当然だが、残された作戦……とも呼べない様なそれはとてもシンプルなモノだった。

「ずばり実力行使、力での無力化作戦だ。」

「みんな、殺す気でやってよ！加減を知らないイリスは怖いよ！」

「私から行きます！『プロテクション』!!」

「ツ!?ダメ、カナエちゃん!!」

ミキータが叫ぶが、一步遅かった。杖を顕現させた葉が、それを振るってイリスとロビン、そしてシャルリアを膜で覆う。本来ならイリスだけを拘束したかった所だが、その2人はイリスに近過ぎた為分断が出来ず一緒に困ってしまう他無かったのだ。

そして、それこそが葉の犯したミスでもあった。

「行きます！『ウオー——』」

「らアっ!!」

膜内を水で満たす対能力者用の必殺技。だけどそれは、水魔法が発動する前に膜を覇気で壊される事によって失敗に終わってしまった。

その上、叶は「イリスの嫁」を巻き込んで攻撃しようとしたのだ。今の話が通じない

怪物に対してその様な事をしてしまえば……一体どうなるのかなんて火を見るよりも明らかだった。

「叶……？今、私の嫁に攻撃しようとした？」

「っ！」

明確な敵意をぶつけられ、叶は一步後ずさる。幸い、女と言うこともあつてかいきなり攻撃を仕掛けられる事は無かったが、これでもう怪物の警戒レベルはMAXになつてしまった。つまり、奇襲はかけられない。むしろイリスから攻撃される可能性が芽生えてしまった事にもなる。

「い、イリス様っ、私なら大丈夫です！それよりも早く寝室に行きませんか？空の下もまた一興かもしれませんが、やはりそういう事は屋根の下で……」

「でも、シャルリアはどこに居たつて魅力的な女性だよ。それなら陽の光に照らされて、その美しい顔がよく見える外の方が良いと思わない？」

「っ、は、はいいい……っ、い、イリス様の御心のままにっ！」

「もう少し粘れよっ!!」

チヨロすぎるシャルリアにウソツプがツツコミを入れた。どうやらツツコミ程度ではイリスの怒りを買う事はないらしい。

「イリスの嫁を巻き込む様な事するのはやめよう、ただでさえ酔つて支離滅裂なのに

怒りまで追加されちゃったらもう手が付けられなくなる」

「王華、みんなもごめんなさい……もう少し考えて動くべきでした」

「気にする事はないですよ、カナエ！」

「ああ、元はと言えばどつかの誰かさんがジュースと酒を入れ替えたせいなんだからな」  
自分を責める様に言う叶をレオとイデオが言葉で励ます。

そのどつかの誰かさんは、あの一撃で有名な渡つてはいけない川を渡りかけていたので、現在全力で船医が治療に取り掛かっていた。

そしてロビンはロビンでこの状況をどうにか打破しようと策を巡らせていた。シャルリアは既に陥落している、例え今話しかけたとしても恐らく上の空だろう。

とはいえ、出来る事などそう多くはない。ロビンは絡めていた腕を解き、シャルリアの手を取った。

「イリス、外でするんでしょう？なら、まずはあの人達を蹴散らさないとダメね。私とシャルリアは危ないから少し離れてるわ」

「えー……離れなくてもいいよ？私、ちゃんと守るから！」

「私がイリスの足手まといになりたくないのよ。……ダメかしら？」

そう言って悲しそうな顔で軽く俯けば、イリスは「う……」と端が悪そうな顔をした。その隙をついてロビンはシャルリアと共にイリスから距離をとった。

これで戦闘に巻き込まれる事は無くなり、イリスが怒る様な事態は未然に防げた筈だ。王華はロビンに軽く頷いて礼をし、しゃがんで床に触れる。そうすればイリスがフカフカにしていた床は元通りの質感に戻り、戦闘もしやすくなった。

「行くよツ！ルフィ、ゾロ、私に続いて!!叶は後方から支援をお願い!!」

「おう！」

「もうあいつには今後何があっても酒は飲ませねエ……!」

「任せて下さい!『プロテクション』!」

ダツ!と王華が甲板を蹴りイリスへと一瞬で距離を詰めた。その後ろをルフィとゾロが追い、叶は前衛3人の体の周りに薄いプロテクションを纏わせた。

通常のプロテクションよりも更に脆くなつてはいるが、そんなやそこの鎧よりかは頑丈だ、何もないよりかはマシだろう。

「この酔っ払いめ!目を、覚ませえ!!<sup>ひやくばいばい</sup>100倍灰!波楼!!」

「ゴムゴムのオ!J E T <sup>ピストル</sup>銃!!」

「三刀流!煉獄鬼斬り!!」

初手から100倍を切つた王華が、遠慮も何も無しに全力で拳を振り上げた。本気でやらなければ意味がない、手を抜いて勝てる相手ではないからだ。

ルフィとゾロも続いて攻撃を放つ。が、イリスはなおも焦る事は無かった。



「ひやくばいばい  
100倍灰」

「へっ?」

「おオっ!?!」

イリスはまず王華の拳を確実かつ丁寧に見て避けると、その次に迫っていたルフィの銃を掴んで引き寄せる。そうやってゾロと自分の間にルフィを寄せて盾にし、ゾロが足を止めた際にルフィを掴んだまま腕を振りかぶった。

当然、ゴムであるルフィはその勢いでイリスの後方までぐーんと伸び、体は海の上だ。

「くらえっ! 伝説の英雄棍棒!!」

「何それ!?!」

ぐいっと力強ルフィの腕を引っ張れば、ゴムの性質で勢いよく戻ってくる。振りかぶった力に引っ張る力が乗って、今のルフィは棍棒と言うよりは弾丸に近かった。ゴムピストルの銃とはいいが、今は拳ではなく自分自身が銃である。

「うわアア!?!危ねエ!!」

「ひゃ、100倍灰! 巨大な手!!」

ドオオン!!と大きな音を響かせて王華の展開した巨大掌にルフィが突っ込んだ。打撃判定になるのでルフィ自身にダメージはないものの、王華の手の平にはピリピリと少なくなない痛みが走る。

「つつく!! 船長を容赦なく武器扱いつてどうなってるの!」

「オレに任せて下さいだべ! 先輩方!!」

次にバルトロメオが指を結んで前に出れば、イリスを叶のプロテクションの様な小さなドームが包んだ。四皇レベルの一撃を誇る『キングパンチ』さえも無傷で耐え切るバリアの中で、イリスは一人困った様な顔をしていた。さつき船長を投げたとは思えないほど普通の表情で、まるで酔ってなどいないみたいだ。

「良い判断ですね、所でバルトロメオ、あれは足元にも展開出来てますか? 床を壊されて突破されたりなどは……」

「大丈夫だべ、足場に隠れて見えねエだけで、キッチンと円形のバリアになつてらア」

叶は小さく頷いた。それなら、あの中に『ウォーター』を入れてやれば終わりだ。

「行きます、『ウォーター』!!」

バリアの中を一杯に出来るだけの水が瞬く間に生まれ、イリスを呑み込む。コロシアのの時と違って足下にも隙は無いので足場を壊されて突破される事も無い。

後は最後まで油断せず、このままイリスの息が続かなくなるまで『ウォーター』を継続させて、最後に弱った所を叩いて勝利だと叶は小さくため息をつく。

「おかしいわ……」

「何がです?」

ぼつりと呟いたミキータに叶が反応する。王華はミキータの感じている違和感に同じく気付いているのか、神妙な顔で頷いていた。酔っ払いを相手にしている顔ではない。

「キャハ、カナエ、イリスちゃんは確かに強いわ、誰よりもね！だけど、それでも悪魔の実際の能力者である以上は水が弱点なのよ」

「はい、だからコロシウムではイリスにも上手く通じて……、……なるほど、確かに、おかしいですね」

能力者のくせに何故かある程度水を克服しているイリスだが、その弱点は完全に消えて無くなった訳ではない。水に浸かって力が抜けるという呪いを乗り越えただけで、水中で能力が使えない事に変わりはない。

だからこそ、今のイリスは異常だと言えた。何故なら、水に吞まれているというのにも関わらず『女王化』が解けていないのだ。

水の中のイリスは苦笑しながら頬を搔いて上を指差し、バルトロメオに向かって「にげ・ろ」と口を動かしている。

明らかに様子のおかしいイリスに、水中なのに女王化が解除されていない事実。そして、そんなイリスからのメッセージ。

「……………ツ！危ないわ!!ニワトリ君!!上よ!!後ろへ跳んで！」

真つ先に気付いたロビンが大声を出したが、一步遅かった。

咄嗟に上を向いたバルトロメオの目の前に見えたのは、拳。一撃で落とされてしまうと経験が理解してしまう程のソレが目の前まで迫っていた。

「20倍灰、去柳薇！」

「グベツ!!」

イリスの拳がバリアを張る間もないバルトロメオの顔面を射抜き、そのまま甲板へと叩き付けた。

けれどもバルトロメオの顔は何とも幸せそうだった、ブレない男である。

「キャハ……！神背ヒューマを使ったって事ね、流石イリスちゃんだわ！」

「褒めてる場合か!!」

ブレないと言えば彼女もそうで、こんな時でも頬を染めて主の活躍に喜びを見せる。これが活躍かどうかはともかくとして。

そんなミキータにツツコミを入れたウソップも自身の相棒である黒カプトを構えている。仲間に攻撃をする事を躊躇ってる暇すらないのが酔っ払いイリスという存在だった。

バルトロメオが倒れた事でバリアは無くなり、その中に居た神背ヒューマも既に解除されて甲板に水だけが浸っている。

状況は刻一刻と悪くなっていった。

話し合いは通じない。そして戦力も削がれていく。

「こうなったら……！ミキータ、ロビン、シャルリア！全力で寝室まで走って！案内はオオロンブス、任せた！」

「白い女王！何か作戦を思い付いたのか?！」

「何その呼び方……って、今はいいか！うん、作戦って程じゃないけどね！ただ時間との戦いになるから急いで欲しい！」

作戦の詳細は分からなくとも王華の指示にミキータ達は頷き、走るオオロンブスの背を追いかけて行つた。

当然イリスがそれを許す訳がなく、嫁達を連れ去ろうとしているオオロンブスへと銃の形を模した指先を向ける。

「ゾロとルフィは私と叶と一緒にイリスを迎え撃つよ！ウソップ、レオ、イデオ、サイは待機!!」

王華はイリスが覇銃ハガンを放つ前に一気に距離を詰めて顔面へ蹴りを放つ。が、空気を斬り裂くその脚は少し頭を引く事で避けられた。

「『ボルケーノ』!!」

甲板が赤く染まり、イリスの足下からマグマの様な炎が吹き出した。だけどそれも後

方へ飛んで軽く躲される。

「甘いです!!」

「っ!?!」

着地する寸前、着地地点が同じ様に赤く染まったのを見てイリスは初めて焦る様な表情を浮かべ慌てて宙を蹴り軌道を変える。

だが、急いで方向転換した事によつてその先に待っていた刀にまで気は回らなかったみたいで、そこには事前<sup>し</sup>に先回りしていたゾロが技を放つ寸前だった。

「一刀流——死・獅子<sup>ししそんそん</sup>歌<sup>か</sup>歌!!」

「だあ!!」

咄嗟に小太刀を引き抜いてガキン!と攻撃を防ぐ。とはいっても防いだだけで、攻撃をする為に抜いた訳では無く大した倍加もかけていない為罅<sup>ひま</sup>迫り合いとなる。

そう、罅<sup>ひま</sup>迫り合いだ。つまり、無防備だった。

とはいえその隙は一瞬だろう、きつとすぐにでもこの怪物は対応して、底知れない力でゾロを吹き飛ばし攻撃を再開する。

だけど、一瞬も隙があれば十分だった。

『リベラシオン』ツ!!! 『テレポート』!!」

「ギア、<sup>フォース</sup>4!!<sup>バウンドマン</sup>弾む男!!」

酔っ払いを止めるだけに全力である。

『リベラシオン』。それは叶の持つ『魔法』の力を極限まで解放するという意味を持つ。

この状態になった叶は効果時間の30秒間のみ最強となり得るのだ。その主な効果として『テレポート』の回数上限解放などがあり、つまり今日使い果たした『テレポート』でも今なら再使用可能という事である。

そして、叶の『テレポート』によつてイリスの頭上に転移したルファイが腕に息を吹き込んで振りかぶった。

黒く太い腕はぐんぐんと大きくなって、遂にイリスへと落ちていく。

「ゴムゴムのオオ!!大猿王銃キングコングガンツ!!」

「王華、今です!!」

「任せて!」

ルファイの拳がイリスへと落ちる直前、王華が甲板に手を当てた。そして最初イリスがした様に甲板をベッドの様に柔らかくする。柔らかさや伸びる量だけでいえばそれ以上だ。

こうやって何かしら対策しなければ船を壊してしまうのでやったものの、これだとイリスへのダメージが下がってしまうというデメリットもあった。が、時間稼ぎには十分になる。ゾロも巻き込まれる前に飛び退いて躲し、拳の落下地点にはイリスだけが残つ

た。

そして、大きな黒腕がイリスを甲板へ押し潰す。

まるでトランポリンの様に甲板が沈み、ルフィも遠慮無しに全力を注ぐ。

「おおおオオ!!」

ズシン！ズシン！と断続的にルフィの拳から衝撃がイリスへ伝わっていく。だけどルフィの顔には焦りが見えた。

結果として使用はしなかったが、ドフラミンゴとの戦いで最後の決め技として使おうと思っていた技がコレなのだ。だということにも関わらず……押し返され始めていた。

「うぐウ……!!」

巨大な黒腕がゆっくりと持ち上げられていく。こうなってしまうてはもう巻き返せないだろうが、ルフィは全力で迎え撃った。

「邪魔」

「ごへッ?!」

しかし無念にも、ルフィの全力は容易に跳ね除けられて瞬時に距離を詰められ、脳天に踵を落とされた。覇気の込められた一撃にルフィは倒れ、次に王華に向かって飛び出そうとして――。

「さっすがルフィ！時間稼ぎは十分!!叶、お願い!!」



「はい!! 行きます、『レポート』!!」  
「——っ?」

転移の魔法陣がイリスの足下に出現し、直後、イリスの姿がその場から掻き消える様に居なくなつた。

行き先は、もはや言うまでもないだろう。

「まったく……お騒がせ過ぎますよ、あなたの半身は」

「あははー……お酒が入るとああなのは2年前から変わんないねえ……」

困つた顔で笑う王華に叶が立つたままもたれかかった。いきなり始まつた予想外の敵との戦闘で色々と疲れが出た様で、王華も何も言わずに受け入れる。

何はともあれ、こうして今回の騒動は幕を下ろしたのだつた。

## 新世界 ゾウ編

### 198 『女好き、ゴーイングルフィセンパイ号』

「……はれ？」

ぱちくり。

目を覚ませば、目の前には見た事のない天井が広がっていて。

周りを見渡して状況を確認してみると、なんだか凄い事になっていた。

私の左腕に抱きついているのがミキータ、私の胸の中で静かに寝息を立てているのがシャルリア、そして右手をぎゅつと握っているのがロビン。ちなみに私も含めて全員裸だった。

「あー……そういえば」

意識を落とす前、私はお酒を飲んだんだっけ。じゃあこの状況にも納得だ。というか、普通に酔ってる時の記憶あります。

とりあえずみんなには謝っておこう。王華ももう私の中に戻ってるみたいだし……後で申し訳ないと。

「……それにしても」

酔ってる私、テクニシャンだなあ……。普段ならどうやってもミキータを相手にすれば押し倒されてるというのに、昨夜はずっと私のターンだった気がする。シャルリアとか鳴きっぱなしだったよね……。やばい、思い出したら興奮してきた。

隣で眠るシャルリアを改めてまじまじと見つめてみれば、やつぱり美人だなあ、と思う。長い睫毛とか、シユツと整った鼻筋、鮮やかな薄い唇、……。くちびる。

……よし、キスしちゃお。

「では失礼して」

身動きは取りずらいけどなんとか顔を寄せてシャルリアの唇に吸い付いた。寝ている相手にこっさりするというのも、なんとか背徳感を唆られて良い。

気分を良くした私は、そのまま舌を口内に割り込ませた。綺麗に並んでいる歯をなぞる様に舐めとり、次に脱力しているシャルリアの舌を探して無理矢理絡め取っていく。

「んっ……。ふ、……。は……。っ」

「っ……。うふあ……。、んう……。っ」

「っはあ……。ふっ、ごめん、起こしちゃった？」

そりゃあ起きるよね、とは思いなながらも一応謝罪の言葉はかける。寝込みを襲われていたシャルリアはというと、軽く頬を染めるだけで怒ってはいないみたい……。というかむしろ嬉しそうだ。

「お気になさらないで。私は貴女様の所有物ですわ、どうぞ如何様にもお使い下さいませ」

「……そういうの、ベッドの上で言うのやめてくれない?」

普段なら、自分をモノ扱いするな—とか言ってるかもしれないけど……状況が状況だし、普通に興奮します、はい。

モンモンと湧き上がる情欲を堪えていると、不意に後ろから腕を回されて抱き締められた。どうやらミキータも目を覚ました様で、シャルリアの向こうを見ればロビンも妖しく微笑んでいた。

……ん? 妖しく??

「おはよう2人とも、でもちよつと待って! ミキータ待って、どこ触ってるの!」

「キャハ、おはようイリスちゃん。どこって、それは勿論イリスちゃんの」

「い、言わなくていいから!」

「なら私は前から攻めようかしら」

「ロビン! せ、攻めなくていいからね!」

マズい……この2人が攻めに回ってしまえば私じゃ止められない!

私だつてまだまだみんなとくつついていたいけど、ナミさん達をゾウに先行させているという事実もあるからね、ゆっくりし過ぎる訳にはいかないから。やる事やつとい

説得力ないけど!!

「シャルリアとはキスしたのに、私達には無しなんて酷いわよつ、イリスちゃん!」

「……だってミキータ、ベッドの上でキスすると絶対最後までするじゃん」

「嫌?」

「嫌じゃないからダメなの!ゾウに行かなくちゃいけないんだから我慢!キスだけなら起きてから何度でもするから、ね?ロビンもそれでいい?」

ロビンとミキータは渋々といった感じではあるが諦めてくれた様で、ベッドから降りた。

どうやらこの部屋は浴室付きらしく、私達はまず昨晚の汗とかその他諸々を洗い落とす為にお風呂に入ったのだった。

……余談だけど、お風呂ではすごいキスされた。だけど私の言葉をしっかりと守ってキスだけだったから、逆に私の方が色々と爆発しちゃうそうだったけど必死に我慢した、うん。ナミさんやペローナの顔が脳裏に浮かばなきややつちやつてたね、あれは。

\*\*\*

そうして、私達はオオロンブスにお礼を言わずと待機していたバルトロメオの船

に乗り移った。

その際、傘下となった彼らはルフィのビブルカードを少しずつ千切って持っていた、なんなら傘下になってないベラミーですらも。

あと、バルトロメオの船は凄かった。何が凄いつて、まず船首像がルフィだったのだ。こいつら頭おかしい。

メインマストはちよつと生意気な表情のメリーの頭から生えているし、船の名前は『ゴーイングルフィセンパイ号』だし、船体の側面にはチョッパーの角を模した飾りも付けてるし、なんならみかんの木も船尾の方に植えてある。

「痛車ならぬ痛船つてやつ？」

「原作だと内装はあまり描写されてなかったんですけど、この調子だと中も凄い事になつてそうですね」

それに、バルトクラブ（バルトロメオの海賊団）の船員はみんな麦わら一味のファンみたいで、全員バルトロメオと同じノリなのだ。私がちよつと前を通る度に叫び声を上げられる始末である。

女の人も何人か居たけど、叶はその事に首を傾げている様子だった。どうやら原作にはバルトクラブに女海賊は居なかったのかなんとか。

まあ、私だけじゃなくてミキータやペローナも居るんだし、女性ファンが入ったつて

事かなあ。

可愛い子ばかりだったから嫁にならないかと尋ねた時は、「死んでしまうのでやめて下さいっ!!」と必死の形相で叫ばれて思わず頷いてしまったものだ。……そんなに拒否しなくてもいいじゃん。

「それにしてもこの船、甲板にソファアアを置いてるなんて珍しいね、バルトロメオ達のはないの?」

「め、滅相もねエベ! そのソファアアは中から引つ張りだしてきたオレ達のやつです!! 心配なさらず! しっつかりと汚れは落としてありますべ!!」

「そ、そうなんだ……」

ちよつと申し訳なく思ったけど嬉しそうだから良しとしよう。

私達が座っているからバルトロメオ一派はさつきから立ったままなのだ。

あと、当然だけでももうメイド服ではない。

「ん? おい、ルファイ、どうやら俺達懸賞金上がってんぞ」

「えー! 本当か!?!」

新聞を眺めていたゾロが少しだけ弾んだ声でそう言った。チラリと覗き込み額を確認して、とん、と肩に手を置きドヤ顔を決める。

「ハッハッハ! まだまだだね小僧! 精進をしっ!!」

「てめエ……！上等だ、叩つ斬つてやる!!」

「その懸賞金額でー？私と7億くらい差があるけどー??」

「そんなてめエを斬り倒せば、んなちつぽけな差なんざすぐに埋まるだろー！」

「うわ！本当に斬つてくるやつがいる!？」

ゾロの居合いを小太刀で受け止めて、みんなから離れている船の前部デッキへと飛び退いた。ゾロも額に青筋浮かべて追つてきたし、今回はちよつと煽り過ぎたかも……なんてね！私はゾロを弄るのが好きなんだよ!!

「イリス様、楽しそうですわ」

「キャハ、イリスちゃんは今よくゾロとああいうやり取りをしているのよ？ゾロも怒ってる様に見せてるけど、ああ見えて結構楽しんでるかもしれないわね」

「ぞ、ゾロ先輩とイリス先輩のお戯れだべ〜!!野郎共、写真を撮れエ!!」

「船長！うちにカメラはありません!!」

「おおおおん!!どうして買ってねえんだ〜ツツ!!オレはバカ野郎だべ〜ツツ!!」

「……こつちもこつちで楽しそうですわ」

「そうねえ……、ん？あれ……これ、どういう事かしら」



ゾロの剣撃を往なしつつ、横目でチラリと疑問の声を上げたミキータへと視線を向けた。

……ていうかゾロ、本当に剣術は化け物だ。私は能力のおかげでゾロの身体能力を遥かに上回っているけど、仮にゾロがこの実を食ってたら凄い事になってた事だろう。

まあ、それはともかく。

「どしたの？」

ゾロとの戯れを適当な所で終わらせて、ソファアに座って新聞を見ていたミキータの首筋に後ろから抱き付き、首を傾けて新聞を覗く。

さつきはゾロの金額しか見てなかったから全員分確認しておこう。

『麦わらのルフィ』懸賞金5億ベリ。

『海賊狩りのゾロ』懸賞金3億2000万ベリ。

『悪魔の子』ニコ・ロビン』懸賞金2億ベリ。

『鉄人』フランキー』懸賞金9400万ベリ。

『黒足のサンジ』懸賞金1億7700万ベリ。

『正妻』ナミ』懸賞金5億ベリ。

『長鼻』ウソップ』懸賞金6500万ベリ。

『わたあめ大好きチョッパ』懸賞金1000ベリ。

『嵐の運び屋』ミキータ』懸賞金1億4000万ベリ。

『ゴーストプリンセス』ペローナ』懸賞金1億ベリ。

『ソウルキング』ブルック』懸賞金8300万ベリ。

『女王』イリス』懸賞金10億ベリ。

とまあ、こんな感じだった。

私の『一騎当千』が無くなってシンプルになってる。いつそ手前に『ハーレム』って付けてください。

他にも気になる事が幾つかあるね。例えば、相変わらず私の嫁は懸賞金額が凄い事になっちゃってたりとか。

ナミさんとか凄いやね、まさかのルフィと同額って……。金に目が眩んでナミさんを襲おうとする奴が出て来たら慈悲なくぶっ潰してやろう。

懸賞金額は対象者の危険度で決まるっていうのなら、ペローナちゃんはちよつと少ない金額なんじゃないかなって思うけど、恐らく政府側もまだペローナちゃんの能力を把握しきれてないだろうね。

写真も2年後のものに変更されているみたいだった。ナミさんは2年前と同じ様に

私の隣で笑っているものだったり、ミキータは空を舞ってるものだったり、ペローナちゃんやゴーストを使役している場面だったり、ロビンは能力使用中の凛々しい場面だったり、とにかく言えることはみんな可愛いつて事である。

で、その中でも特に気になるのがサンジだった。というのも、何故かサンジの手配書だけ「生け捕りのみ」になっているのだ。サンジ以外はみんな「生死問わず」だから、何かしらの陰謀が動いてるとしか考えられないくらい不自然だった。

私の嫁やルフィ、ローなどの例外を除けば、今回の懸賞金アップは大体一律5000万らしく、バルトロメオも5000万上がっているそう。だけとサンジは違う。だって今回彼は別行動をとっており、ビッグマムの船から距離をとってゾウに向かっていただけの筈だ。懸賞金が上がる様な事はしていない、と思う。

少しの間、私達は唸る様に思考を張り巡らせてみたけれど、心当たりの無いものは幾ら考えても答えなど出る筈もない。という訳で一旦意識の外へと追いやって、サンジ達と合流した時にでも確認してみようという事になった。

「……ん？どうかした？叶」

「……いえ、なんでもないです」

んー？少し歯切れ悪いし、多分サンジの事について何か知ってるんだろなあ。

まあ、話さなかつたって事は今更どうにもならない事か、もしくはどうでもいい事な

の  
だ  
ろ  
う。  
も  
し  
今  
後  
気  
に  
な  
る  
事  
が  
出  
て  
来  
た  
ら  
そ  
の  
時  
に  
教  
え  
て  
も  
ら  
う  
と  
し  
よ  
う  
か  
な。

## 199 『女好き、安城 零とレイ』

「ふわあ」

舷の向こうにだらしなく腕を放り投げける様な体勢で、既に黒く染まってしまった海を眺める。

別に見張りの時間がやってきた訳ではない、現在の当番は叶だから、今もメインマストの天辺で便利な魔法でも駆使しながら辺りを隈なく警戒している事だろう。

私がこんな夜更けに寢室から抜け出してここに居るのは、単に物思いに耽る為だった。……なんというか、どれだけ茶化そうがやっぱりナミさん達が心配なのだ。

サンジが付いているのだから滅多な事は無いだろうけど、心配くらいはさせて欲しい、ていうかする。

「んー……」

いつそのまま空を飛び出し、駆けて行けばこの胸の不安も無くなるだろうか。

なんて、勿論思うだけだ。だってゾウはローが持っているビブルカードが示す先にあるのだから、私一人で飛び出したって迷うのがオチだから。こんな事なら嫁全員にビブルカードをどうにかして配っておくんだったなあ、と後悔。いやまあ、後悔したって仕

方ない事なんだけどね？

「……………」

そうやって、ぼけくつと同じ景色を見続けていた時だった。不意に背後から気配を感じ、全身の感覚を研ぎ澄ませる。

見聞色の覇気っていうのは慣れれば常時発動を意識せずに行える技術だ。より広範囲となるとまた別の話ではあるが、私は普段からそれなりの範囲を無意識の内に索敵している。……筈だった。

“そいつ”は今、私の背後に事もなげに立っている。つまり、私の見聞色を掻い潜ってそこに居るという事だ。その上、その気配は私の良く知る人物のものだった。正確には少し違うが、同一人物だと仮定できる程には似ていたのだ。何より、現在見張りをしているのはあの叶である。この気配と、私達の索敵すらも乗り越えてここまで近付いてしまった事実。この事から、私の背後に居る者の正体は……。

「……………何の用かな、**“狂神”**レイ。……………安城さん」

「……………」

ゆつくりと張り詰めた緊張の糸を解く事なく振り向けば、やはりそこに立っていたのは安城零その人だった。

だけど、私の知っている彼女よりも気配が大人しい気がするのはいかほどだろうか。

腰まで伸びる、碌に手入れもされていない様な紫の髪。

全てを吸い込んでしまいそうな程に深い漆黒の瞳。

痩せ細った身体。

……違和感があるのは気配だけだ。やはり外見的特徴はどう見たって安城さんと一致している。

だとすると、今の状況はマズい！こんな場所で戦いなんて起こしてしまえば船を壊してしまう。そうになったら嫁達が危険に晒される事になる……！

「……あなたが」

「……え？」

「あなたが、イリスさん？」

……え??

今度こそ、本当に目が点になった。

何言ってるの、この人。初めましてじゃないよね？

あれか、私の存在を記憶してなかったって事かな？王華の事しか覚えてません、みたいな。

「私がイリスで間違いないけど、あなたは安城零で間違いないよね？」

一応確認はしたけど、どう見たって目の前の彼女は『安城零』その人だ。少し腰を落

として小太刀に手を添える。いつでも「真・女王化」を発動できる様に意識も巡らせて……。

「わたしは、レイ。アンジヨウレイとは違う、よ」

「は？」

この数分だけで一体どれ程驚かされるのか。どう見たって安城さんなのに、当の本人は安城さんではないと言う。

普通に考えればただ人を押搦って遊んでいるのだろうけど、そもそも言うならば私との会話が成立している事自体がおかしいのではないだろうか。

青キジから聞いた話や、実際に私がマリソフオードで見た安城零という存在は、こうやって私が投げつけた質問を素直に返す様な人物では無かった筈。

じゃあただのそっくりさんかと言われれば、それは絶対に違うと断言してもいい。何故なら気配がほぼ同じだからだ。見聞色で感じ取れる気配っていうのは、似てる人は居ても同じ人はいない。恐らく、双子だろうとその身からは違った質の気配を放つもの。

「イリスっ!!ごめんさい、何者かの侵入を許してしまいました……!!……っ、こいつは……!!」

「叶!侵入者は見ての通りだよ、しかも良く分かんない事言ってる」

杖を顕現させて私の隣に立った叶が、私と同じく警戒心を隠す事もなく目の前の彼女



と向き合った。

とりあえず手短かに状況を説明すれば叶も眉を顰めていた。やっぱり理解はしかねるみたい。

「わたしは、わたし。アンジヨウは、アンジヨウ。アンジヨウはわたしの中で眠ってるの」

「ほら、こんな事言って……。……。ん？眠ってる？」

「そう。でも普段は違、う。わたしが、アンジヨウの中で、眠ってる、から」

途切れ途切れに、言葉が間違っていないか確認するかの様に辿々しく彼女は紡いでいく。

「お話、きいてくれ、る？」

「誰がっ!!今度ほどの様なクソツタレた愚行を思い付いたのか知りませんが、生憎とその手には乗りません!」

「……イリス、は？」

叶が早急に会話を切りたがっているのを察したのか、彼女は私を指名して確認を取ってきた。

私としては、叶の対応が正しいと思っている。今すぐ彼女の望む対話とやらを蹴つて、叶のレポートでどこかの無人島にでも転移して2人で叩くべきだと。

だけど、心のどこかでは今の状況に違和感を感じている私も居た。

「叶、出来るだけ人気の少ない場所へテレポート、頼める?」

「はい、では行きます! 『テレポート』!!」

シユン、と私達3人の姿が甲板上から消え去った。

次に目を開ければ、そこは手入れの届いていない天然の浜辺だった。暗闇耐性を倍加して辺りを見渡せば、見た事も来た事もない無人島だというのが分かる。人の気配も少ないし。

「一瞬過ぎて、移動した! って感じがしないね」

「アンジョウ、でも、今のスピードを出すのは、不可能だ、よ」

まあ、テレポートだから速度なんて超越しちゃってるからねえ。

早速戦闘を開始しようとしている叶を止めて、一歩だけ安城さんと距離を詰めた。

叶に転移をお願いしたのは、単純に騒ぎが起きてもあの船に被害が出ない様にする為。私が安城さんに感じた違和感……その正体を突き止める為に、まずは戦闘ではなく会話を試みたかったから。

「それで、安城さんとあなたはどんな関係なの?」

「アンジョウ、は、自分の事を、てんせい、しゃ?とか、言つて、た。わた、しの体に、魂が、ひょうい……?とか」

「は？」

私と叶の声が重なる。

ちよつと待つて欲しい、流石にその情報は予想外過ぎる。

幾らなんでもそれをすぐ信用するのは難しいというか、衝撃が大きいというか。

なんせその話が本当だとすれば、安城さんは私と叶、それに沙彩とも違う転生の仕方だという事になるし、幾らなんでもこの『レイ』って人が不憫過ぎるだろう。

「フザけているのですか？安城零。良くもまあその様な戯言をペラペラと述べられるものですね」

「わたしが、イリスに会いたかった、のは、アンジョウが、イリスを、殺したいって言ってるか、ら」

「そうですか、奇遇ですね、私もあなたを殺したいと思つていますよ」

「叶、落ち着いて」

叶にとつて安城さんとは自分を死に追い込んだ人物だ。感情的になるのは仕方ないかもしれないけど、今は躍起になつても仕方がない。

とはいえ、油断をする訳じゃないけどね。だつてこの人凄く怪しいし。

「今日、は、久し振りに、外に出られた、の。アンジョウ、が、寝たか、ら」

「安城さんが寝れば意識が入れ替わる……なら、毎日外には出られるんじゃないの？そ

りゃあ、夜しか出歩けないのは残念だと思うけど」

「アンジヨウ、は、能力で、自分の活動時間、を、伸ばしてるか、ら」

「活動時間……何日も寝ずにいられるって事かな。……うん、じゃあ、レイ、あなたは私の敵か味方か、ハッキリと教えてくれないかな？」

「イリス……!?何を……っ!」

正直に言つてしまえば、私の中ではもう彼女と安城さんの存在がどうしても一致しなくなつていたので。

叶には見えていないのかもしれないけれど、この暗闇の中でも私には能力のお陰で彼女の瞳がしっかりと見えている。

……不安げに揺れる、幼い少女の瞳だ。外見は既に成熟しているけれど、その瞳だけは幼いままで。そしてそれは、あの『狂神』には無いものだった。

「味方だ、よ。イリス達に、は、アンジヨウ、を……殺して、欲しい、の」  
幼い印象とは裏腹に、出てきた言葉は物騒なモノだった。

というか、殺す、か……。人を殺す、それは私が今まで遠ざけてきた禁忌だ。遠ざけて来たつて言つても結局の所私は海賊な訳で、多分、直接的には無くても間接的に誰かの命を奪つてたりするかもしれないけど。

例えば、インペルダウンでの囚人解放とか。解放した囚人が罪なき人を殺してしまつ

たら、それは間接的な私の殺人になる。

まあ、考え過ぎてても仕方ない事だけど、ね。とにかく私は自分の手を汚したくないという事だ。

……これだけ聞くとただのクズだけど。

「なら話は簡単です、今すぐに後ろを向いて、海に向かって歩いて下さい。そうすれば殺せますよ」

「それじゃだ、め。溺れた、くらいじゃ、アンジョウ、は、死なない、の」

「安城さんは能力者でしょ？」

「そ、う。でも、死なな、い。アンジョウ、の、食べた実、は……『ジョウジョウの実』だか、ら」

「……へえ、ジョウジョウ……上々、かな？」

ふーむ、と首を捻った。

ここに来ようやく安城さんの食べた悪魔の実の名前が分かった訳だ。まあ、それはレイのいう事を信用するなら、だけど。

そしてジョウジョウだけれど、これに関しては王華と修行中に考えていた候補の中にあつたものと同じだった。他にもアゲアゲとか、バフバフとか、とにかく能力向上系なんじゃないかと読んでいた訳だ。

で、ジョウジョウ。これはもう“上々”で決まりだろう。

「アンジョウ、はこの能力を、レイジョウって言つて、た」

「え、レイジョウ??」

上々でジョウジョウじゃなくて、レイジョウでジョウジョウなの？

……ていうか、レイジョウってなんだっけ、聞いた事はあるような……?」

「……累乗、ですか。それが本当だと言う証拠は?」

「え? 叶、レイジョウが何か分かるの?」

「……?? イリスは一応、知識に関しては王華から受け継いでいるんですね?」

「え? うん、そうだよ?」

『あはは……。よし、イリス、お願いだから全力で話逸らしてくれない?』

何故か王華が焦つた様にそんなお願いをしてきた。そもそも話を逸らすつて何から?」

いまいち意味が分からずに首を傾げていれば、何やら叶が段々と凄みのある笑顔をかべ始め、徐々に私へと距離を詰めて来た。

『イリス! 早く! なんとか逸らして! もしくはレイジョウについてなんか正しい事言つて!』

無茶言うな!

「え、えーつと、ルイジョウ、ルイジョウね、あれでしょ、ルイ嬢！どこの姫様、的なね、はは」

『イリスー!!それは絶対に違うっ!!』

「……はあ、王華は確かにア……じゃなくて、あまり勉強は出来ない方でしたが」

今絶対アホって言いかけたよね？

という事は、アホって言われるくらい当たり前の事なのかな？勉強……つまりルイジョウっていうのは、なんかの教科の単語か！そして恐らく響からして数学だね、これは。うん。

「累乗っていうのはですね、同じ数を掛け合わせる事です。〃2〃の『2乗』だと2×2、

〃2〃の『3乗』だと2×2×2、と言った具合で掛ける数を底、何度掛けるか表す数を指数と言います。今の説明で例えると、〃2〃が底で『2乗』や『3乗』などが指数、という訳です」

『あー、うん、OK OK、完璧完璧』

「王華、良く分からないって」

『イリス!!』

頭の中に響く王華の声は一旦意識の隅に追いやって、私は〃累乗〃について考えていく。

安城さんの能力は、累乗を操るものだって事。人を操ったりしてた方法については未だ分からないままだし、累乗を操るのだとしたら少し疑問に思う所もある。

「その累乗って、実際どんな能力なの？」

「アンジョウ、は、3の、5ジョウ、で……約、240、倍の力……とか……言っ、た。良く分からなく、て、あんまり覚えてない、の。ごめんなさい」

「……なるほど」

私は臆げにししか理解出来なかつたけど、叶はちゃんと分かつたみたいで頷いていた。レイの醸し出す圧倒的ふわふわな雰囲気にも叶も呑まれたのか、すっかり落ち着いて話を聞いている様だし……。

「厄介な能力ですね……。要するにそれは、イリスの悪魔の実の上位互換という事になります」

「私の……」

ただでさえ馬鹿げた能力の『バイバイの実』だけど、『ジョウジョウ』はその更に上を行くらしい。

まあ、それはさっきの説明を思い返せば当然だとも思う。だって倍加は文字通り倍加だ。安城さんがどれだけその『底』と『指数』を増やせるのかは分からないけれど、累乗なら3を10乗するだけで……。



えーっ……。

うーっ……。

……。

……。

まあ、約6万倍？

……いや、流石にそこまでは上げられないと思いたい……うん。

## 200『女好き、レイの覚悟』

安城さんの食べた悪魔の実、それが司るのは「累乗」というぶつ壊れアビリティだった。

その後、私と叶はとりあえずレイの話は全て信じてみる事にした。というか、私は既に信じていたのだけどね。

理由は単純で、その情報が嘘でも問題無いからである。何故なら、目の前に居るのが身も心も「安城 零」でただ私達を揶揄って出鱈目な情報を流しているだけだとしても、その情報を掴まされたからと言って何も困らないからだった。というのも、今回レイが私達に伝えた安城さんの能力は「ジョウジョウの実」。しかもその性能は私達の間でもトップクラスなのだ。

わざと能力の効果を低く見積もった情報を流し油断させるというのなら分かるけど、今回の内容は最大限警戒させるだけでしかないものである。

つまり、私達はこの情報を信じ、更に詳細な事まで聞き出した方が得策だという結論に至った訳だった。

あ、勿論これは殆ど叶の考えですけどね！私と王華は「ほー」「へー」しか言ってなかつ

たし！叶も説明の後半は額に青筋を浮かべてたなあ。でもこうやって頭の中で整理出来たくらいだから理解はしてるんだよ？うん。

そんな流れもあつて私達はレイから幾つもの話を聞き出す事が出来た。

まず、ジョウジョウの実際の詳細だ。

安城さんが使用していた中で最大の底と指数は、『3』、指数は『6』であるらしい。つまり3の6乗となり、およそ700倍だ。

それだけならまだ良かったけど、どうやら安城さんはレイにも実力を隠しているようだ。意識の底にまで追いやられているレイには別の様子を上手く伺う事が出来ないそうだし、恐らく安城さんも意図的に見せない様にしてているのだろうとの事。

その話から察する事が出来るのは、安城さんの力は700倍が最大ではないだろうという事。累乗は指数の数字が1つ上がる度に数が跳ね上がる。仮に3の7乗が使えるとすればそれだけで2100倍となってしまうのだ。正直想像したくはなかった。

更に、ジョウジョウの実は他者にも効果を発揮させる事が出来るらしい。デリンジャーや民衆の強化はそれで説明がつくけど、なんとも厄介な能力だと思う。

というか、それつてつまり能力が覚醒しているのでは？と思わないでもない。

そこまで話を聞くと、今度は民が操られていた事などが気掛かりとなつてくるよね。シャルリアは暴徒と化した民衆に追いかけて回されていた訳だけど、ジョウジョウの实

“は流石に洗脳能力なんてないはずだし。

なんて思っていればそれについてもレイが説明してくれた。なんでもレイには4人の直属の配下が居るらしく、その内の1人である『リリー』という名の女が精神干渉系の能力者だとか。

その4人は安城さんと違い表には姿を見せておらず、世界政府や海軍も存在を認識していないとか。

レイもその4人についてはそんなに知らないそうだけど、私と叶はその内の1人の名前を聞いて目を見開いた。

精神干渉系の能力者『リリー』

無精髭の男、名前は分からない。

無精髭とは違って、身嗜みは綺麗な眼鏡の男。

そして、煌めく赤の髪と瞳の、4人の中でも最強の戦闘力を誇る人物。

——ミサキ。

そう、あの美咲である。

「そんな……美咲が、安城 零の所に居るといいますか……？」

「……」

そりゃあ、美咲の情報が掴めない訳だ。だって安城さんが意図的に隠していたのだから

ら。

美咲が安城さんについている理由については簡単だ、恐らく操られているんだろうと思う。なんたつてあの美咲だ、王華を苦しめた元凶に自分の意思で手を貸すなんて有り得ないと私でも断言出来る。

丁度リリーとかいう名の能力者も居るらしい事から、相手が美咲を操れる可能性は十分に有る事だし。

という訳で、私……というか王華と叶の中では既に美咲救出が最優先事項として今後の目的に組み込まれた様だ。この事は叶から沙彩にも伝えるらしい。

次に、現在のレイの状態に関して。

彼女の中に安城さんが入り込んでしまったのは彼女が5歳の頃、丁度誕生日を迎えた後日だったそうだ。

その時には既に安城さんは今の様な人格だったらしく、レイは為す術も無く安城さんに意識の奥底へと追いやられる事となった。

レイの体なんだからそう簡単に乗っ取られたりとかしないだろうと思うかもしれないけど、良く分からない狂ったナニカが突然自分の中へと入り込んで来るのだから、当時5歳のレイでは恐怖で竦んでしまったとしても誰も責める事なんて出来ない。

それに、問題はここからだ。

安城さんは、乗っ取った体の前に現れた悪魔の実、*“ジョウジョウの実”* を食らい、規格外の強さを得てしまった。

実験台としてレイの住んでいた村の人達は皆殺しに遭い、その時に両親も亡くしているそうだ。

なんともない様に話す彼女だけど、声は震えていた。

安城さんを殺して欲しいという願いは、レイ自身が安城さんを憎んでいるから、という理由もあるんだろう。

だけど主導権を取られた彼女では自殺すら出来ないらしく、行使出来る能力も安城さんより低いレベルでしかないらしい。

「わたしが、話出来るの、は、これくら、い」

「いや、十分過ぎるよ。ね？叶」

「はい、貴重な情報です。……が、レイ、安城 零を殺すという事は、即ちその肉体を滅ぼすという事になります。……当然、あなたも死ぬ事になると、分かっているんですか？」

「う、ん」

レイは迷いなくそう頷いた。その瞳に恐怖の色は無く、奥深くに見えるのは怒りと憎しみ、そして、諦め。

そんな彼女の態度にどうしようもなく腹が立つ自分が居る事に気付いた。開き直る訳じゃないけど、仕方ないよね？いや、これは開き直ってるのか。

だって、彼女は5歳の時に安城さんに体を奪われ、本当の意味で目の前で両親や友達を殺されている。その後10数年と囚われ続け、いつしか彼女は自分を諦めてしまったのだろう。

憎しみや怒りは積まれど、それを発散する機会は訪れる事はなく、安城さんに力があ  
るせいで死ぬ事も出来ない。

……死ぬ事も出来ない、か。

自ら「死」を望む事は悲劇だけど、当事者にとっては何よりの救いになる。

だけど私は、

「……流石に、エゴが過ぎるんだけどさ」

「……う？」

そんなもの  
悲しい救いは……嫌いなんだ。

「叶、安城さんは私達で倒そう」

「元よりそのつもりですが……どうかしましたか？」

「そうだね、どうかしてるかも。……夢物語かもしれないし、都合の良過ぎる理想を語るけどさ……安城さんだけ倒して、レイは救ってしまおう」

「!!」

2人の瞳が驚愕で見開かれる。

私の言っている事を理解しているからこそ、その荒唐無稽な理想に呆れているというのもあるかもしれない。

要は、安城さんはブツ倒す!でも、レイの命は救う!という事はだし。

「……それ、は、無理だ、よ。アンジョウとわたし、は、繋がってるか、ら。だからアンジョウ、も、わたしを体から追い出さない、の」

「無理かどうかなんてやってみなきゃ分かんないじゃん!案外安城さんを倒せばその体から逃げていくかもしれないよ?」

「そうほいほい魂だけで移動なんて出来ないでしよう?」

「普通はそうだと思う。だけど、例外もある」

魂だけを外に放出させる方法はある。それこそが クイーンインクリース 女王・倍加<sup>〃</sup>、所謂『王華顕現』である。

あれは私の中にいる王華を一時的にとはいえ体外に放出させる技だ。私自身詳しいメカニズムとかは分かんないけど、とにかく出来るには出来る。

なら、その効果を永続的に発揮させる方法もあるかもしれない、そう希望を抱くのは何もおかしくはない。というか、私は王華を解放してあげようと前からそういう事を考



えていたのだし。

「ね？なんとかなりそうでしょ？」

「……方法は未だ不明ですけど、実例がある以上は可能性はゼロじゃない」

「そうだよ！だからさ、レイ、その命を諦めるにはまだ早いんじゃない？」

「……っ、あなた、は、良い人だ、ね。凄く眩しく、て、暖かい、太陽の様、な」

レイは俯き、私からはその表情が見えなくなっていました。そして――

「でも、ダメな、の。わたし、は、死ななきやいけないか、ら。ママも、パパも、妹も、友達も、みんな、わたしがこの手で殺したか、ら。わたし、は、生き永らえたくない、の」  
「でもっ、それは安城さんがやった事じゃん!!」

「それで、も、わたし、は、わたしが、許せないか、ら……。あなたもそうじゃない、の？大切な人を、その手で何人も、何人も、殺してしまつたら……。生き残りたいって、思える、の？」

「……っ」

言葉に詰まってしまった。

本当はここで、無理矢理にでもレイを言いくるめるべきだったのだろう。だけど、レイの覚悟や想い、そしてその心を蝕む呪いとも呼べる過去きおくに押し負けたのだ。

きつと彼女は何を言った所で引かないのだと分かつてしまったから。

「あなた、は、優しい人。だから、キチンと守り通して、ね。周りに居る、大切な人達、全員、を。アンジヨウは甘くない、から、きつと、手段なんて選ばない。……そろそろ、アンジヨウが起きるか、ら、わたしはもう帰る、ね」

「つ……この、バカ！人の心配ばかりして、あなただって優しい人なのに、どうして死ななきゃいけないの!?!」

「……ふふ、ありがとう、ね。もし、生まれ変わる事が出来たのなら、あなたの近くが良いか、も。……なん、て。それじゃあ、ね」

それだけ言い残してレイはその場から姿を消した。

……レイのおかげで、安城さんの能力や周りの戦力はかなり把握出来た。勿論詳細までキチンと理解出来た訳じゃないけど、何も分からなかった昨日までに比べれば雲泥の差だ。

でも……その情報は全て私達がレイを「殺せる」為のモノで……。

「……介錯を頼まれてしまいましたね。正直、面白くないですけど」

「うん……」

レイの事を、安城 零が私達を騙して揶揄う為に演じているだけだという考えはとつくに微塵も残ってなかった。

だって、あの覚悟は本物だったから。

本物だからこそ、私達の心に深く刺さってしまったのだ。

……とにかくまずは情報の展開だね、色々知れたのは事実なんだし、レイの事は一旦後回しにするしかない。

考える事から逃げてるだけかもしれないけど、どうせいつかは向き合わなきゃいけない問題なんだ。今くらい、目を背けたって良いと思う。

## 201『女好き、口説くか交渉か』

あの後、私と叶は『テレポート』で船へと戻り体を休める事にした。

私達がいけない事に気付いていたみんなはプチ騒ぎとなっていて、何も説明せずに出て行っちゃった事は反省しないといけないね。でもあの流れだと仕方ない気もするけど……まあ、心配をかけたのは事実な訳だし。

そうして一夜明け、みんなが起きてきたタイミングを見計らって甲板に集まって貰った。理由は昨夜のレイの事や安城さんについて。

色々と衝撃的な内容なので、みんなも半信半疑って感じで話を聞いている。あ、ちなみに私の嫁とルフィに関してはこの話に疑いを持ってないみたいだけど。

「——という訳で、“狂神”は割とシャレにならない戦力を持つてるとい事だね。万が一1人で居る時にばったり出くわしちやったら逃げた方が良いかも。確実に倒す為には数で叩くしかない」

「そのレイって女は本当に信用出来るのか？」

ゾロが当然の疑問を投げってくるが、これには迷わず頷いた。直接面を向かい合わせた私と叶には、彼女の本質がしっかりと見えていたんだ。

みんなを納得させる根拠は無いけど、間違いなくレイと安城さんは別人だと確信しているのだと伝えた。

「きつと安城さんはいつか私に……いや、王華に何か仕掛けてくる。ドレスローザでは既に間接的に私達を襲ってきた訳だし、シャルリアは遭遇したんだよね？」

「はい、恐ろしいまでの狂気を秘めている方でした」

「そういう訳だから、私も安城さん……狂神とは決着をつけたいと思ってる」

「……それで、女王屋は何が言っていてエんだ、決意表明を聞かせる為に集めた訳じゃねエだろう？」

「勿論。みんなにはお願いがあるの。私が狂神をブツ倒すから、協力して欲しい！狂神には4人の配下がいる、きつと全員すっごく強いと思う。私は狂神に集中したいから、みんなにはその配下を相手してもらいたいだけ……」

ロー達にまで強制させるのは申し訳ないって気持ちもあるにはある。

「けど、こつちも増やせる戦力は増やせるだけ増やしたいんだ。特にローは強いし、強力してもらえれば凄く助かる筈だからね。」

「手を貸せば良いのか、それで、いつ仕掛ける？作戦は？」

「えっ、いや、それより協力してくれるかどうか……」

「何を言ってるやがる、詳細を確認してる時点で答えは決まっているだろうが。ドフラミ

ンゴ討伐での恩もある、それに、狂神に消えて貰うのは賛成だ」

ローだけじゃなく、バルトロメオ達も力強く頷いた。

「元よりオレたづは麦わら海賊団の傘下だべ！是非お役に立ってみせます！」

「……そつ、か。うん！じゃあ、よろしく！ありがとう！」

いずれ来たる安城さんとの戦いは、ちよつとやそつとの戦力では挑めない。だから2人が快く受け入れてくれた事は私にとつてかなり心強いものだった。

こうなる事が分かっていたのならエース達にも頼んでおけば良かったなあ、絶対頼りになるのに。

「居場所とかは分かかってないからこつちから仕掛ける事は出来ないんだよね。でも、必ず向こうから仕掛けてくる筈。だから私達は油断せずにその時を待てば良いだけ」

「待つと言つても、相手がどう動くか分からねエのは問題だ。4人の配下の事もある、『その時』になれば誰がどう動くのか、それくらいは決めておくべきだ」

ローの言葉に頷いてみせる。みせただけで作戦は何も考えてなかったけど！

「キャハ、もう少し協力者を集つても良いかもしれないわね。イリスちゃんか声を掛けたら直ぐに集まってくるわ！」

ミキータの中の私はとても人望の厚い人らしい。

それに、相手がどのタイミングで仕掛けてくるか分からない以上は同志を集めるのも

難しいんだよね。事前に話しておいて、その時が来たら急いで集まってもらおう、それくらいしか出来ないんじゃないかな。事前に連絡を取る手段もないけども。

あ、でもそういうえば一人だけ連絡を取れる人が居たんだった。早速連絡して今夜にでも会えるか聞いてみよう。

「ねえ、ゾウつてあと何日くらいで着きそう?」

「正確な位置は分からねエ……が、先に向かわせた仲間から連絡が届いた日から考えれば、後2日程度だと俺は読んでいる」

「分かった。じゃあちよつと私今夜出掛けてくるね」

「キャハ、私はついて行っても良いかしら?」

「うん、後叶も一緒にお願ひ。あ、それからシャルリアも」

遠いだろうから叶の反則技でも使って行こうかと思う。

シャルリアを連れて行くのは、とりあえず説明しておこうかと思つたから。

肝心の行き先はたしぎちゃんのだ。パンクハザードの子供達も無事に送り届けられた頃合いじゃないだろうか?

みんなに一声かけて寝室へ戻り、荷物の中から電伝虫を取り出してたしぎちゃんにかける。

この独特の呼び出し音にもすっかり慣れて、今ではこれじゃないと落ち着かないかも

しれない。

ガチャ

『はい』

「あ、もしもし？私だけど」

『……う？ええつと……カナエ、さん、ですか？』

あ、そっか、たしぎちゃんに電伝虫で連絡入れる女性は大体叶だったから勘違いしてるのかな？声とか電伝虫の見た目とか変わると思うんだけど……。

それにしてもたしぎちゃん、この世界では浸透してはいないとはいえ見事にオレオレ詐欺に引っかかりそうな流れだよな。

たしぎちゃんそんな返しをするもんだから、私の中で少しの悪戯心が生まれそうになるのをグツと堪えて……、

「そうです、叶です」

『あ、やはりカナエさんでしたか』

無理です、堪えきれませんでした！だってなんか面白そうだし！

『“女王”の件ですか？申し訳ないですけど、私も今は女王がどこに居るのか……』

「そ、そうではないです」

『え？違うんですか？カナエさんが女王に関する事以外で連絡を取るなんて初めてです



ね』

「そ、そうかもしれないですね、あはは……」

叶……一体どれだけ王華が好きな……！王華も私の中で恥ずかしがつてるし、たしぎちゃんにそう思われてしまうくらいには王華の事ばかり考えていたみたいだね、あの子。

『私も最近はお姫様の事を良く考えてしまいます。あの人、強引だとは思いませんか？私とあの人の立場は敵同士なんですよ？』

「はは……」

『それなのに嫁とか何とか……カナエさんも気を付けないと直ぐに目をつけられてしまいますよ』

「肝に銘じておきます」

色々とね。自重はしないけど！

それにたしぎちゃん、言葉は私を非難しているみたいだけど、なんとか声質が優しげなんだよね、気付いてるのかな？

『あ、すみません、私ばかり話してしまつて』

「気にしないで下さい。それで要件ですが、強敵との戦闘で負傷してしまいました。治療費が1億ベリーだと医者に言われてしまつて……今も寝たきりなんですよ。申し訳

ありませんが、必ずお返しするので急ぎでお金を出してもらっても良いですか？」

『えっ!? カナエさんが、負傷!? そのまでの相手となると……まさか狂神……っ! 分かりました、それほどの額です、今も相当苦しいのではないですか? 直ぐに上に掛け合つて』

え、これは流石に騙され過ぎでは? ど、どうしよ……ネタバラシしないとんでもない事に……っ! これじゃ本当に詐欺になっちゃう!

「あ、あのっ! 私、イリスだからね!? えつと、今夜会えないかなと思つて連絡したつていうか……その、ごめん! 全部嘘だから一億とかいらなくて!」

まさかここまで引つ掛かるとは思つても無かつたから凄く申し訳なく思つてしまう。

やっぱり冗談にならない嘘はついちゃダメだよね……反省しないと、だなんて考えながらあたふたしていれば、電伝虫の向こうでたしぎちゃんが軽く笑つた声が聞こえた。

『気付いていますよ、女王』

「え、い、いつから!？」

『最初は本当にカナエさんだと思つていたのですが、明らかに声が違いますから』

……と言う事はアレかな? 悪戯しようとしたけれど、実は私がされてたつていう事かな?

ぐぬぬ……なんかちよつと悔しい! だけどあのたしぎちゃんがそんな返しをしてく

れる程には心を許してくれてるって事だよね!?

「むう……じゃあ1億は諦めるからたしぎちゃんを下さい」

『1億を諦めたのなら私の事も諦めてはどうですか?』

「それだけは無理!!それで今夜なんだけど、どう?あと子供達は大丈夫?」

無理矢理切り替えて本題に入る。目的はたしぎちゃんと会って対狂神の為の戦力増

強をお願いする事だけど、折角たしぎちゃんと会うんだから猛アタックしたいよね!

『子供達は問題なく保護出来ました。……一応、遅くはなりましたが言っておきます、あ

りがとうございました』

「あはは、良いの?海兵さんが海賊にお礼なんか言っちゃってさ」

『あなたがそれを言いますか?あなた相手にそんな事を気にしていても疲れるだけだと

学んだんです。それと今夜ですが、大丈夫です、問題ありません』

「ほんと?じゃあ空けといてね!今どこに居るの?」

『今はG-5支部ですけど……当たり前の様に居場所を尋ねるのはやめて下さい』

と言いつつも答えてくれてるんだけどね。

私の他にも後3人そっちに行く事を伝えようとした時、電伝虫の向こうで誰かがたしぎちゃんを呼ぶ声があった、と同時に電伝虫も切られてしまった。

多分スモーカーかな?たしぎちゃんの事を「たしぎ」って呼び捨てにしてたし。

\*\*\*

そうして夜がやってきた。幸いにもまだゾウには到着していないし、私の目にもそれらしきものは見当たらないからまだ到着しないだろう。

「ごめんねロビン、留守番頼んじやって……」

「大丈夫よ、気にしないで。それよりあの海兵の女の子、遂に捕まえてくるのかしら？」

「そうしたいけど、まだ厳しいと思うなあ。とりあえずアタックはグイグイする！」

「キャハ！その意気よイリスちゃん！」

「あなた達は何をしに行くつもりなんですか……う？」

呆れ顔の叶が杖を顕現させ、私達の足元まで広がる魔法陣を展開させる。隠している様で分かりづらいけど、未知の体験にシャルリアの顔が強張っているのが見えたので腰に腕を回して引き寄せた。驚いて少し目を見開かせるシャルリアだけど、すぐに落ち着きを取り戻して私に微笑んだ。すっごい美人。

「さ、行こう！たしぎちゃんを口説きに!!」

「戦力増強の交渉ですけど!?!『テレポート』！」

交渉もするけど、私には譲れない事がある!!折角会えるんだから何も行動を起こさな

いなんて勿体ないよねえ!! はっはっはっはあ!!

## 202 『女好き、たしぎとスモーカー』

「おお……ここが海軍の支部かあ」

「大声は出さないで下さい、一応敵地ですので」

叶の『テレポルト』で海軍 G L 第5支部、グランドライン通称海軍 G-5へとやってきた私達は、

出来るだけ身を低くしてこそこそと見つからない様に行動していた。

すぐに出動出来る様にか基地は海岸近くに建っているの、今も嗅ぎ慣れた潮の匂いが鼻を擽っている。

そんなに大きな島ではないけど無人島って訳でもないみたいだ。奥へ行けば村とかあるかもしれないけど……今はいいや。

私達が近くまで来たとなしぎちゃんに知らせる為に電伝虫をコールだけかけてすぐに切り、他の海兵達に気付かれない様暗闇に身を潜める。

「ていうかき、敵地っていうけど叶は立場だけで言ったら海軍寄りでしょ？」

「前までは、ですけどね。私がこちら側についたのは藤虎にも見られている筈です。恐らくまだここまで連絡は届いていないでしょうけど用心するに越した事はないですし」

「藤虎って盲目の人だよな？あれ、叶の事認識出来てたの？」

「それも分かりません。藤虎は目を頼らない分、感覚や聴覚などが鋭いですから。あの時藤虎の近くで迂闊に行動したのは結果としては間違いだったかもしれないですね……」  
これ以上話すのは危険だと言う様に叶は口を閉じる。私達も做つて大人しく待つていれば、G-5基地からたしぎちゃんが歩いてくるのが気配で読み取れた。

『インビジュアル』

ほつりと叶がそう呟けば、気配だけ残して叶の姿が目に見えなくなった。身を完全に隠す魔法か、私達に施さなかった所を見るにどうやら自身にしか効果がないみたいだけど、相変わらず汎用性の塊みたいな能力だ。

叶はそのままたしぎちゃんの近くまで歩いて行き、驚くたしぎちゃんの腕を引いて私達の元まで連れて来た。

見聞色があれば分かるから叶の動きは探れるけど、これ覇気が使えない人からすれば脅威だろうなあ。偵察とかにも使えそうだし。

「や、パンクハザードぶりだねたしぎちゃん」

「どうしてカナエさんがあなた達と共に行動しているんですか……あ、どうも。そちらは運び屋と……えつと」

「シャルリアです。以後お見知り置きを」

「あ、ちなみに彼女は元天竜人で、今は私の嫁だから」

「は？」

唐突に舞い込んだ情報にたしぎちゃんから素っ頓狂な声が漏れた。何度も私とシャルリアを交互に視線を彷徨わせ、やがて大きなため息を一つ溢しジト目で私を睨んでく  
る。

「あなたって人は……一体どこまでその手を伸ばすつもりですか？抱え込める量を測り  
違えばその身を滅ぼす事になりますよ」

「心配してくれてるの？大丈夫、私の腕は世界中の美女を囲う為にあるから」

「……そうですか」

もう何を言っても無駄だと感じたのかももう一度ため息を吐いたたしぎちゃんが、基地  
の向こうに広がる森を指さした。

「とりあえずあちらに移動しましょう。この森を越えてしまえば一つ大きな町がありま  
すが、それさえ気を付ければ大丈夫でしょう」

そうして歩き出したたしぎちゃんから少し離れて私達も移動を開始する。それにし  
てもこの森、獣の気配とかも結構感じるね。たしぎちゃんだけじゃなく、シャルリアの  
訓練にも良さそうだ。

森に足を踏み入れ、それとなくシャルリアの動きを観察してみた。

……うん、足運びとか凄く滑らかで心配する点は一つも見当たらないね。狩りとかし



てたつて言つてたし、こうやって森を歩く術も自力で身につけたのだろう。

自慢だけど、私は森の中でも問題なく体を動かす事が可能である。まあ、海賊になるまでは無人島暮らしだったし、修行中も大体森の中だったから、木の根や上から下がる蔦などは私にとつては動きを加速させる装置でしかないのだ。ドヤ。

やがて私達は川沿いの開けたスペースへと辿り着いた。結構歩いて来たから流石にここがバレるなんて心配はしなくても大丈夫そうだね。

腰掛けるのに丁度いい岩もその辺に埋まつてるし、魚とか捕まえてキャンプ気分味わうのもいいかも。今回はそこまでする時間は無さそうだけど。

「それで女王、今回はどんな要件でここに？」

「流石だね、特訓だけじゃないって分かつたんだ」

「それだけなら、そちらの者達まで連れてくる必要はありません」

ミキータとシャルリアの事かな？シャルリアはともかく、ミキータが来たのは本人の希望があつたからだから、たしぎちゃんの読みは正確には外れてるんだけどね。

でも結論は合つてる訳だし、細かい事を突つ込むのはやめておこう。

「じゃあ率直に言うけど、私達、狂神とぶつかろうと思つてるんだよね」

「……狂神と？なるほど、つまり、私達海軍のパイプを使って協力を要請してほしい、と言う事ですか？」

「え、すごい……まさにその通りなんだけども」

今度こそ、たしぎちゃんの読みは一寸の狂いなく正解を指す。

私の言葉にたしぎちゃんは考える様に腕を組み、眉を寄せた。

「正直、難しいと思います。狂神が暴れていると報告があれば私達も駆けつける理由にはなりますが、場所の特定が出来ません。女王から救援要請が届いても現場まで辿り着くまでに時間がかかる可能性があります」

「いいよ、それでも。狂神を倒すなら海賊とか海軍とか言ってられないかもしれないし、手を取り合えとは言わないから、対狂神の時だけは同じ敵を見よう」

「……ですが、私の発言力はそう高くは無いですよ？ スモーカーさんならどうにかなるかも知れませんが……。それに、狂神は今や四皇の一角、政府がどう判断するかも不明です」

そうだよね……そう簡単にOKを出せるお願いでもない、か。でもいざと言う時に海軍側から応援が来てくれたなら、それはとても助かる話なんだよねえ。

とはいえ、たしぎちゃんに無理をさせたい訳でも無いし……仕方ないか、一応話は通したんだし、上手く行けばG-15の人達だけでも来てくれるかも知れないし。

「無茶はしなくて良いから、お願いしま……、あつ」

「女王……？」

と、その時、私の見聞色レーダーに1人の気配が引っかかった。

私を警戒してか極力気配を押し殺して近づいて来た様で、私が探知する頃には既に手遅れだったんだけど……。

「隠れてコソコソ何をやっていやがるのかと思えば、お前が海賊と仲良くお喋りとはな、たしぎ」

「す、スモーカーさん……どうしてここが……!？」

持ち前の十手を握り、だけど敵意はそれ程見せずにスモーカーが私達へと近づいて来た。

相手に戦う気は無さそうだけど、一応まだ戦闘員ではないシャルリアを背後に回して動きを探る。

「どうしてもクソもあるか、てめエに隠し事は向いてねエよ」

……うん、まあ大体分かった。きつと私としていた連絡に関してスモーカーに問い詰められたりでもしたんだろう。そしてその時に挙動不審な対応でもしてしまったのかな? いや、スモーカーとたしぎちゃんは付き合いも長いし、単純に隠し事が出来る関係じゃないってだけかもね。……羨ましい!!

「で、どうするの? 私達を捕まえる?」

「当然だ。……と言ってエが、腹が立つ事に俺ではお前らに敵わねエ。逆に聞くが、お前

らは何故ここに居る？ どうしてたしぎを呼び出した？」

「……分かった、話すよ。だけど、たしぎちゃんが私達海賊と会つてた事を見逃してくれるならね」

「元よりそんな事で目鯨立てるつもりもねエ。こいつがてめエらに会うつて事アそれなりの理由があるつて事だ」

たしぎちゃんは、私と会う事で特訓が出来るからと今夜会うのを受け入れてくれた筈だ。たしぎちゃんにとつて強くなると言う事は海賊である私に教えを乞う程に重要な事。つまり、スモーカーの言う様に“それなりの理由”はあつた。

まあ、それと今から私が話す事は全く関係ないんだけど。

そんな訳で、私はスモーカーにも説明をした。

話を聞いたスモーカーはたしぎちゃん同様に難しそうな表情を浮かべたけど、返つてきた答えは意外な事に前向きだった。

スモーカー曰く、安城さんを私が叩くのは大歓迎なんだとか。というのも、当然安城さんは弱く無いから戦いは苛烈を極めると思われる。つまり漁夫を狙うぞという話だった。

本人である私を目の前にして漁夫狙い発言、知つてはいたけどスモーカーつて中々肝が据わっているよね……。

「ま、それで協力してくれるなら別にいいけどね。私が疲労困憊の所を背後から突いてくれても構わない。まずは狂神に勝つ事を考えないと」

「……その話は分かりましたけど、女王、その人がロズワード・シャルリアという話は本当ですか？」

「は？」

シャルリアに視線を向けてそう言ったたしぎちゃんにスモーカーが思わずといった様に声を漏らした。

「こんな事で嘘なんか付かないよ、でもロズワード・シャルリアじゃあないよね、でしょ？シャルリア」

「はい、私は2年前に家名を捨て、現在はただのシャルリアとしてイリス様のお側に置かせて頂いております」

要するに嫁にしたって事！と力強く頷けば、スモーカーは呆れた様に1つため息を吐いた。シャルリアを嫁にするのってそんなにおかしいかな？優しくて美人つてよく考えなくても最高だと思っただけだ。天竜人？そんなのどうだっていいよね、シャルリアはシャルリアだし。

「……じゃあ、シャルリア宮……いえ、シャルリアは麦わらの一味にも加入したのですか？」

「まあね、私に付き添う形だけど、一応ルフィの船に乗る訳だし」

「てめエらの海賊団はどうなつてやがる？ 麦わらといいてめエといい、挙句天竜人だと？ 戦争でも起こすつもりか？」

「だから狂神と起こすつもりだつてば」

「そういう事を言つてるんじゃないやねエよ！」

ええ……私からすれば、そんな事言われてもって感じなんだけど……。

「そうだ、スモーカーも特訓していく？」

「特訓だと？」

「うん、私も叶もミキータも居るし、相手には困らないよ？」

協力の申請もしたし、シャルリアの事も一応説明はした。ここからはたしぎちゃんとの約束である特訓を始めようかと思うんだけど、スモーカーも居るなら幅が広がりそうだよな。

シャルリアにとつても良い経験になるだろうし、ミキータもスモーカーと模擬戦闘をやつてもいいんじゃないだろうか？

スモーカーは断りそうだけど、折角の機会だしなんとか参加して貰えないかなあ。

## 203 『女好き、合同訓練キツス』

「ホワイト——!!」

「遅い!去柳薇!」  
さよなら

高密度の覇気がスモーカーの拳に集まったのを見逃す事無く、すかさず距離を詰めてその体を後方へ殴り飛ばす。

まあ、私の拳はすんでの所で手の平に防がれてはいたけど。

少し前、意外な事にスモーカーは私達と共に特訓を行う事を受け入れた。広い視野で物事を見て考える事が出来るスモーカーだから、ここで私達が海賊だからと反発するより、強者を利用して少しでも力を付けた方が良いという結論に至ったのだろう。

そして叶の魔法によってこの場だけ光が照らされ、視界良好の中訓練は開始された。

「はあっ!!」

「っ……やるわね、たしぎちゃん!」

たしぎちゃんが持つのは自分の得物ではなく、訓練用の刃のない刀。だからかたしぎちゃんも相手をしているミキータも中々遠慮のない戦闘をしている様だ。

それに何だかミキータはたしぎちゃんの攻撃をわざとギリギリまで引き付けている

様な気がする。じっくり技を観察している様な、そんな感じ。

たしぎちゃんには悪いけど、今はまだ実力的にもミキータの方がずっと上だろう。だけどミキータはまだ武装色を習得していない筈だから、その点においてはミキータにも得るものがある。技を観察しているのはそういう意図もあるのかもしれないね。

それから、シャルリアと叶は……。

「私の手は今、あなたの目の前にありますか？」

「……、はい」

「正解です。では、少し距離を離しましょう。さて、私の手は今、あなたの目の前にありますか？」

「……………、いい、え」

「ハズレ、です。でも焦る事はありませんよ、これは鍛錬の末に行き着く極地、『覇気』ですから」

叶が目隠しをしているシャルリアの顔の前に手の平を突き出してそんなトレーニングをしていた。ああやってまずは誰もが感じ取れる距離からスタートして、徐々に手を離して感覚を広げて行こうとしているんだらうけど、もう覇気を教えているのかあ。叶がせっかちって訳じゃないだろうから、単純にシャルリアには才能があるのかな。

「どーしたのスマーカー、私、まだ20倍も出してないけど？」



「ク……！相変わらず出鱈目な野郎だ……！」

「野郎じゃないからね？ほらほら、足を止めてると追撃貰うよ？ハガン覇銃！」

よくよく考えたら、海賊なのに海軍側の戦力アップに手を貸すってどうなんだろうね、これ。

スモーカーもたしぎちゃんもセンスはあるから、今日だけで色々掴んで強くなるだろうし、今後2人に見つかる海賊達には今からごめんと心の中で謝っておこう。

その後も軽く打ち合って、スモーカーの動きの悪い点を指摘したり、私も倍加をあまり使わない様にして技術面のスキルアップに努めた。

力や速さでは能力的にも私が圧倒的にスモーカーを凌ぐけど、技術に関してはまだまだスモーカーから学べる事も多い。さつき倍加を使用せずに一戦したけど普通に負けたし……。

で、今は小太刀を倍加させて刀にし、たしぎちゃんと向かい合ってる所だった。

スモーカーは叶が、シャルリアにはミキータがついている。

スモーカーは私と近接戦闘を訓練したから叶から遠距離戦を学べば更に強くなれる。シャルリアは叶に学んでいた見聞色を今度はミキータに教わっている様だった。

「倍加は……5倍くらいにしておこうかな」

「その選択、後悔させてみせます!!」

力強い踏み込みで距離を詰めてきたたしぎちゃんの腕の動きを見極めて顔を横に逸らせば、さつきまで顔があつた場所を剣先が通り過ぎた。いくら刃の無いモノとは言えその攻撃は当たれば普通に怪我すると思うんだけど！

「ていー！」

今度は私の番だとばかりに腰を落として刀を振るうが、たしぎちゃんは冷静に刀の腹で滑る様に受け止め、衝撃を殺して私の体制を崩して来た。シャンクス達に鍛えられたけど、やっぱり私はまだまだ倍加に頼り過ぎていたみたい。

2年前だって私は刀を飛び道具扱いしていた訳だし……。

「そこですツ!!」

「わわっ!?!」

崩した所を狙い澄ました攻撃に、慌てて体を捻って強引に躲す。その際足は地面から離れたし、5倍の私では宙を蹴る事も出来ない。正に危機一髪ってやつだ。

「これで、一本!!」

「そうはさせないよっ!!って、うわっ!?!んっ!」

「えっ、きやつ!?!——っ!」

再度振り下ろされた刀にガキン!と自分の刀をぶつけて直撃は防いだ。だけど地に

足付いていないのに力が入る訳もなく、私はそのまま地面に背中を激突させ、その上私の抵抗が弱過ぎたせいで大振りとなってしまったたしぎちゃんも私の上に倒れ込んで来た。

いや、それだけじゃない。この唇から感じる柔らかさ、目の前に映る目を見開いたたしぎちゃん、ふわりと香る心地の良い匂い。

そう、ラツキーハプニングである!! 要はキス!!

いやはや、やっぱり私は持つてるな、よーしこのままふかいキスもしちゃおう! では早速失礼して……って痛い痛いっ!!?

「いひゃいけど!」

「な、ななな何を考えているのですか貴女は!!」

「ちよつと舌を絡ませようとしただけじゃん! 噛まれると痛いんだよ! 海兵なのに人を痛めつけてもいいの!」

「どうして私が怒られてるんですか!」

ぶんすかと怒った風でたしぎちゃんに詰め寄る。

でも実際たしぎちゃんとキスしちやつたら行けるとこまで行きたいって思うでしょ? 私は何も間違つてないと思うんだよね!!

「ね、1回したんだからもう1回してもいいよね? たしぎちゃんもしたいでしょ?」

「どうしてそう思うんですか!?嫌ですよ!!」

「……てめエら、真面目にする気はあるのか?」

特訓も大事だけど、こうなったらキスも大事じゃん!私は昔から夢に対しては真面目で真っ直ぐだよ!!

「そうだ!見聞色の練習しない?私がキスしようとするから、たしぎちゃんは目を瞑って躲すとかどう?」

「はい!!それ、私がやりたいわ!!」

「お、いいね!じゃあミキータもやろうよ!シャルリアも!」

「はい、承知致しました」

「私はやりませんよ?……あの、聞いてますか!」

逃げ出そうとするたしぎちゃんを『神背』を発動させて押さえ込み、たしぎちゃん、シャルリア、ミキータが私の前に立ち並んだ。

叶とスモーカーはもう気にするのはやめたみたいで、お互いの訓練に戻って集中している様だ。

えー、ここからはなんというか、怒涛の私得な展開だった。

まずシャルリア。彼女は真面目に見聞色を覚えようとはしているけど、失敗して私と

キスをした時はとても幸せそうな表情を浮かべるのだ。襲われたいのか？

次にミキータ。……うん、これは私の予想通りだけど彼女は避けようとしなかった。そもそも見聞色を習得しているミキータは目を瞑っていても私の動きが分かる筈なんだけど、唇を近付けても避ける素振り所か寧ろ近付いてくるのだから流石ミキータと言わざるを得ない。私も調子に乗って盛り上がり過ぎてしまったけど……。

最後にたしぎちゃん。最初は意地でも目は瞑らないって感じだったけど、シャルリアやミキータと訓練<sup>キズ</sup>している私を見て、避ければ良いのだと思いつたのか観念して目を瞑ってくれた。

まあ確かにたしぎちゃんも見聞色を習得してるし、シャルリアやミキータに迫るキス程度は目を瞑っていても簡単に躲せるだろう。だから敢えて私のわがままに付き合っ  
て早々に終わらせたいという考えは分かる。

という訳で、たしぎちゃんの時だけスピードを上げました。簡単に言えば『女王化』を  
使用しました。絶望顔のたしぎちゃんも可愛かったです。

「……もう、いつそ殺して……」

「弱い奴は死に方も選べないそうですので、残念ですけど生きて下さい」

特訓後、倒れて放心しているたしぎちゃんに叶がそう声を掛けた。死に方を選べたと  
しても死なせはしないよ？

それはそうと、この特訓だけでたしぎちゃんとか何回キスしたんだろう？何回か舌も入れたし、最後の方はたしぎちゃんも受け入れてた様な気もするんだけど……。

「スモーカーは叶と手合わせして何か掴めた？」

「何故んな事をてめエに言わなきゃならねエんだ」

「ふむふむ、その言い方は何か得るものがあつたみたいだね」

スモーカーは普通に強いし、強者と戦えばそりゃあレベルアップ出来るだろうと思つてたけど。叶も教え方上手いし、今後もシャルリアの先生として指導を継続して貰おうかな？

「キャハ！たしぎちゃんもイリスちゃんの魅力に気付いたかしら？遅すぎるけど、これでようやく私達は同志だわ！」

「な、何を馬鹿な事を……！少しの接吻で揺らくほど私は軽い女ではありません!!」

「つまりは、より多くの接吻を繰り返せば良いという事でしょうか？イリス様、お聞きになられましたか？」

「もっちらん!!」

「違いますっ!!」

あはは、と呑気に笑う私にむくれるたしぎちゃん。あれだけキスをしただけあつて、口ではそう言ってもたしぎちゃんは意識せざるを得ないみたい。私がチラリと唇に視

線を移せば顔を赤くして目を逸らしてるし、うん、今回会ったのも大成功だね。

「キスの件も私としては重要だけど、真面目な話をするとなしぎちゃんはもう少し見聞色を鍛えた方が良いよ」

「何故見聞色なんですか？同じ覇気なら武装色も重要では？」

「たしぎちゃんは『目』に頼り過ぎてるからね。戦闘中は当然激しい動きをする事になるし、付けてる眼鏡が何らかの拍子に落ちないとも限らない。そうなったら今のたしぎちゃんじゃどうする事も出来ないでしょ？」

それは……と瞳を伏せるたしぎちゃんに、私は握り拳を作って胸に当てた。激励だと思っただけ？違うんだよね、ぼよんを自然に触りたかっただけだよ!!はっはっは!!!

「大丈夫、たしぎちゃんならすぐに見聞色を極められるよ!だって本気で強さを求める事が出来るんだし、ね？」

「女王……、分かりました、当分の間見聞色を鍛えてみようと思います。……それから」「それから？」

「いい加減、胸を触るのやめてくれませんか!？」

なぬっ?!自然に触ってた筈なのに何で?!

……そもそも触るのがダメだという事に気付くべきかもしれないけど、私はそんな事で挫けたりはしない!!

後から思い返した時、この時たしぎちゃんは文句は言っても私の腕を無理矢理払い除けようとはしなかったのだと気付いた。

海賊と海兵、壁は高いけど、少しずつ近づけてる気がする!!今回はまた無理だったけど、次に会う時こそはたしぎちゃんを嫁にしたい!



## 204 『女好き、到着、ゾウさん』

「という訳で、たしぎちゃん達に協力を取り付ける事は出来たよーん！」

「イリス先輩、何か嬉しそうだね！」

「分かる？はっはっは！目標に近づけたからかな？」

たしぎちゃんとスモーカーとの海賊海軍合同訓練も終わりを迎え……と言ってもたつたの数時間だったけど、私達は叶のテレポートでバルトロメオの船に帰ってきていた。

ロー達に説明するのは私が引き受けて、シャルリアとミキータは特訓を継続するらしく、2人は船内に居る私や叶とは分かれて甲板上に居る。

まあミキータはシャルリアの付き添いだけだね。シャルリアが1日1秒でも早く力を付けて私達の足手纏いにならない様になるのだと意気込んでいるから、ミキータもあの手この手で教えてくれるだろう。

叶もシャルリアの事は気にしているらしく、後で自分も面倒を見に行くとか言っていた。シャルリア自身が強さを身に付ける事に貪欲とはいえ、なかなか豪華な先生役が揃っているんじゃないだろうか？

そうそう、叶のテレポートだけど、なんと使えば世界各地どこへでも飛んでいける優れもの。回数制限や人数制限はあっても距離の制限がないのだ。頭おかしい。

つまり何が言いたいかというと、叶にお願ひすればいつでも私の嫁に会いに行けるという事！勿論テレポートはいざという時の為にとっておく必要もあるから、そうそう私個人の都合でホイホイ使えるものでもないけど、余裕がある日なんかはお願ひしてもいいかもしれない。

『リベラシオン』……だっけ？それを使えば回数制限も増やせるらしいし、予め連絡をしておけば各地の嫁達を一気に集めてプチお泊まり会とか、お買い物とか、すつごく魅力的な事が出来る様になる！これは本当の意味で革命だよね！！

「それにしてもバルトロメオ、この船には航海士が居るのですね。海軍基地に行く前から思っではいましたが船体が安定しています」

「何を言ってるんだべ、海に出るんだから航海士を乗せるのは常識だべー！」

「……それをあなたに言われるとブン殴りたくなりますね」

ピキ、とこめかみに青筋を浮かべた叶が拳をワナワナと震わせている。

……まさかバルトロメオ、<sup>グランドライオン</sup>原作だと航海士乗せて無かったの？新世界なの？いや、新世界じゃなくても偉大なる航路前半だつて相当ヤバイ海なんだけど。

私達はナミさんっていうすつごい優秀で美人で優しくてスタイルの良い完璧航海士

が居たから航海で困る事は少なかったけどね。なんとたつて空も飛んだし。

「ゾウまでまだ後2日くらいかかるんだっけ、正直ちよつと暇だね……よし、ロビン、ちよつと海上デートしよ！」

「ええ、楽しみね」

「船の上で海上デートもクソもねエだろ」

ゾロのツツコミは無視しよう。デートだと思えばどこでもデートなんだから！それに私は海の上を歩く事だつて出来るし、ただの海上デートとは一味違った刺激を味わえると思うんだけど。

「いえ、イリス、出来ればあなたは船に残って下さい」

早速出発だ！と準備していれば、そこに叶が口を挟み、すみません、と一言入れて何も無い空間から杖を顕現させる。

「今からゾウまで2日かかるのなら、それを1日短縮します」

「魔女屋、お前の事は疑ってねエ、が、そんな事が可能なのか？」

「はい、ですけど私1人の力では足りないのでイリスに協力してもらいます。イリス、この船の強度を上げて下さい」

「……あ、そういう事？分かった、でも2倍が限界だからね、酔ってる時の色々おかしい私を基準には考えない方がいいよ？」

そう言つて私は邪魔にならない端の方へ寄つて座り込み、床に手を添えて船の強度を倍加させた。それを見た叶は1つ頷いて杖を掲げる。

『ウインド』『プロテクション』

「おっ。」

叶がそう呟いた瞬間、一瞬だけグラリと船体が揺れた。

やっぱりそういう事だったみたいで、この船は帆船だから風を操つてしまえばスピードは自由自在で済んだ。だとすると今の揺れは加速の衝撃かな？そんなもつて私に強化を頼んだのは無理矢理上げた速度に船が耐えられる様につとこだろうね。

「でも叶、コレ、外のミキータとシャルリアは大丈夫？いきなり凄い風に曝されてたりとか……」

「ああ、大丈夫ですよ、『プロテクション』で帆から下の船体を囲っていますから、最初の衝撃以降は逆に無風になっている筈です」

「へえ、流石だね」

何回も言うけど、本当に叶の能力は汎用性が高い。どんな場面でも使い所がある正にチート級悪魔の実だ。そりゃあ異界の実とか呼ばれたりする筈だよ。

……あ、異界の実といえよ。

「叶、優勝賞品の悪魔の実ってどうしたの？」

「それでしたら今も私が所持していますよ。少し、思う所がありました」  
「……思う所？」

叶の瞳に憂いが宿る。

「この実は『異界の実』としてドフラミンゴが安城 零から受け取った物。異界の実と呼ばれるモノを口にはしているのは、全員が転生者ですよ？これは偶然ではなく、転生者である私達の目の前に現れる様になっているのではないのでしょうか」

「じゃあ、その叶の持つてる実は、もしかして……」

「はい……本来であれば、美咲が口にする筈だった物かもしれない、という事です」

その推測に私の中で王華が息を呑んだ。

でも、確かに可能性としては十分に考えられる。美咲は今、安城さんと共に行動しているらしい。いつからなのかは分からないけれど、悪魔の実を食べる前に捕まったのだろう。勿論、異界の実が私達の前に現れるという前提がそもそも間違っているのかもしれないし、私達が知ってる人以外にもまだ転生者がいるのかもしれない。美咲の物だと決め付ける事も出来ないから、叶は『思う所がある』などとハッキリしない言葉を選択したのだろう。

まあでも、そう言う事ならその実はまだ叶が保管しておくべきかな。悪魔の実は小さくないのに何処に持つてるのか、なんて聞くまでもないし。どうせ空間魔法とかよく分

からないものがあるんだろうからね。

\*\*\*

そして、1日が過ぎた。

叶と私が合同で行なっている無理矢理スピード上げよう作戦のお陰で、私達が眠る時以外はグングン距離を進めて行ったゴーイング以下略号。その甲斐あつてついに今、私達は目的地——『ゾウ』へ辿り着いたのだった。

「……『ゾウ』って言うから一体どんな島なのかと思えば……」

目の前に聳える『ゾウ』を見上げて私は「ほへー」と抜けた声で嘆息を漏らす。バルトロメオ一派やウソツプなんかは『ゾウ』を見て慌てふためいているけど、それも仕方がないだろう。だってこの島、島というよりかは……。

「〃象〃 じゃん……」

「ああ、『ゾウ』は巨大な象の背に栄えた土地の名だ」

頭の中にぞーさんぞーさんと有名なメロディが流れ出したのを頭を振って掻き消し

た。流石ONE PIECE、こんな生物もアリらしい。

いやでも、この象、本当にかなり大きいよね？私が100倍大きくなつたとしてもこの象の足よりまだ小さいと思う。

「聞いた事があるわ、常に動き続けて、一定の場所には存在しない幻の島があると」  
「そうだ。『陸』じゃねエから記録指針じゃ辿り着けねエ、俺も来るのは初めてだ」

このサイズで生きてて、しかもずっと歩いてるらしい。このゾウが人の住む島に近付けばそれだけで大津波が起きそうなモノだけだね……。それこそウォーターセブンのアクア・ラグナ並みのやつが。近くどころか上陸しちゃったらどうなるのか……。怖っ！  
「上陸の準備をしろ、ゾウが俺達に背を向けてるって事は、『黒足』達はもうだいぶ早く着いた可能性がある。おい、食糧を分けてくれるか」

「何でおめエに!!」

「麦わら屋に分けてくれるか」

「食糧庫の全てを持ってつてくれ!!」

バルトロメオの動かし方を早くも理解したローがそう言つて、私達もせつせと準備を始めた。準備と言つても荷物は少ないけど。

「おい！『ゾウ』には人を嫌う種族が住むとか……」

「えっ、そうなの？」

錦えもんが助けた侍であるカン十郎の心配気な問いにローが頷く。

ローが言うにはその種族の名は「ミンク族」というらしく、人を寄せ付けず、その国の歴史は1000年近いとかわれられてるらしい。

象の背中で1000年って凄いなあって呑気に考えてたけど、よくよく考えてみたら1000年も生きてる象の方が余程おかしい事に気がついた。寿命1000年超えてるってなに……。

「色々気になる事はあるけど……まあ、いいや!」

考えても仕方ないしね!それに、もうすぐナミさん達に会える事を思えばその程度は些細な事だし!

更に船をゾウに近付けければ、その巨大な足元にサニー号の姿が見えた。

常に動いてて錨を下ろせないから足に紐を括り付けて固定してある様だ。見聞色で調べても船内には誰も残っていなさそうだし、みんな上陸したんだろう。ペローナちゃんも居ないなんて珍しいよね、流石にゾウの足元じゃ落ち着かないって事かな?

「これが……麦わらの一味のご神体を運ぶ偉大なる船グランドシップ!「サウザンド・サニー号」先輩!ありがたや!ありがたや!あ、先輩方、こちら食糧ですだべ!!」

「え、こんなに良いの?」

「持つてつて下さい!!どうせオレたづ少食ですんで!」



絶対嘘だろうな、と思いつつもありがたく受け取っておいた。私の身長よりも高くパンパンに食糧が詰まった袋を持ち上げ、軽くサニー号へと跳躍する。

バルトロメオ達以外のみんなも次々にサニー号へ移ってきて、短かったけどここでバルトロメオ達とはお別れだ。

「じゃあね、船、本当にありがとう、バルトロメオ」

「またな！ロメ男！」

「っ、れ、連続でオレの名前を……!!もう、死んでもいいべ……!!」

「それくらいで死なないでね」

名前を呼んだくらいで大袈裟な反応をするバルトロメオに手を振って、私は巨大なゾウを見上げて軽く息を吐く。ここを登るにしても、私は問題ないとしてみんなはどうしようかな。

ちよつと危ないけど、私が気を付ければ問題ない方法はあるけど……。

「出でよ!!『昇り龍』!!」

「おお?」

「……」

考えてたから見てなかったけど、カン十郎が甲板に描いた絵が実体を持って浮かび上がって来た。龍というにはあまりにゆるい見た目だけ……。

「あのな……」

「目には目をと申す」

何やら呆れ顔の錦えもんにカン十郎は笑ってそう返した。更にそのやり取りを叶が苦い表情で見ているんだけど……何か気になる事でもあるのかな？

てつきり空を飛んでいくのかと思つてたけど、カン十郎作の龍は飛ぶ事が出来ないみたいでゾウの足にしがみついている。この背に乗って上を目指すつて事なんだろう……でも、龍には悪いけど、それは私の嫁を乗せるには些か危ないよね。

「ロビン、ミキータ、シャルリア、3人は私と一緒に行く？」

「キャハー！ええ、私はシャルリアを抱えて行くわ」

「あ、ううん、今回は私達の運び屋にはお休みしてもらうつもり。上にはこれで行こうと思つてるんだけどどうかな。——グランデ・ハンド巨大な手」

両手を30倍大きくして、右手にシャルリアとロビンを、そして左手にミキータを優しく乗せ、トン、と空へ飛んだ。

これなら仮に落ちそうになつてもすぐ助けられるし、安定もしてる。何より私の手のひらに座つてるみんなのおしりの感触……うへへ。

「みんな、私の手を離さないでね」

3人が頷いてくれたのを確認して、私は少しだけ加速し上へ駆けて行つた。

叶も『ウインド』を使って私の後ろを着いてきているみたいだから、ゾウの背中に辿り着くのもそう遠くはなさそうだ。

## 205 『女好き、《もこもどっけどむ》』

「おお、本当に建造物がある〜！」

「キャハッ、ちよつとはしゃいであるイリスちゃんも可愛いわ！」

読み通り大した苦労も無く到着した私達の前に聳えるのは、どう見ても人の手が入っている大門や物見櫓。

その門に『MOKOMO DUKEDOM』と文字が彫られている事から、きつとここがゾウの背中で栄える国の正門なんだろう。

「文字は何て読むのかな…えーつと、もこも…どっけどむ！」

『そんな訳ないじゃん。もこもだうくどむでしょ！』

「だうくどむ？ふっ、だ”ならでいーとえーにならなきやおかしいでしょ？つまりどっけどむ！」

『その考えじゃあどっけどむになるよ？もこもどっけどむ？』

「それだ！”もこもどっけどむ”だ！ふふ、流石王華、やるね！ねえシャルリア、合ってるでしょ？」

「……はい！素晴らしいです、イリス様」

「いやいや、何も素晴らしくないですから!!」

私達の完璧な解答に叶は不満を抱いているらしい。そもそもこれはどう見たつてもこもづけどむだし……あ、あれか、叶からしてみればこの程度は読めて当たり前だから、づけどむつて気付くなんて普通だよって事か!

「はあ……いいですか?あれはづけどむでもどつけどむでもなく、『デュークダム』と読むんです」

「はえ?でゆ?……え?」

なんで!?だってでいーおーえむだよ!?どむじゃん!!でいーえーえむじゃないじゃん!!

中で王華も同じ様に混乱しているみたいで、なんで?なんで?と回らない頭を回して考えている。

「〃王国〃<sup>キングダム</sup>という言葉は聞いたことありますか?」

「聞いた事はある!」

『同じく!』

「そちらは王が治る国なのに対して、今回の『デュークダム』は公国、つまり貴族が治る国なんですよ」

「貴族が……」

うーん、正直、現代日本人の価値観から言えば「貴族」という言葉に関わりが薄いせいでイマイチピンと来ない所はあるよね。デュークダムとか言われてもよく分かんないし、ダムって言うとき水を貯めるアレしか頭に浮かばないし。

ていうかキングダムって王国って意味だったんだ……。なんか凄いい煌びやかで王様っぽいダムの事かと思ってた……。

「なんか良く分かんないけど、公国って無断で入るのはまずいかな？」

「気にしなくても大丈夫でしょう。元より王華達は海賊ですし、不法入国を気にする立場でもない筈では？すでに指名手配されている身なんですから」

た、確かに。

今更どうこう気にする事でもないというのはその通りだし、勝手に入るとしよう。ていうか、不法入国は今更だった。

そうと決まれば早速ナミさん達を探すとしよう。

「よっ、と〜っ！」

せつかく物見櫓があるんだからと大きく跳躍して櫓の上に飛び乗る。そうして前を向き、門の向こう側に広がる景色を視界に納めて感嘆の息を漏らした。

すごい……本当にゾウの背中に島がある……！

森があつて、町があつて、川も流れて……！

本当に生き物の背の上なのかと疑ってしまふ程の光景にいつい目を奪われ、もつと良く見てみたいと視力倍加を使用して国の建築物へと視線を向けた。

「欲を言えば美女も居て欲しい所だけど……、……ん？」

視力倍加を使用した事で遠目では見えなかつた部分も良く見えるようになり、そのお陰、と言つていいのかは分からないけれど無視できない光景が視界に映つた。

この国はローの話を書く限りでは榮えてるとの事だつたけど、今私の目に映っているのは……酷く破壊された、既に滅んだ後の国の姿。

人影すら無さそうだけど、視力倍加を使つてるとはいえ近くに行つてみない事には詳しい事が分からない。それに、もし仮にこの破壊が最近のモノだとしたらナミさん達が心配だ。勿論シーザーの事は心配してない。

とりあえず櫓から飛び降りて門の前に着地する。この門の近くにはこじ開けられた鉄製の扉が転がっているから、やっぱり何者かがこの国を襲撃した可能性は高い。

「それに、破壊の跡もまだ新しいし……叶」

「なんですか？」

「叶はこの先の出来事とか知ってるんだよね？」

「はい。……原作通りなら、ですが」

ドレスローザでも原作とは違つた出来事が幾つか起きていたみたいだから、原作知識

は参考にするまでで留めておいた方が良いと叶は言う。

「じゃあ参考までに。この破壊の跡ってつい最近のものだね？ナミさん達は無事なの？」

「ローの仲間とナミやサンジ達は共に居ますし、その仲間のビブルカードは無事でしたので恐らくは」

「…うん、分かった、ありがとう」

油断は出来ない状況だけど、一先ずナミさん達は無事である可能性が高いって事は分かった。ならもう私から言う事は何も無い、しつかり周りを警戒してナミさん達を探そう！

という訳で、みんなを近くに集めてゆつくりと進行を開始した。別にロー達を待つても良かったけど、今はナミさん達が優先だし！

一見獣道に見える、元は整備されていたであろう破壊の限りを尽くされた道を進んでいく。足場がゾウの背中だからぶにぶにと歩きづらいし……しつかり気を張っておかないと不意な戦闘で足を取られましたじゃあ笑い話にもならない。

「イリス様、微かにですが火薬とガスの匂いが漂っています。何らかの科学兵器が使用されたのかもしれない」

「……ほんとだ」



嗅覚倍加を使用すれば私にも感じ取る事が出来た。というかシャルリアって経験が浅いだけで色々とハイスペックなんじゃないだろうかと最近思い始めてきたんだけど。

それにこの匂い、頂上戦争の時と似てる。という事はやっぱり戦争が起きたんだろうね、しかもつい最近に。

でも、こんな事言うのは良くないんだろ……死体が1つも無いのはどうしてだろう。これ程の破壊の跡なんだから、誰と誰が争っていたのかは知らないけど双方共に甚大な被害が出た筈。

町の方に行けば何か分かるのかも知れないけど……。

「ー」

「……？イリス様、どうかされましたか？」

私の見聞色に何者かの気配が引つかかる。その気配はジツと私達の様子を伺っている……っ、来た!!

「キャハっ、ここは私に任せて！」

気配の主が突っ込んでくるのに合わせてミキータが前へと躍り出た。

襲撃者の速度はかなりの物で、素の状態の私では動きを捉える事が難しいレベルだ。だけどそんな相手にもミキータは臆した様子も無く、冷静に相手の動きを見極めてギリギリまで引きつけ、飛びかかって来た瞬間にその足から「嵐」を発現させた。

瞬間的にとつもない加速度を得たミキータの脚が襲撃者の胴体目掛けて横薙ぎに払われる。相手は飛びかかって来た事もあつて当然空中に居るから避ける事も出来ない……筈だったのだけど。

「つな……!?!」

ミキータの蹴り薙ぎ払いが襲撃者を捉える直前、空中で更に体を浮かせて背後へと回り攻撃を避けてきた。月歩でもなく、自然にふわりと浮かび上がった様に見えたけど……能力者?

ていうかちよつと待つて! その襲撃者ウサ耳あるんだけど!! 良く見たら外見ウサギっぽいんだけど!!! 可愛い……っ!!

なんてはしやいでる間にも攻防は続いていて、予想外の動きに一瞬戸惑ったミキータだったけど、すぐに右手のグローブから風を噴射させてくるりと方向転換し再度蹴りを放つ。

それを迎え撃つ様にウサギっ娘も獣手のグローブを突き出して――。

『プロテクション』

バチインツ!!

「えっ、電気!?!」

丁度ミキータの脚とウサギっ娘のグローブがぶつかる瞬間に、両者の攻撃を拒む様に

叶が『プロテクション』を張った。

ミキータは瞬時に上手く風を調節して寸止めしたけど、ウサギっ娘の反応が少しだけ遅れて『プロテクション』へと直撃し電撃の火花を散らす。

「…キャハっ、ありがとうカナエ、痺れる所だったわ」

「気にしないで下さい、それよりも……あの人がローの言っていたミンク族です。生まれながらにして戦獣民族、弱者は一人も居らず、赤子から老人まで皆護身術の心得がある者達。特に彼らミンクの種族特有である『エレクトロ』や『空中浮遊』などには気を付けて……と言つても、敵対する事は無いと思いますが」

「ふうん？」

敵対する事は無い、か。それは良い情報だよね、私もこんな可愛いウサギっ娘と事を構えたくないし。

「ゆティア達はレッサーミンクだよね!? 門の前に居た筈のバリエテをどうしたの!？」

「ゆティア? えつと……ごめんね、そもそもバリエテって何?」

敵対しないといいつつも何だか敵対しそうな雰囲気だよね、これ……。

チラリと叶を見れば、『バリエテ……?』と首を傾げている。

『バリエテはちっちゃな猿のミンク族だよ。ルファイ達が登ってる時に上から落ちてくるんだけど、何で落ちて来たのかは不明なんだよね……』

ああ、じゃあ私達とはすれ違って会わなかったって事？

『そういう事。バリエテは侍組を巻き込んで下に落ちてくから、錦えもん達よりルフィ達の方が先にここへ来るからね』

……く、詳しい。流石はONE PIECE好きだと言うだけはある。叶がバリエテを知らなかったのもただマイナーキャラだったからってだけだろう。名前は分かんないけどどんな見た目は分かる、とか。

「えっと、私達ここに来るまで誰とも会ってないんだけど、逆にこっちから質問していい？ 私の嫁と仲間がここに来てる筈なんだけど知らないかな、ナミさん、ペローナちゃんって名前なんだけど」

「…それって……もしかしてゆティア達、麦わらの一味!？」

おお、良く分かんないけど話が早くて助かるよ！

私は頷いて肯定し、完全に警戒を解いて無防備に相手へ近付いた。これでこのウサギっ娘も少しは私達を信用してくれるだろう。

「私はイリス、そしてこっちに居るのがミキータ、ロビン、シャルリア、叶だよ」

みんなも一言ずつ自己紹介をし、最後にウサギっ娘の名前を聞いてみた。

もう少し警戒されるのかと思ってたけど、私達が麦わらの一味だと知ってからは寧ろ友好的な態度を取っている。ナミさん達が彼女と知り合いになってくれるのかな？

あと、ウサギっ娘はキャロットと言うらしい。ボソツと嫁にしたいなあって眩いたら  
叶に呆れた視線を向けられてしまった。

いやでもね、可愛いじゃん、キャロット。……よし、嫁にしよう！

## 206 『女好き、豪快な水浴び』

「それでキャロット、ナミさん達はどこかな？」

簡単な自己紹介も済んで、少し言葉を交わしてから本題に戻る。視線はちらちらとキャロットのウサ耳を捉えてしまうけど、今はナミさん達が優先だ……！

「ナミ？ナミなら——」

「キャロット！話途中すまない、くじらの森に侵入者が！」

何やら慌てた様子のこれまたミンク族が姿を現した。キャロットがウサギなのに対してこの人は犬……なのかな？耳も顔の特徴も犬っぽいし。

「くじらの森って？」

「クジラみたいな大木の周りの森をそう言うんですよ。ここは周りが木に囲まれていまずので見えづらいですが」

へえ、じゃあこの木よりも高く跳べば見えるって事だね。くじらの形をした木も気になるし、高さを稼いで上からナミさん達も探せるし、よし、跳ぼう！

「くじらの森に侵入者……?!」

「ええ、マズい事に！ガーディアンズ 狭客団を怒らせてしまう!!」

「……！ちよつと見てみる!!」

「じゃあ一緒にどう?」

「え? うわつ!?!」

ぐいん、とキャロットを慣れた手つきで横抱きして勢いよく空へ跳んだ。地面がぶよぶよしてるからトランポリン程じゃないけど跳びやすく……つてこれ跳び過ぎた! 30倍はやっぱり過多だったかなあ…。

くじらの形をした大木は発見出来たけど、その高さすらもぐんぐん追い越して遥か上空へと跳んできてしまった。腕の中でキャロットがぼかんとした目で周りを見渡している。

くじらの森に侵入者、だっけ? 確かにあの辺で諍いが起きてるみたいだけど、どれどれ。

「視力倍加、つと。……あー……ルフィかあ……」

「え?! 見えるの!?!」

「ふふ、凄いでしょ?」

「すつごーい! ゆティア、私より高く跳べるし遠くが見えるんだね!」

そこまで褒められると少し照れくさいけど、可愛い子によいしょされるのは気分が良いいものだよな、あつはつは……なんて笑ってる場合でもないけど!

ルフィが牛のミンクと思われる大男と何故か戦ってるから、場合によつては参戦しなければいけないし。

ガーディアンズ？だっけ、それが何なのかは分からないけど、ガーディアンという言葉葉だけ聞けば何かを守ってるってイメージが湧く。これは完全に予想でしか無いけど、あの牛のミンクはこの国を守る役割を担ってるんじゃないかな、だから不法入国のルフィを見過ごさずに戦いが起こった。

「ま、行けば分かるか。あとキャロット、私の事はイリスで良いよ」

「あ、うん！分かったよイリス！」

その返事を聞いてにつこりと頷き、空中を蹴りながら「ビューマ神背」を使用する。

キャロットが当たり前のように現れたもう一人の私に目を見開いていたので、私の能力で増やしたんだよ、と説明しておいた。説明になつてない気もする。

「ごめん、私」、ちよつとあそのルフィが暴れてる場所まで向かわなくちゃいけないから、下にいるミキータ達について来て貰うように言ってくれるかな？ミキータとロビンは大丈夫だろうけどまだシャルリアにはキツイだろうからあなたが背負つて運んできてね」

「はいはい、分かりましたよ。全然良いんだけどね、最近「私」って便利屋みたいな扱われ方しかされてないんじゃない？」



「嫌なの？」

「……これが嫌じゃないんだよね。まったく……これも役割を全う出来る能力としての性かなあ」

色々とブツブツ言いながら「私」はお願ひ通り下へと降りていった。

下の事は任せたから、私はこのままルフィと合流するとしよう。

力強く宙を蹴り、軽い爆発音を響かせながらミサイルの様にくじらの森へ突っ込んでいく。

中々のスピードを出しているつもりだけど、腕の中のキャロットは臆した様子も無く只々この速度に感心している様だった。

「ゴムゴムのオオ！鐘エ……つぶべらっ!？」

「あ、ごめんっ」

真つ逆さまに下へと降り、着地の為にくるつと体を縦に回転させた時に丁度着地点へとルフィの頭が伸びて来て思いつきり頭を踏みつけてしまった。結構な勢いがあったものだから衝撃で小規模なクレーターが出来上がっていて、ルフィの相手をしていた牛のミンクも突然の出来事に困惑している様だ。

「いた……くはねエな。イリス、邪魔すんなよ！今こいつとケンカしてんだ」

「ケンカは良いけど、なんで後から来た筈のルフィがこんな所に居るの？道に沿って進

めば私達に合流できる筈……ああ、だからか」

道に沿って歩いてくるのはあんまり想像出来ないし、単身切つて森を突き進んでた所で牛のミンクに遭遇したつてトコか。

「ロデイも落ち着いて！そティアは麦わらの一味だよ！」

「むウ……!?モオ……そうだったのか……！だが、ここは……！」

牛のミンクは困つた様な表情を作る。不法入国というより、この「森」に侵入したのが悪かつたのかな？守つてたのは国じやなくてこの森だったとか。そういえばさつき  
の犬のミンクも「くじらの森に侵入」つて言つてたつけ。

「沢山の気配に囲まれてるみたいだし、早くここから退散して安心させてあげないとね」  
今この場でルフイと戦っていたのは牛のミンクで、近くにはゴリラのミンクも居る。  
ただどそれだけじゃ無く森の木々に潜んで沢山の気配が私達を監視する様に囲つてい  
るのだ。

正直落ち着かないけど、監視だけで襲い掛かつて来ない所を見るに中々理性的な種族  
だという事が分かる。

それに何故か人族、しかも巨人族までここに居るみたいだった。クマっぽいミンクと  
一緒に居るし、どこかで見た事あるから多分あの人達がローの仲間、かな？

「キャロット！無事か!!」

「ワンダー！」

そこへさつききの犬のミンクも合流し、その後ろからはシャルリアを抱えた「私」や、叶、ミキータ達もやって来た。きつちりと役目を果たしてくれた「私」にお礼を言つて能力を解除する。

「不思議な奴らばつかりいる国だ、チョッパーがいっぱいいるみてエだな」

魚人島を経験してるとし、この世界は元々多種多様の種族が言葉を用いて意思疎通してるから驚き自体は少ないけどルフィの言う通り新鮮ではある。

小動物的な意味での可愛いもの好きって訳じゃ無いけど、もふもふできるミンクが居るのならそれはそれで気になるよね。なんならキャロットのおしりから出てる丸いもこもこ尻尾に顔埋めたい。

ガイテイアンズ  
「俠客団！すぐに連れ出す、許してくれ」

「……ワンダに免じて退くぞ、ロデイ、BB！全員退け!!」

直後、周りの木々からザザッと足音が鳴り沢山の気配が遠ざかっていくのを感じた。

牛とゴリラのミンクもそれに合わせて撤退し、ルフィやミキータ達は囲まれていた事に気付いて驚いている様だ。

「今が月夜でなかった事に感謝しろ」

「?。」

ワンダがルフィに向けてそう言つて、イマイチ理解できずに首を傾げる。

月夜?まさか狼人間みたいな感じで月を見たら強くなるとかそんな力があるって事かな?

「で、あなた達はローの仲間だよな?名前なんだっけ」

「ベポだよ!女王は覚えてなくてもおかしくないけど、麦わらは頂上戦争の後世話してやつたら?!シヨックだぞおれ!」

ベポつて名前のクマっぽいミンクがそう叫ぶ。

彼の隣には2人の人間と1人の巨人族が居て、やっぱりローの仲間で間違いなさそうだ。

「いやー、新聞読んでたよ!驚くニュースばかりで!おれ達同盟なんだろう?」

「キャプテンも一緒か!」

「うん、ローも居るよ」

「良かった!来てくれたんだな!キャプテン!早く会いてエよく!!」

ローはあんな感じだけど仲間にはすっかり慕われているみたいだ。なんだかんだで義理堅いし、冷たそうに見えて情に熱かったりするもんね、ローつて。

「ねえ、少し良いかしら」

「なんだ？」

「私達はここへ来る途中、破壊された門や荒らされた道を見てきたわ。しかもごく最近の跡……。答えづらいなら無理に話す必要は無いけれど、一体この地で何か……？」

ロビンの質問にワンダが軽く目を伏せた。……そういえば、さっきの牛のミンクもゴリラのミンクも体に包帯を巻いていたっけ。荒らされたのは住処だけじゃない、彼女ら自身も当然の様に被害者なんだ……。

「……ゆティア達には話す、恩人の仲間達には知る権利もあるだろう。だけどここに長居するのは良くない、移動しながらでも良いだろうか」

「ええ、ありがとう」

そういつて先導するワンダに着いていきながら、シャルリアの隣に移動して疲れていないか確認を取る。スモーカー達との特訓は短い時間ながらも彼女に少なくない影響を与えている。けどまだ私達程に体力がある訳でもないからやっぱり心配してしまっただけ、案の定というべきかシャルリアは美しく微笑んで大丈夫だと返してきた。

そうは言っても心配なものは心配で、とりあえずシャルリアの左手をギュツと握っておく事にした。そんな事をしていれば今度は私の左手がロビンに握られ、まるで両親と散歩する子供の様な感じに……って、誰が子供じゃない!!

「この国は、半月前に滅んだのだ」

「滅んだ……!!」

「数百年の歴史ある国の名は「モコモ公国」。つい半月前の記憶を辿れば皆の幸せな顔が浮かぶ……!!」

……酷いね、それは。

今までも私は色んな国の危機に何度も立ち会って、仲間達と力を合わせながらそれを乗り越えてきた。

でも今回は……。

「その、原因は……?」

「……この国を滅ぼした者の名は、『ジャック』……!!」

悲痛な面持ちで語るワンダは当時の事を思い返しているのか少し肩を震わせていた。

さつきルフィと戦っていた牛のミンクに、包囲していたガーディアンズ俠客団、彼らは1人1人が洗練された戦士の気配を放っていた。

そんな国を滅ぼせるんだからジャックとやらの強さは窺い知れるというものだ。

「つ、わ!何だ、地震!?!」

「噴火雨が来るぞ!木に登れ!」

突然足場が揺れ始めベポ達が騒ぎ出した。噴火雨とやらが何なのかは分からないから対策のしようが無いのだけど……。

「ワーニーに乗れ！」「右腹」へ案内する。仲間達の元へ！」

「良かった、サンジ達いるんだな!!」

「……っ」

「……？」

ルフィの声に苦い顔をするワンダが気になるけど、今は追求している暇は無さそうだ。

「イリス、ロビンとシャルリアを抱えて空へ。ミキータは一人で大丈夫ですよね？」

「え？わ、私空は飛べないわ！イリスちゃんに抱っこして貰わないと！」

「はいはい、じゃあ行きますよ。『ウインド』！」

さらりと流されたミキータはしくしくと残念そうに空へ舞い上がり、私もロビンはおんぶ、シャルリアは横抱きして宙を蹴った。

直後、頭上から「雨」と呼ぶにはあまりにも凝縮された水の塊が落ちて来て――。

『ウオーター・プロテクション』!!」

が、その水の塊が私達に直撃する事は無く、叶が発動させた『プロテクション』の水版によって防がれた。

今回は丸い球体では無く半円のドーム形で足元はガラ空きだ。これは多分ミキータの噴射風が外に逃げる様気を使ってくれたのだと思う。

通常の『プロテクション』とは違い、なんだか降ってくる水を吸収して更に硬度を上げていく様にも見えた。水に対して高い防壁と吸収力がある防壁……多分、水だけじゃなく火とか電気バージョンもあるんだらうなあ。

にしてもこの『噴火雨』とやらは一体何なんだろう？下は洪水みたいになってるし、ここはゾウの背なのに……。……ん？ゾウの背??

「まさか、水浴び……?」

「へえ、頭の回転は王華より速そうですね」

『ちよつと叶！それ酷くない!』

中で王華が何やら叫んでるけど無視しよう、うん。

ゾウの水浴びといってもこれだけ大きなゾウだからね……。そりゃこんな規模にもなるか。でも、そんなの頻繁にされちゃ私達能力者からすればたまったもんじゃないけどね……。



## 2007 『女好き、久々の一味集合！……ならず』

ワーニーというおつきなワニの手綱をワンダが握り、その背にルフィとキャロットが乗って進むのを空中組の私達が追う。

その際にワンダから噴火雨についての説明を聞いた所、やはりこれはゾウの水浴びらしく、頻度は1日に2度程度だそう。ちなみにゾウの名は「ズニーシャ」という。

雨は都市の中心にあるろ過装置で水路に流れ出て国中の生活用水に変わるし、一緒に魚も降ってくるから食料にも困らない。私達能力者にとっては脅威でもミンク族にとっては恵みの雨という訳だ。

「おい麦わら達！おれこの森出られねーから、おれ達の事キャプテンに言つてここへ呼んでくれよ！」

「そうなのか？分かった！」

ベポは木と木を飛び移りながら移動している。クマだと思つていたけど猿とか、コアラとか……ううん、何のミンクなのか分からない……！

「ベポはここの生まれだけど「海賊」だから、今はこの森の親分「ネコマむしの旦那」の預かりになってるんだ！」

「へえ、その辺はしつかり線引きしてるんだね」

「形だけかもしれないがな。海賊とはいえボは同郷の仲間、部外者として扱うのは我らとしても本望ではない」

「良いな、それ」

ルフィはそれを聞いて満足そうだった。まあそういうの好きだしね、うちの船長は。

やがて森を抜け、私が最初に物見櫓で見た町へとやって来た。

さっきの水浴び、噴火雨に順応しているだけあって水の引きは早く、ボロボロに崩壊した家屋や、バツの形をした礫台——所謂拷問具なども視界に入ってきた。

「……台だけではありません、そこを伝い流れ落ち、水の上からでも視認出来るだけの血の跡が地面に残っていますわ。……酷い拷問を受けた証拠です」

「流石だね、私には分かんないや」

「……イリス様の様に心が美しい方は知らなくて当然の事ですから。この知識は私が入りでは無かった時、実際に……その、*“体験”*して得た物ですの……」

「……そっか」

これもまた、シャルリアが乗り越えるべき試練だという訳だ。

でも、決して己の行いから目を逸らさない彼女は確かに強いとはいえ、震える体は抱き抱えてる私相手に隠せるものでもない。かといって私が変に口出しする事でもない

だろうから、今はただシャルリアの心の負担を少しでも一緒に担げる様に強く抱き締め  
た。

「誰だっけ、さつき名前言ってたな……この国襲った奴の……」

ルフィもこの惨状を見て思う事があるみたいで珍しく自分から質問していた。

「『ジャック』だ……！先日新聞に死亡記事が出ていた」

「死亡……？」

「ドフラミンゴを護送する4隻の軍艦を襲撃し、2隻を沈めたが返り討ちにあつたと  
……！」

という事はそいつはドレスローザに来てたんだ。

……しまったなあ、どこかですれ違つてたんだ。それ程に強くて凶悪な気配なら、あ  
の時酔つてなければ気付けてたかもしれないよね。

あ、でも結局死んじやつたんだっけ……。

「大将や前元帥の乗る艦を襲うほど頭のネジが飛んでいる男だ……、記事では死亡確認は  
無し、多分まだ生きてる。私達は……ジャックを許さない！」

「死亡記事は出てるのに確認してないってどういう事？海とかに突き落としてそのまま  
放置してるとか、大規模広範囲攻撃でも頭上から降らせて一片も残つてないとか？」

「それは分からないが……！っただけ確かに言える事がある、ジャックという男はそう簡単

に死ぬ様な奴ではないのだ。∴その事は私達が良く知っている。——そろそろ着くぞ  
霧が深くなつて来て、辺りの様子が目で見て取れなくなつて来た。

……あれ、そういえば…。

「ねえ、ゾロ達つて私達の向かう場所知らないよね?大丈夫かな?」

「ゾロ達ならさつき森で会つたわ。丁度イリスがそのウサギの子を抱えて飛んでいった  
時ね」

あ、あの時ね。

その事を私に伝えようとはしたらしいんだけど、どうにもタイミングを見失つていた  
そうだ。実際そんな雰囲気でも無かつたし仕方ないと思う。

で、肝心のゾロ達の動向だけど、それに関しても問題無いらしく行き先はワンダが伝  
えてくれていたみたい。

「シャンブルズ」

「おっ」

噂をすればなんとやら、ローの能力で私達の目の前にゾロ達が転移してきた。え?実  
際は転移じゃなくて交換?何言ってるのか分からないよ王華。

足元の水も随分捌けてきたのでシャルリア達を降ろし私も歩く事にした。

「お前らーどこ行ってたんだ?」

「どこかに行つたのはためエだろ!!」

フランキーとウソツプがルフイへ突っ込みを入れた。まあ何はともあれ侍組以外は揃つたし、あとはナミさん達と合流出来れば久し振りの一味全員集合だ! あー! 早くナミさんに会いたい!

「にしてもここは霧が深エなア」

「と、遠くが見えねエのは危険だ! いつどこで誰に狙われてるか分からねエ! よしイリス君、霧を晴らしてくれたまえ!!」

「え、やだ」

「即答かよ!!…で、でもよく、こうも辺りが見づらいと咄嗟の行動が出来なくねエか? お前の嫁も危ねエだろ、な?」

「大丈夫だよ、絶対守るから」

ウソツプの希望通りに霧を晴らす事は出来るけど、それは止めておく事にした。

ナミさん達の場所へ私達を案内しているのだとしたら、今向かっている場所はミンク族の隠れ家みたいな所だろう。何やら恩人とまで言われているナミさん達をその辺で野宿させてるとは考えづらいし、住んでいた町はジャックによって破壊されてしまっている。だとしたらこの霧を払う訳にはいかないよね、ミンク族にとって姿を隠すのにうってつけのロケーションだし。

「着いたぞ、ここが目的地だ」

そういうワンダの視線の先には、霧で見えづらいくけど薄らと門の様なものが見えた。その近くに強そうな気配が2人程居て、門の向こうからは沢山の気配を感じ取る事が出来……、つああ!?この気配は……!!ま、間違いない……っ!!

「ナミさんっ!!」

「おい待てイリス!いくらお前でも人嫌い集落に単身突っ込むのは危ねエぞ!!」

「大丈夫!!だってナミさんの気配を感じたし!!お、これはペローナちゃん!!」

他にもチョップパーが居るみたいだけど、どこか出歩いているのか近くにサンジやブルックの気配だけ感じ取れなかった。でもあの門を越えたらやっとなミさん達に会えるんだ!!ああ、興奮してきた!!

「叶!私先行くからミキータ達をよろしく!!とう!ちよつと失礼ツ!!」

「は……っ?ま、待て!入るのは構わないがそこには門番が……!」

何か聞こえるけど無視!この門の先にナミさんが居るんだ!ペローナちゃんが居るんだ!へへ、2人にはシャルリアの事を紹介してちゃんと知って欲しいし、モネやベビー5、それからレベツカちゃんとの話も聞いてほしい!!

「っ、ワンダ、侵入者か!?!」

「生まれ!そガラ何者か!?!」

「私？私の名前はイリス!! 未来のハーレム女王なんでよろしくお願ひしま——すっ!!」

流星にテンションが上がっているとはいえ、この状況で理不尽に門番である彼らを攻撃しようとは思わない。腰から剣を抜いたライオンっぽいミンクの攻撃を誘って、水平に薙ぎ払われた剣の上にタイミングよく足を乗せて場を作り大きく跳躍する。その勢いのまま宙を蹴って速度を増し、一瞬の出来事にぼかんとしているみんなにごめんなさいと手を合わせてその高い門を飛び越えた。

「おお………」

その先の光景は外と違って霧も無く、森の中に何戸も家が建てられている、そんな圧巻のものだった。

家はなんだかパイナップルの形だし、巨大な木の根に巨大船が挟まっていたりして、けど、雰囲気と言えばエルフの里って感じかな？道が整備されてる訳でもないし、なんなら自然に出来る樹洞とは違って「自分達で木をくり抜いて作りました」みたいな木の中を加工する事で生活拠点としている家もある。

「イリスッ!!」

「っ、ナミさん!!」

幾つもある家の中でもかなり豪華な造りになっている建物……というか木なんだけ

ど、そこからナミさんが飛び出して私の元まで走ってきた。って、ええ!?何その服!?スレンダーラインのドレスっぽいけど、丈は足首までしかないしその太ももからさつくり開けてるスリットは何ですか!?!えっちが過ぎるツ!!!

むぎゅ!と力強く抱き締めて胸に顔を埋めれば、なんと素晴らしき匂いだろうかと昇天しそうになる。ペローナちゃんとチョッパーも出てきたし……あれ?なんかぞろぞろと一杯出てきたけどどうしたのかな?まさか勝手に入ったから怒ってるのか……。

とかなんとか思っていると、背後の門が開いて外からルフィ達が入って来た。

叶は私を見るなり呆れた顔だが、シャルリアはナミさんを視界に納めるとどこか緊張した面持ちを見せていた。ナミさんは私の正妻だし、自身の過去に負い目があるシャルリアとしては最初の挨拶をどうするかとか考えてそう。

「皆の者・先立って門を飛び越えた者も含めて大切な客人達だ!大恩人達の仲間にもてなしの準備を!!」

ワンダがそう声を張り上げれば、家の中から次々に姿を現したミンク族達が『ガルチユ〜!!』と挨拶?をしてきた。

ようこそ麦わらの一味ー!

とか

そガラ達の仲間のお陰で助かったぜ!!



とか。

ミンク族は人嫌い。そう最初は言っていたローも驚愕の表情を浮かべている。ていうかロー、あなたは仲間にあれだけ人懐っこいようなミンク族が居るじゃん!!

「あれ〜!?なんだ!?明るい雰囲気だぞ!!ガルチューー!」

「ナミ達も元氣そうで何よりだぜ!いやア、お前らが無事で本当に良かった!にしてもこりやどいう事だ?ミンク族は人嫌いな種族の筈だろ?」

「種族か…、それは他のミンクを知らぬ者達の怯えかもな、私達から見ればゆティアらは毛の少ない“サル”のミンク、同族の一種だ。嫌うなら個々を判断する」

へえ… “他のミンク” って言い方が気になるけど、まあ今は良いか。

なんたつて今はナミさんの胸の中だし!ああ、嬉しすぎて体が震えて来ちゃった! ……ん?いや、これ震えてるのナミさんじゃん!

「イリス…ルフィ、みんなも、ごめん…!」

「え?ナミさん、一体どうしたの…?」

歓迎ムードで明るい雰囲気の前とは対照的に私の心はスツと冷たくなっていく。だって…ナミさんが泣いてる。

更に強く抱き締めて背中を撫で続けて数分、ナミさんは落ち着きを取り戻して口をゆつくりと開いた。

「サンジ君が……!!」

## 2008 『女好き、禁句の言葉』

サンジが手紙を残して一人ビッグマムの所に行ってしまった。

それを聞いた私達は眉を寄せて頭を捻る。

ナミさんが言うには、何やらサンジの様子がおかしかったらしいのだけど……。

「積もる話もあるだろうが、ゆティア達は私達の恩人だ。宴の場も用意しているので着いて来てくれないか」

「宴?!肉はあるか?!」

「酒は?」

「静かで雰囲気の良い暗い部屋はねエのか」

宴と聞けばルファイ達が黙っている筈もなく、対照的にうんざりとした感じのペローナちゃんも内心ではどうせ私達とまた会えてほつとしているのだろう。だってペローナちゃんだし、ほんと可愛い。

案内されたのは奥にある他の建物より大きい家で、まあ家といっても巨大な木の枝からぶら下げられたパイナップル状の形をしているので、果たしてこれを家と呼んでもいいものかは甚だ疑問ではあるけどね。

そこへと案内された私達の目に飛び込んできたのは、ワンダが言っていた通り準備が既にされていた宴の場だった。

何の肉かは分からないけれど、船長が肉好きだという話を聞いたのか大きなテーブルの上には肉がメインで置かれている。お酒類も樽丸ごと部屋の隅に何個も置かれている様でそれを見たゾロが嬉しそうに軽く上唇を舐めていた。

「あ、そういえばロー、ペポがくじらの森で待つてるって言ってたよ」

「そうか、なら俺はまずそこへ向かう。落合場所は決めておくか?」

「別にいいんじゃない? 探せば良いんだし」

私達の行動範囲もそんなに広くないし、ローの行き先も分かっているんだからそこまで気にする事もないだろう。

最悪分からなくなれば探すしね、女王化使って。

そんな訳で、宴には参加せずに去っていったローを見送って私達はそれぞれ美味しい食材が置かれたテーブルの前に座った。

「イリスー! ガルチューー!」

「!!?」

私の隣に腰掛けたキャロットがいきなり頬擦りをぶちかましてきた。

ガル、ガルチューー? なにそれ!?

「多少の文化の違いは大目に見てくれ、ミンクシップは友好の証なのだ」

固まっている私を見て緊張か不快感を覚えていると勘違いしたのかワンダがそうフオローに回った。

ほほう、友好の証とな……？

ちらりと視線を周りに向け、この場に居るミンク族を瞬時に把握して歓喜した。だって、凄く可愛い子が沢山居るんだもん!!ミンクシップは友好の証なんでしょ?どこまでが許されるの?キスは大丈夫なの!!?

「大体何を考えているのかは分かったが、お前はいつも文化に関係なく迫ってくるじゃねエか」

「のんのん、合法だと言うのがまた良いんだよペローナちゃん。非合法のスリルを味わうのも一興だけど、許された範囲で事を始めるのも堪らないんだよ!!ガッルチュー!!」

「わっ!」

思いつきキャロットを抱き締めて頬をすりすりしてみる。さらさらとした動物の毛が肌に擦れて気持ちいい。どきどきに紛れてぽよんも触っておこ。犯罪?ハッ、私は既に犯罪者だもんね!!

普段よりもテンションが上がっている事を自覚しながら立ち上がり、可愛いミンク族の人に狙いを定めてガルチュー爆撃を開始した。

「あーっ!!み、み、皆さ〜っ〜ん!!」

「ガールチュー!!……ん?あ、ブルック?」

キツネのミンクかな?少し尖った耳にふわっとして尻尾の娘が可愛すぎてガルチュってたら勢いよく家の扉が開かれてブルックが入ってきた。

「新聞読みましたよオ!無事で何よりです!」

「そつちも元気そうで何より……って言いたい所だけど、何かあった?」

私達の無事を喜んでくれてる割にはブルックの方がボロボロになっていて、骨の部分に欠けなどは見当たらないけど身につけているコートの裾や袖、ズボンなどが何かに齧られた様に傷だらけだった。

「これは色々とありまして……!それよりも皆さん、サンジさんの件本当に申し訳ない!合わせる顔がありません……!!元々顔面無いですけど!」

「それにモモの助も居なくない?一緒じゃなかったの?」

「あ!ちよ、ちよつと静かに!ゾウ新入りの皆さん、こちらへ!」

モモの助の名前を出した途端に慌て出したブルックに呼ばれてキツネちゃんから渋々離れ集合する。ナミさんとペローナちゃんも私の近くにきて、家の隅の方で丸く固まって円陣を組むみたいになってるけど、逆に目立つよねコレ。

「今錦えもんさんはどこに……!」

「もうじき着く筈なんだけどな」

「——ちよつとこの国では、『侍』：ワノ国という言葉は極力控えて下さい。出来れば、言わないで。多くの人々を傷付け、『恨み』『怒り』を買うかもしれません」

「……どういふこと？」

「……」

要領を得ないブルツクの話に自然と眉間に皺を寄せる私達だけど、ただ一人、叶だけはいつもと変わらない自然体だった。つまり今はまだ原作の流れ通りという事だよね。

「叶、何か知ってる？」

「ちよつと待つてイリス、カナエって、その娘が？」

ああ、そういえばドレスローザ組は色んな所で叶と共闘したりして面識あったけど、ゾウ先行組は今が初対面だっけ。

「初めまして、叶です。縁あつて麦わらの一味の傘下となりまして、今はこうして行動を共にさせて貰っています」

「と言う事はイリスの事情も分かっているって事？」

「はい」

「てことは船に四異界2人乗るって事じゃねエか、流星に海軍が黙って無さそうだな」

「その時は黙らせるから大丈夫！」

そう言う事じゃねエだろ、とでも言いたげなペローナちゃんの視線をにっこりと笑顔で受け止めて今度はシャルリアへと視線を向けた。

「彼女はシャルリア、2年前にシャボンディのオークションに居た綺麗な天竜人の女性を覚えてる？あの人がシャルリアね」

「へえ、ドレスローザに居たの？あんた、ちゃんと嫁には出来たんでしょねえ？」  
「勿論！」

「……オイ、嫁にしたつつつてもそいつは天竜人……はア、考えるだけ無駄だな」

今までの人の反応と違ってナミさんとペローナちゃんはシャルリアを嫁にした事をどうこう言うつもりは無いみたいだ。流石私の可愛くて美しい嫁!!

「さっきの質問に対する答えですけど、色々と知っていますよ。例えば、『侍はこの地において禁句』、これがただの勘違いという事とか」

「ええ!!で、ですがミンク族の方々は……!!」

叶の言葉にブルツクが少し声を荒らげた。ナミさんとペローナちゃんもブルツクの懸念を肯定する様に軽く頷いている。

「まず事情を知らないイリス達にも分かりやすく説明しますが、ここ『ゾウ』は15日程前に襲撃を受けています。丁度私達がドレスローザでドフラミンゴ達と戦っていた頃ですね」



それならば私達も既知の情報だ。襲撃者はジャックという男だと言う事も、その死亡記事が出たって事も。

「襲撃者は『早害のジャック』、四皇の一人であるカイドウの配下です」

「え!? そうなのか!?!」

「はい。ジャック率いる軍勢と戦獣民族と呼ばれるミンク族の戦いは互いに決定打を与える事が出来ないまま5日が過ぎました。普通5日も攻め続けて押し切る事が出来なければ、侵略者は体勢を立て直す為に一度引くのが定石です。地力勝負になればホームであるミンク族の方が圧倒的に有利ですからね」

「つまり、ジャック側には引けない理由と、引かなくてもいい切り札があったって事だね」

「その通りです。ジャックの目的は錦えもんの仲間である『雷ぞう』なので、雷ぞうを捕獲するまではこのこ帰れなかったのでしょう。イリスも見ましたよね、町にあった砲台などの拷問具を。あれらで『雷ぞう』の居場所を吐かせようとしていたんです。長く続く戦は一進一退の激しい攻防を繰り返しましたが、ジャック側が生物兵器という切り札を切った事で状況は一変しました」

叶曰く、その兵器の名は『KORO』と言ってシーザーのぼかちゃんが生み出したかなり危険な毒ガスらしい。その威力、効果は絶大で、ずっと互角にジャック達と争って

たミンク族を一気に壊滅まで追い込んだ程だと。

今この地にその毒ガスの残滓すら残っていない理由は、発明者であるシーザーが『KORO』に対する中和剤、『ROKO』を使用したから。

もしナミさん達がこの地に辿り着くのがほんの少しでも遅れていれば、それだけでこの国の全員は為す術なく毒ガスの猛威によって生を奪われていた。ほんと、シーザーつてロクでもないね。

「でもナミさん達が無事で良かった、ビッグママの船に襲われてたんでしょ？」

「ええ、まあこつちにはサンジ君も居たし、相手がペローナの能力を理解してなかったからそれ程撒くのに苦労はしなかったわね」

「それでも凄いよ、やっぱり私の嫁は最高だよね！そうは思わない？ウソツプ」

「なんでおれに振るんだよ！それ肯定するまで同じ問いかけする気だろ!!」

「こそこそ話してた筈が既に騒ぎになりつつあり、ワンダを始めとするミンク族の面々も首を傾げて私達を見ている。」

と、そこへ一人のミンク族が慌てて家に飛び込んで来た。

「みんなー！公爵様がお目覚めになられたよ!!」

「えっ!!? 本当か!!?」

「良かった…っ！このまま目覚めないかと…!!」

公爵様か。つまりこの国の王でしょ？ 私達も挨拶くらいはしておいた方が良いかも。

「ワンダ！イヌアラシ公爵がぜひ恩人達にお会いしたいと……」

「あア……すぐに！」

お、丁度いいね。

なんとというか私達って行く先々でトップの人と顔を合わせてる気がするなあ……。ルフィの持つてるコネって良く考えなくてもとんでもない事になってそう。

公爵様が目を覚ましたという事で、私達よりも先に慌ててチョッパが現地の医者を引き連れ目的地へと向かって行ったのを見送り、私も食べ損ねていた料理を幾らか拝借して移動を開始する。

『右腹の砦』と言うらしいこの場所は、巨大な木の中をくり抜いて洞窟の様な道を作っているらしく、その枝一本一本が別の場所へ辿り着くための道となっていて知らない私達からすればまるで迷路の様だった。

今はイヌアラシ公爵の療養所へと繋がる枝の中を歩いており、道中でワンダがジャックにより齎された災害を語る。

叶から聞いた内容と照らし合わせれば、此度のミンク族が襲われた悲劇の大筋も見えて来た。このお肉美味しい。

まず、ジャックがゾウを襲った理由だけど、これは「雷ぞう」という1人の侍——と

「いか忍者を求めての暴挙であった。ワンダは『居ない者を出せと言われてもどうする事も出来ない』と語り、三日三晩続いた拷問の日々を顔を伏せて語る。……なんというか、ブルツクが侍は禁句と言った理由が良く分かる話だった。侍が原因で無慈悲にも襲われ、あわや国が滅びかけたのだから私達が侍と知り合いだと言えば敵対する事になるかもしれない。

「こんなのどう聞いても『侍が禁句なのは勘違い』とは思えず、私はどう言うこと？という懐疑的な視線を隠さず叶をジトつと半目で睨んだ。

「……はあ、まあ、見てて下さい」

「そう言うとき叶はワンダの隣まで歩いて行き、まるでそれも世間話の1つだと言わんばかりの気安さで話しかけた。

「ワンダ、侍なら私達と一緒に此処へ来てますよ、『雷ぞう』を迎えに来たそうです」

「え？」

「お、おいおいお前！何言ってるんだ！」

「ウソツプが顔面蒼白で挽回しようとしてるけど、流星に今の流れから誤魔化す事は出来そうもない。

「もうこうなったら叶をとことんまで信用するしかないだろうから、私も腹を括るとしよう。叶え……これでもし原作知識が外れてたら怒るからねえ……!!」

ちなみに私が宴の場から拝借してきた肉はいつの間にか手元から消えていました。ルフィの頬がもぐもぐ動いているから、後でちよつとしばく。

## 209 『女好き、モコモ公国の公爵様』

「……雷ぞう？知らんな、さつきも話した通り、私達はその人物に心当たりはない」

「証明ならばこの国の正門にでも行けばすぐ分かりますよ」

ワンダの震える声と叶の変わらない声が交差し、その後ろで固唾を呑んで見守ってる私達は内心ドツキドキであった。…いや、ルフィは気にしてないっばい！たんこぶはあるけど。なんでだろねえ（棒）

「こう見えても私、結構な情報通です。あなた達ミンク族が光月家と深い関わりを持つている事も既に承知の上です。更にはイヌアラシ公爵だけではなく、この国には『夜の王』として『ネコママシの旦那』というもう一人の王が居る事も知っています」

「……確か、カナエと言ったか？」

「え!?ちよ……!」

情報通とか、また面白い言い回しをしてるなあって思ってたらいきなりワンダが剣を抜いて叶の顔前に剣先を突きつけた。その瞳には敵意こそ、まだ、無いものの、明らかに私達に対する警戒心が多く宿っている。

「どこでその情報を手に入れた？ネコママシの旦那はともかく、私達と『光月家』の繋

がりは関係者以外知る筈が無い事だ……！詳しい事は私にも分からないソレを、どうしてゆティアが知っている……？」

「……ごめんなさい、私はその事を知っている理由は置いておいてくれると有難いです。ただ、嘘は言っていません、侍は私達と共にこの地へ雷ぞうを迎えに来ています。……そうですね、10秒だけ時間をくれませんか？」

「……良いだろう、ゆティア達にはこの国を救って頂いた恩がある、その少ない時間で私を納得させる材料を揃える事が出来るのなら、待とう」

「ありがとうございます。では——『テレポート』」

シユン、と叶の姿が私達の目の前から掻き消えて、ワンダは目を見開いてきよろきよろと首を動かし、やがて諦めた様に構えていた剣を鞘に納めた。

「はあ……恩人を相手にこの様な態度を取ってしまったて申し訳ない、私達にとってデリケートな話なんだ、色々確認は取る必要があるのでな」

「はは……なんかごめん」

恐らく叶はテレポートで錦えもんとカン十郎を連れて来るつもりなんだろうけど、察する事が出来る私達と叶の能力を全く知らないワンダとでは目の前で起きた出来事に對する脳内処理に大きく差が出た筈。

恩人の仲間だけど知る筈も無い情報を知っていて疑わざるを得ない相手が、自分の常

識を覆す力を目の前で使ってみせたのだ。最悪のパターンとして私達と争う事まで考えていたに違いないワンダにとつてはもはやため息を吐くしか無いという訳で……うん、素直に同情してしまうよね、これは。

「——お待たせしました」

と、宣言通り10秒程度で帰ってきた叶の隣にはやっぱりと言うべきか錦えもんとカナン十郎、あとなんかオマケにちっちゃな猿のミンクも付いてきていた。

「カナエ殿、どうもかたじけない！ さアカナン十郎！ 雷ぞうを探そうぞっ!!」

「うむ、まずは基本の聞き込みからでござるな!!」

「あわわわわ、た、大変でござる！ 侍でござる……!!」

「……は？」

流石のワンダもこの展開は予想していなかったのか、彼女らしからぬ呆然とした表情で口をあぐりと開けさせている。

そりゃあ、まさか本当に10秒かからずに自分を納得させられる材料を揃えられるとは思っていなかっただろうし、仕方ないだろう。

「おオ、ルフィ殿達も一緒にござったか！ む？ モモの助はどこでござるか？」

「モモの助なら体調が優れないからってゾウに着いた時からさっきの右腹の砦にある建物に籠りつきりよ。親なら様子くらい見えてきてあげたら？」



「重ねてかたじけない！カン十郎、雷ぞうを頼んだでござる！」

「相分かった！必ずや雷ぞうを探し出してみせるでござるよ、安心せい！」

そう言う訳で、錦えもんは案内役のブルックと共に私達が来た道を引き返して右腹の岩へと向かつて行つた。

「……紹介する間も無かつたですけど、さっきの彼が錦えもん、そしてこの人が黒……じゃなくて、カン十郎です。見ての通り侍ですけど、まだ信用出来ませんか？」

「……いや、正しくそティア達は侍に違いない。バリエテ、まだ鐘を鳴らす必要は無い、少しだけ待つて欲しい」

「わ、分かつたでござる……」

猿のミンクはバリエテと言うらしい。ワンダの発言からして門番役を務めていたのかな？その小さい体軀を活かして忍者みたいに隠密行動とかしたり？

「ゆティアがそこまでの誠意を見せてくれた所すまないが、個人の裁量で判断は出来んのだ。このまま当初の予定通りイヌアラシ公爵様の療養所まで来てもらおう。公爵様ならば侍の見た目も私以上に詳しいのでな」

「錦えもんはともかく、カン十郎が行つても侍には見えなくない？私なら初見であなたを侍とは見抜けないけどね。なんか歌舞伎役者みたいな見た目してるし」

「その点に関しては心配ありません。この黒炭……おつと失礼。カン十郎とイヌアラシ

公爵は旧知の仲、一目見ればそれだけで済む事です」

「カナエ…それは私も知らない情報なのだが…一体ゆティアは何なんだ…」

はあ、と大きく諦めた様にため息を吐くワンダ。

ていうか、今叶がカン十郎の事を『黒炭』って言った瞬間からカン十郎の叶を見る目が怖いんだよね…。カン十郎は上手く隠してるつもりなんだろうけど、見聞色も高いレベルでマスターしてる私から言わせてみればその程度の視線の隠蔽は効果を成さない。

さつきから叶もわざとカン十郎を刺激してる様な感じだしなあ…。

「なんか色々な思惑が交差してるって感じで疲れる…ナミさくん…」

「はいはい」

仕方ないわね、って感じに差し出されたナミさんの腕にしがみつく様にして歩く。ああ、良い匂い…!くんかくんか。

やがて私達はトンネル枝の中を抜け、別の木へと繋がる橋までやって来た。その橋の向こうにはドーム状の少し大きめの建物がどんと建っていて、ワンダがそれを指差してあれが療養所だと教えてくれた。

「ギヤア〜ツツ!」

「申し訳ないシシリアン様ア〜!!」

「ん？何？」

療養所だと言うのに何やら騒がしく、様子を見てみれば1人のミンクが複数のミンクを木の下へと叩き落としている所だった。……うん、全く状況は分かんないけど、落とされたミンク達は痛がってはいるものの大きな怪我とかは無さそうだね、良かった良かった。

「シシリアン殿、何事ですか？」

「おお、ワンダか……！」

全員を叩き落として息を荒げているミンク族へとワンダが駆け寄る。彼の名前はシシリアンというらしいし、立派なたてがみやその口から生えている鋭い牙などの見た目からしてライオンのミンクと予想してみた。ていうかまず間違いないでしょ？

「あガラ達が甘い事ばかり言うのだな、千尋の谷へ叩き落としてやった所だ!! 優しさ・愛・恋・赤子・砂糖・ハチミツ! わしの前で塩気のない話を二度とするな! 喉笛を食い千切るぞ! さア、自力でここまで上がって来い!!」

私の夢を語ったら死んでしまいそうなミンクだなあ……。とりあえずライオンなのは正解だったみたい。

「シシリアン殿、ゆティア達が麦わらの一味です」

「!!」

「バツ！」と勢いよく振り向いたかと思うと、勢いはそのままに私達の前まで跳躍して土下座をかまして来た。

「こ、これは、生ジャンピング土下座……!!なんていうかこのシシリアンってミンク、一瞬一瞬を常に全力で生きてるって感じである意味カッコイイね。」

「この度は国を救っていただきありがとう!!この恩は一生忘れない!公爵が中でお待ちだ!!さア中へ、グズグズするな!」

「はい」

シシリアンが療養所の扉を開けてくれたので中へ入れば、そこにはチョッパーとゾウの国の医師、そしてベッドの上で上体を起こして湯呑みを啜っている貫禄溢れた大きな犬のミンクが居た。

「身体中包帯だし、布団を被っていて今は見えないけどどうやら左足を失ってしまっている様だった。」

「四肢の欠損って、それはもう拷問というよりただ痛め付けているだけじゃないの……?」

「ああ……公爵様、よくぞご無事で……っ」

「ワンダが感極まってその巨体に抱きついてる。この国の王は随分と民に慕われているみたいだ。普通、王様なら今のワンダみたいなスキンシップは取れない筈だし、心

が広いというか大らかな人柄……ミンク柄？なのだろう。

「ゆガラ達……麦わらの一味」かね。何から何まで救われてしまったな、本当にありがとう」

「はは、私達は何もしてないけどね」

「いや、ゆガラ達にもさ、〃女王イリス〃君、〃麦わらのルフィ〃君」

あれ、私まだ名乗ってないよね？

さつき目覚めたのなら私達の名前を聞く余裕も無かったと思うけど、チョッパーが現状の説明ついでに名乗ったとかかな。

「おオ、イヌアラシか！久しぶりな！」

「ぬ？……なっ!?!ゆガラ、カン十郎殿か!?!」

しかもこの2人は知り合いらしく、カン十郎を見たイヌアラシはその鋭い眼を限界まで開けて驚いている。

この時点で叶の言っていた『勘違い』の証明にもなるけど、ぶっちゃけ部外者である私からすれば何がなんやらさっぱりだ。隣では葉が「名シーンが1つ無くなってしまうましたが、仕方ないですね……」ってちよつと落ち込んでる様子。

ところで、名シーンって？

『ああ、多分、〃雷ぞう殿はご無事です〃じゃないかな。あれだけの拷問や毒で国が滅び

かけたにも関わらず、ミンク族は誰一人として「雷ぞう」の居場所を吐かなかつた。で、錦えもん達がここに来た時に国中のミンク族が錦えもんとカン十郎の前に姿を見せて言ったセリフがそれって訳』

「へえ……」

それはなんというか、知らないルフイ達はさぞ驚いただろう。この世界においては叶が居たからこうして真相を早くに知る事が叶ったけど、まさか国が滅びかけてまで守り通そうとしていたなんて思わないよね、普通。

「彼だけじゃなくて、錦えもんとモモの助も来てるよ。その2人とも知り合い？」

「いや、知り合いではない、いわば同志達だ」

侍組、一国の王に同志とか呼ばれてるけど。ぶっちゃけあんまり気にしてなかったけど、錦えもん達って実は偉い立場なのかな？初めて2人を見た時に直感で感じた2人は親子には見えないって私の勘も、もしかしたら結構的を得ていて今回の話に繋がってきたりして。

よし、もし私の勘が当たってたらナミさんにちゅうしよう。そんで当たってなかったらちゅうしよう。どっちに転んでもちゅうだ!! ヨシ!!

## 210 『女好き、くじらの森への道すがら』

錦えもんとモモの助もブルックとキャロットの案内でここへと辿り着き、積もる話などは後回しにして早速本題の“雷ぞう”の件を錦えもんがイヌアラシに尋ねた。

真剣な話なのでイヌアラシもキリツとしているのだけど、どうもブルックのボーンな体が気になるらしく、表情とは裏腹に涎を垂らしている。どうやらワンダも同じ様にブルックに興味を惹かれているみたいなので、犬のミンクは総じてブルックを気に入るのかもしれない。

私にもんじんぬいぐるみとか全身に着ればキャロットに気に入られるのでは？ ははん、私、さては天才か。

「雷ぞう殿は無事だ。今すぐにも案内したい所だが、もうじき日も沈む。急いでいるのは承知しているが、あそこは視界不良で通るのは危険だ」

「むウ……」

「なら、今夜はとりあえずネコママシの旦那に会いに行きましょう。雷ぞうに会うのは明日の朝、その方があなたも都合が良いのでは？」

「…その通り。実はそれがし、隠してはいたが疲れているのでござる。そこな女には氣

付かれてしまった様だが」

……まただ。なんか叶、カン十郎に良くちよつかいを掛けている。実はこの2人会ったことあるとか？ もしくは……原作知識があるからこそ、叶にとってカン十郎を気にかける必要があるとか。

まあいつか、分からない事をうんうん唸つても正解が出てくる訳じゃないし。なんだっけ、下手な考え休むに似たり、だったかな。

『え、なにその言葉』

本で読んだんだよね、ナミさんの測量室って測量に必要なモノだけじゃなくて、本とか結構置かれてるから。

『そ、そんな……』

ふふん、同じアホでも私は向上心のあるアホなのさ！

「じゃあそのネコマムシってミンクの所に行く道すがらにでも話してくれる？ サンジがどうこうつてやつ」

「そうね、分かった」

落ち込む王華はスルーして話を次に進める。

イヌアラシは着いてくるのかな？ ていつてもその重傷体ではキツイか。

……ん？ ていうかイヌアラシ、寝てない？



「ああ、そうか、もう午後6時を回っているのか」

「まだ6時だろ！子供か！」

納得した様に頷くワンダにウソツプがツツコミを入れる。そこへ、またしても自重を忘れた魔女さんが口を開いた。

「正式な国の王はイヌアラシ公爵ですけど、ネコムムシの旦那にも同等の権利があるんですよ。ネコムムシの一族は代々“くじらの森”の守護を務めていまして…あ、くじらの森っていうのはさつきルフィが突撃していた森の事です」

「……ほ、本当に味方なんだろうな？幾らなんでも外の者にしては詳し過ぎるとしか…」  
「いいえ、“外”の者だからこそ詳しいんですよ。まあ、“外”の次元は文字通り違いますけど。話を戻しますが、イヌアラシ公爵とネコムムシの旦那はとても仲が悪いんです。昔は親友だったそうですけど、今では顔を合わせると殺し合いにまで発展してしまつとか。そうなつても力は互角で決着がつかないから2人はルールを決めました。それこそがこのミンク族の生活サイクルを形作っているモノです」

叶さん、ウキウキである。原作知識を披露するのを明らかに楽しんでるよねこの人。私がワンダやイヌアラシの立場なら全力で叶を警戒するつてくらい饒舌に語っちゃつて、実際ワンダに至つては諦めたのか遠い目をしている始末。

「なるほどな、ホロホロ、その生活サイクルがこの時間にデカ犬が寝た事と関係あるつて

訳か」

「はい。『太陽と共に朝6時から夕方6時まで』、そして『月と共に夕方6時から朝6時まで』、喧嘩ばかりの2人が考えついた苦肉の策で、生活時間を分割して暮らす様になつたんです」

「それはなんというか、随分と仲の良い喧嘩だね」

顔を合わせるの嫌だけど、離れるのも嫌だつて事でしょ？話を聞く限りでは当人達は否定しそうだけだよ。

そしてそれは当人だけではなく、ミンク族全体にも影響を及ぼしているとか。例えばイヌアラシの部下であるシシリアンやチョッパーと共にいた医者達だけど、彼らもイヌアラシと同じく今は夢の中だ。ワンダが普通に起きてる理由は、彼女が「王の鳥」という昼夜問わず2人の王の間を行き来する役割を担っているかららしい。因みにキヤロットも王の鳥なんだとか。

寝ているイヌアラシを起こさない様に療養所を出て、私達はネコムムシの旦那の元へワンダとキヤロットがそれぞれ手綱を引くワーニーに乗って向かい始めた。目的地はくじらの森で、その場所の守護者なんだから当然といえは当然である。

すぐに寝ちやつたからイヌアラシとはあんまり話せなくてとんぼ帰りみたいになつ

ちやつたなあ。

「サンジの話つつつても、あいつが変な手紙残してビッグマムの所へ行つたつて事くらいじゃねエのか」

初めに口を開いたのは意外にもペローナちゃん、どう話すべきか考えているのか顎を摘んで斜め上を見上げている。可愛い。可愛すぎて不意打ちちゅーしてやったぜ。叩かれたけど!!

「変な手紙つてなんだ?」

「順を追って説明するわね。まず私達がゾウに上陸した時には既にシーザーの作った毒ガスが辺り一面に蔓延していたのよ。磔にされたイヌアラシやネコマムシ達も居て、この地の毒を中和させた後はとにかく急いでミンク族達の治療をしたわ」

「ゆティア達には本当に何度感謝してもし切れない、あの時私達は心から絶望し、生を諦めていたのだ。本当にありがとう」

「またそれ? 流石に死にかけてる誰かを見捨てられる訳ないじゃない。それに、無償の奉仕が気になるのなら心配しないで? 打算で助けたつて面もあるから。あんたもそうだけど、キャロットも可愛いでしょ? そういう子達が死んでしまえば落ち込む主人が居るのよ」

「……フフ、どつちにしても私達にとつては無償の奉仕と変わらないな。ゆティアの主

人とやらにも是非会ってみたい」

ここに居るだけどね！」

声高らかに「その主人私です！」って言いたいけど、今はサンジの話が優先だから自己顕示欲さんには引つ込んでおいて貰った。

「おれ達が歓迎された理由は良く分かったな」

「それにチョッパーが居たのも幸運だったね、仮にそこに居たのが私なら、ジャックはブツ飛ばせてもあなた達は救えなかったし」

「そうか…天運にも助けられたか。だが、ジャックを倒すのは容易では無いぞ。悪い事は言わない、仮にこの先の船旅で出くわす事になったとしても逃げた方が身の為だ」

「ですが、ジャックは『死亡記事』が…」

ブルックの当然の問いにワンダは力無く首を横に振った。実際にその意思ある邪悪な災害を目の当たりにした彼女にとっては、死亡未確認の死亡記事などただの紙切にも等しい。

「まあ、ジャックの事は見つけたら殴っておくよ、再起不能ってとこまでは持つていくから安心してね」

「安心出来るか！戦うのはやめた方が良い！この国の2人の王ですら奴を倒す事は叶わなかったのだぞ！」

そう言われても、そんな危ない奴を放置するのもね。もしかしたら私の嫁や、今後嫁になつてくれる人達を傷付けるかもしれないし。

「それで、サンジはどうなつたんだ？この国の連中を助けた時はまだサンジもシーザーも居たつて事だろ？」

「…この出来事、実はこの国の人々にはあまり話してないのです」

ウソップの続きを催促する言葉にブルックがそう前置きする。国を滅ぼされた人達にこれ以上心労を掛けたく無かつたのだと言うが…一体何が起きたのだろう。

「これは、こつそりと起きた大事件…！たつた2日前の出来事…どうか覚悟してお聞き下さい、サンジさんもしかしたらもう…私達の下には、戻つて来ないかも知れませんが……」

「え？」

「えええ!!！」

いきなりの事に理解が追いつかず思わずぽつりと声を漏らす私と、大きく驚愕の声を上げるルフィ。

…ナミさん、ウソップ、ロビン、それから私に続いて今度はサンジか。何が起きたのかは今から話してくれるし、それを聞いてから今後の動きを決めるとして、その話がどんな内容であれサンジを連れ戻すのは確定しているけど。

「ここは『幻の島』、島自体が生物である為に記録<sup>ログ</sup>指針<sup>ポース</sup>でも辿り着けず、普通なら見つける事も出来ない場所。——ですが我々には『失態』と『盲点』がありました…!」

「失態と、盲点?」

「はい。完全に引き離れた『ビッグ・ママ』の艦に目的地を聞かれました事。…そしてその艦に、『幻の島』の「出身者」が居た事…!」

「…!」

つまり、2日前の出来事っていうのは…この地にビッグ・ママ海賊団が降り立った事か…!そりゃあ、そんな話を疲労困憊なこの国の住民に話せる訳も無いだろう。

この地やってきたビッグ・ママの勢力は、意外な事に2人だけだった。1人はペコムズ、魚人島でタマゴ男爵と一緒にいたカメライオン。そしてもう1人が『カポネ・ギヤングベツジ』、あの最悪の世代のメンバーだった。

あの、とか他人事みたいに言ってるけど、知っての通り私も最悪の世代だけだね。ルフィもゾロも、それにナミさんも。

ペコムズは最初、国の悲惨な姿を目にした時に麦わらの一味の仕業だと勘違いしていたらしいけど、ミンク族の説明でナミさん達とペコムズが敵対する様な事態にはならなかったそう。てっぺんがあんなお菓子狂いでもペコムズには故郷を思いやる気持ち

があるみたいで、私の中で彼の評価が勝手に上がって行く。

勝手に私からの評価が上がったペコムズは、その後ベッジと共に「ビッグ・ママ」の指令を伝える為にサンジ達を人目のつかない森の中へと誘い、あまりにも襲われるシチュエーションだったのが為に警戒しまくりだったサンジ達ですら拍子抜けする様な行動に出た。

簡単な話、麦わらの一味に恩が出来たからビッグ・ママの指令は無視をするとの事で、シーザーの身柄さえ渡してくれば構わないと言う。

「そこで彼が語ったのは、ビッグ・ママからの指令は一つだけではないということ。元々シーザーを捕獲しようとしたのはついでに過ぎなかったのです」

「率直に言うが、ビッグ・ママの目的はサンジを取り込む事だ。なんで四皇がアイツを狙ってるのかってのは分からねエ…だが、アイツにも事情がありそうに見えたな」

「つまりペローナちゃんはサンジが心配って事？流石私のゴーストプリンセスは可愛いね！」

「特ホロオ!!」

「おおオイヤめろお前ら！おれ達までフツ飛んじまうだろ!!」

飛んできたホロウは掴んで遠くに投げ飛ばし爆発させました。

……でも、ビッグ・ママがサンジをねえ……。

もしかして、手配書が生捕のみになっていたのってこれが原因……? 政府の出す手配書にまで介入出来るって、それはもう海賊としての域を超えてるよね??



## 211 『女好き、ビッグ・ママのお茶会』

「…ていうか、その話を聞く限りだとサンジは連れて行かれないんじゃない？」

その後も諦めずにぼんぼん飛んできた特ホロを、千切つては投げ千切つては投げを繰り返し、未だ凶星を突かれて顔を赤くしているペローナちゃんを抱き締める事で大人しくしてもらった。

私の方が身長低いから今みたいに膝立ちしないと胸の中に迎えられないけど、抱き締められる事の方が多し私からすれば今はかなり至福の時である。それに…私の腕の中で頬を染め、上目遣いで睨んでくるペローナちゃんをなんていうか知ってる？ 私は知ってる、これ、天使つてやつだ、間違いない。

「ペコムズは確かに私達への敵意を無くしました。それに今もまだこの地に、更に言えば今向かっている “くじらの森” にて療養中です」

「療養中？」

「ペコムズの他にもう一人…カポネ・ギヤングベツジが居たって言っただろ、そいつがビッグ・ママの命令に背いたペコムズを処分しようとしたんだ」

ちよつと待って、そこで喋るとちよつとくすぐりたいよペローナちゃん！今は離して

あげないけど！

「油断していたペコムズを背後から襲ったベツジは、その勢いでおれ達を包囲したんだ」「包囲？ペコムズが倒れたのなら、もうベツジしか居なくなるよね？」

「ベツジも、当然の様に悪魔の实の能力者だったので。これはベツジが自分で言っていた事ですが、彼の能力は『シロシロの实』の城人間、私達が見た限りだと彼は自分の体を『要塞化』出来る上、その体内は正しく城の様になっていて人を何百人も収容出来るみたいでした。斯くいう私達も相手を悪戯に刺激する訳にもいかなかったので招待されるがまま彼の体内にお邪魔しました」

シーザーは海楼石入りの槍であっさり無力化されたそうで、チョッパーやブルック、そしてサンジもベツジの体内から現れた沢山の人間に銃口を突きつけられ、倒れたペコムズにも矛先が向きそうだったから従うしかなかったそうだ。

因みに、ベツジは後先考える事が出来るタイプらしく、ナミさんやペローナちゃんには一切の手出しをしなかったみたい。だけど2人ともベツジ城に招待はされたのでサンジ達と共に中へ入ったようだ。まあ、サンジ達と別れる方が危険だろうし、その判断は間違っていないだろう。

で、そこでベツジからサンジにとある『招待状』が渡される事になる。それこそが今回サンジが居なくなった理由にも繋がるとか。

それは、ビッグ・マムの開く「お茶会」の招待状。だけどそのパーティーのメインイベントは結婚式。

「新郎は『ヴィンスモーク家の三男』サンジ。新婦は『シャーロット家の三十六女』プリン。ベッジはそう言ってたわ」

「ヴィンスモーク……？サンジってそんなカッコイイ名字だったんだ。いやそんな事よりも、サンジが結婚って……」

「サンジさんも当然納得が行く話では無かったのですが、どうやらその縁談を持ちかけたのはサンジさんの親族の方らしくて」

サンジの親族？ゼフの事？

『違うよ、サンジと血の繋がった方の親族』

「……そういえば」

\*\*\*

《知ってるの？サンジ君。でもこれ北の海の発行って書いてあるわよ》

《ああ、俺、生まれは北の海だから、みんなにや言った事無かったか？》

《生まれは北で育ちは東？どうして東の海に？》

《まあ俺の話はどうでもいいさ、こいつは北ノースでは有名な話なんだ。童話とは言ってもこのノールランドって奴は昔実在したって話を聞いた事がある》

(何か今露骨に話を逸らされた気がする。：気のせい、かな?)

\*\*\*

——みたいな事を2年前に話した事があつたつけ。

「サンジ、私達と出会つたのは東イーストフルーの海なのに生まれは北ノースフルーの海だつて言つてたよね」

「サンジさんは北ノースフルーの海出身なのですか？ならば東イーストフルーの海へ移る為には、赤レッド土ドラインの大陸”を超える必要があつた筈ですわ」

「あー…そつか、確かにそうだね」

東イーストフルーの海と北ノースフルーの海はシャルリアの言う通りあの馬鹿でかい大陸が二分に分けている。戻る為には私達も通つた「リヴァースマウンテン”を通るか、それこそ一周くると回つてくる必要がある。そりゃあ、偉大なる航路グランドドラインを海路にしなければ一周するのは時間をかければ問題ないのかもしれないけど、それでも家族の引越”しにしては度が過ぎていると思わざるを得ない。

まあ、サンジの家庭の事情は気にしても仕方ない事だけだ。

「その上、〃ジャーロット〃ってのはビッグ・ママの姓だ。四皇の中でもビッグ・ママってのは、自らの子供を餌に広い種族との関係を築いて海賊王を目指しているんだ。ヴィンスモークが何かは知らねエが、ビッグ・ママにとって取り込むに値するだけの存在って事になる」

「へえ、詳しいね、ペローナちゃん」

「そりゃあ、いつかお前が戦うかもしれない相手の事を調べるのは当ぜ……ナニこつ恥ずかしい事言わせてんだ!!」

「それは理不じ……ぶへえっ!?!」

ごん!とペローナちゃんの頭が下から突き上げられて顎に直撃した。

舌が…舌が千切れる…!!

倍加すれば痛くないかもだけど、それをしちやうと今度はペローナちゃんにダメージを与えてしまう…!それだけは許せないからこうして甘んじて痛みを耐えるしかない……!!

「それでもサンジは最初は断つてたんだ、だけど相手がおれ達に聞こえない様にサンジに何かを耳打ちした途端、急に態度が変わって…」

「いたた……きつとそいつがサンジにとつて最悪の条件を突き付けたんだろうね。それが何かは分からないけど」

「ええ……。その後、私達はサンジ君のおかげでベツジの体内から逃げ出す事が出来ただけど、その時サンジ君に渡された手紙がコレよ」

そう言つてナミさんは懐から一枚の折り畳まれた紙を取り出してルフィに渡した。

「それをサンジ君は、わざとベツジが内容を読み取れる様に書いていたのよ。書いてある事もよく分からないし、何か意図があるとしたか思えない」

「……分からない?」

ナミさんの言葉に反応したのは意外にも叶だった。これが原作通りに進んでいるのならば、叶が違和感を覚える事もない筈。つまり今、何か変化が起きているという事になる。

ひよつこりとルフィの後ろから紙を覗き込んだ叶が、驚き……というよりは疑惑に染まった表情でそれを読み上げた。

『野郎共へ、女に会つてくる。必ず戻る』……ここまでは、見覚えがあります。その次ですが、これはイリス、あなたに宛てられた内容ですね」

「私?」

「はい、とにかく読みますね。——『イリスちゃん、可愛い子が俺を待っているから結婚してくる』……との事です」

……なるほど、そう来たか。

叶が困惑しているのも、ナミさんが良く分からないと言っているのも当然で、わざわざ私宛にこんな内容の追記を残す必要なんて無いのだから。……普通はね。

ここで少し前の話を一つ。

ドレスローザのコロシアムで、私は叶との戦闘中にサンジと電伝虫で話をしている。その時私は『ビッグ・マムが相手だろうとみんなを守る』と言った。つまり、私のこの言葉をサンジが愚直に信じてくれたのだとすれば……この手紙の意味は……!!

「私がビッグ・マムの所へ攻め込む為のキツカケ……!!可愛い子で動く理由を作ったんだ  
!」

「そういう事なら、色々と納得が行くわ。イリスは既に世間から『四異界』と呼ばれている存在、そんな人が同格の『四皇』の元へ殴り込むには相応の理由が必要なもの」

ただサンジを迎えに行くというのは『女王』には似合わない。きちんとした理由を作る事によってサンジは私が動きやすい様にしてくれたという訳だ。

勝手に周りが決めた立場とはいえ、その影響は無視できるものじゃない。手当たり次第に気に入らなければとにかく攻め入る存在だなんて認識されてしまえば、同じ『四異界』である「狂神」と同じ様な扱いを受けるかもしれないのだ。そうなってしまえば、完全な私事になるけど今後私の嫁になってくれる人が減るかもしれない。サンジはそこまで考えてくれているのである。

私の立場を気にしつつ、きちんとSOSを送ってくるあたり流石サンジは咄嗟の機転が効く人だと思う。ていうか、ビッグ・ママの所には沙彩も居るからその為に私を誘い出した可能性もあるよね。サンジ：良くそんな事ぱつと思いつくかぶなあ…。

「だとすると、ベツジに見せる様に書いたのはその内容の証人が必要だからか。遠回しな果たし状じゃねエか」

「ハ、あのグルマユコックも面倒な事しやがる」

ペローナちゃんの言葉にゾロがそう反応し、私はまた考え込む様に顎に手を当てる。確かにこれって遠回しも遠回しだし、なにより面倒なんだよね。まるでギリギリまでビッグ・ママ側に私の介入を知らせたくないって感じにも見える。

「ビッグ・ママのお茶会は“強制参加”も同然なんですよ、かの四皇から招待が届いたが最後、受取人は死ぬ気で参加しなくてはいけないんです」

「へえ…それってやつぱりビッグ・ママが怒るから？」

「簡単に言えばそうですけど、怒った後の行動が最悪なんです。例として話しますが、これは例え話でも何でも無く、実際に起きた出来事です。心して聞いてください。特にイリス、あなたは王華より純粋で無垢なので特に気を張って」

え、叶の中で私ってそんな評価だったの!?褒められたというよりは子供っぽいって事を言いたいんだよね?王華より子供っぽい??心外なんだけど…!!



「ある所に、一人の貿易商の男が居ました。優しい妻に結婚を間近に控えた娘、家族にも恵まれて幸せな毎日を過ごしていたんです。そこへ、貿易先の一つであるビッグ・ママから『お茶会』の招待状が届きます。男は喜びました、何故ならビッグ・ママのお茶会に招待されるという事は錚々たる顔触れ達とお近付きになれるということだからです。貿易を職としている男にとってはなりふり構わず飛びつきたい誘いだったので、彼にとつて……いえ、彼らにとつて不幸だったのはそのお茶会の日が娘の結婚式の日と被つてしまつてゐる事でした。当然男は悩みましたが、長い悩みの末、娘の結婚式を選んだんです」

ごくり、誰かが唾を飲み込む音が聞こえた気がした。もしかしたら私だったのかも知れない。それだけこの場合は今緊迫した空気で包まれていた。

「ビッグ・ママ側にお茶会へ参加できない旨を丁寧に書面に綴り、後日、無事に娘の結婚式も終えた男はいつもの様に仕事をしていました。結婚式後に遠方の貿易先へと向かい、帰つてきたのは5日後。そこで男はいつもならお菓子等の輸入側になるビッグ・ママ側からとあるモノを受け取つて欲しいと頼まれ、四角にラッピングされた箱を2個受け取ります。ビッグ・ママ側の担当はニタニタと下衆な笑みを浮かべながらこう言います。『ママからのプレゼントだ、いつも世話になつてるお礼だから金は要らねエ、くれてやる』。男はずっしりと重たい箱を受け取つて、本日中の仕事を終わらせて帰宅しまし

た。そこでふと、違和感を覚えます。……あれ？いつもなら出迎えてくれる妻はどうしたのだろうか」

ぶる、と体が震えた。

そもそもその話し方なんなのと文句を言ってやりたい所だけど、読めてしまった結末に声が喉を通らない。叶が気を張れと言った意味が、ようやく実感として理解できたのだ。

「その時、家に焦燥気味の娘の旦那が姿を見せてこう言います。『お義父さん、あいつがここ数日家に帰ってこないんです。どこに行っているか知りませんか』。流石に男は気付いてしまいました、先程受け取ったプレゼント箱、その数と、人の頭くらいの重み”。……この悪夢の様な予想が外れていくと願う男を嘲笑うかの様に、それぞれの箱の中から出てきたのは……と、いう話です」

「……酷エ事するもんだ、ビッグ・ママってのは」

「ああ、因みに実話というのは半分嘘です」

『は?!!』

フランキーの言葉に反応した叶に対し皆の声が綺麗に重なる。……ん？半分？

「この話は私が適当に作りましたが、招待を断ったが最後、後日大切な人の首がプレゼントと称して送られてくるのは本当です。つまり、私の話も強ちデタラメじゃないかもし

れないという事です」

……だとしてもその作り話する必要あったかなあ?? 実は私の反応を楽しんでいたとかじゃないの??

でも、ビッグ・ママのお茶会を断ればどうなるのかは理解できた。きつとサンジもそういう類の脅しを受けたに違いない。そして彼にとつてそれだけ大事な存在といえれば……『バラティエ』、もしくは『カマバツカ王国』。

…ビッグ・ママ。魚人島の為にぶつ飛ばしておきたいとは思ってたから、攻撃するのに罪悪感を覚えなくていいような人で良かったよ。

## 212 『女好き、ネコマムシの旦那』

最後まで話を聞けば、ベツジはネコマムシが駆け付けた事で不利を悟って逃走したらしい。サンジとシーザーは連れ去られてしまったけど、こうして助けてくれとメッセーヂをくれたんだからなんの迷いもなく助けに行ける！

「私達ってカイドウとも一戦やる予定なんだよね？ どうせなら分かれて行動しない？ カイドウ組とサンジ奪還組。サンジの方は私とナミさん、ロビン、ミキータ、ペローナちゃん、シャルリアでどうかね」

「それはお前が嫁と一緒に居たいだけだろ！」

「でも合理的ね。一味揃って出向いちやったら全面戦争を仕掛けるみたいに見えるかもしれないもの。イリスの案は極端だとしても、分かれるのは間違っていないでしょ？ じゃあメンバーだけど、サンジ君奪還組はまず私、それからイリス」

「お前も言ってる事変わらねえよ!!」

さつきからウソツプ、突っ込んでばかりで大変そうだね。なんて自分の言動を棚に上げながらそう思う。

嫁を全員連れて行けたら一番良いんだけど、それはそれで人数が多くなっちゃうから

なあ。

「つたく、アイツもこの大変な時にビッグ・ママにまで絡んでんじゃねエよ」

「ゾロは何か思うところがあるの？」

「当たり前だ、考えてもみろ、俺達は今止まらねエレールに乗ってんだ。シーザーが言っていた事だが、「SMILE」の最大の取引相手はカイドウだ。パンクハザードの研究所を壊してドフラミンゴを怒らせた様に、ドレスローザの工場を壊しちゃった今……次にブチ切れる男は『四皇』カイドウだ！この国を滅ぼした『ジャック』然り、もう遠い存在じゃねエ……俺達を追って来るのは時間の問題だぞ！カイドウと近々やり合うつてのはお前もさつき自分で言つてただろ、イリス」

まあ……ゾロの言つてる事も間違つてはいないけど……。

「サンジが心配ならそう言えば良いのに」

「あア!!」

「つまりゾロはこう言いたいんでしょ？『カイドウとやり合うつて時にビッグ・ママなんかと遊びやがって！お前が居ねエとうちの頭脳が1人減つてしまうだろ！』つて」

「んな事いつ言つた!?!叩つ斬るぞてめエ!!」

あれ、ゾロさんすこーしだけど耳が赤いですねえ！凶星突かれて照れちゃってますか？ぶぶー!!

煽ってたら鞘に手を掛けたから慌てて引っ込みました。

「カイドウの件は一先ず置いておいて、サンジがビッグ・マムの元へ向かってくれたのはありがたいです。私達の敵は大海賊だけじゃない、この世界に落とされた巨大な狂気……狂神も居るんです。ビッグ・マムの下でどうにか沙彩をこちら側に引き込めれば大きな戦力アツプが見込める、そうは思いませんか?」

「待て、先程から聞いていればお主ら、カイドウと戦を交えるつもりでござるか?」

「そうだよ? 流石にワノ国の侍といえどもカイドウの事は知ってるんだね」

錦えもんの反応は少し気になるけど、変に詮索する必要も無いだろう。単に四皇の一人と事を構えようとしている事実に驚いているだけかもしれないし。

まあ、ビッグ・マムともやり合おうとしてるから実際には四皇2人か。なんなら後に安城さんも控えているから3人になる。……改めて考えたら凄い事になってるなあ。

「では、ビッグ・マムの元へ向かえるのは最大4人ですわね」

「そうね、先行組が向こうで潜伏してくれるのなら、日を跨いで更に3人は可能だわ」

シャルリアとロビンが私では理解できないレベルの話をしているので、視線だけでナミさんへと助けを求めてみた。

「……?」

あ、これナミさんも分かってないパターンだ。首を傾げて考えてるし、可愛いし。可

愛いはいつもの事だけど!

「ねえ、どうして4人なの?それ以上は多すぎるから?」

「いいえ、人数はもう少し多い方が良いけれど、私達はビッグ・マムの居場所を知らないわ。なら、辿り着く方法は2つ。その内の1つが4人までしか行けないのよ」

「おい、ロビン、勿体ぶらずにさっさと教えろ」

痺れを切らした様にペローナちゃんがそういえば、ロビンは軽く頷いて叶に視線を向けた。

「彼女の『テレポート』を用いるのよ。行ったことが無い場所でも問題無く移動可能な規格外の移動手段で」

「…四異界つてのは、頭のおかしい奴らつて認識で良さそうだな」

なんで私をジト目で睨むのかなペローナちゃん!『テレポート』と私は関係ないのにどうして私まで頭のおかしいやつつて思われてるの!?

「なるほど、『テレポート』は私を含めて最大4人が限度、確かにその方法ならば安易にあちら側へ侵入出来ます。そして、もう1つの方法というのは彼の事ですよね?」

「ええ」

叶やロビンは当たり前前の様に話してるけど、ぶつちやけついていけてない。テレポートで先行出来るっていうのは分かったけど……。

「説明をするなら、今向かっているネコマムシの旦那の下にペコムズが居るからです。さつきも言いましたが、ベツジの不意打ちで重傷を負ったペコムズはこの地で療養中です。彼の案内があれば私の『テレポルト』は必要ないでしょう」

成程、と頷く。

先行組と後発組で分かれるって事か。確かにサンジの身の安全は保証されてるとはいえ、事を急いだ方が良いのは事実だろうからね。

先行組が電伝虫を持っていけば、後発組もスムーズに辿り着けるだろうし、早い段階でサンジの状況を探る事が出来るのも良い。

そんな訳で、カイドウ組とサンジ奪還組から更に派生して、先行組と後発組で分かれる事が決定した。まだメンバーは決めていないけど。

そうやって話し合っていると、気が付けば目的地である ガイテイアンス ぐじらの森俠客団居住区“へと辿り着いていた。

私達が来る事は事前に通達があつたのか、沢山のミンク族が出迎えてくれている。それにさつきルフィとドンパチやってた牛のミンクやゴリラのミンクもここに居るようだ。

ここはさつきの右腹の砦と違って戦場になつたのか、建物や木々などに破壊の跡が見



て取れた。

「おオ、ネコママシ!!」

「錦か!元氣そうで何よりぜよ!」

でか!

イヌアラシと同じくらいのパカでかい猫ミンクが身体中包帯だらけで陽気に近付いてきた。それを見たチョッパは顔面蒼白だったけど。

「おいネコママシ!お前なんで出歩いてるんだよ!絶対安静だつて言っただろ!!」

「ニヤニヤ〜ン!かまんちやかまんちや、気にするな!わしは自由を愛する男!悪いが医者者の命令も……おつとつと……どこ吹く風よ!」

「フラついてるだろ!?!傷は癒えてないんだ!傷口が開くぞ!?!」

「おー!ゆガラ達が麦わらの一味か、助かったぜよ!ありがとう!!」

「ウツ!?!」

ルフィとウソップがネコママシの強烈過ぎるガルチューをくらってワーニーから落ち一緒に転がっていく。あ、ネコママシの傷が開いて包帯の隙間から血が噴き出た。

「私からも礼を言わせてもらおう、麦わらの一味!さつきは部下達が悪かった、侵入者に過敏になっていた」

「ん?」

近くの木の上から声がしたので見上げれば、木の枝の上に器用に立っている男の猫のミンクが私達を見下ろしていた。猫っていうか、豹？ジャガー？チーター？

例に漏れず、彼もミンク族特有の挨拶を起き上がってきたルフイにやっている。

「ペコムズなら目を覚ました、奥の建物だ。この一件は皆には内緒にしてある。サンジはいい奴だ、何か力になればいいが…」

他のミンク族には聞こえない様に小声で話している辺り、彼がわざわざルフイにガルチューをしたのはああやって周りに声が漏れない為のカモフラージュだったのかも知れない。

「侍組はネコマムシと話してるでしょ？私達はちよつとペコムズのとこまで行ってくるね」

「私は残ります、どこから敵が襲って来るか分かりませんので」

「気にしすぎじゃ無い？ジャックはもう居ないんですよ？」

「イリス、何も敵は外からやってくるとは限りません。既に付近に潜んでいる可能性だってあります」

叶がそう言うのならこれ以上は詮索しないけど、叶ってそんなに心配性だったかなあ？

違和感に首を傾げつつ、私達はペコムズの居る奥の療養所まで向かった。一緒に着い

てきたのはルフィとナミさん、ワンダとキャロットだけで、残りはネコマムシの元で待機している。ミキータやシャルリアは着いてきたそうにしていただけ、ペコムズが怪我人なのを考慮したのか何も言わずに大人しくしていたのが印象的だった。私の嫁、人間性からして女神だと思う。

\*\*\*

「ペコムズもそう思うよね？」

「一体なんの話だ、ガオ！」

私の嫁はみんな天使で女神だよねって話だよ!!

「にしてもあんた、良く生きてたわね」

「半分は能力で回避した。ベッジの野郎………悪かったな、黒足は連れて行かれたか。もう結婚式からは逃れられねエ……」

「それなんだけどな、ペコマムシ、結婚て誰が決めたんだ？」

「そりゃ勿論、ウチのママとヴァンスモーク家の親父だ！」

つまり、サンジの父親って事か。

……どっちにしろ、ビッグ・マムの後ろ盾を得る為にサンジを利用している様にしか見えないから、サンジには悪いけど碌な親じゃ無いんだろう。

「サンジ君のお父さん？それってどういう人なの？」

「闇の世界じゃ有名な男だぞ、知らねエのか？まあ…簡単に言やアヴィンスモーク家は、  
“人殺しの一族”だ」

「暗殺一家みたいなの？」

「いや…どちらかと言えば “海のギャング” って言った方が正しいな。「ジェルマ  
ダブルシックス

6 6 って名は知らねエか？別名を『戦争屋』と言うが」

ジェルマダブルシックス？戦争屋？どっちも聞いた事無い……いや、待てよ？そういう  
えばその名前、何かの本で読んだ様な……。

「何言ってるの!？それは空想上の「悪の軍隊」でしょ!」

ああ、そうだ、そういうえば2年前に新聞の絵物語を纏めた本が売ってて、買い出しつ  
いでにちよこつと立ち読みした内容に「ジェルマ66」って名が出てきたっけ。きちん  
と見た訳じゃ無いから内容までは覚えてないけど。

「いや、実在する組織だ。そのトップに居るのがヴィンスモーク一家、ボスが黒足の親  
父なのさ」

「え!？」

ナミさんが驚いた様に声を上げるけど、ルフィは不機嫌そうな顔でペコムズに詰め寄る。

「なんか知らねエけどそんなのはどうでもいい!おれ達が知りてエのはサンジが戻ってこれるかどうかだ!結婚するならしても構わねエ!おれ達のとこじやそんなの今更だしよ。だけどそれでおれ達がビッグ・マムの子分になるのはイヤだ!だから、そんな時はお前らがおれの下につけ!」

「えエっ!!?」

ルフィのルフィ過ぎる話に文字通りひっくり返って仰天するペコムズ。身体中傷だらけみたいだけど平気なのかな。

まあ、ルフィはなんだかんだ“形”を大事にする人だからこうやってわざわざペコムズに話を通してゐるんだらうけど、サンジを助けに行くのはもう決まってるからね。せめてペコムズの胃に穴が空かない事を祈ろう。

……背中には空いてるけど。

『はは、びっくりするくらい面白くなくて逆に笑える!』

人の心の中読んでいてそれは酷い!!今夜の特訓覚えてろくっ!!

……この時はそう呑気に考えていたが、今夜私が『王華部屋』へ訪れる事は無かった。

## 213 『女好き、正妻の不安』

「ビッグ・ママを下につけるのは良いけど、向こうには沙彩も居るしそう簡単には行かないよ」

「お前ら口を慎め！滅ぼすぞ！恩人とはいえ調子に乗るな！ママは海の皇帝、「四皇」の1人だぞ!!」

「でもこっちの戦力には「四異界」が2人居るよ？私を除いても「最悪の世代」って称される人が3人居るし、むしろそっちの方が不利じゃない？」

「バカか！女王、お前はサアヤ様の力を知らねエからそう言えるんだ!!あの人がママと共に戦えば最早敵なし、カイドウだろうと相手にならねエって言われてるんだぞ!!」

「じゃあどうしてさっさとカイドウをぶっ倒さないのかと聞けば、そもそも沙彩は戦闘に対して消極的らしく、ビッグ・ママと肩を並べて戦ったのはそう多くないらしい。」

「ビッグ・ママお得意のお菓子納期を過ぎた報復活動には今まで一切参加しておらず、むしろたまに止めに入っているくらいで、基本戦闘に参加するのはよそから侵略行為があった場合のみだとか。」

「まあ、そもそも沙彩は私と全力で戦ったりしないだろうし、対私との戦力に沙彩を期待

するのはオススメしないよ」

「何を言っているのかは分からねエが、いずれにせよ黒足はもう結婚から逃げられねエさ。実際に黒足が行っちゃった様に、ママのお茶会は絶対に断れねエ：断れば後日」

「あー、それはもう聞いたわよ、関わりのある人の首が届くってやつでしょ。私達、実はもうビッグ・ママの元に乗りに込む覚悟は出来てるの、ただ、私達だけじゃそこまで辿り着けない。……ねえペコムズ、ちよつと私達と取引しない？」

取引、といいつつ私達側から何かを差し出す事は無い。ナミさんの黒い笑顔がそれを物語っている。

ペコムズも顔が引き攣ってるし、なんだかちよつと可哀想になって来た。彼じゃあナミさんに逆らうのは難しいもんね、ちよつとでも逆らおうものなら理不尽パンチ（私の）が飛んでくるし。

「あんた、ベツジにやられっぱなしで良いって思ってるの？」

「いや、オレを殺したつもりだろうベツジのガキ…このままじゃ済まさねエ…!」

「でも、その体が回復したからって足のないあんたじゃビッグ・ママの所まで帰れないわよねえ？」

「……ま、まさかお前……オレに敵を誘導しろってのか…!」

「誘導？何言ってるんの、あんたはただ私達の船に乗って帰るだけ。ただ、向こうに着いた



時にはあんたを乗せて行ったお礼として報酬をたんまり頂くわ。だってビッグ・マムの本拠地よ？そんな危険な場所へ送っていくんだから多少は色をつけて貰わないと、ねえ？」

あ、ナミさんの目がお金になってる…。ペコムズはビッグ・マムの元へ帰りたけれど、私達の船に乗らないと帰れない。つまり、多少の重い条件なら飲むしかない。ナミさんはその辺を分かっているからこそこう言ってるんだだろうけど、案の定私達にとつて得しかない取引となっていた。

ペコムズに私達だけじゃ辿り着けない場所へ案内してもらいながら金を取るって、流石ナミさん、えげつない。でもそんな所もとつても可愛いと思います！

「決まりだね、私達はペコムズを護衛して最後に報酬を貰う。ペコムズは私達を利用して元の場所へ帰る。そうと決まればメンバーを決めよう！」

「わあ…面白そう…！」

「キャロット、遊びじゃないんだ」

「あう…ごめんなさい…」

ワンダに注意されてしゅんとなつているキャロットも可愛いなあ。

ともかく、ペコムズはこの提案を断る事が出来ないからこれで私達の案内役は確保されたし、先行組と後発組の案は使えそうだ。

その後、ルフィは出発を早める為にペコムズの治療を急がせようとチョッパーを呼びに療養所を慌てて出て行った。

ルフィが出て行って一気に外が騒がしくなり、ローの声もしたので私とナミさんも外へ出る。そういえばローの仲間、ベポ達はくじらの森で居たんだからここに居るのは当然か。

「ローの仲間は個性的だね、動物が居たり巨人が居たり」

「てめエらにだけは言われたくねエ」

だよね、私も言ってると思った。

冗談もそこそこに、同盟を結んでいるローにもサンジの現状を報告する。ローからすれば訳が分からない話ではあるけれど、サンジを連れ戻すまではカイドウとドンパチやるのを少し待っていて貰わないといけないし。

「——という訳だから、カイドウ組とビッグ・マム組で分かれて行動しようと思うんですけど、どうかな？」

「黒足屋を連れ戻すのに少数で向かうのは分かるが、カイドウの居場所については検討がついているのか？」

「え？」

……：「ういえば知らないつけ。物語的に、とかメタっぽい事を言っちゃうと、錦えもんがカイドウの名前に反応した事からカイドウは「ワノ国」に居るだろうと推測は出来るけど…。」

「居場所も分からねエ以上、下手には動けねエ。だが、俺達がカイドウに狙われるのは時間の問題だぞ、暫く身を隠せる筈だったこの「ゾウ」も奴らに場所が割れちまつてる。次は俺達が狙いだとしても、また攻め込まれたらこの国は一体どうなる？」

ローの言う事も尤もだ。怒ったカイドウが自ら攻め込んでこないとも限らないし、そうなれば対カイドウの戦力をこの地に残したとしても戦場になるのは避けられない。その上、一度戦闘が起きてしまえばローの言っている様にこの国は……いや、国だけじゃない、そこに住むミンク族だって今度こそ命が危ないだろう。

「だけど、サンジは必ず連れ戻す必要がある。明日雷ぞうに会いに行く予定だし、その時にでも錦えもん確認してみよう。」

「うお〜〜つ、優しいな〜〜!!ガルチューー!ゆガラ本当に海賊かア!!」

「助けてくれた上に気遣いまで…ありがとう!!」

「うお〜〜ん!!」

ローの言葉に感激したのか、気が付けば周りをミンク族に囲まれていたみたい。そんな騒ぎを聞きつけたネコマムシが宴を始めたり、宴の雰囲気を買っ先に察知していたル

ファイがいつも通り肉を要望し始めたり、どうやら今夜も騒がしくなりそうだった。

\*\*\*

お酒と物理的に距離を離されていた宴も、天に星が輝く頃にはすっかり収まって、今では風と寝息が奇妙なハーモニーを奏でている。あれ程の喧騒が嘘みたいに静まり返ったこの場所で、私はふと誰かがこの場を離れる気配を感じ取って目を覚ました。

宴の気分そのまま寝る時は今みたいに外でそのままて事も珍しくは無く、その際に問題となる寝具は気のいいミンク族が是非にと柔らかい草布団を与えてくれて、かなり寝心地が良かったものだから野宿も全く苦にはならなかった。

「……シャルリア?……と、キャロット、かな?」

いつの間に仲良くなったんだろう、と思いつながら立ちあがろうとすると、私のお腹へと背中側から抱きしめる様に回された腕に力が込められた。

「……………行くのよ」

「あ……ナミさん……」

弱々しく私の首筋に顔を埋めながらそう言われて、私の中の色んな何かが発火しそうに暴れ回るけど死ぬ気で堪える。さわさわとお腹を撫でたかと思えば、そのまま服の中に手が入ってきた。

「んっ……」

「あなたには沢山嫁が居て、みんな平等に愛したいって思ってるのは分かってる。あなたの夢の為にもまだまだ嫁は増やすべきだし、私も勿論、手伝うわ。でも……今は、私とあなたの時間でしょ？」

「な、み、さん……、あ……っ」

指の腹でおへソの回りをゆっくりと撫でられ、変な声が出そうになるのを唇を噛み、更に口を手で覆う事で防ぐ。

「ちゅ……」

「っ……」

軽く首筋に吸いつかれて、ナミさんの小さな舌が首を這っていく。普段は感じない感触に対するほんの少しの不快感と、それら全てを吹き飛ばしてしまう程に大きな幸福感と快感が全身を駆け巡って私の思考能力を奪い去ろうとする。

攻撃は舌だけに留まらず、おへソを撫でていた手はゆっくりと上へとあげられ、自慢できそうも無い小さな膨らみをそつと手のひらで包み込まれた。

「イリス……このまま最後まで、ダメ？」

「……っ、だ、ダメ……あつ、んっ」

答える為に口を開いた瞬間、胸に添えられていただけの手が少し乱暴に動き出した。

ナミさんめえ……！声を聞く為に私が返答せざるを得ないお願いをしてきたな……！！

「もう……だめだつてばあ……！」

「……そこまで言うなら、止めてあげてもいいわよ？」

「ほ、ほんと……？」

「ええ。ただし……私が満足するまでキスしてくれたら、ね」

一体どんなとんでもない条件が出てくるのかと思えば、私にとつても得でしかない内容でちよつと肩透かしをくらった気分だ。

ナミさんが服から手を抜いてくれたので、くるりと寝返りをして視線を合わせる。

「……っ」

その瞬間、私はこの条件で受けた事を後悔する事となった。

熱っぽい息を吐く唇、ほんのりと赤く上気した頬、目尻に涙を浮かべた潤んだ瞳。

……ナミさん、すつごく“そういうコト”のスイツチ入っちゃってるんじゃないだろうか。キスだけだと思つてたけど、その“キスだけ”が私の理性を奪い去っていくん

じゃ……。

と、愚かにもそんな風に考えていた。

そんな私を見てナミさんは軽く目を伏せて言葉を紡ぐ。

「あんと再会してから私、ずっと我慢してたわ。しらほしの時も、パンクハザードの時も、あんと行動を別にしてからも……。こんな場所であんたを脱がす事は出来ないって、本当は分かっている。あんたが今、私にこんな事を求めてないのも……。分かってる。だから……。キスだけでいい。我儘は言わないわ、1回だけで良いから」

普段よりずっと弱々しい声色でそう言ったナミさんが、こつんと私の額に自分の額を重ね合わせた。

……何を後悔なんてしてるんだ、私は。

熱っぽい息を吐く唇？ほんのりと上記した頬？目尻に涙を浮かべた潤んだ瞳？“そういうコト”のスイツチ？…違う、全然違う！これは——泣くのを我慢してる顔なのに！！

ナミさんとは2年越しの再会を果たしてからというもの、キスこそ何度かすれ、体を重ねるまでは至っていない。そのキスだって片手で数えられる程でしか無い。

だからこれは、ナミさんの不安の表れなんだ。私のナミさんに対する想いが減っていないか、そう不安になっている。いや、不安にさせてしまった。

勿論私のナミさんに対する気持ちは減ったりなんかしないし、なんなら増えてくるくらいだけど、それを伝えるのを怠っていたのは私自身だ。

嫁にしたい人が沢山いて、実際なつてくれる人も沢山居る。その子達みんなに私は幸せになつて欲しくて、同じくらい愛を捧げたくて…結果、ナミさんに甘え過ぎてしまつてこのザマ。

……なら、私がするべき事は決まっている。

「……………めんなさい」

そう言った後に軽く口づけして、顔を離す。覚悟を決めた私の内心を知らないナミさんは、そんな私の言葉を聞いて何かを諦めた様に弱々しく微笑み一筋の涙を流した。

私のナミさんを想う気持ちが減つたつて勘違いしてるんだろうし、そう勘違いさせてしまったのは私が悪い。でも……ナミさんもどうしてそう思つちやうかなあ！私、2年前からずーっとナミさんに対して素直に好き好きオーラ全開だつたと思つてるよ！?

「ん……っ！」

「つ……イリ……んう……！」

勝手に諦めてるナミさんの涙を強引に袖で拭い取つてキスをした。勘違いしてるのなら、再び思い知らせてあげる。私がどれだけあなたの事を好きなのか、私がどれだけ



あなたを求めているのか。

「ただ、それでも私はハーレム女王を目指してるから。」

さつき気配を感じてしまった2人が気になっっているのも事実。でも、ナミさんに何もしないって訳にもいかない。何より私がこの人を滅茶苦茶にしてやりたいんだ。

「さつきシャルリアとキャロットが森の方に歩いて行つたからちよつと行つてくる。戻るのがいつになるのかは分かんないけど……寝ずに待つて。……言つとくけど、お願いじゃないからね、これは私が、女王が正妻に下した命令だから!」

「……!!」

初めて私がナミさんに対して「命令」した事で、ナミさんの瞳が大きく見開かれた。今夜は長くなる、寝かせる気なんてさらさら無い。

「覚悟、決めたよ。ナミさんが不安に思うなら、私はもう遠慮しない。やりたい様にやらせて貰う。……返事は?」

「っ……うん……!」

やっぱ私の正妻は賢いと思う。たったこれだけの言葉で私の意図を理解してくれただから。……だからこそ甘えちやうんだけど。

「ていうか、なに?『うん』って。可愛過ぎか?」

若干後ろ髪を引かれながらも決めた事だと腹を括って起き上がり気配が動いた方向へと向かう。

……今回はナミさんだったけど、ペローナちゃんも条件は同じだし、そもそも不安にさせる行動がダメなのだから私自身が変わらなくちゃいけない。

はは、覚悟を決めておいてなんだけど、早速ちよつと不安になってきた……。

## 214 『女好き、深夜の特訓、天賦の才』

それにしても、である。

さっきのナミさん……普段とのギャップというか、なんか色々凄かった。流石に狙ってやってた訳じゃ無いだろうし、今夜は朝まで盛り上がれそう。

寂しがってる正妻を一旦放つたらかしくするという苦行を成し遂げてしまった私は、現在こんな夜更けに人目のつかない森の中へと進んでいったシャルリアとキャロットを追って、見つけた今も後方から様子を伺っていた。

2人は、周りの木がそこだけを避けているかの如く開けた場所へと足を運ぶと少し距離を離してお互い構えを取り合っている。……まさかとは思うけど、こんな時間に特訓でもしているのだろうか。そりゃあ、目の前の光景が全部教えてくれてはいるけどさ。でもはつきり見えているのは私が暗闇耐性を倍加出来るからであって、恐らく2人は満足にお互いの顔すら見えてないんじゃないかと思う。

「……はあー」

動きも無いようだからそろそろ姿を現そうかと思っていたその時、シャルリアが勢いよく地面の皮を踏み込みキャロットとの距離を詰めた。それに対してキャロットは慌

てる事もなく冷静に動きを見つめ、シャルリアのパンチ……と見せかけた本命の払い蹴りを軽く後ろに跳び退く事で回避してみせた。

「フェイントをかけるなら、本命の攻撃に意識を集中させるのはダメだよ? 『本当はそこを狙ってるよ』って教えてる様なものだから」

「つ………はい!」

「じゃあ、次は私の番!」

それだけ言った次の瞬間、シャルリアの首筋には獣グロブから生えている鋭利な爪がそつと添えられていて、シャルリアは大きく目を見開いて両腕を上げて降参の意を示した。

タネも仕掛けもなく、キャロットがやったのはただの高速移動である。シャルリアが認識できない速度で詰め、人体の急所を的確に突く。相手との速度の差が圧倒的かつ、今が夜中で視界が制限されているからこそ出来る荒技……なんだけど、一体2人は何をやっているんだろう。

なんて、考えるフリを入れる。まあ普通に考えればシャルリアがキャロットに頼んで特訓をしているって所だろうけど………どうしてキャロットなんだろ?

「…申し訳ありません、先程の速度でもう一度お願い出来ますか?」

「うん! ゆティア、何か掴めた?」

「……いえ、残念ながら、まだ目に頼ってしまいましたわね」

どうしてキャロットを誘ったのかは分からないけれど、内容自体は単純な戦闘と、見聞色の覇気の特訓をやっているみたいだ。

それにしてもシャルリア、もう見聞色を習得するにおいて最も大切な事を理解しているみたい。というのははずばり、『視覚を意図的に閉じる』事である。見聞色っていうのは言い方を変えれば『心の目』だから、普段通りに目を使っているようではいつまで経っても習得は出来ない。まあ、私の場合は視力倍加を使えるから視覚と見聞色の二刀流も出来るんだけど。

「ハキ……だっけ？ ゆティアは、シャルリアはどうしてハキを覚えたいと思ったの？ それに、恩人の仲間のシャルリアに戦い方を教えるのは良いけど、私はハキを使えないよ？」

「ふふ、簡単な事で御座いますわ。私が覇気を習得したいと思う理由は……仲間達の、私の主人の足枷になりたくないから。後者の理由はあなたの戦い方を間近で見てみたかったから、ですね。イリス様や叶様方からはこれから先もご指導を受けたいと思っていますが、あなたとはこの地を離れてしまえばお別れ……に、なるかもしれませんので」

お別れになる、と断言しなかったのは私がキャロットを狙っている事に気付いているからだろう。

……それにしても、シャルリアはやっぱり才能がある。キャロットの戦闘なんてミキータとのアレしかなかった筈なのに、それだけで戦闘スタイルや強さを大まかに把握してキャロットを指名した。この地を離ればお別れになるのはキャロットだけじゃないのに、それでも彼女を選んだのは自分の目指すスタイルに一番近かったからというものもあるのだろう。

「では続けてお願いします。……っ、ふう……！」

「！」

「ええ……」

思わず引き気味の声が出してしまった。

視線の先では、シャルリアが右手を前に突き出してそれを左手で支える様な構えを取っている。手の平は開かれ、まるでそこからビームやら弾やらが飛び出すみたいな姿勢だ。……というか、実際そのつもりだと想う。だって、突き出してる右の手の平に集まって来ているのだ……覇気が。

もうね、流石にドン引きするしかない。嫁に対して引くなんてどうかしてるけど、こればかりは仕方が無い。だっていくらなんでもそれは早すぎるし……ねえ？

シャルリアがやってる事は私の覇銃ハガンの手の平バージョンだ。覇銃は、1本の指に覇気を集らせる事でそこから圧縮された覇気の弾を撃ち出すというもの。だけど一点に覇

気を集中させるのは至難の技で、流石のシャルリアもそこまでにはまだ至っていない……が、手の平レベルなら出来てしまっている。

私はまだ教えていないし、叶やミキータも見聞色しか教えていない筈。つまり、アレはシャルリアが独学で覚えたという事で……うん、どれだけ考えても『シャルリア、パない』って感想しか出てこない。

まだ慣れていないからか、手の平に集まった覇気を十分に制御する事は出来ていない。あれでは撃ち出しても弾にも光線にもならず、放射状に短い射程の覇気を放つだけになってしまうけど、きつとシャルリアはそれすらも理解している。

慣れていないのは百も承知、今使える手札でどれだけの事が出来るのか、彼女はそれを模索しているのだ。

…いやそれにしたって武装色の覇気を拙くも扱えてるのはおかしいんだけどね??

「——ふっ！」

『何かある』とまでは分かってても、武装色の覇気に詳しくないキャロットではどう警戒しているのかも分からない筈だ。だからこうして先程と同じく一瞬で距離を詰めようとする。

だけどそれは悪手であり、シャルリアにとつては好機であった。キャロットの動きを目で追えなくとも関係ない、要は攻撃が当たれば良いのだから。

「……っはあ!!」

瞬間、シャルリアの掌から放射状に武装色の覇気が放たれた。今のシャルリアでは満身に覇気を制御する事が叶わなくとも、彼女はそれを逆手にとつて自身の手札として扱ってみせる。

圧縮させられないなら、拡散すればいい。

弾として撃てないのなら、纏めずに広範囲に撃てばいい。

そうする事で、例え相手の動きが見えていなくともただタイミングを合わせるだけで攻撃は当たるから。

「つきやー!」

「……っ!」

射程は短くても、前方に大きく広がる形で撃ち出されたその攻撃をキャロットは避ける事が出来ず後ろへ吹き飛ばされ、シャルリアも自身の放った砲撃が予想よりも大きな規模だった事もあり踏ん張りが効かずにキャロット同様後ろへと飛ばされる結果となった。

「全く、向上心があるのは良いけど怪我には気をつけてよね!」

2人が背を木に叩き付ける前に飛び出し、両手を巨大化させ、腕の長さも倍加させ2人へ伸ばして受け止める。結構な衝撃だったし、あのまま木に激突して2人共昏倒なん



てしてたら……うつ、想像しただけで気分が……、見に来て正解だったみたい。

「い、イリス様……！何故ここに……いえそれより、申し訳御座いません！お手を煩わせてしまつて……！」

「謝るのもお説教も後、今はじつとしてて？体だるいでしょ？」

2人を掴んだまま腕の長さを元に戻し、まだ動けそうなキャロットはそつと降ろして、覇気を放った事で全身の力が抜けているシャルリアを横抱きする。

覇気は制限出来れば全開で使用しても問題ないけど、ただ垂れ流すだけだと今みたい  
に1発で体力が持つていかれるのだ。その辺は今後の練習次第でどうとでもなるんだ  
けど。

「キャロットも怪我不い？直撃してたよね？」

「ううん、大丈夫！それよりシャルリア、さっきのどうやったの!?凄いつ！バーつて手から出してたよね!？」

どうやらキャロットは直撃する寸前、咄嗟に腕でガードを行っていた様だった。証拠にその腕が少し怪我しているみたいなので、戻ったら叶を起こして治療をお願いしよう。

「落ち着いてキャロット、今のは武装色の覇気って言う技術だよ。まあ……『硬化』どころか『放出』まで会得しちゃってるのは私もどうかと思うけど」

「あれもハキなんだね！……ん？　そういえばイリスはどうしてここに？」

「どうしても何も、私の嫁が2人揃ってこんな時間に森の中へ歩いて行ったら気になるでしょ？」

「申し訳御座いません……」

キャロットは「嫁？　2人？」と首を傾げていたけどスルーしておく。頭を動かす度にぴよこぴよこ動いてるうさ耳が可愛すぎて舐め回したい。

「シャルリア、分かっているとは思うけど、もうこんな危ない事を私抜きにするのはやめてね。強くなりたいうって気持ちは分かるけど、あなたが傷付く所は見たくないの」

「はい……」

「見聞色の覇気は制御を間違えても捉えられなくなるだけ。でも武装色は違う、それはシャルリアも分かっているでしょ？　便利な力は同時に凄く危険で、一歩間違えれば大怪我もあり得るんだからさ。……次は無いよ、もし、言いつけを破ったら……分かるよね？」

シャルリアがどれだけ泣いて謝ったって解放してあげない、三日三晩キャツキャウフフ（私だけ）コースにご招待しちゃうからね。

とまあ、今までの反省を活かして少し強気に言ってみただけど、何故かシャルリアは私が想像していた以上に顔を青褪めさせて目尻に涙を溜めてこくこくと震えながら頷いていた。あるえ？　なんか思ってた反応との差異がありすぎるんだけど……。

「わ、私、もう二度とこの様な事は致しません……！ですから、どうかお捨てにならないで……！」

「ええ!?なんか反応が大袈裟だと思っただらそんな事考えてたの!?す、捨てない捨てない！あり得ないから!!さっきの意味は、言いつけを破ったらシャルリアが嫌という程犯してやるゝみたいなの、そんな感じだから！」

「え……？」

シャルリアは天竜人時代の事を負い目に感じてるから、余計に私の言葉がそう聞こえたのかもしれないけど……はあ、そんな事を私がする訳ないのに。

「この際だから言うけど、私があなただを捨てるのだとすればそれは私が死ぬ時だし、私は天寿を全うするまで死なないから一生そんな未来は訪れない。だから大丈夫だよ」

「あ……、重ねて、申し訳御座いません……イリス様を、疑ってしまつて……でも、本当に……良かった、です」

それだけ言うと、安心したのかシャルリアは私に抱かれたまま眠つてしまつた。元々覇気を全放出させた直後だという事もあつて疲労も限界に近かつたのだろうし、このままみんなの元まで帰つて横にさせてあげよう。

そうして私はさつきまで居たガイトイアンス俠客団の居住地までキャロットと戻り、寝ている叶を起

こしてキャロットの腕とシャルリアを治療して貰ったのだった。  
ちなみに、いきなり起こされた叶は結構不機嫌だった。うん、本当にごめん…。

…さて。

起きてるかな、私の正妻は。  
プリンセス

## 215 『女好き、正妻を好きにしたいだけの夜』

果たして、ナミさんは起きていた。ていうかすっごい顔を赤くしてぼーっとしていた。

最初に見た時は熱が出ちゃったのかと焦ったけど、単に去り際の私とのやり取りをずっと頭の中で反芻していただけの様で。

……それはそれで嬉しいやら恥ずかしいやら昂るやらなんだけでも。

何なら色々我慢出来なくなりそうだったから急いでナミさんを抱えてサニー号まで戻ってる所だけでも！

「イリス……っ、ちよつと、苦しい……っ」

「あつ……ご、ごめん！」

もしかしたら私は自分が思っている以上に興奮しているのかもしれない。ナミさんを抱えている状態で空を飛んでいるのに、最速で目的地まで向かおうとしていたのだ。

……その上、ナミさんが苦しいと言った後も、それに対して形だけ謝った後も、結局速度を緩める事はないままで。

「イリ、ス………？」

「……めん」

もう一度呟いたその言葉はナミさんにはどういう意味で聞こえただろう。少なくとも、私の口が加虐的に歪んでいる事から素直に謝罪の言葉を口に出した訳ではない事は確かだった。

ナミさんを滅茶苦茶にしたいと思う。私の下で虐めて、泣かせて、溺れさせてやりた  
いと思う。

……今までの私ならこんな考え、絶対に生まれなかった。だって、嫁を相手にこう  
いった感情は抱くべきではないと考えていたから。

でも、そうじゃない。私は我慢すべきではないのだと気付かされた。

別に傷付けて喜ぶタチではない。なんて今更言わなくても分かるけれど、そもそもの  
話で「私は下には向かない」のだ。

この場合での「下」と「上」とは、言い換えるなら「ネコ」と「タチ」、更に言い換  
えたならば「受け」と「攻め」だ。

普段、私がいみななどの目合いの中で自然と『受け手』に回っていたのも、単に私が色々  
と抑えていたからに過ぎない。傷付けない様に、やり過ぎない様に、爆発してしまわな  
い様に、ただ恐れていただけの事。

証拠に、私が『攻め手』としてみんなを愛したのは、ナミさんとの初夜と、後は酔っ

ていてタガが外れている時だけだった。

ゾウの背端に辿り着き、飛ぶのを止めて下へと真つ逆さまに落ちていく。落ちる時間すらも惜しいとばかりに宙を蹴ってブーストを掛け、耳元で響く悲鳴に微笑みすら浮かべていた。

興奮状態であつてもこのままサニーへ突つ込む訳には行かないので、甲板に足をつける瞬間に一気に減速してふわりと着地する。

「は……あ、はあ……っは……！ あんた、ねえ……！」

「……ふふ、怖かった？ ナミさん。なら良かった、足震えてるし、怖くて力も上手く入らないでしょ？ それじゃあこれから何をされたって、抵抗出来ないね？」

「……！……分かつてるでしょうけど、私は最初からあんたになら何をされたって構わないと思ってるわよ。1番初めにあんたとそういうコトをした時もそう言わなかった？」

「好きにしてもいい、だったよね。勿論覚えてるよ」  
「つきゃ」

ぐい、とナミさんの腕を引つ張つて歩いていく。目的地は当然寝室……じゃなく、私達がいつもご飯を食べているキッチン&ダイニングだ。

電気なんて点いている筈も無く、月明かりも碌に入つてこないから真つ暗だった。

ナミさんも予想外の場所に連れて来られたからか、首を傾げて私の居る方を見ていた。暗くて私の顔は見えていないだろうけど。

「まさか、先に腹ごしらえとか言うんじゃないでしょうね？」

「それこそまさかだよ、ナミさん」

「っ！」

ナミさんの足を払い蹴り、宙に体が浮いた所を抱き抱えてそつと床に寝かせ、その上に馬乗りになる。

「今日はね、サニー号の色んな所でしようと思ってるんだ。ここもそうだし、測量室、浴室、見張り台、甲板、いつも通りの寝室でも。そうすれば、この船のどこに居たって思いつけるでしょ？」

「……………ふふ、本音は？」

「……………素面で我慢しないっていうのが初めてだから、どうすればいいのか分からなくて困ってます」

「まあ、ミキータなら本気で言いそうだけど、あんたはそういうの気にしないもんね」

興奮のし過ぎで空回ってるのが即見抜かれた訳だけど、今すぐしたいのだという事実に変わりは無い。性交に限らず、今はとにかく彼女と肌を重ねていきたいのだ。

暗闇の中でも私にはハッキリと見えているその端整な顔立ちに己の顔を近付けて鼻



先を擦り合わせれば、ナミさんはくすぐったそうに身を振りながらも幸せそうに笑みを浮かべた。

少し顔を離し、頬を優しく撫でて、もみあげを掬う様に何度も何度も弄る。

そうしながらゆつくりと耳元に唇を近づけて、優しく呟いた。

「愛してるよ、ナミ」

「——っ」

びくん、と彼女の体が跳ねた。私だからこそ分かるこの反応の意味する所に激しい征服感と幸福感が湧き起こり、同時に『まだ何も触ってすらいないんだけどなあ』と冷静に考えている部分もあつて。

「イリ……んっう……!」

「っ、ふ……っん」

ナミさんが口を開いた瞬間に自分の唇で塞いで喋る暇すら与えてあげない。だけど舌を入れる事はせず、ただ強く強引に唇を重ね合わせているだけ。

やがて痺れを切らしたナミさんがちろちろと私の歯を舐め口を開ける様に可愛くおねだりしてきたので、意図を気付いた上で無視をして断固として口は開けないでいた。

「……んう……」

明らかに不満気なナミさんも可愛いな、と、キスをしながら頬を撫でつつそう思う。

普段私と致している最中にキスをする時、ナミさんは目を開けている事が多い。理由は私の表情が見たいからだと言っていたけど、今のナミさんはぎゅつと目を閉じていて普段程の余裕も無さそうだ。

そんな事が分かると言う事は当然私は目を開けていて、愛しい正妻の反応を何一つ見逃す事が無い様に凝視しているのだけだ。

私が舌を絡ませる気が無いと悟ったのか、ナミさんは寂しげに舌を自身の口内に戻そうとして……、

「っん……!?ふ、あ………れる……っ」

それを追う様に強引に舌を絡ませ、激しくナミさんの口内を蹂躪していく。啄む様に、更に角度を変えながら何度も何度も唇を重ね合わせ、中では舌が激しく暴れ回っている。ナミさんの顔の横に力無く置かれていた左手に私の右手を置き、艶かしく撫でた後、指を絡ませる。

最早ナミさんの口の中は彼女のものか私のものか分からない位に唾液が混ざり合っている事だろう。それでいい、分からなくなってしまうえば良いんだ。

私とナミさんという2人の人間の境界線なんてものは、今この時のみ消失して一つになる。そう言うのが過言では無い程、重なり合うのだから。

「っぷは………どう?ナミさん、今更言うまでも無いだろうけど、私の想いは何一つ変

わっていないでしょ？」

「はあ……はあ……、ん……そう、ね」

なんだろう、納得はしてくれただけ、どこか不満げみたいだ。

キスが足りなかったかな？それならまだまだ沢山するから心配しなくてもいいんだけど。

と思つてもう一度重ねてみたけれど、顔を離れた時のナミさんの顔はまだ不満げで、なんなら気付いていない私に対して更に眉が内側に寄つてきている。

「えつと……ごめんナミさん、私、何かしちゃったかな？」

「……何もしてないわよ。……ただ、その……」

『もう、呼んでくれないの？』

そう上目遣いで言われた瞬間、私は下唇を強く噛んで押し寄せる感情を必死に堪えた。我慢しないとはいつても、流石に理性までは飛ばす訳にはいかない。だといふのにこの私（わたし）たらしは遠慮も何も無く私をトばしにかかつてくるのだ。

嫁の為ならば、私は恐らく出来るだけなんだつてするだろう。彼女の可愛いおねだりも、結局は叶えてあげるのだけだ。

なんというか、身近な人程呼び慣れた呼び方を変えるのは気恥ずかしいものだ。

でも確かに、ナミさんは以前、私がナミさんにしていた敬語をやめた時の様に呼び方

に敬称を付けるのもやめないかと言ってきた事があった。

その時からずっと待たせているのだとすれば……うん、それはダメだよね。

所詮私が多少の羞恥を味わうくらいなのだから、それで正妻が喜んでくれるのなら安いものだ。

「……ナミ」

「……ん」

ぽつりと呟けば、ナミさんは……いや、ナミは瞋み締める様に瞳を閉じて頬を赤く染める。ただ名前を呼んだだけでこんな幸せそうな反応を返されてしまうと、私の悪戯心にも火がつくというものだ。

「ナミ、ナミ……なーみ」

「っん、ふ………」

今度は耳元に口を寄せて何度も囁いてみると、ナミは咄嗟に口を押さえて体をもじもじと振らせた。

とにかく、普段はまだいつも通りナミさんと呼ぶ事にしよう。彼女の期待に応える為にも常から呼び捨てで呼んであげるべきなんだろうけど、これはこれで夜が盛り上がる材料にもなる。朝起きた時『ナミさん』呼びに戻っていれば当然ナミは不満に思うんだろうけど、ま、その時は恥ずかしいからまだ当分このままで、とかなんとか誤魔化すと

でもしよう。彼女相手にそんな誤魔化しが通用するかはともかくとして。

その後、私がナミを心ゆくまで堪能したのは最早語るまでもないけれど、その際のナミのおねだりが非常に上手かった事だけはここに吐き出しておこうと思う。

まあ、可愛い『おねだり』が原因で必要以上に張り切ってしまった私のせいでナミは途中で気絶してしまっただけ。

……気絶した後も昂りが収まり切らずに彼女の体を弄んだ事は、言わない方が賢明なのかな……でも私は悪くない、何をしていても可愛いナミが悪いのだから。

## 216 『女好き、くじらの木の中へ』

「……………んあ……………」

ぱちり、目を覚ます。隣では乱れた髪のままのナミさんが、私が最後の理性を振り絞って被せた布団にくるまって、私の腕に額をぴったりとくっつけて愛らしく寝息を立てていた。

—— なんとというか、やり過ぎた……………。

思わず1人大きなため息を吐いてしまった。窓から差し込む朝日は随分と高くなっているから、恐らく今は昼前くらいだろう、最早朝日ではない。何が言いたいかというと、そんな時間まで私は寝ていて、更にナミさんはまだ起きてすらいないという事で。

普段、ナミさんは私よりずっと早く起きて測量室に籠もり、夢である世界地図を完成させる為に机の上に広げた海図と睨めっこをしている。

つまり、昨晚はそれ程“やり過ぎた”という事である。

まあ、ナミさんが気絶したのが確か段々明るくなってきた時だったし。むしろその事を考慮するなら早起きだと取れなくもない、よね？うん。

「……………ほんと、可愛かったなあ」

形勢逆転なんて事はただの1度も起きず、ずっと私のターンだった事もあって最後の方のナミさんはなんとというか……いつもの余裕がない、冷静さを欠いている感じ？そりゃあね？そんな嫁の姿を見せられたら私だって収まりが効かなくなりそうですも。しかも昨晚に関しては意図的に理性を取つ払つてた訳だから余計止まらなくなつてしまひ、そのせいでナミさんが意識を失つた後も私は俄然やる気もりもりだったのだけども。

少し手を動かし、私の腕にくつつくナミさんの前髪を梳かす様に撫でる。サラサラで、私のもの比べてもずっと綺麗で絹の様なソレは本当にずっと触つていられそう。ナミさんから言わせれば私の髪の方が綺麗だとの事だけどそんな事は絶対にあり得ない。……なんて、相手の事を一番に思う私達じゃあこの話題は平行線だと結論が出てるんだけどね。

「ん……」

そうしていれば、流石にナミさんも目を覚ましたのかゆつくりと瞼を持ち上げて、  
「じゃ、失礼して」

「……んう」

まだ寝ぼけ眼なその唇に、挨拶代わりにと軽く口付けを落とした。

別に私としては構わないけど、昨晚に続いて今日までナミさんの体を酷使する訳にも

いかないので盛り上がり過ぎない様過度な触れ合いは謹んでおこななければ。

「おはよ、ナミさん」

「……おはよう、イリス」

起きて早々『不機嫌』だと主張する様にジト目で睨まれるけど、これに関してはスルーさせて貰う。呼び方が元に戻っているからなんだろうけど、私の欲の為に普段は“きん付け”のままで行こうと思ってるし。

「もう11時くらいかな？湯船は張れてないけどお風呂入る？」

「ええ、何故だか私が最後に記憶しているよりもずっと“痕”が増えている事だし、ね」  
またしてもジト目で見られるも、それに関して私は絶対に謝罪しないと決めているのだ。

「言っておくけど、それはナミさんが魅力的なのが悪いのであって私のせいじゃないからね」

「気絶した後の嫁の体を好きにしておいて？」

「うん？ナミさんは私のモノなんだから、それは私の権利でしょ？」

「それはそうね。そもそも私はあんたに好き勝手されるのは嫌じゃないから」

「はは、随分と私に都合の良い女になっているって自覚ある？」

「あんたこそ、私をそうさせたのは他ならぬあんた自身だって自覚はあるの？」



私が何をやっても肯定し、身も心も全てを私に委ね、好き勝手に弄ばれようとも幸福を覚える。しかもそうさせたのは私で……うん、ナミさんや他の嫁達には悪いけど、なんだか凄く良い気持ちだ。

「本当の事を言っちゃうと、あんたの『好き勝手』の中に私達が嫌がる様な事が含まれないって言うのが真実なのだけだ」

「じゃあ、ナミさんが私にされて嫌なことって何があるの？」

「そうね……みかんの木を伐採されるとか、海図を捨てられるとか？」

「なるほど、それは確かに私の『好き勝手』には含まれないね」

なんて事を話した後で2人揃って浴室まで向かい、お互いの体を洗い合って昨晚生まれた汗などのベタつきを落としていく。その際ついついスイッチが入りそうになったけど、それはなんとか押し込めて無心で手を動かした。

体を洗い終え替えている間も、いちいちナミさんのぽよんが揺れているものだからそこに視線が行ってしまい、頭をブンブンと振って煩惱退散を図る。

……ダメダメ！ 昨日の刺激が強すぎて忘れられないって！ 意識するでしょこんなの！

とにかくみんなの元へ帰る為にもまずは一旦この煩惱を何とかしないと……！

「……はあ、好きにするんじゃないの？」

「うえ？」

色々と我慢していた私の手の平に、唐突に何か柔らかいモノが押し当てられた。というか、ぽよんですね……ナミさんの。

私がお慢しているのに気付いていたのか、準備万端とばかりに下着を付けていないっぽいし……。

ま、まあ？嫁にここまでさせておいて何もしないって、主人としてはどうなの？って感じだし？あれだよあれ、据え膳？うん、それ。

「……また風呂行こっか」

「ええ、お手柔らかに頼むわね」

着替えたばかりの服をすぐに汚すのは気が引けたので、2人で服を脱いでまた浴室まで戻っていった。

余談だけど、全然お手柔らかに出来なくて結局4時間は浴室に籠りっぱなしだった。

サニ―号を出たのも15時を回ってて、みんなと合流する予定の時間を大幅に遅れる結果となった……けど、それもこれも全部ナミさんが可愛いのが悪いと思う。

\*\*\*

「あれ、みんなどこ行つたんだろ？」

ナミさんとイチヤイチャした後、私達は俠客団ガイダイアンズの居住区に足を運んだ。

でもルフイ達は居ないみたいで、仕方なく見聞色の効果を最大まで広げて探そうとした時、療養所からシャルリアが駆け寄ってくるのが見えたので一旦中断する。

「イリス様、ナミ様、お待ちしておりました、他の皆様の元へご案内致します」

「ん？みんなどこか行つてるの？」

「はい、『雷ぞう』という方に会いに行つております。そちらにお見えになる『くじらの木』にて匿つているとか」

このくじらの形をした巨大な木の中に隠してたつて事か。

確かにその場所に絞つて見聞色で探つたらみんなの反応を感じる事が出来たけど、どうやって入るんだろ、このくじら木の中。

「どうやらあの木の『尾』部分に隠し扉があるらしいのですが、後発のイリス様にも分かりやすい様に目印をすると仰つておりましたので迷う事は無いかと」

「あ、そうなんだ。ごめんね、私達の為に待たせちゃつて」

「謝罪などお止め下さい。私はイリス様の『お嫁』ではありますが、同時に『王』である貴女様の忠実なる『臣下』でもあります。あなた様を待つという行為が苦になろう筈も

御座いませんで」

「じゃあ、王としてシャルリアに謝罪させろって命令すればいいのかな？」

そう言う目に見えて狼狽えだしたシャルリアが可愛くてつい吹き出してしまった。あたふたしている彼女を見ると何故かほっこりするんだよね……ギャップかな？

「王とか臣下とかはあんまり考えなくていいよ、あなたは私の大切な嫁、重要なのはそこでしょ？」

「……ナミ様」

「諦めなさいシャルリア、こういう所はルフィに似てんのよ、何を言っただって意見を変えたりはしないわ」

私と正妻であるナミさんの意見が同じである以上、シャルリアは何も言えなくなつたのか恭しく頭を下げた。でもシャルリアだつて私の事を考えてそう言ってくれた訳だし、否定しただけで終わるのも悪いよね。

「臣下として扱う事は出来ないけど、シャルリアの言う様に私達の間には明確な上下関係があるって教えてあげようか？今夜、ベッドの上で」

「……………はい、是非お願い致します」

この場合での上下関係とは即ちタチネコの事だけど、細かい事は良いよね！シャルリアも嬉しそうだし。

それに、私とそういうコトをするのが幸福だと思ってくれてる時点で、私は凄く幸せ者だと実感出来る。今でこそ当たり前前の様にキスとか色々出来るけど、普通はそういう訳にもいかないし。

今夜の楽しみが出来た後、私達はシャルリアの言葉通りにくじらの木の尾までやって来ていた。歩きで向かうのは骨なので私が2人を抱えてひとつ飛びしたのだ。

で、シャルリアが言っていた様に隠し扉があり、その近くを眩い火の玉が飛び回って目印となっていた。私達が近付けばその玉は扉の中へと入っていつて薄暗い内部の灯りを担当してくれる様だ。

「叶の魔法かな、相変わらず汎用性が狂ってるというか……」

私達に反応して行動パターンを変える火の玉って何？そういう風にプログラムする事も可能って事なのか、はたまた葉が見聞色で気配を察知してそういう風に変更したのか。私の読みでは前者だと思うけどね、だって叶だし。

「ミンク族は木の内部を加工するのが得意な種族だとは思っていましたが、この様な高所ですらも問題なく加工出来るのは素晴らしいですね」

「木の枝の中をトンネル型の通路にしちゃうくらいだし、自然を利用した技術が優れてるみたいだね」

今も隠し扉を潜ってからというものの結構な長さの階段を降りてるけどまだまだ先が見えないし、その上この階段自体もかなり広く作られている。恐らくは大きい体躯のミンク族が数人通っても問題ないくらいの広さにしてあるんだろうけど、それだけにミンク族の技術力の高さが窺えるというものだ。

長く続く階段をナミさんとシャルリアに気を配りながら降りていけば、やがてかなりの広さがある空間へと辿り着いた。みんなも居るみたいで良かったけど、奥の壁に描かれてる変な模様はなんだろう? ……あ、その下にあるの、もしかして歴史の本文!? なんか真っ赤だけど……。

「ごめんみんな、お待たせ」

「キャハッ、気にしないでイリスちゃん! ……んん? イリスちゃん、ちよつと雰囲気変わった?」

「あら、本当ね。何かあったのかしら?」

「……」

あれー、まだ何も言っていない筈なんだけどなー!!

ミキータやロビンだけでなく、何も言っていないけど私を半目で睨んでるペローナちゃんにも気付かかれてるんだろうなー!!

何が変わったって、そりゃあもうベッドに入ればすぐ分かる事だけど、今は敢えてス

ルーさせて貰おう。多人数の前で言う事でもないし。

「なんで気づいたのかはともかく、その話はまた夜ね。ところでそっちの初めて見る顔が雷ぞう?」

「すげーぞイリス! 雷ぞうは忍者で、増えて消えて手裏剣なんだ!!」

「とりあえずルファイが興奮してるのは分かった」

ルファイでなくとも実際に忍者なんて見たら興奮しちゃうだろうけど。でもなんか雷ぞうって言っちゃなんだけど忍者っぽくない…よね? 誇張抜きで二頭身だし、素早い動きとか出来なさそうなんだけど。

「あ、叶、火の玉ありがとう。お陰で助かったよ」

「いえ、気にしないで下さい。それよりもイリス達が居なかった間に色んな情報が出てきましたよ、聞きますか?」

「うん、お願い」

昨晚から今日のおやつ頃までずっと居なかった訳だからね。

奥の真つ赤な歴史ポネグリップの本文も気になるし、ここはじっくり聞いておく事にしよう。

## 217 『女好き、情報の濁流』

あの後みんなから色々な事を聞いて、正直色々ありすぎて頭が混乱しそうになったから一旦纏める事にした。えつと……。

・モモの助は『光月おでん』の跡取り。光月おでんっていうのはワノ国の大名の名であり、今はもう亡くなっている。つまり、錦えもんとは親子関係ではない。

・奥の壁の模様は「光月一族」の家紋。侍組やイヌアラシ、ネコママシにも同じ模様が背中に印されている。

・赤い石、ロード歴史ポーンアップの本文は「ラフテル」へ辿り着く為の道標。この世界の何処かに存在する4つのロード歴史ポーンアップの本文にはどこかの「地点」が記されていて、地図上でその4つの点を結んだ時に中心に「ラフテル」が浮かび上がる。ついでに言えば、歴史ポーンアップの本文を作成したのは800年前の光月一族だとか。

・光月おでんは既に故人だけど、その原因となつたのはワノ国の「將軍」と海賊「カイドウ」の手によるもの。今もカイドウ……というか『百獣海賊団』はワノ国に居て、そもそものおでんが処刑された理由は、おでんがゴールド・ロジャーと共に最後の島であるラフテルに辿り着き、世界の秘密を知ったから。



・おでんが錦えもん達に託した最後の言葉は、「ワノ国を開国せよ」という一言のみ。しかしこの悲願を果たす為には敵であるワノ国の将軍を討ち取る必要がある、即ちそれつらと手を組んでいるカイドウをも倒さなければならぬ。当然、錦えもん達の戦力では逆立ちしたって勝てる相手ではないのでこうして共に戦ってくれる同志を募っていた。錦えもん達がゾウを目指していたのはこの為である。

・そんな経緯もあり、モモの助から正式にルフィへとカイドウを倒す為の助力が要請され、ルフィがそれを引き受けて「忍者海賊ミンク侍女女王同盟」とやらが結成された。

・サンジ奪還まではワノ国での対決を待ってもらおう事になった。

「……………うーん」

……………多い！あまりにも多い！

そりやあね？私が明るいうちから劣情駆り立たせてナミさんとにやんにやんしているのも原因なんだけど、どうしてこれだけの時間でここまでの情報が出てくるの！？詰め込み過ぎだよ！！

……………なんて言っても仕方ないけどさあ。

でも、やっぱり錦えもんとモモの助は親子関係ではなかったみたいだ。事情を理解したからこそ分かる事だけど、私が最初に2人に感じていた違和感の正体は妙な距離感に

あつたんだと思う。親子にしては錦えもんのモモの助に対する態度が固すぎたんだ。言葉遣いとかは上手く繕つてたのかもしれないけど、モモの助に触れる時の仕草などに妙なこちなさがあつたからね。

まあ、自信が無かつたから誰にも言わなかつたんだけど、まさか本当に合つてたとは。これはもうナミさんにちゆうするしかない！

ラフテルの件に関しては今はどうする事も出来ないだろう。ロビンが解読して、ついさつきナミさんがその地点を地図上に表していたけど、残り3つのロード歴史の本文がないと何も分からないだろうし。

それにこれ、現時点では私達だけしか分かりようが無いだろうから他に越される心配も無いしね。だって歴史の本文はロビンにしか解読出来ないし、地図上を点で結ばなくちゃいけないのなら地図だって必要な訳で、偉大なる航路にはそもそも全体の地図が存在しない。で、私達にはそれを描けてしまうすごい航海士も着いてるのだ。

こうなつてくると「ワンピース」を探し求める輩にとつてロビンの価値が一気に上がる事になるし、その分危険な奴らに狙われる確率も高くなる訳だけど、その点は心配いらない、何故なら私が居るからね！

「この長すぎる同盟名はなんなの？」「ハーレム女王と素敵な嫁、その他の愉快的仲間達」で良くない？」

「その方が長いしそれ以前に色々とおかしいだら!!」

「じゃあハーレム女王と素敵な嫁達」

「そこを消すなよ!!?」

うん、うん。今日もウソツプはキレツキレだね。

そういえば、私達にはそんなに関係ないけどミンク族にとつてはかなり大きな出来事も1つあった。というのが、イヌアラシとネコママシの仲直りである。

モモの助が父親であるおでんの名を出して喧嘩中の2人を止め、今後の意味のない喧嘩をやめる様に言ったのだ。喧嘩といつても住む土地を離れたりしていなかった2人の事だから、形だけでも仲直りすればすぐにでも心の方もお互いを許していくんだろっけどさ。まあそもそも私達は2人がどうして喧嘩をしているのか知らないんだけども。

こういつた出来事もあり、ミンク族にはこれから何時に寝て起きても問題無いという嬉しい特典が付いてきたのである。となると『王の鳥』という立場はどうなるんだろっけ?単に専属の従者みたいになるのだろうか。

そうして私達は、用も済んだという事でくじらの木の内部を後にして、徒歩で下まで降りる事になった。

私としては飛んで帰っても良いんだけど、せっかくだから嫁達とゆっくり歩くのも悪くないかなって。

「……私はんな事気にしねエから下まで運んでくれ。ここを登ってきて疲れてんだよ」  
「じゃあおんぶしてあげる、今の私の身長ならギリギリ足が地面につく事は無いと思う  
し」

「……、」

そう言つてペローナちゃんに背を向ければ、少しの間を置いてペローナちゃんの重みが背中にのしかかつて来た。重みつて言つても恐ろしいくらい軽いんだけどね。彼女は私の嫁の中でもかなり軽い方だし、2年間節制を余儀なくされていたシャルリアと良い勝負が出来るくらい軽いんだから相当だ。肌の白さも病的だし、目はくりくりだし、唇はぷるぷるだし、鼻はしゅつと通つてるし、髪は美しいピンク色だし、ぽよんは大きいし、その先端は髪と同じ色の

「おい……なんでそんなに息が荒いんだ」

「ハッ……じゆるり、なんでもないよペローナちゃん!」

「……そうか」

……ん!?ちよつとペローナちゃん、抱きつく力強くなってません!?ぼ、ぽよんが!形の良いぽよんが私の背中に!!肩甲骨に!!!

こうなつたら……全神経を背中に集中させてこの状況をとことんまで楽しんでやる

!!

「時にゆガラ、その麦わら帽子、誰かから譲り受けちゆう事はないか？」

「ん？コレか？この帽子はシャンクスから貰ったおれの宝物だ」

「そうか！シャンクスの！道理で見覚えのある麦わら帽子やと思うた！」

ふおお!?遂におでこを私の首筋に擦り寄せて……!?なんか周りが盛り上がってるけど今私はそれどころじゃないんだよ！ペローナちゃんの貴重なデレ期到来してるんだから!!

「イヌアラシもそう言ってたな、みんなシャンクスの事知ってるのか！」

「ネコも私も一時ロジャーの船に乗っていたのでな。とは言っても、私達は常におでん様の従者として船に乗った。白ひげのモビーディック号に乗っていた時も、そこからおでん様がロジャーにスカウトされた時もいつも傍に。世代で言えばシャンクスやバギーの様な『見習い』達に近い若僧だったのだ」

「白ひげ!?え、おい待てストツプ！頭が追いつかねエ!……そうだ！イリス！お前なら白ひげ本人から何か聞いてるんじゃないか!?」

「……………今夜はシャルリアって決めてたけど、我慢しなくていいのならシャルリアとペローナちゃんを同時に頂いてもいいんじゃないか……?」

「ダメだ聞いてねエ！自分の世界に入ってるやがる！」

だってさ、こんなに体を押しつけてくる様な真似されて我慢できると思う?普通無理

でしょ？私は無理だね、ムラムラしちゃうね!!

本当私の嫁ってなんでこうも誘うのが得意なんだろう！

……うん、まあ盛り上がるのはここまでにしておこう。勿論夜はその分はしゃぐけど。

ウソツプは聞いてないって思ってるけど、実際は反応する暇が無かっただけで周りの話は耳に入っては来ていた。白ひげやシャンクスからおでんの話を聞いた事はないから今更話を掘り返した所で意味はないだろう。

「じゃあ錦えもん達も白ひげの船に乗ってたのか!？」

「いや、ルフィ殿、拙者達はずっとワノ国に!」

「むしろ我らはおでん様が海賊の船に乗り込まぬ様、必死に止めておった立場。鎖国国家のワノ国においては海外へ出る事自体が罪!かたやおでん様は閉ざされた自国の法にずっと疑問を持ち続けた異端児だったのでござる」

鎖国かあ。本当に日本みたいな国だね。

つと、話を聞く前に……と。

「ちよつとごめんね」

「……降ろすのか……?」

「……あのね、ペローナちゃん。お願いだから外でそんな顔するのやめてくれる?」

狙ってるのかと疑ってしまう程にうるうる涙を溜めたペローナちゃんの瞳に射抜かれ、目を手で隠して空を仰ぐ。

どこでスイッチが入ってしまったのかは分からないけど、今日のペローナちゃんは、甘えん坊モード。全開で私の心臓が保たない。それにそんな表情を多数の目に晒したくもないし、ちよつと自重して欲しい。

「それと、抱き方を変えるだけだから安心して、ね？」

「……ん」

怖いくらい素直で、今夜私はナミさんの時みたいに暴走し過ぎてしまわないか心配に思いつつもペローナちゃんを横抱きして歩行を再開する。

おんぶはね、色々とダイレクトに当たってヤバイので今は封印しておきます。

「ねえ、さっきの話も合わせて、色々と航路の事で心配になってきちゃったんだけど、これ、記録指針の記録！今辿ってないけど……いいの？」

ナミさんが左腕に付けてある記録指針をイヌアラシ達に見える様に掲げてそう言う。

確か、ナミさんの付けている3つの針が付いた記録指針は、当然選んだ針の示す航路によって到着する島は変わってくるけど、結局最後に行き着く島はどの記録を選んでも同じって話だった筈だ。

分かりますくいえば、辿り着くゴールが1つしかないあみだくじ。どこからスタート

してもゴールは同じという訳で。

「私達はトラ男君に会って、偶然ビブルカードでこの「ゾウ」へ来て、偶然ロード歴史の本文の情報に辿り着いたけど、確か双子岬のクロツカスさんの話じや記録ログを辿れば最後には全ての航路が1本に纏まるって……、私、そこにラフテルはあるのかと……」

「クロツカスカ！懐かしいにやあ！クロツカスは元気かよ！」

「元気だったぞ〜！会ったの2年前だけど！」

「奴は昔ずつとある海賊団を探しよって……」

「あ、それ、全滅した私の海賊団です！」

「え〜〜〜!!!?」

「ちよつと聞いてる!!?」

ネコムムシは気分屋な所があるらしく、ナミさんの話の中で気になる事があればそっちに気が取られて中々話が進みそうも無かった。

「ただどこそこは「2人の王」と呼ばれるだけあって、ネコムムシのフォローに回る様イヌアラシが口を開く。

「話は分かった。記録ログを辿った先に興味があるのなら行ってみればいい、その3本の指針が全て1つの場所を示す航路はある！——ただし、ゆガラ達はこれまでの旅で既にその先の冒険を始めているのだ」



「え？どういふ事？」

「本来ならば、その記録ログの終着点で初めて気付くのだ。歴史ホーネグリフの本文と古代文字の「謎」に……！歴史モの本文レを生み出した文明と、見えぬ最後の島、『ラフテル』の存在に！ロジャーはそこから大きく冒険をやり直した。クロツカスも海賊王クルの船員、全てを知る者の一人だ、ゆガラ達が嫌いでない限りウソはつかん。ゆガラ、航海士か？しっかりしているな……！大丈夫、道は間違えていない、このまま進め！」

イヌアラシの言葉に、ナミさんは誇らしげに頷いた。

ナミさんがしっかりとっていると、天才とか、優しいとか、可愛いとか、美人とか、スタイル抜群とか、そんなのは当たり前だとしても！イヌアラシは私の中でかなーり評価が上がったね！うんうん、嫁を褒められて嬉しくならない主人なんて居ないし！

## 218 『女好き、100倍の先』

「しっかし、おめエら “伝説” と繋がり過ぎててレイリーと会った時みてエに頭クラクラするよ」

うへえ、と舌を出しながら頭を押さえたウソツプがそう言葉を漏らす。

伝説がどうか言うけど……、

「私達だつて将来的には海賊王の船員クルーだよ？」

「そりやそうだが……」

「せつしやもロジャー達に会つておるが、記おくはあいまいでござる。若かつたゆえ」

「なるほど、曖昧……つてウソ付け！ロジャーは20年以上前に死んでるよ！誰と勘違

いしてんだ！」

ウソを付いた事に対してウソツプがツツコミを入れる流れはなんか可笑しくて笑つちやつたけど、そのモモの助の言葉には引つかかるものがあった。

この世界でロジャーといえば、言わずと知れた『海賊王ゴールド・ロジャー』だともが思い浮かべるだろう。そしてさっきのイヌアラシ達の話では、彼らはロジャーと面識がある。

……そりゃあ、モモの助はどう見たって20歳未満だから、誰かと勘違いでもしてなきや辻褄が合わないけどさ。

「さて……これからまだカイドウと戦うまでにやる事は多々ある！準備が必要でござる！先刻話した様に、「ワノ国」においても現在共に戦う「侍」達を募っておる所！」

「その間にわしらも会いたい男がおるぜよ！戦力が増えて困りはせんきにやあ」

「誰だ？」

「元白ひげ海賊団一番隊隊長……現在の『不死鳥海賊団』船長、「不死鳥のマルコ」じゃきー」

「マルコに？」

ああ、ネコママシとイヌアラシは白ひげの船にも乗ってるって言ってたつけ。マルコは45歳だから、当時の白ひげ海賊団に既に居たって事かな。

「マルコを誘うなら私の名前を出した方が良いよ、自意識過剰とかじゃなくて、絶対エースが来たがると思うし。流石に白ひげまでは着いてこないと思うけど……」

「そうか、今更だが、ゆガラはあの戦争の英雄である『女王』か！」

「はは、海賊じゃない人からすれば、英雄どころか死神かもしれないけどね」

私は自分を過小評価するつもりはないから、あの戦争でエースや白ひげが生き残ったのは私の力があってこそだったと自負している。勿論、その過程でルフィやボンチャ

ん、ジンベエ、イワンコフ、そして嫁であるハンコックや、実は一番の功労者かもしれないMr. 3の助力があつてこそだと言うのも理解してるけど。

「案外マルコ達は呼びに行かなくてもワノ国まで勝手にくるかもね。エースがドレスローザに単身で来てたつて事は、不死鳥海賊団は近くに居たつて事だし」

「え？ エースもドレスローザに着てたの!？」

「うん、ナミさん達には言つてなかつたつて。私達の船が見えたから寄つたんだつてさ」  
「軽いわね……」

私もそう思うけど、エースつて身内にとことんまでデレるタイプだからね……。ルフィも私も居るつてなつちや、そりゃあ一目見ておかないとつてエースなら思つても可笑しくないというか。

「探すのは上手くやるぜよ、ともかく、わしらにしてもまだ準備する時間が欲しいんじやき」

「そうか、分かつた！ じゃあ一度別れてまた集まる場所を決めねエとなー」

と、言う事で、再び集合する場所は現地の『ワノ国』に決まり、侍組はみなワノ国組に居るので、後から行く私達が迷わない様に錦えもんのビブルカードを貰う事となつた。

そうこう話している内に、私達はくじらの木の下にある俠客団ガイティアンズの居住区へと戻つて来

ていた。

下で待つてくれていたミンク族の面々が、雷ぞうの無事と、2人の王の手打ちの祝いと、無事落ち合えた光月家の祝いだと大盛り上がりして、雷ぞうが号泣したりルファイが宴がどうか騒ぎ出したりしたけどそれはみんなでなんとか諫めておく。現状、あんまり宴をしている暇も無さそうだからね。

「サンジ奪還組のメンバーは、ルファイと、私、それから……」

「私も行くわ、その場に居て責任を感じてるし……第一、この新世界の海を私なしで渡れないでしょ?」

「おれも行くぞ!ペコムズの回復を待てないのなら医者<sup>が</sup>居る!」

「それに、落ち込んだりした時誰が音楽を奏でるんですか?」

「ルファイと私、イリスとチョッパーね」

「ちよつと!仲間外れはやめて下さいよ!一緒に目の前でサンジさんを連れてかれた仲でしよう!」

となると、メンバーは私、ナミさん、ルファイ、チョッパー、ブルックつて所かな?

「……私も連れてけ」

「え?」

「連れてけ」

……まあ、だよ。今すぐにも出発しようとしてる訳だし、今夜色々したいと思ってるペローナちゃんを置いていくのは私としても本意では無い。なら……、

「シャルリアも来てくれない？」

「！は、はい、畏まりました」

同じく今夜の“相手”として決めていたシャルリアにも同行する理由がある。あくまでも私には、 فقط。

そりゃあ欲を言えばロビンもミキータも連れて行きたいけど、あまり大人数になり過ぎるのも良くは無い筈。我慢はしなくていいとはいっても、こういう場面での我慢は大事だからね。

「じゃあ、サンジ奪還組は私、ナミさん、ペローナちゃん、シャルリア、ルフィ、チョップ、ブルックで決まりだね、多分そっちに合流する頃には沙彩も連れてくると思うから戦力アップは期待しといてよ」

「あくん……イリスちゃんと当分会えないなんて、私、生きる価値を見出せるのかしら……！」

「再開した時の喜びに価値を見出してくれたら、私としてはこれ以上無いくらい嬉しいかな」

いい加減一味みんなで集まりたい所だけど、現実はその上手くも行かないみたいだ

し。

ちなみに叶はワノ国組だ。ビッグ・マムの方は私1人でも十分なので、危険なワノ国の方へ同行してもらおう事にした。ワノ国で異常事態が起これば、即座に『テレポート』で私を呼び戻すっていう寸法だ。

「しかしその人数だどこっそり潜入するのは微妙になってきたな」

「それに関してはルフイも居るし、最初から無理なんじゃないかな」

「違エねエな。にしてもおめエ、今日はやけに素直じゃねエか」

「うるせエ」

私に大人しく抱かれているペローナちゃんを見てそれをフランキーが揶揄っていると、ロビンもにこりと微笑みながらペローナちゃんの頭を撫でる。

「偶には素直になった方が良いわ。変に気持ちを抑えるのは良くないもの。所でイリス、そっちで方が一歴史ホーネッリフの本文に出会ったら『写し』を1枚お願い」

「うん、分かった」

「私もワノ国でカイドウの方の歴史ホーネッリフの本文を調べておくわ」

「それは良いけど、四皇のお膝元なんだから無理はしないでね？」

善処するわ、なんてロビンは言うけど、この笑顔はやる時は無茶してでも……ってやつだね、私には分かる。

うぐぐ……無茶も無理も私が今まで何回もしてきてその度にみんなには心配かけてたからあんまり言えない……！ロビン、絶対分かってて言ったなあ……！！

「……………ん？」

その時、不意に視界が少し傾いた。

あれ、どうして家や木が傾いてるのかな、と思うよりも早く今度は大きな揺れが私達を襲い、立っているのもやつとな程の“地震”が起こったのだと理解する。

いや、その理解は可笑しいかもしれない。なんたってここはゾウの上……地が震えているのではなく、ゾウが震えているのだ。

—パオオオオオオン……！！—

「象主ズニーシヤが鳴きゆうぜよ！何事じゃ！！」

「凄スニシヤい揺れだ……今までこんな事は……！！」

けたたましいと感じる程に大きな鳴き声と、恐ろしい程の揺れが私達を襲う。一瞬の事で少し反応が遅れてしまったけど、慌てて腕の数を倍加させてそれぞれ嫁の元へ手を伸ばししっかりと掴んだ。勿論キャロットやワンダ、他の可愛いミンク族達も忘れては



いないし、本体の腕はペローナちゃんをしつかりホールドしている。

といつても咄嗟の事だったので女王化も使えず、腕の数は最大で60本しか増やせなかったのだけど……。……改めて言うと60本ってなんか、きもちわ……。うん、考えない様にしよう。

「……え！誰の声だ……。!?」

「ルフイ、何か聞こえるの!?」

「ああ……。誰かは分かんねエけど……。……お前誰なんだよー!!」

ルフイの言う声も気になるけど、今はそれどころじゃない。流星にこの揺れじやあ周りの建物が耐えられる筈もないし、今まさに崩れようとしているものもある。幾ら私が揺れの脅威から嫁を守っているとはいえ、あんなのが降ってきたら危険だ!

「叶!なんかこう、良い感じの魔法で倒れてくる建物を押さえて!」

……。……って、叶どこ!?居ないんだけど!!まさか叶がこの揺れでどこかに吹き飛ばされて気絶してるなんて事は無いだろうけど……。!!

……。……そういえば、カン十郎も居なくなってる……。!?

「あーもう!こんな時に何してるの叶!仕方ない……。女王化!」

からの、見聞色100倍!ゾウに起きてる異変の原因を調べる為に、この辺り一帯を隈なく探して……。……って、探すまでも無かったっばい!普通にゾウの足元でゾウに攻撃

してる海賊達が居るし！

「命じるって何をだよ!!お前が応えろ!お前は誰だ!!」

「ちよつと、誰と喋ってんの!?!ルフィ!私達にはなんにも……!」

「おれも聞こえるだけだ!こつちの話聞いてねエし、どこの誰かも分からねエ!」

「……ジャックでござる!ジャックがゾウを……おそつているでござる!強そうな船が5せき!9時の方角に……!」

モモの助もルフィと一緒に変な声を聞いているのか!それも、ルフィより正確に把握しているみたい!

「ゴール・D・ロジャーもおでん様もこの地にて同じ事を言っていたと聞く……!会話は出来ないが大きな“声”が聞こえると……!」

ペドロが言った事は、それでも今起きてる2人だけが謎の声を聞ける理由の証明にはならないけど、とにかく下に居るジャックをぶつ飛ばせば全て解決するって言うのは分かった!ただ……この揺れをどうするか……!王華にお願いするのが1番だろうけど……。

「声の主は、この、ゾウでござる……!」

「象主!?!」

「ゾウは、大昔に罪をおかし、ただ歩く事しか、許されていないのだ。……命令に、した

がい続けてる……。だから、1度だけ許可をくれ……。めいじてくれ…戦えと！」

モモの助がゾウの言葉を代弁してそう語った。なるほど、反撃自体は容易だけどゾウを縛る命令のせいで手が出せないって事か。

……だけど、ジャックをぶっ飛ばす役は譲れないね。

「私の嫁になる予定の人がいる国を滅ぼして、今回に至っては私の嫁を全員海に沈めようとしてるって事でしょ……。!!その反撃を、他の誰かに譲ってたまるか……。!!王華!!」  
「はいはい！役割は分かっている、あなたの嫁達をしつかり守っておけば良いんでしょ！」  
「違う！あなたの大事な叶が居ないから、あなたはそっちを優先するべきだよ！だから私の嫁は、私の力で守ってみせる！」

と言っても、いつもの通り神背頼みヒューマだけど！

ぱちくりと瞬きをする王華を放って「私」を呼び、私の役割を代わって貰う様にお願いしてペローナちゃんを預ける。

寂しそうな顔をする彼女が愛らしくて、こんな状況だというのにキスを1つ落としてしまった。

「ほら、いつまで呆けてるの、叶を探さなくていいの？」

「……ううん、そうだね、私は叶を探さなきゃ！」

そう言つて王華は消える様なスピードで移動を開始した。まあ叶に関しては心配す

る様な事も無いだろうけど、女王化した以上は出来るだけ王華と叶は会わせてあげないとね。

「モモ！お前が言え！お前の声なら届く気がする、ゾウがやられたらおれ達みんな海の底だぞ!!……多分！」

なんで最後に私の方を見るのかな？いや、その考えは間違つてないけど。そもそもゾウがやられるなんて事は私が許さないし。

「……っ！負けるなゾウ！倒れてはならぬ！ジャックを追い払ってくれー!!」  
「……さて」

——シエスタ クイーンエクステリア  
真・女王化。

先程まで揺れていたゾウの体が、しっかりと4本の足に支えられて微動だにしくなつた。モモの助の『命令』が届き、象の主とも称される怪物の一撃がジャック達を裁く為に振るわれる。

大きく振りかぶられたその巨大な鼻が、勝利を確信していたジャック達を押し潰さんと巨体に見合わぬ猛スピードで迫り——。

「悪いけど、こいつらは私の獲物だから」

バゴオオンツ!!

「ただ、その天災級の攻撃は、象主ズニーシャとジャック達の割り込んだ私の「片腕」によつて防がれた。」

その時の衝撃波で海は大荒れ、下のジャック達も被害を受けている様だけ……。

「私の声は聞こえないんだっけ？じゃあ悪いけど、無理矢理動き止めさせて貰うね？」

「……ふっ！」

「ツ!!？」

ズオオ!と私の体から放たれる暴力的なまでの「霸王色」が象主ズニーシャを包み込み、やがて本能で上下関係を察知したのか、象主ズニーシャは頭を垂れる様に頭を下げる。

「恐怖で言う事聞かせたみたいで本当にごめんね……ちよつとこの状態、本当に手加減難しくて……。」

「良い子だね、そのまま大人しくしててくれるかな？」

「」

言葉は通じてない筈だけど、私から放たれる「霸王」の圧はその身に刻まれたのだから。大人しくこの場は譲ってくれる様なので優しく鼻を撫でてジャックの乗る船へふ

わりと降り立った。

「……………てめエは……………誰だ……………!?!」

「誰だと思おう?」

わざわざこうしてここに降り立ったのも、何かしら弁明する事があつたら聞いてあげよう、くらいの軽い気持ちで来たのだ。私から話をしようとする気なんて一切ない。あー、でも忠告だけはしないとね、流星に殺したくはないし。

「今から殴るからさ、出来れば死ななくてくれると助かるかな。タフな人達が前に出て弱い人を守る様な感じで居て欲しいんだけど。あと、船は粉々になるだろうから泳げる人は泳げない人をなんとかしてあげてね?ほら、私って臆病だからさ、殺したくないというか」

「何を、言つてやがる……………?」

「言つておくけど、許しを乞うたつて無駄だよ?私の嫁を狙った時点で、私があなた達を許す訳がないでしょ?」

「嫁だと……………!?!まさか、まさかてめエは……………!?!」

図体の大きいボスっぽいやつ、多分ジャック（だろう）が声を荒らげるも無視して船から飛び立ち、象主<sup>ズニージャ</sup>を背に5隻の船と対面する。

直後、私に向かって飛んでくる大砲の雨を全て霸王色の圧だけで爆破させて腕を振り

かぶった。

シエスタ クイーン エクステイア

真・女王 化の効果は、倍加上限の解放。そして、100倍以下が使えなくなる。

となると……。

「——200倍灰」  
にひやくばいばい

100倍以上が解放されているという事にも繋がるのだ。

使い所を間違えると大量虐殺にも繋がるけど、今回は的多いし、直接当てる訳でも無いから平気だろう。

「——女王の慈悲なき別れ!!!」

放たれた拳は、そのまま拳圧となって5隻の船を襲った。

私の予想通り船は全て粉々となり、乗組員は全員宙へと投げ出されている。特に真正面にいたジャックなんかは拳圧をモロに喰らって既に意識を飛ばしているみたいだ。

「あちゃ……やり過ぎたかな……?」

船だけではなく、もはや素の視力では見通せないくらい遥か果てまで『海を割って』しまった様で……なんか居たよね、こんな事した神。

「まあいつか、スッキリしたし、みんなのところに戻ろう。…あ、象主、<sup>ズニーシャ</sup>ごめんね?歩いて

「良いよ」

「ぼんぼんと鼻を軽く叩けば、象主ズーシヤは安心した様に一鳴きして前身を再開した。  
とはいっても傷付けられた左足は今もなお血が流れ続けているから、こればかりは  
チヨツパーに診てもらった方がいいだろうけど。」



## 219 『女好き、鼈、双月に届かず』

時は、イリスが真・女王シエスタ クイーンエクステリア化を使用する少し前まで遡る。

象主がジャック達に攻撃され、その背に乗る者は皆、地震など比ではない程の強烈な揺れに襲われていた。

だけど、皆から離れた開けた場所に居る2人に限ってはそんな揺れなど関係ないとにかくに涼しい顔をしている。

1人は、『魔女』叶。

そしてもう1人は、『カン十郎』——否、『黒炭カン十郎』だ。

叶は得意の魔法で宙に浮き、カン十郎は美しい鳥に跨って空を飛んでいる。

普段のどこか間の抜けた表情をしている絵ではなく、カン十郎の乗るその鳥は羽毛一本をとつても繊細で、まるで絵から生まれたとは思えない程に鮮やかだった。

「良い腕です。それ故にあなたが裏切り者なのが惜しいと感じます」

「ほう……俺の本名に気付いていたりと警戒していたが、まさか力を隠していたのまでバレていたとはな。やはり貴様は危険だ、今ここで潰しておく」

「20年前からやって来たのなら仕方ないんですけど、その無知は己を滅ぼします

よ。まして、あなたの場合は空っぽですからね」

「！そんな事まで知っているのか。まさか、俺以外にもスパイが居るのか……」

叶が言うように、カン十郎は裏切り者であった。

ワノ国の『將軍』から送り込まれたスパイであり、己の役が完成されるなら死すらも厭わない狂人。類稀なる絵の才を持ち、何十年と錦えもん達を騙し続けた役者。

その名も、黒炭カン十郎。

主君であるおでんが死のうと心は動かず、共に笑い合つたあの日の思い出も彼にとつては心に留める価値も無く、また、真の主人である『將軍』に対する忠誠も特に無い。

彼が望むのはただ一つ、『完全な役者』。その為ならば討たれようとも構わないとすら思っている彼は、だからこそ空っぽであった。

確かに彼はスパイではあるが、スパイとしての行動と責任を果たしているだけであり、そこに何ら感情は混ざっていない。ただ与えられた役を演じ、いずれ来たる “ 結末 ” まで空っぽの己を動かすのみ。

そんな彼ならば、普段であれば叶が己の正体に気付くとも気にも留めなかったのかもしれない。ただどここうして皆の目を盗んで人気ひとけの無い場所へ呼び出したのは、何故かそうすべきだと思つたから。自分の感情が動いたのは久しぶりだったので、衝動に身を任せて行動に移しただけに過ぎない。

だが幸いな事に、己の正体に気付いているのは眼前の非力そうな少女ただ一人だけ。おかしな呪い<sup>ましな</sup>を得意とする者だとは分かっているが、実力を発揮した己にただの呪い師が敵う筈も無い。手早く「処理」し、海にでも捨てておけば問題無いだろうと考える。

まさかこの混乱の最中、己と少女だけが場を抜け出したと気づける者など居やしない。突然の失踪に周りは慌てふためくだろうが、それこそ己にはどうでもいい話だ。と、カン十郎はそう分析した。

そう、分析してしまった。

「ではとりあえず、あなたがこの先改心しようがしまいが、この場では拘束しておきますね。出来ればあまり抵抗しないでくれると助かります、弱い者いじめは好きじゃないので」

「カツカ！本物の強者を知らぬから、そこまで驕る事が出来る」

「そうですか、じゃあ良かったですね、今からそれを知る事が出来ますよ」

叶が手を翳し、その掌に光が集う。やがてその光は一本の杖となつて現れた。

戦闘力でイリスに及ばずとも、それでも彼女は四異界。『この世界の者とは思えない規格外の強さ』を意味するその肩書きを得ている彼女が、ただの呪い師である筈も無いのだ。

『トウレス・コルプス』

淡い光が叶を包み込む。相手を攻撃するのではなく、これは自身を強化する魔法の1つだった。

所謂身体強化魔法であり、『コルプス』『ドス・コルプス』『トウレス・コルプス』『アルタ・コルプス』の4種類存在し、左から順に効果が高くなっていく。

パンクハザードでイリスとの肉弾戦の際に使用したのは『ドス・コルプス』であり、それだけで素の肉体は脆い叶を大幅に強化させていた。

それだけに、今回使用する『トウレス』の効果が窺い知れるだろう。

『ブースト』!!』

「ほア…!?!」

重ねて『速度強化魔法』を使用し、一瞬でカン十郎の目の前まで移動してそのままの勢いで腹に蹴りを打ち込んだ。

イリスを相手にするならば、この程度の身体強化魔法は些か中途半端が過ぎるだろう。だが、相手がカン十郎ならば十二分であった。

これは彼が弱いから、という訳ではなく、その戦闘スタイルが原因なのだ。彼の能力である『フデフデの実』は、描いたモノをそのままの形で実体化させられるという極めて厄介な能力であるが、それ故に能力発動までどうしても隙が発生する。

同格以下までならば、もしくはは多人数戦での殲滅役ならば十分に強いだろうその能力も、今この時においては意味を為していない。

「……ぐ、何故だ……!?俺の目は誤魔化せん……! 貴様の足運び、体の軸の動き、タイミン  
グ、どれをとつても素人に毛が生えた程度! だというのにその速さは、攻撃の重さはな  
んだ!!?」

「好き勝手言ってくれますね……。ですが、その答えは簡単です、能力の相性差ですね」  
ケロツと言つてのけるが、叶を相手に相性の良い能力など純粋な身体強化くらいしか  
無いのだが。

火を出しても大量の水で瞬く間に鎮火され、雷を出しても土に逃され、水を出しても  
凍らされ、中途半端な格闘術はバインドしぼられて叩かれる。

汎用性の鬼、対応力の暴力。打つ手が無いからこそ、叶は『四異界』と呼ばれるまで  
になったのだ。

「ところで、あなたは本当にただの裏切り者なんですか? 弁明するなら今しかないです  
よ」

「……実は某、二重スパイなのでござる。……カツカ、役不足にも程がある! 俺がその程  
度の二流に収まると思うか!」

「思いませぬ、実際にあなたと会って話してみればみるほど、あなたがどうしようもな

い程に壊れている事がわかって来ます」

ですが、と叶は切り替える様に言葉を発した。

「どうしようもない程壊れていようと、それをどうにかしようとする事は出来ません。死で役が完成するとあなたは思っているらしいですが、結局それは逃げでしかない。真にあなたの役を完成させたいのなら、あなたはスパイという道に流されるべきではなかつたんです」

「流された？誰がだ！己の道は己で選び進んできたつもりだ！確かに、彼奴等の下へ忍び込んだのも、長い年月をかけて友としての信頼を得たのも上からの指示ではあるが、それを受け入れたのは他ならぬ俺自身だ！」

「……まあ、あなたがそう思うなら構いませんが。……あ、ちよつと喋り過ぎましたね、時間切れです」

その言葉にカン十郎は眉を寄せて言葉の意図を図ろうとしたが、自分の中で結論を出す前にその身を持って思い知らされる事となる。

まず第一の異変として、ゾウの揺れが収まった。カン十郎のビブルカードでゾウまでやって来ていたジャックがしくじったのかと懸念するが、ジャックの強さがある程度は知っているカン十郎からすれば失敗したとは考えづらかった。

次に、思わず飛び跳ねてしまいそうになる程の強烈な『覇気』の波動が辺り一帯に振

り撒かれた。カン十郎には知る由もない事だが、これはイリスが象主ズニーシャを従わせる為に放った覇気の余波である。

そして最後だが……。

「おっと、中々面白い組み合わせだね。2人でこんな時にこんな所で何をしてるの？ 戦ってるのなら問答無用で叶の味方をするから先に謝っておくね、ごめん」

真つ白の鮮やかな長髪を靡かせてこの場に登場したのは、他でもない王華だ。

ただ、その瞳の色だけがいつもと違う。空の様に美しい色の瞳は、今だけは燃え盛る焔の様な真つ赤に染まっていたのだ。

当然、イリスが真シエスタ・女クイン王エクステイア化を使用したのが原因である。

「叶と一緒に居させてくれるのはとっても感謝してるんだけど、だったら真シエスタまで使わなくても良いんじゃないかなあって思わない？ ジャックなら女王化でも十分だし、私が実体化出来る時間が減るじゃん」

呆れる様に肩を竦めてみせる王華だが、行動に反してどこにも隙は存在していない。それもその筈だ、彼女もまた100倍以上が解放されているのだから。

「そういう事情もあるから、とりあえず寝とこつか」

「は……？」

カン十郎は「後ろ」から聞こえる声に素っ頓狂な声を上げた。それは、今しがた目の

前から登場した女のもので。

瞬間、カン十郎は振り向きもせず横へ飛び退いた。直後に自分が居た場所で衝撃波が発生している様だが、それを細かく確認をしている暇は無く、首を回す時間すら勿体無いと無我夢中で足を動かした。

着地した後も脇目も振らず森の中へ飛び込んだ。己の失態を悔やむ時間すら惜しいが、それでも今回は事を急ぎ過ぎたと唇を噛む。

死ぬのは怖くない、が、意味もなく死ぬのは嫌だった。こんな所で命尽きても、誰の記憶にも残りほしくないのだから。

「1000倍灰」  
ひやくばいばい

「!?!」

最早声すら出ない程の驚愕に包まれる。

カン十郎は己の実力を適切に見極めている男だ。故に、逃げに徹した自分を捉えるのは容易ではないと自負していた。ここからある程度離れば自分の絵を描いて分身を作り2人の目を欺こうとも考えていたし、走っている最中も見聞色の覇気で気付かれないう様に気配を消していた。だというのに、白髪が悪魔は当たり前のように頭上で拳を振りかぶっている。ある程度離れる余裕すら与えてはくれない。

「波楼!」  
ハロウ



「がはア……!?!」

直接殴られてはいない。拳を突き出した際に発生するバカみたいに強烈な衝撃波、それだけでカン十郎はあっさりと意識を手放した。

……といつても、彼を中心として直径5メートル程のクレーターが発生しているのだから「それだけで」というのは間違っているかもしれないが。

「うーん、この状態だとやっぱり加減が難しいなあ。私でも難しいって事は、イリスは尚更って事か……」

よいしょ、とカン十郎を担ぎながら王華はそう呟いた。その言葉から察せる通り、彼女はイリスに比べて『技術』に秀でている。これは王華が総合的に見てイリスより優れているのではなく、得意分野が2人で分かれているだけだ。

「まあ、『得意分野』って言い方はおかしいんだけど」

王華はイリスより『技術』に優れ、イリスは王華より『力』に優れる。

簡単に言えば、王華はイリスの出せる最大倍加率を出せない。そしてイリスは王華程高度に技を使いこなせない。

とはいえ、王華にとつて今はその様な事はどうでも良いのだ。シエスタ 真の効果時間は短く、いつイリスの中に戻るか分からない以上は早いとこ叶と合流しなければならぬ。

あと、カン十郎の扱いについても叶と相談したいという思いがあった。

「錦えもんは信じてくれるかなあ」

どちらにせよカン十郎の裏切りを錦えもんやその他おでんの臣下達へ知らせる事は決まっているのだが、どう説明したものか、と王華は無い頭を捻って思案するのであった。

## 220 『女好き、五手に分かれて』

「終わったよー」

空から下降しながら、ふりふりと手を振ってみんなの集まる場所に着地する。まず初めにペローナちゃんはずんずんと歩いてきて、「ん」と体を横に向けた。

「はは、うん、分かつてるよ」

ひよい、と横抱きして、1度自分の身に寄せる様に抱き締めるとペローナちゃんは満足気に息を吐いた。

あ、叶戻ってる。王華も居るね。……あれ、近くに縄でぐるぐる巻にされて気絶してるのって、まさかカン十郎？何したんだろ、錦えもんも複雑そうな顔してるし。

「えつと……聞いても良い感じ？」

「ごめんイリス、みんなには説明してるから私はちよつと外しても良い？せつかくだから叶と色々話したくって」

「ああ、そうだね、私こそごめん、調子乗って真<sup>シエスタ</sup>使っちゃった」

「ほんとだよ、今度の修行は厳しく行くから覚悟してなよ？」

うぐ……もしかしてまた能力使用禁止で一戦とかするのかな……あれ嫌なんだよね、能

力禁止ってなったら覇気を使うしかないし、そうしたら私より覇気の扱いに長けてる王華が活き活きしちやうもんなあ。

まあ、今回は私が悪いし甘んじて罰は受けよう。叶と2人で少し離れた所まで離れていく王華は幸せそうだし、お詫びとしてまた今度、何も無い日にでも女王化して実体化させてあげようかな。

「……それで、カン十郎がどうかしたの？なんか頭にタンコブ出来てるっぽいけど」

「それが……」

なんだか話しづらそうなナミさんが、王華から聞いた内容を丸々私に伝えてくれた。

どうやらカン十郎は所謂スパイらしく、私達の敵でもあるワノ国の『將軍』の命令で情報を横流しにしていた様だ。

ジャックが2回も記録指針ログポースに示されないこの地に辿り着けた理由はカン十郎のビブルカードを持っていたから。そして、そもそも侍組が離れ離れになったのもカン十郎が仕組んだ事だったとか。

「……ま、待つでござる！ジャックとやらがカン十郎のビブルカードを持っていたというのは、今となっては調べ様が無い事で御座ろう！先に叶殿から聞いた話、拙者には俄かに信じ難い事実……！」

「うーん……だよねえ、怪しさはあるけど、仲間を疑うのは難しいし」

錦えもん達の目の前でカン十郎が何かしたとかならともかく、今回はそうじゃない。カン十郎が裏切り行為を働いていたのだとしても、仲間である錦えもんは信じられないのだろう。

「この件は一旦保留にしない？ ほら、叶から詳しく話を聞いた方が良いでしょうし。錦えもんが信じられないのも当然だと思っけど、叶だってそんな事で嘘をつく人じゃ無いからさ。」

「う……む、そうでござるな……」

「……いや、待て。そいつが本当に『將軍』の回し者なら、連絡手段はなんだ？ ジャックがそいつのダブルカードを持っていたのなら、そいつも誰かのダブルカードを持っている可能性があるんじゃないやねエのか。それがなくとも電伝虫の1匹くらいは懐に忍ばせていてもおかしくはねエ……」

なるほど……ローの言う事も一理あるよね。

逆に言えば、何も無ければカン十郎の疑いが晴れる可能性も……。

「——少々、酷な事を言うようですが、仮にそれらが見つからなかつたとしても彼が裏切り者では無いという事実にはなりませんわ」

「どういう事？」

「先程叶さんから教えて頂いた彼の能力は『フデフデの実』。体のどこからでも墨を出

す事ができ、描いたモノを実体化させる事が可能。……ならば、伝書鳩なども証拠を残さず生み出す事が出来るのではないでしょうか。しかし、紙までは墨で作れないと思いますので……」

そこまでシャルリアが言つて、ローが結論に気付いたのか口を開いた。

「連絡用の紙を持つていればクロ、そう言う事か」

「し、しかし、カン十郎はそれ程遠くへ飛べる様な鳥は描く事が……」

「自分の実力を隠すのは密偵の基本だ。その上それが『絵』なら更に容易になる。右利きの左利きだと偽れば、それだけで稚拙な絵が出来上がるだろうからな」

「うぐ……」

話は纏まったとは言い難いけど、とりあえずカン十郎の持ち物検査をする事は決定した様だ。

調べるのは錦えもんや雷ぞうで、本来ならば仲間である彼らにさせるのは正しくないらしいけど、彼ら侍組が自分でしっかりケジメを付ける為に任せたい。

……まあ、もしこれで何も見つからなかったらそれこそ私達は土下座でもしなくちや割りに合わないと思うけど。

「……おっと」

時間としては10分経ったか経ってないかくらいだろうか、シエスタ 真の効果が切れてしま

い、同時に私の中へと王華が戻ってきた。不意に体が小さくなったので、ペローナちゃんを万が一にも落とさない様にしっかりと抱き締める。

そうして、戻ってきた叶も含めてみんなで錦えもん達の検査を見守る事数分、錦えもんが一瞬、跳ねる様な声を上げて震える手で白紙の巻物を取り出した。

「……これで分かったでしょう。彼はワノ国の『將軍オロチ』から送り込まれた密偵、あなた方『赤鞘』の敵です」

「……そんな、バカな……いや、紙ならば持つていてもおかしくは……それにあの時、カン十郎も拙者達と共に死に掛けて……」

目に見えて狼狽えている錦えもん達に、叶はふう、と軽く一息ついて杖を軽く振った。その際に発生した紫色の光がカン十郎の体に纏わりつき、やがて溶ける様に消える。

「叶殿、何を……!」

「今のは弱体化の魔法です。イリスや王華に分かりやすく説明するならば、『デバフ』です。彼は強者ですので、身体能力を低下させて貰いました」

「出た、使い勝手の良すぎる魔法」

「それでもありません。これは完全に無抵抗の相手にしか効果を発揮しないので、逆に戦闘中では私の扱える魔法の中でも最弱クラスですよ」

あー、それなら確かに使い所を見極めるのが大変そうかも。

相手を無力化してから弱体化させたって、もう倒してるんだからあんまり意味ないも  
んね。

「錦えもん、雷ぞう、モモの助、あなた達は変わらず彼を信頼し、仲間として接してあげて下さい。カン十郎は確かにあなた達を裏切っていますが、それは彼がそうする道しか知らなかったからです。……だから、あなた達が望むのならば、その事実を知った上で彼を受け入れ、そして救う事が出来ます」

「……!!」

「上辺だけの仲じゃなくなつた時、きつと彼は生まれ変わりますよ。空の器が満たされれば、満たされたモノによつて変わる事が出来るのが人間ですからね」

とはいえ、錦えもん達も苦労する事になるだろう。何せいきなり仲間だったカン十郎が裏切り者だと発覚し、それを暴いたのが会つたばかりの魔女なのだから。信じたくはないけど、一応、証拠も出ている。ジャックがこのゾウまで辿り着けた事と言い、裏切り者が居る可能性は十分にある。

結論としては、錦えもん達は叶の提案を受け入れる事にした。あくまでも自分達はカン十郎の味方だと、そう言い切つたのだ。

それを聞いた叶は満足そうに頷いて、カン十郎を含めた侍組をとても優しい目で見ている。何だかんだ言つてやっぱり叶もお人好しで、とても優しい人だと思つた。



という訳でその話は一旦の纏まりを見せた。

カン十郎の扱いはワノ国組の叶や侍達に任せるしかないが、それとは別の問題として、イヌアラシや錦えもんはモモの助が『象主』<sup>ズニシヤ</sup>と会話出来たという事実が気になっているみたいだった。

「象主<sup>ズニシヤ</sup>の意思など、考えた事も無かった……！ましてや話が通じるとは……！」

「それに、ゆガラ……きつき<sup>ズニシヤ</sup>の姿といい、覇気といい、一体どれ程の強さを秘めておるのか、全く想像もつかんぜよ」

「まあね、嫁を守る為に誰よりも強くありたいし」

実際、あの2年間は色々強烈だった。お陰で自分でも驚く程力がついたけど……正直、安城さんの能力を知った今だとまだまだ油断出来ないって感じてる。

今日も難しそうだけど、明日からはまた王華部屋にお世話にならないと。

「まーイリスが強エのは今に始まった事じゃねエし、このゾウも味方になったらすげエな！」

「気楽な……ゴロニヤニヤ！」

「じゃ、おれ達出発するから食糧いっぱい分けてくれ！」

そう言つてルフィはどこから持つてきたのか自分の背丈以上はあるリュックを取り

出してイヌアラシとネコマムシの前に置いた。

食糧はまだバルトロメオ達くれたのが船にあった筈だけど、くれるというのなら喜んで貰っておこう。食べる物は幾らあっても困らないし。

「ルフイ！出発はまだ待つてくれ、ゾウはジャックに攻撃されてたんだ、怪我してる筈だから治してやりたい！」

「おう、分かった！」

じゃあ、私達はチョッパーズニーシャが象主の治療をしている間にペコムズを連れて来るのちやんとした班決めをしておこうかな。サンジ奪還組とワノ国組といっても、サンジ奪還組は先行組と後発組で分かれてるから。

そんな訳でルフイが全速力でペコムズを背負ってきたんだけど、怪我人に対して遠慮の無いルフイの背はかなり堪えるらしく、ペコムズは背負われてるだけなのに息が切れて大量に汗を流していた。

「はア…はア…！誰でもいい、変わってくれ！揺れが酷い…！」

「頑張つて！それで、サンジ奪還組の先行後発はどうする？一応メンバーは私、ナミさん、ペローナちゃん、シャルリア、ルフイ、チョッパー、ブルック、それからペコムズになつてるけど」

「私のレポートで先んじて送るのなら、その中だとシャルリア、ブルックでしょうか。」

後、ついてくる事になるペドロもですね。これで上限です」

「……む、私がついて行こうと思つていた事に気付いていたのか、彼の事と言い、その洞察力は凄まじいな」

そのペドロの言葉に叶は複雑な表情で苦笑いを返す。叶の素の洞察力も勿論凄まじいけど、恐らくカン十郎の件もペドロの件もただの原作知識だろうから叶からすればその言葉は素直に受け取る事は出来ないのだろう。

「ペドロが来るのは全然構わないけど、シャルリアを先行組にするのは反対しても良い？ それか、先行組の出発を明日の朝とかにして欲しいんだけど」

「何故……かどうかは聞いても意味無さそうですね、分かりました。では先行組、後発組関係無く、サンジ奪還組のメンバー全員と私で船に乗り、明日の朝に私が先行組を向こうまで送り届けましょう」

「ありがとう、うへへ」

おつといかんいかん、夜の事を想像したら涎が……。

「じゃあ、私達はワノ国ね」

ロビン、ミキータ、ゾロ、ウソップ、フランキー、ロー、それから侍組、ミンク組はワノ国か。

ロビンとミキータには出来るだけ気をつけて行動する様をお願いしておかないと

……！何たって完全に敵地だし、万が一があつたら事だからね。

「その事なのだが、せつしや、まだこの地に残ろうかと思つていてござる」

「残る？このゾウにでござるか？」

「うむ」

モモの助はゾウに残りたい様だけど、錦えもんはその理由に見当が付かなくて首を傾げている。理由はどうであれ、残るのは良いけど……。

「残つてどうなされる？」

「どうすればよいのかはわからぬ！されど……叶うなら今一度、話してみたいのだ！  
象主と、千年を生きたものとなぜせつしやの声は届いたのであろうか……よもや、光  
スニシヤ  
月家のなにかを知つてしまいか！」

「でも、立場だけで言えばモモの助つて錦えもん達のトツプなんだよね？そうそう別行動は取らない方が良いんじゃない？」

「いや、いいぞ。私はこのゾウをカイドウの脅威から守らねばと思つていた。どの道一  
氣にワノ国にはなだれ込めまい」

私や錦えもんの懸念していた事について、イヌアラシがそう解決案を出した。イヌアラシはここが落ち着くまで残つて、後からワノ国へと向かうらしい。その際にモモの助を連れて来るとの事だ。

そういう訳で、私達は四手に分かれて行動する事となった。

ゾウ居残り組はモモの助やイヌアラシ、他のミンク族。

ワノ国組は錦えもんを始めとした侍達、カン十郎も。そしてサンジ奪還に参加出来なかった海賊組。

『不死鳥海賊団』探索にはネコマムシとその配下。

サンジ奪還には、私、ナミさん、ペローナちゃん、シャルリア、それからルフィやペコムズ達。

サンジ奪還組に関しては先行組と後発組に分かれるし、正確には五手に分かれて、かな？

……ただサンジを取り返すだけなら簡単だと思う。でも、ドレスローザでの事もあ  
る。……安城さんが何も仕掛けてこないとは考えづらい。ドレスローザでの色々だっ  
て、安城さんが囁んでる件が結構あった。直接狙いに来ず、遠回しな嫌がらせみたいな  
事をしてくる理由は分からないけど……今回も何かしらはあるって覚悟をしておいた  
方が良いだろう。

## 2 2 1 『女好き、シラフ攻め攻め』

サンジ奪還組である私達がワノ国へ到達する為の手段として錦えもんのビブルカードを受け取っているが、それ以外の連絡手段、例えば電伝虫などを錦えもん達が持っていないという話になり、急遽野生のを捕まえて電伝虫にする事となった。

作るのは簡単だと言っていたが、それを簡単と言ってしまうフランキーの技術は一体どうなっているのか……。いや、ビームとか撃ってる時点で相当だけでも。

で、叶が言っていた様にミンク族からペドロが正式にサンジ奪還組に加わる事となった。何やらペコムズが居るからペドロをつけるって話だけど、その辺はよくわかんないし追求する程でも無いからスルーしておく。

「おっとそうだった、これ、今朝漸く完成したんだ！別行動になるから忘れねエ内に渡すとくよ」

「わあ、ウソツプ、ありがとう！」

何やら思い出した様に自分の鞆を漁り出したウソツプが、それをそつと手に乗せてナミさんに渡す。

「おっと、握る際には気を付けろよ？そいつは僅かな力加減で自在に伸縮する新しい」

クリマ・タクト  
天候棒だ！お前から預かったウエザリアの装置は全部組み込んだが、注文の時に言われた魔法のステッキつてのが良く分ならず……」

「ふうん、こうかしら？」

くるん、とナミさんがバトンの様に天候棒を回せば、今までのモノとは比べ物にならない速さで雲が発生し、周囲に落雷を落とす始めた。

一応周りに気を遣ってか小規模な雷に留めているけど、ナミさん程天候を知り尽くした人が持つのにこの武器程怖い物はない。

「持ち易いし回し易い……流石ウソップね、これこそがウエザリアの天候科学の集大成、私の求めてた魔法の天候棒よ！ありがとう、ウソップ」

「いやいや！それで、材料費なんだが……」

「蜃気楼テンポ！」

「逃げんなー！！！！」

「コントかな？」

しかもナミさんの事だから、この話は上手いこと流して結局材料費は出さないんだろうなあ。本当に可愛い。

そうやって各々準備しながら待っている事少し、ゾウの治療からチョッパーやミンク

族の医者達が戻って来た。

待ち切れないルフィに急かされながらもチョッパーは今後もゾウの治療を継続していく旨をしつかりと伝え、私達は最初にこの地へとやってきた正門へと足を運ぶ。

「よっし、みんな荷物は持った？」

「おう！飯持った！」

うん、ルフィはまあ、カバンから溢れそうになつて肉を見ればなんとなく分かるよ！

……あと、私の背負うリュックにこつそりと潜り込んで来た “この子” も。

「じゃあワンダ、ちよつと借りてくね」

「ん？ペドロの事か？それならば私に言わずとも……」

「ペドロの事じゃないよ。ま、私が責任を持って面倒見るから心配はしないであげて」

そう言うのと、私に気付かされている事に気付いたのかりュックの中身が軽く揺れた。

まあ、勿体ぶらずに言っちゃえばキャロットなんだけどね。私としてもついて来てくれるのならその方が良い。だって嫁にしたいし。

「じゃあ、行つてくる！ロビン、ミキータ、出来るだけ早くそっち行ける様に頑張るね！」

「ええ、イリスも無理はしないで」

「何かあつたら飛んでいくわ！その時は名前を呼んで！」



はは……ミキータの場合だと、本当に名前を呼んだら来てくれそうなのがね……。  
後心配なのはカン十郎だけど……。

「イリス殿、拙者達も覚悟は決めている、カン十郎が誰であろうと、拙者達はカン十郎を信じるでござる」

「へえ、カッコいいじゃん、でも、そこまで言い切った挙句背後から刺されるなんて事はやめてよね」

「その時はその時でござる」

……良くその状況で笑えるもんだよね、ほんと、一体どれだけのモノを背負ってるんだか。

「じゃあ叶、よろしく」

「全く、私は便利屋ではないんですけどね。……『ウインド』」

ふわり、とペローナちゃんを抱く私、ナミさん、シャルリア、それから術者である叶が浮かび上がり、ゾウの上からサニー号の元へと降り始めた。

それを見たルフィも慌てて腕を伸ばしてチョッパーやブルック達を抱き込み、トン、とゾウから飛び降りてくる。おー、すごい高所からの紐なしバンジーだ、チョッパーもブルックもペドロも口から魂抜けてて面白い。いや、本当は笑ってる場合じゃないんだらうけど！

\*\*\*

ホールケーキアイランド ホールケーキ城『謁見の間』。

普通ならば玉座があるであろう周りよりも高い床の上には、常人では上るのにすら苦勞しそうな程大きなベッドが置かれ、その上には巨大なベッドに見合う程の巨体の主が寝転がっている。

そんな巨体を前にして、『侵入者』は怯えるでも無く薄く笑みを浮かべている。謁見の間ではあるが膝を付かず、頭も垂れず、あくまでも大胆不敵な態度を崩さない。

素人が見ても一目で分かる程質の良い赤絨毯を我が物顔で歩き、傍に配下を数人引き連れた女は、不遜な表情を崩さずに口を開いた。

「初めまして、『四皇ビッグ・ママ』。早速だけれど、私の駒になって貰えるかしら？」  
「……オレを前にして、大層な妄言を吐くじゃねエか、『狂神』……!!」

視覚化される程の「霸王色」が『狂神』に対して吹き付けられようと、彼女は涼しい顔をして目を細めただけだ。まるで、気持ちの良い風が頬を撫でた——程度の反応。

「……『狂神』レイ、ここは俺達のホーム、つまり、貴様は敵地のど真ん中に居るって訳だが……それが何を意味するか分からねエ程狂ってる訳じゃねエだろう？ペロリン」  
「ゼハハハハ!!てめエらこそ分かつてねエな!逆を言えば俺達は今、敵地のど真ん中まで辿り着いているんだぜエ？」

「阿呆が、この部屋に大将と重鎮が揃い踏みしているんだ、誘導されただけに過ぎん」  
シャーロット家の長男であるペロスペローの言葉に、無精髭の小汚い男が得意気に返す。それを隣に立っていた紳士「風」の男が手の平でメガネの位置を調節しながら呆れた声で正した。

「駒と言つても、私の配下につけという意味ではないわ。ただ、良い様に操られて欲しいだけなのよ。それも、別にあなたじゃなくてもいい。そこに居る『ペロスペロー』でも、『カタクリ』でも、『スムージー』でも良いわ。もつと言えば、彼らでなくともあなたの配下ならば誰でも良いのだけど……私としては、出来るだけ素体が良い方が有難いのよ」

普段のビッグ・ママならば、このような態度を取る者は誰であろうと攻撃の対象になる。が、戦いの火蓋を切れば恐らく双方ともかなりの被害を受ける事となるだろう。近くに大事な「お茶会」が控えている事もあって、長く続くと思われる戦いを起こす訳にも行かないのだ。

だからと言って、素直にハイそうですかと受ける事が出来る筈も無いが。

「誰でも良いってのかい？それならオレの子供達じゃなくとも、お前の部下でも使えば良いじゃねエか」

「駄目、私達の誰を操った所でレイの目的は完遂されない」

『狂神』に代わり、傍に控える金髪の女が同じく不遜な態度で答えた。

「……」

その姿を、狂神側の最後の一人である赤髪の少女が虚な瞳で捉えている事には気付かない。

「これから先、あなた達の元に巨大な脅威が訪れるわ。恐らく、このままだとあなた達は壊滅ね。その展開も上々に盛り上がりそうだけれど、入州さんへの嫌がらせとしては物足りないのよ」

「あア?」

「要は、能力の向上を手伝ってあげるの。あなた達の誰かのステータスを大幅に上昇させてあげる代わりに、これから来る『侵入者』へその力をぶつけて欲しい。拒否するものもないも自由だけれど、良い返事を貰えないと痲癩を起すわよ?」

「それは自由とは言わねエよ、小娘。……だが、聞けば悪くねエ話じゃねエか。その能力向上とやらは眠っている力にも影響を与える事は出来るのか?」

ビッグ・ママがそう問いかけても『狂神』は答えない。彼女は常に一方通行、言いたい事を言うだけで相手の言葉に耳を傾けたりなどはしない。常にそうという訳ではないが、今はそういう気分だというだけの話である。

代わりに、金髪の女が口を開く。

「可能」

「……マ〜ママ〜マ、そうか、それは良い事を聞いた！ 良いぜ、誰でも良い、そうだな？」

「ええ」

「だったら——」

ここに、決して表沙汰に出る事は無い取引が1つ成立された。

大きな野望につけ込んだ悪意は、近い内にこの地を訪れる『海賊達』へと牙を剥く事となるが……種を仕込んだ狂気の神は、ただただ愉快に顔を染めるのみであった。

\*\*\*

「こちよこちよ〜」

「あふつ、ひつ、んふつ！」

「ここかあく??ほれほれ〜！」

「きやんつ、や、やめつ、あつ！」

「たまらん!!」

どうも、うさ耳っ娘にこちよこちよ中、幸せ真っ只中のイリスです！

尻尾の付け根に耳の中、勝手について来た罰、という建前の元触りまくれる至福の一

時！

「ほーらこちよこちよ、おつとこつちもこちよこ……」

「オイ、いつまで遊んでんだ」

「ぐえ」

こちよこちよする為に一回降りて貰ったペローナちゃんの限界が来てしまったみたいだ……!どこにそんな力があるのか、首根っこを掴まれて引き摺られて行く、多分寝室まで。

こうなったら止められそうも無いし、そもそも止める気もないのでナミさんにアイコンタクトで『後はよろしく!』とウインクを飛ばしておいた。同時に、シャルリアには着いてくる様に合図を送る。

そうして私達は3人で寝室まで足を運び——と言っても私は引き摺られていたんだけど——明かりの無い真つ暗な部屋の中、いつもの感覚だけでベッドまで辿り着いた。

「は……………」

「きゃつ……………」

と同時に、唐突に起き上がってペローナちゃんとシャルリアをベッドに突き倒した。そして、2人の体を踏まない様に四つん這いのまま覆い被さつて暗闇耐性を強化する。

ペローナちゃんは何が起こったのか理解していない顔で、シャルリアは顔を赤くして狼狽えているみたいだった。

「外はまだ明るいけど……………明日の朝までは寝かせないから」

ナミさんを散々鳴かせたシラフで攻め攻めな私……………いざ参る!!

## 新世界 ホールケーキアイランド編

### 2 2 2 『女好き、2人同時に』

「ペローナちゃん、一体どうしたの？今までならお顔真っ赤にして反撃して来たのに、今回は自分から誘ってくるなんてさ」

「……うるせエな……あつ……」

するり、とペローナちゃんのロングスカートの中へ手を入れ、太ももを優しく撫でてみる。案の定、狙い通りに甘い声が跳ねて私の口が三日月状に歪んだ。

「理由言わないと最後までやってあげないよ」

「は……ア？」

「今日はシャルリアも居るし……見てるだけになっちゃうかもね」

顔を近付けて耳元でそう呟けば、彼女は大きく目を見開いて目尻に涙を溜めて行く。意地悪したのは私だけど、泣かせちゃうのは心苦しいから優しく指で涙を掬い取り、その薄く綺麗な唇にキスを落とした。

「……ん……、私、可愛げがねエじゃねエか」

「え、誰が？」



「だから、私だつたつてんだろ。周りの女に比べても……口調はこんなだし、思つた事を素直に口に出す事すら出来なかつた。……誇れる事と言えば、この可愛い顔くらいだ」  
後ろ向きなのか前向きなのかよく分からない悩みをぼつぼつと喋り出したペローナちゃんに、首を傾げる事で理解していかない事を伝える。そもそも可愛いのが顔だけつてというのが分からないというか……ペローナちゃんは全部ひつくるめてペローナちゃんです、その全部が可愛いのに。

「私だつてお前の嫁なんだ、お前とナミが、昨日の夜に何かあつて更に距離を詰めたつて事くらい分かる。……だから、私はこのままじゃ、相手にされなくなるんじゃないかねエかと思つたんだ」

「そんな事——」

「分かつてんだよ、んな事は。お前は何かあつたつて私を見捨てねエし、死ぬまで愛してくれる。……これは私自身の気持ちの問題だ、お前の嫁として、私ばかりがいつも幸せになる訳にはいかねエ……くそ、やつぱり恥ずかしい……!」

……ブツツ!!……いかにいかに、鼻血が出る所だった、なんとか心の鼻血で収まつてくれたからほんとに良かった。

え、この娘、これで可愛げが無いとか本気で言ってるの?そもそもペローナちゃんみたいな娘が自分の事を「可愛げが無い」つて言ってる時点で可愛いんだけど、その辺理

解してないよね?!

「じゃ、じゃあペローナちゃんはどうしたいの?私を幸せにするなら、どうすれば良いと思おう?」

「……私から何かすれば良いんだろ、キスとか」

「でも、普段シてる時はペローナちゃんからしてたでしょ?」

「あれは、他の奴らもみんなそうしてたから……。いや、これが駄目なのか……。そんなの言い訳じゃねエか……!」

ペローナちゃんが私の首にするりと腕を回した。そして彼女の精一杯の力で私を引き寄せ、キスをする。

ちよつとビックリしたけど、今までこうして積極的に求められた事は無かったから嬉しいな。大体ペローナちゃんってナミさん達に流されて仕方無く、みたいな体を装ってたところあるし。

「んっ、ふ、あ……!」

「ちゅ、ん……っん」

舌を入れるのは私から。ペローナちゃんを食べてしまうかの如く深く、獣の様な本能そのままに唇を、舌を、口内全てを蹂躪する。

何度も何度も角度を変えて、より深く繋がれる場所を探して行く。ペローナちゃんも

ただされるがままではなく、必死に私を求めて舌を動かしてくれているのが堪らなく愛らしい。

「は、っ……、っ私だつて、おま……、イリスが好き……！私の身も心も、隅々までイリスに奪い尽くして欲しい!!」

「っ……ペローナちゃん……!」

「好き……っ、イリス、大す……っんう!」

素直になろうとするのは良いけど、なんかヤケになつてるよね？ちよつと可愛過ぎて言葉の途中に口塞いじやつたよ。

……でも、今回はちよつと我慢しないとね。

「ふう、ごめんねペローナちゃん、今はシャルリアも居るから」

「!い、いえ、お気になさらず!私はいつになつても構いませんので……!」

「はあ……っ、はあ……うるせエ、私だつて別に遠慮はしねエよ」

首に回つてるペローナちゃんの腕を優しく解き、隣に寝転ぶシャルリアの顔の横に左手の平をつく。右手は何故かペローナちゃんが離してくれないというか……。

「ん、れろ」

「っ、びゃ!」

え、今ペローナちゃん、指舐めたよね!?遠慮しないつてそういう事!?びっくりし過ぎ

て変な声出たんだけど！

「もう……まあ、私の手くらい幾らでも好きに使ってくれていいけどね」

指に湿った温かさを感じながら、今度こそシャルリアに視線を向けて間髪入れずにキスを落とす。

シャルリアは、キスした時の反応が凄く可愛い。何て言えば良いのかな……全てをあなたにあげます、みたいな雰囲気を出してるんだけど、その中に慣れてないからか羞恥も含まれていて……とにかく可愛い。

あと、長く深いキスをしている時に息継ぎをするのが下手つぴなのも可愛い。慣れてないのと余裕が無いのが合わさって結構苦しそうにしているのだ。……苦しそうにしてる嫁を見て可愛いって思うのは流石にまずい、かな？別にSっ気がある訳でもないんだけど。

「は……っ、ふ、……んう……っ！」

必死に息を肺に取り込もうとしてみたいけど、そっちに集中させない様意図的に舌の動きを激しくしてみる。食べ比べなんて言い方をするのは2人に失礼だけど、こうして同時に味わってみるとやっぱり違いが出てくるものだ。違いと言っても優劣が存在する訳では無いけどね、2人とも違った良さがあるって話で。

——と、流石にこれ以上はシャルリアも限界かな。

「ぷは……っ」

「っは……っ！けほ、こほっ！はあ……はあ……！」

「ごめんね、やり過ぎちゃった。もう一回良い？」

「は、い……っ！どう、ぞ……っん！」

少し息継ぎをしてもらった後、またすぐに唇を重ね合わせる。咳き込むほどに苦しくても、私への懸命な奉仕を続けるシャルリアが可愛くてついつい調子に乗ってしまう。

ペローナちゃん程大胆になれなくて私の肩にちよこんと乗せられている手の平も、少し足が触れ合っただけでびくんと跳ねる反応も、瞳の中にハートマークが幻視してしまいうそになる程熱っぽい視線も、必死に絡みついてくる唇も、何もかもが可愛くて……。

だから、ついつい夢中になってしまった。数分間キスをし続け、ハツとなって慌てて唇を離す。

「っは……ご、ごめん！流石にやり過ぎた……！」

「っ……、は……ひ、ら、いじょうぶ、れふ……っは、あ……！」

全然大丈夫じゃないね！うん、ちよつと自重する。ちよつと。

ちらつとペローナちゃんを見ると、指を5本とも全部舐め終わったのか今度は手の平に舌を這わせている所だった。このまま放っておいたら全身隈なく食べられてしまいそう……。ていうか、本当に遠慮しないね！

「……私も、もうそろそろ良いかな」

本当は、もうちよつと軽い……軽い？触れ合いを続けてから本番に行こうと思ってたんだけど、2人がこんなにまで私を求めてくれてるし、何より……可愛過ぎて私ともう我慢出来ない。

「ペローナちゃん、シャルリア」

「……なんだ」

「……はい」

右手はペローナちゃんの左手と絡ませ、左手はシャルリアの右手と絡ませる。ペろりと舌舐めずりをして、ちゅ、ちゅ、と2人に軽くキスを落として微笑んだ……つもり。それを見た2人の顔が少し引き攣ったから、もしかしたらもつと余裕の無い顔してたのかも。

「愛してる」

だけど、それだけではどうしても今言いたかったから。

だからそれだけ、本当にそれだけを言い残して、私は2人に溺れていった。

……後日、私によって散々弄ばれた2人は腰の痛みで暫く起き上がれなくなってしまう、朝に先行する予定だったシャルリアは予定を大きく遅らせ、その日の昼過ぎに先行

組とレポートで跳んでいった。勿論、叶にやり過ぎだとジト目で訴えられたのは言うまでも無い。

\*\*\*

「……………え？食糧が尽きた？」

「ええ……………本当にごめんなさい、もつとちゃんと見ておくべきだったわ……………」

シャルリア達が跳んでから数分と少し、申し訳無さそうに瞳を伏せるナミさんが理解し難い内容を報告してきた。

食糧……………つて、食糧だよね？食べ物だよね??え？バルトロメオから貰ったものにミンク族から貰ったもの、全部合わせれば向こう1週間は余裕で食べて行けるだけあったと思っただけ……………」

「な、何があつたの？」

「……………ルフィが、珍しく料理するつて言うから」

「あ、うん、なんかもう分かつた気がする……………」

微かに漂う焦げ臭い香りはそういう事だったのかあ……。

「……つたく、仕方ねエな、オイ女王、ちよつと私を見てろ」

「え、うん、分かったけど……どうするの？」

「ここは海の上だ、そんなところで食材を手に入れようと思ったら釣りしかねエだろ」

とか言いながらペローナちゃんが幽体離脱したので慌てて本体の方を抱き止める。する時はするって合図くれないと心臓に悪いって！

驚いてる私を他所に、幽体ペローナちゃんはそのまま海へと飛び込んで行った。

……とりあえずーっただけ言わせて欲しい。それ、素潜りじゃん……。

そんな感じのツツコミは入れたけど、その発想は流石だと思った。

能力者は基本的に水に浸かる事は出来ない。腰下まで浸かってしまえばそれだけかなり力が抜けるし、能力の行使が出来なくなる。

その点、能力者が行使する能力ならば海に干渉する事も可能だ。最たる例は青キジかな？自身の能力で海を凍らせたとか。

ペローナちゃんもそんな感じで能力である幽体を飛ばし、海に潜ったという訳だ。

でもちゃんと海に潜れる能力者ってペローナちゃんしか居ないのでは？しかも実体じゃないから海王類に襲われても問題ないし……。

そうしてペローナちゃんが飛び込んだ海面を眺める事数分、そこから数匹の大型な魚



がぶかぶかと浮かび上がってきた。なんだかどいつもこいつも泳ぐ気力を無くしたって顔してるし、間違いなくネガティブ喰らってるね。

「めーしー!!」

真つ先に腕を伸ばしたルフィが浮かんできた魚を全て掴み、勢いよく引つ張つて甲板へあげる。と、効果が切れたのか途端にピチピチ暴れ出したので覇銃で黙らせておく。暫くは魚料理になりそうだけど、絶対にルフィをキッチンには入れない様にしよう。

「フン、食えるかどうかは分からねエぞ」

「あ、おかえりペローナちゃん。凄いね！あんな方法で魚獲つちやうなんて！」

本体に戻ってきたのでペローナちゃんを優しく降ろし、そのまま魚に近付いていく。ルフィは論外だけど、私もきちんとした料理はあんまり得意じゃない。出来ない事はないけど、どの魚に毒があるとかどの部位が美味しいとかは分からない。だって私、基本丸焼きで食べてたし……。

「料理なら私がしてあげるわ」

「私も手伝う、邪魔にはならねエ筈だ」

な、何……!? ナミさんとペローナちゃんの手料理だつて!?

……よし、胃が破裂する寸前まで食べるぞー！おー!!

## 2 2 3 『女好き、毒、食す』

ゾウを発つてから数日が経過したある日の朝、食糧などを保管する倉庫の方からナミさんの悲鳴が聞こえ、全速力でその場に駆けつけた私を待っていたのは倉庫の前でへたり込んでがくりと項垂れているナミさんの姿で。

「えつと……ナミさん？なんか色々察しちやっただけど、どうかした……？」

「……何も無いのよ」

「あー……」

数日前、ペローナちゃんが獲ってくれた魚達は、サイズも大きく数もそれなりにあった。とはいえ、これからビッグ・マムの拠点として島までどれだけ掛かるか分からない以上は無駄遣い出来ないという話になったので、1人1人食べる量が制限されていた。実際、ここ数日は嵐が続いてとてもじゃないけど釣りとか出来る状態じゃなかったし。

……まあ、いずれこういう事が起きるかもとは思っていたけどね。そんな生活に耐えられそうもない男が1人この船に乗ってるし……。乗ってるっていうか、<sup>トツ</sup>頭というか。

「またペローナに獲って貰うのが1番だけど……」

「この時間はまだ寝てるもんね」

ペローナちゃんは朝に弱く、一味の中では誰よりも遅く起床する。遅い時は昼の3時とかに起きてくるけど、眠たそうにしてるペローナちゃんも可愛いんだよねえ、これが私が起こせば恐らく動いてはくれるだろうけど、間違いなく機嫌が悪くなる。それに、気持ちよさそうに寝てるペローナちゃんを起こすのはかなり躊躇われるし。

とはいえ、食材が無いのは困るからなんとかしなければいけない事には変わりはないんだけども。

「一番良いのは釣りかな？まあ、釣りは釣りで大変だが……。というのも、この辺りの海域が猛暑だからである。新世界の海はちよつと進めば夏だとか冬だとかを繰り返す。近くにある島が夏島か冬島か、はたまた春島か秋島かというのが影響するらしいけど、詳しくは忘れた。とにかく春夏秋冬がデタラメな海、それが新世界なのだ。」

話は戻るけど、今は丁度運悪く猛暑の海域で、空から燦々と降り注ぐ太陽光が私達をジリジリと襲っているのです、どうしても甲板に立たなくちゃいけない釣りなどの作業は苦痛で仕方がないという訳である。私は暑さ耐性を上げれば無問題だけど。どや。

それに問題はただ暑いってだけでもないんだよねえ。

「とりあえず、ルフィには働いて貰うわ」

「コックとして？」

「仕事増やす気？勿論、釣りで、よ」

ゆらゆらと立ち上がったナミさんが般若の顔でルフィの元へと歩いていくのを見送り、静かに合掌する。ナミさん、ルフィを殴る時は覇気使えてるのか？と思うくらい強烈なお見舞いするからね……。ゴム人間が痛がる覇気無しのパンチって何……？？

\*\*\*

「……なあ、イリス、ナミって覇気使えるんじゃないやねエか……？」

「否定出来ないけど、もう一回強烈なの喰らいたくなかったら手元と視線の先に集中してね」

あア……。と、普段の姿からは想像もつかない程元気の無いルフィが舷に腰掛けながら釣竿を揺らす。その顔は原型を留められない程ボロボロにされており、ちゃんと前は見えているのかな、とか心配してるのかしていないのか微妙な感想が心に浮かんできた。

現在釣りをしているのは私とルフィだけで、ナミさんとキャロットには日陰で涼んで

もらっている。チョップパーはペコムズに付いてて、ペローナちゃんは言わずもがな。

「あちイ……イリスは暑く……あ、そういえば、それも倍加出来るんだったな……」

「まーね、中々厳しい日照りだけど私には影響無いかな、頑張れ！」

「……」

グツと親指を立てれば、でこぼこの顔でも分かるくらいげんなりした顔になった。

釣りの成果次第では昼飯は抜きだし、晩も無い可能性が高い。最悪叶に連絡を取って食糧を届けて貰わないといけないかもしれないし……倉庫、鍵閉めないとなあ。

「……つつてもよ、これ、魚釣れんのか……?」

ルフィが見つめる先では、湯気で見えづらい海面がポコポコと音を立てて煮えている。……比喩じゃないのが新世界の怖い所で、本当にマグマみたく煮えたぎってるんだけども。

嵐という問題は過ぎたけど、今度はこの沸騰海が問題となつて釣果は期待できそうもない。

「垂らすだけ垂らしてみようよ、もしかしたら釣れるかもしれないし……多分」

「多分ってお前……、……お、……おお!?引いてるぞ!」

「え!?!」

こんなマグマみたいな海を泳いでる魚居るんだ……。しかも竿が結構しなってるか

らかかった獲物はかなりの大きさだと言う事が分かる、これは釣るしかない！

「頑張つてルフィー！」

「お、おおう！！」

色々とながらないルフィが必死に竿を引き、徐々に海面に大きな影が浮かび上がって来て、遂に釣り上げる事に成功した。

「おつとー！」

勢い良く釣り上げた魚が、そのままサニー号に叩きつけられそうだったので落ちる直前に受け止める。

うえ……なんか皮すごいぬるぬるしてる……ぺっぺっ！粘液が口に入っちゃった

……！！

『あ、イリス、そいつ確か皮に猛毒があったから気を付けてね』

「遅いけど!!？」

『まあまあ、落ち着いて。効力はルフィが死にかけるくらいで……後は』

「呑気!! 大体さ、分かっているのならもう少し早めに言ってくれても」

『解毒する為に美女がキスしてくれる』

「分かった！自力で解毒しない！」

『焚き付けておいてあれだけど、無理はしないでね？サンジの手紙が原作と違うって事

は、これから先もどこか変わってる可能性あるし、美女も現れるかどうか分かんないから」

とりあえず魚をそつと甲板に置き、どうせならと表面の皮を千切つて口に放り込んだ。

「……………つー!」

「ちよ……………イリス!どんな毒を持つてるかも分からないのに何口に含んでるのよ!」

「つ……………あはは……………ごめん、でも大丈夫だよ。だけど毒はあるっぽいからみんなは食べないようにね」

……………大丈夫っていうのは嘘だけだ。

いやー、思ってたよりずっと毒が強くてビックリしたけど、なんとか自然治癒力を倍加させて毒に対抗出来たかな。毒を摂取する前なら毒耐性を倍加させる事で抑える事が出来るけど、一度取り込んでしまえば耐性上げても一緒だし。

とはいえ、この毒がかなり強烈である事に変わりはない。間違ってもナミさんやペローナちゃん、キャロットの口には入らないようにしないと。

「やつぱり毒があるんじゃないの……………!ちよつと待ってて、サンジ君の本棚から魚図鑑取ってくるから。絶対もうそれ以上食べるんじゃないわよ?」

「うん」

それだけ言うと、ナミさんは船内へと走って行った。

……これ、ちよつとまづいかな？ 30倍じや追いつかなくなってきたんだけど。少し寒い気もしてきたし……。

「いふ……っ！」

急に胃から熱いものを感じて咄嗟に口元を手で覆えば、咳き込んだ拍子に血反吐を手の平にぶち撒けてしまった。

……え、この魚の毒つてマゼランと同格以上なの……？ そんな生物が普通に海を泳いでるって、新世界……改めておかしいよね。

「イリス!? 大丈夫か!？」

「あー……うん、見た目よりは平気。でもこれで分かったでしょ？ その魚はきちんと調理しないと食べられないからね」

「そんな事言ってる場合じゃねエだろ！ お前、血イ吐いてるじゃねエか！」

あのルフィですらオロオロしている所を見るに、今の私はかなり弱って見えるみたいだ。まあ、汗びっしょりの血反吐どばあだから仕方ないのかもしれないけど、最終的には女王化で治癒力を100倍すれば良いだけだからそう気にする事でもない。

「イリスっ！ やっぱりその皮猛毒がある！ ほら、このページ、サンジ君のメモが……って、あんた、血が……！」



「うう……本当に心配かけてごめん……」

戻ってきたナミさんからもそう言われ、ちよつと無鉄砲過ぎたかな……と今更ながらに思う。

美女にキスされたいが為に毒喰らって、しかも治す気はないって、そりゃあ心配かけるだろう。とにかく事が済んだら謝り倒すしか無さそうだ。

「つとと……」

「ちよつと……！ルファイ！チョッパ！呼んできて！」

「おう！」

ふらつき、がくと膝を折って尻餅をつく。慌ててナミさんがルファイに指示を出し、その場で私を寝かして、頭の下に自身の膝を潜り込ませて膝枕の形を取った。どの体勢が私に取って一番効果があるのかを知り尽くしてるナミさんらしい手際の良さだ。

「ほんと、大丈夫だよ？……この後、なんか美女がキスしてくれるんだって」

「それとあんたが毒にかかる事になんの関係があるのよ！」

「なんか……解毒がどうか……」

「……はあ、もう……！」

大きくため息をついたナミさんが、諦めた様に項垂れて私の前髪を撫でる。心配かけて申し訳ないって気持ちは勿論あるけど、これはこれで役得だ。

それに、毒の侵食と治癒を繰り返してるからか毒に対する耐性が急速的に上がってる気がする。この魚の毒はかなり強烈だったけど、段々と苦しみが薄れていつているのだ。完全に毒が体内から居なくなるとそれはそれで困るんだけど……。

「……………ん？雪？」

「雪は雪でも、あの雲は甘み雲だから“わたあめ雪”ね」

「まーたよく分からない天候って事か……。マグマみたいな海域は抜け出したのかな？」

「プルルルル!!」

「んん……………今度は何？」

「電伝虫が何か受信したみたいね、普段と鳴き声が違うのが気になるけど……」

「と、そこへチョッパを連れたルフイが戻ってきて、もう怪我の具合は大丈夫なのかペコムズも一緒に歩いて来た。」

「警告念波をキャッチしたただけだ、ビッグ・マムのナワバリに入った。お前ら、隠れるか変装をしろ」

「それよりイリス、お前平気か!?!いつもはそんな拾い食いみたいな事しねエのになんで

食つちやつたんだよ！」

とたとたと駆け寄つて来たチヨツパーがテキパキと私の症状を確認していく。チヨツパー曰く、猛毒なのは間違いない上に今は対処法が無いから打つ手がないとか。解毒薬を作る為の材料が足りないみたいで自分を責めていたけど、元々の原因は私だし万が一でも死ぬ様な事にはならないのだからそんなに気にしないで欲しい……というのは無理だよな。

「まあ……起き上がるのはだるいけど、今すぐどうこうつて事も無いから大丈夫。それより……前方から何か気配を感じるんだけど……、結構大人数だし、大型の船とか迫つてない……?」

「ああ、なんか来てるぞ!かたつむりみてエな船だ!」

「!……あれは、ウチの偵察船ダルトじゃねエ……!まさか……!!」

……良く分かんないけど、かたつむりの様な船がサニー号の進行方向に居るつて事だよな。となると、状況的に考えてその船にキスで解毒とかいう素晴らしい行為をしてくれる美女が居るつて事だろう。

『——こちら「ジェルマ」、麦わらの一味の船と見受ける』

ダブルシックス

船の方からそんな声が聞こえて……つて、ジェルマ 6 6? という事はサンジも居るのかな。

ん??となると先行組を送り込んだ意味が無くなつちやうんじや……!?

## 224 『女好き、ポイズンキツス』

『何故お前達がここにいる、麦わらの一味』

「……！ 良く分からないけど、ルフィー！ チョッパー！ 急いで帆を畳んで！ ぶつかるわよ！」

「おうー！」

「分かった！」

慌ててルフィーとチョッパーが帆を畳みに行き、なんとかサニー号はそれ以上進む事なく前方の巨大船と激突する事態は避ける事が出来た。

相手の船はサニー号より何倍も大きく、それもあつてか、こうして寝転がりながらでも舷に姿を現した人影が良く見える。

「あれは……サンジ君!？」

その人影はフードを被っているけれど、薄らと見える影の向こうには特徴的なぐるぐるの眉毛が見てとれた。 だけど……。

「サンジでは……無さそう。 気配が違うし」

「そうなの？……まあこの際誰でもいいわ。 ——ねえちよつと!! その船に解毒薬は載っ

てない!? マグマの様な海でも生息出来る魚の毒を中和したいの!!」

その言葉にフードの男はナミさんへと視線を向け、その目をハートにして飛び出させた。気配は別人なんだけど……本当に別人なのか自信無くなってきたなあ。

「お? サンジか!」

「おーい! サンジー!! 大変なんだ! イリスが魚の毒にあたって……!!」

丁度そこへ、戻ってきた2人が大きく手を振って『サンジ眉』の人に呼びかけた。別人なのは間違いないだろうけど、あの眉は特徴的だから私みたいに気配を探らないとフード越しには分からないだろう。

「サンジサンジと……人違いだ、似ていて当然だがな」

そう言って、男は被っていたフードを取る。……うん、思ったより似てるわ、激似だわ。

サンジと違って髪をオールバックにしている様で、後頭部に向かって尖った形に髪がセットされている。中々独創的なヘアスタイルだけど、それが妙に似合っていた。額にはサングラスを寄せ、ヘッドホンの様な物もつけてあり、どこか悪ぶってる印象を与えている。

「私の名はヨンジ! お前達の良く知るサンジとの関係性は秘中だが……」

絶対弟だこれ。てことはまさか、イチジとかニジとかも居るって事? 4人兄弟だった

んだ……。

「……まあ、今はサンジ君の弟だとかはどうでもいいの！いやむしろ、サンジ君の弟ならイリスの事助けてよ！見て！この容姿を！世界で一番可愛い女よ、思わず助けたくなるでしょ!?!薬の1つや2つ渡せるでしょ!!」

可愛いのはあなたじゃい！と声を大にして言いたいけど、どうやらそんな体力までは無いみたいだ。

侵食と治癒を繰り返す事で、私の口から吸ってはいけない類のガスが漏れ始めた。体内の臓器が溶けてるのかなあ、とか呑気に考えてるけど、実際ナミさんが口にしてたらと思うと………、やめよう、想像しただけで吐き気がする。

「ふん、女だからと言って助ける必要がどこにある?第一、そいつはまだガキだろうが、顔が良いのは認めてやるがな。——それとも、薬を略奪してみるか?『海賊』らしくな……!!」

「……、そう。そっちがその気なら遠慮はしないわ、こっちは薬さえ手に入ればその船が海の藻屑になろうと構わないもの」

「ほう……?威勢がいいな、女。ここで事を起こす気は無かったが、お前らがやるというのならばつぐおオ!?!」

もしかして「私の為に争わないで!」というセリフを言う事が出来るのでは、とか考

えていた時、ヨンジの事を後ろから誰かが蹴り飛ばして海面まで吹き飛ばした。ヨンジはそのまま大きく水飛沫を上げて海中に沈んでいったが……気配は弱くなかったから能力者でも無い限りは大丈夫だろう。

そのヨンジを蹴り飛ばした「誰か」は、彼とは違って迷わない跳躍でサニー号へと降り立った。

さつきも言ったけど、サニー号とかたつむり型の船はサイズにかなりの開きがあつて、相手の船の方が遥かに大きい。そんな船の甲板からこの船の甲板までひとつ跳びで来たんだから、この人もそれなりに強いんだろうけど……それ以前に……!!

「……美しい……!!」

その人は、女の人だった。

ピンク色を基調としたワンピース……いや、ワンピースと言ってもいいのか、スカートで下着は見えないし、胸も隠れてはいるんだけど、なんというかえろい。分かりやすく言えば、肩からお腹まで8の字に開いているワンピース。谷間は余裕で見えてるし、今にもポロリと行きそうである。

そんなピンクとは打って変わって、背中に靡かせている羽型のマントはなんとも毒々しい紫色だ。

服装はかなり尖っているけど、その容姿は疑いようもなく美女だった。



ぷつくらと質感の良さそうな唇に、深い知性を窺わせる紺色の瞳、シユツと通った鼻筋、それに、ぐるぐる眉毛。……え、この人もサンジの血族なの!?

ヨンジとは違って、この人はサンジ同様片側の目を髪で覆っている様だ。サンジより垂らしている髪は長い、彼女自身は肩までつく程度のショートヘアである。耳に付けているヘッドホンはヨンジと同じみただけだ。

「こんにちは。ごめんなさいね、弟は人情の欠片もない人でなしなの」

「弟……サンジ君のお姉さん?それとも、妹かしら」

「姉ね、所でその子——」

「レイジユ~~~~!!おのれ、良くも私に恥をかかせたな!!」

どうやらサンジの姉らしいその人が私に視線を向けた瞬間、海中から凄まじい勢いでヨンジが飛び出してきた。履いている靴が特殊なのか、彼はそのまま宙に浮いている。

「あいつもミキータみたいに空飛べんのかア」

あの靴欲しいなあ、とか物騒な事呟いてるルフイをみんなでスルーした後、ペコムズが口を開く。

『『ジェルマ』は科学戦闘部隊だ、それこそがママの欲しがっている力!ヴァンスモーク家つてのは、大昔に北の海を武力で制圧した一族、つまり、王族だ』

「王……げほつ、じゃあ、サンジつて王子だったんだ」

「そうなるな。尤も、その名はある時代の『悪の代名詞』、だから絵物語のモデルにもなった」

「あら、詳しいのね、ライオンさん。でも過去の話じゃない……今もまだ王族よ。『ジェルマ』は国土を持たない国、治める土地は無いけど、『世界会議』への参加も認められるわ」

レヴェリーってなんだっけ。確か、前にナミさんか誰かに聞いた気がするんだよね。各国首脳会議みたいなもの、だったかな？ Gで20なアレみたいな。いや、Gで20なアレが何を目的としているのかまでは知らないけど。だって王華だし。

『悪意を感じる』

はは、まさかそんな、はは。

「さて、私達の話よりもまずそっちの子をなんとかしてあげないとね。いいかしら？」  
正妻「さん」

「……………ええ、勿論よ、此方こそお願いするわ」

……………そっか、今更だけどナミさん自身もかなりの高額賞金首だから結構世間に知れ渡ってるんだよね。

ん？ていうかちよつと待って！解毒の為に美女がキスってこの人の事でしょ！確か、レイジユ！

このレベルのスーパー美女だったとは流石に予想外だった……よし、スタンバイしよう。目を瞑って、少し口は開けておいて……。

「この症状は……熱々海の『ヨロイオコゼ』、食べちゃった?」

「え、何で分かるんだ!?!」

「この毒は効き方が特殊なのよ、トナカイさん。それもかなりの劇薬よ? 普通、巨人族でも即死するわ」

「えエ!? ど、どうしよう……おれは船医失格だア! うおおおん!」

巨人族でも即死、と聞いて流石にギョツとした。そりゃあ30倍の回復力では完治に時間がかかる訳だ。まあ、そのお陰でキスが出来そうなんだけど。

「でも私は、この毒が大好物……、いただきます♡」

ちゅうーっ。

ちゅうーっ。

はああああ♡♡

此方こそごちになります!!

……ちよつとテンション上がっちゃったけど、私、現在美女——レイジュに毒治療という名のキスをされております。体内の毒素を吸っているのか、私の体で猛威を振るっていた毒が次々と唇を通してレイジュへと巡って行っている。

「……、？」

「ただドレイジユはなんだか気になる事でもあったのか、訝しそうに眉を寄せてみせた。」

「……だから、舌を侵入させてみる。」

「ん!？」

「ふはは! 私とのキス中に考え事なんて余裕じゃないか! どんな理由であれ、私に唇を許した時点であなたの未来は決まったんだよ!」

「っ……ん、ふ……っ!」

「驚いて顔を引こうとしたレイジユの首にするりと腕を回し、離れられない様にガッツリとホールドする。逃げ回る舌を追いかけ、絡め取り、更に深くを求め様に、強く。」

「あわわ……イリスがなんか凄い事してる……っ!」

「あらキャラロット、興味あるの? ならイリスにお願いしてみなさい、丁寧に教えてくれるわよ!」

「え!? そ、それはちよつと、恥ずかしい、かなあ……あはは!」

「……ふむ、キャラロットは興味あり、と。押せば堕ちそうでちよろ可愛い。」

「キャラロットは元々無邪気な娘だし、こんな行為を見せつけければ興味を持つくらいはしても可笑しくないとはいってたけどね。」

……さて、ここまで来るとレイジュの抵抗は最早少しも無く、ただ私にされるがままであった。

諦めたのではなく、単に私の華麗なるテクに堕ちたのだ。証拠に現在のレイジュの瞳はかなりとろんと緩んでいて、口端からはだらしなく涎を垂らしている。

「レイジュ……!!何を遊んでいる!!おい、貴様等、黙って見てないで止めたらどうなんだ!!」

「何言つてんだお前、気になるなら自分でやれよ、おれは嫌だ、死にたくねエ」

「つぶは、良いよ、終わったから」

これ以上は色々止まらなくなりそうだったから何とか自制心を働かせて唇を離す。レイジュの口から垂れていた涎は、顔を離す時についてに舐めとっておいた。

「……つぶ!!これは、やられたわね……」

突然ハツと我に帰ったレイジュが唇を指でなぞり、苦笑しながらそう口にした。毒は完全に体内から消えていて、さっきのやり取りで全てレイジュへと移ったのだろうけど、それはそれで心配ないのだろうか? 大好物とは言つてたけど……。

「やられたでしょ? 嫁になってくれる?」

「……つぶ、噂通り……面白いわね、あなた」

笑わせたくて口説いてるんじゃないけどね?

「……あれ、そういえばサンジは？あなたは姉でしょ？あつちは弟でしょ？本人は居ないの？」

「ええ、私達もあの子を迎えに船を出したのだけど、どうやら行違いになったみたい」「なるほど、じゃあこの先に進めばサンジは居るって訳だ。それさえ分かれば十分だよ」「……!!今の会話で、ある程度の居場所を特定出来る様に誘導したのかしら……?どうやら貴女は頭も良く回る様ね」

え？そんなつもりは全く無かったけど……。サンジは一緒じゃ無いの、って至極当然の疑問を投げつけただけだね？まあ、美女が私に対して過分に評価してくれているのならわざわざ訂正する事も無い……のかな？

## 225 『女好き、絶体絶命』

「レイジユもサンジを探してるなら、私達と一緒に行かない？」

「え？」

いや、え？じゃなくてさ。

サンジのお姉ちゃんだけど、そんな事は関係無く嫁にしたいと思えるだけの美貌と、私の素性を知っていて命を助けようとする優しさ……もうね、逃したら絶対後悔する。

「正直に言っちゃえば、嫁になってくれない？」

「……ふふ、やっぱり貴女、面白いわ」

「あなたはやっぱり綺麗だね。で、どうかな？」

「とても残念だけど、私には貴女の嫁は務まらないし、その余裕も無いの。悪いけれど他を当たってくれるかしら」

じゃあね、と私の答えを聞かずにレイジユは来た時同様ひとつ跳びでカタツムリの船へと帰っていった。あんなスカートでは軽く跳躍しただけでも中が見えてしまいそうなのに、何故だかレイジユのは鉄壁の守りを誇っている。まあ、いずれ脱がせば見える事だけだ。

「……お前、ビッグ・ママ海賊団のペコムズだろう？何故麦わらの一味と一緒に居る？」  
 「今更だな、ガオ！こつちにやこつちの都合があるんだ、いちいち話す事はねエ！まだ俺とお前らの間には何の縁もねエんだからな！」

「確かにそうね、一先ずここでは何も見なかつた事にするわ！今騒ぎを起こして弟の結婚が破談になつては事だもの。お互い、慎重に行きましょう」

「何がどう、事」なのかは知らないけど、先に謝っておくね、それ、破談になるよ」  
 私達が行くし。

と、不敵に笑つておいた。

「あなたとはまた近いうちに会いそうだし、その時には嫁になつてね！」

「……ふ、それは貴女次第よ、小さな女王さん」

小さな、か。まだまだ夢は遠そうだ。

でも、私次第つて事はこれ、脈アリかナシかで言えばアリでしょ！いやまあ、無くつてもどうにかしてアリにするんだけど。

「じゃあね」と軽く手を振つてレイジュ達を乗せる船は去つていった。

サンジを連れ戻す時とかに立ち向かつて来ないことを祈ろう、せつかく嫁に出来そうなんだから。



\*\*\*

「——ふう」

「ほう、珍しいな、緊張していたのか？」

「どの口が言うのか、とレイジユはヨンジへちらりと目を向けた後、直ぐに視線を戻した。」

「ツー、と汗が頬に流れ、無意識のうちに強張っていた体を何回か深呼吸する事で和らげていく。」

「……やつぱり、『女王』は噂通りの怪物ね」

「フン、その辺の毒で死にかけていたがな」

「そうね、死にかけていたわ。……だけど、それはつまり死んではないと言う事よ」  
「びく、とヨンジの眉が跳ね、直後に怪訝そうな顔を浮かべた。」

「あの毒はヨロイオコゼの表皮に含まれるモノ。本来なら、死にかけるんじゃない。死ぬわ」

「常人ならば舐めただけで即死。巨人族でも口に含めば即死。あの毒はそれ程の劇薬

だった。

だが、レイジユが彼女を“怪物”だと評するのはそれだけが理由では無い。

「それに、あの子……あれ程の毒素を喰らってにおいて、体内で中和しかかっていた」

「何だと？」

「恐らくだけど、私が助けなくとも本来の回復力だけでヨロイオコゼの毒は綺麗さっぱり無くなっていてでしょうね」

そこまで言われてヨンジはようやく目を軽く見開いた。巨人族ですら即死する毒を体内で消し去る寸前だったというのだから当然の反応ではある。が、2人はまだイリスを過小評価している。そもそも、中和しかかっていたのではなく、わざと毒素が消えないイリスを保っていたのだ。その気になればあれ程の毒でも瞬時に治療する事が出来るのがイリスの食べた「バイバイの実」の恐ろしい所なのである。

「ヨンジ、悪い事は言わないわ、あの子を敵に回すのだけはやめておきなさい」

「なんだ、怖いのか？確かに厄介な相手かもしれないがな、我々が総力を掛ければ敗北は無いだろう。懸賞金が10億を超えているとはいえ、所詮は小娘1人だ」

「……はあ。忠告はしたわ」

この世界には2人の『女王』と呼ばれる女が存在する。

1人は『四皇』ビッグ・ママ。

そしてもう1人が、『四異界』イリス。

懸賞金だけで見るならば、イリスはビッグ・マムの足元を掴んでいる程度であり、実際の彼女もパツと見は人当たりの良さそうな娘でしかない。

が、舐めてかかっているいい相手な筈がないのだ。仮にも単騎で当時の海軍大将『青キジ』を撃破する事ができ、あの頂上戦争で獅子奮迅の大立ち回りを繰り広げる事が出来る存在で、かつ……それは2年前の事なのだ。

2年間消息を絶った麦わらの一味が、ここに来て活動を再開した……その2年の間に何があったのかはレイジユには計り知る事は出来ないが、ただ遊んでいたという訳では無いのは間違いない。つまり、2年前よりも更に強くなっている可能性が高い。

そうなってくれば、10億という指標は当てに出来ないというのに……。

はあ、とレイジユは再度ため息をついた。自分達ジェルマが崩壊するのは構わない……いや、むしろそうなれば良いと望んでいる節すらある彼女だが、その事に優しい心を持った『弟』が巻き込まれないかと危惧しているだけだ。

……実際の所、その弟が『女好きの女王』をこの地に呼び寄せたのだと言うことを、彼女は知る由もないのだが。

\*\*\*

そして、時は数日間遡り――。

ここ、ホールケーキアイランドへと叶の能力で先乗りを果たした3人はそれぞれ別行動を取っていた。

目的は勿論、サンジの事に関する情報収集と、あわよくば真<sup>リオ</sup>の歴史<sup>ポネグ</sup>の本文の写しを取ること。更にはイリス達がホールケーキアイランドへやってくるまでの土台作りだ。

3人の内の1人であるシャルリアは、船を安全に停める事が出来る様にと何処か条件の良い岸を探して森へとやってきていた。人の良い町人に貰った地図では、この森を抜けた先にサニー号を上手く隠せそうな岸辺がある事が記されていて、現地を確かめる為にこうして足を運んだのだが……。

「困りましたわ……此処は一体、何処でしょうか」

何を隠そう、絶賛迷子中であつた。

『聖地マリージョア』を飛び出してから2年、ジャングルの中を駆け回つて獣と命懸けの戦闘などをした事もあれば、深い森の中で迷子になり死にかけてた事もある。故に、森の中を歩く事に関しては多少の自信もあつたのだが。

「……あら、おかしいですわね、ここには確か、さつきまで開けた道があつた筈なのですが……」

何度も歩き回つていればある程度道を把握する事は出来る筈なのだが、何故かシャルリアはこの森の脳内マップを作る事が出来ないでいた。

例えば開けた休憩に適している空間地点で、目印として柔らかい地面に木の枝を刺したりしていたのだが、次にその場所を訪れてみれば刺さつた木の枝も開けていた筈の空間も何処にもなく、所狭しと木が並んでいたりする。

「……これは、もしかしなくとも、敵の罠に嵌つてしまつたのでしょうか。現状から見て、木などが動き道を変えているのは間違いないでしょうし……方向感覚も狂わされますわ」

そしてそれは、かなり不味い状況だと言うことを意味している。森で迷子になつているだけならばまだ救いはあつた。だが、これはそうではない。

この森自体が……シャルリアをこの地に閉じ込めようとしているのだ。

「……となると、下手に動くのは却つて危険。必要の無い体力消費は控えるべきですわね。幸い、食べ物には困らないでしょうし」

木が動いている可能性があるという事だけが異変ではなく、そもそもこの森自体が普通ではない。まず、視界に映る木、地面にある石の一粒一粒、更にはその地面すらも、

お菓子”で出来ているのだから。

それに、完全に動きを止めるのも愚策だとシャルリアは理解している。森が独りでに形を変えるなどあり得ないのだから、そこには人為的な能力なりなんなりが絡んでいる筈で、現在のシャルリアの動向はその相手に筒抜けになっていると考えるべきであるからだ。

この木々の一本一本に意思が宿っているというトンデモ現象だったとしてもそれは同じ事で、シャルリアが監視されているという事実は変わらない。そんな場所でおちおちゆつくりもしてられない、という訳だった。

「いいえ、こんな所で躓いてはいられません。少しでもイリス様のお役に立たなくては。後ろ向きに考えるのではなく、監視されている事を前提に策を練れば良いだけの事ですわ」

少し小声でそう呟く。

声まで筒抜けになつていいのか分からないので念の為だ。

（森が動いている事、そして、私に監視がある事。この事に私がまだ気付いていないと思わせましょう。見た所枝を刺した地面はそう遠くまで動けないようですし、恐らく“動けて”いるのは数10メートルだけ……ならば、まだ目印として役には立ちます）

ならばとシャルリアはまた歩行を再開した。立ち止まって考えるのは不審に見える

と思つたからだ。

歩きながらもシャルリアは頭を動かし続けていく。

（私が麦わらの一味だとは流石にまだ伝わっていない筈ですので、恐らくこの妨害は侵入者である私を外に逃がさない為のモノ。となると、優先的に防がれるのは岸へと続く道になるでしょう。逆に言えば、防がれた道の向こう側を目標せよば良い）

優先的に岸への道を防ぐとはいっても、その方向へ進む道を全て無くす事は無い、と考える。理由としては、あくまでも監視者の目的はシャルリアを森の中で彷徨わせ続ける事。絶対に塞がっている道などという分かりやすい目印を残す筈がないのだ。

つまり、迷つたフリを続けながら、時折開く岸方面への道をこれまた迷っているフリで通れば、出れるかどうかはともかくとして少しでも目的地へ近づく事が出来るのである。

「ふむ……ここも行き止まりですか。ならあちらに行つてみましょう」

付近に木の枝を刺し、自然と目的地に近づく道を歩いて行く。時には来た道をわざと戻つたりしながら、気付いていないとアピールする事も忘れない。

それを何度も繰り返し、日が傾いて来た頃——遂に、沢山の木々の向こう側に深い青色が見えてきた。

“海の近くまで来た”とシャルリアが気付いている。事に気付かれないシャルリ

アは、顔はそのまま視線だけを海へ向けた。

(ここ)まで来れば、木が移動する前に走り抜ける事は可能ですが……それは得策ではないですわね。地図通りの海岸があるのを確認出来ただけ僥倖でしょう、深追いは首を絞めるだけになります、か)

シャルリアは、海岸に辿り着けばゴールという訳では無い。ブルツクやペドロ達と合流する為にもこの森を抜け出す必要があるのだ。

幸いな事にこの瞬間までシャルリアが異変に気付いているという事を相手はまだ気付いていない。だが、この場で一気に海へと走れば流石に気付いてしまうだろう。

最終的に気付かれるのは仕方ないとしても、それは戻る時がいい筈だ、とシャルリアは考える。

そこまで考えてシャルリアは1つため息をついた。いや、つくフリと言った方が正しいか。迷った挙句、帰り道が分からなくなり途方に暮れる様子を演出しているのだ。名女優も顔負けな自然体の演技で物憂げな表情を浮かばせて、仕方なしに足は動かす……と見せかけ、帰り道を歩いて行く。

「……え？」

——だが、帰る方向へと振り向いたシャルリアの視線の先に広がっていたのは、明らかに異常な光景だった。



「くすくす、あなた、侵入者ね？」

「ネズミ一匹だけか？報告にあつた数と合致しないが……まだ付近に隠れているだけなのか」

シャルリアへと近付いてくる2つの影、それを避ける様にして先程まで巧みに道を塞いでいた木々達が、まるで重役を出迎える騎士達の如く横へと逸れ、1本の大きな道を作り上げていた。

「オーブン様、フランペ様、この森に侵入したのはあの者だけで御座います」

「そうか、では速やかに残りの2人を探し出し、私に連絡しろ」

「はい！オーブン様！」

オーブン、と呼ばれたのは、まるで燃える火を現しているかの様な髪型をしたガタイの良い男。消去法でフランペというのはその隣に「浮かんでいる」女の事だろう。

「っ……」

更に、2人の名を呼んだのは人ではなく近くに生えている木だった。最悪な事にシャルリアが最初に思い浮かんだ『木に意思がある』というトンデモ現象が正しかったのだ。

その上、シャルリアをただ迷わせて餓死等を狙っていた訳でもなく、この2人が現場に到着する為の時間稼ぎだったというのだから目も当てられない。つまり、どれだけシャルリアが演技をしようともこの結末は変わらなかつたという話だ。

「さて、見た所大した実力も無さそうな貴様がどうやってこの地に侵入したのかは分からんが……近くに大事なイベントも控えているのだ、死んでもらおう」  
そしてゆらりと、オーブンの手に熱が宿った。

## 226 『女好き、チヨコの街』

「ほうほう、そうでありましたか！これは失礼、てつきり敵船かと……」

「ガオ！そうじゃねエ、アレは俺が敵から奪ったモノだ。中にお土産のお菓子がたっぷり詰まってる。サプライズなんだ、ママには報告するな」

「あくく！素敵ですわね！分かりました！」

レイジュ達と別れてすぐ、私達はチヨコの匂い漂う甘い島へと辿り着いていた。船の事はペコムズが上手く誤魔化してくれているみたいで、チエスの『ポーン』の様な格好をした兵士とその様に話している。

兵士もペコムズの言葉を疑うつもりは無いのか素直に信じ、ささつとその場を離れていった。

人の目を気にする必要がなくなった途端、ルフイとチヨツパーがそそくさと船を出て島の内部へと走っていく。制止する間もないし……とはいえ、あの2人にとってはこの島は天国みたいなもんだし、仕方ないか。

なんとたつて遠目で見ても分かるけど、街は家や街灯、その他の殆どがチヨコレートで出来ている様なのだ。甘い物好きのチヨツパーや、そもそも食べ物に目がないルフイを

止められる筈もない。この場にミキータが居れば、彼女も2人と一緒に街へ繰り出してたかも。

「お前ら、適当な服に着替えろ、ガオ！出来るだけ一般人に紛れられそうな普通の服がいい」

「分かった、メイド服とか？」

「普通つて知ってるか？」

「冗談なのにマジなトーンで返された……、そこまで常識が無いと思われてるのだとしたら普通にシヨック。普通に。」

と、いう事で普通の服に着替えてみた。以前のメイド服が特別だっただけで、普段から私達はそうそう変な格好など（フランキーを除く）してないけど。

「どう？イリス、海賊に見える？」

「初デートでおめかし頑張った可愛すぎる子に見える！」

「そう？ありがと」

そういうナミさんの格好は、肩紐付きの紅色ジャンパーミニスカートの下にフリルのついた白いシャツを着込むとかいう、ナミさんの様なボンキュツボンが着れば犯罪レベルになってしまうコーデで、ぶつちやけムラつとくる。しかも髪型は空島で見た二つ結びのおさげだし、少女の様な可愛さもあつて堪らない。

私は普段通りラフなTシャツ、ショートパンツスタイルだ。色は上が白で下が黒。私  
が着るなら可愛さとかよりも動きやすさで選ぶのが一番だと思う。普段と同じなら変  
装にならないかもしれないけど、まあ私は子供っぽい見た目だし、変に着飾らない方が  
目立たな……子供違うから！

「つたく、なんだってこんな服着なきやならねえんだ……趣味じゃねえんだよ」

ぶつぶつ言いながら寝室から歩いて来たのは、ティアドesignの白いトップスを  
着て、下には足首までの黒色をしたスキニーパンツを履いたペローナちゃんだ。出来る  
大人な女性って風貌で、普段のゴスロリ風ダークファッションじゃ無い為とても新鮮で  
ある。すつごく可愛い。ちなみに服装に合わせて髪型もローポニテになっており、ペ  
ローナちゃんの特徴でもあるふわふわの髪が首を動かす度に揺れてて抱き付きたい衝  
動に駆られている。はぁー可愛い。

「ナミもイリスもペローナも素敵〜！可愛いよ！」

お前もじやい！と声を大にして叫びたい衝動に駆られる……！キャロットめ……さ  
ては己の可愛さに気が付いていない？！

キャロットは薄緑色を基調としたフリル付きのワンピースに身を包んでいて、真ん中  
を白黒の縦縞が3本走っている。フリルの所は他とは違い濃い緑色となっていて、意外  
にもキャロットの持つ綺麗な金髪と程よくマッチする色合いとなっていた。

「ねね、どうペコムズ、うちの嫁可愛くない？」

「何言ってるのよ、あんたも可愛いでしょ」

「惚気なら別のとこでやってくれ。それよりもホールケーキアイランドまでは後1日はかかる。保つ筈だった食糧はそっちの船長が全部食っちゃったから、代わりに食糧買って来い」

む……目的地まで後1日か。ゾウを出てからもう一週間近くは経過してるんだ……。

「……」

なのに、シャルリア達からの連絡はまだ来ていない。ただ伝える程の進展が無いってだけなら良いけど……敵地だから最悪の事態が頭をよぎってしまうし……はあ、もうこっちから連絡しようかな。

「イリス、気にしても仕方が無いわよ。確かに心配だけど……今の私達にはどうする事も出来ない。だから少しでも準備を整えてシャルリア達と合流しましょ？」

「ナミさん……うん、そうだよね、ごめん、ありがとう！もう大丈夫！」

心配なのに変わりはないけど、ナミさんの言う事は正しかった。後発の私が心配で一杯になっていては上手く行くものも行かなくなるかもしれない。普段通りの気持ちで臨まないと変なとこで足元掬われるかもだし。

気持ちを切り替えて私達はルフイ達に続き街へと繰り出した。まあ、ペコムズが居る

から今は隠れて街中を覗き込んでいただけけど。

それに今更だけど、服装を一般人っぽくした所でナミさんもペローナちゃんもキャラクターも素材が良すぎるから結局目立つんじゃないかな……。

「それにしてもライオン、なんだこの島、人種も何もあつたもんじゃねエ」

ペローナちゃんが少々驚いた様にそう言うのを見てみれば、確かに色んな人種が街を歩き、異種族同士で仲良く語り合っていた。中には結婚もしているのか友達とは思えない距離感で接している組も存在している。

「その事か。簡単に言やア、それこそがママの夢なのさ、世界中の全種族が差別無く暮らせる国……いや、この世の全てだ」

「この世の全てって、なんだかワンピースみたいだけど」

「それ程価値のあるものにしてエのさ、ママは。もはやここはただの国じゃねエ、大国だと思え！俺らが目指しているホールケーキアイランドの周りには34の島が点在し、それらを34人の『大臣』達が治めている。その海域の総称は『万国』トットランド。ここは『チョコレート大臣』の治めるカカオ島、ショコラタウンだ。街は全てチョコで出来てる」

「へえ……え、全て!?!」

家とか街灯がチョコなんだなあっていうのは分かってたけど、その全てがチョコとまでは予想出来なかった……!

例えば他の国とかもそうだったりするのかな？アメ大臣なら街はアメで、クリーム大臣ならクリームで、みたいな。甘い物が好きな人からすれば天国じゃん……！

「だが、窓ガラスはキャンディー大臣、柱はビスケット大臣の管轄だ。勿論それらにもチョコレートでコーティングがされているが」

「ペコムズ！私チョコレート大好き！食べていいの？」

「ああ、この町ではチョコは好きだけ食っていい……が、屋根の瓦チョコは法に触れる。雨風が凌げなくなるからな。それから柱や建物などの私物、公共物もダメだ」

キャロットが「じゃあ何なら食べられるの？」と言いたげに首を傾げた。でも確かに、好きだけ食べていいとは言ってもかなり制限……という細かい法令がある様だ。

考えてみれば当然で、本当に好きだけ食べていいってなったら街はめちゃくちゃになるだろう。

まあ、所々に生えている木の形をしたチョコなどは流石に大丈夫だろうから、それらの法をしっかりと守つてもたつぷりとチョコレートを味わう事は出来そうだけど。

「俺は顔が差すから船に戻っているが、チョコは大好きだ！土産を頼む！」

「うん、買えたらね」

「食糧を調達するついでだろ、ガオ……ん？そっいえば麦わら達は何処に居る？」

「ルフィ達ならもう街に行つたよ」



買えたら、とか含みのある言い方をしたのはこれが理由だ。あのルフィが先行して突っ走って騒ぎを起こさない訳がなく、チョコを買う所か食糧調達を出来るかどうかも怪しい所なのだ。

慣れてる私達やそういう事を気にしないキャロットはともかく、ペコムズはその事実で大層慌てて声を荒らげた。

「街に行つたつて……あの格好のままか!? お前らを俺が連れてきたとバレたら俺アどうなると思う!? 慎重に動け!」

「大丈夫大丈夫、場所なら直ぐに分かるよ」

「……そうか! お前の見聞色なら!」

そうペコムズが納得しかけた直後、街の方面から『カフェ食い事件だー!!!』と大きな声が聞こえてきた。それと同時にペコムズの顔からサツと血の気が失せていく。

「あつちだね!」

「フザけんな!! お前らの船長の尻拭いでわざわざカカオ島に降りたんだぞ!」

ペコムズの言う事は尤もなんだけど、ルフィの行動は誰かが縛れる様な物じゃないし。船員の私がこういうのもなんだけど、仕方ないというかね?

「最悪戦闘になるかも。そうなったらナミさん達は下がっててくれる?」

「イヤよ。さ、行きましょ」

私の申し出を笑顔で断ってナミさんは歩き出した。ペローナちゃんも呆れた顔で続き、私の手を引つ張ってくる。

……もしかして私の嫁って、可愛さだけじゃなくて格好良さも兼ね備えているのでは？なんて、知ってるけど。

ていうかペローナちゃん、自然に私の手を取って先導してくれてるんだよね。服装も普段と違ってスッキリした格好良い感じだからなんか……なんかこう、クる。

少し変なテンションになりながら歩を進める事数分、『カフェ食い事件』とかいう珍重な事件の現場に辿り着いた私達は、他の野次馬達に紛れて事を中心の様子を観察する事にした。

「わ、ルフィ達だ……！」

「本当にカフェを食べたのね……アイツの胃袋はどうなってるのかしら」

「今回はルフィだけじゃなくてチョッパーもだけどね」

チョッパーは甘い物が大好物だから……とはいえ、今回はかなり食べてしまったみたいだけど。

ルフィもチョッパーもどう食べたならそうなるのかってくらい体が風船の様に膨らんでいる。ルフィはゴム人間だからまだ理解出来るけど、チョッパーは……これも甘い物の力なのかな。

さて、ここからどうしようかな。ルフィとチョップは食べ過ぎでその場を離れられないらしいし、『器物破損』の容疑で警官の様なおじちゃんに連行されかけてる。放つておいてもあの2人なら大人しく連行される事はないだろうけど、そうなつてしまえば騒ぎになるのは避けられないし、結果として私達の正体がバレてしまう。せつかく侵入つて形を取っているのにその意味が無くなるのは出来るだけ避けたい事態だ。

「待って、チョコポリスさん！」

「ん？」

どうしたものかと頭を捻っていたその時、上空から顔のついた絨毯に乗って1人の女性が現れた。

そのままふわりと地面に降りて、その女性も優雅な足取りで地につけ警官の方へ歩いて行く。

ていうか、ちよつと……!!あの女の人……!!!

「か、可愛い……!!」

ふわふわの肩甲骨あたりまで伸びてるツインテールに、くりりと綺麗な瞳。あどけなさを残す鼻筋に、ぷつくりと吸い付きがいのありそうな唇。

可愛すぎる……私の嫁達にも劣らない逸材……!!まさかちよつと寄つただけの島で出会えるなんて!

袖口や裾、襟にフリルのついたカットソーを着て、下半身はダボつとした……ええつと、なんだっけ、アラジンが履いてそうなやつ。なんとらパンツって言うんだけど名前も忘れちゃった。まあそれを履いていて、最低限の可愛さも付与しているけどどちらかと言えば動きやすさ重視って感じの格好をしている。

どちらにせよ、可愛い事に変わりはない！名前もまだ知らないけど、とにかく嫁にしよう！

## 227 『女好き、即バレ本性』

「オーナー……！ご覧ください、あなたの店が！」

「まあ……！何て事……っ！」

私が嫁にすると決めた人はどうやらルフィ達が食べてしまったカフェのオーナーだった様で、チョコポリスが慌てた声で見えるも無惨な姿となつてしまった店を指差し、首を動かして視界に収めたオーナーは目を見開いて口元に手を当てた。

「こんなに残して！約束が違うじゃないの！もうっ！」

「ん？」

「え？」

今度は腰に手を当て、頬を膨らまして「怒ってます」といった風のオーナー。

あと今更だけど、その肩に乗ってるゼリーみたいな何??

「あつ、もしかして賞味期限による解体業者でしょうか!?これは失礼しました！でも困るよ君達、作業中は看板を出しといってくれなきや。まだお客も居たしねエ」

「……もしかしなくても、助けて貰った？」

ナミさんがこっそり私に耳打ちしてくる。そのウイスパーパーボイスだけでご飯を何杯でもお代わり出来そう。

「……ただの善意って事はねエだろ、仮にもその店のオーナーらしいじゃねエか、普通はキレてもおかしくねエ」

今度は逆側からペローナちゃんの囁き声が……！あふん、昇天しそう……こんな状況だけ。

「それでは本官はこれにて！」

「ええ、ご苦労様！皆さんもお騒がせしてごめんなさい！」

オーナーが周りの野次馬達にそう告げれば、それぞれ安心した様に散っていった。

……耳が幸せて事だけじゃなく、確かに少し怪しさはあるよね。ここはもう敵地だし、考えたくないけど情報が漏れてたりする可能性だってゼロじゃない。助けてくれたのは敢えて信用させる為とか……、いや、そういうのを考えるのはやめよう！だって折角可愛い子なんだし！

「あ、そういえばこの度の結婚、おめでとごございますプリン様！」

「ひよえ!？」

プリンちゃんって言うんだ！可愛い名前だね！！すっごい可愛いね！！あーっ可愛い  
ねーっ！！！！

で、なんだって？けっ、け??け、なんだっけ!?

「ナミ、イリスが凄い顔してる」

「あの子可愛いから、内心で嫁にしようって考えてたんでしょ。それにしても初めて  
じゃない？略奪愛」

「寝取るの前提かよ、相手も運がねエな」

ナミさんもペローナちゃんも正気!?言つとくけど私はどれ程可愛くても人のパート  
ナーは奪わないからね!?そのパートナーにひどい事とかされて別れたがってるとか  
なら遠慮はしないんだけど……。

「式も近いのに店回りとは、勤労も程々に……!皆、あなたの幸せを願っていますよっ!  
そういうえば、サアヤ様からのご祝儀を受け取られたとか!あの方から直接何かを頂ける  
とは流石ですね!」

「えへへ、ありがとう!」

……ん? 沙彩??

\*\*\*

## —プリンの家—

「いやー、プリンっていうのか、名前！ありがとう、助かったよ！」

「そんな！気にしないで？私の方こそお礼を言いたいのよ、あんなに美味しそうに食べてくれるなんてパティシエ冥利に尽きるものっ」

そんな訳で私達は現在プリンちゃんの家にお邪魔していた。正直、私とナミさんが揃って顔を合わせてる時点で正体がバレてもおかしくないんだけど……。

あと、プリンちゃんは沙彩と繋がりがあられるらしい。ご祝儀を貰うくらいだから相当近い関係なんだろうけど……。

「チョコ作るの好きなのかー、ミキータと同じだむぐっ!？」

「ルフィ！名前を出すのは不味いぞ！」

「あんたもね……」

何だか色々諦めた風のナミさんがため息をつき、飴とかクッキーとかチョコとかで



出来た椅子に腰掛けた。

「ルフィって……まさか、麦わらのルフィ!? 本物!? じゃあそっちの子はあの女王で、隣の人は正妻!」

「チツ……おい、どうすんだ、どうせ嫁にしねエのなら口を割らない程度に痛めつけるか?」

物騒なペローナちゃんの家は当然却下させて貰うとして、実際問題、正体がバレてしまったのは不味い。何もしなければ彼女は私達の事を言いふらしてしまうだろうし、そうなれば潜入も何も無くなってしまう。そういう意味ではペローナちゃんの言ってる事も理に適ってると言えばそうなんだけど……。

「じゃああなた達って、サンジさんのお仲間……?」

「え? そうだけど……」

「……まさかプリン、あなた、結婚するって……」

「うん……! そのサンジさんと!」

え?

ええ!? この子がそうなの!?

あれ? じゃあ私もしかしてプリンちゃんを狙っても大丈夫って事……!? いやでも、プリンちゃん本人がサンジに惚れてた場合は……いやいやでも、まだ付き合っていない!

この婚約も破棄されるのは決まってるから、私の事を好きになってもらえば良くないかな!?

「で、でも、ママの傘下にも入ってないあなた達がどうやってタルトの検問を通過したの!？」

「タルトの検問……ああ」

ペコムズが上手いこと誤魔化してたあれかな。

それよりも、サンジの婚約者って事は当然プリンちゃんやんはビッグ・マムの娘なんだよね? 気配は……正直、強者のオーラは無い、かな。四皇の娘だからってその子まで凄く強いって訳ではないと。

「何故ここへ来たの!?!、殺されちゃうわよ!?! ここはもうママのナワバリで……ママはとても怖い海賊! でも知ってる……っ、あなた達も怖い海賊!」

「……!」

文字通り目を回して混乱しながら取り出した包丁の切先をこちらに向けてくるプリンちゃん。

……んん? でもなんか、包丁の構え方が妙に小慣れてる様な気が……ま、お菓子作りが仕事みただし当然か!

1人納得していると、唐突にペローナちゃんがパチン、と指を鳴らした。直後に小規

模な爆発がプリンちゃんの包丁付近で発生し、予想外の衝撃に包丁を取り落としていく。

「下らねエ芝居はやめろ、ナミヤそのバカは女となると疑う事を知らねエからな。……でも、このゴーストプリンセスであるペローナ様の目まで欺けると思うなよ？ ホロホロ……」

「きゅ、急に爆発が……！ やめてー！ 殺さないでー!!」

「ちよ、ちよつとペローナ！ 芝居つて、決め付けるのは良くないわよ！」

「決めつけてねエ。そもそも、こいつがサンジの婚約者ならビッグ・ママに利用されてるのは間違いないエだろ。立場上は一番怪しいと言っても良い。ここで私達に良い顔していれば、目的の場所までの地図を書くとか提案して罠に掛ける事も出来る」

ペローナちゃんは睨む様にプリンちゃんを見つめる。まるで本心を探っているかの様で、当のプリンちゃんは怯えた様に肩を縮ませていた。

「おいペローナ！ プリンはおれ達を助けてくれたんだぞ！」

「ちよつと危機を救っただけでそうやって信じてくれるんだ、取り入る為なら私でもそうする」

「……じゃあもし仮に、プリンが私達を騙す目的で接触してきたのだとすれば」

……あ！ そっか、それつてつまり私達の入国がバレてるって事になるんだ！

……まさか、シャルリア達に何かあったの……!?

「うーん……ペローナちゃんの言う事も正しいけど、だからってプリンちゃんの口封じなんて出来ないし……、よし、拐おう」

「は？」

プリンちゃんの口から素つ頓狂な音が響いた。

でもこれが1番の方法だと思う。プリンちゃんが私達を騙していたとしても、一緒に連れて行ってしまえばこれ以上の情報は向こうに漏れないし、騙していないのならないので普通に船上ランデブーだ。

「それに、沙彩の事もゆっくり聞きたいし」

「ー」

沙彩の名前を出した瞬間、プリンちゃんは軽く肩を揺らして反応した。

まあとにかく、船に戻ってペコムズとも相談してみよう。あ、そうだ、食糧を調達しないといけないんだった。

「拐うのは良いけど、プリンが居なくなっても不自然じゃない状況を作る必要があるわ」  
「あー……ほら、書き置き残しておいたら良いんじゃない？ サンジさんの所に行ってきます、はーと。みたいな」

「それくらいしか出来る事はねエだろうな」

プリンちゃんの見解は聞かず終いだけど、どうせ誘拐するんだから意見を聞くなんてのは可笑しな話だ。

キャロットやチョッパーは一心不乱に机や壁を食べてるし、ルフィも話を聞いてる様で聞いてない感じだけど。

「ちよつと……！待つ……！」

「それじゃあ私、ちよつとプリンちゃん連れて一足先に船に戻つとくね。食糧の調達の方を頼める？」

「ええ、わかったわ」

何やら慌てた様子のプリンちゃんだけど、申し訳ない事に拐うのは確定してしまったので許して欲しいなあ、なんて。

そうして私は、ひよいつとプリンちゃんを横抱きして裏口からこつそりと家を出た。ここで叫ばれたら私達の犯行がバレてしまうので、倍加は最大の30を使用して跳躍し、一気に空を駆けていく。

「お、おい……つ!!クソつ、息が……つ！」

「ごめんね、下の人に気付かれない速度で飛ばないといけないから」

明らかに喋り方や雰囲気が変わったプリンちゃん。なんだかペローナちゃんっぽい

雰囲気……かな？

あと、気付かれない速度って言っても、流石に最初から空を見上げてる人には気付かれると思う。まあでもプリンちゃんが拐われてると認識出来る人は居ない筈だから多少見られても問題はないんだけど。精々が『なんか速いのが空を飛んでる』くらいの印象しか持たれないだろう。鳥あたりと勘違いしてくれるのが理想だ。

「ほいっと」

今出せる全力で駆けたので当然なんだけど、そう時間をかける事なくサニー号まで辿り着いた。

プリンちゃんの事をペコムズに相談したいんだけど……甲板には居ないっぽい。と言う事は船内かな。

「つく……私をどうするつもり!? 言っておくけど、私に危害を加えれば姉様が黙ってないわよ!!」

「姉様って沙彩の事? 仲良いんだ。それにプリンちゃんもさつきと随分雰囲気違くない?」

「……誘拐までされて自分を取り繕える程肝が据わっちゃいないのよ」

自分の性格すらも偽れるのは相当肝が据わっている証拠だと思うんだけど、そこを突っ込んででも話が進みそうにないから敢えてスルーしておく。

「取り繕ってなくてもあなたは素敵だよ」



## 228 『女好き、ホールケーキアイランド』

ナミさん達が買ってきた食糧を倉庫に収め終わった頃、トイレの方からチョツパーの皆を呼ぶ声が聞こえて小走りでの場へと向かう。

トイレに呼ぶってどういう状況なんだろうと思いつつ辿り着けば、チョツパーがトイレ内の床に「彫られた”文字を指差していた。

『ひきかえせ』……って、引き返せ、だよね」

「これペコムズシが書いたのか？」

「それは分からないけど……、……うん、近くにペコムズの気配を感じられない。誰かに連れ去られたか、もしくは不測の事態に襲われて、慌ててこの文字を残して逃げたか」

なににせよ、ペコムズはもうこの船には居ないという事だ。つまり、私達は唯一の案内人を失ってしまった事になる。

「引き返せつて事は、引き返さなきや何か起きるぞつて事だ」

「だね。じゃあこういう時どうするのが一番だと思う？ 船長」  
キャプテン

にんまりと、答えは分かかっていながらルフィに少し演技かかった口調で問えば、ルフィはいつもの様に気負いなく自身ありげな表情で頷いた。



「進んだら何かある、みんなそれをしつかり覚えとけ！——進むぞ！面白くなってきた！」

『オー!!』

元よりサンジを連れ戻しにきた私達にとつて『引き返す』という選択肢は無い。それにその事を抜きにしたつて、うちの船長は来るなど言われたら行くタイプの人間である、ここまでお膳立てされてて進まない訳が無かった。

「……正気？お茶会を邪魔すればママが黙っていないわよ」

「黙っていなくてもいいよ、黙らせれば良いんでしょ？」

「それが簡単に出来るのなら、ママは世間から“四皇”だと呼ばれていないわ」

「簡単に出来ないことをやってのけるから、私は世間から“四異界”だと呼ばれてるんだよ？」

それに、沙彩も居るからねえ。敵に回るのならばまだしも、まず味方になってくれるだろうし。

あ、でもビッグ・ママって今世での沙彩の母親なんだよね。じゃああんまり戦ったりしちゃうと沙彩的には複雑な気持ちになってしまいかも……。

「進むのは分かったが、これからどうするんだ。ペコムズの話聞いた限りだと、私達が目指すホールケーキアイランドの周りには34の島が点在してるんだろ。そいつらの

監視網を潜り抜けながらどうやって中心に近付くんか」

「最悪の場合は、本当に乱戦になっちゃうかもだけど……ねえプリンちゃん」

「この状況で普通私を頼る？教える訳ないじゃない、あんた達なんか兄様や姉様達にボコボコにされればいいわ」

まあ、だよな。仮にも誘拐されてる立場で脅されてる訳でもないのに口を割ったりはしないか。

かといつて本当に脅したりとか出来る訳もないし……。

『ふっふっふ、こんな時の為の私じゃあないかな？』

あ、そうか！私達が知らなくても王華なら知ってるんだ。

普段は過度な干渉をしてこない王華だけど、こうして私達が本当に困った時なんかは原作の知識を活かしてフォローしてくれるからかなり助かっている。拜んでおこう。

なんであれ、ありがとう、余計な戦闘を避けられるのは凄く助かるよ。

『気にしないで、私だつて沙彩とお話したいしさ』

そういう訳で、残念ながらプリンちゃんの手は借りられなかったけど、この世界においては反則級の知識を持った王華に道案内して貰える事となった。

その事をみんなにも伝えて、操舵の方は私が担当する事に。

ちなみにプリンちゃんとキャロットは意味が分からず首を傾げていたけど。プリン

ちゃんとは王華を知らないし、キャロットも一目見たくらいだろうから仕方ないんだけど。

「ええと、次の島が見えたら記録指針の『2』へ舵を切る、だったわよね」

「うん、そうだね」

ナミさんは魚人島で新世界でも通用する記録指針を貰っている。通常のソレと違うのは、付属している指針の数が3つあるという事だ。

今回私達がホールケーキアイランドへ真つ直ぐ向かう為にはその3本の針を上手く使いこなす必要があるらしい。王華が言うには、ホールケーキアイランドに上陸しても色々罫が待っているらしいけど……それは上陸してからなんとかすればいいだけの事だ。

で、一番最初に指針となるのは『2』の針で、この針が差す方向へと舵を切れれば良いらしい。

『1』とか『2』とか言うけど、結局どの針が『1』で『2』で『3』なのか、というのはその針自体に書いているらしい。一応識別番号みたいなのはあったんだね。

「イリス、面舵お願い。3時の方向へ」

「サンジの方角に行くぞ！面舵いっばーい!!」

「それは回し過ぎじゃないかな……」

ここで前世では得られなかった知識をドヤ顔で披露しようと思う。

面舵つていうのは船の進行方向を右に向ける事で、逆に左に向ける事は取り舵というのだ！『面舵いっぱい』は言葉の通り目一杯舵を右に切る事、『取り舵いっぱい』はその反対である！

まあつまる所、『いっぱい』は急な方向転換くらいにしか使わないから今回に限っては回し過ぎなんで、私はナミさんの指示に従って3時の方向へゆるりと回した。

ぶつちやけ、うちで一番操舵が上手いのはフランキーなんだけど、今は居ないからなあ。

『島に近づく前に次の島へ方向転換する事で、敵の監視網をすり抜けられるんだよ』

「へえ、流石、詳しいね」

『まあね、好きだったから。……だからこの大好きな世界で、大好きな人達と……美咲達と、過ごしたいんだ』

「……そうだね」

美咲は、王華にとって初めての嫁だ。それと同時に私にとっても大恩ある人物である。なんとたつて彼女が王華に『ハーレム』の道を示していなければ、私はこうしてナミさん達と幸せに旅する事なんて出来なかつただろうし。

だから私も美咲の事は出来るだけ早く助けてあげたいと思っっているし、その時がくれ

ば全力で王華をアシストするつもりだ。

「次の島が見えるまでは少し距離があるみたいだから、私はご飯を作ってくるわ。もうルフイに作らせる訳にはいかないから」

「あ、うん、ありがとう。デザートはチョコが良いんだけどなあ」

「なんであんた達がその航路を知ってるの……って、私を見るな！作る訳ないでしょ！」  
それは残念。

でもいずればミキータとの合作とか食べてみたいよね、絶対美味しい、間違いない。

\*\*\*

王華の案内もあって、ホールケーキアイランドまでの航海は殆ど滞りなく順調に進んだ。残念ながら少しも滞らなかつたって訳にはいかず、夜は冷気で飴で出来た海が固まったり、その飴を求めてやってきた数え切れない程の海アリ達に襲われたりとなんやかんや面倒な事態は起きたけど。

「おお、これが……！」

「着いたぞ！ホールケーキアイランドだ!!」

カカオ島を発つてから丸一日、私達はついにホールケーキアイランドへと辿り着い

た。

目の前に大きく聳えるケーキで出来たかの様な島にキャロットとチョコッパーが歓喜の声を上げる。ここにビッグ・ママと、それから沙彩が居るんだ……！

島というより、本当にホールケーキの集合体みたいな感じだ。沢山のホールケーキが所狭しとひしめき合って、中央に一際大きなホールケーキが聳え立っている。恐らくあそこにビッグ・ママが居るんだろう。

「ナミさん、どうやらあの岬が唯一警備網が届かない場所らしいよ。ホールケーキアイランドの南西の海岸、だって。……ああでも、安全じゃないらしい。王華もそこしか岬を知らないだけだって」

「警備網が届かないのに安全じゃないの？それって普通に届いてるから安全じゃないんでしょ」

まあ色々気にはなるけど、敵の本拠地に降り立つんだから安全な訳が無いよね。気を引き締めて進む様にしないと。

……それに、未だに連絡が届かないシャルリア達の事も気になる。

「これだけの間連絡が来ないのは明らかに変だわ、ブルックもついてるし、シャルリアも下手な動きはしないと思うけど……」

「ペドロも居るよー」

「私も無事だつて信じてはいるけど……どうしても浮き足立ちやうつていうか」  
「嫁の事になるとお前はいつもそうだらう」

それはそうだけど！

私達は海岸近くに船をつけ、錨を下ろしてから上陸した。

む？地面がなんかふわふわだ……。

「うめエ！地面が固い生クリームだ！」

「メレンゲね、この島もお菓子だらけなのかしら」

地面がメレンゲかあ、卵の使用量半端じゃ無い事になってそう。

と、そんな事より今はサンジとシャルリア達だよね。シャルリア達に関してはこつちから連絡しても良いんだけど、丁度潜入中だったら電伝虫の鳴き声で気付かれてしまうし、まずはちやつちやとサンジを連れ戻す必要があるそう。

肝心のサンジの居場所だけど……。

『それに関して私に任せてくれる？沙彩と早く合流する為に持つてる知識はじやんじやん曝け出すよ！』

「うん、お願い！」

王華がサンジの居場所を教えてくださいのならば、とにかく私が先行してサンジの所に行くのが良いと思う。一応今は大人しいプリンちゃんに関してはナミさん達に任せてお

けば大丈夫だろうし。

「ねえナミさん、私、単独でサンジの居る場所に向かっても良い？」

「え？……そりゃあ、あんたなら一人で行動しても滅多な事にはならないと思うけど、場所分かる？」

「うん、王華が知ってるみたい」

歴史の本文の事もあるから、サンジを助けたら即脱出つて訳にはいかないけど、少なくとも早期に救出するのは何も悪くないと思う。ナミさんも他のみんなも同意見なのか、私の提案に反対の意を示す人は居なかった。

そうと決まれば早速行動開始だ。私が一人先行し、ナミさん達とはとにかく地道に進む。

この南西の海岸は目の前の森を抜けた先にあるらしく、ナミさん達が先へ進むのなら当然この森を突っ切らなければいけない。その中で色々罫が潜んでいるらしいのだけど、あんまり教えずすぎるのはルフィの望む所じやないので王華も『色々あるから気を付けて』とだけしか言わなかった。

シャルリア達もそうだけど、一旦離れ離れになるナミさん達の事も心配になる……！でもこれは仕方ない、私が私である以上は嫁を心配するのはやめられないから……！！くっ……！！



## 229 『女好き、料理長と出会う』

「……ふいー、なんとか忍び込めた〜」

『流石にイリスでもあの監視網を掻い潜るのは容易じゃなかったね』

ふう、と再度息をつく。

肉体的な疲れはそうでもないけど、結構神経使ったから精神的な疲れが……。

「……うん、確かにサンジの気配を感じる。ここで間違いなさそう」

現在私が居るのは、『アブリコツ湖』と呼ばれる湖に浮かぶ「ジェルマ」の城の様な船の中だ。この湖自体、敵の本拠地である『ホールケーキ城』の裏側にあるから、この船に忍び込むのは王華の言う通り容易では無かった。

ちなみにホールケーキ城シヤトというのは、私達が初めに見たこの島の中央にある一際大きなホールケーキの事だ。

「にしてもジェルマって凄いな、この船だって大き過ぎて国かと思った」

『実際その解釈は間違っていないよ。ジェルマ王国っていうのは前にレイジュやヨンジと会った時の船がいくつも連結して出来た国だから。ここは王城だし』

船が集まって国になってるって事？それはなんともまあ、スリラーバークとはまた

違った斬新な国だなあ。ん？スリラーパークはそもそも『国』ではなかったんだっけ？  
「……それにしても、なんか良い匂いしない？この部屋」

『流石に五感共有は出来ないから分かんないけど、誰かの部屋っぽいしその人の匂いなんじゃない？』

潜入した際、見つけたりそうになって慌てて滑り込んだ部屋がここだ。あんまり物は置いていないのか、簡易的なベッドとダンス、化粧台が置かれている程度。

……そう、化粧台である。

「まさかここ、レイジュの部屋だったりしない？」

『え？うーん……どうだろう、でも確かにジェルマって国民の殆どが男らしいから……いやでも、流石に王女の部屋がこんな質素な訳ない気もするし、見張りくらい居てもおかしくないよね？』

「それはまあ、そうだけど」

……ごくり、と唾を飲み込む。

いや、その、潜入する時結構気を張って疲れたというかね？慣れない事をしたからちよーつとご褒美が欲しいっていうか。

若い子じゃなくても良いんだ、女の人なら！だからちよつと失礼します！

「とぅー！」

ぴよーんと軽快に飛び跳ねてベッドにダイブする。途端、鼻腔を擽るこの甘い香り……!!

私だから分かる……この匂いの主は、若い女!!!

『今のイリス、ハーレム女王っていうか変質者じゃない?』

「ハーレム作ろうなんて人間はみんな変質者だよーだ、今はこの匂いを堪能するんだから黙ってて!」

『開き直っちゃった……』

なんていうか、安心する匂い? 包み込んでくれそうな感じというか……あ、眠くなってきた……。いや、流石に寝ないけど。

『ちよつと警戒も緩んでるんじゃない? 誰か入ってきたらまずいんじゃない?』

「んー、でもさつきから見聞色も発動しつぱなしだったから……覇気って使い続けると疲れるでしょ? 女王化したら大丈夫なだけ……それに心配しなくても、そんな都合よく部屋に戻ってきたりなんか」

ガチャ

「しないって……、あ」

「え？」

『うん、まあ……見事に建てて回収しちゃったね……ダメなやつを』

ま、まずい〜!! 本当に戻ってきちゃった! ていうか、部屋主だよね!? 可愛いんだけど!! ちよつと幼い顔にそばかすとか、ぱつっん前髪とか、ローポニーとか!! 服装的に使用人なのかな? 私専属の使用人になって〜!!

「あつ、あのつ……あなたは、どこから……! 本日招待されるお客様は居ない筈ですが……!」

「え、えーつと、とりあえず入ったら? あなたの部屋なんですよ?」

何故か分からないけど場を仕切ってる私に、頭が混乱しているのか何故か素直に従って入ってくる彼女。

とりあえず都合が良いのでサツと起き上がってその子の後ろに回り、開きっぱなしの扉を静かに閉めた。

「……ハッ、こ、困ります! ここは王城で、許可なく入るのは……!」

「しー、あんまり大声出されるとバレちゃうから、静かに、ね?」

ぴと、と彼女の唇に人差し指をくつつけて軽くウインクする。

……決まった、私は自分でも認めるスーパー美少女、これはもうこの子もメロメロになってもおかしくない!

「がぶー！」

「あいたア!?!ちよ、耐性倍化してないから!不意打ちはダメ!ふー!ふー!……ん?ここを舐めれば間接キスなんじゃ?」

普通に噛まれちゃったけど、美少女に噛まれたと思えば悪くないし、口に含まれたと考えるとえつちだ。ぺろぺろ。

「あ、あなたは誰なんですか……!私の部屋に入つてベッドに潜るなんて、何が目的で……!」

「改めて言葉で説明されるとなんだか思う所があるけど、じゃあ自己紹介から。私はイリス、海賊だよ。目的はここに連れて来られたサンジの奪還。あと、レイジユを嫁にする事と、たつた今あなたも欲しいって思ったからあなたも」

「い、イリス……!?!まさか、女王……!!」

流石に名前を明かすと正体バレるよね。だけど彼女は何故か私の希望通り声のボリュームを落としてくれている。普通、叫んでもおかしくないんだけど。私も覚悟の上だったし。

「私は名乗ったよ、あなたは?」

「……わ、私は、コゼットと言います、ええつと、この城の料理長を務めさせていただけます」

「ふふ、確かに私は海賊つて名乗ったけど、コゼットちゃんまで役職を名乗らなくて良いんだよ?」

「あ!そ、そうですね……」

ちよつと天然が入つてるといふよりは、突然自室に高額賞金首が居た事で混乱している様だ。そんな中でも相手の意を汲んで声を小さくするあたり人が良すぎると言つても良いかもしれない。

「料理長つて事は、料理得意なんだ?でもその歳で料理長つて凄いな、見た目より年齢重ねてたりする?」

「あ、歳は23です」

「じゃあ私の2個上なんだ!」

「そうなんです。……?2個?あれ、え、21歳、ですか?」

「そうだよ、あはは、身長の方は結構気にしてるからあんまり言わないでね?」

……でもまあ、そうやって改めて年齢で比較してみると……。

「……?」

「こう……コゼットちゃんは出るところ出て引つ込むところ引つ込んでるけど。」

「……くう!」

恨めしい!私の寸胴体型……!!でも良いもん!王華を受け入れてからは徐々に成長

してるし！」

「コゼットちゃんは料理長つて話だけど、仕事は大丈夫？仕込みとか」

「はい、今は頼れる仲間達から休憩を貰った所です。どうもサンジ様が帰ってこられたとの事で……あ、だから奪還つて……」

「うん、ごめんね、サンジは連れて帰るよ。後もう一つごめん、あなたも連れて帰るから」  
「えっ?！」

コゼットちゃんが目を見開いて私を見つめる。

うーん、そんな表情も可愛いね、可愛くて料理上手でスタイル良くて性格も良いとか欠点無いじゃん。

「勿論、無理矢理じゃないけど。コゼットちゃんが自分から私を求める様になるまでアタックするからね！」

「そ、それは難しそうですね。仲間も居ますし、今の仕事を投げ出す訳にはいかないの  
で」

「でもコゼットちゃん、私がこうして侵入してるのに叫んだりしないじゃん。脈アリじゃないの?！」

「え!?ち、違います!ただ、なんとというか、それをすればあなたが困りそうだなーって思ったというか……その、初めはびっくりしましたけど、悪い人には見えなくて」

そこまでキツパリ否定されると辛いけど……辛いけど!!コゼットちゃんが包容力ありすぎる人物だつて事は分かった。

普通、悪い人には見えないからつて海賊の肩を持つ? 私が困りそうだから報告しないつて、謀反と取られても仕方ないよ?

『コゼット……どこかで見たことある気がするんだよね』

原作にも登場してたキャラなんじゃない? ていうかこんなにかわいし、普通にメインとか、出番の多いサブキャラだったとか!

『いや、流石にそこまで出番あつたなら忘れないと思う』

いくらONE PIECEが好きつて言つても、あんまり登場しないキャラの名前までは覚え切れないんだね。その割にはホールケーキアイランドへの道のりとか、細かい事は覚えてるみたいだけど。

『そういうのを覚えちゃうのがオタクなの! 例えば何巻の何ページにこういつた描写があるとか、そつち系を極めちゃうの!』

な、なるほど? 分かつた様な、分からない様な?

「それで、イリス、さん? は本当にサンジ様を連れ戻すのですか? それはその、四皇として恐れられているビッグ・ママをも敵に回す行為ですが……」

「例え誰が敵に回ろうとも、サンジは奪い返すよ。大事な仲間なの、それを無理矢理奪わ



れたままで引き下がれないでしょ、私達は『海賊』なんだから」

「…………ふふ、イリスさん、普通の海賊はそこまで義理堅くないと思いますよ」

うっ、コゼットちゃんの柔らかい微笑みの爆弾が強烈過ぎる…………っ！

布団の匂いを嗅いだ時も思ったけど、なんとというか包容力があるというか、安心するっていうか…………！

くう〜！たまらん！

「コゼットちゃん！毎日私に味噌汁を作って！」

「味噌汁ですか？毎日では難しいのでは…………」

ぐふう……………意味も伝わらず、伝わっていないにも関わらず振られる……………！でも負けない！なんならその調理師仲間達も全員嫁に迎えて……………！！……………いや普通に考えて男の人も居るよね。

「くうっ…………あれ、でもそういえば、コゼットちゃんって話を聞く限りだと、私がサンジを連れ戻す事に関しては否定しないの？」

私がそう問うと、コゼットちゃんは部屋の中なのにキョロキョロと辺りを見渡し、ゆつくりと私に顔を寄せてきた。

…………っといけない！反射的にキスしちゃうとこだった。今無理矢理しちゃったら絶対好感度下がるから我慢して私い！

全力で己の欲望を押しさえつけた私だけど、今度は耳付近に唇を寄せてきたコゼットちゃんに翻弄されている。もしかして遊ばれてるのかな、私。

「私個人がどうこう言っていない内容ではないと思いますが、サンジ様も戻りたいと思われているのなら戻るべきだと思います。こんな所まで迎えに来てくれるお仲間なんて、そうそう出会えるものではありませんから。だから私は、サンジ様をここに縛り付ける必要はないのでは、と思うだけです。……あの、でも、私がこう言ったのはどうか内密にお願います。この事が王族の方の耳に触れてしまえば……」

「……勿論、言いふらしたりなんか絶対にしない」

長いこと耳元で喋ってくれたから気持ち悪くない様に集中してたけど、コゼットちゃんが会ったばかりのサンジや私の事を気にかけてくれるのは良く分かった。そんな子の立場が悪くなる事なんて絶対に言わないし、ていうかも絶対嫁にするから立場とか悪くなくても関係ないよほんと！

## 230 『女好き、厨房にて』

「あ、私……そろそろ仕事に戻らなくちゃ」

「もう？まだ20分も休憩してないと思うんだけど……」

「一応仮にも料理長の立場なので、仲間達より多く休んでる訳には行きませんから」

責任感も強いコゼットちゃんがそう言つて部屋を出て行くとするので、ここでお別れは勿体ないと思つて手を掴む。

それにちやんと聞きたい事もあるし。

「引き止めてごめん、だけど聞きたい事があつて」

「サンジ様の居場所ですか？」

「あ、それも確かに知りたい！……けど、それとは別件で。コゼットちゃん、シャルリアとブルックと、あとペドロ、この3人の名前を何処かで聞いたことない？えーつと、シャルリアはクリーム色の長い綺麗な髪をした美女でペドロは喋るジャガー、ブルックは骨なんだけど」

シャルリアを除いた2人のキャラ濃いよねホント。特にブルック……。知らない人に説明する時、もう骨としか言いようが……。あ、アフロも目印にはなるか。

コゼットちゃんは暫し唸り、右上を見たり顎を指で摘んだりと考えてくれていたが、どうやら聞き覚えはない様で申し訳無きそうに眉を下げて首を振った。

「すみません……名前自体は聞いた事あるんですけど、きつとそういう事ではありませんよね？」

「あ、うん、氣遣つてくれてありがとう」

シャルリアやブルックは名前だけでもそれなりに有名だけど、コゼットちゃんはきちんと言葉足らずな私の質問の意図を理解して返事をくれた。本当に優しいというか、悪く言えば甘いというか……。一応私、侵入者なだけどね？まあ、そういう所は素敵だと思っけど。

「そうだ、仕事に戻るのなら私もついて行って良いかな？」

「え？それは……うーん、流石に見つかってしまっ様な……」

「新人調理師として潜入する！」

「む、無理があると思ひますけど……！」

でも、ここでコゼットちゃんと離れちゃったらもう仲良くなれない気がして……。意地でも接点を作りたいって考えるのは仕方ない事だと思っんだ、うん。

「どうしてもダメだっ言うのなら、無理矢理ついていく」

「何一つとして譲歩出来ていませんよ!?それに、制服も無いと思ひますし……！」

「新人だから見学しておく！」

「そういう問題でもないと思うんですけど……!!……えーっと、どうしても、ですか？」

「うん、どうしても！だってコゼットちゃん、可愛いし。絶対嫁に来てもらうから！」

幸い……って言葉にするのは極めて癪だけど、私は身長が少しだけ、少しだけ！低い。つまり、新人や見習いとして行ってもそれ程不自然じゃないだろう。……不自然じゃないのだ、ないっつらない。

「流石に厨房の仲間達には話す必要がありますけど……王族の方々は気付かれないかもしれませんね」

「……？」

王族には気付かれない。そう言ったコゼットちゃんの表情は、なんだか哀愁めいたものが漂っている気がした。

気にはなるし、コゼットちゃんが哀しいのならば首を突っ込んで解決してあげたい。だけど今はあれやこれやと抱えている状況である事には違いなく……。

コゼットちゃん同様、私も哀愁めいたオーラを漂わせて1つため息をついた。

「じゃあ、案内しますね」

「うん。あ、でもちよつと待って」

見聞色の覇気で部屋の外に人が居るかどうか確認しておかないとね。

本当は覇気を消耗してるから、疲れるし使いたくはないんだけど……まさかコゼットちゃんの部屋から一緒に出て行く所を誰かに見られる訳にはいかないだろう。

新人だと誤魔化すし、基礎的な内容を教育中だったと言えばなんとかなるかもしれないけど念には念を入れるべきだ。

「……よし、誰も居ない！お待たせ、もう大丈夫だよ」

「？はあ……」

覇気の内容を知らないからか、私の言動に首を傾げて部屋を出るコゼットちゃんに遅れないよう私も続く。

厨房へと向かっているのだろう道すがら、コゼットちゃんの後ろ姿を凝視していて気付いたのだけど、びっくりするくらい歩行中の姿勢が良い。王族お抱えの料理長っていうのはこんなスキルまで身に付けないといけないのかと感心する程である。

「コゼットちゃんつてその歳で料理長だけど、実際ここに勤めて何年目なの？」

「今年で8年目です。かつての料理長の方に腕を見込んで頂いたのが15歳の時でしたから」

勤続8年かあ。それで料理長つていうのは普通に凄いのではないだろうか。しかも王族お抱えの。

……あ、味見とか、してもいいよね??普通にコゼットちゃんが作った料理を食べたく

なつてきた……。

ナミさんやペローナちゃんの作る料理は当然最高なんだけど、こと料理の腕となると流石にサンジに軍配が上がる。私達はそんな一流どころではない腕のコックが作った料理を毎日食べていたのだから、急に食べられなくなったら舌が物足りなくなってしまうのだ。あの2年間の修行の時ですら、時たまに思い返して涎を垂らすくらいはしていたのだし。

つまり何が言いたいかというと、それ程の腕を持つ可能性があるコゼットちゃんの料理は、今の私にとって喉から手が出てそのまま引つ搦んで胃袋に引き摺り込みたいくらいには求めてやまない物だという事で。

「私、新人だから食べて貢献するね！」

「出来るだけ目立たないで居てくれると助かるんですが……」

「目立たず食べるよ！」

そういう訳じゃないんですよねえ、みたいな視線を受けながらも華麗に受け流しておく。そもそも、会ったばかりの懸賞金10億程ある海賊相手に警戒心が無さ過ぎるのが悪い。そりゃあ極悪非道な真似の1つや2つされた所で文句は言えまい。例えば摘み食いとか、ぼよんをチラ見とか。

そうして、幸いにも誰に見つかる事なく厨房へと辿り着いた私は、まず緊急で集められた料理人を前につこり笑顔で立っていた。

集められた人達は当然困惑した表情を浮かべており、集めた張本人であるコゼットちゃんに何やら意味ありげな視線を送っている。

「ご紹介に預かりました、イリスです！味見役の新人なので摘み食いしても怒らないで下さい！」

「摘み食いに關しては皆で全力で阻止していきましよう！」

コゼットちゃんを含めた料理人の人数は3人。かなり少なくも感じるが、王族の人達の為だけに作ると考えたなら普通くらい……なのかな？いや、やっぱり少ないような……後、何故か全員女性である。

「あのー、料理長？新人って、休憩までその様な事一度も口にしてないですよ？それに私の目がおかしくなっていないのであれば、彼女は『女王』イリスなのではないですか？もしかして……かの有名な女王の嫁入りでもしました？」

やっぱり突然だからこの人達には気付かれちゃうよね。それに正体まで一瞬でバレたし……。10億の手配書は油断出来ないなあ……。

ていうか、私の嫁になつてもらうのつて女王の嫁入りとか言われてるの？語呂だけで



そう言われてるんだらうけど、その言い方だと私がどこかに嫁ぐみたいじゃん。それは絶対イヤなんだけど！

「してません！ここを捨ててどこかになんて行けませんよ。イリスさんについては、その、詳しく説明する事は出来ないと言いますか……でも！私達に危害を加える事は無いと思いますので！」

私のせいで必死に説得させる事になってしまつて申し訳ないけど、コゼットちゃんの料理は絶対食べておきたい！必要な我儘は意地でも通すのが私だからね……！胸を張つて言えた事じゃないけど!!

「料理長がそう言うのなら別に良いですけど、そこに居るのは仮にも10億の賞金首ですよ。異例の船長越えを果たしている一騎当千の怪物、その気になれば私達なんて挽肉も同然なんです」

「そうですよ、料理長は美人だから大丈夫かもしれないかもしれませんが、私なんかいつ殺されたって仕方ないんですから」

といつつ、なんやかんや緊張感は無さそうな料理人達。確かに私は自分で言うのもなんだけど高額賞金首だ。今みたいに押さえ込まず、戦闘時の要領でオーラを放出させればこの場で意識を保つていられる人はまず居ないだらう。でも、ここに居る2人共本当の意味で恐がってはいないと言う事が雰囲気に分かるのだ。

私の身長とかもあるんだろうけど、2人共コゼットちゃんを信用しているという事だ。

「分かってそうだけど一応言っとくね、あ、言っておきますね、先輩方！私から先輩方に何か危害を加えようって気は一切ないです！それに、確かにコゼットちゃんは凄く可愛いけど、あなた達2人も劣らず可愛いよ、嫁に来る？」

意識して変えようと思った敬語も速攻で面倒になって元に戻す。思えば敬語なんて当分使つてないなあ。最初の頃はナミさんにだけ敬語だったけど……。

「えっと……受け答え失敗しても殺されたりしないですか？」

「ちゅーはするかも」

「……一応パートナー居るんで、それだけはその、許して貰えませんか？」

おっと、この人は既に相手持ちだったか。そりゃあそうだ、成人はしてそうだし、普通に生きていれば恋人の1人や2人……。1人や、2人……。

「……ここ、ここ、コゼットちゃんもここ、ここ、ここ……！」

「料理長に恋人は居ませんよ、浮いた話も今まで聞いたことないですね」

「た、確かにそういった経験はないですけどお！もう少しオブラートに包んで下さい！それに、私はあなたに彼氏さんが居るのを始めて知ったんですけど！」

その発言に厨房内で軽く笑いが起き、反面、私はホツとため息をついた。

よ、良かった……これでコゼットちゃんに恋人が居たら泣き喚いてしまう所だった。それにしても、上司と部下って関係だけじゃなくしつかりと個人個人での信頼関係も結べているからかかなり雰囲気が良い。普通、上司の独り身を弄ったり笑ったりは出来ない筈だし。

「仲良いんだね、みんな」

「そうですね、入れ替わりも最近は無かったので、7年は一緒にやってますから」

仲が良いと言われたコゼットちゃんは少し得意げにそう返した。でもそうじゃないというか……どれだけ長い歳月を掛けようが、職場内で良好な関係を築き続けるのは難しいって聞いた事あるし。それを考えればこの雰囲気の良さは一重にコゼットちゃんの人柄が齎しているのだろう。

あ……余計に嫁になって欲しいって気持ちが強くなるう……!!

## 231 『女好き、シエルとメーア』

「んん〜っ!! 美味しい〜!!」

片頬に手のひらを添え、ほっぺたが蕩け落ちない様に支えながらつい溢れてしまった大きな口をきゅっつと結び直す。

私という存在が受け入れられ（というか諦められ）念願の味見役の地位を獲得した私は、恥も外聞も遠慮も捨て去って用意された料理に舌鼓を打っていた。

「これなに!?! このお肉の上にかかっているソース! これすっごく美味しい!」

「それは「アリゴ」ですね、西ウエストブルーの海が起源のじやがいもを使用した料理です。そのままでも食べられるので、一口にソースとも言えないんですよ」

「へえ! とにかく美味しい!」

持ち上げればぷるん、と跳ねるお肉の上で、淡黄色の「アリゴ」がキラキラと光る。ていうかこのお肉も凄い! 結構焼いてた筈なのに固くないし、むしろしつとりジューシーな味わいでアリゴと良く合う!

「その鶏肉は「コンフィ」で煮てあります。お口に合ったようで恐縮です」

「口に合うなんてもんじゃないよ! 今すぐ嫁に来て!!」

「どうやらこの料理はサンジ達の明日の朝ごはんらしいけど、朝からこんな美味しいもの食べるって昼と夜はどうなるの。というか、毎日このレベル食べてたの!?……に關しては、私も人の事言えないけど。」

「でもこれなら王族の人だつて大満足に決まつてるよー!」

「それはどうでしょうか……、でも、イリスさんが美味しそうに食べてくれるだけで私は凄く嬉しいです」

軽く微笑みながらそう言ったコゼットちゃんに、ちよつと所かかなり見惚れながらもどこか呆れた感情が浮かんでくる。

「なんというか、これ程の料理を自信満々に出せないという事がどうかしているんじゃないだろうか。勿論、コゼットちゃん達の事を言っているのではなく、こうして自信を無くしてしまうくらいには『美味しい』という言葉を用いていないのだろう王族に対して、だ。」

「これ、全部食べて良い?」

「はい、勿論です」

「味見役といいつつガッツリ食べてるけど、ここの長であるコゼットちゃんの許可は得たので遠慮なくいただきます。」

「あ、それと、さつき調理中にコゼットちゃん以外の2人にもシャルリアの事を尋ねて

みたけど、2人共知らないみたいだった。ついでに敬語はやめて砕けた口調で接してもらう様にお願ひもしてある。コゼットちゃんは敬語がデフォらしく、逆に砕けるのが難しいらしいので今でもそのままだ。

2人のうち、クールな印象の黒髪ショートの子の名前はメーア。おっとりとした雰囲気ふわふわロングヘアの子の名前はシエル。……とまあ、名前を教えてもらえるくらいは警戒も和らいできた様だった。

余談……というには少し大きい話かもしれないけど、さつきメーアが言っていた『パートナーが居る』というのはどうやらシエルの事らしく、じっくり観察していれば2人の仲はかなりよろしく、そして相応に距離も近い。かといってコゼットちゃんを邪魔者の様に扱っている訳では無さそうで、2人の人の良さが伺える。

……というか、コゼットちゃんが短い休憩時間でわざわざ自室に戻ったのはこの2人の為だったのだろう。2人が付き合っていると知らなくても、仲が良過ぎるな、くらいには思っていたのかも知れない。お互いがお互いに気を遣い合っていると云う訳だけど、そこに息苦しさや面倒な空気は無いので本当にこの3人は良い関係を築けているんだらうな、と思った。

そんな中に割って入ってコゼットちゃんを取ろうとしてるのだから、流石の私も少し罪悪感……と言っても良いのか、それと似たような感情はあるにはある。でも、だから

と言つて躊躇はしてあげないけど。

「そういえば、ちよつとだけ気になつてたんだけどこつて女の子だけなんだね。私、料理人つて言えば男の人のイメージが強くて」

なんかもう、料理人Ⅱサンジみたいなイメージが強すぎるせいでそう感じてしまつて  
いるだけなのだが。

「ああ、それはねえ、男の人はみんな力仕事に回されるからだよ」

敬語を崩したシエルが、間延びした口調で口を開く。そしてそれを今度はメーアが補足した。

「力仕事と言えば聞こえは良いけれど、要は兵士ね。この国の民はその殆どが男で、そして兵士でもある。女は私達の様な料理人や王族に仕える給仕くらいなのよ」

「ええ……私が言うのもなんだけど、それつて次世代が生まれないんじゃないの?」

「そういう小難しい事はそれこそ王族が考えれば良い事でしょう? 少なくとも私は次世代なんかより、こうしてシエルと共にコゼット料理長の下で働いている今が大切に幸せなのよ」

なるほど……確かに、それを料理人である彼女達が考えるのは無駄かもね。

男が大半で女はごく少数……つて事は、始めにコゼットちゃんに出会えたのも奇跡に近かつたつて事になるし、これはもう運命なのでは?

「コゼットちゃん、やっぱり嫁に来てよ！」

「あはは……」

最早笑つて誤魔化し流される始末……くう！だけでもそんな表情も可愛い！

私、結構面食いなどこあるけど、コゼットちゃんも例に漏れず性格だけじゃなくてお顔が素晴らしい！可愛いよりだし、何よりすぐ頬を赤くする。可愛く無い訳がない。

「ねえー、シエルもメーアもなんとか言つてよ！なんなら3人同時に来てくれても良いんだよ？勿論、シエルとメーアの2人は嫁つて立場じゃなくて、普通に仲間として誘うからさあ」

「でも、私は海賊になりたい訳ではないと言うかあ」

「ここだつて悪の組織みたいなものなんでしょ？ジェルマ66だっけ？それなら私達のとこの方が良いつて！みんな優しいし！」

「遠慮しておくわ。シエルとの時間が減りそうなもの」

うぐ、それを言われると返す言葉が無い……！

……うん、ちよつと頭を冷やそう。今更がつつかないというのは無理だけど、引き際は見極めないと本気で愛想尽かされたら泣くし。

「私としては話を変えたく無かつただけ……サンジつてどこに居るの？」

とりあえずここは一旦サンジの話に移つておこう。元々この地にやってきた目的は



サンジにあるんだし、本題に戻ったという方が正しいかもしれないけどね。

「サンジ様なら、恐らく3階の客間ですね」

「3階だね、うん、階層さえ分かれば見聞色もかなり絞れるからなんとかなりそう！ありがとね、コゼットちゃん！」

シエルもメーアも当たり前のように情報を吐くコゼットちゃんに若干目を見開いていたけど、すぐに納得するかのようには何度か頷いていた。

言つとくけど、脅しなんてしてないからね!?

「……………あ、そうだ、1人で行こうと思ってたけど、コゼットちゃんも来る？ほら、王族であるサンジに新人料理人の紹介って感じで」

「うーん……………普通は新人さんが王族の方に謁見するなんて滅多に起こらないんですが……………」

まあ、そりやそうだよね。でもなあ、まだコゼットちゃんとは色々お話したいしなあ。なんとか良い理由見つからないものかな……………いや、そもそも私は新人料理人でもないんだけど。

「料理長、でしたら、新人に城内を案内してあげてはどうでしょうか。その際にたまたま3階の客間に入ってしまうかもしれませんが、職務なので仕方ないでしょう？」

「え、ええ……………？仕方ない、のですか……………？」

「それにー、今晚と明日の朝食の仕込みは終わっていますしー、ここから先は私とメーアだけでも大丈夫ですからあ」

「確かに、この状況なら2人に任せてもなんの問題も無いとは思いますが……」

「おお、まさかの所から援護射撃が！」

コゼットちゃんも折れかけているし、何故か味方してくれてる2人には感謝しかない。……普通に2人きりになりたいとかかな？ 邪魔者扱いはしないけど、2人になれるチャンスは逃したくない、みたいなの。

まあ理由はなんであれ、援護してくれたのに代わりはない！ このチャンスを無駄には出来ないし、押すしかない！

「ほらコゼットちゃん、2人もこう言ってる事だし、一緒に行こうよ」

「ですが……」

「私、もつとコゼットちゃんと一緒に居たい！ 新人つぼくコゼットちゃんの腕に抱きつきながら歩くから！」

「それって新人つぼいのですか!?!」

と、こんな感じで少しの間渋っていたコゼットちゃんだったが、2人の援護と必死な私に根負けして『新人を案内してます風』を装ってサンジの居る3階の客間まで案内してもらおう事になった。

というか、ここの雇用制度はどうなっているんだろうか。前世ではまだ高校生だったからあまり詳しくはないけど、普通に考えてこんな簡単に新人として潜入出来るなんておかしくない？

なんて疑問を思った所で行動が変わる訳でも無く、メーアとシエルから予備の制服を受け取り手早く着替える。少しサイズが大きいかけれど、これを着る事で更にこの城の者として見られやすくなる筈だ。

そんなあれこれが済み、2人に軽く手を振ってキッチンを出る。前を歩くコゼットちゃんの後ろを大人しく付いていく形だ。

これはどこからどう見ても上司に案内されている新人にしか見えないだろう。私が見てるのはコゼットちゃんのお尻だけだ。

「案外バレないもんだね」

「兵士の方が目を光らせているこの城に侵入出来る事がまず異例なんですよ。実際にイリスさんも私に見つかりましたし……イリスさんで無ければその場で叫んでましたから」

「まさか……一目惚れ!?!」

「そうではなく……その、ここで叫んではだめだ、と思ったと言いますか。何故なのかは

分からないんですけど……直感？」

つまり、一目見て私に敵意が無いって気付いたって事でしょ？流石、人を見る目もあるね。

しかもその後の対応も私にとっては凄くありがたいものだったし……思い返せば思い返す程嫁に来て欲しいって気持ちが強くなるなあ！

## 232 『女好き、再会のコック』

そんなこんなで、歩くたびに揺れるコゼットちゃんの腰回りを撫で回す様に見つめている事少し、私にとつては一瞬と言つても過言ではないくらいの体感速度でサンジの居る3階の客間の前へと辿り着いていた。

一応周りに人が居ない事を確認し、コゼットちゃんと頷き合つて扉に手をかけた時、不意に中から声が聞こえて動きを止める。

「——損ない——、息子——ちやいない」

んん？ イマイチ良く聞こえないけど、この声はサンジじゃないよね？ サンジが書き置きを残した上ではいえ、一時的でも私達の元を離れた理由が分かつたりするかな？

ぴつたりと耳を扉にくつつけ、コゼットちゃんにも静かにしてもらおう様お願いして聴覚倍化を使用する。こんな所誰かに見られちゃつたら言い逃れ出来ないくらい不審者だけど、生憎私には精度の良い見聞色がある。付近に人が居ない事は確認済みなのだ。

「おい、なんだこれは」

「手が大切だと言っていたな、丁度よかつた」

ガチャン、と音が聞こえたと思えば、直後にサンジの声も聞こえてきた。その次の声

の主はさつき途切れ途切れで聞こえた人だと思っけど……誰だろ？見聞色で見る限りだと、部屋の中には3人居るっぽい。

「天竜人の奴隷達が付けている『首輪』を知っているか？飼い主から逃げると首ごと爆発するって代物だ。そいつも同じだ、この島から出ようとする両腕が吹き飛ぶ様になっっている」

——!!嘘でしょ……!?どういう状況なの!?話を聞いただけじゃ、サンジの両腕に爆発するリングが付けられたってくらいしか分からないけど、そもそも何がどうなったらそうなるの!?

「ビッグ・マムが気を効かせて貸してくれたんだ。鍵は彼女が持っている。——まあ、それ以前に我々ジェルマがお前を逃がしはしないがな！結婚はしてもらおうぞ！」

「ッ、フザけんな！外せ！」

「ダメよ！無理に取ろうとしちゃ！」

あれ？今聞こえた声……レイジュだ！中にはレイジュも居るんだ、それはラッキーだよね！

……つと、誰かが部屋を出て行くこうとしてるみたいだ。堂々としていても良いけど、王族であるサンジに対する態度からして結構偉い人っぽいから万が一を考えて天井に張り付いて隠れる事にした。勿論、私の我儘で連れてきたコゼットちゃんを抱いて。

「くれぐれも逃げ出そうなどは考えない事だ。その腕が大事なのならな」  
「うるせエ！とつと俺の視界から消えやがれ！」

サンジにそこまで言わせるなんて相当だなあ、と思いつつ天井から見下ろしていると、中からそれなりに大きな体をした尖った髭の大男が姿を現した。顔の上部分はカブトの面で隠れて目元も良く見えないし、ぶつちやけ知らないおつちやんって感じだ。

それにしても、サンジの腕に爆弾をしかけるなんて許せない。そんなの夢を潰してるのと同じことだし、クズのやる事だよ。その場にレイジュが居るって事も気になるし……でも、レイジュはそんな人には見えなかつただけだな……。

「……行つたね。あの人誰なの？」

「あの方は……ヴィンスモーク・ジャツジ様です。サンジ様のお父様、ですね」

「あいつが……」

それは、親が子供の夢を奪おうとしてるって事だ。

私は前世の記憶が薄いという事もあって『親』への情も薄いけど、普通、親子というのは想い合っているものだと思う。いや、そうじゃなくちやいけな。少なくとも子供の夢を自分の私利私欲の為に台無しにする様な事をしていい筈が無い！

……そもそも、そんな事は親で無くともやつちやダメだけど。

内心で怒りを募らせながら、静かに床へと着地して目の前の扉を開く。中に居る2人

が突然の訪問者に驚いている隙にお邪魔して、抱いているコゼットちゃんにそつと扉を閉めてもらった。

「や、久しぶり、サンジ」

「イリスちゃん……!!? 驚いた、もう来てたのか」

「……? どういう事?」

驚いてはいるけど、それは私が来た事ではなく予想より早く辿り着いていた事に対するもので、そんなサンジの反応を訝しんだレイジュが軽く首を傾げて顎を摘む。

「それに、あなたはコゼットでしょう? 何故女王と一緒に……というか、抱かれているの?」

「イリスちゃんの事だ、今更聞くまでもねエ。最初の疑問にはこう答える、イリスちゃん  
は俺が助けを求めたから来たんだ」

「あれ、喋っちゃうの?」

「レイジュには隠すつもりはねエんだ、この人は信用出来る」

親との関係は最悪だけど、姉であるレイジュとはそれなりに腹を割って話せる間柄の様だ。「信用出来る」って言われた時のレイジュも一瞬嬉しそうな顔浮かべてたし……  
いや、可愛すぎない?

「フフ、そう簡単に信用して良いのかしら? 父さんに指示されたからとはいえ、その手錠



を付けたのは誰だったか、もう忘れた？」

「そうそう、それに用があるんだよね、ちよつとごめん」

綿の様に軽いコゼットちゃんをゆっくり降ろして、サンジの手に付けられた錠に触れる。

「“倍化”」

「あら」

2年前、シャボンデイのオークション会場でケイミーちゃんが捕まってしまった際に彼女の首輪を外した時と同じ方法で手錠を外した。つまり、倍化させて普通に手から引き抜いた。

無理矢理取れば爆発する様な物だったとしても、私の能力から言わせて貰えば関係ないのだ。流石に海楼石入りだと厳しいけど。

「あと、これ付けたのレイジユって言った？この錠、サンジを抑えるにしては余りにもお粗末だね？」

グシャ、と手に持つリングを握り潰し、ぽいっとレイジユに投げ渡す。

「見ての通り、それに爆発する仕掛けなんて施されてない、ただの手錠だよ。あのジャツジって人が本気でサンジを縛ろうとしていたのなら、こんな手錠は用意しない。じゃあ、何処かで手錠のすり替えが行われたとしか考えられないよね、その上すり替えるの

が可能な人物は1人だけ……なんて、誰もが分かる事を勿体ぶつても仕方ないから言うけど……レイジュ、手錠をすり替えたのはあなたでしょ？」

「さて、どうかしら」

「認めなくても良いよ、私はそう納得するから、私の中ではそれでこの話はお終いだし」  
それに、レイジュがサンジの事を大切に思っているのは間違いないし。そんな彼女が爆発する手錠なんか付ける訳がない。

「……随分信用されてるみたいね、私が女だから？」

「否定はしないけど、1番はサンジが信用してるからかな。サンジがあなたを信じるなら、サンジを信じる私も信じる。これじゃ足りない？」

確かに私は女好きだし、ハーレム女王を目指している。だけど、それとは別に私は海賊で、サンジの仲間だ。その人が信じる事は自分も信じたい……船長のルフィもそうするだろうし。

「……やるわね、そうやって数多の女性を口説いてきたのかしら？」

「え？」

「あら、無自覚？……いい仲間を持ったわね、サンジ」

「ああ、だから俺は帰る、まだ船から降りる気はねえんだよ」

別に鈍感キャラって訳じゃないんだけど、レイジュが何に対して私に魅力を見出した

のか本気で分からない。サンジも分かっているみたいだし、後ろで控えてるコゼットちゃんも同じだ。

「今の会話で口説いてるとこなんてあつたかなあ……」

「『信じる』って言葉は決して軽くないの。言葉に出しても、その重みは決意の有り様で大きく変わるわ。だからこそ、あなたの真つ直ぐな言葉は胸に響く」

「イリスちゃんは基本真つ直ぐだから、色んな紆余曲折を経ても絶対に元の道に帰ってくる。そんなイリスちゃんだからナミさん達も付いていくんだ」

……なんかいきなり褒められた。ちよつと顔が赤くなってくるのが自覚出来るから、サンジ達から隠す様に後ろを向けば当然そこに控えているコゼットちゃんとバッチリ目が合つてしまい……。

「ふふ、イリスさんでも顔を赤くされるんですね」

「に、人間だし！」

結局逃げ場を無くした私は、ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべたレイジュに少しの間弄られ続けるのであつた。

ただ、私にいじわるしてくるレイジュもとても可愛かったと言う事だけは心のアルバムに残しておく事とする。

\*\*\*

「……やつぱり、そういう事情があるんだね」

サンジと合流出来たからハイ終了、と言う訳には当然いかず、そもそもどうしてベツジの誘いに乗ったのかを確認した所、初めに予想していた通り『バラティエ』と『カマバツカ王国』の名前を出されて身動きが取れなくなっていたらしい。

ベツジの前で私宛の暗号の様なSOSを出したのも、私が侵入するまで相手に気付かれない様にして、いざ気付いた時には既に懐に「四異界」が忍び込んでいるという状況となっていて迂闊に行動出来ない様にさせる為だったとか。敢えて気付かせて私を警戒させる為、わざとあの手紙をベツジにも見える様に書いた……と。

「時間も無いのに良くそこまで頭回るね」

「イリスちゃんが攻めてきている状況だと、幾らビッグ・ママといえども他所ごとに気は回せられねエだろ。そうなればジジイやイワ達に差し向けられる戦力なんざたかが知れてる、そんな連中にやられる程柔じゃねエ筈だ。……イリスちゃんを利用した形になったのは、本当に申し訳ねエと思ってる、ごめん」

「利用くらい気にせずしてよ、毎日の美味しいご飯やおやつのお礼はいくら返しても尽きないんだからさ」

「!ああ、ありがとう……!」

一味の中でサンジの役割はコック兼戦闘員だけど、私はただの戦闘員だし。むしろこういう所ではしばし使ってもらわないとただのお荷物だ。

「サンジの事情は分かった、今すぐ動くのは難しいって事も。……でもこつちもちよつと困った事になってね、私達より先にこの島に乗り込んだシャルリアとブルック、それからペドロと通信が繋がらなくて……」

「ペドロまで来てんのか!……ん?そのシャルリアって誰だ?」

「ほら、2年前のオークション会場で私が蹴った人いるでしょ?クリーム色の髪した美人の……」

「……ああ!あの天竜人の綺麗なお姉さん!そうか、ドレスローザに居たのか、良かったじゃねエか、イリスちゃん」

「うん!他にもモネとベビー5、それからレベッカちゃんって子も嫁に……って、その話はまだ今度聞いてもらうとして……さっき言った3人と連絡が取れないの、サンジは何か知らない?」

私の言葉にサンジは長く眉を顰めて唸った後、申し訳なさそうに頭を振って不承知の意を見せた。ここに来たのはサンジもつい最近の筈だし、知らないのも無理はないか。

……きつと大丈夫、ブルックはあれで結構頼りになる人だし、ペドロも強い気配だつ

た。シャルリアだつてぐんぐん強くなつてるし、大丈夫……! !

だったら私は私の出来る事をやらなくちゃいけないよね。人質を取られて身動きが取れなくなっているのは分かったから、とにかくそっちに戦力を回せないくらい暴れてやれば良いんだ。

ビッグ・ママを倒してしまえば解決するかな?

「結婚式、というからお茶会、だっけ? それっていつあるの?」

「明後日の10時からよ、私達がビッグ・ママの城へ移動するのは明日の昼前ね」

どうせなら結婚式を壊すつて感じにしたいつて思いもあるし、ビッグ・ママと戦うのは明後日まで待とうかな。

……いやだつて、結婚式を壊さないとプリンちゃんはサンジの婚約者つてイメージが払拭出来ないじゃん。プリンちゃんを正式に私の嫁として迎える為にも、この日付は譲れないもんね!

## 233 『女好き、爆発寸前』

「えっと、狭くない……ですか？」

「うん、あつ、やっぱり狭いかも、落ちそうだからそっち寄るね」

暗い部屋の中、1つのベッドで同衾（意味深）しているのは何を隠そう私とコゼットちゃんである。

背中側に空いている人1人分程度のスペースは見ない事にして、慣れた手付きでコゼットちゃんに擦り寄り足を絡ませた。

「あ、あの、寄りすぎでは……」

「ううん、私太いからこれくらいは寄らないと落ちちゃうんだよね」

「イリスさんが太いのなら私なんてどうなっちゃうんですかあ！」

いや、コゼットちゃんも細いでしょ……。あ、でもコゼットちゃんには私と違ってたわわなぽよんがあるか……。私と違って!!!

——どうしてこの様な素敵過ぎる状況になっているのかというと、明日ビッグ・ママの所へ向かう予定のジェルマの馬車に私も乗って行こうという事になったからだ。

普通なら乗せてくれる筈もないが、そこら辺はレイジユが上手いことやってくれら  
しい。

で、一夜を過ごす訳だから寢床が必要になってくるんだけど、そこで白羽の矢が立つ  
たのがコゼットちゃんの自室だった。というか、私がお願ひした。

他にも大量に部屋は余っているそうだけど、折角のチャンス、1人寂しく夜を過ごす  
のなんて勿体ない!と思ったという訳である。

「でも、だからと言ってコゼットちゃんも無防備過ぎるよね……私と同じベッドで寝る  
のを許可するなんてさ」

「そ、それは……!」

「私って自分で言うのもなんだけど、手を出すのは早いよ? 同じベッドで一晩中だなん  
て、我慢出来ないと思うなあ」

後ろを向いているせいで私にはコゼットちゃんの背中しか見えないけど、ぴつとりと  
頬をくつつければ明らかに速い心拍の音が。

一応、ちゃんと意識はしてくれてるみたいで嬉しいって気持ち湧いて来る。本当に  
今からでも押し倒してやろうかこの美少女め……!

「……その、嬉しかったんです」

「ん?」



「私の作ったものを、美味しいって言ってください」

そりゃあ、あれだけのものを出されたら誰だって美味しいって思うでしょ。アリゴとかコンフィがそんなに好きじゃないって人ならともかく、私は凄く美味しいって思ったし。

「味見の際にはシエルもメーアも美味しいって言うてくれるんですが……同じ料理人同士、情けとかかかって思ったりしちゃうって。も、勿論、そんな事は無いって分かってますよ！2人はちゃんとダメな時はダメだって言うてくれますし！……でも、やっぱり不安で」

「コゼットちゃん……」

「だから、凄く嬉しかったんです。……料理人として、食べてくれる人を幸せにするのはとても誇らしい事ですから。……だから、ありがとうございます、イリスさん」

そうして私の方に体を振り向かせたコゼットちゃんの表情を見て、私は少しの間息を止めた。

緊張からか上気した頬や、潤む瞳、そして、あまりにも美しいその綺麗な微笑みに見惚れたのだ。

「綺麗だね」

ずっとコゼットちゃんは可愛い系だと思っていたけど、これ程までに綺麗な表情も出

来るんだと感じて、話の脈絡なんてお構いなしにただ心の声だけがポロリと漏れた。

途端、より頬を染めるコゼットちゃんの顔をもっと近くで見たくて、よじよじと体を動かし真正面から見つめ合える位置まで上った。

「私、コゼットちゃんの事まだまだ過小評価してたのかも。料理の腕も凄くて、優しくて、可愛くて、綺麗で。……ねえ、もう一回言うけどさ……私の嫁になってよ」

「つ……か、感謝はしますよ！でも……」

「それでも、私はコゼットちゃんが欲しい。……雰囲気には流されるのはイヤ？将来に繋がる事だし、もっとじっくり決めたい？なら、安心して。私はあなたを絶対に幸せにしてみせるから」

こうなればもう押せ押せだ。なんとしてでもコゼットちゃんには嫁になって貰いたい。私を好きになって貰いたい。押しすぎは逆効果かな、とかもつと冷静になるべきかな、とか色々ぐるぐる頭の中を回るけど……もう止められそうにもなかった。

「嫌なら嫌って言うてくれてもいい。でも、絶対に振り向いてもらう。絶対に好きになつてもらう！コゼットちゃんから料理を取り上げたりしないし、ここを離れられないのならその意思もちゃんと尊重する！」

このままだと勢いでキスマでしかねないな、と感じ取ってぎゅつとコゼットちゃんの首に腕を回して抱き締めた。

会って1日も経っていないけど、コゼットちゃんの魅力は沢山知っている。これから先、もつと沢山の事を知りたいし、伝えたい。

「私は、ハーレム女王になるのが夢で……！沢山の女の子を嫁にして、毎日幸せに過ごしたい！」

「え、えつと……」

コゼットちゃんの困惑気な声が聞こえる。そりやそうだ、口説くのだとしたらこれ程逆効果な台詞はそうはない。

でも、これが私の本音なんだ。これが私の目指しているものなんだ！みんな、私の夢を知った上で嫁になってくれた……こんな身勝手な私を受け入れてくれた。だからコゼットちゃんにも、取り繕った言葉だけ投げ付けるなんて事はしたくない。

「その毎日の中で、私の食べるご飯はコゼットちゃんに作って欲しい」

「っ……」

「だからコゼットちゃん……私にして！私は、コゼットちゃんの作るご飯を毎日食べたから!!」

そう言つて、ちよつと苦しいくらいに抱き締める腕の力を上げた。これ以上私から言える事は何も無い。言いたい事は全部言つた、だつて率直に言つちやえば、あなたに惚れたので嫁に来て、だから。

これでダメならまた別の方法を考えるけど、今回の訪問中に嫁になってもらうのは無理だろう。……次にいつ会えるかも分からないし、その間にパートナーを作っていないとも限らない。もしかしたらこれが最後のチャンスかもしれないんだ……。

え、そう考えたら凄く怖くなってきたんだけど。これもう押し倒して色々やっちゃおう？それとも攫っちゃおう？私海賊だし、それくらいするよね普通。……なんて、コゼットちゃんの意思に反する事は死んでもしたくないけど。

「イリスさん……」

「……」

少し震えた声と共に、おずおずと私の背中に彼女の細い腕が回された。それが抱き締め返してくれたのだと脳が理解するのに少しかかったけど、これはつまり、そういう事で良いんだよね……！

「私、まだ分かりません。会ったばかりですし、それに私は王族直属の料理人という名前だけなら立派で大層な肩書きを持っていますが、一般人ですよ、海賊の嫁になるのは勇気がいらいます」

「あ、うん……そう、だよね」

「だ、だから……！これからもずっと、私の作る料理を美味しいと言ってくれませんか……！そうすれば、勇気なんか無くて私には、あなたのそばに居たいと思えます……」

！」

「……………」

まだ、好きまではいかないその感情。でもコゼットちゃんが発する言葉にはその感情の芽を感じ取れて……。

口角が上がる、心の底から激しい感情が湧き上がって来て、抑えきれそうにもなかった。

「言うよ……………毎日、毎回言うよ！美味しいって、好きだって言う……………つ、ありがとう、コゼットちゃん！大好き！」

「はい……………私も、きつとあなたを好きになります」

「うん……………っ！」

……………なんか、凄く嬉しくて……………安心したからかな？眠くなつて来た……………。

ふわあ、今日はもう寝てしまおう。そして明日になったらコゼットちゃんともう一度ちゃんと話し合つて、私達について来てくれるのか聞いてみよう。

シエルとメーアを置いていけないなら2人も連れて行くし、それでも難しいなら……………また、いつでも迎えに来るから。

幸せ夢見心地、今日は王華との特訓も休みにして、この余韻に浸りながら寝よう。

素敵な人が嫁になってくれた時のこの嬉しさは、やっぱり何回味无穷でも薄れる事は無いなあ、なんて感じながら。

……ただ、呑気に。

\*\*\*

『……ス!!』

「……、ん」

不意に誰かに呼ばれた気がして、軽く身じろぎをする。そこで違和感を覚えて薄らと目を開ければ、寝る直前まで抱き締め合っていた筈のコゼットちゃんが居なくなっていた。

「あれ……コゼットちゃん……」

『イリス!!!』

「うわ!!!な、なに?!?王華!?!」

突然脳内に響く大爆音に寝ぼけ眼から一気に覚醒へと引つ張り上げられた。

ていうか、何をそんなに慌てているんだろう。もしかして寝過ぎた？ 出発の昼前過ぎてる感じ……？

『ごめん！さつき思い出したんだけど、コゼットつてやつぱりONE PIECEに登場してたよ！』

「そうなんだ。……まさか、それを言う為にわざわざそんな慌てて」

『違うよ！そのコゼットだけど、ONE PIECE好きには結構衝撃的なキャラで……!!』

「ー」

バツと体を起こして王華の話に集中する事にした。王華の声色にかなり真剣さと焦燥が含まれていたから、只事では無いんだろうと察したのだ。

『ごめん、説明する前にコゼットの気配探れる!!』

「コゼットちゃんの気配を探せば良いの？分かった、すぐに済ませる」

この城全域に見聞色を広げるだけなら今の状態でも問題ないけど、詳しく人物まで見ようと思えば30倍では足りないだろう。

ならば、と躊躇なく“女王化”を使用する。これでより鮮明に、更に個人の気配が感じ取れる様に……え。

「コゼットちゃんの気配……あった、けど……どうして、こ、こんなに……弱ってるの

「……？」

誰も居ない部屋で、明らかに横たわっている気配。更にその気配はかなり微弱で……  
今にも死んで……！

「イリスさんツ!!」

そこへ突然、勢い良く扉を開けてシエルとメーアが部屋に飛び込んできた。2人は  
ベッドで身を起こしている私を確認すると慌てて駆け寄って来る。

「料理長が時間になつても戻つてこないのよ!こんな事、今まで1度も無かつたのに  
……!!」

「城内でニジ様に連れて行かれる所を見たつて話が流れてえ!ニジ様、感情的な所が  
あるから!!」

「……っ!ごめん、話は後!私ちよつと見てくる!」

誰かに見られるかも、なんて事は最早気にしていられない。私は新人に変装すらせ  
ず、そのままの格好で2人を置いて部屋を飛び出した。

向かうは1階の隅にある部屋……!如何にも目立たない、悲鳴すら届かない様な……  
!!

「王華!話は分かつたでしょ!?!こんな状況だけど、原作では何があつたの!」

『似た様なものだよ!サンジの兄であるニジの八つ当たりで、コゼットは顔の原型が無



くなるくらい殴られる！……本当にごめん！私的にも辛い話だったから、あのシーンは忘れる様にして……！』

「……！恨み言の1つくらい言つてやりたいけど、確かにそんなシーン忘れたいだろうし、こうして教えてくれたでしょ、それだけでも助かるよ！」

それに、さつきチラツと見えた時計には10時と示されてあつた。コゼットちゃんと同じ時間に起きていたらこんな事にはならなかつた！私も悪い……！幸せに浸り過ぎて集中を欠いちゃつたから……！

「コゼットちゃん!!」

全力で駆け付けたから、道中の床は傷だらけだろうが、そんなのは知つた事ではない。辿り着いた扉を開け、視界に飛び込んできたのは……間違いであつて欲しいと願つた、倒れ伏すコゼットちゃんの姿だつた。

「つ……、コゼットちゃ……、ん……？」

慌てて駆け寄り、しゃがんでそつと頭を持ち上げて、気付く。

そのあまりにも惨い暴力の痕と、あらゆる方向に曲がり、ぐしゃぐしゃになつてしまつているソレ。

それは、コゼットちゃんの両腕だつた何か。私を抱き締めてくれた、細く綺麗で、かつ料理の際には力強い、それが。

『ど、どうして……!!? 原作には、そんな描写は……!!』

混乱する王華の声がどこか遠くから聞こえてくる様だった。ただ……何か切れてしまったのだけは、間違いない。

コゼットちゃんの可愛くて綺麗な顔は最早見る影も無く、顔中腫れ上がり、歯も欠けている所がある。血が付いていない所を見つける方が難しいくらいで……。

それだけでも、激情を抑えられなくなるというのに……!!! よりにもよって、腕を狙ったのか……!! この子の大好きなモノを、奪ったのか……!!!

「っ、誰か、誰か!! 医者には居ないの!!?」

怒りでもうにかなってしまいそうだけど、早く治療してもらないと命が危ない。兵士が沢山いるのなら、その分医者だってそれなりに居るはずだ。とにかく今は早く医者に診てもらわないと……!!!

## 234 『女好き、痛め付ける』

「イリスちゃん！その姿……何かあったのか?!……!!コゼットちゃん……!!」

「サンジ………！医者を呼んできて！それか連れて行った方が速いかな……?!でも、あんまり動かすのも良く無いかもしれないし、あ、チョッパ―呼んでこようか！どこに居るのかは分からないけど、探せば……!!見聞色もあるし、きつと見つかる筈……!!」

頭が回らない。駆け付けてくれたサンジもコゼットちゃんの状態を見て言葉を失っている様で、ギリ、と歯を食い締めていた。

「――まずは、落ち着こう、イリスちゃん。焦る気持ちは分かる、だけど騒いじゃえばコゼットちゃんの身体に響くかもしれないねエ」

「つ………そう、だね」

「医者はすぐに呼んでくる。……ごめん、俺があいつらを煽ったせいだ。責任は俺にもある」

サンジはそう言って何処かへ走って行った。

……サンジに責任なんて、ある訳がない。こうなる事に気付かなかった私を氣遣つてののかな。私だけが悪い訳じゃないって励ましてくれたのかな。……相変わらず、優し

い人だね。

言葉通りサンジはすぐに医者を呼んできた。着いて行きたかったけど治療の邪魔はしたくないから、大人しくサンジと待つ事にする。

そうだ、シエルとメーアにも報告しないと……。

「なんだ、お前も来てたのか、女王」

「……ヨンジ？」

コゼットちゃんが運ばれて行く所をただ見る事しか出来ず、暫くその場で立ち尽くしている。扉の近くにヨンジが姿を見せた。

「あの女がそうなったのはお前せいだよ、サンジ。身分違いの女をつけ上がらせた。二ジに会ってエだろ？勿論その犯人だからな」

「……クソ野郎が、てめエらは、絶対にやってはいけない事をしたと気付いてねエのか！」

「あの女は王族のモノだ。自分のモノをどうしようが勝手だろ。メシ炊きくらいは他を雇えば良い」

「オイ！言葉に気を付けろ！……それ以上は、やめておけ」

……サンジは落ち着けと言った。なら、落ち着くべきだ。それにこの城にはまだコ

ゼツトちゃんも、レイジユも、シエルとメーアだつて居る。

——暴れる訳には、いかない。

だけど。

でも。

「……ニジに会いたいか、つて聞いたよね」

「ん？ああ、お前も会いたいのか？ならついでにい」

「言つておくけど、私には腫れ物を扱う様に接してくれるかな。もう限界寸前でさ、大事な人が居なきや、もう暴れてる所だよ」

僅かに残つた理性で受け答えをし、女王化も解除しておく。もし本当に「暴れて」しまつた時に周りの被害を抑える為だ。……壊すのは、的だけで良い。

\*\*\*

ヨンジに連れられて私達は階段を下り城の地下へとやって来た。目の前には扉があつて、中から沢山の人の気配がする、けど……どうしてこんな所まで歩いてこなきやいけないの。私から会いに行かずとも、そっちが来ればいいのに。

……つて、だめだだめだ！思考に余裕が無くなつて……！

「はいは？」

「興味あつたろ？ガキの頃は立ち入り禁止だったもんな」

余裕の無い私に代わり、サンジが主にヨンジと受け答えを交わしている。時折私の方を確認している事から随分と気を遣わせていて申し訳ない……けど、こればかりは抑えられないんだ。

ヨンジが扉を開き、サンジと私が後に続く。

中へ入ると、機械が動いている特有の音や床にひしめく沢山の電線コードなど、見るからに何かしらの研究施設って場所で、その中でも何より目を引くのがそこら中所狭しに設置された沢山の大きなカプセルだ。

爆発寸前だった筈の私でも思わず息を止めてそのカプセルを見てしまうのは……その中に培養液が何かに浸かった“人間”が居たから。

「なんだ……コレは……」

「これが何かって？各国が恐れる「ジェルマ66」の兵士達さー！」

「兵士……つても、こいつらみんな同じ顔じゃねエか……！生きてんのか……!?!」

……生きてる。それは間違いない。ここへ入る前に感じた沢山の人の気配、それは全部このヒト達から感じたモノだ。

「サンジ、人間は作れるんだ」

「!?」

「ジェルマは代々『科学の国』。父もああ見えて優秀な科学者だった。俺達が生まれる前は海外の無法な研究チームに所属し、かのDr. ベガパンクと共に兵器の研究をしていた。……その時ベガパンクが成した偉業こそ、生物の「血統因子」の発見!こいつは1歩間違うと神の領域に達する、いわば『生命の設計図』の発見だった」

……ダメだ、頭に入つてこない。腹が立つてるからつていうのもあるけど、単純に何言つてるのか分からないのだ。いや、理解したくないというのが正しいのかもしれない。

「世界政府はこれを危険視してベガパンクを逮捕。研究チームは解散、いや……政府に買収された……!——だが父は政府の手から逃れ、1人この『ジェルマ』で研究を続けた。命のコピーと改造の研究を。そしてこの地下施設が生まれたんだ!こいつらは全員たった数名の優れた兵士達のコピー!複製兵だ……!!勿論そんな事、本人達は知らねエがな」

「……で?ニジは何処にいるの?」

「まあ待て、今来ている。話を戻すが、あらゆる国々がウチの軍隊を恐れると同時に憧れ、欲しているのはこの為さ。そりやそうさ、強くて従順!こいつらは死を恐れず裏切らない様プログラムされてる。死んだら補充すればいい、20歳はたちの兵士を1人作るのに

5年かかる……ここは兵士のストック倉庫デポさ……！5年で出来るのにこいつら全員、まるで20年生きて……」

「もういいよ、その話。クローンだかなんだか知らないけど、命は命でしょ。その人達1人1人にちゃんと気配はある、ただの人形からは発する事が出来ないものだよ。……と、まあそれは置いて……遅かったね、どっちがニジ？」

漸くこの場をさせたのは、赤髪と青髪の男2人だった。どちらもぐる眉だからサングルの血族には違いないだろうけど。

「ニジは俺だ、なんだ女、何か用か？」

「コゼットちゃん、私の嫁なんだよね」

「え」

私の言葉に1番驚いていたのはサンジだった。昨日まではまだ嫁じゃなかったから、サンジ的には嫁にしたいと思ってる人、くらいの認識だったのかな？コゼットちゃんが天使すぎて昨日の内に嫁に来てもらったんだよね。

……だけど、私にとって「嫁にしたい人」と「嫁」は同じなんだよ。私とコゼットちゃんの関係が昨日から変わっていなかったとしても、ニジのした事は到底許せるものじゃない。

「嫁？ハハ、何を言ってるんだ、お前は女だぶツ！」



「……ははっ！ やつと暴れられるよ！ 結局私は説教なんかより、殴って発散するのが向いてるからさあ！」

言葉の途中で顔を殴られたニジが宙を舞う。それを追う様に走り、落ちて来たニジの髪を引っ掴んで床に叩きつけた。

「誰の女に手を出したのか、その身を持って味わわせてやる！」

「がふ……っ！ 貴様……！ その強さ、その容姿……女王だな……！？ サンジを助けに来たのか？ なら、俺には手を出さない方が良いぞ、東の海で血が流れる事に……がっ！？」

何か素っ頓狂な事を言っているニジの顔をもう一度床に叩きつけ、ぐりぐりと押し付ける様に力を込める。そして更に数回同じ様に叩きつけを繰り返し、無理矢理背筋させる様な形で髪の毛を掴んで上半身だけ持ち上げた。

「それ、脅しのつもりなの？ だったら血が流れる前に指示を出すあなた達を全滅させれば終わる話じゃん、私とあなたの力は同等じゃないんだよ、なのになんでそんなに自信ありげなの？ 人質程度で埋まる差じゃないでしょ？ しかもさ、その顔なに？ なんでヘコんでるの？ 腫れてよ。コゼットちゃんは腫れてたよ、凄く腫れてた。だったらあなたも腫れるでしょ？ おんなじ目にあつてよ、じゃないと仕返しにならないじゃん」

潰しても潰しても、ニジの顔は血こそ出せど腫れ上がる事は無かった。

こいつらの体も何か科学的に弄られているのか、機械を殴ってる感じとでも言えばい

いだろうか、攻撃した箇所は凹むだけだ。だからこそ、今の私にとっては腹立たしい。  
「……もう顔はいいや」

どうせいくらやってもヘコむだけなら、これ以上はやるだけ無駄だ。流石に潰しすぎちやうとあるのかどうかも分からない脳に到達してしまうかもしれない。殺すのは嫌だし、頭を狙うのはやめてあげよう。

掴んでいた髪を離すと、ニジは力無く床へ倒れ伏した。成る程、痛覚はちゃんとあるんだね、それは良かった。

「次はこっちだよ、当分は粹がれないね？でも仕方ないか、あなたのした事を考えればこれくらいはね」

うつ伏せで倒れているニジの肘を足で押さえつけ、その先にある手首を持った。

私が何をしようとしているのかを理解したのか、サンジが慌てた様に声をかける。

「ま、待つてくれイリスちゃん！それは、やり過ぎじゃ……」

「やり過ぎ？そうかもね、この人はやり過ぎた。やってはいけない事を……やり過ぎたんだよ。……ごめん、本当は分かっているんだよね、サンジの言いたい事。怒りが治った時に私が後悔しない様に止めてくれるんでしょ？ありがとう、やっぱりサンジは優しいね。うん、優しい。……でも」

ボキン、と嫌な音が私の手に伝わった。ニジの腕が本来曲がらない方向に向いてい

る。

……確かに私は、ここまで人を執拗に痛め付ける事は好きじゃない。大抵はカツと  
なつても殴つて倒せばスッキリする。でも、今回は許せないんだ。いや、許しちゃいけ  
ないんだと思う。

「そつちの2人は黙つて見てるけど、邪魔はしないつて事で良いの?」

「フ、その程度で我らジェルマが屈するとても? ニジを無力化したと思つてゐる時点で  
貴様は我々を甘く見過ぎてゐる」

赤いやつ、多分イチジがそう言つた直後、私の足元からニジが消えた。

かなりの速度で拘束から脱し、更に姿を消す何かを使用している様で何処にもニジの  
姿が見えない。

「下らないね、目で見えなくなつて何処に居るのかくらい分かるから」

気配まで消せてゐる訳じゃないニジが背後から忍び寄つて来ているのを察知して、不  
意打ちするつもりで飛びかかつて来た奴の顔面に振り向きざまの裏拳を叩き込んだ。

その勢いで吹っ飛ぶ前に足を掴んで引き戻し床に叩きつけければ、効果が切れたのか消  
えていた姿が現れる。

「甘く見てるのはそつちじゃない? 反撃つてゐるのは勝負が成り立つから出来るもので  
あつて、あなたと私の間にはそもそも勝負が成立しないんだからさ」

バキ！ともう片方の腕も踏みつけてへし折り、脇腹を蹴り飛ばしてイチジ達の前へ転がした。足は攻撃していないんだから立つことくらいは出来るだろう。意識があれば、だけで。

「痛め付けるのはそのくらいで勘弁してあげる。だから質問に答えて」

「……なんだ」

床に倒れ伏したままニジが口を開く。体の作りは普通ではなくとも痛覚自体は存在する様で、まだ起き上がってくる気配は無い。

「どうしてコゼットちゃんをあんな目に遭わせたの。しかも攻撃してるのは顔と腕だけ……！明らかに狙ったよね!!」

勘弁してあげるとは言ったけど、質問している間にもさつき見たコゼットちゃんの姿を思い出してつい語気が荒くなる。返答次第では本当に……抑えられなくなるかもしれない。

「サンジ程度に粹がられて、腹が立ったからだ。顔と腕は、殴る前にあのメシ炊き女が……そこだけは止めてくれと俺に指図しやがったから、狙ってやった、それがどうした……?」

「……それがどうした?本気で言ってるの……?」

何もおかしな事は無い、とでもいう様に自然に、ニジは私の質問に対して真っ直ぐに

返答をくれた。

ただ真つ直ぐに、当たり前前に。

……だからこそ、どこか不気味で、腹が立つ。

「もういい、あなたには……ううん、あなた達には何言つても一緒みたい。レイジュとサンジは優し過ぎるくらいなのに……兄弟つて言つても天と地程の差があるんだね」

「当然だ、だが、レイジュと俺達ではそれ程差は無い。貴様の言う様に文字通りの天と地の差があるのはそこにいる。出来損ない」だけだ」

「あー……あなた、イチジだっけ？あなたもアホなの？私が言ってるのは……つと、何言つても一緒なんだった。じゃ、子供がダメなら親と話すよ」

まあ……サンジの腕に爆弾仕掛ける様な親と話しても一緒かもしれないけど。

何も進展がないようなら『ジェルマ』は潰せば良い。見捨てられない人間もサンジを除けばレイジュとコゼットちゃん、後はシエルとメーアくらいだし、潰した後でうちの船に乗せてもらえる様ルフィに頼み込めば良いんだ。

そうと決まればあのおっさんを探しに……の前に、まずはコゼットちゃんの様子を見に行こう。治療は流石にまだかかっているだろうけど、命に別状が無いとか、腕は後遺症も無くちゃんと完治するのとか色々気になるから……。

## 235 『女好き、話し合いの結果』

地下を上り城の1階まで戻ってきた私は、コゼットちゃんの弱々しい気配を頼りに歩を進めていた。一応サンジには声を掛けてきたが、あのメンツの中に残してきたのはちよつと申し訳ないかもしれない。

とはいえ、今のサンジには『人質』の効果は薄いし、仮に喧嘩を売られたとしても簡単にやられる事は無い筈だ。

……それにしても、ニジやイチジのあの考え方は何なの。まるで人を思いやる感情とかが抜け落ちてみるみたいで、とんがりヒゲ親父がどんな教育をしたのか凄く気になる。にしてはレイジユは優し過ぎるけど。

あと、母親はどうしたのかな？まだ父親しか見てないけど。

そういう考えていれば、いつの間にか治療室らしき部屋の前まで辿り着いていた。

「あ……イリスさん」

「2人共……来てたんだ、って、来るよね……」

そこには既にシエルとメーアが居て、2人共瞳に涙を募らせ、浮かぬ表情で身を寄せ合っていた。厨房での雰囲気から2人とコゼットちゃんの仲の良さを知っていた

けに何ともやらせない気持ちになる。

「ごめん……間に合わなかった」

「イリスさんが謝る事じゃないわよ……。こんな、王族だからって許されていい筈ない！」

「うん、私もシエルと同じ気持ち。……餓死させてあげようか？」

中々に物騒な事を言うメーアに苦笑するシエルだが、否定の言葉は出てきていなかった。

王族直属の料理人は3人しか居ないし、その3人は仲が良いんだからその内の1人に酷い事をすればストライキされるのなんて目に見えてるだろうに。もしかして自分達の料理人が3人しか居ないというのも知らなかったんじゃないだろうか。ていうかそもそもその3人しか居ないというのも元を辿ればあいつらが悪いんじゃないや？ どうせ今回のコゼットちゃんにやった仕打ちと似た様な事を他の人にもやっていたに違いない。

「私、サンジ達の親と話をしようと思ってるんだ」

「え、ジャツジ様と？」

「話つて言つても脅迫に近い感じだね。ただの八つ当たりでここまで酷い仕打ちを受ける様な職場にいつまでも嫁を勤めさせていられないでしょ？ “話し合い”でコゼットちゃんを連れて行くのを許してもらえる様持つていくよ。……で、ここで相談なだけ

ど、2人も一緒に来る?」

「海賊?」

「そ。つて言ってもシエル達にはご飯を作ってもらいたいだけなだけで。海賊の船に乗るだけで海賊になってほしい訳じゃないんだよね。そりゃあ危険は付き纏うけどさ。だけど2人だつてもうあの人達にご飯を作つてあげる気はないんでしょ?」

私の言葉に2人は迷う事なく頷き、だけど海賊船に乗る、という内容に関しては即答出来ない様でうんうんと唸っている。

「海賊の船に乗るのが難しいなら、叶……あー、頼りになる人に頼んでどこかの島に送つてもらおうとか?そこで新生活を始めても、2人の料理の腕なら問題ないと思うよ。ドレスローザとかアラバスタ、後はウォーターセブンとかがオススメ」

「んー?私達、海賊船に乗る事に関してはそんなに抵抗ないよー?」

「海賊船とは言つても、イリスさんのところならつて前提はつくけれど」

あれ、そうなの?てつきりその事で悩んでるのだとばかり思つてただけど……。

「その船に乗っちゃうと、いよいよシエルと2人きりになれないでしょう?」

「メーアとの時間が絶対減っちゃうし……」

「な、なるほど……?」

2人だけの世界つてやつが減るのが嫌つて事だよね?ううん……その辺は私には無



い感覺だけど、好きな人と一緒に居たいって気持ちは凄く良く分かる。

だったら2人は……ドレスローザかな？ 気候とか考えても過ごしやすい島だし、愛と情熱と平和の国ならこの2人にはぴったりだと思うからね。

「ただ、少しの間は私達の船に乗って貰わないといけないかもしれないから、2人には長いかも知れないけど2日は我慢してもらえるかな？」

「いいわよ、ここに居るより全然良い。それで、出発はいつになるのかしら？ 料理長が回復してから？」

「コゼットちゃんには悪いけど、回復を待つてる時間は無いんだ。ただうちには凄く優秀な船医が居るからそういう意味でも早めに出発した方が良いと思う。だから支度の方は今からお願ひ、私達が出発するタイミングで迎えに来るから」

「はーい」

レイジュには悪いけど、ジェルマの人達には1度痛い目を見て貰わないとね。ていうか、レイジュも連れて行けば良いんだけど。

王族直属になれる腕前のシェフが全員居なくなるのは相当苦痛になる筈だ。普段から当たり前だとふんぞり返って、自分の機嫌1つで暴力を振るう事すら厭わない奴らはこれを期に思い知れば良い。美味しいご飯は1日の糧だと……自分達が「メシ炊き」と呼んだ人がどれだけこの城に貢献していたのかを。

生活レベルというのは上げてしまうと下げるのが難しいと聞く。私だって最近サンジが居なくなつてその事を痛感していたんだから、今後のジェルマを思うといい気味だ。

なんてほくそ笑んでいると、治療室の扉が開いて医者が数人出て来た。どうやらコゼットちゃんの治療が終わつたらしく、状態の説明を聞くかどうか問われたのに対しては迷いなく頷いた。

メインで治療を担当していた医者以外は何処かへ去つて行き、残つたその人と一緒に私達は治療室へ入つて行く。その際に聞いた所、命に別状は無いとこの事で3人でホッと胸を撫で下ろした。

「……コゼットちゃん」

だが、そんな安堵もコゼットちゃんの姿を見ればたちまち崩れ去つてしまう。弱々しくベッドに横になっている彼女は、顔は包帯やガーゼなどで手当てされ、左眼と唇しか外気に触れていない。両腕はギプスで固定され、当面は1人でご飯すら食べる事も出来ないだろう。……まして、料理をするなんてのは。

まだ意識を取り戻さないコゼットちゃんのベッドの横に用意されていた椅子に座り、腕に巻かれたギプスにそつと触れる。

……ニジめ、本当にどんな思考回路をしていればこんな事が出来るの……？

「顔の方は時間と共に解決するでしょう」

「……顔の方“は”？」

口を開いた医者に対し、ギロリと睨む様な視線を向けてしまう。この人は悪くなく、むしろ精一杯処置してくれた功労者なんだからこんな態度を取るのには間違っているのは分かっていなければならない……。

「はつきり申し上げますが、お察しの通り、腕は両方とも全治の見込みがありません。動かせる様にはなっても、間違いなく後遺症がついて来るでしょう」

「は……」

「まず、両腕ともに粉碎骨折なのも原因ではありませんが、更に悪い事に腕神経叢を損傷しています」

わんしんけいそう……。詳しくはないけど、腕の神経って事は……何となく分かっています。

シエルとメーアが堪らず口に手を当てて俯き、お互い身を寄せ合って震えている。2人共分かってしまったのだ、コゼットちゃんにはもう、料理をする事が……。

「損傷の状態はかなり深刻で、恐らくどの名医でも完治をさせる事は……不可能でしょう。『再生』でもしない限りは——」

「再生……」

叶の魔法なら、どうだろうか？どこまでの治癒力があるのか分からないけど、正攻法で治療する方法が無いのならもうそれ以外に頼るしか無いのだから。

「自然治癒でもある程度は回復する見込みはありますが、動かせるレベルまでは達しないでしょう。……私も医者です、最後まで諦めませんが、可能性はほぼゼロに等しいのだと覚悟しておいて下さい」

「……、」

自然治癒でも良いのなら、私の能力が適応されれば……。

私が、この力を誰かに分け与える事が出来たなら……。

「……つくそ……!!」

願っても、私の能力は人に分け与える事は出来はしない。

私はこの時初めて、自身の能力が不便だと思った。

\*\*\*

ジェルマ王国、王城のとある一室にて、私はある男と机を挟んで椅子に座り向き合っていた。

男の方は頬から汗水を垂らし、呼吸も不規則、どこからどう見ても極度の緊張状態なのに対して、私は傲岸不遜に足を組み、腕置きに肘を付いて頬を手の甲で支えている姿勢だ。

更に、霸王色も抑えずに垂れ流している。気の弱い人ならこの場に居るだけで卒倒するだろう。

「——それで、話とはなんだ、女王イリス。我が城へ侵入した事実には目を伏せる……今は忙しい時期なんだ、要件があるのなら後日にしてもらいたい」

「勘違いしてもらっちゃ困るね、ヴィンスモーク・ジャツジ。あなたは譲歩する立場に無い。私はその気になれば……お望みのお茶会とやらが開催される前に『ジェルマ』の悉くを滅ぼす事も出来るんだよ？」

目の前の『ジャツジ』が分かりやすく肩を跳ねさせてみせた。この人に取って今回の政略結婚はそれ程価値のあるものなのだろう。

……まあ、その結婚式も後で潰すけど。

「まず、もう話は届いてるかも知れないけど、あなたとこの次男にムカついたからボコボコにしちゃった」

「……一応、耳には入っている。ニジを一方的に痛め付けるとは流石は『四異界』だ」

「ご機嫌取りは良いよ。それでね、そもそも私がニジを攻撃した理由なんだけど、ニジ

が私の嫁に手を出したからなんだ」

「……………」

大きく目を見開くジャツジに、余裕な態度を崩さず寧ろ覇気の圧を増やしてみせた。私が言うのも変な話だけど、彼は私の脅威……………とか地雷を理解しているみたいだ。

……………気になる事はあるけど、今は目を瞑っておこう。

「分かつて貰えたみたいで何より。本当は今も色々押さえ込んでるんだよね。こうして“話し合い”で解決しようとしてる時点で私もだいたいぶ理性的だと思わない？……………ただ、あなたが私の望む返答をしなかった場合は、この僅かに残った理性がどうなるか保証出来ないけど」

「ぐ……………、“話し合い”とは言うが……………それは最早脅迫に近いな」

「私の嫁に手を出したんだから当然でしょ？完治しない怪我を負わせてるんだよ？」

最早叶に頼るしか無いコゼットちゃんの両腕は、本来であれば希望なんて持てない程の状態なんだ。既に壊れてしまったものを『再生』するのはいかにチョツパーやローと言った凄腕のドクターでも成せるものじゃ無い。

なんなら、ジェルマ側にレイジュが居なければ私はきつともう暴れていただろう。

「私からの要件は3つ。ニジが傷付けた私の嫁である料理長のコゼットは貰っていく。で、ついでに同じく料理人を務めているシエルとメーアも連れてく、というのが1つ目。

2つ目は、あなたの娘のレイジュを私に下さいってことなんだけど」

「……1つ目については承知した、子供達にもこれ以上は手を出さない様に強く言っておく。2つ目に関しては……この場合、レイジュは我々の手から離れお前と行動を共にするという事か？」

「そこはレイジュの意思次第かな。とにかく私はレイジュを嫁に貰いたい。そりゃあ私は出来るだけ一緒に居たいけど、嫁になつてくれるのならここに残つてくれてもいい」

親が居るのなら、娘さんを下さいくらいは言っておかないとね。

まあ……そもそもレイジュが私の求めに応じてくれてないんだけど。それは今後の頑張りでなんとかするし。

「3つ目、これが1番簡単なんじゃないかな？有り体に言えばお金が欲しいんだ。うちはいつでも食糧不足だからお金はいくらあつても足りなくて。その点、あなた達は有り余るくらい持つてるんじゃない？下で見たけど、あんなのを量産するんだから相当資金がある筈だよね。私も鬼じゃ無いから無理は言わないよ、5億ベリで手を打つてあげる」

「5億か……確かに、その程度ならばすぐにも用意出来る。いつ渡せば良い？」

「今すぐでもいいし、お茶会が終わるまで待つても良いよ。それより先となると待つて

あげられないけど」

お金は大事だからねえ……うちの船長が原因で大体いつでも食糧不足だし、いくらあつても足りないというか。

「なる程、承知した。しかしそれだと一つ困った事になるのだがな」

「ふーん……例えば？」

「死人に金など贈つても意味ないだろう、そうは思わないか？ 女王。安心しろ、お前の墓にはお気に入りのメシ炊きも入れておいてやる」

ニヤリ、とジャツジが口角を上げた瞬間、部屋を囲う4面の壁が下にスライドして隣接する部屋や廊下が丸見えになった。更に、そこには武装した兵士達が所狭しと犇めきあつていて、イチジ、ヨンジ、それからレイジュの姿も見える。

「話し合い」の結果を伝えよう、女王イリス。我々から貴様にくれてやるものなど何も無い。『ジェルマ』を侮つた事を今ここで後悔させてやろう」

「……後悔、ねえ」

この状況……やつぱりさっきまでの怯えた姿は演技だったって事なのかな。

……まあ、その胆力は認めてあげる。部屋の周りに沢山の気配があつたせいで私にはバレバレだったけどさ。

「ほんと、残念だよ」



折角、目を瞑ってやっていたのに。

「数を揃えれば敵うと思つたの？」

折角、我慢してきたのに。

「『話し合い』の結果を伝えるよ、ヴィンス・モーク・ジャッジ。もうあなた達と話す事は何も無い、遠慮もしない、我慢は止める。……欲しいものは、全部奪っていくよ」

悔っていたのがどっちなのか、その身をもつて味わわせてやる。

「精々頑張つて、せめて『戦い』のステージまでは上がってきてね？」

## 236 『女好きvsジェルマ66(ダブルシックス)』

座りながらザツと周りを見渡してみる。正面にはジャッジ、その後ろには兵士達。右はレイジュ、後ろはヨンジ、左はイチジの配置だ。当然、レイジュ達の後ろにもズラリと兵士達は並んでいるが。

「言うまでもないが、兵士はこれが全てでは無い。動けなくなってもすぐに補充出来るよう、近くで待機してある」

「それとサンジの奴は来ないからな。下で余りの兵達と遊んでもらってる所だ」

イチジ、ヨンジの順でそう語るが、別に兵士の数なんてどうでもいいし、サンジに至っては心配するまでも無い。ここに来ていいる兵士達ですらサンジ一人に蹴散らされそうなのに余りと呼ばれている人達が相手になる筈もない。ただ、足止めにはなるだろうからサンジが来ないと言う事に対しては間違っていないだろう。

「レイジュ、あなたは どうしてこんな馬鹿げたオモテナシに参加してるの？あなたなら分かるよね、こんな事したって無意味だって」

「……それに関しては何も言えないわね、でも、私にも事情があるのよ」

「ふーん……まあいいや、じゃあこの場においてレイジュは私の敵って事になるんだね

「？」

「ええ、この場におかなくとも、あなたは私の味方では無い筈だけれど」

レイジュの事情とやらはともかく、言質は取った！レイジュは今私の敵なのだ。つまり、勝てば私のものになるということ！意味が分からない？はは、敗者が勝者に逆らえないのは当然でしょ？

ふひひ、とゲスな笑い声を上げていると、不意に視界の端で影がブレた。

即座に色のついた脳内をリセットさせ、半歩後ろに下がる。

「ほう？やるな、女王」

「ニジとの戦闘見てたんじゃないの？単独で突っ込むのはどう考えても悪手でしょ」

目の前を横切る私の頬を狙った拳から視線を逸らし、攻撃の主であるイチジと視線が交錯した。と言っても奴はサングラスをつけてるからこっちは目は見ええないんだけど。

「ふっ！」

まずは一人、と脳内でカウントしながら単独になっているイチジに向かって蹴りを放つ。

「甘い！」

「んっ!？」

が、予想以上に反応の良いイチジの腕によって、私の足は彼の腹の前で掴まれる様にガードされていた。

間違はなく今のでやったと思ったんだけど……長男だけあってニジよりは強いって事か。

「そのまま押さえている、イチジ」

「っ……ああ」

ジャツジの言葉にイチジは頷くが、その要請に応えるのが厳しいという事は理解しているらしい。掴まれた瞬間から抜け出そうと動かしている足を必死に離さまいとしていて、流石に握り締められ過ぎて少し痛い。

「そのままこいつで貫いてやろう！」

どこから取り出したのか、ジャツジが突き特化タイプである円錐形をした槍を手に、その場でふわりと浮かんで全速力で突っ込んできた。

「そんな単調な攻撃が当たる訳ないでしょ！」

この際抜け出すのは諦めて、掴まれた右足を軸に左足で迫り来る槍を横から蹴り込み軌道を逸らす。拘束の意味が無くなったと判断したのか、イチジも足から手を離れた。

後ろへ飛んで距離を取ろうにも、四方八方を囲まれてるこの状況ではそういう訳にもいかないし……ん？いや、八方は囲まれて無いよね、いざとなれば床をぶち抜いても天

井を突き破つても逃げる事は出来るって訳だ。

「ま、逃げる必要があればだけど」

「はア!!」

今度はヨンジが後ろに流れていったジャツジと交代する形で殴りかかってきたので、見聞色で把握して振り向く事なく避けて見せた。

ヨンジの殴った後に結構衝撃波が出たから、きつと破壊力だけならヨンジが1番高いのかな?

「30倍灰」  
さんじゅうばいばい

「ぬおツ!」

殴った後の反動でほんの少し硬直時間が生じているヨンジの腕を掴み、その場でぐるぐると振り回して行く。

「大旋回!!」  
だいせんかい

からのお!

「せいっ!!」

「ツ!」

ゴン!!と近くに居たイチジの頭にヨンジの頭を振り下ろした。ヨンジハンマー、なんちやってね。

それよりもこの2人、まるで鉄と鉄をかち合わせたかの様な感覚だった。ニジを痛め付けた時もそうだけど、こいつらなんかみんな硬いんだよね。

「レイジユ！お前も動け!!」

「ええ」

堪らなく叫ぶイチジの言葉に軽く頷いたレイジユは、ゆるやかな動きで顎付近に手のひらをそつと添えて息を吐き出した。その息は次第に無数の矢となつて、私を射抜かんとばかりに飛び出した。

「ピンクホーネット  
桃色毒矢!」

「あいてっ」

レイジユに射ち抜かれるならむしろご褒美だと思つて避けずに全弾喰らつただけど、この矢はやっぱり毒矢だったみたい。ホーネットつてどういう意味??

「躲さなくて良かったのかしら? その毒矢はあなたが苦しめられたヨロイオコゼのよりももつと強烈なのよ?」

「そうなの? 多分毒だろうと思つて毒耐性倍化してたし、実際体内に入ってきたのつて微々たるものだったから分かんなかった。その毒ももう消えてるけど」

「あら……」

「あの時の毒も、実際レイジユにキスされたかったから治療しなかったただけだし、基本私

に毒系は効かないよ」

シーザーがパンクハザードで使ってた、シノクニだっけ？あれとかマゼランの本気の毒なら今でも効くと思うけど、それも本気の本気で治療に意識を回せば問題ないだろう。

「じゃあそろそろ私もカウンターだけじゃなくてしつかり攻撃に移ろうかな」

「っ、させねえぞ！」

「うわっ、危ないなあ！」

ハンマーにされた頭のダメージから復活したのか、ヨンジが少し離れた距離から腕を伸ばして。パンチを繰り出して来た。腕が伸びるのは予想外だったけど、なんとか首を倒してやり過ぎす。

「舐めてんじゃねエ!!」

「っ?」

更に、伸びた腕を元に戻す際に私の肩を掴み、ぐつと力を入れて飛びかかってきた。腕の伸縮がフランキーと同じ鎖タイプなので耳元でジャラジャラと少し鬱陶しい。

「らア!!」

ゴン!!と腕を戻す力も利用したヨンジの右ストレートが私の頬に突き刺さった。ぐらりと視界が揺れ、少くないダメージを感じる。

「好機だ！これを逃すな!!」

「火花スパークファイガー!!」

ジャツジの叫び声の様な指示でイチジも私のお腹に火花散る全力の拳を叩き込む。

「これでトドメだ！女王オ!!電磁デンジシャフトオ!!」

最後にジャツジの電気を纏う槍が私の心臓部目掛けて突き出され、勢いよく胸に激突する。

顔面殴られて、腹を殴られて、挙句の果てには心臓一突き。そりゃあ、対象を無力化するコンビネーションとしては間違つてないのかもしれないけど。

「女の子にする事じゃなくない?」

「な……ッ!?…ッ……がア!」

足の裏でスタンプをする様な、通称ヤクザキックをジャツジの腹に叩き込み、即座に足を引き抜いてその場で右にくるつと回転し、コメカミに踵蹴りを喰らわせた。

イチジにお腹を殴られる直前に『女王化』を使用したので、腹部と胸部に関しては痛いではない。だけど頬に関しては未だズキズキと小さくない痛みが残っている。

「くっ、私達は一旦引くぞ！兵士達は銃を構えろ！近付かずに放て!!」

「それ、私相手に絶対使っちゃダメな武器なんだけど」

「ならばこう言おう！兵士達の中には数人だけ、海楼石を加工した銃弾を含む銃を持つ



ている！」

うぐ、そう来たか……！

そうこうしてうちに倒れたジャツジを連れてイチジ達は後ろに引いてるし、銃口は四方から全部私に注がれてるし。

「……ちよつと舐めてたかな、結構厄介かも」

拳を倍化させてこの城ごと殴り潰してしまえば苦戦する事はないけど、それをしてしまえばコゼツトちゃんは勿論、シエルとメーアにも被害が及ぶ。出来るだけ他の階に衝撃が伝わらない様に無力化するとすれば、やつぱり下手に大技は使わない方が良いだろう。

となれば、霸王色の覇気も使わない方が良い。あれを発動させれば間違はなく周りの有象無象は全員倒れるけれど、あの覇気つて衝撃も結構あるし、万が一コゼツトちゃんの部屋に伝わってベッドから落ちたなんて事があれば……、うん、霸王色は止めとこう。「となると……最適はこうかな？」

音もなく、出来るだけ衝撃を生じさせずに右側の兵士の群れに突っ込み、銃口を握り潰して使えなくしていく。ついでに一発入れておき、意識も奪っておいた。

四方を兵士に囲まれてはいるが、そのどれか一方に突っ込んでさえすれば銃は使えない。何故なら味方ごと撃ち抜くハメになるからだ。

……と、思っていたのだけど。

「……うっそでしょ」

バタバタと倒れる周りの兵士達と、私に向かって降り注ぐ弾丸に頬が引き攣った。

ジェルマってのは、味方ごと攻撃するのになんの躊躇いもないらしい。クローン兵だから？ だけど彼らだって1人1人生きてるんじゃないの……？

「人の心は無いみたいだね……！」

「そんなものは邪魔なだけだ。私達は生まれる前から戦闘に邪魔になる感情は消去してある」

……今なんかイチジが凄い事言わなかった？

「感情を消去？」

「ああ、私達は生まれながらの改造人間。骨格は人を超え、精神は無駄なモノを削ぎ落としていく。誰かを思いやり、時に悲しみ涙する——こんなモノは戦闘において必要な、判断を誤る可能性が生まれるだけだ」

「……なるほど、ぶっ飛んでるね」

生まれる前の我が子にそんな訳の分からない改造を施す所もそうだけど、そんな改造を物ともしてないサンジやレイジユも凄い。あの2人はどこからどう見ても誰かを思いやってるし。

「というか、ニジがコゼットちゃんをあんな目に遭わせたのはそう言った事情もあつたんだらう。だからと言って許したりはしないし、次会つても顔面殴るけど。……まあ、次は1発で堪えてあげなくもない。」

「私が慎重に動けば動く程兵士達は巻き込まれてしまつて事だよね」

かと言つてちよつと力を出し過ぎれば衝撃が城全体に伝わりかねないし。

……よし、手数を増やそう。1人で厳しくても私には頼りになる人が付いてるし！

「てな訳で、よろしく、王華」

「はいよ、コゼットちゃんの人に響かせない為にもちやっちゃやと終わらせちゃおうか！」

さあ、緊張感のカケラもない、結末の分かりきつた乱闘戦、第二ラウンドと行きます

か！

## 237 『女好き、ジェルマとの交渉』

「じゃ、一気にカタをつけちゃうよー！」

ポツ、と王華の人差し指に淡い光が灯り、それをゆつくりと兵士達に向けた。

「連覇銃ー！」

直後、王華の指からマシンガンの様に覇銃<sup>ハガン</sup>が放出され、完璧に調整された威力で1人兵士の数を減らして行く。

連続で覇銃<sup>ハガン</sup>を撃つだけなら当然私も出来るが、これだけの量となると流石に難しい。更に驚きなのが、何100発と撃ち続けているにも関わらず未だに流れ弾が無い事だ。つまり、1発も外していない。

基本は力で解決しようとする私には到底出来はしない芸当で、ジェルマの兵士達を気絶させる程度の威力を保ちながら行われる正に神業と言うやつを軽々とやってのける彼女には本当に度肝を抜かされるというかなんというか。

王華程スピーディーには無理だけど、私も同じく覇銃<sup>ハガン</sup>を撃ち続けていたので気が付けば兵士は全員床に倒れ伏していた。立っているのはイチジ、ヨンジ、レイジュのみとなり、最早足の踏み場すら無い状態だ。

「ここまでやっておいてアレだけど、ジェルマがお茶会に参加しないと間違ひなく原作とは違う展開になるよね」

「本当に今更じゃん。そこら中に倒れてる人達、大半は王華がやったんだけど?」

ここまで来て、漸くイチジとヨンジは表情を強張らせた。さっきの話を聞く限りだと彼らに『恐怖』の感情は無いだろうから、今感じているのは『困惑』だろうか。困んで叩けば勝てるど甘く見積もっていたんだらうけどね、レイジュはそこまで驚いてないどころか、こうなるのを分かっていたかの様に落ち着いた表情だけだ。

「で、どうするの? まだやる?」

「ふ、勿論よ。私達は誇り高きジェルマの戦士、例えこの身朽ちようとも、刺し違えてでも敵は排除するわ」

絶対思っていないよねこの人! 戦闘を継続させて私と王華にやられる気満々だよな!

まあ、そもそもレイジュに手を出す気は無いんだけど。

……とは言っても、どうしたものかな。別に私はジェルマを潰したい訳では無いし、ただコゼットちゃんを受けた仕打ちに対する落とし前を付けさせたかっただけで。

だから最初ジャッジに話した条件さえ呑んでくれればそれで良かったんだけど……期待は裏切られたからね。

でも恐らく指示を出したのだろうジャッジはそこで既にノびてるし、この件に関して

もこれ以上どうこうする必要は無いというか。

「んー……じゃあ、レイジュの身が朽ちちやうのは嫌だから、戦いはここまでにしようか」

「何……？」

「だから、見逃してあげるって事。それともイチジはまだ私と戦うつもり？ だったら相手してあげるよ、ジェルマは間違いなく崩壊するけどね」

「……」

「ただ」

続く私の言葉にイチジは眉をピクリと動かした。戦闘自体はこれ以上行うつもりはないけれど、私が最初に提案した事だけは実行するからその事を一応伝えないといけない……という事もないかもだけど。

「コゼットちゃん……というか、あなた達がメシ炊きと呼ぶ人達はみんな連れて行くから。それとレイジュ、あなたも私と来て。それから最後に、5億ベリーちょうだい」

「おい、それは何の冗談だ？ 纏めて告げるには余りにも私達の損害が大き過ぎるだろう。メシ炊き程度なら構わないが、レイジュと金は別だ。親父が何と言ったかは知らないが、5億ベリーなどという大金をホイホイ渡せるものか」

「ヨンジはそう言うが、責任者であるジャツジは5億ベリーの事を『その程度』と言っ

た。そもそも私に渡す気などサラサラ無かったからそう言い回したのかもしれないが、言われたものは言われたのだ。私はこうして生きているのでジャッジが言っていた『渡す相手が居ない』という状況にも陥っていない。

ジャッジは自分の言葉で自分の首を絞めたのだ。私はその言葉を聞いた以上、証拠など無くとも責任者の発言には責任がついて回る。一度は承諾した内容なんだ、今更無理だと言われる筋合いはない。

「5億ベリーを渡して助かるのと、それを渋って滅ぼされるのと、あなた達はどっちを選ぶの？ま、私はどっちでも良いよ。むしろそのまま状況を顧みず、先の事を見据えず、ただただ王家としてのプライドのみで私の提案を突っぱねて立ち向かってくれた方が私としては嬉しいけど。だってその場合はこの城にある全ての財産をもらって行くから5億ベリーどころじゃないし」

「……女王、その案には私の意思が入っていない様だけれど、女好きともあろうあなたが無理矢理嫌がる私を連れて行くのかしら？」

「まー、ついてきてくれないなら嫁になつてくれるだけで良いよ」

「……あなたの嫁は務まらないと言った筈よ」

「務まる務まらないは関係無くてさ、私はただあなたが欲しいだけだよ、レイジュ」

私の嫁に相応しい人を選んでいるんじゃないかと、私が嫁になつて欲しいと思った人を口

説いてるんだから。

「嫁になってくれる “だけ” だと？ レイジュは我が国の王女、そう簡単な話ではない」  
「ふーん」

そんな難しい顔で言われてもねえ、イチジさん。私にとって王女様を嫁にもらうなんて珍しい事じゃ無いし、簡単な話ではないと言われても……。

確かに今までも簡単かと言われると違うかもしれないけど、王女がどうこうつて理由で断るのはやめて欲しいというか。

「じゃあもう本当にジェルマ潰す？ そしたらレイジュも王女じゃないよね？」  
「……、」

「……あー、割り込んで良いのか判断に困るんだけど、ちよつと良いかな？」

と、ここで王華が頬を掻きながら手を上げた。場の雰囲気こそぐわらないのほほんとした雰囲気は、彼女が私同様にこの場において絶対的な力を有している事を意味している。

「イリスはコゼットを攻撃された事で視野が狭くなっちゃってるから私の意見だけを言うね？ だけど、私は結局この世界においてイリスの判断を尊重するから、今から私が何を言おうとイリスが頷かない事には意味が無いって事だけ頭に置いておいてね」

「どうしたの？ 視野が狭くなってるのは事実だけど、これ以上ここにコゼットちゃんは



置いておけないでしょ？レイジュとお金は欲だけど」

「うん、だからその欲、ちよつと閉まっちゃおうか」

ん？つまり、レイジュとお金は諦めてコゼットちゃんだけに絞って事？

王華は確かにアホかもしれないけど、意味もなくこの様な事を言う人でも無いだろう。何か考えがあるとは思うけど……ぶつちやけこの欲は片付けたくない、特にレイジュ。

「まず、私達はジェルマの兵力を奪うべきでは無いんだよ。むしろここで見逃して、代わりにある条件を突き付けなくちゃならないの」

「条件って？」

「……安城さんの事だよ。近々安城さんは仕掛けてくるって話をしたでしょ？協力も必要だつて事も。だったらジェルマは潰しちやダメ、ここで見逃して安城さんとの決戦で活躍して貰わないと」

……あ、あれか！そういうええ話してたね、それ。

安城さんに支配されたレイも救わなくちゃいけないし、そうなると確かにジェルマを潰すのも、軍資金である5億ベリーを奪うのも、要の1つであるレイジュを連れて行くのもダメな気がしてきた。

「……でも、レイジュには嫁はなつて欲しいんだけど」

「それはこれから口説いていけばいいじゃん。いきなりグイグイ行ったって振り向いてくれる訳ないよ、ちよつと今回は焦り過ぎてるんじゃない？イリス」

「……………むう」

それを言われれば、そうかもしれない。

「……仕方ない所もあるよね？そもそもコゼットちゃんに手を出すのが悪いんだし、私の視野が狭くなるのは当然じゃない？」

うぐぐ、と唸る私をよそに、王華はイチジ達と話を一歩先に進めようとしていた。簡単に言えば、今ちらつと話した『対安城』について。

「色々あつて私達はあの狂神と近々戦わなくちゃならないんだけど、今の戦力だとちよつと物足りないんだよね。でもやるからには絶対に勝ちたいし…………と、言う事で、あなた達ジェルマも戦力になってくれない？」

「……………簡単に言うな、滅びゆく国とはいえ、我々は誇り高きジェルマの一族。延命の為に我々の武力を貸し出すなど……………ふん、見苦しいとは思わないか？」

「だから、私達はそもそもジェルマを滅ぼしたい訳じゃないんだって。来たる時にあなた達の戦力を借りたいだけで」

「ならばこう言おうか？我々の武力とは即ちこの国の価値だ。買いたいのならば、そこそ金が発生する。見逃す代わりに…………という話ならば我々は滅びを選ぶ。だが、お前

達が金で我々を買うというのなら話は別だ」

えーっと、つまり生き永らえる事に意味は無いけど、金を貰えるのなら動く、という事？

……悲しみとか、そう言った方面の感情が欠落しているのはこういう所にも影響が出てくるらしい。自分達の死よりも『ジェルマ』としての利益を優先する。自らの命に無頓着と言えば良いのかな？

戦闘に悲しみや恐怖は邪魔だと思ったのかどうかは知らないけど、そう言う側面もあるから人は強くなれるのに。必要無い感情なんて無いと私は思うけどな。

「……はあ、王華、確かにジェルマの戦力は捨てがたいけどさ、相手がそんな調子なら別に要らなくない？仕掛けて来たのはそっちなんだから私達が譲歩する必要なんてないと思うんだけど。私、コゼツトちゃんをあんな目に遭わせた事……本気で怒ってるからね？」

「確かにあれはやり過ぎだけど、実行したのはニジだけの筈でしょ？そのニジには十分やり返したし、これ以上はやり過ぎだよ。……ごめん、イリスには酷な事言ってるけど」  
そう言って申し訳なさそうな顔をする王華に少し罪悪感が湧いた。王華が謝る必要は無いのに、私がいままで引き摺ってるから……。

更に、そう思っただけでも未だに許す事は出来てないし……というか、許せる訳が無

い。いくら罪悪感を覚えようとも許せないものは許せないのだ。うん、仕方ない、ごめん王華。

「——それなら、こうするのはどうかしら?」

「な……………?!」

突然、落ち着きのある耳触りの良い声が聞こえたと思つたら、イチジとヨンジの背後で青白い『巨大な口』が開いた。鋭い牙を持った目も鼻も無いそれは2人を頭から呑み込み、ゆつくりと咀嚼する。

「ちよつ……………!」

だが、私達が慌てる前にそのアギトは2人を解放し、静かに霧となつて消え去つた。

それと同時に王華の肩を“彼女”がぼん、と叩く。

「本当に、あなたもこつちに来たのね……………王華」

「えつ……………沙彩!?!」

緑髪を靡かせた美女……………沙彩がそこに居た。

彼女が生み出していたらしい先程のアギトに喰われた2人は咀嚼されていたにも関わらず無傷の様で、自らの身に異変が無いか調べている。

「こうするのはどうかしらつて、何かしたの?沙彩」

「何も?ただ、意味ありげな登場は格好いいでしょう?」

格好いい……かなあ?!

それに、どうしてここに沙彩が居るんだろう。私がここに居るって事はまだ外に漏れてないと思うんだけど。

まさか、ここに侵入する時既にバレてたとか……!?

## 238 『女好き、沙彩の能力』

沙彩がここに来た理由は、単純に私が女王化を使用し、更に王華を顕現させたからとの事だった。

いきなり大きな気配が2つ現れれば確かに警戒しても不思議では無いだろう。

で、ついでだからと現在の状況を沙彩にも説明しておいた。すると沙彩は少し考える素振りを見せ、イチジへと視線を向ける。

「そうねえ……ジェルマには悪いけれど、王華の提案を呑まなければ、お茶会お茶会の話も流す、というのはどうかしら？」

「何だと？」

「プリンは可愛い妹だし、元々私は政略結婚なんて反対だったのよ。あの子にはあの子の人生を歩んで欲しかったし……私では埋めきれなかつた心の溝もあのままにはしておけないもの。まあ、その点に関してはサンジが居れば大丈夫だけれど。だけど、ジェルマは絶対に必要というわけじゃないでしょう？」

ジェルマ側に対して妙に厳しい扱いをする沙彩だが、これは恐らくジェルマが嫌いだからとかではなく、単純に王華とジェルマのどちらを味方をするかなど沙彩にとっては

考えるまでも無い事だから、というだけの理由だろう。

「だが、我々との繋がりはビッグ・ママも求めているだろう。超彩……お前が幾ら強くても勝手に判断は出来まい」

「知らないわよ、王華が求めるならママくらい倒してみせるわ」

「そ、そこまで大ごとにはしなくても良いかなあ、はは……」

困った様に笑う王華へと愛おしそうに微笑みかける沙彩は、なんとというか本当に幸せそうだった。そりゃあ、彼女からしてみればようやく再会を果たせた大親友だし、叶も再会した時は色んな意味でテンションが高かった。……この調子だと、美咲も交えて全員が集合した時は三日三晩はしやぎ回るんじゃないだろうか？

「……ふふ、どうやらここまでの様ね。私達に拒否権は無いみたい」

「おい、レイジュ……!!」

真つ先に両手を上げて降参のポーズを取ったのは、意外でも何でも無く、レイジュだった。

その事にヨンジが抗議の声を上げるが、沙彩が軽く視線を向けた事で言葉を詰まらせる。

「女王を怒らせてしまったのなら……私達が滅ぶきつかけになるかもしれないと思ったけれど、私達にはまだ為すべき事がある。そういう事でしょう？どの道、あなた達と

じゃ勝負にならないわ、自滅覚悟の特攻すら私達を傷付けずに防いでしまえばいいのよ」

「しまいそうというより、その通りね。四異界が2人に、下ではサンジも居る。それにはこんな事も可能なのよ」

パチン、と沙彩が指を鳴らせば、急にイチジとヨンジがふらつきだして床に膝をついた。倒れるとまでは行かなかったが、突然起こった体の不調に2人とも困惑している様だ。

「あなた達の顔周辺に睡眠ガスを漂わせているのよ。それで直ぐに昏倒しないなんて流石はジェルマね」

「ぐ……っ！何故、そんな力を……!!」

「何故？私の能力を知らないのかしら。この程度なら科学者に作って貰った睡眠ガスを『噛めば』直ぐに使用出来るわ。とはいえ、実物の半分の効果しか出せないのだけれど」  
『カミカミの実』という噛むだけで対象の能力をコピー出来る悪魔の実を食べた沙彩だが、その対象は『悪魔の実』じゃなくとも効果を発揮するらしい。

仮の話だけど、もしシーザーの生み出したシノクニを沙彩が噛んでいればアレの半分の効果を持った毒ガスを自由自在に扱えたという事になるのだろうか。

「もしかしてだけど、最初にイチジ達を食らった大口って……」



「ええ、あれも私の能力よ。王華の体なら直接嘯むのも吝かではないけれど、幾ら何でも口に含またく無いモノも存在するでしょう？その為に編み出した技、『白影』<sup>シラカゲ</sup>よ」

と、いう事はあれに嘯まれても能力をコピーされるって訳だ。半分の効果しかコピー出来ないとはいえ、やはりこの世界の悪魔の実と比べてしまうと頭一つ抜けた性能を誇っている。

まあ、こうして予想外の援軍『沙彩』により、私達とジェルマのアレコレは無事？解決した。

落とし所としては王華の案通り、私がジェルマを見逃す代わりに安城さんとの戦いに協力してもらおう様取り付けて終わった。見逃すとは言ってもコゼットちゃんとしエル、メーアに関しては私達が引き受ける事になったのだが。そこは断固として譲らなかつた。私達に負けたイチジ達がまた腹いせで彼女達に手を出さないと限らないし。

そしてサンジだが、私達が話し合いを終えてすぐ、息を切らしてこの場へと飛び込んできた。そこら中に倒れている兵士やレイジュとニジ以外の兄弟を見てホッと一息ついていたが、この場に沙彩が居るのにも気が付いて首を傾げていたので事情を説明しておいた。

そうこうしている内に昼が近付いてきて、ビッグ・マムの城へと出発する時間となった。とはいえ王族はレイジュ以外みんな倒れているので、事情を説明する為にレイジュ

はサンジと2人でビッグ・マムの元へ向かう事になったのだが、事情を説明するのなら私も居た方が良いと思って同行する事になった。そもそもついてくつもりだったし、堂々と同行出来る分当初の計画よりも良い展開だと言っても良い。

因みに王華と沙彩だが、彼女達2人はコゼットちゃん達の護衛を買ってくれる事になった。目を覚ました時逆上した王族がコゼットちゃん達に手をかけないとも限らないから……というのが1番の理由だけど、せっかく再会出来たんだから色々と話したい事もあるのだろうと思う。

そんな訳で今、私はジェルマの従者が手綱を握る馬車……というか引いてるのは大きな猫だから猫車？にレイジュとサンジの3人で乗り込んでビッグ・マムの城、『ホールケーキシャトー』へと向かっている。3人つて言っても流石に周りに護衛は沢山居るけどね。

ジャツジやイチジ達は目を覚まして治療が終わり次第来るらしい。なんか普通の人間とは骨格が違うみたいで、ニジに關しても明日のお茶会までにはなんとか動けるレベルまでには回復するそうだ。

「骨格が違うって、レイジュも？」

「ええ」

「へえ、だからイチジ達は殴った感触が固かったんだ。でもレイジュの肌は柔らかいよね？これは何で？」

「肌だからじゃないかしら……」

ぶにぶにとレイジュの剥き出しの太ももを摘んでみると、対面に座っているサンジが困った様に頬を掻いた。流石に実の姉が口説かれてるのは色々複雑なのかな？両親の夜事情を覗いてしまった子供みたいな感覚なのかもしれない。

「今更だけど、コゼットの事……ごめんなさい、女王。弟のやった事とはいえ止められなかった私にも責任があるわ。それに、その後もあなたを利用して私達を倒す様に仕向けたら……」

「あー……レイジュは悪くないよって言っても、その言い方だと納得出来ないんでしょ？分かった、その謝罪は受け取っておくね。だけど私を利用してのに関しては謝罪は受け付けないよ、あれはジャツジが悪いし」

力量差を測りきれず、起こしてはならない行動に出たジャツジが原因だし。それに元を辿れば、冷静さを欠いてジャツジに私が得をするだけの交渉をしたのも悪いのだから。

……そういう意味では、本当の原因は私だからね。

「それはそうとイリスちゃん、その姿になったのなら見聞色の覇気でブルック達の気配

を探ってみたらどうだ？連絡が繋がらなくともこの島に居るのは間違いないんだろ？」  
「そうしたいのは山々なんだけど、沙彩とかビッグ・マムとか、他にも沢山大きな気配がこの島に集まっているせいか島全体を見るとなると細かいところまで探りづらいんだよね。どうしても大きな気配に反応しちゃうし」

見聞色の覇気で誰かの気配を探る時、私の場合には気配の声を聞く様なイメージなのだけど、大きな気配は相応に気配の声が大いなので小さな気配の声を隠してしまうのだ。私がミキータみたいに匂いで分かれば良いのだけど、正直あのレベルには到達できそうにない。

「シャルリアも心配だけど、ナミさん達も心配だな……森は抜け出せたのかな」

まあ、森の方にはルフィの気配を感じるし問題無いだろうけど。……ん？ていうか、段々近付いて来てる？

今、猫車はホールケーキシャトーへと続く草原を走っているのだけど、遠くに見える私達が最初に降り立った森からルフィの気配がこつちへと近付いて来ているのだ。

……確かに薄らと黒い点みたいなのは見えるけど、遠くて良く分かんない。と言うわけでもないのやつを発動！

「……ん？なんか、走る……木？に乗ってルフィ達がこつち来てるんだけど」

「走る木？」

首を傾げるサンジだけど、私も意味が分からずに首を傾げるしかない。冷静に考えれば誰かの能力なんだろうけど……早速現地の人を味方につけたのかな？

「お~~~~い!!サンジイ~~~~!!!」

「うわっ!」

さつきまで遠くに居たのに、いつの間にかやらゴムゴムのバズーカで猫車に飛び乗って来たルフィが、サンジを見るなり表情を輝かせる。

それは良いんだけど、衝撃で猫車がぐらついてるんだよね!倒れちゃうって!

「離れろ貴様!!」

「大丈夫よ、彼は敵じゃないわ」

急な突撃者に思わず銃を向けた護衛の兵士達をレイジユがそつと宥め、とりあえず猫車を止めて外に出た。

「あれ、ナミさんとルフィだけ?ペローナちゃん達は?」

直ぐに追いついて来た走る木からナミさんが降りて、他に誰も降りてこない事を不思議に思いそう聞いてみれば、ペローナちゃんを始めとしたキャロット、プリンちゃん、チョップの4人はブリュレという女の能力で鏡の中の世界に閉じ込められてしまっただらしい。

4人とも不意を突かれたらしいが、脱出に関しては何とか頑張ってみるから気にしな

いで欲しいとの事。

いや、気にするって。

チヨツパーは当然大事な仲間だし、ペローナちゃん、キャロット、プリンちゃんに関しては嫁なんだよ？うん？嫁ったら嫁だよ。

ただでさえシャルリア達と連絡が繋がらなくなってるのにこれ以上離れ離れになるのは……。うーん、やっぱり最初別行動取ったのは間違いだったかな？いや、でもそうしないとコゼットちゃんと会えなかつたか。

「帰ろう！サンジ！」

「って言いたいところだけど、まだダメなんだよね」

ルフィらしい勢いだけど、サンジはまだ遠くの地に人質を取られたままだ。その件と……後は正式に結婚式をぶち壊しておかないとワノ国に向かえない。

人質を取られてるのに結婚式をぶち壊すっていう大胆な事考えてるけど、これはどうするかなあ……。まあ、後で考えよう。

## 239 『女好き、広い繋がり』

「あんた……そんな事があつたのに良く耐えたわね。王華と沙彩のおかげかしら」

「正直、一人だったらレイジュを残してジェルマは潰してたかも」

……今でも許した訳じゃない。コゼットちゃんの腕は、チョッパやローに見せれば違う答えが返ってくるかもしれないが、とにかく現状では打つ手が無い程の状態なのだ。……いや、例えこの世界の誰もが治せなくなつて、私は決して諦めてなるものか。何が何でも治療法を見つけて完治させるんだ……！

「それで、サンジはどうするんだ？ヒゲのおっさんとイワちゃんが危ねえんだろ？」

「その事だけど、私が口を挟んでも大丈夫かしら」

「ほん、と可愛らしく咳払いをしたレイジュが小さく主張する。止める意味も無いので頷いて返せば、レイジュは一度お礼を言つて続きを話した。

「カマバッカ王国といえば、かの有名な『奇跡の人』エンプリオ・イワンコフが王を務める国でしょう？なら、そっちは大丈夫ね」

「どう言う事？」

「ジェルマが総力を上げれば結果は分からないけれど、現状、彼の国を侵略する程の戦力

は私達に無いわ。正確に言えばそこに戦力を充てる余裕がない、かしら。お茶会が控えている以上、向かわせられるのは兵士達だけ……それくらいなら簡単に追い返せるでしょう？」

あー、確かにそうかも。頂上戦争で共闘したイワンコフって男……男？はそれはもう強かった。

革命軍らしいし、サボともルフイのお父さんとも面識があるんだよね。ロビンはイワンコフはあんまり基地に居なかつたって言ってたっけ。

「ビッグ・ママ海賊団に関しても同様に、今は戦力を分散出来ない状況にあるわ。お茶会があるというのもそうだけど……女王、あなたの存在ね」

「そういうえばサンジもそんな事言ってたね」

「更に、超彩のサアヤ、彼女の存在も大きいわ。普通ならばビッグ・ママ側だけどうやら彼女はそうじゃ無いみたいだから」

と言う事は、人質を取ってる様で取ってないって事になるんだね。主力を送り込む余裕がないから兵士くらいしか送らなくて、その人達では人質を倒せない、と。

とはいえ、脅すと言う事は既に人質をいつでも攻撃出来る場所に潜伏している可能性が高いと言うことにも繋がる。あまり楽観視し過ぎるのも問題だし……、あ、そうだ！

「立場的にも私から情報を与えるのは間違ってるけど、良いよね！話したいし」



そうにやりと笑って電伝虫を取り出した私を見て、レイジユは首を傾げるのだった。

\*\*\*

—海軍G-5、軍艦内部—

「——まったく、あの人は……！」

「どうした、またえらく荒れてるじゃねエか、たしぎ」

「……いえ、先程『協力者』から連絡があり、東の海イーストブルーの『バラティエ』付近に一般人を狙う海賊が居る可能性がある……」

「ほオ……『協力者』……まあ、そう言うことにしておいてやる。良い様に使われるのは癪だが、その情報は東の海イーストブルーの支部に連絡しておけ」

「はっ！」

\*\*\*

「……あなた、本当に海賊なの？」

「海賊だよ？ちよつと顔は広いかもしれないけど」

目の前で普通に海軍側と連絡を取った私を見て、レイジュは呆れた様に目を細める。「勘違いしてもらつちや困るから言うけど、誰の前でも海軍と連絡を取ってる姿を見せる訳じゃ無いからね？ここに居るのが仲間とレイジュだけだからそうしたんだし。それに、海軍って言つても一人だけだよ」

一応、周りに護衛としてジェルマの兵士達が佇んでいる訳だけど、彼らには聞こえない声量で喋つたから大丈夫だろう。仮に聞こえていたとしても数人だけだし、少数のトーチンカンな訴えには誰も耳を傾けない筈だ。

「私の前でするのは問題じゃないのかしら？」

「さあ？でも、嫁にすると決めた人に隠し事をしたくないってのはあるかな。ここで私に切れる最良の手が『海軍と連絡を取る』だったから、レイジュの前だからって躊躇いたくないし」

「へえ……徹底してるわね、女王」

徹底してるというか、自然とそうなるだけなんだけど。

好きな人に隠したい事って言えば、カツコつけた時に噛んだりする様なカツコ悪い事だけど、多分ナミさん達は可愛いつて言つてくれるんだろうな。私だつてそう思うもん。

「これで人質の件は一安心だね。念には念を入れてお茶会では沢山暴れちゃおうか！そうすればそれこそ人質を攻撃する為に割く戦力なんて無くなるだろうから」

「程々にね。あんたが沢山暴れるって事はその分周りにも被害が及ぶんだから」

「勿論、ナミさん達を巻き込んだりする訳ないじゃん！」

暴れるって言うっても会場を積極的に破壊するって意味じゃないし。……とはいえ、どんな流れになるかは分かってないからそうならないとも限らないけど。

「そういやルフィ、そのカツコどうしたんだ？ポロポロじゃねエか」

「ああ、さつきすっげー強エ奴と戦って来てよ、勝てたけどギリギリだったんだ」

ルフィでもギリギリだったんだ……。でも、流星に四皇とはいえそんな下っ端は居ないハズだから……、

「強い奴どころじゃないわよ、四皇の幹部よ、幹部！『3将星』って人達の1人を倒して来たの」

「……嘘でしょう？四皇の幹部を単騎で撃破したというの？そちらのお嬢さんが何か手を貸したとかも無く？」

「何もしてないわ。手伝える事はあつたけど、ルフィが要らないって言うから」

「まあルフィだし、それくらいしそうだよね」

なんて軽く言った私だけど、後から聞いた話、原作でルフィはその幹部に1人で勝利

は出来なかったらしい。ナミさんの協力があってなんとか倒したんだとか。

「霸王色の覇気を撃つのは出来る様になったからな。次は纏える様になろうと思って試したんだ」

「あー、私の女王化みたいな感じだね」

女王化に関しては覇気を纏うだけじゃなくて他にも色々やってるし、そんな私が言うのもなんだけど、覇気を纏うというのは簡単な事じゃない。

武装色は覇気さえ習得すれば纏う事自体は案外楽な方だし、見聞色はそもそも纏うものじゃない。その中でも霸王色は特に扱いが難しいのだ。

率直に自慢するけど、私は霸王色を扱う天才だと自負している。私だからこそ、あれ程上手く霸王色を自在に操っているんだ。

……だから正直、普通にやってのけちゃったルフィには複雑な気持ちだったり。うぐぐ……流石は主人公……！

「霸王色を纏うって面白エなア、新しい『ギア』が試せそうだ、しししー！」

しかもこれ、すぐにもっと強くなりそうだなあ。

まあ、いつか。ルフィが強くなるのは歓迎するし。その分嫁を守る事に専念出来るからね。

「しかし、これからどうするんだルフィ。イリスちゃん一人ならともかく、お前とナミさ

んも猫車に乗って大胆にビッグ・ママの所まで行くつもりか？」

「面白そうだね、それ」

「面白くないわよ、あんたは黙ってなさい」

はい……。

「当初の予定では、私達はサンジ君を連れ戻すだけだった。だから滞在するつもりは無かったんだけど、そう簡単には行かないんでしょ？ だけどサンジ君の言う通り私とルフィまで一緒に行ってしまうと目立ち過ぎるから……そうね、電伝虫は？」

「持つてるよ」

「じゃあ、それで合図をして。お茶会まで私とルフィは近くで待機しているから。勿論、シャルリア達を探しつつね」

ナミさんの最大限私に配慮してくれた提案に頷き、少し不満そうなルフィに苦笑しながら猫車に乗り込む。途中まで一緒に乗っていく事も考えたけれど、それじゃあ2人が近くに居るってバレちゃうかもだし。

2人と軽く言葉を交わして別れ、ホールケーキシャトーへと再び猫車を走らせた私達は、それ程時間をかける事なく目的地へと辿り着いた。

道すがらは喋る草花だったり木だったり、まるで異界にでも迷い込んだ様な気分

だったけど……って、私が言うのもおかしい話か。

「11時半……なんとか間に合ったわね」

「昼ご飯をビッグ・ママと一緒に食べるんだっけ」

「ええ、その時に父達が遅れるって事も伝えるわ」

そしてどうやら護衛の人達は中について来れない様で、城の内部に進むのは私達3人という事になった。

それから……。

「本当にごめんな、イリスちゃん。痛くないか？」

「大丈夫……っていうか、ちよつと緩すぎじゃない？」

後ろ手で両手首を紐で縛られています。というのも、私が普通に中へ入るなんて出来る筈がないので、仲間を裏切ったサンジがビッグ・ママへの土産として私を献上する、というシナリオを執行する為だ。

海楼石の縄で縛っているという設定にするらしいが、実際はただの縄だし、私も女王化は解除しない。背丈が変わっているのはゴリ押しして誤魔化そうと思う。

「代わりなさい、サンジ、私がやるわ」

「わ、悪い……頼む」

そもそもどうして自分が縛ろうと思ったのだろうか、サンジが女の肌に傷が付くよう

な真似ができる訳ないのに。

まあ、縄で縛られたくらいじゃ痕も残らないけどさ。

そんな訳で、「裏切られたコーデ」となった私は、若干の項垂れ感を醸し出してレイジュに腕から伸びる紐を引かれ、歩いていくのであった。

この時、サンジに対して悲しそうな目を向けるのがポイント。

城に入る際、兵士には当然問い詰められたけどそこはサンジが上手くカバーした。私を裏切ってジェルマに付くって遠回しに言った時の演技はそれはもう凄かったし、なんなら本気で悲しくなったけど！

## 240『女好き、シャーロット・オープン』

ビッグ・ママが居るといふ謁見の間は、どうやらこのケーキみたいな城の上層に位置しているらしい。縦に長いこの城を登るのは一苦勞だし、エレベーター的な物を新設して欲しいとちよつぱり思いながら歩いていると、大柄な一人の男が不思議そうな顔で近付いてきた。

「お前らは……ジェルマか？それにしても数が少ない様だが……。む？何故女王がここに居る？」

「それならさつきそいつに話した。これからビッグ・ママにも伝えるが、そういうお前は誰だ？」

「俺はオープンだ。シャーロット・オープン」

「……シャーロット？それって確か、ビッグ・ママの姓だった様な……。てことは、この人はビッグ・ママの息子なのかな。」

「経緯は知らないが、あの女王を捕らえた事は評価出来る。我々の間でも目の下のタンコブの様な存在だったからな。サアヤは強いが腰も重い、面倒ごとには首を突っ込まんだろう」



腰が重いつて、前なんか確認の為だけにドレスローザまで来てたけどね。王華の事になると積極的になるのは前世組共通なんだなって改めて感じるよ。

「どうせなら麦わらのルフィも捕まえて来たらどうだ？ そのマヌケの様に捕らえられるかもしれないぞ」

「生憎だが、こいつを縛っている縄は海楼石を含んでいるんだ。そんな貴重なモンを何個も持つてねエ」

「……そうか、まあ、いいだろう。だが他の仲間……いや、元仲間の居場所は吐いてもらうぞ。今更庇う様な関係でもあるまい」

「それは構わねエが、現状で何人捕らえているのかは教えて貰えるか？ 必要の無い情報を与える気はねエんで。俺とお前はまだ他人だからな」

お、ナイスサンジ、これでビッグ・マム側がシャルリア達に危害を加えているかどうかの確認が取れる！

……つて言つても、下手に情報を与えたく無いのは当然向こうも同じで、オープンな睨む様にサンジと私を交互に見やつた。

怪しまれるだけなら良いけど、これで私を縛っている縄の事に勘づかれてもしたら厄介だ。これは……賭けに出てもいいかも。

「ちよつと、離して！」

「っ?」

能力は使わず、素の力だけでぶんぶんと腕を振ってみる。2年間の修行でそのままでもかなり強くなった私だけど、残念な事に覇気を使わないとレイジュの腕すら振り解けない様だ。まあ、今回はそれでいいんだけど。

ていうか、素とはいえ今は女王化してるからね、間違っても能力使用しちやったらとんでもない惨事になるのは目に見えているし。

「私だけにしてくれるんじゃないの!?! ルフィ達には手を出さないって約束だったよね!!」

「……そうだったか? 悪いな、イリスちゃん、良く覚えてねエ」

「ツ……」の!!」

見たか、この即興茶番劇!

ぶっちゃけそんなに演技は上手い方じゃないけど、咄嗟に合わせられるサンジが天才過ぎて緊迫感を出せている筈。

更に、逆上して力任せにレイジュの手を振り解く……感を出し、更に更に話の通用しないサンジを押し退けた……感も出し、そのままオーブンに向かって蹴りを放った。

当然だが、能力は使用していないのでいとも容易く蹴りは掴んで受け取められ、そのまま吊るす様に持ち上げられた。

「くっ……！降ろしてよ！」

「お前らが本当にこの女と縁を切ったのか、ここで確かめてやる」

そう言つて、オーブンは更に高く私を持ち上げ、胸の高さまで私の頭が来た瞬間に躊躇いもなく顔面を殴打してきた。

「ッ……！」

「イ……っ！……っ、……ぐ、！」

思わずといった風に叫びそうになつたサンジだが、レイジュが目で牽制して止めてくれた。

私の演技に対して咄嗟に合わせてくれたサンジだけど、どこまでが私の狙いかまでは把握出来ていなかったみたいだね。まあ、鼻とか口から血をダラダラ流してらるだろうし、防御力も倍化してないから普通に大ダメージって事でサンジも慌てたんだろうけど……実際は痛みは無いんだよね……痛みは。

「ほう？今ので悲鳴一つも上げないか。流星はうちの優秀な妹と同じ次元に立っているだけはある」

どうして痛くないのか、それは簡単で、単に『痛覚耐性』を倍化しているからである。

普段は気付かぬうちに死に至る危険性があるから使用しない倍化だけど、こういう限定的な場面では役に立つ。勿論、死なない様に気を付ける必要があるけど。

「……………」

「完全に信用する訳ではないが、まあ、良いだろう。ただし、こいつはこのまま連れて行く。治療する事は許さん」

「ああ」

治療は許さない、か。

……ふふ、残念！ある程度のレベルまでは自然治癒力を倍化させて治しておくね！  
だって普通に能力使えるんだし！

「それで、今は何人捕らえているんだ。まさか天下の四皇のお膝元に侵入した鼠を未だに1匹も捕まえる事が出来ていないなんて事はないだろう？」

「……そのまさかだ、情けない事に、未だにこの女王しか捕らえる事は出来ていない」

!!

「だが、1人は手傷を負わせた。髪の毛の長い女だ、恐らく麦わらの一味と関係している筈だが……」

「恐らく？」

「最近船に乗ったのか、見た事のない顔だった。……見た事がないというのも自信は無いが……」

だったら、それは十中八九シャルリアだ。捕まえる事が出来ないという事は、傷

を負いながらも上手く逃げられたって事だし。私達に連絡が無かったのは電伝虫がその際に壊れたからだろう。きつとブルックとペドロも同じ様な状況の筈だ。

見た事ないという自分に自信が持てないのも、それは相手がシャルリアだから。色んな意味で有名だからね、シャルリアは。

「オイオイ、そんなんで本当に大丈夫なのかよ。俺の結婚式が潰されるのは勘弁してくれ」

「なら、貴様の持っている情報を寄越すんだな。不甲斐ないのは認めよう。トドメも刺せず、無様にも逃したのはこの俺自身の責任だ。だが……お茶会にはママも参加する。女王を無力化した今、残り滓の麦わら達は大した脅威ではない」

脅威ではない、か。麦わらの一味の最大戦力は、自慢になるけど私が飛び抜けてると思う。だけど、だからと言って私におんぶに抱っこな人達じゃない。たまにこうした勘違いをする人が出てくるけど、あのルフィが弱い訳ないでしょ？

「その麦わらのルフィなら、今は恐らく森の方に居るんじゃないやねエか？ここに来る途中でそつちから戦闘音が聞こえたんだが」

「……随分と曖昧だな」

「ああ、すまねエな。あいつがこの島に辿り着いている事は知っていてもどこに居るかまでは把握してねエんだ。女王は向こうからうちの城に来てくれたんでね、捕えるのも

「楽だったって訳だ」

「うわあ、情報だけ引き抜いて話を終わらせるなんて、エグい……！流石サンジだ。私を捕まえたんだから良いよね？みたいな雰囲気出してんだけど、そもそも私も捕まってる……」

「なら、今後もし引き続き麦わら共の情報を探るんだな。女王一人で釣りが来るとはいえ、残りの奴らが侵入者だと言う事に変わりはない」

「ああ、こつちもいい迷惑だ、結婚式までにはケリをつけようと思っている」

「いい迷惑だ、お前らが。ケリをつけてやる、お前らに。って事でしょ、これ。私だから分かるけど、オープンはまさか自分達に向けて放たれた言葉だとは夢にも思っていないだろうね。擦り寄ってる様に見せかけて悪意満点じゃん。」

「……まあ、それはいいとして。」

「いつになったら私はこの逆さ吊りから解放されるの？いい加減頭に血が昇ってちよつと辛くなってきたんだけど。」

「しかも殴られた顔から結構血が出てるんだよね、主に鼻とか。乙女の顔面じゃ無くなってきたから、こういうとこ嫁に見られたくないじゃん。今だとレイジユとかさ。」

「そろそろ女王を返してくれるかしら？ソレはビッグ・ママへの贈り物なの」

「いや、そう言う事なら俺も同席しよう。女王は俺が持つ」

ええ……。これ、ビッグ・ママと昼食食べてる時もずっとこのままって事？

いや、流石にずつと逆さ吊りにはしておかないだろうけど、早く解放されたい！こんな事になったのは私が身体を張った作戦を実行したからとはいえ、嫌なものは嫌なのだ。

「……………」

オーブンに気付かれない様に全力でサンジとレイジユにアイコンタクトを送ってみる。なんとかして！なんとかして！と自業自得の現状の割に人任せだった。

「あ、あー……とりあえず、担いだらどうだ？その方がお前も楽だろ？」

「今も特に苦ではない。大丈夫だ」

……よし、こうなったらミキータの真似をするしかない！やり過ぎちゃうと気付かれるから……2倍だけ！

「……………なんだ？」

私が密かに行った能力によって、オーブンが眉を寄せる。

恐らく現在奴の腕には、さっきまでと比べてきつちり2倍の負荷がかかっている事だろう。……まあ、ただ自分の体重を2倍にしただけなんだけど。

普通なら間違いなく気付かれる行動だが、今回に限ってはそうではない。何故ならオーブンは今、海楼石の縄で私の能力は封じられていると思っっているからだ。……つて

言っても、サンジの言ってる事を完全に鵜呑みにしているって訳ではないだろうからさつきも言った様にやり過ぎはダメだけどね。

それでも体重を2倍するのは結構な変化がある。ある意味これも賭けになるのだけど……。

「……成る程、やはりこの女は危険だ」

結果としては賭けに勝ったみたいだけど、なんか勘違いしてるのかな？ 私の体重が重くなっただけで発想には至っていないのならいいんだけどさ。

そして、変に勘違いしているオーブンはサンジの言葉通り素直に私を担ぎ直して歩き出した。

なんだかよく分かんないけど、ラッキーなのに変わりはないし、いつか！



## 241 『女好き、無謀な決意』

会話もなく、少し重苦しい空気のまま私達はビッグ・ママが待つという部屋に辿り着いた。

大きな扉からも想像出来たけど、その中もかなりの広大さを誇るダイニングとなっていて、奥の上座にはこの部屋の中に居ても圧迫感を覚える程の巨体がこれまた大きな椅子に腰掛けていた。

「遅かったねエ、ジェルマ……、あア？お前らだけかい？」

「ええ、色々あつて、こちらは私とサンジだけよ」

ギョロリと大きな目玉でレイジユを睨んだのは、まず間違いなくこの国の主、ビッグ・ママだろう。大家族って意味だけじゃなく、その体も『ビッグ』らしい。

「ママ、土産を持ってきた」

「オープンじゃないか、土産つてのは……」

「こいつだ」

ぼい、と放り投げられ、ビッグ・ママの横に転がされた。扱いが雑で色々物申したいけどここは我慢だ。今はまだバレルる訳にはいかない。

「女王イリス、どうやらお仲間を連れ戻しに来たみたいだが、裏切られてそのザマだ」  
「ああ、こいつがイリスか。ママ……！魚人島であれだけ吠えておいて、何とも情けない姿じゃねエか！」

「だけど油断は出来ない。こいつを縛っているのは海楼石製らしいが、さつき俺に霸王色をぶつけて来た。俺の力が抜ける程の圧をその状態で放てる時点で怪物だ」

霸王色？使った覚えはないんだけど……、……もしかして、さつき体重を倍加させたアレかな？私の体重が増えたんじゃなくて、自分の力が抜けたって解釈したんだ、すっごい都合の良い……。

「うちの怠け者沙彩と同程度の実力者って事らしいが、それが本当ならそれくらいはしてもおかしくねエだろ。それに、今は動けない猛獣に気を散らしてる場合じゃねエんだ」  
そういうとビッグ・ママはレイジュへと視線を向け、厳しく目を細めて口を開く。

「今日はジャッジの奴も来るって聞いてたのにどうして居ねエんだ。まさかオレとの約束を破るとは良い度胸してんじゃねエか」

「それについては完全にこちらの落ち度よ、ビッグ・ママ。確かに私達は女王を確保する事に成功したけれど、その際に父や弟達は深傷を負わされてしまったの。幸い、私は女だという事もあって助かった……だから今私とここに居るサンジ以外は治療中よ。でも明日の結婚式までには間に合うわ」

「ふむ……沙彩と同じ実力の者を相手にしたのなら仕方ないだろう。ママ、ここは穩便に行こう、明日の式に差し支える訳にはいかない」

へえ、沙彩はかなり実力的には信賴されているみたいだね。さつきビッグ・ママに怠け者とすら呼ばれていたけど、そんなに動く事が無かったのだろうか。

………というか、もしかしてこの雰囲気のまま食事に入るつもり??私はどうせ食べられないだろうし、地獄じゃん……。

\*\*\*

一方その頃、鏡の世界——『ミロワールド』内にて。

「………つうく………ま………だ、痛みます、わね」

目に見える全てが歪であり、壁はうねり、無数の鏡が存在するこの場所で、壁に埋め込まれている鏡を背にシャルリアは座り込んでいた。

その身を包む衣服は所々が焦げており、なんとか人に見せたくない部分は隠せている

という状態の彼女は何故か仮面で顔を覆っている。

「……あの人、どういうつもりなのかは分かりませんが……、く……次に会った時はお礼を言いませんと」

シャルリアは徐に仮面を外した。

外気に触れるのは、麗しい美女の肌では無く……生々しく爛れた、酷い火傷の痕が見える顔で。

「——とはいえ、この顔では……イリス様にも、幻滅され……る事はないでしょうね。あの方がこれくらいで幻滅する筈、ありません……」

自分がどんな姿になろうとも、彼女ならば受け入れてくれる。そんな確信がシャルリアにはあった。実際、普段のイリスを見ている者なら誰でも行き着く回答ではあるが。

確かに面食いな所もあるイリスだが、1度嫁にすると決めた人物に対してはかなりの甘さを発揮するのだ。食う面が無くなった所で今更お残しをする様な人ではない。

……のだが、それは結局イリスの問題である。誰が好き好んで醜くなった己の顔を最愛の人に見せられようか。

そうは言っても、このままイリスから離れる事などそれこそシャルリアには出来そうもなく。2年の時を経て、遂に見つけてもらったというのに。

ならば、このまま直ぐにイリスと合流して、己をこんな目に遭わせた『熱男』に仕返

しをしてもらうか？それは否だ。

「あの方……確か名は、『オーブン』……でしたか」

これは実力不足でありながら、敵地で単独行動という悪手を打ってしまった自分の失態である。それならば……尻拭いは自分でしたかった。

もう一度オーブンと闘い、彼を下し、何の憂いもなく彼女のそばへ戻りたい。それが現在シャルリアが考えている無茶で無謀な未来だ。

「……オーブン。次は、負けませんわ」

「バカ言ってるんじゃないよ、お前がオーブン兄様に勝てる訳ない！」

唐突にシャルリアが背を預けている鏡の中からその様な声が響く。だけどシャルリアは驚いた様子も無く、痛む体に鞭を打って鏡から少し離れた。

すると、その鏡の中から1人の女が顔を見せる。高い身長もあつてかローブにも見える程丈の長いドレスを身に纏い、緑のもこっとした物体を背に付け、長い鼻と左右に広がる奇抜な髪型をした彼女の名はシャーロット・ブリュレ、ビッグ・マムの8女だ。

「そうですね、今の私なら……例えばどれだけの幸運に恵まれようとも敵う相手ではありません」

「ウイツウイツ、案外素直じゃないか。分かっているならバカな事は考えずに……」

「なので、負けない様に作戦を立てますわ」

「立てんで良いよ!!死にたいのかい!」

「死にたくはありませんが、無様に泣きつくだけの女にもなりたくはないですわ」

そんなシャルリアの言葉にブリュレは分かりやすく表情を歪めた。駄々をこねる子供に腹を立てた親の様な表情でも、実際の所は敵同士である筈なのだが。

だからこそシャルリアはこの状況に感謝をしつつも疑問を感じていた。

「助けて頂いてこの様な物言いもどうかとは思いますが、何故私を助けたのですか?私とあなたは本来敵同士でしょう」

それを聞くな、と言わんばかりにより一層表情を不快に歪めたブリュレが視線を逸らす。口をもごもごと動かしてはいるが、そこから言葉が発される事はなかった。

あの時、シャルリアはドレスローザ以来の『死』を感じていた。

立ちほだかったのはオーブンとシャーロット・フランペ。どちらも彼女より実力が上だった為か、実際に攻撃を仕掛けてきたのはオーブンだけであったが……結果は惨敗。反撃の余地すらもなく目に捉えられない速さで接近され、そのまま体に数発の殴打、更に掌で顔を掴まれ焼かれるという有様であった。

1発1発がシャルリアにとつては即死級のダメージであり、死ななかつたのは本当に運が良かったのとブリュレが居たからだ。彼女がシャルリアに簡易的な治療を施し、こうしてミロワールドにて匿っているからこそ命を繋げていると言える。

「……分かりました、そこまで言いたくないのなら、無理には聞きませんわ」

気にはなるが、優先順位はそこまで高くないので一旦折れる事にし、対オーブンの戦術を幾つも脳内に思い浮かべては却下していく。

そもそも実力が離れ過ぎているのだから作戦を立てる事すら厳しいのだ。

「……やはり、完成させるしかありませんわね」

残された時間は多くない。自分がこの島に辿り着き、敗北してこの鏡の世界に来てから既に数日が経過している。イリス達ならサンジを奪還するのにそう時間はかからないとシャルリアは踏んでいた。

「遅くても、後1日……それまでに間に合わせてみせましょう」

「はア……あたしは止めたからね、もう知らないよ!」

ブリュレはそう言うが、そもそもシャルリアからすれば1度命を救ってもらっているのだ。これ以上を望むのは頼り過ぎというものだろう。

「本当にありがとうございます、ブリュレ。どんな思惑があれば助かりましたわ。あなたの家族を倒してしまう事になるのは心苦しいですが……」

「礼なんて要らないよ! 精々無様にやられちまいな! ばーか!!」

そんな捨て台詞を残し、ブリュレは再び鏡の向こうへと消えていった。

その先でペローナやチョッパーに見つかり良い様に利用される事となる彼女だが、そ

れはまた別の話である。

「……………では、早速始めましょう」

ここから追い出さなかった時点で、ブリュレは完全にシャルリアを見捨てた訳ではない。それに気付いてしまった以上、シャルリアはその好意を無駄にしない為にも痛みを無視して行動を開始するのであった。



## 242 『女好き、牢内にて』

食事も終わり、案の定何一つとして口に入れられなくてお腹が空いている私は、この城の地下にある牢屋に一旦放り込まれていた。

「あー……お腹すいたあ……」

どうやらこの牢屋はそんなに機能していないみたいで、私以外に収監されている人は1人も居ないらしい。別の場所にメインの牢獄でもあるのかな？

じゃあどうして私はここに放り込まれたのかって事だけど、それは多分監視を私1人に集中させたかったからだろうと思ってる。だって……パツと見ただけでも100は越える数のチェスみたいな兵士達が私の居る牢屋の外をウロウロしてるんだもん。

確かに結構広いスペースだからそれだけ居ても窮屈そうには見えないけどさ、過剰過ぎない？こちらら海楼石で縛られてるんだよ？……あ、縛られてなかったね、これ、普通の縄だった。

まあ、そんな訳で別に力を封じられてる訳でもなく、いつでもここから脱出する事は可能なんだけど……なんせ力技でしか脱出方法が思い浮かばないから困っているのがある。

柵をこじ開けてたら絶対兵士達に見つかると、見つかつたら倒さなきゃいけないからね。無駄に騒ぎを起こす事はあんまりしたくないし。

それに……あの人もちよつと厄介なんだよね。

「うーむ……」

チエス兵士の中に1人だけ混ざっている体躯の大きな女性……美人だから気にはなるけど、ぶつちやけ兵士達と比べても遙かに実力が高い。

チエス兵士だけなら騒がれる前に全員倒せば良いんだけど、あの人が居るとそういう訳にもいかないからなあ。戦つて負ける事は無いけど、時間は稼がれるだろうし。

でもまあ、別にいつか。明日の結婚式が始まるまで大人しくしていれば良いだけで、そこからは騒ぎとか幾らでも起きるから私も強引に脱出出来るし。

「案外大人しいな、気分はどうだ？女王イリス」

「最高だよ、美人に話しかけられたからね」

そんな風に現状の整理をしていると、この場においては1番厄介な人物が檻越しに声を掛けてきた。

さつきも思つたけど、兵士達と比べても体躯や実力どちらもずつと上で、あと美人。

「随分と余裕そうだが、貴様の処遇は明日の結婚式後にママが直々に決める事となつている。能力も使えない今、碌な抵抗は出来ないだろう。殺処分となつても不思議ではな

いぞつ。」

「そうなんだ、私、殺されちゃうんだ。だったら嫁になってくれない？ほら、どうせ死ぬんだから1日くらい良いでしょ？」

「頭大丈夫か？」

ガチトーンで言われました。

大丈夫に決まってるじゃん！むしろ平常運転だよ！

「女好きで有名なのは知っていたが、自らの命が脅かされてる状況でもブレないとはな。その点に関しては認めてやるが、私が貴様の嫁になる事はない」

「最初はそう思うかもしれないけど、一回嫁になってみてよ、幸せにしてみせるよ？」

「檻に閉じ込められてる奴が言うセリフか？」

「檻の中でも外でも私は変わらないよ、だから気にしないで！」

ぐつ！と握り拳を作りながらドラ顔で話せば、彼女はあからさまに呆れた態度で大きくため息を吐いて目を細めた。

おつと、これはジト目というやつですね？大好物ですありがとうございます！

「この状況でそこまで樂觀になれる程肝が据わっているのは認めるが、もしかして気付いていないのか？」

「ん？何が？」

「貴様が捕まっつているという事は、恐らく近くに居るのだろう貴様の大切な嫁とやらも直ぐに捕らえることが出来る。まず、生きては帰れないだろう」

ふむ……確かに近くに居るのは間違つてないけど、楽観的に考えているのはどうやらビッグ・ママ側も同じらしい。そもそも、私を捕らえた時点で勝つた気になっているのが甘い、甘過ぎる。

オーブンもそうだった様に本当に良く勘違いされがちだけど、麦わらの一味は私一人のワンマンチームじゃないのだ。

みんな、油断して舐めた考えで勝てる程弱く無いよ？

とはいえ、私の知らない所で嫁が襲われる可能性があるのは確かに癪に触るよね……。

ううむ……とりあえず今は見聞色で周りを探るしかない、かな。ビッグ・ママとか沙彩の気配が強すぎてイマイチ分かりづらいけど、時間をかければ個人レベルで特定出来るかもだし。

「二応言つておくけど——嫁に手を出したらあなたでも許さないからね」

「フ、ここは怖がつておけば良いのか？」

「はは、怖がる必要はないと思うけど、覚悟だけはしておいてね」

なんて言つても、向こうからすれば負け惜しみを吠えてる敗者でしかないけれど。

「ここで霸王色なんて出して威圧すれば絶対警戒されるし、オーブンの時の1回で止めておいた方が良い、と思う。」

「それで、あなた名前は?」

「この流れで自己紹介を求めるか? 敵だぞ、私と貴様は」

「敵対しても挨拶くらいするでしょ? ほら、名前は?」

「……なんだか、他の誰に名乗っても貴様にだけは名乗らない方が良いと私の勘が騒いでいるんだが。これは気の所為だと思うか?」

「そりゃーもうすんごい気のせいだね! 勘が鈍ってるんじゃない?」

「……みんなが苦労してる中私だけ美女との会話を楽しんじゃってて申し訳ないけど、見聞色を練る以外はする事もないし、ここでこの人を引き留めておくのは悪くない筈。」

下手にルフィ達の搜索の応援に行かれたら厄介だ。

「それに名前くらい良いじゃん、名乗る事すら出来ないの? あなたは私の名前を知ってるのに私だけ知らないなんてズルくない?」

「……ふー。分かった、分かった。貴様とまともに会話をしようと思うのが間違いなんだ。話は通じないと思った方が良さそうだ」

「もしかしてだけど虫か何かと同列に見てない? 話は通じるよ? 名乗らない方がおかしいじゃん! 世間一般でもまずは挨拶が基本なんだけど!」

「この場で世間一般を語ってる時点でおかしいとは思わないのか!」

うぐぐ……!! 確かにその通りかもしれない……けど! まあ、いいじゃん、そんな事は! やっぱり名前は大事だし、知りたいし、嫁にしたいもん!!

「嫁になつてよお!!」

「想いを募らせる前に少しばかりの恐怖を抱いているが? 貴様は今までそうやって強引に女を侍らせてきたのか……?」

「まあ……うん、大体そうかも」

「頭のおかしい尻軽の集まりなのか?」

「あはは、あなたもそうなるよっ!」

パチーン、と渾身のウインクをかましたけど、柵越しの彼女にはガチ引き顔を披露されてしまった。なんで!?

——おっと、ついに私が広げていた見聞色に誰かが引つかかったみたい。これは……あれ、ブルツク?

「んー……?」

しかもこれ、この城内に居るっぽい。ペドロも近くに居るのかな、今んとこブルツクの気配しか感じ取れないけど。

どつちにしろ良く潜入出来たねえ、結構警備とか居たと思うんだけどな。

「お」

今度はナミさんとルフィを見聞色で捉える事が出来た。場所はやつぱりこの城の近くで、シャルリア達を探してくれているのかじつとしてはいないみたい。

うーん……そろそろナミさん達に1回連絡取っておきたいよね。電伝虫も今のところ何故か見つかつてないし。

とはいえ、こうも見張りが嚴重だと懐に手を入れる事すら出来ないんだけどさ。

……そういえば、鏡の世界とやらに入ってるペローナちゃん達の気配って感じ取る事は出来るのかな？ 異空間って扱いになるのなら、どれだけ覇気の範囲を拡大しても一緒なんだよなあ。

「急に静かになつたな」

「ん？ ああ、ごめんね、寂しかった？」

「本当に貴様と話していると頭が痛くなってくる」

なるほど、これは脈アリ……ってコト!?

ふっふっふ……がつつり話続けるかあ!?

「お取り込み中失礼します、スムージー様！ 早急にお耳に入りたい事が……」

「——ん？ なんだ、どうかしたのか？」

「え」

ここから怒涛のトークラッシュで一氣に雰囲気あげあげやつほいと洒落込むつもりだったのだけど、後もう少しの所で兵士に呼ばれ離れてしまった。

いやしかし、しかしである。

「……よつし、あの兵士の人、本当にありがとう……!」

会話と引き換えに今、私はスムージーという名前を知る事が出来たのだ!わーい!これからの会話でどう巧みに聞き出そうかと思つてた所だから凄く嬉しいよ!良いプレゼントをありがとう……!!

名前からしてやつぱりスムージーもビッグ・ママの子供なんだろうね。明らかに周りの兵士とは一線を画しているし。

ビッグ・ママは凄い巨体のお婆ちゃんつてイメージなんだけど、娘達があんなに綺麗な若い頃とかもうすんごかったのかなあ。

「ま、それはそれとしてっ」と

ここで一旦気持ちを切り替え、離れたスムージーの声が聞こえる様に聴力を倍化させ、対象へと意識を集中させる。さつき兵士の人は急ぎでつて言つてたから、この情報は聞いた方が良くないと判断したのだ。

私の能力を警戒していれば喋らないだろう事も、能力を封じていると思ひ込んでいる今は関係の無い事である。



「——それで、どうしたんだ」

「はい、たつた今、城内に隠れ潜んでいた麦わらの一味の一人、*“ソウルキング”*ブルツクブルツクの存在を確認致しました！そして同じくペドロというミンクも確認済みで御座います！」

……！ブルツクとペドロ……！

「その言い方だと、未だに捕らえる事は出来ていない様だな」

「申し訳ありません、その通りです。意外に素早く……。ただ、ペドロについては現在タマゴ男爵が追跡中との事ですので捕まるのも時間の問題かと」

「ふむ、そうか……ならソウルキングの方は私が対応しよう。あまり長い間好き勝手にされてママの怒りを買いたくはない。ただ、この場から動くのは私だけだ、残った者は全員で*“女王”*を見張っておけ」

「はー！」

そんな感じで兵士と話し合った後、スムーズには足早にこの場を後にした。折角名前を知る事が出来たんだからもう少しゆっくり話をしたかったけど、仕方ないだろう。

さて、そうこうしている内に見聞色の索敵範囲もだいぶ広くなって、今はジェルマの所まで気配を感じ取れる様になっているんだけど……どうやらジャツジ達はもう意識

を取り戻している様だ。もう一回刈り取ってやろうかこんにやろう。

気になるコゼットちゃんは……うん、まだ眠ってるみたい。シエルとメーアも近くに居るね。

ちなみにだけど、王華と沙彩の気配はあえて探らなかつた。

探る必要ないかなって思ったのもあるけど、折角ゆつくり話せているんだから気配を探るだけとはいえ茶々を入れたくなかつたから……。

「は……脱出しちやおうかなあ……」

居なくなつたら直ぐに気付かれるだろうけど、こうも何もしないというのもねえ。

どうせ騒ぎになつているのなら、今からブルックの応援に行くのもアリかな？

「うん、行っちゃうか」

今まで大人しくしていたのが無駄になつちやうかもしれないけど、これ以上じつとしておく意味もないし。

じゃあ、出来るだけ発見を遅らせる為にもこつそり脱出しちやおつと。

## 243 『女好き、2度目の邂逅』

「なんか、兵士達には悪い事しちゃったなあ」

と、言葉にする程は思ってもない事を口にしながら私は城内を忍び歩く。

結局、地下牢を脱出する為に行つた事が兵士達の殲滅だったのだから私の脳筋つぶりにほほとと呆れ返る……つて、自分の事だけどね？

対大勢はジェルマでも経験したけど、あの時と違って敵さんは私が封じられてると思ひ込んでいるのもあつたから奇襲を仕掛けやすかつたんだよね、いやあ、ホントウニモウシワケナイ。

「後は気付かれない様にブルツクの所まで行くだけ……！」

今更隠密行動に意味があるのかどうかはともかく！

「こつそり、こつそ……つぐエ!？」

「シー、だ、よ」

壁に背をつけて移動していたその時、丁度背後にあつた扉がいきなり開き、私の首根っこを掴んで中に引き摺り込んできた。

更にそれを行つた人物を見て瞬時に戦闘モードへ移ろうとしたが、  
“そっち”の人格

だと気付いてほっと一息つく。

「え……と、レイ、だよね？」

「そう。久しぶりだ、ね」

久しぶり……なのかな？ そんなに前でもない気がするけど。

ていうかなんでレイがここに居るの？

「どうしてこんな所に？」

突然の事でいつも以上に頭が回らず、思っている事をそのまま口に出して問いかけるが、レイは困った様に眉を下げると静かに首を横に振った。

「ごめん、ね。わたしも良く分からなく、て」

「あー……」

そういうえば安城さんの匙加減次第で外の状況が分かったり分からなかったりするって言うってたね。

「でも、少し早すぎる、の。いつもなら、まだわたしは、活動出来ないか、ら」

「それは、レイが体を動かせる様になるのがって事だよね？」

「そ、う」

うーん……いつもより早い交代か、ここに居ると何か関係があるのかな。

「そういうえば、安城さんの仲間は近くに居ないの？ ほら、リリーって人とかさ」

「あの人たち、は、もう帰つてると思う、よ。ワノ国、の、更に向こう側、に、拠点があるか、ら」

「ふむ……」

ワノ国の更に向こう、か。じゃあ進行方向はこのままで良いわけだ。

向こうが先に仕掛けて来ようが来まいが関係ないって事だね。それなら分かりやすくて良かったよ。

「多分、アンジヨウはわたし、が、あなた達に情報をながしたこ、と、気付いて、る」  
「……その上体の主導権も渡してきたつてところを見るに、泳がされてる可能性が高いつて事かな」

「う、ん。でも、アンジヨウ、は、わたしと同じ、で、外の情報を取り込めな、い」

安城さんがレイに対して意識的に外を覗かせないという事が出来る様に、レイも同じ事が出来るという訳だ。

だとしたら泳がせる意味も薄そうだけど……何か裏があるのだろうか。

「……きつと、遊んで、る。わたしも、イリス達のこと、も、脅威とおもつてな、いか、ら」

「ふうん？」

「だか、ら、わたし、も、遠慮しない、よ」

あまりに舐められてる事実少しムツとしていると、不意にレイが軽く微笑んで舌をべ、とイタズラっぽく出してきた。

……そ、そういう表情も出来るんだ、くっ、可愛いじゃん……!

「……ん? 遠慮しないって、何が?」

「アンジョウ、の、思惑……話せるか、ら」

「思惑? それって、私達にいつ攻撃を仕掛けてくるか……ってこと?」

「あ……ごめん、ね、そこまでのこと、は、分からなくて。ただ、この地で、の、話になる、の」

つまり、安城さんはこのホールケーキアイランドで何か私達に何か仕掛けているって事?」

その上、それをバラされても構わないって思ってるくらい遊んでると……。

やっぱり腹は立つけど、せっかくレイが情報を持って来てくれたんだし……ここは安城さんの手のひらの上で転がされてあげるとしよう。

「ここだけでも分かるのはすっごく助かるよ! それで、どういいう話?」

「ありがと、う……。じゃあ、話す、ね」

そう言っつてレイは語り出す。私達がこの島に来る少し前、安城さん達がこの地に足を踏み入っていた事。そしてそこでビッグ・ママと対面し、とある契約を結んだ事を。

そして、その契約はというと……。

「能力向上？安城さんの能力で、って事だよね」

どうも、ビッグ・ママ陣営の誰か一人を安城さんの能力で強化し、その人を後にやってくる私達麦わらの一味にぶつけるといった内容だった。

でもそれ、安城さん達にはなんのメリットも無い話の様なにも思えるけどね。別にビッグ・ママに手を貸さなくとも十分にやり合える力を保有しているし、それにビッグ・ママ側と結託して私達を潰しにかかってきてる訳でも無さそうだから。

「なんでそんな回りくどい事したの？」

「……イリス、あなたへ、の、嫌がら、せ」

「はい？」

「正確に、は、イリスじゃな、い、イリス、に」

つまり王華につて事だよ。相変わらずイリス私に対する興味は無い様で。

「でも、結局、は、イリスへの嫌がらせになる、よ。強化された人、は、かならず、イリスと戦う事になるか、ら」

「本人の意思とか関係なく？」

「う、ん。前に話し、た、リリーの力、で」

確か、操る能力、だっけ。

それで操って、私と無理矢理戦わせるって事か……。

「因みに、それって誰を強化してるのかっていうのは分かるの?」

「う、ん。分かる、よ」

おお、正直ダメ元で聞いてみたんだけど本当に分かっちゃうんだ。メタな言い方しちやうと、ここでは分かんなくて後々判明するとかが良くある。パターンなんだけどね。流石にそんな事にはならなかったか。

「名前し、か、分からないけ、ど……」

「名前が分かれば十分だよ!後は頑張って探しておくから!」

「ありがと、う。——ビッグ・ママ、は、言っ、た。この子の力、を、解放させてやってほし、い、って」

解放……、眠ってる力を無理矢理起こす様なイメージ、で良いのかな。

またまたメタ読みするけど、眠ってる力が覚醒って凄く強くなるんだよね。ていうか、私も初めて女王化した時とかそんな感じだったし。

だとするとあれか、ナミさんが言っ、た。なんたら将星の誰かなのかな?

「名前、は、プリン。シャーロット……プリン」

「ああ、プリンちゃんね、なるほど。……、……、……、はい?」



え？プリンちゃんって……え、プリンちゃんだよね？

だ、だって、昨日会ったけど、全然そんな素振りなかったし……。

「私、知ってるよ……？そのプリンちゃんって女の子……。でも、そんな強さそうな気配じゃなかったし……」

「それ、は、本人の意思、で、操作が出来る、よ。まだ、リリー、に、操られてないな、ら。……それよ、り、会った……の？」

「会ったし……話もしたよ！全然そんな素振り見せなかったし……襲っても来なかった！何かの間違いじゃない？それか、プリンって名前の人がもう1人居るとか……！」

「……プリン、は、女の子、で……髪を結んで、て、おでこにも目があ、る、女の子だ、よ」

み、三つ目かあ。はー、なんだ、やっぱりプリンちゃんじゃ無さそうだね。だってプリンちゃんのおでこには目は無かった……、

……いや。

いや、いやいやちよつと待って。

「そういえば……」

プリンちゃんは私が嫁にすると決めた女性だ。目を閉じ、真つ暗な脳裏にその麗しい顔を思い浮かべる事なんて造作もない事である。

だけど、その思い浮かべたプリンちゃんの顔……更にはその額って……。

「……………髪で、見えない、よね」

そうだ……そうだった……！私はまだ、1度もプリンちゃんの額を見てないんだ……

！

という事は、もしかしたら本当にプリンちゃんが強化されてて、私と戦わなくちゃいけない人かもしれないって事なの……？

ん？でも待てよイリス！もし本当にそうなら、プリンちゃんの額には俗に言う『第三の目』があるって事だよ？それを強化したとして……どうなるだろう？

いやいや、そんな事はどうだって良いはず。肝心なのはどう強くなるのかじゃなくて、プリンちゃんが完全に敵になってしまいかもしれないという事だ。

「イリス……？もしかし、て、ともだ、ち？」

「ううん、もつと上だよ。まだまだ一方通行だけだ」

だからといってプリンちゃんと戦うのは嫌だ。自分の意思で向かってくるのなら良いよ、拳で語り合うのも近道ではあるからね。

だけど、そうじゃないのならそんな戦いに意味なんて無い。操ってるやつと合わせる拳なんて持ち合わせちゃいないしき。

## 244 『女好き、ミロワールド』

「……………どうしようかな」

本当、絶賛困惑中なんだけど。

確定はしたくないけど、まあ、プリンちゃんなんだろうね。よりもよってさあ……………。  
ビッグ・ママもなんでプリンちゃんを選んだの、別に自分で良いじゃん。

「だいじよう、ぶっ？」

「ちよつとだいじよばないかも……………」

最悪、最悪ね、仮にプリンちゃんと戦わなくちゃいけないってなった時……………覇気だけで昏倒させられるのかな？前のデリンジャーを見る限りだと無理そうだけ……………。嫌だあ！戦いたくない！

もうね、ナミさん達に抱きついて癒されたい。キャロットでモフリたいし、シャルリアには頭を撫でて欲しい。ペローナちゃんには、自分から抱きついてきて欲しい……………。……………って、そういうえば……………ペローナちゃんって今、プリンちゃんと一緒に居るんじゃないの？

「……………確かさつき……………」

ナミさん達と会った時、ペローナちゃん達は鏡に吸い込まれたって言った。……それは、不味いんじゃない。

鏡の中に入る方法なんて知らないし、能力者がどこに居るのかも、どんな気配なのかも全然知らないから……これは、本当に不味いかも。

「レイ、色々ありがとう、せつかく会えたんだけどちよつと急ぎの用事が出来ちゃったから……！」

「うう、ん。わたし、も、そろそろ戻らない、と」

流石に安城さんもそう長い事レイに体の主導権を渡さないって事かな。

どちらにしても私がやるべき事は決まってしまったし、ブルックには申し訳ないんだけど……。

心の中でブルックには全力で謝りつつ、外の様子を見聞色で確かめてから扉のドアノブに手をかけ、最後にレイへと振り返った。

「じゃあ、またね、レイ！……あ、そうだ、これだけは言わせてもらうけどさ、私の意見は前から何一つ変わってないよ」

「……う？なんのこゝと……？」

「何の事って、本気で言ってる？じゃあもう一回耳に……ううん、レイの心にでも刷り込んでくれるかな。『あなたを絶対、死なせたりなんかしない』って」

「あ……」

この話は前にやって平行線だったから、レイの答えは特に聞かずそのまま扉を開けて外へ飛び出した。

同じ体だとしても、悪事を行なってきたのは全て安城さんなんだ、レイが責任を取る必要はない。だから私の考えも、目指したい結末も変っちゃいけないから。

「さて」

まず私はプリンちゃんを探さないといけないから、ナミさんの言っていた『鏡の中』とやらに行く必要があるんだけど……そんなものを手がかり無しで探してはいたって見つかる筈も無い。となると……正直申し訳なさすぎて気は進まないけど、あの2人の邪魔をするしか無さそうだな。

流石に本拠地の本城ともなると兵士が多くて、絶対に見つからずに城を出るのは難しく、幾度となく見つかつては騒ぎになる前に眠らせてを繰り返しようやく外へ出る事に成功した。

私の脱出はすぐに気付かれてしまうだろうけど、脱出を許したのはビッグ・ママ側に落ち度があるからそれでサンジ達に矛先が向く事は無い筈。

「……あー、ほんつとうに気が進まないけど、急ぎの用事だから、ごめん！」

と、この場に居ない2人に全力で謝り、急いで『ジェルマ』まで駆けるのであった。

\*\*\*

「……と、いうわけなんだけど、鏡の中に入る方法とか、そのブリュレって能力者がどこに居るのかとか知ってたら、ね？教えて欲しいかなーって……はい」

「なんでそんな畏まってるの？」

「いや……邪魔したし」

少し笑いながらツツコミを入れる王華に、何となく気まづくなつて頬をかく。

「だってさあ、折角2人つきりなのに邪魔したくなかったからさあ！いやね、結局しちゃってるんだけど」

「そんな事言つたつて、そういう事情があるなら仕方ないよ。沙彩も良いでしょ？」

「ええ、勿論、私達はこれからいつだつてお話出来るもの。優先すべきは誰かの命、そうでしょう？」

そんな風に言ってくれるのなら、と少し気が楽にはなつたけど……はい。という訳で、王華と沙彩の2人に相談する事にしてやってきました。

王華曰く、女王化ももうすぐ切れるだろうからタイミング的にも悪くないとの事で、ここからは沙彩も同行してくれるそうだ。

「ミロワールドにブリュレ姉さんが居るのなら話は早いわ、何処かに鏡はあるかしら」  
「この部屋にもあるよ、あそこに……って、あ、時間切」

『れだ』

おっと。壁にかけられてある鏡を王華が指差した瞬間、私の女王化が解けて同時に王華も戻ってきた。沙彩にも簡単に私の中に戻っただけだと伝え、早速鏡の前まで歩いていく。

「それで、この鏡がどうかしたの？」

「どうしたも何も、この鏡こそ、あなたを仲間の下に導いてくれるアイテムになるのよ」  
「えっ?」

そんな貴重な鏡がなんでジェルマの城に、しかも適当な部屋に置いてあるの!?

なんて考えが表情にも出ていたのか、沙彩は眉を下げてくすりと笑い、壁から鏡を取り外して床に寝かせた。

「正確には、この島中の鏡、というのが正しいわね。ブリュレ姉さんの能力で行く事の出来る鏡の世界、ミロワールドは、能力者であるブリュレ姉さんと彼女の周辺に存在する鏡があつてようやく渡れるのよ。そしてその『周辺』がこの島全域程度という訳ね。ミ

ロワールド内部もこの島くらいの広さはあるんじゃないかしら」

「へえ、つまり鏡は特別なものじゃなくて良いんだ、ブリュレさえ居ればどんな鏡だろうと入り口になると」

「そういう事になるわね。で、肝心のブリュレ姉さんなだけど……。こほん、あー、あー。姉さん、ブリュレ姉さん、聞こえる？」

と、こんな風に床に置いた鏡に話しかけ出し、大体どういう事か理解出来た私は鏡に自分の姿が写らない様に一歩下がった。ブリュレに警戒心を抱かせる訳にはいかないという理由である。

『——ん？お、なんかここから声が聞こえるぞ！』

『そ、その声はサアヤだね!? 助けて〜！ 捕まっちゃったよオ〜！』

『うるせエ、静かにしろ』

お、この声はチョッパ〜とペローナちゃん！ 真ん中の声は知らないけど、普通に考えてブリュレ、かな？

でもなんか捕まってるっぽいし、姿を見せても良さそうだと判断した私は鏡を覗き込む様にひよつこりと顔を見せる。

『お!? なんだ、イリスの顔が写ったぞ！』

『イリスの!?!』



鏡の向こうは結構ハッキリ見えて、うねうねした背景に大量の鏡という謎の場所にみんなは居るみたいだ。

ペローナちゃん、キャロット、チョツパー、そしてこの人がブリュレかな？それに……ちゃんとプリンちゃんも居るね。

「とりあえず、私達もそっちに行つていいわよね」

『は、早く来てくれエ〜！』

「もう、姉さんつてば、妹にそんな姿見せて恥ずかしくないのかしら」

恥ずかしいとかそんな問題なのかな……なんかロープでぐるぐる巻きにされて人型チョツパーが背負つてるし、命の危機を感じてるレベルだと思えますね、はい。

でもなんというか、ブリュレという人を見る沙彩の顔は……うーん、なんて表現した方がいいのか……そう、優しい、かな。正に大事な家族に向ける様な……て事は、なんだかんと言つても家族愛はあるみたい。

そんなこんなで、鏡を通れる様にして貰つて中へ飛び込み、私達もミロワールドへと足を踏み入れた。

「おい女王、シャルリアは見つかったのか？」

「手がかりだけしか……。もしかしたら、そこに居るブリュレなら何か知ってるかもだけど」

「知らないよっ！そんなやつ！」

ふうん？でも私の見聞色に反応が無かった以上は絶対この鏡の世界にいる筈なんだけだな。

それ以外で反応が無かった理由なんてのは、ハナから考えちゃいないよ。

「突然押し掛けておいてなんだけれど、姉さんの事、解放してあげてもらえるかしら？」

「それはムリだ、あともう少しでおれもキャロットも鍋の材料にされかけたんだぞ！」

「私じゃなくてカエルさんだよ！」

ちよつと話が掴めないけど、まあ、その話し合いは沙彩に任せるとしよう。正直、ブリュレの処遇についてはあまり関心が無いし。というか、他にやらなくちゃいけない事があるからね。

……少しだけ、緊張するけど。

「や、昨日ぶり」

「……はア、なんで話しかけてくるのよ、あっち行け、あっち！」

プリンちゃんとの楽しい楽しい『お話』……始めようか！